



唱法華題目抄

文応元年五月 三十九歳御作

於鎌倉名越

有る人予に問うて云く世間の道俗させる法華經の文義を并へずとも一部
一卷・四要品自我偈一句等を受持し・或は自らもよみかき若しは人をして
もよみかかせ・或は我とよみかかざれども經に向い奉り合掌礼拝をなし
香華を供養し・或は上の如く行ずる事なき人も他の行ずるを見てわづか
に隨喜の心を・をこし國中に此の經の弘まれる事を悦ばん、是体の僅かの
事によりて世間の罪にも引かれず彼の功德に引かれて小乗の初果の聖人
の度人天に生れて而も惡道に墮ちざるがごとく常に人天の生をうけ終に
法華經を心得るものと成つて十方淨土にも往生し又此の土に於ても
即身成仏する事有るべきや委細に之を聞かん、答えて云くさせる文義を

わきま

弁えたる身にはあらざれども法華經・涅槃經並に天台・妙樂の釈の心をも

て推し量るにかりそめにも法華經を信じて聊も謗を生ぜざらん人は余の

惡にひかれて惡道に墮つべしとはおぼえず、但し惡知識と申してわづかに

權教を知れる人・智者の由をして法華經を我等が機に叶い難き由を和げ

申さんを誠と思ひて法華經を隨喜せし心を打ち捨て余教へうつりはてて一

生さて法華經へ歸り入らざらん人は惡道に墮つべき事も有りなん、仰せに

付いて疑はしき事侍り実にてや侍るらん法華經に説かれて候とて智者の

語らせ給いしは昔三千塵点劫の当初・大通智勝仏と申す仏います其の仏の

凡夫にていましける時十六人の王子をはします、彼の父の王仏にならせ給

ひて一代聖教を説き給いき十六人の王子も亦出家して其の仏の御弟子と

ならせ給いけり、大通智勝仏・法華經を説き畢らせ給いて定に入らせ給い

しかば十六人の王子の沙弥其の前にしてかはるがはる法華經を講じ給いけ

り、其の所説を聴聞せし人・幾千万といふ事をしらず当座に悟をえし人は
不退の位に入り、又法華經をおろかに心得る結縁の衆もあり其の人人
・当座中間に不退の位に入らずして三千塵点劫をへたり、其の間又つづさ
に六道・四生に輪廻し今日・釈迦如来の法華經を説き給うに不退の位に入
る所謂・舍利弗・目連・迦葉・阿難等是なり猶猶信心薄き者は當時も覺ら
ずして未来無數劫を経べきか知らず我等も大通智勝仏の十六人の結縁の衆
にも・あるらん此の結縁の衆をば天台・妙樂は名字觀行の位にかなひた
る人なりと定め給へり名字觀行の位は一念三千の義理を弁へ十法成乗の
觀を擬し能義理を弁えたる人なり一念隨喜・五十展轉と申すも天台・
妙樂の釈のごときは皆觀行五品の初隨喜の位と定め給へり博地の凡夫の
事にはあらず然るに我等は末代の一字・一句等の結縁の衆一分の義理をも
知らざらんは豈無量の世界の塵点劫を経ざらんや是れ偏えに理深解微の故

に教は至いたつて深く機は実じつに浅あきがいたす処ところなり只ただ弥陀みだの名号みょうごうを唱なえて
順次じゆんじしやう生せいに西方極樂世界さいほうごくらくせかいに往生おうじやうし西方極樂世界さいほうごくらくせかいに永ふたく不退むしやうにんの無生忍むしやうにんを得て
阿弥陀如来あみだによらい・觀音かんのん・勢至等せいしの法華經ほけきやうを説たまき給たまわん時間じかんいて悟さとを得とんには
如しかじ然しかるに弥陀みだの本願ほんがんは有智うち・無智むち・善人ぜんにん・惡人あくにん・持戒じかい・破戒等はかいをも択えら
ばず只ただいちねんとな一念唱りんじやううれば臨終りんじゆうに必ず弥陀如来みだによらい・本願ほんがんの故ゆゑに來迎らいごうし給たまふ是これを以もつて
思おもうに此この土ちにして法華經ほけきやうの結縁けちえんを捨て淨土じやうどに往生おうじやうせんと・をもふは億千いふせん
世界せかいの慶点けいてんを経へずして疾法華經とくほけきやうを悟さとるがためなり法華經ほけきやうの根機こんきにあたはざ
る人ひとの此この穢土えどにて法華經ほけきやうにいとまをいれて一向いこうに念仏ねんぶつを申もうさざるは
法華經ほけきやうの証しやうは取り難かたく極樂ごくらくの業ごうは定さだまらず中間ちゆうげんになりて中法華經ほけきやうをおろ
そかにする人ひとにてやおはしますらんと申もうし侍はべるは如何いかんに、其その上ただ只今ただいま承たまわり
候そうらへば僅わずかに法華經ほけきやうの結縁計けちえんばかりならば三惡道さんあくどうに墮おちざる計ばたりにてこそ候そうらへ六道ろくどうの
生死しやうじを出しるにはあらず、念仏ねんぶつの法門ほうもんはなにと義理ぎりを知らざれども弥陀みだの

みょうこう とな たてま じょうど おうじょう
名号 を唱え奉れば浄土に往生する由を申すは遙かに法華經よりも弥陀の
みょうこう
名号 はいみじくこそ聞え侍れ、はべ 答えて云く誠に仰せめでたき上智者の
おんものがたり
御物語 にも侍るなればさこそと存じ候へども但し若し御物語のごとく
はべ
侍らばすこし不審なる事侍り、はべ 大通結縁の者をあらうちあてがい申す
みょうじかんぎよう
には名字 觀行の者とは釈せられて侍れども正しく名字即の位の者と定めら
はべ
れ侍る上退大取小の者として法華經をすてて権教にうつり後には惡道に
お
墮ちたりと見えたる上正しく法華經を誹謗して之を捨てし者なり、たと 設え義理
を知るようなる者なりとも謗法の人にあらん上は三千塵点無量塵点も經べ
はべ
く侍るか、こじゅうてんでん いちねんすいき ひとびと かんぎようしよすいき
五十展転一念隨喜の人人を觀行初隨喜の位の者と釈せられたる
まつだい われら ずいき
は末代の我等が隨喜等は彼の隨喜の中には入る可からずと仰せ候か、おほ 是を
てんだい みようらく しよすいき
天台・妙樂・初隨喜の位と釈せられたりと申さるるほどにては又名字即と
しやく
釈せられて侍る釈はすてらるべきか、しやく 所詮仰せの御義を委く案ずればをそ
はべ

れにては侯そうらへども謗法ほうぼうの一分いちぶんにやあらんずらん其そのの故ゆえは法華經ほけきょうを我等末代われらまつだいの機かなに叶がたい難よしき由おほを仰そうらせ侯まつだいは末代いつさいしゅじょうの一切衆生えどは穢土ほけきょうにして法華經ほけきょうを行おほじて詮無せんなきことき事おほなりと仰おほせらるるにや、若もしさやうに侍はべらば末代まつだいの一切衆生いつさいしゅじょうの中に此ことばの御詞ごしを聞すきて既に法華經ほけきょうを信まづずる者ものも打うち捨すてて未いまだ行いぜざる者ものも行まぜんと思おもうべからず隨喜ずいきの心こころも留とどめ侍はべらば謗法ほうぼうの分ぶんにやあるべかるらん、若もし謗法ほうぼうの者ものに一切衆生いつさいしゅじょうなるならば・いかに念仏ねんぶつを申もうさせ給たまうとも御おうじょう ぶじょう 往生おうじょうは不定ふじょうにこそ侍はべらんずらめ又彌陀みだの名号みょうごうを唱うたへ極樂世界ごくらくせかいに往生おうじょうをとぐべきよしを仰おほせられ侍はべるは何いかなる經論きょうろんを証拠しやうことして此この心こころはつき給たまいけるやらん正まさしくつよき証文しょうもん侯そうらか若もししなくば其その義ぎたのもしからず、前に申もうし侯そうらいつるがごとく法華經ほけきょうを信まづじ侍はべるはさせる解げなければども三惡道さんあくどうには墮だすべからず侯六道ろくどうを出でる事ことは一分いちぶんのさとりなからん人は有あり難かたく侍はべるか、但ただし惡知識あくちしきに値あつて法華經隨喜ほけきょうずいきの心こころを云いいやぶられて侯そうらはんは力ちから及およばざる

すは私の義にあら^{てん}ず天台大師の文句第三の巻に云^{いわ}く「法を聞^いいて未^{いま}だ度^だせず而^しして世^し世に相^あい値^あうて今に声聞^{しやうもん}地に住^じする者有^{すなわ}り即^{すなわ}ち彼の時の結縁^{けちえん}の衆^{しやう}なり」と釈^{しやく}し給^{たま}いて侍^はるを、妙樂大師の疏記第三に重^みねて此^この釈^{しやく}の心^こを述^たべ給^{たま}いて云^いく「但^い全^まく未^{いま}だ品^{ほん}に入^いらず、俱^{とも}に結縁^{けちえん}と名^なづくるが故^ゆに」文・文の心は大通結縁^{だいつうけちえん}の者^{もの}は名字即^{みやうじそく}の者^{もの}となり、又天台大師の玄義^{げんぎ}の第六にだいつうけちえん大通結縁^{だいつうけちえん}の者^{もの}を釈^{しやく}して云^いく「若^もしは信^{しん}若^もしは謗^ぶ因^{いん}つて倒^たれ因^{いん}つて起^おく喜根^{きこん}を謗^ぼずと雖^いも後^ご要^{やう}らず度^どを得^えるが如^{ごと}し」文・文の心は大通結縁^{だいつうけちえん}の者^{もの}の三千^{さんぜん}塵^{じん}点^{てん}を経^へるは謗^ぼ法の者^{もの}なり例^{れい}せば勝意^{しょうい}比丘^{びく}が喜根^{きこん}菩薩^{ぼさつ}を謗^ぼぜしが如^{ごと}しと釈^{しやく}す五十展^{ごじゅうてん}転^{てん}の人は五品^{ごほん}の初^{しよ}めの初^{しよ}随喜^{ずいぎ}の位^いと申^{まを}す釈^{しやく}もあり、又初^{しよ}随喜^{ずいぎ}の位^いの先^まの名字^{みやうじ}即^{そく}と申^{まを}す釈^{しやく}もあり疏記^{しよき}第十^{じゅうじ}に云^いく「初^{はつ}めに法会^{ほうえ}にして聞^{きこ}く是^これ初^{しよ}品^{ほん}なるべし第五^ご十^{じゅう}人は必^{かならず}ず随喜^{ずいぎ}の位^いの初^{しよ}めに在^ある人^{ひと}なり」文・文の心はしよえもんぼう初^{しよ}会^え聞^{もん}法^{ぼう}の人^{ひと}は必^{かならず}ず初^{しよ}随喜^{ずいぎ}の位^いの内^{うち}第五^ご十^{じゅう}人は初^{しよ}随喜^{ずいぎ}の位^いの先^まの名字^{みやうじ}即^{そく}と

申す釈なり。

其の上五種法師にも受持・読・誦・書写の四人は自行の人・大經の九人

の先の四人は解無き者なり解説は化他後の五人は解有る人と証し給へり、

疏記第十に五種法師を釈するには「或は全く未だ品に入らず」又云く

「一向未だ凡位に入らず」文・文の心は五種法師は觀行五品と釈すれども

又五品已前の名字即の位とも釈するなり、此等の釈の如くんば義理を知ら

ざる名字即の凡夫が隨喜等の功德も經文の一偈・一句・一念隨喜の者

五十展轉等の内に入るかと覚え候、何に況や此の經を信ぜざる謗法の者の

罪業は譬喩品に委くとかれたり持經者を謗する罪は法師品にとかれたり、

此の經を信ずる者の功德は分別功德品隨喜功德品に説けり謗法と申すは

違背の義なり隨喜と申すは隨順の義なりさせる義理を知らざれども一念も

貴き由申すは違背隨順の中には何れにか取られ候べき、又末代無智の者の

わづかの供養隨喜の功德は經文には載せられざるか如何、其の上天台・
妙樂の釈の心は他の人師ありて法華經の乃至童子戲・一偈・一句五十展轉
の者を爾前の諸經のごとく上聖の行儀と釈せられたるをば謗法の者と定
め給へり、然るに我が釈を作る時機を高く取りて末代造惡の凡夫を迷はし
給わんは自語相違にあらずや故に妙樂大師五十展轉の人を釈して云く「恐
らくは人謬りて解せる者初心の功德の大なる事を測らず而して功を上位に
推り此の初心を蔑る故に今彼の行浅く功深き事を示して以て經力を顯わす」
文・文の心は謬つて法華經を説かん人の此の經は利智精進・上根・上智
の人のためといはん事を仏をそれて下根・下智・末代の無智の者のわづか
に浅き隨喜の功德を四十余年の諸經の大人上聖の功德に勝れたる事を
顯わさんとして五十展轉の隨喜は説かれたり、故に天台の釈には外道・
小乘・權大乘までたくらべ来て法華經の最下の功德が勝れたる由を釈せ

り、所以に阿竭多仙人は十二年が間恒河の水を耳に留め耆毘仙人は一日の
中に大海の水をすいほす此くの如き得通の仙人は小乗・阿含經の三賢の
浅位の一通もなき凡夫には百千万倍劣れり、三明六通を得たりし小乗
の舍利弗・目連等は華嚴・方等・般若等の諸大乘經の未断三惑の一通も
なき一偈・一句の凡夫には百千万倍劣れり華嚴・方等・般若經を習ひ極
めたる等覺の大菩薩は法華經を僅かに結縁をなせる未断三惑・無惡不造の
末代の凡夫には百千万倍劣れる由釈の文顯然也、而るを当世の念仏宗等
の人・我が身の權教の機にて実經を信ぜざる者は方等・般若の時の二乗
のごとく自身をばぢしめてあるべき処に敢えて其の義なし、あまつさへ
世間の道俗の中に僅かに觀音品自我偈などを讀み適父母孝養などの
ために一日經等を書く事あればいゝまたたげて云く善導和尚は念仏に
法華經をまじうるを雜行と申し百の時は希に一二を得千の時は希に三五を

得ん乃至千中無一と仰せられたり、何に況や智慧第一の法然上人は法華經

等を行ずる者をば祖父の履・或は群賊等にたとへられたりなどいゝうと

め侍るは是くの如く申す師も弟子も阿鼻の焰をや招かんずらんと申す。

問うて云く何なるすがた並に語を以てか法華經を世間にいゝうとむる者

には侍るやよにおそろしくこそおぼえ候へ、答えて云く始めに智者の申さ

れ候と御物語候いつるこそ法華經をいゝうとむる悪知識の語にて侍れ、

末代に法華經を失うべき者は心には一代聖教を知りたりと思ひて而も心

には権実二經を弁へず身には三衣一鉢を帶し・或は阿練若に身をかくし

・或は世間の人にいみじき智者と思はれて而も法華經をよくよく知る由を

人に知られなんとして世間の道俗には三明六通の阿羅漢の如く貴ばれて

法華經を失うべしと見えて候。

問うて云く其の証拠如何、答えて云く法華經勸持品に云く「諸の無智の

人あつく惡口罵詈めり等し及び刀杖とうじょうを加うる者有らん我等皆われらみなまさ當しに忍しのぶべし」文・
妙樂大師・此の文の心を釈しゃくして云く「初めの一行は通じて邪人じゃにんを明す、
すなわそくしゅう 衆なり」文・文の心は此の一行は在家の俗男・俗女が權教の比丘等
即ち俗衆なり」文・文の心は此の一行は在家の俗男・俗女が權教の比丘等
にかたらはれて敵をすべしとなり、經に云く「惡世の中の比丘は邪智じゃちにし
て心諂曲てんこくに未だ得ざるを為得たりと謂い我慢の心充滿じゅうまんせん」文妙樂大師
・此の文の心を釈しゃくして云く「次の一行は道門増上慢の者を明す」文・文の
心は惡世末法の權教の諸の比丘我れ法を得たりと慢まんじて法華經を行ずるも
のの敵となるべしといふ事なり、經に云く「・或は阿練若あれんにやに納衣のうえにして空閑
に在あつて自ら真の道を行ずと謂おもいて人間を輕賤きょうせんする者有らん利養りように貪著とんじやく
するが故ゆえに白衣びやくえの与ために法を説き世に恭敬きやうけいせらるる事六通ろくつうの羅漢らかんの如ごとくなら
ん是この人惡心あくしんを懷いだき常に世俗せぞくの事を念おもい名を阿練若あれんにやに仮かりて好んで我等われらが
過とがを出いださん而も是しかくの如ごとき言を作さん此の諸の比丘等は利養りようを貪むさほるを為もつ

ての故に外道の論義を説き自ら此の經典を作りて世間の人を誑惑す名聞を求むるを爲つての故に分別して是の經を説くと、常に大衆の中に在りて我等を毀らんと欲するが故に國王・大臣・婆羅門・居士及び余の比丘衆に向つて誹謗して我が惡を説いて是れ邪見の人外道の論議を説くと謂わん」已上妙樂大師・此の文を釈して云く「三に七行は僭聖増上慢の者を明す」文・經並に釈の心は惡世の中に多くの比丘有つて身には三衣一鉢を帶し阿練若に居して行儀は大迦葉等の三明六通の羅漢のごとく在家の諸人にあふがれて一言を吐けば如來の金言のごとくをもはれて法華經を行ずる人があるやぶらんがために國王・大臣等に向ひ奉つて此の人は邪見の者なり法門は邪法なりなんどいゝうとむるなり。

上の三人の中に第一の俗衆の毀よりも第二の邪智の比丘の毀は猶しのびがたし又第二の比丘よりも第三の大衣の阿練若の僧は甚し、此の三人

は当世とうせの權教ごんきょうを手本てほんとする文字もんじの法師ほっし並に諸經論しよきょうろんの言語道斷ごんごどうだんの文を信ず
る暗禪あんぜんの法師ほっし並に彼等かれらを信ずる在俗等ざいぞく四十余年よんじゅうよねんの諸經しよきょうと法華經ほけきょうとの權實ごんじつの
もんぎもんぎをわきまえへざる故に、華嚴けこん・方等ほうとう・般若等はんによの心仏衆生しゅじよう・即心是仏そくしんぜぶつ・即往そくおう
文義もんぎを并なへざる故に、
じゅつほうじゅつほう ほうとうほうとう ほうききょうほうききょう しょうほうじつそうそくおうじゅつほうさいほうしょうほうじつそうそくおうじゅつほうさいほう ことば
十方西方等の文と法華經の諸法実相即往十方西方の文と語の同じきを
もつもつ ぎりぎり ありあり しょうきょうしょうきょう こんごどうだんこんごどうだん しんぎようしよめつしんぎようしよめつ
以て義理のかはれるを知らず・或は諸經の言語道斷・心行所滅の文を見
いちだいししょうきょういちだいししょうきょう によらいによらい じつじじつじ のべ
て一代聖教いちだいししょうきょう には如来の實事をば宣べられざりけりなんどの邪念をおこす、
ゆえゆえ あつきあつき
故に惡鬼此の三人に入つて末代の諸人を損じ国土をも破るなり故に經文に
いわいわ くく 濁劫惡世の中には多く諸の恐怖有らん惡鬼其の身に入つて我を罵罵めり
云く「濁劫惡世の中には多く諸の恐怖有らん惡鬼其の身に入つて我を罵罵めり
きにくきにく ないしないし ほうべんずいきしよせつほうべんずいきしよせつ
し毀辱せん乃至仏の方便隨宜所説の法を知らず」文文の心は濁惡世の時比丘びく
我が信ずる所の教は仏の方便隨宜の法門ともしらずして權實を并へたる人
しゅつたいしゅつたい のの はは
出来すれば罵り破しなんどすべし、是偏に惡鬼の身に入りたるをしらずと
ひとえひとえ あつきあつき わきまえわきまえ
云うなり、されば末代の愚人の恐るべき事は刀杖・虎狼・十惡・五逆等

よりも三衣一鉢さんねいちぼつを帶せる暗禪あんぜんの比丘びくと並に權經ごんきやうの比丘びくを貴としと見て実經じつきやうの人をにくまん俗侶そくりよ等なり。

故に涅槃經ねはんぎやう二十二に云く「惡象等あくぞうに於ては心に恐怖くふする事無かれ惡知識あくちしき

に於ては怖畏おひの心を生ぜよ何を以ての故に是惡象等あくぞうは唯能ただよく身を壞りて心

を破やぶること能あたわず惡知識あくちしきは二俱つたつともに壞るが故に乃至惡象やぶの爲に殺されては

三趣さんしゆに至らず惡友あくゆうの爲に殺されては必ず三趣さんしゆに至らん」文 此文このもんの心を

章安大師宣しょうあんだいしべて云く「諸もろの惡象等あくぞうは但是これ惡緣あくえんにして人に惡心あくしんを生ぜしむ

る事能あたわず惡知識あくちしきは甘談かんさんさ詐媚びごう巧言げんれいしよく令色もて人を牽ひいて惡を作なさしむ惡を

作なすを以ての故に人の善心ぜんしんを破やぶる之を名づけて殺と為なす即ち地獄じごくに墮だす」

文、文の心は惡知識あくちしきと申すは甘くかたらひ詐いつわり媚こび言を巧たくみにして愚癡ぐちの人

の心を取つて善心ぜんしんを破やぶるといふ事なり、總じて涅槃經ねはんぎやうの心は十惡・五逆じゅうあくごぎやくの

者よりも謗法ほうぼう闡提せんたいのものをおそるべしと誡いましめたり闡提せんたいの人と申すは法華經ほけきやう

・涅槃經を云いうとむる者と見えたり、当世とうせの念仏者等ねんぶつ・法華經ほけきようを知り極きわめ
たる由よしをいふに因縁譬喩いんねんひゆをもて釈しゃくしよくよく知る由よしを人にしられて然しかして
後には此の經のいみじき故ゆえに末代の機まつだいのおろかなる者及およばざる由よしをのべ強つよげ
き弓重よりいき鎧よろいかひなき人の用もちにたたざる由よしを申まうせば無智むちの道俗どうぞくさもと思おもいて
實じつには叶かなうまじき權教ごんきように心こころを移うつして僅わずかに法華經ほけきように結縁けちえんしぬるをも翻ひるがえし
又人の法華經ほけきようを行おこなずるをも隨喜ずいきせざる故ゆえに師弟俱していともに謗法ほうぼうの者となる。

之これに依よつて謗法ほうぼうの衆生しゆじよう・國中くにじゆうに充満じゆうまんして適たまたま仏事ぶつじをいとなみ法華經ほけきよう
を供養くようし追善ついぜんを修しゆするにも念仏等ねんぶつを行おこなずる謗法ほうぼうの邪師じゃしの僧來ほけきようて法華經ほけきようは
末代まつだいの機かなに叶がたい難よしき由ゆえを示しめす、故ゆえに施主せしゆも其その說ごうしを實ふこうと信ほうぼうじてある間訪とわる
過去かこの父母夫婦兄弟等ふぼ きようだいは弥い地獄よじごくの苦くるしみを増くましめし孝子かうしは不孝ふかう謗法ほうぼうの者となり
聴聞ちやうもんの諸人しよにんは邪法じゃほうを隨喜ずいきし惡魔あくまの眷屬けんぞくとなる、
日本國中にほんこくじゆうの諸人しよにんは仏法ぶつぼうを行おこなずるに似にて仏法ぶつぼうを行おこなぜず適たまたま・仏法ぶつぼうを知る智ちしや者

は国の人に捨てられ守護の善神は法味をなめざる故に威光を失ひ利生を止
此の国をすて他方に去り給い、悪鬼は便りを得て国中に入り替り大地を
動かし悪風を興し一天を悩し五穀を損ず故に飢渴出来し人の五根には鬼神
入つて精気を奪ふ是を疫病と名く一切の諸人善心無く多分は悪道に墮つる
ことひとへに悪知識の教を信ずる故なり、仁王經に云く「諸の悪比丘多く
名利を求め國王・太子・王子の前に於て自ら破仏法の因縁・破国の因縁を
説かん其の王別えずして此の語を信聴し横に法制を作りて仏戒に依らず
是れを破仏・破国の因縁と為す」文、文の心は末法の諸の悪比丘國王・大臣
の御前にして国を安穩ならしむる様にして終に国を損じ仏法を弘むる様に
して還つて佛法を失うべし、國王・大臣此の由を深く知し食さずして此の
言を信受する故に国を破り仏教を失うと云う文なり。此の時・日月度を失ひ
時節もたがひて夏はさむく冬はあたたかに秋は悪風吹き赤き日月出で望朔

にあらずして日月蝕し・或は二つ三つ等の日出来せん大火・大風・彗星等をこり飢饉疫病等あらんと見えたり、国を損じ人を悪道にをとす者は悪知識に過ぎたる事なきか。

問うて云く始めに智者の御物語とて申しつるは所詮後世の事の疑わしき

故に善悪を申して承らんとためなり、彼の義等は恐ろしき事にあるにこそ

侍るなれ一文不通の我等が如くなる者はいかにしてか法華經に信をとり候

べき又心ねをば何様に思い定め侍らん、答えて云く此の身の申す事をも一

定とおぼしめさるまじきにや其の故はかやうに申すも天魔・波旬・惡鬼等

の身に入つて人の善き法門を破りやすらんとおぼしめされ候はん一切は賢

きが智者にて侍るにや。

問うて云く若しかやうに疑い候はば我身は愚者にて侍り万の智者の御語

をば疑いさて信ずる方も無くして空く一期過し侍るべきにや、答えて云く

仏の遺言に依法不依人と説かせ給いて候へば經の如くに説かざるをば何に
いみじき人なりとも御信用あるべからず候か、又依了義經不依不了義經と
説かれて候へば愚癡の身にして一代聖教の前後淺深を弁えざらん程は
了義經に付かせ給い候へ、了義經不了義經も多く候阿含・小乘經は
不了義經・華嚴・方等・般若・淨土の觀經等は了義經、又四十余年の
諸經を法華經に對すれば不了義經・法華經は了義經、涅槃經を法華經に
對すれば法華經は了義經・涅槃經は不了義經、大日經を法華經に對すれ
ば大日經は不了義經法華經は了義經なり、故に四十余年の諸經並に
涅槃經を打ち捨てさせ給いて法華經を師匠と御憑み候へ法華經をば國王・
父母・日月・大海・須弥山・天地の如くおぼしめせ、諸經をば関白・大臣
・公卿乃至万民・衆星・江河・諸山・草木等の如くおぼしめすべし、我等
が身は末代造惡の愚者・鈍者・非法器の者、國王は臣下よりも人をたすく

る人父母は他人よりも子をあはれむ者日月は衆星より暗を照らす者・
法華經は機に叶わずんば況や余經は助け難しとおぼしめせ、又釈迦如来と
阿彌陀如来・薬師如来・多宝仏・觀音・勢至・普賢・文殊等の一切の諸仏
・菩薩は我等が慈悲の父母・此の仏菩薩の衆生を教化する慈悲の極理は唯
法華經にのみとどまれりとおぼしめせ、諸經は悪人・愚者・鈍者・女人・
根欠等の者を救ふ秘術をば未だ説き顯わさずとおぼしめせ法華經の一切經
に勝れ候故は但此の事に侍り、而るを当世の学者・法華經をば一切經に
勝れたりと讃めて、而も末代の機に叶わずと申すを皆信ずる事豈謗法の人
に侍らずや、只一口におぼしめし切らせ給い候へ所詮法華經の文字を破り
さきなんどせんには法華經の心やぶるべからず、又世間の惡業に對して云い
うとむるとも人人用ゆべからず只相似たる權經の義理を以て云いうとむる
にこそ人はたばらかさるれとおぼしめすべし。

問うて云く・或智者の申され候しは四十余年の諸経と八箇年の法華經とは成仏の方こそ爾前は難行道・法華經は易行道にて候へ、往生の方にては同事にして易行道に侍り法華經を書き讀めても十方の淨土阿彌陀仏の國へも生るべし觀經等の諸經の付いて弥陀の名号を唱えん人も往生を遂ぐべし只機縁の有無に随つて何をも諍ふべからず、但し弥陀の名号は人ごとに行じ易しと思ひて日本國中に行じつけたる事なれば法華經等の余行よりも易きにこそと申されしは如何、答えて云く仰せの法門はさも侍るらん又世間の人も多くは道理と思ひたりげに侍り但し身には此の義に不審あり、其の故は前に申せしが如く末代の凡夫は智者と云うともたのみなし世こそぞりて上代の智者には及ぶべからざるが故に愚者と申すともいやしむべからず經論の証文顯然ならんには抑無量義經は法華經を説くが為の序分なり、然るに始め寂滅道場より今の常在靈山の無量義經に至るまで其の

ねんげつにつすう 年月日数を委く計へ挙げれば四十余年なり、其の間の所説の経を挙るに華嚴

・阿含・方等・般若なり所談の法門は三乗・五乗・所習の法門な

しゅぎよう

り修行の時節を定むるには宣説菩薩歷劫修行と云ひ隨自意・隨他意を

わか 分つには是を隨他意と宣べ四十余年の諸經と八箇年の所説との語同じく

義替れる事を定めるには文辭一と雖ど義各異るととけり成仏の方は別に

して往生の方は一つなるべしとおぼえず華嚴・方等・般若・究竟最上

おうじよう

の大乗經・頓悟・漸悟の法門・皆未顕真實と説かれたり此の大部の諸經

だいじようきよう

すら未顕真實なり何に況や浄土の三部經等の往生極樂ばかり未顕真實の内

みけんしんじつ

にもれんや其の上・經經ばかりを出すのみにあらず既に年月日数を出す

きようきよう

をや、然れば華嚴・方等・般若等の弥陀往生已に未顕真實なる事疑い無し、

しか

觀經の弥陀往生に限つて豈多留難故の内に入らざらんや、若し隨自意の

かんきよう

ほけきよう 法華經の往生極樂を隨他意の觀經の往生極樂に同じて易行道と定めて

おうじようこくらく

すいたい かんきよう おうじようこくらく

しか いぎよう
而も易行の中に取つても猶觀經の念仏往生は易行なりと之を立てられば
権実雜乱の失大謗法たる上一滴の水漸漸に流れて大海となり一塵積つて
須弥山となるが如く漸く權經の人も実經にすすまず実經の人も權經に
おち權經の人・次第に國中に充滿せば法華經隨喜の心も留り國中に王
なきが如く人の神を失えるが如く法華・真言の諸の山寺荒れて諸天善神
・竜神等・一切の聖人國を捨てて去らば惡鬼便りを得て乱れ入り惡風吹
いて五穀も成らしめず疫病流行して人民をや亡さんずらん、此の七八年
が前までは諸行は永く往生すべからず善導和尚の千中無一と定めさせ
給いたる上選択には諸行を抛てよ行ずる者は群賊と見えたりなどと放語
を申し立てしが、又此の四五年の後は選択集の如く人を勧めん者は謗法
の罪によつて師檀共に無間地獄に墮つべしと經に見えたりと申す法門出来
したりげに有りしを、始めは念仏者こそぞりて不思議の思いをなす上念仏を

もう 申す者無間地獄に墮つべしと申す悪人外道ありなんどののしり候しが念仏
者・無間地獄に墮つべしと申す語に智慧つきて各 選択集を委く披見する
程にげにも謗法の書とや見なしけん千中無一の悪義を留めて諸行往生の
由を念仏者毎に之を立つ、然りと雖も唯口にのみゆるして心の中は猶本の
千中無一の思いなり在家の愚人は内心の謗法なるをばしらずして諸行
往生の口にばかされて念仏者は法華經をば謗ぜざりけるを法華經を謗ずる
由を聖道門の人の申されしは僻事なりと思へるにや、一向諸行は千中無一
と申す人よりも謗法の心はまさりて候なり失なき由を人に知らせ而も念仏
計りを亦弘めんとたばかるなり偏に天魔の計りごととなり。

問うて云く天台宗の中の人の立つる事あり天台大師爾前と法華と相對し
て爾前を嫌うに二義あり、一には約部四十余年の部と法華經の部と相對し
て爾前は・なり法華は妙なりと之を立つ二には約教・教に☆妙を立て華嚴

・方等・般若等の円頓速疾の法門をば妙と歎じ華嚴・方等・般若等の三乘
れきべつ しゅぎよう ほうもん ぜんさんきよう
歴別の修行の法門をば前三教と名づけて・なりと嫌へり円頓速疾の方を
きら ほけきよう いちみ ほうもん もう いかん ぜんそく
ば嫌わず法華經に同じて一味の法門とせりと申すは如何、答えて云く此の
ふしん はべ し かべ てんだい みようらく
事は不審にもする事侍るらん然る可しと・をばゆ天台・妙樂より已来今に
あ はべ てんだい しようじよ やつきよう
論有る事に侍り天台の三大部六十卷総じて五大部の章疏の中にも約教の
にぜん きら ただやくぶ にぜん おし きら
時は爾前の円を嫌ふ文無し、只約部の時ばかり爾前の円を押ふさねて嫌へ
り、日本に二義あり園城寺には智証大師の釈より起つて爾前の円を嫌ふと
い さんもん きら たがい とも りようけん しか にぜん
云い山門には嫌はずと云う互に文釈あり俱に料簡あり然れども今に事ゆか
ず、但し予が流の義には不審晴れておぼえ候、其の故は天台大師四教を立
たま すじめ にぜん しきよう ほうきよう にぜん
て給うに四の筋目あり、一には爾前の經に四教を立つ二には法華經と爾前
そうたい にぜん ほつけ ぜんさんきよう きら
と相對して爾前の円を法華の円に同じて前三教を嫌う事あり、三には爾前
の円をば別教に摂して前三教と嫌ひ法華の円をば純円と立つ四には爾前

の円をば法華ほっけに同おなずれども但ただ法華經ほけきようの二妙ふたみょうの中の相待妙そうたいみょうに同じて絶待妙ぜったいみょうには同おなぜず、此この四の道理どうりを相對そうたいして六十卷ろくじゅうかんをかんがうれば狐疑こぎの冰解こおりけたり一一の証文しょうもんは且かつつは秘ひし且かつつは繁しげき故ゆえに之これを載のせず、又法華經ほけきようの本門ほんもんにしては爾前にぜんの円と迹門しやくもんの円と・を嫌きらう事不審ふしんなき者なり、爾前にぜんの円をばべつきよう別教せつに攝せつして約教やくきようの時ときは前三ぜんさん為い☆後一いみよう為妙みょうと云いなり此の時にぜんは爾前にぜんの円むりようぎきようりやうじしゆぎようは無量義經むりようぎきようの歷劫修行りやくじうしゆぎようの内に入りぬ、又伝でん教大師きようだいしの註釈ちうしやくの中に爾前にぜんの円はつきようは八教あを挙あげて四十余年よんじゅうよねん・末頭真実みけんしんじつの内に入れ、或あるは前三教ぜんさんきようをば迂回うえと立たて爾前にぜんの円をば直道じきどうと云いい無量義經むりようぎきようをば大直道じきどうと云いう委細いさいに見みる可べし。問いうて云いく法華經ほけきようを信しんぜん人は本尊並ほんぞんに行儀並ぎようぎに常じょうの所行しよぎようは何いかにてか候こべき、答こたえて云いく第一だいいちに本尊ほんぞんは法華經ほけきよう八卷はつかん・一卷いっかん・一品いっぴん・或あるは題目だうもくを書かいて本尊ほんぞんと定べむ可べしと法師品並ほうしほんに神力品じんりきほんに見みえたり、又たへたらん人は釈迦しやくかに由よらいたほうぶつ多宝仏たほうぶつを書かいても造たつても法華經ほけきようの左右さうに之これを立たて奉たてまつるべし、又た

へたらんは十方じゅつぽうの諸仏しよぶつ普賢菩薩等ふげんぼさつをもつくり

かきたてまつるべし、行儀ぎやうぎは本尊ほんぞんの御前おんまえにして必ず坐立行ざりつぎやうなるべし道場どうじやうを

出いでては行住ぎやうじゆう坐臥ざがをえらぶべからず、常じやうの所行しよぎやうは題目なむを南無妙法蓮華經みやうほうれんげきやう

と唱となうべし、たへたらん人は一偈いちげ・一句いっくをも読み奉る可たてまつべし助縁じょえんには南無なむ

釈迦牟尼仏しやくかにぶつ・多宝仏たほうぶつ・十方諸仏じゅつぽうしよぶつ・一切いっさいの諸菩薩しよぼさつ・二乗にじやう・天人てんにん・竜神りゆうじん・

八部等心はちぶどうしんに随したがうべし愚者ぐしや多き世となれば一念三千いちねんさんぜんの觀かんを先とせず其その志こころざし

あらん人は必ず習學しよくがくして之これを觀かんずべし。

問いうて云いわく只題目計ただだいもくばかりを唱となうる功德如何くどくいかに、答いえて云いわく釈迦如来しやくかにらい・法華經ほけきやうを

とかんとおぼしめして世いに出いで・ましまししかども四十余年よんじゅうよねんの程ほどは法華經ほけきやう

の御名みなを秘ひしおぼしめして御年三十ごねんさんじの比ころより七十余いたに至いたるまで法華經ほけきやうの

方便ほうべんをまうけ七十二しちじふににして始めて題目だいもくを呼び出いさせ給たまへば諸經しよきやうの題目だいもくに

是これを比くらぶべからず、其その上法華經ほけきやうの肝心かんじんたる方便ほうべん・寿量じゆりやうの一念三千いちねんさんぜん・久遠くおん

じつじょう ほうもん みようほう

実成の法門は妙法の二字におさまれり、天台大師・玄義十巻を造り給う

だいいち

第一の巻には略して妙法蓮華經の五字の意を宣べ給う、第二の巻より七の

いた

巻に至るまでは又広く妙の一字を宣べ八の巻より九の巻に至るまでは

ほうれんげ

法蓮華の三字を釈し第十の巻には經の一字を宣べ給へり、經の一字に華嚴

あこん

・阿含・方等・般若・涅槃經を収めたり妙法の二字は玄義の心は

ひやつかい・せんによ

百界・千如・心仏衆生の法門なり止観十巻の心は一念三千・百界・千如・

さんぜんせけん

三千世間・心仏衆生・三無差別と立て給う、一切の諸仏菩薩・十界の

いんがじゅつぽう

因果十方の草木・瓦礫等・妙法の二字にあらずと云う事なし、華嚴・阿含

よんじゅうやねん

等の四十余年の經經・小乗經の題目には大乘經の功德を収めず又

だいいじょうきよう

大乘經にも往生を説く經の題目には成仏の功德をおさめず又王にては

あれ

有れども王中の王にて無き經も有り仏も又經に随つて他仏の功德をおさめ

びようどういしゅ

ず平等意趣をもつて他仏・自仏と・をなじといひ・或は法身平等をもて

じぶつ たぶつ 自仏他仏同じといふ、 実には一仏に一切仏の功德をおさめず今法華經は
よんじゅうよねん 四十余年の諸經を一經に収めて十方世界の三身円満の諸仏をあつめて
しゃか 釈迦一仏の分身の諸仏と談ずる故に一仏・一切仏にして妙法の二字に諸仏
みなおさ 皆収まり、 故に妙法蓮華經の五字を唱うる功德莫大なり諸仏・諸經の
だいもく 題目は法華經の所開なり 妙法は能開なりとしりて法華經の題目を唱うべ
し。

いわ 問うて云く此の法門を承つて又智者に尋ね申し候えば法華經のいみじき
さう およ 事は左右に及ばず候但し器量ならん人は唯我が身計りは然る可し、 末代の
ほんぶ 凡夫に向つてただちに機をも知らず爾前の教を云いとめ法華經を行ぜよ
もう と申すはとしごろの念仏などをば打ち捨て又法華經には未だ功も入れず
有にも無にもつかぬようにてあらんずらん、 又機も知らず法華經を説かせ
たま 給はば信ずる者は左右に及ばず若し謗ずる者あらば定めて地獄に墮ち

候はんずらん、其の上仏も四十余年の間・法華經を説き給はざる事は

にやくたんさんぶつじよう

若但讚仏乘・

衆生没在苦の故なりと

在世の機すら

猶然なり何に況や末代

の凡夫をや、されば譬喩品には「仏・舍利弗に告げて言わく無智の人の中

に此の經を説くことなかれ」云云此等の道理を申すは如何が候べき、

答えて云く智者の御物語と仰せ承り候へば所詮末代の凡夫には機をかがみて説

け左右なく説いて人に謗ぜさする事なかれとこそ候なれ、彼人さやうに申さ

れ候はば御返事候べきやうは抑若但讚仏乘・乃至無智人中等の文を出し

給はば又一經の内に凡有所見・我深敬汝等等と説いて不輕菩薩の杖木瓦石

をもつて・うちはられさせ給いしをば顧みさせ給はざりしは如何と申させ

給へ。

問うて云く一經の内に相違の候なる事こそよに得心がたく侍ればくわし

く承り候はん、答えて云く方便品等には機をかがみて此の經を説くべしと

く承り候はん、

答えて云く方便品等には機をかがみて此の經を説くべしと

く承り候はん、

答えて云く方便品等には機をかがみて此の經を説くべしと

く承り候はん、

答えて云く方便品等には機をかがみて此の經を説くべしと

く承り候はん、

答えて云く方便品等には機をかがみて此の經を説くべしと

く承り候はん、

答えて云く方便品等には機をかがみて此の經を説くべしと

く承り候はん、答えて云く方便品等には機をかがみて此の經を説くべしと

く承り候はん、答えて云く方便品等には機をかがみて此の經を説くべしと

く承り候はん、答えて云く方便品等には機をかがみて此の經を説くべしと

く承り候はん、答えて云く方便品等には機をかがみて此の經を説くべしと

く承り候はん、答えて云く方便品等には機をかがみて此の經を説くべしと

く承り候はん、答えて云く方便品等には機をかがみて此の經を説くべしと

く承り候はん、答えて云く方便品等には機をかがみて此の經を説くべしと

く承り候はん、答えて云く方便品等には機をかがみて此の經を説くべしと

見え不輕品には謗ずとも唯強いて之を説くべしと見え侍り一經の前後水火
の如し、然るを天台大師会して云く「本已に善有るは釈迦小を以て之を將護
し本未だ善有らざるは不輕大を以て之を強毒す」文・文の心は本と善根あ
りて今生の内に得解すべき者の為には直に法華經を説くべし、然るに其の
中に猶聞いて謗すべき機あらば暫く權經をもてこしらえて後に法華經を説
くべし、本と大の善根もなく今も法華經を信ずべからずなにとなくとも惡道
に墮ちぬべき故に但押して法華經を説いて之を謗せしめて逆縁ともなせと
会する文なり、此の釈の如きは末代には善無き者は多く善有る者は少し
故に惡道に墮ちんこと疑い無し、同くは法華經を強いて説き聞かせて毒鼓
の縁と成す可きかならば法華經を説いて謗縁を結ぶべき時節なる事諍い無
き者をや、法華經の方便品に五千の上慢あり略開三頭一を聞いて
廣開三頭一の時・仏の御力をもて座をたたしめ給ふ後に涅槃經並に四依の

辺にして今生に悟を得せしめ給うと、諸法無行經に喜根菩薩・勝意比丘
向つて大乘の法門を強いて説ききかせて謗ぜさせしと、此の二の相違をば
天台大師会して云く「如来は悲を以ての故に發遣し喜根は慈を以ての故に
強説す」文・文の心は仏は悲の故に後のたのしみをば闇いて当時・法華經
を謗じて地獄にをちて苦にあうべきを悲み給いて座をたたしめ給いき、譬え
ば母の子に病あると知れども当時の苦を悲んで左右なく灸を加へざるが
如し、喜根菩薩は慈の故に当時の苦をばかへりみず後の樂を思いて強いて
之を説き聞かしむ、譬えば父は慈の故に子に病あるを見て当時の苦をかへ
りみず後を思ふ故に灸を加うるが如し、又仏在世には仏・法華經を秘し給
いしかば四十余年の間等覺不退の菩薩名をしらず、其の上寿量品は法華經
八箇年の内にも名を秘し給いて最後にきかしめ給いき末代の凡夫には左右
なく如何がきかしむべきとおぼゆる處を妙樂大師釈して云く「仏世は當機

の故に簡ゆえぶ末代えらは結縁まつだいの故に聞けちえんかしむ」と釈ゆえし給しゃくへり文の心は仏たま在世ざいせには

仏一期いちいちの間多くの人不退ふたいの位いにのぼりぬべき故ゆえに法華經ほけきようの名義なごうぎを出でして

謗ぼうぜしめず機きをこしらへて之これを説く仏滅後ぶつめつこには当機とうきの衆しゆは少く結縁けちえんの衆多

きが故たぶんに多分つに就さういて左右ほけきようなく法華經ほけきようを説くべしと云う釈こたへなり是体こたへの多く

の品あり又末代まつだいの師は多くは機きを知らず機きを知らざらんには強しいて但実經じつきよう

を説くべきかされば天台大師てんだいだいしの釈いわに云く「等こしく是れ見みざれば但大を説く

に咎とが無し」文・文の心は機きをも知らざれば大を説くに失とがなしと云う文なり

又時の機せつぼうを見て説法せつぽうする方もあり皆国中みなくにじゅうの諸人しよにん・権經ごんきようを信しんじて実經じつきようを謗

し強あながちもちに用もちいざれば彈呵だんかの心をもて説くべきか時に依よつて用否もちひあるべし。

問いうて云く唐土もうこしの人師にんしの中に一分一向いちぶんいつこうに権大乘ごんだいじように留とどまつて実經じつきように入いらざ

る者はいかなる故か候、答こたえて云く仏世いに出いでましまして先いず四十余年よんじゅうよねんの

権大乘ごんだいじよう・小乘しょうじようの經を説き後ごには法華經ほけきようを説いて言のたまわく「若にやくいし以小乘しょうじよう化か・

ないしおいちに
乃至於一人・我則墮慳貪・此事為不可「文・文の心は仏但爾前の經許りを
説いて法華經を説き給はずば仏慳貪の失ありと説かれたり、後に属累品に
いたりて仏右の御手をのべて三たび諫めをなして三千大千世界の外・八方
・四百万億那由他の国土の諸菩薩の頂をなでて未来には必ず法華經を説
くべし、若し機たへずば余の深法の四十余年の經を説いて機をこしらへて
法華經を説くべしと見えたり、後に涅槃經に重ねて此の事を説いて仏滅後
に四依の菩薩ありて法を説くに又法の四依あり実經をついに弘めずんば
天魔としるべきよしを説かれたり故に如来の滅後・後の五百年・九百年の
間に出で給いし竜樹菩薩・天親菩薩等☆如来の聖教を弘め給うに天親
菩薩は先に小乗の説一切有部の人・俱舍論を造つて阿含十二年の經の心
を宣べて一向に大乘の義理を明さず次に十地論・攝大乘論・釈論等を造
つて四十余年の權大乘の心を宣べ後に仏性論・法華論等を造りて粗

じつだいじょう

実大乘のべの義を宣べたり 竜樹菩薩亦然なり 天台大師・唐土の人師として

いちだい

一代を分つに大小・権実顕然なり余の人師は僅かに義理を説けども分明

しょうもん

ならず又証文たしかならず但し末の論師並に訳者・唐土の人師の中に

だいしろう

大小をば分つて大にをいて権実を分たず・或は語には分つといへども心

ごんだいじょう

は権大乘のをもむきを出でず此等是不退諸菩薩・其数如恒沙・亦復不能知

とおぼえて候なり。

疑つて云く唐土の人師の中に慈恩大師は十一面観音の化身牙より光を放

ぜんどうわじょう

つ、善導和尚は弥陀の化身口より仏をいだすこの外の人師通を現じ徳をほ

さんまい

どこし三昧を発得する人・世に多しなんぞ権実二経を并へて法華経を詮と

いわ

せざるや、答えて云く阿竭多仙人外道は十二年の間・耳の中に恒河の水を

ばそせんにん

とどむ婆藪仙人は自在天となりて三目を現ず、唐土の道士の中にも張階は

らんば

霧をいだし鸞巴は雲をはく第六天の魔王は仏滅後に比丘・比丘尼・優婆塞

・優婆夷・阿羅漢・辟支仏の形を現じて四十余年の経を説くべしと見えた
り通力をもて智者愚者をばしるべからざるか、唯仏の遺言の如く一向に
権教を弘めて実経をつゐに弘めざる人師は権教に宿習ありて実経に
入らざらん者は・或は魔にたばらかされて通を現ずるか、但し法門をもて
邪正をただすべし利根と通力とにはよるべからず。

文応元年太歳庚申五月二十八日

日蓮

花押

鎌倉名越に於て書き畢んぬ

◆二 立正安国論

文応元年七月 三十九歳御作 与北条時頼書 於鎌倉

一七P

旅客来りて嘆いて曰く近年より近日に至るまで天変地天・飢饉疫癘・
遍く天下に満ち広く地上に迸る牛馬巷に斃れ骸骨路に充てり死を招くの
輩既に大半に超え悲まざるの族敢て一人も無し、然る間・或は利剣即

こ
是の文を專もつぱらにして西土教主の名を唱え・或は衆病悉除の願を持ちて東方とうほう
によらい
如来の経を誦ずしし・或は病即消滅・不老不死の詞ことばを仰いで法華真実の
みようもん
妙文を崇め・或は七難即滅・七福即生の句を信じて百座百講の儀を調え
あ
有るは秘密真言の経に因て五瓶の水を灑そそぎぎ有るは坐禪入定の儀を全まっとうして
くうかん
空觀の月を澄すまし、若くは七鬼神の号なを書して千門に押し若くは五大力の形
ばんこ
を圖して万戸に懸かけ若くは天神地祇てんじんちぎを拜はいして四角四堺の祭祀さいしを企くわだて若くは
ばんみんひやくせい
万民百姓を哀あわれんで国主・国宰の徳政とくせいを行う、然りと雖も唯肝胆いたんたんを摧くだくくのみ
いよいよ
にして弥飢疫きえきに逼せめられ乞客目こつきやくに溢あふれ死人眼しにんまなこに満みてり、臥ふせる屍しかばねを觀ものみ
な
と為し並なべる戸かばねを橋と作なす、觀おもれば夫れ二離壁じちへきを合せ五緯珠ごいたまを連さんね三寶さんぼうも
いまし
世に在いまし百王未だ窮きわまらざるに此の世早く衰おとろえ其の法何ぞ廢すたれたる是れ
いか
何なる禍わざわいに依より是れ何なる誤いかりに由よるや。

主人の曰いわく独ひとりり此の事を愁うれいて胸臆くおくに憤ふん☆す客来きやくつて共に嘆なげく屢しばしば談話だんわ

を致さん、夫れ出家して道に入る者は法に依つて仏を期するなり而るに今
神術も協わず仏威も験しなし、具に当世の体を覲るに愚にして後生の疑
を發す、然れば則ち円覆を仰いで恨を呑み方載に俯して慮を深くす、
倩ら微管を傾け聊か經文を披きたるに世皆正に背き・人悉く惡に歸す、
故に善神は國を捨てて相去り聖人は所を辭して還りたまわず、是れを以て
魔來り鬼來り災起り難起る言わずんばある可からず恐れずんばある可から
ず。

客の曰く天下の災・國中の難・余独り嘆くのみに非ず衆皆悲む、今
蘭室に入つて初めて芳詞を承るに神聖去り辭し災難並び起るとは何れの
經に出でたるや其の証拠を聞かん。

主人の曰く其の文繁多にして其の証弘博なり。

金光明經に云く「其の國土に於て此の經有りと雖も未だ嘗て流布せし

めず捨離しやりの心を生じて聴聞ちやうもんせん事を楽ねがわわす亦供養またくようし尊重そんちやうし讃歎さんたんせず
四部よんぶの衆・持經じきやうの人を見て亦復またまたた尊重そんちやうし乃至ないしくよう供養あたすること能あたわす、遂に我
れ等およ及び余けんぞくむりやうの眷属しよてん無量の諸天しよてんをして此の甚深じんじんの妙法みやうほうを聞くことを得うざらし
め甘露かんろの味に背そむき正法しやうほうの流を失うしない威光いこう及び勢力およ有ること無あからしむ、
悪趣あくしゅを増長ぞうちやうし人天にんてんを損滅そんめつし生死しやうじの河に墜おちて涅槃ねはんの路みちに乖そむかん、世尊せそん・
我等われら四王なら並びに諸の眷属もろもろけんぞくおよ及び藥叉やしや等斯かくの如ごとき事そを見て其の国土こくどを捨てて
擁護おうごの心無なけん、但ただ我等われらのみ是の王こを捨棄しゃきするに非あらず必ず無量の国土こくどを
守護しゆごする諸天善神しよてんぜんじん有あらんも皆悉みなことごとしやこく捨去すでせん、既に捨離しやりし已おわりりなば其の国
当まさに種種しゆじゆの災禍さいか有あつて国位こくゐを喪失そうしつすべし、一切いっさいの人衆にんしやう皆善心みなぜんしん無なく唯繫縛ただけいばく
殺害さつがい瞋諍しんじやうのみ有あつて互に相讓あひざんてんし諂まげし枉つみげて辜無およきに及およばん、疫病えきび流行りやうこうし
彗星すいせい数しばしばば出いで兩日りやうじつ並ならび現げんじ薄蝕はくしよく恒無こくびやくく黑白こくふしやうの二虹こう不祥ふしやうの相あを表あらわし
ほしながちうこ
星流れ地動ちうこき井の内に声おこを發はううし暴雨あくふう・惡風じせつ・時節よに依よらず常に飢饉ききんに遭あつ

て苗実成らず、多く他方の怨賊有つて国内を侵掠し人民諸の苦惱を受け
とちしよろく ところあ
土地所樂の処有ること無けん」已上。

大集經に云く「仏法実にに隱没せば鬚髮爪皆長く諸法も亦忘失せん、当の
だいしつきよう いわ ぶつぼうじつ おんもつ しゅほつそうみな しよほう またもうしつ その
こくう

時虚空の中に大なる声有つて地を震い一切皆遍く動かんこと猶水上輪の
いっさいみなあまねく なる

如くならん城壁破れ落ち下り屋宇悉く・れ圻け樹林の根・枝・葉・華・
じようへき わ おくう こくご ことごと やぶれさけ じゆりん ね へ せき け け

葉・菓・葉尽きん唯淨居天を除いて欲界の一切処の七味・三精氣損滅して
つ ただじよういてん よっかい いっさいしよ しようけそんげん

余り有ること無けん、解脱の諸の善論當の時一切尽きん、所生の華菓の味
あ げだつ もろもろぜんろんその いっさいいっつ しよしよ けか

い希少にして亦美からず、諸有の井泉池・一切尽く枯涸し土地悉く鹹鹵し
きしよう またうまか しよう せいせんち いっさいいっごここかく とち こくご かんろ

☆裂して丘澗と成らん、諸山皆☆燃して天竜雨を降さず苗稼も皆枯死し
てきれつ きゅうかん しよざんみなししようねん てんりゅうあめ みようけ みなから

生ずる者皆死し尽き余草更に生ぜず、土を雨らし皆昏闇に日月も明を現ぜ
みな につ よそう しょう しょうあくすい げん ふ みなこんあん にちがつ げん

ず四方皆亢旱して数ば諸惡瑞を現じ、十不善業の道・貪・瞋・癡倍增して
しほうみなこうかん しほし しよあくすい げん ふぜんごう とん・じん・ちばいそう

衆生父母に於ける之を観ること・鹿の如くならん、衆生及び壽命・色
しゅじよう ふほ これ み しようろく こく しゅじようおよ じゆみよう

力・威楽減じ人天の樂を遠離し皆悉く惡道に墮せん、是くの如き不善業の
惡王・惡比丘我が正法を毀壞し天人の道を損減し、諸天善神王の衆生を
悲愍する者・此の濁惡の國を棄てて皆悉く余方に向わん」已上。

仁王經に云く「國土乱れん時は先ず鬼神乱る鬼神乱るが故に万民乱る

賊來つて國を劫かし百姓亡喪し臣・君・太子・王子・百官共に是非を生ぜ

ん、天地怪異し二十八宿・星道・日月時を失い度を失い多く賊起ること有

らん」と、亦云く「我今五眼をもつて明に三世を見るに一切の國王は皆過去

の世に五百の仏に侍えるに由つて帝王主と為ることを得たり、是を為つて

一切の聖人羅漢而も為に彼の國土の中に來生して大利益を作さん、若し

王の福尽きん時は一切の聖人皆為に捨て去らん、若し一切の聖人去らん

時は七難必ず起らん」已上。

藥師經に云く「若し刹帝利・灌頂王等の災難起らん時所謂人衆疾疫の難

・他国侵逼の難・自界叛逆の難・星宿変怪の難・日月薄蝕の難・
非時風雨の難・過時不雨の難あらん」已上。

仁王経に云く

大王吾が今化する所の百億の須弥・百億の日月・一一の

須弥に四天下有り、其の南閻浮提に十六の大国五百の中国十千の小国有り

其の国土の中に七つの畏る可き難有り一切の国王是を難と為すが故に、云

何なるを難と為す日月度を失い・時節叛逆し・或は赤日出で・黒日出で

・二三四五の日出で・或は日蝕して光無く・或は日輪一重・二三四

五重輪現ずるを一の難と為すなり、二十八宿度を失い金星・彗星・輪星・

鬼星・火星・水星・風星・☆星・南斗・北斗・五鎮の大星・一切の国主星

・三公星・百官星・是くの如き諸星・各各・変現するを二の難と為すな

り、大火国を焼き万姓焼尽せん・或は鬼火・

竜火・天火・山神火・人火・樹木火・賊火あらん是くの如く変怪するを三

の難なんと為なすなり、大水ひやくせい百姓ひようもつを・没じせつし時節ほんぎやく返逆くして・冬雨あめふり・夏雪ふゆふり
・冬時らいでんに雷電へきれき霹し・六月ひようそうはくに氷霜ひようそうはく雹ふを雨ふらし・赤水せきすい・黒水こくすい・青水せいすいを雨ふらし
・土山どざん・石山せきざんを雨ふらし沙礫さりやくせき石ふを雨ふらす江河こうか逆さかに流れ山やまを浮うべ石いしを流ながす是かくく
の如ごとく変かずる時ときを四よの難なんと為なすなり、大風たいふう・万姓ばんしやうを吹殺ふきころし国土こくど・山河さんが・
樹木じゅもく・一時めつぽつに滅没めつぼつし、非時ひじの大風たいふう・黒風こくふう・赤風せきふう・青風せいふう・天風てんふう・地風ちふう・火風かふう
・水風すいふうあらん是かくくの如ごとく変かずるを五ごの難なんと為なすなり、天地てんち・国土こくど・亢陽かうようし
炎火えんか洞燃どうねんとして・百草ひやくそう亢旱かうかんし・五穀ごこく登のぼらず・土地とち赫燃かくねんと万姓ばんしやう滅尽めつじんせん是かくく
の如ごとく変かずる時ときを六むの難なんと為なすなり、四方しほうの賊来そくつて国くにを侵ないし内外ないげの賊起そく
り、火賊かそく・水賊すいそく・風賊ふうそく・鬼賊きそくありて百姓ひやくせい荒乱かうらんし・刀兵とうひやう劫起きやくらん・是かくくの
如ごとく怪むする時ときを七しちの難なんと為なすなり「大集經だいしつきやうに云いく「若もし国王こくおう有あつて無量世むりやうせ
に於おいて施戒慧せかいえを修しゆすとも我われが法ほふの滅めつせんを見て捨すててて擁護おうごせずんば是かくくの
如ごとく種くさゆる所の無量むりやうの善根ぜんこん悉ことごとく皆滅失みなめつしつして其その国当まに三さんの不祥ふしやうの事あ有あるべ

し、一には穀貴・二には兵革・三には疫病なり、一切の善神悉く之を捨離
せば其の王教令すとも人随従せず常に隣国の侵☆する所と為らん、暴火
横に起り悪風雨多く暴水増長して人民を吹・し内外の親戚其れ共に謀叛せ
ん、其の王久しからずして当に重病に遇い寿終の後・大地獄の中に生ず
べし、乃至王の如く夫人・太子・大臣・城主・柱師・郡守・宰官も亦復た
是くの如くならん」已上。

夫れ四経の文朗かなり万人誰か疑わん、而るに盲瞽の輩迷惑の人妄に
邪説を信じて正教を弁えず、故に天下世上・諸仏・衆経に於て捨離の心
を生じて擁護の志無し、仍て善神聖人国を捨て所を去る、是を以て
悪鬼外道災を成し難を致す。

客色を作して曰く後漢の明帝は金人の夢を悟つて白馬の教を得、上宮
太子は守屋の逆を誅して寺塔の構を成す、爾しより来た上一人より下万民

に至るまで仏像を崇め経巻を專にす、然れば則ち叡山・南都・園城・東寺
・四海・一州・五畿・七道・仏經は星の如く羅なり堂宇雲の如く布けり、
・子の族は則ち驚頭の月を觀じ鶴勒の流は亦鷄足の風を伝う、誰か一代
の教を遍し三宝の跡を廃すと謂んや若し其の証有らば委しく其の故を聞か
ん。

主人諭して曰く仏閣薨を連ね経蔵軒を並べ僧は竹葦の如く侶は稻麻に
似たり崇重年旧り尊貴・日に新たななり、但し法師は諂曲にして人倫を迷惑
し王臣は不覺にして邪正を弁ずること無し、仁王經に云く「諸の惡比丘多
く名利を求め國王・太子・王子の前に於て自ら破仏法の因縁・破国の因縁
を説かん、其の王別えずして此の語を信聴し横に法制を作つて仏戒に依ら
ず是を破仏・破国の因縁と為す」已上。

涅槃經に云く「菩薩惡象等に於ては心に恐怖すること無かれ惡知識に於て

は怖畏ふいの心を生ぜよ・惡象あくそうの為ために殺されては三趣さんしゆに至いたらず惡友あくゆうの為ために殺されては必ず三趣さんしゆに至いたる」已上。

法華經に云く「惡世の中の比丘びくは邪智じゃちにして心諂曲てんこくに未だ得いまざるを為これ得たりと謂おもい我慢がまんの心充滿じゅうまんせん、或あるは阿練若あれんにやに納衣のうえにして空閑くうげんに在りみずか自ら眞の道を行おもわずと謂おもいて人間にんげんを輕賤きやうせんする者有らん、利養りように貪とんじやく著ちやくするが故ゆえに白衣びやくえの与たまふに法を説いて世に恭敬きやうけいせらるること六通ろくつうの羅漢らかんの如ごとくならん、乃至常ないしに大衆たいしゅうの中に在あつて我等われらを毀そしらんと欲ほするが故ゆえに國王こくおう・大臣だいじん・婆羅門ばらもん・居士こじおよ及び余おのれの比丘衆びくに向むかつて誹謗ひぼうして我が惡を説いて是れ邪見このじゃけん人外道げどうの論議ろんぎを説くと謂いわん、濁劫じよつこく惡世あくせの中には多おほく諸もろの恐怖こふ有あらん惡鬼あくき其その身に入はいつて我を罵詈めりし毀辱きにくせん、濁世じよくせの惡比丘あくびくは仏ほうの方便ほうべん隨宜ずいぎ所説しよせつの法ほふを知らず惡口あくくして顰蹙ひんじゆくし数数しばしば擯出ひんずいせられん」已上。

涅槃經に云く「我れ涅槃ねはんの後ご・無量百歲むりやう四道しやうにんの聖人ことまた悉ねはんく復ねはんた涅槃ねはんせん、

しょうほう

正法滅して後・像法の中に於て当に比丘有るべし、持律に似像して少く經

よくじゆ

おんじき

とんし

そ

ちようよう

けさ

じゃく

いえど

なおりようし

の細めに

を讀誦し飲食を貪嗜して其の身を長養し袈裟を著すと雖も猶獵師の細めに

み
しずか

よく

ねずみ

うかが

ごと

常には

この言を

とな

我羅漢を得

視て徐に行くが如く猫の鼠を伺うが如し、常に是の言を唱えん我羅漢を得

たりと外には賢善を現し内には貪嫉を懷く啞法を受けたる婆羅門等の如し、

實には沙門に非ずして沙門の像を現じ邪見熾盛にして正法を誹謗せん」

已上。

文に就いて世を見るに誠に以て然なり惡侶を誡めずんば豈善事を成さん

や。

客猶憤りて曰く、明王は天地に因つて化を成し聖人は是非を察して

世を治む、世上の僧侶は天下の歸する所なり、惡侶に於ては明王信ず可か

らず聖人に非ずんば賢哲仰ぐ可からず、今賢聖の尊重せるを以て則ち

竜象の輕からざるを知んぬ、何ぞ妄言を吐いて強ちに誹謗を成し誰人を

りゅうそう

おさ

せじよう

そうりよ

てんが

あくりよ

おい

みんおう

べ

もつすなわ

だれびと

もつあくびく
以て悪比丘と謂うや委細に聞かんと欲す。

主人の曰く、後鳥羽院の御宇に法然と云うもの有り 選択集を作る即ち

いちだい しょうきよう は あまね じゅつぼう しゅじよう
一代の聖教を破し☆く十方の衆生を迷わす、其の選択に云く道 綽禪師

しょうどうもん
・聖道浄土の二門を立て聖道を捨てて正しく浄土に帰するの文、初に

しょうどうもん とは之に就いて二有り乃至之に準じ之を思うに応に密大及び実大

をも存すべし、然れば則ち今の真言仏心・天台・華嚴・三論・法相・地論

・撰論・此等の八家の意正しく此に在るなり、曇鸞法師往生論の注に

云く謹んで竜樹菩薩の十住毘婆沙を案ずるに云く菩薩阿毘跋致を求むる

に二種の道有り一には難行道二には易行道なり、此の中難行道とは即ち

是れ聖道門なり易行道とは即ち是れ浄土門なり、浄土宗の学者先ず須らく

此の旨を知るべし設い先より聖道門を学ぶ人なりと雖も若し浄土門に於て

其の志有らん者は須らく聖道を棄てて浄土に帰すべし又云く善導和尚

正しょう雜ぞうの二行を立て雜行ぞうぎょうを捨てて正行しょうぎょうに歸するの文、第一だいいちに読誦とくじゆ雜行ぞうぎょうと
かみ かんきよう おうじようじようて
は上の觀經等の往生淨土の經を除いて已外いげ・大小乘しょうじよう・顯密けんみつの諸經しききように
おい じゆじ ず ことごとくじゆぞうぎよう なず
於て受持・読・誦するを悉く読誦とくじゆ雜行ぞうぎょうと名く、第三に札拜らいはい雜行ぞうぎょうとは上の
みだ らいはい いげいつさい しょうぶつ ぼさつ およ もろもろせてん おい
弥陀を札拜らいはいするを除いて已外一切の諸佛・菩薩等及び諸の世天等に於て
らいはい きようけい ことごとくいはいぞうぎよう なず ひそか いわ すべから
札拜し恭敬するを悉く札拜らいはい雜行ぞうぎょうと名く、私に云く此の文を見るに須く雜
を捨てて專せんを修しゆすべし豈百即あにひやくそくひやくしやう百生の專修せんししゅうしやうぎよう 正行しょうぎょうを捨てて堅く千中無一せんちちうむいつ
ぞうししゅうぞうぎよう ぎようじやよ これ しりよう いわ ていげんにしゅうぞうろく
の雜修ぞうしゅう雜行ぞうぎょうを執しゆせんや行者能く之を思量しりようせよ、又云く貞元入藏錄の中
はんにやきよう ほうじようじゆうぎよう けんみつ だじようぎよう
に始め大般若經六百卷より法常住ほうじようじゆうぎよう經に終るまで顯密の大乗けんみつ だいじようぎよう經總じて
六百三十七部二千八百八十三卷なり、皆須く読誦とくじゆ大乘だいじようぎようの一句に撰せんすべし、
まさ ずいた しばら じようさん いえど ずいじ かえり
當に知るべし隨他の前には暫く定散じようさんの門を開くと雖も隨自の後には還て
じようさん
定散の門を閉ず、一たび開いて以後永く閉じざるは唯是れ念仏の一門なり
いわ ねんぶつ ぎようじや ぐそく べ かんむりようじゆきよう
と、又云く念仏の行者必ず三心を具足す可きの文、觀無量壽經に云く

どうきよう 同経の疏に云く問うて曰く若し解行の不同・邪雑の人等有つて外邪異見の
難を防がん・或は行くこと一分二分にして群賊等喚廻すとは即ち
べっかい・べつぎよう 別解・別行・悪見の人等に喩う、私に云く又此の中に一切の別解・別行・
いがく・いけん 異学・異見等と言うは是れ聖道門を指す已上、又最後結句の文に云く
「そ すみや 夫れ速かに生死を離れんと欲せば二種の勝法の中に且く聖道門を闇き
て選んで浄土門に入れ、浄土門に入らんと欲せば正雜二行の中に且く諸の
ぞうぎよう 雜行を抛ちて選んで応に 正行に歸すべし」已上。

之に就いて之を見るに曇鸞・道綽・善導の謬釈を引いて聖道・浄土
・難行・易行の旨を建て法華・真言惣じて一代の大乗六百三十七部二千
八百八十三卷・一切の諸仏・菩薩及び諸の世天等を以て皆聖道・難行・
ぞうぎよう 雜行等に摂して、或は捨て・或は閉じ・或は闇き・或は抛つ此の四字を
もつ 以て多く一切を迷わし、 剩 え三国の聖僧十方の仏弟を以て皆群賊と号

し併せて罵詈せしむ、近くは所依の浄土の三部經の唯除五逆誹謗正法の
誓文に背き、遠くは一代五時の肝心たる法華經の第二の「若し人信ぜずし
て此の經を毀謗せば乃至其の人命終つて阿鼻獄に入らん」の誠文に迷う者
なり、是に於て代末代に及び人聖人に非ず各冥衢に容つて並びに直道を
忘る悲いかな瞳矇を☆たず痛いかな徒に邪信を催す、故に上國王より下土民
に至るまで皆經は浄土三部の外に經無く仏は弥陀の三尊の外に仏無しと
謂えり。

仍つて傳教・義真・慈覺・智証等・或は万里の波濤を涉つて渡せし所の
聖教・或は一朝の山川を廻りて崇むる所の佛像若しくは高山の巔に
華界を建てて以て安置し若しくは深谷の底に蓮宮を起てて以て崇重す、
釈迦・藥師の光を並ぶるや威を現當に施し虚空地蔵の化を成すや益を生後
に被らしむ、故に國王は郡郷を寄せて以て灯燭を明にし地頭は田園を充て

て以て供養に備う。

而るを法然の選択に依つて則ち教主を忘れて西土の仏馱を貴び付属を
なげう とうほう によらい お ただ
抛つて東方の如来を閣き唯四卷・三部の教典を專にして空しく一代五時の
みようとん なげうこれ もつ みだ あら
妙典を抛つ是を以て弥陀の堂に非ざれば皆供仏の志を止め念仏の者に
あら せそう おも ゆえ ぶつかくれいらく かわらまつ けむりお そうほうこうはい
非ざれば早く施僧の懷いを忘る、故に仏閣零落して瓦松の煙老い僧房荒廢
にわくさ つゆ しか いえど ごしやく なら こんりゆう
して庭草の露深し、然りと雖も各護惜の心を捨てて並びに建立の思を廢す、
これ もつ せいそう しゆく せんじん なら こんりゆう
是を以て住持の聖僧行いて歸らず守護の善神去つて来ること無し、是れ
ひとえ ほうねん せんちやく
偏に法然の選択に依るなり、悲しいかな数十年の間・百千万の人・魔縁に
とう ぶつきよう
蕩かされて多く仏教に迷えり、傍を好んで正を忘る善神怒を為さざらんや
円を捨てて偏を好む惡鬼便りを得ざらんや、如かず彼の万祈を修せんよ
へん あつきたより し ばんき しゆう
りは此の一凶を禁ぜんには。

客殊に色を作して曰く、我が本師釈迦文浄土の三部經を説きたまいて以

来、曇鸞法師は四論の講説を捨てて一向に浄土に歸し、道綽禪師は涅槃の
広業を閣きて偏に西方の行を弘め、善導和尚は雜行を抛つて専修を立て、
慧心僧都は諸經の要文を集めて念仏の一行を宗とす、弥陀を貴重すること
誠に以て然なり又往生の人其れ幾ばくぞや、就中法然聖人は幼少にし
て天台山に昇り十七にして六十卷に涉り並びに八宗を究め具に大意を得た
り、其の外一切の經論・七遍反覆し章疏伝記究め看ざることなく智は日月
に齊しく徳は先師に越えたり、然りと雖も猶出離の趣に迷いて涅槃の旨を
弁えず、故に・く覲悉く鑑み深く思い遠く慮り遂に諸經を抛ちて専ら念仏
を修す、其の上一夢の靈応を蒙り四裔の親疎に弘む、故に・或は勢至の化身
と号し・或は善導の再誕と仰ぐ、然れば則ち十方の貴賤頭を低れ一朝の
男女歩を運ぶ、爾しより来た春秋推移り星霜相積れり、而るに忝くも
釈尊の教を疎にして恣に弥陀の文を譏る何ぞ近年の災を以て聖代の時に

おほ あなが 課せ強ちに先師を毀り更に聖人を罵るや、毛を吹いて疵を求め皮を剪つて血を出す昔より今に至るまで此くの如き悪言未だ見ず惶る可く慎む可し、
さいごういた かじょういかで 罪業至つて重し科条争か遁れん対座猶以て恐れ有り杖に携われて則ち帰らんと欲す。

しゅじんえ とど 主人咲み止めて曰く辛きことを夢の葉に習い臭きことを溷廁に忘る善言を聞いて悪言と思ひ謗者を指して聖人と謂ひ正師を疑つて悪侶に擬す、
まよいまこと あくげん 其の迷誠に深く其の罪浅からず、事の起りを聞け委しく其の趣を談ぜん、
いちだい そ 釈尊説法の内一代五時の間に先後を立てて権実を并ず、而るに曇鸞道綽
ぜんどうすで せんご 善導既に権に就いて実を忘れ先に依つて後を捨つ未だ仏教の淵底を探らざる者なり、
なかんずくほうねん そ 就中法然は其の流を酌むと雖も其の源を知らず、所以は何んだいじょうきよう
だいじょうきよう もっしやへいかくほう 大乘經の六百三十七部二千八百八十三卷並びに一切の諸仏・菩薩及び諸の世天等を以て捨閉閣抛の字を置いて一切衆生の心を薄んず、是れ偏に

私曲しきよくの詞ことばを展のべて全く仏經ぶきようの説を見ず、妄語もうごの至あつくり惡口とがの科言とがうても比無
し責めても余り有り人皆其みなその妄語もうごを信じ悉ことごとく彼の選せん択ちやくを貴とうとぶ、故ゆえに淨土じようどの
三經あがめを崇しゅうめて衆經しゅうきようを抛なげうち極樂ごくらくの一あお仏おを仰しよいで諸しよ仏ぶつを忘わする、誠こに是これ諸しよ仏ぶつ
・諸經しよきようの怨敵おんて聖僧せいそう衆人しゅうじんの讎敵しゅうてきなり、此じの邪教じゃきよう広はつく八荒はつこうに弘ひろまり周あまねく
十方じゆつほうに遍へんす、抑そも近年きんねんの災難さいなんを以もつて往代なんを難あながずるの由強これちに之これを恐おそる、
聊いさか先例せんれいを引なんいて汝なんじが迷まよを悟べす可べし、止觀しかん第二にに史記しきを引いいて云いく「周の
末ひはつに被髮たん・袒身しん・礼度れいどに依よらざる者有くり」弘決くけつの第二にに此の文しやくを釈しやくするに
左伝さでんを引いいて曰いく「初め平王へいおうの東とうに遷うつりしに伊川いせんに髪かを被かにする者の野のに
於おいて祭まつるを見る、識者しきしやの曰いく、百年ひゃくねんに及および其その礼れい先せんず亡なびぬ」と、爰こゝに
知しんぬ徵前しるしに顕あられ災わざわい後ごに致いたることを、又また阮藉げんせきが逸才いつさいなりしに蓬頭散帶ほうとうさんたいす
後ごに公卿くきようの子孫しそん皆みな之これに教ならいて奴苟相辱どこうあいはずかしむる者まさを方まに自然じねんに達いたすと云いい
☆節競持そんせつこうじする者いを呼いんで田舎いなかと為なす是これを司馬氏しばしの滅なする相なと為なす已上。

又慈覚大師じかくだいしの入唐巡礼記にゅうとうじゆんれいきを案ずるに云く、「唐とうの武宗皇帝・会昌元年勅ふそうこうてい えしやうがんねん

して章敬寺しょうけいじの鏡霜法師きやうそうほっしをして諸寺しよに於て弥陀念仏おひ みだねんぶつの教を伝え令しむ寺毎てらごとに三

じゆんりん

日巡輪じゆんりんすること絶えず、同二年回鶻国かいこつこくの軍兵等唐ぐんびやう とうの堺を侵す、同三年河北

せつどしたちまらん

の節度使忽ち乱を起す、其その後大蕃国更だいばんこくまた命を拒み回鶻国重かいこつこくかさねて地を奪う、

およ ひょうらんしんこう

凡そ兵乱秦項さいかゆうりの代に同じく災火邑里おこの際に起る、何いか いわに況んや武宗大ふそうおおい ぶつぼうに仏法

は じとう

を破し多く寺塔を滅す乱を撥おさむること能あたわずして遂もつに以て事有已上り」取意

こ もつこれ

此これを以て之を惟おもうに法然ほうねんは後鳥羽院ごとばいんの御宇・建仁年中けんじんの者なり、彼の

おんことすで

院おんことすでの御事既に眼前がんぜんに在り、然しかれば則すなわち大唐だいとうに例を残し吾わが朝あしたに証あらわす、

なんじ

汝なんじ疑うこと莫なかれ汝なんじむあやし怪なむこと莫なかれ唯須ただすべからく凶を捨てて善に歸みなもとし源を

ふさ

塞ふさぎ根を截たつべし。

いささか

客聊いささかか和いわぎて日いまく未えんだ淵底えんていを究きわめざるに数しばしば其その趣そを知る但ただし華洛からくより

りゆうえい

柳りゆうえい営いたに至るまで釈門しゃくもんに枢すうけん☆在り仏家に棟梁ぶつ け とうりやう在り、然しかるに未いまだ勘状かんじやうを進まいら

せず上奏に及ばず汝賤身を以て輒く莠言を吐く其の義余り有り其の理
謂れ無し。

主人の曰く、予少量為りと雖も忝くも大乘を学す蒼蠅驢尾に附して万里
を渡り碧蘿松頭に懸りて千尋を延ぶ、弟子一仏の子と生れて諸経の王に事
う、何ぞ仏法の衰微を見て心情の哀惜を起さざらんや。

其の上涅槃經に云く「若し善比丘あつて法を壊ぶる者を見て置いて呵責
し駟遣し挙処せずんば当に知るべし是の人は仏法の中の怨なり、若し能く
駟遣し呵責し挙処せば是れ我が弟子真の声聞なり」と、余善比丘の身為ら
ずと雖も「仏法中怨」の責を遁れんが為に唯大綱を撮つて粗一端を示す。

其の上取る元仁年中に延暦・興福の両寺より度々奏聞を経・勅宣
御教書を申し下して、法然の選択の印板を大講堂に取り上げ三世の仏恩を
報ぜんが為に之を焼失せしむ、法然の墓所に於ては感神院の犬神人に仰せ

付けて破却せしむ其の門弟・隆観・聖光・成覚・薩生等は遠くに配流せらる、其の後未だ御勘氣を許されず豈未だ勘状を進らせずと云わんや。

客則ち和きて曰く、經を下し僧を謗すること一人には論じ難し、然れど客則ち和きて曰く、經を下し僧を謗すること一人には論じ難し、然れど

も大乘經六百三十七部二千八百八十三卷並びに一切の諸仏・菩薩及び

諸の世天等を以て捨閉閣抛の四字に載す其の詞勿論なり、其の文顯然なり、

此の瑕瑾を守つて其の誹謗を成せども迷うて言うか覺りて語るか、賢愚并

ぜず是非定め難し、但し災難の起りは選択に因るの由、其の詞を盛に

弥よ其の旨を談ず、所詮天下泰平・国土安穩は君臣の樂う所土民の思う所

なり、夫れ国は法に依つて昌え法は人に因つて貴し国亡び人滅せば仏を誰

か崇む可き法を誰か信ず可きや、先ず国家を祈りて須く仏法を立つべし若し

災を消し難を止むるの術有らば聞かんと欲す。

主人の曰く、余は是れ頑愚にして敢て賢を存せず唯經文に就いて聊か

所存しよぞんを述べん、抑そもそもも治術じじゆつの旨内外ないげの間其の文幾多いくばくぞや具つぶさあに挙べぐ可きこと
難がたし、但ただし仏道ぶつどうに入いつて数しばしは愚案ぐあんを廻めぐらすに謗法ほうほうの人を禁いましめて正道せいどうの侶を重
んぜば國中くにじゅうあん安穩あんのんにして天下てんがたいへい泰平たいへいならん。

即すなわち涅槃經ねはんぎやうに云いく「仏いの言わく唯ただ一人を除いいて余の一切いっさいに施ほどこさば皆讚歎みなさんたん
す可べし、純陀じゆんだ問いうて言いく云何いなるをか名いけて唯除ゆいじよ一人と為なす、仏いの言わく此
の經の中に説く所の如ごときは破戒はかいなり、純陀じゆんだ復またた言いく、我今いま未げだ解げせず唯願ただ
くば之これを説ときたまえ、仏じゆんだ純陀かたに語いつて言いく、破戒はかいとは謂おもえらいつせんだい
余の在所ざいしよ一切いっさいに布施ふせすれば皆讚歎みなさんたんすべく大果法かほうを獲えん、純陀じゆんだ復またた問いいたて
まつる、一闍提いっせんたとは其その義い何いかん、仏のたま言いわく、純陀じゆんだ若もし比丘びく及び比丘尼びくに・
優婆塞うばそく・優婆夷うばい有あつてそ惡の言おこを發しょうし正法しょうほうを誹謗ひほうし是この重業じゅうごうを造つくつて永
く改悔かいげせず心に懺悔ざんげ無ならん、是かくの如ごとき等の人を名いけて一闍提いっせんたの道みちに趣向しゅこう
すと為なす、若もし四重しじゅうを犯おかし五逆罪ごぎやくざいを作り自ら定みめて是かくの如ごとき重事じゅうじを犯かす

と知れども而も心に初めより怖畏懺悔無く肯て発露せず彼の正法に於て永く護惜建立の心無く毀皆輕賤して言に過咎多からん、是くの如き等の人を亦た一闡提の道に趣向すと名く、唯此くの如き一闡提の輩を除いて其の余に施さば一切讚歎せん」と。

又云く「我れ往昔を念うに閻浮提に於て大国の王と作れり名を仙予と曰

いき、大乘經典を愛念し敬重し其の心純善に・悪嫉・有ること無し、

善男子我爾の時に於て心に大乘を重んず婆羅門の方等を誹謗するを聞き聞

き已つて即時に其の命根を断ず、善男子是の因縁を以て是より已来地獄に

墮せず」と、又云く「如来昔国王と為りて菩薩の道を行ぜし時爾所の婆羅門

の命を断絶す」と、又云く「殺に三有り謂く下中上なり、下とは蟻子乃至一切

の畜生なり唯だ菩薩の示現生の者を除く、下殺の因縁を以て地獄・畜生

・餓鬼に墮して具に下の苦を受く、何を以ての故に是の諸の畜生に微善根

有り是この故ゆえに殺す者は具つに罪報ざいほうを受く、中殺とは凡夫ほんぶの人より阿那含あなこんに至るいたまでは是これを名けて中と為す、是この業因ごういんを以て地獄じごく・畜生ちくしやう・餓鬼がきに墮だして具つに中の苦を受く上・殺とは父母乃至阿羅漢ふぼないしあらかん・辟支仏ひやくしぶつ・畢定ひつじやうの菩薩ぼさつなり阿鼻あび大地獄だいじごくの中に墮だす、善男子ぜんなんしも若し能く一闍提いつせんたいを殺すこと有らん者は則ち此の三種の殺の中に墮だせず、善男子ぜんなんし彼の諸の婆羅門等もろもろばらもんは一切皆是一闍提いつさいみな ひとつせんたいなり」已上。

仁王經にんのうきやうに云く「仏波斯匿王はしのくに告げたまわく是の故に諸の国王かくに付属ふぞくして比丘びく・比丘尼びくにに付属ふぞくせず何を以ての故に王のごとき威力いりよく無ければなり」已上。

涅槃經ねはんぎやうに云く「今無上の正法むじやう しょうほうを以て諸王大臣宰相及び四部の衆ふぞくに付属ふぞくす、正法しょうほうを毀る者をば大臣四部の衆だいじんよんぶのしゅうまさに苦治くじすべし」と。

又云く「仏いわの言いわく、迦葉かしやう能く正法しょうほうを護持ごじする因縁いんねんを以ての故ゆえに是の

金剛身を成就することを得たり善男子正法を護持せん者は五戒を受けず
威儀を修せず応に刀劍・弓箭・鉾槊を持すべし」と、又云く「若し五戒を
受持せん者有らば名けて大乘の人と為す事を得ず、五戒を受けざれども
正法を護るを為て乃ち大乘と名く、正法を護る者は当に刀劍器仗を執持
すべし刀杖を持すと雖も我是等を説きて名けて持戒と曰わん」と。
又云く「善男子過去の世に此の拘尸那城に於て仏の世に出でたまふこと
有りき歡喜増益如来と号したてまつる、仏涅槃の後正法世に住すること
無量億歳なり余の四十年・仏法の末、爾の時に一の持戒の比丘有り名を覺徳
と曰う、爾の時に多く破戒の比丘有り是の説を作すを聞きて皆惡心を生じ
刀杖を執持し是の法師を逼む、是の時の國王名けて有徳と曰う是の事を聞
き已つて護法の為の故に即便ち說法者の所に往至して是の破戒の諸の
悪比丘と極めて共に戰闘す、爾の時に說法者厄害を免ることを得たり王爾の

時に於て身に刀劍鉾槊の瘡を被り体に完き処は芥子の如き許りも無し、
爾の時に覺徳尋いで王を讃めて言く、善きかな善きかな王今真に是れ正法
を護る者なり当來の世に此の身当に無量の法器と為るべし、王是の時に於て
法を聞くことを得已つて心大に歡喜し尋いで即ち命終して阿☆仏の國に
生ず而も彼の仏の為に第一の弟子と作る、其の王の將從・人民・眷屬・
戰闘有りし者・歡喜有りし者一切菩提の心を退せず命終して悉く阿☆仏
の國に生ず、覺徳比丘却つて後壽終つて亦阿☆仏の國に往生することを
得て彼の仏の為に聲聞衆中の第二の弟子と作る、若し正法尽きんと欲す
ること有らん時當に是くの如く受持し擁護すべし、迦葉爾の時の王とは即ち
我が身是なり、説法の比丘は迦葉仏是なり、迦葉正法を護る者は是くの
如き等の無量の果報を得ん、是の因縁を以て我今日に於て種種の相を得て
以て自ら莊嚴し法身不可壞の身を成す、仏迦葉菩薩に告げたまわく、是の

ゆえ 故に法を護らん優婆塞等は応に刀杖を執持して擁護することは是くの如くなるべし、善男子我涅槃の後濁惡の世に国土荒亂し互に相抄掠し人民飢餓せん、爾の時に多く飢餓の爲の故に発心出家するもの有らん是くの如きの人を名けて禿人と爲す、是の禿人の輩正法を護持するを見て駭逐して出さしめ若くは殺し若くは害せん、是の故に我今持戒の人諸の白衣の刀杖を持つ者に依つて以て伴侶と爲すことを聴す、刀杖を持すと雖も我是等を説いて名けて持戒と曰わん、刀杖を持すと雖も命を断ずべからず」と。
法華經に云く「若し人信ぜずして此の經を毀謗せば即ち一切世間の仏種を断ぜん、乃至其の人命終して阿鼻獄に入らん」已上。
夫れ經文顯然なり私の詞何ぞ加えん、凡そ法華經の如くんば大乘經典を謗する者は無量の五逆に勝れたり、故に阿鼻大城に墮して永く出る期無けん、涅槃經の如くんば設い五逆の供を許すとも謗法の施を許さず、蟻子

を殺す者は必ず三惡道に落つ、謗法を禁ずる者は不退の位に登る、所謂覺徳

とは是れ迦葉仏なり、有徳とは則ち釈迦文なり。

法華・涅槃の經教は一代五時の肝心なり其の禁・実に重し誰か歸仰せ

ざらんや、而るに謗法の族・正道を忘るの人・剩え法然の選択に依つ

て弥よ愚癡の盲瞽を増す、是を以て・或は彼の遺体を忍びて木画の像に

露し・或は其の妄説を信じて莠言を模に彫り之を海内に弘め之を☆外に

翫ぶ、仰ぐ所は則ち其の家風施す所は則ち其の門弟なり、然る間・或は

釈迦の手指を切つて弥陀の印相に結び・或は東方如来の鴈宇を改めて西土

教主の鵝王を居え、・或は四百余回の如法經を止めて西方淨土の三部經

と成し・或は天台大師の講を停めて善導講と為す、此くの如き群類其れ誠

に尽くし難し是破仏に非ずや是・破法に非ずや是・破僧に非ずや、此の

邪義則ち選択に依るなり。

嗟呼悲しいかな、如来誠諦の禁言に背くこと、哀なるかな愚侶迷惑の語に随うこと、早く天下の静謐を思わば須く國中の謗法を断つべし。

客の曰く、若し謗法の輩を断じ若し仏禁の違を絶せんには彼の經文の如く斬罪に行う可きか、若し然らば殺害相加つて罪業何んが為んや。

則ち大集經に云く「頭を剃り袈裟を著せば持戒及び毀戒をも、天人彼

を供養す可し、則ち我を供養するに為りぬ、是れ我が子なり若し彼を☆打

する事有れば則ち我が子を打つに為りぬ、若し彼を罵辱せば則ち我を毀辱

するに為りぬ」料り知んぬ善惡を論ぜず是非を択ぶこと無く僧侶為らんに

於ては供養を展ぶ可し、何ぞ其の子を打辱して忝くも其の父を悲哀せしめ

ん、彼の竹杖の目連尊者を害せしや永く無間の底に沈み、提婆達多の蓮華

比丘尼を殺せしや久しく阿鼻の焰に咽ぶ、先証斯れ明かなり後昆最も恐

あり、謗法を誡むるには似たれども既に禁言を破る此の事信じ難し如何が

こころう
意得んや。

主人しゅじんの云いわく、客明あきらに経文きやうもんを見て猶斯なほこの言を成す心の及およばざるか理の通ぜ

ざるか、全くぶつし仏子いましを禁むるには非あらず唯偏ただひとえに謗法ほうほうを悪にくむむなり、夫それ釈迦しゃかの以

前ぶつきよう仏教そは其の罪を斬ると雖も能忍いえどの以後のうにん経説いごきようせつは則すなわち其の施を止む、然しかれ

ば則しち四海万邦一切しかいばんぼういっさいの四衆ししゆうそ其の惡に施ほどこさず皆此みなの善に帰せば何いかなる難なんか

並ならび起いり何いかなる災きそか競きそい来きらん。

客則すなわち席を避け襟を刷えりいて日つくろく、仏教ぶつきよう斯かく区まちにして旨趣窮ししゆきわめ難かたく不審ふしん

多端ただんにして理非明りひならず、但ただし法然ほうねん聖人しやうにんの選択せんちやく現在げんざいなり諸しよ仏ぶつ・諸しよ經きやう・諸しよ

菩薩ぼさつ・諸天等しよてんを以もつて捨閉閣しゃへい抛かくほうと載のす、其その文顯然けんねんなり、茲これに因よつて聖人しやうにん

国ぜんじんを去せんじんり善神所ぜんじんを捨てて天下飢渴てんがし世上疫病せじやうえきびやうすと、今主人しゅじん広きく経文きやうもんを引

いて明あきらかに理非りひを示ゆえす、故もつに妄執もうししゆう既すでに翻ひるがえり耳目じもく数朗しばあきらかなり、所詮しよせん国土こくど

泰平たいへい・天下安穩てんがあんは一人ばんより万民まんに至いたるまで好む所ねがなり楽ねがう所ねがなり、早はやく

いっせんだい
一闡提の施を止め永く衆僧尼の供を致し仏海の白浪を収め法山の緑林を
截らば世は義農の世と成り国は唐虞の国と為らん、然して後法水の浅深を
斟酌し仏家の棟梁を崇重せん。

主人悦んで曰く、鳩化して鷹と為り雀変じて蛤と為る、悦しきかな
汝蘭室の友に交りて麻畝の性と成る、誠に其の難を顧みて専ら此の言を信

ぜば風和らぎ浪静かにして不日に豊年ならん、但し人の心は時に随つて移

り物の性は境に依つて改まる、譬えば猶水中の月の波に動き陳前の軍の剣

に靡くがごとし、汝当座に信ずと雖も後定めて永く忘れん、若し先ず国土

を安んじて現当を祈らんと欲せば速に情慮を回らし☆で対治を加えよ、

所以は何ん、薬師經の七難の内五難忽に起り二難猶残れり、所以他国侵逼

の難・自界叛逆の難なり、大集經の三災の内二災早く顕れ一災未だ起らず

所以兵革の災なり、金光明經の内の種種の災禍一一起ると雖も他方の

おんぞくこくない しんりやく
怨賊国内を侵掠する此の災未だ露れず此の難未だ来らず、 仁王経の七難
の内六難今盛にして一難未だ現ぜず所以四方の賊来つて国を侵すの難なり
しかのみならずこくどみだ きじんみだ きじんみだ
加之 国土乱れん時は先ず鬼神乱る鬼神乱るるが故に万民乱ると、今・此
の文に就いて具さに事の情を案ずるに百鬼早く乱れ万民多く亡ぶ先難是れ
明かなり後災何ぞ疑わん若し残る所の難悪法の科に依つて並び起り競い来
らば其の時何んが為んや、帝王は国家を基として天下を治め人臣は田園を
領して世上を保つ、而るに他方の賊来つて其の国を侵逼し自界叛逆して其の
地を掠 領せば豈驚かざらんや豈騒がざらんや、国を失い家を滅せば何れ
の所にか世を遁れん汝須く一身の安堵を思わば先ず四表の静謐を☆らん者
か、就 中人の世に在るや各後生を恐る、是を以て・或は邪教を信じ・或
は謗法を貴ぶ各是非に迷うことを悪むと雖も而も猶仏法に帰すること
かな 哀しむ、何ぞ同じく信心の力を以て妄りに邪義の詞を崇めんや、若し

しゅうしんひるがえ
またきよくいなお

ん、ゆえん所以は何ん、いか大集経に云くだいしつきよう いわ「も若し国王有つてこくおう無量世に於てむりようせ おい施戒慧を修すせかいえ しゆう

とも我が法の滅せんを見て捨てて擁護せずんば是くの如く種ゆる所の無量

の善根悉く皆滅失し、
乃至其の王久しからずして当に重病に遇い寿終

のだいじごく後大ごと地獄ふじんに生たいしずべし王だいじんの如じょうしゅく夫人ちゅうし・ぐんしゅ・太子城主・大臣柱師・城主郡主・柱師郡主・郡主

さいかん またまたかく
宰官も亦復是くの如くならん」と。

仁王經に云く「人・仏教を壊らば復た孝子無く六親不和にして天竜も

祐たすけしつずえき疾疫あつ惡鬼き日ひにしん来がつてい侵害げしさい災怪げ首尾しゆしび連禍れん縦横かじゅうしお死うしてじこく地獄・餓鬼がき

・畜生ちくしやうに入らん、若しも出て人と為らば兵奴ひやうぬの果報かほうならん、響ひびきの如く影ごうの

如く人の夜書くに火は滅すれども字は存するが如く、三界の果報も亦復是く

の如し」と。

法華經の第二に云く「もし人信ぜずして此の經を毀謗せば乃至其の人

みようじゅう

命終あびこくして阿鼻獄あびこくに入らん」と、同第七の卷不輕品ふぎように云く「千劫阿鼻地獄せんこうあびこく

に於て大苦惱おいくのうを受く」と、涅槃經ねはんぎように云く「善友ぜんゆうを遠離おんりし正法しょうほうを聞かず惡法あくほう

に住せば是の因縁いんねんの故に沈没ちんぼつして阿鼻地獄あびこくに在つて、受くる所の身形しんぎよう・

じゅうおうはちまん

縱横じゅうけん八万四千由延ゆじんならん」と。

しゅうきよう

広く衆經しゅうきようを披ひらきたるに専ら謗法ぼうほうを重んず、悲いかな皆正法みなしょうほうの門いを出で

じゃほう

て深く邪法じゃほうの獄ごくに入る、愚おろかなるかな各惡教あつきようの綱あみに懸かつて鎮とこしなえに謗教ぼうきようの綱

まつわ

に纏る、此の朦霧もうむの迷彼まよいの盛焰じょうえんの底しずに沈あむ豈愁あにえざらんや豈苦あにまざらん

なんじ

や、汝なんじ早く信仰しんこうの寸心すんしんを改めて速すみやかに実乘じつじようの一善いちぜんに帰しかせよ、然すなわれば則さんがいち三界

みなぶつくく

は皆仏国ぶつこくなり仏国ぶつこく其れ衰おとろえんや十方じゅうぽうは悉ことごとく宝土ほうどなり宝土ほうど何ぞ壊やぶれんや、国

すいびなく

に衰微すいび無く土に破壊はえ無んば身こは是れ安全あんぜん・心こは是れ禪定ぜんじようならん、此の詞ことば

此の言信あがず可べく崇あがむ可べし。

この言信あがず可べく崇あがむ可べし。

いわ

客いの曰いく、今生こんじよう後生ごしよう誰つか慎つまざらん誰なか和なわざらん、此の經文きようもんを披ひらい

て具つぶさぶつこに仏語うけたまわるを承ひほうるに誹法とがいたの科しげ至きぼうつて重しげく毀法きぼうの罪・誠いちぶつに深いし、我一いちぶつ仏ぶつを信しんじて諸しよぶつ仏ぶつを抛なげうさんぶきようあお諸しよきよう經きやうを仰おほいで諸しよにん經きやうを閣またまたかくきしは、是これ私曲しきよくの思おもに非あらずすなわせんだつことば則したがち先達じゆつぼうの詞しよしんに随わすらわらいしよいしなり、十じゆつぼう方しよにんの諸またまたかく人ことも亦復こと是ことくの如ごとくなるべし、今ことの世しよしんには性わすらわらいしよ心あびを勞だし来生あきらには阿鼻つまびらに墮あせんこと文明あきらかに理詳つまびらかなり疑う可べからず、弥いよ貴公きこうの慈誨じかを仰あおぎ益愚客ぐきやくの癡心ちしんを開ひらけり、速すみに對治やかたいじを回めぐらして早たいへいく泰平いたを致いたし先せいぜんず生前やすんを安やすんじて更ほつこに没後たすを扶たけん、唯ただ我われが信しんずるのみあらに非あらず又あやま他の誤いましりをも誠いましめんのみ。

◆三 立正安国論奥書

文ぶん応おう元がん年ねん太歳これ庚申かんが之しよを勘しょうう正嘉しよより之これを始はじめ文ぶん応おう元がん年ねんに勘かんえ畢おわる。

去いぬる正嘉しよ元かん年ねん太歳ひのとも丁巳ひのとも八月いぬい二十三日こく戌亥だいじしんの尅こくの大地震だいじしんを見て之これを勘かんう、

其その後ぶん文おう応がん元ねん年ねん太歳き庚申のえね七月き十六日のえねを以もて宿屋もつやどや・禪門ぜんもんに付ついて故最明寺さいみやうじにゆうどう入道いんどう

殿たてまに奉それり、其その後ぶん文えい永がん元ねん年ねん太歳き甲子のえね七月き五日のえね大明星だいみやうじよの時い弥い此いの災いの

根源を知る、こんげん 文応元年ぶんおうがんねん太歳庚申ぶんえいより文永五年ぶんえい太歳戊辰後の正月十八日に至るまで

九ヶ年を経て西方大蒙古国さいうほうもうちこ自り我が朝を襲う可きの由牒状ちようじようこれ之を渡す、又

同六年重ねて牒状かき之を渡す、既に勘文之に叶う、之に準じて之を思うに

未来亦然る可きか、此の書は徴有る文なり是れ偏に日蓮が力に非ず法華經

の真文の感応の至す所か。しんもん かんのう いた

文永六年太歳己巳十二月八日之を写す。ぶんえい

◆四 安国論御勘由来あんこくろんごかんゆらい

正嘉元年しょうかがんねん丁巳八月廿三日戌亥の時・前代に超え大に地振す、同二年戊午八

月一日大風・同三年己未大飢饉・正元元年ききん己未大疫病同二年庚申四季に亘つて

大疫已まず万民既に大半に超えて死を招き了んぬ、而る間国主之に驚き

内外典に仰せ付けて種種の御祈☆有り、爾りと雖も一分の験も無く還つて

飢疫等を増長す。きえき そうちよう

にちれんせけん

ほほいつさいきよう

かんが

きしうしるしなく

かえ

きようあく

日蓮世間の体を見て粗一切経を勘うるに御祈請驗無く還つて凶惡を

そうちよう

どうり

もんしうこれ

おわ

かんもん

つく

増長するの由道理・文証之を得了んぬ、終に止むこと無く勘文一通を造り

そ

りつしうあんこくろん

ぶんおうがんねん

庚

申七月十六日時屋戸野入道に

作して其の名を立正安国論と号す、文応元年申七月十六日

さいみようじにゆうどう

そうしんもう

おわ

こ

ひとえ

こくど

ほう

付けて古最明寺入道殿に奏進申し了んぬ此れ偏に国土の恩を報ぜんが為な

かんもん

にほんこく

てんじん

ちじん

り、其勘文の意は日本国・天神七代・地神五代

きんめいてんのう

ぎよう

くだら

ぶつぽう

百王百代人王第卅代欽明天皇の御宇に始めて百済国より仏法此の国に渡り

かんむてんのう

ぎよう

いた

そ

ちゆうげん

ぎよう

くだら

ぶつぽう

わた

桓武天皇の御宇に至つて其の中間五十余代・二百六十余年なり、其の間・

いつさいきようなら

こ

い

えど

てんだい

しんこん

いま

こ

かんむ

一切経並びに六宗之れ有りと雖も天台・真言の二宗未だ之れ有らず、桓武

ぎよう

やましなでら

ぎようひようそうじよう

おんでし

さいちよう

こそう

後に伝教大、師と号す、

いぜん

の御宇に山階寺の行表僧正の御弟子に最澄と云う小僧有り

わた

ろくしゆう

ぜんしゆうこれ

きわ

い

えど

いま

かな

しょうむてんのう

に渡る所の六宗並に禪宗之を極むと雖も未だ我が意に叶わず、聖武天皇

ぎよう

だいう

がんじんわじようわた

てんだい

しうじよよんじゆうよねん

へ

い

い

の御宇に大唐の鑒真和尚渡す所の天台の章疏四十余年を経て已後始めて

さいちようこれ

ひけん

ほほぶつぽう

げんじ

さと

おわ

さいちよう

てんちようちきゆう

ため

えんりやく

最澄之を披見し粗仏法の玄旨を覚り了んぬ、最澄・天長地久の為に延暦

えいざん　こんりゅう　かんむこうていこれ　あがめ　てんしほんめい　どうじょう　ろくしゅう
四年叡山を建立す桓武皇帝之を崇め天子本命の道場と号し六宗の御帰依
を捨て一向に天台円宗に帰伏し給う。
いっこう　てんだいえんしゅう　きふく　たま

えんりやく

ながおか

みやこ

うつ

へいあんじょう

えんりやく

同延暦十三年に長岡の京を遷して平安城を建つ、同延暦廿一年正月

たかおでら

おい

なんと

ななだいじ

ろくしゅう

せきがく

こんそう

ちようよう

十九日高雄寺に於て南都・七大寺の六宗の・碩学・勤操・長耀等の十四

しょうふ

けつだん

ろくしゅう

めいしゅう

もんどう

およ

人を召し合せ勝負を決談す、六宗の明匠・一問答にも及ばず口を閉ずる

しょうふ

けつだん

ろくしゅう

めいしゅう

もんどう

およ

こと鼻の如し華嚴宗の五教・法相宗の三時・三論宗の二蔵・三時の所立

こと

けこんしゅう

ほうそうしゅう

さんろん

三時の所立

は

おわ

じしゅう

これ

なじ

あら

みなほうぼう

な

を破し了んぬ但自宗を破らるるのみに非ず皆謗法の者為ることを知る、同

じき廿九日皇帝勅宣を下して之を詰る、十四人謝表を作つて皇帝に捧げ

こうていちよくせん

くだ

これ

なじ

しやひよう

十四人謝表を作つて皇帝に捧げ

たてまつ

そ

こうていえいざん

ごきえ

こうし

ふほ

に仕うるに超え黎民の

王威を恐るるに勝れり、・或御時は宣明を捧げ、・或御時は非を以て理に

おうい

すぐ

あるおんとき

せんみよう

ささ

あるおんとき

に非を以て理に

処す等云云、殊に清和天皇は叡山の惠亮和尚の法威に依つて位に即き帝王

しよ

こと

せいわたんのう

えいざん

えりようわじょう

ほうい

よ

位に即き帝王

の外祖父・九条右丞相は誓状を叡山に捧げ、源の右將軍は清和の末葉

そふ

くじようじようしゅう

せいじょう

えいざん

ささ

みなもと

うしろうぐん

せいわ

まつよう

の外祖父・九条右丞相は誓状を叡山に捧げ、源の右將軍は清和の末葉

そふ

くじようじようしゅう

せいじょう

えいざん

ささ

みなもと

うしろうぐん

せいわ

まつよう

なり鎌倉の御成敗是非を論ぜず叡山に違背す天命恐れ有る者か。

然るに後鳥羽院の御宇・建仁年中に法然・大日とて二人の増上慢の者有

り悪鬼其の身に入つて國中の上下を誑惑し代を挙げて念仏者と成り人毎に

禅宗に趣く、存の外に山門の御帰依淺薄なり國中の法華・真言の学者棄て

置かれたんぬ、故に叡山守護の天照太神・正八幡宮・山王七社・國中

守護の諸大善神法味を☆わらずして威光を失い国土を捨て去り了んぬ、悪鬼

便りを得て災難を致し結句他国より此の国を破る可き先相勘うる所なり、

又其の後文永元年甲子七月五日彗星東方に出で余光大体一国土に及ぶ、此れ

又世始まりてより已来無き所の凶瑞なり内外典の学者も其の凶瑞の根源

を知らず、予弥よ悲歎を増長す、而るに勘文を捧げて已後九ケ年を経て今

年後の正月大蒙古国の国書を見るに日蓮が勘文に相叶うこと宛かも符契の

如し、仏記して云く「我が滅度の後・一百余年を経て阿育大王出世し我が

舍利しやりを弘ひろめんと、周しゅうの第四昭王しやうおうの御宇ぎよう・大史蘇由たいしそゆうが記いに云く「一千年の外声教此への土こに被ひらしめん」と、聖徳太子しやうとくたいしの記いに云く「我が滅度めつどの後二百余年へを経て山城やましやうの国こくに平安城へいあんじやうを立つ可べし」と、天台大師てんだいだいしの記いに云く「我が滅後めつこ二百余年いの已後東国いこくとうこくに生れて我が正法しやうほうを弘ひろめん」等云云、皆果みなして記文きもんの如ごとし。

日蓮正嘉にちれんしょうかの大地震だいじしん同じく大風たいふう同じく飢饉ききん・正元元年がねんの大疫等だいえきを見て記しして云く他国たこくより此この国こくを破やぶる可べき先相せんそうなりと、自讃じさんに似たりと雖いえどもも若もし此この国土こくどを毀壞きえせば復た仏法ぶつぽうの破滅はめつ疑うい無なき者ものなり。

而しかに当世とうせの高僧等こうそう謗法ぼうぽうの者ものと同意どういの者ものなり復た自宗じしゆうの玄底げんていを知らざる者ものなり、定めて勅宣御教書ちよくせんみきやうしよを給たまいて此この凶惡きやうあくを祈請きしやうするか、仏神ぶつしん弥いよ瞋恚しんにを作なし国土こくどを破壞はえせん事疑うい無なき者ものなり。

日蓮復之にちれんまたこれを対治たいじするの方これ之えいざんを知る叡山えいざんを除にほんこくいて日本国にほんこくには但一人ひとりなり、

たとえ にちがつ 臂えは日月の二つ無きが如く こと 聖人肩を並べざるが故なり、若し此の事妄言 もうげん
ならば日蓮が持つ所の法華經守護の十羅刹の治罰之を蒙らん、但偏に国 ひとえ
為・法の為・人の為にして身の為に之を申さず、復禪門に對面を遂ぐ故に ゆえ
之を告ぐ之を用いざれば定めて後悔有る可し、 こうかいあ 恐恐謹言。 きょうききょうきんげん

ぶんえい
文永五年太歳戊辰四月五日

ほうがんごぼう にちれんかおう
法鑒御房 日蓮花押

あんこくろん
安国論別状

りっしょうあんこくろん ときどの
立正安国論の正本、富木殿に候、かきて給ひ候はん、ときどのか、又。

五月廿六日 にちれんかおう
日蓮花押

◆六 しゅごこっか 守護国家論 がんねん 正元元年 36P 三十八歳御作

そ おも 夫れ以んみれば偶 たまたまじゅつぼうみじん 十方微塵の三悪の身を脱れて希に閻浮日本の爪上 まぬか まれ えんぶにほん そうじよう

の生を受け亦閻浮日域・爪上の生を捨てて十方微塵・三惡の身を受けん
またえんぶにちいき そうじょう
こと疑い無き者なり、然るに生を捨てて惡趣に墮つるの縁・一に非ず・或
し か ある せつしょうあくぎやく じゅうじょう よ ある こくしゅ
さいし けんぞく いれん よ ある せつしょうあくぎやく じゅうじょう よ ある こくしゅ
妻子・眷属の哀憐に依り・或は殺生惡逆の重業に依り・或は国主と成つ
みんしゅう なげ よ ある じやせい
て民衆の歎きを知らざるに依り・或は法の邪正を知らざるに依り・或は
あくし
惡師を信ずるに依る、此の中に於ても世間の善惡は眼前に在り愚人も之を
わきまう ぶつぼう じやせい ぜんあく おい せけん ぜんあく がんぜん ぐにん これ
弁うべし仏法の邪正・師の善惡に於ては証果の聖人・尚之を知らず況や
まつだい ほんぶ おい
末代の凡夫に於ておや。

しかのみならず仏・日・西山に隠れ余光・東域を照してより已来・四依
えとう さんそう ほうりゅう
の慧灯は日に減じ三蔵の法流は月に濁る実教に迷える論師は真理の月に
そ こんきょう しゅう やくしや じつきょう たま くだ こんきょう
雲を副え権經に執する訳者は実經の珠を碎きて權教の石と成す、何に
いわんやしんたん にんし しゅうざそ あやま いわんやにほん まつがくあやま
況や震旦の人師の宗義其の誤り無からんや何に況や日本辺土の末学誤りは
したが そ
多く実は少き者か、随つて其の教を学する人数は
にんずう

竜鱗りゅうりんよりも多く得道とくどうの者は鱗角りんかくよりも希まれなり、或あるは権教ごんきょうに依よるが故ゆえに

・或あるは時機じき不相応ふそうおうの教きょうに依よるが故ゆえに、或あるは凡聖ぼんせいの教きょうを弁わえざるが故ゆえに、或ある

は権実ごんじつ二教にきょうを弁わえざるが故ゆえに、或あるは権經ごんきやうを實教じつきやうと謂おもうに依よるが故ゆえに、或ある

は位こうげの高下こうげを知らざるが故ゆえに、凡夫ぼんぷの習ならい仏法ぶつぽうに就おいて生死しやうじの業ごうを増しふこと

其その縁えん・一いつに非あらず。

中昔ちゆうじやく・邪智じゃちの上人しやうにん有あつて末代まつだいの愚人ぐにんの爲ために一切いっさいの宗義しゆぎを破はして

選せん集ちやくしゆう一卷いつくわんを造つくる、名なを鸞らん・綽しゆく・導どうの三師さんしに倣いちだいつて一代いちだいを二門にもんに分わち

實教じつきやうを録ろくして権經ごんきやうに入れ法華ほつけ・真言しんごんの直道じきどうを閉しじて浄土三部じやうどの隘路あいろうを開あ

く、亦また浄土三部じやうどの義ぎにも順ごんじつぜずして権實ごんじつの謗法ほうぽうを成なし永しく四聖ししやうの種しゆを断たじ

て阿鼻あびの底しずに沈しずむ可べき僻見びやくけんなり、而しかに世人しやじん之のに順したがうこと譬たとえば大風たいふうの

小樹しょうじゆの枝えを吹ふくが如ごとく門弟もんてい此このの人ひとを重おもんずること天衆てんしゆうの帝釈たいしやくを敬うやむに似に

たり。

此の惡義あくぎを破らんが為ために亦多くの書有り所謂いわゆる・淨土決義鈔・彈選だんせん・

摧邪輪等さいじゃりんなり、此の書せんちやくしゅうほうほうを造る人・皆碩德みなせきとくの名一天いつてんに弥はびこると雖も恐いえどくは未だ

選せん集ちやくしゅうほうほう 謗法こんげんの根源あらを顕ゆえわさず故かえに還あくほうつて惡法るふの流布ふを増たす、譬たとえば盛な

る早しやううばつの時に小雨しやううを降そうもくいよいよからせば草木つわもの 弥じやくへい枯れ兵者を打つ刻に弱兵を先ずれ

ば強敵じやうてき 倍力ばいりきを得るが如ごとし。

予此なげの事を歎なげく間・一卷せんちやくしゅうほうほうの書を造つて選集せんちやくしゅうほうほう 謗法えんぎの縁起あらを顕わし名づ

けて守護しゆご國家論こくがろんと号いっさいす、願ごうわくば一切いっさいの道俗どうぞく一時いちじの世事せじを止とどめて永劫えいこくの善苗よきなえ

を種くさねえよ、今きやうろん 經論もつを以もつて邪正じやせいを直しんぼうす信謗ぶつせつは仏說まかに任あえてせ敢じぎて自義そんを存ぞんする

事無ことなかれ。

分なちて七門なと為なす、一なには如來にやらいの經教きやうぎやう に於おいて權實こんじつ二教にを定さだむることを

明あかし、二しやうぞうまつには正像末こうはいの興廢あかを明あかし、三せんちやくしゅうには選集ほうほうの謗法えんぎの縁起あかを明あかし、

四ほうほうには謗法たいじの者しやうもんを対治いだすべき証文あかを出いすことを明あかし、五ぜんちしきには善知識ぜんちしき並に

眞實しんじつの法あには値がたい難あかきことを明あかし、六ほには法華ほっけ・涅槃ねはんに依よる行者ぎやうじやの用心ようじんを明あかし、七しちには問したに随したがつて答こたへることを明あかす。

大文だいいちの第一だいいちに如來にょらいの經教きやうぎやうに於おいて權實ごんじつ二教にを定さだむることを明あかすとは此これに於おいて四有しよきやうり、一いちには大部たいぶの經しだいの次第しだいを出でして流類るるいを撰せんずることを明あかし、二にには諸經しよきやうの淺深せんじんを明あかし、三さんには大小しやうじやう乗じやうを定さだむることを明あかし、四しには且しばらく權ごんを捨すてて實じつに就つくべきことを明あかす。

第一だいいちに大部たいぶの經しだいの次第しだいを出でして流類るるいを撰せんずることを明あかさば、問いうて云いくいふ・最初さいしよに何いかなる經きやうを説ときたまうや、答こたへて云いくいふ華嚴經けこんきやうなり、問いうて云いくいふ其その証い如何い、答こたへて云いく六十華嚴經けこんきやうの離世間淨眼品りせけんじやうがんぼんに云いく「是かくの如ごとく我聞わがきこく一時いちじ・仏ぶつ・摩竭提國まかだこく・寂滅道場じやくめつどうじやうに在あつて始めて正覺しやうかくを成じやうず」と、法華經ほけきやうの序品じよぼんに放光瑞の時ほうこうずい・弥勒菩薩みろくぼさつ・十方世界じふつぱうせかいの諸佛しよぶつの五時しだいの次第しだいを見る時み・もんじゆしりぼさつ・文殊師利菩薩もんじゆしりぼさつに問いうて云いく、「又諸佛聖主師子しよぶつせいしゆしの經典きやうてんの微妙第一みみやうだいいちなること

を演説し給うに其の声清浄に柔軟の音を出して諸の菩薩を教え給うこと
を演説し給うに其の声清浄に柔軟の音を出して諸の菩薩を教え給うこと
無数億万なることを観る亦方便品に仏、自ら初成道の時を説いて云く「我
始め道場に坐し樹を觀じ・亦經行す、乃至・爾の時に諸の梵王及び諸天
帝釈・護世四天王及び大自在天並に余の諸の天衆・眷屬百千万・恭敬
合掌し礼して我に轉法輪を請ずと」此等の説は法華經に華嚴經の時を指
す文なり、故に華嚴經の第一に云く毘沙門天王略月天子略日天子略釈提桓因
略大梵略摩醯首羅等略已上。

涅槃經に華嚴經の時を説いて云く「既に成道し已つて梵天勸請すらく唯
願わくば如来當に衆生の為に廣く甘露の門を開き給うべし、乃至・梵王復
言く世尊・一切衆生に凡そ三種有り所謂・利根・中根・鈍根なり利根は
能く受く唯願わくば為に説き給え、仏言く梵王諦に聴け我今當に一切衆生
の為に甘露の門を開くべし」亦三十三に華嚴經の時を説いて云く「十二部

經・修多羅の中の微細の義を我先に已に諸の菩薩の為に説くが如し」。

此くの如き等の文は皆諸仏・世に出で給いて一切經の初めには必ず

華嚴經を説き給いし証文なり。

問うて云く無量義經に云く「初めに四諦を説き、乃至・次に方等十二部

經・摩訶般若・華嚴海空を説く」此くの如き文は般若經の後に華嚴經を説

くと相違如何、答えて云く淺深の次第なるか・或は後分の華嚴經なるか、

法華經の方便品に一代の次第淺深を列ねて云く「余乗有ること無し若は二

若は三」と此の意なり。

問うて云く華嚴經の次に何の經を説き給うや、答えて云く阿含經を説き

給うなり、問うて云く何を以て之を知るや、答えて云く法華經の序品に

華嚴經の次の經を説いて云く「若し人・苦に遭うて老病死を厭うには為に

涅槃を説く」方便品に云く「即・波羅奈に趣き、乃至・五比丘の為に説く」

ねはんぎょう

けこんぎょう

涅槃經に華嚴經の次の經を定めて云く「即・波羅奈國に於て正法輪を轉じ

て中道を宣説す」此等の經文は華嚴經より後に阿含經を説くなり。

せんぜつ これら きょうもん

あこんぎょう

いづれ

たま

いわ ほうとう

問うて云く阿含經の後に何の經を説き給うや、答えて云く方等經なり、

いわ

もつ これ

いわ ほうとう

問うて云く何を以てのを知るや、答えて云く無量義經に云く「初に四諦を

ないし

ほうとう

いわ ほうとう

いわ ほうとう

いいたい

説き乃至・次に方等十二部經を説く」涅槃經に云く「修多羅より方等を出す」

いわ ほうとう

てんじく ことば

いわ だいじょう

けこん はんにな

ほうけ

問うて云く方等とは天竺の語・此には大乘と云う華嚴・般若・法華・

いわ ほうとう

なん ひと

ほうとうぶ

いわ

涅槃等は皆方等なり何ぞ独り方等部に限り方等の名を立つるや、答えて云く

けこん はんにな

ほうとう

しか いえど

ほうとうぶ

おい

實には華嚴・般若・法華等皆方等なり然りと雖も今方等部に於て別して

ほうとう

方等の名を立つることは私の義に非ず無量義經・涅槃經の文に顯然たり、

あこん

しょうか いっしゅうしやうじょう

だいじょう

ほうとう

いこみなだいじょう

と云う

阿含の証果は一向小乘なり次に大乘を説く方等より已後皆大乘と云う

いえど だいじょう

ゆえ

ほうとうぶ

ほうとう

例せば十

と雖も大乘の始なるが故に初に従つて方等部を方等と云うなり、

八界の十半は色なりと雖も初に従つて色境の名を立つるが如し。

問うて云く方等部の諸經の後に何の經を説き給うや、答えて云く般若經なり、問うて云く何を以て之を知るや答えて云く涅槃經に云く「方等より般若を出す」

問うて云く般若經の後には何の經を説き給うや、答えて云く無量義經なり、問うて云く何を以て之を知るや答えて云く仁王經に云く「二十九年中」無量義經に云く「四十余年」問うて云く無量義經には般若經の後に華嚴經を列ね涅槃經には般若經の後に涅槃經を列ぬ、今の所立の次第は般若經の後に無量義經を列ぬる相違如何、答えて云く涅槃經第十四の文を見るに涅槃經已前の諸經を列ねて涅槃經に対して勝劣を論じ而も法華經を挙げず、第九の卷に於て法華經は涅槃經より已前なりと之を定め給う、法華經の序品を見るに無量義經は法華經の序文なり、無量義經には般若の次に華嚴經を列ぬれども華嚴經を初時に遣れば般若經の後は無量義經なり。

問うて云く無量義經の後に何の經を説き給うや、答えて云く法華經を説き給うなり、問うて云く何を以て之を知るや、答えて云く法華經の序文に云く「諸の菩薩の爲に大乘經の無量義經・菩薩法・仏所護念と名ずくるを説き給う、仏・此の經を説き已つて結跏趺坐し無量義處三昧に入る」

問うて云く法華經の後に何の經を説き給うや、答えて云く普賢經を説き給うなり、問うて云く何を以て之を知るや、答えて云く普賢經に云く「卻て後・三月・我当に般涅槃すべし、乃至・如来昔・耆闍崛山及び余の住處に於て已に広く一実の道を分別し今も此の處に於てす」

問うて云く普賢經の後に何の經を説き給うや、答えて云く涅槃經を説き給うなり、問うて云く何を以て之を知るや、答えて云く普賢經に云く「卻て後・三月・我当に般涅槃すべし」涅槃經三十に云く「如来何が故ぞ二月に涅槃し給うや、亦・如来は初生・出家・成道・轉法輪皆八日を以てす何ぞ

仏ねはんひとの涅槃ねはん独り十五日なるやと云う」と大部たいぶの經・大概たいがい是この如ごとし此こより
いげもろもろ しょうじょうきよう くだいふじよう
已外いがい諸の大小乗しょう經は次第しだい不定ふじようなり、或あるは阿含あこん經より已後いごに華嚴けこん經を
と ほけきよう ほうとう はんによ
説き法華經より已後に方等・般若はんを説く皆義類みなぎるいを以て之を収めて一処いっしょに置
くべし。

第二しよきように諸經せんじんの淺深あかを明むりさば、無量義經むりようぎきように云く「初いたに四諦しだいを説き次に方等ほうとう

十二部經・摩訶般若まかはんによ・華嚴海空けこんかいこうを説き菩薩ぼさつの歴劫りやっこうしぎきよう修行せんぜつを宣説またいす」亦云く

「四十余年よんじゅうよねんには未だ真実いま しんじつを顕あらわさず」又云く「無量義經むりようぎきようは尊かじようく過上これら無し」此等これら

の文ことの如ごとくんば四十余年よんじゅうよねんの諸經しよきようは無量義經むりようぎきように劣ること疑い無き者なり。

問いわうて云く密嚴經みつこんきように云く「一切經いっさいききようの中に勝すぐれたり」大雲經だいうんきように云く「諸經しよきよう

の轉輪聖王てんりんじょうおうなり」金光明經こんこうみょうきように云く「諸經しよきようの中の王これらなり」と此等の文これらを

見るに諸大乘經しよだいじょうきようの常の習なんなり何ぞ一文みを瞻むりて無量義經むりようぎきようは四十余年よんじゅうよねんの諸經しよきよう

に勝まさると云うや、答いえて云く教主きようしゅ釈尊しやくそん若しよきようし諸經しよきように於て互おに勝劣たがいしやうれつを説か

ずんば・大小乗しょうじょうの差別さべつ・権実こんじつの不同ふどう有るべからず、若し実もに差別無さべつきに
たがいさべつせんじん互に差別浅深等を説かば諍論じょうろんの根源こんげん・悪業あくごう・起罪きざいの因縁いんねんなり、爾前にぜんの諸經しよきやう
だいいち
の第一だいいちは縁したがに随ふじやうつて不定ふじやうなり・或はある小乗しょうじょうの諸經しよきやうに對して第一だいいちと・或はある
ほうしん
報身の寿を説くに諸經しよきやうの第一だいいちなり・或はある俗諦ぞくたい・真諦しんたい・中諦ちゆうたい等を説くに
だいいち
第一だいいちなりと一切の第一いっさいに非ず、今の無量義經むりやうぎきやうの如きは四十余年の諸經しよきやうに對
して第一だいいちなり。

問うて云く法華經ほけきやうと無量義經むりやうぎきやうと何れいすれが勝れたるや、答えて云く法華經ほけきやう勝れ
たり、問うて云く何を以て之を知るや、答えて云く無量義經むりやうぎきやうには未だ二乗いまにじやう
さぶつ
作仏くおんじつじやうと久遠実成あかゆえとを明さず故に法華經ほけきやうに嫌きらわれて今説こんせつの中に入るなり。

問うて云く法華經ほけきやうと涅槃經ねはんきやうと何れいすれが勝れたるや、答えて云く法華經ほけきやう勝る
るなり、問うて云く何を以て之を知るや、答えて云く涅槃經ねはんきやうに自ら如法華中みずかによほつつけちゆう
と
等と説き更無所作と云う、法華經ほけきやうに当説とうせつを指して難信難解なんげと云わざるが故

なり。

問うて云く涅槃經の文を見るに涅槃經已前をば皆邪見なりと云う如何、

答えて云く法華經は如來出世の本懷なる故に「今者已満足・今正是其時・

然善男子・我実成仏已來」等と説く、但し諸經の勝劣に於ては仏、自ら

「我所説經典無量千萬億」なりと挙げ了つて「已説・今説・當説」等と説

く時、多宝仏・地より涌現して皆是真実と定め分身の諸仏は舌相を梵天に

付け給う是くの如く諸經と法華經との勝劣を定め了んぬ、此の外・釈迦

一仏の所説なれば先後の諸經に對して法華經の勝劣を論ずべきに非ざる

なり、故に涅槃經に諸經を嫌う中に法華經を入れず法華經は諸經に勝る

る由・之を踰わす故なり、但し邪見の文に至つては法華經を覺知せざる一類

の人・涅槃經を聞いて悟を得る故に迦葉童子・自身並に所引を指して

涅槃經より已前を邪見等と云うなり經の勝劣を論ずるには非ず。

第三に 大小乗だいしやうじやう を定むることを明あかさば、問いうて云いく 大小乗だいしやうじやう の差別さべつ如何いかん、

答こたえて云いく常途じやうとの説ことの如ごとくんば阿含部あこんの諸經しよきやうは小乗しやうじやうなり華嚴けこん・方等ほうとう・

般若はん・法華ほつ・涅槃ねはん等だいは大乘だいじやうなり、或あるは六界ろっかいを明あすは小乗しやうじやう・十界じゆっかいを明あす

は大乗だいじやうなり、其その外ほか・法華經ほけきやうに對して實義じつぎを論ろんずる時とき・法華經ほけきやうより外ほかの

四十余年よんじゅうねんの諸大乘しやうだいじやうきやう經きやうは皆みな小乗しやうじやうにして法華經ほけきやうは大乗だいじやうなり。

問いうて云いく諸宗しよしゆうに亘わたて我所しよこ擲ちの經きやうを實大乘じつだいじやうと謂おもい余宗よしゆう所しよこ擲ちの經きやうを

權大乘ごんだいじやうと云いふこと常ならの習ないなり末學まつがくに於おては是非ぜひ定がめ難がたし、未いまだ聞知もんちせず

法華經ほけきやうに對して諸大乘しやうだいじやうきやう經きやうを小乗しやうじやうと稱しょうする証文しやうもん如何いかん、答こたえて云いく宗宗しゆしゆの

立義りつぎ互がに是非ぜひを論ろんず就なかんずくままつばう中末法ちゆうまつぽうに於おて世間出世せけんしゆつせに就おて非ひを先これとし是しを後あととす

自みらは是非ぜひを知らず愚者ぐしやの歎なげくべき所ところなり、但ただし且しかく我等われらが智ちを以もつて四十余年よんじゅうねん

の現文げんぶんを觀みるに此この言ことを破さする文無なければ人ひとの是非ぜひを信用しんようすべからざるな

り、其その上うへ・法華經ほけきやうに對して諸大乘しやうだいじやうきやう經きやうを小乗しやうじやうと稱しょうすることは自答じとうを存ぞんす

べきに非ず、法華經の方便品に云く「仏は自ら大乘に住し給えり、乃至・
自ら無上道大乘平等の法を証しき若し小乗を以て化すること乃至一人
に於てせば我即ち慳貪に墮せん、此の事は為て不可なり」此の文の意は
法華經より外の諸經を皆小乗と説けるなり、亦寿量品に云く「小法を
樂う」と此等の文は法華經より外の四十余年の諸經を皆小乗と説けるな
り、天台・妙樂の釈に於て四十余年の諸經を小乗なりと釈すとも他師
之を許すべからず故に但經文を出すなり。

第四に且らく權教を闔いて実經に就くことを明さば、問うて云く証文
如何、答えて云く十の証文有り法華經に云く「但大乘經典を受持するこ
とを樂て乃至余經の一偈をも受けざれ」涅槃經に云く「了義經に依つて
不了義經に依らざれ」、是二法華經に云く「此の經は持ち難し若し暫くも持
つ者は我即ち歡喜す諸仏も亦然なり是の如き人は諸仏の歎めたもう所なり、

こすなわ ゆうもう
是れ則ち勇猛なり是れ則ち精進なり是を戒を持ち頭陀を行ずる者と名く
まつだい おい よんじゅうよねん
末代に於て四十余年の持戒無し、三涅槃經に云く「乘に緩なる者に於ては
すなわ かん な かい かん
乃ち名けて緩と為す戒緩の者に於ては名けて緩と為さず菩薩摩訶薩・此の
だいじよう おい けまん
大乘に於て心懈慢せずんば是を奉戒と名づく正法を護らんが為に大乘の
も っ しか みずか かく ゆえ ぼさつ ほかい げん いえど
水を以て而も自ら澡浴す是の故に菩薩・破戒を現ずと雖も名づけて緩と
な
為さず」戒を流通する文なり是四法華經第四に云く「妙法華經・乃至・
かいぜしんじつ しやうみよう ぼけきよう ふげん ぼさつ いわ によらい めつこ
皆是真実」の証 明なり法華經第八普賢菩薩の誓に云く「如来の滅後に
おい えんぶだい だんぜつ ぼけきよう
於て閻浮提の内に広く流布せしめて断絶せざらしめん」法華經第七に云く
「我が滅度の後・後の五百歳の中に閻浮提に於て断絶せしむること無けん」
しゃかによらい ぼけきよう たほう じゅつぼうしよぶつらいじゅう いしゆ
釈迦如来の誓なり法華經第四に多宝並に十方諸仏来集の意趣を説いて
い わ 云く「法をして久しく住せしめんが故に此に來至し給えり」是八法華經第
ほけきよう じゅうしよ いわ によらい めつこ おい まさ
七に法華經を行ずる者の住处を説いて云く「如来の滅後に於て応に一心に

受持・読・誦・解説・書写して説の如く修行すべし所在の国土に乃至・
若は経卷所住の処若は園の中に於ても若は林の中に於ても若は樹の下に
於ても若は僧坊に於ても若は白衣の舎にても若は殿堂に在つても若は山谷
曠野にても是の中に皆塔を起て供養すべし所以は何ん当に知るべし是の処
は即ち是れ道場なり諸仏此に於て阿耨多羅三藐三菩提を得給う」是九
法華經の流通たる涅槃經の第九に云く「我涅槃の後正法未だ滅せず余の八
十年・爾時に是の經閻浮提に於て当に広く流布すべし是の時当に諸の
惡比丘有るべし是の經を抄掠して分つて多分と作し能く正法の色香美味
を滅す是の諸の惡人復是の如き經典を讀誦すと雖も如来深密の要義を滅除
して世間莊嚴の文を安置し無義の語を飾り前を抄て後に著け後を抄て前に
著け前後を中に著け中を前後に著けん当に知るべし是くの如き諸の惡比丘
は是・魔の伴侶なり、乃至・譬えば牧牛女の多く水を乳に加うるが如く

もろもろあくびく またまたかく 諸の悪比丘も亦復是の如し雜るに世語を以てし錯りて是の經を定む多くのしゅじよう

衆生をして正説・正写・正取・尊重・讚歎・供養・恭敬することを得しよせつ・しようしや・しようしゅ

ざらしむ是の悪比丘は利養の爲の故に是の經を広宣流布すること能わず分あくびく りよう

流すべき所少く言うに足らず彼の牧牛の貧窮の女人展転して乳を売るにもくこ びんぐ によんでん

乃至糜と成して乳味無きが如し、是の大乗經典・大涅槃經も亦復是のなしかゆ にゆうみ

如く展転薄淡にして氣味有ること無し氣味無しと雖も猶余經に勝る是れ一ごん てんでんはくたん けみあ

千倍なること彼の乳味の諸の苦味に於て千倍勝るにゆうみ もろもろ おい まさ

と爲すが如し何を以ての故に是の大乗經典・大涅槃經は声聞の經に於てな (こと) もつ ゆえ こ だいじようきようてん だいねはんきよう しようもん おい

最上首爲り」是十。さいじようしゅな

問うて云く不了義經を捨てて了義經に就くとは、大円覚修多羅了義經いわ ふりようぎよう りようぎよう

・大仏頂如来密因修証了義經是の如き諸大乘經は皆了義經なり依用だいぶつちようによらいみついいんしゅうしりようぎようかく (こと) しやだいじようきよう みなりようぎよう えよう

と爲す可きや、答えて云く了義・不了義は所対に随つて不同なり二乗・菩薩なべ かわ りようぎ ふりようぎ したい したが ふどう にじよう ぼさつ

等の所説しよせつの不了義ふりようぎに対すれば一代いちだいの仏説ぶつせつ皆みな了義りようぎなり仏説ぶつせつに就おて小乗しょうじようぎ經きやうは
不了義ふりようぎ・大乘だいじようぎ經きやうは了義りようぎなり大乘だいじように就おて又四十余年よんじゅうよねんの諸經しよきやうは不了義ふりようぎ經きやう・
法華ほつけ・涅槃ねはん・大日經だいにちきやう等は了義りようぎ經きやうなり而しかに円覺えんかく・大仙頂だいふつちやう等の諸經しよきやうは
しよじようおよ、りやつこししゆきやう ふうりようぎきやう ふうりようぎきやう
小乗しょうじよう及び歷劫りやく修行しゆぎやうの不了義ふりようぎ經きやうに対すれば了義りようぎ經きやうなり法華ほつけ經きやうの如ごとき了義りようぎ
には非あらざるなり。

問いうて云いく華嚴けこん・法相ほつそう・三論さんろん等の天台てんだい・真言しんごんより已外いげの諸宗しよしゆうの高祖かうそ・各
其その依憑えびようの經經きやうきやうに依よつて其その經經きやうきやうの深義じんぎを極きわめたりと欲おもえり是これ爾しかる
可べしや如何いかん、答いえて云いく華嚴けこん宗しゆうの如ごときは華嚴けこん經きやうに依よつて諸經しよきやうを判はんじて
華嚴けこん經きやうの方便ほうべんと為なすなり、法相ほうそう宗しゆうの如ごときは阿含あこん・般若はん等にやを卑いやしめ華嚴けこん・
法華ほつけ・涅槃ねはんを以もつて深密じんみつ經きやうに同おなじ同おなじく中道教ちゆうだうきやうと立たつと雖いえども亦また法華ほつけ・涅槃ねはん
は一類いちるいの一乘いちじようを説いくが故ゆゑに不了義ふりようぎ經きやうなり深密じんみつ經きやうには五性ごしやう各別かくべつを論ろんずるが
故ゆゑに了義りようぎ經きやうと立たつるなり、三論さんろん宗しゆうの如ごときは二藏にざうを立たてて一代いちだいを攝せつし大乘だいじよう

に於て淺深を論ぜず而も般若經を以て依憑と爲す、此等の諸宗の高祖・
たぶん しえ ぼさつ
多分は四依の菩薩なるか定めて所存有らん是非に及ばず。

然りと雖も自身の疑を晴らさんが爲に且らく人師の異解を聞いて諸宗
しか いえど じしん うたがい ため しば にんし いげ さしお しよしゅう
えびよう きようぎよう

の依憑の經經を開き見るに華嚴經は旧訳は五十・六十・新訳は八十・四
けこんきよう くやく

十・其の中に法華・涅槃の如く一代聖教を集めて方便と爲すの文無し、
ほつけ ねはん こと いちだいしいうきよう ほうべん な

四乗を説くと雖も其の中の仏乘に於て十界互具・久遠実成を説かず但し
いへど そ ぶつじよう おい じゅつかいこく くれんじつじよう ただ

人師に至つては五教を立てて先の四教に諸經を収めて華嚴經の方便と
にんし いた しきよう しよきよう おさ けこんきよう ほうべん

爲す、法相宗の如きは三時教を立てる時・法華等を以て深密經に同ずと
な ほうそうしゅう こと さんじきよう ほつけ もつ じんみつ

雖も深密經五卷を開き見るに全く法華等を以て中道の内に入れず。
いえど じんみつ ほうけ もつ

三論宗の如きは二蔵を立てる時・菩薩蔵に於て華嚴・法華等を収め
さんろんしゅう こと ぼさつくそう おい けこん ほつけ おさ

般若經に同ずと雖も新古の般若經を開き見るに全く般若を以て法華
はんによきよう いへど しんこ はんによきよう はんによ もつ ほつけ

・涅槃に同ずるの文無し華嚴は頓教・法華は漸教等とは人師の意樂にし
ねはん けこん とんきよう ほつけ ぜんきよう にんし いぎよう

て仏説に非ざるなり。

法華經の如きは序分・無量義經に慥に四十余年の年限を挙げ華嚴・方等・般若等の大部の諸經の題名を呼んで未顕真実と定め正宗の法華經に至つて一代の勝劣を定むる時・我が所説の經典・無量千万億・已説・今説・當説の金言を吐いて、而も其の中に於て此の法華經は最も難信難解なりと説き給う時・多宝仏・地より湧出し妙法蓮華經皆是真実と証誠し分身の諸仏・十方より悉く一処に集つて舌を梵天に付け給う。

今・此の義を以て余推察を加うるに唐土・日本に渡れる所の五千・七千余卷の諸經・以外の天竺・竜宮・四王・天・過去の七仏等の諸經並に阿難の未結集の經・十方世界の塵に同ずる諸經の勝劣・淺深・難易・掌中に在り無量千万億の中に豈釈迦如来の所説の諸經を漏らす可けんや已説・今説・當説の年限に入らざる諸經之れ有るべきや願わくば末代の

諸人且らく諸宗の高祖の弱文無義を閣きて釈迦・多宝・十方諸仏の
強文有義を信ず可し、何に況や諸宗の末学・偏執を先と為し末代の愚者
人師を本と為して経論を抛つ者に依憑すべきや、故に法華の流通たる雙林
最後の涅槃經に仏・迦葉童子菩薩に遺言して言く「法に依つて人に依らざ
れ義に依つて語に依らざれ智に依つて識に依らざれ了義經に依つて
不了義經に依らざれ」と云云。

予世間を見聞するに自宗の人師を以て三昧發得智慧第一と称すれども
無徳の凡夫として実經に依つて法門を信ぜしめず不了義の觀經等を以て
時機相応の教と称し了義の法華・涅槃を閣いて譏つて理深解微の失を付け
如来の「遺言に背いて「人に依つて法に依らざれ・語に依つて義に依らざ
れ・識に依つて智に依らざれ・不了義經に依つて了義經に依らざれ」と
談ずるに非ずや、請い願わくば心有らん人は思惟を加えよ如来の入滅は

既に二千二百余の星霜を送れり文殊・迦葉・阿難・經を結集して已後・
しえ ぼさつかさ しゅつせ 四依の菩薩重ねて出世し論を造り經の意を申ぶ末の論師に至つて漸く誤り
しゅつたい またやくしゃ おい ほんかんみだつ 出来す亦訳者に於ても梵漢未達の者・權教 宿習 の人有つて實の經論の
義を曲げて權の經論の義を存せり、之に就て亦唐土の人師・過去の權教
の宿習 の故に權の經論心に叶う間・實經の義を用いず・或は少し白義
に違ふ文有れば理を曲げて會通を構え以て自身の義に叶わしむ、設い後に
道理と念うと雖も・或は名利に依り・或は檀那の歸依に依つて權宗を捨て
て実宗に入らず、世間の道俗亦無智の故に理非を弁えず但・人に依つて法
に依らず設い惡法たりと雖も多人の邪義に随つて一人の實説に依らず、而
に衆生の機多くは流転に随う設い出離を求むとも亦多分
は權教に依る、但恨むらくは惡業の身・善に付け惡に付け生死を離れ難き
のみ、然りと雖も今の世の一切の凡夫設い今生を損すと雖も上に出す所の

ねはんぎよう

涅槃經第九の文に依つて且らく法華・涅槃を信ぜよ其の故は世間の浅事す

てんでん

ら展転多き時は虚は多く実は少し況や仏法の深義に於てをや、如来の滅後

ぶつぽう

じやぎ

そ

いわんやぶつぽう

じんぎ

おい

にやらい

めつこ

しょうきよう

二千余年の間・仏法に邪義を副え来り万に一にも正義無きか一代の聖教

たぶん

あやま

あ

ゆえん

しんじかんきよう

ほうにむろ

しゆし

ほけきよう

そくるい

多分は誤り有るか、所以に心地觀經の法爾無漏の種子・正法華經の属累の

きようまつ

ばしやろん

じようろん

ほうの識の八九・法華論と妙法華經との相違

ほうそうしゅう

じようしゅうむしゅう

じようぶつ

じようろん

みようほけきよう

そうい

経末・婆沙論の一十六字・撰論の識の八九・法華論と妙法華經との相違

ねはん

ほつけほんのう

ほうそうしゅう

じようしゅうむしゅう

じようぶつ

じようろん

みようほけきよう

そうい

ほうの識の八九・法華論と妙法華經との相違

ほうの識の八九・法華論と妙法華經との相違

ほうの識の八九・法華論と妙法華經との相違

・涅槃論の法華煩惱所汚の文法相宗の定性無性の不成仏・撰論宗の

ほけきよう

なむ

べつじいしゆ

これら

みなやくしやにんし

あやま

たといほつけ

ねはん

おい

あやまりあ

また

法華經の一切南無の別時意趣・此等は皆訳者人師の誤りなり、此の外に亦

よんじゅうよねん

きようぎよう

おい

あやま

あ

たといほつけ

ねはん

おい

あやまりあ

また

また

四十余年の経経に於て多くの誤り有るか設い法華・涅槃に於て誤有る

あやまり

よんじゅうよねん

しよきよう

ほつけ

ねはん

したがべ

そ

その証・上に

その証・上に

その証・上に

その証・上に

も誤無きも四十余年の諸経を捨てて法華・涅槃に随う可し其の証・上に

おわ

いわんやあやま

あ

しよきよう

おい

しんじん

いた

しやうじ

しやうじ

しやうじ

しやうじ

出したんぬ況や誤り有る諸経に於て信心を致す者・生死を離るべきや。

しやうぞうまつ

おい

ぶつぽう

こうはいあ

こうはいあ

こうはいあ

こうはいあ

こうはいあ

こうはいあ

こうはいあ

こうはいあ

大文の第二に正像末に就て仏法の興廢有ることを明すとは、之に就て二

にぜんよんじゅうよねん

しよきよう

じようど

さんぶきよう

まつぽう

おい

くじゅう

くじゅう

くじゅう

くじゅう

くじゅう

有り、一には爾前四十余年の内の諸経と浄土の三部経と末法に於て久住・

ふくじゅう 不久住を明す、二には法華・涅槃と浄土の三部經並に諸經との久住・
ふくじゅう 不久住を明す。

だいいち 第一に爾前四十余年の内の諸經と浄土の三部經と末法に於て久住・

ふくじゅう 不久住を明すとは、問うて云く如来の教法は大小・浅深・勝劣を論ぜず

じきよ 但時機に依つて之を行ぜば定めて利益有るべきなり、然るに賢劫・大術・

だいしつ 大集等の諸經を見るに仏滅後・二千余年已後は仏法皆滅して但・教のみ有

つて行証有るべからず、随つて伝教大師の末法灯明記を開くに我延暦

二十年辛巳一千七百五十歳〔一説なり〕延暦二十年より已後亦四百五十歳

なり既に末法に入れり、設い教法有りと雖も行証無けん、然るに於ては

ぶつぽう 仏法を行ずる者・万が一も得道有り難きか、然るに雙觀經の「当来の世・

きようとうめつじん 經道滅尽せんに我慈悲哀愍を以て特り此の經を留め止住せんこと百歳なら

そん其れ衆生の斯の經に値うこと有らん者は意の所願に随つて皆得道す

可し」等の文を見るに釈迦如来一代の聖教皆滅尽の後・唯特り雙觀教の念仏のみを留めて衆生を利益す可しと見え了んぬ。

此の意趣に依つて粗淨土家の諸師の釈を勘うるに其の意無きに非ず、

道綽禪師は「当今末法は是れ五濁惡世なり唯淨土の一門のみ通入すべき路

なり」と書し、善導和尚は「万年に三宝滅して此の經のみ住すること百年

なり」と宣べ、慈恩大師は「末法万年に余經悉く滅し弥陀の一教利物偏に

増さん」と定め、日本国の叡山の先德慧心僧都是一代聖教の要文を集め

て末代の指南を教ゆる往生要集の序に云く「夫れ往生極樂の教行は

濁世末代の目足なり道俗貴賤誰か歸せざる者あらん但し顯密の教法は其の

文一に非ず事理の業因其の行惟れ多し利智精進の人は未だ難しと為す予が

如き頑魯の者豈敢てせんや」乃至・次下に云く「就中念仏の数は多く末代

經道滅尽の後の濁惡の衆生を利する計りなり」と、総じて諸宗の学者

も此の旨を存す可し殊に天台一宗の学者誰か此の義に背く可けんや如何、
答えて云く爾前四十余年の経経は各時機に随つて而も興廢有るが故に
たぶん じょうど さんぶきよう いぜん めつじんあ べ しよきよう おい さんじよう
多分は浄土の三部経より已前に滅尽有る可きか、諸経に於ては多く三乗
現身の得道を説く故に末代に於ては現身得道の者之少きなり十方の往生
じょうど まつだい おい げんしんとくどう さいほうごくらく じゅつぼう おうじよう
浄土は多くは末代の機に蒙らしむ、之に就て西方極楽は娑婆隣近なるが
ゆえ さいか じょうど ゆえ にちりん い さいほうごくらく しゃばりんご
故に最下の浄土なるが故に日輪東に出で西に没するが故に諸経に多く之を
すす したが じょうど そし ひと すす ゆえ しよきよう みようらく
勧む、随つて浄土の祖師のみ独り此の義を勧むるのみに非ず天台・妙楽等
またにぜん よ しば またひと にんし あら りゅうじゅ
も亦爾前の経に依るの日は且らく此の筋あり、亦独り人師のみに非ず竜樹
てんじん またにんのうきよう じょうど さんぶきよう
・天親も此の意有り、是れ一義なり、亦仁王経等の如きは浄土の三部経よ
なお まつぼうまんねん べ ゆえ にぜん しよきよう
り尚久く末法万年の後・八千年住す可しとなり、故に爾前の諸経に於ては
一定すべからず。

第二に法華・涅槃と浄土の三部経との久住・不久住とを明さば、問うて

いわ 云く法華・涅槃と浄土の三部經と何れが先に滅すべきや、答えて云く法華
ねはん 涅槃より已前に浄土の三部經は滅す可きなり、問うて云く何を以て之を
いせん いぜん 知るや、答えて云く無量義經に四十余年の大部の諸經を挙げ了つて未顕
い わ りようぎきよう よんじゅうよねん たいぶ しよきよう あ おわ みけん
しんじつ 眞実と云う故に雙觀經等の「特り此の經を留む」の言は皆・方便なり虚妄
ゆえ そうかんきよう ひと
けこん なり、華嚴・方等・般若・觀經等の速疾歴劫の往生 成仏は無量義經の
ほうとう はんや かんきよう そくしつりやっこう おうじようじようぶつ わりようぎきよう
じつぎ もつこれ むりようむへんふかしぎあそぎこう す つい むじよう
ぼだい 菩提を成ずることを得ず、乃至・險き逕を行くに留難多きが故にと云う經
じよう ないし みち るなん ゆえ
おうじようじようぶつとも べつじいしゅ だいしつ そうかんきよう じゅうめつ せんご みな
なり、往生 成仏俱に別時意趣なり、大集・雙觀經等の住滅の先後は皆
ほけきよう べつじいしゅ だいしつ そうかんきよう じゅうめつ せんご みな
随宜の一説なり、法華經に來らざる已前は彼の外道の説に同じ、譬えば江河
ずいぎ ほけきよう いぜん げどう たと こうか
たいかい おもむ みんな だいおう したがわ こと げどう ざいせめつことも ほうけ
の大海に趣かず民臣の大王に随わざるが如し、身を苦しめ行を作すとも法華
ねはん いた いちぶん りやくなく ゆういんむか げどう ざいせめつことも ほうけ
・涅槃に至らずんば一分の利益無く有因無果の外道なり、在世滅後俱に教
なく 有つて人無く・行有つて証無きなり諸木は枯ると雖も松柏は萎まず
しよ から いえど しょうはく しほ

衆草は散ると雖も鞠竹は変ぜず法華經も亦復是くの如し釈尊の三説・
多宝の証明・諸仏の舌相偏に令法久住に在るが故なり。

問うて云く諸經滅尽の後特り法華經のみ留る可き証文如何、答えて

云く法華經の法師品に釈尊自ら流通せしめて云く「我が所説の經典無量

千万億已に説き今説き當に説かん而も其の中に於て此の法華經最も為れ

難信難解なり」と云云、文の意は一代五十年の已今當の三説に於て最第一

の經なり、八万聖教の中に殊に未來に留めんと欲して説き給えるなり、

故に次の品に多宝如來は地より涌出し分身の諸仏は十方より一処に來集

し釈迦如來は諸仏を御使として八方・四百万億那由佗の世界に充滿せる

菩薩・二乘・人天・八部等を責めて多宝如來並に十方の諸仏・涌出來集

の意趣は偏に令法久住の為なり、各三説の諸經滅尽の後・慥に未來五濁

難信の世界に於て此の經を弘めんとの誓言を立てよと云える時に二万の

菩薩・八十萬億那由陀の菩薩・各誓狀を立てて云く「我身命を愛せず但
無上道を惜む」と、千世界の微塵の菩薩・文殊等皆誓つて云く「我等・仏
の滅後に於て、乃至・当に広く此の經を説くべし」と云云、其の後・仏十喻
を挙げ給う、其の第一の喩は川流江河を以て四十余年の諸經に譬え法華經
を以て大海に誓う、末代濁惡の無慚無愧の大早・の時・四味の川流江河は
渴ると雖も法華經の大海は減少せず等と説き了つて、次下に正しく説いて
云く「我滅度の後・後の五百歳の中に広宣流布し閻浮提に於て断絶せしむ
ること無けん」と定め了んぬ。

倩文の次第を案ずるに我滅度後の次の後の字は四十余年の諸經滅尽の
後の後の字なり、故に法華經の流通たる涅槃經に云く「応に無上の佛法を
以て諸の菩薩に付すべし諸の菩薩は善能く問答するを以てなり是くの如き
法宝は則ち久住することを得・無量千世にも増益熾盛にして衆生を利安す

べし」已上此の如き等の文は法華・涅槃は無量百歳にも絶ゆ可からざる經なり、此の義を知らざる世間の学者・大集権門の五五百歳の文を以て此の經に同じ浄土の三部經より已前に滅尽す可しと存ずる立義は一經の先後起尽を忘れたるなり。

問うて云く上に挙ぐる所の曇鸞・道綽・善導・慧心等の諸師は皆法華・

真言等の諸經に於て末代不相応の釈を作る之に依つて源空並に所化の弟子

・法華・真言等を以て雜行と立て難行道と疎み、行者をば群賊・惡衆

・惡見の人等と罵り、或は祖父が履に類しの語・或は絃歌等にも劣ると

云うの語其の意趣を尋ぬれば偏に時機不相応の義を存するが故なり、此等

の人師の釈をば如何に之を会すべきや、答えて云く釈迦如来一代五十年の

説教・一仏の金言に於て權実二教を分ち權經を捨てて実經に入らしむる

仏語顯然たり、此に於て若但讚仏乘・衆生没在苦の道理を恐れ且らく四

十二年のごんきよう権經を説くと雖も若以いえど小乘しやうじやう化・乃至於一人・我則墮慳貪の失をまぬか脱だつれんが為ために入大乘だいじやういほん為本の義を存し本意を遂げ法華經を説き給う。

然るに涅槃經に至つて我滅度せば必ず四依を出して權実二教を弘通せし

めんと約束やくそくし了んぬ、故に竜樹菩薩は如来の滅後八百年に出世して十住

毘婆沙等の權論を造りて華嚴・方等・般若等の意を宣べ大論を造りて二若

法華の差別を分ち、天親菩薩は如来の滅後・九百年に出世して俱舍論を造り

て小乗の意を宣べ唯識論を造りて方等部の意を宣べ最後に仏性論を造り

て法華・涅槃の意を宣べ了教不了教を分ちて敢て仏の遺言に違わず、末

の論師並に訳者の時に至つては一向に権經に執するが故に実經を会して

権經に入れ權実雜亂の失・出来せり、亦人師の時に至つては各依憑の經

を以て本と為すが故に余經を以て権經と為す是より弥いよいよ仏意に背く。

而るに浄土の三師に於ては鸞・綽の二師は十住毘婆沙論に依つて難易

・聖せい浄じようの二道にどうを立つも若もし本論ほんろんに違たがいて法華真言等ほつけしんこんを以もつて難易なんいの内に入れば
信用しんように及および、随したがつて浄土論註じようどろんちゆう並あんらくに安樂集あんらくを見るに多分たぶんは本論ほんろんの意たがに違たがわ
ず、善導ぜんどう和尚わじようは亦また浄土じようどの三部經さんぶきように依よつて弥陀みだ称名しょうみよう等の一行一願いちだいいしうきようの往生おうじようを
立つる時・梁・陳・隋・唐とうの四代の撰じようろん論師じようろん総いじて一代いちだいいしうきよう聖教せいぎようを以もつて別時
意趣いしゆと定さむ、善導ぜんどう和尚わじようの存念そんねんに違いするが故ゆえに撰じようろん論師じようろんを破さする時・彼の人を
群賊等ぐんぞくに誓じゆんじしようう順次生くんとくの功德そくを賊そくするが故ゆえに其その所行しよぎようを難行なんぎようと称しようすること
は必ずまんぎよう万行もつを以もつて往生おうじようの素懷そかいを遂とぐる故ゆえに此ゆえの人を責せむる時に千中無一せんちゆうむいつ
と嫌きらえり、是かくの故ゆえに善導ぜんどう和尚わじようも雜行そうぎようの言あの中に敢あえて法華・真言等ほつけしんこんを入いれ
ず。

日本国にほんこくの源信僧都げんしんそうずは亦また叡山えいざん第十八代ざすの座主じけいだいし・慈慧大師おんでしの御弟子おんでしなり多く
の書を造れることは皆法華みなほつけを弘ひろめんが為なりなり、而しかるに往生要集おうじようようししゆを造る意
にぜんよんじゆうよねん しょうきよう おい おうじよう じようぶつ
は爾前四十余年の諸經しよきように於おて往生・成仏じようぶつの二義じようぶつ有り成仏じようぶつの難行なんぎように對し

て往生易行の義を存し往生の業の中に於て菩提心觀念の念仏を以て最上
と為す、故に大文第十の問答料簡の中・第七の諸行勝劣門に於ては念仏
を以て最勝と為し次下に爾前最勝の念仏を以て法華經の一念信解の功德
に対して勝劣を判ずる時・一念信解の功德は念仏三昧より勝るる
百千万倍なりと定め給えり、当に知るべし往生要集の意は爾前最上の
念仏を以て法華最下の功德に対して人をして法華經に入らしめんが為に造
る所の書なり、故に往生要集の後に一乗要決を造つて自身の内証を述
ぶる時・法華經を以て本意と為すなり。

而るに源空並に所化の衆・此の義を知らざるが故に法華・真言を以て
三師並に源信所破の難聖難並に往生要集の序の顕密の中に入れて三師並
に源信を法華・真言の謗法の人と為す、其の上・日本国の一切の道俗を化
して法華・真言に於て時機不相応の旨を習わしめ在家・出家の諸人に於て

法華・真言の結縁を留む豈仏の記し給う所の「惡世中比丘邪智心諂曲」の
人に非ずや、亦則ち一切世間の仏種を斷ずの失を免る可けんや。

其の上・山門・寺門・東寺・天台並に日本國中に法華・真言を習う諸人
を群賊・惡衆・惡見の人等に誓うる源空が重罪何れの劫にか其の苦果を

經尽す可きや、法華經の法師品に持經者を罵る罪を説いて云く「若し惡人

有つて不善の心を以て一劫の中に於て現に仏前に於て常に仏を毀罵せん

其の罪尚輕し若し人・一つの惡言を以て在家・出家の法華經を讀誦する者

を毀☆せん其の罪甚だ重し」經文一人の持者を罵る罪すら尚是くの如し

況や書を造り日本國の諸人に罵らしむる罪をや、何に況や此の經を千中無一

と定めて法華經を行ずる人に疑を生ぜしむる罪をや、何に況や此の經を

捨てて觀經等の權經に遷らしむる謗法の罪をや、願わくば一切の源空が

所化の四衆頓に選択集の邪法を捨てて忽に法華經に遷り今度阿鼻の炎を

脱れよ。
まぬか

問うて云く正しく源空が法華經を誹謗する証文如何、答えて云く法華經の第二に云く「若し人信ぜずして斯の經を毀謗せば則一切世間の仏種を断ぜん」經文不信の相貌は人をして法華經を捨てしむればなり、故に天親菩薩の仏性論の第一に此の文を釈して云く「若し大乘に憎背する者・此は是れ一闡提の因なり衆生をして此の法を捨てしむるを為の故に」論文謗法の相貌は此の法を捨てしむるが故なり、選釈集は人をして法華經を捨てしむる書に非ずや閣拋の二字は仏性論の憎背の二字に非ずや、亦法華經誹謗の相貌は四十余年の諸經の如く小善成仏を以て別時意趣と定むる等なり。

故に天台の釈に云く「若し小善成仏を信ぜずんば則世間の仏種を断ずるなり」妙樂重ねて此の義を宣べて云く「此の經は遍く六道の仏種を開す

も 若し此の経を謗せば義・断に当るなり」釈迦・多宝・十方の諸仏・天親・

てんだい みょうらく

天台・妙楽の意の如くんば源空は謗法の者なり所詮選択集の意は人をし

ほつけ しんこん

て法華・真言を捨てしめんと定めて書き了んぬ謗法の義疑い無き者なり。

大文の第三に

せんちやくしゅうほうほう

えんぎ

いだ

問うて云く何れの証拠を

いわ いずれ

しやうこ

もつ げんくう

ほうほう

しょう

せんちやくしゅう

げんぶん

いちだい

しょうきよう

もつ

わか

しやうどう

なんぎよう

そつぎよう

じやうど

いぎよう

しょうぎよう

もつ

わか

しやうどう

なんぎよう

そつぎよう

じやうど

いぎよう

しょうぎよう

もつ

わか

しやうどう

なんぎよう

そつぎよう

じやうど

いぎよう

しょうぎよう

もつ

わか

しやうどう

なんぎよう

そつぎよう

じやうど

いぎよう

しょうぎよう

もつ

わか

しやうどう

なんぎよう

そつぎよう

じやうど

いぎよう

しょうぎよう

もつ

わか

しやうどう

なんぎよう

そつぎよう

じやうど

いぎよう

しょうぎよう

もつ

わか

しやうどう

なんぎよう

そつぎよう

じやうど

いぎよう

しょうぎよう

もつ

わか

しやうどう

なんぎよう

そつぎよう

じやうど

いぎよう

り。

問うて云く一代聖教を聖道・浄土・難行・易行・正行・難行と分

ち其の中に難・聖・雑を以て時機不相応と称すること源空一人の新義に

非ず曇鸞・道綽・善導の三師の義なり、此亦此等の大師の私の案に非ず

其の源は竜樹菩薩の十住毘婆沙論より出でたり、若し源空を謗法の者

と称せば竜樹菩薩並に三師を謗法の者と称するに非ずや、答えて云く

竜樹菩薩並に三師の意は法華已前の四十余年の経経に於て難易等の義を

存す、而るに源空より已来竜樹並に三師の難行等の語を借りて法華・

真言等を以て難・雑等の内に入れぬ、所化の弟子・師の失を知らずして此

の邪義を以て正義と存じ此の国に流布せしむるが故に國中の万民悉く法華

・真言に於て時機不相応の想を作す、其の上世間を貧る天台・真言の学者

世の情に随わんが為に法華・真言に於て時機不相応の悪言を吐いて

せんちやくしゅう 選択集の邪義を扶け、一旦の欲心に依つて釈迦・多宝並に十方諸仏の

こひょうじょう

御評定の「令法久住・於閻浮提広宣流布」の誠言を壊り一切衆生をして

さんぜじゅつぼう

三世十方の諸仏の舌を切る罪を得せしむ、偏に是れ惡世の中の比丘は邪智

てんこく

にして心諂曲に未だ得ざるを為得たりと謂い、乃至・惡鬼其の身に入り仏

ほうべんずいぎしよせつ

の方便隨宜所説の法を知らざる故なり。

問うて云く竜樹菩薩並に三師は法華・真言等を以て難・聖・雜の中に入

いわ りゅうじゅぼさつ

れざりしを源空私に之を入るるとは何を以て之を知るや、答えて云く遠く

よそ

余処に証拠を尋ぬ可きに非ず即選択集に之を見たり、問うて云く其の

しょうもんいかん

証文如何、答えて云く選択集の第一篇に云く道綽禪師・聖道・浄土の

いわ

二門を立て而して聖道を捨てて正しく浄土に歸するの文と約束し了つて、

つぎしも

次下に安樂集を引いて私の料簡の段に云く「初に聖道門とは之に就て二

あんらく

有り・一には大乘・二には小乗なり大乘の中に就て顕密・権実等の

だいじょう

有り・一には大乘・二には小乗なり大乘の中に就て顕密・権実等の

ふとう 不同有りいへどと雖も今・此の集の意は唯ただ顕大及びおほ権大を存ぞんす故に歴劫迂回りやくこうの

行に当る之に準じゆんじて之を思これうに応まさに密大及びおほ実大をも存ぞんすべし」已上

せんちやくしゅう

選択集の文なり、此の文の意は道どうしゆくぜん 綽あんなく禅師の安樂集の意は法華ほつけいぜん已前の

だいしゅうじよう

大小乗おひ經に於て聖道しやうどう・浄土じやうどの二門を分つと雖も我私いへどに法華ひそか・真言等ほつけいの

じつだい みつだい もつ よんじゅうよねん ごんだいじよう

実大・密大を以て四十余年の権大乘に同じて聖道門しやうどうもんと称す「準之思之」

の四字これ是なり、此の意に依よるが故に亦曇鸞またどんらんの難易なんいの二道を引く時亦私またひそかに法華ほつけい

・真言を以て難行道なんぎやうどうの中に入れ善導ぜんどう和尚わがの正雜しやうざう二行を分つ時も亦私またひそかに

ほつけい しんこん もつ そつぎよう

法華・真言を以て雜行せんちやくしゅうの内に入る総じて選択集せんちやくしゅうの十六段に亘わたつて無量むりようの

ほうぼう な ごんげん ひとえ

謗法ほうぼうを作す根源こんげんは偏ひとえに此の四字より起おこる誤あやまりれるかな畏おそろししきかな。

ここに げんくう もんてい

爰ここにに源空げんくうの門弟もんてい・師じやぎの邪義じゃぎを救いつて云いわく諸宗しよしゅうの常ならの習たい設い経論きやうろんの

しやうもん いえど ぎるい あつ いっしよ

証文無ししと雖も義類ぎるいの同じきを聚あつめて一處いっしよに置しかく而も選択集せんちやくしゅうの意は法華ほつけい

しんこん そつぎよう

・真言等を集めて雜行そつぎようの内に入れ正行しやうぎように對して之を捨これつ偏ひとえに經ほつたいの法體ほつたいを

嫌うに非ず但風勢無き末代の衆生を常没の凡夫と定め此の機に易行の法を撰ぶ時・称名の念仏を以て其の機に当て易行の法を以て諸教に勝ると立つ権実浅深の勝劣を詮ずるに非ず、雜行と云うも嫌つて雜と云うに非ず雜と云うは不純を雜と云う其の上諸の經論並に諸師も此の意無きに非ず故に叡山の先徳の往生要集の意偏に是の義なり。

所以に往生要集の序に云く「顕密の教法は其の文一に非ず事理の業因其の行惟れ多し利智精進の人は未だ難しと為す予が如き頑魯の者豈敢てせんや是の故に念仏の一門に依る」と云云、此の序の意は慧心先徳も法華・真言等を破するに非ず但偏に我等頑魯の者の機に当つて法華・真言は聞き難く行じ難きが故に我身鈍根なるが故なり敢て法体を嫌うに非ず、其の上序より已外正宗に至るまで十門有り大文第八の門に述べて云く「今念仏を勧むることは是れ余の種種の妙行を遮するに非ず只是れ男女・貴賤・

ぎようじゅうざが へ行住坐臥を簡えらばず時じ処しよ諸縁しよえんを論これぜず之しゆうを修なんするに難ないからず乃りん至じゆう・臨終りんじゆうには
おうじよう 往生がんくを願求そするに其びんの便宣せんを得ること念仏ねんぶつには如しかず」已上此等これらの文を見
げんくう るに源空せんちやくしゆうの選げん集しんと源信おうじようようしゆうの往お生う要い集しと一ふ卷とう・三卷いの不同えど有りと雖も
いちだいしきうきよう 一代いぎ聖教まの中には易行いぎを撰まんで末代まつだいの愚人ぐにんを救ほわんと欲いする意趣しゆは但同
じ事なり、源空げんくうしきうにん上人ほ・法華ほ・真言しんこんを難行なんぎようと立てて惡道あくどうに墮だせば慧心えしん先徳せん
も亦また此とがの失まぬらを免いるべからず如何いかん、答いえて云なんく汝なんじ・師ほうの謗法ぼうの失とがを救まわんが
ため 為げんに事しんを源信おうじようようしゆうの往生要集ほうぼうに寄いせて謗法いの上に弥い重罪いを招まく者なり
そのゆえ 其しの故ゆえは釈迦しゃかに如來よらい五十年せつきようの説教せつきように総むじて先むき四十二年むの意むを無量義經むりようぎきように定い
めて云いく「險けん逕ぎを行るくに留難る多なんき故ゆえに」と無量義經むりようぎきようの已後いこを定いめて云いく「大
じきとう 直道るを行るくに留難る無なんきが故ゆえに」と仏みずか・自なんら難易しきうれつ・勝劣にとうの二道にとうを分ちちたまえ
り、仏とうより外等覺ま已下末代まつだいの凡師いたに至じるまで自義じぎを以もて難易なんの二道にとうを分ち
此その義むに背げく者どは外道魔王げどうまおうの説したに同しじきか、随しつて四依しえの大師りゆうじゆ・竜樹菩薩ぼさつ

の十住毘婆沙論には法華已前に於て難易の二道を分ち敢て四十余年已後の經に於て難行の義を存せず、其の上若し修し易きを以て易行と定めば法華經の五十展轉の行は称名念仏より行じ易きこと百千万億倍なり、若し亦勝を以て易行と定めば分別功德品に爾前四十余年の八十万億劫の間の檀・戒・忍・進・念仏三昧等先きの五波羅蜜の功德を以て法華經の一念信解の功德に比するに一念信解の功德は念仏三昧等の先きの五波羅蜜に勝る事百千万億倍なり、難易・勝劣と云い行淺功深と云い觀經等の念仏三昧を法華經に比するに難行の中の極難行・劣が中の極劣なり。

其の上惡人・愚人を扶くこと亦教の淺深に依る阿含十二年の戒門には現身に四重五逆の者に得道を許さず、華嚴・方等・般若雙觀經等の諸經は阿含經より教深き故に勸門の時は重罪の者を攝すと雖も猶戒門の日は七逆の者に現身の受戒を許さず、然りと雖も決定性の二乘・無性の闡提に

おい かいかん
於て誠勸共に之を許さず、法華・涅槃等には唯五逆・七逆謗法の者を撰す
るのみに非ず亦 定性 無性をも撰す、就 中末法に於ては常 没の闡提之多
あに かんきよう よんじゅうよねん しきよう おい これ たす べ むしよう じようぼつ
し 豈観 經等の四十余年の諸經に於て之を扶く可けんや無性の常 没・
けつじよう にじよう ほつけ ねはん よんじゅうよねん よ にんし
決定性の二乗は但法華・涅槃等に限れり、四十余年の經に依る人師は彼の
經の機と取る此の人は未だ教相を知らざる故なり。

ただ おうじようようしゅう いちおうじよぶん ほつけ しんこん もつ けんみつ
但し往生要集は一往序分を見る時は法華・真言等を以て顯密の内に入
れて殆ど末代の機に叶わずと書すと雖も文に入つて委細に一部三卷の始末
ほとん まつだい かな しる いえど
を見るに、第十の問答料簡の下に正しく諸行の勝劣を定むる時・觀仏
さんまい はんじゅさんまい じゅうじゅうびばしやろん ほうしやく だいしつ にぜん きようろん
三昧・般舟三昧・十住 毘婆沙論・宝積・大集等の爾前の經論を引いて
いっさい まんぎよう ねんぶつさんまい もつ さんまい おわ さいご
一切の万行に対して念仏三昧を以て王三昧と立て了んぬ、最後に一つの
もんどう にぜん ぜんじよう ねんぶつさんまい もつ ほけきよう いちねんしんげ
問答有り爾前の禪定・念仏三昧を以て法華經の一念信解に対するに百千万
億倍劣ると定む、復問を通ずる時念仏三昧を万行に勝ると云うは爾前の
また ねんぶつさんまい まんぎよう まさ にぜん

とうぶん 当分なりと云云、まさ 当に知るべしえしん 慧心の意は往生要集おうじょうようしゅうを造つて末代の愚機まつだいぐきを調ととのえて法華經ほけきょうに入れんが為なり、例せば仏の四十余年の經を以てもつ 権機を調ととのえ法華經に入れ給たまうが如ごとし。

ゆえ 故に最後に一乗要決を造る其の序ついでに云く「諸宗しよしゅうの権實ごんじつは古來こらいの諍あらそいなとも 俱ともに經論きやうろんに拠よつて互ぜひいに是非しゆうを執しゆうす、余みな・皆ほうべん・方便ほうべんの歳冬十月病中に歎なげいて云くいくぶつぼう 仏法に遇いうと雖もいえどぶつ 意りを了もせずつ 若し終に手むを空なうせばこうかい 後悔何ぞ追おわん、爰ここに經論きやうろんの文義もんぎ・賢哲けんてつの章疏しょうしよ・或は人あるをして尋ねしめ・或はある自ら思みひずかししくやくし全くじしゆう 自宗たしゆう・他宗へんとうの偏党へんとうを捨もつつる時・専らごんちじつち 權智實智しんおうの深奥しんおうを深つぐるに終つにいちじよう 一乗しんじつは真實しんじつの理ほうべん・五乗ごじようは方便ほうべんの說すを得る者なり、既すでに今生こんじようの蒙もうを開くなん 何ぞなん夕死ゆうしの恨うらみを残さんや」已上ひとえ 此の序の意は偏えしんに慧心ほんいの本意あらわを顯あらわすなり、自宗じしゆう他宗へんとうの偏党へんとうを捨ほうもんつるの時じようど 淨土じようどの法門ほうもんを捨ほうもんてざらんや一乗いちじようは真實しんじつの理しんじつと得る時もつ 専らほけきよう 法華經よに依あらるに非ばずや、源信僧都げんしんそうずは永觀二年甲申えいかんの冬きのえさる十一月

おうじょうようしゅう

ひのえうま

いちじょうようけつ

ちゅうげん

往生要集を造り寛弘二年丙午の冬十月の比・

つく

ひのえうま

いちじょうようけつ

ちゅうげん

二十余年なり権を先にし実を後にする宛も仏の如く亦竜樹・天親・天台等

なんじおうじょうようしゅう

たより

あたか

こと

またりゅうじゆ

てんじん

てんだい

の如し、汝往生要集を便りとして師の謗法の失を救わんと欲すれども

あそ

ぎるい

も

つ

い

し

あ

な

ら

ぎるい

敢えて其の義類に似ず義類の同じきを以て一処に聚むとならば何等の義類

ぎるい

も

つ

い

し

あ

な

ら

ぎるい

同なるや、華嚴經の如きは二乘界を隔つるが故に十界互具無し方等・般若

けこんきよう

にじよう

へだ

ゆえ

じ

ゆ

かい

ご

はんにや

の諸經は亦十界互具を許さず觀經等の往生極樂も亦方便の往生なり

またじゆつかいご

ゆる

かんきよう

お

う

じ

よう

く

またほうべん

成仏往生俱に法華經の如き往生に非ず皆別時意趣の往生成仏なり。

ほけきよう

こと

おうじよう

あら

みなべつじいしゆ

おうじよう

じ

よう

ぶつ

其の上源信僧都の意は四威儀に行じ易き故に念仏を以て易行と云い四

げんしんそうず

い

ぎ

やす

ゆえ

ねんぶつ

も

つ

い

威儀に行じ難きが故に法華を以て難行と称せば天台・妙樂の釈を破する

がた

ゆえ

ほ

つ

も

つ

な

ん

ぎよう

人なり所以に妙樂大師の末代の鈍者無智の者等の法華經を行ずるに普賢

ゆえん

み

よう

く

だい

い

し

まつ

だい

菩薩並に多宝・十方の諸仏を見奉るを易行と定めて云く「散心に法華を

たほう

じ

ゆつ

ぽう

し

よ

ふ

ぶつ

を

誦し禪三昧に入らず坐立行・一心に法華の文字を念ぜよ」已上此の釈の意趣

さんまい

ざり

ゆう

ぎ

よう

い

っ

しん

ほ

は末代まつだいの愚者ぐしやを撰せんせんが為ためなり散心さんじんとは定心じょうしんに對たいする語ことばなり誦法華じゆほつけとは

八卷・一卷・一字・一句一偈・題目一心一念だいくいつしん いちねんすいき隨喜じじゅうてんでんの者五十展轉等じじゅうてんでんなり

ざりゅうぎよう

坐立行ざりゅうぎようとは四威儀いぎを嫌きらわざるなり一心いつしんとは定の一心いつしんに非あらず理いつしんの一心いつしんに非あらず

散心さんじんの中の一心いつしんなり念法華文字ほつけもんじとは此この經は諸經しよきようの文字もんじに似にず一字じゆを誦じゆす

と雖いえども八万宝藏はちまんほうぞうの文字もんじを含いみ一切諸佛いっさいしよぶつの功德くどくを納おさむるなり天台大師玄義てんだいだいしげんぎの

八いに云いく「手に卷とを執とらざれども常こに是この經を讀み口に言し聲を無けれども

☆く衆典あまねを誦ずしし仏せつぼう・説法せつぼうせざれども恒つねに梵音ぼんのんを聞き心しゆいに思惟しゆいせざれども

普あまねく法界ほつかいを照てらす」已上こ此この文の意は手に法華經ほけきよう一部八卷とを執とらざれども是この

經を信しんずる人は晝夜十二時じきようの持經者とつきようなり口にに讀經とつきようの聲を出いださざれども

法華經ほけきようを信しんずる者は日じ日じ・時ねんねん時ねんねん・念念いつさいきように一切經いっさいきようを讀よむ者なり。

仏にの入滅にゅうめつは既すでに二千余年にを経たり然しかりと雖いえども法華經ほけきようを信しんずる者の許もとに仏

の音聲おんじようを留とどめて時じ時じ・刻こくこく刻こくこく・念念ねんねんに我死ねんねんせざる由よしを聞きかしむ心いちねんさんぜんに一念三千

- 125 -

を觀ぜざれども・く十方法界を照す者なり此等の徳は偏に法華經を行ずる者に備わるなり、是の故に法華經を信ずる者は設い臨終の時・心に仏を念ぜず口に經を誦せず道場に入らざれども心無くして法界を照し音無くして一切經を誦し巻軸を取らずして法華經八卷を拳る徳之有り是れ豈權教の念仏者の臨終正念を期して・十念の念仏を唱えんと欲する者に・ひやくせんまんばいまさ いぎよう あら ゆえ てんだいだいしもんく 都て諸教に勝るが故に隨喜功德品と云う」妙樂大師の法華經は諸經より淺機を取る而るを人師此の義を弁えざる故に法華經の機を深く取る事を破して云く「恐らくは人謬つて解する者初心の功德の大なることを測らずして功を上位に推り此の初心を蔑る故に今彼の行は淺く功は深きことを示して以て經力を顯す」已上以顯經力の釈の意趣は法華經は觀經等の權經に勝れたるが故に行は淺く功は深し淺機を摂むる故なり、若し慧心の先徳・法華經

を以て念仏より難行と定め愚者頑魯の者を摂せずと云わば恐らくは逆路
がやだつみまねか
伽耶陀の罪を招かざらんや、恐人謬解の内に入らざらんや。

総じて天台・妙楽の三大部の本末の意には華経は諸経に漏れたる愚者
てんだい みようらく たいぶ ほんまつ けきよう しよきよう も ぐしや

・悪人・女人・常没闍提等を摂し給う他師・仏意を覚らざる故に法華経を
あくにん によにん じようほつせんたい せつ たま たし ぶつゐ さと ゆえ ほけきよう
しよきよう ある じじゅう き ある ほんぶ おい べつじいしゆ

諸経に同じ・或は地住の機を取り・或は凡夫に於ても別時意趣の義を
しよきよう 諸経に同じ・或は地住の機を取り・或は凡夫に於ても別時意趣の義を
存す、此等の邪義を破して人天四悪を以て法華経の機と定む、種類相對を
そん これら じやぎ は にんてん もつ ほけきよう しゆるいそうたい

以て過去の善惡を收む人天に生ずる人豈過去の五戒・十善無からんや等と
もつかこ ぜんあく おさ にんてん あにかこ ごかい じゅうぜん

定め了んぬ、若し慧心此の義に背かば豈天台宗を知れる人ならんや、而る
おわ も えしん そむ あにてんだいしゅう

を源空深く此の義に迷うが故に往生要集に於て僻見を起し自ら失ち他
げんくう まよい ゆえ おうじようようしゅう おい びやつけん みずか やま

をも誤る者なり、適宿善有つて実教に入りながら一切衆生を化して
あやまり たまたましゆくぜん じつきよう いっさいしゆじよう

権教に還らしめ 剩え実教を破せしむ豈惡師に非ずや、彼の久遠下種・
こんきよう かえ あまつさえ じつきよう あにあくし あら くおんげしゆ

大通結縁の者の如き五百・三千の塵劫を経るが如きは法華の大教を捨てて
だいとうけちえん こと さんぜん じんこう こと ほつけ

爾前の権小に遷るが故に後に権經を捨てて六道を回りぬ不輕輕毀の衆は千劫阿鼻地獄に墮つ、権師を信じ実經を弘むる者に誹謗を作したるが故なり。

而るに源空我が身唯実經を捨てて権經に入るのみに非ず人を勧めて実經を捨てて権經に入らしめ亦権人をして実經に入らしめず 剩え実經の行者を罵るの罪永劫にも浮び難からんか。

問うて云く十住毘婆沙論は一代の通論なり難易の二道の内に何ぞ法華・真言・涅槃を入れざるや、答えて云く一代の諸大乘經に於て華嚴經の如きは初頓後分有り初頓の華嚴は二乗の成・不成を論ぜず方等部の諸經に一向に二乗・無性闡提の成仏を斥う般若部の諸經も之に同じ総じて四十余年の諸大乘經の意は法華・涅槃・大日經等の如くには二乗・無性の成仏を許さず、此等を以て之を・うるに爾前・法華の相違は水火の如し

滅後の論師・竜樹・天親も亦俱に千部の論師なり所造の論に通別の二論有
り通論に於ても亦二有り四十余年の通論と一代五十年の通論となり、其の
差別を分つに決定性の二乗・無性闡提の成・不成を以て論の権実を定むる
なり、而るに大論は竜樹菩薩の造・羅什三蔵の訳なり此の論にも亦二乗
作仏を許さず之を以て知んぬ法華已前の諸大乘經の意を申べたる論なる
ことを。

問うて云く十住毘婆沙論の何処に二乗作仏を許さざるの文出でたるや、
答えて云く十住毘婆沙論の第五に云く「若し声聞地及び辟支仏地に
墮する是を菩薩の死と名く則ち一切の利を失す若し地獄に墮すとも是の
如き畏れを生ぜじ若し二乗地に墮すれば則ち大怖畏と為す地獄の中に墮す
とも畢竟して仏に至ることを得・若し二乗地に墮すれば畢竟して仏道を
遮す」已上此の文二乗作仏を許さず宛も浄名等の「於仏法中以如敗種」

の文の如し。

問うて云く大論は般若經に依つて二乗作仏を許さず法華經に依つて二乗作仏を許すの文如何、答えて云く大論の一百に云く「問うて云く更に何の法か甚深にして般若に勝れたる者あれば而も般若を以て阿難に属累し余經を以て菩薩に属累するや、答えて云く般若波羅蜜は秘密の法に非ず而るに法華等の諸經は阿羅漢の受決作仏を説く所以に大菩薩能く受けて持用すたと譬えば大藥師の能く毒を以て藥と為すが如し」と、亦九十三に云く「阿羅漢の成仏は論義者の知る所に非ず唯仏のみ能く了し給う」已上此等の文を以て之を思うに論師の権実は宛も仏の権実の如し而るを権經に依る人師みだりに法華等を以て觀經等の権説に同じ法華・涅槃等の義を仮りて浄土三部經の徳と作し決定性の二乗・無性の闡提・常没の往生を許す権実ぞうらんとかまぬか、例せば外典の儒者・内典を賊みて外典を莊るが如し謗法雜亂の失脱れ難し、

の失免れ難きか仏、自ら権実を分ち給う其の詮を探るに決定性の二乗・
無性有情の成・不成是なり、而るに此の義を弁えざる訳者・爾前の経經
を訳する時・二乗の作仏・無性の成仏を許す此の義を知る訳者は爾前の経
を訳する時・二乗の作仏無性の成仏を許さず、之に依つて仏意を覺らざる
人師も亦爾前の経に於て決定性・無性の成仏を明すと見て法華と爾前と
同じき思いを作し・或は爾前の経に於て決定無性を嫌う文を見・此の義を
もつりようぎきよう
以て了義經と為し法華・涅槃を以て不了義經と為す共に仏意を覺らず権実
二經に迷えり、此等の誤りを出さば但源空一人に限るのみに非ず天竺の
論師並に訳者より唐土の人師に至るまで其の義有り、所謂地論師・摂論師
の一代の別時意趣・善導・懷感の法華經の二称南無仏の別時意趣・此等は
皆権実を弁えざるが故に出来する所の誤りなり、論を造る菩薩・經を訳す
る三藏・三昧發得の人師猶以て是くの如し況や末代の凡師に於てをや。

問うて云く汝末学の身として何ぞ論師並に訳者人師を破するや、答えて云く敢えて此の難を致すこと勿れ撰論師並に善導等の釈は権実二教を弁えずして猥りに法華經を以て別時意趣と立つ故に天台・妙樂の釈と水火を作す間・且らく人師の相違を闇いて經論に付て是非を☆うる時・権実の二教は仏説より出でたり天親・竜樹重ねて之を定む、此の義に順ずる人師をば且らく之を仰ぎ此の義に順ぜざる人師をば且らく之を用いず敢て自義を以て是非を定むるに非ず但相違を出す計りなり。

大文の第四に謗法の者を対治すべき証文を出さば、此れに二有り、一には仏法を以て国王・大臣並に四衆に付属することを明し、二には正しく謗法の人・王地に処るをば対治す可き証文を明す、第一に仏法を以て国王・大臣並に四衆に付属することを明さば、仁王經に云く「仏・波斯匿王に告わく、乃至・是の故に諸の国王に付属して比丘・比丘尼・清信男・清信女

に付属せず何を以ての故に王の威力無きが故に、乃至・此の經の三宝をば
諸の国王・四部の弟子に付属す」已上大集經二十八に云く「若し国王有つ
て我が法の滅せんことを見て捨てて擁護せずんば無量世に於て施戒慧を
修すとも悉く皆滅失し其の国に三種の不祥の事を出さん、乃至・命終し
て大地獄に生ぜん」已上

仁王經の文の如くならば

仁王經の文の如くならば仏法を以て先ず国王に付属し次に四衆に及ぼす

王位に居る君・国を治むる臣は仏法を以て先と為し国を治む可きなり、
大集經の文の如くならば王臣等・仏道の為に無量劫の間・頭目等の施を
施し八万の戒行を持ち無量の仏法を学ぶと雖も国に流布する所の法の邪正
を直さざれば国中に大風・旱☆・大雨の三災起りて万民を逃脱せしめ王臣
定めて三惡に墮せん、又雙林最後の涅槃經の第三に云く「今正法を以て諸
王・大臣・宰相・比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷に付属す、乃至・法を護

らざる者をば禿居士と名く」又云く「善男子・正法を護持せん者は五戒を受けず威儀を修せずして応に刀剣・弓箭・鉾槩を持つべし」又云く「五戒を受けざれども正法を護るを為て乃ち大乘と名く正法を護る者は応に刀剣・器械を執持すべし」云云四十余年の内にも梵網等の戒の如くならば國王・大臣の諸人等も一切刀杖・弓箭・矛斧鬪戰の具を畜うることを得ず、若し此を畜うる者は定めて現身に國王の位・比丘・比丘尼の位を失い後生は三惡道の中に墮つ可しと定め了んぬ。

而るに今の世は道俗を択ばず弓箭・刀杖を帶せり梵網經の文の如くならば必ず三惡道に墮せんこと疑無き者なり、涅槃經の文無くんば如何にしてか之を救わん亦涅槃經の先後の文の如くならば弓箭・刀杖を帶して惡法の比丘を治し正法の比丘を守護せん者は先世の四重五逆を滅して必ず無上道を証せんと定め給う。

またこんこうみょうきよう

亦金光明經の第六に云く「若し人有つて其の国土に於て此の經有りと

いんど いま

かつて

るふ

捨離の心を生じ

聴聞せんことを樂わす

亦供養し

雖も未だ嘗て

流布せず

捨離の心を生じ

聴聞せんことを樂わす

亦供養し

尊重し

讚歎せず

四部の衆の持經の人を見て

亦復尊重し

乃至供養すること

能わず

遂に我等及び余の眷属

無量の諸天をして

此の甚深の妙法を聞く

ことを得ざらしめん

甘露の味に背き

有ること

無く

惡趣を増長し

人天を損滅し

生死の河に墜ちて

涅槃の路に乖か

ん世尊

我等四王並に

諸の眷属及び

藥叉等斯くの

如き事を見て

其の国土を

捨てて

擁護の心無からん

但我等のみ是の王を

捨棄するに

非ず

亦無量の国土

を守護する

諸大善神有らん

も皆悉く

捨去せん

既に

捨離し

已り

なば

其の國

當に

種種の災禍有つて

國位を喪失すべし

一切の人衆

皆善心無けん

唯繫縛

殺害瞋諍

のみ有つて

互に相譏諂し

枉げて

辜無きに

及ばん

疫病

流行し

隼星

數數出で

兩日並び

現じ

薄蝕恒無く

黑白の二虹

不祥の相を表わし

星流れ地動き井の内に声を發し暴雨惡風時節に依らず常に飢饉に遭いて
苗実も成らず多く他方の怨賊有つて国内を侵掠し人民諸の苦惱を受け
土地所樂の処有る事無けん」已上。

此の經文を見るに世間の安穩を祈るとも而も国に三災起らば惡法流布す
る故なりと知る可し而るに当世は随分国土の安穩を祈ると雖も去る正嘉
元年には大地・大に動じ同二年に大雨大風苗実を失えり定めて国を喪うの
惡法此の国に有るかと勘うるなり、選択集の・或る段に云く「第一に
讀誦雜行とは上の觀經等の往生淨土の經を除いて已外・大小・顯密の
諸經に於て受持・讀・誦する悉く讀誦雜行と名く」と書き了つて次に書
いて云く「次に二行の得失を判ぜば法華・真言等の雜行は失・淨土の
三部經は得なり」次下に善導和尚の往生禮讚の十即十生・百即百生
・千中無一の文を書き載せて云く「私に云く此の文を見るに弥々雜を捨て

て專を修すべし豈百即百生の專修 正行を捨てて堅く千中無一の雜修
雜行を執せんや行者能く之を思量せよ」已上、此等の文を見るに世間の
道俗豈諸經を信ず可けんや、次下に亦書して法華經等の雜行と念仏の
正行と勝劣難易を定めて云く「一には勝劣の義・二には難易の義なり
初に勝劣の義とは念仏は是れ勝・余行は是れ劣なり次に難易の義とは念仏
は修し易く諸行は修し難し」と、亦次下に法華・真言等の失を定めて云く
「故に知んぬ諸行は機に非ず時を失う念仏往生のみ機に当り時を得たり」
亦次下に法華・真言等の雜行の門を閉じて云く「随他の前には暫らく定散
の門を開くと雖も随自の後には還つて定散の門を閉ず一度開て以後永く閉
じざるは唯・是れ念仏の一門なり」已上最後の述懐に云く「夫れ速に生死
を離れんと欲せば二種の勝法の中に且らく聖道門を闔いて撰んで淨土門
に入れ淨土門に入らんと欲せば正雜二行の中に且らく諸の雜行を抛つて

撰まきんで応しやうぎやうに 正行しやうぎやうに 歸すべし」已上もんでい門弟此の書を伝えて日本にほん六十余州に
充満じゆうまんするが故に門人ゆえもんじん・世間無智せけんむちの者に語かたつて云く「上人しやうにんは智慧第一ちえだいいちの身
と為もつて此の書を造り真実しんじつの義と定め法華ほつけ・真言しんこんの門を閉じて後に開くの文
無く抛なげうつて後に還かえりて取るの文無し」等と立つる間世間の道俗どうぞく一同に頭を傾
け其の義を訪う者には仮字を以て選択せんたくの意を宣べ・或は法然上人ほうねんしやうにんの物語ものがたり
を書しるす間・法華ほつけ・真言しんこんに於て難を付けて・或は去年の曆れき・祖父そふの履くつに譬え
・或は法華經を読むは管絃かんげんより劣ると是かくくの如き惡書あくしよ・國中くにじゅうに充満じゆうまんする
が故に法華ゆえ・真言ほつけ等国に在りと雖も聴聞いえどせんことを樂ねがわわず偶たま行ずる人有
りと雖も尊重いえどを生ぜず一向念佛者いっこうねんぶつ・法華經の結縁けちえんを作すをば往生おうじやうの障さわりと
成ると云う故に捨離ゆえの意を生ず、此の故に諸天しよてん・妙法みやうほうを聞くことを得ず
法味ほうみを嘗めざれば威光勢いこうせいりよくあ力有ること無し四天王並に眷属けんぞく・此の国を捨て
日本国守護の善神捨離ぜんじんしやりし已るが故に、正嘉元年しやうかがんねんに大地大に震い同二年に春

の大雨苗を失い夏の大旱☆に草木を枯し秋の大風に菓実を失い飢渴忽に起
りて万民を逃脱せしむること 金光明經の文の如し豈選択集の失に非ず
や、仏語虚しからざる故に惡法の流布有り既に國に三災起れり而も此の惡義
を対治せずんば仏の所説の三惡を脱がる可けんや、而るに近年より予「我
身命を愛せず但無上道を惜む」の文を瞻る間・雪山常啼の心を起し命を
大乘の流布に替え強言を吐いて云く選択集を信じて後世を願わん人は
無間地獄に墮つ可しと、爾時に法然上人の門弟選択集に於て上に出す所
の惡義を隠し・或は諸行往生を立て・或は選択集に於て法華・真言を
破らざる由を稱し、・或は在俗に於て選択集の邪義を知らしめざる為に
妄語を構えて云く日蓮は念仏を稱うる人は三惡道に墮せんと云つと。
問うて云く法然上人の門弟・諸行往生を立てるに失有りや否や、答え
て云く法然上人の門弟と稱し諸行往生を立てるは逆路伽耶陀の者なり

とうせ またしよぎょうおうじょう
當世も亦諸行往生の義を立つ而も内心には一向に念仏往生の義を存し外
には諸行不謗の由を聞かしむるなり、抑此の義を立つる者は選択集の
ほつけ しんこん おい とが しゃへい かくほう ぐんそく じゃけん あっけん そうにん
法華・真言等に於て失を付け捨閉閣抛・群賊邪見・惡見・邪・雜人・
せんちゅうむいつ ことば
千中無一等の語を見ざるや否や。

第二に正しく謗法人の王地に処るを対治す可き証文を出さば、涅槃經第
三に云く「懈怠にして戒を破し正法を毀る者をば王者・大臣・四部の衆
まさ くじ ぜんなんし こ もろもろこくおうおよ よんぶのしゅう まさ つみあ
應に苦治すべし善男子是の諸の国王及び四部の衆は當に罪有るべきや不や
いな せそん ぜんなんし こ もろもろこくおうおよ よんぶのしゅう なお つみあ
・不なり・世尊・善男子是の諸の国王及び四部の衆は尚、罪有ること無し」
と、又第十二に云く「我往昔を念うに閻浮提に於て大国の王と作り名を仙予
い だいじょうきようてん あいねん けいじゅう そ じゅんぜん そあくしつとおしま あ
と日いき大乘經典を愛念し敬重し其の心純善にして麁惡嫉妬慳・有る
こと無かりき、乃至善男子我爾の時に於て心に大乘を重んず婆羅門の方等
ひほう ひわ かわ そくじ そ みようこん ぜんなんし こ いんねん
を誹謗するを聞き・聞き已つて即時に其の命根を断ちき善男子是の因縁を

もつ
以て是より已來地獄に墮せず」已上。

問うて云く梵網經の文を見るに比丘等の四衆を誹謗するは波羅夷罪なり
しかんげんくうほうほうとがあらあにあびししゅうひほう
而るに源空が謗法の失を顕わすは豈阿鼻の業に非ずや、答えて曰く涅槃經
の文に云く「迦葉菩薩・世尊に言さく如来何が故ぞ彼方に阿鼻地獄に墮す
べしと記するや、善男子・善星比丘は多く眷属有り皆善星は是れ阿羅漢
なり是れ道果を得つと謂えり我・彼が悪邪の心を壊らんと欲するが故に彼
の善星は放逸を以ての故に地獄に墮せりと記す」已上此の文に放逸とは謗法
の名なり源空も亦彼の善星の如く謗法を以ての故に無間に墮すべし所化の
衆此の邪義を知らざるが故に源空を以て一切智人と号し・或は勢至菩薩
・或は善導の化身なりと云う彼が悪邪の心を壊らんが為の故に謗法の根源
を顕わす梵網經の説は謗法の者の外の四衆なり仏誡めて云く「謗法の人を
見て其の失を顕わさざれば仏弟子に非ず」と、故に涅槃經に云く「我涅槃

の後其の方面に随い持戒の比丘有つて威儀具足し正法を護持せば法を壞ぶる者を見て即ち能く駢遣し呵責し徴治せよ当に知るべし是人は福を得ん」と無量にして称計す可からず」亦云く「若し善比丘あつて法を壞る者を見て呵責し駢遣し挙処せずんば当に知るべし是の人は仏法の中の怨なり若し能く駢遣し呵責し挙処せば是我弟子真の声聞なり」已上。

予仏弟子の一分に入らんが為に此の書を作り謗法の失を顕わし世間に流布す願わくば十方の仏陀此の書に於て力を副え大惡法の流布を止め一切衆生の謗法を救わしめたまえ。

大文の第五に善知識並に眞實の法に値い難きことを明さば之に付いて三有り、一には受け難き人身値い難き仏法なることを明し、二には受け難き人身を受け値い難き仏法に値うと雖も惡知識に値うが故に三惡道に墮するを明し、三には正く末代凡夫の爲の善知識を明す。

だいいち

第一に受け難き人身値い難き仏法なることを明さば、涅槃經三十三に云く

「爾の時に世尊・地の少土を取つて之を爪上に置き迦葉に告げて言く、

是の土多きや十方世界の地土多きや、迦葉菩薩・仏に白して言く、世尊・

爪上の土は十方所有の土に比べず善男子・人有り身を捨てて還つて人身

を得・三悪の身を捨てて人身を受くることを得・諸根完く具して中国に生

れ正信を具足して能く道を修習し道を修習し已つて能く正道を修し

正道を修し已つて能く解脱を得・解脱を得已つて能く涅槃に入るは爪上

の土の如く、人身を捨て已つて三悪の身を得・三悪の身を捨てて三悪の身

を得・諸根具せずして辺地に生じ邪倒の信を信じ邪道を修習し解脱常樂

の涅槃を得ざるは十方界の所有の地土の如し」經文此の文は多く法門を集

めて一具と為せり人身を捨てて還つて人身を受くるは爪上の土の如し人身

を捨てて三惡道に墮るは十方の土の如し三惡の身を捨てて人身を受くるは

爪上の土の如く三惡の身を捨てて三惡の身を得るは十方の土の如し人身
を受くるは十方の土の如く人身を受けて六根欠けざるは爪上の土の如し
人身を受けて六根を欠けざれども辺地に生ずるは十方の土の如く中国に
生ずるは爪上の土の如し中国に生ずるは十方の土の如く仏法に値うは
爪上の土の如し、又云く「一闡提と作らず善根を断ぜず是の如き等の涅槃
の經典を信ずるは爪上の土の如し乃至・一闡提と作りて諸の善根を断じ
是の經を信ぜざる者は十方界所有の地土の如し」經文此の文の如くんば法華
・涅槃を信ぜずして一闡提と作るは十方の土の如く法華・涅槃を信ずるは
爪上の土の如し・此の經文を見て弥勒涙押え難し今・日本國の諸人を
見聞するに多分は權教を行ず設けし身口は實教を行ずと雖も心には亦權教
を存ず。

ゆえ てんだいだいしまかしかん
故に天台大師摩訶止觀の五に云く「其の癡鈍なる者は毒氣深く入つて本心

を失う故に既に其れ信ぜざれば則ち手に入らず、乃至・大罪聚の人なり、
乃至・設い世を厭う者も下劣の乗を翫び枝葉に攀付し狗・作務に狎れ
みこう うやも たいしゃく な がりやく みてあそ しょう はんぷ いぬ さむ な
☆猴を敬うて帝釈と為し瓦礫を崇んで是れ明珠なりとす此黒闇の人豈道
を論ず可けんや」已上、源空並に所化の衆深く三毒の酒に酔うて大通結縁の
ほんしん うしな ほつけ ねはん おい ふしん な いっせんだい かんきよう げれつ
本心を失う法華・涅槃に於て不信の思を作し一闡提と作り觀經等の下劣の
よつて ほうべんしょうみよう がりやく もてあそ ほうねんぼう みこう うやも ちえだいいち たいしやく
乗に依て方便称名の瓦礫を翫び法然房の☆猴を敬うて智慧第一の帝釈
と思ひ法華・涅槃の如意珠を捨てて如来の聖教を徧するは権実二教を
わきま
弁えざるが故なり。

ゆえ ぐけつ だいいち いわ えんどん すうちよう まこときんだいだいじよう
故に弘決の第一に云く「此の円頓を聞いて崇重せざる者は良に近代大乘
なら せうらん よ だいじよう おい ごんじつ わきま せうらん
を習う者の雜濫に由るが故なり」大乘に於て権実二經を弁えざるを雜濫と
云うなり、故に末代に於て法華經を信ずる者は爪上の土の如く法華經を信
ぜずして權教に墮落する者は十方の微塵の如し、故に妙樂歎いて云く
ごんきよう だらく じゅっぽう みじん ごと ゆえ みようらく なげ いわ

「そうまつ像末は情うす澆しんじんく信心寡薄にして円頓えんどんの教・法蔵ほうぞうに溢あふれれ函しぼらに満れども暫しばらくも
しゆい すなわ便めいち瞑いた目いたに至いたる徒いたに生いたじ徒いたに死いたす一なんに何いたぞ痛いたしきや」已上此の釈は
ひとえ みょうらくくだいし ごんしゃ
偏みらいに妙樂大師・権者たるの間・遠く日本国の当代を鑒かんみて記しるし置く所の
未来記なり。

問いわうて云ほうく法然上人の門弟の内にも一切経蔵を安置あんちし法華經を行ほけきずる
者なん有り何ぞ皆みな謗法の者と称なせんや、答いえて云いく一切経を開ほけきき見て法華經を
読み難行道なんぎやうどうの由よしを称しょうし選せん択集ちやくしゅうの悪義あくぎを扶たすけんが為きなり經論きやうろんを開きくに付
て弥い謗法を増いふこと例ぜんせば善星ぜんしやうの十二部經・提婆達多だいばだつたが六万蔵ごくとの如ごとし
智ち者の由よしを称しょうするは自身じしんを重しげくし惡法あくほうを扶たすけんが為なり。

第二に受け難がたき人身じんしんを受け値あい難がたき仏法ぶつぽうに値あうと雖いえども惡知識あくちしきに値あうが
故ゆえに三惡道さんあくどうに墮だすることを明あかさば仏藏經ぶつぞうきやうに云いく「大莊嚴だいそうごん仏ぶつの滅後めつごに五比丘びく
あり一人は正道せいどうを知たつて多億たおくの人を度じゃけんし四人は邪見じゃけんに住みす此四人命終みやうじゆうの

後阿鼻地獄に墮つ仰ぎ伏し伏に臥し左脇に臥し右脇に臥すこと各九百万億
歳なり、乃至・若し在家・出家の此の人に親近せしもの並に諸の檀越凡そ
六百四万億の人あり此の四師と俱に生じ俱に死して大地獄に在つて諸の
燒煮を受く大劫若し尽くれば是の四惡人及び六百四万億の人・此の阿鼻
地獄より他方の大地獄の中に転生す」已上涅槃經三十三に云く「爾時に城
中に一の尼乾有り名を苦得と曰う、乃至・善星・苦得に問う答えて曰く我
食吐鬼の身を得・善星諦に聴け、乃至・爾の時に善星即ち我所に還つて
是の如き言を作す世尊・苦得尼乾は命終の後に三十三天に生ぜんと、乃至
・爾時に如来即ち迦葉と善星の所に往き給う善星比丘遙に我来るを見・
見已つて即ち惡邪の心を生ず惡心を以ての故に生身に陷ち入つて阿鼻地獄
に墮す」已上善星比丘は仏の菩薩たりし時の子なり仏に随い奉り出家して
十二部經を受け欲界の煩惱を壊り四禪定を獲得せり然りと雖も惡知識たる

くとかげどう
苦得外道に値い仏法の正義を信ぜざる

よ
に依つて出家の受戒・十二部經の功德を失い生身に阿鼻地獄に墮す苦岸等

びく
の四比丘に親近せし六百四万億の人は四師と俱に十方の大阿鼻地獄を経る

なり、今の世の道俗は選択集を貴ぶが故に源空の影像を拜して一切經

なんぎよう
難行の邪義を読む例せば尼乾の所化の弟子が尼乾の遺骨を礼して三惡道に

だ
墮せしが如く願わくば今の世の道俗選択集の邪正を知つて後に供養恭敬

し
を致せ爾らずんば定めて後悔有らん。

ゆえ
故に涅槃經に云く「菩薩摩訶薩惡象等に於て心に怖畏すること無く惡知識

おい
に於ては怖畏の心を生ぜよ何を以ての故に是の惡象等は唯能く身を壞りて

やぶ
心を壞る能わず惡知識は二俱に壞る故に、是の惡象等は唯一身を壞り惡知識

むりよう
は無量の善身無量の善心を壞る是の惡象等は唯能く不淨の臭き身を破壊す

あくちしき
惡知識は能く淨身及び淨心を壞る是の惡象等は能く肉身を壞り惡知識

は法身を壞る惡象の為に殺されては三趣に至らず惡友の為に殺されては必ず三趣に至る是の惡象等は但身の怨と為り惡知識は善法の怨と為らん是の故に菩薩常に當に諸の惡知識を遠離すべし」已上。

請い願わくば今の世の道俗設い此の書を邪義と思うと雖も且らく此の念を抛つて十住毘婆沙論を開き其の難行の内に法華經の入不入を☆がえんちやくしゅう じゅんししし 選択集の準之思之の四字を案じて後に是非を致せ謬つて惡知識を信じ邪法を習い此の生を空うすること莫れ。

第三に正しく末代の凡夫の為の善知識を明さば、問うて云く善財童子は五十余の善知識に値いき其の中に普賢・文殊・觀音・弥勒等有り常啼・班足・妙莊嚴・阿闍世等は曇無竭・普明・耆婆・二子夫人に値い奉りて生死を離れたり此等は皆大聖なり仏・世を去つて後是の如きの師を得ること難しとなす滅後に於て亦竜樹・天親も去りぬ南岳・天台にも値わず如何

が生死しょうじを離る可べきや、答えて云く末代まつだいに於て真実しんじつの善知識ぜんちしき有り所謂いわゆる法華ほつけ・
涅槃ねはん是なり、問うて云く人いを以て善知識ぜんちしきと為すは常ならの習ないなり法もを以て知識ちしき
と為すに証な有りや、答えて云く人いを以て知識ちしきと為すは常ならの習ないなり然しかりと
雖も末代まつだいに於て真の知識ちしき無ければ法もを以て知識ちしきと為すに多くの証な有り、
摩訶止觀まかしかんに云く「・或は知識ある ちしきに従い・或は經卷きょうかんに従い上に説く所の一実いちじつの
菩提ぼだいを聞く」已上此の文の意は經卷きょうかんを以て善知識ぜんちしきと為す、法華經ほけきように云く
「若し法華經ほけきようを閻浮提えんぶだいに行じ受持じゅじすること有らん者は心こころに此の念ねんを作すべ
し皆是れ普賢ふげん威神いしんの力なり」已上此の文の意は末代まつだいの凡夫ぼんぷ法華經ほけきようを信ずる
は普賢ふげんの善知識ぜんちしきの力なり、又云く「若し是この法華經ほけきようを受持じゅじし読誦どくじゆし正憶念おくとん
し修習しゅうしゆうし書写しよしゃすること有らん者は当に知るべし是この人は即ち釈迦牟尼すなわ しゃかむに仏
を見るなり仏、口より此の經典きやうてんを聞くが如し当に知るべし是この人は
釈迦牟尼しゃかむに仏を供養くやうするなり」已上此の文を見るに法華經ほけきようは即ち釈迦牟尼すなわ しゃかむに仏な

り法華經を信ぜざる人の前には釈迦牟尼仏入滅を取り此の經を信ずる者の前には滅後為りと雖も仏の在世なり。

又云く「若し我成仏して滅度の後十方の国土に於て法華經を説く処有

らば我が塔廟是の經を聴かんが為の故に其の前に涌現し為に証明を為さ

ん」已上此の文の意は我等・法華の名号を唱えて多宝如来本願の故に必ず

来りたまう、又云く「諸仏の十方世界に在つて法を説くを尽く還し一処に

集めたまう」已上釈迦・多宝・十方の諸仏・普賢菩薩等は我等が善知識な

り若し此の義に依らば我等は亦宿善・善財・常啼・班足等にも勝れたり

彼は権經の知識に値い我等は実經の知識に値えばなり彼は権經の菩薩に

値い我等は実經の仏・菩薩に値い奉ればなり。

涅槃經に云く「法に依つて人に依らざれ智に依つて識に依らざれ」已上

依法と云うは法華・涅槃の常住の法なり不依人とは法華・涅槃に依らざ

る人なりたとい設いいたいい仏・菩薩ぼさつな為なりと雖いえども法華・涅槃ねはんに依よらざる仏・菩薩ぼさつは善知識ぜんちしきに非あらず況いわんや法華・涅槃ねはんに依よらざる論師ろんし・訳者やくしや・人師にんしに於おいてをや、依智えちとは仏よに依ふえしきる不依識とうかくいとは等覺か已下かなり、今の世の世間の道俗せけん どうぞく・源空げんくうの謗法ほうほうの失とがを隠ためさんが為てんがに徳を天下あに挙あげて権化ごんげなりと称しょうす依用えようすべからず、外道げどうは五通よを得て能よく山を傾つくけ海を竭つくすとも神通じんつう無あき阿含經あこんきようの凡夫ほんぶに及およばず羅漢らかんを得ろくつう・六通げんを現にじようずる二乘けこんは華嚴・方等ほうとう・般若ほんにやの凡夫ほんぶに及およばず華嚴・方等ほうとう・般若ほんにやの等覺とうかくの菩薩ぼさつも法華經ほけきようの名字みょうじ・觀行かんぎようの凡夫ほんぶに及およばず設たといい神通智慧じんつう ちえ有えりと雖いえども權教ごんきようの善知識ぜんちしきをば用ぶつしよううべからず、我等われら常没じようぼつの一闡提いつせんたいの凡夫ほんぶ法華經ほけきようを信ほぜんと欲ほするは仏性ぶつしようを顯あらわさんが為せんびようの先表なりなり。

故ゆえに妙樂大師みょうらくだいしの云いく「内薰ないくんに非あらざるよりは何なんぞ能よく悟さとを生さとりぜん故ゆえに知ほんぬ悟さとを生さとりずる力は真如しんによに在ゆえり故みようくんに冥薰もつを以げて外護ごと為なすなり」已上ほけきよう法華經ほけきようより外ほかの四十余年よんじゆうよねんの諸經しよきようには十界互具じゅつかいこく無じゅつかいこくし十界互具じゅつかいこくを説ないしんかざれば内心ないしんの

ぶっかい 仏界を知らず内心の仏界を知らざれば外の諸仏も顕われず故に四十余年の
ごんぎよう 権行の者は仏を見ず設い仏を見ると雖も他仏を見るなり、二乗は自仏を見
ざるが故に成仏無し爾前の菩薩も亦自身の十界互具を見ざれば二乗界の
じようぶつ 成仏を見ず故に衆生無辺誓願度の願も満足せず故に菩薩も仏を見ず凡夫
またじゅっかいごく も亦十界互具を知らざるが故に自身の仏界も顕われず、故に阿弥陀如来の
らいごう 来迎も無く諸仏如来の加護も無し譬えば盲人の自身の影を見ざるが如し。
ほけきよう 今法華經に至つて九界の仏界を開くが故に四十余年の菩薩・二乗・六凡
はじめて自身の仏界を見る此の時・此の人の前に始めて仏・菩薩・二乗立ち
給う此の時に二乗・菩薩始めて成仏し凡夫も始めて往生す、此の故に
ざいせめつこ 在世滅後の一切衆生の誠の善知識は法華經是なり、常途の天台宗の学者
にぜん 是爾前に於て当分の得道を許せども自義に於ては猶当分の得道を許さず
しか 然りと雖も此の書に於ては其の義を尽くさず略して之を記すれば追つて

これしる
之を記すべし。

だいぶん 第六に法華・涅槃に依る行者の用心を明さば、一代教門の勝劣

せんじん 浅深・難易等に於ては先の段に既に之を出す、此の一段に於ては一向に

ごしよう おも 後世を念う末代常没の五逆謗法一闡提等の愚人の為に之を注す、略して三

有り、一には在家の諸人正法を護持するを以て生死を離れ惡法を持つに

よ 依つて三惡道に墮す可きことを明し、二には但法華經の名字計りを唱えて

さんあくどう 三惡道を離る可きことを明し、三には涅槃經は法華經の爲の流通と成るこ

とを明す。

だいいち 第一に在家の諸人正法を護持するを以て生死を離れ惡法を持つに依つて

さんあくどう 三惡道に墮す可きことを明さば、涅槃經第三に云く「仏・迦葉に告わく

よ 能く正法を護持するの因縁を以ての故に是の金剛身を成就することを得

たり」と亦云く「時に國王有り名を有徳と曰う、乃至・法を護らんが爲の

ゆえ 故に、乃至・是の破戒の諸の惡比丘と極めて共に戰鬪す、乃至・王是の時
に於て法を聞くことを得已つて心大に歡喜し尋で即ち命終して阿☆仏の
国に生ず」已上此の文の如くならば在家の諸人別の智行無しと雖も謗法の者
を対治する功德に依つて生死を離る可きなり。

問うて云く在家の諸人、仏法を護持す可き様如何、答えて云く涅槃經に
云く「若し衆生有つて財物に貪著せば我当に財を施し然して後に是の
大涅槃經を以て之を勧め讀ましむべし、乃至・先に愛語を以て其の意に
随い然る後に漸く当に是の大乗大涅槃經を以て之を勧め讀ましむべし
もし凡庶の者には當に威勢を以て之に逼りて讀ましむべし若し・慢の者
は我當に其れが為に僕使と作り其の意に随順し其れをして歡喜せしめ然し
て後に復當に大涅槃經を以て之を教導すべし、若し大乗經を誹謗する者有
らば當に勢力を以て之を摧きて伏せしめ既に摧伏し已つて然して後に勧め

て大涅槃ねはんを讀ましむべし、若し大乘だいじょう經を愛樂あいらくする者有らば我、躬みづから當まさに往ゆいて恭敬きやうけいし供養くようし尊重そんちようし讚歎さんたんすべし」已上。

問いわうて云く今の世の道俗偏どうそくひとえに選せん集ちやくしゅうに執しゅうして法華・涅槃ねはんに於おいては自身じしん不相ふそう応おうの念なを作なすの間・護惜ごしやく建立こんりゅうの心こころ無なく偶たま邪義まじやぎの由よしを稱しょうする人有あれれば念ねん仏誹謗ふつひぼうの者と稱しょうして惡名あくみょうを天下てんがに雨ふらす斯これ等いは如何いかん、答いえて云く自答じとうを存そんす可べきに非あらず仏、自みづから此しの事ことを記しして云く、仁王經にんのうきやうに云く「大王我だいおうが滅めつ度どの後・未來世みらいせの中の四部でしの弟子もろ諸しよの小国しょうこくの王・太子たいし・王子みこ乃すなわち是これ三宝さんぼうを住持じゅうじして護まもる者うたたに三宝さんぼうを滅破めつはせんこと師子ししの身し中の虫みづかの自みづから師子ししを食くうが如ごとくならん外道げどうには非あらざるなり多く我ぶつぼう佛法ふつぽうを壞やぶり大罪過たいざいを得えん正法しょうほう衰薄しょうおとろえし民しやうぎに正行しょうぎやう無なく漸ようく惡なを為なすを以もて其もの寿日としに減へじて百歲ひゃくさいに至いたらん人、佛法ぶつぽうを壞やぶりて復孝子またこうし無なく六親不和ろくしんふわにして天神てんじんも祐たすけず疾疫惡鬼しつえきあくき日に來りて侵害しんがいし災怪首尾さいげしゅびし連禍縱橫れんかじゅうおうして地獄・餓鬼・畜生がきちしやうに入らん」

またつぎしも

亦次下に云く「大王未来世の中の諸の小国の王四部の弟子自ら此の罪を作

らん破国の因縁、乃至・諸の悪比丘多く名利を求め国王・太子・王子の前

に於て自ら破仏法の因縁・破国の因縁を説かん其の王別えずして此の語を

信聴し、乃至・其の時に當つて正法將に滅せんこと久しからず」已上。

余・選択集を見るに敢て此の文の未来記に違わず、選択集は法華・真言

等の正法を定めて雑行・難行と云い末代の我等に於ては時機相応せず

之を行ずる者は千が中に一も無く仏、還つて法華等を説くと雖も法華・真言

の諸行の門を閉じて念仏の一門を開く末代に於て之を行ずる者を群賊等と

定め当世の一切の道俗に此の書を信ぜしめ此の義を以て如来の金言と思え

り、此の故に世間の道俗に仏法建立の意無く法華・真言の正法の法水忽ち

に竭き天人減少して三惡日に増長する偏に選択集の惡法に催されて起る

所の邪見なり、此の經文を伝記して「我滅度後」と云えるは正法の末八

十年じゅうねん像法ぞうぼうの末まつ八百年はっぴゃくねん末法まつぼうの末まつ八千年はっせんねんなり 選択集せんちやくしゅう の出る時でるときは像法ぞうぼうの末まつ。

末法まつぼうの始はじなれば八百年はっぴゃくねんの内うちなり 仁王經にんのうきやうの記しるする所ところの時節じせつに当あたり、諸もろの小こ国こく王おうの王わうとは日本国にほんこくの王わうなり 中下品ちゆうげほんの善ぜんは粟散王そくさん是これなり 「如師子身中虫しししんしんちゆうちゆう」

とは仏弟子ぶつでしの源空げんくう是これなり 諸惡比丘しよあくびくとは所化しよけの衆しゆ是これなり 「説破はふつぽう仏法ぶつぽう因縁いんねん・

破国はこく因縁いんねん」とは上あぐに挙あぐる所ところの 選択集せんちやくしゅうの語ことば是これなり 「其王しんちやう不別ふべつ信聴しんちやう此語このことば」

とは今の世このよの道俗どうぞく邪義じやぎを弁わきまえずして猥みだりりに之これを信しんずるなり。

請こい願がねんわくば道俗どうぞく法の邪正じやせいを分別ぶんべつして其その後しやうほう正法せいほうに就おひて後生ごしやうを願ねがえ今度このたび

人身じんしんを失うしない三惡道さんあくどうに墮だして後こうかいに後悔こうかいすとも何なんぞ及およばん。

第二だいふくに但ただ法華經ほけきやうの題目だいもく計けいりを唱となえて三惡道さんあくどうを離はなる可べきことを明あかさば、

法華經ほけきやうの第五だいごに云いく「文殊師利是もんじゆしりこの法華經ほけきやうは無量むりやうの国くに中じゆうに於おいて乃至ないし名字みょうじを

も聞きくことを得うべからず」第八だいぱちに云いく「汝等なんじら但ただ能よく法華名ほつけを受持じゆじする者を

擁護おうえんする福量ふくりやうる可べからず」提婆品だいばに云いく「妙法華經みやうほけきやうの提婆品だいばを聞きいて淨心じやうしん

擁護おうえんする福量ふくりやうる可べからず」提婆品だいばに云いく「妙法華經みやうほけきやうの提婆品だいばを聞きいて淨心じやうしん

に信敬して疑惑を生ぜざらん者は地獄・餓鬼・畜生に堕ちず」大般涅槃經
みょうじくどく
名字功德品に云く「若し善男子・善女人有つて是の經の名を聞いて惡趣に
生ずと云わば是の処有ること無けん」涅槃經は法華經の流通たるが故に引け
るなり。

問うて云く但法華の題目を聞くと雖も解心無くば如何にして三惡趣を
まぬか
脱れんや、答えて云く法華經流布の国に生れて此の經の題名を聞き信を生
ずるは宿善の深厚なるに依れり設い今生は惡人無智なりと雖も必ず過去
しゅくぜん
の宿善有るが故に此の經の名を聞いて信を致す者なるが故に惡道に墮せ
ず。

問うて云く過去の宿善とは如何、答えて云く法華經の第二に云く「若し
此の經法を信受すること有らん者は是の人は已に會て過去の仏を見たてま
きようけい
つり恭敬し供養し亦此の法を聞けるなり」法師品に云く「又如來滅度の後
また
ほうしほん
い

も
若し人有つて妙法華經の乃至・一偈・一句を聞いて一念も隨喜せん者は、
ないし
乃至・当に知るべし是の諸人等已に會て十萬億の仏を供養せしなり」流通
ねはんきよう
たる涅槃經に云く「若し衆生有つて毘連河沙等の諸仏に於て菩提心を發し
すなわよ
乃ち能く是の惡世に於て是の如き經典を受持して誹謗を生ぜず善男子若し
能く一恒沙等の諸仏・世尊に於て菩提心を發すこと有つて然る後に乃ち
よく
能く惡世の中に於て是の法を謗せず是の典を愛敬せん」經文。
これら
此等の文の如くんば設い先に解心無くとも此の法華經を聞いて謗ぜざる
だいぜん
は大善の所生なり、夫れ三惡の生を受くること大地微塵より多く人間の生
そうじよう
を受くるは爪上の土より少し、乃至四十余年の諸經に値うことは大地微塵
ほつけ
よりも多く法華・涅槃に値うことは爪上の土より少し上に挙ぐる所の
ねはんきよう
涅槃經の三十三の文を見るに設い一字・一句なりと雖も此の經を信ずる者
しゆくえん
は宿縁多幸なり。

問うて云くいわ設たい法華經ほけきようを信いずと雖いえども惡緣あくえんに隨したがわば何なんぞ三惡道さんあくどうに墮だせざらんや、答えて云くいわ解げ心しん無なき者もの權教ごんきやうの惡知識あくちしきに遇あつて實教じつきやうを退あくせば惡師あくしを信とずる失よに依よつて必かならずず三惡道さんあくどうに墮だす可べきなり、彼かの不輕ふぎやう・輕毀きやうきの衆しゆは權人ごんじんなり大通結緣だいつうけちえんの者ものの三千塵点さんぜんじんてんを經へしは法華經ほけきようを退あくして權教ごんきやうに遷うつりしが故ゆゑなり、法華經ほけきようを信よずる輩やからは法華經ほけきようの信いを捨すてて權人ごんじんに隨したがわんより外せけんは世間あきこの惡業あくごうに於おいては法華ほけの功德くどくに及およばざる故ゆゑに三惡道さんあくどうに墮おつ可べからざるなり。

問うて云くいわ日本にほん國こくは法華ほけ・涅槃ねはん有緣うゑんの地ちなりや否いなや、答えて云くいわ法華經ほけきよう第八はちに云くいわ「如來にょらいの滅後めつごに於おいて閻浮提えんぶだいの内に廣ひろく流布るふせしめ斷絶だんぜつせざらしむ」七しちの卷くわんに云くいわ「廣宣流布こうせんるふして閻浮提えんぶだいに於おいて斷絶だんぜつせしむること無なけん」涅槃經ねはんきやう第九くに云くいわ「此だいじの大乗經典だいじやうきやうてんだい涅槃ねはん經きやうも亦復またまた是この如ごとし南方なんぽうの諸もろもろの菩薩ぼさつの爲もつての故ゆゑに當まさに廣ひろく流布るふすべし」經文きやうもん三千世界さんぜんせかい廣ひろしと雖いえども仏ぶつ、自みづから法華ほけ・涅槃ねはんを以もつて南方流布なんぽうるふの處ところと定さだむ、南方なんぽうの諸國しよこくの中に於おいては日本にほん國こくは殊ことに

ほけきよう
法華經の流布す可き 処なり。

問うて云く其の証如何、答えて云く肇公の法華翻經の後記に云く羅什三蔵・須利耶蘇摩三蔵に値い奉りて法華經を授かる時の語に云く「仏日西山に隠れ遺耀東北を照す茲の典東北の諸國に有縁なり汝慎んで伝弘せよ」上東北とは日本なり西南の天竺より東北の日本を指すなり、故に慧心いちじょうようけつの「一乗要決に云く」日本一州円機純一なり朝野遠近同じく一乗に歸ししそせんことごとじょうぶつ縑素貴賤悉く成仏を期す」已上願わくば日本國の道俗選択集の久習を捨ほつけて法華・涅槃の現文に依り肇公慧心の日本記を待みて法華修行の安心くわだを企てよ。

問うて云く法華經修行の者何の浄土を期す可きや、答えて云く法華經二十八品の肝心たる寿量品に云く「我常ここに此の娑婆世界に在り」亦云く「我常ここに此処に住し」亦云く「我が此土は安穩」文此の文の如くんば本地久成

の円仏えんぶつは此この世界せかいに在あり此この土つちを捨てて何いずれの土つちを願ねがう可べきや、故ゆえに法華經ほけきやう
修行しゆぎやうの者ものの所住しよじゆうの処ところを浄土じやうどと思おもう可べし何なんぞ煩わづらいしく他た処しよを求もとめんや、
ゆえ じんりきほん いわ もし きやうかんしよじゆう ところ もし 若もし 園中おんちゆうに於おても若もし 林中りんちゆうに
故ゆえに神力品じんりきほんに云いく 若もし 經卷きやうかん 所住しよじゆうの処ところ 若もし 園中おんちゆうに於おても若もし 林中りんちゆうに
於おても若もし 樹下じゆげに於おても若もし 僧坊そうぼうに於おても若もし 白衣舍びやくえに於おても若もし 殿堂でんどうに
あ もし せんごくこや ないし まさ 在あつても若もし 山谷曠野さんくくやうに於おても 乃至な 當まさに知しるべし是この処ところは即すなわち是どうじやう道場
なり」涅槃經ねはんぎやうに云いく 善男子ぜんなんし 是この大涅槃微妙ねはんみみやうの經典きやうてん 流布きやうてんせらるる処ところは當まさに
知しるべし其その地すなわは即すなわち是これ金剛こんぐわうなり此この中の諸人しよにんも亦また金剛こんぐわうの如ごとし 已上ほつけ法華
・涅槃ねはんを信しんずる 行者ぎやうじやは余よ処そに求もとむ可べきに非あらず此この經きやうを信しんずる人しよびいの所在しよびいの
処ところは即すなわち浄土じやうどなり。

問いうて云いく華嚴けこん・方等ほうとう・般若はんんにや・阿含あこん・觀經かんきやう等の諸經しよきやうを見るとそつに兜率とそつ・
西方さいほう・十方じゆつぱうの浄土じやうどを勸すすむ其その上ほけきやう・法華經ほけきやうの文ぶんを見るまたとそつに亦また兜率とそつ・西方さいほう・
じゆつぱう じやうど すす なん これら たがい がりやくきやうごく えど すす
十方じやうどの浄土じやうどを勸すすむ何なんぞ此こ等の文ぶんに違たがひて但たが此この瓦礫荊棘かりやくきやうごくの穢土えどを勸すすむ

や、答えて云く爾前の浄土は久遠実成の釈迦如来の所現の浄土にして実に

は皆穢土なり、法華経は亦方便寿量の二品なり寿量品に至つて実の浄土

を定むる時・此の土は即ち浄土と定めんぬ、但し兜率・安養・十方の難

に至つては爾前の名目を改めずして此の土に於て兜率安養等の名を付く、

例せば此の経に三乗の名有りと雖も三乗有らざるが如し「不須更指觀經

等也」の釈の意是なり、法華経に結縁無き衆生の当世西方浄土を願うは

瓦礫の土を樂う者なり、法華経を信ぜ

ざる衆生は誠に分添の浄土無き者なり。

第三に涅槃経は法華経流通の為に之を説き給うことを明さば、問うて

云く光宅の法雲法師並に道場の慧觀等の碩徳は法華経を以て第四時の経と

定め無常の熟蘇味と立つ、天台智者大師は法華・涅槃同味と立つと雖も亦

拾の義を存す二師共に権化なり互に德行を具せり何を正として我等の

まい
迷心を晴らす可きや、答えて曰く設い論師訳者為りと雖も仏教に違して
こんじつ
権実二教を判ぜずんば且らく疑を加う可し何に況や唐土の人師たる天台
なんかく こうたく えいかん ちこん かじよう ぜんどう
・南岳・光宅・慧観・智儼・嘉祥・善導等の釈に於てをや、設い末代の
がくしゃな いえど えほう ふえ ほんきよう ほんろん たが
学者為りと雖も依法不依人の義を存し本経・本論に違わずんば信用を加う
可し。

問うて云く涅槃經の第十四卷を開きたるに五十年の諸大乘經を挙て
いわ ねはんぎよう
ぜんしみ たと ねはんぎよう もっ だいごみ たと しやだいじようきよう ねはんぎよう
前四味に譬え涅槃經を以て醍醐味に譬う諸大乘經は涅槃經より劣ること
ひやくせんまんばい おわ そ かしようどうじ りようげ いわ こんにち
百千万倍なりと定め了んぬ、其の上迦葉童子の領解に云く「我今日より始
せいけん
て正見を得たり此よりの前は我等悉く邪見の人と名く」と此の文の意は
ねはんぎよう いぜん ほっけ いったい しゅうてん みなじやけん
涅槃經已前の法華等の一切の衆典を皆邪見と云うなり、当に知るべし
ほけきよう じゃけん
法華經は邪見の經にして未だ正見の仏性を明らめず、故に天親菩薩の涅槃
しよきよう ねはん しようれつ
論に諸經と涅槃と勝劣を定むる時・法華經を以て般若經に同じて同じく

第四時に撰せんしたり豈あに正見せいけんの涅槃經ねはんぎょうを以て邪見ぜけんの法華經ほけきょうの流通りつうと為なんや如何いかん、
答こたへて云いく法華經ほけきょうの現文げんぶんを見るに仏の本懷ほんかい残のこすこと無し、方便品ほうべんに云いく「今
まさこしく是そのときれ其時じきなり」壽量品じゆりやうほんに云いく「毎みづからに自ら是この念なを作なす何を以てか
正ただしくは其時むじやうどうなり」衆生しゆじやうをして無上道むじやうどうに入いることを得す・速すみかに仏身ぶつしんを成就じやうじゆすることを得えせし
めん」と神力品じんりきほんに云いく「要もつを以て之これを言いえば如來にやらいの一切いっさいの所有しやうの法ほふ、乃至ないし
・皆みな此こゝの經きやうに於おて宣示顯說せんじけんせつす」已上こゝ此等げんぶんの現文げんぶんは釈迦如來しやくかにやらいの内証ないしやうは皆みな此こゝの
經きやうに尽つくし給たまう其の上そ・多寶並たほうに十方じゆつぽうの諸佛しよぶつ來集らいつの庭ぢやうに於おて釈迦如來しやくかにやらいの
已今當いこんとうの語ことばを証ほけきやうし法華經ほけきやうに如ごとく經無おしと定おめ了あんぬ、而しかに多寶諸佛たほうしよぶつ・
本土ほんどに還かえるの後に但しか釈迦一佛しやくかいちぶつのみ異變いへんを存かえじて還かえつて涅槃經ねはんぎやうを説いいて
法華經ほけきやうを卑いやまば誰人だれか之これを信しんぜん、深ふかく此この義ぎを存ぞんぜよ、隨したがつて涅槃經ねはんぎやうの
第九かいじうを見るに法華經ほけきやうを流通りつうして説いいて云いく「是この經きやう・世よに出いること彼の菓實かじつ
の一切いっさいを利益りやくし安樂あんらくする所多おほきが如ごとく能よく衆生しゆじやうをして仏性ぶつじやうを見みわさしむ

法華ほっけの中の八千の声聞しょうもんの記き☆を授かるを得て大果実だいかじつを成ずるが如くごと
秋收しゅうしゅう冬蔵とうそうして更に所作しよさ無きが如しごとと。

此の文の如くんば法華經邪見ほけきようじゃけんならば涅槃經ねはんきようも豈あにに邪見じゃけんに非ずや、法華經ほけきよう
は大収だいしゅう・涅槃經ねはんきようは☆拾くんじゅうなりと見え了おわんぬ、涅槃經ねはんきようは自ら法華經ほけきようより劣る
の由よしを称す法華經ほけきようの当説とうせつの文敢て相違あえて無し、但し迦葉ただの領解りようげ並に第十四の
文は法華經ほけきようを下す文に非ず迦葉あらかしやうの自身並に所化しよけの衆・今始めて法華經ほけきようの
所説しよせつの常住じやうじゅう・仏性ぶつじやう・久遠実成くおんじつじやうを覺さとる故に我が身を指して此より已前いぜんは
邪見じゃけんなりと云う、法華經ほけきよう已前の無量義經むりやうぎきように嫌きらわるる諸經しよきようを涅槃經ねはんきように重ねて
之これを挙あげて嫌きらうなり法華經ほけきようを嫌きらうには非あらざるなり、亦涅槃論またねはんに至いたつては此等これら
の論は書付くるが如く天親菩薩てんじんぼさつの造・菩提流支ぼだいりしの訳きなり經文きやうもんに違いすること
之ねはん多し涅槃論またねはんきようも亦本經いまに違まさす当に知るべし訳者やくしやの誤あやまりなり信用しんように及およばず。
問いうて云く先の教いに漏れたる者を後の教これに之うを承うけ取とつて得道とくどうせしむる

を流通と称せば阿含經は華嚴經の流通と成る可きや、乃至法華經は前四味の流通と成る可きや如何、答えて曰く前四味の諸經は菩薩・人天等の得道を許すと雖も決定性の二乗・無性闡提の成仏を許さず、其の上仏意を探りて実を以て之を☆うるに亦菩薩・人天等の得道も無し十界互具を説かざるが故に久遠実成無きが故に、問うて云く証文如何、答えて云く法華經方便品に云く「若し小乗を以て化すること乃至一人に於てせば我則ち慳貪に墮せん此の事は爲て不可なり」已上此の文の意は今選択集の邪義を破せんが爲に余事を以て詮と爲す故に爾前得道の有無の実義は之を出さず追つて之を☆うべし、但し四十余年の諸經は実に凡夫の得道無きが故に法華經は爾前の流通と爲らず法華經に於て十界互具・久遠実成を顕わし了んぬ故に涅槃經は法華經の爲に流通と成るなり。

大文の第七に問に随つて答うとは、若し末代の愚人上の六門に依つて万

が一も法華經を信ぜば權宗の諸人・或は自惑に依り・或は偏執に依つて
法華經の行者を破せんが為に多く四十余年並に涅槃等の諸經を引いて
之を難ぜん、而るに權教を信ずる人は之多く・或は威勢に依り・或は世間
の資縁に依り人の意に随つて世路を亘らんが為に・或は權教には學者多く
實教には智者少し是非に就て万が一も實教を信ずる者有るべからず、
是の故に此の一段を撰んで權人の邪難を防がん。

問うて云く諸宗の學者難じて云く「華嚴經は報身如來の所説・七處・八
會・皆、頓極頓証の法門なり、法華經は応身如來の所説・教主既に優劣
有り、所説の法門に於て何ぞ淺深無からん随つて対告衆も法慧・功德林・
金剛幢等なり永く二乗を雜えず、法華經は舍利弗等を以て対告衆と為す」
華嚴、法相宗の如きは解深密經を以て依憑と為し難を加えて云く「解深密
經は文殊・觀音等を以て対告衆と為す勝義生菩薩の領解には一代を有・

空・中と詮^{せん}す其^その中の中とは華嚴・法華・涅槃・深密等なり法華經の信解
品の五時の領解は四大声聞なり菩薩と声聞と勝劣天地なり、浄土宗の
如きは道理を立てて云く「我等は法華等の諸經を誹謗するに非ず彼等の
諸經は正には大人の爲傍には凡夫の爲にす断惑証理・理深の教にして末代
の我等之を行ずるに千人の中に一人も彼の機に当らず在家の諸人多分は
文字を見ず亦華嚴・法相等の名を聞かず況や其の義を知らんや、浄土宗の
意は我等凡夫は但口に任せて六字の名号を称すれば現在に阿弥陀如来二十
五の菩薩等を遣わし身に影の随う如く百重千重に行者を圍繞して之を守り
給う、故に現世には七難即滅・七福即生し乃至臨終の時は必ず来迎有つ
て観音の蓮台に乘じ須臾の間に浄土に至り業に随つて蓮華開け法華經を聞
いて実相を覚る何ぞ煩しく穢土に於て余行を行じて何の詮か有る但万事
を抛つて一向に名号を称せよ」と云云、禅宗等の入云く「一代聖教は

月を指す指・天地日月等も汝等が妄心より出でたり十方の浄土も執心の
影像なり釈迦十方の仏陀は汝が覺心の所変・文字に執する者は株を守る
愚人なり我が達磨大師は文字を立てず方便を仮らず一代聖教の外に仏
迦葉に印して此の法を伝う法華經等は未だ眞実を宣べず」已上。

此等の諸宗の難一に非ず如何ぞ法華經の信心を壞らざる可しや、答て

云く法華經の行者は心中に「四十余年已今当皆是眞実・依法不依人」等

の文を存し而も外に語に之を出さず難に隨て之を問うべし抑所立の

宗義は何の經に依るや、彼、經を引かば引くに隨つて亦之を尋ねよ、一代

五十年の間の說の中に法華經より先か後か同時なるか亦先後不定なるかと、

若し先と答えば未顕眞実の文を以て之を責めよ敢えて彼の經の說相を尋ぬ

ること勿れ、後と答えば當說の文を以て之を責めよ、同時と答えば今說の

文を以て之を責めよ、不定と答えば不定の經は大部の經に非ず一時一会の

説にして亦物の数に非ず其の上、不定の教と雖も三説を出でず、設い百千
よろず
万の義を立つと雖も四十余年の文を載せて虚妄と称せざるより外は用うべ
からず、仏の遺言に不依不了義經と云うが故なり。

亦智儼・嘉祥・慈恩・善導等を引いて徳を立て難ずと雖も法華・涅槃に
違する人師に於ては用うべからず依法不依人の金言を抑ぐが故なり。

亦法華經を信ぜん愚者の為に二種の信心を立つ、一には仏に就て信を立

て二には經に就て信を立つ、仏に就て信を立つとは權宗の學者来り難じて

云わん善導和尚は三昧發得の人師・本地弥陀の化身なり慈恩大師は十一面

觀音の化身亦筆端より舍利を雨らす此等の諸人は皆彼彼の經經に依つて

皆証有り何ぞ汝彼の經に依らず亦彼の師の義を用いざるや、答えて云く汝

聞け一切の權宗の大師先徳並に舍利弗・目連・普賢・文殊・觀音乃至

阿弥陀・薬師・釈迦如来・我等並に十方の諸人の前に集まりて説いて

法華經は汝等が機に叶わず念仏等の権經の行を修して往生を遂げ後に
法華經を覺ると云わん是の如き説を聞くと雖も敢えて用う可からず、其の故
は四十余年の諸の經には法華經の名字を呼ばず何れの処にか機の堪不堪を
論ぜん、法華經に於ては釈迦・多宝・十方諸仏一処に集りて撰定して云く
法をして久住せしむ如来の滅後に於て閻浮提の内に広く流布せしめ断絶せ
ざらしむ、此の外に今・仏出来して法華經を末代不相応と定めば既に
法華經に違す知んぬ此の仏は涅槃經に出す所の滅後の魔・仏なり之を信用
す可からず、其の已下の菩薩・声聞・比丘等は亦言論するに及ばず此等は
不審無し涅槃經に記する所の滅後の魔の所変の菩薩等なり、其の故は法華經
の座は三千大千世界の外四百万億阿僧祇の世界なり其の中に充滿せる菩薩
・二乘・人天・八部等皆如来の告勅を蒙むり各各所在の国土に法華經を弘
む可きの由之を願いぬ、善導等若し権者ならば何ぞ竜樹・天親等の如く

権教ごんきょうを弘ひろめて後に法華經ほけきょうを弘ひろめざるや法華經ほけきょうの告こ勅ちやくの数かずに入いらざるや
何なんぞ仏ぶつの如ごとく権教ごんきょうを弘ひろめて後に法華經ほけきょうを弘ひろめざるや、若もし此この義ぎ無なくんば
設たといい仏ぶつ為なりと雖いえども之これを信べず可べからず今は法華經ほけきょうの中ちゆうの仏ぶつを信べず故ゆえに仏ぶつに
就おて信いを立たつと云いうなり。

問いうて云いく釈迦しゃか如來にょらいの所說しよせつを他た仏ぶつ之これを証しやうするを實說じつせつと稱なんせば何なんぞ阿彌陀あみだ
經きやうを信いぜざるや、答いえて云いく阿彌陀經あみだきやうに於おては法華經ほけきょうの如ごとき証しよみよう 明あ無みきが
故ゆえに之これを信いぜず、問いうて云いく阿彌陀經あみだきやうを見るみるに釈迦しゃか如來にょらいの所說しよせつの一日七日いちにちしちにち
の念ねん仏ぶつを六方りくぽうの諸しよ仏ぶつ舌ぜつを出だし三千さんぜんを覆おほうて之これを証しよみよう 明あせり何なんぞ証しよみよう 明あ無みし
と云いうや、答いえて云いく阿彌陀經あみだきやうに於おては全けんく法華經ほけきょうの如ごとき証しよみよう 明あ無みく但ただ
釈迦しゃか一いち仏ぶつ、舍利弗しゃりふに向むかつて説いいて言いく我われ、一ひと人ひと阿彌陀經あみだきやうを説いくのみのみに非あらず
六方りくぽうの諸しよ仏ぶつ舌ぜつを出だし三千さんぜんを覆おほうて阿彌陀經あみだきやうを説いくと云いう此等これらは釈迦しゃか一いち仏ぶつの
説いなり敢あえて諸しよ仏ぶつ來きりたまわす、此等これらの權文ごんもんは四十余年よんじゅうよねんの間まは教主きやうしゆも權ごん仏ぶつ

の始覺しかくの仏ぶつなり、仏ぶつ、權けんなるが故ゆえに所説しよせつも亦權またなり故ゆえに四十余年よんじゅうよねんの權けんの
説これは之これを信べず可べからず、今いまの法華ほっけ・涅槃ねはんは久遠くおん実成じつじょうの円えんの實説ぶつなり
十界互具じゅつかいこくの實言じつごんなり亦多寶またたほう・十方じゅつぽうの諸しよ佛ぶつ來りて之これを証しやう明みやうし給たまう故ゆえに之これを
信あずべし阿彌陀經あみだの説むりようぎきようは無量みけん義經しんじつの未顯ことば實やぶの語おわんに壞やぶれ了おわんぬ全しやく釈迦かいぢふつ一い佛ふつ
の語ことばにして諸佛しよぶつの証しやう明みやうには非あらざるなり。

二に經おに就おて信いを立つとは、無量むりようぎきよう義經ぎきように四十余年よんじゅうよねんの諸經しよきようを挙あげて未顯みけん
眞實しんじつと云いう、涅槃經ねはんぎきように云いく「如來にょらいは虚妄こもうの言い無いしと雖いも若えし衆生しゆじやう・虚妄こもうの
説よに因よつて法利ほふりを得とと知しれば宜よろしきに随したがつて方便ほうべんして則すなわち為ために之これを説とき
給たまう」又云いく「了義經りやうぎきように依よつて不ふ了義經りやうぎきように依よらざれ」已上かく是ことの如ごときの文ぶん一
に非あらず皆みな四十余年よんじゅうよねんの自説しよきようの諸經しよきようを虚妄こもう・方便ほうべん・不ふ了義りやうぎ・魔説ませつと稱しやうす是これ皆みな
人ひとをして其その經きやうを捨ほつて法華ほっけ・涅槃ねはんに入いらしめんが為ためなり、而しかに何いの恃たのみ
有もうつて妄語もうごの經きやうを留とどめて行儀ぎやうぎを企くわて得道とくどうを期こするや、今こん權教けんきやうの情執じやうしつを捨

て偏に実経を信ず故に經に就て信を立つと云うなり。

問うて云く善導和尚も人に就て信を立て行に就て信を立つ何の差別有ら

んや、答えて云く彼は阿弥陀經等の三部に依つて之を立て一代の經に於て

りようぎふりようぎきよう

わか

あみだ

これ

ゆえ

ほつけ

ねはん

これ

了義不了義經を分たずして之を立つ、故に法華・涅槃の義に対して之を難

ずる時は其の義壞れ了んぬ。

守護国家論

◆七 災難対治抄

正元二年 三十九歳御作

78P

国土に大地震・非時の大風・大飢饉・大疫病・大兵乱等の種種の災難

の起る根源を知りて対治を加う可きの勘文。

金光明經に云く

若し人王有りて其の国土に於て此の經有りと雖も

未だ嘗て流布せず捨離の心を生じて聴聞せんことを樂わず亦供養し尊重

し讚歎せず四部の衆の持經の人を見て亦復尊重し乃至供養すること能わず

遂に我等及び余の眷属無量の諸天をして此の甚深の妙法を聞くことを得ず

甘露の味に背き正法の流を失い威光及び勢力有ること無らしむ惡趣を
增長し人天を損滅し生死の河に墜ちて涅槃の路に背かん、世尊・我等四王
並に諸の眷屬及び藥叉等斯くの如き事を見て其の国土を捨てて擁護の心無
けん但我等是の王を捨棄するのみに非ず亦無量の国土を守護する諸天善神
有らんも皆悉く捨去せん既に捨離し已れば其の國に當に種種の災禍有つて
國位を喪失すべし、一切の人衆皆善心無けん唯繫縛・殺害・瞋諍のみ有
つて互に相讒諂し枉げて辜無きに及ばん、疫病流行し彗星數ば出で兩日
並び現じ薄蝕恒無く黑白の二虹不祥の相を表わし星流れ地動き井の内に
声を發し暴雨・惡風・時節に依らず常に飢饉に遭い苗実も成らず多く他方
の怨賊有つて国内を侵掠し人民諸の苦惱を受け土地に所樂の処有ること
無けん」と。

大集經に云く「若し國王有つて我が法の滅せんを見て擁護せずんば

むりようせ おい せかいえ しゅう ことことみなめつしつ
無量世に於て施戒慧を修すとも悉く皆滅失して其の国の中に三種の不祥の
事を出さん、乃至 命終 して大地獄に生ぜん」と。

仁王經に云く 大王・国土乱れん時は先ず鬼神乱る鬼神乱るが故に
ばんみんみだ またいわ だいおう こくどみだ きじんみだ きじんみだ ゆえ
万民乱ると、亦云く大王・我今五眼をもつて明に三世を見るに一切の国王
みなか こぜ つか よ ていおうしゅ な これ
は皆過去世に五百の仏に侍うるに由つて帝王主と為ることを得たり、是を
もつて一切の聖人羅漢而も為に彼の国土の中に來生して大利益を作さん
もし王の福尽きん時は一切の聖人皆捨て去ることを為さん若し一切の
しょうにん ひちなん おこ
聖人去らん時は七難必ず起る」と。

仁王經に云く 大王吾今化する所の百億の須弥・百億の日月・一一の
しんのおきよう いわ だいおうわれ しゅみ にちがつ
須弥に四天下有り其の南閻浮提に十六の大国五百の中国十千の小国有り
しゅみ してんげ そ えんぶだい たいこく ちゅうこく しょうこく
其の国土の中に七つの畏る可き難有り一切の国王是の難の為の故に、云何な
そ こくど お そべ なん いっさい こくおうこ なん もつて ゆえ
るを難と為す日月度を失い時節返逆し・或は赤日出で黒日出で二三四五の
なん な にちがつ うしな じせつほんぎやく ある せきじつい こくじつい

日出づ・或は日蝕して光無く・或は日輪一重二三四五重輪現ずるを一の難
と為すなり、二十八宿度を失い金星・彗星・輪星・鬼星・火星・水星・風星
・星・南斗・北斗・五鎮の大星・一切の国主星・三公星・百官星・
是くの如き諸星・各各・変現するを二の難と為すなり、大火・国を焼き
万姓焼尽し・或は鬼火・竜火・天火・山神火・人火・樹木火・賊火・
是くの如く変怪するを三の難と為すなり、大水・百姓を漂没して時節
返逆し冬・雨ふり夏・雪ふり冬・時に雷電霹靂し六月に冰霜雹を雨らし
赤水・黒水・青水を雨らし・土山・石山を雨らし沙礫石を雨らし江河逆ま
に流れ山を浮かべ石を流す是くの如く変ずる時を四の難と為すなり、大風
・万姓を吹殺し国土の山河・樹木・一時に滅没して非時の大風・
黒風・赤風・青風・天風・地風・火風・水風・是くの如く変ずる時を五の
難と為すなり、天地・国土亢陽し炎火洞然として百草亢旱し五穀登らず

土地赫然として万姓滅尽せん是くの如く変ずる時を六の難と為すなり、
四方の賊来りて国を侵し内外の賊起り火賊・水賊・風賊・鬼賊あつて百姓
荒乱し刀兵劫起せん是くの如く怪する時を七の難と為すなり」と。

法華經に云く「百由旬の内をして諸の衰患無からしめん」と。

涅槃經に云く「是の大涅槃微妙の經典・流布せらるる処は当に知るべ

し其の地は即ち是れ金剛なり是の中の諸人亦金剛の如し」と。

仁王經に云く「是の經は常に千の光明を放ちて千里の内をして七難起ら

ざらしむと、又云く諸の惡比丘多く名利を求め國王・太子・王子の前に

於て自ら破仏法の因縁・破国の因縁を説く其の王別えずして此の語を

信聴し横に法制を作り仏戒に依らず是を破仏・破国の因縁と為す」と。

今之を勘うるに法華經に云く「百由旬の内諸衰患なからしむ」と仁王經

に云く「千里の内に七難不起らしむ」と、涅槃經に云く「当に知るべし其の

地は即ち是れ金剛、是の中の諸人亦金剛の如し」と文。

疑つて云く今・此の国土に種種の災難起ることを見聞するに所謂建長

八年八月自り正元二年二月に至るまで大地震非時の大風・大飢饉・大疫病

等種種の災難連連として今に絶えず大体国土の人数尽く可きに似たり、之

に依つて種種の祈請を致す人之多しと雖も其の驗無きか、正直捨方便・

多宝の証明・諸仏出舌の法華經の文の令百由旬内・雙林最後の遺言の

涅槃經の其地金剛の文、仁王經の千里の内に七難不起の文皆虚妄に似

たり如何。

答えて云く今愚案を以て之を勘うるに上に挙ぐる所の諸大乘經・国土

に在り而も祈請と成らずして災難起ることは少し其の故有るか、所謂

金光明經に云く其の国土に於て此の經有りと雖も未だ嘗つて流布せず

捨離の心を生じて聴聞せんことを樂わす我等四王皆悉く捨て去り其の国

まさ しゅじゆ さいかあ だいつきよう
當に種種の災禍有るべし、大集經に云く「もし國王有つて我が法の滅せん

を見て捨てて擁護せざれば其の国内三種の不祥を出さん」と、仁王經に

云く「仏戒に依らざる是を破仏・破国の因縁と爲す若し一切の聖人去る時

は七難必ず起らん」已上、此等の文を以て之を勘うるに法華經等の諸

大乘經・國中に在りと雖も一切の四衆捨離の心を生じて聴聞し供養す

るの志を起さざる故に國中の守護の善神・一切の聖人・此の国を捨て

去り守護の善神聖人等・無きが故に出来る所の災難なり。

問うて曰く國中の諸人・諸大乘經に於て捨離の心を生じて供養する

志を生ぜざる事は何の故より起るや。

答えて曰く仁王經に曰く「諸の惡比丘多く名利を求め國王・太子・王子

の前に於て自ら破仏法の因縁・破国の因縁を説かん其の王別えずして此の

語を信聴し横に法制を作りて仏戒に依らず」と、法華經に云く「惡世の

中の比丘びくは邪智じゃちにして心諂曲てんこくに未だ得ざるをこれ得たりと謂おもい我慢がまんの心じゅうまん充滿じゅうまんせん是この人惡心あくしんを懷いだき國王こくおう・大臣だいじん・婆羅門ばらもん・居士こじ及び余おほの諸もろの比丘びくに向むかつて誹謗ひぼうして我が惡を説いて是これ邪見じゃけんの人・外道げどうの論議ろんぎを説くと謂いわんあつきそ惡鬼あくおに其の身に入る」等と云云。

此等の文を以て之を思うに諸の惡比丘國中こくおうに充滿じゅうまんして破國はこく・破仏法はぶつぽうの因緣いんねんを説く國王こくおう並に國中こくちゅうの四衆ししゅう弁わえずして信聰しんちようを加うるが故ゆえに諸しよだいじようきよう大乘經だいじようきように於て捨離しゃりの心を生ずるなり。

問うて曰く諸の惡比丘等・國中こくちゅうに充滿じゅうまんして破國はこく・破仏戒等はぶつかいの因緣いんねんを説くことは仏弟子ぶつでしの中に出來しゅつたす可べきか外道げどうの中に出來しゅつたす可べきか。

答えて曰く仁王經にんのうきように云く「三宝さんぼうを護る者にして轉うたた更に三宝さんぼうを滅し破らんこと師子ししの身中の虫みづかの自ら師子ししを食くうが如ごとし外道げどうには非あらず」文。

此の文の如ごとくんば仏弟子ぶつでしの中に於て破國はこく・破仏法はぶつぽうの者しゅつた出來べす可べきか、問

うていわ日もろく諸あの惡も比丘く・正しょう法ほうを壞やぶるに相似そうじの法はを以もて之これを破やぶらんかまさ當またに亦また惡あく法ほうを以もて之これを破やぶるべしとせんか、答こたえて日いわく小しょう乘じようを以もて權もん大くだい乘じようを破はしはぶつつかいはここくいんねん破は破は國こくの因いん緣ねんを成せいして三さん惡あく道どうに墮だするなり。

問いうて日わく其その証しょう拠こ如何いかん、答こたえて日いわく法ほけ華き經きように云いく仏ぶつの方便ほうべん・隨ずい宜ぎ所しよ說せつの法はを知らずして惡あく口くちして顰ひん蹙じゆく數しばしば數ひんずい擯ひんずい出いせられんと。

涅槃ねはん經ぎように云いく我わ涅槃ねはんの後ご當まさに百む千じよう無む量りようの衆しゆ生じよう有うつて誹ひ謗ぼうして是この大ねはん涅槃ねはんを信しんぜざるべし三さん乘じようの人も亦また復また是ごとくの如むじく無だ上いはんの大だい涅槃ねはん經ぎようを憎そう惡おせん已こ上ねはん。

勝しょう意い比ひ丘くの喜き根こん菩ぼ薩さつを謗ぼうじて三さん惡あく道どうに墮おちし尼に思し仏ぶつ等どうの不ふ輕ぎよう菩ぼ薩さつを打うちつ

て阿あ鼻びの炎えんを招まねくも皆みな大だい小しよう・權こん實じつを弁わえざるより之じ起きれり十じ惡あく・五ご逆ぎやくは

愚ぐ者しや皆みな罪つみ為なることを知しる故ゆえに輒たやすく破は破は國こく・破は破は法はの因いん緣ねんを成せいぜず、故ゆえに

仁にん王おう經ぎように云いく「其その王わ別わかえずして此この語ごを信しん聽ちようす」と、涅槃ねはん經ぎように云いく

「も 若し四重を犯し五逆罪を作り自ら定めて是くの如き重事を犯すと知り而も
心に初より怖畏・懺悔無くして肯て発露せず」已上。

此くの如き等の文は謗法の者は自他共に子細を知らざる故に重罪を成し
て国を破し仏法を破するなり。

問うて曰く若爾らば此の国土に於て權教を以て人の意を取り実教を

失う者之有るか如何、答えて曰く爾なり、問うて曰く其の証拠如何、答え

て曰く法然上人所造等の選択集是れなり今其の文を出して上の經文に

合せ其の失を露顯せしめん若し対治を加えは国土を安穩ならしむ可きか、

選択集に云く「道綽禪師・聖道・浄土の二門を立て聖道を捨てて

正しく浄土に帰するの文初に聖道門とは之に就て二有一には大乘二に

は小乗なり大乘の中に就いて顕密・權実等の不同有りと雖も今・此の集

の意は唯顯大及び權大を存す故に歷劫迂回の行に當る之に準じて之を思

うに密大及び実大を存すべし、然れば則ち今真言・仏心・天台・華嚴・
三論・法相・地論・撰論此等の八家の意正しく此れに在るなり、曇鸞法師
の往生論の注に云く「謹んで竜樹菩薩の十住毘婆沙を案ずるに云く菩薩
・阿毘跋致を求むるに二種の道有り一には難行道二には易行道なり、此の
中に難行道とは即ち是れ聖道門なり易行道とは即ち是れ淨土門なり、淨土
宗の學者先ず須く此の旨を知るべし設い先ず聖道門を學する人と雖も若し
淨土門に於て其の志有らん者は須く聖道を棄てて淨土に歸すべし」文、
又云く「善導和尚正雜二行を立て雜行を捨てて正行に歸するの文、第一
に読誦雜行とは上の觀經等の往生淨土の經を除いて已外・大小乘・
顯密の諸經に於て受持・讀・誦するを悉く読誦雜行と名く、第三に札拜
雜行とは上の弥陀を札拜するを除いて已外一切諸余の仏・菩薩等及び諸の
世天等に於て札拜恭敬するを悉く札拜雜行と名く」

ひそか いわ

すべから

あにひやくそくひやくしょう

私に云く此の文を見るに須く雑を捨てて専を修すべし豈百即百生の

せんしゅうしょうぎよう

せんちゅうむいつ

そうしゅうぞうぎよう

しゅう

ぎようじやよ

これ

専修 正行 を捨てて堅く千中無一の雑修 雑行を執せんや行者能く之を

しりよう

思量せよと。

いわ

じようげんにゆうぞうろく

はんにやきよう

ほうじようじゅうぎよう

いた

又云く貞元入蔵録の中・始め大般若経六百卷より 法常住經 に終る

けんみつ

だいじようきよう

ほうじようじゅうぎよう

みなすべからどくじゅ

まで顕密の大乗 経総じて六百三十七部二千八百八十三卷なり皆須く読誦

だいじよう

いっく

まさ

ずいた

しばらく

じようさん

大乘の一句に摂すべし当に知るべし隨他の前には暫く定散の門を開くと

いへと

ずいじ

かえ

じようさん

と

いこ

雖も隨自の後には還つて定散の門を閉づ一たび開きて以後永く閉じざるは

ただこ

ねんぶつ

さいごけつ

そ

すみやかしょうじ

唯是れ念仏の一門なり文、又最後結句の文に云く「夫れ速に生死を離れん

ほつ

しょうほう

しばらく

さしおき

じようどもん

じようどもん

と欲せば二種の勝法の中に且く聖道門を闔て選んで浄土門に入れ浄土門

ほつ

しょう

しょう

しばらく

なげう

しょうぎよう

に入らんと欲せば正雜二行の中に且く諸の雜行を抛て選んで 正行 に帰

すべし、」已上 選択集 の文なり。

これ

にほんこくじゅう

じようげばんにん

ほうねんしょうにん

今之をるに日本国中の上下万人深く法然上人を信じて此の書を

☆ぶ

ゆえ 故に無智の道俗此の書の中の捨閉閣拋等の字を見て浄土の三部經・
あみだぶつ 阿弥陀仏より外は諸經・諸仏・菩薩・諸天善神等に於て捨閉閣拋等の思を
な 作し彼の仏經等に於て供養受持等の志を起さず還つて捨離の心を生ず
ゆえ 故に古の諸大師等の建立せし所の鎮護国家の道場零落せしむと雖も護惜
こんりゅう 建立の心無し護惜建立の心無きが故に亦読誦供養の音絶え守護の善神も
ほうみ 法味を嘗めざるが故に国を捨てて去り四依の聖人も来らざるなり、偏に
こんごうみょう 金光明・仁王等の一切の聖人去る時は七難必ず起らん我等四王皆悉く
しゃこ 捨去せん既に捨離し已れば其の国当に種種の災禍有るべしの文に当れり豈
しょあくびく 諸惡比丘多く名利を求め、惡世の中の比丘は邪智にして心諂曲の人に非ず
や。

うたがい 疑つて云く国土に於て選択集を流布せしむるに依つて災難起ると云
わば此の書無き已前は國中に於て災難無かりしか、答えて曰く彼の時も亦

さいなん 災難有り云く五常を破り仏法を失いし者之有りしが故なり所謂周の宇文・
げんすう 元嵩等是なり、難じて曰く今の世の災難五常を破りしが故に之起ると云わ
なん ば何ぞ必ずしも 選択集 流布の失に依らんや、答えて曰く仁王經に云く
だいおう 大王・未来の世の中に諸の小国王・四部の弟子諸の惡比丘横に法制を作
ぶつかい りて仏戒に依らず亦復仏像の形・仏塔の形を造作することを聴さず七難必
おこ ず起らん」と、金光明經に云く「供養し尊重し讚歎せず其の国に當に種種
さいかあ の災禍有るべし」涅槃經に云く「無上の大涅槃經を憎惡す」等と云云、豈弥陀
ほか より外の諸仏・諸經等を供養し礼拝し讚歎するを悉く雜行と名くると云
うに 當らざらんや、難じて云く仏法已前国に於て災難有るは何ぞ謗法の者
の 故ならんや、答えて云く仏法已前に五常を以て国を治むるは遠く仏誓を
もっ 以て国を治むるなり礼義を破るは仏の出したまえる五戒を破るなり、問う
いわ そ て云く其の証拠如何、答えて曰く 金光明經に云く「一切世間の所有る善論

は皆此の經に因る」と、法華經に云く「若し俗間の經書・治世の語言・資生の業等を説かんと皆正法に順ず」と普賢經に云く「正法をもつて國を治め人民を邪枉せず是れを第三懺悔を修すと名く」と、涅槃經に云く「一切世間の外道の經書は皆是れ仏說なり外道の說に非ず」と、止觀に云く「若し深く世法を識れば即ち是れ仏法なり」と、弘決に云く「礼樂前に駢せて真道後に啓く」と、広釈に云く「仏三人を遣して且く震旦を化す五常以て五戒の方を開く昔は大宰・孔子に問うて云く三皇・五帝は是れ聖人なるか孔子答えて云く聖人に非ず又問う夫子是れ聖人なるか亦答う非なり又問う若し爾らば誰か聖人なる、答えて云く吾聞く西方に聖有り釈迦と号く」文。此等の文を以て之を勘うるに仏法已前の三皇・五帝は五常を以て國を治む夏の桀・殷の紂・周の幽等の礼義を破りて國を喪すは遠く仏誓の持破に當れり。

うたがい 疑つて云く若し爾らば法華・真言等の諸大乘經を信ずる者は何ぞ此
の難に値えるや、答えて曰く「金光明經に云く「枉げて辜無きに及ばん」と、法華經に云く「横に其の殃に羅る」等と云云、此等の文を以て之を推する
ほつけしんこん に法華真言等を行ずる者も未だ位深からず信心薄く口に誦すれども其の義
を知らず一向名利の爲に之を誦す先生の謗法の失未だ尽きず外に法華等を
行じて内に選択の心を存す此の災難の根源等を知らざる者は此の難を免れ
難きか。

うたがい 疑つて云く若し爾らば何ぞ選択集を信ずる謗法者の中に此の難に値
わざる者之有りや、答えて曰く業力不定なり順現業は法華經に云く此の人
げんせに白癩の病乃至諸の悪重病を得んと、仁王經に云く「人・仏教を
やぶる者は復孝子無く六親不和にして天神祐けず疾疫惡鬼日に來りて侵害し
さいげしゆび 災怪首尾し連禍せん」と、涅槃經に云く「若し是の經典を信ぜざる者有ら

もし りんじゅう
ば若は臨終の時・或は荒乱に値い刀兵競い起り帝王の暴虐・怨家の讎隙
しんびつ
に侵逼せられん」已上、順次生業は法華經に云く「もし人信ぜずして此の
きぼう
經を毀謗せば其の人命終して阿鼻獄に入らん」と、仁王經に云く「人・
ぶつきよう やぶ
仏教を壊らば死して地獄・餓鬼・畜生に入らん」已上、順後業等は之を
略す。

問うて曰く如何にして速かに此の災難を留む可きや、答えて曰く速に謗法
い わ い かん す み や
の者を治す可し若し爾らずんば無尽の祈請有りと雖も災難を留む可からざ
い や べ も し か む じん き し ょ う い え ど さ い な ん と べ
るなり、問うて曰く如何が対治す可き、答えて曰く治方亦經に之有り涅槃經
い わ い わ い かん た い じ べ
に曰く仏言く唯一人を除いて余の一切に施せ正法を誹謗して是の重業を
た だ か ご こと い っ せ ん だ い や か ら そ ほ ど こ い っ さい さ ん た ん
造る唯此くの如き一闡提の輩を除いて其の余の者に施さば一切讚嘆すべし
已上、此の文の如んば施を留めて対治す可しと見えたり此の外にも亦治方
こ つ ぶ さい だ
是れ多く具に出すに暇あらず、問うて曰く謗法の者に於て供養を留め苦治

を加うるは罪有りや不や、答えて曰く涅槃經に云く、今無上の正法を以て
諸王・大臣・宰相・比丘・比丘尼に付属す正法を毀る者は王者・大臣・
よんぶのしゅうまさ くらち なおつみあ
四部の衆當に苦治すべし尚罪有ること無けん已上。

問うて曰く汝僧形を以て比丘の失を顕すは罪業に非ずや、答えて曰く

涅槃經に云く「若し善比丘あつて法を壞る者を見て置いて呵責し駈遣し挙処

せざれば當に知るべし是の人は仏法の中の怨なり若し能く駈遣し呵責し

挙処せば是れ我が弟子真の声聞なり」已上、予此の文を見るが故に

仏法中怨の責を免れんが為に見聞を憚からずして法然上人並に所化の衆

等の阿鼻大城に墮つ可き由を称す、此の道理を聞き解く道俗の中に少少は

廻心の者有り若し一度高覽を経ん人は上に挙ぐる所の如く之を行ぜずんば

大集經の文の若し国王有つて我が法の滅せんを見て捨てて擁護せざれば

無量世に於て施戒慧を修すとも悉く皆滅失して其の国の内に三種の不祥を

出さん乃至命終して大地獄に生ぜんとの記文を免かれ難きか、仁王經に云く「若し王の福尽きん時は七難必ず起らん」と、此の文に云く「無量世に於て施戒慧を修すとも悉く皆滅失す」等と云云、此の文を見るに且く万事を闇いて先ず此の災難の起る由を勘う可きか若し爾からざれば弥亦重ねて災難起る可きか、愚勘是くの如し取捨は人の意に任す。

◆八 念仏者追放せしむる宣旨御教書五篇に集列する勘文状

正元元年 三十八歳御作 八六戸

夫れ以みれば仏法流布の砌には天下静謐なり神明仰崇の界には国土豊饒なり、之に依つて月氏より日域に覃んで君王より人民に至るまで此の義改むること無き職として然り。

爰に後鳥羽院の御宇に源空法師と云う者あり道俗を欺くが故に専修を

興おこして顕密けんみつの教理きょうりを破はし男女なんよを誑たぶらかすが故ゆえに邪義じゃぎを構かまえて仏神ぶっしんの威光いこうを滅おこし常に四衆ししゅうを誘いざなうて云いわく、浄土三部じょうどの外ほかは衆經しゅうきやうを棄置きちすべし唱名しょうみやう一行いっぎやうの外ほかは余行よぎやうを廢退はいたいすべし矧いんや神祇冥道しんぎみやうどうの恭敬きやうけいに於おいおや況いわんやわん孝養報恩こうやうほうおんの事善じぜんに於おいおや之これを信しんぜざる者は本願ほんがんを疑うたがひなりと、爰こゝに頑愚がんぐの類たぐいは甚深じんじんの妙典みやうてんを輕慢きやうまんし無智むちの族やからは神明しんみやうの威徳いとくを蔑如べつじよす、就なかんずくししかんしやながくそうのぞおさおさお癡人ちじんなり三論さんろん・法相ほつそうの稽古けいこを励はげむ者は菩提ぼだいを塞ふさぐ証人しやうにんなりと云云。

之よに依よつて仏法日ぶつぽうに衰おとろえ迷執めいししゅう・月に増しす然しかる間なん・南都北嶺なんとほくりやうの明徳めいとく・奏聞そうもんを経て天聴てんちやうに達たするの刻きざみ・源空げんくうが過咎遁かぐのがれ難がたきの間遠流おんるの宣せんを蒙こうむはいしよはいしよ配所はいしよの境さかいに赴おもむき畢おわおぬ、其その後門徒猶勅命もんとなおちよくめいを憚はばからずして弥いよいよいせんしししゅうを興おこすること殆ほとんと先代せんだいに超こえたり違勅いちよくの至いたり責せめても余ゆえり有あり故かに重かさねて專修せんししゅうするていはいはいいげんくうもんとるざいの由りんげんしきり・綸言頻かんとに下こる又閩東かんとうの御下知ごけち・を停廢ていはいし源空げんくうの門徒もんを流罪るざいすべきの由りんげんしきり・綸言頻かんとに下こる又閩東かんとうの御下知ごけち・

ちよくせん あいそ
勅宣に相添う。

もんよう のが
門葉等は遁るべきの術を失い・或は山林に流浪し・或は遠国に逃隠す、

しか
爾してより華夷・称名を抛ちて男女・正説に帰する者なり然るに又近來

せんき わきま
先規を弁えざるの輩
せんき わきま
仙神を崇めざるの類
また
再び専修の行を企て猶邪惡を増

はなはだ
すこと甚し。

にちれん ふしよう
日蓮不肖なりと雖も且は天下の安寧を思うが為且は仏法の繁昌を致さん

ため あなが
が為に強ちに先賢の語を宣説し称名の行を停廢せんと欲し又愚懷の勘文

すこぶ じゃにん
を添え頗る邪人の慢幢を倒さんとす、勘注の文繁くして見難し知り易から

ため
しめんが為に要を取り諸を省き略して五篇を列ぬ、委細の旨は広本に在く

のみ。

そうじよう
奏状篇 詮を取りて之を注す委くは広本に在り

なんと そうじよう
南都の奏状に云く。

一、謗人謗法的事

右源空・顕密の諸宗を軽んずること土の如く沙の如く智行の高位を蔑ろ
にすること蟻の如く螻の如し、常に自讃して曰く広く一代聖教を見て知
れるは我なり能く八宗の精微を解する者は我なり我諸行を捨て況や余人
に於ておやと、愚癡の道俗之を仰ぐこと仏の如く弟子の偏執遙に其の師に
超え檀那の邪見弥本説に倍し一天四海漸く以て☆し事の奇特を聞くに驚
かずんば有る可からず其の中殊に法華の修行を以て専修の讐敵となす、
・或は此の経を読む者は皆地獄に墮すと云い・或は其の行を修せん者は永
く生死に留まると云い・或は僅に仏道の結縁を許し・或は都て浄土の正因
を嫌う、然る間・本八軸十軸の文を誦し千部万部の功を積める者も永く
以て廃退し剰え前非を悔ゆ、捨つる所の本行の宿習は実に深く企つ
る所の念仏の薰習は未だ積まず中途に天を仰いで歎息する者多し、此の外

般若・華嚴の帰依真言・止観の結縁十の八九皆棄置す之を略す。

一、靈神を蔑如する事

右・我が朝は本是れ神国なり百王・彼の苗裔を承けて四海其の加護を仰ぐ、而るに専修の輩永く神明を別えず権化・実類を論ぜず宗廟・祖社を恐れず若し神明を憑まば魔界に墮すと云云。

実類の鬼神に於ては置いて論ぜざるか権化の垂迹に至つては既に是れ大聖なり、上代の高僧皆以て帰伏す行教和尚・宇佐の宮に参るに釈迦三尊の影月の如くに顕れ仲算大徳・熊野山に詣ぬるに飛滝千仞の水・簾の如くに巻く、凡そ行基・護命・増利・聖宝・空海・最澄・円珍等は皆神社に於て新に靈異を感じず是くの若きは源空に及ばざるの人か又魔界に墮つ

可きの類か之を略す。

山門の奏状に云く。

一、一向専修の党類神明に向背する不当の事。

右・我が朝は神国なり神道を敬うを以て国の勤めと為す謹んで百神の本を討めるに諸仏の迹に非ること無し、所謂伊勢大神宮・八幡・加茂・日吉・春日等は皆是れ釈迦・薬師・弥陀・観音等の示現なり各宿習の地をトめ専ら有縁の儀を調う乃至其の内証に随いて彼の法施を資け念誦読経神に依つて事異なり世を挙げて信を取り人毎に益を被る、而るに今専修の徒・事を念仏に寄せて永く神明を敬うこと無し、既に国の礼を失い仍神を無するの咎あり、当に知るべし有勢の神祇定めて降伏の眸を回らして睨みたまわん之を略す。

一、一向専修和漢の例・快からざる事

右・慈覚大師の入唐巡礼記を按ずるに云く唐の武宗皇帝・会昌元年章敬寺の鏡霜法師に勅令して諸寺に於て弥陀念仏の教を伝え寺毎に三日

じゅんりん

巡輪して絶えず同じく二年・廻鶻国の軍兵等・唐の界を侵す同じく三年

かほく

河北の節度使・忽ち乱を起す其の後大蕃国更に命を拒む廻鶻国重ねて地を

およ ひょうらんしんこう

奪いぬ、凡そ兵乱秦項の代に同じく災火邑里の際に起る何に況や武宗大に

ぶつぼう

仏法を破し多く寺塔を滅す撥乱すること能わずして遂に以て事有り已上取

は すなわ ほしいままじょうと

意、是れ則ち恣に浄土の一門を信じて護国の諸教を仰がざるに依つてな

しか

り而るに吾朝一向専修を弘通してより以来・国衰微に属し俗多く艱難す

これ いわ

已上之を略す、又云く音の哀楽を以て国の盛衰を知る詩の序に云く治世の音は

そむけ

安んじて以て楽しむ其の政和げばなり乱世の音は怨んで以て怒る其の政・

ほうこく

乖けばなり亡国の音は哀んで以て思う其の民・困めばなりと云云、近代念仏

りよぶみん

の曲を聞くに理世撫民の音に背き已に哀慟の響を成す是れ亡国の音なる

べ

可し 是四、已上奏状。

さんもん

山門の奏状詮を取る此の如し。

又大和の莊やまとの法印俊範ほういんしゅんぱん・宝地房ほうちぼうの法印宗源ほういんそうげん・同坊どうぼうの永尊えいそん・堅者けんじや並なに題者とくしやなり等

源空げんくうが門徒もんとを対治たいじせんが為ために各おの子細しさいを述そぶ其そのの文ぶん・広本こうほんに在あり、又諸宗しよしゆう

の明徳めいとく面面めんめんに書かを作りて選せん集ちやくしゆを破はし專修せんしゆを対治たいじする書籍しよせき世よに伝つたう。

宣旨篇せんじ

南都北嶺なんとほくりようの訴状そじように依よつて專修せんしゆを対治たいじし行者ぎようじやを流罪るざいす可べきの由度度たびたびの

宣旨せんじの内うち・今は少せうを載のせ多たを省くわしく委こうくは広本こうほんに在あり。

永尊えいそん・堅者けんじやの状じやうに云いく彈選だんせん・択たく等たう上送じようそうせられて後さうじよう・山上さんじように披露ひろす彈選だんせん・択たくに

於おては人毎ひとごとに之これを翫もてあそび顯選けんせん・択たくは諸人しよにん之これを謗ほうず法然ほうねん・上人しやうにんの墓所ぼしよは感神院かんじんいんの

犬神人つめそうに仰付おほて之これを破は卻きやくせしめ畢おわぬ其そのの後奏聞そうもんに及およんで裁許さいきよを蒙こおむり畢おわぬ

ぬ、七月しちがつの上旬じやうじんに法勝寺ほうしやうじの御八講ごはかうの次山門さんもんより南都なんとに触ふれて云いく清水寺しみずじ・祇園ぎおん

の辺南都山門なんとさんもんの末寺まつじたるの処ところに專修せんしゆの輩身やからを容ゆるれし草菴そうあんに於おては悉ことごとく

破卻はきやくせしめ畢おわぬ其そのの身みに於おては使庁しちように仰おほせて之これを搦からめ取とらるるの間ま・

礼讃れいさんの聲・黒衣こくいの色・京洛きやうらくの中に都すて以もつとど止とどめ畢おわんぬ、張本ちやうほん三人流罪るざいに定めらると雖いえども逐電ちくでんの間・未いまだ配所はいしよに向むかわず山門さんもん今いまに訴もつえ申し候こうなり。

此この十一日の僉議せんぎに云いく法然房所造ほうねんぼうしやうぞうの選せん択ちやくは謗法ほうぼうの書しよなり天下てんがに之これを止とどめ置べく可よからず仍よつて在ざい在所ざいしよ所しよ持じ並そに其いんぼんの印板だいてうどうを大講堂だいこうどうに取り上げさんぜ ぶつおん ほう ため さんもん そうもん おわ かさ 三世の仏恩を報ほうぜんが為ために焼失しょうしつすべきの由・奏聞そうもん仕しり候こうい畢おわんぬ重かさねて仰おほせ下くだされ候こうか、恐きようきよう恐きようきよう。

嘉禄三年十月十五日

専修せんしゅう念仏ねんぶつの張本ちやうほん成覚じやうかく法師ほうし讃岐さぬきの大手嶋おおてじまに経回きやうかいすと云云じつびふんみよう実否じつ分ぶん明めいならず慥たしかに☆知けんちを加くえらる可べきの由・山門さんもんの人人ひとびともう申あいたずす相尋もうね申もうさしめ給たまう可べきの由よし・殿下でんかの御氣色みけしき候こうう所よなり仍よつて執達件しつたつくだんの如ごとし。

嘉禄三年十月二十日

参議さんぎ範輔のりすけ

在り判

修理権亮殿 しゅりこんのすけ

関東より宣旨の御返事 かんとう せんじ ごへんじ

りゅうかんりっし

隆寛律師の事、右大弁宰相家の御奉書披露候い畢んぬ、件の律師去る うだいべんさいそう ごほうしよひろう おわ くだん りっしいぬ

うずき

げこう

かまくら

きようかい

いえど

せいふ

まか

ねんぶつ

七月の比・下向せしむ鎌倉近辺に経回すると雖も京都の制符に任せ念仏者 ついはう おうしゅう るろう きようかい いえど せいふ まか ねんぶつ

を

おうしゅう

るろう

おわ

おわ

ざいしよ

たず

を追放せらるるの間奥州の方へ流浪せしめ畢んぬ云云、早く在所を尋ね搜 おほ かね つか まか つしま おいやるべ おわ ざいしよ たず

して仰せ下さるるの旨に任せ対馬の嶋に追遣可きなり、此の旨を以て言上 おほ かね つか まか つしま おいやるべ おわ もつ こんじよう

せしむ可きの状鎌倉殿の仰せに依つて執達件の如し。 おほ かね つか まか つしま おいやるべ おわ したつくだん ごと

嘉禄三年十月十五日 かろく

武蔵守在り判 むさしのかみ

相模守在り判 さがみのかみ

掃部助殿 かものすけ

修理亮殿 しゅりやうのすけ

専修念仏の事、停廢の宣下重 疊の上儼かに尚興行するの条・更に公家 せんしゅうねんぶつ ていはい せんげちようじよう ひそ なおこうぎよう く げ

専修念仏の事、停廢の宣下重 疊の上儼かに尚興行するの条・更に公家 せんしゅうねんぶつ ていはい せんげちようじよう ひそ なおこうぎよう く げ

専修念仏の事、停廢の宣下重 疊の上儼かに尚興行するの条・更に公家 せんしゅうねんぶつ ていはい せんげちようじよう ひそ なおこうぎよう く げ

専修念仏の事、停廢の宣下重 疊の上儼かに尚興行するの条・更に公家 せんしゅうねんぶつ ていはい せんげちようじよう ひそ なおこうぎよう く げ

専修念仏の事、停廢の宣下重 疊の上儼かに尚興行するの条・更に公家 せんしゅうねんぶつ ていはい せんげちようじよう ひそ なおこうぎよう く げ

専修念仏の事、停廢の宣下重 疊の上儼かに尚興行するの条・更に公家 せんしゅうねんぶつ ていはい せんげちようじよう ひそ なおこうぎよう く げ

専修念仏の事、停廢の宣下重 疊の上儼かに尚興行するの条・更に公家 せんしゅうねんぶつ ていはい せんげちようじよう ひそ なおこうぎよう く げ

専修念仏の事、停廢の宣下重 疊の上儼かに尚興行するの条・更に公家 せんしゅうねんぶつ ていはい せんげちようじよう ひそ なおこうぎよう く げ

専修念仏の事、停廢の宣下重 疊の上儼かに尚興行するの条・更に公家 せんしゅうねんぶつ ていはい せんげちようじよう ひそ なおこうぎよう く げ

の知しめす所にあらず偏に有司の怠慢たり早く先符に任せて禁遏せらるべし、其の上衆徒の蜂起に於ては宜く制止を加えしめ給うべし天氣に依つて言上件の如し、信盛・頓首恐惶謹言

かろく

嘉禄三年六月二十九日

左衛門権佐信盛奉

進上 天台座主大僧正御房政所

右弁官下す

延暦寺

早く僧の隆寛・幸西・空阿弥陀仏の度縁を取り進すべき事の書・
権大納言源朝臣雅親・勅を宣奉するに件の隆寛等の坐せらるること
配流宜く彼の寺に仰せて度縁を取り進せしむ可し、者れば宜く承知して宣
に依つて之を行ふべし違失ある可からず。

かろく

嘉禄三年七月六日

左太史小槻宿禰在り判
左少弁藤原朝臣在り判

大政官の符・五畿内の諸国司まさに宜く專修念仏の興行を停廃し早く隆寛・幸西・空阿弥陀仏等の遺弟の留まる処に禁法を犯す所の輩を捉え搦むべきの事。

弘仁聖代の格条・眼に在り左大臣・勅を宣奉し宜く五畿・七道に課せて興行の道を停廃し違犯の身を捉え搦むべし、者れば諸国司宜く承知して宣に依つて之を行え符・到らば奉行を致せ。

嘉祿三年七月十七日

修理右宮城使正四位下行右中弁藤原朝臣

修理東大寺大仏長官正五位下左大史兼備前権介小槻宿禰

專修念仏興行の輩停止す可きの由五畿・七道に宣下せられ候い畢ん

ぬ、且つは御存知有る可く候、者れば綸言此の如し之を悉にせよ、頼隆・

誠恐頓首謹言。

嘉祿三年七月十三日

右中弁頼隆在り判

進上

てんだいざす　そうじようこほうまんどころ
天台座主大僧正御房政所

りゅうかん

隆寛・対馬の国に改めらる可きの由宣下せられ畢んぬ、其の由御下知

あべ　むねおお

有る可きの旨仰せ下さる所に候なり此の趣を以て申し入れしめ給う可きの

くだん　こと

状・件の如し。

ちゅうなごんりっしごほう

中納言律師御房

りゅうかんりっしせんしゅう

隆寛律師專修の張本たるに依つて山門より訴え申すの間、陸奥に配流

おわ

せられ畢んぬ而るに衆徒尚申す旨有り仍つて配所を改めて対馬の嶋に追ひ

や　とうじとうく

遣らる可きなり、当時東国の辺に経回すと云云不日に彼の島に追ひ遣らる

べ　かんとう　もう

可きの由関東に申さる可し、者れば殿下の御気色に依つて執達件の如し。

かるく

嘉禄三年九月二十六日

さんぎ

参議在り判

しゅりごんのすけ

修理権亮殿

うちゅうべんよりたか

右中弁頼隆在り判

専修念仏の事、京畿七道に仰せて永く停止せらる可きの由先日宣下せられ候い畢んぬ、而るに諸国に尚其の聞え有りと云云、宣旨の状を守りて沙汰致す可きの由・地頭守護所等に仰付けらる可きの由・山門訴え申し候御下知有る可く候、此の旨を以て沙汰申さしめ給う可きの由・殿下の御氣色候所なり、仍つて執達件の如し。

嘉禄三年十月十日

参議在り判

武蔵守殿

嵯峨に下されし院宣

近頃破戒不善の輩嚴禁に拘わらず猶専修念仏を企つるの由其の聞え有り、而るに先師法眼存日の時・清凉寺の辺に多く以て止住すと云云、遺跡を相繼ぎて若し同意有らば彼の寺の執務縦い相承の理を帶すとも免許の義有る可からざるなり、早く此の旨を存して禁止せしめ給う可し院宣此くの

如し仍よつて執達しつたつくだん件の如ごとし。

建保七年二月四日

按察あぜち使在り判

治部卿律師御房

謹つつしんで請こうう 院宣一紙

右当寺四至の内に破戒不善の専修念仏の輩法に任せて制止ある可く候
更に以て芳心有る可からず候、若し猶寺家の力に拘わらずんば事の由を申し
上ぐ可く候、謹つつしんで請こうくる所件の如ごとし。

建保七年閏二月四日

権律師良暁

左弁官下す 綱所

まさに諸寺の執務人に下知して専修念仏の輩を糾断せしむべき事。

右左大臣勅を宣奉す、専修念仏の行は諸宗衰微の基なり、仍よつて去る

建永二年の春・嚴制五箇条の裁許を以てせる官符の施行先に畢おわぬ、傾く

者は進んでは憲章を恐れず退いては仏勅を憚らず・或は梵宇を占め
ある じゅうく あるいは けんしょう しりぞ ぶつちよく はば ある ほんじ
・或は聚洛に交わる破戒の沙門党を道場に結んで偏に今按の佯を以てす
ある じゅうく はかい しゃもん どうじょう ひとえ きんあんのいつわり もつ
ぶつこう とな ため みだ じゃおん な まさ ところか ほういつ
仏号を唱えんが為に妄りに邪音を作し將に蕩して人心を放逸にせんとす、
けんもんまんざ ところ けんぜん いえど じゅうばくはそう るそく
見聞満座の処には賢善の形を現すと雖も寂寞破☆の夕には流俗の睡りに異
こ すなわ しゅうぜん あら らんぎよう かんぼう くわだ あにぶつだ
ならず是れ則ち発心の修善に非ず濫行の奸謀を企つるなり豈仏陀の元意
しぎよう しい

僧徒の所行と謂わんや。

宜しく有司に仰せて慥に糾断せしむべし若し猶違犯の者は罪科の趣き一
よろ ゆうし おお たしかきゅうだん も なおいはん つみとが おもむ
に先符に同じ但し道心修行の人をして以て仏法違越の者に濫ぜしむること
せんぶ ただ しゅぎよう もつ ぶつぽういおう らん
莫れ更に弥陀の教説を忽せにするに非ず只釈氏の法文を全からしめんと
なか みだ せふ しよ しつむ やからもんち すべ
り、兼ては又諸寺執務の人五保監行の輩聞知して言わずんば与同罪會つて
かね しよ しつむ やからもんち
寛宥せざれ、者れば宜しく承知して宣旨に依つて之を行ふべし。
かんゆう ていれ よろ しやうち せんじ よ これ

けんぼ
建保七年閏二月八日

おつきすくね
太史小槻宿禰在り判

謹つつしんで請こころく 綱こうしよ所

宣せんじ旨一通載のせらるるはまさしよに諸寺の執務人しつむにんに下知げちして專修念仏せんしゅうねんぶつの輩やからを
糾断きゆうだんせしむべき事。右宣旨せんじの状まかに任せ諸寺しよに告あげ触べる可べきの状つつし謹つつしんで
請こころくる所件くだんごとの如ごとし。

けんぼ 建保七年閏二月二十二日これ之行をう。

頃年けいねん以来いらい無慚むざんの徒ふほう・不法ふほうの侶れい・如如かいぎようの戒行かいぎようを守らず処処げんせいの嚴制げんせいを恐れず
恣しに念仏ねんぶつの別宗べつしゅうを建て猥みだりりに衆僧しゅうそうの勤学きんがくを謗ぼうず、しかのみならず内うちには
妄執もうしゅうを凝こらして仏意ぶつゐに乖そむき外そとには哀音あいおんを引ひいて人心じんしんを蕩とうかす遠近併おんこんしかしながら
專修せんしゅうの一行いっぎやうに歸かへりし緇素しそ殆ほとんどんど顯密けんみつの両教りやうきやうを偏ひとへす仏法ぶつぽうの衰滅すゐめつ而しかも斯このやうに由よる自
由かんあくの奸惡かんあく・誠まことに禁こころじても余あまり有あり。

是これを以もつて教雅法師きやうがふしに於おいては本源ほんげんを温たずねて遠流おんるし此このの外ほか・同行どうぎやうの余党よたう等たち慥たしか
かに其その之行を帝土ていどの中に停廢ていはいし悉ことごとく其そのの身みを洛陽らくやうの外ほかに追つい卻きやくせよ但ただし・或ある

は自行の為・或は化他の為に至心専念如法修行の輩に於ては制の限りに在らず。

天福二年六月晦日

藤原中納言権弁奉る

天福二年文暦と改む四条院の御宇後堀河院の太子なり、武蔵前司入道殿の御時。

祇園の執行に仰せ付けらるる山門の下知状。

大衆の僉議に云く専修念仏者天下に繁昌す是れ則ち近年山門無沙汰の

致す所なり、件の族は八宗仏法の怨敵なり円頓行者の順魔なり、先ず

京都往返の類・在家称名の所に於ては例に任せ犬神人に仰せて宜しく

停止せしむべし云云、者れば大衆僉議の旨斯くの如し早く先例に任せ

犬神人等に仰せ含めて専修念仏者を停止せしめ給う可し云云、恐恐謹言。

延応二年五月十四日 公文勾当審賢

四条院の御宇武蔵前司殿の御時。 謹上 祇園の執行法眼御房

逐つて申す、去る夜・大衆僉議して先ず此の異名に於て殊に犬神人に付け
て之を責む可きの由仰せ含めぬ仍つて実名之を獻ず、専修念仏の張本の
事・唯仏・鏡仏・智願・定真・円真・正阿弥陀仏・名阿弥陀仏・善慧・
道弁・真如堂狼藉の張本なり已上、唐橋油小路並に八条大御堂六波羅の
総門の向いの堂・已上・当時興行の所なり。

延暦寺 別院 雲居寺 早く一向専修の悪行を禁断す可き事

右頃年以來、愚蒙の結党・☆☆の会衆を名けて専修と曰い☆☆閭に旁ねし
心に一分の慧解無く口に衆罪の悪言を吐き言を一念十声の悲願に寄せて
敢て三毒五蓋の重悪を憚からず盲暝の輩是非を弁えず唯情に順ずるを
以て多く愚誨に信伏す、持戒修善の人を笑うて之を雜行と号し鎮国護王
の教を謗りて之を魔業と称す諸善を擯棄し衆悪を選択し罪を山岳に積み
報を泥梨に招く毒氣深く入つて禁じても改むること無く偏に欲樂を嗜んで

みずか
自ら止むこと能わず、猶蒼蠅の唾の為に黏さるるが如く、何ぞ狂狗の雷
を逐うて走るに異ならん、恣まに三寸の舌を振いて衆生の眼目を抜き五
尺の身を養わんが為に諸仏の肝心を滅す、併ら只仏法の怨魔と為り専ら
緇門の妖怪と謂う可し。

是を以て邪師存生の昔は永く罪条に沈み、滅後の今は亦屍骨を剝らる
其の徒・住蓮と安樂とは死を原野に賜い成覺と薩生とは刑を遠流に蒙り
ぬ此の現罰を以て其の後報を察す可し、方に今且は釈尊の遺法を護らんが
為且は衆生の塗炭を救わんが為に宜く諸国の末寺・莊園・神人・寄人等に
仰せて重ねて彼の邪法を禁断すべし縦い片時と雖も彼の凶類を寄宿せしむ
可からず縦い一言と雖も其の邪説を聴受す可からず、若し又山門所部の内
に専修興行の輩有らば永く重科に処して寛宥有ること勿れ、者れば三千
衆徒の僉議に依つて仰す所・件の如し。

延応二年
えんおう

山門申状
さんもん

きんらい
近來二つの妖怪有り人の耳目を驚かす所謂達磨の邪法と念仏の哀音とな
り。

けんみつ ほうもん
顕密の法門に属せず王臣の祈請を致さず誠に端拱にして世を蔑り暗証に
して人を軽んず小生の淺識を崇めて見性成仏の仁と為し耆年の宿老を
笑うて螻蟻☆☆の類に擬す論談を致さざれば才の長短を表さず決 択に交
らざれば智の賢愚を測らず、唯牆 壁に向うて独り道を得たりと謂い三依
纔に紆い七慢専ら盛なり長く舒卷を抛つ附仏法の外道吾が朝に既に出現
す、妖怪の至り慎まずんばあるべからず何ぞ強ちに亡国流浪の僧を撰んで
伽藍伝持の主と為さんや。

ごしきもく いわ うだいしょうけいご
御式目に云く右大将家以後代代の將軍並に二位殿の御時に於ての事一向

に御沙汰を改ること無きか、追加の状に云く嘉禄元年より仁治に至るまで

御成敗の事正嘉二年二月十日 評定、右自今以後に於ては三代の將軍並に

二位家の御成敗に準じて御沙汰を改むるに及ばずと云云。

念仏停廢の事、宣旨御教書の趣き南都北嶺の状粗此くの如し、日蓮

・弱為りと雖も勅宣並に御下知の旨を守りて偏に南北明哲の賢懷を述べ猶

此の義を棄置せらるるに非ずんば綸言徳政を故らる可きか將た御下知を

仰せらるる可きか、称名念仏の行者又賞翫せらるると雖も既に違勅の者

なり関東の御勘気未だ御免許をも蒙らず何ぞ恣に関東の近住を企てんや、

就中武蔵前司殿の御下知に至りては三代の將軍並に二位家の御沙汰に

準じて御沙汰を改むること有る可からずと云云。

然るに今、念仏者何の威勢に依つてか宣旨に背くのに非ず御下知を輕蔑

して重ねて称名念仏の専修を結構せん人に依つて事異なりと云う此の謂

在るか、何ぞ恣に華夷縦横の経回を致さんや。

かんもん
勘文篇

ねんぶつ 念仏者追放宣旨御教書の事

◆九 念仏無間地獄抄

けんちよう 建長七年

三十四歳御作

97P

ねんぶつ 念仏は無間地獄の業因なり法華経は成仏得道の直路なり早く浄土宗を捨

ほけきよう 法華経を持ち生死を離れ菩提を得可き事

たも 法華経第二譬喩品に云く「若人

信ぜずして此の経を毀謗せば、即ち一切世間の仏種を断ぜん、其の人命終

あびこく して阿鼻獄に入らん、一劫を具足して劫尽きなば更生れん、是くの如く展転

むしゆこく して無数劫に至らん」云云此の文の如くんば方便の念仏を信じて真実の法華

むげんじこく を信ぜざらん者は無間地獄に墮つ可きなり念仏者云く我等が機は法華経に

およ 及ばざる間・信ぜざる計りなり毀謗する事はなし何の科に地獄に墮つ可き

ほつけしゆういわ か、法華宗云く信ぜざる条は承伏なるか、次に毀謗と云うは即不信なり信

みなもとくどく は道の源 功德の母と云へり菩薩の五十二位には十信を本と為し十信の

ほさつ 菩薩の五十二位には十信を本と為し十信の

じゆっしん 十信の

じゆっしん 十信の

じゆっしん 十信の

じゆっしん 十信の

じゆっしん 十信の

じゆっしん 十信の

じゆっしん 十信の

位には信心しんじんを始なと為し諸の悪業煩惱もんごうぼんのうは不信ふしんを本なと為す云云、然ひゆば譬喻品ぽいよひんの
十四誹謗ひほうも不信ふしんを以て体と為せり今の念仏門ねんぶつは不信ふしんと云いい誹謗ひほうと云いい争いかでか
入阿鼻獄にゅうあびごくの句のがを遁のがれんや、其の上浄土宗じやうどには現在げんざいの父ちちたる教主きやうしゆ釈尊しやくそんを捨
て他人たにんたる阿弥陀あみた仏ぶつを信しんずる故ゆえに五逆罪ごぎやくざいの咎とがに依よつて必かならずず無間むげん・大城だいじやうに
墮おつ可べきなり、經に今・此の三界さんがいは皆みな是我有かいてがうなりと説とき給たまうは主君しゆくんの義ぎな
り其その中の衆生しゆじやう悉ことごとく是わがこれ吾子ふしと云いうは父子ふしの義ぎなり而しかに今・此の処ところは
諸の患難もんなん多おほし、唯我一人ただわれひとり能よくく救護くごを為なすと説とき給たまうは師匠ししやうの義ぎなり而しかして
釈尊しやくそん付属ふぞくの文ぶんに此法華經ほけきやうをば付属ふぞく有あ在あと云云何れの機きか漏もる可べき誰人だれびとか信
ぜざらんや、而しかに浄土宗じやうどは主師親しゆししんたる教主きやうしゆ釈尊しやくそんの付属ふぞくに背そむき他人たにんたる
西方極樂世界さいほうごくらくせかいの阿弥陀あみた如來にょらいを憑たのむ故ゆゑに主そむに背そむけり八逆罪はちぎやくざいの凶徒きやうとなり違勅いちよくの
咎とが遁すなわれ難ちやうてきし即いかでち朝敵とがなり争とがか咎無とがけんや、次に父ちちの釈尊しやくそんを捨すてつる故ゆゑに
五逆罪ごぎやくざいの者ものなり豈無間地獄あにむげんじごくに墮おちざる可べけんや、次に師匠ししやうの釈尊しやくそんに背そむく

ゆえ 故に七逆罪ぎやくざいの人なり争いかでか悪道あくどうに墮おちざらんや此ことの如きようしゆく教主しやくそん釈尊しやくそんは
しやばせかい 娑婆世界しやばせかいの衆生しゆじようには主師親しゆししんの三徳さんとくを備まて大恩たいてんの仏ぼつにて御坐まします此ことの仏ぼつを捨て
たほう 他方たほうの仏ぼつを信じみだやくし弥陀だいた薬師やくし・大日等だいにちを憑たのみ奉たてまつる人は二十逆罪ぎやくざいの咎とがに依よつて
あくどう 悪道あくどうに墮おつ可べきなり、浄土じやうどの三部經さんぶきやうとは釈尊しやくそん一代五時いちだいごじの説教せつきやうの内第三
ほうとうぶ 方等部ほうとうぶの内より出いでたり、此ことの四卷しやくそん・三部の經ほんいは全く釈尊あの本意ほんいに非あらず
さんぜしよぶつしゆつせ 三世諸仏さんぜしよぶつしゆつせ出世ほんかいの本懷あらにも非ただしばらしゆじようゆういん衆生ほうべん誘引たの方便たなり譬たとえば塔たをくむに
あししろ 足代あししろをゆふが如ことし念仏ねんぶつは足代あししろなり法華ほうけは宝塔ほうとうなり法華ほうけを説給ほうべんまでの方便ほうべんな
ほうけ 法華ほうけの塔たを説給ねんぶつて後あししろは念仏ねんぶつの足代あししろをば切り捨しべきなり、然しかるに法華經ほうけきやうを
と 説たまき給ねんぶつうて後念仏しゆうじやくに執し著しやくするは塔あししろをくみ立て後足代じやくに著しやくして塔あししろを用じやくざる
こと 人の如ことし豈違背あにいはいの咎とが無なからんや、然しかれば法華ほうけの序分じよぶん・無量義經むりやうぎきやうには
よんじゆうよねんみけんしんじつ 四十余年よんじゆうよねんみけんしんじつ未顯真実ねんぶつと説給ほうもんて念仏うちやぶの法門たを打破たまり給しやうしゆうう、正宗しやうしゆう法華經ほうけきやうには
しょうじきしやほうべん 正直捨方便しょうじきしやほうべん・但説無上道たんせつむじやうどうと宣のべべ給ねんぶつて念仏三昧ねんぶつさんまいを捨たまて給たまう之よに依よて阿弥陀經あみだ

の対告衆長老・舍利弗尊者・阿弥陀經を打捨て法華經に帰伏して華光
如来と成り畢んぬ、四十八願付属の阿難尊者も浄土の三部經を抛て法華經
を受持して山海慧自在通王仏と成り畢んぬ、阿弥陀經の長老舍利弗は千二
百の羅漢の中に智慧第一の上首の大声聞・閻浮提第一の大智者なり肩を
並ぶる人なし、阿難尊者は多聞第一の極聖・釈尊一代の説法を空に誦せ
し広学の智人なり、かかる極位の大阿羅漢すら尚往生成仏の望を遂げず
仏在世の祖師此くの如し祖師の跡を踏む可くば三部經を抛ちて法華經を信
じ無上菩提を成ず可き者なり仏の滅後に於ては祖師先徳多しと雖も大唐
楊州の善導和尚にまさる人なし唐土第一の高祖なり云云、始は楊州の
明勝と云える聖人を師と為して法華經を習たりしが道綽禪師に値つて
浄土宗に移り法華經を捨て念仏者と成れり一代聖教に於て聖道・浄土の
二門を立てたり法華經等の諸大乘經をば聖道門と名く自力の行と嫌えり

しょうどうもん

聖道門しょうどうもんを修行しゅぎようして成仏じやうぶつを願わん人は百人にまれに一人・二人千人にまれ

とくどう

に三人五人得道とくどうする者や有んずらん乃至千人に一人も得道なき事も有るべ

かんきよう

さんぶきよう

じやうどもん

じやうどもん

しゅぎよう

たりきほんがん

たの

し観経等の三部経を浄土門と名け此の浄土門を修行して他力本願を憑ん

おうじよう

じゅつそくじゅつしよう

ひやくそくひやくしよう

で往生を願わん者は十即十生・百即百生とて十人は十人百人は百人

けつじよう おうじよう

べ

決定 往生す可しとすすめたり、

かんむりようじゅきよう

しよえ

な

観無量寿經を所依と為して四卷の疏

をつくげんぎ

を作る玄義分・序分義・定善義・散善義是なり、其の外・法事讃上下・

はんじゅさん

おうじようれいさん

かんねんほうもん

これら

じよ

そ

ほうじさんじようげ

般舟讃・往生礼讃・観念法門經此等を九帖の疏と名けたり、善導念仏し

たま

給へば口より仏の出給うと云つて 称名念仏一遍を作すに三体づつ口より

出給けりと伝へたり、

まいにち

しよさ

あみだ

ねんぶつ

じゅうまん

これ

欠く事なし、諸の戒品を持つて一戒も破らず三依は身の皮の如く脱ぐ事な

はちびよう

りようげん

しよこ

いっかい

さんえ

こと

く鉢 ☆は 両眼の如く身を離さず 精進潔斎す女人を見ずして 一期生不眠三

十年なりと自歎す、凡そ善導の行儀法則を云へば酒肉五辛を制止して口に

じたん

およ

ぜんどう

ぎようぎほうそく

しよにくごしん

せいし

に

十年なりと自歎す、凡そ善導の行儀法則を云へば酒肉五辛を制止して口に

十年なりと自歎す、凡そ善導の行儀法則を云へば酒肉五辛を制止して口に

齧かまず手に取らず未來みらいの諸もろもろの比丘びくも是かくくの如ごとく行なずべしと定めたり、一度ひとたび
酒を飲のみ肉を食くい五辛ごしん等を食くい念仏ねんぶつ申もうさん者は三百万劫じこくが間地獄じこくに墮おす
可べしと禁げんしめたり、善導ぜんどうが行儀法則ぎようほうそくは本律ほんりつの制すに過おぎたり、法然房ほうねんぼうが起請文きしょうぶん
にも書載かきのせたり、一天四海いつてんしかい善導ぜんどう和尚ごうを以もつて善知識ぜんちしきと仰あおぎ貴賤きせん上下じやうげ皆みな悉ことごとく念仏ねんぶつ
者と成なれり。但ただし一代いちだい聖教しょうきやうの大王だいおう・三世諸仏さんぜしよぶつの本懷ほんかいたる法華ほっけの文ぶんには
若もし法を聞きこくこと有あらん者は無む一不成いつふじやうぶつ仏とと説たまき給たまへり、善導ぜんどうは法華經ほけきやうを行
ぜん者は千人とくどうに一人も得道あの者有ある可べからずと定いづれむ何れの説いづれに付べく可べきか、
無量義經むりやうぎきやうには念仏ねんぶつをば末顯真実みけんしんじつとて実あらに非あらずと言ほけきやうふ法華經しやうぎきしやほうべんには正直捨方便しやうじきしやほうべん
・但説無上道たんせつむじやうどうとて正直しやうじきに念仏ねんぶつの觀經かんきやうを捨むじやうどうて無上道ほけきやうの法華經ほけきやうを持べつ可べしと
言りやうせつすいかふ此いすれの兩説りやうせつすいか水火いすれなり何れの辺べに付べく可べきや善導ぜんどうが言ほけきやうを信ほけきやうじて法華經ほけきやうを捨
つ可べきか法華經ほけきやうを信ぜんどうじて善導ぜんどうの義いを捨べつ可べきか如何いかん、夫それ一切衆生いっさいしゆじやう・
皆かいじやうぶつどう成ほけきやう仏道ほけきやうの法華經ほけきやう、一ほけきやうたび法華經ほけきやうを聞けつじやうかば決定けつじやうして菩提ぼだいを成じやうぜんの妙典みやうてん

善導ぜんどうが一言に破われて千中無一虚妄せんちゅうむいつこもうの法と成り、無得道教むとくどうきようと云はれ平等大慧びやうどうだいえ
の巨益きよくは虚妄こもうと成り多宝如来たほうによらいの皆是真実かいぜんじつの証しょうみよう 明しょうの御言妄語おんことばもうごと成るか
じゅつほうによらいじょうぶつ じょうしほんてん こうちようぜつ
十方諸仏じゅうしつの上至梵天じょうしほんてんの広長舌こうちようぜつも破られ給ぬ、三世諸仏さんぜしよぶつの大怨敵おんてきと為り
じゅつほうによらいじょうぶつ しゆし うしな ほうほう とがはなはだ ざいほう
十方如来成仏じゅうしつの種子しゆしを失う大謗法ほうほうの科とが甚重しやうじやうし大罪報ざいほうの至り無間むげん・大城だいじやう
の業因ごういんなり、之に依よつて忽たちまちに物狂ものぐるいにや成しやうじけん所居しやうじの寺の前の柳の木に登りて自ら頸みづかをくくりて身を投げ死おわし畢じやほうぬ邪法じやほうのたたり踵きびすを回めぐらさず冥罰みやうばち
愛こゝに見あらわれたり、最後臨終さいごりんじゅうの言いわに云く此の身厭いとう可べし諸苦しよくに責しめられ暫しばらくも
休息きゅうそく無しと即すなわち所居しやうじの寺の前の柳の木に登り西に向い願いのちつて日いわく仏の威神いしん
もつ以もて我を取り観音かんのん・勢至せいし来きつて又我を扶たすけたまへと唱となえ畢おわつて青柳せいりゅうの上よ
り身を投なげて自絶じぜつす云云、三月十七日いくびをくくりて飛とたりける程ほどにくく
り縄なや切れけん柳の枝えだや折かれけん大旱魃かんばつの堅土かたつちの上に落おて腰骨こしほねを打折うちおりて、
二十四日に至いたるまで七日七夜の間・悶絶もんぜつ躋地びやくちしておめきさけびて死おわし畢おわん

ぬ、さればにや是程の高祖をば往生の人の内には入れざるらんと覺ゆ此事このこと

全く余宗の誹謗に非ず法華宗の妄語にも非ず善導和尚自筆の類聚伝の文なよしゅう ひほう あら ほつけしゅう もうご あら ぜんどうわじょうじひつ るいじゆでん

り云云、而も流を酌む者は其の源を忘れず法を行ずる者は其の師の跡をしか く そ みなもと

踏む可し云云浄土門に入つて師の跡を踏む可くば臨終の時善導が如く自害べ じょうどもん あと りんじゅう ぜんどう ごと じがい

有る可きか、念仏者として頸をくくらずんば師に背く咎有る可きか如何。あ べ なんぶつ そむ とが あ べ いかん。

日本国には法然上人浄土宗の高祖なり十七歳にして一切経を習極めにほんこく ほうねんしょうにんじょうど いっさいきょう ならいきわ

天台六十巻に渡り、八宗を兼学して一代聖教の大意を得たりとののしり、てんだい わた はっしゅう けんがく いちだいしやうきやう たいい いっさいきやう ならいきわ

てんがむそう ちしやさんもんだいいち がくしやう 然るに天魔や其の身に入にけんてんがむそう ちしやさんもんだいいち がくしやう しか てんま そ

天下無雙の智者山門第一の学匠なり云云、こうがくたもん ちえ むなし しよしゅう ちやうじやう てんだいしゅう うちす はっしゅう

広学多聞の智慧も空く諸宗の頂上たる天台宗を打捨て八宗の外なるなんぶつ ほっし だいいん くぎやう ひやくせい

念仏者の法師と成りにけり大臣・公卿の身を捨て民百姓と成るが如し、せんちやくしゅう もう だいじん くぎやう ひやくせい

選択集と申す文を作つて一代五時の聖教を難破し念仏往生の一門を立せんちやくしゅう もう いちだい しやうきやう なんは なんぶつおうじょう

てたり、仏説法滅尽經に云く五濁惡世には魔道興盛し魔沙門と作つて我ぶつせつ ほうめつじんきやう いわ ごじよくあくせ まどうこうじょう しゃもん

が道を壊乱し悪人転た海中の沙の如く善人甚だ少くして若は一人若は

二人ならん云云即ち法然房是なりと山門の状に書かれたり、我が浄土宗の

専修の一行をば五種の

正行と定め権実・顕密の諸大乘をば五種の難行

と簡て浄土門の正行をば善導の如く決定往生と勧めたり、観經等の

浄土の三部經の外・一代顕密の諸大乘經・大般若經を始と為して終り

法常住經に至るまで貞元錄に載する所の六百三十七部・二千八百八十

三卷は皆是千中無一の徒物なり永く得道有る可からず、難行・聖道門

をば門を閉じ之を抛ち之を闇き之を捨て・浄土門に入る可しと勧めたり、

一天の貴賤首を傾け四海の道俗掌を合せ・或は勢至の化身と号し・或は

善導の再誕と仰ぎ一天四海になびかぬ木草なし、智慧は日月の如く世間を照

して肩を並ぶる人なし名徳は一天に充ちて善導に超え曇鸞・道綽にも勝れ

たり貴賤・上下・皆選択集を以て仏法の明鏡なりと思ひ道俗・男女悉く

ほうねんぼう　も　つ　しょうしん　みだ　あお　しか　いえど　きょうけいくよう
法然房を以て生身の弥陀と仰ぐ、然りと雖も恭敬供養する者は愚癡迷惑
ざいぞく　きえかつこう　む　ちほういつ　じゃけん　やから　ごんしゃ　おい
の在俗の人・帰依渴仰する人は無智放逸の邪見の輩なり、権者に於ては
これ　もち　けんてつ　したが　を
之を用いず賢哲又之に随うこと無し。

しか　とがのを　みようえぼう　てんがむそう　ちじん　こうがくたもん　めいししょう
然る間・斗賀尾の明慧房は天下無雙の智人・広学多聞の明匠なり、

さいじやりん　せんちやく　じゃぎ　は　みいでら　ちようり　じついん　そうじよう　きたい
摧邪輪三巻を造つて選択の邪義を破し、三井寺の長吏・実胤大僧正は希代

がくしや　めいよ　さいじん　じようど　うたがい
の学者・名譽の才人なり浄土決疑集三巻を作つて専修の悪行を難じ、

ひえいざん　じゅうろ　ぶつちようぼう　りゅうしんほうきよう　てんがむそう　がくしょう　さんもんたんだい　とつりよう
比叡山の住侶・仏頂房・隆真法橋は天下無雙の学匠・山門探題の棟梁

だんせんたくじようげ　ほうねんぼう　じゃぎ　せ　しかのみならず南都・山門
なり弾選択上下を造つて法然房が邪義を責む、しかのみならず南都・山門

みい　たびたびそうもん　へ　ほうねん　せんちやく　じゃぎほうく　もとな　むね　もう
・三井より度度奏聞を経て法然が選択の邪義亡国の基為るの旨訴え申すに

よ　つちみかどいん　ぎよう　しょうげんがんねん　じようじゅん　せんしゅうねんぶつ
依つて人王八十三代・土御門院の御宇・承元元年二月上旬に専修念仏

ちようほん　あんらく　じゅうれん　めしとら　たちま　こうべ　は　おわ　ほうねんぼう
の張本たる安楽・住蓮等を捕縛え忽ちに頭を刎ねられ畢んぬ、法然房

げんくう　おんる　じゅうか　おわ　そのとき　せつしやうさだいじんいえざね　もう　このえどの
源空は遠流の重科に沈み畢んぬ、其の時・摂政左大臣家実と申すは近衛殿

の御事なり此の事は皇代記に見えたり誰か之を疑わん。

しかのみならず法然房死去の後も又重ねて山門より訴え申すに依つて人

皇八十五代・後堀河院の御宇嘉禄三年京都六箇所の本所より法然房が

せんちやくしゅう

選択集・並に印版を責め出して大講堂の庭に取り上げて三千の大衆会合

さんぜ

ぶつおん ほう たてまつ こ しょうしつ ほうねんぼう ぼしよ

し三世の仏恩を報じ奉るなりとて之れを焼失せしめ法然房が墓所をば

つのめそう おお

犬神人に仰せ付けて之れを掘り出して鴨河に流され畢んぬ。

せんじ

いんせん かんぼくでんか みきようしよ ごき しちどう

宣旨・院宣・関白殿下の御教書を五畿・七道に成し下されて、六十六箇

ねんぶつ ぎようじや

国に念仏の行者・一日片時も之れを置く可からず対馬の島に追い遣る可き

むねしよく

こくし おお おわ これら しだい ろくはら ちゅうしんじよう

の旨諸国の国司に仰せ付けられ畢んぬ、此等の次第・両六波羅の注進状

かんとうさがみのかみ

うけぶみ めいきよう

・関東相模守の請文等明鏡なる者なり。

かるく

嘉禄三年七月五日に山門に下さるる宣旨に云く。

せんしゅうねんぶつ

しよしゅうすいび せんもん いわ

専修念仏の行は諸宗衰微の基なり、茲に因つて代代の御門・頻に嚴旨

を降され殊に禁遏を加うる所なり、而るを頃年又興行を構へ山門訴え申さ

しむるの間・先符に任せて仰せ下さること先に畢んぬ、其の上且は仏法

の陵夷を禁ぜんが為・且は衆徒の鬱訴を優に依つて其の根本と謂うを以て

隆寛・成覚・空阿弥陀仏等其の身を遠流に処せしむ可きの由・不日に

宣下せらるる所なり、余党に於ては其の在所を尋ね搜して帝土を追却す

可きなり、此の上は早く愁訴を慰じて蜂起を停止す可きの旨・時刻を回さ

ず御下知有る可く候、者・綸言此の如し頼隆・誠恐・頓首謹言。

七月五日酉刻

右中弁頼隆奉わる

進上天台座主大僧正御房政所同七月十三日山門に下さるる宣旨に

云く。

専修念仏興行の輩を停止す可きの由・五畿・七道に宣下せられ畢ん

ぬ、且御存知有る可く候綸言此の如く之を悉にす・頼隆・誠恐・頓首

きんげん
謹言。

七月十三日

うちゅうべんよりたか
右中弁頼隆奉わる

しんじょうてんだいざす
進上天台座主大僧正御房政所殿下御教書

せんしゅうねんぶつ
専修念仏の事、
ごき しちどう おお
五畿・七道に仰せて永く停止せらる可きの由・先日宣下

おわ
せられ候い畢んぬ、
しか しよく なおそ
而るを諸国に尚其の聞え有り云云、宣旨の状を守つて

さたいた べ
沙汰致す可きの由・地頭守護所等に仰せ付けらる可きの旨・山門訴え申し

ごそんじあ
候、御存知有る可く候、此の旨を以て沙汰申さしめ給う可き由・殿下の

みけしきそうろうところ
御気色 候所 なり、
よつ したつくだん こと
仍て執達件の如し。

かるく
嘉禄三年十月十日

さんぎのりすけ
参議範輔在り判

むさしのかみ
武蔵守殿

えいそんけんじや
永尊賢者の状に云く、此の十一日に大衆僉議して云く法然房所造の選択

ほうほう
は謗法の書なり天下之を止め置く可からず、
てんがこれ こと
仍て在在所所の所持並に其の

印板を大講堂に取り上げて三世の仏恩を報ぜんが為に之を焼失せしめ畢んぬ、又云く法然上人の墓所をば感神院の犬神人に仰せ付けて破却せしめ畢んぬ。

嘉禄三年十月十五日・隆真法橋申して云く専修念佛は亡国の本為る可き旨文理之有りと。

山門より雲居寺に送る状に云く、邪師源空・存生の間には永く罪条に沈み滅後の今は且死骨を刎ねられ、其の邪類・住蓮・安樂・死を原野に賜い成覚・薩生は刑を遠流に蒙る殆ど此の現罰を以て其の後・報を察す可し云云。

嗚呼世法の方を云えば違勅の者と成り帝王の勅勘を蒙り今に御赦免の天氣之れ無し心有る臣下万民・誰人か彼の宗に於て布施供養を展ぶ可きや、佛法の方を云えば正法誹謗の罪人爲り無間地獄の業類なり何れの輩か

念仏門ねんぶつに於おいて恭敬きやうけい礼拝らいはいを致いたす可べきや、庶幾こいねがわくば末代まつだい今の浄土宗じやうと・仏在世ざいせ
の祖師そし・舍利弗しゃりほつ・阿難等あなんの如ごとく浄土宗じやうとを抛なげうつて法華經ほけきやうを持たもち菩提ぼだいの素懷そかいを
遂とぐ可べき者か。

日蓮 花押かおう

◆一〇 当世念仏者無間地獄事とうせねんぶつ むげんじごく

104P

安房あわの国・長狭郡ながさこおり・東条花房とうじやう はなふさの郷さと・蓮華寺れんげじに於おいて
浄円房じやうえんぼうに對して日蓮阿闍梨にちれんあじやり之を註しよるす、文永元年甲子九月ぶんえいがんねんきのえね

二十二日。

問いわうて曰とうく当世ねんぶつの念仏者無間地獄むげんじごくと云そのゆえ事其いの故如何いかん、答いえて云いく法然ほうねん
の選せん択ちやくに就ついて云いうなり、問いうて云いく其そのの選せん択ちやくの意如何い如何いかん、答いえて曰いく
後鳥羽院ごとばいんの治てん・天下建仁年中てんがけんじに日本国にほんこくに一の慧星すいせい出いでたり名なけて源空げんくう・
法然ほうねんと曰いう選せん択ちやく一卷しるを記しして六十余紙よしに及およべり、科段かだんを十六わかに分だいいちつ第一段

これ せいし しこうしにほんこくじゅう
之を制止す、而て日本国中の無智の道俗を始めて大風に草木の従うが如く皆
此の義に随つて忽に法華・真言等に随喜の意を止め建立の思を廃す、而る
間人毎に平形の念珠を以て弥陀の名号を唱え、或は毎日三万遍・六万遍・
十萬遍四十八萬遍・百萬遍等・唱る間・又他の善根も無く念仏堂を造るこ
とと稲麻竹葦の如く、結句は法華真言等の智者とおぼしき人人も皆・或は帰依
を受けんが為に・或は往生極樂の為に皆本宗を捨てて念仏者と成り・或
は本宗にして念仏の法門を仰げるなり。

今云く日本国中の四衆の人人は形は異り替ると雖も意根は皆一法を行じ
て悉く西方の往生を期す、仏法繁昌の国と見えたる処に一の大なる疑
を發する事は念仏宗の龜鏡と仰ぐ可き智者達念仏宗の大檀那と為る大名
・小名並びに有徳の者多分は臨終思ふ如くならざるの由之を聞き之を見
る、而るに善導和尚十即十生と定め十遍乃至一生の間念仏者は一人も漏

れず往生おうじょうを遂とぐ可べしと見えたり人の臨終りんじゅうと善導ぜんどうの釈すいとは水火すいかなり。

爰こゝに念仏ねんぶつ者会えして云いわく往生おうじょうに四よつ有り、一いには意念往生いねんおうじょう・般舟三昧經はんじゆさんまい

に出いでたり、二にには正念しょうねん往生おうじょう・阿弥陀經あみだに出いでたり、三にには

無記往生むきおうじょう群疑論ぐんぎろんに出いでたり、四よには狂乱きやうらん往生おうじょう觀經くわんぎやうの下品下生げぶんげしやうに出いでたり、

詰なつて曰いわく此の中の意い・正の二は且しば之これを置く無記往生むきおうじょうは何れの經論きやうろんに

依よつて懷感えかん禪師ぜんし・之これを書けるや、經論きやうろんに之これ無くば信用しんよう取り難がたし、第四の

狂乱きやうらん往生おうじょうとは引証いんしやうは觀經くわんぎやうの下品下生げぶんげしやうの文ぶんなり、第一だいいちに惡人臨終あくにんりんじゅうの時とき

妙法みやうほうを覺さとれる善知識ぜんちしきに値あつて覺さとる所の諸法しよほう實相じつそうを説とかしめて之これを聞く者

正念しょうねん存たもし難がたく十惡じゅうあく・五逆具ごぎやく諸不善しよふぜんの苦くに逼せめ被られて覺さとることを得えざれば

善知識ぜんちしき實相じつそうの初門じよもんと為なる故ゆゑに称名しょうみやうして阿弥陀あみだを念おぼぜよと云いうに音おんを

揚あげて唱となえ了おわんぬ、此これは苦痛くつうに堪たえ難がたくして正念しょうねんを失うしなう狂乱きやうらんの者ものに非あらざ

か狂乱きやうらんの者もの争いかでか十念とを唱となう可べき、例べせば正念しょうねん往生おうじょうの所攝しよしやうなり全きく狂乱きやうらん

の往生おうじょうには例べす可べからず、而しかに汝等なんじらが本師ほんしと仰あおぐ所の善導和尚ぜんどうわじょうは此の文を受けててんきようくしやう転教口称てんきようくしやうとは云えども狂乱きやうらん往生おうじょうとは云わず、其の上汝等なんじらが昼夜十二時に祈る所の願文がんもんに云く願くは弟子等でし命終みやうじゅうの時に臨んで心顛倒てんどうせず心錯乱さくらんせず心しつねん・失念しつねんせず身心諸の苦痛しんしんもろもろくつう無く身心しんしん・快樂かいらく・禪定ぜんじやうに入るが如し等云云、此の中に錯乱さくらんとは狂乱きやうらんか而るに十惡じゅうあく・五逆ごぎやくを作らざる当世の念仏ねんぶつの上人達しょうにん・並に大檀那等の臨終りんじゅうの惡瘡等の諸の惡重病じゅうびやう並に臨終りんじゅうのきやうらん狂乱きやうらんは意を得ざる事なり、而るに善導和尚の十即じゅうそく十生じゅうしやうと定め又・定得じやうとく往生等おうじやうの釈しゃくの如きは疑無うたがいきの処ところに十人に九人往生すと雖も一人往生せざれば猶不審なほふしんおこ發べる可べし、何に況や念仏宗の長者ちやうじゃな為る善慧ぜんね・隆觀りやうかん・聖光せいこう・薩生南無さつしやうなむ・真光等しんこう皆惡瘡等の重病みなあくそを受けて臨終りんじゅうに狂乱きやうらんして死するの由之これを聞き又之これを知る、其の已下の念仏者の臨終りんじゅうの狂乱きやうらん其の数を知らず、善導和尚の定むる所の十即じゅうそく十生じゅうしやうは關かけて嫌きらえる所の千中無一せんちゆうむいつと成なんぬ、

千中無一と定められし法華・真言の行者は粗ぼ臨終の正念なる由之を聞
けり、念仏の法門に於ては正像末の中には末法に殊に流布す可し、利根・
鈍根・善人・惡人・持戒・破戒等の中には鈍根惡人破戒等殊に往生す可し
と見えたり、故に道綽禪師は唯有淨土一門と書かれ、善導和尚は十即
十生と定め往生要集には濁世末代の目足と云えり、念仏は時機已に叶
えり行ぜん者・空しかる可からざるの処に是くの如きの相違は大なる疑
なり、若し之に依つて本願を疑わば仏説を疑うに成んぬ進退惟谷れり此
の疑を以て念仏宗の先達並びに聖道の先達に之を尋るに一人として答
うる人之れ無し、念仏者救うて云く、汝は法然上人の捨閉閣抛の四字を
謗法と過むるか汝が小智の及ばざる所なり、故に上人・此の四字を私に
之を書くと思えるか、源曇鸞・道綽・善導の三師の釈より之を出したり、
三師の釈・又私に非ず、源淨土の三部經竜樹菩薩の十住毘婆沙論より

出ず、雙觀經の上巻に云く設い我仏を得乃至十念等と云云、第十九の願

に云く設い我仏を得て諸の功德を修め菩提心を發す等と云云、下巻に云く

乃至一念等と云云、第十八の願成就の文なり、又下巻に云く「其の上・輩者

○一向專念・輩者○一向專念其下輩者○一向專念」と云云、此れは十九願

成就の文なり、觀無量壽經に云く「仏阿難に告ぐ汝好く是の語を持て

是の語を持つ者は即ち是れ無量壽仏の名を持つ」と等と云云、阿彌陀經に

云く小善根を以てす可からず乃至一日七日等と云云、先ず雙觀經の意は

念仏往生諸行往生と説けども一向專念と云つて諸行往生を捨て了ん

ぬ、故に弥勒の付属には一向に念仏を付属し了んぬ、觀無量壽經の十六觀

も上の十五の觀は諸行往生、下輩一觀の三品は念仏往生なり、仏阿難尊者

に念仏を付属するは諸行を捨つる意なり、阿彌陀經には雙觀經の諸行

觀無量壽經の前十五觀を束ねて、小善根と名け往生を得ざるの法と定め

おわ 畢んぬ、雙觀經の念仏をば無上功德と名けて弥勒に付属し、觀經・念仏
をば芬陀利華と名けて阿難に付属し、阿弥陀經の念仏をば大善根と名けて
舍利弗に付属す、終の付属は一經の肝心を付属するなり又一經の名を付属
するなり、三部經には諸の善根多しと雖も其の中に念仏最なり、故に題目
には無量壽經・觀無量壽經・阿弥陀經等と云えり、釈摩訶衍論・法華論等
の論を以て之れを勘うるに一切經の初には必ず南無の二字有り、梵本を
もつこれのたま さんぶきよう だいく
以て之を言わば三部經の題目には南無之れ有り、雙觀經の修諸の二字に
念仏より外の八万 聖教 残る可からず、觀無量壽經の三福九品等の読誦
だいじよう いっく いっさいきよう
大乘の一句に一切經残る可からず、阿弥陀經の念仏の大善根に対する小
善根の語に法華經等漏る可きや、總じて浄土の三部經の意は行者の意樂
したがわ ため しばら しょうよう
に随わんが為に暫く諸行を挙ぐと雖も、再び念仏に対する時は諸行の門
を閉じて捨閉閣抛する事顯然なり、例せば法華經を説かんが為に無量義經

を説くの時よんじゅうよねんに四十余年の經を捨てて法華ほつけの門を開くが如ごとし、竜樹菩薩りゅうじゅぼさつ

十住毘婆沙論じゅうじゅうびしやもんろんを造つて一代聖教いちだいいしやうきやうを難易なんいの二道にどうに分てり、難行道なんぎやうどうとは

三部經さんぶきやうの外の諸行ほかしよぎやうなり易行道いぎやうどうとは念仏ねんぶつなり、經論きやうろん此この如ごとく分明ふんみやうなりと

雖も震旦しんたんの人師にんし此の義を知らず唯善導ただぜんどう一師のみ此の義を発得はつとくせり、所以ゆえんに

雙觀經そうかんきやうの三輩さんはいを觀念かんねん法門ほうもんに書いて云いわく「一切衆生いっさいしゆじやう根性こんじやう不同ふどうにして上中下

有り其の根性こんじやうに随したがつて仏皆無量壽みなむりやうじゆぶつ仏の名を專念せんねんすることを勸すすむ」等云云、

此の文の意は發菩提心はだいしんしゆうしよくどく修諸功德等しよぎやうの諸行しよぎやうは他力本願たうきほんがんの念仏ねんぶつに値あわざりし

以前いぜんに修する事しゆうよと有りけるを忽たちまちに之を捨てよと云うとも行者ぎやうじやもち用べ可べから

ず故ゆえに暫しばらく諸行しよぎやうを許ゆるすなり、實じつには念仏ねんぶつを離しよぎやうれて諸行しよぎやうを以もつて往生おうじやうを遂とぐ

る者これな之無しと書きしなり、觀無量壽經かんむりやうじゆきやうの仏告阿難等ぶつこうあなんの文を善導ぜんどうの疏じよの四に

之れを受けて曰いわく「上來じやうさんに定散じやうさん兩門りやうもんを説くと雖も仏の本願ほんがんに望いえどめば意・

衆生しゆじやうの一向いひやうに専もっぱら阿彌陀あみだの名なを稱しょうするに在あり」云云、定散じやうさんとは八万はちまんの權實ごんじつ

・頭密の諸経を尽して之を撰して念仏に對して之れを捨つるなり、善導の
法事讃に阿弥陀經の大小善根の故を釈して云く「極樂は無為涅槃界なり
隨縁の雜善恐らくは生じ難し故に如來要法を選んで教えて弥陀專修を念ぜ
しむ」等と云云、諸師の中に三部經の意を得たる人は但導一人のみ、如來
の三部經に於ては是くの如く有れども正法・像法の時は根機猶利根の故に
諸行往生の機も之有りけるか。

然るに機根衰えて末法と成る間・諸行の機漸く失い念仏の機と成れり、
更に阿弥陀如來・善導和尚と生れて震旦に此の義を顯し、和尚日本に生れ
て初は叡山に入つて修行し後には叡山を出でて一向に專修念仏して
三部經の意を顯し給ひしなり、汝捨閑閣抛の四字を謗法と咎むる事未だ導
和尚の釈並びに三部經の文を窺わざるか、狗の雷を齧むが如く地獄の業を
増す汝知らずんば淨土家の智者に問え。

不審ふしんして云いわく上の所立しよりゆうの義ぎを以もつて法然ほうねんの捨閉閣抛しゃへいかくほうの謗言ほうげんを救きううか実じつに
浄土じやうどの三師並さんしに竜樹菩薩りゆうじゆぼさつ・仏説ぶつせつにより此この三部經さんぶきやうの文ぶんを開ひらくに念仏ねんぶつに對たいし
て諸行しよぎやうを傍ぼうと爲なす事粗經文ほぼきやうもんに之見みえたり、經文きやうもんに嫌きらわれし程ほどの諸行念仏しよぎやうねんぶつ
に對たいして之これを嫌きらわんこと過あむ可べきに非あらず、但不審ふしんなる處ところは雙觀經そうかんきやうの念仏ねんぶつ
已外いげの諸行觀無量壽經しよぎやうかんむりやうじゆきやうの念仏ねんぶつ以外いがいの定散じやうさん・阿彌陀經あみだの念仏ねんぶつの外ほかの小善根ぜんこん
の中に法華・涅槃ほつけ・大日經等だいにかきやうの極大乘經ごくだいじやうきやうを入れ念仏ねんぶつに對たいして不往生おうじやうの
善根ぜんこんぞと仏きらの嫌たまいわせ給たまいけるを竜樹菩薩三師並りゆうじゆぼさつさんしに法然ほうねん之これを嫌きらわば何いずれの失有とが
らん但三部經さんぶきやうの小善根等ぜんこんの句くに法華・涅槃ほつけ・大日經等だいにかきやうは入べる可べしとも覺おほえ
ざれば三師並さんしに法然ほうねんの釈もちを用もちいざるなり、無量義經むりやうぎきやうの如ごときは四十余年よんじゆうよねん・
未顕真実みけんしんじつと説ほつけいて法華八箇年ほつけはちかねんを除いぜんきて以前四十二年いぜんに説だいしやうく所ごんじつの大小・權實ごんじつ
の諸經しよきやうは一字一点みけんしんじつも未顕真実しよきやうの語ことばに漏もる可べしとも覺おほえず、しかのみなら
ず四十二年あごんの間に説ほうとうく所の阿含・方等・般若・華嚴はんにかの名目けごん之みやうもくを出これだせり、

すで だいしょう しょきよう
既に大小の諸経を出して生滅無常を説ける諸の小乗経を阿含の句に
摂し、三にして無差別の法門を説ける諸大乘経を華嚴海空の句に摂し、
十八空等を説ける諸大乘経を般若の句に摂し、彈呵の意を説ける諸
大乘経を方等の句に摂す、是くの如く年限を指し経の題目を挙げ無量義経
に依つて法華経に對して諸経を嫌い・嫌える所の諸経に依れる諸宗を下
すこと天台大師の私に非ず、汝等が浄土の三部経の中には念仏に對して
諸行を嫌う文は之有りともし嫌はるる諸行は浄土の三部経よりの外の五十
年の諸経なりと云う現文は之無し、又無量義経の如く阿含・方等・般若・
華嚴等をも挙げず誰か知る三部経には諸の小乗経並に歷劫修行の
諸経等の諸行を仏・小善根と名け給うと云ふ事を、左右無く念仏よりの
外の諸行を小善等と云えるを法華・涅槃等の一代の教なりと打ち定めて
捨閉閣抛の四字を置きては仏意にや乖くらんと不審する計りなり、例せば

王の所従には諸人の中諸国の中の凡下等一人も残る可からず民が所従に
は諸人諸国の主は入る可からざるが如し、誠に浄土の三部経等が一代超過
の経ならば五十年の諸経を嫌うも其の謂れ之有りなん三部経の文より事起
つて一代を撰す可しとは見えず、但一機・一縁の小事なり何ぞ一代を撰し
て之を嫌わん、三師並に法然此の義を弁えずして諸行の中に法華・涅槃並
に一代を撰して末代に於て之を行ぜん者は千中無一と定むるは近くは依経
に背き遠くは仏意に違う者なり、但し竜樹の十住毘婆沙論の難行の中
に法華・真言等を入ると云うは論文に分明に之有りや、設い論文に之有り
とも慥なる経文之無くば不審の内なり、竜樹菩薩は権大乘の論師為り
し時の論なるか、又訳者の入れたるかと思得可し、其の故は仏は無量義経
に四十余年は難行道・無量義経は易行道と定め給う事・金口の明鏡なり、
竜樹菩薩・仏の記文に當つて出世して諸経の意を演ぶ豈仏説なる難易の

二道にどうを破ひつて私ひそかに難易なんいの二道にどうを立てんや、随したがつて十住じゅうじゅう毘婆沙論びばしあろんの一部
始中終しちゅうじゅうを開ひらくくに全く法華經ほけきやうを難行なんぎやうの中なかに入いれたる文ぶん之これ無なく只華嚴經ただけこんきやうの
十地じゅうちを釈しゃくするに第二地だいにちに至いたり畢おわつて宣のべべず、又此このの論ろんに諸經しよきやうの歷劫りやくしやく修行しゆぎやう
の旨むねを拏あぐるに菩薩ぼさつ難行道なんぎやうどうに墮だし二乘地にじやうに墮だして永不成仏ようふじやうぶつの思おもを成なりす由よし・
見みえたり法華ほつけいぜん已前いぜんの論ろんなる事うたがひ疑ぎ無なし、竜樹りゅうじゆ菩薩ぼさつの意いを知らずして此このの論ろん
の難行なんぎやうの中なかに法華ほつけい・真言しんごんを入いれたりと料簡りやうけんするか、浄土じやうどの三師さんしに於おいては
書しよ釈しゃくを見みるに難行なんぎやう・雜行そつぎやう・聖道しやうどうの中なかに法華經ほけきやうを入いれたる意い・粗ほぼ之これ有あり、
然しかりと雖いえども法然ほうねんが如ごとき放言ほうげんの事こと之これ無なし、しかのみならず仏法ぶつぽうを弘ひろめん輩やからは
教機き時国きやうこく教法きやうほう流布りふの前ぜん後ごを☆む可べきか。

如來にょらい在世ざいせに前ぜんの四十余年よんじゅうよねんには大小だいしやうを説いくと雖いえども説時せつじ至いたらざるの故ゆゑに本懷ほんかい
を演のべ給たまわず、機き有いりと雖いえども時無なければ大法だふを説いき給たまわず、靈山りやうぜん八年はちねんの間
・誰たれか円機えんきならざる時ゆゑも來きる故ゆゑに本懷ほんかいを演のべたもうに權機ごんき移うつつて実機じつきと成なり

る、法華經の流通並に涅槃經には実教を前とし權教を後とす可きの由見
えたり、在世には実を隠して權を前にす滅後には実を前として權を後と
為す可き道理顯然なり、然りと雖も天竺国には正法一千年の間は外道有り、
一向小乗の国有り、又一向大乘の国有り、又大・小兼学の国有り、漢土
に仏法渡つても又天竺の如し、日本国に於ては外道も無く小乗の機も
無く唯大乘の機のみ有り、大乘に於ても法華よりの外の機無し、但し仏法
・日本に渡り始めし時・暫く小乗の三宗權大乘の三宗を弘むと雖も桓武
の御宇に伝教大師の御時六宗・情を破つて天台宗と成りぬ、俱舍成実
・律の三宗の学者も彼の教の如く七賢三道を経て見思を断じ二乗と成らん
とは思わず、只彼の宗を習つて大乘の初門と為し彼の極を得んとは思わず、
權大乘の三宗を習える者も五性各別等の宗義を捨てて一念三千・五輪等の
妙觀を窺う、大小・權実を知らざる在家の檀那等も一向に法華・真言の

學者がくしゃの教きょうに随したがつて之これを供養くようする間ま・日本にほん一洲いっしゅうは印度震旦いんどしんたんには似にず一向純円いっこうじゆんえんの機きなり、恐おそくは靈山りやうぜん八年はちねんの機きの如ごとし、之これを以もつて之これを思おもうに浄土じやうどの三師さんしは震旦しんたん・権大乘こんだいじやうの機きに超こえじ、法然ほうねんに於おいては純円じゆんえんの機き純円じゆんえんの教きょう・純円じゆんえんの国くにを知らしず、権大乘こんだいじやうの一分いちぶん為なる觀經かんきやう等の念仏ねんぶつ、権実こんじつをも弁わえざる震旦しんたんの三師さんしの釈しやく之これを以もつて此この国くにに流布るふせしめ実機じつきに権法こんぼうを授じゆんえんけ、純円じゆんえんの国くにを権教こんきやうの国くにと成なりし醍醐だいごを嘗ほむむる者ものに蘇味そみを与たまふるの失誠しつじやうに甚はなはだだ多おほし。

◆ 一 題目弥陀名号 勝劣事

111P

南無妙法蓮華經なむみよほうれんげきやうと申もうす事は唱となえがたく南無阿弥陀仏なむあみだぶつ・南無薬師如来なむやくしにょらいなど申もうす事は唱となえやすく又文字もんじの数の程ほども大旨むねは同おなじけれども功德くどくの勝劣しやうれつは遙はるかに替かりて候まちなり、天竺てんじくの習ならひ仏出世しゆつせの前まえには二天三仙みちやうせんの名号なごうを唱となえて天を願ねがひけるに仏世いだに出いさせ給たまひては仏みなの御名みなを唱しふ、然しかるに仏みちやうの名号なごうを二天三仙みちやうせんの名号なごうに對みあすれば天みちやうの名なは瓦礫がりやくのごとし仏みちやうの名号なごうは金銀如意宝珠きんぎょにょいほうじゆ

等のごとし、又諸仏の番号は題目の妙法蓮華經に對すれば瓦礫と如意宝珠の如くに侍るなり、然るを佛教の中の大小・権実をも弁へざる人師などが佛教を知りがほにして仏の番号を外道等に對して如意宝珠に譬へたる經文を見又法華經の題目を如意宝珠に譬へたる經文と喩の同きをもつて念仏と法華經とは同じ事と思へるなり、同じ事と思う故に又世間に貴と思う人の只弥陀の番号計を唱うるに随つて・皆人一期の間・一日に六万遍・十万遍など申せども法華經の題目をば一期に一遍も唱へず、或は世間に智者と思はれたる人人外には智者氣にて内には佛教を弁へざるが故に念仏と法華經とは只一なり南無阿弥陀仏と唱うれば法華經を一部よむにて侍るなんと申しあへり是は一代の諸經の中に一句一字もなき事なり、設ひ大師先徳の釈の中より出たりとも且は觀心の釈か且はあて事かなんどこころえ心得べし、法華經の題目は過去に十萬億の生身の仏に値ひ奉つて功德を

成就じょうじゆする人初めて妙法蓮華經の五字の名を聞き始めて信を致いたすなり、諸仏しよぶつの名号みやうごうは外道・諸天・二乗菩薩の名号みやうごうにあはすれば瓦礫かりやくと如意宝珠にょいほうじゆの如ごとくなれども法華經の題目だいもくに対すれば又瓦礫かりやくと如意宝珠にょいほうじゆとの如ごとし、当世とうせの学者がくしやは法華經の題目だいもくと諸仏しよぶつの名号みやうごうとを功德くどくひとしと思ひ又同じ事と思へるは瓦礫かりやくと如意宝珠にょいほうじゆとを同じと思ひ一と思ふが如ごとし、止觀しかんの五に云く「設たといい世いとを厭えう者も下劣の乗めつを翫もてあそび枝葉しやうに攀付はんぶし狗作務いぬさむに狎なれ・猴みこうを敬うやまついて帝釈たいしやくと為なし瓦礫かりやくを崇あがめめて是・明珠みやうじゆなりとす此の黒闇くろやみの人豈道あにを論べず可べけんや」等云云、文の心は設たとひ世をいとひて出家遁世しゅつげとんせいして山林さんりんに身をかくし名利名聞みやうりみやうもんをたちて一向後世いこうごしやうを祈ひとびとる人人も法華經の大乗ほけきやうをば修行だいじやうせずしてごんきやう権教下劣の乗めつにつきたる名号みやうごう等を唱となうるを瓦礫かりやくを明みやうじゆ珠じゆなどと思ひたるびやくにん僻人たとに譬くらへ闇あくごうき惡道はくに行くべき者と書はれて待まちるなり、弘決くけつの一には妙樂みやうらく大師・善住天子經ぜんじゆうてんしきやうをかたらせ給たまひいて法華經ほけきやうの心を顯いはして云く「法を聞きい

て謗を^{ぼう}生じ地獄^{じごく}に墮^だするは恒沙^{こうしゃ}の仏を供養^{くよう}する者に勝^{まさ}る等^ら云云、法華^{ほけきよう}經の名を聞いてそしる罪^{つみ}は阿弥陀^{あみだ}仏・釈迦^{しゃか}仏・藥師^{やくし}仏等の恒河沙^{こうがしや}の仏を供養^{くよう}し名号^{みょうごう}を唱^{とな}うるにも過^すぎたりされば当世^{とうせ}の念仏^{ねんぶつ}者の念仏^{ねんぶつ}を六万遍^{ろくまんへん}乃至^{ないし}十^{じゅう}万遍^{まんへん}申^{もう}すな^んど云へども彼^{かしこ}にては終^{つい}に生^{しょう}死^じをはなるべからず、法華^{ほけきよう}經を聞^{きこ}くをば千中^{せんちゅう}無^む一^{いつ}・雜行^{ぞうぎよう}・未^み有^{いう}一人得^{いちにんとくしや}者^{しや}な^んど名^なけて・或^{ある}は抛^{なげうて}・よ・或^{ある}は門^{もん}を閉^しじよな^んど申^{もう}す謗法^{ほうぼう}こそ設^{たて}ひ無間^{むげん}・大城^{だいじよう}に墮^{おち}るとも後^{しうじ}に必^{かならず}生^{しょう}死^じは離^はれ侍^{はべ}らんずれ、同^{どう}くは今^{こん}生^{じよう}に信^{しん}をなしたらば・いかによく候^{こう}なん。

問^{もん}う世間^{せけん}の念仏^{ねんぶつ}者^{しや}な^んどの申^{もう}す様^{よう}は此身^{こしん}にて法華^{ほけきよう}經^{きよう}な^んどを破^はする事^じは争^{いかで}か候^{こう}べき念^{ねん}仏^{ぶつ}を申^{もう}すもとく^{とく}と極樂^{ごくらく}世界^{せかい}に参^{まゐ}りて法華^{ほけきよう}經^{きよう}をさ^らんが為^{ため}なり、又^{また}・或^{ある}は云^{いわ}く法華^{ほけきよう}經^{きよう}は不^ふ淨^{じよう}の身^みにては叶^{かな}ひがたし恐^{おそ}れもあり念^{ねん}仏^{ぶつ}は不^ふ淨^{じよう}をも嫌^{きら}はねばこそ申^{もう}し候^{こう}へな^んど申^{もう}すはい^いかん、答^{こた}えて云^{いわ}く此^この四^し五^ご年^{ねん}の程^{ほど}は世間^{せけん}の有^う智^ち・無^む智^ちを嫌^{きら}はず此^この義^ぎをば・さな^んめりと思^{おも}いて過^{すく}る

にちれんいちだいしうきよう

程に日蓮一代 聖教 をあらあら引き見るにいまだ此の二義の文を勘へ出さ

ず・詮せんずるところ 近來きんらいの念仏ねんぶつ者並に有智うちの明匠めいしやうとおぼしき人人の臨終りんじゆうの

思うやうにならざるは是・大謗法ほうぼうの故なり、人ごとに念仏ねんぶつ申して浄土じやうどに生

ほけきよう

れて法華經をさとらんと思う故に穢土えどにして法華經を行ずる者をあざむき

ねんぶつ

又・行ずる者もすてて念仏を申す心は出来るなりと覺おほゆ・謗法ほうぼうの根本こんぽん此の

ほけきよう

義より出たり、法華經こそ此の穢土えどより浄土じやうどに生ずる正因しやういんにては侍れ念仏ねんぶつ

みけんしんじつ

等は未顕真実の故に浄土じやうどの直因ちやくいんにはあらず、然しかるに浄土じやうどの正因しやういんをば極楽ごくらく

しゆぎよう

にして後に修行しゆぎようすべき物と思ひ極楽ごくらくの直因ちやくいんにあらざる念仏ねんぶつをば浄土じやうどの

しやういん

正因しやういんと思う事 僻案びやくあんなり、浄土じやうど門は春沙しゆんさを田まに蒔まいて秋米しゆまいを求め天月てんげつをす

かな

てて水に月を求めるに似たり人の心に叶かないて法華經を失うしなふ大術だいじゆつ此の義にはす

ふじようねんぶつ

ぎず、次に不浄念仏ふじようねんぶつの事・一切念仏いっさいねんぶつ者の師とする善導ぜんどう和尚わじやう・法然ほうねん上人しやうにんは

たじ

他事たじにはいわれなき事多けれども此の事にをいてはよくよく禁めいましめられたり、

善導ぜんどうの觀念かんねん法門ほうもん經きやうに云いく酒肉しゆにく五辛ごしんを手てに取とらざれ口くちにかまざれ手てにとり口くちにもかみて念ねん仏ぶつを申もうさば手てと口くちに惡瘡あくそう付つくべしと禁いましめ法然ほうねん上人しようにんは起請きしやうを書かいて云いく、酒肉しゆにく五辛ごしんを服ふくして念ねん仏ぶつ申もうさば予もんでいが門弟もんていにあらざと云云ふじやう、不淨ふじやうにして念ねん仏ぶつを申もうすべしとは当世とうせの念ねん仏ぶつ者ものの大妄語もうごなり。

問いうて云いく善導ぜんどう和尚わじやう・法然ほうねん上人しようにんの釈しやくを引ひくは彼の釈しやくを用もちるや否いなや、答こたえて云いく、しからず念ねん仏ぶつ者ものの師したる故ゆゑに彼かれがことば己おのれが祖師そしに相違さういするが故ゆゑに彼の祖師そしの禁いましめをもて彼かれを禁いましむなり、例れいせば世間せけんの沙汰さたの彼かれが語ことばの彼の文書ぶんしよに相違さういするを責せるが如ごとし、問いうて云いく善導ぜんどう和尚わじやう・法然ほうねん上人しようにんには何事なにことの失とがあれば用もちいざるや、答こたえて云いく仏ぶつの御遺言ゆいごんには我が滅度めつどの後あとには四依しゑの論師ろんしたりといへども法華經ほけきやうにたがはば用もちうべからずと涅槃經ねはんぎやうに返かへす返かへす禁いましめ置おかせ給たまひいて侍はべるに法華經ほけきやうには我が滅度めつどの後あと・末法まつぽうに諸經しよきやう失しせて後あと・殊ことに法華經ほけきやう流布りふすべき由よし・一所い所じよならずあまたの所ところに説はかれて侍はべり、随したがつ

てんだい みょうらく でんぎよう あんねん
て天台・妙楽・伝教・安然等の義に此事分明なり、然るに善導・法然・

法華經の方便の一分たる四十余年の内の未顕真実の觀經等に依つて仏も説

かせ給はぬ我が依經の讀誦大乘の内に法華經をまげ入れて還つて我が經の

名号に對して讀誦大乘の一句をすつる時・法華經を抛てよ・門を閉じよ

・千中無一なんと書いて侍る僻人をば眼あらん人は是をば用うべしやいな

や。

疑つて云く善導和尚は三昧發得の人師・本地・阿彌陀仏の化身・口よ

り化仏を出せり、法然上人は本地・大勢至菩薩の化身既に日本國に生れて

は念仏を弘めて頭より光を現ぜり争か此等を僻人と申さんや、又善導和尚

・法然上人は汝が見る程の法華經並に一切經をば見給はざらんや定めて

其の故是あらんか、答えて云く汝が難ずる處をば世間の人人定めて道理

と思はんか、是偏に法華經並に天台・妙楽等の実經・実義を述べ給へる

もんぎ
文義を捨て善導・法然等の謗法の者にたばらかされて年久くなりぬるが
ゆえ
故に思はする処なり、先ず通力ある者を信ぜば外道天魔を信ずべきか・或
げどう
る外道は大海を吸干し・或る外道は恒河を十二年まで耳に湛えたり第六天
まおう
の魔王は三十二相を具足して仏身を現ず、阿難尊者・猶魔と仏とを弁へず
ぜんどう
善導・法然が通力いみじしということも天魔・外道には勝れず、其の上・仏
さいご
最後の禁しめに通を本とすべからずと見えたり、次に善導・法然は
いっさいきよう
一切経並に法華経をばおのれよりも見たりなんどの疑ひ是れ又謗法の人
ほけきよう
のためには・さもとと思ひぬべし、然りといへども如来の滅後には先の人は
たぶんかしこ
多分賢きに似て後の人は大旨は・はかなきに似たれども又先の世の人の世
かしこ
に賢き名を取りて・はかなきもあり、外典にも三皇・五帝・老子・孔子
げてん
の五経等を学びて賢き名を取れる人も後の人に・くつがへされたる例是れ
ないてん
多きか、内典にも又かくの如し、仏法・漢土に渡りて五百年の間は明匠・

国に充満せしかども光宅の法雲道場の慧観等には過ぎざりき、

此等の人人は名を天下に流し智水を国中にそそぎしかども天台智者大師と

申せし末の人・彼の義どもの僻事なる由を立て申せしかば初には用ひず、

後には信用を加えし時・始めて五百余年の間の人師の義どもは僻事と見え

しなり、日本国にも仏法渡りて二百余年の間は異義まちまちにして何れを

正義とも知らざりし程に伝教大師と申す人に破られて前二百年の間の私義

は破られしなり、其の時の人人も当時の人の申す様に争か前前の人は

一切経並に法華経をば見ざるべき、定めて様こそあるらめなんと申しあひ

たりしかども叶はず経文に違ひたりし義どもなれば終に破れて止みにき、

當時も又かくの如し此の五十余年が間は善導の千中無一・法然が捨閑閣抛

の四字等は権者の釈なればゆへこそあらんと思ひてひら信じに信じたりし

程に日蓮が法華経の・或は悪世末法時・或は於後末世・或は令法久住等の

文を引きむかへて相違そういをせむる時・我が師の私義しぎ破れて疑うたがいいあへるなり、
詮せんずるところ後・五百歳の経文の誠なるべきかの故に念仏者の念仏をもて
法華經を失ひつるが還かえつて法華經の弘ひろまらせ給たまうべきかと覚おほゆ、但し御用心
の御為ために申もうす世間の悪人は魚鳥鹿等を殺して世路せじを渡わたる、此等は罪なれど
も仏法を失ふ縁とはならず懺悔ざんげをなさざれば三惡道にいたる、又魚鳥鹿等
を殺して売買ばいばいをなして善根ぜんこんを修しゅうする事もあり、此等は世間には惡と思はれ
て遠く善となる事もあり、仏教をもつて仏教を失ふこそ失ふ人も失ふと
も思はず只善ただを修しゅうすると打ち思うて又そばの人も善と打ち思うてある程に
思はざる外に惡道に墮おつる事の出来候しゅつたいなり、当世とうせには念仏者ねんぶつなどの日蓮にちれん
に責め落おちされて我が身は謗法ぼうぼうの者なりけりと思おもう者も是あり、聖道しょうどうの人人ひとびと
の御中おんちゆうにこそ実の謗法ぼうぼうの人人ひとびとは侍はべれ彼の人人ひとびとの仰おほせらるる事は法華經を
毀そしりる念仏者ねんぶつも不思議ふしぎなり念仏者を毀そしりる日蓮にちれんも奇怪きかいなり、念仏と法華とは

一体の物なり、されば法華經を読むこそ念仏を申すよ念仏申すこそ法華經
を読むにては侍れと思ふ事に候なりと、かくの如く仰せらるる人人・聖道
の中にあまた・をはしますと聞ゆ、随つて檀那も此の義を存じて日蓮並に
念仏者をおこがましげに思へるなり、先日蓮が是れ程の事をしらぬと思へ
るははかなし。

仏法・漢土に渡り初めし事は後漢の永平なり渡りとどまる事は唐の

玄宗皇帝・開元十八年なり、渡れるところの經・律・論・五千四十八卷・

訳者一百七十六人其の經經の中に南無阿弥陀仏は即南無妙法蓮華經なり

と申す經は一卷・一品もおはしまさざる事なり、其の上阿弥陀仏の名を仏

・説き出し給う事は始め華嚴より終り般若經に至るまで四十二年が間に所

所に説かれたり、但し阿含經をば除く一代聴聞の者は是を知れり、

妙法蓮華經と申す事は仏の御年七十二成道より已来四十二年と申せしに

りようぜん

靈山にましまして無量義処三昧に入り給いし時、文殊・弥勒の問答に過去

にちげつとうみょうぶつ

の日月燈明仏の例を引いて我・燈明仏を見る乃至法華經を説かんと欲す

せんれい

と先例を引きたりし時こそ南閻浮提の衆生は法華經の御名をば聞き初めた

えんぶだい

しゅじよう

ほけきよう

みな

りしか、三の卷の心ならば阿弥陀仏等の十六の仏は昔大通智勝仏の御時・

あみだぶつ

だいとうちしうぶつ

おんとき

おうじ

十六の王子として法華經を習つて後に正覺をならせ給へりと見えたり、

ほけきよう

しやうかく

たま

阿弥陀等も凡夫にてをはしませし時は妙法蓮華經の五字を習つてこそ仏に

彌陀仏等も凡夫にてをはしませし時は妙法蓮華經の五字を習つてこそ仏に

みだ

ほんぶ

みやうほうれんげきよう

ごじ

はならせ給ひて侍れ、全く南無阿弥陀仏と申して正覺をならせ給いたりと

はべ

もう

しやうかく

たま

は見え、妙法蓮華經は能開なり南無阿弥陀仏は所開なり、能開所開を弁へ

みやうほうれんげきよう

もうかい

なむあみだぶつ

しやかい

もうかいしやかい

わきまえ

ずして南無阿弥陀仏こそ南無妙法蓮華經よと物知りがほに申し侍るなり、

なむあみだぶつ

なむみやうほうれんげきよう

ものしり

もう

はべ

にちれんようしう

日蓮幼少の時・習いそこなひの天台宗・眞言宗に教へられて此の義を存

なら

てんだいしう

しんこんしう

じて数十年の間ありしなり、是れ存外の僻案なり但し人師の釈の中に一体

こ

そんがい

びやくあん

ただ

にんし

しゃく

と見えたる釈どもあまた侍る、彼は觀心の釈か・或は仏の所証の法門につ

はべ

かんじん

ある

しよしう

ほうもん

けて述たるを今の人弁わきまえへずして全体ぜんたい・一なりと思いて人を僻人びやくにんに思うなり、御☆迹けいせきあるべきなり、念仏ねんぶつと法華經ほけきょうと一つならば仏の念仏説かせ給たまいし觀經等かんきやうこそ如来出世にやらいしゅつせの本懷ほんかいにては侍らめ、彼をば本懷ほんかいとも・をぼしめさずして法華經ほけきょうを出世しゅつせの本懷ほんかいと説かせ給たまうは念仏ねんぶつと一体ならざる事明白なり、其の上多くの真言宗しんこんしゅう・天台宗てんだいしゅうの人人に値あい奉りて候し時・此の事を申しければ、されば僻案びやくあんにて侍りけりと申す人は多し、敢て証文あえてしやうもんに經文きやうもんを書いて進そつらぜず候はん限りは御用あひ有るべからず、是こそ謗法ほうぼうとなる根本こんぽんにて侍れはべ、あなかしこ・あなかしこ。

◆ 一二 法華淨土問答抄ほつけじやうどもんどう

117P

理即りそく

名字即みやうじそく

三諦さんたいの名を聞く

日蓮 花押かおう

穢土 えど

觀行即 かんぎようそく

五品を明す ごほん

法華宗立六即 ほっけしゅうそく

相似即 そうじそく

八十八使の見惑を断ず けんわく
八十一品の思惑を断ず しわく

報土 ほうど

分真即 ぶんしんそく

九品の塵沙を断ず じんじゃ
四十一品の無明を断ず むみょう

穢土 えど

理即 りそく

一品の無明を断ず むみょう
中品 戒行世善等 ちゅうほんかいぎよう

浄土宗の所立 じょうどしゅうしりゅう

名字即 みょうじそく

浄土下品 じょうどげほん

報土 ほうど

觀行即 かんぎようそく
相似即 そうじそく

分眞即
ぶんしんそく

究竟即
くきようそく

弁成べんじようの立た、我が身かな叶がたい難がたきが故ゆえに且しばく聖道しょうどうの行しやへいを捨かく閉ほうし閣かく拋ほうし浄土じようどに
帰きし浄土じようどに往おう生じようして法華ほっけを聞きこいて無生むじようを悟わることを得うべきなり。

日蓮にちれん難なんじて云いく、我が身かな叶ない難なんければ穢えど土おに於おて法華ほっけ經きよう等とん・教主きようしやくそん釈尊しやくそん

等とんを捨しや閉へいし閣かく拋ほうし浄土じようどに至いたつて之これを悟べる可べし等とん云云いづれ、何きれの經文きようもんに依よつて

此こくの如ごとき義ぎを立たつるや、又天台宗てんだいしゅうの報土ほうどは分眞即ぶんしんそく・究竟即くきようそく・浄土宗じようどしゅうの

報土ほうどは名字みょうじ即そく乃至究竟即いたしきようそく等とんとは何いづれれの經きん・論ろん釈しやくに出いでたるや、又穢えど土とに

於おいては法華經ほっけきよう等とん・教主きようしやくそん釈尊しやくそん等とんを捨しや閉へいし閣かく拋ほうし浄土じようどに至いたつて法華經ほっけきようを悟わる

可べしとは何いづれれの經文きようもんに出いでたるや。

弁成べんじようの立たに、余ほっけの法華等しよぎようの諸行等しやへいを捨かく閉ほうし閣かく拋ほうして念仏ねんぶつを用もちゆる文もんは

觀經かんきように云いく「仏あなん・阿難あなんに告なんじぐ汝こ好こく是ことの語ごを持たもて是この語ごを持こつ者は

すなわこ むりようじゅぶつ
即ち是れ無量寿仏の名を持つ文、浄土に往生して法華を聞くと云う事は
文に云く「観世音・大勢至・大悲の音声を以つて其れが為に広く諸法実相
・除滅罪法を説く、聞き已つて歡喜し時に応じて即・菩提の心を發す」文、
余は繁き故に且く之を置く。

又日蓮難じて云く、観無量寿經は如来成道四十余年の内なり法華經は

後八箇年の説なり如何んが已説の觀經に兼ねて未説の法華經の名を載せて

捨閉闍拋の可説と為す可きや、随つて「仏告阿難」等の文に至つては只

弥陀念仏を勧進する文なり未だ法華經を捨閉し闍拋することを聞かず、

何に況や無量義經に法華經を説かんが為に先ず四十余年の已説の經經を

挙げて未顕真実と定め畢んぬ、豈未顕真実の觀經の内に已顕真実の法華經

を挙げて捨て乃至之を抛てと為す可きや、又云く「久しく此の要を默して務

めて速かに説かず」等云云、既に教主釈尊・四十余年の間法華の名字を

説かず何ぞ已説觀經の念仏に對して此の法華經を抛たんや、次ぎに
「下品下生・諸法実相・除滅罪法等」云云、夫れ法華經已前の実相其の数
・一に非ず先ず外道の内の長爪の実相・内道の内の小乗乃至爾前の四教
みなしせん
皆所詮の理は実相なり、何ぞ必ずしも已説の觀經に載する所の実相のみ
ほけきよう
法華經に同じと意得べきや、今度慥なる証文を出して法然上人の無間の
苦を救わるべきか。

又弁成の立に、觀經は已説の經なりと雖も未來を面とする故に未來の
衆生は未來に有る所の經卷・之を讀誦して浄土に往生すべし、既に法華
等の諸經・未來流布の故に之れを讀誦して往生すべきか、其の法華を
捨閉閣抛し觀經の持無量寿仏の文に依つて法然是くの如く行じ給うか、
觀經の持無量寿仏の文の上に諸善を説き一向に無量寿仏を勸持せる故に申
せしめ候、実相に於いても多く有りと云う難、彼は浄土の故に此の難來る

べからず、法然上人ほうねんしょうにん聖道しょうどうの行機ぎた堪え難がたき故ゆえに未来流布みらいるふの法華ほっけを捨しゃ閉へい閣かく抛ほうす、故ゆえに是これ慈悲じひの至進ししんなれば此この慈悲じひを以もつて浄土じょうどに往生おうじやうし全く地獄じごくに墮だすべからざるか。

にちれんなん
日蓮難じて云く、觀經くわんぎやうを已說いせつの經なりと云云、已說いせつに於ては承伏しょうふくか、

かんきよう
觀經の時未いまだ法華經ほっけきやうを説かずと雖いえども未来みらいを鑒かんみて捨しゃ閉へい閣かく抛ほうすべしと法然ほうねんしようにん

上人は意得給うか云云、仏・未来みらいを鑒かんみて已說いせつの經に未来みらいの經を載のせて

これ せいし
之を制止せいしすと云わば已說いせつの小乘しょうじやうきやう經きやうに未說みせつの大乗だいじやうきやう經きやうを載のせて之これを制止せいしす

べきか、又已說いせつの權大乘經こんだいじやうきやうに未說みせつの實大乘經じつだいじやうきやうを載のせて未来流布みらいるふの法華經ほっけきやう

を制止せいしせば、何が故ゆえに仏・爾前經にぜんきやうに於て法華ほっけの名のを載のせざる由ゆ、之これを説とき

たまうや。

ほうねんしょうにんじひ
法然上人慈悲じひの事ゆえ、慈悲ゆえの故ほっけきやうに法華經きやうと教主きやうしゅ釈尊しゃくそんとを抛なげつなりと云わ

ば所詮しよせん上いだに出す所の証文しやうもんは未いまだ分明ぶんみやうならず慥たしかなる証文しやうもんを出して法然ほうねん

しょうにん

ごくく

べ

かみ

しょうようおうじよう

しょうようおうじよう

ねんぶつ

上人の極苦を救わる可きか、

上の六品の諸行往生を下の三品の念仏に對

して諸行を捨つ豈法華を捨つるに非ずや等云云、

しょうよう

ほっけいぜん

しょうよう

あら

かんむりようじゆきよう

觀無量壽經の上六品の

諸行は法華已前の諸行なり、

設い下の三品の念仏に對して上六品の諸行

しょうよう

ほっけいぜん

しょうよう

たとい

ねんぶつ

しょうよう

これなげう

ほけきよう

しょうよう

なん

これ

を閣かんや、

又法華の意は

にぜん

しょうよう

かんきよう

ねんぶつ

これ

を捨て

おわ

によらいしゅつせ

ほんかい

と

遂げ

爾前の諸行と觀經の念仏と共に之を捨て畢りて如来出世の本懷を遂げ

たま

にちれん

も

ついちだいしきようなら

ほけきよう

かんが

いま

これ

給うなり、日蓮管見を以て一代聖教並びに法華經の文を勘うるに未だ之を

見ず、

ほけきよう

法華經の名を挙げて、

或は之を

なげう

ある

そ

其の門を閉ずる等と云う

事を、若し爾らば法然上人の憑む所の弥陀本願の誓文並びに法華經の

にゅうあびごく

しゃくそん

かいもん

なん

これ

まぬらべ

ほうねんしょうにん

むげんごく

入阿鼻獄の釈尊の誠文・如何ぞ之を免る可けんや、

だ

しょうけ

でしなら

しょうだんな

あ

びだいじよう

お

今度分明な

証文を出して法然上人の阿鼻の炎を消さる可し云云。

しゅうもん

ほうねんしょうにん

あ

び

の

阿鼻の

炎を

消さる可し云云。

文永九年太歳

みずのえさる

申正月十七日

壬

文永九年太歳

文永九年太歳

文永九年太歳

文永九年太歳

文永九年太歳

文永九年太歳

文永九年太歳

文永九年太歳

日蓮 かおう
花押

弁成 べんじょう
花押 かおう

◆ 一三 法華真言勝劣事 120P

とうじ ほうけしんこんしやうれつ
とうじ こうぼうだいしくうかい しよりゆう
東寺の弘法大師空海の所立に云く法華経は猶華嚴經に劣れり何に況や
だいにちきよう いか いわんや
大日經等に於いてをやと云云、慈覺大師・円仁・智証大師・円珍・安然
じかくだいし えんにん ちしやうだいし えんちん あんねん
わじよう いわ ほけきよう だいにちきよう
和尚等の云く法華経の理は大日經に同じ印と真言との事に於ては是れ猶
おと かい しんこん
劣れるなりと云云其の所釈は余空海は大日經・菩提心論等に依つて十住心
くうかい だいにちきよう ぼだいしん よ じゆうじゆう
を立てて顯密の勝劣を判ず、そ其の中に第六に他縁大乘・心は法相宗・第
けんみつ しやうれつ だいじよう
七に覺心不生心は三論宗・第八に如実一道心は天台宗・第九に極無自性
かくしんふしやうしん さんろんしゆう てんだいしゆう むじせい
心は華嚴宗・第十に秘密莊嚴心は真言宗なり、此の所立の次第は淺き従り
しん けこんしゆう ひみつそうこん しんこんしゆう しよりゆう しだい
深きに至る、そ其の証文は大日經の住心品と菩提心論とに出づと云えり、
いた そ しやうもん だいにちきよう じゆうしんほん ぼだいしんろん
しか いだ だいにちきよう じゆうしんほん だいじよう かくしんふしやう むじせい
然るに出す所の大日經の住心品を見て他縁大乘・覺心不生・極無自性を

たず
尋ぬるに名目みょうもくは經文きやうもんに之これ有り、然しかりと雖いえども他縁たえん・覺心かくしん・極無自性むじせいの三句
を法相ほつそう・三論さんろん・華嚴けこんに配みょうもくする名目これなは之これな無し、其その上かくしんふしやう覺心かくしんふしやう不生むじせいと極無自性むじせいと
の中間ちゆうげんに如實にょじつ一道いちどうの文義もんぎ共に之これな無し、但ただし此この品の初はつめに「云何いかなるか菩提ぼだい
謂おもえらによじつ 謂いく如實じしんに自心じしんを知る」等の文これあ之これあ有り、此この文を取つて此この二句の中間ちゆうげんに
置いて天台宗てんだいしやうと名づけ華嚴宗けこんしやうに劣るの由これ、之これを存そんす、住心品じゅうしんほんに於ては全
く文義もんぎ共に之これな無し、有文有義ゆうもんうぎ・無文有義むもんうぎの二句を虧かく信用しんように及およばず、
菩提心論ぼだいしんろんの文おひに於ても法華ほつけ・華嚴けこんの勝劣しょうれつ都て之これを見ざる上、此この論は
りゅうもう ぼさつ 竜猛菩薩りゅうもうぼさつの論と云う事じやうこ上古じやうこより諍論じやうろん之れ有り、此このの諍論じやうろん絶えざる已前いぜんに
きつきやう 龜鏡きつきやうに立つる事は堅義けんぎの法そむに背く、其その上ぜんむい善無畏ぜんむい・金剛智等こんこうちひやうじやう 評定ひやうじやう 有つて
だいにちきやう 大日經だいにちきやうの疏じよ・義釈ぎしやくを作れり一行阿闍梨あじやりの執筆しつぴつなり、此このの疏義じよぎしやく釈しやくの中に諸宗しよしやう
しょうれつ の勝劣しょうれつを判ずるに法華經ほつけきやうと大日經だいにちきやうとは広略こうりやくの異なりと定め畢おわんぬ、空海くうかい
ととお 徳貴とくとしと雖いえども争いさどか先師せんしの義そむに背く可べきやと云う、難なんこ此このれ強こし此このれ安然あんねんの難なん

なり、之に依つて空海の門人之を陳ずるに旁陳答之有り・或は守護經・或は六波羅蜜經・或は楞伽經・或は金剛頂經等に見ゆと・多く会通すれども総じて難勢を免れず、然りと雖も東寺の末学等大師の高徳を恐るるの間・強ちに会通を加えんとすれども結句会通の術計之無く問答の法に背いて伝教大師最澄は弘法大師の弟子なりと云云、又宗論の甲乙等旁論ずる事之有りと云云。

にちれん 日蓮案じて云く、華嚴宗の杜順・智嚴・法蔵等・法華經の始見今見の文に就いて法華・華嚴・齊等の義之を存す、其の後澄觀始今の文に依つて齊等の義を存すること祖師に違せず、其の上一往の弁を加えて法華と華嚴と齊等なりと云えり、但し華嚴は法華經より先なり、華嚴經の時・仏最初に法慧功德林等の大菩薩に対して出世の本懷之を遂ぐ、然れども二乘並に下賤の凡夫等根機未熟の故に之を用いず、阿含・方等・般若等の調熟に

依つて還つて華嚴經に入らしむ、此れを今見の法華經と名づく、大陣を破る
に余殘・堅からざる等の如し、然れば実に華嚴經・法華經に勝れたり等と
云云、本朝に於て勤操等に値いて此の義を習學す後に天台・真言を學す
と雖も旧執改まらざるが故に此の義を存するか、何に況や華嚴經・法華經
に勝るの由は陳隋より已前・南三・北七・皆此の義を存す、天台已後も又
諸宗此の義を存せり但だ弘法一人に非ざるか、但し澄觀・始見今見の文
に依つて華嚴經は法華經より勝ると料簡する才覚に於ては天台智者大師・
涅槃經の「是經出世乃至如法華中」等の文に依つて法華・涅槃齊等の義を
存するのみに非ず、又勝劣の義を存するは此の才覚を學びて此の義を存す
るか此の義若し僻案ならば空海の義も又僻見なる可きなり、天台・真言
の書に云く法華經と大日經とは広略の異なり、略とは法華經なり、大日經
と齊等の理なりと雖も印・真言之を略する故なり、広とは大日經なり、

極理を説くのに非ず印・真言をも説く故なり、又法華經と大日經とに同
劣の二義有り、謂く・理同事劣なり、又二義有り一には大日經は五時の
摂なり是れ与の義なり、二には大日經は五時の摂に非ず是れ奪の義なり、
又云く法華經は譬えば裸形の猛者の如し大日經は甲冑を帶せる猛者なり
等と云云、又云く印・真言無きは其の仏を知る可からず等と云云。
日蓮不審して云く、何を以て之を知る、理は法華經と大日經と齊等なり
と云う事を、答えて云く疏と義釈並に慈覺・智証等の所釈に依るなり。
求めて云く此等の三蔵大師等は又何を以て之を知るや・理は齊等の義な
りと、答えて云く三蔵大師等をば疑う可からず等と云云、難じて云く、
此の義・論義の法に非ざる上、仏の遺言に違背す慥に經文を出す可し、
若し經文無くんば義分無かる可し如何、答う威儀形色經・瑜祇經・觀智
儀軌等なり、文は口伝す可し、問うて云く法華經に印・真言を略すとは仏

よりか経家きやうけよりか訳者やくしやよりか、答えて云く・或は仏あると云い・或は経家きやうけと云い・或は訳者あるやくしやと云うなり、不審ふしんして云く仏より真言しんこん・印を略して法華經ほけきやうと大日經だいにちきやうと理同事勝りどうじしやうの義之有これありといわば此の事何れの經文いすれきやうもんぞや、文証もんしやうの所出しよしゆつを知らず我意がいの浮言うかれごとならば之これを用ゆ可もちべからず、若し経家きやうけ・訳者やくしやより之これを略すといわば仏説ぶつせつに於ては何ぞ理同事勝りどうじしやうの釈なを作つくる可べきや、法華經ほけきやうと大日經だいにちきやうとは全躰ぜんたい齊さいなり能よく能よく子細しさいを尋ぬ可たずべきなり。

ひそかにちれんいわ
私に日蓮云く、威儀形色經いぎきやうしききやう・瑜祇經ゆぎきやう等の文ふつせつの如ごとくば仏説ぶつせつに於ては法華經ほけきやうに印しんこん・真言有しんこんあるか、若し爾もらば経家きやうけ・訳者やくしや之之を略せるが、六波羅蜜經ろくはらみつきやうの如ごときは経家きやうけ之之を略す、旧訳くやくの仁王經にんのうきやうの如ごときは訳者やくしや之之を略せるか、若し爾もらば天台てんだい・真言しんこんの理同事異りどうじいの釈きやうけは経家並きやうけに訳者やくしやの時より法華經ほけきやう・大日經だいにちきやうの勝劣しやうれつなり、全く仏説ぶつせつの勝劣しやうれつに非あらず此これ天台てんだい・真言しんこんの極しんこんなり、天台宗てんだいしゆうの義勢才覚ぎせいさいかくの爲ために此の義なんを難なんず、天台てんだい・真言しんこんの僻見びやくけん此この如ごとし、東寺所立とうじしりゆう

の義勢は且く之を置く、僻見眼前の故なり、抑天台・真言宗の所立。
りとうじしょう 二難有り、一には法華經と大日經と理同の義其の文全く之無し、
理同事勝に二難有り、一には法華經と大日經と理同の義其の文全く之無し、
法華經と大日經と先後如何、既に義釈に二經の前後之を定め畢つて法華經
は先き大日經は後なりと云へり、若し爾らば大日經は法華經の重説なる
流通なり、一法を兩度之を説くが故なり若し所立の如くば法華經の理を
重ねて之を説くを大日經と云う、然れば則ち法華經と大日經と敵論の時
は大日經の理之を奪つて法華經に付く可し、但し大日經の得分は但・印
真言計りなり、印契は身業・真言は口業なり身口のみにして意無くば印・
真言有る可からず、手口等を奪つて法華經に付けなば手無くして印を結び
口無くして真言を誦せば虚空に印・真言を誦結す可きか如何、裸形の猛者
と甲冑を帯せる猛者との譬の事、裸形の猛者の進んで大陣を破ると甲冑
を帯せる猛者の退いて一陣をも破らざるとは何れが勝るるや、又猛者は

ほけきよう 法華經なり 甲冑は だい にちきよう 大日經なり、 猛者 なく 甲冑 何の詮か之有らん此れ

りとう は理同の義を難ずるなり、 次に事勝の義を難ぜば 法華經には 印・真言 なく

だい にちきよう

大日經には 印・真言之有りと云云、 印契真言の有無に付て二經の勝劣を

だい にちきよう

定むるに 大日經に 印・真言有つて 法華經に之無き故に劣ると云わば、

あごんきよう

阿含經には 世界建立賢聖の地位是れ分明なり、 大日經には之無し、彼の

あ

經に有る事が此の經に無きを以て勝劣を判ぜば 大日經は阿含經より劣る

そうかんきよう

か、雙觀經等には 四十八願是れ分明なり 大日經に之無し、般若經には

こ ふんみよう

十八空是れ分明なり 大日經には之無し、此等の諸經に劣ると云う可きか、

しんこんなく

又印・真言無くんば 仏を知る可からず等と云云、 今反詰して云く 理無くん

あ

ば 仏有る可からず、 仏無くんば 印契真言一切徒然と成るべし。

なん

彼難じて云く、 賢聖並に 四十八願等をば 印・真言に對す可からず等と云

はんきつ

云、 今反詰して云く 最上の印真言之無くば 法華經は 大日經等よりも劣る

か、若し爾らば法華經には二乗作仏・久遠実成・之有り大日經には之無し
印真言と二乗作仏久遠実成とを対論せば天地雲泥なり、諸經に印真言を
簡わざるに大日經に之を説いて何の詮か有る可きや、二乗若し灰断の執を
改めずんば印・真言も無用なり、一代の聖教に皆二乗を永不成仏と簡い
随つて大日經にも之を隔つ、皆成仏までこそ無からめ三分が二之を捨て
百分が六十余分得道せずんば仏の大悲何かせん、凡そ理の三千之有つて
成仏すと云う上には何の不足か有る可き成仏に於ては☆なる仏・中風の
覺者は之有る可からず、之を以て案ずるに印・真言は規模無きか、又諸經
には始成正覺の旨を談じて三身相即の無始の古仏を顕さず、本無今有の失
有れば大日如来は有名無実なり、寿量品に此の旨を顕す釈尊は天の一月
諸仏・菩薩は万水に浮べる影なりと見えたり、委細の旨は且く之を置く。
又印・真言無くんば祈☆有る可からずと云云、是れ又以ての外の僻見な

り、過去・現在の諸仏・法華經を離れて成仏す可からず法華經を以て正覺
を成じ給う、法華經の行者を捨て給わば諸仏還つて凡夫と成り給うべし恩
を知らざる故なり、又未來の諸仏の中の二乗も法華經を離れては永く
枯木敗種なり、今は再生の華果なり、他經の行者と相論を為す時は華光
如來・光明如來等は何れの方に付く可きや、華嚴經等の諸經の仏・菩薩
・人天乃至四惡趣等の衆は皆法華經に於て一念三千・久遠実成の説を聞い
て正覺を成ず可し何れの方に付く可きや、眞言宗等と外道並に小乗・
權大乘の行者等と敵對相論を為すの時は甲乙知り難し、法華經の行者に
對する時は竜と虎と師子と兎との鬪いの如く諍論分絶えたる者なり、慧亮
腦を破りし時・次第位に即き相応加持する時・眞済の惡靈伏せらるる等
是なり、一向・眞言の行者は法華經の行者に劣れる証拠是なり、問うて
云く義釈の意は法華經・大日經共に二乗作仏・久遠実成を明かすや如何、

答えて云く共に之を明かす、義釈に云く「此の經の心の実相は彼の經の諸法実相なり」と云云、又云く「本初は是れ寿量の義なり」等と云云。

問うて云く華嚴宗の義に云く華嚴經には二乗作仏・久遠実成之を明かす、天台宗は之を許さず、宗論は且く之を置く人師を捨てて本經を存せ

ば華嚴經に於ては二乗作仏・久遠実成の相似の文之有りと雖も實には之無し、之を以て之を思うに義釈には大日經に於て二乗作仏・久遠実成

を存すと雖も實には之無きか如何、答えて云く華嚴經の如く相似の文之有りと雖も実義之無きか、私に云く二乗作仏無くば四弘誓願満足す可からず、

四弘誓願満たずんば又別願も満す可からず、總別の二願満せずんば衆生の成仏も有り難きか能く能く意得可し云云。問うて云く大日經の疏に

云く大日如来は無始無終なり遙に五百塵点に勝れたりと如何、答う毘盧遮那の無始無終なる事・華嚴・淨名・般若等の諸大乘經に之を説く独り

だいにちきよう

大日經のみに非ず、問うて云く若し爾らば五百塵点是際限有れば有始有終

なり無始無終は際限無し、然れば則ち法華經は諸經に破せらるるか如何、

答えて云く他宗の人は此の義を存す天台一家に於て此の難を会通する者有

り難きか、今大日經並に諸大乘經の無始無終は法身の無始無終なり三身

の無始無終に非ず、法華經の五百塵点是諸大乘經の破せざる伽耶の始成

之を破りたる五百塵点なり、大日經等の諸大乘經には全く此の義無し、

宝塔の涌現・地涌の涌出・弥勒の疑・寿量品の初の三誠四請・弥勒菩薩

領解の文に「仏・希有の法を説きたもう昔より未だ曾つて聞かざる所なり」

等の文是なり、大日經六卷並に供養法の卷金剛頂經・蘇悉地經等の諸の

真言部の經の中に未だ三止四請・三誠四請・二乗の劫国名号・難信難解等

の文を見ず。

問うて云く五乗の真言如何、答う未だ二乗の真言を知らず四諦・十二因縁

の梵語のみ有るなり、又法身平等に会すること有らんや。

問うて云く慈覺・智証等理同事勝の義を存す争か此等の大師等に過ぎん

や、答えて云く人を以て人を難ずるは仏の誠なり何ぞ汝仏の制誠に違背す

るや但經文を以て勝劣の義を存す可し、難じて云く末学の身として祖師

の言に背かば之を難ぜざらんや、答う末学の祖師に違する之を難ぜば何ぞ

智証・慈覺の天台・妙樂に違するを何ぞ之を難ぜざるや、問うて云く

相違如何、答えて云く天台妙樂の意は已今当の三説の中に法華經に勝れ

たる經之れ有る可からず、若し法華經に勝れたる經之有りといわば一宗の

宗義之を壊る可きの由之を存す、若し大日經・法華經に勝るといわば天台

・妙樂の宗義忽に破る可きをや。

問うて云く天台・妙樂の已今当の宗義証拠經文に有りや、答えて云く

之れ有り法華經・法師品に云く「我が所説の經典は無量千万億已に説き今

と
まさ
説き当に説かん而も其の中に於て此の法華經最も為れ難信難解なり」等と
云云、此の經文の如くんば五十余年の釈迦所説の一切經の内には法華經
さいだいいち
は最第一なり、難じて云く真言師の云く法華經は釈迦所説の一切經の中に
だいいち
第一なり、大日經は大日如来所説の經なりと、答えて云く釈迦如来より外
だいにちにやらい えんぶだいいち
に大日如来閻浮提に於て八相成道して大日經を説けるかは一、六波羅蜜經
いわ かこ げんざい
に云く過去・現在並に釈迦牟尼仏の所説の諸經を分ちて五藏と為し其の中
だらにぞう
の第五の陀羅尼藏は真言なりと真言の經・釈迦如来の所説に非ずといわば
きょうもん い
・經文に違す是二、「我所説經典」等の文は釈迦如来の正直捨方便の説
だいにちにやらい
なり大日如来の証 明分身の諸仏 広長舌相の經文なり是三、五仏の章
ことごとしよぶつみなほけきょう
尽く諸仏皆法華經を第一なりと説き給う是四、「要を以て之を言わば如来の
いっさい
一切の所有の法乃至皆此の經に於て宣示顯説す」等と云云、此の經文の
ほけきょう
如くならば法華經は釈迦所説の諸經の第一なるのみに非ず、大日如来・

じゅつぼうむりようしよぶつ

しよきよう

ほけきようだいいち

いちぶつ

しよせつ

十方無量諸仏の諸經の中に法華經第一なり、此の外一仏・二仏の所説のしよきよう

諸經の中に法華經に勝れたるの經之有りと云わば信用す可からず是五、ほけきよう

だいにちきよう

ほけきよう

きようもんこ

大日經等の諸の真言經の中に法華經に勝れたる由の經文之れ無し是六、

仏より外の天竺・震旦日本國の論師・人師の中に天台大師より外の人師のほか

しよしゃく

所釈の中に一念三千の名目之無し、若し一念三千を立てざれば性惡の義

しよあく

これな

之無し性惡の義之無くんば仏・菩薩の普現色身・不動愛染等の降伏の形・

じゅつかい

まんだら

十界の曼荼羅・三十七尊等・本無今有の外道の法に同じきか是七。

問うて云く七義の中に一一の難勢之有り然りと雖も六義は且く之を置く

第七の義如何、華嚴の澄觀・真言の一行等皆性惡の義を存す何ぞ諸宗に

此の義無しと云うや、答えて云く華嚴の澄觀・真言の一行は天台所立の

義を盗んで自宗の義と成すか、此の事余処に勘えたるが如し、問うて云く

てんだいだいし

天台大師の玄義の三に云く「法華は衆經を總括す乃至舌口中に爛る人情

ただ

問うて云く

問うて云く

問うて云く

問うて云く

を以て彼の大虚を局ること莫れ」等と云云、釈籤の三に云く「法華宗極の旨を了せずして声聞に記する事相のみ華嚴・般若の融通無礙なるに如かずと謂う諫曉すれども止まず舌の爛れんこと何ぞ疑わん、乃至已今当の妙茲に於て固く迷えり舌爛れて止まざるは猶為れ華報なり謗法の罪苦長劫に流る」等と云云、若し天台・妙楽の釈実ならば南三・北七並に華嚴・法相・三論・東寺の弘法等・舌爛れんこと何の疑有らんや、乃至苦流長劫の者なるか、是は且く之を置く慈覚・智証等の親り此の宗義を承けたる者・法華經は大日經より劣の義存す可し、若し其の義ならば此の人人の「舌爛口中苦流長劫」は如何、答えて云く此の義は最上の難の義なり口伝に存り云云。

ぶんえいがんねんきのえね
文永元年甲子七月二十九日之を記す。

にちれん
日蓮



一四 真言七重勝劣事 しんごん しやうれつ

ぶんえい

文永七年 四十九歳御作 与富木常忍 と きじやうにん

128P

ほっけ

だいにち

しやうれつ

法華・大日二經の七重勝劣の事。

しな

ふそう

にんし

いちだいしやうきやう

尸那・扶桑の法師・一代聖教を判ずるの事。

ちんごこつか

鎮護國家の三部の事。

だいにち

さんぼう

ないてん

内裏に三宝有り内典の三部に当るの事。

てんだいしやう

きふく

ひとびと

天台宗に帰伏する人人の四句の事。

こんきやう

今經の位を人に配するの事。

三塔の事。

にほんこくぶっしん

ざせき

日本国仏神の座席の事。

ほっけ

だいにち

しやうれつ

法華・大日二經の七重勝劣の事。

いこんとうだいいち
已今当第一

ほんもんだいいち
本門第一

ほけきようだいいち
法華經第一

しゃくもん

迹門第二

ねはんぎよう

涅槃經第二

むりようぎきよう

無量義經第三

じんじん しんじつじんじん
甚深・眞実甚深

けこんきよう

華嚴經第四

はんによきよう

般若經第五

そしつちきよう

蘇悉地經第六

なおいようじゆ
「猶成就せずんば当に此の法を作す」

いわ
上に云く「三部の中に於て此の經を王と為す」、中に云く

やくおう なんじ
「藥王今汝に告ぐ・諸經の中に於いて最も其の上に在り」

しゆつせ
「是經出世」

ほうとう

「次に方等十二部經・摩訶般若・華嚴海空を説く・眞実

けつじよう
べし決定として成就せん、所謂乞食・精勤・念誦・大

きようけい
恭敬・巡八聖跡・あと礼拝行道なり、・ある或は復大

はん般若經七遍・ある或は一百遍を転読す、いわ下に云く「三時に

だいじようはん常に大乘般若等の經を讀め」

だい大日經第七 いま三国に未だ弘通せざる法門なり。

しな尸那・扶桑の人師一代聖教を判ずるの事

け華嚴經第一

ねはんぎ涅槃經第二

こうたく余人光宅を以て長と為す。

ほけき法華經第三

はん般若經第一

ほけき法華經第一

ねはんぎ涅槃經第二

南北の義 晋・さいとう齊等五百余年・三百六十

きちそう吉藏の義 りようだい梁代の人なり。

なんがく南岳の御弟子なり。

てんだい天台智者大師の御義 おんぎ陳隋二代の人なり。

華嚴經第三 けこんきよう

深密經第一 じんみつ だいいち

ほけきよう

法華經第二

り。

はんによきよう

般若經第三

けこんきようだいいち

華嚴經第一

ほけきよう

法華經第二

ぎよう

御宇の人なり。

ねはんきよう

涅槃經第三

だいにちきようだいいち

大日經第一

ほけきよう

法華經第二

しよきよう

諸經第三

妙樂等之を用う。 みようらく これ

玄奘の義 げんじよう 唐の始め太宗の御宇の人な とう たいそう ぎよう

法蔵・澄観等の義 ほうぞう ちようかん 唐の半ば則天皇后の とう そくてんこうこう

善無畏・不空等の義 ぜんむい ふくう 唐の末・玄宗の御宇の人なり。 とう げんそう ぎよう

ほけきようだいいち
法華經第一

ねはんぎよう
涅槃經第二

でんぎよう おんぎ
傳教の御義人王五十代桓武の御宇及び平城・嵯峨の

ひえいざんえんりやく
御代の人、比叡山延暦寺なり。

しよきよう
諸經第三

だいにかきようだいいち
大日經第一

けこんきよう
華嚴經第二

こうぼう
弘法の義 人王五十二代嵯峨・淳和二代の人、東寺・

こうや
高野等なり。

ほけきよう
法華經第三

だいにかきようだいいち
大日經第一

ほけきよう
法華經第二

かんかく
感覺の義 善無畏を以て師と為す、仁明・文徳・清和

えいざんこうとうそうじいん
の三代、叡山講堂総持院なり。

しよきよう
諸經第三

ちしよう
智証之に同ず、園城寺なり。

鎮護国家の三部の事

法華經 ほけきよう

密厳經 みつこんきよう

不空三蔵 ふくうさんぞう

大曆に法華寺に之を置く、

大曆二年護摩寺

だいれき 二 年 護 摩 寺

を改めて法華寺を立つ、中央に法華經・

仁王經 にんのうきよう

脇士に両部の大日なり。

法華經・浄名經 ほけきよう じようみようきよう

聖徳太子

人王三十四代推古天皇の御宇、四天王寺

に之を置く摂津の国・難波郡・仏法最初

勝鬘經 しょうまん

の寺なり。

法華經 ほけきよう

金光明經 こんこうみようきよう

伝教大師

人王五十代桓武天皇の御宇、比叡山延暦寺

止観院に之を置く、年分得度者一人は

仁王經 にんのうきよう

遮那業一人は止観業なり。

大日經 だいにちきよう

金剛項經 こんこう

慈覺大師 じかくだいし

人王五十四代仁明天皇の御宇、比叡山東塔の

西総持院に之を置かる、御本尊は大日 そうじいん これ ごほんぞん だいにち

蘇悉地經 そしつちきよう

如来、金蘇の二疏十四卷安置せらる。 にょらい きんそ じよ あんち

内裏に三宝有り内典の三部に当るの事。 だいり さんぼう ないてん

神璽 しんじ 国の手験なり。 しるし

宝剣 ほうけん 国敵を禦ぐ財なり、平家の乱の時に海に入りて見えず。 ふせぐ へいけ らん

内侍所 ないじどころ 天照太神影を浮かべ給う神鏡と云う、左馬頭頼茂に打たれて てんしょうだいじん たま

焼失す。 しょうしつ

天台宗に帰伏する人人の四句の事 てんだいしゅう きふく ひとびと

一に身心俱に移る しんしんとも

三論の嘉祥大師 さんろん かじょうだいし

華嚴の澄観法師 けこん ちようかんほっし

二に心移りて身移らず

真言しんこんの善無畏ぜんむい・不空ふくう

華嚴けこんの法蔵ほうぞう

法相ほっそうの慈恩じおん

慈覚じかく

三に身移りて心移らず

智証ちしょう大師だいし

弘法こうぼう大師だいし

四に身心しんしん俱ともに移らず

今經こんきようの位を人に配するの事

征夷せいゐ將軍しょうぐん 鎌倉かまくら殿

無量むりよう義經ぎぎよう

摂政せつしょう

涅槃ねはん經ぎよう

院

迹門しゃくもん十四品

天子てんし

本門ほんもん十四品

三塔の事

中堂 ちゆうどう 伝教大師の御建立 でんぎようだいし こんりゆう 止観・遮那の二業を置く、御本尊は薬師 ごほんぞん やくし

如来なり、にょらい 延暦年中の御建立・王城の えんりやく こんりゆう

丑寅に当る、桓武天皇の御崇重、天子本命の かんむてんのう すうちよう てんしほんめい

道場と云う。どうじやう

止観院 本院 しかん ほん 天竺には靈鷲山と云い震旦には天台山と てんじく りようじゅうせん い しんたん てんだい

云い扶桑には比叡山と云う、三国伝灯 い ふそう ひえいざん

の仏法此に極まれり。ぶつぽうこゝ

講堂 こうどう 慈覚大師の建立 じかくだいし こんりゆう 総持院 鎮護国家の道場と云う、御本尊は大日 そうじいん ちんここつか どうじやう ごほんぞん だいにち

如来なり、にょらい 承和年中の建立、止観院の西 じやうわ こんりゆう しかん

に真言の三部を置き是を東塔と云う しんごん さんぶ これ

なり、伝教の御弟子第三の座主なり。でんぎよう おんでし ざす

西塔

釈迦堂 しゃか

宝幢院 ほうどういん

円澄の建立 えんちよう こんりゆう

伝教の御弟子なり。
でんぎよう おんでし

観音堂 かんのん

横川

慈覚の建立 じかく こんりゆう

楞嚴院 りようこんいん

日本国仏神の座席の事 にほんこくぶっしん ざせき

問う吾が朝には何れの仏を以て一の座と為し何れの法を以て一の座と為し何れの僧を以て一の座と為すや、答う観世音菩薩を以て一の座と為し真言の法を以て一の座と為し東寺の僧を以て一の座と為すなり。

問う日本には人王三十代に仏法渡り始めて後は山寺種種なりと雖も延暦寺を以て天子本命の道場と定め鎮護国家の道場と定む、然して日本最初の本尊釈迦を一の座と為す然らずんば延暦寺の薬師を以て一の座と為すか、又代代の帝王起請を書いて山の弟子とならんと定め給ふ故に法華經を以て法の一の座と為し延暦寺の僧を以て一の座と為す可し、何ぞ仏を本尊

とせず菩薩を以て諸仏の一の座と為すや、答う尤も然る可しと雖も慈覺の
おんときえいざん しんこん
御時叡山は真言になる東寺は弘法の真言を建立す故に共に真言師なり、共
しんこんし ゆえ とうじ
に真言師なるが故に東寺を本として真言を崇む真言を崇むる故に觀音を
もつ ほんぞん しんこん ぼさつ
以て本尊とす真言には菩薩をば仏にまされりと談ずるなり、故に内裏に毎
年正月八日の内道場の法・行わる東寺の一の長者を召して行わる若し一
ちようじや
の長者暇有らざれば二の長者行うべし三までは及ぼす可からず云云、故に
ちようじや
仏には觀音・法には真言・僧には東寺法師なり、比叡山をば鬼門の方とて
これ たと ぶし こと
之を下す譬えば武士の如しと云うて崇めざるなり故に日本国は亡国となら
んとするなり。

問う神の次第如何、答う天照太神を一の座と為し八幡大菩薩を第二の座
しだい いかん てんしょうだいじん
と為す是より已下の神は三千二百三十二社なり。
な い か さんぜん

◆一五 真言天台勝劣事

文永七年四十九歲御作

134P

問う何なる經論に依つて真言宗を立つるや、答う大日經・金剛頂經
蘇悉地經並びに菩提心論此の三經一論に依つて真言宗を立つるなり、問
う大日經と法華經と何れか勝れたるや、答う法華經は・或は七重・或いは
八重の勝なり大日經は七八重の劣なり、難じて云く驚いて云く古より今
に至るまで法華より真言劣ると云う義都て之無し之に依つて弘法大師は
十住心を立てて法華は真言より三重の劣と釈し給へり覺鑊は法華は真言
の履取に及ばずと釈せり打ち任せては密教勝れ顯教劣るなりと世挙つ
て此を許す七重の劣と云う義は甚珍しき者をや、答う真言は七重の劣と
云う事珍しき義なりと驚かるるは理なり、所以に法師品に云く「已に説き
今説き當に説かん而も其の中に於て此の法華經は最も為れ難信難解なり」
云云、又云く「諸經の中に於て最も其の上に在り」云云、此の文の心は法華

は一切經の中に勝れたり此其の一、次に無量義經に云く「次に方等十二部
經摩訶般若・華嚴海空を説く」云云、又云く「眞実甚深甚深甚深なり」云
云、此の文の心は無量義經は諸經の中に勝れて甚深の中にも猶甚深なり
然れども法華の序分にして機もいまだなましき故に正説の法華には劣るな
り此其二、次に涅槃の九に云く「是の經の世に出ずるは彼の果実の利益す
る所多く一切を安樂ならしむるが如く能く衆生をして仏性を見せしむ、
法華の中の八千の声聞記☆を得授するが如く大果実を成じ秋收冬蔵して
更に所作無きが如し」云云、簸の一に云く「一家の義意謂く二部同味なれ
ども然も涅槃尚劣る」云云、此の文の心は涅槃經も醍醐味・法華經も醍醐味
同じ醍醐味なれども涅槃經は尚劣るなり法華經は勝れたりと云へり、涅槃經
は既に法華の序分の無量義經よりも劣り醍醐味なるが故に華嚴經には勝た
り此其三、次に華嚴經は最初頓説なるが故に般若には勝れ涅槃經の醍醐味に

はり此其四、次に蘇悉地經に云く「猶成ぜざらん者は・或は復大般若經を
轉読すること七遍」云云、此の文の心は大般若經は華嚴經には劣り
蘇悉地經には勝ると見えたり此其五、次に蘇悉地經に云く「三部の中に於て
此の經を王と為す」云云、此の文の心は蘇悉地經は大般若經には劣り
大日經・金剛頂經には勝ると見えたり此其六、此の義を以て大日經は
法華經より七重の劣とは申すなり法華の本門に望むれば八重の劣とも申す
なり。

次に弘法大師の十住心を立てて法華は三重劣ると云う事は安然の
教時義と云う文に十住心の立様を破して云く五つの失有り謂く一には
大日經の義釈に違する失・二には金剛頂經に違する失・三には守護經に
違する失・四には菩提心論に違する失・五には衆師に違する失なり、此の
五つの失を陳ずる事無くしてつまり給へり、然る間法華は真言より三重の

劣と釈し給へるが大なる僻事なり謗法に成りぬと覚ゆ、次に覺鑊の法華は
しんこん はきものとり およ 眞言の履 取に及ばずと舍利講の式に書かれたるは舌に任せたる言なり
しょうこ ゆえ もっぱ ほうほう 証拠無き故に専ら謗法なる可し、次に世を挙げて密教勝れ顯教劣ると此
ゆる こ ひとえ こうほう を許すと云う事是れ偏に弘法を信じて法を信ぜざるなり、所以に弘法をば
あんなんわじよう 安然和尚五失有りと云うて用いざる時は世間の人は何様に密教勝ると思ふ
べ そもそもみつきようすく けんきよう 可き抑 密教勝れ顯教劣るとは何れの経に説きたるや是又証拠無き事を
あ もう 世を挙げて申すなり、猶難じて云く大日経等は是中央大日法身無始無終の
よらいほっかい ある くきよう たけじざいてん 如来法界宮・或は色究竟天他化自在天にして菩薩の為に眞言を説き給へり
ほっけ しゃかおうじんりようぜん にじよう ため と たま 法華は釈迦応身靈山にして二乗の為に説き給へり・或は釈迦は大日の化身
なりとも云へり、成道の時は大日の印可を蒙て・字の觀を教えられ後夜に
だいにちにょらい 仏になるなり大日如来だにもましまさずば争か釈迦仏も仏に成り給うべき
これら どうり もっ ほっけ しんこんすく 此等の道理を以て案ずるに法華より眞言勝れたる事は云うに及ばざるなり、

答て云くい依法不依人えほう ふえの故ゆえにい恥はじやうにも経説きょうせつのやうに依る可よきなり、
大日經だいにちきようは釈迦しゃかの大日だいにちとなつて説き給たまへる經なり故ゆえに金光明こんこうみようと最勝王經さいしょうおうきよう
との第一だいいちには中央しゃかむに釈迦牟尼しゃかむにと云へり又金剛頂經こんこうちようきようの第一だいいちにも中央しゃかむに
釈迦牟尼しゃかむにと云へり大日だいにちと釈迦しゃかとは一つ中央だいにちの仏ぶつなるが故ゆえに大日經だいにちきようをば
釈迦しゃかの説とも云うべし大日の説とも云うべし、又毘盧遮那びるしやなと云うは天竺てんじくの
語大日だいにちと云うは此の土の語ことばなり釈迦牟尼しゃかむにを毘盧遮那びるしやなと名づくと云う時は
大日だいにちは釈迦しゃかの異名いみようなり加之しかのみならずくやく旧訳しんやくの經に盧舍那るしやなと云うをば新訳しんやくの經には
毘盧遮那びるしやなと云う然しかる間しんやく・新訳しんやくの經の毘盧遮那びるしやな法身ほつしんと云うは旧訳くやくの經の
盧舍那るしやな他受用身たじゆうしんなり、故ゆえに大日法身だいにちほつしんと云うは法華經ほけきようの自受用報身じじゆうほうしんにも及およば
ず況いはんやほけきようや法華經ほつしんによらいの法身ほつしん如來にょらいにはまして及べぶ可べからず法華經ほけきようの自受用身じじゆうしんと法身ほつしん
とは真言しんごんには分ぶん・絶えて知らざるなり法報不分ほうほうふぶん二三莫弁てんだいしゅうと天台宗てんだいしゅうにもきら
はるるなり、随したがつて華嚴經けこんきようの新訳しんやくには・或あるは釈迦しゃかと称あづけ・或あるは毘盧遮那びるしやな

と称くと説けり故に大日は只是釈迦の異名なりなにしに別の仏とは意得
可きや、次に法身の説法と云う事何れの經の説ぞや弘法大師の二教論には
楞伽經に依つて法身の説法を立て給へり、其の楞伽經と云うは釈迦の説
にして未顕眞実の權教なり法華經の自受用身に及ばざれば法身の説法とは
いへどもいみじくもなし此の上に法は定んで説かず報は二義に通ずるの二
身の有るをば一向知らざるなり、故に大日法身の説法と云うは定んで法華
の他受用身に当るなり、次に大日無始無終と云う事既に「我昔道場に坐し
て四魔を降伏す」とも宣べ又「四魔を降伏し六趣を解脱し一切智智の明を
満足す」等云云、此等の文は大日は始めて四魔を降伏して始めて仏に成るとこ
そ見えたれ全く無始の仏とは見えず、又仏に成りて何程を経ると説かざる
事は權經の故なり実經にこそ五百塵点等をも説きたれ、次に法界宮とは
色究竟天か又何れの処ぞや色究竟天・或は他化自在天は法華宗には別教

の仏の説処せつしよと云うていみじからぬ事に申もうすなり又菩薩ぼさつの爲ために説くとも高名
もなし例せば華嚴經けこんきやうは一向菩薩いつかうぼさつの爲ためなれども尚法華なほほつの方便ほうべんとこそ云はるれ、
ただただしゆしゆつせつせほんいほんい
只仏出世の本意は仏に成り難がたき二乗の仏に成るを一大事いちだいじとし給たまへりされば
だいろんだいろんにじようにじようみつきやうみつきやうにじようさぶつにじようさぶつけんきやうけんきやう
大論には二乗の仏に成るを密教と云ひ二乗作仏を説かざるを顕教と云へ
り、此の趣ならば真言しんごんの三部經さんぶきやうは二乗作仏の旨無きが故に還かえつて顕教と云
ほつけほつけにじようさぶつにじようさぶつむねむねゆえゆえみつきやうみつきやうべべしたがしたがしよぶつひみつしよぶつひみつ
ひ法華は二乗作仏を旨とする故に密教と云う可きなり、随したがつて諸仏秘密しよぶつひみつの
蔵くらと説けば子細しさいなし世間せけんの人密教勝ると云うはいかやうに意得こころうたるや但ただし
「ももけんきやうけんきやうおいおいしゆぎやうしゆぎやうふふ等と云えるは既にすで
若し顕教けんきやうに於て修行する者は久く三大無數劫むしゆこうを經ふ」等と云えるは既に
三大無數劫むしゆこうと云う故に是三蔵四阿含經さんぞうあこんきやうを指して顕教けんきやうと云いて権大乘こんだいじやうまで
は云わず況いわんやや法華実大乘ほつけじつだいじやうまでは都すべて云わざるなり。

次に釈迦しゃかは大日の化身だいにちけしんおんじ☆字を教えられてこそ仏には成りたれと云う事此
ひとえひとえろくはらみつきやうろくはらみつきやう
は偏に六波羅蜜經ろくはらみつきやうの説なり、彼の經一部十卷は是れ釈迦しゃかの説なり大日の説だいにち

には非あらず是これ未み顕けん真しん実じつの權ごん教きやうなり隨したがつて成じやう道どうの相さんも三さん藏ざう教きやうの教きやう主しゆの相さな
り六く年ねん苦く行ぎやうの後の儀ぎ式しきなるをや、彼の經きやう說せつの五ご味みを天てん台だいは盜たうみ取とつて己が
宗しゆに立たつると云いう無む実じつを云いい付けけらるるは弘こう法ぼう大だい師しの大だいなる僻ひが事ごとなり、所以ゆえん
に天てん台だいは涅槃ねはん經ぎやうに依よつて立たて給たまへり全ぜんく六ろく波は羅ら蜜みつ經ぎやうには依よらず況いはんや天てん台だい
死し去きの後ご百ひやく九く十じふ年ねんあつて貞じやう元げん四し年ねんに渡わたる經きやうなり何なにとして天てん台だいは見み給たまうべき
不ふ実じつの過か弘こう法ぼう大だい師しにあり、凡およそ彼の經きやう說せつは皆みな未み顕けん真しん実じつなり之これを以もつて法ほけ華きやう經ぎやう
を下したさん事じ甚はなはだだ荒な量らんなり、猶な難なんじて云いわ如何いかんに云いうとも印しん・真ごん言ごん・三
摩ま耶や尊そん形ぎやうを説だく事じは大だい日じつ經きやう程けい法ぼう華きやう經ぎやうには之これなく事じ理り俱く密みつの談だんは真しん言ごんひと
りすぐれたり、其その上しん真ごん言ごんの三さん部ぶ經きやうは釈しゃ迦か一いつ代だい五ご時じの撰しやう属ぞくに非あらずされば
弘こう法ぼう大だい師しの宝ほう鑰やくには釈しゃく摩ま訶か衍えん論ろんを証しやう拠ことして法ほ華けは無む明めいの辺へん域いき・戲け論ろんの法ほう
と釈しゃくし給たまへり・爰ここを以もつて法ほ華け劣りつ真しん言ごん勝まさると申もうすなり、答おう凡おそ印いん相さう尊そん形ぎやう
は是これ權ごん經きやうの說せつにして実じつ教きやうの談だんに非あらず設たい之これを説だくとも權ごん実じつ大だい小せうの差さ別べつ

浅深せんじんあ有るべし、所以ゆえんに阿含經等あこんきようにも印相いんそうあ有るが故に必ず法華ほっけに印相尊形いんそうそんぎようを

説くことを得ずして之これを説かざるに非ず説くまじければ是これを説かぬにこそ

有あれれ法華ほっけは只三世十方たださんぜじゅうぼうの仏の本意ほんいを説いて其形がとあるかうある

とは云う可べからず、例せば世界建立せかいこんりゆうの相を説かねばとて法華ほっけは俱舍ぐしゃより劣

るとは云う可べからざるが如し、次に事理俱密じりぐみつの事・法華ほっけは理秘密りひみつ・真言しんごんは

事理俱密じりぐみつなれば勝るとは何れの經に説けるや抑そもそも法華ほっけの理秘密りひみつとは何様の

事ぞや、法華ほっけの理とは迹門しゃくもん・開権顯実かいこんけんじつの理か其の理は真言しんごんには分絶えて知

らざる理なり、法華ほっけの事とは又久遠実成くおんじつじようの事なり此の事又真言しんごんになし真言しんごん

に云う所の事理じりは未開會みかいえの権教こんきようの事理じりなり何ぞ法華ほっけに勝る可べきや、次に

一代五時の撰いちだい属しいうそくに非ずと云う事こ是れ往古より諍あらそいなり唐決とうけつには四教しきようあ有るが

故ゆえに方等部ほうとうぶに撰せつすと云へり、教時義きようじぎには一切智智いっさい・一味いちみの開會かいえを説くが

故ゆえに法華ほっけの撰せつと云へり、二義ふたぎの中に方等ほうとうの撰せつと云うは吉よきき義なり、所以ゆえんに

いっさい

一切智智・一味の文を以て法華の摂と云う事甚だいはれなし彼は法開會

の文にして全く人開會なし争か法華の摂と云わるべき、法開會の文は方等

はんにや

さか

だん

ほっけ

だいにちきよう

しじゅう

・般若にも盛んに談ずれども法華に等き事なし彼の大日經の始終を見るに

しきよう

むねつぶさ

もつとほうとう

べ

ゆえん

かいごんけんじつ

むね

四教の旨具にあり尤も方等の摂と云う可し、所以に開権顯実の旨有らざれ

ほっけ

いっこうしようじようさんぞう

ぎな

あごん

べ

ば法華と云うまじ一向小乗三藏の義無ければ阿含の部とも云う可からず、

はんにやひつきよう

はんにやぶ

べ

だいしようしきよう

むね

般若畢 竟空を説かねば般若部とも云う可からず、大小四教の旨を説くが

ゆえ ほうとうぶ

いずれ

いちだい

ぶつぼう

故に方等部と云わずんば何れの部とか云わん、又一代五時を離れて外に仏法

有りと云う可からず若し有らば二仏並 出の失あらん、又其の法を釈迦

とうりよう

こくど

来

ひろ

べ

びようしゅつ

とが

そ

しゃか

統領の国土にきたして弘む可からず、次に弘法大師釈摩訶衍論を証拠と

もつ ほうけ

むみよう

へんいきけろん

ひろ

べ

こうぼうだいししやくまかえんろん

もつ

しょうこ

為て法華を無明の辺域戲論の法と云う事はれ以ての外の事なり、釈摩訶衍論

は竜樹菩薩の造なり、是は釈迦如来の御弟子なり争か弟子の論を以て師の

りゅうじゅぼさつ

しゃかによらい

おんでし

いかで

でし

もつ

一代第一と仰せられし法華經を押下して戲論の法等と云う可きや、而も論

いちだいいい

おほ

ほけきよう

くだ

けろん

べ

しか

一代第一と仰せられし法華經を押下して戲論の法等と云う可きや、而も論

そめいぶんなくしたが
に其の明文無く随つて彼の論の法門は別教の法門なり
えんきよう およ じつきよう あら いか
円教に及ばず又実教に非ず何にしてか法華を下す可き、其の上彼の論に
いくばく
幾の経をか引くらんされども法華経を引く事は都て之無し権論の故なり、
ちたい こうほうだいし ほっけ ほっけ
地体弘法大師の華嚴より法華を下されたるは遙に仏意にはくひ違いたる
しんじ もち
心地なり、用ゆべからず用ゆべからず。

日蓮

◆一六 真言諸宗違目 しんごんしよしゅういもく

文永九年五月五十一歳御作

1
3
9
P

と き じょうにん
与富木常忍

土木殿等の人人御中

日蓮

空に読み覚えよ老人等は具に聞き奉れ早々に御免を蒙らざる事は
 これを欺く可からず定めて天之を抑うるか、藤河入道を以て之を知れ
 去年流罪有らば今年横死に値う可からざるか彼を以て之を惟うに愚者

は用いざる事なり、日蓮が御免を蒙らんと欲するの事を色に出す弟子
は不孝の者なり、敢て後生を扶く可からず、各各此の旨を知れ。

しんこんしゅう てんじく

真言宗は天竺より之無し開元の始に善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵

てんだいだいしこしゅう

いちなんさんぜん

ほうもん

だいにちきよう

これ

等・天台大師己証の一念三千の法門を盗んで大日經に入れて之を立て

しんこんしゅう

けこんしゅう

そくてんこうこう

ぎよう

これ

ちようかん

てんだい

これ

真言宗と号す、

けこんしゅう

そくてんこうこう

ぎよう

これ

ちようかん

てんだい

これ

かんぼう

けこんきよう

これ

けこんしゅう

ほつそう

さんろん

三論は言う

の觀法を盗んで華嚴經に入れて之を立て華嚴宗と号す、

ぜんしゅう

だるまだいしりようがきよう

もつ

だいじよう

いちぶん

な

に足らず、

だるまだいしりようがきよう

もつ

だいじよう

いちぶん

な

大乘の空の一分な

り、其の学者等大慢を成して

きようげべつでん

しよういっさいきよう

べつじよ

てんま

しよい

所為

なり、

じようごしゅう

ぜんどう

かんきよう

いちぶん

じひ

せつち

二論の

人師

に

じようごしゅう

ぜんどう

かんきよう

いちぶん

じひ

せつち

二論の

人師

に向つて一向専修の義を立て

いっこうせんしゅう

おわ

にほん

ほうねんこれ

を

あやまれり

天台・

真言等を以て

雑行に入れ

まつだいふそうおう

な

おおわく

して

國中を

誑惑して

長夜に

迷わしむ、

これ

どうし

にちれん

一人なるのみ。

迷わしむ、

これ

どうし

にちれん

一人なるのみ。

迷わしむ、

これ

どうし

にちれん

一人なるのみ。

迷わしむ、

これ

どうし

にちれん

一人なるのみ。

涅槃經に云く「若し善比丘法を壞る者を見て置いて呵嘖し駢遺し拳処せずんば当に知るべし是の人は仏法の中の怨なり」等云云、漢頂章安大師云く「仏法を壞乱するは仏法の中の怨なり慈無くして詐り親しむは即ち是れ彼が怨なり彼が為に惡を除くは即ち是れ彼が親なり」等云云、法然が捨閉かくほう・禪家等が教外別伝・若し仏意に叶わずんば日蓮は日本國の人の為に閣抛・賢父なり聖親なり導師なり、之を言わざれば一切衆生の為に「無慈詐親即是他怨」の重禍脱れ難し、日蓮既に日本國の王臣等の為には「為彼除惡即是他親」に当れり此の國既に三逆罪を犯す天豈之を罰せざらんや、涅槃經に云く「爾の時に世尊・地の少しの土を取って之を抓の上に置いて迦葉に告げて言わく是の土多きや十方世界の地土多きや、迦葉菩薩・仏に白して言さく世尊抓の上の土は十方所有の土の比ならざるなり○四重禁を犯し五逆罪を作つて○一闍提と作つて諸の善根を断じ是の經を信ぜざるものは

十方界じゅうぽうかい所有しいうの地土ちどの如ごとし○五逆罪ごぎやくざいを作つくらず○一闡提いつせんたいと作つくらず善根ぜんこんを断たんぜず
是かくくの如ごとき等なほの涅槃經ねはんぎやう典てんを信しんずるは抓つまの上うへの土つちの如ごとし」等云云、經文きやうもんの
如ごとくんば当世とうせ・日本国にほんこくは十方じゅうぽうの地土ちどの如ごとく日蓮にちれんは抓つまの上うへの土つちの如ごとし。

法華經ほけきやうに云いく「諸もろもろの無智むちの人ひと有あつて惡口罵詈あくくめり」等云云、法滅尽經ほうめつじんきやうに云いく

「吾われ・般泥☆はつないおんの後ご・五逆濁世ごぎやくじよくせに魔道興まどうこうじやう盛さかなり魔沙門しゃもんと作つくつて吾わが道みちを壊乱えらん

す○惡人あくにん転うた多おほくくして海中かいちゆうの沙すなの如ごとし劫じやく尽つきんとする時とき・日月にちがつ転うた短みづかく

善者ぜんしや甚はなはだだ少すくくして若もしは一若もしは二人ふにん」等云云、又云いく「衆魔しゆまの比丘びく・

命終みやうじゆうの後ご・精神当せいしんまさに無択地獄むじやくじよくに墮おつべし」等云云、今道隆どうりゆうが一党りやうかん・良觀りやうかん

が一党がいつだう・聖一せいいつが一党がいつだう・日本国にほんこくの一切いっさいの四衆ししゆう等は是この經文きやうもんに当あたるなり、

法華經ほけきやうに云いく「仮使たとい劫焼じやくしやうに乾かれたる草くさを担にない負おいて中なに入いつて焼やけざら

んも亦未またいまだ難がたしとせず我が滅度めつどの後ごに若もし此この經きやうもんを持もつて一人ひとりの為ためにも説と

かん是これ則すなわち為がれ難がたし」等云云、日蓮にちれんは此この經文きやうもんに当あたり、「諸もろもろの無智むちの

人有つて悪口罵詈等し及び刀杖を加うる者あらん」等云云、仏陀記して
いわこのこひやくさい ほけきよう ぎようじや もろもろむち ため あつくめり
云く後の五百歳に法華經の行者有つて諸の無智の者の為に必ず悪口罵詈・
とうじようがりやく るざい しざい にちれんなく しゃか たほう じゅつぽう
刀杖瓦礫・流罪・死罪せられん等云云、日蓮無くば釈迦・多宝・十方の
しよぶつ みらいき まさ もうご
諸仏の未來記は当に大妄語なるべきなり。

疑つて云く汝当世の諸人に勝ることは一分爾る可し真言・華嚴・三論
うたがい いわ なんじとうせ しょにん まさ いちぶんしか べ しんこん けこん さんろん

・法相等の元祖に勝るとは豈に慢過慢の者に非ずや過人法とは是なり汝必
ほっそう がんそ まさ あに まんかまん あら かにんぼう これ なんじ

ず無間・大城に墮つ可し、故に首楞嚴經に説いて云く「譬えば窮人妄り
むげん だいじよう お べ ゆえ しゆりようこんきよう いう たと ぐうにんみだ

に帝王と号して自ら誅滅を取るが如し況んや復法王如何ぞ妄りに竊まん
ていおう みずか ちゅうめつ こと いわ またほうおう なん みだ ぬす

因地直からざれば果紆曲を招かん」等云云、涅槃經み云く「云何なる比丘
いんち かにんぼう だ うきよく まね ねはんぎよう いわ いか びく

か過人法に墮する○未だ四沙門果を得ず云何んぞ当に諸の世間の人をして
かにんぼう だ いま しゃもん しゃもん いか まさ もろもろせけん いわ

我は已に得たりと謂わしむべき」等云云、答えて云く法華經に云く「又
すで だいぼんてんのう いっさいしゆじよう こと いわ 此の經は○諸經の中の主なり

大梵天王の一切衆生の父の如く」又云く「此の經は○諸經の中の主なり
だいぼんてんのう いっさいしゆじよう こと いわ

もつともこれ だいいち 最も為れ第一なり能く是の經典を受持すること有らん者は亦復是くの如し
いっさいしゅじょう 一切衆生の中に於て亦為れ第一なり」等云云、伝教大師の秀句に云く
てんだいほつけしゅう 「天台法華宗の諸宗に勝れたるは所宗の經に拠るが故なり自讃毀他なら
ねがわ ず庶くは有智の君子經を尋ねて宗を定めよ」等云云、星の中に勝れたる月
すく 星月の中に勝れたるは日輪なり、小国の大臣は大国の無官より下る傍例
なり、外道の五通を得るより仏弟子の小乗の三賢の者の未だ一通を得ざ
げどう るは天地猶勝る、法華經の外の諸經の大菩薩は法華の名字即の凡夫より下
てんちなおまさ れり何ぞ汝始めて之を驚かんや教に依つて人の勝劣を定む先ず經の
なん なんじ 勝劣を知らずんば何ぞ人の高下を論ぜんや。
しょうれつ

問うて云く汝法華經の行者為らば何ぞ天汝を守護せざるや、答えて
いわ 云く法華經に云く「惡鬼其の身に入る」等云云、首楞嚴經に云く「修羅
ほけきよう いわ あつきそ せかい しゅうじ よ ほんのうおよ たいしやくしてん こう あしゅら
王有り世界を執持して能く梵王及び天の帝釈四天と權を請う此の阿修羅は

變化に因つて有り天趣の所持なり」等云云。

能く大梵天王・帝釈・四天と戦う大阿修羅王有りて禪宗・念仏宗・

律宗等の棟梁の心中に付け入って次第に国主国中に遷り入つて賢人を

失う、是くの如き大悪は梵釈も猶防ぎ難きか何に況んや日本守護の小神を

や但地涌千界の大菩薩・釈迦・多宝・諸仏の御加護に非ざれば叶い難きか、

日月は四天の明鏡なり諸天定めて日蓮を知りたまうか日月は十方世界の

明鏡なり諸仏も定めて日蓮を知りたまうか、一分も之を疑う可からず、

但し先業未だ尽きざるなり日蓮流罪に当れば教主釈尊衣を以て之を覆い

たまわんか、去年九月十二日の夜中には虎口を脱れたるか「必ず心の固き

に仮りて神の守り即ち強し」等とは是なり、汝等努努疑うこと勿れ決定

して疑い有る可からざる者なり、恐恐謹言。

五月五日

日蓮 花押

此の書を以て諸人に触れ示して恨を残すこと勿れ。

土木殿

◆一七 真言見聞

ぶんえい

文永九年七月五十一歳御作 与三位房日行

142P

しんこんほうこく

しやうもんいか

きやうろん

い

ほつけひぼうしやうほうこうはい

問う真言亡国とは証文何なる経論に出ずるや、答う法華誹謗正法向背

ほうこく

しやうもんこれなく

いか

べ

ほうぼう

の故なり、問う亡国の証文之無くば云何に信ず可きや、答う謗法の段は

もちろん

も

ほうぼう

ほうこくだこううたがい

い無し、

およ

ほうぼう

ほうぶつ

ほうそう

勿論なるか若し謗法ならば亡国墮獄疑い無し、凡そ謗法とは謗仏・謗僧

さんぼう

こ

ねはんぎやう

ここをもつ

ほけきやう

すなわ

なり三宝一体なる故なり是れ涅槃經の文なり、爰を以て法華經には「即ち

いっさいせけん

ぶつしゆ

これすなわ いっせんだい

ねはんぎやう

一切世間の仏種を断ず」と説く是を即ち一闡提と名づく涅槃經の一と十と

いさい

べ

つみ

けいちやうあれ

ごく

せんじん

かま

せつしやう

十一とを委細に見る可きなり、罪に輕重有れば獄に淺深を構えたり、殺生

ちゆうとう

ないし

さんぜんせかい

しじゅう

さつがい

とうかつこくじやう

・偷盜等乃至一大三十三世界の衆生を殺害すれども等活黑繩等の上七

だいじこく

むげん

お

すべ

あび

こういん

きやうろん

大地獄の因として無間に墮つることは都て無し、阿鼻の業因は経論の掟は

五逆・七逆・因果撥無・正法誹謗の者なり、但し五逆の中に一逆を犯す者

は無間に墮つと雖も一中劫を経て罪を尽して浮ぶ、一戒をも犯さず道心堅固

にして後世を願うと雖も法華に背きぬれば無間に墮ちて展転無數劫と見え

たり、然れば即ち謗法は無量の五逆に過ぎたり、是を以て国家を祈らんに

天下將に泰平なるべしや、諸法は現量に如かず承久の兵乱の時・関東

には其の用意もなし国主として調伏を企て四十一人の貴僧に仰せて十五壇

の秘法を行はる、其の中に守護經の法を紫宸殿にして御室始めて行わる七

日に滿ぜし日・京方負け畢んぬ亡国の現証に非ずや、是は僅に今生の小事

なり權教・邪法に依つて惡道に墮ちん事淺・かるべし。

問う權教邪宗の証文は如何既に真言教の大日覺王の秘法は即身成仏

の奥蔵なり、故に上下一同に是の法に歸し天下悉く大法を仰ぐ海内を静め

天下を治むる事偏に真言の力なり、權教・邪法と云う事如何、答う權教

と云う事・四教含藏帶方便の説なる經文顯然なり、然れば四味の諸教に
同じて久遠を隠し二乗を隔つ況んや尽形壽の戒等を述べれば小乗權教
なる事疑無し、爰を以て遣唐の疑問に禪林寺の広修・國清寺の維☆の
決判分明に方等部の撰と云うなり、疑つて云く經文の權教は且く之を
置く唐決の事は天台の先德・円珍大師之を破す、大日經の指歸に「法華す
ら尚及ばず況や自余の教をや」云云、既に祖師の所判なり誰か之に背く可き
や、決に云く「道理前の如し」依法不依人の意なり但し此の釈を智証の釈
と云う事不審なり、其の故は授決集の下に云く「若し法華・華嚴・涅槃
等の經に望めば是れ摂引門」と云へり、広修維☆を破する時は法華尚及ば
ずと書き授決集には是れ摂引門と云つて二義相違せり指歸が円珍の作な
らば授決集は智証の釈に非ず、授決集が実ならば指歸は智証の釈に非じ、
今・此の事を案ずるに授決集が智証の釈と云う事天下の人皆之を知る上、

公家の日記にも之を載せたり指帰は人多く之を知らず公家の日記にも
これな之無し、此を以つて彼を思うに後の人作つて智証の釈と号するが能く能く
尋ぬ可き事なり、授決集は正しき智証の自筆なり、密家に四句の五蔵を設
けて十住心を立て論を引き伝を三国に寄せ家家の日記と号し我が宗を嚴
るとも皆是れ妄語胸臆の浮言にして莊嚴己義の法門なり、所詮法華經は
大日經より三重の劣戲論の法にして釈尊は無明纏縛の仏と云う事・慥な
る如来の金言經文を尋ぬ可し、証文無くんば何と云うとも法華誹謗の罪
過を免れず此の事・当家の肝心なり返す返す忘失する事勿れ、何れの宗に
も正法誹謗の失之有り対論の時は但此の一段に在り仏法は自他宗・異ると
いふもてあそ雖も翫ぶ本意は道俗貴賤共に離苦得樂現当二世の爲なり、誹法に成り伏
して惡道に墮つ可くば文殊の智慧・富樓那の弁説一分も無益なり無間に
墮つる程の邪法の行人にて國家を祈☆せんに將た善事を成す可きや、顯密

対判たいはんの釈しほは且しからく之これを置おく華嚴けこんに法華ほつけ劣せうると云いう事こと能よく能よく思惟しゆいす可べきな
り、華嚴經けこんきやうの十二じふにに云いく四十華嚴けこんなり「又また彼の所修しよしゆの一切いっさい功德くどく六分むぶんの一常いつじやうに
王わうに属かくす○是かくの如ごとく修お及おび造さわを障ふぜんる不善しやう所有しやうの罪業ざいごう六分むぶんの一還かえつて王わうに
属ぞくす」文ぶん、六波羅蜜經ろくはらみつぎやうの六むに云いく「若もし王わうの境内けいだいに殺ころす者もの有あれば其その
王わう便すなわち第六分だいろくぶんの罪つみを獲えん偷盜ちゆうとう・邪行じゃぎやう及おび妄語もうごも亦また復また是ごとくの如ごとく何なんを以もつて
の故ゆえに若もしは法ひほうも非法ひほうも王わう為なれ根本こんぽんなれば罪つみに於おいても福ふくに於おいても第六
の一分いちぶんは皆みな王わうに属ぞくするなり」云云、最勝王經さいしやうおうきやうに云いく「惡人あくにんを愛敬あいぎやうし善人ぜんにん
を治罰ちばつするに由よるが故ゆえに他方たほうの怨賊おんそく来きり國人喪乱そうらんに遭あわん」等云云、
大集經だいしききやうに云いく「若もし復諸またもろもろの刹利國王せつりこく諸もろもろの非法ひほうを作なし世尊せそんの声聞しやうもんの弟子でしを
惱乱のうらんし若もしは以もつて毀罵きめし刀杖とうじやうもて打斫ちやうしやくし及おび衣鉢いはつしゆじゆ種種しきくの資具しきぐを奪もい若もし
は他の給施きゆうせに留難るなんを作なす者もの有あらば、我等われら彼かをして自然じねんに卒にわかに他方たほうの怨敵おんてきを
起おこさしめ及おび自こくどの國土こくどにも亦また兵起ひやうき・疫病えきびやう・饑饉ききん・非時風雨ひじふうう・鬭諍とうじやう言訟ごんしやうせ

しめ又其の王久しからずして復当に己が国を亡失すべからしむ」云云、
だいさんがいぎ いたわ 爾の時に諸人共に聚りて衆の内に一の有徳の人を立て名
大三界義に云く「
でんしゅ な けて田主と為して各所収の物六分の一を以て以て田主に貢輸す一人を以て
な せいほう もつこれ おさ ここよ 主と為し政法を以て之を治む、茲に因つて以後・刹利種を立て大衆欽仰し
そつと 恩率土に流る復・大三末多王と名づく」已上俱舍に依り之を出すなり。
けんみつ 顕密の事、無量義經十功德品に云く「第四功德の下」「深く諸仏秘密の法に
えんぜつ 入り演説す可き所違無く失為し」と、抑大日の三部を密説と云ひ法華經
けんきよう を顕教と云う事金言の所出を知らず、所詮真言を密と云うは是の密は隱密
けんきよう の密なるか微密の密なるか、物を秘するに二種有り一には金銀等を蔵に籠む
みみつ るは微密なり、二には疵・片輪等を隠すは隱密なり、然れば即ち真言を密
みみつ と云うは隱密なり其の故は始成と説く故に長寿を隠し二乗を隔つる故に記
おんみつ そのゆえ しじよう ゆえ ちようじゆ かく にじよう へだ ゆえ
小無し、此の二は教法の心髓・文義の綱骨なり、微密の密は法華なり、然れ

ば即ち文に云く四の巻法師品に云く「藥王此の經は是れ諸仏秘要の藏なり」
云云、五の卷安樂行品に云く「文殊師利・此の法華經は諸仏如来秘密の藏
なり諸經の中に於て最も其の上に在り」云云、壽量品に云く「如来秘密
神通之力」云云、如来神力品に云く「如来・一切秘要之藏」云云、しかの
みならず真言の高祖竜樹菩薩・法華經を秘密と名づく二乗作仏有るが故に
と釈せり、次に二乗作仏無きを秘密とせずば真言は即ち秘密の法に非ず、
所以は何ん大日經に云く「仏不思議真言相道の法を説いて一切の聲聞・
緣覺を共にせず亦世尊普く一切衆生の爲にするに非ず」云云、二乗を隔つ
る事前四味の諸教に同じ、随つて唐決には方等部の攝と判ず經文には
四教含藏と見えたり、大論第百卷に云く第九十品を釈す「問うて曰く更に何れ
の法か甚深にして般若に勝れたる者有つて般若を以て阿難に囑累し而も余
の經をば菩薩に囑累するや、答えて曰く般若波羅蜜は秘密の法に非ず而も

法華等の諸經に阿羅漢の受決作仏を説いて大菩薩能く受用す譬えば大薬師
の能く毒を以て薬と為すが如し」等云云、玄義の六に云く「譬えば良医の
能く毒を変じて薬と為すが如く二乗の根敗反た復すること能わず之を名づ
けて毒と為す今經に記を得るは即ち是れ毒を変じて薬と為す、故に論に
云く余經は秘密に非ずとは法華を秘密と為せばなり、復本地の所説有り
諸經に無き所・後に在つて当に広く明すべし」云云、籤の六に云く「第四
に引証の中論に云く等と言ふは大論の文証なり秘密と言ふは八經の中の
秘密には非ず但是れ前に未だ説かざる所を秘と為し開し已れば外無きを密
と為す」文、文句の八に云く「方等・般若に実相の蔵を説くと雖も亦未だ
五乗の作仏を説かず亦未だ発迹顕本せず頓漸の諸經は皆未だ融会せず
故に名づけて秘と為す」文、記の八に云く「大論に云く法華は是れ秘密
諸の菩薩に付すと、今の下の文の如きは下方を召すに尚本眷属を待つ驗け

し余は未だ堪えざることを「云云、秀句の下に竜女の成仏を釈して「身口密なり」と云えり云云、此等の経論釈は分明に法華経を諸仏は最第一と説き秘密教と定め給へるを経論に文証も無き妄語を吐き法華を顕教と名づけて之を下し之を謗す豈大謗法に非ずや。

抑も唐朝の善無畏・金剛智等・法華経と大日経の両経に理同事勝

の釈を作るは梵華両国共に勝劣か、法華経も天竺には十六里の宝蔵に有れば無量の事有れども流沙・葱嶺等の險難・五万八千里・十万里の路次

容易ならざる間・枝葉をば之を略せり、此等は併ながら訳者の意樂に随つ

て広を好み略を惡む人も有り略を好み広を惡む人も有り、然れば即ち玄奘

は広を好んで四十巻の般若経を六百巻と成し、羅什三蔵は略を好んで千巻

の大論を百巻に縮めたり、印契・真言の勝ると云う事はを以て弁え難し、

羅什所訳の法華経には是を宗とせず不空三蔵の法華の儀軌には印・真言

これあり、仁王經も羅什の所訳には印・真言之無し不空所訳の經には之を
副えたり知んぬ是れ訳者の意樂なりと、其の上法華經には「為説実相印」
と説いて合掌の印之有り、譬喩品には「我が此の法印世間を利益せんと
欲するが為の故に説く」云云、此等の文如何只広略の異なるか、又舌相の
言語皆是れ真言なり、法華經には「治生の産業は皆実相と相違背せず」と
宣べ、亦「是れ前仏經中に説く所なり」と説く此等如何、真言こそ有名無実
の真言未顕真実の権教なれば成仏得道跡形も無く始成を談じて久遠無け
れば性徳本有の仏性も無し、三乗が仏の出世を感ずるに三人に二人を捨
て三十人に二十人を除く、「皆令入仏道」の仏の本願満足す可からず
十界互具は思いもよらずまして非情の上の色心の因果争か説く可きや。
然らば陳隋二代の天台大師が法華經の文を解りて印契の上に立て給へる
十界互具・百界千如・一念三千を善無畏は盗み取つて我が宗の骨目とせ

り、彼の三蔵さんぞうは唐とうの第七玄宗皇帝げんそうこうていの開元四年かいげんに来る如来入滅にょらいにゆうめつより一千六百六十四年か、開皇十七年かいこうより百二十余年なり何ぞ百二十余年いぜん已前てんだいに天台てんだいのたま立たちて給たまへる一念三千いちねんさんぜんの法門ほうもんを盗み取つて我が物とするや、而しかるに己えきようが依經えきようたる大日經だいにちきようには衆生しゅじようの中に機きを簡きひ前四味の諸經ぜんしみのしきように同じて二乗にじようを簡きへり、まして草木成仏そうもくじようぶつは思いもよらずされば理を云う時は盗人ぬすびとなり、又印契いんけい真言しんごん何れの經しんごんにか之これを簡もえる若しかし爾だいにちきようれば大日經だいにちきようにを説くとも規模きもならず、一代いちだいに簡さらわれ諸經しよきように捨てられたる二乗作仏にじようさぶつは法華ほっけに限にじようれり、二乗むりようは無量むりようむへん無辺劫の間むへん・千二百余尊よそんの印契真言いんけいしんごんを行ほけきようずとも法華經ほけきように値あわずんば成仏じようぶつす可べからず、印は手の用しんごん・真言は口の用そなり其の主じようぶつが成仏じようぶつせざれば口と手と別べつに成仏じようぶつす可べきや、一代いちだいに超過ちようかし三説ひいに秀ひいでたる二乗にじようの事をば物とせず事ことに依よる時は印真言しんごんを尊そんむ者もの・劣謂勝見れつゐしやうけんの外道げどうなり。

無量義經說法品むりようぎきやうせつぽうほんに云いく「四十余年よんじゅうよねん・未顕真実みけんしんじつ」文、一の巻いに云いく「世尊せそん

は法久くして後要^{かなら}ず^{まさ}当^{しんじつ}に真実^とを説きたもうべし」文、又云く「一大事^{いちだいじ}の因縁^{いんねん}の故^{ゆえ}に世^{しよ}に出現^{しゅつげん}したもう」文、四^{しよ}の卷^{きやう}に云く「薬王^{やくおう}今^{なんじ}汝^{なんじ}に告^つぐ我^{われ}が所説^{しよせつ}の諸經^{しよきやう}あり而^{しか}も此^この經^{きやう}の中^{ちゆう}に於^{おい}て法華^{ほつげ}最^{さい}も第一^{だいいち}なり」文、又云く「已^{すで}に説^とき今^{いま}説^まき当^{まさ}に説^まかん」文、宝塔^{ほうとう}品^{ほん}に云く「我^{われ}仏道^{ぶつどう}を爲^もつて無量^{むりやう}の土^どに於^{おい}て始^{はじ}より今^{いま}に至^{いた}るまで廣^{ひろ}く諸經^{しよきやう}を説^{しか}く而^そも其^その中^{ちゆう}に於^{おい}て此^この經^{きやう}第一^{だいいち}なり」文、安樂^{あんらく}行品^{ぎやうほん}に云く「此^この法華^{ほつげ}經^{きやう}は是^これ諸^{しよ}の如來^{にょらい}第一^{だいいち}の説^{せつ}なり 諸經^{しよきやう}の中^{ちゆう}に於^{おい}て最^{さい}も爲^も甚深^{しんじん}なり」文、又云く「此^この法華^{ほつげ}經^{きやう}は諸^{しよ}仏^{ぶつ}如來^{にょらい}秘密^{みつゑ}の藏^{ざう}なり 諸經^{しよきやう}の中^{ちゆう}に於^{おい}て最^{さい}も其^その上^{じやう}に在^あり」文、藥王^{やくおう}品^{ほん}に云く「此^この法華^{ほつげ}經^{きやう}も亦^{また}復^{また}是^こくの如^{ごと}し 諸經^{しよきやう}の中^{ちゆう}に於^{おい}て最^{さい}も爲^も其^その上^{じやう}なり」文、又云く「此^この經^{きやう}も亦^{また}復^{また}是^こくの如^{ごと}し 諸經^{しよきやう}の中^{ちゆう}に於^{おい}て最^{さい}も爲^も其^その尊^{そん}なり」文、又云く「此^この經^{きやう}も亦^{また}復^{また}是^この如^{ごと}し 諸經^{しよきやう}の中^{ちゆう}の王^{わう}なり」文、又云く「此^この經^{きやう}も亦^{また}復^{また}是^この如^{ごと}し 諸經^{しよきやう}の中^{ちゆう}に最^{さい}爲^{だいいち}第一^{だいいち}なり」

等云云、玄の十に云く「又・已今当の説に最も為れ難信難解前経は是れ
已説なり」文、秀句の下に云く「謹んで案ずるに法華経・法師品の偈に
云く薬王今汝に告ぐ我が所説の諸経あり而も此の経の中に於て法華最も
第一なり」文、又云く「当に知るべし已説は四時の経なり」文、文句の八
に云く「今法華は法を論ずれば」云云、記の八に云く「鋒に当る」云云、秀句
の下に云く「明かに知んぬ他宗所依の経は是れ王中の王ならず」云云、釈迦
・多宝・十方の諸仏・天台・妙楽・伝教等は法華経は眞実・華嚴経は
方便なり、「未だ眞実を顕さず正直に方便を捨てて余経の一偈をも受けざ
れ」若し人信ぜずして乃至其の人・命終して阿鼻獄に入らん」と云云。
弘法大師は「法華は戯論・華嚴は眞実なり」と云云、何れを用う可きや、
宝鑰に云く「此くの如き乗乗は自乗に名を得れども後に望めば戯論と作
る」文、又云く「謗人謗法は定めて阿鼻獄に墮せん」文、記の五に云く「故に

じつそう

みなけるん

実相の外は皆戲論と名づく」文、

梵網經の疏に云く

「第十に謗三宝戒亦是

ほうさんぼうかいまた

ほうぼさつかい

い

ある

或は邪見と云う謗は是れ乖背の名なり

☆

て是れ解・理に

かな

稱わす言は實に当らずして異解して説く者を皆名づけて謗と為すなり」文、

玄の三に云く

「文証無き者は悉く是れ邪偽・彼の外道に同じ」文、弘の十

に云く

「今の人・他の所引の經論を信じて謂いて憑み有りと為して宗の

源を尋ねず謬誤何ぞ甚しき」文、守護章上の中に云く

「若し所説の經論

めいぶん

明文有らば権実・大小・偏円・半満を簡択す可し」文、玄の三に云く

「広

く經論を引いて己義を莊嚴す」文。

抑弘法の法華經は真言より三重の劣・戲論の法にして尚華嚴にも劣る

と云う事大日經六卷に供養法の卷を加えて七卷・三十一品・或は三十六品

には何れの品何れの巻に見えたるや、しかのみならず蘇悉地經三十四品・

金剛頂經三卷・三品・或は一巻に全く見えざる所なり、又大日經並びに

こんごうちょうきよう

ある

或は

一巻に全く見えざる所なり、

又大日經並びに

だいにかきようなら

みなもとたず

あやまりなん

はなはだ

しき」文、

守護章上の中に云く

「若し所説の經論

源を尋ねず謬誤何ぞ甚しき」文、

守護章上の中に云く

「若し所説の經論

源を尋ねず謬誤何ぞ甚しき」文、

守護章上の中に云く

「若し所説の經論

源を尋ねず謬誤何ぞ甚しき」文、

守護章上の中に云く

「若し所説の經論

源を尋ねず謬誤何ぞ甚しき」文、

めいぶん

明文有らば権実・大小・偏円・半満を簡択す可し」文、

玄の三に云く

「広

く經論を引いて己義を莊嚴す」文。

抑弘法の法華經は真言より三重の劣・戲論の法にして尚華嚴にも劣る

と云う事大日經六卷に供養法の卷を加えて七卷・三十一品・或は三十六品

には何れの品何れの巻に見えたるや、しかのみならず蘇悉地經三十四品・

金剛頂經三卷・三品・或は一巻に全く見えざる所なり、又大日經並びに

こんごうちょうきよう

ある

或は

一巻に全く見えざる所なり、

又大日經並びに

だいにかきようなら

めいぶん

明文有らば権実・大小・偏円・半満を簡択す可し」文、

玄の三に云く

「広

く經論を引いて己義を莊嚴す」文。

抑弘法の法華經は真言より三重の劣・戲論の法にして尚華嚴にも劣る

と云う事大日經六卷に供養法の卷を加えて七卷・三十一品・或は三十六品

には何れの品何れの巻に見えたるや、しかのみならず蘇悉地經三十四品・

金剛頂經三卷・三品・或は一巻に全く見えざる所なり、又大日經並びに

こんごうちょうきよう

ある

或は

一巻に全く見えざる所なり、

又大日經並びに

だいにかきようなら

めいぶん

明文有らば権実・大小・偏円・半満を簡択す可し」文、

玄の三に云く

「広

く經論を引いて己義を莊嚴す」文。

抑弘法の法華經は真言より三重の劣・戲論の法にして尚華嚴にも劣る

と云う事大日經六卷に供養法の卷を加えて七卷・三十一品・或は三十六品

には何れの品何れの巻に見えたるや、しかのみならず蘇悉地經三十四品・

金剛頂經三卷・三品・或は一巻に全く見えざる所なり、又大日經並びに

こんごうちょうきよう

ある

或は

一巻に全く見えざる所なり、

又大日經並びに

だいにかきようなら

めいぶん

明文有らば権実・大小・偏円・半満を簡択す可し」文、

玄の三に云く

「広

く經論を引いて己義を莊嚴す」文。

抑弘法の法華經は真言より三重の劣・戲論の法にして尚華嚴にも劣る

と云う事大日經六卷に供養法の卷を加えて七卷・三十一品・或は三十六品

には何れの品何れの巻に見えたるや、しかのみならず蘇悉地經三十四品・

金剛頂經三卷・三品・或は一巻に全く見えざる所なり、又大日經並びに

こんごうちょうきよう

ある

或は

一巻に全く見えざる所なり、

又大日經並びに

だいにかきようなら

めいぶん

明文有らば権実・大小・偏円・半満を簡択す可し」文、

玄の三に云く

「広

く經論を引いて己義を莊嚴す」文。

抑弘法の法華經は真言より三重の劣・戲論の法にして尚華嚴にも劣る

と云う事大日經六卷に供養法の卷を加えて七卷・三十一品・或は三十六品

には何れの品何れの巻に見えたるや、しかのみならず蘇悉地經三十四品・

金剛頂經三卷・三品・或は一巻に全く見えざる所なり、又大日經並びに

こんごうちょうきよう

ある

或は

一巻に全く見えざる所なり、

又大日經並びに

だいにかきようなら

めいぶん

明文有らば権実・大小・偏円・半満を簡択す可し」文、

玄の三に云く

「広

く經論を引いて己義を莊嚴す」文。

抑弘法の法華經は真言より三重の劣・戲論の法にして尚華嚴にも劣る

と云う事大日經六卷に供養法の卷を加えて七卷・三十一品・或は三十六品

には何れの品何れの巻に見えたるや、しかのみならず蘇悉地經三十四品・

金剛頂經三卷・三品・或は一巻に全く見えざる所なり、又大日經並びに

こんごうちょうきよう

ある

或は

一巻に全く見えざる所なり、

又大日經並びに

だいにかきようなら

めいぶん

明文有らば権実・大小・偏円・半満を簡択す可し」文、

玄の三に云く

「広

く經論を引いて己義を莊嚴す」文。

抑弘法の法華經は真言より三重の劣・戲論の法にして尚華嚴にも劣る

と云う事大日經六卷に供養法の卷を加えて七卷・三十一品・或は三十六品

には何れの品何れの巻に見えたるや、しかのみならず蘇悉地經三十四品・

金剛頂經三卷・三品・或は一巻に全く見えざる所なり、又大日經並びに

こんごうちょうきよう

ある

或は

一巻に全く見えざる所なり、

又大日經並びに

だいにかきようなら

三部の秘經には何れの巻何れの品にか十界互具之有りや都て無きなり、
法華經には事理共に有るなり、所謂久遠実成は事なり二乗作仏は理なり、
善無畏等の理同事勝は臆説なり信用す可からざる者なり。

凡そ真言の誤り多き中

一、十住心に第八法華・第九華嚴・第十真言云云何れの經論に出でたるや。

一、善無畏の四句と弘法の十住心と眼前違目なり何ぞ師弟敵對するや。
一、五藏を立つる時・六波羅蜜經の陀羅尼藏を何ぞ必ず我が家の真言と云うや。

一、震旦の人師争つて醍醐を盗むと云う年紀何ぞ相違するや、其の故は開皇十七年より唐の徳宗の貞元四年戊辰の歳に至るまで百九十二年なり何ぞ天台入滅百九十二年の後に渡れる六波羅蜜經の醍醐を盗み給う可きや

顕然けんねんの違目いもくなり、若し爾もれば謗人ぼうじん謗法定墮阿鼻獄ほうびごくというは自責じせきなるや。

一、弘法こうぼうの心經しんきょうの秘鍵ひけんの五分ごぶんに何ぞ法華ほっけを撰せんするや能く能く尋ぬ可たずき事べなり。

真言しんごん七重難なな。

一、真言しんごんは法華經ほっけきょうより外ぐわいに大日如來だいにくわいの所説しよせつなり云云、若し爾もれば大日だいにくわいの

出世成道しゅつせじょうどう說法利生せつぽうりしやうは釈尊しやくそんより前ぜんか後ごか如何いかに、對機きせつぽう說法せつぽうの仏ぶつは八相はつさう作さ仏ぶつす

父母ふぼは誰たれれぞ名字みょうじは如何いかにに娑婆世界しやばせかいの仏ぶつと云はば世よに二仏にぶつ無く國くにに二主にしゅ無なき

きは聖教しやうきやうの通判つうはんなり、涅槃經ねはんきやうの三十五さんじふごの卷まきを見る可べきなり、若し他土たどの

仏ぶつなりと云はば何なんぞ我が主師親しゅししんの釈尊しやくそんを蔑ないがしろにして他方たほう・疎縁そえんの仏ぶつを崇あがむ

るや不忠ふちゆうなり不孝ふこうなり逆路伽耶陀ぎやくろがやだなり、若し一体いつたいと云はば何なんぞ別べつ仏ぶつと云う

や若もし別べつ仏ぶつならば何なんぞ我が重恩じゆうおんの仏ぶつを捨すつるや、唐堯とうぎやうは老らうい衰おとろえへたる母

を敬うやまひ虞舜ぐしゆんは頑かたくななる父ちちを崇あがむ「是二」、六波羅蜜經ろくはらみつぎやうに云く「所謂いわゆる過去無量かこむりやう

こうがしや　・伽沙の諸仏・世尊の所説の正法・我今亦当に是の如き説を作すべし所謂
はちまん　もろもろみょうほうおん　八万四千の諸の妙法蘊なり　○而も阿難陀等の諸大弟子をして一たび耳に聞
いて皆悉く憶持せしむ」云云、此の中の陀羅尼蔵を弘法我が真言と云える
も　若し爾れば此の陀羅尼蔵は釈迦の説に非ざるか此の説に違す是二、凡そ
ほけきよう　むりようせんまん　法華経は無量千万億の已説・今説・当説に最も第一なり、諸仏の所説菩薩
しよせつしよもん　しよせつ　の所説声聞の所説に此の経第一なり諸仏の中に大日漏る可きや、法華経は
しよにきむじようどつ　正直無上道の説・大日等の諸仏長舌を梵天に付けて真実と示し給う是三、
いぎぎようしぎきよう　威儀形色経に　身相黄金色にして常に満月輪に遊び定慧智拳の印法華経を
しようせい　証誠す」と、又五仏章の仏も法華経第一と見えたり是四、「要を以て之を
云わば如来の一切所有の法乃至皆此の経に於て宣示顕説す」云云、此等の
きようもん　しゃかしよせつ　経文は釈迦所説の諸経の中に第一なるのみに非ず三世の諸仏の所説の中
だいいち　に第一なり此の外一仏・二仏の所説の経の中に法華経に勝れたる経有りと

云はば用ゆ可からず法華經は三世不壞の經なる故なり是五、又大日經等の
諸經の中に法華經に勝るる經文之無し是六、釈尊御入滅より已後天竺
の論師二十四人の付法藏其の外大権の垂迹震旦の人師南三・北七の十師
三論・法相の先師の中に天台宗より外に十界互具・百界千如・一念三千
と談ずる人之無し、若し一念三千を立てざれば性惡の義之無し性惡の義無
くば仏・菩薩の普現色身真言兩界の漫荼羅五百七百の諸尊は本無今有の
外道の法に同ぜんか、若し十界互具・百界・千如を立てば本經何れの經に
か十界皆成の旨之を説けるや、天台円宗見聞の後・邪智莊嚴の為に盗み
取れる法門なり、才芸を誦し浮言を吐くには依る可からず正しき經文金言
を尋ぬ可きなり是七。

涅槃經の三十五に云く「我処処の經の中に於て説いて言く一人出世すれ
ば多人利益す一国土の中に二の轉輪王あり一世界の中に二仏出世すといわ

ば是の処ことわり有ること無し」文、大論だいろんの九に云く「十方恒河沙じゅつぽうこうがしやの三千大千世界さんぜんだいせんせかいを名づけて一仏世界いちぶつせかいと為す是の中こに更に余仏よぶつ無し実ひとには一りの釈迦牟尼しゃかむにぶつなり」文、記の一に云く「世には二仏なく無く国には二主なく無し一仏の境界きょうがいには二の尊号そんこう無し」文、持地論ちちろんに云く「世に二仏なく無く国に二主なく無く一仏の境界きょうがいに二の尊号そんこう無し」文。

七月日

日蓮 花押かおう

◆一八 蓮盛抄れんじょうしやう

建長七年 三十四歳御作 150P

禅宗ぜんしゅう云く涅槃ねはんの時・世尊座せそんに登り拈華ねんげして衆に示す迦葉かしょう・破顔微笑はがんびしょうせり、仏の言いわく吾に正法眼蔵しょうぼうげんそう・涅槃ねはんの妙心みょうしん・実相無相じつそうむそう・微妙みみょうの法門ほうもん有り文字もんじを立てず教外きょうがいに別伝べつでんし摩訶迦葉まかしやうに付属ふぞくするのみと、問うて云く何なる経文きょうもんぞや、禅宗ぜんしゅう答えて云く大梵天王問仏決疑經だいぼんてんのうもんぶつけつぎききやうの文なり、問うて云く件の経いわ何れの三蔵さんそうの訳ぞや貞元じやうげん・開元かいげんの録ろくの中に曾かつて此の経い無し如何いかん、禅宗ぜんしゅう

答えて云く此の経は秘経なり故に文計り天然二より之を渡す云云、問うて
云く何れの聖人何れの人師の代に渡りしぞや跡形無きなり此の文は上古の
録に載せず中頃より之を載す此の事禪宗の根源なり尤も古録に載すべし知
んぬ偽文なり、禪宗云く涅槃經の二に云く「我今所有の無上の正法悉く
もつまかかしうふそく
以て摩訶迦葉に付属す」云云此の文如何、答えて云く無上の言は大乘に似
たりと雖も是れ小乗を指すなり外道の邪法に對すれば小乗をも正法と
いはん、例せば大法東漸と云えるを妙樂大師解釈の中に「通じて仏教を
指す」と云いて大小・権実をふさなて大法と云うなり云云、外道に對すれ
ば小乗も大乘と云われ下臆なれども分には殿と云はれ上臆と云はるる
がごとし、涅槃經の三に云く「若し法寶を以て阿難及び諸の比丘に付属せ
ば久住を得じ何を以ての故に一切の聲聞及び大迦葉は悉く當に無常なるべ
し彼の老人の他の寄物を受くるが如し、是の故に応に無上の佛法を以て

諸の菩薩に付属すべし諸の菩薩は善能問答するを以て是くの如きの法宝
則ち久住することを得・無量千世増益熾盛にして衆生を利安せん彼の壮な
る人の他の寄物を受くるが如し是の義を以ての故に諸大菩薩乃ち能く問う
のみ」云云、大小の付属其れ別なること分明なり、同經の十に云く「汝
等・文殊当に四衆の為に広く大法を説くべし今・此の經法を以て汝に
付属す乃至迦葉・阿難等も来らば復当に是くの如き正法を付属すべし」云
云故に知んぬ文殊迦葉に大法を付属すべしと云云、仏より付属する処の法
は小乗なり悟性論に云く「人心をさとする事あれば菩提の道を得る故に仏
と名づく」菩提に五あり何れの菩提ぞや得道又種種なり何れの道ぞや余經
に明す所は大菩提にあらず又無上道にあらず經に云く「四十余年・未顕
眞実」云云。

問うて云く法華は貴賤男女何れの菩提の道を得べきや、答えて云く

「ないし いちげ乃至一偈おいに於ても皆かいじょう成仏うたがい疑うたがいい無し」云云、又云く「しょうじき正直に方便ほうべんを捨て但むじょうどう無上道を説く」云云、是に知んぬ無上菩提むじょうぼだいなり「須臾しゅゆも之これを聞いてすなわあのくぼだいあのかぼだいくきょうを究竟することを得るなり」此の菩提ぼだいを得ん事須臾しゅゆも此の法門ほうもんを聞く功德くどくなり、問うて云く須臾しゅゆとは三十須臾しゅゆを一日一夜と云う「須臾しゅゆ聞之しゅゆもんし」の須臾しゅゆは之を指すか如何いかにん、答う件の如し天台止観てんだいしかんの二に云く「須臾しゅゆも廃すること無かれ」云云、弘決くけつに云く「しばら暫くも廃はいすることを許さざる故に須臾しゅゆと云う」故に須臾しゅゆは刹那せつななり。

問うて云く本分の田地ほんぶん でんちにもとづくを禪の規模きもとす、答う本分の田地ほんぶん でんちとは何者なにものぞや又何れの経いずれに出でたるぞや法華経ほけきょうこそ人天にんてんの福田ふくでんなればむねと人天にんてんを教化きょうけし給ふ故に仏てんにんしを天人師てんにんしと号す此の経を信ずる者は己身こしんの仏を見るのみならず過・現げん・末の三世さんぜの仏を見る事・浄頗梨じょうはりに向ふに色像しきぞうを見るが如し、経に云く「又浄明鏡じょうみょうきやうに悉く諸の色像しよくもろしきぞうを見るが如し」云云。

ぜんしゅういわ 禪宗云く是心即仏・即身是仏と、
こ 答えて云く経に云く「心は是れ第一の

あだ 怨なり此の怨・最も悪と為す此の怨・能く人を縛り送つて閻羅の処に到る

なんじひと

じこく

あくこう

ため

さいしきようだい

えんら

いた

汝独り地獄に焼かれて悪業の為に養う所の妻子兄弟等・親属も救うこと

あた

ねはんぎよう

いわ

能わじ」云云、涅槃経に云く「願つて心の師と作つて心を師とせざれ」云

ぐち

むざん

もつ

そくしんそくぶつ

あにみとくいとく

みしやういしやう

あら

云、愚癡無懺の心を以て即心即仏と立つ豈未得謂得・未証謂証の人に非ず

や。

ほうけしゅう 問う法華宗の意如何、
きやうもん 答う経文に「具三十二相乃是眞実滅」云云、
ある 或

そくじやうじゅうぶっしん

ぜんしゅう

りしやう

しんじつ

ある

は「速成就仏身」云云、禪宗は理性の仏を尊んで己れ仏に均しと思ひ

そうじやうまん

お

こ

あび

ざいにん

ゆえ

ほけきやう

いわ

そうじやうまん

増上慢に墮つ定めて是れ阿鼻の罪人なり、故に法華経に云く「増上慢の

びく

まさ

だいこう

お

ぜんしゅう

びる

ちやうじやう

を・むと、

云く毘盧

比丘は將に大坑に墜ちんとす」禪宗云く毘盧の頂上を・むと、云く毘盧

なにもの

しゅうへんほっかい

ほっしん

さんせん

だいち

みなこ

びる

とは何者ぞや若し周遍法界の法身ならば山川・大地も皆是れ毘盧の身土な

こ

りしやう

びる

此の

しんど

おい

いぬやかん

たぐい

これ

ふ

り是れ理性の毘盧なり、此の身土に於ては狗野干の類も之を☆む禪宗の

規模きもに非あらず・若もし実じつに仏ぶつの頂いただきを☆まんか梵天ぼんてんも其その頂いただきを見みずと云いえり
薄地いは争そうでか之これを☆む可べきや、夫それ仏ぶつは一切衆生いっさいしゅじやうに於おいて主師親しゅししんの徳とく有あり
若もし恩徳おんとく広ひろき慈父じふを☆まんは不孝ふこう逆罪ぎやくざいの大愚人ぐにん・悪人あくにんなり、孔子こうしの典籍てんじやく
尚な以おもつて此この輩やからを捨すつ況いわんや如来にやらいの正法しやうほうをや豈あに此この邪類じやくるい邪法じやくほうを讃ほめて無量むりやう
の重罪じゆうざいを獲えんや云云、在世ざいせの迦葉かしやうは頭頂ずちやう礼敬れいけいと云いふ滅後めつこの闇禪あんぜんは頂上ちやうじやうを
☆むと云いふ恐おそる可べし。

禅宗ぜんしゆう云いふ教外別伝きやうげべつでん・不立文字ふりちうもんじ、答こたえて云いふ凡およそ世よに流布るふの教きやうに三種さんしゆを立た
つ、一いちには儒教じゆきやう此これに二十七種にじふしちしゆあり、二にには道教たうきやう此これに二十五家にじふごけあり、三さん
には十二分教てんだいししゆう天台宗てんだいししゆうには四教しきやう八教はつきやうを立たつるなり此等これらを教外きやうがいと立たつるか、
医師いしの法ぽうには本道ほんだうの外げを外経師げきやうしと云いふ人間の言ごんには姓しやうのつづかざるをば
外戚がいせきと云いふ仏教ぶつきやうには経論きやうろんにはなれたるをば外道げだうと云いふ、涅槃經ねはんきやうに云いふ
「若もし仏ぶつの所説しよせつに順したがはざる者もの有あらば当あたに知しるべし是この人は是これ魔まの眷属けんぞくな

り」云云、九に云く「法華已前は猶是れ外道の弟子なり」云云、禪宗云く
仏祖不伝云云、答えて云く然らば何ぞ西天の二十八祖東土の六祖を立つる
や、付属摩訶迦葉の立義已に破るるか自語相違は如何、禪宗云く向上の
一路は先聖不伝云云、答う爾らば今の禪宗も向上に於ては解了すべから
ず若し解らずんば禪に非ざるか凡そ向上を歌つて以て☆慢に住し未だ
妄心を治せずして見性に奢り機と法と相乖くこと此の責尤も親し旁がた
けぎ化儀を妨ぐ其の失転多し謂く教外と号し剩さえ教外を学び文筆を嗜みなが
ら文字を立てず言と心と相応せず豈天魔の部類外道の弟子に非ずや、仏は
文字に依つて衆生を度し給うなり、問う其の証拠如何、答えて云く涅槃經
の十五に云く「願わくは諸の衆生悉く皆出世の文字を受持せよ」文、
像法決疑經に云く「文字に依るが故に衆生を度し菩提を得」云云、若し文字
を離れば何を以てか仏事とせん禪宗は言語を以て人に示さざらんや若し示

さずといはば南天竺の達磨は四巻の楞伽經に依つて五巻の疏を作り慧可に
伝うる時・我漢地を見るに但此の經のみあつて人を度す可し汝此れに依つ
て世を度す可し云云、若し爾れば猥に教外別伝と号せんや、次に不伝の言
に至つては冷煖二途・唯自覺了と云つて文字に依るか其れも相伝の後の
冷煖自知なり是を以て法華に云く「惡知識を捨て善友に親近せよ」文、止觀
に云く「師に値わざれば邪慧日に増し生死月に甚し稠林に曲木を曳くが
如く出づる期有こと無けん」云云、凡そ世間の沙汰尚以て他人に談合す況ん
や出世の深理寧ろ輒く自己を本分とせんや、故に經に云く「近きを見る可
らざるこそ人の睫の如く遠きを見る可からざること空中の鳥の跡の如し」
云云、上根・上機の坐禅は且く之を置く当世の禅宗は益を蒙つて壁に
向うが如し、經に云く「盲冥にして見る所無し大勢の仏及び断苦の法を求
めず深く諸の邪見に入つて苦を以て苦を捨てんと欲す」云云、弘決に云く

「世間の顯語尚識らず況んや中道の遠理をや円常の密教寧ろ当に識る可けんや」云云、当世の禪者皆是れ大邪見の輩なり、就中三惑未断の凡夫の語録を用いて四智円明の如來の言教を輕んずる返す返す過てる者か、疾の前に葉なし機の前に教なし等覺の菩薩すら尚教を用いき底下の愚人何ぞ經を信ぜざる云云、是を以て漢土に禪宗興ぜしかば其の国忽ちに亡びき本朝の滅す可き瑞相に闇証の禪師充滿す、止觀に云く「此れ則ち法滅の妖怪なり亦是れ時代の妖怪なり」云云。

禪宗云く法華宗は不立文字の義を破す何故ぞ仏は一字不説と説き給うや、答う汝楞伽經の文を引くか本法自法の二義を知らざるか学ばずんば習うべし其の上彼の經に於いては未顕真実と破られ畢んぬ何ぞ指南と為ん。問うて云く像法決疑經に云く「如來の一句の法を説きたもうを見ず」云云如何、答う是は常施菩薩の言なり法華經には「菩薩是の法を聞いて疑網

みなすで
皆已に除く千二百の羅漢悉く亦当に作仏すべし」と云つて八万の菩薩も千
二百の羅漢も悉く皆列座し聴聞随喜す、常施一人は見えず何れの説に依る
可き法華の座に挙ぐる菩薩の上首の中に常施の名之無し見えずと申すも
道理なり、何に況や次下に「然るに諸の衆生出没有るを見て法を説いて
人を度す」云云、何ぞ不説の一句を留めて可説の妙理を失う可き、汝が立義
一一大僻見なり執情を改めて法華に帰伏す可し、然らずんば豈無道心に
非ずや。

◆十九 八宗違目抄

文永九年二月五十一歳御作 与富木常忍

154P

記の九に云く「若し其れ未だ開せざれば法報は迹に非ず若し顕本し已れ
ば本迹各三なり」文句の九に云く「仏・三世に於て等しく三身有り諸教
の中に於て之を秘して伝えず」

法身如来

仏

報身如来

化身如来

衆生

了因仏性

了因仏性

縁因仏性

衆生の仏性

小乗経には仏性の有無を論ぜず。

仏性有つて了因縁因無し。

華嚴・方等・般若・大日経等には衆生本より了因

法華経には本より三因仏性有り。

文句の十に云く「正因仏性「法身の性なり」は本當に通互す、縁了仏性は種子本有なり今に適むるに非ざるなり」

今・此の三界は皆是れ我が有なり

主国王

世尊なり

法華経第二に云く

其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり

而も今・此の処は諸の患難多し

親父なり
導師なり

唯我一人のみ能く救護をなす

じゅりようぼん
寿量品に云く我も亦為世の父文

主 国王

ほうしんによらい
報身如来

師 親

ほうしんによらい
応身如来

またふとう
法身如来

五百問論に云く「若し父の寿の遠を知らずして復父統の邦に迷わば徒らに才能と謂うとも全く人の子に非ず」又云く「但恐らくは才一国に当るとも父母の年を識らざらんや」

古今・仏道論衡道宣の作に云く「三皇已前は未だ文字有らず但其の母を識つて其の父を識らず禽獸に同じなり」等云云、
鳥等
慧遠法師周の武帝を語る語なり

俱舍宗

成実宗

律宗

華嚴宗

三論宗

うしむしゅうおうじん
有始無終応身は有始有終なり。
うしむしゅうおうじん
釈尊を以て本尊と為すと雖も法身は無始無終報身は

法相宗

だいになにによらい
大日如来は釈迦の法身なり。

一義に云く

真言宗 一向に大日如来を以て本尊と為す二義有り 一義に云く

大日如来は釈迦の法身には非ず。

但し大日経には大日如来は釈迦牟尼仏なりと見えたり人師よりの僻見なり。

浄土宗一向に阿弥陀如来を以て本尊と為す。

法華宗より外の真言等の七宗並に浄土宗等は釈迦如来を以て父と為すこ

とを知らず、例せば三皇已前の人・禽獸に同ずるが如し鳥の中に 鷦鷯鳥

も鳳凰鳥も父を知らず獸の中には兎も師子も父を知らず、三皇以前は大王

も小民も共に其の父を知らず天台宗よりの外・真言等の諸宗の大乗宗は

師子と鳳凰の如く小乗宗は鷦鷯と兎等の如く共に父を知らざるなり。

華嚴宗に十界互具・一念三千を立つること澄觀の疏に之有り。

真言宗に十界互具・一念三千を立つること大日経の疏に之を出す。

天台宗と同異如何、天台宗已前にも十界互具・一念三千を立つるや、

記の三に云く「然るに衆釈を攢むるに既に三乗及び一乘三一俱に性相等の十有りと許す何すれぞ六道の十を語らざるや」三藏等の法華經に依る者
いちねんさんぜん みようもく
一念三千の名 目を立てざるか。

問うて云く華嚴宗は一念三千の義を用いるや後の御宇に之を立つ、答えて
いわ ちようかん じよ
云く澄觀の疏三十三國師に云く「止觀の第五に十法成乘を明す中の第二
しんしょうほつほだいしん しゃく いわ しか
に眞正發菩提心○釈して云く然も此の經の上下の發心の義は文理淵博にし
そ さつりやく
て其の撮略を見る故に取つて之を用い引いて之を証とす」と、二十九に
いわ ほけきよう いわ ゆいぶつよぶつ てんだいいわ すなわ さんぜんせけん
云く「法華經に云く唯仏与仏等と天台云く○便ち三千世間を成すと彼の宗
こ
には此れを以つて実と為す○一家の意理として通ぜざる無し」文。

華嚴經に云く「覺林菩薩之を説くと、弘決には如来林菩薩と引く「心は工なる画師の種種
ごおん いっさいせけん
の五陰を画くが如く一切世間の中に法として造らざること無し心の如く仏
またしか しゅじよう しか およ しゅじよう こ さへつ
も亦爾なり仏の如く衆生も然なり心と仏と及び衆生と是の三差別無し

不空一行に云くは伝教・弘法之を見ず智証之を渡す「此の経は是れ法王の秘宝なり妄りに卑賤の人に示さざれ釈迦出世して四十余年に舍利弗の慇懃なる三請に因りて方に為に略して妙法蓮華の義を説きたまいしが如し、今・此の本地の身又是れ妙法蓮華最深の秘処なるが故に、寿命品に云く常在りようじゅうせん 及余諸住処乃至我浄土不毀而衆見焼尽と即ち此の宗の瑜伽の意ならくのみ又補処の菩薩の慇懃の三請に因つて方に為に之を説けり」と、又云く「又此の経の宗は横に一切の仏教を統ぶ唯蘊無我にして世間の心を出で蘊の中に住すと説くが如きは即ち諸部の小乗三蔵を撰す、蘊の阿頼耶を觀じて自心の本不生を覺ると説くが如きは即ち諸經の八識・三性・無性の義を撰す、極無自性心と十緣生の句を説くが如きは即ち華嚴・般若の種種の不思議の境界を撰して皆其の中に入る、如実知自心を一切種智と名づくと言くが如きは則ち仏性「なり」一乗「なり」如来秘藏「なり」皆其の

中に入る種種の聖言に於て其の精要を統べざること無し、毘盧遮那經の疏
「傳教・弘法之を見る」第七の下に云く天台の誦經は是れ円頓の数息なり
と謂う是れ此の意なり」と。

大宋の高僧伝卷の第二十七の含光の伝に云く「代宗光を重んずること含
光は不空三藏の弟子なり不空を見るが如し勅委して五台山に往いて功德を修せ
しむ、時に天台の宗学湛然「第六の師なり」禅觀を解了して深く智者「天台な
り」の膏腴を得たりと、嘗つて江淮の僧四十余人と清涼の境界に入る、湛然
・光と相見て西域伝法の事を問う、光の云く一国の僧空宗を体得する有り
と問うて智者の教法に及ぶ梵僧云く會て聞く此の教邪正を定め偏円を曉り
止觀を明して功第一と推す再三光に囑す・或は因縁あつて重ねて至らば
為に唐を翻して梵と為して附し来れ某願くは受持せんと屢屢手を握つ
て叮囑す、詳かにするに其の南印土には多く竜樹の宗見を行ず故に此の

るふ
流布を願うこと有るなりと、菩提心義の三に云く一行和上は元是れ天台一
さんまい
行三昧の禪師なり能く天台円満の宗趣を得たり故に凡そ説く所の文言義理
や
動もすれば天台に合す、不空三蔵の門人含光天竺に帰るの日天竺の僧問わ
てんだい
く伝え聞く彼の国に天台の教有りと理致・須ゆ可くば翻譯して此の方に將
さんぞう
来せんや云云、此の三蔵の旨も亦天台に合す、今・或る阿闍梨の云く真言
むね またてんだい
を学せんと欲せば先ず共に天台を学せよと而して門人皆瞋る」云云。
てんだい
問うて云く華嚴經に一念三千を明すや、答えて云く「心仏及衆生」等
いけんきよう いちねんさんぜん
云云、止観の一に云く「此の一念の心は縦ならず横ならず不可思議なり但
しかん
己のみ爾るに非ず仏及び衆生も亦復是くの如し、華嚴に云く心と仏と及び
あち しゅじよう またまかく
しゅじよう
衆生と是の三差別無しと当に知るべし己心に一切の法を具することを入文、
いさ
弘の一に云く「華嚴の下は引いて理の斉きことを証す、故に華嚴に初住の
いわ けこん
心を歎じて云く心の如く仏も亦爾なり仏の如く衆生も然り心と仏と及び
たん いわ こと またしか こと しゅじよう しか およ

衆生しゆじやうと是この三差別さんさべつ無し諸仏しよぶつは悉しつじつく一切いっけつは心こころに従したがつて転りずと了知りやうちしたまえ
り、若もし能よく是かくの如ごとく解とすれば彼あの人真まに仏ぶつを見みたてまつる、身亦またこ是れ
心こころに非あらず心またこも亦是いっさいれ身ぶつじに非なず一切いっさいの仏事ぶつじを作なすこと自在じざいにして未會みそう有なり、
人若もし・三世一切さんぜいの仏いっさいを知らんと欲求ませば応かく是かくの如ごとき觀くわんを作なすべし心
諸もろの如來もろを造つくすと、若もし今家いまの諸もろの円文えんぶんの意い無なくんば彼あの經きやうの偈げの旨むね・理
として実じつに消くし難なんからん」と。

三藏教

小乘しょうじやうの四阿含經あこんきやう

心生ろっかいの六界ろっかい

心具しんぐの六界ろっかいを明あかさず。

大乘だいじやう

通教つうきやう
別教べつきやう

心生ろっかいの六界ろっかい
心生じゆつかいの十界じゆつかい

亦また心具しんぐを明あかさず。
心具しんぐの十界じゆつかいを明あかさず。

思議しぎの十界じゆつかい

爾前にぜん華嚴等けこんの円えん

円教えんきやう

不思議ふしぎの十界じゆつかい互具かいぐ

法華の円

止の五に云く「華嚴に云く心は工なる画師の種種の五陰を造るが如く一切世間の中に心より造らざること莫しと種種の五陰とは前の十法界の五陰の如きなり」又云く「又十種の五陰一一に各十法を具す謂く如是相・性・体・力・作・因・縁・果・報・本末究竟等なり」文、又云く「夫れ一心に十法界を具す一法界に又十法界を具すれば百法界なり一界に三十種の世間を具すれば百法界には即ち三千種の世間を具す此の三千一念の心に在り」文、弘の五に云く「故に大師覺意三昧觀心食法及び誦經法小止觀等の諸の心觀の文に但自他等の觀を以て三仮を推せり並びに未だ一念三千具足を云わず、乃至觀心論の中に亦只三十六の問を以て四心を責むれども亦一念三千に涉らず、唯四念処の中に略して觀心の十界を云うのみ、故に止觀に正しく觀法を明すに至つて並びに三千を以て指南と為せり、乃ち

こ しゅうぐくきよう
是れ終窮究竟の極説なり、 故に序の中に説己心中所行法門と云う良に
ゆえあ
以有るなり請う尋ね読まん者心に異縁無かれ、 止の五に云く「此の十重
かんぼう おうじゆ
の観法は横豎に収束し微妙精巧なり初は則ち境の真偽を簡び中は則ち正助
あいそ すなわ むちやく こころまど
相添い後は則ち安忍無著なり、 意円 かに法巧みに該括周備して初心に規矩
まさ ぎようじゃ
し将に行者を送って彼の薩雲に到らんとすなり 閻証の禪師誦文の法師の
よ あら けだ によういしやくこう ごんぐ
能く知る所に非ざるなり、 蓋し如来積劫の懃求したまえる所・道場の妙悟
よ しんし しよう
したまえる所身子の三請する所・法譬の三たび説く所・正しく茲に在るに
よるか、 弘の五に云く「四教の十六門乃至八教の一期の始終に遍せり
みな たば いちじよう あまねくしきよう くく いちじつ そな も とうぶん
今皆開顯して束ねて一乗に入れ遍く諸経を括りて一実に備う、 若し当分
なほ きようしゆ
を者尚偏教の教主の知る所に非ず況んや復た世間閻証の者をや○、 蓋し
によらい しょうたん すで こ ほつけ しじよう かく ゆえ かえ ほつけ
如来の下は称歎なり十法は既に是れ法華の所乗なり是の故に還つて法華
の文を用いて歎ず迹の説に約せば即ち大通智勝仏の時を指して以て積劫と

な じゃくめつどうじょう
為し寂滅道場を以て妙悟と為す若し本門に約せば我本行菩薩道の時を指
も っ しゃくじょう
して以て積劫と為し本成仏の時を以て妙悟と為す、本・迹二門只是れ此
な じょうぶつ
の十法を求悟せるなり、身子等とは寂場にして説かんと欲するに物の機
しんし
いま 未だ宜からず其の苦に墮せん事を恐れて更に方便を施す四十余年種種に
だ ほうべん ほどこ ぶんじゅうよねんしゅじゅ
ちようじゆく ほ っ け 調 熟し法華の会に至つて初めて略して權を開するに動執生疑して慇懃に
いた とうしゅうしやうぎ おんごん
しやう 三請す五千起ち去つて方に枝葉無し四一を点示して五仏の章を演べ上根
まさ しやう の じやうこん
の 人に被るを名づけて法説と為し、中根は未だ解せざれば猶譬喩を・う下根
こうむ いま げこん
は器劣にして復た因縁を待つ、仏意聯綿として茲の十法に在り、故に十法
また いんねん ぐえ
の文の末に皆大車に譬えたり今の文の憑る所意此に在り、惑者は未だ見ず
みな たと いた
な お け こん 尚華嚴を指す唯華嚴円頓の名を知つて而して彼の部の兼帶の説に味し、全
ただ け こん えん どん しんじ
ほ っ け ぜ っ たい 法華絶待の意を失つて妙教独頭の能を貶挫す、迹本の二文を驗して五時
うしな
の 説を・うれば円極謬らず何ぞ須らく疑を致すべけん是の故に結して
かんが えんごく なん すべか うたがい いた かく ゆえ

まさしく茲に在るかと言う、又云く「初に華嚴を引くことを者重ねて初に引いて境相を示す文を牒す前に心造と云うは即ち是れ心具なり故に造の文を引いて以て心具を証す、彼の經第十八の中に功德林菩薩の偈を説いて云うが如く心は工なる画師の種種の五陰を造るが如く一切世界の中に法として造らざること無し心の如く仏も亦爾なり仏の如く衆生も然なり心と仏とおよし衆生と是の三差別無し、若し人三世の一切の仏を知らんと欲求せば、應に是くの如く觀ずべし心は諸の如来を造ると今の文を解せずんば如何ぞ偈の心造一切三無差別を消せん」文、諸宗の是非之を以て之を糾明す可きなり、
恐恐謹言。

二月十八日

日蓮 在御判

◆二〇 早勝問答

ぶんえい 文永八年 161P

五十歳御作浄土宗問答。

問う六字の番号は善惡の中には何ぞや、答う一義に云く今問う所の善惡は世出の中には何ぞや、一義に云く云う所の善惡を治定せば墮獄治定なるか、一義に云く番号惡と治定せば墮獄治定なるか、一義に云く汝が依經は權實の中には何れぞや。

問う念仏・無間と云わば法華も無間なり、答う一義に云く法華無間とは自義なるか經文なるか、一義に云く念仏・無間をば治定して法華無間と云うか、一義に云く祖師の謗法を治定して法華も無間と云うか、一義に云く汝が云う所の法華は超過の法華か又弥陀成仏の法華か。

問うて云く念仏・無間の証拠二十八品の中には何れぞや、答う一義に云く二十八品の中に証拠有らば墮獄治定なるか、一義に云く法華を誹謗するを証拠とするなり、一義に云く法華の文を尋ぬるは信じて問うか信ぜずして

問うか、一義に云く直に入阿鼻獄の文を出すなり、一義に云く妙法蓮華經
其の証拠なり、一義に云く弥陀の本誓に背く故なり、一義に云く弥陀の命
を断つ故なり、一義に云く有縁の釈尊に背く故なり念仏・無間は三世諸仏
の配立なり。

問う止観の念仏の事、答う一義に云く法然所立の念仏は墮獄治定して
止観を問うか、一義に云く西方の念仏と一なるか異なるか、一義に云く止観
の念仏は法華を誹謗するか、一義に云く彼に文段を問う可し、一義に云く
止観に依つて浄土宗を建立するか。

問う觀經は法華已後の事、答う一義に云く此の故に法華を謗するか、一
義に云く已前ならば無間は治定なるか、一義に云く汝が謗法は無間をば治
定して問うか。

問う觀經と法華と同時なり、答う一義に云く同時なる故に法華を謗する

か、さては返つて観經をも謗するなり。

問う先師の謗法は一往なり且くの字を置く故なり、答う一義に云く且く

謗ぜよとは自義か經文か、一義に云く始終共に謗せば墮獄は治定なるか。

問う未顕眞実は往生に非ず成仏の方なり、答う一義に云く此の故に法華

を謗するか、一義に云く余經は無得道と云う人は僻事か。

問う法華本・迹の阿弥陀をば如何、答う一義に云く法華の弥陀は法華經

を謗せんと誓い給いしか、一義に云く法華の弥陀と三部經と同じきか異なる

か、異ならば無間治定なるか。

問う一称南無仏と何んぞ称名を無益と云わんや、答う一義に云く此の

故に法華を謗するか、一義に云く法華を信じて問うか信ぜずして問うか。

問う法華に「諸の如来に於て」「諸仏を恭敬す」と何ぞ弥陀を捨つるや、

答う一義に云く此の故に法華を謗するか「大旨上の如し。」

問う「余の深法中に示教利喜す」と何ぞ余経を謗するや、答う一義に云くゆえ此の故に法華を謗するや、一義に云く汝が誹謗は治定して問うか又自義かきようもん経文か「大旨上の如し」。

問う普門品に觀世音の称名功德を挙ぐと見えたり何ぞ余の仏・菩薩を捨てんや、答う一義に云く此の故に法華を謗するか、一義に云く此の觀音ほつけは法華を謗するか、一義に云く此の品に依つて念仏を立つるか、私に云くきようもんしやくぎ彼が経文釈義を引かん時は先ず文段を一一問う可し、大段万事の問にはひほう誹謗の言を先とす可きなり、前の当家の義云云。

ぜんしゅうもんどう
禪宗問答。

問う禪天魔の故如何、答う一義に云く仏經に依らざる故なり、一義に云く一代聖教を誹謗する故なり。

問う禪とは三世諸仏成道の始は坐禪し給へり如何、答う一義に云く汝

が坐禪ざぜんは仏しゅつせの出世そむに背てんまかは天魔てんま治定ほつけなるか、又坐禪ざぜんは大小だいしやうの中には何れぞや、一義いわに云く仏の端座六年は法華ほつけに無益むやくと云うか。

問う禪法ぶつせつむやくには仏説ぶつせつむやく無益むやくなり、答う一義いわに云く是自義じぎなるか経文きやうもんなるか、一義いわに云くやがて是てんまが天魔しよいの所為しよいなり。

問う経文きやうもんには「是法不可示ぜほうふかじ」と如何いかん、答う一義いわに云く此の文は法華ほつけむやく無益むやくと云う文なるか、一義いわに云く爾しからば法華ほつけに依よるか、一義いわに云く文段もんを以て責むせ可べきなり。

問う竜女りゆうにょは坐禪ざぜんの成仏じやうぶつなり其の故そのゆえは経文きやうもんに「深く禪定ぜんじやうに入しよほうつて諸法しよほうに達とす」と説き給たまへり、知んぬ法華ほつけむやく無益むやくと云うことを、答う一義いわに云く此の義じぎは自義じぎなるか経文きやうもんなるか、一義いわに云く若もし法華ほつけの成仏じやうぶつならば天魔てんま治定ほつけなるか、一義いわに云く文殊海中もんじゆかいちゆうの教化きやうけは論説みやうほう妙法のべと宣いべたり如何いかん。

問う常に坐禪ざぜんを好み深く禪定ぜんじやうに入しよほうつて常に坐禪ざぜんを貴とうとぶとも説いけり如何いかん、

答う一義に云く文段を以て責む可し、一義に云く此の文は法華無益と云う文なるか、一義に云く此の文を以て禪宗を建立するか。

問う唯独り自のみ明了にして余人の見ざる所と云う故に禪宗ひとり真性

を見て余人は見ずと云うなり、答う一義に云く文段を以て責む可し經文を

見る可し、問う像法決疑經に云く「一字不説」と爾らば一代は未顕真実と

聞きたり真実は只迦葉一人教の外に別伝し給へり如何、答う此の文は仏説

か若し仏説ならば汝此の文に依る故に自語相違なり、一義に云く言う所の

迦葉は何なる經にて成仏するや、一義に云く言う所の經文は三説の中に

は何れぞや、一義に云く楞伽經は仏説なるか。

問う三大部に觀心之有り何ぞ禪天魔と云うや、答う一義に云く汝は三

大部にて宗を立つるか、一義に云く三大部の觀心は汝が禪と同じきか、一

義に云く汝は天台を師とするか、一義に云く三大部の觀心は諸經を捨つ

るか。

問う 雙非の禪の事如何、いかん 答う 一義に云く い一度は法華に依り ひとたび 一度は法華無益ほつけむやくなり、一義に云く い二義共に天魔なり てんま 一義に云く い此の義に背かん者 そむは僻事ひがごとなるか。

問う 法華宗は妙法の道理を知るや、ほつけしゅう みょうぼう どうり 答う 一義に云く い汝は天魔を治定して問うか、一義に云く い汝は法華を信じて問うか、一義に云く い妙法を知つて問うか なんじ 知らずして問うか、一義に云く い汝が問う所の妙法は みょうぼう 今經に付いて こんきょう 百二十の妙有り そ 其の品品を問うか、一義に云く い汝は此の妙法に依つて みょうぼう 禪を建立するか。 こんりゅう 天台宗問答。てんだいしゅうもんどう

問う 天台宗を無間という証拠如何、てんだいしゅう むげん しょうこ 答う 一義に云く い法華を誹謗する故なり、一義に云く い經文に背く故なり。きょうもん そむ

問う 余經無益と云う事は・を判ずる いちおう 一往の意なり さいおう 再往の日は諸乘 しよじょう

いちぶつじよう

一仏乗と開会す何ぞ一往を執して再往の義を捨つるや、答う一義に云く今

言う所の開会とは何れの教の開会ぞや、一義に云く今經に於て本・迹の十

妙の下に各二十の開会あり亦教行人理の四一開会の中には何れぞや、一義

に云く能開所開の中には何れぞや、一義に云く開会の後善惡無しと云うか、

一義に云く天台宗は法華を信ずるか、一義に云く開会の後諸宗を簡ばず

と云わば天台大師僻事なるか其の故は南三・北七云云 伝教大師は六宗

と云云、一義に云く天台宗は悪行をも致す可きか性惡不斷と云うが故に

自語相違なりと責む可きなり、一義に云く開会の後に権実を立つる人は僻事

なるか爾らば藥王の十喩法師の三説超過云云、一義に云く此の故に開会の

心を以て慈覺は法華を謗ずるか、一義に云く汝は慈覺の弟子なるか爾らば

謗法治定なるか。

問う善惡不二・邪正一如の故に強ちに善惡を云う可からず元意の重是な

り、答えて云く天台の出世は悪を息めんが為か又悪を増さんが為か、一義に云く悪事を致せとは法華經二十八品の中には何れの処に見えたるや。

問う 絶待妙の事、答う 一義に云く先ず文段を問う可し、一義に云く何れの教の絶待ぞや、一義に云く此の故に慈覺は法華を謗ずるか。

問う 相待は一往絶待は再往と見えたり如何、答う 自義なるか経文なるか、

一義に云く相待妙一往と云うは二十八品の中には何れに見えたるや、一義

に云く相待妙は法華に明すか余經に明すか若し法華に明さば法華は一往な

るか。

問う 約教・約部の故に約部の日は一往爾前の円を嫌うなり、答う 一義に

云く言う所の約教は天台の判釈の四種の約教の中には何れぞや、一義に

云く約部は落居の釈なるか、一義に云く約部を捨つ可きか、一義に云く

約教の時・爾前の円を嫌わば墮獄は治定なるか、一義に云く約教の辺に

て今昔こんじやく円同じとは法華經ほけきよう二十八品の中何れぞや、一義いゐに云く玄文げんもんの第一だいいちの施開廢ゆえの三重かいえの故に開會かいえの後も余經よきようを捨つると云う文をば知るか知らざるか。

山門流さんもんりゅうの真言宗問答しんこんしゅうもんどう

問う法華第一ほつくだいいちと云うは顯教けんきようの門なり真言しんこんに対すれば第一だいいちとは云う可べからず、答う自義じぎなるか經文きようもんなるか爰ここを以て慈覺大師むげんを無間もうと申すなり、一義いゐに云く真言しんこんに対して法華第一ほつくだいいちならば亡國治定ぼうこくちていなるか、一義いゐに云く真言しんこんは已今當いこんとうの中には何れぞや、若し外もと云わば一機いちき・一緣いちえんの一往いちおうにして秘密ひみつとは云わる可べからざるなり。

問う法華ほつけと真言しんこんとは理同事勝りどうじしょうの故に真言しんこんに対すれば戲論けろんの法と云うか、答う一義いゐに云くさてこそ汝なんじは無間治定むげんなれ、一義いゐに云くさては慈覺じかくは真言しんこんをも謗ぼうずるなり其そのの故は理同りどうの法華ほつけを謗ぼうずる故なり。

問う伝教の本理大綱集の文を以て顕密同と云う事、答う一義に云く此の書は伝教の御作に非ざるなり、一義に云く此の書に依つて法華を慈覺は謗ずるか。東寺流の問答。

問う真言は釈尊の説と云う事其の証拠如何、答う若し真言釈尊の説ならば亡国は治定なるか、若し然なりと云わば弘法大師五蔵を立つる時・法華を六波羅蜜經の五蔵の第四般若波羅蜜藏第五の陀羅尼藏をば真言と建立し給へり如何。

問う真言宗を末顕真実とは言うべからず其の故は釈迦の説の外に建立する故なり如何、答えて云く若し釈尊の説教ならば亡国は治定なるか、一義に云く六波羅蜜經は釈迦の説なるか大日の説なるか、若し釈迦の説ならば末顕真実は治定なるか、他云く釈迦所説の顕教無益なりと。

尋ねて云く六波羅蜜經は顕教・密教の中には何れぞや、他云く

ろくはらみつぎよう

六波羅蜜經は雜部の真言なり我が家の三部は純説の真言なり、答う助証正

証と云う事全く弘法の所判に見えず若し弘法の義ならば墮獄は治定なるか、

いわ しんこん そくしつ けんきよう うえ りやつこう

他云く真言は速疾の教顯教は迂回歴劫の教なり云云、自ら云く自義なる

きようもん

か經文なるか、他云く五秘密教に云く「若し顯教に於て修行する者は久

むしゅう

しく三大無數劫を經」と説け是れ其の証拠なり如何、答う、さて此の經は

しゃか

釈迦の説なるか大日の説なるか若し釈迦の説ならば未顯真実は治定なるか。

ほつけしゅう

問う法華宗は何れの經に依つて仏の印契相好を造るや顯教には無し但

しんこん

真言の印を盗むと覚えたり如何、答う之に依つて法華を謗するか、一義に

いわ なんじ

云く汝盗むの義相違せば亡国は治定なるか、一義に云く汝法華宗の建立

みようほうれんげきよう

する所の大段の妙法蓮華經をば本尊と落居して問うか、一義に云く釈尊

よ こんりゅう

を三部に依つて建立する故に驢牛の三身と下すか若し爾なりと云わば返つ

なんじ

て汝は真言を誹謗する者なりと責む可し、一義に云く三世の諸仏の印契

ひほう

せ

べ

いわ

さんぜ

しよぶつ

いんけい

そうこう 相好実みよに妙法蓮華經ほうれんげきやうに依よつて具足ぐそくするの義落居ぎらくぐせば亡国ぼうこくは治定ちぢやうなるか、又ぬすびと盜人たうじんは治定ちぢやうなるか、一義いゐに云く竜女りゆうにょ靈山りやうせんに即身そくしんに印契いんけい相好具足そうこうぐそくし南方なんぽうに成道じやうどうを唱えしは真言しんごんに依よつて建立こんりゆうするか若し爾もなりと云わば直ただちに經文きやうもんを出せせと責せむ可べきなり。

問ほうこくう亡国しやうこくの証拠しやうこく如何いかん、答ほつけう法華ひほうを誹謗ひぼうする故ほつけなり云云、一義いゐに云く三徳さんとくの釈尊しやくそんに背そむく故ほつけなり云云、一義いゐに云く現世安穩げんせあんのん・後生善処ごしやうぜんしよの妙法蓮華經みやうほうれんげきやうに背そむき奉たてまつる故ほうこくに今生こんじやうには亡国ぼうこく後生ごしやうには無間むげんと云いなり、一義いゐに云く法華經ほけきやう第三の劣きやうもんとは經文きやうもんなるか自義じぎなるか若もし爾しからば亡国治定ぼうこくなるか。

他いゐ云く密教みつぎやうに對たいすれば第三の劣きやうもんなり、答いゐう一義いゐに云く此の義經文きやうもんなるか自義じぎなるか、一義いゐに云く顯教けんきやうの内に法華第一ほつけだいいちなる事落居ほつけするか、若もし爾しかなりと云はばさては弘法こうぼうは僻事ひがごとなり顯教けんきやうの内にして法華ほつけを華嚴けこんに對たいして第二・真言しんごんに對たいして第三と云う故いゐなり、一義いゐに云く真言しんごんに對たいして第一だいいちなら

ば亡国は治定なるか。

他云く印・真言を説かざるが故に第三の劣と云うなり、答う此の故に劣とは経文なるか自義なるか、一義に云く若し法華に説かば亡国は治定なるか。

他云く大日・釈迦各別なり、答う一義に云く此の故に法華を謗ずるか、一義に云く若し一仏ならば亡国は治定なるか、一義に云く各別なれば劣とは経文なるか自義なるか。

他云く顕教は応身密教は法身の説なり此の故に法華は第三の劣なり、自ら云く応身の説の故に法華劣とは経文なるか自義なるか、一義に云く法華法身の説ならば亡国治定なるか、一義に云く真言は応身の説ならば亡国は治定なるか。

他云く五智五仏の時は北方は釈迦中央は大日と見えたり如何、答う一義

に云く中央釈迦しゃかならば亡国治定ぼうこくなるか、一義に云く北方釈迦しゃかと云う事は三部の内に無し不空ふくうの義なり仏説ぶつせつに非ず。

他云く法華ほっけは穢土えどの説なり真言しんごんは三界さんがいの外の法界宮ほっかいの説なり、答う一義に云く真言しんごんは三界さんがいの内の説ならば亡国治定ぼうこくなるか義釈ぎしゃくの文。

他云く顕教けんきょうの内にて大日だいにち・釈迦しゃか一体と説くとも密教みつぎょうの内にては二仏各別かくべつなり名は同じけれども義異なるなり如何いかに、

答う此の故に亡国と云うなり、一義に云く此の如く云う事直に経文きやうもんを出す可いだいきなり。

他云く竜女りゆうによは真言しんごんの成仏じやうぶつ・法華ほっけには三密さんみつ闕かくる故なり、答う自義じぎなるか経文きやうもんなるか。

他云く経文きやうもんなり「陀羅尼だらにを得・不退転ふたいを得たり」云云、陀羅尼だらには三密さんみつの加持かじなり、答う、此の陀羅尼だらにを真言しんごんと云うは自義じぎなるか経文きやうもんなるか、一義

に云くさては弘法の僻事なり其の故は此の陀羅尼を戲論第三の劣と下すなり、一義に云く自語相違なり法華に印有る故なり。

他云く守護經の文に依れば釈迦は大日より三密の法門を習いて成仏するなり、答う此の故に法華を謗するか、一義に云く此の文は三説の内なるか外なるか、一義に云く此れに相違せば亡国は治定なるか。

他云く法華經には「合掌を以て敬心し具足の道は聞かんと欲す」と云へり何ぞ印・真言を捨つるや、答う此の故に法華を謗するか、一義に云く自義なるか經文なるか、一義に云く此の故に真言を捨てずとは經文なるか、一義に云く此の文は真言を持つと云う文なるか、一義に文段を以て責む可し。

他云く弘法大師を無間と云うは經文なるか自義なるか、答う經文なり。

他云く二十八品の中には何れぞや、答う二十八品の中に有らば墮獄治定

なるか、他云く爾なり、答う法華を誹謗すること治定なるか若し爾らば
経文を出して責む可きなり

◆二一 宿屋入道への御状

文永五年八月 四十七歳御作 与宿屋光則 於鎌倉 169P

其の後は書・絶えて申さず不審極り無く候、抑去る正嘉元年丁巳八月

二十三日戌亥の刻の大地震、日蓮諸経を引いて之を勘えたるに念仏宗と

禅宗等とを御帰依有るが故に日本守護の諸大善神瞋恚を作して起す所の災

なり、若し此れを対治無くんば他国の為に此の国を破らる可きの由勘文一

通之を撰し正元二年庚申七月十六日御辺に付け奉つて故最明寺入道殿へ

之を進覧す、其の後九箇年を経て今年大蒙古国より牒状之有る由・風聞

す等云云、経文の如くんば彼の国より此の国を責めん事必定なり、而るに

日本国の中には日蓮一人当に彼の西戎を調伏するの人たる可しと兼て

之^{これ}を知^{ろんぶん}り論文^{これ}に之^{かんが}を勘^{かんが}う、君^{きん}の為^{かんが}・国^{こく}の為^{かんが}・神^{かみ}の為^{かんが}・仏^{ぶつ}の為^{かんが}・内奏^{ないそう}を経^{かんが}ら
る可^べきか、委細^{いさい}の旨^{むね}は見参^{けんさん}を遂^とげて申^{もう}す可^べく候^{こう}、恐恐^{きょうきょう}謹言^{きんげん}。

文永五年八月二十一日

日蓮 花押

宿屋左衛門入道殿

◆二二 北条時宗への御状

169P

謹^{つつし}んで言^{ごんじよう}上^{じやう}せしめ候^{こう}、抑^{おさ}も正月十八日・西戎大蒙古国^{さいじやうだいもうこく}の牒^{ちやうじやう}状^{じやう}到^と来^{らい}

す、日蓮^{にちれん}先年^{しやきやう}諸経^{しよきやう}の要文^{ようぶん}を集^あめ之^{これ}を勘^{かん}えたること立正安国論^{りっしやうあんこくろん}の如^{ごと}く少^{せう}

しも違^{たが}わず普合^{ふごう}しぬ、日蓮^{にちれん}は聖人^{しやうにん}の一分^{いちぶん}に当^{あた}れり未萌^{みぼう}を知る^しが故^ゆなり、

然^{しか}る間重^{かさ}ねて此^この由^{よし}を驚^{おどろ}かし奉^{たてまつ}る急^{いそ}ぎ建長寺^{けんちやうじ}・寿福寺^{じゆふくじ}・極楽寺^{ごくらくじ}・多宝寺^{たぼうじ}・

浄光明寺^{じやうくわうみやうじ}・大仏殿等^{だいにぶつでん}の御帰依^{ごきえ}を止^{とど}めたまえ、然^{しか}らずんば重^{かさ}ねて又四方^{しやうほう}より

責^せめ来^きる可^べきなり、速^{すみ}かに蒙古国^{もうこく}の人^{ひと}を調伏^{じやうぶく}して我^{われ}が国^{こく}を安泰^{あんたい}ならしめ

たま 給え、彼を調伏せられん事日蓮に非ざれば叶う可からざるなり、諫臣国に

在れば則ち其の国正しく争子家に在れば則ち其の家直し、国家の安危は政

道の直否に在り仏法の邪正は經文の明鏡に依る。

そ 夫れ此の国は神国なり神は非礼を稟けたまわず天神七代・地神五代の神

そ 神其の外諸天善神等は一乘擁護の神明なり、然も法華經を以て食と為し

しようじき もつ な ほけきよう いわ しょうぶつ 正直を以て力と為す、法華經に云く諸仏救世者・大神通に住して衆生を

よろこ 悦ばしめんが為の故に無量の神力を現すと、一乗棄捨の国に於ては豈善神

怒を成さざらんや、仁王經に云く「一切の聖人去る時七難必ず起る」と、

ごししよ こたば わ けつちゆう りゆうひ うしな こくい 彼の呉王は伍子胥が詞を捨て吾が身を亡し・桀紂は竜比を失つて国位を

ほろ 喪ぼす、今・日本国既に蒙古国に奪われんとす豈歎かざらんや豈驚かざら

んや、日蓮が申す事御用い無くんば定めて後悔之有る可し、日蓮は法華經

おんつかい いわ すなわ によらい によらい によらい 御使なり經に云く「則ち如来の使如来の所遣として如来の事を行ず」と、

さんぜしよぶつ
三世諸仏の事とは法華經なり、此の由方々へ之を驚かし奉る一所に集めて
御評議有つて御報に予かる可く候、所詮は万祈を抛つて諸宗を御前に召し
合せ仏法の邪正を決し給え、潤底の長松未だ知らざるは良匠の誤り闇中の
錦衣を未だ見ざるは愚人の失なり。

ぶつぼう ぶんべつ おい
三国仏法の分別に於ては殿前に在り所謂阿闍世・陳隋・桓武是なり、
あえてにちれん しきよく あら ただひとえ
敢て日蓮が私曲に非ず只偏に大忠を懷く故に身の為に之を申さず神の為。
君の為・国の為・一切衆生の為に言上せしむる所なり、
ぶんえい
文永五年辰十月十一日
いっさいしゅじょう ため ごんじょう
日蓮花押

きんじょう やどやにゆうどう
謹上 宿屋入道殿

◆二三 宿屋左衛門光則への御状

170P

かんが
先年勘えたるの書安国論に普合せるに就て言上せしめ候い畢んぬ、抑
さいじょうだいまうこくく
正月十八日西戎大蒙古国より牒状到来すと、之を以て之を按ずるに日蓮

は聖人しょうにんの一分いちぶんに当り候か、然りしかと雖も未だ御尋いえどに予らず候の間重かさねて諫状
を捧ささぐ、希ねがわくば御帰依ごきえの寺僧ていしを停止ようせられ宜ほけきしく法華經ほうけきに帰せしむべし、
若し然しからずんば後悔こうかい何ぞ追なんわん、此の趣もつを以て十一所に申せしめ候なり定
めて御評議あ有る可く候か、偏ひとえに貴殿あおを仰たてまつぎ奉る早く日蓮にちれんが本望とを遂いげしめ
給え、十一箇所もつと申すは平の左衛門尉殿さえものじょうに申せしむる所なり委悉いしつ申し度たく
候と雖も上書分いえど明なる間省略ふんみようせしめ候、御氣色みけしきを以て御披露もつ庶幾ごうしよきせしむる
所に候、恐恐きようきよう謹言きんげん。

文永五年ぶんえい辰十月十一日日

日蓮にちれん 花押かおう

謹上きんじよう 宿屋入道殿やどやにゆうどう

◆二四 平左衛門尉頼綱さえものじょうへの御状あみ

171P

蒙古国もうこの牒状ちようじよう到来ちようじようとうらいに就ついて言上ごんじようせしめ候い畢おわんぬ、抑そもそも先年しんねん日蓮にちれん
立正安国論りっしょうあんこくろんに之これを勘かんえたるが如ごとく少しも違たがわず普合ふごうせしむ、然しかる間重かさねて

訴状を以て愁鬱を發かんと欲す爰を以て諫旗を公前に飛ばし争戟を私後に立つ、併ながら貴殿は一天の屋梁為り万民の手足為り争でか此の国滅亡の事を歎かざらんや慎まざらんや、早く須く退治を加えて謗法の咎を制すべし。

夫れ以れば一乗・妙法蓮華經は諸仏正覺の極理・諸天善神の威食なり之を信受するに於ては何ぞ七難来り三災興らんや、剩え此の事を申す日蓮をば流罪せらる争でか日月・星宿罰を加えざらんや、聖徳太子は守屋の悪を倒して仏法を興し秀郷は將門を挫いて名を後代に留む、然らば法華經の強敵為る御帰依の寺僧を退治して宜く善神の擁護を蒙るべき者なり、御式目を見るに非抛を制止すること分明なり、争でか日蓮が愁訴に於ては御叙い無らん豈御起請の文を破るに非ずや、此の趣を以て方々へ愚状を進らす、所謂鎌倉殿・宿屋入道殿・建長寺・寿福寺・極樂寺・大仏殿・

ちようらくじ たほう
長楽寺・多宝寺・浄光明寺・弥源太殿並びに此の状合せ十一箇所なり、各
御評議有つて速かに御報に預るべく候、若し爾らば卞和が璞磨いて玉
と成り法王髻中の明珠此の時に顕れんのみ、全く身の為に之を申さず、神
の為・君の為・国の為・一切衆生の為に言上せしむるの処なり件の
如し、きようきようきんげん 恐恐謹言。

ぶんえい
文永五年戊辰十月十一日

にちれん かおう
日蓮 花押

さえものじよう
平左衛門尉殿

◆二五 北条弥源太への御状

172P

い
去ぬる月、御来臨急ぎ急ぎ御帰宅本意無く存ぜしめ候い畢んぬ、抑蒙古

ちようじようとうらい かみいちにん
国の牒状 到来の事上一人より下万民に至るまで驚動極り無し然りと雖も

いすれ いま こ
何の故なること人未だ之れを知らず、日蓮兼ねて存知せしむるの間既に一

これ しるしせんたつ
論を造つて之を進覧せり 徴先達つて顕れ則ち災必ず後に来る、去ぬる正嘉

がんねんひのとも

元年丁巳八月廿三日戌亥の刻の大地震是併ながら此の瑞に非ずや、法華經

に云く如是相と天台大師云く「蜘蛛下りて喜事来り・鵲鳴いて行人来る」

と、易に云く吉凶動に於て生ずと此等の本文豈替るべけんや、所詮諸宗

の帰依を止めて一乗妙經を信受せしむべきの由勘文を捧げ候、日本亡國

の根源は淨土・真言・禪宗・律宗の邪法惡法より起れり諸宗を召し合せ

諸經勝劣を分別せしめ給え、殊に貴殿は相模の守殿の同姓なり根本滅す

るに於ては枝葉豈栄えんや、早く蒙古國を調伏し國土を安穩ならしめ給え、

法華を謗する者は三世諸仏の大怨敵なり、天照太神・八幡大菩薩等・此の

國を放ち給う故・大蒙古國より牒状来るか、自今已後各各生取と成り他國

の奴と成る可し、此の趣き方々へ之れを驚かし愚状を進ぜしめ候なり、

恐恐謹言。

文永五年辰十月十一日

日蓮 花押

謹上 弥源太入道殿

◆二六 建長寺道隆への御状

173P

夫れ仏閣軒を並べ法門屋に拒る仏法の繁栄は身毒支那に超過し僧宝の形
儀は六通の羅漢の如し、然りと雖も一代諸経に於て未だ勝劣・浅深を知
らず併がら禽獸に同じ忽ち三徳の釈迦如来を抛つて、他方の仏・菩薩を信
ず是豈逆路伽耶陀の者に非ずや、念仏は無間地獄の業・禅宗は天魔の所為
・真言は亡国の惡法・律宗は国賊の妄説と云云、爰に日蓮去ぬる文応元年
の比勘えたるの書を立正安國論と名け宿屋入道を以て故最明寺殿に奉り
ぬ、此の書の所詮は念仏・真言・禅・律等の惡法を信ずる故に天下に災難
頻りに起り 剩え他國より此の國責めらる可きの由之を勘えたり、然るに
去ぬる正月十八日牒狀到来すと日蓮が勘えたる所に少しも違わず普合せ
しむ、諸寺・諸山の祈☆威力滅する故か将又惡法の故なるか鎌倉中の上下

ばんにんどうりゅうしようにん
万人道隆 聖人をば仏の如く之を仰ぎ良観 聖人をば羅漢の如く之を尊
む、其の外寿福寺・多宝寺・浄光明寺・長楽寺・大仏殿の長老等は「我慢
の心充滿し、未だ得ざるを得たりと謂う」の増上慢の大悪人なり、何ぞ
蒙古国の大兵を調伏せしむ可けんや、剩え日本国中の上下万人悉く生
取と成る可く今世には国を亡し後世には必ず無間に墮せん、日蓮が申す事
を御用い無くんば後悔之れ有る可し此の趣鎌倉殿・宿屋入道殿・平の
左衛門の尉殿等へ之を進状せしめ候、一処に寄り集りて御評議有る可く候、
敢て日蓮が私曲の義に非ず只経論の文に任す処なり、具には紙面に載せ
難し併ながら対決の時を期す、書は言を尽さず言は心を尽さず、恐恐謹言。

ぶんえい
文永五年辰十月十一日 日蓮 花押

しんじょう
進上 建長寺道隆証人侍者御中

◆二七 極楽寺良観への御状

174

さいじょうだいもうこくかんちょう

西戎大蒙古国簡牒の事に就て鎌倉殿其の外へ書状を進ぜしめ候、日蓮

いぬ ぶんおうがんねん

かんが

りっしょうあんこくろん

ごうまつばか

そうい

去る文応元年の比勘え申せし立正安国論の如く毫末計りも之に相違せず

いかん

ちようろう

すみや

ちようろう

ひるがえり

にちれんぼう

候、此の事如何、長老忍性速かに嘲哂の心を翻えし早く日蓮房に帰せ

たま

も

しか

にんげん

きようせん

びやくえ

ため

とが

しめ給え、若し然らずんば人間を輕賤する者・白衣の与に法を説くの失

まぬか

がた

えほう

ふえ

きんげん

りようかんしょうにん

じゅうしよ

ほけきよう

脱れ難きか、依法不依人とは如來の金言なり、良觀聖人の住処を法華經

いわ

ある

あれんにや

のうえ

くうげん

あれんにや

に説て云く「・或は阿練若に有り納衣にして空閑に在り」と、阿練若は無

はん

いかで

にちれん

ざんそう

じゅうしよ

そうい

そうい

事と翻ず争か日蓮を譏奏するの条住処と相違せり併ながら三学に似たる矯

そく

しょうにん

せんしろう

ぞうじようまん

こんじよう

そく

らいせ

だざい

賊の聖人なり、偕聖増上慢にして今生は国賊・来世は那落に墮在せん

いささか

いささか

く

にちれん

べ

おもむ

かまくら

こと必定なり、聊かも先非を悔いなば日蓮に帰す可し、此の趣き鎌倉殿を

たてまつけんちようじ

そ

ひろう

にちれん

しよせんほんい

と

ほつ

始め奉り建長寺等其の外へ披露せしめ候、所詮本意を遂げんと欲せば対決

し

すなわ

さんぞう

もつ

しよきよう

ほつ

たいかい

に如かず、即ち三蔵淺近の法を以て諸經中王の法華に向うは江河と大海と

しょうれつ

こと

もうこ

じようぶく

ひほう

ごぞんじあ

あ

華山と妙高との勝劣の如くならん、蒙古国調伏の秘法定めて御存知有る

可く候か、日蓮は日本第一の法華經の行者蒙古国退治の大將な為り「於一切いっさい衆生中亦為第一」とは是なり、文言多端理を尽す能わず併ながら省略せしめ候、恐恐謹言。

文永五年戊辰十月十一日

日蓮花押 謹上

極樂寺長老良觀聖人・御所

◆二八 大仙殿別当への御状 174P

去る正月十八日西戎大蒙古国より牒状到来し候い畢おわんぬ、其の状に云く大蒙古国皇帝日本国王に書を上る大道の行わるる其の義・たり信を構え睦を修す其の理何ぞ異ならん乃至至元三年丙寅正月日と、右此の状の如くんば返牒に依つて日本国を襲う可きの由分明なり、日蓮兼ねて勘え申し立正安国論に少しも相違せず急に退治を加え給え、然れば日蓮を放て之を叶う可からず、早く我慢を倒して日蓮に帰すべし、今生空しく過ぎ

なば後悔何ぞ追わん委しく之を記すこと能わず、此の趣方方へ申せしめ候、
一処に聚集して御調伏有る可く候か。

ぶんえい
文永五年十月十一日

にちれんかおう きんじょう だいぶつでんべつとうごぼう
日蓮花押 謹上 大仏殿別当御房

◆二九 寿福寺への御状 175P

風聞の如くんば蒙古国の簡牒・去る正月十八日慥に到来候い畢んぬ、
然れば先年日蓮が勘えし書の立正安国論の如く普合せしむ、恐くは日蓮は
未萌を知る者なるか、之を以て之を按ずるに念仏・真言・禪・律等の悪法
・一天に充滿して上下の師と為るの故に此の如き他国侵逼の難起れるな
り、法華不信の失に依つて皆一同に後生は無間地獄に墮す可し早く邪見を
翻し達磨の法を捨てて一乗正法に帰せしむ可し、然る間方方へ披露せ
しめ候の処なり、早早一処に集りて御評議有る可く候、委くは対決の時を

期す、きようきようきんげん
恐恐謹言。

文永五年十月十一日

日蓮花押

謹上

寿福寺侍司御中

◆三〇 浄光明寺への御状

175P

大蒙古国の皇帝日本国を奪う可きの由牒状を渡す、此の事先年
立正安国論に勘え申せし如く少しも相違せしめず内内日本第一の勸賞に行
わる可きかと存ぜしめ候の処、剩え御称歎に預らず候、是れ併ながら
鎌倉中著・の類、律宗・禅宗等が「向国王・大臣誹謗説我惡」の故なり、
早く二百五十戒を抛つて日蓮に歸して成仏を期す可し、若し然らずんば
墮在無間の根源ならん、此の趣き方々へ披露せしめ候い畢んぬ、早く一処
に集りて対決を遂げしめ給え日蓮・庶幾せしむる処なり、敢て諸宗を蔑如
するに非ざるのみ、法華の大王戒に対して小乗 ☆ 戒・豈相對に及ばん

や、笑う可し笑う可し。

ぶんえい
文永五年十月十一日

にちれんかおう
日蓮花押

きんじょう じょうこうみょうじ

おんちゅう

謹上 浄光明寺侍者御中

◆三一 多宝寺への御状

176P

にちれん

さいみょうじ

たてまつ

りっしょうあんころん

ひけん

みぼう

日蓮・故最明寺殿に奉りたるの書・立正安国論御披見候か未萌を知つて

これ かんが もう ところ

すで いぬ

もうこ

かんちょうとうらい

なん おどろ

之を勘え申す処なり、既に去る正月蒙古国の簡牒到来す何ぞ驚かざらん

や、此の事不審千万なり

ふしんせんまん たと にちれん

にくし

いえど かんが

あいあた

おい

何ぞ用いざらんや、早く一所に集りて御評議有る可し、若し日蓮が申す事

なん もち

あ

べ

も

にちれん

もう

を御用い無くんば今世には国を亡し後世は必ず無間・大城に墮す可し、此

もち なく

むげん

だいじょう

だ

べ

の旨方々へ之を申せしめしなり敢て日蓮が私曲に非ず委しく御報に預る可

むねかたがた

これ

あえて

にちれん

しきよく

あら

くわ

く候、言は心を尽さず書は言を尽さず併ながら省略せしめ候、恐恐謹言。

きょうきょうきんげん

ぶんえい

文永五年十月十一日

にちれん

かおう

きんじょう

たほう

おんちゅう

日蓮 花押

謹上

多宝寺侍司御中

◆三二 長樂寺への御状

176P

蒙古国調伏の事に就いて方々へ披露せしめ候い畢んぬ、既に日蓮
立正安国論に勘えたるが如く普合せしむ、早く邪法邪教を捨て実法実教
に帰す可し、若し御用い無くんば今生には国を亡し身を失い後生には必ず
那落に墮す可し、速かに一処に集りて談合を遂げ評議せしめ給え日蓮庶幾
せしむる所なり、御報に依つて其の旨を存す可く候の処なり敢て諸宗を
蔑如するに非ず但此の国の安泰を存する計りなり、恐恐謹言。

文永五年十月十一日 日蓮花押

謹上 長樂寺侍司御中

◆三三 弟子・檀那中への御状

177P

大蒙古国の簡牒到来に就いて十一通の書状を以て方々へ申せしめ候、定
めて日蓮が弟子・檀那・流罪・死罪一定ならん少しも之を驚くこと莫れ

かたがた ほうほうへの強言申すに及ばず是併ながら而強毒之の故なり、日蓮庶幾せしむ
る所に候、各各用心有る可し少しも妻子・眷属を憶うこと莫れ權威を恐る
ること莫れ、今度生死の縛を切つて仏果を遂げしめ給え、鎌倉殿・宿屋
入道・平の左衛門尉・弥源太・建長寺・寿福寺・極楽寺・多宝寺・
浄光明寺・大仏殿・長楽寺十一箇所仍つて十一通の状を書して諫訴せしめ
候い畢んぬ、定めて子細有る可し、日蓮が所に来りて書状等披見せしめ給え、
恐恐 謹言。

ぶんえい 文永五年 戊辰 十月十一日

にちれんかおう 日蓮花押

にちれんでし 日蓮弟子・檀那中

◆三四 問注得意抄

ぶんえい 文永六年五月 四十八歳御作

178P

与富木入道外二人

にゅうどう 土木入道殿

にちれん 日蓮

こんにち

たまわ

こと

さんぜん

ひとたび

今日召し合せ御問注の由承り候、

各各御所念の如くならば

三千年に一度

花さき菓なる優曇華に値えるの身か、

西王母の園の桃・九千年に三度之を

得たる東方朔が心か一期の幸何事か之に如かん、御成敗の甲乙は且らく之を

置く前立つて鬱念を開発せんか、但し兼日御存知有りと雖も駿馬にも鞭うつ

の理之有り、今日の御出仕・公庭に望んでの後は設い知音為りと雖も傍輩

に向つて雑言を止めらる可し両方召し合せの時・御奉行人・訴陳の状之を

読むの尅何事に付けても御奉行人の御尋ね無からんの外一言を出す可から

ざるか、設い敵人等悪口を吐くと雖も各各当身の事一二度までは聞かざる

が如くすべし、三度に及ぶの時・顔貌を変ぜず・言を出さず・語を以て

申す可し各各は一处の同輩なり私に於ては全く遺恨無きの由之を申さる

可きか、又御供雑人等に能く能く禁止を加え喧嘩を出す可からざるか、是く

の如き事書札に尽し難し心を以て御斟酌有る可きか、此等の矯言を出す

事恐を存すと雖も仏經と行者と檀那と三事相応して一事を成さんが為に
愚言を出す處なり、恐恐謹言。

五月九日 日蓮花押

三人御中

◆三五 行敏御返事 文永八年七月 五十歳御作 与浄土僧行敏 179P

◆三六 行敏初度の難状 179P

未だ見参に入らずと雖も事の次を以て申し承るは常の習に候か、抑
風聞の如くんば所立の義尤も以て不審なり、法華の前に説ける一切の諸經
は皆是妄語にして出離の法に非ずとは一、大小の戒律は世間を誑惑して
悪道に墮せしむるの法と是二、念仏は無間地獄の業為と是三、禅宗は天魔
の説若し依つて行ずる者は悪見を増長すと是四、事若し実ならば仏法の

おんてき 怨敵なり、仍て対面を遂げて悪見を破らんと欲す、将又其の義無くんば
いか あくみょう 争でか悪名を痛ませられざらんや、是非に付き委く示し賜わる可きなり、
きようきようきんげん 恐恐 謹言。

七月八日 僧行敏花押 かおう

日蓮阿闍梨御房 にちれんあじやりごほう

◆三七 聖人御返事 しょうにんごへんじ

179P

ふしん 条条御不審の事私の問答は事行き難く候か、然れば上奏を經られ仰せ下
おもむきしたが さるるの趣に随つて是非を糾明せらる可く候か、此の如く仰せを蒙り候条
もつとしよき 尤も庶幾する所に候、恐恐 謹言。
きようきようきんげん

七月十三日 日蓮花押 にちれんかおう

行敏御房御返事 ごほうごへんじ

◆三八 行敏訴状御会通

文永八年 五十歳御作 180P

とうせ 日本第一の持戒の僧・良観 聖人並びに法然上人の孫弟子念

あみだぶつ どうあみだぶつ 阿弥陀仏・道阿弥陀仏等の諸聖人等日蓮を訴訟する状に云く早く日蓮を召

し決せられて邪見を摧破し正義を興隆せんと欲する事云云、日蓮云く邪見

を摧破し正義を興隆せば一眼の亀の浮木の穴に入るならん、幸甚幸甚。

彼の状に云く右八万四千の教乃至一を是として諸を非とする理豈に然る

可けんや云云、道綽禪師云く当今末法は是五濁惡世なり唯浄土の一門のみ

有つて路に通入す可し云云、善導和尚云く千中無一二云云、法然上人云く

捨閉閣抛云云、念阿上人等の云く一を是とし諸を非とす謗法なり云云、

本師三人の聖人の御義に相違す豈に逆路伽耶陀の者に非ずや、将又忍性

良観 聖人彼等の立義に与力して此を正義と存せらるるか、又云く而るに

日蓮偏えに法華一部に執して諸余の大乗を誹謗す云云、無量義經に云く

よんじゅうよねん 四十余年・未顕真実・法華經に云く要當說真実と・又云く宣示顯說と・
たほうぶつしょうみょう 多宝仏証明を加えて云く皆是真実と十方の諸仏は舌相至梵天と云う云
いこんとう 云、已今當の三説を非毀して法華經一部を讚歎するは釈尊の金言なり諸仏
ほうれい 傍例なり敢て日蓮が自義に非ず、其の上此の難は去る延曆・大同・弘仁
この比・南都の徳一大師が伝教大師を難破せし言なり、其の難已に破れて
ほつけしゅう 法華宗を建立し畢んぬ。

いわ いわゆるほつけ 又云く所謂法華前説の諸經は皆是れ妄語なりと云云此又日蓮が私の言に
あら むりようぎきよう 非ず、無量義經に云く未だ真実を顯さず妄語の異名なり法華經第二に云く
むし こもつ 寧ろ虚妄有りや不なり云云、第六に云く此の良医虚妄の罪を説くや不や云
ねはんぎきよう 云、涅槃經に云く如来虚妄の言無しと雖も若し衆生虚妄の説に因ると知れ
ば云云、天台云く則ち為如来綺語の語云云、四十余年の經經を妄語と
しょう 称すること又日蓮が私の言に非ず、又云く念仏は無間の業と云云法華經第一

に云く我れ則ち慳貪に墮せん此の事為不可なり云云、第二に云く其の人
命終して阿鼻獄に入らん云云、大覺世尊但觀經・念仏等の四十余年の
経經を説て法華經を演説したまわずんば三惡道を脱れ難し云云、何に
況や末代の凡夫・一生の間・但自らも念仏の一行に留り他人をも進めずん
ば豈無間に墮せざらんや、例せば民と子との王と親とに随わざるが如し、
何に況や道綽・善導・法然上人等念仏等を修行する輩法華經の名字を
挙げて念仏に對当して勝劣難易等を論じ未有一人得者・十即十生・
百即百生・千中無一等と謂うは無間の大火を招かざらんや、又云く禪宗
は天魔波旬の説と云云、此又日蓮が私の言に非ず彼の宗の人人の云く教外
別伝と云云、仏の遺言に云く我が經の外に正法有りといわば天魔の説なり
云云、教外別伝の言豈此の科を脱れんや、又云く大小の戒律は世間誑惑の
法と云云、日蓮が云く小乗戒は仏世すら猶之を破す其の上月氏国に三寺

有り、所謂一向小乗の寺と一向大乘の寺と大小兼行の寺となり云云、

一向小と一向大とは水火の如し將又道路をも分隔せり、日本国に去る聖武

皇帝と孝謙天皇との御宇に小乗の戒壇を三所に建立せり、其の後桓武の

御宇に伝教大師之を責め破りたまひぬ、其の詮は小乗戒は末代の機に当

らずと云云、護命景深の本師等其の諍論に負くるのみに非ず六宗の碩徳

各退状を捧げ伝教大師に帰依し円頓の戒体を伝受す云云、其の状今に朽ち

ず汝自ら開き見よ、而るを良観上人当世・日本国の小乗は昔の科を存

せずという、又云く年来の本尊弥陀・観音等の像を火に入れ水に流す等云

云、此の事慥なる証人を指し出し申す可し若し証拠無くんば良観上人等

自ら本尊を取り出して火に入れ水に流し科を日蓮に負せんと欲するか委細

は之を糾明せん時其の隠れ無らんか、但し御尋ね無き間は其の重罪は

良観上人等に譲り渡す、二百五十戒を破失せる因縁此の大妄語に如かず

むげん・大城だいじょうの人他処たしよに求ること勿なれ、又云く凶徒きやうとを室中に集むと云云、
法華經ほけきやうに云く・或あるは阿練若あれんにやに有り等云云、妙樂みやうらく云く東春いわ云く輔正ふしやう記き云く
此等の經釈等きやうしやくを以て当世もつとう・日本国にほんこくに引き向うるに汝等なんじが擧る所の建長寺けんちやうじ
・寿福寺じゆふく・極樂寺ごくらく・多宝寺たほう・大仏殿だいぶつでん・長樂寺ちやうらくじ・淨光明寺等の寺じは妙樂みやうらく
大師だいしの指す所の第三最はなはだ甚はなはだの惡所なり、東春いわに云く即すなわち是れ出家処しゆつに一切いっさい
の惡人あくにんを撰せんす云云、又云く兩行は公処いわに向う等云云、又云く兵ひやうじやう・杖等云云、
涅槃經ねはんきやうに云く天台てんだい云く章安しやうあん云く妙樂みやうらく云く法華經守護ほけきやうしゆごの爲の弓箭もつてきゆうせんひやうじやう・杖は
ぶつぽう
仏法の定れる法なり例せば國王守護こくおうしゆごの爲に刀杖たうじやうを集むるが如ごとし、但ただし
良觀りやうかん上人等弘通くつうする所の法・日蓮にちれんが難脱なんまぬかれ難がたきの間既すでに露顯ろけんせしむ可べき
か、故ゆゑに彼の邪義じゃぎを隠かくさんが爲に諸國しよこくの守護地頭しゆごじ雜人等そうにんを相語かたらいて言いわく
日蓮並にびに弟子等でしは阿彌陀あみだ仏ぶつを火に入れ水に流す汝等なんじが大怨敵おんてきなりと云
云、頸しよりやうを切れ所領しよりやうを追かんじんい出せ等と勸進かんじんするが故に日蓮ゆゑの身にちれんに疵きずを被こり弟子でし

等を殺害に及ぶこと数百人なり、此れ偏に良觀・念阿・道阿等の上人の大妄語より出たり心有らん人人は驚く可し怖る可し云云、毘瑠璃王は七千の諸の得道の人を殺す、月氏国の大族王は卒都婆を滅毀し僧伽藍を廢すること凡そ一千六百余処乃至大地震動して無間地獄に墮ちにき、毘盧釈迦王は釈種九千九百九十万人を生け取りて並べ従えて殺戮す積屍葬の如く流血池を成す、弗沙弥多羅王は四兵を興して五天を回らし僧侶を殺し寺塔を焼く、説賞迦王は仏法を毀壞す、訖利多王は僧徒を斥逐し仏法を毀壞す、欽明・敏達・用明の三王の詔に曰く炳然として宜く仏法を斷ずべし云云、二臣自ら寺に詣で堂塔を斫倒し仏像を毀破し火を縦つて之を焼き所焼の仏像を取つて難波の堀江に棄て三尼を喚び出して其の法服を奪い並びに笞を加う云云、大唐の武宗は四千六百余処を滅失して僧尼還俗する者計うるに二十六万五百人なり、去る永保年中には山僧・園城寺を焼き払う云云、

御願は十五所・寺院は九十所・塔婆は四基・鐘樓は六宇・經藏は二十所・神社は十三所・僧坊は八百余宇・舎宅は三千余等云云、去る治承四年十二月二十日・太政入道・浄海・東大・興福の両寺を焼失して僧尼等を殺す、此等は仏記に云く此等の悪人は仏法の怨敵には非ず・三明六通の羅漢の如き僧侶等が我が正法を滅失せん、所謂守護經に云く・涅槃經に云く。日蓮

◆三八 一昨日御書

文永八年九月 五十歳御作 与平左衛門尉頼綱

183P

一昨日見参に罷入候の条悦び入り候、抑人の世に在る誰か後世を思わざらん仏の出世は専ら衆生を救わんが為なり、爰に日蓮比丘と成りしより旁法門を開き已に諸仏の本意を覚り早く出離の大要を得たり、其の要は妙法蓮華經是なり、一乗の宗重・三国の繁昌の儀・眼前に流る誰か疑網を貽さんや、而るに専ら正路に背いて偏に邪途を行ず然る間聖人国を捨て

善神ぜんじん瞋ちんを成なりし七難ひちなん並びに起おこつて四海しかい閑かんかならず、方今ことごと世かんとうは悉ことごとく関東かんとうに歸かへし人みなは皆みな士風しふうを貴とうとぶ、就な中日な蓮生れんせいを此この土ちに得えて豈あに吾わが国くにを思おもわざらんや、仍またつて立正安国論りっしょうあんこくろんを造つくつて故最明寺さいみょうじ入道にゅうどう殿どのの御時宿屋おんときやどやの入道にゅうどうを以もつて見参けんさんに入れ畢おわんぬ、而しかに近年きんねんの間、多日けんじょうの程ほど・犬戎けんじょう浪らんを乱いたし夷敵国いてきを伺うかう、先年かんが勘もうえ申きんじつす所近日きんじつ符合きんじつせしむる者ものなり、彼の太公たこうが殷いんの国くにに入りしは西伯しやくの礼れいに依より張良ちやうが秦朝しんてうを量はかりしは漢王かんわうの誠まことを感じかんずればなり、是これ皆みな時に當あつて賞しょうを得え・謀いを帷帳いけちやうの中ちゆうに回めぐらし勝かちつことを千里せんりの外ほかに決きせし者ものなり、夫それ末萌みぼうを知る者ものは六正ろくせいの聖臣せいしんなり法華ほつけを弘ひろむる者ものは諸仏しよぶつの使者しやしやなり、而しかに日蓮にちれん忝かたじけなくも鷲嶺じゆれい・鶴林かくりんの文ぶんを開ひらいて鵝王がおう・烏瑟ういつの志こころざしを覚さとり剩あまつさええ将来きんがを勘かんえたるに粗符合ほほすることを得えたり先哲せんてつに及およばずと雖いえども定さだんで後人ごにんには希まれなる可べき者ものなり、法はふを知しり国くにを思おもうの志こころざし尤なほも賞しょうせらる可べき処ところにやじゃほうじゃきようやからざんそうざんげん

・邪法じゃはふ邪教じゃきようの輩やから・讒奏ざんそう讒言ざんげんするの間久おほしく大忠おほしを懷いまいて而しかも未いまだ微望いぼうを

達せず、あまつさえ 剽え 不快の見参に罷り入ること偏に難治の次第を愁うれうる者なり、

伏して惟おもんみれば泰山に昇らずんば天の高きを知らず深谷に入らずんば地の

厚きを知らず、仍よつて御存知の為に立正安国論一卷之を進覧す、勘かんえ載のする

所の文は九牛の一毛なり未だ微志を尽さざるのみ、抑そもそもきへん貴辺は当時・天下

の棟梁なり何ぞ国中の良材を損せんや、早く賢慮を回らして須く異敵を退

くべし世を安やすんじ国を安やすんずるを忠と為し孝と為す、是れ偏に身の為に之を述

べず君の為仏の為神の為一切衆生の為に言上せしむる所なり、恐恐きようきよう

謹言きんげん。

文永八年九月十二日 ぶんえい 日蓮花押 にちれんかおう 謹上 きんじよう 平左衛門殿 さへもん

◆三九 強仁状御返事 ごへんじ 建治元年十二月 がんねん 五十四歳御作

与真言僧強仁 しんこん 184P

強仁上人十月二十五日の御勘状同十二月二十六日に到来す、此の事余

も年来鬱訴する所なり忽に返状を書いて自他の疑氷を釈かんと欲す、但し
歎ずるは田舎に於て邪正を決せば暗中に錦を服して遊行し澗底の長松・匠
を知らざるか、兼ねて又定めて喧嘩出来の基なり、貴坊本意を遂げんと
欲せば公家と関東とに奏聞を経て露点を申し下し是非を糾明せば上一人咲
を含み下万民疑を散ぜんか、其の上大覺世尊は仏法を以て王臣に付属せ
り世・出世の邪正を決断せんこと必ず公場なる可きなり、就中当時・我
が朝の体為る二難を盛んにす所謂自界叛逆難と他国侵逼難となり、此の
大難を以て大蔵經に引き向えて之を見るに定めて国家と仏法との中に大禍
有るか、仍つて予正嘉文永二箇年の大地震と大長星とに驚いて一切經を
聞き見るに此の国の中に前代未起の二難有る可し所謂自他叛逼の兩難なり、
是れ併ながら真言・禪門・念仏・持齋等・権小の邪法を以て法華真実の
正法を滅失する故に招き出す所の大災なり、只今他国より我が国を逼む

可^べき由^か・兼^かねて之^{これ}を知る故^{ゆえ}に身命^{しんみょう}を仙神^{ぶっしん}の宝前^{ほうぜん}に捨棄^{しやき}して刀劍^{とうけん}・武家^{ぶけ}の責^せを恐れず昼^{こくしゅ}は国主^{こくしゅ}に奏^{そう}し夜^よは弟子^{でし}等に語^{かた}る、然^{しか}りと雖^{いえど}も真言^{しんごん}・禪門^{ぜんもん}・念仏^{ねんぶつ}者^{りつそう}・律僧^{しゆじゆ}等^{おうげん}・種種^{かま}の誑言^{ざんご}を構^{くわだ}え重重^{じやうじやう}の讒訴^{せんそ}を企^{くわだ}つるが故^{ゆえ}に叙用^{じやうよう}せられざるの間処^{しよしよ}処^{おい}に於^おて刀杖^{とうじやう}を加^くえられ兩度^{りやうど}まで御勘氣^{ごかんき}を蒙^{こおむ}る剩^{あまつさ}え頭^こを刎^はねんと擬^ぎする是^この事^{こと}なり、夫^それ以^もれば月支漢土^{おもんみればがっしかんど}の仏法^{ぶつぽう}の邪正^{じゃせい}は且^{しば}らく之^{これ}を置^おく大^{だい}日本^{にほん}国^{こく}・亡国^{ぼうこく}と爲^なる可^べき由^ゆ來^{らい}之^{これ}を勘^{かん}うるに真言宗^{しんごんしゅう}の元祖^{がんそ}たる東寺^{とうじ}の弘法^{こうぼう}・天台^{てんだい}山^{さん}第三^{ざす}の座主^{ざす}慈覺^{じかく}・此^{だい}の兩大師^{りやうだいし}・法華經^{ほけきやう}と大日經^{だいにちきやう}との勝劣^{しょうれつ}に迷惑^{めいわく}し日本^{にほん}第一^{だいいち}の聖人^{しょうにん}なる伝教大師^{でんぎやうだいし}の正義^{せいぎ}を隱没^{おんもつ}してより已來^{このかた}叡山^{えいざん}の諸寺^{しよ}は慈覺^{じかく}の邪義^{じゃぎ}に付き神護^{まも}七^{なな}大寺^{だいてし}は弘法^{こうぼう}の僻見^{びやくけん}に隨^{したが}う其^それより已來^{このかた}王臣^{わうしん}邪師^{じゃし}を仰^あぎ万民^{ばんみん}僻見^{びやくけん}に歸^{かへ}す、是^{かく}の如^{ごと}き諂曲^{てんこく}既^{すで}に久^くしく四百余年^{しやうりやく}を經^き歴^{れき}し国^{こく}漸^{ようや}く衰^{おとろ}え王法^まも亦^{また}尽^つきんとす彼の月支^{がっし}の弗沙弥^{ふっし}多羅王^{たらかみ}の八万四千^{はちまん}の寺塔^{じとう}を焚^{ほん}燒^{しょう}し無量^{むりやう}仏子^{ぶつし}の頸^{けい}を刎^はねし、此^{かん}の漢土^{えしやうてん}の会昌^{かいしやう}天子^{てんし}の寺院^{じやういん}四千六百^{しせんりくひやく}余^よ所^{しよ}を

滅失し九国の僧尼還俗せしめたる此等大悪人爲りと雖も我が朝の大謗法に
は過ぎず、故に青天は眼を瞋らして我が国を睨み黄地は憤を含んで動も
すれば天・を發す、国主聖主に非れば謂れ之を知らず諸臣儒家に非れば事
之を勘えず、剩え此の災天を消さんが爲に真言師を渴仰し大難を卻けんが
爲に持斎等を供養す、譬えば火に薪を加え氷に水を増すが如く惡法は弥
貴まれ大難は益々来る只今・此の国滅亡せんとす。

予粗先ず此の子細を勘うるの間・身命を捨棄し国恩を報ぜんとす、而る
に愚人の習い遠きを尊び近きを蔑るか将又多人を信じて一人を捨つるかの
故に終に空しく年月を送る、今幸に強仁上人・御勘状を以て日蓮を曉諭
す然る可くは此の次でに天聴を驚かし奉つて決せん、誠に又・御勘文の
体爲非を以て先と爲し若し上人黙止して空しく一生を過せば定めて師檀共
に泥梨の大苦を招かん、一期の大慢を以て永劫の迷因を殖ること勿れ速速

天奏を経て疾疾対面を遂げ邪見を翻えし給え、書は言を尽さず言は心を
尽さず悉々公場を期す、恐恐謹言。

十二月廿六日

日蓮 花押

強仁上人座下

◆四〇 開目抄上

文永九年（1172年）二月 五十一歳御作 与門下

一同 於佐渡塚原 186P

夫れ一切衆生の尊敬すべき者三あり、所謂主師親これなり、又習学す
べき物三あり、所謂儒外内これなり。

儒家には三皇・五帝・三王・此等を天尊と号す諸臣の頭目・万民の橋梁

なり、三皇已前は父をしらず人皆禽獸に同ず五帝已後は父母を并て孝を

いたす、所謂重華はかたくなはしき父をうやまひ沛公は帝となつて大公を

拝す、武王は西伯を木像に造り丁蘭は母の形をきざめり、此等は孝の手本

なり、比干ひかんは殷の世の・ほろぶべきを見て・しめて帝をいさめ頭こづへをはねらる、公胤こういんといふし者は懿公の肝をとつて我が腹をさき肝を入れて死しぬ此等
は忠の手本てほんなり、尹寿いんじゅは堯王の師・務成むせいは舜王の師・大公望たいこうぼうは文王の師
老子ろうしは孔子の師なり此等を四聖ししやうとがうす、天尊てんそん・頭こづへをかたづけ万民・
掌たなごころをあわす、此等の聖人に三墳・五典・三史等の三千余巻の書あり、
其の所詮しよせんは三玄をいはず三玄とは一には有の玄・周公等此れを立つ、二に
は無の玄・老子等・三には亦有亦無等・莊子が玄これなり、玄とは黒なり
父母ふぼ・末生いぜん・已前いぜんをたづぬれば、或あるは元氣よりして生じ、或あるは貴賤・苦
楽・是非ぜひ・得失等とくしつは皆自然等云云。かくのごとく巧たくみに立つといえども・い
まだ過去かこ・未来みらいを一分いちぶんもしらず玄とは黒なり幽なりかるがゆへに玄という
但現在げんざい計りしるににたり、現在げんざいにをひて仁義を制して身をまほり国を安
んず此に相違そういすれば族やからをほろぼし家を亡ぼす等いう、此等の賢聖けんせいの人人ひとびとは

聖人なりといえども過去を・しらざることを凡夫の背を見ず・未来を・かがみざること盲人の前をみざるがごとし、但現在に家を治め孝をいたし堅く五常を行ずれば傍輩も・うやまい名も国にきこえ賢王もこれを召して・或は臣となし・或は師とたのみ・或は位をゆづり天も来て守りつかう、所謂周の武王には五老きたりつかえ後漢の光武には二十八宿来つて二十八将となりし此なり、而りといえども過去・未来をしらざれば父母・主君・師匠の後世をもたすけず不知恩の者なり・まことの賢聖にあらず。孔子が此の土に賢聖なし西方に仏図という者あり此聖人なりといひて外典を仏法の初門となせしこれなり、礼楽等を教て内典わたらば戒定慧をしりやすからせんがため・王臣を教て尊卑をさだめ、父母を教て孝の高きをしらしめ師匠を教て帰依をしらしむ、妙楽大師云く「佛教の流化実には茲に頼る礼楽前に馳せて真道後に啓く」等云云、天台云く「金光明經に云く一切世間所有

の善論皆此の經に因る、若し深く世法を識れば即ち是れ仏法なり」等云云、止觀に云く「我れ三聖を遣わして彼の真丹を化す」等云云、弘決に云く「清淨法行經に云く月光菩薩彼に顔回と稱し光淨菩薩彼に仲尼と稱し迦葉菩薩彼に老子と稱す天竺より此の震旦を指して彼と為す」等云云。

二には月氏の外道・三目八臂の摩醯首羅天・毘紐天・此の二天をば一切

衆生の尊父・悲母・又天尊・主君と号す、迦毘羅・樓僧ぎや・勒姿婆・此

の三人をば三仙となづく、此等は仏前八百年・已前已後の仙人なり、此の

三仙の所説を四韋陀と号す六万蔵あり、乃至・仏・出世に當つて六師外道

・此の外經を習伝して五天竺の王の師となる支流・九十五六等にもなれ

り、一一に流流多くして我慢の瞳高きこと非想天にもすぎ執心の心の堅

きこと金石にも超えたり、其の見る深きこと巧なるさま儒家には・にるべ

くもなし、或は過去・二生・三生・乃至七生・八万劫を照見し又兼て

未来・八万劫をしる、其の所説の法門の極理・・或は因中有果・・或は
因中無果・・或は因中亦有果・亦無果等云云、此れ外道の極理なり所謂
善き外道は五戒・十善戒等を持つて有漏の禪定を修し上・色・無色をき
わめ上界を涅槃と立て屈歩虫のごとく・せめのぼれども非想天より返つて
三惡道に墮つ一人として天に留るものなし而れども天を極むる者は永くか
へらずと・をもえり、各各・自師の義をうけて堅く執するゆへに・或は冬
寒に一日に三度・恒河に浴し・或は髪をぬき・或は巖に身をなげ・或は身
を火にあぶり・或は五処をやく・或は裸形・或は馬を多く殺せば福をう
・或は草木をやき・或は一切の木を礼す、此等の邪義其の数をしらず師を
恭敬する事・諸天の帝釈をうやまい諸臣の皇帝を拜するがごとし、しか
れども外道の法・九十五種・善惡につけて一人も生死をはなれず善師につ
かへては二生・三生等に惡道に墮ち惡師につかへては順次生に惡道に

お 墮つ、外道の所詮は内道に入る即最要なり・或外道云く「千年已後・仏出世す」等云云、あるげどういわ「百年已後・仏出世す」等云云、いご大涅槃經に云く「一切世間の外道の經書は皆是れ仏說にして外道の說に非ず」等云云、げどう法華經に云く「衆に三毒有りと示し又邪見の相を現ず我が弟子是くの如くほうききょう いわ方便して衆生を度す」等云云。しょうじん しゅじょう

三には大覺世尊は、此一切衆生の大導師・大眼目・大橋梁・大船師・大福田等なり、ふくでん外典・外道の四聖・三仙其の名は聖なりといえども実にはげてん げどう ししやう三惑未斷の凡夫・其の名は賢なりといえども実に因果を弁えざる事嬰兒のさんなくみだん ほんぶ そごとし、彼を船として生死の大海をわたるべしや。彼を橋として六道の巷しょうじ たいかいこえがたし。我が大師は変易・猶を・わたり給へり。だいし へんにやく なお たま況や分段の生死をやいわんや元品の無明の根本猶をかたづけ給へり。がんぽん むみょう こんほん たま況や見思枝葉の鹿惑をや、此の仏陀いわんやけんじしやう そわく ぶつだは三十成道より八十御入滅にいたるまで五十年が間・一代の聖教をじゅうどう じゅうめつ いちだい しょうきやう

と
説き給へり、一字・一句・皆真言なり一文一偈・妄語にあらず外典・外道
中の聖賢の言すらいふこと、あやまりなし事と心と相符へり況や仏陀は
むりようの妄語の人・されば一代・五十余年の説教は外典外道に對
すれば大乘なり大人の実語なるべし、初成道の始より泥の夕にいたるま
で説くところの所説・皆真実なり。

但し仏教に入て五十余年の経経・八万法蔵を勘えたるに小乗あり
大乘あり権經あり実經あり顯教・密教・☆語・麁語・実語・妄語・
正見・邪見等の種種の差別あり、但し法華經計り教主釈尊の正言なり三世
十方の諸仏の真言なり、大覺世尊は四十余年の年限を指して其の内の
恒河の諸經を未顯真実・八年の法華は要當說真実と定め給しかば多宝仏大
地より出現して皆是真実と証明す、分身の諸仏・來集して長舌を梵天
に付く此の赫赫たり明明たり。晴天の日よりも・あきらかに夜中の満月の

ごとし仰いあおで信ぜよ伏して懷おもうべし。

但ただし此の經に二箇の大事あり俱舍宗・成実宗・律宗・法相宗・

さんろんしゅう

三論宗等は名をもしらず華嚴宗と真言宗との二宗は偷に盗んで自宗の

こつもく

骨目とせり、一念三千の法門は但法華經の本門・寿量品の文の底にしづめ

りゅうじゅ

たり、竜樹・天親・知つてしかも・いまだ・ひろいいださず但我が天台

ちしゃ

智者のみこれをいだけり。

いちねんさんぜん

一念三千は十界互具よりことはじまれり、法相と三論とは八界を立てて

じゅつかい

十界をしらず況や互具をしるべしや、俱舍・成実・禪宗等は阿含經によ

ろっかい

れり六界を明らかに四界をしらず、「十方唯一仏」と云つて一方有仏だ

いっさいうじょう

にもあかさず、一切有情・悉有仏性ところそ・とかざらめ。一人の仏性猶

りっしゅう

ゆるさず、而るを律宗・成実宗等の十方有仏・有仏性なんと申すは仏滅

にんし

後の人師等の大乘の義を自宗に盗み入れたるなるべし、例せば外典・外道

等は仏前の外道は執見あさし仏後の外道は仏教をききみて自宗の非をしり
巧の心・出現して仏教を盗み取り自宗に入れて邪見もつとも・ふかし、
ふぶつきよう　かくふぶつぼうじよう
附仏教・学仏法成等これなり、外典も又かくのごとし漢土に仏法いまだ
・わたらざりし時の儒家・道家はいういうとして嬰兒のごとく・はかなか
りしが後漢・已後に釈教　わたりて対論の後・釈教　やうやく流布する程
しゃつつきよう　そりうよ　はかい　ある　げんそく　ある
に釈教の僧侶・破戒のゆへに・或は還俗して家にかへり・或は俗に心を
あはせ儒道の内に釈教を盗み入れたり。止観の第五に云く「今世多く悪魔
の比丘有つて、戒を退き家に還り駈策を懼畏して更に道士に越済す、復
た名利を邀めて莊老を誇談し、仏法の義を以て偷んで邪典に安き、高を押
して下きに就け、尊を推いて卑しきに入れ概して平等ならしむし」云云。弘
に云く「比丘の身と作つて仏法を破滅す。若しは戒を退き家に還るは、衛
の元嵩等が如し、即ち在家の身を以て仏法を破壊す、此の人正教を偷・

して邪典に助添す、『高きを押して』等とは道士の心を以て二教の概と
為し邪正をして等しからしむ。義是の理無し、曾つて仏法に入つて正を偷ん
で邪を助け八万・十二の高きを押して五千二篇の下きに就け用つて彼の典
の邪鄙の教を釈するを推尊入卑と名く」等云云、此の釈を見るべし次上の
心なり。

ぶつきよう

仏教又かくのごとし、後漢の永平に漢土に仏法わたりて、邪典やぶれて

ないてん

ないてん

なんざん

ほくひち

いしゅう

かんど

ぶつぽう

らんぎく

ちんずい

陳隋の

ちしゃだいし

智者大師にうちやぶられて仏法二び群類をすくう。

その後・

法相宗・

しんこんしゅう

てんじく

けこんしゅう

しゅつたい

これら

此等の宗宗の中に法相宗は

いっこう

てんだいしゅう

ほうもんすいか

一向・天台宗に敵を成す宗・法門水火なり、しかれども玄奘三蔵・慈恩

だいし

いさい

てんだい

大師・委細に天台の御釈を見ける程に自宗の邪見ひるがへるかのゆへに

じしゅう

自宗をば・すてねども其の心天台に帰伏すと見へたり、華嚴宗と真言宗と

じしゅう

そ

てんだい

きふく

自宗をば・すてねども其の心天台に帰伏すと見へたり、華嚴宗と真言宗と

けこんしゅう

しんこんしゅう

は本は権経・権宗なり善無畏三蔵・金剛智三蔵・天台の一念三千の義を盗みとつて自宗の肝心とし其の上に印と真言とを加て超過の心を・をこす、其の子細をしらぬ学者等は天竺より大日経に一念三千の法門ありけりと・うちをもう、華嚴宗は澄観が時・華嚴経の心如工画師の文に天台の一念三千の法門を偷み入れたり、人これをしらず。

にほん

日本・我朝には華嚴等の六宗・天台・真言已前にわたりけり、華嚴・

三論・法相・諍論水火なりけり、伝教大師・此の国にいでて六宗の邪見

をやぶるのみならず真言宗が天台の法華経の理を盗み取て自宗の極とする

事あらはれ・をはんぬ、伝教大師・宗宗の人師の異執をすてて専ら経文

を前として責めさせ給しかば六宗の高徳・八人・十二人・十四人・三百余

人・並に弘法大師等せめをとされて日本国・一人もなく天台宗に帰伏し

南都・東寺・日本一州の山寺・皆叡山の末寺となりぬ、又漢土の諸宗の

元祖がんその天台てんだいに帰伏きふくして謗法ほうぼうの失とがを・まぬかれたる事もあらはれぬ、又其その後ごやうやく世たしゅうをとろへ人の智しゅうしんあさく・なるほどに天台てんだいの深義じんぎは習ならうしないぬ、他宗たしゅうの執心しゅうしんは強盛かうじようになるほどにやうやく六宗ろくしゅう・七宗てんだいしゅうに天台宗てんだいしゅうをとされて・よわりゆくかの・ゆへに結句けっくは六宗ろくしゅう・七宗等しちそうとうにもをよばず、いうにかいなき禪宗ぜんしゅう・浄土宗じようとしゅうにをとされて始めは檀那だんなやうやくかの邪宗じゃしゅうにうつる、結句けっくは天台宗てんだいしゅうの碩徳せきとくと仰あおがる人人ひとびとみな・をちゆきて彼の邪宗じゃしゅうをたすく、さるほどに六宗ろくしゅう・八宗はっしゅうの田畠でんぱた・所領しりようみなたをされ正法しやうほう失せはてぬ天照太神てんしやうだいじん・正八幡しやうはちまん・山王等さんかう・諸もろの守護しゆごの諸大善神しやだいぜんじんも法味ほうみを・なめざるか国中こくにちを去り給たまうかの故ゆゑに悪鬼あくき・使あきを得て国くにすでに破やれなんとす。

此こゝに予愚見ぐけんをもつて前四十余年よんじゅうよねんと後八年ごはちなんとの相違さういをかんがへみるに、其その相違さうい多しといえども先ず世間せけんの学者がくしやもゆるし、我が身みにも・さもやとうちをばうる事は二乗作仏にじようさぶつ・久遠実成くおんじつじようなるべし。法華經ほけきやうの現文げんぶんを拝見はいけんする

に、舍利弗は華光如来・迦葉は光明如来・須菩提は名相如来・迦施延は
えんぶなだいこんこうによらい　もくれん　たまらばせんだこうぶつ　ふるな　ほうみようにらい　あなん
閻浮那提金光如来・目連は多摩羅跋梅檀香仏・富樓那は法明如来・阿難は
さんかいえじざいつうおうぶつ　どうしつほうげによらい　ふみようにらい
山海慧自在通王仏・羅喉羅は蹈七宝華如来・五百・七百は普明如来、学・
無学二千人は宝相如来・摩訶波闍波提比丘尼・耶輸多羅比丘尼等は、一切
しゅじようきけんによらい　ぐそくせんまんこうそうによらい　これら　ひとびと　ほけきよう　はいけん
衆生喜見如来・具足千万光相如来等なり、此等の人人は法華經を拝見した
てまつるには尊きやうなれども、爾前の経經を披見の時はけをさむる事
どもをほし。其の故は仏・世尊は実語の人なり故に聖人・大人と号す。
外典・外道の中の賢人・聖人・天仙などと申すは実語につけたる名なるべ
し此等の人人に勝れて第一なる故に世尊をば大人とは・申すぞかし、此の
だいにん　ゆいいちだいいんねん　しゅつげんのうせ　たまひ　いま　しんじつ　あらわ
大人「唯一大事因縁故・出現於世」となのらせ給いて「未だ真実を顕さず
せそん　ほうひさ　かなら　まさ　しんじつ　しょうじき　ほうべん
・世尊は法久しうして後・要ず当に真実を説くべし・正直に方便を捨て」
等云云、多宝仏・証明を加え分身・舌を出す等は舍利弗が未来の華光如来

・迦葉かしやうが光明こうみょう如来にやらい等の説をば誰たれの人か疑網ぎもうをなすべき。

而しかれども爾前にぜんの諸経しよきやうも又仏陀ぶつだの実語じつごなり・大方広仏華嚴經けこんきやうに云く「如来にやらい

の智慧・大藥王樹やくおうは、唯二処ただに於おいて生長して利益りやくを為な作あたすこと能あたわず、

所謂二乗いわゆるにじやうの無為むい廣大の深坑じんこうに墮おつると、及び善根およを壊ぜんこんる非器やぶの衆生ひきは大

邪見じゃけん・貧愛とんないの水に溺なるとなり」等云云、此の經文きやうもんの心は雪山せつせんに大樹たいじゆあり

無尽根むじんこんとなづく。此を大藥王樹やくおうと号なづす、閻浮提えんぶだいの諸木しよの中だいおうの大王だいおうなり此の

木の高さは十六万八千由旬ゆじゆんなり、一閻浮提えんぶだいの一切いっさいの草木そうもくは此の木の根ぶつしやうざし

枝葉しやう・華菓けかの次第しだいに随したがつて華菓けかなるなるべし、此の木をば仏ぶつの仏性ぶつじやうに譬たとへ

たり一切衆生いっさいしじやうをば一切いっさいの草木そうもくにたとへ、但し此の大樹たいじゆは火坑かきやうと水輪すいりんの中に

生長にじやうせず、二乗しんちゆうの心中しんちゆうをば火坑かきやうにたとへ一闍提人いっせんたいの心中しんちゆうをば水輪すいりんにたと

えたり、此の二類にるいは永く仏になるべからずと申もうす經文きやうもんなり、大集經だいしつきやうに云く

「二種ふたしづの人ひと有り、必ず死ひつきやうして活ひつきやうきず、畢竟ひつきやうして恩おんを知り恩おんを報あずること能あたわ

ず。一には声聞、二には縁覺なり、譬えば人有りて深坑に墜墮し、是の人
みずか
自ら利し他を利すること能わざるが如く、声聞・縁覺も亦復是くの如し、
解たつ
解脱の坑に墜して自ら利し及び他を利すること能わずし等云云、外典三千
あな
余卷の所詮に二つあり所謂孝と忠となり忠も又孝の家よりいであり、孝と
しよせん
申すは高なり天高けれども孝よりも高からず又孝とは厚なり地あつけれど
もう
も孝よりは厚からず、聖賢の二類は孝の家よりいであり何に況や仏法を学
せいけん
せん人・知恩報恩なかるべしや、仏弟子は必ず四恩をしつて知恩報恩をい
ちおんほうおん
たすべし、其の上舎利弗・迦葉等の二乗は二百五十戒三千の威儀・持整し
そ
て味・浄・無漏の三静慮・阿含經をきわめ三界の見思を尽せり。知恩報恩
むろ
の人の手本なるべし、然るを不知恩の人なりと世尊定め給ぬ、其の故は父母
てほん
の家を出でて出家の身となるは必ず父母を・すくはんがためなり、二乗は
しゅつけ
自身は解脱と・をもえども利他の行かけぬ。設い分分の利他ありといえど
げだつ
じしん

も父母等を永不成仏の道に入るれば・かへりて不知恩の者となる。

維摩經に云く「維摩詰、又文殊師利に問う、何等をか如来の種と為す、

答えて曰く一切塵勞の疇は如来の種と為る、五無間を以て具すと雖も、

猶能く此の大道意を發す」等云云・又云く「譬えば族姓の子・高原陸土に

は青蓮芙蓉の衡華を生ぜず卑湿汚田に乃ち此の華を生ずるが如し」等云云、

又云く「已に阿羅漢を得て応真と為る者は終に復道意を起して仏法を具す

ること能わざるなり、根敗の土・其の五樂に於て複利すること能わざるが

如し」等云云、文の心は貪・瞋・癡等の三毒は仏の種となるべし殺父等の

五逆罪は仏種となるべし高原の陸土には青蓮華生ずべし、二乗は仏になる

べからず、いう心は二乗の諸善と凡夫の惡と相對するに凡夫の惡は仏にな

るとも、二乗の善は仏にならじとなり、諸の小乗經には惡をいましめ善

をほむ、此の經には二乗の善をそしり凡夫の惡をほめたり、かへつて仏經

とも・をばへず外道の法門のやうなれども詮するところは二乗の永不成仏
をつよく定めさせ給うにや、方等陀羅尼經に云く「文殊・舍利弗に語らく
猶枯樹の如く更に華を生ずるや不や。亦山水の如く本処に還るや不や。
折石還つて合うや不や。焦種芽を生ずるや不や。舍利弗の言く不なり、
文殊の言く若し得べからずんば云何ぞ我に菩提の記を得るを問うて、心に
歡喜を生ずるや」等云云、文の心は枯れたる木・華さかず山水・山にかへ
らず破れたる石あはず・いれる種をいず、二乗また・かくのごとし仏種を
いれり等となん。

大品般若經に云く「諸の天子今未だ三菩提心を發さずんば応に發すべし、
若し聲聞の正位に入れば是の人能く三菩提心を發さざるなり、何を以ての
故に生死の為に障隔を作す故」等云云、文の心は二乗は菩提心を・をこ
さざれば我隨喜せじ諸天は菩提心を・をこせば我隨喜せん。首楞嚴經に

云く「五逆罪の人・是の首楞嚴三昧を聞いて阿耨菩提心を發せば、還つて
仏と作るを得。世尊・漏尽の阿羅漢は猶破器の如く、永く是の三昧を受く
るに堪忍せず」等云云。淨名經に云く「其れ汝に施す者は福田と名け
ず。汝を供養する者は三惡道に墮す」等云云。文の心は迦葉・舍利弗等の
聖僧を供養せん人天等は必ず三惡道に墮つべしとなり、此等の聖僧は仏陀
を除きたてまつりては人天の眼目・一切衆生の導師とこそ・をもひしに
幾許の人天・大会の中にして・かう度度・仰せられしは本意なかりし事な
り只詮するところは我が御弟子を安めころさんとや、此の外牛驢の二乳
・瓦器・金器・螢火・日光等の無量の譬をとつて二乗を呵嘖せさせ給き、
一言二言ならず一日・二日ならず一月・二月ならず一年・二年ならず一經
二經ならず、四十余年が間・無量・無辺の經經に無量の大会の諸人に対
して一言もゆるし給う事もなく・そしり給ひしかば世尊の不妄語なりと我

もする人もする天もする地もする、一人・二人ならず百千万人・三界の諸天
・竜神・阿修羅・五天・四洲・六欲・色・無色・十方世界より雲集せる
人天・二乗・大菩薩等皆これをする又皆これをきく、各各・国国へ還りて
娑婆世界の釈尊の説法を彼れ彼れの国国にして一にかたるに十方無辺
の世界の一切衆生・一人もなく迦葉・舍利弗等は永不成仏の者・供養して
は・あしかりぬべしと・しりぬ。

而るを後八年の法華經に忽ちに悔還して、二乗作仏すべしと仏陀とかせ
給はん、人天大会・信仰をなすべしや、用ゆべからざる上・先後の經經
に疑網をなし、五十余年の説教・皆虚妄の説となりなん、されば四十余年
未顕眞実等の經文はあらませしか天変の仏陀と現じて後八年の經をばと
かせ給うかと疑網するところに・げにげに・しげに劫国・名号と申して
二乗成仏の国をさだめ、劫をしるし、所化の弟子などを定めさせ給へば、

きようしゅしやくそん おんことば

教主釈尊の御語すでに二言になりぬ。自語相違と申すはこれなり。外道

が仏陀を大妄語の者と咲いしこと・これなり。人天大会（興）けをさめて・あり

し程に、爾（そ）の時に東方・宝浄世界の多宝如来・高さ五百由旬・広さ二百五

十由旬の大七宝塔に乘じて教主釈尊の人天・大会に自語相違をせめられ

て・とのべ・かうのべ、さまざまに宣べさせ給いしかども、不審猶をはる

べしとも・みへず・もてあつかいて・をはせし時・仏前（ぶつぜん）に大地より涌现（ゆげん）し

て虚空（こくう）にのぼり給う、例せば暗夜（やみよ）に満月の東山より出づるがごとし七宝（しちぼう）の

塔・大虚（おおそら）にかからせ給いて大地にも・つかず大虚にも付かせ給はず・天中（たま）

に懸りて宝塔の中より梵音声（ぼんおんじよう）を出して証明（しょうみょう）して云く「爾（そ）の時に宝塔の中

より大音声（おんじよう）を出して歎めて云く、善き哉善き哉・釈迦牟尼世尊・能く

平等大慧・教菩薩法・仏所護念の妙法華經を以て大衆の為に説きたもう、

是くの如し是くの如し、釈迦牟尼世尊の所説の如きは皆是れ眞実なり」等

云云、又云く「爾の時に世尊・文殊師利等の無量百千万億・旧住娑婆世界の菩薩・乃至人非人等・一切の衆の前に於て大神力を現じたもう、広長舌を出して上み梵世に至らしめ一切の毛孔より乃至十方世界・衆の宝樹の下師子の座の上の諸仏も亦復是くの如く、広長舌を出し無量の光を放ちたもう」等云云、又云く「十方より来りたまえる諸の分身の仏をして各本土に還らしめ、乃至多宝仏の塔も、還つて故の如くし給うべし」等云云、大覺世尊・初成道の時・諸仏・十方に現じて釈尊を慰諭し給う上・諸の大菩薩を遣しき、般若經の御時は釈尊・長舌を三千にをほひ千仏・十方に現じ給い・金光明經には四方の四仏現せり、阿弥陀經には六方の諸仏・舌を三千にををう、大集經には十方の諸仏・菩薩・大宝坊にあつまれり、此等を法華經に引合せて・かんがうるに黄石と黄金と白雲と白山と白氷と銀鏡と黒色と青色とをば翳眼の者・眇目の者・一眼の者・邪眼の

者は・みたがへつべし、華嚴經には先後の經なければ仏語相違なしなに
・つけてか大疑いで来べき、大集經・大品經・金光明經・阿弥陀經は諸
小乗經の二乗を彈呵せんがために十方に淨土をとき凡夫・菩薩を欣慕
せしめ二乗を、わずらはす、小乗經と諸大乘經と一分の相違あるゆえ
に、・或いは・或は十方に仏現じ給ひ、・或は十方より大菩薩をつかはし
・或は十方世界にも此の經をとくよしをしめし、・或は十方より諸仏あ
つまり給う・或は釈尊、舌を三千に・をほひ・或は諸仏の舌をいだす・よ
しをとかせ給う、此ひとえに諸小乗經の十方世界・唯一仏と・とか
せ給いしをもひを・やぶるなるべし、法華經のごとくに先後の諸大乘經
と相違・出来して舍利弗等の諸の声聞・大菩薩・人天等に將非魔作仏と
・をもはれさせ給う大事にはあらず、而るを華嚴・法相・三論・真言・念仏
等の翳眼の輩・彼の彼の經と法華經とは同じと・うちをもへるは・つた

まなこ
なき眼なるべし。

但在世ざいせは四十余年よんじゅうよねんをすてて法華經ほけきようにつき候ものもや・ありけん、仏滅後ぶつめつ

に此この經文きようもんを開見かいけんして信受しんじゆせんこと・かたかるべし、先ず一つには爾前にぜんの

きようぎよう

經經きようぎようは多言ほけきようなり法華經ほけきようは一言いっげんなり爾前にぜんの經經きようぎようは多經いっぎようなり此の經は一經いっぎよう

かれがれ きようぎよう

なり彼彼の經經きようぎようは多年きようぎようなり此の經は八年はちねんなり、仏は大妄語もうごの人・永く信

ずべからず不信ふしんの上に信を立てば爾前にぜんの經經きようぎようは信ずる事もありなん

ほけきよう

法華經ほけきようは永く信ずべからず、当世とうせも法華經ほけきようをば皆信みなじたるやうなれども

ほけきよう

法華經ほけきようにては・なきなり、其そのの故ゆえは法華經ほけきようと大日經だいにちきようと法華經ほけきようと華嚴經けこんきようと

ほけきよう

法華經ほけきようと阿弥陀經あみたと一なるやうを・とく人をば悦よろこんで歸依きえし別別なるなん

もう

ど申もうす人をば用もちいずたとい用もちゆれども本意ほんいなき事と・をもへり。

にちれんいわ

日蓮にほん云く日本ふつぽうに仏法ぶつぽうわたりて・すでに七百余年・但伝教大師でんぎようだいし・一人

ばか ほけきよう

計り、法華經ほけきようをよめりと申もうすをば諸人しよにんこれを用もちいず、但ただし法華經ほけきように云く

「も若し須弥しゆみを接とつて他方たほうの無数の仏土なげおに擲置またいまかんも亦未がただ為難がたしとせず、
乃ないしも至若しぶつめつ仏滅後あくせに惡世中おいよに於よて能よく此の經を説こかん是れ則すなわち為難がたしし等云
云、日蓮にちれんが強義かうぎ・經文きやうもんに普ふ合せり法華經ほけきやうの流通るつうたる涅槃經ねはんぎやうに末代濁世まつだいじよくせに
謗法ほうぼうの者は十方じゆつぱうの地のごとし正法しやうほうの者は爪上そうじやうの土のごとしと・とかれて
侯そうらは・いかんがし侯にほんべき、日本しよにんの諸人そうじやうは爪上にちれんの土じゆつぱうか日蓮にちれんは十方じゆつぱうの土かよ
くよく思惟しゆいあるべし、賢王けんおうの世には道理どうりかつべしの世に非道ひどう・先をすべし、
聖人しやうにんの世に法華經ほけきやうの実義じつぎ顯るべし等と心にぜんうべし、此の法門ほうもんは迹門しやくもんと爾前にぜん
と相對そうたいして爾前にぜんの強きやうに・をばゆもし爾前にぜんつよるならば舍利弗等しやりほつの
諸もろもろの二乗じふじやうは永不成仏ようふじやうぶつの者なるべし・いかんが・なげかせ給たまうらん。

二には教主きやうしゆしやくそん釈尊しやくそんは住劫じゆけつ・第九の滅にんじゆう・人壽にんじゆう百歲の時し・師子ししきやう頰王けおうには孫
・淨飯王じやうばんには嫡子どうじ・童子どうじ悉達太子しつたたいし・一切義いっさい成就じやうじゆ菩薩ぼさつこれなり、御年ごねん十九
の御出家しゆっけ・三十成道じやうどうの世尊せそん・始め寂滅じやくめつ道場どうじやうにして実報華王じつぱうけおうの儀式ぎぎしを示現じげん

して十玄・六相・法界・円融・頓極微妙の大法を説き給ひ十方の諸仏も
顕現し一切の菩薩も雲集せり、土といひ機といひ諸仏といひ始めといひ
何事につけてか大法を秘し給うべき、されば経文には顕現自在力・演説
円満経等云云、一部六十巻は一字一点もなく円満経なり、譬へば如意宝珠
は一珠も無量珠も共に同じ。一珠も万宝を尽して雨し万珠も万宝を尽すが
ごとし、華嚴経は一字も万事も但同事なるべし、心仏及衆生の文は華嚴宗
の肝心なるのみならず法相・三論・真言・天台の肝要とこそ申し候へ、此等
程いみじき御経に何事をか隠すべき、なれども二乗闡提・不成仏と・とか
れしは珠のきずと・みゆる上三処まで始成正覺と・なのらせ給いて久遠
実成の寿量品を説きかくさせ給いき、珠の破れたると月に雲のかかれる
と日の蝕したるがごとし不思議なりしことなり、阿含・方等・般若・
大日経等は仏説なれば・いみじき事なれども華嚴経にたいすれば・いうに

かいなし、彼の經に秘せんこと此等の經經にとかるべからず、されば雜
阿含經に云く「初め成道」等云云、大集經に云く「如来成道始め十六年」
等云云、淨名經に云く「始め仏樹に坐して力めて魔を降す」等云云、
大日經に云く「我昔道湯に坐して」等云云、仁王般若經に云く「二十九
年」等云云。

此等は言うにたらず只耳目を・をどろかす事は無量義經・華嚴經の唯心
法界・方等・般若經の海印三昧・混同無二等の大法をかきあげて・或は
未顕真実・・或は歴劫修行等・下す程の御經に我先きに道場菩提樹の下
に端坐すること六年、阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たり」と
初成道の華嚴經の始成の文に同せられし不思議と打ち思うところに此は
法華經の序分なれば正宗の事をいはずも・あるべし、法華經の正宗・
略開三・広開三の御時・唯仏与仏・乃能究尽諸法実相等・世尊法久後等・

しょうじきしゃほうべん しょうみよう
正直捨方便・多宝仏・迹門八品を指して皆是其實と証明せられしに

なにごと
何事をか隠すべきなれども久遠寿命をば秘せさせ給いて我始め道場に坐

かん また
し樹を観じて亦経行す等云云、最第一の大不思議なり、されば弥勒菩薩・

ゆじゅつぽん よんじゅうよねん
涌出品に四十余年の未見今見の大菩薩を仏・爾して乃ち之を教化して初め

どうしん
て道心を發さしむ等と・とかせ給いしを疑つて云く「如来太子為りし時

しゃく
・釈の宮を出でて伽耶城を去ること遠からず道場に坐して

あのかたらさんみやくさんぼだい じょう
阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たまえり、是より已来始めて四十余年

す せそん なん
を過ぎたり世尊・云何ぞ此の少時に於て大いに仏事を作したまえる」等云

きようしゅしゃくそんこれら うたがい
云、教主釈尊此等の疑を晴さんがために寿命品を・とかんとして爾前

しゃくもん
・迹門のききを挙げて云く「一切世間の天人及び阿修羅は皆今の

しゃかむにぶつ しゃくし
釈迦牟尼仏・釈氏の宮を出でて伽耶城を去ること遠からず道場に坐して

あのかたらさんみやくさんぼだい おも
あのかたらさんみやくさんぼだいを謂えり」等と云云、正しく此の疑を

答えて云く「然るに善男子・我実に成仏してより已来無量無辺・百千万億
・那由佗劫なり」等云云。

華嚴・乃至般若・大日經等は二乗作仏を隠すのみならず、久遠実成を

説きかくさせ給へり、此等の經經に二つの失あり、一には「行布を存す

るが故に、仍お未だ權を開せずとて迹門の一念三千をかくせり、二には

始成を言うが故に尚未だ迹を發せずとて本門の久遠をかくせり、此等の二

つの大法は一代の綱骨・一切經の心髓なり、迹門方便品は一念三千・

二乗作仏を説いて爾前二種の失・一つを脱れたり、しかりと・いえどもい

まだ發迹顯本せざれば・まことの一念三千もあらはれず二乗作仏も定まら

ず、水中の月を見るがごとし・根なし草の波の上に浮べるにいたり、本門

にいたりて始成正覺をやぶれば四教の果をやぶる、四教の果をやぶれば

四教の因やぶれぬ、爾前・迹門の十界の因果を打ちやぶつて、本門の十界

の因果いんがをとき顯あらわす、此即すなわち本因ほんいん・本果ほんがの法門ほうもんなり、九界むしも無始ぶっかいの仏界ぶつがいに具

しぶつがい仏界むしも無始むしの九界そなわに備りて・真じゅっかいごくの十界互具ひゃっかいせんによ・百界千如いちねんさんぜん・一念三千ひゃくかいせんなるべ

し、かうて・かへり・みれば華嚴經けこんきようの台上十方じゅつぽう・阿含經あこんきようの小釈迦しゃか・方等ほうとう

はんはんにや

こんこんこうみこうようききよう

ああみみだ

だだいにちちききよう

ああこんこんききよう

般若はんの金光明經こんこうみようきようの阿弥陀經あみだの大日經だいにちきよう等の權ごんぶつ仏等ごんぶつは・此じの壽量じゅりようの仏ぶつの

てんてんげげつ

だだいししよう

たたま

ししょししゆう

ががくししや

近きんくは

天月てんげつしばらく影えいを大小だいしの器きにして浮うべ給たまうを・諸宗しよしゆうの学者等がくしや・近きんくは

じしじしゆう

ままよよい

ほほけけききよう

じじゆりりようほん

自宗じしゆうに迷まい遠えんくは法華經ほけきようの壽量品じゅりようほんをしらず水中じゆりようの月に実じつの月の想きよういをな

し・或あるは入いつて取とらんと・をもひ・或あるは繩じゆりを・つけて・つなぎとどめんと

す、天台てんだい云いく

てんてんげげつ

し

但た池月ちげつを觀くず」等どう云いふ。

日蓮案にちれんじて云いく二乗にじよう作さ仏ぶつすら猶なほ爾前にぜんづよにををぼゆ。久遠くおん実成じつじようは又またにるべ

くも・なき爾前にぜんづりなり、其そのの故ゆえは爾前にぜん・法華ほけ相對そうたいするに猶なほ爾前にぜんこわき上強

・爾前にぜんのみならず迹門しやくもん十四品しじゅうも一向いっこうに爾前にぜんに同どうず、本門ほんもん十四品しじゅうも涌出ゆじゆつ・

じじゆりりよう

みみなししじじよう

そそうりりんんさいさいこ

だだいははつつねねはんんぎぎよう

雙林そうりん最後さいごの大般涅槃經だいぱんねはんぎよう・四十卷しじゅう・

其^その外^{ほか}の法華^{ほっけ}・前後^{ぜんご}の諸大經^{しよだい}に一字^{いっく}・一句^{いっく}もなく法身^{ほっしん}の無始^{むし}・無終^{むしゅう}はとけども応身^{おうじん}・報身^{ほうしん}の顕本^{けんぽん}はとかれず、いかんが広博^{こうはく}の爾前^{にぜん}・本^{ほん}・迹^{ねはん}・涅槃^{ねはん}等のしよだいじようきようゆじゆつじゆりようの諸大乘^{しよだいじようきよう}經^{きやう}をばすてて但涌出^{ゆじゆつ}・寿量^{じゆりよう}の二品^{にひん}には付くべき。

されば法相宗^{ほうしやうしゆう}と申^{もう}す宗^{しゆ}は、西天^{さいてん}の仏滅後^{ぶつめつご}・九百年^{きゅうひゃくねん}に無著菩薩^{むぢやくぼさつ}と申^{もう}す大論師^{だろんし}有^あしき、夜^よは都率^{とそつ}の内院^{ないえん}にのぼり、弥勒菩薩^{みろくぼさつ}に對面^{たいめん}して・一代^{いちだい}聖教^{しやうきやう}の不審^{ふしん}をひらき・昼^{あしゆしや}は阿輸舍国^{あしゆしや}にして法相^{ほつしやう}の法門^{ほうもん}を弘^{ひろ}め給^{たま}う。彼の御弟子^{おんでし}は世親^{せじん}・護法^{ごほう}・難陀^{なんだ}・戒賢^{かいけん}等の大論師^{だろんし}なり。戒日大王^{かいにちおう}・頭^{かうべ}をかたづけ五天幢^{ごんじやう}を倒^{たふ}して此^これに帰依^{きえ}す、尸那国^{しな}の玄奘三蔵^{げんじやうさんそう}・月氏^{がつし}にいたりて十七年^{じしちねん}、印度^{いんど}百三十余^{ひゃくさんじゆ}の国^{こく}を見^みきて、諸宗^{しよしゆう}をばふりすて、此^この宗^{しゆ}を漢土^{かんど}にわたして、太宗皇帝^{たいそうこうてい}と申^{もう}す賢王^{けんおう}にさづけ給^{たま}い、肪^{たまい}・尚^{たまい}・光^{たまい}・基^{たまい}を弟子^{でし}として大慈恩寺^{だいじんじんじ}並^{なら}に三百六十余^{さんひゃくろくじゆ}箇国^こに弘^{ひろ}め給^{たま}う。日本国^{にほんこく}には人王三十七代^{じんおうさんじしちだい}・孝徳天皇^{てんのう}の御宇^{ぎよ}に道慈^{だうじ}・道昭^{だうしやう}等^らならいわたしして山階寺^{やましなでら}にあがめ給^{たま}へり、三国第一^{だいいち}の

宗なるべし、此の宗の云く始め華嚴經より終り法華・涅槃經にいたるまで
むしようじょう けつじょう にじょう
無性有情と決定性の二乗は永く仏になるべからず、仏語に二言なし一度・
ようふじょうぶつ たまい にちがつ
永不成仏と定め給いぬる上は日月は地に落ち給うとも、大地は反覆すとも、
へんかいあ ほけきよう ねはんぎよう にぜん きようぎよう
永く変改有るべからず。されば法華經・涅槃經の中にも爾前の經經に嫌
むしようじょう けつじょう まさ じょうぶつ
いし無性有情・決定性を正しくついさして成仏すとは・とかれず。まづ
まなこ
眼を閉じて案ぜよ。

ほけきよう ねはんぎよう けつじょう むしようじょう まさし
法華經・涅槃經に決定性・無性有情・正く仏になるならば無著・世親ほ
ろんし げんじょう じおん さんそう にんし
どの大論師・玄奘・慈恩ほどの三蔵・人師これをみざるべしや、此をのせ
ざるべしや、これを信じて伝えざるべしや、弥勒菩薩に聞いてたてまつる
なんじ ほけきよう ぜんだい みようらく でんぎよう びやつけん
べしや、汝は法華經の文に依るやうなれども、天台・妙楽・伝教の僻見
しんじゆ そ きようもん にぜん ほけきよう すいか
を信受して其の見をもつて經文をみるゆえに爾前に法華經は水火なりと見
るなり。 けこんしゅう しんこんしゅう ほつそう さんろん
華嚴宗と真言宗は法相・三論にはにるべくもなき超過の宗なり、
ちようか

二乗作仏・久遠実成は法華經に限らず華嚴經・大日經に分明なり、
けこんしゅう とじゅん ちこん ほうそう ちようかん しんこんしゅう ぜんむい こんごうち ふくう
華嚴宗の杜順・智儼・法蔵・澄観・真言宗の善無畏・金剛智・不空等は
てんだい でんぎよう
天台・伝教には・にるべくもなき高位の人なり、其の上善無畏等は大日
によらい そうじよう
如来より系みだれざる相承あり、此等の権化の人いかでかあやまりあるべ
き、随つて華嚴經には「・或は釈迦・仏道を成じ已つて不可思議劫を経る
を見たが けこんきよう ある しゃか ぶつどう おわ ふかしぎ
を見る」等云云、大日經には「我れは一切の本初なり」等云云、何ぞ但
だいにちきよう ほんじよ
久遠実成・寿命品に限らん、譬へば井底の蝦が大海を見ず山左が洛中を
くおんじつじよう じゆりようほん たと せいてい かわす たいかい やまかつ
・しらざるがごとし、汝但寿量の一品を見て華嚴・大日經等の諸經を
なんじ じゆりよう けこん だいにちきよう しよきよう
しらざるか、其の上月氏・戸那・新羅・百濟等にも一向に二乗作仏・久遠
そ がつし しな しらぎ くだら いっこう にじようさぶつ くおん
じつじよう ほけきよう
実成は法華經に限るといふか。

されば八箇年の經は四十余年の經經には相違せりというとも先判・後
はちかねん よんじゅうよねん きようぎよう そうい
判の中には後判につくべしというとも、猶爾前づりにこそをばうれ。又、
なおにぜん

但在世計りならば・さも・あるべきに滅後に居せる論師・人師・多は爾前
づりにこそ侯へ、かう法華經は信じがたき上、世もやうやく末になれば聖賢
はやうやく・かくれ迷者はやうやく多し。世間の浅き事すら猶あやまりや
すし。何に況や出世の深法・なかるべしや、犢子・方広が聡敏なりし猶
を大小乗經にあやまてり、無垢☆☆が利根なりし、権実・二教を弁えず、
正法一千年の内、在世も近く月氏の内なりし・すでにかくのごとし、況や
尸那・日本等は国もへだて音もかはれり。人の根も鈍なり壽命も日あさし
貪・瞋・癡も倍增せり、仏世を去つてとし久し、仏經みなあやまれり、誰
の智解か直かるべき、仏涅槃經に記して云く「末法には正法の者は爪上
の土・謗法の者は十方の土」とみへぬ、法滅尽經に云く「謗法の者は
恒河沙・正法の者は二二の小石」と記しをき給う、千年・五百年に一人な
んども正法の者ありがたからん、世間の罪に依つて惡道に墮る者は爪上

の土・仏法によつて惡道に墮る者は十方の土・俗よりも僧・女より尼多くの土・仏法によつて惡道に墮る者は十方の土・俗よりも僧・女より尼多く惡道に墮つべし。

此に日蓮案じて云く、世すでに末代に入つて二百余年・辺土に生をうけ、

其の上下賤・其の上貧道の身なり。輪廻六趣の間・人天の大王と生れて、

万民をなびかす事・大風の小木の枝を吹くがごとくせし時も仏にならず、

だいしようじょう

大小乗經の外凡・内凡の大菩薩と修しあがり一劫・二劫・無量劫を経て

菩薩の行を立て、すでに不退に入りぬべかりし時も・強盛の惡縁におとさ

れて仏にもならず、しらず大通結縁の第三類の在世をもれたるか久遠五百

の退轉して今に来れるか、法華經を行ぜし程に世間の惡縁・王難・外道の難

・小乗經の難などは忍びし程に権大乘・実大乘經を極めたるやう

なる道綽・善導・法然等がごとくなる惡魔の身に入りたる者・法華經をつ

よくほめあげ、機をあながちに下し「理深解微」と立て、「未有一人得者」、

「千中無一等」とすかししものに、無量生が間・恒河沙の度すかされて権經に墮ちぬ権教より小乗經に墮ちぬ外道・外典に墮ちぬ結句は惡道に墮ちけりと深く此れをしれり、日本國に此れをしれる者は但日蓮一人なり。

これを一言も申出すならば父母・兄弟・師匠に國主の王難必ず来るべし、いはずば・慈悲なきに・にたりと思惟するに法華經・涅槃經等に此の二辺を合せ見るに・いはずば今生は事なくとも後生は必ず無間地獄に墮べし、いうならば三障四魔必ず競い起るべしと・しりぬ、二辺の中には・いうべし、王難等・出来の時は退轉すべくは一度に思ひ止るべしと、且くやすらいし程に宝塔品の六難九易これなり、我等程の小力の者・須弥山はなぐとも、我等程の無通の者・乾草を負うて劫火には・やけずとも我等程の無智の者・恒沙の經經をば・よみをばうとも、法華經は一句一偈も末代に持ちがたしと・とかるるは・これなるべし、今度強盛の菩提心を・をこして

退たい転てんせじと願ねがしぬ。

既すでに二十余年が間・此この法ほう門もんを申もうすに日ひ・月げつ・年ねん年に難なんかさなる、

少なん少なんの難なんは・かずしらず大だい事じの難なん・四し度どなり二に度どは・しばらく・をく王わん難なん

すでに二に度どにをよぶ、今このたび度は・すでに我しんが身み命めいに及そぶ其その上じやう弟子でしといひ檀

耶やといひ・わづかの聴ちやう聞もんの俗しやう人もんなんと来きつて重じゆう科かに行いわる謀まう反はんなんどの者

ののごとし。

法ほけ華きやう經きやうの第だい四しに云いく「而しかも此こ經きやうは如にやう來らいの現げん在ざいにすら猶な怨おん嫉しつ多たし、況いや滅めつ度ど

の後のをや」等云云、第だい二にに云いく「經きやうを讀どく誦じゆし書しよ持じすること有あらん者しやを見て

輕きやう賤せん憎そう嫉しつして結けつ恨こんを懷いだかん」等云云、第だい五ごに云いく「一いつ切さい世せ間けん、怨あだ多おほくして

信がたじ難がたし」等云云、又云く「諸もろの無む智ちの人の惡あく口くち罵め詈りする有あらん」等、又云く

「国こく王わう・大だい臣じん・婆ば羅ら門もん・居こ士しに向むかつて誹ひ謗ぼうし我わが惡あくを説こいて、是これ邪じや見けんの

人ひとなりと謂いわん」と、又云く「数しばしば數ひん擯ずい出し見けんれん」等云云、又云く「杖じやう木もく瓦がしやく石せき

もて之を打擲せん等云云、涅槃經に云く「爾の時に多く無量の外道有つて、和合して共に摩訶陀の王・阿闍世の所に往き、今は唯一の大惡人有り瞿曇沙門なり、一切世間の惡人利養の爲の故に其の所に往集して眷屬と爲つて、能く善を修せず、呪術の力の故に迦葉及び舍利弗・目・連を調伏す」等云云、天台云く「何に況や未來をや。理化し難きに在るなり」等云云、妙樂云く「障り未だ除かざる者を怨と爲し、聞くことを喜ばざる者を嫉と名く」等云云。南三・北七の十師・漢土無量の學者・天台を怨敵とす、得一云く「咄いかな智公・汝は是れ誰が弟子ぞ。三寸に足らざる舌根を以て、覆面舌の所説を謗する」等云云、東春に云く「問う在世の時許多の怨嫉あり仏滅度の後此經を説く時・何が故ぞ亦留難多きや、答えて云く俗に良藥口に苦しと云うが如く、此經は五乘の異執を廢して一極の玄宗を立つ、故に凡を斥け聖を呵し、大を排い小を破り天魔を銘づけて毒

虫と為し、外道を説いて惡鬼と為し、執小を貶して貧賤と為し、菩薩を挫きて新學と為す、故に天魔は聞くを惡み、外道は耳に逆い二乗は驚怪し、菩薩は怯行す、此くの如きの徒、悉く留雖を為す多怨嫉の言、豈唐しからんや」等云云、顯・或論に云く「僧統奏して曰く、西夏に鬼井婆羅門有り。東土に巧言を吐く禿頭沙門あり、此れ乃ち物類冥召して世間を誑惑す」等云云、論じて曰く「昔齊朝の光統に聞き今は本朝の六統に見る、実なるかな法華に何況すつをや」等云云、秀句に云く「代を語れば則ち像の終り未の始め、地を尋ぬれば則ち唐の東、羯の西・人を原ぬれば則ち五濁の生・鬭諍の時なり、經に云く猶多怨嫉・況滅度後と。此の言、良に以有るなり」等云云。夫れ小兒に灸治を加れば必ず母をあだむ。重病の者に良藥をあたうれば定んで口に苦しとうれう、在世猶をしかり、乃至像末辺土をや、山に山をかさね波に波をたたみ難に難を加へ非に非をますべし、像法の中

には天台一人・法華經・一切經をよめり。南北これをあだみしかども、
陳隋・二代の聖主・眼前に是非を明めしかば敵ついに尽きぬ、像の末に
傳教一人・法華經・一切經を仏説のごとく読み給へり、南都・七大寺蜂起
せしかども桓武・乃至嵯峨等の賢主・我と明らめ給ひしかば又事なし、今
末法の始め二百余年なり況滅度後のしるしに鬭諍の序となるべきゆへに
非理を前として濁世のしるしに召合せられずして流罪乃至壽にも・をよば
んと・するなり、されば日蓮が法華經の智解は天台・傳教には千万が
一分も及ぶ事なけれども難を忍び慈悲のすぐれたる事は・をそれをも・い
だきぬべし、定んで天の御計いにもあづかるべしと存ずれども、一分のし
るしもなし。いよいよ重科に沈む、還つて此の事を計りみれば我が身の
法華經の行者にあらざるか、又諸天・善神等の此の国をすてて去り給える
か・かたがた疑はし、而るに法華經の第五の卷・勸持品の二十行の偈は日蓮

だにも此の国に生れずば・ほとをど世尊は大妄語の人・八十万億那由佗の
菩薩は提婆が虚誑罪にも堕ちぬべし、經に云く「諸の無智の人あつて・
悪口罵詈し・刀杖瓦石を加う」等云云、今の世を見るに日蓮より外の諸僧
たれの人か法華經につけて諸人に悪口罵詈られ刀杖等を加えらるる者あ
る、日蓮なくば此の一偈の未來記は妄語となりぬ、「惡世の中の比丘は・
邪智にして心諂曲」又云く「白衣の与に法を説いて世に恭敬せらるること、
六通の羅漢の如し」此等の經文は今の世の念仏者・禪宗・律宗等の法師
なくば世尊は又大妄語の人、常在大衆中・乃至向国王・大臣・婆羅門・
居士等、今の世の僧等・日蓮を譏奏して流罪せずば此の經文むなし、又
云く「数数見擯出」等云云、日蓮・法華經のゆへに度度ながされずば数数
の二字いかんがせん、此の二字は天台・伝教もいまだ・よみ給はず況や余
人をや、末法の始のしるし恐怖惡世中の金言の・あふゆへに但日蓮一人こ

れをよめり、例せば世尊せそんが付法蔵經ふほうぞうきように記して云く「我が滅後めつご・一百年に
あそかだいう
阿育大王あそくだいうという王あるべし」摩耶經まやきように云く「我が滅後めつご・六百年に竜樹菩薩りゅうじゅぼさつ
という人・南天竺てんじくに出ずべし」大悲經だいひききように云く「我が滅後めつご・六十年に末田地までんたい
という者・地を竜宮りゅうぐうにつくべし」此れ等皆仏記のごとくなりき、しからず
ぶつきよう しんじゅ
ば誰か仏教を信受すべき、而るに仏・恐怖惡世・然後末世・末法滅時・後
・五百歳なんと正妙の二本に正しく時を定め給う、当世・法華の三類の強敵
ぶつせつ しんじゅ にちれん
なくば誰か仏説を信受せん日蓮なくば誰をか法華經の行者として仏語をた
すけん、南三・北七・七大寺等・猶像法の法華經の敵の内・何に況や当世
なんざん ほくひち ななだいじ なおそうほう ほけきよう
の禪・律・念佛者等は脱るべしや、經文に我が身・普合せり御勘氣をかほ
ねんぶつ のが きようもん ふじう ごかんき
れば・いよいよ悦びをますべし、例せば小乗の菩薩の末斷惑なるが
ようじ しょうじよう ぼさつ だんなく
「願兼於業」と申して・つくりたくなき罪なれども父母等の地獄に墮ちて
がんけんおしう もう つみ ふほ じごく お
大苦を・うくるを見てかたのごとく其の業を造つて願つて地獄に墮ちて苦
そ じごく お

が同じ苦に代れるを悦よろこびとするがごとし、此これも又かくのごとし當時とうじの責
はたうべくも・なければも未来みらいの悪道あくどうを脱すらんと・をもえば悦よろこびなり。

但し世間の疑といふ、
 自心の疑と申し、
 いかでか天扶け給わざるら

ん、
諸天等の守護神は仏前の御誓言あり法華經の行者には・さるになりと

ほけきよう　ぎようじや　ぶつぜん　せいこん
も法華經の行者とがうして早々に仏前の御誓言を・とげんとこそをぼすべ

きに其その義なきは我が身・法華經ほけきようの行者ぎようじやにあらざるか、此うたがの疑は此の書の

肝心・一期の大事なれば処処に・これをかく上疑を強くして答をかまう

べし。

季札きさつといひし者は心のやくそくを・たがへじと、王の重宝たる剣を徐君

が塚にかく・王尹おういんと云いいし人は河の水を飲んで金の鷺目がもくを水に入れ・公胤こういん

といひし人は腹をさいて主君しゅくんの肝かんを入れる・此等これらは賢人けんじんなり恩をほうずるな

るべし、
 いわんやしやりほつかしう
 況や舍利弗迦葉等の大聖は・二百五十戒三千の威儀・一もかけず
 たいせい
 さんぜん
 いぎ

けんじ 見思を断じ三界を離れたる聖人なり、梵帝・諸天の導師・一切衆生の眼目
なり、而るに四十余年が間・永不成仏と嫌いすてはてられて・ありしが
ほけきよう 法華經の不死の良薬をなめて・種の生い、破石の合い・枯木の華菓なん
どならんとせるがごとく仏になるべしと許されて・いまだ八相をとなえず
・いかでか此の經の重恩をば・ほうぜざらん、若しほうぜずば彼彼の賢人
にも・をとりて不知恩の畜生なるべし、毛宝が龜はあをの恩をわすれず
こんめいち 昆明池の大魚は命の恩をほうぜんと明珠を夜中にささげたり、畜生すら猶
思をほうず何に況や大聖をや、阿難尊者は斛飯王の次男・羅喉羅尊者は
じようばん 浄飯王の孫なり、人中に家高き上証果の身となつて成仏を・をさへられ
たりしに八年の靈山の席にて山海慧・蹈七宝華なんと如来の号をさづけら
れ給う、若し法華經ましまさずば・いかに・いえたかく大聖なりとも誰か
きようけい 恭敬したてまつるべき、夏の桀・殷の紂と申すは万乗の主・土民の帰依な

り、しかれども政あしくして世をほろぼせしかば今に・わるきものの手本てほんには桀紂・桀紂けつちゆうとこそ申せ、下賤げせんの者・癩病らいびやうの者も桀紂けつちゆうのごとしと・いはれぬればのられたりと腹たつなり、千二百・無量の声聞むりやうしやうもんは法華經ほけきやうましまさずば誰か名をも・きくべき其その音こえをも習ならうべき、一千の声聞しやうもん・一切經いっさいきやうを結集けつじゆうせりとも見る人よもあらじ、まして此等これらの人人ひとびとを絵像・木像にあらはして本尊ほんぞんと仰あおぐべしや、此これ偏ひとへに法華經ほけきやうの御力おんちからによつて一切いっさいの羅漢らかん歸依きえせられさせ給たまうなるべし、諸もろの声聞しやうもん・法華ほつけを・はなれさせ給たまいなば魚の水をはなれ猿の木をはなれ小兒しょうにの乳をはなれ民の王を・はなれたるが・ごとし、いかでか法華經ほけきやうの行者ぎやうじやをすて給たまうべき、諸もろの聲聞しやうもんは爾前にぜんの經經きやうきやうにては肉眼にくげんの上に天眼てんげん・慧眼えげんをう。法華經ほけきやうにして法眼ほうげん・仏眼ぶつげん備そなわれり。十方じゆつぱう世界せかいすら猶照見なうしやうけんし給たまうらん、何いかに況いわんやや此しやの娑婆世界しやばせかいの中法華經ほけきやうの行者ぎやうじやをちけん知見ちけんせられざるべしや、設にちれんい日蓮あくにん・惡人あくにんにて一言・二言・一年・二年・一劫いつくう

・二劫・乃至百千万億劫・此等の声聞を悪口・罵詈訾し奉り刀杖を加えま
いらする色なりとも法華經をだにも信仰したる行者ならばすて給うべから
ず、譬へば幼稚の父母をのる父学これを・すつるや、梟鳥が母を食う、
母これをすてず・破鏡父をがいす父これにしたがふ、畜生すら猶かくのご
とし大聖・法華經の行者を捨つべしや、されば四大声聞の領解の文に云く
「我等今は真に是れ声聞なり仏道の声を以て一切をして聞かしむ我等今は
真に阿羅漢なり諸の世間天人・魔・梵に於て普く其の中に於て・応に供養
を受くべし、世尊は大恩まいます希有の事を以て憐愍教化して我等を利益
し給う、無量億劫にも、誰か能く報ずる者あらん。手足をもつて供給し頭
頂をもつて礼敬し一切をもつて供養すとも伴報ずること能わじ、若しは
以て項戴し両肩に荷負して恒沙劫に於て心を尽して恭敬し又美膳・無量
の宝衣、及び諸の臥具・種種の湯藥を以てし、牛頭栴檀、及び諸の珍宝を

もつとつびよう
以て塔廟たてを起て宝衣たてを地に布かき斯くごとの如ごとき等の事もつを以用くようて供養すること
恒沙劫ごうしゃに於おいてすとも亦また報あたずること能あたわじ」等云云。

もろもろしょうもん

ぜんしみ きようぎよう

かしゃく こおむ にんてん たいえ

諸の声聞等ちじよくは前四味の経経ぜんしきにいばくぞの呵噴かしゃくを蒙り人天にんてん・大会たいえの中に

して恥辱がましき事そ・其の数をしらず、しかれば迦葉尊者かしょうそんじやの淳泣ていきゅうの音こえは

さんぜん

しゅばだい そんじや

いちばつ しやりほつ

三千をひびかし、須菩提尊者しゅぼだいそんじやは亡然として手の一鉢いちばつをすつ。舍利弗しゃりふつは餌食

をは吐き富楼那ふるなは画瓶がびように糞くそを入ると嫌きらわる。世尊せそん、鹿野苑ろくやおんにしては阿含経あこんきようを

さんたん

おんこん

たまい

讚歎さんたんし二百五十戒を師とせよなんと慇懃おんこんにほめさせ給たまいて、今又いつのま

に我が所説しよせつをばかうはそしらせ給たまうと二言そくい・相違そういの失とがとも申しぬべし、例

せば世尊せそん・提婆達多だいばだつたを汝愚人なんじぐにん・人の唾つばきを食うと罵詈めりせさせ給たましかば毒箭どくせん

の胸に入るがごとく・をもひて・うらみて云く「瞿曇くどうん

ぶつだ

こくはんのう

あなんそんじや

くどうん

いちるい

は仏陀にはあらず我は斛飯王こくはんのうの嫡子あなんそんじや・阿難尊者あなんそんじやが兄くどうん・瞿曇くどうんが一類いちるいなり、い

かにあしき事ありとも内内きようくん・教訓きようくんすべし、此等程これらの人天にんてん・大会たいえに此程の大

禍を現げんに向つて申もうすもの大人だいにん・仏陀ぶつだの中にあるべしや、されば先々は妻のかたき、今は一座のかたき、今日きょうよりは生生世世しょうじょうよよに大怨敵おんてきとなるべし」と誓ちかいしぞかし、此これをもつて思うに今諸の大声聞もろもろは本と外道しょうもん・婆羅門ばらもんの家より出いでたり、又諸の外道もろもろの長者ちやうじやなりしかば諸王しよに帰依きえせられ諸檀那しよにたつとまる、或あるは種姓すじやう・高貴の人もあり・或あるは富福じゆうまん・充滿じゆうまんのやからもあり、而しかに彼彼かれかれの榮官等をうちすて慢心まんしんの瞳を倒して俗服を脱ぎ壊色の糞衣ひんじんを身にまとひ白びやく・弘くわう・弓きゆう・箭等をうちすて一鉢いちぱつを手ににぎり貧人ひんじん・乞丐こうがいなんどの・ごとくして世尊せそんにつき奉り風雨を防ぐ宅もなく、身命しんみやうをつぐ衣食いしよく乏少なりし・ありさまなるに五天しかい・四海みなげどう・皆外道の弟子でし・檀那だんななれば仏くわうすら九横くわうの大難だいにんにあひ給ふ、所謂提婆いわゆるだいばが大石をとばせし阿闍世王あじゃせの醉象を放ちし、阿耆多王あぎたわうの馬麦めみやく・婆羅門城ばらもんのこんづ・せんしや婆羅門女ばらもんが鉢を腹にふせし、何いかに況いわんや所化しよけの弟子でしの数難申す計りなし、無量の釈子は波瑠璃はりり

王に殺され千万の眷属は醉象にふまれ、華色比丘尼は提婆にがいせられ迦
盧提尊者は馬糞にうづまれ、目・尊者は竹杖にがいせらる、其の上六師同
心して阿闍世・婆斯匿王等に讒奏して云く「瞿曇は閻浮第一の大悪人なり、
彼がいたる処は三災・七難を前とす。大海の衆流をあつめ、大山の衆木
をあつめたるが・ごとし、瞿曇がところには衆惡をあつめたり、所謂迦葉
・舍利弗・目連・須菩提等なり、人身を受けたる者は忠孝を先とすべし、
彼等は瞿曇にすかされて父母の教訓をも用いず、家をいで王法の宣旨をも
・そむいて山林にいたる、一國に跡をとどむべき者にはあらず、されば天
には日月・衆星・変をなす地には衆天さかなりなんど・うつたう、堪べ
しとも・おぼえざりしに又うちそうわざわいと仏陀にもうちそい・がたく
て・ありしなり、人天大会の衆会の砌にて時時呵嘖の音をききしかば・い
かにあるべしとも・おぼへず只あわつる心のみなり、其の上大の大難の第一

なりしは 浄名經 の「其れ汝に施す者は福田と名けず汝を供養する者は
さんあくどう だ 三惡道に墮す」等云、文の心は仏・庵羅苑申すところに・をはせしに梵天
たいしやく にちがつ してん さんがいしよてん あんらおんもう
・帝釈・日月・四天・三界諸天・地神・竜神等・無数恒沙の大会の中に
いわ しゅぼだい びく くよう てんにん さんあくどう お これら
して云く須菩提等の比丘等を供養せん天人は三惡道に墮つべし、此等をう
ちきく天人・此等の声聞を供養すべしや、詮ずるところは仏の御言を用
もろもろにじよう さつがい たま 供養すべしや、詮ずるところは仏の御言を用
つて諸の二乗を殺害せさせ給うかと思ゆ、心あらん人人は仏をも・うとみ
ぬべし、されば此等の人人は仏を供養したてまつりしついでに・こそ・わ
づかの身命をも扶けさせ給いしか、されば事の心を案ずるに四十余年の
きようぎよう 経經のみとかれて、法華八箇年の所説なくて、御入滅ならせ給いたらま
しかば、誰の人か此等の尊者をば供養し奉るべき現身に餓鬼道にこそ・を
はすべけれ。

しか よんじゆうよねん きようぎよう 而るに四十余年の経經をば東春の大日輪・寒氷を消滅するがごとく
だいにちりん しようめつ

むりよう

無量の草露を大風の零落するがごとく一言一時に未顕真実と打ちけし、大風

の黒雲をまき大虚に満月の処するがごとく青天に日輪の懸り給うがごとく

「世尊は法久後、要当説真実と照させ給いて、華光如来・光明如来等と

舍利弗・迦葉等を赫赫たる日輪・明明たる月輪のごとく鳳文にしるし、

きつきよう

亀鏡に浮べられて候へばこそ如来滅後の人天の諸檀那等には仏陀のごとく

あお

は仰がれ給しか。水すまば月・影を・をしむべからず風ふかば草木なびか

ざるべしや、法華經の行者あるならば此等の聖者は大火の中をすぎても大

石の中を・とをりてもとぶらはせ給うべし、迦葉の人定もことにこそ・よ

れ、いかにと・なりぬるぞいぶかしとも申すばかりなし、「後・五百歳」

のあたらざるか「広宣流布」の妄語となるべきか是が法華經の行者ならざ

るか、法華經を教内と下して別伝と称する大妄語の者をまほり給うべきか、

しゃへいかくほう

捨閉閣抛と定めて法華經の門をとぢよ巻をなげすてよと・ゑりて法華堂を

うしな 失える者を守護し給うべきか、仏前の誓いはありしかども濁世の・大難のはげしさ・をみて諸天下り給わざるか、日月・天にまします須弥山いまも・くづれず海潮も増減す四季も・かたのごとく・たがはず・いかに・なりぬるやらんと大疑いよいよ・つもり候。

しやだいぼさつ てんにん 又諸大菩薩・天人等のごときは爾前の経経にして記別を・うるやうな

れども水中の月を取らんと、するがごとく影を体とおもうがごとく・いろ

かたち・のみあつて実義もなし、又仏の御恩も深くて深からず、世尊

初成道の時はいまだ説教もなかりしに法慧菩薩・功德林菩薩・金剛幢

菩薩☆金剛蔵菩薩等なんと申せし六十余の大菩薩・十方の諸仏の国土よ

り教主釈尊の御前に来り給いて賢首菩薩・解脱月等の菩薩の請にをもむ

いて十住・十行・十回向・十地等の法門を説き給いき、此等の大菩薩の

所説の法門は釈尊に習いたてまつるにあらず、十方世界の諸の梵天等も

来つて法をとく又釈尊に・ならいたてまつらず、総じて華嚴会座の大菩薩

・天竜等は釈尊以前に不思議解脱に任せる大菩薩なり、釈尊の過去・

因位の御弟子にや有るらん・十方世界の先仏の御弟子にや有るらん、一代

教主・始成の正覚の仏の弟子にはあらず、阿含・方等・般若の時・四教

を仏の説き給いし時こそ・やうやく御弟子は出来して候へ、此も又・仏の

自説なれども正説にはあらず、ゆへ・いかなとなれば方等・般若の別・円

三教は華嚴經の別・円・二教の義趣をいえず、彼の別・円・二教は教主

釈尊の別・円・二教にはあらず、法慧等の別円二教なり、此等の大菩薩は

人目には仏の御弟子かとは見ゆれども仏の御師とも・いぬぬべし、世尊・

彼の菩薩の所説を聴聞して智発して後・重ねて方等・般若の別・円をとけ

り、色もかわらぬ華嚴經の別・円・二教なり、されば此等の大菩薩は釈尊

の師なり、華嚴經に此等の菩薩をかずへて善知識ととかれしはこれなり、

善知識ぜんちしきと申もうすは一向いっじう・師しにもあらず一向いっじう・弟子でしにもあらずある事なり、蔵

・通・二教は又・別・円の枝流なり別・円・二教をしる人必ず蔵・通・二

教をしるべし、人の師もうと申でしすは弟子のしらぬ事を教えたるが師にては候な

り、例せば仏より前の一切いっさいの人天にんてん・外道げどうは二天・三仙でしの弟子なり、九十五種

まで流派したりしかども三仙のい見を出きやうしゆしやくそんでず、教主きやうしゆしやくそん釈尊もかれに習ならい伝え

て外道げどうの弟子でしにて・ましませしが苦行くぎやう・樂行らくぎやう・十二年の時・苦・空・無常むじやう

・無我むがの理をさとり出してこそ外道げどうの弟子の名をば離れさせ給たまいて無師智むしち

とはなのらせ給たまいしか、又人天にんてんも大師だいしとは仰あおぎまいらせしか、されば前四味ぜんしみ

の間は教主きやうしゆしやくそん釈尊・法慧菩薩等の御弟子でしなり、例せば文殊もんじゆは釈尊九代の

御師おんしと申もうすがごとし、つねは諸經しよきやうに不説ふせつ一字と・とかせ給たまうも・これなり。

仏・御年・七十二の年・摩竭提国まかだこく・靈鷲山りやうじゆせんと申もうす山にして無量義經むりやうぎきやうを

・とかせ給たまいしに、四十余年よんじゅうよねんの經經きやうぎきやうをあげて、杖葉そうじやくをば其の中におさめ

て四十余年・未顕真実と打消し給うは此なり、此の時こそ諸大菩薩・諸天人等はあはてて実義を請せんとは申せしか、無量義經にて実義とをばしき事一言ありしかども・いまだまことなし、譬へば月の出でんとして其の体東山にかくれて光り西山に及べども諸人月体を見ざるがごとし、法華經・方便品の略開三顯一の時・仏略して一念三千・心中の本懷を宣べ給う、始の事なればほととぎすの初音をねをびれたる者の一音ききたるが・やうに月の山の半を出でたれども薄雲の・をほへるが・ごとく・かそかなりしを舍利弗等・驚いて諸天・竜神・大菩薩等をもよをして諸天・竜神等其の数恒沙の如し仏を求むる諸の菩薩大数八万有り・又諸の万億国の轉輪聖王の至れる合掌して敬心を以て具足の道を聞かんと欲す等とは請ぜしなり、文の心は四味・三教・四十余年の間いまだ・きかざる法門うけ給はらんと請ぜしなり、この文に具足の道を聞かんと欲すと申すは大教に

いわ 云く「薩とは具足の義に名く」等云云、無依無得大乗四論玄義記に云く「沙
とは訳して六と云う胡法に六を以て具足の義と為すなり」等云云。吉蔵の疏
に云く「沙とは翻じて具足と為す」等云云、天台の玄義の八に云く「薩と
は梵語、此に妙と翻ずるなり」等云云、付法蔵の第十三真言・華嚴・諸宗
の元祖・本地は法雲自在王如來・迹に竜猛菩薩・初他の大聖の大智度論千
卷の肝心に云く「薩とは六なり」等云云、妙法蓮華經と申すは漢語なり、
がっし 月支には薩達磨分陀利伽蘇多覽と申す、善無畏三蔵の法華經の肝心真言に
いわ 云く「囊謨三曼陀沒駄南阿暗惡薩縛勃陀枳攬知娑乞芻毘耶見☆囊三姿縛
如虛 空性羅乞叉・相也薩哩達磨浮陀哩迦蘇駄覽經惹吽・發喜縛日羅固羅乞叉・護
うん 空無 吽 無願娑婆詞成就」

しんこん 此の真言は南天竺の鉄塔の中の法華經の肝心の真言なり、此の真言の中
さつり だるま 薩哩達磨と申すは正法なり薩と申すは正なり正は妙なり妙は正なり

しょうほうげ　みょうほうげこれ　正法華・妙法華是なり、又妙法蓮華經の上に南無の二字を・をけり南無

みょうほうれんげきよう

妙法蓮華經これなり、妙とは具足・六とは六度万行、諸の菩薩の六度万行

くそく

を具足するやうを・きかんとをもう、具とは十界互具・足と申すは一界に

じゅっかい

十界あれば当位に余界あり満足の義なり、此の經一部八卷・二十八品・六

よかい

万九千三百八十四字・一一に皆妙の一字を備えて三十二相・八十種好の

ぶつだ

仏陀なり、十界に皆己界の仏界を顕す妙樂云く「尚仏果を具す、余果も

またしか

亦然り」等云云、仏此れを答えて云く、「衆生をして仏知見を開か令めん

ほ

と欲す」等云云、衆生と申すは舍利弗・衆生と申すは一闍提・衆生と申す

ほっかい

は九法界・衆生無辺誓願度・此に満足す、「我本誓願を立つ一切の衆をし

ほ

て我が如く等しくして異なること無からしめんと欲す我が昔の願せし所の

ごと

如き今は已に満足しぬ」等云云。

しよだいほさつ

諸大菩薩・諸天等・此の法門をきひて領解して云く「我等昔より

このかたしほしほ せそん

来数 世尊の説を聞きたてまつれども未だ曾て是の如き深妙の上法を開

かず」等云云、伝教大師云く「我等昔より 来数 世尊の説を聞く・と謂う

は昔法華經の前・華嚴等の大法を説くを聞けども・となり、未だ曾て是く

の如き深妙の上法を開かずと謂うは未だ法華經の唯一仏乗の教を聞かざる

なり」等云云、華嚴・方等・般若・深密・大日等の恒河沙の諸大乘經は

いまだ一代の肝心たる一念三千の大綱・骨髓たる二乗作仏・久遠実成等を

いまだきかずと領解せり。

◆四一 開目抄下

210P

又、今よりこそ諸大菩薩も梵帝・日月・四天等も教主釈尊の御弟子に

ては候へ、されば宝塔品には、此等の大菩薩を仏・我が御弟子等と・をば

すゆへに諫曉して云く「諸の所大衆に告ぐ我が滅度の後、誰か能く此の

經を護持し読誦する今・仏前に於て自ら誓言を説け」とは・したたかに

おほくだ 仰せ下せしか、又諸大菩薩も「たとえば大風のしやうじゆ小樹の枝を吹くが如し」等と

きちじよう 吉祥草の大風にたいふう随したがい河水の大海へ引くがごとく仏にはしたが随したがいまらせしか。

しか 而れどもりようぜん靈山日浅くして夢のごとく・うつつならずありしに証前しやうぜんの

ほうとう 宝塔の上にきこ起後の宝塔あつて十方じゆつぱうの諸仏・来集しよぶつせる皆我が分身らいじゆうなりとな

たまい のらせ給たまい宝塔は虚空に釈迦・多宝坐たほうざを並べ日月の青天に並にちがつ出せるが

ごと 如し、人天大会は星をつらね分身ふんじんの諸仏は大地の上宝樹の下しよぶつの師子だいちのゆか

にまします、華嚴經の蓮華藏世界は十方ふんじん・此土の報仏・各各に国国にして

彼の界の仏・此の土に來つて分身ふんじんとなならず此の界の仏・彼の界へゆかず

ほうえ 但法慧等の大菩薩のみ互ほさついに來会らいえせり、大日經・金剛頂經だいにちきよう等の八葉九学こんごうちようきよう

三十七尊等・大日如來の化身けしんとはみゆれども其の化身けしん・三身円満さんじんえんまんの古仏こぶつに

あらず、大品經だいほんの千仏・阿弥陀經あみだの六方しよぶつの諸仏しよぶついまだ來集らいじゆうの仏にあらず

だいしつきよう 大集經だいじきようの來集らいじゆうの仏・又分身ふんじんならず、金光明經こんこうみようきようの四方しほうの四仏けしんは化身けしんなり、

いっさいきよう

かくしゅうかくきよう

さんじんえんまん

しよぶつ

ふんじん

総じて一切経の中に各修・各行の三身円満の諸仏を集めて我が分身とはと

かれず、これ寿命品の遠序なり、始成四十余年の釈尊が一劫・十劫等・

いぜん しよぶつ

ふんじん

びようどういしゆ

いっしう

已前の諸仏を集めて分身ととかる・さすが平等意趣にもにず・をびただし

くをどろかし、又始成の仏ならば所化・十方に充滿すべからざれば分身

そな

しじよう

しよけ

じゆつぽう

じゆうまん

ふんじん

の徳は備わりたりとも示現して益なし、天台云く「分身既に多し当に知る

じようぶつ

じげん

たいえ

てんだいいわ

ふんじんすで

まさ

べし成仏の久しきことを」等云云、大会のをどろきし意をかかれたり。

其の上に地涌千界の大菩薩・大地より出来せり釈尊に第一の御弟子と

そ

じゆせんがい

ほさつ

だいち

しゆつたい

しゃくそん

だいいち

おんでし

・をぼしき普賢・文殊等にも・にるべくもなし、華嚴・方等・般若・法華經

ふげん

もんじゆ

けこん

ほうとう

はんによ

ほけきよう

ほさつ

の宝塔品に來集する大菩薩・大日經等の金剛薩・等の十六の大菩薩なん

ほうとうほん

らいじゅう

ほさつ

だいにちきよう

こんこうほすい

ほさつ

やまかつ

ども此の菩薩に對当すれば☆☆の群る中に帝釈の來り給うが如し、山人に

げっけい

ほさつ

みこう

たいしゃく

たま

ごと

やまかつ

月郷等のまじはるにことならず、補処の弥勒すら猶迷惑せり何に況や其の

い

せかい

ほさつ

ふしよ

みろく

なおもいわく

いか

いわんやそ

已下をや、此の千世界の大菩薩の中に四人の大聖まします所謂・上行・

い

せかい

ほさつ

ふしよ

みろく

なおもいわく

いか

いわんやそ

むへんぎよう じようぎよう あんりゆうぎよう
無辺行・浄行・安立行なり、此の四人は虚空・靈山の諸菩薩等・眼
もあはせ心もをよばず、華嚴經の四菩薩・大日經の四菩薩・金剛頂經の
十六大菩薩等も此の菩薩に対すれば翳眼のものの日輪を見るが如く海人が
こうてい たてまつ こと たいこう ししゅう しゅうちゅう
皇帝に向い奉るが如し、大公等の四聖の衆中にありしに・にたり商山の
しこう
四皓が忠節に仕えしにことならず、巍巍堂堂として尊高なり、釈迦・多宝
じゅつぽう ふんじん いっさいしじゅう ぜんちしき たてまつ しゃか たほう
・十方の分身を除いては一切衆生の善知識ともたのみ奉りぬべし、弥勒
ぼさつ ねんげん たいし おんとき じようぶつ りようぜん
菩薩・心に念言すらく、我は仏の太子の御時より三十成道・今の靈山ま
で四十二年が間・此の界の菩薩・十方世界より来集せし諸大菩薩皆しり
たり、又十方の淨穢土に・或は御使い・或は我と遊戲して其の国国に大
ぼさつ けんもん ある おんつかい ある ゆうげ そ
菩薩を見聞せり、此の大菩薩の御師などは・いかなる仏にてや・あるら
ん、よも此の釈迦・多宝・十方の分身の仏陀にはにるべくもなき仏にてこ
そ・をはすらめ、雨の猛を見て竜の大なる事をしり華の大なるを見て池の

ふかきことは・しんぬべし、此等の大菩薩の来る国・又誰と申す仏にあいたてまつり・いかなる大法をか習修し給うらんと疑いし、あまりの不審さに音をも・いだすべくも・なければも仏力にやありけん、弥勒菩薩疑つて云く「無量千万億の大衆の諸の菩薩は昔より未だ曾て見ざる所なり是の諸の大威徳の精進に菩薩衆は誰か其の為に法を説いて教化して成就せる、誰に従つてか初めて発心し何れの仏法をか称揚せる、世尊・我昔より来未だ曾つて是の事を見ず、願くは其の所従の国土の名号を説きたまえ、我常に諸国に遊べども未だ曾つて是の事を見ず、我れ此の衆の中に於て乃し一人をも識らず忽然に地より出でたり願くは其の因縁を説きたまえ」等云云、天台云く「寂場より已降今座已往十方の大士来会絶えず限る可からずと雖も我補処の智力を以つて悉く見悉く知る、而れども此の衆に於て一人をも識らず然るに我れ十方に遊戲して諸仏に・奉し大衆に快

く識知せらる」等云云、妙樂云く「智人は起を知る蛇は自ら蛇を織る」等

云云、きようしやく經釈の心・分明ふんみょうなり詮せんずるところは初成道しよじやうどうより・このかた此の

土十方じゆつぽうにて此等の菩薩ぼさつを見たてまつらず・きかずと申もうすなり。

仏・此の疑うたがいを答えて云く「阿逸多・汝等昔より未だ見ざる所の者は我

是この娑婆世界しやばせかいに於て阿耨多羅三藐三菩提あのくたらさんみやくさんぼだいを得已つて是の諸の菩薩おわを教化きやうけし

示導じどうして其の心そを調伏じやうぶくして道の意おを發はつこさしめたり」等、又云く「我伽耶がや

城菩提樹下ぼだいじゆげに於て坐して最正覺しやうかくを成じやうずることを得て無上の法輪むじやうほうりんを転しかじ爾しか

て乃すなわち之これを教化きやうけして初めて道心どうしんを發さしむ今皆不退みなふたいに任まかせり、乃至我久遠ないしきうおん

より来このかた是等の衆これらを教化きやうけせり」等云云、此に弥勒等みろくの大菩薩大ぼさつおおいに疑うたがいいを

もう、華嚴經の時けこんきやう・法慧等の無量ほうえの大菩薩むりやうぼさつあつまるいかなる人人ひとびとなるらん

と・をもへば我が善知識ぜんちしきなりとをほせられしかば、さもやと・うちをもひ

き、其その後の大宝坊びやくろち・白鷺池等らいえの来会ぼさつの大菩薩も・しかのごとし、此の大

菩薩ぼさつは彼等かれらにはにるべくもなき・ふりたりげにまします定めて釈尊しやくそんの御お師匠ししょうかなんとおぼしきを令初發道心どうしんとて幼稚ようちのものども・なりしを教化きやうけして弟子でしとなせりなんど・をほせあれば・大なる疑うたがいなるべし、日本にほんのしょうとくたいし
聖徳太子は人王第三十二代・用明天皇の御子なり、御年六歳の時・百濟くだら・高麗こま・唐土もうこしより老人ろうじんどものわたりたりしを六歳の太子たいし・我が弟子でしなりと・をほせありしかば彼の老人ろうじんども又合掌がつしようして我が師なり等云云、不思議ふしぎなりし事なり、外典げてんに申す・或者道あるをゆけば路のほとりに年三十計ばかりなる・わかものが八十計ばかりなる老人ろうじんを・とらへて打ちけり、いかなる事ぞと・とえば此おうの老翁ろうは我が子なりなんど申すと・かたるにもにたり、されば弥勒菩薩みろくぼさつ等疑うたがいつて云く「世尊せそん・如来太子にやらいたいし為りし時・釈しやくの宮を出で伽耶城がやを去るこ
と遠からずして道場どうじやうに坐して阿耨多羅三藐三菩提あのかたらさんみやくさんぼだいを成じやうずることを得給え
り、是より已来始めて四十余年を過ぎたり、世尊せそん・云何ぞ此の少時に於おいて

大いに仏事ぶつじを作し給たまえる」等云云、一切いっさいの菩薩ぼさつ始め華嚴けこん經より四十余年よんじゅうよねん・
會うたが會いに疑ぎをまうけて一切衆生いっさいしじゅうの疑網ぎもをはらす中に此この疑ぎ・第一だいいちの疑ぎ
なるべし、無量義經むりょうぎきょうの大莊嚴等そうこんの八万はちまんの大士だうし・四十余年よんじゅうよねんと今との歷劫りやくこく・
疾成しつじょうの疑ぎにも超過ちようかせり、觀無量壽經くわんむりょうじゆききょうに韋提希夫人いだいけふじんの阿闍世王あじやせが提婆だいばに
すかされて父の王をいましめ母を殺さんとせしが耆婆ぎば月光がっこうに・をどされて
母をはなちたりし時・仏を請しょうじたてまつて・まづ第一だいいちの間に云く「我れ
宿むかし何つみの罪あつて此の惡子を生む世尊せそん・復た何等またなんらの因緣有いんねんつて提婆達多だいばだつたと
共に眷屬けんぞくとなり給たまう」等云云、此この疑うたがの中に「世尊復た何等せそんまたなんらの因緣有いんねんつ
て」等の疑うたがは大なる大事だいじなり、輪王りんおうは敵と共に生れず帝釈たいしゃくは鬼と・ともな
らず仏は無量劫むりょうこくの慈悲じひ者なりいかに大怨と共にはまします還かえつて仏には・
ましまさざるかと疑うたがうなるべし、而しかれども仏答たまえ給たまはず、されば觀經かんききょうを
讀誦どくじゆせん人・法華經ほけききょうの提婆品だいばへ入らずば・いたづらごととなるべし、大涅槃經だいにはんききょう

に迦葉菩薩の三十六の間もこれには及ばず、されば仏・此の疑を晴させ
給はずば一代の聖教は泡沫にどうじ一切衆生は疑網にかかるべし、寿量
の一品の大切なるこれなり。

其の後・仏・寿量品を説いて云く「一切世間の天人及び阿修羅は皆今の
釈迦牟尼仏は釈氏の宮を出で伽耶城を去ること遠からず道場に坐して
阿耨多羅三藐三菩提を得給えりと謂えり」等云云、此の経文は始め寂滅
道場より終り法華經の安樂行品にいたるまでの一切の大菩薩等の所知を
あげたるなり、「然るに善男子・我れ実に成仏してより已來・無量無辺百
千万億那由佗劫なり」等云云、此の文は華嚴經の「三処の始成正覺」阿含經
に云く「初成」浄名經の「始坐仏樹」大集經に云く「始十六年」大日經
の「我昔坐道場」等・仁王經の「二十九年」無量義經の「我先道場」法華經
の方位品に云く「我始坐道場」等を一言に大虚妄なりと・やぶるもんなり。

此の過去常顯るる時・諸仏皆釈尊の分身なり爾前・迹門の時は諸仏・

釈尊に肩を並べて各修・各行の仏なり、かるがゆへに諸仏を本尊とする者

・釈尊等を下す、今華嚴の台上・方等・般若・大日經等の諸仏は皆釈尊

の眷属なり、仏三十成道の御時は大梵天王・第六天等の知行の娑婆世界を

奪い取り給いき、今爾前・迹門にして十方を淨土と・がうして此の土を

穢土ととかれしを打ちかへして此の土は本土なり十方の淨土は垂迹の

穢土となる、仏は久遠の仏なれば迹化・他方の大菩薩も教主・釈尊の御弟子

なり、一切經の中に此の壽量品ましますば天に日月の・国に大王

の・山河に珠の・人に神のなからんが・ごとくして・あるべきを華嚴・

真言等の権宗の智者と・をばしき澄觀・嘉祥・慈恩・弘法等の一往・

権宗の人人・且は自の依經を讚歎せんために・或は云く「華嚴經の教主

は報身・法華經は応身」と・或は云く「法華壽量品の仏は無明の辺域・

だいにちきよう

大日経の仏は明の分位」等云、雲は月をかくし・臣は賢人をかくす人

さん

讚すれば黄^{おうしやく}石も玉とみへ諛^{ゆしん}臣も賢^{けんじん}人かと・をぼゆ、今濁世^{じよくせ}の学者等^{がくしや}・彼等^{かれら}

ことば

の語義に隠されて寿命品^{じゆりようほん}の玉を翫^{もてあそ}ばず、又天台宗^{てんだいしゆう}の人人もたほらかさ

ひとびと

れて金石・一同のをもひを・なせる人人もあり、仏・久成^{くじやう}に・ましまさず

しよけ

ば所化^{しよけ}の少^{わず}かるべき事を弁^{わきまう}うべきなり、月は影を慳^{おしま}ざれども水なくば・う

しゆじやう

つるべからず、仏・衆生を化せんと・をばせども結縁^{けちえん}うすければ八相を現^{げん}

もろもろしやうもん

ぜず、例せば諸^{もろもろ}の声聞^{しやうもん}が初地^{しよじ}・初住^{しよじゆう}には・のぼれども爾前^{にぜん}にして自調自度^{じちやうじど}

みらい

なりしかば未来^{みらい}の八相を^{きやうしゆしやくそんしじやう}ごするなるべし、しかれば教主釈尊始成^{しじやう}ならば

ほか

今・此^{ほか}の世外^{ぼんたい}の梵帝^{にちがつ}・日月^{してん}・四天^{こつしよ}等は劫初^{こつしよ}より此の土を領すれども

よんじゆうよねん

四十余年^{ぶつでし}の仏弟子^{りやうぜん}なり、靈山^{りやうぜん}・八年^{ほつつけちえん}の法華結縁^{ほつつけちえん}の衆今^{しゆくん}まいりの主君^{しゆくん}にをも

くじゆう

ひつかず久住^{くじゆう}の者にへだてらるるがごとし、今久遠実成^{くおんじつじやう}あらはれぬれば

とうほう

東方^{やくしによらい}の薬師如来^{がっこう}の日光^{さいほう}・月光^{あみだによらい}・西方阿弥陀如来^{かんのん}の觀音^{せいし}・勢至^{ないしじゆう}・乃至十方^{ぼう}

世かい しょぶつ おんでしだいにち こんこうちよう
世界の諸仏の御弟子大日・金剛頂等の両部の大日如来の御弟子の諸大菩薩
な おきようしゅしゅくそん おんでし
・ 猶教主 釈尊の御弟子なり、諸仏・釈迦如来の分身たる上は諸仏の所化
もう
申すにをよばず何に況や此の土の劫初より・このかたの日月・衆星等・
きようしゅしゅくそん おんでし
教主 釈尊の御弟子にあらずや。

しか てんだいしゅう ほか しょしゅう ほんぞん
而るも天台宗より外の諸宗は本尊にまどえり、俱舎・成実・律宗は
三十四心・断結成道の釈尊を本尊とせり、天尊の太子が迷惑して我が身
じようどう しゅくそん ほんぞん
は民の子とをもうがごとし、華嚴宗・真言宗・三論宗・法相宗等の四宗
だいじよう
は大乗の宗なり、法相・三論は勝応身ににたる仏を本尊とす天王の太子・
さむらい
我が父は侍と・をもうがごとし、華嚴宗・真言宗は釈尊を下げたて慮舎那
ほんぞん てんし
の大口等を本尊と定む天子たる父を下げたて種姓もなき者の法王のごとくな
じようとしゅう しゅか ふんじん あみだぶつ うえん
るに・つくり、浄土宗は釈迦の分身の阿弥陀仏を有縁の仏とをもうて教主
きようしゅ
をすてたり、禅宗は下賤の者・一分の徳あつて父母をさぐるがごとし、仏

をさげ経を下す此皆本尊に迷えり、例せば三皇已前に父をしらさず人皆禽獸
に同ぜしが如し、寿命品をしらざる諸宗の者は畜に同じ不知恩の者なり、
故に妙楽云く「一代教の中未だ曾て遠を顕さず、父母の寿知らずんばあ
る可からず若し父の寿の遠きを知らずんば復父統の邦に迷う、徒に才能
と謂うとも全く人の子に非ず」等云云、妙楽大師は唐の末・天宝年中の者
なり三論・華嚴・法相・真言等の諸宗・並に依経を深くみ広く勘えて
寿命品の仏をしらざる者は父統の邦に迷える才能ある畜生とかけるな
り、徒謂才能とは華嚴宗の法蔵・澄観・乃至・真言宗の善無畏三蔵等は
才能の人師なれども子の父を知らざるがごとし、伝教大師は日本顕密の
元祖・秀句に云く「他宗所依の経は一分仏母の義有りと雖も然も但愛のみ
有つて蔽の義を闕く、天台法華宗は嚴愛の義を具す一切の賢聖・学・無学
及び菩薩心を発せる者の父なり」等云云、真言・華嚴等の経経には種熱脱

の三義・名字すら猶なし何に況や其の義をや、華嚴・真言經等の一生初地の即身成仏等は經は權經にして過去をかくせり、種をしらざる脱なれば超高が位にのぼり道鏡が王位に居せんとせしがごとし。

宗宗・互に程を諍う予此をあらそはず但經に任すべし、法華經の種に依つて天親菩薩は種子無上を立てたり天台の一念三千これなり、華嚴經・乃至

諸大乘經・大日經等の諸尊の種子・皆一念三千なり天台智者大師・一人

・此の法門を得給えり、華嚴宗の澄觀・此の義を盗んで華嚴經の心如工

画師の文のた神とす、真言・大日經等には二乗作仏・久遠実成・

一念三千の法門これなし、善無畏三蔵・震旦に来て後・天台の止觀を見

て智發し大日經の心実相・我一切本初の文の神に天台の一念三千を盗み入

れて真言宗の肝心として其の上に印と真言とをかざり法華經と大日經と

の勝劣を判ずる時・理同事勝の釈をつくれり、両界の漫荼羅の二乗作仏・

じゅつかいこく

だいにちきよう

だいいち

おおわく

ゆえ

でんきようだいしいわ

十界互具は一定・大日経にありや第一の誑惑なり、故に伝教大師云く「新

しんこん

すなわ

ひつじゆ

そうじよう

みん

くとう

けこん

すなわ

ようこう

きも

来の真言家は則ち筆受の相承を混じ、旧到の華嚴家は則ち影響の規模を隠

えぞ

す」等云云、俘囚の嶋などに・わたて・ほのぼのといううたは・われよ

もう

夷鉢

かんど

にほん

みたりなんと申すは・えぞていの者はさこそとをもうべし、漢土・日本

がくしゃ

りようしうわじういわ

しんこん

ぜんもん

けこん

さんろんないしも

学者又かくのごとし、良☆和尚云く「真言・禅門・華嚴・三論乃至若し

ほっけ

えんま

ぜんむいさんぞう

きふく

法華等に望めば是接引門」等云云、善無畏三蔵の閻魔の責にあづからせ給

しは此の邪見による後に心を・ひるがへし法華経に帰伏してこそ・このせ

じゃけん

ほけきよう

きふく

をば脱させ給いしか、其の後善無畏・不空等・法華経を両界の中央にを

のがれ

たまい

そ

ぜんむい

ふくう

ほけきよう

きて大王のごとくし胎蔵の大日経・金剛の金剛頂経をば左右の臣下のご

だいおう

たいぞう

だいにちきよう

こんごう

こんごうちようきよう

さう

しんか

とくせし・これなり、日本の弘法も教相の時は華嚴宗に心をよせて法華経

にほん

こうぼう

きようそう

けこんしゅう

をば第八にをきしかとも事相の時には実慧・真雅・円澄・光定等の人人に

じそう

じつて

しんが

えんちよう

みつさだ

ひとびと

伝え給いし時・両界の中央に上のごとく・をかれたり、例せば三論の嘉祥

たまい

かみ

- 467 -

は法華ほっけ玄十卷ほけきように法華經ほけきようを第四時・会二破二えにはにと定れども天台てんだいに歸伏きふくして七年

つかへ廢講散衆はいこうさんしやうして身を肉橋にくきようとなせり、法相ほっそうの慈恩じおんは法苑林ほうおんりん・七卷・十

二卷いちじやうほうべんに一乘方便さんじやうしんじつ・三乘真實等もうげんの妄言多し、しかれども玄贊げんさんの第四またには故亦

兩存等じやうと我が宗を不定じやうになせり、言は兩方なれども心は天台てんだいに歸伏きふくせり、

華嚴けこんの澄觀ちやうかんは華嚴けこんの疏じよを造て華嚴けこん・法華ほっけ・相對そうたいして法華ほっけを方便ほうべんとかけるに

似れども彼の宗これ之もつを以て実なと為す此の宗りつぎの立義・理通ぜざること無し等と

かけるは悔くい還すにあらずや、弘法こうぼうも又かくのごとし、龜鏡きつきやうなければ我が

面をみず敵なければ我が非をしらず、真言等しんごんの諸宗しよしゆうの學者等がくしや・我が非をし

らざりし程でんぎやうだいしに伝教大師でんぎやうだいしにあひたてまつて自宗じしゆうの失とがをしるなるべし。

されば諸經しよきやうの諸仏しよぶつ・菩薩ぼさつ・人天等にんてんは彼彼かれがれの經經きやうきやうにして仏たまたにならせ給う

やうなれども実には法華經ほけきやうにして正覺しやうかくなり給へり釈迦諸仏しやかしよぶつの衆生しゆじやう無辺むへんの

総願みなは皆此の經まんぞくにをいて満足こんじやいまんぞくする今者已満足よの文これなり、予事よじの由よしを・

をし計るに華嚴・觀經・大日經等をよみ修行する人をば・その經經の
仏・菩薩・天等・守護し給らん 疑あるべからず、但し大日經・觀經等
をよむ行者等・法華經の行者に敵對をなさば彼の行者をすてて法華經の
行者を守護すべし、例せば孝子・慈父の王敵となれば父をすてて王にまい
る孝の至りなり、仏法も又かくのごとし、法華經の諸仏・菩薩・十羅刹・
日蓮を守護し給う上・淨土宗の六方の諸仏・二十五の菩薩・真言宗の千
二百等・七宗の諸尊・守護の善神・日蓮を守護し給うべし、例せば七宗の
守護神・伝教大師をまほり給いしが如しと・をもう、日蓮案じて云く
法華經の二処三会の座にましましし、日月等の諸天は法華經の行者 出来
せば磁石の鉄を吸うがごとく月の水に遷るがごとく須臾に來つて行者に
代り仏前の御誓をはたさせ給べしとこそをばへ候にいままで日蓮をとぶら
ひ給はぬは日蓮・法華經の行者にあらざるか、されば重ねて經文を勘え

て我が身にあてて、身の失をしるべし。

疑て云く当世の念仏宗・禅宗等をば何なる智眼をもつて法華經の

敵人・一切衆生の悪知識とはしるべきや、

答えて云く私の言を出すべから

ず経釈の明鏡を出して謗法の醜面をうかべ其の失をみせしめん生盲は

力をよばず、法華經の第四宝塔品に云く「爾の時に多宝仏・宝塔の中に於て

半座を分ち釈迦牟尼仏に与う、

爾の時に大衆二如来の七宝の塔の中の師子

の座の上に在して結跏趺坐し給うを見たてまつる、

大音声を以て普く四衆

に告げ給わく、

誰か能く此の娑婆国土に於て広く妙法華經を説かん、今

正しく是れ時なり、

如来久しからずして当に涅槃に入るべし、仏・此の

妙法華經を以て付属して在ること有らしめんと欲す」等云云、

第一の勅宣

なり。

又云く「爾の時に世尊重ねて此の義を宣べんと欲して偈を説いて言く、

聖主世尊・久しく滅度し給うと雖も宝塔の中に在して尚法の為に來り給えり、諸人如何ぞ勤めて法に為わざらん、又我が分身の無量の諸仏・恒沙等の如く來れる法を聴かんと欲す各妙なる土及び弟子衆・天人・竜神・諸の供養の事を捨てて法をして久しく住せしめんが故に此に來至し給えり、譬えば大風の小樹の枝を吹くが如し、是の方便を以て法をして久しく住せしむ、諸の大衆に告ぐ我が滅度の後誰か能く此の經を護持し読誦せん今・仏前に於て自ら誓言を説け、第二の鳳詔なり。

「多宝如來および我が身集むる所の化仏當に此の意を知るべし、諸の善男子・各諦かに思惟せよ此れは為れ難き事なり、宜しく大願を發こすべし、諸余の經典數・恒沙の如し此等を説くと雖も未だ為れ難しとするに足らず、若し須弥を接つて他方無數の仏土に擲げ置かんも亦未だ為れ難しとせず、若し仏滅後・惡世の中に於て能く此の經を説かん是則ち為れ難し、

たといこうしょう
仮使劫焼に乾れたる草を担い負うて中に入つて焼けざらんも亦未だ為れ
難しとせず、我が滅度の後に若し此の経を持ちて一人の爲にも説かん是
則ち為れ難し、諸の善男子・我が滅後に於て誰か能く此の経を護持し誦
せん、今・仏前に於て自ら誓言を説け」等云云、第三の諫勅なり、第四・

第五の二箇の諫曉・提婆品にあり下にかくべし。

此の経文の心は眼前なり青天に大日輪の懸がごとし白面に照のあるに

にたり、而れども生盲の者と邪眼の者と一眼のものと各謂自師の者・迦執

家の者はみがたし万難をすてて道心あらん者にしるしとどめてみせん、西

王母がそののもも・輪王出世の優曇華よりもあいがたく沛公が項羽と八年

・漢土をあらそいし頼朝と宗盛が七年・秋津嶋にたたかひし修羅と帝釈と

金翅鳥と竜王と阿耨池に諍えるも此にはすぐべからずとしるべし、日本国

に此の法顕ること二度なり伝教大師と日蓮となりとしれ、無眼のものは

うたがい
疑うべし力及ぶべからず此の經文は日本・漢土月氏・竜宮・天上・
じゅつぼうせかい いっさいきよう
十方世界の一切經の勝劣を釈迦・多宝・十方の仏・來集して定め給う
なるべし。

問うて云く華嚴經・方等經・般若經・深密經・楞伽經・大日經・
ねはんぎよう
涅槃經等は九易の内か六難の内か、答えて云く華嚴宗の杜順・智儼・法藏
ちようかん
澄觀等の三藏大師。読んで云く「華嚴經と法華經と六難の内・名は二經
しよせつ
なれども所説・乃至理これ同じ四門觀別・見真諦同のごとし」、法相の
げんじようさんそう
玄奘三藏・慈恩大師等・読んで云く「深密經と法華經とは同く唯識の法門
にして第三時の教・六難の内なりし三論の吉藏等読んで云く「般若經と
ほけきよう
法華經とは名異体同・二經一法なり」善無畏三藏・金剛智三藏・不空三藏
等・読んで云く「大日經と法華經とは理同じ、をなじく六難の内の經な
り」、日本の弘法・読んで云く「大日經は六難・九易の内にあらず大日經

は釈迦しゃかしよせつ所説いっさいきようの一切経いっさいきようの外ほか・法身ほっしん・大日如来だいにちにょらいの所説しよせつなり、又・或人ある云く
「華嚴經けこんきやうは報身ほうしん如来にょらいの所説しよせつ・六難なん・九易くゐの内にはあらずし、此この四宗しよその元祖
等かやうに読みければ其その流れをくむ数千の学徒等も又此の見をいはず、
日蓮にちれんなげいて云く上かみの諸人しよにんの義を左右さうなく非なりといはば当地しよにんおもての諸人面しよにんおもてを
向くべからず非に非をかさね結句けっこくは国王こくおうに讒奏ざんそうして命に及ぶべし、但し我等
が慈父じふ・雙林そうりん最後の御遺言ゆいごんに云く「法に依つて人に依らざれ」等云云、不依
人等とは初依しよえ・二依ふたえ・三依さんえ・第四依しよえ・普賢ふげん・文殊等の等覺とうかくの菩薩ぼさつが法門ほうもんを
説き給うとも経を手ににぎらざらんをば用ゆべからず、「了義經りやうぎきやうに依つて
不了義經ふりやうぎきやうに依らざれ」と定めて經の中にも了義りやうぎ・不了義經ふりやうぎきやうを糾明きゆうめいして信受しんじゆ
すべきこそ候そうらいぬれ、竜樹菩薩りゆうじゆぼさつの十住毘婆沙論じゆうじゆうびしやもんろんに云く「修多羅黑論しゆたらに依ら
ずして修多羅白論しゆたらびやくろんに依れ」等云云、天台大師てんだいだいし云く「修多羅と合う者は録ろくし
て之を用いよ文無なくき義無ぎなきは信受しんじゆすべからず」等云云、伝教大師でんきやうだいし云く「仏説ぶつせつ

に依憑えびようして口伝くでんを信ずること其それ」等云云、円珍智証大師云く「文に依よつて伝つうべし」等云云、上にあぐるところの諸師しよしの釈みないちぶん・皆き一分・經論きやうろんに依よつて勝劣しょうれつを弁わきまうやうなれども皆自宗みなじしゆを堅しんじゆく信受せんしし先師みやうぎの謬義みやうぎをたださざるゆへに曲会私情しやうれつの勝劣しょうれつなり莊嚴そうこん己義こぎの法門ほうもんなり・仏滅後の犢子ぶつめつ・方広とくし・後漢ごかん以後いごの外典げてんは仏法外ぶつぼうほかの外道げどうの見みよりも三皇さんこう・五帝ごていの儒書にうしよよりも邪見じゃけん・強盛かうじやうなり邪法じゃほう・巧たくみなり、華嚴けこん・法相ほつそう・真言等しんこんの人師にんし・天台宗てんだいししゆの正義せいぎを嫉ねたむゆへに実經じつきやうの文えを会えして権義くわんぎに順したがぜしむること強盛かうじやうなり、しかれども道心どうしんあらん人・偏党へんとうをすて自他宗じたをあらそはず人をあなづる事なかれ。

法華經ほけきやうに云く「已今当いこんとう」等云云、妙樂みやうらく云く「縦たとい經有しよきやうつて諸經しよきやうの王わうと

云うとも已今当いこんとう説最さいい為第一だいいちと云わす」等云云、又云く「已今当いこんとうの妙茲みやくに於おいて

固まよく迷ほうほうう謗法ぼうほうの罪苦長劫ざいくちやうくに流ながる」等云云、此この經釈きやうしやくにをどろいて一切經いっさいきやう

・並にんしに人師じんしの疏釈じゆを見るに狐疑こぎの冰こおりとけぬ今真言しんこんの愚者等ぐしや・印しんこん・真言しんこんのあ

るを・たのみて真言宗は法華經にすぐれたりとをもひ慈覺大師等の真言
勝れたりとをすくはせられぬれば・なんと・をもえるは・いうにかいなき事甲斐な
り。

密嚴經に云く「十地華嚴等と大樹と神通勝鬘及び余經と皆此の經従り

出でたり、是くの如きの密嚴經は一切經の中に勝れたり」等云云、大雲經

に云く「是の經は即是諸經の轉輪聖王なり何を以ての故に是の經典の中

に衆生の実性・仏性・常住の法蔵を宣説する故なり」等云云、

六波羅蜜經に云く「所謂過去無量の諸仏・所説の正法及び我今説く所の

所謂八万四千の諸の妙法蘊なり、摂して五分と為す一には索咀纒・二には

毘奈耶・三には阿毘達磨・四には般若波羅蜜・五には陀羅尼門となり此の

五種の蔵をもつて有情を教化す、若し彼の有情契經調伏対法般若を受持

すること能わず・或は復有情諸の惡業・四重・八重・五無間罪方等經を

誹ほうずる一闡いつせん提等だいの種種しゅじゆの重罪じゆうざいを造るに銷滅しょうめつして速疾そくしつに解脱げだつし頓とみに涅槃ねはんを
悟わることを得えせしむ、而しかも彼ためが為もろもろに諸だらの陀羅尼藏にぞうを説く、此この五ごの法藏ほうぞう譬たとえ
ば乳に・酪じやく・生蘇しやうそ・熟蘇じゆくそ及び妙みやくなる醍醐だいごの如ごとし、總持門そうじもんとは譬たとえば醍醐だいごの
如ごとし醍醐だいごの味は乳・酪・蘇の中に微妙みみやく第一だいいちにして能よく諸もろもろの病を除き諸もろもろの
有情うじやうをして身心安樂しんしんあんらくならしむ、總持門そうじもんとは契經等がいきやうの中に最も第一だいいちと為す
能よく重罪じゆうざいを除く」等云云、解深密經げじんみつに云く「爾その時に勝義生菩薩復しやうぎしやうぼさつまた仏に
白もうして云く世尊せそん・初め一時いちじに於おいて波羅はら☆仙人墮せん処にん施鹿林だしよせろくりんの中に在ただて唯た
声聞乘しやうもんを發趣ほつしゆする者の為ために四諦したいの相を以もつて正法輪しやうほうりんを轉たまじ給たまいき、是はなはだ甚
だ奇ことにして甚はなはだだ此これ希有けうなり一切世間いっさいせけんの諸もろもろの天人等てんにん・先よより能よく法の
如ごとく轉たまずる者有あること無しと雖いえども、而しかも彼の時に於おいて轉たまじ給たまう所の法輪ほうりんは
有上うじやうなり有容うやうなり是これ未了義みりやうぎなり是これ諸もろもろの諍論安足しよしよの処所しよしよなり、世尊せそん在昔むかし
第二時だいいじやうの中に唯發趣ただほつしゆして大乘だいじやうを修しゆする者の為ためにして一切いっさいの法は皆無自性みなむじせいな

り無性無滅なり本来寂靜なり自性涅槃なるに依る隱密の相を以て正法輪
を轉じ給いき、更に甚だ奇にして甚だ為れ希有なりと雖も、彼の時に
於て轉じ給う所の法輪亦是れ有上なり容受する所有り猶未だ了義ならず、
是れ諸の評論安足の処所なり、世尊今第三時の中に於て普く一切乗を發趣
する者の為に一切の法は皆無自性・無生無滅・本来寂靜・自性涅槃にして
無自性の性なるに依り顯了の相を以て正法輪を轉じ給う、第一甚だ奇
にして最も為れ希有なり、今に世尊轉じ給う所の法輪・無上無容にして是れ
眞の了義なり諸の評論安息の処所に非ず」等云云、大般若經に云く「聽聞
する所の世・出世の法に随つて皆能く方便して般若甚深の理趣に会入し
るもろぞうさく
諸の造作する所の世間の事業も亦般若を以て法性に会入し一事として
ほつしよう
法性を出ずる者を見ず」等云云、大日經第一に云く「秘密主大乗行あり
むえん
無緣乗の心を發す法に我性無し何を以ての故に彼往昔是くの如く修行せし

者の如く蘊の阿頼耶を觀察して自性幻の如しと知る」等云云、又云く「秘密
主彼是くの如く無我を捨て心主自在にして自心の本不生を覺す」等云云、
又云く「所謂空性は根境を離れ無相にして境界無く諸の戲論に越えて虚空
に等同なり乃至極無自性」等云云、又云く「大日尊秘密主に告げて言く秘密
主云何なるか菩提・謂く実の如く自心を知る」等云云、華嚴經に云く
「一切世界の諸の群生声同乗を求めんと欲すること有ること☆し縁覺を求
むる者・轉・復少し、大乘を求むる者甚だ希有なり大乘を求むる者猶
為れ易く能く是の法を信ずる為れ甚だ難し、況や能く受持し・正憶念し
・説の如く修行し眞実に解せんをや、若し三千大千界を以て頂戴するこ
と一劫身動ぜざらんも彼の所作未だ為れ難からず是の法を信ずるは為れ
甚だ難し、大千塵数の衆生の類に一劫諸の樂典を供養するも彼の功德
未だ為れ勝れず是の法を信ずるは為れ殊勝なり、若し掌を以て十仏刹

を持し虚空の中に於て住すること一劫なるも彼の所作未だ為れ難からず
是の法を信ずるは為れ甚だ難し、十仏刹塵の衆生の類に一劫諸の樂典
を供養せんも彼の功德未だ勝れりと為さず是の法を信ずるは為れ殊勝な
り、十仏刹塵の諸の如来を一劫恭敬して供養せん若し能く此の品を受持せ
ん者の功德彼よりも最勝と為す」等云云、涅槃經に云く「是の諸の大乗
方等經典復無量の功德を成就すと雖も是の經に比せんと欲するに喩を
為すを得ざること百倍千倍百千万倍、乃至算數譬喩も及ぶこと能わざる所
なり、善男子譬えば牛從り乳を出し乳從り酪を出し酪從り生蘇を出し生蘇
從り熟蘇を出し熟蘇從り醍醐を出す醍醐は最上なり、若し服すること有る
者は衆病皆除き所有の諸藥も悉く其の中に入るが如し、善男子仏も亦是く
の如し仏從り十二部經を出し十二部經從り修多羅を出し修多羅從り方等經
を出し方等經從り般若波羅蜜を出し般若波羅蜜從り大涅槃を出し猶醍醐の

こと だいご
如し醍醐だいごと言うは仏性ぶつしょうに喩たとう」等云云。

此等これらの經文きやうもんを法華經ほけきやうの已今當いこんとう・六難九易なんくゐに相對そうたいすれば月に星をならべ九

山しゆみに須弥しゆみを合せたるにいたり、しかれども華嚴宗けこんしゆうの澄觀ちやうかん・法相ほつそう・三論さんろん・

真言等しんごんの慈恩じおん・嘉祥かじやう・弘法等こうぼうの仏眼ぶつげんのごとくなる人・猶此なおの文にまどへり、

何いかに況いわんやめくらめや盲眼めくらめのごとくなる當世とうせの學者等がくしや・勝劣しょうれつを弁わきまうべしや、黑白こくびやくのご

とく・あきらかに須弥しゆみ・芥子けしのごとくなる勝劣しょうれつなを・まどへり・いはんや

虚空こくうのごとくなる理まよひに迷まよひわざるべしや、教せんじんの淺深せんじんをしらざれば理せんじんの淺深せんじんを

弁わきまうものなし卷まきをへだて文前後ぜんごすれば教門きやうもんの色わきま弁わきまえがたければ文を出して

愚者ぐしやを扶たすけんとをもう、王だいおうに小王だいおう・大王だいおう・一切いっさいに少分せうぶん・全分ぜんぶん・五乳ごにゅうに全喩ぜんゆ

・分喩ぶんゆを弁わきまうべし、六波羅蜜經ろくはらみつぎやうは有情うじやうの成仏じやうぶつあつて無性むじやうの成仏じやうぶつなし何いかに

況いわんややくおんじつじやう・猶涅槃經なおねはんぎやうの五味ごみにをよばず何いかに況いわんやや法華經ほけきやうの

迹門しやくもん・本門ほんもんにたいすべしや、而しかに日本にほんの弘法大師こうぼうだいし・此きの經文きやうもんにまどひ

たまい ほけきよう
給いて法華經を第四の熟蘇味に入れ給えり、第五の総持門の醍醐味すら
ねはんぎよう およ
涅槃經に及ばずいかにし給いけるやらん、而るを震旦の人師争つて醍醐を
てんだい めすびと
盗むと天台等を盗人とかき給へり惜い哉古賢醍醐を嘗めず等と自歎せられ
たり、此等はさてをく我が一門の者のためにしるす他人は信ぜざれば逆縁
これら
なるべし、一☆をなめて大海のしを・をしり一華を見て春を推せよ、万里
いったい たいかい
をわたて宋に入らずとも三箇年を経て靈山にいたらずとも竜樹のごとく
りゆうぐう
竜宮に入らずとも無著菩薩のごとく弥勒菩薩にあはずとも二所三会に値わ
むちやくぼさつ みろくぼさつ
ずとも一代の勝劣はこれをしれるなるべし、蛇は七日が内の洪水をしる竜
いちだい しやうれつ じゃ
の眷属なるゆへ鳥は年中の吉凶をしれり過去に陰陽師なりしゆへ鳥はとぶ
けんそく きつきよう かこ おんようし
徳人にすぐれたり。

にちれん しよきよう しやうれつ
日蓮は諸經の勝劣をしること華嚴の澄觀・三論の嘉祥・法相の慈恩・
しんこん こうほう
真言の弘法にすぐれたり、天台・伝教の跡をしるのぶゆへなり、彼の人人は
てんだい でんぎよう あと
ひとびと

てんだい 伝教に帰せさせ給はずば謗法の失脱れさせ給うべしや、当世・
日本国に第一に富める者は日蓮なるべし命は法華經にたてまつり名をば後
代に留べし、大海の主となれば諸の河神・皆したかう須弥山の王に諸の山
神したがはざるべしや、法華經の六難九易を弁うれば一切經よまざるにし
たがうべし。

宝塔品の三箇の勅宣の上に提婆品に二箇の諫曉あり、提婆達多は一闍提
なり天王如来と記せらる、涅槃經四十卷の現証は此の品にあり、善星・
阿闍世等の無量の五逆・謗法の者の一をあげ頭をあげ万を・をさめ枝をし
たがふ、一切の五逆・七逆・謗法・闍提・天王如来にあらはれ了んぬ毒藥
變じて甘露となる衆味にすぐれたり、竜女が成仏此れ一人にはあらず一切
の女人の成仏をあらはす、法華已前の諸の小乗教には女人の成仏をゆ
るさず、諸の大乗經には成仏・往生をゆるすやうなれども・或は改転

の成仏じやうぶつにして一念三千いちねんさんぜんの成仏じやうぶつにあらざれば有名無実ゆうめいむじつの成仏じやうぶつ往生おうじやうなり、

拳一例諸こいれいしよと申もうして竜女りゆうにょが成仏じやうぶつは末代まつだいの女人にょにんの成仏じやうぶつ往生おうじやうの道をふみあけ

たるなるべし、儒家じゆけの孝養こうようは今生こんじやうにかかる未来みらいの父母ふぼを扶たすけざれば外家の

聖賢せいけんは有名無実ゆうめいむじつなり、外道げどうは過未かみをしれども父母ふぼを扶たすくる道なし仏道ぶつどうこそ

父母ふぼの後世ごしやうを扶たすくれば聖賢せいけんの名はあるべけれ、しかれども法華經ほけきやう已前いぜん等の

だいしようじやう

大小乗だいしやうじやうの經宗きやうしゆは自身じしんの得道とくどう猶なほかなひがたし何いかに況いわんやや父母ふぼをや但文ひふのみ

あつて義なし、今法華經ほけきやうの時こそ女人にょにん成仏じやうぶつの時・悲母ひもの成仏じやうぶつも顕あらわれ・

達多だつたの悪人あくにん成仏じやうぶつの時・慈父じふの成仏じやうぶつも顕あらわるれ、此の經は内典ないてんの孝經こうきやうなり、

二箇ふたのいさめ了おんぬ。

已上五箇ほうしやうの鳳ほう詔しやうにをどろきて勸持品かんじほんの弘經くきやうあり、明鏡めいきやうの經文きやうもんを出して

当世とうせの禪・律・念仏者ねんぶつ・並びに諸檀那しよだんなの謗法ほうぽうをしらしめん、日蓮にちれんといふし

者は去年九月十二日子丑こぞの時に頸うしはねられぬ、此これは魂魄こんぱく・佐土さどの国に

たりて返年かえるとしの二月・雪中にしるして有縁うえんの弟子でしへをくればをそろしくて・

を拍そろしからず・みんないかに・をぢぬらむ、此これは釈迦しゃか・多宝たほう・十方じゅつぽうの

諸しよぶつ仏みらいにほんこくの未来日本とうせ国・当世たまたをうつし給めいきようう明鏡めいきようなりかたみともみるべし。

勸持品かんじほんに云いわく「唯願ただくは慮うらおもいしたもうべからず仏滅度ほとけめつどの後恐怖くふ惡世あくせの中に

於われらまさて我等われら當にまさ広く説くべし、諸もろもろの無智むちの人の惡口罵詈めり等およし及び刀杖たうじやうを加

うる者有らん我等われらみなまさ皆當に忍ぶべし、惡世あくせの中の比丘びくは邪智じゃちにして心諂曲しんてんきよくに

未だ得ざるをこ為れ得たりと謂おもい我慢がまんの心充滿じゅうまんせん、或阿練若あるあれんにやに納衣のうえにし

て空閑からかんに在あつて自ら真みずかの道を行いずと謂いつて人間にんげんを輕賤きやうせんする者有らん利養りやうに

貪とんじやく著あするが故に白衣びやくえの与ために法を説いて世に恭敬きやうけいせらるることをう為ること

六通ろくつうの羅漢らかんの如ごとくならん、是この人惡心あくしんを懷いだき常に世俗せそくの事を念おもい名を阿練若あれんにや

にあつ仮あつて好んで我等われらが過いだを出いさん、常たいしゆうに大衆おほの中に在あつて我等われらを毀そしらんと

欲ほするが故に國王こくおう・大臣だいじん・婆羅門ばらもん・居士こじおよ及び余びくの比丘衆びくに向ひほうつて誹謗ひほうして

我が惡を説いて是れ邪見の人外道の論議を説くと謂わん、濁劫惡世の中に
は多く諸の恐怖有らん惡鬼其身に入つて我を罵詈毀辱せん、濁世の惡比丘
は仏の方便隨宜の所説の法を知らず惡口し顰蹙し数数擯出せられん」等云
云、記の八に云く「文に三初に一行は通じて邪人を明す即ち俗衆なり、次
に一行は道門増上慢の者を明す、三に七行は僭聖
増上慢の者を明す、此の三の中に初は忍ぶ可し次の者は前に過ぎたり第三
最も甚だし後後の者は轉識り難きを以ての故に」等云云、東春に智度法師
云く「初に有諸より下の五行は第一に一偈は三業の惡を忍ぶ是れ外惡の人
なり次に惡世の下の一偈は是上慢出家の人なり第三に・或有阿練若より下
の三偈は即是出家の處に一切の惡人を摂す」等云云、又云く「常在大衆
より下の兩行は公處に向つて法を毀り人を謗す」等云云、涅槃經の九に云く
「善男子・一闍提有り羅漢の像を作して空處に住し方等大乘經典を誹謗

せん諸の凡夫人見已つて皆眞の阿羅漢是大菩薩なりと謂わん」等云云、又云く「爾の時には是の経閻浮提に於て当に広く流布すべし、是の時に当に諸の悪比丘有つて是の経を抄略し分ちて多分と作し能く正法の色香美味を滅すべし、是の諸の悪人復是くの如き經典を讀誦すと雖も如来の深密の要義を滅除して世間の莊嚴の文飾無義の語を安置す前を抄して後に著け後を抄して前に著け前後を中に著け中を前後に著く当に知るべし是くの如きの諸の悪比丘は是れ魔の伴侶なり」等云云、六卷の般泥・經に云く「阿羅漢に似たる一闍提有つて惡業を行ず、一闍提に似たる阿羅漢あつて慈心を作さん羅漢に似たる一闍提有りとは是の諸の衆生方等を誹謗するなり、一闍提に似たる阿羅漢とは聲聞を毀訾し広く方等を説くなり衆生に語つて言く我れ汝等と俱に是れ菩薩なり所以は何ん一切皆如来の性有る故に然も彼の衆生一闍提なりと謂わん」等云云、涅槃經に云く「我涅槃の後

ないししょうほう
乃至正法滅して後・像法の中に於て当に比丘有るべし持律に似像して少かに経を讀誦し飲食を貪嗜し其の身を長養す、袈裟を服ると雖も猶獵師の細視徐行するが如く猫の鼠を伺うが如し、常に是の言を唱えん我羅漢を得たりと外には賢善を現わし内には貪嫉を懷かん啞法を受けたる婆羅門等の如し、実に沙門に非ずして沙門の像を現じ邪見熾盛にして正法を誹謗せん等云云。

そ じゅうほう ふうりん にちがつ ひだん
夫れ鷲峯・雙林の日月・毘湛・東春の明鏡に当世の諸宗並に国中の禅
ねんぶつ しゅうめん
・律念仏者が醜面を浮べたるに一分もくもりなし、妙法華經に云く「於
ぶつめつとく ふあくせ あんらくぎょうほうん いわ
仏滅度後恐怖惡世中」安樂行品に云く「於後惡世」又云く「於末世中」又云く
「おごまつせほうよくめつじ ぶんべつとく いわ あくせまつほう やくおうほん いわ
「於後末世法欲滅時」分別功德品に云く「惡世末法時」藥王品に云く「後
・五百歳」等云云、正法華經の勸說品に云く「然後末世」又云く「然後来
てんほんほけきょう いわ
末世」等云云、添品法華經に云く等、天台の云く「像法の中の南三北七は

ほけきよう　おんてき
法華經の怨敵なり、
おんてき
傳教の云く「像法の末・南都・六宗の学者は法華
の怨敵なり」等云云、彼等の時はいまだ分明ならず、此は教主釈尊・
おんてき
たほうぶつ　ほうとう　にちがつ
多宝仏・宝塔の中に日月の並ぶがごとく十方分身の諸仏・樹下に星を列ね
しゅうほう
たりし中にして正法一千年・像法一千年・二千年すぎて末法の始に法華經
おんてきさんるい
の怨敵三類あるべしと八十萬億那由他の諸菩薩の定め給いし虚妄となるべ
とうせ　によらいめつし
しや、当世は如来滅後二千二百余年なり大地は・指ばはづるとも春は・花
さんるい　てきじん　にほんこく
は・さかずとも三類の敵人・必ず日本国にあるべし、さるにてはたれたれ
ひとびと　さんるい　だれびと　ほけきよう　ぎようじや
の人人か三類の内なるらん又誰人か法華經の行者なりとさされたるらんを
さんるい　おんてき　われら
ぼつかなし、彼の三類の怨敵に我等入りてやあるらん又法華經の行者の内
しゅうよう　ぎよう　きのえとら
にてやあるらんをぼつかなし、周の第四昭王の御宇二十四年甲寅・四月
そら
八日の夜中に天に五色の光氣・南北に亘りて昼のごとし、大地・六種に震動
こうか　せいち　わた　だいち　しんどう
し雨ふらずして江河・井池の水まさり一切の草木に花さき菓なりたりけり
いっさい　そうもく　このみ

不思議なりし事なり、昭王・大に驚き大史・蘇由・占つて云く「西方に
聖人生れたり」昭王問て云く「此の国いかん」答えて云く「事なし一千
年の後に彼の聖言此の国にわたつて衆生を利すべし」彼のわづかの外典の
一毫未断・見思の者・しかれども一千年のことをしる、はたして仏教・一
千一十五年と申せし後漢の第二・明帝の永平十年丁卯の年・仏法・漢土に
わたる、此は似るべくもなき釈迦多宝十方分身の仏の御前の諸菩薩の
未来記なり、当世・日本国に三類の法華經の敵人なかるべしや、されば仏
付法藏經等に記して云く「我が滅後に正法一千年が間・我が正法を弘む
べき人・二十四人次第に相続すべし」迦葉・阿難等はさてをきぬ一百年の
脇比丘・六百年の馬鳴・七百年の竜樹菩薩等・一分もたがはずでに出で
給いぬ、此の事いかんがむなしかるべき此の事相違せば一經・皆相違すべ
し、所謂舍利弗が未来の華光如来・迦葉の光明如来も皆妄語となるべし、

にぜん
爾前返つて一定となつて永不成仏の諸声聞なり、犬野干をば供養すとも
あなん
阿難等をば供養すべからずとなん、いかんがせん・いかんがせん。

だいいち
第一の有諸無智人と云うは經文の第二の惡世中比丘と第三の納衣の比丘
だんな
の大檀那と見へたり、随つて妙樂大師は「俗衆」等云云、東春に云く「公
したがつ
処に向う」等云云、第二の法華經の怨敵は經に云く「惡世中の比丘は邪智
ほけきよう
にして心諂曲に未だ得ざるを為れ得たりと謂い我慢の心充滿せん」等云云、
おもと
涅槃經に云く「是の時に當に諸の惡比丘有るべし乃至是の諸の惡人復是く
いわ
の如き經典を讀誦すと雖も如来深密の要義を滅除せん」等云云、止觀に
ちぶん
云く「若し信無きは高く聖境に推して己が智分に非ずとす、若し智無きは
ぞうじようまん
増上慢を起し己れ仏に均しと謂う」等云云、道綽禪師が云く「二に
りじんげみ
理深解微なるに由る」等云云、法然云く「諸行は機に非ず時を失う」等云
いわ
云、記の十に云く「恐くは人謬り解せん者初心の功德の大なることを識ら
あやま
るべし」

ずして功を上位に推り此の初心を蔑にせん故に今彼の行浅く功深きことを

示して以て経力を顕す」等云云、伝教大師云く「正像稍過ぎ已て末法太

はだ近きに有り法華一乗の機今正しくは其の時なり何を以て知ることを得

る安樂行品に云く末世法滅の時なり」等云云、慧心の云く「日本一州

円機純一なり」等云云、道綽と伝教と法然と慧心といづれ此を信ずべし

や、彼の一切経に証文なし此れは正しく法華経によれり、其の上・日本国

・一同に叡山の大師は受戒の師なり何ぞ天魔のつける法然に心をよせ我が

剃頭の師をなげすつるや、法然智者ならば何ぞ此の釈を選択に載せて和会

せざる人の理をかくせる者なり、第二の惡世中比丘と指さるるは法然等の

無戒邪見の者なり、涅槃経に云く「我れ等悉く邪見の人と名く」等云云、

妙樂云く「自ら三教を指して皆邪見と名く」等云云、止観に云く「大經

に云く此よりの前は我等皆邪見の人と名くるなり、邪豈惡に非ずや」等云

云、弘決くけつに云く「邪いは即こち是これ惡こなり是この故こに當まさに知しるべし唯ただ円えんを善ぜんと為なす、復また二意に有あり、一ひとには順じゆんを以もつて善ぜんと為なし背せを以もつて惡あくと為なす相待さうたいの意いなり、著しやくを以もつて惡あくと為なし達たつを以もつて善ぜんと為なす相待さうたい・絶待ぜつたい俱ともに須すべく惡あくを離はなるべし円えんに著しやくする尚なお惡あくなり況いはんや復また余あをや」等な云いふ、外道げどうの善惡ぜんあくは小乘しょうじやう經きやうに對たいすれば皆みな惡あく道みち小乘しょうじやうの善道ぜんどう・乃至な至いた四味しゐ三教さんけうは法華經ほけきやうに對たいすれば皆みな邪惡じゃあく但ほつ法華ほつのみ正善せいぜんなり、爾前にぜんの円えんは相待さうたい妙みやうなり、絶待ぜつたい妙みやうに對たいすれば猶な惡あくなり前三教ぜんさんけうに攝せつすれば猶な惡道あくどうなり、爾前にぜんのごとく彼の經の極理ごくりを行こずる猶な惡道あくどうなり、況いはんや觀經等くわんきやうの猶華嚴けごん・般若經等はんになきやうに及およばざる小法しょうぽうを本ほんとして法華經ほけきやうを觀經くわんきやうに取り入いれて還かへつて念仏ねんぶつに對たいして閣かく拋ほう閉へい捨しやせるは法然並ほうねんびに所化しよけの弟子等でし檀那等だんなは誹謗ひぼう正法しょうぽうの者ものにあらざや、釈迦しやか・多寶たぼう・十方じゆつぽうの諸仏しよぶつは法をして久くしく住すせしめんが故ゆゑに此こゝに來き至いたし給たまへり、法然並ほうねんに日本國にほんこくの念仏ねんぶつ者等ものは法華經ほけきやうは末法まつぽうに念仏ねんぶつより前に滅尽めつじんすべしと豈あに三聖さんせいの怨敵おんてきにあらざや。

第三は、法華經に云く、「或は阿練若に有り納衣にして空閑に在つて
ないしびやくえ ため ある あれんにや のうえ からかん あ
乃至白衣の与に法を説いて世に恭敬せらるることを為ること六通の羅漢の
如くならん」等云云、六卷の般泥☆經に云く「羅漢に似たる一闍提有つて
あくこう いっせんだい あらかん いっせんだい
惡業を行じ一闍提に似たる阿羅漢あつて慈心を作さん、羅漢に似たる一闍提
有りととは是諸の衆生の方等を誹謗するなり一闍提に似たる阿羅漢とは
しょうもん きし ほうとう と しゅじょう かた いわ なんじ とも こ ぼさつ
聲聞を毀訾して広く方等を説き衆生に語つて言く我汝等と俱に是れ菩薩
なり所以は何ん一切皆如来の性有るが故に然かも彼の衆生は一闍提と謂わ
ゆえん いか いっさいみなによらい し そうほう まさ びく
ん」等云云、涅槃經に云く「我れ涅槃の後・像法の中に当に比丘有るべし
じりつ じそう わず きやうてん どんじゅ おんじき とんし ちやうよう
持律に似像して少かに經典を讀誦し飲食を貪嗜して其の身を長養せん
けさ き いえと りやうし こと ねずみ うかが 常に
袈裟を服ると雖も猶獵師の細視徐行するが如く猫の鼠を伺うが如し、常に
こ 是の言を唱えん我羅漢を得たりと外には賢善を現し内には貪嫉を懷く啞法
ばらもん こん しゃもん しゃもん げん じゃけんしじよう
を受けたる婆羅門等の如く実には沙門に非ずして沙門の像を現じ邪見熾盛

第三最も甚し後後の者

より

即そく是ぜ出し家ゆつけ

ぞや、
叡山 えいざん

か・よくよく・たづぬべ

の五分法身の

はにず為^い世^せ所

には聖一等・

に我が身

ぜんだい
前代未だ聞かず」

に
予り あずか

等

云云、止の五に云く「又一種の禪人・乃至盲跛の師徒二俱に墮落す」等云云、止の七に云く「九の意世間の文字の法師と共ならず、事相の禪師と共ならず、一種の禪師は唯觀心の一意のみ有り・或は浅く・或は偽る余の九は全く此無し虚言に非ず後賢眼有らん者は当に証知すべきなり」、弘の七に云く「文字法師とは内に觀解無くして唯法相を構う事相の禪師とは境智を閑わす鼻膈に心を止む乃至根本有漏定等なり、一師唯有觀心一意等とは此は且く与えて論を為す奪えば則ち觀解俱に闕く、世間の禪人偏えに理觀を尚ぶ既に教を諳んぜず觀を以つて經を消し八邪八風を数えて丈六の仏と爲し五陰三毒を合して名けて八邪と爲し六入を用いて六通と爲し四大を以つて四諦と爲す、此くの如く經を解するは偽の中の偽なり何ぞ浅くして論ず可けんや」等云云、止觀の七に云く「昔☆洛の禪師名河海に播き住するときは四方雲の如くに仰ぎ去るときは阡陌群を成し隱隱轟轟亦何の利益か

有る、臨終に皆悔ゆ」等云云、弘の七に云く「洛の禪師とは☆は相州

に在り即ち齊魏の都する所なり、大に仏法を興す禪祖の一・其の地を王化

す、時人の意を譲りて其の名を出さず洛は即ち洛陽なり」等云云、六卷の

はつないおん 一般泥☆経に云く「究竟の処を見ずとは彼の一闡提の輩の究竟の悪業を見

ざるなり」等云云、妙楽云く「第三最も甚だし転識り難きが故に」等、無

眼の者・一眼の者・邪見の者は末法の始の三類を見るべからず一分の仏眼

を得るもの此れをしるべし、向国王・大臣・婆羅門・居士等云云、東春に

云く「公処に向い法を毀り人を謗ず」等云云、夫れ昔像法の末には護命・

修円等・奏状をささげて伝教大師を譏奏す、今末法の始には良観・念阿

等偽書を注して將軍家にささぐ・あに三類の怨敵にあらずや。

当世の念仏者等・天台法華宗の檀那の国王・大臣・婆羅門・居士等に向

つて云く「法華経は理深我等は解微法は至つて深く機は至つて浅し」等と

申しうとむるは高推聖境・非己智分の者にあらずや、禪宗の云く「法華經は月をさす指・禪宗は月なり月をえて指なにかせん、禪は仏の心・法華經は仏の言なり仏・法華經等の一切經をとかせ給いて後・最後に一ふさの華をもつて迦葉一人にさづく、其のしるしに仏の御袈裟を迦葉に付属し乃至付法蔵の二十八・六祖までに伝う」等云云、此等の大妄語國中を誑醉せしめてとしひさし、又天台・真言の高僧等名は其の家にえたれども我が宗にくらし、貪欲は深く公家・武家を・をそれて此の義を証伏し讃歎す、昔の多宝・分身の諸仏は法華經の令法久住を証明す、今天台宗の碩徳は理深解微を証伏せり、かるがゆへに日本國に但法華經の名のみあつて得道の人・一人もなし、誰をか法華經の行者とせん、寺塔を焼いて流罪せらるる僧侶は・かずをしらず、公家・武家に諛う・てにくまるる高僧これ多し、此等を法華經の行者といふべきか。

仏語むなしからざれば三類の怨敵すでに国中に充滿せり、金言のやぶる
べきかのゆへに法華經の行者なし・いかがせん・いかがせん、抑たれや
の人か衆俗に悪口罵詈せらるる誰の僧か刀杖を加へらるる、誰の僧をか
法華經のゆへに公家・武家に奏する・誰の僧か数数見擯出と度度ながさる
る、日蓮より外に日本国に取り出さんとするに人なし、日蓮は法華經の
行者にあらず天これを・すて給うゆへに、誰をか当世の法華經の行者と
して仏語を実語とせん、仏と提婆とは身と影とのごとし生生にはなれず
聖徳太子と守屋とは蓮華の花華・同時なるがごとし、法華經の行者あらば
必ず三類の怨敵あるべし、三類は・すでにあり法華經の行者は誰なるらむ、
求めて師とすべし一眼の亀の浮木に値うなるべし。

有る人云く当世の三類はほぼ有るにいたり、但し法華經の行者なし汝
を法華經の行者といはんとすれば大なる相違あり、此の經に云く「天の

もろもろどうじも っきゅうじ な 諸の童子以て給使を為さん、刀杖も加えず、毒も害すること能わざらん」
又云く「若し人悪罵すれば口則閉塞す」等、又云く「現世には安穩にして
後・善処に生れん」等云云、又「頭破れて七分と作ること阿梨樹の杖の如く
ならん」又云く「亦現世に於て其の福報を得ん」等又云く「若し復是の經典
を受持する者を見て其の過惡を出せば若しは実にもあれ若しは不実にもあ
れ此の人現世に白癩の病を得ん」等云云、答えて云く汝が疑い大に吉し
ついでに不審を晴さん、不輕品に云く「惡口罵詈」等、又云く「・或は
杖木瓦石を以て之を打擲す」等云云、涅槃經に云く「若しは殺若しは害」
等云云、法華經に云く「而かも此の經は如来の現在すら猶怨嫉多し」等云
云、仏は小指を提婆にやぶられ九横の大難に値い給う此は法華經の行者に
あらずや、不輕菩薩は一乗の行者といはれまじきか、目連は竹杖に殺さ
る法華經記☆の後なり、付法蔵の第十四の提婆菩薩・第二十五の師子尊者

の二人は人に殺されぬ、此等は法華經の行者にはあらざるか、竺の道生は蘇山に流されぬ法道は火印を面にやいて江南にうつさる。此等は一乘の持者にあらざるか、外典の者なりしかども白居易北野の天神は遠流せらる賢人にあらざるか、事の心を案ずるに前生に法華經・誹謗の罪なきもの今生に法華經を行ずこれを世間の実によせ。或は罪なきをあだすれば忽に現罰あるか・修羅が帝釈を射る金翅鳥の阿耨池に入る等必ず返つて一時に損するがごとし、天台云く「今・我が疾苦は皆過去に由る今生の修福は報・将来に在り」等云云、心地觀經に曰く「過去の因を知らんと欲せば其の現在の果を見よ未来の果を知らんと欲せば其の現在の因を見よ」等云云、不輕品に云く「其の罪畢已」等云云、不輕菩薩は過去に法華經を謗じ給う罪・身に有るゆへに瓦石をかほるとみへたり、又順次生に必ず地獄に墮すべき者は重罪を造るとも現罰なし一闍提人これなり、涅槃經に云く

「迦葉菩薩・仏に白して言く世尊・仏の所説の如く大涅槃の光一切衆生の毛孔に入る」等云云、又云く「迦葉菩薩・仏に曰して言く世尊云何んぞ未だ菩提の心を發さざる者・菩提の因を得ん」等云云、仏・此の問を答えて云く「仏迦葉に告わく若し是の大涅槃經を聞くこと有つて我菩提心を發すことを用いずと言つて正法を誹謗せん、是の人即時に夜夢の中に羅刹の像を見て心中怖畏す羅刹語つて言く咄し善男子汝今若し菩提心を發さずんば當に汝が命を斷つべし是の人惶怖し寤め已つて即ち菩提の心を發す當に是の人は大菩薩なりと知るべし」等云云、いたうの大惡人ならざる者が正法を誹謗すれば即時に夢みて・ひるがへる心生ず、又云く「枯木・石山」等、又云く「焦種甘雨に遇うと雖も」等・又「明珠淤泥」等、又云く「人の手に創あるに毒藥を捉るが如し」等、又云く「大雨空に住せず」等云云、此等多くの譬あり、詮ずるところ上品の一闡提人になりぬれば順次生に

必ず無間獄に墮つべきゆへに現罰なし例せば夏の桀・殷の紂の世には天変
なし重科有て必ず世ほろぶべきゆへか、又守護神此国をすつるゆへに現罰
なきか謗法の世をば守護神すて去り諸天まほるべからずかるがゆへに正法
を行ずるものにしるしなし還つて大難に値うべし 金光明經 に云く「善業
を修する者は日々に衰減す」等云云、悪国・悪時これなり具さには
立正安国論にかんがへたるがごとし。

詮ずるところは天もすて給え諸難にもあえ身命を期とせん、身子が六十
劫の菩薩の行を退せし乞眼の婆羅門の責を堪えざるゆへ、久遠大通の者の
三五の塵をふる悪知識に値うゆへなり、善に付け悪につけ法華經をすつる
は地獄の業なるべし、大願を立てん日本国の位をゆづらむ、法華經をすて
て觀經等について後生をこそせよ、父母の頸を刎ん念仏申さずば、なんどの
種種の大難・出来すとも智者に我義やぶられずば用いじとなり、其の外の

大難・風の前の塵なるべし、我日本の柱とならむ我日本の眼目とならむ我日本の大船とならむ等とちかいし願やぶるべからず。

疑つて云くいかにして汝が流罪・死罪等を過去の宿習としらむ、

答えて云く銅鏡は色形を顕わす秦王・駿偽の鏡は現在の罪を顕わす仏法の

鏡は過去の業因を現ず、般泥☆経に云く「善男子過去に會て無量の諸罪種種

の悪業を作るに是の諸の罪報は・或は輕易せられ・或は形状醜陋・

衣服足らず・飲食ソソ・財を求むるに利あらず貧賤の家邪見の家に生れ

・或は王難に遭い・及び余の種種の人間の苦報あらん現世に軽く受るは

斯れ護法の功德力に由るが故なり」云云、此の經文日蓮が身に宛も符契の

ごとし狐疑の氷とけぬ千万の難も由なし一一の句を我が身にあわせん、或

被輕易等云云、法華經に云く「輕賤憎嫉」等云云・二十余年が間の輕慢

せらる、或は形状醜陋・又云く衣服不足は予が身なり飲食ソソは予が

身なり求財不利は予が身なり生貧賤家は予が身なり、・或遭王難等・此の

経文疑うべしや、法華經に云く「数数擯出せられん」此の経文に云く

「種種」等云云、斯由護法功德力故等とは摩訶止觀の第五に云く「散善微

弱なるは動せしむること能わず今止觀を修して健病☆ぎれば生死の輪を

動ず」等云云、又云く「三障四魔紛然として競い起る」等云云我れ無始よ

り・このかた惡王と生れて法華經の行者の衣食・田畠等を奪いとせしこ

と・かずしらず、当世・日本國の諸人の法華經の山寺をたうすがごとし、

又法華經の行者の頸を刎こと其の数をしらず此等の重罪はたせるもあり

・いまだ・はたさざるも・あるらん、果すも余残いまだ・つきず生死を離

る時は必ず此の重罪をけしはてて出離すべし、功德は淺輕なり此等の罪

は深重なり、權經を行ぜしには此の重罪いまだ・をこらず鉄を熱にい

たう・きたわざればきず隠れてみえず、度度せむれば・きずあらはる、麻子

を・しぼるに・つよくせめざれば油少きがごとし、
今日蓮・強盛に国土
の謗法を責むれば此の大難の来るは過去の重罪の
今生の護法に招き出だ
せるなるべし、
鉄は火に値わざれば黒し火と合いぬれば赤し木をもつて
急流をかけば波山のごとし睡れる師子に手をつくれれば大に吼ゆ。

涅槃經に曰く「譬えば貧女の如し居家救護の者有ること無く加うるに復

病苦飢渴に逼められて遊行乞丐す、他の客舎に止り一子を寄生す是の客舎

の主駆逐して去らしむ、其の産して未だ久しからず是の兒を☆☆して他国

に至らんと欲し、其の中路に於て惡風雨に遇て寒苦並び至り多く蚊虻蜂☆

毒虫の☆い食う所となる、恒河に☆由し兒を抱いて渡る其の水漂疾なれど

も而も放ち捨てず是に於て母子遂に共俱に没しぬ、是くの如き女人慈念の

功德・命終の後梵天に生ず、文殊師利若し善男子有つて正法を護らんと

欲せば彼の貧女の恒河に在つて子を愛念するが為に身命を捨つるが如くせ

よ、善男子ぜんなんし護法ごほふの菩薩ぼさつも亦是またくの如ごとくなるべし、寧むしろ身命しんみょうを捨てよ是かくくの如ごときの人解脱げだつを求めずと雖いえども解脱げだつ自ら至いたること彼の貧女ひんによの梵天ぼんてんを求めざれども梵天ぼんてん自ら至いたるが如ごとし」等云云、此の經文は章安大師・三障をもつて釈しゃくし給へり、それを見るべし、貧人ひんじんとは法財ほふけきのなきなり女人にょにんとは一分いちぶんの慈ある者なり、客舎きやくしゃとは穢土えどなり一子ひとことは法華經ほふけきやうの信心しんじん・了因りやういんの子なり舍主しやくしゅ驅逐くちくとは流罪るざいせらる其その産うまゐりて未だ久しからずとはいまだ信じて・ひさしからず、惡風あくふうとは流罪るざいの勅宣ちよくせんなり蚊虻ぶんぼう等とは諸もろもろの無智むちの人有り惡口罵詈あくくめり等なり母子共に没すとは終ついに法華經ほふけきやうの信心しんじんをやぶらずして頸はねを刎はらるるなり、梵天ぼんてんとは仏界ぶつがいに生るるをいうなり引業いんごうと申すは仏界ぶつがいまでかはらず、日本漢土にほんかんとの万国しよにんの諸人しよにんを殺すとも五逆ごぎやく・謗法ぼうぼうなければ無間地獄むげんじごくには墮おちず、余あの惡道あくどうにして多歳しきてんをふべし、色天しきてんに生るること万戒たもを持てども万善ばんぜんを修しゆすれども散善さんぜんにては生れず、又梵天王ぼんてんとなる事・有漏うろの引業いんごうの上に慈悲じひを加えて生

ずべし、今・此の貧女ひんによが子を念おもうゆへに梵天ぼんてんに生る常の性相しょうそうには相違そういせり、
章安しょうあんの二はあれども詮せんずるところは子を念おもう慈念じねんより外の事ほかなし、念を一
境にする、定じょうに似たり専もつぱら子を思う又慈悲じひにも・にたり、かるがゆへに他事たじ
なけれども天に生るるか、又仏になる道は華嚴けこんの唯心法界ゆいしんほっかい・三論さんろんの八不・
法相ほつそうの唯識ゆいしき・真言しんごんの五輪親等も実には叶かなうべしともみへず、但天台てんだいの
一念三千こそ仏になるべき道とみゆれ、此の一念三千も我等いちねんさんぜん われらいちぶん一分の慧解えげも
なし、而しかれとも一代いちだい經經いきやうぎやうの中には此の經計げかり一念三千の玉をいだけり、余經よきやう
の理は玉に・にたる黄石おうしやくなり沙をしぼるに油なし石女に子のなきがごと
し、諸經しよきやうは智者ちしや・猶なお仏にならず此の經は愚人ぐにんも仏因ぶつゐんを種うゆべし不求解脫ふくげだつ・
解脫げだつ自至等と云云、我並びに我が弟子でし・諸難しよなんありとも疑うたがいう心なくば自然じねん
に仏界ぶつかいにいたるべし、天の加護かこなき事を疑うたがはざれ現世げんせの安穩あんのんならざる事を
なげかざれ、我が弟子でしに朝夕ちやうせき教えしかども・疑うたがいいを・をこして皆みなすてけ

んつたなき者のならひは約束せし事を・まことの時は・わするるなるべし、
 妻子を不便と・をもうゆへ現身にわかれん事を・なげくらん、多生曠劫に
 ・したしみし妻子には心とはなれしか仏道のために・はなれしか、いつも
 同じわかれなるべし、我法華經の信心をやぶらずして靈山にまいりて返て
 みちびけかし。

うたがい

いわねんぶつ

ぜんしゅう

むげんもう

あらそ

しゅらどう

お

疑

いわねんぶつ

ぜんしゅう

むげんもう

あらそ

しゅらどう

お

べかるらむ、又法華經の安樂行品に云く

「ねが

およきょうてん

の過を説か

ざれ亦諸余の法師を輕慢せざれ」等云云、

なんじ

きょうもんそうい

に相違するゆへに

天にすてられたるか、答て云く止觀に云く

「そ

りようせつ

には撰・

二には折・安樂行に不称長短という如き是れ撰の義なり、

だいきょう

とうじょう

を

執持し乃至首を斬れという是れ折の義なり与奪・途を殊にすと雖も俱に

しゅうじ

ないし

こ

よだつ

みち

こと

いえど

とも

利益せしむ」等云云、

ぐけつ

い

い

そ

夫れ仏に両説あり等とは大經に刀杖

りようせつ

だいきょう

とうじょう

なけれ、こんじゃくとも 今昔俱に嶮けんならば俱に杖を持つべし今昔俱に平ならば俱に戒を持
つべし、取捨宜きを得て一向にす可からず」等云云、汝なんじが不審ふしんをば世間の
学者・多分・道理とをもう、いかに諫曉かんぎようすれども日蓮にちれんが弟子等も此のをも
ひをすてず一闡提人の・ごとくなるゆへに先づ天台・妙楽等の釈をいだし
て・かれが邪難じやなんをふせぐ、夫れ摂受・折伏しゃくぶくと申す法門は水火のごとし火
は水をいとう水は火をにくむ、摂受しやうじゆの者は折伏しゃくぶくをわらう折伏しゃくぶくの者は摂受しやうじゆ
をかなしむ、無智・悪人の国土に充滿じゅうまんの時は摂受しやうじゆを前とす安樂行品のご
とし、邪智・謗法の者の多き時は折伏しゃくぶくを前とす常不輕品のごとし、譬たとへ
ば熱き時に寒水を用い寒き時に火をこのむがごとし、草木は日輪の眷属・
寒月に苦をう諸水は月輪の所従・熱時に本性を失う、末法に摂受・折伏
あるべし所謂悪国・破法の兩國あるべきゆへなり、日本国の当世は悪国か
破法の国かと・しるべし。

問うて云く、摂受の時・折伏を行ずると、折伏の時・摂受を行ずると
利益あるべしや、答えて云く、涅槃經に云く、「迦葉菩薩・仏に白して言く、如来
の法身は金剛不壊なり、未だ所因を知ること能わず云何、仏の言く、迦葉能く
正法を護持する因縁を以ての故に是の金剛身を成就することを得たり、
迦葉我護持正法の国縁にて今是の金剛身常住不壊を成就することを得
たり、善男子正法を護持する者は五戒を受けず威儀を修せず、応に刀剣弓箭
を持つべし、是くの如く種種に法を説くも、然も故師子吼を作すこと能わず
非法の悪人を降伏すること能わず、是くの如き比丘自利し及び衆生を利す
ること能わず、当に知るべし是の輩は懈怠懶惰なり、能く戒を持ち、淨行を
守護すと雖も、当に知るべし是の人は能く為す所無からん、乃至時に破戒の
者有つて是の語を聞き已つて、咸共に瞋恚して是の法師を害せん、是の説法の
者、設い復命終すとも、故持戒自利利他と名く」等云云、章安の云く、「取捨

宜きを得て一向にす可からず」等、天台云く「時に適う而已」等云云、譬へば秋の終りに種子を下し田畠をかえさんに稲米をうるにかたし、建仁年中に法然・大日の二人・出来して念仏宗・禅宗を興行す、法然云く「法華経は末法に入つては未有一人得者千中無一」等云云、大日云く「教外別伝」等云云、此の両義国土に充滿せり、天台・真言の学者等・念仏・禅の檀那を・へつらいをづる事犬の主にを・をふり・ねづみの猫を・をそるるがごとし、国王・將軍に・みやつかひ破仏法の因縁・破国の因縁をよくと説き能くかたるなり、天台・真言の学者等今生には餓鬼道に墮ち後生には阿鼻を招くべし、設い山林にまじわつて一念三千の觀をこらすとも空閑にして三密の油をこぼさずとも時機をしらず摂折の二門を弁へずば・いかでか生死を離るべき。

問うて云く念仏者・禅宗等を責めて彼等に・あだまれたる・いかなる

りやく
利益かあるや、答えて云く涅槃經に云く「もし善比丘法を壞る者を見て置
いて呵責し駈遣し挙処せずんば当に知るべし是の人は仏法の中の怨なり、
もし能く駈遣し呵責し挙処せば是れ我が弟子眞の聲聞なり」等云云、「仏法
を壞乱するは仏法中の怨なり慈無くして詐り親しむは是れ彼が怨なり能く
糾治せんは是れ護法の聲聞眞の我が弟子なり彼が爲に惡を除くは即ち是れ
彼が親なり能く呵責する者は是れ我が弟子駈遣せざらん者は仏法中の
怨なり」等云云。

そ
夫れ法華經の宝塔品を拜見するに釈迦・多宝・十方分身の諸仏の來集
はなに心ぞ「令法久住・故來至此」等云云、三仏の未來に法華經を弘めて
未來の一切の仏子にあたえんと・おぼしめす御心の中をすいするに父母の
一子の大苦に値うを見るよりも強盛にこそみへたるを法然いたはしと・も
おもはで末法には法華經の門を堅く閉じて人を入れじとせき狂児をたばら

かして宝をすてさするやうに法華經を抛させける心こそ無慚に見へ候へ、

我が父母を人の殺さんに父母につげざるべしや、惡子の酔狂して父母を殺

すをせいせざるべしや、惡人寺塔に火を放たんにせいせざるべしや、一子

の重病を灸せざるべしや、日本の禪と念佛者とをみて制せざる者はかく

のごとし「慈無くして詐り親しむは即ち是れ彼が怨なり」等云云。

日蓮は日本国の諸人にしうし父母なり一切天台宗の人は彼等が大怨敵な

り「彼が為に惡を除くは即ち是れ彼が親」等云云、無道心の者生死をはな

る事はなきなり、教主釈尊の一切の外道に大惡人と罵詈せられさせ

給い天台大師の南北並びに得一に三寸の舌もつて五尺の身をたつと伝教

大師の南京の諸人に「最澄未だ唐都を見ず」等といはれさせ給いし皆

法華經のゆへなればはぢならず愚人にほめられたるは第一のはぢなり、日蓮

が御勘氣をかほれば天台・真言の法師等悦ばしくやをもうらん・かつはむ

ざんなり・かつはきくわいなり、夫れ釈尊は娑婆に入り羅什は秦に入り
伝教は戸那に入り提婆師子は身をすつ薬王は臂をやく上宮は手の皮をは
ぐ釈迦菩薩は肉をうる薬法は骨を筆とす、天台の云く「適時而已」等云云、
仏法は時によるべし日蓮が流罪は今生の小苦なれば・なげかしからず、
後生には大楽をうくべければ大に悦ばし。

◆四二 如来滅後五百歲始 観心本尊抄

(文永十年 五二歳御作)

本朝沙門 日蓮撰

238P

摩訶止観第五に云く開合の異なり

「夫れ一心に十法界を具す一法界に又十法界を具すれば百法界なり一界に
三十種の世間を具すれば百法界に即三千種の世間を具す、比の三千・一念
の心に在り若し心無んば而已介爾も心有れば即ち三千を具す乃至所以に
称して不可思議と為す意此に在り」

問うて云く玄義に一念三千の名目を明かすや、答えて曰く妙楽云く明か
さず、問うて曰く文句に一念三千の名目を明かすや、答えて曰く妙楽
云く明かさず、問うて曰く其の妙楽の釈如何、答えて曰く未だ一念三千と
云わず等云云、問うて曰く止観の一二三四等に一念三千の名目を明かすや、
答えて曰く之れ無し、問うて曰く其の証如何、答えて曰く妙楽云く「故に
止観に至って正しく観法を明かす並び三千を以て指南と為す」等云云、疑
つて曰く玄義第二に云く「又一法界に九法界を具すれば百法界千如是」等
云云、文句第一に云く「一入に十法界を具すれば一界又十界なり十界各
十如是あれば即ち是れ一千」等云云、観音玄に云く「十法界交互なれば即ち
百法界有り千種の性相・冥伏して心に在り現前せずと雖も宛然として
具足す」等云云、問うて曰く止観の前の四に一念三千の名目を明かすや、
答えて曰く妙楽云く明かす、問うて曰く其の釈如何、答う弘決第五に云く

「^も若し正觀に望めば全く未^{いま}だ行を論ぜず亦^{また}二十五法に歴^へて事に約して解^げを生^{まさ}ず方に能^よく正修^{せいしゅう}の方便^{ほうべん}と爲すに堪^たえたり是^{かく}の故^{ゆえ}に前の六をば皆解^{みな}に属^{ぞく}す」等云云、又云く「故^{ゆえ}に止觀の正^{まさ}しく觀法を明^{あきら}かすに至^{いた}つて並びに三千^{さんぜん}を以て指南と爲す乃^{すなわ}ち是れ終窮究竟の極説なり故に序の中に「説己心中^{せつこしんちゅう}しよぎようほうもん所行法門」と云う良に以所有るなり請^{こう}う尋^{たず}ね読まん者心に果縁無^{みな}れ」等云云、夫^それ智者の弘法三十年二十九年の間は玄文等の諸義を説いて五時八教^{はつきよう}ひやつかい・せんによあきら・百界・千如を明かし前^{まへ}き五百余年の間の諸非^{しよ}を責め並びに天竺^{てんじく}の論師^{ろんし}未^{いま}だ述べざるを顯^{あらわ}す、章安大師云く「天竺^{てんじく}の大論尚^{たう}其^きの類^{るい}に非^{あら}ず震旦^{しんたん}の人師^{にんし}何ぞ勞^{わづら}わしく語^{かた}るに汲^おばん此^これ誇耀^{こやう}に非^{あら}ず法相^{ほつそう}の然^{しか}らしむるのみ」等云云、墓^{はか}ないかな天台^{てんだい}の末学^{まつがく}等華嚴^{けこん}・真言^{しんこん}の元祖^{がんそ}の盗人^{ぬすびと}に一念三千^{いちねんさんぜん}の重宝^{じゆうほう}を盗み取られて還^{かへ}つて彼等^{かれら}が門家^{もんか}と成りぬ章安大師兼^{しやうあんだいしか}ねて此の事を知^しつて歎^{なげ}いて言^{いわ}く「斯^この言若^もし墜^おちなば将来悲^べむ可^べし」云云。

問うて曰く百界千如と一念三千と差別如何、答えて曰く百界千如は有情
界に限り一念三千は情非情に亘る、不審して云く非情に十如是亘るならば
草木に心有って有情の如く成仏を為す可きや如何、答えて曰く此の事
難信難解なり天台の難信難解に二有り一には教門の難信難解・二には觀門
の難信難解なり、其の教門の難信難解とは一仏の所説に於て爾前の諸經
には二乘闡提・未來に永く成仏せず教主釈尊始めて正覺を成じ法華經
迹本二門に來至し給い彼の二説を壊る一仏二言水火なり誰人か之を信ぜん
此れは教門の難信難解なり、觀門の難信難解は百界千如・一念三千・非情
の上の色心の二法十如是是なり、爾りといえども木画の二像に於ては外典
内典共に之を許して本尊と為す其の義に於ては天台一家より出でたり、草木
の上に色心の因果を置かずんば木画の像を本尊に待み奉ること無益なり、
疑うたがい云く草木国土の上の十如是の因果の二法は何れの文に出でたるや、

答えて曰く止観第五に云く「国土世間亦十種の法を具す所以に惡国土・相・性・体・力」等と云云、釈詮第六に云く「相は唯色に有り性は唯心に在り体・力・作・縁は義色心を兼ね因果は唯心・報は唯色にあり」等云云、金☆論に云く「乃ち是れ一草・一木・一礫・一塵・各一仏性・各一因果あり縁了を具足す」等云云。

問うて曰く出処既に之を聞く觀心の心如何、答えて曰く觀心とは我が己心を觀じて十法界を見る是を觀心と云うなり、譬えば他人の六根を見ると雖も未だ自面の六根を見ざれば自具の六根を知らず明鏡に向うの時始めて自具の六根を見るが如し、設い諸經の中に處處に六道並びに四聖を載すといえどほけきようならん天台大師所述の摩訶止觀等の明鏡を見ざれば自具の雖も法華經並びに十界・百界千如・一念三千を知らざるなり。

問うて云く法華經は何れの文ぞ天台の釈は如何、答えて曰く法華經第一

ほうべん 方便品に云く「衆生をして仏知見を開かしめんと欲す」等云云是は九界
しょうぐ 所具の仏界なり、ぶつがい 寿命品に云く「是くの如く我成仏してより已来甚大に
くおん 久遠なり寿命・無量阿僧祇劫・常住にして滅せず諸の善男子我本菩薩の
じゆみよう 道を行じて成ぜし所の寿命今猶未だ尽きず復上の数に倍せり」等云云此の
きようもん 経文は仏界所具の九界なり、ぶつがいしょうぐ 経に云く「提婆達多乃至天王如来」等云云
じこくしょうぐ 地獄所具の仏界なり、ぶつがい 経に云く「一を藍婆と名け乃至汝等但能く法華の名
ごじ を護持する者は福量るべからず」等云云、はか 是れ餓鬼界所具の十界なり、こ 経
いわ くに云く「竜女乃至成正覺」等云云此れ畜生界所具の十界なり、りゆうにょないし 経に
いわ 云く「婆稚阿修羅王乃至一偈・一句を聞いて・阿耨多羅三藐三菩提を
う 得べし」等云云修羅界所具の十界なり、しゆら 経に云く「若し人・仏の爲の故に
ないしみなす 乃至皆已に仏道を成ず」等云云此れ人界所具の十界なり、ぶつどう 経に云く
「大梵天王乃至我等も亦是くの如く・必ず当に作仏することを得べし」等
だいぼんてんのうないしわれら 大梵天王乃至我等も亦是くの如く・必ず当に作仏することを得べし」等

云云此れ天界所具の十界なり、經に云く「舍利弗乃至華光如来」等云云
此れ声聞界所具の十界なり、經に云く「其の緣覺を求むる者・比丘・
比丘尼乃至合掌を以て敬心し具足の道を聞かんと欲す」等云云、此れ即ち
緣覺界所具の十界なり、經に云く「地湧千界乃至真淨大法」等云云此れ
即ち菩薩所具の十界なり、經に云く「或説己身・或説他身」等云云即ち
仏界所具の十界なり。

問うて曰く自他面の六根共に之を見る彼此の十界に於ては未だ之を見ず
如何が之を信ぜん、答えて曰く法華經・法師品に云く「難信難解」宝塔品
に云く「六難九易」等云云、天台大師云く「二門悉く昔と反すれば難信難解
なり」章安大師云く「仏此れを將て大事と為す何ぞ解し易きことを得可け
んや」等云云、伝教大師云く「此の法華經は最も為れ難信難解なり随自意
の故に」等云云、夫れ在世の正機は過去の宿習厚き上、教主釈尊・

たほうぶつ 多宝仏・十方分身の諸仏・地涌千界・文殊・弥勒等之を扶けて諫曉せしむるに猶信ぜざる者之れ有り五千・席を去り人天移さる況や正像をや何に
いわんやまっぼうのはじめ 況や末法の初をや汝之を信ぜば正法に非じ。

問うて曰く 經文並に天台章 安等の解釈は疑網無し但し火を以て水と
云い墨を以て白しと云う 設い仏説為りと雖も信を取り難し、今数ば他面を
見るに但人界に限って余界を見ず自面も亦復是くの如し如何が信心を立て
んや、答う数ば他面を見るに・或時は喜び・或時は瞋り・或時は平に・或
時は貪り現じ・或時は癡現じ・或時は諂曲なり、瞋るは地獄・貪るは餓鬼
・癡は畜生・諂曲なるは修羅・喜ぶは天・平かなるは人なり他面の色法
に於ては六道共に之れ有り四聖は冥伏して現れざれども委細に之を尋ねば
之れ有る可し。

問うて曰く 六遣に於て分明ならずと雖も粗之を聞くに之を備うるに以た

り、四聖は全く見えざるは如何、答えて白く前には人界の六道之を疑う、
然りと雖も強いて之を言つて相似の言を出だせしなり四聖も又爾るに可き
か試みに道理を添加して万か一之をの宣べん所以に世間の無常は眼前に有
り豈人界に二乘界無からんや、無顧の惡人

も猶妻子を慈愛す菩薩界の一分なり、但仏界計り現じ難し九界を具するを
以て強いて之を信じ疑惑せしむること勿れ、法華經の文に人界を説いて云く
「衆生をして仏知見を開かしめんと欲す」涅槃經に云く「大乘を学する
者は肉眼有りと雖も名けて仏眼と為す」等云云、末代の凡夫出生して
法華經を信ずるは人界に仏界を具足する故なり。

問うて曰く十界互具の仏語分明なり然りと雖も我等が劣心に仏法界を
具すること信を取り難き者なり今時之を信ぜずば必ず一闡提と成らん願く
ば大慈悲を起して之を信ぜしめ阿鼻の苦を救護したまえ。

答えて曰く汝既に唯一大事因縁の經文を見開して之を信ぜざれば釈尊より已下四依の菩薩並びに末代理即の我等如何が汝が不信を救護せんや、然りと雖も試みに之を云わん仏に値いたてまつつて覺らざる者・阿難等の辺にして得道する者之れ有ればなり、其れ機に二有一一には仏を見たてまつり法華にして得道す二には仏を見たてまつらざれども法華にて得道するなり、其の上仏教已前は漢土の道士月支の外道・儒教・四韋陀等を以て經と爲して正見に入る者之れ有り、又利根の菩薩・凡夫等の華嚴・方等・般若等の諸大乘經聞きし縁を以て大通久遠の下種をする者多々なり例せば独覺の飛花落葉の如し教外の得道是なり、過去の下種結縁無き者の権小に執着する者は設い法華經に値い奉れども小権の見を出でず、自見を以て正義と爲るが故に通つて法華經を以て・或小乘經に同じ・或は華嚴・大日經等に同じ・或は之を下す、此等の諸師は儒家外道の賢聖より劣れる

者なり、此等は且らく之を置く、十界互具之を立つるは石中の花・木中の花信じ難けれども縁に値うて出生すれば之を信ず人界所具の仏界は水中の火・火中の水最も甚だ信じ難し、然りと雖も竜火は水より出で竜水は火より生ず心得られざれども現証有れば之を用ゆ、既に人界の八界之を信ず、仏界何ぞ之を用いざらん哉、舜等の聖人の如きは万民に於て偏頗無し、人界の仏界の一分なり、不輕菩薩は所見の人に於て仏身を見る悉達太子は人界より仏身を成ず此等の現証を以て之を信ず可きなり。

問うて曰く堅固に之を秘す三惑已断の仏なり又十方世界の国主一切の菩薩・二乗・人天等の主君なり行の時は梵天左に在り帝釈右に侍り四衆・八部後に従い金剛前に導びき八万法蔵を演説して一切衆生を得脱せしむ是くの如き仏陀何を以て我等凡夫の己心に住せしめんや、又迹門・爾前の意を以て之を論ずれば教主釈尊は始成正覺の仏なり、過去の因行を尋ね

求れば・或能施太子・或は儒童菩薩・或は戸毘王・或は薩た王子・或は三
祇・百劫、或は動☆塵劫・或は無量阿僧祇劫・或は初発心時・或は三千
塵点等の間七万・五千・六千・七千等の仏を供養し劫を積み行満じて今の
教主釈尊と成り給う、是くの如き因位の諸行は皆我等が己身所見の菩薩
界の功德か、果位を以て之を論ずれば教主釈尊は始成正覚の仏四十年の
間四教の色身を示現し爾前・迹門・涅槃等を演説して一切衆生を利益し
給う、所謂華藏の時・十万台上の虞舍那・阿含經の三十四心・断結成道
の仏、方等・般若の千仏等、大日・金剛頂の千二百余尊、並びに迹門
宝塔品の四土色身、涅槃經の・或は丈六と見る・或は小身大身と現じ・或
いは虞舍那と見る・或いは身虚空に同じと見る四種の身乃至八十御入滅
舍利を留めて正像末を利益し給う、本門を以て之を疑わば教主釈尊は
五百塵点已前の仏なり因位も又是くの如し、其れより已来十方世界に分身

いちだいしょうきよう
し一代聖教を演説して塵数の衆生を教化し給う、本門の所化を以て迹門
の所化に比較すれば一たいと大海と一塵と大山とな、本門の一菩薩を迹門
じゅうまんせかいもんじゅ
十萬世界の文殊・観音等に対向すれば猴猿を以て帝釈に比するに尚及ば
ず、其の外十方世界の断惑証果の二乗並びに梵天・帝釈・日月・四天・
りんおうないしむげんだいじゅうたいか
四輪王・乃至無間・大城の大火等比等は皆我が一念の十界か己身の三千
か、仏説為りといえども之を信ず可からず。

こ
此れを以て之を思うに爾前の諸経は実事なり実語なり、華嚴經に云く
くきようこもうち
「究竟して虚妄を離れ染無きこと虚空の如し」と仁王經に云く「源を窮め
性を尽して妙智存せり」金剛般若經に云く「清淨の善のみ有り」馬鳴菩薩
の起信論に云く「如来藏の中に清淨の功德のみ有り」天親菩薩の唯識論
に云く「請く余の有漏と劣の無漏と種は金剛喻定が現在前する時
ごくえんみょうじゆんじょう
極円明純淨の本識を引く彼の依に非ざるが故に皆永く喜捨す」等云云、

にぜん きようぎよう
爾前の経経と法華経と之を校量するに彼の経経は無数なり時説既に
いちぶつ かしこ
長し一仏二言彼に付く可し、馬鳴菩薩は律法蔵第十一にして仏記に之れ有
てんじん ろんし しえ
り天親は千部の論師・四依の大師なり、天台大師は辺鄙の小僧にして一論
をも宣べず誰か之を信ぜん、其の上多を捨て小に付くとも法華経の文分明
ならば少し恃怙有らんも法華経文に何れの所にか十界互具・百界・千如・
いちねんさんぜん ふんみよう
一念三千の分明なる証文之れ有りや、随つて経文を開拓するに
「断諸法中惡」等云云、天親菩薩の法華論・堅慧菩薩の宝性論に
じゅつかいごこ なく かんど
十界互具之れ無く漢土南化の諸大師・日本七寺の末師の中にも此の義無
てんだい
し但天台一人の僻見なり伝教一人の謬伝なり、故に清涼国師の云く
てんだい あやまり
「天台の謬りなり」憲苑法師の云く「然るに天台は小乗を呼んで三蔵
教と為し其の名謬濫するを以て」等云云、了洪が云く「天台独り未だ華嚴
の意を尽さず」等云云、得一が云く「咄いかな智公汝は是れ誰が弟子ぞ、

三寸に足らざる舌根を以て覆面説の所説の教時を謗ず」等云云、弘法大師の云く「震旦の法師等諍つて醍醐を盗んで各自宗に名く」等云云、夫れ一念三千の法門は一代の権實に名目を削り四依の諸論師其の義を載せず漢土日域の法師も之を用いず、如何が之を信ぜん。

答えて曰く此の難最も甚し最も甚し但し諸經と法華との相違は

經文より事起つて分明なり未顕と已顕と証明と舌相と二乗の成不と

始成と久成と等之を顕わす、諸論師の事、天台大師云く「天親・竜樹・

内鑑冷然たり外には時の宜きに適い各権に拠る所あり、而るに法師偏に

解し學者苛も執し遂に矢石を興し各一辺を保ちて大に聖道に乖けり」等云

云、章安大師云く「天竺の大論尚其の類に非ず真旦の法師何ぞ勞わしく

語るに及ばん此れ誇耀に非ず法相の然らしむるのみ」等云云、天親・竜樹

・馬鳴・堅慧等は内鑑冷然なり然りと雖も時未だ至らざるが故に之を宣べ

ざるか、人師にんしに於おいては天台てんだい已前いぜんは・或あるは珠たまを含あみ・或あるは一向いっこうに之これを知らず
已後にんしの人師ある・或あるは初はつに之これを破はして後あとに帰伏きふくする人有あるり・或あるは一向いっこう用もちいざる
者こも之これれ有ただり但ただし断諸法だんしよほう中惡ちゆうあくの經文きやうもんを会えす可べきなり、彼ほは法華經ほけきやうに爾前にぜん
の經文きやうもんを載のするなり往ゆいて之これを見るに經文きやうもん分明ぶんめいに十界互具じゅうかいぐこ之これを説いく所謂いわゆる
「欲令よくりやう衆生しゆじやう開かい仏知見ぶつちけん」等云云、天台此てんだいの經文きやうもんを承うけて云いく「若もし衆生しゆじやう
に仏ちけんの知見しけん無なんんば何なんぞ開まを論まずる所あらん当まさに知るべし仏ちけんの知見しけん衆生しゆじやうに
蘊うんざい在ざいすることを」云云、章安大師しやうあんだいしの云いく「衆生しゆじやうに若もし仏ちけんの知見しけん無なんくんば
何なんぞ開悟かいごする所あらん若もし貧女ひんによに蔵なく無なんんば何なんぞ示しす所あらんや」等云云。
但ただし会えし難がたき所は上かみの教主きやうしゆ釈尊しやくそん等だいなんの大難だいなんなり、此この事をしやえ仏遮い会いして云いく
「已今いこん当とう説さい最さい為なん難しん信なん難げ解げ」と次下つぎしもの六難なんく九易いこれ是これなり、天台大師てんだいだいし云いく「二門にもん
・悉しよくく昔こと反はんすれば、信かたじ難がたく解げし難がたし。銚ほこに当なんるの難事なんじなり」章安大師しやうあんだいし
の云いく「仏こ此これを將もつて大事だいじと為なす。何なんぞ解げし易やすきことを得う可べけんや」

でんぎようだいしいわ
傳教大師云く「此の法華經は最も為れ難信難解なり。隋自意の故に」等云

云。夫れ仏より滅後に至る一千八百余年。三国に経歴して但三人のみ有

つて始めて此の正法を覚知せり。所謂月支の釈尊・真旦の智者大師・日域

の伝教此の三人は内典の聖人なり、問うて曰く竜樹・天親等是如何、答

えて曰く此等の聖人は知つて之を言わざる仁なり、・或は迹門の一分

之を宣べて、本門と觀心とを云わず。・或は機有つて時無きか、・或は機と

時と共に之れ無きか、天台・伝教已後は之を知る者多多なり。二聖の智を

用ゆるが故なり所謂三論の嘉祥・南三・北七の百余人・華嚴宗の宝蔵・

清涼等・法相宗の玄奘三蔵・慈恩大師等・真言宗の善無畏三蔵・

金剛智三蔵・不空三蔵等、律宗の道宣等、初には反逆を存し、後には一向

に歸伏せしなり。

但し初の大難を遮せば無量義經に云く「譬えば国王と夫人と新たに王子

を生ぜん若は一日若は二日若は七日に至り若は一月若は二月若は七月に至り若は一歳若は二歳若は七歳に至り復国事を領理すること能わずと雖もすでに臣民に宗敬せられ諸の大王の子以て伴侶と為らん、王及び夫人の愛心偏に重くして常に与共に語らん所以は、何ん稚小なるを以ての故にと云うが如く、善男子是の持経者も亦復是くの如し、諸仏の国王と是の経の夫人与和合して共に是の菩薩の子を生ず若し菩薩是の経を聞くことを得て若しは一句若しは一偈若しは一転若しは二転若しは十若しは百若しは千若しは万若しは億万恒河沙・無量無数転せば復真理の極を体すること能わずといえど、乃至已に一切の四衆・八部に宗仰せられ諸の大菩薩を以て眷属となし乃至常に諸仏に護念せられ慈愛偏に覆われん新学なるを所ての故なり」等云云、普賢經に云く「此の大乗經典は諸仏の宝蔵十万三世の諸仏の眼目なり乃至三世の諸の如來を出生する種なり乃至汝大乘を行じて仏種を

断ぜざれ」等云云、又云く「此の方等経は是れ諸仏の眼なり諸仏是に因つて五眼を具することを得・仏の三種の身は方等従り生ず是れ大法印にして涅槃海に印す此くの如き海中能く三者の仏の清浄身を生ず此の三種の身は人天の福田なり」等云云。

夫れ以れば・釈迦如来の一代・顕密・大小の二教・華嚴・真言等の諸宗の依経往いて之を勸うるに・或は十方台葉・毘盧遮那仏・大集雲集の諸仏如来・般若染浄の千仏示現・大日・金剛頂等の千二百尊・但其の近因近果を演説して其の遠因果を顕さず、速疾頓成之を説けども三五の速化を亡失し化導の始終跡を削りて見えず、華嚴経・大日経等は一往之を見るに別円四蔵等に似たれども再往之を勸うれば蔵通二教に同じて未だ別円にも及ばず本有の三因之れ無し何を以てか仏の種子を定めん、而るに新訳の訳者等漢土に來入するの日・天台の一念三千の法門を見聞して・或は

みずか^{しよじ} 自ら所持の経^{きようぎよう}に添加^{てんか}し・或^{ある}は天竺^{てんじく}より受持^{じゆじ}するの由^{これ}之^{しやう}を称^{せん}す、天台^{てんだい}の
学者^{がくしや}等^{ある}・或^{ある}は自宗^{じしゆう}に同^{ようこ}ずるを悦^{よろこ}び・・或^{ある}は遠^{とうと}きを貴^{たうと}んで近^{さげす}きを蔑^あみし・或^{ある}
は旧^{ふつしゆ}を捨てて新^{あら}を取り魔心^{ましん}・愚心^{ぐしん}出来^{しゆつたい}す、然^{しか}りと雖^{いえど}も詮^{せん}ずる所^{いちねんさんぜん}は一念三千
の仏種^{ぶつしゆ}に非^{あら}ずんば有情^{うじやう}の成^{じやうぶつ}仏^{もくえ}・木画^{もくえ}二像^{ほんぞん}の本尊^{ほんぞん}は有名無実^{ゆうめいむじつ}なり。

問^{かみ}うて曰^{だいなん}く上^{えつう}の大難^{えつう}未^いだ其^いの会通^{えつう}を開^いかず如何^い。

答^いえて曰^{むりやうぎきやう}く無量義^い経^いに云^いく「未^{ろくはらみつ}だ六波羅蜜^{しゆぎやう}を修行^{しゆぎやう}する事^いを得^いずと雖^{いえど}も

六波羅蜜^{ろくはらみつ}自然^{ざいぜん}に在^い前^いす」等云云、法華^{ほけきやう}経^いに云^いく「具足^{ぐそく}の道^{みち}を聞^{きこ}かんと欲^ほす」

等云云、涅槃^{ねはんぎやう}経^いに云^いく「薩^{さつ}とは具足^{ぐそく}に名^なく」云云、竜樹^{りゆうじゆ}菩薩^{ぼさつ}云^いく「薩^{さつ}とは

六なり」等云云、無依^{むゑむ}無得^{とくだい}大乘^{だいじやう}四論^{しろん}・玄義^{げんぎ}記^きに云^いく「沙^さとは訳^{わけ}して六^むと云

う胡法^{こほう}には六^むを以^{もつ}て具足^{ぐそく}の義^ぎと為^なすなり」吉蔵^{きちざう}疏^{しよ}に云^いく「沙^さとは翻^{ほん}じて

具足^{ぐそく}と為^なす」天台大師^{てんだいだいし}云^いく「薩^{さつ}とは梵語^{ほんご}なり此^こには妙^{めう}と翻^{ほん}ず」等云云、

私^{ひそ}に会通^{えつう}を加^けえば本文^{けがす}を黷^しが如^{しか}し爾^いりと雖^{いえど}も文^{ぶん}の心^{しん}は釈尊^{しゃくそん}の因行^{いんぎやう}果徳^{かどく}の

二法は妙法蓮華經の五字に具足す我等・此の五字を受持すれば自然に彼の
因果の功德を譲り与え給う、四大声聞の領解に云く「無上宝聚・不求自得」
云云、我等が己心の声聞界なり、「我が如く等くして異なる事無し我が昔
の所願の如き今は已に満足しぬ一切衆生を化して皆仏道に入らしむ」・
妙覺の釈尊は我等が血肉なり因果の功德は骨髓に非ずや、宝塔品に云く
「其れ能く此の經法を護る事有らん者は則ち為れ我及び多宝を供養するな
り、乃至亦復諸の來り給える化仏の諸の世界を莊嚴し光飾し給う者を供
養するなり」等云云、釈迦・多宝・十方の諸仏は我が仏界なり其の跡を
紹繼して其の功德を受得す「須臾も之を聞く・即ち阿耨多羅三藐三菩提を
究竟するを得ん」とは是なり、寿量品に云く「然るに我実に成仏してよ
り已來、無量無辺百千万那由佗劫なり」等云云、我等が己心の釈尊は
五百塵点劫乃至所願の三身にして無始の古仏なり、經に云く「我本菩薩の

道を行じて、成ぜし所の寿命、今猶未だ尽きず・復上の数に倍せり」等云

云、我等が己心の菩薩等なり、地涌千界の菩薩は己心の釈尊の眷属なり、

例せば大公・周公旦等は周武の臣下・成王幼稚の眷属・武内の大臣は

神功皇后の棟梁仁徳王子の臣下なるが如し、上行・無辺行・淨行・

安立行等は我等が己心の菩薩なり、妙薬大師云く「当に知るべし身土一念

の三千なり故に成道の時・此の本理に称うて一身一念法界に遍し」等云云。

夫れ始め寂滅道場・華蔵世界より沙羅林に終るまで五十余年の間・

華蔵・密蔵・三変・四見等の三土四土は皆成劫の上の無常の土に変化する

所の方便・実報・寂光・安養・淨瑠璃・密蔵等なり能変の教主涅槃に入

りぬれば所變の諸仏随つて滅尽す土も又以て是くの如し。

今本時の娑婆世界は三災を離れ四劫を出でたる常住の淨土なり仏既に

過去にも滅せず未来にも生ぜず所化以て同体なり此れ即ち己心の三千具足

・三種の世間なり迹門十四品には未だ之を説かず法華經の内に於ても時機未熟の故なるか。

此の本門の肝心南無妙法蓮華經の五字に於ては仏猶文殊・藥王等にもこれを付属し給わず何に況や其の已外をや但地涌千界を召して八品を説いて之を付属し給う、其の本尊の爲体本師の娑婆の上に宝塔空に居し塔中の妙法蓮華經の左右に釈迦牟尼仏・多宝仏・釈尊の脇士上行等の四菩薩・文殊・弥勒等は四菩薩の眷属として末座に居し迹化他方の大小の諸菩薩は万民の大地に処して雲閣月卿を見るが如く十方の諸仏は大地の上に処し給う迹仏迹土を表する故なり、是くの如き本尊は在世五十余年に之れ無し八年の間にも但八品に限る、正像二千年の間は小乗の釈尊は迦葉・阿難を脇士と爲し権大乘並に涅槃・法華經の迹門等の釈尊は文殊・普賢等を以て脇士と爲す此等の仏をば正像に造り画けども未だ寿量の仏有さず、

まっぼう
末法に來入して始めて此の佛像出現せしむ可きか。

問う 正像 二千余年の間は四依の菩薩並びに人師等余仏・小乗・

権大乘こ爾前・迹門の釈尊等の寺塔を建立すれども本門壽量品の本尊
ごんだいじよう にぜん しゃくもん しゃくそん じとう こんりゆう ほんもんじりようほん ほんぞん

並びに四大菩薩をば三国の王臣俱に未だ之を崇重せざる由之を申す、比の
おうしんとも いま これ すうちゆう

事粗之を聞くと雖も前代未聞の故に耳目を驚動し心意を迷惑す請う重ねて
ほぼこれ いえど ぜんだいみもん ゆえ じもく きようどう めいわく こう かさ
之を説け委細に之を聞かん。

答えて白く法華經一部八卷・二十八品・進んでは前四味・退いては

涅槃經等の一代の諸經惣じて之を括るに但一經なり始め寂滅道場より
ねはんぎよう いちだい しゃきようそう これ くく いっきよう じやくめつどうじよう

終り般若經に至るまでは序分なり無量義經・法華經普賢經の十卷は正宗
はんによきよう いた じよぶん むりようぎきよう ほけきようふげん じようしゅう

なり涅槃經等は流通分なり、正宗 十卷の中において亦序正流通有り
ねはんぎよう るつう じようしゅう また るつう

無量義經並に序品は序文なり、方便品より分別功德品の十九行の偈に至る
むりようぎきよう じよほん じよぶん ほうべん ぶんべつくだく げんざい げん いた

まで十五品半は正宗分なり、分別功德品の現在の四信より普賢經に至る
じようしゅうぶん なり、 ぶんべつくだく げんざい げん いた

までの十一品半と一卷は流通分なり。

又法華經等の十卷に於ても二經有り各序正流通を具するなり、無量義經

と序品は序分なり方便品より人記品に至るまでの八品は正宗分なり、

法師品より安樂行品に至るまでの五品は流通分なり、其の教主を論ずれ

ば始成・正覚の仏・本無今有の百界・千如を説いて已今当に超過せる

随自意・難信難解の正法なり、過去の結縁を尋れば大通十六の時・仏果の

下種を下し進んでは華嚴經等の前四味を以て助縁と為して大通の種子を

覚知せしむ、此れは仏の本意に非ず但毒發等の一分なり、二乘凡夫等は

前四味を縁と為し漸漸に法華に來至して種子を顕わし開顯を遂ぐるの機

是なり、又在世に於て始めて八品を聞く人天等・或は一句一偈等を聞て下種

とし・或は熟し・或は脱し・或は普賢・涅槃等に至り・或は正像未等に

小権等を以て顔と為して法華に入る例せば在世の前四味の者の如し。

又本門十四品の一經に序正流通有り涌出品の半品を序分と為し壽量品
と前後の二半と此れを正宗と為す其の余は流通分なり、其の教主を論ず
れば始成正覺の釈尊に非ず所説の法門も亦天地の如し十界久遠の上に
国土世間既に顯われ一念三千殆んど竹膜を隔つ、又迹門並びに前四味・
無量義經・涅槃經等の三説は悉く随他意の易信易解・本門は三説の外の
難信難解・随自意なり。

又本門に於て序正流通有り過去大通仏の法華經より乃至現在の華嚴經
乃至迹門十四品涅槃經等の一代五十余年の諸經・十方三世諸仏の微塵の
經經は皆壽量の序分なり一品二半よりの外は小乗教・邪教・未得道
教・覆相教と名く、其の機を論ずれば徳薄垢重・幼稚・貧窮・孤露にして
禽獸に同ずるなり、爾前・迹門の円教尚仏因に非ず何に況や大日經等の
諸小乗經をや何に況や華嚴・真言等の七宗等の論師・人師の宗をや、与

えて之を論ずれば前三教を出でず奪つて之を云えば藏通に同ず、設い法は
甚深と称すとも未だ種熟脱を論ぜず還つて灰断に同じ化の始終無しとは
是なり、皆えば王女たりと雖も畜種を懷妊すれば其の子旃陀羅に劣れるが
如し、此等は且く之を闇く迹門十四品の正宗の八品は二往之を見るに
二乗を以て正と為し菩薩・凡夫を以て傍と為す、再往之を勘うれば凡夫・
正像末を以て正と為す正像末の三時の中にも末法の始を以て正が中の正
と為す、問うて曰く其の証如何ん、答えて曰く法師品に云く「而も此の經
は如来の現在すら猶怨嫉多し況や滅度の後をや」宝塔品に云く「法をして
久住せしむ乃至來れる所の化仏当に此の意を知るべし」等、勸持安樂等之を
見る可し迹門是くの如し、本門を以て之を論ずれば一向に末法の初を以て
正機と為す所謂一往之を見る時は久種を以て下種と為し大通前四味迹門を
熟と為して本門に至つて等妙に登らしむ、再往之を見れば迹門には似ず

ほんもん
本門は序正流通俱に末法の始を以て経と為す、在世の本門と末法の始は一
じゅんえん
同に純円なり但し彼は脱此れは種なり彼は一品二半此れは但題目の五字な
り。

問うて白く其の証文如何、答えて云く涌出品に云く「爾の時に他方の
くくど もろもろ ぼさつまかさつ ごうがしや す たいしゅう
国土の諸の来れる菩薩摩訶薩の八恒河沙の数に過ぎたる大衆の中に於て起
がっしょう
立し合掌し礼を作して仏に白して言さく、世尊若し我等に仏の滅後に於て
しやばせかい
娑婆世界に在って勤加精進して是の經典を護持し読誦し書写し供養せん
ゆる たま まさ
ことを聴し給わば当に此の土に於て広く之を説きたてまつるべし、爾の時
もろもろ ぼさつまかさつ
に仏・諸の菩薩摩訶薩衆に告げ給わく止ね善男子・汝等が此の経を護持せ
んことを須いじし等云云、法師より已下五品の经文前後水火なり、宝塔品
いわ おんじょう もつ あまね ししゅう
の末に云く「大音声を以て普く四衆に告ぐ誰か能く此の娑婆国土に於て広
みょうほけきょう
く妙法華経を説かんものなる」等云云、設い教主一仏為りと雖も之を奨勤
たといきょうしゆいちぶつな いえど これ しょうかん

し給^{たま}わば薬王等^{やくおう}の大菩薩^{ほさつ}・梵帝^{ぼんたい}・日月^{にちがつ}・四天等^{してん}は之^{これ}を重んず可^べき処^{ところ}に
たほうぶつ　じゅつぽう　しよぶつ　もつ　これ　かんぎよう　たま　もろもろほさつ　おんこん
多宝仏^{たぼうぶつ}・十方^{じゅつぽう}の諸仏客仏^{しよぶつ}と為^{もつ}て之^{これ}を諫曉^{かんぎよう}し給^{たま}う、諸^{もろ}の菩薩等^{ほさつ}は此^この慇懃^{おんこん}
ふぞく
の付属^{ふぞく}を聞^きいて「我不愛身命^{がふあいしんみよう}」の誓言^{せいごん}を立^たつ、此等^{これら}は偏^{ひとえ}に仏意^{ぶつゐ}に叶^{かな}わんが
為^ななり、而^{しか}るに須臾^{しゆゆ}の間に仏語相違^{ぶつごそうゐ}して過^{かは}八恒沙^{ちちこうじや}の此^この土^ちの弘經^{くきよう}を制止^{せいし}
たま　しんたいこ　きわ　およ　てんだいちしゃだいしぜんさんごさん
給^{たま}う進退^{しんたい}惟^きれ谷^{きわ}まり凡智^{およ}に及^{およ}ばず、天台智者大師前三後三^{てんたいちしやだいしぜんさんごさん}の六釈^{ろくしやく}を作^{つく}つて
これ　え　たま　しよせんさつけ　ほさつ　ないしやう　じりやうぼん　もつじゅよ
之^{これ}を会^あし給^{たま}えり、所詮^{しよせん}迹化他方^{しよせんさつけ}の大菩薩等^{ほさつ}に我^{われ}が内証^{ないしやう}の寿量品^{じりやうぼん}を以^{もつ}て授与^{じゅよ}
すべからず末法^{まっぽう}の初^{はつ}は謗法^{ぼうぽう}の国^{こく}にして惡機^きなる故^{ゆえ}に之^{これ}を止^{とど}めて地湧^{せんがい}千界^{せんがい}の
ぼさつ　じりやうぼん　かんじん　みやうほうれんげきやう　ごじ　もつえんぶ　しゅじやう
大菩薩^{ほさつ}を召^めして寿量品^{じりやうぼん}の肝心^{かんじん}たる妙法蓮華經^{みやうほうれんげきやう}の五字^{ごじ}を以^{もつ}て閻浮^{えんぷ}の衆生^{しゅじやう}に
授与^{じゅよ}せしめ給^{たま}う、又迹化^{しやつけ}の大衆^{たいしゆう}は釈尊^{しやくそん}初發心^{しよほっしん}の弟子等^{でし}に非^{あら}ざる故^{ゆえ}なり、
てんだいだいしわ　こ　でし　まさ　ひろ　みやうらくいわ
天台大師^{てんたいだいし}云^いく「是^これ我^{われ}が弟子^{でし}なり応^{まさ}に我^{われ}が故^{ひろ}を弘^{ひろ}むべし」妙樂^{みやうらく}云^いく「子父^{しふ}
の法^{ひろ}を弘^{ひろ}む世界^{せかい}の益^{えき}有^あり」、輔正記^{ふしやうき}に云^いく「法^こ是^これ久成^{くじやう}の法^こなるを以^{もつ}ての
ゆえ　くじやう
故^{ゆえ}に久成^{くじやう}の人^{ひと}に付^くす」等^と云^いふ。

又弥勒菩薩疑請して云く經に云く「我等は復仏の隨宜の所説、仏所出の
言未だ曾て虚妄ならず、仏の所知は皆悉く通達し給えりと信ずと雖も、
然も諸の新發意の菩薩・仏の滅後に於て、若し是の語を聞かば、或は
信受せずして法を破する罪業の因縁を起さん。唯然り世尊、願わくは為に
解説して我等が疑を除き給え及び未來世の諸の善男子此の事を聞き已り
ならば、亦疑を生ぜじ」云云。文の意は壽量の法門は滅後の為に之を請
ずるなり、壽量品に云く「・或は本心を失える・或は失わざる者あり。
乃至、心を失わざる者は比の良藥の色香、俱に好きを見て即便之を服する
に病尽く・除癒ぬ」等云云、久遠下種大通結縁乃至前四味迹門等の一切
の菩薩・二乘人天等の本門に於て得道する是なり、經に云く「余の心を失え
る者は其の父の來れるを見て亦歡喜し、問訊して病を治せんことを求むと
雖も、然も其の藥を与うるに而も肯えて服せず、所以は何ん。毒氣深く入

つて本心ほんしんを失うしなえるが故ゆえに此この好き色香しきこうある薬いに於おて美うまからずと謂おもえり。
乃至ないし、我今当まさに方便ほうべんを設おけ此この薬いを服のせしむべし、乃至ないしかく是この好き良薬りょうやくを今
留とどめて此こに在おく汝取なんじつて服のす可べし、差いじと憂うれうること勿なかれ、是この教なを作なし
已おわつて、復また他国たこくに至つつて使つかを遣つかわして還かえつて告つぐ等云云、分ぶん別べつ功く徳とく品ひんに
云いく「惡世末法あくせまつぽうの時とき」等云云。

問いうて曰いく此この經文きやうもんの遣使還告けんしげんこうは如何いかに、答こたえて曰いく四依しえなり四依しえに四類しえ
有しり、小乘しょうじやうの四依しえは多分たぶんは正法しょうぽうの前まへの五百年しゅつげんに出現だいいやうす、大乘だいじやうの四依しえは
多分たぶんは正法しょうぽうの後のちの五百年しゅつげんに出現しやくもんす、三さんに迹門しやくもんの四依しえは多分たぶんは像法ぞうぽう一千年
・少分まは末法まつぽうの初はじめ、四よに本門ほんもんの四依しえは地涌じゆせん千界末法がいまつぽうの始はじに必しず出現しゅつげんす
可べし今けんしげんこうの遣使還告けんしげんこうは地涌じゆせんなり是好良薬ぜこうりやうやくとは寿量品じゆりやうぽんの肝要かんやうたる名体宗用教なみたいしゆようきやう
の南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやう是これなり、此この良薬りやうやくをば仏な猶迹化おしやくけに授与じゆよし給たまわらず何いかに
況いや他方たほうをや。

じんりきほん
神力品に云く「爾の時に千世界微塵等の菩薩摩訶薩の地より涌出せる者
みなぶつぜん
皆仏前に於て一心に合掌し尊顔を胆仰して仏に白して言さく世尊・我等・
めつこ
仏の滅後・世尊分身の所在の国土・滅度の処に於て当に広く此の經を説く
べし」等云云、天台の云く「但下方の發誓のみを見たり」等云云、道暹云く
「付属とは此の經をば唯下方涌出の菩薩に付す何が故に爾る法是れ久成の
法なるに由るが故に久成の人に付す」等云云、夫れ文殊師利菩薩は東方金
色世界の不動仏の弟子觀音は西方無量壽仏の弟子・藥王菩薩は日月
浄明德仏の弟子・普賢菩薩は宝威仏の弟子なり一往釈尊の行化を扶けん
ため袈裟婆世界に來入す又爾前・迹門の菩薩なり本法所持の人に非れば末法
の弘法に足らざる者か、經に云く「爾の時に世尊乃至一切の衆の前に大神力
を現じ給う広長舌を出して上梵世に至らしめ乃至十方世界衆の宝樹の
下師子の座の上の諸仏も亦復是くの如く広長舌を出し給う」等云云、夫れ

けんみつにどう いっさい だいしょうじょう
顕密二道・一切の 大小乗 經の中に釈迦諸仏・並び坐し舌相梵天に至る文
これな あみだ こつちようぜつそうさんぜん おお ゆうめいむじつ
之無し、阿弥陀經の 広長舌相三千を覆うは有名無実なり、般若經の舌相
さんぜん はんによ と しやうみやう あら
三千光を放って般若を説きしも全く証明に非ず、此は皆兼帶の故に久遠
ふそや かく こつち じんりき げん じゆ ぼさつ みやうほう こじ
を覆相する故なり、是くの如く十神力を現じて地涌の菩薩に妙法の五字を
ぞくるい いわ いわ そ じようぎやう ぼさつたいしやう たま
囑累して云く、經に曰く「爾の時に仏・上行等の菩薩大衆に告げ給わく
しよぶつ じんりき かく こつち むりやうむへんふかしぎ も こ じんりき もつ
諸仏の神力は是くの如く無量無辺不可思議なり若し我れ是の神力を以て
むりやうむへん せんまん あそぎこう おい ぞくるい ゆえ くどく
無量無辺百千万億阿僧祇劫に於て囑累の爲の故に此の經の功德を説くとも
なお もつ これ のたま によらい いっさい しやう によらい いっさい
猶尽すこと能わじ要を以て之を言わば如来の一切の所有の法・如来の一切
じげい じんりき によらい いっさい ひやう によらい いっさい じんじん みな
の自在の神力・如来の一切の秘要の蔵・如来の一切の甚深の事・皆此の經
おい せんじけんせつ 等云云、天台云く「爾時・仏告上行より下は第三
に於て宣示顯説す」等云云、天台云く「又神力品に云く以要言之・如来・一切
けつちやうふそく でんぎやういわ じんりきほん いわ いやうこんし によらい いっさい
結要付属なり」云云、伝教云く「又神力品に云く以要言之・如来・一切
しやう ないし せんじけんせつ 己上 あきら
所有之法・乃至宣示顯説經文明かに知んぬ果分の一切の所有の法・果分の

一切の自在の神力・果分の一切の秘要の蔵・果分の一切の甚深の事・皆
法華に於て宣示顯説するなり」等云云、此の十神力は妙法蓮華經の五字を
以て上行・安立行・淨行・無辺行等の四大菩薩に授与し給うなり前
の五神力は在世の為後の五神力は滅後の為なり、爾りと雖も再往之を論ず
れば一向に滅後の為なり、故に次下の文に云く「仏滅度の後に能く此の經
を持たんを以ての故に諸仏皆歡喜して無量の神力を現じ給う」等云云。
次下の囑累品に云く「爾の時に釈迦牟尼仏・法座より起つて大神力を現
じ給う右の手を以て無量の菩薩摩訶薩の頂を摩で乃至今以て汝等に付属
す」等云云、地涌の菩薩を以て頭と為して迹化他力乃至・梵釈・四天等
に此の經を囑累し給う・十方より来る諸の分身の仏各本土に還り給う乃至
多宝仏の塔還つて故の如くし給う可し等云云、藥王品已下乃至涅槃經等は
地涌の菩薩去り了つて迹化の衆他方の菩薩等の為に重ねて之を付属し給う

くんにゆいぞくこれ
☆拾遺囑是なり。

疑うたがい っいて云いく正像しょうそう二千年の間に地涌じゆ千界閻浮提せんがい えんぶだいに出現しゆつげんして此の経を

流通りつちゆうするや、答こたえて曰いく爾しからず、驚おどろいて云いく法華經ほけきやう並びに本門ほんもんは仏の滅後めつご

を以もつて本なと為なして先なず地涌じゆに之これを授与じゆよす何なんぞ正像しょうそうに出現しゆつげんして此の経を

弘通くつちゆうせざるや、答こたえて云いく宜のべず、重かさねて問いうて云いく如何いかん、答こたう之これを宣のべべ

ず、又かさ重かさねて問いう如何いかん、答こたえて曰いく之これを宣のべぶれば一切世間の諸人いっさいせけん しょにん・威音王いおんおうぶつ仏

の末法まつぽうの如ごとく又また我が弟子でしの中にも粗之ほぼこれを説みなば皆みな誹謗ひわうを為なす可べし默止もくしせん

のみ、求いめて云いく説いかずんば汝慳貪なんじけんどんに墮だせん、答こたえて曰いく進退しんたい惟きれ谷きれり

試ほぼこれみに粗之ほぼこれを説いかん、法師品ほうしほんに云いく「況いんや滅度めつどの後あとをや」寿量品じゆりやうほんに云いく

「今留ことめて此こに在おく」分別功德品ぶんべつくどくに云いく「惡世末法あくせまつぽうの時とき」藥王品やくおうほんに云いく

「後の五百歳閻浮提このごひゃくさい えんぶだいに於おて広宣流布こうせんるふせん」涅槃經ねはんきやうに云いく「譬たとえば七子しちこあり

父母平等ふぼびやうどうならざるに非あらざれども然しかれども病者びやうしやに於おて心則しんすなわち偏ひとえに重おもきが

如し」等云云、已前の明鏡を以て仏意を推知するに仏の出世は靈山八年の諸人の為に非ず正像末の人の為なり、又正像二千年の人の為に非ず末法の始め予が如き者の為なり、然れども病者に於いてと云うは滅後・法華經誹謗の者を指すなり、「今留在此」とは「於此好色香藥而謂不美」の者を指すなり。

地涌千界正像に出でざることは正法一千年の間は小乘・權大乘なり機時共に之れ無く四依の大士小權を以て縁と為して在世の下種之を脱せしむ謗多くして熟益を破る可き故に之を説かず例せば在世の前四味の機根の如し、像法の中末に觀音・藥王・南岳・天台等と示現し出現して迹門を以て面と為し本門を以て裏と為して百界千如・一念三千其の義を尽せり、但理具を論じて事行の南無妙法蓮華經の五字並びに本門の本尊未だ広く之を行ぜず所詮円機有って円時無き故なり。

今末法の初小を以て大を打ち権を以て実を破し東西共に之を失し天地
顛倒せり迹化の四依は乱れて現前せず諸天其の国を棄て之を守護せず、此
の時地湧の菩薩始めて世に出現し但妙法蓮華經の五字を以て幼稚に服せ
しむ「因謗墮惡必因得益」とは是なり、我が弟子之を推え地涌千界は教主
釈尊の初發心の弟子なり寂滅道場に来らず☆林・最後にも訪わず不孝の
失之れ有り迹門の十四品にも来らず本門の六品には座を立つ但人品の間に
来還せり、是くの如き高貴の大菩薩・三仏に約束して之を受持す末法の初
に出で給わざる可きか、当に知るべし此の四菩薩折伏を現ずる時は賢王と
成つて愚王を誡責し摂受を行ずる時は僧と成つて正法を弘持す。
問うて曰く仏の記文は云何答えて曰く「後の五百歳閻浮提に於て広宣流布
せん」と、天台大師記して云く「後の五百歳遠く妙道に沾おわん」妙薬記し
て云く「末法の初冥利無きにあらず」伝教大師云く「正像稍過ぎ已つて

まっぼうはなは

まっぼう

あら

末法太だ近きに有り」等云云、末法太有近の釈は我が時は正時に非ずと云
う意なり、伝教大師・日本にして末法の始を記して云く「代を語れば像の
終り末の初・地を尋れば唐の東・羯の西・人を原れば則ち五濁の生・闍諍
の時なり経に云く猶多怨嫉・況滅度後と此の言良とに以有るなり」

とうじょう

じかいほんぎやく

しんびつ

なん

此の釈に闍諍の時と云云、今の自界叛逆・西海侵逼の二難を指すなり、

じゆせんがいしゆつげん

ほんもん

しやくそん きようじ

な

えんぶだい だいいち

ほんそん

此の時地涌千界出現して本門の釈尊を脇士と為す一闍浮提第一の本尊此

べ

がっししんたん

いま

ほんぞん ましま

にほんこく

じようぐう

してんのう

の国に立つ可し月支震旦に未だ此の本尊有さず、日本国の上宮・四天王寺

こんりゅう

いま

あみだ

たほう

もっほんぞん

な

しょうむてんのう

を建立して未だ時来らざれば阿弥陀・他方を以て本尊と為す、聖武天皇・

とうだいじ

こんりゅう

けこんきやう

きやうしゆ

いま ほけきやう

じつぎ

あらわ

でんぎやう

東大寺を建立す、華嚴經の教主なり、未だ法華經の実義を顕さず、伝教

だいしほほほけきやう

じつぎ

しか

いえど

いま

ゆえ

とうほう

がおう

大師粗法華經の実義を顕示す然りと雖も時未だ来らざるの故に東方の鵝王

こんりゅう

ほんもん

ほさつ

あら

しよせんじ

ゆせんがい

ため

こ

ゆず

を建立して本門の四菩薩を顕わさず、所詮地涌千界の為に此れを譲り与え

たま

給う故なり、此の菩薩・

ほさつ

ぶつちやく

こおも

だいち

しょうぞう

いま

給う故なり、此の菩薩・仏勅を蒙りて近く大地の下に在り正像に未だ

出現しゅつげんせず末法まつぽうにも又出いで来り給たまわずば大妄語もうごの大士だいしなり、三仏さんぶつの未来記みらいきも亦泡沫またほうまつに同じ。

此これを以て之もつこれを惟おもうに正像しょうざうに無だき大地震だいじしん・大慧星等すいせい出来しゅつす、此等これらは

金翅鳥こんじちよう・修羅しゆら・竜神等りゆうじんの動変どうへんに非あらず偏ひとえに四大菩薩ぼさつを出現しゅつげんせしむ可べき先兆

なるか、天台てんだい云く「雨あめの猛たけきを見て竜の大なるを知り花の盛なるを見て池

の深きことを知る」等云云、妙楽みょうらく云く「智人ちじんは起おを知り蛇じゃは自ら蛇みずかを識しる」

等云云、天晴あきれぬれば地明あきらかなり法華ほっけを識しる者は世法せぽうを得可べきか。

一念いちねん三千さんぜんを識しらざる者しには仏ぶつ・大慈悲だいじひを起おこし五字ごじの内うちに此この珠たまを裏つみ

末代まつだい幼稚ようちの首くびに懸かけさしめ給たまう、四大菩薩ぼさつの此この人ひとを守護しゆごし給たまわんこと大公たいこう

・周公しゅうこうの文王ぶんおうを摂扶しやうぶし四皓しこうが恵帝けいていに侍奉じぶせしに異いならざる者しなり。

文永十年卯月二十五日

日蓮にちれん之これを註しるす

◆四三 観心本尊抄 送状

かたひら

帷 一つ・墨三長・筆五官給ひ候い了んぬ、観心の法門少少之を注して

大田殿・教信御房等に奉る、此の事日蓮身に当たる大事なり之を秘す、無

二の志を見れば之を開☆せらる可きか、此の書は難多く答少なし未聞の事

なれば人耳目を驚動す可きか、設い他見に及ぶとも三人四人座を並べて

之を読むこと勿れ、仏滅後・二千二百二十余年未だ此の書の心有らず、国難

を顧みず五五百歳を期して之を演説す乞い願くば一見を歴來の輩は師弟共

に靈山浄土に詣でて三仏の顔貌を拝見したてまつらん、恐恐謹言。

文永十年太齋卯月二十六日

日蓮 花押

富木殿御返事

◆四四 撰時抄

建治元年

五十四歳御作

256P

釈子 日蓮述ぶ

夫れ仏法を学せん法は必ず先づ時をならうべし、過去の大通智勝仏は出世

し給たまいて十小劫いつきょうが間と・一経たまも説たまき給たまはず経いに云いく一坐十小劫又云いく「仏・
時いまの未いただ至いたらざるをし知り請しょうを受けて默然もくねんとして坐すす」等云云、今の教主
釈尊しゃくそんは四十余年よんじゅうねんの程ほけき法華經ほうけきを説たまき給たまはず經いに云いく「説いまく時未いただ至いたらざるが
故」と云云、老子ろうしは母の胎しよに処しよして八十年、弥勒菩薩みろくぼさつは兜率とそつの内院こもに籠こもら
せ給たまいて五十六億七千萬歳せんまんをまたまち給たまうべし、彼の時ほとこぎ鳥けいは春いちを・をくり鶏ちよく鳥
は曉ちくしやうをまたまつ畜生ちくしやうすらなをかくのごとし何いかに況いわんやい仏法ぶつぽうを修行しゆぎやうせんしに時ときを
糾ただざるべしや、寂滅じやくめつ道場どうじやうの砌みぎりには十方じふぽうの諸仏しよぶつ示現しげんし一切いっさいの大菩薩集會ぼさつししうえ
し給たまい梵帝ぼんたい・四天してんは衣いを・ひるがへし竜神りゆうじん・八部はちぶは掌たなこころを合あせ凡夫大ぼんぶ
根性こんじやうの者は耳みみをそばだて生身得忍しやうしんとくにんの諸菩薩しよぼさつ・解脫月等請げだつがつしやうをなし給たまいしか
ども世尊せそんは二乗作仏にじやうさぶつ・久遠実成くおんじつじやうをば名字みやうじをかくし即身成仏そくしんじやうぶつ・一念三千いちねんさんぜんの
肝心かんじん、其義のべを宣たまべ給たまはず、此等これらは偏ひとえにこれ機きは有ありしかども時の来きらざれ
ばのべさせ給たまはず經いに云いく「説いまく時未いただ至いたらざる故」等云云、靈山會上りやうぜんの

みぎり

えんぶだいいち

ふこう

あじゃせだいおう

いちだいほうぼう

砌には閻浮第一の不孝の人たりし阿闍世大王座につらなり、一代謗法の

だいばだった

てんのうによらい

ごしょう

りゆうによ

じゃしん

提婆達多には天王如来と名をさづけ五障の竜女は蛇身をあらためずして仏

けつじよう

じようぶつ

いれるたね

くおんじつじよう

おきな

になる、決定性の成仏は焦種の花さき果なり久遠実成は百歳の災・二

けつじよう

じようぶつ

いれるたね

くおんじつじよう

おきな

十五の子となれるかと・うたがふ、一念三千は九界即仏界・仏界即九界と

いちねんさんぜん

いっく

しよぶつ

いっく

しよぶつ

しゆし

これら

き

談ず、されば此の経の一字は如意宝珠なり一句は諸仏の種子となる此等は機

によいほうじゆ

いっく

しよぶつ

いっく

しよぶつ

しゆし

これら

き

の熟不熟はさてをきぬ時の至れるゆへなり、経に云く「今正しく是れ其の時

いた

いわ

い

い

い

い

い

い

なり決定して大乘を説かん」等云云。

けつじよう

だいじよう

い

い

い

い

い

い

問うて云く機にあらざるに大法を授けられれば愚人は定めて誹謗をなして

い

き

だいほう

い

い

い

い

い

悪道に墮るならば豈説く者の罪にあらずや、答えて云く人路をつくる路に

あくどう

おち

あに

つみ

い

い

い

い

迷う者あり作る者の罪となるべしや良医・薬を病人にあたう病人嫌いて服

まい

つみ

り

り

い

い

い

い

せずして死せば良医の失となるか、尋ねて云く法華経の第二に云く「無智

り

り

と

た

い

い

い

い

の人の中に此の経を説くこと莫れ」同第四に云く「分布して妄りに人に授与

なか

い

い

い

い

い

い

い

すべからず」同第五に云く「此の法華經は諸仏如来の秘密の蔵なり、諸經

の中に於て最も其の上に在り長夜に守護して妄りに宣說せざれ」等云云、

此等の經文は機にあらざれば説かざれというか、今反詰して云く不輕品に

云く「而も是の言を作さく我深く汝等を敬う等云云四衆の中に瞋恚を生じ

心不淨なる者有り、惡口罵詈して言く是の無智の比丘○又云く衆人・或は

杖木瓦石を以て之を打擲す」等云云、勸持品に云く「諸の無智の人の

惡口罵詈等し及び刀杖を加うる者有らん」等云云、此等の經文は惡口

罵詈乃至打擲すれどもとかれて候は説く人の失となりけるか、求めて

云く此の兩説は水火なり・いかなが心うべき答えて云く天台云く「時に

適うのみ」章安云く「取捨宜きを得て一向にすべからず」等云云、釈の心

は・或る時は謗じぬべきにはしばらくとかず・或る時は謗ずとも強て説く

べし・或る時は一機は信ずべくとも万機謗べくばとくべからず・或る時は

万機き一同に謗ほうずとも強しいて説くべし、初成道しよじやうどうの時は法慧ほうえ・功德林くどく・金剛幢こんこう・

金剛藏こんこう・文殊もんじゆ・普賢ふげん・弥勒みろく・解脫月げだつがつ等の大菩薩ほさつ、梵帝ほんたい・四天等してんの凡夫ほんぶ・大

こんじやう

根性の者かずをしらず、鹿野苑ろくやおんの苑そのには俱鄰等くりんの五人・迦葉等かしようの二百五十

しゃりほつ

人・舍利弗等の二百五十人・八万の諸天はちまん、方等大会しょうてんの儀式には世尊せそんの慈父じふ

じやうばんだいおう

の淨飯大王じやうばんだいおうねんごろに恋せさせ給たまいしかば仏・宮に入らせ給たまいて觀かん仏三昧ぶつさんまい

經をとかせ給たまい、悲母ひもの御ために☆利天とりえんに九十日こもが間たまい籠らせ給たまいしには摩耶まや

經をとかせ給たまう、慈父じふ・悲母ひもなどにはいかなる秘法ひほうか惜おしませ給たまうべきなれ

ども法華經ほけきやうをば説かせ給たまはずせんずるところ機きにはよらず時ときいたらざれば

・いかにもとかせ給たまはぬにや。

問いうて云いくいかなる時しやうじやうにか小乗しんきやう・權經ごんきやうをときいかなる時ほけきやうにか法華經ほけきやうを

説くべきや、答いえて云いく十信じゆっしんの菩薩ぼさつより等覺とうかくの大士とうかくにいたるまで時ときと機きと

をば相知りがたき事なり何いかに況いや我等い等は凡夫いなり・いかでか時機じきをしるべ

き、求めて云くすこしも知る事あるべからざるか、答えて云く仏眼をかつ
て時機をかんがへよ仏・日を用て国土をてらせ、問うて云く其の心如何、
答えて云く大集經に大覺世尊・月藏菩薩に對して未來の時を定め給えり
所謂我が滅度の後の五百歳の中には解脱堅固・次の五百年には禪定堅固
已上 一千年・次の五百年には読誦多聞堅固・次の五百年には多造塔寺堅固 已上 二千年・次
の五百年には我法の中に於て鬭諍言訟して白法隱沒せん等云云、此の五
の五百歳・二千五百余年に人人の料簡さまざまなり、漢土の道綽禪師が
云く正像二千・四箇の五百歳には小乗と大乘との白法盛なるべし末法
に入つては彼等の白法皆消滅して淨土の法門・念仏の白法を修行せん
人計り生死をはなるべし、日本国の法然が料簡して云く今・日本国に流布
する法華經・華嚴經並びに大日經諸の小乗經・天台・真言・律等の
諸宗は大集經の記文の正像二千年の白法なり末法に入つては彼等の

びやくほう みなめつじん

白法は皆滅尽すべしたとい行ずる人ありとも一人も生死しやうじをはなるべからず、

じゅうじゅう びしゃもんろん

十住 毘婆沙論と曇鸞法師の難行道なんぎやうどう道綽どうしやくの未有一人得者みういちにんとくしや・善導ぜんどうの

せんちゅうむいつ

千中無一これなり、彼等かれらの白法びやくほう隱没おんもつの次には浄土三部經じやうどさんぶきやう・弥陀みだ・称名しやうみやうの

びやくほう

一行ばかり大白法びやくほうとして出現しゆつげんすべし、此を行ぜん人人ひとびとはいかなる悪人あくにん・

ぐにん

愚人なりとも十即じゆつそく十生じゆつしやう・百即ひやくそく百生ひやくしやう唯浄土ただじやうどの一門いちもんのみ有つて路に通入

すべしとはこれなり、されば後世ごしやうを願はん人人ひとびとは叡山えいざん・東寺とうじ・園城おんじやう・

ななだいに にほん 七大寺等の日本一州の諸寺しよ・諸山しよざんの御帰依ごきえをとどめて彼の寺山によせをけ

でんばたぐんこつ

る田畠郡郷をうばいとつて念仏堂ねんぶつにつけば決定けつじやう往生おうじやう南無阿弥陀仏なむあみだぶつとす

めければ我が朝あした

一同ひとに其の義ぎになりて今に五十余年なり、日蓮此等にちれんこれらの悪義あくぎ

を難なんじやぶる事はことふり候いぬ、彼の大集經だいしつきやうの白法びやくほう隱没おんもつの時ときは第五の

五百歳ごひゃくさい当世とうせいなる事は疑うたがいひなし、但し彼の白法びやくほう隱没おんもつの次つぎには法華經ほけきやうの肝心かんじん

たる南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうの大白法びやくほうの一閻浮提えんぶだいの内八万はちまんの国あり其の国そ国に

五百歳ごひゃくさい当世とうせいなる事は疑うたがいひなし、但し彼の白法びやくほう隱没おんもつの次つぎには法華經ほけきやうの肝心かんじん

たる南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうの大白法びやくほうの一閻浮提えんぶだいの内八万はちまんの国あり其の国そ国に

五百歳ごひゃくさい当世とうせいなる事は疑うたがいひなし、但し彼の白法びやくほう隱没おんもつの次つぎには法華經ほけきやうの肝心かんじん

たる南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうの大白法びやくほうの一閻浮提えんぶだいの内八万はちまんの国あり其の国そ国に

五百歳ごひゃくさい当世とうせいなる事は疑うたがいひなし、但し彼の白法びやくほう隱没おんもつの次つぎには法華經ほけきやうの肝心かんじん

たる南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうの大白法びやくほうの一閻浮提えんぶだいの内八万はちまんの国あり其の国そ国に

はちまん
八万の王あり王王ごとに臣下並びに万民までも今・日本国に弥陀称名を
ししゅう
四衆の口口に唱うるがごとく広宣流布せさせ給うべきなり。

問うて云く其の証文如何、答えて云く法華經の第七に云く「我が滅度の

後・後の五百歳の中に広宣流布して閻浮提に於て断絶せしむること無けん」

等云云、經文は大集經の白法隱没の次の時をとかせ給うに広宣流布と云

云、同第六の巻に云く「惡世末法の時能く是の經を持つ者」等云云又第五

の巻に云く「後の末世の法滅せんとする時」等又第四の巻に云く「而も此

經は如来現在にすら猶怨嫉多し況や滅度の後をや」又第五の巻に云く

「一切世間怨多くして信じ難し」又第七の巻に第五の五百歳・閻諍堅固の

時を説いて云く「惡魔・魔民諸の天竜・夜叉・鳩槃荼等其の便を得ん」

大集經に云く「我が法の中に於て閻諍言訟せん」等云云、法華經の第五

に云く「惡世の中の比丘」又云く「或は阿蘭若に有り」等云云又云く「惡鬼

其身に入る」等云云、文の心は第五の五百歳の時悪鬼の身に入る大僧等・

国中に充滿せん其時に智人・一人出現せん彼の悪鬼の入る大僧等時の

おうしんばんみん かたらい あつく めり じょうもくがりやく るざい しざい しゃか たほう
王臣万民等を語て悪口罵詈・杖木瓦礫・流罪・死罪に行はん時釈迦・多宝

じゅつぼう しょうぶつ じゆ ぼさつ おお ぼさつ ほんたい にちがつ してん
・十方の諸仏・地涌の大菩薩らに仰せつけ大菩薩は梵帝・日月・四天等に

もう そのとき てんぺん ちよう こくしゅ そ もち
申しくだされ其の時・天変地天盛なるべし、国主等其のいさめを用いずば

りんこく かがれ あくおう あくびく
鄰国にをほせつけて彼彼の国国の惡王・惡比丘等をせめらるるならば

ぜんだいみもん とつじよう えんぶだい おこ そのとき にちがつしよしょう してんげ いっさい
前代未聞の大闘諍一閻浮提に起るべし其の時・日月所照の四天下の一切

しゅじよう ある ある いっさい ぼさつ
衆生、或は国を・をしみ・或は身を・をしむゆへに一切の仏・菩薩にい

のりをかくともしるしなくば彼のにくみつる一の小僧を信じて無量の大僧

はちまん だいおう いっさい ばんみんみなこうべ たなこころ なむ
等八万の大王等、一切の万民皆頭を地につけ掌を合せて一同に南無

みようほうれんげきよう じんりき じんりき じゅつぼうせかい いっさい
妙法蓮華經となうべし、例せば神力品の十神力の時・十方世界の一切

しゅじよう しゃばせかい おんじよう なむ しゃかむにぶつ
衆生一人もなく娑婆世界に向つて大音声をはなちて南無釈迦牟尼仏・

ば唐とうの東・羯かつの西・人を原たずぬれば五濁ごじよくの生・鬬諍とうじょうの時なり、經いに云く猶多ゆたおんしつ 況滅度後きやうめつごと此の言良まことゆえあに以有こるなり」云云、夫それ釈尊しゃくそんの出世しゅつせは住劫第
九の滅・人壽百歳の時なり百歳と十歳との中間ちゆうげんざいせ在世五十年滅後二千年と
一万年となり、其その中間ちゆうげんに法華經の流布の時・二度あるべし所謂いわゆるざいせ在世の八
年・滅後には末法の始の五百年なり、而しかるにてんだいに天台・妙樂・伝教等は進んで
は在世法華經の時にも・もれさせ給たまいぬ、退しりぞいては滅後末法の時にも生れ
させ給たまはず中間なる事をなげかせ給たまいて末法の始をこひさせ給たまう御筆な
り、例せば阿私陀仙人あしだせんじんが悉達太子しつたたいしの生れさせ給たまいしを見て悲いんで云く現生げんせい
には九十にあまれり・太子たいしの成道じやうどうを見るべからず後生ごしやうには無色界むじくかいに生れて
五十年の說法せつぽうの坐にもつらなるべからず正像末しやうざうまつにも生るべからずとなげき
しがごとし、道心どうしんあらん人人ひとびとは此を見ききて悦よろこばせ給たまえ正像二千年の大王だいおう
よりも後世ごしやうを・をもはん人人ひとびとは末法の今の民にてこそあるべけれ此こを信いぜ

ざらんや、彼の天台の座主よりも南無妙法蓮華經と唱うる癩人とはなるべし、梁の武帝の願に云く「寧ろ提婆達多となて無間地獄には沈むとも鬱頭羅弗とはならじ」と云云。

問うて云く竜樹・天親等の論師の中に此の義ありや、答えて云く竜樹

・天親等は内心には存ぜさせ給うといえども言には此の義を宣べ給はず、

求めて云くいかなる故にか宣給ざるや、答えて云く多くの故あり一には彼

の時に機なし二には時なし三には迹化なれば付嘱せられ給はず、求めて

云く願くは此の事よくよくきかんとをもう、答えて云く夫仏の滅後二月十

六日より正法の始なり迦葉尊者・仏の付嘱をうけて二十年、次に阿難

尊者二十年・次に商那和修二十年・次に優婆崛多二十年・次に提多迦二十

年、已上一百年が間は但小乘經の法門をのみ弘通して諸大乘經は名字

もなし何に況や法華經をひろむべしや、次には弥遮迦・仏陀難提・仏駄密

多・脇比丘・富那奢等の四五人、前の五百余年が間は大乗經の法門少

しゅったい

出来せしかどもとりたてて弘通し給はず、但小乗經を面としてやみぬ、

だいしっきよう

已上大集經の先五百年解脱堅固の時なり、正法の後六百年已後一千年が

そ

前其の中間に馬鳴菩薩・毘羅尊者・竜樹菩薩・提婆菩薩・羅・尊者・

僧・難提・僧伽耶奢・鳩摩羅駄・闍夜那・盤陀・摩奴羅・鶴勒夜那・師子

等の十余人の人人始には外道の家に入り次には小乗經をきわめ後には諸

ひとびと

大乗經をもて諸小乗經をさんざんに破し失ひ給いき此等の大士等は諸

だいじようきよう

大乗經をもつて諸小乗經をば破せさせ給いしかども諸大乗經と

だいじようきよう

法華經の勝劣をば分明にかかせ給はず、設い勝劣をすこしかかせ給いた

ほけきよう

るやうなれども本・迹の十妙・二乗作仏・久遠実成・已今当の妙・

ひやつかいせんによ

百界千如

いちねんさんぜん

かんよう

ほうもん

ふんみよう

ある

とくし・或は文にあたりてひとはし計りかかせ給いて化導の始終・師弟の
遠近・得道の有無はすべて一分もみへず、此等は正法の後の五百年・
大集經の禪定堅固の時にあたれり、正法一千年の後は月氏に仏法充滿
せしかども・或は小をもて大を破し・或は權經をもつて実經を隱没し
仏法さまざまに乱れしかば得道の人やふやくすくなく仏法につけて惡道に
墮る者かずをしらず、正法一千年の後・像法に入つて一十五年と申せしに
仏法東に流れて漢土に入りనికి、像法の前五百年の内・始の一百余年が間
は漢土の道士と月氏の仏法と諍論していまだ事さだまらず設い定まりたり
しかども仏法を信ずる人の心いまだふかからず、而るに仏法の中に大小・
權實・顯密をわかつならば聖教一同ならざる故・疑をこりてかへりて
外典ともなう者もありぬべし、これらのをそれあるかのゆへに摩騰・竺蘭
は自は知つて而も大小を分けず權實をいはずしてやみぬ、其の後・魏・晉

・齊・宋・梁の五代が間・仏法の内に大小・権実・顕密をあらそひし程に
 いづれこそ道理ともきこえずして上み一人より下も万民にいたるまで不審
 すくなからず南三・北七と申して仏法十流にわかれぬ所謂南には三時・四
 時・五時・北には五時・半満・四宗・五宗・六宗、二宗の大乗一音等・
 各各義を立てて、執水火なり、しかれども大綱は一同なり所謂一代聖教の
 中には華嚴經第一・涅槃經第二・法華經第三なり法華經は阿含・般若
 浄名・思益等の經經に對すれば眞実なり了義經・正見なりしかりとい
 へども涅槃經に對すれば無常教・不了義經・邪見の經等云云、漢より四百
 余年の末へ五百年に入つて陳隋二代に智☆と申す小僧一人あり後には天台
 智者大師と号したてまつる、南北の邪義をやぶりて一代聖教の中には
 法華經第一・涅槃經第二・華嚴經第三なり等云云、此れ像法の前・五百歳
 ・大集經の誦誦多聞堅固の時にあひあたれり、像法の後・五百歳は唐の始

・太宗^{たいそう}皇宗^{ぎょう}の御宇^{ぎよう}に玄奘^{げんじやう}三藏^{さんざう}・月支^{がつし}に入つて十九年が間、百三十箇国の
寺塔^{じとう}を見聞^{けんもん}して多くの論師^{ろんし}に値^あいたてまつりて八万^{はちまん}聖教^{しやうきやう}・十二部經^{じふにぶきやう}の
淵底^{えんてい}を習^{なら}いきわめしに其^その中に二宗^{にそう}あり所謂^{いわゆる}法相宗^{ほうしやうしゆう}・三論宗^{さんろんしゆう}なり、此の
二宗^{にそう}の中に法相^{ほうしやう}・大乘^{だいじやう}は遠くは弥勒^{みろく}・無著^{むぢやく}近くは戒賢^{かいけん}論師^{ろんし}に伝えて漢土^{かんと}に
かへりて太宗^{たいそう}皇帝^{こうてい}にさづけさせ給^{たま}う、此の宗の心は仏教^{ぶつきやう}は機^きに随^{したが}うべし
一乘^{いちじやう}の機^きのためには三乘^{さんじやう}方便^{ほうべん}・一乘^{いちじやう}真實^{しんじつ}なり所謂^{いわゆる}法華經^{ほけきやう}等なり、三乘^{さんじやう}
の機^きのためには三乘^{さんじやう}真實^{しんじつ}・一乘^{いちじやう}方便^{ほうべん}所謂^{いわゆる}深密經^{しんみつ}・勝鬘^{しやうまん}經^{きやう}等此^これなり、
天台智者等^{てんだいちしや}は此の旨^{むね}を弁^わえず等云云^{しやうん}、而も太宗^{たいそう}は賢王^{けんおう}なり当時^{とうじ}名を一天^{いつてん}に
ひびかすのみならず三皇^{さんこう}にもこえ五帝^{ごてい}にも勝^{すぐ}れたるよし四海^{しかい}にひびき漢土^{かんと}
を手ににぎるのみならず高昌^{こうしやう}・高麗^{こうま}等の一千八百余国^{せんぱちやくこ}をなびかし内外^{ないげ}を
極^{きわ}めたる王ときこへし賢王^{けんおう}の第一^{だいいち}の御帰依^{ごきえ}の僧^{そう}なり、天台宗^{てんだいしゆう}の学者^{がくしや}の中に
も頭^{かしら}をさしいだす人・一人もなし、而れば法華經^{ほけきやう}の実義^{じつぎ}すでに一國^{おんもつ}に隱没^{おんもつ}

しぬ、同じき太宗の太子・高宗・高麗の継母・則天皇后の御宇に法蔵法師
といふ者あり法相宗に天台宗のをそわるところを見て前に天台の御時
せめられし華嚴經を取出して一代の中には華嚴第一・法華第二・涅槃第三
と立てけり、太宗・第四代玄宗皇帝の御宇開元四年同八年に西天・印度よ
り善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵・大日經・金剛頂經・蘇悉地經を
持て渡り真言宗を立つ、此の宗の立義に云く教に二種あり一には釈迦の
顕教所謂華嚴・法華等、二には大日の密教所謂大日經等なり、法華經は
顕教の第一なり此の經は大日の密教に對すれば極理は少し同じけれども
事相の印契と真言とはたえてみへず三密相応せざれば不了義經等云云、已
上法相・華嚴・真言の三宗一同に天台法華宗をやぶれども天台大師程の
智人・法華宗の中になかりけるかの間・内内はゆはれなき由は存じけれど
も天台のごとく公場にして論ぜられざりければ上国王・大臣・下一切の

人民にいたるまで皆仏法に迷いて衆生の得道みなとまりけり、此等は
像法の後の五百年の前二百余年が内なり、像法に入つて四百余年と申しけ
るに百済国より一切経並びに教主釈尊の木像・僧尼等日本国にわたる、
漢土の梁の末・陳の始にあひあたる、日本には神武天王よりは第三十代欽明
天王の御宇なり、欽明の御子・用明の太子に上宮王子・仏法を弘通し給う
のみならず並びに法華経・浄名経・勝鬘経を鎮護国家の法と定めさせ
給いぬ、其の後・人王第三十七代に孝徳天王の御宇に三論宗・成実宗を
観勒僧正・百済国よりわたす、同御代に道昭法師・漢土より法相宗・
俱舎宗をわたす、人王第四十四代元正天皇の御宇に天竺より大日経をわた
して有りしかども而も弘通せずして漢土へかへる此の僧をば善無畏三蔵と
いう、人王第四十五代に聖武天皇の御宇に審祥大徳・新羅国より華嚴宗を
わたして良弁僧正・聖武天王にさづけたてまつりて東大寺の大仏を立て

させ給えり同御代に大唐の鑒真和尚天台宗と律宗をわたす、其の中に
りつしゅう させ給えり だいとう がんじんわじょうてんだいしゅう りつしゅう
律宗をば弘通し小乗の戒場を東大寺に建立せしかども法華宗の事をば
みょうじ もう いだ たま にゅうめつ おわ 其後人王第五十代像法八百
名字をも申し出させ給はずして入滅了んぬ、
あいた かんむ ぎょう さいちよう もう こそうしゅつたい
年に相当つて桓武天王の御宇に最澄と申す小僧出来せり後には伝教大師
と号したてまつる、始には三論・法相・華嚴・俱舍・成実・律の六宗並び
ぜんしゅう ぎょうひょうそうじょう ならい たまい
に禅宗等を行表僧正等に習学せさせ給いし程に我と立て給える国昌寺
・後には比叡山と号す、此にして六宗の本経・本論と宗宗の大師の釈と
ひえいざん ここ ろくしゅう ほんぎょう ほんろん にんし
を引き合せて御らむありしかば彼の宗宗の大師の釈・所依の経論に相違せ
る事多き上僻見多にして信受せん人皆惡道に堕ちぬべしとかんがへさせ
たま そ ほけきよう じつぎ しんじゅ みなあくどう お
給う其の上法華經の実義は宗宗の人人・我も得たり我も得たりと自讃あり
しかども其の義なし、此れを申すならば喧嘩出来すべしもだして申さずば
ぶっせい こ もう しゅつたい
仏誓にそむきなんとをもひわづらはせ給いしかども終に仏の誠ををそれて
たまい つい いましめ

桓武皇帝に奏し給ひしかば帝・此の事を・をどろかせ給いて六宗の碩学に
召し合させ給う、彼の学者等始めは慢幢山のごとし悪心・毒蛇のやうなり
しかども終に王の前にしてせめをとされて六宗・七寺一同に御弟子とな
りぬ、例せば漢土の南北の諸師・陳殿にして天台大師にせめおとされて
御弟子となりしがごとし、此れはこれ円定・円慧計りなり其の上天台大師
のいまだせめ給はざりし小乗の別受戒をせめをとし六宗の八大徳に
梵網經の大乗・別受戒をさづけ給うのみならず法華經の円頓の別受戒を
叡山に建立せしかば延暦円頓の別受戒は日本第一たるのみならず仏の
滅後・一千八百余年が間身毒戸那一閻浮提にいまだなかりし靈山の大戒・
日本国に始まる、されば伝教大師は其の功を論ずれば竜樹・天親にもこ
え天台・妙楽にも勝れてをはします聖人なり、されば日本国の当世の東寺
・園城・七大寺・諸国の八宗・浄土・禅宗・律宗等の諸僧等誰人か

でんぎようだいし
傳教大師の円戒をそむくべき、かの漢土九国の諸僧等は円定・円慧は天台

でし
の弟子ににたれども円頓一同の戒場は漢土になければ戒にをいては弟子と

ならぬ者もありけん、この日本国は傳教大師の御弟子にあらざる者は外道

なり悪人なり、而れども漢土・日本の天台宗と真言の勝劣は大師心中に

は存知せさせ給いけれども六宗と天台宗のごとく公場にして勝負なか

りけるゆへにや、傳教大師已後には東寺・七寺・園城の諸寺日本一州一

共に真言宗は天台宗に勝れたりと上一人より下万人にいたるまでをぼし

めしをもえり、しかれば天台法華宗は傳教大師の御時計りにぞありける此

の傳教の御時は像法の末・大集經の多造塔寺堅固の時なり、いまだ於我法

中・鬬諍言訟・白法隱没の時にはあたらず。

まっほう
今末法に入つて二百余歳・大集經の於我法中・鬬諍言訟・白法隱没

の時にあたれり仏語まことならば定んで一閻浮提に鬬諍起るべき時節な

り、伝え聞く漢土は三百六十箇国・二百六十余州は・すでに蒙古国に打ち
やぶられぬ華洛すでにやぶられて徽宗・欽宗の両帝・北蕃にいけどりにせ
られて韃靼にして終にかくれさせ給いぬ、徽宗の孫・高宗皇帝は長安をせ
めをとされて田舎の臨安行在府に落ちさせ給いて今に数年が間京を見ず、
高麗六百余国も新羅百濟等の諸国等も皆大蒙古国の皇帝に・せめられぬ、
今の日本国の壱岐対馬並びに九国のごとし闘諍堅固の仏語地に堕ちず、あ
たかもこれ大海のしをの時をたがへざるがごとし、是をもつて案ずるに
大集経の白法隠没の時に次いで法華経の大白法の日本国並びに一閻浮提
に広宣流布せん事も疑うべからざるか、彼の大集経は仏説の中の権大乘
ぞかし、生死をはなるる道には法華経の結縁なき者のためには未顕真實な
れども六道・四生・三世の事を記し給いけるは寸分もたがはざりけるにや、
何に況や法華経は釈尊・要当說真實となのらせ給い多宝仏は真實なりと御

判をそへ十方の諸仏は広長舌を梵天につけて誠諦と指し示し、釈尊は重ねて無虚妄の舌を色究竟に付けさせ給いて後・五百歳に一切の仏法の滅せん時・上行菩薩に妙法蓮華經の五字をもたしめて謗法一闡提の白癩病の輩の良薬とせんと梵帝・日月・四天・竜神等に仰せつけられし金言虚妄なるべしや、大地は反覆すとも高山は頽落すとも春の後に夏は来らずとも日は東へかへるとも月は地に落つるとも此の事は一定なるべし、此の事一定ならば鬪諍堅固の時・日本国の王臣と並びに万民等が仏の御使として南無妙法蓮華經を流布せんとするを・或は罵詈訕・或は惡口し・或は流罪し・或は打擲し弟子眷属等を種種の難にあわする人人いかでか安穩にては候べき、これをば愚癡の者は咒詛すとをもひぬべし、法華經をひろむる者は日本国の一切衆生の父母なり章安大師云く「彼が為に惡を除くは即ち是れ彼が親なり」等云云、されば日蓮は当帝の父母・念佛者・禅衆

・真言師等しんごんしが師範しなり又主君しゅくんなり、而しかるを上一人かみいちにんより下万民ばんみんにいたるまで
あだをなすをば日月にちがついかでか彼等かれらが頂いただきを照てらし給たまうべき地神ちかみいかでか彼等かれら
の足を戴いたき給たまうべき、提婆達多だいばだつたは仏を打ちたてまつりしかば大地だいち揺動ようどうして
火災かさいいでにき、檀弥羅王だんみらは師子尊者ししそんじやの頸を切りしかば右の手・刀とともに
落ちぬ、徽宗皇帝きそうこうていは法道ほうどうが面かおにかなやきをやきて江南にながせしかば半年
が内にゑびすの手にかかり給たまいき、蒙古もうこのせめも又かくのごとくなるべし、
設たい五天のつわものをあつめて鉄圀山てつがんを城とせりともかなふべからず必ず
日本国にほんこくの一切衆生いっさいしゅじやう・兵難なんに値あうべし、されば日蓮にちれんが法華經ほけきやうの行者ぎやうじやにてあ
るなきかはこれにても見るべし、教主きやうしゅ釈尊しやくそん記きして云く末代惡世まつだいあくせに法華經ほけきやう
を弘通くつうするものを惡口罵詈あくくめり等せん人は我を一劫いっくわうが間あだせん者の罪つみにも百
千万億倍せんまんすぎたるべしと・とかせ給たまへり、而しかるを今の日本国にほんこくの国主こくしゅ・万民ばんみん
等・雅意にまかせて父母ふぼ・宿世すくせの敵かたきよりもいたくにくみ謀反さつがい・殺害の者よ

りもつよくせめぬるは現身げんしんにも大地だいちわれて入り天雷も身をさかざるは不審ふしんなり、日蓮にちれんが法華經ほけきょうの行者ぎょうじやにてあらざるか・もししからばを・をきになげかし、今生こんじやうには万人ばんにんに・せめられて片時かたときもやすからず後生ごしやうには惡道あくどうに墮だん事あさましとも申もうすばかりなし、又日蓮にちれん・法華經ほけきょうの行者ぎょうじやならずばいかなる者の一乗いちじやうの持者じしやにてはあるべきぞ、法然ほうねんが法華經ほけきょうをなげすてよ善導ぜんどうがせんちゆうむいつ千中無一・道綽どうしやくが未有一人得者みういちにんとくしやと申もうすが法華經ほけきょうの行者ぎょうじやにて候か、又弘法こうぼうだいしいわほけきやう大師だいしの云く法華經ほけきやうを行ずるは戲論けろんなりとかかれたるが法華經ほけきやうの行者ぎやうじやなるべきか、經文きやうもんには能持是經のうじ・能說此經なんどこそとかれて候へよくとくと申もうすはいかなるぞと申もうすに於諸經しよきやう中最もつとも在其上そのかみにありと申もうして大日經だいにちきやう・華嚴經けこんきやう・涅槃經ねはんぎやう・般若經はんんにやきやう等に法華經ほけきやうはすぐれて候なりと申もうす者をこそ經文きやうもんにはほけきやう法華經ぎやうじやの行者ほうとはとかれて候へ、もし經文きやうもんのごとくならば日本國にほんこくに仏法ぶつぽうわたて七百余年でんぎやうだいし、伝教大師にちれんと日蓮にちれんとが外は一人も法華經ほけきやうの行者ぎやうじやはなきぞ

かし、いかにかにとをもうところに頭破作七分口則閉塞のなかりけるはこうそくへいそく

道理にて候いけるなり、此等は浅き罰なり但一人・二人等のことなり、日蓮にちれん

は閻浮第一の法華經の行者なり此れをそしり此れをあだむ人を結構せん人けつこう

は閻浮第一の大難にあうべし、これは日本国をふりゆるがす正嘉の大地震しょうか だいいじしん

一天を罰する文永の大慧星等なり、此等をみよ仏滅後の後・仏法を行ずるふつめつ ぶつほう

者にあだをなすといへども今のごとくの大難は一度もなきなり、南無なむ

妙法蓮華經と一切衆生にすすめたる人・一人もなし、此の徳はたれか一天いつてん

に眼を合せ四海に肩をならぶべきや。

疑つて云く設い正法の時は仏の在世に對すれば根機劣なりとも像末にこんきれつ

對すれば最上の上機なり、いかでか正法の始に法華經をば用いざるべきもち

・随つて馬鳴・竜樹・提婆・無著等も正法一千年の内にこそ出現せさせしゅつげん

給へ、天親菩薩は千部の論師・法華論を造りて諸經の中第一の義を存すそん

真諦三蔵の相伝に云く月支に法華經を弘通せる家・五十余家・天親は其の
一也と已上・正法なり、像法に入つては天台大師・像法の半に漢土に
出現して玄と文と止との三十巻を造りて法華經の淵底を極めたり、像法の
末に伝教大師・日本に出現して天台大師の円慧・円定の二法を我が朝に
弘通せしむるのみならず円頓の大戒場を叡山に建立して日本一州皆同じく
円戒の地になして上一人より下万民まで延暦寺を師範と仰がせ給う豈に
像法の時・法華經の広宣流布にあらずや、答えて云く如来の教法は必ず機
に随うという事は世間の学者の存知なり、しかれども仏教はしからず・
上根・上智の人のために必ず大法を説くならば初成道の時なんぞ法華經
をとき給はざる正法の先五百年に大乘經を弘通すべし、有縁の人に大法
を説かせ給うならば淨飯大王・摩耶夫人に觀仏三昧經・摩耶經をとくべか
らず、無縁の惡人謗法の者に秘法をあたえずば覺徳比丘は無量の破戒の者

に涅槃經ねはんぎょうをさづくべからず、不輕菩薩ふぎょうぼさつは誹謗ひぼうの四衆ししゅうに向つていかに法華經ほけきぎょうをば弘通くつうせさせ給たまいしぞ、されば機きに随したがつて法を説くと申もうすは大なる僻見びやくけんなり。

問いわうて云りゅうじゆく竜樹せじん・世親等ほけきぎょうは法華經じつぎの実義のべをば宣たまべ給たまわずや、答いわえて云くく宣たまべ給たまはず、問いわうて云く何なる教のべをか宣たまべ給たまいし、答いわえて云く華嚴けこん・方等ほうとう・般若はんや・大日經等だいにちぎょうの権大乘こんだいじよう・顯密けんみつの諸經しよきぎょうをのべさせ給たまいて法華經ほけきぎょうの法門ほうもんをば宣のべべさせ給たまはず、問いわうて云く何をもつてこれをしるや答いわえて云く竜樹りゅうじゆほさつしよぞうの所造しよぞうの論ろん・三十万偈げしか而かんどにほんれども尽そして漢土かんど日本にほんにわたらざれば其その心しりがたしといえども漢土かんどにわたれる十住毘婆娑論じゅうじゅうびしやろん・中論ちゅうろん・大論等だいろんをもつて天竺てんじくの論ろんをも比知こして此これを知るなり。

疑うたがいつて云く天竺てんじくに残る論ろんの中にわたれる論ろんよりも勝すぐれたる論ろんやあるらん、答いわえて云く竜樹りゅうじゆ菩薩ぼさつの事ひそかは私もうに申しるすべからず仏たま・記めつこし給たまう我が滅後めつこに

りゅうじゅぼさつ 竜樹菩薩と申す人・南天竺てんじくに出ずべし彼の人の所詮しよせんは中論あという論に有る

べしと伝記たまたし給う、随したがつて竜樹菩薩りゅうじゅぼさつの流天竺てんじくに七十家あり七十人ともに

大論師ろんしなり、彼の七十家の人人ひとびとは皆中論みなを本とす中論四卷・二十七品の肝心かんじん

は因縁いんねんしししょう所生法の四句の偈げなり、此の四句の偈げは華嚴けこん・般若等はんによの四教三諦しきようさんたいの

法門ほうもんなりいまだ法華開会の三諦ほっけかいえをば宣さんたいべ給のべはず。

疑うたがいつて云く汝いわがごとくに料簡りようけんせる人ありや、答えて云く天台云く「中

論もつを以て相比すること莫なかれ」又云く「天親てんじん・竜樹りゅうじゅ内鑒冷然しかして外は時の

宜よろしきに適かなう」等云云、妙楽みょうらく云く「破会を論ぜば未いまだ法華ほっけに若しかざる故に」

云云、從義いわの云く「竜樹りゅうじゅ・天親てんじん未いまだ天台てんだいに若しかず」云云、問うて云く唐とうの

末ふくうさんぞうに不空三蔵一卷の論をわたす其その名を菩提心論ぼだいしんろんとなづく竜樹菩薩りゅうじゅぼさつの造な

り云云、弘法大師こうぼうだいし云く「此の論は竜猛りゅうもう千部だいちかんじんの中の第一肝心の論」と云云、

答えて云く此の論いわ一部七丁あり竜猛りゅうもうの言ならぬ事处处しよしよに多し故に目錄ゆえにも

・或は竜猛・或は不空と両方にいまだ事定まらず、其の上此の論文は一代
を括れる論にもあらず荒量なる事此れ多し、先ず唯真言法中の肝心の文あ
やまりなり其の故は文証・現証ある法華經の即身成仏をばなきになして
文証も現証もあとかたもなき真言經に即身成仏を立て候又唯という唯の
一字は第一のあやまりなり、事のていを見るに不空三藏の私につくりて候
を時の人にをもくせせんがために事を竜猛によせたるか其の上不空三藏
は誤る事かずをほし所謂法華經の觀智の儀軌に寿量品を阿弥陀仏とかけ
る眼の前の大僻見陀羅尼品を神力品の次にをける属累品を經末に下せる
此等はいうかひなし、さるかともれば天台の大乗戒を盗んで代宗皇帝に
宣旨を申し五台山の五寺に立てたり、而も又真言の教相には天台宗をす
べしといえりかたがた誑惑の事どもなり、他人の訳ならば用ゆる事もあり
なん此の人の訳せる經論は信ぜられず、総じて月支より漢土に經論をわ

たす人・旧訳・新訳に一百八十六人なり羅什三蔵一人を除いてはいづれの
人人も・らざるはなし、其の中に不空三蔵は殊に誤多き上誑惑の心顯な
り、疑つて云く何をもつて知るぞや羅什三蔵より外の人人はあやまりな
りとは汝が禪宗・念仏・真言等の七宗を破るのみならず漢土・日本にわ
たる一切の訳者を用いざるかいかん、答えて云く此の事は余が第一の秘事
なり委細には向つて問うべし、但しすこし申すべし羅什三蔵の云く我漢土
の一切経を見るに皆梵語のごとくならずいかでか此の事を顯すべき、但し
一の大願あり身を不浄になして妻を帶すべし舌計り清浄になして仏法に
妄語せじ我死なば必やくべし焼かん時舌焼けるならば我が経をすてよと常
に高座にしてとかせ給しなり、上一人より下万民にいたるまで願じて云く
願くは羅什三蔵より後に死せんと、終に死し給う後焼きたてまつりしかば
不浄の身は皆灰となりぬ御舌計り火中に青蓮華生て其の上にある五色の

こうみょう

光明を放ちて夜は昼のごとく、昼は日輪の御光をうばい給いき、さてこそ

いっさい

一切の訳人の経経は軽くなりて羅什三蔵の訳し給える経経殊に法華経

かんど

は漢土にやすやすとひろまり給いしか。

うたがい

疑つて云く羅什已前はしかるべし已後の善無畏不空・等は如何、答え

いわ

て云く已後なりとも訳者の舌の焼けるをば・ありけりとしるべしされば

にほんこく

日本国に法相宗のはやりたりしを伝教大師責めさせ給いしには羅什三蔵

げんじょう

は舌焼けず玄奘・慈恩は舌焼けぬとせめさせ給いしかば桓武天王は道理と

てんだいほつけしゅう

・をばして天台法華宗へはうつらせ給いしなり、涅槃経の第三・第九等を

ぶつぽう

みまいらすれば我が仏法は月支より他国へわたらん時、多くの謬誤出来し

しゅじょう

て衆生の得道うすかるべしととかれて候、されば妙楽大師は「並びに進退

なん

は人に在り何ぞ聖旨に関らん」とこそあそばされて候へ、今の人人いかに

こしやう

経のままに後世をねがうともあやまれる経経のままにねがはば得道も・

あるべからず、しかればとて仏の御とがにはあらじとかかれて候、ぶつきよう 仏教を
習ふ法には大小・権実・顕密はさてをくこれこそ第一の大事にては候ら
め。だいしよう こんじつ けんみつ だいいち だいじ そうろう

うたがい いわ しようほう 疑つて云く正法 一千年の論師の内心には法華經の実義の顕密の諸經

に超過してあるよしはしろしめしながら外には宣説せずして但権大乘計り
ちようか せんぜつ こんだいじようばか

を宣べさせ給うことはしかるべしとはをぼへねども其の義はすこしきこえ
のべ たま そ

候いぬ、像法一千年の半に天台智者大師出現して題目の妙法蓮華經の
そうほう なかば てんだいちしやだいしししゅつげん だいもく みようほうれんげきよう

五字を玄義十卷・一千枚にかきつくし、文句十卷には始め如是我聞より終
ごじ げんぎ もんく によげがもん

り作礼而去にいたるまで一字・一句に因縁・約教・本・迹・觀心の四の釈
さらいにこ いっく いんねん やつきよう かんじん

をならべて又一千枚に尽し給う已上玄義・文句の二十卷には一切經の心を
たま げんぎ もんく いっさいきよう

江河として法華經を大海にたとえ十方界の仏法の露一☆も漏さず
こうか ほけきよう たいかい じゅうぽうかい ぶつぽう つゆ しずく も

妙法蓮華經の大海に入れさせ給いぬ、其の上天堂の大論の諸義・一点もも
みようほうれんげきよう たいかい たまい そ てんじく だいろん しょ

らさず漢土・南北の十師の義破すべきをばこれをはし取るべきをば此れを
用う、其の上止観十巻を注して一代の観門を一念にすべ十界の依正を三千
につづめたり、此の書の文体は遠くは月支・一千年の間の論師にも超え近
くは戸那・五百年の大師の釈にも勝れたり、故に三論宗の吉蔵大師・南北
一百余人の先達と長者らをすすめて天台大師の講経を聞けと勧むる状に
云く「千年の興五百の実復今日に在り乃至南岳の叡聖・天台の明哲・昔は
三業住持し今は二尊に紹係す豈止甘呂を震旦に灑ぐのみならん亦当に法
鼓を天竺に震うべし、生知の妙悟魏晉以来典籍風謡実に関連無し乃至禅衆
一百余の僧と共に智者大師を奉請す」等云云、修南山の道宣律師天台大師
を讃歎して云く「法華を照了すること高輝の幽谷に臨むが若く摩訶衍を
説くこと長風の太虚に遊ぶに似たり仮令文字の師・千羣万衆ありて彼の妙
弁を数め尋ぬとも能く窮むる者無し、乃至義月を指すに同じ乃至宗一極に

歸す」云云、華嚴宗の法蔵大師・天台を讀して云く「思禪師智者等の如き
神異に感通して迹登位に参わる靈山の聴法憶い今に在り」等云云、真言宗
の不空三蔵・含光法師等師弟共に真言宗をすてて天台大師に帰伏する
ものがたり
物語に云く高僧伝に云く「不空三蔵と親たり天竺に遊びたるに彼に僧有り
問うて曰く大唐に天台の迹教有り最も邪正を簡び偏円を曉むるに堪えたり
能く之を訳して將に此土に至らしむ可きや」等云云、此の物語は含光が
妙樂大師にかたり給しなり、妙樂大師・此の物語を聞いて云く「豈中国
に法を失いて之を四維に求むるに非ずや而も此方識ること有る者少し魯人
の如きのみ」等云云、身毒国の中に天台三十卷のごとくなる大論あるなら
ば南天の僧いかでか漢土の天台の釈をねがうべき、これあに像法の中に
法華經の実義顯れて南閻浮提に広宣流布するにあらずや、答えて云く正法
一千年・像法の前四百年・已上仏滅後一千四百余年にいまだ論師の弘通し

たま 給はざる 一代超過の円定・円慧を漢土に弘通し給うのみならず其の声月氏
までもきこえぬ、法華經の広宣流布にはにたれどもいまだ円頓の戒壇を立
てられず 小乗の威儀をもつて円の慧定に切りつけるはすこし便なきに
たり、例せば日輪の蝕するがごとし月輪のかけたるに似たり、何にいわう
や天台大師の御時は大集經の読誦多聞堅固の時にあひあていまだ広宣
流布の時にあらず。

問うて云く伝教大師は日本国の土なり桓武の御宇に出世して欽明より二
百余年が間の邪義をなんじやぶり天台大師の円慧・円定をせんじ給うのみ
ならず、鑒真和尚の弘通せし日本小乗の三処の戒壇をなんじやぶり叡山
に円頓の大乗別受戒を建立せり、此の大事は仏滅後・一千八百年が間の
身毒・尸那・扶桑乃至一閻浮提第一の奇事なり、内証は竜樹・天台等に
は・或は劣るにもや・或は同じくもやあるらん、仏法の人をすべて一法と

なせる事は竜樹・天親にもこえ南岳・天台にも・すぐれて見えさせ給うな
り、総じては如来御入滅の後・一千八百年が間・此の二人こそ法華經の
行者にてはをはすれ、故に秀句に云く「經に云く若し須弥を接つて他方無
数の仏土に擲げ置かんも亦未だこれ難しとせず乃至若し仏の滅度惡世の中
に於て能く此の經を説かん是則ちこれ難し云云、此經を釈して云く淺は易
く深は難しとは釈迦の所判なり淺を去て深に就くは丈夫の心なり天台大師
は釈に信順し法華宗を助けて震旦に敷揚し叡山の一家は天台に相承し
法華宗を助けて日本に弘通す」云云、釈の心は賢劫第九の滅・人壽百歳の
時より如来在世五十年滅後・一千八百余年が中間に高さ十六万八千由旬六
百六十二万里の金山を有人五尺の小身の手をもつて方一寸・二寸等の
瓦礫をにぎりて一丁二丁までなぐるがごとく雀鳥のとぶよりもはやく
鉄圍山の外へなぐる者はありとも法華經を仏のとかせ給いしやうに説かん

人は末法まつぽうにはまれなるべし、天台大師・伝教大師こそ仏説ぶつせつに相似そうじしてとか
せ給たまいたる人にてをはすれとなり、天竺てんじくの論師ろんしはいまだ法華經ほけきやうへゆきつき
給たまはず漢土かんどの天台てんだい已前いぜんの人師にんしは・或あるはすぎ・或あるはたらず、慈恩じおん・法蔵ほうぞう善無畏ぜんむい
等は東を西といひ天を地と申せる人人ひとびとなり、此等これらは伝教大師でんぎやうだいしの自讃じざんにはあ
らず、去る延暦いぬ えんりやく二十一年正月十九日高雄山に桓武皇帝行幸なりて六宗ろくしゆう
七な大寺なだいじの碩徳せきとくたる善議ぜんぎ・勝猷しやうぎ・奉基ほうき・寵忍ちゆうにん・賢玉けんぎよ・安福あんふく・勤操こんそう
修円しゆえん・慈誥じこ・玄耀げんよう・歳光さいこう・道証どうしやう・光証こうしやう・觀敏等くあんびんの十有余人、最澄法師さいちやうほしと召よ
し合せられて宗論しゆろんありしに・或あるは一言に舌を巻いて二言三言に及ばず皆一
同どうに頭こづへをかたづけ手をあざう、三論さんろんの二蔵・三時・三転法輪てんぽうりん・法相ほつそうの三時
・五性・華嚴宗けこんしゆうの四教しきやう・五教・根本枝末こんぽん・六相・十玄・皆大綱みなたいこうをやぶらる、
例せば大屋おほいえの棟梁とうりやうのをれたるがごとし十大徳だいたくの慢幢まんどうも倒れにき、爾その時
天子大に驚かせ給たまいて同二十九日に弘世・国道の両吏を勅使として重かさねて

七寺六宗に仰せ下れしかば各各帰伏の状を載せて云く「竊に天台の玄疏を
見れば総じて釈迦一代の教を括つて悉く其の趣を顕すに通ぜざる所無く
ひとり諸宗に逾え殊に一道を示す其の中の所説甚深の妙理なり七箇の大寺
六宗の学生昔より未だ聞かざる所曾て未だ見ざる所なり三論・法相久年の
諍い渙焉として氷の如く釈け照然として既に明かに猶雲霧を披いて三光を
見るがごとし聖徳の弘化より以降今に二百余年の間講ずる所の経論其の
数多く彼此理を争えども其の疑未だ解けず、而るに此の最妙の円宗未だ
闡揚せず蓋し以て此の間の羣生未だ円味に応わざるか、伏して惟れば聖朝
久しく如来の付を受け深く純円の機を結び一妙の義理始めて乃ち興顕し
六宗の学者初めて至極を悟る此の界の含靈今より後悉く妙円の船に載り
早く彼岸に済る事を得ると謂いつべし、乃至善議等牽れて休運に逢い乃ち
奇詞を閱す深期に非ざるよりは何ぞ聖世に託せんや」等云云、彼の漢土の

かじよう

嘉祥等は百余人をあつめて天台大師を聖人と定めたり、今日本の七寺二百

余人は伝教大師を聖人とがうしたてまつる、仏の滅後二千余年に及んで

りようこく しょうにん しゅつげん そ てんだいだいし みく えんどんだいかい えいざん

両国に聖人・二人出現せり其の上天台大師の未弘の円頓大戒を叡山に

こんりゅう たま こ あにぞうほう ほけきようこうせん る ふ えん

建立し給う此れ豈像法の末に法華經広宣流布するにあらずや、答えて云く

かしよう あなん ぐつう だいほう めみよう りゅうじゅ だいばてんじん ぐつう いわ

迦葉・阿難等の弘通せざる大法を馬鳴・竜樹・提婆天親等の弘通せる事前

の難に踰れたり、又竜樹・天親等の流布し残し給える大天天台大師の弘通

なん あらわ りゅうじゅ てんじん る ふ たま だいほうてんだいだいし ぐつう

し事又難にあらはれぬ、又天台智者大師の弘通し給はざる円頓の大戒を

でんぎようだいし こんりゅう たま けんねん ただ ふしん えんどん だいかい と

伝教大師の建立せさせ給う事又顯然なり、但し詮と不審なる事は仏は説き

たま ぶつめつ かしよう あなん めみよう りゅうじゅ むちやく てんじんないし てんだい

尽し給えども仏滅後に迦葉・阿難・馬鳴・竜樹・無著・天親乃至・天台

でんぎよう ぐつう じんみつ しょうほうきようもん げんぜん

伝教のいまだ弘通しましまさぬ最大の深密の正法經文の面に現前なり、

じんぼう まつぼう えんぶだい こうせん る ふ ふしん

此の深法・今末法の始五五百歳に一閻浮提に広宣流布すべきやの事不審

きわま

極り無きなり。

問ういかなる秘法ぞ先ず名をきき次に義をきかんとをもう此の事もし
じつじ 実事ならば釈尊の二度世に出現し給うか上行菩薩の重ねて涌出せるかい
そぎいそぎ慈悲をたれられよ、彼の玄奘三蔵は六生を経て月氏に入りて十
ほつけいちじょう 九年・法華一乗は方便教・小乗・阿含経は真実教、不空三蔵は身毒に返
じゅうりょうほん りて寿命品を阿弥陀仏とかかれたり、此等は東を西という日を月とあやま
てり身を苦めてなにかせん・心に染てようなし、幸い我等末法に生れて一
さんぎ 歩をあゆまずして三祇をこゑ頭を虎にかわずして無見頂相をゑん、答えて
いわ 云く此の法門を申さん事は経文に候へばやすかるべし但し此の法門には先
だいじ ず三の大事あり大海は広けれども死骸をとどめず大地は厚けれども不孝の
ぶつぽう 者をば載せず、仏法には五逆をたすけ不孝をばすくう但し誹謗一闡提の者
だいいち 持戒にして第一なるをばゆるされず、此の三のわざはひとは所謂念仏宗と
ぜんしゅう 禪宗と真言宗となり、一には念仏宗は日本国に充満して四衆の口あそ
ねんぶつしゅう ねんぶつしゅう にほんこく じゅうまん ししゅう

びとす、二に禪宗ぜんしゅうは三衣一鉢さんねいちぱつの大慢だいまんの比丘びくの四海しかいに充満じゅうまんして一天いつてんの明導めいどうと・をもへり、三に真言宗しんこんしゅうは又彼等かれらの二宗にそうにはにるべくもなし叡山えいざん・東寺とうじ・七寺しちじ・園城おんじょう・或官主あるかんしゅ・或は御室おむろ・或は長吏あたるちやうり・或は検校けんぎやうなりかの内侍所ないじどころの☆☆神鏡みかがみじんかい燼灰だいにちによらいとなりしかども大日如来だい にちによらいの宝印くよくを仏鏡ほとけがたとたのみ宝剣ほうけん・西海しんじんに入りしかども五大尊こくてきをもつて国敵こくてきを切らんと思へり、此等これらの堅固けんこの信心しんじんは設たといい劫石たといはひすらぐとも・かたぶくべしとはみへず大地だいちは反覆はんぷくすとも疑心うたがいをこりがたし、彼の天台大師てんだいだいしの南北なんぽくをせめ給たまひいし時も此の宗しんはいまだわたらず此の伝でん教大師ぎょうだいしの六宗ろくしゅうをしゑたげ給たまひいし時ももれぬ、かたがたの強敵こうてきをまぬがれてかへつて大法だいはうをかすめ失うしなう、其その上传でんぎやう教大師ぎょうだいしの御弟子おんでしじかくだいし慈覚大師じかくだいし・此の宗しんをとりたてて叡山えいざんの天台宗てんだいしゅうをかすめをとして一向いっこう真言宗しんこんしゅうになししかば此の人には誰の人か敵をなすべき、かかる僻見びやくけんのたよりをえて弘法大師こうぼうだいしの邪義じゃぎをもとがむる人もなし、安然和尚あんねんわじやうすこし弘法こうぼうを難なん

ぜんとせしかどもただけこんしゅう只華嚴宗のところ計りとがむるににてかへて法華經をば
大日經に對して沈めはてぬ、ただ世間のたて入の者のごとし。

問うて云く此の三宗の謬みょうごい☆如何答えて云く淨土宗は齊の世に曇鸞法師と
申す者あり本は三論宗の人竜樹菩薩の十住毘婆娑論を見て難行道易行道

を立てたり、道綽どうしゆく禪師という者あり唐の世の者本は涅槃經をかうじけるが
曇鸞法師が淨土にうつる筆を見て涅槃經をすて淨土にうつて聖道・淨土

二門を立てたり、又道綽が弟子に善導という者あり雜行・正行を立つ、
日本国に末法に入つて二百余年・後鳥羽院の御宇に法然というものあり

一切の道俗をすすめて云く仏法は時機を本とす法華經・大日經・天台真言
等の八宗・九宗一代の大小・顯密・權実等の諸宗等は上根・上智の

正像二千年の機のためなり、末法に入りてはいかに功をなして行ずるとも
其の益あるべからず、其上・弥陀念仏にまじへて行ずるならば念仏も

おうじょう 往生すべからず此れわたくしに申すにはあらず 竜樹菩薩・曇鸞法師は
なんぎょうどう 難行道となづけ、道綽は未有一人得者ときらひ善導は千中無一とさだめ
これら たり、此等是他宗なれば御不審も・あるべし、慧心・先徳にすぎさせ給へ
てんだい 天台・真言の智者は末代にをはすべきか彼の 往生要集には顕密の教法
は予が死生をはなるべき法にはあらず、又三論の永観が十因等のみよされ
ほつけ ば法華・真言等をすてて一向に念仏せば十即十生・百即百生とす
えいざん めければ、叡山・東寺・園城・七寺等始めは諍論するやうなれども、
おうじょうようしゅう おうじょうようしゅう 往生要集の序の詞・道理かとみへければ顕真座主落ちさせ給いて法然が
でし 弟子となる、其の上設い法然が弟子とならぬ人々も弥陀念仏は他仏に
べくもなく口ずさみとし心よせにをもひければ日本国・皆一同に法然房の
でし 弟子と見へけり、此の五十年が間・一天四海一人もなく法然が弟子となる
ほうねん 法然が弟子となりぬれば日本国一人もなく謗法の者となりぬ、譬へば千人

の子が一同に一人の親を殺害せば千人共に五逆の者なり一人阿鼻に堕ちな
ば余人堕ちざるべしや、結句は法然・流罪をあだみて悪霊となつて我並び
に弟子等をとがせし国主山寺の僧等が身に入つて・或は謀反を・をこし
・或は悪事をなして皆関東にほろぼされぬ、わづかにのこれる叡山・東寺
等の諸僧は俗男・俗女にあなづらるること猿猴の人にならば・俘囚が
童子に蔑如せらるるがごとし、禅宗は又此の便を得て持斎等となつて人
の眼を迷かし・たつとげなる気色なれば・いかに・ひがほうもんを・いる
くるへども失とも・をぼへず、禅宗と申す宗は教外別伝と申して釈尊の
一切経の外に迦葉尊者にひそかにささやかせ給へり、されば禅宗をしら
ずして一切経を習うものは、犬の雷をかむがごとし、猿の月の影をとる
にいたり云云、此の故に日本国の中に不孝にして父母にすてられ無礼なる
故に、主君にかんどうせられ・あるいは若なる法師等の学文にもものうき遊

女のものぐるわしき本性に叶る邪法なるゆへに皆一同に持齋になりて国の

ひやくせい

百姓をくらう蝗虫となれり、しかれば天は天眼をいからかし地神は身をふ

るう、真言宗と申すは上の二のわざはひには・にるべくもなき大僻見な

りあらあら此れを申すべし、所謂大唐の玄宗皇帝の御宇に善無畏三蔵

金剛智三蔵・不空三蔵・大日経・金剛頂経・蘇悉地経を月支よりわたす、

此の三経の説相分明なり其の極理を尋めれば会二破二の一乗其の相を論

ずれば印と真言と計りなり、尚華嚴・般若の三一相對の一乗にも及ばず

天台宗の爾前の別円程もなし但蔵通二教を面とするを善無畏三蔵をもはく

此の経文をあらわにいゐ出す程ならば華嚴・法相にもをこつかれ天台宗

にもわらはれなん大事として月支よりは持ち来りぬ・さてもだせば本意に

あらずとやをもひけん、天台宗の中に一行禪師という僻人一人ありこれ

をかたらひて漢土の法門をかたらせけり、一行阿闍梨うちぬかれて三論法相

・華嚴等をあらあらかたるのみならず天台宗の立てられけるやうを申しければ善無畏をもはく天台宗は天然にして聞きしにもなをうちすぐれてかさむべきやうもなかりければ善無畏一行をうちぬひて云く和僧は漢土にはこざかしき者にてありけり、天台宗は神妙の宗なり今真言宗の天台宗にかさむところは印と真言と計りなりといふれば一行さもやと・をもひければ善無畏三蔵一行にかたて云く、天台大師の法華經に疏をつくらせ給へるごとく大日經の疏を造りて真言を弘通せんとをもう汝かきなんやと・いふければ一行が云くやすう候、但しいかやうにかき候べきぞ天台宗はにくき宗なり諸宗は我も我烽にあらそいをなせども一切に叶わざる事一あり、所謂法華經の序分に無量義經と申す經をもつて前四十余年の經經をば其の門を打ちふさぎ候いぬ、法華經の法師品・神力品をもつて後の經經をば又ふさがせぬ肩をならぶ經經をば今説の文をもつてせめ候大日經を

ば三説の中にはいづくにかをき候べきと問ひければ爾その時に善無畏三蔵ぜんむいさんそうのおおいたくらたくらいわだいにちきよう

大に巧んで云く大日經に住心品じゅうしんほんという品あり無量義經むりょうぎきようの四十余年よんじゅうよねんの

きようきよう

經經を打ちはらうがごとし、大日經の入漫陀羅已下の諸品いかは漢土かんどにては

ほけきよう

だいにちきよう

てんじく

いつきよう

しゃかぶつ

法華經・大日經とて二本なれども天竺にては一經いつきようのごとし、釈迦しゃか仏は

しゃりほつみろく

だいにちきよう

ほけきよう

しんこん

舍利弗弥勒に向つて大日經を法華經となづけて印と真言とをすてて但理

ばか

るじゅうさんそうこ

てんだいだいしこ

だいにちによらい

計りをとけるを羅什三蔵此れをわたす天台大師此れをみる、大日如来は

ほけきよう

だいにちきよう

こんごうさつた

たまこ

だいにちきよう

法華經を大日經となづけて金剛薩☆に向つてとかせ給う此れを大日經と

なづく我まのあたり天竺てんじくにしてこれを見る、されば汝なんじがかくべきやうは

だいにちきよう

ほけきよう

いちみ

なんじ

大日經と法華經とをば水と乳とのやうに一味となすべし、もししからば

だいにちきよう

いこんとう

みなほけきよう

い

さ

て

大日經は已今当の三説をば皆法華經のごとくうちをとすべし、さて印と

しんこん

い

そうこん

そうおう

ひほう

三密

真言とは心法いちねんさんぜんの一念三千に莊嚴するならば三密相応そうおうの秘法ひほうなるべし、三密

相応する程ならば天台宗は意密なり真言は甲なる將軍しょうぐんの甲鎧よろいを帶たいして

てんだいしゅう いみつ しんこん しょうぐん よろい たい

きゆうせん

弓箭を横たへ太刀を腰にはけるがごとし、天台宗は意密計りなれば甲な

る將軍の赤裸なるがごとくならんといふければ、一行阿闍梨は此のやうに

かきけり、漢土三百六十箇国には此の事を知る人なかりけるかのあひだ始

めには勝劣を諍論しけれども善無畏等は人がらは重し天台宗の人人は輕

かりけり、又天台大師ほどの智ある者もなかりければ但日日に真言宗にな

りてさてやみにけり、年ひさしくなればいよいよ真言の誑惑の根ふかくか

くれて候いけり、日本国の伝教大師・漢土にわたりて天台宗をわたし給う

ついでに真言宗をならべわたす、天台宗を日本の皇帝にさづけ真言宗を

六宗の大徳にならばせ給う、但し六宗と天台宗の勝劣は入唐已前に定

めさせ給う、入唐已後には円頓の戒場を立てう立てじの論の計りなかりけ

るかのあひだ敵多くしては戒場の一事成りがたしとやをぼしめしけん、又

末法にせめさせんとやをぼしけん皇帝の御前にしても論ぜさせ給はず弟子

等にもはかばかしくかたらせ給はず、但し依憑集と申す一卷の秘書あり七
宗の人人ひとびとの天台てんだいに落ちたるやうをかかれて候文なり、かの文の序に真言宗しんこんしゅう
のおおわくの誑惑一筆みへて候弘法大師は同じき延暦年中に御入唐青竜寺の慧果に
値あい給たまいて真言宗しんこんしゅうをならはせ給へり、御帰朝の後・一代の勝劣しょうれつを判じ給たまい
けるに第一真言・第二・華嚴・第三法華とかかれて候、此の大師は世間の
ひとびと人人もつてのほかにも重ずる人なり、但し仏法の事は申すにをそれあれども
もつてのほかにあらき事どもはんべり、此の事をあらあら・かんがへたる
に漢土かんとにわたらせ給たまいては但真言しんこんの事相の印・真言計り習ならいつたえて其の
義理ぎりをばくはしくもさはぐらせ給たまはざりけるほどに日本にほんにわたりて後大に
世間せけんを見れば天台宗てんだいしゅうもつてのほかにかさみたりければ、我が重ずる真言宗しんこんしゅう
ひろめがたかりけるかのゆへに本日本国にほんこくにして習ならいたりし華嚴宗けこんしゅうをとりい
だして法華經にまされるよしを申しけり、それも常の華嚴宗に申すやうに

申すならば人信ずまじとやをぼしめしけんすこしいろをかえて此れは
大日經だいにちきようりゅうもうほさつ 竜猛菩薩りゅうもうぼさつの菩提心論ぼだいしんろんぜんむい 善無畏等ぜんむいの実義じつぎなりと大妄語だうごをひきそへたり
けれども天台宗てんだいしゅうの人人ひとびといたうとがめ申す事なし。

問うて云く弘法大師こうぼうだいしの十住心論じゅうじゅう・秘藏宝鑰ひそうほうやく二教論にけうろんに云く「此くの如き
乗乗じようじようじじよう 自乗じじように名を得れども後に望めば戲論けろんと作す」又云く「無明の辺域むみょうへんいきに

して明の分位あらに非ず」又云く「第四熟蘇味じゆくそみなり」又云く「震旦しんたんの人師等にんし諍つ
て醍醐だいごを盗んで各自宗じしゅうに名く」等云云、此等の釈しゃくの心如何いかん、答えて云く予

此の釈しゃくにをどろいて一切經いっさいきよう並びに大日の三部經さんぶきよう等をひらきみるに華嚴經けこんきようと
大日經だいにちきようとに對すれば法華經ほけきよう戲論けろん・六波羅蜜經ろくはらみつきように對すれば盜人守護經ぬすびとしゆこに對す

れば無明むみょうの辺域へんいきと申す經文きやうもんは一字・一句も候はず此の事はいとかなき事
なれども此の三四百余年に日本國にほんこくのそこばくの智者ちしやどもの用いさせ給へば

定めてゆへあるかともひぬべし、しばらくいとやすきひが事をあげて余事よじ

のはかなき事をしらすべし、法華經を醍醐味と称することは陳隋の代なり
ろくはらみつきよう とうろくはらみつきよう
六波羅蜜經は唐の半に般若三藏此れをわたす、六波羅蜜經の醍醐は陳隋の
世には・わたりてあらばこそ天台大師は真言の醍醐をば盗ませ給はめ、傍例
にほん
あり日本の得一が云く天台大師は深密經の三時教をやぶる三寸の舌をもつ
て五尺の身をたつべしとののしりしを伝教大師此れをただして云く深密經
は唐の始玄奘これをわたす天台は陳隋に人・智者御入滅の後・数箇年あ
つて深密經わたれり、死して已後にわたれる經をば・いかでか破り給うべ
きとせめさせ給いて候いしかば得一はつまるのみならず舌八にさけて死し
候いぬ、これは彼にはにるべくもなき悪口なり、華嚴の法蔵三論の嘉祥法相
の玄奘・天台等・乃至南北の諸師・後漢より已下の三藏・人師を皆をさえ
ぬすびと
て盗人とかかれて候なり、其の上又法華經を醍醐と称することは天台等の
私の言にはあらず、仏涅槃經に法華經を醍醐と・とかせ給い天親菩薩は

ほけきよう　ねはんぎよう　だいご
法華經・涅槃經を醍醐とかかれて候、
りゆうじゅぼさつ　ほけきよう
竜樹菩薩は法華經を妙藥となづけさ
せ給う、
たま　ほけきよう　だいご　もう　ぬすびと　しゃか　たほう　じゅつぼう
されば法華經等を醍醐と申す人盗人ならば釈迦・多宝・十方の
しよぶつりゆうじゅ　てんじん　ぬすびと　こうぼう　もんじん　ないしにほん　とうじ
諸仏竜樹・天親等は盗人にてをはすべきか、
しんこんし　いかん　こくびやく　わきまえ
眞言師如何に自眼の黒白はつたなくして弁へずとも他の鏡をもつて自禍
をしれ、
ほけきよう　けろん　だいにかきよう　こんごうちようきよう
此の外法華經を戲論の法とかかるること大日經・金剛頂經等に
たしかなる經文をいだされよ、
きようもん　たといかがれ　きようぎよう　ほけきよう　けろん
設い彼彼の經經に法華經を戲論ととかれ
たりとも訳者の・る事も・あるぞかしよくよく思慮のあるべかりけるか、
やくしや
こうし
孔子は九思一言・周公旦は沐には三にぎり食には三はかれけり外書のは
しゅうこうたん　ゆあみ
かなき世間の浅き事を習う人すら智人はかう候ぞかし、
せけん　なら　ちじん　びやっけん
いかにかかるあさ
ましき事はあるりけるやらん、
しょうかくぼう　しやり　ひやっけん　でんぼういん　ほんがん
かうする聖覚房が舍利講の式に云く「尊高なる者は不二摩訶衍の仏なり
ろご　さんじん　たす　あた
驢牛の三身は車を扶くこと能はず秘奥なる者は両部漫陀羅の教なり頭乗

の四法は履くつを採るに堪へず」と云云、頭乗もうの四法と申すは法相・三論・華嚴けこん・
法華ほっけの四人、驢牛ろごの三身さんじんと申すは法華・華嚴・般若・深密經じんみつの教主きようしゆの四
仏これら、此等の仏僧は真言師しんごんしに對すれば聖覺弘法しょうかくこうほうの牛飼・履物取者にもたらぬ
程の事なりとかいて候、彼の月氏がっしの大慢婆羅門だいまんばらもんは生知けんみつの博學頭密くわんみつにどう二道胸に
うかべ内外ないげの典籍てんじやく・掌たなごころににぎる、されば王臣頭おうしんこうべをかたづけ万人師範にんしと
仰あおぐあまりの慢心まんしんに世間せけんに尊崇する者は大自在天じざいてん・婆藪天ばそ・那羅延天ならえん大覺だいかく
世尊せそん此しの四聖ししやうなり我が座ざの四足しそくにせんと座ざの足あしにつくりて坐はうもんして法門ほうもんを
申しけり、當時とうじの真言師しんごんしが釈迦しゃか仏等ぶつどうの一切いっさいの仏ぶつをかきあつめて灌頂かんちやうする時
敷ふまんだらとするがごとし、禪宗ぜんしゆの法師等ほうしが云いく此この宗そうは仏ぶつの頂いただきをふむ
大法だいほうなりというがごとし、而しかるを賢愛論師けんあいろんしと申せし小僧こそうあり彼かをただすべ
きよし申せしかども王臣おうしん万民ばんみんこれをもちゐず、結句けっくは大慢だいまんが弟子等でし・檀那だんな
等もうに申しつけて無量むりやうの妄語もうごをかまへて惡口あくくちやう打擲うちちやくせしかども・すこしも命

もをしまずののしりしかば帝王・賢愛をにくみてつめさせんとし給いしほどにかへりて大慢がせめられたりしかば、大王・天に仰ぎ地に伏してなげひての給はく朕はまのあたり此の事をきひて邪見をはらしめ先王はいかに此の者にたばらされて阿鼻地獄にをはすらんと賢愛論師の御足にとりつきて悲涙させ給いしかば、賢愛の御計いとして大慢を驢にのせて五竺に面をさらし給いければいよいよ悪心盛になりて現身に無間地獄に堕ちぬ、今の世の真言と禪宗等とは此れにかわれりや、漢土の三階禪師の云く教主釈尊の法華経は第一第二階の正像の法門なり末代のためには我がつくれる普経なり法華経を今の世に行ぜん者は十方の大阿鼻獄に堕つべし、末代の根機にあたらざるゆへなりと申して、六時の礼懺・四時の坐禪・生身仏のごとくなりしかば、人多く尊みて弟子万余人ありしかどもわづかの小女の法華経をよみしに・せめられて当坐には音を失い後には大蛇になりてそ

こばくの檀那弟子並びに小女処女等をのみ食いしなり、今の善導・法然等
が千中無一の悪義もこれにて候なり、此等の三大事は・すでに久くなり候
へばいやしむべきにはあらねども申さば信ずる人もやありなん、これより
も百千万億倍・信じがたき最大の悪事はんべり、慈覚大師は伝教大師の第
三の御弟子なり・しかれども上一人より下万民にいたるまで伝教大師には
勝れてをはします人なりとをもひり、此の人真言宗と法華宗の実義を極め
させ給いて候が真言は法華経には勝れたりとかかせ給へり、而るを叡山三千
人の大衆・日本一州の学者等・一同の帰伏の義なり、弘法の門人等は大師
の法華経を華嚴経に劣るとかかせ給えるは、我がかたながらも少し強きや
うなれども、慈覚大師の釈をもつてをもうに真言宗の法華経に勝れたるこ
とは一定なり、日本国にして真言宗を法華経に勝ると立つるをば叡山こ
そ強きかたきなりぬべかりつるに慈覚をもつて三千人の口をふさぎなば

しんこんしゅう

真言宗はをもうごとし、されば東寺第一のかたうど慈覚大師にはすぐべか

らず、例せば浄土宗・禅宗は余国にてはひろまるとも日本国にしては

えんりやくじ

延暦寺のゆるされなからんには無辺劫はふとも叶うまじかりしを安然和尚

もう

と申す叡山第一の古徳・教時諍論と申す文に九宗の勝劣を立てられたる

だいいちしんこんしゅう

に第一真言宗・第二禅宗・第三天台法華宗・第四華嚴宗等云云、此の大

みようしやく

謬釈につひて禅宗は日本国に充滿して・すでに亡国とならんとはする

ほうなん ねんぶつしゅう

なり法然が念仏宗のはやりて一国を失わんとする因縁は慧心の往生要集

の序よりはじまれり、師子の身の中の虫の師子を食うと仏の記し給うはま

ことなるかなや。

でんぎようだいし にほんこく

伝教大師は日本国にして十五年が間・天台・真言等を自見せさせ給う生

みようこ

知の妙悟にて師なくしてさとらせ給いしかども、世間の不審をはらさんが

かんど わた

ために漢土に亘りて天台・真言の二宗を伝へ給いし時漢土の人人はやうや

てんだい しんこん たまい せけん ふしん かんど ひとびと

うの義ありしかども我が心には法華は真言にすぐれたりと・をぼしめしし

ゆへに真言宗の宗の名字をば削らせ給いて天台宗の止観・真言等かかせ

給う、十二年の年分得度の者二人を・をかせ給い、重ねて止観院に法華經

・金光明經・仁王經の三部を鎮護国家の三部と定めて宣旨を申し下し永

代日本国の第一の重宝・神璽・宝剑・内侍所とあがめさせ給いき、叡山第一

の座主・義真和尚・第二の座主・円澄大師までは此の義相違なし、第三の

慈覚大師・御入唐・漢土にわたりて十年が間・顯密二道の勝劣を八箇の

大徳にならひつたう、又天台宗の人人広修・惟・等にならさせ給いしか

ども心の内にをぼしけるは真言宗は天台宗には勝れたりけり、我が師

伝教大師はいまだ此の事をばくはしく習せ給わざりけり漢土に久しくもわ

たらせ給わざりける故に此の法門はあらうちに・をはしけるやと・をぼし

て日本国に帰朝し叡山東塔止観院の西に総持院と申す大講堂を立て御本尊

は金剛界の大日如来・此の御前にして大日經の善無畏の疏を本として金剛
頂經の疏七卷・蘇悉地經の疏七卷・已上十四卷をつくる、此の疏の肝心
の釈に云く「教に二種有り一は顯示教謂く三乗教なり世俗と勝義と未だ
円融せざる故に、二は秘密教謂く一乗教なり世俗と勝義と一体にして
融する故に、秘密教の中に亦二種有り一には理秘密の教諸の華嚴・般若
維摩法華・涅槃等なり但だ世俗と勝義との不二を説いて未だ真言密印の事
を説かざる故に、二には事理俱密教謂く大日教・金剛頂經・蘇悉地經等
なり亦世俗と勝義との不二を説き亦真言密印の事を説く故に」等云云、釈の
心は法華經と真言の三部との勝劣を定めさせ給うに真言の三部經と法華と
は所詮の理は同じく一念三千の法門なり、しかれども密印と真言等の事法
は法華經かけてをはず法華經は理秘密・真言の三部經は事理俱密なれば
天地雲泥なりとかかれたり、しかも此の筆は私の筆にはあらず善無畏三蔵

だいにちきよう

じよ

しやうれつふしん

の大日経だいにちきようの疏じよの心なりと・をばせどもなをなを二宗の勝劣しやうれつふしん不審ふしんにやあり

けん、はた又他人たにんの疑うたがいいをさんぜんとやをぼしけん、大師だいし覚さくの伝でんに云いわく

だいし

じよ

つく

こつ

おわ

しんちゆうひと

おもえ

だいし

じよ

「大師二経だいしの疏じよを造り功を成し已畢おわつて心中しんちゆう独り謂おもえらく此この疏じよ仏意ぶつに通つうず

るや否もや若ぶつし仏意ぶつに通つうぜざれば世に流伝るでんせじ仍よつて佛像ぶつぞうの前に安置あんちし七日

七夜深誠ぎやうきを翹企きしやうし祈請ごんしゆうを勤修きんしゆうす五日の五更ごごうに至いたつて夢ゆめらく正午しやうみに當あつて

日輪にちりんを仰あおぎ見弓みきゆうを以もつて之これを射そる其その箭日輪にちりんに當あつて日輪即にちりんそく転動さす夢覺さめて

の後深ぶつく仏意ぶつに通つう達だつせりと悟ごり後世ごしやうに伝でんうべし」等い云云ちゆうん、慈覺じかく大師だいしは本朝ほんちやう

にしては伝教でんぎやう・弘法こうぼうの両家ならを習ないきわめ異朝いちやうにしては八大德だいたく並なに南天なんてんの宝

月三蔵等さんぞうに十年が間最大だいじ事の秘法ひほうをきわめさせ給たまえる上二経じよの疏じよをつくり

了かさり重ねて本尊ほんぞんに祈請きしやうをなすに智慧ちえの矢やすでに中道ちゆうどうの日輪にちりんにあたりてうち

をどろかせ給たまい、歡喜かんきのあまりに仁明天王じんみんやうに宣旨せんじを申もうしそへさせ給たまい天台てんだい

の座主ざすを真言しんごんの官主かんしゆとなし真言しんごんの鎮護ちんこ國家こくかの三部さんぶとて今に四百余年が間

せきがくとうま

かつこう ちくい

かんむ だんぎよう

にほんこくこんりゆう

碩学せきがく稲麻のごとし渴仰かつこう竹葦ちくいに同じ、されば桓武・伝教等の日本国建立の

じとう

寺塔は一字もなく真言しんこんの寺となりぬ公家くげも武家ぶげも一同に真言師しんこんしを召して

しよう

師匠とあをぎ官をなし寺をあづけ給ふ、仏事ぶつじの木画もくえの開眼供養かいげんくようは八宗一同

だいにちぶつげん

に大日だいにちぶつげん仏眼の印・真言しんこんなり。

うたがい

疑うたがいつて云いわく法華經ほけきようを真言しんこんに勝まさると申もうす人は此の釈をばいかがせん用う

べきか又すつべきか、答う仏みらいの未来を定めて云いわく「法に依よつて人に依よらざ

りゅうじゅほさつ

れ」竜樹菩薩りゅうじゅほさつの云いわく「修多羅しゅたらに依れるは白論びやくろんなり修多羅しゅたらに依らざれば黒

てんだい

論てんだいなり」天台てんだいの云いわく「復修多羅またしゅたらと合せば録ろくして之これを用もちゆ文なく無ぎ義な無なきは信受しんじゆ

でんぎようだいしいう

すべからず」伝教大師でんぎようだいしいう云いわく「仏説ぶつせつに依憑えひようして口伝くでんを信ずること莫なれ」等云

これら きようろんしやく

云、此等の經論きようろん釈のごときんば夢を本にはすべからずただついさして

ほけきよう だいにちきよう

法華經ほけきようと大日だいにちきよう經との勝劣しょうれつを分明ふんみように説きたらん經論きようろんの文こそたいせちに

ただし

候はめ、但印・真言しんこんなくば木画もくえの像の開眼かいげんの事・此れ又をこの事なり真言しんこん

のなかりし已前いぜんには木画もくえの開眼かいげんはなかりしか、天竺てんじく・漢土かんど・日本にほんには
しんこんしゅういぜん もくえ
真言宗已前の木画の像は・或あるは行き・或あるは説法せっぽうし・或あるは御物語おんものがたりあり、印
しんこん
・真言をもて仏を供養くようせしより・このかた利生りしょうもかたがた失うせたるなり、此れ
は常ろんだんの論談ろんだんの義なり、此の一事にをひては但ただし日蓮にちれんは分明ふんみょうの証拠しょうこを余所よそに
引くべからず慈覚大師じかくだいしの御釈あおを仰いで信じて候なり。

問いうて云いく何いかにと信ぜらるるや、答いえて云いく此の夢の根源こんげんは真言しんこんは法華經ほけきょう
に勝まさると造定つくりめての御ゆめなり、此の夢吉夢じかくだいしならば慈覚大師じかくだいしの合せさせ
給たまうがごとく真言勝しんこんまさるべし、但日輪にちりんを射るとゆめにみたるは吉夢なりとい
うべきか、内典ないでん五千・七千余卷外典げてん三千余卷の中に日を射るとゆめに見て
吉夢しょうこなる証拠しょうこをうけ給たまわるべし、少少こ此れより出し申もうさん阿闍世王あじゃせは天よ
り月落るとゆめにみて耆婆大臣ぎばだいじんに合せさせ給たましかば大臣だいじん合せて云いく仏の御
入滅にゅうめつなり須拔多羅天しゅばつたらてんより日落るとゆめにみる我とあわせて云いく仏の御

にゆうめつ

入滅なり、修羅は帝釈と合戦の時まづ日月をいたてまつる、夏の桀・

いんのちゆう

殷の紂と申せし悪王は常に日をいて身をほろぼし国をやぶる、摩耶夫人は

あくおう

まやふじん

日をはらむとゆめにみて悉達太子をうませ給う、

しつたたいし

たま

かるがゆへに仏のわらわ

なをば日種という、日本国と申すは天照太神の

にほんこく

もう

てんしょうだいじん

にってん

日天にてましますゆへなり、

されば此のゆめは天照太神・伝教大師・釈迦仏・法華経をいたてまつれ

てんしょうだいじん

でんぎやうだいし

しゃかぶつ

ほけきやう

をいたてまつれ

る矢にてこそ二部の疏は候なれ、日蓮は愚癡の者なれば経論もしらず但此

じよ

にちれん

ぐち

きやうろん

をいたてまつれ

の夢をもつて法華経に真言すぐれたりと申す人は今生には

ほけきやう

しんごん

もう

こんじやう

に

国をほろぼし家を失ひ後生にはあび地獄に入るべしとはしりて候、今現証

うしないごしやう

じごく

にほんこく

もうこ

いっさい

しんごんし

じやうぶく

あるべし日本国と蒙古との合戦に一切の真言師の調伏を行ひ候へば日本か

にほんこく

もうこ

いっさい

しんごんし

じやうぶく

にほん

か

ちて候ならば真言はいみじかりけりと・おもひ候なん、但し承久の合戦

しんごん

いみじかりけりと

おもひ候なん

ただ

じやうきゆう

の合戦

にそこばくの真言師のいのり候しが調伏せられ給し権の大夫殿はかたせ

しんごんし

いのり候しが

じやうぶく

たてま

けん

の合戦

給い、後鳥羽院は隠岐の国へ御子の天子は佐渡の嶋嶋へ調伏しやりまいら

たまい

ごとばいん

おき

てんし

さど

じやうぶく

をいたてまつる

せ候いぬ、けつく 結句は野干やかんのなきの身にをうなるやうに還著げんちゃく於本人おほんにんの經文きようもんにす

こしもたがはず叡山えいざんの三千人さんぜんかまくらに・せめられて一同どうじにしたがいはて

ぬ、しかるに今はかまくらの世さかななるゆへに東寺とうじ・天台てんだい・園城おんじょう・七寺

の真言師等しんごんしと並びに自立をわすれたる法華宗ほっけしゅうの謗法ほうぼうの人人ひとびと・関東かんとうにをちく

だりて頭こづへをかたぶけひざをかがめやうやうに武士ぶしの心をとりて、諸寺しよ諸山しよざん

の別当べつどうとなり長吏ちやうりとなりて王位うしなを失あくはつし惡法あくほうをとりいだして国土こくど安穩あんのんとい

のれば、將軍家しやうぐん並びに所従しよじゆうの侍已下いかは国土こくどの安穩あんのんなるべき事なんめりと

うちをもひて有あるほどに法華經ほけきやうを失うしなう大禍ちの僧どもを用もちいらるれば国定め

てほろびなん、亡国ほいつくのかなしさ亡身しんみのなげかしさに身命しんみやうをすてて此の事を

あらわすべし、国主世こくしゅを持つべきならばあやしと・おもひてたづぬべきと

ころにただざんげんのことばのみ用もちいてやうやうのあだをなす、而しかるに

ほけきやうしゆこ ほんてん たいしやく ちちがつ してん じしん いにしえほうほう ふしぎ
法華經守護の梵天・帝釈・日月・四天地神等は古の謗法をば不思議とはを

ばせども此これをしれる人なければ一子の悪事のごとくうちゆるして、いつ
わりをろかなる時もあり又すこしつみしらする時もあり、今は謗ほう法ぼうを用もちい
たるだに不思議ふしぎなるにまれまれ諫かんぎよう曉きやうする人をかへりてあだをなす、一日二
日・一月・二月・一年・二年ならず数年に及ぶ、彼の不輕菩薩ぶきやうぼさつの杖じようもく木の難なん
に値あいしにも・すぐれ覺徳比丘かくとくびくの殺害さつがいに及びしにもこえたり、而しかる間ほんしやく梵ぼん釈しやく
の二王にちがつ・日月してん・四天しゅうせい・衆星しゅうせい・地神等やうやうにいかり度度いさめらるれど
も・いよいよあだをなすゆへに天おんはからの御計りんごくいとして隣國しやうにんの聖人しやうにんにをほせつけ
られて此これをいましめ大鬼神きじんを国に入れて人の心をたばらかし自界はんぎやく反逆はんぎやくせ
しむ、吉凶きつきようにつけて瑞大きざしなれば難多なんかるべきことわりにて仏滅後ぶつめつ・二千
二百三十余年が間いまだいでざる大長星だいちしいまだふらざる大地しゅつたいしん出来しゅつたいせ
り、漢土かんど・日本にほんに智慧ちえすぐれ才能さいのういみじき聖人しやうにんは度度たびたびありしかどもいまだ
日蓮にちれんほど法華經ほけきやうのかたうとして國土こくどに強敵かうてき多くまうけたる者なきなり、ま

づ眼前がんぜんの事をもつて日蓮にちれんは閻浮提えんぶだい第一だいいちの者としるべし、仏法ぶつぽう・日本にほんにわた
て七百余年いっさいきやう一切經は五千・七千宗は八宗・十宗智人ちじんは稻麻とうまのごとし弘通くつう
は竹葦ちくゑいにいたり、しかれども仏には阿弥陀あみだ佛諸ぶつしよ佛のみやういふ名号みやういふには弥陀みだのみやういふ名号
ほどひろまりてをはするは候はず、此のみやういふ名号みやういふを弘通くつうする人は慧心えしんは往生おうじやう
要集ようしゅうをつくる日本国にほんこく三分が一は一同の弥陀みだ念仏ねんぶつ者・永観えいかんは十因おうじやうと往生講
の式をつくる扶桑ふそう三分が二分は一同の念仏ねんぶつ者法然ほうねんせんちやくをつくる本朝ほんちやう
一同の念仏ねんぶつ者、而しかれば今の弥陀みだのみやういふ名号みやういふを唱となうる人人ひとびとは一人が弟子でしにはあら
ず、此の念仏ねんぶつと申もうすは雙觀そうかん經・觀經かんきやう・阿弥陀あみだ經の題名だいめいなり権大乘こんだいじやうきやう經の
題目だいもくの広宣流布こうせんるふするは実大乘じつだいじやうきやう經の題目だいもくの流布るふせんずる序にあらずや、心
あらん人は此これをすひしぬべし、権經こんきやう流布るふせば実經じつきやう流布るふすべし権經こんきやうの
題目だいもく流布るふせば実經じつきやうの題目だいもくも又流布るふすべし、欽明きんめいより当帝たいていにいたるまで七百
余年なむみやういまだきかずいまだ見なむず南無妙法蓮華なむみやうほうれんげきやう經と唱となえよと他人たにんをすすめ我と

とな
唱えたる智人なし、日出でぬれば星かくる賢王来れば愚王ほろぶ実経流布
ごんきよう
せば権経のとどまり智人南無妙法蓮華経と唱えば愚人の此れに随はんこ
ひびき
と影と身と声と響とのごとくならん、日蓮は日本第一の法華経の行者な
うたがい
る事あえて疑ひなし、これをもつてすいせよ漢土月支にも一閻浮提の内
あ
にも肩をならぶる者は有るべからず。

せば権經ごんきやうのとどまりちじん智人南無妙法蓮華經なむみよほうれんげきやうと唱えとなば愚人ぐにんの此れこに随したがはんこ

と影と身と声と響とのごとくならん、
日蓮は日本第一の法華經の行者な

る事あえて疑ひなし、これをもつてすいせよ漢土月支にも一閻浮提の内

にも肩をならぶる者は有るべからず。

問うて云く正嘉の大地しん文永の大彗星はいかなる事によつて出来せる

や答えて云く天台云く「智人は起を知り蛇は自ら蛇を識る」等云云、問て

云く心いかん、
 答えて云く
 上行菩薩の大地より
 出現し給いたりしをば

彌勒菩薩・文殊師利菩薩觀世音菩薩藥王菩薩等の四十一品の無明を断ぜし

人人も元品の無明を断ぜざれば愚人といはれて寿量品の南無妙法蓮華経

の末法まっぽうに流布るふせんずるゆへに、此この菩薩ぼさつを召いし出だされたるとはしらざりし

という事なり、問うて云く日本・漢土月支の中に此の事を知る人あるべし

や、答えて云く見思を断尽し四十一品の無明を尽せる大菩薩だにも此の事をしらせ給はずいかにいわうや一毫の惑をも断ぜぬ者ども此の事を知るべきか、問うて云く智人なくば・いかでか此れを対治すべき例せば病の所起を知らぬ人の病人を治すれば人必ず死す、此の災の根源を知らぬ人人がいのりをなさば国まさに亡びん事疑いなきか、あらあさましやあらあさましや、答えて云く蛇は七日が内の大雨をしり鳥は年中の吉凶をしる此れ則ち大竜の所従又久学のゆへか、日蓮は凡夫なり、此の事をしるべからずすなわしよじゅう
といえども汝等にはほこれとさん、彼の周の平王の時・禿にして裸なる者出現せしを辛有といふし者うらなつて云く百年が内に世ほろびん同じしゅつげん
き幽王の時山川くづれ大地ふるひき白陽と云う者勘えていはく十二年の内に大王事に値せ給うべし、今の大地震大長星等は国王・日蓮をにくみて亡国の法たる禪宗と念仏者と真言師をかたふどせらるれば天いからせ給いていぜんしゅう
ねんぶつ
しんごんし

ださせ給うところの災難なり。

問うて云くなにをもつてか此れを信ぜん、答えて云く最勝王経に云く

「悪人を愛敬し善人を治罰するに由るが故に星宿及び風雨皆時を以て行

われず」等云云、此の経文のごときんば此国に悪人のあるを王臣此れを

帰依すという事疑いなし、又此の国に智人あり国主此れをにくみてあだ

すという事も又疑いなし、又云く「三十三天の衆咸忿怒の心を生じ変怪

流星墮ち二の日俱時に出で他方の怨賊来りて国人喪乱に遭わん」等云云、

すでに此の国に天変あり地天あり他国より此れをせむ三十三天の御いかり

有こと又疑いなきか、仁王経に云く「諸の惡比丘多く名利を求め国王太子

・王子の前に於て自ら破仏法の因縁・破国の因縁を説く其王別ずして信じ

て此語を聴く」等云云、又云く「日月度を失い時節反逆し・或は赤日

出で・或は黒日出で二三四五の日出で・或は日蝕して光無く・或は日輪一

重二重四五重輪現ず」等云云、文の心は悪比丘等・国に充滿して国王・
太子・王子等をたばらかして破仏法・破国の因縁をとかば其の国の王等・
此の人にたばらかされてをぼすやう、此の法こそ持仏法の因縁持国の因縁
とをもひ此の言を・をさめてをこなうならば日月に変あり大風と大雨と
大火等出来し次には内賊と申して親類より・大兵乱おこり我がかたうど
しぬべき者をば皆打ち失いて後には他国に・せめられて・或は自殺し・或
はいけどりにせられて・或は降人となるべし是れ偏に仏法をほろぼし国を
ほろぼす故なり、守護経に云く「彼の釈迦牟尼如来所有の教法は一切の
天魔・外道悪人五通の神仙皆乃至少分をも破壊せず而るに此の名相の諸の
悪沙門皆悉く毀滅して余り有ること無からしむ須弥山を仮使三千界の中の
草木を尽して薪と為し長時に焚焼すとも一毫も損すること無し若し劫火
起りて火内従り生じ須臾も焼滅せんには灰燼をも余す無きが如し」等云云、

蓮華面經に云く「れんげめんきよう いわ 仏阿難に告あなん つげたまわく譬たとえば師し子の命終みょうじゆう せんに若もしは空若もしは地若もしは水若もしは陸所有しやうの衆生敢しゅじやうあえてて師し子の身の穴にくを食たわらず唯ただ師し子自らみずかもろもろ諸の虫を生じて自ら師みずか子の穴にくを食くらうが如ごとし阿難我あなんが之の仏法は余の能よくやぶあら壊るに非ず是れ我法の中の諸の惡比丘我が三大阿僧祇劫積行勤苦し集むる所ぶつぽうの仏法を破らん」等云云、經文の心は過去かこの迦葉かしやうぶつ 仏しや迦か如かに來らいの末法まっぽうの事きりきを訖哩枳王にかたらせ給たまい釈迦しやか如來にの仏法ぶつぽうをばいかなるものがうしなうべき、大族王の五天の堂舎を燒き払い十六大國の僧尼を殺せし漢土の武宗皇帝たいこく そうにの九國の寺塔じとう四千六百余所を消滅せしめ僧尼二十六萬五百人を還俗げんそくせし等のごとくなる惡人等あくにんは釈迦しやかの仏法ぶつぽうをば失うしなうべからず、三衣さんねを身にまとひ一鉢いちぱつを頸うしなにかけ八万法藏を胸はちまんほうぞうにうかべ十二部經を口にずうせん僧侶が彼の仏法ぶつぽうを失うしなうべし、譬たとへば須弥山しゆみせんは金の山なり三千大千世界の草木さんぜんだいせんせかいをもつて四天してん六欲じゅうまんに充満じゅうまんしてつみこめて一年・二年百千萬億年が間やくとも一分いちぶんも損ず

べからず、而るを劫火をこらん時須弥の根より豆計りの火いでて須弥山をやくのみならず三千大千世界をやき失うべし、若し仏記のごとくならば十宗・八宗・内典の僧等が仏教の須弥山をば焼き払うべきにや、小乗の俱舍・成実・律僧等が大乘をそねむ胸の瞋恚は炎なり真言の善無畏・禪宗の三階等・浄土宗の善導等は仏教の師子の肉より出来せる蝗虫の比丘なり、伝教大師は三論・法相華嚴等の日本の碩徳等を六虫とかかせ給へり、日蓮は真言・禪宗・浄土等の元祖を三虫となづく、又天台宗の慈覚・安然・慧心等は法華経伝教大師の師子の身の中の三虫なり。

此等の大謗法の根源をただす日蓮にあだをなせば天神もをしみ地祇もいからせ給いて災天も大に起るなり、されば心うべし一閻浮提第一の大事を申すゆへに最第一の瑞相此れをこれり、あわれなるかなや・なげかしきかなや日本国の人皆無間・大城に墮ちむ事よ、悦しきかなや・楽かなや

ふしよう
不肖の身として今度心田に仏種をうえたる、いまにしもみよ大蒙古国・数
万艘の兵船をうかべて日本をせめば上一人より下万民にいたるまで一切の
仏寺一切の神寺をばなげすてて各各声をつるべて南無妙法蓮華經・南無
妙法蓮華經と唱え 掌 を合せてたすけ給え、日蓮の御房日蓮の御房とさ
けび候はんずるにや、例せば月支のいう大族王は幻日王に 掌 をあはせ
日本の宗盛はかぢわらをうやまう、大慢のものは敵に随うという・このこ
とわりなり、彼の輕毀大慢の比丘等は始めには杖木をととのへて不輕菩薩
を打ちしかども後には 掌 をあはせて失をくゆ提婆達多是釈尊の御身に
血をいだししかども臨終の時には南無と唱えたりき、仏とだに申したりし
かば地獄には墮つべからざりしを業ふかくして但南無とのみとなへて仏と
はいはず、今・日本国の高僧等も南無日蓮聖人となえんとすとも南無
計りにてやあらんずらんふびんふびん。

外典に曰く未萌を^いするを^し聖人^{しようにん}という内典に云く三世を知るを^し聖人^{しようにん}とい

う余に三度のかうみようあり一には去^{いた}し文応元年^{ぶんおうがんねん}庚申七月十六日に

りつしょうあんこくろん

さいみようじ

立正安国論を最明寺殿に奏したてまつりし時宿谷の入道に向つて云く

ぜんしゅう

ねんぶつしゅう

うしな

たま

もう

たま

此の事を御用いなきならば

もち

禪宗と念仏宗とを失い給うべしと申させ給へ此の事を御用いなきならば

いちもん

此の一門より事をこりて他国に

たこく

せめられさせ給うべし、二には去^{いた}し文永

たまた

ぶんえい

八年九月十二日申の時に平左衛門尉に向つて云く日蓮は日本国の棟梁なり

さる

さえもののじよう

い

にちれん

にほんこく

とうりよう

予を失なうは日本国の柱礎を倒すなり、只今に自界叛逆難とてどしうちし

にほんこく

はしら

ただ

じかいほんぎやくなん

とてどしうちし

て他国侵逼難とて此の国の人人他国に打ち殺さるのみならず多くいけどり

たこくしんびつなん

ひとびとたこく

只今に自界叛逆難とてどしうちし

にせらるべし、建長寺・寿福寺・極楽寺・大仏・長樂寺等の一切の念仏者

けんちようじ

じくらく

だいぶつ

ちようらくじ

いっさい

ねんぶつ

・禅僧等が寺塔をばやきはらいて彼等が頸をゆひのはまにて切らずば

じとう

かれら

日本国必ずほろぶべしと申し候了ぬ、第三には去年十一月四日左衛門尉

にほんこく

にほんこく

もう

おわん

こそ

文永

さえもののじよう

に語つて云く、王地に生れたれば身をば随えられたてまつるやうなりとも

かた

い

お

つ

に語つて云く、王地に生れたれば身をば随えられたてまつるやうなりとも

心をば随えられたてまつるべからず念仏の無間獄禪の天魔の所為なる事は
疑いなし、殊に真言宗が此の国土の大なるわざはひにては候なり大蒙古
を調伏せん事真言師には仰せ付けらるべからず若し大事を真言師・調伏
するならばいよいよいそいで此の国ほろぶべしと申せしかば頼綱問うて
云くいつごろよせ候べき、予言く経文にはいつとはみへ候はねども天の
御氣色いかりすくなからず・きうに見へて候よも今生はすごし候はじと
語りたりき、此の三つの大事は日蓮が申したるにはあらず只偏に釈迦如来
の御神・我身に入りかわせ給いけるにや我が身ながらも悦び身にあまる
法華経の一念三千と申す大事の法門はこれなり、経に云く所謂諸法如是相
と申すは何事ぞ十如是の始の相如是が第一の大事にて候へば仏は世にいで
させ給う、智人は起をしる蛇みづから蛇をしるとはこれなり、衆流あつま
りて大海となる微塵つもりて須弥山となれり、日蓮が法華経を信じ始めし

は日本国には一・一微塵のごとし、法華經を二人・三人・十人・百千万億人・唱え伝うるほどならば妙覺の須弥山ともなり大涅槃の大海ともなるべし仏になる道は此れよりほかに又もとむる事なかれ。

問うて云く第二の文永八年九月十二日の御勘氣の時はいかにとして我を
そんなば自他のいくさをこるべしとはしり給うや、答う大集經十に云く
「若し復諸の刹利国王諸の非法を作し世尊の聲聞の弟子を悩亂し若しは
以て毀罵し刀杖をもて打斫し及び衣鉢種種の資具を奪い若しは他の給施
に留難を作す者有らば我等彼をして自然に卒に他方の怨敵を起さしめ及び
自界の国土にも亦兵起り飢疫飢饉非時の風雨・鬭諍言訟譏謗せしめ、又
其の王をして久しからずして復当に己れが国を亡失せしむべし」等云云、
夫れ諸經に諸文多しといえども此の經文は身にあたり時にのぞんで殊に
尊くをばうるゆへに・これをせんしいだす、此の經文に我等とは梵王と

帝釈たいしゃくと第六天だいろくてんの魔王まおうと日月にちがつと四天等してんの三界さんがいの一切いっさいの天竜てんりゅう等ななり、此等これらの
上主ぶつぜん・仏前けいに詣いして誓ちかつて云いわく仏めつこの滅後しょうほう・正法そうほう・像法まつだい・末代しょうほうの中に正法しょうほう
を行なぜん者を邪法じゃほうの比丘等びくが国主こくしゅにうつたへば王わうに近ちかきもの王わうに心こころよせな
る者もの・我がたつとしとをもう者のいうことなれば理りふじん不尽ぜひに是非たを糾たさず彼
の智人ちじんをさんざんとはぢにをよばせなんどせば、其そのの故ゆえともなく其そのの国こくに
にわかひょうらんに・大兵乱しゅつげん・出現たこくし後ごには他国こくしゅに・せめらるべし其そのの国主こくしゅもうせ
其そのの国こくもほろびなんずととかれて候こう、いたひとかゆきとはこれなり、予そが
身みには今生こんじょうにはさせる失とがなし但国ほんいをたすけんがため生国なまの恩おんをほうぜんと
申もちせしを御用ごよういなかからんこそ本意ほんいにあらざるに、あまさへ召めいし出して法華經ほけきょう
の第五の巻かいを懷い中ちゅうせるをとりいだしてさんざんときいなみ、結句けつこはこ
ぢをわたしなんどせしうば申もちしたりしなり、日月天にちがつに処しよし給たまいながら日蓮にちれんが
大難だいなにあうを今度このたびかわらせ給たまはずば一つには日蓮にちれんが法華經ほけきょうの行者ぎょうじやならざる

か忽に邪見をあらたむべし、若し日蓮・法華經の行者ならば忽に国にする
しを見せ給へ若ししからずば今の日月等は釈迦・多宝・十方の仏をたぶら
かし奉る大妄語の人なり、提婆が虚誑罪・俱伽利が大妄語にも百千万億倍
すぎさせ給へる大妄語の天なりと声をあげて申せしかば忽に出来せる
自界叛逆難なり、されば国土いたくみだれば我身はいうにかひなき凡夫な
れども御經を持ちまいらせ候分齊は当世には日本第一の大人なりと申す
なり。

問うて云く慢煩惱は七慢・九慢・八慢あり汝が大慢は仏教に明すとこ
ろの大慢にも百千万億倍すぐれたり、彼の徳光論師は弥勒菩薩を礼せず
大慢婆羅門は四聖を座とせり、大天は凡夫にして阿羅漢とななる無垢論師
が五天第一といゐし、此等は皆阿鼻に墮ちぬ無間の罪人なり汝いかでか一
閻浮提第一の智人となのれる地獄に墮ちざるべしやおそろしおそろし、答

えて云く汝は七慢・九慢・八慢等をばしれりや大覺世尊は三界第一となの
らせ給う一切の外道が云く只今天に罰せらるべし大地われて入りなんと、
日本国の七寺・三百余人が云く最澄法師は大天が蘇生か鉄腹が再誕か等云
云、而りといえども天も罰せずかへて左右を守護し地もわれず金剛のごと
し、伝教大師は叡山を立て一切衆生の眼目となる結句七大寺は落ちて弟子
となり諸国は檀那となる、されば現に勝れたるを勝れたりという事は慢に
にて大功德なりけるか、伝教大師云く「天台法華宗の諸宗に勝れたるは
所依の經に拠るが故に自讃毀他ならず」等云云法華經第七に云く「衆山の
中に須弥山これ第一なり此の法華經も亦復かくの如し諸經の中に於て最も
これ其の上なり」等云云、此の經文は已説の華嚴・般若・大日經等、今説
の無量義經、當説の涅槃經等の五千・七千月支竜宮・四王・天・☆利天
にちがつ日月の中的一切經尽十方界の諸經は土山・黒山・小鉄圀山・大鉄圀山の

ごとし日本国にわたらせ給える法華經は須弥山のごとし。

又云く「能く是の經典を受持すること有らん者も、亦復是くの如し、

いっさいしゅじょう

一切衆生の中に於て亦これ第一なり」等云、此の經文をもつて案ずる

けこんきよう

たも

ふげんぼさつ

げだつがつぼさつ

りゅうじゅぼさつ

めみょうぼさつ

ほうぞう

に華嚴經を持てる普賢菩薩・解脱月菩薩等・竜樹菩薩・馬鳴菩薩・法蔵

だいし　せいりよう

そくてんこうこう

しんじょうだいとく

りょうべんそうじょう

しょうむてんのう

じんみつ

大師・清凉国師・則天皇后・審祥大徳・良弁僧正・聖武天皇・深密

はんによきよう

たも

しょうぎしうぼさつ

しゅばだいそんじや

かじょうだいし

げんじょうさんぞう

たいそう

般若經を持てる勝義生菩薩・須菩提尊者・嘉祥大師・玄奘三蔵・太宗

こうそう

かんろうく

てんのう

しんこんしゅう

だいにちきよう

たも

こんごうさつた

・高宗・觀勒・道昭・孝徳天皇・真言宗の大日經を持てる金剛薩・

りゅうもうぼさつ

ぼさつ

げんむいさんぞう

さん

ぞう

ふくうさんぞう

げんぞう

竜猛菩薩・竜智菩薩・印生王・善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵・玄宗

けいか

こうほうだいし

じかくだいし

ねはんきよう

たも

かしようどうじぼさつ

ご

・代宗・慧果・弘法大師・慈覚大師・涅槃經を持てる迦葉童子菩薩・五十

にるい　どんむさんさんぞう　こうたく

ほううんなんざん　ほくひち

まつだいあくせ

ほんぶ

二類・曇無讖三蔵・光宅寺の法雲南三・北七の十師等よりも末代悪世の凡夫

いっかい

いっせんたい

きようもん

ご

の一戒も持たず一闡提のごとくに人には思はれたれども、經文のごとく已

今当にすぐれて法華經より外は仏になる道なしと強盛に信じて而も一分の

まば　ほけきよう　まば　し　いちぶん

解なからん人人は、彼等の大聖には百千万億倍のまさりなりと申す経文なり、彼の人人は・或は彼の経経に且く人を入れて法華経へうつさんがためなる人もあり、・或は彼の経に著をなして法華経へ入らぬ人もあり、・或は彼の経経に留逗のみならず彼の経経を深く執するゆへに法華経を彼の経に劣るという人もあり、されば今法華経の行者は心うべし、譬え「一切の川流江河の諸水の中に海これ第一なるが如く法華経を持つ者も亦復是くの如し、又衆星の中に月天子最もこれ第一なるが如く法華経を持つ者も亦復是くの如し」等と御心えあるべし、当世・日本国の智人等は衆星のごとし日蓮は満月のごとし。

問うて云く古へかくのごとくいえる人ありや、答えて云く伝教大師の云く「当に知るべし他宗所依の経は未だ最為第一ならず其の能く経を持つ者も亦未だ第一ならず天台法華宗は所持の経最為第一なるが故に能く法華

を持つ者も亦衆生の中に第一なり、已に仏説に拠る豈自歎ならんや」等云
云、夫れ麒麟の尾につけるだにの一日に千里を飛ぶといふ、転王に随える
劣夫の須臾に四天下をめぐるというをば難ずべしや疑うべしや、
豈自歎哉の釈は肝にめいずるか若し爾らば法華經を経のごとくに持つ人は
梵王にも・すぐれ帝釈にもこえたり、修羅を随へば須弥山をもになひぬべ
し竜をせめつかはば大海をもくみほしぬべし、伝教大師云く「讀むる者は
福を安明に積み謗る者は罪を無間に聞く」等云云、法華經に云く「經を讀誦
し書持すること有らん者を見て輕賤憎嫉して結恨を懷かん乃至其の人
命終して阿鼻獄に入らん」等云云、教主釈尊の金言まことならば多宝仏
の証明たがずば十方の諸仏の舌相一定ならば今・日本国の一切の衆生
無間地獄に堕ちん事疑うべしや、法華經の八の卷に云く「若し後の世に
於て是の經典を受持し讀誦せん者は乃至諸願虚しからず、亦現世に於て其の

福報を得ん」又云く「若し之を供養し讚歎する」と有らん者は当に今世に
於て現の果報を得べし」等云云、此の二つの文の中に亦於現世・得其福報
の八字・當於今世・得現果報の八字・已上一六字の文むなしくして日蓮
今生に大果報なくば如来の金言は提婆が虚言に同じく多宝の証明は
俱伽利が妄語に異ならじ、謗法の一切衆生も阿鼻地獄に墮つべからず、
三世の諸仏もましまさざるか、されば我が弟子等心みに法華經のごとく
身命もおしままず修行して此の度仏法を心みよ、南無妙法蓮華經・南無
妙法蓮華經。

抑此の法華經の文に「我身命を愛せず但無上道を惜しむ」涅槃經に
云く「譬えば王使の善能談論して方便に巧なる命を他國に奉るに寧ろ身命
を喪うとも終に王所説の言教を匿さざるが如し智者も亦爾なり凡夫中に
於て身命を惜まらずかならず大乘方等如来の秘藏一切衆生に皆仏性有り

と宣説すべし」等云云、いかやうな事のあるゆへに身命をすつるまでにて
あるやらん委細にうけ給わり候はん、答えて云く予が初心の時の存念は
伝教・弘法・慈覚智証等の勅宣を給いて漢土にわたりし事の我不愛身命
にあたれるか、玄奘三蔵の漢土より月氏に入りしに六生が間・身命をほ
ろぼししこれ等か、雪山童子の半偈のために身をなげ、薬王菩薩の七万二
千歳が間・臂をやきし事かなんどもをひしほどに経文のごときんば此等に
はあらず、経文に我不愛身命と申すは上に三類の敵人をあげて彼等がのり
せめ刀杖に及んで身命をうばうともみへたり、又涅槃經の文に寧喪身命
等ととかれて候は次下の経文に云く「一闍提有り羅漢の像を作し空処に住
し方等經典を誹謗す、諸の凡夫人見已つて皆眞の阿羅漢是れ大菩薩なりと
謂わん」等云云、彼の法華經の文に第三の敵人を説いて云く「・或は阿蘭若
に納衣にして空閑に在つて乃至世に恭敬せらるること六通の羅漢の如き有

らん」等云云、般泥^{はつないおん}☆經に云く「羅漢^{らかん}に似たる一闡提^{いつせんたい}有つて惡業^{あくごう}を行ず」

等云云、此等^{これら}の經文^{きようもん}は正法^{しょうほう}の強敵^{こつてき}と申^{もう}すは惡王^{あくおう}惡臣^{あくお}よりも外道魔王^{げどうまおう}より

も破戒^{はかい}の僧侶^{そうりよ}よりも、持戒^{じかい}有智^{いうち}の大僧^{だいそう}の中に大謗法^{ほうほう}の人あるべし、されば

みようらくだいし

妙樂大師^{みょうらくだいし}かいて云く^{いわ}「第三^{だいさん}最も甚^{はなはだ}し後後^{うたたり}の者は轉識^{がた}り難^{むづか}きを以ての故^{もつ}な

り」等云云、法華經^{ほけきよう}の第五^{だいご}の卷^{くわん}に云く「此^この法華經^{ほけきよう}は諸^{しよ}仙^{ふつ}如來^{にょらい}の秘密^{ひみつ}の藏

なり、諸經^{しよきよう}

の中に於て最も其^その上に在^あり」等云云、此^この經文^{きようもん}に最^{もつ}も其^{その}かみにあり

の四文^{しよもん}あり、されば此^この經文^{きようもん}のごときんば法華經^{ほけきよう}を一切^{いっさい}經^{きよう}の頂^{いた}にあり

と申^{もう}すが法華經^{ほけきよう}の行者^{ぎやうじや}にてはあるべきか、而^{しか}るを又^{また}國王^{こくおう}に尊重^{そんぢよう}せらるる

人人^{ひとびと}あまたありて、法華經^{ほけきよう}にまさりてをはする經^{きよう}經^{きよう}ましますと申^{もう}す人に

せめあひ候^{そうら}はん時^{とき}、かの人は王臣^{おうしん}に御^ご歸^き依^えあり法華經^{ほけきよう}の行者^{ぎやうじや}は貧道^{ひんどう}なるゆ

へに、国^{くに}こそつてこれをいやしみ候^{そうら}はん時^{とき}、不^ふ輕^{きよう}菩^ぼ薩^{さつ}のごとく賢^{けん}愛^{あい}論^{ろん}師^しが

ごとく申^{もう}しつをらば身命^{しんみよう}に及^{およ}ぶべし、此^これが第一^{だいいち}の大事^{だいじ}なるべしとみへて

候此の事は今の日蓮が身にあたれり、予が分齊として弘法大師・慈覚大師
・善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵などを法華經の強敵なり經文まこ
とならば無間地獄は疑なしなんと申すは裸形にて大火に入るはやすし
須弥を手にとてなげんはやすし大石を負うて大海をわたらんはやすし
日本国にして此の法門を立てんは大事なるべし云云。

靈山淨土の教主釈尊宝淨世界の多宝仏・十方分身の諸仏・地涌千界
の菩薩等梵釈・日月・四天等・冥に加し顯に助け給はずば一時一日も
安穩なるべしや。

◆四五 報恩抄 日蓮之を撰す 293P

夫れ老狐は塚をあとにせず白亀は毛宝が恩をほうず畜生すらかくのごと
しいわうや人倫をや、されば古への賢者予讓といぬし者は剣をのみて智伯
が恩にあてこう演と申せし臣下は腹をさひて衛の懿公が肝を入れたり、い

かにいわうや仏教をならはん者父母・師匠国恩をわするべしや、此の大恩をほうぜんには必ず仏法をならひきはめ智者とならで叶うべきか、譬へば衆盲をみちびかんには生盲の身にては橋河をわたしがたし方風を弁えざらん大舟は諸商を導きて宝山にいたるべしや、仏法を習い極めんと・をもはば・いとまあらずば叶うべからず・いとまあらんと・をもはば父・母・師匠・国主等に随いては叶うべからず是非につけて出離の道をわきまへざらんほどは父母・師匠・等の心に随うべからず、この義は諸人をもはく顯にもはづれ冥にも叶うまじとをもう、しかれども外典の孝経にも父母・主君に随はずして忠臣孝人なるやうもみえたり、内典の仏經に云く「恩を棄て無為に入るは眞実報恩の者なり」等云云、比干が王に随わずして賢人のなをとり悉達太子の浄飯大王に背きて三界第一の孝となりしこれなり。かくのごとく存して父母・師等に随わずして仏法をうかがひし程に一代

しょうきよう

聖教をさとるべき明鏡十あり、所謂る俱舎・成実・律宗・法相・三論

しんこん

・真言・華嚴・浄土・禪宗・天台法華宗なり此の十宗を明師として

いっさいきよう

一切經の心をしるべし世間の學者等おもえり此の十の鏡はみな正直に

ぶつどう

仏道の道を照せりと小乗の三宗はしばらくこれを・をく民の消息の是非

たこく

につけて他國へわたるに用なきがごとし、大乘の七鏡こそ生死の大海をわ

じょうど

たりて浄土の岸につく大船なれば此を習いほどひて我がみも助け人をもみ

なら

ちびかんと・おもひて習ひみるほどに大乘の七宗いづれもいづれも自讃あ

いちだい

り我が宗こそ一代の心はえたれえたれ等云云、所謂華嚴宗の杜順・智儼・

ほうそう

法蔵・澄觀等、法相宗の玄奘慈恩・智周・智昭等、三論宗の興皇・嘉祥

しんこんしゅう

等、真言宗の善無畏・金剛智・不空・弘法・慈覚・智証等、禪宗の達磨

えの

・慧可・慧能等、浄土宗の道綽・善導・懷感・源空等、此等の宗宗みな

ほんきよう

本經・本論によりて我も我も一切經をさとれり仏意をきはめたりと云云、

彼の人人云く一切經の中には華嚴經第一なり法華經・大日經等は臣下の
ごとし、真言宗の云く一切經の中には大日經第一なり余經は衆星のご
とし、禪宗が云く一切經の中には楞伽經第一なり乃至余宗かくのごとし、
而も上に挙ぐる諸師は世間の人人・各各おもえり諸天の帝釈をうやまひ
衆星の日月に随うがごとし我等凡夫はいづれの師師なりとも信ずるならば
不足あるべからず仰いでこそ信ずべけれども日蓮が愚案はれがたし、世間
をみるに各各・我も我もといへども国主は但一人なり二人となれば国土お
だやかならず家に二の主あれば其の家必ずやぶる一切經も又かくのごとく
や有るらん何の經にてもをはせ一經こそ一切經の大王にてはをはすらめ、
而るに十宗・七宗まで各各・諍論して随はず国に七人・十人の大王ありて
万民をだやかならじ・いかんがせんと疑うところに一の願を立つ我れ
八宗・十宗に随はじ天台大師の専ら經文を師として一代の勝劣をかんが

へしがごとく一切經を開きみるに涅槃經と申す經に云く「法に依つて人に
依らざれ」等云云依法と申すは一切經・不依人と申すは仏を除き奉りて
外の普賢菩薩・文殊師利菩薩乃至上にあぐるところの諸の人師なり、此の
經に又云く「了義經に依つて不了義經に依らざれ」等云云、此の經に指す
ところを了義經と申すは法華經・不了義經と申すは華嚴經・大日經・
涅槃經等の已今当の一切經なり、されば仏の遺言を信ずるならば専ら
法華經を明鏡として一切經の心をばしるべきか。

随つて法華經の文を開き奉れば「此の法華經は諸經の中に於て最も其の
上に在り」等云云此の經文のごとくば須弥山の頂に帝釈の居がごとく
輪王の頂に如意宝珠のあるがごとく衆木の頂に月のやどるがごとく
諸仏の頂に肉髻の住せるがごとく此の法華經は華嚴經・大日經・涅槃經
等の一切經の頂上の如意宝珠なり。

されば専ら論師・人師をすてて經文に依るならば大日經・華嚴經等に
法華經の勝れ給えることは日輪の青天に出現せる時眼あきらかなる者の
天地を見るがごとく高下宛然なり、又大日經・華嚴經等の一切經をみる
に此の經文に相似の經文・一字・一点もなし、或は小乘經 に対して
勝劣をとかれ・或は俗諦に対して真諦をとき・或は諸の空仮に対して
中道をほめたり、譬へば小国の王が我が国の臣下に対して大王というが
ごとし、法華經は諸王に対して大王等と云云、但涅槃經計りこそ法華經に
相似の經文は候へ、されば天台已前の南北の諸師は迷惑して法華經は
涅槃經に劣と云云、されども専ら經文を開き見るには無量義經のごとく
華嚴・阿含・方等・般若等の四十余年の經經をあげて涅槃經に対して我
がみ勝ると・とひて又法華經に対する時は是の經の出世は乃至法華の中の
八千の声聞に記☆を授くることを得て大菓実を成ずるが如き秋收冬蔵し

て更に所作無きが如し等と云云、我れと涅槃經は法華經には劣るととける
經文なり、かう經文は分明なれども南北の大智の諸人の迷うて有りし
經文なれば末代の學者能く能く眼をとどむべし、此の經文は但法華經・
涅槃經の勝劣のみならず十方世界の一切經の勝劣をもしりぬべし、而
を經文にこそ迷うとも天台・妙樂・伝教大師の御れうけんの後は眼あ
らん人人はしりぬべき事ぞかし、然れども天台宗の人たる慈覺・智証すら
猶此の經文にくらし・いわうや余宗の人人をや。

・或る人疑つて云く漢土・日本にわたりたる經經にこそ法華經に勝
たる經はをはずとも月氏・竜宮・四王・日月・☆利天・都率天などに
は恒河沙の經經ましますなれば其中に法華經に勝れさせ給う御經やまし
ますらん、答て云く一をもつて万を察せよ庭戸を出でずして天下をしると
はこれなり、癡人が疑つて云く我等は南天を見て東西北の三空を見ず彼

の三方の空に此の日輪にちりんより別べちの日やましますらん、山を隔へだて煙の立つを見

て火を見ざれば煙は一定なれども火にてやなかるらん・かくのごとくいは

ん者は一闡提いつせんたいの人としるべし生盲いきめくらにことならず、法華經の法師品ほうしほんに釈迦しゃか

によらいきんく

せいげん

いっさいきよう

しやうれつ

いっさいきよう

しやうれつ

いっさいきよう

いっさいきよう

いっさいきよう

いっさいきよう

いっさいきよう

如来金口の誠言をもつて五十余年の一切經の勝劣を定めて云く「我所説

きやうてん

むりやうせんまん

すで

と

と

まさ

しか

そ

おい

おい

おい

の經典は無量千万億にして已に説き今説き當に説ん而も其の中に於て此

ほけきよう

もつともこれなんしんなんげ

すで

と

と

まさ

しか

そ

おい

おい

法華經は最も為難信難解なり」等云云、此の經文は但釈迦如来・一仏の説

なりとも等覺已下は仰いで信すべき上・多宝仏・東方より来りて真実なり

とうかくいか

あお

たほうぶつ

とうほう

しんじつ

しんじつ

しんじつ

しんじつ

しんじつ

しんじつ

と証明し十方の諸仏集りて釈迦仏となく広長舌を梵天に付け給て後・

しょうみよう

じゅうほう

しよぶつ

しゃかぶつ

しんじつ

しんじつ

しんじつ

しんじつ

しんじつ

しんじつ

しんじつ

各各・国国へ還らせ給いぬ、已今當の三字は五十年並びに十方三世の諸仏

かく

たまい

いこんとう

いこんとう

いこんとう

いこんとう

いこんとう

いこんとう

いこんとう

いこんとう

いこんとう

えの御經、一字一点ものこさず引き載せて法華經に對して説せ給いて候を

じゅうほう

しよぶつ

しよぶつ

しよぶつ

しよぶつ

しよぶつ

しよぶつ

しよぶつ

しよぶつ

しよぶつ

しよぶつ

十方の諸仏・此座にして御判形を加えさせ給い各各又自国に還らせ給いて

じゅうほう

しよぶつ

しよぶつ

しよぶつ

しよぶつ

しよぶつ

しよぶつ

しよぶつ

しよぶつ

しよぶつ

しよぶつ

しよぶつ

我弟子等に向わせ給いて法華經に勝れたる御經ありと説せ給はば其の所化

でし

たまい

ほけきよう

すく

すく

すく

すく

すく

すく

すく

すく

すく

の弟子等信用すべしや、又我は見ざれば月氏・竜宮・四天・日月等の宮殿
の中に法華經に勝れさせ給いたる經や・おはしますらんと疑いをなすは
されば梵釈・日月・四天・竜王は法華經の御座にはなかりけるか、若し
日月等の諸天・法華經に勝れたる御經まします汝はしらずと仰せあるなら
ば大誑惑の日月なるべし、日蓮せめて云く日月は虚空に住し給へども我等
が大地に処するがごとくして墮落し給はざる事は上品の不妄語戒の力ぞか
し、法華經に勝れたる御經ありと仰せある大妄語あるならば恐らくはいま
だ壞劫にいたらざるに大地の上にとどうとおち候はんか無間・大城の最下の
堅鉄にあらずばとどまりがたからんか、大妄語の人は須臾も空に処して
四天下を廻り給うべからずとせめたてまつるべし、而るを華嚴宗の澄觀等
真言宗の善無畏・金剛智・不空・弘法・慈覺・智証等の大智の三蔵大師等
の華嚴經・大日經等は法華經に勝れたりと立て給わば我等が分齊には及ば

ぬ事なれども大道理のをすところは豈諸仏の大怨敵にあらずや、提婆・瞿伽梨も・ものならず大天・大慢・外にもとむべからず、かの人人を信ずる輩はをそろしをそろし。

問て云く華嚴の澄觀・三論の嘉祥・法相の慈恩・真言の善無畏乃至・

弘法・慈覚・智証等を仏の敵との給うか、答えて云く此大なる難なり仏法

に入りて第一の大事なり愚眼をもつて經文を見るには法華經に勝れたる經

ありといはん人は設いいかなる人なりとも謗法は免れじと見えて候、而る

を經文のごとく申すならば・いかでか此の諸人仏敵たらざるべき、若し又

恐をなして指し申さずは一切經の勝劣むなしかるべし、又此人人を恐れ

て末の人人を仏敵といはんとすれば彼の宗宗の末の人人の云く法華經に

大日經をまさりたりと申すは我れ私の計にはあらず祖師の御義なり戒行

の持破・智慧の勝劣・身の上下はありとも所学の法門はたがふ事なしと申

せば彼人人ひとびとにとがなし、又日蓮此れを知りながら人人を恐れて申さずは
ないそうしんみょう ふわくきようしや ぶつだ かんぎよう もち
寧喪身命・不匿教者の仏陀の諫 暁を用いぬ者となりぬ、いかんがせん・
いはんとすれば世間せけんをそろし止やめんとすれば仏の諫 暁のがれがたし進退此に
きわまれ 谷り、むべなるかなや、法華經の文に云く「而しかも此經は如来にらいの現在げんざいにす
ら猶怨嫉多し況んや滅度の後をや」又云く一切世間怨多くして信じ難がたし等
云云、釈迦しゃか仏を摩耶夫人まやふじんはらませ給たまいたりければ第六天の魔王・摩耶夫人
の御腹をとをし見て我等が大怨敵法華經と申す利剣りけんをはらみたり事の成ぜ
ぬ先にいかにしてか失うしなうべき、第六天の魔王・大医と変じて浄飯王宮じょうはんおうぐうに入
り御産安穩あんのんの良薬りょうやくを持候 大医ありとののしりて毒を后きさきにまいらせつ、
初生しよしやうの時は石をふらし乳に毒をまじへ城を出いでさせ給たまいしには黒き毒蛇こくじやと
変じて道にふさがり乃至提婆瞿伽利波瑠璃王阿闍世王等の悪人の身に入り
て・或あるは大石をなげて仏の御身おんみより血をいだし・或あるは釈子あくをころし・或あるは

御弟子等を殺す、此等の大難は皆遠くは法華經を仏・世尊に説かせまいらせじとたばかりし如來現在猶多怨嫉の大難ぞかし、此等は遠き難なり近き難には舍利弗・目連・諸大菩薩等も四十余年が間は法華經の大怨敵の内ぞかし、況滅度後と申して未來の世には又此の大難よりも・すぐれてをそろしき大難あるべしとかれて候、仏だにも忍びがたかりける大難をば凡夫はいかでか忍ぶべきいわうや在世より大なる大難にてあるべかなり、いかなる大難か提婆が長三丈広一丈六尺の大石・阿闍世王の醉象にはすぐべきとはおもへども彼にもすぐるべく候なれば小失なくとも大難に度度値う人をこそ滅後の法華經の行者とはしり候はめ、付法蔵の人人は四依の菩薩・仏の御使なり提婆菩薩は外道に殺され師子尊者は檀弥羅王に頭を刎ねられ仏陀密多・竜樹菩薩等は赤幡を七年十二年さしとをす馬鳴菩薩は金錢三億がかわりとなり如意論師は・おもひじにに死す。

これ等は正法一千年の内なり、像法に入つて五百年・仏滅後・一千五百年と申せし時漢土に一人の智人あり始は智・・後には智者大師とがうす、法華經の義をありのままに弘通せんと思ひ給しに天台已前の百千万の智者しなじなに一代を判ぜしかども詮して十流となりぬ所謂南三・北七なり十流ありしかども一流をもて最とせり、所謂南三の中の第三の光宅寺の法雲法師これなり、此の人は一代の仙教を五にわかつ其の五の中に三經をえらびいだす、所謂華嚴經・涅槃經・法華經なり一切經の中には華嚴經第一・大王のごとし涅槃經第二・摂政関白のごとし第三法華經は公卿等のごとし此れより已下は万民のごとし、此の人は本より智慧かしこき上・慧観・慧嚴・僧柔・慧次などと申せし大智者より習ひ伝え給るのみならず南北の諸師の義をせめやぶり山林にまじわりて法華經・涅槃經華嚴經の功をつもりし上・梁の武帝召し出して内裏の内に寺を立て光宅寺となづけて此の

法師ほつしをあがめ給たまう、法華經ほけきようをかうぜしかば天より花ふることに在ざい世せいのごとし、
天鑒五年てんかんに大旱魃かんぱつありしかば此この法雲法師ほううんほつしを請しょうじ奉たてまつりて法華經ほけきようを講こうぜさせ
まいらせしに藥草喻品やくそうゆほんの其雨普等こうふとう・四方俱下しほうくげと申もうす二句を講こうぜさせ給たまいし
時・天より甘雨かんう下たりしかば天子御感てんしぎよかんのあまりに現げんに僧正そうじようになしまいらせ
て諸天しよてんの帝釈たいしやくにつかえ万民ばんみんの国王こくおうを・をそるるがごとく我われとつかへ給たまいし
上あ・・或人夢あるく此人かこは過去かこの灯明仏ほけきようの時より法華經ほけきようをかうぜる人なり、
法華經ほけきようの疏じよ四卷あり此この疏じよに云く「此經未いまだ碩然せきねんならず」亦云く「異またの方便ほうべん」
等云云まさし、正ほけきようく法華經ほけきようはいまだ仏理ふつりをきわめざる經と書かれて候、此の人の
御義おんぎ仏意ぶつゐに相あひ叶たまひ給たまいければこそ天より花も下り雨もふり候けらめ、か
かるいみじき事にて候しかば漢土かんとの人人ひとびとさては法華經ほけきようは華嚴經けこんきよう・涅槃經ねはんきように
は劣おとにてこそあるなれと思ひし上しらぎ・新羅くだら・百濟こま・高麗こま日本にほんまで此この疏じよひろ
まりて大體だいたい一同どうの義にて候しに法雲法師ほううんほつし御死去しきよありていくばくならざるに

りよう

梁の末・陳の始に智☆法師と申す小僧出来せり、南岳大師と申せし人の

おんでし

御弟子なりしかども師の義も不審にありけるかのゆへに一切経蔵に入つて

たびたび

度度御らんありしに華嚴經・涅槃經・法華經の三經に詮じいだし此の三經

こと

の中に殊に華嚴經を講じ給いき、別して礼文を造りて日に功をなし給い

せけん

しかば世間の人もおもわく此人も華嚴經を第一とおぼすかと見えしほどに

ほううんほうし いっさいきよう

法雲法師が一切経の中に華嚴第一・涅槃第二・法華第三と立てたるがあま

ふしん

りに不審なりける故にことに華嚴經を御らんありけるなり、かくて一切経

ほうけだいいち

の中に法華第一・涅槃第二・華嚴第三と見定めさせ給いてなげき給うやう

によらい

は如来の聖教は漢土にわたれども人を利益することなしかへりて一切

しゅじよう

衆生を惡道に導びくこと人師の☆により、例せば国の長とある人東を

あぐう

西といふ天を地といふいだしぬれば万民は・かくのごとくに心うべし、後

しゅったい

にいやしき者出来して汝等が西は東汝等が天は地なりといはば・もちう

ることなき上・我が長おさの心に叶かなわんがために今の人をのりうちなんとすべ
しいかんがせんとはおぼせしかども・さてもだすべきにあらねば光宅こうたく寺の
法雲法師は謗法ほうぼうによつて地獄じごくに墮おちぬとののしられ給たまう、其そのの時南北しよくの諸師
はちのごとく蜂起ほうきし・からすのごとく鳥合うごうせり、智ち☆法師ほつしをば頭こづへをわるべ
きか国を・をうべきかなんと申せし程に陳主ちんしゆこ此れをきこしめして南北の数
人に召し合せて我と列座れつざしてきかせ給たまいき、法雲法師が弟子等の慧栄・法歳
・慧曠・慧えこう☆なんど申せし僧正・僧都・已上の人人百余人なり各各悪口あくくを
先とし眉をあげ眼まなこをいからし手をあげ柏子ひようしをたたく、而れども智ち☆法師は
末座まつざに坐して色を変ぜず言を☆らず威儀いぎしづかにして諸僧しよそうの言を一一に
牒ちようをとり言ごとにせめかえす、をしかへして難なんじて云く抑も法雲法師の
御義おんぎに第一華嚴・第二涅槃・第三法華と立させ給たまいける証文しょうもんは何れの経ぞ
慥たしかかに明かなる証文しょうもんを出ださせ給たまえとせめしかば各各頭こづへをうつぶせ色を

うしな
失いて一言の返事なし。

かさ
重ねてせめて云く無量義經に正しく次説方等十二部經・摩訶般若・華嚴

かいくう
海空等云云、仏・我と華嚴經の名をよびあげて無量義經に対して未顕真実

と打ち消し給う法華經に劣りて候・無量義經に華嚴經はせめられて候ぬい

たま ほけきよう
かに心えさせ給いて華嚴經をば一代第一とは候けるぞ各各・御師の御かた

たま
うどせんと・をぼさば此の經文をやぶりに此れに勝れたる經文を取り出

けこんきよう
だして御師の御義を助け給えとせめたり。

ねはんきよう
又涅槃經を法華經に勝るると候けるは・いかなる經文ぞ涅槃經の第十四

けこん あこん ほうつう
には華嚴・阿含・方等・般若をあけて涅槃經に対して勝劣は説れて候へど

ほけきよう
もまつたく法華經と涅槃經との勝劣はみへず、次上の第九の卷に法華經

ねはんきよう
と涅槃經との勝劣分明なり、所謂經文に云く「是の經の出世は乃至法華

しょうもん
の中の八千の声聞・記☆を受くることを得て大菓実を成ずるが如き

きべつ
記☆を受くることを得て大菓実を成ずるが如き

きべつ
記☆を受くることを得て大菓実を成ずるが如き

きべつ
記☆を受くることを得て大菓実を成ずるが如き

きべつ
記☆を受くることを得て大菓実を成ずるが如き

きべつ
記☆を受くることを得て大菓実を成ずるが如き

きべつ
記☆を受くることを得て大菓実を成ずるが如き

きべつ
記☆を受くることを得て大菓実を成ずるが如き

きべつ
記☆を受くることを得て大菓実を成ずるが如き

しゅうしゅうとうぞう

秋收冬蔵して更に所作無きが如し」等云云、
経文明に諸経をば春夏と

説かせ給い涅槃経と法華経とをば菓実の位とは説かれて候へども法華経を

しゅうしゅうとうぞう

かじつ

ねはんぎよう

くんじゅう

ば秋收冬蔵の大菓実の位・涅槃経をば秋の末・冬の始☆拾の位と定め

たま

きようもんまさし

しょうふく

たま

ほけきよう

給いぬ、此の経文正く法華経には我が身劣ると承伏し給いぬ、法華経の

いせつ

こんせつ

とうせつ

もう

ほけきよう

ならび

きようぎよう

すぐ

文には已説・今説・当説と申して此の法華経は前と並との経経に勝れた

るのみならず後に説かん経経にも勝るべしと仏定め給う、すでに教主

しやくそん

たま

うたが

まさ

たま

きようしゅ

釈尊かく定め給いぬれば疑うべきにあらねども我が滅後はいかにかと

うたが

とうほうほうじようせかい

たほうぶつ

たま

たほうぶつだいち

疑いおぼして東方宝浄世界の多宝仏を証人に立て給いしかば多宝仏大地

よりをどり出でて妙法華経・皆是真実と証し十方分身の諸仏重ねてあつま

たま

こうちようぜつ

ほんでん

かいぜしんじつ

じゅつぽうふんじん

しよぶつかさ

あつま

らせ給い広長舌を大梵天に付け又教主釈尊も付け給う、然して後・

たほうぶつ

ほうじようせかい

ほんでん

じゅつぽう

しよぶつ

ほんど

たま

しか

たほう

多宝仏は宝浄世界えかへり十方の諸仏各各本土にかへらせ給いて後・多宝

ふんじん

きようしゅしやくそん

ねはんぎよう

ほけきよう

まさ

分身の仏もおはせざらんに教主釈尊・涅槃経をといて法華経に勝ると

仰おほせあらば御弟子等おんでしは信たぜさせ給たまうべしやとせめしかば日月にちがつの大明だいみょうの
修羅しゅらの眼まなこを照てららすがごとく漢王まなこの劍けんの諸侯しよの頸けいにかかりしがごとく両眼りょうげん
をとち一頭うなだを低たかれたり、天台大師てんだいだいしの御氣色みけしきは師子王ししの狐兔こことの前に吼ほえたる
がごとし鷹鷲たかの鳩雉はときじをせめたるにいたり、かくのごとくありしかばさては
法華經ほけきょうは華嚴經けこんきょう・涅槃經ねはんきょうにも・すぐれてありけりと震旦しんたん一国いちこくに流布るふするの
みならず・かへりて五天竺てんじくまでも聞きへ月氏がっしだいしやう大小しよの諸論ちしやだいしも智者大師おんぎの御義ぎに
は勝すぐれず教主きやうしゆしやくそん釈尊しゆつげん・兩度しゆつげん出現しゆつげんしまするか仏教ぶつぎやう二度あらはれぬとほめ
られ給たまいしなり。

其その後天台大師てんだいだいしも御入滅にゆうめつなりぬ陳隋ちんずいの世も代わりて唐とうの世となりぬ
章安大師しやうあんだいしも御入滅にゆうめつなりぬ、天台てんだいの仏法ぶつぽうやうやく習ならい失なせし程ほどに唐とうの太宗たいそう
御宇ぎやうに玄奘げんじやうさんそう三蔵さんそうといふし人じん・貞觀じやうかん三年に始めて月氏がっしに入りて同十九年
にかへりしが月氏がっしの仏法ぶつぽう尋ね尽くして法相宗ほうそうしゆと申もうす宗をわたす、此の宗は

てんだいしゅう すいか し か てんだい
天台宗と水火なり而るに天台の御覧なかりし深密經・瑜伽論・唯識論等を
わたして法華經は一切經には勝れたれども深密には劣るという、而るを
てんだい ほけきょう いっさいきょう すく
天台は御覧なかりしかば天台の末学等は智慧の薄きかのゆへにさもやとお
もう、又太宗は賢王なり玄奘の御帰依あさからず、いうべき事ありしかど
たいそう けんおう げんじょう ごきえ
もいつもの事なれば時の威をおそれ申す人なし、法華經を打ちかへして
さんじょうしんじつ いちじょうほうべん もう
三乘眞実・一乘方便・五性各別と申せし事は心うかりし事なり、天竺よ
りは・わたれども月氏の外道が漢土にわたれるか法華經は方便・深密經は
しんじつ がっし げどう かんど ほけきょう ほうべん じんみつ
眞実といふしかば釈迦・多宝・十方の諸仏の誠言もかへりて虚くなり
げんじょう じおん しょうしん せいげん むなし
玄奘・慈恩こそ時の生身の仏にてはありしか。

そくてんこうこう ぎょう てんだいだいし
其後則天皇后の御宇に天台大師に・せめられし華嚴經に又重ねて新訳の
けこんきょう けこんきょう けこん
華嚴經わたりしかば、さきのいきどをりをはたさんがために新訳の華嚴を
てんだい ぐやく けこんきょう たす けこんしゅう もう ほうそう
もつて天台に・せめられし旧訳の華嚴經を扶けて華嚴宗と申す宗を法蔵

法師と申す人立てぬ、此の宗は華嚴經をば根本法輪法華經をば枝末法輪と申すなり、南北は一華嚴・二涅槃・三法華・天台大師は一法華・二涅槃・

三華嚴・今の華嚴宗は一華嚴・二法華・三涅槃等云云。

其の後玄宗皇帝の御宇に天竺より善無畏三蔵は大日經・蘇悉地經をわた

す、金剛智三蔵は金剛頂經をわたす、又金剛智三蔵の弟子あり不空三蔵

なり、此の三人は月氏の人・種姓も高貴なる上・人がらも漢土の僧ににず

法門もなにとはしらず後漢より今にいたるまでなかりし印と真言という事

をあひそいてゆゆしかりしかば天子かうべをかたづけ万民掌をあわす、

此の人人の義にいわく華嚴・深密・般若・涅槃・法華經等の勝劣は顯教

の内・釈迦如来

の説の分なり、今の大日經等は法王の勅言なり彼の經經は民の万言

・此經は天子の一言なり、華嚴經・涅槃經等は法王の勅言なり彼の經經は民の万言

ず但法華經計りこそ大日經には相似の經なれ、されども彼の經は釈迦如来ほけきょうばか だいにちきよう そうじ

の説民の正言・此の經は天子の正言なり言は似れども人がら雲泥なり、譬へてんし うんでい たと

ば濁水の月と清水の月のごとし月の影は同じけれども水に清濁ありなんと

申しければ、此の由尋ね顯す人もなし諸宗皆落ち伏して真言宗にかたぶもう たず あらわ しよしゅうみな しんこんしゅう

きぬ、善無畏・金剛智・死去の後・不空三蔵又月氏にかへりて菩提心論とぜんむい こんごうち しきよ ふくうさんぞう がっし ぼだいしんろん

申す論をわたしいよいよ真言宗盛りなりけり、但し妙樂大師といふ人あもう しんこんしゅう ちえ ただ みょうらくだいし

り天台大師よりは二百余年の後なれども智慧かしこき人にて天台の所釈をてんだいだいし ちえ てんだい しよしやく

見明めてありしかば天台の釈の心は後にわたれる深密經・法相宗又始めててんだい しやく じんみつ ほうそうしゅう

漢土に立てたる華嚴宗・大日經・真言宗にも法華經は勝れさせ給いたりかんど けこんしゅう だいにちきよう しんこんしゅう ほけきょう すぐ たまひ

けるを、・或は智のをよばざるか・或は人に畏るるか・或は時の王威をおある ある おそ ある おうい

づるかの故にいはずりけるか・かくてあるならば天台の正義すでに失なん、ゆえ てんだい せいぎ うしなわ

又陳隋已前の南北が邪義にも勝れたりとおぼして三十卷の末文を造り給うちんずい いぜん じやぎ すぐ つく たま

いわゆるぐけつ しゃくせん
所謂弘決・釈籤・疏記これなり、此の三十巻の文は本書の重なれるをけつ
り・よわきをたすくるのみならず天台大師の御時なかりしかば御責にもの
がれてあるやうなる法相宗と華嚴宗と真言宗とを一時にとりひしがれた
る書なり。

にほんこく

きんめいてんのう

ぎょう

みずのえさる

又日本国には人王第三十代欽明天皇の御宇十三年壬申十月十三日に

くだら

いっさいきょう

しゃかぶつ

ようめいてんのう

ぎょう

しょうとくたいし

百済国より一切経・釈迦仏の像をわたす、又用明天皇の御宇に聖徳太子

ぶつぽう

もう

しんか

かんど

せんしやうしよじ

仏法をよみはじめ和氣の妹子と申す臣下を漢土につかはして先生所持の一

ほけきょう

たまい

じきょう

そ

巻の法華経をとりよせ給いて持経と定め、其の後人王第三十七代孝徳天王

ぎょう

さんろんしゅう

けこんしゅう

ほうそうしゅう

ぐしやしゅうじょうじつ

の御宇に三論宗・華嚴宗・法相宗・俱舎宗成実宗わたる、人王第四十五

しょうむ

ぎょう

りっしゅう

ろくしゅう

代に聖武天皇の御宇に律宗わたる已上六宗なり、孝徳より人王五十代の

かんむてんのう

てんだい

しんこん

桓武天皇にいたるまでは十四代一百二十余年が間は天台・真言の二宗なし、

かんむ

ぎょう

さいちよう

もう

こそう

やましなでら

ぎょうひようそうじよう

おんでし

桓武の御宇に最澄と申す小僧あり山階寺の行表僧正の御弟子なり、

ほうそうしゅう
法相宗を始めとして六宗を習いきわめぬ而れども仏法いまだ極めたりと
ろくしゅう
もおぼえざりしに華嚴宗の法蔵法師が造りたる起信論の疏を見給うに
てんだいだいし
天台大師の釈を引きのせたり此の疏こそ子細ありげなれ此の国に渡りたる
か又いまだわたらざるかと不審ありしほどに有人にとひしかば其の人の
いわ だいとう
云く大唐の揚州竜興寺の僧鑒真和尚は天台の末学道暹律師の弟子天宝の末
にほんこく
に日本国にわたり給いて小乗の戒を弘通せさせ給いしかども天台の御釈
たも
持ち来りながらひろめ給はず人王第四十五代聖武天王の御宇なりとかたる、
そ
其の書を見んと申されしかば取り出だして見せまいらせしかば一返御らん
しやうじ
ありて生死の醉をさましつ此の書をもつて六宗の心を尋ねあきらめしかば
じやけん
一一に邪見なる事あらはれぬ、忽に願を發て云く日本国の人皆・謗法の者
だんのつ
の檀越たるが天下一定乱れなんずとおぼして六宗を難ぜられしかば七大寺
ろくしゅう
ろくしゅう
・六宗の碩学蜂起して京中烏合し天下みなさわぐ、七大寺・六宗の諸人
せきがくほうき
うごう
てんが
ななだいじ
ろくしゅう
しよにん

あくしんこうじょう

等惡心強盛なり、

而るを去める延暦二十一年正月十九日に天王高雄寺に

たかおでら

行幸あつて七寺の碩徳十四人善議・勝猷・奉基・寵忍・賢玉・安福・

勤操・修円・慈誥・玄耀・歳光・道証・光証・觀敏等の十有余人を召し合

わす、華嚴・三論・法相等の人人・各各・我宗の元祖が義にたがはず最澄

上人は六宗の人人の所立・一一に牒を取りて本經・本論・並に諸經

諸論に指し合わせてせめしかば一言も答えず口をして鼻のごとくになりぬ、

天皇をどろき給いて委細に御たづねありて重ねて勅宣を下して十四人をせ

め給いしかば承伏の謝表を奉りたり、其書に云く「七箇の大寺・六宗の

学匠乃至初て至極を悟る」等云云又云く「聖徳の弘化より以降今に二百余

年の間、講ずる所の經論其数多し、彼此理を争うて其の疑未だ解けず

而も此の最妙の円宗猶未だ闡揚せず」等云云、又云く「三論法相・久年の

諍渙焉として氷の如く解け照然として既に明かに猶雲霧を披いて三光を

さいちようわじよう

見るがごとし」云云、最澄和尚十四人が義を判じて云く「各一軸を講ずる

に法鼓を深壑に振り寶主三乗の路に徘徊し義旗を高峰に飛す長幼三有の結

を摧破して猶未だ歴劫の轍を改めず白牛を門外に混ず、豈善く初発の位に

昇り阿茶を宅内に悟らんや」等云云、弘世真綱二人の臣下云く「靈山の

妙法を南岳に聞き総持の妙悟を天台に闢く一乗の権滯を慨き三諦の未顕

を悲しむ」等云云、又十四人の云く「善議等牽れて休運に逢て乃ち奇詞を

閱す深期に非るよりは何ぞ聖世に託せんや」等云云、此の十四人は華嚴宗

の法蔵・審祥・三論宗の嘉祥・觀勒・法相宗の慈恩・道昭・律宗の

道宣・鑒真等の漢土・日本元祖等の法門瓶はかはれども水は一なり、而る

に十四人彼の邪義をすてて伝教の法華經に帰伏しぬる上は誰の末代の人か

華嚴・般若・深密經等は法華經に超過せりと申すべきや、小乗の三宗は

又彼の人人の所学なり大乗の三宗破れぬる上は沙汰のかぎりにあらず、

而るを今に子細を知らざる者六宗はいまだ破られずと・をもへり、譬へば
めしいにちがつつんぽいかずちこえにちがつ
盲目が天の日月を見ず聾人が雷の音をきかざるゆへに天には日月なし空
に声なしとをもうがごとし。

真言宗と申すは日本・人王第四十四代と申せし元正天皇の御宇に善無畏
さんそうだいにちきようぐつうかんど
三蔵・大日経をわたして弘通せずして漢土へかへる、又玄・等大日経の
ぎしやくとうだいじだいとく
義釈十四巻をわたす又東大寺の得清大徳わたす、此等を伝教大師御らんあ
りてありしかども大日経・法華経の勝劣いかんがとおぼしけるほどにか
たがた不審ありし故に去る延暦二十三年七月御入唐西明寺の道邃和尚・
ぶつろうじあてまつしかんえんどんだいかい
仏滝寺の行満等に値い奉りて止観円頓の大戒を伝受し靈感寺の順暁和尚
に値い奉りて真言を相伝し同延暦二十四年六月に帰朝して桓武天王に御
たいめんせんじくだそうでんえんりやくきちようかんむ
対面・宣旨を下して六宗の学生に止観・真言を習はしめ同七大寺にをかれ
ぬ、真言・止観の二宗の勝劣は漢土に多く子細あれども又大日経の義釈
しんこんしかんしょうれつかんどしさいだいにちきようぎしやく

には理同事勝とかきたれども伝でんぎようだいし教大師は善無畏三蔵のあやまりなり、
大日経は法華経には劣りたりと知ししめして八宗とはせさせ給たまはず真言宗
の名をけづりて法華宗の内に入れ七宗となし大日経をば法華天台宗の
傍依経となして華嚴・大品・般若涅槃等の例とせり、而れども大事の円頓
の大乗別受戒の大戒壇を我が国に立つ立じの諍論がわずらはしきに依り
てや真言・天台の二宗の勝劣は弟子にも分明にをしえ給わざりけるか、
但依憑集と申す文に正しく真言宗は法華天台宗の正義を偷ぬすみとりて
大日経に入れて理同とせり、されば彼の宗は天台宗に落ちたる宗なり、
いわずや不空三蔵は善無畏・金剛智入滅の後・月氏に入りてありしに竜智
菩薩に値い奉りし時・月氏には仏意をあきらめたる論釈なし、漢土に天台
という人の釈こそ邪正をえらび偏円をあきらめたる文にては候なれ、あな
かしこ・あなかしこ・月氏へ渡し給えとねんごろにあつらへし事を不空の

でしこんじう

みょうらくだいし

の

弟子含光といゐるし者が妙楽大師にかたれるを記の十の末に引き載せられて

候をこの依憑集に取り載せて候、法華經に大日經は劣るとしろしめす事

でんぎようだいし

けんねん

しゃかによらい

てんだいだいし

みょうらくだいし

でんぎよう

伝教大師の御心顕然なり、されば釈迦如来・天台大師・妙楽大師・伝教

だいし

だいにちきよう

いつさいきよう

ほけきよう

大師の御心は一同に大日經等の一切經の中には法華經はすぐれたりとい

ふんみよう

しんこんしゅう

がんそ

りゅうじゅぼさつ

う事は分明なり、又真言宗の元祖という竜樹菩薩の御心もかくのごとし、

だいちどろん

よ

たず

ふんみよう

ふくう

大智度論を能く能く尋ぬるならば此の事分明なるべきを不空があやまれる

ほだいしんろん

みな

めいわく

菩提心論に皆人ばかされて此の事に迷惑せるか。

いわぶち

こんそうそうじよう

おんでし

くうかい

こうぼうだいし

又石淵の勤操僧正の御弟子に空海と云う人あり後には弘法大師とがう

い

えんりやく

にゅうとう

かんど

こんこうち

す、去ぬる延暦二十三年五月十二日に御入唐、漢土にわたりては金剛智

ぜんむい

さんぞう

おんでしけいかわじよう

・善無畏の両三蔵の第三の御弟子慧果和尚といゐるし人に両界を伝受し大同

二年十月二十二日に御帰朝平城天王の御宇なり、桓武天王は御ほうぎよ平城

ぎよう

かんむ

へいぜい

天王に見参し御用いありて御帰依・他にことなりしかども平城ほどもなく

もち

こきえ

へいぜい

天王に見参し御用いありて御帰依・他にことなりしかども平城ほどもなく

嵯峨に世をとられさせ給いしかば弘法ひき入れてありし程に伝でんぎようだいし教大師は

嵯峨天王の弘仁十三年六月四日御入滅、同じき弘仁十四年より弘法大師・

王の御師となり真言宗を立てて東寺を給真言和尚とがうし此より八宗始

る、一代の勝劣を判じて云く第一真言・大日經第二・華嚴第三は法華・

涅槃等云云、法華經は阿含・方等・般若等に対すれば真実の經なれども

華嚴經・大日經に望むれば戲論の法なり教主釈尊は仏なれども大日如来

に向うれば無明の辺域と申して皇帝と俘囚との如し、天台大師は盗人なり

真言の醍醐を盗んで法華經を醍醐というなにかかれしかば法華經はいみ

じと・をもへども弘法大師にあひぬれば物のかずにもあらず、天竺の外道

はさて置きぬ漢土の南北が法華經は涅槃經に対すれば邪見の經といゐしに

も・すぐれ華嚴宗が法華經は華嚴經に対すれば枝末教と申せしにもこへた

り、例ば彼の月氏の大慢婆羅門が自在天・那羅延天・婆藪天・教主釈尊

の四人を高座こうざの足につくりて其その上うへにのぼつて邪法じゃほうを弘ひろめしがごとし、
伝教大師御存生でんぎようだいし せんしょうならば一言いだは出されべかりける事なり、又義真ぎしん・円澄えんちよう・
慈覚じかく・智証等ちしょうもいかに御不審ふしんはなかりけるやらん天下第一てんがだいいちの大凶なり、
慈覚大師は去ぬる承和五年に御入唐にゅうとう・漢土かんどにして十年が間・天台てんだい・真言しんこんの
二宗をならう、法華ほっけ・大日經だいにちきようの勝劣しょうれつを習いしに法全げんじよう・元政等の八人の
真言師しんこんしには法華經ほっけきようと大日經だいにちきようは理同事勝等云云、天台宗てんだいしゅうの志遠しおん・広修こうしゅう・
維ゆい☆等いけんに習いしには大日經だいにちきようは方等部ほうとうぶの攝等云云、同じき承和十三年九月
十日に御帰朝きちよう・嘉祥元年六月十四日に宣旨下せんじくだる、法華ほっけ・大日經等だいにちきようの勝劣しょうれつは
漢土かんどにしてしりがたかりけるかのゆへに金剛頂經こんごうぢようきようの疏七卷蘇悉地經そしつちきようの疏じよ
七卷已上十四卷此疏じよの心は大日經だいにちきよう・金剛頂經こんごうぢようきよう・蘇悉地經そしつちきようの義ぎと法華經ほっけきよう
義そは其しよせんの所詮しよせんの理は一同なれども事相じそうの印と真言しんこんとは真言しんこんの三部經さんぶきようすぐれ
たりと云云、此これは偏ひとえに善無畏ぜんむい・金剛智こんごうち・不空ふくうの造りたる大日經だいにちきようの疏じよの心

のごとし、然れども我が心に猶不審なおふしんやのこりけん又心にはとけてんけれども人の不審ふしんをはらさんとやおぼしけん、此の十四卷の疏じよを御本尊ごほんぞんの御前おんまえにさしをきて御祈請きしやうありき・かくは造りて候へども仏意計ぶつゐばかりがたし大日の三部さんぶやすぐれたる法華經ほけきやうの三部やまされると御祈念きねん有りしかば五日と申すもう五更ごこうに忽に夢想あり、青天に大日輪だいにちりんかかり給たまへり矢をもてこれを射ければ矢飛んで天にのぼり日輪にちりんの中に立ちぬ日輪動転して・すでに地に落んとすともひてうちさめぬ、悦よろこんで云く我吉夢あり法華經ほけきやうに真言勝しんこんすぐれたりと造りつくつるふみは仏意ぶつゐに叶かないけりと悦よろこばせ給いて宣旨せんじを申し下して日本国にほんこくに弘通くつうあり、而も宣旨せんじの心に云く「遂に知んぬ天台てんだいの止観しかんと真言しんこんの法義とは理冥あに符あえり」等と云云、祈請きしやうのごときんば大日經だいにちきやうに法華經ほけきやうは劣なるやうなり、宣旨せんじを申し下すには法華經ほけきやうと大日經だいにちきやうとは同じ等云云。

智証大師は本朝にしては義真和尚・円澄大師・別当・慈覚等の弟子な

り、けんみつ にどう 顕密の二道は大体此の国にして学がくし給たまひいけり天台・真言しんこんの二宗の勝劣しょうれつ
の御不審ふしんに漢土かんとへは渡り給けるか、去仁寿二年に御入唐漢土にしては
真言宗しんこんしゅうは法全・元政等にならばせ給い大体・大日経だいにくぎょうと法華経ほけきょうとは
りどうじしゅう 理同事勝・慈覚の義のごとし、天台宗は良・和尚にならひ給い真言・天台
しょうれつ 勝劣・大日経は華嚴・法華等には及ばず等云云、七年が間・漢土に
へいぬ 経て去る貞観元年五月十七日に御帰朝、大日経の旨帰に云く「法華尚及ば
ず況や自余の教をや」等云云、此釈は法華経は大日経には劣る等云云、又
じゆけつしゅう いわ 授決集に云く「真言・禪門乃至若し華嚴・法華・涅槃等の経に望むれば
こ 是れ摂引門」等云云、普賢経の記・論の記に云く同じ等云云、貞観八年
みずのえさる 丙戌四月廿九日壬申・勅宣を申し下して云く「聞くならく真言・止観・
だいいご 両教の宗同じく醍醐と号し俱に深秘と称す」等云云、又六月三日の勅宣に
いわ 云く「先師既に両業を開いて以て我が道と為す代代の座主相承して兼ね伝

えざるなこと莫なし在後の輩やからあに豈旧迹そむに乖そむかんや、聞きこくならく山上さんじょうの僧等もつば専ら
先師せんしの義ぎに違へんいて偏執へんしゅうの心こころを成じようず殆たいていんど余風せんふうを扇揚せんようし旧業きうごふを興隆きようりゅうするを
顧かへりみざるに似おほたり、凡おほそ厥その師資しその道みち一ひとを闕かきても不可ふかなり伝弘でんぐの勤つとめ
寧むしろ兼備けんびせざらんや、今いまより以後いご宜よろしく兩教りうきやうに通達つうだつするの人ひとを以もつて延曆寺えんりやくじの
座主ざすと為なし立てて恒例なと為なすべし云云。

されば慈覺じかく・智証ちしやうの二人ふたりは伝教でんきやう・義真ぎしんの御弟子おんでし、漢土かんとにわたりては又
天台てんだい・真言しんごんの明師あに値あいて有ありしかども二宗しやうれつの勝劣しやうれつは思おもひ定めざりけるか
・或あるは真言しんごんすぐれ・或あるは法華ほつけすぐれ・或あるは理同事勝等りどうじしやう云云、宣旨せんじを申もうし下
すには二宗しやうれつの勝劣しやうれつを論ろんぜん人は違勅いちよくの者ものといましめられたり、此これ等は皆みな
自語相違じごそういといふぬべし他宗たしゅうの人ひとはよも用もちいじとみえて候、但二宗ふたし齊等ひとしとは
先師せんし・伝教大師でんきやうだいしの御義おんぎと宣旨せんじに引ひき載のせられたり、抑そもも傳教大師でんきやうだいしいづ
れの書かきにかかれて候ぞや此の事ことよくよく尋たずぬべし、慈覺じかく・智証ちしやうと日蓮にちれんとが

伝教大師の御事を不審申すは親に値うての年あらそひ日天に値い奉りての
目くらべにては候へども慈覚・智証の御かたふどをせさせ給はん人人は
分明なる証文をかまへさせ給うべし、詮ずるところは信をとらんがため
なり、玄奘三蔵は月氏の婆沙論を見たりし人ぞかし天竺にわたらざりし宝
法師に・せめられにき、法護三蔵は印度の法華經をば見たれども囑累の先後
をば漢土の人みねども ☆ といひしぞかし、設い慈覚・伝教大師に値い
奉りて習い伝えたりとも智証・義真和尚に口決せりといふとも伝教・義真
の正文に相違せばあに不審を加えざらん、伝教大師の依憑集と申す文は
大師第一の秘書なり、彼の書の序に云く「新来の真言家は則ち筆授の相承
を混し旧到の華嚴家は則ち影響の軌範を隠し、沈空の三論宗は彈訶の屈恥
を忘れて称心の酔を覆う、著有の法相は撲揚の帰依を非し青竜の判經を
撥う等、乃至謹んで依憑集の一巻を著わして同我の後哲に贈る某の時興る

こと日本第五十二葉・弘仁の七・丙申の歳なり」云云、次ぎ下の正宗に
云く「天竺の名僧大唐天台の教迹最も邪正を簡ぶに堪えたりと聞いて渴仰
して訪問す」云云、次ぎ下に云く「豈中国に法を失つて之を四維に求むる
に非ずや而かも此の方に識ること有る者少し魯人の如きのみ」等云云、此
の書は法相・三論・華嚴・真言の四宗をせめて候文なり、天台・真言の二
宗同一味ならば・いかでかせめ候べき、而も不空三蔵等をば魯人のごとし
なんどかかれて候、善無畏・金剛智・不空の真言宗いみじくば・いかでか
魯人と悪口あるべき、又天竺の真言が天台宗に同じきも又勝れたるならば
天竺の名僧いかでか不空にあつらへ中国に正法なしとはいふべき、それ
はいかにもあれ慈覚・智証の二人は言は伝教大師の御弟子とはなのらせ給
ども心は御弟子にあらず、其の故は此の書に云く「謹で依憑集一卷を著わ
して同我の後哲に贈る」等云云、同我の二字は真言宗は天台宗に劣ると

ならひてこそ同我にてはあるべけれ我と申し下さるる宣旨に云く「専ら先師
の義に違ひ偏執の心を成す」等云云、又云く「凡そ厥師資の道一を闕いて
も不可なり」等云云、此の宣旨のごとくならば慈覚・智証こそ専ら先師に
そむく人にては候へ、かうせめ候もをそれにては候へども此れをせめずば
大日経・法華経の勝劣やぶれなんと存じていのちをまとにかくてせめ候
なり、此の二人の人人の弘法大師の邪義をせめ候はざりけるは最も道理に
て候いけるなり、されば糧米をつくし人をわづらはして漢土へわたらせ給は
んよりは本師・伝教大師の御義を・よくよく・つくさせ給うべかりけるに
や、されば叡山の仏法は但だ伝教大師・義真和尚・円澄大師の三代計り
にてやありけん、天台座主すでに真言の座主にうつりぬ名と所領とは天台
山其の主は真言師なり、されば慈覚大師・智証大師は已今当の経文をやぶ
らせ給う人なり、已今当の経文をやぶらせ給うは・あに釈迦・多宝・十方

の諸仏しよぶつの怨敵おんてきにあらずや、弘法大師こうぼうだいしこそ第一だいいちの謗法ほうぼうの人とおもふに、これはそれにはなるべくもなき僻事ひがごとなり、其の故そのゆえは水火天地なる事は僻事ひがごとなれども人用もちゆる事なければ其の僻事ひがごと成ずる事なし、弘法大師の御義おんぎはあまり僻事ひがごとなれば弟子等も用ゆる事なし事相計りじそうばかは其の門家なれども其の教相きやうそうのほうもんこうぼうは弘法の義いにくきゆへに善無畏・金剛智・不空慈覚・智証の義に法門ほうもんは弘法の義いにくきゆへに善無畏・金剛智・不空慈覚・智証の義にであるなり、慈覚じかく・智証ちしようの義こそ真言しんごんと天台てんだいとは理同りおなじなりなんと申せば皆人さもやとをもう、かうをもうゆへに事勝じしようの印と真言しんごんにつひて天台宗てんだいしゅうの人人・画像・木像の開眼かいげんの仏事ぶつじを・ねらはんがために日本にほん一同に真言宗しんごんしゅうにおちて天台宗てんだいしゅうは一人もなきなり、例せば法師ほっしと尼くろぎとあおきと黒と青とは・まがひぬべければ眼まなこくらき人はあやまつぞかし、僧と男と白と赤とは目くらき人も迷まよひわず、いわうや眼まなこあきらかなる者をや、慈覚じかく・智証ちしようの義は法師ほっしと尼くろぎとあおきと黒と青とがごとくなるゆへに智人ちじんも迷まよひい愚人ぐにんもあやまり候て此の四百余年

が間は叡山・園城・東寺・奈良・五畿・七道・日本一州・皆謗法の者となりぬ。

そもそも

抑も法華經の第五に「文殊師利此の法華經は諸仏如来の秘密の蔵なり

しよきよう

諸經の中に於て最も其の上に在り」云云、此の經文のごとくならば法華經

だいにちきよう

は大日經等の衆經の頂上に住し給う正法なり、さるにては善無畏・

こんごうち

金剛智・不空・弘法・慈覺・智証等は此の經文をばいかんが会通せさせ

たま

給うべき、法華經の第七に云く「能く是の經典を受持すること有らん者も

またまたかく

亦復是くの如し一切衆生の中に於て亦為第一なり」等云云、此の經文の

またまたかく

ごとくならば法華經の行者は川流江河の中の大海・衆山の中の須弥山・

しゅうせい

衆星の中の月天・衆明の中の大日天、転輪王・帝釈・諸王の中の大梵王

なり、

伝教大師の秀句と申す書に云く「此の經も亦復是くの如し乃至諸の

きようほう

經法の中に最も為第一なり能く是の經典を受持すること有らん者も亦復

かく
是くの如し一切衆生の中に於て亦為第一なり」已上經文なりと引き入れ
させ給いて次下に云く「天台法華玄に云く」等云云、已上玄文とかかせ給い
て上の心を釈して云く「当に知るべし他宗所依の經は未だ最も為れ第一な
らず其の能く經を持つ者も亦未だ第一ならず、天台法華宗所持の法華經は
最も為れ第一なる故に能く法華を持つ者も亦衆生の中の第一なり已に仏説
に拠る豈自歎ならん哉」等云云、次下に譲る釈に云く「委曲の依憑具さに
別卷に有るなり」等云云、依憑集に云く「今吾が天台大師・法華經を説き
法華經を釈すること群に特秀し唐に独歩す明に知んぬ如来の使なり讃る者
は福を安明に積み誇る者は罪を無間に開く」等云云、法華經・天台・
妙樂・伝教の經釈の心の如くならば今・日本国には法華經の行者は一
人もなきぞかし、月氏には教主釈尊・宝塔品にして一切の仏をあつめさ
せ給て大地の上に居せしめ大日如来計り宝塔の中の南の下座にすへ奉りて

きようしゆしやくそん

教主 釈尊は北の上座につかせ給う、此の大日如来は大日經の胎藏界の

だいにち こんこうちようきよう

大日・金剛頂經の金剛界の大日の主君なり、兩部の大日如来を即從等と

たほうぶつ

定めたる多宝仏の上座に教主 釈尊居せさせ給う此れ即ち法華經の行者な

てんじく

り天竺かくのごとし、漢土には陳帝の時・天台大師・南北にせめかちて現身

だいし

に大師となる「群に特 秀し唐に独歩す」というこれなり、日本国には

でんぎようだいしろうくしゆう

伝 教大師六宗にせめかちて日本の始第一の根本大師となり給う月氏・

かんど にほん

漢土・日本に但三人計りこそ於一切衆生中亦為第一にては候へ、されば

しゆうく いわ

秀句に云く「浅きは易く深きは難しとは釈迦の所判なり浅きを去つて深き

に就くは丈夫の心なり

に就くは丈夫の心なり天台大師は釈迦に信順して法華宗を助けて震旦に

ふよう えいざん

敷揚し叡山の一家は天台に相承して法華宗を助けて日本に弘通す等云云、

ぶつめつ

仏滅後・一千八百余年が間に法華經の行者漢土に一人・日本に一人已上二

しやくそん

人釈尊を加へ奉りて已上三人なり。

外典げてんに云いく聖人しょうにんは一千年ひとたびいに一い出でで賢人けんじんは五百年ひとたびいに一い出でづ、黄河くわはは

☆渭けいながれをわけて五百年なには半なかば・河すみ千年なには共に清むと申もうすは一

定じようにて候しけり、然るに日本国にほんこくは叡山えいざん計りに伝でん教大師ぎきようだいしの御時おんとき・法華經ほけきようの行者ぎようじや

ましましけり、義真ぎしん・円澄えんちようは第一第二だいいちの座主ざすなり第一だいいちの義真計りぎしんじり伝でん教大師ぎきようだいし

ににたり、第二えんちようの円澄なかばは半でんぎようは伝おん教大師なかばの弟子こうぼうなり、第

三じかくだいしの慈覚大師でんぎようだいしは始めは伝おん教大師でんの御弟子かんどににたり、御年四十にて漢土にわ

たりてより名は伝でん教大師ぎきようだいしの御弟其の跡をばつがせ給たまえども法門ほうもんは全く御弟子に

はあらず、而しかれども円頓えんどんの戒計げいりは又御弟子ににたり蝙蝠へんぷく鳥くのごとし鳥に

もあらず・ねずみにもあらず梟きようちようきん鳥は禽けい・破鏡獸はいけいじゆうのごとし、法華經ほけきようの父を食

らい持者じしやの母をかめるなり日をいとゆめにみしこれなり、されば死去しきよの

後は墓はかなくてやみぬ、智証ちしようの門家もんか・園城寺おんじようじと慈覚じかくの門家もんか・叡山えいざんと修羅しゆらと悪

竜と合戦ひまなし園城寺おんじようじをやき叡山えいざんをやく、智証大師ちしようだいしの本尊ほんそんの慈氏菩薩じしぼさつも

やけぬ慈覺大師の本尊・大講堂もやけぬ現身に無間地獄をかんぜり、但中

堂計りのこれり、弘法大師も又跡なし弘法大師の云く東大寺の受戒せざら

ん者をば東寺の長者とすべからず等御いましめの状あり、しかれども

寛平法王は仁和寺を建立して東寺の法師をうつして我寺には叡山の円頓

戒を持ざらん者をば住せしむべからずと宣旨分明なり、されば今の東寺の

法師は鑒真が弟子にもあらず弘法の弟子にもあらず戒は伝教の御弟子なり

又伝教の御弟子にもあらず伝教の法華經を破失す、去る承和二年三月二

十一日に死去ありしかば公家より遺体をば・ほうぶらせ給う、其の後誑惑

の弟子等集りて御入定と云云、或はかみをそりてまいらするぞといふ

・或は三鈷をかんどより・なげたりといふ・或は日輪夜中に出でたりとい

ふ・或は現身に大日如来となりたりといひ・或は伝教大師に十八道を・を

しへまいらせ給うといふて、師の徳をあげて智慧にかへ我が師の邪義を扶け

らざる人はなし。

但し事ただの心を案ずるに大莊嚴だいそうごん仏の末・一切明王いっさいおうぶつ仏の末法のごとし、威音いおん

おうぶつ まっぼう

かいげ

なおせんごう

あびじごく

お

いかにいわうや

王仏にほんこく

しんごんし

ぜんしゅう

ねんぶつ

いちぶん

えしん

によせてんでん

むしゅごううたがい

日本国の真言師・禪宗・念仏者等は一分の廻心なし如是展転至無數劫疑

ほうぼう

なきものか、かかる謗法の国なれば天もすてぬ天すつればふるき守護しゅごの善神ぜんじん

じやうごう

も・ほこらをやひて寂光の都へかへり給いぬ、但日蓮計り留り居て告げ示にちれんばか とどま

こくしゅ

せば国主これをあだみ数百人の民に・或は罵詈ある めり・或は悪口ある あつく・或は杖木ある じょうもく・或

とうけん

ある

ある

ある

ある

ある

は刀剣・或は宅宅ごとにせき・或は家家ごとにをう、それになはねば

我と手をくだして二度まで流罪るざいあり、去ぬる文永八年九月の十二日に頸を

さいしゅうおうきよう

いわ

あくにん

あいぎよう

ぜんにん

ちばつ

よ

切らんとす、最勝王経に云く「悪人を愛敬し善人を治罰するに由るが

ゆえ たほう おんそく

そうらん

あ

等云云、大集経に云く「若しは復

だいしつきよう

いわ

また

故に他方の怨賊来つて国人喪乱に遭う」等云云、大集経に云く「若しは復

諸の刹利国王有つて諸の非法を作して世尊の声聞の弟子を悩乱し、若しは

もつきめ とうじょう
以て毀罵し刀杖をもつて 打斫し及び衣鉢種種の資具を奪い、若しは他の
きゆうせ なるん な
給施せんに留難を作さば我等彼れをして自然に他方の怨敵を卒起せしめん
およ みずか こくど また
及び自らの国土も亦兵起り病疫・飢饉し非時の風雨・鬭諍言訟せしめん、
そ
又其の王をして久しからずして復当に己が国を亡失せしめん」等云云、
これら きようもん にちれん
此等の経文のごときは日蓮この国になくば仏は大妄語の人・阿鼻地獄はい
のがれたま
かで脱給うべき、去ぬる文永八年九月十二日に平の左衛門並びに数百人に
いわ にちれん にほんこく
向て云く日蓮は日本国のはしらなり日蓮を失うほどならば日本国のはしら
を・たをすになりぬ等云云、此の経文に智人を国主等若は悪僧等がざんげ
んにより若は諸人の悪口によつて失にあつるならば、にはかに・いくさを
たいふう たこく
こり又大風吹き他国よりせめらるべし等云云、去ぬる文永九年二月のどし
いくさ 同じき十一年の四月の大風・同じき十月に大蒙古の来りしは偏に
にちれん
日蓮がゆへにあらずや、いわうや前よりこれをかながへたり誰の人が疑

うべき、弘法・慈覚・智証の☆国に年久し其の上禪宗と念仏宗とのわ
ざわい・あいをこりて逆風に大波をこり大地震のかさなれるがごとし、さ
ればやふやく国をとろう太政入道が国をおさへ承久に王位つきはてて世
・東にうつりしかども但国中のみだれにて他国のせめはなかりき、彼は謗法
の者はあれども又天台の正法も・すこし有り、其の上ささへ顕わす智人な
し・かるがゆへになのめなりき、譬へば師子のねぶれるは手をつけざれば
・ほへず迅流は櫓をささへざれば波たかからず盗人はとめざればいからず
火は薪を加えざればさかんならず、謗法はあれどもあらわす人なければ王
法もしばらくはたえず国もをだやかなるにいたり、例せば日本国に仏法わ
たりはじめて候いしに始はなに事もなかりしかども守屋・仏をやき僧をい
ましめ堂塔をやきしかば天より火の雨ふり国にはうさうをこり兵乱つづき
しがごとし、此れはそれにはにるべくもなし、謗法の人人も国に充満せり、

にちれん

日蓮が大義も強くせめかかる修羅と帝釈と仏と魔王との合戦にもをとるべ

からず、こんこうみょうきよう金光明經に云く「時に鄰国の怨敵是くの如き念を興さん当に四

兵を具して彼の国土を壊るべし」等云云、又云く「時に王見已つて即四兵

を厳よそおいて彼の国に発向し討罰を為んと欲す我等爾の時に当に眷属無量無辺

の薬叉諸神と各形を隠かくして為に護助を作し彼の怨敵をして自然に降伏せし

むべし」等云云、最勝王經の文又かくのごとし、大集經云云・仁王經

云云、此等の經文のごときんば正法を行ずるものを国主あだみ邪法を行

ずる者のかたうとせば大梵天王・帝釈・日月・四天等・隣国の賢王の身に

入りかわりて其の国をせむべしとみゆ、例せば訖利多王を雪山下王のせめ

大族王を幻日王の失うしないがごとし、訖利多王と大族王とは月氏の仏法を失うしな

し王ぞかし、漢土にも仏法をほろぼしし王みな賢王に・せめられぬ、これ

は彼にはなるべくもなしかほこ仏法のかたうとなるようにてぶつぽう仏法を失はなうほつし法師を

扶たすくと見えて正しょう法の行ぎやう者を失うしなうゆへに愚ぐ者はすべてしらちず智し者やなんども
常じやうの智ち人じんはしりがたし、天てんも下げ劣れつの天てん人じんは知ららずもやあるらん、されば漢かん土ど
がつし
・月げつ氏のいにしへのみだれよりも大きなるべし。

ほうめつじんきやう いわ
法滅尽ほうめつじんきやう經きやうに云いく「吾わ般はん泥に☆ののち後ご・五ご逆ぎやく濁じやく世せに魔ま道どう興きやう盛せいし魔ま沙しゃ門もんと作なつ

わ
て吾わが道みちを壊え乱らんせん、乃な至いた惡あく人にん転た多たく海かい中ちゆうの沙いさの如ごとく善ぜん者しや甚はなはだ少すくして

も
若もしは一も若もしは二に云い云い、涅槃ねはん經ぎやうに云いく「是かくくの如ごとき等との涅槃ねはん經ぎやう典てんを信しんず

るものは爪そうじやう上じやうの土どの如ごとく乃な至いた是しの經きやうを信しんぜざるものは十じゅう方ぽう界かいの所有しやうの

ちとど
地ち土どの如ごとし」等と云い云い、此この經きやう文もんは時ときに当あたりて貴とうとく予よが肝かんに染そみぬ、当とう世せ

にほんこく
・日本にほん国こくには我わも法華ほけ經きやうを信しんじたり信しんじたり、諸しよ人にんの語ことのことば

ほうほう
も謗ほう法ほうの者ものなし、此この經きやう文もんには末まつ法ぽうに謗ほう法ほうの者もの・十じゅう方ぽうの地ち土ど・正しょう法ほうの者もの

そうじやう
爪そうじやう上じやうの土ど等と云い云い、經きやう文もんと世せ間けんとは水すい火かなり、世せ間けんの人ひと云いく日本にほん国こくには日にち蓮れん

ばか
一いっ人にん計けいり謗ほう法ほうの者もの等と云い云い、又また經きやう文もんには大だい地ちより多おほからんと云い云い、法滅尽ほうめつじんきやう經きやう

には善者ぜんしや一二人、涅槃經ねはんぎようには信者しんじやう爪上土等云云、經文きやうもんのごとくならば
にほんこく にちれん
日本国は但日蓮一人こそ爪上土二人にては候へ、されば心あらん人ひとびとは
きやうもん
經文きやうもんをか用ゆべき世間せけんをか用ゆべき。

問て云く涅槃經ねはんぎようの文には涅槃經ねはんぎようの行者ぎやうじやは爪上の土等云云、汝なんじが義には

ほけきやう
法華經等云云如何、答えて云く涅槃經ねはんぎように云く「法華の中の如し」等云云、

みようらくだいしいわ

妙楽大師云く「大經だいぎよう自ら法華を指して極ごくと為す」等云云、大經だいぎようと申すは

ねはんぎよう

涅槃經なり涅槃經ねはんぎようには法華經を極ごくと指て候なり、而しかるを涅槃宗の人の涅槃經ねはんぎよう

ほけきやう

を法華經に勝ると申せしは主を所従しよじゆうといひる下郎を上郎といひるし人なり、

ねはんぎよう

涅槃經をよむと申すは法華經をよむを申すなり、譬たとへば賢人けんじんは国主こくしゆを重ん

ずる者をば我をさぐれども悦ぶなり、

涅槃經ねはんぎようは法華經を下て我をほむる人

をばあながちに敵とにくませ給う、

此の例をもつて知るべし華嚴經・觀經けこんぎよう・觀經かんぎよう

だいにかきやう

・大日經等をよむ人も法華經を劣とよむは彼れ彼れの經經きやうぎようの心にはそむ

くべし、此れをもつて知るべし法華經をよむ人の此の經をば信ずるようなれども諸經にても得道なるとおもふは此の經をよまぬ人なり、例せば嘉祥大師は法華玄と申す文十卷造りて法華經をほめしかども妙樂かれをせめて云く「毀其の中に在り何んぞ弘讚と成さん」等云云、法華經をやぶる人なり・されば嘉祥は落ちて天台につかひて法華經をよまず我れ經をよむならば惡道まぬかれがたしとて七年まで身を橋とし給いき、慈恩大師は玄賛と申して法華經をほむる文十卷あり伝教大師せめて云く「法華經を讀むると雖も還て法華の心を死す」等云云、此等をもつておもふに法華經をよみ讚歎する人人の中に無間地獄は多く有るなり、嘉祥・慈恩すでに一乗誹謗のぞかし、弘法・慈覺・智証あに法華經蔑如の人にあらずや、嘉祥大師のごとく講を廢し衆を散じて身を橋となせしも猶已前の法華經誹謗の罪やきへざるらん、例せば不輕輕毀の衆は不輕菩薩に信伏隨從せしかども重罪い

まだ・のこりて千劫阿鼻に墮ちぬ、されば弘法・慈覚・智証等は設い・ひ
るがへす心ありとも尚法華經をよむならば重罪きへがたし・いわうや・ひ
るがへる心なし、又法華經を失い真言教を昼夜に行い朝暮に伝法せしをや、
世親菩薩・馬鳴菩薩は小をもつて大を破せる罪をば舌を切らんとこそせさ
せ給いしか、世親菩薩は仏説なれども阿含經をば・たわふれにも舌の上に
をかじとちかひ、馬鳴菩薩は懺悔のために起信論をつくりて小乗をやぶ
り給き、嘉祥大師は天台大師を請じ奉りて百余人の智者の前にして五体を
地になげ遍身にあせをながし紅のなんだをながして今よりは弟子を見じ
法華經をかうぜじ弟子の面をまほり法華經をよみたてまつれば我力の此の
經を知るにいたりて・天台よりも高僧老僧にておはせしがわざと人のみ
るときをひまいらせて河をこへかうざにちかづきて・せなかにのせまいら
せて高座にのぼせたてまつり結句御臨終の後は隋の皇帝にまいらせて

小児しょうにが母にをくれたるがごとくに足ずりをして・なき給たまいしなり、嘉祥大師かじょうだいしの法華玄ほっけを見るにいたう法華經ほけきょうを謗ぼうじたる疏じよにはあらず但法華經ほけきょうと諸しよだいじようきよう大乘經だいじようきようとは門もんは浅深せんじんあれども心は一と・かきてこそ候へ此これが謗法ぼうぼうの根本こんぽんにて候か。

華嚴けこんの澄觀ちようかんも真言しんこんの善無畏ぜんむいも大日經だいにちきようと法華經ほけきようとは理は一とこそかかれ候へ、嘉祥大師かじようだいしとがあらば善無畏ぜんむい三藏さんぞうも脱のがれがたしされば善無畏ぜんむい三藏さんぞうは中天こくしゆの国主こくしゆなり位をすてて他国たこくにいたり殊勝しゆじよう・招提しやうだいの二人にあひて法華經ほけきようをうけ百千の石の塔を立てしかば法華經ほけきようの行者ぎぎやうじやとこそみへしか、しかれども大日經だいにちきようを習ならいしより・このかた法華經ほけきようを大日經だいにちきように劣るとやおもひけん、始そはいたう其その義もなかりけるが漢土かんとにわたりて玄宗皇帝げんそうていの師となりぬ、天台宗てんだいしゆうをそねみ思おもう心つき給たまいけるかのゆへに、忽たちまちに頓死とんしして二人の獄卒ごくそつに鉄くろがねの繩なな・七すぢつけられて閻魔王宮えんまおうきゆうにいたりぬ、命いのちいまだ・つきずと

・いゐてかへされしに法華經を謗ずるとやおもひけん真言の觀念・印・
真言等をば・なげ

すてて法華經の今此三界の文を唱えて繩も切れかへされ給いぬ、又雨のい
のりをおほせつけられたりしに忽に雨は下たりしかども大風吹きて国をや
ぶる、結句死し給いてありしには弟子等集りて臨終いみじきやうをほめし
かども無間・大城に墮ちにき、問うて云く何をもつてかこれをする、答え
て云く彼の伝を見るに云く「今畏の遺形を觀るに漸く加縮小し黒皮隱隱
として骨其露なり」等云云、彼の弟子等は死後に地獄の相の顯われたるを
しらずして徳をあぐなどをもへども・かきあらはせる筆は畏が失をかけり、
死してありければ身やふやくつづまり・ちひさく皮はくろし骨あらはなり
等云云、人死して後・色の黒きは地獄の業と定むる事は仏陀の金言ぞかし、
善無畏三蔵の地獄の業はなに事ぞ幼少にして位をすてぬ第一の道心なり、

がつし

月氏・五十余箇国を修行せり慈悲の余りに漢土にわたれり、天竺・震旦・

にほん

えんぶだい

しんこん

日本一閻浮提の内に真言を伝へ鈴をふる此の人の徳にあらずや、いかにし

じごく

お

ごしょう

ひとびと

たず

て地獄に堕ちけると後生をおもはん人人は御尋ねあるべし。

こんごうちさんぞう

てんじく

だいおう

たいし

こんごうちようきよう

かんど

又金剛智三蔵は南天竺の大王の太子なり、金剛頂經を漢土にわたす其の

ぜんむい

てんじく

だいおう

たいし

こんごうちさんぞうきよくせん

かんど

そ

徳善無畏のごとし、又互いに師となれり、而るに金剛智三蔵勅宣により雨

ぜんむい

てんじく

だいおう

たいし

こんごうちさんぞうきよくせん

かんど

あめ

の祈りありしかば七日が中に雨下る天子大に悦ばせ給うほどに忽に大風吹

おうしん

あめふ

てんしおおい

よろこ

たま

たちまちたいふう

き来る、王臣等けうさめ給いき使をつけて追はせ給いしかども・とかうの

とどま

けつく

ひめみや

しきよ

たま

たま

たま

たま

たま

たま

たま

べて留りしなり、結句は姫宮の御死去ありしに、いのりをなすべしとて御身

とどま

けつく

ひめみや

しきよ

たま

たま

たま

たま

たま

たま

たま

の代に殿上の二女七歳になりしを薪につみこめて焼き殺せし事こそ無慚に

し

ひめみや

ふくうさんぞう

こんごうち

が

が

が

が

が

が

が

はおぼゆれ、而れども姫宮もいきかへり給はず不空三蔵は金剛智と月支よ

し

ひめみや

ふくうさんぞう

こんごうち

が

が

が

が

が

が

が

り御ともせり、此等の事を不審とやおもひけん畏と智と入滅の後・月氏に

これら

ふしん

ふしん

ふしん

ふしん

ふしん

ふしん

ふしん

ふしん

ふしん

ふしん

還りて竜智に値い奉り真言を習いなをし天台宗に帰伏してありしが心計り

あ

たてまつしんこん

なら

なら

なら

なら

なら

なら

なら

なら

なら

は帰えれども身はかへる事なし、雨の御いのりうけ給わりたりしが三日と
申すに雨下る、天子悦ばせ給いて我れと御布施ひかせ給う、須臾ありしか
ば大風落ち下りて内裏をも吹きやぶり雲閣月卿の宿所一所も・あるべしと
もみへざりしかば天子大に驚きて宣旨なりて風をとどめよと仰せ下さる
しば
且らくありては又吹き又吹きせしほどに数日が間やむことなし、結句は使
をつけて追うてこそ風もやみてありしか、此の三人の悪風は漢土・日本の
一切の真言師の大風なり。

さにてあるやらん去ぬる文永十一年四月十二日の大風は阿弥陀堂の加賀
法印・東寺第一の智者の雨のいのりに吹きたりし逆風なり、善無畏・金剛智
・不空の悪法をすこしもたがへず伝えたりけるか・心にくし・心にくし。
弘法大師は去ぬる天長元年の二月大旱魃のありしに先には守敏・祈雨し
て七日が内に雨を下す但京中にふりて田舎にそそがず、次に弘法承取て一

七日に雨氣なし二七日に雲なし三七日と申せしに天子より和氣の真綱あみを使
者として御幣ぬさを神泉苑しんせんおんにまいらせたりしかば天雨下事三日、此れをば弘法こうぼう
大師だいし並に弟子等でし・此の雨をうばひとり我が雨として今に四百余年・弘法こうぼう
雨あめという、慈覚大師の夢に日輪をいしと弘法大師の大妄語に云く弘仁九年
の春・大疫をいのりしかば夜中に大日輪出現せりと云云、成劫より已来このかた
・住劫の第九の減・已上二十九劫が間に日輪夜中に出でしという事なし、
慈覚大師は夢に日輪をいるという内典五千・七千・外典三千余卷に日輪を
いるとゆめにみるは吉夢という事有りやいなや、修羅しゆらは帝釈たいしやくをあだみて
日天をいたてまつる其の矢かへりて我が眼にたつ、殷いんの紂王は日天を的ひのかみに
いて身を亡ほろす、日本の神武天皇の御時おんとき・度美長と五瀬命と合戦ありしに命
の手に矢たつ、命の云く我はこれ日天の子孫なり日に向い奉りて弓をひく
ゆへに日天のせめをかをほれりと云云、阿闍世王は邪見をひるがえして仏

に歸しまいらせて内裏に返りて・ぎよしんなりしが、おどろいて諸臣に向
て云く日輪・天より地に落つとゆめにみる諸臣の云く仏の御入滅か云云、
須跋陀羅がゆめ又かくのごとし、我国は殊にいむべきゆめなり神をば天照
という国をば日本という、又教主釈尊をば日種と申す摩耶夫人日をはら
むとゆめにみて・まうけ給える太子なり、慈覺大師は大日如来を叡山に立
て釈迦仏をすて真言の三部經をあがめて法華經の三部の敵となせしゆへに
此の夢出現せり。

例せば漢土の善導が始は密州の明勝といゐし者に値うて法華經をよみた
りしが後には道綽に値うて法華經をすて觀經に依りて疏をつくり法華經
をば千中無一・念仏をば十即十生・百即百生と定めて此の義を
成ぜんがために阿彌陀仏の御前にして祈誓をなす、仏意に叶うやいなや毎
夜夢の中に常に一りの僧有りて来て指授すと云云、乃至一經法の如くせ

ないしかんねんほうもん

よ乃至観念法門經等云云、法華經には「若し法を聞く者有れば一として

じょうぶつ

成仏せざる無し」と善導は「千の中に一も無し」等云云、法華經と善導と

すいか

は水火なり善導は觀經をば十即十生・百即百生・無量義經に云く

かんきよう

「觀經は未だ眞實を顕さず」等云云、無量義經と楊柳房とは天地なり此れ

あみだぶつ

を阿弥陀仏の僧と成りて來つて汝が疏は眞なりと証し給わんは・あに眞事

なんじ

ならんや、抑阿弥陀は法華經の座に來りて舌をば出だし給はざりけるか、

かんのん

觀音・勢至は法華經の座にはなかりけるか、此れをもつて・をもへ慈覺大師

せいし

の御夢は・わざわひなり。

いわ

問うて云く弘法大師の心經の秘鍵に云く「時に弘仁九年の春天下大疫す、

こころ

爰に皇帝自ら黄金を筆端に染め紺紙を爪掌に握りて般若心經一卷を書写

たてまつたま

し奉り給う予、講読の撰に範りて經旨の宗を綴る未だ結願の詞を吐かざる

やから

に蘇生の族途にイずむ、夜變じて而も日光赫赫たり是れ愚身の戒徳に非ず

金輪しんりき御信力しよいの所た為だなり、但ただし神舎しんかに詣もつでん輩やからは此ひけんの秘鍵じゅを誦たてまし奉たてまれ、昔予じゅぶせつぼう驚峰むしろ說法まのあたその筵むしろに陪まのあたそして親まのあたそり其まのあたその深文あにそを聞あにそきたてまつる豈あにそ其あにその義あにそに達あにそせざらんや」等云云、又孔雀經くじやくの音義いわに云く「弘法大師こうぼうだいし歸朝きしちやうの後しんこんしゅう真言宗しんこんしゅうを立てんと欲しよしゅうし諸宗しよしゅうを朝廷しよしゅうに群集しよしゅうす即身成仏そくしんじやうぶつの義うたがいを疑うたがいう、大師智拳だいしちけんの印だいいしちけんを結びて南方なんぼうに向なんぼううに面門めんもん俄いつに開ひらいて金色きんしきの毘盧遮那びるしゃなと成なり即便すなわち本体ほんていに還歸げんきす、入我我入にががにがの事こと・即身頓証そくしんとんしやうの疑うたがいい此この日にち釈然しやくぜんたり、然しかるに真言しんこん瑜伽ぎやの宗しゆ・秘密ひみつ曼荼羅まんだらの道みち・彼の時ときより建立こんりやうしぬ、又云く「此この時に諸宗しよしゅうの学徒しよしゅう大師だいしに歸かへして始めて真言しんこんを得えて請益しやうやくし習学しゅうがくす三論さんろんの道昌どうしやう・法相ほつそうの源仁げんじん・華嚴けこんの道雄どうゆう・天台てんだいの円澄えんちやう等皆其みなその類たぐいなり、弘法大師こうぼうだいしの伝でんに云く「歸朝きちやう泛舟はんしゅうの日にち、發願ほつがんして云く我が所學きやうぼうもの教法かんのお若もし感応かんのうの地有あらば此こ三鉢さんこ其そのの処ところに到いたるべし仍またて日本にほんの方かたに向むかて三鉢さんこを抛なげ上はるぐ遙はるかに飛とんで雲うみに入いる十月じふがつに歸朝きちやうす」云云、又云く「高野山こうやさんの下したに入い定じやうじやうの所しを占しむ乃な至いたる

彼の海上の三鉢さんこ今新たに此こに在り」等云云、此の大師の徳無量むりようなり其の兩
三を示すかくのごとくの大徳だいとくあり・いかんが此の人を信ぜずしてかへりて
阿鼻地獄あびじごくに墮おつるといはんや、答えて云く予も仰いで信じ奉る事かくのごとし
但古の人人も不可思議ふかしぎの徳ありしかども仏法の邪正は其にはよらず、外道
が・或は恒河を耳に十二年留め・或は大海をすひほし・或は日月を手にに
ぎり・或は釈子を牛羊ぎゅうようとなしなんどせしかども・いよいよ大慢を・をこし
て生死しょうじの業とこそなりしか、此れをば天台云く「名利を邀め見愛を増す」
とこそ釈せられて候へ、光宅が忽に雨を下し須臾に花をさかせしをも妙樂
は「感応かんのう此の如ごとくなれども猶理に称かなわず」とこそかかれて候へ、されば
天台大師の法華經をよみて「須臾に甘雨かんうを下せ」伝教大師の三日が内に
甘露かんろうの雨をふらしておはせしも其をもつて仏意に叶かなうとはをほせられず、
弘法大師いかなる徳ましますとも法華經を戲論の法と定め釈迦しゃか仏を無明むみようの

辺域へんいきとかかせ給たまへる御ごふでは智慧ちえかしこからん人は用もちゆべからず、いかに
いだえき
わうや上にあげられて候徳ちどもは不審ふしんある事なり、「弘仁九年こうにんの春天下てんが
大疫だいえき」等云云、春は九十日・何いの月づれ・何いの日づれぞ是一、又弘仁九年には大疫だいえき
ありけるか是二、又「夜変やへんじて日光赫赫かくかくたり」と云云、此の事第一だいいちの大事だいいじ
なり弘仁九年は嵯峨天皇の御宇ごうなり左史右史の記に載のせたりや是三、設たい
載のせたりとも信じがたき事なり成劫じょうきやく二十劫・住劫九劫・已上二十九劫が間
にいまだ無てんべんき天変てんべんなり、夜中にちりんに日輪しゅつげんの出現いせる事如何い又如来にょらい一代いちだいの聖教しょうきょう
にもみへず未来みらいに夜中にちりんに日輪しゅつげん出いずべしとは三皇さんこう・五帝ごていの三墳さんぶん・五典ごてんにも
載のせず仏經ぶつぎょうのごときんば壞劫えこうにこそ二の日・三の日乃至ないし・七の日は出いずべ
しとは見えたれどもかれは昼のことぞかし夜日出現しゅつげんせば東西北の三方は
如何い、設いい内外たの典ないげに記せずとも現げんに弘仁九年こうにんの春何れいの月何れいの日何れい
の夜いの何れいの時に日出いずるといいう公家くげ・諸家しよ・叡山等えいざんの日記にあるならばす

こし信ずるへんもや、次ぎ下に「昔予鷲峰説法の筵に陪して親り其の深文

を聞く」等云云、此の筆を人に信ぜさせしめんがためにかまへ出だす大妄語

か、されば靈山にして法華は戲論・大日経は真実と仏の説き給けるを阿難

・文殊が☆りて妙法華経をば真実とかけるかいかん、いうにかいなき姪女

・破戒の法師等が歌をよみて雨す雨を三七日まで下さざりし人はかかる徳

あるべしや是四、孔雀経の音義に云く「大師智拳の印を結んで南方に向う

に面門俄かに開いて金色の毘盧遮那と成る」等云云、此れ又何れの王何れ

の年時ぞ漢土には建元を初とし日本には大宝を初として緇素の日記大事に

は必ず年号のあるが、これほどの大事にいかでか王も臣も年号も日時もな

きや、又次ぎに云く「三論の道昌・法相の源仁・華嚴の道雄・天台の円澄」

等云云、抑も円澄は寂光大師・天台第二の座主なり、其の時何ぞ第一

の座主・義真根本の伝教大師をば召さざりけるや、円澄は天台第二の

座主伝ざすでんぎようだいし 教大師おんでしの御弟子ごでしなれども又弘法大師こうぼうだいしの弟子でしなり、弟子でしを召さんより

は三論さんろん・法相ほつそう・華嚴けこんよりは天台てんだいの伝教でんぎよう・義真ぎしんの二人ふたりを召すめべかりけるか、

而も此しかの日記にっきに云いわく「真言しんこん瑜伽ゆいがの宗しゆ・秘密ひみつ曼荼羅まんだら彼の時ときよりして建立こんりゆうす」

等云云、此の筆でんぎようは伝教でんぎよう・義真ぎしんの御存生ごんしやうかとみゆ、弘法こうぼうは平城天皇へいぜいてんのう・大同

二年こうにんより弘仁こうにん十三年までは盛さかんに真言しんこんをひろめし人なり、其そのときの時ときは此このときの二人ふたり現

におはします又義真ぎしんは天長十年までおはせしかば其そのときの時ときまで弘法こうぼうの真言しんこんは

・ひろまらざりけるか・かたがた不審ふしんあり、孔雀經くじやくの疏じよは弘法こうぼうの弟子でし・真濟しんざい

が自記じきなり信じがたし、又邪見者じゃけんが公家くげ・諸家しよ・円澄えんちやうの記きをひかるべきか、

又道昌どうしやう・源仁げんじん・道雄どうゆうの記きを尋ぬべし、「面門めんもん俄にわかに開ひらいて金色きんしきの毘盧遮那びるしやな

と成る」等云云、面門めんもんとは口なり口の開けたりけるか眉間みけん開くとかかんと

しけるが☆あやまりて面門めんもんとかけるか、ぼう書しよをつくるゆへにかかるあやまりあ

るか、「大師智拳だいしちけんの印いんを結むすんで南方なんぼうに向むかうに面門めんもん俄にわかに開ひらいて金色きんしきの

毘盧遮那と成る」等云云、涅槃經の五に云く「迦葉・仏に白して言さく世尊
・我今是の四種の人に依らず何を以ての故に瞿師羅經の中の如き仏・
瞿師羅が為に説きたまわく若し天魔梵破壊せんと欲するが為に變じて仏の
像と為り三十二相・八十種好を具足し莊嚴し円光一尋面部円満なること猶
月の盛明なるが如く眉間の毫相白きこと珂雪に踰え乃至左の脇より水を出
し右の脇より火を出す」等云云、又六の卷に云く「仏迦葉に告げたまわく
我般涅槃して乃至後是の魔波旬漸く当に我が正法を沮壞す乃至化して
阿羅漢の身及仏の色身と作り魔王此の有漏の形を以て無漏の身と作り我が
正法を壞らん」等云云、弘法大師は法華經を華嚴經・大日經に對して戲論
等云云、而も仏身を現ず此れ涅槃經には魔有漏の形をもつて仏となつて我
が正法をやぶらんと記し給う、涅槃經の正法は法華經なり故に經の次ぎ下
の文に云く「久く已に成仏す」、又云く「法華の中の如し」等云云、釈迦

・多宝・十方の諸仏は一切経に對して「法華経は眞実大日経等の一切経は不眞実」等云云、弘法大師は仏身を現じて華嚴経・大日経に對して「法華経は戲論」等云云、仏説まことならば弘法は天魔にあらずや、又三鈔の事殊に不審なり漢土の人の日本に來りてほりいだすとも信じがたし、已前に人をや・つかわして・うずみけん、いわうや弘法は日本の人・かかる誑乱其の数多し此等をもつて仏意に叶う人の証拠とはしりがたし。

されば此の眞言・禪宗・念佛等やうやくかさなり来る程に人王八十二代・尊成・隱岐の法皇・権の太夫殿を失わんと年ごろはげませ給いけるゆへに大王たる国主なれば・なにとなくとも師子王の兔を伏するがごとく、鷹の雉を取るやうにこそあるべかりし上・叡山・東寺・園城・奈良・七太寺・天照太神・加茂・春日等に数年が間・或は調伏・或は神に申させ給いに二日三日だにもささへかねて佐渡国・阿波国・隱岐国等にながし失て

ついについにかくれさせ給たまいぬ、調伏じょうぶくの上首御室じょうしゅおむろは但東寺とうじをかへらるるのみならず眼まなこのごとくあひせさせ給たまいし第一だいいちの天童てんどう・勢多伽せいたかが頸切けきりられたりしかば調伏じょうぶくのしるし還著げんちやく於本人おほんにんのゆへとこそ見へて候へ、これは・わづかの事なり此の後定にほんこくんで日本国しよの諸臣万民ばんみん一人もなく乾草かれくさを積みて火を放つがごとく大山おほやまのくづれて谷をうむるがごとく我が国たこく・他国たこくに・せめらるる事出来すべし、此の事日本国にほんこくの中に但日蓮にちれん一人計ばかりしれり、いゐいだすならば殷いんのちゆうの紂王ひかんの比干ひかんが胸をさきしがごとく夏の桀王かのけつの竜蓬りゅうほうが頸を切りしがごとく檀弥羅王だんみらの師子尊者ししそんじやが頸を刎はねしがごとく竺の道生じくのだうしやうが流されしがごとく法道三蔵ほうどうさんぞうのかなやきを・やかれしがごとくならんずらんとは・かねて知りしかども法華經ほけきやうには「我身命しんみやうを愛せず、但無上道むじやうだうを惜おししむ」ととかれ涅槃經ねはんきやうには「寧身命むしろしんみやうを喪うしなうとも教を匿かくさざれ」といさめ給たまえり、今度命このたびをおしむならばいつの世にか仏になるべき、又何いかなる世にか父母ふぼ・師匠ししやうをも・す

くひ奉るべきとひとへにをもひ切りて申し始めしかば案にたがはず・或は

所をおひ・或はのり・或はうたれ・或は疵をかうふるほどに去ぬる弘長

がんねんかのとり

元年辛酉五月十二日に御勘氣をかうふりて伊豆の国・伊東にながされぬ、

又同じき弘長三年癸亥二月二十二日にゆりぬ。

其の後弥菩提心強盛にして申せばいよいよ大難かさなる事大風に大波

の起るがごとし、昔の不輕菩薩の杖木のせめも我身につみしられたり覺徳

比丘が歡喜仏の末の大難も此れには及ばじと・をぼゆ、日本六十六箇国・

嶋二の中に一日片時も何れの所にすむべきやうもなし、古は二百五十戒を

持ちて忍辱なる事・羅云のごとくなる持戒の聖人も富樓那のごとくなる

智者も日蓮に値いぬれば悪口をはく正直にして魏徴・忠仁公のごとくなる

賢者等も日蓮を見ては理をまげて非とをこなう、いわうや世間の常の人人

は犬のさるをみたるがごとく獵師が鹿をこめたるにいたり、日本国の中に

一人として故こそあるらめという人なし道理なり、人ごとに念仏を申す人に向うごとに念仏は無間に墮つるというゆへに、人ごとに真言を尊む真言は国をほろぼす悪法という、国主は禪宗を尊む日蓮は天魔の所為というゆへに我と招けるわざわひなれば・人ののるをも・とがめず・とがむとても一人ならず、打つをもいたまず本より存ぜしがゆへに・かう・いよいよ身をもしまず力にまかせて・せめしかば禅僧数百人・念仏者・数千・真言師・百千人・或は奉行につき・或はきり人につき・或はきり女房につき・或は後家尼御前等について無尽のざんげんをなせし程に最後には天下第一の大事・日本国を失わんと咒する法師なり、故最明寺殿・極楽寺殿を無間地獄に墮ちたりと申す法師なり御尋ねあるまでもなし但須臾に頸をめせ弟子等をば又頸を切り・或は遠国につかはし・或は籠に入れよと尼ごぜんたちいからせ給いしかばそのまま行われけり。

御前達

たま

去いぬる文永八年辛ふんえい 未九月十二日の夜は相模さがみの国たつの口にて切らるべ
かりしが、いかにしてやありけん其その夜はのびて依智えちというところへつき
ぬ、又十三日の夜はゆりたりと・どどめきしが又いかにやありけん・さ佐渡と
の国までゆく、今日きょう切るあす切るといひしほどに四箇年というに結句けっくは
去いぬる文永ふんえい十一年太歳甲戌きのえいぬ二月十四日に・ゆりて同じき三月二十六日に
鎌倉へ入り同じき四月八日平さへもんの左衛門の尉に見参してやうやうの事もう申した
りし中に今年もうこは蒙古は一定よすべしと申しぬ、同じき五月の十二日にかま
くらをいでて此の山に入れり、これはひとへに父母ふぼの恩師ししやう匠しやうの恩・三宝さんぼうの
恩・国恩をほうぜんがために身をやぶり命をすつれども破われざればさでこ
そ候へ、又賢人けんじんの習ならい三度国をいさむるに用もちいずば山林さんりんにまじわれという
ことは定まるれいなり、此の功德くどくは定めて上三宝さんぼう・下梵天ぼんてん・帝釈たいしやく・日月にちがつま
でもしろしめしぬらん、父母ふぼも故道善房どうぜんぼうの聖靈しやうりやうも扶たすかり給たまうらん、但疑うたがひ

い念うことあり目連尊者は扶けんと・おもいしかども母の青提女は餓鬼道
に墜ちぬ、大覺世尊の御子なれども善星比丘は阿鼻地獄へ墜ちぬ、これは
力のまま・すくはんと・をぼせども自業自得果のへんはすくひがたし、故
道善房はいたう弟子なれば日蓮をばにくしとはをぼせざりけるらめどもき
わめて臆病なりし上・清澄をはなれじと執せし人なり、地頭景信がおそろ
しさといる・提婆・瞿伽利にことならぬ円智・実成が上と下とに居てをど
せしをあながちにをそれていとをしとをもうとしごろの弟子等をだにもす
てられし人なれば後生はいかんがと疑わし、但一の冥加には景信と円智・
実成とが・さきにゆきしこそ一のたすかりとは・をもへども彼等は法華經
十羅刹のせめをかほりてはやく失ぬ、後にすこし信ぜられてありしは・い
さかひの後のちぎりきなり、ひるのもしびなにかせん其の上いかなる事
あれども子・弟子などという者は不便なる者ぞかし、力なき人にもあらざ

りしが・さどの国までゆきしに一度もとぶらはれざりし事は法華經を信じ
たるにはあらぬぞかし・それにつけても・あさましかれば彼の

人の御死去ときくには火にも入り水にも沈み・はしりたちても・ゆひて御

はかをも・たたいて經をも一卷読誦せんとこそおもへども賢人のならひ心

には遁世とは・おもはねども人は遁世とこそおもうらん・ゆへもなく・

はしり出ずるならば末へも・とをらずと人おもひぬべし、されば・いかに

おもひたてまつれども・まいるべきにあらず、但し各各二人は日蓮が幼少

の師匠にて・おはします、勤操僧正・行表僧正の伝教大師の御師たり

しがかへりて御弟子とならせ給いしがごとし、日蓮が景信にあだまれて清

澄山を出でしにかくしおきてしのび出でられたりしは天下第一の法華經の

奉公なり後生は疑いおぼすべからず。

問うて云く法華經一部八卷・二十八品の中に何物か肝心なるや、答えて

いわ けこんきよう
云く華嚴經の肝心は大方広仏華嚴經・阿含經の肝心は仏說中阿含經・
だいしつきよう かんじん ほうとう だいしつきよう
大集經の肝心は大方等・大集經・般若經の肝心は摩訶般若波羅蜜經・
そうかんきよう かんじん ぶつせつむりよう
雙觀經の肝心は仏說無量壽經・觀經の肝心は仏說觀無量壽經・阿彌陀經
かんじん ぶつせつあみだ ねはんきよう かんじん だいはいつねはんきよう
の肝心は仏說阿彌陀經・涅槃經の肝心は大般涅槃經かくのごとくの一切經
みなによぜがもん かみ だいもくそ
は皆如是我聞の上の題目其の經の肝心なり、大は大につけ小は小につけて
だいもく かんじん だいにちきよう こんごうちようきよう そしつちきよう またまた
題目をもつて肝心とす、大日經・金剛頂經・蘇悉地經等亦復かくのごと
し、仏も又かくのごとし大日如來・日月燈明仏・燃燈仏・大通仏・
うんらいおんのうぶつこれら そ しゅじゅ
雲雷音王仏是等の仏も又名の内に其の仏の種種の徳をそなへたり、今の
ほけきよう また
法華經も亦もつてかくのごとし、如是我聞の上の妙法蓮華經の五字は即一
部八卷の肝心、亦復一切經の肝心一切の諸仏・菩薩・二乘・天人・修羅・
りゅうじん ちようじよう しょうほう いわ なむ みようほうれんげきよう
竜神等の頂上の正法なり、問うて云く南無妙法蓮華經と心もしらぬ者
とな なむ けこんきよう
の唱うると南無大方広仏華嚴經と心もしらぬ者の唱うると斉等なりや淺深

の功德差別せりや、答えて云く浅深等あり、疑て云く其の心如何、答えて云く小河は露と涓と井と渠と江とをば収むれども大河ををさめず大河は露乃至小河を摂むれども大海ををさめず、阿含経は井江等露涓ををさめたる小河のごとし、方等経・阿弥陀経・大日経・華嚴経等は小河ををさむる大河なり、法華経は露・涓・井・江・小河・大河・天雨等の一切の水を一てきももらさぬ大海なり、譬えば身の熱者の大寒水の辺にいなつれば・すずしく小水の辺に臥ぬれば苦きがごとし、五逆謗法の大きな一闍提人・阿含・華嚴・觀経・大日経等の小水の辺にては大罪の大熱さんじがたし、法華経の大雪山の上に臥ぬれば五逆・誹謗・一闍提等の大熱忽に散ずべし・されば愚者は必ず法華経を信ずべし、各各経経の題目は易き事同じといへども愚者と智者との唱うる功德は天地雲泥なり、譬へば大綱は大力も切りがたし小力なれども小刀をもつてたやすくこれをきる、

たと 譬へば堅石をば鈍刀をもてば大力も破がたし、利剣をもてば小力も破り

たと ぬべし、譬へば薬はしらねども服すれば病やみぬ食は服すれども病やまず、

たと 譬へば仙薬は命をのべ凡薬は病をいやせども命をのべず。

うたがい

疑つて云く二十八品の中に何か肝心ぞや、答えて云く・或は云く品品皆

事したがに随かんじんいて肝心なり、・或は云く方便品・寿量品肝心なり、・或は云く

ほうべん かんじん

ある

いわ じゅうようほんかんじん

ある

いわ かいじこにゅうかんじん

方便品肝心なり、・或は云く寿量品肝心なり、・或は云く開示悟入肝心な

ある

いわ じつそうかんじん

り、・或は云く実相肝心なり。

問うて云く汝が心如何答う南無妙法蓮華経肝心なり、其の証如何・阿難

もんじゅ によぜがもん

・文殊等如是我聞等云云、問うて云く心如何、答えて云く阿難と文殊とは

ほけきよう むりよう

いっく

いちげ

ちようもん

八年が間・此の法華経の無量の義を一句・一偈・一字も残さず聴聞してあ

めつこ けつじゅう

りしが仏の滅後に結集の時九百九十九人の阿羅漢が筆を染めてありしに先

みようほうれんげきよう

たまい

によぜがもん

たまい

づはじめに妙法蓮華経とかかせ給いて如是我聞と唱えさせ給いしは

妙法蓮華經の五字は一部八卷・二十八品の肝心にあらずや、されば過去の
燈明仏の時より法華經を講ぜし光宅寺の法雲法師は「如是とは將に所聞を
伝えんとす前題に一部を挙ぐるなり」等云云、靈山にまのあたり・きこし
めしてありし天台大師は「如是とは所聞の法体なり」等云云章安大師の
云く記者釈して曰く「蓋し序王とは經の玄意を叙し玄意は文心を述す」等
云云、此の釈に文心とは題目は法華經の心なり妙樂大師云く「一代の教法
を収むること法華の文心より出ず」等云云、天竺は七十箇国なり總名は月氏
国・日本は六十箇国・總名は日本国月氏の名の内に七十箇国乃至人畜・
珍宝みなあり、日本と申す名の内に六十六箇国あり、出羽の羽も奥州の金
も乃至国の珍宝・人畜乃至寺塔も神社もみな日本と申す二字の名の内に摂
れり、天眼をもつては日本と申す二字を見て六十六国乃至人畜等を見るべ
し法眼をもつては人畜等の此に死し彼に生るをもみるべし譬へば人の声を

きいて体をしり跡をみて大小をしる蓮をみて池の大小を計り雨をみて竜
の分齊をかんがう、これはみな一に一切の有ることわりなり、阿含經の題目
には大旨一切はあるやうなれども但小釈迦・一仏のみありて他仏なし、
華嚴經・觀經・大日經等には又一切有るやうなれども二乗を仏になすや
うと久遠実成の釈迦仏いまず、例せば華さいて菓ならず雷なつて雨
ふらず鼓あつて音なし眼あつて物をみず女人あつて子をうまず人あつて命
なし又神なし、大日の真言・藥師の真言・阿弥陀の真言・觀音の真言等
又かくのごとし、彼の經經にしては大王・須弥山日月・良藥・如意珠・
利劍等のやうなれども法華經の題目に対すれば雲泥の勝劣なるのみならず
皆各各当体の自用を失ふ、例せば衆星の光の一日輪にうばはれ諸の鉄
の一の磁石に値うて利性のつき大剣の小火に値て用を失ない牛乳・驢乳等
の師子王の乳に値うて水となり衆狐が術・一犬に値うて失い、狗犬が小虎

に値^あうて色を變ずるがごとし、南無妙法蓮華經と申せば南無阿弥陀仏の用

も南無大日真言の用も觀世音菩薩の用も一切の諸^{いっさい}仏・諸^{しよぶつ}經・諸^{しよきやう}菩薩の用皆^{みな}

ことごとみょうほうれんげきやう

悉く妙法蓮華經の用に失なはる、彼の經^{きやうぎやう}經は妙法蓮華經の用を借^{みやうほうれんげきやう}ずば皆^{みな}

いたづらのものなるべし当時眼前^{とうじがんぜん}のことはりなり、日蓮^{にちれん}が南無妙法蓮華經

と弘^{ひろ}むれば南無阿弥陀仏の用は月のかくるがごとく塩のひるがごとく秋冬^{しゅうとう}

の草のかるるがごとく冰^{こおり}の日天^{にってん}にとくるがごとくなりゆくをみよ。

問^{いわ}うて云^{いわ}く此の法実^いにいみじくばなど迦葉^{かしやう}・阿難^{あなん}・竜樹^{りゅうじゆ}・馬鳴^{めみやう}・無著^{むぢやく}・

天親^{てんじん}・南岳^{なんがく}・天台^{てんだい}・妙樂^{みやうらく}・伝教^{でんぎやう}等は善導^{ぜんどう}が南無阿弥陀仏とすすめて漢土^{かんど}

に弘通^{くつう}せしがごとく、慧心^{えしん}・永觀^{ようかん}・法然^{ほうねん}が日本^{にほん}国^{こく}を皆阿弥陀仏^{みなあみだぶつ}になしたる

がごとく・すすめ給^{たま}はざりけるやらん、答^{こた}えて云^{いわ}く此の難^{なん}は古^{いにし}の難^{えなん}なり今

はじめたるにはあらず、馬鳴^{めみやう}・竜樹^{りゅうじゆ}菩薩^{ぼさつ}等は仏^{めつこ}の滅後^{めつこ}・六百年^{むっぴやうねん}・七百年^{しちひやうねん}等

の大論師^{ろんし}なり、此^{ひとびと}の人人^{ひとびと}・世^よにいでて大乘^{だいじやう}經^{きやう}を弘通^{くつう}せしかば諸^{しよ}諸^{しよ}の小乘^{しよもう}

の者疑うたがいつて云いわく迦葉かしよう・阿難等あなんは仏ぶつの滅後めつご・二十年・四十年住すし給たまいて
正しょう法ほうをひろめ給たまいしは如來にょらい一いち代だいの肝心かんじんをこそ弘通くつうし給たまいしか、而しかるに此この
人ひと人ひとは但むじよう苦く・空くう・無常むじよう・無我むがの法門ほうもんをこそ詮たまとし給たまいしに今馬鳴めみよう・竜樹等りゆうじゆ
かしこしといふとも迦葉かしよう・阿難等あなんにはすぐべからず是こ一いつ、迦葉かしようは仏ぶつにあひ
まいらせて解げをえたる人なり、此この人人ひとは仏ぶつにあひたてまつらず是こ二に、外道げどう
は常樂我淨じようらくがじようと立てしを仏ぶつ・世いに出いでさせ給たまいて苦く・空くう・無常むじよう・無我むがと説むかか
せ給たまいき、此このものどもは常樂我淨じようらくがじようといへり、されば仏ぶつも御入滅にゆうめつなり又
迦葉等かしようもかくれさせ給たまいぬれば第六天だいろくてんの魔王まおうが此このものどもが身みに入りか
はりて仏法ぶつぽうをやぶり外道げどうの法ぽうとなさんとするなり、されば仏法ぶつぽうのあだをば
頭かうへをわれ頸くをきれ命いのちをたて食じきを止めよ国くにを追おへと諸もろの小乘しょうじようの人人ひと人ひと申まをせし
かども馬鳴めみよう・竜樹等りゆうじゆは但むじよう・一二人ひとりふたりなり昼夜あつくに悪口あくぐちの声をきき朝暮ちやうぼに杖木じようもく
をかうふりしなり、而しかれども此この二人ふたりは仏ぶつの御使おんつかいぞかし、正まさく摩耶經まやには

六百年に馬鳴出で七百年に竜樹出でんと説かれて候、其の上楞伽經等に

も記せられたり又付法藏經には申すにをよばず、されども諸の小乗のも

のどもは用いず但めくらぜめにせめしなり、如来現在猶多怨嫉・況滅度後

の經文は此の時にあたりて少しつみしられけり、提婆菩薩の外道にころさ

れ師子尊者の頸をきられし此の事をもつておもひやらせ給へ。

又仏滅後・一千五百余年にあたりて月氏よりは東に漢土といふ国あり

陳隋の代に天台大師出世す、此の人の云く如来の聖教に大あり小あり顯

あり密あり権あり実あり、迦葉・阿難等是一向に小を弘め馬鳴・竜樹・

無著・天親等は権大乘を弘めて実大乘の法華經をば・或は但指をさして

義をかくし・或は經の面をのべて始中終をのべず、或は迹門をのべて

本門をあらはさず、或は本・迹あつて觀心なしといひしかば、南三・北七

の十流が末数千万人・時をつくり・どつとわらふ、世の末になるままだ

不思議ふしぎの法師ほっしも出現しゅつげんせり、時にあたりて我等われらを偏執へんしゅうする者はありとも後漢ごかんの永平十年丁卯ひのとつの歳より今陳隋ちんずいにいたるまでの三蔵さんぞう・人師にんし・二百六十余人をものもしらずと申もうす上謗法ほうぼうの者なり惡道あくどうに墜つるといふ者出来しゅつたいせり、あまりの・ものくるはしさに法華經ほけきょうを持たもて来り給たまへる羅什三蔵らじゅうさんぞうをも・ものしらぬ者と申もうすなり、漢土かんどはさてもをけ月氏がっしの大論師ろんしりゅうじゅ竜樹てんじん・天親等の数百人しえ ぼさつの四依しえの菩薩ぼさつもいまだ実義じつぎをのべ給たまはずといふなり、此をころしたらん人は鷹たかをころしたるものなり鬼をころすにもすぐべしとののしりき、又妙樂みょうらく大師だいしの時・月氏がっしより法相真言ほっそうしんこんわたり漢土かんどに華嚴宗けこんしゅうの始まりたりしを・とかくせめしかばこれも又さはぎしなり。

日本国にほんこくには伝でん教大師ぎょうだいしが仏滅後ぶつめつ・一千八百年にあたりていでさせ給たまい天台てんだいの御釈ぎんめいを見て欽明このかたより已来このかた二百六十余年が間の六宗ろくしゅうをせめ給たまいしかば在世ざいせの外道げどう・漢土かんどの道士どうし・日本にほんに出現しゅつげんせりと謗ぼうぜし上仏滅後ぶつめつ・一千八百年が間

・月氏がつし・漢土かんと・日本にほんになかりし円頓えんどんの大戒だいかいを立てんというのみならず、西
国かんのんの観音寺の戒壇かいだん・東国下野とうごくしもつけの小野寺の戒壇かいだん中国かいいん大和の国・東大寺の戒壇かいだん
は同く小乗しょうじょう臭糞しゅうふんの戒なり瓦石がしやくのごとし、其それを持つ法師ほっし等は野干やかん・猿猴えんこう等
のごとしとありしかばあら不思議ふしぎや法師ほっしににたる大蝗虫国いなんむしに出現しゅつげんせり
仏教ぶつぎょうの苗いちじ一時にうせなん、殷いんの紂ちゆう・夏かのけつの桀ほっし・法師ほっしとなりて日本にほんに生まれた
り、後周うぶんの宇文とう・唐ぶそうの武宗ふそう・二たび世に出現しゅつげんせり仏法ぶつぽうも但今失せぬべし国
もほろびなんと大乘だいじよう・小乗しょうじようの二類にるいの法師ほっし出現しゅつげんせば修羅しゆらと帝釈たいしやくと項羽こううと
高祖こうそと一國に並べるなるべしと、諸人しよにん手をたたき舌をふるふ、在世ざいせには仏
と提婆だいばが二の戒壇かいだんありてそこばくの人人ひとびと死にき、されば他宗たしゆうにはそむくべ
し我が師てんだいだいし・天台大師てんだいだいしの立て給たまはざる円頓えんどんの戒壇かいだんを立つべしという不思議ふしぎさ
よ・あらおそろし・おそろしと・ののしりあえりき、されども經文きやうもん分明ふんみやう
にありしかば叡山えいざんの大乗戒壇だいじようかいだんすでに立てさせ給たまいぬ、されば内証ないしやうは同じ

けれども法の流布は迦葉・阿難よりも馬鳴・竜樹等はすぐれ馬鳴等よりも
天台はすぐれ天台よりも伝教は超えさせ給いたり、世末になれば人の智は
あさく仏教はふかくなる事なり、例せば輕病は凡藥・重病には仙藥・弱
人には強きかたうど有りて扶くるこれなり。

問うて云く天台・伝教の弘通し給わざる正法ありや、答えて云く有り・

求めて云く何物ぞや、答えて云く三あり、末法のために仏留め置き給う迦葉

・阿難等馬鳴・竜樹等天台・伝教等の弘通せさせ給はざる正法なり、求

めて云く其の形貌如何、答えて云く一には日本乃至一閻浮提一同に本門

の教主釈尊を本尊とすべし、所謂宝塔の内の釈迦・多宝外の諸仏・並に

上行等の四菩薩脇士となるべし、二には本門の戒壇、三には日本乃至・

漢土・月氏・一閻浮提に人ごとに有智・無智をきらはず一同に他事をすて

て南無妙法蓮華經と唱うべし、此の事いまだひろまらず一閻浮提の内に

ぶつめつ

仏滅後・二千二百二十五年が間・一人も唱えず日蓮一人南無妙法蓮華經・

なむみょうほうれんげきよう

南無妙法蓮華經等と声もをしまず唱うるなり、例せば風に随つて波の大小

たきぎ

あり薪によつて火の高下あり池に随つて蓮の大小あり雨の大小は竜に

よる根ふかければ枝しげし源遠ければ流ながしというこれなり、

周の代の

七百年は文王の礼孝による秦の世ほどもなし始皇の左道によるなり、日蓮

が慈悲曠大ならば南無妙法蓮華經は万年の外未来までもながるべし、

日本国の一切衆生の盲目をひらける功德あり、無間地獄の道をふさぎぬ、

此の功德は伝教天台にも超へ竜樹迦葉にも・すぐれたり、極楽百年の

修行は穢土の一日の功德に及ばず、正像二千年の弘通は末法の一時に劣

るか、是れひとへに日蓮が智のかしこきにはあらず時のしからしむる耳、

春は花さき秋は菓なる夏はあたたかに冬はつめたし時のしからしむるに有

らずや。

「我滅度の後・後の五百歳の中に広宣流布して閻浮提に於て断絶して惡魔
・魔民・諸の天竜・夜叉・鳩槃荼等に其の便りを得せしむること無けん」

等云云、此の經文若しむなしくなるならば舍利弗は華光如來とならじ迦葉

尊者は光明如來とならじ目☆は多摩羅跋栴檀香仏とならじ阿難は

山海慧自在通王仏とならじ摩訶波闍波提比丘尼は一切衆生喜見仏とならじ

耶輸陀羅比丘尼は具足千万光相仏とならじ、三千塵点も戲論となり五百塵点

も妄語となりて恐らくは教主釈尊は無間地獄に墮ち多宝仏は阿鼻の炎に

むせび十方の諸仏は八大地獄を栖とし一切の菩薩は一百三十六の苦をう

くべし・いかでかその義候べき、其の義なくば日本国は一同の南無

妙法蓮華經なり、されば花は根にかへり真味は土にとどまる、此の功德は

故道善房の聖靈の御身にあつまるべし、南無妙法蓮華經・南無

妙法蓮華經。

建治二年太歲丙子七月二十一日 ひのえね

之を記す これしる 甲州波木井郷身延山より安房の国・東条の郡・清澄山・浄顕房 はきはり あわ とうじょう ほう

・義成房の許に奉送す ほう もと

◆四六 報恩抄送文 330P ほうおん

御状給り候畢ぬ、親疎と無く法門と申すは心に入れぬ人にはいはぬ事に おわん しんそ なく ほうもん もう

て候ぞ御心得候へ、御本尊図して進候・此の法華経は仏の在世よりも こころえ ごほんぞん まいらせそうろう ほけきよう ざいせ

仏の滅後・正法よりも像法・像法よりも末法の初には次第に怨敵強くなる めつご しょうぼう そうぼう まつぼうのはじめ しだい おんてき

べき由をだにも御心へあるならば日本国に是より外に法華経の行者なし・ よし にほんこく ほけきよう ぎようじや

これを皆人存じ候ぬべし、道善御房の御死去の由・去る月粗承わり候、自身 みな どうぜんごほう しきよ いぬ ほほうけたま じしん

早早と参上し此の御房をも・やがてつかはすべきにて候しが自身は内心は ごほう じしん ないしん

存ぜずといへども人目には遁世のやうに見えて候へばなにとなく此の山を とんせい

出でず候、此の御房は又内内・人の申し候しは宗論やあらんずらんと申せ ごほう もう しゅうろん

しゆへに十方にわかつて経論等を尋ねしゆへに国国の寺寺へ人をあまたつかはして候に此の御房はするがの国へ・つかはして当時こそ来て候へ、又此の文は随分大事の大事どもをかきて候ぞ詮なからん人人にきかせなばあしかりぬべく候、又設いさなくともあまたになり候はば・ほかさまにもきこえ候なば御ため又このため安穩ならず候はんか、御まへと義成房と二人・此の御房をよみてとして嵩がもりの頂にて二三遍又・故道善御房の御はかにて一遍よませさせ給いては此の御房にあづけさせ給いてつねに御聴聞候へ、たびたびになり候ならば心づかせ給う事候なむ、
恐恐謹言。

七月二十六日

日蓮 花押

清澄御房

◆四七

法華取要抄

文永十一年五月

五十三歳御作

与富木常忍

於身延

331P

扶桑沙門日蓮之を述ぶ

夫れ以れば月支・西天より漢土・日本に渡来する所の經論・五千・七千

余卷なり、其中の諸經論の勝劣・淺深・難易・先後・自見に任せて之を

弁うことは其の分に及ばず、人に随い宗に依つて之を知る者は其の義紛紜

す、所謂華嚴宗の云く「一切經の中に此の經第一」と、法相宗の云く

「一切經の中に深密經第一」と、三論宗の云く「一切經の中に般若經

第一」と、真言宗の云く「一切經の中に大日三部經第一」と、禪宗の

云く・或は云く「教内には楞伽經第一」と、或は云く「首楞嚴經第一」

と・或は云く「教外別傳の宗なり」と、浄土宗の云く「一切經の中に浄土

の三部經末法に入りては機教相応して第一なり」と、俱舍宗・成実宗・

律宗云く「四阿含並に律論は仏説なり華嚴經・法華經等は仏説に非ず外道

の經なり」・或は云く・或は云く、而に彼れ彼れ宗宗の元祖等・杜順・智儼

・法蔵・澄観・玄奘・慈恩・嘉祥・道朗・善無畏・金剛智・不空・道宣
・鑒真・曇鸞・道綽・善導・達磨・慧可等なり、此等の三蔵大師等は皆
聖人なり賢人なり智は日月に齊く徳は四海に弥れり、其の上各各に經・律
・論に依り更互に証拠有り随つて王臣国を傾け士民之を仰ぐ末世の偏学
たとい是非を加うとも人信用を致さじ、爾りと雖も宝山に來り登つて瓦石を
採取し梅檀に歩み入つて伊蘭を懷き取らば悔恨有らん、故に万人の謗りを
捨て猥りに取捨を加う我が門弟委細に之を尋討せよ。

夫れ諸宗の人師等・或は旧訳の經論を見て新訳の聖典を見ず・或は
新訳の經論を見て旧訳を捨置き・或は自宗の曲に執著して己義に随い
愚見を注し止めて後代に之を加添す、株杭に驚き騒ぎて兎獸を尋ね求め
智円扇に発して仰いで天月を見る非を捨て理を取るは智人なり、今末の論師
・本の人師の邪義を捨て置いて専ら本經・本論を引き見るに五十余年の

諸經の中に法華經第四法師品の中の已今当の三字最も第一なり、諸の論師
もろもろにんし
・諸の人師定めて此經文を見けるか、然りと雖も・或は相似の經文に狂
あるほんし じゃえ しゅう ある おうしん きえ
い・或は本師の邪会に執し・或は王臣等の帰依を恐るるか、所謂 金光明經
しきよう
の「是諸經之王」密嚴經の「一切經中勝」六波羅蜜經の「總持第一」大日經
うんがぼだい けこんきよう さいい なん はんにやきよう えにゆうほつしゅう
の「云何菩提」華嚴經の「能信是經・最為難」般若經の「会入法性・不
だいちどろん はんにやはらみつさいだい いち ねはん ねはん
見一事」大智度論の「般若波羅蜜最第一」涅槃論の「今者涅槃理」等なり、此等
しよ ほけきよう いこんとう そうじ しか いえど ある ほんたい
の諸文は法華經の已今当の三字に相似せる文なり然りと雖も・或は梵帝・
してん しきよう こ しきよう する あるいは 小乘經に相對すれ
四天等の諸經に對当すれば是れ諸經の王なり・或は 小乘經に相對すれ
しきよう する あるいは 華嚴・勝鬘等の經に相對すれば一切經の中に
すぐ だいしゅう こんじつ けんみつ しきよう そうたい こ しきよう
勝れたり全く五十余年の大小・樞実・顯密の諸經に相對して是れ諸經の
だいおう あら しよせんしよたい きようぎよう しようれつ わきまう
王の大王なるに非ず所詮所對を見て 經經の勝劣を弁すべきなり、強敵を
ふせふ ちけん これ そ しきよう しようれつ しゃくそんいちぶつ
臥伏するに始て大力を知見する是なり、其の上諸經の勝劣は釈尊一仏の

せんじん 浅深なり全く多宝分身の助言を加うるに非ず私説を以て公事に混ざる事
なけれ、諸経は・或は二乗凡夫に對揚して 小乗經を演説し、或は文殊
・解脱月・金剛薩☆等の弘伝の菩薩に對向して全く地涌千界の上行等に
は非ず、今法華經と諸經とを相對するに一代に超過すること二十種之有り、
其の中最要二有り所謂三五の二法なり三とは三千塵点劫なり諸經は・或は
釈尊の因位を明すこと・或は三祇・或は動逾塵劫・或は無量劫なり、
梵王云く此の土には二十九劫より已來知行の主なり第六天・帝釈・四天王
等も以て是くの如し、釈尊と梵王等と始めて知行の先後之を諍論す爾り
と雖も一指を挙げて之を降伏してより已來梵天・頭を傾け魔王掌を合せ
三界の衆生をして釈尊に歸伏せしむる是なり、又諸仏の因位と釈尊の
因位と之を糾明するに諸仏の因位は・或は三祇・或は五劫等なり釈尊の
因位は既に三千塵点劫より已來娑婆世界の一切衆生の結縁の大士なり、此

世界の六道の一切衆生は他土の他の菩薩に有縁の者一人も之無し、

法華經に云く「爾の時に法を聞く者は各諸仏の所に在り」等云云、天台云く

「西方は仏・別に縁異り故に子父の義成せず」等云云、妙樂云く「弥陀・

釈迦二仏既に殊なり況や宿昔の縁別にして化導同じからざるをや結縁は生

の如く成熟は養の如し生養縁異れば父子成せず」等云云、当世・日本国

の一切衆生弥陀の來迎を待つは譬えば牛の子に馬の乳を含め瓦の鏡に天月

を浮ぶるが如し、又果位を以て之を論ずれば諸仏如來・或は十劫・百劫・

千劫已來の過去の仏なり、教主釈尊は既に五百塵点劫より已來妙覺果滿

の仏なり大日如來・阿彌陀如來・藥師如來等の尽十方の諸仏は我等が本師

教主釈尊の所從等なり、天月の万水に浮ぶ是なり、華嚴經の十方台上

の毘盧遮那・大日經・金剛頂經・兩界の大日如來は宝塔品の多寶如來の

左右の脇士なり、例せば世の王の両臣の如し此の多寶仏も壽量品の教主

釈尊しゃくそんの所しよ従じゆうなり、此この土つちの我等われら衆生しゆじやうは五百塵点劫ごひやくじんてんこうより已来このかた教主きやうしゆ釈尊しゃくそんの
愛子ふこなり不孝ふこの失しよに依よつて今いまに覚知かくちせずと雖いへども他方たほうの衆生しゆじやうには似にる可べから
ず、有縁うえんの仏けちえんと結縁しゆじやうの衆生たととは譬てんげつえば天月てんげつの清水しづみづに浮うぶが如ごとく無縁むえんの仏と
ししゆじやう衆生たととは譬みみしいえば聾者らいの雷らいの聲こゑを聞きこき盲者めくらの日月にちがつに向むかうが如ごとし、而しかるに・或ある
人師にんしは釈尊しゃくそんを下くだして大日如来だいにちにらいを仰ぎやうすう崇あし・或ある人師にんしは世尊せそんは無縁むえんなり
阿弥陀あみだは有縁うえんなり、・或ある人師にんしの云いく小乘しやうじやうの釈尊しゃくそんと・或あるは華嚴經けこんきやうの釈尊しゃくそん
と・或あるは法華經ほけきやう迹門しゃくそんの釈尊これらと此等しよしならの諸師だんな並びに檀那等しゃくそん釈尊しゃくそんを忘わすれて諸仏しよぶつ
を取とることは例あせば阿闍世太子あじゃせたいしの頻婆沙羅王びんばしやらを殺ころし釈尊しゃくそんに背そむいて提婆達多だいばだつた
に付つきしが如ごとし、二月十五日にゅうめつは釈尊しゃくそん御入滅にやうめつの日ないし乃至さうがい十二月十五日にゅうめつも三界さんがい
慈父じふの御遠忌おんきなり、善導ぜんどう・法然ほうねん・永觀等ようかんの提婆達多だいばだつたに誑たぶらかされて阿弥陀あみだ仏ぶつの
日ひと定め畢おわんぬ、四月八日せそんは世尊せそん御誕生にやうめつの日ないしなり藥師やくし・仏ぶつに取り畢おわんぬ、
我が慈父じふの忌日きじつを他仏たぶつに替かわるは孝養かうようの者ものなるか如何いかん、寿量品じゆりやうほんに云いく「我われも

またこ

亦為れ世の父狂子を治する為の故に」等云云、天台大師云く「本此の仏に従つて初めて道心を發す亦此の仏に従つて不退地に住す乃至猶百川の海に潮すべきが如く縁に牽かれて応生すること亦復是くの如し」等云云。

問うて云く法華經は誰人の為に之を説くや、答えて曰く方便品より人記品

に至るまでの八品に二意有り上より下に向て次第に之を読めば第一は菩薩

第二は二乘・第三は凡夫なり、安樂行より勸持・提婆・宝塔・法師と逆次

に之を読めば滅後の衆生を以て本と為す在世の衆生は傍なり滅後を以て

之を論ずれば正法一千年・像法一千年は傍なり、末法を以て正と為す末法

の中には日蓮を以て正と為すなり、問うて曰く其の証拠如何、答えて曰く

況滅度後の文是なり、疑つて云く日蓮を正と為す正文如何、答えて云く

「諸の無智の人有つて・悪口罵詈等し・及び刀杖を加うる者」等云云、問

うて曰く自讃は如何、答えて曰く喜び身に余るが故に堪え難くして自讃す

るなり、問うて曰く本門の心如何、答えて曰く本門に於て二の心有り一に

は涌出品の略開近顕遠は前四味並に迹門の諸衆をして脱せしめんが為な

り、二には涌出品の動執生疑より一半並びに寿量品・分別功德品の半品

已上一品二半を広開近顕遠と名く一向に滅後の為なり、問うて曰く

略開近顕遠の心如何、答えて曰く文殊・弥勒等の諸大菩薩・梵天・帝釈

・日月・衆星・竜王等初成道の時より般若経に至る已來は一人も釈尊

の御弟子に非ず此等の菩薩・天人は初成道の時・仏未だ説法したまわざる

已前に不思議解脱に住して我と別円二教を演説す釈尊其の後に阿含・方等

・般若を宣説し給う然りと雖も全く此等の諸人の得分に非ず、既に別円二

教を知りぬれば蔵通をも又知れり勝は劣を兼ねる是なり委細に之を論ぜば

・或は釈尊の師匠なるか善知識とは是なり釈尊に随うに非ず、法華経の

迹門の八品に來至して始めて未聞の法を聞いて此等の人人は弟子と成りぬ

舍利弗・目連等は鹿苑より已来初発心の弟子なり、然りと雖も権法のみを

許せり、今法華經に來至して実法を授与し法華經本門の略開近顯遠に來至

して華嚴よりの大菩薩・二乘・大梵天・帝釈・日月・四天・竜王等は位

・妙覺に隣り又妙覺の位に入るなり、若し爾れば今・我等天に向つて之を

見れば生身の妙覺の仏本位に居して衆生を利益する是なり。

問うて曰く誰人の為に広開近顯遠の壽量品を演説するや、答えて曰く

壽量品の一品二半は始より終に至るまで正く滅後衆生の為なり滅後の中

には末法今時の日蓮等が為なり、疑つて云く此の法門前代に未だ之を聞

かず經文に之れ有りや、答えて曰く予が智前賢に超えず設い經文を引く

と雖も誰人か之を信ぜん卞和が啼泣・伍子胥が悲傷是なり、然りと雖も

略開近顯遠・動執生疑の文に云く「然も諸の新發意の菩薩・仏の滅後に

於て若し是の語を聞かば・或は信受せずして法を破する罪業の因縁を起さ

ん」等云云、文の心は寿命品を説かずんば末代の凡夫皆惡道に墮せん等なり、
寿命品に云く「是の好き良藥を今留めて此に在く」等云云、文の心
は上は過去の事を説くに似たる様なれども此の文を以て之れを案ずるに
滅後を以て本と為す先ず先例を引くなり、分別功德品に云く「惡世末法の
時」等云云、神力品に云く「仏滅度の後に能く是の經を持たんを以つての
故に諸仏皆歡喜して無量の神力を現じ給う」等云云、藥王品に云く「我が
滅度の後・後の五百歳の中に広宣流布して閻浮提に於て斷絶せしむること
無けん」等云云、又云く「此の經は則ち為れ閻浮提の人の病の良藥なり」
等云云、涅槃經に云く「譬えば七子の如し父母平等ならざるに非ざれども
然も病者に於て心則ち偏に重し」等云云、七子の中の第一第二は一闡提謗法
の衆生なり諸病の中には法華經を謗するが第一の重病なり、諸藥の中に
は南無妙法蓮華經は第一の良藥なり、此の一閻浮提は縱広七千由善那

はちまん 八万の国之れ有り 正像 二千年の間未だ広宣流布せざるに法華經当世に當つ
て流布せしめずんば釈尊は大妄語の仏・多宝仏の証 明は泡沫に同じく
十方分身の仏の助舌も芭蕉の如くならん。

疑 明・十方の助舌・地涌の涌出此等は誰人の為ぞ

や、答えて曰く世間の情に云く在世の為と、日蓮云く舍利弗・目☆等は現在

を以て之を論ずれば智慧第一・神通第一の大聖なり、過去を以て之を論ず

れば金竜陀仏・青竜陀仏なり、未来を以て之を論ずれば華光如来、靈山を

以て之を論ずれば三惑頓尽の大菩薩、本を以て之を論ずれば内秘外現の古

菩薩なり、文殊・弥勒等の大菩薩は過去之古仏・現在の応生なり、梵帝・

日月・四天等は初成已前の大聖なり、其の上・前四味・四教一言に之を覺

りぬ仏の在世には一人に於ても無智の者之れ無し誰人の疑を晴さんが

為に多宝仏の証 明を借り諸仏舌を出し地涌の菩薩を召さんや方方以て

謂れ無き事なり、きようもん 経文に随つて「況滅度後・令法久住」等云云、此等の

経文を以て之を案ずるに偏に我等が為なり、しだが 随つて天台大師当世を指して

云く「後の五百歳遠く妙道に沾わん」てんぎようだいしとうせ 伝教大師当世を記して云く「正像

稍過ぎ已つて末法太だ近きに有り」等云云、「末法太有近」の五字は我が

世は法華経流布の世に非ずと云う釈なり。

問うて云く如来滅後二千余年・竜樹・天親・天台・伝教の残したまえ

る所の秘法は何物ぞや、いわ 答えて云く本門の本尊と戒壇と題目の五字となり、

問うて曰く正像等に何ぞ弘通せざるや、いわ 答えて曰く正像に之を弘通せば

小乗・権大乘・迹門の法門一時に滅尽す可きなり、いわ 問うて曰く仏法を

滅尽するの法何ぞ之を弘通せんや、いわ 答えて曰く末法に於ては大小・権実・

顕密共に教のみ有つて得道無し一閻浮提皆謗法と為り畢んぬ、いわ 逆縁の為に

は但妙法蓮華経の五字に限る、いわ 例せば不輕品の如し我が門弟は順縁なり

にほんこく ぎやくえん
日本国は逆縁なり、
疑つて云く何ぞ広略を捨て要を取るや、答えて

いわ げんじょうさんぞう

曰く玄奘三蔵は略を捨てて広を好み四十巻の大品經を六百巻と成す羅什

さんぞう

三蔵は広を捨て略を好む千巻の大論を百巻と成せり、日蓮は広略を捨てて

かんよう

肝要を好む所謂上行菩薩所伝の妙法蓮華經の五字なり、九包淵が馬を相

げんこう

するの法は玄黄を略して駿逸を取る支道林が經を講ずるには細科を捨てて

すで ほうとう

元意を取る等云云、仏既に宝塔に入つて二仏座を並べ分身來集し地涌を召

かんよう

し出し肝要を取つて末代に当てて五字を授与せんこと当世異義有る可から

ず。

うたがい

疑つて云く今世に此の法を流布せば先相之れ有りや、答えて曰く法華經

によぜそうないしほんまつつきよう

に「如是相乃至本末究竟等」云云、天台云く「蜘蛛掛りて喜び事來たり」☆鵲

鳴いて客人來る小事猶以て是くの如し何に況や大事をや」取意、問うて

いわ

曰く若し爾れば其の相之れ有りや、答えて曰く去ぬる正嘉年中の大地震・

い わ も し か そ こ いか い しょうか だいじしん

ぶんえい すいせい
文永の大彗星其より已後今に種種の大なる天変・地天此等は此先相なり、
にんのうきよう ひちなん
仁王経の七難・二十九難・無量の難、金光明経・大集経・守護経・薬師
しきよう あ
経等の諸経に挙ぐる所の諸難皆之有り但し無き所は二三四五の日出る大難
なり、
しか さど
而るを今年佐渡の国の土民は口口に云う今年正月廿三日の申の時西
しゅつげん
の方に二の日出現す・或は云く三の日出現す等云云、二月五日には東方
なら
に明星二つ並び出ず其の中間は三寸計り等云云、此の大難は日本国先代に
いま これあ
も未だ之有らざるか、最勝王経の王法正論品に云く「変化の流星墮ち二
ぐじ い たほう おんそく
の日俱時に出で他方の怨賊来つて国人喪乱に遭う」等云云、
いわ
云く「・或は二の日を見し・或は両つの月を見す」等、薬師経に云く
「にちがつはくしよく なん
「日月薄蝕の難」等云云、金光明経に云く「彗星数ば出で両つの日並び現
はくしよく
じ薄蝕恒無し」大集経に云く「仏法実おんもつに隠没せば乃至日月明げんを現げんぜず」
にんのうきよう いわ
仁王経に云く「日月度を失い時節返逆し・或は赤日出で黒日出で二三四

五の日出ず・或は日蝕して光無く・或は日輪一重二三四五重輪現ぜん」等
云云、此の日月等の難は七難二十九難無量の諸難の中に第一の大悪難なり、
問うて曰く此等の大中小の諸難は何に因つて之を起すや、答えて曰く
「最勝王經に曰く非法を行ずる者を見て当に愛敬を生じ善法を行ずる人
に於て苦楚して治罰す」等云云、法華經に云く涅槃經に云く金光明經に
云く「悪人を愛敬し善人を治罰するに由るが故に星宿及び風雨皆時を以て
行われず」等云云、大集經に云く「仏法実に隱没し乃至是くの如き不善業
の悪王・悪比丘我が正法を毀壞す」等、仁王經に云く「聖人去る時七難
必ず起る」等、又云く「法に非ず律に非ず比丘を繫縛すること獄囚の法の
如くす爾の時に當つて法滅せんこと久しからず」等、又云く「諸の悪比丘
多く名利を求め国王・太子・王子の前に於て自ら破仏法の因縁・破国の
因縁を説かん其の王別まえずして此の語を信聴せん」等云云、此等の明鏡

を齎^{もつ}て當時^{とうじ}の日本^{にほん}国^{こく}を引き向^{むか}うるに天地^{てんち}を浮^うぶること宛^{あたか}も符契^{ふけい}の如^{ごと}し眼^{まなこ}有^あらん我が門弟^{もんてい}は之^{これ}を見よ、当^{まさ}に知るべし此^この国^{こく}に惡比丘^{あくびく}等有^あつて天子^{てんし}・王子^{みこ}・將軍^{しょうぐん}等^らに向^{むか}つて讒訴^{ざんそ}を企^{くわだ}て聖人^{しょうにん}を失^{うしな}う世^よなり、問^{いわ}うて曰^いく弗舍密多羅王^{ふっしゃみつたらおう}・会昌天子^{えしやうてんし}・守屋等^{もりや}は月支^{がっし}・真旦^{しんたん}・日本^{にほん}の仏法^{ぶつぽう}を滅失^{めっしつ}し提婆菩薩^{だいばぼさつ}・師子^{しし}・尊者等^{そんじや}を殺害^{さつがい}す其^{その}の時^{とき}何^{なん}ぞ此^この大難^{だいにん}を出^{いだ}さざるや、答^{こた}えて曰^いく災難^{さいなん}は人^{ひと}に随^{したが}つて大小^{だいしやう}有^ある可^べし正像^{しょうざう}二千年^{にせんねん}の間惡王^{あくおう}・惡比丘等^{あくびく}は・或^{ある}は外道^{げどう}を^{もち}用^{もち}い・或^{ある}は道士^{どうし}を語^{かた}らい・或^{ある}は邪神^{じゃじん}を信^ぶず仏法^{ぶつぽう}を滅失^{めっしつ}すること大なるに似^にたれども其^その科尚^{とがなほ}淺^あきか、今^{いま}当世^{とうせ}の惡王^{あくおう}・惡比丘^{あくびく}の仏法^{ぶつぽう}を滅失^{めっしつ}するは小^こを以^もて大^{だい}を打^{うち}ち權^{けん}を以^もて実^{じつ}を失^{うしな}う人心^{じんしん}を削^けて身^みを失^うわす寺塔^{じとう}を焼^やき尽^{じん}さずして自然^{じねん}に之^{これ}を喪^{ほろ}ぼす其^{その}の失前代^{とがぜんだい}に超過^{ちやうか}せるなり、我が門弟^{もんてい}之^{これ}を見て法華經^{ほけきやう}を信用^{しんよう}せよ目^めを瞋^{いか}らして鏡^{かがみ}に向^{むか}え、天瞋^{てん}るは人^{ひと}に失有^{とがあれ}ればなり、二^{ふた}の日^{にち}並^{なら}び出^でるは一^{ひと}国^{こく}に二^{ふた}の国王^{こくおう}並^{なら}ぶ相^{さう}なり、王^{わう}と王^{わう}との鬭爭^{とうじやう}なり、星^{せい}の日^{にち}月^{げつ}を犯^{はん}す

は臣王を犯す相なり、日と日と競い出るは四天下一同の諍論なり、明星
並び出るは太子と太子との諍論なり、是くの如く国土乱れて後に上行等
の聖人出現し本門の三つの法門之を建立し一四天・四海一同に
妙法蓮華經の広宣流布疑い無からん者か。

文永十一年五月

在御判

◆四八 四信五品抄

建治三年四月十日 五十六歳御作 与富木常忍

338p

青鳧一結送り給ひ候い了んぬ。

今來の学者一同の御存知に云く「在世滅後異なりと雖も法華を修行する
には必ず三学を具す一を欠いても成ぜず」云云。

余又年来此の義を存する処一代聖教は且らく之を置く法華經に入つて

此の義を見聞するに序正の二段は且らく之を置く流通の一段は末法の明鏡
尤も依用と為すべし、而して流通に於て二有一一には所謂迹門の中の法師
等の五品・二には所謂本門の中の分別功德の半品より経を終るまで十一品
半なり、此の十一品半と五品と合せて十六品半此の中に末法に入つて法華
を修行する相貌分明なり是に尚事行かずんば普賢經・涅槃經等を引き来
りて之れを糾明せんに其の隠れ無きか、其の中の分別功德品の四信と五品
とは法華を修行するの要・在世・滅後の龜鏡なり。

荊谿の云く「一念信解とは即ち是れ本門立行の首なり」と云云、其の中
に現在の四信の初の一信信解と滅後の五品の第一の初隨喜と此の二処は一
同に百界千如・一念三千の宝篋十方三世の諸仏の出る門なり、天台・
妙楽の二の聖賢此の二処の位を定むるに三の釈有り所謂・或は相似・
十信・鉄輪の位・或は勸行五品の初品の位・未断見思・或は名字即の位な

り、止観しかんに其その不定ふじょうを会えして云く「仏意ぶつゐ知り難がたし機きに赴おもむきて異説いせつす此を借
つて開解げせば何ぞ勞なんしく苦ねんころに諍あらそわん」云云等。

予が意いに云く、三釈しやくの中名字みょうじ即そくは經文きやうもんに叶かなうか滅後めつごの五品ごほんの初の一品ひとしほんを
説いいて云く「而しかも毀きぜずして隨喜ずいきの心を起おこす」と若もし此の文相似そうじの五品ごほん
に渡わたらば而不にふ毀きぜの言ことは便たよりならざるか、就な中なか壽量品じゆりやうほんの失心しつしん不失心ふしつしん等は皆みな
名字みょうじ即そくなり、涅槃經ねはんぎやうに「若信ふしん若不信ふしんない乃至いし熙連きれん」とあり之これを勘かんえよ、又一いち念信解ねんしんげ
の四字しの中の信しんの一字ひとしは四信ししんの初はつめに居こし解げの一字ひとしは後に奪うばわるる故ゆゑなり、
若もし爾しからば無解むげ有信うしんは四信ししんの初はつ位ゐに當あたる經きやうに第二信だいにしんを説いいて云く
「略解言趣りやくげごんしゆ」と云云、記きの九くに云く「唯初信ただはつしんを除のぞく初はつは解げ無なきが故ゆゑに」随したがつ
て次下つぎしもの隨喜品ずいきに至いたつて上かみの初隨喜しよずいきを重かさねて之これを分ぶん明みやうにす五十人ふんみやう是皆展轉みなてんでん
劣しよなり、第五十人だいにしじゆに至いたつて二の釈有しより一ひとしには謂いく第五十人だいにしじゆは初隨喜しよずいきの内うちな
り二ふたには謂いく第五十人だいにしじゆは初隨喜しよずいきの外ほかなりと云いうは名字みょうじ即そくなり、教弥いよくよ実じつな

れば位い弥い下いれりと云う釈しは此この意いなり、四味三教しみさんきょうよりも円教えんきょうは機きを摂せつし
爾前にぜんの円教えんきょうよりも法華經ほけきょうは機きを摂せつし迹門しゃくもんよりも本門ほんもんは機きを尽きすなり教きょう
弥い実位い弥い下いの六字心ろくじしんを留とどめて案あんず可べし。

問まう末法まつぽうに入いって初心しよしんの行者ぎやうじや必かならずず円えんの三学さんがくを具ぐするや不いや、答こたえて曰いわく
此この義大事だいじたる故ゆえに經文きやうもんを勸かんえ出でして貴辺きへんに送付くわいす、所謂い五品ごほんの初二三品にわゆるごほん
には仏正まさしく戒定かいじやうの二法にぽうを制止せいしして一向いっかうに慧いちぶんの一分いっぶんに限かぎる慧え又また勸かんざれば信しん
を以もて慧えに代かえ・信しんの一字いちじを詮せんと為なす、不信ふしんは一闡いつせん提だい謗ぼう法ぽうの因いん・信しんは慧えの
因いん・名字みやうじそく即すなわちの位いなり、天台てんだい云いく「若もし相似そうじの益えきは隔生きやくすれども忘わすれず名字みやうじ
勸行きんぎやうの益えきは隔生きやくすれば即すなわち忘わする・或あるは忘わすれざるも有あり忘わするる者ものも若もし知ち識しき
に値あえば宿善しゆくぜん還かえつて生なず若もし悪友あくゆうに値あえば則すなわち本心ほんしんを失うしなう」云云、恐おそらく
は中古てんだいしゆうの天台宗じかくの慈覺ちしかく・智証ちしやうの兩大師だいいしも天台てんだい・伝教でんきやうの善知識ぜんちしきに違背いはいして
心しん・無畏ふくう・不空等あくゆうの悪友あくゆうに遷うつれり、末代まつだいの学者がくしや慧心えしんの往生おうじやう要集ようしゆうの序おに誑惑おわく

せられて法華の^{ほつけ}本心を^{ほんしん}失い^{うしな}弥陀の^{みだ}権門に入る^{ごんもん}退大取小の^{たいだいしゅしやう}者なり、過去を^{かこ}もつ^{これ}これを^{すい}推するに^{みらいむりやうこう}未来無量劫を経て^へ三惡道に^{さんあくどう}処せん^{しよ}若し^も惡友に^{あくゆう}値え^あば^{すなわ}即ち^{すなわ}本心を^{ほんしん}失う^{うしな}とは^{これ}是なり。

問うて^{いわ}曰く^そ其の^い証如何^{いかん}答えて^{いわ}曰く^{しかん}止觀第六に^{いわ}云く「前教に^そ其の^い位を高う

する所以は^{ゆえん}方便の^{ほうべん}説なればなり^{えんきやう}円教の^{えんきやう}位下きは^{しんじつ}眞実の^{しんじつ}説なればなり」弘決^{ぐけつ}

に^い云く「前教と^い云うより下は^{まさし}正く^{ごんじつ}権実を^い判ず^い教^い弥よ^い実なれば^い位^い弥よ^い下く^い教

弥^いよ^い権なれば^い位^い弥よ^い高き^{ゆえ}故に」と、又記の^い九に^い云く「位を^い判ずることを

いわば^い觀境^い弥よ^い深く^い実^い位^い弥よ^い下きを^{あらわ}顯す」と云云、他宗は^{たしゆう}且らく^し之を^{これ}置く

天台一門の^{てんだいいちもん}学者等^{がくしや}何ぞ^{なん}実^{じつ}位^い弥下^いの^い釈^{さしお}を^{えしん}闇いて^{えしん}慧心僧都の^{えしん}筆^{もち}を用ゆるや、畏

・智・空と^{かくしやう}覺証との^{だいじ}事は^{だいじ}追つて^{だいじ}之を^{えんぶだい}習え^{だい}大事なり^{だい}大事なり^{だい}一閻浮提^{えんぶだい}第一の

大事なり^{だいじ}心有らん^{こころあ}人は^{うと}聞いて^{うと}後に^{うと}我を外め。

問うて^い云く^い末代^{まつだい}初心の^{しん}行者^{ぎやう}何物^{なにも}をか^{せいし}制止^{せいし}するや、答えて^い曰く^い檀戒等の^い五

度を制止せいしして一向いっこうに南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと称なづせしむるを一念信解いちねんしんげしよずいき初隨喜しよぞいきの氣分けぶんと為なすなり是これ則すなわち此この經きやうの本意ほんいなり、疑うたがいつて云いく此この義ぎ未いまだ見聞けんもんせず心おころを驚おどろかし耳みみを迷まよいす明あきらかに証文しやうもんを引ひて請こうう苦ねんころに之これを示しせ、答こたえて云いく經きやうに云いく「須すべからく我われが為ために復またた塔寺たてを起たてて及および僧坊そうほうを作り四事しじを以もつて衆僧しゆうそうを供養くやうすることをもちいざれ」此この經文きやうもん明あきらかに初心しよしんの行者ぎやうじやに檀戒等だんかいとうの五度ごどを制止せいしする文ぶんなり、疑うたがいつて云いく汝なんじが引ひく所この經文きやうもんは但じとう寺塔しゆうそうと衆僧しゆうそうと計ばかりを制止せいしして未いまだ諸もろもろの戒等かいとうに及およばざるか、答こたえて曰いく初あを挙あげて後あを略りやくす、問いて曰いく何を以もつて之これを知らん、答こたえて曰いく次下つぎしもの第四品きやうもんの經文きやうもんに云いく「況いわんやまた復人ふくじん有あつて能よく是この經きやうもんを持もちて兼かねて布施持戒等ふせじかいを行おこなぜんをや」云いふ、經文きやうもん分明きやうもんに初二三品しよさんひんの人ひとには檀戒等だんかいとうの五度ごどを制止せいしし第四品きやうもんに至いたつて始はめて之これを許ゆるす後のちに許ゆるすを以もつて知しんぬ初はに制せいする事ことを、問いうて曰いく經文きやうもん一往相似いちおうしやうじたり將はた又また疏釈しよじやく有ありや、答こたえて曰いく汝なんじが尋たずぬる所ところの釈しやくとは月氏がつし

四依しえの論ろんか將はた又漢土かんと・日本にほんの人師にんしの書しよか本ほんを捨て末まつを尋たずね体を離はなれて影かげを求め源みなもとを忘れて流りゅうを貴とうとぶ分明ぶんみょうなる經文きやうもんを閣さしおいて論釈ろんしやくを請たずい尋たずね本經ほんきやうに相違そういする末糶まつ有あらば本經ほんきやうを捨てて末糶まつに付べく可べきか然しかりと雖いえども好みに隨したがて之これを示しめさん、文句もんくの九くに云いく「初心しよしんは縁えんに紛動ぶんどうせられて正業しやうごふを修しゆするを妨さまたげんことを畏おそる直ちよくちに専せんら此この經きやうを持もつ即すなわち上供養くやうなり事を廢ふしして理りを存ぞんするは所益しよやく弘多くたなり」と、此この釈しやくに縁えんと云いうは五度ごたなり初心しよしんの者兼かねて五度ごたを行いずれば正業しやうごふの信しんを妨さまたぐるなり、譬たとえば小船せうせんに財さいを積たんで海うみを渡わたるに財さいと俱ともに没もつするが如ごとし、直專持じきせんじしきやう此經こきやうと云いうは一經いつきやうに亘わたるに非あらず専もつぱら題目だいもくを持もつて余文まじを雜なえず尚なおい一經いつきやうの読誦どくじゆだも許ゆるさず何いかに況いや五度ごたをや、
「廢事存理はいじぞんり」と云いうは戒等かいとうの事ことを捨てて題目だいもくの理りを専もつぱらにす云云、所益弘多しよやくくたとは初心しよしんの者諸しよぎやう行だい目もくと並び行ならずれば所益しよやく全ぜんく失うしなうと云云。

文句もんくに云いく「問もんう若爾じやくらば經きやうを持もつは即すなわち是これ第一義だいいちの戒かいなり何いかんが故ゆゑぞ

またよ

復能く戒を持つ者と言うや、答う此は初品しよほんを明あきらかす後を以て難もつなんを作すべからず」等云云、当世とうせの学者がくしや・此の釈しやくを見ずして末代まつだいの愚人ぐにんを以て南岳もつなんがく・天台てんだいの二聖にせいに同あやまず誤りあやまの中の誤りなり、妙楽みょうらく重かさねて之これを明あかして云く「問う若もししか爾もらば若し事の塔おほ及び色身しきしんの骨もちを須もちいず亦須またすべからく事の戒けいを持つべからざるべしないし乃至事の僧くようを供養くようすることを須もちいざるや」等云云、伝教大師でんぎようだいしの云く「二百五十戒忽たちまちに捨て畢おわんぬ」唯教大師ゆいきようだいし一人に限るに非あらず鑒真がんじんの弟子でし・如宝じよほう・道忠なら並びに七大寺等一同に捨て了おわんぬ、又教大師だいいし・未来みらいを誡いましめて云く「末法まっぽうの中に持戒じかいの者有こらば是れ怪異けいなり市に虎有あるが如ごとし此れ誰か信べず可べき」云云。

問う汝何ぞなんじんなん一念三千いちねんさんぜんの觀門かんもんを勸進かんじんせず唯題目許ただだいもくばかりを唱となえしむるや、答えて日いわく日本にほんの二字に六十六国じんちくの人畜財しやうじんを摂しやうじん尽じんちくして一も残がっしさず月氏がっしの兩字にほんにあに豈あに七ヶ国無みようらくからんや、妙樂みょうらくの云く「略いわして經題きようだいを挙あぐるに玄はるかに一部を

おさ
収む」又云く「略して界如を挙ぐるに具さに三千を撰す、文殊師利菩薩・
あなんさんじや
阿難尊者・三会八年の間の仏語之を挙げて妙法蓮華經と題し次下に領解し
て云く「如是我聞」と云云。

問う其の義を知らざる人唯南無妙法蓮華經と唱うるに解義の功德を具す
るや否や、答う小兒乳を含むに其の味を知らざれども自然に身を益す耆婆
が妙藥誰か弁えて之を服せん水心無けれども火を消し火物を焼く豈覺有ら
んや竜樹・天台皆此の意なり重ねて示す可し。

問う何が故ぞ題目に万法を含むや、答う章安の云く「蓋し序王とは經の
玄意を叙す玄意は文の心を述す文の心は迹本に過ぎたるは莫し」妙樂の
云く「法華の文心を出して諸教の所以を弁ず」云云、濁水心無けれども月
を得て自ら清めり草木雨を得豈覺有つて花さくならんや妙法蓮華經の
五字は經文に非ず其の義に非ず唯一部の意なるのみ、初心の行者其の心

を知らざれども而も之を行ずるに自然に意に当るなり。

問う汝が弟子一分の解無くして但一口に南無妙法蓮華經と称する其の位

如何、答う此の人は但四味三教の極位並びに爾前の円人に超過するのみに

非ず將た又真言等の諸宗の元祖・畏・嚴・恩・蔵・宣・摩・導等に勝出

すること百千万億倍なり、請う国中の諸人・我が末弟等を軽ずる事勿れ進

んで過去を尋ぬれば八十万億劫に供養せし大菩薩なり豈熙連一恒の者に

非ずや退いて未来を論ずれば八十年の布施に超過して五十の功德を備う

可し天子の襁褓に纏れ大竜の始めて生ずるが如し蔑如すること勿れ蔑如す

ること勿れ、妙樂の云く「若し悩乱する者は頭七分に破れ供養すること

有る者は福十号に過ぐ」と、優陀延王は寶頭盧尊者を蔑如して七年の内に

身を喪失し相州は日蓮を流罪して百日の内に兵乱に遇えり、經に云く

「若し復是の經典を受持する者を見て其の過惡を出さん若は實にもあれ

もしふじつ 若は不実にもあれ此の人現世に白癩の病を得ん乃至諸悪重病あるべし」
又云く「当に世世に眼無かるべし」等云云、明心と円智とは現に白癩を得
・道阿弥は無眼の者と成りぬ、国中の疫病は頭破七分なり罰を以て徳を
推するに我が門人等は福過十号 疑い無き者なり。

そ 夫れ人王三十代欽明の御宇に始めて仏法渡りし以来桓武の御宇に至るま
で二十代二百余年の間六宗有りと雖も仏法未だ定らず、爰に延暦年中に
ひとりの聖人有つて此の国に出現せり所謂伝教大師是なり、此の人先きよ
り弘通する六宗を糾明し七寺を弟子と為して終に叡山を建てて本寺と
為し諸寺を取つて末寺と為す、日本の仏法唯一門なり王法も二に非ず法定
まり国清めり其の功を論ぜば源已今当の文より出でたり其の後弘法・
慈覚・智証の三大師事を漢土に寄せて大日の三部は法華經に勝ると謂い
あまつ 剩さえ教大師の削ずる所の真言宗の宗の一字之を副えて八宗と云云、三

人・一同に勅宣を申し下して日本に弘通し寺毎に法華經の義を破る是偏に
已今当の文を破らんと為して釈迦・多宝・十方の諸仏の大怨敵と成りぬ、
然して後・仏法漸く廢れ王法次第に衰え天照太神・正八幡等の久住の
守護神は力を失い梵帝・四天は國を去つて已に亡國と成らんとす情有らん
人誰か傷み嗟かざらんや、所詮三大師の邪法の興る所は所謂東寺と叡山の
總持院と園城寺との三所なり禁止せずんば國土の滅亡と衆生の惡道と疑
い無き者か予粗此の旨を勘え國主に示すと雖も敢て叙用無し悲む可し悲む
可し。

◆四九 下山御消息

建治三年六月 五十六歲御代作 与下山兵庫光基

例時に於ては尤も阿弥陀經を讀まる可きか等云云此の事は仰せ候はぬ
已前より親父の代官といひ私の計と申し此の四五年が間は退轉無し、例時

には阿弥陀經あみだを読み奉り候しが去年こぞの春の末へ夏の始めより阿弥陀經あみだを
止めて一向いっこうに法華經ほけきようの内・自我偈じがけ誦誦どくじゆし候又同くば一部たてまつを読み奉らむとは
げみ候これ又偏ひとえに現当げんとうの御祈きとう☆の為なり、但し阿弥陀經あみだ・念仏ねんぶつを止めて候
事は此れ日比ひごろ・日本国にほんこくに聞へさせ給う日蓮聖人たまた去る文永十一年ぶんえいの夏の比同
じき甲州飯野・御牧・波木井の郷の内身延の嶺と申す深山みやまに御隠居いんきよせさせ
給たまい候へば、さるべき人人ひとびと・御法門承ほうもんうけたまわる可べきの由候へども御制止せいしありて
入れられずおぼろげの強縁あつひとならではかなひがたく候しに有人見参あるひとの候と
申し候しかば信じまいらせ候はんれうには参り候はず、ものの様をも見
候はんために閑所しよより忍しのびて参り御庵室あんしつの後に隠れ人人ひとびとの御不審ふしんに付きて
あらあら御法門ほうもんとかせ給たまい候き。

法華經ほけきようと大日經だいにちきよう・華嚴けこん・般若はんにや・深密じんみつ・楞伽りやうが・阿弥陀經等あみだの經經ききようの
勝劣しょうれつ・浅深等せんじんを先として説き給たまいしを承り候へば法華經ほけきようと阿弥陀經等あみだの

しょうれつ

勝劣は一重二重のみならず天地雲泥に候けり、譬ば帝釈と猿猴と鳳凰と

かささぎ

烏鵲と大山と微塵と日月と螢炬等の高下勝劣なり、彼彼の經文と法華經

とを引き合せてたくらべさせ給いしかば愚人も弁えつ可し白白なり赤赤な

り、されば此の法門は大体人も知れり始めておどろくべきにあらず又仏法

しゅぎよう

を修行する法は必ず經經の大小・権実・顕密を弁うべき上よくよく時

き

を知り機を鑑みて申すべき事なり、而るに当世・日本国は人毎に阿みだ經

みだ みようこう

並に弥陀の名号等を本として法華經を忽諸し奉る世間に智者と仰がるる

ひとびと

人人・我も我も時機を知れり知れりと存ぜられげに候へども小善を持て

だいぜん

大善を打ち奉り権經を以て実經を失ふとがは小善還つて大惡となる藥變

たてまつこんきよう

じて毒となる親族還つて怨敵と成るが如し難治の次第なり、又仏法には

かしこげ

賢なる様なる人なれども時に依り機に依り国に依り先後の弘通に依る事を

わきまえ

弁へざれば身心を苦めて修行すれども驗なき事なり、設い一向に小乗

るふ
流布の国には大乘だいじょうをば弘通くつうする事はあれども一向大乘いっこうだいじょうの国には小乗經しょうじょうきょう
をあながちにいむ事なり・しゐてこれを弘通くつうすれば国もわづらひ人も惡道あくどう
まぬかれがたし、又初心しよしんの人には二法を並べて修行しゆぎょうせしむる事をゆるさず
がっしなら月氏の習いには一向小乗いっこうしょうじょうの寺の者は王路を行かず一向大乘いっこうだいじょうの僧は左右さうの
路をふむ事なし井の水・河の水・同じく飲む事なし何いかに況いわんや一房ぼうに栖すみな
んや、されば法華經ほけきょうに初心しよしんの一向大乘いっこうだいじょうの寺を仏説とき給たまうに「但大乘經典だいじょうきぎょうてん
を受持じゅじせんことを樂ねがつて、乃至余經ないしよきょうの一偈いちげをも受けざれ」又云いわく「又声聞しやうもん
を求むる比丘びく・比丘尼びくに・優婆塞うばそく・優婆夷うばいに親近しんこんせざれ」又云いわく「亦問訊またもんじんせ
ざれ」等云云たとい、設い親父たれども一向小乗いっこうしょうじょうの寺に住する比丘びく・比丘尼びくに
ば一向大乘いっこうだいじょうの寺の子息しそくこれを礼拝らいはいせず親近しんこんせず何いかに況いわんや其法しゆぎょうを修行しゆぎょうせん
や大小兼行だいしょうけんぎょうの寺は後心ほさつの菩薩ぼさつなり。

今・日本国にほんこくは最初さいしよに仏法渡りて候し比ころ・大小雜行だいしょうぞうぎょうにて候しが人王四十

五代聖武天皇しやうむてんのうの御宇ぎやうに唐とうの揚州竜興寺わじやうの鑑真和尚かんどうと申せし人漢土かんとより我が朝あしたに法華經ほけきやう・天台宗てんだいしやうを渡し給わたいて有りしが円機未熟えんきみじゆくとやおぼしけんのほうもんほうもん法門ほふもんをば己心こしんに収めて口くちにも出だし給たまはず、大唐だいたうの終南山ぶとくの豐徳寺ほうとくのどうせんりつしどうせんりつし・小乗しやうじやう戒にほんこくを日本国こんりやうの三所に建立せり此れ偏こに法華宗ひとえ ほつけしやうの流布るふすべき方便ほうべんなり、大乘だいじやうしゆつげん出現だいいじやうしゆつげんの後には肩かたを並べて行ぜよとにはあらず例せば儒家じゆけの本師ほんしたる孔子こうし・老子等らうしの三聖さんせいは仏おんつかいの御使ごしとして漢土かんとに遣なされて内典ないてんの初門じゆもんに礼楽れいがくの文ぶんを諸人しよじんに教しよえたりき、止観しかんに經きやうを引ひいて云いく「我三聖わさんせいを遣つかわして彼の震旦しんたんを化くわす」等云云、妙楽大師みやうらくだいし云いく「礼楽れいがく前に馳はせ真道しんどう後に啓ひらく」と云云、仏だいいじやうは大乗だいじやうの初門じゆもんに且しばらく小乗しやうじやう戒とを説たまい給たまいしかども時ときすぎぬれば禁いましめて云いく涅槃經ねはんぎやうに云いく「も若もし人有にやういつて如来むじやうは無常むじやうなりと言のたまわん云何いかんぞ是この人舌墮だらく落らくせざらん」と等云云、其その後人王第五十代桓武天皇かんむてんのうの御宇ぎやうに伝教大師でんぎやうだいしと申せし聖人しやうにんしゆつげん出現しやうにんしゆつげんせり始めには華嚴けこん・三論さんろん・法相ほつそう・俱舍ぐしや・

じょうじつ

成実・律の六宗を習い極め給うのみならず、達磨宗の淵底を探り究め給

あまつさ

ひ剩へいまだ日本国に弘通せざる天台・真言の二宗をも尋ね顕わして浅深

しょうれつ

しんちゅう

くきょう

たま

いぬるえんりやく

勝劣を心中に究竟し給へり、去延暦二十一年正月十九日に桓武皇帝・

たまい

なんと

ななだいじ

ちようじゃ

ぜんぎ

ごんそう

高雄山に行幸なり給い、南都・七大寺の長者・善議・勤操等の十四人を教

だいし

ろくしゅう

ほつけしゅう

しょうれつ

きゅうめい

ろくしゅう

せきがく

大師に召し合せて六宗と法華宗との勝劣を糾明せられしに六宗の碩学

いちだいちようか

もう

だいし

宗宗毎に我宗は一代超過の由各各に立て申されしかども教大師の一言に

ばんじわ

おわ

そ

こうていかさ

あけのしろよ

おんつかい

かんせき

万事破れ畢んぬ、其の後皇帝重ねて口宣す和氣弘世を御使として諫責せら

ななだいじ

ろくしゅう

せきがく

しゃひょう

たてまつおわ

ひがん

れしかば七大寺・六宗の碩学一同に謝表を奉り畢んぬ、一十四人の表に

いわ

がなりよう

いまよりのちことみようえん

の

ひがん

わた

云く「此界の含靈而今而後悉く妙円の船に載り早く彼岸に済ることを得」

だいしいわ

たちま

おわ

いわ

いわ

しょうぞう

云云、教大師云く「二百五十戒忽ちに捨て畢んぬ」云云、又云く「正像

ややす

おわ

まっぽうはなは

いわ

いちじょう

すべ

もち

稍過ぎ已つて末法太だ近きに有り」又云く「一乗の家には都て権を用いず」

いわ

えじき

もつ

いわ

いわ

いわ

いわ

らんかんすで

又云く「穢食を以て宝器に置くこと無し」又云く「仏世の大羅漢已に此の

阿噴かしやくを被めむれり滅後めつこの小蚊虻何もんもうなんぞ此これに随したがわわざらん」云云、此これ又私の責
めにはあらず法華經ほけきようには「正直しやうじきに方便ほうべんを捨て但無上道むじやうどうを説く」云云涅槃經ねはんきやう
には「邪見じゃけんの人」等云云、邪見方便じゃけんほうべんと申もうすは華嚴けこん・大日經だいにちきやう・般若經はんんにゃきやう・
阿彌陀經あみだ等の四十余年よんじゅうよねんの經經きやうぎやうなり、捨すてとは天台てんだいの云いわく「廢すてるなり」又云く
「謗そむとは背そむくなり」正直しやうじきの初心しよしんの行者ぎやうじやの法華經ほけきやうを修行しゆぎやうする法あは上に挙あぐ
るところの經經きやうぎやう・宗宗なげうを抛なげうつて一向いっかうに法華經ほけきやうを行ほけきやうずるが真しやうじきの正直しやうじきの
行者ぎやうじやにては候しなり、而しかを初心しよしんの行者ぎやうじや深位ぼさつの菩薩かれがれの樣きやうぎやうに彼彼きやうぎやうの經經きやうぎやうと
法華經ほけきやうとを並しやうじきべて行しやうじきずれば不正直しやうじきの者せけんとなる、世間せけんの法けんじんにも賢人けんじんは二君にに
仕しへず貞女とつは兩夫もうに嫁ひそかがずと申もうす是これなり、又私ひそかに異議もうを申もうすべきにあらず。
如來にょらいは未來みらいを鑑かんがみさせ給たまひて我が滅後めつこ・正法しやうほう一千年そうほう・像法ぞうほう一千年まっほう・末法まつほう
一万年まんねんが間ほうもん我が法門くつうを弘通ひろとすべき人人ひとびと並きやうぎやうに經經きやうぎやうを一一きりにきりあてられて
候しか、而そむるに此そむを背そむく人・世しゅつたいに出来たい智ち者しや賢王けんおうなりとも用もちうべからず、

いわゆる
所謂・我が滅後の次の日より正法五百年の間は一向小乗經を弘通すべ
し迦葉・阿難乃至・富那奢等の十余人なり、後の五百年には権大乘經の
けこん ほうとうじんみつ はんにや だいにちきよう かんきよう
内華嚴・方等深密・般若・大日經・觀經・阿みだ經等を弥勒菩薩・
もんじゅしりぼさつ めみようぼさつ りゆうじゅぼさつむちやくぼさつ てんじんぼさつ しえ ぼさつ
文殊師利菩薩・馬鳴菩薩・竜樹菩薩無著菩薩・天親菩薩等の四依の大菩薩
ろんしぐつう ろんし ぼけきよう じんぎ しろしめ
等の大論師弘通すべしと云云、此れ等の大論師は法華經の深義を知し食さ
ざるにあらざらねば法華經流布の時も来らざる上釈尊よりも仰せ付けられざ
る大法なれば心には存じて口に宣べ給はず・或時は粗口に轉る様なれども
だいほう のべ たま ある ぼぼ さえず
じつぎ いっこう かく の たま そうほう
実義をば一向に隠して演べ給はず、像法一千年の内に入りぬれば月氏の
ぶつぽうようや かんど にほん わた せそん がんぜん やくおうぼさつ けた ぼさつ
仏法漸く漢土・日本に渡り来る世尊眼前に藥王菩薩等の迹化他方の大菩薩
ほけきよう しゃくもん ゆず たま じゆ ぼさつまつぽうのはじめ
に法華經の半分・迹門十四品を譲り給う、これは又地涌の大菩薩末法の初
めに出現せさせ給いて本門壽量品の肝心たる南無妙法蓮華經の五字を一
えんぶだい いっさいしゅじょう とな たま
閻浮提の一切衆生に唱えさせ給うべき先序のためなり、所謂迹門弘通の

衆は南岳・天台・妙楽・伝教等是なり、今の時は世すでに上行菩薩等の
御出現の時剋に相当れり、而るに余愚眼を以てこれを見るに先相すであ
らはれたるか、而るに諸宗所依の華嚴・大日・阿みだ経等は其の流布の時
を論ずれば正法一千年の内・後の五百年乃至像法の始めの諍論の経経
なり、而るに人師等経経の浅深勝劣等に迷惑するのみならず仏の譲り状
をもわすれ時機をも勘へず猥りに宗宗を構え像末の行となせり、例せば白
田に種を下だして玄冬に穀をもとめ下弦に満月を期し夜中に日輪を尋ぬる
如し、何に況や律宗なんと申す宗は一向小乗なり月氏には正法一千年
の前の五百年の小法又日本国にては像法の中比・法華経・天台宗の流布す
べき前に且らく機を調養せむがためなり、例せば日出でんとて明星前に立
ち雨下らむとて雲先おこるが如し、日出雨下て後の星雲はなにかせん而る
に今は時過ぬ又末法に入りて之を修行せば重病に輕藥を授け大石を小船

に載のするが如ごとし修行しゅぎようせば身は苦く暇は入りて験しるしなく華はなのみ開きて菓このみなからん、故ゆえに教大師だいいし・像法ぞうほうの末しゅつげんに出現ほけきようして法華經しゃくもんの迹門かいじようえの戒定慧かいじやうえの三が内
・其その中えんどん・円頓えんだんの戒壇かいだんを叡山えいざんに建立こんりゅうし給たまひし時たま二百五十戒忽たちまちに捨おわて畢おわぬ、随したがつて又鑑真なんとの末ななだいじの南都なんと・七大寺ななだいじの一十四人ひと・三百余人ひゃくさんも加判かはんして
大乘だいじようの人となり一國こそ挙りつぎつて小律儀りつぎを捨おわて畢おわぬ、其その授戒じゆかいの書しよを見る可べし
分明ふんみようなり。

而しかるを今邪智じゃちの持齋じさいの法師ほつし等昔しようじようきようし捨しよてし小乘經しよじようきようを取り出して一戒いっかいもた
もたぬ名計なけいりなる二百五十戒ほつしの法師ほつし原有くげつて公家ぶけ・武家おおくわくを誑惑おおくわくして国師こくしと
ののしる剩あまつさえがまん我慢おこを發だいじようかいして大乘戒だいじようかいの人を破戒はかい・無戒むかいとあなづる、例せば
狗犬くけんが師子ししを吠えんこうえ猿猴えんこうが帝釈たいしやくをあなづるが如ごとし、今の律宗りつしゅうの法師ほつし原せけんは世間せけん
の人人ひとびとには持戒実語じかいじつごの者の様ようには見ゆれども其その実じつを論ろんぜば天下第一てんがだいいちの大
不実ふじつの者なり、其そのの故ゆえは彼等かれらが本文ほんぶんとする四分律じふうりつ・十誦律じゆうりつ等の文は

だいしょうじょう

大小乗の中には一向小乗・小乗の中にも最下の小律なり、在世には

十二年の後・方等大乗へうつる程の且くのやすめ言・滅後には正法の前

の五百年は一向小乗の寺なり此れ亦一向大乘の寺の毀謗となさんがため

なり、されば日本国には像法半に鑑真和尚大乘の手習とし給う教大師・彼

の宗を破し給いて人をば天台宗へとりことし宗をば失うべしといへども後

に事の由を知らしめんがために我が大乘の弟子を遣してたすけをき給う、

而るに今の学者等は此の由を知らずして六宗は本より破れずして有りとお

もへり墓無し墓無し、又一類の者等天台の才学を以て見れば我が律宗は幼

弱なる故に漸漸に梵網經へうつり結句は法華經の大戒を我が小律に盗み入

れて還つて円頓の行者を破戒・無戒と咲へば、国主は当時の形貌の貴げ

なる気色にたばらかされ給いて天台宗の寺に寄せたる田畠等を奪い取つて

彼等にあたへ万民は又一向大乘の寺の帰依を抛ちて彼の寺にうつる、手づ

から火をつけざれども日本にほん一國の大乗だいじようの寺を焼き失ひ抜目鳥うしなばつもくちようにあらざれ

ども一切衆生の眼いっさいしじゆを抜きぬ仏まなこの記しるし給ふ阿羅漢あらかんに似たる闡提せんたい是なり、

涅槃ねはん經に云く「我涅槃ねはんの後・無量百歳むりように四道の聖人しやうにんも悉く復涅槃しやうほうせん正法

滅めつして後・像法そうほうの中に於いて当に比丘びくあ有るべし、持律じりつに似像じそうし少く經を誦とくじゆ

し飲食おんじきを貪嗜とんしして其の身を長養ちやうようせん、乃至袈裟かいしけさを服すと雖も猶獵師いえどなおりようしの細視

徐行じゆかうするが如く猫ねずみの鼠うかがを伺こうが如く外けんぜんには賢善けんぜんを現し内ないには貪嫉とんしつを懷いだき

啞法あほうを受けたる婆羅門ばらもん等の如く實じつに沙門しゃもんに非ずして沙門しゃもんの像やうを現し邪見じゃけん

熾盛しじようにして正法しやうほうを誹謗ひぼうせん」等云云、此この經文きやうもんに世尊せそん未來みらいを記しるし置き給たまう。

抑おさ抑おさ尊そんは我等われらがためには賢父けんふたる上明師せいししゆなり聖主せいしゅなり、一身さんとくに三徳さんとくを備

へ給たまへる仏ぶつの仏眼ぶつげんを以て未來惡世みらいあくせを鑑かんみ給たまひて記しるし置き給たまう記文きもんに云く「我

涅槃ねはんの後・無量百歳むりよう」云云仏滅ぶつめつ後・二千年いにしへ已後いこと見みへぬ、又「四道の聖人しやうにん

悉く復涅槃しよくふたねはんせん」云云、付法藏ふほうぞうの二十四人を指さすか、「正法滅後しやうほうめつこ」等云云

- 765 -

像末の世と聞えたり、「当に比丘有るべし持律に似像し」等云云今

まっぽう

末法の代に比丘の似像を撰び出さば日本国には誰の人をか引き出して大覺

せそん

世尊をば不妄語の人とし奉るべき、俗男・俗女・比丘尼をば此の經文に載

せそん

たる事なし但比丘計なり比丘は日本国に数を知らず、然るに其の中に三衣

いちばつ

一鉢を身に帶せねば似像と定めがたし唯持斎の法師計相似たり一切の持斎

いちばつ

の中には次下の文に持律ととけり律宗より外は又脱ぬ、次下の文に「少し

じきしも

經を讀誦す」云云相州鎌倉の極樂寺の良觀房にあらざば誰を指し出だし

きようもん

經文をたすけ奉るべき、次下の文に「猶獵師の細視徐行するが如く猫の鼠

うかが

を伺うが如く外には賢善を現し内には貪嫉を懷く」等云云両火房にあらざ

きようもん

ば誰をか三衣一鉢の獵師伺猫として仏説を信ず可し、哀れなるかな當時の

そくなん

俗男・俗女・比丘尼等檀那等が山の鹿・家の鼠となりて獵師・猫に似たる

ぼう

両火房に伺われ・たばらかされて今生には守護国土の天照太神・正八幡

等にすてられ他国の兵軍にやぶられて猫の鼠を捺え取るが如く獵師の鹿を
射死が如し、俗男・武士等は射伏・切伏られ俗女は捺え取られて他国へお
もむかん王昭君・楊貴妃が如くになりて後生には無間・大城に一人もなく
趣くべし。

而るを余・此の事を見る故に彼が檀那等が大悪心をおそれ強盛にせむ
故に両火房・内内諸方に讒言を企てて余が口を塞がんとはげみしなり、
又経に云く「汝を供養する者は三惡道に墮つ」等云云、在世の阿羅漢を供養
せし人尚三惡道まぬかれがたし、何に況や滅後の誑惑の小律の法師原をや、
小戒の大科をばこれを以て知んぬ可し、或は又驢乳にも譬えたり還つて
糞となる、或は狗犬にも譬えたり大乘の人の糞を食す、或は☆猴・
或はは瓦礫と云云、然れば時を弁へず機をしらずして小乗戒を持たば
大乘の障となる、破れば又必ず惡果を招く其の上今の人人小律の者ども

は大乗戒を小乗戒に盗み入れ驢乳は牛乳を入れて大乘の人をあざむく、
大偷盗の者大謗法の者其のとがを論ずれば提婆達多も肩を並べがたく
瞿伽利尊者が足も及ばざる閻浮第一の大悪人なり帰依せん国土安穩なるべ
しや、余・此の事を見るに自身だにも弁へなばさでこそあるべきに日本国
に智者とおぼしき人人・一人も知らず国すでにやぶれなんとす、其の上仏
の諫曉を重んずる上一分の慈悲に・もよをされて国に代りて身命を捨て
申せども国主等彼にたばらかされて用ゆる人・一人もなし譬へば熱鉄に冷
水を投げ睡眠の師子に手を触るが如し、爰に両火房と申す法師あり身には
三衣を皮の如くはなつ事なし、一鉢は両眼をまほるが如し二百五十戒堅く
持ち三千の威儀をととのへたり、世間の無智の道俗国主よりはじめて万民
にいたるまで地藏尊者の伽羅陀山より出現せるか迦葉尊者の靈山より下
来するかと疑ふ、余・法華經の第五の卷の勸持品を拝見したてまつれば

まつだい
末代に入りて法華經の大怨敵三類あるべし其の第三の強敵は此の者かと見
おわ
畢んぬ、便宜あらば国敵をせめて彼れが大慢を倒して仏法の威験をあらは
さんと思ふ処に両火房常に高座にして歎いて云く「日本国の僧尼には二百
五十戒・五百戒・男女には五戒・八斎戒等を一同に持たせんとおもうに、
にちれん
日蓮が此の願の障りとなる」と云云、余案じて云く「現証に付て事を切
らんとする処に、彼常に雨を心に任せて下す由披露あり、古へも又雨を
もつとくしつ
以て得失をあらはす例これ多し、所謂伝教大師と護命と守敏と弘法と等
なり、此に両火房上より祈雨の御いのりを仰せ付けられたり」と云云、此に
ほう
両火房祈雨あり去る文永八年六月十八日より二十四日なり、此に使を極楽
つかわ
寺へ遣す年来の御歎きこれなり「七日が間に若一雨も下らば御弟子となり
て二百五十戒具さに持たんに、念仏・無間地獄と申す事ひがよみなりけ
りと申すべし余だにも帰伏し奉らば我弟子等をはじめて日本国大体かたぶ
もう
きふく
たてまつ
でし
にほんこくだいたい

き候なん」と云云、七日が間に三度の使をつかはす、然れどもいかんがし
たりけむ一雨も下らざるの上、いちう ふら 頹風・たいふう ☆風・旋風・暴風等の八風・十二時
にやむ事なし あまつさえ 剩一七日まで一雨も下らず風もやむ事なし、されば此の事
は何事ぞ和泉式部と云いし色好み・能因法師と申せし無戒の者・此は彼の
両火房がいむところの三十一文字ぞかし、彼の月氏の大盜賊南・無仏と称
せしかば天頭を得たり、彼の両火房並に諸僧等の二百五十戒・真言・法華
の小法・大法の数百人の仏法の靈驗いかなれば姪女等の誑言・大盜人が称
仏には劣らんとあやしき事なり、此れを以て彼等が大科をばしらるべきに
さはなくして還つて讒言をもちゐらるるは実とはおぼへず所詮日本国・
亡国となるべき期来るか、又祈雨の事はたとひ雨下らせりとも雨の形貌を
以て祈る者の賢不賢を知る事あり雨・種種なり・或は天雨・或は竜雨・
或は修羅雨・或は☆雨・或は甘雨・或は雷雨等あり、今の祈雨

は都すべて一雨いちうも下ふらざる上二七日じふにちが間前まへよりはるかに超過ちようかせる大旱魃かんぱつ・大
悪風あくふう・十二時に止む事なし、両火房ほう真の人ならば忽たちまちに邪見じゃけんをもひるがへし跡あと
をも山林にかくすべきに其その義ぎなくして面おもてを弟子でし・檀那等だんなにさらす上あまつさえ 剩あまつさえ
讒言ざんげんを企くわだて日蓮にちれんが頸くびをきらせまいらせんと申し上あげ・あづかる人の国まで状
を申し下くだして種くさねをたたんとする大悪人あくにんなり、而しかるを無智むちの檀那等だんなは恃怙じこ
て現世げんせには国をやぶり後生ごしょうには無間地獄むげんじごくに墮おちなん事の不便ふびんさよ、起世經
に云いわく「諸もろの衆生しゆじやう有りて放逸ほういつを為なし清淨しょうじやうの行ぎやうを汚ゆす故ゆゑに天雨てんうを下くださず」
又い云わく「不如法いふほふあり慳貪けんどん・嫉妬しつと・邪見じゃけん・顛倒てんどうなる故ゆゑに天則すなわち雨あめを下くださず」
又経律異相いそうに云いわく「五事有あめて雨無あめし一二三之これを略りやくす四には雨師姪いんらん乱らん・五に
は国王理こくおうをもつて治めず雨師い瞋ちんる故ゆゑに雨あめふらず」云云、此等これらの經文きやうもんの龜鏡きつぎやう
をもつて両火房ほうが身みに指さし当あたりて見みよ少すくもりなからん、一には名なは持戒じかいと
き・こゆれども実じつには放逸ほういつなるか二には慳貪けんどんなるか三には嫉妬しつとなるか四に

は邪見じゃけんなるか五には姪いんらん乱なるか此の五にはすぐべからず、又此の経は兩火房ほう

一人には限るべからず昔をかがみ今をもしれ、弘法大師こうぼうだいしの祈雨きうの時二七日

の間・一雨いちうも下らざりしもあやしき事なり、而しかるを誑惑おおわくの心強盛じやうじやうなりし人

なれば天子てんしの御祈雨きうの雨を盗み取て我が雨あめと云云、善無畏三蔵ぜんむいさんそう・金剛智三蔵こんごうちさんそう

・不空三蔵ふくさんそうの祈雨きうの時も小雨しょううは下たりしかども三師さんし共に大風連連たいふうと吹いて

勅使てくしをつけてをはれしあさましさと、天台大師てんだいだいし・伝教大師でんぎやうだいしの須臾しゆゆと三日が

間に帝たい釈雨しゃくあめを下ふらして小風も吹かざりしもたとくぞおぼゆるおぼゆる。

法華經ほけきやうに云く「・或あるは阿練若あれんにやに納衣のうえにして空閑くうげんに在りて、乃至利養ないしりやうに

貪著とんじやくするが故ゆえに白衣びやくえの与たに法を説いて世に恭敬きやうけいせらるること六通ろくつうの羅漢らかん

の如ごときもの有らん」又云く「常たいしやうに大衆たいしゆうの中に在て我等われらを毀そしらんと欲するが

故ゆえに国王大臣婆羅門こくおうだいじんばらもん・居士こじおよ及び余おのれの比丘衆びくに向つて誹謗ひぼうして我が悪とを説き

乃至惡鬼ないしあつきそ其の身に入つて我を罵詈毀辱めりきにくせん」、又云く「濁世じよくせの惡比丘あくびくは仏

の方便ほうべん随宜ずいぎ所説しよせつの法を知らずして悪口あくくして顰蹙ひんじゆくし数数しばしば擯出ひんすいせられん」等云
云、涅槃經ねはんぎやうに云く「一闍提いつせんたい有つて羅漢らかんの像なを作し空処くうしよに住し方等ほうとうだいじようきやうてん大乘經典だいじやうきんてん
を誹謗ひぼうす諸の凡夫人もろもろほんぷ見已みおつて皆真みなの阿羅漢あらかん是れ大菩薩だいぼさつなりと謂おもえり」等云
云、今予法華經ほけきやうと涅槃經ねはんぎやうとの仏鏡ねはんぎやうをもつて當時とうじの日本国にほんこくを浮べて其影うをみ
るに誰こくしゆの僧ろうつうか国主らかんに六通こくつうの羅漢らかんの如ごとくたとまれて而も法華經ほけきやうの行者ぎやうじやを讒言ざんげん
して頸けいをきらせんとせし、又いづれの僧ほんみんか万民ばんみんに大菩薩だいぼさつとあをがれたる、
誰の智者ちしやか法華經ほけきやうの故ゆえに度度たびたび処処しよしよを追はれ頸でしをきられ弟子でしを殺され兩度りやうどま
で流罪るざいせられて最後さいごに頸およに及およばんとせし、眼まなこ無く耳無みみなきの人は除まなこく眼有みみ
り耳有みみらん人は經文きやうもんを見聞けんもんせよ、今の人人ひとびとは人毎ひとごとに經文きやうもんを我もよむ我
も信じたりといふ只ただにくむところは日蓮計にちれんなり經文きやうもんを信ずるならば慥たしかにの
せたる強敵かうてきを取出きやうもんして經文きやうもんを信じてよむしるしとせよ、若し爾しからずんば
經文きやうもんの如く読誦どくじゆする日蓮にちれんをいかれるは經文きやうもんをいかれるにあらずや仏の使

をかるしむるなり、今の代の両火房が法華經の第三の強敵とならずば釈尊
は大妄語の仏・多宝・十方の諸仏は不実の証明なり、又經文まことな
らば御帰依の国主は現在には守護の善神にすてられ国は他の有となり後生
には阿鼻地獄疑なし、而るに彼等が大惡法を尊まるる故に理不尽の政道
出来す彼の国主の僻見の心を推するに日蓮は阿弥陀仏の怨敵・父母の
建立の堂塔の讎敵なれば仮令政道をまげたりとも仏意には背かじ天神も
ゆるし給うべしと・をもはるるか、はかなしはかなし委細にかたるべけれ
ども此れは小事なれば申さず心有らん者推して知んぬべし上に書挙るより
雲泥大事なる日本第一の大科此の国に出来して年久くなる間、此の国既に
梵釈・日月・四天・大王等の諸天にも捨てられ守護の諸大善神も還つて大
怨敵となり法華經守護の梵帝等鄰国の聖人に仰せ付けて日本国を治罰し
仏前の誓状を遂げんとおぼしめす事あり。

そ 夫れ正像しょうざうの古いにしえへは世濁世じよくせに入るといへども始めなりしかば国土こくどさしも乱みだれず聖賢せいけんも間間出現しゅつげんし福徳おうれんの王臣おうしんも絶えざりしかば政道も曲る事なし万民ばんみんも直かりし故ゆえに小科せうかを対治たいじせんがために三皇さんこう・五帝ごてい・三王さんわう・三聖等出現しゅつげんして墳典ふんでんを作りて代を治す、世しばらく治りたりしかども漸漸ぜんぜんにすへになるまに聖賢せいけんも出現しゅつげんせず福徳ふくとくの人ひともすくなければ三災さんさいは多大おほまにして七難ひちなん・先代せんだいに超過ちようかせしかば外典げてん及びがたし、其そのの時治ときを代えて内典ないてんを用いて世を治す随いつて世且したがくはおさまるされども又世末しばらになるまに人の惡は日日にに增長そうちようし政道は月月すいげんに衰減さんさいするかの故に又三災ひちなん・七難しちなん先よりいよいよ增長そうちようして小乗しょうじよう戒等の力驗しるしなかりしかば其そのの時治ときをかへて小乗しょうじようの戒等を止めて大乘だいじようを用ゆ、大乘だいじよう又叶かなわねば法華經ほけきやうの円頓えんどんの大戒壇だいかいだんを叡山えいざんに建立こんりゆうして代を治めたり、所謂いわゆる伝教大師でんぎやうだいし・日本にほん三所さんしよの小乗しょうじよう戒並に華嚴三論けこんさんろん・法相ほつそうの三大乗戒だいじようかいを破失はしつせし是なり、此これの大師だいしは六宗ろくしゆうをせめ落させ給たまうのみなら

ずぜんしゅう 禪宗なら をも習きわ い極あまつさにほんこく め剩ほつつけしゅう え日しんこんしゅう 本うたがい 国うたがい にいまだひろまらざりし法華宗・真言宗
をも勘かんが え出して勝劣しょうれつ 鏡けんみつ をかけ顕密さべつこくびやく の差別しか 黑白せけん なり、然うたがい れども世間の疑
を散さん じがたかりしかば去いぬ る延暦年中えんりやく に御入にゅうとう 唐漢土かんと の人々ひと も他事たじ には賢かしこ か
りしかども法華經ほけきょう ・大日經だいにちきょう ・天台真言てんだいしんこん の二宗しょうれつ の勝劣しょうれつ ・浅深せんじん は分明ふんみょう に知ら
たま せ給たま はざりしかば、御帰朝きちよう の後ごそんじ ・本の御存知ごこと の如ごと く妙楽大師みょうらくだいし の記し の十の
ふくうさんそう 不空三蔵かいげ の改悔ごんこう の言ごんこう を含光の がかたりしを引の き載てんだい せて天台勝しんこん れ真言劣しんこん なる明
証えびよう を依憑集たま に定め給あまつさしんこんしゅう う剩たま え真言宗そのゆえ の宗ぜんむい の一字だいにちきょう を削た り給う 、其そのゆえ の故ぜんむい は善無畏
・金剛智こんこうち ・不空ふくう の三人あじやり ・一行阿闍梨だいにちきょう をたばらかして本てんだい はなき大日經てんだい に天台
の己証こしやう の一念三千いちねんさんぜん の法門ほうもん を盗ちんぼう み入れて人の珍宝ちんぼう を我が有おおわく とせる大誑惑おおわく の者
なりと心得こころえ 給たま へり、例ちようかん せば澄てんだい 觀法師てんだい が天台大師じようじよう の十法かんぼう 成乘けこん の觀法かんぼう を華嚴
に盗かえ み入れて還てんだい つて天台宗てんだい を末教くだ と下ごそんじ せしが如ごと しと御存知ごそんじ あて宗ごそんじ の一字ごそんじ を
削えいざん りて叡山ただ は唯七宗し たるべしと云云し 、而しか るを弘法大師こうぼうだいし と申もう し天下第一てんがだい 一の

自讃毀他の大妄語の人、教大師御入滅の後対論なくして公家をかすめたてまつりて八宗と申し立てぬ、然れども本師の跡を紹繼する人人は叡山は唯七宗にてこそあるべきに教大師の第三の弟子・慈覚大師と叡山第一の座主・義真和尚の末弟子・智証大師と此の二人は漢土に渡り給いし時・日本国にて一国の大事と諍論せし事なれば天台・真言の碩学等に値い給う毎に勝劣・浅深を尋ね給う、然るに其の時の明匠等も・或は真言宗勝れ・或は天台宗勝れ・或は二宗斉等し・或は理同事異といへども俱に慥の証文をば出さず、二宗の学者等併しながら胸臆の言なり然るに慈覚大師は学極めずして帰朝して疏十四卷を作れり所謂金剛頂經の疏七卷・蘇悉地經の疏七卷なり此の疏の体たらくは法華經と大日經の三部經とは理は同く事は異なり等云云、此の疏の心は大日經の疏と義釈との心を出すがない不審あきらめがたかりけるかの故に本尊の御前に疏を指し置て此の疏仏意に叶へり

やいなやと祈せいせし処ところに夢に日輪にちりんを射ると云云、うちをどろきて吉夢な

り真言勝れたる事うたがい疑なしと・おもひて宣旨せんじを申し下す日本国にほんこくに弘通くつうせん

とし給たまひいしがほどなく疫病えきびようやみて四ヶ月と申せしかば跡あともなくうせ給たまひい

ぬ、而しかるに智証大師ちしょうだいしは慈覚じかくの御為ためにも御弟子おんでしなりしかば、遺言ゆいごんに任せて宣旨せんじ

を申し下し給もうう所謂真言たまたま いわゆるしんごん・法華齊等ほっけさいとうなり 譬たとえば鳥の二の翼よく・人の両目の如ごとし

又叡山えいざんも八宗はっしゅうなるべしと云云、此の兩人は身は叡山えいざんの雲の上に臥ふすといへ

ども心は東寺里中の塵ちりにまじはる本師ほんしの遺跡いせきを紹繼しょうけいする様にて還かえつて

聖人の正義せいぎを忽諸こつしよし給たまへり、法華經ほけきようの於諸經しよきよう中最しよきよう在其上もつともそのかみにありの字をう

ちかへして大日經だいにちきようの下に置き先づ大師だいしの怨敵おんできとなるのみならず存外ぞんがいに釈迦しゃか

・多宝たほう・十方分身じゅつぼうふんじん・大日如来等だいにちによらいの諸仏しよぶつの讎敵しゅうてきとなり給たまう、されば慈覚大師じかくだいし

の夢に日輪にちりんを射ると見しは是これなり仏法ぶつぽうの大科だいかこ此れよりはじまる日本国にほんこく・

亡国ぼうこくとなるべき先兆せんせうなり、棟梁どうりようたる法華經ほけきよう既に大日經だいにちきようの椽栢てんりよとなりぬ、

王法も下剋上して王位も臣下に随うべかりしを其の時又一類の学者有りて
堅く此の法門を諍論せし上・座主も両方を兼ねて事いまだきれざりしかば
世も忽にほろびず有りけるか、例せば外典に云く「たいこく 大国には諍臣七人・
中国には五人・小国には三人諍論すればたとい 仮令政道に謬誤出来すれども
国破れず乃至家に諫子あれば不義におちず」と申すが如しか 仏家も又是く
の如し、天台・真言の勝劣・浅深事きれざりしかば少少の災難は出来せ
しかども青天にも捨てられず黄地にも犯されず一国の内の事にてありし程
に人王七十七代・後白河の法皇の御宇に当りて天台座主明雲・伝教大師の
止観院の法華經の三部を捨てて慈覚大師の総持院の大日經の三部に付き
給う、天台山は名計りにて真言の山になり法華經の所領は大日經の地と
なる天台と真言と座主と大衆と敵対あるべき序なり、国又王と臣と諍論
して王は臣に随うべき序なり一國乱れて他國に破らるべき序なり、然れば

明雲は義仲に殺されて院も清盛にしたがひられ給う、然れども公家も叡山も共に此の故としらずして世静ならずする程に災難次第に増長して人王八十二代隱岐の法皇の御宇に至つて一災起れば二災起ると申して禪宗・念仏宗起り合いぬ、善導房は法華經は末代には千中無一とかき、法然はしゃへいかくほう・ぜんしゅう・ほけきょう・まつだい・せんちゅうむいつ・きょうげべつでん・ふりゅうもんじ・捨閉閣抛と云云、禪宗は法華經を失はんがために教外別伝・不立文字とのしる、此の三の大惡法鼻を並べて一国に出現せしが故に此の国すでに梵釈・二天・日月・四王に捨てられ奉り守護の善神も還つて大怨敵とならせ給う然れば相伝の所従に責随えられて主上・上皇共に夷島に放たれ給ひ御返りなくしてむなしき島の塵となり給う詮ずる所は実經の所領を奪い取りて權經たる真言の知行となせし上・日本国の万民等・禪宗・念仏宗の惡法を用いし故に天下第一・先代未聞の下剋上出来せり而るに相州は謗法の人ならぬ上・文武きはめ尽せし人なれば天許し国主となす

随したがつて世しばら且しく静しずなりき、然而しかるに又先に王法うしなを失ういし真言しんこん漸ようやく関東かんとうに落ち下る
存外そんがいに崇重すうちゆうせらるる故ゆえに鎌倉かまくら又還かえつて大謗法ほうほう一闡提いつせんたいの官僧くわんそう・禅僧ぜんそう・念仏僧ねんぶつ
檀那だんなと成りて新寺こんりゆうを建立こんりゆうして旧寺きゅうじを捨すつる故ゆえに天神てんじんは眼まなこを瞋いからして此
の国くにを睨にらめ地神いきどおりは憤いを含めて身を震ふるふ長星いってんは一天おに覆おひ地震しakaiは四海しかいを動
かす余これら此等の災天おどろに驚おどろいて粗内典ほぼないてん五千・七千・外典げてん三千等を引き見るに
先代せんだいにも希まれなる天変地天てんぺんちちようなり、然而しかるに儒者じゆしやの家には記しせざれば知る事ぶつぼうなし仏法ぶつぼう
は自迷まよひなればこころへず此の災天さいてんは常の政道そういの相違せけんと世間あやまりの謬誤みうごより
出来しゅつたいせるにあらず定めて仏法ぶつぼうより事起おこるかかんがと勘かんへなしぬ、先ず大地震だいにしんに付
て去いぬる正嘉元年しょうかがんねんに書もを一巻注さしたりしさいみようじを故最明寺にゆうどうの入道殿たてまつに奉たずる御尋みねも
なく御用もちいもなかりしかば国主こくしゅの御用もちいなき法師ほうしなればあやまちたりとも
科とがあらじとやおもひけん念仏ねんぶつ者並だんなに檀那だんな等又さるべき人人ひとびとも同意どういしたると
ぞ聞きこへし夜中にちれんに日蓮しょうあんが小庵しょうあんに数千人さつがい押し寄せて殺害ころせんとせしかども・い

かんがしたりけん其その夜の害もまぬかれぬ、然しかれども心を合せたる事なれば寄せたる者も科とがなくて大事だいじの政道を破やぶる日蓮にちれんが未いまだ生きたる不思議ふしぎなりとて伊豆の国へ流しぬ、されば人のあまりに・にくきには我がほろぶべきとがをも・かへりみざるか御式目ごしきめくをも破らるるか御起請文きしょうぶんを見るに梵釈ぼんしやく・四天してん・天照太神てんしょうだいじん・正八幡等しょうはちまんを書きのせたてまつる、余存外ぞんがいの法門ほうもんを申もうさば子細しさいを弁わきまえられずば日本国の御帰依にほんこくの僧等ごきえに召し合せられて其それになを事ゆかずば漢土かんど・月氏がっしまでも尋たずねらるべし、其それに叶かなわずば子細しさいありなるとて且しばらまたるべし、子細しさいも弁わきまえぬ人人ひとびとが身のほろぶべきを指さしをきて大事だいじの起請きしょうを破らるる事心へられず。三五五頁

自讃じさんには似たれども本文まかに任もつせて申もうす余は日本国の人人にほんこくには上ひとびとは天子てんしより下は万民ばんみんにいたるまで三の故あり、一には父母ふぼなり二には師匠ししょうなり三には主君しゅくんの御使おんつかいなり、経いわに云く「即如来そくによらいの使なり」と又云く「眼目がんもくなり」と

又云く「日月なり」と章安大師の云く「彼が為に悪を除くは則ち是彼が親なり」等云、而るに謗法一闡提・国敵の法師原が讒言を用いて其義を弁えず左右なく大事たる政道を曲げらるるは・わざとわざはひをまねかるるか墓無し墓無し、然るに事しづまりぬれば科なき事は恥かしきかの故にほどなく召返されしかども故最明寺の入道殿も又早くかくれさせ給いぬ、当御時に成りて・或は身に疵をかふり・或は弟子を殺され・或は所所を追れ・或はやどをせめしかば一日片時も地上に栖むべき便りなし、是に付けても仏は一切世間・多怨難信と説き置き給う諸の菩薩は我不愛身命但惜無上道と誓へり、加刀杖瓦石数数見擯出の文に任せて流罪せられ刀のさきにかかりなば法華經一部よみまいらせたるにこそと・おもひきりてわざと不輕菩薩の如く覺徳比丘の様に竜樹菩薩・提婆菩薩・仏陀密多・師子尊者の如く弥強盛に申しはる、今度・法華經の大怨敵を見て經文の如く父母

・師匠・朝敵・宿世の敵の如く散散に責るならば定めて万人もいかり国主
も讒言を収て流罪し頸にも及ばんずらん、其時・仏前にして誓状せし梵釈
・日月四天の願をもはたさせたてまつり法華經の行者をあだまんものを
須臾ものがさじと起請せしを身にあてて心みん、釈尊・多宝・十方分身
の諸仏の・或は共に宿し・或は衣を覆はれ・或は守護せんとねんごろに説
かせ給いしをも実か虚言かと知つて信心をも増長せんと退転なくはげみ
し程に案にたがはず去る文永八年九月十二日に都て一分の科もなくして佐
土の国へ流罪せらる、外には遠流と聞えしかども内には頸を切ると定めぬ
余又兼て此の事を推せし故に弟子に向つて云く我が願既に遂ぬ悦び身に
余れり人身は受けがたくして破れやすし、過去遠遠劫より由なき事には失い
しかども法華經のために命をすてたる事はなし、我頸を刎られて師子尊者
が絶えたる跡を継ぎ天台・伝教の功にも超へ付法蔵の二十五人に一を加え

二十六人となり不^ふ輕^ぎ菩薩^{ぼさつ}の行にも越えて釈迦^{しゃか}・多宝^{たほう}・十方^{じゅうぽう}の諸^{しよ}仏^{ぶつ}に
いかげせんとなげかせまいらせんと思^{おも}ひし故^{ゆゑ}に言^{こと}をもおしまふ已^い前^{ぜん}にあり
し事後^あに有^あるべき事^{こと}の様^{よう}を平^{へい}の金吾^{きんご}に申^{もう}し含^こめぬ此^この語^{ことば}しげければ委細^{うさい}に
はかかず。

そもそも にほんこく

抑^{おさ}も日本^{にほん}国^{こく}の主^{しゅ}となりて万^{ばん}事^じを心^{こころ}に任^{まか}せ給^{たま}へり何^{なに}事^{こと}も兩^{りやう}方^{ほう}を召^めし合^あせ

しょうぶ

ごせいばい

にちれん

しよそう

てこそ勝^{しょう}負^ふを決^{けつ}し御^ご成^{せい}敗^{ばい}をなす人^{ひと}のいかなれば日蓮^{にちれん}一人^{ひとり}に限^{かぎ}つて諸^{しよ}僧^{そう}等^{どう}に

だいか

こ

ひとえ

にちれん

召^め合せずして大科^{だいか}に行^いわるるらん是^これ偏^{ひとえ}にただ事^{こと}にあらずたとひ日蓮^{にちれん}は

だいか

あんのん

ごしきもく

大科^{だいか}の者^{もの}なりとも国^{くに}は安穩^{あんのん}なるべからず、御^ご式^{しき}目^{もく}を見るに五十一箇^ご条^{じょう}を立

きしやうぶん

かきのせ

だいいち

ぶつじないし

てて終^はりに起^{おこ}請^{しん}文^{ぶん}を書^か載^{さい}せたり、第一^{だいいち}・第二^{だいに}は神事^{かみじ}・仏事^{ぶつじ}乃至^{およ}五十一等^{ごじゅういちどう}云^い

ぶつじ

かんよう

ほけきよう

ざんにん

云^い、神事^{かみじ}・仏事^{ぶつじ}の肝^{かん}要^{よう}たる法華^{ほけ}經^{きやう}を手^てににぎれる者^{もの}を讒^{ざん}人^{にん}等に召^め合せられ

かれら

もう

しか

きしやうぶん

そうい

ずして彼等^{かれら}が申^{もう}すままに頸^{けい}に及^{およ}ぶ然^{しか}れば他事^{たじ}の中^{なか}にも此^この起^{おこ}請^{しん}文^{ぶん}に相違^{そうい}す

あ

こ

だいいち

だいに

にちれん

る政道^{せいどう}は有^あるらめども此^これは第一^{だいいち}の大事^{だいじ}なり、日蓮^{にちれん}がにくさに国^{くに}をかへ身

を失はんとせらるるか魯の哀公が忘事の第一なる事を記せらるるには

わたまし

移宅に妻をわすると云云、孔子の云く身をわする者あり国主と成りて政

道を曲ぐるなり是云云、将又国主は此の事を委細には知らせ給はざるか、

いかに知らせ給はずとのべらるるとも法華經の大怨敵と成給いぬる重科は

のが

脱るべしや、多宝・十方の諸仏の御前にして教主釈尊の申す口として

まつだいとうせ

末代当世の事を説かせ給いしかば諸の菩薩記して云く「悪鬼其の身に入つ

めりきにく

て我を罵詈毀辱せん、乃至数数擯出せられん」等云云、又四仏釈尊の所説

さいしょうおうきよう

の最勝王經に云く「悪人を愛敬し善人を治罰するに由るが故に、乃至他方

おんそく

の怨賊来つて国人喪乱に遭わん」等云云、たとい日蓮をば輕賤せさせ給う

きようしゆしやくそん

とも教主釈尊の金言・多宝・十方の諸仏の証明は空かるべからず一切

しんごんし

の真言師・禅宗・念佛者等の謗法の悪比丘をば前より御帰依ありしかども

そ だいか

其の大科を知らせ給はねば少し天も許し善神もすてざりけるにや、而るを

にちれん しゅつげん
日蓮が出現して一切の人を恐れず身命を捨てて指し申さば賢なる国主な
しさい
らば子細を聞き給うべきに聞きもせず用いられざるだにも不思議なるに
あまつさ およ
剩へ頸に及ばむとせし事は存外の次第なり、然れば大悪人を用いる大科
しょうほう ぜんにん ちじよく
正法の大善人を耻辱する大罪・二悪・鼻を並べて此の国に出現せり、譬
しゆら きようけい につてん たてまつ こと ゆえ ぜんだいみもん だいじ
ば修羅を恭敬し日天を射奉るが如し故に前代未聞の大事・此の国に起るな
り、是又先例なきにあらず夏の桀王は竜蓬が頭を刎ね殷の紂王は比干が
せんれい かのけつ りゅうほう こつべ は いんのちゆう
胸をさき二世王は李斯を殺し優陀延王は賓頭盧尊者を蔑如し檀弥羅王は
ししそんじや
師子尊者の頸をきる武王は慧遠法師と諍論し憲宗王は白居易を遠流し徽宗
こうてい ほうどうさんぞう かお かなやき
皇帝は法道三蔵の面に火印をさす、此等は皆諫暁を用いざるのみならず
かえ
還つて怨を成せし人人現世には国を亡し身を失ひ後生には悪道に墮つ是れ
ひとびとげんせ
又人をあなづり讒言を納れて理を尽さざりし故なり、而るに去る文永十一
ざんげん い
年二月に佐土の国より召返されて同四月の八日に平金吾に対面して有りし
たいめん

時・理不尽の御勘氣の由委細に申し含めぬ、又恨むらくは此の国すでに他國
に破れん事にあさましさと歎き申せしかば金吾が云く何の比か大蒙古は
寄せ候べきと問いしかば經文には分明に年月を指したる事はなけれども
天の御氣色を拝見し奉るに以ての外に此の国を睨みさせ給うか今年は一定
寄せぬと覺ふ若し寄するならば一人も面を向う者あるべからず此れ又天の
責なり、日蓮をばわど和殿原のばらが用いぬ者なれば力及ばず、穴賢穴賢・
真言師等に調伏行わせ給うべからず若し行わするほどならいよいよ悪かる
べき由申付けてさて歸りてありしに上下共に先の如く用いさりげに有る上
・本より存知せり国恩を報ぜんがために三度までは諫曉すべし用いずば
山林に身を隠さんと・おもひしなり、又上古の本文にも三度のいさめ用い
ずば去れといふ本文にまかせて且く山中に罷り入りぬ、其の上は国主の
用い給はざらんに其れ已下に法門申して何かせん申したりとも国もたすか

るまじ人も又仏になるべしとおぼへず。

又念仏・無間地獄・阿弥陀經を読むべからずと申す事も私の言にはあら

ず、夫れ弥陀念仏と申すは源と釈迦如来の五十余年の説法の内・前四十余年

の内の阿弥陀經等の三部經より出来せり、然れども如来の金言なれば定め

て真実にてこそあるらめと信ずる処に後八年の法華經の序分たる無量義經

に仏・法華經を説かせ給はんために先づ四十余年の經經並に年紀等を

具に数へあげて未顕真実・乃至・終不得成・無上菩提と若干の經經並に

法門を唯一言に打ち消し給う事譬えば大水の小火をけし大風の衆の草木の

露を落すが如し、然後に正宗の法華經の第一卷に至つて世尊法久後・

要当説真実又云く正直捨方便・但説無上道と説き給う譬へば闇夜に大月輪

の出現し大塔立て後足代を切り捨つるが如し、然実義を定めて云く「今

・此の三界は皆是れ我が有なり其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり而も今

・此の処は諸の患難多し唯我一人のみ能く救護を為す、復教詔すと雖も
しか しんじゆ ながらも信受せず、乃至經を誦誦し書き持つこと有らん者を見て輕賤憎嫉して
しか けつこん いだ 其の人 命終して阿鼻獄に入らん等云云、經文の次第
普通の性相の法には似ず常には五逆・七逆の罪人こそ阿鼻地獄とは定めて
候に此れはさにては候はず在世滅後の一切衆生・阿弥陀經等の四十余年の
きようぎよう 經經を堅く執して法華經へうつらざらんとたとひ法華經へ入るとも本執
を捨てずして彼の彼の 經經を法華經に並て修行せん人と又自執の 經經を
ほけきよう 法華經に勝れたりといはん人と法華經を法の如く修行すとも法華經の
ぎようじや ちじよく 行者を恥辱せん者と此れ等の諸人を指しつめて其人命終入阿鼻獄と定め
させ給いしなり、此の事はただ釈迦一仏の仰なりとも、外道にあらずば疑
うべきにてはあらねども已今当の諸經の説に色をかへて重き事をあらはさ
んがために宝淨世界の多宝如来は 自はるばる來給いて証人とならせ給う、

釈迦如来の先判たる大日経・阿弥陀経・念仏等を堅く執して後の法華經へ
入らざらむ人人は入阿鼻獄は一定なりと証明し、又阿弥陀仏等の十方の
諸仏は各各の国国を捨てて靈山虚空会に詣で給い宝樹下に坐して広長舌
を出し大梵天に付け給うこと無量無辺の虹の虚空に立ちたらんが如し、心
は四十余年の中の觀經・阿弥陀経・悲華經等に法藏比丘の諸菩薩・四十八
願等を發して凡夫を九品の淨土へ來迎せんと説く事は且く法華經已前のや
すめ言なり、
・多宝・十方の諸仏寿命品の肝要たる南無妙法蓮華經の五字を信ぜしめ
んが為なりと出し給う広長舌なり、我等と釈迦仏とは同じ程の仏なり
釈迦仏は天月の如し我等は水中の影の月なり釈迦仏の本土は實には
娑婆世界なり天月動き給はずば我等もうつるべからず此の土に居住して

ほけきよう　ぎようじや　しゅこ
法華經の行者を守護せん事・臣下が主上を仰ぎ奉らんが如く父母の一子を
愛するが如くならんと出し給う舌なり、其のときあみだぶつ　そのときあみだぶつ　の一二の弟子・観音
・勢至等は阿弥陀仏の塩梅なり雙翼なり左右の臣なり両目の如し、然而
ごくらくせかい
極樂世界よりはるばると御供し奉りたりしが無量義經の時・仏の阿弥陀經
等の四十八願等は未顕真実・乃至法華經にて一名阿弥陀と名をあげて此等
ほうもん　しんじつ　と　たまひ　まこと　おほ
の法門は真実ならずと説き給いしかば実とも覺へざりしに阿弥陀仏正く来
りて合点し給いしをうち見てさては我等が念佛者等を九品の浄土へ來迎の
れんだい　がつしやう　むな　ほさつ　ある　かんのん　しゃばせかい
蓮台と合掌の印とは虚しかりけりと間定めてさては我等も本土に還りて何
かせんとて八万二万の菩薩のうちに入り・或は観音品に遊於娑婆世界と
もう　ほうけきよう　ぎようじや　しゅこ　にほんこく
申して此の土の法華經の行者を守護せんとなんごころに申せしかば、日本国
より近き一閻浮提の内・南方・補陀落山と申す小所を釈迦仏より給いて宿
所と定め給ふ、阿弥陀仏は左右の臣下たる観音・勢至に捨てられて西方世界

へは還り給はず此の世界に留りて法華經の行者を守護せんとありしかば此
の世の内・欲界第四の兜率天・弥勒菩薩の所領の内・四十九院の一院を
給いて阿弥陀院と額を打つておはするとこそうけ給はれ、其の上阿弥陀經
には仏・舍利弗に対して凡夫の往生すべき様を説き給ふ、舍利弗・舍利弗
・又舍利弗と二十余処までいくばくもなき經によび給いしはかまびすしか
りし事ぞかし、然れども四紙の一卷が内すべて舍利弗等の諸声聞の往生
成仏を許さず法華經に來りてこそ始て華光如來・光明如來とは記せられ
給いしか一閻浮提第一の大智者たる舍利弗すら浄土の三部經にて往生
成仏の跡をけづる、まして末代の牛羊の如くなる男女・彼の經經に
て生死を離れなんや、此の由を弁へざる末代の学者等並に法華經を修行す
る初心の人人かたじけなく阿弥陀經を読み念仏を申して、或は法華經に鼻
を並べ、或は後に此れを讀みて法華經の肝心とし功德を阿弥陀經等にあ

つらへて西方さいほうへ回向えこうし往生おうじょうせんと思ふは譬たとへば飛竜が驢馬を乗物とし師子ししが野干やかんをたのみたるか将又日輪出現はたまたにちりんしゅつげんの後の衆星しゅうせいの光大雨だいいうの盛さかんなるとき時の小露さかんなるときなり、故ゆえに教大師云く「白牛びやくこを賜たまう朝あしたには三車もちを用いず、家業を得る夕になん じよふん もち何ぞ除糞じよふんを須もちいん、故ゆえに經に云く「正直しやうじきに方便ほうべんを捨て但無上道むじやうどうを説く」又云く「日出いでぬれば星隠れ巧を見て拙しづを知る」と云云、法華經出現ほけきやうしゅつげんの後いこんとうは已今当しきやうの諸經しよきやうの捨てらるる事は勿論もちろんなりたとひ修行しゆぎやうすとも法華經ほけきやうの所従しよじゆうにてこそあるべきに今の日本国にほんこくの人人道ひとびとどう綽みうが未有一人得者いちにんとくしや ぜんどう・善導ぜんどうが千中無一せんちゆうむいつ えしん・慧心おうじやうしゆうが往生要集やうかんの序・永觀やうかんが十因じゆ・法然ほうなんが捨閉閣しやへいかく拋ほう等を堅く信あるじて・或ほけきやうは法華經なげうを拋いっさうちて一向いっさうに念仏ねんぶつを申もうす者もあり、・或あるは念仏ねんぶつを本あるとして助ほけきやうけに法華經あるを持つ者もあり、・或あるは弥陀念仏みだねんぶつと法華經ほけきやうとを鼻ほけきやうを並あるべて左右さうに念あるじて二行あると行あるずる者もあり、・或あるは念仏ねんぶつと法華經ほけきやうと一法ほけきやうの二名ほけきやうなりと思あるいて行あるずる者もあり、此これ等は皆教主みなきやうしゆしやくそん釈尊しやくそんの御屋敷みやうしやくそんの内に居こして

師主をば指し置き奉りて阿弥陀堂を釈迦如来の御所領の内^{しよりよう}に国毎に郷毎に^{さと}
家家毎に並べ立て・或^{ある}は一万・二万・或^{ある}は七万返・或^{ある}は一生の間・一向に^{いっしやう}
修行^{しゆぎよう}して主師親をわすれたるだに不思議なるに、剩^{あまつさ}へ親父たる教主^{きやうしゆしやくそん}釈尊^{しやくそん}
の御誕生後入滅の兩^{りやうじつ}日を奪^{せいごにゆうめつ}い取りて、十五日は阿弥陀仏の日・八日は薬師^{やくし}
・仏の日等云云、一仏誕生の兩^{いちぶつ}日を東西二仏の死生の日となせり是豈に^{あに}
不孝^{ふこう}の者にあらずや逆路七逆の者にあらずや、人毎に此^{ひとごと}の重科^{じゆうかう}有りてしか
も人毎に我が身は科^{とが}なしとおもへり無慚無愧の一闍提人^{むざんむき いっせんたい}なり、法華經の第^{ほけきやう}
二の卷に主と親と師との三大事を説き給^{だいじ}へり一經^{たまた}の肝心^{いっききやう}ぞかし、其^{かんじん}の經文^そ
に云^{いわ}く「今・此^{さんがい}の三界^{みなこ}は皆是^{だいに}れ我有^となり其中^{たまた}の衆生^{いっききやう}は悉^{しゆじやう}く是^{しよくごん}れ吾^ごが子^こなり、
而^{しか}も今^{いま}・此^{この}の処^{ところ}は諸^{もろもろ}の患難^{げなん}多^{ただ}し唯^{ただ}我^{われ}一人^{ひとり}のみ能^{よく}く救護^{くご}を為^なす」等云云、又
此^その經^{きやう}に背^{そむ}く者^{もの}を文^{ぶん}に説^{いわ}いて云^{また}く「復^{また}教詔^{きやうちやく}す^くと雖^{いえど}も而^{しか}も信受^{しんじゆ}せず、乃至^{ないし}
其^その人^{みやうじゆう}命終^{あびこく}して阿鼻獄に入らん」等云云、されば念仏^{ねんぶつ}者^{もんし}が本師^{ほんし}の導公^{どうこう}は

ごちゆうしゅじょう　ただわれひとり　きょうもん
其中衆生の外か唯我一人の経文を破りて千中無一といいし故に現身に狂
人と成りて楊柳に登りて身を投げ堅土に落ちて死にかねて十四日より二十
七日まで十四日が間顛倒狂死し畢んぬ、又真言宗の元祖善無畏三蔵・
金剛智三蔵・不空三蔵等は親父を兼ねたる教主釈尊・法王を立て大日
他仏をあがめし故に善無畏三蔵は閻魔王のせめにあづかるのみならず又
無間地獄に堕ちぬ、汝等・此の事疑あらば眼前に閻魔堂の画を見よ、
金剛智・不空の事はしげればかかず、又禪宗の三階信行禪師は法華経等
の一代聖教をば別教と下だす我が作れる経をば普経と崇重せし故に
四依の居士の如くなりしかども法華経の持者の優婆夷に・せめられてこえ
を失ひ現身に大蛇となり数十人の弟子を呑み食う。

今・日本国の人人はたとひ法華経を持ち釈尊を釈尊と崇重し奉るとも
真言宗・禪宗・念仏者をあがむるならば無間地獄はまぬがれがたし、

いかにわんや
何に況や三宗の者共を日月の如く渴仰し我が身にも念仏を事とせむ者をや
心あらん人人は念仏・阿弥陀経等をば父母・師君・宿世の敵よりもいむべ
きものなり、例せば逆臣が旗をば官兵は指す事なし寒食の祭には火をいむ
ぞかし、されば古への論師・天親菩薩は小乗経を舌の上に置かじと誓ひ、
賢者たりし吉蔵大師は法華経をだに読み給はず、此等のもと小乗経を
もつだいじようきようはしつほけきようもつてんだいだいしきぼうたてまつほうほうじゅうざい
以て大乘経を破失し法華経を以て天台大師を毀謗し奉りし謗法の重罪を
しょうめつ
消滅せんがためなり、今・日本国の人人は一人もなく不輕輕毀の如く苦岸
しょうい
勝意等の如く一国万人・皆無間地獄に墮つべき人人ぞかし、仏の涅槃経に
しるまっほうほけきようひほうだいぢみじん
記して末法には法華経誹謗の者は大地微塵よりもおほかるべしと記し給い
し是なり、而に今法華経の行者出現せば一国万人・皆法華経の誦誦を止め
きちそうだいしてんだいだいししたがごとにくきようふぎようきようきえふぎよう
て吉蔵大師の天台大師に随うが如く身を肉橋となし不輕輕毀の還つて不輕
ぼさつしんぶくずいじゅう
菩薩に信伏随従せしが如く仕うるとも、一日・二日・一月・二月・一年二

年・一生二生が間には法華經誹謗の重罪は尚なをし滅しがたかるべきに
其の義はなくして当世の人人は四衆俱に一慢をおこせり、所謂念仏者は
法華經を捨てて念仏を申す日蓮は法華經を持といへども念仏を持たず我等
は念仏を持ち法華經をも信ず戒をも持ち一切の善を行ず等云云、此等は野
兔が跡を隠し金鳥が頭を穴に入れ、魯人が孔子をあなづり善星が仏を・
をどせしにことならず鹿馬迷いやすく鷹鳩変じがたき者なり、墓無し墓無
し、当時は予が古へ申せし事の漸く合かの故に心中には如何せんとは思ふ
らめども年来あまりに法にすぎてそしり悪口せし事が忽に翻がたくて信
ずる由をせず、而も蒙古はつよりゆく、如何せんと宗盛・義朝が様になげ
くなり、あはれ人は心はあるべきものかな孔子は九思一言・周公旦は浴す
る時は三度にぎり食する時は三度吐給う賢人は此の如く用意をなすなり
世間の法にも・はふにすぎば・あやしめといふぞかし、国を治する人なん

どが人の申せばとて委細いさいにも尋ねずして左右さうなく科とがに行はれしは・あはれ
くやしかるらんに夏のかのけつ槃王はんぎようが湯王もちに責められ吳王あじやせが越王あくそうに生けどりにせら
れし時は賢者けんじやの諫かんぎよう曉もちを用いざりし事を悔くひ阿闍世王あじやせが悪瘡身あくそうに出いて他国たこくに
襲はれし時は提婆だいばを眼まなこに見じ耳に聞かじと誓い、乃至宗盛ないしむねもりがいくさにまけ
よしつね義経よしつねに生けどられて鎌倉かまくらに下されて面をさらせし時は東大寺を焼き払ははせ
さんのう山王さんのおうの御輿たてまつを射奉りし事を歎なげきしなり、今の世も又一分いちぶんもたがふべからず
にちれんいやししよそう日蓮にちれんを賤いやししよそうみ諸僧たまたを貴ゆえび給じねんう故ほけきように自然じゆんてきに法華経たまたの強敵たまたとなり給わきまえう事を弁わきまえへず、
政道そむに背そむきて行はるる間ほんしやく・梵釈にちがつ・日月してん・四天りゆうおう・竜王おんてき等の大怨敵おんてきとなり
給たまう、法華経ほけきよう守護しゆこの釈迦しやか・多宝たほう・十方分身じゆつぼうふんじんの諸仏しよぶつ・地涌千界じゆせんがい・迹化他方けた・
二聖じゆうらせつによ・二天きしもじん・十羅刹女たこく・鬼子母神けんおう・他国の賢王けんおうの身に入り代りて国主を罰こくしゆ
し国をほろぼさんとするを知らず、真の天のせめにてだにも・あるならば
たとひ鉄圀山てっちせんを日本国にほんに引しきまわし回しゆみせんし須弥山しゆみせんを蓋おおいとして十方世界じゆつぼうせかいの四天王してんのうを集

めて波際なぎさに立て並べてふせがするとも法華經ほけきょうの敵となり教主きょうしゅ釈尊しやくそんより

だいじ ぎょうじや ほけきょう もつ にちれん こうべ
大事なる 行者を法華經の第五の巻を以て日蓮が頭を打ち十巻共に引き散

して散散にふみたりし大禍は現当二世にげんとうのがれがたくこそ候はそうらんずらめ

日本守護の天照太神・正八幡等もいかでかかかる国をばたすけ給うべき

いそぎいそぎ治罰ちばつを加えて自みずからのたが科を脱がれんとこそはげみ給たまうらめをそく

科とがに行く間・日本にほんこく国の諸神しよじんども四天大王してんだいおうにいましめられてやあるらん知り

難き事なりがた教大師云くだいしいう「竊に以れば菩薩は国の宝なることひそかおもんればさつ法華經に載せほけきようの

大乗の利他は摩訶衍の説なり弥天の七難は大乗經に非ずんば何を以てか

除くことを為^せん、未然の大災は菩薩僧に非^たずんば豈冥滅することを得^えんや」

等云云、而るしかを今大蒙古国だいうこくを調伏じょうぶくする公家・武家くげぶけの日記にっきを見るに・或は五ある

大尊・或あるは七やくし仙ある薬師・或あるは仏ぶつげん眼・或あるは金輪等云云、此れ等の小法は大災をたいさい

消すべしや還著於本人と成りて国忽に亡びなんとす、
げんちやくおほんにん
たちまち
ある
ひよし
 ・或は日吉の社にし

て法華ほっけの護摩まもを行うといへども不空三蔵ふくうさんぞうがあやまれる法を本として行う間
祈き☆の儀ぎにあらず、又今の高僧等こうそうは・或あるは東寺とうじの真言しんこん・或あるは天台てんだいの真言しんこんな
り東寺とうじは弘法大師こうぼうだいし・天台てんだいは慈覺じかく・智証ちしょうなり、此の三人は上に申すが如く大
謗法ほうぼうの人人ひとびとなり、其れより已外いげの諸僧等しよそうは・或あるは東大寺とうだいじの戒壇かいだんの小乗しょうじょうの
者ものなり、叡山えいざんの円頓戒えんどんは又慈覺じかくの謗法ほうぼうに曲げられぬ彼の円頓戒えんどんも迹門しやくもんの
大戒だいかいなれば今の時の機きにあらず 旁かたがたかな叶たまうべき事にはあらず、只今ただ国土こくどやぶ
れなん後悔こうかいさきにたたじ不便ふびん不便ふびんと語り給たまいしを千万せんまんが一を書き付けて参
らせ候こう。

但ただし身も下賤げせんに生れ心も愚おろかに候へば此の事は道理どうりかとは承うけたまわり候へども
国主こくしゅも御用もちいなきかの故ゆえに鎌倉かまくらにては如何いかにが候けん不審ふしんに覺おほえ候、返す返
すも愚意おろかに存じ候はこれ程の国の大事だいじをば・いかに御尋たずねもなくして兩度
の御勘氣ごかんきには行はれけるやらんと聞食きこしめしほどこかせ給たまはぬ人人ひとびとの・或あるは道理どうり

とも・或は僻事とも仰せあるべき事とは覚え候はず、又此の身に阿弥陀經
を読み候はぬも併ら御為父母の為にて候、只理不尽に読むべき由を仰せを
蒙り候はば其の時重ねて申すべく候、いかにも聞食さずしてうしろの推義
をなさん人人の仰せをばたとひ身は随う様に候えども心は一向に用いま
らせ候まじ、又恐れにて候へども兼ねてつみしらせまいらせ候、此の御房
は唯一人おはします若しやの御事の候はん時は御後悔や候はんずらん世間
の人人の用いねばとは一旦のをろかの事なり上の御用あらん時は誰人か
用いざるべきや、其の時は又用いたりとも何かせん人を信じて法を信ぜず、
又世間の人人の思いて候は親には子は是非に随うべしと君臣・師弟も此く
の如しと此れ等は外典をも弁えず内典をも知らぬ人人の邪推なり外典の
孝經には子父・臣君諍うべき段もあり、内典には恩を棄て無為に入るは
眞実に恩を報ずる者なりと仏定め給いぬ、悉達太子は閻浮第一の孝子なり

父の王の命を背きてこそ父母をば引導し給いしか、比干が親父紂王を諫曉かんぎようして胸をほられてこそ賢人の名をば流せしか、賤み給うとも小法師が諫曉かんぎようを用ひ給はずば現当の御歎きなるべし、此れは親の為に読みまいらせ候はぬ阿弥陀經にて候へば・いかにも当時は叶うべしとはおぼへ候はず、あみだ恐恐 申し上げ候。きようきようもう

建治三年六月日 僧 日永

しもやま 下山兵庫五郎殿御返事ごへんじ

◆五〇

ほんぞんもんどう 本尊問答抄

こうあんがんねん 弘安元年九月

五十七歳御作 与浄顯房日仲ぼう

365P

問うて云く末代悪世の凡夫は何物を以て本尊と定むべきや、答えて云くいわ

法華經の題目を以て本尊とすべし、問うて云く何れの經文何れの人師の釈いわ

にか出でたるや、答う法華經の第四法師品に云く「薬王在在处处に若しはい

と
説き若しは読み若しは誦し若しは書き若しは経巻所住の処には皆応に
しつぽう
七宝の塔を起てて極めて高広嚴飾なら令むべし復舍利を安んずることを
もち
須いじ所以は何ん此の中には已に如来の全身有す」等云云、涅槃經の第四
によらい
如来性品に云く「復次に迦葉諸仏の師とする所は所謂法なり是の故に如来
きようけい
恭敬供養す法常なるを以ての故に諸仏も亦常なり」云云、天台大師の法華
さんまい いわ
三昧に云く「道場の中に於て好き高座を敷き法華經一部を安置し亦必ずし
ぎようぞうしやりなら
も形像舍利並びに余の經典を安くべからず唯法華經一部を置け」等云云。
うたがい
疑つて云く天台大師の摩訶止観の第二の四種三昧の御本尊は阿弥陀仏
ふくうさんぞう
なり、不空三蔵の法華經の観智の儀軌は釈迦・多宝を以て法華經の本尊と
せり、汝何ぞ此等の義に相違するや、答えて云く是れ私の義にあらず上に
なんじん
出だすところの經文並びに天台大師の御釈なり、但し摩訶止観の四種三昧
ほんぞん
の本尊は阿弥陀仏とは彼は常坐・常行・非行・非坐の三種の本尊は

阿弥陀仏なり、文殊問経・般若三昧経・請觀音経等による、是れ爾前の諸経の内・未顕真実の経なり、半行半坐三昧には二あり、一には方等経の七仏・八菩薩等を本尊とす彼の経による、二には法華経の釈迦・多宝等を引き奉れども法華三昧を以て案ずるに法華経を本尊とすべし、不空三蔵の法華儀軌は宝塔品の文によれり、此れは法華経の教主を本尊とす法華経の正意にはあらず、上に挙ぐる所の本尊は釈迦・多宝・十方の諸仏の御本尊法華経の行者の正意なり。

問うて云く日本国に十宗あり所謂俱舍・成実・律・法相・三論・華嚴・真言・浄土・禅・法華宗なり、此の宗は皆本尊まちまちなり所謂俱舍・成実・律の三宗は劣応身の小釈迦なり、法相・三論の二宗は大釈迦仏を本尊とす華嚴宗は台上のるさな報身の釈迦如来、真言宗は大日如来、浄土宗は阿弥陀仏、禅宗にも釈迦を用いたり、何ぞ天台宗に独り法華経

を本尊とするや、答う彼等は仏を本尊とするに是は經を本尊とす其の義あるべし、問う其の義如何仏と經といづれか勝れたるや、答えて云く本尊とすは勝れたるを用うべし、例せば儒家には三皇・五帝を用いて本尊とするがごとく、如く仏家にも又釈迦を以て本尊とすべし。

問うて云く然らば汝云何ぞ釈迦を以て本尊とせずして法華經の題目を本尊とするや、答う上に挙ぐるところの經釈を見給へ私の義にはあらずやくそん、釈尊と天台とは法華經を本尊と定め給へり、末代今の日蓮も仏と天台のごとく、如く法華經を以て本尊とするなり、其の故は法華經は釈尊の父母・諸仏の眼目なり釈迦大日・総じて十方の諸仏は法華經より出生し給へり故に今のうしようにも、能生を以て本尊とするなり、問う其証拠如何、答う普賢經に云く「此の大乗經典は諸仏の宝蔵なり十方三世の諸仏の眼目なり三世の諸の如来を出生する種なり」等云云、又云く「此の方等經は是れ諸仏の眼なり諸仏

は是に因よつて五眼を具ぐすることを得たまえり仏の三種の身は方等ほうとうより生ず
是れ大法印ほういんにして涅槃海を印ねはんす此かくの如ごとき海中かいちゆうより能よく三種の仏の清淨しやうじやう
の身を生ず此の三種の身は人天の福田にんてん応供ふくでんの中の最なり」等云云、此等の
経文きやうもんは所生しよしやう法華経は能のうしやう生しやう仏は身なり法華経は神なり、然しかれば則すなわち木像
・画像の開眼供養は唯法華経にかぎるべし而しかに今木画の二像をまうけて
大日仏眼の印と真言しんごんとを以て開眼供養をなすはもとも逆なり。

問うて云く法華経を本尊ほんぞんとすると大日如来を本尊ほんぞんとするといづれか勝まさる
や、答う弘法大師・慈覚大師・智証大師の御義ごぎの如ごとくならば大日如来はす
ぐれ法華経は劣るなり、問う其の義い如何、答う弘法大師の秘藏宝鑰 十住
心に云く「第八法華・第九華嚴・第十大日經」等云云是は浅きより深きに
入る、慈覚大師の金剛頂經こんこうぢやうきやうの疏じよ・蘇悉地經そしつちきやうの疏じよ・智証大師の大日經ぢしやうだいし
旨歸等に云く「大日經第一・法華經第二」等云云、問う汝が意如何、答

う釈迦如来・多宝仏・総じて十方の諸仏の御評定に云く已今当の一切經の中に法華最為第一なり云云、問う今・日本国中の天台・真言等の諸僧並びに王臣万民疑つて云く日蓮法師めは弘法・慈覺・智証大師等に勝るべきか如何、答う日蓮反詰して云く弘法・慈覺・智証大師等は釈迦・多宝・十方の諸仏に勝るべきかは一、今日本の国王より民までも教主釈尊の御子なり釈尊の最後の御遺言に云く「法に依つて人に依らざれ」等云云、法華第一と申すは法に依るなり、然るに三大師等に勝るべしやとの給ふ諸僧・王臣・万民乃至所従牛馬等にいたるまで不孝の子にあらずや是二、問う弘法大師は法華經を見給はずや、答う弘法大師も一切經を読み給へり、其の中に法華經・華嚴經・大日經の浅深・勝劣を読み給うに法華經を読給う様に云く文殊師利・此の法華經は諸仏如来秘密の蔵なり諸經の中に於て最も其の下に在り、又読み給う様に云く藥王今汝に告ぐ我が所説の

諸經あり而も此の經の中に於て法華最第三云、又慈覺・智証大師の読み給う様に云く諸經の中に於て最も其の中に在り又最爲第二等云云、釈迦如来・多宝仏・大日如来・一切の諸仏・法華經を一切經に相對して説いての給はく法華最第一、又説いて云く法華最も其の上に在り云云、所詮釈迦十方の諸仏と慈覺・弘法等の三大師といづれを本とすべきや、但し事を日蓮によせて釈迦十方の諸仏には永く背きて三大師を本とすべきか如何。問う弘法大師は讃岐の国の人勤操僧正の弟子なり、三論・法相の六宗を極む、去る延暦二十三年五月桓武天皇の勅宣を帯びて漢土に入り順宗皇帝の勅に依りて青竜寺に入りて慧果和尚に真言の大法を相承し給へり慧果和尚は大日如来よりは七代になり給う人はかはれども法門はをなじ譬えば瓶の水を猶瓶にうつすがごとし、大日如来と金剛薩☆・竜猛・竜智・金剛智・不空・慧果・弘法との瓶は異なれども所伝の智水は同じ真言な

り此の大師・彼の真言を習いて三千の波濤をわたりて日本国に付き給うに
平城・嵯峨・淳和の三帝にさづけ奉る、去る弘仁十四年正月十九日に東寺
を建立すべき勅を給いて真言の秘法を弘通し給う然らば五畿・七道・六
十六箇国・二の島にいたるまでも鈴をとり杵をにぎる人たれかこの末流
にあらざるや。

又慈覚大師は下野の国の人・広智菩薩の弟子なり、大同三年御歳十五に
して伝教大師の御弟子となりて叡山に登りて十五年の間六宗を習い法華
・真言の二宗を習い伝え承和五年御入唐・漢土の会昌天子の御宇なり、法
全・元政・義真・法月・宗叡・志遠等の天台・真言の碩学に値い奉りて
顕密の二道を習い極め給う、其の上殊に真言の秘教は十年の間功を尽し
給う大日如来よりは九代なり嘉祥元年仁明天皇の御師なり、仁寿・斉衡に
金剛頂経・蘇悉地経の二経の疏を造り叡山に総持院を建立して第三の

座主となり給う天台の真言これよりはじまる。

又智証大師は讃岐の国の入天長四年御年十四・叡山に登り義真和尚の

御弟子となり給う、日本国にては義真・慈覚・円澄・別当等の諸徳に八宗

を習い伝え去る仁寿元年に文徳天皇の勅を給いて漢土に入り宣宗皇帝の

大中年中に法全良☆和尚等の諸大師に七年の間顕密の二教習い極め給い

て去る天安二年に御帰朝・文徳・清和等の皇帝の御師なり、何れも現の為

当の為月の如く日の如く代代の明主・時時の臣民・信仰余り有り帰依怠り

無し故に愚癡の一切偏に信ずるばかりなり誠に法に依つて人に依らざれの

金言を背かざるの外は争か仏によらずして弘法等の人によるべきや、所詮

其の心如何、答う夫れ教主釈尊の御入滅一千年の間月氏に仏法の弘通せ

し次第は先五百年は小乗後の五百年は大乗・小大・権実の諍はありし

かども顕密の定めはかすかなりき、像法に入りて十五年と申せしに漢土に

ぶつぼうわた
仏法渡る始は儒道と 釈教と 諍論して定めがたかりきされども仏法やうや
く 弘通せしかば 小大・権実の 諍論いできたる、されどもいたくの相違もな
かりしに、漢土に 仏法渡りて六百年・玄宗皇帝の 御宇・善無畏・金剛智・
不空の三三蔵・月氏より入り給いて後真言宗を立てしかば、華嚴・法華等
の 諸宗は以ての外にくだされき上一人自り下万民に至るまで真言には
ほけきよう うんでい
法華経は雲泥なりと思ひしなり、其の後・徳宗皇帝の 御宇に妙楽大師と
もう しんこん ほけきよう
申す人真言は法華経にあながちに・をとりたりとおぼしめしかども、い
たく立てる事もなかりしかば法華・真言の 勝劣を弁える人なし。

にほんこく
日本国は人王三十代欽明の 御時・百済国より 仏法始めて渡りたりしかど
も始は神と仏との 諍論こわくして三十余年はすぎにき、三十四代推古天皇
ぎよう しょうとくたいし
の 御宇に聖徳太子始めて 仏法を弘通し給う 慧観観勒の二の 上人百済国より
わたりて三論宗を弘め、孝徳の 御宇に道昭・禅宗をわたす文武の 御宇に

新羅国の智鳳・法相宗をわたす第四十四代元正天皇の御宇に善無畏三蔵・

大日経をわたす然而弘まらず、聖武の御宇に審祥大徳・朗弁僧正等・

華嚴宗をわたす人王四十六代孝謙天皇の御宇に唐代の鑒真和尚・律宗と

法華経をわたす律をばひろめ法華をば弘めず、第五十代桓武天皇の御宇に

延暦二十三年七月伝教大師勅宣を給いて漢土に渡り妙楽大師の御弟子

・道邃・行満に値い奉りて法華宗の定慧を伝え道宣律師に菩薩戒を伝え

順・暁和尚と申せし人に真言の秘教を習い伝えて日本国に帰り給いて、真言

・法華の勝劣は漢土の師のおしへに依りては定め難しと思食しければ・こ

こにして大日経と法華経と彼の釈と此の釈とを引き並べて勝劣を判じ

給いしに大日経は法華経に劣りたるのみならず大日経の疏は天台の心を

とりて我が宗に入れたりけりと勘え給へり。

其の後弘法大師・真言経を下されける事を遺恨とや思食しけむ真言宗を

立てんとたばかりて法華經はほけきょう大日經に劣るのみならず華嚴經に劣れりと云だいにちきょう

云、あはれ慈覺・智証・叡山・園城にこの義をゆるさずば弘法大師の僻見じかく　ちしゅう　えいざん　おんじょう　ひやっけん

は日本国にひろまらざらまし、彼の両大師・華嚴・法華の勝劣をばゆるさにほんこく　だいし　けこん　ほっけ　しょうれつ

ねど法華・真言の勝劣をば永く弘法大師に同心せしかば存外に本の伝教ほっけ　しんこん　しょうれつ　こうぼうだいし　そんがい　でんぎょう

大師の大怨敵となる、其の後日本国の諸碩徳等各智慧高く有るなれども彼だいし　おんてき　その　にほんこく　しよせきとく　ちえ　あ

の三大師にこえざれば今四百余年の間・日本一同に真言は法華經に勝れけだいし　おわ　てんだいしゅう　にほん　しんこん　ほけきょう　すぐ

りと定め畢んぬ・たまたま天台宗を習へる人人も真言は法華に及ばざるのひとびと　しんこん　ほっけ　およ

由存ぜども天台の座主・御室等の高貴におそれて申す事なし・あるは又てんだい　ざす　おむろ　もう

其の義をもわきまへぬかのゆへにからくして同の義をいへば一向・真言師そ　いっこう　しんこんし

はさる事おもひもよらずとわらふなり。

然らば日本国中に数十万の寺社あり皆真言宗なりたまたま法華宗を並ぶしか　にほんこくじゅう　じゅうまん　みなしんこんしゅう　ほっけしゅう

とも真言は主の如く法華は所従の如くなり若しくは兼学の人も心中は一しんこん　こと　ほっけ　しよじゅう　こと　も　けんがく　しんちゅう

同に真言なり、座主長吏・検校・別当・一向に真言たるうへ上に好むとこ

ろ下皆したがふ事なれば一人ももれず真言師なり、されば日本国・或は口

には法華經最第一とはよめども心は最第二・最第三なり・或は身口意共に

最第二三なり、三業相応して最第一と読める法華經の行者は四百余年が間

・一人もなしまして能持此經の行者はあるべしともおぼへず、如来現在・

猶多怨嫉・況滅度後の衆生は上一人より下万民にいたるまで法華經の大

怨敵なり。

然るに日蓮は東海道十五箇国の内第十二に相当る安房の国長狹の郡・

東条の郷・片海の海人が子なり、生年十二同じき郷の内・清澄寺と申す山

にまかり登り住しき、遠国なるうへ寺とはなづけて候へども修学の人なし

然而随分諸国を修行して学問し候いしほどに我が身は不肖なり人はおしへ

ず十宗の元起勝劣たやすくわきまへがたきところに、たまたま仏・菩薩に

きしょう

いっさい

きょうろん

かんがえ

ぐしやしゅう

いちぶん

祈請して一切の経論を勘て十宗に合せたるに俱舍宗は浅近なれども一分は

しょうじょうきょう

小乗經に相当するに似たり、

じょうじつ

成実宗は大小兼雜して

だいしょうけんざつ

謬☆あり

りつしゅう

しょうじょう

なかころ

こんだいじょう

いっしゅう

だいじょう

でんぎようだいし

りつしゅう

本は小乗

・中比は権大乘

・今は一向に大乘宗とおもへり

又伝教大師の

りつしゅう

律宗あり別に習う事なり、

ほうそうしゅう

法相宗は源

権大乘經の中の浅近の法門にて

ほうもん

ありけるが次第に増長して権実と並び結句は彼の宗宗を打ち破らんと存ぜ

り譬えば日本国の將軍・將門・純友等のごとし下に居て上を破る、三論宗

たと

にほんこく

しょうぐん

けこんしゅう

も又権大乘の空の一分なり此れも我は実大乘とおもへり、華嚴宗は又

こんだいじょう

いちぶん

こ

じつだいじょう

けこんしゅう

権大乘と云ひながら余宗にまされり譬えば摂政関白のごとし然而法華經

を敵となして立てる宗なる故に臣下の身を以て大王に順ぜんとするがごと

し、浄土宗と申すも権大乘の一分なれども善導・法然がたばかりかしこ

くして諸經をば上げ觀經をば下し正像の機をば上げ末法の機をば下して

まつぼう

き

まつぼう

き

くだ

末法の機に相叶える念仏を取り出しして機を以て經を打ち一代の聖教を

まつぼう

き

ねんぶつ

き

もつ

いちだい

しょうきょう

を

うしな ねんぶつ いちもん
失いて念仏の一門を立てたり譬えば心かしこくして身は卑しき者が身を上
げて心はかなきものを敬いて賢人をうしなふがごとし、 禪宗と申すは一代
しようきよう
聖教の外に真実の法有りと云云譬えばをやを殺して子を用い主を殺せる
しようきよう
所従のしかも其の位につけるがごとし、 真言宗と申すは一向に大妄語に
しようきよう
て候が深く其の根源をかくして候へば浅機の人あらはしがたし一向に誑惑
せられて数年を経て候先ず天竺に真言宗と申す宗なし然れども有りと云
云、其の証拠を尋ぬ可きなり所詮大日経ここにわたれり法華経に引き向け
そ しょうれつ ところ だいにちきよう ほけきよう
て其の勝劣を見候処に大日経は法華経より七重下劣の経なり証拠彼の経
ふんみよう
・此の経に分明なり此に之を引かずしかるを・或は云く法華経に三重の主君
ある しょうくん こと これ かもつ ほか びやつけん いた ほけきよう しょうくん
・或は二重の主君なりと云云以ての外の大僻見なり、 譬えば劉聡が下劣の
身として愍帝に馬の口をとらせ超高が民の身として横に帝位につきしがご
てんじく だいまんばらもん しゃくそん よこしま
とし又彼の天竺の大慢婆羅門が釈尊を床として坐せしがごとし漢土にも知

る人なく日本にほんにもあやしめずして・すでに四百余年をおくれり。

是かくくの如ごとく仏法の邪正乱れしかば王法も漸ようやく尽きぬ結句けつこは此の国・他国たこく

にやぶられて亡国ぼうこくとなるべきなり、此の事曰蓮独り勘かんえ知れる故に仏法の

ため王法のため諸経しよきようの要文を集めて一卷の書を作る仍よつて故最明寺入道

殿に奉る立正安国論と名けき、其の書そにくはしく申もうしたれども愚人は知り

難がたし、所詮現証を引いて申すべし抑人王八十二代隱岐の法王と申す王

有おわしましき去ぬる承久三年太歳辛巳五月十五日伊賀太郎判官光末を打捕まし

ます鎌倉の義時をうち給はむとの門出なり、やがて五畿・七道の兵を

召して相州鎌倉の権の太夫義時を打ち給はんとし給うところに還りて義時

にまけ給たまいぬ、結句我が身は隱岐の国にながされ太子二人は佐渡の国・阿

波の国にながされ給う公卿七人は忽に頸をはねられてき、これは・いかに

としてまけ給たまいけるぞ国王の身として民の如くなる義時を打ち給はんは鷹たか

の雉^{きじ}をとり猫の鼠^{ねずみ}を食^はむにてこそあるべけれこれは猫のねずみにくらはれ
鷹^{たか}の雉^{きじ}にとられたるやうなり、しかのみならず調^{じょうぶく}伏^{ふく}力を尽せり所謂天台の
座主・慈円僧正・真言の長者・仁和寺の御室・園城寺の長吏・総じて
七大寺・十五大寺・智慧戒行は日月の如く、秘法は弘法・慈覚等の三大師
の心中の深密の大法・十五壇の秘法なり、五月十九日より六月の十四日に
いたるまであせをながしなづきをくだきて行いき最後には御室・紫宸殿に
して日本国にわたりていまだ三度までも行はぬ大法・六月八日始めて之を
行う程に・同じき十四日に関東の兵軍・宇治勢多をおしわたして洛陽に打
ち入りて三院を生け取り奉りて九重に火を放ちて一時に焼失す、三院をば
三国へ流罪し奉りぬ又公卿七人は忽に頸をきる、しかのみならず御室の御
所に押し入りて最愛の弟子の小児勢多伽と申せしをせめいだして終に頸を
きりにき御室思いに堪えずして死に給い畢んぬ母も死す童も死す、すべて

此のいのりをたのみし人いく千万せんまんといふ事をしらず死にきたまたまいきたるもかひなし、御室おむろ祈りを始めたまひ給いし六月八日より同じき十四日までなかをかぞふれば七日に満じける日なり、此の十五壇の法と申もうすは一字金輪・四天王・不動大威徳・転法輪・如意輪・愛染王・仏眼六字・金剛童子・尊星王・太元守護経等の大法なり此の法の詮は国敵王敵となる者を降伏こうふくして命を召し取りて其その魂を密厳浄土へつかはすと云う法なり、其その行者ぎやうじやの人人も又輕からず天台の座主・慈円東寺御室三井の常住院の僧正等の四十一人並びに伴僧等三百余人なり云云、法と云ひ行者ぎやうじやと云ひ又代も上代なりいかにとしてまけ給たまひいけるぞたとひかつ事こそなくとも即時そくじにまけおはりて・かかるはぢにあひたりける事、いかなるゆへといふ事を余人いまだしらず、国主こくしゅとして民を討たん事・鷹たかの鳥をとらんがごとし・たとひまけ給たまうとも一年・二年十年二十年もささうべきぞかし五月十五日におこりて

六月十四日にまけ給いぬわづかに三十余日なり、権の大夫殿は此の事を兼て
しらねば祈きとう☆もなしかまへもなし。

然しかるににちれん而日蓮小智を以て勘もつえたるに其の故あり所謂彼の真言の邪法の故なり

僻事ひがごとは一人なれども万国のわづらひなり一人として行ずとも一国・二国や

ぶれぬべし況いわんやや三百余人をや国主とともに法華經の大怨敵となりぬいかで

かほろびざらん、かかる大悪法だいあくほうとしをへてやうやく関東におち下りて諸堂しよ

の別当供僧べつどうとなり連連と行えり本より辺域へんいきの武士なれば教法きようほうの邪正じやせいをば知

らずただ三宝さんぼうをばあがむべき事とばかり思ふゆへに自然じねんとしてこれを用い

きたりてやうやく年数を経る程に今他国たこくのせめをかうふりて此の国すでに

ほろびなんとす、関東八箇国かんとくのみならず叡山えいざん・東寺とうじ・園城おんじょう・七寺等の座主ざす

・別当べつどう・皆関東の御はからひとなりぬるゆへに隱岐おきの法皇のごとく大悪法だいあくほう

の檀那だんなと成定まり給いぬるなり、国主となる事は大小皆・梵王ぼんのう・帝釈たいしゃく・

にちがつ 日月・四天の御計いなり、法華經の怨敵となり定まり給はば忽に治罰すべ

きよしを誓い給へり、随つて人王八十一代安徳天皇に太政入道の一門与力

して兵衛佐頼朝を調伏せんがために、叡山を氏寺と定め山王を氏神とた

のみしかども安徳は西海に沈み明雲は義仲に殺さる一門・皆一時にほろび

おわ 畢んぬ、第二度なり今度は第三度にあたるなり。

にちれん 日蓮がいさめを御用いなくて真言の惡法を以て大蒙古を調伏せられ

日本国還つて調伏せられなむ還著於本人と説けりと申すなり、然らば則ち

罰を以て利生を思うに法華經にすぎたる仏になる大道はなかるべきなり

げんせ 現世の祈☆は兵衛佐殿・法華經を讀誦する現証なり。

此の道理を存ぜる事は父母と師匠との御恩なれば父母は・すでに過去し

給い畢んぬ、故道善御房は師匠にて・おはしまししかども法華經の故に地頭

におそれ給いて心中には不便とおぼしつらめども外にはかたきのやうに

くみ給^{たま}いぬ、後にはすこし信じ給^{たま}いたるやうにきこへしかども臨終^{りんじゅう}にはいかにやおはしけむおぼつかなし地獄^{じごく}まではよもおはせじ又生死^{しいうじ}をはなる事はあるべしとおおぼへず中有^{ちゅうう}にやただよひましますらむとなげかし、貴辺^{きへん}は地頭^{じとう}のいかりし時・義城房^{ぎじょうぼう}とともに清澄寺^{きよすみでら}を出^いでておはせし人なれば何となくともこれを法華經^{ほけきやう}の御奉公^{ごほうこう}とおぼしめして生死^{しいうじ}をはなれさせ給^{たま}うべし。

此^この御本尊^{ごほんぞん}は世尊^{せそん}説きおかせ給^{たま}いて後二千二百三十余年^{えんぶだい}が間・一閻浮提^{えんぶだい}の内にいまだひろめたる人候^{かんど}はず、漢土^{かんど}の天台日本^{てんだいにほん}の伝教^{でんぎやう}ほほしろしめていささかひろめさせ給^{たま}はず当時^{とうじ}こそひろまらせ給^{たま}うべき時にあたりて候へ経^{じやうぎやう}には上行^{むへんぎやう}・無辺行^{むへんぎやう}等こそ出^いでてひろめさせ給^{たま}うべしと見^みへて候へもいまだ見^みへさせ給^{たま}はず、日蓮^{にちれん}は其^その人に候^{まう}はねどもほほこころえて候^{きやうめつこ}へば地涌^{じゆ}の菩薩^{ぼさつ}の出^いでさせ給^{たま}うまでの口^{くち}ずさみにあらあら申^{もう}して況滅度^{きやうめつど}後の

ほこさきに当り候なり、願わくは此の功德を以て父母と師匠と一切衆生に
回向し奉らんと祈請仕り候、其の旨をしらせまいらせむがために御不審を
書きおくりまいらせ候に他事をすてて此の御本尊の御前にして一向に後世
をもいのらせ給い候へ、又これより申さんと存じ候、いかにも御房たちは
からい申させ給へ。

日蓮 花押

◆五一

諸宗問答抄

建長七年 三十四歳御作与三位房日行 375P

問うて云く抑法華宗の法門は天台・妙楽・伝教等の御釈をば御用い

候や如何、答て云く最も此の御釈共を明鏡の助証として立て申す法門にて

候、問て云く何を明鏡として立てられ候ぞや彼の御釈共には爾前権教を

簡び捨てらる事候はず、随つて初後仏慧・円頓・或は・義斉とも・或は

此妙彼妙・妙義殊なること無しとも釈せられて華嚴と法華との仏慧同じ
と見えて候何を以て偏に法華勝れたりとは仰せられ候や意得ず候如何、答
て云く天台の御釈を引かれ候は定て天台宗にて御坐候らん、然るに天台の
御釈には教道・証道とて二筋を以て六十巻を造られて候、教道は即教相の
法門にて候証道は即内証の悟の方にて候、只今引れ候釈の文共は教証の
二道の中には何れの文と御得意候て引かれ候ぞや、若し教門の御釈にて候
わば教相には三種の教相を立て爾前・法華を釈して勝劣を判ぜられ候、
先づ三種の教相と申すは何にて候ぞやと之を尋ぬ可し、若し三種の教相
と申すは一には根性の融不融の相・二には化導の始終不始終の相・三には
師弟の遠近不遠近の相なりと答へばさては只今引かれ候・御釈は何れの
教相の下にて引かれ候やと尋ぬ可きなり、若し根性の融不融の下にて釈せ

らると答へば又押し返して問う可し根性の融不融の下には約教・約部とて二の法門あり何れぞと尋ぬ可し、若し約教の下と答へば又問う可し約教

・約部に付いて与奪の二の釈候只今の釈は与の釈なるか奪の釈なるかと

これたずべもやつきよう之を尋ね可し、若し約教・約部をも与奪をも弁えずと云わばさては

てんだいしゅうほうもんけんごぶさた天台宗の法門は堅固に無沙汰にて候けり、尤も天台法華の法門は教相を

もつしよぶつごほんいもきようそうくらほつけほうもん以て諸仏の御本意を宣られたり若し教相に闇くして法華の法門を云ん者は

すいさんほけきようげんしほつけ雖讚法華経還死法華心とて法華の心を殺すと云う事にて候、其の上「若し

よきようひろきようそうあき余経を弘むるに教相を明らかにせざるも義に於て傷ること無し若し法華を弘む

るに教相を明さざれば文義闕くること有り」と釈せられて殊更教相を本

として天台の法門は建立せられ候、仰せられ候如く次第も無く偏円をも

簡ばず邪正も選ばず法門申さん者をば信受せざれと天台堅く誠しめられ候

なり、是程に知食さず候けるに中々天台の御釈を引かれ候事浅☆・き御事

なりと責む可きなり、但し天台の教相を三種に立てらるる中に根性の

ゆうふゆう

融不融の相の下にて相待妙・絶待妙とて二妙を立て候、相待妙の下にて

やつきよう

又約教・約部の法門を釈して仏教の勝劣を判ぜられて候、約教の時は

いちだい

一代の教を蔵通・別円の四教に分つて之に付いて勝劣を判ずる時は前三

いそごいちのみよう

為☆後・一為妙とは判ぜられて蔵通別の三教をば☆教と嫌ひ後の一教をば

みようほう

妙法と選取せられ候へども此の時もなほ爾前権教の当分の得道を許し

しばらけこん

且く華嚴等の仏慧と法華の仏慧とを等から令めて只今の初後仏慧・円頓・

ぎさい

義齊等の与の釈を作られ候なり、然りと雖も約部の時は一代の教を五時に

わか

分つて五味に配し華嚴部・阿含部・方等部・般若部・法華部と立てられ

ぜんしみいそごいちのみよう

前四味為☆後・一為妙と判じて奪の釈を作られ候なり、然れば奪の釈に云く

「細人☆人・二俱犯過・從過辺説俱名☆人」と、此釈の意は華嚴部にも別円

さいにんそにんにくはんか

二教を説かれて候へば円の方は仏慧と云わるるなり、方等部にも蔵通・別円

の四教しきようを説しれたれば円えんの方は又また仏慧ぶつてなり般若部はんによぶにも通別つうべつえん円えんの後三教ごさんを説しいて候さうへば其それも円えんの方は仏慧ぶつてなり、然しかりと雖いえども華嚴けこんは別教べつきようと申もうすえせ物ものをつれて説しれたる間まわるき物ものつれたる仏慧ぶつてなりとて簡きんわるるなり方等部ほうとうぶの円えんぜんさんきようも前三教ぜんさんきようのえせ物ものをつれたる仏慧ぶつてなり般若部はんによぶの円えんも前二にそ☆のえせ物ものをつれたる仏慧ぶつてなり、然しかる間ま仏慧ぶつての名なは同おなじと雖いえども過えの辺へに従したがつて☆・と云いわれてわるき円教えんきようの仏慧ぶつてと下くだされ候さうなり、之これに依よつてて四教しきようにても真実しんじつの勝劣しょうれつを判はんずる時ときは一往いちおうは三藏さんざうを名なて小乗なと為なし再往さいおうは三教さんきようを名なて小乗なと為なすと釈しやくして一往いちおうの時ときは二百五十戒等あこんさんざうの阿含三藏教ほうもんの法門ほうもんを総しやうじようじて小乗しやうじようの法ほうと簡きんい捨すててらるれども、再往さいおうの釈しやくの時ときは三藏教さんざうと大乘だいじようと云いいつる通教つうきようと別教べつきようとの三教さんきよう皆みな小乗しんしやくの法ほうと本朝ほんちようの智証大師ちしやうだいしも法華論ほうっけろんの記きと申もうす文ぶんを作つくつて判釈はんしやくせられて候さうなり。

次に絶待妙ぜったいみようと申もうすは開會かいえの法門ほうもんにて候さうなり、此この時ときは爾前にぜんこんきよう權教ごんきようとて嫌きら

ひ捨らるる所の教を皆法華の大海におさめ入るるなり、随つて法華の大海
に入りぬれば爾前の権教とて嫌わるる者無きなり、皆法華の大海の
ふかしぎなむみょうほうれんげきよう
不可思議の徳として南無妙法蓮華經と云う一味にたたきなしつる間・念仏
・戒・真言・禪とて別の名言を呼び出す可き道理無きなり、随つて釈に
云く「諸水入海・同一鹹味・諸智入如実智・失本名字」等と釈して本の名字
を一言も呼び顯す可らずと釈せられて候なり、世間の人天台宗は開会の後
は相待妙の時斥い捨てられし所の前四味の諸經の名言を唱うるも又諸仏
・諸菩薩の名言を唱うるも皆是法華の妙体にて有るなり大海に入らざる
程こそ各別の思なりけれ大海に入つて後に見れば日來よしわるしと嫌ひ用
ひけるは大僻見にて有りけり、嫌はるる諸流も用ひらるる冷水も源はた
だ大海より出でたる一水にて有りけり、然れば何の水と呼びたりとてもた
だ大海の一水に於て別別の名言をよびたるにてこそあれ、各別各別の物と

思おもうてよよぶにこそとが科とがはあれただたいかい只ただ大海たいかいの一いち水みづと思おもうて何いずれれをも心こころに任まかせて有うえん縁えん
に從したがつて唱となえ持もつに苦くるしかる可べからずとて念ねん仏ぶつをも真しん言ごんをも何いずれれをも心こころに
任まかせて持もち唱となうるなり。

今云いまう此この義ぎは与あえて云いう時ときはさも有ある可べきかと覺さとれども奪さつつて云いう時とき
は随ずい分ぶん墮だ地じ獄ごくの義ぎにて有あるなり、其そのの故ゆえは縦たひ一人ひと此この如ごとく意こころ得う何いずれれを
も持もち唱もるとても万人ばんにん・此この心こころ根ねを得えざる時ときは只ただ例れいの偏へん見けん・偏へん情じやうにて持もち
唱なえれば一人ひとり成じやう仏ぶつするとも万人ばんにんは皆みな地じ獄ごくに墮だす可べき邪じや見けんの惡あく義ぎなり、爾に前ぜん
に立たてる所ところの法ほう門もんの名な言ごんと其そのの法ほう門もんの内うちに談だんずる所ところの道どう理りの所しよ詮せんとは皆みな是こ
・偏へん見けん・偏へん情じやうによりて入じやけん邪けん見けん稠ちゆう林りん・若にや有く若にや無む等とうの權ごん教きやうなり、然しかれば此こ等ら
の名な言ごんを以もつて持もち唱なへ此こ等らの所しよ詮せんの理りを觀くわんずれば偏へんに心こころ得えたるも心こころ得えざる
も皆みな大だい地じ獄ごくに墮おつべし、心こころ得えたりとて唱なへ持もちたらん者ものは牛ぎゆう蹄ていに大たい海かいを
納おさめたる者ものの如ごとく是じ僻びや見けんの者ものなり、何なんぞ三さん惡あく道どうを免めんがれん又また心こころ得えざる者ものの

唱へ持たんは本迷惑めいわくの者なれば邪見じゃけん權教こんきょうの執心しゅうしんによつて無間むげん・大城だいじょうに入らん事うたがい疑うたがいい無き者なり、開会かいえの後も☆教そきょうとて嫌きらい捨てし惡法あくほうをば名言みょうごんをそも其しよせんの所詮ごくりの極理ごくりをも唱へ持つて交ゆべからずと見えて候弘決くけつに云く「相待ぜったいとも・絶待ぜったいとも俱すべからに須じやくく惡を離るべし円じやくに著なほする尚惡いわんやまたなり況や復余いをや」云云、文じやくの心は相待ぜったいみょう妙めうの時も絶待ぜったいみょう妙めうの時も俱ともに須すべからく惡法あくほうをば離るべし円じやくに著なほする尚惡いわんやまたし況や復余いの法をやと云う文なり、円まんぞくと云うは満足まんぞくの義なり余と云うは闕減けつげんの義なり、円教えんきょうの十界じゅうかい平等びやうどうに成仏じやうぶつする法をすら著じやくしたる方きらを惡ぞと嫌いふ、況や復十界い平等じやうぶつに成仏あくほうせざるの惡法かけの闕もつたるを以て執しゅうじやく著しよせんをなして朝夕ちやうせき・受持じゆじ・読誦どくじゆ・解説げせつ・書写しよしゃせんをや、設たとひ爾前にぜんの円えんをほつけ今けいの法華かいえに開會かいえし入るるとも爾前にぜんの円えんは法華ほつけの一味いちみとなる事こと無し、法華ほつけの体内たいえいに開會かいえし入れられても体内たいえいの權えんと云われて実じつとは云わざるなり、体内たいえいの權えんを体外たいがいに取出しして且しかばらおいちぶつじようぶんべつ於お一い仏ふつ乘じやう分ぶん別べつ說せつ三さんする時とき・權えんに於おて円えんの名なを付

て三乗さんじょうの中の円教えんきょうと云いわれたるなり、之これに依よりて古いにしえへも金杖こんじょうの譬たとえを
もつさんじょう
以て三乗さんじょうにあてて沙汰さたする事あり、譬たとへば金の杖さへを三に打うをりて一つつ
さんじょう きこん
三乗さんじょうの機根きこんに与あへて何いづれれも皆みな金なり然しかれば何なんぞ同じ金おに於おいて差別さべつの思おもをな
しょうれつ
して勝劣しょうれつを判はぜんやと談合だんごうしたり、此こはうち聞きこく所ところはさもやと覺おぼえたれ
ども悪あくく学者がくしゃの得心ごころえたるなり、今云いまいう此この義ぎは譬たとへば法華ほつけの体内たいの権くわんの
こんじょう
金杖こんじょうを仏ぶつ・三根さんこんにあてて体外たいげに三度さんどうちふり給たまへる其その影かげを機根きこんが見み付つず
みなしんじつ
して皆真実みなしんじつの思おもを成なして己おのが見みに任まかせたるなり、其その真実しんじつには金杖こんじょうを打折うちおり
て三になしたる事が有あらばこそ今たとえの譬たとへば合譬がっぴとはならめ、仏ぶつは権くわんの金杖こんじょう
を折しらずして三度さんどふり給たまへるを機根きこんありて三に成なりたりと執しゅうじやく著しし得心ごころえた
る返へんす返へんす不得心ふじこころえの大邪見じゃけんなり大邪見じゃけんなり、三度振ふりたるも法華ほつけの体内たいの
くどく たいげ
権くわんの功德くどくを体外たいげの三根さんこんに配はいして三度振ふりたるにてこそ有あれれ、全みく妙体みょうたい
ふしぎ えんじつ
不思議ふしぎの円実えんじつを振ふりたる事無ことなきなり、然しかれば体外たいげの影かげの三乗さんじょうを体内たいの本ほんの

権の本体へ開会かいえし入るれば本の体内の権と云われて全く体内の円とは成ら

ざるなり、此の心を以て体内たいげ体外ごんじつの権実ほうもんの法門こころえわきまをば得意弁ふべき者なり。

次にぜんしゅう禪宗ほうもんの法門あるは・或はきょうげ教外別伝ふりゅうもんじ・不立文字と云ひ・或はある仏祖不伝ぶつそふでんと云

ひ修多羅しゅたらかの教は月をさす指ことの如しとも云ひ・或はある即身成仏そくしんじょうぶつとも云つて文字もんじ

をも立てずぶつそ仏祖よにも依らずきょうほう教法しゅうがくをも修しゅう学がくせずしんよう画像・木像をも信用せずと

云うなり、反詰はんきつして云くいわ仏祖不伝ぶつそふでんにて候はば何ぞなん月氏がっしの二十八祖とうど東土の六

祖そうでんとて相伝そうでんせられ候や、其の上そ・迦葉尊者かしようそんじやは何ぞなん一枝の花房はなふさを釈尊しゃくそんより授

けられ微笑びしょうして心の一法りょうぜんを靈山りやうぜんにして伝えたりとは自称しやうするや、又そし祖師

無用むようならば何ぞなん達磨大師だるまだいしを本尊ほんぞんとするや、又修多羅しゅたらかの法無用むようならば何ぞなん

朝夕ちようせきの所作しよさに真言陀羅尼しんこんだらにをよみつるぞや、首楞嚴經しゅりやうごんきやう・金剛經こんこう・円覺經えんかく等

を・或はある談だんし・或はある読誦どくじゆするや、又ほさつ仏・菩薩しんようを信用しんようせずなんば何ぞなん南無三寶なむさんぼう

と行住坐臥ぎやうじゆうざがに唱となうるやと責せむ可べきなり、次に聞きき知らざる言もつを以て種しゅ種じゆ申もうし

狂はば云う可し、凡そ機には上中下の三根あり随つて法門も三根に与へて
説事なり、禪宗の法門にも理致・機関・向上として三根に配て法門を示
され候なり、御辺は某が機をば三根の中には何れと得意で聞知せざる法門
を仰せられ候ぞや、又理致の分か機関の分か向上の分に候かと責む可きな
り、理致と云うは下根に道理を云いきかせて禪の法門を知らする名目なり、
機関とは中根には何なるか本来の面目と問へば庭前の柏樹子など答えた
る様の言づかひをして禅法を示す様なり、向上と云うは上根の者の事な
り此の機は祖師よりも伝えず仏よりも伝えず我として禪の法門を悟る機な
り、迦葉靈山微笑の花に依て心の一法を得たりと云う時には是れ尚中根の機
なり、所詮禪の法門と云う事は迦葉一枝の花房を得しより已来出来せる
法門なり、抑も伝えし時の花房は木の花か草の花か五色の中には何様な
る色の花ぞや又花の葉は何重の葉ぞや委細に之を尋ぬ可きなり、此の花を

ありのままに云い出したる禪宗有らば実に心の一法をも一分得たる者と知る可きなり、設ひ得たりとは存知すとも真実の仏意には叶う可からず如何となれば法華經を信ぜざるが故なり、此の心は法華經の方便品の末長行に委く見えたり委は引て拝見し奉る可きなり、次に禪の法門何としても物に著する所を離れよと教えたる法門にて有るなり、さと云へば其れも情なりかうと云うも其れも情なりとあなた・こなたへ・すべりとどまらぬ法門にて候なり、夫れを責む可き様は他人の情に著したらん計りをば沙汰して己が情量に著し封ぜらる所をば知らざるなり、云うべき様は御辺は人の情計りをば責むれども御辺情を情と執したる情をばなど離れ得ぬぞと反詰すべきなり、凡そ法として三世諸仏の説きのこしたる法は無きなり汝仏祖不伝と云つて仏祖よりも伝えずとなのらばさては禪法は天魔の伝うる所の法門なり如何、然る間汝断常の二見を出でず無間地獄に墮せん事疑

無しと云つて何度もかれが云う言にてややもすれば己がつまる語なり、されども非学匠は理につまらずと云つて他人の道理をも自身の道理をも聞き知らざる間暗証の者とは云うなり、都て理におれざるなり譬えば行く水にかずかくが如し。

次に即身即仏とは即身即仏なる道理を立てよと責む可し其の道理を立てずして無理に唯即身即仏と云わば例の天魔の義なりと責む可し但即身即仏と云う名目を聞くに天台法華宗の即身成仏の名目つかひを盗み取てぜんしゅう禅宗の家につかふと覚えたり、然れば法華に立つる様なる即身即仏なるか如何とせめよ、若し其の義無く押して名目をつかはばつかはるる語は無障礙しょうげの法なり譬えば民の身として国王と名乗ん者の如くなり如何に国王と云うとも言には障り無し己が舌の和かなるままに云うとも其の身は即土民の卑いやしく嫌きらわれたる身なり、又瓦礫を玉と云う者の如し石瓦を玉と云いた

りとも會かつて石は玉にならず、汝なんじが云う所の即身即仏の名目も此かくの如ごとく
有ゆう名無実めいむじつなり不便ふびんなり不便ふびんなり。

次に不立文字ふりゆうもんじと云う所詮文字しよせんもんじと云う事は何なるものと得心こころえ此くの如ごとく立

てられ候や、文字もんじは是一切衆生の心法の顯あらわれたる質すがたなりされば人のかける

物を以もつて其の人の心根を知もつつて相そうする事あり、凡およそ心と色法とは不二の法

にて有ある間かきたる物を以もつて其の人の貧福ひんぶくをも相そうするなり、然しかれば文字もんじは

是一切衆生の色心不二いっさいししゅじょうの質すがたなり汝若なんじもし文字もんじを立てざれば汝なんじが色心しきしんをも立

つ可べからず汝六根なんじろくこんを離はなれて禪ぜんの法門ほうもん一句答いっくへよと責せむ可べきなり、さてと云

うもかうと云うも有と無との二見をば離はなれず無と云わば無の見なりとせめ

よと有と云わば有の見なりとせめよ、何いずれれも何いずれれも叶かなわざる事なり。

次に修多羅しゆたらの教は月をさす指こての如しと云うは月を見て後は徒いたずら者ものと云う

義よしなるか若もし其義にて候わば御辺の親も徒者と云う義か又師匠ししやうは弟子でしの爲ために

徒者か又大地は徒者か又天は徒者か、如何となれば父母は御辺を出生するまでの用にてこそあれ御辺を出生して後はなにかせん、人の師は物を習い取るまでこそ用なれ習い取つて後は無用なり、夫れ天は雨露を下すまでこそあれ雨ふりて後は天無用なり大地は草木を出生せんが為なり草木を出生して後は大地無用なりと云わん者の如し、是を世俗の者の譬に喉過ぬればあつさわすれ病愈えぬれば医師をわすると云うらん譬に少も違わず相似たり、所詮修多羅と云うも文字なり文字は是れ三世諸仏の氣命なりと天台釈し給へり、天台は震旦・禪宗の祖師の中に入れたり、何ぞ祖師の言を嫌はん其の上・御辺の色心なり凡そ一切衆生の三世不斷の色心なり、何ぞ汝本来の面目を捨て不立文字と云うや、是れ昔し移宅しけるに我が妻を忘れたる者の如し、真実の禪法をば何としてか知るべき哀なる禪の法門かなと責む可し。

次に華嚴・法相・三論・俱舍・成実・律宗等の六宗の法門いかに花を
さかせても申しやすく返事すべき方は能能いはせて後・南都の帰伏状を唯
読みきかす可きなり、既に六宗の祖師が帰伏の状をかきて桓武天皇に奏し
奉る、仍て彼帰伏状を山門に納められぬ其外内裏にも記せられたり諸道の
家家にも記し留めて今にあり、其より已来・華嚴宗等の六宗の法門・末法
の今に至るまで一度も頭をさし出さず何ぞ唯今・事新しく捨られたる所の
権教・無得道の法にをいて真実の思をなし此くの如く仰せられ候ぞや心得
られずとせむべし。

次に真言宗の法門は先ず真言三部經は大日如來の説か釈迦如來の説かと
尋ね定めて釈迦の説と言はば釈尊・五十年の説教にをいて已今当の三説
を分別せられたり、其の中に大日經等の三部は何れの分にをさまり候ぞと
之を尋ぬ可し、三説の中にはいづくにこそおさまりたりと云はば例の法門

にてたやすかるべき問答なり、若法華と同時に説なり義理も法華と同じと云はば法華は是純円一実の教にて會て方便を交へて説く事なし、大日經等は四教を含有したる經なり何ぞ時も同じ義理も同じと云わんや謬りなりとせめよ、次に大日如来の説法と云はば大日如来の父母と生ぜし所と死せし所を委く沙汰し問うべし、一句一偈も大日の父母なし説所なし生死の所なし有名無実の大日如来なり然る間殊に法門せめやすかるべきなり若法門の所詮の理を云はば教主の有無を定めて説教の得不得をば極む可き事なり、設ひ至極の理密・事密を沙汰すとも訳者に虚妄有り法華の極理を盗み取て事密真言とか立てられてあるやらん不審なり、之に依りて法の所談は教主の有無に随て沙汰有る可きなりと責む可きなり、次に大日如来は法身と云はば法華よりは未顕真実と嫌い捨てられたる爾前權教にも法身如来と説たり何ぞ不思議なるべきやと云う可きなり、若無始無終の由を云て・い

みじき由よしを立て申もうさは必大日如来だいにちにやらいに限らず我等われら・一切衆生いっさいしゅじょう・螻蟻ろうぎもん☆☆等に
いた
至るまでみな無始無終むしむしゅうの色心しきしんなり、衆生しゅじょうに於て有始有終うしゅうしゅうと思ふは外道げどうの
びやつけん
僻見へきけんなり 汝外道なんじげどうに同ず如何いかんと云う可きなり。

次に念仏ねんぶつは是浄土宗じょうとしゅう所用しよくようの義なり、此れ又權教ごんきょうの中の權教ごんきょうなり譬たとえば

夢の中の夢ごこの如ごとし有名無実ゆうめいむじつにして其その実無きなり一切衆生いっさいしゅじょう願て所詮しよせんなし、

然しかれば云う所の仏うも有為無常うゐむじょうの阿弥陀仏あみだぶつなり何ぞ常住なん不滅じようじゅうふめつの道理どうりにしか

んや、されば本朝ほんちようの根本大師こんぽんだいしの御釈いわに云く「有為うゐの報ほう仏ぶつは夢中の權果無作ごんかむさ

の三身さんじんは覺前かくぜんの実じつ仏ぶつ」と釈しゃくして阿弥陀あみだ等ぶつの有為無常うゐむじょうの仏ぶつをば大おおにいまし

め捨てをかれ候すでなり、既に憑たのむ所の阿弥陀あみだ有ぶつ名無実うゐめいむじつにして名のみ有つて

其その体たいなからんには往生おうじようす可べき道理どうりをば委くわく須弥山しゆみせんの如ごとく高く立て大海たいかいの

如ごとくに深く云とも何いずれの所詮しよせん有るべきや又經論きやうろんに正めいき明文ぶんども有と云はば

明文めいぶんありとも未顕真実みけんしんじつの文ぶんなり、浄土じようどの三部經さんぶきやうに限らず華嚴經けこんきやう等より初て

いすれ
何の經・教・論釈にか成仏の明文無らんや、然れども權教の明文なる時
なんじ
は汝等が所執の拙きにてこそあれ經論に無き僻事なり、何れも法門の
どうり
道理を宣べ蔽り依經を立てたりとも夢中の權果にて無用の義に成る可きな
り返す返す。

◆五二 一生成仏抄

けんちよう

建長七年 三十四歳御作

ときじやうにん

与富木常忍

383P

そ
夫れ無始の生死を留めて此の度決定して無上菩提を証せんと思はばすべ
しゅじようほんぬ
からく衆生本有の妙理を觀ずべし、衆生本有の妙理とは妙法蓮華經是な
ゆえ
り故に妙法蓮華經と唱へたてまつれば衆生本有の妙理を觀ずるにてある
ぶんり
なり、文理真正の經王なれば文字即実相なり実相即妙法なり唯所詮一心
ほっかい
法界の旨を説き顯すを妙法と名く故に此の經を諸仏の智慧とは云うなり、
いっしんほっかい
一心法界の旨とは十界三千の依正色心非情草木虚空刹土いづれも除かずち

りも残らず一念の心に収めて此の一念の心法界に☆満するを指して万法と
は云うなり、此の理を覚知するを一心法界とも云うなるべし、但し
妙法蓮華經と唱へ持つと云うとも若し己心の外に法ありと思はば全く
妙法にあらず☆法なり、☆法は今經にあらず今經にあらざれば方便なり
権門なり、方便権門の教ならば成仏の直道にあらず成仏の直道にあらざ
れば多生曠劫の修行を経て成仏すべきにあらざる故に一生成仏叶いがた
し、故に妙法と唱へ蓮華と読まん時は我が一念を指して妙法蓮華經と
名くるぞと深く信心を發すべきなり。

都て一代八万の聖教三世十方の諸仏・菩薩も我が心の外に有りとほゆ
めゆめ思ふべからず、然れば仏教を習ふといへども心性を觀ぜざれば全く
生死を離るる事なきなり、若し心外に道を求めて万行万善を修せんは譬え
ば貧窮の人日夜に隣の財を計へたれども半銭の得分もなきが如し、然れば

てんだい 天台の釈しゃくの中には若もし心を觀かんぜざれば重罪滅じゅうばいせずとて若もし心を觀かんぜざれば
むりよう 無量の苦行くぎようとなると判はんぜり、故ゆえにかくの如ごときの人をば仏法ぶつぽうを學がくして外道げどうと
なると恥はじしめられたり、爰ここを以もつて止觀しがんには雖すい學がく・還げん同どう外見げけんと釈しゃくせり、
しか 然しかる間・仏の名を唱なへ經卷きょうかんをよみ華をちらし香をひねるまでも皆みな我が一念いちねん
おき に納おさめたる功德善根くどくぜんこんなりと信心しんじんを取るべきなり、之よに依よつて淨名經じやうみやうきやうの中
には諸しよ仏ぶつの解脫げだつを衆生しじやうの心行しんぎやうに求めば衆生しじやう即菩提しじやうそくぼだいなり生死しやうじそく即涅槃ねはんなりと
あか 明あかせり、又衆生しじやうの心けがるれば土もけがれ心清ければ土も清しとて淨土じやうど
えど 云えどひ穢土えいどと云うも土に二の隔へだたりなし只我等ただわれらが心の善惡ぜんあくによると見えたり、
しじやう 衆生しじやうと云うも仏と云うも亦また此こくの如ごとし迷まよう時は衆生しじやうと名け悟る時をば仏
たと と名けたり、譬たとえば閻鏡えんきやうも磨ときぬれば玉と見ゆるが如ごとし、只ただ今いまも一念無明いちねんむみやう
まよひ の迷心まよひは磨かざる鏡なり是これを磨かば必ず法性真如ほうしやうしんによの明鏡めいきやうと成るべし、深
しんじん く信心しんじんを發おこして日夜朝暮ちやうぼに又懈おこたらず磨くべし何様いかやうにしてか磨くべき只南無ただなむ

妙法蓮華經と唱へたてまつるを是をみかくとは云うなり。

そもそも

抑妙とは何と云う心ぞや只我が一念の心不思議なる処を妙とは云うな

り不思議とは心も及ばず語も及ばずと云う事なり、然ればすなはち起ると

ころの一念の心を尋ね見れば有りと云はんとすれば色も質もなし又無しと

云はんとすれば様様に心起る有と思ふべきに非ず無と思ふべきにも非ず、

有無の二の語も及ばず有無の二の心も及ばず有無に非ずして而も有無に☆

して中道一実の妙体にして不思議なるを妙とは名くるなり、此の妙なる

心を名けて法とも云うなり、此の法門の不思議をあらはすに譬を事法にか

たどりて蓮華と名く、一心を妙と知りぬれば亦転じて余心をも妙法と知る

処を妙経とは云うなり、然ればすなはち善悪に付いて起り起る処の念

心の当体を指して是れ妙法の体と説き宣べたる経王なれば成仏の直道と

は云うなり、此の旨を深く信じて妙法蓮華經と唱へば一生成仏更に疑

あるべからず、故に經文には「我が滅度の後に於て・応に斯の經を受持す
べし是の人・仏道に於て決定して疑有る事無けん」とのべたり、
不審をなすべからず 六賢六賢、一生成仏の信心南無妙法蓮華經
・南無妙法蓮華經。

日蓮 花押

◆五三 主師親御書

建長七年 三十四歳御作 385P

釈迦仏は我等が為には主なり師なり親なり一人してすくひ護ると説き
給へり、阿弥陀仏は我等が為には主ならず親ならず師ならず、然れば
天台大師是を釈して曰く「西方は仏・別にして縁異なり仏・別なるが故に
隠顕の義成ぜず縁異なるが故に子父の義成ぜず、又此の經の首末に全く此
の旨無し眼を閉じて穿鑿せよ」と実なるかな釈迦仏は中天竺の浄飯大王
の太子として十九の御年家を出で給いて檀特山と申す山に籠らせ給ひ、高峯

に登つては妻木つまぎをとり深谷しんこくに下つては水を結び難行なんぎよう苦行くぎようして御年三十と申せしに仏ほとけにならせ給たまいて一代いちだい聖教しょうきようを説き給たまいに、上うわへには華嚴けこん・阿含あこん・ほうとうはん・般若等しゆじゆの種種きようぎようの経経きんぎんを説かせ給たまへども内心ないしんには法華經ほけきようを説かばやとおぼしめされしかども衆生しゆじようの機根きこんまちまちにして一種ならざる間・仏の御心ごしんをば説き給たまはで人の心に随したがひ万の經を説き給たまへり、此かくの如ごとく四十二年が程は心苦しく思食おほしめしかども今法華經ほけきように至いたつて我が願既すでに満足まんぞくしぬ我が如ごとくに衆生しゆじようを仏になさんと説き給たまへり、久遠くおんより已来このかた・或あるは鹿となり・或あるは熊となり・或時あるは鬼神きじんの爲に食われ給たまへり、此かくの如ごとき功德くどくをば法華經ほけきようを信じたらん衆生しゆじようは是れ真仏子しんぶつことて是実の我が子なり此の功德くどくを此の人に与へんと説き給たまへり、是れ程に思食おほしめしたる親の釈迦しゃか仏ぶつをばないがしろに思ひなして唯ゆい以いい一大事いちだいじと説き給たまへる法華經ほけきようを信ぜざらん人は争いかでか仏になるべきや能よく能よく心を留めて案ずべし。

二の巻に云く「若し人信ぜずして此の経を毀謗せば則ち一切世間の仏種

を断ず乃至余経の一偈をも受けざれ」と文の心は仏にならん為には唯法華経

を受持せん事を願つて余経の一偈・一句をも受けざれと、三の巻に云く

「飢国より来つて忽ち大王の膳に遇うが如し」と文の心は飢えたる国より

来つて忽に大王の膳にあへり心は犬野干の心を致すとも迦葉・目連等の

小乗の心をば起さざれ破れたる石は合うとも枯木に花はさくとも二乗は

仏になるべからずと仰せられしかば須菩提は茫然として手の一鉢をなげ

迦葉は涕泣の声大千界を響すと申して歎き悲みしが今法華経に至つて

迦葉尊者は光明如来の記☆を授かりしかば目連・須菩提・摩訶迦旃延等は

是を見て我等も定めて仏になるべし飢えたる国より来つて忽に大王の膳に

あへるが如しと喜びし文なり、我等衆生・無始曠劫より已来妙法蓮華経

の如意宝珠を片時も相離れざれども無明の酒にたばらかされて衣の裏にか

けたりとしらずして少きを得て足りぬと思ひぬ、南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうとだに
とな たてまつ 唱え奉りたらししかば速すみやに仏に成るべかりし衆生しゆじやうどもの五戒ごかい・十善等じゆぜんの
わずかなる戒を以て・或は天に生れて大梵天・帝釈の身と成つていみじき
事と思ひ・或時は人に生れて諸の国王・大臣・公卿・殿上人等の身と成つ
て是れ程のたのしみなしと思ひ少きを得て足りぬと思ひ悦びあへり、是を
仏は夢の中のさかへ・まぼろしのたのしみなり唯法華經を持ち奉り速に仏
になるべしと説き給へり、又四の巻に云く「而も此の經は如来の現在すら
猶怨嫉多し況や滅度の後をや」云云。
なのおんしつ いわんやめつと

釈迦仏は師子頻王の孫・淨飯王には嫡子なり十善の位をすて五天竺
第一なりし美女耶輸多羅女をふりすてて十九の御年出家して勤め行ひ給い
しかば三十の御年・成道し御坐して三十二相・八十種好の御形にて御幸
なる時は大梵天王・帝釈左右に立ち多聞・持国等の四天王・先後圍繞せ
しやかぶつ ししきやうおう じやうばん じゆうぜん てんじく
だいいち あしゆたら しゆつけ つと たまひ
だいぼんてんのう たいしやくさう たもん してんのう せんごいによ

り、法を説き給ふ御時は四弁・八音の説法は祇園精舎に満ち三智五眼の徳
は四海にしけり、然れば何れの人か仏を惡むべきなれども尚怨嫉するもの
多し、まして滅度の後・一毫の煩惱をも断ぜず少しの罪をも弁へざらん
法華經の行者を惡み嫉む者多からん事は雲霞の如くならんと見えたり、
然れば則ち末代惡世に此の經を有りのままに説く人には敵多からんと説か
れて候に世間の人人・我も持ちたり我も読み奉り行じ候に敵なきは仏の
虚言か法華經の実ならざるか、又実の御經ならば当世の人人・經をよみま
いらせ候は虚よみか実の行者にて・はなきか如何能く能く心得べき事なり
明むべき物なり、四の巻に多宝如来は釈迦牟尼仏御年三十にして仏に成り
給ふに、初には華嚴經と申す經を十方華王のみぎりにして別円頓大の法輪
・法慧・垢徳林・金剛幢・金剛藏の四菩薩に対して三七日の間説き給ひし
にも来り給はず、其の二乗の機根叶はざりしかば瓔珞細☆の衣をぬぎすて

そべいくに ☆弊垢膩の衣を著・波羅奈国・鹿野苑に趣いて十二年の間・生滅四諦の

ほうもん 法門を説き給ひしに阿若俱鄰等の五人証果し八万の諸天は無生忍を得たり、

次に欲色二界の中間大宝坊の儀式・浄名の御室には三万二千の牀を立て

般若・白鷺池の辺・十六会の儀式・染浄虚融の旨をのべ給いしにも来り

給はず、法華経にも一の巻乃至四の巻・人記品までも来り給はず宝塔品に

至つて初めて来り給へり。

釈迦仏・先四十余年の経を我と虚事と仰せられしかば人用うる事なく

法華経を真実なりと説かせ給へども仏と云うは無虚妄の人とて永く虚言し

給はずと聞きしに一日ならず二日ならず一月ならず二月ならず一年・二年

ならず四十余年の程まで虚言したり仰せられしかば又此の経を實と説き

給うも虚言にやあらんずらんと不審なししかば此の不審釈迦仏一人しては

舍利弗を始め事はれがたかりしに此の多宝仏・宝浄世界よりはるばると来

らせ給いて法華經は皆是れ真実なりと証明し給いしに先の四十余年の經を虚言と仰せらるる事實の虚言に定まるなり、又法華經より外の一切經を空に浮べて文・文・句句・阿難尊者の如く覺り富樓那の弁舌の如くに説くとも其れを難事とせず、又須弥山と申す山は十六万八千由旬の金山にて候を他方世界へつづてになぐる者ありとも難事には候はじ、仏の滅度の後・当世・末代・惡世に法華經を有りのままに能く説かんとすといふ説かたは世給へり、五天竺・第一の大力なりし提婆達多も長三丈五尺・広一丈二尺の石をこそ仏になげかけて候いしか又漢土第一の大力・楚の項羽と申せし人も九石入の釜に水満ち候いしをこそひさげ候いしか其れに是は須弥山をばなぐる者は有りともし此の經を説の如く読み奉らん人は有りがたと説かれて候に人ごとに此の經をよみ書き説き候、經文を虚言に成して当世のひとびとみなほけきやうきやうじゃひとびと人人を皆法華經の行者と思ふべきか能く能く御心得有るべき事なり、五の

卷提婆品に云く「だ い ば い わ若し善男子善女人有りて妙法華經の提婆達多品を聞いて

じょうしん

淨心に信敬して疑惑を生ぜざらん者は地獄・餓鬼・畜生に墮せずして

じゅつぽう

ぶつぜん

十方の仏前に生ぜん」と、此の品には二つの大事あり一には提婆達多と

もう

あなんそんじや

申すは阿難尊者には兄・斛飯王には嫡子・師子頰王には孫・仏にはいとこ

にて有りしが仏は一閻浮提第一の道心者にてましまししに怨をなして我は

えんぶだい だいいち

えんぶだい だいいち

えんぶだい だいいち

えんぶだい だいいち

えんぶだい だいいち

えんぶだい だいいち

えんぶだい だいいち

えんぶだい だいいち

えんぶだい だいいち

えんぶだい だいいち

えんぶだい だいいち

えんぶだい だいいち

又閻浮提第一の邪見放逸の者とならんと誓つて万の悪人を語いて仏に怨を

えんぶだい だいいち

えんぶだい だいいち

えんぶだい だいいち

えんぶだい だいいち

えんぶだい だいいち

えんぶだい だいいち

えんぶだい だいいち

なして三逆罪を作つて現身に大地破れて無間・大城に墮ちて候いしを

えんぶだい だいいち

えんぶだい だいいち

えんぶだい だいいち

えんぶだい だいいち

えんぶだい だいいち

えんぶだい だいいち

えんぶだい だいいち

天王如来と申す記☆を授けらるる品にて候、然れば善男子と申すは男此の

えんぶだい だいいち

えんぶだい だいいち

えんぶだい だいいち

えんぶだい だいいち

えんぶだい だいいち

えんぶだい だいいち

えんぶだい だいいち

經を信じまひらせて聴聞するならば提婆達多程の悪人だにも仏になる、ま

えんぶだい だいいち

えんぶだい だいいち

えんぶだい だいいち

えんぶだい だいいち

えんぶだい だいいち

えんぶだい だいいち

えんぶだい だいいち

えんぶだい だいいち

えんぶだい だいいち

して末代の人とはたとひ重罪なりとも多分は十悪をすぎずまして深く持ち

えんぶだい だいいち

えんぶだい だいいち

えんぶだい だいいち

えんぶだい だいいち

えんぶだい だいいち

えんぶだい だいいち

えんぶだい だいいち

えんぶだい だいいち

えんぶだい だいいち

えんぶだい だいいち

奉る人・仏にならざるべきや、二には娑竭羅竜王のむすめ竜女と申すは

えんぶだい だいいち

えんぶだい だいいち

えんぶだい だいいち

えんぶだい だいいち

えんぶだい だいいち

えんぶだい だいいち

えんぶだい だいいち

八歳のくちなは仏に成りたる品にて候此の事めづらしく貴き事にて候、

其の故は華嚴經には「女人は地獄の使なり能く仏種子を断ず外面は菩薩に似て内心は夜叉の如し」と、文の心は女人は地獄の使・よく仏の種をたつ外面は菩薩に似たれども内心は夜叉の如しと云へり、又云く「一度女人を見る者はよく眼の功德を失ふ設ひ大蛇をば見るとも女人を見るべからず」と云い、又有る経には「所有の三千界の男子の諸の煩惱を合せ集めて一人の女人の業障と為す」と三千大千世界にあらゆる男子の諸の煩惱を取り集めて女人・一人の罪とすと云へり、・或経には「三世の諸仏の眼は脱て大地に墮つとも女人は仏に成るべからず」と説き給へり、此の品の意は人畜をいはば畜生たる竜女だにも仏に成れりまして我等は形のごとく人間の果報なり、彼の果報にはまされり争か仏にならざるべきやと思食すべきなり。

中にも三惡道におちずと説かれて候其の地獄と申すは八寒八熱乃至八

だいじごく 大地獄の中に初め浅き等活地獄を尋ねれば此の一閻浮提の下一千由旬なり、
その 其の中の罪人は互に常に害心をいだけりもしたまたま相見れば獵師が鹿に
あへるが如し各各鉄の爪を以て互につかみ・さく・血肉皆尽きて唯残つ
て骨のみあり・或は獄卒棒を以て頭よりあなうらに至るまで皆打ちくたく
身も破れくだけで猶沙の如し、焦熱なんと申すは譬えん・かたなき苦な
り鉄城四方に回つて門を閉じたれば力士も開きがたく猛火高くのぼつて
金翅のつばさもかけるべからず、餓鬼道と申すは其の住处に二あり一には
地の下五百由旬の閻魔王宮にあり、二には人天の中にもまじはれり其の相
種種なり・或は腹は大海の如くのんどは鍼の如くなれば明けても暮れても
食すともあくべからず、まして五百生・七百生なんと飲食の名をだに
もきかず・或は己が頭をくだきて脳を食するもあり・或は一夜に五人の子
を生んで夜の内に食するもあり、万菓林に結び取らんとすれば悉く剣の

林となり万水・大海に流入りぬ飲んとすれば猛火となる如何にしてか此の
苦をまぬがるべき、次に畜生道と申すは其の住所に二あり根本は大海に住
す枝末は人天に雜れり短き物は長き物にのまれ小き物は大なる物に食はれ
互に相食んでしばらくもやすむ事なし、或は鳥獸と生れ、或は牛馬と
成つても重き物をおほせられ西へ行かんと思へば東へやられ東へ行かんと
すれば西へやらる山野に多くある水と草をのみ思いて余は知るところなし、
然るに善男子・善女人・此の法華經を持ち南無妙法蓮華經と唱え奉らば此
の三罪を脱るべしと説き給へり何事か是にしかん・たのもしきかな・たの
もしきかな、又五の卷に云く「我れ大乘經を聞いて苦の衆生を度脱す」
と心は・われ大乘の教をひらいてと申すは法華經を申す苦の衆生とは
何ぞや地獄の衆生にもあらず餓鬼道の衆生にもあらず只女人を指して苦
の衆生と名けたり、五障三従と申して三つしたがふ事有つて五つの障りあ

り竜女我女人の身を受けて女人の苦をつみしれり然れば余をば知るべから
ず女人を導かんと誓へり、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經。

日蓮 花押

◆五四

一代聖教大意

正嘉二年二月 三十七歳御作

390P

四教は一には三藏教・二には通教・三には別教・四には円教なり。

始に三藏とは阿含經の意なり・此の經の意は六道より外を明さず但し

六道修人天の内の因果の道理を明す、但し正報は十界を明すなり地・餓

・畜・修・人天・声聞・縁覺・菩薩・仏なり依報が六にて有れば六界と

申すなり、此の教の意は六道より外を明さざれば三界より外に浄土と申す

生処ありと言わず又三世に仏は次第・次第に出世すとは云へども横に十方

に並べて仏有りと云わず、三藏とは一には經藏・二には律藏・三には

論蔵亦云慧蔵ただなり但し經・律・論の定戒慧・戒定慧・慧定戒と云う事あるなり、

戒蔵とは五戒・八戒・十善戒・二百五十戒・五百戒なり・定蔵とは味

ぜんじよう

禪定名浄禪・無漏禪なり慧蔵とは苦・空・無常・無我の智慧なり、戒定慧

しょうれつ

の勝劣と云うは但上の戒計りを持つ者は三界の内の欲界の人天に生を受く

ほんぶ

る凡夫なり、但し上の定計りを修する人は戒を持たざれども定の力に依つ

かみ

て上の戒を具するなり、此の定の内に味禪・浄禪は三界の内・色無色界へ

むろ

生ず無漏禪は声聞・縁覚と成つて見思を断じ尽し灰身滅智するなり、慧は

むじよう

又苦・空・無常・無我と我が色心を観ずれば上の戒・定を自然に具足して

しょうもん

声聞・縁覚とも成るなり、故に戒より定は勝れ定より慧は勝れたり、而れ

さんそう

ども此の三蔵教の意は戒が本体にてあるなり、されば阿含經を総結する

ゆいきようきよう

遺教經には戒を説けるなり、此の教の意は依報には六界・正報には

じゅっかい

十界を明せども而も依報に随つて六界を明す經と名くるなり、又正報に

じゅつかい
十界を明せども縁覚・菩薩・仏も声聞の悟に過ぎざれば但声聞教とも
もう
申す、されば仏も菩薩も縁覚も灰身滅智する教なり、声聞に付いて七賢七
ろくどう
聖の位あり、六道は凡夫なり。

一に五停心

さんけん
三賢

ねんじょ
二に別想念処

外凡

ねんじょ
三に総想念処

七賢 智と言ふ事なり

一に・法

ぜんこん
四善根

二に頂法

内凡

三に忍法

だいいち
四に世第一法

ろくどう
此の七賢の位は六道の凡夫より賢く生死を厭ひ煩惱を具しながら煩惱を
おこ
発さざる賢人なり、例せば外典の許由巢父が如し。

五停心

一に数息^{すそく}息を数えて散乱^{さんらん}を治^じす

二に不浄^{ふじょう}身の不浄^{ふじょう}を觀^{かん}じて貪欲^{とんよく}を治^じす

三に慈悲^{じひ}慈悲^{じひ}を觀^{かん}じて嫉妬^{しつと}を治^じす

四に因縁^{いんねん}十二因縁^{いんねん}を觀^{かん}じて愚癡^{ぐち}を治^じす

五に界方便^{ほうべん} 地水火風空識^{すいか}の六界^{ろっかい}を觀^{かん}じて障道^{しょうどう}を治^じす又は念仏^{ねんぶつ}

と云う

別想念処^{ねんじょ}

一に身 外道^{げどう}は身を淨^{じやう}と言^いい仏^{ぶつ}は不淨^{ふじやう}と説^とき給^{たま}う

二に受 外道^{げどう}は三界^{さんがい}を樂^{らく}と言^いい仏^{ぶつ}は苦^くと説^とき給^{たま}う

三に心 外道^{げどう}は心を常^{じやう}と言^いい仏^{ぶつ}は無常^{むじやう}と説^とき給^{たま}う

四に法 外道^{げどう}は一切衆生^{いっさいしゆじやう}に我有^いりと云^いい仏^{ぶつ}は無我^{むが}と説^とき給^{たま}う

外道^{げどう}は常心樂受我法^{じやうしん} 淨身^{じやうしん} 仏^{ぶつ}は苦^く・不淨^{ふじやう}・無常^{むじやう}・無我^{むが}を調練^{てうれん}して觀^{かん}ずるなり ☆法^{なんぽう}は智慧^{ちえ}の火^か・煩惱^{ぼんのう}の薪^{たきぎ}

を蒸せば煙の立つなり故に・法と云う、頂法は山の頂に登つて四方を見るに雲無きが如し、世間出世間の因果の道理を委く知つて闇き事無きに譬えたるなり、始め五停心より此の頂法に至るまで退位と申して惡縁に値へば惡道に墮つ而れども此の頂法の善根は失せずと習うなり、忍法は此の位に入る人は永く惡道に墮ちず、世第一法は此の位に至る賢人なり但今聖人と成る可きなり。

一に見道

二

随信行

鈍根

正と言ふ事なり

七聖三

三

見得

利根

信解

鈍根

二に修道

身証

利鈍に亘る

阿羅漢

二

慧解脱鈍根

三に無學道

俱解脱利根

見・思の煩惱ぼんのうを斷ずる者を聖しょうと云う、此の聖人しょうにんに三道あり、見道とは見思けんじの内の見惑けんわくを斷じつ尽くす、此の見惑けんわくをつ尽くす人をば初果しょかの聖者せいじゃと申す、此の人は欲界よっかいの人天にんてんには生るれども永く地・餓・畜・修しゅうの四惡趣しあくしゅには墮おちず、天台てんだい云く「見惑けんわくを破るが故に四惡趣しあくしゅを離る」文、此の人は未だ思惑しわくを斷ぜず貪とん・瞋じん・癡ち有り、身に貪欲とんよくある故に妻ゆえを帶もつす、而れども他人たにんの妻を犯さず、瞋恚しんにあれども物を殺さず、鋤すきを以て地をすけば虫自然じねんに四寸去る、愚癡ぐちなる故に我が身・初果しょかの聖者せいじゃと知らず、婆娑論ばしやろんに云く「初果しょかの聖者せいじゃは妻を八十一度ひとたび・一夜に犯すと」取意てんたい天台てんだいの解釋げしやくに云く「初果しょか地を耕すに虫四寸を離るるは道共どうくの力なり」と、第四果せいじやの聖者あらかん・阿羅漢あらかんを無學まなと云ひ亦または不生ふしやうと云う、永く見思けんじを斷じ尽して三界六道さんがいりくどうに此の生の尽きて後生のちしやうすべからず見思けんじの煩惱ぼんのう無きが故なり、又此の教の意こころは三界六道さんがいりくどうより外とこころに処あかを明さざ

れば生処有りと知らず・身に煩惱有りととも知らず又生因なく但灰身滅智と
申して身も心もうせ虚空の如く成るべしと習う、法華經にあらざば永く仏
になるべからずと云うは二乘是なり、此の教の修行の時節は声聞は三生
鈍根六十劫利根又一類の最上利根の声聞一生の内に阿羅漢の位に登る事あ
り、縁覚は四生鈍根百劫利根菩薩は一向凡夫にて見思を断ぜず而も四弘誓願
を發し六度万行を修し三僧祇・百大劫を経て三藏教の仏と成る仏と成る時
始めて見思を断尽するなり、見惑とは一には身見亦我見と云う二には辺見亦断見と云う
三には邪見亦撥無見と云う四には見取見勝見亦劣請と云う五には戒禁取見亦非因計因非道と云うなり見惑
は八十八有れども此の五が根本にて有るなり、思惑とは一には貪・二には
瞋・三には癡・四には慢なり思惑は八十一有れども此の四が根本にて有る
なり、此の法門は阿含經四十卷・婆沙論二百卷・正理論・顯宗論・俱舍論
に具に明せり、別して俱舍宗と申す宗有り又諸の大乗に此の法門少少明す

事あり・謂く方等部の經・涅槃經等なり但し華嚴・般若・法華には此の法門無し。

次に通教とは大乘の始なり又戒定慧の三学あり、此の教の意のおきて大旨は六道を出でず少分利根なる菩薩六道より外に推し出すことあり、声聞・緣覚・菩薩共に一の法門を習い見思を三人共に断じ而も声聞・緣覚・灰身滅智の意に入る者もあり入らざる者もあり、此の教に十地あり。

一 乾慧地 三賢

二 性地 四善根 賢人

三 八人地 見道位聖人

四 見地 見惑を断ず

初果の聖人

十地 じゅうち

五 薄地

六 離欲地

思惑を断ず しわく

七 已弁地

阿羅漢 見思を断じ尽す あらかん けんじ

八 辟支仏

地習氣を尽す ひやくしぶつ しゅうけ

九 菩薩地

誓つて習を扶けて生ずるなり ぼさつ たす

十 仏地

見思を断じ尽す けんじ

此通教の法門は別して一經に限らず方等經・般若經・心經・觀經・

阿彌陀經・雙觀經・金剛般若等の經に散在せり、此通教の修行の時節は

動踰塵劫を経て仏に成ると習うなり、又一類の疾く成ると云う辺もあり・

已上・上の藏通二教には六道の凡夫本より仏性ありとも談ぜず始めて修す

れば声聞・緣覺・菩薩・仏と・おもひおもひに成ると談ずる教なり。

次に別教又戒定慧の三学を談ず此の教は但菩薩計りにて声聞・緣覺を

まじ
雜えず、菩薩戒とは三聚淨戒なり五戒・八戒・十善戒・二百五十戒・五

百戒 梵網ほんもうきようの五十八の戒・瓔珞ようらくの十無尽戒・華嚴けこんの十戒・涅槃經ねはんぎようの自行じぎようの

五支戒・護陀ごだの十戒・大論だいろんの十戒・是等は皆菩薩みなぼさつの三聚淨戒の内・

摂律儀戒せつりつぎかいなり、摂善法戒せつぜんぽうかいとは八万四千はちまんの法門ほうもんを摂す、饒益有情戒にようやくうじようとは四弘しぐ

誓願せいがんなり定とは觀練熏修かんれんくんじゅうの四種の禪定ぜんじようなり慧とは心生十界じゅっかいの法門ほうもんなり、

五十二位を立つ五十二位とは一に十信じゅっしん・二に十住じゅうじゅう・三に十行・四に十

回向えこう・五に十地等覺じゅうちとうかく一位妙覺みょうかく二位なり、已上。

十信じゅっしん 退位ほんぶぼさついま 凡夫菩薩未だ見思けんじを断ぜず

五十二位 十住じゅうじゅう 不退位ふたい五十二位

十行じゅうち 十回向見思えこうけんじ・塵沙だんを断ぜる菩薩ぼさつ

十地じゅうち 無明むみようを断ぜる菩薩だん

等覺とうかく

妙覺 無明を断じ尽せる仏なり

此の教は大乗なり戒定慧を明す・戒は前の藏通二教に似ず尽未来際の戒

・金剛宝戒なり、此の教の菩薩は三悪道を恐しとせず二乗道を恐る地・餓

・畜等の三悪道は仏の種子を断ぜず二乗の道は仏の種子を断ずればなり、

大莊嚴論に云く「恒に地獄に処すと雖も大菩提を障えず若し自利の心を起

さば是れ大菩提の障なり」と、此の教の習は眞の悪道とは三無為の火☆

なり眞の悪人とは二乗を云うなり、されば悪を造るとも二乗の戒をば持た

じと談ず、故に大般若經に云く「若し菩薩設い恒河沙劫に妙なる五欲を受

くるとも菩薩戒に於ては猶犯と名けずと若し一念二乗の心を起さば即ち名

けて犯と為す」文、此の文に妙なる五欲とは色・声・香・味・触の五欲な

り・色欲とは青黛・珂雪・白齒等声欲とは絲竹管絃・香欲とは沈檀芳薰・

味欲とは猪鹿等の味・触欲とは☆膚等なり、此に恒河沙劫に著すれども菩薩

戒は破れず一念の二乗の心を起すに菩薩戒は破ると云える文なり、太賢の
古迹に云く「貪に汚さるると雖も大心尽きざるをもつて無余の犯無し起せ
ども無犯と名く」文、二乗戒に趣くを菩薩の破戒とは申すなり華嚴・般若
・方等総じて爾前の經にはあながちに二乗をきらうなり定慧此れを略す、
梵網經に云く「戒をば謂いて大地と為し定をば謂いて室宅と為す智慧は為
灯明なり」文、此の菩薩戒は人・畜・黃門・二形の四種を嫌わず但一種の
菩薩戒を授く、此の教の意は五十二位を一一の位に多俱低劫を経て衆生
界を尽して仏に成るべし一人として一生に仏に成る者無し、又一行を以て
仏に成る事無し一切行を積んで仏と成る微塵を積んで須弥山と成すが如し、
華嚴・方等・般若・梵網・瓔珞等の經に此の旨分明なり、但し二乗界の此
の戒を受くる事を嫌ふ、妙樂の釈に云く「
☆法華已前の諸經を尋ぬる
に實に二乗作仏の文無し」文。

次に円教えんきょうとは此この円教えんきょうに二有り・一には爾前にぜんの円・二には法華ほっけ・涅槃ねはん

の円えんなり、爾前にぜんの円えんに五十二位・又戒定慧かいじょうえあり、爾前にぜんの円えんとは華嚴經けこんきょうの

法界唯心ほっかいゆいしんの法門文ほうもんに云く「初發心しょほつしんの時便すなわち正覺しょうかくを成じやうずと」又云く「円満えんまん

修多羅しゆたら」文、淨名經じやうみやうきやうに云く「無我無造むがにして受者無ぜんあくけれども善惡ぜんあくの業敗

亡むすぜず」文、般若經はんになきやうに云く「初發心しょほつしんより即すなわち道場どうじやうに坐ます」文、觀經くわんきやうに云く

「韋提希いだいけ・時に応おじて即すなわち無生法忍むじやうを得」文、梵網經ぼんもつきやうに云く「衆生しゆじやう・仏戒ぶつかい

を受うくれば位大覺だいかくに同おなじ即すなわち諸仏しよぶつの位みこに入り真こに是これ諸仏しよぶつの子みこなり」文、此これ

は皆爾前みなにぜんの円えんの証文しやうもんなり、此の教こころの意いは又五十二位を明めいす名は別教べつきやうの五

十二位じふにゐの如ごとし但ただし義ぎはかはれり、其そのの故ゆゑは五十二位ごじふにゐが互たがひに具くして淺深せんじんも

無なく勝劣しやうれつも無なし、凡夫ぼんぷも位ゑを経へずとも仏おにもなり又往生おうじやうするなり、煩惱ぼんのう

も断だんぜざれども仏おに成なる障さり無なく一善一戒いちぜんいつかいを以もつても仏おに成なる少少開會かいえの

法門ほうもんを説とく処ところもあり、所謂い淨名經じやうみやうきやうには凡夫ぼんぷを會えし煩惱惡法ぼんのうあくほうも皆會みなえす

ただし二乗を会せず、般若經の中には二乗の所學の法門をば開會して二乗の人と惡人をば開會せず、觀經等の經に凡夫一毫の煩惱をも斷ぜず往生すと説くは皆爾前の円教の意なり、法華經の円經は後に至つて書く可し已上四教。

次に五時、五時とは一には華嚴經 結經 梵網經 別円二教を説く、二には

阿含 結經 遺教經 但三藏教の小乗の法門を説く、三には方等經・

宝積經・觀經等の説時を知らざる 權大乘經なり 結經 瓔珞經、但し藏通

・別円の四教を皆説く、四には般若經 結經 仁王經 通教・別教・円教

の後三教を説く三藏教を説かず、華嚴經は三七日の間の説・阿含經は十二

年の説・方等・般若は三十年の説、已上華嚴より般若に至る四十二年なり、

山門の義には方等は説時定まらず説處定まらず般若經三十年と申す、寺門

の義には方等十六年・般若十四年と申す、秘藏の大事の義には方等・般若

は説時三十年・但し方等は前・般若は後と申すなり、仏は十九出家・三十
じょうとう

成道と定むる事は大論に見えたり、一代聖教五十年と申す事は涅槃經に
だいろん いちだいしゅうきよう

見えたり、法華經已前四十二年と申す事は無量義經に見えたり、法華經
ほけきよう いぜん もう わりようぎきよう

八箇年と申す事は涅槃經の五十年の文と無量義經の四十二年の文の間を
はちかねん もう ねはんぎよう わりようぎきよう

勘うれば八箇年なり、已上十九出家・三十成道・五十年の轉法輪八十入滅
かんが はちかねん しゅつつけ じようどう てんぽうりん にゅうめつ

と定む可し、此等の四十二年の説教は皆法華經の吸引の方便なり、其の故
べ これら せつきよう みなほけきよう ほうべん そのゆえ

は無量義經に云く「我先に道場菩提樹下に端坐すること六年
むりようぎきよう いわ ぼだいじゅげ とうじよう ぼだいじゅげ

阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たり○方便力を以てす、四十余年に
あのかたらさんみやくさんぼだい じよう ほうべん もつ よんじゅうよねん

は未だ真実を顕さず初に四諦を説き阿含經なり次に方等十二部經・摩訶般若
いま しんじつ あらわ したい と あこんきよう ほうとう じふにぶきよう ま かはんによ

・華嚴海空を説く」文。

私に云く説の次第に順ずれば華嚴・阿含・方等・般若・法華・涅槃なり、
ひそか いわ しだい けこん あこん ほうとう はんによ ほつけ ねはん

法門の浅深の次第を列ぬれば阿含・方等・般若・華嚴・涅槃・法華と列ぬ
ほうもん せんじん しだい つら あこん ほうとう はんによ けこん ねはん ほつけ つら

べし、されば法華經・涅槃經には爾くの如く見えたり華嚴宗と申す宗は
ちこんほつし ほうそうほつし ちようかんほつし になし けこんきよう よ
智嚴法師・法蔵法師・澄觀法師等の大師・華嚴經に依つて立てたり、
くしやしゅう じようじつ りつしゅう ほつし ほつし どうせん になし あこんきよう よ
俱舍宗・成実宗・律宗は宝法師・光法師・道宣等の大師・阿含經に依つ
て立てたり、法相宗と申す宗は玄奘三蔵・慈恩法師等・方等部の内に上
生經・下生經・成仏經・解深密經瑜伽論・唯識論等の經論に依つて立て
たり、三論宗と申す宗は般若經・百論・中論・十二門論・大論等の經論
よ きちそうだいし たま けこんしゅう もう けこん ほつけ ねはん はんにや
に依つて吉蔵大師立て給へり、華嚴宗と申すは華嚴と法華・涅槃は同じく
えんきよう 円教と立つ余は皆劣と云うなる可し、法相宗には解深密經と華嚴・般若
ほつけ ねはん ほうそう えきようもろもろしやうじようきよう
・法華・涅槃は同じ程の經と云う、三論宗とは般若經と華嚴・法華・涅槃
は同じ程の經なり、但し法相の依經諸の小乗經は劣なりと立つ、此等は
みなほつけ いぜん しきよう よ へんぜん
皆法華已前の諸經に依つて立てたる宗なり、爾前の円を極として立てたる
宗どもなり、宗宗の人人の諍は有れども經經に依つて勝劣を判ぜん時

はいかにも法華經は勝れたるべきなり、人師の釈を以て勝劣を論ずる事無し。

五には法華經と申すは開經には無量義經一卷法華經八卷結經には普賢經一卷上の四教・四時の經論を書き挙ぐる事は此の法華經を知らん為なり、法華經の習としては前の諸經を習わずしては永く心を得ること莫きなり、爾前の諸經は一經一經を習うに又余經を沙汰せざれども苦しからず、故に天台の御釈に云く「若し余經を弘むるには教相を明さざれども義に於て傷むこと無し若し法華を弘むるには教相を明さずんば文義闕くること有り」文、法華經に云く「種種の道を示すと雖も其れ實には仏乗の為なり」文、種種の道と申すは爾前一切の諸經なり仏乗の為とは法華經の為に一切の經を説くと申す文なり。

問う諸經の如きは・或は菩薩の為・或は人天の為・或は声聞・緣覺の

ためき したがつ ほうもん
為機に随つて法門もかわり益もかわる此の經は何なる人の為ぞや、答う此

の經は相伝そうでんに有らざれば知り難がたし所詮しよせん惡人・善人・有智・無智・有戒・

むかい

無戒・男子・女子・四趣・八部總じて十界の衆生の為なり、所謂惡人は

だいばだった みようそうこん

提婆達多・妙莊嚴王・阿闍世王・善人は韋提希等の人天の人・有智は

しやりほつ むち しゆりはんどく

舍利弗・無智は須利槃特・有戒は声聞・菩薩・無戒は竜畜なり女人は

りゆうによ

竜女なり、總じて十界の衆生・円の一法を覺るなり此の事を知らざる

がくしや ほけきよう われらぼんぶ ため

學者・法華經は我等凡夫の為には有らずと申す仏意恐れ有り、此の經に云く

「一切いっさいの菩薩ぼさつの阿耨多羅三藐三菩提あのくたらさんみやくさんぼだいは皆此みなの經に属せり」文、此の文の菩薩

とは九界しじゅうの衆生しじゅう・善人ぜんにん・惡人あくにん・女人にょにん・男子さんぞう・三藏教しやうもんの声聞えんかく・緣覺ぼさつ・菩薩

つうきよう さんじよう べつきよう ぼさつにぜん えんきよう ぼさつみな

・通教の三乘・別教の菩薩爾前の円教の菩薩皆此の經の力に有らざれ

ば仏に成るまじと申す文なり、又此の經に云く「藥王多く人有りて在家・

しゆつけ ぼさつ

出家の菩薩の道を行ぜんに若し是の法華經を見聞し誦誦し書持し供養する

も こ ほけきよう けんもん どくじゆ しよじ ぐよう

出家の菩薩の道を行ぜんに若し是の法華經を見聞し誦誦し書持し供養する

ことを得ること能わずんば当に知るべし是の人は未だ善く菩薩の道を行ぜず、若し是の經典を聞くことを得ること有らば乃ち能く菩薩の道を行ずなりと」文、此の文は顯然に權教の菩薩の三祇・百劫・動踰塵劫・無量阿僧祇劫の間の六度万行・四弘誓願は此の經に至らざれば菩薩の行には有らず善根を修したるにも有らずと云う文なり、又菩薩の行無ければ仏にも成らざる事も顯然なり。

天台・妙樂の末代の凡夫を勸進する文、文句に云く「好堅・地に処して牙已に百圍せり頻伽☆に在つて声衆鳥に勝れたり」文、此の文は法華經の五十展轉の第五十の功德を釈する文なり、仏苦に校量を説き給うに權教の多劫の修行又大聖の功德よりも此の經の須臾・結縁の愚人の隨喜の功德百千万億勝れたる事經に見えつれば此の意を大師譬を以て顕し給えり、好堅樹と申す木は一日に百圍にて高くをう、頻伽と申す鳥は幼

だも諸の大小の鳥の声に勝れたり、権教の修行の久きに諸の草木の遅く
生長するを譬へ、法華の行の速に仏に成る事を一日に百匝なるに譬へ、
権教の大小の聖人をば諸鳥に譬へ法華の凡夫のはかなきを☆の声の
衆鳥に勝るるに譬う、妙楽大師重ねて釈して云く「恐らくば人謬りて
解せる者初心の功德の大なることを測らずして功を上位に推り此の初心を
蔑る故に今彼の行浅く功深きことを示して以て経力を顕す」文、末代の愚者
は法華経は深理にしていみじけれども我等が下機に叶わずと言つて法を
挙げ機を下して退する者を釈する文なり。

又妙楽大師末代に此の法の捨てられん事を歎いて云く「此の円頓を聞き
て崇重せざる者は良に近代に大乘を習える者の雑濫するに由るが故なり、
況や像末に情澆く信心寡薄に円頓の教・法蔵に溢れ函に盈れども暫くも
思惟せず便ち目を瞑ぐに至る・徒に生じ徒に死す一に何ぞ痛ましきや有る

人云く聞いて行ぜずんば汝に於て何ぞ預らん此れは未だ深く久遠の益を知らず、善住天子經の如き文殊・舍利弗に告ぐ法を聞き謗を生じて地獄に墮つるは恒沙の仏を供養する者に勝れたり地獄に墮つと雖も地獄より出で還つて法を聞くことを得ると、此れは仏を供し法を聞かざる者を以て校量と爲り聞いて謗を生ずる尚遠種と爲す況や聞いて思惟し勤めて修習せんをや」と、又云く「一句も神に染めれば咸く彼岸を資く思惟修習永く舟航に用いたり随喜見聞恒に主伴と爲る、若は取・若は捨・耳に經て縁と成り・或は順・或は違・終に斯れに因つて脱すと」文、私にいわにやくしゅにやくしゅ・或順・或違の文は肝に銘ずるなり。

法華翻經の後記に云く釈僧肇記「什羅什三藏なり姚興王に對して曰く予昔天竺国に在りし時・☆く五竺に遊びて大乘を尋討し大師須梨耶蘇摩に従つて理味を餐受するに頂を摩でて此の經を属累して言く、仏・日西に隠れ

遺光東北とうほく てるを照らす茲この典東北諸国とうほくしよこくに有縁うえんなり汝慎なんじつしんで伝弘でんぐせよ」と文、

私ひそか いわに云く天竺てんじくよりは此にほんの日本とうほくは東北とうほくの州しゅうなり慧心えしんの一乗いちじょう要決ようけつに云く「日本にほん

一州いちしゅう・円機えんき じゆんじゆく純熟じゆんじゆく・朝野遠近おんこん・同じく一乗いちじょうに帰し緇素貴賤しそきせん悉ことごとくく成仏じやうぶつを

期こすす・唯一師等ただいっしあつて若し信受しんじゆせず権けんとや為ん実じつとや為ん権けん為らば責せむ

可べし」浄名じやうみやうに云く「衆の魔事を覚知かくちして其行したがわに随したがわず善力方便ほうべんを以て意

に随したがつて度すと実な為らば憐あわれむ可べし」此經いわに云く「当来世とうらいせの悪人あくにんは仏説ぶつせつの

一乗いちじょうを聞いて迷惑めいわくして信受しんじゆせず法はを破やぶして惡道おに墮おつ」文。

妙法蓮華經みやうほうれんげきやう・妙てんだいげんぎは天台玄義いわに云く「言いう所の妙みよとは妙ふかは不可思議しぎに

名なくるなり」と、又云く「秘密ひみつの奥藏おうそうを發ひらく之これを稱しょうして妙なと為なす」と、又云く

「妙さいしやうとは最勝しゆたら・修多羅かんろ・甘露かんろの門ゆえなり故に妙いと云いうなり」と、法げんぎは玄義しやうぎに

云く「言いう所の法じゆつかいとは十界じゆつかい・十如じゆつかい・権実こんじつの法いなり」と、又云く「権実こんじつの正軌しやうき

を示しす故に号ゆえして法なと為なす」と、蓮華れんげは玄義げんぎに云く「蓮華れんげとは権実こんじつの法いに

譬^{たと}うるなり、又云^{いわ}く「久遠^{くおん}の本果を指す之^{これ}を喩^{たと}うるに蓮を以^{もつ}てし不二の
円道^{えん}に会^こす之^{これ}を譬^{たと}うるに華を以^{もつ}てす」文、経は又云^{いわ}く「声仏事^{ぶつじ}を為^なす之^{これ}を
称^{しょう}して経と為^なす」文、私^{ひそ}に云^{いわ}く法華以前^{ほつけいぜん}の諸経^{しよきよう}に小乗^{しやうじよう}は心生^{ろくかい}ずれば六界
・心滅^{にころめつ}すれば四界なり、通教^{つうきよう}以^{もつ}て是^この如^{ごと}し、爾前^{にぜん}の別円^{べつえん}の二教^{ふつえん}は心生
の十界^{じゆつかい}なり小乗^{しやうじよう}の意^いは六道^{ろくどう}・四生^{ししやう}の苦楽^{しゆじよう}は衆生^{しゆじよう}の心より生^なずと習^{なら}うな
りされば心滅^{ろくどう}すれば六道^{いんが}の因果^{えんが}は無^なきなり、大乘^{だいじよう}の心より十界^{じゆつかい}を生^なず、
華嚴經^{けこんきやう}に云^{いわ}く「心は工^{たくみ}なる画師^{えし}の如^{ごと}く種種^{しゆじゆ}の五陰^{ごおん}を造^{いっさいせ}る一切世界^{いっさいせかい}の中に法
として造^{つく}らざることを無し」文、造種種^{しゆじゆ}五陰^{ごおん}とは十界^{じゆつかい}の五陰^{ごおん}なり仏界^{ぶつがい}をも心
法^{はふ}をも造^{つく}ると習^{なら}う心が過去^{かこ}・現在^{げんざい}・未来^{みらい}の十方^{じふぱう}の仏と顕^{あらわ}ると習^{なら}うなり、
華嚴經^{けこんきやう}に云^{いわ}く「若^もし人三世^{さんぜ}一切^{いっさい}の仏を了^{りようち}知^ちせんと欲^{ほつ}せば当^{まさ}に是^{かく}の如^{ごと}く觀
すべし心は諸^{もろ}の如来^{もろもろにやらい}を造^{つく}ると」法華已前^{ほつけいぜん}の経^{きやう}のおきては上品^{じやうぼん}の十惡^{じゆあく}は地獄^{じじく}
の引業^{いんごう}・中品^{ちゆうぼん}の十惡^{じゆあく}は餓鬼^{がき}の引業^{いんごう}・下品^{げぼん}の十惡^{じゆあく}は畜生^{ちくしやう}の引業^{いんごう}・五常^{ごじやう}は

修羅の引業・三帰・五戒は人の引業・三帰・十善は六欲天の引業なり、
有漏の坐禅は色界・無色界の引業・五戒・八戒・十戒・十善戒・二百五十
戒・五百戒の上に苦・空・無常・無我の観は声聞・縁覚の引業・五戒・八
戒乃至三聚淨戒の上に六度四弘の菩提心を発すは菩薩なり仏界の引業な
り、藏通二教には仏性の沙汰なし但菩薩の発心を仏性と云う、別円二教
には衆生に仏性を論ず但し別教の意は二乗に仏性を論ぜず、爾前の
円教は別教に附して二乗の仏性の沙汰無し此等は皆☆法なり、今の妙法
とは此等の十界を互に具すと説く時・妙法と申す、十界互具と申す事は
十界の内に一界に余の九界を具し十界互に具すれば百法界なり、玄の二
に云く「又一法界に九法界を具すれば即ち百法界有り」文、法華經とは
別の事無し十界の因果は爾前の經に明す今は十界の因果互具をおきてた
る計りなり、爾前の經意は菩薩をば仏に成るべし声聞は仏に成るまじな

んど説けば菩薩は悦び声聞はなげき人天等は・おもひもかけずなんとある
経もあり、・或は二乗は見思を断じて六道を出でんと念い菩薩は・わざと
煩惱を断ぜず六道に生れて衆生を利益せんと念ふ、・或は菩薩の頓悟成仏
を見、・或は菩薩の多俱低劫の修行を見、・或は凡夫往生の旨を説けば
菩薩・声聞の為には有らずと見て人の不成仏は我が不成仏、人の成仏
は我が成仏・凡夫の往生は我が往生・聖人の見思断は我等凡夫の見思
断とも知らず四十二年をば過ぎしなり。

然るに今経にして十界互具を談ずる時・声聞の自調自度の身に菩薩界
を具すれば六度万行も修せず多俱低劫も経ぬ声聞が諸の菩薩のからくして
修したりし無量無辺の難行道が声聞に具する間・をもはざる外に声聞
が菩薩と云われ人をせむる獄卒・慳貪なる凡夫も亦菩薩と云はる、仏も又
因位に居して菩薩界に摂せられ妙覺ながら等覺なり、藥草喩品に声聞を

説いて云く「汝等が所行は是れ菩薩の道なり」と、又我等六度をも行ぜざるが六度満足の菩薩なる文・経に云く「未だ六波羅蜜を修行することを得ずと雖も六波羅蜜自然に在前しな」と、我等一戒をも受けざるが持戒の者と云わるる文・経に云く「是則ち勇猛なり是則ち精進なり是を戒をもち頭陀を行ずる者と名く」文。

問うて云く諸経にも悪人が仏に成る華嚴経の調達じゆきの授記・普超経の闍王じゃおうの授記・大集経の婆藪天子ばそてんしの授記・又女人が仏に成る胎経の釈女じやくにょの授記・成仏・畜生が仏に成る阿含経の鵠雀こつじやくの授記・二乗が仏に成る方等ほうとうだらに經・首楞嚴經等なり、菩薩の成仏は華嚴經等・具縛の凡夫ほんぶの往生おうじようは觀經の下品下生等・女人の女身を転ずるは雙觀經の四十八願の中の三十五の願此等は法華經の二乘・竜女・提婆菩薩の授記に何なるかわりめかある、又設いかわりめはありとも諸経にても成仏はうたがひなし如何、答

う予の習い伝うる処の法門・此の答に顕るべし此の答に法華經の諸經に
超過し又諸經の成仏を許し許さぬは聞うべし秘藏の故に顕露に書さず。

問うて曰く妙法を一念三千と言う事如何、答う天台大師・此の法門を覺

り給うて後・玄義十卷・文句十卷・覺意三昧・小止觀・淨名疏・四念処

・次第禪門等の多くの法門を説き給いしかども此の一念三千をば談義し

給はず、但十界・百界・千如の法門ばかりにて・おはしませしなり、御年

五十七の夏四月の比荊州の玉泉寺と申す処にて御弟子・章安大師と申す

人に説きかせ給いし止觀十卷あり、上の四帖に猶をしみ給いて但六即・

四種三昧等・計の法門にてありしに五の卷より十境・十乘を立てて

一念三千の法門を書き給へり、此れを妙樂大師末代の人に勧進して言く「並

に三千を以て指南と為す○請うらくは尋ね読まん者心に異縁無かれ」文、

六十卷・三千丁の多くの法門も由無し但此の初の二三行を意得可きなり、

止観しかんの五いに云いく「夫それ一い心しんに十ほ法界はっかいを具ぐす一ほ法界はっかいに又ほ十ほ法界はっかいを具ぐすれば百ほ法界はっかいなり一せ界けんに三十ぐ種しゅの世間せけんを具ぐすれば百ほ法界はっかいには即すち三千さん種しゅの世間せけんを具ぐす此さんの三千ぜん一いち念ねんの心こころに在あり」文ぶん、妙楽みょうらく承しょうけ釈しゃくして云いく「当まさに知しるべし身土しん一いち念ねんの三千さんなり故ゆゑに成道じやうどうの時とき・此この本理ほんりに称かなて一い身しん一いち念ねん法界はっかいに☆ねし」文ぶん、日本にほんの伝でん教ぎやう大師だいし比叡ひゑ山さん建立けんりつの時とき・根本こんぽん中堂ちゆうどうの地ちを引ひき給たまいし時とき・地中ちちゆうより舌八しかつある鑰かぎを引ひき出でしたり、此この鑰かぎを以もつて入唐にゆうどうの時ときに天台大師てんだいだいしより第七み代やう妙楽みょうらく大師だいしの御弟子おんでし道邃すい和尚わじやうに値あひ奉たてまつりて天台てんだいの法門ほうもんを伝たへ給たまいし時とき、天機てんき秀發しゆはつの人ひとたりし間道どう邃すい和尚わじやう悦よろこんで天台てんだいの造つくり給たまへる十じゆ五ごの経藏きやうざうを開ひき見みせしめ給たまいしに十四じゆしを開ひいて一いの蔵ざうを開ひかず、其時そのときでんぎようだいしといわ

伝教大師でんぎやうだいし云いく師し此この一い蔵ざうを開ひき給たまえと請たまい給たまいしに邃すい和尚わじやう云いく「此この一い蔵ざうは開ひく可べき鑰かぎ無なし天台てんだい大師だいし自みづから出しゅ世つせして開ひき給たまう可べし」と云云そのときでんぎよう其の時そのとき伝教でんぎやう大師だいし・日本にほんより隨身ずいしんの鑰かぎを以もつて開ひき給たまいしに此この経藏きやうざう開ひけたりしかば

きようぞう

経蔵の内より光室に満ちたりき、其の光の本を尋ねれば此の一念三千の文

より光を放ちたりしなりありがたき事なり、其の時遂和尚は返つて伝教

大師を礼拝し給いき、天台大師の後身と云云、依つて天台の経蔵の所釈

は遺り無く日本に亘りしなり、天台大師の御自筆の観音経・章安大師の

自筆の止観・今比叡山の根本中堂に収めたり。

一 自性 自力 迦毘羅外道

四性計 二 他性 他力 ☆楼僧伽外道

三 共性 共力 勒娑婆外道

四 無因性 無因力 自然外道

外道に三人あり、一には仏法外の外道九十五種の外道二に附仏法成の

外道 小乗 三には学仏法の外道 大乘の外道なり。今の法華経は自力も定めて

自力にあらず十界の一切衆生を具する自なる故に我が身に本より自の

ぶっかい いっさいしゅじょう
仏界・一切衆生の他の仏界我が身に具せり、されば今・仏に成るに新仏に
あらず又他力も定めて他力に非ず他仏も我等凡夫の自具なるが故に又他仏
が我等が如く自に現同するなり、共と無因は略す。

ほけきょう いぜん しきょう じゅっかいごく あか
法華經已前の諸經は十界互具を明さざれば仏に成らんと願うには必ず九
界を厭う九界を仏界に具せざるが故なり、されば必ず惡を滅し煩惱を斷じ
て仏には成ると談ず凡夫の身を仏に具すと云わざるが故に、されば人天惡人
の身を失いて仏に成ると申す、此れをば妙樂大師は厭離斷九の仏と名くさ
れば爾前の經の人人は仏の九界の形を現するをば但仏の不思議の神變と思
ひ仏の身に九界が本よりありて現ずるとは言わず、されば實を以てさぐり
給うに法華經已前には但權者の仏のみ有つて實の凡夫が仏に成りたりける
事は無きなり、煩惱を斷じ九界を厭うて仏に成らんと願うは實には九界を
離れたる仏無き故に往生したる實の凡夫も無し、人界を離れたる菩薩界も

無き故に但ゆえ法華經ほけきようの仏にぜんの爾前じゆつかいにして十界じゆつかいの形を現して所化しよけとも能化のうけとも
悪人あくにんとも善人ぜんにんとも外道げどうとも言われしなり、実のたまの悪人あくにん・善人ぜんにん・外道げどう・凡夫ほんぷは
ほうべん
方便ほうべんの權しんじつを行じて真実しんじつの教しんじつとうち思おもひなしてすぎし程ほけきように法華經ほけきように來つて
ほうべん
方便ほうべんにてありけり、實けんじむみようには見思無明けんじむみようも断だんぜざりけり往生おうじようもせざりけりなん
かくち
と覺知かくちするなり、一念三千いちねんさんぜんは別くわししるに委べく書べす可べし。

此この經きやうには二妙にみょうあり釈いわに云いく「此この經きやうは唯ただ二妙にみょうを論ろんず」と一いつには相待妙そうたいみよう
二にには絶待妙ぜったいみようなり、相待妙そうたいみようの意いは前こころの四時いちだいしやうきようの一代ほけきよう聖教しやうきやうに法華經ほけきようを對たいし
て爾前にぜんと之これを嫌きらい、爾前にぜんをば当分とうぶんと言いひ法華ほつけを跨節かせつと申もうす、絶待妙ぜったいみようの意こころ
いちだいしやうきよう
は一代い聖教しやうきやうは即すなわち法華經ほけきようなりと開會かいえす、又法華經ほけきように二事ふたことあり一ひとつには所開しよかい
もうかい
・二ふたには能開もうかいなり開示悟入かいじこにゆうの文ある・或あるは皆かい已い成じやうぶつ仏道等ぶつどうの文ある、一部い・八卷はつけん・二
十八品じふはちひん・六万九千三百八十四字ろくまんきゅうせんさんぱくはじしじ・一一の字もの下したに皆妙みなの文字もんじあるべしこれ
能開もうかいの妙もうかいなり、此この法華經ほけきようは知らずして習ならひ談だんずる者は但爾前にぜんの經きやうの利益りやく

なり、阿含經開会の文は經に云く「我が此の九部の法は衆生に隨順して

説く大乘に入るに為本なり」と云云、華嚴經・開会の文は一切世間・天人

及び阿修羅は皆謂えり今の釈迦牟尼仏等の文、般若經開会の文は安樂行品

の十八空の文、觀經等の往生安樂・開会の文は「此に於て命終し

て即ち安樂世界に往く」等の文、散善開会の文は「一たび南無仏と称せし

皆已に仏道を成じき」の文、一切衆生開会の文は「今・此の三界は皆是れ

我が有なり其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり」、外典開会の文は「若し

俗間經書治世語言資生の業等を説かんと皆正法に順ぜん」文、兜率開會

の文・人天所開会の文しげきゆへにいださず。

此の經を意得ざる人は經の文に此の經を読んで人天に生ずと説く文を見

・或は兜率・☆利などにといたる文を見・或は安養に生ずる文を見て穢土

に於て法華經を行ぜば經はいみじけれども行者不退の地に至らざれば穢土

にして流転るてんし久しく五十六億七千万歳せんまんの晨あかつきを期し・或はある人畜等じんちくに生れて
隔生きやくする間・自みづからの苦しみ限り無しなんと云云

・或はある自力じりきの修行しゆぎようなり難行道なんぎようどうなり等云云、此れは恐らくは爾前にぜん・法華ほつけの

二途を知らずして自ら癡闇みずかに迷うのみに非ず一切衆生の仏眼ちあんを閉ずる人まよい

なり、兜率とそつを勧めたる事は小乗經しやうじやうきように多し少しは大乗經だいじやうきようにも勧めたり

西方さいほうを勧めたる事はすす大乘經だいじやうきように多し此等は皆所開これらの文なり、法華經ほけきようの意はこころ

兜率とそつに即して十方じゅうぽう仏土中・西方さいほうに即して十方じゅうぽう仏土中・人天にんてんに即して十方じゅうぽう

仏土中と云云、法華經ほけきようは惡人あくにんに対しては十界じゅうかいの惡を説くは惡人あくにん・五眼ごがんを具

しなんどすれば惡人あくにんのきわまりを救い、女人にょにんに即して十界じゅうかいを談だんずれば

十界じゅうかい皆女人にょにんなる事を談だんず、何にも法華円実ほつけんじつの菩提心ぼだいしんを發おこさん人は迷まよいの九

界かいへ業力ごうりきに引かるる事無きなり。

此の意いを存たまいじ給たまひいけるやらん法然上人ほうねんしやうにんも一向念仏いっこうねんぶつの行者ぎやうじやながら選せん択たく

と申す文には難行難行道には法華經・大日經等をば除かれたる処もあら
り委く見よ又慧心の往生要集にも法華經を除きたり、たとい法然上人・
慧心・法華經を難行・難行道として末代の機に叶わずと書き給うとも
日蓮は全くもちゆべからず、一代聖教のおきてに違い三世十方の仏陀の
誠言に違する故にいわうやそのぎなし、而るに後の人の消息に法華經を
難行道・經はいみじけれども末代の機に叶わず謗らばこそ罪にてもあら
め、浄土に至つて法華經をば覺るべしと云云、日蓮が心は何にも此の事は
ひが事と覺ゆるなりかう申すもひが事にや有らん、能く能く智人に習う
可し。

正嘉二年二月十四日 日蓮撰

◆五六 一念三千理事

正嘉二年三十七歳御作

406P

十二因縁図、問う流転の十二因縁とは何等ぞや答う一には無明・俱舍に

云く「宿惑しゅくわくの位ゐは無明むみょうなり」文、無明むみょうとは昔愛欲ぼんのうの煩惱ぼんのう起りしを云うなり、男は父に瞋いかりを成して母に愛を起す、女は母に瞋を成して父に愛を起すなり俱舎くしゃの第九に見えたり、二には行・俱舎くしゃに云く「宿の諸業むかししよを行と名く」と文、昔の造業そうぎようを行とは云うなり業に二有り一には牽引の業なり我等われらが正く生を受く可べき業を云うなり、二には円満えんまんの業なり余の一切いっさいの造業そうぎようなり所謂いわゆる足を折り手を切る先業せんごうを云うなり是は円満えんまんの業なり、三には識・俱舎くしゃに云く「識まさしとは正く生を結する蘊おんなり」文、正く母の腹の中に入る時の五蘊おんなり、五蘊おんとは色・受・想・行・識またごおんなり亦五陰とも云うなり、四には名色みょうしき・俱舎くしゃに云く「六処いわの前は名色みょうしきなり」文、五には六処・俱舎くしゃに云く「眼等の根を生ずるより三和の前は六処なり」文、六処とは眼・耳鼻・舌・身・意の六根ろっこんしゅつたい出来するを云うなり、六には触そく・俱舎くしゃに云く「三受の因ことの異なるに於おいて未いまだ了り了り知りせざるを触なずと名く」文、火は熱しとも知らず水は寒しとも知

らず刀は人を切る物とも知らざる時なり、七には受・俱舎ぐしゃに云く「婬愛いんあいの前まえに在るは受なり」文、寒熱かんねつを知つて未だ婬欲いんよくを發おこさざる時なり、八には愛・俱舎ぐしゃに云く「資具しぐと婬とを貪むさぼるは愛なり」文、女人にょにんを愛して婬欲いんよく等を發おこすを云うなり、九には取・俱舎ぐしゃに云く「諸もろもろの境界きょうがいを得んが為ために☆く馳求なずするを取と名く」文、今世こんぜに有る時世間せけんを営たにんみて他人の物を貪むさぼり取る時を云うなり、十には有・俱舎ぐしゃに云く「有いは謂まく正よしく能とうく当有ひの果を牽く業を造る」文、未来みらい又此こくの如ごとく生を受く可べき業を造るを有とは云うなり、十一には生・俱舎ぐしゃに云く「当そのの有を結するを生と名く」文、未来みらいに正まさく生を受けて母の腹に入る時を云うなり、十二には老死・俱舎ぐしゃに云く「当そのの受いたに至るまでは老死なり」文、生老死を受くるを老死憂悲苦惱ろうしゆうひくのうとは云うなり。問う十二因縁いんねんを三世兩重さんぜふんべつに分別する方如何いかん、答う無明むみょうと行とは過去かこの二因みようしきなり識しと名色なうしきと六入と触と受とは現在げんざいの五果なり愛と取と有とは現在げんざいの

三因なり生と老死とは未来の両果なり、私の略頌に云く過去の二因無明行
現在の五果識名色六入触受現在の三因愛取有未来の両果生老死と、問う十二因縁
流轉の次第如何、答う無明は行に縁たり行は識に縁たり識は名色に縁たり
名色は六入に縁たり六入は触に縁たり触は受に縁たり受は愛に縁たり愛は
取に縁たり取は有に縁たり有は生に縁たり生は老死憂悲苦惱に縁たり是れ
其の生死海に流轉する方なり此くの如くして凡夫とは成るなり、問う還滅
の十二因縁の様如何答う無明滅すれば則ち行滅す行滅すれば則ち識滅す
識滅すれば則ち名色滅す名色滅すれば則ち六入滅す六入滅すれば則ち
触滅す触滅すれば則ち受滅す受滅すれば則ち愛滅す愛滅すれば則ち取滅
す取滅すれば則ち有滅す有滅すれば則ち生滅す生滅すれば則ち老死憂悲
苦惱滅す、是れ其の還滅の様なり仏は還つて煩惱を失つて行く方なり私に
云く中有の人には十二因縁具に之無し又天上にも具には之無く又無色界に

も具には之無し。
つぎは これな

一念三千理事 十如是一如相は身なり
いちねんさんぜん じゆのぜ によぜそう 可し文籤六に云く相は唯色に在り文、 によぜしやう

は心なり
玄二に云く性以て内に拠る自分 改めず文籤六に云く性は唯心に在り文、 によぜたい

如是力は身と心となり
止に云く力は堪 忍を用となす文如是作は身と心となり 止に云く建立 によぜいん

は心なり
因と為す亦名けて業となす文、 によぜえん 如是縁止に云く縁は縁業を助くるに由る文、 によぜか

果は剋獲を果と為す文、 如是報因を報と曰う文、 如是本末究竟等為し後ちの報を末と為す文、
な によぜほう 止に云く報は酬 によぜほんまつきやう 玄二に云く初めの相を本と

三種世間とは五陰世間に五陰世間と名くるなり文、 衆生世間を得る故に 衆生世間
せけん ごおんせけん せけん なす によぜほんまつきやう しゅじやうせけん しゅじやうせけん

と名くるなり文、 国土世間じて国土世間と称す文、 五陰とは新訳には五蘊と云うな
なす ごくどせけん ごくどせけん 称す文、 ごおん しんやく おん

り陰とは聚集の義なり一に色陰・五色是なり・二に受陰・領納是なり・
じゆしやう ぐしや いわ 一に色陰・五色是なり・二に受陰・領納是なり・

三に相陰・俱舍に云く想は像を取るを体と為すと文・四に行陰・造作是行
ぐしや いわ 三に相陰・俱舍に云く想は像を取るを体と為すと文・四に行陰・造作是行

なり・五に識陰・了別是れ識なり止の五に婆沙を引いて云く識・先ず了別
こ 了別是れ識なり止の五に婆沙を引いて云く識・先ず了別

し次に受は領納し・相は相貌を取り・行は違従を起し・色は行に由つて
りやうのう そうみやう いじゆう 由つて

- 895 -

文、又云く「妙境の一念三千を明さずんば如何ぞ一に一切を摂ることを
識る可けん、三千は一念の無明を出でず是の故に唯苦因苦果のみ有り」文、
又云く「一切の諸業十界・百界・千如・三千世間を出でざるなり」文、籤の
二に云く「仮は即ち衆生・実は即ち五陰及び国土・即ち三世間なり千の法
は皆三なり故に三千有り」文、弘の五に云く「一念の心に於て十界に約せ
ざれば事を収むること☆からず三諦に約せざれば理を摂ること周からず十
如を語らざれば因果備わらず三世間無んば依正尽きず」文、記の一に云く
「若三千に非ざれば摂ること・からず若し円心に非ざれば三千を摂せず」
文、玄の二に云く「但衆生法は太だ広く仏法は太だ高し初学に於て難と
為し心は則ち易しと為す」文、弘の五に云く「初に華嚴を引くことは心の
工なる画師の如く種種の五陰を造る一切世界の中に法として造らざること
無し、心の如く仏も亦爾なり仏の如く衆生も然なり心仏及び衆生是の三

差別さべつ無しも若もし人さん三世一切さんぜいっさいの仏ほとけを求め知らんと欲ほつせば当まさに是かくくの如ごとく観かんずべ

し心こころは諸もろもろの如來にょらいを造つくる」と、金☆論こんべいろんに云いく「実相じつそうは必ず諸法しよほう・諸法しよほうは必ず

十如・十如じゆっかいは必ず十界・十界じゆっかいは必ず身土しんどなり」

三身さんじんしゃく釈しやくの事こと、先まづず法身ほふしんとは大師大經だいしだいきやうを引ひいて「一切いっさいの世諦せたいは若もし如來にょらいに

於おいては即すなわち是第一義諦だいいちぎたいなり衆生顛倒しゆじやうてんどうして仏法ぶつぽうに非あらずと謂おもえり」と釈しやくせり、

然しかれば則すなわち自他じた・依正えしやう・魔界まかい・仏界ぶつかい・染淨せんじやう・因果いんがは異ことなれども悉ことごとく皆みな諸佛しよぶつ

の法身ほふしんに背そむく事に非あらざれば善星比丘ぜんしやうびくが不信ふしんなりしも楞伽王りやうがの信心しんじんに同おなじく

般若蜜外道はんによが意いの邪見じやくけんなりしも須達長者すだつちやうじゃが正見せいけんに異ちがはず、即すなわち知しんぬ此この

法身ほふしんの本ほんは衆生しゆじやうの当体とうたいなり、十方諸佛じゆつぱうしよぶつの行願ぎやうがんは實じつに法身ほふしんを証しるするなり、

次に報身ほうしんとは大師だいしの云いく「法如如ほふにじつの智如如しにじつ眞實しんじつの道みちに乗のりじ來きつて妙覺みやうかくを

成じやうず智如しにじつの理りに称かなう理りに従したがつて如にと名なけ智ちに従したがつて來きと名なく即すなわち報身ほうしん如來にょらい

なり盧舍那るしやなと名なけ此こには淨滿じやうまんと翻はんず」と釈しやくせり、此これは如如法性ほふしやうの智ち・如

如^{しんじつ}真^{しん}実^{じつ}の道^{みち}に乗^{のり}じて妙^{みょう}覺^{かく}究^く竟^{きやう}の理^り智^ち・法^{ほつ}界^{かい}と冥^{めい}合^がしたる時^{とき}・理^りを如^{ごと}と名^なく智^ちは来^きなり。

◆五五 十^{じゆ}如^{のぜ}是^ぜ事^じ 正^{しやう}嘉^か二^に年^{ねん} 三^{さん}十^{じゅう}七^{しち}歳^{さい}御^ご作^{さく} 四^し一^{いつ}〇^{まる}頁^{ぺい}

我^{われ}が身^みが三^{さん}身^{じん}即^{そく}一^{いつ}の本^{ほん}覺^{かく}の如^{ごと}来^きにてありける事^{こと}を今^{こん}經^{きやう}に説^いいて云^いく
に^よぜ^ぜそ^う 如^{ごと}是^ぜ性^{じやう}・如^{ごと}是^ぜ体^{たい}・如^{ごと}是^ぜ力^{りき}・如^{ごと}是^ぜ作^{さく}・如^{ごと}是^ぜ因^{いん}・如^{ごと}是^ぜ縁^{えん}・如^{ごと}是^ぜ果^{くわ}・
に^よぜ^ぜほ^うう 如^{ごと}是^ぜ報^{ほう}・如^{ごと}是^ぜ本^{ほん}末^{まつ}究^く竟^{きやう}等^{とう}文^{ぶん}、初^{はつ}め^めに如^{ごと}是^ぜ相^{さう}とは我^{われ}が身^みの色^{しき}形^{けい}に顕^{あらわ}れたる相^{さう}
を云^いうなり是^{これ}を応^{おう}身^{じん}如^{ごと}来^きとも又^{また}は解^げ脱^{だつ}とも又^{また}は仮^け諦^{たい}とも云^いうなり、次^{つぎ}に
如^{ごと}是^ぜ性^{じやう}とは我^{われ}が心^{しん}性^{じやう}を云^いうなり是^{これ}を報^{ほう}身^{しん}如^{ごと}来^きとも又^{また}は般^{はん}若^{にや}とも又^{また}は空^{くう}諦^{たい}と
も云^いうなり、三^{さん}に如^{ごと}是^ぜ体^{たい}とは我^{われ}が此^この身^み体^{たい}なり是^{これ}を法^{ほつ}身^{しん}如^{ごと}来^きとも又^{また}は中^{ちゆう}道^{どう}
とも法^{ほつ}性^{じやう}とも寂^{じやく}滅^{めつ}とも云^いうなり、されば此^この三^{さん}如^{ごと}是^ぜを三^{さん}身^{じん}如^{ごと}来^きとは云^いう
なり此^この三^{さん}如^{ごと}是^ぜが三^{さん}身^{じん}如^{ごと}来^きにて・おはしましけるを・よそに思^{おも}ひへだてつ
るがはや我^{われ}が身^みの上^{うへ}にてありけるなり、かく知^しりぬるを法^{ほつ}華^け經^{きやう}をさとれる

人とは申すなり此の三如是を本として是よりのこりの七つの如是はいでて
十如是とは成りたるなり、此の十如是が百界にも千如にも三千世間にも成
りたるなり、かくの如く多くの法門と成りて八万法蔵と云はるれどもすべ
て只一つの三諦の法にて三諦より外には法門なき事なり、其の故は百界と
云うは仮諦なり千如と云うは空諦なり三千と云うは中諦なり空と仮と中と
を三諦と云う事なれば百界・千如・三千世間まで多くの法門と成りたりと
云へども唯一つの三諦にてある事なり、されば始の三如是の三諦と終の七
如是の三諦とは唯一つの三諦にて始と終と我が一身の中の理にて唯一物に
て不可思議なりければ本と末とは究竟して等しとは説き給へるなり、是を
如是本末究竟等とは申したるなり、始の三如是を本とし終の七如是を末と
して十の如是にてあるは我が身の中の三諦にてあるなり、此の三諦を三身
如来とも云へば我が心身より外には善悪に付けてかみすぢ計りの法もなき

物をされば我が身が頓やがて三身即一の本覺ほんがくの如来にょらいにてはありける事なり、是これを
よそに思うを衆生しゅじょうとも迷まよいとも凡夫ほんぶとも云うなり、是これを我が身の上と知
りぬるを如来にょらいとも覺さとりとも聖人しょうにんとも智者ちしやとも云うなり、かう解さとり明あきらかに觀
ずれば此の身頓やがて今生こんじょうの中に本覺ほんがくの如来にょらいを顯ひはして即身成仏そくしんじょうぶつとはいはる
るなり、譬たとえば春夏しゅんか・田を作りうへつれば秋冬しゅうとうは蔵おさに収めて心のままに用
うるが如ごとし春より秋をまつ程は久しき様なれども一年の内に待ち得るが
如ごとく此の覺さとりに入つて仏を顯ひはす程は久しき様なれども一生の内に顯ひはして
我が身が三身即一の仏となりぬるなり。

此の道に入ぬる人にも上中下の三根はあれども同じく一生の内に顯ひはす
なり、上根じやうこんの人は聞きく所ところにて覺さとを極きまめて顯ひはす、中根ちゅうこんの人は若もしは一日・
若もしは一月・若もしは一年に顯ひはすなり、下根げこんの人はのびゆく所ところなくてつまりぬ
れば一生の内に限りたる事なれば臨終りんじゅうの時ときに至いたりて諸もろもろのみえつる夢も覺さとりて

うつつになりぬるが如く（ごと）只今（ただ）までみつる所の生死妄想の邪思ひがめの理は
あと形もなくなりて本覺（ほんがく）のうつつの覺（さと）にかへりて法界をみれば皆寂光の
極樂（ごくらく）にて日來賤（ひごろいやし）と思ひし我が此の身が三身即一の本覺（ほんがく）の如來（によらい）にてあるべき
なり、秋のいねには早（わせ）と中と晩（おく）との三のいね有（あれ）れども一年が内に収（おさ）むるが
如く、此れも上中下の差別ある人なれども同じく一生の内に諸（しよぶつ）仏如來と一
体不二に思い合せてあるべき事なり。

妙法蓮華經の体のいみじくおはしますは何様（いかよう）なる体にて・おはしますぞ

と尋（たず）ね出してみれば我が心性（しんしよ）の八葉（はちよう）の白蓮華（びやくれんげ）にてありける事なり、されば

我が身の体性を妙法蓮華經（みようほうれんげきよう）とは申しける事なれば經の名にてはあらずして

・はや我が身の体にてありけると知りぬれば我が身頓（やが）て法華經（ほけきよう）にて法華經（ほけきよう）

は我が身の体をよび顯（あらわ）し給（たま）いける仏の御言（みことば）にてこそありければやがて我が

身三身即一の本覺（ほんがく）の如來（によらい）にてあるものなり、かく覺（さと）ぬれば無始（むし）より已來（このかた）今

まで思いならわしし・ひが思いの妄想は昨日の夢を思いやるが如く・あと
かたもなく成りぬる事なり、是を信じて一遍も南無妙法蓮華經と申せば
法華經を覺て如法に一部をよみ奉るにてあるなり、十遍は十部・百遍は百
部・千遍は千部を如法によみ奉るにてあるべきなり、かく信ずるを
如説修行の人とは申すなり、南無妙法蓮華經。

◆五七 一念三千法門

いちねんさんぜんほうもん

正嘉二年 三十七歳御作 412P

ほけきよう よきよう

すぐ

法華經の余經に勝れたる事何事ぞ此の經に一心三觀・一念三千と云う事

なにごと

いっしんさんかん

いちねんさんぜん

さ

あり、薬王菩薩・漢土に出世して天台大師と云われ此の法門を覺り給いし

やくおうぼさつ

かんど

しゅつせ

てんだいだいし

ほうもん

さ

たま

かども先ず玄義十卷・文句十卷・覺意三昧・小止觀・浄名疏・四念処・

げんぎ

もんく

かくいさんまい

しかん

じようみようじよ

ねんじよ

次第禪門等の多くの法門を説きしかども此の一念三千の法門をば談じ給は

しだいぜんもん

ほうもん

と

いちねんさんぜん

ほうもん

たま

ず百界・千如の法門計りなり、御年五十七の夏四月の比・荊州玉泉寺と

ひゃつかい・せんじよ

ほうもんばか

ごねんごじちのげし

けいしゅうぎよくせんじ

申す処にて御弟子章安大師に教え給ふ止觀と申す文十卷あり、上四帖に猶

もう

ところ

おんでししうあんだいし

たま

しかん

もう

なお

秘し給いて但六即四種三昧等計りなり、五の巻に至つて十境・十乘・
いちねんさんぜん ほうもん 一心三千の法門を立て夫れ一心に具す等と云云是より二百年後に妙樂大師
しゃく いわ 釈して云く「当に知るべし身土一念の三千なり故に成道の時・此の本理に
かなつ いちねんほっかい へん 称て一身一念法界に遍し」と云云、此の一念三千・一心三觀の法門は法華經
の一の巻の十如是より起れり、文の心は百界・千如・三千世間云云、さて
いっしんさんかん もう 一心三觀と申すは余宗は如是とあそばす是れ僻事にて二義かけたり天台・
なんがく おんぎ 南岳の御義を知らざる故なり、されば当宗には天台の所釈の如く三遍読に
くどく 功德まさる、第一に是相如と相性体力以下の十を如と云ふ如と云うは空の
ゆえ 義なるが故に十法界皆空諦なり是を読み觀する時は我が身即・報身如来な
はちまん はんによ 八万四千又は般若とも申す、第二に如是相是れ我が身の色形顯れたる相
こ みな なり是れ皆仮なり相性体力以下の十なれば十法界皆仮諦と申して仮の義な
これ り是を読み觀する時は我が身即・応身如来なり又は解脱とも申す、第三に

相如是と云うは中道と申して仏の法身の形なり是を読み観ずる時は我が身
即・法身如来なり又は中道とも法性とも涅槃とも寂滅とも申す、此の三
を法報応の三身とも空仮中の三諦とも法身・般若・解脱の三徳とも申す此
の三身如来全く外になし我が身即・三徳究竟の体にて三身即一身の本覺の
仏なり、是をしるを如来とも聖人とも悟とも云う知らざるを凡夫とも衆生
とも迷とも申す。

十界の衆生・各互に十界を具足す合すれば百界なり百界に各各十如を
具すれば千如なり、此の千如是に衆生世間・国土世間・五陰世間を具すれ
ば三千なり、百界と顯れたる色相は皆総て仮の義なれば仮諦の一なり千如
は総て空の義なれば空諦の一なり三千世間は総じて法身の義なれば中道の
一なり、法門多しと雖も但三諦なり此の三諦を三身如来とも三徳究竟とも
申すなり始の三如是は本覺の如来なり、終の七如是と一体にして無二無別

なれば本末究竟等とは申すなり、本と申すは仏性・末と申すは未顕の仏・
九界の名なり究竟等と申すは妙覚究竟の如来と理即の凡夫なる我等と差別
無きを究竟等とも平等大慧の法華經とも申すなり、始の三如是は本覺の如来
なり本覺の如来を悟り出し給へる妙覺の仏なれば我等は妙覺の父母なり
仏は我等が所生の子なり、止の一に云く「止は則 仏の母・觀は即 仏の父
なり」と云云、譬えば人十人あらんずるが面面に蔵蔵に宝をつみ我が蔵に
宝のある事を知らずかつへ死しこごへ死す、或は一人・此の中にかしこ
き人ありて悟り出すが如し九人は終に知らず、然るに・或は教えられて食
し・或はくくめられて食するが如し、弘の一の止觀の二字は正しく閻体を
示す聞かざる者は本末究竟等も徒らか、子なれども親にまさる事多し重華
はかたくなはしき父を敬いて賢人の名を得たり、沛公は帝王と成つて後も
其の父を拜す其の敬われし父をば全く王といはず敬いし子をば王と仰ぐが

如し、其れ仏は子なれども賢くましまして悟り出し給へり、凡夫は親なれども愚癡にして未だ悟らず委しき義を知らざる人・毘盧の頂上をふむな
んと悪口す大なる僻事なり。

一心三觀に付いて次第の三觀・不次第の三觀と云う事あり委く申すに
及ばず候、此の三觀を心得すまし成就したる処を華嚴經に三界唯一心と

云云、天台は諸水入海とのぶ、仏と我等と総て一切衆生・理性一にて・へ
だてなきを平等大慧と云うなり、平等と書いてはおしなべてと読む、此の

一心三觀・一念三千の法門・諸經にたえて之無し法華經に遇わざれば争か
成仏す可きや、余經には六界八界より十界を明せどもさらに具を明かさ
ず、法華經は念念に一心三觀・一念三千の謂を觀ずれば我が身本覺の如來

なること悟り出され無明の雲晴れて法性の月明かに妄想の夢醒て本覺の月
輪いさぎよく父母所生の肉身・煩惱具縛の身・即本有常住の如來となる

べし、此を即身成仏とも煩惱即菩提とも生死即涅槃とも申す、此の時法界
を照し見れば悉く中道の一理にて仏も衆生も一なり、されば天台の所釈
に「一色一香中道に非ざることを無し」と釈し給へり、此の時は十方世界
皆寂光淨土にて何れの處をか弥陀薬師等の淨土とは云わん、是を以て
法華經に「是の法は法位に住して世間の相常住なり」と説き給ふさては
經をよまずとも心地の觀念計りにて成仏す可きかと思いたれば一念三千の
觀念も一心三觀の觀法も妙法蓮華經の五字に納れり、妙法蓮華經の五字
は又我等が一心に納りて候けり、天台の所釈に「此の妙法蓮華經は本地
甚深の奥蔵三世の如来の証得したもう所なり」と釈したり、さて此の
妙法蓮華經を唱うる時心中の本覺の仏顕る我等が身と心をば蔵に譬へ妙
の一字を印に譬へたり、天台の御釈に「秘密の奥蔵を發く之を稱して妙と
為す・權実の正軌を示す故に号して法と為す、久遠の本果を指す之を喩う

るに蓮を以てす、不二の円道に会す之を譬うるに華を以てす、声仏事を
為す之を称して経と為す」と釈し給う、又「妙とは不可思議の法を褒美す
るなり又妙とは十界・十如・権実の法なり」と云云、経の題目を唱うると
觀念と一なる事心得がたしと愚癡の人は思い給ふべし、されども天台止の
二に而於説黙と云へり、説とは経・黙とは觀念なり、又四教義の一に云く
「但功の唐捐ならざるのみに非ず亦能く理に契うの要なるをや」と云云、
天台大師と申すは薬王菩薩なり此の大師の説而觀而と釈し給ふ元より天台
の所釈に因縁・約教・本・迹・觀心の四種の御釈あり四種の重を知らず
して一しなを見たる人・一向本・迹をむねとし一向觀心を面とす、法華經
に法譬因縁と云う事あり法説の段に至つて諸仏出世の本懷・一切衆生・
成仏の直道と定む、我のみならず一切衆生・直至道場の因縁なりと定め
給ひしは題目なり、されば天台玄の一に「衆善の小行を会して広大の一乗

に歸す」と廣大と申すは残らず引導し給うを申すなり、たといしゃくそん 仮使釈尊一人本懷ほんかいと宣のべべ給うとも等覺以下は仰いで此の經を信ず可べし況や諸仏出世の本懷ほんかいなり、ぜんしゅう 禪宗は觀心を本懷と仰ぐとあれども其は四種の一面なり、一念三千・かんじん 一心三觀等の觀心計りが法華經の肝心なるべくば題目に十如是を置くべきところだいもく だにもく みょうほうれんげきょう 妙法蓮華經と置かれたる上は子細に及ばず、又当世の禪宗は教外別伝と云い給うかと思へば又捨られたる円覺經等の文を引かるる上はきょうげべつでん じつきよう 実經の文に於て御綺に及ぶべからず候、智者は読誦に觀念をも並べしおい おいろえ 愚者は題目計りを唱ふとも此の理に會う可べし、此の妙法蓮華經とは我等がしんしよ 心性・総じては一切衆生の心性八葉の白蓮華の名なり是を教え給ふ仏の御ことば 詞なり、無始より以来・我が身中の心性に迷て生死を流転せし身今・此あ の經に値ひ奉つて三身即一の本覺の如来を唱うるに顕れて現世に其内証たてまつ 成仏するを即身成仏と申す、死すれば光を放つ是れ外用の成仏と申す

来世得作仏とは是なり、略拳経題・玄収一部とて一遍は一部云云、

妙法蓮華經と唱うる時心性の如来顕る耳にふれし類は無量阿僧祇劫の罪

を滅す一念も随喜する時即身成仏す縦ひ信ぜざれども種と成り熟と成り必

ず之に依て成仏す、妙樂大師の云く「若は取・若は捨・耳に經て縁と成

る、或いは順・或いは違終いに斯れに因つて脱す」と云云、日蓮云く若取

・若捨・或順・或違の文肝に銘ずる詞なり法華經に若有聞法者等と

説れたるは是か、既に聞く者と説れたり観念計りにて成仏すべくば若有

觀法者と説かるべし、只天台の御料簡に十如是と云うは十界なり此の

十界は一念より事起り十界の衆生は出来たりけり、此の十如是と云は

妙法蓮華經にて有けり此の娑婆世界は耳根得道の国なり以前に申す如く当

知身土と云云、一切衆生の身に百界・千如・三千世間を納むる謂を明が

故に是を耳に触るる一切衆生は功德を得る衆生なり、一切衆生と申すは

そうもく がりやく いっさいしゅじょう

草木・瓦礫も一切衆生の内なるか、有情、抑草木は何ぞ金☆論に云く「一

草一木・一礫一塵・各一仏性・各一因果・具足縁了」等と云云、法師品

の始に云く「無量の諸天・竜王・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦楼羅・緊那羅

・摩羅伽・人と非人と及び比丘・比丘尼、妙法蓮華經の一偈・一句を聞い

て乃至一念も随喜せん者は我皆阿耨多羅三藐三菩提の記を与え授く」と云

云、非人とは総じて人界の外一切有情界とて心あるものなり況や人界をや、

法華經の行者は如説修行せば必ず一生の中に一人も残らず成仏す可し、

譬えば春夏田を作るに早晚あれども一年の中には必ず之を納む、法華の

行者も上中下根あれども必ず一生の中に証得す、玄の一に云く「上中

下根皆記☆を与う」と云云、観心計りにて成仏せんと思ふ人は一方かけた

る人なり、況や教外別伝の坐禪をや、法師品に云く「薬王多く人有て在家

出家の菩薩の道を行ぜんに若し是の法華經を見聞し読誦し書持し供養す

ること得ること能あたわずんば当まさに知るべし是この人は未いまだ善ほさつく菩薩ぼさつの道を行ぜ
ず、若もし是この經典きょうてんを聞くこと得ること有らば乃すなわち能善菩薩ほさつの道を行ずるな
り」と云云、觀心計りにて成仏じょうぶつすべくんば争いかでか見聞誦誦と云わんや、此の
經は専ら聞を以て本と為す凡此の經は惡人・女人・二乘・闡提を簡えらばず
ゆえ かいじょうぶつどう
故に皆成仏道とも云ひ又平等大慧とも云う、善惡不二・邪正一如と聞く
ところ
処にやがて内証成仏ゆえす故に即身成仏と申し一生に証得するが故に一生
みょうかく
妙覺と云ふ、義を知らざる人なれども唱ふれば唯仏と仏と悦よろこび給ふ我即そく
歡喜・諸仏亦然云云、百千合せたる藥も口にのまざれば病愈いえず蔵に宝を
持ども開く事をしらずしてかつへ懷に藥たもを持ても飲まん事をしらずして死
するが如し、如意宝珠と云う玉は五百弟子品の此の經の徳も又此かくの如し、
觀心かんじんを並べて読めば申すに及およばず觀念かんねんせずと雖も始に申しつることく所謂
しょうほうによぜそう
諸法如是相如云云と読む時は如は空の義なれば我が身の先業せんごうにうくる所の

相性体力其の具する所の八十八使の見惑・八十一品の思惑・其の空は報身
に依つて受けたる相性体力云云其の具したる塵沙の惑悉く即身応身如来な
り、所謂諸法如是と読む時は是れ中道の義に順じて業に依つて受くる所の
相性等云云、其に随いたる無明皆退いて即身法身の如来と心を開く、此の
十如是・三転によまる事・三身即一身・一身即三身の義なり三に分るれ
ども一なり一に定まれども三なり。

◆五八 十法界事 元年 三十八歳御作 417P

二乗三界を出でざれば即ち十法界の数量を失う云云、問う十界互具を知
らざらん者六道流転の分段の生死を出離して変易の土に生ず可きや、答う
二乗は既に見思を断じ三界の生因無し底に由つてか界内の土に生る事を得
ん是の故に二乗永く六道に生ぜず、故に玄の第二に云く「夫れ変易に生る

すなわに則ち三種有り三蔵の二乗・通教の三乗・別教の三十心」已上此の如き
等の人は皆迷惑を断じ變易の土に生ずることを得て界内分段の不浄の国土
に生ぜず。

難じて云く小乗の教は但是れ心生の六道を談じて是れ心具の六界を
談ずるに非ず、是の故に二乗は六界を顕さず心具を談ぜず云何ぞ但六界の
見思を断じて六道を出ず可きや、故に寿命品に云える一切世間・天人・
阿修羅とは爾前・迹門・兩教の二乗・三教の菩薩並に五時の円人を皆天人
・修羅と云う豈に未断見思の人と云うに非ずや、答う十界互具とは法華の
淵底此の宗の冲微なり四十余年の諸経の中には之を秘して伝えず、但し
四十余年の諸の経教の中に無数の凡夫見思を断じて無漏の果を得能く二
種の涅槃の無為を証し塵数の菩薩・通別の惑を断じ頓に二種の生死の縛を
超ゆ、無量義経の中に四十余年の諸経を挙げて未顕真実と説くと雖も而も

なおにぜん さんじょう

猶爾前・三乗の益を許す、法華の中に於て正直捨方便と説くと雖も尚

けんしよぼさつじゆきさぶつ

見諸菩薩授記作仏と説く此くの如き等の文爾前の説に於て当分の益を許す

あら ただ にぜん しよきよう

に非ずや、但し爾前の諸經に二事を説かず謂く実の円仏無く又久遠実成

を説かず故に等覺の菩薩に至るまで近成を執する思い有り此の一辺に於て

天人と同じく能迷の門を挙げ生死煩惱・一時に断壊することを証せず故に

ただみけんしんじつ

唯未顕真実と説けり、六界の互具を明さざるが故に出ず可からずとは此の

なんはなはだ

難甚だ不可なり、六界互具せば即ち十界互具す可し何となれば権果の心

生とは六凡の差別なり心生を觀するに何ぞ四聖の高下無からんや。

第三重の難に云く

所立の義誠に道理有るに似たり委く一代聖教の前後

を☆うるに法華本門並に觀心の智慧を起さざれば円仏と成らず、故に実の

ぼんぶ ごんか

凡夫にして権果だも得ず所以に彼の外道五天竺に出でて四顛倒を立つ、

如来出世して四顛倒を破せんが為に苦・空等を説く此れ則ち外道の迷情を

によらいしゅつせ

如来出世して四顛倒を破せんが為に苦・空等を説く此れ則ち外道の迷情を

てんどう

如来出世して四顛倒を破せんが為に苦・空等を説く此れ則ち外道の迷情を

てんどう

破せんが為なり、是の故に外道の我見を破して無我到住するは火を捨てて
もつたがごとく以て水に随うが如し堅く無我を執して見思を断じ六道を出ずると謂えり、
こまよいこんぼんゆえしきしん此れ迷の根本なり故に色心俱滅の見到住す大集等の経経に断常の二見
と説くは是れなり、例せば有漏外道の自らは得道すと念えども無漏智に望
むれば未だ三界を出でざるが如し、仏教に値わずして三界を出ずるといわ
ば是の処有ること無し小乗の二乗も亦復是くの如し、鹿苑施小の時外道
の我を離れて無我到住す此の情を改めずして四十余年草庵に止宿する
の思い暫くも離るる時無し、又大乗の菩薩に於て心生の十界を談ずと
いえどしかしんぐじゅっかい雖も而も心具の十界を論ぜず、又・或る時は九界の色心を断尽して仏界の
一理に進む是の故に自ら念わく三惑を断尽して変易の生を離れ寂光に生
るべしと、然るに九界を滅すれば是れ則ち断見なり進んで仏界に昇れば即ち
常見と為す九界の色心の常住を滅すと欲うは豈に九法界に迷惑するに

あらずや、又妙楽大師の云く「但し心を観ずと言わば則ち理に称わす」文、此の釈の意は小乗の観心は小乗の理に称わざるのみ、又天台の文句第九に云く「七方便並に究竟の滅に非ず」已上、此の釈は是れ爾前の前三教の菩薩も実には不成仏と云えるなり、但し未顕真実と説くと雖も三乗の得道を許し正直捨方便と説くと雖も而も見諸菩薩授記作仏と云うは、天台宗に於て三種の教相有り第二の化導の始終の時過去の世に於て法華結縁の輩有り爾前の中に於て且らく法華の為に三乗当分の得道を許すいわゆるしゆじゆくだつ所謂種熟脱の中の熟益の位なり是は尚迹門の説なり、本門観心の時は是れ実義に非ず一往許すのみ、其の実義を論ずれば如来久遠の本に迷い一念三千を知らざれば永く六道の流転を出す可からず、故に釈に云く「円乗の外を名けて外道と為す」文、又「諸善男子・樂於小法・徳薄垢重者」と説く若し爾れば経釈共に道理必然なり、答う執難有りと雖も其の

義不可なり、所以は如来の説教は機に備りて虚からず是を以て頓等の四教蔵等の四教八機の為に設くる所にして得益無きに非ず、故に無量義経には「是の故に衆生の得道差別あり」と説く、誠に知んぬ「終に無上菩提を成ずることを得ず」と説くと雖も而も三法・四果の益無きに非ず、但是れ速疾頓成と歴劫迂回との異なるのみ、是れ一向に得道無きに非ざるなり、是の故に・或は三明六通も有り・或は普現色身の菩薩も有り縦い一心三觀を修して以て同体の三惑を断ぜずとも既に析智を以て見思を断ず何ぞ二十有五有を出でざらん、是の故に解釈に云く「若し衆生に遇うて小乗を修せしめば我則ち慳貪に墮せん此の事不可なりとして祇二十五有を出す」已上、当に知るべし此の事不可と説くと雖も而も出界有り但是れ不思議の空を觀ぜざるが故に不思議の空智を顯さずと雖も何ぞ小分の空解を起さざらん、若し空智を以て見思を断ぜずと云わば開善の無声聞の義に同ずるに非ず

や、況や今の経は正直捨権・純円一実の説なり諸の爾前の声聞の得益を
挙げて「諸漏已に尽きて復煩惱無し」と説き又「実に阿羅漢を得・此の法
を信ぜず是の処有ること無し」と云い又「三百由旬を過ぎて一城を化作
す」と説く、若し諸の声聞全く凡夫に同ぜば五百由旬一步も行可から
ず。

又云く「自ら所得の功德に於て滅度の想を生じて当に涅槃に入るべし、
我余国に於て作仏して更に異名有らん是の人滅度の想を生じて涅槃に入る
と雖も而も彼の土に於て仏の智慧を求めて是の経を聞くことを得ん」已上、
此の文既に証果の羅漢・法華の座に来らずして無余涅槃に入り方便土に生
じて法華を説くを聞くと見えたり、若し爾らば既に方便土に生じて何んぞ
見思を断ぜざらん是の故に天台・妙楽も「彼土得聞」と釈す、又爾前の菩薩
に於て「始めて我が身を見我が所説を聞いて即ち皆信受し如来慧に入り

き」と説く、故に知んぬ爾前の諸の菩薩三惑を断除して仏慧に入ること、
故に解釈に云く「初後の仏慧円頓の義齊し」已上。

・或は云く「故に始終を挙ぐるに意・仏慧に在り」と若し此等の説相
きようしゃく

経釈 共に非義ならば正直捨權の説・唯以一大事の文・妙法華経・

皆是真実の証 誠皆以て無益なり 皆是真実の言は豈一部八巻に亘るに非ず

や、釈迦・多宝・十方分身の舌相・至梵天の神力・三世諸仏の誠諦・不

虚の証 誠・空く泡沫に同ぜん、但し小乗の断常の二見に至つては且く

大乘に對して小乗を以て外道に同ず小益無きに非ざるなり、又七方便並

に究竟の滅に非ざるの釈・或は復但し心を觀ずと言わば則ち理に称わずと

は又是れ円実の大益に對して七方便の益を下して並に非究竟滅・即不称理

と釈するなり。

第四重の難に云く法華本門の觀心の意を以て一代聖教を按ずるに

菴羅果を取つて掌中に捧ぐるが如し、所以は何ん迹門の大教起れば爾前
の大教亡じ・本門の大教起れば迹門・爾前亡じ・觀心の大教起れば本・迹
爾前共に亡ず此れは是れ如来所説の聖教・從淺至深して次第に迷を転ず
るなり、然れども如来の説は一人の爲にせず此の大道を説きて迷情除かざ
れば生死出で難し、若し爾前の中に八教有りとは頓は則ち華嚴・漸は則ち
三昧・秘密と不定とは前四昧に亘る・藏は則ち阿含・方等に亘る・通は
是れ方等・般若・円・別は是れ則ち前四昧の中に鹿苑の説を除く、此くの
如く八機各不同なれば教説も亦異なり四教の教主亦是れ不同なれば当教
の機根余仏を知らず、故に解釈に云く「各各仏独り其の前に在すと見る」
已上。

人天の五戒・十善・二乗の四諦・十二・菩薩の六度・三祇・百劫・或
は動逾塵劫・或は無量阿僧祇劫・円教の菩薩の初發心時・便成正覺・

明かに知んぬ機根別なるが故に説教亦別なり、教別なるが故に行も亦別なり行別なるが故に得果も別なり此れ即ち各別の得益にして不同なり。

然るに今法華方便品に「衆生をして仏知見を開かしめんと欲す」と説き

給う爾の時八機並に悪趣の衆生悉く皆同じく釈迦如来と成り互に五眼を具

し一界に十界を具し十界に百界を具せり、是の時・爾前の諸経を思惟す

るに諸経の諸仏は自界の二乗を二乗も又菩薩界を具せず三界の人天の如き

は成仏の望絶えて二乗・菩薩の断惑即ち是れ自身の断惑なりと知らず、

三乗四乗の智慧は四悪趣を脱るるに似たりと雖も互に界界を隔つ而も皆

是れ一体なり、昔の経は二乗は但自界の見思を断除すると思つて六界の見思

を断ずることを知らず菩薩も亦是くの如し自界の三惑を断尽せんと欲すと

雖も六界二乗の三惑を断ずることを知らず、真実に証する時は一衆生即十

衆生・十衆生即一衆生なり、若し六界の見思を断ぜざれば二乗の見思を

断ず可からず是くの如く説くと雖も迹門は但九界の情を改め十界互具を明
す故に即ち円仏と成るなり、爾前当分の益を嫌うこと無きが故に「三界の
諸漏已に尽き三百由旬を過ぎて始めて我身を見る」と説けり又爾前入滅
の二乗は実には見思を断ぜず故に六界を出でずと雖も迹門は二乗作仏が
本懷なり故に「彼の土に於いて是の経を聞くことを得」と説く、既に「彼
の土に聞くことを得」と云う故に知んぬ爾前の諸経には方便土無し故に実
には実報並に常寂光も無し、菩薩の成仏を明す故に実報・寂光を仮立
す然れども菩薩に二乗を具す二乗成仏せずんば菩薩も成仏す可からざる
なり、衆生無辺誓願度も満せず二乗の沈空尽滅は即ち是れ菩薩の沈空尽滅
なり凡夫六道を出でざれば二乗も六道を出ず可からず、尚下劣の方便土を
明さず況や勝れたる実報・寂光を明さんや、実に見思を断ぜば何ぞ方便を
明さざらん菩薩実実報・寂光に至らば何ぞ方便土に至ること無らん、但

断無明と云うが故に仮りに実報・寂光を立つと雖も而も上の二土無きが
故に同居の中に於て影現の実報・寂光を仮立す、然るに此の三百由旬は
實には三界を出ずること無し迹門には但是れ始覺の十界互具を説きて未だ
必ず本覺本有の十界互具を明さず故に所化の大衆能化の円仏皆是れ悉く
始覺なり、若し爾らば本無今有の失何ぞ免ることを得んや、当に知るべ
し四教の四仏則ち円仏と成るは且く迹門の所談なり是の故に無始の本仏を
知らず、故に無始無終の義欠けて具足せず又無始・色心常住の義無し
但し是の法は法位に住すと説くことは未来常住にして是れ過去常に
非ざるなり、本有の十界互具を顕さざれば本有の大乗菩薩界無きなり、
故に知んぬ迹門の二乗は未だ見思を断ぜず迹門の菩薩は未だ無明を断ぜ
ず六道の凡夫は本有の六界に住せざれば有名無実なり。

故に涌出品に至つて爾前・迹門の断無明の菩薩を「五十小劫・半日の

如しと謂えり」と説く是れ則ち寿命品の久遠円仏の非長非短・不二の義に
迷うが故なり、爾前・迹門の断惑とは外道の有漏断の退すれば起るが
如し未だ久遠を知らざるを以て惑者の本と為すなり、故に四十一品断の弥勒
・本門立行の發起・影響・当機・結縁の地涌千界の衆を知らず、既に一分
の無始の無明を断じて十界の一分の無始の法性を得れば何ぞ等覚の菩薩
を知らざらん、設い等覚の菩薩を知らざるも争でか当機・結縁の衆を知ら
ざらん乃ち不識一人の文は最も未断三惑の故か、是を以て本門に至つては
則ち爾前・迹門に於て随他意の釈を加え又天人・修羅に摂し「貪著五欲
・妄見網中・為凡夫顛倒」と説き、釈の文には「我坐道場不得・一法」と
云う蔵通両仏の見思断も別円二仏の無明断も並に皆見思無明を断ぜず故に
随他意と云う、所化の衆生三惑を断ずと謂えるは是れ実の断に非ず答の文
に開善の無声聞の義に同ずとは汝も亦光宅の有声聞の義に同ずるか、

天台は有無共に破し給うなり、開善は爾前に於て無声聞を判じ光宅は法華
に於て有聲聞を判ず故に有無共に難有り、天台は「爾前には則ち有り今經
には則ち無し所化の執情には則ち有り長者の見には則ち無し」此くの
如きの破文皆是れ爾前・迹門相對の釈にて有無共に今の難には非ざるな
り、「但し七方便並に究竟の滅に非ず又但し心を觀ずと云わば則ち理に称わ
ず」との釈は円益に對し自分の益を下して「並非究竟滅・即不称理」と云
うなりと云うは金☆論には「偏に清淨の眞如を指す尚小の眞を失えり
仏性安んぞ在らん」と云う釈をば云何が会す可き、但し此の尚失小眞の
釈は常には出だす可からず最も秘藏す可し、但し「妙法蓮華經皆是眞實」
の文を以て迹門に於て爾前の得道を許すが故に爾前得道の義有りと云うは
此れは是れ迹門を爾前に對して眞實と説くか、而も未だ久遠実成を顯さ
ず是れ則ち彼の未顕眞實の分域なり所以に無量義經に大莊嚴等の菩薩の

よんじゅうよねん とくやく あ 四十余年の得益を挙ぐるを仏の答えたもうに未顕真実の言を以てす、又
ゆじゅうぽん みろくうたがい 涌出品の中に弥勒疑 つて云く「如来太子為りし時釈の宮を出でて伽耶城
を去ること遠からず、乃至四十余年を過ぐ」已上仏答えて云く「一切世間
てんにんおよ あしゆら みな 天人及び阿修羅は皆今の釈迦牟尼仏は釈氏の宮を出で伽耶城を去ること
遠からずして三菩提を得たりと謂えり我実に成仏してより以来」已上、
がじつじょうぶつ じゅうようほん いぜん みけんしんじつ 我実成仏とは寿量品已前を未顕真実と云うに非ずや是の故に記の九に云く
「昔七方便より誠諦に至るまでは七方便の権と言うは且く昔の権に寄す
も 若し果門に対すれば権実俱に是れ随他意なり」已上、此の釈は明かに知んぬ
しゃくもん なおずいたい 迹門をも尚随他意と云うなり、寿量品の皆実不虚を天台釈して云く「円頓
しゅじょう しの衆生に約すれば迹本二門に於て一実一虚なり」已上、記の九に云く「故に
知んぬ迹の実は本に於て猶虚なり」已上、迹門既に虚なること論に及ぶ可
ただ かいぜしんじつ も らず但し皆是真実とは若し本門に望むれば迹は是れ虚なりと雖も一座の内

に於て虚実を論ず故に本・迹兩門俱に真実と言うなり、例せば迹門法説の時の譬説因縁の二周も此の一座に於て聞知せざること無し故に名けて顕と為すが如し、記の九に云く「若し方便教は二門俱に虚なり因門開し竟りて果門に望むれば則ち一実一虚なり本門顕れ竟れば則ち二種俱に実なり」已上、此の釈の意は本門未だ顕れざる以前は本門に對すれば尚迹門を以て名けて虚と為すが若し本門顕れ已りぬれば迹門の仏因は即ち本門の仏果なるが故に天月水月本有の法と成りて本・迹俱に三世常住と顯るるなり、一切衆生の始覺を名けて迹門の円因と言ひ一切衆生の本覺を名けて本門の円果と為す修一円因感一円果とは是なり、是くの如く法門を談ずるの時迹門・爾前は若し本門顕れずんば六道を出でず何ぞ九界を出でんや。

◆五九 爾前一乗菩薩不作仏事 正元元年三十八歳御作 424P

問うて云く二乗永不成仏の教に菩薩の作仏を許す可きや、答えて云く

りようがきよう

楞伽經第二に云く「大慧何者か無性乗なる、謂く一闍提なり・大慧・

いっせんたい

ねはん

一闍提とは涅槃の性無し何を以ての故に解脱の中に於て信心を生ぜず涅槃

いっせんたい

だいえい

なんら

いっさいしゅじよう

いっさいしゅじよう

いっさい

ぜんこん

に入らず、大慧一闍提とは二種あり何等をか二と為す一には一切の善根を

ぼんしよう

いっさいしゅじよう

れんみん

いっさいしゅじよう

いっさい

ぜんこん

梵焼す、二には一切衆生を憐愍して一切衆生界を尽さんとの願を作す

だいえい

いかん

いっさい

ぜんこん

ぼんしよう

いわ

ぼさつくそう

ぼう

かくのごと

かくのごと

大慧・云何が一切の善根を梵焼する謂く菩薩蔵を謗じて是くの如きの言を

な

いっさい

ぜんこん

ぼんしよう

いわ

ぼさつくそう

ぼう

かくのごと

かくのごと

作す、彼の修多羅・毘尼・解脱の説に随順するに非ず諸の善根を捨つと

な

いっさい

ぜんこん

ぼんしよう

いわ

ぼさつくそう

ぼう

かくのごと

かくのごと

是の故に涅槃を得ず、大慧・衆生を憐愍して衆生界を尽さんとの願を作す

かくのゆえ

ねはん

だいえい

しゅじよう

れんみん

しゅじよう

しゅじよう

おこ

者是を菩薩と為す、大慧菩薩は方便して願を作す若し諸の衆生の涅槃に入

これ

ぼさつ

な

だいえい

ぼさつ

ほうべん

な

も

もろもしゅじよう

ねはん

らざる者あらば我も亦涅槃に入らずと是の故に菩薩摩訶薩涅槃に入らず、

だいえい

これ

いっせんたい

ねはん

なす

こ

も

いっせんたい

けつじよう

けつじよう

大慧・是を二種の一闍提無涅槃性と名く是の義を以ての故に決定して

いっせんたい

だいえい

いっせんたい

ねはん

なす

こ

も

いっせんたい

けつじよう

けつじよう

一闍提の行を取る、大慧菩薩・仏に白して言く世尊此の二種の一闍提何等

いっせんたい

だいえい

いっせんたい

ねはん

なす

こ

も

いっせんたい

けつじよう

けつじよう

の一闍提か常に涅槃に入らざる、仏、大慧に告げたまわく菩薩摩訶薩の

いっせんたい

だいえい

いっせんたい

ねはん

なす

こ

も

いっせんたい

けつじよう

けつじよう

いっせんたい
一闡提は常に涅槃に入らず何を以ての故に能善く一切諸法本来涅槃なりと
知るを以て是の故に涅槃に入らず一切の善根を捨つる闡提には非ず、何を
以ての故に大慧彼れ一切の善根を捨つる闡提は若し諸仏・善知識等に値い
たてまつれば菩提心を發し諸の善根を生じて便ち涅槃を証す」等と云云、
此の經文に「若し諸の衆生涅槃に入らざれば我も亦涅槃に入らじ」等云
云。

ぜんしみ しよきよう
前四味の諸經に二乗作仏を許さず之を以て之を思うに四味諸經の四教
の菩薩も作仏有り難きか、華嚴經に云く「衆生界尽きざれば我が願も亦
尽きず」等と云云、一切の菩薩必ず四弘誓願を發す可し其の中の衆生無辺
誓願度の願之を滿せざれば無上菩提誓願証の願又成じ難し、之を以て之を
案ずるに四十余年の文二乗に限らば菩薩の願又成じ難きか。

問うて云く二乗成仏之無ければ菩薩の成仏も之無き正証文如何、答

えて云く涅槃經三十六に云く「仏性は是れ衆生に有りと信ずと雖も必ず
一切に皆悉く之有らず是の故に名けて信不具足と為す」と三十六本三十二、
此の文の如くんば先四味の諸菩薩は皆一闡提の人なり二乗作仏を許さず
二乗の作仏を成ぜざるのみに非ず、将又菩薩の作仏も之を許さざる者なり、
之を以て之を思うに四十余年の文二乗作仏を許さずんば菩薩の成仏も又
之無きなり、一乗要決の中に云く「涅槃經三十六に云く仏性は是れ衆生
に有りと信ずと雖も必ず一切皆悉く之有らず是の故に名けて信不具足と
為すと三十六本三十二、第三十一に説く一切衆生及び一闡提到悉く仏性有り
と信ずるを菩薩の十法の中の第一の信心具足と名くと、三十六本第三十、一切
衆生悉有仏性を明すは是れ少分に非ず、若し猶堅く少分の一切なりと執せ
ば唯經に違するのみに非ず亦信不具なり何に因つてか樂つて一闡提と作る
や此れに由つて全分の有性を許すべし理亦一切の成仏を許すべし○」

慈恩の心經玄贊に云く「大悲の辺に約すれば常に闡提と為る大智の辺に

約すれば亦當に作仏すべし、宝公の云く大悲闡提は是れ前經の所説なり前

説を以て後説を難す可からざるなり諸師の釈意大途之に同じ」文、金☆の

註に云く「境は謂く四諦なり百界三千の生死は即ち苦なり此の生死即ち

是れ涅槃なりと達するを衆生無辺誓願度と名く百界三千に三惑を具足す此

の煩惱即ち是れ菩提なりと達するを煩惱無辺誓願断と名く生死即涅槃と円

の仏性を証するは即ち仏道無上誓願成なり、惑即菩提にして般若に非ざる

こと無ければ即ち法門無尽誓願知なり、惑智無二なれば生仏体同じ苦集唯心

なれば四弘融攝す一即一切なりとは斯の言徴有り」文、慈覺大師の速証仏

位集に云く「第一に唯今經の力用仏の下化衆生の願を満す故に世に出で

て之を説く所謂諸仏の因位・四弘の願・利生断惑・知法作仏なり然るに因

円果満なれば後の三の願は満ず、利生の一願甚だ満じ難しと為す彼の華嚴

の力じゅつかいみなぶつどう十界皆じょう仏道を成あたずること能あこんわらず阿含・方等・般若も亦爾またしかなり後番の五
味・皆かいじょうぶつどう成ほんかい仏道の本懐あたなる事能だわらず、今・此の妙経みょうきようは十界皆じゅつかいじょうぶつどう成りゅうによじょうぶつ仏道なる
こと分明ふんみようなり彼の達多・無間だつたむげんに墮だするに天王仏の記を授け竜女成じゅうらせつによ仏し
十羅刹女もぶつどう仏道を悟り阿修羅も成あしゅらじょうぶつ仏の総記を受け人天・二乗・三教の菩薩ぼさつ
・円妙のぶつどう仏道に入る、経に云く我が昔の所願しよがんの如ごときは今者いま已に満足まんぞくしぬ
一切衆生いっさいしゅじょうを化して皆みなぶつどう仏道に入らしむと云云、衆生界しゅじょう尽つきざるが故ゆえに未だ
仏道に入らざる衆生しゅじょう有りと雖も然れども十界皆じゅつかいじょうぶつ成ただこんきよう仏すること唯今経の
力ゆえに在り故に利生りしやうの本懐ほんかいなり」と云云。

又云く「第一いわに妙経だいいちの大意みょうきようを明たいいさは諸仏あかは唯一大事ゆいいちだいじの因縁いんねんを以ての故ゆえに
世しゅつげんに出現いっさいしゅじょうしつうぶつしやうし一切衆生と悉有もんぼう仏性かんきようと説き聞法・觀行・皆みなまさ當に作さぶつ仏すべし、
抑そも仏何の因縁いんねんを以て十界の衆生しゅじょう悉く三因と仏性有りと説きたもうや、

天親菩薩のてんじんぼさつ仏性論ぶつしやうろんえんぎ縁起分の第一だいいちに云く如来五種の過失にやらいごしゆを除き五種の功德くどくを

生ずるが為に故に一切衆生・悉有仏性と説きたもう已上謂く五種の過失と
は一には下劣心・二には高慢心・三には虚妄執・四には眞法を謗じ・五に
は我執を起すなり、五種の功德とは一には正勤・二には恭敬・三には般若
・四には闍那・五には大悲なり、生ずること無しと疑うが故に大菩提心
を發すこと能わざるを下劣心と名け、我に性有つて能く菩提心を發すと謂え
るを高慢と名け、一切の法無我の中に於て有我的執を作すを虚妄執と名
け一切諸法の清淨の智慧功德を違謗するを謗眞法と名け意唯己を存して
一切衆生を憐むことを欲せざるを起我執と名く此の五に翻對して定めて性
有りと知りて菩提心を發す」と。

花押

◆六〇

十法界明因果抄

文応元年五月三十九歳御作沙門

日蓮撰

427P

八十華嚴經六十九に云く「普賢道に入ることを得て十法界を了知す」と、

法華經第六に云く「地獄聲・畜生聲・餓鬼聲・阿修羅聲比丘聲・比丘尼聲

人道天声天道声聞声辟支声・菩薩聲・仏聲」と已上十法界名目なり。

第一に地獄界とは觀仏三昧經に云く「五逆罪を造り因果を撥無し大衆を

誹謗し四重禁を犯し虚く信施を食するの者・此の中に墮す」と獄なり、

正法念經に云く「殺盜・姪欲・飲酒・妄語の者・此の中に墮す」と獄なり、

正法念經に云く「昔酒を以て人に与えて酔わしめ已つて調戲して之を翫

び彼をして羞恥せしむるの者・此の中に墮す」と獄なり、正法念經に云く

「殺生・偷盜・邪淫の者・此の中に墮す」と獄なり、涅槃經に云く「殺に

三種有り謂く下中上なり○下とは蟻子乃至一切の畜生乃至下殺の因縁を

以て地獄に墮し乃至具に下の苦を受く」文。

問うて云く十惡・五逆等を造りて地獄に墮するは世間の道俗皆之を知れ

り謗法に依つて地獄に墮するは未だ其の相貌を知らざる如何、答えて云く
けんねぼさつ 堅慧菩薩の造・勒那摩提の訳・究竟一乘宝性論に云く「樂て小法を行じ
て法及び法師を謗じ○如来の教を識らずして説くこと修多羅に背いて是
しんじつ 眞実義と言う」文、此の文の如くんば小乗を信じて眞実義と云い大乘を
知らざるは是れ謗法なり、天親菩薩の説・眞諦三蔵の訳・仏性論に云く
「若し大乘に憎背するは此はは一闡提の因なり衆生をして此の法を捨て
しむるを為ての故に」文、此の文の如くんば大小流布の世に一向に小乗
ひろ 弘め自身も大乘に背き人に於ても大乘を捨てしむる是を謗法と云うな
り、天台大師の梵網經の疏に云く「謗は是れ乖背の名・☆て是れ解・理に
かな 称わす言実に当らず異解して説く者を皆名けて謗と為すなり己が宗に背く
が故に罪を得」文、法華經の譬喻品に云く「若し人信ぜずして此の經を毀謗
せば則ち一切世間の仏種を断ぜん乃至其の人命終して阿鼻獄に入らん」

文、此の文の意はこころ小乗しょうじょうの三賢さんけん已前いぜん・大乘だいじょうの十信じゅうしん已前いぜん・末代まつだいの凡夫ぼんぶの
十惡じゅうあく・五逆ごぎやく・不孝父母ふこうふぼ・女人等にょにんを嫌きらわす此等法華經これらほけきょうの名字みょうじを聞いて・或ある
題名だいめいを唱となえ一字いっく・一句いっく・四句いっく・一品いっく・一卷いっく・八卷等はつけんを受持じゆじし誦誦どくじゆし乃至ないし亦また
上かみの如ごとく行ぎぜん人を随喜ずいきし讚歎さんたんする人は法華經ほけきょうよりの外ほか、一代いちだいの聖教しょうきょうを
深く習ならい義理ぎりに達だいし堅けんく大小乗だいしょうじょうの戒たもを持もてる大菩薩ぼさつの如ごとき者ものより勝すぐれて
往生おうじょう成仏じやうぶつを遂とぐ可べしと説かえくを信ほけきぜずして還かえつて法華經ほけきは地住じじゅう已上ほさつの菩薩
の為ある・或あるは上根じやうこん・上智じやうちの凡夫ぼんぶの為ためにして愚人ぐにん惡人あくにん・女人にょにん末代まつだいの凡夫ぼんぶ等らの
為ためには非あらずと言のたまわん者は即すなわち一切衆生いっさいしゆじょうの成仏じやうぶつの種くさねを断あびじて阿鼻獄あびごくに入る
可べしと説ける文ふみなり、涅槃經ねはんぎょうに云いく「仏しやうほうの正法しやうほうに於おいて永こしやくく護惜こんりゅう建立こころなの心無こころな
し」文、此の文の意こころは此の大涅槃經だいねはんぎょうの大法世間だいほうせけんに滅尽めつじんせんを惜おしまざる者は
即すなわち是れ誹謗ひぼうの者ものなり、天台大師法華經てんだいだいしほけきょうの怨敵おんてきを定いめて云いく「聞きこく事を喜こころ
ばざる者を怨おんと為なす」文、謗法ほうぼうは多種おほなり大小流布だいしやうの国くにに生いれて一向いっこう

しょうじょう

小乗しょうじょうの法はくを学まなして身みを治しめ大乘だいじょうに遷うつらざるは是これ謗法ほうぼうなり、亦また華嚴けこん・

ほうとう

方等はんじや・般若等しやだいじょうきようの諸大乘しよだいじょうきよう經きやうを習しよえる人も諸經しよきようと法華經ほけきようと等同なの思おもを作なし人

をして等同なの義ぎを学まなばしめ法華經ほけきように遷うつらざるは是これ謗法ほうぼうなり、亦また偶またまたまえんき円機えんき

あ
ほけきよう

有ある人の法華經ほけきようを学まなぶをも我が法はに付つけて世利むさほを貪ためるが為ために汝なんじが機きは

ほけきよう

法華經ほけきように當あたらざる由よしを称しょうして此この經きやうを捨すてて權經こんきように遷うつらしむるは是これ大謗法ほうぼう

なり、此かくの如ごとき等は皆地獄みなじごくの業ごふなり人間にんげんに生なずること過去かこの五戒ごかいは強かく

さんあくじう

三惡道さんあくじうの業因ごふいんは弱じやくきが故ゆえに人間にんげんに生なずるなり、亦また當世たうせの人も五逆ごぎやくを作つくる者

は少く十惡は盛に之を犯す亦偶

は少じゆうあくく十惡さかんは盛これに之これを犯またたまたまこしす亦また偶また後世ごうあくを願ねがふ人の十惡じゆうあくを犯せんさずして善人

の如ごとくなるも自然じねんに愚癡ぐちの失とがに依よつて身口しんくは善ごうく意いは惡にくししき師しを信しんず、但

じやほう

我わのみ此この邪法じやほうを信しんずるに非あらず国こくを知し行ぎやうする人じん・人民じんみんを聳すすめて我わが邪法じやほうに同

ぜしめ妻子さいし・眷属けんぞく・所従しよじゆうの人ひとを以もつて亦聳またすめ従しよじゆうえ我わが行ぎやうを行しぜしむ、故ゆえに

しやうほう

正法しやうほうを行しぜしむる人ひとに於おいて結縁けちえんを作なさず亦また民しよじゆう・所従しよじゆう等に於おいても隨喜ずいきの心

を至さしめず、故に自他共に謗法の者と成りて修善止惡の如き人も自然に
阿鼻地獄の業を招くこと末法に於て多分之れ有るか。

阿難尊者は淨飯王の甥・斛飯王の太子・提婆達多の舍弟・釈迦如來の

従子なり、如來に仕え奉つて二十年覺意三昧を得て一代聖教を覺れり、

仏入滅の後・阿闍世王・阿難を歸依し奉る、仏の滅後四十年の此阿難尊者

一の竹林の中に至るに一りの比丘有一の法句の偈を誦して云く「若し人

生じて百歳なりとも水の潦涸を見ずんば生じて一日にして之を觀見するこ

とを得るに如かず」已上、阿難此の偈を聞き比丘に語つて云く此れ仏説に

非ず汝修行す可らず爾時に比丘阿難に問うて云く仏説は如何、阿難答え

て云く若人生じて百歳なりとも生滅の法を解せずんば生じて一日にして

之を解了することを得んには如かず已上此の文仏説なり、汝が唱うる所の

偈は此の文を謬りたるなり、爾の時に比丘・此の偈を得て本師の比丘に

語る、本師の云く我汝に教うる所の偈は眞の仏説なり阿難が唱うる所の偈
は仏説に非ず阿難年老衰して言錯謬多し信ず可らず、此の比丘亦阿難の偈
を捨てて本の謬りたる偈を唱う阿難又竹林に入りて之を聞くに我が教うる
所の偈に非ず重ねて之を語るに比丘信用せざりき等云云、仏の滅後四十年
にさえ既に謬り出来せり何に況んや仏の滅後既に二千余年を過ぎたり、
仏法天竺より唐土に至り唐土より日本に至る論師三蔵・人師等伝来せり定
めて謬り無き法は万が一なるか、何に況や当世の学者偏執を先と為して
我慢を挿み火を水と諍い之を糾さず偶仏の教の如く教を宣ぶる学者をも
之を信用せず故に謗法ならざる者は万が一なるか。

第二に餓鬼道とは正法念經に云く「昔財を貪りて屠殺せるの者・此の
報を受く」と、亦云く「丈夫自ら美食を☆い妻子に与えず・或は婦人自ら
食して夫子に与えざるは此の報を受く」と、亦云く「名利を貪るが為に

不淨說法する者・此の報を受く」と、亦云く「昔酒を☆に水を加うる者・此の報を受く」と、亦云く「若し人勞して少物を得たるを誑惑して之を取り用いける者・此の報を受く」と、亦云く「昔行路人の病苦ありて疲極せるに其の売を欺き取り直を与うることに薄少なりし者・此の報を受く」と、又云く「昔刑獄を典主・人の飲食を取りし者・此の報を受く」と、亦云く「昔陰涼樹を伐り及び衆僧の園林を伐りし者・此の報を受く」と文、法華經に云く「若し人信ぜずして此の經を毀謗せば○常に地獄に処すること園觀に遊ぶが如く余の惡道に在ること己が舍宅の如し」文、慳貪・偷盜等の罪に依つて餓鬼道に墮することは世人知り易し、慳貪等無き諸の善人も謗法に依り亦謗法の人に親近し自然に其の義を信ずるに依つて餓鬼道に墮することは智者に非ざれば之を知らず能く能く恐る可きか。

第三に畜生道とは愚癡無慙にして徒に信施の他物を受けて之を償わざる

者・此の報むくいを受くるなり、法華經ほけきょうに云く「若し人信ぜずして此の經を毀謗きぼうせば○当まさに畜生ちくしょうに墮だすべし」文已上三惡道なり。

第四に修羅道しゅらどうとは止觀しかんの一に云く「若し其の心念念に常に彼に勝らんことを欲し耐えざれば人を下くだし他を輕かろしめ己を珍たっとぶこと鵠とびの高く飛びて下視みおろすが如ごとし而も外には仁・義・礼・智・信を掲げて下品の善心を起し阿修羅あしゅらの道を行ずるなり」文。

第五に人道とは報恩經ほうおんに云く「三歸五戒は人に生る」文。

第六に天道とは二有り、欲天には十善じゅうぜんを持ちて生れ色無色天しきてんには下地げじはそくしょう・苦障くしょう・上地じょうちは静妙離じょうみょうちの六行觀むつを以て生ずるなり。

問うて云く六道ろくだうの生因いんは是かくの如ごとし抑そも同時に五戒ごかいを持ちて人界にんかいの生を受くるに何ぞ生盲いきめくら・聾りょう・☆☆・☆陋る・☆☆・背偻はいる・貧窮びんぐ・多病たびょう・瞋恚しんに等むりょう・さべつ・無量の差別有りや、答えて云く大論だいろんに云く「若は衆生の眼を破り若は衆生

の眼まなこを屈くじり若もしは正見せいけんの眼まなこを破やぶり罪福無ざいふくしと言いわん是この人死しして地獄じごくに
墮だし罪畢つみおわつて人なと為なり生よれて従めくらり盲めくらなり、若もしは復また仏塔ぶつとうの中ちゅうの火珠おほ及おほび諸もろもろの
灯明とうめいを盗かむ是かくの如ごとき等しゆじゆの種種せんぜの先世せんぜの業いんねん・因縁いんねんをもて眼まなこを失うしなうなり○
聾つんぼとは是これ先世せんぜの因縁いんねん師父しふの教訓きようくんを受けず行しぜず而しかも反はんつて瞋恚しんにす是この
罪つみを以もつての故ゆえに聾つんぼとなる、復次またに衆生しゆじようの耳みみを截きり若もしは衆生しゆじようの耳みみを破やぶり
若もしは仏塔僧塔ぶつとう諸もろもろの善人ぜんにん・福田ふくでんの中ちゅうの☆椎けんち・れい・ばい・鈴およ・貝かい及および鼓こを盗ぬすむ故ゆえに此この罪つみ
を得えるなり、先世せんぜに他たの舌しかを截きり・或あるは其その口くちを塞ふさぎ・或あるは惡藥あくやくを与あづかへて
語かたることを得えざらしめ、・或あるは師しの教きよう・父ふ母ぼの教きよう勅ちよくを聞きこき其その語ことばを断ことばつ
○世ぜに生なれて人おしと為なり啞おしにして言いうこと能あたわず○先世せんぜに他たの坐ざ禪ぜんを破やぶり
坐ざ禪ぜんの舍いえを破やぶり諸もろもろの咒じゆ術じゆを以もつて人じんを咒じゆして瞋いからし闘とう諍じようし姪いん欲よくせしむ今世こんぜ
に諸もろもろの結使けつし厚重こうじゆうなること婆羅門ばらもんの其その稻田とうでんを失うしなふ其その婦復死つままたして即時そくじに狂くる
発はつし裸形らぎようにして走はしりしが如ごとくならん、先世せんぜに仏ぶつ・阿羅漢あらかん・辟支仏ひやくしぶつの食おほ及おほび

父母所親の食を奪えば仏世に値うと雖も猶故飢渴す罪の重きを以ての故なり、○先世に好んで鞭杖・拷掠・閉繫を行じ種種に悩すが故に今世の病を得るなり○先世に他の身を破り其の頭を截り其の手足を斬り種種の身分を破り・或は仏像を壊り仏像の鼻及び諸の賢聖の形像を毀り・或は父母の形像を破る是の罪を以ての故に形を受くる多く具足せず、復次に不善法の報身を受くること醜陋なり」文、法華經に云く「若し人信ぜずして此の經を毀謗せば○若し人と為ることを得ては諸根闇鈍にして盲・聾・背偃ならん○口の氣常に臭く鬼魅に著せられん貧窮下賤にして人に使われ多病瘠瘦にして依怙する所無く○若は他の叛逆し抄劫し竊盜せん是くの如き等の罪横に其の殃に羅らん」文。

又八の卷に云く「若し復是の經典を受持する者を見て其の過惡を出さん若は実にもあれ若は不実にもあれ此の人は現世に白癩の病を得ん若し之を

きようしょう

輕笑 すること有らん者は当に世世に牙齒疎欠・醜き脣・平める鼻・

しゅきやくりようらい

がんもくかくらい

しゅうえ

あくそう

のうけつ・すいふく・たんけもるもろ

手脚繚戻し眼目角☆に身体臭穢にして惡瘡・膿血・水腹・短氣諸の惡

じゅうびよう

重病 あるべし」文、問うて云く何なる業を修する者が六道に生じて其の

中の王と成るや、答えて云く大乘の菩薩戒を持して之を破る者は色界の

いわ

だいじよう

ぼさつ

これ

やぶ

しっかい

梵王・欲界の魔王・帝釈・四輪王・禽獸王・閻魔王等と成るなり、心地

ぼんのう

よっかい

まおう

たいしやく

りんのう

きんじゅう

えんまおう

しんじ

觀經に云く「諸王の受くる所の諸の福樂は往昔會つて三の淨戒を持し

かんきよう

いわ

しよ

もろもろ

むかしあ

じようかい

戒德薰修して招き感ずる所・人天の妙果王の身を獲○中品に菩薩戒を

かいとくくんじゅう

にんてん

みょうかおう

ちゅうぼん

ぼさつ

受持すれば福徳自在の轉輪王として心の所作に随つて尽く皆成じ無量の

じゅじ

じざい

てんりんおう

しよさ

したが

ことごと

むりよう

人天悉く遵奉す、下の上品に持すれば大鬼王として一切の非人咸く率伏

にんてんことごとじゅんぼう

じようぼん

じ

だいきおう

いっさい

ことごとりつぷく

す戒品を受持して欠犯すと雖も戒の勝るに由るが故に王と為ることを得

かいぼん

じゅじ

けつぱん

いえど

まさ

よ

ゆえ

な

ことを得

下の中品に持すれば禽獸の王として一切の飛走皆歸伏す清淨の戒に

ちゅうぼん

じ

きんじゅう

いっさい

みなきふく

しょうじよう

の戒に

於て欠犯有るも戒の勝るに由るが故に王と為ることを得、下の下品に持す

おい

けつぱんあ

まさ

よ

ゆえ

な

ことを得、下の下品に持す

げぼん

れば☆魔王として地獄の中に処して常に自在なり禁戒を毀り惡道に生ずと
雖も戒の勝るに由るが故に王と為る事を得○若し如来の戒を受けざる事
有れば終に野干の身をも得ること能わず何に況んや能く人天の中の最勝の
快樂を感じて王位に居せん」文、安然和尚の広釈に云く「菩薩の大戒は持
して法王と成り犯して世王と成る而も戒の失せざることを譬えば金銀を器と
成すに用ゆるに貴く器を破りて用いざるも而も宝は失せざるが如し」亦云く
「無量壽觀に云く劫初より已來八萬の王有つて其の父を殺害すと此則ち菩薩
戒を受けて國王と作ると雖も今・殺の戒を犯して皆地獄に墮れども犯戒の
力も王と作るなり」大仏頂經に云く「發心の菩薩罪を犯せども暫く天神・
地祇と作ると、大隨求に云く「天帝・命尽きて忽ち驢の腹に入れども隨求
の力に由つて還つて天上に生ず」と、尊勝に云く「善住天子・死後七返
畜生の身に墮すべきを尊勝の力に由つて還つて天の報を得たり」と、昔

こくおう

ぶつとう

みずか きょうしん

あしゅら

国王有り千車をもて水を運び仏塔の焼くるを救う自ら☆心を起して阿修羅

王と作る、昔・梁の武帝五百の袈裟を須弥山の五百の羅漢に施す、誌公云く

「往五百に施すに一りの衆を欠けり罪を犯して暫く人王と作る即ち武帝是な

り、昔国王有つて民を治むること等からず今・天王と作れども大鬼王と

為る、即ち東南西の三天王是なり拘留孫の末に菩薩と成りて發誓し現に北

方毘沙門と作る是なり」云云、此等の文を以て之を思うに小乗戒を持し

て破る者は六道の民と作り大乘戒を破する者は六道の王と成り持する者は

仏と成る是なり。

第七に声聞道とは此の界の因果をば阿含・小乗・十二年の経に分明

に之を明せり、諸大乘経に於ても大に對せんが為に亦之をば明せり、声聞

に於て四種有り一には優婆塞・俗男なり五戒を持し苦・空・無常・無我の

觀を修し自調自度の心強くして敢て化他の意無く見思を断尽して阿羅漢

と成る此くの如くする時自然に髪を剃るに自ら落つ、二には優婆夷・俗女
なり五戒ごかいを持し髪を剃るに自ら落つること男の如し三には比丘僧なり二百
五十戒具足なりを持して苦・空・無常・無我の觀を修し見思を断じて阿羅漢
と成る此くの如くするの時・髪を剃らざれども生ぜず、四に比丘尼なり五
百戒じを持す余は比丘びくの如し、一代諸經に列座せる舍利弗・目連等の如き
声聞しょうもん是なり永く六道ろくどうに生ぜず亦また仏・菩薩とも成らず灰身滅智けしんめつちし決定けつじようして
仏に成らざるなり、小乗戒の手本たる尽形寿の戒は一度依身を壞れば永
く戒の功德無し、上品じようほんを持すれば二乗と成り中下ちゆうげを持すれば人天にんてんに生じて
民なと為る之これを破れば三惡道さんあくどうに墮だして罪人ざいにんと成るなり、安然和尚あんねんわじようの広釈こうしやくに
云く「三善は世戒なり因生して果を感じ業尽きて惡に墮だす譬たとえば楊葉ようようの秋
至いたれば金に似れども秋去れば地に落つるが如し、二乗にじようの小戒じは持する時は
果拙つたなく破る時は永く捨つ譬たとえば瓦器がきの完まったくして用うるに卑いやしく若し破われば

永く失するが如し」文。

第八に縁覺道とは二有一には部行獨覺・仏前に在りて声聞の如く
小乗の法を習い小乗の戒を持し見思を斷じて永不成仏の者と成る、二
には鱗喩獨覺・無仏の世に在りて飛花落葉を見て苦・空・無常・無我の觀
を作し見思を斷じて永不成仏の身と成る戒も亦声聞の如し此の声聞・
縁覺を二乗とは云うなり。

第九に菩薩界とは六道の凡夫の中に於て自身を輕んじ他人を重んじ惡を
以て己に向け善を以て他に与えんと念う者有り、仏・此の人の為に諸の
大乘經に於て菩薩戒を説きたまえり、此の菩薩戒に於て三有一には
摂善法戒・所謂八万四千の法門を習い尽さんと願す、二には饒益有情戒・
一切衆生を度しての後に自ら成仏せんと欲する是なり、三には摂律儀戒・
一切の諸戒を盡く持せんと欲する是なり、華嚴經の心を演ぶる梵網經に

云く「い仏諸のもろ仏子に告げて言く十重の波羅提木叉有り若し菩薩戒を受けて此の戒を誦せざる者は菩薩に非ず仏の種子に非ず我も亦是くの如く誦す一切の菩薩は已に学し一切の菩薩は当に学し一切の菩薩は今学す」文、菩薩と言ふは二乗を除いて一切の有情なり、小乗の如きは戒に随つて異なるなり、菩薩戒は爾らず一切の有心に必ず十重禁等を授く一戒を持するを一分の菩薩と云い具に十分を受くるを具足の菩薩と名く、故に瓔珞經に云く「い一分の戒を受くること有れば一分の菩薩と名け乃至二分・三分・四分・十分なるを具足の受戒と云う」文。

問うて云く二乗を除くの文如何、答えて云く梵網經に菩薩戒を受くる者を列ねて云く「い若し仏戒を受くる者は國王・王子・百官・宰相・比丘・比丘尼・十八梵天・六欲天子・庶民・黃門・姪男・姪女・奴婢・八部・鬼神・金剛神・畜生・乃至變化人にもあれ但法師の語を解するは尽く戒

を受得じゆとくすれば皆第一清淨みなだいいちしようじようの者と名なく「文、此の中に於おいて二乗無にじようきなり、方等部ほうとうぶの結經けつきようたる瓔珞經ようらくきやうにも亦二乗無またにじようし、問うて云いわく二乗所持にじようしよじの不殺生戒ふさつしようかいと菩薩所持ぼさつしよじの不殺生戒ふさつしようかいと差別さべつ如何いかん、答えて云いわく所持しよじの戒の名は同じと雖も持じする様並に心念永く異なるなり、故に戒の功德くどくも亦淺深またせんじんあり、問うて云いわく異なる様如何いかん、答えて云いわく二乗の不殺生戒は永く六道ろくどうに還らんと思わおもはず故に化導けどうの心無こころなし亦仏菩薩また ぼさつと成らんと思わおもず但灰身滅智けしんめつちの思おもを成なりすなり、譬たとえば木を焼き灰なと為なしての後に一塵いちじんも無なきが如ごとし故に此の戒をば瓦器がきに譬たとう破われて後用あとうることに無なきが故なり、菩薩ぼさつは爾しからず饒益にやうやく有情じやうじやう戒かいを發おこして此の戒を持じするが故に機きを見て五逆ごぎやく・十惡じゆあくを造つくり同く犯なせども此の戒は破われず還かえつて弥い弥い戒かい体を全いくす、故に瓔珞經ようらくきやうに云いわく「犯なすこと有あれども失あれせず未來みらい際さいを尽つくくす」文、故に此の戒をば金銀きんぎんの器きに譬たとう完まったくして持じする時はも破はする時ときも永く失はせざるが故なり、問うて云いわく此の戒を持じする人は幾劫いくこう

を経てか成仏じょうぶつするや、答えて云く瓔珞經ようらくきやうに云く「未だ住前に上らざる○
若もしは一劫二劫三劫乃至十劫を経て初住しよじゆうの位の中に入ることを得」文、文の
意こころは凡夫ぼんぶに於て此の戒けいを持するを信位の菩薩ぼさつと云う、然しかりと雖いえども一劫二劫
乃至十劫の間は六道ろくどうに沈輪ちんりんし十劫を経て不退ふたいの位に入り永く六道の苦を受
けざるを不退ふたいの菩薩ぼさつと云う未だ仏に成らず還かえつて六道に入れども苦無きな
り。

第十に仏界ぶつがいとは菩薩ぼさつの位に於て四弘誓願しぐせいがんを發おこすを以て戒なと為なす三僧祇さんそうぎの
間ろくどまんぎよう・六度万行しゅうを修けんじし見思じんじや・塵沙むみよう・無明さんなくの三惑だんじんを断尽だんじんして仏と成ゆえる、故に
心地觀經しんじかんきやうに云く「三僧企耶大劫の中に具つぶさに百千の諸の苦行しゅうを修くどくえんまんし功德円満
にして法界ほっかいに遍あまなくく十地究竟じゅうちくきようして三身さんじんを証しんす」文、因位いんいに於て諸の戒もろもろを持たもち
仏果ぶつがの位いたに至ぶっしんつて仏身そうつこんを莊嚴しゆごうす三十二相すなわ・八十種好こは即しよごうち是の戒の功德くどくの
感たずる所ふつがなり、但し仏果の位いたに至れば戒体失たす譬たとえば華の果と成つて華の

形無きが如し、故に天台の梵網經の疏に云く「仏果に至つて乃ち廃す」文、
問うて云く梵網經等の大乘戒は現身に七逆を造れると並に決定性の二乗
とを許すや、答えて云く梵網經に云く「もし戒を受けんと欲する時は師・
問い言うべし汝現身に七逆の罪を作らざるやと、菩薩の法師は七逆の人の
ために現身に戒を受けしむることを得ず」文、此の文の如くんば七逆の人は
現身に受戒を許さず、大般若經に云く「若し菩薩設い恒河沙劫に妙の五欲
を受くるとも菩薩戒に於ては猶犯と名けず若し一念二乗の心を起さば即ち
名けて犯と為す」文、大莊嚴論に云く「恒に地獄に処すと雖も大菩提を
障ず若し自利の心を起さば是れ大菩提の障なり」文、此等の文の如くんば
六凡に於ては菩薩戒を授け二乗に於ては制止を加うる者なり、二乗戒を嫌
うは二乗所持の五戒・八戒・十戒・十善戒・二百五十戒等を嫌うに非ず彼
の戒は菩薩も持す可し但二乗の心を嫌うなり、夫れ以みれば持戒は父母

・師僧・國王・主君の一切衆生・三宝の恩を報ぜんが為なり、父母は養育の恩深し一切衆生は互に相助くる恩重し國王は正法を以て世を治むれば自他安穩なり、此に依つて善を修すれば恩・重し主君も亦彼の恩を蒙りて父母・妻子・眷属・所従・牛馬等を養う、設い爾らずと雖も一身を顧る等の恩・是重し師は亦邪道を閉じ正道に趣かしむる等の恩・是深し仏恩は言うに及ばす是くの如く無量の恩分之有り、而るに二乗は此等の報恩皆欠けたり故に一念も二乗の心を起すは十悪・五逆に過ぎたり一念も菩薩の心を起すは一切諸仏の後心の功德を起せるなり、已上四十余年の間の大小乗の戒なり、法華經の戒と言うは二有り、一には相待妙の戒二には絶待妙の戒なり、先ず相待妙の戒とは四十余年の大小乗の戒と法華經の戒と相對して爾前を☆戒と云い法華經を妙戒と云うて諸經の戒をば未顕真實の戒・歴劫修行の戒・決定性の二乗戒と嫌うなり、法華經の戒は真實の

戒・速疾頓成の戒・二乗の成仏を嫌わざる戒等を相對して☆妙を論ずる
を相對妙の戒と云うなり。

問うて云く梵網經に云く「衆生・仏戒を受くれば即ち諸仏の位に入る
位大覺に同じ已に實に是諸仏の子なり」文。

華嚴經に云く「初發心の時便ち正覺を成ず」文、大品經に云く「初發心

の時即ち道場に坐す」文、此等の文の如くんば四十余年の大乗戒に於て

法華經の如く速疾頓成の戒有り何ぞ但歷劫修行の戒なりと云うや、答え

て云く此れに於て二義有一義に云く四十余年の間に於て歷劫修行の戒

と速疾頓成の戒と有り法華經に於ては但一つの速疾頓成の戒のみ有り、

其の中に於て四十余年の間の歷劫修行の戒に於ては法華經の戒に劣ると

雖も四十余年の間の速疾頓成の戒に於ては法華經の戒に同じ、故に上に

出す所の衆生・仏戒を受れば即ち諸仏の位に入る等の文は法華經の須臾

もんし　そくとくきよう
聞之・即得究竟の文に之同じ、
ただ　むりようぎきよう　よんじゅうよねん
但し無量義經に四十余年の經を挙げて歴劫
しゅぎよう
修行等と云えるは四十余年の内の歴劫　修行の戒計りを嫌うなり速疾
とんじよう
頓成の戒をば嫌わざるなり、一義に云く四十余年の間の戒は一向に歴劫
しゅぎよう　ほけきよう　そくしつとんじよう
修行の戒・法華經の戒は速疾頓成の戒なり、但し上に出す所の四十余年
しよきよう　そくしつとんじよう
の諸經の速疾頓成の戒に於ては凡夫地より速疾頓成するに非ず凡夫地よ
むりよう　むりようこう　へ　さいご　おい　ほんぶ　そくしつとんじよう　あら　ほんぶ
り無量の行を成じて無量劫を経・最後に於て凡夫地より即身成仏す、故に
さいご　そくしつとんじよう
最後に從えて速疾頓成とは説くなり、委悉に之を論ぜば歴劫　修行の所摂
ゆえ　むりようぎきよう　よんじゅうよねん　あ　むりようぎきよう　そくしつ
なり、故に無量義經には総て四十余年の經を挙げて仏・無量義經の速疾
とんじよう　せんぜつぼさつ　りやうしゅぎきよう　きら　そつこんぼさつ
頓成に対して宣説菩薩・歴劫　修行と嫌いたまえり、大莊嚴菩薩の此の義
う　りようげ　いわ　むりようむへんふかしぎあそぎこう　すぐ　つい　むじようぼだい
を承けて領解して云く「無量無辺不可思議阿僧祇劫を過れども終に無上菩提
じよう　もつ　ゆえ　ぼだい　じきどう　ゆえ　けんぎよう
を成ずることを得ず、何を以ての故に菩提の大直道を知らざるが故に陰逕
るなん　ゆえ　ないし　じきどう　るなん　ゆえ　も
を行くに留難多きが故に、乃至大直道を行くに留難無きが故に」文、若し

よんじゅうねん 四十余年の間に無量義經・法華經の如く速疾頓成の戒之れ有れば仏猥りに
よんじゅうねん 四十余年の実義を隠し給うの失之れ有り云云、二義の中に後の義を作る者
は存知の義なり、相待妙の戒是なり、次に絶待妙の戒とは法華經に於て
は別の戒無し、爾前の戒即ち法華經の戒なり其の故は爾前の人天の楊葉戒
・小乗・阿含經の二乗の瓦器戒・華嚴・方等・般若・觀經等の歴劫
菩薩の金銀戒の行者・法華經に至つて互に和会して一同と成る、所以に
人天の楊葉戒の人は二乗の瓦器・菩薩の金銀戒を具し菩薩の金銀戒に人天
の楊葉二乗の瓦器を具す余は以て知んぬ可し、三惡道の人とは現身に於て戒
無し過去に於て人天に生れし時人天の楊葉・二乗の瓦器菩薩の金銀戒を
持ち退して三惡道に墮す、然りと雖も其の功德未だ失せず之有り三惡道の
人・法華經に入る時其の戒之を起す故に三惡道にも亦十界を具す、故に
爾前の十界の人・法華經に來至すれば皆持戒なり、故に法華經に云く

「是これを持じ戒かいと名なく」文、安あん然ねん和わ尚じょうの広こう釈しやくに云いく「法ほ華っけに云いく能よく法ほ華っけを説ほく是これを持じ戒かいと名なく」文、爾にぜん前き經きやうの如ごとく師したに隨したがつて、戒かいを持もせず但ただ此この經きやうを信しんずるが即すなわち持じ戒かいなり、爾にぜん前きの經きやうには十じ界ゆつかい互ご具ぐを明あかさず故ゆえに菩ぼ薩さつ無む量りやう劫こくを經へて修しゆ行ぎやうすれども二に乘じやう・人にん天てん等とんの余よ戒かいの功く徳とく無くく但ただ一い界かいの功く徳とくを成じやうず故ゆえに一い界かいの功く徳とくを以もつて成じやう仏ぶつを遂とげず、故ゆえに一い界かいの功く徳とくも亦また成じやうぜず、爾にぜん前きの人にん・法ほ華っけ經きやうに至いたりぬれば余よ界かいの功く徳とくを一い界かいに具ぐす、故ゆえに爾にぜん前きの經きやう即すなわち法ほ華っけ經きやうなり法ほ華っけ經きやう即すなわち爾にぜん前きの經きやうなり、法ほ華っけ經きやうは爾にぜん前きの經きやうを離はなれず爾にぜん前きの經きやうは法ほ華っけ經きやうを離はなれず是これを妙みやう法ほうと云いふ、此この覺さつり起おりて後ぎは行ぎやう者じや・阿あ含こん・小しやう乘じやう經きやうを讀よむとも即すなわち一い切いっさいの大だい乘じやう經きやうを讀よ誦じゆし法ほ華っけ經きやうを讀よむ人にんなり、故ゆえに法ほ華っけ經きやうに云いく「声しやう聞もんの法ほうを決けつ了りやうすれば是この諸しよ經きやうの王わうなり」文、阿あ含こん經きやう即すなわち法ほ華っけ經きやうと云いふ文ぶんなり、「一いち仏ぶつ乘じやうに於おいて分ぶん別べつして三さんと説せつく」文、華け嚴ごん・方ほう等とう・般はん若にや即すなわち法ほ華っけ經きやうと云いふ文ぶんなり、「若もし俗そつ間かんの經きやう書しよ・治ち世せいの語ご言げん・資し生せいの業ぎやう等とんを

説か^{みな}んも皆^{みな}正^{しやう}法^{ほう}に順^{じゆん}ず^い文^{ぶん}、一^い切^つの^{さい}外^げ道^{どう}・老^{ろう}子^し・孔^{こう}子^し等^らの^ら経^{きやう}は即^{すなわ}ち^ほ法^ほ華^け經^{きやう}と云^いふ^さ文^{ぶん}なり、梵^{ぼん}網^{もう}經^{きやう}等^らの^ら権^{ごん}大^{だい}乘^{じやう}の^ら戒^{かい}と法^ほ華^け經^{きやう}の^ら戒^{かい}とに多^さくの^{べつ}差^さ別^{べつ}有^あり、一^いには彼^かの^ら戒^{かい}は二^に乘^{じやう}七^し逆^{ぎやく}の^ら者^{しや}を許^{ゆる}さず二^にには戒^{かい}の^ら功^く徳^{とく}に仏^{ぶつ}果^かを具^ぐせず三^{さん}には彼^かは歴^り劫^{やく}修^{しゆ}行^{ぎやう}の^ら戒^{かい}なり是^{かく}の^ら如^にき等^らの多^たくの^ら失^し有^あり、法^ほ華^け經^{きやう}に於^{おい}ては二^に乘^{じやう}七^し逆^{ぎやく}の^ら者^{しや}を許^{ゆる}す上^{じやう}・博^{はく}地^ちの^ら凡^{ぼん}夫^ぶ・一^い生^{しやう}の中^{ちゆう}に仏^{ぶつ}位^いに入^いり妙^{みやう}覺^{かく}至^{いた}つて因^{いん}果^{くわく}の^ら功^く徳^{とく}を具^ぐする^{なり}なり。

正元二年庚申四月二十一日

日蓮^{にちれん} 花押^{かおう}

◆六一 教機時国抄^{きやうきときくしやう} 弘長二年二月十日^{こうちやう} 四十一歳御作^し 438P

本朝沙門日蓮之を註す^{ほんちやうしやもんにちれんこれしる}

一^いに教^{しや}とは釈^{しや}迦^か如^に来^ら所^{しよ}説^{せつ}の^ら一^い切^つの^{さい}経^{きやう}・律^{りつ}・論^{ろん}・五^ご千^{せん}四^し十^{じゅう}八^{はち}卷^{まき}・四^し百^{ひやく}八^{はち}十^{じゅう}帙^{しち}・天^{てん}竺^{じく}に流^{りう}布^ふする^{こと}一^い千^{せん}年^{ねん}・仏^{ぶつ}の^ら滅^{めつ}後^ご・一^い千^{せん}一^{じゅう}十^{じゅう}五^ご年^{ねん}に當^{あた}つて震^{しん}旦^{たん}国^{こく}

にぶきようわた仏經渡る、後漢ごかんの孝明皇帝こうめい永平十年ひのとう丁卯ていぼうより唐とうの玄宗皇帝げんそうこうてい・開元十八年かいげん

かのえうまのえうま

庚午いたに至るいた六百六十四歳の間に一切いっさい經渡り畢おわんぬ、此の一切いっさいの經・律・

論の中に小乗しょうじよう・大乘だいじよう・權經ごんきんきよう・實經じつきんきよう・顯經けんきんきよう・密經みつきんきようあり此等これらを并わきまうべ

し、此の名目みようもくは論師ろんし・人師にんしよりも出いでずぶつせつ仏說ぶつせつより起おこる十方世界じゆつぱうせかいの一切いっさい

ししゅじようじよう

衆生しゅじよう一人も無なくく之これを用もちうべし之これを用もちいざる者は外道げどうと知るべきなり、

ああこんきようあこんきよう

阿含經しょうじようを小乗しょうじようと説く事は方等ほうとう・般若はんや・法華ほつけ・涅槃ねはん等の諸大乘經しよだいじようきようより

出いでたり、法華經ほけきようには一向いっかうに小乗しょうじようを説ときて法華經ほけきようを説とかざればけんどん仏慳貪だに墮だ

すべしと説ときたもう、涅槃經ねはんきようには一向いっかうに小乗經しょうじようきようを用もちいてむじよう仏を無常むじようなりと

云くちゆうわん人は舌口中ただに爛ただるべしと云云。

二きに機きとはぶつきよう仏教ひろを弘きこんむる人は必きず機根きこんを知るべし舍利弗尊者しやりほつそんじやは金師しんしに

不淨觀ふじようくわんを教かんええ浣衣かんえの者すそくには数息觀すそくを教かんえうる間九十日へを経てしよけ所化でしの弟子ぶつぱう仏法ぶつぽう

を一分いちぶんも覺さとらずして還かえつて邪見じゃけんを起いっせんし一闍提いっせんと成おわり畢おわんぬ、仏は金師しんしに数息すそく

観を教え浣衣の者に不浄観を教えたもう故に須臾の間に覺ることを得たり、
智慧第一の舍利弗すら尚機を知らず何に況や末代の凡師機を知り難し但し
機を知らざる凡師は所化の弟子に一向に法華經を教うべし、問うて云く無智
の人の中にして此の經を説くこと莫れとの文は如何、答えて云く機を知る
は智人の説法する事なり又謗法の者に向つては一向に法華經を説くべし
毒鼓の縁と成さんが為なり、例せば不輕菩薩の如し亦智者と成る可き機と
知らば必ず先ず小乗を教え次に権大乘を教え後に実大乘を教う可し、
愚者と知らば必ず先ず実大乘を教う可し信謗共に下種と為ればなり。
三に時とは仏教を弘めん人は必ず時を知るべし、譬えば農人の秋冬・
田を作るに種と地と人の功勞とは違わざれども一分も益無く還つて損す一
段を作る者は少損なり、一町二町等の者は大損なり、春夏耕作すれば
上中下に従つて皆分分に益有るが如し、仏法も亦復是くの如し、時を知ら

ずして法を弘めば益無き上還つて惡道に墮するなり、仏出世したもうて必ず法華經を説かんと欲するに縦い機有れども時・無きが故に四十余年には此の經を説きたまわず故に經に云く「説時未だ至らざるが故なり」等と云、仏の滅後の次の日より正法一千年は持戒の者は多く破戒の者は少し、正法一千年の次の日より像法一千年は破戒の者は多く無戒の者は少し、像法一千年の次の日より末法一万年は破戒の者は少く無戒の者は多し、正法には破戒・無戒を捨てて持戒の者を供養すべし像法には無戒を捨てて破戒の者を供養すべし、末法には無戒の者を供養すること仏の如くすべし但し法華經を謗ぜん者をば正像末の三時に亘りて持戒の者をも無戒の者をも破戒の者をも共に供養すべからず、供養せば必ず国に三災・七難起り供養せし者も必ず無間・大城に墮すべきなり、法華經の行者の權經を謗するは主君・親・師の所従・子息・弟子等を罰するが如し、權經の行者の

ほけきよう
法華經を謗ずるは所従・子息・弟子等の主君・親・師を罰するが如し、又
とうせ
当世は末法に入つて二百一十余年なり、権經・念仏等の時か法華經の時か
よ
能く能く時刻を勘うべきなり。

四に国とは仏教は必ず国に依つて之を弘むべし国には寒国・熱国・貧国
・富国・中国・辺国・大国・小国・一向偷盗国・一向殺生国・一向
ふこう
不孝国等之有り、又一向小乗の国・一向大乘の国・大小兼学の国も之有
り、而るに日本国は一向に小乗の国か一向に大乘の国か大小兼学の国
なるか能く之を勘うべし。

五に教法流布の先後とは未だ仏法渡らざる国には未だ仏法を聴かざる者
あり既に仏法渡れる国には仏法を信ずる者あり必ず先に弘まれる法を知つ
て後の法を弘むべし先に小乗・権大乘弘らば後に必ず実大乘を弘むべ
し先に実大乘弘らば後に小乗・権大乘を弘むべからず、瓦礫を捨てて

金珠こんじゆを取るべし金珠こんじゆを捨てて瓦礫がりやくを取るなこと勿なれ。

已上の此の五義を知つて仏法ぶつぽうを弘ひろめば日本にほんの国師こくしと成る可べきか所以ゆえんに

法華經ほけきやうは一切經いっさいきやうの中の第一だいいちの經王なりと知るは是これ教を知る者なり、但ただし

光宅こうたくの法雲ほううん・道場どうじやうの慧觀えいかん等は涅槃經ねはんきやうは法華經ほけきやうに勝すぐれたりと、清涼山せいりやうの

澄觀ちやうかん・高野こうやの弘法こうぼう等は華嚴經けこんきやう・大日經だいにちきやう等は法華經ほけきやうに勝すぐれたりと、嘉祥寺かじやう

の吉蔵きちぞう・慈恩寺じおんの基法師きほふし等は般若はんにな・深密等じんみつの二經ふたきやうは法華經ほけきやうに勝すぐれたりと云

う、天台てんだいの智者大師ちしやだい只一人ただひとりのみ一切經いっさいきやうの中に法華經ほけきやうを勝すぐれたりと立つる

のみに非あらず法華經ほけきやうに勝すぐれたる經き之これ有りと云わん者を諫かんぎやう曉やせよ止やまずんば

現世げんせに舌口くちゆう中に爛ただれ後生ごしやうは阿鼻地獄あびじこくに墮だすべし等と云云、此等これらの相違さういを

能よく能よく之これを弁わきまえたる者は教こうを知れる者なり、当世とうせの千万せんまんの学者等がくしや一一いちいちに

之まよに迷まよえるか、若もし爾しからば教こうを知れる者こ之これ少すこきか教こうを知れる者こ之これ無なけ

れば法華經ほけきやうを讀よむ者こ之これ無なし法華經ほけきやうを讀よむ者こ之これ無なければ国師こくしとなる者無

きなり、国師となる者無ければ国中の諸人・一切経の大・小・権・実・顕

・密の差別に迷うて一人に於ても生死を離るる者之れ無く、結句は謗法の

者と成り法に依つて阿鼻地獄に墮する者は大地の微塵よりも多く法に依つ

て生死を離るる者は爪上の土よりも少し、恐る可し恐る可し、日本国の

一切衆生は桓武皇帝より已来四百余年一向に法華経の機なり、例せば

靈山八箇年の純円の機為るが如し大師安然和尚慧心等の記に之有り是れ機を知

れるなり、而るに当世の学者の云く日本国は一向に称名念佛の機なり等

と云云、例せば舍利弗の機に迷うて所化の衆を一闡提と成せしが如し。

日本国の当世は如来の滅後二千二百一十余年後・五百歳に当つて

妙法蓮華経広宣流布の時刻なり是れ時を知れるなり、而るに日本国の当世

の学者・或は法華経を抛ちて一向に称名念佛を行じ・或は小乗の戒律

を教えて叡山の大僧を蔑り・或は教外を立てて法華の正法を輕しむ此等は

時に迷^{まよ}える者か、例せば勝意比丘^{しょういびく}が喜根菩薩^{きこんぼさつ}を謗^{ぼう}じ徳光論師^{とくくわんろんし}が弥勒菩薩^{みろくぼさつ}を蔑^{あなず}りて阿鼻^{あび}の大苦^{だいこ}を招^{まね}きしが如^{ごと}し、日本国^{にほんこく}は一向^{いっこう}に法華經^{ほけきやう}の国なり例せば舎衛国^{しゃえいこく}の一向^{いっこう}に大乘^{だいじやう}なりしが如^{ごと}し、又天竺^{てんじく}には一向^{いっこう}に小乘^{しょうじやう}の国一向^{いっこう}にだいじやう

大乘^{だいじやう}の国・大小兼学^{だいしょうけんがく}の国も之^{これ}あり、日本国^{にほんこく}は一向^{いっこう}大乘^{だいじやう}の国なり大乘^{だいじやう}の中^{ほけきやう}にも法華經^{たべ}の国為^たる可^べきなり瑜伽論華公の記聖徳太子伝教
大師安然等の記之有り是れ国^こを知^しれる者なり、しかとうせがくしやにほんこくしゆじやう

而るに当世^{いっこう}の学者日本国^{しょうじやう}の衆生^{しゅうじやう}に向^いつて一向^{いっこう}に小乘^{しょうじやう}の戒律^{いっこう}を授^いけ一向^{いっこう}に念仏者^{ねんぶつ}等と成^たすは「譬^{たと}えば宝器^{えいき}に穢食^{えじき}を入^いれたるが如^{ごと}し」等云云^{しゆこ}の守護章^{しゆごしやう}に在^あり、日本国^{にほんこく}には欽明天皇^{きんめいてんのう}の御宇^{ぎやう}に仏法百濟国^{ぶつぽうくた}より渡^{わた}り始めしより桓武天皇^{かんむてんのう}に至^{いた}るまで二百四十余年^{よんじゅうよねん}の間・此の国^{しやうじやう}に小乘^{しょうじやう}・権大乘^{こんだいじやう}のみ弘^{ひろ}まり法華經^{ほけきやう}有^いりと雖^{いえど}も其^その義未^{いま}だ顕^{あらわ}れず、例せば震旦国^{しんたん}に法華經^{ほけきやう}渡^{わた}つて三百余年^{さんひゃくねん}の間

・法華經^{ほけきやう}有^いりと雖^{いえど}も其^その義未^{いま}だ顕^{あらわ}れざりしが如^{ごと}し、桓武天皇^{かんむてんのう}の御宇^{ぎやう}に伝教^{でんきやう}大師^{だいき}有^あして小乘^{しょうじやう}・権大乘^{こんだいじやう}の義^ぎを破^はして法華經^{ほけきやう}の実義^{じつぎ}を顕^{あらわ}せしより已来^{このかた}又

異義いぎ無く純一じゆんいつに法華經ほけきやうを信ず、設たといけい華嚴こん・般若はん・深密じんみつ・阿含あこん・大小だいしやうの六宗ろくしゆうを学まなぶ者ものも法華經ほけきやうを以もつて所詮しよせんと為なす、況いわんやてんだいい・天台たい・真言しんこんの学者がくしやをや何いかに況いわんやざいけい・在家むちの無智むちの者ものをや、例たとせば崑崙山こんろんに石なく無く蓬萊山ほうらいさんに毒どく無むきが如ごとし、建けん仁じより已この来かた今けんに五十余年ごじゅうねんの間ま・大日だいにち・仏陀ぶつだ・禪宗ぜんしゆうを弘ひろめ、法然ほうねん・隆寛りゆうかん・浄土宗じやうとしゆうを興おこし実大乘じつだいじやうを破はして権宗こんしゆうに付き一切經いっさいきやうを捨きやうげてて教外きやうげを立つ、譬たとえば珠たまを捨すてて石いしを取り地ちを離はなれて空くうに登のぼるが如ごとし此こは教法きやうほう流布りふの先後せんごを知らざる者ものなり。

仏誠いましめて云いく「惡象あくぞうに値あうとも惡知識あくちしきに値あわざれ」等らと云云うんうん、法華經ほけきやうの勸持品かんぢほんに後このの五百歳ごひやくさい二千余年に當あつて法華經ほけきやうの敵人てきじん・三類さんるい有ある可べしと記しるし置おきたまへり当世とうせは後のち・五百歳ごひやくさいに當あれり、日蓮にちれん・仏語ぶつごの實否じつぴを勘かんうるに三類さんるいてきじんこれあこれの敵人之有このり之これを隱ほさば法華經ほけきやうの行者ぎやうじやに非あらず之これを顯あらわさば身命しんみやう定さだめて喪うしなうわんか、法華經ほけきやう第四だいに云いく「而しかも此この經きやうは如來にの現げん在ざいにすら猶な怨おん嫉しつ多たし

況や滅度の後をや」等と云云、同じく第五に云く「一切世間怨多くして信
じ難し」と、又云く、「我身命を愛せず但無上道を惜む」と、同第六に云く
「自ら身命を惜まず」と云云、涅槃經第九に云く「譬えば王使の善能談論
し方便に巧みなる命を他国に奉け寧ろ身命を喪うとも終に王の所説の
言教を匿さざるが如し、智者も亦爾なり凡夫の中に於て身命を惜まずし
て要必大乘方等を宣説すべし」と云云、章安大師釈して云く
「寧喪身命不匿教とは身は軽く法は重し身を死して法を弘めよ」等と云
云、此等の本文を見れば三類の敵人を顕さずんば法華經の行者に非ず之を
顕すは法華經の行者なり、而れども必ず身命を喪わんか、例せば師子尊者
・提婆菩薩等の如くならん云云。

二月十日

にちれん
日蓮
かおう
花押

◆六二 顕謗法抄 けんぼうほうしやう

弘長二年 四十一歳御作 443P

本朝沙門 ほんちやうしゃもん

日蓮撰 にちれん

だいいち

だいいちく

いんが

あか

むげんじく

いんが

けいちやう

あか

第一に八大地獄の因果を明し、第二に無間地獄の因果の輕重を明し、第

もんどりやうけん

あか

ぎやうじやくぎやう

やうじん

三に問答料簡を明し、第四に行者弘經の用心を明す。

第一に八大地獄の因果を明さば、

だいいち

だいいちく

いんが

あか

だいいち

とうかつじく

えんぶだい

第一に等活地獄とは此の閻浮提の地

ゆじゆん

じく

じゅうじつさいとう

ゆじゆん

の下・一千由旬にあり此の地獄は縦 広齊等にして一万由旬なり、此の中の

罪人はたがいに害心をいだく若たまたま相見れば犬と☆とのあえるがごと

ざいにん

もし

さる

さる

さる

さる

さる

し、各鉄の爪をもて互につかみさく血肉既に尽きぬれば唯骨のみあり、

くろがね

たがい

つ

つ

ただ

ただ

或は獄卒手に鉄杖を取つて頭より足にいたるまで皆打くだく身体くだけ

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

て沙のごとし、或は利刀をもつて分分に肉をさく然れども又よみがへり

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

よみがへりするなり此の地獄の寿命は人間の昼夜五十年をもつて第一

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

四王・天の一日一夜として四王・天の天人の寿命五百歳なり、四王・天の

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

しおう

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

しおう

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

しおう

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

しおう

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

しおう

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

しおう

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

しおう

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

しおう

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある

しおう

五百歳を此れ等活地獄の一日一夜として其の寿命五百歳なり、此の地獄の業因をいはば・ものの命をたつもの此の地獄に墮つ螻蛄蚊☆等の小虫を殺せる者も懺悔なければ必ず此の地獄に墮つべし、譬へばはりなれども水の上をければ沈まざることなきが如し、又懺悔すれども懺悔の後に重ねて此の罪を作れば後の懺悔には此の罪きえがたし、譬へばぬすみをして獄に入りぬるもののしばらく経て後に御免を蒙りて獄を出ずれども又重ねて盗をして獄に入りぬれば出ゆるされがたきが如し、されば当世の日本国の人は上一人より下万民に至まで此の地獄をまぬがる人は一人もありがたかるべし、何に持戒のをばへをとれる持律の僧たりとも蟻虱などを殺さず蚊☆をあやまたざるべきか、況や其外山野の鳥鹿・江海の魚鱗を日に殺すものをや、何に況や牛馬人等を殺す者をや。

第二に黒繩地獄とは等活地獄の下にあり縦広は等活地獄の如し、獄卒

・罪人ざいにんをとらえて熱鉄ねつてつの地にふせて熱鉄の繩をもつて身にすみうつて熱鉄

の斧おのをもつて繩しなに随したがつてきり・さきけづる又鋸のこぎりを以もつてひく又左右さうに大な

くろがね

る鉄の山あり山の上に鉄の幢はたほこを立て鉄の繩をはり罪人ざいにんに鉄の山

くろがね

くろがね

ざいにん

くろがね

を・ををせて繩の上よりわたす繩より落ちてくだけ・或鉄あるくろがねのかなえに

墮だし入れて・にらる此の苦は上かみの等活地獄とうかつじごくの苦よりも十倍なり、人間の一

百歳は第二の☆利天とうりてんの一日一夜なり其の寿そ一千歳せんさいなり此の天の寿せんさい一千歳を

とらうてん

そ

せんさい

せんさい

一日一夜として此の第二の地獄じごくの寿命じゅみょう一千歳せんさいなり、殺生せつじょうの上に偷盜ちゅうとうとて

じごく

じゅみょう

せんさい

せつじょう

ちゅうとう

・ぬすみをかさねたるもの此の地獄じごくにをつ、当世とうせの偷盜ちゅうとうのもの・ものをぬ

じごく

とうせ

ちゅうとう

すむ上・物の主を殺すもの此の地獄じごくに墮おつべし。

じごく

お

第三に衆合地獄じゅうごくとは黒繩地獄くろじょうじごくの下にあり縦じゅう広かうは上かみの如ごとく多くの鉄くろがねの

じゅうごく

くろじょうじごく

じゅう

かう

くろがね

山二つづつに相向あひむかへり、牛頭ごず・馬頭めず等の獄卒ごくそつ手に棒を取つて罪人ざいにんを駈かりて

ごず

めず

ごくそつ

ざいにん

か

山の間に入らしむ、此の時・両の山迫り来て合せ押す身体くだけで血流れ

て地にみつ、又種種しゆじゆの苦あり、人間の二百歳を第三の夜・摩天まてんの一日一夜として此の天の寿二千歳せんさいなり此の天の寿を一日一夜として此の地獄じごくの寿命じゆみゆう二千歳せんさいなり、殺生せつしよう・偷盗ちゆうとうの罪の上に邪淫じゃいんとて他人たにんのつまを犯す者・此の地獄じごくの中に墮おつべし、而るに当世とうせの僧・尼・士・女・多分たぶんは此の罪を犯す殊ことに僧にこの罪多し、士女は各各互たがいにまほり又人目をつつまざる故に此の罪を・をかさず僧は一人ある故に姪欲いんよくとぼしきところに若し有身もば父ただされ・あらはれぬべきゆへに独ある女人にょにんを・をかさず、もしや・かくるると他人たにんの妻をうかがひ・ふかく・かくれんとをもうなり、当世とうせのほか・たうとげなる僧の中にことに此の罪又多くあるらんと・をぼゆ、されば多分たぶんは当世とうせ・たうとげなる僧此の地獄じごくに墮おつべし。

第四に叫喚きようかん地獄じごくとは衆合の下にあり縦じゆう広前こうぜんに同じ獄卒ごくそつ惡あらきこえ声出してきゆうせん弓箭きゆうせんをもつて罪人ざいにんをいる、又鉄くろがねの棒を以て頭もつこを打つて熱鉄ねつてつの地をはし

らしむ、・或は熱鉄のいりだなにうちかへし・うちかへし此の罪人をあぶ
る、・或は口を開てわける銅のゆを入れるれば五臓やけて下より直に出ず、
壽命をいはば人間の四百歳を第四の都率天の一日一夜とす、又都率天の四
千歳なり都率天の四千歳の寿を一日一夜として此の地獄の壽命四千歳な
り、此の地獄の業因をいはば・殺生偷盜・邪淫の上に飲酒とて酒のむも
の此の地獄に墮つべし、当世の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の四衆の大
酒なる者・此の地獄の苦免れがたきか、大論には酒に三十六の失をいだし
梵網經には酒盃をすすめる者五百生に手なき身と生ると・とかせ給う
人師の釈にはみみずていの者と・なるとみへたり、況や酒をうりて人にあ
たえたる者をや何に況や酒に水を入れてうるものをや・当世の在家の人人
この地獄の苦まぬがれがたし。

第五に大叫喚地獄とは叫喚の下にあり縦広前に同し、其の苦の相は

かみ 上の四の地獄じごくの諸もろの苦くるしみに十倍して重しげくこれをうく、寿命じゆみようの長短ちやうたんを云わば
にんげん 人間の八百歳はちひゃくさいは第五の化楽天けらくてんの一日一夜いちにちいっやなり此の天てんの寿せんさい八千歳はちせんさいなり此の天
の八千歳せんさいを一日一夜いちにちいっやとして此の地獄じごくの寿命じゆみよう八千歳せんさいなり、殺生せつしよう・偷盜ちゆうとう・
じゃいん 邪淫おんじゆ・飲酒じゆうざいの重罪じゆうざいの上に妄語もうごとてそらごとせる者もの・此の地獄じごくに墮おつべし、
とうせ 当世しよにんの諸人たといけんじんは設しやうにんい賢人しやうにん・上人ひとびとなど・いはる人人もろうこも妄語もうごせざる時はあり
もろうこ とも妄語もうごをせざる日はあるべからず、設たといい日はありとも月はあるべからず
たとい 設たといい月はありとも年いちねんはあるべからず設たといい年いちねんはありとも一期生もろうこ・妄語もうごせざる
者ものはあるべからず、若もししからは当世とうせの諸人しよにん・一人もこの地獄じごくをまぬがれ
がたきか。

しやうねつじごく 第六に焦熱地獄しやうねつじごくとは大叫きやうかんじごく喚地獄えんじごくの下したにあり縦じゅうじう広前かうぜんにをなじ、此の地獄じごく
しゆじゆ に種種しゆじゆの苦くるしみあり若もし此の地獄じごくの豆計ばかりの火えんぶだいを閻浮提えんぶだいにをけらんに一時いちじにや
けつきなん況いわんやざいにんや罪人やわらかの身みの☆なることわたのごとくなるをや、此の地獄じごく

の人は前の五つの地獄じごくの火を見る事・雪ことの如し、譬たとへば人間の火たきぎの薪たきぎの火よりも鉄銅の火の熱こときが如し、寿命じゅみょうの長短ちやうたんは人間にんげんの千六百歳を第六のたけてん他化天の一日一夜として此の天の寿千六百歳なり此の天の千六百歳を一日一夜として此の地獄じごくの寿命じゅみょう一千六百歳なり、業因ごういんを云わば殺生せつしよう・偷盗ちゆうとう・邪淫じゃいん・飲酒おんじゆ・妄語もうごの上・邪見じゃけんとて因果いんがなしという者・此の中に墮おつべし、邪見じゃけんとは有人あるひとの云く人飢えて死ぬれば天に生るべし等と云云、総じて因果いんがをしらぬ者を邪見じゃけんと申もうすなり世間せけんの法には慈悲じひなき者を邪見じゃけんの者という、当世とうせいの人人ひとびと・此の地獄じごくを免まぬかれがたきか。

第七に大焦熱地獄だいしやうねつじごくとは焦熱しやうねつの下にあり縦じゆう広前かうぜんの如し、前の六つの地獄じごくの一切いっさいの諸苦しよくに十倍して重しげく受うるなり、其その寿命じゅみょうは半中劫はんちゆうかいなり、業因ごういんを云わば殺生せつしよう・偷盗ちゆうとう・邪淫じゃいん・飲酒おんじゆ・妄語もうご・邪見じゃけんの上に淨戒じやうかいの比丘尼びくにを・をかせるもの此の中に墮おつべし、又比丘びく・酒をもつて不邪淫戒ふじゃいんかいを持たもてる婦女を

たばらかし・或は財物をあたへて犯せるもの此の中に墮つべし、当世の僧
の中に多く此の重罪あるなり、大悲經の文に末代には士女は多くは天に生
じ僧尼は多くは地獄に墮つべしとかれたるはこれていの事か、心あらん
人人は・はづべし・はづべし。

総じて上の七大地獄の業因は諸經論をもつて勘え当世・日本国の四衆に
あて見るに此の七大地獄をはなるべき人を見ず又きかず、涅槃經に云く末代
に入りて人間に生ぜん者は爪上の土の如し三惡道に墮つるものは十方
世界の微塵の如しと説かれたり、若爾らば我等が父母・兄弟等の死ぬる人
は皆上の七大地獄にこそ墮ち給いては候らめあさましともいふばかりなし、
竜と蛇と鬼神と仏・菩薩・聖人をば未だ見ずただをとのみ・これをきく
当世に上の七大地獄の業を造らざるものをば未だ見ず又・をとも・きか
ず、而るに我が身よりはじめて一切衆生・七大地獄に墮つべしと・をもえ

る者・一人もなし、設たといい言には墮おつべきよしを・さえづれども心には墮おつべしとも・をもわず、又僧尼そうに・士女しにょ・地獄じごくの業をば犯すとは・をもえども
・或あるは地蔵菩薩等の菩薩を信じ・或あるは阿弥陀仏等の仏を待たのみ・或あるは種種しゅじゅの善根ぜんこんを修しゅうしたる者もあり、皆みなをもはく我はかかる善根ぜんこんをもてれば・なんと
・うちをもひて地獄じごくをもをぢず、・或あるは宗宗を習へる人人は各各の智分ちぶんをたのみて又地獄じごくの因を・をぢず、而しかに仏菩薩を信じたるも愛子・夫婦な
んどをあふいし父母・主君しゅくんなどをうやまうには雲泥うんでいなり、仏・菩薩等をば
・かろくをもえるなり、されば当世とうせの人人の仏・菩薩を待たのめれば宗宗を学がくし
たれば地獄じごくの苦はまぬがれなんんど・をもえるは僻案ひやくあんにや心あらん人人
はよくよくはかりをもうべきか。

第八あびに大阿鼻地獄だいあびじごくとは又は無間地獄むげんじごくと申もうすなり欲界よっかいの最底・大焦熱地獄だいしやうねつじごく
の下にあり此じこくの地獄は縦じゅうこうはちまんゆじゆん、外ぐろがねに七重の鉄の城あり地獄じごくの

こつく しばらこれ
極苦は且く之を略す前の七大地獄並びに別処の一切の諸苦を以て一分とし
て大阿鼻地獄の苦一千倍勝れたり、此の地獄の罪人は大焦熱地獄の罪人を
見る事・他化自在天の楽みの如し、此の地獄の香のくさを人かくならば
してんげ よっかい
四天下・欲界・六天の天人皆ししなん、されども出山・没山と申す山・此
の地獄の臭き気を・をさへて人間へ来らせざるなり、故に此の世界の者死
せずと見へぬ、若し仏・此の地獄の苦を具に説かせ給はば人聴いて血をは
いて死すべき故にくわしく仏説き給はずとみへたり、此の無間地獄の寿命
ちようたん
の長短は一中劫なり一中劫と申すは此の人寿無量歳なりしが百年に一寿
を減じ又百年に一寿を減ずるほどに人寿十歳の時に減ずるを一減と申す、
又十歳より百年に一寿を増し又百年に一寿を増する程に八万歳に増するを
一増と申す、此の一増一減の程を小劫として二十の増減を一中劫とは申す
なり、此の地獄に墮ちたる者これ程久しく無間地獄に住して大苦をうくる

なり、業因ごういんを云わば五逆罪ごぎやくざいを造る人・此の地獄じごくに墮おつべし、五逆罪ごぎやくざいと申す
は一に殺父しふ・二に殺母しも・三に殺阿羅漢あらかん・四に出仏身血すいぶつしんけつ・五に破和合僧はわごうそうなり、
今の世には仏ましますさず・しかれば出仏身血すいぶつしんけつあるべからず、和合僧わごうそうなけれ
ば破和合僧はわごうそうなし、阿羅漢あらかんなければ殺阿羅漢あらかんこれなし、但殺父しふ・殺母しもの罪つみの
みありぬべし、しかれども王法のいましめきびしくあるゆへに此の罪つみ・を
かしがたし、若爾もしからば当世とうせには阿鼻地獄あびじごくに墮おつべき人すくなし但ただし相似そうじの
五逆罪ごぎやくざいこれあり木画もくえの仏像ぶつぞう・堂塔等どうとうをやき・かの仏像等ぶつぞうの寄進きじんの所をうば
いとり率兜婆等そとばをきりやき智人ちじんを殺しなんどするもの多し、此等これらは大阿鼻あび
地獄じごくの十六の別処べつこに墮おつべし、されば当世とうせの衆生しゅじょう十六の別処べつこに墮おつるもの
多きか又謗法ほうぼうの者ものこの地獄じごくに墮おつべし。

第二に無間地獄むげんじごくの因果いんがの輕重けいちようを明あかさば、問いわうて云いわく五逆罪ごぎやくざいより外ほかの罪つみに
よりて無間地獄むげんじごくに墮おちんことあるべしや、答いえて云いく誹謗正法ひぼうしょうぼうの重罪じゅうざいなり、

問うて云く証文如何、答えて云く法華經第二に云く「若し人信ぜずして此の經を毀謗せば乃至其の人命終して阿鼻獄に入らん」等と云云、此の文に謗法は阿鼻地獄の業と見へたり、問うて云く五逆と謗法と罪の輕重如何、答て云く大品經に云く「舍利弗・仏に白して言く世尊五逆罪と破法罪と相似するや、仏・舍利弗に告わく相似と言うべからず所以は何ん若し般若波羅蜜を破れば即ち十方諸仏の一切智一切種智を破るに為んぬ、仏宝を破るが故に法寶を破るが故に僧寶を破るが故に三宝を破るが故に即ち世間の正見を破す世間の正見を破れば○則ち無量無辺阿僧祇の罪を得るなり無量無辺阿僧祇の罪を得已つて則ち無量無辺阿僧祇の憂苦を受るなり」文又云く「破法の業・因縁集るが故に無量百千万億歳大地獄の中に墮つ、此の破法人の輩一大地獄より一大地獄に至る若し劫火起る時は他方の大地獄の中に至る、是くの如く十方に☆くして彼の間に劫火起る故に彼より死し破法の

業・因縁未だ尽きざるが故に是の間の大地獄の中に還来す」等と云云、
法華經第七に云く「四衆の中に瞋恚を生じ心不淨なる者有り惡口罵詈して
言く是れ無智の比丘と、或は杖木瓦石を以て之れを打擲す乃至千劫
阿鼻地獄に於て大苦惱を受く」等と云云、此の經文の心は法華經の行者
を惡口し及び杖を以て打擲せるもの其の後に懺悔せりといえども罪いま
だ滅せずして千劫阿鼻地獄に墮ちたりと見えぬ、懺悔せる謗法の罪すら
五逆罪に千倍せり況や懺悔せざらん謗法に在いては阿鼻地獄を出ずる期か
たかるべし、故に法華經第二に云く「經を讀誦し書持すること有らん者を
見て輕賤憎嫉して結恨を懷かん乃至其の人命終して阿鼻獄に入り一劫を
具足して劫尽きなば更生れん、是くの如く展轉して無數劫に至らん」等と
云云。

第三に問答料簡を明さば問うて云く五逆罪と謗法罪との輕重はしんぬ

ほうぼう そうみょう いかん 謗法の相貌如何、
い わ てんたいちしやだいし 答えて云く天台智者大師の梵網經の疏に云く謗とは背
なり等と云云、法に背くが謗法にてはあるか天親の仏性論に云く若し憎は
そむ 背くなり等と云云、この文の心は正法を人に捨てさせるが謗法にてあるな
り、問うて云く委細に相貌をしらんとをもうあらあら・しめすべし、
い わ ねはんぎよう 答えて云く涅槃經第五に云く「若し人有りて如来は無常なりと言わん云何ぞ是の
人舌墮落せざらん」等云云、此の文の心は仏を無常といはん人は舌墮落す
べしと云云、問うて云く諸の 小乗經 に仏を無常と説かるる上又所化の衆
みなむじよう もししか 皆無常と談じき若爾らば仏・並に所化の衆の舌墮落すべしや、
しょうじようぎよう しょうじようぎよう 答えて云く
小乗經 の仏を 小乗經 の人が無常ととき談ずるは舌ただれざるか、
だいじようぎよう むじよう 大乘經に向つて仏を無常と談じ 小乗經 に対して大乘經を破するが舌
だらく は 是は墮落するか、此れをもつて・をもうに・をのれが依經には随えども依經
よりすぐれたる經を破するは破法となるか、若爾らば設い觀經・華嚴經等

の権大乘經ごんだいじようきようの人人ひとびと・所依しよえの經きようの文ぶんの如ごとく修行しゆぎようすともかの經きようにすぐれたる
經經きようきように随したがはず又すぐれざる由よしを談だんぜば謗法ほうぼうとなるべきか、されば觀經等かんきようとう
の經きようの如ごとく法はふをえたりとも觀經等かんきようとうを破はせる經きようの出来しゅつたいたらん時そ其の經きように
随したがわずば破法はほうとなるべきか、小乘經しよくじようきようを以もつてなぞらえて心こころうべし。

問いうて云いく雙觀經等そうかんきようとうに乃至ないし十念そくとくおうじよう・即得そくとく往生おうじようなんととかれて候もちが彼のけ

うの教きようの如ごとく十念そつ申もうして往生おうじようすべきを後の經きようを以もつて申もうしやぶらば謗法ほうぼうにて

は候もちまじきか、答こたえて云いく仏ぶつ・觀經等かんきようとうの四十余年よんじゆうよねんの經經きようきようを束むすて未顯真實みけんしんじつ

と説たまかせ給たまいぬれば此この經文きやうもんに随したがつて乃至ないし十念そくとくおうじよう・即得そくとく往生おうじよう等は實じつには

往生おうじようしがたしと申もうす此この經文きやうもんなくば謗法ほうぼうとなるべし、問いうて云いく・或人ある

云いく無量義經むりやうぎきようの四十余年よんじゆうよねん・未顯真實みけんしんじつの文ぶんはあえて四十余年よんじゆうよねんの一切いっさいの經經きようきよう

並ならびに文文ぶんぶん・句句くくを皆未顯真實みなみけんしんじつと説たまき給たまにはあらず、但四十余年よんじゆうよねんの經經きようきように

處處しよしよに決定けつじよう性の二乗にじようを永不成仏ようふじようぶつときらはせ給たまい釈迦如来しゃかにらを始成正覺しじようしやうかくと

と
説き給しを其の言ばかりをさして未顕真実とは申すなりあえて余事にはあ
らず、而るをみだりに四十余年の文を見て観經等の凡夫のために九品往生
なんぞを説きたるを妄りに往生はなき事なりなんと押し申すあにをそろし
ほうぼう
き謗法の者にあらずやなんと申すはいかに、答えて云く此の料簡は
とうどのとくいちりょうけん
東土の得一が料簡に似たり、得一が云く未顕真実とは決定性の二乗を仏
にぜん
・爾前の經にして永不成仏ととかれしを未顕真実とは嫌はるるなり前四味
いっさい
の一切には亘るべからずと申しき、伝教大師は前四味に亘りて文・句・句
みけんしんじつ
に未顕真実と立て給いき、さればこの料簡は古の謗法者の料簡に似たり、
ただしばらなんじりょうけん
但し且く汝等が料簡に随て尋ね明らめん、問う法華已前に二乗作仏を嫌
みけんしんじつ
いけるを今未顕真実というとならば先ず決定性の二乗を仏の永不成仏と説
きょうもん
かせ給し処の經文ばかりは未顕真実の仏の妄語なりと承伏せさせ給う
しよしよ
か、さては仏の妄語は勿論なり若し爾らば妄語の人の申すことは有無共に
もうこもちろんもしかもうこもう

もち
用いぬ事にてあるぞかし、決定性の二乗・永不成仏の語ばかり妄語とな
り若し余の菩薩・凡夫の往生・成仏等は実語となるべきならば信用しが
たき事なり、譬へば東方を西方と妄語し申さん人は西方を東方と申すべし
にしよう ようふじようぶつ
二乗を永不成仏と説く仏は余の菩薩の成仏をゆるすも又妄語にあらずや、
五乗は但一仏性なり二乗の仏性をかくし菩薩・凡夫の仏性をあらはすは
返つて菩薩・凡夫の仏性をかくすなり。

あるひといわ よんじゅうよねん みけんしんじつ じようぶつ おうじよう
有人云く四十余年・未顕真実とは成仏の道ばかり未顕真実なり 往生等
みけんしんじつ
は未顕真実にはあらず、又難じて云く四十余年が間の説の成仏を未顕真実
しようぶく
と承伏せさせ給はば雙觀經に云う不取正覚 成仏已来凡歴十劫等の文は
みけんしんじつ しようぶく たま ふしゅうしやかくじようぶつ いらいほんりやく
未顕真実と承伏せさせ給うか、若し爾らば四十余年の經經にして法蔵
びく あみだぶつ たま も しか よんじゅうよねん きようぎよう
比丘の阿弥陀仏になり給はずば法蔵比丘の成仏すでに妄語なり、若し
じようぶつ もうこ
成仏妄語ならば何の仏か行者を迎え給うべきや、又かれ此の難を通して

云ん四十余年よんじゅうよねんが間は成仏じょうぶつはなし阿弥陀あみだぶつ仏ぶつは今の成仏じょうぶつにはあらず過去かこの
成仏じょうぶつなり等と云云、今難なんじて云く今日の四十余年よんじゅうよねんの経経きょうぎょうにして実ほんぶの凡夫
の成仏じょうぶつを許ゆるされずば過去遠遠劫かこおんのんこうの四十余年よんじゅうよねんの権経ごんきょうにても成仏じょうぶつ叶かないがたき
か、三世さんぜの諸仏しよぶつの説法せつぽうの儀式みぎ皆みな同どうきが故ゆゑなり、或あるは云く不得ふとく疾しつじよう成じよう・無上
菩提ぼだいととかるれば四十余年よんじゅうよねんの経経きょうぎょうにては疾はやくこそ仏ぶつにはならねども遅く
劫けつを経てはなるか、難なんじて云く次下つぎしもの大莊嚴そうごん菩薩ぼさつ等の領解りようげに云く
「不可思議無量無辺阿僧祇劫ふかしぎむりようむへんあそぎこうを過すくるとも終ついに無上菩提むじようぼだいを成じようずることを得ず」
等と云云、此の文の如ごとくならば劫けつを経てへも爾前にぜんの経計けいりにては成仏じょうぶつはかた
きか。

有あるは云う華嚴宗けこんしゅうの料簡りょうけんに云く四十余年よんじゅうよねんの内うちには華嚴経計けこんきようばかりは入いるべから
ず、華嚴経けこんきようにすでに往生おうじよう成仏じょうぶつ・此こありなんぞ華嚴経けこんきようを行おじて往生おうじよう成仏じょうぶつ
をとげざらん、答こたえて云く四十余年よんじゅうよねんの内うちに華嚴経けこんきよう入いるべからずとは華嚴宗けこんしゅう

の人師にんしの義ぎなり、無量義經むりょうぎきょうには正まさく四十余年よんじゅうよねんの内に華嚴海空けこんかいくうと名な目めを呼よび出でして四十余年よんじゅうよねんの内にかずへ入れられたり、人師にんしを本もととせば仏そむに背そむくになりぬ。

問いうて云いく法華經ほけききょうをはなれて往生おうじょう成仏じやうぶつをとげずば仏世いたに出いさせ給たては但法華經計ほけききょうけいをこそ説とき給たまはめ、なんぞわづらはしく四十余年よんじゅうよねんの經經きやうきやうを説たまかせ給たまうや、答いえて云いく此なんの難なんは仏みずか、自みら答たまえ給たまえり「若もし但ぶつ仏乘じやうを讀さんせば衆生苦しゅじやうくに没在ぼつざいして法はを破やぶして信ゆえぜざるが故ゆえに三惡道さんあくどうに墜おちなん」等の經文きやうもんこれなり、問いうて云いくいかなれば爾前にぜんの經をば衆生しゅじやう謗しせざるや、答いえて云いく爾前にぜんの經經きやうきやうは万差ばんさなれども束たばねて此これを論ろんずれば隨他意ずいたいと申もうして衆生しゅじやうの心をとかれてはんべり故ゆえに違いする事なし、譬たとへば水に石を・なぐるに・あらそうことなきがごとし又またしなじなの説教せつきやうはんべれども九界くかいの衆生しゅじやうの心を出いでず衆生しゅじやうの心は皆善みなにつけ惡まにつけて迷まよを本とするゆへに

仏にはならざるか、問うて云く衆生謗すべきゆへに仏・最初に法華經をと
き給はずして四十余年の後に法華經をとき給はば汝なんぞ当世に權經を
ば・とかずして左右なく法華經をといて人に謗をなさせて惡道に墮すや、
答えて云く仏在世には仏・菩提樹の下に坐し給いて機をかがみ給うに当時
・法華經を説くならば衆生謗じて惡道に墮ちぬべし、四十余年すぎて後に
とかば謗せずして初住不退・乃至妙覺にのぼりぬべしと知見し・ましま
しき、末代濁世には當機にして初住の位に入るべき人は万に一人もありが
たかるべし、又能化の人も仏にあらざれば機をかがみん事もこれかたし、
されば逆縁・順縁のために先ず法華經を説くべしと仏ゆるし給へり、但し
又滅後なりとも當機衆になりぬべきものには先ず權教をとく事も・あるべ
し、又悲を先とする人は先ず權經をとく釈迦仏のごとし慈を先とする人は
先ず實經をとくべし不輕菩薩のごとし、又末代の凡夫はなにとなくとも

悪道あくどうを免まぬれんことはかたかるべし同じく悪道あくどうに墮おるならば法華經ほけきょうを謗ぼうぜさせて墮だすならば世間の罪つみをもて墮おちたるには・にるべからず、聞法生謗もんぼうしやうぼう・墮だ於地獄だおじごく・勝於供養しょうおくやう・恒沙じやうしゃ仏者等の文のごとし、此の文の心は法華經ほけきょうをはうじて地獄じごくに墮おちたるは釈迦しやくか・阿彌陀あみだ・恒河沙ごうがしやの仏を供養くやうし歸依きえ渴仰かつやうする功德くどくには百千万倍ひやくせんまんばいすぎたりとこかれたり。

問いうて云いく上かみの義ぎのごとくならば華嚴けこん・法相ほつそう・三論さんろん・真言しんごん・淨土じやうど等の祖師そしはみな謗法ぼうぼうに墮だすべきか、華嚴宗けこんしゆうには華嚴經けこんきやうは法華經ほけきやうには雲泥超過うんでいちやうかせり法相ほつそう・三論さんろんもてかくのごとし、真言宗しんごんしゆうには日本国にほんこくに二の流あり東寺とうじの真言しんごんは法華經ほけきやうは華嚴經けこんきやうにをとり何いかに況いや大日經だいにくきやうにをいてをや、天台てんだいの真言しんごんには大日經だいにくきやうと法華經ほけきやうとは理さいは齊等さいとうなり印真言しんごん等は超過ちやうかせりと云云、此等これらは皆惡道みなあくどうに墮おつべしや、答いえて云いく宗しゆをたて經經きやうきやうの勝劣しやうれつを判ずるに

二の義あり、一は似破じは・二は能破のうはなり一に似破じはとは他の義は吉とをもえど

も此をはすかの正義せいぎを分明ふんみょうにあらはさんがためか、二に能破のうはとは実に他人たにんの義ぎの勝すぐれたるをば弁わきまえずして迷まようて我が義ぎすぐれたりとをもひて、心中しんちゅうよりこれを破はするをば能破のうはという・されば彼の宗宗の祖師そしに似破じは・能破のうはの二の義あるべし、心中しんちゅうには法華経ほけきょうは諸經しよきょうに勝すぐれたりと思えども且しばく違ちがして法華経ほけきょうの義ぎを顕あらわさんとをもひてこれをはする事あり、提婆達多だいばだつた・阿闍世あじゃせ王もろもろげどう・諸の外道ほんぶが仏のかたきとなりて仏徳あらかを顕あらわし後には仏に帰せしがごとし、又実ほんぶの凡夫ぼんぷが仏のかたきとなりて惡道あくどうに墮おつる事これ多し、されば諸宗しよしゅうの祖師そしの中に回心えしんの筆えしんをかかずば謗法ほうぼうの者惡道あくどうに墮おちたりとするべし、三論さんろんの嘉祥かじょう・華嚴けこんの澄觀ちようかん・法相ほつそうの慈恩じおん・東寺とうじの弘法こうぼう等は回心えしんの筆これあるか、よくよく尋たずねならうべし。

問いうて云いくまことに今度生死このたびしうじをはなれんと・をもはんに・なにものをか
・いとひなにものをか願もろもろきようもんうべきや、答こたう諸の經文にょにんには女人等にょにんをいとうべし

とみへたれどもそうりんさいこ雙林最後の涅槃經に云く「菩薩是の身に無量の過患具足じゅうまん充滿すと見るといえど雖も涅槃經を受持せんと欲するを為ての故にほ猶好く將護してぼうしょう乏少ならしめず、菩薩惡象等に於ては心に恐怖すること無れ惡知識におい於ては怖畏の心を生ぜよ、何を以ての故に是れ惡象等は唯能く身を壞りてやぶ心を壞る事能わず、惡知識は二俱に壞るが故に、惡象の若きは唯一身をやぶ壞る惡知識は無量の身・無量の善心を壞る、惡象の為に殺されては三趣にいた至らず惡友の為に殺されては三趣に至る」等と云云此の經文の心は後世をい願はん人は一切の惡縁を恐るべし一切の惡縁よりは惡知識を・をそるべしとみえたり。

されば大莊嚴仏の末の四の比丘だいそうごんぶつは自ら惡法を行じて十方の大阿鼻地獄をふ經るのみならず、六百億人の檀那等をも十方の地獄に墮しぬ、まにばつだ摩尼跋陀が教に随つてしたが九百九十九人の指をきり結句・母・並に仏をがいせ

んとぎす、善星^{ぜんしやう}比丘^{びく}は仏の御子・十二部經を受持^{じゆじ}し四禪定^{ぜんじやう}をえ欲界^{よつかい}の結
を斷じたりしかども苦得^{くとく}外道の法を習^{なら}うて生身^{しやうしん}に阿鼻地獄^{あびじごく}に墮^おちぬ、提婆^{だいば}
が六万蔵・八万蔵を暗^{はちまん}じたりしかども外道^{げどう}の五法を行^{げん}じて現^{むげん}に無間^おに墮^おち
にき、阿闍世王^{あじゃせ}の父を殺し母を害せんと擬せし大象を放つて仏をうしない
たてまつらんとせしも惡師^{あくし}・提婆^{だいば}が教なり、俱伽利比丘^{くぎやりびく}が舍利弗^{しゃりほつ}・目連^{もくれん}を
そしりて生身^{しやうしん}に阿鼻^{あび}に墮^だせし、大族王^{だいぞくおう}の五竺^{ぶつぽう}の仏法僧をほろぼせし、
大族王^{だいぞくおう}の舍弟^{しやてい}は加^か☆弥羅國^{しやみらくこく}の王となりて健駄羅國^{けんだらく}の率都婆^{そとば}・寺塔^{じとう}・一千六
百所をうしなひし、金耳國王^{こんにこくおう}の仏法^{ぶつぽう}をほろぼせし、波瑠璃王^{はるり}の九千九十万^{ばんにん}人
の人をころして血ながれて池をなせし、設賞迦王^{せつしやうきや}の仏法^{ぶつぽう}を滅し菩提樹^{ぼだいじゆ}をき
り根をほりし、後周^{うぶん}の宇文王^{うぶん}の四千六百余所の寺院^{うしない}を失ひ二十六万六百余
の僧尼^{そうに}を還俗^{げんぞく}せしめし、此等^{これら}は皆惡師^{みなあくし}を信じ惡鬼^{あつきそ}其の身に入りし故なり。
問うて云く天竺^{いわ}・震旦^{てんじく}は外道^{しんたん}が仏法^{げどう}をほろぼし小乘^{しょうじやう}が大乗^{だいじやう}をやぶると

みえたり、此の日本国にほんこくもしかるべきか、答えて云く月支がっし・尸那しなには外道げどうあり小乗しょうじょうあり此の日本国にほんこくには外道げどうなし小乗しょうじょうの者なし、紀典博士等これあれども仏法の敵となるものこれなし、小乗しょうじょうの三宗これあれども彼宗を用しょうじて生死しょうじをはなれんと・をまはず但大乘だいじょうを心うる才覚さいかくとをもらい、但ただ此の国には大乘の五宗のみこれあり人人皆ひとびとみなをもらく彼の宗宗にして生死しょうじをはなるべしとをもう故ゆえにあらそいも多きできたり、又檀那だんなの帰依きえも多くあるゆへに利養りようの心もふかし。

第四ぎよつじやに行者ぎふぼう・仏法ひろうを弘ひろむる用心ようじんを明あかさば、夫それ仏法ぶつぽうをひろめんと・をものはんものは必ず五義ごぎを存しして正法しょうぽうをひろむべし、五義とは一には教・二には機き・三には時・四には国・五には仏法流布ぶつぽうるふの前後ぜんごなり、第一だいいちに教とは如来にょらい一代五十年の説教せつきょうは大小だいしょう・権実こんじつ・顕密けんみつの差別さべつあり、華嚴宗けこんしゅうには五教ごけうを立て一代いちだいを・をさめ其その中には華嚴けこん・法華ほっけを最勝さいしょうとし華嚴けこん・法華ほっけの中に

華嚴經を以て第一とす、南三・北七並に華嚴宗の祖師日本国の東寺の弘法けこんぎよう

大師・此の義なり、法相宗は三時に一代を・をさめ其の中に深密法華經をだいし

一代の聖教にすぐれたりとす、深密・法華の中・法華經は了義經の中のいちだい

不了義經・深密經は了義經の中の了義經なり、三論宗に又二藏・三時をふりようぎきよう

立つ三時の中の第三中道教とは般若・法華なり、般若・法華の中には般若じんみつ

最第一なり、真言宗には日本国に二の流あり東寺流は弘法大師十住心をしんごんしゅう

立て第八法華・第九華嚴・第十真言・法華經は大日經に劣るのみならず猶ほつけ

華嚴經に下るなり、天台の真言は慈覺大師等大日經と法華經とは広略のけこんぎよう

異法華經は理秘密・大日經は事理俱密なり、浄土宗には聖道・浄土・ほけきよう

難行・易行難行・正行を立てたり浄土の三部經より外の法華經等のいぎようそうぎよう

一切經は難行・聖道・難行なり、禪宗には二の流あり一流は一切經いっさいきよう

一切の宗の深義は禪宗なり一流は如来一代の聖教は皆言説・如来のじんぎ

一切の宗の深義は禪宗なり一流は如来一代の聖教は皆言説・如来のぜんしゅう

一切の宗の深義は禪宗なり一流は如来一代の聖教は皆言説・如来のいっさい

一切の宗の深義は禪宗なり一流は如来一代の聖教は皆言説・如来のじんぎ

一切の宗の深義は禪宗なり一流は如来一代の聖教は皆言説・如来のぜんしゅう

一切の宗の深義は禪宗なり一流は如来一代の聖教は皆言説・如来のいっさい

一切の宗の深義は禪宗なり一流は如来一代の聖教は皆言説・如来のじんぎ

一切の宗の深義は禪宗なり一流は如来一代の聖教は皆言説・如来のぜんしゅう

一切の宗の深義は禪宗なり一流は如来一代の聖教は皆言説・如来のいっさい

一切の宗の深義は禪宗なり一流は如来一代の聖教は皆言説・如来のじんぎ

一切の宗の深義は禪宗なり一流は如来一代の聖教は皆言説・如来のぜんしゅう

一切の宗の深義は禪宗なり一流は如来一代の聖教は皆言説・如来のいっさい

一切の宗の深義は禪宗なり一流は如来一代の聖教は皆言説・如来のじんぎ

一切の宗の深義は禪宗なり一流は如来一代の聖教は皆言説・如来のぜんしゅう

くりん ほうべん
口輪の方便なり禪師は如来の意密言説にをよばず教外の別伝なり、俱舍宗
じょうじつ
・成実宗・律宗は小乗宗なり天竺・震旦には小乗宗の者大乘を破す
にほんこく
る事これ多し日本国には其の義なし。

いわ しよしゅう
問うて云く諸宗の異義区なり一一に其の謂れありて得道をなすべきか又
いぎ まちまち
しよしゅう みなほうほう
諸宗皆謗法となりて一宗計り正義となるべきか、答えて云く異論相違あり

みなとくどう
といえども皆得道なるか、仏の滅後四百年にあたりて健駄羅国の迦式色迦

ぶつほう

とうと いちげ

きょう ぶつほう

いぎ

かにか

ふしん
不審して云く仏説は定て一ならんと終に脇尊者に問う、尊者答て云く金杖

いわ ぶつせつ

ついに ぎょうそんじゃ

いわ こんじょう

こんじょう

を折つて種種の物につくるに形は別なれども金杖は一なり形の異なるをば

あらそ

いへども 金がね

ふとう

あらそ

ども入理は一なり等と云云、又求那跋摩云く諸論各異端なれども修行の理

へんしゅう

ぜひ

いじょう

いたん

しゅぎよう

は二無し偏執に是非有りととも達者は違諍無し等と云云、又五百羅漢の真因

各異ことなれども同く聖理をえたり、大論だいろんの四悉檀ししつたんの中の対治悉檀たいじしつたん・撰論じょうろんの四

意趣いしゆの中の衆生意樂意趣しじゅういぎよういしゆ・此等これらは此の善を嫌きらい此の善をほむ、檀戒進等だんかいしん一

一にそしり一一にほむる皆得道みなとくどうをなる、此等これらを以てこれを思うに護法ごほう・

清弁しょうべんのあらそい智光ちこう・戒賢かいけんの空中くうちゅう・南三なんさん・北七ほくひちの頓漸とんぜん・不定ふじよう・一時いちじ・二

時とき・三時さんじ・四時しじ・五時ごじ・四宗ししゅう・五宗ごしゅう・六宗ろくしゅう・天台てんだいの五時ごじ・華嚴けこんの五教ごけう・

真言教しんこんぎようの東寺とうじ・天台てんだいの諍じやうどしやう・淨土宗じやうどしやうの聖道しやうどう・淨土じやうど・禪宗ぜんしゅうの教外きやうげ・教内きやうない、

入門さべつは差別せりということとも実理に入る事は但一なるべきか。

難なんじて云いわく華嚴けこんの五教ごけう・法相ほつそう・三論さんろんの三時さんじ・禪宗ぜんしゅうの教外きやうげ・淨土宗じやうどしやうの

難行なんぎよう・易行いぎよう・南三なんさん・北七ほくひちの五時等ごじどう・門もんはことなりと・いへども入理にり・一に

して皆仏意みなぶつゐに叶かない謗法ほうほうとならずといはば謗法ほうほうという事あるべからざるか

謗法ほうほうとは法に背そむくという事なり法に背そむくと申もうすは小乗しょうじようは小乘經しょうじようきやうに背そむき

大乘だいじようは大乗經だいじようきやうに背そむく法に背そむかばあに謗法ほうほうとならざらん謗法ほうほうとならばなん

ぞ苦果くかをまねかざらん、此このの道理どうりにそむくこれひとつ、大般若經はんにやきように云いわく

「般若はんにやを謗ぼうずる者は十方じゅうぽうの大阿鼻地獄あびじごくに墮おつべし」法華經ほけきように云いわく「若もし人

信ぜずして乃至其なの人命終みようじゆうして阿鼻地獄あびごくに入らん」と涅槃經ねはんぎように云いわく「世いに難なん

治ちの病三あり一には四重しじゆう・二には五逆ごぎやく・三には謗大乗だいいじゆうなり」此等これらの經文

あにむなしかるべき、此等これらは証文しょうもんなり、されば無垢論師むくろんし・大慢婆羅門だいまんばらもん・

熙連禪師きれんぜん・嵩靈法師等すうりようほうしは正法しょうほうを謗ぼうじて現身げんしんに大阿鼻地獄あびじごくに墮おち舌口中くちゆうに

爛ただれたりこれは現証げんじようなり、天親菩薩てんじんぼさつは小乗しょうじようの論を作つて諸大乘經しのだいじようきよう・を

はしき、後に無著菩薩むちやくぼさつに對して此このの罪つみを懺悔ざんげせんがために舌を切らんとく

い給たまいき、謗法ほうほうもし罪つみとならずんばいかなが千部の論師懺悔ろんしざんげをいたすべき、

闡提せんだいとは天竺てんじくの語ことば此こには不信ふしんと翻ひるがえりす不信ふしんとは一切衆生いっさいしじゆうしつうぶつしゆう悉有しつうぶつしゆう仏性を信

ぜざるは闡提せんだいの人と見へたり。

不信ふしんとは謗法ほうほうの者なり恒河こうがの七種の衆生しちじゆうの第一だいいちは一闡提いっせんだい・謗法常没ほうほうじようぼつの

者なり、第二は五逆・謗法常・没等の者なりあに謗法を・をそれざらん、答えて云く謗法とは只由なく仏法を謗ずるを謗法といふか我が宗をたてんがために余法を謗ずるは謗法にあらざるか、撰論の四意趣の中の衆生意趣といしゅ意趣とは仮令人ありて一生の間・一善をも修せず但悪を作る者あり而るに小縁にあって何れの善にてもあれ一善を修せんと申す・これは随喜讚歎すべし、又善人あり一生の間ただ一善を修す而るを他の善え・うつさんがためにそのぜんをそしる、一事の中に於て・或は呵し・或は讚すといふこれなり、大論の四悉檀の中の対治悉檀又これをなじ、浄名經の彈呵と申すは阿含經の時ほめし法をそしるなり、此等を以てをもふに・或は衆生多く小乗の機あれば大乘を謗りて小乗經に信心をまし・或は衆生多く大乘の機なれば小乗をそしりて大乘經に信心をあつくす、或は衆生

・弥陀仏に縁あれば諸仏をそしりて弥陀に信心をまさしめ、或は衆生多

く地蔵に縁あれば諸菩薩をそしりて地蔵をほむ、・或は衆生多く華嚴經に縁あれば諸經をそしりて華嚴經をほむ、・或は衆生・大般若經に縁あれば諸經をそしりて大般若經をほむ、・或は衆生・法華經・・或は衆生だいにちきよう
大日經等同く心うべし、機を見て・或は讚め・或は毀る共に謗法とならず而るを機をしらざる者みだりに・或は讚め・或は皆るは謗法となるべきか、例せば華嚴宗・三論・法相・天台・真言・禪・淨土等の諸師の諸經をはして我が宗を立つるは謗法とならざるか。

難じて云く宗を立てんに諸經・諸宗を破し仏・菩薩を讚むるに仏・菩薩を破し他の善根を修せしめんがために・この善根をはする・くるしからずば阿含等の諸の小乘經に華嚴經等の諸大乘經をはしたる文ありや、華嚴經に法華・大日經等の諸大乘經をはしたる文これありや、答えて云く阿含・小乘經に諸大乘經をはしたる文はなければども華嚴經には

にじようだいじよう

いちじよう

にじようだいじよう

ねはんぎよう

しよだいじようぎよう

二乗大乘

一乗をあげて二乗大乘をはし涅槃經には諸大乘經をあげて

ねはんぎよう

涅槃經に對してこれをはす、密嚴經には一切經中王とき無量義經には

みつこんぎよう

いつさいぎよう

むりようぎきよう

よんじゆうよねん

みけんしんじつ

あみだ

ねんぶつ

しよきよう

ぜんこん

四十余年・未顕眞実ととかれ阿弥陀經には念仏に對して諸經を小善根とと

かる、これらの例一にあらす故に又彼の經經による人師皆此の義を存せ

ゆえ

きようぎよう

にんしみな

しよきよう

り、此等をもつて思うに宗を立つる方は我が宗に對して諸經を破るはくる

これら

しよきよう

やぶ

しよきよう

しからざるか、難じて云く華嚴經には小乘・大乘・一乗とあげ密嚴經

なん

いわ

しよじよう

だいじよう

には一切經中王ととかれ涅槃經には是諸大乘とあげ阿弥陀經には念仏に

いつさいぎよう

ねはんぎよう

しよだいじよう

あみだ

對して諸經を小善根とはとかれたれども無量義經のごとく四十余年と年限

しよきよう

ぜんこん

むりようぎきよう

よんじゆうよねん

を指して其の間の大部の諸經・阿含・方等・般若・華嚴等の名をよびあげ

そ

たいぶ

しよきよう

あこん

て勝劣をとける事これなし、涅槃經の是諸大乘の文計りこそ雙林最後の

しよれつ

ねはんぎよう

しよだいじよう

ばか

經として是諸大乘ととかれたれば涅槃經には一切經は嫌はるかと・をば

しよだいじよう

ねはんぎよう

いつさいぎよう

きら

うれども是諸大乘經と挙げて次ぎ下に諸大乘經を列ねたるに十二部・

しよだいじよう

あ

つぎしも

しよだいじよう

きら

しよだいじよう

あ

つぎしも

しよだいじよう

きら

しよだいじよう

あ

つぎしも

しよだいじよう

きら

しよだいじよう

あ

つぎしも

しよだいじよう

きら

しよだいじよう

あ

つぎしも

しよだいじよう

きら

しよだいじよう

あ

つぎしも

しよだいじよう

きら

しよだいじよう

あ

つぎしも

しよだいじよう

修多羅・方等・般若等とあげたり無量義經・法華經をば載せず、但し
無量義經に挙ぐるところは四十余年の阿含・方等・般若・華嚴經をあげた
り、いまだ法華經・涅槃經の勝劣はみへず密嚴に一切經中王とはあげた
れども一切經をあぐる中に華嚴・勝鬘等の諸經の名をあげて一切經中
王ととく故に法華經等とはみへず、阿弥陀經の小善根は時節もなし善根の
相貌もみへず、たれかする小乘經を小善根というか又人天の善根を小
善根というか又觀經・雙觀經の所説の諸善を小善根というかいまだ一代
を念仏に對して小善根というとはきこえず。

又大日經・六波羅蜜經等の諸の秘教の中にも一代の一切經を嫌うてそ
の經をほめたる文はなし、但し無量義經計りこそ前四十余年の諸經を嫌い
法華經一經に限りて已説の四十余年・今説の無量義經・當説の未來にとく
べき涅槃經を嫌うて法華經計りをほめたり、釈迦如来・過去・現在・未來

の三世さんぜの諸仏しよぶつ世にいで給たまいて各各一切いっさいききやう經を説き給うにいづれの仏も法華ほけき經
第一だいいちなり、例せば上郎らくやう・下郎不定ふじやうなり田舎いなかにしては百姓ひやくせい・郎從等ろうじやうは侍を
上郎らくやうといふ、洛陽らくやうにして源平等げんべう已下いかを下郎げんべうといふ三家を上郎らくやうといふ、又主
を王ひやくせいといはば百姓も宅中の王じちやうなり地頭じちやう・領家等も又・村・郷・郡・国の王
なり・しかれども大王だいおうにはあらず、小乗しやうじやう經には無為涅槃むいねはんの理が王なり
しやうじやう かいじやう
小乗しやうじやうの戒定等かいじやうに對して智慧ちえは王なり、諸大乘しよだいじやう經には中道ちゆうだうの理が王な
り又華嚴けこん經は円融相即えんゆうさうそくの王・般若經はんによきやうは空理の王・大集經だいいしきやうは守護正法しゆごしやうほふの王
・藥師經やくしは藥師如來やくしにょらいの別願べつがんを説く經の中の王・雙觀經そうかんきやうは阿彌陀佛あみだぶつの四十八
願を説く經の中の王・大日經だいにちきやうは印真言しんこんを説く經の中の王・一代いちだい・一切經いっさいききやう
の王にはあらず、法華經ほけきやうは真諦しんたい・俗諦そくたい・空仮中印真言くうけちゆう しんこん・無為むいの理・十二大
願・四十八願いっさいしききやう・一切諸經しよせつの所説しよせんの所詮ほうもんの法門だいおうの大王なり、これ教をしれる
者しなり而しかるを善無畏ぜんむい・金剛智こんこうち・不空ふくう・法藏ほうぞう・澄觀ちやうかん・慈恩じおん・嘉祥かじやう・

なんざん ほんくひち どんらん どうしゆく ぜんどう だるま しよりゆう えきよう いちだいだい
南三・北七・曇鸞・道綽・善導・達磨等の我が所立の依経を一代第一と

いえるは教をしらざる者なり、但し一切の人師の中には天台智者大師一人

教をしれる人なり、曇鸞・道綽等の聖道・浄土・難行・易行・正行・

雑行は源と十住毘婆沙論に依る彼本論に難行の内に法華・真言等を入

ると謂は僻案なり、論主の心と論の始中終をしらざる失あり慈恩が深密

経の三時に一代を・をさめたる事、又本経の三時に一切経の摂らざる事

をしらざる失あり、法蔵・澄観等が五教に一代を・をさむる中に法華経・

華嚴経を円教と立て又華嚴経は法華経に勝れたりとをもえるは所依の

華嚴経に二乗作仏・久遠実成をあかさざるに記小久成ありとをもひ華嚴よ

りも超過の法華経を我経に劣ると謂うは僻見なり、三論の嘉祥の二蔵等又

法華経に般若経すぐれたりとをもう事は僻案なり、善無畏等が大日経は

法華経に勝れたりという法華経の心をしらざるのみならず大日経をもしら

ざる者なり。

問て云く此等皆謗法ならば惡道に墮ちたるか如何、答て云く謗法に

じようちゆうげ

ほうほう

じおん

かじよう

ちようかん

ほうほう

ほうほう

じしん

上中下雜の謗法あり慈恩・嘉祥・澄觀等が謗法は上中の謗法か其上自身

ほうほう

も謗法としれるかの間・悔還す筆これあるか、又他師をはするに二あり

のうはじは

能破似破これなり教はまさりとしれども是非をあらはさんがために法をは

す・これは似破なり、能破とは実にまされる経を劣とをもうてこれをはす

・これは惡能破なり、又現に・をとれるをはす・これ善能破なり、但し脇

・これは惡能破なり、

のうは

げん

をとれるをはす

・これ善能破なり、

ただ脇

尊者の金杖の譬は 小乗經 は多しといえども同じ苦・空・無常・無我の

そんじゃ

こんじよう

たとえ

しょうじようびよう

はちぶ

じようろん

論あれども但門の

むじよう

むが

理なり、

しよにん

諸人

同く此の義を存じて十八部・二十部相ひ諍論あれども但門の

諍にて理の諍にはあらず故に共に謗法とならず、外道が 小乗經 を

あらそい

あらそい

ゆえ

ほうほう

げん

しょうじようびよう

むじよう

げん

破するは外道の理は常住なり 小乗經 の理は無常なり空なり故に外道が

は

げん

じようじゆう

しょうじようびよう

むじよう

ゆえ

げん

しょうじようびよう

げん

小乗經 をはするは謗法となる、大乘經の理は中道なり 小乗經 は空

しょうじようきよう

ほうほう

だいじようきよう

ちゆうどう

しょうじようきよう

は空

しょうじようきよう

ほうほう

だいじようきよう

ちゆうどう

しょうじようきよう

は空

しょうじようきよう

は空

しょうじようきよう

は空

しょうじようきよう

ほうほう

だいじようきよう

ちゆうどう

しょうじようきよう

は空

しょうじようきよう

は空

しょうじようきよう

は空

しょうじようきよう

ほうほう

だいじようきよう

ちゆうどう

しょうじようきよう

は空

しょうじようきよう

は空

しょうじようきよう

は空

しょうじようきよう

ほうほう

だいじようきよう

ちゆうどう

しょうじようきよう

は空

しょうじようきよう

は空

しょうじようきよう

は空

しょうじようきよう

ほうほう

だいじようきよう

ちゆうどう

しょうじようきよう

は空

しょうじようきよう

は空

しょうじようきよう

は空

しょうじようきよう

ほうほう

だいじようきよう

ちゆうどう

しょうじようきよう

は空

しょうじようきよう

は空

しょうじようきよう

は空

なり しょうじょうきよう 小乗經の者が大乘經をはするは謗法となる大乘經の者が

小乗經 しょうじょうきよう を・はするは破法とならず、諸大乘經の中の理は未開会の理い

まだ記小久成 くじよう これなし法華經の理は開会の理・記小久成これあり、諸

大乘經の者が法華經を・はするは謗法となるべし法華經の者の諸

大乘經を謗するは謗法となるべからず、大日經・真言宗は未開会・記

小久成なくば法華經已前なり開会・記小久成を許さば涅槃經とをなじ、

但し善無畏三藏・金剛智・不空・一行等の性惡の法門・一念三千の法門は

天台智者の法門をぬすめるか、若し爾らば善無畏等の謗法は似破か又雜謗法

か五百羅漢の真因は小乗十二因縁の事なり無明行等を縁として空理に入

ると見へたり、門は諍えども謗法とならず撰論の四意趣・大論の四悉檀等

は無著菩薩・竜樹菩薩滅後の論師として法華經を以て一切經の心をえて

四悉四意趣等を用いて爾前の經經の意を判ずるなり未開会の四意趣・

しつだん かいえ いしゅ しつだん
四悉檀と開会の四意趣・四悉檀を同ぜば、あに謗法にあらずや此等をよく
よくしるは教をしれる者なり、四句あり一に信而不解・二に解而不信・三
やくしんやくげ
に亦信亦解・四に非信・非解、問うて云く信而不解の者は謗法なるか答え
いわ ほけきよう いわ
て云く法華經に云く「信を以つて入ることを得」等と云云、涅槃經の九に
いわ なん いわ ねはんぎよう
云く難じて云く涅槃經三十六に云く我契經の中に於て説く二種の人有り
ぶつぽう ぼう
仏法僧を謗すと、一には不信にして瞋恚の心あるが故に二には信ずと雖も
げ ゆえ ぜんなんしも しんに ちえ あ こ
義を解せざるが故に善男子若し人信心あつて智慧有ること無き是の人は
すなわ よ むみよう そうちよう も ちえ しんじん
則ち能く無明を増長す若し智慧有つて信心あること無き是の人は則ち能く
じゃけん そうちよう ぜんなんし ふしん しんに
邪見を増長す善男子・不信の人は瞋恚の心あるが故に説いて仏法僧宝有る
こと無しと言わん、信者は慧無く顛倒して義を解するが故に法を聞く者を
ぶつぽう ぼう
して仏法僧を謗ぜしむ等と云云、此の二人の中には信じて解せざる者を謗法
と説く如何、
い かん
答えて云く此の信而不解の者は涅槃經の三十六に恒河の七種

の衆生の第二の者を説くなり、此の第二の者は涅槃經の一切衆生悉有
仏性の説を聞いて之を信ずと雖も又不信の者なり。

問うて云く如何ぞ信ずと雖も不信なるや、答えて云く一切衆生悉有仏性
の説を聞きて之を信ずと雖も又心を爾前の經に寄する一類の衆生をば無
仏性の者と云うなり此れ信而不信の者なり問うて云く証文如何、答えて
云く恒河第二の衆生を説いて云く經に云く「是くの如き大涅槃經を聞くこ
とを得て信心を生ず是を名けて出と為す」と又云く「仏性は是れ衆生に
有りと信ずと雖も必ずしも一切皆悉く之有らず是の故に名けて信不具足と
為す」文此の文の如くんば口には涅槃を信ずと雖も心に爾前の義を存する
者なり又此の第二の人を説いて云く「信ずる者にして慧無く顛倒して義を
解するが故に」等と云云、顛倒解義とは実經の文を得て権經の義を覺る
者なり。

問うて云く信而不解得・道の文如何、答えて云く涅槃經の三十二に云く
「是れ菩提の因は復無量なりと雖も若し信心を説けば已に摂尽す」文九に
云く「此の經を聞き已つて悉く皆菩提の因縁と作る法声光明毛孔に入る
者は必定して当に阿耨多羅三藐三菩提を得べし」等と云云、法華經に云く
「信を以て入ることを得」等と云云、問うて云く解而不信の者は如何、答
う恒河の第一の者なり、問うて云く証文如何、答えて云く涅槃經の三十六
に第一を説て云く「人有りて是の大涅槃經の如来常住無有變易常樂我淨
を聞くとともに終に畢竟して於涅槃の一切衆生悉有仏性に入らざるは
いっせんない
一闡提の人なり方等經を謗じ五逆罪を作り四重禁を犯すとも必ず当に菩提
の道を成ずることを得べし須陀☆の人・斯陀含の人・阿那含の人・阿羅漢
の人・辟支仏等必ず当に阿○菩提を成ずることを得べし是の語を聞き已つ
て不信の心を生ず」等と云云。

問うて云く此の文不信とは見えたり解而不信とは見えず如何、答えて云く第一の結文に云く「若し智慧有つて信心有ること無き是の人は則ち能く邪見を増長す」文。

◆六三 持妙法華問答抄 みょうほう もんどう 弘長三年 こうちゅう 四十二歳御作 461P

抑も希に人身をうけ適ま仏法をきけり、然るに法に浅深あり人に高下

ありと云へり何なる法を修行してか速に仏になり候べき願くは其の道を聞

かと思ふ、
 答えて云くいわ家いへに尊勝そんしょうあり国くにに高貴みかたあり皆みな其そのの君きみを貴たつとみ

其その親あがを崇あにこむといへども豈こ國王こにまさるべきや、爰こに知だいしんぬ大小う・権ごんじ實つは

家家の諍ひなれども一代聖教の中には法華独り勝れたり、是れ頓証菩提

の指南・直至道場の車輪なり、疑つて云く人師は経論の心を得て釈

をつくる者なり然らば則ち宗宗の人師・面・面・各々に教門をしつらい釈を作

り義を立て証得菩提と志す何ぞ虚しかるべきや、然るに法華独り勝る

と候はば心せばくこそ覺え候へ、おほ 答えて云く法華独りいみじと申すが心せ

ばく候はば釈尊程心せばき人は世に候はじ何ぞ誤りの甚しきや、しやくそん 且くあやま はなはだ

いっきよう

一經・一流の釈を引いて其の迷をさとらせん、そ 無量義經に云く「種種にむりようぎきよう い わ しゅじゅ

法を説き種種に法を説くこと方便力を以てす四十余年未だ真実を顯さず」と しゅじゅ ほうべん よんじゅうよねんいま しんじつ あらわ

云云、此の文を聞いて大莊嚴等の八万人の菩薩・一同に「無量無辺不可思議そつこん はちまん ぼさつ むりようむへんふかしぎ

・阿僧祇劫を過ぐるとも終に無上菩提を成ずることを得ず」と領解し給へあそぎこう す つい むじようぼだい じよう りようげ たま

り、此の文の心は華嚴・阿含・方等・般若の四十余年の經に付いていかにけんぶつ もう ぜんしゅう たも ぶつどう むりようむへんふかしぎ あそぎこう す

念仏を申し禪宗を持ちて仏道を願ひ無量無辺不可思議・阿僧祇劫を過ぐるとも無上菩提を成ずる事を得じと云へり、しかのみならず方便品には「世尊むじようぼだい じよう

は法久くして後要当に真実を説きたもうべし」ととき、又唯一乘法・のちかならずまさ しんじつ と ゆいいういちじよう

無二亦無三と説きて此の經ばかりまことなりと云い、又二の卷にはやくむ と

「唯我一人のみ能く救護を為す」と教へ「但樂いて大乘經典を受持してただわれひとり よ くこ な ねが だいじようきようてん じゅじ

唯我一人のみ能く救護を為す」と教へ「但樂いて大乘經典を受持して

乃至余經の一偈をも受けず」と説き給へり、文の心はただわれ一人して・
よくすくひ・まもる事をなす、法華經をうけたもたん事をねがひて余經の
一偈をもうけざれと見えたり、又云く「若し人信ぜずして此の經を毀謗せ
ば則ち一切世間の仏種を断ぜん乃至其の人命終して阿鼻獄に入らん」と
云云、此の文の心は若し人・此の經を信ぜずして此の經にそむかば則ち
一切世間の仏のたねを・たつものなり・その人は命をはらば無間地獄に入
るべしと説き給へり、此等の文をうけて天台は將非魔作仏の詞正く此の文
によれりと判じ給へり、唯人師の釈計りを憑みて仏説によらずば何ぞ仏法
と云う名を付くべきや言語道断の次第なり、之に依つて智証大師は經に
大小なく理に偏円なしと云つて一切・人によらば仏説無用なりと釈し給へ
り、天台は「若し深く所以有り復修多羅と合せるをば録して之を用ゆ無文
無義は信受す可からず」と判じ給へり、又云く「文証無きは悉く是れ邪の

おも
謂い」とも云へり、
い
かが心得べきや。

問うて云く人師の釈はさも候べし爾前の諸經に此の經第一とも説き

しよきよう

諸經の王とも宣べたり若し爾らば仏説なりとも用うべからず候か如何、答

い
わ
た
と
い

えて云く設い此の經第一とも諸經の王とも申し候へ皆是れ權教なり其の

ことば

語によるべからず、之に依つて仏は「了義經によりて不了義經によらざ

と
み
よう
く
だ
い
し

れ」と説き妙樂大師は「縦い經有りて諸經の王と云うとも已今當説最為

だいいち

第一と云わざれば兼但对帶其の義知んぬ可し」と釈し給へり、此の釈の心

たと

は設ひ經ありて諸經の王とは云うとも前に説きつる經にも後に説かんずる

し
よ
き
よ
う

經にも此の經はまされりと云はずば方便の經としれと云う釈なり、されば

に
ぜ
ん
な
ら
い

爾前の經の習として今説く經より後に又經を説くべき由を云はざるなり、

た
だ
ほ
け
き
よ
う
ば
か

唯法華經計りこそ最後の極説なるが故に已今當の中に此の經独り勝れたり

さ
い
こ
ゆ
え
い
こ
ん
と
う

と説かれて候へ、されば釈には「唯法華に至つて前教の意を説いて今教の

意を顕すあらわと申もうして法華經ほけきようにて如来にょらいの本意ほんいも教化きようけの儀式も定りたりと見えたり、之に依よつて天台てんだいは「如来成道にょらいじょうどう四十余年よんじゅうよねん未だ眞実しんじつを顕あらわさず法華ほつけ始めて眞実しんじつを顕あらわす」と云へり、此の文の心は如来世にょらいに出いでさせ給たまひて四十余年よんじゅうよねんが間は眞実しんじつの法をば顕あらわさず法華經ほけきように始めて仏になる実の道を顕あらわし給たまへりと釈しゃくし給たまへり。

問いうて云いく已今当いこんとうの中に法華經ほけきよう勝れたりと云う事はさも候べし、但し有い人師にんしの云いわく四十余年よんじゅうよねん・未顕眞実みけんしんじつと云うは法華經ほけきようにて仏になる声聞しょうもんの爲なりにぜん爾前にぜんの得益とくやくの菩薩ぼさつの爲には未顕眞実みけんしんじつと云うべからずと云う義をばいかが心得こころえ候べきや、答こたえて云いく法華經ほけきようは二乗にじようの爲なり菩薩ぼさつの爲にあらず、されば未顕眞実みけんしんじつと云う事二乗にじように限る可しと云うは徳だいし一大師だいしの義ぎか此これは法相宗ほうそうしゅうの人なり、此の事を伝でん教大師けんぎょうだいし破たし給たまうに「現在の☆食者げんざいは偽章ぎしやう数巻しうまを作りて、法を謗ぼうじ人を謗ぼうず何ぞ地獄じごくに墮だせざらんや」と破はし給たまひしかば徳一は

其の語に責められて舌八にさけてうせ給いき、未顕眞実とは二乗の為なり
と云はば最も理を得たり、其の故は如来布教の元旨は元より二乗の為なり
一代の化儀・三周の善巧・併ら二乗を正意とし給へり、されば華嚴經には
地獄の衆生は仏になるとも二乗は仏になるべからずと嫌い、方等には高峯
に蓮の生ざるように二乗は仏の種をいりたりと云はれ、般若には五逆罪の
者は仏になるべし二乗は叶うべからずと捨てらる、かかるあさましき捨者
の仏になるを以て如来の本意とし法華經の規模とす、之に依つて天台の云く
「華嚴大品も之を治すること能わず唯法華のみ有りて能く無学をして還つ
て善根を生じ仏道を成ずることを得せしむ所以に妙と称す、又闡提は心有
り猶作仏す可し二乗は智を滅す心生ず可からず法華能く治す復稱して妙と
為す」と云云、此の文の心は委く申すに及ばず誠に知んぬ華嚴・方等・大品
等の法薬も二乗の重病をばいやさず又三惡道の罪人をも菩薩ぞと爾前の

經にはゆるせども二乗をばゆるさず、之に依つて妙樂大師は「余趣を實に
會すること諸經に・或は有れども二乗は全く無し故に菩薩に合して二乗に
對し難きに從つて説く」と釈し給えり、しかのみならず二乗の作仏は一切
衆生の成仏を顯すと天台は判じ給へり、修羅が大海を渡らんをば是れ難し
とやせん、嬰兒の力士を投ん何ぞたやすしとせん、然らば則ち仏性の種あ
るものは仏になるべしと爾前にも説けども未だ焦種の者作仏すべしとは説
かず、かかる重病をたやすく・いやすは独り法華の良藥なり、只須く汝
仏にならんと思はば慢のはたほこをたをし忿りの杖をすてて偏に一乗に帰
すべし、名聞名利は今生のかざり我慢偏執は後生のほだしなり、嗚呼恥
づべし恥づべし恐るべし恐るべし。

問うて云く一を以て万を察する事なればあらあら法華のいわれを聞くに
耳目始めて明かなり、但し法華經をば・いかように心得候てか速に菩提の

岸に到るべきや、伝え聞く一念三千の大虚には慧日くもる事なく一心三觀の広池には智水にぐる事なき人こそ其の修行に堪えたる機にて候なれ、然るに南都の修學に臂をくだく事なかりしかば瑜伽唯識にもくらし北嶺の學文に眼をさらさざりしかば止觀玄義にも迷へり、天台・法相の兩宗はほとぎを蒙りて壁に向へるが如し、されば法華の機には既にもれて候にこそ何んがし候べき、答えて云く利智精進にして觀法修行するのみ法華の機ぞと云つて無智の人を妨ぐるは当世の學者の所行なり是れ還つて愚癡邪見の至りなり、一切衆生・皆成仏道の教なれば上根・上機は觀念・觀法も然るべし下根・下機は唯信心肝要なり、されば經には「淨心に信敬して疑惑を生ぜざらん者は地獄・餓鬼・畜生に墮ちずして十方の仏前に生ぜん」と説き給へり、いかにも信じて次の生の仏前を期すべきなり、譬えば高き岸の下に人ありて登ることあたはざらんに又岸の上に人ありて繩を

たいせい きんげんうたがい 大聖の金言 疑 ひなし、然るに人・此の理をしらず見ずして名聞・狐疑・
へんしゅう 偏執を致せるは墮獄の基なり、只願くは経を持ち名を十方の仏陀の願海
ほま さんぜ ほさつ に流し譽れを三世の菩薩の慈天に施すべし、然れば法華経を持ち奉る人は
てんりゅう はちぶ しだいぼさつ 天竜・八部・諸大菩薩を以て我が眷属とする者なり、しかのみならず因身
にくだん かまん ぶつげん の肉団に果満の仏眼を備へ有為の凡膚に無為の聖衣を著ぬれば三途に恐れ
なん はばかり なく八難に憚りなし、七方便の山の頂に登りて九法界の雲を払ひ無垢地
ほつしょう そら の園に花開け法性の空に月明かならん、是人於仏道・決定無有疑の文
たのみ ゆいがいちにん のういくこ 憑あり唯我一人・能為救護の説疑 ひなし、一念信解の功德は五波羅蜜の
ずいき うたがい 行に越へ五十展転の隨喜は八十年の布施に勝れたり、頓証菩提の教は遙に
ひい けんぼんおんじゅ 群典に秀で顕本遠寿の説は永く諸乘に絶えたり、爰を以て八歳の竜女は
たいかい せつな ほんげ じようぎよう 大海より来つて経力を刹那に示し本化の上行は大地より涌出して仏寿を
くおん あらわ ごんごどうだん しんぎようしよめつ みようほう 久遠に顕す言語道断の經王心行所滅の妙法なり、然るに此の理をいるか

せにして余経よきょうにひとしむるは謗法ほうぼうの至り大罪たいざいの至極しごくなり、譬たとえを取るに物なし、仏の神変しんぺんにても何ぞ是これを説き尽つくきん菩薩ぼさつの智力しちりくにても争いかでか是これを量はかるべき、されば譬喻品ひゆほんに云く「若もし其そのの罪つみを説かば劫きわを窮むとも尽つくきず」と云へり文の心は法華経ほけきょうを一度もそむける人の罪つみをば劫きわを窮むとも説き尽つくし難がたしと見えたり、然しかる間三世さんぜの諸仏しよぶつの化導けどうにももれ恒沙ごうしゃの如来にょらいの法門ほうもんにも捨てられ冥くらきより冥くらきに入あつて阿鼻大城あびだいじょうの苦患争くかんいかでまぬかが免れん誰か心あらん人・長劫ちやうきやくの悲みを恐れざらんや、爰ここをを以て経いに云く「経きやうを誦誦どくじゆし書持しよじするこ

と有らん者を見て輕賤きやうせんぞうしつ憎嫉けつこんして結恨けつこんを懷いだかん其そのの人命終みやうじゆうして阿鼻獄あびごくに入らん」と云云、文の心は法華経ほけきょうをよみたもたん者を見てかろしめ・いやしみ・にくみ・そねみ・うらみをむすばん其そのの人は命いのちをはりて阿鼻大城あびだいじょうに入らんと云へり、大聖たいせいの金言きんげん誰か是これを恐れざらんや正直捨方便しやうじきしやほうべんの明文めいぶん豈是あにこれを疑うたがいうべきや、然しかるに人皆経文みなきやうもんに背そむき世悉こことこく法理まよひに迷へり汝何ぞ悪友なんじなんあくゆうの

教へに随はんや、されば邪師の法を信じ受くる者を名けて毒を飲む者なり
と天台は釈し給へり汝能く是を慎むべし是を慎むべし。

倩ら世間を見るに法をば貴しと申せども其の人をば万人是を惡む汝能く

能く法の源に迷へり何にと云うに一切の草木は地より出生せり、是を

以て思うに一切の仏法も又人によりて弘まるべし之に依つて天台は仏世す

ら猶人を以て法を顯はす末代いづくんぞ法は貴けれども人は賤しと云はん

やとこそ釈して御坐候へ、されば持たる法だに第一ならば持つ人随つて

第一なるべし、然らば則ち其の人を毀るは其の法を毀るなり其の子を賤

しむるは即ち其の親を賤しむなり、爰に知んぬ当世の人は詞と心と総てあ

はず孝経を以て其の親を打つが如し豈冥の照覧恥かしからざらんや地獄

の苦み恐るべし恐るべし慎むべし慎むべし、上根に望めても卑下すべから

ず下根を捨てざるは本懷なり、下根に望めても☆慢ならざれ上根ももる

る事あり心をいたさざるが故に凡そ其の里ゆかしけれども道たえ縁なきに
は通ふ心もをろそかに其の人恋しけれども憑めず契らぬには待つ思もなを
ざりなるやうに彼の月卿雲閣に勝れたる靈山浄土の行きやすきにも未だゆ
かず我即是父の柔☆の御すがた見奉るべきをも未だ見奉らず、是れ誠に袂
をくだし胸をこがす歎ならざらんや、暮行空の雲の色・有明方の月の光ま
でも心をもよほす思なり、事にふれをりに付けても後世を心にかけて花の春
雪の朝も是を思ひ風さはぎ村雲まよふ夕にも忘る隙なかれ、出ずる息は
入る息をまたず何なる時節ありてか毎自作是念の悲願を忘れ何なる月日あ
りてか無一成仏の御経を持たざらん、昨日が今日になり去年の今年とな
る事も是れ期する処の余命にはあらざるをや、総て過ぎにし方をかぞへて
年の積るをば知るといへども今行末にをいて一日片時も誰か命の数に入る
べき、臨終已に今にありとは知りながら我慢偏執・名聞利養に著して

みようほう

妙法を唱へ奉らざらん事は 志

いじんざし

の程無下にかひなし、さこそは皆成仏道

の御法とは云いながら此の人争でか仏道に・ものうからざるべき、色なき

そで

人の袖にはそぞろに月のやどる事かは、又命已に一念にすぎざれば仏は

いちねんすいき

くどく

と

たま

も

若し是れ二念三念を期すと云はば平等大慧

びようどうだいえ

一念随喜の功德と説き給へり、若し是れ二念三念を期すと云はば平等大慧

ほんぜいとんきよういちじようかいじよう

の本誓頓教一乗皆成仏の法とは云はるべからず、流布の時は末世・法滅

およ

き

こぎやく

ほうほう

おさ

ゆえ

とんしやうぼだい

に及び機は五逆・謗法をも納めたり、故に頓証菩提の心におきてられて

こぎ

しゅうじやく

じゃけん

著の邪見に身を任する事なかれ、生涯幾くならず思へば一夜のか

しょうがい

り

狐疑執 著の邪見に身を任する事なかれ、生涯幾くならず思へば一夜のか

りの宿を忘れて幾くの名利をか得ん、又得たりとも是れ夢の中の栄へ珍し

く

いくば

みようり

ただせんぜ

こういん

まか

只先世の業因に任せて営むべし世間の無常をさとらん事

むじよう

からぬ楽みなり、只先世の業因に任せて営むべし世間の無常をさとらん事

まなこ

さえぎ

は眼に遮り耳にみてり、雲とやなり雨とやなりけん昔の人は只名をのみき

雲とやなり雨とやなりけん昔の人は只名をのみき

あめ

露とや消え煙とや登りけん今の友も又みえず、我れいつまでか三笠の

ただ

は眼に遮り耳にみてり、雲とやなり雨とやなりけん昔の人は只名をのみき

つゆ

く、露とや消え煙とや登りけん今の友も又みえず、我れいつまでか三笠の

雲と思ふべき春の花の風に随ひ秋の紅葉の時雨に染まる、是れ皆ながらへ

しだが

もみじ

あめ

こ

みな

雲と思ふべき春の花の風に随ひ秋の紅葉の時雨に染まる、是れ皆ながらへ

雲と思ふべき春の花の風に随ひ秋の紅葉の時雨に染まる、是れ皆ながらへ

ぬ世の中のためしなれば法華經には「世皆牢固ならざること水沫泡焰の如し」とすすめたり「以何令衆生得入無上道」の御心のそこ順縁逆縁の御ことは已に本懷なれば暫くも持つ者も又本意にかないぬ又本意に叶はば仏の恩を報ずるなり、悲母深重の經文心安ければ唯我一人の御苦みもかつかつやすみ給うらん、釈迦一仏の悦び給うのみならず諸仏出世の本懷なれば十方三世の諸仏も悦び給うべし「我即歡喜・諸仏亦然」と説かれたれば仏悦び給うのみならず神も即ち隨喜し給うなるべし、傳教大師是を講じ給いしかば八幡大菩薩は紫の袈裟を布施し、空也上人是を読み給いかば松尾の大明神は寒風をふせがせ給う、されば「七難即滅・七福即生」と祈らんにも此の御經第一なり現世安穩と見えなればなり、他国侵逼の難・自界叛逆の難の御祈☆にも此の妙典に過ぎたるはなし、令百由旬内無諸衰患と説かれたればなり。

然るに当世の御祈☆はさかさまなり先代流布の権教なり末代流布の
最上真実の秘法にあらざるなり、譬えば去年の暦を用ゐる鳥を鵲につかはん
が如し是れ偏に権教の邪師を貴んで未だ実教の明師に値わせ給はざる故
なり、惜いかな文武の卞和があら玉何くにか納めけん、嬉しいかな釈尊出世
の髻の中の明珠今度我身に得たる事よ、十方諸仏の証誠として・い
るがせならず、さこそは「一切世間・多怨難信」と知りながら争か一分の
疑心を残して決定無有疑の仏にならざらんや、過去遠遠の苦みは徒ら
にのみこそ・うけこしか、などが暫く不変常住の妙因をうへざらん未来
永永の楽しみはかつかつ心を養ふともしめてあながちに電光朝露の名利をば
貪るべからず、「三界無安・猶如火宅」は如来の教へ「所以諸法・如幻如化」
は菩薩の詞なり、寂光の都ならずは何くも皆苦なるべし本覺の栖を離れ
て何事か楽しみなるべき、願くは「現世安穩・後生善処」の妙法を持つのみ

こそ只今生ただこんじょうの名聞みやうもん・後世ごしやうの弄引ろういんなるべけれ須すべからく心を一ひとにして南無なむ妙法蓮華經みょうほうれんげきやうと我も唱へ他をも勸すすんのみこそ今生人界こんじやうにんかいの思出おもひだなるべき、
南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經。

日蓮にちれん 花押かおう

◆六四 木絵二像開眼之事もくえ かいげん

文永元年ぶんえいがんねん 四十三歳御作 468P

仏に三十二相有います皆色法みななり、最下さいかの千輻輪ぶくりんより終り無見頂相むけんちやうさうに至いたるま
での三十一相は可見有対色かけんうたいしきなれば書きつべし作りつべし梵音声ぼんおんじやうの一相ひとは
ふかけんむたいしき不可見無対色ふかけんむたいしきなれば書く可べからず作つくる可べからず、仏滅後ぶつめつは木画もくえの二像にざうあり是れ
三十一相さんじゅういちさうにして梵音声ぼんおんじやうかけたり故ゆえに仏に非あらず又心法しんぽうかけたり、生身しやうしんの仏ほとけ
と木画もくえの二像にざうを対するに天地雲泥てんちうんでいなり、何ぞ涅槃ねはんの後分ごぶんには生身しやうしんの仏と
滅後めつごの木画もくえの二像にざうと功德くどくさいとう等らなりといふや又大瓔珞經やうらくには木画もくえの二像にざうは
生身しやうしんの仏にはをとれりととけり、木画もくえの二像にざうの仏の前に經を置けば三十二

相具足するなり、但心なければ三十二相を具すれども必ず仏にあらざる人天
も三十二相あるがゆへに、木絵の三十一相の前に五戒經を置けば此の仏は
輪王とひとし、十善論と云うを置けば帝釈とひとし、出欲論と云うを置
けば梵王とひとし全く仏にあらざる、又木絵二像の前に阿含經を置けば声聞
とひとし、方等・般若の一時一会の共般若を置けば縁覺とひとし、華嚴・
方等・般若の別円を置けば菩薩とひとし全く仏に非らず、大日經・金剛
頂經・蘇悉地經等の仏眼・大日の印真言は名は仏眼・大日といへども
其の義は仏眼・大日に非ず、例せば仏も華嚴經は円仏には非ず名にはよら
ず三十一相の仏の前に法華經を置きたてまつれば必ず純円の仏なり云云、
故に普賢經に法華經の仏を説て云く「仏の三種の身は方等より生ず」文、
是の方等は方等部の方等に非ず法華を方等といふなり、又云く「此の
大乘經は是れ諸仏の眼なり諸仏是に因つて五眼を具することを得る」等

云云、法華經の文字は仏の梵音声の不可見無対色を可見有対色のかたちと
・あらはしぬれば顕形の二色となれるなり、滅せる梵音声かへつて形をあ
らはして文字と成つて衆生を利益するなり、人の声を出すに二つあり、一
には自身は存ぜざれども人をたぶらかさむがために声をいだす是は随他意
の声、自身の思を声にあらはす事ありされば意が声とあらはる意は心法・
声は色法・心より色をあらはす、又声を聞いて心を知る色法が心法を顕す
なり、色心不二なるがゆへに而二とあらはれて仏の御意あらはれて法華の
文字となれり、文字変じて又仏の御意となる、されば法華經をよませ給は
む人は文字と思食事なかれすなわち仏の御意なり、故に天台の釈に云く
「請を受けて説く時は只是れ教の意を説く教の意は是れ仏意仏意即是れ仏
智なり・仏智至て深し是故に三止四請す、此の如き艱難あり余經に比する
に余經は則易し」文此の釈の中に仏意と申すは色法を・をさへて心法とい

ふ釈なり、法華經を心法とさだめて三十一相の木絵の像に印すれば木絵二
像の全体・生身の仏なり、草木成仏といへるは是なり、故に天台は
「一色一香無非中道」と云云、妙樂是をうけて釈に「然るに亦俱に色香中道
を許せども無情仏性は耳を惑わし心を驚かす」云云、華嚴の澄觀が天台
の一念三千をぬすみて華嚴にさしいれ法華・華嚴ともに一念三千なり、
但し華嚴は頓頓・さきなれば法華は漸頓のちなれば華嚴は根本さきをしぬ
れば法華は枝葉等といふて我理をえたりとおもへる意・山の如し・然りと
雖も一念三千の肝心・草木成仏を知らざる事を妙樂のわらひ給へる事な
り、今の天台の学者等我一念三千を得たりと思ふ、然りと雖も法華をもつ
て・或は華嚴に同じ・或は大日經に同ず其の義を論ずるに澄觀のを見を
出でず善無畏不空に同ず、詮を以て之を謂わば今の木絵二像を真言師を以
て之を供養すれば実仏に非ずして權仏なり權仏にも非ず形は仏に似たれど

も意は本の非情の草木なり、又本の非情の草木にも非ず魔なり鬼なり、
真言師が邪義・印真言と成つて木絵二像の意と成れるゆへに例せば人の思
変じて石と成り俱留と黄夫石が如し、法華を心得たる人・木絵二像を開眼
供養せざれば家に主のなきに盗人が入り人の死するに其の身に鬼神入るが
如し、今真言を以て日本の仏を供養すれば鬼入つて人の命をうばふ鬼をば
奪命者といふ魔入つて功德をうばふ魔をば奪功德者といふ、鬼をあがむる
ゆへに今生には国をほろぼす魔をたとむゆへに後生には無間獄に墮す、人
死すれば魂去り其の身に鬼神入り替つて子孫を亡ぼす、餓鬼といふは我を
くらふといふ是なり、智者あつて法華經を讚歎して骨の魂となせば死人の
身は人身・心は法身・生身得忍といへる法門是なり、華嚴・方等・般若の
円をさとれる智者は死人の骨を生身得忍と成す、涅槃經に身は人身なりと
雖も心は仏心に同ずといへるは是なり、生身得忍の現証は純陀なり、法華

を悟れる智者・死骨を供養せば生身即法身・是を即身といふ、さりぬる魂
を取り返して死骨に入れて彼の魂を変えて仏意と成す成仏是なり、即身の
二字は色法・成仏の二字は心法・死人の色心を変えて無始の妙境・妙智と
成す是れ則ち即身成仏なり、故に法華經に云く「所謂諸法如是相死人の身
如是性同く心如是体同く色心等云云、又云く「深く罪福の相に達して☆く十方
を照したまう微妙の淨き法身・相を具せること三十二」等云云、上の二句
は生身得忍・下の二句は即身成仏・即身成仏の手本は竜女是なり生身
得忍の手本は純陀是なり。

◆六五 女人成仏抄 文永二年四十四歳御作 470P

提婆品に云く「仏告諸比丘未来世中乃至蓮華化生」等云云、此の提婆品

に二箇の諫曉あり所謂達多の弘經釈尊の成道を明し又文殊の通經・

竜女の作仏を説く、されば此の品を長安宮に一品切り留めて二十七品を世

に流布する間・秦の代より梁の代に至るまで七代の間の王は二十七品の經を講読す、其の後満法師と云いし人・此の品法華經になき由を読み出され候いて後・長安城より尋ね出し今は二十八品にて弘まらせ給う、さて此の品に淨心信敬の人のことを云うに一には三惡道に墮せず二には十方の仏前に生ぜん三には所生の処には常に此の經を聞かん四には若し人天の中に生ぜば勝妙の樂を受けん五には若し仏前に在らば蓮華より化生せんとなり、然るに一切衆生は法性眞如の都を迷い出でて妄想顛倒の里に入りしより已來身口意の三業になすところ善根は少く惡業は多し、されば經文には一人・一日の中に八億四千念あり念念の中に作す所皆是れ三途の業なり等云云、我等衆生三界二十五有の・ちまたに輪回せし事鳥の林に移るが如く死しては生じ生じては死し車の場に回るが如く始め終りもなく死し生ずる惡業深重の衆生なり、爰を以て心地觀經に云く「有情輪回して

ろくどう

六道に生ずること猶車輪の始終無きが如く・或は父母と為り男女と為り

しょうじよよ

生生世世互いに恩有り」等云云、法華經二の卷に云く「三界は安きこと無

なお

し猶火宅の如く衆苦充滿せり」云云、涅槃經二十二に云く「菩薩摩訶薩

もろもろしじよ

諸の衆生を觀するに色香味触の因縁の為の故に昔無量無數劫より以來常に

くのう

苦惱を受く、一一の衆生一劫の中に積る所の身の骨は王舎城の毘富羅山

ごと

の如く飲む所の乳汁は四海の水の如く身より出す所の血は四海の水より

ふぼ・きようだい

多く父母・兄弟・妻子・眷属の命終に涕泣して出す所の目涙は四大海の

さいし

水より多し、地の草木を尽くして四寸の籌と為して以て父母を数うるに

またつ

亦尽くすこと能わじ、無量劫より已來・或地獄・畜生・餓鬼に在つて受く

しょうけい

る所の行苦称計す可からず亦一切衆生の骸骨をや」云云、是くの如くい

かばね

たづらに命を捨るところの骸骨は毘富羅山よりも多し恩愛あはれみの涙は

たいかい

四大海の水よりも多けれども仏法の為には一骨をもなげず、一句一偈を

ちようもん

聴聞して一滴の涙をも・おとさぬゆへに三界の籠樊を出でずして二十五

有のちまたに流転する衆生にて候なり、然る間如何として三界を離るべき

と申すに仏法修行の功力に依つて無明のやみはれて法性真如の覺を開く

べく候、さては仏法は何なるをか修行して生死を離るべきぞと申すに但

一乗・妙法にて有るべく候、されば慧心僧都・七箇日・加茂に参籠して

出離生死は何なる教にてか候べきと祈請申され候いしに明神御託宣に云く

「釈迦の説教は一乗に留まり諸仏の成道は妙法に在り菩薩の六度は蓮華

に在り二乗の得道は此の経に在り」云云、普賢経に云く「此の大乗經典

は諸仏の宝蔵なり十方三世の諸仏の眼目なり三世の諸の如来を出生する

種なり」云云、此の経より外はすべて成仏の期有るべからず候上殊更女人

成仏の事は此の経より外は更にゆるされず、結句爾前の経にては・をびた

だしく嫌はれたり、されば華嚴経に云く「女人は地獄の使なり能く仏の種子

を断ず外面は菩薩に似て内心は夜叉の如し」云云、銀色女経に云く「三世
の諸仏の眼は大地に墮落すとも法界の諸の女人は永く成仏の期無し」云
云、或は又女人には五障三従の罪深しと申す、其れは内典には五障を
明し外典には三従を教えたり、其の三従とは少くしては父母に従ひ盛にし
ては夫に従ひ老いては子に従ふ一期身を心に任せず、されば榮啓期が三樂
を歌ひし中にも女人と生れざるを以て一樂とす、天台大師云く「他経
には但菩薩に記して二乗に記せず但男に記して女に記せず」とて全く余経
には女人の授記これなしと釈せり、其上釈迦・多宝の二仏塔中に並坐し給
ひし時・文殊・妙法を弘めん為に海中に入り給いて・仏前に歸り参り
給いしかば宝浄世界の多宝仏の御弟子・智積菩薩は竜女成仏を難じて
云く「我釈迦如来を見たてまつれば無量劫に於て難行苦行し功を積み・徳
を累ね・菩薩の道を求むること未だ曾つて止息したまわず、三千大千世界

を觀るに乃至芥子の如き許りも是れ菩薩の身命を捨てたもう処に非ざる
こと有ること無し、衆生の為の故なり」等云云、所謂智積・文殊・再三問答
いたし給う間は八万の菩薩・万二千の声聞等何れも耳をすまして御聴聞
計りにて一口の御助言に及ばず、然るに智慧第一の舍利弗・文殊の事をば難
ずる事なし多くの故を以て竜女を難ぜらる所以に女人は垢穢にして是れ
法器に非ずと小乗權教の意を以て難ぜられ候いしかば文殊が竜女成仏
の有無の現証は今・仏前にして見え候べしと仰せられ候いしに、案にたが
はず八歳の竜女蛇身をあらためずして仏前に参詣し価直三千大千世界と説
かれて候・如意宝珠を仏に奉りしに、仏悦んで是を請取り給いしかば此の
時智積菩薩も舍利弗も不審を開き女人成仏の路をふみわけ候、されば女人
成仏の根本是より起つて候・委細は五の巻の經文之を読む可く候、伝教
大師の秀句に云く「能化の竜女歴劫の行無く所化の衆生も歴劫の行無

し能化所化俱に歴劫無し妙法経力・即身成仏す」天台の疏に云く「智積
は別教に執して疑いを為し竜女は円を明して疑いを釈く身子は三蔵
の権を挟んで難ず竜女は一実を以て疑いを除く」海竜王経に云く
「竜女作仏し国土を光明国と号し名をば無垢証如来と号す」云云、法華
已前の諸経の如きは縦い人中・天上の女人なりといふとも成仏の思絶
たるべし、然るに竜女・畜生道の衆生として戒緩の姿を改めずして
即身成仏せし事は不思議なり、是を始として釈尊の姨母・摩訶波闍波提
比丘尼等・勸持品にして一切衆生喜見如来と授記を被り・羅☆羅の母・
耶輸陀羅女も眷属の比丘尼と共に具足千万光相如来と成り、鬼道の女人た
る十羅刹女も成仏す、然れば尚殊に女性の御信仰あるべき御経にて候、
抑此の経の一文一句を読み一字一点を書く尚出離生死・証大菩提の因な
り、然れば彼の字に結縁せし者・尚炎魔の庁より帰され六十四字を書し人

は其その父を天上てんじょうへ送る、何いかに況や阿鼻いわんやあびの依正えしょうは極聖ごくしょうの自心じしんに処しょし地獄じごく・
天宮みなこ皆是かじれ果地にょらいの如来りやうぜんじょうどなり、毘盧びるの身土しんどは凡下ほんげの一念いちねんを逾こえず遮那しゃなの覺体かくたいも
しゅじょう めいもう い みようもん りようぜんじょうど
衆生の迷妄しやうじやうを出いでず妙文みようもんは靈山りやうぜんじょうど淨土じやうどに増し六万九千りくまんきゅうせんの露点ろてんは紫磨金しまこんの輝
光くわうを副そえ給たまうべし、殊ことに過去かこ聖靈しやうりやうは御存生おんしやうの時ときより御信心しんじん他ことに異なる
おんこと
御事おんことなりしかば今日こんにち講經かうきやうの功力くわうりきに依よつて仏前ぶつぜんに生なまを受け仏果菩提ぶつかけだひの勝因しやういんに
登たり給たまうべし云云、南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやう、南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやう。

◆六六 聖愚問答抄上 上文永二年 四十四歳御作 474P
おろかもんどう ふんえい

夫それ生なまを受けしより死しを免まぬかれざる理ことりは賢かしこき御門みかどより卑ひき民たみに至いたるまで
人ひとごとに是これを知しるといへども實じつに是これを大事だいじとし是これを歎なげく者もの千万人ばんにんに一人も
有あがたし、無常むじやうの現起げんきするを見ては疎すきをば恐れ親おやきをば歎なげくといへども
先立さきだてつははかなく留とどるは・かしこきやうに思おもいて昨日けふは彼のわざ今日けふは此
の事こととて徒いたずらに世間せけんの五慾ごよくにほだされて白駒はくこのかけ過すぎやすく羊やぎの歩あみ近

づく事をしらずして空しく衣食の獄につながれ徒らに名利の穴にをち三途
の旧里に帰り六道のちまたに輪回せん事心有らん人誰か歎かざらん誰か悲
しまざらん。

嗚呼・老少不定は娑婆の習ひ会者定離は浮世のことほりなれば始めて驚

くべきにあらねども正嘉の初め世を早うせし人のありさまを見るに・或は

幼き子をふりすて・或は老いたる親を留めをき、いまだ壮年の齡にて黄泉

の旅に趣く心の中さこそ悲しかるらめ行くもかなしみ留るもかなしむ、彼

楚王が神女に伴いし情を一片の朝の雲に残し劉氏が仙客に値し思いを七世

の後胤に慰む予か如き者底に縁つて愁いを休めん、かかる山左のいやしき

心なれば身には思のなかれかしと云いけん人の古事さへ思い出でられて末

の代のわすれがたみにもとて難波のもしほ草をかきあつめ水くきのあとを

形の如くしるしをくなり。

悲しいかな痛しいかな我等無始より已来無明の酒に酔て六道・四生に
輪回して・或時は焦熱大焦熱の炎にむせび・或時は紅蓮・大紅蓮の氷に
とぢられ・或時は餓鬼飢渴の悲みに値いて五百生の間飲食の名をも聞か
ず・或時は畜生・残害の苦みをうけて小さきは大きなるに・のまれ短き
は長きにまかる是を残害の苦と云う・或時は修羅・鬪諍の苦をうけ・或
時は人間に生れて八苦をうく生・老・病・死・愛別離苦・怨憎会苦・求不
得苦・五盛陰苦等なり・或時は天上に生れて五衰をうく、此くの如く三界
の間を車輪のごとく回り父子の中にも親の親たる子の子たる事をさとらず
夫婦の会遇るも会遇たる事をしらず、迷へる事は羊目に等しく暗き事は
狼眼に同じ、我を生たる母の由来をもしらず生を受けたる我が身も死の終
りをしらず、嗚呼受け難き人界の生をうけ値い難き如来の聖教に値い奉れ
り一眼の亀の浮木の穴にあへるがごとし、今度若し生死のきづなをきらず

三界さんがいの籠ろう樊はんを出いでざらん事かなしかるべしかなしかるべし。

爰こゝに・或あるる智人ちじん来りて示いして云いく汝なんじが歎なげく所しょ実じつに爾しかなり此かくの如ごとく無常むじょう

のことはりを思おもひ知しり善心ぜんしんを發おこす者は麟角りんかくよりも希まれなり、此のことはりを

覺さとらずして惡心あくしんを發おこす者は牛毛ぎうもうよりも多おほし、汝なんじ早しやうじく生死しやうじを離はれ菩提心ぼだいしんを

發おこさんと思おもはば吾最第一さいだいいちの法ほふを知しれり志こころざし あらば汝なんじが為ために之これを説いいて聞き

かしめん、其そのの時とき愚人座ふつぎようより起たつて掌たなごころ を合あせて云いく我わは日ひ来こ外ごう典てんを学がく

風月ふうげつに心こころをよせていまだ仏教ぶつぎようと云いふ事ことを委細いさいにしらず願ねがふば上人しやうにん・我わが

為ために是これを説とき給たまへ、其そのの時とき上人しやうにんの云いく汝耳なんじを伶倫りしゆんが耳みみに寄よせ目めを離り朱しゆが

眼まなこにかつて心こころをしづめて我わが教きやうをきけ汝なんじが為ために之これを説とかん夫それふつぎよう仏教ぶつぎようは

八万はちまんの聖教しやうきやう多おほけれども諸宗しよしゆうの父母ふぼたる事こと・戒律かいりつにはしかずされば天竺てんじくに

は世親馬鳴等せじんめみやうの薩さつ☆唐土たうどには慧曠えかう・道宣どうせんと云いいし人ひと是これを重おもんず、我わが朝あしたに

は人皇四十五代じんかうしごふごだい・聖武天皇しやうむてんのうの御宇ぎやうに鑒真和尚かんじんわじやう此この宗しゆと天台宗てんだいしゆうと両宗りやうしゆうを渡わたし

て東大寺の戒壇之を立つ爾しより已来当世に至るまで崇重年旧り尊貴・日に新たなり、就中極楽寺の良観上人は上一人より下万民に至るまで生身の如来と是を仰ぎ奉る彼の行儀を見るに実に以て爾なり、飯嶋の津にて六浦の関米を取つては諸国の道を作り七道に木戸をかまへて人別の錢を取つては諸河に橋を渡す慈悲は如来に齊しく德行は先達に越えたり、汝早く生死を離れんと思はば五戒・二百五十戒を持ち慈悲をふかくして物の命を殺さずして良観上人の如く道を作り橋を渡せ是れ第一の法なり、汝持たんや否や。

愚人弥掌を合せて云く能く能く持ち奉らんと思ふ具に我が為に是を説き給へ抑五戒・二百五十戒と云う事は我等未だ存知せず委細に是を示し給へ、智人云く汝は無下に愚かなり五戒・二百五十戒と云う事をば孩児も是をしる然れども汝が為に之を説かん、五戒とは一には不殺生戒二には

不偷盜戒三には不妄語戒四には不邪淫戒五には不飲酒戒是なり、二百五十戒の事は多き間之を略す、其の時に愚人礼拝恭敬して云く我今日より深く此の法を持ち奉るべし。

爰に予が年来の知音・或所に隱居せる居士一人あり予が愁歎を訪わん

為に來れるが始には往事渺茫として夢に似たる事をかたり終には行末の冥

冥として弁え難き事を談ず鬱を散し思をのべて後予に問うて云く抑人の

世に有る誰か後生を思はざらん、貴辺何なる仏法をか持ちて出離をねがひ

又亡者の後世をも訪ひ給うや、予答えて云く一日・或る上人來つて我が

為に五戒・二百五十戒を授け給へり実に以て心肝にそみて貴し、我深く

良觀上人の如く及ばぬ身にもわろき道を作り深き河には橋をわたさんと

思へるなり、其の時居士示して云く汝が道心貴きに似て愚かなり、今談ず

る処の法は浅ましき小乗の法なり、されば仏は則ち八種の喩を設け文殊

は又十七種の差別を宣べたり・或は螢火日光の喩を取り・或は水精・瑠璃

の喩あり爰を以て三国の人師も其の破文一に非ず、次に行者の尊重の事

必ず人の敬ふに依つて法の貴きにあらず・されば仏は依法不依人と定め

給へり、我伝え聞く上古の持律の聖者の振舞は殺を言い収を言うには知浄

の語有り行雲廻雪には死屍の想を作す而るに今の律僧の振舞を見るに

布絹・財宝をたくはへ利銭・借請を業とす・教行既に相違せり誰か是を

信受せん、次に道を作り橋を渡す事還つて人の歎きなり、飯嶋の津にて六

浦の関米を取る諸人の歎き是れ多し諸国七道の木戸・是も旅人のわづらい

只此の事に在り眼前の事なり汝見ざるや否や。

愚人色を作して云く汝が智分をもつて上人を謗し奉り其の法を誹る事

謂れ無し知つて云うか愚にして云うかおそろしおそろし、其の時居士笑つ

て云く嗚呼おろかなりおろかなり彼の宗の僻見をあらあら申すべし、抑

教に大小有り宗に権実を分かてり鹿苑施小の昔は化城の戸ぼそに導くとい
へども驚峯開蹊の筵には其の得益更に之れ無し、其の時愚人茫然として
居士に問うて云く文証・現証実に以て然なり・さて何なる法を持つてか
生死を離れ速に成仏せんや、居士示して云く我れ在俗の身なれども深く
仏道を修行して幼少より多くの人師の語を聞き粗経教をも聞き見るに
末代我等が如くなる無悪不造のためには念仏往生の教にしくはなし、され
ば慧心の僧都は「夫れ往生極楽の教行は濁世末代の目足なり」と云ひ
法然上人は諸経の要文を集めて一向専修の念仏を弘め給ふ中にも弥陀の
本願は諸仏超過の崇重なり始め無三悪趣の願より終り得三法忍の願に至る
までいづれも悲願目出けれども第十八の願殊に我等が為に殊勝なり、又
十悪・五逆をもきらはず一念・多念をもえらば上一人より下万民
に至るまで此の宗をもてなし給う事他に異なり又往生の人それ幾ぞや。

其の時愚人の云く実に小を恥じて大を慕ひ浅を去て深に就は仏教の理
のみに非ず世間にも是れ法なり我早く彼の宗にうつらんと思ふ委細に彼の
旨を語り給へ、彼の仏の悲願の中に五逆・十悪をも簡ばずと云へる五逆と
は何等ぞや十悪とは如何、智人の云く五逆とは父を殺し母を殺し阿羅漢を
殺し仏身の血を出し和合僧を破す是を五逆と云うなり、十悪とは身に三・
口に四・意に三なり身に三とは・殺・盗・姪・口に四とは妄語・綺語・
惡口・兩舌・意に三とは貪・瞋・癡是を十悪と云うなり、愚人云く我今
解しぬ今日よりは他力往生に憑を懸くべきなり、爰に愚人又云く以ての
外盛に・いみじき密宗の行人あり是も予が歎きを訪わんが為に來臨して始
には狂言綺語のことはりを示し終には顯密二宗の法門を談じて予に問うて
云く抑汝は何なる佛法をか修行し何なる經論をか読誦し奉るや、
予答えて云く我一日・或る居士の教に依つて浄土の三部經を読み奉り西方

ごくらく きょうしゅ たのみ
極楽の教主に憑を深く懸くるなり、行者の云く仏教に二種有り一には
けんきょう みつきよう けんきょう ごくり みつきよう じよもん およ
顕教二には密教なり顕教の極理は密教の初門にも及ばずと云云、汝が
しゅうしん
執心の法を聞けば釈迦の顕教なり我が所持の法は大日覚王の秘法なり、
さんがい じやつこう すべからけんきょう みつきよう
実に三界の火宅を恐れ寂光の宝台を願はば須く顕教を捨てて密教につく
べし。

ぐにんおどろ いわ けんみつにどう
愚人驚いて云く我いまだ顕密二道と云う事を聞かず何なるを顕教と云
いか
ひ何なるを密教と云へるや、行者の云く予は是れ頑愚にして敢て賢を存
しか いえど
ぜず然りと雖も今二の文を挙げて汝が矇昧を挑げん、顕教とは舍利弗
しょう
等の請に依つて応身如来の説き給う諸教なり密教とは自受法楽の為に
ほっしんだいにちによらい こんごうさった しよけ と たま ところ だいにちきよう
法身大日如来の金剛薩☆を所化として説き給う処の大日経等の三部なり、
ぐにん いわ もつ しか
愚人の云く実に以て然なり先非を・ひるがへして賢き教に付き奉らんと思
うなり。

又爰こゝに萍うきくさのごとく諸州しよを回り蓬めくのごとく県県えんけんに転ずる非人のそれとも
知らず来り門の柱に寄り立ちて含笑ほくそえみ語る事なし、あやしみをなして是これを問
うに始めには云う事なし後に強しいて問を立つる時・彼が云く月蒼蒼そうそうとして風
ぼうぼう
忙忙なりかたたりと、形質ごんご常に異に言語又通ぜず其の至極しごくを尋れば当世とうせの禅法是な
り、予彼の人の有様を見其の言語を聞きて仏道の良因を問う時、非人の
いわ
云く修多羅の教は月をさす指・教網こは是れ言語にとどこほる妄事なり我が
ほんぶん
心の本分いであつにおちつかんと出立法は其の名を禅と云うなり、愚人ぐにん云く願くは
我聞いわんと思ふ、非人の云く実そに其の志こころざし深くば壁に向い坐禅ざぜんして本心ほんしんの月
を澄ましめ爰こゝを以て西天さいてんには二十八祖系みだ乱れず東土とうどには六祖の相伝そうでん明白
なり、汝なんじ是を悟これらずして教網いにかかる不便ふびん不便ふびん、是心即仏ぜしんそくぶつ・即心是仏そくしんぜぶつなれ
ば此の身の外に更に何いかにか仏あらんや。

愚人ぐにん此の語ことばを聞いてつくづく諸法しよほうを観かんじ閑しずかに義理ぎりを案いじて云く

ぶつきょう
仏教万差にして理非明らめ難し宜なるかな常啼は東に請い善財は南に求
やくおう
め薬王は臂を焼き楽法は皮を剥ぐ善知識実に値い難し、・或は教内と談じ
ある きょうげ
・或は教外と云う此のことはりを思うに未だ淵底を究めず・法水に臨む者
しんえん
は深淵の思いを懷き人師を見る族は薄氷の心を成せり、爰を以て金言には
えほう ふ え
依法不依人と定め又爪上土の譬あり若し仏法の真偽をしる人あらば尋ね
て師とすべし求めて崇べし、夫れ人界に生を受くるを天上の糸にたとへ
ぶつぽう
仏法の視聴は浮木の穴の類せり、身を軽くして法を重んずべしと思うに
よ
依つて衆山に攀歎きに引れて諸寺を回る足に任せて一つの巖窟に至るに後
には青山峨峨として松風・常楽我浄を奏し前には碧水湯湯として岸うつ
波・四徳波羅蜜を響かす深谷に開敷せる花も中道実相の色を顕し広野に
ほころ
綻ぶる梅も界如三千の薫を添ふ言語道断・心行所滅せり謂つ可し商山の
しこう
四皓の所居とも又知らず古仏経行の迹なるか、景雲朝に立ち靈光夕べに現

ず嗚呼心を以て計るべからず詞を以て宣ぶべからず、予此の砌に沈吟と
さまよひ彷徨とたちもとをり徙倚とたたずむ、此処に忽然として一の
聖人坐す其の行儀を拝すれば法華読誦の声深く心肝に染みて閑☆の戸ほそ
うかがへば玄義の牀に臂をくだす、爰に聖人予が求法の志を酌知て詞を
和げ予に問うて云く汝なにに依つて此の深山の窟に至れるや、予答えて
云く生をかくして法をおもくする者なり、聖人問て云く其の行法如何、
予答えて云く本より我は俗塵に交りて未だ出離を弁えず、適善知識に値
て始には律・次には念仏・真言並に禪此等を聞くといへども未だ真偽を
弁えず、聖人云く汝が詞を聞くに実に以て然なり身をかくして法をお
もくするは先聖の教へ予が存ずるところなり、抑上は非想の雲の上・下
は那落の底までも生を受けて死をまぬかるる者やはある、然れば外典のい
やしきをしえにも朝に紅顔有つて世路に誇るとも夕には白骨と為つて郊原

に朽ちぬと云へり、雲上に交つて雲のびんづらあざやかに廻雪たもとを・
ひるがへすとも其の樂みをおもへば夢の中の夢なり、山のふもと蓬がもと
はつゐの栖なり玉の台・錦の帳も後世の道にはなにかせん、小野の小
町・衣通姫が花の姿も無常の風に散り・攀☆・張良が武芸に達せしも獄卒
の杖をかなしむ、されば心ありし古人の云くあはれなり鳥べの山の夕煙を
くる人としてとまるべきかは、末のつゆ本のしづくや世の中の・をくれさき
たつためしなるらん、先亡後滅の理り始めて驚くべきにあらず願ふても願
ふべきは仏道求めても求むべきは経教なり、抑汝が云うところの法門
をきけば・或は小乗・・或は大乗・位の高下は且らく之を置く還つて
悪道の業たるべし。

爰に愚人驚いて云く如来一代の聖教はいづれも衆生を利せんが為な
り、始め七処・八会の筵より終り跋提河の儀式まで何れか釈尊の所説なら

ざるたと設いちぶんひ一分の勝劣しょうれつをば判ずとも何ぞ惡道あくどうの因と云べきや、聖人しょうにん云く
如來にょらい一代いちだいの聖教しょうきょうに權有り実有り大有り小有り又顯密二道けんみつにとう相分ち其の品一そ
に非あらず、須すく其の大途だいとを示して汝なんじが迷まよを悟らしめん、夫れ三界さんがいの教主きょうしゅ
釈尊しゃくそんは十九歳にして伽耶城がやを出て檀特山だんとくせんに籠りて難行苦行なんぎようきぎようし三十成道じようどうの
刻きざみに三惑頓さんなくとみに破はし無明むみようの大夜爰ここに明あかしかば須すく本願ほんがんに任せて一乘いちじよう・
妙法蓮華經みようほうれんげきようを宣のぶべしといへども機緣きえん万差にして其の機そ仙乘きぶつじように堪えず、
然しかれば四十余年よんじゅうよねんに所被きえんの機緣とこのを調へて後八箇年はちかねんに至つて出世しゅつせの本懷ほんかいたる
妙法蓮華經みようほうれんげきようを説とき給たまへり、然しかれば仏の御年七十二歳にして序分じよぶん・無量義經むりようぎきよう
に説き定めて云くいわ「我先むづかきに道場菩提樹どうじょうぼだいじゆの下に端坐すること六年にして
阿耨多羅三藐三菩提あうたらかさんみやくさんぼだいを成じようずることを得たり、仏眼ぶつげんを以て一切いっさいの諸法しよほうを觀くず
るに宣説せんぜつす可べからず、所以ゆえんは何ん諸いかの衆生もろもろしじゆの性慾ふどう不同なるを知れり性慾
ふどう
不同なれば種種しじゆじゆに法を説く種種しじゆじゆに法を説くこと方便ほうべんの力を以てす四十余年よんじゅうよねん

には未だ^{いま}真^{しん}實^{じつ}を^{あら}顯^{あら}わさず」文、此の文の意は仏の御年三十にして寂滅^{じやくめつ}どうじょうほだいじゆ
道場菩提樹の下に坐して仏眼^{ぶつげん}を以て一切衆生の心根を御覽するに衆生^{しゆじやう}
じやうぶつ じきじやう ぼけきじやう
成仏の直道たる法華經をば説くべからず、是^{これ}を以て空拳^{くうけん}を^あ挙^あげて嬰兒^{みどりこ}をす
かすが如^{ごと}く様様のたばかりを以て四十余年が間はいまだ真^{しん}實^{じつ}を^{あら}顯^{あら}わさずと
ねんき にちりん い やみよ まんげつ
年紀をさして青天に日輪の出で暗夜に満月のかかるが如^{ごと}く説き定めさせ
たま 給へり、此の文を見て何ぞ同^{なん}じ信^{しん}心^{じん}を以て仏の虚事^{そらごと}と説かるる法華已前の
ごんきじやう しじやうじやく
權教に執^し著^{しやく}して、めずらしからぬ三界の故宅に歸るべきや、されば
ほけきじやう ほうべん いわ
法華經の一の卷方便品に云く「正^{しやう}直^{じき}に方^{ほう}便^{べん}を捨^{すて}て但^{むじやう}無^む上^{じやう}道^{どう}を説く」文、此
の文の意は前四十二年の經^き經^{じやう}汝^{なんじ}が語るところの念^{ねん}仏^{ぶつ}・真^{しん}言^{ごん}・禪^{ぜん}・律^{りつ}を
しやうじき
正^{しやう}直^{じき}に捨^{すて}てよとなり、此の文明白なる上重^{かさ}ねていましめて第二の卷譬^ひ喩^ゆ品
に云^{いわ}く「但^{ねが}樂^{らく}つて大^{だい}乘^{じやう}經^{きやう}典^{てん}を受^{じゆじ}持^ちし乃^{ない}至^し余^{しよ}經^{きやう}の一偈^{いちげ}をも受^うけざれ」文、
ねんき だいじやうきじやうてん じゆじ ないしよきじやう いちげ
此の文の意は年紀かれこれ煩^{わづら}はし所詮^{しよせん}法華經より自^じ余^よの經をば一偈^{いちげ}をも受

くべからずとなり、然るに八宗の異義蘭菊に道俗形ちを異にすれども一同
に法華經をば崇むる由を云う、されば此等の文をばいかが弁へたる正直に
捨てよと云つて余經の一偈をも禁むるに・或は念仏・或は真言・或は禪
・或は律・是れ余經にあらずや、今・此の妙法蓮華經とは諸仏出世の本意
・衆生成仏の直道なり、されば釈尊は付属を宣べ多宝は証明を遂げ
諸仏は舌相を梵天に付けて皆是真実と宣べ給へり、此の經は一字も諸仏の
本懷・一点も多生の助なり一言一語も虚妄あるべからず此の經の禁を用い
ざる者は諸仏の舌をきり賢聖をあざむく人に非ずや其の罪実に怖るべし、
されば二の巻に云く「若し人信ぜずして此の經を毀謗せば則ち一切世間の
仏種を断ず」文、此の文の意は若人此經の一偈・一句をも背かん人は過去
・現在・未來三世十方の仏を殺さん罪と定む、經教の鏡をもつて当世に
あてみるに法華經をそむかぬ人は実に以て有りがたし、事の心を案ずるに

ふしん 不信の人・尚無間なおむげんを免れず況や念仏ねんぶつの祖師そし・法然上人ほうねんしやうにんは法華經ほけきやうをもつて

念仏ねんぶつに對して抛てよと云云、五千・七千の經教きやうきやうに何れの處ところにか法華經ほけきやうを

なげう

抛てよと云う文ありや、三昧發得さんまいはつとくの行者ぎやうじやしやうしん生身の弥陀みだとあがむる善導和尚ぜんどうわじやう

こしゆ

・五種の雜行そうぎやうを立てて法華經ほけきやうをば千中無一せんちゆうむいつとて千人持つとも一人も仏にな

るべからずと立てたり、

きやうもん

にやくもんぼう

むいつふじやうぶつ

を談じて此の經

を聞けば十界じゆっかいの依正えしやう・皆仏道を成みなぶつどうずと見えたり、

きやうもん

にやくもんぼう

を談じて此の經

を聞けば十界じゆっかいの依正えしやう・皆仏道を成みなぶつどうずと見えたり、爰ここを以て五逆ごぎやくの調達ちやうだつは

てんのうによらい

きべつ

あずか

ひきこしやう

りやうによ

なんぼう

とんかくじやうぶつ

を唱ふ況や復

いわんやまた

を唱ふ況や復

いわんやまた

を唱ふ況や復

いわんやまた

を唱ふ況や復

いわんやまた

を唱ふ況や復

きつこう

そく

の六即を立てて機きを漏もらす事なし、

き

ぜんどう

善導の言と法華經の文と実に以て

ぜんどう

善導の言と法華經の文と実に以て

ぜんどう

善導の言と法華經の文と実に以て

ぜんどう

善導の言と法華經の文と実に以て

ぜんどう

善導の言と法華經の文と実に以て

ぜんどう

善導の言と法華經の文と実に以て

ぜんどう

☆の六即そくを立てて機きを漏もらす事なし、善導ぜんどうの言と法華經ほけきやうの文と実に以て

てんちうんでい

いすれ

天地雲泥てんちうぬいせり何れに付くべきや就なかんずく中其の道理どうりを思うに諸仏しよぶつ衆經しゆうきやうの怨敵おんてき

いすれ

天地雲泥てんちうぬいせり何れに付くべきや就なかんずく中其の道理どうりを思うに諸仏しよぶつ衆經しゆうきやうの怨敵おんてき

いすれ

天地雲泥てんちうぬいせり何れに付くべきや就なかんずく中其の道理どうりを思うに諸仏しよぶつ衆經しゆうきやうの怨敵おんてき

いすれ

天地雲泥てんちうぬいせり何れに付くべきや就なかんずく中其の道理どうりを思うに諸仏しよぶつ衆經しゆうきやうの怨敵おんてき

いすれ

天地雲泥てんちうぬいせり何れに付くべきや就なかんずく中其の道理どうりを思うに諸仏しよぶつ衆經しゆうきやうの怨敵おんてき

いすれ

天地雲泥てんちうぬいせり何れに付くべきや就なかんずく中其の道理どうりを思うに諸仏しよぶつ衆經しゆうきやうの怨敵おんてき

いすれ

天地雲泥てんちうぬいせり何れに付くべきや就なかんずく中其の道理どうりを思うに諸仏しよぶつ衆經しゆうきやうの怨敵おんてき

いすれ

せいそうしやうじん

しやうてき

聖僧衆人の讎敵しやうてきなり、

きやうもん

經文の如くならば争か無間むげんを免るべきや。

きやうもん

經文の如くならば争か無間むげんを免るべきや。

きやうもん

經文の如くならば争か無間むげんを免るべきや。

きやうもん

經文の如くならば争か無間むげんを免るべきや。

きやうもん

經文の如くならば争か無間むげんを免るべきや。

きやうもん

經文の如くならば争か無間むげんを免るべきや。

きやうもん

にん

にん

爰こゝに愚人色ぐにんを作して云く汝賤なんじやしき身を以て恣もつに莠言ほしいまやうげんを吐く悟つて言うか

にん

爰こゝに愚人色ぐにんを作して云く汝賤なんじやしき身を以て恣もつに莠言ほしいまやうげんを吐く悟つて言うか

にん

爰こゝに愚人色ぐにんを作して云く汝賤なんじやしき身を以て恣もつに莠言ほしいまやうげんを吐く悟つて言うか

にん

爰こゝに愚人色ぐにんを作して云く汝賤なんじやしき身を以て恣もつに莠言ほしいまやうげんを吐く悟つて言うか

にん

爰こゝに愚人色ぐにんを作して云く汝賤なんじやしき身を以て恣もつに莠言ほしいまやうげんを吐く悟つて言うか

にん

爰こゝに愚人色ぐにんを作して云く汝賤なんじやしき身を以て恣もつに莠言ほしいまやうげんを吐く悟つて言うか

にん

爰こゝに愚人色ぐにんを作して云く汝賤なんじやしき身を以て恣もつに莠言ほしいまやうげんを吐く悟つて言うか

にん

まい

迷つて言うか理非弁りひひんえ難し、忝かたじけなくも善導ぜんどう和尚わじやうは弥陀みだ善逝ぜんぜいの応化ある・或は

まい

迷つて言うか理非弁りひひんえ難し、忝かたじけなくも善導ぜんどう和尚わじやうは弥陀みだ善逝ぜんぜいの応化ある・或は

まい

迷つて言うか理非弁りひひんえ難し、忝かたじけなくも善導ぜんどう和尚わじやうは弥陀みだ善逝ぜんぜいの応化ある・或は

まい

迷つて言うか理非弁りひひんえ難し、忝かたじけなくも善導ぜんどう和尚わじやうは弥陀みだ善逝ぜんぜいの応化ある・或は

まい

迷つて言うか理非弁りひひんえ難し、忝かたじけなくも善導ぜんどう和尚わじやうは弥陀みだ善逝ぜんぜいの応化ある・或は

まい

迷つて言うか理非弁りひひんえ難し、忝かたじけなくも善導ぜんどう和尚わじやうは弥陀みだ善逝ぜんぜいの応化ある・或は

まい

迷つて言うか理非弁りひひんえ難し、忝かたじけなくも善導ぜんどう和尚わじやうは弥陀みだ善逝ぜんぜいの応化ある・或は

まい

迷つて言うか理非弁りひひんえ難し、忝かたじけなくも善導ぜんどう和尚わじやうは弥陀みだ善逝ぜんぜいの応化ある・或は

まい

迷つて言うか理非弁りひひんえ難し、忝かたじけなくも善導ぜんどう和尚わじやうは弥陀みだ善逝ぜんぜいの応化ある・或は

まい

迷つて言うか理非弁りひひんえ難し、忝かたじけなくも善導ぜんどう和尚わじやうは弥陀みだ善逝ぜんぜいの応化ある・或は

まい

迷つて言うか理非弁りひひんえ難し、忝かたじけなくも善導ぜんどう和尚わじやうは弥陀みだ善逝ぜんぜいの応化ある・或は

まい

迷つて言うか理非弁りひひんえ難し、忝かたじけなくも善導ぜんどう和尚わじやうは弥陀みだ善逝ぜんぜいの応化ある・或は

まい

迷つて言うか理非弁りひひんえ難し、忝かたじけなくも善導ぜんどう和尚わじやうは弥陀みだ善逝ぜんぜいの応化ある・或は

まい

迷つて言うか理非弁りひひんえ難し、忝かたじけなくも善導ぜんどう和尚わじやうは弥陀みだ善逝ぜんぜいの応化ある・或は

まい

迷つて言うか理非弁りひひんえ難し、忝かたじけなくも善導ぜんどう和尚わじやうは弥陀みだ善逝ぜんぜいの応化ある・或は

まい

迷つて言うか理非弁りひひんえ難し、忝かたじけなくも善導ぜんどう和尚わじやうは弥陀みだ善逝ぜんぜいの応化ある・或は

まい

迷つて言うか理非弁りひひんえ難し、忝かたじけなくも善導ぜんどう和尚わじやうは弥陀みだ善逝ぜんぜいの応化ある・或は

まい

迷つて言うか理非弁りひひんえ難し、忝かたじけなくも善導ぜんどう和尚わじやうは弥陀みだ善逝ぜんぜいの応化ある・或は

まい

迷つて言うか理非弁りひひんえ難し、忝かたじけなくも善導ぜんどう和尚わじやうは弥陀みだ善逝ぜんぜいの応化ある・或は

まい

迷つて言うか理非弁りひひんえ難し、忝かたじけなくも善導ぜんどう和尚わじやうは弥陀みだ善逝ぜんぜいの応化ある・或は

まい

迷つて言うか理非弁りひひんえ難し、忝かたじけなくも善導ぜんどう和尚わじやうは弥陀みだ善逝ぜんぜいの応化ある・或は

まい

迷つて言うか理非弁りひひんえ難し、忝かたじけなくも善導ぜんどう和尚わじやうは弥陀みだ善逝ぜんぜいの応化ある・或は

まい

迷つて言うか理非弁りひひんえ難し、忝かたじけなくも善導ぜんどう和尚わじやうは弥陀みだ善逝ぜんぜいの応化ある・或は

まい

迷つて言うか理非弁りひひんえ難し、忝かたじけなくも善導ぜんどう和尚わじやうは弥陀みだ善逝ぜんぜいの応化ある・或は

勢せい至し菩ぼ薩さつの化け身しんと云いへり、法ほう然ねん上しょう人にんも亦また然しかなり善ぜん導どうの後ご身しんといへり、上じょう古こ
の先せん達だつたる上じやう・行ぎやう徳とく秀しゆ發はつし解げ了りやう・底ぞを極きくわめたり何なんぞ惡あく道どうに墮おち給たまうと云いう
や、聖しやう人にん云いく汝なんじが言しか然しかなり予あおも仰あおいで信しんを取とること此かくの如ごとし但ただし仏ぶつ法ぽう
は強あながちに人きせんの貴き賤せんには依よるべからず只ただ經きやう文もんを先ききとすべし身いの賤やしきをもつて
其その法ほふを輕かろんずる事ことなかれ、有う人にん樂らく生しやう惡あく死し・有う人にん樂らく死し惡あく生しやうの十二じふに字じを唱なへ
し毘び摩また大たい國こくの狐こは帝しやく釈しやくの師しと崇あがめめられ諸しよ行ぎやう無む常じやう等どうの十六じふ字じを談だんぜし鬼き神しんは
雪せつ山せん童どう子じに貴きまる是これ必かならずず狐こと鬼き神しんとの貴ききに非あらず只ただ法ほふを重おもんずる故ゆゑな
り、されば我われ等らが慈じ父ふ・教きやう主しゆ釈しやく尊そん・雙そう林りん最さい後ごの御ぎ遺い言ごん・涅槃ねはん經ぎやうの第六だいろくに
は依え法ほふ不ふ依え人にんとて普ふ賢けん・文もん殊じゆ等どうの等とう覺かく已い還かんの大だい薩さつ☆法ほふ門もんを説とき給たまふとも
經きやう文もんを手てに把とらずば用もちゑざれとなり、天てん台だい大だい師しの云いく「修しゆ多た羅らと合がする者もの
は録ろくして之これを用もちいよ文ぶん無なく義ぎ無なきは信しん受じゆす可べからず」文ぶん、釈しやくの意いは經きやう文もんに
明あきらかならんを用もちいよ文ぶん証しやう無なからんをば捨すててよとなり、伝でん教ぎやう大だい師しの云いく

「仏説に依憑して口伝を信ずること莫れ」文、前の釈と同意なり、竜樹菩薩の云く「修多羅白論に依つて修多羅黒論に依らざれ」と文、意は經の中にほつけ いぜん ごんきようも法華已前の權教をすてて此の經につけよとなり、經文にも論文にほつけも法華に對して諸余の經典を捨てよと云う事分明なり、然るに開元の錄あくに挙る所の五千・七千の經卷に法華經を捨てよ乃至抛てよと嫌ふことも又そうぎよう雜行に撰して之を捨てよと云う經文も全く無し・されば慥の經文をかんが勘へ出して善導・法然の無間の苦を救はるべし、今世の念仏の行者・俗男そくじよ きようもん・俗女・經文に違するのみならず又師の教にも背けり、五種の雜行とてねんぶつ とう念仏申さん人のすつべき日記・善導の釈之れ有り、其の雜行とは選択にいわ云く「第一に読誦雜行とは上の觀經等の往生淨土の經を除いて已外・だいしようじよう大小乗・顯密の諸經に於て受持・讀・誦するを悉く読誦雜行と名くないし乃至第三に礼拝雜行とは上の弥陀を礼拝するを除いて已外一切諸余の仏

菩薩等及諸の世天に於て礼拝恭敬するを悉く礼拝雜行と名く、第四に
稱名 雜行とは上の弥陀の名号を稱するを除いて已外自余の一切仏菩薩
等及諸の世天等の名号を稱するを悉く 稱名 雜行と名く、第五に讚歎
供養 雜行とは上の弥陀を除いて已外一切諸余の仏菩薩等及諸の世天等に
於て讚歎し供養するを悉く 讚歎供養 雜行と名く「文。

此の釈の意は第一の読誦 雜行とは念仏申さん道俗男女読むべき經あり読
むまじき經ありと定めたり、読むまじき經は法華經・仁王經・藥師經・
大集經・般若心經・轉女成仏經・北斗壽命經ことさらうち任せて諸人
読まるる八卷の中の觀音經此等の諸經を一句一偈も読むならばたとひ念仏
を志す行者なりとも 雜行に摂せられて往生す可からず云云・予愚眼を
以て世を見るに設ひ念仏申す人なれども此の經經を讀む人は多く師弟敵
對して七逆罪となりぬ。

又第三の礼拝雜行とは念仏ねんぶつの行者ぎやうじやは弥陀三尊みださんそんより外は上に挙あぐる所の諸仏菩薩しよぶつぼさつ・諸天善神しよてんぜんじんを礼するをば礼拝雜行らいはいぞうぎやうと名け又之これを禁しず、然しかるを日本にほんは神国しんこくとして伊奘諾伊奘册いざなぎいざまみの尊みこと・此の国を作り天照大神てんしやうだいじんすいじやく垂迹御坐おわして御裳濯河の流れ久しくして今にたえず豈あに此の国に生を受けて此の邪義じやぎをもち用ゆべきや、又普天の下に生れて三光の恩を蒙こむりながら誠に日月にちがつ・星宿せいしゆくを破はする事尤も恐れ有り。

又第四の称名しょうみょう雜行ぞうぎやうとは念仏申ねんぶつもうさん人は唱うべき仏菩薩ぼさつの名あり唱えまじき仏菩薩ぼさつの名あり、唱うべき仏・菩薩ぼさつの名とは弥陀三尊みださんそんの名号みやうごう、唱うまじき仏菩薩ぼさつの名号みやうごうとは釈迦しゃか・薬師やくし・大日等だいにちの諸仏しよぶつ、地藏じぞう・普賢ふげん・文殊もんじゆ・日月星にちがつ、二所と三嶋と熊野と羽黒と天照大神てんしやうだいじんと八幡大菩薩はちまんたいぼさつと此等これらの名を一遍いっぺんも唱えん人は念仏ねんぶつを十万遍じゆうまん・百万遍申もうしたりとも此の仏菩薩ぼさつ・日月神にちがつ等の名を唱となうる過とがに依よつて無間むげんにはおつとも往生おうじやうすべからずと云云、我

世間を見るに念仏を申す人も此等の諸仏菩薩・諸天善神の名を唱うる故に
是れ又師の教に背けり。

第五の讚歎供養雜行とは念仏申さん人は供養すべき仏は弥陀三尊を供養
せん外は上に挙ぐる所の仏菩薩・諸天善神に香華のすこしをも供養せん人
は念仏の功は貴とけれども此の過に依つて雜行に悞すと是をきらふ、然る
に世を見るに社壇に詣では幣帛を捧げ堂舎に臨みては礼拝を致す是れ又
師の教に背けり、汝若し不審ならば選択を見よ其の文明白なり、又善導
和尚の観念法門經に云く「酒肉五辛誓つて發願して手に捉らざれ口に喫ま
ざれ若し此の語に違せば即ち身口俱に惡瘡を著けんと願ぜよ」文、此の文
の意は念仏申さん男女・尼法師は酒を飲まざれ魚鳥をも食わざれ其の外に
らひる等の五つのからく・くさき物を食わざれ是を持たざる念仏者は今生
には惡瘡身に出で後生には無間に墮すべしと云云、然るに念仏申す男女・

尼法師此の誠をかへりみず恣に酒をのみ魚鳥を食ふ事・剣を飲む譬にあらずや。

爰に愚人の云く誠に是れ此の法門を聞くに念仏の法門実往生すと雖も其の行儀修行し難し況や彼の憑む所の経論は皆以て権説なり往生す可からざるの条分明なり、但真言を破する事は其の謂れ無し夫れ大日経とは大日覚王の秘法なり大日如来より系も乱れず善無畏・不空之を伝え弘法大師は日本に両界の曼陀羅を弘め、尊高三十七尊・秘奥なるものなり然るに顕教の極理は尚密教の初門にも及ばず爰を以て後唐院は法華尚及ばず況や自余の教をやと釈し給へり此の事如何が心うべきや。

聖人示して云く予も始は大日に憑を懸けて密宗に志を寄す然れども彼の宗の最底を見るに其の立義も亦謗法なり汝が云う所の高野の大師は嵯峨天皇の御宇の人師なり、然るに皇帝より仏法の浅深を判釈すべき由の

宣旨せんじを給たまいて十住じゅうじゅう心論十卷これ之を造る、此この書しよ広博こうはくなる間要を取つて三卷
に之これを縮め其その名を秘藏宝鑰ひそうほうやくと号す始異生はじめいしょうていようしん羝羊心おわりひみつそうこんより終秘密莊嚴心おわりひみつそうこんに
いたるまで十に分別ぶんべつし、第八法華ほっけ・第九華嚴けこん・第十真言しんこんと立てて法華ほっけは華嚴
にも劣れば大日經には三重の劣と判じて此かくの如ごときの乗乘じようじようは自乘じじように仏の
名を得れども後に望めば戲論けろんと作ると書いて法華經を狂言綺語きこと云い釈尊しゃくそん
をば無明むみように迷まよへる仏と下せり、仍よつて伝法院建立でんぼういんこんりゆうせし弘法の弟子正覺房は
ほけきよう だいにちきようう
法華經は大日經のはきものとりおよに及およばず・釈迦しゃか仏は大日如來の牛飼にも足
らずと書けり、汝心なんじを静めて聞いちだい一代五千・七千の經教きようぎよう・外典三千余卷
にも法華經は戲論けろん三重の劣けこんきよう・華嚴經にも劣り釈尊しゃくそんは無明むみように迷まよへる仏にて
だいにちきようう
大日如來の牛飼にも足らずと云う慥たしかなる文ありや、設たとひさる文有りと云う
とも能よく能よく思案あるべきか。

經教きようぎよう は西天さいてんより東土とうどに☆ほす時おほぼす・訳者やくしゃの意樂いぎように随したがつて經論きようろんの文不定ふじような

り、さて後秦こうしんの羅什らじゅうさんそう三蔵は我漢土かんとの仏法ぶつぽうを見るに多く梵本ぼんほんに違せり我が訳
する所の經も若し誤りなくば我死して後・身は不浄ふじょうなれば焼くると云えども
舌計ばかり焼けざらんと常に説法せつぽうし給いしに焼き奉る時・御身おんみは皆骨みなとなると
いへども御舌計ばかりは青蓮華せいれんげの上に光明こうみょうを放つて日輪にちりんを映奪えいざつし給いき有り
難がたき事なり、さてこそ殊更ことさら・彼の三蔵所訳さんそうしややくの法華經ほけきようは唐土もろこしにやすやすと弘ひろま
らせ給たまいしか、然しかれば延曆寺えんりやくじの根本大師こんぽんだいし・諸宗しよしゆうを責め給たまいしには法華ほつけを訳
する三蔵さんそうは舌の焼けざる驗しるしあり汝等なんじが依經えきようは皆誤みなあやまりれりと破はし給たまふは
是なり、涅槃經ねはんぎようにも我が仏法ぶつぽうは他国たこくへ移らん時誤り多かるべしと説き給たまへ
ば經文きやうもんに設たとひ法華經ほけきようはいたずら事・釈尊しゃくそんをば無明むみように迷まよへる仏なりとあり
とも權教こんきやう・実教じつきやう・大乘だいじやう・小乘しやうじやう・説時せつじの前後ぜんご・訳者やくしや能く能く尋ぬべし、
所謂老子・孔子こうしは九思一言・三思一言・周公旦しゅうこうたんは食するに三度吐き沐もくする
に三度にぎる外典げてんのあさき猶是くなおかくのことの如し況や内典いわんやないてんの深義じんぎを習はん人をや、

其の上此の義・経論に迹形もなし人を毀り法を謗じては惡道に墮つべし
とは弘法大師の釈なり必ず地獄に墮んこと疑い無き者なり。

爰に愚人・茫然とほれ忽然となげひて良久しうして云く此の大師は内外

の明鏡・衆人の導師たり徳行世に勝れ名誉普く聞えて・或は唐土より

三鉢を八万余里の海上をなぐるに即日本に至り・或は心經の旨をつづるに

蘇生の族・途にイむ、然れば此の人ただ人にあらず大聖権化の垂迹なり

仰いで信を取らんにはしかじ、聖人云く予も始めは然なり但し仏道に入つ

て理非を勘へ見るに仏法の邪正は必ず得通自在にはよらず是を以て仏は

依法不依人と定め給へり前に示すが如し、彼の阿伽陀仙は恒河を片耳にた

だへて十二年・耆兔仙は一日の中に大海をすひほす張階は霧を吐き欒巴は

雲を吐く然れども未だ仏法の是非を知らず因果の道理をも弁へず、異朝の

法雲法師は講經勤修の砌に須臾に天華をふらせしかども妙樂大師は感応

斯^かくの如^{ごと}きも猶^{なほ}理^りに称^{かな}わらずとていまだ仏^{ぶつ}法^{ぽう}をばしらずと破^はし給^{たま}う、夫^それ此^この法^ほ華^け經^{きやう}と申^{もう}すは已^い今^{こん}当^{とう}の三^{さん}說^{せつ}を嫌^{きら}つて已^い前^{ぜん}の經^{きやう}をば未^み顕^{けん}真^{しん}実^{じつ}と打^{うち}破^{やぶ}り肩^{かた}を並^{なら}ぶる經^{きやう}をば今^{こん}說^{せつ}の文^{ぶん}を以^{もつ}てせめ已^い後^ごの經^{きやう}をば当^{とう}說^{せつ}の文^{ぶん}を以^{もつ}て破^{やぶ}る實^{じつ}に三^{さん}說^{せつ}第^{だい}一^{いち}の經^{きやう}なり、第^{だい}四^しの卷^{わん}に云^いく「藥^{やく}王^{おう}今^{こん}汝^にに告^{なん}ぐ我^し所^{せつ}說^{せつ}の經^{きやう}典^{てん}而^しかも此^この經^{きやう}の中^{ちゆう}に於^{おい}て法^ほ華^け最^{さい}第^{だい}一^{いち}なり」文^{ぶん}、此^この文^{ぶん}の意^いは靈^{りやう}山^{ぜん}会^{かい}上^{じやう}に藥^{やく}王^{おう}菩^ぼ薩^{さつ}と申^{まう}せし菩^ぼ薩^{さつ}に仏^{ぶつ}・告^こげて云^いく始^{しやう}・華^け嚴^{げん}より終^{しゆう}・涅槃^{ねはん}經^{ぎやう}に至^{いた}るまで無^む量^{りやう}むへん恒^{こう}河^が沙^{しゃ}等^{とう}の數^{かず}多^{おほ}し其^その中^{ちゆう}には今^{こん}の法^ほ華^け經^{きやう}最^{さい}第^{だい}一^{いち}と說^わかれたり、然^{しか}を弘^こ法^{ぼう}大^{だい}師^しは一^{いつ}の字^じを三^{さん}と讀^よまれたり、同^{どう}卷^{わん}に云^いく「我^わ仏^{ぶつ}道^{どう}の爲^{ため}に無^む量^{りやう}の土^どに於^{おい}て始^しより今^{こん}に至^{いた}るまで広^{ひろ}く諸^{しよ}經^{きやう}を說^わく而^{しか}も其^その中^{ちゆう}に於^{おい}て此^この經^{きやう}第^{だい}一^{いち}なり」と、此^この文^{ぶん}の意^いは又^{また}釈^{しやく}尊^{そん}無^む量^{りやう}の国^{こく}土^どにして・或^{ある}は名^な字^じを替^かへ・或^{ある}は年^{ねん}紀^きを不^ふ同^{どう}になし種^{しゆ}種^{じゆ}の形^{けい}を現^{げん}して說^わく所^{しよ}の諸^{しよ}經^{きやう}の中^{ちゆう}には此^この法^ほ華^け經^{きやう}を第^{だい}一^{いち}と定^{ぢやう}められたり、同^{どう}き第^{だい}五^ご卷^{わん}には最^{もつ}在^{とも}其^{その}上^{かみ}と宣^のべて大^{だい}日^{にち}經^{きやう}

・金剛頂等の無量の經の頂に此の經は有るべしと説かれたるを弘法大師
は最在其下と謂へり、釈尊と弘法と法華經と宝鑰とは実に以て相違せり
釈尊を捨て奉つて弘法に付くべきか、又弘法を捨てて釈尊に付奉るべき
か、又經文に背いて人師の言に随ふべきか人師の言を捨てて金言を仰ぐべ
きか用捨・心に有るべし、又第七の卷藥王品に十喩を挙げて教を歎ずるに
第一は水の譬なり江河を諸經に譬へ大海を法華に譬へたり、然るを
大日經は勝れたり法華は劣れりと云う人は即大海は小河よりもすくなしと
云わん人なり、然るに今の世の人は海の諸河に勝る事をば知るといへども
法華經の第一なる事をば弁へず、第二は山の譬なり衆山を諸經に譬へ
須弥山を法華に譬へたり須弥山は上下十六万八千由旬の山なり何れの山か
肩を並ぶべき法華經を大日經に劣ると云う人は富士山は須弥山より大なり
と云わん人なり、第三は星月の譬なり諸經を星に譬へ法華經を月に譬ふ

月と星とは何れ勝りたりと思へるや、乃至次下には此の経も亦復是くの如

し一切の如来の所説若しは菩薩の所説若しは声聞の所説諸の経法の中に

最も為れ第一とて此の法華経は只釈尊一代の第一と説き給うのみにあらず

大日及び薬師・阿弥陀等の諸仏・普賢・文殊等の菩薩の一切の所説・諸経

の中に此の法華経第一と説けり、されば若し此の経に勝りたりと云う経有

らば外道天魔の説と知るべきなり、其の上・大日如来と云うは久遠実成の

教主釈尊・四十二年・和光同塵して其の機に応ずる時・三身即一の如来

暫く毘盧遮那と示せり、是の故に開顕実相の前には釈迦の応化と見えたり、

爰を以て普賢経には釈迦牟尼仏を毘盧遮那遍一切処と名け其の仏の住処を

常寂光と名くと説けり、今法華経は十界互具・一念三千・三諦即是・四

土不二と談ず其の上に一代聖教の骨髓たる二乗作仏・久遠実成は今経

に限れり、汝語る所の大日経・金剛頂等の三部の秘経に此等の大事あり

や善無畏不空等此等の大事の法門を盗み取つて己が經の眼目とせり本經・
本論には迹形もなき誑惑なり急ぎ急ぎ是を改むべし。

抑大日經とは四教含藏して尽形壽戒等を明せり唐土の人師は天台
所立の第三時方等部の經なりと定めたる權教なりあさまし・あさまし、

汝実に道心あらば急いで先非を悔ゆべし夫れ以れば此の妙法蓮華經は
一代の觀門を一念にすべ十界の依正を三千につづめたり。

◆六六一二 聖愚問答抄下 487P

爰に愚人聊か和いで云く經文は明鏡なり疑慮をいたすに及ばず但し
法華經は三説に秀で一代に超ゆるといへども言説に拘はらず經文に留まら
ざる我等が心の本分の禪の一法にはしくべからず凡そ万法を払遣して言語
の及ばざる處を禪法とは名けたり、されば跋提河の辺り沙羅林の下にして
釈尊・金棺より御足を出し拈華微笑して此の法門を迦葉に付屬ありしより

このかた てんじく

已来・天竺二十八祖・系乱れず唐土には六祖次第に弘通せり、達磨は西天

にしては二十八祖の終・東土にしては六祖の始なり相伝をうしなはず教網

とどこお

に滞るべからず、爰を以て大梵天王問仏決疑經に云く「吾に正法眼蔵の

ねはんみょうしんじつそうむそうみみょう

ほうもん

きやうげ

もんじ

しょうほうげんそう

涅槃妙心実相無相微妙の法門有り教外に別に云う文字を立てず摩訶迦葉に

ふぞく

かしよう

きやうげ

もんじ

ま

かしよう

すべし

たら

付属す」とて迦葉に此の禅の一法をば教外に伝ふと見えたり、都て修多羅

きやうぎやう

の經教は月をさす指・月を見て後は指何かはせん心の本分禅の一理を知

ぶつぎやう

つて後は仏教に心を留むべしや、されば古人の云く十二部經は総て是れ閑

もんじ

よ

えの

ひけん

いわ

こ

閑

文字と云云、仍つて此の宗の六祖慧能の壇經を披見するに実に以て然なり、

けいゑ

言下に契会して後は教は何かせん此の理如何が弁えんや、聖人示して云く

なんじ

ほうもん

どうり

えん

そも

い

だい

う

えん

汝先ず法門を置いて道理を案ぜよ、抑我一代の大途を同わず十宗の淵底

きわ

い

なん

だん

なん

だん

なん

なん

なん

を究めずして国を諫め人を教ふべきか、汝が談ずる所の禅は我最前に習い

きわ

そ

し

は

も

ひ

が

こ

い

わ

極めて其の至極を見るに甚だ以て僻事なり、禅に三種あり所謂如来禅と

教禪と祖師禪となり、汝が言う所の祖師禪等の一端之を示さん聞いて其の
旨を知れ若し教を離れて之を伝うといわば教を離れて理なく理を離れて教
無し理全く教・教全く理と云う道理汝之を知らざるや拈華微笑して迦葉に
付属し給うと云うも是れ教なり不立文字と云う四字も即教なり文字なり此
の事・和漢兩國に事旧りぬ今いへば事新きに似たれども一兩の文を勘えて
汝が迷を払はしめん、補註十一に云く又復若し言説に滞ると謂わば且く
娑婆世界には何を將つて仏事と為るや、禪徒豈言説をもつて人に示さざら
んや、文字を離れて解脱の義を談ずること無し豈に聞かざらんや乃至次ぎ下
に云く豈に達磨西来して直指人心・見性成佛すと而るに華嚴等の諸
大乘經に此の事無からんや、嗚呼世人何ぞ其れ愚かなるや汝等当に仏の
所説を信ずべし諸仏如来は言虚妄無し、此の文の意は若し教文にとどこほ
り言説にかかはるとて教の外に修行すといはば此の娑婆国にはさて如何か

して仏事善根を作すべき、さように云うところの禪人も人に教ゆる時は言
を以て云はざるべしや其の上仏道の解了を云う時文字を離れて義なし、又
達磨西より来つて直に人心を指して仏なりと云う是程の理は華嚴・大集・
大般若等の法華已前の権大乘經にも在在處處に之を談ぜり是をいみじき
事とせんは無下に云いがひなき事なり嗚呼今世の人何ぞ甚ひがめるや只
中道実相の理に契当せる妙覺果滿の如来誠諦の言を信すべきなり又
妙樂大師の弘決の一に此の理を釈して云く「世人・教を蔑にして理觀を
尚ぶは誤れるかな誤れるかな」と、此の文の意は今の世の人人は觀心
觀法を先として經教を尋ね学ばず還つて教をあなづり經をかるしむる
是れ誤れりと云う文なり、其の上当世の禪人・自宗に迷へり、続高僧伝
を披見するに習禪の初祖達磨大師の伝に云く教に藉つて宗を悟ると、如来
一代の聖教の道理を習學し法門の旨・宗宗の沙汰を知るべきなり、又

達磨の弟子・六祖の第二祖慧可の伝に云く達磨禪師四巻の楞伽を以て可に授けて云く「我漢の地を觀るに唯此の經のみ有り仁者依行せば自ら世を度する事を得ん」と、此の文の意は達磨大師天竺より唐土に來つて四巻の楞伽經をもつて慧可に授けて云く我此の國を見るに是の經殊に勝れたり汝持ち修行して仏に成れとなり、此等の祖師既に經文を前とす若し之に依つて經に依ると云はば大乘か小乗か權教か實教か能く能く弁ふべし、或は經を用いるには禪宗も楞伽經・首楞嚴經・金剛般若經等による是れ皆法華已前の權教・覆藏の説なり、只諸經に是心即仏・即心是仏等の理の方を説ける一兩の文と句とに迷いて大小・權實・顯露・覆藏をも尋ねず、只不二を立てて而二を知らず謂己均仏の大慢を成せり、彼の月氏の大慢が迹をつぎ此の尸那の三階禪師が古風を追う然りと雖も大慢は生ながら無間に入り三階は死して大蛇と成りぬ・をそろしをそろし、釈尊は

付ふ法ほう藏そうの人の事・私ひそかに書くべきにあらず如よらい來きの記もん文ふん分明みょうなり、其その付ふ法ほう藏そう
伝いに云わく「復また比び丘く有くり名しけて師し子しと曰いう☆賓けいひんこく國こくに於おいて大おおいに仏ぶつ事じを作なす、時
に彼こくおうの國王みらくつをば弥じゃけんしじょう羅ら掘くつと名なけ邪じ見けん熾し盛じょうにして心こころに敬けい信ひん無くく☆賓けいひんこく國こくに於おいて塔
寺きえを毀しゅう壞そうし衆さつ僧がいを殺すな害わりす、即もつち利もち劍ししを以もつて用もちいて師し子しを斬しる頸ししの中なか血く無く
唯ただ乳にだのみ流い出だす法ぽうを相さう付ふする人ひと是こゝに於おいて便すなち絶なえん」此こゝの文ぶんの意いは仏ぶつ・我
が入ねはん涅槃ねはんの後ごに我わが法ぽうを相さう伝でんする人ひと・二ふた十じゅう四し人にんあるべし其その中なかに最さい後ご・
弘くつう通つうの人ひとに当あたるをば師し子し比び丘くと云いわん、☆賓けいひんこく國こくと云いう國こくにて我わが法ぽうを弘ひろむ
べし彼かの國こくの王わうをば檀だん弥み羅ら王わうと云いうべし邪じゃ見けん放ほう逸いつにして仏ぶつ法ぽうを信しんぜず衆しゅう僧そう
を敬うしはないず堂どう塔たうを破やぶり失うしひ劍けんをもつて諸しよ僧そうの頸けいを切きるべし即そく師し子し比び丘くの頸けいを
きらん時ときに頸けいの中なかに血く無くく只ただ乳にだのみ出でずべし、是この時ときに仏ぶつ法ぽうを相さう伝でんせん人
絶たゆべしと定さだめられたり、案あんの如ごとく仏ぶつの御み言こと違ちがはず師し子し尊そん者じや・頸けいをきられ
給たまう事こと実じつに以もつて爾しかなり、王わうのかいな共ともにつれて落おち畢おんぬ、二ふた十じゅう八はち祖そを立

つる事甚はなはだもつ以て僻見びやくけんなり禅の僻事ひがごと是より興おこるなるべし、今慧能えのが壇經に二
十八祖を立つる事は達磨だるまを高祖こうそと定むる時師子ししと達磨だるまとの年紀はる遙かなる間
・三人の禅師ぜんを私ひそかに作り入れて天竺てんじくより来れる付法蔵ふほうぞう・系乱みだれずと云うて
人に重んぜさせん為の僻事ひがごとなり此の事異朝じいにして事旧ふりぬ、補註の十一に
云く「今家は二十三祖を承用いす豈あに有らんや、若し二十八祖を立つるは
未だ所出いまの翻訳しよしゆつを見ざるなり、近來きんらい更に石に刻み版に鏤ちりばめ七仏二十八祖を
図状いちぢやうし各一偈もつを以て伝授相付でんじゆすること有り嗚呼ああ仮託なん何ぞ其れそ甚はなはだだしきや
識者力有らば宜よろしく斯の弊を革あらたむべし」是も二十八祖を立て石にきざみ版
にちりばめて伝うる事甚はなはだだ以て誤あやまりれり此の事を知る人あらば此の誤あやまり
をあらためなをせとなり、祖師そし禅はなはだ甚ひがごとだ僻事ひがごとなる事是にあり先に引く所の
大梵天王問仏決疑經の文を教外別伝きやうがいべつでんの証拠しやうこに汝之なんじこれを引く既に自語相違すでせ
り、其の上此の經は説相權教せつそうこんきやうなり又開元貞元の再度の目錄にも全く載のせ

これは録外の経なる上・権教と見えたり、然れば世間の学者用ゐざるところなり証拠とするにたらず。

そもそも

抑今の法華経を説かるる時・益をうる輩・迹門界如三千の時・敗種

にじよう

ぶつしゅ

きざ

きざ

きざ

きざ

きざ

きざ

きざ

きざ

きざ

きざ

の二乗・仏種を萌す四十二年の間は永不成仏と嫌はれて在在處處の集會に

めりひぼう

こえ

こえ

こえ

こえ

こえ

こえ

こえ

こえ

こえ

こえ

こえ

して罵詈誼の音をのみ聞き人天大会に思いうとまれて既に飢え死ぬべか

ひとびと

ひとびと

ひとびと

ひとびと

ひとびと

ひとびと

ひとびと

ひとびと

ひとびと

ひとびと

ひとびと

ひとびと

りし人人も今の経に來つて舍利弗は華光如來・目連は多摩羅跋旃檀香如來

あなん

あなん

あなん

あなん

あなん

あなん

あなん

あなん

あなん

あなん

あなん

あなん

・阿難は山海慧自在通王仏・羅羅羅は七宝華如來五百の羅漢は普明如來

しょうもん

しょうもん

しょうもん

しょうもん

しょうもん

しょうもん

しょうもん

しょうもん

しょうもん

しょうもん

しょうもん

しょうもん

・二千の聲聞は宝相如來の記☆に予る・頭本遠寿の日は微塵数の菩薩増道

だいかく

だいかく

だいかく

だいかく

だいかく

だいかく

だいかく

だいかく

だいかく

だいかく

だいかく

だいかく

損生して位大覺に鄰る、されば天台大師の釈を披見するに他經には菩薩は

にじよう

にじよう

にじよう

にじよう

にじよう

にじよう

にじよう

にじよう

にじよう

にじよう

にじよう

にじよう

仏になると云つて二乗の得道は永く之れ無し、善人は仏になると云つて悪人

じようぶつ

じようぶつ

じようぶつ

じようぶつ

じようぶつ

じようぶつ

じようぶつ

じようぶつ

じようぶつ

じようぶつ

じようぶつ

じようぶつ

の成仏を明さず男子は仏になると説いて女人は地獄の使と定む人天は仏に

あか

あか

あか

あか

あか

あか

あか

あか

あか

あか

あか

あか

なると云つて畜類は仏になるといはず、然るを今の経は是等が皆仏になる

と説くたのもしきかな末代濁世に生を受くといへども提婆だいばが如ごとくに五逆ごぎやくを

も造らず三逆をも犯さず、而しかるに提婆だいば猶なおてんのうによらいの記き☆を得きたり況いや犯はんさ

ざる我等われらが身をりゆうによすや、八歳のじやしん竜女りゆうによす既に蛇身あらたを改めずして南方に妙果なんぼうを証す

況いや人界いに生を受けたる女人にょにんをや、只得ただ難がたきは人身じんしん値あい難がたきは正法しょうほうなり汝なんじ

早く邪ひるがえりを翻ひるがえりえし正に付き凡を転じて聖を証せんと思はば念仏ねんぶつ・真言しんごん・禪

・律いちじょうみょうてんを捨てて此の一乗じゆじ・妙典もを受持しかすべし、若もし爾しからば妄染もうぜんの塵穢じんえを払つ

て清浄しょうじようの覺体かくたいを証せん事うたがい疑うたがいなかるべし。

爰こゝに愚人ぐにん云いく今しやうにん聖人しやうにんの教誡ちやうもんを聴聞ひこするに日來もうまいの矇昧たちまち忽てんしんに開てんしんけぬ天真てんしん

發明はつめいとも云つべし理非りひ顯然けんねんなれば誰おほか信仰おほせざらんや、但ただし世上せじやうを見るに

上一人かみいちにんより下万民ばんみんに至いたるまで念仏ねんぶつ・真言しんごん・禪しんじゆ・律しんじゆを深く信受しんじゆし御座おわすさる

前こゝどには国土こくどに生を受けながら争いかでか王命そむを背そむかんや、其その上そ・我いが親いと云い

祖いと云い旁かたがた念仏ねんぶつ等の法理はふりを信じて他界の雲に交あり畢おわんぬ、又日本にほんには上下じやうげ

の人数・幾いくばくか有る、然りと雖もいえど權教・權宗の者は多く此の法門ほうもんを信ず

る人は未だ其の名をも聞かず、仍て善処・惡処をいはず邪法・正法しょうほうを簡えらば

ないてん

ず内典五千・七千の多きも外典三千余卷の広きも只主君の命に随したがひ父母の

かな

義に叶かんじんうが肝心なり、されば教主釈尊は天竺てんじくにして孝養報恩の理を説とき

こうし だいとう

孔子は大唐にして忠功孝高の道を示す師の恩を報ずる人は肉をさき身をな

ぐ主の恩をする人は弘演こうえんは腹をさき予讓は劍をのむ親の恩を思し

ていらん

人は丁蘭は木をきざみ伯瑜は杖になく、儒・外・内・道は異なりといへど

ほうおん

も報恩謝徳の教は替かわる事なし然れば主師親のいまだ信ぜざる法理を我始め

すで

て信ぜん事既に違背いはいの過に沈みなん法門の道理は經文明白なれば疑網都ぎもうて

つ ころしやう

尽きぬ後生を願はずば来世・苦に沈しずむべし進退惟谷しんたいこれきわまれり我如何がせんや、

しょうにんいわ

聖人云く汝此の理を知りながら猶是の語をなす理の通ぜざるか意の及およば

しやくそん

ざるか我釈尊の遺法をまなび仏法に肩を入れしより已来知恩をもて最とし

報恩ほうおんをもて前とす世に四恩あり之これを知るを人倫じんりんとなづけ知らざるを畜生ちくしようとす、予父母ふぼの後世ごしやうを助け国家こっかの恩徳おんとくを報ぜんとするが故ゆえに身命しんみやうを捨つる事あえて敢て他事たじにあらず唯知恩ただちおんを旨むねとする計ばかりなり、先ず汝目なんじをふさぎ心を静めどうりて道理を思へ我は善道を知りながら親と主との悪道あくどうにかからんを諫めいさざらんや、又愚心ぐしんの狂ひ酔つて毒を服せんを我知りながら是これをいましめざらんや、其その如く法門の道理を存じて火・血・刀の苦を知りながら争いかでか恩を蒙こおむる人の悪道あくどうにおちん事を歎なげかざらんや、身をもなげ命をも捨つべし諫いさめても・あきたらず歎なげきても限りなし、今世に眼まなこを合がっする苦み猶是なおこれを悲む況や悠いわんや悠たる冥途めいどの悲み豈あにに痛まざらんや恐れても恐るべきは後世ごしやう慎みても慎むべきは来世らいせなり、而しかるを是非ぜひを論ぜず親の命したがに随したがひ邪正じゃせいを簡えらばず主の仰おおせに順したがはんと云う事愚癡ぐちの前には忠孝に似たれども賢人けんじんの意には不忠不孝ふちゆうふこう是に過すぐべからず。

されば教主きようしゅ釈尊しやくそんは転輪聖王てんりんじやうおうの末師子しし・類王きやうおうの孫まご・浄飯王じやうばんの嫡子しやくしとし

て五天竺てんじくの大王だいうたるべしといへども生死無常しやうじむじやうの理をさとり出離解脱しゆつりげだつの道を

願いとつて世を厭いとひ給しかば浄飯大王じやうばんだいう是これを歎なげき四方しほうに四季の色を顕あらわして太子たいしの

御意みこころを留め奉らんと巧み給ふ、先づ東には霞たなびくたえまより・かりが

ねこしぢに帰り☆まどの梅の香・玉簾たまだれの中にかよひ・でうでうたる花の色・も

もさへづりの鶯うぐいす・春の氣色を顕はせり、南には泉の色いろしろ白たへにしてかの

玉川の卵の華信太しのだの森のほととぎす夏のすがたを顕はせり、西には紅葉もみじ・

常葉ときわに交ればさながら錦をおり交まじえ荻おぎふく風・閑のどかにして松の嵐ものすご

し過ぎすにし夏のなごりには沢辺にみゆる螢の光・あまつ空なる星かと誤みあやま

り・松虫・鈴虫の声声・涙を催せり、北には枯野からの色いつしかものうく池

の汀なぎさにつららゐて谷の小川も・をとさびぬ、かかるありさまを造つて御意みこころ

をなぐさめ給たまうのみならず四門に五百人づつの兵を置いて守護しゆごし給たまいしか

ども終に太子の御年十九と申せし二月八日の夜半の比・車匿を召して
金泥駒に鞍置かせ伽耶城を出て檀特山に入り十二年高山に薪をとり深谷に
水を結んで難行苦行し給ひ三十成道の妙果を感得して三界の独尊・一代
の教主と成つて父母を救ひ群生を導き給いしをばさて不孝の人と申すべき
か、仏を不孝の人と云いしは九十五種の外道なり父母の命に背いて無為に
入り還つて父母を導くは孝の手本なる事・仏其の証拠なるべし、彼の淨蔵
・淨眼は父の妙莊嚴王・外道の法に著して仏法に背き給いしかども二人の
太子は父の命に背いて雲雷音王仏の御弟子となり終に父を導いて沙羅樹王
仏と申す仏になし申されけるは不孝の人と云うべきか、經文には棄恩入
無為・眞実報恩者と説いて今生の恩愛をば皆すてて仏法の実の道に入る
是れ実に恩をしれる人なりと見えたり、又主君の恩の深き事汝よりも能く
しれり汝若し知恩の望あらば深く諫め強いて奏せよ非道にも主命に随は

んと云う事・佞臣ねいしんの至り不忠ふちゅうの極きわまりなり、殷いんの紂王のちゆうは悪王あくおう・比干ひかんは忠臣あくおうなり政事まつりごと理に違ちがひしを見て強しいて諫いさめしかば即比干そくひかんは胸むねを割さかる紂王ひかんは比干ひかん死あくおうして後・周の王に打たれぬ、今の世までも比干ひかんは忠臣あくおうといはれ紂王あくおうは悪王あくおうといはる、夏の桀王かのけつを諫いさめし竜蓬りゅうほうは頭こづへをきられぬ・されども桀王あくおうは悪王あくおう・竜蓬りゅうほうは忠臣しゅくべんとぞ云う主君しゅくんを三度諫いさむるに用ゐずば山林さんりんに交れとこそ教へたれ何なんぞ其その非を見ながら默もくせんと云うや、古の賢人いにしえけんじん・世のを遁のがれて山林さんりんに交りし先蹤せんしゅうを集めて聊いささかなんじおろかおろかが汝おが愚耳おろかに聞かしまん、殷の代の太公望はけいは☆溪けいと云う谷に隠る、周の代の伯夷はくゐ・叔齊しゅくせいは首陽山と云う山に籠こもる、秦の綺里季きりきは商洛山に入り漢の嚴光げんこうは孤亭こていに居し、晋の介子綏かいしすゐは縣上山めんじょうざんに隠れぬ、此等これらをば不忠ふちゅうと云うべきか愚おろかなり汝忠なんじを存ぞんぜば諫いさむべし孝を思はば言いうべきなり。

先なんじんず汝ごんきよう權教ごんしゅう・權宗ごんしゅうの人は多く此の宗の人は少し何なんぞ多を捨て少に付く

と云う事必ず多きが尊くして少きが卑きにあらず、賢善けんぜんの人は希まれに愚悪おろかの者は多し麒麟きりん鸞鳳らんほうは禽獸きんじゅうの奇秀しきうなり然れども是は甚はなはだだ少し牛羊ぎゅうよう・烏鴿うこうは畜鳥の拙卑せうひなりされども是は転多うたたおほし、必ず多きが・たつとくして少きがいやしくば麒麟きりんをすてて牛羊ぎゅうようをとり鸞鳳らんほうを闇さしおいて烏鴿うこうをとるべきか、摩尼まに・金剛こんこうは金石の靈異れいゐなり、此の宝は乏しく瓦礫がりやく・土石は徒物いたずらものの至り是は又巨多こたなり、汝なんじが言の如くごとならば玉などをば捨てて瓦礫がりやくを用ゆべきかはかなし・はかなし、聖君は希まれにして千年に一たび出いで賢佐は五百年に一たび顕あらわる摩尼は空しく名のみ聞く麒麟きりん誰か実を見たるや世間出世せけんしゅつせ・善き者は乏しく悪き者は多き事・眼前がんぜんなり、然れば何ぞ強なんちに少きを・おろかにして多きを詮とするや土沙は多けれども米穀は希まれなり木皮は充満じゅうまんすれども布絹は些少さしょうなり、汝なんじ只正理を以て前もつとすべし別して人の多きを以て本とすることなかれ。

爰に愚人席をさり袂をかいつくろいて云く誠に聖教の理をきくに人身

は得難く天上の絲筋の海底の針に貫けるよりも希に仏法は聞き難くして一

眼の亀の浮木に遇うよりも難し、今既に得難き人界に生をうけ値い難き

仏教を見聞しつ今生を・もだしては又何れの世にか生死を離れ菩提を証

すべき、夫れ一劫受生の骨は山よりも高けれども仏法の為にはいまだ一骨

をもすてず多生恩愛の涙は海よりも深けれども尚後世の為には一滴をも落

さず、拙きが中に拙く愚かなるが中に愚かなり設ひ命をすて身をやぶると

も生を軽くして仏道に入り父母の菩提を資け愚身が獄縛をも免るべし能く

能く教を示し給へ。

抑法華經を信ずる其の行相如何・五種の行の中には先ず何れの行をか

修すべき丁寧に尊教を聞かん事を願う、聖人示して云く汝蘭室の友に交

つて麻畝の性と成る誠に禿樹禿に非ず春に遇つて栄え華さく枯草枯るに

あらず夏に入つて鮮かに注ふ、若し先非を悔いて正理に入らば湛寂の潭に遊
泳して無為の宮に優遊せん事疑なかるべし、抑仏法を弘通し群生を利益
せんには先ず教機時国教法流布の前後を弁ふべきものなり、所以は時に
正像末あり法に大小乗あり修行に摂折あり摂受の時・折伏を行ず
るも非なり折伏の時・摂受を行ずるも失なり、然るに今世は摂受の時か
折伏の時か先づ是を知るべし摂受の行は此の国に法華一純に弘まりて
邪法・邪師一人もなしといはん、此の時は山林に交つて觀法を修し五種・
六種乃至・十種等を行すべきなり、折伏の時はかくの如くならず經教の
おきて蘭菊に諸宗のおぎろ譽れを擅にし邪正・肩を並べ大小先を争はん
時は万事を閣いて謗法を責むべし是れ折伏の修行なり、此の旨を知らず
して摂折途に違はば得道は思もよらず惡道に墮つべしと云う事・法華・
涅槃に定め置き天台・妙樂の解釈にも分明なり是れ仏法修行の大事なる

べし、たとえ譬ば文武両道を以て天下を治るに武を先とすべき時もあり文を旨と
すべき時もあり、てんがむい天下無為にして国土静かならん時は文を先とすべし東夷
・南蛮・西戎・北狄・蜂起して野心をさしはさまんには武を先とすべきな
り、文武のよき事計りを心えて時をもしらず万邦・安堵の思をなして世間
むい無為ならん時甲冑をよるひ兵杖をもたん事も非なり、又王敵起らん時戦
場にて武具をば閣いて筆硯を提ん事も亦時に相応せず摂受・折伏の
ほうもん法門も亦是くの如し正法のみ弘まつて邪法・邪師無からん時は深谷にも入
り閑静にも居して読誦・書写をもし観念工夫をも凝すべし、是れ天下の静
なる時筆硯を用ゆるが如し権宗・謗法国にあらん時は諸事を閣いて謗法を
せ責むべし是れ合戦の場に兵杖を用ゆるが如し、然れば章安大師・涅槃の
じょ疏に釈して云く「昔は時平かにして法弘まる応に戒を持すべし杖を持する
こと勿れ今は時嶮しくして法翳る応に杖を持すべし戒を持すること勿れ

今昔俱に嶮しくば俱に杖を持すべし今昔俱に平かならば応に俱に戒を
持すべし、取捨宜きを得て一向にす可からず」と此の釈の意分明なり、昔
は世もすなをに人もただしくして邪法邪義・無かりき、されば威儀をただ
し穩便に行業を積んで杖をもつて人を責めず邪法をとがむる事無かりき、
今の世は濁世なり人の情もひがみゆがんで權教謗法のみ多ければ正法
弘まりがたし此の時は読誦・書写の修行も觀念・工夫・修練も無用なり、
只折伏を行じて力あらば威勢を以て謗法をくだき又法門を以ても邪義を責
めよとなり、取捨其旨を得て一向に執する事なかれと書けり、今の世を見
るに正法一純に弘まる国か邪法の興盛する国か勘ふべし、然るを浄土宗
の法然は念仏に対して法華經を捨閑閣抛とよみ善導は法華經を雜行と名け
あまつせんちゅうむいっ
剩へ千中無一とて千人信ずとも一人得道の者あるべからずと書けり、
真言宗の弘法は法華經を華嚴にも劣り大日經には三重の劣と書き戲論の

法と定めたり、正覚房は法華經は大日經のはきものとりにも及ばずと云しやくそんひ釈尊をば大日如來の牛飼にもたらずと判せり、だいにちにやらい禪宗は法華經を・吐たぜんしゅうる・つばき・月をさす指・教綱なんど下す、しょうじょう小乗律等は法華經は邪教・ほけきよう天魔の所説と名けたり、てんま此等豈謗法にあらずや責めても猶あまりあり禁めしょうせつても亦たらず。また

愚人云く日本六十余州・人替り法異りといへども・或は念仏者・或はぐにんいわ真言師・或は禪・或は律・誠に一人として謗法ならざる人はなし、然りしんごんしと雖も人の上沙汰してなにかせん只我が心中に深く信受して人の誤りをばいえど余所の事にせんと思ふ、よそ聖人示して云く汝言う所実にしかなり我も其のしょうにん義を存ぜし処に經文には・或は不惜身命とも・或は寧喪身命とも説く、ところ何故にかやうには説かるるやと存ずるに只人をはばかりずゆえ經文のままに法ぐつう理を弘通せば謗法の者多からん世には必ず三類の敵人有つて命にも及ぶべほうぼう

しと見えたり、其の仏法の違目を見ながら我もせめず国主にも訴へずば教
へに背いて仏弟子にはあらずと説かれたり、涅槃經第三に云く「若し善比丘
あつて法を壞らん者を見て置いて呵責し驅遣し拳処せずんば当に知るべし
是の人は仏法の中の怨なり、若し能く驅遣し呵責し拳処せば是れ我が弟子
眞の声聞なり」と、此の文の意は仏の正法を弘めん者・經教の義を悪
く説かんと聞き見ながら我もせめず我が身及ばずば国主に申し上げても
是を対治せずば仏法の中の敵なり、若し經文の如くに人をもはばからず我
もせめ国主にも申さん人は仏弟子にして眞の僧なりと説かれて候、されば
仏法中怨の責を免れんとてかやうに諸人に悪まるれども命を釈尊と
法華經に奉り慈悲を一切衆生に与へて謗法を責むるを心えぬ人は口をすく
め眼を瞋らす、汝実に後世を恐れば身を輕しめ法を重んぜよ是を以て
章安大師云く「寧ろ身命を喪ふとも教を匿さざれとは身は輕く法は重し

身を死して法を弘めよ」と、此の文の意は身命をば・ほろぼすとも正法
をかくさざれ、其の故は身はかるく法はおもし身をばころすとも法をば弘
めよとなり、悲いかな生者必滅の習なれば設ひ長寿を得たりとも終には
無常をのがるべからず、今世は百年の内外の程を思へば夢の中の夢なり、
非想の八万歳未だ無常を免れず・利の一千年も猶退没の風に破らる、況や
人間・閻浮の習は露よりも・あやうく芭蕉よりもろく泡沫よりもあだな
り、水中に宿る月のあるかなきかの如く草葉にをく露のをくれ・さきだつ
身なり、若し此の道理を得ば後世を一大事とせよ歡喜仏の末の世の覺徳比丘
・正法を弘めしに無量の破戒此の行者を怨みて責めしかば有徳国王・
正法を守る故に謗法を責めて終に命終して阿☆仏の国に生れて彼の仏の
第一の弟子となる、大乘を重んじて五百人の婆羅門の謗法を誡めし仙予
国王は不退の位に登る、憑しいかな正法の僧を重んじて邪惡の侶を誡む

る人かくの如くごとの徳あり、されば今の世にしやうじゆ摂受を行ぜん人はほうじん謗人ととも俱に
悪道あくどうに墮おちん事うたがい疑い無し、南岳大師なんがくだいしの四安樂行あんらくぎやうに云くいわ「若しも菩薩有つて
悪人あくにんを將護しやうこし治罰ちばつすること能あたわず乃至ないしそ其の人みやうじゆう命終みやうじゆうして諸悪人しよあくにんと俱ともに地獄じごく
に墮だせん」と、此の文の意は若しも仏法を行ずる人有つてほうほう謗法ほうほうの悪人あくにんを治罰ちばつ
せずしてかんねんしゆい觀念思惟もつぱを専らにしてじゃせいこんじつ邪正權実えらをも簡いつわばず詐じひつて慈悲じひの姿げんを現げぜ
ん人は諸もろもろあくにんの悪人と俱ともに悪道あくどうに墮おつべしと云う文なり、今真言しんごん・念仏ねんぶつ・禅・
律ほうじんの謗人ほうじんをたださずいつはつて慈悲じひを現げんずる人・此の文の如くごとなるべし。
爰ここに愚人ぐにん意ひそかを竊ひそかにし言いわを頭いにして云く誠いさに君いさを諫いさめて家まさを正まさしくする事
先賢せんけんの教けへ本文げてんに明白こなり外典け此ことくの如ことし内典ないてん是そむに違たがいうべからず、悪いを見
ていましめず謗ほうを知きつてせめずばきやうもん経文そむに背そむき祖師そしに違たがいせん其その禁いましめ殊ことに
重しんじんし今いたより信心しんじんを至いたすべし、但ただし此し経しゆぎやうを修行たてまつし奉かならん事も叶もいがたし若もし
其その最要しやうこあらば証しやうこ拠こを聞きかんと思ふ、聖人しやうにん示いして云く今汝なんじの道意みちいを見る

に鄭重・慇懃なり、所謂諸仏の誠諦得道の最要は只是れ妙法蓮華經の

五字なり、檀王の宝位を退き竜女が蛇身を改めしも只此の五字の致す所な

り、夫れ以れば今の經は受持の多少をば一偈・一句と宣べ修行の時刻をば

一念隨喜と定めたり、凡そ八万法藏の広きも一部八卷の多きも只是の五字

を説かんとためなり、靈山の雲の上・鷲峯の霞の中に釈尊要を結び地涌

付屬を得ることありしも法体は何事ぞ只此の要法に在り、天台・妙樂の六

千張の疏・玉を連ぬるも道邃行滿の数軸の釈・金を並ぶるも併しながら

此の義趣を出でず、誠に生死を恐れ涅槃を欣い信心を運び渴仰を至さば

遷滅無常は昨日の夢・菩提の覺悟は今日のうつつなるべし、只南無

妙法蓮華經とだにも唱へ奉らば滅せぬ罪やあるべき来らぬ福や有るべき、

眞実なり甚深なり是を信受すべし。

愚人掌を合せ膝を折つて云く貴命肝に染み教訓意を動ぜり然りと

雖も上能兼下の理ことわりなれば広きは狭きを括り多は少を兼ね、然る処ところに五字ごじは少く文言は多し首題は狭く八軸は広し如何なんぞ功德くどく齊等さいとうならんや、聖人しょうにんは少く汝愚なんじかなり捨少取多の執しゆみ・須弥しゆみよりも高く輕狭重広の情めい・溟海めいかいよりも深し、今の文の初後は必ず多きが尊く少きが卑いやしきにあらざる事こと・前に示すが如し、爰こゝに又小が大を兼かね、一が多に勝ると云う事こと之を談ぜん彼の尼拘類樹にくるじゆの実けしは芥子けし・三分が一のせいなりされども五百輛りやうの車を隠す徳あり是小が大を含めるにあらずや、又如意宝珠にょいほうじゆは一あれども万宝を雨ふらして欠かくるところこ・欠か之れ無し是れ又少が多を兼ねたるにあらずや、世間せけんのことわざにも一は万が母といへり此等の道理これら どうりを知らずや、所詮しよせん実相じつそうの理はいけいの背契はいけいを論ぜよ強あながちに多少を執しゆうする事なかれ、汝なんじ至いたつて愚おろかなり今一の譬たとえを仮らん、そ夫れ妙法蓮華經みょうほうれんげきやうとは一切衆生の仏性いっさいしゆじやうなり仏性ぶつしやうとは法性ほふしやうなり法性ほふしやうとは菩提ぼだいなり、所謂いわゆる釈迦しやくか・多宝たほう・十方じゆつぱうの諸仏しよぶつ・上行じやうぎやう・無辺行等むへんぎやう・普賢ふげん・文殊もんじゆ

・舍利弗・目連等、大梵天王・釈提桓因・日月・明星・北斗・七星・二十
八宿・無量の諸星・天衆・地類・竜神・八部・人天・大会・閻魔法王・
上は非想の雲の上・下は那落の炎の底まで所有一切衆生の備うる所の
仏性を妙法蓮華經とは名くるなり、されば一遍此の首題を唱へ奉れば
一切衆生の仏性が皆よばれて爰に集まる時・我が身の法性の法報応の
三身ともに・ひかれて顕れ出ずる是を成仏とは申すなり、例せば籠の内に
ある鳥の鳴く時空を飛ぶ衆鳥の同時に集まる是を見て籠の内の鳥も出で
んとするが如し。

爰に愚人云く首題の功德・妙法の義趣・今聞く所詳かなり但し此の旨趣
正しく經文に是をのせたりや如何、聖人云く其の理詳かならん上は文を
尋ぬるに及ばざるか然れども請に随つて之れを示さん法華經第八陀羅尼品
に云く「汝等但能く法華の名を受持せん者を擁護せん福量るべからず」此

の文の意は仏・鬼子母神・十羅刹女の法華經の行者を守らんと誓い給うを
讃むるとして汝等・法華の首題を持つ人を守るべしと誓ふ、其の功德は
三世了達の仏の智慧も尚及びがたとしと説かれたり、仏智の及ばぬ事何かあ
るべきなれども法華の題名受持の功德ばかりは是を知らずと宣べたり、法華
一部の功德は只妙法等の五字の内に籠れり、一部八卷・文文ごとに二十八
品・生起かはれども首題の五字は同等なり、譬ば日本の二字の中に六十余
州・島二つ入らぬ国やあるべき籠らぬ郡やあるべき、飛鳥とよべば空をか
ける者と知り走獸といへば地をはしる者と心うる一切名の大切なる事蓋し
以て是くの如し、天台は名詮自性・句詮差別とも名者大綱とも判ずる此の
謂れなり、又名は物をめす徳あり物は名に応ずる用あり法華題名の功德も
亦以て此くの如し。

愚人云く聖人の言の如くば実に首題の功莫大なり但し知ると知らざると

の不同あり、我は弓箭に携り兵杖をむねとして未だ仏法の真味を知らず
若し然れば得る所の功德何ぞ其れ深からんや、聖人云く円頓の教理は初後
全く不二にして初位に後位の徳あり一行・一切行にして功德備わらざるは
之れ無し若し汝が言の如くば功德を知つて植えずんば上は等覺より下は
名字に至るまで得益更にあるべからず、今の経は唯仏与仏と談ずるが故な
り、譬喩品に云く「汝舍利弗尚此の経に於ては信を以て入ることを得たり
況や余の声聞をや」文の心は大智・舍利弗も法華経には信を以て入る其の
智分の力にはあらず況や自余の声聞をやとなり、されば法華経に来て信
ぜしかば永不成仏の名を削りて華光如来となり嬰兒に乳をふくむるに其の
味をしらずといへども自然に其の身を生長す、医師が病者に薬を与うるに
病者薬の根源をしらずといへども服すれば任運と病愈ゆ若し薬の源をしら
ずと云つて医師の与ふる薬を服せずば其の病愈ゆべしや薬を知るも知らざ

るも服すれば病の愈ゆる事以て是れ同じ、既に仏を良医と号し法を良薬に
たとしゆじょう たとえ によらいちだい きょうほう とうしわこう みようほう
譬へ衆生を病人に譬ふされば如来一代の教法を擣☆和合して妙法一粒
りようやく
の良薬に丸ぜり豈知るも知らざるも服せん者・煩惱の病愈えざるべしや病
者は薬をもしらず病をも弁へずといへども服すれば必ず愈ゆ、行者も亦
わきまえ ほんのう けんじ じんじゃ
然なり法理をもしらず煩惱をもしらずといへども只信すれば見思・塵沙・
むみょう さんなく どうじ じつぼう じゃつこう うてな ほんぬさんじん はだえ
無明の三惑の病を同時に断じて実報・寂光の台にのぼり本有三身の膚を
磨かん事疑いあるべからず、されば伝教大師云く「能化所化俱に歴劫
うたがい なく みようほう そくしんじようぶつ ほけきよう ししやう りやつこう
無く妙法経の力即身成仏す」と法華経の法理を教へん師匠も又習はん弟子
も久しからずして法華経の力をもつて俱に仏になるべしと云う文なり、
てんだいだいし ほけきよう げんぎ もんく しかん 三十卷の釈を造り給う、
天台大師も法華経に付いて玄義・文句・止観の三十卷の釈を造り給う、
みようらくだいし しやくせん じよき ふぎよう かさ ほんしやく てんだい
妙楽大師は又釈籤・疏記・輔行の三十卷の末文を重ねて判釈す、天台六
十卷とは是なり、玄義には名体宗用教の五重玄を建立して妙法蓮華経の
これ げんぎ こじゆうげん こんりゆう みようほうれんげきよう

五ご字じの功く能のうを判はん釈しゃくす、五重ごじゅうげん玄けんを釈しゃくする中なの宗しゅうの釈しゃくに云いく「綱維こういを提ひげるに
目もくとして動どうかざること無なく衣いの一角ひとすみを牽ひくに縷るとして来きらざる無なきが如ごとし」
と、意いは此この妙法蓮華經みょうほうれんげきょうを信仰しんこうし奉たてまつる一行いっぎょうに功徳くどくとして来きらざる事ことなく
善根ぜんこんとして動どうかざる事ことなし、譬たとえば網なりの目無量むりょうなれども一つの大綱たいこうを引ひくに
動どうかざる目めもなく衣いの糸筋いとすぢ巨多あまたなれども一角ひとすみを取とるに糸筋いとすぢとして来きらざる
ことなきが如ごとしと云いう義ぎなり、さて文句もんくには如に是よ我聞がもんより作礼さらい而去にまで文
文・句句いんねんに因縁やつきょう・約教やくきょう・本・迹かんじん・觀心くわんじんの四種ししゅの釈しゃくを設しけたり、次に止觀しかんに
は妙解みょうげの上うへに立たてる所ところの觀不思議境ふしぎの一念三千いちねんさんぜん是これ本覺ほんがくの立行りっぎょう・本具ほんぐの理り
心しんなり、今爰こゝに委くわしくせず、悦よろこばしいかな生せいを五濁惡世ごじよくあくせに受うくといへども
一乘いちじょうの真文しんもんを見聞けんもんする事ことを得えたり、熙連恒沙きれんごうしゃの善根ぜんこんを致いたせる者もの・此この經きょうに
あい奉たてまつつて信しんを取とると見みえたり、汝なんじ今いま一念隨喜いちねんずいきの信しんを致いたす
函蓋相応感応道交疑くわんがいさうおうかんのおうどうこうたがい無なし。

愚人頭ぐにんこうべを低たれ手を挙あげて云いわく我れ今いまよりは一実いちじつの経王じゆじを受持さんがいし三界さんがいの独尊ほんしを本師こんじんよとして今身ぶっしん自いたり仏身ふっしんに至いたるまで此この信心しんじんあえて敢たいてんて退転たと無ごきやくけん、設たひ五逆ごぎやくの雲厚おんこうくとも乞だふ提婆達多だいばだつたが成仏じやうぶつを続じゆうぎ十悪じゅうあくの波なみあらくとも願おうじくは王子おうじ覆講けちえんの結縁けつえんに同どうじからん、聖人しょうにん云いく人の心こころは水の器けりにしたがふが如ごとく物の性しやうは月の波なみに動うごくに似にたり、故ゆえに汝当座なんじとうざは信しんずといふとも後日ごにちは必かならずず翻へさん魔来まきり鬼来き来きるとも騷乱そうらんする事ことなかれ、夫それ天魔てんまは仏法ぶつぽうをにくむ外道げどうは内道ないどうをきらふ、されば猪いのの金山きんざんを摺すり衆流しゅうりゅうの海うみに入り薪たきぎの火ひを盛さかんになし風の求羅ぐらをますが如ごとくせば豈あに好き事ことにあらずや。

◆六七 如説修行抄 501P

夫それ以おもんみれば末法まつぽう流布るふの時とき・生なまを此この土つちに受うけ此この経きやうを信しんぜん人ひとは如來にょらいの在世ざいせいより猶多ゆた怨嫉おんしつの難なん甚なはだしかるべしと見みえて候こうなり、其そのの故ゆえは在ざい世せいは能化のうけの主ぬしは仏ぶつなり弟子でし又大菩薩ほさつ阿羅漢あらかんなり、人天にんてん・四衆ししじう・八部はちぶ・人非人にんびにん

等なりといへども調機調養して法華經を聞かしめ給ふ猶怨嫉多し、何に
況んや末法今の時は教機時刻当来すといへども其の師を尋ぬれば凡師なり、
弟子又鬪諍堅固・白法隱没・三毒強盛の惡人等なり、故に善師をば遠離
し惡師には親近す、其の上真実の法華經の如說修行の行者の師弟檀那と
ならんには三類の敵人決定せり、されば此の經を聴聞し始めん日より思
い定むべし況滅度後の大難の三類甚しかるべしと、然るに我が弟子等の
中にも兼て聴聞せしかども大小の難來る時は今始めて驚き肝をけして
信心を破りぬ、兼て申さざりけるか經文を先として猶多怨嫉・況滅度後・
況滅度後と朝夕教へし事は是なり予が・或は所を・をわれ・或は疵を
蒙り・或は兩度の御勘氣を蒙りて遠國に流罪せらるるを見聞くとも今始
めて驚くべきにあらざる物をや。

問うて云く如說修行の行者は現世安穩なるべし何が故ぞ三類の強敵

盛んならんや、答えて云く、釈尊は法華經の御為に今度九横の大難に値ひ
給ふ、過去の不輕菩薩は法華經の故に杖木瓦石を蒙り竺の道生は蘇山に流
され法道三蔵は面に火印をあてられ師子尊者は頭をはねられ天台大師は
南三・北七にあだまれ伝教大師は六宗にくまれ給へり、此等の仏菩薩
・大聖等は法華經の行者として而も大難にあひ給へり、此れ等の人人を
如説修行の人と云わずんばいづくにか如説修行の人を尋ねん、然るに今
の世は鬭諍堅固・白法隱没なる上・惡国・惡王・惡臣・惡民のみ有りて
正法を背きて邪法・邪師を尊重すれば国土に惡鬼乱れ入りて三災・七難
盛に起れり、かかる時刻に日蓮仏勅を蒙りて此の土に生れけるこそ時の
不祥なれ、法王の宣旨背きがなければ經文に任せて權実二教のいくさを起
し忍辱の鎧を着て妙教の劍を提げ一部八卷の肝心・妙法五字の旗を指上
て未顕真実の弓をはり正直捨權の箭をはげて大白牛車に打乗つて權門をか

つばと破り・かしこへおしかけここへおしよせ念仏・真言・禪・律等の
はつしゅう
八宗・十宗の敵人をせむるに・或はにげ・或はひきしりぞき・或は生取ら
れし者は我が弟子となる、或はせめ返し・せめをとしすれどもかたきは
多勢なり法王の一人は無勢なり今に至るまで軍やむ事なし、法華折伏・
はこんもんり きんげん つい こんきやうこんもん やから
破権門理の金言なれば終に権教権門の輩を一人もなくせめをとして法王
の家人となし天下万民諸乗一仏乗と成つて妙法独り繁昌せん時、万民
なむみやうほうれんげきやう とな
一同に南無妙法蓮華經と唱え奉らば吹く風枝をならさず 雨壤を砕かず、
ぎのう こんじやう ふしやう さいなん
代は義農の世となりて今生には不祥の災難を払ひ長生の術を得、人法共に
ふろうふし ことわり あらわ
不老不死の理・顕れん時を各各御覽ぜよ現世安穩の証文 疑い有る可
らざる者なり。

問うて云く如説修行の行者と申さんは何様に信ずるを申し候べきや、
いわ によせつしゆぎやう きやうじや もう いかやう
いわ とうせ にほんこくじゅう しよにん
答えて云く当世・日本国中の諸人・一同に如説修行の人と申し候は諸乗
しよじやう

いちぶつじよう

かいえ

いすれ

みなほけきよう

しょうれつ

せんじん

一仏乗と開会しぬれば何れの法も皆法華經にして勝劣・淺深ある事なし、

ねんぶつ

もう

しんこん

しゆぎよう

いっさい

しよきようなら

念仏を申すも真言を持つも禪を修行するも總じて一切の諸經並びに仏・

ぼさつ

みな

たも

みなほけきよう

によせつしゆぎよう

菩薩の御名を持ちて唱るも皆法華經なりと信ずるが如說修行の人とは云わ

れ候なり等云云、予が云く然らず所詮佛法を修行せんには人の言を用う

べか

ただあお

きんげん

いわ

しよせんぶつぼう

しゆぎよう

われら

ほんし

しやかによらい

可らず只仰いで仏の金言をまほるべきなり我等が本師・釈迦如来は初成道

の始より

ほつけ

おほしめ

しゆじよう

きこんみじゆく

法華を説かんと思食しかども衆生の機根未熟なりしかば先ず

ごんきよう

ほうべん

よんじゅうよねん

と

しんじつ

ほけきよう

たま

權教たる方便を四十余年が間説きて後に真実たる法華經を説かせ給いしな

り、此の經の序分・無量義經にして權實のはうじを指て方便真実を分け給へ

り、所謂以方便力・四十余年・未顕真実はなり、大莊嚴等の八万の居士・

いわゆる

ほうべん

よんじゅうよねん

みけんしんじつこれ

そうごん

はちまん

施權・開權・廢權等のいはれを心得分け給いて領解して言く法華經已前の

りやつこうしゆきよう

しよきよう

しゆふとくじよう

むじようほだい

もう

りようげ

いわ

ほけきよういぜん

歴劫修行等の諸經は終不得成・無上菩提と申しきり給ひぬ、然して後・

しようしゅう

ほつけ

いた

せそん

ほうくこ

ようとうせつしんじつ

と

たま

正宗の法華に至つて世尊・法久後・要當說真実と説き給いしを始めとし

しんじつ

ほうくこ

せそん

ほうくこ

ようとうせつしんじつ

と

たま

たま

たま

しんじつ

ほうくこ

せそん

ほうくこ

ようとうせつしんじつ

と

たま

たま

たま

て無二亦無三やくむ除ほうべん仏方便しょうじきしやほうべん說正しやうじきしやほうべん直捨方便しやうじきしやほうべん乃至不受余經一偈ふじゆよきよういちげと禁め給へり、是より已後は唯一いこ一ゆい仏乗の妙法いちぶつじようのみ一切衆生みようほうを仏になす大法いっさいしゆじようにて法華經より外ほかの諸經しよきようは一分の得益いちぶんもあるまじきに末法とくやくの今の學者まつほう何れも如来がくしやいすれの說教せつきようなれば皆得道みなとくどうあるべしと思いて、或は眞言ある・或は眞言しんこん・或は念仏ある・或は念仏ねんぶつ・或は禪宗ある・或は禪宗ぜんしゆう・三論さんろん・法相ほつそう・俱舍ぐしや・成実じやうじつ・律等の諸宗しよしゆう諸經しよきようを取しゆじゆ取しゆじゆに信ずるなり、かくのごとく是くの如き人をば若人にやくにんふしん不信毀謗きぼう・此經即斷しきようそくだん・一切世間いっさいせけん・仏種ぶつしゆ・乃至ないし・其人命終ごにんみやうじゆう・入阿鼻獄にゆうあびごくと定め給へり、此等のをきての明鏡めいきやうを本として一分もたがえず唯一ゆい一いち乘法いちじようと信ずるを如說修行の人とは仏は定めさせ給へり。難なんじて云く左様いに方便ほうべん權教こんきやうたる諸經しよきよう諸仏しよぶつを信ずるを法華經ほけきやうと云はばこそ、只一經ただいっきやうに限りて經文きやうもんの如く五種ごしゆの修行しゆきやうをこらし安樂行あんらくきやう品の如く修行しゆぎやうせんは如說修行にやせつしゆぎやうの者とは云われ候まじきか如何いかん、答えて云く凡おほそ法ぶつほうを修行しゆぎやうせん者は摂折しやうしやく二門にもんを知る可きなり一切いっさいの經論きやうろん此の二を出でざる

なり、されば國中の諸学者等・仏法をあらあら学すと云へども時刻相應の道をしらず四節・四季・取取に替れり、夏は熱く冬はつめたく春は花さき秋は菓なる春種子を下して秋菓を取るべし秋種子を下して春菓を取らんに豈取らる可けんや、極寒の時は厚き衣は用なり極熱の夏はなにかせん、涼風は夏用のなり冬はなにかせん、仏法も亦復是くの如し小乗の流布して得益あるべき時もあり、権大乘の流布して得益あるべき時もあり、実教の流布して仏果を得べき時もあり、然るに正像二千年は小乗・権大乘の流布の時なり、末法の始めの五百年には純円一実の法華經のみ広宣流布の時なり、此の時は鬭諍堅固・白法隱没の時と定めて権実雜乱の砌なり、敵有る時は刀杖弓箭を持つ可し敵無き時は弓箭杖何にかせん、今の時は権教即実教の敵と成るなり、一乗流布の時は権教有つて敵と成りてまぎらはしくば実教より之を責む可し、是を摂折二門の中には法華經

の折伏とは申すなり、天台云く「法華折伏・破権門理」とまことに故あるかな、然るに摂受たる四安樂の修行を今の時行ずるならば冬種子を下して春菓を求める者にあらずや、鶏の曉に鳴くは用なり宵に鳴くは物怪なり、権実雜乱の時・法華經の御敵を責めずして山林に閉じ籠り摂受を修行せんは豈法華經修行の時を失う物怪にあらずや、されば末法今の時・法華經の折伏の修行をば誰か經文の如く行じ給へしぞ、誰人にも坐せ諸經は無得道墮地獄の根源法華經独り成仏の法なりと音も惜まずよばはり給て諸宗の人法・共に折伏して御覽ぜよ三類の強敵来らん事疑い無し。我等が本師・釈迦如来は在世八年の間折伏し給ひ天台大師は三十余年伝教大師は二十余年今日蓮は二十余年の間・権理を破す其間の大難数を知らず、仏の九横の難に及ぶか及ばざるは知らず、恐らくは天台・伝教も法華經の故に日蓮が如く大難に値い給いし事なし、彼は只悪口怨嫉計りな

り、是は兩度の御勘氣遠國に流罪せられ竜口の頸の座頭の疵等其の外惡口
せられ弟子等を流罪せられ籠に入れられ檀那の所領を取られ御内を出ださ
れし、是等の大難には竜樹・天台・伝教も争か及び給うべき、されば
如説修行の法華經の行者には三類の強敵打ち定んで有る可しと知り給へ、
されば釈尊御入滅の後二千余年が間に如説修行の行者は釈尊・天台・
傳教の三人はさてをき候ぬ、末法に入つては日蓮並びに弟子・檀那等
り、我等を如説修行の者といはずば釈尊・天台・傳教等の三人も
如説修行の人なるべからず、提婆・瞿伽利・善星・弘法・慈覺・智証・
善導・法然・良觀房等は即ち法華經の行者と云はれ、釈尊・天台・傳教
・日蓮並びに弟子・檀那は念仏・真言・禪・律等の行者なるべし、法華經
は方便權教と云はれ念仏等の諸經は還つて法華經となるべきか、東は西
となり西は東となるとも大地は持つ所の草木共に飛び上りて天となり天の

にちがつ せいしゆく

日月・星宿は共に落ち下りて地となるためしはありとも・いかでか此の
ことわり

理あるべき。

あわれ

哀なるかな今・日本国の万民日蓮並びに弟子・檀那等が三類の強敵に責

にほんこく

ばんみんにちれんなら

でし

だんな

さんるい

ごうてき

められ大苦に値うを見て悦んで笑ふとも昨日は人の上・今日は身の上なれ

あ

よろこ

きよう

にちれんなら

でし

だんな

そうろ

ばか

ただ

ぶっか

ば日蓮並びに弟子・檀那共に霜露の命の日影を待つ計りぞかし、只今・仏果

かな

じゃつこう

ほんど

じじゅうらく

なんじ

あびだいじよう

に叶いて寂光の本土に居住して自受法楽せん時、汝等が阿鼻大城の底に

沈みて大苦に値わん時・我等何計無慚と思はんずらん、汝等何計うらや

あ

われらいかばかりむざん

なんじ

いかばかり

ましく思はんずらん、一期を過ぐる事程も無ければ・いかに強敵重なると

いちよこす

こつてき

もゆめゆめ退する心なかれ恐るる心なかれ、縦ひ頸をば鋸にて引き切り

たと

のこぎり

・どうをばひしほこを以てつつき足にはほだしを打って・きりを以てもむ

もつ

もつ

とも、命のかよはんほどは南無妙法蓮華経・南無妙法蓮華経と唱えて唱

なむみょうほうれんげきよう

なむみょうほうれんげきよう

とな

へ死に死するならば釈迦・多宝・十方の諸仏靈山会上にして御契約なれば

しゃか

たほう

じゅうぽう

しよぶつりようぜん

けいやく

須臾しゆゆの程に飛び来りて手を取り肩に引懸かけて靈山りやうぜんへ・はしり給たまはば二聖・
二天じゅうらせつ十羅刹女じゆじは受持おうちの者を擁護しよてんぜんじんし諸天善神てんがいは天蓋てんがいを指し旛わねを上げて我等われらを
守護しゆこして慥たしかかに寂光じやくこうの宝刹ほうせつへ送り給たまうべきなり、あらうれしや・あらう
れしや。

ぶんえい 文永十年癸酉五月日 日蓮在御判

おんちゆう 人々御中へ 此の書御身を離さず常に御覧有る可く候

◆六八 顕仏未来記 沙門 日蓮 之を勘う 505P

ほけきやう 法華經の第七に云く「我が滅度の後・後の五百歳の中に閻浮提に広宣流布
して断絶だんぜつせしむること無けん」等云云、予一たびは歎なげいて云く仏滅後既に
二千二百二十余年を隔へだつ何なる罪業ざいごうに依よつて仏の在世ざいせに生れず正法しょうぼうの四依
像法そうぼうの中てんだいの天台・伝教等にも値あわざるやと、亦一たびは喜んで云く何なる
幸あつて後・五百歳に生れて此の真文しんもんを拜見はいけんすることぞや、在世ざいせも無益むやくな

り前ぜん四味しの人は未いまだ法華經ほけきようを聞きかず正像しょうぞうも又由よしし無なし南三なんざん・北七ほくひち並びに
華嚴けこん・真言しんこん等の学者がくしやは法華經ほけきようを信しんぜず、天台大師てんだいだいし云く「後の五百歳このごひやくさい遠く
妙道みょうどうに沾うるおわん」等云云こうせんるふ広宣流布こうせんるふの時ときを指さすか、伝教大師でんぎようだいし云く「正像
稍過ややすぎ已おわつて末法まつぽう太なほだ近ちかきに有あり」等云云まつぽう末法まつぽうの始はつを願がん樂ぎようするの言ことなり、
時代じだいを以もつて果報かほうを論ろんずれば竜樹りゅうじゆ・天親てんじんに超過ちようかし天台てんだい・伝教でんぎようにも勝まさるるな
り。

問いうて云いく後ご・五百歳ごひゃくさいは汝なんじ一人ひとりに限かぎらず何なんぞ殊ことに之これを喜悅きえつせしむるや、
答こたえて云いく法華經ほけきようの第四だいよに云く「如來にやらいの現在げんざいにすら猶なほ怨嫉おんしつ多おほし況いはんや滅度めつどの
後ごをや」文ぶん、天台大師てんだいだいし云く「何いかに況いはんや未來みらいをや理化りかし難がたきに在あり」文、
妙樂大師みょうらくだいし云く「理在難化りざいなんげとは此この理りを明みすことは意い・衆生しゆじようの化けし難がたきを
知しらしむるに在あり」文、智度法師ちどほつし云く「俗りようやくに良藥りやうやく口くちに苦くるしと言いうが如ごとく此
の經きやうは五乘いしゆの異執いしゆを廢はいして一極いっごくの玄宗げんそうを立たつ故ゆゑに凡ぼんを斥しりぞけ聖せいを呵かし大だいを

排し小を破るやぶ ないしか乃至此ことくの如ごときの徒こと悉ことく留難なを為す」等云云、伝でん教大師きょうだいし云く

「代ことばを語れば則すなわち像の終り末の始・地を尋たずぬれば唐たうの東・羯かつの西・人たすぬを原たすぬれ

すなわ ことば

ば則すなわち五濁ごじよくの生なま・鬭諍とうじやうの時ときなり、經いに云く猶多ゆた怨嫉おんしつ・況滅度きやうめつど後ごと此の言

まことゆえあ

良よに以有もちるなり」等云云、此この伝でん教大師きょうだいしの筆跡あは其そのの時に当あたるに似にたれど

とうじ

も意いは当時とうじを指しすなり正像しょうざう稍過しやうぎ已おつて末法まつぽう太なだ近ききに有ありの釈こころあは心有こころある

かな、經いに云く「惡魔あくま・魔民まみん・諸天しよてん竜りゆう・夜叉やしゃ・鳩槃荼くわんだ等そ其そのの便たよりりを得えん」

云云、言いう所の等らとは此この經きやうに又云またわく「若もは夜叉やしゃ・若もは羅刹らせつ・若もは餓鬼がき

もし ふたん

・若もは富單那ふたん・若もは吉遮きつしや・若もは毘陀羅びだら・若もは☆馱けん・若もは烏摩勒伽うまりが・若もは

あばつ

阿跋摩羅あばつ・若もは夜叉吉遮やしゃきつしや・若もは人吉遮じんきつしや」等云云、此この文ぶんの如ごときは先生せんしやうに

しみさん

四味三教しみさんきやう・乃至ないし外道げどう人天にんてん等の法ぽうを持じ得とくして今生こんじやうに惡魔あくま・諸天しよてん・諸人しよにん等の身

を受けたる者が円実えんじつの行者ぎやうじやを見聞けんもんして留難るなんを至いたすべき由よしを説とくくなり。

うたがい

疑うたがいつて云いく正像しょうざうの二時まつぱうを末法まつぽうに相對そつたいするに時きと機きと共に正像しょうざうは殊ことに

まさ勝るるなり何ぞ其の時機を捨てて偏に當時を指すや、答えて云く仏意測り
がたいまこれ難し予未だ之を得ず試みに一義を案じ小乗經を以て之を勘うるに正法
千年は教行証の三つ具さに之を備う像法千年には教行のみ有つて証無
まつぼうし末法には教のみ有つて行証無し等云云、法華經を以て之を探るに正法
千年に三事を具するは在世に於て法華經に結縁する者か、其の後正法に生
れて小乗の教行を以て縁と為し小乗の証を得るなり、像法に於ては
ざいせけちえんびはくゆえしやうじやうおい在世の結縁微薄の故に小乗に於て証すること無く此の人権大乘を以て縁
となじゅつぼうじやうと為して十方の浄土に生ず、末法に於ては大小の益共に之無し、小乗
には教のみ有つて行証無し大乘には教行のみ有つて冥顯の証之無し、
その上正像の時の所立の権小の二宗漸漸末法に入て執心弥強盛にし
て小を以て大を打ち権を以て実を破り国土に大体謗法の者充滿するなり、
ぶつきやうよあくどうだだいぢみじんしやうほうぶつどう
仏教に依つて惡道に墮する者は大地微塵よりも多く正法を行じて仏道を

得る者は爪上の土よりも少きなり、此の時に當つて諸天善神其の国を捨離しやり

し但邪天・邪鬼等有つて王臣・比丘・比丘尼等の身心しんしんに入住にゆうじゆうし法華經の

ぎようじや

行者を罵詈毀辱せしむべき時なり、爾りと雖も仏の滅後に於て四味三教等

じやしゅう

の邪執を捨て実大乘の法華經に帰せば諸天善神並びに地涌千界等の菩薩

ほつけ

・法華の行者を守護せん此の人は守護の力を得て本門の本尊・

みようほうれんげきよう

妙法蓮華經の五字を以て閻浮堤に広宣流布せしめんか、例せば威音王仏の

そうほう

像法の時・不輕菩薩・我深敬等の二十四字を以て彼の土に広宣流布し一國

じようもく

の杖木等の大難を招きしが如し、彼の二十四字と此の五字と其の語殊な

いえどそ

りと雖も其の意是れ同じ彼の像法の末と是の末法の初と全く同じ彼の不輕

ぼさつ

菩薩は初隨喜の人・日蓮は名字の凡夫なり。

うたがい

疑つて云く何を以て之を知る汝を末法の初の法華經の行者なりと

な

為すと云うことを、答えて云く法華經に云く「況んや滅度の後をや」又云く

「諸の無智の人有つて悪口罵詈等し及び刀杖を加うる者あらん」又云く
「数数擯出せられん」又云く「一切世間怨多くして信じ難し」又云く
「杖木瓦石をもつて之を打擲す」又云く「惡魔・魔民・諸天竜・夜叉
鳩槃荼等其の便りを得ん」等云云、此の明鏡に付いて仏語を信ぜしめ
んが為に、日本国中の王臣四衆の面目に引き向えたるに・予よりの外には
一人も之無し、時を論ずれば末法の初め一定なり、然る間若し日蓮無くん
ば仏語は虚妄と成らん、難じて云く汝は大慢の法師にして大天に過ぎ四禪
比丘にも超えたり如何、答えて云く汝日蓮を蔑如するの重罪・又提婆達多
に過ぎ無垢論師にも超えたり、我が言は大慢に似たれども仏記を扶け如来
の実語を顕さんが為なり、然りと雖も日本国中に日蓮を除いては誰人を取
り出して法華經の行者と為さん汝日蓮を謗らんとしして仏記を虚妄にす豈
大惡人に非ずや。

うたがい 疑つて云く如來の未來記汝に相当れり、但し五天竺並びに漢土等にも
ほけきよう ぎようじや あ いかん 法華經の行者之有るか如何、答えて云く四天下の中に全く二の日無し四海
あに の内豈両主有らんや、疑つて云く何を以て汝之を知る、答えて云く月は
い 西より出でて東を照し日は東より出でて西を照す仏法も又以て是くの如し
しょうぞう 正像には西より東に向い末法には東より西に往く、妙樂大師の云く「豈
ちゆうこく 中国に法を失いて之を四維に求むるに非ずや」等云云、天竺に仏法無き
しょうもん 証文なり漢土に於て高宗皇帝の時北狄東京を領して今に一百五十余年・
ぶつぽう 仏法王法共に尽き了んぬ、漢土の大蔵の中に小乗經は一向之れ無く
だいじようきよう たぶんこれ 大乘經は多分之を失す、日本より寂照等少少之を渡す然りと雖も伝持
なほほくせき いはつ の人無れば猶木石の衣鉢を帶持せるが如し、故に遵式の云く「始西より伝
なほ う猶月の生ずるが如し今復東より返る猶日の昇るが如し」等云云、此等の
しゃくごん 釈の如くんば天竺漢土に於て仏法を失せること勿論なり、問うて云く月氏

・漢土に於て仏法無きことは之を知れり、東西北の三洲に仏法無き事は何
もつこれ
を以て之を知る、答えて云く法華經の第八に云く「如来の滅後に於て閻浮提
の内に広く流布せしめて断絶せざらしめん」等云云、内の字は三洲を嫌う
文なり、問うて曰く仏記既に此くの如し汝が未来記如何、答えて曰く仏記
に順じて之を勘うるに既に後・五百歳の始に相当れり仏法必ず東土の日本
より出づべきなり、其の前相必ず正像に超過せる天変地天之れ有るか、
いわゆる所謂仏生の時・転法輪の時・入涅槃の時・吉瑞凶瑞共に前後に絶えたる
大瑞なり、仏は此れ聖人の本なり 経經の文を見るに仏の御誕生の時は五
だいたい色いろの光氣四方に遍くして夜も昼の如し仏御入滅の時は十二の白虹・南北
はくこうに亘り大日輪光り無くして闇夜の如くなりし、其の後正像二千年の間・
内外の聖人・生滅有れども此の大瑞には如かず、而るに去ぬる正嘉年中
より今年に至るまで・或は大地震・或は大天変・宛かも仏陀の生滅の

時の如し、当に知るべし仏の如き聖人生れたまわんか、大虚に亘つて大
慧星出づ誰の王臣を以て之に対せん、当瑞大地を傾動して三たび振裂す
何れの聖賢を以て之に課せん、当に知るべし通途世間の吉凶の大瑞には
非ざるべし惟れ偏に此の大法興廢の大瑞なり、天台云く雨の猛きを見て竜
の大なるを知り華の盛なるを見て池の深きを知る」等云云、妙楽の云く
「智人は起を知り蛇は自ら蛇を識る」等云云、日蓮此の道理を存して既に
二十一年なり、日來の災・月來の難・此の兩三年の間の事既に死罪に及ば
んとす今年・今月万が一も脱がれ難き身命なり、世の人疑い有らば委細
の事は弟子に之を問え、幸なるかな一生の内に無始の謗法を消滅せんこと
を悦ばしいかな未だ見聞せざる教主釈尊に侍え奉らんことよ、願くは我
を損ずる国主等をば最初に之を導かん、我を扶くる弟子等をば釈尊に之を
申さん、我を生める父母等には未だ死せざる已前に此の大善を進めん、但し

今・夢の如く宝塔品の心を得たり、此の経に云く「若し須弥を接つて他方の無数の仏土に擲げ置かんも亦未だ為難しとせず乃至若し仏の滅後に惡世の中に於て能く此の経を説かん是れ則ち為難し」等云云、伝教大師云く「浅きは易く深きは難しとは釈迦の所判なり浅きを去つて深きに就くは丈夫の心なり、天台大師は釈迦に信順し法華宗を助けて震旦に敷揚し叡山の一家は天台に相承し法華宗を助けて日本に弘通す」等云云、安州の日蓮は恐くは三師に相承し法華宗を助けて末法に流通す三に一を加えて三国四師と号く、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經。

ぶんえい
文永十年太歳癸酉後・五月十一日 桑門日蓮之を記す

◆六九 当体義抄 日蓮之を勘う 510P

問う妙法蓮華經とは其の体何物ぞや、答う十界の依正即ち妙法蓮華經の当体なり、問う若爾れば我等が如き一切衆生も妙法の全体なりと云わ

る可きか、答う勿論なり經に云く「所謂諸法乃至本末究竟等」云云、妙樂

大師釈して云く「真相は必ず諸法・諸法は必ず十如・十如は必ず十界・

十界は必ず身土」と云云、天台云く「十如十界三千の諸法は今經の正体

なるのみ」云云、南岳大師云く「云何なるを名けて妙法蓮華經と為すや答

う妙とは衆生妙なるが故に法とは即ち是れ衆生法なるが故に」云云、又

天台釈して云く「衆生法妙」と云云。

問う一切衆生の当体即妙法の全体ならば地獄乃至九界の業因・業果も

皆是れ妙法の体なるや、答う法性の妙理に染淨の二法有り染法は熏じて

迷と成り淨法は熏じて悟と成る悟は即ち仏界なり迷は即ち衆生なり、此

の迷悟の二法二なりと雖も然も法性真如の一理なり、譬えば水精の玉の

日輪に向えば火を取り月輪に向えば水を取る玉の体一なれども縁に随て

其の功同じからざるが如し、真如の妙理も亦復是くの如し一妙真如の理な

りいえどと雖も惡縁あくえんに遇まよいえば迷まよと成り善縁ぜんえんに遇まよえば悟すなわと成る悟ほつしやうは即ち法性ほつしやうなり
迷まよは即ち無明むみやうなり、譬たとえば人夢ひとゆめに種種しじゆじゆの善惡ぜんあくの業さを見夢覺さめて後これに之を思
えいっしんば我が一心いっしんに見る所の夢なるが如ごとし、一心いっしんは法性ほつしやう真如しんによの一理いなり夢の
善惡ぜんあくは迷悟めいごの無明むみやう法性ほつしやうなり、是かくのくの如ことく意得あくめいれば惡迷むみやうの無明むみやうを捨て善悟ぜんごの
法性ほつしやうを本なと為なす可べきなり、大円覺えんかく・修多羅しゆたら・了義經りやうぎきやうに云いく「一切諸いっさいもろもろの衆生しゆじやう
の無始むしの幻無明むみやうは皆諸みなもろもろの如來えんかくの円覺えんかくの心よ従り建立こんりやうす」云云、天台大師てんだいだいしの
止觀しかんに云いく「無明癡惑むみやうちわく本こ是ほつしやうれ法性ほつしやうなり癡迷ちめいを以もつての故ゆえに法性ほつしやう變ほつしやうじて無明むみやう
と作なる」云云、妙樂大師みやうらくだいしの釈いに云いく「理性りしやう體無むみやうし全よく無明むみやうに依よる無明體無むみやう
し全ほつしやうく法性ほつしやうに依よる」云云、無明むみやうは所斷まよの迷まよ・法性ほつしやうは所証しよしやうの理なんなり何ぞ
體一たいなりと云ふうやと云ふえる不審ふしんをば此等これらの文義もんぎを以もつて意得いごう可べきなり、大論だいろん
九十五たの夢たの譬てんだい・天台一家てんだいの玉たの譬た・誠たに面白おもく思おもうなり、正まさく無明むみやう
法性ほつしやう其その體一たいなりと云しう証しやう拠こは法華經ほけきやうに云いく「是この法ほうは法位ほういに住せして世間せけん

の相常住じょうじゅうなり」云云、大論だいろんに云く「明みょうと無明むみょうと異なく別無べつむし是かくの如ごとく

知るをば是これを中道ちゅうどうと名なく」云云、但真如しんにょの妙理みょうりに染淨せんじょうの二法ふたぽう有りと云う

事証文ししょうもん之れ多しと雖も華嚴經けこんぎょうに云く「心仏しんぶつ及衆生しゅじょう是三無差別さんむさべつ」の文と

法華經ほけぎょうの諸法実相しよほうじつそうの文ぶんには過すぐ可べからざるなり南岳大師なんがくだいしの云く「心体いわに

染淨せんじょうの二法ふたぽうを具足ぐそくして而も異相いそう無なく一味平等いちみびやうどうなり」云云、又明鏡めいきやうの譬たとえ

・真実しんじつに一二つまびらなり委くわくは大乗止觀だいじょうしかんの釈しゃくの如ごとし又能またき釈しゃくには籤せんの六むに云いく

「三千理さんぜんに在あれば同じく無明むみょうと名なけ三千果成さんぜんすれば咸ことごとく常樂じやうらくと称しょうす三千改さんぜん

むること無なければ無明即明むみょうそく・三千並さんぜんに常じょうなれば俱体俱用くたいくゆうなり」文、此の釈しゃく

分明ぶんみょうなり。

問いう一切衆生いっさいしゅじょう・皆悉みなことごとく妙法蓮華經みょうほうれんげぎやうの当体とうたいならば我等われらが如ごとき愚癡闇鈍ぐちあんどんの

凡夫ぼんぷも即すなわち妙法みょうほうの当体とうたいなりや、答こたう当世とうせの諸人しよにん之れ多しと雖も二人いを出いで

ず謂いゆる權教こんきやうの人実教じつぎやうの人ひとなり而も權教方便こんきやうほうべんの念仏等ねんぶつを信しんずる人は

妙法蓮華の当体と云わる可からず、実教の法華經を信ずる人は即ち当体の蓮華・真如の妙体・是なり涅槃經に云く「一切衆生大乗を信ずる故に大乘の衆生と名く」文、南岳大師の四安樂行に云く「大強精進經に云く衆生と如来と同共一法身にして清淨妙無比なるを妙法華經と称す」文、又云く「法華經を修行するは此の一心一學に衆果普く備わる一時に具足して次第入に非ず亦蓮華の一華に衆果を一時に具足するが如し是を一乗の衆生の義と名く」文、又云く「二乗・声聞及び鈍根の菩薩は方便道の中の次第修學なり利根の菩薩は正直に方便を捨て次第行を修せず若し法華三昧を証すれば衆果悉く具足す是を一乗の衆生と名く」文、南岳の釈の意は次第行の三字をば当世の學者は別教なりと料簡す、然るに此の釈の意は法華の因果具足の道に對して方便道を次第行と云う故に爾前の円・爾前の諸大乘經並びに頓漸大小の諸經なり証拠は無量義經に云く

「次に方等十二部經・摩訶般若・華嚴海空を説いて菩薩の歴劫修行を宣説す」文、利根の菩薩は正直に方便を捨てて次第行を修せず若し法華經を証する時は衆果悉く具足す是を一乗の衆生と名くるなり此等の文の意を案ずるに三乘・五乘・七方便・九法界・四味三教・一切の凡聖等をば大乘の衆生妙法蓮華の当体とは名く可からざるなり、設い仏なりと雖も權教の仏をば仏界の名言を付く可からず權教の三身は未だ無常を免れざる故に何に況や其の余の界界の名言をや、故に正像二千年の國王・大臣よりも末法の非人は尊貴なりと釈するも此の意なり、南岳釈して云く「一切衆生法身の蔵を具足して仏と一にして異り有ること無し」、是の故に法華經に云く「父母・所生・清淨・常眼・耳・鼻・舌・身・意亦復如是」文、又云く「問うて云く仏何れの經の中に眼等の諸根を説いて名けて如来と為や、答えて云く大強精進經の中に衆生と如来と同じく共に一法身

にして清淨しやうじやう 妙無比なるを妙法蓮華經みやうほうれんげきやうと称すしょう文、他經たきやうに有りと雖もいへど

くだしぶみあらわ おわ

下文くだしぶみあらわ顯れ已れば通じて引用することを得るなり、大強精進經だいきやうしやうじんきやうの同共の

なら そうでん

ほけきやう

みやうきやう

ふどう

二字に習い相伝するなり法華經ほけきやうに同共して信ずる者は妙經みやうきやうの体なり不同

ねんぶつ

すで

ぶつしやうほつしんにやらい

そむ

ゆえ みやうきやう

あら

共の念仏者等は既に仏性法身如来に背くが故に妙經みやうきやうの体に非ざるなり、

しよせんみやうほうれんげ

とうたい ほけきやう

にちれん

でし

だんな

ふほしよしやう

所詮妙法蓮華の当体とは法華經を信ずる日蓮が弟子・檀那等の父母所生の

これ

しやうじき

ほうべん

ほけきやう

なむみやうほうれんげきやう

とな

肉身是なり、正直に方便を捨て但法華經を信じ南無妙法蓮華經と唱うる

ほんのう

ほつしん

はんにや

げだつ

さんとく

さんかん

さんたいそく

人は煩惱・業・苦の三道・法身・般若・解脱の三徳と転じて三觀・三諦即

いっしん

あら

そ

しよじやう

ところ

じやうじやう

のうこ

しやうこ

しんど

一心に顯われ其の人の所住の処は常寂光土なり、能居・所居・身土・

しきしん

くたいくゆう

むささんじん

ほんもんじりやう

とうたいれんげ

にちれん

色心・俱体俱用・無作三身の本門寿量の当体蓮華の仏とは日蓮が弟子・

だんな

こ

すなわ

ほつけ

とうたいじざいじんりき

あら

くのう

檀那等の中の事なり是れ即ち法華の当体自在神力の顯わす所の功能なり

あえてこれ

うたがい

べ

これ

うたがい

べ

てんだいだいし

みやうほうれんげ

敢て之を疑う可からず之を疑う可からず、問う天台大師・妙法蓮華の

当体・譬喩の二義を釈し給えり爾れば其の当体・譬喩の蓮華の様は如何、

ひゆ

答う譬喩の蓮華とは施開廢の三釈委く之を見るべし、当体蓮華の釈は玄義
第七に云く「蓮華は譬えに非ず当体に名を得類せば劫初に万物名無し聖人
・理を觀じて準則して名を作るが如し」文、又云く「今蓮華の称は是れ喩
かを返るに非ず乃ち是れ法華の法門なり法華の法門は清淨にして因果微妙
なれば此の法門を名けて蓮華と為す即ち是れ法華三昧の当体の名にして
譬喩に非ざるなり」又云く「問う蓮華定めて是れ法華三昧の蓮華なりや定
めて是れ華草の蓮華なりや、答う定めて是れ法蓮華なり法蓮華解し難し故に
草花を喩と為す利根は名に即して理を解し譬喩を返らず但法華の解を作す
中下は未だ悟らず譬を須いて乃ち知る易解の蓮華を以て難解の蓮華に
喩う、故に三周の説法有つて上中下根に逗う上根に約すれば是れ法の名・
中下に約すれば是れ譬の名なり三根合論し雙べて法譬を標す是くの如く解
する者は誰とか諍うことを為さんや」云云、此の釈の意は至理は名無し

しょうにん

聖人・理を觀じて万物に名を付くる時・因果俱時・不思議の一法之れ有り

これ

之を名けて妙法蓮華と為す此の妙法蓮華の一法に十界三千の諸法を具足し

けつげん

これ しゅぎよう

ぶついでん

ぶつかどうじ

これ

之を得るなり、聖人・此

て闕減無し之を修行する者は仏因・仏果同時に之を得るなり、

な

しゅぎようかくどう

たま

みよういん・みようか

ぐじ かんとか

たま

ゆえ

の法を師と為して修行覺道し給えば妙因・妙果・俱時に感得し給うが故に

みようかくかまん

によらい

たま

みよういん・みようか

かんとか

たま

ゆえ

妙覺果滿の如來と成り給いしなり、故に伝教大師云く「一心の妙法蓮華

いんが

かだい

ぐじ

そうちよう

びようどう

むじよう

ほうもん

ひゆ

いっききよう

とは因華・果台・俱時に增長す三周各各当体・譬喩有り、總じて一經に

みなとうたい

ひゆ

ぐじ

そうちよう

びようどう

むじよう

ほうもん

ひゆ

いっききよう

皆当体・譬喩あり別して七譬・三平等・十無上の法門有りて皆当体蓮華

あ

有るなり、此の理を詮ずる教を名けて妙法蓮華經と為す」云云、妙樂大師

い

すべから

もつ

れんげこんじつ

の義に對すべし

なにものれんげ

ただこ

の云く「須く七譬を以て各蓮華權実の義に對すべし」何者蓮華は只是れ

いじつせこん

かいこんけんじつ

みなしか

文、又劫初に華草有り

けそう

しょうにん

理を見て

為実施權・開權顯実七譬皆然なり」文、又劫初に華草有り聖人・理を見て

れんげ

なす

けそう

いんがぐじ

ことしよ

けそう

しょうにん

理を見て

号して蓮華と名く此の華草・因果俱時なること妙法蓮華に似たり故に此の

けそう

れんげ

なす

けそう

いんがぐじ

ことしよ

けそう

しょうにん

理を見て

華草同じく蓮華と名くるなり水中に生ずる赤蓮華・白蓮華等の蓮華是なり、

譬喩の蓮華とは此の華草の蓮華なり此の華草を以て難解の妙法蓮華を顕す
てんだいだいし みようほう げ なたえ か あらわ やす しやく こ
天台大師の妙法は解し難し譬を仮りて顕れ易しと釈するは是の意なり。

問う劫初より已来何人か当体の蓮華を証得せしや、答う釈尊・

五百塵点劫の当初此の妙法の当体蓮華を証得して世世番番に成道を唱え
のうしよう しよしよう そのかみ みようほう とうたいれんげ しようたく とな
能証・所証の本理を顕し給えり、今日又・中天竺・摩訶陀国に出世して

此の蓮華を顕わさんと欲すに機無く時無し故に一法の蓮華に於て三の草華

を分別し三乗の権法を施し擬宣誘引せしこと四十余年なり、此の間は衆生

の根性万差なれば種種の草華を施し設けて終に妙法蓮華を施したまわざる

故に、無量義經に云く「我先に道場菩提樹下乃至四十余年未だ真実を顕さ

ず」文、法華經に至つて四味三教の方便の権教・小乗・種種の草華を捨

てて唯一の妙法蓮華を説き三の華草を開して一の妙法蓮華を顕す時、

四味三教の権人に初住の蓮華を授けしより始めて開近顕遠の蓮華に至つて

二住・三住・乃至・十住・等覺・妙覺の極果の蓮華を得るなり。

問う法華經は何れの品何れの文にか正しく当体・譬喩の蓮華を説き分け

たるや、答う若し三周の声聞に約して之を論ぜば方便の一品は皆是

当体蓮華を説けるなり、譬喩品・化城喩品には譬喩蓮華を説きしなり、但

方便品にも譬喩蓮華無きに非ず余品にも当体蓮華無きに非ざるなり、問う

若し爾らば正く当体蓮華を説きし文は何れぞや答う方便品の諸法実相の文

是なり、問う何を以て此の文が当体蓮華なりと云う事を知ることを得るや、

答う天台・妙樂今の文を引て今經の体を釈せし故なり、又伝教大師釈し

て云く「問う法華經は何を以て体と為すや、答う諸法実相を以て体と為す」

文、此の釈分明なり此の文の名を妙法蓮華と曰う義なり、又現証は宝塔品の三身

是れ現証なり、或は涌出の菩薩竜女の即身成仏是なり、地涌の菩薩を

現証と為す事は經文に如蓮華在水と云う故なり、菩薩の当体と聞たり

りゅうによ　しように　な　りようじゅうせん　もう
竜女を証拠と為す事は　靈鷲山に詣で千葉の蓮華の大いさ車輪の如くなる
に坐しと説きたまう故なり、又妙音・観音の三十三・四身なり是をば解釈
には法華三昧の不思議・自在の業を証得するに非ざるよりは安ぞ能く此の
三十三身を現ぜんと云云、或は「世間相常住」文、此等は皆当世の学者
の勘文なり、然りと雖も日蓮は方便品の文と神力品の如来・一切所有之法
等の文となり、此の文をば天台大師も之を引いて今経の五重玄を釈せしな
り、殊更此の一文正しき証文なり。

つぎのかみ　もんしょう　げんしょう　しゅしょう　なん　じんりき　しゅう
問う次上に引く所の文証・現証・殊勝なり何ぞ神力の一文に執する
や、答う此の一文は深意有る故に殊更に吉なり、問う其の深意如何、答う
此の文は釈尊・本眷属地涌の菩薩に結要の五字の当体を付属すと説きた
まえる文なる故なり、久遠実成の釈迦如来は我が昔の所願の如き今は已に
満足す、一切衆生を化して皆仏道に入ら令むとて御願已に満足し、如来の

滅後・後・五百歳中・広宣流布の付属を説かんが為地涌の菩薩を召し出し
本門の当体蓮華を要を以て付属し給える文なれば釈尊出世の本懷・道場
所得の秘法末法の我等が現当二世を成就する当体蓮華の誠 証は此の文な
り、故に末法今時に於て如来の御使より外に当体蓮華の証文を知つて出す
人都有る可からざるなり真実以て秘文なり真実以て大事なり真実以て尊
きなり、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經具足の道を聞かんと欲す云云、是なり、
問う当流の法門の意は諸宗の人來つて当体蓮華の証文を問わん時は
法華經何れの文を出す可きや、答う二十八品の始に妙法蓮華經と題す此の
文を出す可きなり、問う何を以て品品の題目は当体蓮華なりと云う事を知
ることを得るや、故は天台大師・今經の首題を釈する時・蓮華とは譬喩を
挙ぐると云つて譬喩蓮華と釈し給える者をや、答う題目の蓮華は当体・譬喩
を合説す天台の今の釈は譬喩の辺を釈する時の釈なり、玄文第一の本・迹

の六譬は此の意なり同じく第七は当体の辺を釈するなり、故に天台は題目

の蓮華を以て当体・譬喩の両説を釈する故に失無し、問う何を以て題目の

蓮華は当体・譬喩合説すと云う事を知ることを得んや、南岳大師も

妙法蓮華經の五字を釈する時「妙とは衆生妙なるに故に法とは衆生法な

る故に蓮華とは是れ譬喩を借るなり」文、南岳・天台の釈既に譬喩蓮華な

りと釈し給う如何、答う南岳の釈も天台の釈の如し云云、但當体・譬喩合

説すと云う事經文分明ならずと雖も南岳・天台既に天親・竜樹の論に

依て合説の意を判釈せり、所謂法華論に云く「妙法蓮華とは二種の義有り

一には出水の義、乃至泥水を出るをば諸の声聞・如来大衆の中に入つて

坐し諸の菩薩の如く蓮華の上に坐して如来・無上智慧・清淨の境界を説

くを聞いて如来の密蔵を証するを喩うるが故に・二に華開とは諸の衆生・

大乘の中に於て其心怯弱にして信を生ずること能わず故に如来の淨妙

法身を開示して信心を生ぜしめんが故なり」文、諸の菩薩の諸の字は法華
いぜん だいしょう しよぼさつ ほけきょう
已前の大小の諸菩薩・法華經に來つて仏の蓮華を得ると云う事・法華論の
ぶんみょう ゆえ ほさつしよしよとくにゆう ほうべん てんだいこのろん
文分明なり、故に知ぬ菩薩處得入とは方便なり、天台此の論の文を釈し
いわ しじゅう じようみょうほっしん のたま
て云く今論の意を解せば若し衆生をして淨妙法身を見せしむと言わば
こ みょういん かいほつ れんげ な も にやらいたいしゅう
此れ妙因の開発するを以つて蓮華と為るなり、若し如來大衆に入るに蓮華
の上に坐すと言わば此は妙報の国土を以て蓮華と為るなり、又天台が当体
・譬喩合説する様を委細に釈し給う時大集經の我今・仏の蓮華を敬礼す
ひゆ いさい しゃく たま だいしつきやう れんげ きやうらい
と云う文と法華論の今の文とを引証して釈して云く「若し大集に依れば行
法の因果を蓮華と為す菩薩上に処すれば即ち是れ因の華なり仏の蓮華を礼
すれば即ち是れ果の華なり、若し法華論に依れば依報の国土を以て蓮華と
な またぼさつ れんげ しゆう よ れんげ こくど まさ
為す復菩薩・蓮華の行を修するに由つて報・蓮華の国土を得・当に知るべ
えしやういんがこくどこ れんげ なん たとえ あらわ
し依正因果悉く是れ蓮華の法なり、何ぞ譬をもつて顯すことをもちいん鈍

人の法性の蓮華を解せざる為の故に世の華を挙げて譬と為す亦何の妨げ
かあるべき」文、又云く若し蓮華に非んば何に由つて遍く上来の諸法を喩
えん法譬雙弁ずる故に妙法蓮華と称するなり、次に竜樹菩薩の大論に
云く「蓮華とは法譬並びに挙ぐるなり」文、伝教大師が天親・竜樹の二
論の文を釈して云く「論の文但妙法蓮華經と名くるに二種の義あり唯蓮華
に二種の義有りと謂うには非ず、凡そ法喩とは相い似たるを好しと為す若し
相い似ずんば何を以てか他を解せしめん、是の故に釈論に法喩並び挙ぐ
一心の妙法蓮華は因華・果台・俱時に増長す此の義解し難し喩を仮れば
解し易し此の理教を詮ずるを名けて妙法蓮華經と為す」文、此等の論文
釈義分明なり文に在つて見る可し包蔵せざるが故に合説の義・極成せり、
凡そ法華經の意は譬喩即法体・法体即譬喩なり、故に伝教大師釈して云く
「今經は譬喩多しと雖も大喩は是れ七喩なり此の七喩は即ち法体法体は

即ち譬喩なり、故に譬喩の外に法体無く法体の外に譬喩無し、但し法体とは法性の理体なり譬喩とは即ち妙法の事相の体なり事相即理体なり理体即事相なり故に法譬一体とは云うなり、是を以て論文山家の釈に皆蓮華を釈するには法譬並べ挙ぐ等云云、釈の意分明なる故重ねて云わず。

門う如來の在世に誰か当体の蓮華を証得せるや、答う四味三教の時は三乘・五乘・七方便・九法界・帶權の円の菩薩並びに教主乃至法華迹門

の教主総じて本門壽量の教主を除くの外は本門の当体蓮華の名をも聞かず何に況んや証得せんをや、開三顯一の無上菩提の蓮華尚四十余年には之を顯さず、故に無量義經に終不得成・無上菩提とて迹門開三顯一の蓮華は爾前に之を説かずと云うなり、何に況んや開近顯遠・本地難思・

境智冥合・本有無作の当体蓮華をば迹化弥勒等之を知る可きや、問う何を以て爾前の円の菩薩・迹門の円の菩薩は本門の当体蓮華を証得せずと云

う事を知ることを得ん、答う爾前にぜんの円の菩薩ぼさつは迹門しやくもんの蓮華れんげを知らず迹門しやくもんの円の菩薩ぼさつは本門ほんもんの蓮華れんげを知らざるなり、天台てんだい云く「権教ごんきやうの補処ふしよは迹化しやつけの衆しゅうを知らず迹化しやつけの衆しゅうは本化ほんげの衆しゅうを知らず」文、伝教大師でんぎやうだいし云く「是直道じきどうなりと雖いえども大直道じきどうならず」云云、或は云く「未だ菩提ぼだいの大直道じきどうを知らざるが故ゆえに」云云此の意なり、爾前にぜん・迹門しやくもんの菩薩ぼさつは一分断惑証理いちぶんだんなくしやうりの義分ぎぶん有りと雖も本門ほんもんに対するの時は当分の断惑だんなくにして跨節かせつの断惑だんなくに非ず未断惑みだんなくと云わるるなり、然しかれば菩薩ぼさつ处处得入とつぶんと釈しゃくすれども二乗にじやうを嫌きらうの時一往得入いちおうとくにゅうの名を与うるなり、故ゆえに爾前にぜん・迹門しやくもんの大菩薩ぼさつが仏れんげの蓮華しやうとくを証得しやうとくする事は本門ほんもんの時なり真実しんじつの断惑だんなくは寿量じゆりやうの一品を聞きし時なり、天台大師てんだいだいし涌出品ゆじゅつぽんの五十小劫じんにき・仏ゆえの神力しんりきの故ゆえに諸の大衆もろもろたいしゅうをして半日の如ごとしと謂いわしむの文しやくを釈しゃくして云く「解者げしやは短に即して長・五十小劫いと見る惑者わくしやは長に即して短・半日の如ごとしと謂いえり」文、妙楽みやうらく之を受けて釈しゃくして云く「菩薩ぼさつ已に無明むみやうを破はす之を

稱しょうして解なと為なす大衆たいしゅう仍なお賢位けんいに居これす之これを名なけて惑なと為なす「文ぶん、釈しゃくの意い分ぶん明めいなり爾前にぜん・迹門しゃくもんの菩薩ぼさつは惑者わくしゃなり地涌じゆの菩薩ぼさつのみ独ひとり解者げしゃなりと云いう事ことなり、然しかるに当世天台宗とうせてんだいしゅうの人の中なかにに本ほん・迹どういの同異どういを論ろんずる時異ときり無なしと云いつて此この文ぶんを料簡りょうけんするに解者げしゃの中なかにに迹化しゃっけの衆しゅう入りたりと云いうは大だいなる僻見びやくけんなり經きやうの文釈ぶんしゃくの義分ぎぶん明めいなり何なんぞ横計やうけいを為なす可べけんや、文ぶんの如ごときは地涌じゆの菩薩ぼさつ・五十小劫にょらいの間ま如来しやうようを称揚しょうようするを靈山迹化りやうぜんしゃっけの衆しゅうは半日ごんじつの如ごとく謂おもえりと説とき給たまえるを天台てんだいは解者げしゃ惑者わくしゃを出いだして迹化しゃっけの衆しゅうは惑者わくしゃの故ゆゑに半日ごんじつと思おもえり是これ即すなわち僻見びやくけんなり、地涌じゆの菩薩ぼさつは解者げしゃの故ゆゑに五十小劫ごと見みる是これ即すなわち正見せいけんなりと釈しゃくし給たまえるなり、妙樂みょうらく之これを受むけて無明むみやうを破はする菩薩ぼさつは解者げしゃなり未いまだ無明むみやうを破はせざる菩薩ぼさつは惑者わくしゃなりと釈しゃくし給たまいし事文じぶんに在あつて分明ぶんめいなり、迹化しゃっけの菩薩ぼさつなりとも住上じゆうじやうの菩薩ぼさつは已すでに無明むみやうを破はする菩薩ぼさつなりと云いわん学者がくしゃは無得道とくどうの諸經しよきやうを有得道とくどうと習ならいし故ゆゑなり、爾前にぜん・迹門しゃくもんの当分とうぶんに妙覺みょうかくの位

有りいへどと雖も本門ほんもん・寿量じゆりやうの真仏まぶつに望むる時は惑者わくしやな仍お賢位けんいに居ると云わるる者なり
權教こんきやうの三身さんじん未だ無常むじやうを免れざる故は夢中の虚仏こぶつなるが故なり、爾前にぜんと
迹化しやくけの衆とは未だ本門ほんもんに至らざる時は未断惑みだんなくの者と云われ彼かしこに至る時
まさしく初住しよじゆうに叶かななり、妙楽みやうらくの釈いわに云く「開迹顯本かいしやくけんほん皆初住みなしよじゆうに入る」文、
仍賢位なおけんいに居すの釈これ之を思い合すべし、爾前迹化にぜんしやくけの衆は惑者わくしやい未だ無明むみやうを破せ
ざる仏ぼさつ・菩薩ぼさつなりと云う事真実しんじつなり、故に知ぬ本門ほんもん・寿量じゆりやうの説顯あらわれ
ての後は靈山りやうぜん・一会しゆうみなことごとの衆皆悉く当体蓮華とうたいれんげを証得しやうとくせしなり、二乗にじやう・闡提せんたい・
定性じやうしやう・女人にょにん・惡人あくにん等も本仏ほんぶつの蓮華れんげを証得しやうとくするなり、伝教大師でんぎやうだいし・一大事いちだいじの
蓮華れんげを釈しゃくして云く「法華の肝心かんじん・一大事いちだいじの因縁いんねんは蓮華れんげの所顯しよけんなり、一とは一
じつそう
実相じつさうなり大とは性広博じやうくわくなり事とは法性ほうしやうの事なり一究竟くきやう事は円えんの理教・
智行ちぎやう、円えんの身・若じやく・達たつなり一乗いちじやう・三乗さんじやう・定性じやうしやう・不定性ふじやう・内道ないどう・外道げどう・
阿闍あせん・阿顛あてん・皆悉みなことごとく一切智地いちじちに到る是の一大事いちだいじ・佛ぶつの知見ちけんを開示かいじし悟入ごにゆうして

いっさいじようぶつ 一切成仏す 女人・闍提・定性・二乗等の極悪人 靈山に於て 当体蓮華を証得するを云うなり。

問う末法今時誰れ人か 当体蓮華を証得せるや、答う 当世の体を見るに大阿鼻地獄の当体を証得する人之れ多しと雖も 仏の蓮華を証得せる人の之れ無し 其の故は無得道の権教方便を信仰して 法華の当体真実の蓮華を毀謗する故なり、仏説いて云く「若し人信ぜずして此の経を毀謗せば則ち一切世間の仏種を断ぜん 乃至其の人 命終して阿鼻獄に入らん」文、天台云く「此の経は☆く六道の仏種を開く 若此の経を謗せば義・断ずるに当なり」文、日蓮云く 此の経は是れ十界の仏種に通ず 若し此の経を謗せば義是れ十界の仏種を断ずるに当る 是の人無間に於て決定して墮在す 何ぞ出ずる期を得んや、然るに日蓮が一門は正直に権教の邪法・邪師の邪義を捨てて 正直に正法・正師の正義を信ずる故に 当体蓮華を証得して

じょうじやつこう

常寂光の当体の妙理を顕す事は本門寿量の教主の金言を信じて南無

みょうほうれんげきょう

妙法蓮華經と唱うるが故なり、問う南岳・天台・伝教等の大師・法華經

よ いちじょうえんしゅう

に依つて一乗円宗の教法を弘通し給うと雖も未だ南無妙法蓮華經と

とな

唱えたまわざるは如何、若し爾らば此の大師等は未だ当体蓮華を知らず又

しょうとく

証得したまわずと云うべきや、答う南岳大師は觀音の化身・天台大師は

やくおう

薬王の化身なり等云云、若し爾らば靈山に於て本門寿量の説を聞きし時

これ しょうとく

は之を証得すと雖も在生の時は妙法流布の時に非ず、故に妙法の名字を

しかん

替えて止觀と号し一念三・千一心三觀を修し給いしなり、但し此等の大師

な む みょうほうれんげきょう

等も南無妙法蓮華經と唱うる事を自行真実の内証と思食されしなり、

なんがくだいし

南岳大師の法華懺法に云く「南無妙法蓮華經」文、天台大師の云く「南無

びょうどうだいえいちじょう

平等大慧一乘・妙法蓮華經」文、又云く「稽首妙法蓮華經」云云、又

きみょうみょうほうれんげきょう

「歸命妙法蓮華經」云云、伝教大師の最後臨終の十生願の記に云く

「南無妙法蓮華經」云云、問う文証分明なり何ぞ是くの如く弘通したまわざるや、答う此れに於て二意有り一には時の至らざるが故に二には付属に非ざるが故なり、凡そ妙法の五字は末法流布の大白法なり地涌千界の大士の付属なり是の故に南岳・天台・伝教等は内に鑑みて末法の導師にこれを譲りて弘通し給わざりしなり。

◆七〇 当体義抄送状 519P

問う当体の蓮華解し難し故に譬喩を仮りて之を顕すとは經文に証拠有るか、答う經に云く「世間の法に染まらざること蓮華の水に在るが如し地より而も涌出す」云云、地涌の菩薩の当体蓮華なり、譬喩は知るべし以上後日に之を改め書すべし、此の法門は妙經所詮の理にして釈迦如来の御本懷地涌の大士に付属せる末法に弘通せん經の肝心なり、国主信心あらん後始めて之を申す可き秘藏の法門なり、日蓮最蓮房に伝え畢んぬ。

日蓮 かおう
花押

◆七一 小乗 しょうじょうだいじょうぶんべつ
大乘 分別抄

文永十年 ぶんえい 五十二歳御作 与富木常忍 ときじょうにん 520P

夫れ小大定めなし一寸の物を一尺の物に対しては小と云い五尺の男に対

しては六尺七尺の男を大の男と云う、外道の法に対しては一切の大小の

仏教を皆大乘と云う大法東漸通指仏教以為大法等と釈する是なり、仏教

に入つても鹿苑十二年の説・四阿含經等の一切の小乗經をば諸大乘經

に対して小乗經と名けたり、又諸大乘經には大乘の中にとりて劣る

教を小乗と云う華嚴の大乘經に其餘樂小法と申す文あり、天台大師

はこの小法というは常の小乗經にはあらず十地の大法に対して十住十

行・十回向の大法を下して小法と名くと釈し給へり、又法華經第一の卷方便

品に若にやくいし以小乘しょうじょう化くわ乃な至於し一人ひとりと申もうす文あり天台てんだい・妙楽みょうらくは阿含經あこんきょうを小乘しょうじょうと

云いうのみにあらず華嚴經けこんきょうの別教べつきょう・方等ほうとう・般若はんにかの通別だいいじょうの大乗だいじょうをも小乘しょうじょうと

定め給たまう、又また玄義げんぎの第一だいいちに会え小帰大しょうきだい・是ぜん漸頓ぜんとん混合みんごうと申もうす釈ちしやうだいをば智証大師ちしやうだいは

初め華嚴經けこんきょうより終り般若經はんにかにいたるまで四教しきやう八教はつきやうの權教ごんきやう諸大乘しよだいじやうきやう經きやうを

漸頓ぜんとんと釈しゃくす混合みんごうとは八教はつきやうを會えして一大円教えんきやうに合がつとこそことはられて候

へ、又法華經ほけきやうの壽量品じゆりやうぼんに樂ぎやうお於小法しょうじやうきやう・德薄垢重者とくはくじゆうと申もうす文あり、天台大師てんだいだいは

此經文きやうもんに小法しょうじやうきやうと云いうは小乘經しょうじやうきやうにもあらず又諸大乘しよだいじやうきやう經きやうにもあらず久遠くおん

実成じつじやうを説くわかざる華嚴經けこんきやうの円えん・乃至ないし・方等ほうとう・般若はんにか・法華經ほけきやうの迹門しやくもん十四品しやくもんの

円頓えんとんの大法だいほうまで小乘しょうじやうの法ほうなり、又華嚴經けこんきやう等の諸大乘しよだいじやうきやう經きやうの教主きやうしゅの法身ほっしん・

報身ほうしん・毘盧遮那びるしやな・盧舍那るしやな・大日如來等だいにちにらゐをも小仏しょうぶつなりと釈しゃく給たまふ、此の心な

らば涅槃經ねはんきやう・大日經等だいにちきやうの一切いっさいの大小だいいしやう・權実ごんじつ・顯密けんみつの諸經しよきやうは皆みな小乘經しょうじやうきやう

八宗はっしゅうの中には俱舍宗くしやしゅう・成実宗じやうじつ・律宗りっしゅうを小乘しょうじやうと云いうのみならず華嚴宗けこんしゅう・

ほうそうしゅう さんろんしゅう しんこんしゅう

法相宗・三論宗・真言宗等の諸大乘宗を小乗宗として唯天台のただてんだい一宗

ばかり じつだいじょう

計り実大乘宗なるべし、彼彼かれかれの大乗宗の所依しよえの經經きやうきやうには絶えて二乗作仏にじやうさぶつ

くおんじつじょう

・久遠実成の最大の法をとかせ給たまはず、譬たとえば一尺二尺の石を持つ者をば

大力といはず一丈二丈の石を持つを大力と云ことうが如し、華嚴經けこんきやうの法界ほっかい・円融えんゆう

はんによきやう こんどう

四十一位・般若經はんによきやうの混同無二・十八空乾慧地等の十地じゅうち・瓔珞經ようらくの五十二位

にんのうきやう

・仁王經にんのうきやうの五十一位・藥師經やくしの十二の大願・雙觀經そうかんきやうの四十八願・大日經だいにちきやう

しんこん

の真言・印契等此等は 小乗經しやうじやうきやう に対すれば大法秘法なり、法華經ほけきやうの二乗にじやう

さぶつ くおんじつじょう

作仏・久遠実成に対すれば 小乗しやうじやうの法なり、一尺二尺を一丈二丈に対する

こと

が如し、又二乗作仏にじやうさぶつ・久遠実成くおんじつじょうは法華經ほけきやうの肝用にして諸經しよきやうに対すれば奇

ほけきやう

たりと云へども法華經ほけきやうの中にてはいまだ奇妙ならず一念三千いちねんさんぜんと申もうす法門ほうもんこ

そ奇が中の奇・妙が中の妙にて華嚴けこん・大日經だいにちきやう等に分絶たるのみならず、

はつしゅう

八宗そしの祖師しんこんの中にも真言等の七宗の大師にんし・名をだにもしらず天竺てんじくの大論師ろんし

りゆうじゆぼさつ

てんじんぼさつ

たま

たま

ほうもん

竜樹菩薩・

天親菩薩は内には珠を含み外には書きあらはし給はざりし法門

なり、

うす

さんとく

べいさい

米育が六句の先仏の教を盗みとれる様に華嚴宗の澄観

なり、

しんこんしゅう

ぜんむい

てんだいだいし

いちねんさんぜん

ほうもん

ちようかん

しんこんしゅう

ぜんむい

てんだいだいし

いちねんさんぜん

ほうもん

しんこんしゅう

ぜんむい

てんだいだいし

いちねんさんぜん

ほうもん

しんこんしゅう

ぜんむい

てんだいだいし

・真言宗の善無畏等は天台大師の一念三千の法門を盗み取って我が所依の

しんぶつぎゅうしじゅう

じつそう

もう

たまし

経の心仏及衆生の文の心とし心実相と申す文の神とせるなり、かくの

ごとか盗み取って我が宗の規模となせるが又還って天台宗を下し華嚴宗・

しんこんしゅう

おと

真言宗には劣れる法なりと申す、此等の大師は世間の盗人にはあらねども

ぶつぽう

ぬすびと

これら

たず

あきら

仏法の盗人なるべし、此等をよくよく尋ね明むべし。

又世間の天台宗の学者並びに諸宗の人人の云く法華経は但二乗作仏・

せけん

てんだいしゅう

がくしやなら

しよしゅう

ひとびと

いわ

ほけきよう

久遠実成計りなり等云云、今反詰して云く汝等が承伏に付いて但二乗

くおんじつじようばか

さぶつ

くおんじつじようばか

ほけきよう

作仏と久遠実成計り法華経にかぎって諸経になくば此れなりとも豈奇が

中の奇にあらずや、二乗作仏・諸経になくば仏の御弟子・頭陀第一の迦葉

ちえ

だいいち

しやりほつ

じんつうだいいち

もくれん

でし

智慧第一の舍利弗・神通第一の目連等の十大弟子千二百の羅漢・万二千

・智慧第一の舍利弗・神通第一の目連等の十大弟子千二百の羅漢・万二千

・智慧第一の舍利弗・神通第一の目連等の十大弟子千二百の羅漢・万二千

・智慧第一の舍利弗・神通第一の目連等の十大弟子千二百の羅漢・万二千

・智慧第一の舍利弗・神通第一の目連等の十大弟子千二百の羅漢・万二千

・智慧第一の舍利弗・神通第一の目連等の十大弟子千二百の羅漢・万二千

・智慧第一の舍利弗・神通第一の目連等の十大弟子千二百の羅漢・万二千

・智慧第一の舍利弗・神通第一の目連等の十大弟子千二百の羅漢・万二千

・智慧第一の舍利弗・神通第一の目連等の十大弟子千二百の羅漢・万二千

・智慧第一の舍利弗・神通第一の目連等の十大弟子千二百の羅漢・万二千

・智慧第一の舍利弗・神通第一の目連等の十大弟子千二百の羅漢・万二千

・智慧第一の舍利弗・神通第一の目連等の十大弟子千二百の羅漢・万二千

の聲聞・無数億の二乗界・過去遠遠劫より未來無数劫にいたるまで法華經

に値いたてまつらずば永く色心俱に滅して永不成仏の者となるべし豈大

る失にあらずや、又二乗界・仏にならずば迦葉等を供養せし梵天・帝釈・

四衆・八部・比丘・比丘尼等の二界・八番の衆はいかんがあるべき、又

久遠実成が此の經に限らずんば三世の諸仏・無常遷滅の法に墮しなん、

譬えば天に諸星ありとも日月ましまさずんば・いかんがせん地に草木あり

とも大地なくばいかんがせん、是は汝が承伏に付いての義なり実をもつ

て勘へ申さば二乗作仏なきならば九界の衆生・仏になるべからず、法華經

の心は法爾のことほりとして一切衆生に十界を具足せり、譬えば人・一

人は必ず四大を以てつくれり一大かけなば人にあらじ、一切衆生のみなら

ず十界の依正の二法非情の草木一微塵にいたるまで皆十界を具足せり、

二乗界・仏にならずば余界の中の二乗界も仏になるべからず又余界の中の

にじよう

二乗界仏にならずば余界よかいの八界仏になるべからず、譬たとえば父母ふぼともに持たもち

きようだい

たる者兄弟きようだい九人あらんか二人は凡下ほんげの者と定められれば余の七人も必ず凡下ほんげ

しゅじよう

の者となるべし、仏と經とは父母ふぼの如ごとし九界の衆生しゅじようは実子じしなり声聞しやうもん・縁覺えんかく

ようふじようぶつ

の二人・永不成仏の者となるならば菩薩ぼさつ・六凡の七人あに得道とくどうをゆるさる

さんがい みなこれわが

べきや、今・此の三界さんがいは皆是みな我が有そなり其の中の衆生しゅじようは悉ことごとく是吾子わがこなり

ないしただわれひとり

乃至唯我一人のみ能よく救護くごを為すの文をもつて知るべし、又菩薩ぼさつと申もうすは

しぐせいがん

必ず四弘誓願しぐせいがんをおこす第一衆生無辺誓願度の願だいいちしゅじようむへんせいがんど・成就じやうじゆせずば第四の無上むじやう

ぼだいせいがん

菩提誓願証ぼだいせいがんの願じやうじゆも成就じやうじゆすべからず、前四味の諸經ぜんしみのしよきやうにては菩薩ぼさつ・凡夫ほんぶは仏

にじよう

になるべし二乗にじようは永く仏になるべからず等云云、而しかをかしこげなる菩薩ぼさつ

われら

もはかなげなる六凡も共に思おもへり我等われら・仏になるべし二乗にじようは仏にならざれ

にじよう

ば・かしこくして彼の道には入いざりけると思おもふ、二乗にじようはなげきをいたき此

ほけきやう

の道には入いるまじかりし者と恐れかなしみしが今法華經ほけきやうにして二乗にじようを仏

になし給へる時二乗・仏になるのみならずかの九界の成仏をも・ときあら
はし給へり、諸の菩薩・此の法門を聞いて思はく我等が思ひは・はかなか
りけり爾前の経經にして二乗・仏にならずば我等もなるまじかりける者
なり、二乗を永不成仏と説き給ふは二乗一人計りなげくべきにあらざりけ
り我等も同じなげきにてありけりと心うるなり。

又寿量品の久遠実成が爾前の経經になき事を以て思ふに爾前には
久遠実成なきのみならず仏は天下第一の大妄語の人なるべし、爾前の

大乘第一たる華嚴經・大日経等に始めて正覚を成じ我昔道場に坐す等
云云、眞実甚深正直捨方便の無量義經と法華經の迹門には我先に道場に

して・我始め道場に坐すと説れたり、此等の経文は寿量品の然るに我実
に成仏してより已来無量無辺なりの文より思い見ればあに大妄語にあらず

や、仏の一身すでに大妄語の身なり一身に備えたる六根の諸法あに実なる

べきや、大冰の上に造れる諸舎は春をむかへては破れざるべしや水中の満月
は実に体ありや、爾前の成仏往生等は水中の星月の如し爾前の成仏往生
等は体に随ふ影の如し、本門寿命品をもつて見れば寿命品の智慧をはな
れては諸経は跨節当分の得道共に有名無実なり、天台大師・此の法門を
道場にして独り覚知し玄義十卷・文句十卷・止観十卷等かきつけ給うに
諸経に二乗作仏・久遠実成絶えてなき由を書きをき給ふ、是は南北の十
師が教相に迷つて三時・四時・五時・四宗・五宗・六宗・一音・半満・
三教・四教等を立てて教の浅深勝劣に迷いし此等の非義を破らんが為に
まず眼前たる二乗作仏・久遠実成をもつて諸経の勝劣を定め給いしな
り、然りと云つて余界の得道をゆるすにはあらず、其の後華嚴宗の五教・
法相宗の三時真言宗の顕密五蔵十住心義釈の四句等は南三・北七の十
師の義よりも尚☆れる教相なり。

此等これらは他師たしの事なればさてをきぬ又自宗じしゅうの学者がくしゃが天台てんだい・妙楽みょうらく・伝教でんぎょう
大師だいしの御釈まよいに迷にぜんうて爾前きようぎょうの経経にじようさぶつには二乗作仏くおんじつじようばか・久遠実成にほんこく計りこそ無け
れども余界よかいの得道とくどうは有りなんと申もうす人人ひとびと・一人・二人ならず日本国にほんこくに弘ひろ
れり、他宗たしゅうの人人ひとびと是に便ひとびとを得て弥いよいよてんだいしゅう うしな これら がくしや たと とんば
蜘蛛ちちゅうの網にかかり渴かわける鹿の陽炎をおふよりも・はかなし例せば頼朝よりともの
右大將家うだいしようけは泰衡ためを討たんが為に泰衡だまを誑よしつねして義経よしつねを討たせ、太政入道清盛にゅうどうきよもり
は源氏げんじを喪そうして世をとらんが為に我が伯父平馬介忠正へいまのすけただまさを切る義朝よしともはたばら
かされて慈父じふためよし為義ことを切るが如これらし、此等はかは墓ひとびとなき人人ひとびとのためしなり、天台大師てんだいだいし
・法華經ほけきょうより外ほかの経経きようぎょうには二乗作仏にじようさぶつ・久遠実成くおんじつじようは絶えてなしなんと釈しゃく
給たまへば菩薩ぼさつの作仏凡夫さぶつほんぶの往生おうじようはあるなんめりとうち思われらいて我等にじようは二乗にじようにも
あらざれば爾前にぜんの経経きようぎょうにても得道とくどうなるべし此の念おもい心中しんちゅうにさしはさめ
り、其の中にも觀經かんきょうの九品往生おうじようはねがひやすき事なれば法華經ほけきょうをばなげ

すて念仏ねんぶつ申して浄土じょうどに生れて観音かんのん・勢至せいし・阿弥陀仏あみだぶつに値あいたてまつて成仏じょうぶつ
を遂とぐべし云云、当世とうせの天台宗てんだいしゅうの人人ひとびとを始はじとして諸宗しよしゅうの学者がくしや皆みな此この
如ごとし実義じつぎをもつて申もうさば一切衆生いっさいしゆじようの成仏じようぶつのみならず六道ろくどうを出いで十方じゆつぽうの
浄土じょうどに往生おうじようする事はかならず法華經ほけきやうの力なり、例せば日本国にほんこくの人・唐土もうこしの
内裏だいりに入らん事は必ず日本にほんの国王こくおうの勅定ちよくじようによるべきが如し穢土えどを離れて
浄土じょうどに入る事は必ず法華經ほけきやうの力なるべし、例せば民の女むすめ・乃至閼白ないしかんぱく・大臣だいじん
の女むすめに至るまで大王だいおうの種くたを下せば其の産る子王そとなりぬ、大王だいおうの女むすめなれ
ども臣下しんかの種かいにんを懷妊そせば其の子王そとならざるが如し、十方じゆつぽうの浄土じょうどに生るる
者は三乘人天さんじようにんてん・畜生等ちくじようまでも皆王みなの種姓すじようと成つて生るべし皆仏みなとなるべ
きが故なり、阿含經あこんきやうは民の女むすめの民を夫とし華嚴けこん・方等ほうとう・般若等はんんにやは臣の女むすめ
の臣を夫とせるが如し、又華嚴經けこんきやう・方等ほうとう・般若はんんにや・大日經等だいにちきやうの円教えんきやうの菩薩ぼさつ
等だいおうは大王むすめの女しんかの臣下しんかを夫とせるが如し、皆浄土じんじようどに生るべき法にはあらず、

又華嚴・阿含・方等・般若等の經經の間に六道を出づる人あり是は彼
の經經の力には非ず過去に法華經の種を殖えたりし人現在に法華經を待
たずして機すむ故に爾前の經經を縁として過去の法華經の種を發得し
て成仏往生をとぐるなり、例せば緣覺の無仏世にして飛花落葉を觀じて
獨覺の菩提を証し孝養父母の者の梵天に生るるが如し飛花落葉孝養父母等
は獨覺と梵天との修因にはあらねどもかれを縁として過去の修因を引き
おこし彼の天に生じ獨覺の菩提を証す、而るに尚過去に小乗の三賢四善根
にも入らず有漏の禪定をも修せざる者は月を觀じ花を詠じ孝養父母の善を
修すれども獨覺ともならず色天にも生ぜず、過去に法華經の種を殖ざる人
は華嚴經の席に侍りしかども初地・初住にものぼらず、鹿苑説教の砌に
ても見思をも断ぜず觀經等にも九品の往生をもとげず、但大小の賢位
のみに入って聖位にはのぼらずして法華經に來つて始めて仏種を心田に

くだ
下して一生に初地・初住等に登る者もあり、又涅槃の座へさがり乃至滅後
みらい
未来までゆく人もあり、過去に法華經の種を殖たる人人は結縁の厚薄に随つ
けこんきよう
て華嚴經を縁として初地・初住に登る人もあり、阿含經を縁として見思を
にじよう
断じて二乗と成る者もあり、觀經等の九品の行業を縁として往生する者
ほうとう
もあり、方等・般若も此れをもつて知んぬべし、此等は彼の彼
はんこ
の力
ひろえ
にはあらず偏に法華經の力なり譬えば民の女に王の種を下せるを人しらず
ほけきよう
して民の子と思ひ大臣等の女に王の種を下せるを人しらずして臣下の子と
だいじん
思へども大王よりは是を尋ぬれば皆王種となるべし、爾前にして界外へ至る
ほけきよう
人を法華經より之を尋ぬれば皆法華經の得道なるべし、又過去に法華經の
これ
種を殖えたる人の根鈍にして爾前の經經に發得せざる人人は法華經にい
にぜん
たりて得道なる、是は爾前の經經をばめのととしてきさき腹の太子・王子
きようぎよう
と云うが如くなるべし、又仏の滅後にも正法一千年が間は在世の如くこそ
めつこ
しうほう
ざいせ

なければ、も過去に法華經の種を殖えて法華・涅槃經にて覺りをとぐる者もありぬ現在・在世にて種を下せる人人も是多し。

又滅後なれども現に法華經ましますば外道の法より 小乗經 にうつり

小乗經 より 權大乘 にうつり 權大乘 より 法華經 にうつる 人人数をし

ず、竜樹菩薩・無著菩薩・世親論師等是なり、像法一千年には正法のほ

どこそ無けれども又過去・現在に法華經の種を殖えたる人人も少少之有り、

而るを漸漸に仏法澆薄になる程に宗宗も偏執・石の如くかたく我慢山の

如く高し、像法の末に成りぬれば仏法によつて諍論・興盛して仏法の合

戦ひまなし、世間の罪よりも仏法の失に依つて無間地獄に墮つる者・数を

しらず。

今は又末法に入つて二百余歳・過去・現在に法華經の種を殖えたりし

人人もやうやくつきはてぬ、又種をうへたる人人は少少あるらめども世間

の大悪人・出生の謗法の者数をしらず国に充満せり、譬えば大火の中の
小水・大水の中の小火・大海の中の水・大地の中の金などの如く悪業と
のみなりぬ、又過去の善業もなきが如く現在の善業もしるしなし、或は
弥陀の名号をもつて人を狂はし法華經をすてしむれば背上向下のとがあ
り、或は禪宗を立てて教外と称し仏教をば眞の法にあらざと蔑如して
増上慢を起し、或は法相・三論・華嚴宗を立てて法華經を下し、或は
真言宗・大日宗と称して法華經は釈迦如来の顯教にして真言宗に及ばず
等云云、而るに自然に法門に迷う者もあり、或は師師に依つて迷う者も
あり、或は元祖・論師・人師の迷法を年久しく眞実の法ぞと伝へ来る者
もあり、或は悪鬼天魔の身に入りかはりて惡法を弘めて正法ぞと思ふ者
もあり、或ははづかの小乗一途の小法をしりて大法を行ずる人はしか
らずと我慢して我が小法を行ぜんが為に大法秘法の山寺をおさへとる者も

あり、或は慈悲魔と申す魔身に入つて三衣一鉢を身に帶し小乗の一法
を行ずるやから・はづかの小法を持ちて國中の棟梁たる比叡山竜象の
如くなる智者どもを一分我が教にたがへるを見て邪見の者・悪人な
ち思へり、此の悪見をもつて国主をたばらかし誑惑して正法の御帰依を
すうなしかへつて破国・破仏の因縁となせるなり、彼の妹己・姐己・褒
と申せし後は心もおだやかに・みめかたちも人にすぐれたりき、愚王これ
を愛して国をほろぼす因縁となす、当世の禪師・律師・念佛者など申す
聖一・道隆・良観・道阿弥・念阿弥など申す法師どもは鳩鴿が糞土
を食するが如し西施が呉王をたばらかしに似たり、或は我が小乗の
臭糞・驢乳の戒を持て。

◆七二 立正観抄

ぶんえい
文永十一年

五十三歳御作

ほつけしかんどうい
法華止観同異決

にちれん
日蓮撰527P

とうせてんだい きようほう

やから

かんじんしゅぎよう

とうと

ほっけ

迹二

当世天台の教法を習学するの輩

多く観心修行を貴んで法華本・迹二

門を捨て見えたり、今問う抑観心修行と言うは天台大師の摩訶止観の

せつこしんちゅうしよぎようほうもん

いっしんさんかん

いちねんさんぜん

てんだいだいし

まかしかん

観の

説己心中所行法門の一心三観・一念三千の観に依るか、将又・世流布の

いっしんさんかん

いっしんさんかん

はたまた

るふ

観の

達磨の禅観に依るか、若し達磨の禅観に依るといわば教禅は未顕真実妄語

よ

だるま

よ

みけんしんじつもうこ

未顕真実妄語

達磨の

方便の禅観なり法華經妙禅の時には正直捨方便と捨てらるる禅なり、祖師

ほうべん

ほけきよう

しょうじきしやほうべん

と捨てらるる禅なり、

そし

祖師

達磨禅は教外別伝の天魔禅なり、共に是れ無得道妄語の禅なり仍て之を

きようげべつでん

てんま

こ

とくどうもうこ

よつ

これ

用ゆ可からず、若し天台の止観一心三観に依るとならば止観一部の廢立・

もち

も

てんだい

しかんいっしんさんかん

よ

しかん

廢立・

天台の本意に背く可からざるなり、若し止観修行の観心に依るとならば

てんだい

ほんい

そむ

も

しかんしゅぎよう

観心に

法華經に背く可からず止観一部は法華經に依つて建立す一心三観の修行

ほけきよう

そむ

しかん

ほけきよう

よ

建立す

は妙法の不可得なるを感得せんが為なり、故に知んぬ法華經を捨てて但だ

みようほう

ふか

かん

ゆえ

ほけきよう

捨てて

観を正とするの輩は大謗法大邪見天魔の所為なることを、其の故は天台の

よく

ほうほう

じゃけんてんま

しよい

そのゆえ

てんだい

一心三観とは法華經に依つて三昧開發するを己心証得の止観とは云う故な

いっしんさんかん

ほけきよう

よ

さんまいかいほつ

こしんしやうとく

止観とは

り。

問う天台大師止観てんだいだいしかん一部並びになら一念三千・一心三・観己心証得こしんしやうとくの妙観みようかんは

併しかしながら法華經ほけきやうに依ると云う証拠しやうこ如何、答う予反詰はんきつして云く法華經ほけきやうに依ら

ずと見えたる証文しやうもん如何、人之これを出して云く「此の止観しかんは天台智者己心中てんだいちしやこしんちゆう

所行しやぎやうの法門ほうもんを説く・或は又故に止観ゆえに至つて正く観法かんぽうを明かす並に三千を

以て指南もつと為す乃ち是れ終窮究竟しゆうくきやうの極説ゆえなり故に序の中に説己心中せっこしんちゆうしやぎやう所行

法門ほうもんと云えり良に以有まことゆえあるなり」文、難じて云く此の文は全く法華經ほけきやうに依ら

ずと云う文に非ず既に説己心中あら所行すでの法門せっこしんちゆうしやぎやうと云うが故なり天台てんだいの所行しやぎやうの

法門ほうもんは法華經ほけきやうなるが故に此の意は法華經ほけきやうに依ると見えたる証文しやうもんなり但し

他宗たしゆうに対するの時は問答大綱もんどうたいかうを存そんす可べきなり、所謂いわゆる云う可べし若し天台てんだいの止観しかん

・法華經ほけきやうに依らずといわば速すみやかに捨べつ可べきなりと、其そのの故は天台大師兼てんだいだいしかね

て約束やくそくして云く「修多羅しゆたらと合せろくば録これして之もちを用いよ文なく無く義ぎ無なきは信受しんじゆす

可^べからず」云云、伝^{でんぎようだいし}教大師の云く「仏説に依憑^{えひよう}して口伝^{くでん}を信ずること莫^{なか}れ」
文、竜樹^{りゆうじゆ}の大論^{だいろん}に云く「修多羅^{しゆたら}に依^よるは白論^{びやくろん}なり修多羅^{しゆたら}に依^よらざるは黒
論^{ろん}なり」文、教主^{きようしゆしやくそんいわ}釈尊云く「依法^{えほう}不依人^{ふえ}」文、天台^{てんだい}は法華經^{ほけきよう}に依^より竜樹^{りゆうじゆ}
を高祖^{こうそ}にしながら經文^{きようもん}に違^{たがい}し我が言^{げどうじやくん}を翻^{へん}じて外道邪見^{げどうじやくん}の法^よに依^よつて止觀^{しかん}
部^{しやく}を釈^{しやく}する事全^あく有^ある可^べからざるなり、問^{まさ}う正^{まさ}しく止觀^{しかん}は法華經^{ほけきよう}に依^よると
見^みえたる文^{これあ}之^{これあ}有^ありや、答^{こたへ}う余^ゆりに多^{ゆえ}きが故^{ゆえ}に少^{これ}少^{いた}之^{いた}を出^いさん止觀^{しかん}に云^いく「漸^{ぜん}
と不定^{ふじよう}とは置^おいて論^{ろん}ぜず今經^{こんきよう}に依^よつて更^{えんどん}に円頓^{えんどん}を明^{あきら}かさん」文、弘決^{くけつ}に
云^いく「法華經^{ほけきよう}の旨^{むね}を攢^{あつめ}て不思議^{ふしぎ}・十乘^{じゆしゆ}・十境^{じゆじゆ}・待絶^{たいぜつ}・滅絶^{めつぜつ}・寂^{じやく}照^{しやう}の行^{ぎやう}を
成^{じやう}ず」文、止觀^{しかん}大意^{たいい}に云^いく「今家^{きやうもん}の教門^{きやうもん}は竜樹^{りゆうじゆ}を以^{もつ}て始祖^{しそ}と為^なす慧文^{えいぶん}は
但内觀^{ないくわん}を列^{れつ}ねて視聽^{しでん}するのみ南岳^{なんがく}・天台^{てんだい}に及^{およ}んで復法華三昧陀羅尼^{またほつけさんまいだらに}を發^{おこ}す
るに因^よつて義門^{かいたく}を開拓^{かいたく}して觀法周備^{かんぼうしゆうび}す、○若^もし法華^{ほっけ}を釈^{しやく}するには弥^い弥^い須^いく
權實本^{こんじつ}・迹^ぎを曉^{きやうりよう}了^{りよう}すべし方^{まさ}に行^{ぎやう}を立^たつ可^べし此^この經^{きやう}独^{ひとり}り妙^{しやう}と稱^{しょう}することを

得・方まづに此こゝに依よつて以もつて觀意を立つ可べし、五方便及び十乘軌行と言いうは
すなわ えんどんしかん ほんけ ほんけ えんどんしかん すなわ ほんけさんまい いみよう
即ち円頓止觀もんく全く法華に依よる円頓止觀は即ち法華三昧の異名なるのみ」文、
文句の記に云いく「觀と經と合がすれば他の宝を数かずうるに非あらず方に知しんぬ止觀
一部は是これ法華三昧の筈せんてい○なり若もし斯の意を得れば方に經旨に會かなう」云云、
唐土の人師・行滿の釈しゃくせる学天台宗法門大意に云いく「摩訶止觀一部の大意
ほつけさんまい いみよう い ほんけさんまい ほんけさんまい ほんけさんまい
は法華三昧の異名を出いでず經に依よつて觀を修しゅうす」文、此等の文証分明な
り、誰これか之を論ろんぜん、問てんだいう天台四種の釈しゃくを作るの時觀心の釈かんじんに至いたつて本・
迹の釈を捨すつと見えたり、又法華經は漸機ぜんきの為ために之を説しき止觀は直達じきたつの機
の為ために之を説しくと如何いかん、答ぜんきう漸機ぜんきの為ために説しけば劣とんきり頓機とんきの為ために説しけば勝まさる
とならば今の天台宗の意は華嚴・真言等の經は法華經に勝すぐれたりと云いう
可べきや、今の天台宗の浅てんだいしゅう☆さは真言は事理俱密あさまし しんこん じりぐみつの教ゆえなる故ゆえに法華經に勝すぐれ
たりと謂おもえり、故ゆえに止觀は法華に勝まさると云いえるも道理どうりなり道理どうりなり。

次に觀心の釈の時・本・迹を捨てと云う難は法華經何れの文人師の釈を
本と為して仏教を捨てよと見えたるや設い天台の釈なりとも釈尊の金言
に背き法華經に背かば全く之を用ゆ可からざるなり、依法不依人の故に
竜樹・天台・伝教元よりの御約束なるが故なり、其上天台の釈の意は迹
の大教起れば爾前の大教亡じ本の大教興れば迹の大教亡じ觀心の
大教興れば本の大教亡じと釈するは本体の本法をば妙法不思議の一法に取り定めて
の上に修行を立つるの時、今像法の修行は觀心修行を詮と爲るに迹を
尋ぬれば迹・広し本を尋ぬれば本・高うして極む可からず、故に末学機に
叶い難し但己心の妙法を觀ぜよと云う釈なり、然りと雖も妙法を捨てよ
とは釈せざるなり若し妙法を捨てば何物を己心と爲して觀ず可きや、
如意宝珠を捨て瓦石を取つて宝と爲す可きか、悲しいかな当世天台宗の
学者は念仏・真言・禪宗等に同意するが故に天台の教釈を習い失つて

法華經に背き大謗法の罪を得るなり、若し止観を法華經に勝ると云わば種種の過之有り止観は天台の道場所得の己証なり、法華經は釈尊の道場所得の大法なりは一釈尊は妙覺果滿の仏なり天台は住前未証なれば名字・觀行・相似には過ぐ可からず四十二重の劣なり是二法華は釈尊乃至諸仏出世の本懷なり止観は天台出世の己証なり是三法華經は多寶の証明あり來集の分身は広長舌を大梵天に付く皆是真實の大白法なり是四止観は天台の説法なり是くの如き等の種種の相違之有れども仍お之を略するなり、又一つの問答に云く所被の機・上機なる故に勝ると云わば実を捨てて権を取れ天台云く「教弥弥権なれば位弥弥高し」と釈し給う故なり所被の機下劣なる故に劣ると云わば権を捨てて実を取れ、天台の釈には教弥弥実なれば位弥弥下しと云う故なり、然而して止観は上機の為に之を説き法華は下機の為に之を説くと云わば止観は法華に劣れる故に機を高く説くと聞えたり

実にさもや有るらん、天台大師は靈山の聴衆として如来出世の本懐を
のべ
宣べたもうと雖も時至らざるが故に妙法の名字を替えて止観と号す迹化の
のべ
衆なるが故に本化の付属を弘め給わず正直の妙法を止観と説きまぎら
ゆえ
す故に有のままの妙法ならざれば帶權の法に似たり、故に知んぬ天台弘通
ゆえ
の所化の機は在世帶權の円機の如し、本化弘通の所化の機は法華本門の直機
しよけ
なり、止観法華は全く体同尚人師の釈を以て仏説に同ずる失甚重なり、
しかんほつけ
何に況や止観は法華經に勝ると云う邪義を申し出すは但是れ本化の弘經と
いか
しやつけ
迹化の弘通と像法と末法と迹門の付属と本門の付属とを末法の行者に
い
云い顕わさせん為の仏天の御計いなり、爰に知んぬ当世天台宗の中に此の
あら
義を云う人は祖師・天台の為には不知恩の人なり豈其の過を免れんや、
そ
夫れ天台大師は昔靈山に在ては薬王と名け今漢土に在ては天台と名け
てんだいだいし
にほんこく
日本国の中にては伝教と名く三世の弘通俱に妙法と名く、是くの如く

法華經を弘通し給う人は在世の釈尊より外は三国に其の名を聞かず有り
難く御坐します大師を其の末学其の教釈を悪く習うて失無き天台に失を
懸けたてまつる豈大罪に非ずや。

今問う天台の本意は何法ぞや碩学等の云く「一心三觀是なり」今云く
一実円満の一心三觀とは誠に甚深なるに似たれども尚以て行者修行の方
法なり三觀とは因の義なるが故なり慈覺大師の釈に云く「三觀とは法体を
得せしめんが為の修觀なり」云云、伝教大師云く「今・止觀修行とは法華
の妙果を成ぜんが為なり」云云、故に知んぬ一心三觀とは果地・果徳の法門
を成ぜんが為の能觀の心なることを何に況や三觀とは言説に出でたる法な
る故に如来の果地・果徳の妙法に對すれば可思議の三觀なり。

問う一心三觀に勝れたる法とは何なる法ぞや、答う此の事誠に一大事の
法門なり唯仏与仏の境界なるが故に我等が言説に出す可からざるが故に

これを申す可らざるなり、是を以て經文には「我が法は妙にして思い難し言を以て宣ぶ可からず」云云妙覺果滿の仏すら尚不可説・不思議の法と説き給う何に況や等覺の菩薩已下乃至凡夫をや、問う名字を聞かずんば何を以て勝法有りと知ることを得んや、答う天台已証の法とは是なり、当世の学者は血脈相承を習い失う故に之を知らざるなり故に相構え相構えて秘す可く秘す可き法門なり、然りと雖も汝が志神妙なれば其の名を出すなり一言の法是なり伝教大師の一心三觀一言に伝うと書き給う是なり、問う未だ其の法体を聞かず如何、答う所詮一言とは妙法是なり、問う何を以て妙法は一心三觀に勝れたりと云う事を知ることを得るや、答う妙法は所詮の功德なり三觀は行者の觀門なる故なり此の妙法を仏説いて言く「道場所得法我法妙難思是法非思量不可以言宣」云云、天台の云く「妙はふかしぎこんごうだん・心行所滅なり法は十界十如・因果不二の法なり」と、不可思議言語道斷・

三諦と云うも三觀と云うも三千と云うも共に不思議法とは云えども天台の
己証天台の御思慮の及ぶ所の法門なり、此の妙法は諸仏の師なり今の經文
の如くならば久遠実成の妙覺極果の仏の境界にして爾前・迹門の教主
諸仏・菩薩の境界に非ず經に唯仏与仏乃能究尽とは迹門の界如三千の
法門をば迹門の仏が当分究竟の辺を説けるなり、本地難思の境智の妙法
は迹仏等の思慮に及ばず何に況や菩薩・凡夫をや、止觀の二字をば觀名
仏知・止名仏見と釈すれども迹門の仏智・仏見にして妙覺極果の知見に
は非ざるなり、其の故は止觀は天台己証の界如三千三諦三觀を正と為す
迹門の正意是なり、故に知んぬ迹仏の知見なりと云う事を但止觀に絶待
不思議の妙觀を明かすと云えども只一念三千の妙觀に且らく与えて絶待
不思議と名けるなり。

問う天台大師眞實に此の一言の妙法を証得したまわざるや、答う内証

爾らざるなり、外用に於ては之を弘通したまわざるなり、所謂内証の辺を

ば祕して外用には三觀と号して一念三千の法門を示現し給うなり、問う何

が故ぞ知り乍ら弘通し給わざるや、答う時至らざるが故に付属に非ざるが

故に迹化なるが故なり、問う天台此の一言の妙法を証得し給える証拠之有

りや、答う此の事天台一家の祕事なり世に流布せる學者之を知らず灌頂

玄旨の血脈とて天台大師自筆の血脈一紙之有り、天台御入滅の後石塔

の中に之有り伝教大師御入唐の時八舌の鑰を以て之を開き道邃和尚より

伝受し給う血脈とは是なり、此の書に云く「一言の妙旨一教の玄義」文、

伝教大師の血脈に云く「夫れ一言の妙法とは兩眼を開いて五塵の境を

見る時は隨縁真如なるべし兩眼を閉じて無念に住する時は不變真如なるべ

し、故に此の一言を聞くに万法茲に達し一代の修多羅一言に含す」文、此

の兩大師の血脈の如くならば天台大師の血脈相承の最要の法は妙法の

一言なり、一心三觀とは所詮妙法を成就せん為の修行の方法なり、三觀

は因の義妙法は果の義なり但因の処に果有り果の処に因有り因果俱時の

妙法を觀するが故に是くの如き功能を得るなり、爰に知んぬ天台至極の

法門は法華本・迹未分の処に無念の止觀を立てて最祕の大法とすと云える

邪義大なる僻見なりと云う事を四依弘經の大薩☆は既に仙經に依つて諸論

を造る天台何ぞ仙説に背いて無念の止觀を立てたまわんや、若し此の止觀

・法華經に依らずといわば天台の止觀教外別傳の達磨の天魔の邪法に同ぜ

ん都て然る可からず哀れなり哀れなり。

傳教大師の云く「国主の制に非ざれば以て遵行する無く法王の教に

非ざれば以て信受すること無けん」と文、又云く「四依論を造るに権有り

実有り三乘旨を述ぶるに三有り一有り、所以に天台智者は三乘の旨に順

じて四教の階を定め一実の教に依つて一仏乘を建つ、六度に別有り、戒度

何ぞ同じからん受法同じからず威儀豈同じからんや、是の故に天台の伝法
は深く四依に依り亦仏經に順う」文、本朝の天台宗の法門は伝教大師よ
り之を始む若し天台の止観・法華經に依らずと云わば日本に於ては伝教の
高祖に背き漢土に於ては天台に背く兩大師の伝法既に法華經に依る豈其の
末學之に違せんや、違するを以て知んぬ当世の天台家の人人其の名を天台
山に借ると雖も所學の法門は達磨の僻見と善無畏の妄語とに依ると云う
事、天台・傳教の解釈の如くんば己心中の秘法は但法の一言に限るな
り、然而当世の天台宗の學者は天台の石塔の血脈を秘し失う故に天台の
血脈相承の秘法を習い失いて我と一心三觀の血脈とて我意に任せて書を
造り錦の袋に入れて頸に懸け箱の底に埋めて高直に売る故に邪義國中に
流布して天台の仏法破失するなり、天台の本意を失い釈尊の妙法を下す
是れ偏えに達磨の教訓善無畏の勸なり、故に止觀をも知らず一心三觀・

いっしんさんたい いちねんさんぜん

一心三諦をも知らず一念三千の觀をも知らず本・迹二門をも知らず相待

・絶待の二妙をも知らず法華の妙觀をも知らず教相をも知らず権実をも

知らず四教・八教をも知らず五時・五味の施化をも知らず、教・機・時・

国・相応の義は申すに及ばず実教にも似ず権教にも似ざるなり道理なり

道理なり。

天台・伝教の所伝は法華經は禪・真言より劣れりと習う故に達磨の邪義

・真言の妄語と打ち成つて権教にも似ず実教にも似ず二途に摂せざるな

り、故に大謗法罪顕れて止觀は法華經に勝ると云う邪義を申し出して

過無き天台に失を懸けたてまつる故に高祖に背く不孝の者・法華經に背く

大謗法罪の者と成るなり。

夫れ天台の觀法を尋ぬれば大蘇道場に於て三昧開發せしより已来目を開

いて妙法を思えば随縁真如なり目を閉じて妙法を思えば不變真如なり此

の兩種の真如は只一言の妙法に有り我妙法を唱うる時・万法茲に達し
いちだい しんによ ただ みようほう とな
一代の修多羅一言に含す、所詮迹門を尋ぬれば迹広く本門を尋ねぬれば本
し しん みようほう おほしめ とうせ がくしゃ
高し如かじ己心の妙法を觀ぜんにはと思食されしなり、当世の学者・此の
意を得ざるが故に天台已証の妙法を習い失いて止觀は法華經に勝り禪宗
しかん すく ほけきよう しかん しかん ぜんしゅう
は止觀に勝れたりと思いて法華經を捨てて止觀に付き止觀を捨てて禪宗に
付くなり、禪宗の一門云く松に藤懸る松枯れ藤枯れて後如何上らずして一
枝なんど云える天魔の語を深く信ずる故なり、修多羅の教主は松の如く
そ きようほう てんま ことば しかん かん いかん
其の教法は藤の如し各各に諍論すと雖も仏も入滅して教法の威徳も無
し爰に知んぬ修多羅の仏教は月を指す指なり禪の一法のみ独妙なり之を
こゝ けんしやうとくだつ ほうほう てんま しよい
觀ずれば見性得達するなりと云う大謗法の天魔の所為を信ずる故なり、
しかるにほけきよう じゆみようむりようじゆうふめつ ぜんしゅう めつど
然而法華經の仏は壽命無量常住不滅の仏なり、禪宗は滅度の仏と見る
ゆえ げどう ぜほうじゆうほういせけん じようじゅう きんげん そむ びやつけん
が故に外道の無の見なり、是法住法位世間相常住の金言に背く僻見なり、

禪は法華經の方便無得道の禪なるを眞実常住法と云うが故に外道の常見なり、若し与えて之を言わば仏の方便三蔵の分齊なり若し奪つて之を言わば但外道の邪法なり与は当分の義・奪は法華の義なり法華の奪の義を以ての故に禪は天魔・外道の法と云うなり、問う禪を天魔の法と云う証拠如何、答う前前に申すが如し。

◆七三 立正觀抄送状

文永十二年二月 五十四歳御作 与最蓮房日淨 534P

今度の御使い誠に御志の程顕れ候い畢んぬ又種種の御志慥に給候い畢んぬ。

抑承わり候、当世の天台宗等止觀は法華經に勝れ禪宗は止觀に勝る、又觀心の大教興る時は本・迹の大教を捨てと云う事先ず天台一宗に於て流流各別なりと雖も慧心檀那の両流を出でず候なり、慧心流の義に云く止觀

の一部は本・迹二門に亘るなり謂く止観の六に云く「観は仏知と名く止は
ぶつけん なす ねんねん おもえらしかん いわ 観は仏知と名く止は
仏見と名く念念の中に於て止観現前す乃至三乗の近執を除く」文、弘決
の五に云く「十法既に是れ法華の所乗なり是の故に還つて法華の文を用い
て歎ず、若し迹説に約せば即ち大通智勝仏の時を指して以て積劫と為し
寂滅道場を以て妙悟と為す、若し本門に約せば我本行菩薩道の時を指し
て以て積劫と為し本成仏の時を以て妙悟と為す本・迹二門只是此の十法
を求悟す」文、始の一文は本門に限ると見えたり次の文は正しく本・迹に
亘ると見えたり、止観は本・迹に亘ると云う事文証此に依るなりと云えり、
次に檀那流には止観は迹門に限ると云う証拠は弘決の三に云く「還つて教
味を借つて以て妙円を顕す○故に知んぬ一部の文共に円成の開権妙観を
成ずるを」文、此の文に依らば止観は法華の迹門に限ると云う事文に在り
て分明なり両流の異義替れども共に本・迹を出でず当世の天台宗何くよ

り相承そうじようして止観しかんは法華經ほけきように勝ると云うや、但し予が所存しよぞんは止観法華しかんほつけの勝劣しやうれつは天地雲泥てんちうんでいなり。

若し与えて此を論ぜば止観しかんは法華迹門ほつけしかくもんの分齊ぶんざいに似たり、其の故そのゆえは

てんだいだいし

こしやう

だいいち

じげぶつじやう

ほつけえんい

い

れいおうでん

いわ

ほつけ

きやうかい

しかん

い

靈応伝れいおうでんの第四だいしに云く「法華ほつぽの行を受けて二七日境界きやうかいす」文、止観しかんの一いちに云く

「此の止観しかんは天台智者てんだいちしや己心中こしんちゆうに行ずる所の法門ほうもんを説く」文、弘決くけつの五ごに云く

「故に止観しかんに正しく観法かんぽうを明いたすに至つて並びに三千さんぜんを以て指南しなんと為す」故ゆえに

序の中に云く己心中こしんちゆうに行ずる所の法門ほうもんを説く」文、己心こしん所行しよぎやうの法ほうとは

一念三千いちねんさんぜん・一心三觀いっしんさんかんなり三諦三觀さんたいさんかんの名義なうぎは瓔珞ようらく・仁王にんのうの二經じつそに有りと雖も

いっしんさんかん

いちねんさんぜん

こしんしよぎやう

ほうもん

しかくもん

じつそ

い

して釈成たまいし給おわい畢おわんぬ。

爰こゝに知んぬ止観しかん一部いぶは迹門しかくもんの分齊ぶんざいに似たりと云う事を若し奪つて之を論

爰こゝに知んぬ止観しかん一部いぶは迹門しかくもんの分齊ぶんざいに似たりと云う事を若し奪つて之を論

爰こゝに知んぬ止観しかん一部いぶは迹門しかくもんの分齊ぶんざいに似たりと云う事を若し奪つて之を論

爰こゝに知んぬ止観しかん一部いぶは迹門しかくもんの分齊ぶんざいに似たりと云う事を若し奪つて之を論

爰こゝに知んぬ止観しかん一部いぶは迹門しかくもんの分齊ぶんざいに似たりと云う事を若し奪つて之を論

爰こゝに知んぬ止観しかん一部いぶは迹門しかくもんの分齊ぶんざいに似たりと云う事を若し奪つて之を論

爰こゝに知んぬ止観しかん一部いぶは迹門しかくもんの分齊ぶんざいに似たりと云う事を若し奪つて之を論

爰こゝに知んぬ止観しかん一部いぶは迹門しかくもんの分齊ぶんざいに似たりと云う事を若し奪つて之を論

爰こゝに知んぬ止観しかん一部いぶは迹門しかくもんの分齊ぶんざいに似たりと云う事を若し奪つて之を論

爰こゝに知んぬ止観しかん一部いぶは迹門しかくもんの分齊ぶんざいに似たりと云う事を若し奪つて之を論

ぜば爾前権大乘・即別教の分齊なり其の故は天台已証の止観とは道場所
得の妙悟なり所謂天台大師・大蘇の普賢道場に於て三昧開發し証を以て師
に白す師の曰く法華の前方便陀羅尼なりと靈応伝の第四に云く「智☆師
に代つて金字經を講ず一心具足万行の処に至つて・疑有り思・為に
釈して曰く汝が疑う所は此乃ち大品次第の意なるのみ未だ是法華円頓の
旨にあらざるなり」文、講ずる所の經既に権大乘經なり又次第と云えり
故に別教なり、開發せし陀羅尼又法華前方便と云えり故に知んぬ爾前帶權
の經・別教の分齊なりと云う事を・己証既に前方便の陀羅尼なり止観とは
己心中所行の法門を説くと云うが故に、明かに知んぬ法華の迹門に及ば
ずと云う事を何に況や本門をや、若し此の意を得ば檀那流の義尤も吉なり
此等の趣を以て止観は法華に勝ると申す邪義をば問答有る可く候か、委細
の旨は別に一卷書き進らせ候なり、又日蓮相承の法門血脉慥に之を註し

奉る、
恐恐謹言

文永十二乙亥二月二十八日

日蓮 花押

最蓮房御返事

◆七四 顕立正意抄 文永十一年十二月 五十三歳御作 536P

日蓮去る正嘉元年太歳丁巳八月二十三日大地震を見て之を勘え定めて書け

立正安国論に云く「薬師経の七難の内五難忽ちに起つて二難猶残れり

所以他国侵逼の難・自界叛逆の難なり、大集経の三災の内二災早く顕れ一

災未だ起らず、所以兵革の災なり、金光明経の内の種種の災過一一起る

と雖も他方の怨賊国内を侵掠する此の災未だ露われず此の難未だ来らず、

仁王経の七難の内六難今盛にして一難未だ現ぜず所以四方より賊来つて国

を侵すの難なり、しかのみならず国土乱れん時は先ず鬼神乱る鬼神乱るる

故に万民乱ると、今・此の文に就て具さに事の情を案ずるに百鬼早く乱れ

ばんみん 万民多く亡びぬ先難せんなん是れ明なり後災何ぞ疑わんうたがも若し残る所の難・悪法の
とが 科に依つて並び起り競い来らば其の時何為や、帝王は国家を基として天下
おさ を治む、人臣は田園を領して世上を保つ、而るに他方より賊来つて此の国
しんびつ を侵逼し自界叛逆して此の地を掠 領せば豈驚かざらんやあに豈騒がざらん
うしな や、国を失い家を滅せば何れの所にか世を遁れん」等云云已上 立正安國論
の言なり。

いまにちれんかき 今日蓮重ねて記して云く大覺世尊記して云く「苦得外道七日有つて死す
いわ べ可し死して後食吐鬼に生れん苦得外道の言く七日の内には死す可からず我
らかん 羅漢を得て餓鬼道に生れじと」等云云、瞻婆城の長者の婦懷妊す六師外道
いわ の云く「女子を生まん」仏記して云く「男子を生まん」等云云、仏記して云く
さつ 「卻て後三月あつて我当に般涅槃すべし」等云云、一切の外道云く「是れ妄語
まさ はつねはん なり」等云云、仏の記の如く二月十五日に般涅槃し給う、法華經の第二に

いわく「舍利弗汝未来世に於て無量無辺不可思議劫を過て乃至当に作仏するを得べし号をば華光如来と曰わん」等云云、又第三の卷に云く「我が此の弟子摩訶迦葉未来世に於て当に三百万億に奉觀することを得べし乃至最後に於て仏と成ることを得ん名をば光明如来と曰わん」等云云、又第四の卷に云く「又如來滅度の後に若し人有つて妙法華經の乃至一偈・一句を聞いて一念も随喜せん者には我亦阿耨多羅三藐三菩提の記を与え授く」等云云、此等の經文は仏・未来世の事を記し給う、上に挙ぐる所の苦得外道等の三事・符合せずんば誰か仏語を信ぜん・設い多宝仏証明を加え分身の諸仏長舌を梵天に付くとも信用し難きか、今亦以て是くの如し設い日蓮富樓那の弁を得て目連の通を現ずとも勘うる所・当らずんば誰か之を信ぜん、去める文永五年に蒙古国の牒狀渡来する所をば朝に賢人有らば之を怪む可し、設い其れを信ぜずとも去る文永八年九月十二日御勘氣を蒙り

しの時・吐く所の強言次の年二月十一日に符合せしむ、情有らん者は之を
信ず可し何に況や今年既に彼の国災兵の上二箇国を奪い取る設い木石為りと雖も設い禽獸為りと雖も感ず可く驚く可きに偏えに只事に非ず天魔の
国に入つて醉えるが如く狂えるが如く歎く可し哀む可し恐る可し厭う可し、
又立正安国論に云く「若し執心翻えらずして亦曲意猶存せば早く有為の郷
を辞して必ず無間の獄に墮せん」等云云、今・符合するを以て未来を案ず
るに日本国の上下・万人阿鼻大城に墮ちんこと大地を的と為すが如し、
此等は且らく之を置く日蓮が弟子等又此の大難脱れ難きか彼の不輕輕毀の
衆は現身に信伏随従の四字を加れども猶先謗の強きに依つて先ず阿鼻
大城に墮して千劫を経歴して大苦惱を受く、今日蓮が弟子等も亦
是くの如し・或は信じ・或は伏し・或は随い・或は従う但だ名のみ之を
仮りて心中に染まざる信心薄き者は設い千劫をば経ずとも・或は一無間

・或は二無間乃至十百無間・疑無からん者か是を免れんと欲せば各・
薬王・薬法の如く臂を焼き皮を剥ぎ雪山国王等の如く身を投げ心を仕え
よ、若し爾らずんば五体を地に投げ・身に汗を流せ、若し爾らずんば珍宝
を以て仏前に積み若し爾らずんば奴婢と為つて持者に奉えよ若し爾らずん
ば・等云云、四悉檀を以て時に適うのみ、我弟子等の中にも信心薄淡き者
は臨終の時阿鼻獄の相を現ず可し其の時・我を恨む可からず等云云。

文永十一年太歳甲戌十二月十五日 日蓮之を記す

◆七五 上行菩薩 結要 付属口伝

建治元年 五十四歳御作 於身延 538P

妙法蓮華經見宝塔品第十一 「爾の時に仏前に七宝の塔有り」と云云、又
云く「即時に釈迦牟尼仏神通力を以て諸の大衆を接して皆虚空に在たもう、
大音声を以て普く四衆に告げたまわく誰か能く此の娑婆国土に於て広く

妙法華經を説かん今正く是れ時なり如来久しからずして当に涅槃に入るべし。此の妙法華經を以て付属して在ること有らしめんと欲す。云云、又云く「諸余の教典数恒沙の如し」と云云、又云く「諸の大衆に告ぐ我滅度の後に誰か能く斯の經を護持し読誦せん今・仏前に於て自ら誓言を説け」と又云く「此の經は持ち難し若し暫くも持つ者は我即ち歡喜す諸仏も亦然なり是の如きの人は諸仏の歎め給う所なり」と云云、妙法蓮華經勸持品第十三「爾時藥王菩薩摩訶薩及び大衆說菩薩摩訶薩二万の菩薩眷属と俱に皆仏前に於て是の誓言を作さく唯・願くば世尊以て慮したもうべからず我等・仏の滅後に於て当に此の經典を奉持し読誦し説きたてまつるべし、後の惡世の衆生は善根轉た少くして増上慢多く利供養を貪り不善根を増し解脱を遠離せん教化すべきこと難しと雖も我等当に大忍力を起して此の經を読誦し持説し書寫し種種に供養して身命を惜まざるべし、爾の時に衆中の五

百の阿羅漢あらかんの授記じゆきを得たる者・仏に白して言さく世尊せそん・我れ等亦自ら誓願またみずか せいがんすらく異の国土こくどに於て広く此の經を説かんと、復学無学の八千人の授記じゆきを得たる者有り座従り起て合掌がっしょうし仏に向いたてまつりて是誓言せいごんを作さく世尊せそん・我等亦当に他の国土こくどに於て広く此の經を説きたてまつるべし・所以はゆえんいかこしやばこく何ん是の娑婆國の中は人・弊惡多く増上慢を懷き功德淺薄に瞋濁諂曲しんじよくてんごくにして心不実なるが故に」と云云、又云く「爾の時に世尊せそん・八十萬億那由他なゆたの諸の菩薩摩訶薩を視す是の諸の菩薩は皆是阿惟越致あゆいおつちなり、即時そくじに諸の菩薩俱に同く声を發して偈を説いて言さく、唯願ただくは慮うらおもひしたもうべからず仏の滅度めつどの後・恐怖惡世くふあくせの中に於て我等當に広く説くべし諸の無智の人の惡口罵詈およく等し及び刀杖とうじょうを加うる者有らん我等皆當に忍ぶべし、惡世の中の比丘びくは邪智じゃちにして心諂曲てんごくに未だ得ざるをこれ得たりと謂い我慢の心充滿じゅうまんせん、或は阿練若あるに納衣のうえにして空閑くうげんに在り自ら眞の道を行ずと謂いて人間おも

を輕賤する者有らん、利養に貪著するが故に白衣の与に法を説いて世に恭敬せらるること六通の羅漢の如くならん是の人悪心を懷き常に世俗の事を念い名を阿練若に仮りて好んで我等の過を出ださん、濁世の惡比丘は仏の方便・隨宜所説の法を知らずして惡口して顰蹙し数数擯出せられん」と云云。

文句の八に云く「初めに一行は通じて邪人を明す即ち俗衆なり、次に一行は道門増上慢の者を明す、三に七行は僭聖増上慢の者を明す、故に此の三の中初めは忍ぶ可し次は前に過ぐ第三は最も甚し」と云云。

涌出品に云く「爾の時に他方の国土の諸の來れる菩薩摩訶薩八恒河沙の數に過ぎたり、大衆の中に於て起立し合掌し礼を作して仏に白して言く、世尊若し我等に仏の滅後に於て此の娑婆世界に在つて勤加精進し是の經典を護持し読誦し書寫し供養せんことを聴いたまわば當に此の土に於て

広く之を説きたてまつるべし、爾の時に仏諸の菩薩摩訶薩衆に告く止みね
善男子汝等が此の経を護持せんことを須いじ所以は何ん我が娑婆世界に
自ら六万恒河沙等の菩薩摩訶薩有り、一一の菩薩各六万恒河沙の眷属有り
是の諸人等能く我が滅後に於て護持し読誦し広く此の経を説かん」と云云
五巻畢。

属累品に云く「爾の時に釈迦牟尼仏法座從り起つて大神力を現じたもう
右の手を以て無量の菩薩摩訶薩の頂を摩でて是の言を作したまわく我
無量百千万億・阿僧祇劫に於て是の得難き阿耨多羅三藐三菩提の法を
修習せり今以て汝等に付属す汝等当に一心に此の法を流布して広く
増益せしむべし、是くの如く三たび諸の菩薩摩訶薩の頂を摩でて是の言
を作したまわく我無量百千万億・阿僧祇劫に於て是の得難き
阿耨多羅三藐三菩提の法を修習せり今以て汝等に付属す、汝等当に

受持読誦し広く此の法を宣べて一切衆生をして普く聞知することを得せしむべし所以は何ん如来は大慈悲有つて諸の慳☆無く亦畏るる所無く能く衆生に仏の智慧・如来の智慧・自然の智慧を与う如来は一切衆生の大施主なり汝等亦随つて如来の法を学べし慳☆を生ずること勿れ」と云云。

もんく 文句の九に云く品下「如来之を止めたもうに凡そ三義有り、汝等各各に自ら己が任有り若し此の土に住せば彼の利益を廃せん、又他方は此土結縁の事浅し・宣授せんと欲すと雖も必ず巨益無からん又若し之を許さば則ち下を召すことを得ず下若し来らずんば迹を破することを得ず遠を顕すことを得ず是を三義もつて如来之を止めたもうと為す、下方を召して来らしむるに亦三義有り是れ我が弟子なり我が法を弘むべし縁深広なるを以て能く此の土に遍じて益し分身の土に遍して益し他方の土に遍して益す、又開近顕遠することを得是の故に彼を止めて下を召すなり」と云云。

記に云く「問う諸の仏・菩薩は共に未熟を熟す何の彼此有らん分身散影
記に云く「問う諸の仏・菩薩は共に未熟を熟す何の彼此有らん分身散影
して普く十方に遍す而るを己任及び廢彼と言うや、答う諸の仏・菩薩は実
に彼此無し但機に在無有り無始法爾なり故に第二の義を以て初の義を顕わ
して結縁事浅と云う、初め此の仏・菩薩に従つて結縁し還つて此の仏・菩薩
に於て成就す」と云云、又云く「子父の法を弘むるに世界の益有り」と云
云、記の八に云く「因藥王とは本藥王に託し茲に因せて余に告ぐ此れ流通
の初なり先に八万の大士に告ぐとは、大論に云く法華は是秘密なれば諸の
菩薩に付すと、下の文に下方を召すが如きは尚本眷属を待つ 驗し余は
未だ堪えず」云云、問う何が故ぞ他方を止めて本眷属を召すや、答う私の
義有る可らず靈山の聴衆天台の所判に任す可し、疏に云く「涌出に三と
為す一には他方の菩薩弘經を請す・二には如来許したまわず・三には下方
の涌出なり、他方の菩薩は通經の福の大なることを聞いて咸く願を發し此

の土に住して弘宣くせんんと欲するが故に請しやうず、之が為ために如来にやらい之を止めたもう等と云云。

けつちようふそく

結要付属の事

初しやうに称たん 歎付属・爾時にじぶつこう 仏告 猶不能尽ゆうふのうじん

けつちようかんじ

結要勸持四

一に結要付属以要言之けつちようふそくいようごんし

宣示顯説せんじけんせつ

ふそく

なんじ

くよう

三に正勸付属是故汝等起塔供養

四に釈勸付属所以者何而般涅槃ふそくゆえん はつねはん

じよ

疏の十に云くいわ

爾時にじぶつこう 仏告 上行じやうぎやう の下は是れ第三に結要付属なりこ

と云云、けつちようふそく

又云く「結要に四句有り、一切法とは一切皆是れ仏法なり此は一切皆妙名いっさいみな

を結するなり一切力とは通達無礙にして八自在を具す此れは妙用を結するいっさい

なり一切秘藏とは一切処に遍して皆是れ実相なり・此れは妙体を結するないっさいひそう いっさいしよ へん みなこ じつそう こ

り一切深事とは因果は是れ深事なり此は妙宗を結するなり、いっさい いんが こ

かいおしきようせんじけんぜつ
皆於此經宣示顯説とは総じて一經を結する唯四ならくのみ其枢柄を撮つて
これじゆよ
之を授与すと云云、記に云く「結要有四句とは本・迹二門に各宗用有り
二門の体は両処殊ならず」と云云輔正記に云く付属とは此の經は唯下方涌出
ほさつ
の菩薩に付す何を以ての故に爾る法是れ久成の法なるに由るが故に久成の
人に付す云云。

初に付属に三

一如來の付属

二 付属を釈す

三 付属を誡む余の

じんぼう
深 法の中の下なり

そくるいほん
属累品の文段に二有り

二 菩薩の領受

三 事畢て唱散す

次に時衆の歡喜

說是語時の下三行余

第一の五百歳 だいいち 解脱堅固 げだつけんこ

第二の五百歳 ぜんじょうけんこ 禅定堅固 ぜんじょうけんこ

第三の五百歳 どくじゅうたぶんけんこ 読誦多聞堅固 どくじゅうたぶんけんこ

第四の五百歳 たそうとうじけんこ 多造塔寺堅固 たそうとうじけんこ

第五の五百歳 とうじょうけんこ 鬪諍堅固 とうじょうけんこ

夫れそ 仏滅度の後二月十六日より正法しょうほうなり、迦葉かしょうぶつ 仏の付属ふぞくを請け次に阿難あなん

尊者・次に商那和修・次に優婆うばき多・次に提多迦此だいたかの五人各各二十年にし

て一百年なり、其の間は但 小乗しょうじょうきょう經の法門ほうもんのみ弘通くつうして諸大乗しやだいじょうきょう經は名字

もなし何いかに況いや法華い經をや、次に弥遮迦・仏陀難陀・仏駄密多・脇比丘きやうきびく・

富那奢等の五人は五百年の間・大乘だいじょうの法門ほうもん少少出来しゅつたいすと雖も取立てて

弘通くつうせず但 小乗しょうじょうきょう經を正と為す已上大乘だいじょうきょう經の前の五百年解脱堅固げだつけんこに当れ

り、正法しょうほうの後の五百年には馬鳴めみょう・竜樹りゅうじゆ乃至師子等の十余人の人人始ひとびとには

げどう

外道の家に入り次には しょうじょうきよう 小乗經 を極め後には諸大乘經を以て散散に

しょうじょうきよう

小乗經 等を破失しき、然りと雖も権大乘と法華經との勝劣未だ分明

せんじん

ならず浅深を書かせ給いしかども本・迹の十妙・二乗作仏・久遠実成・

いこんとう

已今当等・百界千如・一念三千の法門をば名をも書き給わず此大集經の

ぜんじょうけんご

禪定堅固に当れり、次に像法に入つては天竺は皆権実雜乱して地獄に

だ 墮する者数百人ありき、像法に入つて一百余年の間は漢土の道士と月氏の

仏法と諍論未だ事定らざる故に仏法を信ずる心未だ深からずまして権実を

ぶつぽう じょうろんいま

分くる事なし、摩騰竺法蘭は自は知りて而も大小を分たず権実までは思い

まとうじくほうらん

もよらず、其の後・魏・晋・宋・齊・梁の五代の間漸く仏法の中に大小・

そ

権実・顕密を諍いし程に何れをも道理とも聞えず南三・北七の十流・我意

こんじつ

に仏法を弘む、爾れども大に分つに一切經の中には一には華嚴・二には

ぶつぽう ひろ

涅槃・三には法華と云云、爾れども像法の始の四百年に当つて天台大師震旦

ねはん

涅槃・三には法華と云云、爾れども像法の始の四百年に当つて天台大師震旦

しゅつげん
に出現して南北の邪義・一一に之を破し畢んぬ、此大集經の多聞堅固の
時に当れり、像法の後の五百年には三論・法相・乃至・真言等を各三蔵將
来す、像法に入つて四百余年あつて日本国へ百濟国より一切經並に釈尊
の木像僧尼等を渡す梁の末・陳の始めに相當る日本国には神武天皇より第
三十代欽明天皇の御宇なり、像法の後の五百年に三論・法相等の六宗面面
の異義あり爾れども各邪義なり、像法八百年に相當つて伝教大師・日本に
出でて彼の六宗の義を皆責め伏せ給えりと云云、伝教已後には東寺・
園城寺等の諸寺日本一同に云く「真言宗は天台宗に勝れたり」と云云、
此大集經の多造塔寺堅固の時なり今末法に入つて仏滅後・二千二百二十余
年に當りて聖人出世す是は大集經の闍諍言訟白法隱没の時なり云云、
夫れ釈迦の御出世は住劫第九の減・人寿百歳の時なり百歳と十歳との
中間は在世は五十年・滅後は正像二千年と末法一万年となり、其の中間

に法華經流布の時二度之れ有る可し、所謂在世の八年・滅後には末法の始の五百年なり。

夫れ仏法を学する法には必ず時を知る可きなり過去の大通智勝仏は出世給いて十小劫が間一偈も之を説かず經に云く「一坐十小劫」と云云、又云く「仏・時末だ至らずと知しめして請を受け默然として坐したまえり」と、今の教主釈尊も四十余年の間は法華經を説きたまわず經に云く「説時未だ至らざるが故なり」等云云、老子は母の胎に処して八十年・弥勒菩薩は兜率の内院にして五十六億七千万歳を待ちたもう仏法を修行する人人時を知らざらんや、爾らば末法の始には純円一実の流布とは知らざれども經文に任するに「我が滅度の後・後の五百歳の中に閻浮提に広宣流布して断絶せしむること無けん」と云云、誠に以て分明なり。

◆七六 法華初心成仏抄 ほつけしよしんじようぶつ

建治三年 五十六歳御作 与岡宮妙法尼 みようほう 544P

問うて云く八宗・九宗・十宗の中に何か釈迦仏の立て給へる宗なるや、
いわ ほつけしゅう しゃかぶつ

答えて云く法華宗は釈迦所立の宗なり其の故は已説・今説・当説の中には
いわ ほつけしゅう そのゆえ いせつ こんせつ とうせつ

法華経第一なりと説き給う是れ釈迦仏の立て給う処の御語なり、故に
ほけきよう だいいち と たま こ しゃかぶつ たま ところ おんことば ゆえ

法華経をば 仏立宗と云い又は法華宗と云う又天台宗とも云うなり、故に
ほけきよう ぶつりゅうしゅう い ほつけしゅう てんだいしゅう ゆえ

伝教大師の釈に云く天台所釈の法華の宗は釈迦世尊所立の宗と云へり、
でんぎようだいし いわ てんだいしよしゃく ほつけ しゃかせそんしよりゅう

法華より外の経には全く已今当の文なきなり已説とは法華より已前の
ほつけ ほか いこんとう いせつ ほつけ いぜん

四十余年の諸経を云う今説とは無量義経を云う当説とは涅槃経を云う此の
よんじゅうよねん しよきよう こんせつ むりようぎきよう とうせつ ねはんぎよう

三説の外に法華経計り成仏する宗なりと仏定め給へり、余宗は仏涅槃し
ほけきよう ばか じようぶつ こんりゅう たま よしゅう ねはん

給いて後・或は菩薩・或は人師達の建立する宗なり仏の御定を背きて菩薩
たまい ある ほさつ ある にんし こんりゅう そむ ほさつ

・人師の立てたる宗を用ゆべきか菩薩・人師の語を背きて仏の立て給へる
にんし もち ほさつ にんし ことば そむ たま

宗を用ゆべきか又何れをも思い思いに我が心に任せて 志 あらん経法を
持つべきかと思う処に仏是を兼て知し召して末法濁悪の世に真実の道心
あらん人人の持つべき経を定め給へり、経に云く「法に依つて人に依らざ
れ・義に依つて語に依らざれ知に依つて識に依らざれ・了義経に依つて
ふりようぎきよう
不了義経に依らざれ」文、此の文の心は菩薩・人師の言には依るべからず
仏の御定を用いよ華嚴・阿含・方等・般若経等の真言・禪宗・念仏等の
法には依らざれ了義経を持つべし了義経と云うは法華経を持つべしと云
う文なり。

問うて云く今・日本国を見るに当時五濁の障重く闍諍堅固にして瞋恚
の心猛く嫉妬の思い甚しかかる国かかる時には何れの経をか弘むべきや、
答えて云く法華経を弘むべき国なり、其の故は法華経に云く「閻浮提の内
に広く流布せしめて断絶せざらしめん」等云云、瑜伽論には丑寅の隅に

だいじょう 大乘・妙法蓮華經の流布すべき小国ありと見えた

り、安然和尚云く「我が日本国」等云云、天然よりは丑寅の角に此の日本国

は当るなり、又慧心僧都の一乗要決に云く「日本一州円機純一にして朝野

遠近同く一乗に帰し緇素貴賤悉く成仏を期せん」云云、此の文の心は

日本国は京鎌倉・筑紫・鎮西みちをく・遠きも近きも法華一乗の機のみ有

りて上も下も貴も賤も持戒も破戒も男も女も皆おしなべて法華經にて成仏

すべき国なりと云う文なり、譬えば崑崙山に石なく蓬萊山に毒なきが如く

日本国は純に法華經の国なり、而るに法華經は元よりめでたき御經なれば

誰か信ぜざると語には云うて而も昼夜朝暮に弥陀念仏を申す人は薬はめで

たしとほめて朝夕毒を服する者の如し、或は念仏も法華經も一なりと云

はん人は石も玉も上臍も下臍も毒も薬も一なりと云わん者の如し、其の上

法華經を怨み嫉み惡み毀り輕しめ賤む族のみ多し、經に云く「一切世間

・多怨難信」又云く「如来現在・猶多怨嫉・況滅度後」の經文少しも違はず当れり、されば伝教大師の釈に云く「代を語れば則ち像の終り末の初め地を尋ぬれば唐の東・羯の西・人を原めれば則ち五濁の生・鬭諍の時なり經に云く猶多怨嫉・況滅度後と此の言良に以有るなり」と、此等の文釈をもつて知るべし、日本国に法華經より外の真言・禪・律宗・念仏宗等の經教 山山寺寺朝野遠近に弘まるといへども正く国に相應して仏の御本意に相叶ひ生死を離るべき法にはあらざるなり。

問うて云く華嚴宗には五教を立て余の一切の經は劣れり華嚴經は勝ると云ひ、真言宗には十住心を立て余の一切經は顯經なれば劣るなり真言宗は密教なれば勝れたりと云う、禪宗には余の一切經をば教内と簡いて教外別伝・不立文字と立て壁に向いて悟れば禪宗独り勝れたりと云う、淨土宗には正雜二行を立て法華經等の一切經をば捨閉閣抛し雜行

と簡さらひ浄土じょうどの三部經さんぶきょうを機きに叶きひめでたき正行しょうぎやうなりと云う、各各・我慢がまんを
立て互たがいに偏執へんしゅうを作なす何いずれれか釈迦しゃか仏ぶつの御本意ごほんいなるや、答こたえて云いく宗宗各別かくべつに
我が經きやうこそすぐれたれ余經よきやうは劣おとれりと云いいて我が宗・吉よきと云う事は唯是ただこれ
人師にんしの言ことにて仏説ぶつせつにあらず、但ただし法華經計ほけきやうばかりこそ仏五味たといの譬たとを説ときて五時
の教あたりに當あたり此の經の勝すぐれたる由よしを説とき、・或あるは又已今當いこんとうの三説の中に仏に
なる道ほけきやうは法華經に及およぶ經なしと云う事は正しき仏の金言きんげんなり、然しかるに我が
經きやうは法華經に勝すぐれたり我が宗は法華宗に勝すぐれたりと云はん人は下臈げろうが上臈じやうろう
を凡下ほんげと下くだし相伝そうでんの從者じゆうしやが主に敵對てきたいして我が下人げにんなりと云わんが如ごとし何ぞ
大罪たいざいに行いなはれざらんや、法華經ほけきやうより余經よきやうを下す事は人師にんしの言ことにあらず
經文きやうもん分明ふんみやうなり、譬たとえば國王こくおうの万人ばんにんに勝すぐれたりと名乗なをのりり侍ぼんげの凡下げろうと
云わんに何の禍わざはひがあるべきや、此の經は是これ仏ぶつの御本意ごほんいなり天台てんだい・妙樂みやうらくの
正意しやういなり。

問うて云く釈迦一期の説法は皆衆生のためなり衆生の根性万差なれば
説法も種種なり何れも皆得道なるを本意とす、然れば我が有縁の経は人の
為には無縁なり人の有縁の経は我が為には無縁なり故に余経の念仏により
て得道なるべき者の為には觀經等はめでたし法華經等は無用なり、法華に
よりて成仏得道なるべき者の為には余経は無用なり法華經はめでたし、
四十余年・未顕真実と説くも雖示種種道・其実為仏乗と云うも
正直捨方便・但説無上道と云うも法華得道の機の前の事なりと云う事・世
こそつてあはれ然るべき道理かななんと思へり如何心うべきや、若し爾ら
ば大乘・小乗の差別もなく權教・実教の不同もなきなり何れをか仏の
本意と説き何れをか成仏の法と説き給えるや甚・だいぶかし・いぶか
し、答えて云く凡そ仏の出世は始めより妙法を説かんと申し食ししかども
衆生の機縁万差にしてととのをらざりしかば三七日の間思惟し四十余年の

程・こしらへおおせて最後に此の妙法を説き給う、故に「若し但仏乗を讃せば衆生苦に没在し是の法を信ずること能わず、法を破して信ぜざるが故に三惡道に墜ちん」と説き「世尊の法は久くして後要らず当に眞實を説きたまうべし」とも云へり、此の文の意は始めより此の仏乗を説かんとし食ししかども仏法の気分もなき衆生は信ぜずして定めて謗りを至さん、故に機をひとしなに誘へ給うほどに初めに華嚴・阿含・方等・般若等の經を四十余年の間とき最後に法華經をとき給う時、四十余年の座席にありし身子・目連等の万二千の声聞・文殊・弥勒等の八万の菩薩・万億の輪王等・梵王・帝釈等の無量の天人各爾前に聞きし所の法をば如来の無量の知見を失えりと云云、法華經を聞いては無上の宝聚求めざるに自ら得たりと悦び給ふ、されば「我等昔より来、数世尊の説を聞きたてまつるに未だ曾つて是くの如き深妙の上法を聞かず」とも、「仏希有の法を説き給う

昔より未だ會つて聞かざる所なり」とも説き給う、此等の文の心は四十余年
の程若干の説法を聴聞せしかども法華經の様なる法をば総てきかず又仏も
終に説かせ給はずと法華經を讀たる文なり四十二年の聴と今經の聴とをば
わけたくらぶべからず、然るに今經をそれ法華經得道の人の為にして爾前
得道の者の為には無用なりと云う事大なる誤りなり、をのづから四十二年
の經の内には一機・一縁の為にしつらう処の方便なれば設け有縁無縁の
沙汰はありとも法華經は爾前の經經の座にして得益しつる機どもを押ふ
さねて一純に調えて説き給ひし間・有縁無縁の沙汰あるべからざるなり、
悲しいかな大小・権実みだりがわしく仏の本懷を失いて爾前得道の者のた
めには法華經無用なりと云へる事を能能慎むべし・恐るべし、古の徳一大師
と云いし人・此の義を人にも教へ我が心にも存して・さて法華經を読み
給ひしを伝教大師・此の人を破し給ふ言に「法華經を讀すと雖も還つて

法華の心を死す」と責め給いしかば徳一大師は舌八にさけて失せ給ひき。
問うて云く天台の釈の中に菩薩处处得入と云う文は法華經は但二乗の
為にして菩薩の為ならず菩薩は爾前の經の中にして也得道なると見えたり
若し爾らば未顕眞実も正直捨方便等も総じて法華經八卷の内皆以て二乗の
為にして菩薩は一人も有るまじきと意うべきか如何、答えて云く法華經は
但二乗の為にして菩薩の為ならずと云う事は天台より已前・唐土に
南三・北七と申して十人の学匠の義なり、天台は其の義を破し失て今は
弘まらず若し菩薩なしと云はば菩薩是の法を聞いて疑網皆已に除くと云え
る豈是れ菩薩の得益なしと云わんや、それに尚鈍根の菩薩は二乗とつれて
得益あれども利根の菩薩は爾前の經にて得益すと云はば「利根・鈍根等し
く法雨を雨す」と説き「一切の菩薩の阿耨多羅三藐三菩提は皆此經に属せ
り」と説くは何に、此等の文の心は利根にてもあれ鈍根にてもあれ持戒に

てもあれ破戒はかいにててもあれ貴もあれ賤もあれ一切いっさいの菩薩ぼさつ・凡夫ぼんぷ・二乗にじようは
法華經ほけきようにて成仏じようぶつ得道とくどうなるべしと云う文なるをや、又法華得益ほつけとくやくの菩薩ぼさつは皆みな
鈍根どんこんなりと云はば普賢ふげん・文殊もんじゆ・弥勒みろく・藥王やくおう等の八万はちまんの菩薩ぼさつをば鈍根どんこんなりと
云うべきか、其その外にぜんに爾前にぜんの經にて得道とくどうする利根りこんの菩薩ぼさつと云うは何様いかようなる
菩薩ぼさつぞや、抑そも爾前にぜんに菩薩とくどうの得道とくどうと云うは法華經ほけきようの如き得道とくどうにて候か、其
ならば法華經ほけきようの得道とくどうにて爾前にぜんの得分とくぶんにあらず、又法華經ほけきようより外ほかの得道とくどうなら
ば已今当いこんとうの中うちには何れぞや、いかさまにも法華經ほけきようならぬ得道とくどうは当分とうぶんの得道とくどう
にて真実しんじつの得道とくどうにあらず、故ゆえに無量義經むりようぎきようには「是かくのゆえの故しゆじように衆生とくどうの得道とくどう差別さべつせ
り」と云い又「終ついに無上菩提むじようぼだいを成じようずることを得じ」と云へり、文の心は爾前にぜん
の經經きようきようには得道とくどうの差別さべつを説くと云へども終ついに無上菩提むじようぼだいの法華經ほけきようの得道とくどうは
なしとこそ仏とは説たまき給まいいて候へ。

問いわうて云とうじく當時しやくそんにゆうめつは釈尊しゃくそん入滅にゆうめつの後のち・今いまに二千二百三十余年いっさいきようなり、一切いっさい經

の中に何いすれの経きやうが時ときに相応さうおうして弘ひろまり利生りしようも有あるべきや大集經だいしききやうの五百

歳さいの中の第五ごの五百歳ごひゃくさいに当時とうじはあたれり、其その第五ごの五百歳ごひゃくさいをば鬪諍とうじやうけんご堅固けんこ

びやくほうおんもつ

・白法びやくほう隱没いんもつと云いつて人の心こころたけく腹はらあしく貪欲とんよく・瞋恚しんに・強盛かうじやうなれば軍合ぐんが

さかん ぶつほう

戦せんのみ盛さかんにして仏法ぶつほうの中に先まづき先まづき弘ひろりし所の眞言しんごん・禪宗ぜんしゆう・念仏ねんぶつ持戒じがい等

びやくほう おんもつ

の白法びやくほうは隱没いんもつすべしと仏說とき給たまへり、第一だいいちの五百歳ごひゃくさい・第二だいにの五百歳ごひゃくさい・第三だいに

じやうぶつ

の五百歳ごひゃくさい・第四よんの五百歳ごひゃくさいを見るに成仏じやうぶつの道みちこそ未顕みけん眞実しんじつなれ世間せけんの事法じふほふは

みことばいちぶん

仏ぶつの御言ごごん一分いちぶんも違ちがはず是これを以もつて之これを思おもうに当時とうじの鬪諍とうじやうけんご堅固けんこ・白法びやくほう隱没いんもつの

きんげん

金言きんげんも違ちがう事ことあらじ、若爾しからば末法まつほうには何いすれの法ほふも得益とくやくあるべからず何いすれれの

ぼさつ りしよう

仏ぶつ・菩薩ぼさつも利生りしようあるべからずと見えたり如何いかん、さてもだして何いすれの仏菩薩ぼさつに

いすれ

もつかへ奉ほうらず何いすれの法ほふをも行いぜず憑たのむ方かたなくして候まちべきか、後世ごしやうをば如何いかん

いすれ

が思おもひ定め候まちべきや、答こたえて云いく末法まつほう當時とうじは久遠くおん実成じつじやうの釈迦しゃか仏ぶつ上行じやうぎやう菩薩ぼさつ

むへんぎやう ぼさつ

・無辺行菩薩むへんぎやう ぼさつ等の弘ひろめさせ給たまうべき法華經ほふけきやう二十八品にじはちはんの肝心かんじんたる南無なむ

妙法蓮華經の七字計り此の国に弘まりて利生得益もあり上行菩薩の御
りしようさか
利生盛んなるべき時なり、其の故は經文明白なり道心堅固にして 志 あ

らん人は委く是を尋ね聞くべきなり。

浄土宗の人人末法万年には余經悉く滅し弥陀一教のみと云ひ又当今末法

は是れ五濁の惡世唯浄土の一門のみ有て通入す可き路なりと云つて虚言し

て大集經に云くと引ども彼の經に都て此文なし、其の上あるべき様もなし

仏の在世の御言に当今末法五濁の惡世には但浄土の一門のみ入るべき道な

りとは説き給うべからざる道理顯然なり本經には「当來の世經道滅尽し

特り此の經を留めて止住する事百歳ならん」と説けり、末法一万年の百歳

とは全く見えず、然るに平等覺經・大阿弥陀經を見るに仏滅後・一千年の

後の百歳とこそ意えられたれ、然るに善導が惑へる釈をば尤も道理と人皆

思へり是は諸僻案の者なり、但し心あらん人は世間のことはりをもつて推

察せよ、大旱魃かんばつのあらん時は大海たいかいが先にひるべきか小河こがが先にひるべきか

仏是これを説き給たまうには法華經ほけきようは大海たいかいなり觀經かんきよう・阿弥陀經あみだ等は小河こがなり、され

ねんぶつ

びやくほう

きようもん

たまい

ば念仏等の小河の白法びやくほうこそ先にひるべしと經文きようもんにも説き給たまいて候たまひぬれ、

大集經だいしつきようの五箇の五百歳ごのいほひの中の第五の五百歳・白法隱没びやくほうおんもつと云と雙觀經そうかんきように

きようどうめつじん

まつぼう

そうかんきよう

經道滅尽きようどうめつじんと云とは但一つ心なり、されば末法まつぼうには始めより雙觀經等の

きようどうめつじん

りしやう

經道滅尽きようどうめつじんと聞えたり經道滅尽きようどうめつじんと云は經の利生の滅すと云う事なり、色

きようかんあ

とうじ

いた

の經卷きようかんあ有るにはよるべからず、されば當時とうじは經道滅尽きようどうめつじんの時に至つて二百

あま

ほけきよう

りしやうとくやく

歳あまに余れり、此の時は但法華經ほけきようのみ利生得益りしやうとくやくあるべし。

じゆじ

なむみようほうれんげきよう

とな

やくおうぼん

されば此經を受持じゆじして南無妙法蓮華經なむみようほうれんげきようと唱となえ奉たてまつるべしと見えたり藥王品やくおうぼん

には「後このごひやくさいの五百歳えんぶだいの中に閻浮提えんぶだいに広宣流布こうせんるふして断絶だんぜつせしむることなけん」

と

てんだいだいし

うるおわ

しやく

みようらくだいいし

と説き給たまひ、天台大師てんだいだいしは「後このごひやくさいの五百歳えんぶだい遠く妙道みようどうに沾うるおわん」と釈しやくし、妙樂大師みようらくだいいし

すべか

だいきよう

りゆうこう

べ

しやく

このごひやくさい

は「且すべからく大經だいきようの流行りゆうこうす可べき時に拠よる」と釈しやくして後このごひやくさいの五百歳えんぶだいの間に

法華經弘まりて其の後そは閻浮提えんぶだいの内に絶え失せる事あ有るべからずと見えた
り、安樂行品あんらくぎようほんに云く「後の末世ほうめつの法滅ほつせんと欲ほつせん時に於おいて斯この經典きようてんを
受持じゆじし読誦どくじゆせん者」文神力品じんりきほんに云く「爾その時に仏・上行等じようぎようの菩薩大衆ぼさつたいしゆうに
告ぞくげたまわく属累そくゑいの爲の故に此の經の功德くどくを説くとも猶尽なおすこと能あたわじ、
要もつを以これて之を云わば如來の一切いっさいの所有しやうの法・如來の一切いっさいの自在じざいの神力如來
の一切いっさいの秘要ひようの藏・如來の一切いっさいの甚深じんじんの事・皆此經みなに於おいて宣示顯説せんじけんせつす」と
云云、此等これらの文の心は釈尊しゃくそん入滅にゆうめつの後第五の五百歳と説くも來世らいせと云うも
濁惡世じよくあくと説くも正像しょうざう二千年過すぎて末法まつぽうの始二百余歳の今時は唯法華經ただほけきよう
計ばかり弘ひろまるべしと云う文なり、其そのの故ゆゑは人既すでにひがみ法も實じつにしるしなく
仏神ぶつしんの威験いげんもましまさず今生こんじやう後生いしやうの祈りも叶かなはず、かからん時はたよりを
得てんて天魔はじゆん・波旬みだ乱れ入り国土こくど常に飢渴けかちして天下てんがも疫癘えきれいし他國たこく侵逼しんびつ難
自界叛逆じかいほんぎやくなん難とて我が國に軍合戰常じやうにありて、後には他國たこくより兵どもをそひ

来りて此の国を責むべしと見えたり、此くの如き鬭諍堅固の時は余經の
白法は驗し失せて法華經の大良藥を以て此の大難をば治すべしと見え
り。

法華經を以て国土を祈らば上一人より下万民に至るまで悉く悦び榮へ
給うべき鎮護国家の大白法なり、但し阿闍世王・阿育大王は始めは惡王な
りしかども耆婆大臣の語を用ひ夜叉尊者を信じ給いて後にこそ賢王の名を
ば留め給いしか、南三・北七を捨てて知☆法師を用ひ給いし陳主・六宗の
碩徳を捨てて最澄法師を用ひ給いし桓武天皇は今に賢王の名を留め給へ
り、知☆法師と云うは後には天台大師と号し奉る最澄法師は後には伝教
大師と云う是なり、今の国主も又是くの如し現世安穩・後生善處なるべき
此の大白法を信じて国土に弘め給はば万国に其の身を仰がれ後代に賢人の
名を留め給うべし、知らず又無辺行菩薩の化身にてやましますらん、又

みようほう 妙法の五字を弘め給はん智者をば・いかに賤くとも上行菩薩の化身か又
しゃかによらい 釈迦如来の御使かと思ふべし、又薬王菩薩・薬上菩薩・観音勢至の菩薩は
しようぞう 正像二千年の御使なり此等の菩薩達の御番は早過たれば上古の様に利生
あ 有るまじきなり、されば当世の祈を御覧ぜよ一切叶はざる者なり、末法今
じようぎよう 世の番衆は上行・無辺行等にてをはしますなり此等を能能明らめ信じ
しるし てこそ法の験も仏・菩薩の利生も有るべしとは見えたれ、譬えばよき火打
とよき石のかごと・よきほくちと此の三寄り合いて火を用ゆるなり、祈も
かくのこと 又是くの如しよき師とよき檀那とよき法と此の三寄り合いて祈を成就し
こくと 国土の大難をも払ふべき者なり、よき師とは指したる世間の失無くして聊
のへつらうことなく小欲知足にして慈悲有らん僧の経文に任せて法華経を
たも 読み持ちて人をも勧めて持たせん僧をば仏は一切の僧の中に吉第一の法師
すす なりと讃められたり、吉檀那とは貴人にも・よらず賤人をも・にくまず上
よきだんな

にももらず下をもちやします一切・人をば用いずして一切經の中に法華經
を持たん人をば一切の人の中に吉人なりと仏は説給へり吉法とは此の
法華經を最爲第一の法と説かれたり、已説の經の中にも今説の經の中にも
當説の經の中にも此の經第一と見えて候へば吉法なり、禪宗・真言宗等
の經法は第二・第三なり殊に取り分けて申せば真言の法は第七重の劣な
り、然るに日本国には第二・第三・乃至・第七重の劣の法をもつて御祈☆
あれども末だ其の証拠をみず、最上第一の妙法をもつて御祈☆あるべき
か、是を正直捨方便・但説無上道・唯此一事實と云へり誰か疑をなすべ
きや。

問うて云く無智の人來りて生死を離るべき道を問わん時は何れの經の意
をか説くべき仏如何が教へ給へるや、答えて云く法華經を説くべきなり所以
に法師品に云く「若し人有つて何等の衆生か未來世に於て當に作仏するこ

とを得^うべきと問わば^{まさ}応に示すべし、是^この諸^{しよ}人^{にん}等^ら・未^み来^{らい}世^せに於^{おい}て必^さず作^さ仏^{ぶつ}する^{こと}を得^うん」と云云、安^{あん}樂^{らく}行^{ぎやう}品^{ひん}に云^いく「難^{なん}問^{もん}する所^{しやう}有^うらば小^{しやう}乘^{じやう}の法^{ぽう}を以^{もつ}て答^{こた}えず但^だ大^{だい}乘^{じやう}を以^{もつ}て而^{しか}も為^{ため}に解^げ説^{せつ}せよ」云云、此^{これ}等^らの文^{ぶん}の心^{こころ}は何^{いか}なる^しじやう^{よう}衆^{しゆ}生^{じやう}か仏^{ぶつ}になるべきと問わば法^ほ華^け經^{きやう}を受^{じゆ}持^じし奉^{たて}ら^{まつ}ん人^{にん}必^さず仏^{ぶつ}になるべしと答^{こた}うべきなり是^これ^に仏^{ぶつ}の御^ご本^{ほん}意^いなり、之^{これ}に付^つて不^ふ審^{しん}あり衆^{しゆ}生^{じやう}の根^{こん}性^{じやう}区^くにし^{ねん}て念^{ねん}仏^{ぶつ}を聞^きかん^と願^{ねん}ふ人^{にん}もあ^り法^ほ華^け經^{きやう}を聞^きかん^と願^{ねん}ふ人^{にん}もあ^り、又^{また}念^{ねん}仏^{ぶつ}を聞^きかん^と願^{ねん}ふ人^{にん}に法^ほ華^け經^{きやう}を説^{とく}いて聞^きか^せんは何^{なん}の得^{とく}益^{やく}かあ^るべき、又^{また}念^{ねん}仏^{ぶつ}を聞^きかん^と為^{ため}に請^{しやう}じたら^ん時^{とき}にも強^して法^ほ華^け經^{きやう}を説^{とく}くべきか、仏^{ぶつ}の説^{せつ}法^{ぽう}も機^きに隨^{したが}いて得^{とく}益^{やく}有^あるをこ^そ本^{ほん}意^いとし給^{たま}うら^んと不^ふ審^{しん}する人^{にん}あらば云^いうべし、元^{もと}より末^{まつ}法^{ぽう}の世^せには無^む智^ちの人^{にん}に機^きに叶^あひ叶^あはざるを顧^{かえ}みず但^し強^しいて法^ほ華^け經^{きやう}の五^ご字^じの名^な号^{ごう}を説^{とく}いて持^もたすべきなり、其^{その}の故^{ゆゑ}は釈^{しゃ}迦^か仏^{ぶつ}・昔^{ふき}不^ふ輕^{きやう}菩^ぼ薩^{さつ}と云^いはれて法^ほ華^け經^{きやう}を弘^{ひろ}め給^{たま}いしには男^{なん}女^{にょ}・尼^に・法^ほ師^しがおしなべて用^{もち}ひざりき、・或^{ある}

は罵ののしられ毀そしられ・或あるは打れ追はれ一しなならず・或あるは怨あだまれ嫉そねまれ給たまい
しかども少しもこりもなくして強しいて法華經を説ほけきようき給たまいし故ゆえに今の釈迦しゃか仏ぶつ
となり給たまいしなり、不輕菩薩ふぎようぼさつを罵ののしりまいらせし人は口もゆがまず打ち奉たてまつり
しかいなもすくまず、付法藏ふほうぞうの師子尊者ししそんじゃも外道げどうに殺されぬ、又法道三蔵ほうどうさんぞうも
火印かなやきを面かおにあてられて江南に流され給たまいしぞかし、まして末法まつぽうにかひなき
僧ほけきようの法華經を弘ひろめんにはかかる難なんあるべしと經文きようもんに正まさしく見えたり、されば
人これ是これを用もちひず機きに叶こはずと云へども強しいて法華經の五字ごじの題名だいめいを聞かすべ
きなり、是これならでは仏になる道はなきが故なり、又・或人ある不審ふしんして云く、機き
に叶はざる法華經ほけきようを強しいて説ほついて謗ぼうぜさせて・惡道あくどうに人を墮ださんよりは、機き
に叶へる念仏ねんぶつを説ほついて・發心ほつしんせしむべし、利益りやくもなく謗ぼうぜさせて返つて地獄じごく
に墮ださんは法華經ほけきようの行者ぎやうじやにもあらず邪見じゃけんの人にてこそ有あるらめと不審ふしんせ
ば、云うべし經文きようもんには何体にもあれ末法まつぽうには強しいて法華經を説くべしと仏

の説き給へるをばさていかが心うべく候や、釈迦仏・不輕菩薩・天台・妙樂・伝教等はさて邪見の人外道にて・おはしまし候べきか、又惡道にも墮ちず三界の生を離れたる二乗と云う者をば仏のの給はく設ひ犬野干の心をば發すとも二乗の心をもつべからず五逆・十惡を作りて地獄には墮つとも二乗の心をば・もつべからずなどと禁められしぞかし、惡道におちざる程の利益は争でか有るべきなれども其れをば仏の御本意とも思し食さず地獄には墮つるとも仏になる法華經を耳にふれぬれば是を種として必ず仏になるなり、されば天台・妙樂も此の心を以て強いて法華經を説くべしとは釈し給へり譬えば、人の地に依りて倒れたる者の返つて地をおさへて起が如し、地獄には墮つれども疾く浮んで仏になるなり、当世の人・何となくとも法華經に背く失に依りて地獄に墮ちん事疑いなき故に、とてもかくても法華經を強いて説き聞かすべし、信ぜん人は仏になるべし謗ぜん者

は毒鼓どつくの縁となつて仏になるべきなり、何いかにとしても仏の種は法華經ほけきようより外ほかになきなり、權教こんきやうをもつて仏になる由よしだにあらば、なにしにか仏は強しいて法華經ほけきようを説といて謗ぼうずるも利益りやくあるべしと説とき我不愛身命がふあいしんみやうとは仰おおせらるべきや、よくよく此等これらを道心どうしんましまさん人は御心得ごころえあるべきなり。問いうて云いく無智むちの人も法華經ほけきようを信ほじたらば即身成仏そくしんじやうぶつすべきか、又何いづれれの浄土じやうどに往生おうじやうすべきぞや、答いえて云いく法華經ほけきようを持ほつにおいては深く法華經ほけきようの心しを知り止觀しかんの坐禪ざぜんをし一念三千いちねんさんぜん・十境・十乗の觀法かんぽうをこらさん人は實じつに即身成仏そくしんじやうぶつし解さとりを開く事も・あるべし、其その外ほかに法華經ほけきようの心しをもしらず無智むちにしてひら信心しんじんの人は浄土じやうどに必ず生うまべしと見えたり、されば生じゅつぽう十方じふぱう仏前ぶつぜんと説とき・或あるは即往安樂世界そくおうあんらくせかいと説ときき、是この法華經ほけきようを信ほずる者の往生おうじやうすと云いう明文めいぶんなり、之に付ふいて不審ふしんあり其そのの故ゆゑは我が身は一ひとにして十方じふぱうの仏前ぶつぜんに生うまべしと云いう事こと心得こころえられず、何いづれれにてもあれ一方いつぱうに限るべし正ただに何いづれの方

をか信じて往生すべきや、答えて云く一方にさだめずして十方と説くは
最もいはれあるなり、所以に法華經を信ずる人の一期終る時には十方世界
の中に法華經を説かん仏のみもとに生るべきなり、余の華嚴阿含・方等・
般若經を説く浄土へは生るべからず、浄土十方に多くして声聞の法を説
く浄土もあり辟支仏の法を説く浄土もあり、或は菩薩の法を説く浄土もあ
り、法華經を信ずる者は此等の浄土には一向生れずして法華經を説き給う
浄土へ直ちに往生して座席に列りて法華經を聴聞してやがてに仏になる
べきなり、然るに今世にして法華經は機に叶はずと云いうとめて西方浄土
にて法華經をさとるべしと云はん者は阿弥陀の浄土にても法華經
をさとるべからず十方の浄土にも生るべからず、法華經に背く咎重きが
故に永く地獄に墮つべしと見えたり、其人命終入阿鼻獄と云へる是なり。
問うて云く即往安樂世界・阿弥陀仏と云云、此の文の心は法華經を受持

し奉らん女人は阿弥陀仏の浄土に生るべしと説き給えり念仏を申しても
阿弥陀の浄土に生るべしと云ふ、浄土既に同じ念仏も法華経も等と心え候
べきか如何、答えて云く観経は権教なり法華経は実教なり全く等しかる
べからず其の故は仏世に出でさせ給いて四十余年の間・多くの法を説き
給いしかども二乗と悪人と女人とをば簡ひ・はてられて成仏すべしとは一
言も仰せられざりしに此の経にこそ敗種の二乗も三逆の調達も五障の女人
も仏になるとは説き給い候つれ、其の旨経文に見えたり、華嚴経には「女人
は地獄の使なり仏の種子を断ず外面は菩薩に似て内心は夜叉の如し」と云
へり、銀色女経には三世の諸仏の眼は抜けて大地に落つるとも法界の女人
は永く仏になるべからずと見えたり、又経に云く「女人は大鬼神なり能く
一切の人を喰う」と、竜樹菩薩の大論には一度女人を見れば永く地獄の業
を結ぶと見えたり・されば実にてやありけん善導和尚は謗法なれども女人

をみずして一期生いちせいと云はれたり、又業平なりひらが歌にも律むくろをいて・あれたるやどのうれたきは・かりにも鬼の・すだくなりけりと云うも女人にょにんをば鬼とよめるにこそ侍はべれ、又女人にょにんには五障ごしょう三従と云う事有あるが故ゆえに罪深つみしと見えたり、
五障とは一には梵天王ぼんてん・二には帝釈たいしやく・三には魔王まおう・四には転輪聖王てんりんじやうおう・五には仏にならずと見えたり、又三従とは女人は幼き時は親に従いて心に任せず、人となりては男に従いて心にまかせず、年よりぬれば子に従いて心にまかせず加様に幼き時より老耄ろうもうに至るまで三人に従て心にまかせず思ふ事をもいはず見たき事をもみず聴問したき事をもきかず是これを三従とは説くなり、されば榮啓期えいけいきが三樂を立てたるにも女人にょにんの身と生れざるを一の樂みといへり、加様に内典ないてん・外典げてんにも嫌きらはれたる女人にょにんの身なれども此の經を讀まねどもかかねども身と口と意とにうけ持ちて殊に口に南無妙法蓮華經と唱なむへ奉る女人は在世の竜女・☆曇弥・耶輸陀羅女の如くにやすやすと仏にな

るべしと云うきょうもん經文なり、又安樂世界あんらくせかいと云うは一切いっさいの淨土じょうどをば皆安樂みなあんらくと説く
なり、又阿弥陀あみだと云うも觀經かんきょうの阿弥陀あみだにはあらず、所以ゆえんに觀經かんきょうの阿弥陀あみだ仏
は法藏比丘ほうそうびくの阿弥陀あみだ・四十八願じゅうはつがんの主十劫成道じゅうじやくじょうどうの仏なり、法華經ほけきょうにも迹門しやくもん
の阿弥陀あみだは大通智勝だいつうちしやうぶつ仏おうじの十六王子おうじの中の第九の阿弥陀あみだにて法華經ほけきょう大願おほいの主
の仏なり、本門ほんもんの阿弥陀あみだは釈迦分身しやくかふんじんの阿弥陀あみだなり随したがつて釈しかにも「須すく更に
觀經等かんきやうを指すべからざるなり」と釈しやくし給たまえり。

問いうて云いく經きやうに難解難入なんげなんにゆうと云へり世間せけんの人・此の文ぶんを引ひいて法華經ほけきやうは機き
に叶あはずと申もうし候こうは道理どうりと覺おほえ候こうは如何いかん、答こたえて云いく謂いれなき事ことなり其そのの故ゆゑ
は此の經きやうを能あたも心こころえぬ人の云いう事ことなり、法華ほつより已前いぜんの經きやうは解さり難かたく入いり
難がたし法華ほつの座ざに來きりては解さり易やすく入いり易やすしと云いう事ことなり、されば妙樂大師みやうらくだいし
の御釈いに云いく「法華ほつ已前いぜんは不ふ了義りやうぎなるが故ゆゑに故ゆゑに難解なんと云いう即すなわち今いまの教きやうに
は咸いく皆實みなじつに入るを指しす故ゆゑに易知いと云いう」文ぶん、此の文ぶんの心こころは法華ほつより已前いぜん

經にては機きつたなくして解さり難かく入り難がし、今の經に來りては機き賢かしこく成り
て解さり易やすく入り易やすしと釈しゃくし給たまへり、其その上難解難入なんげなんにゅうと説とかれたる經が機きに
叶ねんぶつはずば先念ねんぶつ仏を捨てさせ給たまうべきなり、其そのの故ゆえは雙觀經そうかんきょうに「難がきが中ちゅうの
難がき此なんの難すに過すぎたるは無なし」と説とき阿彌陀經あみだには難信なんしんの法と云へり、文
の心は此の經を受け持たん事は難がきが中ちゅうの難がきなり此これに過すぎたる難がきは
なし難信なんしんの法なりと見えたり。

問いわうて云きょうもんく經文きやうもんに「四十余年未だ眞實しんじつを顯あらわさず」と云いい、又「無量無辺
ふかしぎ 阿僧祇劫あそぎこうを過すぐるとも終ついに無上菩提むじょうぼだいを成じやうずることを得えじ」と云へ
り、此の文は何体いかていの事にて候や、答えて云いわく此の文の心は釈迦しゃか・一期五
十年せっぽうの説法けこんきやうの中に始めの華嚴經けこんきやうにも眞實しんじつをとかず中の方等ほうとう・般若はんにやにも眞實
をとかず、此の故ゆえに禪宗ぜんしゅう・念ねんぶつ・戒等を行ずる人は無量無辺むりやうむへん劫をば過すぐと
も仏にならじと云う文なり、仏四十二年の歲月へを経て後・法華經ほけきやうを説とき給たまふ

文には「世尊せそんの法は久くして後に要かならず当まさに真実しんじつを説とき給たまうべし」と仰おおせられしかば、舍利弗等しやりほつの千二百の羅漢らかん・万二千の声聞しょうもん・弥勒等みろくの八万人はちまんの菩薩ぼさつ・梵王ぼんのう・帝釈等たいしやくの万億てんにんの天人あじやせ・阿闍世王等あじやせの無量無辺むりようむへんの国王こくおう・仏の御言みことばを領解りようげする文には「我等われら昔より来このかたしばしば世尊せそんに未いまだ會かつて是かくの如ごとき深妙しんめうの上法じやうぼうを聞きこはず」と云いつて、我等われら・仏に離はなれ奉ほうらずして四十二年若干そこばくの説法せつぽうを聴聞ちやうもんしつれども・いまだ是かくの如ごとき貴とうとき法華經ほけきやうをばきかずと云いへる、此等これらの明文めいぶんをば・いかが心こころえて世間せけんの人は法華經ほけきやうと余經よきやうと等おなしく思おもひ剰あまつさへ機きに叶あはねば闇やみの夜よの錦にしき・こそぞ曆りきなんど云いひて、適持たまたまつ人ひとを見ては賤いやみ輕かるしめ惡にくみ嫉ねたみ口くちをすくめなんどする是これ併しかしながほつぼう争いかでか往生おうじやうじやうぶつ成仏いふぶつも・あるべきや、必ず無間地獄むげんじごくに墮おつべき者と見えたり。

問いうて云いく凡おほそ佛法ぶつぽうを能よく心得こころえて仏意ぶつゐに叶あへる人ひとをば世間せけんに是これを重おもんじ

いっさいこれ
一切是を貴む、然るに当世法華經を持つ人人をば世こそつて惡み嫉み輕し
め賤み・或は所を追ひ出し、・或は流罪し供養をなすまでは思いもよらず
怨敵の様ににくまるるは、いかさまにも心わろくして仏意にもかかはらず
がさまに法を心得たるなるべし、經文には如何が説きたるや、答えて云く
きようもん
經文の如くならば末法の法華經の行者は人に惡まるる程に持つを實の
だいじよう
大乘の僧とす、又經を弘めて人を利益する法師なり、人に吉と思はれ人の
したが
心に随いて貴しと思はれん僧をば法華經のかたき世間の惡知識なりと思う
べし、此の人を經文には獵師の目を細めにして鹿をねらひ猫の爪を隠して
ねずみ
鼠をねらふが如くにして在家の俗男・俗女の檀那をへつらい・いつわりた
ぼらかすべしと説き給へり、其の上勸持品には法華經の敵人三類を挙げら
れたるに、一には在家の俗男・俗女なり此の俗男・俗女は法華經の行者を
憎み罵り打ちはりきり殺し所を追ひ出だし・或は上へ讒奏して遠流しなさ

けなくあだむ者なり、二には出家の人なり此の人は慢心高くして内心には
物も知らざれども智者ちしやげにもてなして世間の人に学匠がくしやうと思はれて法華經の
行者ぎやうじやを見ては怨み嫉み輕しめ、賤み犬野干よりも・わろきようを人に云い
うとめ法華經をば我、一人心得たりと思う者なり、三には阿練若の僧なり
此の僧は極めて貴き相を形に顯し三衣一鉢を帶して山林の閑かなる所に
籠り居て在世の羅漢の如く諸人に貴まれ仏の如く万人に仰がれて法華經を
説の如くに読み持ち奉らん僧を見ては憎み嫉んで云く大愚癡の者大邪見の
者なり総て慈悲なき者・外道の法を説くなんと云わん、上一人より仰いで
信を取らせ給はば其の已下万人も仏の如くに供養をなすべし、法華經を説
の如くよみ持たん人は必ず此の三類の敵人に怨まるべきなりと仏説き給へ
り。

問うて云く仏の名号を持つ様に法華經の名号を取り分けて持つべき

証^{しょうじ}拠^こありや如何^{いかん}、答^{こた}えて云^いく經^{きやう}に云^いく「仏^{ぶつ}諸^{しよ}の羅刹^{らさつ}女^{にょ}に告^つげたまわく
よきかなよきかなんじ
善^{ぜん}き哉^や善^{ぜん}き哉^や汝^に等^ら但^{ただ}能^よく法^{ほつ}華^けの名^なを受^{じゆ}持^ぢする者^{もの}を擁^{おうえ}護^ごせん福^{はく}量^{りやう}る可^べから
ず」と云云此^この文^{ぶん}の意^いは十羅刹^{じしゆらさつ}の法^{ほつ}華^けの名^なを持^もつ人^{ひと}を護^{まも}らんと誓^{せい}言^{ごん}を立て
給^{たま}うを大覺^{だいかく}世尊^{せそん}讃^ほめて言^いく善^{ぜん}き哉^や善^{ぜん}き哉^や汝^に等^ら南無^{なむ}妙法蓮華^{みょうほうれんげきやう}經^{きやう}と受^うけ持^ぢた
人^{ひと}を守^{くどく}らん功^{くどく}徳^{とく}いくら程^{ほど}とも計^{はか}りがたく・めでたき功^{くどく}徳^{とく}なり神妙^{しんめう}なりと
仰^{おほ}せられたる文^{ぶん}なり、是^これ我^{われ}等^ら衆生^{しゆじやう}の行^{ぎやう}住^{じゆ}坐^ざ臥^がに南無^{なむ}妙法蓮華^{みょうほうれんげきやう}經^{きやう}と唱^なふ
べしと云^いう文^{ぶん}なり。

凡^{おほ}そ妙法蓮華^{みょうほうれんげきやう}經^{きやう}とは我^{われ}等^ら衆生^{しゆじやう}の仏^{ぶつ}性^{しやう}と梵王^{ぼんのう}・帝釈^{たいしやく}等^らの仏^{ぶつ}性^{しやう}と舍利弗^{しゃりふ}
・目連^{もくれん}等^らの仏^{ぶつ}性^{しやう}と文殊^{もんじゆ}・弥勒^{みろく}等^らの仏^{ぶつ}性^{しやう}と三世^{さんぜ}の諸^{しよ}仏^{ぶつ}の解^{かい}の妙法^{みょうほう}と一^{いつ}体^{たい}不^ふ
二^になる理^りを妙法蓮華^{みょうほうれんげきやう}經^{きやう}と名^なけたるなり、故^{ゆえ}に一^{いつ}度^た妙法蓮華^{みょうほうれんげきやう}經^{きやう}と唱^なうれば
一切^{いっさい}の仏^{ぶつ}・一切^{いっさい}の法^{ほふ}・一切^{いっさい}の菩^ぼ薩^{さつ}・一切^{いっさい}の聲^{しやう}聞^{もん}・一切^{いっさい}の梵王^{ぼんのう}・帝^{たい}釈^{しやく}
閻魔^{えんま}法^{ほう}王^{わう}・日^{にち}月^{がつ}・衆^{しゆ}星^{せい}・天^{てん}神^{じん}・地^ち神^{じん}・乃^{ない}至^し・地^じ獄^{ごく}・餓^が鬼^き・畜^{ちく}生^{しやう}・修^{しゆ}羅^ら

人天一切衆生の心中の仏性を唯一音に喚び顕し奉る功德・無量無辺なり、我が己心の妙法蓮華經を本尊とあがめ奉りて我が己心中の仏性南無妙法蓮華經とよびよばれて顕れ給う處を仏とは云うなり、譬えば籠の中の鳥なけば空とぶ鳥のよばれて集まるが如し、空とぶ鳥の集まれば籠の中の鳥も出でんとするが如し口に妙法をよび奉れば我が身の仏性もよばれて必ず顕れ給ふ、梵王・帝釈の仏性はよばれて我等を守り給ふ、仏・菩薩の仏性はよばれて悦び給ふ、されば「若し暫くも持つ者は我れ則ち歡喜す諸仏も亦然なり」と説き給うは此の心なり、されば三世の諸仏も妙法蓮華經の五字を以て仏に成り給いしなり三世の諸仏の出世の本懷一切衆生・皆成仏道の妙法と云うは是なり。是等の趣きを能く能く心得て仏になる道には我慢偏執の心なく南無妙法蓮華經と唱へ奉るべき者なり。日蓮在

◆七七 三世諸仏総勘文教相廃立

さんぜしよぶつ かんもんきようそうはいりゆう

こうあん

弘安二年十月 五十八歳御作日蓮之を撰す 558P

にちれんこれ

そ いちだいしろうきよう

夫れ一代聖教とは総べて五十年の説教なり是を一切経とは言ふなり、

こ これを分ちて二と為す一には化他・二には自行なり、一には化他の経とは

ほけきよう

法華経より前の四十二年の間説き給える諸の経教なり此れをば権教と

い また

云い亦は方便と名く、此れは四教の中には三蔵教・通教・別教の三教な

り五時の中には華嚴・阿含・方等・般若なり法華より前の四時の経教な

じゅつかい

り、又十界の中には前の九法界なり又夢と寤との中には夢中の善悪なり

うつつ

又夢をば権と云い寤をば実と云ふなり、是の故に夢は仮に有つて体性無し

ゆえ

故に名けて権と云ふなり、寤は常住にして不変の心の体なるが故に此れ

な

を名けて実と為す、故に四十二年の諸の経教は生死の夢の中の善悪の事

ゆえ

を説く故に権教と言う夢中の衆生を誘引し驚覺して法華経の寤と成さ

こんきよう

しゅじよう

ゆういん

きようかく

ほけきよう

うつつ

んと思食おほしめしての支度方便ほうべんの經教きやうぎやうなり故ゆえに權教こんきやうと言う、斯これに由よつて文字もんじの讀ただみを糾たして心得こころうべ可なきなり、故ゆえに權なをば權なと讀じつじむ權ななる事てほんの手本うつつには夢を以なて本なと為なす又實じつじをば實てほんと讀うつつむ實事じつじの手本てほんは寤うつつなり、故ゆえに生死しやうじの夢は權にして性体無なければ權ななる事てほんの手本うつつなり故ゆえに妄想もうそうと云うつ、本覺ほんがくの寤うつつは實なにして生滅しやうめつを離はなれたる心しんじつなれば真実しんじつの手本てほんなり故ゆえに実相じつそうと云うつ、是これを以なてごんじつ權實ごんじつの二字たを糾ただして一代いちだい聖教しやうぎやうの化他けたの權じぎやうと自行じぎやうの實さべつとの差別さべつを知る可べきなり、故ゆえに四教しきやうの中には前まへの三教さんきやうと五時ごじの中には前まへの四時しじと十法界じふぽうかいの中に前まへの九法界くぽうかいは同みなじく皆夢中ぜんあくの善惡ぜんあくの事ことを説ゆえくなり故ゆえに權教こんきやうと云うつ、此この教相きやうさうをば無量義經むりやうぎきやうに四十余年よんじゆうよねん・末顯真実みけんしんじつと説たまき給たまう已上みけんしんじつ、末顯真実しよきやうの諸經しよきやうは夢中ごんきやうの權教こんきやうなり故ゆえに釈籤しやくせんに云いく「性しやう・殊ことなること無なしと雖いえども必ず幻げんに藉よりて幻きの機きと幻ふの感かんと幻ふの応おこと幻ふの赴おことを發おこす・能しよけ應しよけと所化しよけと並ならびにごんじつ權實ごんじつに非あらず」已上こ、此これ皆夢幻みなの中ほうべんの方便ほうべんの教しやうすいむしゆなり性雖無殊等しやうすいむしゆとは夢見る

心性しんしよと寤うつつの時の心性しんしよとは只ただ一の心性しんしよにして総て異なること無しと雖いえども夢の中
の虚事そうつこと寤うつつの時の実事じつじと二事一の心法なるを以て見ると思ふも我が心なり
と云う釈しゆじやうなり、故に止観ゆえに云く「前の三教しぐの四弘のう・能も所も泯みんす」已上、四弘
とは衆生しゆじやうの無辺なるを度むへんせんと誓願せいがんし煩惱ぼんのうの無辺なるを断だんせんと誓願せいがんし・
法門ほうもんの無尽むじんなるを知らんと誓願せいがんし無上菩提むじやうぼだいを証せいがんせんと誓願せいがんす此を四弘しぐと云
う、能とは如来にやういなり所とは衆生しゆじやうなり此の四弘しぐは能の仏も所の衆生しゆじやうも
前三教ぜんさんきやうは皆夢中みなの是非ぜひなりと釈しやくし給えるなり、然しかれば法華ほつけい以前の四十二年
の間の説教せつきやうたる諸經しよきやうは末顕真実みけんしんじつの権教こんきやうなり方便ほうべんなり、法華ほつけに取寄くる可べき
方便ほうべんなるが故に真実ゆえには非あらず、此これは仏みずか、自ら四十二年の間説とき集たまめ給いひ
て後に、今法華經ほけきやうを説かんと欲して先ず序分じよぶんの開經むりやうききやうの無量義經むりやうぎきやうの時・仏、
自ら勘文かんもんし給たまえる教相きやうそうなれば人の語ことばも入べる可ふしんからず不審ふしんをも生べす可べから
ず、故に玄義ゆえに云く「九界げんぎを権いと為し仏界ぶつかいを実なと為す」已上、九法界ほつかいの権は

四十二年の説教なり仏法界の実は八箇年の説・法華經是なり、故に法華經をば仏乗と云う九界の生死は夢の理なれば權教と云い仏界の常住は寤の理なれば実教と云う、故に五十年の説教・一代の聖教一切の諸經は化他の四十二年の權教と自行の八箇年の実教と合して五十年なれば權と實との二の文字を以て鏡に懸けて陰無し。

故に三藏經を修行すること三僧祇・百大劫を歴て終りに仏に成らんと思えば我が身より火を出して灰身入滅とて灰と成つて失せるなり、通教を修行すること七阿僧祇・百大劫を満てて仏に成らんと思えば前の如く同様に灰身入滅して跡形も無く失せぬるなり、別教を修行すること二十二大阿僧祇・百千万劫を尽くして終りに仏に成りぬと思えば生死の夢の中の權教の成仏なれば本覺の寤の法華經の時には別教には実仏無し夢中の果なり故に別教の教道には實の仏無しと云うなり、別教の証道には初地

に始めていちぶん 一分の無明を断じていちぶん 一分の中道の理を顕し始めて之を見れば
別教は隔きやくりやく 歴不融の教と知つて円教に移り入つて円人と成り已つて別教
には留とどまらざるなり上中下三根の不同有るが故に初地・二地・三地・乃至
・等覺までも円人と成る故に別教の面に仏無きなり、故に有教無人と云う
なり、故に守護国界章に云く「有為の報仏は夢中の權果修行の仏無作の三身
は覺前かくぜんの實仏じつぷつなり觀心の仏」又云く「權教の三身は未だ無常を免れず前三教の
實教の三身は俱体俱用くたいくゆうなりの觀心の仏」此の釈を能く能く意得可きなり、權教
は難行苦行して適たまたま 仏に成りぬと思えば夢中の權の仏なれば本覺の寤うつつの
時には實じつぷつ 實無きなり、極果の仏無ければ有教無人なり況や教法実ならんや
之を取つて修行しゆぎよう せんは聖教しやうきよう に迷えるなり、此の前三教には仏に成らざ
る証拠しやうこ を説き置き給いて末代の衆生しゆじやう に慧解を開かしむるなり九界の衆生
は一念いちねん の無明の眠の中に於て生死しやうじ の夢に溺れて本覺ほんかく の寤うつつ を忘れ夢の是非ぜひ に

執しゅして冥くらきより冥くらきに入る、是かくのゆえの故にに如よ来らいは我われ等らが生しやう死じの夢の中の入いつて
顛倒てんどうの衆生しゅじやうに同じて夢中いこほの語ごを以て夢中しゅじやうの衆生しゅじやうを誘さひ夢中しゅじやうの善惡ぜんあくの差別さべつ
の事を説ぜんぜんいて漸漸ゆういんに誘引たまし給たまうに、夢中ぜんあくの善惡ちやうじやうの事重ちやうじやう 疊むりやうして様やう様に無量
むへん 無辺なれば先ぜんじず善事ぜんじに付じやうちゆうげいて上中下さんじやうを立つ三乗これの法こ是これなり、三三九品な
り、此かくの如ごとく説おわき已おつて後ごに又上じやうじやうほん・上品こんほんの根本善こんほんを立て上中下じやうちゆうげ・三三九
品の善と云う、皆悉みなことごとく九界生死しきうじの夢の中の善惡ぜんあくの是非ぜひなり今これ是これをば總くわじて
邪見外道じゃけんげどうと為なす記きの意い、此この上に又上じやうじやうほん・上品ぜんしんの善心ほんかくは本覺うつつの寤うの理うなれば
此これを善の本と云うと説とき聞かせ給し時に夢中ぜんあくの善惡ぜんあくの悟ごの力を以ての
故ゆえに寤うつつの本心ほんしんの真相じつそうの理りを始めて聞知もんちせられし事なり、是この時に仏説ぶつせついて
言いわく夢と寤うつつとの二ふたは虚事そいつてと実事じつじとの二ふたの事なれども心法たは只ただ一ひとなり、眠かの
縁あに値あいぬれば夢なり眠去りぬれば寤うつつの心なり心法たは只ただ一ひとなりと開會かいえせら
るべき下地げじを造り置かれし方便ほうべんなり此れは別教是かくのゆえの故にに未いまだ十界互具じゅつかいこく・円融えんゆう

相即そうそくを顕あらわさざれば成仏じょうぶつの人無し故に三藏教より別教べつきょうに至るまで四十二年
の間の八教はつきょうは皆悉みなことごとく方便ほうべん・夢中の善惡ぜんあくなり、只暫ただしばらく之これを用いて衆生しゅじょうを誘引ゆういん
し給たまう支度方便ほうべんなり此の權教こんきょうの中にも分分に皆悉みなことごとく方便ほうべんと眞實しんじつと有りて
權實こんじつの法闕かけざるなり、四教しきょう一一に各四門有つて差別有ること無し語ことばも只
同じ語ことばなり文字も異なること無し斯これに由つて語ことばに迷いて權實まよいの差別さべつを
分別ぶんべつせざる時を仏法滅すと云う是この方便の教は唯穢土ただいどに有つて総じて淨土じょうど
には無きなり法華經ほけきょうに云く「十方じゅうぽうの仏土ぶつどの中には唯一乘ただいちじょうの法のみ有つて
二無なくく亦また三も無し仏ほうの方便べんの説をば除く」已上ゆえ、故に知んぬ十方じゅうぽうの仏土ぶつどに
無き方便の教を取つて往生おうじょうの行と為し十方じゅうぽうの淨土じょうどに有る一乘いちじょうの法をば
之これを嫌きらいて取らずして成仏じょうぶつす可き道理有る可しや否や一代いちだいの教主釈迦きやうしゅしや
如来にょらい・一切經いっさいきやうを説き勸文かんもんし給たまいて言いわく三世さんぜの諸仏しよぶつ同様に一つ語ことば一つ心こころに
勸文かんもんし給たまえる説法の儀式なれば我も是かくのくの如く一言も違わざる説教せつきやうの次第しだい

なり云云、方便品に云く「三世の諸仏の説法の儀式の如く我も今亦是くの如く無分別の法を説く」已上、無分別の法とは一乗の妙法なり善惡を簡ぶこと無く草木・樹林・山河・大地にも一微塵の中にも互に各十法界の法を具足す我が心の妙法蓮華經の一乗は十方の浄土に周☆して闕くること無し十方の浄土の依報・正報の功德莊嚴は我が心の中に有つて片時も離るること無き三身即一の本覺の如来にて是の外には法無し此の一法計りじゅつぼう十方の浄土に有りて余法有ること無し故に無分別法と云う是なり、此の一乗・妙法の行をば取らずして全く浄土には無き方便の教を取つて成仏の行と為さんは迷いの中の迷いなり、我仏に成りて後に穢土に立ち還りて穢土の衆生を仏法界に入らしめんが為に次第に誘引して方便の教を説くを化他の教とは云うなり、故に權教と言ひ又方便とも云う化他の法門の有様大略を存して斯くの如し。

二に自行じぎようの法ほけきとは是これ法華經ほけき八箇年はちかねんの説となり、是この經きやうは寤うつつの本心ほんしんを説とき
給たまう唯ただし衆生しゆじやうの思おもひ習ならわせる夢中むちゆうの心地しんじなるが故ゆゑに夢中むちゆうの言語ごんごを借りて寤うつつ
の本心ほんしんを訓おしる故ゆゑに語ことばは夢中むちゆうの言語ごんごなれども意いは寤うつつの本心ほんしんを訓おしゆ法華經ほけきの
文ぶんと釈しゃくとの意い此こくの如ごとし、之これを明あめ知らずんば經きやうの文ぶんと釈しゃくの文ぶんとに必ず迷まよ
う可べきなり、但ただし此この化他けたの夢中むちゆうの法門ほうもんも寤うつつの本心ほんしんに備そなわれる徳用とくようの法門ほうもん
なれば夢中むちゆうの教きやうを取とつて寤うつつの心こころに摂おさむるが故ゆゑに四十二年しじふにねんの夢中むちゆうの化他けた方便ほうべん
の法門ほうもんも妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの寤うつつの心こころに摂おさまりて心こころの外そとには法無こきなり此これを
ほけきよう
法華經ほけきの開會かいえとは云いうなり、譬たとえば衆流しゆりゆうを大海たいかいに納おさむるが如ごときなり仏ぶつの心こころ
法妙しゆじやう・衆生しゆじやうの心法妙しんぽうと此この二妙ふたみやくを取とつて己心こしんに摂おさむるが故ゆゑに心こころの外そとに法無こ
きなり己心こしんと心性しんしやうと心体しんたいとの三さんは己身こしんの本覺ほんがくの三身さんじん如來にやらいなり是これを經きやうに説とい
て云いく「如是相にやぜそう如來にやらい如是性にやぜしやう如來にやらい如是体にやぜたい如來にやらい」此これを三如是にやぜと云いう、此この三
如是この本覺ほんがくの如來にやらいは十方じゆつぱう法界ほつがいを身体なと為なし十方じゆつぱう法界ほつがいを心性しんしやうと為なし十方じゆつぱう

ほっかい そうしう な かくのゆえ ほんがくさんじんによらい 法界を相好と為す是の故に我が身は本覺三身如来の身体なり、法界に周 ☆

いちぶつ して一仏の徳用なれば一切の法は皆是仏法なりと説き給いし時其の座席に

つらな もろもろ ししゅう はちぶ ちくしゅう げどう も みなことともうそう ひがめ 列りし諸の四衆・八部・畜生・外道等一人も漏れず皆悉く妄想の僻目

ひがおもい 僻思・立所に散止して本覺の寤に還つて皆仏道を成ず、仏は寤の人の

ごと しゅじょう ごと ゆえ しようじ こむ さま ほんがく うつつ かえ 如く衆生は夢見る人の如し故に生死の虚夢を醒して本覺の寤に還るを

そくしんじょうぶつ びようどうだい え ぶんべつ かいじょうぶつでう ただ 即身成仏とも平等大慧とも無分別法とも皆成仏道とも云う只一つの法門

じゅつぽう なり、十方の仏土は区に分れたりと雖も通じて法は一乘なり方便無きが

ゆえ ぶんべつ じゅつかい しゅじょう いえど じつそう 故に無分別法なり、十界の衆生は品品に異りと雖も実相の理は一なるが

ゆえ ぶんべつ ひやつかいせんによ さんぜんせけん ほうもんこと いえど じゅつかいこく 故に無分別なり 百界千如・三千世間の法門殊なりと雖も十界互具するが

ゆえ ぶんべつ うつつ かくべつ いえど いっしん 故に無分別なり、夢と寤と虚と実と各別異なりと雖も一心の中の法なるが

ゆえ ぶんべつ かこ みらい げんざい いえど いちねん しんちゅう 故に無分別なり、過去と未来と現在とは三なりと雖も一念の心中の理なれ

ぶんべつ ば無分別なり、一切經の語は夢中の語とは譬えば扇と樹との如し法華經

の寤の心を顕す言とは譬えば月と風との如し、故に本覺の寤の心の月輪
の光は無明の闇を照し実相般若の智慧の風は妄想の塵を払う故に夢の語の
扇と樹とを以て寤の心の月と風とを知らしむ是の故に夢の余波を散じて
寤の本心に帰せしむるなり、故に止観に云く「月・重山に隠るれば扇を
挙げて之に類し風大虚に息みぬれば樹を動かして之を訓ゆるが如し」文、
弘決に云く「真常性の月・煩惱の山に隠る煩惱一に非ず故に名けて重と
為す円音教の風は化を息めて寂に歸す寂理無礙なること猶大虚の如し四依
の弘教は扇と樹との如し乃至月と風とを知らしむるなり已上、夢中の煩惱
の雲・重 畳せること山の如く其の数八万四千の塵勞にて心性本覺の月輪
を隠す扇と樹との如くなる経論の文字言語の教を以て月と風との如くなる
本覺の理を覺知せしむる 聖教なり故に文と語とは扇と樹との如し」文、
上釈は一往の釈とて実義に非ざるなり月の如くなる妙法の心性の月輪と風

の如くなる我が心の般若の慧解とを訓え知らしむるを妙法蓮華經と名く、
故に釈籤に云く「声色の近名を尋ねて無相の極理に至る」と已上、声色の
近名とは扇と樹との如くなる夢中の一切經論の言説なり無相の極理とは月
と風との如くなる寤の我が身の心性の寂光の極樂なり、此の極樂とは
十方法界の正報の有情と十方法界の依報の国土と和合して一体・三身即
一なり、四土不二にして法身の一仏なり十界を身と為すは法身なり十界
を心と為すは報身なり十界を形と為すは応身なり十界の外に仏無し仏の
外に十界無くして依正不二なり身土不二なり一仏の身体なるを以て寂光
土と云う是の故に無相の極理とは云うなり、生滅無常の相を離れたるが
故に無相と云うなり法性の淵底玄宗の極地なり故に極理と云う、此の無相
の極理なる寂光の極樂は一切有情の心性の中に有つて清淨無漏なり之を
名けて妙法の心蓮台とは云うなり是の故に心外無別法と云う此れを一切法

みな ぶつぼう
は皆是仏法なりと通達解了すとは云うなり、生と死と二つの理は生死の
夢の理なり妄想なり顛倒なり本覺の寤を以て我が心性を糾せば生ず可き始
めも無きが故に死す可き終りも無し既に生死を離れたる心法に非ずや、劫火
にも焼けず水災にも朽ちず劒刀にも切られず弓 箭にも射られず芥子の中に
入るれども芥子も広からず心法も縮まらず虚空の中に満つれども虚空も広
からず心法も狭からず善に背くを惡と云い惡に背くを善と云う、故に心の
外に善無く惡無し此の善と惡とを離るるを無記と云うなり、善惡無記☆此
の外には心無く心の外には法無きなり故に善惡も淨穢も凡夫・聖人も天地
も大小も東西も南北も四維も上下も言語道斷し心行所滅す心に分別して
思い言い顯す言語なれば心の外には分別も無分別も無し、言と云うは心の
思ひを響かして声を顯すを云うなり凡夫は我が心に迷うて知らず覺らざ
るなり、仏は之を悟り顯わして神通と名くるなり神通とは神の一切の法に

通じて礙ぎ無なきなり、此の自在じざいの神通じんつうは一切いっさいの有情うじょうの心にて有あるなり故ゆえに狐
狸も分分に通を現げんずること皆みな・心の神の分分の悟なり此の心の一法より
こくどせけん しゅつたい
国土世間も出来する事なり、一代いちだい聖教しやうきやうとは此の事を説ときたるなり此れを
はちまん
八万四千の法蔵とは云うなり是れ皆悉く一人の身中の法門にて有るなり、
しか はちまん
然れば八万四千の法蔵は我身一人の日記文書なり、此の八万法蔵を我が
しんちゅう はら たも いだ たも
心中に孕み持ち懷き持ちたり我が身中の心を以て仏と法と浄土とを我が身
より外に思い願まよい求むるを迷いいとは云うなり此の心が善惡ぜんあくの縁に値あうて
ぜんあく
善惡の法をば造り出せるなり、華嚴經に云く「心は工なる画師の種種しゅじゆの
こおん
五陰を造るが如く一切世間の中に法として造らざること無し心の如く仏も
またしか
亦爾なり仏の如く衆生も然なり三界唯一心なり心の外に別の法無し心仏
およ しゅじやうこ さべつ
及び衆生是の三差別無し」已上、無量義經に云く「無相・不相の一法より
むりやう
無量義を出生す」已上、無相・不相の一法とは一切衆生の一念の心これはな

り、文句に釈して云く「生滅無常の相無きが故に無相と云うなり二乗の有
余・無余の二つの涅槃の相を離るが故に不相と云うなり」云云、心の不思議
を以て経論の詮要と為すなり、此の心を悟り知るを名けて如来と云う之を
悟り知つて後は十界は我が身なり我が心なり我が形なり本覺の如来は我が
身心なるが故なり之を知らざる時を名けて無明と為す無明は明かなること
無しと読むなり、我が心の有様を明かに覺らざるなり、之を悟り知る時を
名けて法性と云う、故に無明と法性とは一心の異名なり、名と言とは二
なりと雖も心は只一つ心なり斯れに由つて無明をば断ず可からざるなり夢
の心の無明なるを断ぜば寤の心を失う可きが故に総じて円教の意は一毫
の惑をも断ぜず故に一切の法は皆是れ仏法なりと云うなり、法華經に云く
「如是相本覺の応身如来 如是性本覺の報身如来 如是体本覺の法身如来」此の三如是
より後の七如是 出生して合して十如是と成れるなり、此の十如是は十法界

なり、此の十法界は一人の心より出で八万四千の法門と成るなり、一人を
てほん 一切衆生 平等なることは是の如し、三世の諸仏の総勘文にし
手本として一切衆生 平等なることは是の如し、三世の諸仏の総勘文にし
て御判慥かに印たる正本の文書なり仏の御判とは実相の一印なり印とは判
の異名なり、余の一切の経には実相の印無ければ正本の文書に非ず全く実
の仏無し実の仏無きが故に夢中の文書なり浄土に無きが故なり、十法界は
十なれども十如是一なり譬えば水中の月は無量なりと雖も虚空の月は一
なるが如し、九法界の十如是一なるが故に水中の月の如し
仏法界の十如是は本覺の寤の十如是なれば虚空の月の如し、是の故に仏界
の一つの十如是顯れぬれば九法界の十如是の水中の月の如きも一も闕減
無く同時に皆顯れて体と用と一具にして一体の仏と成る、十法界を互に具足
し平等なる十界の衆生なれば虚空の本月も水中の末月も一人の身中に
具足して闕くること無し故に十如是は本末究竟して等しく差別無し、本と

は衆生の十如是なり末とは諸仏の十如是なり諸仏は衆生の一念の心より
あらわたま 顕れ給えば衆生は是れ本なり諸仏は是れ末なり、然るを經に云く「今・此
さんのが 三界は皆是我が有なり其の中の衆生は悉く是吾が子なり」と已上、仏
じようとう 成道の後に化他の為の故に迹の成道を唱えて生死の夢中にして本覺の寤
と 説き給うなり、智慧を父に譬え愚癡を子に譬えて是くの如く説き給える
なり、衆生は本覺の十如是なりと雖も一念の無明眠りの如く心を覆うて
しように 生死の夢に入つて本覺の理を忘れ髮筋を切る程に過去・現在・未来の三世
こむ の虚夢を見るなり、仏は寤の人の如くなれば生死の夢に入つて衆生を驚
たま かし給える智慧は夢の中にて父母の如く夢の中なる我等は子息の如くなり、
とうり 此の道理を以て悉是吾子と言ひ給うなり、此の理を思い解けば諸仏と我等
ゆえ とは本の故にも父子なり末の故にも父子なり父子の天性は本末是れ同じ、
こよ 斯れに由つて己心と仏心とは異ならずと観ずるが故に生死の夢を覺まして

ほんがく うつつ

そくしんじょうぶつ

そくしんじょうぶつ

かみ

本覚の寤に還えるを即身成仏と云うなり、

即身成仏は今・我が身の上の

ちたい

わずらい

なく

さわ

しゅじょう

かほう

みょうが

みょうが

た

これ

天性地体なり 煩も無く障りも無き衆生の運命なり果報なり冥加なり、

そ おもんみれば

まよい

たと

うつつ

た

これ

た

これ

これ

これ

これ

夫れ以れば夢の時の心を迷いに譬え寤の時の心を悟りに譬う之を以て

いちだいしきょう

かくこ

あとかた

こむ

こむ

こむ

こむ

こむ

こむ

こむ

こむ

一代聖教を覚悟するに跡形も無き虚夢を見て心を苦しめ汗水と成つて驚

わがみ

ふしど

ふしど

ふしど

ふしど

ふしど

ふしど

ふしど

ふしど

ふしど

ふしど

きぬれば我身も家も臥所も一所にて異らず夢の虚と寤の実との二事を目に

た

た

た

た

た

た

た

た

た

た

た

も見・心にも思えども所は只一所なり身も只一身にて二の虚と実との事有

これ

これ

これ

これ

これ

これ

これ

これ

これ

これ

これ

り之を以て知んぬ可し、九界の生死の夢見る我が心も仏界常住の寤の心

かわ

ざいしよ

たが

たが

たが

たが

たが

たが

たが

たが

たが

も異ならず九界生死の夢見る所が仏界常住の寤の所にて変らず心法も

かわ

ざいしよ

たが

たが

たが

たが

たが

たが

たが

たが

たが

替らず在所も差わざれども夢は皆虚事なり寤は皆実事なり止観に云く「昔

そうしゅう

そうしゅう

そうしゅう

そうしゅう

そうしゅう

そうしゅう

そうしゅう

そうしゅう

そうしゅう

そうしゅう

そうしゅう

莊周と云うもの有り夢に胡蝶と成つて一百年を経たり苦は多く楽は少く

あせみず

あせみず

あせみず

あせみず

あせみず

あせみず

あせみず

あせみず

あせみず

あせみず

あせみず

汗水と成つて驚きぬれば胡蝶にも成らず百年をも経ず苦も無く楽も無く皆

そらごと

そらごと

そらごと

そらごと

そらごと

そらごと

そらごと

そらごと

そらごと

そらごと

そらごと

虚事なり皆妄想なり」取意、弘決に云く「無明は夢の蝶の如く三千は百年

の如し（こと）一念実無きは猶蝶（なちよう）に非ざるが如く（こと）三千も亦無きこと年を積むに非る（あらば）
が如し（こと）「已上、此の釈は即身成仏の証拠なり夢に蝶と成る時も莊周は異（ちよう）
ならず寤（うつ）に蝶（ちよう）と成らずと思う時も別の莊周無し、我が身を生死（しやうじ）の凡夫（ほんぶ）な
りと思う時は夢に蝶と成るが如く僻目僻思（ひがめひがおもい）なり、我が身は本覺（ほんがく）の如来（にやらい）な
りと思う時は本の莊周（そうしゅう）なるが如し即身成仏（そくしんじやうぶつ）なり、蝶（ちよう）の身を以て成仏（じやうぶつ）す
と云うに非ざるなり蝶（ちよう）と思うは虚事なれば成仏の言は無し沙汰（さた）の外（ほか）の事
なり、無明（むみよう）は夢の蝶（ちよう）の如しと判ずれば我等が僻思（ひがおもい）は猶昨日の夢の如く性（じやう）
体無き妄想（むそう）なり誰の人か虚夢（こむ）の生死（しやうじ）を信受（しんじゆ）して疑（うたがい）を常住（じやうじゅう）涅槃（ねはん）の仏性（ぶつじやう）に
生ぜんや、止観（しかん）に云く「無明（むみよう）の癡惑（ちわく）本より是れ法性（ほつじやう）なり癡迷（ちめい）を以ての故に（ゆえ）
法性（ほつじやう）変じて無明（むみよう）と作り諸の顛倒（てんどう）の善不善等（ふぜん）を起す寒来りて水を結べば変じ
て堅（けん）氷（びよう）と作るが如く又眠来りて心を変ずれば種種（しんじゆ）の夢有るが如し今当に（いま）
諸の顛倒（てんどう）は即ち是法性（ほつじやう）なり一ならず異ならずと体すべし、顛倒起滅（てんどう）するこ

と旋火輪せんかりんの如ごとしと雖いえども顛倒てんどうの起滅おきめつを信こぜずして唯ただ此この心こころ但是ほつしやうれ法性ほつしやうなりと
信こず、起おきは是これ法性ほつしやうの起おき・滅めつは是これ法性ほつしやうの滅めつなり其それを体たいするに実じつには
起滅おきめつせざるを妄みだりに起滅おきめつすと謂おもえり只ただ妄想むぎそうを指さすに悉ことごとく是これ法性ほつしやうなり、
法性ほつしやうを以もつて法性ほつしやうに繋かけ法性ほつしやうを以もつて法性ほつしやうを念ねんず常じやうに是これ法性ほつしやうなり法性ほつしやう
ならざる時とき無し」已上いじやう、是かくの如ごとく法性ほつしやうならざる時の隙ひまも無なき理りの法性ほつしやう
に夢ちやうの蝶てつの如ごとく無明むみやうに於おいて実有じついうの思しを生おこじて之これに迷まようなり、止觀しがんの九くに
云いく「譬たとえば眠ねんの法ぽう・心こころを覆おほうて一念いちねんの中に無量世むりやうせの事ことを夢ゆめみるが如ごとし
乃至ないし寂滅じやくめつ真如しんじゆに何なんの次位さいゐか有あらん、乃至ないし一切衆生いっせつしゆじやうそく即大涅槃おほはんなり復滅またす可べか
らず何なんの次位さいゐ・高下かうげ・大小だいしやう有あらんや、不生ふしやう不生ふしやうにして不可説ふかせつなれども因縁いんねん
有あるが故ゆゑに亦また説まをくことを得べ可いんねんし十因縁じゆいんねんの法生ための爲ために因いんと作なる虚空こくうに画えがき
方便ほうべんして樹うゑを種こるが如ごとく一切いっさいの位ゐを説いくのみ」已上いじやう、十法界じゆぽうの依報正報えほうしやうほうは
法身ほつしんの仏ぶつ・一いつ・三身さんじんの徳とくなりと知しつて一切いっさいの法ぽうは皆みな是これ仏法ぶつぽうなりと通達つうだつ

し解了する是を名字即と為す名字即の位より即身成仏す故に円頓の教には
次位の次第無し・故に玄義に云く「末代の学者多く経論の方便の断伏を
執して諍闘す水の性の冷かなるが如きも飲まずんば安んぞ知らん」已上、
天台の判に云く「次位の綱目は仁王・瓔珞に依り断伏の高下は大品智論に
依る」已上、仁王・瓔珞・大品・大智度論是の経論は皆法華已前の八教
の経論なり、権教の行は無量劫を経て昇進する次位なれば位の次第を説
けり今法華は八教に超えたる円なれば速疾頓成にして心と仏と衆生と此
の三は我が一念の心中に摂めて心の外に無しと観ずれば下根の行者すら
尚一生の中に妙覺の位に入る・一と多と相即すれば一位に一切の位皆是れ
具足せり故に一生に入るなり、下根すら是くの如し況や中根の者をや何に
況や上根をや実相の外に更に別の法無し実相には次第無きが故に位無し、
総じて一代の聖教は一人の法なれば我が身の本体を能く能く知る可し

これ之を悟るを仏と云い之に迷うは衆生なり此れは華嚴經の文の意なり、弘決
 の六に云く「此の身の中に具さに天地に倣うことを知る頭の円かなるは
 天に象り足の方なるは地に象ると知り身の内の空種なるは即ち是れ虚空な
 り腹の温かなるは春夏に法とり背の剛きは秋冬に法とり四体は四時に
 法とり大節の十二は十二月に法とり小節の三百六十は三百六十日に法とり、
 鼻の息の出入は山沢溪谷の中の風に法とり口の息の出入は虚空の中の風に
 法とり眼は日月に法とり開閉は昼夜に法とり髪は星辰に法とり眉は北斗に
 法とり脈は江河に法とり骨は玉石に法とり皮肉は地土に法とり毛は叢林に
 法とり、五臓は天に在つては五星に法とり地に在つては五岳に法とり陰陽
 に在つては五行に法とり世に在つては五常に法とり内に在つては五神に
 法とり行を修するには五徳に法とり罪を治むるには五刑に法とる謂く墨・
 ☆ぎ・☆ひ・宮・大辟其の數三千の罰有り此を五刑と云う首領には五官と為す五官は下の第

八の巻に博物誌を引くが如し（ことおもえら）謂く苟萌等なり、天に昇つては五雲と曰（い）化して五竜と為る、心を朱雀と為し腎を玄武と為し肝を青竜と為し肺を白虎と為し脾を勾陳と為す」又云く「五音・五明・六藝・皆此れより起る亦復（またまた）當に内治の法を識るべし（し）覺心内に大王と為つては百重の内に居り出でては（い）則ち五官に侍衛せ為る、肺をば司馬と為し肝をば司徒と為し脾をば司空と為し四支をば民子と為し、左をば司命と為し右をば司録と為し人命を主司す、乃至臍をば太一君等と為すと禪門の中に広く其の相を明す」已上、人身（じんしん）の本体委く検すれば是く（かく）の如し、然るに此の金剛不壞の身を以て生滅無常の身なりと思う僻思は譬えば莊周が夢の蝶の如しと釈し給えるなり、五行とは地水火風空なり五大種とも五蘊とも五戒とも五常とも五方とも五智とも五時とも云う、只一物・経經の異説なり内典・外典名目の異名なり、今経に之を開して一切衆生の心中の五仙性五智の如來の種子と説けり

是則ち妙法蓮華經の五字なり、此の五字を以て人身の体を造るなり
本有常住なり本覺の如來なり是を十如是と云う此を唯仏与仏・乃能究尽と
云う、不退の菩薩と極果の二乗と少分も知らざる法門なり然るを円頓の凡夫
は初心より之を知る故に即身成仏するなり金剛不壊の体なり、是を以て
明かに知んぬ可し天崩れば我が身も崩る可し地裂けば我が身も裂く可し地
水火風滅亡せば我が身も亦滅亡すべし、然るに此の五大種は過去・現在・
未来の三世は替ると雖も五大種は替ること無し、正法と像法と末法との三
特殊なりと雖も五大種は是れ一にして盛衰轉變無し、藥草喻品の疏には
円教の理は大地なり円頓の教は空の雨なり亦三藏教・通教・別教の三教
は三草と二木となり、其の故は此の草木は円理の大地より生じて円教の空
の雨に養われて五乗の草木は榮うれども天地に依つて我榮えたりと思知ら
ざるに由るが故に三教の人天・二乗・菩薩をば草木に譬えて不知恩と説か

れたり、故に草木の名を得・今法華に始めて五乗の草木は円理の母と円教の父とを知るなり、一地の所生なれば母の恩を知るが如く一雨の所潤なれば父の恩を知るが如し、藥草喻品の意是くの如くなり。

釈迦如来・五百塵点劫の当初凡夫にて御坐せし時・我が身は地水火風空なりと知しめして即座に悟を開き給いき、後に化他の為に世世番番に出世成道し存在処に八相作仏し王宮に誕生し樹下に成道して始めて仏に成る様を衆生に見知らしめ四十余年に方便教を儲け衆生を誘引す、其の後方便の諸の經教を捨てて正直の妙法蓮華經の五智の如来の種子の理を説き顕して其の中に四十二年の方便の諸經を丸かし納れて一仏乗と丸し人・一の法と名く一人が上の法なり、多人の綺えざる正しき文書を造つて慥かな御判の印あり三世諸仏の手継ぎの文書を釈迦仏より相伝せられし時に三千三百万億那由他の国土の上の虚空の中に満ち塞がれる若干の菩薩達

の頂いたなきを摩なで尽して時を指して末法まつぼう近來きんらいの我等衆生われらしゆじょうの爲ために慥たしかかに此この由よしを説き聞かせて仏おんごんの議おんごんこは状ゆずりじょうを以て末代まつだいの衆生しゆじょうに慥たしかかに授与じゅよす可べしと慇懃おんごんに三度まで同じ御語おんごんこはに説き給たまいしかば若干そこばくの菩薩達ぼさつ・各数ほさつを尽して☆を曲みげ頭こつべを低うなだれ三度まで同じ言ごに各ご・我も劣らじと事請しやうを申もうし給たまいしかば仏おほしめ・心安く思食ほんがくして本覺たまたの都さんぜに還しよぶつえり給せつぼうう、三世さんぜの諸仏しよぶつの説法せつぼうの儀式・作法ただには只みことば同じ御言みことばに時を指したる末代まつだいの議ゆずりじょう状ただいこつなれば只みことば一向みことばに後・五百歳みようほうれんげきようを指して此この妙法蓮華經じようぶつを以て成仏じようぶつす可べき時なりと議ゆずりじょう状ただいこつの面めんに載のせられたる手継しやうもんぎ証文しやうもんなり。

安樂行品あんらくぎようぽんには末法まつぼうに入まづつて近來このころ・初心しよしんの凡夫ほんぶ・法華經ほけきようを修行しゆぎようして成仏じようぶつす可べき様とを説とき置とかれしなり、身あんらくぎようも安樂行あんらくぎようなり口あんらくぎようも安樂行あんらくぎようなり意あも安樂行あんらくぎようなり自行じきようの三業せいがんあんらくも誓願けた安樂けたの化他けたの行けたも同じく後の末世おひに於おて法あの滅ほせんと欲ほする時と云云、此きんらいは近來きんらいの時きんらいなり已上四所やくおうほんに有やくおうほんり藥王品やくおうほんには二

所に説かれ勸発品には三所に説かれたり、皆近來を指して譲り置かれたる
正しき文書を用いずして凡夫の言に付き愚癡の心に任せて三世諸仏の譲り
状に背き奉り永く仏法に背かば三世の諸仏・何に本意無く口惜しく心憂く
歎き悲しみ思食すらん、涅槃經に云く「法に依つて人に依らざれ」と云云、
痛ましいかな悲しいかな末代の学者・仏法を習學して還つて仏法を滅す、
弘決に之を悲しんで曰く「此の円頓を聞いて崇重せざることは良に近代
大乘を習う者の雜濫に由るが故なり況や像末情澆く信心寡薄・円頓の教
・法蔵に溢れ函に盈つれども暫くも思惟せず便ち目を瞑ぐに至る徒らに生
し徒らに死す一に何ぞ痛ましき哉」已上、同四に云く「然も円頓の教は本
と凡夫に被むらしむ若し凡を益するに擬せずんば仏・何ぞ自ら法性の土に
住して法性の身を以て諸の菩薩の為に此の円頓を説かずして何ぞ諸の法身
の菩薩の与に凡身を示し此の三界に現じ給うことを須いんや、乃至一心凡

に在れば即ち修習す可し」已上、所詮己心と仏身と一なりと観ずれば速かに
に仏に成るなり、故に弘決に又云く「一切の諸仏己心は仏心と異ならずと
観し給うに由るが故に仏に成ることを得る」と已上、此れを觀心と云う実
に己心と仏心と一心なりと悟れば臨終を礙わる可き惡業も有らず生死に
留まる可き妄念も有らず、一切の法は皆是れ仏法なりと知りぬれば教訓す
可き善知識も入る可らず思うと思ひ言うと言ひ為すと為し儀いと儀う
行住坐臥の四威儀の所作は皆仏の御心と和合して一体なれば過も無く障り
も無き自在の身と成る此れを自行と云う、此くの如く自在なる自行の行を
捨て跡形も有らざる無明妄想なる僻思の心に住して三世の諸仏の教訓に
背き奉れば冥きより冥きに入り永く仏法に背くこと悲しむ可く悲しむ可し、
只今打ち返えし思い直し悟り返さば即身成仏は我が身の外には無しと知り
ぬ、我が心の鏡と仏の心の鏡とは只一鏡なりと雖も我等は裏に向つて我が

性の理を見ず故に無明と云う、如来は面に向つて我が性の理を見たまえり
故に明と無明とは其の体只一なり鏡は一の鏡なりと雖も向い様に依つて
明味の差別有り鏡に裏有りと雖も面の障りと成らず只向い様に依つて
得失の二つ有り相即融通して一法の二義なり、化他の法門は鏡の裏に向う
が如く自行の觀心は鏡の面に向うが如し化他の時の鏡も自行の時の鏡も我
が心性の鏡は只一にして替ること無し鏡を即身に譬え面に向うをば成仏
に譬え裏に向うをば衆生に譬う鏡に裏有るをば性惡を断ぜざるに譬え裏
に向う時・面の徳無きをば化他の功德に譬うるなり衆生の仏性の顯れざ
るに譬うるなり、自行と化他とは得失の力用なり玄義の一に云く「薩婆悉達
・祖王の弓を彎て満るを名けて力と為す七つの鉄鼓を中り一つの鉄圀山を
貫ぬき地を洞し水輪に徹る如きを名けて用と為す用なり諸の方便教は力用の
微弱なること凡夫の弓箭の如し何となれば昔の縁は化他の二智を稟けて理

を照すこと遍あまねからず信を生ずること深うたがひからず疑を除くこと尽けさず化他けた、今

の縁は自行じぎようの二智うを稟きわけて仏の境界きやうかいを極きわめ法界ほっかいの信しんを起し円妙えんめうの道みちを増し

根本こんぽんの惑ごを断へんじ変易へんにやくの生しやうを損おす、但ただ生身しやうしん及び生身しやうしん得忍とくにんの兩種りやうしゆの

菩薩ぼさつ俱ともに益やくするのみに非あらず法身ほっしんと法身ほっしんの後心ごしんとの兩種りやうしゆの菩薩ぼさつも亦また以もて俱ともに

益やくす化の功こう広大くわうだいに利潤りりん弘深くわうじんなる蓋けだし茲この經きやうの力用りきようなり自行じぎよう自行じぎようと化他けたとの

力用りきよう勝劣しやうれつ分明ふんみやうなること勿論もちろんなり能よく能よく之これを見みよ一代いちだい聖教しやうきやうを鏡きやうに懸けんた

る教相きやうさうなり、極仏境界ききふくきやうかいとは十如是じゆしゆの法門ほうもんなり十界じゆかいに互たがひに具足ぐそくして十界じゆかい

・十如じゆしゆの因果いんが・權實ごんじつの二智じち・二境じきやうは我が身みの中に有あつて一人ひとりも漏もるること

無しと通達つうだつし解了げりやうし仏語ぶつごを悟きわり極きわむるなり起法界信きほうかいしんとは十法界じゆかいを体たいと為なし

十法界じゆかいを心しんと為なし十法界じゆかいを形かたちと為なしたまえりと本覺ほんがくの如來にやらいは我が身みの中に

有ありけりと信しんず増円妙道ぞうえんめうだうとは自行じぎようと化他けたとの二ふたは相即そうそく円融えんゆうの法ほふなれば珠たまと

光くわうと宝ほうとの三德さんとくは只ただ一の珠たまの德とくなるが如ごとし片時かたときも相離あいはなれず仏法ぶつぽうに不足ふそく無し

一生の中に仏に成るべしと慶喜の念を増すなり、断根本惑とは一念無明の眠を覚まして本覺の寤に還れば生死も涅槃も俱に昨日の夢の如く跡形も無きなり、損變易生とは同居土の極樂と方便土の極樂と実報土の極樂との三土に往生せる人彼の土にて菩薩の道を修行して仏に成らんと欲するの間・因は移り果は易りて次第に進み昇り劫数を経て成仏の遠きを待つを變易の生死と云うなり、下位を捨つるを死と云い上位に進むをば生と云うかくのごとくへんにやく是くの如く變易する生死は浄土の苦惱にて有るなり、爰に凡夫の我等が此の穢土に於て法華を修行すれば十界互具・法界一如なれば浄土の菩薩の變易の生は損し仏道の行は増して變易の生死を一生の中に促めて仏道を成ず故に生身及び生身得忍の兩種の菩薩・増道損生するなり、法身の菩薩とは生身を捨てて実報土に居するなり、後心の菩薩とは等覺の菩薩なり但し迹門には生身及び生身得忍の菩薩を利益するなり本門には法身と

後身との菩薩を利益す但し今は迹門を開して本門に摂めて一の妙法と成
す故に凡夫の我等穢土の修行の行の力を以て浄土の十地等覺の菩薩を利益
する行なるが故に化の功広大なり徳用、利潤弘深とは徳用円頓の行者は自行
と化他と一法をも漏さず一念に具足して横に十方法界に遍するが故に弘き
なり豎には三世に亘つて法性の淵底を極むるが故に深きなり、此の經の
自行の力用此くの如し化他の諸經は自行を具せざれば鳥の片翼を以て空を
飛ばざるが如し故に成仏の人も無し今法華經は自行化他の二行を開會して
不足無きが故に鳥の二翼を以て飛ぶに障り無きが如く成仏滞り無し、
薬王品には十喻を以て自行と化他との力用の勝劣を判ぜり第一の譬に
云く諸經は諸水の如く法華は大海の如し云云取意、実に自行の法華經の
大海には化他の諸經の衆水を入れること昼夜に絶えず入ると雖も増ぜず
減ぜず不可思議の徳用を顯す、諸經の衆水は片時の程も法華經の大海を

い
納るること無し自行と化他との勝劣是くの如し一を以て諸を例せよ、上来
ひ
の譬喩は皆仏の所説なり人の語を入れず此の旨を意得れば一代聖教鏡に
か
懸けて陰り無し此の文釈を見て誰の人か迷惑せんや、三世の諸仏の総勘文
あえて
なり敢て人の会釈を引き入る可からず三世諸仏の出世の本懐なり一切衆生
じようぶつ じきどつ
成仏の直道なり、四十二年の化他の経を以て立る所の宗宗は華嚴・真言・
だるま じようど ほつそう さんろん りつしゅう ぐしゃ じようじつ しよしゅう これら みなことごと
達磨・浄土・法相・三論・律宗・俱舍・成実等の諸宗なり此等は皆悉く
ほつけ いぜん はつきよう みな ほうべん ほうべんゆういん
法華より已前の八教の中の教なり皆是方便なり兼・但・対・帯の方便誘引
なり、三世諸仏の説教の次第なり此の次第を糾して法門を談ず若し次第に
たが ぶつぽう あら いちだいきようしゅ しやくかによらい さんぜしよぶつ せつきよう
違わば仏法に非ざるなり、一代教主の釈迦如来も三世諸仏の説教の次第
ただ 糾して一字も違わず我も亦是くの如しとて・経に云く「三世諸仏の説法
の儀式の如く我も今亦是くの如く無分別の法を説く」已上、若し之に違えば
さんぜ しよぶつ ほんい そむ たしゅう そし ほうけしゅう あらそ
永く三世の諸仏の本意に背く他宗の祖師各・我が宗を立て法華宗と諍うこ

と☆りの中の☆り迷いの中の迷いなり。

徴佗学の決に之を破して云く（いは）山王院（さんのおういん）「凡そ八万法蔵其の行相を統ぶるに

四教を出でず頭辺に示すが如し蔵通・別円は即ち声聞・縁覺・菩薩（きやうり）仏乘

なり真言・禪門・華嚴・三論・唯識・律業・成俱の二論等の能所の教理

争でか此の四を過ぎん若し過ぐると言わば豈外邪に非ずや若し出でずと

言わば便ち他の所期を問い得よの果なり、然して後に答に随つて極理を推ね

徴めよ我が四教の行相を以て並べ検えて決定せよ彼の所期の果に於て若し

我と違わば随つて即ち之を詰めよ、且く華嚴の如きは五教に各各に修因向

果有り初・中・後の行一ならず一教一果是れ所期なるべし若し蔵通・別円

の因と果とに非ざれば是れ仏教ならざるのみ、三種の法輪・三時の教等・

中に就て定む可し汝何者を以てか所期の乗と為るや若し仏乘なりと言わ

ば未だ成仏の觀行を見ず若し菩薩と言わば此れ亦即離の中道の異なるな

り、汝正しく何れを取るや設し離の辺を取らば果として成ず可き無し如し
そくぜ 即是を要せば仏に例して之を難ぜよ謬つて真言を誦すとも三觀一心の妙趣
を会せずんば恐くは別人に同じて妙理を証せじ所以に他の所期の極を
逐うて理に準じて理なり徴べし、因明の道理は外道と対す多くは小乘
及び別教に在り若し法華・華嚴・涅槃等の經に望むれば接引門なり権り
に機に對して設けたり終に以て引進するなり邪小の徒をして会して真理に
至らしむるなり所以に論ずる時は四依擊目の志を存して之を執着する
こと莫れ又須らく他の義を將つて自義に對檢して随つて是非を決すべし
執して之を怨むこと莫れ円旨至つて少きのみ」先徳大師の所判是の如し、諸宗
の所立鏡に懸けて陰り無し末代の學者何ぞ之を見ずして妄りに教門を判
ぜんや大綱の三教を能く能く學す可し、頓と漸と円とは三教なり是れ一代
聖教の總の三諦なり頓・漸の二は四十二年の説なり円教の一は八箇年の

説なり合して五十年なり此の外に法無し何に由つてか之に迷わん、衆生

に有る時には此れを三諦と云い仏果を成ずる時には此れを三身と云う一物

の異名なり之を説き顯すを一代聖教と云い之を開会して只一の總の三諦

と成ずる時に成仏す此を開会と云い此を自行と云う、又他宗所立の宗宗

は此の總の三諦を分別して八と為す各各に宗を立つるに依つて円満の理を

闕いて成仏の理無し是の故に余宗には実の仏無きなり故に之を嫌う意は

不足なりと嫌うなり、円教を取つて一切諸法を觀ずること円融・円満して

十五夜の月の如く不足無く満足し究竟すれば善惡をも嫌わず折節をも撰ば

ず静処をも求めず人品をも択ばず一切諸法は皆是れ仏法なりと知りぬれば

諸法を通過す即ち非道を行うとも仏道を成ずるが故なり、天地水火風は是れ

五智の如来なり一切衆生の身心の中に住在して片時も離るること無きが

故に世間と出世と和合して心中に有つて心外には全く別の法無きなり故に

之を聞く時立所に速かに仏果を成ずること滞り無き道理至極なり、總の三諦
とは譬えば珠と光と宝との如し此の三徳有るに由つて如意宝珠と云う故に
總の三諦に譬う若し亦珠の三徳を別別に取り放さば何の用にも叶う可から
ず隔別の方便教の宗宗も亦是くの如し珠をば法身に譬え光をば報身に譬え
宝をば応身に譬う此の總の三徳を分別して宗を立つるを不足と嫌うなり
之を丸じて一と為すを總の三諦と云う、此の總の三諦は三身即一の本覺の
如来なり又寂光をば鏡に譬え同居と方便と実報の三土をば鏡に遷る像に
譬う四土も一土なり三身も一仏なり今は此の三身と四土と和合して仏の一
体の徳なるを寂光の仏と云う寂光の仏を以て円教の仏と為し円教の仏
を以て寤の実仏と為す余の三土の仏は夢中の權仏なり、此れは三世の諸仏
の只同じ語に勘文し給える總の教相なれば人の語も入らず会釈も有らず
若し之に違わば三世の諸仏に背き奉る大罪の人なり天魔・外道なり永く

ぶつぼう 仏法に背くが故に之を秘藏して他人には見せざれ若し秘藏せずして妄りに
これ ひろう 之を披露せば仏法に証理無く二世に冥加無からん謗ずる人出来せば三世の
しよぶつ 諸仏に背くが故に二人乍ら俱に惡道に墮んと識るが故に之を誡むるなり、
よ 能く能く秘藏して深く此の理を証し三世の諸仏の御本意に相叶い二聖二
じゅうらせつ 天・十羅刹の擁護を蒙り滞り無く上・上品の寂光の往生を遂げ須臾の
しやうじ 間に九界生死の夢の中に還り來つて身を十方法界の国土に遍じ心を一切
うじよう 有情の身中に入れて内よりは勧發し外よりは引導し内外相応し因縁和合し
じぎいじんつう 自在神通の慈悲の力を施し広く衆生を利益すること滞り有る可からず。
さんぜ 三世の諸仏は此れを一大事の因縁と思食して世間に出現し給えり一とは
中道なり 法華なり大とは華嚴なり事とは方等・般若なり已上一代の總の三諦なり、之を悟
り知る時・仏果を成ずるが故に出世の本懷成仏の直道なり因とは一切
しゅじよう 衆生の身中に總の三諦有つて常住 不變なり此れを總じて因と云うなり縁

とは三因^{さんいんぶつしょう}仏性は有り^{いへど}と雖も善知識^{ぜんちしき}の縁に値^あわざれば悟^あらず知らず^{あらわ}顕^あれず
善知識^{ぜんちしき}の縁に値^あえば必ず^{あらわ}顕^あるるが故^{ゆえ}に縁と云^いなり、然^{しか}るに今・此^この一と
大と事と因^{いん}と縁との五事^{ごじ}和合^{わごう}して値^あい難^{がた}き善知識^{ぜんちしき}の縁に値^あいて五^ご仏性^{ぶつしょう}を
顕^{あらわ}さんこと何^{なん}の滞^{とど}りか有^あらんや春^{はる}の時来^きりて風雨^{ふうう}の縁に値^あいぬれば無^む心の
草木^{そうもく}も皆悉^{みなことごと}く萌^{しゅつ}え^{しょう} 出^い生^{せい} して華敷^{はなぢ}き栄^{さか}えて世^よに値^あう気色^{きしき}なり秋^{あき}の時^{とき}に至^{いた}り
て月光^{げっこう}の縁に値^あいぬれば草木^{そうもく}皆悉^{みなことごと}く実成^{じつじやう}熟^{じやく}して一切^{いっさい}の有情^{うじやう}を養育^{じやういく}し寿^{じゆ}命^{めい}
を続^{つづ}き長養^{ちやうやう}し終^{つい}に成^{じやう}仏^{ぶつ}の徳用^{とくじよう}を顕^{あらわ}す之^{これ}を疑^{うたが}い^い之^{これ}を信^{しん}ぜざる人^あ有^ある可^べし
や無^む心の草木^{そうもく}すら猶^{なほ}以^{もつ}て是^{かく}の如^{ごと}し何^{いか}に況^{いわん}や人倫^{じんりん}に於^{おい}てをや、我^{われ}等^らは迷^{まよ}の
凡^{ぼん}夫^ぶなりと雖^{いへど}も一^{いち}分^{ぶん}の心^{しん}も有^あり解^{げん}も有^あり善惡^{ぜんあく}も分別^{ぶんべつ}し折節^{おりふし}を思^し知^ちる然^{しか}るに
宿縁^{しゆくえん}に催^{うなが}されて生^{ぶつ}を仏法^{ぶつぽう}流布^{りゅうふ}の国土^{こくど}に受^うけたり善知識^{ぜんちしき}の縁に値^あいなば因果^{いんが}
を分別^{ぶんべつ}して成^{じやう}仏^{ぶつ}す可^べき身^みを以^{もつ}て善知識^{ぜんちしき}に値^あうと雖^{いへど}も猶^{なほ}草木^{そうもく}にも劣^おつて身^み中^{しんちゆう}
の三^{さん}因^{いん}仏性^{ぶつしょう}を顕^{あらわ}さずして默^{もく}止^しせる謂^{いわ}れ有^ある可^べきや、此^この度^ど必^{かならず}ず必^{かならず}ず生^{しやう}死^じの

夢を覚まし本覺の寤に還つて生死の繼を切る可し今より已後は夢中の
法門を心に懸く可からざるなり、三世の諸仏と一心と和合して妙法蓮華經
を修行し障り無く開悟す可し自行と化他との二教の差別は鏡に懸けて陰り
無し、三世の諸仏の勸文是くの如し秘す可し秘す可し。

弘安二年己卯十月 日

日蓮 花押

◆七八 諫曉八幡抄 576P

夫れ馬は一歳二歳の時は設いつがいのび・まろすねに・すねほそく・う
でのびて候へども病あるべしとも見え、而れども七八歳なんどになりて
身もこへ血ふとく上かち下をくれ候へば小船に大石をつめるがごとく小き
木に大なる菓のなれるがごとく多くのやまい出来して人の用にもあわず
力もよわく寿もみじかし、天神等も又かくのごとし成劫の始には先生の
果報いみじき衆生生れ来る上・人の惡も候はねば身の光もあざやかに心も

いさぎよく日月のごとくあざやかに師子象のいさみをなして候いし程に
成劫やうやくすぎて住劫になるままに前の天神等は年かさなりて下旬の月
のごとし今生れ来れる天神は果報衰減し下劣の衆生多分は出来す、然る
間・一天に三災やうやくをこり四海に七難粗出現せしかば一切衆生始め
て苦と楽とを・をもい知る。

此の時・仏出現し給いて仏教と申す薬を天と人と神とにあたへ給いし
かば燈に油をそへ老人に杖をあたへたるがごとく天神等還つて威光をま
し勢力を増長せし事・成劫のごとし仏教に又五味のあぢわひ分れたり
在世の衆生は成劫ほどこそなかりしかども果報いたう・をとろへぬ衆生
なれば五味の中に何の味をもなめて威光勢力をもまし候き、仏滅度の後
正像二千年過て末法になりぬれば本のも神も阿修羅大竜等も年もかさな
りて身もつかれ心もよはくなり又今生れ来る天人・修羅等は・或は小果報

ある
・或は悪天人等なり、小乗・権大乘等の乳・酪・生蘇・熟蘇味を服すれ
ども老人に☆食をあたへ高人に麦飯等を奉るがごとし、而るを当世此を弁え
ざる学人等古にならいて日本国の一切の諸神等の御前にして阿含経方等・
般若・華嚴・大日経等を法樂し俱舍・成実・律・法相・三論華嚴・浄土
・禅等の僧を護持の僧とし給える唯老人に☆食を与へ小兒に強飯をくくめ
るがごとし、何に況や今の小乗経と小乗宗と大乘経と大乘宗とは
いにしえだいにきうしゅう古の小大乘の経宗にはあらず、天竺より仏法漢土へわたりし時小大の
きようぎようきんげん
経経は金言に私言まじはれり、宗宗は又天竺・漢土の論師・人師・或は
小を大とあらそい・或は大を小という・或は小に大をかきまじへ・或は
おおい
大に小を入れ・或は先きの経を後とあらそい・或は後を先とし・或は先を
後につけ・或は顕経を密経といひ密経を顕経という譬へば乳に水を入
れ薬に毒を加うるがごとし、涅槃経に仏・未来を記して云く「爾の時に

諸の賊・醍醐を以ての故に之に加うるに水を以てす・水を以てする事多き

が故に乳酪醍醐一切俱に失す」等云云、阿含・小乗経は乳味のごとし

方等・大集経・阿弥陀経・深密経・楞伽経・大日経等は酪味のごとし、

般若経等は生蘇味の如く華嚴経等は熟蘇味の如く法華・涅槃経等は醍醐味

の如し、設い小乗経の乳味なりとも仏説の如くならば争でか一分の薬と

ならざるべき、況や諸の大乗経をや何に況や法華経をや。

然るに月氏より漢土に経を渡せる訳人は一百八十七人なり其の中に羅什

三蔵一人を除きて前後の一百八十六人は純乳に水を加へ薬に入たる

人人なり、此の理を弁へざる一切の人師・末学等設い一切経を誦誦し十二

分経を胸に浮べたる様なりとも生死を離る事かたし又現在に一分のしるし

ある様なりとも天地の知る程の析とは成る可からず魔王・魔民等守護を加

えて法に験の有様なりとも終には其の身も檀那も安穩なる可からず譬ば

旧医の薬に毒を雜まじへて・さしをけるを旧医の弟子等でし・或あるは盗み取り・或あるは自然じねんに取りて人の病を治せんが如ごとし・いかでか安穩あんのんなるべき、当世日本とうせにほんこくの眞言等の七宗並に浄土・禪宗等の諸学者等、弘法・慈覺・智証等のしんこんほけきようさいだいいち だいご ほんけ 法華經最第一の醍醐に法華第二・第三等の私の水を入れたるを知らず仏説ふつせつの如くならば・いかでか一切俱失の大科を脱れん、大日經は法華經よごとの如くならん・いかでか一切俱失の大科を脱れん、大日經は法華經よだいにか まぬか だいにちきよう ほけきようり劣る事七重なり而るを弘法等・顛倒して大日經最第一と定めて日本にほんこくに弘通せるは法華經一分の乳に大日經七分の水を入れたるなり水にも非ず乳うぐつう ほけきよういちぶん だいにちきようにも非ず大日經にも非ず法華經にも非ず而も法華經に似て大日經に似たあら だいにちきよう あら ほけきようり大覺世尊此の事を涅槃經に記して云く「我が滅後に於て正法將に滅尽せだいかくせそん ねはんぎよう しる いわ めつご おい しょうほうまさ めつじんんと欲す爾の時に多く悪を行ずる比丘有らん、乃至牧牛女の如く乳を売るほ そ びく ないしむくごに多利を貪らんと欲するを為ての故に二分の水を加う、乃至此の乳・水多もつ ゆえ まさ るふ ないしし、爾の時に是の經閻浮提に於て当に広く流布すべし、是の時に當に諸のそ こ えんぶだい おい まさ るふ こ まさ もろもろ

悪比丘あくびく有こて是この経きやうを鈔とり・略りやくし分ぶんて多た分ぶんと作なし能よく正しやう法ほうの香しき味かうを滅めすべし、是この諸もろもろの悪人あくにん復また是かくの如ごとき經きやう典てんを讀どく誦じゆすと雖いえども如にやう來らいの深じん密みつの要よう義ぎを滅めつ除じよせん、乃ない至し前とりを鈔とりて後つに著つけ後をを鈔とりて前つに著つけ前ぜん後ごを中ちゆうに著つけ中ちゆうを前ぜん後ごに著つけん当まさに知しるべし是かくの如ごとき諸もろもろの悪比丘あくびくは是これ魔まの伴はん侶りよなり」等云。

今・日本国にほんこくを案あんずるに代始すでまりて已すでに久くしく成なるりぬ旧ふるき守護しゆごの善神ぜんじんは定さだめて福ふくも尽つき寿しうも滅めつじ威光いこう勢せい力りきも衰おとろえぬらん、仏法ぶつぽうの味あじをなめてこそ威光いこう勢せい力りきも増長ぞうちやうすべきに仏法ぶつぽうの味あじは皆みなたがひぬ齡やわいはたけぬ争いかでか国こくの災さいを払はらい氏子ししこをも守護しゆごすべき、其その上かう謗ぼう法ほうの国こくにて候こうを氏神しじんなればとて大科だいかをいましめずして守護しゆごし候こうへば仏前ぶつぜんの起請きしやうを毀そしりる神たましいなり、しかれども氏子ししこなれば愛子とがの失うしなのやうに・すてずして守護しゆごし給たまひいぬる程ほどに法華經ほけきやうの行者ぎやうじやをあだむ国主人こくしゆじん人等たいじを対治たいじを加くわえずして守護しゆごする失うしなに依よりて梵釈ぼんしやく等のためには

八幡等は罰せられ給いぬるか此事は一大事なり秘すべし秘すべし、有る經
の中に仏・此の世界と他方の世界との梵釈・日月・四天・竜神等を集め
て我が正像末の持戒・破戒・無戒等の弟子等を第六天の魔王・惡鬼神等が
人王・人民等の身に入りて悩乱せんを見乍ら聞き乍ら治罰せずして須臾も
すぐすならば必ず梵釈等の使をして四天王に仰せつけて治罰を加うべし、
若し氏神・治罰を加えずば梵釈・四天等も守護神に治罰を加うべし梵釈
又かくのごとし、梵釈等は必ず此の世界の梵釈・日月・四天等を治罰す
べし、若し然らずんば三世の諸仏の出世に漏れ永く梵釈等の位を失いて
無間・大城に沈むべしと釈迦・多宝・十方の諸仏の御前にして起請を書
き置れたり。

今之を案ずるに日本小国の王となり神となり給うは小乗には三賢の
菩薩・大乘には十信・法華には名字五品の菩薩なり、何なる氏神有りて

むじん くだく 無限の功徳を修すとも法華經の名字を聞かず一念三千の觀法を守護せずん
ば退位の菩薩と成りて永く無間・大城に沈み候べし、故に扶桑記に云く「又
でんぎようだいし はちまんだいぼさつ おんため じんぐうじ おい 必ずか ほけきよう こう すなわ
傳教大師・八幡大菩薩の奉為に神宮寺に於て、自ら法華經を講ず、乃ち聞
おわり たくせん ほうせい さいねん へ わじよう
き竟て大神託宣すらく我法音を聞かずして久しく歳年を歴る幸い和尚に
ちぐう せいきよう かね かね しゅじゅ くだく しゅう
値遇して正教を聞くことを得たり兼て我がために種種の功徳を修す至誠
ずいき なん 随喜す何ぞ徳を謝するに足らん、兼て我が所持の法衣有りと即ち託宣の主
みずか ほうでん けさ せさ わじよう
・自ら宝殿を開いて手ら紫の袈裟一つ紫の衣一を捧げ和尚に奉上す大悲力
ゆえ のうじゅ たま こ ねぎ・はふりとう いわ
の故に幸に納受を垂れ給えと、是の時に禰宜・祝等各歎異して云く元来
かくのこと 是の如きの奇事を見ず聞かざるかな、此の大神施し給う所の法衣今山王院
に在るなり」云云、今謂く八幡は人王第十六代・応神天皇なり其の時は仏經
無かりしかば此に袈裟衣有るべからず、人王第三十代欽明天皇の治三十二
年に神と顕れ給い其れより已来弘仁五年までは禰宜・祝等次第に宝殿を
あらわ たまい そ このかたこうにん ねぎ・はふりとう しだい ほうでん

守護す、何の王の時・此の袈裟を納めけると意へし而して禰宜等云く元来
見ず聞かず等云、此の大菩薩いかにしてか此の袈裟衣は持ち給いけるぞ
不思議なり不思議なり。

又欽明より已来弘仁五年に至るまでは王は二十二代・仏法は二百六十余

年なり、其の間に三論・成実・法相・俱舍・華嚴・律宗・禪宗等の六宗

・七宗・日本国に渡りて八幡大菩薩の御前にして経を講ずる人人・其の数

を知らず、又法華経を讀誦する人も争でか無からん、又八幡大菩薩の御宝殿

の傍には神宮寺と号して法華経等の一切経を講ずる堂・大師より已前には

あり、其の時定めて仏法を聴聞し給いぬらん何ぞ今始めて我法音を聞かず

して久しく年歳を歴る等と託宣し給ふべきや、幾くの人人か法華経一切経

を講じ給いけるに何ぞ此の御袈裟衣をば進らせ給はざりけるやらん、当に

知るべし伝教大師已前は法華経の文字のみ読みけれども其の義はいまだ

あらわ
顯れざりけるか、去ぬる延暦二十年十一月中旬の比・伝教大師比叡山
にして南都・七大寺の六宗の碩徳十余人を奉請して法華經を講じ給ひし
に、弘世・真綱等の二人の臣下此の法門を聴聞してなげいて云く「一乗
の権滯を慨き三諦の未顯を悲しむ」又云く「長幼三有の結を摧破し猶未だ
歴劫の轍を改めず」等云云、其の後延暦二十一年正月十九日に高雄寺に
主上・行幸ならせ給いて六宗の碩徳と伝教大師とを召し合はせられて宗
の勝劣を聞き食ししに南都の十四人皆口を閉ぢて鼻のごとくす、後に重ね
て怠状を捧げたり、其の状に云く「聖徳の弘化より以降た今に二百余年の
間講ずる所の經論其の数多し、彼れ此れ理を争ひ其の疑未だ解けず而も
比の最妙の円宗猶未だ闡揚せず」等云云、比れをもつて思うに伝教大師
已前には法華經の御心いまだ顯れざりけるか、八幡大菩薩の見ず聞かずと
御託宣有りけるは指なり指なり白なり白なり。

法華經第四に云く「我が滅度の後に能く竊に一人の爲にも法華經を説か
ん、当に知るべし是の人は則ち如来の使なり乃至如来則ち衣を以て之れを覆
い給うべし」等云云、当来の弥勒仏は法華經を説き給うべきゆへに釈迦仏
は大迦葉尊者を御使として衣を送り給ふ、又伝教大師は仏の御使として
法華經を説き給うゆへに八幡大菩薩を使として衣を送り給うか、又此の大
菩薩は伝教大師已前には加水の法華經を服してをはしましけれども先生
の善根に依つて大王と生れ給いぬ、其の善根の余慶・神と顕れて此の国を
守護し給いけるほどに今は先生の福の余慶も尽きぬ、正法の味も失せぬ
謗法の者等・国中に充滿して年久しけれども日本国の衆生に久く仰がれ
てなじみせし大科あれども捨てがたくをぼしめし老人の不幸の子を捨てざ
るが如くして天のせめに合い給いぬるか、又此の袈裟は法華經第一と説
かん人こそ・かけまいらせ給うべきに伝教大師の後は第一の座主・義真

わじょう 和尚・法華最第一の人なればかけさせ給う事其の謂あり、第二の座主
えんちようだいし 円澄大師は伝教大師の御弟子なれども又弘法大師の弟子なり・すこし
ほうほう 謗法にいたり、此の袈裟の人には有らず、第三の座主・円仁慈覚大師は名
でんぎようだいし 第二の人なり、此の袈裟は一向にかけがたし、設いかけたりとも法華經の
おんでし 行者にはあらず、其の上又当世の天台座主は一向・真言の座主なり、又
ぎようじや 当世の八幡の別当は・或は園城寺の長吏・或は東寺の末流なり、此れ等は
はちまん 遠くは釈迦・多宝・十方の諸仏の大怨敵・近くは伝教大師の讐敵なり、
しゃか たほう 譬へば提婆達多が大覺世尊の御袈裟をかけたるがごとし、又獵師が仏衣を
たい 被て師子の皮をはぎしがごとし、当世叡山の座主は伝教大師の八幡大菩薩
しし より給て候し御袈裟をかけて法華經の所領を奪ひ取りて真言の領となせ
けさ たり、譬へば阿闍世王の提婆達多を師とせしがごとし。

而るを大菩薩の此の袈裟をはぎかへし給わざるは第一の大科なり、此の大菩薩は法華經の御座にして行者を守護すべき由の起請をかきながら数年が間・法華經の大怨敵を治罰せざる事不思議なる上、たまたま法華經の行者の出現せるを来りて守護こそなさざらめ、我が前にして、国主等の怨する事・犬の猿をかみ蛇の蝦をのみ鷹の雉を師子王の兎を殺すがごとくするを一度もいましめず、設いいましむるやうなれども・いつわりをろかなるゆへに梵釈・日月・四天等のせめを八幡大菩薩かほり給いぬるにや、例せば欽明天皇・敏達天皇・用明天皇已上三代の大王・物部大連・守屋等がすすめに依りて宣旨を下して金銅の釈尊を焼き奉り堂に火を放ち僧尼をせめしかば天より火下て内裏をやく、其の上・日本国の万民とがなくなして悪瘡をやみ死ぬること大半に過ぎぬ、結句三代の大王・二人の大臣・其の外多くの王子・公卿等・或は悪瘡・或は合戦にほろび給いしがごとし、

其の時・日本国の百八十の神の栖給いし宝殿皆焼け失せぬ釈迦仏に敵する
者を守護し給いし大科なり、又園城寺は叡山已前の寺なれども智証大師の
真言を伝えて今に長吏とがうす叡山の末寺たる事疑いなし、而るに山門
の得分たる大乘の戒壇を奪い取りて園城寺に立てて叡山に随わじと云云、
譬へば小臣が大王に敵し子が親に不幸なるがごとし、かかる悪逆の寺を
新羅大明神みだれがわしく守護するゆへに度度・山門に宝殿を焼る、此の
ごとし、今八幡大菩薩は法華經の大怨敵を守護して天火に焼かれ給いぬる
か、例せば秦の始皇の先祖・襄王と申せし王・神となりて始皇等を守護し
給いし程に秦の始皇大慢をなして三皇・五帝の墳典をやき三聖の孝經等を
失いしかば沛公と申す人剣をもつて大蛇を切り死ぬ秦皇の氏神是なり、
其の後秦の代ほどなくほろび候いぬ此れも又かくのごとし、安芸の国いつ
く島の大明神は平家の氏神なり平家を・をこらせし失に伊勢太神宮・八幡

等に神うち打ち失われて其の後平家ほどなくほろび候いぬ此れも又かくのごとし。

法華經の第四に云く「ほけきよう いわ 仏滅度の後能く其の義を解せんは是れ諸の天人・せけん まなこ 世間の眼なり」等云云、にちれん ほけきよう かんじん だいもく にほんこく ぐつう 日蓮が法華經の肝心たる題目を日本国に弘通し候は諸天・世間の眼にあらずや、しよてん せけん まなこ 眼には五あり所謂・肉眼・天眼・慧眼法眼・ぶつげん 仏眼なり、此の五眼は法華經よりほけきよう しゅつしやう 出生せさせ給う故に普賢經に云く「此の方等經は是れ諸仏の眼なり諸仏是れに因て五眼を具する事を得給う」等云云、此の方等經と申すは法華經を申すなり、又此の經に云く「人天の福田・おうぐ にじよう ほさつ 応供の中の最なり」等云云、此等の經文のごとくば妙法蓮華經は人天の眼・二乗・菩薩の眼諸仏の御眼なり、而るに法華經の行者を怨む人は人天の眼をくじる者なり、其の人を罰せざる守護神は一切の人天の眼をくじる者を結構し給う神なり、而るに弘法・慈覺・智証等は正しく書を作

りて法華經を無明の辺域にして明の分位に非ず後に望れば戲論と作る力者
に及ばず履者とりにとらずとかきつけて四百余年、日本国の上一人より下
万民にいたるまで法華經をあなづらせ一切衆生の眼をくじる者を守護し
給うはあに八幡大菩薩の結構にあらずや、去ぬる弘長と又去ぬる文永八年
九月の十二日に日蓮一分の失なくして南無妙法蓮華經と申す大科に国主の
はからいとして八幡大菩薩の御前にひきはらせて一国の謗法の者どもにわ
らわせ給いしはあに八幡大菩薩の大科にあらずや、其のいましめと・をば
しきは・ただどうちばかりなり、日本国の賢王たりし上・第一・第二の
御神なれば八幡に勝れたる神はよもをはせじ、又偏頗はよも有らじとは・
をもへども一切經並に法華經のをきてのごときんば・この神は大科の神な
り、日本六十六箇国二つの島一万一千三十七の寺寺の仏は皆・或は画像・或
は木像・或は真言已前の寺もあり・或は已後の寺もあり、此等の仏は皆

法華經より 出生 せり、法華經をもつて 眼とすべし、所謂「此の方等經は
是れ諸仏の眼なり」等云云、妙樂云く「然も此の經は常住 仏性を以て
咽喉と爲し一乗の妙行を以て眼目と爲し再生敗種を以て心腑と爲し
顯本遠寿を以て其の命と爲す」等云云、而るを日本國の習い真言師にもか
ぎらず 諸宗一同に仏眼の印をもつて開眼し大日の真言をもつて五智を具す
と云云此等は法華經にして仏になれる衆生を真言の權經にて供養すれば
還つて仏を死し眼をくじり 壽命を断ち喉をさきなんどする人人なり、
提婆が教主釈尊の身より血を出し阿闍世王の彼の人を師として現罰に
値いしにいかでか・をとり候べき、八幡大菩薩は応神天皇・小國の王なり
阿闍世王は摩竭國の大王なり天と人と王と民との勝劣なり、而れども
阿闍世王・猶釈迦仏に敵をなして惡瘡身に付き給いぬ、八幡大菩薩いかで
か其の科を脱るべき、去ぬる文永十一年に大蒙古よりよせて日本國の兵を

多くほろぼすのみならず八幡はちまんの宮殿すでにやかれぬ、其そのの時何ぞ彼の国の兵を罰し給たまはざるや、まさに知るべし彼の国の大王だいおうは此の国の神に勝すぐれたる事あきらけし、襄王じやおうと申せし神は漢土かんどの第一だいいちの神なれども沛公はいこうが利劔に切られ給たまいぬ。

此れをもつてをもうべし道鏡法師・称徳天皇の心よせと成りて国王こくおうと成らんとせし時清丸きよまる・八幡大菩薩はちまんだいぼさつに祈請きしょうせし時八幡の御託宣おたくせんに云く「夫れ神そに大小好悪有ないし乃至彼は衆く我は寡すくなし邪は強く正は弱し乃ち当に仏力の加護かごを仰て為めに皇緒こうちよを紹しょう隆すべし」等云云、当に知るべし八幡大菩薩はちまんだいぼさつは正法を力として王法を守護しゆごし給たまいけるなり、叡山えいざん・東寺等の真言しんごんの邪法じゃほうをもつて権の大夫殿を調伏たうふくせし程に権の大夫殿はかたせ給たまい隠岐おきの法皇はまけさせ給たまいぬ還著げんちゃく於本人此れなり。

今又日本国・一万一千三十七の寺並に三千一百三十二社の神は国家安穩こっかあんのん
にほんこく

のために・あがめられて候、而るに其の寺寺の別当等・其の社社の神主等はみなみな・あがむるところの本尊と神との御心に相違せり、彼れ彼れの仏と神とは其の身異体なれども其の心同心に法華經の守護神なり、別当と社主等は・或は眞言師・或は念仏者・或は禪僧・或は律僧なり皆一同にはちまん八幡等の御かたきなり、謗法不孝の者を守護し給いて正法の者を・或は流罪・或は死罪等に行なわするゆへに天のせめを被り給いぬるなり、我が弟子等の内・謗法の余慶有る者の思いていわく此の御房は八幡をかたきとすと云云、これいまだ道理有りて法の成就せぬには本尊をせむるという事を存知せざる者の思いなり付法蔵經と申す經に大迦葉尊者の因縁を説いて云く「時に摩竭國に婆羅門有り尼俱律陀と名づく過去の世に於て久しく勝業を修し、多く財宝に饒かにして巨富無量なり摩竭王に比するに千倍勝れりと爲す、財宝饒かなりと雖も子息有る事無し自ら念わく老朽して死の時

將に至らんとす庫藏の諸物委付する所無し、其の舎の側に於て樹林神有り
彼の婆羅門子を求むるが為の故に即ち往て祈請す年歳を経歴すれども微
庶無し、時に尼俱律陀大に瞋忿を生じて樹神に語て曰く、我汝に事てより
来已に年歳を経れども都て一の福応を垂るるを見ず今当に七日至心に汝に
事うべし、若し復驗無ければ必ず相焼剪せん、樹神聞き已て甚だ愁怖
を懷き四天王に向つて具さに斯の事を陳ぶ、是に於て四王往て帝釈に白す
・帝釈閻浮提の内を觀察するに・福德の人の彼の子と為るに堪ゆる無し
即ち梵王に詣で広く上の事を宣ぶ、爾の時に梵王・天眼を以て觀見するに
梵天の當に命終に臨む有り而て之に告げて曰く汝若し神を降さば宜しく
當に彼の閻浮提界の婆羅門の家に生ずべし、梵天對て曰く婆羅門の法惡邪見
多し我今其子と為る事能ざるなり、梵王復言く彼の婆羅門大威徳有り閻浮提
の人往て生ずるに堪ゆる莫し汝必ず彼に生ぜば吾れ相護りて終に汝をし

て邪見じゃけんに入らしめざらん、梵天ぼんてん曰く諾・敬うやまいして聖教しょうきょうを承うけん、是おいに於たいて帝釈たいしゃく
・即そく樹神じくしんに向つて斯この如ごとき事を説く樹神かんき歡喜しりぞけして尋そて其もうの家ばらもんに詣もて婆羅門ばらもん
に語かたらく汝なんじ今復恨またうらみを我われれに起おこす事ことなかれ卻しりぞけて後七日また当まさに卿きやうが願ねがひを満みすべ
し、七日いたつに至いたて已すでに婦身おほむ事こと有あるを覺おぼえ十月まんぞくを満み足ぞくして一男兒なんにを生なめり乃至ないし
今かしようの迦葉これ是なりなり」云云、「時ときに応おこじて尼俱律陀にくりだ大おおに瞋しん忿ふんを生はず」等云云、
常じょうのごときんば氏神しんに向むかひて大瞋しん恚にを生はぜん者は今生こんじやうには身みをほろぼし
後世ごしやうには惡道あくどうに墮おつべし然しかりと雖いえども尼俱律陀にくりだ長者ちやうじや・氏神しんに向むかひて大惡あく口くち大おほ
瞋しん恚にを生はじて大願じやうがんを成就じやうじゆし賢子けんしをまうけ給たまいぬ、当まさに知しるべし瞋しん恚には善惡ぜんあく
に通とおずる者ものなり。

今日蓮いまにちれんは去いぬる建長けんちやう五年癸丑みづのえ四月二十八日しがつにじはちにちより今年弘安こうあん三年太歲庚辰たうさいかうしん十二
月つきにいたるまで二十八年にじはちとせが間また又他事たじなし、只妙法蓮華經ただみよほうれんげきやうの七字五字ごじを
日本國にほんこくの一切衆生いつさいしゆじやうの口くちに入れんとはげむ計はかりなり、此これ即母そくの赤子せきしの口くちに

乳を入れんとはげむ慈悲なり此れ又時の当らざるにあらず已に仏記の五五
百歳に当れり、天台・伝教の御時は時いまだ来らざりしかども一分の機あ
る故に少分流布せり、何に況や今は已に時いたりぬ設とひ機なくして水火
をなすともいかでか弘通せざらむ、只不輕のごとく大難には値うとも流布
せん事疑なかるべきに真言・禪・念仏等の讒奏に依りて無智の国主等・
留難をなす此を対治すべき氏神八幡大菩薩・彼等の大科を治せざるゆへに
日蓮の氏神を諫曉するは道理に背くべしや、尼俱律陀長者が樹神をいさ
むるに・異ならず、蘇悉地經に云く「本尊を治罰する事鬼魅を治するが如し」
等云云、文の心は經文のごとく所願を成ぜんがために数年が間・法を修行
するに成就せざれば本尊を・或はしほり・或は打ちなんどせよととかれて
候、相応和尚の不動明王をしほりけるは此の經文を見たりけるか、此は
他事にはにるべからず日本国の一切の善人は・或は戒を持ち・或は布施を

行じ・或は父母等の孝養のために寺塔を建立し・或は成仏得道の爲に
妻子をやしなうべき財を止めて諸僧に供養をなし候に、諸僧謗法の者たる
ゆへに謀反の者を知ずしてやどしたるがごとく不孝の者に契をなせるがご
とく今生には災難を招き後生も惡道に堕ち候べきを扶けんとする身なり
しか日本国の守護の善神等・彼等にくみして正法の敵となるゆへに此を
せむるは經文のごとし道理に任せたり、我が弟子等が愚案にをもわく我が
師は法華經を弘通し給うとてひろまらざる上・大難の來れるは眞言は國を
ほろぼす念仏は無間地獄・禪は天魔の所為・律僧は國賊との給うゆへなり、
例せば道理有る問注に惡口のまじわれるがごとしと云云、日蓮我が弟子に
反詰して云く汝若し爾らば我が問を答えよ一切の眞言師・一切の念仏者・
一切の禪宗等に向て南無妙法蓮華經と唱え給えと勸進せば彼等の云く我
が弘法大師は法華經と釈迦仏とを戲論無明の辺域・力者・はき物とり

および・かかせ給いて候、物の用にあわぬ法華經を讀誦せんよりも其の
口に我が小呪を一反も見つべし一切の在家の者の云く善導和尚は法華經を
せんちゅうむいつ ほうねんしょうにん しゃへいかくほう どうしゆくぜん みういちにんとくしゃ
ば千中無一・法然上人は捨閑閣抛・道綽禪師は未有一人得者と定めさせ
たま なんじ なむ みようほうれんげきよう ねんぶつ さわ われたたとい
給へり汝がすすむる南無妙法蓮華經は我が念仏の障りなり我等設い惡を
つくるともよも唱えじ一切の禪宗の云く我が宗は教外別伝と申して
いっさいきよう さいじよう ほうもん 一切經は指のごとし禪は月のごと
一切經の外に伝へたる最上の法門なり一切經は指のごとし禪は月のごと
てんだい ぐにん し天台等の愚人は指をまほつて月を亡いたり法華經は指なり禪は月なり月
を見て後は指は何のせんか有るべきなどと申す、かくのごとく申さん時は
いかにとしてか南無妙法蓮華經の良藥をば彼れ等が口には入るべき仏は
しば あこんきようと たいい ぎようじゃ ほけきよう
且らく阿含經を説き給いて後・彼の行者を法華經へ入れんと・たばかり
給いしに一切の声聞等・只阿含經に著して法華經へ入らざりしをば・いか
たま いっさい しょうもん ただあこんきよう じゃく ほけきよう
やうにか・たばかり給いし、此をば仏説いて云く「設ひ五逆罪は造ると

も五逆ごぎやくの者をば供養くようすとも罪つみは仏ぶつの種くさねとはなるとも彼れ等ぜんこんが善根ぜんこんは仏種ぶつしゆと
ならじ」とこそ説かせ給しか、小乗しょうじよう・大乘だいじようはかわれども同じく仏説ぶつせつなり
大が小を破はして小を大となすと大を破はして法華經ほけきように入ると大小だいしやうは異ことなれど
も法華經ほけきようへ入れんと思ういひ志こころざしは是こゝろ一つなり、されば無量義經むりやうぎきように大を破はして
云く未顕真実みけんしんじつと法華經ほけきように云く「此の事は為さだめて不可ふかなり」等云云、仏みずか、自ら云く
「我世いに出いでて華嚴けこん・般若等はんになを説ときて法華經ほけきようをとかずして入涅槃ねはんせば愛子みずか
に財を・をしみ病者に良藥りやうやくをあたへずして死にたるがごとし仏みずか、自ら地獄じごく
に墮おつべし」と云云、不可ふかと申もうすは地獄じごくの名なり況いや法華經ほけきようの後・爾前にぜんの
經じやくに著ほけきようして法華經ほけきようへうつらざる者は大王だいおうに民の従したがはざるがごとし親まみに子
の見ほけきようへざるがごとし、設たとい法華經ほけきようを破はせざれども爾前にぜんの經經ききようをほむるは
法華經ほけきようをそしるに当たれり妙樂みやうらく云く「若もし昔しやうたんを称しょう歎たんせば豈あにに今そしりを毀こるに
あらずや」文あら、又云く「發心ほつしんせんと欲ほすと雖いえども偏円へんえんを簡えらばず誓ちかの境さとを解とらざ

れば未来法を聞くと何ぞ能く謗を免れん」等云云、真言の善無畏・金剛智
・不空・弘法・慈覚・智証等は設といは法華經を大日經に相對して勝劣を
論ぜずして大日經を弘通すとも滅後に生まれたる三藏・人師なれば謗法は
よも免れ候はじ、何に況や善無畏等の三三藏は法華經は略説・大日經は広
説と同じて而かも法華經の行者を大日經えすかし入れ、弘法等の三大師
は法華經の名をかきあげて戲論などかかれて候大科を明らかにすして此の
四百余年一切衆生を皆謗法の者となせり、例せば大莊嚴仏の末の四比丘が
六百萬億那由他の人を皆無間地獄に墮せると、師子音王仏の末の勝意比丘
が無量無辺の持戒の比丘・比丘尼うばそくうばいを皆阿鼻大城に導きし
と、今の三大師の教化に隨いて日本国四十九億九萬四千八百二十八人・或
は云く日本紀に行基の人数に云く男女四十五億八萬九千六百五十九人云云
の一切衆生又四十九億等の人人四百余年に死して無間地獄に墮ちぬれば

其の後他方世界よりは生れて又死して無間地獄に墮ちぬ、かくのごとく墮つ
る者は大地微塵よりも多し此れ皆三大師の科ぞかし、此れを日蓮此に大に
見ながらいつわりをろかにして申さずば俱に墮地獄の者となつて一分の科
なき身が十方の大阿鼻獄を経めぐるべしかでか身命をすててよばわら
ざるべき涅槃經に云く「一切衆生異の苦を受くるは悉く是如來一人の苦な
り」等云云、日蓮云く一切衆生の同一苦は悉く是日蓮一人の苦と申すべし。
へいぜいてんのう 平城天皇の御字に八幡の御託宣に云く「我は是れ日本の鎮守八幡大菩薩
なり百王を守護せん誓願あり」等云云、今云く人王八十一・二代隱岐の
法皇・三・四・五の諸王已に破られ畢んぬ残の二十余代・今捨て畢んぬ、
すでに此の願破るるがごとし、日蓮料簡して云く百王を守護せんというは
正直の王・百人を守護せんと誓い給う、八幡の御誓願に云く「正直の人
の頂を以て栖と為し、諂曲の人の心を以て亭ず」等云云、夫れ月は清水

に影をやどす濁水にすむ事なし、王と申すは不妄語の人・右大將家・権の
たゆうどの とうご しょうじき はちまんだいぼさつ すむ しょうじき
大夫殿は不妄語の人正直の頂八幡大菩薩の栖む百皇の内なり、正直に二
あり一には世間の正直王と申すは天心地の三を串くを王と名づく、天・人
・地の三は横なりたつてんは縦なり、王と申すは黃帝・中央の名なり、天
の主・人の主・地の主を王と申す、隱岐の法皇は名は國王・身は妄語の人
なり横人なり、権の大夫殿は名は臣下・身は大王・不妄語の人・八幡大菩薩
の願ひ給う いただき しょうせ しょうじき もう にぜん 七宗等の經論釈
は妄語・法華經・天台宗は正直の經釈なり、本地は不妄語の經の釈迦仏
迹には不妄語の八幡大菩薩なり、八葉は八幡・中台は教主釈尊なり、四
月八日・寅の日に生まれ八十年を経て二月十五日申の日に隠れさせ給う、豈
きようしゅ にほんこく たま しょうはちまめぐう いわ
に教主の日本国に生まれ給うに有らずや、大隅の正八幡宮の石の文に云く
「昔し靈鷲山に在つて妙法華經を説き今正宮の中に在て大菩薩と示現す」
りようじゅうせん あ みようほけきよう と ぼさつ じげん

等云云、法華經に云く「今此三界」等云云、又「常に靈鷲山に在り」等

云云、遠くは三千大千世界の一切衆生は釈迦如来の子なり、近くは日本国

・四十九億九万四千八百二十八人は八幡大菩薩の子なり、今日本國の一切

衆生は八幡をたのみ奉るやうにもてなし釈迦仏をすて奉るは影をうやまつ

て体をあなづり子に向いて親をのるがごとし、本地は釈迦如来にして月氏

國に出でて正直捨方便の法華經を説き給ひ、垂迹は日本國に生れては

正直の頂きにすみ給う、諸の権化の人人の本地は法華經の一実相なれど

も垂迹の門は無量なり、所謂跋俱羅尊者は三世に不殺生戒を示し鶯嶮摩羅

は生生に殺生を示す、舍利弗は外道となり是くの如く門門不同なる事は本

凡夫にて有りし時の初發得道の始を成仏の後・化他門に出で給う時・我が

得道の門を示すなり、妙樂大師云く「若し本に従て説かば亦是れ昔殺等の

悪の中に於て能く出離するが故なり是の故に迹中に亦殺を以て利他の法門

と為す^な」等云云、今八幡大菩薩は本地は月支の妄語^{もうご}の法華經を迹^{あと}に日本國^{にほんこく}にして正直^{しょうじき}の二字となして賢人^{けんじん}の頂^{いただき}きにやどらんと云云、若し爾^もらば此^{しか}の大菩薩^{ほさつ}は宝殿^{ほうでん}をやきて天^{てん}にのぼり給^{たま}うとも法華經^{ほけきよう}の行者^{ぎようじゃ}日本國^{にほんこく}に有^あるならば其^その所に栖^すみ給^{たま}うべし。

法華經^{ほけきよう}の第五^{いわ}に云^いく諸天^{しよてん}昼夜^{しよてん}に常に法の為^{ゆえ}の故^{しか}に而^{これ}も之^{えい}を衛護^{まも}す、經文^{きようもん}

の如^{ごと}くんば南無妙法蓮華經^{なむみょうほうれんげきよう}と申^{もう}す人をば大梵天^{ぼんでん}・帝釈^{たいしやく}・日月^{にちがつ}・四天^{してん}等^と昼^{ある}

夜^{しゆこ}に守護^{しゆこ}すべしと見えたり、又第六^いの卷^{わん}に云^いく「或^{ある}は己身^{こしん}を説^とき・或^{ある}は

他身^とを説^とき・或^{ある}は己身^{こしん}を示^しし・或^{ある}は他身^とを示^しし・或^{ある}は己事^{こじ}を示^しし・或^{ある}は

他事^{たじ}を示^しす」文觀音^{かんのん}尚^{さんじん}三十三身^{さんじん}を現^{げん}じ妙音^{みょうおん}又^{また}三十四身^{さんじし}を現^{げん}じ給^{たま}ふ教主^{きようしゆ}

釈尊^{しやくそん}何^{なん}ぞ八幡大菩薩^{はちまんだいほさつ}と現^{げん}じ給^{たま}はざらんや天台^{てんだい}云^いく「即^{そく}是^これ形^{かたち}を十界^{じゆつかい}に垂^た

れて種種^{しじゆじゆ}の像^{ざう}を作^なす」等云云。天竺^{てんじく}三國^{さんこく}をば月氏^{がつし}國^{こく}と申^{もう}すは仏^{ぶつ}の出現^{しゆつげん}し給^{たま}う

べき名^ななり、扶桑^{ふそう}國^{こく}をば日本^{にほん}國^{こく}と申^{もう}すあに聖人^{しょうにん}出^でて給^{たま}わざらむ、月^{つき}は西^{せい}よ

り東に向へり月氏の仏法の東へ流るべき相なり、日は東より出づ日本の仏法
がっし ぶつぼう
の月氏へかへるべき瑞相なり、月は光あきらかならず在世は但八年なり、
ずいそう
日は光明・月に勝れり五五百歳の長き闇を照すべき瑞相なり、仏は法華經
ほうぼう
謗法の者を治し給はず在世には無きゆへに、末法には一乗の強敵充滿す
ふぎようぼさつ りやくこ

各各・我が弟子等はげませ給へはげませ給へ。
でし たま

弘安三年太歲庚辰十二月日
こうあん

日蓮 花押
にちれん かおう

◆七九 二乗作仏事 589P
にじようさぶつ

爾前得道の旨たる文、經に云く見諸菩薩等云云、又云く始見我身等、此等
にぜんとくどう むね いわ けんしよぼさつ
の文の如きは菩薩初地・初住に叶う事有ると見えたるなり、故に見諸菩薩
こと ぼさつしよじ しよじゅう かな あ ゆえ けんしよぼさつ
の文の下には而我等不預斯事と・又始見の文の下には除先修習等云云、
にがとう ふよしじ しけん じよせんしゅうしゅう
此れは爾前に二乗作仏無しと見たる文なり。
こ にぜん にじようさぶつ

問う 顕露定教には二乗作仏を許すや 顕露不定教には之を許すか 秘密には之を許すか 爾前の円には二乗作仏を許すや 別教には之を許すか、答う 所詮は重重の問答有りと 雖も皆之を許さざるなり、所詮は二乗界の作仏を許さずんば 菩薩界の作仏も許さざるか 衆生無辺誓願度の願の闕くるが故なり、釈は菩薩の得道と見たる 經文を消する許りなり、所詮華・方・般若の円の菩薩も 初住に登らず又凡夫二乗は勿論なり 化一切衆生・皆令入仏道の文の下にて此の事は意得可きなり。

問う 円の菩薩に向つては二乗作仏を説くか、答う 説かざるなり 未會向人説如此事の釈に明かなり。

問う 華嚴經の三無差別の文は十界互具の正証なりや、答う 次下の經に云く 如来智慧の大藥王樹は唯二所を除きて生長することを得ず 所謂 声聞と縁覺となり等云云 二乗作仏を許さずと云う事 分明なり、若し爾らば本文は

じゅつかいこく

にじようさぶつ

じゅつかいこく

ゆる

十界互具と見えたれども実には二乗作仏無ければ十界互具を許さざるか、

そにぜん

ほけきよう

べ

すで

じよせんしゅうしゅう

けこん

其の上爾前の経は法華経を以て定む可し既に除先修習等云云と云う華嚴

にじようさぶつ

ふんみよう

ほうとう

はんにか

にじようさぶつ

は二乗作仏無しと云う事分明なり方等般若も又以て此くの如し。

そう

にぜん

こころうべ

あなんけつじゅう

いぜん

惣じて爾前の円に意得可き様・二有り、一には阿難結集の已前に仏は一

べつえん

しきよう

たま

音に必ず別円二教の義を含ませ一一の音に必ず四教三教を含ませ給えるな

ゆえ

じゅんえん

にぜんきよう

ゆえ

ほつけ

り、故に純円の円は爾前経には無きなり故に円と云えども今の法華に対す

せつ

せん

せん

みなふげん

ゆえ

れば別に撰すと云うなり、籤の十に又一一の位に皆普賢行布の二門有り故に

か

もち

せつ

しゃく

にぜん

とくどう

知んぬ兼ねて円門を用いて別に撰すと釈するなり此の意にて爾前に得道無

しと云うなり、二には阿難結集の時・多羅葉に注す一段は純別・一段は

純円に書けるなり方等般若も此くの如し、此の時は爾前の純円に書け

じゅんえん

ほうとう

はんにか

こと

にぜん

じゅんえん

る処は粗法華に似たり、住中多明円融之相等と釈するは此の意なり。

ところ

ほほほつけ

えんゆう

しゃく

てんだいちしやだいし

どうり

たま

ゆえ

たし

けこん

そう

にぜん

天台智者大師は此の道理を得給いし故に他師の華嚴など惣じて爾前の経

を心得しには・たがい給えるなり、此の二の法門をば如何として天台大師
は心得給いしぞとさぐれば法華經の信解品等を以て一一の文字別円の菩薩
及び四教・三教なりけりとは心得給いしなり、又此の智恵を得るの後にて
彼等の經に向つて見る時は一向に別・一向に円等と見えたる処あり、阿難
結集の後のしはざなりけりと見給えるなり、天台一宗の学者の中に此の
道理を得ざるは爾前の円と法華の円と始終同の義を思ふ故に一処のみの
円教の經を見て一卷・二卷等に純円の義を存ずる故に彼の經等に於て
往生成仏の義理を許す人人是れ多きなり、華嚴・方等・般若・觀經等の
本文に於て阿難・円教の卷を書くの日に即身成仏云云即得往生等とある
を見て一生乃至順次生に往生成仏を遂げんと思いたり、阿難結集已前
の仏口より出す所の説教にて意を案ずれば即身成仏即得往生の裏に
歴劫修行・永不往生の心含めり、句の三に云く撰論を引いて云く

りようぎよう

了義經・依文判義等と云う意なり、爾前の經を文の如く判ぜば仏意に乖く

可しと云う事は是なり、記の三に云く法華已前は不了義なる故と云えり此

の心を釈せるなり、籤の十に云く「唯此の法華のみ前教の意を説き今經の

意を顯す」と釈の意は是なり。

抑 他師と天台との意の殊なる様は如何と云うに他師は一一の經經に

向つて彼の經經の意を得たりと謂へり、天台大師は法華經に仏四十余年

の經經を説き給へる意をもつて諸經を釈する故に阿難尊者の書きし所の

諸經の本文にたがひたる様なれども仏意に相叶いたるなり、且らく觀經

の疏の如き經説には見えざれども一字に於て四教を釈す、本文は一処は

別教・一処は円教・一処は通教に似たり、釈の四教に亘るは法華の意を

以て仏意を知りたもう故なり、阿難尊者の結集する經にては一処は純別

一処は純円に書き別円を一字に含する義をば法華にて書きけり、法華にし

て爾前の經の意を知らしむるなり、若し爾らば一代聖教は反覆すと雖も
法華經無くんば一字も諸經の意を知るべからざるなり、又法華經を讀誦す
る行者も此の意を知らずんば法華經を讀むにては有る可からず、爾前の經
は深經なればと云つて淺經の意をば顯さず淺經なればと云つて又深義を
含まざるにも非ず、法華經の意は一一の文字は皆爾前の意を顯し法華經の
意をも顯す故に一字を讀めば一切經を讀むなり一字を讀まざるは一切經
を讀まざるなり、若し爾らば法華經無き国には諸經有りと雖も得道は難か
る可し、滅後に一切經を讀む可き様は華嚴經にも必ず法華經を列ねて彼の
經の意を顯し觀經にも必ず法華經を列ねて其の意を顯すべし諸經も又以
て此くの如し、而るに月支の末の論師及び震旦の人師此の意を弁えず一經
を講して各・我得たりと謂い又超過諸經の謂いを成せるは會て一經の意
を得ざるのみに非ず謗法の罪に墮するか。

問う天竺の論師震旦の人師の中に天台の如く阿難結集已前の仏口の
諸經を此くの如く意得たる論師・人師之有るか、答う無著菩薩の撰論に
は四意趣を以て諸經を釈し、竜樹菩薩の大論には四悉檀を以て一代を得
たり、此れ等は粗此の意を釈すとは見えたれども天台の如く分明には見え
ず、天親菩薩の法華論も又以て此くの如し、震旦国に於ては天台以前の五
百年の間には一向に此の義無し、玄の三に云く「天竺の大論尚其の類に
非ず」云云、籤の三に云く「一家の章疏は理に附し教に憑り凡そ立つる所
の義他人の其の所弘に随い偏に己が典を讃するに同じからず、若し法華を弘
むるに偏に讃せば尚失なり況や復余をや」文、何となれば既に開権顯実と
云う何ぞ一向に権を毀る可きや、華嚴經の心仏及衆生・是三無差別の文
は華嚴の人師・此の文に於て一心覺不覺の三義を立つるは、源と起信論の
名目を借りて此の文を釈するなり、南岳大師は妙法の二字を釈するに此

の文を借りて三法妙の義を存せり、天台智者大師は之を依用す此に於て
てんだいしゅう 天_{てん}台_{だい}宗_{しゅう}の人は華_け嚴_{ごん}・法_ほ華_{っけ}同_{どう}等の義を存するか、又澄_{ちよう}觀_{かん}・心_{しん}仏_{ぶつ}及_ぎ衆_{しゆ}生_{じやう}の
文に於て一_{いっ}心_{しん}覺_{かく}不_ふ覺_{かく}の義を存するのみに非ず性_{しやう}惡_{あく}の義を存して云く、澄_{ちよう}觀_{かん}
の釈に「彼の宗には此れを謂つて実と為す此の宗の立義・理通ぜざる無し」
等云云、此等の法門許可きや否や、答えて云く弘の一に云く「若し今家
の諸の円文の意無くんば彼の經の偈の旨理実_{むね}に消し難し」同じく五に云く
「今文を解せずんば如何ぞ心造一切三無差別を消解せん」文、記の七に
云く忽ち都て未だ性惡の名を聞かずと云えり、此等の文の如くんば天台の
意を得ずんば彼の經の偈の意・知り難きか、又震旦の大師の中には天台の
外には性惡の名目あらざりけるか、又法華經に非ずんば一念三千の法門
・談ずべからざるか、天台已後の華嚴の末師並びに真言宗の人性惡を以
て自宗の依經の詮と為すは天竺より伝わりたりけるか祖師より伝わるか、

又天台の名目てんだい みようもくを偷ぬすんんで自宗の内証じしゅう ないしゅうと為なすと云へるか、能よく能よく之これを驗けんす可べし。

問しやうあくう性惡みようもくの名目てんだいは天台一家に限る可べし諸宗しよしゅうには之これな無し、若もし性惡しやうあくを立てずんば九界いんがの因果いかなを如何ぶっかいが仏界いんがの上に現げんぜん、答ざいう義例いわに云しやうあくく性惡しやうあく若断等云云、問えんどんしかんう円頓止觀しやうこの証拠いちねんさんぜんと一念三千しやうこの証拠けこんきやうに華嚴經しんぶつぎやうしゆじやうの心仏及衆生えんどんしかんおよ いちねんさんぜん是三無差別さんむさべつの文を引くは彼の經に円頓止觀及び一念三千を説くというか、答いわえて云てんだいしゅうく天台宗の人の中には爾前にぜんの円と法華ほつけの円と同の義そんを存す、問六十卷の中に前三教の文を引いて円の義を釈せるは文を借ると心得、爾前の円の文を引いて法華ほつけの円の義しやくを釈するをば借らずと存ぜんや、若もし爾しからば三種しかんの止觀しやうもんの証文にぜんに爾前しよきやうの諸經えんどんしかんを引く中に円頓止觀しやうこの証拠けこんに華嚴ぼさつ菩薩しやうじ於生死等みようらくしやくの文を引けるをば、妙樂いわ釈して云かえく「還かえつて教味しやくを借て以て妙みようえん円あらわを顯しよきやうす」とは此の文は諸經しよきやうの円の文を借ると釈しやくするに非あらずや、若もし

爾らば心仏及衆生の文を一念三千の証拠に引く事は之を借れるにて有るべし、答う当世の天台宗は華嚴宗の見を出でざる事を云うか、華嚴宗の意は法華と華嚴とに於て同勝の二義を存ず、同は法華・華嚴の所詮の法門之同じとす、勝には二義あり、古の華嚴宗は教主と対菩薩衆等の勝の義を談ず、近代の華嚴宗は華嚴と法華とに於て同勝の二義有りと云云、其の勝に於て又二義あり、迹門は華嚴と同勝の二義あり華嚴の円と法華迹門の相待妙の円とは同なり彼の円も判☆・此の円も判☆の故なり、籤の二に云く「故に須らく二妙を以て三法を妙ならしむべし故に諸味の中に円融有りと雖も全く二妙無し」私志記に云く「昔の八の中の円は今の相待の円と同じ」と云へり是は同なり記の四に云く「法界を以て之を論ずれば華嚴に非ざる無し仏慧を以て之を論ずれば法華に非ざる無し」云云、又云く「応に知るべし華嚴の尽未来際は即ち此の經の常在靈山なり」云云、此等の釈

は爾前にぜんの円えんと法華ほっけの相待そうたい妙みょうとを同どうずる釈しやくなり、迹門しやくもんの絶待ぜったい開會かいえは永にぜんく爾前にぜんの円えんと異いなり、籤せんの十じゅうに云いく「此この法華經ほっけきょうは開權顯實かいこんけんじつ・開迹顯本かいしやくけんほんの此この兩りょう意いは永よきく余經よききょうに異いなり」と云いえり、記きの四しに云いく「若もし仏慧ぶつてを以もつて法華ほっけと為なさば即そく」等と云云、此この釈しやくは仏慧ぶつてを明みすは爾前にぜん・法華ほっけに亘わたり開會かいえは唯法華ただほっけに限かると見みえたり是こは勝ふつてなり、爾前にぜんの無得道とくどうなる事ことは分ぶん明みょうなり其そのの故ゆえは二妙ふたみょうを以もつて一法いつぽうに妙みょうならしむるなり、既すでに爾前にぜんの円えんには絶待ぜったいの一妙いちみょうを闕かく衆生しゅじょうも妙みょうの仏ぶつと成なる可べからざる故ゆえに籤せんの三さんに云いく妙變みょうへん為な☆の釈しやく是こなり、華嚴けこんの円變えんへんじて別べつと成なると云いう意いなり。

本門ほんもんは相待ぜったい・絶待ぜったいの二妙ふたみょう俱ともに爾前にぜんに分無ぶんむし又迹門しやくもんにも之これ無なし、爾前迹門にぜんしやくもんは異ことなれども二乘にじようは見思けんじを断はじ菩薩ぼさつは無明むみょうを断はずと申もうすことは一往いちおう之これを許ゆるして再往さいおうは之これを許ゆるさず、本門ほんもん寿量品じゆりやうほんの意いは爾前にぜん・迹門しやくもんに於おいて一向いっこうに三乘さんじよう俱ともに三惑さんかくを断だんぜずと意得いこう可べきなり、此この道理どうりを弁わえざるの間ま・天台てんだいの

學者は爾前・法華の一往同の釈を見て永異の釈を忘れ結句名は天台宗にて
其の義分は華嚴宗に墮ちたり、華嚴宗に墮ちるが故に方等・般若の円に墮ち
ぬ、結句は善導等の釈の見を出でず、結句・後には謗法の法然に同じて師子
身中の虫の自ら師子を食うが如し文、仁王經「大王我が滅度の後未來世の中
に四部の弟子・諸の小国の王・太子・王子乃ち是れ三宝を住持し護れる者
・轉た更に三宝を滅破すること師子身中の虫の自ら師子を食うが如し、外道
には非ず多く我が仏法を壊りて大罪過を得ん」云云、籤の十に云く「始め
住前より登・住に至るこのかた全く是れ円の義・第二住より次の第七住に
至る文相次第して又別の義に似たり、七住の中に於て又多相即自在を
弁ず、次の行向地又是れ次第差別の義なり、又一一の位に皆普賢行布の二
門有り故に知んぬ兼て円門を用いて別に摂すること」

華嚴 けごん

阿含 あこん

大日經 だいにちきよう

真言宗 しんごんしゅう

觀經等 かんきよう

淨土宗 じょうどしゅう

方等 ほうとう

深密經等 じんみつ

法相宗 ほうそうしゅう

小乘 しょうじょう

般若 はんにや

楞伽經 りょうがきよう

三論宗 さんろんしゅう

無量義經 むりようぎきよう

法華經迹門十四品 ほけきようしゃくもん

・本門藥王品已下 ほんもんやくおうぼんいか

の六品並びに なら

普賢 ふげん

・涅槃經 ねはんきよう

等

応身 おうじん

劣応身 ろうおうじん

勝応身 しょうおうじん

小仏

報身ほうしん

華嚴經けこんぎょうるさな仏

だいにちきよう

大日經だいにくきょう等ならびるさな仏

しやくもんねはんぎよう

並びに迹門しやくもん涅槃經ねはんぎょう等の仏

なんじまさ

阿逸・汝なんじまさ当に知るべし是この諸もろもろの大菩薩ぼさつ

序出しゅしゅつ二三云。

むしゅう

無數劫むしゅうより・このかた仏の智慧ちえを修習しゅうしゅうす、悉ことごとくく是れ我が所化しよけなり大道心どうしん

おこ

を發おこさしむ此等これらは是れ我が子なり是この世界せかいに依止えしせり、玄こんの七しちに云いく「六

ほんせつぽうみよう

に本說法妙ほんせつぽうみようとは經いに言いく此等これら我所化しよけ・令發りようほつ大道心だうしん・今皆住不退こんかいじゅうふたいと我

しよけ

所化しよけとは正こく是れ說法せつぽうして大道心だうしんを發おこさしむるは小説せつぽうに簡非けんぴするなり、

こ

此れ本時の説を指して迹説しやくせつを簡非けんぴするなり迹説しやくせつ・多種しやくせつなれども若もし

ねはん

涅槃ねはんに依よれば」等云云、華嚴經けこんぎょうの寂滅じやくめつ是こなり始成正覺しじようしやうかく。

しやくぶつ

迹仏しやくぶつ。増一阿含經あこんぎようの十じふに云いく「仏・摩竭國まかつに在いましし道樹だうじの下したにして爾時そのときに

世尊得道未だ久からず」浄名經に云く「始め仏樹に坐して力て魔を降す」大集經に云く「如来成道始めて十六年なり」大日經に云く「我昔道場に坐し四魔を降伏す」仁王般若經に云く「大覺世尊先ず我が爲に二十九年」無量義經に云く「我先に道場菩提樹下に端坐する事六年乃至四十余年」法華經の方便品に云く「我始め道場に坐し樹を觀じ亦經行し三七日の中に於て是くの如き事を思惟す」籤の七に云く「大乘の融通過ぎたること無し」華嚴經の初に云く「菩提道場にして始めて正覺を成ず、故に知んぬ大小識成皆近なり」壽量品に云く「爾時に世尊諸の菩薩の三たび請じて止まざるを知ろしめして之に告げて言たまわく汝等諦かに聴け如来の秘密神通の力を・一切世間の天人及び阿修羅は皆今の釈迦牟尼仏は釈氏の宮を出でて伽耶城を去ること遠からず道場に坐してあのかたらしさんみやくさんぼだい阿耨多羅三藐三菩提を得たりと謂えり、然るに善男子・我実に成仏して

より已来無量無辺百千万億那由佗劫なり」等云云、文句の九に云く「仏

・三世に於いて等く三身有り諸教の中に於いて之を秘して伝えず・故に

一切世間の天人・修羅は今の仏は是に始まると謂えるなり、此の三身を

得る故に近に執して遠を疑う」寿量品に云く「諸の善男子・如来は

諸の衆生の小法を樂える徳薄垢重の者を見ては是の人の為に我少くして

出家し阿耨多羅三藐三菩提を得たりと説く、然るに我実に成仏してより

已来久遠なること斯くの若し」文句の九に云く「一日〇二現在〇三約修行

〇四・果門に約せば近成の小を聞かんと樂う者は釈氏の宮を出で始めて

菩提を得たりとし長大久遠の道を聞かん事を樂欲せず故に樂小と云う」

此等の小心は今日に始まるに非ず若し先に大を樂わば仏即ち始成を説か

ず始成を説くことは皆小法を樂う者の為のみ、又云く「諸の衆生・小法

を樂う者とは所見の機なり」華嚴に云く「大衆清淨なりと雖も其の余

の樂ぎょうしゅうぼう小法の者は・或あるは疑悔ぎけを生じ長夜すいのうに衰惱こせん此これを慙あわれむが故ゆえに
默もくす」偈げに云いく「其その余あまの久ひさく行ゆぜざるは智慧ちえ未いまだ明あ了らず識しに依よつ
て智よに依よらず聞きき已おつて憂悔うげを生まじ彼將まさに惡道あくどうに墮おちんとす此これを念おもう
が故ゆえに説とかず」と、彼かれの經きやうを案あんずるに声聞しょうもん・二乘にじよう無なし但ただ不久行ふきやうの者ものを指さ
して樂ぎょうしゅうぼう小法しょうぼうの人ひとと為なすのみ、師しの云いく「樂小しょうじようは小乘しょうじようの人ひとに非あらざるな
り乃すなわち是これ近説きんせつを樂ねがう者ものを小なと為なすのみ」文句もんくの九くに云いく「德薄えんりようとは縁えん了りよう
の二善功用くゆうびれつ微劣ゐりつなれば下しもの文ぶんに諸子幼稚しよと云いうなり垢重くじゆうとは見思未けんじいまだ除ぞ
かざるなり」記きの九くに云いく「德薄垢重とくはつくじゆうとは其その人ひと未いまだ実教じつきやうの二因にん有あらざ
る故ゆゑなり下しもの文ぶんに諸子幼稚しよと云いうは下しもの医子いしの譬たとえの文ぶんを指さす尚未なおいまだ円えんを
聞きくに堪たえず況いんや遠いを聞きかんをや、見思けんじ未除しとは且しばらたとえ譬たとえの中うちの幼稚ようちの
言ごを消けす定さだめて未いまだ遠えんを知らず」玄げんの一いちに云いく「厚おく善根ぜんこんを殖ふえて此この
頓説とんせつを感かんず」文ぶん、籤せんの一いちに云いく「一往いちおうは総べつじて別円べつえんを以もつて厚おと為なす」五

百問論に云く「一經の中に本門を以て主と為す」云云、又云く「一代教の中に未だ曾て遠を顕さず父母の寿は知らずんばあるべからず始めて此の中に於いて方に遠本を顕す、乃至但恐る才一国に當るも父母の年を知らざれば失う所・小と謂うも辱むる所至つて大なり、若し父の寿の遠きを知らざれば復父統の邦に迷う徒に才能と謂うも全く人の子に非ず」文句の九に云く「菩薩に三種有り下方と他方と旧住となり」玄義の七に云く「若し迹因を執して本因と為さば斯れ迹を知らず亦本を識らざるなり天月を識らずして但池月を觀るが如し○、弘迹顯本せば即ち本地の因妙を知る影を撥つて天を指すが如し云何ぞ盆に臨んで漢を仰がざる嗚呼聾駭なんすれぞ道を論ぜんや」又云く「若し迹果を執して本果と為す者は斯れ迹を知らず亦本を識らざるなり、本より迹を垂るるは月の水に現ずるが如く迹を払うて本を顕すは影を撥うて天を指すが如し、

まは しじょう
當に始成の果を撥けば皆是れ迹果なるべく久成の果を指すは是れ本果な

り」又云く「諸土は悉く迹土なり一には今・仏の所栖の故に二には前後

しゅうりゅう

修立の故に三には中間所弘の故に若し是れ本土は今・仏の所栖に

非ず、今・仏の所栖は即ち迹土なり、若し是れ本土は一土一切土にして

前後修立なるべからず浅深不同なり○、迹を執して本と為す者は此れ

ぜんごしゅうりゅう

迹を知らず亦本を識らざるなり、今迹を弘つて本を指すときは本時所栖

の四土は是れ本国土妙なり」

蔵因 三祇百劫菩薩 未断見思

通因 動喩塵劫菩薩 見思断

別因 無量劫菩薩 十一品断無明

円因 四十一品断無明

劣因 蔵「草座」三十四心断結成道

迹仏

しやくぶつ

迹仏

しやくぶつ

迹仏

しやくぶつ

迹仏

しやくぶつ

迹仏

しやくぶつ

迹仏果 ぶつか

勝応

通

「天衣」三十四心見思・塵沙断の仏 けんじ じんじゃ

果

報身 ほうしん

別

「蓮華座」十一品断無明の仏 れんげ むみょう

法身 ほっしん

円

「虚空座」四十二品断無明の仏 こくう むみょう

◆八一

にちがつ
日月の事

599P

誓耶后

麻利支天女 まりしてん

大日天 だいにち

乗輅車

九曜

毘誓耶后

七曜

大月天 がってん

乘鷲

二十八宿

十二宮

金光明經に云く こんこうみょうきょう いわ

「日の天子乃以び月天是の經典を聞き精氣充実す」 てんし がってん こ きょうてん せいき

最勝王經に云く「日出でて光を放ち無垢炎清淨なり此の經王の力に
由て流暉四天を遶る」仁王經に云く「日月度を失い」等、大集經に云く
「日月明を現ぜず四方皆亢旱す是の如き不善業惡王・惡比丘我が正法を
毀壞す」仁王經に云く「非法非律にして比丘を繫縛すること獄囚の法の
如くす」法華經に云く「色力及び智惠此等皆減少す」華嚴經に云く大集經
に云く。

段食・法食・喜食・禪悅食。

三力、一切衆生力・法力・自身功德力。

戒光 清淨也

日光 定也

惠光 ☆也

人天 三学

小乗 しょうじょう 三学

大乘 だいじょう 三学

権大乘 こんだいじょう 三学

実大乘 じつだいじょう 三学

純円 じゆんえん 三学

法身光 ほっしん 般若光 はんによ 解脱光 げだつ

此天は初地・或は十廻向なり しよじ ある えこう

十信 じゆっしん 十住 じゆうじゆう 十行 じゅうぎょう 十廻向 じゅうち えこう 十地 じゅうち 等 妙

初地三惑断 しよじさんなく

初住三惑断 しよじゆうさんなく

北辰

梵帝釈・日月・四天等 たいしやく にちがつ してん

衆星 しゅうせい

衣食 いしょく

壽命 じゅみょう

肉眼 にくげん

天眼 てんげん

一切の四天下の衆生の眼目 いっさいしてんげしゅじょうがんもく

惠眼

法眼 ほうげん

仏眼 ぶつげん

有に非ず地を離るが故に、空に非ず有を照すが故に有、辺に非ずして中
に処するが故に、而も空・空に処するが故に、而も有・有を養うが故に、
来らずして北に至るが故に、而も来りて南に来るが故に、一ならず四州を照
すが故に、異ならず一日なるが故に、断ならず常なるが故に、常ならず一処
に住せざるが故に。

記の三に云く部方等と雖も義は円極なる故に・故に今之を引く、

◆八二 和漢王代記 602p

伏羲

小昊

三皇 さんこう

神農

☆☆

三墳・五典 さんぶん

黄帝 こうてい

五帝

帝☆☆

堯王 ぎょうおう

男九人女一人

舜王 しゅんおう

夏 殷

第一文王 だいいち

第二武王

周公旦 しゅうこうたん

第三成王

第四昭王の御宇二十四年甲寅に当る五色の光氣南北に亘る大史・蘇由之を

占う四月八日は仏の御誕生なり

中間七十九年なり ちゅうげん

第五穆王の五十二年壬申に当る みずのえさる 二月十五日御入滅 にゅうめつ 十二の虹南北に亘る わた

たいし 大史扈多之を占う これ

三十七有り・或は八 ある

一儒教 じゅきょう 五常 ごじょう 文武等なり

周 三教

にどう 二道教 仙教「孔丘」「顔回」

しゃつきょう 三釈教 いちだい 一代五十余年「老子」

始皇

じゅきょう 儒教

秦 次生皇

三教 道教 しゃつきょう

釈教

前漢 十四代

漢

仏の滅後一千一十五年に当るなり 又周の第四の昭王二十四年より後漢の第二光武に至る いた

千一十五年に当るなり

後漢光武帝永平十年丁卯

あたひ まとう かじくほうらん

一千一十五年に当て摩騰迦竺法蘭の二人の聖人四十二生

經しやうじやうきやう 小乘經

十住 断結經 大乘經を

以て白馬に負せて漢土に渡す

魏 雙觀經渡る

そうかんきやうわた

西晋 正法華經十卷渡る 法護三蔵亘す

ほけきやう

わた

まもさんぞう

妙法華經渡る

みやうほけきやうわた

七卷・或は八卷

ある

羅什三蔵亘す

らじゆうさんぞう

晋

後秦

こうしん

阿弥陀經亘る

あみだ わた

華嚴經亘る

けこんきやうわた

觀經亘る

かんきやうわた

宋

齊 宗

六^七宗

梁

末

だいねはんきようわた
大涅槃經亘る

三時・四時・五時^一 五時^二 一音^三 半滿^四 三教^五 四宗^六 五

なんざん ほくひち
南三・北七 「江南なり」の十師 「江北なり」

どんらん ほっしじようとしゅう
曇鸞法師浄土宗を立つ

ぜんしゅうわた
禅宗渡る 達摩大師なり

じようろんわた
撰論亘る 南北

ちろんわた
地論亘る 南北

べつじいしゅ
別時意趣の法門出来す

なんがくだいしまた
南岳大師亦惠思禅師と云う
「観音の化身なり道宣の感通伝に

始

ろっこん
六根淨の人日本の淨宮太子是なり

てんだいだいし
天台大師の御師なり

にほん
日本に伝教大師と生る

またちしゃ
亦智者と云い

てんだいだいし
天台大師

また
亦智・と云い

また
亦徳安と云い

おんとき
此の御時・南三・北七並びに前五百余年の人師・三蔵・所立

は
の十師の義を破し始めて五時・八教・三觀・六即・十境・十

しゃか
乗を立て小釈迦と号す、進では天竺の論師にも超え退ては震旦

にんし
の人師に勝るなり、玄義の三に云く故に章安大師の云く「天竺

だいろんなおそ
の大論尚其の類に非ず震旦の人師何ぞ劣しく語るに及ばん

此これ誇こ耀ように非あらず法ほ相っそうの然しかるのみ」又また智ち証しょう大だい師し 授じゅ決けつ集しゅう 也い云わく

「天てん台だい世いに出いで仏ぶつ意い快かいく暢あにぶ豈あに万まん教きやう再さいび世せ間けんに演えんるに非あらずや」

くつた

さんそうてんほんほけきよう

わた

笈多くつたと崛多くつたの両りやう三さん藏そう添てん品ぽん法ほ華け經きやうを渡わたす

とうしゆくぜんとう

道どう綽しやく善ぜん導とう此この世よに在あり

けこんしゆう

華け嚴こん宗しゆう

ごかん

よ

こうてい

かいげん

いた

後ご漢かんの世よ自よりり唐とうの神こう武てい皇わう帝ていの開かい元げん十じゅう八はち年ねん庚かう申しんに至いたる六りく百ひゃく六む十じゅう

わた

四し載ざいに渡わたす所ところの經きやう・律りつ・論ろん・五ご千せん四し十じゅう八はち卷巻

やくしや

みようじく

こ

訳やく者しや百ひゃく七しち十じゅう六む人にんなり妙みやう樂らくは是この世よの人ひとなり

ほうそうしゆう

げんじようさんそうせいてんよ

わた

法ほう相そう宗しゆうは玄げん奘むい三さん藏そう西せい天てん自よりり之これを渡わたす

しんこんしゆう

ぜんむいさんそう

こんこうちさんそうこれ

わた

真しん言こん宗しゆうは善ぜん無む畏い三さん藏そう・金こん剛こう智ち三さん藏そう之これを渡わたす

ほうそうしゆう

しんこんしゆう

てんだいこれ

みようらくだいしこれ

法ほう相そう宗しゆう

真しん言こん宗しゆうの二に宗しゆうは天てん台だい之これを見みず

妙みやう樂らく大だい師し之これを見みて

てんだいしゆう

しやうれつ

にほんこく

でんぎようじかく

ちしやう

天てん台だい宗しゆうに对たい当とうして勝しょう劣りゃくを論ろんず又また日にっ本ぽん国こくの伝でん教きやう慈じ覺かく・智ち証しょう

これあらそ
之を諍う

宋

てんだい げんぎ
天台の玄義の十に南北の十師を破して云く「但聖意幽隱にして教法 弥
がた ぜんだい しよし ある ほほ
難し、前代の諸師・或は粗名匠に承け・或は思い袖 衿より出ず阡陌
じゅうおう いえど いずれ これ
縦横なりと雖も孰か是なるを知ることを莫し、然るに義雙立せず理兩存す
ること無し若し深く所以有り復修多羅と合する者は録して而て之を用ゆ
なく ぎ な しんじゅ
文無く義無きは信受すべからず」籤の十に云く「一として全く是なるこ
と無きを以ての故に一一に難破す」玄の三に云く「輕慢止まざれば舌口中
に爛る」又云く「法華は衆經を總括す」籤の三に云く「已法華已前華
阿方般等の一切經今無量義經なり当涅槃經等の法華已後の一切經なり
の妙茲に於て固く迷えば舌爛れて止まざるも猶華報と為す謗法の
ざいくちようじう
罪苦長劫に流る」南三北七に華嚴宗の法蔵・澄觀・真言宗の弘法等は

法華經ほけきょうよりも華嚴經けこんきょうを勝まさるとするなり、又三論さんろんの嘉祥かじょうは法華經ほけきょうよりも般若經はんにゃきょうを勝まさるとす、又法相ほつそうの慈恩じおん等は法華經ほけきょうよりも深密經じんみつを勝まさるとす、又真言宗しんこんしゅうの善無畏ぜんむいさんぞう三藏さんぞう・金剛智こんこうちさんぞう三藏さんぞう・不空三藏ふくうさんぞう等は法華經ほけきょうよりも大日經だいにちきょうを勝まさるとするなり、此等これらの宗宗そうの相違そういいかん如何そういいかん相違そういいかん如何。

授決集じゅけつしゅうに云いく円えん珍智ちんちしう証大師だいし

文だいきょうは大經だいきょうに出いでたり人の之これを会えする無し、光めくら・盲めくらの前に在いれども他に

於おいては無用むようなり、仏分ふんみよう明みょうに五味ごみの喩たとえを説とき五時ごときの教たこえに喩たとええたもう云云、

訳らいつこうしやありてより來講者らいこうしや・路あふに溢あふるれども未いまだ會かつて五味ごみを談だんずるの義ぎを解げせず

己おのが胸臆くおくに任まかせて趣爾たやすく嚙語なんす何なんぞ象なんに触なんる衆盲しゆめうの者なんに異なんらんや、天台世てんだいに

出いで仏意ぶつゐ快あにく暢あにぶ豈あにに万教ばんけう再せけんび世間せけんに演あらるに非あらずや、南北なんぼくの講匠きやうじやう經論きやうろんを

釈しゃくする者しやく・各教時かくけうじを立たつれども百ひやくにして一いちも是ぜなること無し只教部ただの前後ぜんご

頓漸とんぜん権實こんじつ大小だいしやうの☆妙そみやう・寛狹くわんけつ・進否しんひに迷まよいうに縁えんりてなり・大教だうけうの網みを張はり

て法界ほっかいの海うみを亘わたし人天にんてんの魚うしほを済おさめて涅槃ねはんの岸きに置く斯かくの如ごとくするすら其その遺漏いろうを恐おそる況いはんやしよしや諸師よからあみの輩羅やからあみの一目いすれなり何れの時そか其の鳥とりを得もん、若し万蔵まんざうを暗いへとずと雖も此の理趣えを会あわせざれば年を終るまで他の宝たからを計はかりて自ら半銭みずかの分なく無く虚むなしく諍論じやうろんを益やくし長水じやうすいに水みづを添そうのみ。

授決集じゆけつしゅうに法相宗ほうさうしゅうの慈恩大師じおんだいしを破はして云いく、五性宗いごせいしゅうに云いく未熟みじゆく法華論ほっけこうの前に未熟みじゆく未熟みじゆくの文也ふんぜと

云いうは、応まぎに不熟ふじよくと云いうべし、○今謂おもく汎はんく法華ほっけを講こうずるには須すく此の義ぎを以もて正ただと為なすべし若し爾しからずんば經きやうを破はし論ろんを破はし罪五逆つみごぎやくに過すぎたり基き公こうを除のぞきて外ほかは人の彼かの不熟ふじよくの義ぎを伝でんうる無なし、○若し強しいて之これを執しゆせば公こう私じ十方じゆつぱうの信施しんせ消けし難がたし消けし難がたし若し消けせずんば何ぞ三途さんとを免まぬれん爾なんじを供養くやうせん者は三惡道さんあくどうに墮だせん謗法ぼうぼうの罪報ざいほうは法華般若ほっけはんになの諸大乗しよだいじやうきやう經きやうに一切いっさい明あきらかに説ちしやけり智者ちしや披べく可べし、○爾なんじこれを信受しんじゆす可べし無間むげんを招まねく莫なかれ。

授決集じゆけつしゅう円珍真言えんちんしんごんの諸宗しよしゅうを徴しうして云いう

真言・禪門・華嚴・三論・唯識・律業・成俱の二論等、○若し法華・涅槃等の經に望むれば是れ摂引門なり文、又云く大底他は多く三教在り円の旨に至て少きのみ弘法大師の二教論に喩して曰く今斯の經文に依るに仏五味を以て五藏に配当す、總持を醍醐と稱し四味を四藏に譬う震旦の大師等諍つて醍醐を盗み各自宗に名く。

一 姐多覽「乳」

「アナン」

經

二 毘那耶「酪」

「ウハリ」

律

小乘

ろくはら
六波羅經五藏

三 阿毘達磨「生」

「カセンエン」

論

四 般若「熟」

はら蜜藏

「文珠」

大乘

五 惣持

「醍醐」

だらに藏

「金剛藏」

一 姐多覽「乳」

二 毘那耶「酪」

三阿毘達磨「生」

弘法大師・此の經に

依つて五藏を立つ

華

方

四般若はんにやはら蜜「熟」

般

法華ほっけ

涅槃ねはん

五だら尼藏「醍醐」

大日だいにちの三部經さんぶきよう

二教論にけうろんに云いく加しか以のみずならし釈教しやくきやう東夏とうかに漸ぜんし微み自より著なに至り漢明かんめいを始めと為し

周文しうぶんを後なと為す、其その中間ちゆうげん翻伝ほんでんする所みなこ皆是けんきようれ顯教けんきようなり玄宗げんそう代宗だいそうの時・金

智ち広智くわうちの日・密教みつきやう鬱うとして起おこり盛さかんに秘趣ひそを談だんず、新藥しんやく日に浅あくして旧痼きうこ

未いまだ除りかず楞伽りやうがの如ごときに至いたつては法ぶつ仏せつ説法だんの文ち智度ちど性身しやうしん妙色めうしきなり句☆憶きうきようおくに

馳はしかせ而も文を会えして自宗じしゅうを驅かり而も義しかを取る惜おしいかな古賢こけん醍醐だいごを嘗なめず
日本にほん

神代十二代

天神てんじん 七代

地神 五代

人代百王ひやくおう

第一神武天皇だいいち てんのう

第十四仲哀

第十五神功皇后しんこうこうごう

第十六応神天皇てんのう

第三十欽明天皇きんめいてんのう

之これを略す

八幡大神はちまんだいの父なり

八幡大菩薩はちまんだいぼさつの母なり

今の八幡大菩薩はちまんだいぼさつなり

略

歴記いに云いわく欽明天皇きんめいてんのうの治てんが天下十三年己申歳冬十月

一日百濟国聖明王く せいいめいおうよ自ぶつそうり仏像經等始めて日本にほんこく国

に送る

第三十一敏達天皇 びんたつてんのう

厩戸王子 おうじ 四天王寺を造る してんのう

第三十二用明 ようめい

聖德太子は用明の御子也 しょうとくたいし ようめい

じようぐうたいしもりや

上宮 太子守屋を切り四十九院を立つ南岳大師 なんがくだいし

の後身なり救世観音の垂迹なり かんのん すいじやく

第三十三崇峻 すしゅん

第三十四推胡 女帝

第三十五舒明

第三十六皇極 女帝

第三十七孝徳

第三十八斉明 女帝

第三十九天智

第四十天武

第四十一持統

第四十二文武

第四十三元明

第四十四元正

六宗ろくしゅう

俱舍宗くしゃしゅう

りっしゅう

律宗

じょうじつ

成実宗

ほうそうしゅう

法相宗

さんろんしゅう

三論宗

けこんしゅう

華嚴宗

またぜんしゅう

亦また禪宗ぜんしゅう有なりり並びいっさいきように一切經有ありり

第四十五聖武しょうむ

聖武しょうむ天皇てんのう東大寺とうだいじの大仏だいぶつを造る

欽明きんめい自りより聖武しょうむに至るいたまで二百四十余年よんじゅうよねんなり、震旦国しんたん

自りより鑒真かんじん和尚わじょう渡りわた律宗りっしゅうを亘わたす、次に天台宗てんだいしゅうの玄文げんもん

止等わたりを渡わたす、又東大寺とうだいじの小乗しょうじょう戒壇かいだんを立つ

第四十六孝謙こうけん

聖武しょうむの女

第四十七淡路

廢帝

第四十八称徳

孝謙こうけん又即位そく也

第四十九光仁

桓武かんむの父ちちなり

欽明きんめい自りより二百六十余年に及およぶ

第五十 桓武かんむ延暦えんりやく三年に奈良の都よ自りより長岡ながおかの京うつつに遷うつり、延暦えんりやく十三年に長岡ながおか

の京よ自りより平へいの京うつつに遷うつる、延暦えんりやく二十五年に御崩みよな・去いぬる延暦えんりやく四年に

叡山えいざんを立つたて最澄さいていなりなり延暦えんりやく二十年に叡山えいざん八講はくかうを始はじめ南京ななの十人じゅうにんを

請こころをず、延暦えんりやく二十一年にの正月しょうげつ十九日じゅうくにち高雄たかたけに於おいて南京ななの十四人じゅうしにん

と最澄さいていと宗論しゅうろんあり、同二十九日どうにじゅうくにち六宗りくしゅうの十四人しゅうしにん謝表しゃひょうを桓武かんむ

聖王に奉る、延暦二十三年入宋同二十四年御帰朝、此の時始めて伝教大師・天台宗を立て四十余年の文を以て六宗を破り始めて法華の実義之を顕し、欽明自り二百余年の邪義之を改む、又六宗の碩徳たる勤操・徳円・長耀等の十四人・桓武皇帝に謝表を奉りて邪見を翻す。弘法大師空海は延暦二十三年御入宋・大同元年御帰朝、伝教大師は山階寺の行表僧正の御弟子・弘法大師は石淵の勤操僧正の御弟子なり。

第五十一平城

第五十二嵯峨弘仁十三年六月四日伝教大師御入滅同十一日「慈覚大師」戒壇を立つ。

第五十三淳和

衆

秀句に云く「法華經を賛すと雖も還つて法華の心を死す」文。

選択集に云く法然造捨閉閣拋、善導札讚に云く「十即十生・百即

ひやくしやう

百生」又云く「百の時に希に一二を得千の時に希に三五を得」又云く

「千中無一」道綽の安樂集に云く

大集月

藏經を引く「我が末法の時の中の億億の

しゆじやう

衆生行を起し道に臨むも未だ一人の得る者有らず、当今末法は是五濁の

あくせ

惡世なり唯淨土の一門のみ有りて通入す可きの路なり」惠心の往生要集

に云く「利智精進の人は未だ難しと為さず予が如き頑魯の者豈敢てせんや」

こんぽんだいし

根本大師

伝教大師

山家

てんだい

天台の後身なり

守護章に「正像稍過ぎ已つて末法太だ近きに有り法華一乗の機今正に

是れ其の時なり」又云く「一乗の家には都て用いざれ四十年なり但し開し已つ

小乗・權大乘 ただ おわ

はつけいちじよう き まさ

て助道に用いたるを除く」

◆八三 一代五時図 文応元年三十九歳御作

6 1 2 P

於総州

大論に云く十九出家三十成道と

権大乘

華嚴經

「三七日」

華嚴宗

戒

定 智儼

杜順

法蔵

「二七日」

慧 澄観

小乗

俱舍宗

戒定慧

阿含

「十二年」

成実宗

戒定慧

律宗

戒定慧

鑒真和尚

大集經

深密經 じんみつ

法相宗 ほうそうしゅう

玄奘 げんじょう

戒定慧 かいじょうえ

楞伽經 りょうがきょう

禪宗 ぜんしゅう

慈恩 じおん

權大乘 ごんだいじょう

觀經 かんきょう

淨土宗 じょうどしゅう

方等 ほうとう

雙觀經 そうかんきょう

淨土宗 じょうどしゅう

善導 ぜんどう

三十年

金剛頂經 こんごうちょうきょう

淨土宗 じょうどしゅう

大日經 だいにちきょう

真言宗 しんごんしゅう

戒定慧 かいじょうえ

蘇悉地經 そしつちきょう

真言宗 しんごんしゅう

百論「提婆菩薩造」 だいばぼさつ

權大乘 ごんだいじょう

中論「竜樹菩薩造」 りゅうじゆぼさつ

三論宗 さんろんしゅう

般若 はんにや

十二門論

同

三論宗 さんろんしゅう

戒定慧 かいじょうえ

大論 だいろん

同

嘉祥寺 かじょう

吉蔵大師 きちそうだいし

無量義經に云く「方便力を以て四十余年には未だ眞實を顕さず、又云く

無量無辺不可思議阿僧祇劫を過れども終に無上菩提を成ずることを得ず

所以は何ん菩提の大直道を知らざるが故に陰逕を行くに留難多きが故に」

と、又云く「大直道を行くに留難無きが故に」と。

法華經「八箇年」

法華宗

天台宗

戒定慧

「世尊は法久しくして後かならず当に眞實を説き給うべし、種種の道を示

すと雖も其れ實には仏乗の爲なり、正直に方便を捨てて但無上道を説く、

今・此の三界は皆是れ我が有なり其の中の衆生は悉く是れ我が子なり而も

今・此の処は諸の患難多し唯我一人のみ能く救護を爲す復教詔すと雖も

而も信受せず、若し人信ぜずして此の經を毀謗

せば則ち一切世間の仏種を断ぜん○其の人命終して阿鼻獄に入らん、○

まさ
將に魔の仏と作りて我が心を悩乱するに非ずや
しんじつ 多宝証
眞実明の文
あら
舍利弗の卷、
みょうほけきよう
妙法華經○皆是れ
みなこ

ねはんぎよう
涅槃經六に出ず

しえ
法四依

一日一夜

よ
依らざれ

ねはんぎよう
涅槃經

ごぼん
五品

てんだい
天台等

にゅうめつ
八十入滅

初依

ろっこん
六根

しえ
人四依

第二依

しよじ
初地已上

りゅうじゆ
竜樹

ぼさつ
菩薩等

よ
法に依つて人に依らざれ
よ
義に依つて語に依らざれ
よ
智に依つて識に依らざれ

りようぎきよう
了義經に依つて不了義經に

第三依 さんえ

第四依 しえ

等覺菩薩 とうかくぼさつ

天竺 てんじく 十四五六卷

十住毘婆沙論に云く じゅうじゅうびしゃもんろん いわ

竜樹 菩薩造羅 什三藏訳 りゅうじゅぼさつ らじゅうさんぞう

難行道 なんぎやうどう

譬えば陸路を歩行せば苦なれども たと

不退地 ふたい

易行道 いぎやうどう

水道を船に乗れば則ち楽なるが如し すなわ

十仏・百三十余菩薩並に阿弥陀仏等 ぼさつ あみだぶつ

曇鸞法師 どんらんほっし

「齊世」

本三論宗の人なり さんろんしゅう

浄土論註二卷を作る じょうどろんちゅう

道綽禪師 どうしゆくぜん

「唐世」

善導の師なり ぜんどう

安樂集二卷を作る あんらくしゅう

安樂集に云く あんらくしゅう いわ

「大集月藏經に云く我が末法の時の中の億億の衆生起行 だいしつがつぞうきやう いわ

修道すとも未だ一人も得る者有らじ しゅうどう

當今末法は是れ五濁の惡世なり唯浄土の一門のみ有つて通入すべき路な とうこんまっぼう こ

「ただしよく あくせ ただじやうど いちもん

まっぼう

しゅじやう

り」と

唐世とう

善導ぜんどう

玄義一卷・序分義一卷・定善義一卷・散善義一卷・觀念法門一卷

・往生礼讃一卷・般舟讃一卷・法事讃上下已上九卷 隱岐院の

御宇建仁年中今に五十余年なり

法然ほうねん

源空げんくう

選択集せんちやくしゅう 一卷

未だ一人も得る者有らず千の中に一も無し

浄土三部經を除くの外法華經等の一切阿弥陀仏を除く一切の仏・

菩薩・一切の神祇等

難行なんぎょう 聖道しょうどう 雜行そうぎょう

天台法華宗等八宗を捨閉し閣抛す

易行 いぎよう 淨土 じようど 正行 しやうぎよう

阿弥陀仏は十即十生・百即百生
あみだぶつ じゆつそくじゆつしやう ひやくそくひやくしやう

六百三十七部二千八百八十三卷

捨閉閣拋 しやへいかくほう

そうかんきよう

雙觀經に云く「い設たといわれほとけ我わ仏ぶつを得じゆつばうんに十しゆじよう方の衆生至心に信樂しんぎようし我が國に

生れんと欲し乃至十念ないしして若もし生ぜずんば正覺しやうかくを取らじ唯五逆ただごぎやくと誹謗ひぼう

しやうほう

正法しやうほうとを除く」と、道綽どうしゆくの未み有一人得者みういちにんとくしや、善導ぜんどうの千中無一せんちゆうむいつ・法然ほうねんの捨閉しやへい

閣拋かくほう・此等これらは豈謗法あにほうほうに非ずや、法華經第二譬喻品あに云く「若もし人信ぜずし

て此きの經を毀謗きほうせば則すなわち一切世間の仏種いっさいせけん ぶつしゆを断だんぜん・或あるは復讐またひんじゆく蹙しやくして而しかも

疑惑ぎわくを懷いだかん汝当なんじまさに此この人の罪報ざいほうを説もくを聴きくべし若もしは仏の在世ざいせい若もしは

滅度めつどの後に其それ斯この經典きやうてんを誹謗ひぼうすること有ひらん經を誦誦どくじゆし書持しよじすること有

らん者めつどを見て輕賤きやうせん憎嫉そうしつして而しかも結恨けつこんを懷いだかん此この人の罪報ざいほう汝なんじ今復また聴きけ

其の人 命終みょうじゅう して阿鼻獄あびごくに入らん一劫いつくわうを具足ぐそくして劫尽つきなば更生またうまれん
是かくの如ごとく展轉てんでんして無む数しう劫くわうに至いたらん地獄じごく從より出でては當まさに畜生ちくしうに墮おつべし」
涅槃經ねはんぎよう第十じゅうに云いく「問いう一闍提いつせんだいとは其その義い云かん何い、仏い云わく純陀じゆんだ若もし比丘びく及および
比丘尼びくに・優婆塞うばそく・優婆夷うばい有いつて・惡しの言ごんを發しし正法しやうほうを誹謗ひほうし是この重業じゆうごうを
造つくりて永かいく改悔げかいせず心しんに慚愧ざんき無なからん是かくの如ごとき等らの人ひとを名なけて一闍提いつせんだいの
道みちに趣向しゆこうすと為なす、若もし四重しじゆうを犯おかして五逆罪ごぎやくざいを作みずかずり自みら定さだめて是かくの如ごとき
重事じゆうじを犯かすと知しつて而しかも心しんに初はつより怖畏ふい慚愧ざんき無なく肯あて發露はつろせず彼かの正法しやうほうに
於おいて永こく護惜ごしやく建こん立りの心しん無なく毀き皆き輕賤きやうせんして言過咎かぐ多たからん、是かくの如ごとき等
の人ひとも亦また一闍提いつせんだいの道みちに趣向しゆこうすと名なく、若もし復また説ふついて仏法衆ぶつぽう無なしと云いわん
是かくの如ごとき等らの人ひとも亦また一闍提いつせんだいの道みちに趣向しゆこうすと名なく、唯ただ此この如ごとき一闍提いつせんだいの
輩やからを除のきて其その余ほごに施いさば一切讚歎いっさいさんたんすべし」と。

上品じやうぽんは地獄じごくに墮おつ

一 殺生せつしやう

下殺げせつは螻蟻蚊ろうぎもんもう☆

中品は餓鬼に墮つ

二 偷盗

中殺は凡夫人及び前三果の

聖人

下品は畜生に墮つ

三 邪淫

上殺は阿羅漢・辟支仏・菩薩

父母等

十惡

四 妄語

五 綺語

八貪

六 惡言

九瞋

七 兩舌

十癡

殺生

一 殺父

養父母

偷盗

二 殺母

四重

五逆

凡夫上人

邪淫

三 殺阿羅漢

木画像等

妄語

四 出仏身血

五 破和合僧

四人已上

凡夫僧

此等は皆一業引一生なり故に一度惡道に墮すれば還つて二度惡道に墮せず、謗法は一業引多生なれば一度三宝を破すれば度度惡道に墮する是なり、傳教大師の守護章に云く「不正義の一切学人は信受すべからず所以は何ん其の師の墮する所弟子も亦墮ち檀那も亦墮つ金口の明説何ぞ慎まざるべけんや慎まざるべけんや」と。

第一弟子

「長樂寺多念」

隆觀

「南無房一切鎌倉の人人」

第一

「こさか」

善慧房

「当院洛中一切諸人」

法然

第一聖光

「筑紫九国一切諸人」

一条 覚明 かくみょう

今 道阿弥等 どうあみ

成 覚 じょうかく

一 念 いちねん

法 本

一 念 いちねん

已上弟子八十余人 でし

ないしにほんこく いっさいねんぶつ
乃至日本国の一切念仏者並に檀那等、又一切の天台・真言等の諸宗の
ひとびと ほうねん ちふん い
人人又法然が智分を出でず各各其の宗を習えども心は皆一同に念仏者なり、
ほけきよう
法華經を読めども真言を行ずれども皆助業となし念仏を以て正業と為す
ほうぼう とがのが
謗法の失脱るべからず。

◆八四 一代五時図 618P いちだい

竜樹菩薩造いわ
大論に云く十九出家浄飯王の太子 三十成道 悉達太子 しゅつけじょうばん
たいし

権大乘 こんだいじよう

杜順法師 とじゆんほつし

六十卷

智儼法師 ちこんほつし

華嚴經 けこんきょう

華嚴宗 けこんしゅう

八十卷

法藏大師 ほうそうだいし

三七日

增一阿含經 あこんきょう

澄觀法師 ちようかんほつし

世親菩薩 せじんぼさつ

しょうじきょう

小乘經

中阿含經 あこんきょう

俱舍宗 ぐしやしゅう

玄奘三蔵 げんじょうさんぞう

阿含經 あこんきょう

長阿含經 あこんきょう

成実宗 じょうじつ

迦梨跋摩 かうりばだ

十二年

雜阿含經 あこんきょう

律宗 りつしゅう

道宣律師 どうせんりつし

僧

二百五十戒

尼

小乘戒 しょうじょう

五百戒

男女 なんよ

男女 なんよ

玄奘三蔵 げんじょうさんぞう

大師 だいし

五戒 ごかい

八斎戒

深密經 五卷

大集經 だいしつきょう

瑜伽論 ゆいが百卷
唯識論 ゆいしきろん

弥勒菩薩造 みろくぼさつ
世親菩薩造 せじんぼさつ

法相宗 ほうそうしゅう

雙卷經

慈恩 じおん

曇鸞 どんらん

法師 ほっし

浄土三部經 じょうどさんぶきょう

道綽禪師 どうしゆくぜん

觀經 かんきょう

阿彌陀經 あみだ

浄土宗 じょうとしゅう

善導 ぜんどう

わじょう

和尚

ほうねんぼう

法然房

大日經 だいにちきょう

七卷

善無畏三藏 ぜんむいさんそう

権大乘 こんだいじょう

金剛頂經 こんごうちょうきょう

三卷

金剛智三藏 こんごうちさんそう

ほうとうぶ

蘇悉地經 そしつちきょう

三卷

真言宗 しんごんしゅう

不空 ふくう

さんそう

三藏

和尚 わじょう

大師 だいし

大師 だいし

智証大師 ちしょうだいし

三十年

大師 だいし

楞伽經 りょうがきょう

四卷

禪宗 ぜんしゅう

慧果 けいか

弘法 こうぼう

慈覺 じかく

達摩

慧可 えか

僧

道

信

十卷

求忍

百論

提婆菩薩造
だいばぼさつ

中論

龍樹菩薩造
りゅうじゅぼさつ

権大乘
こんだいじょう

慧能
えの

般若
はんによ

十二門論

同

三論宗
さんろんしゅう

興皇
こうこう

四十卷

大智度論
だいちどろん

同

嘉祥大師
かじょうだいし

無量義經
むりょうぎきょう

七十二歳

吉蔵
きちそう

四十余年には未だ真実を顕さず、方便の力を以て四十余年には未だ真実を顕さず、無量無辺不可思議・阿僧祇劫を過れども終に無上菩提を成ずることを得ず、所以は何ん菩提の大直道を知らざるが故に險逕を行くは留難多きが故に、大直道を行くは留難無きが故に。

実大乘 けんろしゅう
顕露宗

法華經 ほけきょう

最秘密宗 ひみつ

八箇年 はちかねん
仏立宗 ぶつりゅうしゅう

法華宗 ほつけしゅう

天台宗 てんだいしゅう

世尊は法久しくして後に要当に真実を説き給うべし正直に方便を捨てて但無上道を説く種種の道を示すと雖も其れ実には仏乗の為なり、今此の三界は皆是れ我が有なり其の中の衆生は悉く是れ我が子なり而も今・

此の処は諸の患難多し唯我れ一人のみ能く救護を為す復教詔すと雖も
而も信受せず、若し人信ぜずして此の経を毀謗せば則一切世間の仏種を
断ぜん、或は復☆蹙して疑惑を懷かん汝当に此の人の罪報を説くこ
とを聴くべし若しは仏の在世若しは滅度の後其れ斯の如き經典を誹謗す
ること有らん経を誦誦し書持する有らん者を見て輕賤憎嫉し而も結恨を
懷かん此の人の罪報を汝今復聴け其の人命終して阿鼻獄に入らん一劫
を具足して劫尽きなば更生じ是の如く展転して無數劫に至らん此に於て
死し已つて更に蟒身を受けん其の形・長大にして五百由旬ならん、若し
是の善男子・善女人・我が滅度の後に能く竊に一人の爲にも法華經の
乃至一句を説かん当に知るべし是の人は則・如来の使なり如来の所遣と
して如来の事を行ずるなり、藥王若し惡人有つて不善の心を以て一劫の
中に於て現に仏前に於て常に仏を毀罵せん其の罪尚輕し若人・一の惡言

を以て在家・出家の法華經を讀誦する者を毀訾せば其の罪甚だ重し
やくおう なんじ しよせつ しよきようしか
薬王今汝に告ぐ我が所説の諸經而も此の經の中に於て法華最も第一な
り我が所説の經典無量千万億にして已に説き今説き當に説かん而も其の
中に於て此の法華經最も為難信難解なり若し法師に親近せば速かに菩薩
の道を得ん是の師に隨順して学せば恒沙の仏を見上ることを得ん、爾の
時に宝塔の中より大音声を出して歎めて言わく善哉善哉釈迦牟尼世尊
能く平等大慧教菩薩法仏所護念の妙法華經を以て大衆の為に説き給う
かくのごとく かくのごとく しゃかむにせせん しゃせつ ごとく みなこ しんじつ しゃよ
是の如し是の如し釈迦牟尼世尊の所説の如きは皆是れ眞實なり・諸余の
經典恒沙の如し此等を説くと雖も未だ難しと為すに足らず若し須弥を
接つて他方無數の仏土に擲げ置かんも亦未だ難しと為さず若し仏の滅度
に惡世の中に於て能く此の經を説かん是れ則ち難しと為す、諸の無智の
人の惡口罵詈等し及び刀杖を加うる者有らん我等皆當に忍ぶべし惡世の

中の比丘は邪智にして心諂曲に未だ得ざるを為れ得たりと謂い我慢の心
充滿せん・或は阿練若に納衣にして空閑に在つて自ら眞の道を行ずと
謂いて人間を輕賤する者有らん利養に貪著するが故に白衣の与に法を
説いて世に恭敬せらるること六通の羅漢の如くならん常に大衆の中に
在つて我等を毀らんと欲する故に國王・大臣・婆羅門・居士及び余の
比丘衆に向つて誹謗して我が惡を説いて是れ邪見の人外道の論議を説く
と謂わん・濁劫惡世の中には多く諸の恐怖有らん惡鬼其身に入つて我を
罵詈し毀辱せん・濁世の惡比丘は仏の方便隨宜所説の法を知らず惡口し
て☆蹙し数数擯出せられん、大神力を現し広長舌を出して上梵世に至ら
しむ諸仏も亦復是の如く広長舌を出し給う。

依報不依人

文殊・普賢・觀音・地藏・等竜樹菩薩・
善無畏・弘法・慈覺・法藏・嘉祥・善導

等なり

一日一夜

涅槃經

ねはんぎょう
にゅうめつ

八十入滅

依義不依語

依智不依識

依了義經

不依不了義經

法華經

觀經等

大日經等

深密經等

華嚴經等

般若經等

◆八五 一代五時鷄圖

いちだい
じゅみょう
623P

壽命三百年

羅什訳

法雲自在王如來

觀自在王如來

百論

千卷

仏滅後六七八

だいろん
大論に云く十九出家三十成道

三十万巻

りゅうじゅぼさつ
竜樹菩薩

めみょうぼさつ
第十一馬鳴菩薩の御弟子付法蔵の第

十三

だいひほうべん
大悲方便論

じゅうまん
十万巻

猛

だいしん
大心論

じゅうまん
十万巻

だむらいろん
大無畏論

じゅうまん
十万巻

じつだいじょう
実大乘

こんだいじょう
権大乘

しょうじんいちだい
立五教摂尽一代

けこんきょう
華嚴經

二七日
三七日

けこんしゅう
華嚴宗

ちこんほつし
智儼法師

ほうそうだいし
法蔵大師

とじゅんわじょう
杜順和尚

だいし
香象大師

けんしゅほつし
賢首法師

けつきょうぼんもうきょう
結經梵網經

だいじょうかいこれ
大乘戒之を出す

けこん
華嚴

和尚 わじょう

小乘 しょうじょう

十二年

阿含經 あこんきょう

長阿含 あこん
中阿含 あこん

俱舍經 くしゃしゆ

定

論 ろん
成実宗 じやうじつ

增一阿含 あこん

雜阿含 あこん

律宗 りつしゆ

結經 けつきょう
遺教經 いじきょう

小乘戒之を出す これ

大乘

或説時不定 ある

或十六年

深密經 じんみつ

或云法華已前 ある
或云法華已後 ある

一百卷 彌勒菩薩説 みろくぼさつ
無著 むぢやく

菩薩筆 ぼさつ

或八箇年 あるはちかねん

五卷

瑜伽論 ゆいが

方等部 ほうとうぶ

菩薩造 ぼさつ

世親 せじん

権大乘
ごんだいじょう

唯識論
ゆいしきろん

玄奘三蔵
げんじょうさんそう

大師
だいし

楞伽經
りょうがきょう

禪宗
ぜんしゅう

・ある
或は大円覚經
えんかく

・ある
或は首楞嚴經
しゅりょうこんぎょう

・ある
或は云く一切經
いっさいきょう

・ある
或は云く教外別伝
きょううべつでん

達磨大師
だるまいし

・ある
或は諸法無行經
しよほうむぎようきょう

・ある
或は金剛般若經
こんごうはんによきょう

璎珞經
ようらく

結經
けつきょう

六經十一論

慈恩
じおん

有相宗
ゆうそう
ほうそうしゅう

法相宗

三時を立て一代を摂尽す
いちだい
しゅうじん
三十頌

一卷七枚

菩提心論 ぼだいしんろん

・或云竜樹造 ある りゅうじゆ

・或云不空造 ある ふくう

善無畏 ぜんむい

大日經 だいにちきよう

〔七卷〕

三蔵 さんぞう

金剛頂經 こんこうちようきよう

〔三卷〕

真言宗 しんごんしゅう

顯密二道 けんみつにとう

を分ち五蔵を立て・或は十住心を立て ある じゅうじゅう

蘇悉地經 そしつちきよう

〔三卷〕

金剛智 こんこうち

三蔵・不空三蔵一行阿闍梨 さんぞう ふくうさんぞう あじやり

・或は云く方等部 ある いわ ほうとうぶ

・或は云く華嚴部 ある いわ けこん

・或は云く般若部 ある いわ はんんにやぶ

・或は云く法華部 ある いわ ほっけ

・或は云く涅槃部

・或は一代諸経の外

・双観経

・観経

・浄土宗

曇鸞法師

道綽禪師

善導和尚

惠感禪師

小乘法師

法照

阿弥陀経

難行

易行

聖道

浄土

雑行

正行

三十年

・ある いわ
或は云く二十二年

・ある いわ
或は云く十四年

だいほんはんにや
大品般若

こうさんはんにや
光讚般若

こんごうはんにや
金剛般若

はんにや
天王問般若

ま か はんにや
摩訶般若

はんにやきよう
般若經

にんのうはんにや
仁王般若

けつきよう
〔結經〕

・ある
或は四論宗という

淨影

しよぎよう
諸行

ねんぶつ
念仏

百論

りゅうじゅぼさつ
竜樹菩薩造

中論

同

十二門論 同

だいろん
大論

同

三論宗 さんろんしゅう

興皇 こうこう

・或はある法性宗と云うほつしやう

嘉祥寺の吉蔵大師 かじやう きちそうだいし

・或はある無相宗と云うむそう

道朗

三時を立て一代を撰いちだい尽しやうじんす、・或はある二蔵を立

て・或はある三転法輪を立つてんほうりん

華嚴三七日阿含十二年方等・般若三十年已 けごん あごん ほうとう はんによ

上四十二年なり

法界性論に四十二年 ほつかい

無量義經に云く方便力を以ての故に四十余年には未だ真実を顕さず、
むりやうぎきやう いわ ほうべん ゆえ よんじゅうよねん いま しんじつ あらわ

又云く無量無辺不可思議・阿僧祇劫を過るも終に無上菩提を成ずるを得
いわ むりやうむへんふかしぎ あそぎこう すぐ つい むじやうぼだい じやう

ず、所以は何ん菩提の大直道を知らず險逕を行くに留難多きが故に、又
ゆえん いか ぼだい じきごう けんぎやう るなん ゆえ

云く大直道を行けば留難無きが故に。
いわ じきごう るなん ゆえ

しよしゅうえびよう
諸宗 依憑宗

ぶつりゅうしゅう
仏立宗

せそんほうくご
世尊法久後・要當說真実

ある
廢也・或は前三教と云い・或は前四教

ぜんしみ
前四味と云うなり、或は先の三教の円教

てんだいしゅう
天台宗

に摂尽するを云う。

ほっけしゅう
法華宗

しょうじきしゃほうべん
正直捨方便・但說無上道

ほけきよう
法華經

ひみつ
秘密宗

はつきよう
四時・七教・五時・八教

あらわ
顕露彰灼宗

すいじしゅじゅ
雖示種種道・其実為仏乘

いちぶつじよう
唯一仏乘

ふげん
普賢經

しょうひまさぶつ
將非魔作仏・悩乱我心耶

えいざんかいだん
叡山戒壇

くもくしよ
久默此要・不務速說

けこんきよう
華嚴經・大日經・深密經・楞伽經・大品經・般若經等

むりようぎきよう
無量義經

ねはんきよう
涅槃經等

「我が所説の經典は無量千万億にして已に説き今説き當に説かん而も
其の中に於て此の法華經最も為難信難解なり」、記の六に云く「縦い經
有つて諸經の王と云うとも已今當説最為第一と云わず、兼但对帶其の義
知んぬべし」、玄の三に云く「舌口中に爛る」、籤の三に云く「已今當の
妙此に於て固く迷えば舌爛れて止まざるは猶華報と為す謗法の罪苦長劫
に流る」、又云く「諫曉止まず」

法四依第六卷 人四依

結經

像法決疑經

「一日一夜」

依法不依人
依義不依語

涅槃經

佛智

八十御入滅

七十九・八十・八十一

八十二・百五・百二十

菩薩等識
依智不依識
法華經

爾前の

経経
きようぎよう

釈尊
しゃくそん

主

人王

天王

八
虐に違す
い

師

師匠
ししょう

主上
天尊
世尊
せそん

法王
國王
ほうおう
こくおう

依了義經不依不了義經
りようぎきよう ふ え ふりようぎきよう

二天

魔☆修羅天
ひちゅう

毘紐天
びちゅう

大梵天
ぼんてん

第六天
だいろくてん

帝釈天
たいしゃく

天竺
てんじく

師子類王
ししきようおう

净飯王
じようばん

震旦
しんたん

三皇
さんこう

五帝

三王等

日本国
にほんこく

七逆に違いす

涅槃疏云

章安釈

一体の仏主師親と作る

三仙

外道師

迦毘羅

神武天皇

☆楼僧伽

勒沙婆

五逆に違いす

親

八親
六親

六師
外典師
四聖

尹喜
務成

老☆

呂望

周公旦

孔子

顔回

理性の子

結縁の子

二十五有

其中衆生

悉是吾子

世尊
三界特尊
今此三界・皆是我有

文句の五に云く一切

衆生等しく仏性有り

仏性同じきが故に等しゆえ

く是れ子なりこ

而今此処・多諸患難ここ しょげんなん
唯我一人能為救護ただわれひとりのういくこ

玄の六に云く本此の仏に従つて初めて道心どうしんを

発し亦此の仏に従つて不退の地に住すおこ また ふたい

もんく 文句の六に云く「旧は西方の無量寿仏を以て長者に合す今は之を用いず、さいほう さいほう むりようじゅぶつ ちようじゃ がっ これ もち

西方は仏・別に縁異り仏別なる故に隠頭の義成ぜず縁異る故に子父の義成さいほう ゆえ おんけん ゆえ

ぜず又此の経の首末全く此の旨無し眼を閉し穿鑿せよ、舎那の著脱近く尚しゅまつ むね まなこ せんさく しゃな じゃくだつ なお

知らず弥陀は遠きに在り何ぞ嘗て変換せん」云云、記の六に云く「西方等みだ なんだ かつて いわ

とは弥陀・釈迦の二仏既に殊なり豈弥陀をして珍玩の服を隠さしめ乃ちみだ しゃか すで こと あにみだ ちんがん すなわ

釈迦をして弊垢の衣を著せ使めん状、釈迦珍服の隠す可き無く弥陀唯勝妙しゃか へいく ちやく しゃかちんふく べ なく みだただしようみよう

の形なるに当る、況や宿昔の縁別に化導同じからざるをや、結縁は生のいわんやむかし けどう けちえん

ごと じようじゆ
如く成就は養の如し生養の縁異れば父子成ぜず、珍弊途を分ち著脱殊に
へだた しようきよう
隔る消経・事闕けて調 熟の義乖く当部の文永く斯の旨無し、舎那著脱
しやな
等とは舎那の動ぜずして
しか まよい
而も往くに迷う、弥陀の著弊は諸経に文無し、若し平等意趣を論ぜば
かれこれいずくんかつて みずか ほこ
彼此奚ぞ嘗て自ら矜らん、縦い他を我が身とするも還つて我が化を成す我
すなわ
他の像を立つれば乃ち他の縁を助く人之を見ざれば化縁便ち乱る、故に知
おうじん
んぬ夫の結縁とは並に応身に約すること在我昔曾て二万億等と云うが
ごと いわんやじゅうろくおうじ よ
如し、況や十六王子始縦り今に至つて機感相成し任運に分解す、是の故に
みだ
彼の弥陀を以て此の変換と為す可からず」

種熟

とうほうえん
東方有縁

だいいちあしゆくぶつ
第一阿☆仏

脱

主 師 親

大通の太子だいつう たいし

種熟西方有縁しゅじゅく さいほううえん

十六王子じゅうろくおうじ

第九阿弥陀仏だいじゅうあみだぶつ

沙弥いよいよ

脱

種熟娑婆世界しゅじゅく しゃばせかい

第十六釈迦牟尼仏

脱

主 師 親

記の九に云く「初・此の仏菩薩に従つて結縁し還た此の仏菩薩に於て成熟けちえん ま ぼさつ おい じょうじゅく

す、玄の六に云く「仏尚自ら分段に入つて仏事を施作す有縁の者何ぞ来い わ な おみずか ぶつじ な うえん なん

らざるを得ん譬えば百川の海に潮す応須が如し縁に牽れて応生することた と べきが こと ひか

亦復是くの如し、又云く「本此の仏に従つて初めて道心を発し亦此の仏またまた かくのこと い わ べきが こと どうしん おこ また

に従つて不退地に住す」ふたい

本尊ほんぞん

劣応身釈迦如来おうじんしゃかにょらい

俱舍宗ぐしゃしゅう

成実宗じょうじつ

律宗りつしゅう

おほう
うしん
じん

心身

来
おうじん

心身

来

身

来しん

身

だい
は

台は

仙

導等

論に

とも

の本尊

の
本尊

宗の本尊

示の本尊

宗の本尊

宗の
本尊

日宗の本尊

浄土宗の本尊

の遠きを知らず復父統の邦に迷わば徒に才能

三皇已前は父を知らず人皆禽獸に同じ」

華嚴けこんのるさな真言しんこんの大日等だいにちは皆此みなの仏けんぞくの眷属けんぞくたり

久遠くおん実成じつじょう実修じつじゅう実証じつしゅうの仏

天台宗てんだいしゅうの御本尊ごほんぞん

釈迦如来しゃかにょらい

応身おうじん 有始有終うしうしゅう

始成しじょうの三身さんじん 報身ほうしん 有始無終うしむしゅう

真言しんこんの大日等だいにち

法身ほっしん 無始無終むしむしゅう

応身おうじん

久成くじょうの三身さんじん 報身ほうしん 無始無終むしむしゅう

法身ほっしん

華嚴宗けこんしゅう・真言宗しんこんしゅうの無始無終むしむしゅうの三身さんじんを立つるは天台てんだいの名目みょうもくを盗み取つて自

の依経えきょうに入れしなり。

◆八六

釈迦しやかいちだい一代五時繼図

633P

大論だいろんに云くいわ十九出家しゅっけ・三十成道じょうどう・八十入滅文にゅうめつ、此このの論ろんは竜樹菩薩りゅうじゅぼさつの造

じゆみよう

・壽命じゆみよう三百年・三十万偈げの論師ろんしなり、付法藏ふほうぞうの第十三ぶつめつ仏滅後七百年の人なり。

り。

せつしよ

てんじくまかだこく

じやくめつどうじようほだいじゅげ

説処せつしよは中天竺摩竭提国の寂滅道場菩提樹下・七処八会

けりゆうじつぽうと

仮立実報土・別・円の二教を説く

三七日の説なり「三七日は法華ほっけの説二七日は華嚴けこんの説」

けこんきよう
華嚴經

兼なすと名く

こんだいじよう

権大乘にゅうみなり乳味なすと名く頓大とんだいの機きの為ために説く

とんきよう

なす

頓教とんきようと名く「亦秘密教またひみつ有り亦不定教またふじよう有り」擬宜なすと名く

けつきよう

ほんもうきよう

結經けつきようは梵網經ほんもうきようなり

めみようぼさつ

馬鳴菩薩

起信論を造る

天竺 てんじく

天親菩薩 てんじんぼさつ

十地論を造る じゅうちろん

竜樹菩薩 りゅうじゅぼさつ

十住毘婆沙論を造る じゅうじゅうびしゃもんろん

華嚴宗祖師 けこんしゅうそし

杜順和尚 とじゆんわじょう

法蔵大師 ほうぞうだいし

漢土 かんど

智嚴法師 ちこんほつし

澄觀法師 ちようかんほつし

此の華嚴教けこんというは所謂いわゆる仏摩訶陀国寂滅まかだこくじやくめつ道場菩提樹下どうばうぼだいじゆげにして始めて正覺しやうかく

を成じたまいし時・七処八会しちこはくわいに於て法惠ほうえ・功德林くどく・金剛幢こんぐうどう・金剛藏こんぐうざうの四

菩薩ぼさつに加して頓大とんだいの根性こんじやうの為ために因陀羅網いんだら・無障礙土むざうがいの相さうを現げんじ別円べつえんの両教

・住行向地ぎやうこうじの功德くどく・法界唯心ほつかいゆいしんの理とを説き給たまう所謂華嚴經いわゆるけこんきやうなり、此の經には

四十一位しゅうじゅういちゐを明いす謂いわく十住じゅうじゅう・十行じゅうぎやう・十廻向じゅうくわう・十地じゅうち・仏果ぶつがなり、此の經には

新古しんこの二訳ふたゝし有り六十華嚴けこんは旧訳くやくなり八十華嚴けこんは新訳しんやくなり、梵網經ぼんもうきやうを以て

華嚴の結経と為す、此の華嚴は化儀は頓部化法は別円なり、成道の最初
 に此の教を説き給う譬えば日出でて先づ高山を照すが如し厚殖善根は斯の
 頓説を感じ、頓説本と小の為にせず彼の初分に於ては永く声聞無し後分に
 は即ち有り復た坐に在りと雖も聾の如くの如し、経文に云く「即ち傍人
 を遣わして急に追うて將に還さんとす乃至悶絶して地に☆る」云云。

せつしよはらなろくやおん
説処は波羅奈国鹿野苑・同居土の説

但さんぞう三蔵教を説く・但なずと名く

十二年しょうじゅう小乗しょうじゅうを説く・酪味らくみと名なく

三乗さんじょうの根性こんじょうの為ために説く・漸教ぜんきょうと名なく「亦秘密教またひみつ有あり亦不定またふじょう

教有り」

誘引と名く

けつきよう
結経は遣教経なり

俱舎宗・成実宗・律宗

此の阿含は是小乗教なり、仏・成道五十七日を経て梵王の請に赴きはらなろくやおんおいちんによ波羅奈国の鹿野苑に於て陳如等の五人の為に三蔵教の四諦の法論を説き給う、謂く四阿含等の小乗経を説くなり、増一阿含には人天の因果を明し、長阿含には邪見を破し、中阿含には真寂の深義を明し、雜阿含には禪定を明す、遣教経を以て結経と為す、化儀は漸の部の初め化法は三蔵教なり、三乗の根性の為に此の阿含教を説く経の次第に依れば日の次に幽谷を照すが如し、浅行を偏えに明せば当分に漸を解る三蔵本大の為ならず座に在りと雖も多☆婆和す、経に云く「將に其の子を誘引せんと欲して方便を説く密かに二人の形色憔悴せる威徳無き者を遣わす」云云。

説処は欲色二界の中間大宝坊同居土の説なり

蔵通・別円の四教を説く

十六年の説なり みいでら 三井寺の義説時不定なり せんもん 山門の義権大乘生蘇味

対と名く なす

四教の機 き の為 ため に説く ぜんきよう 漸教と名く なす 亦秘密教有 またひみつ 亦不定教有 またふじよう

弾訶と名く なす

結経 けつきよう は璎珞経なり ようらく

方等部 ほうとうぶ

深密経 じんみつ 法相宗 ほうそうしゅう 玄奘 げんじよう 三蔵慈恩大師 さんざうじおんだいし

楞伽経 りようがきよう 禅宗 ぜんしゅう 達磨 だるま 曇鸞法師 どんらんほうし

観経 かんきよう 道綽禅师 どうしゆくぜん

雙観経 そうかんきよう 浄土宗 じようどしゅう 祖师 そし 善導和尚 ぜんどうわじよう

阿弥陀経 あみだ 法然上人 ほうねんしやうにん

大日経 だいにちきよう 善无畏三蔵 ぜんむいさんざう

金剛頂経 こんこうちようきよう 真言宗 しんごんしゅう 祖师 そし 金剛智三蔵 こんこうちさんざう

蘇悉地經

不空三藏

此の方等教は謂く鹿苑の後般若の前四教の機に對し処処に四教の法を説いて唯だ二乗を彈呵し菩薩を稱揚す、所謂密嚴經・厚嚴經・思益經・方等經・楞伽經・淨名經等なり、瓔珞經を以て結經と為す、化儀は漸部の中・化法は四教なり、説教の次第に依れば日の次ぎに平地を照すが如し影万水に臨み器の方円を逐い波の動靜に随つて一仏土を示すに淨穢不同ならしめ一身を示現するに巨細各異なり、一音の説法・類に随つて各解なり、くい 恐畏しかんき 歡喜しおんり 厭離しだんぎ 斷疑すじんりきふく 神力不共の故に見にゆえ 淨穢有りじようえ 間にほうへん 褒貶有りきゆう 嗅にせんぶく 胆荀とせんぶく 不胆荀と有りじゃくしん 華に著身と不著身と有りじようみようほうとう 淨名方等の如し、きゆうもん 經文にいわ 云く「是を過ぎて已後、心相体信じて入出難り無し」文。

説処は鷲峯山・白鷺池等の四处十六会・同居土の説なり

權大乘なり

帶と名くなす

熟蘇味と名くなす

十四年の説なり「三井寺の義」三十年の説「山門の義」さんもん

般若部
はんによぶ

漸と名くなす「亦秘密教有り亦不定教有り」またひみつ またふじょう

淘汰と名くなす

けつきょう にんのうきょう

結経は仁王経なり

已上四十二年なり

百論

中論 さんろんしゅう 三論宗 そし 祖師 かじょうだいし 吉祥大師

十二門論

きちそうだいし 吉蔵大師

此の大般若経は唐の玄奘三蔵の所訳是れ新訳なり、此の経は一部六百卷

・二百六十五品・六十億四十万字・一万

六百三十八紙なり、此の般若経は方等の後・法華の前四处十六会の中に

おい ござん 於て後三教の機きの爲ために広く諸部しよの般若はんを説く、所謂光讚般若經・文殊問
般はんにやきよう 金剛般若經・能斷金剛般若經・小品般若經・小品般若經・大品般若經・大般若經・大般若經等なり、仁王般若經を以て結經と
般はんにやきよう 天王問般若經・大般若經等なり、仁王般若經を以て結經と
爲す、唯ただ化儀けぎは漸教ぜんきようの後・化法は通別円けほう つうべつえんなり、此の般若經の時も二乗
ねんじよ みなこ まかえん またしんし しゅぼだい ぼさつ ため はんじや
の念処道品は皆是れ摩訶衍と説いて亦身子・須菩提をして菩薩の爲に般若
を轉教せしむ。

げんぎ いわ だいにん そ 玄義に云く「大人は其の光用を蒙り嬰兒は其の精明を喪う夜遊の者は伏匿
さむ こうじよう ゆえ いわ 但菩薩の爲に其の實事を説いて我が
し作務の者は興盛す」故に文に云く「但菩薩の爲に其の實事を説いて我が
ため 此の眞要を説かず、三人俱に學すと雖も二乗は証を取る具に大品等の
こと きようもん いわ 爾の時に窮子即ち教勅を受けて衆物を領知し乃至而も
如し」經文に云く「爾の時に窮子即ち教勅を受けて衆物を領知し乃至而も
いちきん けしゅ 一☆を☆取するの意無し」云云。

仏・自ら四十余年の諸經を破し給う事、無量義經說法品に云く「我先に

どうじょうぼだいじゅげ

道場菩提樹下に端座すること六年にして阿耨多羅三藐三菩提を成ずること

を得たり仏眼を以て一切の諸法を觀るに宣説すべからず所以は如何諸の

しゅじょう　しょうよくふどう

衆生の性欲不同なることを知れり性欲不同なれば種種に法を説き種種に

法を説くことは方便力を以てす四十余年には未だ真実を顯わさず」云云、

いわ　もんじ

又云く「文辞は一なりと雖も義は各異なり」云云、伝教大師の無量義經の

注釈に云く

いわ

「性欲不同なれば種種に法を説くとは是れ能被の教を挙ぐるなり釈迦一代

よんじゅうよねん　しよせつ

四十余年の所説の教略して四教及び八教あり所謂樹王の華嚴・鹿苑の阿含

・坊中の方等・鷲峯等の般若・演説一乘・大小の菩薩の歴劫修行・

しょうじょう　さんぞう

小乗の三蔵教・

だいじょう

大乘の通教・大乘の別教・大乘の円教・頓教・漸教・不定教・

ひみつ　かくのこと

秘密教是くの如き等の前四味各各不同なり是の故に名けて種種の説法と

な
為す」云云、又云く「但随他の五種性等門外の方便・差別の権教・帯権の
いちじよう
一乗を説いて未だ随自一仏乗等・露地の真実・平等の直道・捨権の
いちじよう あら
一乗を顕わさず是の故に説いて方便力を以て四十余年未だ真実を顕さずと
かくのゆえ ほうべん
言う」と云云、無量義經に云く「若し衆生有つて是の經を聞くことを得ば
むりようぎきよう いわ
すなわこ 則ち為れ大利なり所以は如何若し能く修行すれば必ず疾く無上菩提を成ず
ゆえん いかんも よ しゆぎよう
ることを得ればなり、其れ衆生有つて聞くことを得ざる者は当に知るべし
そ しゆじよう
これらこ 是等は為れ大利を失えるなり、無量無辺不可思議阿僧祇劫を過ぐれども
うしな むりようむへんふかしぎあそぎこう す
つい むじようぼだい 終に無上菩提を成ずることを得ず所以は如何菩提の大直道を知らざる故に
じよう けんぎよう
けんぎよう 險逕を行くに留難多きが故に」云云、注釈に云く「疾く無上菩提を成ずる
るなん ゆえ
ことを得ずとは未だ直道一乗の海路を解せず未だ純円六度の固船に乗ら
いま じつそうほうべん
ず未だ実相方便の順風を得ず是の故に横道の三乗嶮路の歩行留難多き処
かくのゆえ さんじよう
こんくもうそうむり 勲苦妄想夢裏の大河なり是の故に説いて疾く無上菩提を成ずることを得
かくのゆえ と むじようぼだい じよう

ずと言ふなり」云云、秀句の下に云く「法華經を讀むと雖も還つて法華の心を死す」云云、無量義經に云く「次に方等十二部經・摩訶般若・華嚴海空を説いて菩薩の歷劫修行を宣説せしかども」云云、伝教大師秀句の下巻に云く「謹しみて無量義經を案ずるに云く方等十二部經とは法相宗所依の經なり摩訶般若とは三論宗の所依の經なり華嚴海空とは即ち華嚴宗の所依の經なり但歷劫修行を説いて未だ大直道を知らず」云云、天台大師玄義の五に云く「成道より以來四十余年未だ眞實を顯わさず法華に始めて眞實を顯わす」相伝に云く仏の年七十二歳にして法華經を説くと云云、慧心僧都の一乗要決の下に云く「仏既に説いて言く法華眞實なり前は未だ眞實を顯わさず何ぞ強ちに仏教に背いて法華の怨嫉と爲るや」云云、記の八に云く「略して經題を挙げて玄に一部を収む故に仏欲以此妙法等と云ふなり」釈籤一に云く「次に經題を釈す初めには妙法の兩字は通じて本・迹を

詮^{せん}す蓮華^{れんげ}の両字は通じて本・迹^{たと}を譬^{たと}う

説^{せつ}処^{しよ}は靈山^{りやうぜん}虚空^{こくう}の二処^{じつ}三會^{ぼうと}実報^{じつ}土^との説

じつだいじよう

実大乘

はちかねん

八箇年の説

かいえ みようてん

又開會の妙典とも純円一実の説とも一円機^きの説とも云う

ほけきよう

法華經

だいごみ

えんきよう

円教

とんふじよう

頓不定と秘密無し

けつきよう

結經は普賢經

ぶつりゆうしゆう

仏立宗

ほつけしゆう

てんだいしゆう

一に靈山會

こくう

序品より法師品に至る十品

ほうとうほん

二処三會の儀式

二に虚空會

宝塔品より神力品に至る十一品

本・迹の両門

三に靈山会 りようぜん

嘱累品より勸發品に至る七品 ぞくるい かんほつぽん いた

序品より十四品は迹門なり じよぽん しゃくもん

開権顕実と名く かいこんけんじつ なず

涌出品より十四品は本門なり ゆじゅつぽん ほんもん

開近顕遠と名く かいこんけんのん なず

此の法華經は第五時の教なり、無量義經を開經と為し觀普賢經を結經と ほけきよう な

為す、化儀は會漸歸頓・會三歸一・化法は純円なり、般若の後・雙林の前 な けぎ えぜんきとん けほう じゆんえん はんによ そくりん

・純ら一の円機に對して真實を説くなり、日光普なく照すに土圭の測影縮 もつぱ えんき しんじつ あま てら どけい そくいしゆく

ならず盈ならざるが如し低頭挙手・皆仏道を成ず汝は實に我が子・我は實 えん ご ていずこしゆ みなぶつどう じよう なんじ

に汝が父・唯だ如來の滅後を以て之を滅度す、此の第五時の教は是れ日中 なんじ た によらい めつご これ めつど こ

にして四時に非ず是醍醐にして四味に非ず是れ定にして不定に非ず是れ あらわ ひみつ あら さんじよう ほうべん ほうかい え いちぶつじよう

顕露にして秘密に非ず三乘・五乘・七方便・九法界を會して一仏乘に入 あらわ ひみつ あら さんじよう ほうべん ほうかい え いちぶつじよう

らしむ所以に迹門には二乗初住の位に叶て無生忍を得・成仏の記を受く ゆえん しゃくもん にじようしよじゆう かない むじようにん う じようぶつ

八歳の竜女は男子に變成して即身に無垢の成道を唱う、本門には二世の りゆうによ そくしん むく じようどう とな ほんもん

弟子増道損生の益を得・凡そ三周四説不可思議なり方便品に云く「世尊の法久くして後要ず当に眞実を説くべし」又云く「未だ曾て説ざる所以は説時未だ至らざるが故なり今正しく是れ其の時なり決定して大乘を説かんと」云云、又云く「乃至一偈に於ても皆成仏すること疑無し十方仏土の中・唯一乗の法のみ有つて二も無く亦三も無し仏の方便の説を除く」又云く「諸仏世に出る唯此の一事のみ実なり余の二は則ち眞に非ず」、普賢經の記に云く「故に正説に云く唯此の一事のみ実にして余の二は則ち眞に非ずと斯れに多義有り、一には非頓非漸の妙法を指して一事實と爲し而頓而漸を余二の権と爲す、二には三教の仮名を呼びて非眞と爲し一円の実理を指して一実と爲す、三には四味を以て非眞と爲し醍醐を以て一実と爲す」と、方便品に云く「終に小乗を以て衆生を済度せず」云云、又云く「若小乗を以て化すること乃至一人に於てもせば我則ち慳貧に墮せん此

の事不可と為す」又云く「正直に方便を捨てて但だ無上道を説く」と、玄
の九に云く「廃三頭一とは此れ正しく教を廃す其の情を破すと雖も若し教
を廃せざれば樹想還つて生ず教を執して惑を生ず是の故に教を廃す正直に
ほうべん
方便を捨てて但だ無上道を説く十方仏土の中唯だ一乗の法のみ有り二も
なく亦三も無し」云云、玄義の一に云く「華落は権を廃するを譬え蓮成は
実を立するを譬う」文に云く「正直に方便を捨てて但だ無上道を説く」云
云、伝教大師の顕戒論に云く「白牛を賜う朝には三車を用いず家業を得
る夕べには何ぞ除糞を用いん」故に經に云く「正直に方便を捨てて但だ
むじょうどう
無上道を説く」と、方便品に云く「我が昔の所願の如く今已に満足す」云
云。

玄義の十に云く「即ち方便の一乗を廃して唯だ円実の一乗なり故に云く
我本と誓願するが如き今已に満足す」方便品に云く「当来世の惡人仏一乗

を説き給うを聞いて迷惑して信受せず法を破して惡道に墮せん」と云云、
又云く「法を聞き歡喜し讃めて乃至一言を發す則ち為れ已に一切三世の仏
を供養するなり」譬喩品に云く「今・此の三界は皆是れ我が有なり其の中
の衆生は悉く是れ我が子なり而も今・此の處は諸の患難多し唯我一人の
み能く救護を為す」云云、文句の六に云く「旧は西方の無量壽仏を以て、
以て長者に合す今之を用いず西方の仏・別に縁・異なり仏・別なり故に
隱顯の義・成ぜず縁異なるが故に子父の義・成ぜず又此の經の首末全く此
の旨無し閉眼穿鑿せよ」、疏記の六に云く「弥陀・釈迦二仏既に殊なり
況や宿昔の縁・別に化導同じからざるをや結縁は生の如く成熟は養の
如し生養の縁異なるれば父子成ぜず珍幣途を分ち著脱殊に隔たる消經事
闕け調 熟義乖く当部の文・永く斯の旨無し」云云、又云く「往昔は大小
の兩縁俱に釈迦に在りとし今は尊特垢衣俱に弥陀に在りとせば更に笑う

可きことを成ず」云云、涅槃經の疏の一に云く「無救無護無所宗 仰とは此れ
は無主の苦を釈す貧窮孤露・一旦遠離・無上世尊とは此れは無親の苦を
釈す設有疑惑・當復問誰とは此は無師の苦を釈す」云云、涅槃經の四に云く
「我又闍浮提の中に示現し疫病劫起多く衆生有つて病に悩む所と為んに
去つて医藥を施し然して後に為に微妙の法を説いて其をして無上菩提に安
住せしむ」云云、涅槃經の一に云く「我等今より救護有ること無く宗 仰す
る所無く貧窮孤露なり、一旦無上世尊に遠離したてまつらば設い疑惑有り
といえども當に復た誰にか問うべし」同二に云く「主無く親無ければ家を
亡し国を亡す」又云く「一体の仏を主師親と作す」譬喩品に云く「一切
衆生・皆是吾が子なり」云云、壽量品に云く「我常に此の娑婆世界に在
つて説法教化す亦余処の百千万億那由佉阿僧祇の国に於ても衆生を導利
す」云云、大論に云く「十萬恒河沙等の三千の国土を名けて一仏国土と

為す是の中に更に余仏無し実に一りの釈迦仏のみなり」云云、寿量品に云く「我も亦為れ世の父諸の苦患を救う者なり」云云、宝塔品に云く「能く来世に於て此の經を読み持たんは是れ眞の仏子なり」云云、譬喻品に云く「若し人あつて信ぜずして此の經を毀謗せば則ち一切世間の仏種を断ず其の人命終して阿鼻獄に入り一劫を具足して劫尽きて更に生じかくのごとて展転して無數劫に至らん」又云く「但大乘經典を受持するこを樂つて乃至余經の一偈をも受けざれ」妙樂大師の五百問論に云く「況や彼の華嚴は但福を以て比す此の經の法を以て之を比するに同じからず、故に云く乃至不受余經一偈と人之を思はず徒らに引く何んの益あらん」玄義の五に云く「究竟の大乗は華嚴・大集・大品・法華・涅槃に過ぐる無し」妙樂の釈籤の十に云く「請う有眼の者委悉に之を尋ねて法華は漸円・華嚴の頓極に及ばずと云うこと勿れ当に知るべし法華は部に約するとき

は則ち尚華嚴・般若を破し教に約するときは則ち尚別教の後心を破す」
譬喩品に云く「初め仏の所説を聞いて心中大いに驚疑す將に魔・仏と作つて我が心を悩乱するに非ずや」宝塔品に云く「爾の時に宝塔の中より大音声を出して歎めて言く善哉善哉釈迦牟尼世尊能く平等大慧教菩薩法所護念の妙法蓮華經を以て大衆の為に説き給うことは是の如し是の如し釈迦牟尼世尊所説の如きは皆是れ眞実なり」又云く「釈迦牟尼仏・快く是の法華經を説き給え我是の經を聴かんが爲の故に而かも此に來至せり」と云云、又云く「大音声を以て普く四衆に告ぐ誰か能く此の娑婆国土に於て広く妙法華經を説かん今正しく是れ時なり如來久しからずして當に涅槃に入り給うべし仏・此の妙法華經を以て付屬して在ること有らしめんと欲す」法師品に云く「藥王若し人有つて何等の衆生か未來世に於て當に作仏することを得べしと問わば応に示すべし、是の諸人等・未來世に於て

必ず作仏さぶつすることを得んと何を以ての故に善男子・善女人・法華經の乃至なにし一句に於て受持し誦誦せん」云云、宝塔品に云く「諸余の經典數恒沙の如くごとくならん、此等を説くと雖も未だ難しと爲るに足らず若し仏の滅後惡世の中に於て能く此の經を説く是則ち難しと爲すと」提婆品に云く「仏諸の比丘びくに告げ給わく未來世の中に若し善男子善女人有つて妙法華經の提婆達多品を聞いて淨心に信敬して疑惑を生ぜざらん者は地獄・餓鬼・畜生に墮ちずして十方の仏前に生ぜん、所生の處には常に此の經を聞き若し人天の中に生れば勝妙の樂を受け若し仏前に在らば蓮華より化生せん」又云く「當時の衆会皆竜女の忽然の間に變じて男子と成つて菩薩の行を具してすなわなんぼうむく即ち南方無垢世界に往き宝蓮華に坐して等正覺を成じ三十二相・八十種好あつて普く十方一切衆生の爲に妙法を演説するを見る」又云く「爾の時そに娑婆世界の菩薩・声聞・天竜・八部・人と非人と皆遙かに彼の竜女の

じょうぶつ

あまね

にんてん

ため

かんき

ことことはる

成仏して普く時の会の人天の為に法を説くを見て心大いに歡喜し悉く遙かに敬礼す」分別功德品に云く「阿逸多是の善男子・善女人は我が為に復た

たて

およ

そうぼう

しゅうそう

くよう

もち

ゆえん

塔寺を起て及び僧坊を作り四事を以て衆僧に供養することを須いず、所以

いかに

ぜんなんし

ぜんによんこ

きやうてん

じゆじ

どくじゆ

すて

たて

は如何是の善男子・善女人是の經典を受持し誦誦する者は已に塔を起て

そうぼう

しゅうそう

くよう

な

すなわこ

しやり

しつぼう

たて

たて

僧坊を造立し衆僧を供養すと為す、則ち為れ仏舍利を以て七宝の塔を起て

ぜん

ほんてん

いた

と云云、

じんりきほん

いわ

ほとけめつと

よ

こ

高広漸小にして梵天に至る」と云云、神力品に云く「仏滅度の後に能く是の

おい

まさ

こ

ゆえ

しよぶつみなかんき

云云、

又云く

いわ

我が滅度の後に

めつと

經を持たんとを以ての故に諸仏皆歡喜す」云云、又云く「我が滅度の後に

おい

まさ

こ

じゆじ

是の

こ

ぶつどう

おい

けつじよう

疑有ること無

うたがいあ

於て応に斯の經を受持すべし是の人・仏道に於て決定して疑有ること無

けん

云云、

やくおうほん

いわ

能く

こ

きやうてん

經典を受持すること有らん者も亦復

じゆじ

また

復

また

けん」云云、藥王品に云く「能く是の經典を受持すること有らん者も亦復

かくの

こと

いっさいしゆじよう

おい

まただいいち

な

と為す」云云、

普賢經に云く

いわ

煩惱

ぼんのう

う

是くの如し一切衆生の中に於て亦第一と為す」云云、普賢經に云く「煩惱

だん

を断ぜ

ず

五欲を離れず

さんまい

三昧に入らざれども但誦持するが故に」云云、又云く

じゆじ

ゆえ

又云く

いわ

又云く

又云く

又云く

「其れ大乘方等經典を誦誦する有らば當に知るべし此の人は仏の功德を

そ

だいじようほうとうきやうてん

どくじゆ

まさ

また

知る

べし

此の人は仏の功德を

具しよあくして諸惡永く滅して仏慧ぶつてより生ずるなり」云云、一經いつきようの始めの如是によぜ我聞によぜがもんを釈しゃくする文句もんくの一に云く「如是によぜとは所聞しよもんの法体ほつたいを拳あぐ」と則ち妙法蓮華經すなわ みようほうれんげきよう是なり。これ

一日一夜の説

こんだいじよう

權大乘

ねはんぎよう
涅槃經

せつしよ ぼつだいが

説処は跋提河の辺

じようじゆうしきよう

常住 四教を説く

だいごみ

同醍醐味

けつきよう

結經は像法決疑經
そうほうけつききよう

ねはんぎよう

此の涅槃經は一日一夜の説三藏教・通教・別教・円教を明す、亦是また

だいごみ

醍醐味とも名く、釈尊拘尸那城・力士生地・阿利羅跋提河・沙羅雙樹の間

おい

に於て二月十五日の晨朝・面門より種種の光を放ち給う十二由旬の内

じゅつぱう たいしゅう

ねはんぎよう と たま すなわ

ねはんぎようくやく

十方の大衆を集めて涅槃經を説き給う即ち三十六の涅槃經旧訳の四十の

涅槃經なり、像法決疑經を以て結經と為す、亦☆拾教と名け亦扶律顕常

と云う、化儀は漸部・化法は四教なり法華の時猶未解の輩有り更に後番五

味を以て余殘の機を調 熟し給う、涅槃の時・四教の機同く・仏性を見る

秋收冬蔵の如し、唯四機有り俱に常住を知る故に法華と合して同醍醐味

と為すなり、凡そ一往此くの如く配立すと雖も万差の機縁に随つて時節の

長短不同なり・或は華嚴の時長は涅槃の時に至る阿含・方等・般若も亦

爾なり云云、涅槃經の六に「法に依て人に依らざれ義に依つて語に依らざ

れ智に依つて識に依らざれ了義經に依つて不了義經に依らざれ」と云云、

又「亦如来隨宜の方便所説の法の中に執着を生ぜざる是を了義と名く不了義

とは經の中に一切焼然なり一切無常なり一切皆苦なり一切皆空なり一切

無我なりと説くが如し是を不了義と名く何を以ての故に是くの如きの義を

了あたすること能よわざるを以ての故に諸の衆生しゆじやうをして阿鼻獄あびごくに墮だせしむ」云云、
十七の卷に云く「如来は虚妄の言無しと雖も若し衆生の虚妄の説に因よつて
○「文、又云く「虚妄の法則すなわこち是れ罪と為す是の罪を以ての故に地獄に墮だ
す」云云。

一、小乗の戒を破はする事

涅槃經の三の卷に云く「仏迦葉に告げ給わく能く正法を護持する因縁いんねんを
以ての故に是の金剛身を成就じやうじゆすることを得・迦葉我往昔に於て護法の因縁いんねん
を以て今是の金剛身を成就じやうじゆすることを得て常住じやうじゆうにして壊せず、善男子
正法を護持する者は五戒を受けず威儀を修せず応に刀剣・弓箭・鉞むさく槃ばんを
持して持戒清淨の比丘を守護すべし」云云、同十七に云く「仏性を見る
が故に大涅槃を得・是を菩薩の清淨の持戒にして世間の戒には非ずと
名く」と云云、又云く「是の經を受持して戒を毀る者は則ち是れ衆生の

悪知識なり我が弟子に非ず是れ魔の眷属なり」云云、法師品に云く「若し
是の深經声聞の法を決了する是れ諸經の王なることを聞いて」云云、
安樂行品に云く「又声聞を求むる比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷に親近
せざれ亦問訊せざれ若しは坊中に於ても若しは経行の処若しは講堂の中に
在ても共に住止せざれ」云云、伝教大師の顕戒論の中に云く「貧人の食は
是れ輪王の毒なるが如し、故に二乗の者の持戒精進は即ち菩薩の破戒懶惰
なり故に応に親近すべからず、来らば為に法を説け親使・利養・恭敬を
わざれ」と云云、秀句の下に云く「小乗の持戒は則ち菩薩の煩惱なり」
云云、宝塔品に云く「此の經は持ち難し若し暫くも持つ者は我則ち歡喜す
諸仏も亦然なり、是の如きの人は諸仏の歎め給う所なり是則ち勇猛なり是
則ち精進なり是を戒を持ち頭陀を行ずる者と名く、則ち疾く無上の仏道を
得と為す能く来世に於て此の經を読み持たんは是真の仏子なり」云云、

りゅうじゅぼさつ 竜樹菩薩の大論に云く「自法愛染の故に他人の法を毀訾す持戒の行人と
いんど じこく 雖も地獄の苦を脱れず」云云、涅槃經の十二に云く「仏迦葉に告げ給わく
も ぼさつ 若し菩薩有つて破戒の因縁を以て則ち能く人をして 大乘經典を受持し
あいらく 愛樂せしむることを知つて又能く其れをして 經卷を讀誦し通利し書寫し広
く人の為に説いて阿耨多羅三藐三菩提を退轉せざらしめんと、是くの如き
ゆえ こと 為の故に故さらに戒を破ることを得」云云、安然の広釈に云く「能く法華經
これ じかい なず りつぎ を説く是を持戒と名く律儀を持すと雖も善法を損せざれば猶木石の衣鉢を
たいじ 帶持せるが如し」云云、弘決の四に大論の十九を引いて云く「諸の比丘・
仏に問いたてまつる阿蘭若の比丘死しぬ今何の処にか生ずる・仏の言く
あびこく 阿鼻獄に生ず諸の比丘大いに驚く、坐禪持戒するに便ち爾るを至すや仏答
いわ たもん えて言く多聞・持戒・禪未だ漏尽の法を得ず」云云、伝教大師云く「今よ
いごしょうもん 已後声聞の利益を受けず菩薩は二百五十戒を捨て畢んぬ」云云、涅槃經

の四に云く「我涅槃の後・無量百歳に四道の聖人も悉く復涅槃せん正法
滅した後・像法の中に於て当に比丘有べし貌持律に像て少しく經を誦誦し
飲食を貪嗜し其の身を長養し袈裟を服すと雖も猶獵師の如く細めに視て徐
かに行くこと猫の鼠を伺うが如し、常に是の言を唱う我羅漢を得たりと、
諸の病苦多く糞穢に眠臥す・外には賢善を現し内には貪嫉を懷く誑法を受
けたる婆羅門等の如し、実に沙門に非ずして沙門の像を現し邪見熾盛にし
て正法を誹謗し及び甚深秘密の教を壞り各自意に随つて反つて經律を説
く」云云、同九に云く「善男子・一闍提有り羅漢の像を作し空処に住して
ほうとうだいじょうきようてん ほうほう もろもろほんぶ おわ みな あらかん こ
方等 大乘經典 を誹謗す諸の凡夫人・見已つて皆眞の阿羅漢なり是れ大
菩薩摩訶薩なりと謂えり」

一、善導和尚自害の事

類聚伝に云く「導・此の身諸苦に逼迫せられて情偽反易し暫くも休息す

ること無し、乃ち所居の寺の前の柳樹に登つて西に向て願つて云く仏の
威神驟いしんしばしば以て我を摂せつし観音・勢至せいしも亦来て我を助け給え、此の心をして
正念しょうねんを失わざらしめ驚怖きょうふを起さず弥陀の法の中に於て以て退墮たいだを生ぜざら
んと願ねがいし畢おわつて其の樹の上に極いたり身を投じて自ら絶えぬ」

一、仏自害・断食・身根不具を禁ずる事

涅槃ねはんの七に云く「若し説いて言えること有らん常に一の脚を翹あげて寂☆

として言わず淵に投じて火に赴き自ら高巖より墜ち嶮難を避けず毒を服し

食を断じ灰土の上に臥し自ら手足を縛しばつて衆生を殺害せん、方道・咒術じゅうじゆつ

・旃陀羅の子・無根・二根及び不定根・身根不具ならん、是くかくの如き等の

事・如来悉く出家して道を為なすことを聴ゆるし給うといわば是を魔説と名く」

云云、涅槃經の六に云く「大乘を学する者は肉眼有りと雖も名けて仏眼と

為す耳鼻五根も例して亦是くまたかくのことの如し」云云、像法決疑經に云く「諸の悪比丘

我が意を解げせず己おのが所見しよけんを執しゅうして十二部經を宣說せんぜつし文したに随したがつて義を取り
決けつ定の說なと作なさん、當まさに知るべし此この人は三世さんぜの諸しよ仏ぶつの怨あだなり速すみかに我が
法ほふを滅めつせん」云云、涅槃經ねはんぎやうの十四しよに云いく「如來にょらい・世尊せそんは大方ほう便べん有むじり無常むじやうを
常とと説とき・常むじやうを無常とと説とき・樂なを説といて苦なと為なし・苦なを説といて樂なと為なし
不淨ふじやうを淨とと説とき・淨ふじやうを不淨とと説とき・我むがを無我とと説とき・無我むがを我とと説とき・非
衆生しゆじやうに於おいて説しゆじやういて衆生なと為なし・實しゆじやうの衆生おいに於しゆじやうて非衆生とと説とき・非物とを
物とと説とき・物とを非物とと説とき・非實とを實とと説とき・實とを非實とと説とき・非境とを境
と説とき・境とを非境とと説とき・非生とを生とと説とき・生とを非生とと説とき・乃至ないし無明むみやうを
明とと説とき・明むみやうを無明とと説とき・非色とを色とと説とき・色とを非色とと説とき・非道とを道
と説とき・道とを非道とと説とく」云云。

父ちちは月淨げつじやう・轉輪王鼓てんりんおう・音声おんじやう・陀羅尼經だらにの說しなり

淨土宗じやうどしゅうの阿彌陀あみだ

誓願せいがんは執持しゅうぢ・名号なごう・往生おうじやう・極樂ごくらく

正覚しょうかくは十劫このかた已来なり

父は大通智勝だいとうちしょうぶつ仏なり

誓願せいがんは常楽じょうらくの説みようは妙法蓮華ほうれんげきよう經なり

法華宗ほつけしゆうの阿弥陀あみだ

正覚しょうかくは三千塵点さんぜんじんてんごう劫なり

薬王品やくおうぼんに云く「若し女人にょにん有つて是の經典きやうてんを聞いて説ごとの如く修行しゆぎようせば此こゝに

於おいて命終みやうじゆう

して即ち安樂世界阿弥陀すなわ仏大菩薩衆あんらくせかいあみだぶつの圍繞ぼさつしゆうせる住処いにように往じゆうしよき蓮華ゆ

の中宝坐ちゅうほうざの上に生なず」云云、疏記じよきの十に云く「若し女人にょにん有つて等とは此この

ただこ

中只是ただこの經を聞くことを得、説ごとの如く修行しゆぎようすと云う即ち淨土じやうどの因更いんきやうどに觀經くわんきやう

等を指さすことを須もちいざるなり、問いかんう如何しゆぎようが修行しゆぎようする答すでう既に如説によせつしゆぎよう修行しゆぎようと

すなわ

云う即ち經に依よつてて行を立つ具つぶさに分別功德品ぶんべつくどくの中直ちちに此この土を觀くわんずるに

くそく

四土具足しどするが如ゆえし故に此この仏身即三身ぶつしんそくさんじんなり」云云、「自在じざい所欲生じゆじやう」云云、

ほうべん

方便品いに云く「舍利弗しやりほつ・如来にやらい但一仏乘いちぶつじやうを以ゆえての故に衆生しゆじやうの爲ために法を説く

余乗よじようの若もしは二若もしは三有あること無し」云云、安樂行品あんらくぎやうほんに云く「無量むりようの國中ちゅうに於おいて乃至ないし名字みょうじを聞きこくことを得え可べからず」陀羅尼品だらにほんに云く「汝等なんじら但能よく法華ほっけの名なを受持じゆじせし者ものを擁護おうごせんすら福量はくる可べからず」釈籤しゃくせんの一いっに云く「名なは即すなわち是これ体てい・文字もんじ解脫げだつなり」又云く「次に經題きやうだいを釈しゃくす初めには妙法みやうほうの兩字りやうじは通じて本・迹せんを詮せんす蓮華れんげの兩字りやうじは通じて本・迹せんを誓ちかう」疏記じょきの一いっに云く「妙法みやうほうの唱たは唯ただだ正宗しやうしゆうのみに非あらず二十八品とそ俱ともに妙法みやうほうと名なくが故ゆゑに、故ゆゑに品品しんしんの内に咸ことごとく体等たいとうを具そし句句くくの下に通じて妙名めうなを結むすす」云云、藥王品やくおうほんに云く「若もし復人また有あつて七宝しちほうを以もつて三千大千世界さんぜんだいせんせかいに満みてて仏おほ及び大菩薩だいぼさつ・辟支仏ひやくしぶつ・阿羅漢あらかんに供養くやうせん是この人の得える所の功德くどく此この法華經ほけきやうの乃至ないし一四句偈くげを受持じゆじする其その福最ふくも多おほきに如しかず」又云く「能よく是この經典きやうてんを受持じゆじすること有あらん者ものも亦復またまた是かくの如いっさいしゆじようし一切衆生いっさいしゆじようの中ちゅうに於おいて亦また為これ第一だいいちなり」又云く「此この經は能よく一切衆生いっさいしゆじようを救きうう者ものなり此この經は能よく一切衆生いっさいしゆじようをして

諸の苦惱を離れしむ此の経は能く大いに一切衆生を饒益して其の願を
充滿す」と勸発品に云く「若し復是の經典を受持する者を見て其の過惡
を出さば若しは実・若しは不実にもあれ此の人は現世に白癩の病を得ん、
若し之を輕笑すること有らん者は当に世世に牙齒疎き欠け
醜脣平鼻・手脚繚戾し眼目角☆・身体臭穢にして惡瘡☆血・水腹・短氣
・諸の惡重病あるべし、是の故に普賢若し是の經典を受持する者を見て
は當に起つて遠く迎えて當に仏を敬うが如くすべし」涅槃經の十三に云く
「我爾の時に於て思惟し坐禪し無量歳を経れども亦如来出世の大乗經の
名有ることを聞かず」文句の五に云く「所以は經に出でたり人の語を信ず
ること勿れ」同三に云く「たとい百千種の師あつて一一の師・百千種の説
を作すとも是れ權ならざるは無し、如来の所説有る尚復是れ權なり況や復
人師をや、寧ろ權に非ざることを得んや前に出す所の如きは悉く皆權なり」

一、念仏者ねんぶつ謗法罪ほうぼうつみを作る事つく 法然ほうねんの選択せんちやくに云く「道どう・綽しゆく・禪ぜん師し・聖道しょうどう・浄土じやうど

の二門にもんを立て聖道しょうどうを捨てて正ただしく浄土じやうどに帰するの文、初めに聖道門しょうどうもんと云

うは之これに就ついて二有ふたり、乃至ないし之これに准じゆんじて之これを思うに応まさに密大みつだい及実大じつだいを存ぞんす

べし、然しかれば則すなわち今真言しんごん・仏心ぶつしん・天台てんだい・華嚴けごん・三論さんろん・法相ほっそう・地論ちろん・摂論じやうろん

此等これらの家の意正まさしく此こゝに在あり、浄土宗じやうどしじうの学者がくしや先すべかず須すべからく此の旨むねを知るべし、

設たとい先しず聖道門しょうどうもんを学まなぶ人なりと雖も若いへどし浄土門じやうどもんに於おいて其の志こころざし有あら

ん者は須すべからく聖道しょうどうを棄すてて浄土じやうどに皈きすべし、善導ぜんどう和尚わじやう・正しやう・雜ざう二行にぎやうを立て

雑行ざうぎやうを捨てて正行しやうぎやうに皈きするの文、第一だいいちに読誦どくじゆ雑行ざうぎやうと云うは上の觀經かんきやう等

の往生おうじやう浄土じやうどの經を除いいて已外いげ・大小乘だいしやうじやう・顯密けんみつの諸經しよきやうに於おいて受持じゆじし読誦どくじゆ

するを悉ことごとくく読誦どくじゆ雑行ざうぎやうと名なず、乃至ないし・第三だいさんに礼拝らいはい雑行ざうぎやうと云うは上の弥陀みだを

礼拝らいはいするを除いいて已外いげ・自余じよ一切諸余いっさいしよの仏菩薩等ぼさつ及び諸おほの世天等せてんに於おいて

礼拝らいはいし恭敬きやうけいするを悉ことごとくく礼拝らいはい雑行ざうぎやうと名なけ、第四だいしに称名しょうみやう・雑行ざうぎやうとは上の弥陀みだ

のみょうごう名号しょうを称するを除いて已外いげ自余一切のぼさつ仏菩薩等及び諸のおほ世天等のもろもろ名号しょうを称するを悉くせんたんくよう称名しょうめい雜行ざぎょうと名け、第五に讚歎供養雜行さんたんくようそうぎょうと云うは上のかみ弥陀みだ仏を除いて已外一切諸余のぼさつおほ仏菩薩及び諸のおほ世天等に於てさんたんくよう讚歎くようし供養するを悉くぜんごう讚歎供養雜行さんたんくようと名く、乃至、此の文を見るにいよいよすべからず彌須いよいよすべからずらく雜を捨てて專せんしゅうを修すべし、豈百即あにひやくそくひやくしゅう百生せんしゅうの專修せんしゅうの正行しょうぎょうを捨てて堅くせんちゅうむいつ千中無一のそうしゅう雜修ざしゅうを執しゅうせんや、又云くい貞元入藏錄じょうげんにゅうそうろくの中に始め大般若經はんにな六百卷より終りほうじょうじゅうきよう法常住經いたに至るまでけんみつ顯密の大乗だいじょうきようす經惣だいじょうきようすべて六百三十七部・二千八百八十みなすべからず三卷なり皆須どくじゆだいじようらく誦誦大乘せつの句に撰そすべし夫れ速すみやかに生死しやうじを離れんと欲ほつせば二種の勝法しょうほうの中且しばらく聖道門しょうどうもんをさしお閣さしおいて選んでじようどもん淨土門じようどもんに入れじようどもん淨土門じようどもんに入じようどもんらんと欲ほつせば正雜しょうざう二行の中に且しばらく諸のもろもろ雜行ざぎょうを抛なげうつて選んでしょうぎよう正行しょうぎようにき皈きすべし」云云、大論だいろんに云く「自法愛染あいぜんの故ゆえに他人たにんの法きしを毀きし皆じかい持戒じかいの行いえど人と雖いえども地獄じごくの苦まめかを脱まめかれず」云云、法華經ほけきように云く「当来世とうらいせの惡人あくにんはいちじよう仏の一乘いちじよう

を説き給うを聞いて迷惑して信受せず法を破して惡道に墮せん」又云く「法を破して信ぜざるが故に三惡道に墜ちなん」雙觀經に云く「設い我仏を得るも十方衆生の至心に信樂して我が國に生ぜんと欲して乃至十念せんに若し生ぜずんば正覺を取らじ唯五逆と誹謗正法を除く」譬喩品に云く「若し人あつて信ぜずして此の經を毀謗するときは則ち一切世間の仏種を断ず其人命終して阿鼻獄に入り一劫を具足して劫尽きて更に生ぜんかくのごとて展転して無數劫に至らん」文句に云く「今經に小善成仏を明かす此の緣因を取つて仏種と為す、若し小善成仏を信ぜずんば則ち一切世間の仏種を断ずるなり」云云。

一、真言師謗法罪を作る事

ひそうほうやく
秘藏宝鑰の上に云く十住心とは、

一 異生羝羊心 凡夫惡人

二 愚童持齋心 凡夫善人

三 嬰童無畏心

外道

四

唯蘊無我心

声聞

五 拔業因種心

縁覚

六

他縁大乘心

法相宗

七 覚心不生心

三論宗

八

如実一道心

法華宗

九 極無自性心

華嚴宗

十

秘密莊嚴心

眞言宗

又云く「他縁以後は大乗の心なり 大乘において前の二は菩薩乗・後の二

は仏乗なり此くの如きの乗乗は自乗には仏の名を得れども後に望むれば

戲論と作る」云云、又云く「人を謗じ法を謗ずれば定めて阿鼻獄に墮ちて

更に出不ずる期無し、世人斯の義を知らずして舌に任せて輒すく談じて深害

を顧みず寧ろ日夜に十悪・五逆を作るべしとも一言一語も人法を謗ず可か

らず」云云、大日經に云く「仏不思議の眞言相道の法を説くに一切の声聞

・縁覚を共にせず亦普く一切衆生の爲にするに非ず」法華經の二に云く

「汝等若し能く此の語を信受せば一切皆當に仏道を成ずることを得べし

是この乗微妙みみょうにして清淨しょうじょう第一だいいちなり」云云、又云く「此この法華經ほけきょうは是れ諸もろの如來にょらい第一だいいちの説・諸説しよの中に於おいて最も甚深じんじん為なり」又云く「此この法華經ほけきょうは諸佛しよぶつに如來にょらいの秘密ひみつの藏しよきよう・諸經しよきようの中に於おいて最も其その上に在あり」六波羅蜜經ろくはらみつきように五藏ごそう五味ごみを説く、私ひそかに云く此この經きやうは天台御入滅てんだい にゆうめつ已後いご百余年みやうしつに天竺てんじくより漢土かんどに來きり爾しかれば見みざる經きやうの醍醐だいごを盗たうむと書かくは謬失みやうしつなり弘法こうぼうの二教論にきやうろんの下したに云く「喩さして日いく今斯この經文きやうもんに依よらば仏五味ぶつごみを以もつて五藏ごそうに配當さいたうし惣持そうじを醍醐だいごと稱しょうし四味しごみを四藏しそうに譬たとえ給たまえり、振旦しんたんの人師にんし等醍醐だいごを諍あらそひ盗たうんで各自宗じしゆうに名なく若もし斯この經きやうを鑒かんみば則すなわち掩耳えんにの智割割ちかつぱうを待まちたじ」云云、又云く「毘盧遮那經びるしやなの疏じよに順じゆんぜば阿字あじを釈しゃくす」云云、私ひそかに云く毘盧遮那經びるしやな疏じよ供養じやくよう法の卷りゆうじゆにゆうめつは竜樹りゆうじゆにゆうめつ入滅いご已後いご八百年はつひゃくねんの造疏じよなり、而しかに菩提心論ぼだいしんろんに此この事ことを引ひき載のせたり故ゆえに知しんぬ菩提心論ぼだいしんろんは竜樹りゆうじゆにゆうめつの釈あらざり又云く「唯真言法ただしんごんの中にのみ即身成仏そくしんじやうぶつするが故ゆえに是三摩地さんまじの法ほふを説く諸教しよきようの中に於おいて闕かいて

書せず」云云。

一、真言は別仏の説に非る事

だいにちきよう

だいにちにようらい

大日經の一の巻の五仏は中央は大日如来と説く同五巻の五仏は中央は

びるしやな

だいいち

しやかむにぶつ

もんく

毘盧遮那と説く第一の巻の五仏は中央は釈迦牟尼仏と説く、文句の九に

いわ ふげん

ほつけ

い わ しやかむにぶつ

びるしやな

なず

すなわ

云く普賢觀は法華を結成す文に云く釈迦牟尼仏を毘盧遮那と名くと、乃ち

こ いみよう

あら

あんねん きようじぎ

い わ

「しんこんしゅう

ほんち

是れ異名なり別体なるに非ざるなり、安然の教時義に云く「真言宗の本地

びるしやな

すなわ てんだいしゅう

みようほうれんげきよう さいじんみつしよ

ちしやうだいし

智証大師の

毘盧遮那は即ち天台宗の妙法蓮華經・最深密処同仏なり」、智証大師の

じゆけつしゅう

い わ

「しんこん

ぜんもん

けこん

さんろん

ゆいしき

りつしゅう

じようぐ

授決集に云く「真言・禪門・華嚴・三論・唯識・律宗・成俱の二論等は

も ほつけ

ねはんぎよう

こ しやういん

若し法華・涅槃經等の經に望むれば是れ摂引の門なり」云云、金剛頂經

い わ

「ばかほんしやかむににようらい

いっさいびようどう

つうだつ

ゆえ いっさい

に云く「婆伽梵釈迦牟尼如来・一切平等に善く通達するが故に一切方を

びようどう

しほう

たま

ふどうにようらい

ほうしやうにようらい

かんじざい

平等に觀察して四方に坐し給う不動如来・宝生如来・觀自在王如来不空

じようじゆにようらい

だいにちきよう

しんこん

成就如来」云云、大日經普通真言藏品の四に云く「時に釈迦牟尼世尊

しんこん

べつぶつ

あらば

だいにちきにようらい

しやかむにぶつ

もんく

なず

すなわ

い わ

ほつけ

い わ

しやかむにぶつ

びるしやな

なず

すなわ

云く普賢觀は法華を結成す文に云く釈迦牟尼仏を毘盧遮那と名くと、乃ち

こ いみよう

あら

あんねん きようじぎ

い わ

「しんこんしゅう

ほんち

是れ異名なり別体なるに非ざるなり、安然の教時義に云く「真言宗の本地

びるしやな

すなわ てんだいしゅう

みようほうれんげきよう さいじんみつしよ

ちしやうだいし

智証大師の

毘盧遮那は即ち天台宗の妙法蓮華經・最深密処同仏なり」、智証大師の

じゆけつしゅう

い わ

「しんこん

ぜんもん

けこん

さんろん

ゆいしき

りつしゅう

じようぐ

授決集に云く「真言・禪門・華嚴・三論・唯識・律宗・成俱の二論等は

ほうしよさんまい 宝処三昧に入つて自心及び眷属の真言を説き給う」文、大日經の第二に
いわ 云く「我昔道場に坐して四魔を降伏し大勤勇の声を以て衆生の怖畏を除
く、是の時梵天等心喜共に称説す此れに由つて諸の世間号して大勤勇と名く
ふしやう 我本不生を覚る」云云、前唐院金剛頂經の疏に云く「成仏已来甚大久遠
なり未だ所經の劫数を説かざる所以は經に於て各傍正の義有り故に彼の
ほつけ 法華の久遠の成仏も亦是れ此の經の毘盧遮那仏と異解す可からず」云云、
ぶつぽう 仏法伝来の次第に云く「大師智拳・印を結びて南方に向かう面門俄かに開
けて金色の毘盧遮那と成り即便ち本体に還歸す」云云、涅槃經の七の卷に
かしやう 仏迦葉に告げ給わく「我般涅槃して七百歳の後は是の摩波旬漸く当に我が
しやうほう 正法を壊乱すべし、乃至化して阿羅漢の身及び仏の色身と作らん魔王此の
うろ 有漏の形を以て無漏の身と作りて我が正法を壊らん」云云。

一、禪宗謗罪を作す事

円覚經に云く「修多羅の教は月を標す指の如し」文方便品に云く「或
は修多羅を説く衆生に随順して説く大乘に入るに為れ本なり」梵天王
問仏決疑經に云く「梵天・靈山會上に至つて金色の沙羅華を以て仏に献り
仏群生の為に法を説き給えと請す世尊坐に登り華を拈して衆に示して青蓮
の目を瞬す天人百万悉く皆措くこと罔し独り金色の頭陀破顔微笑す、世尊
の言く吾に正法眼蔵・涅槃妙心・実相微妙の法門有り文字を立てず教外
別伝・摩訶迦葉に付属す」云云、是は中天竺なり仏の御入滅は北天竺
拘尸那城なり、涅槃經の一に云く「爾の時に閻浮提の中の比丘・比丘尼
一切皆集る唯尊者摩訶迦葉・阿難の二衆を除く」同經の三に云く「若し
法宝を以て阿難及び諸の比丘に付属し給う久住することを得ず何を以ての
故に一切声聞及大迦葉は悉く当に無常なるべし彼の老人の他の寄物を受
くるが如し、是の故に無上の仏法を以て諸の菩薩に付属すべし」云云、

そうほうけつぎよう
像法決疑經に云く「諸の惡比丘・或は禪を修すること有るも經論に依らず、
みずか こけん お
自ら己見を逐うて非を以て是と為し是れ邪是れ正を分別すること能わず、
あまねくどうそく
遍く道俗に向つて是くの如き言を作さん我能く是を知り我能く是を見ると、
まさ
当に知るべし此の人は速かに我が法を滅せん乃至地獄に入ること猶箭を射
るが如し」云云、弘決一の下に云く「世人多く坐禪安心を以て名けて発心
ここと
と為す、此の人 모두 未だ所縁の境を識らず所期の果無ければ全く上求無し
な すべいま
大悲を識らざれば全く下化無し、是の故に發心は大悲より起るなり」云云、
だいひ し
天台の止觀の五に云く「又一種の禪人他の根性に達せずして純ら乳藥を教
てんだい しかん いわ
ゆ体心踏心・和融覺 覓若しは泯若しは了斯れ一轍の意なり 障礙 万途紛然
とうしん かくみやくも みんも りようこ てつ しょうなん ふんぜん
として識らず纔かに異相を見て即ち是れ道と判ず自ら法器に非ず復他に匠
し ひそ いそう すなわこ みずか ほうき あら また しょう
たるを闕く盲跛の師徒二り俱に墮落す瞽瞍の夜遊 甚だ憐愍す可し」云云、
か もうは とも だらく こけつ はなはだ れんみん べ
くけつ
弘決の一に云く「世人・教を蔑にし理觀を尚ぶ者 ☆ れるかな ☆ れるかな」
ないがしろ
あやま

ほうべん
方便品に云く「諸法実相・所謂諸法・如是相・如是性・如是体・如是力乃至
によぜほんまつつきよう
・如是本末究竟等」云云、妙楽大師の金☆論に云く「実相は必ず諸法・諸法
は必ず十如・十如は必ず十界・十界は必ず身土なり」云云、疏記の十に
い
云く「直ちに此の土を觀するに四土具足す故に此の仏身即ち三身なり」云
云。

一、権実証拠の事

げんぎ
玄義の二に云く「則ち百法界・千如是有り束ねて五差と為す一に惡・二
に善・三に二乗・四に菩薩・五に仏なり、判じて二法と為す前の四は是れ
ごんぼう
権法・後の一は是れ実法」云云、釈籤の二に云く「九界を権と為し仏界を
な
実と為す」云云、秀句の下に云く「定性と不定性は位の高下に依り成仏
じようぶつ
と不成仏は經の権実に依る」文句の九に云く「漸頓の益は虚なり」云云、
い
記の九に云く「権を稟けて界を出るを名けて虚出と為す」云云、玄義の九

に云く「化他の因果は仏菩提を致すこと能わず是の故に取て並べ用いず化他の権実も亦他をして極に至らしむること能わず亦取るべからず」云云、止觀の三に云く「權の權は實の權に非ず實の權と成ることを得可し權の實は實の實に非ず實の實と成ることを得べからず」云云。

一、權實分別の事

一に玄義の一に云く「蓮の爲の故に華・實の爲に權を施すを譬う、權は即ち是れ苗文に云く種種の道を示すと雖も其れ實には仏乗の爲なり」云云、二に又云く「華敷は權を開するを譬う蓮現は實を顯すを譬う權實共に稲なり文に云く方便の門を開いて眞實の相を示す」云云、三に又云く「華落は權を廢するを譬う蓮成は實を立つるを譬う実独り眞米なり文に云く正直に方便を捨てて但無上の道を説く」云云、釈籤の一に云く「開廢俱時なり開の時已に廢するが故なり」云云、又云く「開の時即ち廢す」又云く「既に

実を識り已れば永く権を用いず」云云。

一、破三顯一の事

方便品に云く「一仏乘に於て分別して三と説く」云云、玄義の九に云く「廢三顯実」又云く「施権」方便品に云く「二も無く亦三も無し仏の方便説を除く」云云涅槃經の二十三に云く「実には三乘無し顛倒心の故に三乘有りと言う、一実の道は真実にして虚ならず顛倒心の故に一実無しと言う」云云、方便品に云く「尚二乘無し何に況や三有らんや」云云。

一、入如来慧の事

法華經に云く「是の諸の衆生世世より已来常に我が化を受く此の諸の衆生始めて我が身を見て我が所説を聞いて即ち皆信受して如来の慧に入る先より修習して小乗を学する者を除く」云云、文句の九に云く「根利にして徳厚く世世已来常に大化を受け始めて我が身を見て即ち華嚴を稟け

て如来にょらい慧このみに入る菓熟このみして零おち易やすし」云云、釈籤しゃくせんの十に云く「当まさに知るべし法華ほっけは部に約するときは則すなわち華嚴けこん・般若はんにやを破はす」云云。

一、余深よじん法中の事

嘱累ぞくるい品に云く「若もしし衆生しゅじょう有しんじゆて信受しんじゆせざらん者には当まさに如来にょらいの余じんぼうの深法じんぼうの

中に於おいて示教じき利喜りきすべし」文句もんくの七に云く「示教じき利喜りき・示すなわは即すなわち示転しせん・教

は即すなわち勧転かんてん・利喜りきは即すなわち証転しせんなり」、玄義げんぎの六に云く「余すなわとは方便ほうべんを帶おす

るなり深ちゆうどうとは中道ちゆうどうを明ほうべんすなり方便たいを帶ちゆうどうして中道ちゆうどうを明すなわすは即すなわち別教べつきやうなり」

云云、又云く「但ため為ひろに実しかを弘しゅじょうむるに而すなわも衆生べつきやう信すべかぜず須ためらく実ための為ために権ためを

施ほどこすべし」釈籤しゃくせんの六に云く「有うじん深復ふ余すなわとは即すなわち別教べつきやうの法ふつてなり入地ふつてを深ふつてと

名なけ地前なすを余なすと名なく」云云、文句もんくの十に云く「汝なんじよ能よじんく余深よじんの法ふつてを以ふつてて仏慧ぶつて

を助申すなわせば即ぜんきよち善巧ぜんきよに仏じんぎよの恩じんぎよを報じんぎよず」云云、疏記じよきの十に云く「以いへん偏助へんじよえん円えんは

則すなわち此すなわの意じんぎよなり此じんぎよの經じんぎよの上下じようげ・一切いっさい皆然みなしかなり人これ之これを見みずして三乘さんじやう有ありと

おも
謂うは謬れり」云云。
あやま

一、三種教相の事 きようそう

玄義に「教相を三と為す一に根性の融不融の相・二に化導の始終不始終の相・三に師弟の遠近不遠近の相」云云、釈籤の一に云く「前の両意は迹門に約し後の一意は本門に約す」云云、寂滅道場を以て元始と為す方便以下の五品の意なり。
ごほん

第一、根性融「法華」不融「爾前」の相 だいいち ごんじょう ほっけ ほうけ にぜん の け

華嚴・阿含・方等・般若・法華・各得道有り種熟脱を論ぜず、釈籤の一に云く「又今文の諸義は凡そ二の科皆先ず四教に約して以て鹿妙を判ずるときは則ち前三を鹿と為し後・一を妙と為す次に五味に約して以て鹿妙を判ずるときは則ち前四味を鹿と為し醍醐を妙と為す、全く上下の文意を推求せずして直ちに一語を指して法華は華嚴より劣れりと謂えるは幾許
けごん あごん ほうとう はんによ ほっけ とくどう しゅじゅくだつ しゃくせん そみよう すなわ ぜんさん そ な すなわ ぜんしみ そ な だいご な じょうげ もんい すいぐ こと ほっけ けごん おと い いくばく

の☆りぞや☆りぞや」云云。
あやま

華嚴は一麁一妙
けこん そ

相待妙
そうたいみよう

麁妙を判ず
そみよう

阿含は単麁
あこん そ

無妙

方等是三麁一妙
ほうとう そ

相待妙
そうたいみよう

麁妙を判ず
そみよう

般若は二麁一妙
はんによ そ

相待妙
そうたいみよう

麁妙を判ず
そみよう

法華は二妙有り
ほっけ

相待妙は
そうたいみよう

麁妙を判ず
そみよう

絶待妙は
ぜったいみよう

麁を開して妙を顕わす
そ あら

釈籤の十に云く
しゃくせん いわ

「唯法華に至つて前教の意を説いて今教の意を顕わす」、
ただほっけ いた

玄義の二に云く
げんぎ いわ

「此の妙・彼の妙・妙の義殊なること無し」
このこと
約教 相待前三を麁
やくきよう ぜんさん そ

と為し後・一を妙と為す但方便を帶すると方便を帶せざるを以て異と為すのみ
な ほうべん ほうべん

云云、
約部・相・前四味を麁と為し醍醐を妙と為す

同十に云く「初後の仏慧・円頓の義斎し」一往の釈、文句
いわ ぶつて えんどん いちおう もんく

の五に云く「今の如く始の如く今の如し二無く異無し」云云、弘決の五に
いわ こと こと こと なく ぐけつ

云く「惑者未だ見ず尚華嚴を指す唯華嚴円頓の名を知つて彼の部の兼帯の
説に味し全く法華絶待の意を失う」云云、釈籤の二に云く「故に諸味の中
・円融有りと雖も全く二妙無し」と同三に云く「若し但四教の中の円を判
じて之を名けて妙と為す諸経に皆是くの如きの円の義有り何ぞ妙と称せざ
る故に復更に部に約し味に約して方に今経の教も円部も円なることを顕わ
すべし、若し教に約せざれば則ち教の妙を知らず若し味に約せざれば則ち
部の妙を知らず、爾前の相待妙とは前三を蔵通別麁と為し後・一円を妙と
為す」云云、法華の相待妙とは前四味華嚴・阿含・方等・般若を麁と為し醍醐を
妙と為す三千塵点大通を以て元始と為す。

第二、化導始・中間終・靈山の初住不始終の相 化城喻品の意なり

種熟脱を論ず種は大通なり熟は中間乃至今日の四味なり脱は今の法華
なり玄の一に云く「異とは余教は当機益物にして如来施化の意を説かず此

の経は仏の教を設け給う元始巧みに衆生の為に頓・漸・不定・顕・密の種子を作す

を明す」云云、釈籤の一に云く「漸及び不定に寄すと雖も余教を以て種と為さず故に巧為と云う」止観の三に云く「若し初業に常を知るを作さずんば三蔵の帰戒羯磨悉く成就せず」と、弘決の三に云く「今日の声聞・禁戒を具することは良に久遠の初業に常を聞くに由る若し昔聞かずんば小尚具せず況や復大をや」云云、弘決の三に云く「若し全く未だ曾て大乘の常を聞かずんば既に小果無し誰か禁戒の具・不具を論ぜんや」云云、又云く「羯磨不成と言うは所謂久遠必ず大無んば則ち小乗の乗る法を成ぜざらしめん本無きを以ての故に諸行成ぜざること樹の根無ければ華果を成ぜざるが如し、時機未だ熟せずんば権に小の名を立つ汝等の行ずる所是れ菩薩の道、始めて記を得て方に大人と名くるに非ず」釈籤の一に云く「法譬二

とくやく やから
周得益の徒は往日結縁の輩に非ること莫し」ニ云。

じんでんくおん
五百塵点久遠を以て元始と為す じゆりようほん
寿量品の意なり

じんでんりようぜん ちゆうげん
五百塵点靈山の間

してい おんこんふおんこん
第三に師弟の遠近不遠近の相

しゅじゅくだつ
種熟脱を論ず

くおん かこ
種は久遠熟は過去脱は近く世世番番の成道今日の法華なり

げんぎ いわ しゅうきよう ことごとく
玄義の一に云く「又衆経に咸く云く道樹に師の実智始めて満じ道樹を起て

ごんち ほんじ
始めて権智を施す今の経は師の権実・道樹の前に在て久久に已に満すと

あきらら しよきよう あきらら にじよう でし じっち
明かす、諸経に明かす二乗の弟子は実智に入ることを得ず亦権智を施すこ

あた あきらら でし はなはだ だし また
と能わず、今の経に明かす弟子の入実は甚だ久し、亦先より解して権を

しゅうきよう なお
行ず、又衆経は尚道樹の前の師と弟子との近近の権実を論ぜず況や復た

ごんじつちようおん あきらら ふしよせかい
遠遠をや、今の経は道樹の前の権実長遠なることを明かす補処世界を数う

るに知らず況や其の塵数をや」經に云く「昔未だ曾て説ざる所今皆當に聞
くことを得べし慇懃に稱讃すること良に所以有るなり、當に知るべし此の
經は諸經に異なることを」釈籤の一に云く「二乘猶小果に住す故に不入と
云う豈に能く他を化せんや、故に権を施さず、次に今經を明かす満願等の
如き先に已に実に入る説法第一なり、故に先より解して権を行ずることを」
弘の七に云く「過去に種を下すは現在に重ねて聞いて成熟の益を得、
未だ曾て種を下さざるは現在に種を成じ未來に方に益す故に三世の益皆
法輪に因る」と藥草喩品に云く「汝等が所行は是れ菩薩の道なり漸漸に
修學して悉く當に成仏すべし」ニ云、記の一に云く「一時・一説・一念
の中・三世・九世・種熟脱の三あり」弟子品に云く「諸の比丘諦かに聴け
仏子所行の道善く方便を學ぶが故に思議することを得可からず衆の小法を
棄つて而して大智を畏るることを知る、是の故に諸の菩薩・声聞・緣覺と

な
作る無数の方便ほうべんを以て諸の衆生の類たぐいを化す」云云、又云く「内に菩薩ぼさつの
行を秘ひし外に是れ声聞しょうもんなることを現す小欲しょうよくにして生死しやうじを厭いとえども実には
みずか
自ら仏土きよを淨きよむ、衆に三毒さんどく有ることを示し又邪見じゃけんの相を現げんず我が弟子でし
かくのごと
是くの如く方便ほうべんして衆生しゅじやうを度す」云云、方便品ほうべんに云く「大乘だいじやうに入る為れ
本なり」云云、分別功德品ぶんべつくどくに云く「願みらいわくば我未來おゐに於て長寿ちやうじゆを以て衆生
を度せん」云云、玄義げんぎの七に云く「但本極ほんしんの法身みみやうしんえん・微妙深遠みみようしんえんなり仏若もし説
かずんば弥勒みろく尚暗みろくなおし何いかに況いや下地いをや何いかに況いや凡夫ぼんぶをや」云云、伝教大師でんぎやうだいし
の秀句しゅうくの下に云く「浅やすは易やすし深がたは難しし釈迦しやかの所判しよはんなり浅あさきを去ふつて深ふかきに就つ
は丈夫じやうぶの心なり天台大師てんだいだいしは釈迦しやかに信順しんじゆんして法華宗ほつけしゆうを助けて震旦しんたんに敷揚ふようし
えいざん
叡山てんだいの一家そうじやうは天台ほつけしゆうに相承にほんして法華宗くつうを助けて日本にほんに弘通ぐつうす」云云、又云く
つつし
「謹ほけきやうみて法華經ほうしほん・法師品ほうしほんの偈げを案いずるに云く藥王やくおう今汝なんじに告しよせつぐ我しよせつか所説しよせつの
しよきやうしか
諸經しよきやうしか而も此の經の中に於て法華最おゐも第一ほつなりだい一いちなりち經文ま当まに知こるべし斯ほけきやうの法華經

は諸經しよきようの中の最さい為いいち第一だいなり」と、釈迦しやかせ世尊そん宗を立つるの言は法華ほっけを極と為なす金口きんくの校きよう量りようなり深く信受しんじゆす可べきか。

◆八七 一代五時繼図 658P

大論だいろんに云いくわ百卷ひやく竜樹りゆうじゆ菩薩ぼさつの造ぞう如來にょらい滅めつ後ご七百年しちひゃくねん出世しゅっせの人ひとなり十九じゅうしゅう出家しゅっけ・三十さんじゅう成道じやうどう・八十はちじゅう涅槃ねはん

涅槃ねはん經きやうに云いく八十はちじゅう入滅にゅうめつ 阿含あこん經きやう亦此よくしの説有いうり云云、

兼せつしよ 説処せつしよは中天竺てんじく寂滅じやくめつ道場どうじやう菩提樹ぼだいじゆげ下

権大乗こんだいじよう

別教べつきよう

六十卷くやくぶつだ 旧訳きうやく仏陀ぶつだ跋多羅さんそ三藏さんそうの訳

三七日

八十卷しんやく 新訳しんやく実叉難陀なんださんそ三藏さんそうの訳

華嚴經けこんきやう

円教えんきよう

四十卷

乳味にゅうみ

結經けつきやうは梵網經ぼんもうきやう

教主きょうしゅ

他受用報身如來たじゅうゆうほうしんにょらい

旧訳の説くやく

毘盧遮那如來びるしやなにょらい

新訳の説しんやく

所居しよくこの土は仮立実報土又は蓮華藏世界と云うけりゅうじつぽうど れんげそうせかい

愚法二乘經

一に小乘教

一切いっさいの小乘經しょうじょうきようを撰せんす

空

二に大乘始教だいじよう

方等部ほうとうぶの經を撰せんす

不空

三に大乘終教だいじよう

般若・涅槃經はんによ ねはんぎようを撰せんす

三乘の中の絶言の理を説く

四に頓教とんきよう 一切經中の頓悟成仏の旨むねを撰せんす

別教一乘べつきよういちじよう

華嚴宗五教を立つけこんしゅう

五に円教えんきよう

華嚴・法華を撰すけこん ほっけ せん

馬鳴菩薩めみょうぼさつ

起信論を造る

天竺てんじく

竜樹菩薩りゅうじゅぼさつ

十住毘婆沙論を造るじゅうじゅうびしゃもんろん

天親菩薩てんじんぼさつ

十地論を造るじゅうちろん

杜順和尚とじゆんわじよう

終南山の住文殊の化身云云もんじゅ けしん

智儼法師ちごんほっし

至相寺の住

法蔵大師ほうぞうだいし

京兆涼山大華寺の住「又賢首大師と云いけんしゅだいし

唐土もうこし

又康蔵大師と云うだいし

祖師そし

澄観法師ちようかんほっし

「清涼山大華寺の住又清涼国師と云せいりよう

う」

審祥大和尚しんじよう わじよう

「大安寺の住新羅国の人」日本最初伝だいあんじ しらぎ にほんさいしよ

慈訓小僧都そうず

明哲律師 りっし

日本 にほん

良弁僧正 りょうべんそうじょう

東大寺の本願 とうだいじほんがん

等定大僧都 そうず

道雄僧都 どうゆうそうず

海印寺の住

一向小乘 いっこうしょうじょう

波羅奈国・鹿野園 はらなろくやおん

に増一阿含 あこん

人天の因果を明す にんてんいんが

十二年説

に中阿含 あこん

真寂の深義を明す じんぎ

阿含經 あこんきょう

酪味 らくみ

四阿含經 あこんきょう

に雜阿含 あこん

諸の禪定を明す もろもろぜんじょう

但三蔵教 さんぞう

に長阿含 あこん

諸の外道を破す もろもろげどうは

けつきょう ゆいきょうきょう
結経は 遺教経

うぶ
有部顕宗六百頌

てんじく
天竺の人なり

ぐしやしゅう
俱舎宗

ぐしや
俱舎論「三十卷・三乘法を明かす」

せじんほさつ によらいめつご
世親菩薩の造如来滅後

九百年の人なり

しんやく
新訳

てんじんほさつ
経部密宗十万頌・天親菩薩の造天竺には婆薮畔豆と云うなり

げんじょうさんぞう
玄奘三蔵

くやく
旧訳

ほっし
光法師

ほっし
宝法師

もろこし
唐土

神泰

円暉

祖師そし

惠暉

道麟

善報

日本にほん

伝灯満位の勝貴「延暦廿五年法相宗に付す私に云く

余抄に云う延暦十三年官付云云」

訶梨跋摩三蔵・天竺てんじくの人此ここに師子鎧ししよろいと云う

成実宗じょうじつ

成実論十六卷「二十七賢聖けんせいの位を明す二百二品」

如来滅後九百年にょらいめつご

羅什三蔵らじゅうさんそう

唐土もろこし

僧叡

祖師そし

智蔵・開善寺の僧ちそう

日本にほん

伝灯満位の賢融えんりやく延暦二十五年三論さんろんしゅうとうだいじ宗東大寺僧に付す余

抄に云くいわ延曆十三年云云えんりやく

りつしゅう

律宗

如来成道五年の後律を説く、

僧祇律之これを説く、・或は十二年の

後須提によつて戒律を制す四分律之これを説く

一 曇無徳部

二 薩婆多部
あるば

五部を明あきらかす

三 弥沙塞部

四 婆廬富羅部

五 迦葉遺部
かしよう

五篇七聚を立つ

一には波羅夷

二には僧残

一には波羅夷篇

三には偷蘭遮

二には僧伽婆尸沙篇

四には波逸提

三には波逸提篇

五には波羅提提舍尼はらだい

四には波羅提提舍尼篇はらだい

六には突吉羅

五には突吉羅篇

七には惡說

☆多三藏さんぞう

天竺てんじく

仏滅後三百年

祖師そし

道宣律師どうせんりっし

唐土もうこし

弟子鑒真和尚でし がんじんわじょう

日本にほん

鑒真和尚は唐土の人なり、
東大寺戒壇院を立てし人とうだいじ

なり。

蔵通・別円ぞうつう べつえん

十六年説時不定せつじふじょう

対

方等部ほうとうぶ

権大乘こんだいじょう

生蘇味 しょうそみ

結経は瓔珞経 けつぎょう いうらぐ

解深密経 げじんみつ

瑜伽論百卷弥勒説無著筆 ゆいが みろく むちやく

唯識論 ゆいしきろん

又有相宗と云う ゆうそう

法相宗 ほうそうしゅう

「惣じては一切経に依り別し そう いっさいぎょう よ

有初 又有相教とも云 ゆうそう

ては六経十一部に依る」 よ

三時教を立つ さんじきょう

空昔 又無相教とも云 むそう

中今 又中道教とも云 ちゅうどう

如来滅後九百年に出づ にょらいめつご

弥勒菩薩 みろくぼさつ

無著菩薩 むちやくぼさつ

祖そ師し

天竺てんじく

世親せじん菩薩ぼさつ

護法ごほう菩薩ぼさつ

戒賢かいけん論師ろんし

摩訶まか陀だ国こくの大だい那な爛らん陀た寺じのの人ひと

☆法師ほっし

尚しょう法師ほっし

光こう法師ほっし

基き法師ほっし

弟子でし四し人にん

玄奘げんじょう三藏さんざう

慈恩じおん大師だいし

智周ちしゅう法師ほっし

智鳳

義淵

空晴

真喜

日本にほん

唐土もうこし

善議 ぜんぎ

勤操 こんそう

觀經一卷 かんきょう

・良耶舎の訳

宋の代

雙觀經二卷 そうかんきょう

康僧鎧の訳 ようい

魏の代

淨土宗 じょうどしゅう

阿彌陀經一卷 あみだ

鳩摩羅什の訳 くまらじゅう

後秦代 こうしん

淨土論一卷 じょうど

天親菩薩の造 菩提流支三藏の訳 天竺の人なり てんじんぼさつ ぼだいいるしさんそう てんじく

天竺 てんじく

菩提流支三藏 ぼだいいるしさんそう

曇鸞法師 どんらんほっし

難行・易行を立てて一切の經論を なんぎょう いぎょう いっさい きょうろん

撰するなり せん

道綽禪師 どうしゆくぜん

聖道・淨土の二門を立てて一切の しょうどう じょうど 二もん いっさい

經論を撰するなり きょうろん せん

祖師 そし

唐土 もろこし

善導和尚 ぜんどうわじょう

正雜の二行を立てて一切の經論を しょうざう 二ぎょう いっさい きょうろん

摂せつするなり

るなり

懷感えかんぜん禪師

群疑うたがい論を造つて一代いちだいの聖教しょうきょうを判ず

小康ほっし法師

已上もろこし、五人唐土の人なり

日本にほん

法然ほうねん上人

選択せんちやく集

「二卷」

「捨しゃ閉閣抛入開入

皈」

禪宗ぜんしゅう

如来にょらい禪

楞伽りやうが經

・金剛般若經等に依る、

又は教禪とも云う

祖師そし禪

教外別伝きやうげべつでん

・不立文字ふりゅうもんじ云云

西天さいてんの二十八祖

別紙これあに之有り

菩提達磨ぼだいだるま禪師

天竺てんじくの人なり

祖師そし

惠可ぜん禪師

僧 ☆

東土六祖 とうど

道信

弘忍

惠能

真言宗 しんごんしゅう

胎藏界 たいざう

七百余尊 よそん

金剛界 こんごう

五百余尊 よそん

大日經 だいにちきよう

「六卷卅一品」

善無畏三藏の訳 ぜんむいさんぞう

「開元四年中天竺の人なり」 かいげん 4年 てんじく

供養法の巻を加えて七卷なり、一卷・五品 くよう ごほん

金剛頂經 こんごうちようきよう

「三卷・一品」

金剛智三藏の訳 こんごうちさんぞう

「開元八年南天竺の人なり」 かいげん 8年 てんじく

蘇悉地經 そしつちきよう

「三卷卅四品」

善無畏三藏の訳 ぜんむいさんぞう

菩提心論 ぼだいしんろん

「一卷七丁」

竜猛菩薩の造 りゅうもうぼさつ

不空の訳 ふくう

・或は不空の造 ある ふくう

大日如来 だいにちによらい

祖そ
師し

唐もろこし
土

天竺てんじく
三

金剛薩捶こんこう

竜猛菩薩りゅうもうぼさつ

竜智
已上天竺てんじくの人なり

善無畏三蔵ぜんむいさんぞう

金剛智こんこうち

不空ふくう

惠果

弘法こうぼう
又空海くうかいと云う

真雅しんが

源仁げんじん

聖宝せいほう

淳祐

日本 にほん

元杲

仁海

成尊

義範

範俊

五藏

一に俎多覽藏 にゆうみきようぞう「乳味経藏」阿難の結集

二に毘奈耶藏 びなや「酪味律藏」優婆利

三に阿毘達磨藏 あびだるま「生蘇味論藏」迦旃延

四に般若波羅蜜多藏 はんにはやはらみつ「熟蘇味文殊」華嚴

方等・般若・法華・涅槃經を撰するなり

五に陀羅尼藏 だらにぞう「醍醐味・金剛藏」大日經

金剛頂經・蘇悉地經を撰す

こうぼうだいし
弘法大師・義立

ぼんぶあくにん
「凡夫悪人」

ていよう
一異生羝羊住心

ぐどうじさい
二愚童持斎住心「凡夫

ぜんにん
善人」

じゅうじゅう

十住心

三嬰童無畏住心

げどう
「外道」

ゆいおんむが
四唯蘊無我住心「声聞」

ごういん
五拔業因種住心「緣覺」

はんにやきよう
理趣般若經「一卷」
そう
惣じて八部の般若有り
はんにや
六他縁大乘住心

ほうそうしゅう
「法相宗」

だいぼんはんにや
大品般若「四十卷」
らじゅうさんそう
羅什三蔵の訳「旧訳」
かくしんふしよう
七覺心不生住心

さんろんしゅう
「三論宗」

大般若經はんにやきよう「六百卷」
玄奘三蔵の訳
「新訳」しんやく

八如実一道住心によじついちどう

「法華宗」ほっけしゅう

般若部はんにやぶ

通別円つうべつえん

九極無自性住心むじせい

「華嚴宗」けこんしゅう

帶

十秘密莊嚴住心ひみつそうこん

「真言宗」しんこんしゅう

権大乘こんだいじょう

十四年の説・或あるは三十年の説

熟蘇味じゆくそみ

結経は仁王経けつきよう にんのうきよう

百論「二卷」提婆菩薩の造だいばぼさつ

中論「四卷」竜樹菩薩の造りゅうじゆぼさつ

三論宗さんろんしゅう

十二門論「一卷」竜樹菩薩の造

大論だいろんを加えて四論宗とも云う。

二蔵

一に声聞蔵しょうもん

一に根本法論こんぽん

二に菩薩蔵ぼさつくそ

三転法論

二に枝末法論しまつ

文殊もんじゅ

三に摂末歸本法論きほん

馬鳴めみょう

竜樹りゅうじゅ

天竺てんじく

提婆だいば

竜智

清弁しょうべん

智光ちこう

羅什らじゅ

祖師そし

唐土 もろこし

道朗

法朗

吉蔵 きちそう

觀勒僧正 かんろくそうじよう

「亦嘉祥大師と云う嘉祥寺の僧なり」
またかじようだいし かじよう

百濟国の人なり くだら

高麗国の人なり こま

惠灌

日本 にほん

善議 ぜんぎ

勤操 こんそう

妙法蓮華經 みようほうれんげきよう

羅什三蔵の訳 らじゅうさんそう

正法華經 ほけきよう

法護三蔵の訳 まもさんそう

添品法華經 てんぽんほけきよう

闍那笈多の訳 じやな

薩吽分陀梨法華 さつ

新訳 しんやく

八箇年の説 はちかねん

法華經
ほけきよう

実大乘
じつだいじよう

醍醐味
だいごみ

純円
じゆんえん

純円の説

けつきよう ふげん

結経は普賢經

曇無蜜多の訳

〔宋代〕

法華宗
ほつけしゆう

ぶつりゆうしゆう

仙立宗

てんだいしゆう

天台宗

えびよう

依憑宗

四教五時を立てて一代教を撰す
しきよう いちだい

華嚴 寅時
けこん あこん

阿含 卯時
あこん

方等 辰時
ほうとう

般若 巳時
はん にや

一に三蔵教 諸部小乗の実有の所説を撰す
さんぞう しよ しようじよう しよせつ せつ

二に 通教 つうきょう

諸部の如幻即空の旨を撰す しよ そく むね せつ

三に 別教 べつきょう

諸部の大乘並びに歴劫行の所説を撰す しよ だいじょうなら りゃくこう しよせつ せつ

四に 円教 えんきょう

諸部の大乘經の速疾頓成の所説を撰す しよ だいじょうきょう そくしつとんじょう しよせつ せつ

大覺世尊 だいかくせそん

天竺 てんじく

竜樹菩薩 りゅうじゅぼさつ

祖師 そし

天台大師 てんだいだいし

唐土 もうこし

章安大師 しょうあんだいし

妙樂大師 みょうらくだいし

日本 にほん

伝教大師 でんきょうだいし

一日一夜の説

涅槃經 ねはんきょう

醍醐味 だいごみ

けつきよう　そうほうけつききよう
結経は像法決疑経

ねはん　そし
涅槃宗の祖師

一北地師

ほだいるし
二菩提流支師

こうずほつし
三光統法師

まも　ほつし
四護身の法師

ほつし
五耆闍の法師

ぜん
六北地の禪師

ぜん
七北地の禪師

南三

ほつし
二愛法師

ほううんほつし
三法雲法師

こうたく
「光宅寺の僧なり」

北七

ほつけ　しょうじよう
法華の外は小乗の事

じゆりようほん　いわ　ねが　とくはつくじゆう　こ
寿命品に云く小法を楽う徳薄垢重の者は人の為に我少きより出家して

あのかたらさんみやくさんぼだい
阿耨多羅三藐三菩提を得たりと説く云云。

もんく　いわ　しじよう　と　みな　ねが　な
文句九に云く始成を説きたもうことは皆小法を楽える者と為すのみ云云。

じよき　いわ　ただ　こんじよう　ねが　な　けこん　とんぶ　しよみ
疏記に云く但し近成を楽う者・楽小の者と為すは華嚴の頓部・諸味の中

の円なり文。

てんじんぼさつ ほっけろん いわ いちおうさんそう
天親菩薩の法華論に云く一往三蔵を名けて小乗と為し再往は三教を名

けて小乗と為す文。

もんく いわ ねが しやうじやう
文句の九に云く小を樂う者は小乗の人に非ざるなり、乃ち是近説を樂う

者を小と為すのみ文。

じよき いわ ぎやうしやうぼう
疏記の九に云く樂小法とは久近を以て相望して小と為す文。

しゅうく いわ ほとけめつど きやうしゅうろんしゅう
秀句の下に云く仏滅度の後の六七百年の經宗論宗九百年の中の法相の

りやうしゅうしぎやう しゅじやう いんしやう かくのゆえ みけんしんじつ
一宗は歴劫修行を説いて衆生を引攝す是の故に未顕真実なり云云。

でんぎやうだいし えびやう いわ
伝教大師の依憑集に云く新來の真言家は則ち筆受の相承を泯し旧到の

けこん すなわ ようこう きも かく じんくう さんろんしゅう だんか くっち しやうしん
華嚴家は則ち影響の規模を隠し☆空の三論宗は彈呵の屈耻を忘れて称心

しんすい くつがえ じゃくう ほうそうしゅう ぼくよう きえ はんぎやう かつ
の心酔を覆し、著有の法相宗は僕陽の帰依を非して青竜の判經を撥す云

云。

秀句の下に云く誠に願くは一乗の君子仏説に依憑して口伝を信ずること
莫れ、仰いで誠文を信じて偽会を信ずること莫れ、天台所釈の法華宗は
諸宗に勝る寧ろ所伝を空うせんや、又云く謹みて無量義經を案ずるに云く
次に方等十二部經・摩訶般若・華嚴海空を説いて菩薩の歴劫修行を宣説
す已上大唐の伝に云く方等十二部經とは法相宗の所依の經なり、摩訶般若
とは三論宗の所依の經なり、華嚴海空とは華嚴宗の所依の經なり俱に
歴劫修行を説いて未だ大直道を知らず文。

妙樂大師の弘決の九に云く法華以前は猶是れ外道の弟子なり文。

傳教大師の守護章の上に云く妙法の外更に一句の經無し文。

智証大師授決集の上に云く經に大小無く理に偏円無からん一切・人に
依らば仏説無用ならん、若し然らずんば文に拠て伝う可し己が父は國王に
勝ると執すること莫れ、又他に劣ると謂うこと莫れ、然も家家の尊勝・國

国の高貴たかしやう大小ふんざい各分齊おのづか有り、土を以て金と為せば家これあ家に之有り金を以て金と為せば有無うむ処を異にす、久成くじやうの本・開権かいこんの妙・法華ほつげ独り妙ひとに独り勝まさる、強しいて抑おさえて之を喪これし仏説ぶつせつを哽塞こうそくす如來にやらいを咎とがむ合あし伝者でんしやを非なすること莫なれ、又云いわく国こくとは五味、家け家けとは四教しきやう八教はつきやうなり文。

天台てんだいの玄義げんぎの十じふに云く若もし余教よきやうを弘ひろむるには教相きやうそうを明あかさざれども義ぎに於おいて傷きずむこと無し、法華ほつげを弘ひろむるには教相きやうそうを明あかさざれば文義もんぎ闕かくること有り、但聖意ゆういん幽隱ゆういんにして教法きやうほう弥難いよいよし前代ぜんだいの諸師しよし・或あるは名匠めいじやうに祖承そじやうし・或あるは思しい袖しゆうきん衿きんより出でず阡陌せんひやく縱横じゆうかうなりと雖いえども孰いずれか是これなることを知しること莫なし、然しかるに義雙ぎなび立たたず理兩ふたつながら存そんする無し、若もし深ふかく所以ゆえん有りて復修多羅またしゆたらと合あする者ものは録ろくして之これを用もちゆ文ぶん無なく義無ぎなきは信受しんじゆす可べからずと。

一、開會かいえの事

壽量品じゆりやうほんに云く諸しよの經方きやうに依よつて好このき藥草やくそうの色香しきかう美味みみ皆みな悉ことごとくく具足ぐそくするを求もと

めて擣とう☆和合しわごうす文。

文句もんくの九くに云いわく経方すなわとは即ち十二部経すなわなり藥草すなわは即ち教しよせんの所詮はちまんの八万はちまんの
法門ほうもんなり、香美味かうみみとは戒定慧かいじょうえなり、空觀くうかんは擣つくが如ごとく仮觀けかんは☆うふるが如ごとく中
觀がっは合ごつするが如ごとし文。

大經だいきように云いわく衆流海しゅうるうみに入りて同一鹹味かんみゆえ故ゆゑに海味かいみと云いう文。玄げんの三さんに云いく

諸水しよすい・海かいに入いれば同一鹹味かんみなり、諸智しよち・如実智じつちに入いれば本ほんの名字みょうじを失しすと
文。

一、是諸經之王しよきやうのわうと云いう事

信解品しんげひんに云いく並びならに親族しんそく・国王こくおう・大臣だいじんを会えす。

文句もんくの六ろくに云いく国王こくおうとは一切漸頓いっさいぜんとんの諸經しよきやうなり。

疏記じよきの六ろくに云いく諸もろもろの小王こわうを廢たして唯一ただの王わうを立たつ是かくのゆえの故ゆゑに法華ほつげを王中おうちゆうの

王なすと名なく文。

一、法華已前の説を権と云う事

玄義げんぎの三さんに云く涅槃ねはんの聖行品しょうぎようほんに云く追つて衆經しゅうきようを分別ぶんべつす故ゆえに具つぶさに四種したいの四諦しやくせんを説くなり、徳王品とくおうほんに追つて衆經しゅうきようを混みんす文。

釈籤しやくせんの三さんに云く涅槃ねはんに追と言いうは退かえなり劫しよつて更に前の諸味ぶんべつを分別しよす、混みんとは合会ごうかいなり法華ほっけより已前いぜんの諸經しよきよう皆混みなす此すなわの意ほっけは則すなわち法華ほっけの部に順しゆんずるなり文。

弘くの三さんに云く彼の經けいの四教しきよう皆常住じやうじゆうを知る故ゆえに本意ほんいは円えんに在ざいりと文。
玄義げんぎの四しに云く法華ほっけの意いを得る者ねはんは涅槃ねはんに於おいて次第しだいの五行ごけいを用もちいざるなり文。

一、常好坐禪ざぜんと云う事

安樂行品あんらくぎようほんに云く亦師またと同どうずることを樂ねがわらず常に坐禪ざぜんを好このむ文。普賢經ふげんに云く専せんら大乘だいじようを誦じゆし三昧さんまいに入いらず文、又云またく其その大乗經典だいじようきやうてんを讀誦どくじゆするも

の有らば諸悪永く滅して仏惠より生ずるなり文。

一、天台宗阿弥陀の事

弘決の二に云く諸経の讚する所多く弥陀に在り故に西方を以て一准と爲す文、私に云く此の釈・文殊説・文殊問の兩經に依るなり、常坐三昧の下。

止觀の二に云く弥陀を唱うるは即ち是れ十方の仏を唱うる功德と等し但専ら弥陀を以て法門の主と爲す、要を挙げて之を言わば歩歩・声声・念念・唯阿弥陀仏に在り文、私に云く此の釈般舟三昧經に依るなり常行三昧の下口説☆の下。

又云く意に止觀を論ぜば西方阿弥陀仏を念ず此れを去ること十万億仏刹と文、此の釈般舟三昧の經の文に依るなり常行三昧の下。

又云く陀羅尼咒を誦し三宝十仏を請じ摩訶祖持陀羅尼を思惟せよ文、此

の釈は方等陀羅尼經に依る半行半坐の三昧の下。

又云く三宝・七仏・釈尊・弥陀・三陀羅尼・二菩薩・聖衆を礼せよ、

此の釈は諸經に依る非行・非坐三昧の下。

玄義の九に云く諸行は傍の実相を以て躰と為し体行俱に麁なり文、又

云く諸經の方法に依る常行等の行は傍を以て體と為す体行俱に麁なり

文。

已上四十余年の經釈

止觀の二に云く別に一卷有り法華三昧と名く是れ天台大師の著す所なり、

世に流傳して行者之を宗ぶ、此れ則ち説☆を兼ね復別に論ぜざるなり文。

法華三昧に云く道場の中に於て好き高座を敷き法華經一部を安置し亦

未だ必ず形像・舍利並に余の經典を安ずることを須いず唯法華經を置け

文。

止観しかんの二にに云いわく意いの止観しかんとは普賢ふげん観かんに云いわく専もつぱら大乘だいじようを誦じゆして三昧さんまいに入いらず日夜六ろっこん時に六根つみの罪さんを懺あんらくきようほんす、安樂行品いんらくぎようほんに云いわく諸法しよほうに於おいて行なく不また分別ぶんべつを行なぜざれ文。

法華經ほけきやうに云いわく乃至余經ないしよきやうの一偈いちげをも受けざれ文。

又云いわく復舎利またしやりを安やすんずることを須もちいず文。

一、天台念仏てんだいねんぶつの事

止観しかんの六にに云いわく見思けんじの惑わくすなわ即こち是これ仏法界ぶつぽうかいなりと覺さとして法身ほっしんを破やぶせざるを念仏ねんぶつと名なくと文。

止観しかん二にに云いわく意止観いしかんとは普賢ふげん観かんに云いわく専もつぱら大乘だいじようを誦じゆし三昧さんまいに入いらず日夜六ろっこん時に六根つみの罪さんを懺あんらくきようほんす安樂行品いんらくぎようほんに云いわく諸法しよほうに於おいて行なずる所なく無く亦また不分別ぶんべつを行なぜざれ。

秀句しゅうくの下いに云いわく能化のうけの竜女りゆうにょ歴劫りやくの行無しよけし所化しよけの衆生しゆじやうも亦また歴劫りやく無なし文。

一、法華成仏の人数の事

二の卷舍利弗は華光如来・三の卷迦葉は光明如来・須菩提は名相如来
かせんねん えんぶなだいこんこうによらい もくれん たまらばせんだんこうによらい みようそうによらい
迦旃延は閻浮那提金光如来・目連は多摩羅跋旃檀香如来・四の卷富楼那
ほうみようによらい ちんによ ふみようによらい あなん さんかいえじざいつうおうぶつ らしち
は法明如来・陳如等の千二百は普明如来・阿難は山海慧自在通王仏羅☆羅
どうしつほうげによらい だいばだった てんのうによらい まかはじやはだいびくに いっさい
は蹈七宝華如来・五の卷提婆達多是天王如来・摩訶波闍波堤比丘尼は一切
しゅじよう きけんぶつ やしゅたらによ くそくせんまんこうそつによらい しゃからりゅうおう むすめ
衆生・喜見仏・耶輸陀羅女は具足千万光相如来・娑竭羅竜王の女の八歳
りゅうによ によらい 正法華經 だいば いわ とうじ しゅうえみなりゅうによ ことねん
の竜女は無照光如来の説なり提婆品に云く当時の衆会皆竜女を見る忽然の
間に變じて男子と成て菩薩の行を具して即ち南方無垢世界に往き宝蓮華に
坐して等正覺を成じ三十二相・八十種好普なく十方一切衆生の為に
みようほう えんぜつ しょうかく しょうさつ しやうもん てんりゅう はちぶ みな
妙法を演説す文。

又云く爾の時に娑婆世界の菩薩・声聞・天竜・八部・人と非人と皆
いわ そ しやばせかい ぼさつ しやうもん てんりゅう はちぶ みな
遙かに彼の竜女の成仏して普なく時の会の人天の為に法を説くを見て心
はる りゅうによ じようぶつ あま にんてん ため

大いに歡喜して遙かに敬礼す文。

一、四十余年の諸の経論に女人を嫌う事

華嚴經に云く女人は地獄の使なり能く仏の種子を断つ外面は菩薩に以て

内心は夜叉の如しと文。

又云く一び女人を見れば能く眼の功德を失う縦い大蛇を見ると雖も女人を見る可からずと文。

銀色女經に云く三世の諸仏の眼は大地に墮落すとも法界の諸の女人は永く成仏の期無らんと文。

華嚴經に云く女人を見れば眼大地に墮落す何に況や犯すこと一度せば三惡道に墮つ文。

十二仏名經に云く假使法界に遍する大悲の諸菩薩も彼の女人の極業の障を降伏すること能わず文。

大論に云く女人を見ることが一度なるすら永く輪廻の業を結ぶ、何に況や犯すこと一度せば定んで無間獄に墮すと文。

往生礼讃に云く女人と及び根欠と二乗種とは生せず文。

大論に云く女人は惡の根本なり一たび犯せば五百生彼の所生の処六趣の中に輪廻すと文。

華嚴經に云く女人は大魔王能く一切の人を食す現在には纏縛と作り後生は怨敵と為る文。

一、眞言を用いざる事

伝教大師の依憑集の序に云く新來の眞言家は則ち筆受の相承を混す文。

安然の教時義の第二に云く問う天台宗の遺唐の決義に云く此の大

盧遮那經は天台五時の中に於て第三時方等部の攝なり彼の經の中に四乗を説くを以ての故に云云、此の義云何ん答う彼の決義に云く伝え聞く疏二十

卷有り但未だ披見せず云云、此は是れ未だ經意を知らざる誤判なり、何なれば天台第三時の方等教は四教相對して大を以て小を斥い円を以て偏を彈ず、今日日經は応供正遍知・衆生の樂に隨つて四乗の法及び八部法を説きたもう是は一切智智一味云云、若し爾らば法華と同じと謂う可し何に方等彈斥の教に擧するや文。

広修維☆の唐決に云く問う大毘盧遮那一部七卷・薄伽梵・如来加持廣大金剛法界宮に住して一切の持金剛者の為に之を演説す、大唐の中天竺国の三蔵・輸婆迦羅・唐には言う善無畏と訳す、今疑う如来の所説始め華嚴より終り涅槃に至るまで五時四教の為に統攝せざる所無し、今・此の毘盧遮那經を以て何の部・何の時・何の教にか之を攝せん又法華の前説とや為さん當に法華の後説とや為さん此の義云何、答う謹みて經文を尋ぬるに方等部に属す声聞・緣覺に被らしむるが故に不空羂索・大宝積・大集

・大方等^{ほうとう}・金光明^{こんこうみょう}・維摩^{ゆいま}・楞伽^{りょうが}・思益等^{しやく}の經^{きやう}と同味^{どうみ}なり、四教^{しきやう}・四仏^{しふつ}
・四土^{じつ}を具^ぐす今毘盧遮那經法界宮^{びるしゃなほつかい}に於^{おい}て説^おくことを顯^{あらわ}す、乃^{すなわ}ち是^これ法身^{ほっしん}
寂光土^{じやくこうど}なり勝^{しょう}に従^{したが}つて名^なを受^うくるなり前後^{ぜんご}詳明^{しょうめい}す可^べし云云。

一、法華と諸經との勝劣の事

法華經第一

本門第一

已今當第一なり、藥王今汝に告ぐ諸經の中に於て最も其の上に在り又云く
我が所説の諸經此の經の中に於て法華最第一なり云云

迹門第二

涅槃經第二

是經出世

無量義經第三「次に方等十二部經を説く」

華嚴經第四

般若經第五

蘇悉地經第六あればある・或は復大般はんにやきよう若若經を転讀すること七遍・或は一百遍せよ

大日經第七 三国に未だ弘通せざる法門なり

一、鎮護國家の三部の事

法華經 ほけきよう

密嚴經 みつこんきよう

法華經 ほけきよう

仁王經 にんのうきよう

法華經 ほけきよう

浄名經 じようみようきよう

勝鬘經 しょうまん

法華經 ほけきよう

金光明經 こんこうみようきよう

仁王經 にんのうきよう

不空三蔵大曆に法華寺に之を置く ふくうさんそうだいいき ほつけじ これ

唐の大曆二年に護摩寺を改めて法華寺を立て中央に とう だいいき ごまでら あらた ほつけじ

脇士に両部の大日なり きようじ だいにち

人王三十四代推古天王の御宇聖徳太子 すいこ ぎようしやうとくだいし

四天王寺に之を置く摂津国・難波郡 してんのう これ せつつ なにわぐん

仏法最初の寺なり ぶつぽうさいしよ

人王五十代桓武天皇の御宇伝教大師 かんむてんのう ぎようでんきようだいし

比叡山延暦寺止観院に之を置かる ひえいざんえんりやくじしかん これ

年分得度者二人 とくとしや
一人は遮那 しゃな

一人は止観業 しかん

大いにちきよう
大日経

五十四代仁明天王の御宇

こんごうちょうきよう
金剛頂経

慈覚大師比叡山東塔の西惣持院に之を置かる

そしつちきよう
蘇悉地経

御本尊は大日如来金蘇二疏十四卷之を安置せらる

ひけきよう
一、悲華経の五百の大願等の事並びに示現等

だいいち
第一百十三願に云く我來世穢惡土の中に於て當に作仏することを得べし

すなわじゅつぽうじようと ひんずい しゅじょう
則ち十方淨土の擯出の衆生を集めて我當に之を度すべしと文。

だいいち
第一百十四願に云く我無始より來かた積集せる諸の大善根一分我が身

とど
に留めず悉く衆生に施さんと文。

だいいち
第一百十五願に云く十法界の諸の衆生無始より來かた造作する所の極重

むげん
五無間等の諸罪合して我が一人の罪と為す大地獄等に入つて大悲代つて苦

を受けんと文。

ひけきよう
悲華経に云く我が滅度の後末法の中に於て大明神と現じて広く衆生を

度せんと文。

涅槃經の二に云く爾の時に如来・棺の中より手を出して阿難を招き密かに言く汝悲泣すること勿れ我還つて復閻浮に生じて大明神と現じて広く衆生を度せんと文。

又云く汝等悲泣すること莫れ遂に瞻部州に到つて衆生を度せんが為の故に大明神と示現せんと文。

悲華經に云く第五百願に我来世穢惡土の中に於て大明神と現じて当に衆生を度すべし文。

大隅正八幡の石の銘に云く昔靈鷲山に在つて妙法華經を説く衆生を度せんが為の故に大菩薩と示現すと文。

行教和尚の夢の記に云く阿弥陀三尊

延暦二十三年甲申春、伝教大師渡海の願を遂げんが為に筑前宇佐の

じんぐうじ
神宮寺に向つて自ら法華經を講ず、即ち託宣して云く我此の法音を聞かず
して久しく歳年を歴たり幸に和尚に値遇して正教を聞くことを得て至誠に
随喜す何ぞ徳を謝するに足らん苟くも我が所持の法衣有り即ち託宣の主
さいでん
斎殿を開いて手に紫の袈裟一を捧げて和尚に上る、大悲力の故に幸に納受
を垂れたまえ、是の時禰宜・祝等各各之を随喜す元來此くの如きの奇事見
ず聞かざるかなと、彼の施す所の法衣は山王院に在り文。

がんねん
元慶元年丁酉十一月十三日權大宮司藤原実元女七歳にして託宣して云く
にほんこく
我日本国を持ちて大明神と示現す本軀は是れ釈迦如来なり。

ばか
延喜二年四月二日二歳計りの小児に託宣して云く我無量劫自り以來度し
がた
難き衆生を教化す未度の衆生の為に此の中に在つて大菩薩と示現すと文。

てんじんほけきよう
一、北野の天神法華經に歸して真言等を用いざる事

てんじん
天神の託宣に云く吾円宗の法門に於て未だ心に飽かず仍つて遠忌追善に

あたり すべてからみつだん あらた ほつけ
當て 須く密壇を改めて法華八講を修すべきなり、
ほつけ
所以に曼陀羅供を改めて
法華八講を始め吉祥院の八講と号す是なり、
ほつけ
彼の院は北野天神の御旧跡
なり。

一、賀茂大明神法華を信ずる事
だいみょうじんほつけ

一条院の御時代記に之有り
おんとき これあ

恵心の僧都加茂社に七箇日参籠して出離生死の道は何れの経にか付く
えしん そうずかも
可きと祈誠有れば、示現して云く釈迦の説教は一乘に留り諸仏の成道は
べ あれ じげん いわ しゃか せつきよう いちじよう とどま しよぶつ じようごう
妙法に在り菩薩の六度は蓮華に在り二乗の作仏は此の経に在り文。
みようほう ぼさつ れんげ にじよう さぶつ

伝教大師加茂大明神に参詣して法華経を講ず甲冑をぬいで自ら布施し
でんぎようだいしかも だいみょうじん さんけい ほけきよう こう かちゅう みるか ふせ
給い畢んぬ。
たまい おわ

文句の十に云く得聞是経不老不死とは此れ須らく観解すべし不老は是れ
もんく いわ とくもんぜきよう ふろう ふし こ すべか かんげ こ

楽・不死は是れ常・此の経を聞いて常樂の解を得文。
こ

ねはんぎよう

涅槃經の十三に云く是の諸の大乗方等經典は復無量の功德を成就すと

いへんこ

雖も是の經に比せんと欲す喩と為ることを得ず百倍千倍百千万億倍乃至

さんじゆひゆ

算數譬喩も及ぶこと能わざる所なり、善男子譬えば牛より乳を出し乳より

酪を出し酪より生蘇を出し生蘇より熟蘇を出し熟蘇より醍醐を出し醍醐

を出し酪より生蘇を出し生蘇より熟蘇を出し熟蘇より醍醐を出し醍醐

さいじよう

最上なり、若し服すること有る者は衆病皆除く所有の諸藥悉く其の中に

入るが如し、善男子・仏も亦是くの如し仏より十二部經を出生し十二部

經より修多羅を出し修多羅より方等經を出し方等より般若波羅蜜を出し

はんにははらみつ

般若波羅蜜より大涅槃を出す猶醍醐の如し、醍醐と言ふは仏性を喩う仏性

すなわこ

とは即ち是れ如来なり文。

こんごう

一、金剛峯寺建立修業緣記に云く、吾入定の間・知足天に往いて慈尊御前

さんし

に参仕すること五十六億七千余歳の後慈尊下生の時必ず随從して吾が

きゆうせき

旧跡を見る可し此の峯・等閑にすること勿れと文。

べ

旧跡を見る可し此の峯・等閑にすること勿れと文。

一、弘決くけつに云いく若もし衆生しゅじやう・生死しやうじを出いでず仏乘ぶつじやうを慕したわずと知らば魔ま・是この人おに於なて猶親想なを生おずと文。

五百問論いに云いく大千界塵數じんじゆの仏ぶつを殺ころすは其その罪尚輕つみなおかるし、此の經きやうを毀謗きぼうすれば罪彼つみより多おほし永とこく地獄じじくに入いつて出期あ有あること無なからん、読誦とくじゆの者ものを毀きせする亦復また是かくの如ごとし文。

一、広宣流布こうせんるふす可べき法華ほつけの事

傳でん教大師ぎやうだいしの守護章しゆごに云いく正像しやうざう稍過ややすぎ已おつて末法まつぽう太はだ近きはきに有ほり法華ほつけ一乘いちじやうの機き今いま正まさしく是これ其そのの時ときなり何なにを以もつて知しることを得えん安樂行品あんらくぎやうぽんに云いく末世法滅時まつせぽうめつと文。

秀句しゆくの下したに云いく代たひを語ことばれば則すなわち像さうの終しゆうり末まつの初はつめ地ちを尋たずぬれば唐たうの東とう・羯かつの西せい・人ひとを原たずぬれば則すなわち五濁ごじやくの生鬪諍しやうじやうの時ときなり、經きやうに云いく如來にやらいの現げん在ざいすなら猶なおん嫉しつ多おほし況いはんや滅度めつどの後のちをや、此の言良まことに所以ゆゑん有あるなり文。

道暹和尚どうせんわじょうの輔正記ふしょうきに云く法華ほっけの教興おこれば權教ごんきょう即ち廢はいす日出れば星隱せいおんれ功こうなるを見て拙ちよを知る文。

法華經ほけきょうの安樂行品あんらくぎょうほんに云く一切世間怨多いっさいせけんあだおおくして信がたじ難がたし文。

藥王品やくおうほんに云く我滅度めつどの後ご・後の五百歲このごひゃくさいの中ちゅう・閻浮提えんぶだいに広宣流布こうせんるふして斷絶だんぜつせしむること無なけん文。

勸發品かんぼつほんに云く我今神通力つうりきを以ての故ゆえに是この經しゆこを守護しゆごして如來滅後閻浮提にらいめつごえんぶだいの内に於おいて廣ひろく流布るふせしめて斷絶だんぜつせざらしめんと文。

文句もんくの一いちに云く但當時大利益とうじりやくを獲るのみに非あらず後ご・五百歲遠みようてんく妙道みょうどうに沾うるおわんと文。

一乘要決いちじょうようけつに云く日本一州にほんいちしゅう・円機純一えんきじゆんいつ・朝野遠近おんこん・同いく一乘いちじょうに歸かへりし緇素しそ貴賤きせん悉ことごとく成仏じやうぶつを期すす、安然あんねんの広釈こうしゃくに云く彼の天竺てんじく三國さんこくには外道げどう有あつて仏道ぶつどうを信しんぜず亦また小乘しょうじょう有あつて大乘だいじょうを許ゆるさず、其その大唐國だいとうこくには道法だうぽう有あつて仏法ぶつぽうを

ゆる またしようじょう
許さず亦小乗有つて大乘を許さず、我が日本国には皆大乘を信じて一
人として成仏を願わざること有ること無し、瑜伽論に云く東方に小国有
ただだいじょう
つて唯大乘の機のみ有り豈我が国に非ずや文。

一、不謗人法の事

あんらくきようほん いわ およ きやうてん
安樂行品に云く人及び經典の過を説くことを樂わざれ亦諸余の法師を
きやうまん
輕慢せざれ文。

しかん
止観の十に云く夫れ仏説に兩説あり一に摂・二に折・安樂行の長短
を称ぜざるが如きは是れ摂の義なり、大經の刀杖を執持し乃至首を斬る是れ
こと
折の義なり、与奪途を殊にすと雖も俱に利益せしむ文。

くけつ いわ
弘決の十に云く夫れ仏法兩説等は大經の執持刀杖等は第三に云く
ぜんなんししようほう
善男子正法を護持する者五戒を受けず威儀を修せず乃至下の文は仙預国王
ごこい いぎ しゅう ないし
等の文なり文。

もんく 文句の八に云く大経には偏に折伏を論じ一子地に住す何ぞ曾て摂受無
もんく からん、此の経には偏に摂受を明せども頭七分に破る折伏無きに非ず、
各各一端を挙げて時に適うのみ文。

けんかいろん 顕戒論の中に云く論じて曰く持品の上位は四行を用いず安楽の下位は必
しゅう まかさつ ず四行を修す摩訶薩の言定んで上下に通ずと文。

もんく 文句の八に云く持品は八万の大士忍力成ずる者・此の土に弘経す新得記
ぐきよう の者は他土に弘経す安楽行の一品文。

じよき 疏記の八に云く持品は即ち是れ悪世の方軌・安楽行は即ち是れ始行の
ほうき 方軌なり故に住忍辱地等と云う、安楽行品に云く他人及び經典の過を説
たにん かざれ、他人の好悪長短を説かざれと文。

ねんぶつ 一、念仏の一切衆生の往生せざる事六道輪廻の事
いっさいしゅじよう おうじよう

ぜんどうわじよう 善導和尚の玄義分に云く問うて曰く未審定散の二善出でて何れの文にか
げんぎ いわ いふかしじようさん い いずれ

在る今既に教備つて虚しからず何れの機が受くることを得る、答えて曰く
解するに二義有り一には謗法と無信八難及び非人と此等は受けざるなり
斯れ乃ち朽林頑石生潤の期有る可からず此等の衆生は必ず受化の義無
し、斯れを除いて已外は一心に信樂して求めて往生を願すれば上み一形
を尽し下も十念を収む仏の願力に乗じて皆往かざると云うこと莫し文。

往生礼讃に云く女人と及び根欠と二乗種とは生ぜずと文。

一、八難処の事

弘決の四に云く北州と及び三惡に長寿天と並びに世智弁聰と仏前仏後と
諸根不具を加う、是を八難と為すと文。

善導の遺言に云く我・毎日阿弥陀經六十卷・念仏六万返・懈怠無く三衣
は身の皮の如く瓶鉢は両眼の如く諸の禁戒を持ち一戒をも犯さず未来の
弟子も亦然り、設い念仏すと雖も戒を持たざる者は往生即ち得難し、譬え

ば小舟に大石を載せ大惡風に向つて去るが如し、設い本願の船有りと雖も
破戒の大石重きが故に岸に就くこと万が一なり文。

観念法門經に云く酒肉五辛誓つて發願して手に捉らざれ口に喫らわざれ

若し此の語に違せば即ち身口俱に惡瘡著かんと願せよ文。

法然上人の起請文に云く酒肉五辛を服して念仏を申さば予が門弟に非ず

と文。

觀念法門經に云く戒を持ちて西方弥陀を思念せよと文。

無量壽經に云く三心を具する者は必ず彼の國に生ずと文。

善導の釈に云く若し一心も少ければ即ち生ずることを得ずと明らかに知

んぬ一少は是れ更に不可なることを、茲に因つて極樂に生ぜん欲するの

人は全く三心を具足す可きなり。

月藏經に云く我が末法の時の中の億億の衆生行を起し行を修すとも

未だ一人も得る者有らず、当今は末法なり現に是れ五濁惡世なり唯淨土の
一門のみ有つて通入す可きの路なり文。

遺教經に云く淨戒を持つ者は販賣貿易し田宅を安置し人民奴婢畜生

を畜養することを得ざれ一切の種植及び諸の財宝・皆當に遠離すること

火坑を避るが如くすべし草木を斬伐し墾土掘地することを得ざれ文。

善導和尚の所釈の觀念法門經の酒肉五辛を禁ずる事の依經をいわば、

無量壽經一に依り二卷十六觀經二に依り一卷・四紙の阿彌陀經三に依り一

卷般舟三昧四に依り十往生經五に依り一卷淨土三昧經六に依る一卷

雙觀經の下に云く無智の人の中にして此の經を説かざれ文。

一、觀經と法華經との説時各別の事

善導和尚の疏の四に云く仏・彼の經を説きたまいし時・処別時別・教別

對機別・利益別なり又彼の經を説きたもう時は即ち觀經・弥陀經等を説き

給う時に非ず文。たまあら

阿弥陀経に云く況や三惡道無し文、無三惡と説くと雖も修羅・人天之れあみだ いわんやさんあくどう さんあく いえど しゅら にんてんこ有り。

四十八願の第一に云くだいいち いわ無し設し我れ仏を得んに国に地獄・餓鬼・畜生有しょうかくらば正覺を取らじ。

第二の願に云くいわ三惡道に更えず極楽に於て又死す可しと云う設し我れ仏を得るも十方の無量不可思議しょうさんあくどう しょうかくの諸三惡道には正覺を取らじ文。

第三十五の願に云くいわ聞名転女人往生せざる事設し我れ仏を得んに十方の無量不可思議しょうぶつ せかい そ にょにん みょうこうの諸仏の世界に其れ女人有て我が名号を聞いて歡喜信樂して菩提心を發しえんお じゅうじゅう また な しょうかくて女身を厭惡せん寿 終の後復女像と為らば正覺を取らじ文。

一、黒衣並びに平念珠地獄に墮つ可き事こくいなら ねんじゅじこく お べ法鼓経に云く黒衣の謗法なる必ず地獄に墮す文。ほっきよう いわ こくい ほうほう じこく だ

勢至經に云く平形の念珠を以ゆる者は此れは是れ外道の弟子なり我が弟子に非ず仏子我が遺弟必ず円形の念珠を用ゆ可し次第を超越する者は妄語の罪に因つて必ず地獄に墮せん文。

一、天台の念仏の事

一 大意

一 常坐三昧

もんじゅもんじゅ
文殊説経文殊問經に依る

二 釈名

一 發大心

二 本尊は阿彌陀
常行三昧

はんじゅさんまい
般舟三昧經に依る

三 鉢相

二 修大行

ししゅざんまい
四種三昧

三

本尊は別有
半行半坐三昧一方等經法華經に依る

しかん

止観十章者 四 摂法 五略者 三 感大果

四 本尊は観音
非行・非坐三昧

五 偏円へんえん

四 裂大綱

右

四種三昧ししゅざんまいの次ついででは先段に之これを注す

六 方便ほうべん

五 歸大処

七 正観

八 果報かほう

九 起教ききょう

十 指歸

止観しかんの七に云く若し四種三昧修習ししゅざんまいしゅうしゅうの方便ほうべんは通じて上に説くが如し、唯ただ法華懺法ほっけせんぼうのみ別して六時五悔げに約して重ねて方便ほうべんを作なす今五悔げに就いて其その位相を明す文。

弘決くけつの七に云く四種三昧ししゅざんまいは通じて二十五法もちを用いて通の方便ほうべんと為す、若し法華ほっけを行ずるには別して五悔げを加う余行よぎょうに通ぜず文。

第七の正修止観せいしゅうしかんとは止の五いに云く前の六重は修多羅しゅたらに依つて以て妙解みょうげを開き今は妙解みょうげに依つて以て正行しょうぎやうを立つ文。

十疑うたがいの第四に云く釈迦大師一代しゃかだいしいちだいの説法処処せっぽうしよしよの聖教しょうきやうに唯衆生心ただしゅじやうを専もつぱらにして偏ひとえに阿弥陀仏あみたぶつを念じて西方極樂世界さいほうごくらくせかいに生ぜんことを求めよと勧めたまえり文。

七疑うたがいに云く又聞く西国の伝に云く三りの菩薩ぼさつ有り一むちやくを無著むちやくと名け二を世親せじんと名け三を獅子覺ししかくと名く文。

八疑うたがいに云く雜集論いわに云く若し安樂国土あんらくこくどに生ぜんと願わば即ち往生すなわ おうじやうを得る等文。

一、天台御臨終てんだい りんじゆうの事

止観しかんの一いに云く安禪あんぜんとして化す位五品ごほんに居す文。

弘決ぐけつの一いに云く安禪あんぜんとして化す位五品ごほんに居す等とは此れ臨終りんじゆうの行位ぎやうゐを

出すなり、^{いで}禪定^{ぜんじやう}を出^いでずして端坐^{たんざ}して滅^{めつ}を取る故^{ゆゑ}に安禪^{あんぜん}として化^{くわ}すと云^いう

文^{ぶん}、又云^{いは}く法華^{ほっけ}と觀無量壽^{むりやうじゆ}の二部^{ふたふ}の經題^{きやうだい}を唱^{とな}えしむ文^{ぶん}、又云^{いは}く香湯^{かうとう}を索^{もと}め

て口^{くち}を漱^{すす}ぎ竟^{おわ}つて十如^{じしよ}・四不生^{ふしやう}・十法界^{ほっかい}・四教^{しきやう}・三觀^{さんかん}・四悉^{しさい}・四諦^{しだい}・十二

縁^{えん}を説^{せつ}くに一一^{いっさい}の法門^{ほうもん}・一切^{いっさい}の法^ほを撰^{せん}ず、吾^{われ}今^{いま}最後^{さいご}に觀^{くわん}を策^{はけ}まし玄^{げん}を談^{だん}ず

最後^{さいご}善寂^{ぜんじやく}なり○跏趺^{かふ}して三宝^{さんぼう}の名^なを唱^{とな}えて三昧^{さんまい}に入る^いるが如^{ごと}し即^{すなわ}ち其^その年^{ねん}十

一^{ひつじ}月^{げつ}二十四^{にじふ}日^{にち}未^みの時^{とき}・端坐^{たんざ}して滅^{めつ}に入り^いりたもう文^{ぶん}。

又云^{いは}く大師^{だいし}生存^{じふん}に常^{とそつ}に兜率^{とすつ}に生^うぜん事を願^{りんじやう}う臨終^{りんじゆう}に乃^{すなわ}ち觀音^{くわんおん}来迎^{らいいよう}すと云^い

う、当^{まさ}に知^しるべし物^{もの}に軌^きとり機^きに随^{したが}い縁^{えん}に順^{したが}じて化^{くわ}を設^{もう}く一^{いち}准^{じゆん}なる可^べから

ざることを文^{ぶん}、又云^{いは}く汝^{なんじ}善根^{ぜんこん}を種^ううるに嬾^{ものう}くして他^たの功徳^{くどく}を問^{もん}う盲^{めくら}の乳^{にち}

を問^{もん}い蹶^{つまず}きたる者^{もの}の路^じを訪^{たづ}うが如^{ごと}し実^{じつ}を告^こげて何^{なに}の益^{えき}かあらん文^{ぶん}。

選^{せん}集^{ちやくしゆ}の上に云^{いは}く願^{さいほう}くは西方^{ぎやうほう}の行者^{ぎやうじや}各^そ其^{いぎやう}の意樂^{いたが}に随^{したが}い・或^{ある}は法華^{ほっけ}を

読^{どく}誦^{じゆ}して以^おうじようて往生^{おうじよう}の業^なと為^なし、或^{ある}は華嚴^{けこん}を讀誦^{どくじゆ}し以^おうじようて往生^{おうじよう}の業^なと為^なし

ある しゃなきようしゅ
・或は遮那教主及び諸尊の法等を受持し読誦して往生の業と為し・或
はんiny ほうとう およ ねはんぎよう
は般若・方等及び涅槃經等を解説し書写して以て往生の業と為す是れ
すなわ じようとしゅうかんむりようじゆきよう
則ち浄土宗 觀無量壽經の意なり文。

又云く問うて曰く爾前經の中何ぞ法華を撰するや、答えて曰く今言う所
いわ にぜんきよう なん ほつけ せつ
の撰とは権実偏円等の義を論ずるに非ず、読誦大乘の言は普く前後の
ごんじつ へんえん あら どのじゆ だいじよう
だいじようしよきよう
大乘 諸經に通ず文。

觀無量壽經に云く爾の時に王舎大城に一りの太子有す阿闍世と名く、
かんむりようじゆきよう いわ そ だいじよう ひと たいしいま あじやせ なく
ちようだつあくゆう
調達悪友の教に随順して父の王の頻婆沙羅を収執して幽閉して七重の
ずいじゆん さら しゅうしゆう
室内に置く文。

法華經の序品に云く韋提希の子阿闍世王・若干百千の眷属と俱なり文。
ほけきよう じよぼん いわ いたいけ あじやせ そこばく けんそく とも
えしん おうじようようしゆう
恵心の往生要集の上に云く夫れ往生極樂の教行は濁世末代の目足な
どうそくきせん
り道俗貴賤誰か帰せざらん、但顯密の教法其の文一に非ず事理の業因其の
けんみつ きようほうそ あら じり ぐういんそ

行こ惟れ多し利智りち精進しやうじんの人は未だ難いまと為さず、予が如ごとき頑魯がんろの者・豈敢あにあえててせんや、是かくのゆえの故に念仏ねんぶつの一門いちもんに依よつて聊いささかか經論きやうろんの要文ようぶんを集め之これを披ひらき之これを修しゅうするに覺さとり易やすく行やすじ易やすし文。

惠心えしん往生要集おうじやうようけつを破はし二十三年いご已後いちじやうようけつに一乘要決いちじやうようけつを作る、一乘要決いちじやうようけつの上に云いわく諸乘しよじやうの權實こんじつは古來こらいの諍あらそいなり俱ともに經論きやうろんに拠たがつて互たがいに是非ぜひを執しゅうす、余寬弘かんこう丙午ひのえうまの歲冬十月えいど病中いまいに歎なげじて曰いく仏法ぶつぽうに遇いうと雖も未だ仏意ぶつゐを了おせず若もし終ついに手を空むなしうせば後悔こうかい何ぞ追おはん、爰こゝに經論きやうろんの文義賢哲もんぎけんてつの章疏しやうじよ・或あるは人たをして尋たずねしめ・或あるは自ら思し忖すくす、全じしゆく自宗他宗じしゆたししゅうの偏党へんとうを捨もてて専もつらごんちじつち權智実智しんおうの深奥しんおうを探いるに遂いちじやうに一乘しんじつは真実ほんじつの理ほうべん・五乘ごしやうは方便ほうべんの說しなることを得する者すなり、既すでに今生こんじやうの蒙もうを開なんく何なんぞ夕死ゆうしの恨うらみを遺もさん文。

一、念仏ねんぶつは末代まつだいに流布るふす可べき事

雙觀經そうかんきやうの下いに云いく當來とうらいの世きやうどうめつじんに經道滅尽じやうだうめつじんせんに我慈悲じひを以あて哀愍あいみして特

に此の經を留めて止住すること百歳ならん、其れ衆生有つて斯の經に値う
者は意の所願に随つて皆得度す可し文。

往生礼讃に云く万年に三宝滅して此の經住すること百年、爾の時に聞い
て一念もせば皆當に往生を得べし文。

慈恩大師の西方要決に云く末法万年に余經悉く滅して弥陀の一經のみと
文。

方便品に云く深く虚妄の法に著して堅く受けて捨つ可からず是くの如き
人度し難しと文。

堅惠菩薩の宝性論に云く過去謗法の障り不了義に執著すと文。
方便品に云く若し余仏に遇わば此の法中に於て便ち決了することを得ん

と文。

玄の七に云く南岳師の云く初依を余仏と名く無明未だ破せず之を名けて

余と為す、能く如来秘密の蔵を知つて深く円理を覺す之を名けて仏と為す文。

涅槃經疏十一に云く人正法を得るが故に聖人と云うと文。

そうほうけつぎきょう　いわ　ひとしやうほう
像法決疑經に云く常施菩薩・初成道より乃至涅槃其の中間に於て如来
いっく　の一句の法を説くを見ず、然るに諸の衆生は出沒・説法度人有りと見
ると文。

二十五三昧・二十五有の略頌に曰く四州・四惡趣・六欲並びに梵世・四

禪・四無色・無想・五那含文。

一、漢土・南北の十師・天台大師に歸伏する事

国清百録の第四に云く千年と復五百と復実に今日に在り南岳の叡聖天台

の明哲昔は三業を住持し今は二尊に紹繼す豈止だ甘露を振旦に灑ぐのみな

らん亦當に法鼓を天竺に振うべし、生知妙悟なり魏晉より以来典籍風謡実

に連類無し云云、乃至禪衆一百余僧と共に智者大師を請し奉る。
顓川の人なり、

後則ち南荊州華容県に遷居す。

一、伝 教 大 師 の 一 期 略 記 に 云 く

桓武天皇の御宇、延暦廿一年壬午正月十九日伝教大師最澄高尾寺に於て、六宗と諍い責め破り畢ぬ。仍つて勅宣を下され帰伏の状を召さる。六宗の碩学共に帰伏の状を奉りて云く漢明の年

・教・震旦に被り礪島の代に訓本朝に及ぼす、聖徳の皇子は靈山の聖衆

にして衡岳の後身なり経を西隣に請い道を東域に弘む、智者・禪師は亦共

に靈山に侍し迹を台岳に降し同く法華三昧を悟り以て諸仏の妙旨を演ぶる

者なり、竊に天台の玄疏を見れば釈迦一代の教を惣括して悉く其の趣を顕わ

し処として通ぜざること無し独り諸宗に逾え殊に一道を示す、其の中の

所説の甚深の妙理・七箇の大寺・六宗の学匠昔未だ聞かざる所曾て未だ

見ざる所三論・法相の久年の諍い渙焉として氷の如く釈け昭然として既に

明かなり雲霧を披いて三光を見るが猶し、聖徳の弘化より以降今に二百余

年の間・講ずる所の經論其の数惟れ多し彼此理を争つて其の疑未だ解けず、此の最妙の円宗猶未だ闡揚せず、蓋し以れば此の間の群生未だ円味に
應ぜざるか、伏して惟れば聖朝久しく如来の付嘱を受け深く純円の機を結
ぶ一妙の義理始めて乃ち興顯す、六宗の学衆初めて至極を悟る、謂つべし
此の界の含靈而今而後悉く妙円の船に載つて早く彼岸に済ることを得
と、如来の成道四十余年の後乃ち法華を説いて悉く三乗の侶をして共に
一乗の車に駕せしむるが猶し、善議等慶躍の至りに堪えず敢て表を奉つて
陳謝以て聞す云云。

秀句の下に云く当に知るべし已説の四時の經今説の無量義經・当説の
涅槃經は易信易解なることを随他意の故に、此の法華經は最も為れ難信難解
なり随自意の故に、随自意の説は随他意に勝る、但し無量義を随他意と云
うは未合の一辺を指す余部の随他意に同じからざるなり文。

もんく 文句の八に云く已とは大品以上の漸頓の諸説なり今とは同一の座席謂く
むりようぎきよう 無量義經なり当とは謂く涅槃なり、大品等の漸頓は皆方便を帶すれば信を
取ること易しと為す今無量義は一より無量を生ずれども無量未だ一に還ら
ず是亦信じ易し、今の法華は法を論ずれば一切の差別融通して一法に歸す
人を論ずれば則ち師弟の本・迹俱に皆久遠なり、二門悉く昔と反すれば信
じ難く解し難し、鋒に当る難事をば法華已に説く涅槃は後に在れば則ち信
ず可きこと易し、秘要の蔵とは隠して説かざるを秘と為し一切を惣括する
を要と為す真如実相の包蘊せるを蔵と為す、
ふか 不可分布とは法妙にして信じ難し深智には授く可し無智は罪を益す故に
みだ 妄りに説く可らず、昔より已来未だ曾て顕説せずとは三蔵の中に於ては二乗
さぶつ の作仏を説かず、亦師弟の本・迹を明かさず、方等・般若には実相の蔵を
いえど 説くと雖も亦未だ五乗の作仏を説かず、亦未だ発迹顕本せず頓漸の諸經

皆未だ融會せず故に名けて秘と為す、此の經には具に昔秘する所の法を説く即ち是れ秘密藏を開するに亦即ち是れ秘密藏なり、此くの如きの秘藏は未だ會て顯説せず、如来在世猶多怨嫉といわば四十余年には即ち説くことを得ず今説かんと欲すと雖も而も五千尋いで即ち座を退く仏世すら尚爾り、何に況や未來をや理化し難きに在り。

楞伽經に云く我得道の夜より涅槃の夜に至るまで一字をも説かず文。

止觀の五に云く是の故に二夜一字を説かずと文、又云く仏二法に因つて此くの如きの説を作したもう緣自法と及び本住の法を謂う、自法とは彼の如来の得る所我も亦之を得文、又云く文字を離るるとは仮名を離るるなり文。

法華に云く但仮の名字を以て衆生を引導したもう文。

玄義の五に云く惠能く惑を破し理を顯す理は惑を破すこと能わず、理若し

惑を破せば一切衆生・悉く理性を具す何が故ぞ破せざる、若し此の恵を得れば則ち能く惑を破す故に智を用つて乗体と為す文。

弘の五に云く何の密語に依つて此くの如き説を作したもう、仏の言く二の密語に依る・謂く自証法・及び本住法なり、然るに一代の施化・豈權智被物の教無からんや、但此の二に約して未だ曾て説有らざる故に不説と云うのみ文。籤の一に云く三に廢迹とは後の如く前の如し文を引く中・初に諸仏の下同を引く・為度の下正しく廢迹を明す、廢し已れば迹無し故に皆実と云う、実は只是れ本權は只是れ迹若し同異を弁ぜば広く第七の卷の如し文、籤の一に云く捨は只だ是れ廢・故に知んぬ開と廢は名異跡同なることを文。

止の六に云く和光同塵は結縁の始め八相成道は以て其の終りを論ずと文。

弘くわの六ろくに云いく和光わくわうの下・身を現げんずるを釈しゃくするなり四住しぢうの塵ちりに同じ処しよ処しよに縁えんを結むすび浄土じやうどの因いんを作なし利物りもつの始なめと為なす、衆生しゆじやうき機熟きじくして八相はしやう成道じやうどうす身みを見み・法ほふを聞きき終ついに実益いたに至いたる文ぶん。

てんしやうだいじん たくせん いわ
天照大神あまてらすかみの託宣たくせんに云いく

むかしこんしやう ぶつどう ぐがんえんまんへんしやうそん えんぶ あ まも
往昔むかし勤修こんしやうして仏道ぶつどうを成なじ求願ぐがん円満えんまん遍照へんしやう尊そん・閻浮えんぶに在あつては王位わういを護まもり

しゆじやう

衆生しゆじやうを度たせんが為ために天照神てんしやう。

さんろんしやうごしよ
◆八九 三論宗御書 691P

さんろんしやう

三論宗さんろんしやうの始はめて日本にほんに渡わたりしは三十四代すいじ推古みよしろの御宇みづのえいぬ治しす十年みづのえいぬ壬戌みづのえいぬの十

くだら

月く・百濟ひやくさいの僧そう・觀勒かんろく之これを渡わたす、日本にほん記きの太子たいしの伝でんを見るみるに異義いぎ無なし、但ただし

三十七代さんじちちだいとの事は流布るふの始はめなり、天台宗てんだいしやう・律宗りつしやうの渡わたれる事は天平勝宝てんぴやうしやうほう

きのえねおま

六年くわんね甲午けつん二月十六日ふたつきじゅうろくにち丁未ていみ・乃至ないし四月しがつに京きやうに入り東大寺とうだいじに入る天台止觀てんだいしかん

等云云しやう、諸伝しよでん之これに同じ、人王にんわう第四十六代だいじゅうじゅうろくにち孝謙天皇かうけんてんのうの御宇ぎやうなり聖武しやうむは義あやま謬みうり

なり書き直す可きか、戒壇は以て前に同じ、大日經の日本に渡れる事は

弘法の遺告に云く「件の經王は大日本国高市郡久米道場の東塔の下に在り」

云云、此れ又元政天皇の御宇なり、法華經の渡り始めし事は人王第三十四

代推古の四年なり、太子・惠慈法師に謂つて曰く「法華經の中に此の句落

字」と云云、太子使を漢土に遣わし已前の法華經・此の国に有るか、惟れ

知んぬ欽明の御宇に渡る所の經の中に法華經有るなり、但し自ら御不審

有る大事は所謂日本記に云く「欽明天皇十三年壬申冬十月十三日辛酉

百済国聖明王始めて金銅釈迦像一軀を献ず」等云云、善光寺流記に云く

「阿弥陀並びに觀音・勢至・欽明天皇の御宇治天下十三年壬申十月十三

日辛酉・百済国の明王・件の仏・菩薩・頂戴」と云云、相違欲「已下欠」

◆八九 十宗判名の事 692P

拙度宗

華嚴宗

迷經宗

倶舎宗 くしやしゅう

半字宗

真言宗 しんこんしゅう

☆范宗

じょうじつ

成実宗

下劣宗 げれつ
驢牛和合乳宗 ろごわこう

法華宗 ほっけしゅう

仏立宗 ぶつりゅうしゅう

りっしゅう

律宗

驢乳宗 ろにゅう

禪宗 ぜんしゅう

趙高宗 ちやうこう

殺二世王 よおう

法相宗 ほうそうしゅう

逆路宗 ぎやくろ

浄土宗 じやうどしゅう

破鏡宗 はけい

獸

ほうそうしゅう

ぎやくろ

じやうどしゅう

はけい

さんろんしゅう

三論宗

そむ

背上向下宗

ふこう

不孝宗

◆九〇

五行御書 ごしよ

ごしよ

捨本附末宗

もうご

不妄語戒

脾臟 ひ

ふさっしやうかい

不殺生戒

肝臟

不飲酒戒 おんじゆ

もうご

不妄語戒

脾臟

がんこん

眼根

がんこん

舌根

ぜっこん

不飲酒戒

ぜっこん

不妄語戒

脾臟

舌根

身根

不妄語戒

脾臟

金

木

白色

西方
さいほう

辛味

鼻根

不偷
ちゅうとう
盜戒

歳星

魂

青雲

春

青色

東方
とうほう

酢味

水

火

黒色

北方

☆味

耳根

不邪淫戒
ふじやいんかい

☆惑星

神

赤雲

夏

赤色

南方
なんぼう

苦味

土

鎮星

意

黄雲

土用

黄色

中央

甘味

秋

冬

白雲

黒雲

魄

志

大白星

辰星

◆九一 浄土九品の事

695P

なんぎよういぎよう

しょうどうじようど

そうぎようしょうぎよう

しょうぎようねんぶつ

難行易行・

聖道浄土・

雑行 正行・

諸行念仏、

ほうねんほう

りようけん

しょうぎよう

ねんぶつ

そうたい

法然房の料簡は諸行と念仏と相對なり、

二義、一には勝劣・

しょうれつ

一には難易

なんい

廃立

はいりゅう

一に諸行を廢して念仏に歸せんが為に而も諸行を

しょうぎよう

ねんぶつ

ため

しか

しょうぎよう

説くなり

助正

二に念仏を助成せんが為に而も諸行を説くなり

ねんぶつ

ため

しか

しょうぎよう

傍正

三に念ねん仏ぶつ諸しよ行ぎやうの二門に約して各三品を立てんが

為ために而しかも諸しよ行ぎやうを説くなり

若ぜん善導だうに依らば初を以て正と為なすのみ

読誦どくじゆだいじやう大乘

至誠心えこうほつがん深心しん廻向くわう發願心はつがんしんなり

上品じやうぽん上生

三種さんしゆの心しんを發はつして即すなわち往生おうじやうす

復また三種さんしゆの衆生しゆじやう有あり當まさに往生おうじやうを得うべし

六念

天 施 戒 僧 法 仏

一には慈心じしんにして殺ころさず諸もろの戒行かいぎやうを具ぐす

二には大乗だいじやう方等ほうとう經典きやうてんを讀誦どくじゆす

三には六念りくねんを修行しゆぎやうす
法然ほうねんの料簡りやうけんに云く

上品じやうぽん

華嚴經けこんきやう・方等經ほうとう・般若經はんになきやう・法華經ほけきやう・涅槃經ねはんきやう・大日經だいにちきやう・深密經じんみつ

・楞嚴經等の一切の大乗經は読誦

だいじょう だいじょうきよう
だいじょう いっく しょうじん
大乗の一句に摂尽す

だいいち
解第一義

じょうぼん
上品中生

ぎしゅ げ だいいち おい ほうねん りょうけん いわ けこん ゆいしん
善く義趣を解し第一義に於て一法然の料簡に云く一華嚴の唯心

・法界法相の唯識・三論の八

しんごん ぐそうじょうしんてんだい いちねんさんぜん みな だいいち いっく しょうじん
不・真言の五相成身天台の一念三千・皆解第一義の一句に摂尽す

す

じょうぼん
上品下生

ほうねん りょうけん いんが じゅつかい いんが しょうじん
法然の料簡一深信の因果に十界の因果を摂尽す

ちゅうぼん
中品上生

ごかい ないししょ しょうじん
五戒・八戒乃至諸戒を摂尽す

あこんきょう ぐしゃ じょうじつ りっしゅう
四阿含經・俱舍・成実・律宗は此の二品に摂尽す

中品 ちゅうほん

中品中生 ちゅうほん

八齋戒

儒教 じゆきやう 道教 たうきやう は此の一品に摂尽 しやうじん

中品下生 ちゅうほん

孝養父母の行なり仁慈

孝養父母の行なり仁慈

外典三千余卷 げてんさんぜん

下品上生 げほん

老子經 らうし

孝經 こうきやう

觀經 かんきやう

此くの如きの愚人多く衆惡を造るも十念せば往生す か こと ぐにん しゆうあく おうじやう

下品中生 げほん

・或は衆生有て五戒・八戒及び具足戒を毀犯す、此く ある しゆじやう ごかい およ ぐそく か

の如きの愚人は僧祇物を偷み現前僧 こと ぐにん ぬ すげんぜん

下品 げほん

物を盗む不淨に法を説いて懺愧有ること無し ふじやう あ

下品下生は五逆重罪の者なり而かも能く逆罪を除滅するは余行 げふんげしやう こぎやくじゆうざい し よ つみ よきやう

に堪えざる所なり、唯念仏の力

のみ能く重罪を滅するに堪る有り、故に極悪最下の人の為に

而かも極善最上の説を説く等云云

下品下生 五逆罪の人・十念往生

撰択に云く「念仏三昧は重罪すら消滅す何に況や軽罪

をや余行は然らず・或は輕を滅し

て重を滅せざる有り、或は一を消して二を消せざる

有り」等云云

捨閉閣拋

法華經等の一切經

釈迦仏等の一切諸仏

天台宗等の八宗・九宗の世天等

浄土三部經・阿弥陀仏よりの外なり

安樂集に

未だ一人も得る者有らず唯浄土の一門のみ有て通入の路なるべし

往生礼讃に云く

千中無一十即十生・百即百生

長樂寺南無

一弟子

隆寛

多念

故嵯峨法皇の御師

一弟子

善恵

小坂

道観

一弟子

聖光

故打宮入道修観

建仁年中
後鳥羽院御宇

法蓮

極樂寺殿の

源空御師

法然房

法本

念阿弥陀仏
諸行往生

顕真座主 けんしんざす

八人の碩徳 せきとく

覚明 かくみょう

一条道阿弥 いちじょうどうあみ

嵯峨 さが

聖心 じょうしん

成覚 じやうかく

一念 いちねん

法本

頼顯僧上の御師 らいけんそうじょうのおんし

蘭城寺の長吏 らんじやうじのちやうり

公胤大式僧上 こういんたいしきそうじょう

浄土決疑集三巻を造て法然房の撰択集を じやうとくたぎしゆうたがいほうねんぼう

破す、隨機の諸行皆往生を為すべし等云云 はすきしよぎやうみなおうじやうななほうちほうほういんてし

故宝地房法印証真の弟子 こうちほうほういん

上野清井者

定真豎者 ていしんけんじや

彈撰撰二巻を造る隨機諸行往生 きしよぎやうおうじやう

下輩下三品 げはい

証真の嫡弟 竹中法師 ほうちゅう

値惡人 あくにん

宗源法印 そうげんほういん

隆真法印 ほういん

証義者

やまと
大和の莊

俊鏤法印
ほういん

梶生

ぜんにん
善人

三塔の総学頭

しょうじょうほんぷ
小乗凡夫

さんぜん
三千人の大衆
たいしゅう

中輩

たんだい
五人探題
しょうかく
聖覚

中三品

貞雲

値小

竜証

けこんしゅう
華嚴宗

とがのをの

値大

ぼう
明恵房

さいじやりん
摧邪輪三卷を造る隨機諸行往生
きしよぎょうおうじょう

だいじょうほんぷ
大乘凡夫

じんみつ
深密經に依る
よ

上輩

上輩ほけきょう
て法華經を下す

法相宗ほうそうしゅう

三時教をもて一代を摂いちだい しゅうじん尽し返じんみつて深密經を以

三論宗さんろんしゅう

二藏三時をもて一代を摂いちだい しゅうじん尽し返みょうちて妙智經を

以て法華經を下すほけきょう

上三

華嚴宗けこんしゅう

五教をもて一代を摂いちだい しゅうじん尽し返けこんきょうて華嚴經を以て

法華を下すほつけ

だいじょう

大乘五宗

真言宗しんこんしゅう

五藏をもて一代を摂いちだい しゅうじん尽し返だいにかきょうて大日經等

を以て法華經を下すほけきょう

天台宗てんだいしゅう

四教五時をもて一代を摂いちだい しゅうじん尽す

県の額を州に打ち牛跡を大海に入るあと たいかい

伝教大師・此の義を許すや不でんぎょうだいし ゆる いなや

夫れ三時の教は勝義の領解りようげ一部の間は義生の機宜き なら猶三部を闕かく

何ぞ一代なん いちだいを摂せつせん、華嚴けごん

云く・三論さんろん云く真言等しんごん云云

◆九二 御義口伝おんぎくでん目録 701P

南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょう

七〇八

卷上

序品じょぼん七箇だいじの大事 七〇九

第一だいいち 如是我聞にょぜがもんの事

七〇九

第二 阿若・陳如あにやちんによの事

七〇〇

第三 阿闍世王あじゃせの事

七〇〇

第四 仏所護念ぶつしよごねんの事

七〇一

第五 下至阿鼻地獄げしあびじこくの事

七〇二

第六 導師何故どうしの事

七〇二

第七 天鼓自然鳴てんこじねんの事

七〇三

方便品ほうべん八箇だいじの大事 七二三

第一 方便品の事

七二三

第二 諸仏智慧甚深無量其智慧門の事

七二四

第三 唯以一大事因縁の事

七二六

第四 五濁の事

七二七

第五 比丘・比丘尼有懷増上慢優婆塞我慢優婆夷不信の事

七二八

第六 如我等無異如我昔所願の事

七二〇

第七 於諸菩薩中正直捨方便の事

七二〇

第八 当來世惡人聞仏説一乘迷惑不信受破法墮惡道の事

七二一

譬喩品九箇の大事

七二二

第一 譬喩品の事

七二二

第二 即起合掌の事

七二二

第三 身意泰然快得安穩の事

七二二

第四 得仏法分の事

七二三

第五 而自廻轉の事

七二三

第六	一時俱作の事	七二三
第七	以譬喻得解の事	七二四
第八	唯一門の事	七二四
第九	今此三界等の事	七二四
信解品六箇の大事		七二五
第一	信解品の事	七二五
第二	捨父逃逝の事	七二六
第三	加復窮困の事	七二六
第四	心懷悔恨の事	七二六
第五	無上宝聚不求自得の事	七二七
第六	世尊大恩の事	七二七
藥草喻品五箇の大事		七二八
第一	藥草喻品の事	七二八
第二	此の品述成段の事	七二九
第三	雖一地所生一雨所潤等の事	七二九
第四	破有法王出現世間の事	七二九

第五 我観一切普皆平等無有彼此愛憎之心我無貪著亦無限礙の事

七三〇

授記品四箇の大事

七三〇

第一 授記の事

七三〇

第二 迦葉光明の事

七三一

第三 捨是身己の事

七三一

第四 宿世因縁吾今當説の事

七三一

化城喩品七箇の大事

七三二

第一 化城の事

七三二

第二 大通智勝仏の事

七三二

第三 諸母涕泣の事

七三三

第四 其祖轉輪聖王の事

七三三

第五 十六王子の事

七三三

第六 即滅化城の事

七三四

第七 皆共至宝処の事

七三四

五百弟子品三箇の大事 七三四

第一 だいいち 衣裏えりの事 七三四

第二 醉酒而臥しんしんかんきの事 七三四

第三 身心遍だいいじ歡喜かんきの事 七三五

人記にんき品ほん二箇にの大事 七三五

第一 だいいち 学がく無学むがくの事 七三五

第二 山海慧自在通王さんかいえじざいつうおうぶつ仏ぶつの事 七三五

法師ほうし品ほん十六箇じゅうろくの大事 七三六

第一 だいいち 法師ほうしの事 七三六

第二 成就じょうじゆ大願だいがん愍しん衆生じゆうじやう故生こせい於あ惡世あくせ広演くわえん此經しきやうの事

七三六

第三 如來にょらい所遣しよけん行ぎやう如來にょらい事の事 七三六

第四 与にょらい如來にょらい共宿きしやくの事 七三六

第五 是法華經藏深固幽遠無人能到ぜほけきやうぞうじんこゆうおんむにんのうとうの事

七三七

第六 聞法信受もんぽうしんじゆずいじゆん隨順不逆じゆんの事 七三七

第七 衣座室えざしつの事 七三七

第八 欲捨諸懈怠 应当聽此經の事 七三七

第九 不聞法華經去あるひと仏智あつく甚遠とつじょうの事 七三八

第十 若説此經時有人惡口罵加刀杖瓦石念仏故応忍の事

七三〇八

第十一
及清信士女供養於法師の事
七三八

第十二
若人欲加惡刀杖及瓦石則遣變化人為之作衛護の事

七三八

第十三 若親近法師速得菩薩道の事七三八

第十四 随順ずいじゆん是師学しがくの事 七三八

第十五 師と学との事 （ごうしや） 七三九

第十六 得見恒沙仏の事
七三九

宝塔品甘箇の大事 七三九

第一 宝塔の事 七三九

第二 有七宝の事 しつぽう しめんみな 七三九

第三 四面皆出の事 しめんみな
おんじょう 七四〇

第四 出大音声の事 七四〇

第五 見大宝塔住ほうとうじゅう在空中くうちゅうの事 七四〇

第六 国名宝浄彼中有こくめいほうじやう有あ仏号ぶつごう日多宝たほうの事 七四〇

第七 於十方じゅうぽう国土有こくど説と・法華經ほけきやう処我之塔ところ廟為聴是經故ゆげん涌現其前ゆげん

為作証 明讚言善哉の事

七四〇

第八 南西北方四惟上下じやうげの事 七四一

第九 各齋宝華滿掬ほうげの事 七四一

第十 如却関鑰開大城門たいじやうの事 七四二

第十一 撰諸大衆皆在虚空こくうの事 七四二

第十二 譬如大風吹小樹枝しやうじの事 七四二

第十三 若有能持則持しきやうなんじ仙身せんしんの事 七四二

第十四 此經難持しきやうなんじの事 七四二

第十五 我則歡喜諸かんぎしよ仏亦然ぶつまたの事 七四二

第十六 讀持此經しきやうなんじの事 七四三

第十七 是真せいしん仙子ぶつしの事 七四三

第十八 是諸しよてん天人・世間之眼せけんの事 七四三

第十九	能須臾 しゅゆ 說 し の事	七四三
第二十	此經難持 しきやうなんじ の事	七四三
提婆達多 だいばだつた 品 だい 八箇 はち の大事 だいじ	七四四	
第一	提婆達多 だいばだつた の事	七四四
第二	若不違我 せんぜつ 當 た 為 を 宣說 せんぜつ の事	七四四
第三	採菓汲水 みょうほう 拾薪 たきぎ 設食 ころな の事	七四四
第四	情存妙法 かいちゆう 故身 み 心 こころ 無懈倦 な の事	七四五
第五	我於海中唯常宣說 せんぜつ の事	七四五
第六	年始八歳の事	七四五
第七	言論未訖 ほうしゆ の事	七四六
第八	有一宝珠 ほうしゆ の事	七四七
勸持品 かんじほん 十三箇 だいじ の大事 だいじ	七四七	
第一	勸持 かんじ の事	七四七
第二	不惜身命 おしんみゆう の事	七四七
第三	心不實故 ふじつ の事	七四八
第四	敬順 ぶつじ 仏意 い の事	七四八

第五 作師し子し吼くの事

七四八

第六 如法しよふ修行ぎやうの事

七四八

第七 有あ諸しよ無む智ち人にんの事

七四八

第八 惡あく世せ中ちゆう比ひ丘きゆうの事

七四九

第九 有ある阿あ練れん若にやの事

七四九

第十 自作きやう此こ經きやう典てんの事

七四九

第十一 為あつ斯き所しよ輕けい言げん汝なん等じ皆みな是し仏ぶつの事

七四九

第十二 惡あつ鬼き入い其そ身みの事

七四九

第十三 但た惜しやく無む上じやう道どうの事

七四九

安樂あんらく行ぎやう品ぽん五ご箇かんの大事だいじ

七五〇

第一 安樂あんらく行ぎやう品ぽんの事

七五〇

第二 一切いっさい法ぽう空くうの事

七五〇

第三 有なん所しよ難なん問もん不ふ以い小しやう乘じやう法ぽう答たふ等とうの事

七五〇

第四 無ふ有う怖ふ畏い加か刀とう杖じやう等とうの事

七五〇

第五 有ある人ひと來き欲よく難なん問もん者しや諸しよ天てん昼しやう夜ぎや等とうの事

七五〇

涌出品ゆじゅっぽん一箇の大事だいじ

七五〇

第一だいいち 唱導之師の事

七五一

卷下

じゅりようぼん

寿量品じゅりようぼん廿七箇の大事だいじ

七五二

第一だいいち 南無妙法蓮華經如来寿量品第十六の事

七五二

第二 如来秘密神通之力の事 七五二

第三 我実成仏已来無量無辺等の事 七五三

第四 如来如実知見三界之相無有生死の事

七五三

第五 若仏久住於世薄徳之人不種善根貧窮下賤貪著五欲入於憶

想妄見網中の事

七五四

第六 飲他毒藥發悶乱宛転于地の事 七五四

第七 或失本心・或不失者の事 七五五

第八 擣・和合与子令服の事 七五五

第九 毒氣深入失本心故の事 七五五

第十 是好良藥今留在此汝可取服勿憂不差的事
ぜこうりょうやくこんるざいしなんじ

七五六

第十一 自我得仏來の事
じがくぶらいの事 七五六

第十二 為度衆生故方便現涅槃の事七五六
じゆうじゆうせつほうの事 七五六

第十三 常住此説法の事
じやうぢうそふの事 七五六

第十四 時・我及衆僧俱出靈鷲山の事七五六
しゆじようの事 七五六

第十五 衆生見劫尽○而衆見焼尽の事
しゆじようけんこくしんの事 七五六

第十六 我亦為世父の事
がいたせの事 七五七

第十七 放逸著五欲墮於惡道中の事七五八
ほういつしよくどうふぎようどうの事 七五八

第十八 行道不行道の事
ぎようどうふぎようどうの事 七五八

第十九 每自作是念の事
さぜんねんの事 七五八

第二十 得入無上道等の事
とくにくうむじようどうの事 七五九

第二十一 自我偈の事
じがけの事 七五九

第二十二 自我偈始終の事
じがけしじゆうの事 七五九

第二十三 久遠の事
くおんの事 七五九

第二十四 此の寿量品の所化の国土と修行との事
じゆりようぼんの所化の国土と修行との事 七五九

七五七

七五九

第廿五

建立御本尊等の事

七六〇

第廿六

壽量品の対告衆の事

七六〇

第廿七

無作三身の事

七六〇

分別功德品

三箇の大事

七六〇

第一

其有衆生聞仏壽命長遠如是乃至能生一念信解所得

七六〇

功德無有量限の事

七六〇

第二

是則能信受如是諸人等頂受此經典の事

七六一

第三

仏子住此地則是仏受用の事

七六一

隨喜品

二箇の大事

七六一

第一

妙法蓮華經隨喜功德の事

七六一

第二

口氣無・穢優鉢華之香常從其口出の事

七六二

法師功德品

四箇の大事

七六二

第一

法師功德の事

七六二

第二

六根清淨の事

七六二

第三 又如淨明鏡の事 七六三

第四 是人持此經安住希有地的事 七六三

常不輕品三十箇の大事 七六三

第一 常不輕の事 七六三

第二 得大勢菩薩の事 七六四

第三 威音王の事 七六四

第四 凡有所見の事 七六四

第五 我深敬汝等不敢輕慢所以者何汝等皆行菩薩道當得作仏

の事 七六四

第六 但行禮拜の事 七六四

第七 乃至遠見の事 七六四

第八 心不淨者の事 七六五

第九 言は無智比丘の事 七六五

第十 聞其所說皆信伏隨從の事 七六五

第十一 於四衆中說法心無所畏の事 七六五

第十二 常不輕菩薩豈異人乎則我身是の事

七六六

もんぼう

第十三

常不值仏不聞法不見僧の事七六六

第十四

畢是罪已復遇常不輕菩薩の事

七六六

にやらいめつこ

第十五

於如来滅後等の事

七六六

第十六

此品の時の不輕菩薩の体の事

七六七

らいはいじゅうしよ

第十七

不輕菩薩の礼拝住処の事

六七

第十八

開示悟入礼拝住処の事

七六七

第十九

每自作是念の文礼拝住処の事

七六七

がほんぎようはつどう

第二十

我本行菩薩道の文礼拝住処の事

七六八

しやうろうひようしらいはいじゅうしよ

第二十一

生老病死礼拝住処の事

七六八

第二十二

法性礼拝住処の事

七六八

第二十三

無明礼拝住処の事

七六八

第卅四 蓮華の二字禮拜住処の事 七六八

第卅五 實報土禮拜住処の事 七六九

第卅六 慈悲の二字禮拜住処の事 七六九

第卅七 禮拜住処分真即の事 七六九

第卅八 究竟即禮拜住処の事 七六九

第卅九 法界禮拜住処の事 七六九

第卅 禮拜住処忍辱地の事 七七〇

神力品八箇の大事 七七〇

第一 妙法蓮華經如来神力の事 七七〇

第二 出広長舌の事 七七〇

第三 十方世界衆宝樹下師子座上の事 七七一

第四 満百千歳の事 七七一

第五 地皆六種震動其中衆生○衆宝樹下の事

第六 娑婆是有名釈迦牟尼仏の事 七七一

第七 斯人行世間能滅衆生闇の事 七七一

第八 畢竟住一乘ひっきよう いちじよう○是人於仏道決定無有疑ぜにんのうぶつどうけつじよう うたがいの事

七七二

囑累品そくるい三箇さんの大事だいじ

七七二

第一 從法座起ほうざの事いっさいしゆじよう

七七二

第二 如來是一切衆生之大施主せしゆの事七七二

第三 如世尊勅せそん當具奉行ふぎようの事七七二

藥王品やくおうぼん六箇りくの大事だいじ

七七三

第一 不如受持たいいち此法華經ほけきよう乃至一四句偈くげの事

七七三

第二 十喻じゅうゆの事いっさい

七七三

第三 離一切苦一切病痛能解一切生死之縛いっさいしやうじの事

七七三

第四 火不能燒水不能漂しやうめつの事七七三

第五 諸余怨敵皆悉摧滅しよよ おんてきがいしつさいめつの事七七四

第六 若人有病得聞是經病即消滅不老不死もろひと じゆん せき せき せき せきの事

七七四

妙音品三箇の大事 みようおん だいじ

七七四

第一 だいいち 妙音菩薩の事 みようおんぼさつ

七七四

第二 肉髻白毫の事 にけいびやくこう

七七四

第三 八万四千七宝鉢の事 はちまん しっぽう

七七五

普門品五箇の大事 ふもんほん だいじ

七七五

第一 だいいち 無尽意菩薩の事 むじんいぼさつ

七七五

第二 觀音妙の事 かんのん ねんねん

七七六

第三 念念勿生疑の事 ねんねん うたがい

七七六

第四 二求兩願の事 さんじんりやく

七七六

第五 三十三身利益の事 だいじ

七七七

陀羅尼品六箇の大事 だらにほん だいじ

七七七

第一 だいいち 陀羅尼の事 だらに

七七七

第二 安爾曼爾の事 きしもじん そ

七七七

第三 鬼子母神の事 じゆじぼつ

七七八

第四 受持法華名者福不可量の事 じゆだいによ

七七八

第五 皐諦女の事

七七八

第六 五番神呪の事 七七八

嚴王品三箇の大事 七七九

第一 妙莊嚴王の事 七七九

第二 浮木孔の事 七七九

第三 当品邪見即正の事 七七九

普賢品六箇の大事 七八〇

第一 普賢菩薩の事 七八〇

第二 若法華經行閻浮提の事 七八〇

第三 八万四千天女の事 七八〇

第四 是人命終為千仏授手の事 七八〇

第五 閻浮提内広令流布の事 七八一

第六 此人不久当詣道場の事 七八一

無量義經六箇の大事 七八三

第一 無量義經德行品第一の事 七八三

第二 量の字の事 七八四

第三 義の字の事 七八四

第四処の一字の事

七八四

第五無量義処の事

七八四

第六無量義処の事

七八五

普賢經五箇の大事

七八五

第一普賢經の事

七八五

第二 不断煩惱不離五欲の事

七八五

第三 六念の事

七八五

◆九三 御義口伝 708P

南無妙法蓮華經

おんぎくでん いわ なむ ほんご ここ きみよう
御義口伝に云く南無とは梵語なり此には歸命と云う、人法之れ有り人と

は釈尊に歸命し奉るなり法とは法華經に歸命し奉るなり又歸と云うは

迹門 不變真如の理に歸するなり命とは本門隨緣真如の智に命くなり歸命と

は南無妙法蓮華經是なり、釈に云く隨緣不變・一念寂照と、又歸とは我等

が色法なり命とは我等が心法なり色心不二なるを一極と云うなり、釈に云く
一極に帰せしむ故に仏乗と云うと、又云く南無妙法蓮華經の南無とは梵語
・妙法蓮華經は漢語なり梵漢共時に南無妙法蓮華經と云うなり、又云く
梵語には薩達磨・芬陀梨伽・蘇多覽と云う此には妙法蓮華經と云うなり、
薩は妙なり、達磨は法なり、芬陀梨伽は蓮華なり蘇多覽は經なり、九字は
九尊の仏体なり九界即仏界の表示なり、妙とは法性なり法とは無明なり
無明法性一体なるを妙法と云うなり蓮華とは因果の二法なり是又因果一
体なり經とは一切衆生の言語音声を経と云うなり、釈に云く声仏事を
為す之を名けて經と為すと、或は三世常恒なるを経と云うなり、法界は
妙法なり法界は蓮華なり法界は經なり蓮華とは八葉九尊の仏体なり能く
能く之を思う可し已上。

伝云序品七箇の大事

方便品八箇の大事

譬喻品九箇の大事

信解品六箇の大事 しんげ だいじ

藥草喻品五箇の大事授記品四箇の大事 やくそうゆほん だいじじゆき だいじ

化城喻品七箇の大事 けじょうゆほん だいじ

五百品三箇の大事 ほうつうほん だいじ

人記品二箇の大事 にんきほん だいじ

法師品十六箇の大事 ほうしほん だいじ

宝塔品二十箇の大事 ほうとうほん だいじ

提婆品八箇の大事 だいば だいじ

勸持品十三箇の大事 かんじほん だいじ

安樂行品五箇の大事涌出品一箇の大事 あんらくぎょうほん だいじゆじゆつほん だいじ

壽量品二十七箇の大事分別功德品三箇の大事隨喜品二箇の大事 じゆりょうほん だいじぶんべつくとく だいじずいき だいじ

法師功德品四箇の大事不輕品三十箇の大事神力品八箇の大事 ほうしくとく だいじふぎょう だいじじんりきほん だいじ

囑累品三箇の大事藥王品六箇の大事妙音品三箇の大事 そくるい だいじやくおうほん だいじみょうおん だいじ

普門品五箇の大事陀羅尼品六箇の大事嚴王品三箇の大事 ふもんほん だいじだらにほん だいじ だいじ

普賢品六箇の大事無量義經六箇の大事普賢經五箇の大事 ふげん だいじむりょうぎきょう だいじふげん だいじ

已上二百三十一箇条也此の外に別伝之有り具さに之を記し訖ぬ。
べつでんこれあ つぶ これしる

御義口伝卷上 おんぎくでん

序品七箇の大事 じよほん だいじ

第一如是我聞の事

文句の一に云く如是とは所聞の法体を挙ぐ我聞とは

能持の人なり記の一に云く故に始と末と一經を所聞の体と為す。

御義口伝に云く所聞の同は名字即なり法体とは南無妙法蓮華經なり

能持とは能の字之を思う可し、次に記の一の故始末一經の釈は始とは序品

なり末とは普賢品なり法体とは心と云う事なり法とは諸法なり語法の心

と云う事なり諸法の心とは妙法蓮華經なり、伝教云く法華經を讚むる

と雖も還つて法華の心を死すと、死の字に心を留めて之を案ず可し不信

の人は如是我聞の聞には非ず法華經の行者は如是の体を聞く人と云う

可きなり、爰を以て文句の一に云く「如是とは信順の辞なり信は則ち所聞

の理會し順は則ち師資の道成ず」と、所詮日蓮等の類を以て如是我聞

と云うべきなり云云。

第二阿若☆陳如の事

疏の一に云く・陳如は姓なり此には火器と翻ず

婆羅門種なり其の先火に事こう此れに従て族に命く、火に二義有り照
なり曉なり照は則ち聞生ぜず焼は則ち物生ぜず・此には不生を以て姓と
為す。

御義口伝に云く火とは法性の智火なり、火の二義とは一の照は隨縁真如
の智なり一の焼は不變真如の理なり照焼の二字は本・迹二門なり、さて
火の能作としては照焼の二徳を具うる南無妙法蓮華經なり、今日蓮等
の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは生死の闇を照し晴して涅槃の智火明
了なり生死即涅槃と開覺するを照則闇不生とは云うなり、煩惱の薪を
焼いて菩提の慧火現前するなり煩惱即菩提と開發するを焼別物不生とは
云うなり、爰を以て之を案ずるに陳如は我等・法華經の行者の煩惱即
菩提・生死即涅槃を顯したり云云。

第三阿闍世王の事 文句の一に云く阿闍世王とは未生怨と名く、又云く

だいきよう いわ あじやせ
大經に云く阿闍世世とは未生怨と名く又云く大經に云く阿闍を不生と
なす
名く世とは怨と名く。

おんぎくでん いわ にほんこく いっさいしゅじよう
御義口伝に云く日本国の一切衆生は阿闍世王なり既に諸仏の父を殺し
ほけきよう
法華經の母を害するなり、無量義經に云く諸仏の国王と是の經の夫人と
わこ
和合して共に是の菩薩の子を生む、謗法の人・今は母の胎内に処しながら
ほつけ おんてき あにみしゅうおん あら
法華の怨敵たり豈未生怨に非ずや、其の上・日本国当世は三類の強敵
せしやみようおん
なり世者名怨の四字に心を留めて之を案ず可し。

にちれん たぐ じゅうばい まぬか
日蓮等の類い此の重罪を脱れたり謗法の人人・法華經を信じ釈尊に
なん いぜん しふ しも じゅうばい
歸し奉らば何ぞ已前の殺父殺母の重罪滅せざらんや、但し父母なりとも
ほけきようふしん さつがい べ そのゆえ ごんきよう
法華經不信の者ならば殺害す可きか、其の故は權教の愛を成す母・方便
しんじつ さつがい べ
眞実を明めざる父をば殺害す可しと見えたり、仍て文句の二に云く「觀解
とんあい むみよう こ ゆえ しよう
は食愛の母・無明の父・此れを害する故に逆と称す逆即順なり非道を行

じて仏道に通達す」と、観解とは末法・当今は題目の観解なる可し子として父母を殺害するは逆なり、然りと雖も法華經不信の父母を殺しては順となるなり爰を以て逆即是順と釈せり、今日蓮等の類いは阿闍世王なり其の故は南無妙法蓮華經の劍を取つて食愛・無明の父位を害して教主釈尊の如く仏身を感得するなり、貧愛の母とは勸持品三類の中第一の俗衆なり無明の父とは第二・第三の僧なり云云。

第四仏所護念の事 文句の三に云く仏所護念とは無量義処は是れ仏の証得し給う所是の故に如来の護念し給う所なり、下の文に仏自住大乘と云えり開示せんと欲すと雖も衆生の根鈍なれば久しく斯の要を黙して務て速かに説き給わず故に護念と云う記の三に云く昔未だ説かず故に之を名けて護と為す法に約し機に約して皆護念する故に乃至機仍おも未だ発せず隠して説かず故に護念と言う、乃至末説を以ての故に護し未暢を以ての

故に念ず、久默と言は昔より今に至るなり斯要等の意之を思うて知る可し。

御義口伝に云く此の護念の体に於ては本・迹二門首題の五字なり、此の護念に於て七種の護念之れ有り一には時に約し二には機に約し三には人に約し四には本・迹に約し五には色心に約し六には法体に約し七には信心に約するなり云云、今日蓮等の類いは護念の体を弘むるなり、一に時に約するとは仏・法華經を四十余年の間未だ時至らざるが故に護念し給うなり、二に機に約するとは破法不信故墜於三惡道の故に前四十余年の間に未だ之を説かざるなり、三に人に約するとは舍利弗に対して説かんなが為なり、四に本・迹に約するとは護を以て本と為し念を以て迹と為す、五に色心に約するとは護を以て色と為し念を以て心と為す、六に法体に約するとは法体とは本有常住なり一切衆生の慈悲心是なり、七

事は護ごとは唯我一人能為救護・念とは每自作是念是なり、普賢品に至いたつて一者為諸仏護念しよぶつごねんと説くなり、日蓮は生年三十二より南無妙法蓮華經を護念ごねんするなり。

第五下至阿鼻地獄の事

おんぎくでん いわ じゅっかいはいじょう
御義口伝に云く十界皆成の文なり提婆が成仏・此の文にて分明なり、
ほうごうほん だいば じょうぶつ かんぎょう
宝塔品の次に提婆が成仏を説く事は二箇の諫曉の分なり、提婆は此の
文の時成仏せり此の至の字は白毫の行く事なり白毫の光明は南無
みょうほうれんげきょう
妙法蓮華經なり、上至阿迦尼咤天は空諦・下至阿鼻地獄は仮諦・白毫
の光は中道なり、之に依つて十界同時の成仏なり天王仏とは宝号を送
るまでなり、去て依正二報の成仏の時此の品の下至阿鼻地獄の文は
えほう じょうぶつ と だいば だつた てんのうにやらい じょうほう じょうぶつ
依報の成仏を説き提婆達多の天王如来は正報の成仏を説く依報正報
みょうほう じょうぶつ いまにちれん たぐ しよりょう
共に妙法の成仏なり、今日蓮等の類い聖靈を訪う時・法華經を誦誦

し南無妙法蓮華經と唱え奉る時・題目の光無間に至りて即身成仏せしむ、廻向の文此れより事起るなり、法華不信の人は墮在無間なれども、題目の光を以て孝子法華の行者として訪わんに豈此の義に替わる可しや、されば下至阿鼻地獄の文は仏・光を放ちて提婆を成仏せしめんが為なりと日蓮推知し奉るなり。

第六導師何故の事 疏に云く良に以みれば説法入定して能く人を導く既に導師と称す。

御義口伝に云く此の導師は釈尊の御事なり、説法とは無量義經・入定とは無量義処三昧に入りたもう事なり、所詮導師に於て二あり惡の導師善の導師之れ有るなり、惡の導師とは法然・弘法・慈覺・智証等なり善の導師とは天台・伝教等是なり、末法に入つては今日蓮等の類いは善の導師なり、説法とは南無妙法蓮華經・入定とは法華受持の決定心に

入る事なり能導のうどう於人の能の字に心を留めて之を案ず可し涌出品ゆじゅつぽんの
唱導しょうどう之師と同じ事なり、所詮しよせん日本国の一切衆生を導かんが為ために説法する
人はなり云云。

第七天鼓自然鳴の事 疏に云く天鼓自然鳴は無間・自説を表するなり。

御義口伝に云く此の文は此土・他土の瑞同じきことを頌して長出せり、
無間・自説とは釈迦如来、妙法蓮華經を無間・自説し給うなり、今日蓮
等の類たぐいは無間・自説なり念仏・無間・禪天魔・真言亡国・律国賊と喚
ぶ事は無間・自説なり三類の強敵来る事は此の故なり、天鼓とは南無
妙法蓮華經なり自然とは無障礙なり鳴とは唱うる所の音声なり、一義
に一切衆生の語言・音声を自在に出すは無間・自説なり自説とは獄卒の
罪人を呵責する音・餓鬼飢饉の音声等・一切衆生の貪・瞋・癡の三毒の
念念等を自説とは云うなり此の音声の体とは南無妙法蓮華經なり、本

・迹両門みょうほう妙法蓮華經の五字ごじは天鼓なり天とは第一だいいち義天なり自説とは
自受用じじゅうの説法せっぽうなり、記の三に云く無間むげん・自説を表するとは方便ほうべんの初に三
味より起つて舍利弗しゃりほつに告げ広く歎たんじ略して歎たんず、此土他土言に寄せ言を
絶もしす若は境若は智此乃ち一經の根本五時の要津ようしんなり此の事輕からずと、
此釈に一經いつきようの根源こんげん五字の要津ようしんとは南無妙法蓮華經是なり云云。

方便品八箇の大事ほうべん だいじ

713P

第一方便品だいいちほうべんの事 文句の三に云く方とは秘なり便とは妙なり妙に方に達まさす
るに即すなわち是真の秘なり、內衣裏ないえりの無価の珠たまを点ずるに王の頂上ちようじやうの唯一ただ
珠あ有ると二無なくく別無し、客作かくさの人を指すに是長者ちやうじゃの子にして亦二無なくく別
無し、此の如ごときの言は是秘是妙なり、經の唯我知是相じやう・十方じふぱう仏亦然やくねん・止
止不須説ふしゆせつ・我法妙難思なんしの如ごとし故に秘を以て方を釈しゃくし妙を以て便を釈しゃくす
正まさしく是れ今いまの品の意なり故に方便品ほうべんと言ふなり記の三に云く第三に秘

妙に約して釈しゃくするとは妙を以ての故に即すくなり円を以て即すくと為し三を不即なと為す故に更に不即なに對して以て即すくを釈しゃくす。

御義口伝に云く此の釈しゃくの中に一珠とは衣裏珠・即頂上珠なり、客作かくさの

人と長者ちやうじやの子と全く不同之無し、所詮しよせん謗法不信ふどうこれなの人は体外たいげの權にして法

用能通の二種ほうべんの方便こころをなり爰を以て無二無別あらざに非るなり、今日蓮等の類いまにちれん

南無妙法蓮華經なむみようほうれんげきようと唱え奉るは是秘妙方便ほうべんにして体内ゆえなり故に

妙法蓮華經みようほうれんげきようと題して次に方便品ほうべんと云えり、妙樂みようらくの記の三の釈に本疏じよの

即是真秘そくの即すくを以円いえん為即すくと消釈しょうしゃくせり、即すくは円なれば法華經の別名なり即すく

とは凡夫ほんぶ即極しよほうじつ・諸法実相しよほうじつの仏なり、円いちねんさんぜんとは一念三千そくなり即すくと円ふしぎと言は替

れども妙の別名なり、一切衆生実相いっさいしゆじやうじつの仏なれば妙なり不思議ふしぎなり謗法ほうほうの

人いまこれ今之これを知らざる故に之を秘ひと云う、又云く法界三千ほっかいさんぜんを秘妙ふしぎとは云うな

り秘とはきびしきなり三千羅列さんぜんなり是より外に不思議ふしぎ之無し、大謗法ほうほうの

人たりと云うとも妙法蓮華經みょうほうれんげきやうを受持じゆじし奉るたてまつ所を妙法蓮華經方便品みょうほうれんげきやうほうべんとは云うなり今末法いままつほうに入いつて正ただしく日蓮等にぢれんの類たぐいの事なり、妙法蓮華經みょうほうれんげきやうの体内にぜんに爾前にぜんの人法にぜを入いるを妙法蓮華經方便品みょうほうれんげきやうほうべんとは云うなり、是これを即身成仏そくしんじやうぶつとも如是本末究竟等によぜほんまつくきやうとも説く、又方便ほうべんとは十界じゆっかいの事なり又は無明むみやうなり妙法蓮華經みょうほうれんげきやうは十界じゆっかいの頂上ちやうじやうなり又は法性ほふしやうなり煩惱即菩提ほんのうそくほだい・生死即涅槃しやうじそくねはん是なり、以円これ為即いとは一念三千いちねんさんぜんなり妙と即そくとは同じ物なり一字の一念三千いちねんさんぜんと云う事は円えんと妙とを云うなり円えんとは諸法実相しよほうじつそうなり、円えんとは釈いわに云く円えん融ゆう・円満えんまんに名くと円融えんゆうは迹門しゃくもん・円満えんまんは本門ほんもんなり又は止観しかんの二法なり又は我等われらが色心しきしんの二法なり一字の一念三千いちねんさんぜんとは慧心流えしんの秘藏ひそうなり、口は一念いちねんなり員かずは三千さんぜんなり一念三千いちねんさんぜんとは不思議ふしぎと云う事なり、此の妙は前ぜん三教さんきやうに未だ之いまを説かず故ゆえに秘と云うなり、故ゆえに知ぬ南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうは一い心の方便ほうべんなり妙法蓮華經みょうほうれんげきやうは九識じゆっかいなり十界じゆっかいは八識い已下かなり心とこを留め

て之を案ず可し、方とは即十方・十方は即十界なり便とは不思議と云う事なり云云。

第二諸仏智慧甚深無量其智慧門の事 文句の三に云く先ず実を歎じ次に権

を歎ず、実とは諸仏の智慧なり三種の化他の権実に非ず故に諸仏と云う

自行の実を顕す故に智慧と云う、此の智慧の体即ち一心の三智なり、

甚深無量とは即ち称歎の辞なり仏の実智の豎に如理の底に徹すること

明す故に甚深と云う、横に法界の辺を窮む故に無量と云う無量甚深にし

て豎に高く横に広し、譬えば根深ければ則ち条茂く源遠ければ則ち流長

きが如し実智既に然り権智例して爾り云云、其智慧門は即ち是れ権智を

歎ずるなり蓋し是れ自行の道前の方便進趣の力有り故に名けて門と為す、

門より入つて道中に到る道中を実と称し道前を権と謂うなり、難解難入

とは権を歎ずるの辞なり不謀にして了し無方の大用あり、七種の方便測度

すること能あたわず十住じゅうじゅうに始めて解じゅうちす十地じゅうちを入と為なす初と後とをあ挙ちゅうげんぐ中間
の難なん示なん難悟は知べる可し、而しかに別わかして声聞しょうもん・縁覺えんかくの所不能知しよふのちをあ挙あぐるこ
とは執重しやくちゆうきが故ゆえに別わかして之これを破はするのみ、記きの三さんに云いく豎高横広じゅうかうかうかうとは中
に於おいて法ほつ譬び合ごうあり此これを以て後ごを例れいす、今実いまを釈しやくするに既すでに周あまねく横おうじゆ豎じを
窮きわめたり下しもに権けんを釈しやくするに理深極りじんなるべし、下しもに當まさに権けんを釈しやくすべし予め
其その相さうを述じゆつす故ゆえに云云と註しるす、其智慧門ごちえもんとは其すなわとは乃すなわち前まへの実果じつこの因智いんち
を指しす若もし智慧ちえ即門そくもんならば門かどは是これ権けんなり若もし智慧ちえの門かどならば智即すなわち果
なり、蓋けだし是等これらとは此この中に須すべからく十地じゅうちを以て道前みちのまえと為なし妙覺みょうかくを道中みちのちゆうと
為なし証後しやうごを道後みちのちゆうと為なすべし、故ゆえに知しんぬ文ぶんの意いは因いんの位ゐに在ありと。
御義口伝おんぎくでんに云いく此この本末ほんまつの意分いぶん明みやうなり、中ちゆうに豎じゆうに高く横かうに広かうしとは豎じゆうは
本門ほんもんなり横かうは迹門しやくもんなり、根こんとは草木そうもくなり草木そうもくは上かうへ登のぼる此これは迹門しやくもんの
意いなり、源みなもととは本門ほんもんなり源みなもとは水みづなり水みづは下しもへくだる此これは本門ほんもんの意い

なり、えだしげし 条茂とは迹門しやくもん 十四品なり流長とは本門ほんもん 十四品なり智慧とは一心いっしん

の三智なり門とは此の智慧ちえに入る処ところの能入の門なり三智の体とは南無なむ

妙法蓮華經なり

門とは信心しんじんの事なり、ここを 爰を以て第二の巻に以信得入と云

う入と門とは之れ同じきなり、いまにちれん 今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え

奉るを智慧ちえとは云うなり、ひゆほん 譬喩品に云く「唯一門ゆいいういちもん」と門に於て有門・

空門・亦有亦空門・非有非空門あるなり、有門は生なり空門は死なり

亦有亦空門は生死しやうじ一念なり非有非空門は生に非ず死に非ず有門は題目の

文字なり空門は此の五字に万法を具足して一方にとどこうらざる義なり、

亦有亦空門は五字に具足する本・迹なり非有非空門は一部の意なり、此

の内証は法華已前の二乗の智慧の及ばざる所なり、もんく 文句の三に云く「七

種の方便測度すること能わず」と、いまにちれん 今日蓮等の類いは此の智慧に得入す

るなり、よつ 仍て偈頌に除諸菩薩衆信力堅固者と云うは我等行者の事を説く

なり云云。

第三唯以一大事因縁の事

文句の四に云く一は即ち一実相なり五に非ず三

に非ず七に非ず九に非ず故に一と言ふなり、其の性広博にして五三七九

より博し故に名けて大と為す、諸仏出世の儀式なり故に名けて事と為す、

衆生に此の機有つて仏を感じ故に名けて因と為す、仏機を承けて而も応

ず故に名けて縁となす、是を出世の本意と為す。

御義口伝に云く一とは法華經なり大とは華嚴なり事とは中間の三昧な

り、法華已前にも三諦あれども碎けたる珠は宝に非ざるが如し云云、又

云く一とは妙なり大とは法なり事とは蓮なり因とは華なり縁とは経なり

云云、又云く我等が頭は妙なり喉は法なり胸は蓮なり胎は華なり足は経

なり此の五尺の身妙法蓮華經の五字なり、此の大事を釈迦如来四十余年

の間隱密したもうなり今經の時説き出したもう此の大事を説かんが為に

仏は出世しゅつせしたもう我等われらが一身みようほうの妙法ごじ五字ごじなりと開仏知見かいぶつちけんする時
即身成仏そくしんじょうぶつするなり、開ひらくとは信心しんじんの異名いみょうなり信心しんじんを以て妙法みようほうを唱え奉ら
ばやが臆おそて開仏知見かいぶつちけんするなり、然しかる間信心しんじんを開く時南無妙法蓮華經なむみようほうれんげきようと示すを
示仏知見じぶつちけんと云うなり、示す時に靈山淨土りようぜんじょうどの住処じゅうしょと悟り即身成仏そくしんじょうぶつと悟る
を悟仏知見ごぶつちけんと云うなり、悟る当体とうたい・直至道場じきしどうじょうなるを入仏知見にゅうぶつちけんと云うなり、
然しかる間信心しんじんの開仏知見かいぶつちけんを以て正意しやういとせり、入仏知見にゅうぶつちけんの入の字しやくもんは迹門しやくもんの意
は実相じつそうの理内きにゆうに歸入きにゆうするを入と云うなり本門ほんもんの意は理即本覺りそくほんがくと入るなり、
今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみようほうれんげきようと唱となえ奉たてまつる程ほどの者は宝塔ほうとうに入るなり云
云い、又云いく開仏知見かいぶつちけんの仏ぶつとは九界所具しよくの仏界ぶつがいなり知見ちけんとは妙法みようほうの二字
止觀しかんの二字寂じやく照しょうの二徳生死しやうじの二法ふっしんなり色心因果しきしんいんがなり、所詮知見しよせんちけんとは
妙法みようほうなり九界所具しよくの仏心ぶつしんを法華經ほけきようの知見ちけんにて開く事なり、爰ここをを以て之これを
思しうに仏しゅじようとは九界の衆生しゅじようの事なり、此の開覺かいかく顕あらわれて今身こんじんより仏身ぶつしんに至いたる

まで持つや否いなやと示とす処ところが妙法みょうほうを示じす示じ仏知見ぶつちけんと云いうなり、師弟していかんのう感かん應おう
して受け取る時に如よ我等がとうむい無異むいと悟ごるを悟ぶつちけん仏知見ぶつちけんと云いうなり、悟ごつて見れば
ほっかいさんぜん ここの己こ己この当とう体たい法華經ほけきやうなり此この内証ないしやうに入るにゆうぶつちけんを入に仏知見ぶつちけんと云いうなり
秘へす可べし云云、又い云わく四し仏知見ぶつちけんとは八相はつさうなり開ひらくとは生なまの相さうなり入いとは死し
の相さうなり中ちゆう間げんの示し悟ごは六相りくさうなり下天託胎じふつちけん等は示じ仏知見ぶつちけんなり出家降魔しゅつ
成道じやうどう轉法輪てんぽうりん等は悟ち仏知見けんなり、權教ごんきやうの意いは生しやう死じを遠離おんりする教きやうなるが
故ゆえに四し仏知見ぶつちけんに非あらざるなり、今經こんきやうの時生死しやうじの二法には一心いっしんの妙用みやうゆう有無うむの
二道にどうは本覺ほんがくの真徳かいかくと開覺かいかくするを四し仏知見ぶつちけんと云いうなり、四し仏知見ぶつちけんを以もつて三世さんぜ
の諸しよ仏ぶつは一大事いちだいじと思召しめし世しに出現しゅつげんしたもうなり、此この開かい仏知見ぶつちけんの法華經ほけきやう
を法然ほうねんは捨しゃ閉閣へいかく抛ほうと云いい弘法大師こうぼうだいしは第三だいの劣戲論けろんの法ほとののしれり、五
仏道ぶつどう同どうの舌しやをへいきる者かくほうに非あらずや、慈覺大師じかくだいし・智証ちしやう等は惡子ちしやうに劍けんを与あえて我
が親おやの頭こゝへをきらする者あらに非あらずや云云、又い云わく一いちとは中諦ちゆうたい・大だいとは空諦くうたい

・事とは仮諦なり此の円融の三諦は何物ぞ所謂南無妙法蓮華經是なり、
此の五字日蓮出世の本懐なり之を名けて事と為す、日本国の一切衆生の
中に日蓮が弟子・檀那と成る人は衆生有此機感仏故名爲因の人なり、夫れ
が爲に法華經の極理を弘めたるは承機而応故名爲縁に非ずや、因は下種
なり縁は三五の宿縁に歸するなり、事の一念三千は、日蓮が身に當りて
の大事なり、一とは一念・大とは三千なり此の三千ときたるは事の因縁
なり事とは衆生世間・因とは五陰世間・縁とは国土世間なり、国土世間
の縁とは南閻浮提は妙法蓮華經を弘むべき本縁の国なり、經に云く
「閻浮提内広令流布使不斷絶」是なり云云。

第四五濁の事 文句の四に云く劫濁は別の体無し劫は是長時・刹那是短
時なり、衆生濁は別の体無し見慢果報を攬る煩惱濁は五鈍使を指て体と
爲し見濁は五利使を指て体と爲し命濁は連持色心を指して体と爲す。

御義口伝に云く日蓮等の類いは此の五濁を離るるなり、我此土安穩なれば劫濁に非ず実相無作の仏身なれば衆生濁に非ず・煩惱即菩提・生死即涅槃の妙旨なれば煩惱濁に非ず・五百塵点劫より無始本有の身なれば命濁に非ざるなり、正直捨方便・但説無上道の行者なれば見濁に非るなり、所詮南無妙法蓮華經を境として起る所の五濁なれば、日本国の一切衆生五濁の正意なり、されば文句四に云く「相とは四濁増劇にして此の時に聚在せり瞋恚増劇にして刀兵起り貪欲増劇にして飢饉起り愚癡増劇にして疾疫起り三災起るが故に煩惱倍增隆んに諸見轉た熾んなり」經に如來現在猶多怨嫉・況滅度後と云う是なり、法華經不信の者を以て五濁障重の者とす經に云く「以五濁惡世但樂著諸欲如是等衆生終不求仏道」云云、仏道とは法華經の別名なり天台云く「仏道とは別して今經を指す」と。

第五比丘比丘尼有懷増上慢優婆塞我慢優婆夷不信の事 文句の四に云く

上慢と我慢と不信と四衆通じて有り、但し出家の二衆は多く道を修し

禪を得て謬て聖果と謂い偏に上慢を起す、在俗は矜高にして多く我慢を

起す女人は智浅くして多く邪僻を生ず自ら其の過を見ずとは三失心を

覆う、疵を蔵くし徳を揚げて自ら省ること能わざるは是れ無慙の人なり、

若し自ら過を見れば是れ有差の僧なり記の四に云く疵を蔵くす等とは三

失を釈するなり疵を蔵くし徳を揚ぐは上慢を釈す、自ら省ること能わざ

るは我慢を釈す、無慙の人とは不信を釈す、若し自ら過を見るは此の三

失無し未だ果を証せずと雖も且らく有差と名く。

御義口伝に云く此本末の釈の意は五千の上慢を釈するなり委くは本末を

見る可きなり、比丘・比丘尼の二人は出家なり共に増上慢と名く疵を

蔵くし徳を揚ぐるを以て本とせり、優婆塞は男なり我慢を以て本とせり

優婆夷は女人なり無慙を以て本とせり、此の四衆は今・日本国に盛んな
り経には其数有五千と有れども日本国に四十九億九万四千八百廿八人と
見えたり、在世には五千人・仏の座を立てり今末法にては日本国の一切
衆生悉く日蓮が所座を立てり、比丘比丘尼増上慢とは道隆・良觀等
に非ずや又鎌倉中の比丘尼等に非ずや、優婆塞とは最明寺優婆夷とは上下
の女人に非ずや敢て我が過を知る可からざるなり、今日蓮等の類いを誹謗
して惡名を立て豈不自見其過の者に非ずや大謗法の罪人なり法華の御座
を立て事疑無き者なり、然りと雖も日蓮に値う事は併ら礼仏而退の義
なり此の礼仏而退は輕賤の義なり全く信解の礼退に非ざるなり此等の衆
は於戒有欠漏の者なり、文句の四に云く「於戒有欠漏とは律義失有るを
ば欠と名け定共道共失有るをば漏と名く」と此の五千の上慢とは我等
所具の五住の煩惱なり、今法華經に値い奉る時慢即法界と開きて礼仏而退

するをいとく仏威徳故去と云うなり、仏とは我等所具のわれらしよく仏界ぶつかいなり威徳とは南無

妙法蓮華經なり、

故去とは而去不去の意なり普賢品の作礼而去之を思ふげんう

可きなり、又云くい五千の退座と云う事・法華の意は不退座なり其の故は

諸法実相略開三頭一の開悟なり、さて其の時は我慢増上慢とは慢即法界そのゆえ

と開きて本有の慢機なり、其数有五千とは我等が五住の煩惱なり若し又

五住の煩惱無しと云うは法華の意を失いたり、五住の煩惱有り乍ら

本有常住ぞと云う時其数有五千と説くなり、断惑に取り合わず其の儘

本有妙法の五住と見れば不自見其過と云うなり、さて於戒有欠漏とは

小乗 権教の対治 衆病

の戒法にては無きなり是名持戒の妙法なり

故に欠漏の当体其の儘是名持戒の体なり、然るに欠漏を其の儘本有と談ず

る故に護惜其瑕疵とは説くなり、元より一乗の妙戒なれば一塵含法界

一念遍十方する故に是小智已出と云うなり、糟糠とは塵塵法法・本覺の

いちねん

じゅつぽう

ゆえ

けつろ

ゆえ

けつろ

いちねん

じゅつぽう

さんじん

三身なり故にすくなき福德の当体も本覚無作の覚体なり、不堪受是法と

は略開の諸法実相の法体を聞きて其の儘開悟するなりさて身子尊者鈍根

のために分別解説したまえと請う広開三の法門をば不堪受是法と説く、

さて法華の実義に歸りて見れば妙法の法体は更に能受所受を忘るるなり

不思議の妙法なり、本法の重を悟りて見る故に此衆無枝葉と云うなり、

かかる内証は純一実相・実相外更無別法なれば唯有諸貞実なり所詮貞

実とは色心を妙法と開く事なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と

唱え奉る処を唯有諸貞実と説くなり、諸とは諸法実相の仏なり諸は十界

なり貞実は十界の色心を妙法と云うなり今經に限る故に唯と云うな

り、五千の上慢の外全く法華經之れ無し五千の慢人とは我等が五大なり

五大即妙法蓮華經なり、五千の上慢は元品の無明なり故に礼仏而退な

り此れは九識八識六識と下る分なり流転門の談道なり、仏威徳故去とは

げんめつ
還滅門なり然らば威徳とは南無妙法蓮華經なり本迷本悟の全体なり
能く能く之を案ず可し云云。

第六如我等無異如我昔所願の事 疏に云く因を挙げて信を勧むと。

おんぎくでん
御義口伝に云く我とは釈尊・我実成仏久遠の仏なり此の本門の釈尊は
われらしゆじょう

我等衆生の事なり、如我の我は十如是の末の七如是なり九界の衆生は

始の三如是なり我等衆生は親なり仏は子なり父子一体にして本末究竟等

なり、此の我等を寿量品に無作の三身と説きたるなり、今日蓮等の類い

南無妙法蓮華經と唱うる者はなり、爰を以て之を思うに釈尊の惣別の

二願とは我等衆生の為に立てたもう処の願なり、此の故に南無

妙法蓮華經と唱え奉りて日本国の一切衆生を我が成仏せしめんと云う

所の願併ら如我昔所願なり、終に引導して己身と和合するを今者已満足

と意得可きなり、此の今者已満足の已の字すでにと読むなり何の処を指

して已すでにとは説けるや、凡およそ所しよ釈しゃくの心は諸法実相しよほうじつそうの文を指して已すでにとは云えり、爾しかりりと雖いえども当家の立義りつぎとしては南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうを指して今者こんじゃい已満足まんぞくと説かれたりと意得いごう可べきなり、されば此この如我等無異にやがとうむいの文肝要かんやうなり、如我昔所願にやがしやくしよがんは本因妙如我等無異ほんにんみやうにやがとうむいは本果妙みょうかくなり妙覺しやくそんの釈尊われらは我等けつにくが血肉いんがなり因果くどくこつずいの功德骨髓あらに非ずや、釈には孝因こいん勸信こいんと孝因すなわは即ち本果なり、今日蓮いまにちれんが唱となうる所の南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうは末法まつぽう一万年まんねんの衆生しゅじやうまで成仏じやうぶつせしむるなり、豈あに今者こんじゃい已満足まんぞくに非ずや、已あらとは建長五年四月廿八けんちやう日に初めて唱となえ出す処いだいの題目だいもくを指して已こころうと意得べ可べきなり、妙法みょうほうの大良薬りやうやくを以て一切衆生の無明いっさいしゆじやうの大病むみやうを治せん事うたがい疑こい無きなり此これを思い遣えんる時まんぞくんば満足まんぞくなり満足まんぞくとは成仏じやうぶつと云う事なり、釈いわに云く「円えんは円融えんゆう・円満えんまんに名なけ頓とんは頓極とんごく頓足とんそくに名なく」と之これを思べう可べし云云。

第七しち於諸菩薩しよぼさつ中正直捨方便しやうじきしやほうべんの事もんく 文句もんくの四しに云いく於諸菩薩しよぼさつ中しよぼさつの下しもの三句さんくは

まさしく実を顕すなり、五乗は是れ曲にして直に非ず通別は偏傍にして正に非ず今皆彼の偏曲を捨てて但正直の一道を説くなり。

おんぎくでん いわ ぼさつ 御義口伝に云く此の菩薩とは九界の第九に居したる菩薩なり又一切衆生
 ぼさつ いまにちれん を菩薩と云うなり今日蓮等の類いなり、又諸天善神等迄も是れ菩薩なり
 しょうじき ぼんのうそくぼだい 生死即涅槃なり、さて一道とは南無妙法蓮華經
 いままつぼう しょうじき 正直とは煩惱即菩提・生死即涅槃なり、さて一道とは南無妙法蓮華經
 しょうじき ひろ なり今末法にして正直の一道を弘むる者は日蓮等の類いに非ずや。

とうらいせあくにん　ぶっせついちじょうめいわく　しんじゅはほう　だあくどう
第八当来悪人聞仏説一乘迷惑不信受破法堕惡道の事

おんぎくでん いわ とうらいせ まつぼう あくにん ほうねん こうぼう じかく ちしやう
御義口伝に云く当来世とは末法なり悪人とは法然・弘法・慈覚・智証等
なり、仏とは日蓮等の類いなり一乗とは妙法蓮華經なり不信の故に
さんあくどう だ べ
三惡道に墮す可きなり。

譬喩品九箇の大事

第一譬喩品の事
文句の五に云く譬とは比況なり喩とは曉訓なり大悲息ま

ず巧智無辺なれば更に樹を動かして風を訓え扇を挙げて月を喩すと。

御義口伝に云く大悲とは母の子を思う慈悲の如し今日蓮等の慈悲なり、

しょうあんいわ

章 安云く「彼の為に悪を除くは即是れ彼の親」と、巧智とは南無

みょうほうれんげきよう

しよしゅう

りつぎ

ぎようおうなんもんどう

きよう

妙法蓮華経なり諸宗無得道の立義なり巧於難問答の意なり更とは

ざいせ

ついで

こころうべ

ほんのう

おしう

在世に次で滅後の事と意得可きなり、樹を動すとは煩惱なり風を訓ると

そくぼだい

あ

しよつじ

たとえ

そくねはん

いまにちれん

は即菩提なり扇を挙ぐとは生死なり月を喩すとは即涅槃なり、今日蓮等

たぐ

なむみょうほうれんげきよう

とな

たてまつ

だいびやくこしや

じきしどうじよう

の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る時大白牛車に乗じて直至道場するな

り、記の五に云く

樹と扇と風と月とは唯円教の理なり」と又云く

法

説の実相は何ぞ隠れ何ぞ顕れんや長風息むこと靡く空月常に懸れり」と

じっそう

なん

あらわ

な

くうげつ

かか

此釈之を思う可し、隠とは死なり顕とは生なり長風とは我等が息なり空月

これ

べ

おん

われら

くうげつ

とは心月なり法華の生死とは三世常恒にして隠顕之無し我等が息風とは

ほつけ

しようじ

さんぜじようこう

おんけんこれな

われら

吐く処の言語なり是南無妙法蓮華経なり、一心法界の覚月常住にし

ところ

ごんこ

なむみょうほうれんげきよう

いっしんほっかい

かくげつじようじゅう

吐く処の言語なり是南無妙法蓮華経なり、一心法界の覚月常住にし

て懸れり是を指して唯円教の理と釈せり円とは法界なり教とは三千羅列なり理とは実相の理なり云云。

第二即起合掌の事 文句の五に云く外義を敍するとは即起合掌は身の領解と名く昔は権実二と為す掌の合わざるが如し、今は権即実と解る二の掌の合するが如し、向仏とは昔は権・仏因に非ず実・仏果に非ず今権即実と解して大円因を成ず因は必ず果に趣く故に合掌向仏と言うと。

御義口伝に云く合掌とは法華經の異名なり向仏とは法華經に値い奉ると云うなり合掌は色法なり向仏は心法なり、色心の二法を妙法と開悟するを歡喜踊躍と説くなり、合掌に於て又二の意之れ有り合とは妙なり掌とは法なり、又云く合とは妙法蓮華經なり掌とは廿八品なり、

又云く合とは仏界なり掌とは九界なり九界は権・仏界は実なり、

妙樂大師の云く「九界を権と為し仏界を實と為す」と十界悉く合掌の
二字に納まって森羅三千の諸法は合掌に非ざること莫きなり、惣じて三
種の法華の合掌之れ有り今の妙法蓮華經は三種の法華未分なり、爾
と雖も先ず顯說法華を正意と為すなり、之に依つて傳教大師は於二仏乘
とは根本法華の教なり○妙法の外更に一句の余經無しと、向仏とは二文
文皆金色の仏体と向い奉る事なり合掌の二字に法界を尽したるなり、
地獄餓鬼の己己の当体其の外三千の諸法其の儘合掌向仏なり而る間
法界悉く舍利弗なり舍利弗とは法華經なり、舎とは空諦利とは仮諦弗と
は中道なり円融三諦の妙法なり舍利弗とは梵語此には身子と云う身子
とは十界の色心なり身とは十界の色法子とは十界の心法なり、今日蓮
等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は悉く舍利弗なり、舍利弗は即
釈迦如来・釈迦如来は即法華經・法華經は即我等が色心の二法なり、

仍よつしんして身子此この品の時間ほうせい此こ法音りようげと領解みようほうせり、聞きことは名字もんく即しやく法音じちようとは諸法しよほうの音やとは妙法ななり、爰ほっかいを以おんじようて文句もんくに釈しやくする時長風いぶつどうしやうれい息いっさいむこと
摩なしと長風ほっかいとは法界おんじようの音声しんげなり、此この音声おんじようを信解しんげ品いぶつどうしやうれいに以おんじようて仙道な声令む一切みようほうれんげきやう聞いっさいと云ほっかいえり一切しじようとは法界しじようの衆生しじようの事なり此この音声おんじようとは南無妙法蓮華經なむみようほうれんげきやうなり。

第三云いく身意しん泰然しん快得たいげん安穩あんのんの事 文句もんくの五ごに云いく從しん仏には是これ身しんの喜きを結むすす

るなり聞法もんぽうは此これ口くちの喜きを結むすするなり断諸だんしよ疑悔ぎけとは是これ意いの喜きを結むすすと。

御義おんぎ口伝くでんに云いく身意しん泰然たいぜんとは煩惱ぼんのう即しやく菩提ぼだい・生死しやうじ即しやく涅槃ねはんなり、身しんとは生死しやうじ

即しやく涅槃ねはんなり意いとは煩惱ぼんのう即しやく菩提ぼだいなり從しやく仏ふつとは日蓮にちれんに從しやくう類たぐい等の事なり口

の富なとは南無妙法蓮華經なむみようほうれんげきやうなり意いの喜きとは無明むみようの惑わく障しやう無むき故こなり、爰こを

以こて之これを思おもうに此この文ぶんは一心三觀いっしんさんかん・一念三千いちねんさんぜん我等われらが即しやく身成しんじやう仏ぶつなり方便ほうべんの

教けうは泰然あに非あらず安穩あんのんに非あらざるなり行けんぎ於や陰うん逕多留難じやうたろうなん故この教けうなり。

第四得仏法分の事 ぶつぽう

御義口伝に云く仏法の分とは初住一分の中道を云うなり、迹門初住 おんぎくでん いわ ぶつぽう しよじゅういちぶん ちゅうどう しゃくもんしよじゅう

ほんもん

本門二住已上と云う事は此の分の字より起るなり、所詮此の分の一字は おこ しよせん

いちねんさんぜん

一念三千の法門なり其の故は地獄は地相の分で仏実を証し乃至二千の ほうもん そのゆえ じごく われら そくしんじょうぶつ

しよほうここ

諸法己己の当体の分で仏果を証したるなり真実の我等が即身成仏なり、 ぶつ ぶつ ぶつ ぶつ ぶつ ぶつ

きょう

今日連等の類南無妙法蓮華經と叫うる分で仏果を証したるなり、分と たぐいな むみょうほうれんげきょう ぶつ ぶつ

こんきやう

は権教は無得道・法華經は成仏と分つと意御可きなり、又云く分とは とくどう ほけきやう じょうぶつ わか べ いわ

ほんもんじゅうりょうほん

本門寿命品の意なり己己本分の分なり、惣じて迹門初住分証と云うは ここほんぶん そう しゃくもんしよじゅう

きやうそう

教相なり真実は初住分証の処にて一經は極りたるなり。 しんじつ しよじゅう ところ いっきやう きわま

第五而自廻轉の事

記の五に云く・或は大論の如し經に而自廻轉と云うは いわ ある だいろん ごと

しんし

身子の得記を聞きて法性自然にして轉じ因果依正自他悉く轉ずるを表す ほっしやうじねん いんがえしやうじ たことごと

と。

御義口伝おんぎくでんに云いく草木成仏そうもくじようぶつの証文しょうもんに而自廻轉じよりんの文ぶんを出いだすなり是れ
一いち念三千ねんさんぜんの依正体一えしやうの成仏じようぶつを説とき極きわめたるなり、草木成仏そうもくじようぶつの証人しょうにんとは
日蓮等にちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつるを指さすなり、廻轉えんとは題目だいもく
五字ごじなり自みづかとは我等行者われらぎやうじやの事ことなり記きの五ごの釈能しやくよくく能よくく之これを思おもうべし云
云。

第六一時俱作いちじぐさの事

御義口伝おんぎくでんに云いく一時いちじとは末法まつぽうの一時いちじなり俱作ぐさとは南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうなり俱
とは畢ひつきやう竟住いちじやう一乘いまいちじやうなり、今日蓮等けふにちれんの類たぐい所作しよさには題目だいもくの五字ごじなり余行よぎやうを
交まじえざるなり、又云またいく十界じゆつかいの語言ごげんは一返だいもくの題目ぐさを俱作ぐさしたり、是これ豈あに感かん應おう
に非あらずや。

第七以譬喻得解ひゆとくげの事 止觀しかんの五ごに云いく智ちとは譬たとえに因よるに斯この意しる徴しるし有あり
と。

御義口伝に云く此の文を以て鏡像円融の三諦の事を伝うるなり、惣じて
鏡像の譬とは自浮自影の鏡の事なり此の鏡とは一心の鏡なり、惣じて鏡
に付て重重的の相伝之有り所詮鏡の能徳とは万像を浮ぶるを本とせり妙法
華華經の五字は万像を浮べて一法も残る物之れ無し、又云く鏡に於て五
鏡之れ有り妙の鏡には法界の不思議を浮べ法の鏡には法界の体を浮べ蓮
の鏡には法界の果を浮べ・華の鏡には法界の因を浮べ・經の鏡には万法
の言語を浮べたり、又云く妙の鏡には華嚴を浮べ・法の鏡には阿含を浮
べ・蓮の鏡には方等を浮べ・華の鏡には般若を浮べ・經の鏡には法華を
浮ぶるなり、順逆次第して意得可きなり、我等衆生の五体五輪
妙法蓮華經と浮び出でたる間宝塔品を以て鏡と習うなり、信謗の浮び様
能く能く之を案ず可し自浮自影の鏡とは南無妙法蓮華經是なり云云。

第八唯一門の事 文句の五に云く唯一門とは上の以種種法門宣示於

ぶつどう 仏道に譬^{たと}う、門に又二あり宅門^{たくもん}と車門となり宅とは生死^{しやうじ}なり門とは出^いずる要路なり、此は方便教^{ほうべん}の詮なり車とは大乘^{だいじやう}の法なり門とは円教^{えんきやう}の詮たりと。

おんぎくでん いわ いちもん 御義口伝に云く一門とは法華經^{ほけきやう}の信心^{しんじん}なり車とは法華經^{ほけきやう}なり牛^なとは南無^{なむ}妙法蓮華經^{みやうほうれんげきやう}なり宅とは煩惱^{ぼんのう}なり自身^{じしん}法性^{ほつしやう}の大地^{だいち}を生^{しやうじ}死^{しやうじ}と転^{てん}ぐり行くなり云云。

こんしさんがい 第九今此三界等の事 文句^{もんく}の五に云く次に今此三界^{こんしさんがい}より下・第二に一行半^{いっけうはん}は上^{かみ}の所見^{しよけん}諸衆生^{しよしゆじやう}為^い生老病死^{しやうらうびやうしし}之所^{しよ}焼煮^{しやうしゆ}を頌^{しやう}して第二^{だいじ}の所見^{しよけん}・火^かの譬^{たとえ}を合^{がっ}す、唯我一人^{ただわれひとり}より下・第三に半偈^{はんげ}は上^{かみ}の仏見^{ぶつけん}此已^{こゝ}便作^{べんさく}是念^{しやうねん}と頌^{しやう}し、きやうにゆう 驚入^{おどろこ}火宅^{かたく}を合^{がっ}するなりと。

おんぎくでん いわ いちもん 御義口伝に云く此の文は一念三千^{いちねんさんぜん}の文なり一念三千^{いちねんさんぜん}の法門^{ほうもん}は迹門^{しやくもん}には生^{しやう}陰二千^{いんにふせん}の世間^{せけん}を明^{あか}し本門^{ほんもん}には国土世間^{こくどせけん}を明^{あか}すなり、又云く今此三界^{こんしさんがい}の文

は国土世間なり其中衆生の文は五陰世間なり而今此処多諸患難唯我一人の文は衆生世間なり、又云く今此三界は法身如来なり其中衆生悉是吾子は報身如来なり而今此処等は応身如来なり。

信解品六箇の大事

第一信解品の事 記の六に云く正法華には信樂品と名く其の義通ずと

雖も樂は解に及ばず今は領解を明かす何を以てか樂と云わんや。

御義口伝に云く法華一部廿八品の題号の中に信解の題号此の品に之れ有り、一念三千も信の一字より起り三世の諸仏の成道も信の一字より起るなり、此の信の字元品の無明を切る利剣なり其の故は信は無疑曰信とて疑惑を断破する利剣なり解とは智慧の異名なり信は価の如く解は宝の如し三世の諸仏の智慧をかうは信の一字なり智慧とは南無妙法蓮華経なり、信は智慧の因にして名字即なり信の外に解無く解の外に信無し信の

一字を以て妙覺の種子と定めたり、今日蓮等の類い南無妙法達華經と
信受領納する故に無上宝聚不求自得の大宝珠を得るなり信は智慧の種な
り不信は墮獄の因なり、又云く信は不變真如の理なり其の故は信は知一切
法皆是仏法と体達して実相の一理と信ずるなり解は隨縁真如なり
自受用智を云うなり、文句の九に云く疑い無きを信と曰い明了なるを
解と曰うと、文句の六に云く中根の人譬喩を説くを聞きて、初めて疑惑
を破して大乘の見道に入る故に名けて信と為す進んで大乘の修道に入
る故に名けて解と為す、記の六に云く大を以て之に望むるに乃ち両手を
分ちて以て二道に属す疑を破するが故に信なり進んで入るを解と名く、
信は二道に通じ解は唯修に在り故に修道を解と名くと云うと。

第二捨父逃逝の事 文句の六に云く、捨父逃逝とは大を退するを捨と為し
無明自ら覆うを逃と曰い生死に趣向するを逝と為すと。

御義口伝に云く父に於て三之れ有り法華經・釈尊・日蓮是なり、法華經は一切衆生の父なり此の父に背く故に流轉の凡夫となる、釈尊は一切衆生の父なり此の仏に背く故に備さに諸道を輪ぐるなり、今日蓮は日本国の一切衆生の父なり、章安大師の云く「彼が為に惡を除く即ち是れ彼が親なり」と、退大の大は南無妙法蓮華經なり無明とは疑惑謗法なり、自ら覆うとは法然・弘法・慈覺・智証・道隆・良觀等の惡比丘・謗法の失を恣まに覆いかくすなり。

第三加復窮困の事 文句の六に云く、出要の術を得ざるを又窮と爲し、八苦の火に焼かるるが故に困と爲すと。

御義口伝に云く出要とは南無妙法蓮華經なり術とは信心なり、今日蓮等の類い窮困を免離する事は法華經を受持し奉るが故なり、又云く妙法に値い奉る時は八苦の煩惱の火自受用報身の智火と開覺するなり云云。

第四心懷悔恨の事

文句の六に云く悔を父に約し恨を子に約すと、記の六

に云く父にも悔恨あり、子にも悔恨ありと。

御義口伝に云く日本国の一切衆生は子の如く日蓮は父の如し、法華不信

の失に依つて無間・大城に墮ちて返つて日蓮を恨みん、又日蓮も声も惜

まず法華を捨つ可からずと云うべきものを靈山にて悔ること之れ有る

可きか、文句の六に云く「心懷悔恨とは昔・勤に教詔せず訓うるこ

と無くして逃逝せしむることを致すことを悔い子の恩義を惟わずして我

を疎んじ他に親しむるを恨む」と。

第五無上宝聚不求自得の事

御義口伝に云く無上に重重の子細あり、外道の法に対すれば三蔵教は

無上外道の法は有上なり又三蔵教は有上・通教は無上・通教は有上

別教は無上・別教は有上・円教は無上、又爾前の円は有上・法華の円

は無上・又迹門の円は有上・本門の円は無上、又迹門十三品は有上方便
品は無上・又本門十三品は有上・一品二半は無上、又天台大師所弘の止観
は無上・玄文二部は有上なり、今日蓮等の類いの心は無上とは南無
妙法蓮華經・無上の中の極無上なり、此の妙法を指して無上・宝聚と
説き給うなり、宝聚とは三世の諸仏の万行万善の諸波羅蜜の宝を聚めた
る南無妙法蓮華經なり、此の無上宝聚を辛勞も無く行功も無く一言に受
取る信心なり不求自得とは是れなり、自の字は十界なり十界各各得る
なり諸法実相是なり、然る間・此の文・妙覺の釈尊・我等衆生の骨肉
なり能く能く之を案ず可し云云。

第六世尊大恩の事

御義口伝に云く世尊とは釈尊・大恩とは南無妙法蓮華經なり、釈尊の
大恩を報ぜんと思わば法華經を受持す可き者なり是れ即ち釈尊の御恩を

奉じ奉るなり、大恩を題目と云う事は次下に以稀有事と説く、希有の事

とは題目なり、此の大恩の妙法蓮華經を四十余年の間秘し給いて後

八箇年に大恩を開き給うなり、文句の一に云く「法王運を啓く」と運と

は大恩の妙法蓮華經なり云云、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え

奉りて日本国の一切

衆生を助けんと思うは豈世尊の大恩に非ずや、章安大師十種の恩を挙げ

たりしなり第一には慈悲逗物の恩・第二には最初下種の恩・第三には

中間随逐の恩・第四には隱徳示拙の恩・第五には鹿苑施小の恩・第六に

は耻小慕大の恩・第七には領地家業の恩・第八には父子決定の恩・第九

には快得安穩の恩・第十には還用利多の恩なり此の十恩即ち衣座室の三

軌なりと云云、記の六に云く「宿萌稍割けて尚未だ敷榮せず長遠の恩

何に由りてか報ず可き」と、又云く「注家は但物として施を天地に答え

ず子として生を父母に謝せず感報斯に亡するを以てなり、と云えり、
輔正記の六に云く「物は施を天地に答えずとは謂く物は天地に由て生ず
と雖も而も天地の沢を報ずと云わず子も亦之の如し」と、記の六に云く
「況や復只だ我をして報亡せしむるに縁る斯の恩報じ☆きをや」と、
輔正記に云く「只縁令我報亡とは意に云く只如来の声聞をして等しく亡
報の理を得せしむるに縁るなり理は謂く一大涅槃なり」と。
御義口伝に云く此くの如く重重の所釈之れ有りと雖も所詮南無
妙法蓮華經の下種なり下種の故に如影随形し給うなり、今日蓮も此くの
如きなり妙法蓮華經を日本国の一切衆生等に与え授くる豈釈尊の十恩
に非ずや、十恩は即ち衣座室の三軌なりとは第一・第二・第三は大慈為室
の御恩なり第四・第五第六第七は柔和忍辱衣の恩なり第八第九第十は
諸法空為座の恩なり、第六の耻小慕大の恩を記の六に云く「故に頓の後

に於ておい すなわ便ち小化を垂れ弾だんしょう斥淘汰し槌砧鍛鍊す」と。

薬草喻品五箇の大事やくそうゆほん だいじ

だいいちやくそうゆほん

第一薬草喻品の事 記の七に云く無始むしの性徳しょうとくは地の如く大乘だいじようの心を発す

るは種の如し二乗にじようの心を発するは草木の芽茎そうもくの如し今初住いましよじゆうに入るは同じ

ぶつじよう げきよう じよう

く仏乗の芽茎等を成ずるが如しと。

おんぎくでん

ほっけ

しよほうじつそう ないしよう

ぶつか

御義口伝に云く法華の心を信ずるは種なり諸法実相の内証しよほうじつそう ないしように入れば仏果

じよう

しゅじよう

そのゆえ こんぎよう

を成ずるなり、薬とは九界の衆生しゅじようの心法なり其の故は権教の心は毒草

ほっけ

あ

さんどく

ぼんのう

さんじんかまん

かいかく

なり法華に値いぬれば三毒の煩惱の心地を三身果満の種なりと開覚かいかくする

ほん

いまにちれん

たぐ

みようほう

ぼんのう

を薬とは云うなり、今日蓮等の類い妙法の薬を煩惱の草に受くるなり

ぼんのうそくぼだい

しやうじそくねはん

さと

ゆ

ゆ

煩惱即菩提・生死即涅槃と覺らしむるを喻とは云うなり、釈に云く「喻

ぎようくん

われらぎようじや

とは曉訓なり」と薬草喻とは我等行者の事なり。

じゅつじよう

第二此の品述 成段の事

おんぎくでん
御義口伝に云く述とは迦葉なり成とは釈尊なり、述 成の二字は迦葉・

しゃくそんいっち
釈尊一致する義なり、所詮述は所化の領解、成は仏の印加なり、今日蓮

たぐ なむ みようほうれんげきよう
等の類い南無妙法蓮華經と領するは述なり日蓮が賛嘆するは成なり我等

そくしんじようぶつ
が即身成仏を説き極めたる品なり、述 成一致符契するは述 成不二の

そくしんじようぶつ
即身成仏なり此の述 成は法界三千の皆成仏道の述 成なり。

第三雖一地所生一雨所潤等の事

おんぎくでん
御義口伝に云く隨縁不變の起る所の文なり、妙樂大師云く「隨縁不變の

ほくせき
説は大教より出で木石無心の言は小宗より生ず」と、此の大教とは一經

すいいちじそししよう
の惣体に非ず此の雖一地所生等の十七字を指すなり、一地所生一雨所潤

しよそうもく
は無差別譬・而諸草木各有差別は有差別譬なり無差別譬の故に妙なり

うしやべつひ
有差別譬の故に法なり云云、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る

うしや
は有差を置くなり廿八品は有差別なり、妙法の五字は無差別なり、一地

とは迹門しやくもんの大地だいち一雨いちうとは本門ほんもんの義天ぎてん・一地いちとは從因しから至果いちう・一雨いちうとは從果じゅうかこういん向因まつほう、末法まつほうに至いたつて從果じゅうかこういん向因いちうの一雨ぐつうを弘通くわつうするなり

いちう

だいまく よぎよう

一雨いちうとは題目だいもくに余行よぎようを交まじえざるなり、序品じよほんの時ときは雨大法ほうう雨うと説とくき此このの品

いちう

いちはうしよにん

じよほん

ほうう

ほうう

の時ときは一雨いちう所潤じよじゆんと説とくけり一雨いちう所潤じよじゆんは序品じよほんの雨大法ほうう雨うを重おもねて仏ぶつ・説とくき給

うなり、一地いちとは五字ごじの中の經きやうの一字いちなり一雨いちうとは五字ごじの中の妙めうの一字

ほうれんげ

なり法蓮華ほうれんげの三字さんは三千万法さんじゆう・中ちゆうにも草木そうもくなり三乘さんじやう・五乘ごじやう・七方便しちほうべん・九

ほっかい

法界ほっかいなり云云。

第四破有法王出現世間の事

はうほうおうしゆつげんせけん

おんぎくでん

御義口伝おんぎくでんに云く有あるとは謗法ほうほうの者ものなり破やぶとは折伏しやくふくなり法王ほうおうとは法華經ほけきやうの

ぎようじや

せけん

にほんこく

行者ぎやうじやなり世間せけんとは日本国にほんこくなり、又云く破やぶは空くう・有あるは仮かり・法王ほうおうは中道ちゆうどうな

り、されば此このの文ぶんをば釈迦如来しやかにらいの種子しゆしと伝でんうるなり惣そうじて三世さんぜの諸仏しよぶつの

しゆつせ

出世しゆつせは此このの文ぶんに依よるなり、有あるとは三界さんがい廿五じふご有あるなり破やぶとは有執いうしやくを破やぶするな

り法王とは十界の衆生の心法なり王とは心法を云うなり諸法実相と開
くを破有法王とは云うなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る
は謗法の有執を断じて釈迦法王と成ると云う事なり、破有の二字を以て
釈迦如来の種子とは云うなり、又云く有と云うは我等が煩惱生死なり此
の煩惱生死を捨てて別に菩提涅槃有りと云うは權教權門の心なり、今經
の心は煩惱生死を其の儘置いて菩提涅槃と開く所を破と云うなり、有と
は煩惱・破とは南無妙法蓮華經なり有は所破なり破は能破なり能破・
所破共に実相の一理なり、序品の時は尽諸有結と説き此の品には破有法王
と説き譬喩品の時は皆是我有と宣べたり云云。

第五我觀一切・普皆平等・無有彼此・愛憎之心・我無貪著・亦無限礙の事
御義口伝に云く此の六句の文は五識なり我觀一切・普皆平等とは九識な
り無有彼此とは八識なり愛憎之心とは七識なり我無貪著とは六識なり

やくもげんぎ
亦無限礙とは五識なり我等衆生の觀法の大体なり、今日蓮等の類い南無
みょうほうれんげきよう
妙法蓮華經と唱え奉る者は豈我觀一切・普皆平等の九識の修行に非ず
しか
や爾らば無有彼此に非ずや愛憎之心に非ずや我無貪著に非ずや亦無限礙
に非ずや。

授記品四箇の大事

第一授記の事
文句の七に云く授とは是れ与の義なりと。

おんぎくでん いわ
御義口伝に云く記とは南無妙法蓮華經なり授とは日本国の一切衆生な
ふしん
り不信の者には授けざるなり又之を受けざるなり、今日蓮等の類い南無
みょうほうれんげきよう
妙法蓮華經の記を受くるなり、又云く授記とは法界の授記なり地獄の
じゆき
授記は悪因なれば悪業の授記を罪人に授くるなり余は之に准じて知る
べ
可きなり、生の記有れば必ず死す死の記あれば又生ず三世常恒の授記な
しよせん
り、所詮中根の四大声聞とは我等が生老病死の四相なり、迦葉は生の

相・迦旃延は老の相・日連は病の相・須菩提は死の相なり、法華に来つ
て生老病死の四相を四大声聞と顕したり是れ即ち八相作仏なり、
諸法実相の振舞なりと記を授くるなり妙法の授記なるが故に法界の授記
なり、蓮華の授記なるが故に法界清浄なり經の授記なるが故に衆生の
語言音声は三世常恒の授記なり、唯一言に授記すべき南無妙法蓮華經
なり云云。

第二迦葉光明の事

御義口伝に云く光明とは一切衆生の相好なり光とは地獄の灯燃猛火
此れ即ち本覺自受用の智火なり乃至仏果之れ同じ、今日蓮等の類い南無
妙法蓮華經の光明を謗法の闇冥の中に指し出だす此れ即ち迦葉の
光明如来なり、迦葉は頭陀を本とす頭陀は爰に抖☆と云うなり、今末法
に入つて余行を抖☆して、専ら南無妙法蓮華經と修するは此經難持

ぎようずだしやこれ
行頭陀者是なり云云。

第三捨是身已の事

おんぎくでん いわ
御義口伝に云く此の文段より捨不捨の起りなり転捨にして永捨に非ず
てんしや ほんもん ようしや
転捨は本門なり永捨は迹門なり此の身を捨るは煩惱即菩提・生死即涅槃
むね そむ
の旨に背くなり云云、所詮日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは
しゃぜしんい おししんみよう
捨是身已なり不惜身命の故なり云云、又云く此の身を捨すと読む時は
ほっかい
法界に五大を捨すなり捨つる処の義に非ず、是の身 を捨てて仏に成る
と云うは権門の意なりかかる 執情 を捨つるを捨是身已と説くなり、此
の文は一念三千の法門なり捨是身已とは還歸本理・一念三千の意なり、
みようらくだいし しんど いちねんさんぜん
妙樂大師の当知身土・一念三千・故成道時・称此本理・一心一念・
へんおほっかい しゃく
遍於法界と釈するは此の意なり云云。

第四宿世因縁吾今当説の事

御義口伝に云く宿世の因縁とは三千塵点の昔の事なり下根の為に宿世の
因縁を説かんと云う事なり、因縁とは因は種なり縁は昔に帰る義なりも
とづく^{くん}と訓ぜり、大通結縁の下種にもとづく^{だいとうけちえん}と云う事を因縁と云うなり、
今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは過去^{いまにちれん}の因にもとづきたり、
爰を以て妙樂大師の云く「故に知んぬ^{ここを} ^{みょうらくだいし} ^{いわ} ^{ゆえ}」
末代一時聞くことを待て聞き已て信を生ず・事須く宿種なるべし」と、
宿とは大通の往時なり絶とは下種の南無妙法蓮華經なり此の下種にもと
づく^{だいとう}を因縁と云うなり、本門の意は五百塵点の下種にもとづくべきなり
真実妙法の因に縁くを成仏と云うなり。
^{しんじつみょうぼう} ^{もとず} ^{じょうぶつ}

化城喻品七箇の大事

732P

第一化城の事

御義口伝に云く化とは色法なり城とは心法なり、此の色心の二法を無常

（こんきよう）

と説くは権教の心なり法華經の意は無常を常住と説くなり化城即宝処

なり、所詮今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は色心妙法と

けじようそくほうしよ

じゅつかいみなけじよう

けじよう

開くを化城即宝処と云うなり、十界皆化城・十界各各宝処なり化城は

ほうしよ

ぶつかい

けじよう

ほうしよ

いた

けじよう

九界なり宝処は仏界なり、化城を去つて宝処に至ると云うは五百由旬の

ひやくゆじゆん

けんじ

じんじや

むみよう

ほんのう

ひやくゆじゆん

間なり此の五百由旬とは見思・塵沙・無明なり、此の煩惱の五百由旬

みようほう

ごじ

を妙法の五字と開くを

化城即宝処と云うなり、化城即宝処とは即の一字は南無妙法蓮華經なり

ねんねん

けじようねんねん

ほうしよ

われら

しきしん

むじよう

こんきよう

念念の化城念念の宝処なり、我等が色心の二法を無常と説くは権教なり

じようじゆう

ほけきよう

むじよう

しゅう

しゅうじよう

そくめつけじよう

常住と説くは法華經なり無常と執する執情を滅するを即滅化城と云

けじよう

ほうしよ

しきしん

みようほう

かいかく

うなり、化城は皮肉・宝処は骨なり色心の二法を妙法と開覚するを

けじようそくほうしよ

むじようじようじゆう

ぐじそうそく

ずいんふへん

化城即宝処の実体と云うなり、実体とは無常常住・俱時相即・随縁不變

いちねんじやくしよく

いちねん

なむみようほうれんげきよう

うたがいわっしん

そく

・一念寂照なり一念とは南無妙法蓮華經・無疑曰信の一念なり即の

一字心を留めて之を思う可し云云。

第二大通智勝仏の事

おんぎくでん いわ だいづう しのう ちしやう じんず だいづう しゃくもんちしやう
御義口伝に云く大通は心王なり智勝は心数なり大通は迹門智勝は本門な
だいづうちしやう われら いまにちれん たぐ なむ みやうほうれんげきやう とな
り大通智勝は我等が一身なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え
たてまつ だいづう だいもく とな ちしやう ほけきやう ぎやうじや こんしゅう
奉る者は大通なり題目を唱うるは智勝なり、法華經の行者の智は權宗
の大智よりも びやくせんまんばいすぐ ちしやう ころうへ
百千万倍勝れたる所を智勝と心得可きなり、大は色法通は
心法なり我等が生死を大通と云うなり、此の生死の身心に振舞う起念を
ちしやう われら しやうじ だいづう しやうじ しんしん ふるまい
智勝とは云うなり、爰を以て之を思うに南無妙法蓮華經と唱え奉る行者
だいづうちしやう じゅうろくおうじ われら しんず
は大通智勝仏なり十六王子とは我等が心数なり云云。

第三諸母涕泣の事

おんぎくでん いわ しよも しよ じつぎ
御義口伝に云く諸母とは諸は十六人の母と云う事なり、実義には母とは
がんぼん むみやう むみやう おこ わくしやう しよも るてん
元品の無明なり此の無明より起る惑障を諸母とも云うなり、流転の時は

無明の母とつれて出で還滅げんめつの時は無明の母を殺すなり、無明の母とは念仏ねんぶつ
・禪・真言等しんこんの人人ひとびとなり而隨送にずいそうし之とは謗人ぼうじんを指すなり、然りと雖も終にしか
法華經の広宣流布こうせんるふ顚あらかれて天下一同に法華經の行者てんがと成る可きなりほけきようぎようじゃ
「隨至道場還欲親近ずいしどうじょうげんよくしんこん」是なり。これ

第四其祖轉輪聖王の事

御義口伝おんぎくでんに云く本地身いわほんちの仏とは此文このもんを習うなり、祖とは法界ほっかいの異名いみようなり
此れは方便品の相性体の三如是こほうべんによぜを祖と云うなり、此の三如是によぜより外に
轉輪聖王之れ無きなり轉輪とは生住異滅しょうじゅういめつなり聖王とは心法なり、此の
三如是によぜは三世さんぜの諸仏しよぶつの父母ふぼなり、今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようと唱え
奉る者たてまつは三世さんぜの諸仏しよぶつの父母ふぼにして其祖轉輪聖王こそてんりんじようおう

なり、金銀銅鉄きんぎんとは金は生・銀は白骨にして死なり銅は老の相・鉄は病
なり此れ即ち開示悟入こすなわかいじこにゆうの四仏知見しぶつちけんなり、三世常恒さんぜじようこうに生死しやうじ・生死とめぐる

をてんりんじょうおう転輪聖王と云うなり、此のてんりんじょうおうしゅつげん転輪聖王出現の時の輪宝とは我等が吐く
所の言語ごんごおんじょう音声なり此のおんじょう音声の輪宝とは南無妙法蓮華經なりなむみょうほうれんげきょう爰を以て
平等大慧とは云うなり。
じゅうろくおうじ

第五十六王子の事

御義口伝に云く十とはじゅうかい十界なり六とはろっこん六根なり王とはしんのう心王なり子とは
心数なり此れ即ち実相の一理の大通の子なり、今日蓮等の類い南無
妙法蓮華經と唱え奉る者はじゅうろくおうじ十六王子なり八方作仏とは我等が八苦の煩惱
即菩提そくぼだいと開くなり云云。

第六即滅化城の事

御義口伝に云く我等が滅する当体はけじょう化城なり、此の滅を滅と見ればけじょう化城
なり不滅ふめつの滅と知見するを宝处とは云うなり、是をこれ寿命品にしては而実
不滅度めつどとは説くなり、滅と云う見を滅するを滅と云うなり三権即一実の
そくいちじつ

ほうもんこれ
法門之を思う可し、・或は即滅化城とは謗法の寺塔を滅する事なり、
いまにちれん たぐ なむ みょうほうれんげきょう となたてまつ
今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は化城即宝処なり我等が居
せんくこうやみなかいじょうじやつこう
住の山谷曠野 皆皆常寂光 の宝処なり云云。

第七皆共至宝処の事

おんぎくでん いわ みな じゅっかい
御義口伝に云く皆とは十界なり共とは如我等無異なり至とは極果の
じゅうしよ ほうしよ りょうぜん にちれん たぐ なむ みょうほうれんげきょう となたてまつ
住処なり宝処とは靈山なり、日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る
みなきようしほうしよ
者は一同に皆共至宝処なり、共の一字は日蓮に共する時は宝処に至る可し
べ
不共ならば阿鼻大城に墮つ可し云云。

五百弟子品三箇の大事

第一衣裏の事

だいいちえり
おんぎくでん いわ
御義口伝に云く此の品には無価の宝珠を衣裏に繋ぐる事を説くなり、
しよせんちれん たぐ なむ みょうほうれんげきょう となたてまつ いちじょう みょうほう ちほう
所詮日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は一乗・妙法の智宝を

信受するなり信心を以て衣裏にかくと云うなり。

第二酔酒而臥の事

御義口伝に云く酒とは無明なり無明は謗法なり臥とは謗法の家に生るる事なり、三千塵点の当初に悪縁の酒を呑みて五道六道に酔い廻りて今謗法の家に臥したり、酔とは不信なり覺とは信なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る時無明の酒醒めたり、又云く酒に重重之れ有り権教は酒・法華經は醒めたり、本・迹相對する時迹門は酒なり始覺の故なり本門は醒めたり本覺の故なり、又本・迹二門は酒なり南無妙法蓮華經は醒めたり酒と醒むるとは相離れざるなり、酒は無明なり醒むるは法性なり法は酒なり妙は醒めたり妙法と唱うれば無明法性体一なり、止の一に云く無明塵勞即是菩提と。

第三身心遍歡喜の事

御義口伝おんぎくでん いわに云く身とは生死しやうじそく涅槃ねはんなり心とは煩惱ぼんのう即菩提そくぼだいなり、遍へんとは
十界じゅうかい同時どうじなり歡喜かんきとは法界ほっかい同時どうじの歡喜かんきなり、此この歡喜かんきの内うちには三世さんぜ諸しよ仏ぶつ
の歡喜かんき納おさまるなり、今日けふ蓮等れんどうの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまれば我則われすなは
歡喜かんきとて釈尊しやくそん歡喜かんきし給たまうなり、歡喜かんきとは善惡ぜんあく共に歡喜かんきなり十界じゅうかい同時どうじな
り深く之これを思おもふ可べし云云。

人記品二箇の大事にんきほん だいじ

第一学無学の事だいいちがくむがく

御義口伝おんぎくでん いわに云く学とは無智むちなり無学むがくとは有智うちなり、今日けふ蓮等れんどうの類たぐい南無
妙法蓮華經みょうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつるは学無学がくむがくの人に如我等にやがとうむい無異むいの記きを授さずくるに非あらず
や、色法しきふは無学むがくなり心法しんふは学がくなり又心法しんふは無学むがくなり色法しきふは学がくなり学無学がくむがく
の人ひととは日本国にほんこくの一切衆生いっさいしじやうなり、智者ちしやくしや愚者ぐしやをしなべて南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやう
の記きを説ときて而強毒ぬこうどく之しするなり。

第二山海慧自在通王仏の事

さんかいえじざいつうおうぶつ

御義口伝おんぎくでんに云く山とは煩惱ぼんご即菩提そくぼだいなり海とは生死しやうじ即涅槃そくねはんなり慧とは我等われら

が吐く所の言語ごんごなり自在じざいとは無障礙しやうげなり通王とは十界互具じゅうかいこく・百界千如ひゃっかいせんによ・

いちねんさんぜん

一念三千なり、又云く山とは迹門いわの意なり海とは本門ほんもんの意なり慧とは

みようほう

妙法の五字ごじなり、今日蓮等の類いまにちれんい南無妙法蓮華經なむみようほうれんげきやうと唱え奉る者は

さんかいえじざいつうおうぶつ

山海慧自在通王仏なり全く外に非ざるなり我等行者の外に阿難あなん之れ無き

なり、阿難あなんとは歡喜かんきなり一念三千の開覚いちねんさんぜんなり云云。

法師品十六箇の大事

だいじ

第一法師の事

だいいちほつし

御義口伝おんぎくでんに云く法とは諸法しよほうなり師とは諸法しよほうが直ちに師と成るなり

しんらさんぜん

森羅三千の諸法しよほうが直ちに師と成り弟子でしとなるべきなり、今日蓮等の類いまにちれんい

なむみようほうれんげきやう

南無妙法蓮華經と唱え奉る者は法師の中の大法師なり、諸法実相の開覚しよほうじつそう

あらわ 顕れて見れば地獄じごくの灯燃猛火とうねんみょうか乃至な仏果ぶつに至る迄いた悉く具足ことごとくそくして一念三千いちねんさんぜんの法師ほっしなり、又云いわく法とは題目だいもく師とは日蓮等にちれんの類たぐいなり。

第二成就大願愍衆生故生於惡世広演此經の事

おんぎくでん いわ ほっけぐつう みんしゅじょうこ にほんこく いっさいしゅじょう
御義口伝に云く大願とは法華弘通なり愍衆生故とは日本国の一切衆生な
り生於惡世あくせの人とは日蓮等にちれんの類たぐいなり広とは南閻浮提えんぶだいなり此經とは題目だいもく
なり、今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと唱え奉る者なり。

第三如来所遣行如来事の事

おんぎくでん いわ ぎょうじゃ にょらい
御義口伝に云く法華の行者は如来の使に來れり、如来とは釈迦如来事と
は南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうなり如来とは十界三千じゅうかいさんぜんの衆生しゅじょうの事なり今日蓮等いまにちれん
類たぐい、南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと唱え奉るは眞実しんじつの御使おんつかいなり云云。
にょらい

第四与如来共宿の事

おんぎくでん いわ ほっけ ぎょうじゃ なんよ にょらい
御義口伝に云く法華の行者は男女共に如来なり煩惱即菩提・生死即涅槃ぼんのうそくぼだい しやうじそくねはん

なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は与如来共宿の者なり、傳大士の釈に云く「朝朝 仏と共に起き夕夕仏と共に臥し時時に成道し時時に顕本す」と云云。

第五是法華經藏深固幽遠無人能到の事

おんぎくでん いわ ぜほけきようそう むにんのうとう
御義口伝に云く是法華經藏とは題目なり深固とは本門なり幽遠とは迹門なり無人能到とは謗法なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は無人能到の者に非ざるなり云云。

第六聞法信受隨順不逆の事

おんぎくでん いわ みようじそく
御義口伝に云く聞とは名字即なり法とは題目なり信受とは受持なり隨順不逆とは本・迹二門に隨順するなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者の事なり。

第七衣座室の事

おんぎくでん いわ えざしつ ほつぼうおう さんじん くうけちゆう さんたいしんくい
御義口伝に云く衣座室とは法報応の三身なり空仮中の三諦身口意の三業
なり、いまにちれん たぐ な むみょうほうれんげきよう とな たてまつ今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は此の三軌を一念に
じようじゆ成就するなり、衣とは柔和忍辱の衣当著忍辱鎧是なり座とは不惜身命
しゆぎようの修行なれば空座に居するなり室とは慈悲に住して弘むる故なり母の子
を思うが如くなり、こと あにいちねん豈一念に三軌を具足するに非ずや。ぐそく あら

第八欲捨諸懈怠 応当聴此經の事 よくしやしよけたいおうとうちようしきよう 御義口伝に云く諸の懈怠とは四十余年の
ほうべん きようぎよう方便の經教 なり悉く皆懈怠の經なり此經とは題目なり、だいもく今日蓮等の
たぐ な むみょうほうれんげきよう とな たてまつ こ すなわ しようじん おうとうちようしきよう類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは是れ即ち精進なり 応当聴此經は是な
まさ にちれんり、 応に日蓮に此の經を聞くべしと云えり云云。

第九不聞法華經去仏智 甚遠の事 もんぼう はなはだ

御義口伝に云く不聞とは謗法なり成仏の智を遠ざかるべきなり、今日蓮 おんぎくでん いわ ほうぼう じょうぶつ いまにちれん
等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は仏智開悟の者にして成仏の近 たぐ なむみょうほうれんげきょう とな たてまつ かいご じょうぶつ
き故なり。

第十若説此經時有人惡口罵加刀 杖瓦石念仏故忍の事 あるひとあつく どうじょうがしやくねんぶつ

御義口伝に云く此經とは題目なり惡口とは口業なり加刀杖は身業なり此 おんぎくでん いわ だいもく あつく くごう どうじょう しんごう
の身口の二業は意業より起るなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と しんく いごう おこ いまにちれん たぐ なむみょうほうれんげきょう
とな たてまつ ぶつちやく 唱え奉る者は仏勅を念ずるが故に忍忍とは云うなり。

第十一及清信士女供養於法師の事 しにょくよう ほうし

御義口伝に云く士女とは男女なり法師とは日蓮等の類いなり清信とは おんぎくでん いわ しにょ なんよ ほうし にちれん たぐ
法華經に信心の者なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者 ほけきょう しんじん いまにちれん たぐ なむみょうほうれんげきょう とな たてまつ
是なり云云、此れ諸天善神等男女と顕れて法華經の行者を供養す可しと これ こ してんぜんじん なんよ あらわ ほけきょう ぎようじゃ べ

云うきようもん經文なり。

第十二若人にやくにん欲加惡刀とうじょう杖及瓦石則遣變化人がしやく為之作衛護へんかの事ごと

おんぎくでん いわ へんか
御義口伝に云く變化人とは竜口守護たつのくちしゅごの八幡大菩薩はちまんだいぼさつなり、今日蓮等の類いまにちれん たぐ
なむみょうほうれんげきよう とな たてまつ
南無妙法蓮華經と唱え奉る者しゅごを守護べす可しと云う經文きようもんなり。

第十三若親近法師速得菩薩道の事しんこんほつし ぼさつ

おんぎくでん いわ しんこん
御義口伝に云く親近しんこんとは信受しんじゅの異名いみょうなり法師ほつしとは日蓮等の類にちれん たぐなり菩薩ぼさつ
とは仏果ぶつかを得る下地げじなり、今日蓮等の類いまにちれん たぐ南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようと唱え奉る者とな たてまつ
の事なり。

第十四隨順ずいじゆん是師学ししがくの事

おんぎくでん いわ
御義口伝に云く是師しとは日蓮等にちれんの類たぐいなり学がくとは南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようなり
隨順ずいじゆんとは信受しんじゅなり云云。

第十五師と学との事

おんぎくでん いわ にちれん たく な むみょうほうれんげきよう がくしゃ いちねんさんぜん
御義口伝に云く日蓮等の類いの南無妙法蓮華経は学者の一念三千なり師
も学も共に法界三千の師学なり。

第十六得見恒沙仏の事

おんぎくでん いわ こうしゃ けんほうとう
御義口伝に云く見恒沙仏とは見宝塔と云う事なり、恒沙仏とは多宝の事
なり多宝の多とは法界なり宝とは一念三千の開悟なり法界を多宝仏と見
るを見恒沙仏と云うなり、故に法師品の次に宝塔品は来るなり解行証の
法師の乗物は宝塔なり云云、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る
は妙解妙行妙証の不思議の解・不思議の行・不思議の証得なり真実
いちねんさんぜん かいご
一念三千の開悟なり云云、此の恒沙と云うは悪を滅し善を生ずる河なり、
恒沙仏とは一一文文皆金色の仏体なり見の字之を思う可し仏見と云う事
なり、随順とは仏知見なり得見の見の字と見宝塔の見とは依正の二報な
り得見恒沙の見は正報なり見宝塔の見は依報なり云云。

ほうとうほん
宝塔品甘箇の大事

739P

だいいちほうとう

第一宝塔の事

もんく

文句の八に云く前仏已に居し今・仏・並に座す当仏も亦然なりと。

おんぎくでん

いわ

すでこ

わこう

ごおんわこう

ほうとう

御義口伝に云く宝とは五陰なり塔とは和合なり五陰和合を以て宝塔と云

うなり、此の五陰和合とは妙法の五字なりと見る是を見とは云うなり、

いまにちれん

たぐ

なむみょうほうれんげきよう

とな

たてまつ

けんほうとう

今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は見宝塔なり。

しっぽう

第二有七宝の事

おんぎくでん

いわ

しっぽう

御義口伝に云く七宝とは聞・信・戒・定・進・捨・慙なり、又云く頭上

いまにちれん

たぐ

なむみょうほうれんげきよう

とな

たてまつ

しっぽう

ぎようじや

の七穴なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは有七宝の行者

なり云云。

しめんかいすい

第三四面皆出の事

もんく
文句の八に云くいわ四面出香しめんすいこうとは四諦したいの道風四徳の香を吹くなり。御義口伝
に云くいわ四面おもてとは生老病死しょうろうびょうしなり四相を以て我等われらが一身の塔そうこんを莊嚴するな
り、我等われらが生老病死しょうろうびょうしに南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうとななてまつしかしなが併しら四徳の香を吹
くなり、南無なむとは樂波羅蜜はらみつ・妙法みょうほうとは我波羅蜜はらみつ・蓮華れんげとは淨波羅蜜はらみつ・經
とは常波羅蜜なり。

第四出大音声の事

おんぎくでん いわわれらしゅじょう ちようせき
御義口伝に云く我等衆生の朝夕吐く所の言語ごんごなり、大音声おんじょうとは權教ごんきょう
は小音声おんじょう・法華經は大音声おんじょうなり廿八品は小音声おんじょう題目は大音声おんじょうなり、
惣じて大音声おんじょうとは大は法界ほっかいなり法界の衆生の言語ごんごを妙法の音声おんじょうと
さたおんじょう
沙汰するを大音声おんじょうとは云うなり、今日蓮等の類いまにちれん南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと
となたてまつ おんじょう
唱え奉るは大音声おんじょうなり、又云く大とは空諦くうたい・音声おんじょうとは仮諦けたいなり出とは
ちゅうご
中道なり云云。

第五見大宝塔住 在空中の事

おんぎくでん いわ ほうとう
御義口伝に云く見大宝塔とは我等が一身なり住 在空中とは我等衆生
つい
終に滅に帰する事なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉りて
しんじん とうろ じゅうはいくうちゅう
信心に住する処が住 在空中なり虚空会に住するなり。

第六国名宝浄彼中有仏号曰多宝の事

おんぎくでん いわ ほうじょうせかい われら
御義口伝に云く宝浄世界とは我等が母の胎内なり、有仏とは諸法実相の
ここを たほうぶつ
仏なり爰を以て多宝仏と云うなり、胎内とは煩惱を云うなり煩惱の淤泥
しんによ われらしゅじょう
の中に真如の仏あり我等衆生の事なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經
とな たてまつ とうたいれんげ
と唱え奉るを当体蓮華の仏と云うなり云云。

第七於十方国土有説・法華經処我之塔 廟為聴是經故涌現其前為作証 明

讃言善哉の事

おんぎくでん いわ じゅつぼう
御義口伝に云く十方とは十界なり法華經とは我等衆生流轉の十二因縁
ぜんざい じゅつかい ほけきよう われらしゅじょうるてん いんねん

なり仍て言語の音声よつ ごんこ おんじょうを指すなり善哉ぜんざいとは善惡不二ぜんあくふに・邪正一如じゃしょういちによなり、
今日蓮等の類いまにちれん たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと唱え奉る處とな たてまつところを多宝涌現たほうゆげんと云うなり。

第八南西北方四惟上下の事じょうげ

御義口伝おんぎくでん いわに云く四方四惟しほう上下合じょうげして十方じゅうぽうなり即ち十界すなわ じゅうかいなり、十界じゅうかいの衆生しゅじょう共に三毒さんどくの光こ之れ有これ是を白毫びやくこうと云うなり一心中道いつしんちゅうどうの智慧ちえなり、
今日蓮等の類いまにちれん たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと唱え奉るは十界じゅうかい同時どうじの光指しよほうじっそう こつみようなり諸法実相しよほうじつそうの光明こつみようなるが故なり。

第九各齋宝華滿掬の事

御義口伝おんぎくでん いわに云く宝華ほうげとは合掌がっしょう一念三千いちねんさんぜんの所表しよひょうなり各おんぎくでん いわとは十界じゅうかいなり満の一字いちごを一念三千いちねんさんぜんと心得こころうべ可いまにちれんし、今日蓮等の類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと唱え奉るは仏はうに宝華ほうげを奉たてまつるなり宝華即宝珠ほうげそくほうしゆなり宝珠即一念三千ほうしゆそくいちねんさんぜんなり合掌がっしょう以敬心欲ぐそく聞具足道これ是なり云云。

第十如却関鑰開大城門の事 補註の四に云く此の開塔見仏は蓋し所表有るなり、何となれば即ち開塔は即開権なり見仏は即顕実なり是れ亦前を証し復將さに後を起さんとするのみ、如却関鑰とは却是除なり障除こり機動くことを表す謂く法身の居士惑を破し理を顕し道を増し生を損するなりと。

御義口伝に云く関鑰とは謗法なり無明なり開とは我等が成仏なり大城門とは我等が色心の二法なり大城とは色法なり門とは口なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る時無明の惑障却けて己心の釈迦・多宝住するなり、関鑰とは無明なり開とは法性なり鑰とは妙の一字なり天台の云く「秘密の奥蔵を發らく之を称して妙と為す」と、妙の一字を以て鑰と心得可きなり、此の經文は謗法不信の関鑰を却けて己心の仏を開くと云う事なり開仏知見之を思う可し云云。

第十一摂諸大衆皆在虚空の事 しやだい みな こくう

御義口伝に云く大衆とは聴衆なり皆在虚空とは我等が死の相なり、
おんぎくでん いわ たいしゅう ちようしゅう みな こくう われら

今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは生死即涅槃と開覺するを皆
けふ いまにちれん たく なむみょうほうれんげきょう とな たてまつ しやうじそくねはん かいかく みな

在虚空と説くなり生死即涅槃と被摂するなり、大地は色法なり虚空は心
こくう しやうじそくねはん ひしやう だいち こくう

法なり色心不二と心得可きなり虚空とは寂光土なり、又云く虚空とは
しきしんふに こころうべ こくう じゃっこう いわ こくう

蓮華なり經とは大地なり妙法は天なり虚空とは中なり一切衆生の内
れんげ だいち みやうほう こくう いっさいしゆじよう

菩薩蓮華に座するなり、此れを妙法蓮華經と説かれたり、經に云く「若
ぼさつれんげ ぶつぜんれんげしやう こ みやうほうれんげきょう いわ

在仏前蓮華化生」と。
ふつぜんれんげしやう

第十二譬如大風吹小樹枝の事 ひによたいふうすいしやうじゆえ

御義口伝に云く此の偈頌の如清凉池と譬如大風と燃大炬火とは三身な
おんぎくでん いわ げじゆ しやうりやう ひによたいふう さんじん

り、其の中に譬如大風とは題目の五字なり吹小樹枝とは折伏門なり、
そ ひによたいふう だいもく ごじ すいしやうじゆえ しゃくぶくもん

今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは大風の吹くが如くなり。
けふ いまにちれん たく なむみょうほうれんげきょう とな たてまつ たいふう こ

第十三若有能持則持にやくうのうじ 仏身ぶっしんの事

御義口伝おんぎくでんに云くいわ法華經ほけきようを持ち奉るとは我が身ぶっしん 仏身ぶっしんと持つなり、則の一字は生かみ 仏のうじ不二のうじなり上の能持みなの持ほんぶは凡夫ぼんぶなり持つみようほう 体ごじは妙法ぶっしんの五字ごじなりぶっしん 仏身ぶっしんを持つと云うは一一文みな 文皆金色ぶっしん 仏体ぶっしんの故なり、さてぶっしん 仏身ぶっしんを持つとは我が身ぶっしんの外そくにそく 仏無しと持つを云うなり、理りそく 即の凡夫ぼんぶと究竟くきようそく 即のそく 仏と二無きなりそく 即の字そくは即故初後不二の故なり云云。

第十四此經難持しきようなんじの事

御義口伝おんぎくでんに云くいわ此ほけきようの法華經ほけきようを持つ者なんは難あに遇わんと心得こころえて持つなり、されば即為疾得無上そくいしつとくむじようぶつどう 仏道じようぶつの成いまにちれん 仏たぐは今日蓮等なむみようほうれんげきようの類とない南無妙法蓮華經なむみようほうれんげきようと唱となえ奉る是なり云云。

第十五我則歡喜諸かんきしよぶつまた 佛亦然たてまつの事

御義口伝おんぎくでんに云くいわ我しんのうとは心王しんわうなり諸しよぶつ 佛しんずとは心数しんずなり法華經ほけきようを持ち奉る時たてまつは

しんのうしんずどうじ かんき
心王心数同時に歡喜するなり、又云く我とは凡夫なり諸仏とは三世諸仏
ななり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱えて歡喜する是なり云云。
いまにちれん たぐ なむみょうほうれんげきよう とな かんき これ

第十六読持此經の事

おんぎくでん いわ ごしゆ しゆぎよう どんじゆ じゆじ
御義口伝に云く五種の修行の読誦と受持との二行なり、今日蓮等の類い
なむみょうほうれんげきよう とな たてまつ
南無妙法蓮華經と唱え奉るは読なり此の經を持つは持なり此經とは題目
の五字なり云云。
ごじ

第十七是真仏子の事

おんぎくでん いわ ほけきよう ぎようじや
御義口伝に云く法華經の行者は真に釈迦法王の御子なり、然る間王位を
継ぐ可きなり悉是吾子の子と是真仏子の子と能く能く心得合す可きなり、
いまにちれん たぐ なむみょうほうれんげきよう とな たてまつ しやかほうおう
今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は釈迦法王の御子なり。
しよてん

第十八是諸天人・世間之眼の事

おんぎくでん いわ せけん にほんこく まなこ ぶつちけん ほけきよう しよてん
御義口伝に云く世間とは日本国なり眼とは仏知見なり法華經は諸天・

世間の眼目なり、眼とは南無妙法蓮華經なり是諸天人・世間之眼又云く
是諸仏眼目云云、此の眼をくじる者は禪・念仏・真言宗等なり眼等と
は目を閉づるなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは諸天・
世間の眼に非ずや云云。

第十九能須臾說の事

御義口伝に云く能の一字之を思ふ可し説とは南無妙法蓮華經なり、
今日蓮等の類いは能須臾說の行者なり云云。

第二十此經難持の事

御義口伝に云く此の經文にて三学俱伝するなり、虚空不動戒・虚空
不動定・虚空不動慧・三学俱に伝うるを名けて妙法と曰うと、戒とは色
法なり定とは心法なり慧とは色心二法の振舞なり、俱の字は南無
妙法蓮華經の一念三千なり伝とは末法万年を指すなり、今日蓮等の類い

なむみょうほうれんげきょう とな たてまつこんきょう
南無妙法蓮華經と唱え奉り 權教は無得道・法華經は眞実と修行する是
は戒なり防非止惡の義なり、持つ所の行者・決定無有疑の仏体と定む
是は定なり、三世の諸仏の智慧を一返の題目に受持する是は慧なり、此
の三学は皮肉骨・三身・三諦・三軌・三智等なり。

提婆達多品八箇の大事

第一 提婆達多の事 文句の八に云く本地は清凉にして迹に天熱を示

すと。

おんぎくでん いわ だいば
御義口伝に云く提婆とは本地は文殊なり、本地清凉と云うなり迹には
提婆と云うなり天熱を示す是なり、清凉は水なり此れは生死即涅槃な
り天熱は火なり是は煩惱即菩提なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と
唱え奉る

ぼんのうそくぼだい しやうじそくねはん
に煩惱即菩提・生死即涅槃なり、提婆は妙法蓮華經の別名なり過去の時

に阿私仙人あしせんなり阿私仙人あしせんとは妙法みょうほうの異名いみょうなり阿とは無の義なり私無きの法みょうほうとは妙法みょうほうなり、文句もんくの八はちに云く無私法むしほうを以て衆生しゅじょうに灑そぐと云えり阿私仙人あしせんとは法界三千ほっかいさんぜんの別名べつめいなり故ゆえに私無きなり一念三千いちねんさんぜん之を思おもう可べし云云。

第二 若不違我當為宣說せんぜつの事

御義口伝おんぎくでんに云く妙法蓮華經みょうほうれんげきょうを宣說せんぜつする事を汝なんじは我たがに違ちがわずして宣說せんぜつすべしと云う事なり、若なんじの字なは汝なんじなり、天台てんだいの云く「法いを受けて奉行ぶぎようす」と、今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと唱となえ奉たてまつる者にちれんは日蓮たがに違ちがわずして宣說せんぜつす可べきなり阿私仙人あしせんとは南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうなり云云。

第三採菓汲水拾薪設食たきぎの事

御義口伝おんぎくでんに云く採菓ちぼんとは癡煩惱ちぼんのうなり汲水きすいとは貪煩惱ぼんのうなり拾薪たきぎとは瞋煩惱ぼんのうなり設食まんぼんとは慢煩惱まんぼんのうなり、此この下したに八種の給仕こ之れ有り此の外ほかに

みょうほうれんげきよう
妙法蓮華經の伝受之れ無きなり、
今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と
とな たてまつ すなわ せんさい
唱え奉るは即ち千歳給仕なり是れ即ち一念三千なり貪・瞋・癡慢を対治
するなり。

第四 情存妙法故身心無懈倦の事

おんぎくでん いわ しんしん
御義口伝に云く身心の二字色心妙法と伝受するなり、
日蓮等の類い南無
みょうほうれんげきよう とな たてまつ そくしんじょうぶつ しんしんむけん いちねんさんぜん
妙法蓮華經と唱え奉りて即身成仏す身心無倦とは一念三千なり云云。

第五 我於海中唯常宣説の事

おんぎくでん いわ もんじゆ
御義口伝に云く我とは文殊なり海とは生死の海なり唯とは唯有一乘法な
り常とは常住 此説法なり妙法蓮華經とは法界の言語音声なり、今日蓮
等たぐの類い南無妙法蓮華經と唱え奉る是なり、生死しやうじの海即真如そくしんによの大海たいかいなり
我とは法界ほっかいの智慧ちえなり文殊もんじゆなり云云。

第六 年始八歳の事

おんぎくでん いわ 御義口伝に云く八歳とは八巻なり提婆は地獄界なり竜女は仏界なり然る
じゅっかいごく ひゃっかいせんによ いちねんさんぜん 間十界互具・百界千如・一念三千なり、又云く八歳とは法華經八巻なり
われら ほんのう そう ほけきよう じょうぶつ 我等八苦の煩惱なり、惣じて法華經の成仏は八歳なりと心得可し八苦即
そく 八巻なり八苦八巻即八歳の竜女と顕るるなり一義に云く、八歳の事はた
まをひらくと読むなり、歳とは竜女の一心なり八とは三千なり三千とは
ほっけ 法華の八巻なり、仍つて八歳とは開仏知見の所表なり智慧利根より能至
ぼだい ほっけ きにゆう 菩提まで法華に歸入するなり、此の中に心念口演とは口業なり志意和雅
いこう いちじ 意業なり悉能受持深入禪定とは身業なり三業即三徳なれば三諦
ほっしょう 法性なり、又云く心念とは一念なり口演とは三千なり悉能受持とは
りゆうによ ほけきよう じゅじ 竜女法華經受持の文なり、歳とは如意宝珠なり妙法なり八とは色心を
みょうほう 妙法と開くなり。

おんぎくでん いわ 御義口伝に云く此の文は無明即法性の明文なり、其の故は智積難問の言

いまいま おわ 未だ訖らざるに竜女三行半の偈を以て答うるなり、難問の意は別教の

むみょう りゆうによ えんきよう 意なり無明なり竜女の答は円教の意なり法性なり、智積は元品の無明

りゆうによ ほつしやう になり竜女は法性の女人なり仍て無明に即する法性法性に即する無明

いまにちれん たぐ な むみょうほうれんげきよう となり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは

かみ 言論未訖なり、時とは上の事の末末の事の始なり時とは無明法性同時の

な むみょうほうれんげきよう と な たてまつ 時なり南無妙法蓮華經と唱え奉る時なり、智積菩薩を元品の無明と云う

ふしん ふしん 事は不信此女の不信の二字なり不信とは疑惑なり疑惑を根本無明と云う

りゆうによ ほつしやう なり、竜女を法性と云う事は我闡大乘教の文なり竜女とは竜は父な

りゆうによ りゆうによ り女は八歳の娘なり竜女の二字は父子同時の成仏なり、其の故は時

りゆうおう これ すて りゆうおう むすめ 竜王女の文是なり既に竜王の女と云う間竜王は父なり女とは八歳の

じようぶつ 子なり、されば女の成仏は此の品にあり父の竜の成仏は序品に之れ在

り、有八竜王の文是なり、然りと雖も父子同時の成仏なり序品は一經の序なる故なり、又聞成菩提とは竜女が智積を責めたる言なりされば唯我が成仏をば仏御存知あるべしとて又聞成菩提唯仏当証知と云えり苦の衆生とは別して女人の事なり、此の三行半の偈は一念三千の法門なり遍照於十方とは十界なり、殊には此の八歳の竜女の成仏は帝王持経の先祖たり、人王の始は神武天皇なり神武天皇は地神五代の第五の鶉萱葺不合尊の御子なり此の葺不合尊は豊玉姫の子なり此の豊玉姫は沙竭羅竜王の女なり八歳の竜女の姉なり、然る間先祖法華経の行者なり甚深甚深云云、されば此の提婆の一品は一天の腰刀なり無明煩惱の敵を切り生死愛着の繩を切る秘法なり、漢高三尺の劍も一字の智劍に及ばざるなり妙の一字の智劍を以て生死煩惱の繩を切るなり、提婆は火炎を顕し竜女は大蛇を示し文殊は智劍を顕すなり仍つて不動明王の尊形と

口伝くでんせり、提婆だいばは我等われらが煩惱ぼんのう即菩提そくぼだいを顯あらわすなり、竜女りゅうにょは生死しょうじ即涅槃そくねはんを顯あらわすなり、文殊もんじゆをば此こゝには妙徳みょうとくと翻かへするなり煩惱ぼんのう生死しょうじ具足ぐそくして当品とうひんの能化のうけなり。

第八 有一宝珠ほうしゆの事 文句もんくの八はちに云いく一ひととは珠たまを献たまじて円解えんげを得えることを

表あらわすと。

御義おんぎ口伝くでんに云いく一ひととは妙法蓮華經みょうほうれんげきやうなり宝たまとは妙法みょうほうの用もちなり珠たまとは妙法みょうほうの体たいなり、妙ゆゑの故ゆゑに心法しんぽうなり法ぽうの故ゆゑに色法しきぽうなり色法しきぽうは珠たまなり心法しんぽうは宝たまなり妙法みょうほうとは色心不二しきしんふになり、一念三千いちねんさんぜんを所表しよひょうして竜女宝珠りゅうにょほうしゆを奉たてまつるなり、釈しやくに表得円解ひょうとくえんげと云いうは一念三千いちねんさんぜんなり、竜女りゅうにょが手に持もてる時は性得しやうとくの宝珠ほうしゆなり仏受ぶつじゆけ取り給たまう時は修得しゆとくの宝珠ほうしゆなり、中に有あるは修性不二しゆしやうふになり、甚はなはだ疾とんこくとは頓極とんこく・頓速とんそく・頓証とんしやうの法門ほうもんなり即為疾得無上仏道そくいしつとくむじやうぶつどうなり、神力じんりきとは神じんは心法しんぽうなり力りきとは色法しきぽうなり觀我成仏くわがじやうぶつとは舍利弗竜女しやりほつりゅうにょが成仏じやうぶつと思うが

ひがごと 僻事なり、我が成仏じょうぶつぞと観かんぜよと責めたるなり、観かんに六則観こく之れ有り爰元いんもと
の観かんは名字即みょうじそくの観かんと心得こころえ可きなり、其そのの故ゆえは南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと聞ける処ところ
を一念坐道場いちねん どうじやうじやうぶつ成仏じょうぶつ不虛也ふみよと云えり、變成男子りゆうにょとは竜女りゆうにょも本地南無
妙法蓮華經みょうほうれんげきやうなり其その意經文きやうもんに分明ふんみやうなり。

勸持品十三箇の大事かんじほん

747P

第一 勸持だいいちの事かんじ

御義口伝おんぎくでんに云く勸いとは化他持けたとは自行じぎやうなり南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうは自行化他じぎやうけたに
亘わたるなり、今日蓮等けふにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうを勸すすめて持たしむるなり。

第二 不惜身命おしんみやうの事

御義口伝おんぎくでんに云く身みとは色法命しきほふめいとは心法しんぽうなり事理じりの不惜身命おしんみやう之れ有り、
法華ほつげの行者ぎやうじやでんばた田畠等おしんみやうを奪うばはるは理みやうこんの不惜身命おしんみやうなり命根めいこんを断きたるを事ことの不

惜身命おしんみょうと云いふなり、今日蓮等の類いまにちれんい南無妙法蓮華經たぐと唱となえ奉たてまつる者は事理じり共に値あうなり。

第三 心不実故ふじつの事

御義口伝おんぎくでんに云いく心不実故ふじつとは法華最第一ほっけさいだいいちの經文きょうもんを第三と讀み最さい為其上きやうもんの經文きやうもんを最さい為其下さいと讀みて法華經ほけきやうの一念三千いちねんさんぜんを華嚴けこん・大日等だいにちに之これ有りとほほつけ法華そくしんじやうぶつの即身成仏だいにちきやうを大日經だいに取り入るこは此等これらは皆みな・心不実故ふじつなり、いまにちれんたぐ今日蓮等なむみやうほうれんげきやうの類ない南無妙法蓮華經となと唱たてまつえ奉たてまつる者は心実なるべし云云。

第四 敬順ぶつゐ仏意ぶつゐの事

御義口伝おんぎくでんに云いく法華經ほけきやうに順ぶつゐずるは敬順ぶつゐ仏意ぶつゐなり意なとは南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうこれいまにちれん是なり、今日蓮等たぐの類ない南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつるは敬順ぶつゐ仏意ぶつゐの意なり。

第五 作師子吼ししくの事

御義口伝おんぎくでんに云いく師子吼ししくとは仏の說せつなり說法せつぽうとは法華別ほっけしては南無なむ

みょうほうれんげきよう
妙法蓮華經なり、師とは師匠授くる所の妙法子とは弟子受くる所の
みょうほう
妙法吼とは師弟共に唱うる所の音声なり作とはおこすと読むなり、末法
なむみょうほうれんげきよう
にして南無妙法蓮華經を作すなり。

第六 如法修行の事

おんぎくでん いわ しゅぎよう
御義口伝に云く如法修行の人とは天台・妙楽・伝教等なり、今日蓮等
たぐ なむみょうほうれんげきよう とな たてまつ
の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは如法修行なり云云。

第七 有諸無智人の事

おんぎくでん いわ いちもんふつう
御義口伝に云く一文不通の大俗なり惡口罵詈等分明なり日本国の俗を諸
と云うなり。

第八 惡世中比丘の事

おんぎくでん いわ あくせ びく
御義口伝に云く惡世中比丘の惡世とは末法なり比丘とは謗法たる弘法等
これ ほっけ ごんきよう じゃち いまにちれん
是なり、法華の正智を捨て權教の邪智を本とせり、今日蓮等の類い南無

みょうほうれんげきょう とな たてまつ
妙法蓮華經と唱え奉る者は正智の中の大正智なり。

第九・或有阿練若の事
ある あれんにや

おんぎくでん いわ
御義口伝に云く第三の比丘なり良觀等なり如上六通羅漢の人と思うなり。

第十自作此經典の事
きようてん

おんぎくでん いわ ほけきょう な
御義口伝に云く法華經を所作して読むと謗す可しと云う經文なり。

第十一為斯所輕言汝等皆是仏の事
なんじ みな

おんぎくでん いわ ほつけ ぎようじゃ あな
御義口伝に云く法華雜の行者を蔑づり生仏と云うべしと云う經文なり、
是は輕心を以て誇るなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者
を云う可きなり。

第十二惡鬼入其身の事
あつき

おんぎくでん いわ あつき ほうねん こうほう これ こくおう だいじん
御義口伝に云く惡鬼とは法然・弘法等是なり入其身とは國王・大臣・

ばんみん 万民等の事なり、いまにちれん 今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るを怨むべし

と云う事なり、鬼とは命を奪う者にして奪功德者と云うなり、くどく 法華經は

さんぜしよぶつ みようこん 三世諸仏の命根なり此の經は一切菩薩の功德を納めたる御經なり。

第十三但信無上道の事 むじょうどう

おんぎくでんいわ むじょうどう 御義口伝云く無上道とは南無妙法蓮華經是れなり、なむみようほうれんげきようこ 今日蓮等の類い南無

みようほうれんげきよう おし 妙法蓮華經を惜しむ事は命根よりも惜しき事なり、みようこん 之に依つて結ぶ処

じち わがこころ に仏自知我心と説かれたり法華經の行者の心中をば教主釈尊の

ごそんじあ べ 御存知有る可きなり、しゃくそん わがこころ 仏とは釈尊我心とは今日蓮等の類い南無

みようほうれんげきよう とな たてまつ 妙法蓮華經と唱え奉る者なり。

あんらくぎようほん 安樂行品五箇の大事 だいじ

第一 だいいち あんらくぎようほん 安樂行品の事

おんぎくでん いわ みようほうれんげきよう あんらく まつぼう おい いまにちれん 御義口伝に云く妙法蓮華經を安樂に行ぜむ事末法に於て今日蓮等の類い

の修行は妙法蓮華經を修行するに難來るを以て安樂と意得可きなり。

第二 一切法空の事

御義口伝に云く此下に於て十八空之有り十八空の体とは南無妙法蓮華經
是なり十八空は何れも妙法の事なり。

第三 有所難問不以小乘法答等の事

御義口伝に云く対治の時は權教を以て会通す可からず。

一切種智とは南無妙法蓮華經なり一切は万物なり種智は万物の種なり
妙法蓮華經是なり、又云く一切種智とは我等が一心なり一心とは万法の
惣体なり之を思ふ可し。

第四 無有怖畏加刀杖等の事

御義口伝に云く迹化の菩薩に刀杖の難之れ有る可からずと云う經文な
り、勸持品は末法華の行者に及加刀杖者数数見擯出と此の品には

これなし、彼は末法の折伏の修行此の品は像法攝受の修行なるが故なり云云。

第五 有人來欲難問者諸天昼夜等の事

御義口伝に云く末法に於て法華を行ずる者をば諸天守護之有る可し常為法故の法とは南無妙法蓮華經なり。

涌出品一箇の大事

第一 唱導之師の事

御義口伝に云く涌出の一品は悉く本化の菩薩の事なり、本化の菩薩の所作として南無妙法蓮華經なり此れを唱と云うなり導とは日本國の一切衆生を靈山淨土へ引導する事なり、末法の導師とは本化に限ると云うを師と云うなり、此の四大菩薩の事を釈する時、疏の九を受けて輔正記の九に云く「經に四導師有りとは今四徳を表す上行は我を表し無辺行

は常を表し淨行は淨を表し安立行は樂を表す、有る時には一人に此
の四義を具す二死の表に出づるを上行と名け断常の際を踰ゆるを
無辺行と称し五住の垢累を超ゆる故に淨行と名け道樹にして徳円かな
り故に安立行と曰うなり」と今日蓮等の類南無妙法蓮華經と唱え奉る
者は皆地涌の流類なり、又云く火は物を焼くを以て行とし水は物を淨む
るを以て行とし風は塵垢を払うを以て行とし大地は草木を長ずるを以て
行とするなり四菩薩の利益是なり、四菩薩の行は不同なりと雖も、俱に
妙法蓮華經の修行なり、此の四菩薩は下方に住する故に釈に「法性之
淵底玄宗之極地」と云えり、下方を以て住处とす下方とは真理なり、
輔正記に云く「下方とは生公の云く住して理に在るなり」と云云、此の
理の住处より顕れ出づるを事と云うなり、又云く千草万木・地涌の菩薩
に非ずと云う事なし、されば地涌の菩薩を本化と云えり本とは過去久遠

五百塵点じんてんよりの利益りやくとして無始無終むしむしゆうの利益りやくなり、此の菩薩ぼさつは本法しよじ所持しよじの人なり本法しよじとは南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようなり、此の題目だいもくは必ず地涌じゆの所持しよじの物にして迹化しやつけの菩薩ぼさつの所持しよじに非ず、此の本法しよじの体より用を出して止観しかんと弘ひろめ一念三千いちねんさんぜんと云う、惣そうじて大師人師だいしにんしの所釈しよしゃくも此の妙法みょうほうの用を弘ひろめ給たまうなり、此の本法しよじを受持じゆじするは信の一字いちじなり、元品がんぽんの無明むみようを対治たいじする利剣りけんは信の一字いちじなり無疑うたがいわしん曰信うたがの釈い之わしんを思ふ可べし云云。

御義口伝卷上おんぎくでん

弘安元年 戊寅 正月一日

執筆しつぴつ

◆九五 御義口伝 卷下おんぎくでん

日蓮所立自寿量品至開結二經にちれんしよりゆう じゆりようぼん

752P

寿量品廿七箇の大事じゆりようぼん だいじ

第一 南無妙法蓮華經如來壽量品第十六の事だいいち なむみょうほうれんげきようによらいじゆりようぼん 文句もんくの九に云いわく如來によらいとは

じゅつぼうさんぜ　しよぶつ
十方三世の諸仏二仏三仏本仏迹仏の通号なり別しては本地三仏の別号
なり、
じゅりよう　しよぶつ
寿量とは詮量なり、
じゅつぼうさんぜ　しよぶつ　くどく
十方三世二仏三仏の諸仏の功德を詮量す
ゆえ　じゅりようほん
故に寿量品と云うと。

おんぎくでん　いわ　だいもく　にちれん
御義口伝に云く此の品の題目は日蓮が身に当る大事なり神力品の付属
これ　によらい　しゃくせんそう　じゅつぼうさんぜ　しよぶつ　ほんちむさく
是なり、
いまだん　いまにちれん　たぐ　そう　によらい　いつさいしゅじよう
の三身なり、
にちれん　でし　だんな　むさ　さんじん　まっぼう　ほけきよう　ぎようじゃ
ては日蓮の弟子・檀那なり、
むさ　さんじん　なむ　みようほうれんげきよう　じゅりようほん
なり無作の三身の宝号を南無妙法蓮華經と云うなり、
だいじ　これ　そく　にやらい　りそく　ほんぶ　こうべ
大事とは是なり、
なむ　みようほうれんげきよう　ちようだい　たてまつ　みようじそく　そのゆえ
南無妙法蓮華經を頂戴し奉る時名字即なり、
だいもく　たてまつ　しゅぎよう　かんぎようそく　かんぎようそく
題目なるが故なり聞き奉りて修行するは観行即なり此の観行即とは事
いちねんさんぜん　ほんそん　わくしよう　そうじそく
の一念三千の本尊を観ずるなり、
さて惑障を伏するを相似即と云うなり

化他けたに出づるを分真即ぶんしんそくと

云むさうなり無作さんじんの三身の仏なりと究竟くきようしたるを究竟即くきようそくの仏とは云うなり、
惣そうじて伏惑を以て寿量品じゅうりょうぼんの極とせず唯凡夫ただほんぶの当体とうたい・本有ほんぬの儘ままを此の品の
こくり 二こうろべ
極理と心得可きなり、無作むさの三身さんじんの所作しよさは何物なにものぞと云う時南無なむ
みようほうれんげきよう
妙法蓮華經なり云云。

によういひみつじんつう

第二如来秘密神通之力の事

御義口伝おんぎくでんに云く無作三身の依文いわなり、此の文に於て重重そうでんの相伝これあ之有り、
じんつう われらししゅじよう
神通之力とは我等衆生の作作發發と振る舞う処ところを神通と云うなり獄卒ごくそつ
ざいにん こえ みなじんつう
の罪人を苛責する音も皆神通乃力生住異滅しやうじゅういめつの森羅三千の当体とうたい悉く神通之
いまにちれん
力の体なり、今日蓮等の類たぐの意は即身成仏そくしんじやうぶつと開覺かいかくするを如来秘密神通
じやうぶつ
之力とは云うなり、成仏するより外ほかの神通じんつうと秘密ひみつとは之れ無きなり、此
むさ さんじん
の無作の三身をば一字を以て得たり所謂信いわゆるの一字なり、仍よつて經いわに云く

「我等当信受仏語」と信受の二字に意を留む可きなり。

第三我実成仏已来無量無辺等の事会

おんぎくでん がじつじょうぶつらいむりょうむへん
御義口伝に云く我実とは釈尊の久遠実成道なりと云う事を説かれたり、
然りと雖も当品の意は我とは法界の衆生なり十界己己を指して我と云
うなり、実とは無作三身の仏なりと定めたり此れを實と云うなり成とは
能成所成 なり成は開く義なり法界無作の三身の仏なりと開きたり、仏
とは此れを覚知するを云うなり已とは過去なり来とは未来なり已来の言
の中に現在是有るなり、我実と成けたる仏にして已も来も無道なり無辺
なり、百界千如・一念三千と説かれたり、百千の二字は百は百界千は千
如なり此れ即ち事の一念三千なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と
唱え奉る者は寿命品の本主なり、惣じては迹化の菩薩此の品に手をつけ
いろいろべきに非ざる者なり、彼は迹表本裏・此れは本面迹裏・然りと

雖も而も当品は末法の要法に非ざるか其の故は此の品は在世いえずしか

の脱益なり題目の五字計り当今の下種なり、然れば在世は脱益滅後は下種だいまく ごじばか とうこん げしゅ
なり仍て下種を以て末法の詮と為す云云。よつ げしゅ まっぽう な

第四如来如実知見三界之相無有生死の事によらいによじつちけんさんがい

御義口伝に云く如来とは三界の衆生なり此の衆生を寿量品の眼開けおんぎくでん いわ によらい さんがい しゅじょう
てみれば十界本有と実の如く知見せり・三界之相とは生老病死なりじゅっかいほんぬ ごと ちけん さんがい しやうろうびやうし
本有の生死とみれば無有生死なり生死無ければ退出も無し唯生死無きにほんぬ しょうじ しょうじ ただしやうじ
非ざるなり、生死を見て厭離するを迷と云い始覚と云うなりさて本有のあら しょうじ しょうじ おんり まよい い しかく ほんぬ
生死と知見するを悟と云い本覚と云うなり、今日蓮等の類い南無しょうじ ちけん い ほんがく いまにちれん たぐ なむ
妙法蓮華經と唱え奉る時本有の生死本有の退出と開覚するなり、又云くみやうほうれんげきやう とな たてまつ ほんぬ しょうじほんぬ かいかく
無も有も生も死も若退も若出も在世も滅後も悉く皆本有常住の振舞なりむ も しょう も じ も じやくたい も じやくしゅ も ざいせ めつこ こことみなほんぬじやうじゆう ふるまい
無とは法界同時に妙法蓮華經の振舞より外は無きなり有とはむ とは ほうがいどうじ みやうほうれんげきやう ふるまい

地獄じごくは地獄じごくの有ままじゅうの儘かいほん十界しゅうかい本有ほんぬの妙法みょうほうの全体ぜんたいなり、生なまとは妙法みょうほうの生なまなれば随縁ずいえんなり死しとは寿量じゅうりょうの死しなれば法界ほっかい同時どうじに責如せきごなり若退じやくたいの故ゆえに滅後めつごなり若出じやくしゅつの故ゆえに在世ざいせいなり、されば無死退滅むしつたいめつは空くうなり有生うしゅ出在しゅつざいは仮かりなり如来にょらい如実じよじつは中道ちゅうどうなり、無死退滅むしつたいめつは無作むさの報身ほうしんなり有生うしゅ出在しゅつざいは無作むさの応身おうじんなり如来にょらい如実じよじつは無作むさの法身ほっしんなり、此この三身さんじんは我が一身いしんなり、一身いしん即三身そくさんじん名為秘みとは是これなり、三身さんじん即一身いしん名為密みつも此この意いなり、然しからば無作むさの三身さんじんの当体とうたいの蓮華れんげの仏ぶつとは日蓮にちれんが弟子でし・檀那だんな等ななり南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうの宝号たうごうを奉たてまつる故ためなり云云。

第五 若くじゅう仏久住くじゅう於世薄徳せんこんびんぐげせん之人とんじゆく不種善根ぜんこん貧窮びんぐ下賤げせん貪著とんじゆく五欲ごよく入於憶想妄見網中

の事

御義口伝おんぎくでんに云いわく此この經文きやうもんは仏世くじゅうに久住くじゅうしたまわば薄徳せんこんの人は善根ぜんこんを殖うゆべ可べからず然しかる間妄見網中しやせんと説しよせんかれたり、所詮しよせん此この薄徳せんこんとは在世ざいせいに漏もれた

衆生しゅじょう今滅後めつご日本國にほんこくに生れたり、所謂いわゆる念仏・禪・真言等しんごんの謗法ほうぼうなり、不種善根ぜんぜんとは善根ぜんこんは題目だいもくなり不種ふしゅとは未だ持たざる者なり、憶想しやへいとは捨閉しかへいかくほう閣拋かくほう第三の劣等か此ことの如きの憶想なり、妄ごんきやうもうごとは權教妄語きやうぎやうの經教きやうぎやうなり見は邪見じゃけんなり法華第一ほつけさいだいの一を第三と見るが邪見じゃけんなり、網中とは謗法不信ほうぼうふしんの家なり、今日蓮等にちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱え奉る者となはかかる妄見たてまつの經網中の家を離れたる者なり云云。

第六 飲他毒藥發悶亂宛轉于地もんらんの事

御義口伝おんぎくでんに云く他いわとは念仏・禪・真言しんごんの謗法ほうぼうの比丘びくなり、毒藥ごんきやうとは權教ごんきやう方便ほうべんなり法華ほつけの良藥りやうやくに非ず故ゆえに悶亂もんらんするなり悶もんとはいきたゆるなり、じゆりやうぼん壽量品の命なきが故ゆえに悶亂もんらんするなり宛轉あびじこく于地とは阿鼻地獄あびじこくへ入るなり云云。諸子しよ飲毒しよの事は釈いわに云く「邪師じゃしの法しんじゆを信受しんじゆするを名けて飲毒なと為す」と、諸子しよとは謗法ほうぼうなり飲毒みだとは弥陀大日等みだだいの權法ごんぼうなり、今日蓮等いまにちれんの類たぐ

南無妙法蓮華經と唱え奉るは毒を飲まざるなり。

第七・或矢本心・或不失者の事

御義口伝に云く本心を失うとは謗法なり本心とは下種なり不失とは
法華經の行者なり失とは本有る物を失う事なり、今日蓮等の類い南無
妙法蓮華經と唱え奉るは本心を失わざるなり云云

第八擣☆符和合与子令服の事

御義口伝に云く此の經文は空仮中の三諦戒定慧の三学なり、色香美味の
良藥なり擣は空諦なり☆は仮諦なり和合は中道なり与は投与なり子は
法華の行者なり服すると云うは受持の義なり、是を此大良藥色香美味
皆悉具足と説かれたり、皆悉の二字万行方善・諸波羅蜜を具足したる大
良藥たる南無妙法蓮華經なり、色香等とは一色一香・無非中道にして
草木成仏なり、されば題目の五字に一法として具足せずと云う事なし

もし服する者は速除苦惱なり、されば妙法の大良薬を服するは
貪・瞋・癡の三毒の煩惱の病患を除くなり、法華の行者南無妙法蓮華經
と唱え奉る者は謗法の供養を受けざるは貪欲の病を除くなり、法華の
行者は罵詈せらるれども忍辱を行ずるは脹意の病を除くなり、法華經の
行者は是人於仏道決定無有疑と成仏を知るは愚痴の煩惱を治するな
り、されば大良薬は末法の成仏の甘露なり、今日蓮等の類い南無
妙法蓮華經と唱え奉るは大良薬の本主なり。

第九毒氣深入矢本心故の事

御義口伝に云く毒氣深入とは権教謗法の執情深く入りたる者なり、之
に依つて法華の大良薬を信受せざるなり服せしむると雖も吐き出だすは
而謂不美とてむまからずと云う者なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經
と唱え奉るは而謂不美の者に非ざるなり。

第十 是好良藥今留在此汝可取服勿憂不差の事

おんぎくでん いわ ぜこうりょうやく
御義口伝に云く是好良藥とは・或は經教・或は舍利なりさて末法にて

なむみょうほうれんげきょう
は南無妙法蓮華經なり、好とは三世諸仏の好み物は題目の五字なり、今留

まっぽう
とは末法なり此とは一閻浮提の中には日本国なり、汝とは末法の一切

しゅじょう ほけきょう じゅじ
衆生なり取は法華經を受持する時の儀式なり、服するとは唱え奉る事な

むさ さんじん しじょうしやうかく げんいゆ
り服するより無作の三身なり始成正覺の病患差るなり、今日蓮等の類い

なむみょうほうれんげきょう とな たてまつこれ
南無妙法蓮華經と唱え奉る是なり。

第十一 自我得仏來の事

おんぎくでん いわ いっくさんじん なら
御義口伝に云く一句三身の習いの文と云うなり、自とは九界なり我とは

ぶつかい じゅつかい ほんぬむさ さんじん
仏界なり此の十界は本有無作の三身にして来る仏なりと云えり、自も我

じゅつかいほんぬ めいぶん
も得たる仏來れり十界本有の明文なり、我は法身・仏は報身・來は応身

さんじん むしむしゅう こぶつ じとく
なり此の三身・無始無終の古仏にして自得なり、無上宝聚不求自得之を

思う可し、然らば即ち顯本遠寿の説は永く諸教に絶えたり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは自我得仏來の行者なり云云。

第十二為度衆生故方便現涅槃の事

御義口伝に云く涅槃經は法華經より出でたりと云う經文なり、既に方便

と説かれたり云云。

第十三 常住此説法の事

御義口伝に云く常住とは法華經の行者の住処なり、此とは娑婆世界なり山谷曠野を指して此とは説き給う、説法とは一切衆生の語言の音声

第十四 時・我及衆僧俱出靈鷲山の事

御義口伝に云く靈山一会儼然未散の文なり、時とは感応末法の時なり我

とは釈尊及とは菩薩聖衆を衆僧と説かれたり俱とは十界なり

靈鷲山とは寂光土なり、時に我も及も衆僧も俱に靈鷲山に出ずる

なり秘す可し秘す可し、本門事の一念三千の明文なり御本尊は此の文を

顯し出だし給うなり、されば俱とは不變真如の理なり出とは隨緣真如の

智なり俱とは一念なり出とは三千なり云云。

又云く時とは本時娑婆世界の時なり下は十界宛然の曼陀羅を顯す文な

り、其の故は時とは末法第五時の時なり、我とは釈尊及は菩薩衆僧は

二乗俱とは六道なり・出とは靈山淨土に列出するなり靈山とは御本尊

並びに日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者の住所を説くなり云

云。

第十五 衆生見劫尽○而衆見燒尽の事

御義口伝に云く本門寿量の一念三千を頌する文なり、大火所焼時とは
実義には煩惱の大火なり、我此土安穩とは国土世間なり、衆生所遊樂と
は衆生世間なり、宝樹多華菓とは五陰世間なり是れ即ち一念三千を分明
に説かれたり、又云く上の件の文は十界なり大火とは地獄界なり天鼓と
は畜生なり人と天とは人天の二界なり、天と
人と常に充滿するなり、雨曼陀羅華とは声聞界なり園林とは縁覺界な
り菩薩界とは及の一字なり仏界とは散仏なり修羅と餓鬼界とは憂怖諸苦
悩如是悉充滿の句に摂するなり、此等を是諸罪衆生と説かれたり、然り
と雖も此の寿量品の説顯われては、則皆見我身とて一念三千なり、今日蓮
等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者はなり云云。

第十六 我亦為世父の事

御義口伝に云く我とは釈尊一切衆生の父なり主師親に於て仏に約し經

に約す、仏に約すとは迹門しやくもんの仏の三徳さんとくは今此三界こんしさんがいの文これなり、本門ほんもんの仏しゅしんの主師親さんとくの三徳さんとくは主の徳は我此土安穩しどあんのんの文なり師の徳は常説法教化せつぽうきょうけの文なり親の徳は此の我亦また為世父これの文これなり、妙樂大師みょうらくだいしは壽量品じゆりやうほんの文しきやうを知らざる者は不知恩ふちおんの畜生ちくしやうと釈しゃくし給たまへり經に約すれば、諸經中王しよきやうは主の徳なり能救一切衆生いっさいしじやうは師の徳なり又如大梵天王一切衆生之父の文は父の徳なり、今日蓮等の類いまにちれんい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつる者は一切衆生の父むげんじこくなり無間地獄むげんじこくの苦を救う故なり云云、涅槃經ねはんぎやうに云く「一切衆生の異の苦を受くるは悉ことごとくく是れ如來一人の苦」と云云、日蓮にちれんが云く一切衆生の異の苦を受くるは悉ことごとくく是れ日蓮一人の苦なるべし。

第十七 放逸ほういつ著五欲墮だ おあくどう於惡道中の事

御義口伝おんぎくでんに云く放逸ほういつとは謗法ほうぼうの名なり入阿鼻獄にゅうあびごく疑うたがひ無なき者ものなり、今日蓮いまにちれん等の類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつる者は此の經文きやうもんを免離めんりせり云云。

第十八

行道 不行道ぎようどうふぎようどうの事

御義口伝おんぎくでんに云くいわ十界じゅうかいの衆生しゅじょうの事を説くなり行道ぎようどうは四聖ししやうふぎようどう不行道ふぎようどうは六道ろくどうなり、又云くいわ行道ぎようどうは修羅しゆら・人天にんてんふぎようどう不行道ふぎようどうは三惡道さんあくどうなり、所詮しよせんまっぼう末法まっぼうに入つてはほつけ法華ぎようじやの行者ぎようどうは行道ぎようどうなり謗法ほうほうの者は不行道ふぎようどうなり、道ほけきやうとは法華經ほけきやうなり、天台云くてんだいいわ「仏道ぶつどうとは別して今の經を指す」と、今日蓮等の類いまにちれんい南無なむ妙法蓮華經みやうほうれんげきやうと唱え奉るは行道ぎようどうなり唱えざるは不行道ふぎようどうなり云云。

第十九

每自作是念さぜねんの事

御義口伝おんぎくでんに云くいわ每さんぜとは三世さんぜなり自とは別しては釈尊しゃくそん惣じては十界じゅうかいなり、是念むさほんぬとは無作本有なむみやうほうれんげきやうの南無妙法蓮華經いちねんの一念いちねんなり、作とは此の作は有作あらむさほんぬの作に非ず無作本有なむみやうほうれんげきやうの作なり云云、広く十界じゅうかいほんぬ本有ほんぬに約して云わば自とは万法ここの己ごの当体とうたいなり、是念じこくとは地獄かしゃくの呵責その音其いっさいしゅじやうの外一切衆生ねんねんみなの念念ねんねん皆是ここのれ自受用報身の智これなり是を念とは云うなり、今日蓮等の類いまにちれんい南無なむ

みょうほうれんげきょう とな たてまつ
妙法蓮華經と唱え奉る念は大慈悲の念なり云云。

第二十 得入無上道等の事

おんぎくでん いわ むじょうどう
御義口伝に云く無上道とは寿量品の無作の三身なり此の外に成就じょうじゅぶっしん 仏身
こ いまにちれん たぐ な む みょうほうれんげきょう とな たてまつ じょうじゅぶっしんうたがい
之れ無し、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は成就じょうじゅぶっしん 仏身疑
無きなり云云。

第廿一 自我偈の事

おんぎくでん いわ
御義口伝に云く自とは九界なり我とはぶっしん 仏身なり偈ことわり とはことわるなり
ほんぬ
本有とことわりたる偈げじゅ 頌なり深く之これ を案べ ず可ことわり し、偈ことわり 様とは南無
みょうほうれんげきょう
妙法蓮華經なり云云。

第廿二 自我偈始終の事

おんぎくでん いわ
御義口伝に云く自とは始なり速成就そくじょうじゅうぶっしん 仏身の身は終りなり始終しじゅうじしん 自身なり
もんじ じゅよう
中の文字は受用なり、仍よ つて自我偈は自受用身なり法界ほっかい を自身じしん と開き

ほっかいじじゅうしん
法界自受用身なれば自我偈に非ずと云う事なし、自受用身とは
いちねんさんぜん
一念三千なり、伝教云く「一念三千即・自受用身・自受用身とは尊形
でんぎょういわ いちねんさんぜんそく じじゅうしん じじゅうしん
を出でたる仏と・出尊形仏とは無作の三身と云う事なり」云云、今日蓮
い そんぎよう むさ さんじん いまにちれん
等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者はなり云云。
たぐ なむ みようほうれんげきよう とな たてまつ これ

第廿三 久遠の事

おんぎくでん いわ
御義口伝に云く此の品の所詮は久遠実成なり久遠とははたらかさずつく
しよせん くおんじつじよう くおん
ろわずもとの儘と云う義なり、無作の三身なれば初めて成ぜず是れ働か
ま ま じつじつ じつじつ じつじつ じつじつ じつじつ じつじつ じつじつ じつじつ じつじつ
ざるなり、卅二相・八十種好を具足せず是れ繕わざるなり本有常住の仏
しゆじつ ぐそく こ つくろ ほんぬじようじゆう
なれば本の儘なり是を久遠と云うなり、久遠とは南無妙法蓮華經なり
ま ま これ くおん くおん なむ みようほうれんげきよう
じつじつじつじつ
実成無作と開けたるなり云云。

第廿四 此の寿量品の所化の国土と修行との事

おんぎくでん いわ
御義口伝に云く当品流布の国土とは日本国なり惣じては南閻浮提なり、
る ふ こくど にほんこく そう えんぶだい

所化とは日本国の一切衆生なり修行とは無疑日信の信心の事なり、授与の人とは本化地涌の菩薩なり云云。

第廿五建立御本尊等の事

御義口伝に云く此の本尊の依文とは如来秘密神通之力の文なり、戒定慧の三字は寿量品の事の三大秘法是れなり、日蓮慥に靈山に於て面受口決せしなり、本尊とは法華經の行者の一身の当体なり云云

第廿六寿量品の対告衆の事

御義口伝に云く經文は弥勒菩薩なり、然りと雖も滅後を本とする故に日本国の一切衆生なり、中にも日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者はなり、弥勒とは末法法華の行者の事なり、弥勒をば慈氏と云う法華の行者を指すなり、章安大師云く「為彼除惡即是彼親」と是れ豈弥勒

菩薩に非ずや云云

第廿七無作三身の事 種子尊形三摩耶

おんぎくでん いわ そんなぎよう
御義口伝に云く尊形とは十界本有の形像なり三摩耶とは十界所持の

物なり種子とは信の一字なり、所謂南無妙法蓮華經改めざるを云うなり

三摩耶とは合掌なり秘す可し秘す可し云云。

分別功德品三箇の大事

第一其有衆生聞仏壽命長遠如是乃至能生一念信解所得功德無有量の

事

御義口伝に云く一念信解の信の一字は一切智慧を受得する所の因種なり、

信の一字は名字即の位なり仍って信の一字は最後品の無明を切る利剣な

り、信の一字は寿命品の理頭本を信ずるなり解とは事頭本を解するなり

此の事理の頭本を一念に信解するなり、一念とは無作本有の一念なり、

此くの如く信解する人の功德は限量有る事有る可からざるなり、信の処

に解あり解の処に信あり然りと雖も信を以て成仏を決定するなり、
今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者はなり云云。

第二是則能信受如是諸人等頂受此經典の事

御義口伝に云く法華經を頭に頂くと云う明文なり、如是諸人等の文は
広く一切衆生に亘るなり、然らば三世十方の諸仏は妙法蓮華經を頂
き受けて成仏し給う、仍つて上の壽量品の題目を妙法蓮華經と題して
次に如来と題したり秘す可し云云、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と
唱え奉るは此の故なり云云。

第三仏子住此地則是仏受用の事

御義口伝に云く此の文を自受用の明文と云えり、此地とは無作の三身の
依地なり仏子とは法華の行者なり仏子は菩薩なり法華の行者は菩薩な
り住とは信解の義なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は

妙法みょうほうの地に住するなり仏ぶつの受用じゅうようの身なり深く之これを案べず可べし云云。

随喜品ずいき二箇だいいの大事

第一妙法蓮華經隨喜功德だいいちみょうほうれんげきようずいきくどくの事

御義口伝おんぎくでんに云く随いとは事理じりに随順ずいじゆんするを云うなり喜きとは自他じた共に喜ぶ事なり、事とは五百塵点じんてんの事頭本じとうほんに随順ずいじゆんするなり理りとは理頭本りとうほんに随したがうなり所詮しよせん壽量品じゆりようぼんの内証ないしやうに随順ずいじゆんするを随しよせんとは云うなり、然しかるに自他じた共に智慧ちえと慈悲じひと有るを喜あとは云うなり所詮しよせん今日蓮等こんにんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようと唱となえ奉たてまつる時必むず無作三身むささんじんの仏ぶつに成るを喜しよせんとは云うなり、然しかる間随かんずいとは法はふに約じゆりようし喜なむとは人に約するなり、人とは五百塵点じんてんの古仏こぶつたる釈尊法しゃくそんとは壽量品じゆりようぼんの南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようなり、是したがに随しい喜きぶを随喜ずいきとは云うなり惣そうじて随いとは信いみの異名いみなり云云、唯信心ただしんじんの事を隋たと云うなりされば二卷には随順ずいじゆん此經ちふん非己智分ちふんと説ちふんかれたり云云。

第二口氣無 ☆ 優鉢華之香常徒其口出の事

おんぎくでん いわ 御義口伝に云く口氣とは題目なり、無 ☆ 稼とは弥陀等の權教方便無得道

の教を交えざるなり、優鉢華之香とは 法華經なり、末法の今は題目な

り、方便品に如優量鉢華の事を一念三千と云えり之を案ず可し、常とは

三世常住 なり其口とは法華の行者の口なり出とは南無妙法蓮華經なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは 常徒其口出なり云云。

いまにちれん たぐ なむみょうほうれんげきょう とな たてまつ

法師功德品四箇の大事

第一法師功德の事

おんぎくでん いわ 御義口伝に云く法師とは五種法師なり功德とは六根 清淨 の果報なり、

所詮今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は六根 清淨 なり、さ

れば妙法蓮華經の法の師と成つて大なる 徳有るなり、功は幸と云う事

なり又は惡を滅するを功と云い善を生ずるを徳と云うなり、功德とは

そくしんじょうぶつ　ろっこんしやうじやう
即身成仏なり又六根清浄なり、法華經の説文の如く修行するを六根
しょうじやう
清浄と得意可きなり云云。

第二六根清浄の事

おんぎくでん　いわ　まなこ　くどく　ほっけふしん　むげん　だざい
御義口伝に云く眼の功德とは法華不信の者は無間に墮在し信ずる者は
じやうぶつ　まなこ　くどく
成仏なりと見るを以て眼の功德とするなり、法華經を持ち奉る処に眼
くどく　まなこ　ほっけきやう　だいじやうきやうてん　しよぶつ
の八百の功德を得るなり、眼とは法華經なり此の大乗經典は諸仏の
がもく　いまにちれん　たぐ　な　むみやうほうれんげきやう　とな　たてまつ　まなこ　くどく
眼目と、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は眼の功德を得
るなり云云、耳・鼻・舌・身・意又又此くの如きなり云云。

第三又如浄明鏡の事

おんぎくでん　いわ　ほっけきやう　たとえ　めいぶん　ろっこんしやうじやう
御義口伝に云く法華經に鏡の譬を説く事此の明文なり、六根清浄の人
るりみやうきやう　さんぜんせかい　きやうもん　いまにちれん　たぐ　な　む
は瑠璃明鏡の如く三千世界を見ると云う經文なり、今日蓮等の類い南無
みやうほうれんげきやう　とな　たてまつ　めいきやう　こと　ちけん
妙法蓮華經と唱え奉る者は明鏡に万像を浮ぶるが如く知見するなり、

此の明鏡めいきようとは法華經ほけきようなり別しては宝塔品ほうとうほんなり、又は我が一心いっしんの明鏡めいきようなり、所詮しよせん瑠璃るりと明鏡めいきようとの二の譬たとえを説かれたり身根しんこん清淨しやうじやうの下なり、色心しきしん不二ふになれば何れも清淨しやうじやうの徳分とくぶんなり淨とは不淨ふじやうに対して淨と云うなり明とは無明むみように対して明と説くなり、鏡とは一心いっしんなり淨は仮諦けたい・明は空諦くうたい・鏡は中道ちゆうどうなり悉見けんしよ諸色像しよしきざうの悉じゆつは十界じゆかいなり、所詮しよせん沖明鏡めいきようとは色心しきしんの二法ふたぽう、妙法蓮華經めうぼうれんげきようの体たいなり、淨明鏡じやうめいきようとは信心しんじんなり云云、又三千大子世界さんぜんせかいを知見ちけんするとは三世間せけんの事なり。

第四是人持此經安住希有地の事けう

御義口伝おんぎくでんに云く是人いわとは日本国にほんこくの一切衆生いっさいしゆじやうの中には法華ほつけの行者ぎやうじやなり希有地けうとは寿量品じゆりやうほんの事理じりの顯本けんぽんを指すなり、是これを又分別品ぶんべつには「仏説希有法ぶつせつけう」と説かれたり別しては南無妙法蓮華經なむめうぼうれんげきようなり、今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無なむ妙法蓮華經めうぼうれんげきようと唱え奉る者となの希有けうの地ちとは末法弘通まつぽうくつうの明鏡めいきようたる本尊ほんそんなり、

惣じては此の品の六根清淨の功德は十信相似即なり対告衆の常精進
菩薩は十信の第三信と云えり、然りと雜も末法に於ては法華經の行者
を指して常精進菩薩と心得可きなり此の經の持者は是則精進の故なり。

常不輕品三十箇の大事

763P

第一常不輕の事

御義口伝に云く常の字は三世の不輕の事なり、不輕とは一切衆生の
内証所具の三因仏性を指すなり仏性とは法性なり法性とは
妙法蓮華經なり云云。

第二得大勢菩薩の事

御義口伝に云く得とは応身なり大とは法身なり勢とは報身なり、又得と
は仮諦なり大とは中道なり勢とは空諦なり円融の三諦三身なり。

第三威音王いおんの事

御義口伝に云く威とは色法なり音とは心法なり王とは色心不二しきしんふにを王と云

うなり、末法まつぽうに入つて南無妙法蓮華經と唱え奉る是れ併いおんら威音王なり云

云、其の故は音とは一切いっさい權教の題目等なり威とは首題の五字ごじなり王とは

法華の行者ぎやうじやなり云云、法華の題目は獅子の吼ゆるが如く余經は余獸の音

の如ごとくなり諸經しよきやう中王の故に王と云うなり、今日蓮等の類たぐいい南無

妙法蓮華經と唱え奉る威音王いおんなり云云。

第四凡有所見しよけんの事

御義口伝に云く今日いま日本ほんこくの一切衆生いっさいしゆじやうを法華經の題目だいもくの機きなりと知見ちけんする

なり云云。

第五我深敬汝等不敢輕慢がじんきやう所以者何汝等きやうまん皆行菩薩道みな當得作仏ぼさつの事さぶつ

御義口伝に云く此の廿四字と妙法の五字は替われども其の意は之これ同じ

廿四字は略法華經なり。ほけきよう

第六但行礼拝の事

おんぎくでん 御義口伝に云く礼拝とは合掌がっしょうなり合掌がっしょうとは法華經ほけきようなり此れ即ち
いちねんさんぜん 一念三千なり、故に不專読誦經典どくじゆきやうてん但行礼拝と云うなり。

第七乃至遠見の事

おんぎくでん 御義口伝に云く上かみの凡有所見しよけんの見は内証所具ないしやうしよぐの仏性ぶつしやうを見るなり、此れ
は理なり遠見ししゆうの見は四衆ししゆうと云う間事なり仍つて上は心法を見る今は色法
を見る色法は本門ほんもんの開悟かいご四一開会なり、心法を見るは迹門しゃくもんの意又四一開
会なり、遠の一字は寿量品じゆりやうぼんの久遠くおんなり故に故往礼拝といえり云云。

第八心不浄者の事

おんぎくでん 御義口伝に云く謗法ほうぼうの者は色心しきしん二法共に不浄ふじやうなり、先ず心法不浄ふじやうの文は
今・此の心不浄ふじやう者なり、又身不浄ふじやうの文は譬喩品ひゆほんに「身常臭処垢穢不浄くえふじやう」

と云えり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は色心共に
清淨なり、身淨は法師功德品に云く「若持法華經其身甚清淨」の文
なり、心淨とは提婆品に云く「淨心信敬」と云云、淨とは法華經の信心
なり不淨とは謗法なり云云。

第九言は無智比丘の事

御義口伝に云く此の文は法華經の明文なり、上慢の四衆不輕菩薩を無智
の比丘と罵詈せり、凡有所見の菩薩を無智と云う事は第六天の魔王の所
為なり、末法に入つて日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は無智
の比丘と謗ぜられん事經文の明鏡なり、無智を以て法華經の機と定め
たり。

第十聞其所說皆信伏隨從の事

御義口伝に云く聞とは名字即なり所詮は而強毒之の題目なり、皆とは

じょうまん

上慢しじゅうの四衆等なり信とは無疑うたがいわっしん曰信なり伏とは法華ほつけに歸伏きふくするなり随と

は心こころを法華經ほけきょうに移すなり従とは身を此の經に移すなり、所詮いまにちれん今日蓮等の

たぐい

類なむい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと唱え奉る行者ぎやうじやは末法まつぽうの不輕菩薩ふぎようぼさつなり。

第十一於四衆中說法心無所畏の事

おんぎくでん

御義口伝ししゅうに云く四衆にほんこくとは日本国の中いっさいしゅじょうの一切衆生せつぽうなり說法なむとは南無

みょうほうれんげきょう

妙法蓮華經しんむしよいなり、心無所畏いまにちれんとは今日蓮等の類たぐいい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと呼ば

わる所の折伏しやくぶくなり云云。

ふぎようぼさつ

第十二常不輕菩薩豈異人乎則我身是の事

おんぎくでん

御義口伝かこに云く過去ふぎようぼさつの不輕菩薩しやくそんは今日の釈尊しやくそんなり、釈尊じゅりようぼんは壽量品きようしゆの

きようしゆ

教主じゅりようぼんなり壽量品きようしゆの教主われらとは我等ほけきよう・法華經ぎようじやの行者たぐいなり、さては我等ふぎようが

いまにちれん

事なり今日蓮等の類たぐいいは不輕ふぎようなり云云。

もんぼう

第十三常不值仏不聞法不見僧の事

御義口伝に云く此の文は不輕菩薩を輕賤するが故に三宝を拝見せざる事

二百億劫地獄に墮ちて大苦惱を受くと云えり、今末法に入つて日蓮等の

類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者を輕賤せん事は彼に過ぎたり、彼は

千劫此れは至無數劫なり末法の仏とは凡夫なり凡夫僧なり、法とは題目

なり僧とは我等行者なり、仏とも云われ又凡夫僧とも云わるるなり、深覺

・円理名之為仏の故なり円理とは法華經なり云云。

第十四畢是罪已復遇常不輕菩薩の事

御義口伝に云く若し法華誹謗の失を改めて信伏随従する共浅く有りては

無間に墮つ可きなり、先謗強きが故に依るなり千劫無間地獄に墮ちて後

に出づる期有つて又日蓮に値う可きなり復遇日蓮なるべし。

第十五於如来滅後等の事

御義口伝に云く不輕菩薩の修行は此の如くなり仏の滅後に五種に

妙法蓮華經みょうほうれんげきょうを修行しゆぎょうすべしと見えたり、正ただしくは是故こゝより下廿五字ごじは末法まつぽうにちれん
日蓮等たぐいの類るつういの事なるべし、既に是かくのゆゑの故にとおさえて於如来滅後にょらいめつごと説まづか
れたり流通るつうの品なる故なり、惣そうじては流通るつうとは未来当今の為なり、法華經ほけききょう
一部いちぶは一往いちおうは在世ざいせいの為なり再往さいおうは末法まつぽう当今の為なり、其そのの故は
妙法蓮華經みょうほうれんげきょうの五字ごじは三世さんぜの諸仏しよぶつ共に許みらいめつごして未来滅後の者の為なり、品品ほうもん
の法門ほうもんは題目だいもくの用なり体の妙法みょうほう末法の用たらば何ぞ用の品品別ならむ
や、此ほうもんの法門秘ほうもんす可し秘てんだいす可し、天台てんだいの「綱維こういを提きぐるに目として動きようだいか
ざるきようだいこと無ききが如みし」等と釈みする此の意なり、妙樂大師みょうらくだいしは「略りやくして經題きやうだい
を挙あぐるに玄おに一部おを収おさむ」と、此等こころえを心得まづざる者は末法まつぽうの弘通くつうに足ら
ざる者なり。

第十六此品の時の不輕菩薩ふぎようぼさつの体の事

御義口伝おんぎくでんに云く不輕菩薩ふぎようぼさつとは十界じゆっかいの衆生しゆじやうなり、三世常住さんぜじやうじゆうの礼拝らいはいの行

を立つるなり吐く所の語言は妙法の音声なり、獄卒が杖を取つて罪人を呵責するが体の礼拝なり敢えて輕慢せざるなり、罪人・我を責め成すと思えば不輕菩薩を呵責するなり折伏の行是なり。

第十七不輕菩薩の礼拝住処の事之に付て十四箇所の礼拝住処の事之有り
おんぎくでん じゅうしよ じゅうしよ じゅうしよ じゅうしよ
御義口伝に云く礼拝の住処とは多宝塔中の礼拝なり、其の故は塔婆とは五大の所成なり五大とは地水火風空なり此れを多宝の塔とも云うなり、
ほっかい 法界広しと雖も此の五大には過ぎざるなり故に塔中の礼拝と相伝するなり
秘す可し秘す可し云云。

第十八開示悟入礼拝住処の事

おんぎくでん かいじこにゆう しぶつちけん じゅうしよ
御義口伝に云く開示悟入の四仏知見を住処とするなり、然る間方便品の
じゅうしよ 此の文を礼拝の住処と云うなり此れは内に不輕の解を懷くと釈せり、解
しょういんぶつしょう ぐそく とは正因 仏性を具足すと釈するなり開仏知見とは此の仏性を開かしめ

んとて仏は出現し給うなり。

第十九每自作是念の文礼拝住処の事

おんぎくでん

さぜねん

じゅうしよ

の事

御義口伝に云く毎の字は三世なり念とは一切衆生の仏性を念じ給いし

なり、仍つて速成就仏身と皆当作仏とは同じき事なり仍つて此の一文を

そつでん

てんだいだいし

かいさんけんいつ

かいこんけんのん

相伝せり、天台大師は「開三顯一〇開近顯遠」と釈せり秘す可し秘す可

し云云。

第二十我本行菩薩道の文礼拝住処の事

おんぎくでん

ほんにんみょう

の事

御義口伝に云く我とは本因妙の時を指すなり、本行菩薩道の文は不輕

ぼさつ

じゅうしよ

菩薩なり此れを礼拝の住処と指すなり。

しやうろうびやうし

じゅうしよ

第廿一生老病死礼拝住処の事

おんぎくでん

いっさいしゅじやうしやうろうびやうし

おんり

むじやう

とうたい

まよい

御義口伝に云く一切衆生生老病死を厭離せず無常遷滅の当体に迷うに

こしやうほだい

かくち

依つて後世菩提を覚知せざるなり、此を示す時煩惱即菩提生死即涅槃と

教うる当体とうたいを礼拝と云うなり、左右の両の手を開く時は煩惱ぼんのう生死しじょう上慢じやうまん不輕ふぎよう各別なり、礼拝する時両の手を合するは煩惱ぼんのう即菩提生死じつぼだいしじょう即涅槃じくねはんなり、
上慢じやうまんの四衆ししじうの所具しよぐの仏性ぶつじやうも不輕ふぎよう所具しよぐの仏性ぶつじやうも一種みじやうの妙法みやうほうなりと礼拝するなり云云。

第廿二法性礼拝住处ほつじやうの事じゆうじよ

御義口伝おんぎくでんに云く不輕菩薩ふぎようぼさつ法性真如ほつじやうしんによの三因さんいん仏性ぶつじやう南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうの廿四字に足立て無明むみやうの上慢じやうまんの四衆ししじうを拝するは蘊在衆生うんざいしじやうの仏性ぶつじやうを礼拝するなり云云。

第廿三無明礼拝住处さんむの事じゆうじよ

御義口伝おんぎくでんに云く自他じたの隔意きやくいを立て彼は上慢じやうまんの四衆ししじう我ふぎようは不輕ふぎようと云う、不輕ふぎようは善人ぜんにん上慢じやうまんは悪人あくにんと善惡ぜんあくを立つるは無明むみやうなり、此に立つて礼拝れいはいの行を成す時善惡不二ぜんあくふに・邪正一如じやしじやういちによの南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうと礼拝するなり云云。

第廿四蓮華れんげの二字礼拝住処じゅうしよの事

御義口伝おんぎくでんに云く蓮華れんげとは因果いんがの二法なり、悪因あれば悪果を感じ善因あれば善果を感じず内証ないしやうには汝等三因さんいんぶつしやう仏性の善因あり、事に顕あらわす時は善果と成つて皆当作みなさぶつ仏す可しと礼拝はいし給うなり云云。

第廿五実報土礼拝住処じゅうしよの事

御義口伝おんぎくでんに云く実報土は豎の時は菩薩ぼさつの住処じゅうしよなり、仍つて不輕菩薩ふぎやうぼさつの住処じゅうしよを实報土と定めて此にて礼拝行を立て給う間実報土は礼拝じゅうしよの住処じゅうしよなり云云。

第廿六慈悲の二字礼拝住処じゅうしよの事

御義口伝おんぎくでんに云く不輕礼拝ふぎやうの行は皆当作みなさぶつ仏と教うる故に慈悲じひなり、既に杖木瓦石を以て打擲すれども而強毒にこうどくし之するは慈悲じひより起れり、仏心ぶつしんとは大慈悲じひ心是なりと説かれたれば礼拝じゅうしよの住処じゅうしよは慈悲じひなり云云。

第廿七礼拝住処分真即の事 じゅうしよ そく

御義口伝に云く菩薩は分真即の位と定むるなり、此の位に立つて理即の凡夫を礼拝するなり之に依つて理即の凡夫なる間・此の授記を受けずして無智の比丘と謗じたり云云。

第廿八究竟即礼拝住処の事 くきようそく じゅうしよ

御義口伝に云く凡有所見の見は仏知見なり、仏知見を以て上慢の四衆を礼拝する間究竟即を礼拝の住処と定むるなり云云。

第廿九法界礼拝住処の事 ほっかい じゅうしよ

御義口伝に云く法界に立て礼拝するなり法界とは広きに非ず狭きに非ず惣じて法とは諸法なり界とは境界なり、地獄界乃至仏界各各界を法る間不輕菩薩は不輕菩薩の界に法り上慢の四衆は四衆の界に法るなり、仍て法界が法界を礼拝するなり自他不二の礼拝なり、其の故は不輕菩薩の四衆

を礼拝すれば上慢じょうまんの四衆所具ししゅうしよぐの仏性ぶつじょう又不輕菩薩ふぎょうぼさつを礼拝するなり、鏡に向つて礼拝を成す時浮べる影又我を礼拝するなり云云。
じゅうしよ

第卅礼拝住処忍辱地の事

御義口伝おんぎくでんに云く既に上慢じょうまんの四衆罵詈瞋恚ししゅうを成して虚妄じゆきの授記じゆきと謗わずと云えども不生瞋恚ふしょうと説く間忍辱地に住して礼拝の行を立つるなり云云、初の一の住処じゅうしょは世流布るふの学者がくしゃ知れり後の十三箇所は当世とうせの学者がくしゃ知らざる事なり云云。已上十四箇条の礼拝の住処じゅうしょなり云云。

神力品八箇の大事じんりきほん だいじ

第一妙法蓮華經如来神力の事だいいちみょうほうれんげきようによらいじんりき

もんく
文句もんくの十に云く神は不測ふしきに名け力は幹用かんゆうに名く不測ふしきは即ち天然の体深く幹用かんゆうは則ち轉變すなわの力大なり、此の中・深法じんぽうを付属ふぞくせんが為ために十種の大力げんを現げんず故に神力品ゆえと名くと。
じんりきほん なす

御義口伝おんぎくでんに云いく 此この妙法建華經みょうほうけんげきょうは釈尊しゃくそんの妙法みょうほうには非あらざるなり既に此すでの品の時じょうぎ上行菩薩じょうぎようぼさつに付属ふそくし給たまう故ゆゑなり、惣そうじて妙法蓮華經みょうほうれんげきょうを上行菩薩じょうぎようぼさつに付属ふそくし給たまう事は宝塔品ほうとうほんの時事起じゆりようほんり・寿量品じゆりようほんの時事顕あらわれ・神力属累じんりきそくるいの時おわ事竟おわるなり、如来にょらいとは上かみの寿量品じゆりようほんの如来にょらいなり神力じんりきとは十種じゆりようほんの神力じんりきなりいわゆるみょうほうれんげきょう所謂妙法蓮華經ごじの五字ごじは神じんと力りきとなり、神力じんりきとは上いまにちれんの寿量品たぐの時なむみょうほうれんげきょうの如来秘密神通いまいちみひみつじんつう之力ぢくの文ぶんと同じきなり、今日蓮等こんにちれんとうの類るいい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと唱となえ奉たてまつる所の題目だいもくなり此この十種じゆりきの神力ざいせめつこは在世滅後わたいに亘わたるなり然しかりと雖いえども十種じゆりき共に滅後めつこに限かぎると心得こころえ可べきなり、又云いく妙法蓮華經みょうほうれんげきょう如来にょらいと神じんとの力りきの品しんと心得こころえ可べきなり云云いん、如来にょらいとは一切衆生いっさいしゆじやうなり寿量品じゆりようほんの如ごとし、仍よつて釈しゃくにも如来にょらいとは上しやくに釈おわんし畢おわんぬと云いえり此この神さんとは山王七社等さんおうしちやうなり此この旨むね之これを案べず可べきなり云云いん。

第二出広長舌にだいちやうぢぜつの事

御義口伝に云く広とは迹門・長とは本門・舌とは中道法性なり十法界
妙法の功德なれば広と云うなり豎に高ければ長と云うなり・広とは三千
重点より已来の妙法・長とは五百塵点已来の妙法・同じく広長舌なり
云云。

第三十方世界衆宝樹下師子座上の事

御義口伝に云く十方とは十界なり此の下に於て草木成仏分明なり、
師子とは師は師匠子は弟子なり座上とは寂光土なり十界即本有の寂光
たる国土なり云云。

第四満百千歳の事

御義口伝に云く満とは法界なり百は百界なり千は千如なり一念三千を満
百千歳と説くなり云云、一時も一念も満百千歳にして十種の神力を現ず
るなり十種の神力とは十界の神力なり、十界の各各の神力は一種の

なむみょうほうれんげきよう
南無妙法蓮華經なり云云。

みな しんどうちゆうしゅじよう
第五地皆六種震動其中衆生 ○衆宝樹下の事

おんぎくでん いわ こくどせけん しちゆうしゅじよう
御義口伝に云く地とは国土世間なり其中衆生とは衆生世間なり

しゆうほうじゆげ ごおんせけん いちねんさんぜんふんみよう
衆宝樹下とは五陰世間なり一念三千分明なり云云。

しゃば ちゆうう しゃかむにぶつ
第六娑婆是有仏名釈迦牟尼仏の事

おんぎくでん いわ ほんげぐつう みようほうれんげきよう んにく
御義口伝に云く本化弘通の妙法蓮華經の大忍辱の力を以て弘通するを

しゃば んにく じやうこうでん
娑婆と云うなり、忍辱は寂光土なり此の忍辱の心を釈迦牟尼仏と云えり

かんにんせかい
娑婆とは堪忍世界と云うなり云云。

せけん しゅじよう
第七新人行世間能滅衆生闇の事

おんぎくでん いわ じようぎようほさつ せけん にほんこく しゅじよう
御義口伝に云く斯人とは上行菩薩なり世間とは大日本国なり衆生闇と

ほうほう じゅうびよう なむみょうほうれんげきよう いまにちれん たく
は謗法の大重病なり、能滅の件は南無妙法蓮華經なり今日蓮等の類い

これ
是なり云云。

第八畢 竟住ひつきよう いちじよう一乘ぜにんのうぶつどうけつじようむうぎ○是人於ぜにんのうぶつどうけつじようむうぎ仏道決定ひつきよう無有疑むうぎの事

御義口伝おんぎくでん いわに云く畢 竟ひつきようとは広宣流布こうせんるふなり住一乘いちじようとは南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようの一
法に住べす可べきなり是人みようじそくとは名字即ほんぶの凡夫ふつどうなり仏道くきようそくとは究竟うたがい即うたがいなり疑うたがいと
は根本疑惑こんほんぎわく むみようの無明むみようを指むすなり、末法まつほうとうこん当ま今つは此この經きやうぎを受持じゆじする一行計いっけいけいりに
して成仏じやうぶつす可べしと定さだむるなり云云。

囑累品そくるい三箇さんかんの大事だいじ

第一だいいち從法座起ほうざの事

御義口伝おんぎくでん いわに云く起おことは塔中たつちゆうの座ざを起おこちて塔外ほかの儀式ぎしきなり三摩さんまの付囑ふそく有ある
なり、三摩さんまの付囑ふそくとは身口意三業三諦三觀しんくいさんたいさんかんと付囑ふそくし給たまう事ことなり云云。

第二に如來にょらい是一切衆生いっさいしゆじよう之大施主せしゆの事

御義口伝おんぎくでん いわに云く如來にょらいとは本法不思議ふしぎの如來にょらいなれば此この法華經ほけきようの行者ぎやうじやを指さ
す可べきなり、大施主せしゆの施せとは末法まつほうとうこん當ま今つ流布るふの南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきよう主しゆとは

上行菩薩じようぎようぼさつの事と心得こころうへ可きなり、然しかりと雖いえども当品しやくもんは迹門ふそく付嘱ふそくの品なり
上行菩薩じようぎようぼさつを首ふそくとして付属たまし給たまう間じようぎようぼさつ上行菩薩じようぎようぼさつの御本意ごほんいと見たるなり云云。

第三如世尊勅当具奉行之事せそん ぶぎよう

御義口伝おんぎくでんに云く諸いわの菩薩等もろもろぼさつの誓言せいごんの文なり、諸天善神菩薩等しよてんぜんじんぼさつを日蓮等にちれんの
類たぐい諫曉かんぎようするは此の文に依よるなり云云。

藥王品六箇の大事やくおうぼん だいじ

773P

第一不如受持此法華經乃至一四句偈の事だいいち じゅじ ほけきようないし くげ

御義口伝おんぎくでんに云く法華經いわ ほけきようとは一經いっきよう廿八品なり一四句偈くげとは題目だいもくの五字ごじと
心得こころうへ可きなり云云。

第二十喻の事じゅうゆ

御義口伝おんぎくでんに云く十喻じゅうゆとは十界じゅうかいなり、此の山の下に地獄界じごくを含めり、川流せんる
江河かうが餓鬼がき・畜生ちくしやうを撰せんせり・日月にちがつの下に修羅しゆらを収おさめたり帝釈梵天たいしやくほんてんは天界

なり・凡夫人とは人間なり、声聞とは四向四果の阿羅漢なり・縁覚とは辟支仏中と説かれたり、菩薩は菩薩為第一と云えり仏界は如仏為諸法王と見えたり、此の十界を十喻と挙げて教相を分別してさて妙法蓮華經の於一仏乘より分別説三する時此くの如く挙げたり、仍つて一念三千の法門なり一念三千は拔苦与樂なり。

第三離一切苦一切病痛能解一切生死之縛の事

御義口伝に云く法華の心は煩惱即菩提・生死即涅槃なり離解の二字は此の説相に背くなり然るに離の字をば明とよむなり、本門壽量の慧眼開けて見れば本来本有の病痛苦惱なりと明らめたり仍つて自受用報身の智慧なり、解とは我等が生死は今始めたる生死に非ず本来本有の生死なり、始覺の思縛解くるなり云云、離解の二字は南無妙法蓮華經なり云云。

第四火不能燒水不能漂の事

御義口伝に云く火とは阿鼻の炎なり水とは紅蓮の氷なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は此くの如くなるべし云云。

第五諸余怨敵皆悉摧滅の事

御義口伝に云く怨敵とは念仏・禪・真言等の謗法の人なり摧滅とは法華折伏・破權門理なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る是なり云云。

第六若人有病得聞是經病即消滅不老不死の事

文句の十に云く此に觀解を須ゆべしと。

御義口伝に云く若人とは上仏果より下地獄の罪人まで之を撰す可きなり、病とは三毒の煩惱・菩薩に於ても亦之れ有るなり、不老は釈尊不死は地涌の類たり、是は滅後當今の衆生の為に説かれたり、然らば病とは謗法なり、此の經を受持し奉る者は病即消滅疑無きなり、今日蓮

等の類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようと唱となえ奉たてまつる者これ是これなり云云。

妙音品みょうおん三箇だいじの大事

だいいちみょうおんぼさつ

第一妙音菩薩みょうおんぼさつの事

御義口伝おんぎくでんに云いわく妙音菩薩みょうおんぼさつとは十界じゅうかいの衆生しゅじようなり、妙ふとは不思議ふしぎなり音おんと
いっさいしゅじよう
は一切衆生の吐く所の語言ごげんおんじよう音声みょうほうが妙法の音声おんじようなり三世常住さんぜじようじゅうの妙音みょうおん
なり、所用しつたがに随したがつて諸事しよじを并べんずるは慈悲じひなり是これを菩薩ぼさつと云いふなり、又
いわく妙音みょうおんとは今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようと唱となえ奉たてまつる事まつほうとうこんは末法当今まっぽうとうこん
ふしぎの不思議ふしぎの音声おんじようなり、其そのの故ゆえは煩惱ぼんのう即菩提そくぼだい・生死しやうじ即涅槃そくねはんの妙音みょうおんなり云
云。

第二肉髻白毫にくけいびやくごうの事

御義口伝おんぎくでんに云いわく此このの二そふじうの相好そうごうは孝順師長こうじゆんしちやうより起おこれり法華經ほけきようを持たもち奉たてまつるを
いいて一切いっさいの孝養こうやうの最頂さいていとせり、又

云く此の白毫とは父の姪なり肉髻とは母の姪なり赤白二・今經に來つて肉髻白毫の二相と顯れたり、又云く肉髻は隨緣真如の智なり白毫は不變真如の理なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは此等の相好を具足するなり、我等が生の始は赤色肉髻なり死後の白骨は白毫相なり、生の始の赤色は隨緣真如の智死後の白骨は不變真如の理なり秘す可し秘す可し云云。

第三八万四千七宝鉢の事

御義口伝に云く此の文は妙音菩薩雲雷音王仏に奉る所の供養の鉢なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は八万四千の鉢を三世の諸仏に供養し奉るなり、八万四千とは我等が八万四千の塵勞なり南無妙法蓮華經と唱え奉る處にて八万四千の法門と顯るるなり、法華經の文字は開結二經を合しては八万四千なり、又云く八とは八苦なり四とは

生老病死なり七宝とは頭上の七穴なり鉢とは智器なり妙法の智水を
受持するを以て鉢とは心得可きなり云云。

普門品五箇の大事

775P

第一無尽意菩薩の事

御義口伝に云く無尽意とは円融の三諦なり、無とは空諦尽とは仮諦意と
は中道なり、観世音とは観は空諦世は仮諦音は中道なり、妙法蓮華經
とは妙とは空諦法蓮華は仮諦經とは中道なり、三諦法性の妙理を三諦
の観世音と三諦の無尽意に對して説き給うなり、今日蓮等の類い南無
妙法蓮華經と唱え奉る者は末法の無尽意なり、所詮無とは我等が死の相
なり尽とは我等が生の相なり意とは我等が命根なり、然る間・一切の
法門・境智冥合等の法門意の一字に之を摂入す此の意とは中道法性
なり法性とは南無妙法蓮華經なり、仍つて意の五字なり我等が胎内の

五位の中には第五番の形なり、其の故は第五番の姿は五輪なり五輪即ち
妙法等の五字なり、此の五字又意の字なり仏意とは妙法の五字なり此
の事別に之無し、仏の意とは法華經なり是を壽量品にして是好良藥と
て三世の諸仏の好もの良藥と説かれたり森羅三千の諸法は意の一字には
過ぎざるなり、此の仏の意を信ずるを信心とは申すなりされば心は有分別
なり俱に妙法の全体なり云云。

第二観音妙の事

御義口伝に云く妙法の梵語は薩達摩と云うなり、薩とは妙と翻ず此の薩
の字は観音の種子なり仍て観音・法華眼目異名と釈せり、今末法に入つ
て日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る事は観音の利益より天地雲泥
せり、所詮観とは円觀なり世とは不思議なり音とは仏機なり觀とは法界
の異名なり既に円觀なるが故なり、諸法実相の觀世音なれば地獄・餓鬼

・畜生等の境界を不思議世界と知見するなり、音とは諸法実相なれば衆生として実相の仏に非ずと云う事なし、寿命品の時は十界本有と説いて無作の三身なり、観音既に法華經を頂受せり然らば此の經受持の行者は觀世音の利益より勝れたり云云。

第三念念勿生疑の事

御義口伝に云く念念とは一の念は六凡なり一の念は四聖なり六凡四聖の利益を施すなり疑心を生ずること勿れ云云、又云く念念とは前念後念なり、又云く妙法を念ずるに疑を生ず可からず云云、又三世常住の念念なり之に依つて上の文に是故衆生念と、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉りて念念勿生疑の信心に住す可きなり煩惱即菩提生死即涅槃疑有る可からざるなり云云。

第四二求兩願の事

御義口伝おんぎくでんに云くい二求とは求男求女なり、求女とは世間の果報せけん かほう求男とは出世しゅつせの果報かほう仍なほつて現世安穩げんせあんのんは求女の徳なり後生善処ごしょうぜんしよは求男の徳なり、求女は竜女りゆうにょが成仏じやうぶつ生死即涅槃しじそくねはんを顕あらわすなり求男は提婆だいばが成仏じやうぶつ煩惱即菩提ぼんのおそくぼだいを顕あらわすなり我等われらが即身成仏そくしんじやうぶつを顕あらわすなり、今日蓮等の類いまにちれん たぐ南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうとなな 唱え奉る行者たてまつぎやうじやは求男求女を満足まんぞくして父母の成仏ふぼ じやうぶつ決定けつじやうするなり云云。

第五三十三身利益の事さんじんにやく

御義口伝おんぎくでんに云くい三十とは三千の法門さんぜん ほうもんなり、三身とは三諦さんたいの法門ほうもんなり云云、又云く卅三身いとは十界じゅうかいに三身さんじんづつ具ぐすれば十界じゅうかいには三十・本の三身さんじんを加くうれば卅三身さんじんなり、所詮しよせん三とは三業さんごふなり十とは十界じゅうかいなり三とは三毒さんどくなり身とは一切衆生の身いっさいしゆじやうなり、今日蓮等の類いまにちれん たぐ南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱え奉る者たてまつは卅三身さんじんの利益りやくなり云云。

陀羅尼品六箇の大事だらにほん だいじ

777P

第一陀羅尼の事

御義口伝に云く陀羅尼とは南無妙法蓮華經なり、其の故は陀羅尼は諸仏の密語なり題目の五字三世の諸仏の秘密の密語なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは陀羅尼を弘通するなり捨惡持善の故なり云云。

第二安爾曼爾の事

御義口伝に云く安爾とは止なり・曼爾とは觀なり、此の安爾・曼爾より止觀の二法を釈し出せり、仍つて此の咒は藥王菩薩の咒なり藥王菩薩は天台の本地なり、安爾は我等が心法なり妙なり曼爾は我等が色法なり法なり色心妙法と呪する時は即身成仏なり云云。

第三鬼子母神の事

御義口伝に云く鬼とは父なり子とは十羅刹女なり母とは伽利帝母なり、

逆次に次第する時は神とは九識なり母とは八識へ出づる無明なり子とは七識六識なり鬼とは五識なり、流転門の時は悪鬼なり還滅門の時は善鬼なり、仍つて十界互具・百界・千如の一念三千を鬼子母神十羅刹女と云うなり、三宝荒神とは十羅刹女の事なり所謂飢渴神貪欲神障碍神なり、今法華經の行者は三毒即三徳と転ずる故に三宝荒神に非ざるなり荒神とは法華不信の人なり法華經の行者の前にては守護神なり云云。

第四受持法華名者福不可量の事

御義口伝に云く法華の名と云うは題目なり、者と云うは日本国は一切衆生の中には法華經の行者なり、又云く者の字は男女の中には別して女人を讃めたり女人を指して者と云うなり、十羅刹女は別して女人を本とせり例せば竜女が度脱苦衆生とて女人を苦の衆生と云うが如し藥王品の是經典者の者と同じ事なり云云。

第五皐諦女の事こうだいによ

御義口伝おんぎくでんに云く皐諦女こうだいによは本地ほんちは文殊菩薩もんじゅぼさつなり、山海何かなる処ところにてもほけきようぎようじや法華經ほけきようの行者ぎようじやを守護しゆごす可しと云う經文きようもんなり、九惡一善いちぜんとて皐諦女こうだいによをば一善いちぜんと定めたり、十惡じゅうあくの煩惱ぼんのうの時は偷盜ちゆうとうに皐諦女こうだいによは当れり逆次に次第しだいするなり云云。

第六五番神呪の事じんしゆ

御義口伝おんぎくでんに云く五番神呪ごばんじんしゆとは我等われらが一身いつしんなり、妙とは十羅刹女じゅうらせつにょなり法とは持国天王じこくてんのうなり蓮れんとは增長そうぢよう天王てんわうなり華けとは広目天王くわうもくてんのうなり經きやうもんとは毘沙門天王びしゃもんてんのうなり、此この妙法みょうほうの五字ごじは五番神呪ごばんじんしゆなり、五番神呪ごばんじんしゆは我等われらが一身いつしんなり、十羅刹女じゅうらせつにょの呪じゆは妙みょうの一字いちじを十九句じゅうきゅうに並べたり經文きようもんには寧上じやうじやう・我頭上がじやうじやうの文ぶん是これなり、持国天じこくてんは法ほふの一字いちじを九句きゅうに並べたり經文きようもんには四十二億しじふにえきと云えり、四しとは生老病死しょうろうびやうし・十じゅうとは十界じゅうかい・二にとは迷悟めいこなり、

持国は依報えほうの名なり法は十界じゅうかいなり、増長天ぞうちょうは蓮の一字を十三句に並べたり經文きょうもんには「亦皆隨喜またみなずいき」と云えり隨喜ずいきの言は仏界ぶつかいに約せり、広目天は華の一字を四十三句に並べたり經文きょうもんには「於諸衆生多所饒益しよしゆじょう」と云えり、毘沙門天びしゃもんは經の一字を六句に並べたり經文きょうもんには「持是經者ぜききやうしや」等の文是なり云云。

嚴王品三箇の大事だいじ

第一妙莊嚴王だいいちみょうそういんの事 文句もんくの十に云く妙莊嚴みょうそういんとは妙法功德みょうほうくどくをもつて諸根しよこんを莊嚴そういんするなりと。

御義口伝おんぎくでんに云く妙とは妙法みょうほうの功德くどくなり、諸根しよこんとは六根ろっこんなり此の妙法の功德くどくを以て六根ろっこんを莊嚴そういんす可き名なり、所詮しよせん妙とは空諦くうたいなり莊嚴そういんとは仮諦けたいなり王とは中道ちゅうどうなり、今日蓮等けふにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱え奉る者とな たてまつは悉く妙莊嚴王みょうそういんなり云云。

第二浮木孔の事 うきぎ

御義口伝に云く孔とは小孔大孔の二之れ有り、小孔とは四十余年の經教 おんぎくでん いわ
なり大孔とは法華經の題目なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え ほけきよう だいもく いまにちれん たぐ なむみようほうれんげきよう とな
たてまつ たてまつ いっさいしゅじよう
奉るは大孔なり、一切衆生は一眼の龜なり梅檀の浮木とは法華經なり、 せんた うきぎ ほけきよう
生死の大海に南無妙法蓮華經の大孔ある浮木は法華經に之在り云云。 しょうじ たいかい なむみようほうれんげきよう うきぎ ほけきよう

第三当品邪見即正の事 じゃけんそく

御義口伝に云く嚴王の邪見二人の教化に依り功德を得て邪を改めて正と おんぎくでん いわ じゃけん きようけ よ くどく あらた
せり、止の一に辺邪皆中正と云う是なり、今・日本国の一切衆生は邪見 みな ちこれ にほんこく いっさいしゅじよう じゃけん
にして嚴王なり、日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は二人の にちれん たぐ なむみようほうれんげきよう とな たてまつ
如し終に畢竟住一乘して邪見即正なる可し云云。 ごと つい ひっきよう いちじよう じゃけん

普賢品六箇の大事 ふげん だいじ

第一普賢菩薩の事 だいいちふげんぼさつ 文句の十に云く勸発とは恋法の辞なりと。 もんく いわ かんぼつ

御義口伝に云く勸発とは勸は化他・発は自行なり、普とは諸法実相迹門 おんぎくでん いわ かんぼつ けた じぎょう しょほうじつそうしゃくもん

の不变真如の理なり、賢とは智慧の義なり本門の随縁真如の智なり、然 ふへんしんによ ちえ ほんもん ずいえんしんによ し

きようまつ

間経末に来つて本・迹二門を恋法し給えり、所詮今日蓮等の類い南無 たま しょせんいまにちれん たぐ なむ

みようほうれんげきよう とな たてまつ ふげんぼさつ しゅこ

妙法蓮華経と唱え奉る者は普賢菩薩の守護なり云云。

ほけきよう えんぶだい

第二若法華経行閻浮提の事

御義口伝に云く此の法華経を閻浮提に行ずることは普賢菩薩の威神の力 おんぎくでん いわ ほけきよう えんぶだい ふげんぼさつ いしん

に依るなり、此の経の広宣流布することは普賢菩薩の守護なるべきなり よ こっせんる ふ ふげんぼさつ しゅこ

云云。

はちまん

第三八万四千天女の事

御義口伝に云く八万四千の塵勞門なり、是れ即ち煩惱即菩提・生死即涅槃 おんぎくでん いわ はちまん じんろう すなわ ほんのうそくぼだい しょうじそくねはん

なり七宝の冠とは頭上の七穴なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と しっぽう かんむり いまにちれん たぐ なむ みようほうれんげきよう

とな たてまつ これ
唱え奉る者はなり云云。

第四是人命終 為千仏授手の事

おんぎくでん いわ ほっけふしん みようじゅう
御義口伝に云く法華不信の人は命終の時地獄に墮在す可し、經に云く
「若人不信毀謗・此經即斷・一切世間・仏種其人命終・入阿鼻獄」と、
ほけきよう ぎようじや みようじゅう じようぶつ べ みようじゅう
法華經の行者は命終して成仏す可し是人命終 為千仏授手の文はな
り、千仏とは千如の法門なり謗法の人は獄卒來迎し法華經の行者は千仏
らいごう たま いまにちれん たく なむみようほうれんげきよう とな たてまつ
來迎し給うべし、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は千仏の
らいごう たがい
來迎疑無き者なり云云。

第五閻浮提内広令流布の事

おんぎくでん いわ
御義口伝に云く此の内の字は東西北の三方を嫌える文なり、広令流布と
ほけきよう えんぶだい ばか るふ べ きようもん
は法華經は南閻浮提計りに流布す可しと云う經文なり、此の内の字之を
案ず可し、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は深く之を思ふ
べ いまにちれん たく なむみようほうれんげきよう とな たてまつ

可きなり云云。

第六此人不久当詣道場の事

おんぎくでん いわ
御義口伝に云く此人とは法華經の行者なり、法華經を持ち奉る処を
とうけいどうじよう
当詣道場と云うなり此を去つて彼に行くには非ざるなり、道場とは
じゅつかい しゅじよう じゅうしよ
十界の衆生の住处を云うなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と
とな たてまつ じゅうしよ さんや こうやみなじやつこつと
唱え奉る者の住处は山谷曠野皆寂光土なり此れを道場と云うなり、此
因無易故云直至の釈之を思う可し、此の品の時最上第一の相伝あり、
しゃくそんはちかねん ほけきよう
釈尊八箇年の法華經を八字に留めて末代の衆生に譲り給うなり八字と
は当起遠迎当如敬仏の文なり、此の文までにて經は終るなり当の字は未来
なり当起遠迎とは必ず仏の如くに法華經の行者を敬う可しと云う經文
なり、法師品には於此經卷敬視如仏と云えり、八年の御說法の口開きは
なむみようほうれんげきようほうべん しよぶつ ちえ
南無妙法蓮華經方便品の諸仏智慧終りは当起遠迎当如敬仏の八字なり、

但此の八字を以て法華ほっけ一部の要路とせりされば文句もんくの十に云く「当起遠
迎当如敬仏そよりは其の信者くどくの功德を結することじゅつを述す」と、法華ほっけ一部は
信の一字を以て本とせり云云。

尋ねて云く今の法華經ほけきように於て序品じよほんには首めに如の字を置き終りの普賢品ふげん
には去の字を置く羅什三蔵らじゅうさんざうの心地何なる表事の法門ほうもんぞや、答て云く今の
經の法体は実相じつそうと久遠くおんとの二義を以て正体と為すなり始の如の字は実相じつそう
を表し終りの去の字は久遠くおんを表するなり、其の故は実相は理なり久遠は
事なり理は空の義なり空は如の義なり之に依て如をば理空に相配するな
り、釈に云く「如は不具ふぐに名く即ち空の義なり」と久遠は事なり其の故
は本門ほんもん寿量じゆりやうの心は事円の三千さんぜんを以て正意と為すなり、去は久遠くおんに当るな
り去は開の義如は合の義なり開は分別ぶんべつの心なり合は無分別ぶんべつの意なり、此
の開合を生仏に配当する時は合は仏界開ぶつがいは衆生しゆじやうなり、序品じよほんの始に如の字

を顕あらわしたるは生仏不二の義なり、迹門しやくもんは不二の分なり不變真如ふへんしんによなる故なり、此の如によ是我聞がもんの如ふへんしんによをば不變真如ふへんしんによの如ならと習ならうなり、空假中の三諦くうけちゆう さんたいには如はは空・是はは中・我聞がもんは仮諦けたい・迹門しやくもんは空を面おもてと為なす故に不二かみの上の而なり、然しかる間じに而二の義を顕あらわす時・同聞衆を別つらに列つらぬるなり、さて本門ほんもんの終りの去は随縁真如ずいえんしんによにして而二じにの分なり仇あつて去の字を置おくなり、作礼而去さらいにこの去は随縁真如ずいえんしんによと約束やくそくするなり、本門ほんもんは而二じにの上の不二じになり而二じに不二・常同常別・古今法爾ほうにの釈これ之を思おもふ可べし、此の去の字は彼の五千起去なの去と習ならうなり、其そのの故は五千とは五住の煩惱ぼんのうと相伝そうでんする間五住の煩惱ぼんのうが己心こしんの仏を礼いぬして去いぬると云う義なり、如去の二字は生死しやうじの二法なり、伝教でんぎやうい云く「去は無来之如来無去之円去」等と云云。如の字は一切法いっさい是心しやくもんの義・去の字は心いっさいは一切法いっさいの義なり、一切法いっさい是心しやくもんは迹門ふへんしんによの不變真如ふへんしんによなり、心いっさいは一切法いっさいは本門ほんもんの随縁真如ずいえんしんによなり、然しかる間ほっかい・法界いっしんを一心いっしんに縮ちぢむるは如の

義なり法界ほっかいに開くは去の義なり三諦三觀さんたいさんかんの口決相承くけつそうじょうと意同じ云云。一義

に云く如いわは実なり去は相なり実しんは心王相しんおうは心数なり、又諸法しよほうは去なり実相じつそう

は如なり今經こんきやう 一部の始終諸法実相しじゅうしよほうじつそうの四字に習うとは是なり、釈に云く

「今經こんきやうは何を以て体と為るや諸法実相しよほうじつそうを以て体と為す」と、今一重立ち

入つて日蓮にちれんが修行しゆぎやうに配当せば如とは如說修行によせつしゆぎやうの如なり・其の故は結要

五字ごじの付属ふぞくを宣べ給う時・宝塔品ほうとうぽんに事起り声徹下方しやうてつげほうし近令有在・遠令有

在と云うて有在の二字を以て本化ほんげ・迹化しゃつけの付属ふぞくを宣ぶるなり仍よつて本門ほんもん

の密序ならと習うなり、さて二仏・並座びやうざ・分身ふんじんの諸仏集まつて是好良藥ぜこうりやうやくの

妙法蓮華經みやうほうれんげきやうを説き顯あらわし釈尊しゃくそん十種の神力じんにりきを現じて四句に結び上行菩薩じやうぎやうぼさつに

付属ふぞくし給う英の付属ふぞくとは妙法の首題なり惣別の付属塔中塔外之ふぞくたうちゅうを思おもう

可べし、之に依よつて涌出ゆじゆつ寿命じゆりやうに事顯あらわれ神力属累じんにりきそくるいに事竟おわるなり、此の妙法みやうほう

等の五字ごじを末法まつほう・白法隱没びやくほうおんもつの時じやうぎやうぼさつ上行菩薩じゆつせ・御出世有ごしゆつて五種の修行しゆぎやうの

中には四種を略して但受持じゆじの一行にして成仏じようぶつす可べしと經文きようもんに親まのり之れ
有り、夫それば神力品じんりきほんに云く「於我滅度後・応受持斯經・是人於仏道・
決定無有疑」云云此の文明白なり、仍よつて此の文をば仏の廻向の文と習ならう
なり、然しかる間此の經を受持じゆじし奉たてまつる心地は如説修行の如なり此の如の心地しんじ
に妙法等の五字を受持じゆじし奉たてまつる南無妙法蓮華經と唱え奉たてまつれば忽ち無明
煩惱ぼんのうの病を悉く去こつて妙覺極果の膚みかを瑩あらわく事を顯ゆえす故にさて去の字を
終りに結ぶなり、仍よつて上に受持じゆじ仏語と説ほんのうけり煩惱惡覺の魔王まおうも諸法実相しよほうじつそう
の光に照てらされて一心一念・遍於法界と觀達せらる、然しかる間還かえつて己心こしんの
仏を礼ゆえす故に作礼而去さらいとは説たまき給たまうなり、彼彼三千互遍亦爾かれがれさんぜんまたの釈これ之を思
ふ可べし秘べす可べし秘べす可べし唯受一人の相承そうじようなり、口外くわいす可べからず然しからば此
の去の字は不去而去の去と相伝そうでんするを以て至極しごくと為なすなり云云。

無量義經六箇の大事むりようぎきようだいいじ

第一無量義經德行品第一の事

御義口伝に云く無量義の三字を本・迹・觀心に配する事、初の無の字は
迹門なり其の故は理円を面とし不變真如の旨を談ず、迹門は無常の
摂属なり常住を談ぜず但し「是法住法位世間相常住」と明かせども
是れは理常住にして事常住に非ず理常住の相を談ずるなり、空は
無の義なり但し此の無は斷無の無に非ず相即の上の空なる処を無と云い
空と云うなり、円の上にて是を沙汰するなり、本門の事常住無作の三身
に対して迹門を無常と云うなり、守護章には有為の報仏は夢中の権果
無作の三身は覺前の実仏と云云、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え
奉る者は無作の三身覺前の実仏なり云云。

第二量の字の事

御義口伝に云く量の字を本門に配当する事は量とは権摂の義なり、

本門の心は無作三身を談ず此の無作三身とは仏の上ばかりにて之を云わ
ず、森羅万法を自受用身の自体顕照と談ずる故に迹門にして不變真如の
理円を明かす処を改めずして己が当体無作三身と沙汰するが本門事円
三千の意なり、是れ即ち桜梅桃李の己己の当体を改めずして無作三身と
開見すれば是れ即ち量の義なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え
奉る者は無作三身の本主なり云云。

第三義の字の事

御義口伝に云く義とは觀心なり、其の故は文は教相義は觀心なり所説の
文字を心地に沙汰するを義と云うなり、就中無量義は一法より無量の義
を出生すと談ず、能生は義所生は無量なり是は無量義經の能生所生
なり、法華經と無量義經とを相對する能所に非ざるなり無相・不相名為
実相の理より万法を開出すと云う、源が実相なる故に觀心と云うなり、

か
此くの如く無量義の三字を迹門・本門觀心に配当する事は法華の妙法
ご
むりよう
むりよう
等の題と今の無量義の題と一体不二の序正なりと相承の心を相伝せむが
むりよう
為なり。

第四処の一字の事

おんぎくでん いわ
御義口伝に云く処の一字は法華經なり、三藏教と通教とは無の字に摂し
べつきよう
別教は量の字に摂し円教は義の字に摂するなり、此の爾前の四教を
しよしよう
所生と定めて序分の此の經を能生と定めたり、能生を且く処と云い
しよしよう むりよう
所生を無量義と定めたり、仍つて權教に相對して無量義処を沙汰する
なり云云。

第五無量義処の事

おんぎくでん いわ ほけきよう
御義口伝に云く法華經八卷は処なり無量義經は無量義なり、無量義は
むりよう
さんたいさんかんさんじんさんじよう
三諦三觀三身三乘三業なり法華經に於一仏乘分別說三と説いて法華の
ほけきよう
むりようききよう むりよう
むりよう

為の序分と成るなり、こを爰を以て隔別の三諦は無得道円融の三諦は得道と定むる故に四十余年・未顕真実と破し給えり云云。

第六無量義処の事

御義口伝に云く無量義処とは一念三千なり、十界各各無量に義処たり、此の当体其の儘実相の理より外は之れ無きを諸法実相と説かれたり、其の為の序なる故に一念三千の序として無量義処と云うなり、処は一念無量義は三千なり、我等衆生朝夕吐く所の言語も依正二法共に無量に義処りたり、此れを妙法蓮華経とは云うなり然る間法華の為の序分開経なり云云。

普賢經五箇の大事

第一普賢經の事 題号に云く仏説觀普賢菩薩行法經と云云。

御義口伝に云く此の法華經は十界互具三千具足の法体なれば三千十界

悉く普賢なり、法界一法として漏るる義之れ無し故に普賢なり、妙法の
十界蓮華の十界なれば依正の二法悉く法華經なりと結し納めたる經な
れば此の普賢經を結經とは云うなり、然らば十界を妙法蓮華經と結し
合せたり云云。

第二不斷煩惱不離五欲の事

御義口伝に云く此の文は煩惱即菩提・生死即涅槃を説かれたり、法華の
行者は貪欲は貪欲のまま瞋恚は瞋恚のまま愚癡は愚癡のまま普賢菩薩の
行法なりと心得可きなり云云。

第三六念の事

念仏 念法 念僧 念戒 念施 念天

御義口伝に云く念仏とは唯我一人の導師なり、念法とは滅後は題目の五字
なり念僧とは末法にては凡夫僧なり、念戒とは是名持戒なり、念施とは
一切衆生に題目を授与するなり、念天とは諸天昼夜常為法故而衛護之の

意なり、末法まつぽうとうこん当今の行者ぎやうじやの上なり之を思おもう可べきなり云云。

第四一切業障いっさいごうしやう海皆從妄想もうそう生若欲懺悔ざんげ者端坐思実相衆罪じつそうしゆうざい如霜露そうろえにち慧日能消除しよくの事

御義口伝おんぎくでんに云く衆罪いわ しゆうざいとは六根ろくこんに於て業障おひ じやうしやう降り下る事は霜露そうろの如し、然りと雖も慧日いへど えにちを以て能く消除よすと云えり、慧日えにちとは末法まつぽうとうこん今日蓮所弘しよくの南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうなり、慧日えにちとは仏に約し法に約するなり、釈尊しやくそんをば慧日えにち大聖尊もうと申すなり法華經ほけきやうを又如日天子能除諸闇しよと説かれたり、末法まつぽうの導師どうしを如日月光明にちがつこうみやう等と説かれたり。

第五正法治国不邪枉人民の事しょうほう じやおうじんみん

御義口伝おんぎくでんに云く末法まつぽうの正法しょうほうとは南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうなり、此の五字ごじは一切いっさい衆生しゆじやうをたばらかさぬ秘法ひほうなり、正法しょうほうを天下一てんが同に信仰しんぎやうせば此の国安穩あんのんならむ、されば玄義げんぎに云く「若もし此の法に依よれば即すなわち天下泰平てんがたいへい」と、此

の法とは法華經なり法華經を信仰せば天下安全たらむ事疑有る可からざるなり。

已上二百三十一箇条の大事

廿八品に一文充の大事 合せて廿八箇条の大事秘す可し云云

序品

十界也 始覺

於無漏実相 心已得通達

妙法 不變 隨縁

此の文・我が心本より覺なりと始めて覺るを成仏と云うなり所謂南無妙法蓮華經と始めて覺る題目なり。

ほうべん
方便品

しんたい
真諦

そくたい
俗諦

ぜほうじゅうほうい
是法住法位

せけんじょうじゅう
世間相常住

しゅじょう
迹門

ほんもん
本門

此の文衆生の心は本来仏なりと説くを常住と云うなり万法元より覺
の体なり。

ひゅほん
譬喩品

じゅじ
受持人

だいびやくこしゃ
大白牛車

ほんぷ
凡夫即極

だいもく
乗此宝乘

じきしどうじょう
直至道場

だいもく
題目

ごっか
極果ノ処也

此の文は自身の仏乗を悟つて自身の宮殿に入るなり所謂南無
妙法蓮華經と唱え奉るは自身の宮殿に入るなり。

しんげ
信解品

いちねんさんぜん
一念三千

むじょうほうしゅ
無上宝珠

ふぐじとく
不求自得

だいもく
題目

此の文は無始色心本是理性妙境・妙智なれば己心より外に実相を求むべ
可からず所謂南無妙法蓮華經は不求自得なり。

藥草喩品

三世題目一切衆生

此の文は当來の成仏顯然なり所謂南無妙法蓮華經なり。

授記品

十界実相仏 三世常住 煩惱即菩提・生死即涅槃

於諸仏所常修梵行於無量劫奉持佛法

一切業障

此の文に常と云い無量劫と云う即ち本有所具の妙法なり所謂南無
妙法蓮華經なり。

化城喩品

三千塵点

観彼久遠くおん なが 猶如今日

在世ざいせ

此の文は元初のいちねん 一念ほっかい 法界より外に更に六道四聖とて有る可からざるなり。
所謂南無妙法蓮華経は三世一念なり今日とは末法を指して今日と云うなり。

五百品

日本国一切衆生

貧人ひんじん

題目御本尊

見此珠

心法色法

其心大歡喜

信心ノカタチ

煩惱即菩提・生死即涅槃

此の文は始めて我心本来の仏なりと知るを即ち大歡喜と名く所謂南無妙法蓮華経は歡喜の中の大歡喜なり。

人記品

一部

安住於仏道

広略

以求無上道

要

題目

此の文は本来相即の三身の妙理を初めて覚知するを求無上道とは云うなり
所謂南無妙法蓮華經なり。

法師品
ほうしほん
じやうこう

寂光

当知如是人 自在所欲生
にやぜ じざい

此の文は我等が一念の妄心の外に仏心無し九界の生死が真如なれば即ち
自在なり 所謂南無妙法蓮華經と唱え奉る即ち自在なり。

宝塔品
ほうとうほん

受持也
じゆじ

則為疾得 無上仏道
しつとく むじょうぶつどう

凡夫即極也
ほんぶそく

此の文は持者即ち円頓の妙戒なれば等妙二覚一念開悟なれば疾得と云
うなり 所謂南無妙法蓮華經と唱え奉るは疾得なり。

提婆品
たいば

忽然之間 变成男子
こつねん

此の文の心は三惑の全体三諦と悟るを變と説くなり所謂南無妙法蓮華經
とな たてまつ さんなく ぜんたいさんたい わくそくさんとき
と唱え奉るは三惑即三徳なり。

勸持品

色法心法

我不愛身命がふあいしんみ但惜無上道たしくむじやうどう

此の文は色心幻化四大五陰元より惡習なり然るに本覺真如は常住なり
い わゆる な む み よう ほう れん げ き よう し か ほん がく しん によ じ よう じ ゅう
所謂南無妙法蓮華經なり。

安樂行品

一切諸法空無所有無有常住亦無起滅
い っ さい い し よ ほう じ よう じ ゅう や く む

此の文は元より常住の妙法なる故に六道の生滅本来不生と談ず故に
い わ ゆる な む み よう ほう れん げ き よ う え ろく どう し よう めつ ふ し よう だん ゆ え
起滅無し所謂南無妙法蓮華經本来無起滅なり云云。

涌出品

昼夜常精進し よう じん 為求仏道故む つ てい う

此の文は一念に億劫の辛勞を尽せば本来無作の三身念念に起るなり所謂
い ち ねん い ち ねん む さ さん じん ねん ねん お こ い わ ゆる

南無妙法蓮華經は精進行なり。
なむみょうほうれんげきょう しやうじん

寿命品
じゆりやうぼん

如来如実知見三界之相無有生死
にょらいによじつちけんさんがい しやうじ

此の文は万法を無作の三身と見るを如実知見と云う無作の覚体なれば
むさ さんじん によじつちけん むさ かくたい

何に依つて生死有りと云わんか。
いかよ しやうじ

分別功德品
ぶんべつくとく

持此一心福 願求無上道
いっしん がんぐむじやうどう

此の文は一切の万行万善但一心本覺の三身を顕さんが為なり、善惡一如
いっさい まんぎやうばんぜん いっしんほんかく さんじん あらわ ぜんあく

なれば一心福とは云うなり所謂南無妙法蓮華經は一心福なり。
いっしん いわゆる な むみょうほうれんげきやう いっしん

隨喜功德品
ずいきくとく

言此經深妙 千万劫難遇
せんまん なん せんまん ねん

此の文は、一切即妙法なれば一心の源底を顕す事甚妙無外なり所謂
いっさいそくみやうほう いっしん あらわ はなはだ いわゆる

なむみょうほうれんげきようふしぎ
南無妙法蓮華經不思議なり。

ほっしくどく
法師功德品

静 散

ぜんしゃ
入禅出禅者 聞香悉能知

ふへん じゅいかい
不變死 随縁生 十界

いっしん
此の文は一心静なる時は入禅、一心散乱する時は出禅、静散即本覺と知るを悉く知るとは云うなり所謂南無妙法蓮華經は入禅出禅なり云云。

ふぎよう
不輕品

いっしん
应当一心広説此経世世値仏疾成仏道

ほっかいみな
此の文は法界皆本来三諦一心に具わる事を顕せば己心の念念・仏に値う事を即ち世世値仏と云うなり所謂南無妙法蓮華經是なり。

じんりきほん
神力品

斷破元品無明

是人於仙道

決定無有疑

十如是

此の文は十界各各有本覺の十如是なれば地獄も仏界も一如なれば
成仏決定するなり所謂南無妙法蓮華經の受持なり云云。

囑累品

信如來知慧者當演說此法華經

此の文は釈迦如來の悟の如く一切衆生の悟と不同有ること無し故に如來
の智慧を信ずるは即ち妙法なり所謂南無妙法蓮華經の智慧なり云云。

藥王品

是真精進是名真法供養如來

此の文は色香中道の觀念懈ること無し是を即ち真法供養如來と名くるな
り所謂南無妙法蓮華經唯一乘の故に真法なり世間も出世も純一実相

なり云云。

妙音品
みょうおん

久遠 寂光土
くおん じゃつこうど
さんまい

身不動揺而入三昧
さんまい

此の文は即ち久遠を悟るを身不動揺と云うなり惑障を尽くさずして
すなわ くおん わくしょう

寂光に入るを三昧とは云うなり所謂南無妙法蓮華經の三昧なり云云。
じゃつこうど さんまい いわゆるなむみょうほうれんげきよう さんまい

普門品
ふもんぼん

福智

慈眼視衆生福聚海無量
しゅじょう むりよう

此の文は法界の依正妙法なる故に平等一子の慈悲なり依正福智共に
ほっかい えしやう みやうほう ゆえ びやうどう じひ えしやう
むりよう いわゆるなむみょうほうれんげきよう
無量なり所謂南無妙法蓮華經福智の二法なり云云。

陀羅尼品
だらにぼん

未来顕 みらい

修行是経者 しゆぎようぜきようしや

令得安穩 あんのん

現在顕 げんざい

此の文は五種妙行を修すれば悟の道に入つて嶮路に入らざるなり此れは
安穩と云う事なり、所謂南無妙法蓮華経即安穩なり云云。

嚴王品

宿福深厚生値仏法 じんこうしよくちぶつぽう

此の文は一句妙法に結縁すれば億劫にも失せずして大乘無価の宝珠を
研き顕すを生値仏法と云うなり所謂南無妙法蓮華経の仏法なり。

勧発品 かんほつぽん

是人命終為千仏授手令不恐怖不墮惡趣 みようじゆう くらふ だあくしゆ

此の文は妙法を悟れば分段の身即常寂光と顕るるを命終と云うなり

千仏とは千如・御手とは千如・具足なり故に不墮惡趣なり所謂南無
妙法蓮華經の御手なり。

じょうほん べつでん

已上品品別伝畢

一廿八品悉南無妙法蓮華經の事

疏の十に云く惣じて一經を結するに唯四のみ其の枢柄を撮つて之を授与
す。

御義口伝に云く一經とは本・迹二十八品なり唯四とは名用体宗の四なり

枢柄とは唯題目の五字なり授与とは上行菩薩に授与するなり之とは

妙法蓮華經なり云云、此の釈分明なり今日蓮等の弘通の南無

妙法蓮華經は体なり心なり廿八品は用なり廿八品は助行なり題目は

正行なり正行に助行を攝す可きなり云云。

一 無量義經の事

おんぎくでん いわ みようほう じよぶん むりようぎきよう
御義口伝に云く妙法の序分・無量義経なれば十界悉く妙法蓮華經の
序分なり。 じよぶん

一 序品 じよほん

おんぎくでん いわ によげがもん よ よ こころえ いっきようむりよう
御義口伝に云く如是我聞の四字を能く能く心得れば一經無量の義は知ら
れ易きなり 十界互具三千具足の妙と聞くなり此の所聞は妙法蓮華と聞く
ゆえ みようほう ほっかいご さんぜんしやうじよう いっきよう しじゆう
故に妙法の法界互具にして三千 清浄 なり此の四字を以て一經の始終
に亘るなり 廿八品の文文・句句の義理我が身の上の法門と聞くを
によげがもん じゆつかいご さんぜん
如是我聞とは云うなり、其の聞物は南無妙法蓮華經なりされば皆成仏道
と云うなり此の皆成の二字は十界三千に亘る可きなり 妙法の皆成な
るが故なり又仏とは我が一心なり是れ又十界三千の心心なり、道とは能
通に名くる故に十界の心心に通ずるなり此の時皆成仏道と顕るるなり
かいじようぶつどう なむ みようほうれんげきよう
皆成仏道の法は南無妙法蓮華經なり。

方便品 ほうべん

御義口伝に云く此の品には十如是を説く此の十如是とは十界なり此の
方便とは十界三千なり。既に妙法蓮華經を頂く故に十方仏土中唯有
一乘法なり妙法の方便蓮華の方便なれば秘妙なり清淨なり妙法の
五字は九識方便は八識已下なり九識は悟なり八識已下は迷なり、
妙法蓮華經方便品と題したれば迷悟不二なり森羅三千の諸法此の
妙法蓮華經方便に非ずと云う事無きなり品は義類同なり、義とは三千な
り類とは互具なり同とは一念なり此の一念三千を指して品と云うなり此
の一念三千を三仏合点し給えり仍つて品に題せり南無妙法蓮華經の信
の一念より三千具足と聞えたり云云。

譬喩品 ひゆほん

御義口伝に云く此の品の大白牛車とは「無明癡惑本是法性」の明闇一

体の義なり、即ち三千具足の一乗すなわ さんぜんぐそく いちじょうをかけたる車なれば明闇みょうあん一体にし

て三千具足の義を顕あらわすなり、法界ほっかいに満したれども一法なるを一乗いちじょうと云

うなり、此の一乗いちじょうとは諸乗具足の一乗しよじょうぐそく いちじょうなり諸法具足の一法しよほうぐそくなり故ゆえに一

の白牛びやくごなり又白牛は一なりといえども無量の白牛むりょう びやくごなり一切衆生の体

大白牛車だいびやくごしやなるが故なり、然しからば妙法みょうほうの大白牛車だいびやくごしやに妙法みょうほうの十界三千じゅっかいさんぜんの

衆生しゅじょう乗じたり蓮華れんげの大白牛車だいびやくごしやなれば十界三千じゅっかいさんぜんの衆生しゅじょうも蓮華れんげにして

清浄しやうじやうなり南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうの法体ほつたい此この如ごとし。

信解品しんげ

御義口伝おんぎくでんに云いわく此しんげの信解しんげは中根しやうもんの四大声聞りやうしやうの領解りやうしやうに限るに非あらず妙法みょうほうの

信解しんげなるが故ゆえに十界三千じゅっかいさんぜんの信解しんげなり、蓮華れんげの信解しんげなるが故ゆえに十界三千じゅっかいさんぜん

の清浄しやうじやうの信解しんげなり此しんげの信解しんげの体なむみょうほうれんげきやうこれとは南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうこれ是なり云云。

藥草喻品やくそうゆほん

御義口伝に云く妙法の薬草なれば十界三千の毒草・蓮華の薬草なれば
本来清浄なり、清浄なれば仏なり此の仏の説法とは南無妙法蓮華經
なり云云、されば此の品には種相体性の種の字に種類種・相体種の二の
開会之れ有り、相對種とは三毒即三徳なり種類種とは始の種の字は十界
三千なり、類とは互具なり下の種の字は南無妙法蓮華經なり種類種な
り、十界三千の草木各各なれども只南無妙法蓮華經の一種なり、毒草
の毒もなきなり清浄の草木にして薬草なり云云。

授記品

御義口伝に云く十界已已の当体の言語は妙法蓮華の授記なれば清浄の
授記なり、清浄の授記なれば十界三千の仏なり、爰を以て仏南無
妙法蓮華經と授記するなり云云。

化城喻品

おんぎくでん いわ みようほう けじょう じゅっかいどうじ むじょう 蓮華の化城なれば十界同時の無常なり、
御義口伝に云く妙法の化城なれば十界同時の無常なり、
じゅっかいさんぜん かいらく 常住 無常俱に妙法蓮華經の全体なり、
れは十界三千の開落なり、
けじょうほうしよ しやうじほんぬ しやうじほんぬ なむ みようほうれんげきよう ぜんたい
化城宝処は生死本有なり生死本有の体とは南無妙法蓮華經なり、
いわ 云く「起は是れ法性の起滅は是れ法性の滅」と。
こ ほっしやう こ ほっしやう

五百品

おんぎくでん いわ でしじゆきさぶつ げんぶん 然り
御義口伝に云く此の品には五百弟子授記作仏すと現文に見えたり、
いえど みようほう じゅっかいさんぜんみな でし れんげ でし
と雖も妙法の五百なれば十界三千皆五百の弟子なり、蓮華の弟子な
ば又清浄なり、所詮十界三千南無妙法蓮華經の弟子に非ずと云う事
なし此の經の授記是なり云云。
じゆきこれ

人記品

おんぎくでん いわ がくむがく せいじや じようぶつ すで
御義口伝に云く此の品には学無学の聖者来つて成仏するなり、
みようほうちやうだい がくむがく じゅっかいごさんぜんぐそく がくむがく みようほう がくむがく
妙法頂戴の学無学なれば十界互具三千具足の学無学なり妙法の学無学

なるが故に不思議の十界に煩惱未だ尽くさざるなり蓮華の学無学なれば
じゅつかいさんぜんしゅうじょう
十界三千清浄の開落なり、此の学無学何物ぞや学とは法なり無学とは
いわゆるなむみょうほうれんげきよう
妙なり所謂南無妙法蓮華経なり云云。

法師品

御義口伝に云く妙法の法師なれば十界皆妙法受持の一句一偈の法師な
おんぎくでん いわ みようほう ほっし じゅつかいみなみようほうじゅじ いっくいちげ ほっし
り、蓮華の法師なれば十界三千清浄の法師なり、十界衆生の色法は
れんげ ほっし じゅつかいさんぜんしゅうじょう ほっし じゅつかいしじゅう
能持の人なり十界の心性は所持の法なり、仍つて色心共に法師にして
じぎようけた あらわ いわゆるなむみょうほうれんげきよう ほっし
自行化他を顕すなり所謂南無妙法蓮華経の法師なるが故なり云云。

宝塔品

御義口伝に云く此の宝塔は宝浄世界より涌现するなり、其の宝浄世界の
おんぎくでん いわ ほうとう ほうじょうせかい ゆげん そ ほうじょうせかい
仏とは事相の義をば且らく之を置く、証道観心の時は母の胎内是なり
じそう しば これ かんじん たいないこれ
故に父母は宝塔造作の番匠なり、宝塔とは我等が五輪・五大なり然るに
ゆえ ふほ ほうとうそうさく ばんしやう ほうとう われら しか

たきたい 託胎の胎を宝浄世界と云う故に 出胎する 処を涌現と云うなり、凡そ
しゅじょう 衆生の涌現は地輪より出現するなり故に従地湧出と云うなり、妙法の
ほうじょうせかい 宝浄世界なれば十界の衆生の胎内は皆是れ宝浄世界なり、蓮華の宝浄
なれば十界の胎内悉く無垢清浄の世界なり、妙法の地輪なれば十界
わた に亘るなり蓮華の地なれば清浄地なり、妙法の宝浄なれば我等が身体
しゅうじょう は清浄の宝塔なり妙法蓮華の涌出なれば十界の出胎の産門本来
しょうじょう 清浄の宝塔なり、法界の搭婆にして十法界即塔婆なり妙法の二仏なれ
じゅつかいさんぜん ば十界三千・皆境智の二仏なり、妙法的一座には三千の心性皆以て二
みょうほうれんげ 尊の所座なり妙法蓮華二仏一座なれば不思議なり清浄なり、妙法蓮華
の見なれば十界の衆生・三千の群類・皆自身の塔婆を見るなり、十界
ふどう の不同なれども己が身を見るは三千具足の塔を見るなり己の心を見るは
さんぜんぐそく 三千具足の仏を見るなり、分身とは父母より相續する分身の意なり、迷

う時は流転るてんの分身ふんじんなり悟る時は果中の分身ふんじんなり、さて分身ふんじんの起るおこ處ところを
習ならうには地獄じごくを習ならうなり、かかる宝塔ほうとうも妙法蓮華經みょうほうれんげきょうの五字ごじより外こは之これ
無きなり妙法蓮華經みょうほうれんげきょうを見れば宝塔ほうとう即一切衆生そくいつさいしゅじょう一切衆生そく即南無
妙法蓮華經みょうほうれんげきょうの全体ぜんたいなり云云。

提婆品だいば

御義口伝おんぎくでんに云く此の品いわには釈尊しゃくそんの本師ほんし・提婆達多だいばだつたの成仏じょうぶつと文殊師利もんじゆしり・
教化きやうけの童女りゅうによじょうぶつ成仏とを説くなり、是れ又妙法蓮華經みょうほうれんげきょうの提婆だいば童女りゅうによなれば
十界三千皆調達じゅっかいさんぜんみなちようだつりゅうによ童女ちようだつなり、法界ほっかいの衆生しゅじょうの逆ちようだつの辺ほっかいは調達ちようだつなり法界ほっかいの
貪欲とんよく・瞋恚しんに・愚癡ぐちの方は悉ことごとく童女ちようだつなり、調達しゅうとくは修徳しゅうとくの逆罪つみ・一切衆生いつさいしゅじょう
は性徳しょうとくの逆罪つみなり一切衆生いつさいしゅじょうは性徳しょうとくの天王てんのう如來にやらいちようだつ調達しゅうとくは修徳しゅうとくの天王てんのう如來にやらい
なり、童女りゅうによは修徳しゅうとくの童女しゅうとく・一切衆生いつさいしゅじょうは性徳しょうとくの童女りゅうによなり、所詮しよせん釈尊しゃくそん
も文殊もんじゆも提婆だいばも童女りゅうによも一つ種の妙法蓮華經みょうほうれんげきょうの功能くのうなれば本來成仏じようぶつな

り、仍よつて南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと唱となえ奉たてまつる時は十界同時じゅっかいどうじに成仏じょうぶつするなり、
是これを妙法蓮華經みょうほうれんげきょうの提婆達多だいばだつたと云いうなり、十界三千竜女じゅっかいさんぜんりゅうにょなれば無垢世界むくせかい
に非あらずと云いう事なし、竜女りゅうにょが一身も本来成仏じょうぶつにして南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうの
当とう体たいなり云云。

勸持品

御義口伝おんぎくでんに云いく此この品の姨母おば・耶輸やしゅの記き☆は十界同時じゅっかいどうじの授記じゅきなり妙法みょうほう
の姨母おば・妙法みょうほうの耶輸やしゅなる故ゆゑなり、十界じゅっかいの衆生しゅじょうの心性しんしよは所持しよじの經きやうの体たいな
り是これ即すなわち勸持かんじの流通りつうなり、心性しんしよしよじ所持しよじの經きやうを勸持かんじして自行化他じぎやうけたに趣おもむくな
り、姨母おば耶輸やしゅは女人にょにんの成仏じょうぶつなり二万よろずの大士だいしは男子なんしの流通りつうなり此この文ぶん・
陰陽いんよう一体いつたいにして南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうの当とう体たいなり云云。

安樂行品

御義口伝おんぎくでんに云いく妙法みょうほうの安樂行あんらくぎやうなれば十界三千じゅっかいさんぜん悉ことごとく安樂行あんらくぎやうなり、自受用じじゆゆう

の当体なり身口意誓願悉く安樂行なり、蓮華の安樂行なれば三千十界
清淨の修行なり、諸法実相なれば安樂行に非ざることを莫し、本門の
意は十界の色心本来本有として真実の安樂行なり、安樂行の体とは
所謂上行所伝の南無妙法蓮華經是なり云云、靈山淨土に安樂に行詣
す可きなり云云。

一 涌出品

御義口伝に云く此の品は迹門流通の後・本門開顯の序分なり、故に先ず
本地無作の三身を顕さんが為に釈尊所具の菩薩なるが故本地本化の弟子
を召すなり、是れ又妙法の從地なれば十界の大地なり、妙法の涌出な
れば十界皆涌出なり、十界妙法の菩薩なれば皆饒益有情界の慈悲
深重の大士なり、蓮華の大地なれば十界の大地も十界涌出の菩薩も本
来清淨なり、所詮悟道に約する時は從地とは十界の衆生の大種の

所生なり、涌出とは十界の衆生の出胎の相なり菩薩とは十界の衆生の本有の慈悲なり、此の菩薩に本法の妙法蓮華經を付属せんが為に從地涌出するなり、日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は從地涌出の菩薩なり外に求むること莫かれ云云。

壽量品

御義口伝に云く壽量品とは十界の衆生の本命なり、此の品を本門と云う事は本に入る門と云う事なり、凡夫の血肉の色心を本有と談ずるが故に本門とは云うなり、此の重に至らざるを始覺と云い迹門と云うなり、是を悟るを本覺と云い本門と云うなり、所謂南無妙法蓮華經は一切衆生の本有の在処なり爰を以て經に我実成仏已来とは云うなり云云。

分別品

御義口伝に云く此の品は上の品の時本地無作の三身如来の壽を聞く故に

今品にして上の無作の三身を信解するなり、其の功德を分別するなり功德
とは十界己己の当体の三毒の煩惱を此の品の時其の儘妙法の功德なり
と分別するなり、其の功德とは本有の南無妙法蓮華經是なり云云。

一 隨喜品

御義口伝に云く妙法の功德を隨喜する事を説くなり、五十展転とは五と
は妙法の五字なり十とは十界の衆生なり展転とは一念三千なり、教相
の時は第五十人の隨喜の功德を校量せり五十人とは一切衆生の事な
り、妙法の五十人妙法蓮華經を展転するが故なり、所謂南無妙法蓮華經
を展転するなり云云。

一 法師功德品

御義口伝に云く無作の三身も如来の寿も分別功德も隨喜も我が身の上の
事なり、然らば父母所生の六根は清淨にして自在無碍なり妙法の六根

なれば十界三千の六根皆清淨なり、蓮華所具の六根なれば全く不淨に
あら じゅつかいさんぜん ろっこんみなしやうじよう
非ざるなり、此の六根にて南無妙法蓮華經と見開覚知する時は本来本有
ろっこんしやうじよう
の六根清淨なり云云。

一 不輕品

御義口伝に云く此の菩薩の礼拝の行とは一切衆生の事なり、自他一念の
おんぎくでん いわ ほさつ らいはい いっさいしゅじよう
礼拝なり父母果縛の肉身を妙法蓮華經と礼拝するなり、仏性も仏身も
らいはい ふ ぼ かばく みやうほうれんげきやう らいはい ぶつしやう ぶつしん
しゅじよう とうたい しきしん
衆生の当体の色心なれば直ちに礼拝を行ずるなり、仍って皆当作仏の四
らいはい
字は南無妙法蓮華經の種子に依るなり。

一 神力品

御義口伝に云く十種の神力を現じて上行菩薩に妙法蓮華經の五字を
おんぎくでん いわ じんりき げん じやうぎやうほさつ みやうほうれんげきやう ごじ
付属し給う此の神力とは十界三千の衆生の神力なり、凡夫は体の神力
ふぞく たま じんりき じゅつかいさんぜん しゅじよう じんりき ほんぶ
・三世の諸仏は用の神力なり神とは心法力とは色法なり力は法神は妙な
さんぜ しよぶつ じんりき

り妙法の神力なれば十界悉く神力なり、蓮華の神力なれば十界清淨の神力なり、惣じて三世の諸仏の神力は此の品に尽くせり釈尊出世の神力の本意も此の品の神力なり、所謂妙法蓮華經の神力なり十界皆成と談ずるより外の諸仏の神力は之れ有る可からず、一切の法門神力に非ずと云う事なし云云。

一 囑累品

御義口伝に云く此の品には摩頂付属を説きて此の妙法を滅後に留め給うなり、是れ又妙法の付属なれば十界三千皆付属の菩薩なり、又三摩ずる事は能化所具の三觀三身の御手を以て所化の頭上に明珠を譲り与えたる心なり、凡そ頂上の明珠は覺悟知見なり頂上の明珠とは南無妙法蓮華經是なり云云。

薬王品 やくおうぼん

御義口伝に云く此の品は薬王菩薩の仏の滅後に於て法華を弘通するなり、
おんぎくでん いわ
所詮焼身焼臂とは焼は照の義なり照は智慧の義なり智能く煩惱の身生死
しよせん しやうひ
の臂を焼くなり、天台大師も本地薬王菩薩なり、能説に約する時は釈迦
ひじ
なり衆生の重病を消除する方は薬王・薬師如来なり又利物の方にて
しゆじやう じゆうびやう しょうじよ
やくおう
薬王と云う自悟の方にては薬師と云う、此の薬王・薬師出世の時は
てんだいだいし
天台大師なり薬王も滅後に弘通し薬師如来も像法暫時の利益有情なり、
やくおう めつこ ぐつう やくしにやらい そうほうざんじ りやくうじやう
時を以て身体を顕し名を以て義を顕す事を仏顕し給うなり、薬王菩薩は
しかん いちねんさんぜん ほうもん ひろ たま そ いちねんさんぜん いわゆる なむ
止観の一念三千の法門を弘め給う、其の一念三千とは所謂南無
みやうほうれんげきやうこれ
妙法蓮華経是なり云云。
みやうおん

妙音品

御義口伝に云く此の菩薩は法華弘通の菩薩なり故に卅四身を現じて
おんぎくでん いわ ぼさつ ほっけくつう ぼさつ ゆえ げん

十界互具を顕し給い利益說法するなり、是れ又妙法の妙音なれば十界の音声は皆妙音なり、又十界悉く卅四身の所現の妙音なり、又蓮華の妙音なれば十界三千の音声皆無染清淨なり、されば慈覺大師をば妙音の出世と習うなり之に依つて唐決の時・引声妙音をば伝え給えり何故有りてか法華を誹謗して大日經等に劣りたりと云うや云云、所謂法界の音声・南無妙法蓮華經の音声に非ずと云う事なし云云。

一 観音品

御義口伝に云く此の品は甚深の秘品なり息災延命の品なり当途王經と名く、されば此の品に就て職位法門を継ぐぞと習うなり、天台も三大部の外に観音玄という疏を作り章安大師は兩卷の疏を作り給えり能く能くの秘品なり、観音・法華・眼目異名と云いて観音即ち法華の体なり所謂南無妙法蓮華經の体なり云云。

陀羅尼品

御義口伝に云く此の品は二聖・二天王・十羅刹女・陀羅尼を説きて持經者おうちを擁護たもし給うなり、所詮妙法・陀羅尼の真言なれば十界の語言音声みなだらかに皆陀羅尼なり、されば伝教大師の云く「妙法の真言は他經に説かず普賢常護は他經に説かず」陀羅尼とは南無妙法蓮華經の用なり、此の五字の中には妙の一字より陀羅尼を説き出すなり云云。

嚴王品

御義口伝に云く此の品は二子の教化に依つて父の妙莊嚴王邪見を翻し正見に住して沙羅樹王せいきん仏と成るなり、沙羅樹王とは梵語なり此には熾盛光と云う、一切衆生は皆是れ熾盛光より出生したる一切衆生なり、此の故に十界衆生の父なり、法華の心にては自受用智なり忽然火起ゆえ 煩悩の一念の火起りて迷悟不二の舍宅を焼くなり

邪見とは是なり、此の邪見を邪見即正と照したる南無妙法蓮華經の智慧
なり所謂六凡は父なり四聖は子なり四聖は正見六凡は邪見故に六道の
衆生は皆是れ我が父母とは是なり云云。

勸發品

御義口伝に云く此の品は再演法華なり本・迹二門の極理此の品に至極す
るなり、慈覺大師云く十界の衆生は發心修行と釈し給うは此の品の事
なり、所詮此の品と序品とは生死の二法なり序品は我等衆生の生なり此
の品は一切衆生の死なり生死一念なるを妙法蓮華經と云うなり品品に
於て初の題号は生の方・終の方は死の方なり、此の
法華經は生死・生死と轉りたり、生の故に始に如是我聞と置く如は生の
義なり死の故に終りに作礼而去と結したり、去は死の義なり作礼の言は
生死の間に成しと成す処の我等衆生の所作なり、此の所作とは

妙法蓮華經なり、礼とは不乱の義なり法界妙法なれば不乱なり、
天台大師の云く「体の字は礼に訓ず礼は法なり各々其の親を親とし各々
其の子を子とす出世の法体も亦復是の如し」と、体とは妙法蓮華經の事
なり先づ体玄義を釈するなり、体とは十界の異体なり是を法華經の体と
せり此等を作礼而去とは説かれたり、法界の千草万木地獄・餓鬼等何の
界も諸法実相の作礼に非ずという事なし是れ即ち普賢菩薩なり、普とは
法界・賢とは作礼而去なり此れ即ち妙法蓮華經なり、爰を以て品品の初
めにも五字を題し終りにも五字を以て結し前後中間南無妙法蓮華經の
七字なり、末法弘通の要法唯此の一段に之れ有るなり、此等の心を失う
て要法に結ばずんば末法弘通の法には不足の者なり剩え日蓮が本意を
失う可し、日蓮が弟子・檀那別の才覚無益なり、妙樂の釈に云く「子父
の法を弘む世界の益有り」と、子とは地涌の菩薩なり父とは釈尊なり世界

にほんこく

じょうぶつ

なむみょうほうれんげきよう

とは日本国なり益とは成仏なり法とは南無妙法蓮華経なり、今又以て

か
こと

にちれん

にちれん

でし

だんな

せかい

にほんこく

此くの如し父とは日蓮なり子とは日蓮が弟子・檀那なり世界とは日本国

じゅじじょうぶつ

じょうぎようしよでん

だいもく

なり益とは受持成仏なり法とは上行所伝の題目なり

おんぎくでん

御義口伝卷下

こうあんがんねんつちのえとら

弘安元年 戊寅 正月一日

しつびつ
にっこう
執筆 日興

御講聞書

◆九六 御講聞書目録

804p

已上九十ヶ条

一、本因・本果の事

八〇九

一、妙法蓮華経序品第一の事八〇

一、爾前無得道の事

八〇九

七

一、序品の事

八〇九

一、妙法

八〇八

一、品と云う事

八〇九

一、蓮華

八〇八

一、如是我聞の事

八一〇

一、如是この二字 八一〇

一、耆闍崛山ぎしゃくつせんの事 八一

一、与大比丘びく衆の事 八二

一、爾時・世尊せそんの事 八三

一、淨飯王摩耶夫人成仏証文じょうばん まやふじんじょうぶつしょうもんの

事八一三

一、方便品ほうべんの事 八三

一、仏所成就ぶつしよじょうじゅだい第一希有難解之法けうなん

唯仏与仏の事八一四

一、十如是じの事 八五

一、自証無上道大乘平等法むじょうどうだいじょうびやうどうの事

八一五

一、我始坐道場ごしざどうじょう觀樹また亦經行の事八

一六

一、今・我喜無畏の事 八六

一、我聞是法音疑網ほうせいぎもうかい皆已除の事八

一六

一、以本願故說三乘法ほんがんさんじやうの事 八

一七

一、有大長者ちやうじやの事 八一八

一、多有田宅の事 八一九

一、等一大車の事 八二〇

一、其車高広の事 八二〇

一、是朽故宅そくう属于一人の事 八

二〇

一、諸鬼神等揚声 大叫の事
しよきじん ようしやうだいきやう

八二一

一、乘此宝乘直至道場の事
じきしどうじやう 八

二

一、若人 不信毀謗此經則断一切
にやくにんふしん きぼう いっさい

世間・仏種の事八二二
せけん ぶつしゆ

一、捨惡知識親近善友の事
あくちしきしんこんぜんゆう 八

二三

一、無上宝聚不求自得の事
むじやうほうじゆ ふぐじとく 八

二四

一、藥草喩品の事 八二四
やくそうゆほん

一、現世安穩・後生善処の事
げんせあんのん ごしやうぜんしよ

八二五

一、皆悉到於一切智地の事
かいしつ いっさいちち 八

二五

一、此の一切智地の四字八二六
いっさいちち

一、根茎枝葉の事
しやう 八

二七

一、枯槁衆生の事
から しゆじやう 八

二七

一、等雨法雨の事
ほうう 八

二七

一、如從飢国来忽遇大王・の事八
けこく だいおう

二八

一、大通智勝だいとうちしょう仏ぶつ ○ 不得ふとく成じょう仏道ぶつどうの事

八二九

一、貧人ひんじん見此珠其心大歡喜かんきの事八

三〇

一、如甘露かんろけんかん見灌くわんの事 八三二

一、若有惡人以不善心ふぜんしん等の事 八

三三

一、如是によぜ如是この事 八三二

一、是真ぜしん仏子住淳善地ぶつしの事 八

三三

一、非口所宣非心所測そくの事 八

三三

一、不染せけん世間法よれんげざい如蓮華すい在水すい從地而ゆじゅつ

涌出ゆじゅつの事八三三

一、願みらい仏為未來演說えんぜつ令開解らうかいの事八

三四

一、譬如良医智慧聰達ちえの事 八

三四

一、一念いちねん信解しんげの事 八三五

一、見もん仏聞法信受教誨しんじゆの事 八

三五

一、若復有人またあるひと以七宝しつぽう滿是人所得其

福最多ふくたひの事八三五

一、妙音菩薩の事 八三六

一、爾時無尽意菩薩の事 八三六

一、觀音妙智力の事 八三六

一、自在之業の事 八三六

一、妙法蓮華經陀羅尼の事 八

三六

一、六万八千人の事 八三七

一、妙莊嚴王の事 八三七

一、華嚴・大日觀經等の凡夫の

得道の事 八三七

一、題目だいもくの五字ごじを以て下種げしゆの証文しょうもん

と為す可なき事べ 八三七

一、題目だいもくの五字ごじ末法まつぽうに限りて持つ

可べきの事 八三八

一、天台云く是我弟子これわがでし應弘おうぐが我法の

事 八三八

一、色心しきしんを心法と云う事 八三八

一、無作むさの応身我等おうじんわれら凡夫也ほんぶと云う

事 八三八

一、諸河無鹹しよの事 八三八

一、妙樂大師の釈みょうらくに末法まつぽう之初冥利みょうり

不無しやくの釈の事 八三九

一、爾前經瓦礫国にぜんきやうがりやくの事 八三九

一、無明惡酒むみょうの事 八三九

一、日蓮己証の事 八四〇

一、釈尊の持言秘法ひほうの事八四〇

一、日蓮門家大事にちれんもんかだいじの事 八四〇

一、日蓮が弟子臆病にちれん でし おくびようにては叶かなう

可べからざる事八四〇

一、妙法蓮華經みょうほうれんげきようの五字ごじを眼と云う

事 八四〇

一、法華經ほけきようの行者ぎようじゃに水火すいかの行者ぎようじゃ

の事 八四一

一、女人にょにんと妙しやくそんと釈尊しやくそんと一体の事八

四一

一、置不呵責かしやくの文の事 八四二

一、異念なく無く靈山淨土りやうぜんじょうどへ参る可べき

事 八四二

一、不可失ふか本心ほんしんの事 八四二

一、天台大師てんだいだいしを魔王障礙まおうしょうげせし事八

四三

一、法華經極理ほけきようごくりの事 八四四

一、妙法蓮華經五字みょうほうれんげきようごじの藏の事 八

四四

一、我等衆生われらしゆじようの成仏じようぶつは打かため

たる成仏じようぶつと云う証文しょうもんの事八四五

一、爾前にぜん・法華ほっけの能くらべの事

八四五

一、授職の法体ほったいの事

八四五

一、四弘誓願しぐせいがん応報如理と云う事八

一、末代まつだい讓狀の事

八四五

四六

一、本有ほんぬしかん止観と云う事

八四五

一、本来しぐの四弘の事

八四六

一、入末法まつぼうしぐせいがん四弘誓願の事八四五

右日向記の目録は、現行板本の目録に脱せる「如是我聞によぜがもんの事」及び「法華經ほけきよう

の行者ぎようじゃに水火すいかの行者ぎようじゃの事」の二条を加え、

新會本に明かに

「已上九十ヶ

条」とあるに合せて、新たに作製せり。現行板本に八十八箇条とあるは誤あやまり

なり、但しただ卷頭の「総」は新會本にも数えず、故に本目録にも記載のせず。

なお同一箇条にして、別条に御講示ある場合、即ちすなわ「等雨法雨ほううの事」「根茎枝葉しやう

の事」等は、新會本も現行板本も、共に一条に数うるを以て、本目録も亦また

た其れそに従えり。

已上四行の附記は全く日宗社本に依るよ、編者。

二二弘安元年三月十九日一連連御講至二同三年五月二十八日一也

自二弘安元年三月十九日一連連御講至二同三年五月二十八日一也

仍テ記シレ之畢

日向 記之

凡そ法華經と申すは一切衆生・皆成仏道の要法なり、されば大覺世尊

は説時未至故と説かせ給いて説く可き時節を待たせ給いき、例せば郭公の

春をおくり鶏鳥の曉を待ちて鳴くが如くなり、此れ即ち時を待つ故なり、

されば涅槃經に云く以知時故名大法師と説かれたり、今末法は南無

妙法蓮華經の七字を弘めて利生得益あるべき時な

り、されば此の題目には余事を交えれば僻事なるべし、此の妙法の大曼荼羅

を身に持ち心に念じ口に唱え奉るべき時なり、之に依つて一部二十八品の

頂上に南無妙法蓮華經序品第一と題したり。

一妙法蓮華經序品第一の事玄旨伝に云く、一切經の惣要とは謂く

妙法蓮華經の五字なり、又云く、一行一切行恒修二此三味一文、云う所の

三味とは即ち法華の有相無相の二行なり、此の道理を以て法華經を讀誦せ

ん行者は即ち法具の一心三觀なり云云、此の釈に一切經と云うは近くは

華嚴・阿含・方等・般若等なり、遠くは大通仏より已來の諸經なり、本門

の意は壽量品を除いて其の外は一切經なり、惣要とは天には日月・地に

は大王・人には神・眼目の如くなりと云う意を以つて釈せり、此れ即ち

妙法蓮華經の枝葉なり、一行とは妙法の一行に一切行を納めたり、法具

とは題目の五字に万法を具足すと云う・事なり、然る間・三世十方の諸仏

も上行菩薩等も・大梵天王

・帝釈・四王・十羅刹女・天照太神・八幡大菩薩・山王二十一社・其の

外・日本国中の小神・大神等・此の經の行者を守護すべしと・法華經の第

五卷に分明ふんみょうに説かれたり、影と・身と・音と・響ひびきとの如ごとし、法華經二十

八品は影こゝの如ごとく響ひびきの如ごとし、題目だいもくの五字は体の如ごとく音こゝの如ごとくなり、題目だいもくを

唱となえ奉たてまつる音は十方世界じゅつぱうせかいにとずかずと云う所なし、我等われらが小音なれども、

題目の大音だいもくに入れて唱となえ奉たてまつる間、一大三千界さんぜんかいにいたらざる所なし、譬たとえば

小音なれども貝ばいに入れて吹く時・遠く響ひびきくが如ごとく、手の音は・わずかなれ

ども鼓を打つに遠く響ひびきくが如ごとし、一念三千いちねんさんぜんの大事だいじの法門ほうもん是なり、かかる目

出度しだき御經ごきやうにて渡わたらせ給たまえるを、謗そしる人何ぞ無間むげんに墮だ在ざいせざらんや、法然ほうねん

・弘法等こうぼうの大惡知識あくちしき是なり。

一妙法みょうぼうの二字は一切衆生いっさいしゅじやうの色心しきしんの二法なり、一代説教いちだいせつきやうの中に法の

字の上に妙の字を置きたる經は一經いっきやうもなし、涅槃經ねはんきやうの題目だいもくにも大涅槃經だいねはんきやうと

云いいて大の字あれども妙の字なし、但ただし大は只是ただこれ妙と云えり然しかれども大

と妙とは不同ふどうなり、同じ大なれども華嚴經けこんきやうの大方広仏華嚴經けこんきやうと云える題号

の大と、涅槃經の大と天地雲泥なり、華嚴經の大は無得道の大なり。涅槃經

の大は法華同醍醐味の大なり、然れども然涅槃尚劣と云う時は法華經には

劣れり、此の事は涅槃經に分明に法華經に劣ると説かれたり、涅槃經に

云く如下法華中八千声聞得レ受二記べつ一成中大果舞上如三秋收冬蔵更

無二所作二云云此の文分明に我と法華經に劣れりと説かせ給えり。

一蓮華とは本因・本果なり、此の本因・本果と云うは一念三千なり、

本有の因・本有の果なり、今始めたる因果に非ざるなり、五百塵点の法門

とは此の事を説かれたり、本因の因と云うは下種の題目なり、本果の果と

は成仏なり、因と云うは信心領納の事なり、此の經を持ち奉る時を本因

とす其の本因のまま成仏なりと云うを本果とは云うなり、日蓮が弟子・

檀那の肝要は本果より本因を宗とするなり、本因なくしては本果有る可か

らず、仍て本因とは慧の因にして名字即の位なり、本果は果にして究竟即

の位なり、究竟くきようそく即とは九識ほんかく本覺いみゆうの異名なり、九識ほんかく本法の都とは法華ほっけの行者ぎようじや
の住所なり、神力品じんりきほんに云く若しは山谷せんごく曠野等と説けり即ち是れ道場どうじようと見え
たり豈あにほっけ法華ぎようじやの行者の住所は生処・得道とくどう・轉法輪てんほうりん・入涅槃ねはんの諸仏しよぶつの四処の
道場どうじように非ずや。

一本因・本果の事

法界ほっかい悉く常住じやうじゆう不滅ふめつの爲ていたらく体を云うなり、されば

妙樂大師・此の事を釈する時・弘決くけつに云く当七知身しんどういちねんさんぜん土一念三千・故成道じやうどう

時称二此本理二身一念遍二於法界一云云、此の釈分ふんみよう明に本因・本果を釈し

たり、身と云うは一切衆生いっさいしゆじようなり、土と云うは此の一切衆生の住処じゆうしよなり一念いちねん

とは此の衆生しゆじようの念念ねんねんの作業なり、故成道じやうどう時称二此本理一とは本因・本果の

成道なり、本理と本因・本果とは同じ事なり法界ほっかいとは五大なり、所詮しよせん

法華經ほけきようを持ち奉る行者は若在ぶつぜん仏前れんげ蓮華けし化生しやうしなれば称此本理じようどうの成道なり、

本理かなに称うとは妙法蓮華經みようほうれんげきようの本理かなに称うと云う事なり、法華經ほけきようの本理かなに

かな
叶うとは此の経を持ち奉るを云うなり、若有能持則持仏身とは是なり。

一爾前無得道的事

此の法門は蓮華の二字より起れり、其の故は蓮華

の二字を以て云うなり、三世の諸仏の成道を唱うるは蓮華の二字より出で

たり、權教に於て蓮華の沙汰無し若しありと云うとも有名無実の蓮華なる

べし、三世の諸仏の本時の下種を指して華と名け、此の下種の華によつて

成仏の蓮を取る、妙法蓮華即ち下種なり、下種即ち南無妙法蓮華經なり、

華は本因・蓮は本果なれば華の本国を不信謗法の人豈具足せんや、經に

云く若人不信毀謗此經則斷一切世間・仏種云云、此の蓮華に迷う故に

十界具足無し、十界具足せざれば一念三千跡形無きなり、一切の法門は

蓮華の二字より起れり、一代説教に於て無得道と云うも蓮華の二字より起

れり深く之を案ず可し。

一序品の事

此の事は、教主釈尊・法華經を説き給わんとて先ず瑞相

の顯あらわれたる事を云うなり、今末法まっぽうに入つて南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうの顯あらわれ給うべ
き瑞相ずいそうは彼かしこには百千万倍勝るべきなり、其そのの故は雨は竜の大小だいしやうにより蓮華
は池の淺深せんじんに随したがつて其の色不同なるが如くなるべし。

一品と云う事 品とは、釈に云く義類同と云えり、此ほけきやうの法華經は三仏寄

合たまひい給いて定判し給えり、三仏とは釈迦・多宝・分身是なり、此の三仏・

ひようじやう 評定 してのたまわく一切衆生・皆成仏道は法華經に限りて有りと、

かいぜしんじつ 皆是真實の証明・舌相梵天の誠証・要當說真實の金言・此等を義類同

して題したる品の字なり、天竺てんじくには跋渠ぼくこと云う此には品と云えり、釈迦・

多宝・分身の三仏の御口を以て指し合せ同音に定判し給える我等衆生の

成仏じやうぶつなり、譬たとえば鳥の卵の内より卵をつつく時・母又同じくつつきあくる

に・同じき所をつつきあくるが如ごとし、是れ即ち念慮すなわの感応かんのうする故なり、今

法華經の成仏も此くの如くなり、三世諸仏の同音に同時に定め給える成仏

なり、故に經に云く從仏口生如從仏等云云。

一如是我聞の事

仰に云く如と云うは衆生の如と仏の如と一如にして

無二如なり、然りと雖も九界と仏界と分れたるを是と云うなり、如は如を

不具に名く即ち空の義なりと釈して少しも・ことならざるを云うなり、

所詮法華經の意は煩惱即菩提・生死即涅槃・生仏不二・迷悟一体といえり、

是を如とは云うなり、されば如は実相・是は諸法なり、又如は心法・是は

色法・如は寂・是は照なり、如は一念・是は三千なり、今經の心は文文・

句句・一念三千の法門なり、惣じて如是我聞の四字より外は今經の体全く

無きなり 如と妙とは同じ事・是とは法と又同じ事なり、法華經と釈尊と

我等との三・全く不同無く・如我等無異なるを如と云うなり、仏は悟り・

凡夫は迷なりと云うを是とは云うなり、我聞と云うは、我は阿難なり、聞

とは耳の主と釈せり、聞とは名字即なり、如是の二字は妙法なり、阿難を

始めて靈山りょうぜん一會の聴衆ちようしゅう・同時に妙法蓮華經の五字ごじを聴聞ちようもんせり仍よつて我

も聞くと云えり、されば相伝そうでんの点には如これは是なりきと我れ聞くとはいえり、

しよせんまつほうとうこん なむ みようほうれんげきよう

所詮末法当今には南無妙法蓮華經を我も聞くと心得こころえべきなり、我は真如しんによ

ほうししよう

法性の我なり、天台大師は同聞衆と判ぜり同じ事を聞く衆と云うなり、同

みようほうれんげきよう

とは妙法蓮華經なり、聞は即身成仏・法華經に限ると聞くなり云云。

そくしんじようぶつ ほけきよう

一如是の二字

こ

を約教やくきようの下に釈しゃくする時・文句もんくの一に又一時に四箭いちしせんを接

して地に墮だせしめざるも未いまだ敢て捷あえてしと称せず、鈍驢どんろに策むちうつて跋はべつ☆を駈なる尚

し一をも得ず何いかに況いわんやや四をや云云、記の一に云く、大經だいきように云く迦葉菩薩かしようぼさつ

問うて云くいわ云何いかなるかか智者ちしや・念念ねんねんの滅を觀かんずと、仏いの言いわく譬たとえば四人皆射術みな

を善し満みつつて一處いつしよに在りて・各一方いっぽうを射るに念言ねんげんすらく・我等われらは四の箭や・

俱ともに射ともて俱だに墮だせんと、復人また有りて念ねんずらく・其その未いまだ墮だせざるに及いたんで

我よれ能いく一時いちじに手を以て接取せとくせんというが如ごとし、仏いの言いわく、捷疾鬼しやうしつきは復また是この

人よりも速なり是くのごとく、飛行鬼・四天王日月神・堅疾天は展転して箭よりも疾し、無常は此れに過ぎたりと、此の本末の意は他師・此の經の如是に付て釈を設くと云えども・更に法蓮華の理に深く叶わざるなり、一二だも義理を尽さざるなり況や因縁をや、何に況や約教・觀心の四をやと破し給えり、所詮法華經は速疾頓成を以て本とす、我等衆生の無常のはやき事は捷疾鬼よりもはやし、爰を以て出ずる息は入る息を待たず、此の經の如是は爾前の諸經の如是に勝れて超八の如是なり、超八醍醐の如是とは速疾頓成の故なり、妙樂大師云く若し超八の如是に非ずんば、安ぞ此の經の所聞と為さんと云云。

一耆闍崛山の事 仰に云く耆闍崛山とは靈鷲山なり、靈とは三世の諸仏の心法なり必ず此の山に仏法を留め給う、鷲とは鳥なり此の山の南に當つ

て詩だ戸陀林あり死人を捨つる所なり、鷲此の屍を取り食うて、此の山に住むなり、さて靈鷲山とは云うなり、所詮今の經の心は迷悟一体と談ず、靈と云うは法華經なり、三世の諸仏の心法にして悟なり、鷲と云う卯は畜生にして迷なり、迷悟不二と開く中道即法性の山なり、耆闍崛山と云うは迷悟不二・三諦一諦・中道第一義空の内証なり、されば法華經を行ずる日蓮等が弟子・檀那の住所はいかなる山野なりとも靈鷲山なり行者遠釈迦如来に非ずや、日本国は耆闍崛山・日蓮等の類は釈迦如来なるべし、惣じて一乘南無妙法蓮華經を修行せん所は・いかなる所なりとも常寂光の都・靈鷲山なるべし、此の耆闍崛山中とは煩惱の山なり、仏菩薩等は菩提の果なり・煩惱の山の中にして法華經を三世の諸仏説き給えり、諸仏は法性の依地・衆生は無明の依地なり、此の山を寿命品にしては本有の靈山と説かれたり、本有の靈山とは此の娑婆世界なり、中

にも日本国なり、法華經の本国土妙・娑婆世界なり、本門壽量品の未曾有

の大曼荼羅建立の在所なり云云、瑜伽論に云く東方に小国有り、其の中

唯大乘の種姓のみ有り、大乘の種姓とは法華經なり法華經を下種として

成仏すべしと云う事なり、所謂南無妙法蓮華經なり小国とは日本国なり

云云。

一与大比丘衆の事 仰に云く文句の一に云く釈論に明す、大とは亦是

多と言ひ亦是勝と言う、遍く内外の經書を知る故に多と言う、又数一万・

二千に至る故に多と言う、今明さく大道有るが故に・大用有るが故に・大

知有るが故に・故に大と言う、勝とは道勝れ・風勝れ・知勝る、故に勝と

言う、多とは道多く・用多く・知多し故に多と言う、又云く含容一心・一切

心なり、故に多と名くるなり、記の一に云く一心一切心と言うは心境俱に

心にして各一切を摂す、一切三千を出でざるが故なり、具に止觀の第五の

文の如し、若し円心に非ざれば三千を撰せず、故に三千惣別威く空仮中なり、一文既に爾なり他は皆此れに准せよ、此の本末の心は心境義の一念三千を釈するなり、止観の第五の文とは夫一心具十法界乃至不可思議境の文を指すなり、心境義の一念三千とは此の与大比丘和が大の字より釈し出だせり、大多勝の三字・三諦・三観なり、円頓行者起念の当体・三諦三観にして大多勝なり、此の釈に惣と云うは一心の事なり、別とは三千なり、一文とは大の一字なり、今末法に入つては法華經の行者・日蓮等の類、正しく大多勝の修行なり、法華經の行者は釈迦如来を始め奉りて悉く大人の為に敬い奉るなり誠に以て大曼荼羅の同共の比丘衆なり、本門の事の一念三千・南無妙法蓮華經・大多勝の比丘衆なり、文文・句句・六万九千三百八十四字の字ごとに大多勝なり、人法一体にして即身成仏なり、されば釈に云く大は是れ空の義・多は是れ仮の義・勝は是れ中の義と、一人の上にも大多

勝の三義・分明に具足す、大とは迹門☆☆多とは本門・勝とは題目なり、

法華經の本尊を大多勝の大曼荼羅と云うなり、是れ豈与大比丘衆に非ずや、

二界・八番の雜衆悉く法華の会座の大曼荼羅なり、法華經の行者は二法の

情を捨てて唯妙法と信ずるを大というなり、此の題目の一心に一切心を

含容するを多と云うなり、諸經・諸人に勝れたるが故に勝と云うなり、

一切心に法界を尽す一心とは法華經の信心なり、信心即一念三千なり云云。

一爾時・世尊の事 仰に云く世尊とは釈迦如来・所詮世尊とは孝養の

人を云うなり、其の故は不孝の人をば世尊とは云わず教主釈尊こそ世尊

の本にては御座候え、父淨飯王・母摩耶夫人を成道せしめ給うなり、

されど今經の座には父母御座さざれば方便土へ法華經をば送らせ給うな

り、彼土得聞とは是なり、但し法華經の心は十方仏土中・唯一乘法な

り切利夫に母摩耶夫人生じ給えり、仰利天に即したる寂光土なり、方便土

に即したる寂光土なり、四土一念・皆常寂光なれば、何れも法華經の説処なり、虚空会の時の説・法華に岩切利天もるべきや寂光土の説・法華に遠方便土もるべきや、何れも法華經の説所なれば同聞衆の人数なり云云。

一淨飯王座耶夫人成仏証文の事 仰に云く方便品に云く我始坐

道場・觀樹亦經行の文是なり、又寿量品に云く、然我実成仏已來の文是なり、

教主釈尊の成道の時・淨飯王も摩耶も得道するなり、本・迹二門

の得道の文是なり云云、此の文日蓮が己心の大事なり、我始と我実との文

能く能く之を案ず可し、其の故は爾前經の心は父子各別の談道なり、然る

開成仏之れ無し、今の經の時・父子の天性を定め父子一体と談ぜり・父母

の成仏即ち子の成仏なり、子の成仏・即ち父母の成仏なり、釈尊の我

始坐道場の時・淨飯王・摩耶夫人も同時に成道なり、釈尊の我実成仏

の時・淨飯王・摩耶夫人同時なり始本共に同時の成道なり、此の法門は

天台・伝教等を除いて知る人・一人も之れ有る可からず、末法に入つて
にちれん 天蓮等の類・堅く秘す可き法門なり、譬えば蓮華の華果の相離せざるが
ごとくなり、然れば法華經の行者は男女悉く世尊に非ずや、薬王品に云く於
いっさいしゅじょう またこれだい 一切衆生中亦為第一文、此れ即ち世尊の經文に非ずや、是真仏子なれば
ほうおう 法王の子にして世尊第一に非ずや。

ほうべん 一方便品の事 妙法蓮華經の五字とは名体宗用教の五重玄義なり、されば

しかん 止觀に十章を釈せり此の十章即ち妙法蓮華經の能釈なり、夫れとは釈名は

げんぎ 名玄義なり、体相攝法の二は体玄義なり、偏円の一は教玄義なり、方便・

かほう 正觀・果報の三は宗玄義なり、起教の一は用玄義なり、始の大意の章と終

しき の旨歸との二をば之を除く、此の意は止觀一部の所詮は大意と旨歸とに納

むみょうそく れり無明即明の大意なる故なり、無明とも即明とも分別せざるが旨歸なり、

みょうほうれんげきよう 今妙法蓮華經の五重玄義を修行し奉れば・煩惱即菩提・生死即涅槃の

開悟を得るなり、大意と旨歸とは法華の信心の事なるべし、以信得入・非
己智分とは是なり、我等衆生の色心の二法は妙法の二字なり無始色心・
本是理性・妙境・妙智と開覺するを大意と云うなり、大は色法の徳・意は
心法の徳なり大の字は形に訓ぜり、今日蓮等の類・南無妙法蓮華經と
唱え奉る男女・貴賤・等の色心本有の妙境・妙智なり、父母果縛の肉身の
外に別に三十二相・八十種好の相好之れ無し即身成仏是なり、然る間・大
の一字に法界を悉く収むるが故に法華經を大乘と云うなり、一切の仏・
菩薩・聖衆・人畜・地獄等の衆生・の智慧を具足し給うが故に・仏意と
云うなり、大乘と云うも同じ事なり是れ即ち妙法蓮華經の具徳なり、さ
れば九界の衆生の意を以て仏の意とす、一切經の心を以て法華經の意と
す、於一仏乘分別説三とは是なり、かかる目出度き法華經を謗じ奉る事・
三世の諸仏の御舌を切るに非ずや、然るに此の妙法蓮華經の具徳をば仏の

智慧^{ちえ}にてもはかりがたく何^{いか}に況^いや菩薩^{ぼさつ}の智力^{しちり}に及^べぶ可^べけんや、之^よに依^よつて
大聖^{だいせい}塔^{たつ}中^{ちゅう}偶^ぐの相^{さう}伝^{でん}に云^いく、一^{いっ}家^かの本^{ほん}意^いは只^{ただ}一^{いっ}言^{ごん}を以^もて本^{ほん}と為^なす云^い云、此^こ
の一言^{いっごん}とは寂^{じゃく}照^{しょう}不^ふ二^にの一^{いっ}言^{ごん}なり・或^{ある}は本^{ほん}末^{まつ}究^{きゅう}竟^{きやう}等^{とう}の一^{いっ}言^{ごん}とも云^いうなり、
真^{しん}実^{じつ}の義^ぎには南^な無^む妙^{みょう}法^{ほう}蓮^{れん}華^げ經^{きやう}の一^{いっ}言^{ごん}なり、本^{ほん}とは凡^{ぼん}夫^ぶなり、末^{まつ}とは仙^{せん}なり、
究^{きゅう}竟^{きやう}とは生^{せい}仙^{せん}一^{いっ}如^{じょ}なり、生^{せい}仙^{せん}一^{いっ}如^{じょ}の如^{ごと}の体^{たい}は所^い謂^わ南^な無^む妙^{みょう}法^{ほう}蓮^{れん}華^げ經^{きやう}是^{これ}なり云^い。
云。

一^{いっ}仙^{せん}所^ぶ成^つ就^{じょ}第^だ一^い希^け有^う難^{なん}解^{かい}之^ゆ法^{ぽう}唯^い仙^ふ与^つ仙^ぶの事^じ 仰^うに云^いく仙^いとは釈^{しやく}尊^{そん}の
御^{おん}事^{こと}なり、成^{じやう}就^{じゆ}とは法^{ほけ}華^{きやう}經^{きやう}なり、第^{だい}一^いは爾^に前^{ぜん}の不^ふ第^{だい}一^いに對^{たい}し・希^け有^うは爾^に前^{ぜん}
の不^け希^う有^うに對^{たい}し・難^{なん}解^{かい}之^に法^{ぽう}は爾^に前^{ぜん}の不^ふ難^{なん}解^{かい}に對^{たい}したり、此^{この}の仙^いと申^{もう}すは
諸^{しよ}法^{ほう}実^{じつ}相^{さう}なれば十^{じゆ}界^{かい}の衆^{しゆ}生^{じやう}を仙^いとは云^いうなり、十^{じゆ}界^{かい}の衆^{しゆ}生^{じやう}の語^ご言^{げん}音^{おん}声^{じやう}
成^{じやう}就^{じゆ}にして法^{ほけ}華^{きやう}經^{きやう}なり、三^{さん}世^ぜの諸^{しよ}仙^{ぶつ}の出^{しゆ}世^{つせ}の本^{ほん}懷^{かい}の妙^{みやう}法^{ほう}にして、優^う曇^{どん}華^げ
の妙^{みやう}文^{もん}なれば第^{だい}一^い希^け有^うなり、九^{きゅう}界^{かい}の智^ち慧^えは及^{およ}ばざれば難^{なん}解^{かい}の法^{ぽう}なり、成^{じやう}就^{じゆ}

とは我等衆生の煩惱即菩提・生死即涅槃の事なり、權教の意は終に不成仏なれば成就には非ず、迹門には二乗成仏顕れたり、是れ即ち成就なり、是を仏所成就とは説かれたり、されば唯仏とは釈迦・与仏とは多宝なり、多宝涌現なければ与仏とは云いがたし、然りと雖も終には出現あるべき故に・与仏を多宝というなり、所詮日蓮等の類いの心は・唯仏は釈尊・与仏は日蓮等の類いの事なるべし、其の故は唯仏の唯を重ねて譬喩品にただわれひとり
は唯我一人と説けり、与仏の二字を重ねて、方便品の末に至つて若遇余仏と説けり、釈には深く円理を覚るは、之れを名けて仏と為すと釈せり、是れ即ち与仏と云うは法華經の行者男女の事なり、唯我一人の釈尊に与し上る仏なり、此の二仏寄り合いて、乃能究尽する所の諸法実相の法体なり、されば十如是と云うは十界なり、十界即十如是なり、十如是は即ち法華經の異名なり云云。

一十如是この事

仰いわに云く此この十如是じゆのぜは法華經ほけきようの眼目がんもく・一切經いっさいきようの惣要そうようた

り、されば此この十如是じゆのぜを開覺かいかくしめれば語法ことばに於おいて迷悟めいご無く、実相じつそうに於おいて

せんじよう

染淨せんじよう無し、之これに依よつて天台大師てんだいだいしは止觀しかんの十章じゆのぜも此この十如是じゆのぜはより釈出じやくしゅせり、

しか

然しかる間かん・十如是じゆのぜに過あやまたる法門ほうもん更に以こて之これ無し、爰ここをを以わじようて和尚わじよう授いけて云いく

十章じゆのぜは是これ全じゆのぜく十如是じゆのぜ・若もし大意たいいを覺さとる時とき・性如是じゆのぜの意いを以こて下したの玄如げんに

の図ずを分別ぶんべつす可べし、十如是じゆのぜを十章じゆのぜに習ならう事は性如是じゆのぜは大意たいい・和如是には釈

名な・体如是には体相たいさう・力如是には攝法えつぽう・作如是には偏円へんえん・縁如是には方便へんぽう・因如是には

は正觀かほう・果報かほう如定かほうは果報ほんまつききよう・本末究竟ほんまつききよう如是には旨歸しきなり、此この中に起教ききようの章しやうは

化他利物けたりもつ果上化用けたりもつと云いうなり云云。

一自証むじようどう無上道だいいじようびようどう大乘だいじようびようどう平等たいじようびようどう法の事おひ 仰いわに云く末法まつぽう当今とうこんに於おいて大乘だいじようびようどう平等たいじようびようどうの

法ほけきようを証ごくりせる事にちれん・日蓮等たぐの類たぐいに限かぎりされば此この經文きやうもんは教主きやうしゆ大覺世尊だいかくせそん・

法華經ほけきようの極理ごくりを証しゆつせして番番たまに出世しゆつせし給たまいて説たまき給たまうなり、所詮しよせん此この自証しよせんと

云うは三十成道の時を指すなり、其の故は教主釈尊は十九出家・三十

成道なり、然る間・自証無上道等文、所詮此の品の心は十界皆成の旨を

明せり、然れば自証と云うは十界を諸法実相の一仏ぞと説かれたり、地獄

も餓鬼も悉く無上大乗の妙法を証得したるなり、自は十界を指したり、

恣ままに証すと云う事なり、權教は不平等の経なり、法華経は平等法の

経なり、今日蓮等の類いは真実自証無上道・大乘平等法の行者なり、

所謂南無妙法蓮華経の大乗平等の広宣流布の時なり云云。

一我始坐道場觀樹亦經行の事 仰に云く、此の文は教主釈尊・三十

成道の時を説き給えり、觀樹の樹と云うは十二因縁の事なり、所詮十二

因縁を觀じて經行すと説き給えり、十二因縁は法界の異名なり又法華経の

異名なり、其の故は樹木は枝葉華菓あり是れ即ち生住異滅の四相なり、

大覺世尊・十二因縁の流転を觀じ・經行し給えり、所詮末法当今も一切

衆生・法華經を謗じて流轉す可きを觀じて日本國を日蓮經行して南無
妙法蓮華經と弘通する・又又此の如くなり、法華の行者は悉く道場に坐
したる人なり云云。

一今・我喜無畏の事

仰に云く此の文は權教を説き畢らせ給いて

法華經を説かせ給う時なれば喜びておそれなしと觀じ給えり、其の故は爾前

の間は一切衆生を畏れ給えり、若し法華經を説かずして空しくやあらんず

らんと思召して畏れ深くありと云う文なり、さて今は恐るべき事なく時節

・來つて説く間・畏れなしと喜び給えり、今日蓮等の類も是くの如く日蓮

も三十二までは畏れありき、若しや此の南無妙法蓮華經を弘めずして・あ

らんずらんと畏れありき、今は即ち此の恐れ無く既に末法當時・南無

妙法蓮華經の七字を日本國に弘むる間恐れなし、終には一閻浮提に広宣

流布せん事一定なるべし云云。

一我聞是法音疑網皆已除の事

仰に云く法音とは南無妙法蓮華經な

り、疑網とは最後品の無明を云うなり、此の經を持ち奉れば悉く除くと説

かれたり、此の文は舍利弗が三重の無明・一時俱尽する事を領解せり、

今日日本の一切衆生・法華經の法音を聞くと云えども未だ能く信ぜず豈

疑網皆已に除かんや、除かざれば入阿鼻獄は疑無きなり、疑の字は元品

の無明の事なり此の疑を断つを信とは云うなり、釈に云く無疑曰信と

云えり身子は此の疑無き故に華光仏と成れり、今日蓮等の類は題目の

法音を信受する故に疑網更に無し、如我等無異とて釈迦同等の仏にやすや

すとならん事疑無きなり、疑網と云うは色心の二法に有る惑障なり、

疑は心法にあり・網は色法にあり、此の經を持ち奉り信ずれば色心の二法

共に悉く除くと云う事なり、此の皆已の已の字は身子尊者・広開三顯一を

指して已とは云うなり、今は領解の文段なり、身子・妙法実相の理を聴聞

して心懷大歡喜せしなり、所詮舍利弗尊者程の智者・法華經へ來つて華光
仏となり、疑網を斷除せり、何に況んや末法當時の權人謗法の人人・此の
經に値わらずんば成仏あらんや云云。

一以本願故說三乘法の事

仰に云く此の經文は身子尊者・成道の国

・離垢世界にて三乗の法は惡世には非ず、然りと雖も身子本願の故に説く

と云えり、其の本願と云うは身子菩薩の行を立てしに乞眼の婆羅門に眼を

決じられて、其の時・菩薩の行を退轉したり、此の菩薩の行を百劫立てけ

るに、六十劫なして今四十劫たらざりき、此の時・乞眼に眼を決じられて

其の時・菩薩の行を退して願成仏・日・開三乘法の願を立てたるなり、

上品淨土・不須開漸なれば三乗の法を説く事は更に以てあるまじけれど

も以本願故の故にて三乗の法を説くなり、此の行は禪多羅仏の所にして立

つるなり、此の事は身子が六住退とて大なる沙汰なり、重重的義勢之れ在

り輒く心得難きの事なり、・或は欲怖地前の意、・或は権者退云云、所詮は
六住退とは六根・六道に菩薩の行を取られたりと云う事なり、之を以て之を
思うに末法当今・法華經を修行せんには、必ず身子が退轉の如くなるべし、
所詮身子が眼を取らるるは菩薩の智慧の行を取らるるなり、今日蓮等の
類い・南無妙法蓮華經の眼を持ち奉るに謗法の諸人に障觀せらるる・宝
眼を袂り取らるるに非ずや、所詮彼の乞眼の婆羅門・眼を乞いしは身子が
菩薩の行を退轉せしめんが為に乞いて踏みつぶして捨てたり、全く菩薩の
供養の方を本として眼をば乞わざりしなり、只だ退轉せしめん為なり、
身子は一念菩薩の行を立てて・かかる事に値えり、向後は菩薩の行をば立
つ可からず二乗の行を立つ可しと云つて後悔せし故に成仏の日・
說三乘法するなり、所詮乞眼婆羅門の責を堪えざるが故なり、法華經の
行者・三類の強敵を堪忍して妙法の信心を捨つ可からざる見り信心を以

て眼とせり云云。
まなこ

一有大長者の事
ちやうじや

仰に云く此の長者に於いて天台大師・三の長者を
ちやうじや

釈し給えり、
しゃくたま

一には世間の長者・二には出世の長者・三には観心の長者
せけん ちやうじや しゅつせ ちやうじや かんじん ちやうじや

是なり、此の中に出世観心の長者を以て、此の品の長者とせり、長者と
これ しゅつせ かんじん ちやうじや ちやうじや

は釈迦如来の事なり、観心の長者の時は一切衆生なり、所詮法華經の行者
しゃかによらい かんじん ちやうじや いっさいしゅじやう しょせんほけきやう ぎやうじや

は男女共に長者なり、文句の五に委しく釈せり、
なんよ ちやうじや もんく しゃく

末法当今の長者と申すは日蓮等の類い・南無妙法蓮華經と唱え奉る者な
まつぽうとうこん ちやうじや もう にちれん たぐ なむみょうほうれんげきやう とな たてまつ

り、されば三の長者を釈する時、文句五に云く、二に位号を探するに三と
ちやうじや しゃく もんく いわ

為す、一は世間の長者・二は出世の長者・三は観心の長者なり、世に十
な せけん ちやうじや しゅつせ ちやうじや かんじん ちやうじや

徳を備う、一には姓貴・二には位高・三には大富・四には威猛・五には智
そな ちやうじや

深・六には年耆・七には行浄・八には礼備・九には上歎・十には下帰なり
ねんぎ ちやうじや けき

云云、又云く、出世の長者は、仏は三世の真如實際の中より生ず、功成り、
いわ しゅつせ ちやうじや さんぜ しんによ

道あら著あらわれて、十号きわま極きり無なし、法財万徳、悉ことごとみなつく皆具ぶに満みせり、十力雄猛しよくよくにして、魔まを降くだし外げを制せいす、一心いっしんの三智通達つうたつせずと云いふこと無なし、早しやうく正覚しやうかくを成なじて、久遠くおんなること斯かくの如ごとし、三業智さんごうちに随したがつて、運動うんどうして矢無やなし、仏ぶつの威儀いぎを具ぐして、心大こころおほなること海うみの如ごとし、十方じふぱうの種しゆ覚かく・共ともに称しょう譽ぎする所ところなり、七種しちしゆの方便ほうべん・而しかも来きつて依止えしす、是これを出世しゆつせの仏大長者ちやうじやと名なく、三さんに觀心かんじんとは、觀心かんじんの智實相ちじつしやうより出いで生なじて仏家ぶつかけにあり、種性真正しゆじやうしんじやうなり、三惑さんかく起おこらず、未いまだ真まことを發おこさずと縮こも是これ如來にやらいの衣いを着きれば、寂滅じやくめつ忍しんと称しょうす、三諦さんたいに一切いっさいの功徳くどくを含藏がんざうす、正觀しやうくわんの慧え・愛見あいけんを降伏かうふくす、中道ちゆうだう双ふたべ照てらして權實ごんじつ並ならに明あきらなり、久くく善根ぜんこんを積たみて・能よく此この觀くわんを修しゆす、此この觀くわん七方便しちほうべんの上うへに出いでたり、此この觀くわん・心性しんしやうを觀くわんずるを上定なずと名なくれば、即すなわち三業過無さんごうくわし、歷緣對境りやくえんたいきやうたいきやうするに成儀失無とがなし、能よく此この如ごとく觀くわんず、是これ深信解しんしんげの相しやう諸しよ佛ぶつ皆みな歡喜くわんきして持法ちほふの者ものを歎美たんびしたもう、天竜てんりゆう・四部しふ・恭敬供養きやうけいぐやうす、下しもの文ぶんに云いく、

ぶつしこ
仏子は是の地に住すれば、即ち是れ仏受用し給い、経行し及び坐臥し給わんと、既に此の人を称して仏と為す、出田觀心の長者と名けざらんやと此の
ふんみよう かんじん ちようじや
積分明に觀心の長者に十徳を具足すと釈せり、所謂引証の文に、分別功德
じゆよう ぎようもん ぶつし
品の則是仏受用の文を引けり、經文には仏子住此地とあり、此の字を是の
字にうつせり、経行若坐臥の若を及の字にかえたり、又法師品の文を引
しよせんぶつし ほけきよう ぎようじや
けり、所詮仏子とは法華經の行者なり、此地とは実相の大地なり、経行若
ざが ほけきよう ぎようじや いぎ しょさ ふるまい ことごと
坐臥とは法華經の行者の四威儀の所作の振舞、悉く仏の振舞なり、我等
しゆじよう ふるまい とうたい
衆生の振舞の当体、仏の振舞なり、此の当体のふるまいこそ長者なれ、
よ かんじん ちようじや われら ほんぶ
仍つて觀心の長者は我等凡夫なり、然るに末法当今の法華經の行者より
かんじん ちようじや いまにちれん たぐ なむみようほうれんげきよう とな たてまつ
外に、觀心の長者無きなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る
むじよう ふぐじとく ちようじや あら
者、無上宝緊不求自得の長者に非ずや、既称此人為仏の六字に心を留めて
案すべきなり云云。

一多有田宅の事

仰に云く田宅とは、長者の財宝なり、所詮田と云う

は命なり、宅とは身なり、文句の五に田宅をば身命と釈せり、田は米なり、

米は命をつぐ、宅は身をやどす是は家なり、身命の二を安穩にするより外

に財宝は無きなり、法門に約すれば田は定・宅は慧なり、仍って定は田地

の如し、慧は万法の如し、我等一心の田地より諸法の万法は起れり、法華

一部方寸知るべしと釈して八年の法華も一心が三千と開きたるなり、所詮

田は定なれば妙の徳、宅は慧の徳なれば法の徳、又は本・迹同門なり、止観

の二法なり、教主釈尊本・迹両門の田宅を以って一切衆生を助け給えり、

田宅は我等衆生の色心の二法なり、法華經に低い奉りて、南無妙法蓮華經

と唱え奉る時・煩惱即菩提・生死即涅槃と体達するなり、山扁多有田宅の

長者に非ずや、多有と云う心は心法に具足する心数なり、色法に具足する

所作なり、然らば多有田宅の文は一念三千の法門なり、其の故は一念は定

なり、三千は慧なり、既に釈に云く、田宅は別譬なり、田は能く命を養う、
禪定の般若を資するに譬う、宅は身を栖ます可し、実境の智の所託と為る
に誓う云云、此の釈分明なり、田宅は身命なり、身命は即ち南無
妙法蓮華経なり、此の題目を持ち奉る者は宝多有田宅の長者に非ずや、
今末法に入つて日蓮等の類・多有田宅の本主として如説修行の行者なり
云云。

一 等一大車の事 仰に云く此の大車とは直至道場の太白牛車にして

其の疾きこと風の如し、所詮南無妙法蓮華経を等一大車と云うなり、等と

云うは諸法実相なり、一とは唯一乘法なり、大とは大乘なり、車とは

一念三千なり、仍つて釈には等の字を子等車等と釈せり、子等の等と

如我等無異の等とは同なり、車等の等は平等大慧の等なり、今日蓮等の類い

・南無妙法蓮華経と唱え奉る者は男女・貴賤共に無上宝聚・不求自得の

金言きんげんを持つ者なり、智者ちしゃぐしゃ愚者をきらわず共に即身成仏そくしんじょうぶつなり云云、疏じよの五に

云く一に等子二に等車・子等しきを以ての故に則ち心等し、一切衆生等し

く仏性有るに譬う、仏性同じきが故に等しく是れ子なり、第二に車等と

は法等しきを以ての故に仏法に非ざること無し、一切法皆摩訶えんなるに

誓う、摩訶えん同じきが故に等しく是れ大車なり、而して各賜と言うは各

々本習に随う、四諦六度無量の諸法・各各旧習に於て眞実を開示す、旧習

同じからず故に各と言う、皆摩訶えんなり故に大車と言う云云。

一其車高広の事 仰に云く此の車は南無妙法蓮華經なり、即ち我等

衆生の体なり、法華一部の総体なり、高広とは仏知見なり、されば此の車

を方便品の時は諸仏智慧と説き其の智慧を甚深無量と称歎せり、歎の言に

は甚深無量とほめたり、爰には其車と説いて高広とほめたり、されば文句

の五に云く其車高広の下は如来の知見深遠なるに譬う、横に法界の辺際に

あまね

周く・堅に三諦の源底に徹す故に高広と言うなりと、所詮此の如来とは

いっさいしゅじょう

一切衆生の事なり既に諸法実相の仏なるが故なり、知見とは色心の二法な

り知は心法・見は色法なり、色心二法を高広と云えり、高広即本・迹二門

なり此れ即ち南無妙法蓮華經なり云云。

こすなわなむみょうほうれんげきよう

一是朽故宅属于一人の事 仰に云く此の文をば文句の五に云く出火の由を

明す文、此の宅とは三界の火宅なり、火と云うは煩惱の火なり、此の火と

宅とをば属于一人として釈迦一仏の御利益なり、弥陀・薬師・大日等の諸仏

の救護に非ず、教主釈尊一仏の御化導なり、唯我一人・能為救護とは是な

り、此の属于一人の文を重ねて、五巻提婆品に説いて云く観二三千大千世界

一乃至無し有下如芥子許非是菩薩捨二身命一処上為二衆生一故文、妙楽

大師・此の属于一人の經文を釈する時・記の五に云く、咸く長者に歸す

・二一番・一切皆然なりと判ぜり、既に咸歸長者と釈して、法界に有りと

いっさいみなしか

いっさいみなしか

既に咸歸長者と釈して、法界に有りと

既に咸歸長者と釈して、法界に有りと

既に咸歸長者と釈して、法界に有りと

既に咸歸長者と釈して、法界に有りと

既に咸歸長者と釈して、法界に有りと

既に咸歸長者と釈して、法界に有りと

既に咸歸長者と釈して、法界に有りと

既に咸歸長者と釈して、法界に有りと

いっさいしゅじょう

ある一切衆生の受くる苦惱をば、釈尊一人の長者に帰すと釈せり、

しゃくそん

ちやうじや

しゃく

いっしきいっこういっさいみなしか

一色一香一切皆然なりとは、法界の千草万木・飛華落葉の爲体、是れ皆

ほっかい

ひけらくよう ていたらく こ

みな

むじょうせんめつ

無常遷滅の質と見て仏道に帰するも、属于一人の利益なり、此の利益の本源

ぶつどう

そくう

りやく

りやく ほんげん

なむみょうほうれんげきよう

ないしきう

は南無妙法蓮華經の内証に引入れしめんが爲なり、所詮末法に入つて属于

そくう

りやく

にちれん

一人の利益は日蓮が身に当りたり、日本国の一切衆生の受くる苦惱は、

にほんこく

いっさいしゅじょう

くのう

ことごとくにちれん

悉く日蓮一人が属于一人なり、教主釈尊は唯我一人・能爲救護、日蓮は

そくう

きやうしゅしやくそん ただわれひとり

のういくご

にちれん

のういくご

一人能爲救護に云云、文句の五に云く、是朽故宅属于一人の下、第二に一偈

もんく

いわ

そくう

しも

いちげ

有り、失火の由を明す、

よし

さんがい こ

三界は是れ仏の化応の処発心已来誓つて度脱せん

ほっしんこのかた

どだつ

と願う、

ゆえ

故に属于一人と云うと、此の釈に発心已来誓願度脱の文、豈日蓮

そくう

ほっしんこのかたせいがんど

あににちれん

の身に非ずや云云。

あら

一諸鬼神等揚声 大叫の事

しよきじん

ようしきうだいきよう

いわ

しよきじん

しんるいぶるい

仰に云く諸鬼神等と云うは親類部類等を

しよきじん

ようしきうだいきよう

いわ

しよきじん

しんるいぶるい

鬼神と云うなり、

きじん

われらしゅじきうご

さいし

けんそく

ひたん

我等衆生死したる時・妻子・眷属あつまりて悲歎するを

さいし

けんそく

ひたん

ようしょうだいきよう

揚声 大叫とは云うなり、文句の五に云く諸鬼神等の下・第四に一行半は被焼の相を明す、・或云く親屬を鬼神と為し・哭泣を揚声と為すと。

いちじよう

じきしどうじよう

一乗此宝棄直至道場の事

仰に云く此の經文は我等衆生の煩惱即

ぼだい しようじそく

そのゆえ もんく

きようもん われらしめじよう

ぼんのうそく

菩提・生死即捏槃を明せり、

其の故は文句の五に云く、

此の因易ること無

きが故に

ゆえ じきし

と云う、此の、

釈の心は

にぜん

ぼんのう

を捨てて生死を厭う

て別に菩提捏槃を求めたり、

法華經の意は

ぼんのうそくぼだい

生死即捏槃と云え

り、直と即とは同じ事なり、

そく

所詮日蓮等の・

類い

たぐ

なむみようほうれんげきよう

とな たてまつ

者の、住处即寂光土と心得可きなり、

然れば此の

しか

実乗に

乗じて、忽ちに

妙覺極果の位に至るを

みようかくごつか

直至道場とは云うなり、

直至と云う文の意は、

四

十二位を爰にて極めたり、

此の直の一字は、

地獄即寂光・

餓鬼即寂光土な

り、法華經の行者の住处、

山谷曠野なりとも、

直至道場なり、

道場と

は究竟の寂光なり、

くきよう じやうこう

仍って乗此宝乗の上の乗は

よ

法華の行者、此の品の意

は究竟の寂光なり、

くきよう じやうこう

仍って乗此宝乗の上の乗は

よ

法華の行者、此の品の意

は究竟の寂光なり、

くきよう じやうこう

仍って乗此宝乗の上の乗は

よ

法華の行者、此の品の意

は究竟の寂光なり、

くきよう じやうこう

仍って乗此宝乗の上の乗は

よ

法華の行者、此の品の意

は究竟の寂光なり、

くきよう じやうこう

仍って乗此宝乗の上の乗は

よ

法華の行者、此の品の意

は究竟の寂光なり、

くきよう じやうこう

仍って乗此宝乗の上の乗は

よ

法華の行者、此の品の意

は究竟の寂光なり、

くきよう じやうこう

仍って乗此宝乗の上の乗は

よ

法華の行者、此の品の意

は究竟の寂光なり、

くきよう じやうこう

仍って乗此宝乗の上の乗は

よ

法華の行者、此の品の意

は究竟の寂光なり、

くきよう じやうこう

仍って乗此宝乗の上の乗は

よ

法華の行者、此の品の意

は究竟の寂光なり、

にては中根の四大声聞しょうもんなり、惣そうじて一切衆生の事なり、今末法まつぽう

に入いつては日蓮等にちれんの類たぐいなり、宝乗の乗の字は太白牛車の妙法蓮華經だいびやくごしや みょうほうれんげきようなり、

然しかれば上の乗は能乗・下の乗は所乗しよじようなり、宝乗は蓮華れんげなり、釈迦しやか・多宝等

の諸しよぶつ仏も、此の宝乗に乘たまじ給たまえり、此これを提婆品だいば かさに重ねて説く時・若在

仏前蓮華化生と云云、釈迦しやか・多宝たほうの二仏は我等われらが己心こしんなり、此の己心こしんの

法華經に値あひ奉たてまつて成仏じようぶつするを顕あらわさんとして釈迦しやか・多宝たほう・二仏びようぜ・並座びようざし

て乗じきしづつじよう此宝乗・直至道場あを顕たまわし給たまえり、此の乗とは車なり、車は蓮華れんげなり、

此の蓮華れんげの上の妙法みようほうは、我等われらが生死しようじの二法・二仏じきしなり、直至の至こは此れよ

り彼へいたるの至いたるには非あらず住処即寂光じゅうしよそくじやうこうと云うを至とは云うなり、此の

宝乗の宝は七宝しつぽうの大車なり、七宝即ち頭上しつぽうすなわの七穴・七穴即ち末法すなわ まつぽうの要法ようほう・

南無妙法蓮華經なむ みようほうれんげきようこれ是なり、此の題目だいもくの五字ごじ、我等衆生われらしゆじようの為ためには、三途の河

にては船となり、紅蓮地獄ぐれんじごくにては寒さをのぞき、焦熱地獄しやうねつじごくにては涼風とな

り、死出の山にては達華となり、渴せる時は水となり・飢えたる時は食となり・裸かなる時は衣となり、妻となり、子となり、眷属けんそくとなり、家となり、無窮むぎゅうの応用ほごうを施ほこして一切衆生いっさいしゅじょうを利益りやくし給たまうなり、直至道場じきしどうじょうとは是なり、仍よつて此の身を取りも直さず寂光土じやくこうどに居るを直至道場じきしどうじょうとは云うなり、直の字心とこを留とどめて之これを案べず可べし云云。

にやくにんふしん きぼつ

一若人にやくにんふしん不信毀謗きぼつ此經則新いっさいせけん一切世間・仏種ぶつしゅの事 仰いに云く此の經文きやうもんの意は

しょうぜんじようぶつ

小善しょうぜん成仏じようぶつを信ぜずんば一切世間の仏種ぶつしゅを断ずと云う事なり、文句もんくの五に

い

わ

く

ん

き

やう

もん

の

ご

に

い

わ

く

ん

き

やう

もん

の

ご

に

い

わ

く

ん

き

やう

もん

の

ご

に

い

わ

く

ん

き

やう

もん

の

ご

に

い

わ

く

ん

き

やう

もん

の

ご

に

い

わ

く

ん

き

やう

もん

の

ご

に

い

わ

く

ん

き

やう

もん

の

ご

に

い

わ

く

ん

き

やう

もん

の

ご

に

い

わ

く

ん

き

やう

もん

の

ご

に

い

わ

く

ん

き

やう

もん

の

ご

に

なる、入らざれば本の水なり、法界の善根も、法華經へ歸入せざれば善根
とはならざるなり、されば釈に云く、断一切仏種とは淨名には煩惱を以
て如来の種と為す、此れ境界性を取るなり、此の釈の心は淨名經の心
ならば我等衆生の一曰一夜に作す所の罪業・八億四千の念慮を
起す、余經の意は皆三途の業因と説くなり、法華經の意は、此の業因・即ち
仏ぞと明せり、されば煩惱を以て如来の種子とすと云うは此の義なり、此
の淨名經の文は、正しく文在爾前・義在法華の意なり、此の境界性と
云うは、末師釈する時、能生煩惱・名境界性と判ぜり、我等衆生の眼耳
等の六根に妄執を起すなり、是を境界性と云うなり、權教の意は此の
念慮を捨てよと説けり、法華經の心は、此の境界性の外に、三因仏性の
種子なし、是れ則ち三身円満の仏果となるべき種性なりと説けり、此の種
性を、權教を信ずる人は之を知らず此の經を謗るが故に、凡夫即極の義を

も知らず、故に一切世間の仏種を断ずるなり、されば六道の衆生も三因
ぶつしよう くそく
仏性を具足して、終に三身円満の尊容を顕す可き所に、此の経を謗するが
ゆえ ろくどう ぶつしゅ
故に、六道の仏種をも断ずるなり、されば妙樂大師云く、此の経は遍く六道
ぶつしゅ
の仏種を開す、若し此の経を謗するは、義・断に当るなりと、所詮日蓮が
いっさい
意は一切の言は十界をさす、此の経を謗するは十界の仏種を断ずるなり、
されば、誹謗の二字を大論に云く、口に謗るを誹と云い、心に背くを謗と
ひぼう
云うと、仍つて色心三業に経て、法華経を謗し奉る人は入阿鼻獄疑い無
よ しきしん
きなり、所謂弘法・慈覚・智証・善導・法然・達磨等の大謗法の者なり、
いわるこうぼう じかく ちしよう ぜんどう ほうねん だるま ほうぼう
今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る、豈二世の諸仏の仏種を継ぐ者
いまにちれん なむ みょうほうれんげきよう とな たてまつ あに しょぶつ ぶつしゅ
に非ずや云云。

一捨悪知識親近善友の事
あくちしきしんこんぜんゆう

仰に云く悪知識とは在世にては善星・
いわ あくちしき ざいせ ぜんしよう

瞿伽利・提婆等是なり、善友とは迦葉・舍利弗・阿難・目連等是なり、
くぎやり だいば これ ぜんゆう かしよう しゃりほつ あなん もくれん これ

末法まつぽう当今とうこんに於おいて惡智識あくちしきと云いうは法然ほうねん・弘法こうぼう・慈覺じかく・智証ちしょう等の權人ごんじん謗法ほうぼうの
人人ひとびとなり、善智識ぜんちしきと申もうすは日蓮等にちれんの類たぐいの事ことなり、惣そうじて知識ちしきに於おいて重
之これ有あり、外護げごの知識ちしき・同行どうぎょうの知識ちしき・実相じつそうの知識ちしき是これなり、所詮しよせん実相じつそうの知識ちしき
とは所謂いわゆる南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやう是これなり、知識ちしきとは形かたちをしり、心こころをしるを云いうなり、
是これ即すなわち色心しきしんの二法にぽうなり、謗法ほうぼうの色心しきしんを捨てて法華經ほけきやうの妙境みょうぢ・妙智みょうちの色心しきしん
を顯あらわすべきなり、惡友あくゆうは謗法ほうぼうの人人ひとびとなり、善友ぜんゆうは日蓮等にちれんの類たぐいなり。
一無上宝聚むじやうほうじゆふぐじとく不求自得ふくぐの事こと 仰いに云いく、此この無上宝聚むじやうほうじゆに於おいて一いっには釈尊しゃくそん
の因行いんぎやう・果徳かとくの万行まんぎやう・万善ばんぜんの骨髓こつずいを宝聚ほうじゆと云いうなり、二にには妙法蓮華經みょうほうれんげきやう
の事ことなり、不求ふくぐとは中根ちゆうこんの四大声聞しやうだいもんは此こくの如ごとき宝聚ほうじゆを任運自在めんうんじざいと得えたり
此こ実我子我実其父じつがこがじつがふの故ゆゑなり、總いっさいじては一切衆生いっさいしゆじやうの事ことなり、自得じとくと云いうは自
は十界じゅうかいの事ことなり、此これは自我得仏来じがとくぶつらいの自みづかりと同じ事ことなり、得えも又同じ事ことなり
末法まつぽうに入いつては自得じとくとは日蓮等にちれんの類たぐいなり、自みづかりとは法華經ほけきやうの行者ぎやうじや、得えとは

題目なり、得の一字には師弟を含みたり、与うると得るとの義を含めり、

不求とは仏法に入るには修行・覺道の辛勞あり、釈迦如来は往来娑婆八千

反の御辛勞にして求め給う功德なり、さて今の釈迦牟尼仏と成り給えり、

法華經の行者は求めずして此の功德を受得せり仍て自得とは説かれたり、

此の自の字は一念なり得は三千なり、又自は三千・得は一念なり、又た自

は自なり得は他なり、総じて自得の二字に法界を尽くせり、所詮此の

妙法蓮華經を自より得たり、自とは釈尊なり、釈尊は即ち我が一心なり、

一心の釈迦より受得し奉る南無妙法蓮華經なり、日蓮も生年三十二にして

自得し奉る題目なり云云。

一藥草喩品の事 仰に云く藥とは是好良藥の南無妙法蓮華經なり、

妙法を頂上にいただきたる草なれば、藥に非ずと云う事なし、草は中根の

声聞なれども、惣じては一切衆生なり、譬えば土器に藥をかけたるが如し、

われらしゅじょう 我等衆生・父母果縛の肉身に南無妙法蓮華經の藥をかけたたり、煩惱即菩提

生死即涅槃は是なり云云、此の分を教うるを喩とは申すなり、釈に云く、

喩とは曉訓なりと、提婆・竜女の畜生・人間も、天帝・羅漢・菩薩等

も、悉く藥草の仏に非ずと云う事なし、末法当今の法華の行者の日蓮等の

類い、藥草にして日本国の一切衆生の藥王なり云云。

一現世安穩・後生善処の事 仰に云く所詮此の妙法蓮華經を聴聞し

奉るを現世安穩とも後生善処とも云えり、既に上に聞是法已と説けり聞は

名字即の凡夫なり妙法を聞き奉る所にて即身成仏と聞くなり、若有能持即

持仏身とは是なり、聞く故に持ち奉るの故に三類の強敵来る来るを以て

現世安穩の記文顯れたり、法華の行者なる事疑無きなり、法華の行者

はかかる大難に値うべしと見えたり、大難に値うを以て後生善処の成仏は

決定せり是れ豈現世にして安穩なるに非ずや、後生善処は提婆品に分明

に説けり、所詮現世安穩とは法華經を信じ奉れば三途八難の苦をはなれ

善惡上下の人までも皆教主釈尊・同等の仏果を得て自身本覺の如来なり

と顯す、自身の当体・妙法蓮華經の藥草なれば現世安穩なり、爰を開くを

後生善処と云うなり、妙法蓮華經と云うは妙法の藥草なり、所詮現世安穩

は色法・後生善処は心法なり、十界の色心・妙法と開覺するを現世安穩

・後生善処とは云うなり、所詮法華經を弘むるを以て現世安穩・後生善処

と申すなり云云。

一皆悉到於一切智地の事 仰に云く一切智地と云うは法華經なり、譬え

ば三千大千世界の土地・草木・人畜等・皆大地に備りたるが如くなり、

八万法蔵・十二部經・悉く法華に歸入せしむるなり、皆悉の二字をば善人

も悪人も迷も悟も一切衆生の惡業も善業も其の外藥師・大日・弥陀並び

に地藏・觀音・横に十方・豎に三世有りとある諸仏の具徳・諸菩薩の行徳

・惣じて十界の衆生の善悪・業作等を皆悉と説けり、是を法華經に歸入せしむるを一切智地の法華經と申すなり、されば文句の七に云く皆悉到於一切智地とは、地とは実相なり、究竟して二に非ず故に一と名くるなり、其の性広博なり、故に名けて切と為す、寂にして常照なり、故に名けて智と為す、無住の本より一切の法を立す、故に名けて地と為す、此れ円教の実説なり、凡そ所説有るは皆衆生をして此の智地に到らしむ云云、此の釈は一切智地の四字を委しく判ぜり、一をば究竟と云い切をば広博と釈し智をば寂而常照と云い地をば無住之本と判ぜり、然るに凡有所説は約教を指し・皆令衆生は機縁を納るるなり、十界の衆生を指して切と云い凡有所説を指して、究竟非二故名一也と云えり、一とは三千大千世界・十方法界を云うなり、其の上に人畜等あるは地なり、記の七に云く、切を衆に訓ずと文、仍って一切の二字に法界を尽せりなり、諸法は切なり実相は一

なり、しよせん 所詮・法界実相の妙体・ほっかいじつそう 照而常寂の一理にして十界三千・一

法性ほっしやうに非ずと云う事なし是をこれ一と説くなり、さて三千さんぜんの諸法しよほうの己ここ己ほんぶんに本分

なれば切の義なり、然らば一は妙・切は法なり、妙法みやうほうの二字・一切いっさいの二字

なり、無住之本は妙の徳・立一切いっさい法は法の徳なり、一切智地いっさいちちとは南無

妙法蓮華經みやうほうれんげきやうなり一切智地・即一念三千そくいちねんさんぜんなり、今末法まっぽうに入いっさいちちて一切智地を

弘通くつうするは日蓮等にちれんの類たぐ是なり、然るに一とは一念いちねんなり切とは三千さんぜんなり、

一心いっしんより松よ桜よと起るおこは切なり、是は心法に約する義なり、色法にては

手足等は切なり、一身いっさいなるは一切なり、所詮色心の二法・一切智地しよせんしきしんにして

南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうなり云云。

一此いっさいちちの一切智地の四字 に法華經ほけきやう一部八卷文・句句おさを収めたり、此

の一切智地いっさいちちとは三諦さんたい・一諦・非三非一なり、三智に約すれば空智くうちなり、さ

ては三諦さんたいとは云い難し、然りと雖も三諦・一諦いの中の空智くうちなり、されば三諦さんたい

に於て三三九箇の三諦あり、先ず空諦にて三諦を云う時は空諦と呼出だすが仮諦・空諦なるは空諦なり・不二するは

中道なり、三諦同じく此くの如く心得可きなり、所詮此の一切智地をば九

識法性と心得可きなり、九識法性をば、迷悟不二・凡聖一如なれば空と

云うなり、無分別智光を空と云うなり、此の九識法性とは、いかなる所の

法界を指すや、法界とは十界なり、十界即諸法なり、此の語法の当体・

本有の妙法蓮華経なり、此の重に迷う衆生の為に、一仏現じて分別説三

するは、九識本法の都を立出するなり、さて終に本の九識に引入する、夫れ

を法華経とは云うなり、一切智地とは是れなり、一切智地は我等衆生の心

法なり心法即ち妙法なり一切智地とは是なり云云。

一根茎枝葉の事 仰に云く此の文をば釈には信戒定慧と云云、此の

釈の心は草木は此の根茎枝葉を以て増長と云うなり、仏法修行するも又

か
斯くの如し、所詮我等衆生・法華經を信じ奉るは根をつけたるが如し、
ほけきよう
法華經の文の如く是名持戒の戒体を本として、正直捨方便・但説無上道の
こと
如くなるは戒なり、法華經の文相にまかせて、法華三昧を修するは定なり、
だいもく とな たてまつ
題目を唱え奉るは慧なり、所謂法界悉く生住異滅するは信・己己本分は戒
さんぜふかい
・三世不改なるは定なり、各各の徳義を顕したるは慧なり、是れ即ち法界
びようどう こんきよう
平等の根茎杖葉なり、是れ即ち真如実相の振舞なり、所謂戒定慧の三学
みようほうれんげきよう
・妙法蓮華經なり、此れを信ずるを根と云うなり、釈に云く三学俱に伝う
るを名けて妙法と曰うと云云。

こんきようしよう
一根茎杖葉の事 仰に云く此れは我等が一身なり、根とは心法なり茎と
われら こうべ
は我等が頭より足に至るまでなり、枝とは手足なり、葉とは毛なり、此の
こんきようしよう
四を根茎杖葉と説けり、法界三千此の四を具足せずと云う事なし、是れ
すなわ かいじようえ
即ち信戒定慧の体にして実相一理の南無妙法蓮華經の体なり、法華不信の

人は根茎杖葉ありて増長あるべからず枯塙の衆生なるべし云云。

一枯塙衆生の事 仰に云く、法華經を持ち奉る者は、枯塙の衆生に

非ざるなり、既に法華經の種子を受持し奉るが故なり、謗法不信の人は下種

無き故に枯塙の衆生なり、されば、妙樂大師の云く、余教を以て種と為さ

ず文。

一等雨法雨の事 仰に云く等とは平等の事なり、善人・悪人、二乗・

闡提、正早・邪見等の者にも、妙法の雨を惜まず平等にふらすと云う事

なり、されば法の雨を雨すと云う時は、大覺世尊ふらしてに成り給えり、

さて、の雨ふりてとよむ時は、本より実相平等の法雨は、常住本有の雨

なれば、今始めてふるべきに非ず、されば、諸法実相を、譬喩品の時は風

月に譬えたり、妙樂大師は何ぞ隠れ何ぞ顕れんと釈せり、実相の法雨は

三世常恒にして、隱顯更に無きなり、所詮、等の字はひとしくとよむ時は、

釈迦如来の平等の慈悲なり、さて、ひとしきとよむ時は、平等大慧の
妙法蓮華経なり、ひとしく法の雨をふらすとは、能弘につけたり、ひとし
き法の雨ふり、にりと読む時は、所弘の法なり、所詮法と云うは、十界の語
法なり、雨とは十界の言語・音声の振舞なり、ふるとは自在にして地獄
は洞燃猛火、乃至仏界の上の所作音声を、等雨法雨とは説けり、此の等雨
法雨は法体の南無妙法蓮華経なり、今末法に入つて、日蓮等の類いの弘通
する題目は、等雨法雨の法体なり、此の法雨・地獄の衆生・餓鬼・畜生
等に至るまで同時にふりたる法雨なり、日本国の一切衆生の為に付属し
給う法雨は題目の五字なり、所謂日蓮建立の御本尊・南無妙法蓮華経はな
り云云、方便品には本末究竟等と云えり、譬喩品には等一大事と云えり、
此の等の字を重ねて説かれたり、或は如我等無異と云えり、此の等の字
は宝塔品の如是如是と同じなり、所詮等とは南無妙法蓮華経なり、法雨を

ふらすとは今身こんじんより仏身ぶっしんに至るいたまで打つや否やいなと云う受持じゆじの言語ごんごなり云云。

一等雨法ほうう雨うの事

仰いはに云く此の時みようほうじつそうは妙法実相ほううの法雨じゅつかいさんぜんは十界三千・下

は地獄じごく・上は非想非非想よこしまじゅつぼうまで横に十方・豎に三世さんぜに亘わたつて妙法の功德みようほうくどくを

ふるを等とは云うなり、さてふるとは一切衆生いっさいしゅじようの色心しきしん・妙法蓮華經みようほうれんげきようと

三世常住さんぜじようじゅうふるなり云云、一義いに云く、此の妙法の雨みようほうは九識本法ほつたいの法体ほつたいな

り、然しかるに一仏現前いちぶつげんぜんして説とき出す所の妙法みようほうなれば、法の雨みようほうをふらすと云う

なり、其そのの故ゆえは、ふらすと云うは・上より下へふるを云うなり、「のつて

従果向因じゅうかういんの義ぎなり、仏に約やくすれば、第十の仏見ぶつけんより九界へふらす、法体ほつたいに

ては・ふる処ところも・ふらす処ところも、真如しんによの一理いちりなり識分しきぶんにては八識

へふり下りたるなり、然しからば今日蓮等けふにれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみようほうれんげきようを日本国にほんこくの

一切衆生いっさいしゅじようの頂上ちやうじやうにふらすを法の雨みようほうをふらすと云うなり云云。

一如けこく從飢国来忽遇こつぐだいおう大王膳だいおうの事 仰いはに云く此の文しやうもんは中根ちゅうこんの四大声聞ほつけ・法華ほつけに

来れる事、譬^{たと}えばうえたる国より来りて大王^{だいおう}のそなえに値^あうが如^{ごと}くの歡喜^{かんき}なりと云えり、然^{しか}らば此の文の如^{ごと}くならば法華^{ほっけ}已^い前の人は餓鬼^{がき}界の衆生^{しゅじょう}なり、既^{すで}に飢^け国来と説^くけり、大王膳^{だいおう}とは醍醐^{だいご}味^みなり、中根^{しゅうもん}の声聞^{ほっけ}・法華^{ほっけ}に來つて一乘^{いちじょう}醍醐^{だいご}の法味^{ほうみ}を得て忽^{たちまち}に法王^{ほっけ}の位^ゐに備^{そなわ}りたり、忽^にの字^じは爾前^{にぜん}の迂廻^{ぎうかい}道の機^きに對して忽^{そく}と云うなり、速疾頓^{そくしつとん}成^{じやう}の義^ぎを忽^{そく}と云うなり、飯令外用^{たとい}の八相^{はつさう}を唱^{とな}うる事は所化^{しよけ}をして仏道^{ぶつどう}に進^{しん}めんが為^{ため}なり、所詮^{しよせん}末法^{まつぽう}に入^いつては謗法^{ぼうぽう}の人人^{ひとびと}は餓鬼^{がき}界の衆生^{しゅじょう}なり、此の經に値^あい奉^{たてまつ}り・南無妙法蓮華經^{なむみょうほうれんげきやう}に値^あい奉^{たてまつ}る事は併^{しか}しながだいおう大王膳^{だいおう}たり、忽遇^{こつぐ}の遇^ぐの字肝要^{かんよう}たり、釈^{いわ}に云^いく、成仏^{じやうぶつ}の難^{がた}きには非^{あら}ず、此の經に値^あうをかたしとすと云えり、不輕^{ふぎやう}品^{ひん}に云^いく復遇^{また}常不輕^{ふぎやう}と云云、嚴王品^{いんわうひん}に云^いく生值^{しやうち}仏法^{ぶつぽう}云云、大王^{だいおう}の膳^あに値^あいたり、最も以^{なむ}て南無妙法蓮華經^{なむみょうほうれんげきやう}を信受^{しんじゆ}し奉^{たてまつ}る可^べきなり、此の經文^{きやうもん}の如^{ごと}くならば法華^{ほっけ}よ^り外^{ほか}の一切衆生^{いっさいしゅじょう}はいかに高貴^{がき}の人なりとも餓鬼^{がき}道の衆生^{しゅじょう}なり、十羅刹女^{じゅうらせつにょ}

は餓鬼界の羅刹なれども法華經を受持し奉る故に餓鬼に即する一念三千なり、法華へ来らずんば何れも餓鬼飢餓の苦みなるべし、所詮必ず中根の
声聞領解の言に我身を餓鬼に類する事は餓鬼は法界に食ありと云えども
食する事を得ざるなり、諸法実相の一味の醍醐の妙法あれども終に開覺に
能えざる間・四十余年食にうえたり云云、一義に云く序品方便より諸法実相
の甘露顕れて南無妙法蓮華經あれども広略二重の譬説段まで悟らざるは
餓鬼の満満とある食事をくらわざるが如し、所詮日本国の一切衆生は餓鬼
界の衆生なり、大王膳とは所謂南無妙法蓮華經是なり、遇の字には人法
を納めたり、のつて未に如飢須教食と云えり、うえたるも大王のをしえ
を待ちて醍醐を食するが如しと云えり、今南無妙法蓮華經有れども・今身
より仏身に至るまでの受持をうけずんば成仏は之れ有るべからず、教とは
爾前無得道・法華成仏の事なり、此の教をうけずんば法華經を誦誦すとも

だいおう
大王の位に登る事・之れ有る可からず醍醐は題目の五字なり云云。

だいとうちしようぶつ
一大通智勝仏十劫坐道場
どうしようぶつぼう
仏法不現前不得成仏道の事
げんぜん ふとく じようぶつ
仰に云く此經文
きようもん

いっさいしゅじよう
は一切衆生の本法流転を説かれたり、されば釈にも出世以前と判ぜり、此

だいとう しゅっせ
は大通仏出世し給えども十小劫の間・一經も説給わずと云う經文なり、

よつ ぶつぼう げんぜん
仍て仏法も現前せざる故に不得成仏と云えり、されども釈を見るに出世

いぜん
以前と云う時は、此の經文は何なる事ぞ此は本法の重を説かれたり、一仏

しゅっせ
出世すれば流転門となる、一仏も出世無き時は、本法不思議の体なり、迷悟

もなく、生仏もなく、成仏もなく、不成仏もなきなり、仍つて不得成仏

道と云えり、抑も本法と申すは水があつくなり、火がつめたくならば流転

門なるべし、水はいつもつめたく、火はいつもあつく、地獄は何も火焰・

がき
餓鬼はいつも飢渴・其の外・万法己己の当位・当位の儘なるを本法の体と

云うなり、此の重を説き顯したる經文なり、此の本法の重は法華經なり、

権教は流転なり、此の流転の衆生を本法の重に引入せられんとての仏の
出世なり、其の本法と云うは此の經なり、所詮此の經文本法とは大通
智勝仏と云うは我等衆生の色心なり、十劫と云うは十界なり、坐道場と
云うは十界の住所其の儘道場なり、道場なれば寂光土なり、法界寂光土
にして、十界の衆生悉く諸法実相の仏なれば一仏現すべきに非ず、迷の
衆生無ければ説く可き法も無し、仍つて仏法不現前と云えり、不得成仏
道とは始覺本覺の成仏と云う事も無し、本法不思議の体にして万法本有な
り、之れに依つて釈には出世以前と判ぜり、然らば、其の本法の体とは、
所詮南無妙法蓮華經なり、此の本法の内証に引入せんが為に、住は
四十余年誘引し、終に第五時の本法を説き給えり、今末法に入つて上行
所伝の本法の南無妙法蓮華經を弘め奉る、日蓮・世間に出世すと云えども、
三十二歳までは、此の題目を唱え出さざるは、仏法不現前なり、此の

みょうほうれんげきよう 妙法蓮華經を弘めて、終には本法の内証に引入するなり日蓮・豈大通
ちしようぶつ 智勝仏に非ずや、日本国の一切衆生こそ十劫坐道場とて十界其の儘・本
なむ みょうほうれんげきよう 法の南無妙法蓮華經へ引入するなり、所詮信心を出だして南無
みょうほうれんげきよう 妙法蓮華經と唱え奉る可き者なり云云。

ひんじん 一貧人見此珠其心大歡喜の事 仰に云く此珠とは一乘無価の宝珠なり、

ひんじん 貧人とは下根の聲聞なり、惣じて一切衆生なり、所詮末法に入つて此珠

なむ みょうほうれんげきよう とは南無妙法蓮華經なり、貧人とは日本国の一切衆生なり、此の題目を

とな たてまつ 唱え奉る者は心大歡喜せり、されば見宝塔と云う見と此珠とは同じ事なり

しよせん 所詮此珠とは我等衆生の一心なり、一念三千なり此の經に値い奉る時、

いちねんさんぜん 一念三千と開くを珠を見るとは云うなり、此の珠は広く一切衆生の心法な

たま り此の珠は体中にある財用なり、一心に三千具足の財を具足せり、此の珠

ほうべん を方便品にして諸法実相と説き、譬喩品にては大白牛車・三草二木・五

ひやくゆじゆん ほうとう 百由旬の宝塔、共に皆一珠の妙法蓮華經の宝珠なり、此の經文色心の
じつそうかんき 実相歡喜を説けり・見此珠の見は色法なり、其心大と云うは心法なり、色心
かんき 共に歡喜なれば大歡喜と云うなり、所詮此珠と云うは我等衆生の心法なり、
よ いちねんさんぜん 仍つて一念三千の宝珠なり、所謂妙法蓮華經なり、今末代に入つて此の珠
あらわ にちれん を顯す事は日蓮等の類いなり所謂未曾有の大曼荼羅こそ正しく一念三千の
ほうしゆ 宝珠なれ、見の字は日本国の一切衆生、広くは一閻浮提の衆生なり、然り
いんど と雖も其心大歡喜と云う時は、日蓮が弟子・檀那等の信者をさすなり、
しよせんぼんのうそくぼだい 所詮煩惱即菩提・生死即涅槃と体達する、其心大歡喜なり、されば、我等
しゆじよう 衆生・五百塵点の下種の珠を失いて、五道・六道に輪廻し・貧人となる、
さんぜんじんてん 近くは三千塵点の下種を捨てて備輪諸道せり、之れに依つて貧人と成る、
たま 今・此の珠を釈尊に値い奉りて見付け得て本の如く取り得たり、此の故に
かんき 心大歡喜せり、末法当今に於いて妙法蓮華經の宝珠を受持し奉りて、己心

を見るに、十界互具・百界千如・一念三千の宝珠を分明に具足せり、
是れ併ら末法の要法たる題目なり云云。

一如甘露見灌の事

仰に云く甘露とは天上の甘露なり、されば妙楽

大師云く実相常住は甘露の如し是れ不死の薬云云、此の釈の心は諸法実相

の法体をば甘露に譬えたり、甘露は不死の薬と云えり、所詮妙とは不死の

薬なり、此の心は不死とは法界を指すなり、其の故は森羅三千の万法を

不思議と歎じたり、生住異滅の当位当位・三世常恒なるを不死と云う、

本法の徳として水はくだりつめたく火はのぼりあつし、此れを妙と云う、

此れ即ち不思議なり、此の重を不死とは云うなり、甘露と妙とは同じ事な

り、然らば法界の儘に闇いて妙法なりと説くを本法とも甘露とも云えり、

火は水にきゆる本法にして不死なり、十界己己の当位当位の振舞・常住

本有なるを甘露とも妙法とも不思議とも本法とも止観とも云えり、所詮

本有なるを甘露とも妙法とも不思議とも本法とも止観とも云えり、所詮

本有なるを甘露とも妙法とも不思議とも本法とも止観とも云えり、所詮

本有なるを甘露とも妙法とも不思議とも本法とも止観とも云えり、所詮

本有なるを甘露とも妙法とも不思議とも本法とも止観とも云えり、所詮

本有なるを甘露とも妙法とも不思議とも本法とも止観とも云えり、所詮

本有なるを甘露とも妙法とも不思議とも本法とも止観とも云えり、所詮

本有なるを甘露とも妙法とも不思議とも本法とも止観とも云えり、所詮

本有なるを甘露とも妙法とも不思議とも本法とも止観とも云えり、所詮

本有なるを甘露とも妙法とも不思議とも本法とも止観とも云えり、所詮

本有なるを甘露とも妙法とも不思議とも本法とも止観とも云えり、所詮

本有なるを甘露とも妙法とも不思議とも本法とも止観とも云えり、所詮

本有なるを甘露とも妙法とも不思議とも本法とも止観とも云えり、所詮

本有なるを甘露とも妙法とも不思議とも本法とも止観とも云えり、所詮

本有なるを甘露とも妙法とも不思議とも本法とも止観とも云えり、所詮

本有なるを甘露とも妙法とも不思議とも本法とも止観とも云えり、所詮

本有なるを甘露とも妙法とも不思議とも本法とも止観とも云えり、所詮

本有なるを甘露とも妙法とも不思議とも本法とも止観とも云えり、所詮

本有なるを甘露とも妙法とも不思議とも本法とも止観とも云えり、所詮

本有なるを甘露とも妙法とも不思議とも本法とも止観とも云えり、所詮

本有なるを甘露とも妙法とも不思議とも本法とも止観とも云えり、所詮

本有なるを甘露とも妙法とも不思議とも本法とも止観とも云えり、所詮

本有なるを甘露とも妙法とも不思議とも本法とも止観とも云えり、所詮

本有なるを甘露とも妙法とも不思議とも本法とも止観とも云えり、所詮

本有なるを甘露とも妙法とも不思議とも本法とも止観とも云えり、所詮

本有なるを甘露とも妙法とも不思議とも本法とも止観とも云えり、所詮

本有なるを甘露とも妙法とも不思議とも本法とも止観とも云えり、所詮

本有なるを甘露とも妙法とも不思議とも本法とも止観とも云えり、所詮

本有なるを甘露とも妙法とも不思議とも本法とも止観とも云えり、所詮

本有なるを甘露とも妙法とも不思議とも本法とも止観とも云えり、所詮

本有なるを甘露とも妙法とも不思議とも本法とも止観とも云えり、所詮

本有なるを甘露とも妙法とも不思議とも本法とも止観とも云えり、所詮

本有なるを甘露とも妙法とも不思議とも本法とも止観とも云えり、所詮

本有なるを甘露とも妙法とも不思議とも本法とも止観とも云えり、所詮

本有なるを甘露とも妙法とも不思議とも本法とも止観とも云えり、所詮

本有なるを甘露とも妙法とも不思議とも本法とも止観とも云えり、所詮

本有なるを甘露とも妙法とも不思議とも本法とも止観とも云えり、所詮

本有なるを甘露とも妙法とも不思議とも本法とも止観とも云えり、所詮

本有なるを甘露とも妙法とも不思議とも本法とも止観とも云えり、所詮

本有なるを甘露とも妙法とも不思議とも本法とも止観とも云えり、所詮

本有なるを甘露とも妙法とも不思議とも本法とも止観とも云えり、所詮

本有なるを甘露とも妙法とも不思議とも本法とも止観とも云えり、所詮

本有なるを甘露とも妙法とも不思議とも本法とも止観とも云えり、所詮

本有なるを甘露とも妙法とも不思議とも本法とも止観とも云えり、所詮

本有なるを甘露とも妙法とも不思議とも本法とも止観とも云えり、所詮

本有なるを甘露とも妙法とも不思議とも本法とも止観とも云えり、所詮

本有なるを甘露とも妙法とも不思議とも本法とも止観とも云えり、所詮

本有なるを甘露とも妙法とも不思議とも本法とも止観とも云えり、所詮

本有なるを甘露とも妙法とも不思議とも本法とも止観とも云えり、所詮

まっぼう

末法に入つて甘露とは南無妙法蓮華經なり、見灌とは受持の一行なり云云。

にやくうあくにん

ふぜんしん

一若有惡人以不善心等の事

仰に云く惡人とは在世にては提婆瞿伽利

ざいせい

だいばくぎやう

等なり、不善心とは惡心を以て仏を罵詈し奉る事を説くなり、滅後には惡人

ふぜんしん

あくしん

めり

たてまつ

めつこ

あくにん

等なり、不善心とは惡心を以て仏を罵詈し奉る事を説くなり、滅後には惡人

こうぼう

じかく

ちしやう

ぜんどう

ほうねん

これ

ふぜんしん

ほうげん

とは弘法・慈覺・智証・善導・法然等はなり、不善心とは謗言なり此の謗言

しやしや

じゅうじゅう

せんちやくしゅう

ほうぼう

を書寫したる十住心等選択集等の謗法の書どもなり、さて末法に入て

まっぼう

善人とは日蓮等の類いなり善心とは法華弘通の信心なり所謂南無

ぜんにん

にちれん

たぐ

ぜんしん

ほつけくつう

しんじん

いわるる

なむ

妙法蓮華經是なり云云。

妙法蓮華經是なり云云。

によぜ

一如是如是の事

仰に云く釈に云く法相の是に如し根性の是に如する

いわ

いわ

ほつそう

ごと

こんじやう

なり文、法相の是に如すとは諸法実相を重ねて如是と説かれたり、根性の

ほつそう

しよほうじつそう

かさ

によぜ

こんじやう

是に如すとは、九法界を説かれたり、然れば機法共に釈迦如来の所説の

是に如すとは、九法界を説かれたり、然れば機法共に釈迦如来の所説の

ほつかい

しか

き

しゃかによらい

しよせつ

如く真実なりと証明し給えり、始の如是は教一開会なり次の如是は人・

ごと

しんじつ

しやうみやう

たま

によぜ

かいえ

によぜ

によぜ

一開会なり、權教の意は諸法を妄法ときらいし隔別不融の教なり、根性

かいえ

こんきやう

しよほう

きやくべつ

こんじやう

根性

一開会なり、權教の意は諸法を妄法ときらいし隔別不融の教なり、根性

に於ては性欲不同なれば種種に説法し給えり、仍つて人も成仏せず、今の經の心は諸法実相の御經なれば十界平等に授くる所の妙法なり、根性は不同なれども同じく如是性の一性なり、所詮今末法に入つての如法相は塔中相承の本尊なり如根性是也と云うは十界宛然の尊像なり法相は南無妙法蓮華經なり、根性は日本国の一切衆生廣くは一閻浮提の衆生なり云云。

一是真仏子住淳善地の事

仰に云く末法当今に於て釈迦如来の眞実の

御子と云うは法華經の行者なり、其の故は上の文に能於來世讀持此經と説

けり來世とは末法なり、讀むと云うは法華經の如説修行の行者なり、弘法

・慈覺・智証・善導・法然等讀みて云く第三の劣・戲論の法・捨閑閑拋・

理同事勝等と讀むは謗法にして三仏の御舌を切るに非ずや何に況や持たん

をや、伝教大師云く法華經を讀むると雖も還つて法華の心を死すとは是な

- 1767 -

り、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る人は、読持此經の人なり、
あにぜしんぶつし あら 豈是真仏子に非ずや淳善地は寂光土に非ずや、是真仏子の字は十界の
しゅじよう 衆生なり、所詮此の子の字は法華經の行者に限る、悉是吾子の子は孝不孝
ぶんべつ ぶんべつ を分別せざる子なり、我等皆似仏子の子は中根の声聞仏子に似たりと説か
れたり、為治狂子故の子は、久遠の下種を忘れたれば物にくるう子なり、
よく しやくそん 仍つて釈尊の御子にも物にくるう子もあり、不孝の子もあり、孝養の子も
いゆるほけきよう ぎようじやしんじつ しやくそん あり、所謂法華經の行者真実の釈尊の御子なりと、
なゆた せかい じゅうまん しよぶつ おんまえ 三百萬億那由他の世界に充滿せる諸仏の御前にして孝不孝の子を定めをき
たま 給えり、父の業をつぐを以て子とせり、三世の諸仏の業とは南無
みようほうれんげきようこれ ほうしほん にやらい 妙法蓮華經是なり、法師品に行如來事と説けり云云、法華經は母なり釈尊
われらしゅじよう わりようぎきよう いわ しよぶつ こくおう こ は父なり我等衆生は子なり、無量義經に云く諸仏の國王と是の經の夫人と
わこう 和合して共に是の菩薩の子を生み給う文、菩薩とは法華經の行者なり、

ほうしほん いわ ざいけ しゅつけ ほさつ
法師品に云く在家・出家行菩薩道云云。

一非口所宣非心所測の事

仰に云く非口所宣は色法・非心所測は心法

なり、色心の二法を以て大海にして教化したる衆生を宣測するに非ずと云

えり、末に至つては広導諸群生と説かれたり云云。

一不染世間法如蓮華在水從地而涌出の事

仰に云く、世間法とは全く

貪欲等に染せられず、譬えば蓮華の水の中より生ずれども淤泥にそまざる

が如し、此の蓮華と云うは地涌の菩薩に譬えたり、地とは法性の大地なり

所詮法華經の行者は蓮華の泥水に染まざるが如し、但だ唯一大事の南無

妙法蓮華經を弘通するを本とせり、世間の法とは国王・大臣より所領を

給わり官位を給うとも夫には染せられず、謗法の供養を受けざるを以て不

染世間法とは云うなり、所詮蓮華は水をはなれて生長せず水とは南無

妙法蓮華經是なり、本化の菩薩は蓮華の如く過去久遠より已来本法所持の

菩薩ぼさつなり蓮華れんげ在水すゐとは是これなり、所詮しよせん此の水すゐとは我等われら行者ぎやうじやの信心しんじんなり、蓮華れんげは本因ほんいん・ほんが・本果みようほうの妙法みよほうなり信心しんじんの水すゐに妙法蓮華みよほうれんげは生長せいじやうせり、地ちとは我等われら衆生しゆじやうの心地しんじなり涌出ゆじゆつとは広宣流布こうせんるふの時とき一閻浮提えんぶだいの一切衆生いつさいしゆじやう法華經ほふききやうの行者ぎやうじやとなすべきを涌出ゆじゆつとは云いうなり云云。

一願みらいえん仏ぶつ為ため未來演說きやうけこれら令開解かいげの事

仰いに云いく此の文ぶんは弥勒菩薩みろくぼさつ等末法まつぽう当今とうじん

の為ために我われ從久遠くおん來教化きやうけ是等衆しやうの言ごんを演說えんぜつ令開解かいげせしめ給たまえと請しやうじ奉たてまつる

經文きやうもんなり、此しやうの請文しやうぶんに於おいて壽量品じゆりやうぼんは顯あらわれたり五百塵点じんてんの久遠くおんの法門ほうもん是これな

り、開解かいげとは教主きやうしゆしやくそん釈尊しやくそんの御内証ないしやうに此この分ぶんを・をさたまえ給たまうを願ねがは開ひらかし

め給たまえ同どうじく一會いししゆの大衆だしゆの疑うたがいをも解とかしめ給たまえと請しやうするなり、此この開解かいげ

の語ことばを壽量品じゆりやうぼんにして汝等なんじ当信解しんげと誠いましめ給たまえり、若もし開解かいげし給たまわずんば

大衆たいしゆ皆法華經みなほふききやうに於おいて疑惑ぎわくを生おこす可べしと見給たまえり、疑うたがいを生おこせば三惡道さんあくどうに

墮おつべしと既すでに弥勒菩薩みろくぼさつ申もうされたり、此この時とき壽量品じゆりやうぼん顯あらわれずんば即当だあくどう墮お惡道あくどう

すべきなり 寿量品の法門大切なるは是なり、さて此の開解の開に於て二あり、迹門の意は諸法を真相の一理と会したり、さては諸法を真相と開きて見れば十界悉く妙法真相の一理なりと開くを開仏智見と説けり、さて本門の意は十界本有と開いて始覚のきづなを解きたり、此の重を開解と申されたり仍つて演説の二字は釈尊開解の両字は大衆なり、此の演説とは 寿量品の久遠の事なり、終に釈尊 寿量品を説かせ給いて一切大衆の疑惑を破り給えり云云。

一譬如良医智慧聰達の事

仰に云く良医とは教主 釈尊智慧とは八万

法蔵十二部経なり 聰達とは三世了達なり 薬とは妙法の良薬なり、さて

寿量品の意は十界本有と談ぜりされば此の薬師とは一切衆生の事なり、

智慧とは万法己己の自受用報身の振舞なり 聰達とは自在自在に振舞うを

聰達とは云うなり、所詮末法当今の爲の 寿量品なれば法華經の行者の上

の事なり、此の智慧ちえとは南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうなり、聰達そうだつとは本有無作三身ほんぬむさんじんなりと云う事なり、元品がんぽんの無明むみやうの大良藥りやうやくは南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうなり、智ちとは一切いっさい衆生しゆじやうの力なり、慧えとは一切衆生いっさいしゆじやうの言語音声ごんごおんじやうなり、故に偈頌げじゆに云く我智力いわによぜ
如是慧光照無量むりやうと云えり云云。

一一念信解いちねんしんげの事 仰いわに云く此の經文きやうもんは一念三千いちねんさんぜんの宝珠ほうしゆを納めたる函おさなり

此れは現在げんざいの四信いちねんしんげの初めつこの一念信解ごほんなり、さて滅後めつこの五品ごほんの初めつこの十心具足しんぐ

初隨喜品しゆざいきも一念三千いちねんさんぜんの宝を積みたる函しんぐなり、法華經ほけきやうの骨髓こつずい・末法まつぽうに於て

法華經ほけきやうの行者ぎやうじやの修行しゆぎやうの相貌そうみやう分明ふんみやうなり、所詮信しよせんと隨喜ずいきとは心同しんどうじなり隨喜ずいき

するは信心しんじんなり信心しんじんするは隨喜ずいきなり一念三千いちねんさんぜんの法門ほうもんは信心しんじん隨喜ずいきの函はこに納り

たり、又此の函いわゆるとは所謂南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやう是なり又此の函われらは我等いっしんが一心いっしんなり

此の一心いっしんは万法の總体だいまくなり總体は題目ごじの五字ごじなり、一念三千いちねんさんぜんと云うが如く

一心三千いっしんさんぜんもあり釈いわに云く介爾けにも心有こころあれば即ち三千すなわを具すと、又宝函ほうかんとは我等われら

が色心しきしんの二法なり。本・迹しやうじ兩門・生死しやうじの二法・止觀しかんの二法なり所詮しよせん信心しんじんの函はこに入はいれたる南無妙法蓮華經なむみょうほうの函はこなり云云。

一見もんぼうしんじゆ仏聞法信受教誨もんぼうしんじゆの事 仰いに云いく此きの經文きやうもんは一念いちねん隨喜ずいきの人は五十いその

功德くどくを備そなうべし、然しかる間見くどく仏間法ぐそくの功德くどくを具足ぐそくせり、此この五十ごじゅう展轉てんでんの五十

人くどくの功德くどくを隨喜ずいき功德品くどくには説よかれたり、仍よつて世世じじ・生生しやうしやうの間見くどく仏間法くどくの

功德くどくを備そなえたり、所詮しよせん末法まつぽうに入はいつては仏ぶつを見るとは壽量品じゆりやうぼんの釈尊しやくそん・法はふを

聞きこくとは南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうなり、教誨きやういとは日蓮等にちれんの類たぐい教化きやうけする所の諸宗しよしゆう

無得道とくどうの教誡きやうがいなり、信受しんじゆするは法華經ほけきやうの行者ぎやうじやなり、所詮しよせん・壽量じゆりやう開顯きやうけんの眼まなこ

の顯あらわれては、此この見仏みぶつは無作むさの三身さんじんなり、開法きはふは万法まんぽう己己ここの音聲おんじやうなり、信受しんじゆ

教範きやうはんは本有ほんぬ隨緣ずいえん真如しんによの振舞ふるまいなり、是これ即すなわち色心しきしんの二法ふたぽうなり、見聞けんもんとは色法しきぽう

なり、信受しんじゆは信心しんじん領納りやうなつなれば心法しんぽうなり、所謂い色心しきしんの二法ふたぽうに備なえたる南無なむ

妙法蓮華經みやうほうれんげきやう是こなり云云。

一若復有人以七宝満是人所得其福最多またあるひと しつぼうの事

仰に云く此の経文いわは七宝きやうもん しつぼうを

以て三千大千世界に満てて四聖さんぜんだいせんせかい ししやうを供養くやうせんよりは法華經の一偈ほけきやう いちげを受持じゆじし

奉らんにはをとれりと説かれたり、天台大師は生養成栄てんだいだいし しやうやうの四の義を以て、

法華經の功德を釈し給えり、所詮末法に入つては題目だいもくの五字即ち是なり、

此の妙法蓮華經の五字は万法能生みやうほうれんげきやう ごじの父母なり、生養成栄しやうやうも亦復是くまたかくのごとの如

きなり、仍て釈には法を以つて本と為すと釈せり、三世十方さんぜじゆつぼうの諸仏しよぶつは、

妙法蓮華經を以て父母とし給えり、此の故に四聖みやうほうれんげ ふぼ たまを供養するよりも法華經ほけきやう

を持つは勝れたりすぐ、七宝は世間の財宝なり、四聖しつぼう せけんは滅に帰する仏・菩薩羅漢ぼさつらかん

なり、さて妙法の功德みやうほう くとくは一得永不失なれば朽失せざる功德いつとくやうふしつ くとくなり、此の故にゆえ

勝れたり云云。

一妙音菩薩の事

仰に云く妙音菩薩みやうおんぼさつとは、十界じゆつかいの語言音声ごげんおんじやうなり、

此の音声おんじやう悉く慈悲なり、菩薩ぼさつとは是れなり。

一爾時無尽意菩薩の事

仰に云く此の菩薩は空仮中の三諦なり、意の

一字には一切の法門を摂得するなり意と云うは中道の事なり無は空諦なり

尽とは仮諦なり、所謂意と云うは南無妙法蓮華經なり、一切諸經の意三世

の諸仏の題目の五字なり所詮法華の行者は信心を以て意とせり云云。

一觀音妙智力の事 仰に云く妙とは不思議なり、智とは隨緣真如の智

力なり、森羅三千の自受用智なり、觀音は円觀なり、円觀とは一念三千な

り、觀音とは法華の異名なり、觀音と法華とは眼目の異名と釈する間・

法華經の異名なり、觀とは円觀・音は仏機なり、仍つて觀音の二字は人法

一体なり、所謂一心三觀・一念三千是なり云云。

一自在之業の事 仰に云く此の自在之業とは自受用報身の智力なり、

森羅三千の諸法作業をさして云うなり、其の所作のまま法華經の意は不思議

の自在之業なりと説けり、此の自在之業の本は南無妙法蓮華經是なり云云。

一妙法蓮華經陀羅尼の事

仰に云く妙法蓮華經陀羅尼とは

正直捨方便・但説無上道なり、しやうじきしやほうべん たんせつむじやうどう 五字は体なり陀羅尼は用なり妙法の五字ごじ

は我等が色心なり、陀羅尼は色心の作用なり、所詮陀羅尼とは呪なり、われら しきしん だらに しきしん

妙法蓮華經を以て煩惱即菩提・生死即涅槃と呪いたるなり、日蓮等の類いみやうほうれんげきやう ぼんのうそくほだい しやうじそくねはん にちれん たぐ

南無妙法蓮華經を受持するを以て呪とは云うなり、若有能持即持仏身とまなむ みやうほうれんげきやう じゅじ にやくうのうじ ぶっしん

じないたるなり、釈に云く陀羅尼とは諸仏の密号と判ぜり、所詮法華折伏いわ だらに しよぶつ しよせんほつけしやくぶく

・破権門理の義遮惡持善の義なり云云。

一六万八千人の事 仰に云く六とは六根なり、万とは六根に具わる処はこん もんり いわ だらに しろこん ろっこん ところ

の煩惱なり八とは八苦の煩惱なり千とは八苦に具足する煩惱なり、是れぼんのう ぼんのう ぐそく ぼんのう

即ち法華經に値い奉りて六万八千の功德の法門と顕るるなり、所詮日蓮等すなわ ぼけきやう あ たてまつ くどく ほうもん あらわ しよせんにちれん

の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る外に六万八千の功德の法門之れ無きなりたぐ なむ みやうほうれんげきやう とな たてまつ くどく ほうもん こ

云云。

一妙莊嚴王の事

仰に云く邪見即正の手本なり、所詮森羅三千の万法

・妙を以て莊嚴したる王なり妙とは称歎の語なり莊嚴とは色法なり王と

は心法なり諸法の色心を不思議とほめたり、然れば、妙莊嚴王の言・三千

の諸法・三諦法性の当位なり、所詮日蓮等の類南無妙法蓮華經を以て

色心を莊嚴したり、此の莊嚴とは別してかざり立てたるには非ず当位即妙

の莊嚴なり、煩惱即菩提・生死即涅槃是なり云云。

一華嚴・大日觀經等の凡夫の得道の事 仰に云く彼等の衆皆各其の

經經の得道に似たれども眞實には法華の得道なり、所謂三五下種の輩な

り經に云く始見我身聞我所說文、妙樂大師云く脱は現に在りと雖も具に本

種を騰ぐと云えり本種と云うは南無妙法蓮華經是なり云云。

一題目の五字を以て下種の証文と為すべき事 仰に云く經に云く教

無量菩薩畢責住一乘文、妙樂大師の云く余教を以て程と為さず文、無量

の菩薩とは日本国にほんこくの一切衆生いっさいしゅじょうを菩薩ぼさつと開会かいえして題目だいもくを教えたり、畢竟ひつきようと

は題目だいもくの五字ごじに畢竟ひつきようするなり住一乘いちじようとは乘此宝乘じきしどう直至道場じきしどう是なり文、

下種げしゅとはたねを下すなり種子しゆしとは成仏じようぶつの種の事なり

り、上の經文かみ きようもんに教無量菩薩むりようぼさつの教の一字は下種げしゅの証文しようもんなり教とは題目だいもくを授くさず

る時の事なり、權教無得道・法華得道と教うるを下種げしゅとは云うなり、末法まっぽう

に入つて此の經文きようもんを出ださん人は有る可べからざるなり慥たしかに塔中相承たつちゆうそうじようの秘

文なり下種げしゅの証文しようもん秘す可べし云云。

一題目だいもくの五字末法ごじ まっぽうに限つて持つ可べきの事

仰に云く經に云く、惡世末法あくせまっぽう

時能持是經者文、此の經とは題目だいもくの五字ごじなり、能の一字に心を留めて之れこ

を案ずべし云云、末代惡世・日本国にほんこくの一切衆生いっさいしゅじように持てと云う經文きようもんなり云

云。

一天台云く是我弟子これわがでし志弘我法おうがほうの事

仰に云く我が弟子でしとは上行菩薩じようぎようぼさつなり

り我が法とは南無妙法蓮華經なり、權教乃至始覺等は隨他意なれば他の法なり、さて此の題目の五字は五百塵点より已來、証得し給える法体なりゆえ故に我が法と釈せり、天台云く此の妙法蓮華經は本地甚深の奧藏なり、三世の如來の証得し給える所とは是れなり。

一色心を心法と云う事

仰に云く玄の十に云く請を受けて説く時只だ

是れ教の意を説く教意は是れ仏意なり仏意は即ち是れ仏智なり仏智至つて

深し是の故に三止四請す此くの如きの艱難・余經に比するに余經は則ち

易し云云、此の釈の意分明なり教意と仏意と仏智とは何れも同じ事なり、

教は二十八品なり意は題目の五字なり惣じて仏意とは法華經の異名なり、

法華經を以て一切經の心法とせり又題目の五字を以て一代説教・本・迹

二門の神とせり、經に云く妙法蓮華經如來寿命品是なり、此の題目の五字

を以て三世の諸仏の命根とせりさて諸經の神法華經なりと云う証文は

みようほうれんげきようほうべん
妙法蓮華經方便品と題したる是なり云云。

一 無作の応身我等凡夫也と云う事

仰に云く釈に云く凡夫も亦三身の本

を得たりと云云、此の本の字は応身の事なりされば本地無作本覺の体は無作

の応身を以て本とせり仍つて我等凡夫なり、応身は物に応う身なり其の上

寿量品の題目を唱え出し奉るは真実に応身如来の慈悲なり云云。

一 諸河無鹹の事

仰に云く此無鹹の事をば諸教無得道に譬えたり大海

のしをはゆきをば法華經の成仏得道に譬えたり、又諸經に一念三千の法門

無きは、諸河にうしをの味無きが如く死人の如し、法華經に一念三千の

法門有るはうしをの大海にあるが如く生きたる人の如し、法華經を浅く信

ずるはあわのうしをの如し、深く信ずるは、海水の如し、あわはきえやす

し、海水は消えざるなり、如説修行最も以て大切なり、然りと雖も、諸經

の大河の極深なるも、大海のあわのしをの味をば具足せず、權教の仏は

法華經の理即の凡夫には百千万倍劣るなり云云。

仰に云く此の釈の心は

経即為閻浮提人病之良藥 若人有病得聞是經病即消滅 不老不死云云、此の

経文きやうもんの意を底に含めて釈しやくせり、妙楽みょうらく云く然しかるに後・五百は、且しばらく一往いちおう

に從う、まっぼうのはじめみようり末法の初冥利無きにあらず、しばら且く大教の流行す可き時に拠る、りゆうこう故にべよゆえ

五百と云う文、仍よつて本化ほんげの菩薩ぼさつは顯りやくの利益しやく迹化しやくけは冥りやくの利益しやくなるべし云云。

一 爾前經瓦礫国の事
にぜんきようがりやく
仰に云く法華經の第三に云く、
如從飢国来忽遇
けこく こつぐ

大王・と云云、六の巻に云く我此土安穩天人常充滿我淨土不毀云云、此の

両品の文の意はこんきょう権教はことごとがりやく悉く瓦礫の旅の国なり、あやまりて本国と書いて都

と思わん事迷まよいの故なり、一往四十二年住したる国なれば衆生・皆本国といちおうしゅじょうみな

思えり、
 本国は此の法華經なり、
 信解品に云く遇向本国と、
 三五の下種の

所を指して本国とも浄土とも大王・とも云うなり、下種の心地即ち受持信解の国なり云云。

一 無明悪酒の事 むみょう 仰に云く無明の悪酒に酔うと云う事は弘法・慈覚・

智証法然等の人人なり、ちしようほうねん 無明の悪酒と云う証文は勸持品に云く、ひとびと 悪鬼入其

身是なり、これ 悪鬼と悪酒とは同じ事なり悪鬼の鬼は第六天の魔王の事なり悪

酒とは無明なり 無明即魔王魔王即無明なり、むみょう 其身の身とは日本国の謗法の

一切衆生なり、いっさいしゅじょう 入ると呑むとは同じ事なり、此の悪鬼入る人は阿鼻に入る、

さて法華經の行者は入仏知見道故と見えて仏道に入る得入無上道とも説

けり、あいかまえそうかまえ 相構え相構えて無明の悪酒を恐るべきなり云云。

一日蓮已証の事 にちれんこししよう 仰に云く寿量品の南無妙法蓮華經是れなり、地涌

千界の出現末代の当世の別付属の妙法蓮華經の五字を一閻浮提の一切

衆生に取次ぎ給うべき仏勅使の上行菩薩なり云云、取次とは取るとは

しやくそん

釈尊より上行菩薩の手へ取り給うさて上行菩薩又末法当今の衆生に取

たま

次ぎ給えり是を取次ぐとは云うなり、広くは末法万年までの取次なり、

これ むりようだんぜつ

是を無令断絶とは説かれたり、又結要の五字とも申すなり云云、上行菩薩

ひほう

いかわゆるなむみようほうれんげきよう

取次の秘法は所謂南無妙法蓮華経なり云云。

しやくそん

一釈尊の持言秘法の事

仰に云く持言の秘法の経文とは寿量品に

云く、每自作是念の文是なり、毎の字は三世常住なり、是念の念とは、

わすれ給わずして内証に具足し給えり故に持言なり、秘法とは南無

たま

ないしやう

たま

ゆえ

ひほう

なむ

みようほうれんげきようこれ

妙法蓮華経是なり秘す可し秘す可し云云。

にちれんもんか

一日蓮門家の大事の事

仰に云く此の門家の大事は涌出品の前三後三

の釈なり、此の釈無くんば本化・迹化の不同・像法付属・末法付属・迹門

ほんもん

きじんこ

あべ

すて

ぜんなんし

にちれんもんか

・本門等の起尽之れ有る可からず、既に止善男子の止の一字は日蓮門家の

だいじ

べ

べ

まさ

にちれんもんか

めいきやう

大事なり秘す可し秘す可し、総じて止の一字は正しく日蓮門家の明鏡の中

の明鏡なり口外も詮無し、上行菩薩等を除いては総じて余の菩薩をば悉く

止の一字を以て成敗せり云云。

一日蓮が弟子臆病にては叶う可からざる事

仰に云く此の意は問答

対論の時は爾前・迹門の釈尊をも用う可からざるなり、此れは臆病にて

は釈尊を用いまじきかなんと思ふべき故なり、釈尊をさえ用う可からず

何に況や其の以下の等覺の菩薩をやまして謗法の人人に於ておや、所謂

南無妙法蓮華經の大音声を出だして諸經・諸宗を対治すべし、巧於難

問答其心無所畏とは是なり云云。

一妙法蓮華經の五字を眼と云う事 仰に云く法華第四に云く、仏滅度後

能解其義是諸天人・世間之眼と云云、此の經文の意は、法華經は人天・

二乘・菩薩・仏の眼目なり、此の眼目を弘むるは日蓮一人なり、此の眼に

は五眼あり、所謂肉眼・天眼・慧眼・法眼・仏眼なり、此の眼をくじりて

別に眼まなこを入れたる人あり、所謂いわゆる弘法大師是なり、法華經ほけきようの一念三千いちねんさんぜん

即身成仏そくしんじようぶつ諸仏の開眼かいげんを止めて、真言經しんごんにありと云えり、是れ豈あにほけきよう法華經まなこの眼

を抽くれる人に非あらずや、又此の眼まなこをとじふさぐ人あり所謂いわゆる法然上人ほうねんしやうにん是れな

り、捨閉しゃへいの閉の文字もんじは、閉眼へいがんの義ぎに非あらずや、所詮しよせん能弘のうぐの人に約やくしては、日蓮にちれん

等の類たぐい世間せけん之眼のまなこなり、所弘しよぐの法はふに随つえば、此の大乗經典だいじやうきやうてんは、是れ諸仏しよぶつ

の眼まなこなり、所詮しよせん眼の一字いちは一念三千いちねんさんぜんの法門はうもんなり、六万九千三百八十四字

を此の眼まなこの一字おに納おさめたり、此の眼の字あ頭あわれて見れば煩惱ぼんのう即菩提そくぼだい・

生死しやうじ即涅槃そくねはんなり、今末法まつぽうに入まつて、眼まなことは所謂いわゆる未會有まんだらの大曼荼羅だいたんなり、此

の御本尊ごほんぞんより外がには眼目がんもく無なきなり云云。

一法華經ほけきようの行者ぎやうじやに水火すいかの行者ぎやうじやの事こと 仰いに云いく総すべじて此の經きやうを信たじ奉まつる人

に水火すいかの不同ふどうあり、其の故そのゆゑは火の如ごときの行者ぎやうじやは多く水の如ごとき行者ぎやうじやはまれ

なり、火の如ごとしとは此の經のいわれをききて火炎くわえんのもえ立つが如ごとく貴たかく

殊勝しゅしょうに思おもいて信しんずれども・やがて消失こす、此これは当座とうざは大信心しんじんと見えたれども其その信心しんじんの灯しんきゆる事ことやすしさて水の如ごときの行者ぎやうじやと申もうすは水は昼夜ぎやうじやふたい不退ふたいに流ながるるなり少しもやむ事ことなし、其その如ごとく法華經ほけきやうを信しんずるを水の行者ぎやうじやとは云いうなり云云。

一い女人にょにんと妙しやうと釈尊しゃくそんと一いつ体の事こと 仰いわに云いく女人にょにんは子こを出生しゅっしやうす、此この出生しゅっしやうの子こ又また子こを出生しゅっしやうす此かくの如ごとく展轉てんでんして無数しゅっしやうの子こを出生しゅっしやうせり、此この出生しゅっしやうの子こに善子ぜんこもあり惡子あくこもあり端嚴たんげん美麗るいの子こもあり・醜陋しゆうろうの子こもあり長ちやうのひくき子こもあり大なる子こもあり・男子なんしもあり・女子にょしもあり云云、所詮しよせん・妙めうの一字いちより万法ばんぽうは出生しゅっしやうせり地獄じごくもあり・餓鬼がきもあり・乃至ないしふつ仏界ぶつがいもあり・權教こんきやうもあり・実教じつきやうもあり・善ぜんもあり惡あくもあり・諸法しよぽうを出生しゅっしやうせり云云、又また釈迦しゃか一いつ仏ぶつの御身おんみより一切いっさいの仏ぶつ・菩薩ぼさつ等とう悉しつく出生しゅっしやうせり、阿弥陀あみだ・藥師やくし・大日等だいにちは悉しつく釈尊しゃくそんの一月いちげつより万水ばんすいに浮うぶ所ところの万影ばんえいなり、然しからば女人にょにんと妙めうと

しゃくそん

釈尊との三全く不同無きなり、妙樂大師の云く妙即三千・三千即法云云、

だいば

提婆品に云く有二一宝殊一価直二三千大千世界一是なり云云。

かしやく

一置不呵責の文の事

仰に云く此の経文に於ては日蓮等の類のおそ

るべき文字

もんじ

一字之れ有り、

若し此の文字を恐れざれば縦い当座は事なしと

たととうざ

みらいむげん

も未来無間の業たるべし、然らば無間地獄へ引き入る獄卒なるべし夫れは

しかむげんじごく

ほうぼうふしん

とが

置の一字是なり云云、此の置の一字は獄卒なるべし謗法不信の失を見なが

これ

ごくそつ

ほうぼうふしん

とが

ら聞きながら云わずして置かんは必ず無間地獄へ墮在す可し、仍つて置の

むげんじごく

だざい

べ

よ

置の

ごくそつ

あほうらせつ

もっと

べ

ごくそつ

しよせん

一字・獄卒・阿防羅刹なるべし尤も以て恐る可きは置の一字なり云云、所詮

きようもん

ごくそつ

ごくそつ

此の経文の内に獄卒の一字を恐るべきなり云云、此の獄卒の一字を深く

これ

べ

にちれん

ゆえ

けんちよう

こうあん

まめか

之を思う可し、日蓮は此の字を恐る故に建長五年より今弘安年中まで

さいざいしよしよ

もう

ただひとえ

ごくそつ

まめか

ほけきよう

在在所所にて申しはりしなり只偏に此の獄卒を脱れんが為なり、法華經に

にやくにんふしん

うたがいふしん

と

たま

ほけきよう

は若人不信とも生疑不信者とも説き給えり、法華經の文文・句句をひら

き捏槃經の文文・句句をひらきたりとも置いていわずんば叶う可からざる
は此の置の一字より外に獄卒は無きなり云云。

一異念なく無りようぜんじようどく 靈山淨土へ参る可き事

仰に云く異念とは不信ふしんの事なり

若し我が心なりとも不信ふしんの意出来せば忽たちまちしんじんに信心に住すべし、所詮しよせんふしん不信の心

をば師となすべからず信心しんじんの心を師匠ししやうとすべし淨心じやうしん信敬ほけきやうに法華經しゆぎやうを修行

し奉るべきなり、されば能持のうじ二是經一能說二此經一と説きて能の字を説か

せ給たまえり靈山りやうぜんここにあり四土一みなじようじやっこう念皆常寂光とは是なり云云。

一不可失本心の事 仰に云く此の本心ほんしんと云うは法華經ほけきやうの信心しんじんの事なり、失とが

と申すは謗法の人ほうぼうにすかされて法華經ほけきやうを捨つる心の出来するを云うなり、

されば天台大師てんだいだいし云く若もし悪友あくゆうに値あえば則ち本心ほんしんを失うしなうと云云、此の釈あくゆうに悪友

とは謗法ほうぼうの人の事なり、本心ほんしんとは法華經ほけきやうなり、法華經ほけきやうを本心ほんしんと云う意は

諸法実相しよほうじつそうの御經なれば十界じゆつかいの衆生しゆじやうの心法ほけきやうを法華經ほけきやうとは申すなり、而しかに

此の本心を引きかえて迷妄の法に着するが故に本心を失うなり、此の本心に於ては三五の下種の法門なり、若し善友に値う時んば失う所の本心を忽に見得するなり、所謂迦葉・舍利弗等是なり、善友とは釈迦如来・悪友とは第六天の魔王・外道・婆羅門是なり、所詮末法に入つて本心とは日蓮弘通の南無妙法蓮華經是なり、悪友とは法然・弘法・慈覚・智証等是なり、若し此の題目の本心を失せんに於ては又三五塵点を経べきなり、但、如是展転至無數劫なるべし、失とは無明の酒に酔いたる事なり仍て本心を失うと云うなり、此の酔をさますとは権教を捨てしむるを云うなり云云。

一天台大師を魔王障礙せし事

仰に云く此の事は随分の秘藏なり、

其の故は天台大師・一心三觀・一念三千の觀法を説き顯さんとし給いしかば父母左右の膝に住して悩まし奉り障礙し給いしなり、是れ即ち第六天の魔王が父母の形を現じて障礙せしなり、終に魔王に障礙せられ給わずして

摩訶止觀まかしかんの法門ほうもん起り、何いかに況や今日蓮いまにちれんが弘ひろむる南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようは三世さんぜの諸仏しよぶつの成道じやうどうの師し・十方薩じゅつぱうさつた☆の得道とくどうの師匠ししやうたり、其その上正像しやうざう二千年ふつぱうの仏法ぶつぽうは爾前にぜん・迹門しやくもんなれば、魔王自身まおうじしん・障礙しょうげをなさずともなるべし、今末法まっぽうの時ときは、所弘しよぐの法ほけきようほんもんは、法華經本門ほけきようほんもんの事いちなんさんぜんの一念三千なむみょうほうれんげきようの南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようなり、能弘のうぐの導師どうしは本化地涌ほんげじゆの大菩薩ほさつにてましますべし、然しかる間魔王自身まおうじしん下りて障礙しょうげせずんば叶かなう可べからざるなり、仍よつて自身下りたる事ふんみよう分明めいなり、所謂いわゆる道隆どうりゆう・良觀りやうかん最明寺等さいみやうじ是これなり、然しかりと雖も諸天善神等しよてんぜんじんは日蓮にちれんに力を合せ給たまう故ゆえに竜口たつのくちまでもかちぬ、其その外ほかの大難だいなんをも脱まぬかれたり、今は魔王まおうもこりてや候うらん、日蓮死去にちれんしきよの後のちは殘党ざんたうども軍いくさを起すべきか、故ゆえに夫れも落居らくこは叶かなう可べからざるなり、其そのの故ゆえは第六天だいりくてんの魔王まおうの眷属けんぞく日本国にほんこくに四十九億九万四千八百二十八人たふんなりしが今は日蓮にちれんに降参かうさんしたる事多分たぶんなり、經いわに云あつきく惡鬼入其身あくきにそのみとは是これなり、此この合戰くわくせんの起りも、所詮しよせん南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきよう是これなり、魔王まおうに於おいて

体の魔王・用の魔王あり、体の魔王とは法性同共の魔王なり妙法の法是なり、用の魔王とは此れより出生する第六天の魔王なり、用の魔王は障礙をなす、然れども体用同共の諸法実相の一理なり、唯一門の智慧の門に入り、無明法性一体なるべきなり云云、所謂摩訶止観の大事の法門是なり、法華經の一代説教に勝れたるは此の故なり、一念三千とは是なり、法華經第三に云く魔及魔民皆護仏法云云。

一 法華經極理の事

仰に云く迹門には二乗作仏本門には久遠実成此

をさして極理と云うなり、但し是も未だ極理にたらず、迹門にして極理の

文は諸仏智慧甚深無量の文是れなり、其の故は此の文を受けて文句の三に

云く豎に如理の底に徹し横に法界の辺を窮むと釈せり、さて本門の極理と

云うは如来秘密神通之力の文是なり、

所詮日蓮が意に云く法華經の極理とは南無妙法蓮華經是なり、一切の功德

法門・釈尊の因行果徳の二法・三世十方の諸仏の修因感果・法華經の文・句句の功徳を取り聚めて此の南無妙法蓮華經と成し給えり、爰を以て釈に云く惣じて一經を結するに唯だ四のみ、其の枢柄を撮つて之を授与す云云、上行菩薩に授与し給う題目の外に法華經の極理は無きなり云云。

一妙法蓮華經五字の蔵の事 仰に云く此の意は妙法の五字の中には一念三千の宝珠あり五字を蔵と定む、天台大師玄義の一に判ぜり、所謂此の妙法蓮華經は本地甚深の奥蔵なり云云、法華經の第四に云く是れ法華經蔵と云云、妙華嚴法阿含蓮方等華般若經涅槃、又云く妙涅槃法般若蓮方等華阿含經・華嚴、已上妙法蓮華經の五字には十界三千の宝珠あり、三世の諸仏は此の五字の蔵の中より、或は華嚴の宝を取り出だし、或は阿含・方等・般若の宝を取り出だし種種說法し給えり、加之・論師・人師等の疏釈も悉く此の五字の中より取り出だして一切衆生に与え給えり、此等は

みなごじ 皆五字の中より取り出だし給えども妙法蓮華經の袋をば持ち給わず、所詮
ごじ 五字は上行菩薩の付属にして更に迹化の菩薩・諸論師いろはざる題目な
り、仍つて上行所伝の南無妙法蓮華經は藏なり、金剛不壞の袋なり此の
袋をそのまま日本国の一切衆生には与え給えり、信心を以て此の財宝を受
取るべきなり、今末法に入つては日蓮等の類い受取る所の如意宝珠なり云
云。

われらしゆじょう 一我等衆生の成仏は打かためたる成仏と云う証文の事 仰に云く經
いわ じょうぶつ に云く無上宝聚不求自得の文是なり、我等凡夫即極とはたと打かためたる
じょうぶつ 成仏なり所謂不求自得する所の南無妙法蓮華經なればなり云云。

にぜんほつ 一爾前法華の能くらべの事 仰に云く爾前の經にして十惡・五逆等の
じょうぶつ 成仏の能なし、今法華經に十界皆成・分明なり、爾前の經の無能と云
しょうもん 証文とは方便品に云く但似仮名字引導於衆生の文是なり、さて法華經

は能と云う証文は諸法実相の文是なり、今末法に入つて第一の能たる南無妙法蓮華經是なり云云。

一授職の法体の事 仰に云く此の文は唯仏与仏の秘文なり輒く云う可からざる法門なり、十界三千の諸法を一言を以て授職する所の秘文なり、其の文とは神力品に云く皆於此經宣示顯説の文是なり、此の五字即十界同時に授職する所の秘文なり十界己己の当体・本有妙法蓮華經なりと授職したる秘文なり云云。

一末代讓 状の事 仰に云く末代とは末法五百年なり、讓 状とは手繼の証文たる南無妙法蓮華經是なり此れを讓るに二義之れ有り、一には跡をゆずり二には宝をゆずるなり、一に跡を讓ると云うは釈迦如来の跡を法華經の行者にゆずり給えり、其の証文に云く如我等無異の文是なり、次に財宝をゆずると云うは釈尊の智慧戒徳を法華經の行者にゆずり給えり、

其の証文に云く無上宝聚不求自得の文是なりと云云、さて此の題目の五字は讓 状なり云云。

一本有止観と云う事 仰に云く本有の止観と云うは大通を以て習うなり、

くおんじつじよう

だいづうちしやうぶつ

しやくそん

さんぼう

久遠実成道の仏と大通智勝仏と釈尊との三仏を次の如く仏法僧の三宝と

習うなり、此の故に大通は本有の止観なれば即ち三世の諸仏の師範と定め

たり、仍つて大通仏を法と習う、此の法は妙法蓮華經是なり、仍つて証文

に云く大通智勝仏十劫坐道場の文是なり十劫は即ち十界なり云云。

一入末法四弘誓願の事 仰に云く四弘誓願をば一文に口伝せり、其の一

文とは所謂神力品に云く於我滅度後応受持斯經是人於仏道決定無有疑と云

云、此の經文は法華經の序品より始めて四弘誓願の法門を説き終りてさて

上行菩薩に妙法蓮華經を付属し給う時・妙法の五字に四弘誓願を結びて

結句に説かせ給えり滅後とは末法の始の五百年なり、衆生無辺誓願度と云

くおんじつじよう

だいづうちしやうぶつ

しやくそん

さんぼう

だいづうちしやうぶつ

しやくそん

さんぼう

だいづうちしやうぶつ

しやくそん

さんぼう

うは是人の人の字なり、誓願せいがんは地涌じゆの本化ほんげの上行菩薩じやうぎやうぼさつの誓願せいがんに入らん

と此れ即ち仏道の二字度脱どだつなり、煩惱無辺ぼんのうむへんなれども煩惱即菩提ぼんのうそくぼだい・生死即涅槃しやうじそくねはん

と体達たいだつす、仏道に入つては煩惱更になし受持斯經じゆじの所には法門無尽誓願ほうもんむじんせいがん知

分明ふんみやうなり無上菩提誓願証むじやうぼだいせいがんと云うは是人於仏道決定無有疑ぜにんのうぶつどうけつじやうむうぎと定めたる四弘しぐ

誓願分明せいがんふんみやうなり、教主釈尊きやうしゆしやくそん・末法に入つて四弘誓願まつぽうも此の文なり、

上行菩薩じやうぎやうぼさつの四弘誓願しぐせいがんも此の文なり深く之を思案しをす可し云云。

一四弘誓願しぐせいがん応報如理と云う事 仰いに云く衆生無辺誓願度しゆじやうむへんせいがんは応身おうじんなり、煩惱ぼんのう

無辺誓願断むへんせいがんは報身ほうしんなり、法門無尽誓願知ほうもんむじんせいがんは智法身ちほふしんなり、無上菩提誓願証むじやうぼだいせいがんは

理法身ほつしんなり、所詮誓願しよせんせいがんと云うは題目弘通だいもくぐつうの誓願せいがんなり、釈いに云く彼が為ために惡

を除くは即ち是れ彼が親すなわなりと是なり云云。

一本來の四弘しぐの事 仰いに云く諸法しよほうの当體本來四弘とうたいなり、其の故そのゆえは衆生しゆじやう

と云うは法界ほふかいなり、所詮法界しよせんほふかいに理智慈悲じひの三を具足ぐそくせり、應報法えうほうの三身諸法さんじんしよほう

の自体なり、無作の応身を以て衆生無辺誓願度と云うなり、無作の報身に
は智徳断徳の二徳を備えたり、煩惱無辺誓願断を以て本有の断徳とは定め
たり、法門無尽誓願知を以て本有の智徳とす、無上菩提誓願証を以て無作
の法身と云うなり、所詮四弘誓願の中には衆生無辺誓願度を以て肝要とす
るなり、今日蓮等の類いは南無妙法蓮華經を以て衆生を度する此より外
は所詮なきなり、速成就仏身是なり云云、所詮四弘誓願は一念三千なり、
さて四弘の弘とは何物ぞ、所謂上行所伝の南無妙法蓮華經なり、釈に云く
しぐのうじょみん
四弘能所混すと云云、此の釈は止観に前三教を釈せり、能と云うは如来な
り所とは衆生なり能所各別するは権教の故なり、法華經の心は能所一体
なり混すと云うは権教の心は機法共に一同なれば能所混すと云うなりあえ
て能所一同して成仏する所を混すと云うには非ざるなり、今末法に入つて
ほけきよう　ぎようじや　しぐ　かんのう　そくしんじようぶつ　しぐ
法華經の行者は四弘能所感応の即身成仏の四弘なり云云。

御講聞書 終

◆九八 四九院申状

848P

駿河の国蒲原の庄・四十九院の供僧等謹んで申す。

寺務・二位律師嚴譽の為に日興並に日持・承賢・賢秀等・所学の法華宗を以て外道大邪教と称し往古の住坊並に田畠を奪い取り寺内を追い出さしむる謂れ無き子細の事。

右釈迦一代教の中には天台を以て宗匠と為す、如来五十年の間は法華を以て真実と為す、是れ則ち諸仏の本懷なり抑亦多宝の証誠なり、上一人より下万民に至るまで帰敬年旧り渴仰日に新なり。

而るに嚴譽の状に云く「四十九院の内日蓮が弟子等居住せしむるの由・其の聞え有り、彼の党類佛法を学し乍ら外道の教に同じ正見を改めて邪義の旨に住せしむ以ての外次第なり、大衆等評定せしめ寺内に住せしむ

べからざるの由の所に候なり」云云。

茲に因つて日興等 忽に年来の住坊を追ひ出され已に御祈☆便宜の学道を失う、法華の正義を以て外道の邪教と称するは何の経・何れの論文ぞや、諸経多しと雖も未だ両眼に触れず法華の中に諸経を破るの文之有りと雖も諸経の裏に法華を破るの文全く之無し、所詮已今当の三説を以て教法の方便を破摧するは更に日蓮聖人の莠言に非ず皆是れ釈尊出世の金口なり。

爰に真言及び諸宗の人師等 大小乗の浅深を弁えず権実教の雜乱を知らず、或は勝を以て劣と称し、或は権を以て実と号し意樹に任せて砂草を造る、仍て愚癡の輩・短才の族・経経顯然の正説を伺わず徒に師資相伝の口決を信じ秘密の法力を行ずと雖も真実の驗證無し、天地之が為に妖孽を示し国土之が為に災難多し、是れ併ら仏法の邪正を糺さず僧侶

の賢愚おろかを撰えらばざる故なり、夫れ仏法ぶつぽうは王法そうほんの崇尊そんに依よつて威を増し王法は
仏法ぶつぽうの擁護まもに依よつて長久しやうきうす、正法しやうぽうを学まなぶの僧そうを以もつて外道げどうと称なづせらるるの条
理り豈然なりる可べけんや外道げどうか外道げどうに非あらざるか早く嚴ごん訾より律師しと召よし合あわせられ真
偽ゐを糺ただされんと欲ほす。

且いぬ去ぶんる文ぶん応おう年中ししやうにちれんしやうにん・師匠ぶつぽう日蓮すた聖人ふつぽう・仏法すたの廃すたれたるを見み・未み來らいの災あを鑒かん

み諸經しよきやうの文ぶんを勸かんえ一い卷くわんの書しよを造ぞうと号ごうす、異い國こくの來なん難なん果くわして以もつて符ふ合あし畢おわ

んぬ未み萌ぼうを知るを聖せいと謂いつ可べきか、大だい覺かく世せ尊そん・靈山りやうじん・虛空てんじん・二に処こくう・三さん會かい・

二門にもん・八年はちねんの間ひほう三重さんじゆうの秘法ひほうを説せつき窮きゆうむと雖すなはちも仏滅ぶつめつ後ご二に千せん二に百ひやく二に十じう余よ年ねんの間かん

・月氏がっしの迦葉かしょう・阿難あなん・竜樹りゆうじゆ・天親てんじん等らうしの大論師だいろんし・漢土かんどの天台てんだい・妙樂みやうらく・日本にほん

の伝でん教ぎやう大師だいし等らう内ないには之これを知しると雖すなはちも外ぐわいに之これを伝でんえず第三だいさんの秘法ひほう今いまに残のこす所ところ

なり、是こゝ偏へんに末法まつぽう鬪諍とうじやうの始はつ・他國たこく來なん難なんの刻とき・一閻えん浮提ぶだいの中ちゆうの大合戰おほ起おこら

んの時とき・國主こくしゆ此こゝの法ぽうを用もちいて兵乱ひやうらんに勝かちつ可べきの秘術ひじゆつなり、經文きやうもん赫赫はつはつたり

所説明明たり、彼れと云い此れと云い国の為・世の為・尤も尋ね聞し食さ
るべき者なり、仍て款状よつ かんじょうを勅して各言上件こんじょうくだんの如し。

承賢

賢秀

日持

日興にっけい

弘安元年三月 日
こうあんがんねん

◆九九 竜泉寺申状

弘安二年十月 五十八歳御代作 849P
こうあん

駿河の国・富士下方滝泉寺の大衆・越後房日弁・下野房日秀等謹んで
するが
弁言す。
べんごん

当寺院主代・平左近入道行智・条条の自科を塞ぎ遮らんが為に不実の
にゅうどう
濫訴を致す謂れ無き事。
らんそ いた いわ

そじょう
訴状に云く日秀・日弁・日蓮房の弟子と号し法華經より外の余經・或は

しんこん
真言の行人は皆以て今世後世叶う可からざるの由・之を申す云云取意。

此の条は日弁等の本師日蓮聖人・去る正嘉以来の大彗星大地動等を觀見
いっさいきよう かんが とうじ にほんこく

し一切經を勘えて云く當時・日本国の体たらく權小に執著し実經を失没

せるの故に當に前代未有の二難を起すべし所謂自界叛逆難・他国侵逼難な
ぜんだい なん しよいじかいほんぎやくなん たこく なん

り、仍て治国の故を思い兼日彼の大災難を対治せらる可きの由、去る文忠
よつ かねて さいなん たいじ いぬ ぶんおう

年中・一卷の書を上表す立正安國論と号す勘え申す所皆以て符合す既に
りっしょうあんこくろん かんが もう みな

金口の未來記に同じ宛も声と響との如し、外書に云く「未萌を知るは聖人
きんく みらいき あたか しようにん

なり」内典に云く「智人は起を知り蛇は自ら蛇を知る」云云、之を以て之
ないてん ちじん みずか

を思うに本師は豈聖人なるかな巧匠内に在り国宝外に求む可からず、外
ほんし しょうにん きょうしょうう うち

書に云く「隣國に聖人有るは敵國の憂なり」云云、内經に云く「國に
りんこく しょうにん ろうい

聖人有れば天必ず守護す」云云、外書に云く「世必ず聖智の君有り而して
しょうにん あれ しゅこ

復賢明の臣有り」云云、此の本文を見るに聖人・国に在るは日本国の大喜にして蒙古国の大憂なり諸竜を驅り催して敵舟を海に沈め梵釈に仰せ付けて蒙王を召し取るべし、君既に賢人に在さば豈聖人を用いずして徒に他国の逼を憂えん。

抑大覺世尊・遙に末法鬭諍堅固の時を鑒み此くの如きの大難を対治す

可きの秘術を説き置かせらるるの經文明明たり、然りと雖も如来の滅後二

千二百二十余年の間・身毒・尸那・扶桑等・一閻浮提の内に未だ流布せず、

随つて四依の大士内に鑒みて説かず天台傳教而も演べず時未だ至らざる

の故なり、法華經に云く「後の五百歳の中に閻浮提に広宣流布す」云云、

天台大師云く「後・五百歳」妙樂云く「五五百歳」伝教大師云く「代を

語れば則ち像の終り末の初め地を尋ぬれば唐の東・羯の西・人を原ぬれば

則五濁の生・鬭諍の時」云云、東勝西負の明文なり。

法主聖人^{しやうにん}・

時を知り国を知り法を知り機^きを知り君の爲臣の爲神の爲仏の

爲災難^{さいなん}を対治^{たいじ}せらる可きの由・

勘^{かん}え申^{もう}すと雖も御信用^{ごしんよう}無きの上・剩^{あまつ}さえ

ほうぼう

謗法人等の讒言に依つて聖人^{しやうにん}・

頭に疵^{きず}を負い左手を打ち折らるる上・兩度

おんる

まで遠流の責を蒙^{こう}むり門弟等・

所所に射殺され切り殺され毒害・刃傷・禁

ごく

獄・流罪・打擲・

ひんずい

擯出・罵詈等の大難勝^{だいなん}げて計^かう可^かからず、

茲^{こゝ}に因^よつて大

にほんこく

日本国・皆法華經の大怨敵と成り万民

おんてき

悉^{ばんみんこころごとく}く一闡提の人と爲るの故に天神

てんじん

・国を捨て地神・

所を辞^{てんが}し天下静ならざるの由・

粗伝承するの間其の仁に非ずと雖も愚案^{ぐあん}を

顧みず言上^{ごんじやう}せしむる所なり、

外經に云く「奸人朝^{あした}に在れば賢者^{けんじゃ}進まず」

云云、内經に云く「法を壊る者を見て責めざる者は仏法の中の怨^{あだ}なり」云

云。

又風聞の如^{ごと}くんば高僧等を崛請^{くつせい}して蒙古国を調伏す云云、其の状を見聞

するに去るいぬ元暦・承久じようきゆうの両帝・叡山えいざんの座主・東寺・御室・七大寺・

おんじようじ

園城寺等・検校・長吏等の諸しよの真言師しんこんしを請い向け内裏の紫宸殿にして咒咀じゅうそ

し奉る故源みなもと右將軍並に故平右虎牙の日記にっきなり、此の法を修しゆうするの仁は敬

つて之を行えば必ず身を滅し強いて之を持てば定めて主を失うなり、然れ

てんのう

ば則ち安徳天皇は西海に沈没し叡山えいざんの明雲は流矢に当り後鳥羽法皇は

えびすのしま

夷島えいじまに放ち捨てられ東寺・御室は自ら高山こうざんに死し北嶺ほくりようの座主は改易きぎの

ちじよく

恥辱に値あう、現罰げんばち・眼に遮り後賢之おそを畏る聖人山中の御悲みは是これなり。

次あぎに阿弥陀經あみだを以て例時の勤つとめと為す可きの由の事、夫れ以おもみれば花

と月と水と火と時に依つて之を用もちゆ必ずしも先例せんれいを追う可からず、仏法ぶつぽう又

かくのごと

是しかくの如し時に随したがつて用捨ようしゃす、其の上・汝等の執する所の四枚の阿弥陀經あみだ

よんじゆうよねんみけんしんじつ

は四十余年未顕真実の小經なり、一閻浮提第一えんぶだいいちの智者ちしやたる舍利弗尊者しゃりほつそんじやは多

年の間・此の經を讀誦どくじゆするも終に成仏じようぶつを遂げず然る後・彼の經を抛なげち末

に法華經ほけきょうに至いたつて華光如來にょらいと爲なる、況や末代惡世まつだいあくせの愚人おろか・南無阿彌陀佛なむあみだぶつの題目計だいもくりを唱なえて順次往生むじょうじやうを遂いぐ可いしや、故に仏之いさを誡いめて言いく法華經ほけきょうに云いく「正直ほうべんに方便ほうべんを捨て但無上道むじやうだうを説いく」と云云教主きやうしゆしやくそんまさ釈尊あみだ正あみだしく阿彌陀あみだ經しゆじやうを抛なちたまう云云又涅槃經ねはんぎやうに云いく「如來にょらいは虚妄まじの言無みしと雖も若し衆生しゆじやうの虚妄まじの説に因よるを知しれば」と云云、正まさしく弥陀念仏みだねんぶつを以もて虚妄まじと称しやうする文ふみなり、法華經ほけきょうに云いく「但樂ねがて大乘經典だいじやうきやうてんを受持なし乃至余經ないしよきやうの一偈げをも受うけざれ」云云、妙樂大師みやうらくだいし云いく「況や彼かの華嚴けごん但以たて称比けひせん此この經きやうの法ほふを以もて之を化くわするに同おなじからず故ゆゑに乃至不受余經ないしふじゆよきやう一偈げと云いう」云云、彼の華嚴經けごんきやうは寂滅じやくめつ道場どうじやうの説ほつかい・法界唯心ほふもんの法門ほふもんなり、上本じやうまんげは十三世界微塵品せかいみじん中品ちゆうほんは四十九万八千偈げ・下本じゆうまんげは十万偈四十八品今現げんに一切經藏いっさいきやうを觀みるに唯八十六十四十等ほうつちうの經きやうなり、其その外ほかの方等はんにや・般若だいにちきやう・大日經こんごうちやうきやう・金剛頂經みずか等あるの諸しよの顯密けんみつ・大乘經等だいじやうきやうを尚なお・法華經ほけきやうに對当みづかし奉あるりて仏みけん自みづから・或あるは未顯みけん

眞実しんじつと云い・或あるは留難とどなん多きが故に・或あるは門を閉じよ・或あるは抛て等云云、何

に況いわんや阿弥陀經あみだをや、唯大山ただと蟻岳ぎがくとの高下こうげ・師子王ししと狐兔ここととの☆力すもうなり。

今日秀等専ら彼等かれら小經なげうを抛ち専ら法華經ほけきようを誦誦どくじゆし法界ほっかいに勸進なむして南無

妙法蓮華經みようほうれんげきようと唱え奉る豈殊忠に非ずや、此等の子細御不審を相貽のこさば高僧

等を召され是非ぜひを決せらる可きか、仏法ぶつぽうの優劣ゆうれつを糺明致す事は月氏がっし・漢土

にほんにほんの先例せんれいなり、今明時に當つて何ぞ三国の旧規きうきに背そむかんや。

訴状そじように云く今月二十一日数多の人勢あまたを催し弓箭たいを帶し院主分の御坊内に

打ち入り下野坊は乗馬相具じようめあいぐし熱原の百姓・紀次郎男・点札たてふだを立て作毛を蒔

り取り日秀の住房ぼうに取り入れ畢んぬ云云「取意」。

此の条・跡形あとかたも無き虚誕こたんなり日秀等は損亡そんもうせられし行者ぎようじゃなり不安堵あんどの上

は誰の人か日秀等の点札たてふだを叙用じようようせしむ可き將た又☆弱はなる土民どみんの族やから・日

秀等に雇い越されんや、然らば弓箭たいを帶し悪行あくぎようを企くわだつるに於ては行智云く

近隣の人人争つて弓箭を奪い取り其の身に召し取ると云うが如き子細を申さざるや、矯飾の至り宜しく賢察に足るべし。

日秀・日弁等は当寺代代の住侶として行法の薰修を積み天長地久の御祈☆を致すの処に行智は乍に当寺靈地の院主代に補し寺家・三河房頼円並に少輔房・日禪・日秀・日弁等に行智より仰せて、法華經に於ては不信用の法なり速に法華經の読誦を停止し一向に阿弥陀經を読み念仏を申す可きの由の起請文を書けば安堵す可きの旨下知せしむるの間、頼円は下知に随つて起請を書いて安堵せしむと雖も日禪等は起請を書かざるに依つて所職の住坊を奪い取るの時・日禪は即ち離散せしめ畢んぬ、日秀・日弁は無頼の身たるに依つて所縁を相憑み猶寺中に寄宿せしむるの間・此の四箇年の程・日秀等の所職の住坊を奪い取り嚴重の御祈☆を打ち止むるの余り悪行猶以て飽き足らず為に法華經行者の跡を削り謀案を構えて種種の不実を申し

付くるの条・豈在世の調達ざいせ ちょうだつに非ずや。

凡そ行智の所行は法華三昧ほっけさんまいの供僧・和泉房蓮海ほうを以て法華經ほけきょうを柿紙しぶかみに作り紺形しゅうじを彫り堂舎ごしよの修治しゅうじを為す、日弁に御書下ごしよを給い構え置く所かまの上葺うわぶき構くれ一万・二千寸の内八千寸を之を私用せしむ、下方まんごうの政所代すずに勧め去る四月いぬ御神事もなかの最中ほけきようしんじんに法華經信心いぬの行人・四郎男にんじようを刃傷せしめ去る八月いよいよ弥四郎坊男むちの頸を切らしむ、日秀等はに頸を刎ぬる事を擬して此の中に書き入れ無智無才ぬすびとの盗人ぼう・兵部房静印きりようより過料きりようを取り器量きりようの仁と称して当寺の供僧に補せしめ、・或は寺内の百姓等あるを催し・鶉狩・狸殺・狼落の鹿を取りて別当べっとうの坊に於て之を食らい・或は毒物を仏前の池ぶつぜんに入れ若干さうの魚類ぎょるいを殺し村里に出して之を売る、見聞じもくの人・耳目おどろを驚かさざるは莫なし仏法破滅ぶつぼうはめつの基悲もといんで余り有り。

此くこゝの如き不善あくぎようの悪行・日日相積しゅうたんるの間・日秀等愁歎しゅうたんの余り依つて上

聞^{おとろ}を驚^{おどろ}かさんと欲^ほす、行智^{ぎやうち}条条^{じじょう}の自科^{しき}を塞^{ふさ}が^んが為^{ため}に種^{しゆ}種^{じゆ}の秘計^{ひけい}を廻^{まわ}らし
近隣^{きんりん}の輩^{ともがら}を相語^{さうご}らい遮^{さえぎ}つて跡形^{あとがた}も無^なき不実^{ふじつ}を申^{まう}し付け日秀^{にっしゆ}等を損亡^{そんもう}せし
めんと擬^{ねい}するの条言語^{じょうげんご}道断^{だうだん}の次第^{しだい}なり、冥^{みやう}に付け頭^{けん}に付け戒^{けい}めの御沙汰^{おさた}無^な
からんや、所詮^{ぶつぽう}仏法^{ぶつぽう}の権実^{ごんじつ}沙汰^{さた}の真偽^{まゐ}・淵底^{えんてい}を究^{きう}めて御尋^{ぎゆん}ね有^あり且^{かつ}は誠^{じやうたい}諦^{たい}
の金言^{きんげん}に任^{まか}せ且^{かつ}は式条^{しきじょう}の明文^{めいぶん}に准^{きんあつ}し禁遏^{きんあつ}を加^くえられ^ば守護^{しゆご}の善神^{ぜんじん}は変^かを消^く
し擁護^{まも}の諸天^{しよてん}は咲^さを含^こまん、然^{しか}れば則^{すなは}ち不善^{ぜんあく}惡行^{あくかう}の院主代^{いんしゅだい}・行智^{ぎやうち}を改易^{かいえき}せ
られ將^はた又^{また}本主^{ほんしゅ}此^この重科^{じゆうか}を脱^{だつ}れ難^{なん}からん何^{なん}ぞ実相^{じつそう}寺^じに例^{れい}如^にせん、誤^{あやまり} まら
ざるの道理^{どうり}に任^{まか}せて日秀^{にっしゆ}・日弁^{にっぺん}等は安堵^{あんど}の御成敗^{ごせいばい}を蒙^{かうむ}むり堂舎^{どうしゃ}を修理^{しゆり}せし
め天長^{てんぢやう}地久^{ぢきう}御祈^{ぎと}☆の忠勤^{ちゆきん}を抽^ぬんでんと欲^ほす、仍^{いふ}て状^{じやう}を勒^{ろく}し披陳^{ひぢん}言上^{ごんじやう}件^{けん}の
如^{ごと}し。

弘安二年十月 日

沙門 日秀日弁等上

◆一〇〇

百六箇抄

(血脈抄) 弘安三年

854P

与日興 にじきう

五十九歳

ぐとう

具勝本種・正法の実義・本・迹勝劣正伝、本因妙の教手本門の大師・

にちれんつつし

これ けつちよう

日蓮謹んで之を結要す・

まんねんくごしやびよう

でし

これ じゅよ

万年救護写 瓶の弟子日異に之を授与す云云、

脱種合して一百六箇之れ在り、

こ

りようぜんじようど

たほうたつちゅう

くおんじつじよう

むじよう

靈山浄土・多宝塔中・久遠実成・無上

かくおう

そうじよう

しろうれつ

ぐけつそうでん

くおんみようじ

このかた

ほんいん・ほんが

覚王・直授相承本・迹勝劣の口決相伝譜、久遠名字より已来た本因・本果

の主・本地自受用報身の垂迹 上行菩薩の再誕・

さいたん

ほんもん

だいしにちれん

要す。

の主・本地自受用報身の垂迹 上行菩薩の再誕・本門の大師日蓮詮要す。

理の一念三千・

いちねんさんぜん

いっしんさんかん

一心三観本・迹

さんぜしよぶつ

しゅつせじようどう

じゅりよう

の義理の三千は釈迦諸仏の仏

ぎり さんぜん

しゃかしよぶつ

みようほうれんげきよう

いっしん うんざい

せる理なり。

心と妙法蓮華經の理觀の一心とに蘊在

だいとう

ちゅうげん

大通今日・法華本・迹

だいとう

ほつけ

くおんみようじ

ほんにんみよう

久遠名字本因妙を本として中間

くおんみようじ

ほんにんみよう

だいし

にじきう

五十九歳

とらふ

しん

しん

しん

とらふ

しん

しん

しん

しん

とらふ

しん

しん

しん

しん

とらふ

しん

しん

しん

しん

とらふ

しん

しん

しん

しん

とらふ

しん

しん

しん

しん

とらふ

しん

しん

しん

しん

・今日・下種げしゅする故ゆえに久成くじょうを本なと為し中

り。

間・今日の本・迹を俱ともに迹と為なる者な

応いちだい仏一代の本・迹

くおんげしゅ りょうぜんとくだつ みょうほうちぐう
久遠下種・靈山得脱・妙法値遇の

衆生しゅじょうを利せん為ために無作三身・寂光淨土じやくこうじょうどよ従り三

眼三智をもつて九界を知見ちけんし迹を垂れ権

を施ほどこす後に説くみょうぎよう妙經の故ゆえに今日の本

迹共に迹と之これを得る者なり。

迹門しやくもん為理円いっちの一致の本・迹

しょうはく
松柏風波・万声一如・諸法実相の

理上の觀心かんじんは応仏の域を引かえた

ゆえ
る故に本・迹とは別れども唯理ただの上の

法相ほつそうなれば本・迹理觀の妙法みょうほうと

ず。

心法そくしんじょうぶつ即身成仏の本・迹

れば華嚴・阿含・方等・般若・法華の安

は劣り本は勝るまさる者なり。

心法妙法蓮華經の本・迹

不滅・性相凝然・釈迦口を閉ぢて身

十界互具を説く本門に至つて顕

るに実相は久遠垂迹の本門

顕す、迹化は付属無きが故に之を弘め

中間・今日も迹門は心法の成仏な

染行品に至るまで円理に同ずるが故に迹

山家云く一切諸法・従本已来・不生

子言を絶す云云、方便品には理具の

本理上の法相なれば久遠に対して之を見

なる故に色法に非るなり。

從困至果・中間今日の本・迹

迹は中間・今日の迹門を因と

為し本門修行を果と為るなり。

本果の妙法蓮華經の本・迹

には劣るなり、寿量の脱益・

在世一段の一品二半は舍利弗等の声開の

為の觀心なり、我等が為

には教相なり、情は迹劣本勝なり、又

滅後・像法相似・觀行解了の

行益も以て是くの如し、南岳・天台・

伝教の修行の如く末法に入つ

が^{ため}為には虚戲の行と成る可

て修行せば帶権 隔歴の行と成つて我等

きなり、日蓮は一向本・天台は一向迹・

能く能く之を問う可し。

疏の九に云わく爾前皆虚にして実ならず迹門は一虚一実・本門は

皆実不虚云云、爾前二種の失の事・一には存行布故仍未聞権として迹門

の理の一念三千を隠せり、二には言始成故尚未發迹として本門の久遠を

隠せり迹門方便品一念三千・二乗作仏を説いて爾膳・二種の失一つ

脱がれたり、本門に至りて迹門の十界因果を打破る是即ち

本因・本果の法門なり、実の一念三千も顕れず二乗作仏も定らず云云、

世間の罪に依つて惡道に墮ん者は爪上の土・仏法に依つて惡道に

墮ちん者は十方の土の如し、故は信心の根本は本勝迹劣余の信心は

しやう
枝葉なり。

よきよう
余行に渡る法華經の本・迹

を受けて説く所の教なるが故に一

みようじ みようほう
名字の妙法を下種して熱脱せし

ざいせかんじんほけきよう
在世觀心法華經の本・迹

てんだい ほんもん
天台の本門なり、日蓮が為には教相

みようほう きようしゆ
脱益の妙法の教主の本・迹

きようしゆしやくそん しやくもん
教主釈尊は迹門なり、法自ら弘まら

いちだいはちまん しよほう ほんにんみよう
一代八万の諸法は本因妙の下種

ないしいちだい
部八卷乃至一代五時・次第梯☆は

本・迹なり。

ざいせ
一品二半は在世一段の觀心なり

しやくもん
の迹門なり云云。

しよせつ しようほう ほんもん
所説の正法は本門なり能説の

ひろ ゆえ
ず人・法を弘むる故に人法ともに

尊し。

脱益の今此三界こんしさんがいの教主きょうしゅ本・迹

・密表寿量品じゅりようほんの今此三界こんしさんがいは即そく本身

脱益像法時剋弘經そうほうじこくぐきょうの本・迹

なり時剋じこく亦天地またてんちの不同ふどう之在り・

脱益迹門しやくもんしゅぎよう修行しゅぎようの本・迹

像法そうほう一日の徳すくは勝れたるなるべし。

脱益迹門しやくもんしゅぎよう自解じげ仏乘ぶつじょう修行しゅぎようの本・迹

就ついて之これを思惟しゆいす可べし。

脱の五大尊だいのごだいそんの本・迹

弥勒みろく・藥王やくおうは迹なり。

天上てんじよう・天下てんが唯我独尊ゆいがどくそんは迹身門

門なり。

天台てんだいの本・迹ともは俱にちれんに日蓮しやくもんが迹門

正法しょうほう一千年しゅぎようの修行しゅぎようの徳より

熱益は迹・脱益は本なり之に

他受用たじゆゆう応ふげん仏もんじゅは本・普賢ふげん・文殊もんじゅ・

脱の真俗二諦の本・迹

しゃくもん

迹門に約し後十四品は本門に約す云云、

ほんもん

てんだいだいしぐつう
天台大師弘通の本・迹前十四品は

ぜほうじゅうほういせけん じょうじゅう
是法住法位世間相常住文。

によらい

ないしやう

じよほん

めつごしやうそうまつ

前十四品悉く流通分の本・迹

こことるつう

如来の内証は序品より滅後正像末

の爲なり、薬王菩薩は像法

やくおうぼさつ

そうほう

てんだいこれ
の主天台是なり、密表の法師品に

云く今此三界文。脱益理觀一致の本・迹

いわ こんしさんがい

いっち

脱益理觀一致の本・迹

いっち

本・迹殊なりと雖も不思議一と云うは今

こと

いえど ふしぎ

日乃至中間の本・迹は本・迹と分別す

ないしちゅうげん

ぶんべつ

れども本因妙を下種として説く所の

ほんにんみよう

げしゆ

本・迹なれば迹の本は本に非ず云云。

あら

脱益戒体の本・迹

にぜん しゃくもん
爾前・迹門・熱益の戒躰を迹とし脱益の

かいたい

戒躰かいたいを本と為なるなり、迹門しやくもんの・或あるは爾前にぜん

大小だいしやうの戒すくに勝ほんもんれ本門あるの・或にぜんは爾前しやくもん・迹門

の戒まさに勝しやつけるるなり。

脱しやつけの迹化七面しやつけの本・迹

像法そうほうには理觀りくわんを本と用もちうるなり故ゆえに天台てんだい

は迹なを本と為なし本ほんを迹しやくもんと行なず

るなり。

脱しやつけほんぞんの迹化本尊しやつけほんぞんの本・迹

一部ほんぞんを本尊ほんぞんと定さだむるに前十四品ぜんじしふひんは迹・後

十四品じしふひんは本と云云、是こゝは一部八

卷まきなり云云。

脱益守護神しゆごしんの本・迹

守護しゆごする所ところの法華ほっけは本・守番たてまつし奉ほうる処ところの

神等しんどうは迹なり、本因ほんにん妙みやうの影かげを万水ばんすい

に浮うべたる事は治定ちぢやうと云云。

脱益山王の本・迹さんのお

久遠・中間くおん ちゆうげんに受くる処ところの法華ほっけは本・

夫れそより守り来る所は垂迹すいじやくなり、下種げしゆは本

因妙なり云云。

脱迹十羅刹女じゆうらせつによの本・迹

久遠・中間くおん ちゆうげん・今日の理事ちゆうげんは本・中間・

大通だいづう・今日出世冥守しゅつせする処ところは垂迹すいじやくなり

り、下種げしゆは前まへの如ごとし云云。

脱迹付属ふそくの本・迹

脱益しゃつけふそくの迹化付属ちゆうげんは中間だいづう・大通を本とし今

日初任にっしゆの終を迹とするなり、受くる

正法しやうぽうは本・持つ方は迹なり。

脱迹開会かいえの本・迹

大通だいづうの初を開ひらきと云い今日初任にっしゆの終りを会

と云うなり、本は大通だいづう・迹は初任しゆじんなり

り、初頭しゆとうを開ひらきと云い終合しうがふを会と云う云云、

案位も理上の案位なり。

脱益成仏じょうぶつの本・迹

寿命品じゅうりようほんは本・応仏は迹なり、無作三身むささんじん

寂光土じやくくわうどに任して三眼・三智をもつて九界

を知見ちけんす云云。

脱迹三種教相ぎようそうしやうの本・迹

二種は迹・無開会かいえ・一種は本有ほんぬの開会かいえな

り、一種は開顯・二種は不開会かいえ・

所從者属しよじゆうしゆの教相ぎようそうしやうなり云云。

脱の五味所從しよじゆうの本・迹

天台・伝教の五味は横豎おうじゆともに所從しよじゆうな

り、五味は本・修行しゆぎやうの人は迹た

り、在世ざいせ以て此かくの如ごとし云云。

脱迹父子ふしの本・迹

応仏は本・迹しやくぶつ仏は迹なり、子・父の法を

弘ひろむるに世界せかいの益ありと云云。

脱迹してい師弟の本・迹

義理ぎり共に上に同じ是れ我が弟子でしまさ応に我が

法ひろを弘ひろむ可べし弘ひろむ可べし云云。

脱益かんのう感応の本・迹

久遠くおんの天月てんげつの影ちゆうげんを中間・今日の脱益の水

に移しゅじょうくおんすなり、衆生久遠に仏の善巧ぜんきよを

蒙こむるとは是これなり。

脱益寂じゃくしよう照の本・迹

理じゃくしようの上の寂照みようかくは妙覺ないしかんぎよう・乃至觀行等

の解げりよう了りそくなり、理即ぼんぶの凡夫は無駄有用の本・迹

なり。

脱益ずいえんふへん随縁不變の本・迹

在世ざいせと像法そうほうと之同じ真如しんによの義理ぎりなり、随縁ずいえん

も不變ふへんも共に理の一段の本

迹なり。

脱益九法妙の本・迹

三法妙に各三法妙を具ぐすれば九法妙なり、

法中の心法妙より起る所の生仏おこ

二妙なり本・迹知るべし。

脱益八相・八苦習合の本・迹
八相は本・八苦は迹・同躰ごんじつこれの権実ごんじつ是なり。

脱益灌頂等の本・迹

灌頂かんちようとは至極しごくなり後世ごしやう・仏ぼ・菩薩ぼさつの

灌頂かんちようは法華經ほけきやうなり、迹門しゃくもんの灌頂かんちようは方便ほうべん読

誦じゆ・欲令よくりやうしゆじやう衆生しゆじやう開仏知見かいふちけんなり、本門ほんもんの港項

は寿量品じゆりやうぼんどくじゆ読誦がじつじやうぶつらい・然我実成仏已来がじつじやうぶつらいなり。

脱益説所戒壇本・迹かいだん

靈山りやうぜんは本・天台山てんだいは迹・久遠くおんと末法まつぽうとは事

行の戒・事戒・理戒・今日けうと像法そうぽうと

は理かいたいの戒躰けいたいなり。

脱益^{さんぜ}三世三仏利の本・迹

世世番番の教主^{きようしゅ}は本・所化^{しよけ}の衆生^{しゅじやう}は迹

なり、世世^{このかた}已来常に我が化を

受け番番^{しゅつせ}に出世^{しゅつせ}し師^{とも}と俱^{とも}に生^なず。

脱益証^{しょうみよう}明^{たほうぶつ}・多宝仏塔の本・迹

妙法蓮華經^{みやうほうれんげきやう}皆是^{かいぜしんじつ}眞実^{たほうぶつ}は本・多宝仏は迹

・迹門^{しやくもん}八品乃至本門之を指^{ないしほんもんこれ}

すなり云云。

脱益序正流通^{るつうげんぶん}現文の本・迹

經文^{きやうもん}釈義^{しやくぎ}の如^{ごと}く理^しの上^{じやうしゅうるつうじよぶん}の正宗^{しやうしゅうるつうじよぶん}流通序文

なれども本は勝^{すぐ}れ迹は劣

るなり、然^{しか}るに迹は本無^{ほんむ}今有^{こんぬ}なれば久遠^{くおん}の

迹を脱として今日の本

を説くなり云云。

脱益^{しやうじゆしやくぶく}摂受^{てんたい}折伏^{しやくぶく}の本・迹

天台は摂受^{しやうじゆ}を本とし折伏^{しやくぶく}を迹とす、

そのゆえ そうほう 故なり ざいせ 其の故は像法は在世の熟益冥利の じゆくやくみょうり

故なり ぐそく 福智具足の故と云えり。

脱益二妙の本・迹

そうたいみょう 相待妙は迹・ ぜったいみょう 絶待妙は本・ みょうほう 妙法の外に

更に一句の余経無し云云、独一法界の故 いっく よきょう

に絶待と名くるの釈之を思う可し。 ぜったい なず

脱益十妙の本・迹

本果妙は本・九妙は迹なり在世と天台と ざいせ てんだい

は機上の理なり、仏は本因妙を本と き ほんにんみょう

為し所化は本果妙を本と思えり。 な しよけ

脱益六重所説の本・迹 しよせつ

已今を本と為し余は迹なり本・迹殊なり な こと

と雖も不思議一と云云、理具の いゑど ふしぎ

本・迹なれば一部俱に迹の上の本・迹なり。 とも

脱益六即所判の本・迹 そくしよはん

妙覺は本・余は迹なり。 みょうかく

と為す^な十行を因とし十廻向^{えこう}を果とし十

等覺^{とうかく}を果とし等覺^{とうかく}を因とし妙覺^{みょうかく}を果

と為す^な云云。

脱益十不二門の本・迹

には非^{あらび}るなり。

脱益^{じゅっかいごく}十界互具の本・迹

非^{あら}ざるなり、九界の理を仏界^{ぶつかい}の

玄九に云く初の十住^{じゅうじゅう}を因と為し^な十行を果

廻向^{えこう}を因とし十地^{じゅうち}を果とし十地^{じゅうち}を因と為し^な

理の上の不變^{ふへん}の不二にして事行の不二門

理具^{じゅっかいごく}の十界互具にして事行の互具^{つぶさ}には

理に押し入る方ならでは脱せざるなり。

經に云く無明^{むみょうないし}乃至老死云云、苦集滅^{くしゅう}は迹

脱益^{いんねんしたい}十二因縁四諦の本・迹
なり道諦^{どうたい}は本なり。脱益

三土の本・迹 報土は本・同居・方便は迹

なり。

妙樂云く雖脱在現本・迹理上の一致なり心は壽量品も文は現量なれども

上行所伝の本因妙を唱え顯して後は只久遠の教相にて成仏肝要の觀心

には非ずと云云。籤一に云く本中体等迹と殊ならず脱益の妙覺乃至觀行相似

等の妙法蓮華經は理に即して事を含む、然も本・迹一致に非ず破廢立本云

云。玄七に云く權實は智に約し教に約す 化他不定の時施す所の權實八教

なり兩所殊ならず久遠の本・今日の脱益と兩所なり。

籤七に云く理淺深無し故に不殊と曰う本因・本果の理を今日中間にも

壽量顯本の理に推し入れて顯すと釈するなり。

籤七に云く經に約すれば是れ本門と雖も既に是れ今世迹中の本名本門と為す

故に知んぬ、今日正く迹中利益に當る、乃至本成已後俱に中間と名く中間

本を顯すに利益を得る者尚迹益を成ず況や復今日をや文。

意は久遠本巢の迹を中間・今日の本と為す、又久遠名字の妙法の影を中間

今日に垂迹する故に下種に對して脱益壽量を迹と得たる証拠に釈する是な

り。

疏じよの一いちに云いく衆生しゆじやうくおん久遠くおんげしゆりやうぜんに仙せんの善巧ぜんきやうを蒙こむる久遠くおんげしゆりやうぜん下種げしゆりやうぜん靈山りやうぜん得脱とくだつ。

籤せん十じゆに云いく故ゆえに知しんぬ今日けふの逗会とうえは昔むかしの成熟じやうじくの機きに赴おもむくことを靈山りやうぜん下種げしゆりやうぜん・

久遠くおん得脱とくだつの益えき。記き二にに云いく本時ほんじの自行じぎやうは唯円ただと合あす本時ほんじとは本周ほんしゆ妙めうの時ときな

り。化他けたは不定ふじやう亦また八教はつぎやう有あり中間ちゆうけん今日けふ・化導けどうの儀式ぎしきなり。

玄七げんしちに云いく迹あとの本ほんは本ほんに非あらず今日けふの本果ほんぐあ妙めうの事ことなり。

本の迹あとは迹あとに非あらず本因ほんにん妙めうの事ことなり。本・迹殊ことなりと雖いえども不思議ふしぎ一ひとなり本因ほんにん妙めう

の外ほか全ぜんく迹あと無なきなり迹門しやくもんは即すなわち顕本けんぽんの後のちは本無ほんむ今有こんぐの方便ほうべん無得とく道どうなりと中島なかつしま

の証しやう俊何しゆんにと問とわれし時とき、俊範しゆんぱん法印ほういん答こたえて云いく不思議ふしぎ一ひとと、求もとめて云いく其その

義い如何か、答こたえて云いく文在ぶんざい迹門しやくもん義ぎ在本門ほんもん云云うんぐんと、会あして云いく迹門しやくもん既すでに益無えきなし

本門ほんもん益えき有あり本・迹勝劣しやうれつ不思議ふしぎ一ひとと云云うんぐん。

妙楽めうらく云いく権実こんじつは理りなり本・迹は事ことなり天台てんだい云いく本・迹を二經にぎやうと為なすと云いえり

如來にょらいの本・迹は理上ほつそうの法相にちれんなり日蓮にちれんの本・迹は事行ほつそうの法相にちれんなり

以上いじやう・脱だつの上うへの本・迹勝劣しやうれつ口決くけつ畢おわんぬ

事ことの一いち念ねん三千さんぜん・一いつ心しん三觀さんかんの本迹ほんしやく

釈迦しや三世さんぜの諸しよ仏ぶつ・声聞しやうもん

・縁覚・人天の唱る方は迹なり、南無

くおん

久遠元初直行の本迹

ほんしゃく

り、本果妙は余行に渡る故に本の上の

よぎよう

わた ゆえ

いまにちれんただちとな
今日蓮直に唱うるなり。

くおんじつじよう

久遠実成直体の本迹

ほんしゃく

り、名字童形の位、釈迦は迹なり

みようじ

しゃか

しゆぎよう くおん
修行は久遠を移せり。

くおん

久遠本果成道の本迹

じようどう

ほんしゃく

の本門なり直に唱え奉る我等は迹なり。

ほんもん

ただち とな

たてまつわれら

みようほうれんげきよう
妙法蓮華経は本なり。

みようじほんにんみよう

名字本因妙は本種なれば本門な

ほんもん

迹なり、久遠釈尊の口唱を

くおんしゃくそん

くしよう

くおんみようじ
久遠名字の正法は本種子な

しようほう

しゆし

がほんぎようぼさつどうこれ
我本行菩薩道是なり、日蓮が

にちれん

みようじ みようほう
名字の妙法を持つ処は直躰

みようじ

みようほう

ところ

じきたい

くおんじじゅゆうほうしん
久遠自受用報身の本迹ほんしやく

しょうれつ
勝劣なり。能く能く伝流口決くけつす可べき者なり

男は本・女は迹・知り難がたき

じょうぎようしよでん
り上行 所伝の妙法は名字本有みょうじほんぬ

みょうほうれんげきよう
の妙法蓮華經なれば事理俱勝の本なり

くじょうほんもん
久成本門為事円の本迹ほんしやく

り。

にちれん
日蓮並に弟子檀袖郡等は迹な

そくしんじょうぶつ
色法即身成仏の本迹ほんしやく

いご われら
より已後・我等は色法の成仏じょうぶつなり不渡ふど

親の義なり父の義なり、涌出品ゆじゅつぽん

よびよう みょうほう
余行の妙法は本・我等は迹な

り。

みょうほうれんげきよう
色法妙法蓮華經の本迹ほんしやく

みょうじ
男子と成つて名字の大法を聞き

こご
己己・物物・事事・本・迹を顕あらわす者なり、

又今日の二十八品・品品の内の勝劣は通号は本なり勝なり・別

迹なり劣なり云云。

妙楽疏記九に云く故に知んぬ迹の実は本に於て猶虚なり、籤十に云く、

今日は初成を以て元始と為し

爾前・迹門は大通を以て元始と為し 迹門 本門は本因を以て元始と

為す本門此の釈は元始本・迹・遠近勝劣を判ずるなり、本果妙は然

我実成仏已来猶迹門なり、迹の本は本に非ざるなり、本因妙は

我本行菩薩道真実の本門なり、本の迹は迹に非ず云云、我が内証の

寿量品は迹化も知らず云云、重位秘蔵の義なり本・迹と分別する上は

勝劣は治定なれども末代には知り難き故云云。

くおんじゅうかこういん
久遠従果向因の本迹

ほんにんみょう
本果妙は釈迦仏・本因妙は

じょうぎようほさつ くおん みょうほう
上行菩薩・久遠の妙法は果・今日の寿量品は

ゆえ じゅうかこういん
花なるが故に従果向因の本・迹

と云うなり。

みょうほうれんげきよう ほんしやく
本因妙法蓮華經の本迹

とな にちれん
本・唱うる日蓮は迹なり、手本には不

よぎよう わか みょうほう
全く余行に分たざりし妙法は

ぼさつ これ
輕菩薩の二十四字是なり、又

そ ぎようぎこれ
其の行儀是なり云云。

ふ ど よぎよう ほけきよう ほんしやく
不渡余行法華經の本迹

とな しゃか いまにちれん しゅう
・唱うる釈迦は迹なり、今日蓮が修

ぎり じきたつ ほつけ ほんもん
義理上に同じ・直達の法華は本門

くおん みょうじ ふるまい けに
行は久遠名字の振舞に芥爾計も

たが
違わざるなり。

下種げしゅの法華經教主ほけきょうきようしゅの本迹ほんしやく

なり、我等われらが内証ないしやうの寿量品じゆりやうぼんとは脱益

其その教主きやうしゅは某それがしなり。

下種げしゅの今此三界こんしさんがいの主ほんしやくの本迹

唯我独尊ゆいがどくそんは日蓮にちれん是なり、久遠くおんは本・今日

の利生りしやうなり。

下種げしゅ得法かんじん觀心ほんしやくの本迹

中間等ちゆうげんの得法かんじん觀心かんじんは迹なり、分別功德ぶんべつくとく

自受用身じじゆゆうしんは本・上行じやうぎやう日蓮にちれんは迹

寿量じゆりやうの文底ほんにんみやうの本因妙ほんにんみやうの事なり、

久遠くおん元始てんじやうの天上てんが・天下てんが・

は迹なり、三世常住さんぜじやうじやうの日蓮にちれんは名字みやうじ

久遠くおん下種げしゅの得法かんじんは本なり、今日

品の名字みやうじ初随喜しゆずいきの文ぶんの如ごとし云云。

げしゅじげぶつじょう ほんしやく
下種自解仏乗の本迹

じげぶつじょう
得る方は自解仏乗の本なり、聞き得て後

みょうじ みょうほう じょうぎようしよでん
名字の妙法を上行所伝と聞き

じゅじ われら ゆえ でんぎよう
受持する我等は迹なり、故に伝教

にちれん まさ
より日蓮は勝るなり云云。

まつぼうじこく ぐつう ほんしやく
末法時刻の弘通の本迹

くおん しやくそん しゅぎよう
を迹とするなり、久遠の釈尊の修行

ほんにんみよう じゅりよう
本因妙を本とし今日寿量の脱益

いまにちれん しゅぎよう けし たが
と今日蓮の修行とは芥子計も違わ

しょうれつ
ざる勝劣なり云云。

ほんもんしゅぎよう ほんしやく
本門修行の本迹

まつぼう しゅぎよう ほんもん ちゅうげん
末法の修行は本門なり、又中間今日の仏

しょうぞう しゅぎよう しやくもん
正像二千年の修行は迹門なり、

しゅぎよう にちれん しゅぎよう まさ
の修行より日蓮の修行は勝るる者

なり。

ほんもん
本門五大尊の本迹

じようぎよう
り、上行等の四菩薩は迹なり。

にちれんほんもんぐつう
日蓮本門弘通の本迹

なり云云。

ほんげ いっち
本化事行一致の本迹

ほんにんみよう

本因妙の外に並に迹とて別して之無

しょうれつ てほん

勝劣の手本の義なり云云。

みな るつう
後十四品皆流通の本迹

じようぎようほさつ

いだい
上行菩薩を召し出す事は一向に滅後末法利

みなめつこ
は後の十四品皆滅後の流通分なり

くおん
久遠本果の自受用報身如来は本な

ほんにんみよう
本因妙は本なり我本行菩薩道は迹

こと
本・迹殊なりと雖も不思議一云云、

ゆえ
し故に一と釈する者なり、真実の

しゃくそん
本果妙の釈尊・本因妙の

しか
益の為なり、然る間・日蓮修行の時

下種戒体の本迹げしゅ ほんしやく

の戒躰かいたいは純一無雜の大戒だいかいなり。

如し云云。ごと

本化七面ほんげ ほんしやくの本迹

には理觀てんだいを本とするなり、天台の本

決、我家の本けしゅ書は事の上の本なり。

下種三種法華げしゅ ほんしやくの本迹

は隱密法華おんみつ ほんもん・本門ほんもんは根本法華こんぽん ほんけ・迹本文

り。

爾前にぜん・迹門しやくもんの戒躰かいたいは權實雜亂ごんじつぞうらん、本門ほんもん

勝劣しょうれつ天地水火尚及しやうれつてんちすいかなおおよばず具つぶさに戒躰抄かいいたいの

末法まつぽうには事行ざいせを本とし在世そうほうと像法ざうほうと

書は理の上の事なれば一向迹門いっかうしやくもんの七

二種は迹なり一種は本なり、迹門しやくもん

底なむの南無妙法蓮華經なむほうれんげきやうは顯說法華けんせつ ほんけな

本化本尊の本迹 ほんげほんそん ほんしやく

諸経・諸宗中王の本尊万物下種の種子無上 しよきよう しよしゆう ほんそん げしゆ しゆしむじよう

七字は本なり・余の十界は迹なり、 じふつかい

の大曼陀羅なり。 だいまんだら

下種守護神の本迹 げしゆしゆごしん ほんしやく

守護し奉る所の題目は本・護る所の しゆご たてまつ だいもく まも

神明は迹なり、諸仏救世者・現無量神 しんみよう しよぶつ げんむりよう

力云云。

下種山王神の本迹 げしゆさんのう ほんしやく

久遠に受くる所の妙法は本・中間 くおん みようほう ちゆうげん

・今日・未来までも守り来る所の山王明 みらい さんのう

神は即迹なり。 そく

下種十羅刹女の本迹 げしゆじゆうらせつによ ほんしやく

此の義理上に同じ唯神明と十女を ぎり ただしんみよう

本・迹に対する時・十羅刹女は本・神明 じゆうらせつによ しんみよう

は迹なり。

ほんもんふぞく
本門付属の本迹

じようぎよう
・上行等は迹なり、久遠元初の結要付属は

くおんみようじ
久遠名字の時・受る所の妙法は本

にちれん
日蓮今日寿量の付属と同意なり云

云。

ほんもんかいえ
本門開会の本迹

くおん
久遠の本会を本と為す、今日寿量

の脱を迹と為るなり。

みようらくいわ
妙楽云く始頭を開と云い終合を会と

云う文。

げしゅじようぶつ
下種成仏の本迹

ほんにんみよう
本因妙は本・自受用身は迹・

じようぶつ
成仏は難きに非ず此の経を持つこと難けれ

ばなり云云。

げしゅ
下種三種教相の本迹

しやくもん
二種は迹門・一種は本門なり、

ほんもん きょうそう きょうそう しゅくん
本門の教相は教相の主君なり、二種は

二十八品・一種は題目なり、題目は

かんじん きょうそう
観心の上の教相なり。

ほんしやく
五味主の中の主の本迹

にちれん おうじゆ
日蓮が五味は横豎共に五味の

しゅぎよう そくほんもん しゅぎよう そく
修行なり、五味は即本門・修行は即迹

門なり。

してい ふへんほんしやく
本種師弟不変の本迹

くおん じつじよう じじゆゆうしん
久遠実成の自受用身は本・

じようびようはつ さんぜじようじつふへん やくそく
上行菩薩は迹なり、三世常恒不変の約束なり

ふし じようじゆほんしやく
本種父子常住の本迹

ぎり くおん みようじそく
義理上と同じ、久遠の名字即の

そくたいじようじゆ ふし いまにちれん しゅぎよう
俗諦常住の父子は今日蓮が修行に殊

せけん じようじゆうれ
ならず、世間相常住是なり。

ぐそくほんしやく
四土具足の本迹

じようじやくこう
三土は迹・常寂光土は本なり、四

土即常寂光・寂光即四土の浄土は唯本門
そくじようじゃつこう　じゃつこうそく　ただほんもん

弘經の道場なり。
くきよう　どうじよう

下種感応日月の本迹
げしゅかんのうにちがつ　ほんしやく

下種の仏は天月・脱仏は池月なり。
げしゅ　てんげつ

天台云く不識天月但觀池月云云。
てんげつ

下種随縁不變の本迹
げしゅずいえんふへん　ほんしやく

体用同時の眞実・眞如・一口の首題
たいゆうどうじ　しんじつ　しんによ

なり、本有の迹・本有の一念三千是な
ほんぬ　ほんぬ　いちねんさんぜんこれ

り、随縁不變一念寂照の本・迹な
ずいえんふへんいちねんじやくしやう

り。

下種九法妙の本迹
げしゅ　ほんしやく

久遠下種の妙法は本・已來の九法
くおんげしゅ　みようほう　このかた

は迹なり。

下種人天の本迹
げしゅ　ほんしやく

久遠下種の妙法は本なり、已來の
くおんげしゅ　みようほう　このかた

人天は迹なり。
にんてん

げしゅ
下種八相・八苦習合実勝の本迹ほんしやく

の八苦は迹・種の八苦は本

ふめつ
此不滅と云えり。

げしゅさいご
下種最後直授摩頂の本迹ほんしやく

むじよう かんちよう
是最極無上の灌頂なり法は本

げしゅぐつうかいだん
下種弘通戒壇実勝の本迹ほんしやく

ほんもん
本門寺本堂なり。

じて院号なるべし云云)

げしゅじやくしよう じつじ たいゆうむじよう
下種寂照・実事・体用無上の本迹ほんしやく

脱の八相は迹・種の八相は本・脱

ほんのうそくほだい しようじそく じようざい
なり煩惱即菩提・生死即涅槃・常在

くおんいちねん みようほう
久遠一念元初の妙法を受け頂く事

人は迹なり。

ひほうこんりゆう
三箇の秘法建立の勝地は富士山

じようだいとう せし
(上行院は祖師堂云云弘通所は総

ほんがく じやくしよう
生仏一如の事の上の本覚の寂照

なり人は迹・仏は本なり

云云。

下種三世・三仏実益の本迹げしゅさんぜ ほんしやく

日蓮は下種の利益・三世・九世にちれん げしゅ りやく さんぜ

種熟脱・本有一念の利益なり、天しゅじゅくだつ ほんぬいちねん りやく

台云く若しは破若しは立皆是法華のいわも も みな ほっけ

意の修行の利益なり。しゅぎよう りやく

下種証明・多宝仏塔の本迹げしゅしょうみよう たほうぶつ ほんしやく

久遠実成・無始無終・本法のくおんじつじよう むしむしゅう ほんぽう

妙法蓮華經皆是真實は本なり、久遠みょうほうれんげきよう かいげしんじつ ほんなり くおん

の本師は妙法なり、本有実成釈迦ほんし みょうほう ほんぬじつじようしゃか

・多宝は迹なり。たほう

下順序正流通・文底の本迹げしゅ るつう ほんしやく

応仏と天台とは正宗 一品二半をてんだい しょうしゅう

本門と定め現文の勝劣、報仏とほんもん げんぶん しょうれつ

なり。

下種げしゅ折しやく摂く二門の本迹ほんしやく

む法華折ほっけしやく伏ぶく・破は権門理ごんもんりとは是これなり。

下種げしゅ二妙実行の本迹ほんしやく

を本と定む、然しかるに相待は迹・絶待ぜったい

は本云云。

下種げしゅ十妙実体ほんしやくの本迹ほんしやく

と為なすなり、是これ真実しんじつの本因ほんいん・本果ほんがの

法門ほうもんなり。

下種げしゅ六重具膳ほんしやくの本迹ほんしやく

重なを本と為なるなり云云。

日蓮にちれんとは流通りつうを本と定む文底しやうじの勝劣しやうれつ

日蓮にちれんは折しやく伏くを本とし摂受しやうじゆを迹と定

日蓮にちれんは脱の二妙を迹なと為なし種しゆの二妙

は本云云。

日蓮にちれんは本因ほんにん妙みやうを本なと為なし、余を迹

日蓮にちれんは脱の六重を迹なと為なし、種しゆの六

下種六即実去の本迹げしゆ そく ほんしやく

一即の六即・案位の理即は開会のそく そく りそく かいえ

と為るなり。

下種十二因縁の本迹げしゆ いんねん ほんしやく

為し、久遠報仏所説の十二因縁を本な くおん しよせつ いんねん

下種十不二門の本迹げしゆ ほんしやく

躰用の不二門なり。

下種十界互具の本迹げしゆ じゅうかいごく ほんしやく

我等九界は迹なり、妙覚より理即の凡われら みようかく りそく

日蓮は脱の六即を迹と為し種の三世にちれん そく な さんぜ

妙覚・開会の理即は本覚の極果を本みようかく かいえ りそく ほんかく ごっか

日蓮は応仏所説の十二因縁を迹とにちれん しよせつ いんねん

と定むるなり。

日蓮が十不二門は事上極極の事理一にちれん じり

唱え奉る妙法・仏界は本・唱うるとな たてまつ みようほう ぶつかい とな

夫までなり、実の十界互具の勝劣とじゅうかいごく しやうれつ

は是なり。これ

下種境智俱実の本迹げしゆきようちほんしやく

名字即の境智は境智俱に本・観行即みようじやくきようちきんぎようそく

脱の境智は迹・種の境智は本なり、きようちきんぎようち

の境智は境智俱に迹なり云云。きようちきんぎようち

意は十界の仏性只一口に呼び顯すなり、本因口唱の勝る南無じゆっかいぶつしやうただよあらわ

妙法蓮華經なり、初心成仏抄の如きなり、弘一に云く理造作にみようほうれんげきやうししんじやうぶつご

非ざる故に天真と曰い証智円明の故に独朗と云う云云、久遠の理とあらゆえんてんしんいえんみやうゆえん

今日の理と理に浩作無し、然れも久遠は事上の理なり今日は理上の理しかくおん

なり故に知んぬ本因妙の理は勝れ今日日本果妙の理は劣るなり是理のゆえんほんにんみやうすぐいまにほん

本・迹なり是の故に独朗と云うなり、又云く独一法界の故に絶待とかくのゆえんどくろういわほっかいゆえんぜったい

なく云云。なす

天台は唯大綱を存して綱目を事とせず此の釈の意は大綱は本・綱目はてんだいただたいこうしやくたいこう

迹なり、天台・伝教の修行は綱目・日蓮日興等の修行は大綱なり

云云・如来秘密神通之力意得可し是事理の如来の本・迹なり、秘密の

如来は理性の如来なり、我等なり、神通の如来は世尊なり秘密は本地

神通は垂迹なり、世世以来常受我化・我本行菩薩道所成寿命今猶未

尽復倍上数云云。

本・迹勝劣其理甚遠なり、仏若し説かずんば弥勒尚暗し何に況や

下地をや何に況や凡夫をや、本仏本化乃能究尽云云、妙楽云く具騰

本種 本勝迹劣 故に但名に於て以て本・迹を分つ下種名字妙法事

行の勝劣なる所を判ずるなり本・迹は身に約し位に約す 久遠

名字即の身と位との判なり本従り迹を垂れ迹は本に依る迹は究責に

非ず、玄の一に開示悟入是れ迹の要なりと雖も若し顕本し已れば即ち

本要と成るなり、籤の一に若し迹中の事理乃至権実無くんば何ぞ能く

ちようじゅ
長寿の本を顕さん云云。

已上程の本・迹勝劣畢んぬ

右此の血脈は本・迹勝劣其の数二百六箇之を注す数量に就て表事有
り之を覚知すべし・釈迦諸仏出世の本懐・真実真実・唯為一大事の
秘密なり、然る間・万年救護の為に之を記し留む。

就中六人の清弟を定むる表事は先に沙汰するが如し云云、但し直授
結要付属は一人なり、白蓮阿闍梨日興を以て惣貫首と為して日蓮が
正義悉く以て毛頭程も之れを残さず悉く付属せしめ畢んぬ、上首己下
並に末弟等異論無く尽未来際に至るまで予が存日の如く日興嫡嫡付法
の上人を以て惣貫首と仰ぐ可き者なり。

又五人並に已下の諸僧等日本乃至一閻閻浮捏の外・万国に之を流布せ
しむと雖も日興嫡嫡相承の皐茶羅を以て本堂の正本尊と為す可きな
り所以は何ん在世滅後殊なりと雉も付属の儀式之同じ曹えば四大六万の
直弟の大昔属有りと維も上行儀棒を以て結要の大導師と定むるが如し、
今以つて是くの如し六人以下数輩の弟子有りと維も日興を以て結要

付属の大將と定むる者なり。

又弘長配流の日も文永流罪の時も其の外語処の大難の折節も先陣を
かけ日蓮に影の形に随うが如くせしなり誰か之を疑わんや、又延山地頭
発心の根元は日興教化の力用なり、遁世の事甲斐の国三牧は日興衆志の
故なり。

又御本尊書写の事・予が顕し奉るが如くなるべし、若し日蓮御判と書

かずんは天稗地舐もよも用い給わじ
あなりゆうぎよう びしゃもん もち たま のうらん
 上行・無辺行と持国と浄行・
じようぎよう むへんぎよう じようぎよう じようぎよう
ずはしちぶん ぐよう ふくかじゅうごう

安立行と毘沙門との間には若惱乱者・頭破七分・有供養者・福過十号これと之を害す可きなり、経中の明文等意に任す可きか。まか

と之を害す可きなり、経中の明文等意に任す可きか。
又立つ浪・吹く風・万物に洗いて本・迹を分け勝劣を弁ず可きなり。

本因妙抄

870 p

法華本門宗血脈相承事

ほんにんみょう
ぎょうじゃにちれん
本因妙の行者日蓮之

を^{しる}記す。

予が外用の師・伝教大師生歳四十二歳の御時・仏立寺天台山 仏隆寺の大和尚に値い

奉り義道を落居し生死一大事の秘法を決したもうの日、大唐の貞元二十一年太歳乙酉五月三日・三大章疏を伝え各七面七重の口決を以て治定し給えり、所謂玄義七面の決とは正釈五重列名に約して決したもう。

一に依名判義の一面・名とは法の分位に於いて施設す・体とは宰主を義と為す・宗とは所作の究竟なり、受持本因の所作に由つて口唱本果の究竟を得、用とは証体本因・本果の上の功能徳行なり、教とは誠を義と為す誠とは本の為の迹為れば迹は即ち有名無実無得道なるを実相の名題は本・迹同じければ本・迹一致と思惟す可き事を大に誠んが為に三種の教相を起す種熟脱の論不論を立つる者なり、經文解釋明白なり、此くの如く文・句句の名・妙正の深義・本・迹勝劣の本意を顕し給う者なり、然りと雖も天台伝教の御弘通は偏に理の上の法相・迹化付属・像法の理位・觀行五品の教主なれば迹を表と為して衆を救い、本を隠して裏に用る者なり甚深甚

じんみつ
深秘す可し秘す可し。

二に仏意・機情・二意の一面、仏意は觀行・相似を本と為し機情は理即・名字を本と為す、何れも体用を離れず体用は法華の心智に依つて一代五時の次第淺深を開拓す、次に機情とは大通結縁の衆の為に四味の調養を設け法華に來入す、本・迹二門乃至文・句句此の二意を以て分別す可き者なり。

三に四重淺深の一面、名の四重有り。一には名体無常の義・爾前の諸經・諸宗なり、二には体実名仮・迹門・始覺無常なり、三には名体俱実・本門本覺常住なり、四には名体不思議是れ觀心直達の南無妙法蓮華經なり、湛然の云く「雖脱在現・具騰本種」云次に体の四重とは一に三諦隔歴の体・爾前權教なり、二に理性円融の体・迹門十四品なり、三に三千本の体・本門十四品なり、四に自性不思議の体・我が内証の寿量品事行の

いちねんさんぜん

一念三千なり、次に宗の四重とは一に因果異性の宗・方便權教なり、二に

いんが

因果同性の宗・是れ迹門なり、三に因果並常の宗・即ち本門なり、四に

いんがいちねん

因果一念の宗・文に云く「芥爾も心有れば即ち三千を具す」と、是れ即ち

まつぼうじゅんえん

末法純円・結要付属の妙法なり云云、次に用の四重とは一に神通幻化の

こんきやう

用・今経已前に明かす所の仏・菩薩・出仮利生の事、二に普賢色身の用・

即ち一身の中に於て十界を具する事なり本・迹一代五時に亘る、三に無作

じやうじゅう

常住の用・証道八相有り無作自在の事なり、四に一心の化用・或説己身

じやうじゅう

等なり、次に教の四重とは一には但顯隔理の教・権小なり、二には教即実

理の教・迹門なり、三には自性会中の教・応仏の本門なり、四には一心

ほっかい

法界の教・寿量品の文の底の法門・自受用報身如来の眞実の本門・久遠

いちねん

一念の南無妙法蓮華經・雖脱在現具騰本種の勝劣是なり。

なむみやうほうれんげきやう

第四に八重淺深の一面なり、名の八重とは一に名体永別の名・二に名体不

ようべつ

第四に八重淺深の一面なり、名の八重とは一に名体永別の名・二に名体不

離の名・三に従体流出の名・四に名体具足の名・五に本分常住の名・六に果海妙性の名・七に無相不思議の名・八に自性己己の名・乃至教知る可し云云、文に任せて思惟す可きなり。

第五に還住当文の一面、四八の浅深を以て本・迹勝劣を知る可し。

第六に但入己心の一面、始め大法東漸より第十の判教に至るまで文の生起

さし

いっとう

しょうれつ

じょう

いた

だいほう

を闇おき一向に心理の勝劣に入れて正意を成ず可し、謂く大法とは即ち

ぎょうじや

こしん

いみょう

じゅう

いは

だいほう

行者の己心の異名なり云云、釈の意は文義の広博を離れて首題の理を専に

すと釈し給うなり。

第七に出離生死の一面、心は一代応仏の寿命品を迹と為し内証の寿命品

しゅつりしやうじ

いちだい

じゅうりやうぽん

ないしやう

じゅうりやうぽん

を本と為し釈尊久遠名字即の身と位とに約して南無妙法蓮華經と唱え奉

しやくそんくおんみょうじそく

なむみょうほうれんげきやう

る是を出離生死の一面と名く、本・迹約身約位の釈・之を思う可き者なり

しゅつりしやうじ

なす

已上。玄文畢る。

おわ

もんく

文句の七面の決とは、一に依名の一面・其の義上の如し、二に感応の一面

・三時弘經に亘る可し、爾前・迹門の正像二千年弘經の感応より本門

まっぼうぐつう

かんのう

しんじつしんじつ

末法弘通の感応は真実真実勝るなり、三に四教の一面・四に五時の一面・

五に本・迹の一面・六に体用の一面・七に入己心の一面・悉く皆其の心前

に同じ、智威大師の伝には玄義・文句の兩部には爾前・迹門に各三十重の

だいし

げんぎ

もんく

にぜん

しゃくもん

しゃくもん

しゃくもん

しゃくもん

しゃくもん

浅深を以て口決し給えり、具には伝教大師七面決の如し。

たま

又摩訶止観一部には十重顕観を立てて是を通じ給えり、一は待教立観・爾前

まかしかん

たま

たま

たま

たま

たま

たま

たま

たま

たま

・本・迹の三教を破して不思議実理の妙法蓮華經の観を立つ、文に云く円

頓者初縁実相と云云、迹門を理具の一念三千と云う脱益の法華は本・迹共

とん

じつそう

しゃくもん

いちねんさんぜん

いちねんさんぜん

いちねんさんぜん

いちねんさんぜん

いちねんさんぜん

いちねんさんぜん

いちねんさんぜん

に迹なり、本門を事行の一念三千と云う下種の法華は独一の本門なり、是

ほんもん

ほんもん

ほんもん

ほんもん

ほんもん

ほんもん

ほんもん

ほんもん

ほんもん

を不思議実理の妙観と申すなり、二に廃教立観・心は権教並に迹執を

ふしぎ

みようかん

もう

もう

もう

もう

もう

もう

捨て本門首題の理を取つて事行に用いよとなり、三に開教顕観文に云く

ほんもん

ほんもん

ほんもん

ほんもん

ほんもん

ほんもん

ほんもん

ほんもん

ほんもん

ほんもん

- 1853 -

いっさいしよほう

ぶつぼう

ぶつぼう

一切諸法本是仏法三諦の理を具するを名けて仏法と為す云何んぞ教を除か

ん云云文意は観行理観のいちねんさんぜん一念三千を開して名字事行のいちねんさんぜん一念三千をあらわ顕す、大師

もんい

じょうぎようしよでん

みょうじ

だいし

きようそう

の深意・釈尊の慈悲・上行所伝の秘曲・是なり、四に会教顕観・教相

ほっけ

かんじん

ほっけ

ふしぎ

の法華を捨てて観心の法華を信ぜよと、五に住不思議顕観・文に云く理は

そうさく

てんしん

い

えんみよう

どくろう

造作に非ず故に天真と曰う・証智円明なるが故に独朗と云う云云、釈の意

くしやう

そうさく

は口唱首題の理に造作無し、今日熟脱の本・迹二門を迹と為し久遠名字の

ほんもん

しんじん

ただよねんなく

なむみようほうれんげきよう

くおんみようじ

本門を本と為す、信心強盛にして唯余念無く南無妙法蓮華經と唱え奉れ

そくぶっしん

てんしんどくろう

そくしんじようぶつ

なす

ば凡身即仏身なり、是を天真独朗の即身成仏と名く。

問うて曰く前代に此の法門を知れる人之有りや、答えて曰く之有り、求

だれびと

ほうもん

これあ

これあ

めて云く誰人ぞや、示して云く釈尊是なり、尋ねて云く仏を除き奉つて

にんしろんし

てんだい

てんじんりゆうじゆ

余に之を知れる人師論師有りや、答えて曰く天台の云く「天親竜樹・

ないがんれいねん

げちやくぎぎ

なむみようほうれんげきよう

なんがく

てんだい

みようらく

内鑒冷然・外適時宜」と、今日南無妙法蓮華經は南岳・天台・妙楽・

伝教の内鑒冷然・外適時宜なり、内鑒冷然・外適時宜の修行の日は本

・迹一致なり、有智無智を嫌わず円頓者初縁実相の理は造作に非ざる故

に天真と曰う・証智円明の故に独朗と曰うと云つて理位觀行に趣かし

め利益を為し末法の時を待つ者なり、故に天台云く「但當時大利益を獲る

のみに非ず後・五百歳遠く妙道に霑う」と云云、天台・章安・妙樂・

伝教等の大聖は内証は本・迹勝劣・外用は本・迹一致なり、其の故は

教相も觀心も相似觀行解了の人師・時機亦像法なり、付属は即妄授余人

・御身も亦迹化の衆・觀音・妙音・文殊・藥王等の化身なり、今末法は

本化の薩・上行等の出世の境・本門流宣の時尅なり、何ぞ理觀を用

いて事行を修せざらんや、予が所存は内証・外用共に本・迹勝劣なり、

若し本・迹一致と修行せば本門の付属を失う物怪なり。

本・迹の不同は処処に之を書す、然りと雖も宿習拙き者本・迹に迷倒せ

んか若し本・迹勝劣しょうれつを知らずんば未来みらいの惡道最も不便ふびんなり宿業しやくごふを恥はじじず
還うらつて予を恨む可きか、我が弟子等でしの中にも天台てんだい傳教でんきやうの解了げりやうの理觀りくわんを出
でず、本・迹に就いちおうて一往勝劣しょうれつ再往さいおう一致いっしの謬義みやうぎを存ぞんして自他じたを迷惑まよひせし
めんの条・宿習しゆくしゆの然らしむる所か、閻浮提えんぶだい第一だいいちの秘事ひじ為りと雖も万年いえどまんねん救護まも
の為に之を記しるし留とどる者なり、我が未来みらいに於て予が仏法ぶつぽうを破らん為に一切いっさい
衆生しゆくじやうの元品がんぽんの大石がんだいし・大六天だいろくてんの魔王まおう・師子身中しししんの蝗蟲いなむしと成なりつて名なを日蓮にちれんに
仮かりて本・迹いっし一致いっしと云いふ邪義じゃぎを申し出して多おほの衆生しゆくじやうを当あたに惡道いあくだうに引ひくべ
し、若し道心どうしん有あらん者は彼等かれらの邪師じゃしを捨てて宜よろく予が正義せいぎに随したがうべし、
正義せいぎとは本・迹勝劣しょうれつの深秘具騰じんみつ本種ほんしゆの実理じつりなり、日蓮にちれん一期だいいちの大事だいじなれば
弟子等でしにも朝あしたな夕ゆふなに教しやうえ亦また一期しよその所造等しよぞう悉ことごとく此この義ぎなり、然しかりと雖も
迹執しやくしゆを出だでず、或あるは輕見惑きやうけん・或あるは蔑思惑めつし・或あるは癡塵沙惑じんじや・或あるは迷まよひ無明惑むめい、
故ゆゑに日蓮にちれんが立義りつぎを用もちいざるか、予が教相きやうそう・觀心かんじんは理即りそく・名字みやうじ・愚惡おろか愚見ぐけん

の爲なり。

にちれん

みようじそく

日蓮は名字即の位・弟子檀那は理即の位なり、

でしだんな

りそく

上行 所伝結要付属の

ぎようぎ

みなみようじそく

しゅぎよう

きようそう

しだい

行儀は教観判乘・皆名字即・五味の主の修行なり、故に教相の次第要

よ

ただたいこう

そん

用に依る可し唯大綱を存する時は余は綱目を事とせず彼は綱目・此れは

たいこう

きようそう

たいこう

にちれん

ぎようぎ

大綱・彼は綱目の教相の主・此れは大綱首題の主・恐くは日蓮の行儀に

てんだいでんぎよう

きようぎ

たし

ぎようぎ

ただざいせはちかねん

唯在世八箇年の

儀式を移して滅後末法の行儀と爲す、然りと雖も仏は熟脱の教主某は

めつごまつぽう

ぎようぎ

しか

いんど

きようしゅ

下種の法主なり、彼の一品二半は舍利弗等の爲には観心たり、我等・凡夫

げしゅ

しやりほつ

かんじん

かんじん

われら

ほんぶ

の爲には教相たり、理即・短妄の凡夫の爲の観心は余行に渡らざる南無

きようそう

りそく

ほんぶ

かんじん

よぎよう

わた

なむ

妙法蓮華經是なり、是くの如く深義を知らざる僻人・出来して予が立義

みようほうれんげきようこれ

かくのごと

じんぎ

かんじん

よぎよう

わた

りつき

は教相辺外と思う可き者なり、此等は皆宿業の拙き修因感果の至極せ

きようそうはずれ

みな

つたな

しゅういんかんか

つたな

しゅういんかんか

つたな

しゅういんかんか

るなるべし、彼の天台大師には三千人の弟子ありて章安一人朗然なり、

てんだいだいし

さんぜん

でし

しゅうあん

しゅうあん

しゅうあん

の爲なり。

伝でん教ぎょう大師だいしは三千さんぜん人の衆徒しゅうとを置く義真ぎしん已後は其れ無きが如し、今以て此くの如し数輩でしの弟子でし有りと雖も疑心いえど うたがいこころな無く正義せいぎを伝うる者は希まれにして一二の小石ほうもんの如し秘す可きの法門ほうもんなり。

第六に住教じく頭ず觀くわん七に住教じく非ひ觀くわん八に覆教ふく頭ず觀くわん九に住教じく用よう觀くわん十に住觀じく用よう教きょう此の五重ごじゅうは上の五重ごじゅうの如し思惟しゆいす可し。

問うて云く本・迹ふしぎ雖殊しゆ不思議ふしぎ一・本・迹の教に於て別して不思議ふしぎの觀理くわんりを頭ずわす故にと云云、機情きじやうに約すれば本・迹に於て久近きうじんの異有る可し、是れ一往いちおうの淺義せんぎなり、内証ないしやうに約して之を論ずれば勝劣しやうれつ有る可からず再往さいおうの深義じんぎは不思議ふしぎ一なり云云如何が意を得可けんや、答えて云く住教じく頭ず觀くわんは煩惱ぼんのう即菩提ぼだい・住教じく非ひ觀くわんは法性ほつじやう寂然じやくぜん・覆教ふく頭ず觀くわんは名字みふじ判教はんきやう・住教じく用よう觀くわんは不思議ふしぎ一・住觀じく用よう教きょうは以頭みづか妙円みやうえんと申す大事だいじ是なり、教觀きやうくわん不思議ふしぎ・天然てんぜん本性ほんじやうの処ところに独ひとり一法界ほつかいの妙觀みやうかんを立つ是を不思議ふしぎの本・迹勝劣しやうれつと云う亦絶対

不思議の内証・不可得・言語道断の勝劣は天台・妙楽・伝教の残す
所我が家の秘密観心直達の勝劣なり、迹と云う名ありといえども
有名無実・本無今有の迹門なり、実に不思議の妙法は唯寿命品に限る
故に不思議一と釈するなり、迹門の妙法蓮華經の題号は本門に似ると
いへど 雖も義理・天地を隔つ成仏亦水火の不同なり、久遠名字の妙法蓮華經
の朽木書なる故を顕さんが為に一と釈するなり末学疑網を残すこと
勿れ、日蓮・靈山会上・多宝塔中に於て親たり釈尊より直授し奉る秘法
なり、甚深甚深秘す可し秘す可し伝う可し伝う可し。

摩訶止観七面口決とは依名判義・附文元意・寂照一相・教行証・六九
二識・絶諸思慮・出離生死の一面已上、一切諸法・従本已来・不生不滅
・性相凝然・釈迦閉口・身子絶言云云、是は迹門天台・止観の内証
なり、本門日蓮の止観は釈迦は口を開き文殊は言語す迹門不思議・

ふかせつ・本門不思議可説の証拠の釈是なり、亦三大部に於て一同十異・

四同六異之有り、伝教仏立寺より之を口決す、一同とは名同なり、十異と

は名同義異・所依異・觀心異・傍正異・用教異・對機異・顯本理異・修行

異・相承異・元旨異、四同とは名同・義同・所依・同所・顯同なり、六異

とは釈異・大綱綱目異・本末異・觀心異・教内外觀異・自行化他異・是な

り、今要を以て之を言わば迹本觀心同名異義なり始終・本末共に修行も

覺道も時機も感応も皆勝劣なり。

此の下・二十四番勝劣なり、彼の本門は我が迹門・彼の勝は此の劣彼の

深義は予が浅義・彼の深理は此の浅理・彼が極位は此の浅位・彼の極果は

此の初心・彼の觀心は此の教相・彼の台星の国に出生す・此れは日天の

国に出世す・彼は藥王・此れは上行・彼は解了の機を利す・此れは愚惡

の機を益す・彼の弘通は台星所居の高嶺なり・此の弘經は日王・能住の高

峰なり・彼は上機じやうきに教え・此れは下機きを訓くんず・彼は一部を以て本尊ほんぞんと為し
 ・此れは七字を本尊ほんぞんと為す・彼は相對開會そうたいを表と為し・此れは絶対開會じつそうを
 表と為す・彼は熟脱此れは下種げしゆ・彼は衆機きの為に円頓者初縁実相と示し・
 此れは万機きの為に南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうと勸すすむ・彼は悪口怨嫉おんしつ・此れは遠島流罪るざい
 ・彼は一部を誦誦とくじゆすと雖も二字を讀まざること之在り・此れは文文句句もんく・
 悉ことごとく之を讀む・彼は正直の妙法みやうほうの名を替えて一心三觀いっしんさんかんと名なく・有の儘ままの
 大法だいほうに非ざれば帶權の法に似たり此れは信謗彼此ひし・決定成菩提けつじやう・南無
 妙法蓮華經みやうほうれんげきやうと唱えかく、彼は諸宗しよしゆうの謬義みやうぎを粗書おほき顯あらわすと雖も未だ言說いえどせ
 ず此れは身命しんみやうを惜おしまず他師たしの邪義じゃぎを糺ただし三類さんるいの強敵かうてきを招まねく・彼は安樂普賢あんらくふげん
 の説相せつそうに依より此れは勸持不輕かんじふぎやうの行相もちを用もちゆ・彼は一部に勝劣しやうれつを立て・此れ
 は一部を迹と伝でんう・彼は応仏のいきをひかう・此れは壽量品じゆりやうほんの文底もちを用もちゆ
 ・彼は応仏昇進じじゆゆうほうしんの自受用報身いちねんさんぜんいっしんさんかんの一念三千一心三觀くおん・此れは久遠元初の

じじゅうほうしんむさほんぬ みょうほう
自受用報身無作本有の妙法を直に唱う。

此れ等の深意は迹化の衆・普賢・文殊・観音・薬王等の大菩薩にも付属せ
ざる所の大事なれば知らざる所の秘法なり況や凡師に於てをや。

若し末法に於て本・迹一致と修行し所化等に教ゆる者ならば我が身も

五逆罪を造らずして無間に墮ち其れに随従せんともがらも阿鼻に沈まん

事疑無き者なり、此の書一見の人人は理普賢智文殊一言の薩☆・生死絶

断の際・定光覚悟の大菩薩なり、伝教云く「文殊の利剣は六輪に通じ十

二の生類を切断す、一刀を下して万方に勅するに自然に由お三諦

を出だす見聞覚知に明なり」此の一言の三際を示すに一言に如かず、若

し未達の者も一頌を開くに題目三般三諦同じく通知せざること無し、生仏

自ら一現なる是を一言の妙旨一教の玄義と謂う云云、天台の云く「一言

三諦・刹那成道・半偈成道」と云云、伝教の云く「仏界の智は九界を

境と為し九界の智は仏界を境と為す境智互に冥薰して凡聖常恒なる是
を刹那成道と謂う、三道即三徳と解れば諸悪 ☆ に真善なる是を半偈
成道と名く「今会釈して云く諸仏菩薩の定光三昧も凡聖一如の証道刹那
半偈の成道も我が家の勝劣修行の南無妙法蓮華經の一言に摂し尽す
者なり、此の血脈を列ぬる事は末代浅学の者の予が仮字の消息を蔑如
し天台の漢字の止観を見て眼目を迷わし心意を驚動し・或は仮字を漢
字と成し、或は止観明静・前代末間の見に耽り本・迹一致の思を成す、
我が内証の寿量品を知らずして止観に同じ但自見の僻見を本として予
が立義を破失して惡道に墮つ可き故に天台三大章疏の奥伝に属す、天台
伝教等の秘し給える正義・生死一大事の秘伝を書き顕し奉る事は且は恐
れ有り且は憚り有り、広宣流布の日公亭に於て応に之を披覽し奉るべし、
会通を加える事は且は広宣流布の為且は末代浅学の為なり又天台伝教の

釈等も予が眞實しんじつの本懐ほんかいに非ざるか、未来嬰兒みらいの弟子等彼を本懐ほんかいかと思ふべきものか。

いぬ ぶんえい めんきよ
去る文永の免許の日・爾前にぜん・迹門しやくもんの謗法ほうぼうを対治たいじし本門ほんもんの正義せいぎを立て被れ
ふじつ
ば不日に豊歳ならむと申せしかば聞きこく人毎ひとごとに舌を振り耳を塞ぐ、其の時
かとうど
方人一人も無く唯我にちれんと日蓮にっけん与我にっけん日興にっこう計りなり。

問うて云く寿量品じゆりやうぼん文底だいいの大事だいじと云う秘法ひほう如何、答えて云く唯密しやうぼうの正法しやうぼうな

り秘す可し秘す可し一代応仏いちだいのいきをひかえたる方は理ほつその上の法相ほつそなれば

一部共に理いちねんさんぜんの一念三千迹ほんもんじゆりやうの上の本門ほんもん寿量じゆりやうぞと得意みようじせしむる事を脱益みようじの文の

上と申もうすなり、文の底とは久遠実成くおんじつじやうの名字みようじの妙法みようほうを余行よぎやうにわたさず直達じきたつ

の正觀事行いちねんさんぜんの一念三千なむみやうほうれんげきやうの南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやう是なり、権実こんじつは理にほん今日こんにち日本にほん・迹理しんりなり

本・迹は事久遠くおん・迹事しんじなり、亦権実こんじつは約智やくち約教やくきやう一代應いちだい仏本ぶつほん・迹本しんほん・迹は約身約

位みやうじ名くおん字くおん身くおん久遠くおん・迹亦云く雖脱在現具騰本種しやくそんくおんみやうじそくといへり、釈尊久遠名字しやくそんくおんみやうじそく即の位

の御身おんみの修行しゆぎようを末法まつぽう今時けふ・日蓮にちれんが名字ななふ即すなはの身に移うつせり理ことわりは造作ぞうさくに非あらず故ゆゑに
天真てんしんと日ひ証智えんみ円明えんめいの故ゆゑに独朗どくろうと云いうの行儀ぎやうぎ本門ほんもん立行りつぎやうの血脈けちみやく之をを注つす秘ひ
す可べし秘ひす可べし。

又また日文字にちもんじの口伝くでん・産湯うぶゆの口決くけつ・二箇ふたは両大師りやうだいしの玄旨げんしにあつ、本尊ほんぞん七箇しちの
口伝くでんは七面の決けつに之をを表あらわす教化きやうくわ弘經くわんぎやうの七箇しちの伝でんは弘通くわんつう者の大要だいようなり、又
此この血脈けちみやく並ならに本尊ほんぞんの大事だいじは日蓮にちれん嫡嫡ちやくちやく座主ざす伝法でんぽうの書しよ・塔中たつちゆう相承そうじやうの
稟承りやうじやう唯授ただ一人ひとりの血脈けちみやくなり、相構あいかまえ相構え秘ひす可べし秘ひす可べし伝でんう可べし、
法華ほつげ本門ほんもん宗しゆ血脈けちみやく相承そうじやう畢ひんぬ。

弘安五太歳壬午十月十一日

日蓮 在御判

◆一〇二 産湯相承事

日興之を記す

878

御名みな乗りの事こと、始めは是生こゝろ・実名みなは蓮長れんぢやうと申し奉たてまつる後のちには日蓮にちれんと御名みな乗り
有ある御事おんことは悲母梅菊女ひもの童女の御名なり平の畠山殿一類いんれいにて御座みやす云云みようれんぜんに法号おんものがたり妙蓮めうれん禅尼ぜんにの御物語おんものごとり御座みやす事こと

には、我に不思議の御夢想あり、清澄寺に通夜申したりし時汝が志真
に神妙なり一閻浮提第一の宝を与えんと思うなり、東条片海に三国の太夫
と云う者あり是を夫と定めよと云云、其の歳の春・三月廿四日の夜なり正に
今も覚え侍るなり。

我父母に後れ奉りて已後詮方なく遊女の如くなりし時御身の父に嫁げり、

・或夜の靈夢に日く叡山の頂に腰をかけて近江の湖水を以て手を洗うて

富士の山より日輪の出でたもうを懷き奉ると思つて打ち驚いて後・月水留

ると夢物語りを申し侍れば、父の太夫我も不思議なる御夢想を蒙むるなり、

虚空蔵菩薩貌吉き兒を御肩に立て給う、此の少人は我が為には上行菩提

薩☆なり日の下の人の為には生財摩訶薩・なり、亦一切有情の為には行く

末三世常恒の大導師なり、是を汝に与えんとのたもうと見て後御事懷妊

の由を聞くと語り相いたりき、さてこそ御事は聖人なれ。

又產生まるべき夜の夢に富士山の頂に登つて十方を見るに明なる事

たなごころ

掌の内を見るが如し三世明白なり、梵天・帝釈・四大天王等の諸天

ことこらいげ

ほんちじじゅうほうしんによらい

すいじやく

じようぎようほさつ

おんみ

ほんぶ

悉く来下して本地自受用報身如来の垂迹・上行菩薩の御身を凡夫地に

けんげ

たま

ただ

むねうち

だつたりゅうおう

くどく

謙下し給う御誕生は唯今なり、無熱池の主阿那婆達多竜王八・功德水を

まさ

まさ

あゆみ

たてまつ

しよてん

たま

応に汲み来るべきなり、当に産湯に浴し奉るべしと諸天に告げ給えり、

よつ りゅうじん

そくじ

せいれんげ

あゆみ

たてまつ

しよてん

たま

仍て竜神王即時に青蓮華を一本荷い来れり、其の蓮より清水を出して御身

あゆみ

まい

はべ

そ

あま

してんげ

そ

その

うるお

おんみ

を浴し進らせ侍りけり、其の余れる水をば四天下に灑ぐに其の潤いを受く

じんちく

そつもく

こくどせけん

ことごと

こうみよう

しほう

そつもく

ひ

このみ

る人畜・草木・国土世間・悉く金色の光明を放ち四方の草木花発らき菓

成る。

成る。

なんよ

男女座を並べて有れども煩惱無く淤泥の中より出れども塵泥に染まず、

たと

れんげ

い

おでい

こと

にんてん

じんてい

染まず、

譬えば蓮華の泥より出でて泥に染まざるが如し、人天・竜畜・共に白き蓮

たと

れんげ

い

おでい

こと

にんてん

じんてい

染まず、

を各手に捧げて日に向つて今此三界・皆是我有・其中衆生・悉是吾子・

を各手に捧げて日に向つて今此三界・皆是我有・其中衆生・悉是吾子・

ただわれひとり のういくこ とな たてまつ 唯我一人・能為救護と唱え奉ると見て驚けば則聖人 しょうにんしゅっしょう 出生し給えり、毎 たま
自作是念 さぜん・以何令衆生 しゅじょう・得入無上道 とくにゅうむじょうどう・速成就仏身 そくじょうじゅうぶっしんと苦我 たま・き給う。

我少し寐 まどろみし様なりし時・梵帝等 ほんたいの諸天一同 しよてん・音に唱えて言 いく善哉善哉 よきかなよきかな

・善日童子 どうじ・末法教主釈迦仏 まつぼうきようしやくしかぶつと三度唱えて作礼 となして去 いたし給うと寤 うつに見聞 けんもん

きしなりと慥 たしかに語り給 たまいしを聞 きし食 たしさては某 それがしは日蓮 にちれんなりとの給 たまいしな り。

しょうにんかさ 聖人重 にちれんねて日 でし蓮 だんなが弟子檀那等 ひも・悲母 ものがたりの物語 語りと思 うべからず

すなわ 金言 きんげんなり其 そのの故 ゆえは予 しゅぎようが修行 かは兼 かねて母 ちちの靈夢 れいむにありけり・日蓮 にちれんは富士

山 じねん自然 みようじうの名号 なごうなり、富士 ふじは郡名 ぐんめいなり実名 じつめいをば大日蓮華山 だいびやくれんげさんと云 いうなり、我

中道 ちゅうどうを修行 しゅぎようする故 ゆえに是 かくのくの如 ごとく国 くにをば日本 にほんと云 いい神 かみをば日神 にちかみと申 もうし仏 ぶつの

童名 どうなをば日種 たいし太子 もうと申 もうし予 しゅぎようが童名 どうなをば善日 ぜんにち・仮名 かみは是生 ぜいじやう・実名 じつめいは即 すなわち日蓮 にちれん

なり。

くおんげしゅ なむ みようほうれんげきよう
久遠下種の南無妙法蓮華經の守護神は我國に天下り始めし国は出雲な
り、出雲に日の御崎と云う所あり、天照太神始めて天下り給う故に日の御
崎と申すなり。

しやくそん ほけきよう と あらわ たまい このかたじゆうらせつによ
我が釈尊・法華經を説き顯し給いしより已来十羅刹女と号す、十羅刹と
てんしやうだいじん しやくそん にちれん いみようほんちすいじやく りやく
天照太神と釈尊と日蓮とは一体の異名本地垂迹の利益広大なり、日神と
月神とを合して文字を訓ずれば十なり、十羅刹と申すは諸神を一体に束ね
合せたる深義なり、日蓮の日は即日神・昼なり蓮は即月神・夜なり、月は
水を縁とす蓮は水より生ずる故なり、又是生とは日の下の人を生むと書け
り。

にちれん てんじよう てんか いっさいしゆじよう しゆくん ふほ ししやう くおんげしゅ
日蓮は天上・天下の一切衆生の主君なり父母なり師匠なり、今久遠下種
じゆりようほん いわ 今此三界・皆是我有主君の義なり其中衆生悉是吾子父母の義
の寿命品に云く「今此三界・皆是我有主君の義なり其中衆生悉是吾子父母の義
しこんししよ しよげんなんこくどうそうもく ただわれひとりのういくごししやう
なり而今此処・多諸患難国土草木唯我一人能為救護師匠の義なり」と云えり、

さんぜじょうこう にちれん こんしさんがい
三世常恒に日蓮は今此三界の主なり、日蓮は大恩以事希有・憐愍教化利益

われらむりょう
・我等無量億劫誰能報者なるべし。

も にちれん げんざい でしなら みらい でし もんじ
若し日蓮が現在の弟子並びに未来の弟子等の中に日文字を名乗の上の字

に置かずんば自然の法罰を蒙ると知るべし、予が一期の功德は日文字に留め

置くと御説法ありし儘・日興謹んで之を記し奉る。

しょうにん いわ そうじょう にちれんちやくちやく ぐけつ ただ
聖人の言く此の相承は日蓮嫡嫡一人の口決・唯授一人の秘伝なり神

妙神妙とのたまいて留め畢んぬ。

◆一〇三 ぜんむいさんぞう ぶんえい 四十九歳御作 881P
善無畏三蔵抄 文永七年

与義浄房浄顕房 於鎌倉

ほけきょう いちだいししょうきょう かんじんはちまんほうぞう よ だいにかきょう
法華経は一代聖教の肝心八万法蔵の依りどころなり、大日経・華嚴経

はんにやきょう じんみつ もろもろけんみつ しきょう しんたん がっし りゅうぐうてんじょうじゅつぽう
・般若経・深密経等の諸の顕密の諸経は震旦・月氏・竜宮天上十方

せかい こくど しょうぶつ せつきょうこうしゃじんじゅ たいかい さんぜんだいせんせかい
世界の国土の諸仏の説教恒沙塵数なり、大海を硯の水とし三千大千世界の

草木を筆としても書き尽しがたき経経の中をも・或は此れを見・或は計り推するに法華経は最第一におはします、而るを印度等の宗日域の間にふつい
仏意を窺はざる論師・人師多くして・或は大日経は法華経に勝れたり、
・或る人人は法華経は大日経に劣れるのみならず華嚴経にも及ばず、
る人人は法華経は涅槃経・般若経・深密経等には劣る、
あり互に勝劣ある故に、
ば勝れ叶はざれば劣る、
をそしり有門をほむ余も是を以て知るべしなんと申す、
に此の法門を申しやぶる人なければおろかなる国王等深く是を信ぜさせ給
ひ田畠等を寄進して徒党あまたになりぬ、
めりと打ち思つて疑ふ事もなく過ぎ行く程に末世に彼等が論師・人師よ
り智慧賢き人出来して、
彼等が持つところの論師・人師の立義一に・或

は所依しよえの經經きやうきやうに相違そういするやう・或あるは一代いちだい聖教しやうきやうの始末しまつせんじん淺深等わきまえを并なへざる
故ゆえに專もつぱら經文きやうもんを以て責め申もうす時、各各宗宗がんその元祖げんその邪義じやぎ扶たすけ難がたき故ゆえに陳ちんし
方うしなを失あひ、或あるは疑うたがつて云いわく論師ろんし・人師にんし定きめて經論きやうろんに証文しやうもんありぬらん
我が智おほ及およばざれば扶たすけがたし、或あるは疑うたがつて云いわく我が師じは上古じやうこの賢哲けんてつな
り今・我等われらは末代まつだいの愚人ぐにんなりなんと思おもう故ゆえに有徳うとく高人をかたらひえて怨あだの
みなすなり。

しかりといへども予自他じたの偏党へんとうをなげすて論師ろんし・人師にんしの料簡りやうけんを闇さしいて
專もつぱら經文きやうもんによるに法華經ほけきやうは勝すぐれて第一だいいちにおはすと意得いこころづて侍はべるなり、法華經ほけきやう
に勝すぐれておはする御經もうありと申もうす人出来しゅつたい候こうはば思食しべし、此これは相似そうじの
經文きやうもんを見たがえて申もうすか又人の私ひそかに我きやうもんと經文きやうもんをつくりて事をぶつせつをおほしめをおほしめにおほしめよせ
て候こうか、智慧ちえおろかなる者并わきまえへずして仏説ぶつせつと号するなおほしめんと思食しすべし、
慧能えのが壇經善導ぜんどうが觀念かんねん法門ほうもん經天竺震旦てんじくしんたん日本國にほんこくに私ひそかに經を説ときをける邪師じやし

其その数多し、其その外私ひそかに經文きやうもんを作り經文きやうもんに私の言ことを加へなんとせる人ひと人ひと
是れ多し、然しかりと雖も愚者ぐしゃは是これを真まことと思おもうなり、譬たとえば天てんに日月にちがつにすぎた
る星有まなこりなんと申せば眼無まなこき者はさもやなんと思はんが如ごとし、我が師は
上古じやうこの賢哲けんてつ汝なんじは末代まつだいの愚人ぐにんなんと申す事ことをば愚おろかなる者はさもやと思おもうな
り、此ふしんの不審ふしんは今に始りたるにあらず陳隋ちんずいの代に智ち・法師ほふしと申せし小僧こそう一
人はべ侍りき後には二代てんしの天子おんしの御師てんだいちしやだいし・天台智者大師たてまつと号し奉る、此の人始はい
やしかりし時但漢土かんど五百余年さんそうの三蔵さんざう・人師にんしを破るのみならず月氏がつし・一千年
の論師ろんしをも破せしかば南北ちじんの智人等ちじん・雲ことの如く起り東西けんてつの賢哲等星ことの如く
列りて雨この如く難なんを下し風ことの如く此の義を破りしかども終ついに論師ろんし・人師にんしの
偏邪はの義を破して天台一宗てんだいの正義せいぎを立てにき、日域にちいきの桓武かんむの御宇ぎやうに最澄さいちやうと
申す小僧侍りき後には伝教大師でんきやうだいしと号し奉る、欽明きんめい已来このかたの二百余年もろもろの諸もろもろの
人師にんしの諸宗しよしゆうを破りしかは始は諸人しよにんいかりをなせしかども後には一同に

御弟子となりにき、此等の人人の難に我等が元祖は四依の論師上古の賢哲なり汝は像末の凡夫愚人なりとこそ難じ侍りしか、正像末には依るべからず実經の文に依るべきぞ人には依るべからず専ら道理に依るべきか、外道仏を難じて云く「汝は成劫の末住劫の始の愚人なり我等が本師は先代の智者二天三仙是なり」なんと申せしかども終に九十五種の外道とこそ捨てられしか。

日蓮八宗を勘へたるに法相宗・華嚴宗・三論宗等は権經に依つて
・或は実經に同じ・或は実經を下せり、是れ論師・人師より誤りぬと見えぬ、俱舎・成実の子細ある上律宗などは小乗最下の宗なり、人師より論師権大乘より実大乘經なれば真言宗・大日經等は未だ華嚴經等に及ばず何に況や涅槃・法華經等に及ぶべしや、而るに善無畏三蔵は華嚴・法華・大日經等の勝劣を判ずる時・理同事勝の謬釈を作りしより

このかたある
已来・或はおごりをなして法華経は華嚴経にも劣りなん何に況や真言経に
及ぶべしや、或は云く印・真言のなき事は法華経に諍ふべからず、或は
云く天台宗の祖師多く真言宗を勝ると云い世間の思いも真言宗勝れたる
なんめりと思へり、日蓮此の事を計るに人多く迷ふ事なれば委細にかんが
へたるなり、粗余処に注せり見るべし又志あらん人人は存生の時習い
伝ふべし人の多くおもふにはおそるべからず、又時節の久近にも依るべか
らず専ら経文と道理とに依るべし、浄土宗は曇鸞道綽善導より誤り多く
して多くの人人を邪見に入れけるを日本の法然是をうけ取つて人ごとに
念仏を信ぜしむるのみならず天下の諸宗を皆失はんとするを叡山三千の
大衆南都興福寺東大寺の八宗より是をせく故に代代の国王勅宣を下し
將軍家より御教書をなしてせけどもとどまらず、弥弥繁昌して返つて主
上・上皇・万民等にいたるまで皆信状せり。

しか ちれん とうじょう
而るに日蓮は安房の国・東条片海の石中の賤民が子なり威徳なく有徳の
ものにあらず、なににつけてか南都北嶺の^{なんとほくりょう}とどめがたき天子の虎牙の制止^{せいし}
に叶はざる念仏^{ねんぶつ}をふせぐべきとは思へども^{きょうもん}経文を^{きつきょう}龜鏡と定め天台・伝教^{てんだい だんきやう}
^{しなん}の指南を手ににぎりて^{けんちやう}建長五年より今年文永七年に至るまで十七年が間^{ぶんえい いた}
是を責めたるに日本国の念仏大体留り了ぬ眼前に是れ見えたり、又口にす^{にほんこく ねんぶつ だいたい 留り 了ぬ 眼前に 是れ 見えたり、 又口にす}
てぬ人人はあれども心計りは念仏は生死をはなるる道にはあらざりけると^{ひとびと ねんぶつ しょうじ}
思ふ、^{ぜんしゅう}禅宗以て是くの如し一を以て万を知れ真言等の^{かくのごと}諸宗の誤りをだに^{しんこん しょうしゅう}
留めん事手ににぎりておぼゆるなり、況や当世の高僧真言師等は其の智牛馬^{とうせ こうそうしんこんし}
にもおとり螢火の光にもしかず只死せるものの手に弓^{けいか ただ}箭をゆひつけねごと^{きゅうせん}
するものに物をとふが如し、手に印を結び口に真言は誦すれども其の心中^{こと しんこん}
には義理を弁^{ぎり わきまう}つる事なし、^{けつくまんしん}結句慢心は山の如く高く欲心は海よりも深し、^{よくしん}
是は皆自ら^{みなみずか きやうろん}経論の勝劣に迷ふより事起り祖師の誤りをたださざるによる^{しょうれつ まよい そし あやま}

なり、所詮しよせん智者は八万法蔵はちまんほうぞうをも習ふべし十二部経をも学すべし、末代まつだい濁悪じよくあく

世の愚人ぐにんは念仏等ねんぶつの難行・易行等なんぎよう いぎようをば抛なげうつて一向いっこうに法華經ほけききやうの題目だいもくを南無なむ

妙法蓮華經みやうほうれんげきやうと唱となえ給たまうべし、日輪東方にちりんとうほうの空そらに出いでさせ給たまへば南浮みなうの空そら皆みな

明あきらかなり大光たかを備たへ給たまへる故ゆゑなり、螢火けいかは未いまだ国土こくどを照てさず宝珠ほうしゆは懷かい中ちゆう

に持もぬれば万物みな皆みなふらさずと云いふ事ことなし、瓦石がしやくは財さいをふらさず念仏等ねんぶつは

法華經ほけききやうの題目だいもくに對たいすれば瓦石がしやくと宝珠ほうしゆと螢火けいかと日光にっこうとの如ごとし。

我等われらが昧まなこき眼まなこを以もつて螢火けいかの光ひかりを得えて物の色いろを弁わきまふべしや、旁かたがた凡夫ぼんぶの

叶かないがたき法はふは念仏ねんぶつ・真言等しんごんの小乘しょうじやう權教ごんきやうなり、又また我が師し釈迦しゃか如来にょらいは一代いちだい

聖教しやうきやう乃至しやうきやう八万法蔵はちまんほうぞうの説者しやばなり、此この娑婆無仏しやばの世よの最先しやうせんに出いでさせ給たまい

て一切衆生いっさいしゆじやうの眼目がんもくを開ひらき給たまふ御仏みほとけなり、東西十方じゆうっぽうの諸仏しよぶつ・菩薩ぼさつも皆みな此この

仏ぶつの教きやうなるべし、譬たとえば皇帝てうてい已前いぜんは人父にんふをしらずして畜生ちくしやうの如ごとし、堯王ぎやうおう

已前いぜんは四季ききを弁わきまへず牛馬ぎゆうばの癡おろかなるに同じおなじかりき、仏世ぶつじに出いでさせ給たまはざり

しには比丘比丘尼の二衆もなく只男女二人にて候いき、今比丘・比丘尼の
真言師等大日如来を御本尊と定めて釈迦如来を下し念佛者等が阿弥陀仏を
一向に持つて釈迦如来を抛てたるも教主釈尊の比丘・比丘尼なり元祖が
誤を伝え来るなるべし。

此の釈迦如来は三の故ましまして他仏にかはらせ給ひて娑婆世界の一切

衆生の有縁の仏となり給ふ、一には此の娑婆世界の一切衆生の世尊にて

・おはします、阿弥陀仏は此の国の大王にはあらず釈迦仏は譬えば我が国

の主上のごとし先ず此の国の大王を敬つて後に他国の王をば敬ふべし、

天照太神・正八幡宮等は我が国の本主なり迹化の後神と顕れさせ給ふ、

此の神にそむく人・此の国の主となるべからず、されば天照太神をば鏡に

うつし奉りて内侍所と号す、八幡大菩薩に勅使有つて物申しあはさせ給い

き、大覚世尊は我等が尊主なり先づ御本尊と定むべし、二には釈迦如来は

娑婆世界の一切衆生の父母なり、先づ我が父母を孝し後に他人の父母には
及ぼすべし、例せば周の武王は父の形を木像に造つて車にのせて戦の大將
と定めて天感を蒙り殷の紂王をうつ、舜王は父の眼の盲たるをなげきて
涙をながし手をもつてのごひしかば本のごとく眼あきにけり、此の仏も又
かくのごとくわれらしゆじようまなこかいぶつちけん
是くの如く我等衆生の眼をば開仏知見とは開き給いしか、いまだ他仏は
開き給はず、三には此の仏は娑婆世界の一切衆生の本師なり、此の仏は賢
劫第九人壽百歳の時中天竺淨飯大王の御子十九にして出家し三十にして
成道し五十余年が間・一代聖教を説き八十にして御入滅舍利を留めて
一切衆生を正像末に救ひ給ふ、阿弥陀如来薬師・仏大日等は他土の仏に
して此の世界の世尊にてはまします、此の娑婆世界は十方世界の中の
最下の処譬えば此の国土の中の獄門の如し、十方世界の中の十悪・五逆
誹謗正法の重罪逆罪の者を諸仏如来擯出し給いしを釈迦如来此の土にあ

つめ給ふ、三悪並びに無間・大城に堕ちて其の苦をつぐのひて人中天上
には生れたれども其の罪の余残ありてややもすれば正法を謗じ智者を罵り
罪つくりやすし、例せば身子は阿羅漢なれども瞋恚のけしきあり、畢陵は
見思を断ぜしかども慢心の形みゆ、難陀は姪欲を断じても女人に交る心あ
り、煩惱を断じたれども余残あり何に況や凡夫にをいてをや、されば釈迦
如来の御名をば能忍と名けて此の土に入り給うに一切衆生の誹謗をとがめ
ずよく忍び給ふ故なり、此等の秘術は他仏のかけ給へるところなり、
阿弥陀仏等の諸仏・世尊悲願をおこさせ給いて心にははぢをおぼしめして
還つて此の界にかよひ四十八願十二大願などは起させ給ふなるべし、
観世音等の他土の菩薩も亦復是くの如し、仏には常平等の時は一切諸仏は
差別なけれども常差別の時は各各に十方世界に土をしめて有縁無縁を分ち
給ふ、大通智勝仏の十六王子十方に土をしめて一一に我が弟子を救ひ給ふ、

其の中に釈迦如来は此土に当り給ふ我等衆生も又生を娑婆世界に受けぬ、
いかにも釈迦如来の教化をばはなるべからず而りといへども人皆是を知ら
ず委く尋ねあきらめば唯我一人能為救護と申して釈迦如来の御手を離るべ
からず、而れば此の土の一切衆生・生死を厭ひ御本尊を崇めんとおぼしめ
さば必ず先ず釈尊を木画の像に顕わして御本尊と定めさせ給いて其の後力
おはしまさば弥陀等の他仏にも及ぶべし。

然るを当世聖行なき此の土の人人の仏をつくりかかせ給うに先ず他仏を
さきとするは其の仏の御本意にも釈迦如来の御本意にも叶ふべからざる上
世間の礼儀にもはづれて候、されば優填大王の赤梅檀いまだ他仏をば・き
ざませ給はず、千塔王の画像も釈迦如来なり、而るを諸大乘經による人人
・我が所依の經經を諸經に勝れたりと思ふ故に教主釈尊をば次さまに
し給ふ、一切の真言師は大日經は諸經に勝れたりと思ふ故に此の經に詮

とする大日如来を我等が有縁の仏と思ひ念仏者等は觀經等を信ずる故に
あみだぶつ　しゃばうえん　だいにちによらい　われら　うえん　ねんぶつ　かんきよう
阿弥陀仏を娑婆有縁の仏と思ふ、当世はことに善導・法然等が邪義を正義
じようど　さんぶきよう　しなん　とうせ　ぜんどう　ほうねん　じゃぎ　せいぎ
と思ひて浄土の三部經を指南とする故に十造る寺は八九は阿弥陀仏を本尊
ざいけしゅつけ　とす、在家出家一家十家百家千家にいたるまで持仏堂の仏は阿弥陀なり、
そ　もくえ　其の外木画の像一家に千仏万仏まします大旨は阿弥陀仏なり、而るに当世
ちしゃ　ひとびとこれ　むね　あみだぶつ　しか　とうせ
の智者とおぼしき人人是を見てわざはひとは思はずして我が意に相叶ふ
ゆえ　ただ　さんたん　ただいっとうあくにん　いんが　どうり　わきまえ　いちぶつ
故に只称美讚歎の心のみあり、只一向惡人にして因果の道理をも弁へず一仏
をも持たざる者は還つて失なきへんもありぬべし、我等が父母世尊は主師親
さんとく　いっさい　ひんずい　われら　ただわれひとりのういくこ
の三徳を備えて一切の仏に擯出せられたる我等を唯我一人能為救護とはげ
ませ給ふ、其の恩大海よりも深し其の恩大地よりも厚し其の恩虚空よりも
たま　そ　たいかい　だいち　そ　こくう
広し、二つの眼をぬいて仏前に空の星の数備ふとも身の皮を剥いで百千万
ふつぜん　ふつぜん　せんまん　ふつぜん　せんまん
天井にはるとも涙を闕伽の水として千万億劫仏前に花を備ふとも身の肉血

を無量劫仏前に山の如く積み大海の如く湛ふとも此の仏の一分の御恩を報
じ尽しがたし。

而るを当世の僻見の学者等設ひ八万法蔵を極め十二部經を諳んじ大小
の戒品を堅く持ち給ふ智者なりとも此の道理に背かば惡道を免るべからず
と思食すべし、例せば善無畏三蔵は真言宗の元祖烏菴奈国の大王・仏種王
の太子なり、教主釈尊は十九にして出家し給いき此の三蔵は十三にして
位を捨て月氏七十箇国九万里を歩き回りて諸經諸論諸宗を習い伝へ北
天竺金粟王の塔の下にして天に仰ぎ祈請を致し給えるに虚空の中に大日
如来を中央として胎蔵界の曼荼羅顕れさせ給ふ、慈悲の余り此の正法を迦
土に弘めんと思食して漢土に入り給ひ玄宗皇帝に秘法を授け奉り旱魃の時
雨の祈をし給いしかば三日が内に天より雨ふりしなり、此の三蔵は千二百
余尊の種子尊形三摩耶一事もくもりなし、当世の東寺等の一切の真言宗

一人も此の御弟子に非るはなし、而るに此の三蔵一時に頓死ありき数多の
獄卒来つて鉄繩七すぢ懸けたてまつり閻魔王宮に至る此の事第一の不審な
り、いかなる罪あつて此の責に値い給ひけるやらん、今生は十悪は有り
もやすらん五逆罪は造らず過去を尋めれば大国の王となり給ふ事を勘うる
に十善戒を堅く持ち五百の仏陀に仕へ給ふなり何の罪かあらん、其の上十
三にして位を捨て出家し給いき閻浮第一の菩提心なるべし、過去・現在の
軽重の罪も滅すらん其の上月氏に流布する所の經論諸宗を習い極め給い
しなり何の罪か消えざらん、又真言密教は他に異なる法なるべし一印一
真言なれども手に結び口に誦すれば三世の重罪も滅せずと云うことなし、
無量俱低劫の間作る所の衆の罪障も此の曼荼羅を見れば一時に皆消滅す
とこそ申し候へ、況や此の三蔵は千二百余尊の印・真言を諳に浮べ
そくしんじようぶつ かんどうきよう がか かんちよう おんときだいにちかくおう たまい いかん
即身成仏の觀道鏡に懸り両部灌頂の御時大日覺王となり給いき、如何に

して閻魔の責に豫り給いけるやらん、日蓮は顕密二道の中に勝れさせ給い
て我等易と生死を離るべき教に入らんとはい候いて真言の秘教をあらあ
ら習ひ此の事を尋ね勘うるに一人として答をする人なし、此の人惡道を免れ
ずば当世の一切の真言並びに一印一真言の道俗三惡道の罪を免るべきや。
日蓮此の事を委く勘うるに二つの失有つて閻魔王の責に予り給へり、一
つには大日經は法華經に劣るのみに非ず涅槃經・華嚴經・般若經等にも
及ばざる經にて候を法華經に勝れたりとする謗法の失なり、二つには大日
如来は釈尊の分身なり而るを大日如来は教主釈尊に勝れたりと思ひし
僻見なり、此の謗法の罪は無量劫の間・千二百余尊の法を行ずとも惡道を
免るべからず、此の三藏此の失免れ難き故に諸尊の印・真言を作せども叶
はざりしかば法華經第二譬喻品の今此三界・皆是我有其中衆生悉是吾子
而今此処・多諸患難唯我一人能為救護の文を唱へて鉄の繩を免れさせ

たまい 給いき、しか而るに善無畏ぜんむい已後の真言師等は大日経は一切経に勝るるのみに
あら ほけきようほけきよう ちようかちようか
非ず法華経に超過せり、ある或は法華経は華嚴経にも劣るなんと申す人もあ
これら ことり此等は人は異なれども其の謗法の罪は同じきか、又善無畏三藏法華経と
だいにちきよう だいじ大日経と大事とすべしと深理をば同ぜさせ給いしかども印と真言とは
ほけきようほけきよう だいにちきようだいにちきよう びやっけんばか僻見計りなり、其の已後の真言師
法華経は大日経に劣りけるとおぼせし
だいじ等は大事の理をも法華経は劣れりと思へり、印・真言は又申すに及ばず謗法
つみはるかの罪遥にかさみたり、閻魔えんまの責にて墮獄ごくの苦を延ぶべしとも見えず直に阿鼻
の炎をや招くらん、まね大日経には本一念三千の深理なし此の理は法華経に限
るべし、ぜんむいさんそうてんだいだいし善無畏三藏天台大師の法華経の深理を読み出でさせ給いしを盗み
取つて大日経に入れ法華経の莊嚴として説かれて候大日経の印・真言を
だいにちきよう取つて大日経に入れ法華経の莊嚴として説かれて候大日経の印・真言を
彼の経の得分と思へり、理も同じと申すは僻見なり真言・印契を得分と思
ふも邪見なり、じゃけん譬えば人の下人の六根は主の物なるべし而るを我が財と思

ふ故に多くの失出で来る、此の譬を似て諸経を解るべし劣る経に説く法門は勝れたる経の得分と成るべきなり。

而るを日蓮は安房の国・東条の郷清澄山の住人なり、幼少の時より虚空蔵菩薩に願を立てて云く日本第一の智者となし給へと云云、虚空蔵菩薩眼前に高僧とならせ給いて明星の如くなる智慧の宝珠を授けさせ給いき、其のしるしにや日本国の八宗並びに禅宗・念仏宗等の大綱粗伺ひ侍りぬ、殊には建長五年の比より今文永七年に至るまで此の十六七年の間禅宗と念仏宗とを難ずる故に禅宗・念仏宗の学者蜂の如く起り雲の如く集る、是をつむる事一言二言には過ぎず結句は天台・真言等の学者自宗の廃立を習ひ失いて我が心と他宗に同じ在家の信をなせる事なれば彼の邪見の宗を扶けんが為に天台・真言は念仏宗・禅宗に等しと料簡しなして日蓮を破するなり、此れは日蓮を破する様なれども我と天台・真言等を失ふ者な

るべし能く能く恥すべき事なり。

此の諸經諸論諸宗の失を弁うる事は虚空蔵菩薩の御利生本師道善御房

の御恩なるべし。 亀魚すら恩を報ずる事あり何に況や人倫をや、此の恩を

報ぜんが為に清澄山に於て仏法を弘め道善御房を導き奉らんと欲す、而る

に此の人愚癡におはする上念仏者なり三惡道を免るべしとも見え、而も

又日蓮が教訓を用ふべき人にあらず然れども文永元年十一月十四日西条華

房の僧坊にして見参に入りし時・彼の人の云く我智慧なければ請用の望も

なし、年老いていらへなければ念仏の名僧をも立てず世間に弘まる事なれ

ば唯南無阿弥陀仏と申す計りなり、又我が心より起こらざれども事の縁有

つて阿弥陀仏を五体まで作り奉る是れ又過去の宿習なるべし、此の科に

依つて地獄に墮つべきや等云云、爾時に日蓮意に念はく別して中違ひまい

らする事無けれども東条左衛門入道蓮智が事に依つて此の十余年の間は

見奉らず但し中不和なるが如し、穩便の義を存じおだやかに申す事こそ礼
儀なれとは思ひしかども生死界の習ひ老少不定なり又二度見参の事難かる
べし、此の人の兄道義房義尚此の人に向つて無間地獄に墮つべき人と申し
て有りしが臨終思う様にもましまさざりけるやらん、此の人も又しかるべ
しと哀れに思ひし故に思い切つて強強に申したりき、阿弥陀仏を五体作り
給へるは五度無間地獄に墮ち給ふべし其の故は正直捨方便の法華經に釈迦
如来は我等が親父阿弥陀仏は伯父と説かせ給ふ、我が伯父をば五体まで作
り供養せさせ給いて親父をば一体も造り給はざりけるは豈不孝の人に非ず
や、中中山人海人などが東西をしらず一善をも修せざる者は還つて罪淺
き者なるべし、当世の道心者が後世を願ふとも法華經・釈迦仏をば打ち捨
て阿弥陀仏念仏などを念念に捨て申さざるはいかがあるべかるらん、打
ち見る処は善人とは見えたれども親を捨てて他人につく失免るべしとは見

えず、一向悪人はいまだ仏法に帰せず釈迦仏を捨て奉る失も見えず縁有つ
て信ずる辺もや有らんずらん、善導・法然並びに当世の学者等が邪義に就い
て阿弥陀仏を本尊として一向に念仏を申す人人は多生曠劫をふるとも此の
邪見を翻へして釈迦仏・法華經に歸すべしとは見えず、されば雙林最後
の涅槃經に十悪・五逆よりも過ぎておそろしき者を出ださせ給ふに謗法
闡提と申して二百五十戒を持ち三衣一鉢を身に纏へる智者共の中にこそ
有るべしと見え侍れとこまごまと申して候いしかば此の人もこころえずげ
に思いて・おはしき、傍座の人人もこころえずげにをもはれしかども其の
後承りしに法華經を持たるるの由承りしかば此の人邪見を翻し給ふか
善人に成り給いぬと悦び思ひ候処に又此の釈迦仏を造らせ給う事申す計り
なし、当座には強なる様に有りしかども法華經の文のままに説き候いしか
ばかうおれさせ給へり、忠言耳に逆らい良薬口に苦しと申す事は是なり。

今既に日蓮・師の恩を報ず定めて仏神・納受し給はんか、各各此の由を

道善房に申し聞かせ給ふべし、仮令強言なれども人をたすくれば実語・☆語

なるべし、設ひ・☆語なれども人を損ずるは妄語・強言なり、当世・学匠

等の法門は☆語・実語と人人は思食したれども皆強言妄語なり、仏の本意

たる法華經に背く故なるべし、日蓮が念仏申す者は無間地獄に墮つべし

禪宗・真言宗も又謬の宗なりなんと申し候は強言とは思食すとも実語

・語なるべし、例せば此の道善御房の法華經を迎へ釈迦仏を造らせ給う事

は日蓮が強言より起る、日本国の一切衆生も亦復是くの如し、当世此の十

余年已前は一向念仏者にて候いしが十人が二人は一向に南無妙法蓮華經

と唱へ二三人は両方になり、又一向念仏申す人も疑をなす故に心中に

法華經を信じ又釈迦仏を書き造り奉る、是れ亦日蓮が強言より起る、譬え

ば梅檀は伊蘭より生じ蓮華は泥より出でたり而るに念仏は無間地獄に墮つ

ると申せば当世牛馬の如くなる智者どもが日蓮が法門を仮染にも毀るは
糞犬が師子王をほへ癡猿が帝釈を笑ふに似たり。

ぶんえい
文永七年

にちれん
日蓮

かおう
花押

ほう
義浄房浄顕房

◆一〇四 佐渡御勘気抄

ぶんえい
文永八年十月 五十歳御作

891P

ほう
与円浄房 於佐渡

九月十二日に御勘気を蒙て今年十月十日佐渡の国へまかり候なり、本よ

り学文し候し事は仏教をきはめて仏になり恩ある人をも・たすけんと思

ふ、仏になる道は必ず身命をすつるほどの事ありてこそ仏にはなり候らめ

と・をしはからる、既に経文のごとく悪口・罵詈・刀杖・瓦礫・

数数見擯出と説かれて・かかるめに値い候こそ法華經をよむにて候らめと、
いよいよ信心もおこり後生もたのもしく候、死して候はば必ず各各をもた
すけたてまつるべし、天竺に師子尊者と申せし人は檀弥羅王に頸をはねら
れ提婆菩薩は外道につきころさる、漢土に竺の道生と申せし人は蘇山と申す
所へながさる、法道三蔵は面にかなを・やかれて江南と申す所へながされ
き、是れ皆法華經のとく仏法のゆへなり、日蓮は日本国・東夷・東条・
安房の国・海辺の旃陀羅が子なり、いたづらに・くちん身を法華經の御故に
捨てまいらせん事あに石に金を・かふるにあらずや、各各なげかせ給うべ
からず、道善の御房にも・かう申しきかせまいらせ給うべし、領家の尼御前
へも御ふみと存じ候へども先かかる身のふみなれば・なつかしやと・おぼ
さざるらんと申しぬると便宜あらば各各御物語り申させ給い候へ。

十月 日

日蓮花押

御法門ほうもんの事委くわしく承そうらはり候おわい畢おほんぬ、法華經ほけきようの功德くどくと申もうすは唯ゆい仏ぶつ与よ仏ぶつの

きようかい じゅつほうふんじん

境界・十方分身の智恵も及ぶか及ばざるかの内証ないしょうなり、されば天台大師てんだいだいし

も妙の一字をば妙とは妙は不可思議ふかしぎと名なくと釈しゃくし給たまいて候さきざきなるぞ前

ごぞんじ ごと

御存知ごぞんじの如ごとし、然しかれども此の經に於て重重の修行分しゅぎようれたり天台・妙樂・

でんぎよう

伝教等計りしらせ給たまう法門ほうもんなり、就中なかなんずく伝教大師・天台の後身ごんしんにて渡わたら

たま

せ給へども人の不審ふしんを晴さんとや思し食しけん大唐へ決をつかはし給たまふ事

たまた

多し、されば今經こんきようの所詮しよせんは十界互具じゅつかいごぐ・百界千如ひゃつかいせんによ・一念三千いちねんさんぜんと云ふ事こそ

だいじ

ゆゆしき大事だいじにては候なれ、此の法門ほうもんは摩訶止觀まかしかんと申す文にしるされて侯、

じゅりようほん

次に寿量品の法門ほうもんは日蓮にちれんが身に取つてたのみあることぞかし、天台・伝教

ほほ

等も粗しらせ給へども言に出して宣のべべ給はず竜樹りゅうじゆ・天親てんじん等も亦是またくの如

じゅりようほん

し、寿量品の自我偈じがげに云く「一心いっしんに仏を見たてまつらんと欲して自ら身命みづか しんみよう

を惜おししまず」云云、日蓮にちれんが己こ心の仏界ぶつがいを此この文ぶんに依よつて顕あはすなり、其そのの故ゆえ

は寿量品じゆりやうぽんの事ことの一念三千いちねんさんぜんの三大秘法ひほうを成就じやうじゆせる事こと・此この經文きやうもんなり秘ひす

可べし秘べす可べし、叡山えいざんの大師だいし・渡唐ととうして此この文ぶんの点てんを相伝そうでんし給たまう処ところなり、一

とは一道清淨しやうじやうの義心ぎしんとは諸法しよほうなり、されば天台大師てんだいだいし心の字じを釈しゃくして云いく

「一月三星・心果清淨しやうじやう」云云、日蓮にちれん云いく一いつとは妙めうなり心しんとは法ぽうなり欲よくと

は蓮れんなり見みとは華けなり仏ぶつとは經きやうなり、此この五字ごじを弘通くわうつうせんには不ふ自惜おしんみやう身命しんめい

是これなり、一心いっしんに仏ぶつを見る心しんを一いつにして仏ぶつを見る一心いっしんを見れば仏ぶつなり、無作むさ

の三身さんじんの仏果ぶつかを成就じやうじゆせん事は恐おそくは天台てんだい・伝教でんぎやうにも越りへ竜樹りやうじゆ・迦葉かしようにも

勝すぐれたり、相構さうかうへ相構さうかうへて心の師しとはなるとも心を師しとすべからずと仏ぶつは

記しるし給たまひしなり、法華經ほけきやうの御為ために身みをも捨すて命めいをも惜おししまざれと強情きやうじやうに申まを

せしは是これなり、南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやう・南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやう。

文永十年五月二十八日

日蓮にちれん

花押 かおう

義浄房御返事 ほうごへんじ

◆一〇六 清澄寺大衆中 きよすみでらたいしゅう 建治二年正月 五十五歳御作 893p

新春の慶賀^じ自他^じ幸甚^{いたこうじんこうじん}幸甚^{こそ}、去年来らず如何^{いかん}定めて子細^{しさい}有らんか、抑^{そもそもさんけい}参詣^{じんぎ}を企て候わば伊勢公の御房に十住心論・秘藏宝鑑二教論等の真言の疏^{しよ}を借用候へ、是^{かくのごと}の如きは真言師蜂起の故に之^{しんごんしほうき}を申す、又止観の第一第二御隨身候へ東春輔正記^{ふしようき}な^{ずいしん}んどや候らん、円智房の御弟子に観智房の持ちて候なる宗要集^{ようしゅう}かしたび候へ、そのみならずふみの候由も人人申し候いしなり
早早に返すべきのよし申させ給へ、今年^{こと}は殊^{ぶつぼう}に仏法の邪正^{じゃせい}たださるべき年か浄願の御房義城房等^{ごぼう}には申し給うべし、日蓮^{にちれん}が度度殺害^{たびたびさがい}せられんとし並びに二度まで流罪^{るさい}せられ頸を刎られんとせし事は別に世間の失^{せけん}に候はず、生身の虚空蔵菩薩より大智慧^{ちえ}を給わりし事ありき、日本第一の智者となし

給へと申せし事を不便とや思し食しけん明星の如くなる大宝珠を給いて右
の袖にうけとり候いし故に一切經を見候いしかば八宗並びに一切經の
勝劣粗是を知りぬ、其の上真言宗は法華經を失う宗なり、是は大事なり
先ず序分に禪宗と念仏宗の僻見を責めて見んと思ふ、其の故は月氏・
漢土の仏法の邪正は且らく之を置く日本国の法華經の正義を失うて一人も
なく人の惡道に墮つる事は真言宗が影の身に隨うがごとく山山・寺寺ごと
に法華宗に真言宗をあひそひて如法の法華經に十八道をそへ懺法に阿弥陀
經を加へ天台宗の學者の灌頂をして真言宗を正とし法華經を傍とせし程
に、真言經と申すは爾前權教の内の華嚴・般若にも劣れるを慈覺・弘法こ
れに迷惑して、或は法華經に同じ、或は勝れたりなど申して、仏を開眼
するにも仏眼大日の印・真言をもつて開眼供養するゆへに日本国の木画の
諸像皆無魂無眼の者となりぬ、結句は天魔入り替つて檀那をほろぼす佛像

となりぬ王法の尽きんとするこれなり、此の惡真言かまくらに來りて又
にほんこく
日本國をほろぼさんとす。

其上禪宗・淨土宗などと申すは又いうばかりなき僻見の者なり、

此れを申さば必ず日蓮が命と成るべしと存知せしかども虚空藏菩薩の御恩

をほうぜんがために建長五年四月二十八日安房の國・東条の郷清澄寺

道善の房持仏堂の南面にして淨円房と申す者並びに少少の大衆に・これ

を申しはじめて其の後二十余年が間退轉なく申す、或は所を追ひ出され

・或は流罪等、昔は聞く不輕菩薩の杖・木等を今は見る日蓮が刀劍に當る事

を、日本國の有智・無智上下万人の云く日蓮法師は古の論師・人師大師先徳

にすぐるべからずと、日蓮この不審をはらさんがために正嘉文永の大地震

大長星を見て勘えて云く我が朝に二つの大難あるべし所謂自界叛逆難・

他國侵逼難なり、自界は鎌倉に権の大夫殿御子孫どううち出来すべし、

他国侵逼難は四方よりあるべし、其の中に西よりつよくせむべし、是れ
偏に仏法が一国挙りて邪なるゆへに梵天帝釈の他国に仰せつけてせめら
るるなるべし。

日蓮をだに用いぬ程ならば將門・純友・貞任・利仁・田村のやうなる

將軍百千人ありとも叶ふべからず、これまことならずば真言と念仏等の

僻見をば信ずべしと申しひろめ候いき、就中清澄山の大衆は日蓮を父母

にも三宝にもをもひをとさせ給はば今生には貧窮の乞者とならせ給ひ後生

には無間地獄に堕ちさせ給うべし故・いかんとなれば東条左衛門景信が

悪人として清澄のかいしし等をかりとり房房の法師等を念佛者の所従にし

・なんとせしに日蓮敵をなして領家のかたうどとなり清澄・二間の二箇の

寺東条が方につくならば日蓮・法華經をすてんと、せいじやうの起請をか

いて日蓮が御本尊の手にゆいつけていのりて一年が内に両寺は東条が手を

はなれ候いしなり、此の事は虚空蔵菩薩もいかでかすてさせ給うべき、
大衆も日蓮を心へずに・をもはれん人人は天にすてられ・たてまつらざる
べしや、かう申せば愚癡の者は我をのろうと申すべし後生に無間地獄に墮ち
んが不便なればなり。

領家の尼ごぜんは女人なり愚癡なれば人人のいひをどせば・さこそとま
しまし候らめ、されども恩をしらぬ人となりて後生に惡道に墮ちさせ給は
ん事こそ不便に候へども又一つには日蓮が父母等に恩をかほらせたる人な
れば・いかにしても後生をたすけたてまつらんと・こそいのり候へ、法華經
と申す御經は別の事も候はず我は過去五百塵点劫より先の仏なり、又舍利弗
等は未来に仏になるべしと、これを信ぜざらん者は無間地獄に墮つべし、
我のみかう申すにはあらず多宝仏も証明し十方の諸仏も舌をいだしてか
う候、地涌千界・文殊・觀音・梵天・帝釈・日月・四天・十羅刹・法華經

の行者ぎようじゃを守護しゆごし給たまはんと説たまかれたり、されば仏ぶつになる道みちは別のやうなしかこ
過去の事みらい未来もつの事を申しあてて候こうがまことの法華經ほけきやうにては候こうなり。

日蓮にちれんはいまだ・つくしを見ずえぞしらず、一切いっさいきやう經をもつて勘かんへて候こうへば

・すでに値あいぬ、もし・しからば各各ふちおん不知恩ふちおんの人なれば無間地獄むげんじごくに墮おち給たまう

べしと申し候こうはたがひ候こうべきか、今はよし後ごをござらんぜよ日本国にほんこくは当時とうじの

ゆき対馬つしまのやうになり候こうはんずるなり、其そのの時安房あわの国にむこが寄せて責せ

め候こうはん時・日蓮房にちれんぼうの申もうせし事の合あうたりと申もうすは偏執へんししゅうの法師等ほっしが口くちすく

めて無間地獄むげんじごくに墮おちん事不便ふびんなり不便ふびんなり。

正月十一日

にちれんかおう
日蓮花押

安房あわの国清澄寺きよすみでら大衆たいしゅう中

このふみはさど殿ごぼうと・すけあさり御房ごぼうと虚空蔵こくうの御前ごんまえにして大衆たいしゅうごとに・

よみきかせ給たまへ。

◆一〇七

聖密房御書

建治三年

五十六歳御作

896P

大日経だいにちきようをば善無畏ぜんむい・不空ふくう・金剛智等こんこうちの義いに云く

ぜんむい

不空ふくう・金剛智等こんこうちの義いに云く大日経だいにちきようの理りと法華経ほけきようの理りとは同じ事なり但印しんこんと真言まげんとが法華経ほけきようは劣りようなり」と立てたり、良りよう☆大日経だいにちきようの理りと法華経ほけきようの理りとは同じ事なり但印しんこんと真言まげんとが法華経ほけきようは劣りようなり」と立てたり、良☆和尙わじよう・広修こうしゆう・維ゆい☆なんと申もうす人は大日経だいにちきようは華嚴経けこんきよう・法華経ほけきよう・涅槃経ねはんきよう等に

わじよう

こうしゆう

ゆい

だいにちきよう

けこんきよう

ほけきよう

ねはんきよう

等に

は及およばず但方等部ほうとうぶの経きようなるべし、日本にほんの弘法大師こうぼうだいし云く「法華経ほけきようは猶な華嚴経けこんきよう

およ

ほうとうぶ

にほん

こうぼうだいし

ほけきよう

な

等に劣おとれりまして大日経だいにちきようには及およべからず」等云云、又云く「法華経ほけきようは釈迦しゃか

おと

だいにちきよう

に及およべからず」等云云、又云く

ほけきよう

しゃか

の説だいにちきよう・大日経だいにちきようは大日如来だいにちの説きようしゆ・教主きようしゆ既にことなり・又釈迦しゃか如来だいにちは大日

だいにちきよう

だいにち

きようしゆ

にことなり

しゃか

だいにち

如来にの御使おんつかいとして顕教けんきようをとき給たまうこれは密教みつきようの初門じよもんなるべし」・或あるは

に

おんつかい

けんきよう

たま

みつきよう

じよもん

ある

云く「法華経ほけきようの肝心かんじんたる寿量品じゆりやうぼんの仏ぶつは顕教けんきようの中にしては仏ぶつなれども密教みつきよう

い

ほけきよう

かんじん

じゆりやうぼん

けんきよう

の中にしては

対たいすれば具縛くばくの凡夫ほんぶなり」と云云。

くばく

ほんぶ

と云云。

にちれんかんが

い

だいにちきよう

しんやく

とう

げんそうこうてい

おんときかいげん

てんじく

日蓮にちれん勘かんえて云く大日経だいにちきようは新詠しんやくの経唐きやうの玄宗皇帝げんそうこうていの御時おんとき開元四年かいげんしんに天竺てんじくの

ぜんむいさんそう

い

だいにちきよう

しんやく

きやう

げんそうこうてい

おんときかいげん

てんじく

善無畏ぜんむい三蔵さんそうもて来る、法華経ほけきようは旧詠きうやくの経きやう・後秦こうしんの御宇ぎやうに羅什らじゆう三蔵さんそうもて来る

ぜんむいさんそう

い

ほけきよう

きやく

きやう

こうしん

ぎやう

らじゆうさんそう

もて来る

其その中ちゆうげん間げん三百余年なり、法華經ほけきやう亘わたつて後へ百余年を経て天台智者大師・教門きやうもん
には五時四教しきやうを立てて上きやう五百余年の学者の教相きやうそうをやぶり觀門かんもんには一念三千いちねんさんぜん
ほうもんの法門ほうもんをさとりて始めて法華經ほけきやうの理を得たり、天台大師てんだいだいし已前いぜんの三論宗さんろんしゅう・
いこ已後の法相宗ほうそうしゅうには八界じゅうかいを立て十界いちねんさんぜんを論ぜず一念三千ほうもんの法門ほうもんをば立つべき
やうなし、華嚴宗けこんしゅうは天台てんだい・已前いぜんには南北の諸師しよしけこんきやう華嚴經ほけきやうに勝すぐれたり
とは申しけれども華嚴宗けこんしゅうの名は候もうはず、唐とうの代こころに高宗きさきの後そくてんこうごう・則すなはち天后そくてんこうごうと
申もうす人の御時おんとき・法藏法師ほうそうほつし・澄觀ちやうかんなど申もうす人・華嚴宗けこんしゅうの名を立てたり、此
の宗きやうそうは教相かんもんに五教を立て觀門かんもんには十玄・六相ちやうかんなど申もうす法門ほうもんなり、をびた
だしきやうに・みへたりしかども澄觀ちやうかんは天台てんだいをはするやうにてなを天台てんだいの
一念三千いちねんさんぜんの法門ほうもんをかりとりて我が經しんによくの心えし如工画師しんによくの文の心とす、これは
華嚴宗けこんしゅうは天台てんだいに落ちたりといふべきか又一念三千いちねんさんぜんの法門ほうもんを盗みとりたりと
いふべきか、澄觀ちやうかんは持戒じかいの人・大小だいしやうの戒いちじんを一塵いちじんをもやぶらざれども

一念三千の法門をば・ぬすみとれり・よくよく口伝あるべし、真言宗の名

は天竺にあり・やいなや大なる不審なるべし、但真言經にてありけるを

善無畏等の宗の名を漢土にして付けたりけるか・よくよくしるべし、就中

善無畏等・法華經と大日經との勝劣をはんずるに理同事勝の釈をばつく

りて一念三千の理は法華經・大日經これ同じなんといへども印と真言とが

法華經には無ければ事法は大日經に劣れり、事相かけぬれば事理俱密もな

しと存ぜり、今・日本国及び諸宗の学者等並びにことに用ゆべからざる

天台宗共にこの義をゆるせり例せば諸宗の人人をばそねめども一同に

弥陀の名をとなへて自宗の本尊をすてたるがごとし天台宗の人人は一同に

真言宗に落ちたる者なり。

日蓮・理のゆくところを不審して云く善無畏三蔵の法華經と大日經とを

理は同じく事は勝れたりと立つるは天台大師の始めて立て給へる一念三千

だいにちきよう

の理を今大日経にとり入れて同じと自由に判ずる条ゆるさるべしや、例せば先に人丸がほのぼのと・あかしのうらの・あさぎりに・しまかくれゆく・ふねをしぞをもう・とよめるを、紀のしくばう源みなもとのしたがうなんどが判じて云くいわ「此の歌はうたの父・うたの母」等云云、今の人・我うたよめりと申してもう・ほのぼのと乃至船をしぞをもうと一字をもたがへず・よみて我が才は人丸にをとらずと申すもうをば人これを用ゆべしや、やまかつ海人あまなんどは用ゆる事もありなん、天台大師の始めて立て給へる一念三千の法門もちは仏の父・仏の母なるべし、百年・已後の善無畏三蔵がこの法門ほうもんをぬすみとりて大日経と法華経とは理同なるべし、理同と申すは一念三千なりとかけるをば智慧ちえかしこき人は用ゆべしや、事勝と申すは印・真言なしなんどももう申すは天竺の大日経・法華経の勝劣か漢土の法華経・大日経の勝劣か、ふくうさんそうほうけきよう ぎき ほうけきよう 不空三蔵の法華経の儀軌には法華経に印・真言をそへて訳せり、仁王経ににんのうきよう

も羅什の訳には印・真言なし不空の訳の仁王經には印・真言これあり、
此等の天竺の經經には無量の事あれども月氏・漢土・国を・へだてて・
とをく・ことごとく・もちて来がたければ經を略するなるべし、法華經に
は印・真言なけれども二乗作仏・劫国名号・久遠実成と申すきぼの事あ
り、大日經等には印・真言はあれども二乗作仏・久遠実成これなし、
二乗作仏と印・真言とを並ぶるに天地の勝劣なり、四十余年の經經には
二乗は敗種の人と一字・二字ならず無量無辺の經經に嫌はれ、法華經に
は・これを破して二乗作仏を宣べたり、いづれの經經にか印真言を嫌う
ことばあるや、その言なければ又大日經にも其の名を嫌はず但印・真言を
とけり、印と申すは手の用なり手仏にならずは手の印・仏になるべしや、
真言と申すは口の用なり口仏にならずば口の真言・仏になるべしや、二乗
の三業は法華經に値いたてまつらずは無量劫・千二百余尊の印・真言を行

ずとも仏になるべからず、勝れたる二乗作仏の事法をばとかずと申して劣れる印・真言をとける事法をば勝れたりと申すは理によれば盗人なり事によれば劣謂勝見の外道なり、此の失によりて閻魔の責めをばかほりし人なり、後にくいかへして天台大師を仰いで法華にうつりて惡道をば脱れしなり。

くおんじつじょう
久遠実成 なんとは大日経にはをもひもよらず、久遠実成は一切の仏の

ほんち 本地・譬へば大海は久遠実成・魚鳥は千二百余尊なり、久遠実成なくば

よそん 千二百余尊はうきくさの根なきがごとし夜の露の日輪の出でざる程なるべ

てんだいしゅう 一人ひとりの事を弁へずして真言師にたばらかされたり、真言師

じしゅう は又自宗の誤をしらず・いたづらに惡道の邪念をつみをく、空海和尚は

わきまえ 此の理を弁へざる上華嚴宗のすでにやぶられし邪義を借りとりて法華経は

なわけんきょう 猶華嚴経にをとれりと僻見せり、龜毛の長短・兎角の有無・龜の甲には

ちやうたん 毛なしなんぞ長短をあらそい兎の頭には角なし・なんの有無を論ぜん、

りとう もう 理同と申す人いまだ閻魔のせめを脱れず、大日経に劣る華嚴經に猶劣ると
もう 申す人・謗法を脱るべしや、人は・かはれども其の謗法の義同じかるべし、
こうぼう 弘法の第一の御弟子かきのもときの僧正・紺青鬼となりし・これをもつて
だいいち おんでし 弘法の第一の御弟子かきのもときの僧正・紺青鬼となりし・これをもつて
くうかい するべし、空海悔改なくば惡道疑うべしとも・をぼへず其の流をうけた
ひとびと る人人又いかん。

ほっし 問うて云わく法師一人・此の惡言をはく如何、答えて云く日蓮は此の人人
なん 難ずるにはあらず但不審する計りなり、いかりをぼせば・さでをはしま
ふしん せ、外道の法門は一千年・八百年・五天にはびこりて輪王より万民かうべ
ほうもん をかたぶけたりしかども九十五種共に仏にやぶられたりき、撰論師が邪義
きゅうじゅうごしゅ せ、外道の法門は一千年・八百年・五天にはびこりて輪王より万民かうべ
を かたぶけたりしかども九十五種共に仏にやぶられたりき、撰論師が邪義
・ 百余年なりしもやぶれき、南北の三百余年の邪見もやぶれき、日本・二
にほん 百六十余年の六宗の義もやぶれき、其の上此の事は伝教大師の・或書の
ろくしゅう 中にやぶられて候を申すなり、日本国は大乗に五宗あり法相・三論・華嚴
もう 中にやぶられて候を申すなり、日本国は大乗に五宗あり法相・三論・華嚴
にほんこく 日本国は大乗に五宗あり法相・三論・華嚴
だいじょう 日本国は大乗に五宗あり法相・三論・華嚴
ほっそう 日本国は大乗に五宗あり法相・三論・華嚴
さんろん 日本国は大乗に五宗あり法相・三論・華嚴
けこん 日本国は大乗に五宗あり法相・三論・華嚴

・真言・天台、小乗に三宗あり俱舎・成実・律宗なり、真言・華嚴・三論・法相は大乘よりいでたりといへども・くわしく論ずれば皆小乗なり、宗と申すは戒・定・慧の三学を備へたる物なり、其の中に定・慧をさてをきぬ、戒をもて大・小のぼうじをうちわかつものなり、東寺の真言・法相・三論・華嚴等は戒壇なきゆへに東大寺に入りて小乗・律宗の乳驢・臭糞の戒を持つ、戒を用つて論ぜば此等の宗は小乗の宗なるべし、比叡山には天台宗・真言宗の二宗・伝教大師習いつたへ給いたりしかども天台宗に對しては真言宗の名あるべからずと・をばして天台法華宗の止観・真言とあそばして公家へまいらせ給いき、伝教より慈覚たまはらせ給いし誓戒の文には天台法華宗の止観・真言と正くのせられて真言宗の名をけづられたり、天台法華宗は仏立宗と申して仏より立てられて候、

しんこんしゅう 眞言宗の眞言は当分の宗・論師・人師始めて宗の名をたてたり、而るを事
だいにちにやらい 大日如来・弥勒菩薩等によせたるなり、仏御存知の御意は但法華經一宗
なるべし 小乗には二宗十八宗二十宗候へども但所詮の理は無常の一理な
り、法相宗は唯心有境・大乘宗・無量の宗ありとも所詮は唯心有境とだ
にいはば但一宗なり三論宗は唯心無境無量の宗ありとも所詮・唯心無境な
らば但一宗なり、此れは大乘の空・有の一分か、華嚴宗・眞言宗あがら
ば但中・くだらば大乘の空・有なるべし、經文の説相は猶華嚴・般若に
も及ばず但しよき人とおぼしき人人の多く信じたるあいだ、下女を王のあ
いするにいたり、大日經等は下女のごとし理は但中にすぎず、論師・人師
は王のごとし人のあいするに由て・いばうがあるなるべし、上の問答等は
當時は世すえになりて人の智淺く慢心高きゆへに用ゆる事はなくとも、
聖人・賢人なんども出でたらん時は子細もやあらんずらん、不便にをもひ

まいらすれば目安に注せり、御ひまにはならはせ給うべし。^{たま}

これは大事の法門なり、^{だいじ}こくうざう菩薩にまいりてつねにより奉らせ給うべし。^{たま}

聖密房に之を遣わす^{ぼう これ つか}

日蓮花押^{にちれんかおう}

◆一〇八 華果成就御書^{け かじようじゆごしよ}

弘安元年四月 五十七歳御作 900P^{こうあんがんねん}

与浄顕房・義浄房 於身延^{ぼう ぼう}

其の後なに事もうちたへ申し承わらず候、さては建治の比・故道善房^{そ もう うけたま}

聖人のために二札かきつかはし奉り候を嵩が森にてよませ給いて候よし^{しょうにん たてまつ たまい}

悦び入つて候、たとへば根ふかきときんば枝葉かれず、源に水あれば流^{よろこ しよう}

かはかず、火はたきぎ・かくればたへぬ、草木は大地なくして生長する事^{そうもく だいち}

あるべからず、日蓮・法華經の行者となつて善惡につけて日蓮房・日蓮房^{にちれん ぼけきよう ぎようじや ぜんあく にちれんぼう にちれんぼう}

とうたはるる此の御恩さながら故師匠道善房の故にあらずや、日蓮は草木^{ごおん ししやうどうぜんぼう ゆえ にちれん そうもく}

の如くごと師匠ししょうは大地だいちの如し、彼の地涌じゆの菩薩ぼさつの上首じょうしゆ四人にてまします、一名
じようぎよう ないし
上行 乃至四名 安立行 菩薩云云、末法には 上行・出世し給はば
あんりゆうぎよう ぼさつ
安立行 菩薩も出現せさせ給うべきか、さればいねは華果成就すれども
だいち
必ず米の精・大地にをさまる、故にひつちおひいでて二度華果成就するな
にちれん ほけきよう ひろ
り、日蓮が法華經を弘むる功德は必ず道善房の身に歸すべしあらうとた
うと、よき弟子をもつときんば師弟・仏果にいたり・あしき弟子をたくは
でし
ひぬれば師弟・地獄にをつといへり、師弟相違せばなに事も成べからず委く
してい じごく
は又又申すべく候、常にかたりあわせて出離生死して同心に靈山浄土にて
もう
うなづきかたり給へ、經に云く「衆に三毒有ることを示し又邪見の相を現
でしかくのごと ほうべん
ず我が弟子是くの如く方便して衆生度す」云云 前前申す如く御心得ある
しゅじよう
べく候、穴賢 穴賢

弘安元年戊寅卯月 日
こうあんがんねん

日蓮花押
にちれんかおう

淨顯房ぼう

義淨房ぼう

べつとう ぼうごへんじ

◆一〇九

別當御房御返事

901P

聖密房ぼうのふみに・くはしく・かきて候よりあいて・きかせ給たまい候へ、な

に事も二間清澄の事をば聖密房ぼうに申しあわせさせ給たまうべく候か、世間せけんのり

をしりたる物に候へばかう申もうすに候、これへの所当なんどの事は・ゆめゆ

めをもはず候、いくらほどの事に候べき、但なばかりにてこそ候はめ、又

わせいつをの事をそれ入つて候、いくほどなき事に御心ぐるしく候らんと

・かへりてなげき入つて候へども・我が恩をば・しりたりけりと・しらせ

まつらんとために候、大名を計るものは小耻にはぢずと申もうして、南無

妙法蓮華經みょうほうれんげきょうの七字を日本にほん国にひろめ震旦しんたん高麗こままでも及ぶべきよしの大願を

はらみて其その願の満すべきしるしにや、大蒙古国だいもうここくの牒状ちようじようしきりにありて

此の国の人ごとの大なる歎なげきとみへ候、日蓮にちれん又先きより・この事をかんがへたり閻浮えんぶだい第一の高名なり、先きよりにくみぬるゆへにままこのかうみやうのやうに専心もちとは用い候はねども終ついに身のなげき極まり候時は辺へん執しゅうのものどもも一定とかへぬとみへて候、これほどの大事だいじをはらみて候ものの少事をあながちに申し候もうべきか、但しただ当時とうじ・日蓮にちれん心ざす事は生処にほんこくなり日本国よりも大切にをもひ候、例せば漢王の沛郡を・をもくをぼしめししがごとし・かれ生処にほんこくなるゆへなり、聖智あとが跡の主となるをもつてしろしめせ、日本国にほんこくの山寺の主ともなるべし、日蓮にちれんは閻浮えんぶだい第一の法華經ほけきようの行者ぎようじゃなり・天のあたへ給たまうべきことわりなるべし。

米一斗・六升あはの米二升・やき米はふくろへ・そのみならず人人ひとびとの御心おんこころざし申しつくしがたく候、これは・いたみをもひ候、これより後は心おんこころざしもうぐるしく・をぼしめすべからず候、よく人人ひとびとにしめすべからず候、よく人人ひとびと

にもつたへさせ給たまい候へ。

乃時

べつとうごほうごへんじ
別当御房御返事

◆一一〇 寂日房御書 ぼうごしよ

弘安二年九月 五十八歳御作 こうあん

902P

与寂日房日家 ぼう 於身延

是まで御をとかたじけなく候、夫れ人身じんしんをうくる事はまれなるなり、已すに
まれなる人身じんしんをうけたり又あひがたきは仏法ぶつぽう・是も又あへり、同じ仏法ぶつぽうの
中にも法華經の題目にあひたてまつる結句題目けつくだいもくの行者ぎやうじやとなれり、まことに
まことに過去十萬億かこじゅうまん(じゅうまんおく)の諸仏しよぶつを供養くやうする者なり。

日蓮は日本第一の法華經の行者なり・すでに勸持品の二十行の偈げの文は
日本国の中には日蓮一人にちれんよめり、八十万億那由佗なゆたの菩薩ぼさつは口には宣たれど
も修行したる人・一人もなし、かかる不思議の日蓮にちれんをうみ出だせし父母ふぼは

にほんこく いっさいしゅじょう
日本国の一切衆生の中には大果報の人なり、父母となり其の子となるも必ず宿習なり、もし日蓮が法華經・釈迦如来の御使ならば父母あに其の故なからんや、例せば妙莊嚴王・淨徳夫人・淨蔵・淨眼の如し、釈迦・多宝の二仏・日蓮が父母と變じ給うか、然らずんば八十万億の菩薩の生れかわり給うか、又上行菩薩等の四菩薩の中の垂迹か不思議に覚え候、一切の物にわたりて名の大切なるなり、さてこそ天台大師・五重玄義の初めに名玄義と釈し給へり。

にちれん じげぶつじょう
日蓮とななる事自解仏乗とも云いつべし、かやうに申せば利口げに聞え
たれども道理のさすところさもやあらん、經に云く「日月の光明の能く
諸の幽冥を除くが如く斯の人・世間に行じて能く衆生の闇を滅す」と此
の文の心よくよく案じさせ給へ、斯人行世間の五の文字は上行菩薩・末法
の始の五百年に出現して南無妙法蓮華經の五字の光明をさしして無明

煩悩ぼんのうの闇をてらすべしと云う事なり、日蓮にちれんは此この上行菩薩じょうぎょうぼさつの御使おんつかいとして
日本にほんの一切衆生いっさいしゅじょうに法華經ほけきょうをうけたもてと勧めすすめしは是これなり、此の山にして
もをこたらず候なり、今の經文きょうもんの次下に説つぎしもいて云く「我が滅度めつどの後おひに於て
應まさに此の經を受持じゅじすべし是の人・仏道ぶつどうに於て決定けつじようして疑うたがいい有ること無け
ん」と云云、かかる者の弟子でし・檀那だんなとならん人人ひとびとは宿縁しゆくえんふかしと思つて
日蓮にちれんと同じく法華經ほけきょうを弘ひろむべきなり、法華經ほけきょうの行者ぎやうじやといはれぬる事はや
不祥ふしようなりまぬかれがたき身なり、彼かれのはんいちやうりやうまさすみといは
れたる者は名を・をしむ故ゆえにはぢを思おもう故に・ついに臆おそしたることはなし、
同じおなじはぢなれども今生こんじやうのはぢは・もののかずならず・ただ後生ごじやうのはぢこそ
大切たいせつなれ、獄卒ごくそつ・だつえば懸衣翁けんいおうが三途河さんずがのはたにて・いしうをはがん時
を思食おほしめして法華經ほけきょうの道場どうじやうへまいり給たまうべし、法華經ほけきょうは後生ごじやうのはぢをかくす
衣なり、經いに云く「裸者の衣を得たるが如ごとし」云云。

此の御本尊こそ冥途めいどのいしやうなれ・よくよく信じ給うべし、をとこの

はだへをかくさざる女あるべしや・子のさむさをあわれまざるをやあるべ

しや、釈迦しゃか・法華ほけ経はめやとの如くましまし候ぞ、日蓮にちれんをたすけ給う事

・今生こんじやうの恥はじをかくし給う人なり後生ごしやうは又日蓮御身にちれんおんみのはぢをかくし申すべ

し、昨日は人の上・今日は我が身の上なり、花さけばこのみなり・よめの

しうとめになる事候ぞ、信心しんじんをこたらずして南無妙法蓮華経なむみょうほうれんげきやうと唱え給うべ

し、度度たびたびの御音信おとずれ申しつくしがたく候ぞ、此の事寂日房ぼうくわしくかたり給へ。

九月十六日

日蓮花押
にちれんかおう

◆一一一 新尼御前御返事
あまごぜんごへんじ

ぶんえい 文永十二年二月 五十四歳御作

904P

あまのり一ふくろ送り給ひ畢おわんぬ、又大尼御前あまごぜんよりあまのり畏かしこまり入

つて候、此の所をば身延たけの嶽もうと申す駿河するがの国は南にあたりたり彼の国の浮島うきしま

がはらの海ぎはより此の甲斐かいの国・波木井はきりの郷・身延みねの嶺へは百余里に及ぶ、
余の道・千里せんりよりもわづらはし、富士河ふじがわと申もうす日本第一にほんだいいちのはやき河・北より
南へ流れたり、此の河は東西は高山こうざんなり谷深く左右は左右は大石にして高き屏風
を立て並べたるがごとくなり、河の水は筒の中に強兵がうへいが矢を射出したるが
ごとし、此の河の左右さうの岸をつたい・或あるは河を渡り・或時あるは河はやく石多
ければ舟破われて微塵みじんとなる、かかる所をすぎゆきて身延の嶺と申もうす大山あ
り、東は天子てんしの嶺・南は鷹取たかとりの嶺・西は七面の嶺・北は身延の嶺なり、高き
屏風を四ついたてたるがごとし、峯に上つてみれば草木森森たり谷に下つ
てたづぬれば大石連連たり、大狼おおろうの音・山に充満じゅうまんし☆猴ましらのなき谷にひびき
鹿のつまをこうる音あはれしく蟬のひびきかまびすし、春の花は夏にさき
秋の菓このみは冬になる、たまたま見るものはやまかつがたき木をひろうすがた
時時とぶらう人は昔なれし同朋ともどうちなり、彼の商山しょうざんの四皓しこうが世を脱まぬかれし心ち竹
よりより

林の七賢が跡を隠せし山もかくやありけむ、峯に上つて・わかめやをいたると見候へば・さにてはなくして・わらびのみ並び立ちたり、谷に下つてあまのりや・をいたると尋ねれば、あやまりてや・みるらん・せりのみしげり・ふしたり、古郷の事はるかに思いわすれて候いつるに今・此のあまのりを見候いてよしなき心をもひいでて・うくつらし、かたうみいちはこみなとの磯のほとりにて昔見しあまのりなり、色形あぢわひもかはらず、など我が父母かはらせ給いけんと・かたちがへなる・うらめしさ・なみだをさへがたし。

此れは・さて・とどめ候いぬ、但大尼御前の御本尊の御事おほせつかはされて・おもひわづらひて候、其の故は此の御本尊は天竺より漢土へ渡り候いし・あまたの三蔵漢土より月氏へ入り候いし人人の中にもしるしをか
せ給はず、西域慈恩伝燈録等の書どもを開き見候へば五天竺の諸国の寺

寺の本尊皆しるし尽して渡す、又漢土より日本に渡る聖人日域より漢土へ
入る賢者等のしるされて候、寺寺の御本尊皆かんがへ尽し日本国最初の寺
元興寺・四天王寺等の無量の寺寺の日記、日本紀と申すふみより始めて多
くの日記にのこりなく註して候へば其の寺寺の御本尊又かくれなし、其の
中に此の本尊はあへてまします。

人疑つて云く経論になきかなければこそそそこばくの賢者等は画像にか
き奉り木像にもつくりたてまつらざるらめと云云、而れども経文は眼前な
り御不審の人人は経文の有無をこそ尋ぬべけれ、前代につくりかかぬを難
ぜんと・をもうは僻案なり、例せば釈迦仏は悲母孝養のために☆利天に隠
れさせ給いたりしをば一閻浮提の一切の諸人しる事なし、但目蓮尊者一人
此れをしれり此れ又仏の御力なりと云云、仏法は眼前なれども機なければ
顕れず時いたらざればひろまらざる事・法爾の道理なり、例せば大海の潮

の時に随したがつて増減ぞうげんし上天じょうげの月の上下じょうげにみちかくるがごとし。

今・此この御本尊ごほんぞんは教主きようしゅ釈尊しやくそん・五百塵点劫ごひやくじんてんこうより心中しんちゆうにをさめさせ給たまいて

世しに出現しゅつげんせさせ給たまいても四十余年よんじゅうよねん・其その後又法華經ほけきようの中にも迹門しやくもんはせす

ぎて宝塔品ほうとうほんより事をこりて寿量品じゅうりやうほんに説き顕あらわし神力品じんりきほん・属累ぞくるいに事極きわまりて候い

しが、金色世界せかいの文殊師もんじゆ・利兜史多天宮としたの弥勒菩薩みろくぼさつ・補陀落山ふだらくさんの觀世音かんぜおん・

日月にちがつ・淨明おんでし・徳仏やくおうぼさつの御弟子おんでしの藥王菩薩等やくおうぼさつの諸大士しやだい・我も我もと望み給たまいし

かども叶こはず、是等これらは智慧ちえいみじく才学ひとびとある人人ひとびととは・ひびけども・いま

だ法華經ほけきようを学まずる日あさし学まも始まつだいなり、末代だいなんしのの大難忍だいにんしのびがたかるべし、我

五百塵点劫ごひやくじんてんこうより大地だいちの底ちにかくしをきたる真でしの弟子こあり・此これにゆづるべ

しとて、上行菩薩等じやうぎやうぼさつを涌出品ゆじゅつほんに召いし出ださせ給たまいて、法華經ほけきようの本門ほんもんの肝心かんじんた

る妙法蓮華經みやうほうれんげきようの五字ごじをゆづらせ給たまいて、あなかしこ・あなかしこ・我が

滅度めつどの後ご・正法しやうほう一千年いつせん・像法ぞうほう一千年いつせんに弘通くつうすべからず、末法まつほうの始はうほうに謗法ぼうほうの

法師ほつし一閻浮提えんぶだいに充滿じゅうまんして諸天しよてんいかりをなし彗星すいせいは一天いつてんにわたらせ大地だいちは大波たいはのごとくをどらむ、大旱魃かんばつ・大火たいか・大水たいたい・大風たいふう・大疫病えきびょう・大飢饉ききん・大兵乱ひょうらん等の無量むりようの大災難さいなん並びをこり、一閻浮提えんぶだいの人人ひとびと・各各おのづから・甲冑かちゅうをきて弓杖きゆうじょうを手ににぎらむ時、諸仏しよぶつ・諸菩薩しよぼさつ・諸大善神しよだいぜんじん等の御力おんちからの及およばせ給たまわざらん時、諸人しよにんみな皆死むげんじこくして無間地獄おちに墮おちること雨のごとくしげからん時・此の五字ごじの大曼荼羅まんだらを身に帶たいし心に存しよせば諸王しよは国たすを扶ばんけ万民ばんみんは難なんを・のがれん、乃至ないし後生ごしょうの大火炎たいかえんを脱のがるべしと仏記しるしをかせ給たまいぬ、而しかるに日蓮にちれん上行菩薩じょうぎょうぼさつにはあらねどもほほ兼かねてこれをしれるは彼の菩薩ぼさつの御計ごけいらいかと存ぞんじて此の二十余年こが間ま此れを申もうす、此の法門ほうもん弘通くわうつうせんには如来にょらい現在げんざい猶多ゆた怨嫉おんしつ・況滅度後きやうめつどご・一切世間いっさいせけん・多怨難信たおんなんしんと申もうして第一だいいちのかたきは国主こくしゆ並びに郡郷等ぐんこうの地頭じとう・領家りやうけ・万民等ばんみんなり、此れ又第二・第三の僧侶そうりよが・うったへについて行者ぎやうじやを・或あるは悪口あくぐちし・或あるは罵詈めりし・或あるは刀杖等とうじやう云云。

而るを安房の国・東条の郷は辺国なれども日本国の中心のごとし、

其の故は天照太神・跡を垂れ給へり、昔は伊勢の国に跡を垂れさせ給いて

こそありしかども、国王は八幡・加茂等を御帰依深くありて天照太神の

御帰依浅かりしかば、太神・禰りおぼせし時・源右將軍と申せし人・御

起請文をもつてあをかの小大夫に仰せつけて頂戴し伊勢の外宮にしを

さめしかば太神の御心に叶はせ給いけるかの故に日本を手ににぎる將軍

となり給いぬ、此の人東条の郡を天照太神の御栖と定めさせ給う、され

ば此の太神は伊勢の国にはをはしまさず安房の国・東条の郡にすませ

給うか、例えば八幡大菩薩は昔は西府にをはせしかども、中比は山城の国

男山に移り給い、今は相州鎌倉鶴が岡に栖み給うこれも・かくのごとし。

日蓮は一閭浮提の内日本国安房の国・東条の郡に始めて此の正法を

弘通し始めたり、随つて地頭敵となる彼の者すでに半分ほろびて今半分あ

り、領家はいつわりをろかにて・或時は信じ・或時はやぶる不定なりしが
にちれんごかんき こおむ
日蓮御勘気を蒙りし時すでに法華經をすて給いき、日蓮先よりけさんのつ
いでごとに難信難解と申せしはこれなり、日蓮が重恩の人なれば扶けたて
まつらんとために此の御本尊をわたし奉るならば十羅刹定めて偏頗の法師と
・をぼしめされなん、又經文のごとく不信の人に・わたしまいらせずば
にちれんへんげ あまごぜん
日蓮偏頗はなけれども尼御前我が身のとがをば・しらせ給はずしてうらみ
させ給はんずらん、此の由をば委細に助阿闍梨の文にかきて候ぞ召して
あまごぜん たま
尼御前の見参に入れさせ給うべく候。

おんこん
御事にをいては御一味なるやうなれども御信心は色あらわれて候、さど
の国と申し此の国と申し度度の御志 ありてたゆむけしきはみへさせ給は
ねば御本尊は・わたしまいらせて候なり、それも終にはいかんがとをそれ
思う事・薄氷をふみ太刀に向うがごとし、くはしくは又又申すべく候、そ

れのみならずかまくらにも御勘氣の時千が九百九十九人は墮ちて候人人も
・いまは世間せけんやわらぎ候かのゆへにくゆる人人ひとびとも候と申すげに候へども
此れはそれには似るべくもなくいかにもふびんには思いまいらせ候へども
骨に肉をば・かへぬ事にて候へば法華經に相違せさせ給い候はん事を叶う
まじき由いつまでも申し候べく候、
恐恐 謹言

二月十六日

にちれんかおう
日蓮花押

あまごぜんごへんじ
新尼御前御返事

◆ 一一二 大尼御前御返事
あまごぜんごへんじ

908P

ごくそつえんま王の長は十丁ばかり面はすをさし眼は日月のごとく齒は
まんぐわのねのやうにくぶしは大石のごとく大地は舟を海にうかべたるや
うに・うごき・声はらいのごとく・はたはたとなりわたらむには・よも
なむみょうほうれんげきよう
南無妙法蓮華經とは・をほせ候はじ、
日蓮が弟子にも・をほせず・よくよ

く・内をしたためて・をほせをかほり候はん、なづきをわりみをせめて・
いのりてみ候はん、たださきの・いのりと・をぼしめせ、これより後は・
のちの事をよくよく御かため候へ、
恐恐。

九月二十日

にちれん
日蓮在御判

あまごせんごへんじ
大尼御前御返事

◆一一三

しゅじゅ ふるまいごじょ
種種御振舞御書

けんちよう

建長二年五十五歳御作

ぼう
与光日房

於身延

909P

い
去ぬる文永五年後の正月十八日・西戎・大蒙古国より日本国を・をそう
ぶんえい
べきよし 牒状をわたす、日蓮が去ぬる文応元年太歳に勘えたりし
ちようじよう
りっしょうあんこうろん

立正安国論今すこしもたがわず符合しぬ、此の書は白楽天が楽府にも越へ

みらいき
仏の未来記にもをとらず末代の不思議なに事かこれにすぎん、賢王・聖主
まつだい
ふしぎ

にほんだいいち
の御世ならば日本第一の権状にもをこなわれ現身に大師号も・あるべし定

めて御たづねありていくさの僉義せんぎをもいゐあわせ調伏じょうぶくなんとも申しつけられぬらんと・をもひしに其その義なかりしかば其その年の末十月に十一通の状をかきて・かたがたへをどろかし申すもう、国に賢人けんじんなんども・あるならば不思議ふしぎなる事かな・これはひとへにただ事にはあらず、天照太神てんしょうだいじん・しゅうはちまんぐう正八幡宮の此の僧について日本国のたすかるべき事を御計らいのあるかと・をもわるべきに・さはなくて・或は使を悪口あつくし・或はあざむき・或はとりも入れず・或は返事あるもなし・或は返事をなせども上へも申さずこれひとへにただ事にはあらず、設たといにちれんい日蓮が身の事なりとも国主こくしゅとなりまつり事をなさん人人ひとびとは取りつき申もうしたらんには政道の法ぞかし、いわうや・この事は上の御大事だいじいできらむのみならず各各の身にあたりて・をほいなるなげき出来しゅったいすべき事ぞかし、而しかるを用うる事こそなくとも悪口あつくまではあまりなり、此これひとへに日本国にほんこくの上下万人じょうげばんにん・一人もなく法華經ほけきょうの強敵じやうてきとなりてと

しひさしくなりぬれば大禍のつもり大鬼神の各各の身に入る上へ蒙古国の
ちようじよう

牒状に正念をぬかれてくるうなり、例せば段の紂王・比干といふし者い
しょうねん

さめをなせしかば用いずして胸をほり周の文武王にほろぼされぬ、呉王は
もち

伍子しよがいさめを用いず自害をせさせしかば越王勾踐の手にかかる、こ
もち

れもかれがごとくなるべきかと・いよいよ・ふびんに・をぼへて名をもを
じがい

しまず命をもすてて強盛に申しはりしかば風・大なれば波・大なり竜・大
じやうきやう

なれば雨たけきやうに・いよいよ・あだをなし・ますますにくみて御評定
ごひやうじやう

に僉議あり、頸をはぬべきか鎌倉を・をわるべきか弟子・檀那等をば所領
せんぎ かまくら でし だんな しよりよう

あらん者は所領を召して頸を切れ・或はろうにてせめ・あるいは遠流すべ
しよりよう

し等云云。

にちれんよろこ

日蓮悦んで云く本より存知の旨なり、雪山童子は半偈のために身をなげ
いわ

じようたいほさつ

常啼菩薩は身をうり善財童子は火に入り樂法梵士は皮をはぐ薬王菩薩は
ぜんざいどうじ きようほう やくおうほさつ

みな 皆をやく不^ふ輕^ぎ菩^ぼ薩^{さつ}は杖^{じょう}木^{もく}をかうむり師^し子^し尊^{そん}者^{じゃ}は頭^{こう}をはねられ提^{だい}婆^ば菩^ぼ薩^{さつ}は
げとう 外^げ道^{どう}にころさる、此^{これ}等^らはいかなりける時^{とき}ぞやと勘^{かん}う^うれば天^{てん}台^{だい}大^{だい}師^しは「時^{とき}に
かな 適^{かな}うのみ」とかかれ章^{しょう}安^{あん}大^{だい}師^しは「取^{しゅ}捨^{しや}宜^{よろ}きを得^えて一^{いつ}向^{こう}にすべからず」とし
るされ、法^ほ華^け經^{きやう}は一^ほ法^けなれども機^きにしたがひ時^{とき}によりて其^その行^{ぎやう}万^{まん}差^さなるべ
し、仏^{ぶつ}記^きして云^いく「我^{われ}が滅^{めつ}後^ご・正^{しょう}像^{ざう}二^に千^{せん}年^{ねん}すぎて末^{まつ}法^{ぽう}の始^しに此^この法^ほ華^け經^{きやう}の
肝^{かん}心^{じん}題^{だい}目^{もく}の五^ご字^じ計^{けい}りを弘^{ひろ}めんもの出^{しゅ}来^{らい}すべし、其^{その}の時^{とき}惡^{あく}王^{おう}・惡^{あく}比^ひ丘^{きう}等^と・
大^{だい}地^ち微^み塵^{じん}より多^{おほ}くして・或^{ある}大^{だい}乘^{じやう}・或^{ある}は小^{しょう}乘^{じやう}等^とをもつて・きそはんほど
に、此^この題^{だい}目^{もく}の行^{ぎやう}者^{じゃ}にせめられて在^{ざい}家^けの檀^{だん}那^な等^とをかたらひて・或^{ある}はのり
・或^{ある}はうち・或^{ある}はろうに入^いれ・或^{ある}は所^{しよ}領^{りやう}を召^めし・或^{ある}は流^る罪^{ざい}・或^{ある}は頸^{あき}をはぬ
べし、などいふとも退^{たい}轉^{てん}なく・ひろむるほどならば・あだをなすものは国^{こく}主^{しゅ}
は・どし打^{うち}ちをはじめ餓^が鬼^きのごとく身^みをくらひ後^{あと}には他^た国^{こく}よりせめらるべ
し、これひとへに梵^{ぼん}天^{てん}・帝^{たい}釈^{しやく}・日^{にち}月^{がつ}・四^{してん}天^{てん}等^との法^ほ華^け經^{きやう}の敵^{たき}なる国^{こく}を他^た国^{こく}よ

り責めさせ給^{たま}うなるべし」ととかれて侯^たぞ、各各・我が弟子^{でし}となのらん人人^{ひとひと}
は一人もをくしをもはるべからず、をやを・をもひ・めこを・をもひ所^し領^{りょう}
をかへりみるこゝなかれ、無量劫^{むりょうじやく}より・このかた・をやこのため所^し領^{りょう}
のために命^{いのち}すてたる事は大地微塵^{だいちみじん}よりも・をほし、法華經^{ほけきよう}のゆへには・いま
だ一度もすてず、法華經^{ほけきよう}をばそこばく行ぜしかども・かかる事出来^{しゅつたい}せしか
ば退^{たい}転^{てん}してやみにき、譬^{たと}えばゆをわかして水に入れ火を切るにとげざるが
ごとし、各各思^{おも}ひ切^きり給^{たま}へ此の身を法華經^{ほけきよう}にかうるは石に金をかへ糞^{ふん}に米
をかうるなり。

ぶつめつ
仏滅後^{ぶつめつ}・二千二百二十余年が間^{かん}・迦葉^{かしよう}・阿難^{あなん}等^ら・馬鳴^{めみよう}・竜樹^{りゅうじゆ}等^ら・南岳^{なんがく}・
てんだい
天台等^{てんだい}・妙楽^{みょうらく}・伝教^{でんぎよう}等^らだにも・いまだひろめ給^{たま}わぬ法華經^{ほけきよう}の肝心^{かんじん}・諸^{しよ}仏^{ぶつ}
がんもく
の眼目^{がんもく}たる妙法蓮華經^{みょうほうれんげきよう}の五^ご字^じ・末法^{まつぽう}の始^{はじ}に一閻浮提^{えんぶだい}にひろまらせ給^{たま}うべき
ずいそう
瑞相^{ずいそう}に日蓮^{にちれん}さきがけしたり、わたうども二陣三陣つづきて迦葉^{かしよう}・阿難^{あなん}にも

勝ぐれ天台・伝教にもこへよかし、わづかの小島のぬしらをどさんを。
をぢては閻魔王のせめをばいかんがすべき、仏の御使と・なのりながら。
をくせんは無下の人人なりと申しふくめぬ、さりし程に念仏者・持斎・
真言師等・自身の智は及ばず訴状も叶わざれば上郎・尼ごぜんたちに・
とりつきて種種にかまへ申す、故最明寺入道殿・極楽寺入道殿を無間地獄
に墮ちたりと申し建長寺・寿福寺・極楽寺・長樂寺・大仏寺等をやきはら
へと申し道隆上人・良観上人等を頭をはねよと申す、御評定になにと
なくとも日蓮が罪禍まぬかれがたし、但し上件の事・一定申すかと召し出
てたづねらるべしとて召し出だされぬ、奉行人の云く上のをほせ・かくの
ごとしと申せしかば・上件の事・一言もたがはず申す、但し最明寺殿・極楽
寺殿を地獄という事は・そらごとなり、此の法門は最明寺殿・極楽寺穀・
御存生の時より申せし事なり。

詮せんずるところ、上件くだんの事どもは此の国を・をもひて申もうす事なれば世を安穩あんのん

にたもたんと・をぼさば彼の法師ほっしばらを召し合せて・きこしめせ、さなく

して彼等かれらにかわりて理不尽りふじんに失とがに行わるるはどならば国に後悔こうかいあるべし、

日蓮にちれん・御勘氣ごかんきをかほらば仏おんつかいの御使もちを用いぬになるべし、梵天ぼんてん・帝釈たいしゃく・日月にちがつ

・四天してんの御とがめありて遠流おんる・死罪しざいの後・百日一年・三年・七年が内に

自界叛逆難じかいほんぎやくなんとて此の御一門いちもんどうちはじまるべし、其その後は他国侵逼難たこくしんびつなんと

て四方しほうより・ことには西方さいほうよりせめられさせ給たまうべし、其そのの時後悔そのときこうかいあるべ

しと平左衛門尉さへものじょうに申し付けしかども太攻入道にゅうどうのくるひしやうに・すこしも

はばかりる事なく物にくるう。

去文ぶんえい永八年太歳庚申辛かのとひつじ 未九月十二日・御勘氣ごかんきをかはる、其そのの時の御勘氣ごかんき

のやうも常ならず法にすぎてみゆ、了行りょうぎょうが謀反たゆうを・をこし大夫の律師りつしが世

をみださんと・せしを・めしとられしにもこえたり、平左衛門尉さへものじょう・大将と

して数百人の兵者つわものにどうまろきせてゑぼうしかけて眼まなこをいからし声をあらうす、大体だいたい・事の心を案ずるに太政入道にょうどうの世をとりながら国をやぶらんとせしにいたり、ただ事ともみへず、日蓮にちれんこれを見てをもうやう日ごろ月ごろ・をもひまうけたりつる事はこれなり、さいわひなるかな法華經ほけきょうのために身をすてん事よ、くさきかうべをはなたれば沙いさに金こがねをかへ石いしに珠たまをあきなへるがごとし、さて平左衛門尉さへものじょうが一いちの郎従ろうじゅう・少輔房しょうぼうと申もうす者はしりよりて日蓮にちれんが懷かい中ちゆうせる法華經ほけきょうの第五の巻を取り出しておもてを三度さいなみて・さんざんとうちちらす、又九巻ほけきょうの法華經つわものを兵者ども打ちちらして・あるいは足にふみ・あるいは身にまとひ・あるいはいたじき・たたみ等・家の二三間にちらさぬ所もなし、日蓮にちれん・大高声を放ちて申もうすあらをもしろや平左衛門尉さへものじょうが・ものにくるうを見よ、とのばら但今にほんこく・日本国の柱をたをすと・よばはりしかば上下万人じやうげばんにんあわてて見えし、日蓮にちれんこそ御勘氣ごかんきをかほ

れば・をくして見ゆべかりしに・さはなくして・これはひがことなりとや
・をもひけん、兵者つわものどものいろこそ・へんじて見へしか、十日並びに十二
日の間・真言宗しんこんしゅうの失とが・禪宗ぜんしゅう・念仏等ねんぶつ・良観りょうかんが雨ふらさぬ事・具つぶさに平
左衛門尉さへもんじょうに・いゐきかせてありしに・或あるはどつとわらひ・或あるはいかりなん
ど・せし事どもはしげければ・しるさず、せんずるところは六月十八日よ
り七月四日まで良観りょうかんが雨のいのりして日蓮にちれんに支へられてふらしかね・汗を
ながし・なんだのみ下くだして雨ふらざりし上・逆風ひまなくてありし事・三
度まで・つかひをつかわして一丈のほりを・こへぬもの十丈・二十丈のほ
りを・こうべきか、いづみしきぶいろごのみの身にして八斎戒にせいせる
うたをよみて雨をふらし、能因法師ほつしが破戒はかいの身として・うたをよみて天雨てんう
を下ふららせしに、いかに二百五十戒の人人ひとひと・百千人あつまりて七日二七日せ
めさせ給たまうに雨の下ふららざる上に大風たいふうは吹き候ぞ、これをもつて存ぜさせ給たまへ

各各の往生は叶うまじきぞとせめられて良観がなきし事・人人につきて
通せし事・二に申せしかば、平左衛門尉等かたうとし・かなへずして・つ
まりふしし事どもはしげければかかず。

さては十二日の夜・武蔵守殿のあづかりにて夜半に及び頸を切らんがた

めに鎌倉をいでしに・わかみやこうぢにうちいでて四方に兵のうちつつみ

て・ありしかども、日蓮云く各各さわがせ給うなべちの事はなし、八幡大

菩薩に最後に申すべき事ありとて馬よりさしをりて高声に申すやう、いか

に八幡大菩薩はまことの神か和氣清丸が頸を刎られんとせし時は長一丈の

月と顕われさせ給い、伝教大師の法華經をかうぜさせ給いし時はむらさき

の袈裟を御布施にさづけさせ給いき、今日蓮は日本第一の法華經の行者な

り其の上・身に一分のあやまちなし、日本国の一切衆生の法華經を謗じて

無間・大城におつべきを・たすけんがために申す法門なり、又大蒙古国よ

り・この国をせむるならば天照太神・正八幡とても安穩におはすべき
か、其の上・釈迦仏・法華經を説き給いしかば多宝仏・十方の諸仏・菩薩
あつまりて日と日と月と月と星と星と鏡と鏡とをならべたるがごとくなり
し時、無量の諸天並びに天竺・漢土・日本国等の善神・聖人あつまりたり
し時、各各・法華經の行者にをろかなるまじき由の誓状まいらせよと・
せめられしかば一一に御誓状を立てられしぞかし、さるにては日蓮が申す
までもなし・いそぎいそぎこそ誓状の宿願をとげさせ給うべきに・いかに
此の処には・をちあわせ給はぬぞと・たかだかと申す、さて最後には日蓮
・今夜・頸切られて靈山浄土へ・まいりてあらん時はまづ天照太神・
正八幡こそ起請を用いぬかみにて候いけれとさしきりて教主釈尊に申し
上げ候はんずるぞいたしと・おぼさば・いそぎいそぎ御計らいあるべしと
て又馬にのりぬ。

ゆいのはまに・うちいでて御りやうのまへに・いたりて又云くしばし・
とのばら・これにつぐべき人ありとて、中務三郎左衛門尉と申す者のもと
へ熊王と申す童子を・つかわしたりしかば・いそぎいでぬ、今夜頸切られ
へ・まかるなり、この数年が間・願いつる事これなり、此の娑婆世界にし
て・きじとなりし時は・たかにつかまれ・ねずみとなりし時は・ねこにく
らわれき、或はめこのかたきに身を失いし事・大地微塵より多し、法華經
の御ためには一度だも失うことなし、されば日蓮貧道の身と生れて父母の
孝養・心にとらず国の恩を報すべき力なし、今度頸を法華經に奉りて其の
功德を父母に回向せん其のあまりは弟子・檀那等にはぶくべしと申せし事
これなりと申せしかば、左衛門尉・兄弟四人・馬の口にとりつきて・こし
ごへたつの口にゆきぬ、此にてぞ有らんずらんと・をもうところに案にた
がはず兵士どもうちまはり・さわぎしかば、左衛門尉申すやう只今なりと

なく、日蓮申すやう不かくのとのばらかな・これほどの悦びよろこをば・わらへかし、いかに・やくそくをば・たがへらるるぞと申せし時、江のしまのかたより月のごとく・ひかりたる物まりのやうにて辰巳のかたより戌亥いぬいのかたへ・ひかりわたる、十二日の夜のあけぐれ人の面も・みへざりしが物のひかり月よのやうにて人人ひとびとの面もみなみゆ、太刀取目くらみ・たふれ臥し兵共おぢ怖れ・けうさめて一町計ばかりはせのき、或あるは馬より・をりて・かしこまり・或あるは馬の上にて・うずくまれるもあり、日蓮申すやう・いかにとのばら・かかる大根ある召人にはとをのくぞ近く打ちよれや打ちよれやと・たかだかと・よばわれども・いそぎよる人もなし、さてよあけば・いかにいかに頸切べくはいそぎ切るべし夜明けなばみぐるしかりなんと・すめしかども・とかくのへんじもなし。

はるか計ばかりありて云くさがみのえちと申もうすところへ入らせ給たまへと申もうす、

此れは道知る者なし・さきうちすべしと申せどもうつ人もなかりしかば・
さてやすらうほどに・或如来あるにょらいの云く・それこそその道にて候そうらへと申せしか
ば道にまかせてゆく、午の時計ばかりにえちと申すところへ・ゆきつきたりし
かば本間六郎左衛門さえもんがいへに入りぬ、さけとりよせて・もののふどもに・
のませてありしかば各かへるとて・かうべをうなたれ手をあさへて申もうすや
う、このほどは・いかなる人にてや・をはすらん・我等われらがたのみて候・
阿弥陀あみだぶつ仏をそしらせ給たまうと・うけ給たまわれば・にくみまいらせて候そうらいつるに
・まのあたりをがみまいらせ候そうらいつる事どもを見て候そうらへば・たうとさに・
としごろ申もうしつる念仏ねんぶつはすて候そうらいぬとて・ひうちぶくろよりすずとりい
して・すつる者あり、今は念仏ねんぶつ申もうさじと・せいじやうをたつる者もあり、
六郎左衛門さえもんが郎從等ろうじゅう・番をばうけとりぬ、さえもんのじようも・かへりぬ。
其その日の戌の時計ばかりにかまくらより上の御使おんつかいとてたてぶみをもちて来

ぬ、頸切れという・かさねたる御使かと・もののふどもは・をもひてあり
し程に六郎左衛門さえもんが代官右馬のじようと申もうす者・立ぶみもちて・はしり来
りひざま・つひて申もうす、今夜にて候べし・あらあさましやと存じて候そうらいつ
るに・かかる御悦よろこびの御ふみ来りて候、武蔵守殿は今日・卯の時にあたま
の御ゆへ御出いで候へば・いそぎ・あやなき事もやと・まづこれへはしりま
いりて候と申そうらうもうす、かまくらより御つかいは二時にはしりて候、今夜の内に
あたまの御ゆへ・はしりまいるべしとて・まかりいでぬ、追状いわに云く此の
人はとがなき人なり今しばらくありてゆ・るさせ給たまうべし・あやまちして
は後悔こうかいあるべしと云云。

其その夜は十三日・兵士ども数十人・坊の辺り並びに大庭になみゐて候そうらい
き、九月十二百の夜なれば月・大おおに・はれてありしに夜中に大庭に立ち出いで
て月に向ひ奉りてこ自我じがけ偈たてまつ少少たてまつしよしゅうよみ奉り諸宗しゅうの勝劣しょうれつ・法華經ほけきようの文あらあ

ら申して抑今もつの月天もそもは法華經がつてんの御座ほけきように列つらなりまします名月天子がつてんしぞかし、
宝塔品ほうとうほんにして仏勅ぶつちよくをうけ給たまい囑累品そくるいにして仏いただきに頂なでをなでられまいらせ
「世尊せそんの勅ちとの如まさく當つに具つぶさに奉行ぶぎようすべし」と誓狀せいじようをたてし天ぞかし、仏前ぶつぜんの
譬たとえは日蓮にちれんなくば虚むなしくてこそをはすべけれ、今かか事出来しゅつたいせばいそぎ悦よろこび
をなして法華經ほけきようの行者ぎようじやにも・かはり仏勅ぶつちよくをも・はたして誓言せいごんのしるしを
ばとげさせ給たまうべし、いかに今しるしのなきは不思議ふしぎに候ものかな、何いかな
る事も国になくしては鎌倉かまくらへもかへらんとと思はず、しるしこそなくとも
・うれしがをにて澄渡わたらせ給たまうはいかに、大集經だいしききようには「日月明にちがつを現げんぜず」
ととかれ、仁王經にんのうきようには「日月度にちげつどを失うしなう」とかかれ、最勝王經さいしょうおうきようには「三十
三天各隕恨うらみを生はず」とこそ見え侍はべるに・いかに月天がつてんいかに月天がつてんとせめしか
ば、其そのしるしにや天より明星めいせいの如ごとくなる大星だいせい下りて前の梅うめの木の杖しやくに・
かかりてありしかば・もののふども皆みなえんより・とびをり・或あるは大庭おほにわにひ

れふし・或は家のうしろへにげぬ、やがて即ち天かきくもりて大風吹き来りて江の島のなるとて空のひびく芋大なるつつみを打つがごとし。

夜明れば十四日卯の時に十郎入道と申すもの来りて云く・昨日の夜の戌の時計りにかうどのに大なるさわぎあり、陰陽師を召して御うらなひ候へば申せしは大に国みだれ候べし・此の御房御勘氣のゆへなり、いそぎいそぎ召しかえさずんば世の中いかが候べかるらんと申せば、ゆりさせ給へ候と申す人もあり、又百日の把に軍あるべしと申しつれば・それを待つべしとも申す、依智にして二十余日・其の間鎌倉に・或は火をつくる事・七八度・或は人をころす事ひまなし、讒言の者共の云く日蓮が弟子共の火をつくるなりと、さも・あるらんとて日蓮が弟子等を鎌倉に置くべからずとて二百六十余人しるさる、皆遠島へ遺すべしろうにある弟子共をば頸をはねらるべしと聞ふ、さる程に火をつくる等は持斎念仏者が計事なり其の

余はしげればかかず。

同十月十日に依智えちを立つて同十月二十八日に佐渡さどの国へ著つぬ、十一月一

日さえもん

日もつ

日らくよう

日れんだいの

日に六郎左衛門が家のうしろ塚原と申す山野の中に洛陽の蓮台野のやうに

死人しにん

死人を捨つる所に一間四面しめんなる堂の仏もなし、上はいたまあはず四壁はあ

ばらに雪ふりりて消ゆる事なし、かかる所にしきがは打ちしき養みのうちきて

夜をあかし日をくらす、夜は雪電雷電ゆきあられいなづまひまなし昼は日の光もささせ給たまはず

心細かるべきすまゐなり、彼の李陵りりようが胡国ここくに入りて巖窟いんくつに・せめられし

法道三蔵ほうどうさんそうの徽宗皇帝きそうこうていに・せめられて面かおにかなやきをさされて江南にはなた

れしも只今ただとおぼゆ、あらうれしや檀王だんおうは阿私仙人あしせんじんに・せめられて法華經ほけきよう

の功德くどくを得給たまいき、不輕菩薩ふぎようぼさつは上慢じようまんの比丘等の杖にあたりて一乗いちじようの行者ぎようじゃ

といはれ給たまふ、今日蓮いまにちれんは末法まつぽうに生れて妙法蓮華經みようほうれんげきようの五字ごじを弘ひろめて・かかる

せめにあへり、仏滅度後ぶつめつご・二千二百余年が間・恐らくは天台智者大師も

いっさいせけん 一切世間・多怨難信の経文をば行じ給はず数数見擯出の明文は但日蓮一人
なり、一句一偈・我皆与授記は我なり阿耨多羅三藐三菩提は疑いなし、
さがみのかみ 相模守殿こそ善知識よ平左衛門こそ提婆達多よ念仏者は瞿伽利尊者・持斎
等は善星比丘なり、在世は今にあり今は在世なり、法華経の肝心は
しほほうじつそう 諸法実相と・とかれて本末究竟等とのべられて候は是なり、摩訶止観第五
に云く「行解既に勤めぬれば三障・四魔・紛然として競い起る」文、又云く
「猪の金山を摺り衆流の海に入り薪の火を熾にし風の求羅を益すが如きの
み」等云云、釈の心は法華経を教のごとく機に叶ひ時に叶うて解行すれば
七つの大事出来す、其の中に天子魔とて第六天の魔王・或は国主・或は
父母・或は妻子・或は檀那・或は悪人等について・或は随つて法華経の行
をさえ・或は達してさうべき事なり、何れの経をも行ぜよ仏法を行ずるに
は分分に随つて留難あるべし、其の中に法華経を行ずるには強盛にさうべ

し、法華經を・をしへの如く時機に當つて行ずるには殊に難あるべん、
故に弘決の八に云く「若し衆生・生死を出でず仏乗を慕わずと知れば魔
・是の人に於て猶親の想を生ず」等云云、釈の心は人・善根を修すれども
念仏・真言・禪・律等の行をなして法華經を行ぜざれば魔王親のおもひを
なして人間につきて其の人をもてなし供養す世間の人に実の僧と思はせん
が為なり、例せば国主のたとむ僧をば諸人供養するが如し、されば国主等
のかたきにするは既に正法を行ずるにてあるなり、釈迦如来の御ためには
提婆達多こそ第一の善知識なれ、今の世間を見るに人をよくなすものはか
たうどよりも強敵が人をば・よくなしけるなり、眼前に見えたり此の鎌倉
の御一門の御繁昌は義盛と隠岐法皇ましますずんば争か日本の主となり
給うべき、されば此の人人は此の御一門の御ためには第一のかたうどなり、
日蓮が仏にならん第一のかたうどは景信・法師には良観・道隆・道

あみだぶつ さえもののじょう 阿弥陀仏と平左衛門尉・守殿ましまさずんば争か法華經の行者とはなるベ
きと悦ぶ。

かくて・すごす程に庭には雪つもりて・人もかよはず堂にはあらし風よ
り外は・をとづるものなし、まなこ 眼には止観・法華をさらし口には南無
みょうほうれんげきよう 妙法蓮華經と唱へ夜は月星に向ひ奉りて諸宗の違目と法華經の深義を
だん 談ずる程に年もかへりぬ、いづくも人の心のはかなさは佐渡の国の持斎・
ねんぶつ 念仏者の唯阿弥陀仏・生喩房・印性房・慈道房等の数百人より合いて僉議
うけたまわる すと承る、聞ふる阿弥陀仏の大怨敵・一切衆生の悪知識の日蓮房・此の
国にながされたり・なにとなくとも此の国へ流されたる人の始終いけらる
たと る事なし、設ひいけらるるとも・かへる事なし、又打ちころしたりとも御
とがめなし、塚原と云う所に只一人ありいかにがうなりとも力つよくとも
とこころ 人なき処なれば集りていころ・せかしと云うものもありけり、又なにとな

くとも頸を切らるべかりけるが守殿しゅでんのの御台所みだいどころの御懷妊かいにんなれば・しばらく

きられず終ついには一定ときく、又云く六郎左衛門尉殿さえものじょうに申もうしてきらずんば・

はからうべしと云う、多くの義の中に・これについて守護所しゅごじょに数百人集り

ぬ、六郎左衛門尉さえものじょう云く上より殺しまうすまじき副状下りてあなづるべき流

人にはあらず、あやまちあるならば重連しげつらが大なる失とがなるべし、それよりは

ただほうもん

只法門ただほうもんにてせめよかしと云いいければ念仏者等ねんぶつ・・或あるは浄土じょうどの三部経さんぶきょう・・或ある

は止観しかん・・或あるは真言等しんこんを小法師等ほっしが頸にかけさせ・或あるはわきにはさませて

正月十六日にあつまる、佐渡さどの国のみならず越後・越中・出羽・奥州・信

濃等の国国より集れる法師等ほっしなれば塚原の堂の大庭・山野に数百人・六郎

さえものじょう

左衛門尉・兄弟きょうだい一家さならぬもの百姓ひやくせいの入道等にゅうどうかずをしらず集りたり、

ねんぶつ

念仏者ねんぶつは口口に悪口あくくをなし真言師しんこんしは面面に色を失うしないてんだいしゅうひ天台宗たいたいしゅうぞ勝つべきよし

を・ののしる、在家ざいけの者どもは聞きこふる阿弥陀仏あみだぶつのかたきよと・ののしり・

さわぎ・ひびく事・震動雷電の如し、日蓮は暫らく・さはがせて後・各各
しつもらせ給へ・法門の御為にこそ御渡りあるらめ悪口等よしなしと申せ
しかば・六郎左衛門を始めて諸人然るべしとて悪口せし念仏者をば・そく
びをつきいだしぬ、さて止観・真言・念仏の法門一一にかれが申す様を・
でつしあげて承伏せさせては・ちやうとはつめつめ・一言二言にはすぎ
ず、鎌倉の真言師・禅宗・念仏者・天台の者よりも・はかなきものどもな
れば只思ひやらせ給へ、利剣をもて・うりをきり大風の草をなびかすが
如し、仏法のおろかなる・のみならず・或は自語相違し・或は経をわすれ
て論と云ひ釈をわすれて論と云ふ、善導が柳より落ち弘法大師の三鈷を投
たる大日如来と現じたる等をば・或は妄語・或は物にくるへる処を一一に
せめたるに、・或は悪口し・或は口を閉ぢ・或は色を失ひ・或は念仏ひが
事なりけりと云うものもあり、・或は当座に袈裟・平念珠をすてて念仏申す

まじきよし誓状せいじょうを立つる者もあり。

皆人みな立ち帰る程に六郎左衛門尉さえものじょうも立ち帰る一家の者も返る、日蓮にちれん不思議ふしぎ

一云はんと思ひて六郎左衛門尉さえものじょうを大庭よりよび返して云いわくいつか鎌倉かまくらへの

ぼり給たまうべき、かれ答えて云いわく下人共に農せさせて七月の比と云云、日蓮にちれん

云く弓きゅう箭せんとる者は・を・をやけの御大事にあひて所領しりょうをも給たまわり供をこ

そ田畠でんぱたつくるとは申せ、只今ただいくさのあらんずるに急ぎうちのぼり高名し

て所知しよちを給らぬか、さすがに和殿原はさがみの国には名ある侍ぞかし、田舎いなか

にて田つくり・いくさに・はづれたらんは恥はじなるべしと申せしかば・いか

にや思ひけめあはててもものもいはず、念仏ねんぶつ者持齋じさい・在家ざいけの者どもも・なに

と云う事ぞやと恠あやしむ。

さて皆みな帰りしかば去年こぞの十一月より勘かんえたる開目抄もうと申す文二巻つく造りた

り、頸切にちれんるるならば日蓮ふしぎが不思議かんがとどめんと思ひて勘かんえたり、此の文の心

は日蓮にちれんによりて日本にほんこくの有無うむはあるべし、譬たとへば宅に柱なければ・たまた
ず人に魂なければ死人しにんなり、日蓮は日本にほんの人の魂なり平左衛門既に日本にほんの
柱をたをしぬ、只今世ただ乱れてそれともなく・ゆめの如ごとくに妄語出来して此
の御一門いちもんどうしうちして後には他国よりせめらるべし、例せば立正安国論に
委くわしきが如ごとし、かやうに書き付けて中務三郎左衛門尉が使にとらせぬ、つ
きたる弟子等でしもあらぎかなと思へども力及およばざりげにてある程に、二月の
十八日に島に船つく、鎌倉に軍あり京にもあり・そのやう申す計ばかりなし、
六郎左衛門尉・其その夜にはやふねをもつて一門相具してわたる日蓮にたな
心を合せて・たすけさせ給へ、去る正月十六日の御言みことばいかにやと此程疑うたがい
い申しつるに・いくほどなく三十日が内にあひ俟そうらいぬ、又蒙古国も一定渡わた
り俟そうらいなん、念仏ねんぶつ・無間地獄も一定にてぞ候はんずらん永く念仏申し俟ま
じと申せしかば、いかに云うとも相模守殿等の用ひ給はざらんには日本にほんこく

の人用うまじ用ゐずば国必ず亡ぶべし、日蓮は幼若の者なれども法華經を弘ひろむれば釈迦しゃかぶつ仏の御使おんつかいぞかし、わづかの天照太神てんしょうだいじん・正八幡しょうはちまんなどと申もうすは此の国には重おもけれども梵釈ぼんしゃく・日月にちがつ・四天してんに対すれば小神こじんぞかし、されども此の神人などをあやまちぬれば只ただの人を殺せるには七人半しちにんはんなど申もうすぞかし、太政入道にゅうどう隱岐法皇等おきほうこうのほろび給たまいしは是これなり、此これはそれにはなるべくもなし教主きょうしゅ釈尊しやくそんの御使おんつかいなれば天照太神てんしょうだいじん・正八幡宮しょうはちまんぐうも頭こづべをかたづけ手を合せて地に伏し給たまうべき事なり、法華經ほけきやうの行者ぎやうじやをば梵釈ぼんしゃく・左右さうに侍はんべり月月げんご・前後てらを照し給たまふ、かかる日蓮にちれんを用もちいぬるともあしくうやまはば国亡ぶべし、何いかに況や数百人ひゃくにんにくませ二度まで流しぬ、此の国の亡びん事うたがい疑うたがいいなるべけれども且しばらく禁をなして国をたすけ給たまへと日蓮にちれんがひかうればこそ今までは安穩あんゐんにありつれども・はうに過すぐれば罰あたりぬるなり、又此の度も用ひずば大蒙古国だいもうこくより打手を向けて日本国にほんこくほろぼさるべし、た

さえものじょう

だ平左衛門尉が好むわざわひなり、和殿原とても此の島とても安穩なるま

あんのん

じきなりと申せしかば、あさましげにて立歸りぬ、さて在家の者ども申し

ざいけ

もう

けるは・此の御房は神通の人にてましますか・あらおそろし・おそろし、

ごぼう じんつう

ねんぶつ

今は念仏者をも・やしなひ持斎をも供養すまじ、念仏者・良観が弟子の

じさい ぐよう

ねんぶつ

りようかん

でし

じさい いわ

持斎等が云く此の御房は謀叛の内に入りたりけるか、さて且くありて世間

ごぼう むほん

しばらく

せけん

しつまる。

ねんぶつ

又念仏者集りて僉議す、かうてあらんには我等かつえしぬべし・いかに

せんぎ

われら

もして此の法師を失はばや、既に国の者も大体つきぬ・いかんがせん、念仏

ほっし

すで

だいたい

ねんぶつ

者の長者の唯阿弥陀仏・持斎の長者の性諭房・良観が弟子の道観等・

ちようじや

ただあみだぶつ

じさい

ちようじや

しょうゆぼう

りようかん

でし

かまくら

鎌倉に走り登りて武蔵守殿に申す、此の御房・島に侯ものならば堂塔一宇

むさしのかみ

もう

ごぼう

ぐうたう

も侯べからず僧一人も侯まじ、阿弥陀仏をば・或は火に入れ・或は河にな

あみだぶつ

ある

ある

がす、夜もひるも高き山に登りて日月に向つて大音声を放つて上を呪呶し

にちがつ

おんじよう

じゅうそ

奉る、其の音声 一國に聞ふと申す、武蔵前司殿・是をきき上へ申すまでも
・あるまじ、先ず國中のもの日蓮房につくならば・或は國をおひ・或はろ
うに入れよと私の下知を下す、又下文下るかくの如く三度其の間の事申さ
ざるに心をもて計りぬべし、・或は其の前をとをれりと云うて・ろうに入
れ・或は其の御房に物をまいらせけりと云うて國をおひ・或は妻子をとる、
かくの如くして上へ此の由を申されければ案に相違して去る文永十一年二
月十四日の御赦免の状・同三月八日に島につきぬ、念佛者等・僉議して
云く此れ程の阿弥陀仏の御敵・善導和尚・法然上人をのるほどの者が・た
またま御勘氣を蒙りて此の島に放されたるを御赦免あるとていけて帰さん
は心うき事なりと云うて、やうやうの支度ありしかども何なる事にや有り
けん、思はざるに順風吹き来りて島をば・たちしかばあはいあしければ百
日・五十日にもわたらず、順風には三日なる所を須臾の間に渡りぬ、越後

のこう・信濃の善光寺の念仏者・持齋・真言等は雲集して僉議す、島の法師原は今まで・いけてかへすは人かつたいなり、一我等はいかにも生身の阿弥陀仏の御前をば・とをすまじと僉議せしかども、又越後のこうより兵者ども・あまた日蓮にそひて善光寺をとをりしかば力及ばず、三月十三日に島を立ちて同三月二十六日に鎌倉へ打ち入りぬ。

同四月八日平左衛門尉に見参しぬ、さきには・にるべくもなく威儀を和らげて・ただしくする上・・或る入道は念仏をとふ・・或る俗は真言をとふ・・或る人は禅をとふ・平左衛門尉は爾前得道の有無をとふ・一一に経文を引いて申しぬ、平の左衛門尉は上の御使の様にて大蒙古国はいつか渡り候べきと申す、日蓮答えて云く今年は一定なりそれにとつては日蓮已前より勘へ申すをば御用ひなし、譬えば病の起りを知らざる人の病を治せば弥より病は倍增すべし、真言師だにも調伏するならば弥よ此の国軍にまくべし・

あなかしこあなかしこ

六賢ぶつぼう六賢、真言師しんごんし・総じて当世とうせの法師等ほっしをもつて御祈り有るあべからず・

各各は仏法をたしらせ給うておわさばこそ申すもうともしらせ給はめ、又何いかなる

ふしぎ

不思議にやあるらん他事たじには・ことにして日蓮にちれんが申す事もうは御用いなし、後

に思い合せさせ奉らんが為ために申す隠岐法皇おきほうこうは天子てんしなり権大夫殿ごんのたゆうは民ぞかし、

子の親をあだまんをば天照太神てんしょうだいじんうけ給いなんや、所従しよじゆうが主君しゅくんを敵とせん

しょうはちまんもち

をば正八幡しょうはちまんは御用いあるべしや、いかなりければ公家くげはまけ給いけるぞ、

こひとえただ

此れは偏に只事ひとえただにはあらず弘法大師こうぼうだいしの邪義じゃぎ・慈覚大師じかくだいし・智証大師ちしょうだいしの僻見びやくけんを

まことと思ひて叡山えいざん・東寺とうじ・園城寺おんじょうじの人人ひとびとの鎌倉かまくらをあだみ給いしかば

還著げんちやく於本人おほんにんとて其その失還とがかえつて公家くげはまけ給いぬ、武家ぶけは其その事知らずして

じようぶく

調伏じようぶくも行はざればかちぬ今又かくの如ごとくなるべし、ゑぞは死生不知しじふしのもの

安藤五郎いんどうごろうは因果いんがの道理どうりを弁わきて堂塔どうとう多く造りつくし善人ぜんにんなり、いかにとして願

をば・ゑぞに・とられぬるぞ、是これをもつて思うに此の御房ごぼうたちだに御祈あ

らば入道穀・事にあひ給いぬと覚え候、あなかしこ・あなかしこ・さ・いはざりけると・おほせ候なと・したたかに申し付け候いぬ。

さてかへりききしかば同四月十日より阿弥陀堂法印に仰付られて雨の御いのりあり、此の法印は東寺第一の智人・をむろ等の御師・弘法大師・じかくだいし ちしようだいし しょうこん ひほう せんだい けこん しよしゅう 慈覚大師・智証大師の・真言の秘法を鏡にかけ天台・華嚴等の諸宗を・みな胸にうかべたり、それに随いて十日よりの祈雨に十一日に大雨下りて風ふかず雨しつかにて一日一夜ふりしかば・守殿御感のあまりに金三十兩むまやうやうの御ひきで物ありと・きこふ、鎌倉中の上下・万人・手をたたき口をすくめてわらうやうは日蓮ひが法門申して・すでに頸をきられんとせしが・とかうしてゆりたらば・さではなくして念仏・禪をそしるのみならず、真言の密教なんどをも・そしるゆへに・かかる法のしるしめでたしと・ののしりしかば、日蓮が弟子等けうさめて・これは御あら義と申せし

程に・日蓮にちれんが申もうすやうはしばしまて弘法大師こうぼうだいしの悪義あくぎまことにて国の御いの

りとなるべくば隱岐法皇おきほうこうこそ・いくさにかち給たまはめ、をむる最愛の児せい

たかも頸をきられざるらん、弘法こうぼうの法華經ほけきようを華嚴經けこんきようにをとれりとかける状

は十住じゅうじゅう心論しんろんと申もうす文ぶんにあり、寿命品じゅりようほんの釈迦しゃか仏ぶつをば凡夫ぼんぷなりとするされた

する文ぶんは秘藏宝鑰ひそうほうやくに候、天台大師てんだいだいしをぬす人とかける状は二教論にけうろんにあり、

一乘法華經いちじようほけきようをとける仏ぶつをば真言師しんごんしのはきものとりにも及およばずとかける状は

正覚房しょうかくぼうが舍利講しゃりかうの式しきにあり、かかる僻事ひがことを申もうす人の弟子でし・阿弥陀堂あみだだうの法印ほういん

が日蓮にちれんにかつならば竜王りゅうおうは法華經ほけきようのかたきなり、梵釈ぼんしゃく・四王しおうに・せめら

れなん子細しさいぞあらんずらんと申でしせば、弟子でしどものいはく・いかなる子細しさいの

あるべきぞとをこつきし程に、日蓮にちれん古ふるく善無畏ぜんむいも不空ふくうも雨のいのりに雨は

ふりたりしかども大風吹たいふうきてありけるとみゆ、弘法こうぼうは三七日さんじつすぎて雨をふ

らしたり、此等これらは雨ふらさぬがごとし、三七・二十一日にじゅういちにちにふらぬ雨やある

べき設たといいふりたりとも・なんの不思議ふしぎかあるべき、天台てんだいのごとく千観なん
どのごとく一座たいふうなんど・こそたうとけれ、此これは一定やうあるべしと・い
るもあはせず大風吹来る、大小だいしょうの舍宅しゃたく・堂塔どうとう・古木・御所等を・或あるは天に
吹きのぼせ・或あるは地に吹き入れ、そらには大なる光り物とび地には棟梁とうりょうみ
だれたり、人人ひとびとをも・ふきころし牛馬ぎゅうばを・をくたふれぬ、悪風あくふうなれども秋
は時なれば・なをゆるすかたもあり此これは夏四月なり、其その上・日本国にほんこくに
はふかず但関東かんと・八箇国なり八箇国にも武蔵・相模さがみの両国りょうこくなり両国りょうこくの中
には相州そうしゅうにつよくふく、相州そうしゅうにも・かまくら・かまくらにも御所・若宮
・建長寺けんちようじ・極楽寺ごくらくじ等につよくふけり、ただ事ともみへず・ひとへにこのい
のりの・ゆへにやと・おぼへて・わらひ口すくめせし人人ひとびとも・けうさめて
ありし上・我が弟子でしどももあら不思議ふしぎやと舌をふるう。

本よりごせし事なれば三度・国をいさめんに・もちゐずば国をさるべし
と、されば同五月十二日にかまくらを・いでて此の山に入る、同十月に
大蒙古国よせて^{だいもうこく}壱岐・^{い き}対馬の二箇国を打ち取らるのみならず、太宰府も
やぶられて少弐入道・^{にゅうどう}大友等ききにげににげ其の外の兵者ども其の事とも
なく^{だいたい}大体打たれぬ、又今度よせくるならば・いかにも此の国よはよはと見
ゆるなり、^{にんのうきよう}仁王経には「^{しょうにん}聖人去る時は七難必ず起る」等云云、^{さいしゅうおうきよう}最勝王経
に云く「^{い わ}悪人を愛敬し^{あくにん あいぎよう}善人を治罰するに由るが故に乃至他方の怨賊来りて
^{そうらん あ}国人喪乱に遇わん」等云云、^{ぶっせつ}仏説まことならば此の国に一定悪人のあるを
^{こくしゅ}国主たつとませ給いて^{たまひ}善人をあだませ給うにや、^{だいしつきよう}大集経に云く「^{いちがつ}日月明を
^{げん}現ぜず四方皆亢旱す^{しほうみなこうかん}是くの如く不善業の悪王・^{あくびく}悪比丘我が^{しょうほう}正法を毀壊せ
ん」云云、^{にんのうきよう}仁王経に云く「^{いわ}諸の悪比丘多く名利を求め^{みょうり}国王太子・^{こくおうたいし}王子の前
に於て自ら^{おい みずか はぶつぼう}破仏法の因縁・^{いんねん}破国の因縁を説く、^そ其の王別えずして此の語を

しんちょう
信聴せん是を破これ仏法・破国の因縁はこく いんねんと為す等云云、法華經ほけきように云く「濁世じよくせの悪比丘あくびく」等云云、經文きやうもんまことならば此の国に一軍悪比丘あくびくのあるなり、夫れそ宝山には曲林をきる大海たいかいには死骸をとどめず、仏法ぶつぽうの大海たいかい二乗の宝山には五逆ごぎやくの瓦礫がりがく・四重しじゅうの濁水をば入るれども誹謗ひぼうの死骸と一闍提いつせんたいの曲林をば・をさめざるなり、されば仏法ぶつぽうを習わん人・後世ごしやうをねがはん人は法華誹謗ほっけひぼうをおそるべし。

みな
皆人をぼするやうは・いかでか弘法こうぼう・慈覺等じかくをそしる人を用うべきと、他人たにんは・さてをきぬ安房あわの国の東西ひとびとの人人は此の事を信ずべき事なり、眼前がんぜんの現証げんしょうありいのもりの円頓房えんどんぼう・清澄せいじやうの西堯房せうぎやう・道義房どうぎかたうみの実智房等じつちぼうは年とかりし僧ぞかし、此等これらの臨終りんじゅうはいかんがありけんたずと尋ぬべし、これらはさてをきぬ、円智房げんちぼうは清澄の大堂にして三箇年が間・一字三礼ほけきようの法華經ほけきようを我とかきたてまつりて十巻を誦そらに・をぼへ、五十年が間・一日一夜に二

部づつよまれしぞかし、かれをば哲人は仏になるべしと云云、日蓮こそ念仏者よりも道義房と円智房とは無間地獄の底にをつべしと申したりしが此のひとびと人人の御臨終はよく候いけるか・いかに、日蓮なくば此の人人をば仏になりぬらんとこそおぼすべけれ、これをもつて・しろしめせ弘法・慈覚等はあさましき事どもはあれども弟子ども隠せしかば公家にもしらせ給はず未の代は・いよいよあをぐなり、あらはす人なくば未来永劫までも・さであるべし、拘留外道は八百年ありて水となり、迦毘羅外道は一千年すぎてこそ其の失はあらわれしか。

夫れ人身をうくる事は五戒の力による、五戒を持てる者をば二十五の善神これをまほる上同生同名と申して二つの天生れしより・このかた左右のかたに守護するゆへに失なくて鬼神あだむことなし、しかるに此の国の無量の諸人なげきを・なすのみならず、ゆきつしまの両国の人・皆事にあひぬ

太宰府又申すばかりなし、此の国はいかなるとがのあるやらん・しらまほ
ほしき事なり、一人・二人こそ矢も・あるらめ・そこばくの人人いかん、
これひとへに法華經をさぐる弘法・慈覺・智証等の末の台空白師・善導・
法然が末の弟子等・達磨等の人人の末の者ども国中に充滿せり、故に梵釈
・四天等の法華經の座の誓状のごとく頭破作七分の失にあてらるるなり。
疑つて云く法華經の行者をあだむ者は頭破作七分としかれて侯に・日蓮
房をもしれども頭もわれぬは日蓮房は法華經の行者にはあらざるかと
申すは道理なりと・をばへ侯はいかん、答えて云く日蓮を法華經の行者に
てなしと申さば法華經をなげすてよとかける法然等・無明の辺域とするせ
る弘法大師・理同事勝と宣たる善無畏・意覺等が法華經の行者にてあるべ
きか、又頭破作七分と申す事はいかなる事ぞ刀をもてきるやうにわると
しれるか、經文には如阿梨樹枝とこそとかれたれ、人の頭に七滴あり七

鬼神きじんありて一滴食へば頭いづへをいたむ三滴を食へば寿絶えんとす七滴皆食えみなば死するなり、今の世の人人ひとびとは皆頭阿梨樹の枝のごとくに・われたれども悪業あくごうふかくして・しらざるなり、例せばてをおいたる人の・或あるは酒にゑい・或あるはねいりぬれば・をぼえざるが如しごと、又頭破作七分と申すは・或あるは心破作七分とも申してもう頂いたの皮の底にある骨のひびたふるなり、死ぬる時は・わるる事もあり、今の世の人人ひとびとは去ぬる正嘉の大地震・文永の大彗星に皆頭みなこうべわれて候なり、其その頭いづへのわれし時ぜひせひやみ・五臓の損ぜし時あかき腹をやみしなり、これは法華經の行者ほけきょうをそしりしゆへにあたりし罰とはしらずや。

されば鹿は味あじある故に人に殺され亀は油ある故に命を害せらる女人にょにんはみめ形かたちよければ嫉ねたむ者多し、国を治る者は他国たこくの恐れあり財有る者は命危あやうしほけきょう法華經を持つ者は必ず成仏じょうぶつし候、故に第六天の魔王と申す三界の主此の經

を持つ人をば強に嫉み候なり、此の魔王疫病の神の目にも見えずして人に
付き候やうに古酒に人の酔い候如く国主父母・妻子に付きて法華經の行者
を嫉むべしと見えて候、少しも違わざるは当時の世にて候、日蓮は南無
妙法蓮華經と唱うる故に二十余年所を追はれ二度まで御勘氣を蒙り最後に
は此の山にこもる、此の山の体たらくは西は七面の山・東は天子のたけ北
は身延の山・南は鷹取の山・四つの山高きこと天に付き・さがしきこと飛
鳥もとびがたし、中に四つの河あり所謂・富士河・早河・大白河・身延河
なり、其の中に一町ばかり間の候に庵室を結びて候、昼は日をみず夜は月
を拝せず冬は雪深く夏は草茂り問う人希なれば道をふみわくることかたし、
殊に今年に雪深くして人問うことなし命を期として法華經計りをたのみ
奉り候に御音信ありがたく候、しらず釈迦仏の御使か過去の父母の御使
かと申すばかりなく候、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經。

去る文永八年太歳辛いぬ ぶんえい かのとひつじ

未九月のころより御勘氣をかほりて北国の海中ごかんき かいちゆう

佐渡の嶋にはなたれたりしかば、なにとなく相州鎌倉に住しには生国なれさど そうしゅうかまくら

ば安房の国はこひしかりしかども我が国ながらも人の心もいかにとやむつあわ

びにくくありしかば、常にはかよう事もなくしてすぎしに御勘氣の身となごかんき

りて死罪となるべかりしが、しばらく国の外にはなたれし上はをぼるげなしがい

らではかまくらへはかへるべからず、かへらずば又父母のはかをみる身とふぼ

なりがたしとをもひつづけしかば、いまさらとびたつばかりくやくしてな

どかかかる身とならざりし時・日にも月にも海もわたり山をもこえて父母ふぼ

のはかをもみ師匠のありやうをもとひをとづれざりけんとなげかしくて、ししやう

彼の蘇武が胡国に入りて十九年かりの南へとびけるをうらやみ、仲丸がそぶ ここく

日本国の朝使として・もろこしにわたりてありしがかへされずしてとしをにほんこく

經^へしかば月の東に出^いでたるをみて、我が国みかさの山にも此の月は出^いでさ
せ給^{たま}いて故里の人も只^{ただ}今月に向いてながむらんと心をすましてけり、此^これ
もかくをもひやりし時・我が国より・或^{ある}人のびんにつけて衣をたびたりし
時・彼の蘇^そ武^ぶがかりのあし此^これは現^{げん}に衣ありにるべくもなく・心なぐさみ
て候^{もと}しに、日蓮^{にちれん}はさせる失^{とが}あるべしとはをもはねども此の国のならひ念^{ねん}仏^{ぶつ}
者と禪^{ぜん}宗^{しゅう}と律^{りつ}宗^{しゅう}と真^{しん}言^{ごん}宗^{しゅう}にすかされぬるゆへに法^ほ華^け經^{きょう}をば上^うにはたうと
むよしをふるまい心には入^いらざるゆへに、日蓮^{にちれん}が法^ほ華^け經^{きょう}を・いみじきよし
申^{まう}せば威^い音^{おん}王^{おう}仏^{ぶつ}の末^{まつ}の末^{まつ}法^{ぽう}に不^ふ輕^{きやう}菩^ぼ薩^{さつ}をにくみしごとく上^か一人^{いちにん}より下^げ万^{ばん}人^{にん}
にいたるまで名をも・きかじ・まして形をみる事はをもひよらず、されば
たとひ失^{とが}なくともかくなさるる上はゆるしがたし、まして・いわうや日本^{にほん}国^{こく}
の人の父^ふ母^ぼよりもをもく日^{にち}月^{がつ}よりもたかくたのみたまへる念^{ねん}仏^{ぶつ}を無^む間^{げん}の業^{ごう}
と申し禪^{ぜん}宗^{しゅう}は天^{てん}魔^まの所^{しよ}為^い・真^{しん}言^{ごん}は亡^{ぼう}国^{こく}の邪^{じゃ}法^{ぽう}念^{ねん}仏^{ぶつ}者^{しや}・禪^{ぜん}宗^{しゅう}・律^{りつ}僧^{そう}等^{どう}が寺

をばやきはらひ念ねんぶつ仏者どもが頸をはねらるべしと申もうす上、故最明寺極楽寺
の兩入道殿を阿鼻地獄に墮おち給たまひいたりと申もうすほどの大禍ある身なり、此れ
程の大事だいじを上下万人につけられぬる上は設たとひそらごとなりとも此の世には
うかびがたし、いかにいわうやこれはみな朝夕に申し昼夜に談ぜしうへ平
さえものじよう
左衛門尉等の数百人の奉行人に申しきかせいかにとがに行わるとも申もうしや
むまじきよし・したたかにいゐきかせぬ、されば大海たいかいのそのちびきの石
はうかぶとも天よりふる雨は地にをちずとも日蓮にちれんはかまくらへは還かえるべか
らず、但ただし法華經ほけきようのまことにおはしまし日月にちがつ我をすて給たまはずばかへり入
て又父母ふぼのはかをもみるへんもありなんと心づよくをもひて梵天ぼんてん・帝釈たいしやく・
日月にちがつ・四天してんはいかになり給たまひいぬるやらん、天照太神てんしやうだいじん・正八幡宮しょうはちまんぐうは此の国
にをはせぬか、仏前ぶつぜんの御起請きしょうはむなしくて法華經ほけきようの行者ぎやうじやをばすて給たまうか、
もし此の事叶かなわずば日蓮にちれんが身のなにともならん事はをしからず、各各現げんに

きようしゆしゃくそん
教主 釈尊 と多宝如来と十方の諸仏の御宝前にして誓状を立て給いしが
いまにちれん
今日蓮を守護せずして捨て給うならば正直捨方便の法華經に大妄語を加へ
たま
給へるか、十方三世の諸仏をたばらかし奉れる御失は提婆達多が大妄語に
くぎやりそんじゃ こおうざい
もこへ瞿伽利尊者が虚誑罪にもまされたり設ひ大梵天として色界の頂に
居し千眼天といはれて須弥の頂におはすとも日蓮をすて給うならば阿鼻
の炎にはたきぎとなり無間・大城にはいづるごおはせじ、此の罪をそろし
むげん だいじよう
とおぼさばいそぎいそぎ国土にしるしをいだし給え、本国へかへし給へと
こくど
高き山にのぼりて大音声をはなちてさけびしかば、九月の十二日に御勘氣
おんじよう
十一月に謀反のもの・いできたり、かへる年の二月十一日に日本国のかた
にほんこく
めたるべき大将ともよしくなく打ちころされぬ、天のせめという事あらはな
り、此れにやをどろかれけん弟子どもゆるされぬ。
こ

しか
而れどもいまだゆりざりしかば・いよいよ強盛に天に申せしかば頭の
じうきよう
こくへ

白き鳥からすとび来りぬ、彼の燕つばめのたむ太子たいしの馬鳥からすのれい日藏しょうにん上人の山がらす

・かしらもしろく・なりにけり、我がかへるべき時やきぬらんとながめし

此これなりと申しもうもあへず、文永ぶんえい十一年二月十四日の御赦免状しやめん同三月八日に

佐渡さどの国につきぬ同十三日に国を立ちてまうらというつにをりて十四日は

かのつにとどまり、同じき十五日に越後の寺どまりのつにつくべきが大風たいふう

にはなたれさいわひにふつかぢをすぎてかしはざきにつきて、次の日はこ

うにつき中十二をへて三月二十六日に鎌倉かまくらへ入りぬ、同じき四月八日に平

左衛門尉さゑもんのかみに見参す、本よりごせし事なれば日本国にほんこくのほろびんを助けんがた

めに三度いさめに御用もちいなくば山林さんりんにまじわるべきよし存ぜしゆへに同

五月十二日に鎌倉かまくらをいでぬ。

但しただ本国にいたりて今一度父母ひとたひふのはかをもみると・をもへどもにしきを

きて故郷へはかへれといふ事は内外ないげのをきてなり、させる面目めんもくもなくして

本国へいたりなば不孝ふこうの者にてやあらんずらん、これほどのかたかりし事だにもやぶれてかまくらへかへり入る身なれば又にしきをきるへんもやあらんずらん、其そのときふの時父母ほのはかをもみよかしとふかくおもうゆへにいまに生国へはいたらねどもさすがこひしくて吹く風立つくもまでも東のかたと申せば庵をいでて身にふれ庭に立ちてみるなり、かかる事なれば故郷の人は設たといい心よせにおもはぬ物なれども我が国の人といへばなつかしくてはなべるところに此の御ふみを給びて心もあらずして・いそぎいそぎひらきてみ候へばをとしの六月の八日にいや四郎にをくれてとかかれたり、御ふみもひらかざりつるまではうれしくてありつるが、今・此のことばをよみてこそなににかくいそぎひらきけんうらしまが子のはこなれやあけてくやしきものかな、我が国の事はうくつらくあたりし人のすへまでもをろかならずをもうにことさら此の人は形も常の人にはすぎてみへうちをもひた

るけしきもかたくなにもなしと見えしかども、さすが法華經ほけきょうのみざなれば
しらぬ人人ひとひとあまたありしかば言もかけずありしに、経はてさせ給たまいて皆人
も立ちかへる、此の人このひとも立ちかへりしが使を入れて申せしは安房あわの国のあ
まつと申もうすところの者にて候が、をさなくより御心おんこころざしをもひまいらせて
候上母にて候人もをろかならず申もうしなれなれしき申し事にて候へども・ひ
そかに申もうすべき事の候、さきざきまひりて次第しだいになれまいらせてこそ申もうし
入るべきに候へどもゆみやとる人に・みやづかひてひま候はぬ上事きうに
なり候いぬる上はをそれをかへりみず申もうすところまときこえしかば、な
にとなく生国の人なる上そのあたりの事ははばかりにあらざとて入れ
たてまつりてこまごまとこしかたゆくすへかたりてのちには世間せけん無常むじょうなり
いつと申もうす事をしらず、其の上その武士ぶしに身をまかせたる身なり又ちかく申もうし
かけられて候事のがれがたし、さるにては後生ごしょうこそをそろしく候へたすけ

させ給^{たま}へときこへしかば経文^{きようもん}をひいて申^{もう}しきかす、彼のなげき申せしは父
はさてをき候いぬ、やもめにて候は・わをさしおきて前に立ち候^{そうら}はん事こ
そ不孝^{ふこう}に・をばへ候へ、もしやの事候ならば御弟子^{おんでし}に申^{もう}したへてたび候
へとねんごろにあつらへ候いしが、そのたびは事ゆへなく候へけれども後
にむなしくなる事のいできたりて候いけるにや、人間^{にんげん}に生をうけたる人上下^{じようげ}
につけてうれへなき人はなけれども時にあたり人人^{ひとびと}にしたがひてなげきし
なじななり、譬^{たと}へば病のならひは何の病も重^{しげ}くなりぬれば是にすぎたる病
なしとをもうがごとし、主のわかれをやのわかれ夫妻のわかれ・いづれか
おろかなるべきなれども主は又他の主もありぬべし、夫妻は又かはりぬれ
ば心をやすむる事もありなん、をやこのわかれこそ月日のへだつるままに
いよいよなげきふかかりぬべくみへ候へ、をやこのわかれにもをやはゆき
て子はとどまるは同じ無常^{むじよう}なれどもことはりにもや、をひたるは・わはと

どまりてわきき子のさきにたつなさけなき事なれば神も仏もうらめしや、
いかなればをやに子をかへさせ給たまいてさきにはたてさせ給たまはず・とどめを
かせ給たまいてなげかせ給たまうらんと心こころうし、心なき畜生ちくしやうすら子のわかれしの
びがたし、竹林精舎しょうじやの金鳥こんちやうはかひこのために身をやく鹿野苑ろくやおんの鹿は胎内たいたい
の子を・をしみて王の前にまいれり、いかにいわうや心あらん人にをいて
をや、されば王陵が母は子のためになつきをくだき、神堯皇帝こうていの後は胎内たいたい
の太子たいしの御ために腹をやぶらせ給たまいき、此等これらを・をもひつづけさせ給たまはん
には火にも入り頭かぶをもわりて我が子の形をみるべきならばをしからずとこ
そおぼすらめと・おもひやられてなみだもとどまらず。

又御消息しよきに云く人をもころしたりし者なればいかやうなところにか生
れて候らんをほせをかほり候そうらはんと云云、夫れ針そは水にせずむ雨は空にと
どまらず、蟻あり子を殺せる者は地獄じじくに入り死にかばねを切れる者は悪道あくどうをま

ぬかれず、何に況や人身をうけたる者をころせる人をや、但し大石も海に
うかぶ船の力なり大火も・きゆる事水の用にあらずや、小罪なれども懺悔
せざれば悪道をまぬがれず、大逆なれども懺悔すれば罪きへぬ、所謂る粟
をつみたりし比丘は五百生が間牛となる、をつみし者は三惡道に墮ち
にき、羅摩王・拔提王・毘樓真王・那☆沙王・迦帝王・毘舍☆王・月光王
・光明王・日光王・愛王持多人王等の八万余人の諸王は皆父を殺して位に
つく、善知識にあはざれば罪きへずして阿鼻地獄に入り、波羅奈城に
惡人あり其の名をば阿逸多という母をあひせしゆへに父を殺し妻とせり、
父が師の阿羅漢ありて教訓せしかば阿らかむを殺す、母又他の夫にとつき
しかば又母をも殺しつ、具に三逆罪をつくりしかば隣里の人うとみしかば、
一身たもちがたくして祇・精舎にゆいて出家をもとめしに諸僧許さざりし
かば惡心強盛にして多くの僧坊をやきぬ、然れども釈尊に値い奉りて出家

をゆるし給にき、北天竺^{てんじく}に城あり細石となづく彼の城に王あり竜印という、

父を殺してありしかども後に此^これをおそれ彼の国をすてて仏にまいりた

りしかば仏懺悔^{ざんげ}を許し給いき、阿闍世王^{あじゃせ}はひととなり三毒熾盛^{さんどくしじょう}なり十惡^{じゅうあく}ひ

まなし、其^その上父をころし母を害せんとし提婆達多^{だいばだつた}を師として無量の仏弟子^{むりやう ぶつでし}

を殺しぬ、惡逆^{あくぎやく}のつもりに二月十五日仏の御入滅^{にゆうめつ}の日にあたりて無間地獄^{むげんじごく}

の先相^{せんそう}に七処に惡瘡^{あくそうしゅつしやう}出生して玉体しづかならず、大火^{だいか}の身をやくがごと

く熱湯をくみかくるがごとくなりしに六大臣^{だいにん}まいりて六師外道を召されて

惡瘡^{あくそう}を治すべきやう申しき、今の日本^{にほん}の人人の禪師^{ぜんし}・律師^{りっし}・念仏者^{ねんぶつ}・

真言師等^{しんこんし}を善知識^{ぜんちしき}とたのみて蒙古国^{もうこ}を調伏^{じょうぶく}し後生^{ごしやう}をたすからんとをもうが

ごとし、上提婆達多^{だいはだつた}は阿闍世王^{あじゃせ}の本師^{ほんし}なり、外道の六万蔵^{げどう ぶつぼう}佛法^{はちまん}の八万蔵を

そらにして世間出世^{せけんしゅつせ}のあきらかなる事日月^{にちがつ}と明鏡^{めいきやう}とに向うがごとし、今の

世の天台宗^{てんだいしゅう}の碩学^{せきがく}の顕密二道^{けんみつにどう}を胸にうかべ一切経^{いっさいきやう}をそらんぜしがごとし、

此れ等の人人諸の大臣阿闍世王を教訓せしかば仏に帰依し奉る事なかりし程に摩竭堤に天変度度かさなり地天しきりなる上大風・大旱ばつ飢饉疫癘ひまなき上他国よりせめられて・すでにかうとみえしに悪瘡すら身に出しかば国土一時にほろびぬとみえし程に俄に仏前にまいり懺悔して罪きえしなり。

これらはさてをき候いぬ人のをやは悪人なれども子善人なればをやの罪ゆるす事あり、又子悪人なれども親善人なれば子の罪ゆるさる事あり、されば故弥四郎殿は設い悪人なりともうめる母釈迦仏の御宝前にして昼夜なげきとぶらはば争か彼人うかばざるべき、いかにいわうや彼の人は法華經を信じたりしかば・をやをみちびく身とぞなられて候らん、法華經を信ずる人はかまへてかまへて法華經のかたきを・をそれさせ給へ、念仏者と持齋と真言師と一切南無妙法蓮華經と申さざらん者をば・いかに

法華經ほけきょうをよむとも法華經ほけきょうのかたきとしろしめすべし、かたきをしらねばか
たきにたばらかされ候もつぞ、あはれあはれけさんに入りてくわしく申し候は
ばや、又これよりそれへわたり候三位房ぼう佐度公等おんふみにたびごとにこのふみを
よませてきこしめすべし、又この御文みょうえぼうをば明慧房みょうえぼうにあづけさせ給たまうべし、
なにとなく我が智慧ちえはたらぬ者が・或あるはをこづき・或あるは此文このもんをさいかくと
してそしり候なり、・或あるはよも此の御房ごぼうは弘法大師こうぼうだいしにはまさらじよも慈覺じかく
大師だいしにはこへじなんと人くらべをし候ぞかし、かく申もうす人をばものしらぬ
者と・をぼすべし。

建治二年太歳丙子三月ひのえね

日

日蓮花押にちれんかおう

甲州南部波木井はきりの郷山中

◆一一五

光日上人御返事しょうにんごへんじ

弘安四年八月こうあん

六十歳御作

932P

法華經二の巻に云くほけきょう「其の人命終みょうじゅうして阿鼻獄あびごくに入らん」云云、阿鼻地獄あびじごく

と申すはてんじんく天竺の言もろこしにほん唐土日本には無間むげんと申す無間むげんはひまなしとかけり、一百三十六じじくの地獄の中に一百三十五はひま候、十二時の中にあつけれども又すずしき事もありたへがたけれども又ゆるくなる時もあり、此むげんじじくの無間地獄と申すは十二時に一時いちじかた時も大苦ならざる事はなし故ゆえに無間地獄むげんじじくと申す、此じじくの地獄は此われらの我等が居て候大地だいちの底二万由旬ゆじゆんをすぎて最下さいかの処ところなり、此これ世間せけんの法にもかるき物は上に重き物は下にあり、大地だいちの上には水あり地よりも水かるし、水の上には火あり水よりも火かるし、火の上に風あり火よりも風かるし、風の上に空あり風よりも空かるし、人をも此の四大を以て造れり悪人あくにんは風と火と先ず去り地と水と留とどまる故に人死して後重きは地獄じじくへ墮おつる相なり、善人ぜんにんは地と水と先ず去り風火留とどまる重き物は去りぬ軽き物は留とどまる故に軽かるし人天にんてんへ生まるる相なり、地獄じじくの相重きが中の重きはむげんむげんじじくの相なり、彼の無間地獄は縦横二万由旬むげんじじくなりじゅうおう八方は八万由旬ゆじゆんなり、はちまんゆじゆん

彼の地獄に墮つる人人は一人の身大にして八万由旬なり多人も又此くの如し、身のやはらかなる事綿の如し火のこわき事は大風の焼亡の如し鉄の火の如し、詮を取つて申さば我が身より火の出ずる事十三あり、二の火あり足より出でて頂をとる。又二の火あり頂より出でて足をとほる又二の火あり背より入りて胸より出ず又二の火あり胸より入りて背へ出ず。又二の火あり左の脇より入りて右の脇へ出ず又二の火あり右の脇より入りて左の脇へ出ず亦一の火あり首より下に向いて雲の山を巻くが如くして下る、此の地獄の罪人の身は枯れたる草を焼くが如し東西南北に走れども逃去所なし、他の苦は且らく之を置く大火の一苦なり此の大地獄の大苦を仏委しく説き給うならば我等衆生聞いて皆死すべし故に仏委しくは説き給う事なしと見えて候。

今・日本国の四十五億八万九千六百五十八人の人人は皆此の地獄へ墮ち

させ給^{たま}うべし、されども一人として墮^おつべしとはおぼさず、例せば此の弘安^{こうあん}四年五月以前^{いぜん}には日本^{にほん}の上下万人^{じやうげばんにん}・一人も蒙古^{もうこ}の責めにあふべしともおぼさざりしを日本^{にほん}国^{こく}に只日蓮^{ただにちれん}一人計^{ばか}りかかる事此の国に出来^{しゅったい}すべしとしる、
そのとき^{そのとき} 日本^{にほん}国^{こく}の四十五億八万九千六百五十八人の一切衆生^{いっさいしゆじやう}一人もなく
其の時^{たこく}・日本^{にほん}国^{こく}の四十五億八万九千六百五十八人の一切衆生^{いっさいしゆじやう}一人もなく
他国^{たこく}に責められさせ給^{たま}いて、其の大苦^そは譬^{たと}へばほうろくと申^{もう}す釜に水を入
れてざつこと申^{もう}す小魚をあまた入れて枯^{から}れたるしば木をたかむが如^{ごと}くなる
べしと申せば、あらおそろしいまいまし・打ちはれ所を追へ流せ殺せ信ぜ
ん人人^{ひとびと}をば田はたをとれ財を奪^{しりよう}へ所領をめせと申せしかども、此の五月よ
りは大蒙古^{もうこ}の責めに値^あいてあきれ迷^{まよ}ふ程にさもやと思^{ひとびと}う人人も・あるやら
ん、にがにがしうしてせめたくはなけれども有^ある事なればあたりたりあた
りたり、日蓮^{にちれん}が申せし事はあたりたりばけ物のもの申^{もう}す様にこそ候めれ。
去^{いぬ}る承久^{じやうきゆう}の合戦に隠岐^{おき}の法皇^{ほうこう}の御前^{おんまえ}にして京の二位殿^{にいの}などと申せし

何もしらぬ女房等の集りて王を勧め奉り戦を起して義時に責められあはて

給いしが如し、今今御覽ぜよ法華經誹謗の科と云ひ日蓮をいやしみし罰と

申し經と仏と僧との三宝誹謗の大科によつて現生には此の国に修羅道を移

し後生には無間地獄へ行き給うべし、此れ又偏に弘法・慈覺・智証等の三

大師の法華經誹謗の科と達磨善導律僧等の一乘誹謗の科と此れ等の人人を

結構せさせ給う国主の科と、国を思ひ生処を忍びて兼て勤へ告げ示すを用い

ずして還つて怨をなす大科、先例を思へば呉王夫差の伍子胥が諫を用いず

して越王・勾踐にほろぼされ、殷の紂王が比干が言をあなづりて周の武王

に責められしが如し。

而るに光日尼御前はいかなる宿習にて法華經をば御信用ありけるぞ、

又故弥四郎殿が信じて候しかば子の勧めか此の功德空しからざれば子と

俱に靈山淨土へ参り合せ給わん事疑いなるべし、烏竜と云いし者は

法華經を謗じて地獄に墮ちたりしかども其の子に遺竜と云いし者・法華經
を書きて供養せしかば親仏に成りぬ、又妙莊嚴王は悪王なりしかども御子
の淨蔵・淨眼に導かれて娑羅樹王仏と成らせ給う、其の故は子の肉は母の
肉母の骨は子の骨なり、松榮れば柏悦ぶ芝かるれば蘭なく情無き草木すら
友の喜び友の歎き一つなり、何に況や親と子との契り胎内に宿して九月を
経て生み落し数年まで養ひき、彼になはれ彼にとぶらはれんと思ひしに
彼をとぶらふうらめしさ、彼如何があらんと思うところぐるしさ・いかに
せん・いかにせん、子を思う金鳥は火の中に入りき、子を思ひし貧女は
恒河に沈みき、彼の金鳥は今の弥勒菩薩なり彼の河に沈みし女人は
大梵天王と生まれ給えり、何に況や今の光日上人は子を思うあまりに
法華經の行者と成り給ふ、母と子と俱に靈山淨土へ参り給うべし、其の時
御対面いかにうれしかるべきいかにうれしかるべき、
恐恐

八月八日

にちれんかおう
日蓮花押

光日上人御返事
しょうにんごへんじ

◆一一六 光日尼御返事
ごへんじ

934 P

なきなをながさせ給^{たま}うにや、三つのつなは今生^{こんじょう}に切れぬ五つのさわりは
・すではれぬらむ、心の月くもりなく身のあかきへはてぬ、即身^{そくしん}の仏な
りたうとしたうとし、くはしく申^{もつ}すべく候へども・あまりふみを・をくか
き候ときにかきたりて候ぞ 恐恐^{きょうきょう}謹言^{きんげん}。

九月十九日

にちれん
日蓮在御判

光日尼^{ごへんじ}ごぜん御返事

◆一一七 四恩抄 弘長^{こうちやう}二年正月十六日 四十一歳御作 935 P

与工藤左近尉吉隆

於伊豆伊東

そもそも

抑此の流罪るがいの身になりて候につけて二つの大事あり、一には大なる悦びよろこ

そのゆえ

あり其の故は此の世界をば娑婆せかいと名く娑婆なずと申すは忍もつと申す事なり故に仏ゆゑ

のうにん

をば能忍と名けたてまつる、此の娑婆世界しゃばせかいの内に百億の須弥山しゅみせん百億の日月にちがつ

その

百億の四州あり、其の中の中央の須弥山しゅみせん・日月四州に仏は世に出でまし

にほんこく

す、此の日本国は其の仏の世に出でまします国よりは丑寅の角にあたりた

しゃばせかい

る小島なり、此の娑婆世界より外の十方の国土は皆浄土にて候へば人の心

けんせい

もやはらかに賢聖をのり悪む事も候はず、此の国土は十方の浄土にすては

じゅうあく

てられて候・十悪・五逆・誹謗賢聖・不孝父母・不敬沙門等の科の衆生

さんあくどう

が三悪道に堕ちて無量劫を経て還つて此の世界に生れて候が、先生の悪業

しゅうけ

の習氣失せずしてややもすれば十悪・五逆を作り賢聖をのり父母に孝せず

しゃもん

沙門をも敬はず候なり、故に釈迦如来世に出でましませしかば、或は毒藥

まじえ

を食に雜て奉り・或は刀杖・惡象・師子・惡牛・惡狗等の方便を以て害

し奉らんとし・或は女人を犯すと云い・或は卑賤の者・或は殺生の者と
云い・或は行き合ひ奉る時は面を覆うて眼に見奉らじとし・或は戸を
閉じ窓を塞ぎ・或は国王・大臣の諸人に向つては邪見の者なり高き人を
罵者など申せしなり、大集經涅槃經等に見えたり、させる失も仏にはお
はしまさざりしかども只此の国のくせかたわとして惡業の衆生が生れ集り
て候上、第六天の魔王が此の国の衆生を他の淨土へ出さじとたばかりを成
してかく事にふれてひがめる事をなすなり、此のたばかりも詮する所は仏
に法華經を説かせまいらせじ料と見えて候、其の故は魔王の習として三惡道
の業を作る者をば悦び三善道の業を作る者をばなげく、又三善道の業を作る
者をばいたうなげかず三乘とならんとする者をばいたうなげく、又三乘
となる者をばいたうなげかず仏となる業をなす者をば強になげき事にふれ
て障をなす、法華經は一文一句なれども耳にふるる者は既に仏になるべき

と思ひて、いたう第六天の魔王だいろくてん まおうもなげき思おもう故ゆえに方便ほうべんをまはして留難るなんをなし経きやうを信しんずる心こころをすてしめんとたばかり、而しかるに仏ぶつの在世ざいせの時は濁世じやくせなりといへども五濁ごじやくと始はじたりし上じやう仏ぶつの御力おんちからをも恐れ人ひとの貪とん・瞋じん・癡ち・邪見じゃけんも強盛かうじやうならざりし時ときだにも竹ちく杖じやう外道げどうは神通じんつう第一だいいちの目連尊もくれんそんじや者を殺ころし、阿闍世あじやせ王わうは惡象あくさうを放はなて三界さんがいの独尊どくそんを・をどし奉たてまつり、提婆達多だいばだつたは証果しょうかの阿羅漢あらかん・蓮華れんげ比丘尼びくにを害くぎし、瞿伽利尊くぎやりそんじや者は智慧第一ちえだいいちの舍利弗しゃりほつに惡名あくみやうを立てき、何いかに況いはや世漸よつやく五濁ごじやくの盛さかんになりて候まつだいをや、況いはや世末代まつだいに入りて法華經ほけきやうをかりそめにも信しんぜん者ものの人ひとにそねみねたまれん事ことはおびただしかるべきか、故ゆえに法華經ほけきやうに云いく「如來にやらいの現在げんざいにすら猶な怨嫉おんしつ多おほし況いはや滅度めつどの後あとをや」と云云、始はに此この文ぶんを見候みいし時ときはさしもやと思おもい候まちいしに今いまこそ仏ぶつの御言みことばは違ちがはざりけるものかなと殊ことに身みに當あたつて思おもひ知しれて候まちへ。

日蓮にちれんは身みに戒行かいぎやうなく心こころに三毒さんどくを離はなれざれども此この御經もを若もしや我われも信しんを

取り人にも縁を結ばしむるかと思つて随分世間の事おだやかならんと思ひ
き、世末になりて候へば妻子を帯して候比丘も人の帰依をうけ魚鳥を服す
る僧もさてこそ候か、日蓮はさせる妻子をも帶せず魚鳥をも服せず只法華經
を弘めんとする失によりて妻子を帶せずして犯僧の名四海に満ち螻蟻をも
殺さざれども惡名一天に弥れり、恐くは在世に釈尊を諸の外道が毀り奉り
しに似たり、是れ偏に法華經を信ずることの余人よりも少し經文の如く信
をもむけたる故に惡鬼其の身に入つてそねみをなすかと・をばえ候へば
是れ程の卑賤・無智・無戒の者の二千余年已前に説かれて候法華經の文に
のせられて留難に値うべしと伝記しをかれまいらせて候事のうれしさ申し
尽くし難く候、此の身に学文つかまつりし事やうやく二十四五年にまかり
なるなり、法華經を殊に信じまいらせ候いし事は・わづかに此の六七年よ
りこのかたなり、又信じて候いしかども懈怠の身たる上・或は学文と云ひ

・或は世間の事にさえられて一日にわづかに一卷・一品題目計なり、去年
の五月十二日より今年正月十六日に至るまで二百四十余日の程は昼夜十二
時に法華經を修行し奉ると存じ候、其の故は法華經の故にかかる身となり
て候へば行住坐臥に法華經を読み行ずるにてこそ候へ、人間に生を受けて
是れ程の悦びは何事か候べき。

凡夫の習い我とはげみて菩提心を發して後生を願うといへども自ら思ひ
出し十二時の間に一時・二時こそははげみ候へ、是は思ひ出さぬにも御經
をよみ読まざるにも法華經を行ずるにて候か、無量劫の間・六道・四生を
輪回し候いけるには・或は謀叛をおこし強盜夜打等の罪にてこそ国主より
禁をも蒙り流罪・死罪にも行はれ候らめ、是は法華經を弘むるかと思う心
の強盛なりしに依つて悪業の衆生に讒言せられて・かかる身になりて候
へば定て後生の勤にはなりなんと覚え候、是れ程の心ならぬ昼夜十二時の

ほけきよう 法華經の持經者は末代には有がたくこそ候らめ、又止事なくめでたき事はべ むりようこう 侍り無量劫の間六道に回り候けるには多くの国主に生れ値ひ奉りて・或は寵愛の大臣・関白等ともなり候けん、若し爾らば国を給り財宝官祿の恩をこうむ 蒙けるか法華經流布の国主に値ひ奉り其の国にて法華經の御名を聞いてしゆぎよう これ 修行し是を行じて讒言を蒙り流罪に行われまいらせて候国主には未だ値いまいらせ候はぬか、法華經に云く「この法華經は無量の國中に於て乃至名字をも聞くことを得べからず何に況んや見ることを得て受持し読誦せんをや」と云云、されば此の讒言の人・国主こそ我が身には恩深き人にはをわしまし候らめ。

ぶつぼう 仏法を習う身には必ず四恩を報すべきに候か、四恩とは心地觀經に云くいっさいしゆじよう 一には一切衆生の恩、一切衆生なくば衆生無辺誓願度の願を發し難し、あくにんなく 又悪人無くして菩薩に留難をなさずば・いかでか功德をば増長せしめ候べ

き、二には父母の恩、六道に生を受くるに必ず父母あり、其の中に・或は
殺盗・悪律儀・謗法の家に生れぬれば我と其の科を犯さざれども其の業を
成就す、然るに今生の父母は我を生みて法華經を信ずる身となせり、梵天
・帝釈・四大天王・轉輪聖王の家に生まれて三界・四天をゆづられて
人天・四衆に恭敬せられんよりも恩重きは今の某が父母なるか、三には
国王の恩、天の三光に身をあたため地の五穀に神を養ふこと皆是れ国王の
恩なり、其の上今度・法華經を信じ今度生死を離るべき国主に値い奉れり、
争か少分の怨に依つておろかに思ひ奉るべきや、四には三宝の恩、釈迦
如来無量劫の間菩薩の行を立て給いし時一切の福德を集めて六十四分と成
して功德を身に得給へり、其の一分をば我が身に用ひ給ふ、今六十三分を
ば此の世界に留め置きて五濁雜乱の時非法の盛ならん時・謗法の者・国に
充滿せん時、無量の守護の善神も法味をなめずして威光勢力減ぜん時、

にちがつ

うしないてんりゅう

日月光りを失ひ天竜雨をくださず地神地味を減ぜん時、草木根茎枝葉華菓

薬等の七味も失せん時、十善じゅうぜんの国王こくおうも貪とん・癡じん・癡ちをまし父母ふぼ・六親ろくしんに

考せずしたしからざらん時、我が弟子でし無智むち・無戒むかいにして髪ばかりを剃りて

しゅごしん

守護神にも捨てられて活命のはかりごとなからん比丘びく・比丘尼びくにの命のささ

へとせんと誓ひ給へり、又果地かじの三分の功德二分をば我が身に用ひ給ひ、

じゅみょう

仏の寿命百二十まで世にましますべかりしが八十にして入滅にゅうめつし、残る所

じゅみょう

の四十年の寿命を留め置きて我等われらに与へ給ふ恩をば四大海の水を硯の水と

いっさい

し一切の草木を焼て墨となして一切いっさいのけだものの毛を筆とし十方世界じゅうぼうせかいの

だいち

大地を紙と定めて注し置くとも争いかでか仏の恩を報じ奉るべき、法の恩を申さ

しょうぶつ

ば法は諸仏しよぶつの師なり諸仏しよぶつの貴き事は法に依る、されば仏恩を報ぜんと思は

ん人は法の恩を報ずべし、次に僧の恩をいはば仏宝法宝ぶつぼうほうほうは必ず僧によりて

住す、譬たとえば薪たきぎなければ火なく無だいちく大地無ければ草木生ずべからず、仏法ぶつぼう有り

といへども僧有りて習伝へずんば正法・像法

二千年過ぎて末法へも伝はるべからず、故に大集經に云く五箇の五百歳の

後に無智・無戒なる沙門を失ありと云つて是を悩すは此の人、仏法の大燈

明を滅せんと思えと説かれたり、然れば僧の恩を報じ難し、されば三宝の

恩を報じ給うべし、古の聖人は雪山童子常啼菩薩藥王太子普明王等此等

は皆我が身を鬼のうちかひとなし身の血髓をうり臂をたき頭を捨て給い

き、然るに末代の凡夫三宝の恩を蒙りて三宝の恩を報ぜず、いかにしてか

仏道を成ぜん、然るに心地觀經梵網經等には仏法を學し円頓の戒を受け

ん人は必ず四恩を報ずべしと見えたり、某は愚癡の凡夫血肉の身なり

三惑一分も断ぜず只法華經の故に罵詈毀謗せられて刀杖を加えられ流罪せ

られたるを以て大聖の臂を焼き髓をくだき頭をはねられたるになぞらへん

と思ふ、是れ一つの悦びなり。

第二に大なる歎きと申すは、法華經第四に云く「若し惡人有つて不善の心を以て一劫の中に於て現に仏前に於て常に仏を毀罵せん其の罪尚輕し、若し人・一つの惡言を以て在家・出家の法華經を誦誦する者を毀咎せん其の罪甚だ重し」等と云云、此等の經文を見るに信心を起し身より汗を流し兩眼より涙を流すこと雨の如し我、一人・此の國に生れて多くの人をして一生の業を造らしむることを歎く、彼の不輕菩薩を打擲せし人現身に改悔の心を起せしだにも猶罪消え難くして千劫阿鼻地獄に墮ちぬ、今・我に怨を結べる輩は未だ一分も悔る心もおこさず、是体の人の受くる業報を大集經に説いて云く「若し人あつて千万億の仏の所にして仏身より血を出さん意に於て如何・此の人の罪をうる事寧ろ多しとせんや否や、大梵王言さく若し人只一仏の身より血を出さん無間の罪尚多し、無量にして算をおきても数をしらず阿鼻大地獄の中に墮ちん、何に況や万億の仏身より血

を出^{いだ}さん者を見んをや、終^{つい}によく広く彼の人の罪業果報を説く事ある事な
から^{ただ}ん但し如来をば除き奉^{たてまつ}る、仏の言はく大梵王若し我が為^{ため}に髪をそり袈裟^{けさ}
をかけ片時も禁戒をうけず欠犯をうけん者をなやましのり杖をもつて打ち
なんどする事有らば罪^{つみ}をうる事彼よりは多し」と。

こうちよう

みずのえいぬ

弘長二年 壬戌 正月十六日

日蓮

花押^{かおう}

工藤左近尉殿

◆ 一一八

法華経題目抄^{ほけきようだいもく}

根本大師門人^{こんぽんだいしもんじん} 日蓮撰^{にちれん}

文永三年一月六日四十五歳御作^{ぶんえい}

940P

南無妙法蓮華経^{なむみょうほうれんげきよう}

問^{いわ}うて云^{ほけきよう}く法華経の意もしらず只南無妙法蓮華経と計^{ただなむみょうほうれんげきよう}り五^{ばか}字七^ご字に限り

て一日一遍一月乃至一年十年一期生の間に只一遍^{いっぺん}なんど唱^{ないし}えても輕重^{いちちよう}の惡

に引かれずして四惡趣しあくしゅにおもむかずついに不退ふたいの位にいたるべしや、答え
て云いわくしかるべきなり、問うて云いわく火火といえども手にとらざればやけず
水水といえども口にのまざれば水のほしさもやまず、只南無妙法蓮華經と
題目計りを唱うとも義趣ぎしゅをまぬかれん事いがあるべからん、答えて
云いわく獅子の筋を琴の絃いととして一度奏すれば余の絃いとことこ悉うめのみくきれ梅子のすき声を
きけば口につたまりうるをう世間せけんの不思議ふしぎすら是の如し況や法華經の
不思議ふしぎをや小乗しょうじょうの四諦したいの名計なばかりをさやづる鸚鵡おうむなを天に生ず三歸計さんかりを
持つ人・大魚なんの難をまぬかる何いかに況や法華經の題目は八万聖教の肝心かんじん
一切諸仏の眼目がんもくなり汝等なんじ此れを唱えて四惡趣しあくしゅをはなるべからずと疑うたがいう
か、正直捨方便の法華經には「信を以って入ることを得」と云い雙林最後
の涅槃經には「是の菩提の因は復無量なりと雖も若し信心を説けば即ち
すでに摂尽す」等云云

そ 夫れ仏道に入る根本は信をもて本となす五十二位の中には十信の位には
ぶつどう こんほん
信心初めなりたとひさとりなければしも信心あらん者は鈍根も正見の者なり
しんじん しんじん どんこん せいけん
たとひさとりあるとも信心なき者は誹謗闡提の者なり善星比丘は二百五十
しんじん ひほうせんたい ぜんしやうびく
戒を持ち四禪定を得十二部經を諳にせし者・提婆達多是六万八万の宝蔵を
たも ぜんじやう たら だいはだつた はちまん ほうそう
おぼへ十八變を現ぜしかども此等是有解無信の者今に阿鼻大城にありと聞
げん これら げん じゆき こおむ げこうによらい こうみやう
く、迦葉舍利弗等は無解有信の者なり仏に授記を蒙りて華光如来・光明
かしやうしやりほつ むげうしん
如来といはれき・仏説いて云く「疑いを生じて信ぜざらん者は即ち當に
によらい ぶつせつ いわ うたがい すなわ まさ
あくどう お 疑いを生じて信ぜざらん者は即ち當に
惡道に墮つべし」等云云、此等是有解無信の者を説き給う、而るに今の代
これら げん な と たま し か
に世間の學者の云く只信心計りにて解する心なく南無妙法蓮華經と唱うる
せけん がくしや いわ ただしんじんばか な むみやうほうれんげきやう とな
ばかりにて争か惡信をまぬかるべき等云云、此の人人は經文の如くならば
いかに ひとびと きやうもん こと
あびだいじやう 阿鼻大城まぬかれがたし、さればさせる解りなくとも南無妙法蓮華經と
あびだいじやう 阿鼻大城まぬかれがたし、さればさせる解りなくとも南無妙法蓮華經と
とな なく な むみやうほうれんげきやう
唱うるならば惡道まぬかるべし譬えば蓮華は日に随つて回る蓮に心なし
あくどう たと れんげ

芭蕉ばしょうは雷いかずちによりて増長ぞうちようす此の草に耳なし、我等われらは蓮華れんげと芭蕉ばしょうの如くごと

法華經ほけきようの題目だいまくは日輪にちりんと雷いかずちとの如しごと、犀さいの生角いきつづを身に帶たいして水に入りぬれ

ば水五尺身に近せんだずかず梅檀ゆじゆんの一葉開きぬれば四十由旬の伊蘭いらんを變われらず我等われらが

悪業あくごうは伊蘭いらんと水との如くごと法華經ほけきようの題目だいまくは犀さいの生角いきつづと梅檀せんだの一葉ごとの如しごと、金剛こんごう

は堅固けんこにして一切いっさいの物に破やぶられずされども羊の角と龜の甲に破やぶらる

にくるじゆニ俱類樹には大鳥ににも枝おれざれどもかのまつげに巢くうけうせうれう鳥にやぶ

らる、我等われらが悪業あくごうは金剛こんごうの如くごと尼俱類樹にの如しごと法華經ほけきようの題目だいまくは羊の角ごとの

とくせうれう鳥の如しごと琥珀こはくは塵ちりをとり磁石じしやくは鉄くろがねをすう我等われらが悪業あくごうは塵ちりと

鉄くろがねの如くごと法華經ほけきようの題目だいまくは琥珀こはくと磁石じしやくの如しごと。

かくをもひて常に南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようと唱となうべし、法華經ほけきようの第一だいいちの卷いに云いく

「無量無数劫むりようむしゆこにも是の法を聞かんこと亦難し」第五の卷いに云いく「是の法華經ほけきよう

は無量の國中むりように於おいて乃至名字ないしみようじを聞くことも得可べからず」等云云法華經ほけきようの御名みな

を聞く事はをぼろげにもありがたき事なり、されば須仙多仏多宝仏は世に
いでさせ給^{たま}いたりしかども法華經の御名^{みな}をだびも説^とき給^{たま}わらず釈迦如来は
ほけきよう
法華經のために世にいでさせ給^{たま}いたりしかども四十二年が間は名をひして
かたりいださせ給^{たま}わらず仏の御年七十二と申せし時はじめて妙法蓮華經とと
なえいでさせ給^{たま}いたりき、しかりといえども摩訶^ま訶^か尸^し那^な日本^{にほん}の辺国の者は御名^{みな}
をもきかざりき一千余年すぎて三百五十余年に及びてこそ☆に御名^{みな}計^{ばか}りを
ば聞きたりしか、さればこの經に値^あいたてまつる事をば三千年に一度華さ^{さんぜん}
く優曇華^{うどんげ}・無量無辺劫^{むりょうむへん}に一度値^{ひとたび}うなる一眼の亀にもたとへたり、大地の上^{だいち}
に針を立てて大梵天王宮より芥子^{けし}をなぐるに針のさきに芥子^{けし}の・つらぬか
れたるよりも法華經の題目^{だいもく}に値^あう事はかたし、この須弥山^{しゆみせん}に針を立てて・
かの須弥山^{しゆみせん}より大風^{たいふう}のつよく吹く日・いとをわたさんに・いたりてはりの
穴に・いとのおさきの・いりたらんよりも法華經の題目^{だいもく}に値^あい奉^{たてまつ}る事かたし、

さればこの經の題目を・となえさせ給はんにはをぼしめすべし、生盲の始
めて眼をあきて父母等を・みんな・うれしく・強き・かたきに・とら
れたる者の・ゆるされて妻子を見るよりも・めずらしと・をぼすべし。

問うて云く題目計りを唱うる証文これありや、答えて云く妙法蓮華經

の第八に云く「法華の名を受持せん者・福量る可からず」正法華經に云く

「若し以の經を聞いて名号を宣持では特量可からず」添品法華經に云く

「法華の名を受持せん者・福量る可からず」等云云、此等の文は題目計り

を唱うる福齒計るべからずとみへぬ、一部・八卷・二十八品を受持読誦し

隨喜護持等するは広なり、方便品・壽量品を受持し乃至護持するは略なり、

但一四句偈乃至題目計りを唱えとなうる者を護持するは要なり、広略要の

中には題目は要の内なり。問うて云く妙法蓮華經の五字にはいくばくかの

功德をおさめたるや、答えて云く大海は衆流を納めたり大地は有情非情

をも 持てり如意宝珠は万財を雨ふらし梵王は山界を領す妙法蓮華經の五字ま
かくのこと いっさい
た是の如し一切の九界の衆生並に仏界を納む、十界を納むれば亦十界の
えほう こくど おさ
依報の国土を収む、先ず妙法蓮華經の五字に一切の法を納むる事をいは
ば經の一字は諸經の中の王なり一切の諸經を納む、仏世に出でさせ給い
はちまんしやうきやう と
て五十余年の間八万 聖教 を説きをかせ給いき、仏は人壽・百歳の時・
みずのえさる
壬 申の歳・二月十五日の夜半に御入滅あり、其の後四月八日より七月十
五日に至るまで一夏九旬の間・一千人の阿羅漢・結集堂にあつまりて
いっさいきやう
一切經をかきをかせ給いき、其の後正法 一千年の間は五天竺に一切經ひ
ろまらせ給いしかども震旦国には渡らず、像法に入つて一十五年と申せし
ごかん こうてい
に後漢の孝明皇帝・永平十年丁卯歳・仏教始めて渡つて唐の玄宗皇帝・
かいげん
開元十八年庚午の歳に至るまで渡れる訳者・一百七十六人・持ち来る經・
律・論一千七十六部・五千四十八卷・四百八十帙・是れ皆法華經の經の一

字の眷属けんそくの修多羅しゅたらなり。

先みず妙法蓮華經ほうれんげきようの以前いぜん・四十余年よんじゅうよねんの間の經の中に大方けこんきよう仏華嚴經もんと申もうす經

まします。竜宮城りゅうくうじようには三本あり上本は十三世界微塵數せかいじんじゆの品・中本は四十

九万八千八百偈げ・下本は十万偈四十八品・此の三本の外に震旦しんたん・日本にほんには

僅わずかに八十卷・六十卷等あり、阿含あこん・小乘經しょうじようきよう・方等ほうとう・般若はんの諸大乘經等、

大日經だいにちきようは梵本ほんほんには阿ことばぼら詞ことばきやの五字計ごじばかりを三千五百の偈げをもつてむす

べり、況や余の諸尊しよそんの種子しゆし・尊形三摩耶そんぎよう・其の數をしらず、而しかるに漢土かんとに

は但ねはんぎようわずかに六卷七卷なり、涅槃經そりんさいこには雙林最後の說・漢土かんとには但四十卷

是も梵本ほんほん之れ多し、此等これらの諸經しよきようは皆釈迦みなしや如来かにようらいの所說しよせつの法華經ほけきようの眷属けんそくの

修多羅しゅたらなり、この外過去かこの七仏しよぶつ・千仏おんのんこう・遠遠劫しよぶつの諸仏しよせつの所說げんざいじゆうまん・現在十万の

諸仏しよぶつの說經みなほけきよう皆法華經しよぶつの經の一字の眷属けんそくなり、されば藥王品やくおうほんに仏・宿王華菩薩ほさつ

に對して云いわく「譬たとえば一切いっさいの川流江河せんるこうかの諸水しよすいの中に海こ為だいれ第一いちなるが如ごとく

しゅうざん 衆山の中に須弥山しゅみせんこ為れ第一・衆星しゅうせいの中に月天子がつてんし最も為れ第一だいいち」等云云、
みょうらくだいいし 妙樂大師の釈いわに云く「已今当説最とうせつ為第一さいい」等云云、以の經の一字の中に
じゅつほうほっかい 十方法界の一切經納めたり、譬たとえば如意宝珠の一切の財を納め虚空の万
いっさいきようおさ 象を含めるが如し、經の一字は一代に勝る故に妙法蓮華の四字も又八万宝蔵
ちようか に超過するなり、妙とは法華經に云く「方便の門を開いて真実の相を示す」、
しょうあんだいいし 章安大師の釈に云く「秘密の奥蔵を發く之を称して妙と為す」、妙樂大師
いかわ 此の文を受けて云く「發とは開なり」等云云、妙と申す事は開と云う
せけん 事なり世間に財を積める蔵に鑰かぎなければ開くことかたし開かざれば蔵の内
けこんきよう の財を見ず、華嚴經は仏説き給たまいたりしかども經を開く鑰かぎをば仏・彼の經
と たま 説き給わず、阿含・方等・般若・觀經等の四十余年も仏説き給たまいたりし
きようぎよう かにども彼の經經の意をば開き給わず、門を閉じて・をかせ給たまいたりしか
きようぎよう ば人・彼の經經をさとする者一人もなかりき、たとひ・さとれりとをもひ

しも僻見びやくけんにてありしなり、而しかるに仏ほとけ・法華經ほけきようを説かせ給たまいて諸經しよきようの蔵くらを

開かせ給たまいき、此の時に四十余年よんじゅうよねんの九界しゅじょうの衆生しゆじやう始めて諸經しよきようの蔵くら

の内の財さいをば見しりたりなり譬たとえば大地だいちの上に人畜じんちく・草木等そうもくあれども日月にちがつ

の光まなこなければ眼がんある人も人畜じんちく・草木そうもくの色彩しきさいをしらず、日月にちがつ出で給たまいてこそ

始めてこれをば知る事なれ、爾前にぜんの諸經しよきようは長夜の闇くらの如ごとく法華經ほけきようの本迹ほんせき二

門にちがつは日月にちがつの如ごとし、諸の菩薩もろもろほさつの二目にじようある二乗みようもくの眇目ぼんぶなる凡夫もうもくの盲目せんだいなる闍提いきめくら

の生にぜん盲きやうぎようなる共に爾前にぜんの經經きやうぎようにてはいろいろかたちをばわきまえずありし程

に、法華經ほけきようの時しやくもん・迹門しやくもんの月輪い始めて出で給たまいし時ほさつ・菩薩りようげんの両眼りやうげん先にさと

り二乗にじようの眇目みようもく次にさととり凡夫ぼんぶの盲目もうもく次に開いき生いきめくら盲いっせんだいの一闍提まんこ未來みらいに眼まなこの開ひとえ

くべき縁こを結ひとえぶ是れ偏に妙の一字の得なり。

迹門しやくもん十四品しよくもんの一妙ほんもん・本門ほんもん十四品しよくもんの一妙ほんもん合わせて二妙、迹門しやくもんの十妙しやくもん合しやくもんわ

せて二十妙、迹門しやくもんの三十妙しやくもん・本門ほんもんの三十妙ほんもん合しやくもんわせて六十妙、迹門しやくもんの四十

妙・本門ほんもんの四十妙・觀心かんじんの四十妙合せて百二十重の妙なり六万九千三百八十四字一一の字の下に一の妙あり総じて六万九千三百八十四の妙あり、妙とは天竺てんじくには薩さつと云い漢土かんどには妙と云う妙とは具の義なり具とは円満えんまんの義なり、法華經ほけきょうの一一の文字・一字一字に余の六万九千三百八十四字を納めたり、譬たとえば大海たいかいの一タイの水に一切の河の水を納め一おさの如意宝珠にょいほうじゅの芥子けし計りなるが一切いっさいの如意宝珠にょいほうじゅの財ふを雨ふらすが如し、譬たとえば秋冬しゅうとう枯れたる草木そうもくの春夏しゅんかの日あに値あうて枝葉しやう・華菓けか・出来しゅったいするが如し、爾前にぜんの秋冬しゅうとうの草木そうもくの如くなる九界しゅじやうの衆生ほけきやう・法華經ほけきやうの妙の一字しゅんかの春夏しゅんかの日輪にちりんにあひたてまつりて菩提心ぼだいしんの華よさき成仏じやうぶつ往生おうじやうの菓このみなる、竜樹菩薩りゅうじゅぼさつの大論だいろんに云く「譬たとえば大藥師やくしの能よく毒を以なつて藥と為なすが如し」云云、此の文は大論だいろんに法華經ほけきやうの妙の徳しやくを釈しやくする文なり、妙樂大師みょうらくだいしの釈いに云く「治がたし難がたきを能よく治がたす所以ゆえんに妙しやうと称しやうす」等云云、総じて、成仏じやうぶつ往生おうじやうのなりがたき者・四人あり第一だいいちには

けつじょう にじょう

決定性の二乗・第二には一闍提人・第三には空心の者・第四には謗法の者

なり、此等を法華經にをいて仏になさせ給う故に法華經は妙と云うなり。

だいばだった こくはんのう だいいち たいし じょうばん
提婆達多は斛飯王の第一の太子・浄飯王にはをひ・阿難尊者がこのかみ
きょうしゆしやくそん

・教主釈尊にはいとこに当る・南閻浮提にかろかざる・人なり須陀比丘

を師として出家し阿難尊者に十八変をならひ外道の六万蔵・仏の八万蔵を

胸にうかべ五法を行じて殆ど仏よりも尊きけしきなり、両頭をたてて破僧罪

を犯さんために象頭山に戒壇を築き仏弟子を招き取り、阿闍世太子をかた

らいて云く我は仏を殺して新仏となるべし太子は父の王を殺して新王とな

り給へ、阿闍世太子・すでに父の王を殺せしかば提婆達多は又仏をうかが

い大石をもちて仏の御身より血をいだし阿羅漢たる華色比丘尼を打ちころ

し五逆の内三逆をつぶさにつくる、其の上☆伽梨尊者を弟子とし阿闍世王

を檀那とたのみ五天竺・十六の大国・五百の中国等の一逆・二逆・三逆等

をつくれる者は皆提婆みなだいばが一類いちるいにあらざる事これなし、譬たとえば大海たいかいの諸河しよを

あつめ大山そつもくの草木をあつめたるがごとし、智慧ちえの者は舍利弗しやりほつにあつまり・

神通じんつうの者は目連もくれんにしたがひ・悪人あくにんは提婆だいばに・かたらいしなり、されば厚あつさ

十六万八千由旬ゆじゆん・其その下に金剛こんごうの風輪ある大地だいちすでにわれて生身しやうしんに無間むげん・

大城だいじやうに墮おちにき、第一だいいちの弟子でしく伽梨がしも又生身しやうしんに地獄じごくに入る施遮婆羅門女しらもん

も・おちにき・波瑠璃王はるりもをちぬ善星比丘ぜんしやうびくもおちぬ、又此等これらの人人ひとびとの生身しやうしん

に墮おちしをば五天竺てんじく・十六の大国たいこく・五百の中国ちゆうごく・十千の小国しやうこくの人人ひとびとも皆みな

これをみる、六欲だいろくてん・四戦中丁無争梵字音釈まおう・第六天えんまほうおうの魔王も閻魔法王等みなも皆

御覽さんぜんありき、三千大千世界じゆつぽう・十方しゆじやう法界の衆生みなも皆開ひらきしなり、されば

大地だいち微塵劫みじんはすぐとも無間むげん・大城だいじやうを出でづべからず、劫石ほけきはひすらぐとも

阿鼻あび大城だいじやうの苦くは・つきじとこそ思い合あひたりしに、法華經ほけきやうの提婆品だいばにして

教きやう主しゆ釈尊しやくそんの昔むかしの師し・天王てんのう如来にやらいと記しるし給たまう事ふこそ不思議ふしぎにをほゆれ、爾前にぜん

の経経・実ならば法華経は大妄語・法華経実ならば爾前の諸経は大
虚誑罪なり、提婆が三逆を具に犯して其の外無量の重罪を作りし天王如来
となる、況や二逆・一逆等の諸の悪人の得道疑いなき事譬えば大地をか
へすに草木等のかへるがごとく堅石をわる者・☆草をわるが如し、故に此
の経をば妙と云ふ。

女人をば内外典に是をそしり三皇・五帝の三墳・五典に詔曲の者と定む、
されば災は三女より起ると云へり国の亡び人の損ずる源は女人を本とす、
内典の中には初成道の大法たる華嚴経には「女人は地獄の使なり能く仏の
種子を断つ外面は菩薩に似て内心は夜叉の如し」と云い、雙林最後の
大涅槃経には「一切の江河必ず回曲有り一切の女人必ず詔曲有り」と、又
云く「所有三千界の男子の諸の煩惱・合集して一人の女人の業障と為る」
等云云、大華嚴経の文に「能く仏の種子を断つ」と説かれて侯は女人は仏

になるべき種子しゆしをいれり、譬たとえば大旱魃かんばつの時・虚空こくうの中に大雲だいうをこり大雨だいを大地だいちに下すに・かれたるが如ごとくなる無量無辺むりやうむへんの草木そうもく・花さき菓このみなる、然しかりと雖いえどもいれる種くさねはをひずして結句けっく・雨ふらしげければ・くちうするが如ごとし、
仏は大雲だいうんの如ごとく・説教せつきやうは大雨だいうの如ごとく・かれたるが如ごとくなる草木そうもくを一切いっさいしゅじよう たと ぶつきやう うるお ごかい じゅうぜん ぜんじよう くどく しゅう
衆生しゆじやうに譬たとえたり、仏教ぶつぎやうの雨うに潤うるい五戒ごかい・十善じゅうぜん・禪定ぜんじやう等の功德くどくを修しゆする
は・花さき菓このみなるが如ごとし、一雨いちう・ふれどもいりたる種くさねのをひずかへりて・
くちうするは女人にょにんの仏教ぶつぎやうにあひて生死しやうじを・はなれずして・かへりて仏法ぶつぽうを
うしないあくどう お
失うしなひ惡道あくどうに墮おつるに譬たとふべし、是これを「能よく仏の種子しゆしを断きつ」とは申もうすなり、
涅槃經ねはんぎやうの文ぶんに一切いっさいの江河かうかのまがれるが如ごとく女人にょにんも又まがれりと説とかれたる
は、水みづはやわらかなる物ものなれば石山いしさんなどの・こわき物ものにさへちれて水みづの
さき・ひるむゆへに・あれへ・これへ行くなり、女人にょにんも亦是またかくのくの如ごとく女人にょにん
の心をば水みづに譬たとえたり、心こころよわくして水みづの如ごとくなり、道理どうりと思う事ことも男おとこの

こわき心に値あいぬればせかれて・よしなき方へをもむく、又水に急いぐに
・とどまらざるが如ごとし、女人にょにんは不信ふしんを体とするゆへに只今たださあるべしと見
る事も又しばらくあれば・あらぬさまになるなり、仏ぶつと申もうすは正直しやうじきを本と
す故ゆえに・まがれる女人にょにんは仏になるべからず五障三従ごしやうと申もうして五つのさはり
三つしたがふ事あり、されば銀色女経ぎんじきにょきやうには「三世さんぜの諸仏しよぶつの眼まなこは大地だいちに落
つとも女人にょにんは仏になるべからず」、と説だいろんかれ大論には「清風は・とると云
えども女人にょにんの心はとりがたし」と云へり。

此かくの如ごとく諸経しよきやうに嫌きらはれたりし女人にょにんを文殊師利菩薩もんじゆしりほさつの妙の一字を説とき
給たまいしかば忽たちまちに仏にりき、あまりに不審ふしんなりし故ゆえに宝浄世界ほうじやうせかいの多宝仏たほうぶつの第一だいいち
の弟子でし智積菩薩ちしやくほさつ、釈迦如来しやくかにらひの御弟子おんでしの智慧第一ちえだいいち舍利弗尊者しやりほつそんじや、四十余年よんじゆうよねん
の大小乗だいしやうじやう経の経文きやうもんをもつて竜女りゆうにょの仏になるまじき由よしを難なんぜしかども終ついに

叶ははず仏にたりにき、初成道しよじやうどうの「能よく仏の種子しゆしを断ことつ」雙林最後そうりんさいごの「一切いっさい

の江河必ず回曲有り」の文も破れぬ、銀色女経・並に大論の亀鏡も空しく

なりぬ智積・舍利弗は舌を巻きて口を閉ぢ人天大会は歡喜せしあまりに

たなごころ

掌を合せたりき、是れ偏に妙の一字の徳たり、此の南閻浮提の内に二千

五百の河あり一一に皆まがり、南閻浮提の女人の心のまがれるが如し、

ただしやばや

但し娑婆耶と申す河あり繩を引きはえたるが如くして直に西海に入る、

ほけきよう

法華経を信ずる女人亦復是の如く直に西方浄土へ入るべし此れ妙の一字の

徳なり、妙とは蘇生の義なり蘇生と申すは蘇る義なり、譬えば黄鵠の子・

死せるに鶴の母・子案となけば死せる子・還つて活り、鳩鳥・水に入れば

魚蚌悉く死す犀の角これに・ふるれば死せる者皆よみがえる如く爾前の

きようぎよう

経経にて仏種をいりて死せる二乗・闍提・女人等・妙の一字を持ちぬれ

ば・いれる仏種も還つて生ずるが如し、天台云く「闍提は心有り猶作仏す

べし二乗は

智を威す心生ず可からず法華能く治す復称して妙と為す」と、

みょうらくいわ

妙樂云く「但大と云いて妙と名づけざるは一には有心は治し易く無心は治

し治し難きを能く治す所以に妙と称す」等云云、此等の文の心は大方広仏

けこんきよう だいしつきよう だいほん ねはん だいもく

華嚴經・大集經・大品經・大涅槃等は題目に大の字のみありて妙の字な

し、但生る者を治して死せる者をぼ治せず、法華經は死せる者をも治する

ゆえ

が故に妙と云ふ釈なり、されば諸經にしては仏になる者も仏になるべから

そのゆえ ほつけ

ず其の故は法華は仏になりがたき著すら尚仏になりぬ、なりやすき者は云

どうり

ふにや及ぶと云う道理立ちぬれば法華經をとかれて後は諸經にをもむく一

ほけきよう

しよきよう

人も・あるべからず。

しか しょうそつ

而るに正像二千年過ぎて末法に入つて当世の衆生の・成仏往生のとげ

じようぶつおうじよう

がたき事は・在世の二乗闡提等にも・百千万億倍すぎたる・衆生の觀經

せんまん

しゅじよう

かんきよう

よんじゅうよねん きようぎよう

等の四十余年の經經によりて生死をはなれんと思うは・はかなし・はか

しやうじ

にょにん ざいせ しょうそつまつ

なし・女人は在世・正像末総じて一切の諸仏の一切經の中に法華經を・

いっさい

しよぶつ

いっさいきよう

ほけきよう

はなれて・仏になるべからず、りようぜん 靈山のちようしゅうどうじょうかいこ 聴衆 道場開悟たるてんだいちしやだいし 天台智者大師

・定めて云くいわ「諸経しよきようは但男しるに記して女に記せず今経こんきようは皆記す」等云云。

釈迦如来・多宝仏・十方諸仏の御前おんまえにして摩訶提国王舎城の良・鷲の山うしとらわし

と申す所にて八箇年はちかねんの間・説き給たまひいし法華經を智者大師ちしやだいしまのあたり聞きこし

めしりるに我五十余年いちだいいしうきようの一代聖教とを説きみなしをく事は皆衆生利益のためな

り、但しただ其の中に四十二年きようぎようの經經には女人・仏になるべからずと説きたと

まひしなり、今法華經ほけきようにして女人・仏に成ると・とくと・なのらせ給たまひいし

を仏滅後ぶつめつ・一千五百余年に當あたつて鷲の山より東北・十方八千里せんりの山海をへ

だてて摩訶尸那まかしなと申す国あり震旦国しんたん是なり、此の国に仏の御使おんつかいに出でさせ

給たまひひ天台智者大師となのりて女人にょにんは法華經を・はなれて仏になるべかるず

と定めさせ給たまひいぬ。

尸那国しなより三千里さんぜんをへだてて東方とうほうに国あり日本国にほんこくとなづけたり、天台大師てんだいだいし

・御入滅・二百余年と申せしに此の国に生れて伝教大師となのらせ給い

て秀句と申す書を造り給いしに「能化・所化俱に歴劫無し妙法経の力に

て即身に成仏す」と竜女が成仏を定め置き給いたり、而るに当世の女人

は即身成仏こそ。かたからめ往生極楽は法華を憑まば疑いなし、譬え

ば江河の大海に入るよりもたやすく雨の空より落つるよりもはやくあるべ

き事なり、而るに日本国の一切の女人は南無妙法蓮華経とは唱へずして

女人の往生成仏をとげざる雙観・観経等によりて弥陀の名号を一日に

六万遍・十万遍などとなうるは、仏の名号なれば巧なるには似たれど

も女人不成仏・不往生の経によれるが故にいたずらに他の財を数えたる

女人なり、これひとえに悪知識にたばらかされたるなり、されば日本国の

一切の女人の御かたきは虎狼よりも山賊・海賊よりも父母の敵・とわり等

よりも法華経をばをしえずして念仏を・をしゆるこそ一切の女人のかたき

なれ。

なむ みようほうれんげきよう

南無妙法蓮華經と一日に六万・十万・千万等も唱えて後に暇あらば

よりより あみだ

しよぶつ みようこう

時時阿弥陀等の諸仏の名号をも口ずさみ・なるやうに申し給はんこそ

ほけきよう

によん

法華經を信ずる女人にては・あるべきに当世の女人は一期の間・弥陀の

みようこう

によん

ねんぶつ

ぶつじ

ほけきよう

名号をば・しきりに・となへ念仏の仏事をば・ひまなくをこなひ法華經を

ばつやつや唱へず供養せず・

ある

ほけきよう

じきよう

或はわづかに法華經を持經者に・よますれど

ねんぶつ

ふぼ・きようだい

も念仏者をば父母・兄弟などのやうに・をもひなし持經者をば所従眷属

よりもかろくをもへり、かくして・しかも法華經を信ずる由を・

ほけきよう

よし

なめるなり、抑も淨徳夫人は二人の太子の出家を許して法華經をひろめさせ竜女

は「我闡大乘教・

どだつ

しゅじよう

たいし

しゅつけ

ゆる

ほけきよう

りゆうによ

は「我闡大乘教・度脱苦衆生」とこそ誓ひしが全く他經計りを行じ・て

比の經を行ぜじとは誓はず、

よにん

ひとえ

たきよう

ほけきよう

たきよう

ばか

ほけきよう

今の女人は偏に他經を行じて法華經を行ずる

方をしらず、とくとく心を・ひるがへすべし・心を・ひるがへすべし、

- 2015 -

南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經

日蓮

花押

文永三年五月六日清澄寺に於て末の時書し畢んぬ。

◆一一九 富木殿御消息 文永六年六月 四十八歳御作 949P

大師講の事今月明性房にて候が此月はさしあい候又余人の申せんと候人
侯はば申させ給えと候、貴辺より仰を蒙り候へ、御指合にて候はば他処へ
申すべく候、恐々。

六月七日

日蓮花押

土木殿

◆一二〇 富木殿御返事

949P

白米一ほかひ本斗六升たしかに給候、ときれうも侯はざりつるに悦び入
り候、何事も見参にて申すべく候。

乃時

ときとの
富木殿

かおう
花押

◆一二一

真間・釈迦仏御供養逐状
しゃかぶつ くよう

ぶんえい
文永七年九月 四十九歳御作

950P

しゃかぶつ
釈迦仏御造立の御事、無始曠劫よりいまだ顕れましまさぬ己心の一念三千
おんこと むしこうこう あらわ

つく
の仏造り顕しますか、はせまいりてをがみまいらせ候わばや、「欲令
よくりよう

しゅじょうかいぶつちけんないし がじつじょうぶついらい
衆生開仏知見乃至然我実成仏已来」は是なり、但し仏の御開眼の御事はい
ただ

ぼう
そぎいそぎ伊よ房をもてはたしまいらせさせ給い候へ、法華經一部御仏の
たまい そうち ほけきよう みほとけ

ろっこん
御六根によみ入れまいらせて生身の教主釈尊になしまいらせてかへりて
しょうしん きようしゅしやくそん

たま
迎入れまいらせさせ給へ、自身並に子にあらずばいかんがと存じ候、御
じしん

しりよう
所領の堂の事等は大進の阿闍梨がききて候、かへすがへすをがみ結縁しま
あじやり けちえん

くよう
いらせ候べし、いっぞや大黒を供養して候いし其後より世間なげかずして
そうち せけん

おはするか、此度は大海のしほの満つるがごとく月の満ずるが如く福きたり命ながく後生は靈山とおぼしめせ。

九月二十六日

にちれんかおう
日蓮花押

しんじょう　ときどのごへんじ
進上　富木殿御返事

◆ 二二二 土木殿御返事

ぶんえい　ぶんえい
文永八年九月　五十歳御作　於相模依智

950P

たま　ほけきよう　そうら
上のせめさせ給うにこそ法華經を信じたる色もあらわれ候へ、月はかけ
てみち・しをはひてみつる事疑なし此れも罰あり必ず徳あるべし・なに
しにか・なげかん。

とり　ごかんき　むさしのかみ
此の十二日酉の時・御勘気・武蔵守殿御あづかりにて十三日丑の時に
よくらをいでて佐土の国へながされ候が、たうじはほん雀のえちと申すと

ころにえちの六郎左衛門尉殿さえものじょうの代官・右馬太郎と申もうす者あづかりて侯が、
いま四五日はあるべげに侯、御嘆きはさる事に侯そうらへども・これには一定と
本よりほんごして侯そうらへば・なげかず侯、いままで頸の切れぬこそ本意ほんいなく侯そうらへ、
法華經ほけきょうの御ゆへに過去かこに頸を・うしないたらば・かかる少身じゅうせいのみにて候べ
きか、又数数見擯出さくさくけんひんずいととかれて度度失たびたびとがにあたりて重罪じゅうざいをけしてこそ仏にも
なり侯そうらはんずれば我くぎょうと苦行をいたす事は心ゆへ
なり。

九月十四日

にちれんかおう
日蓮花押

土木殿御返事ごへんじ

◆一二三 寺泊御書ごしよ

文永八年十月ぶんえい 五十歳御作 951P

与富木常忍ときじょうにん 於越後寺泊

鷺目がもくひとゆい一結給おわんび了ぬ、心ざしあらん諸人しよにんは一処いっしょにあつまりて御聴聞ちようもんあるべ

し。

今月十月なり十日相州愛京郡依智の郷を起つて武蔵の国久目河の宿に付き
十二日を経て越後の国寺泊の津に付きぬ、此れより大海を亘つて佐渡の国
に至らんと欲するに順風定まらず其の期を知らず、道の間の事心も及ぶこ
と莫く又筆にも及ばず但暗に推し度る可し、又本より存知の上なれば始め
て嘆く可きに非ざれば之を止む。

法華經の第四に云く「而も此の經は如来の現在すら猶怨嫉多し況んや滅度
の後をや」第五の巻に云く「一切世間怨多くして信じ難し」、涅槃經の三
十八に云く「爾の時に一切の外道の衆咸く是の言を作さく○大王今は唯一
の大悪人有り瞿曇沙門なり○一切の世間の悪人利養の爲の故に其の所に
行き集り而も眷属と爲つて善を修すること能わず呪術力の故に迦葉及び
舍利弗・目☆蓮等を調伏す」云云、此の涅槃經の文は一切の外道我が本師

たる二天三仙の所説の經典を仏陀に毀られて出す所の惡言なり、法華經の文は仏を怨と為す經文には非ず、天台の意に云く「一切の聲聞・緣覺並に近成を樂う菩薩」等云云、聞かんと欲せず信ぜんと欲せず其の機に當らざるは言を出して謗ること莫きも皆怨嫉の者と定め了んぬ、在世を以て滅後を推すに一切諸宗の学者等は皆外道の如し、彼等が云う一大惡人とは日蓮に當れり、一切の惡人之人に集まるとは日蓮が弟子等是なり、彼の外道は先仏の説教流傳の後之を謬つて後・仏を怨と為せり、今諸宗の学者等も亦またかくのごとく復是くの如し、所詮仏教に依つて邪見を起す目の転ずる者大山転ずと欲う、今八宗・十宗等多門の故に諍論を至す、涅槃經の第十八に贖命重宝と申す法門あり、天台大師の料簡に云く命とは法華經なり重宝とは涅槃經に説く所の前三教なり、但し涅槃經に説く所の円教は如何、此の法華經に説く所の仏性常住を重ねて之を説いて帰本せしめ涅槃經の円常を以て

法華經に摂す、涅槃經の得分は但前三教に限る、天台の玄義の三に云く

「涅槃は贖命の重宝なり重ねて掌を抵つのみ」文、籤の三に云く「今家

の引意は大經の部を指して以て重宝と為す」等云云、天台大師の四念処と

申す文に法華經の「雖示種種道」の文を引いて先ず四味を又重宝と定め了ん

ぬ、若し爾らば法華經の先後の諸經は法華經の為の重宝なり、世間の學者

の想に云く此れは天台一宗の義なり諸宗は之を用いず等云云、日蓮之を

案じて云く八宗・十宗等は皆仏滅後より之を起し論師・人師之を立つ滅後

の宗を以て現在の經を計る可からず天台の所判は一切經に叶うに依って一

宗に属して之を弃つ可からず、諸宗の學者等自師の誤りを執する故に・或

は事を機に寄せ・或は前師に譲り・或は賢王を語らい結句最後には悪心

強盛にして鬭諍を起し失無き者を之を損うて樂と為す、諸宗の中に

真言宗殊に僻案を至す善無畏・金剛智等の想に云く一念三千は天台の

極理一代の肝心なり顕密二道の詮たる可きの心地の三千は且く之を置く、
此の外印と真言とは仏教の最要等云云、其の後真言師等事を此の義に寄せ
て印・真言無き経経をば之を下すこと外道の法の如し、・或る義に云く
大日経は釈迦如来の外の説なりと、・或る義に云く教主釈尊第一の説な
りと、・或る義には釈尊と現じて顕経を説き大日と現じて密経を説くと、
道理を得ずして无尽の僻見之を起す、譬えば乳の色を弁えざる者種種の邪
推を作せども本色に当らざるが如く又象の譬の如し、今汝等知る可し
大日経等は法華経已前ならば華嚴経等の如く已後ならば涅槃等の如し。
又天竺の法華経には印・真言有れども訳者之を略して羅什は妙法経と名
づけ、印・真言を加えて善無畏は大日経と名づくるか、譬えば正法華
添品法華・法華三昧・薩云分陀利等の如し、仏の滅後天竺に於いて此の詮
を得たるは竜樹菩薩、漢土に於いて始めて之を得たるは天台智者大師なり、

しんこんしゅう 真言宗の善無畏等・華嚴宗の澄観等・三論宗の嘉祥等・法相宗の慈恩
等・名は自宗に依れども其の心は天台宗に落ちたり其の門弟等・此の事を
知らず如何ぞ謗法の失を免れんや、・或る人・日蓮を難じて云く機を知ら
ずして☆議を立て難に値うと、・或る人云く勸持品の如きは深位の菩薩の
義なり安楽行品に違すと、・或る人云く我も此の義を存すれども言わずと
云云、・或る人云く唯教門計りなりと、具に我之を存すと雖も卞和は足を
切られ清丸は穢丸と云う名を給うて死罪に及ばんと欲す時の人之を咲う、
然りと雖も其の人未だ善き名を流さず汝等が邪難も亦爾る可し。
勸持品に云く「諸の無智の人有つて悪口罵詈し」等云云日蓮此の經文に
當れり汝等何ぞ此の經文に入らざる、及び刀杖を加うる者」等云云、
日蓮は此の經文を読み汝等何ぞ此の經文を読まざる「常に大衆の中
に在つて我等が過を毀らんと欲す」等云云、「国王・大臣婆羅門・居士に

向つて」等云云、「悪口あつくして顰蹙ひんじゆくし数数しばしば擯出ひんずいせられん」数数しばしばとは度度たびたびなり
にちれんひんずいるざい日蓮にちれん擯出ひんずい衆度流罪るざいは二度なり、法華經ほけきようは三世さんぜの説法せつぽうの儀式かこなり、過去ふぎようの不輕ふぎよう
品かんじほんは今の勸持品かんじほん今の勸持品かんじほんは過去かこの不輕品ふぎようなり、今の勸持品かんじほんは未來みらいは不輕ふぎよう
品な為る可べし、其そのときの時は日蓮にちれんは即すなわち不輕菩薩ふぎようぼさつ為る可べし、一部八卷・二十八品
天竺てんじくの御經ゆじゆんは一由旬うけたまに布くと承うけたまわる定めて数品あ有る可べし、いま漢土・日本
の二十八品は略の中の要なり、正宗しやうしゆは之これを置く流通るつうに至つて宝塔品ほうとうほんの三
箇ちよくせんの勸宣りやうぜんは靈山たいしゆ虛空こくうの大衆かんじほんに被らしむ、勸持品かんじほんの二万八万・八十万億等
の大菩薩ぼさつの御誓言せいごんは日蓮にちれんが浅智おほには及たばず但ただし「恐怖惡世中くふあくせ」の經文きやうもんは
末法まつぽうの始まつぽうを指すなり、此くの「恐怖惡世中くふあくせ」の次下つぎしもの安樂行品あんらくぎやうほん等に云く
「於末世おまつせ」等云云、同本異訳ほけきようの正法華經いわに云く「然後末世なんごまつせ」又云く「然後
來末世てんぽんほけきよう」、添品法華經いわに云く「恐怖惡世中くふあくせ」等云云、時に当り当世三類とうせさんるいの敵人てきじん
は之これ有るに但八十万億那由他の諸菩薩しよぼさつは一人も見えたまわず乾ひたる湖の

満たず月の虧^かけて満ちざるが如^{ごと}し水清めば月を浮かべ木を植うれば鳥棲^すむ、
にちれん
日蓮は八十万億那由他の諸の菩薩の代官として之^{これ}を申^{もう}す彼の諸の菩薩の
かび
加被を請^こう者なり。

此の入道佐渡の国へ御共為^なす可^べきの由^{これ}之^{もう}を申^{しか}す然^{しか}る可^べき用途^いと云いかた
わすらいあ
がた煩^わ有^あるの故^{ゆえ}に之^{これ}を還^{かへ}す、御^ご志^しし始^はめて申^{もう}すに及^{およ}ばず候^{ひとびと}人人^{ひと}に
かくのごと^{もう}
是^{これ}くの如^{ごと}く申^{もう}させ給^{たま}え、但^{ただ}し圀^{らい}僧^{そう}等^{どう}のみ心^{こころ}に懸^かり候^{こう}便^{べん}宜^ぎの時^{とき}早^{はや}早^{はや}之^{これ}を聴^きか
す可^べし、
あなかしこあなかしこ
穴^{あな}賢^{けん}穴^{あな}賢^{けん}。

十月二十二日 酉^{とり}の時

にちれんかおう
日蓮花押

◆一二四 富木入道殿御返事^{と きにもうどうごへんじ}

文永八年十一月五十歳御作^{ぶんえい}

於^さ佐渡塚原 955P

此比は十一月の下旬なれば相州鎌倉に候^{こう}し時の思^{おも}には四節の轉變は万国
みな
・皆同じかるべしと存^{ぞん}候^{こう}し処^{ところ}に此北国佐渡の国に下^さ著^{ちやく}候^{こう}て後二月は寒風

しきり

頻に吹て霜雪更に降ざる時はあれども日の光をば見ることなし、八寒を現身はちかん げんしんに感ず、人の心は禽獸きんじゆうに同じく主師親しゅししんを知らず何に況や仏法の邪正・師の善悪は思もよらざるをや、此等は且く之を置く。

にゆうとう

去十月十日に付られ候し入道・寺泊より還し候し時法門を書き遣わし候

かえ

ほうもん

つか

き推量候らむ、已に眼前なり仏滅後・二千二百余年に月氏・漢土・日本・

すで がんぜん

ぶつめつ

がっし

かんど

にほん

えんぶだい

てんじん りゆうじゅ

ないがんれいねん

げちやくぎぎ

てんだい

でんぎよう

ほぼ

一閻浮提の内に天親・竜樹・内鑑冷然・外適時宜云云、天台・伝教は粗

しゃくたま

これ ひろ

いちだいにじ ひほう

これ ひろ

にちれんあに

釈し給へども之を弘め残せる一大事の秘法を此国に初めて之を弘む日蓮豈

そ たら

其の人に非ずや。

すで あらわ

しょうか

だいじしんぜんだいまもん

だいにじ

かみよ

前相已に顕れぬ去正嘉の大地震前代未聞の大瑞なり神世十二人王九十代と

ぶつめつ

だいにじ

じんりきほん

いわ

めつと

おい

仏滅後・二千二百余年末曾有の大瑞なり神力品に云く正滅度の後に於て

よ こ

ゆえ

しよぶつみなかんき

むりよう

じんりき

げん

にやらい

能く是の経を持つが故に諸仏皆歡喜して無量の神力を現ず」等云云、「如来

いっさいしやう

だいほうひろ

にぜん

しゃくもん

きやうぎよう

一切所有之法」云云、但此の大法弘まり給ならば爾前・迹門の経教は

いちぶん
一分も益なかるべし、伝でん教大師きょうだいし云く「日出ひでて星隠せいこんる」云云、遵じゆん式しきの記きに云く
「末法まつぽうの初西はつせいを照てらす」等云云、法已すでに顕あらわれぬ、前ぜん和先代わせんだいに超過ちやうかせり日蓮にちれん粗ぼ
これかんがを勘かんうるに是時しかの然しからしむる故ゆゑなり經きやうに云く「四導どうし師し有あり一いつを上じやうぎ行ぎやうと
なす
名なく」云云又云く「惡世あくせ末法まつぽう時能持のうじぜき是經しやうきやう者しや」又云く「若接須弥しゆみ擲置たほう他方たほう」
云云。

きへん
又貴辺きへんに申付まうづし高經かうきやうの要文智論ようぶんちろんの要文五帖ようぶんごてふ一処いつしよに取り集め被らる可べく候こう、
ろんしゃく
其外論釈ろんしゃくの要文散在ようぶんさんざいあるべからず候こう、又小僧達談義こそうだんぎあるべしと仰おほらるべく
るべい
侯流罪るべいの事痛いたく歎なげせ給たまふべからず、勸持品かんじほんに云く不輕品ふぎやうに云く、命限いのちり有あり
おし
惜おしむ可べからず遂すに願ねがふ可べきは仏国ぶつこく也云云。
かおう
花押

にちれん
日蓮

ぶんえい
文永八年十一月二十三日

ときにゆうどう
富木入道殿御返事

小僧達こそう少還えし候此国ていたらくざいしよ為体在所の有様御問あい有る可く候筆端ひったんに載のせ難かたく候。

◆一二五 佐渡御書さどごしよ

文永九年三月五十一歳御作 与弟子檀那ぶんえい でしだんな

956P

此文このもんは富木殿のかた三郎左衛門殿大蔵たうのつじ十郎入道殿等さじ
きの尼御前あまごぜん一に見させ給べき人人ひとびとの御中おんちゆうへなり、京鎌倉に軍に死
る人人ひとびとを書付けたび候へ、外典抄文句そつらのこ玄げてんの四の本末勘文宣旨等こ
れへの人人ひとびともちてわたらせ給へ。たま

世間せけんに人の恐るる者は火炎の中と刀剣とうけんの影と此身の死するとなるべし
牛馬猶身ぎゆうばなおを惜おしむ況や人身じんしんをや瀬人猶命なおを惜おしむ何に況や杜人いをや、仏説ぶつせつて云く
「七宝しっぽうを以て三千大千世界に布き満るとも手の小指を以て仏経ぶつきように供養くようせん
には如しかず」取意、雪山童子せつせんどうじの身をなげし楽法梵志ぎようほうぼんじが身の皮をはぎし身命しんみよう

に過^{あやま}たる惜^{おし}き者のなければ是^{これ}を布施^{ふせ}として仏法^{ぶつぽう}を習へば必^{かならず}仏となる身命^{しんみょう}を捨^する人・他の宝を仏法^{ぶつぽう}に惜^{おし}べしや、又財宝を仏法^{ぶつぽう}におしまん物まさる身命^{しんみょう}を捨^すべきや、世間^{せけん}の法にも重恩^{じゅうおん}をば命を捨て報ずるなるべし又主君^{しゅくん}の爲^{ため}に命を捨^する人はすくなきやうなれども其数多し男子ははぢに命をすて女人^{にょにん}は男^{ため}の爲^{ため}に命をすつ、魚は命を惜^{おし}む故に池にすむに池の浅き事を嘆^{なげ}きて池の底に穴をほりてすむしかれどもゑにばかされて釣^{つり}をのむ鳥は木にすむ木のひきき事をおじて木の上枝にすむしかれどもゑにばかされて網にかかる、人も又是^{かくのごと}くの如^{ごと}し世間^{せけん}の浅き事には身命^{しんみょう}を失へども大事^{だいじ}の仏法^{ぶつぽう}などには捨^する事難^{がた}し故^{ゆえ}に仏になる人もなかるべし。

仏法^{ぶつぽう}は摂受^{しょうじゅ}・折伏^{しゃくぶく}時によるべし譬^{たとえ}ば世間^{せけん}の文武二道^{にどう}の如^{ごと}しされば昔の大聖^{だいせい}は時によりて法を行ず・雪山童子^{せっせんどうじ}・薩^{さつ}☆王子^{たみこ}は身を布施^{ふせ}とせば法を教へん菩薩^{ぼさつ}の行となるべしと責しかば身をすつ、肉をほしがらざる時身を捨

つ可^べきや紙なからん世には身の皮を紙とし筆なからん時は骨を筆とすべし、
破^は戒^{かい}・無^む戒^{かい}を毀^そり持^じ戒^{かい}・正^し法^{ほう}を用^しん用^{ほう}には諸^し戒^{かい}を堅^きく持^じべし儒^{じゆ}教^{きやう}・道^{だう}教^{きやう}
を以^して釈^{しやく}教^{きやう}を制^{せい}止^しせん日^じには道^{だう}安^{あん}法^{ほう}師^し・慧^ほ遠^{えん}法^{ほう}師^し・法^{ほう}道^{だう}三^{さん}蔵^{ざう}等^{とう}の如^{ごと}く王^{わう}
と論^{ろん}じて命^{めい}を軽^{けい}うすべし、釈^{しやく}教^{きやう}の中^{ちゆう}に小^{しやう}乘^{じやう}・大^{だい}乘^{じやう}・権^{こん}経^{きやう}・実^{じつ}経^{きやう}・
雜^{ざう}乱^{らん}して明^{めい}珠^{じゆ}と瓦^が礫^{りやく}と牛^{ぎゆう}驢^ろの二^に乳^{にゅう}を并^ひへざる時^{とき}は天^{てん}台^{だい}大^{だい}師^し・伝^{でん}教^{きやう}大^{だい}師^し等^{とう}
の如^{ごと}く大^{だい}小^{しやう}・確^{けつ}実^{じつ}・顕^{けん}密^{みつ}を強^{きやう}盛^{じやう}に分^{ぶん}別^{べつ}すべし、畜^{ちく}生^{しやう}の心^{しん}は弱^{じやく}きをおどし
強^{きやう}きをおそる当^{とう}世^せの学^{がく}者^{しや}等^{とう}は畜^{ちく}生^{しやう}の如^{ごと}く智^ち者^{しや}の弱^{じやく}きをあなづり王^{わう}法^{ほう}の邪^{じや}を
おそる諛^ゆ臣^{しん}と申^{もう}すは是^{これ}なり強^{きやう}敵^{てき}を伏^{ふく}して始^はて力^{りき}士^しをしる、惡^{あく}王^{わう}の正^{しやう}法^{ほう}を
破^{やぶ}るに邪^{じや}法^{ほう}の僧^{そう}等^{とう}が方^か人^{にん}をなして智^ち者^{しや}を失^しはん時^{とき}は師^し子^し王^{わう}の如^{ごと}くなる心^{しん}を
もてる者^{もの}必^{かならず}ず仏^{ぶつ}になるべし例^{れい}せば日^に蓮^{れん}が如^{ごと}く、これおこれるにはあらず
正^{しやう}法^{ほう}を惜^{おし}む心^{しん}の強^{きやう}盛^{じやう}なるべしおこれる者^{もの}は必^{かならず}ず強^{きやう}敵^{てき}に値^あておそる心^{しん}
しゅつたし
出来^{しゅつ}するなり例^{れい}せば、修^{しゆ}羅^らのおごり帝^{たい}釈^{しやく}に・せめられて無^む熱^{ねつ}池^ちの蓮^{れん}の中^{ちゆう}

に小身と成て隠れしが如ししょうぼう正法は一字・一句いっくなれども時機じきに叶かないぬれば必ず得道とくどうなるべし千経・万論を習学しゅうがくすれども時機じきに相違そういすれば叶かなう可べからず。

宝治の合戦すでに二十六年今年二月十一日十七日又合戦あり外道げどう・悪人あくにん
によらい しょうぼう

は如来にょらいの正法しょうぼうを破りがたしぶつでし仏弟子等・必ずぶつぼう仏法やぶを破るべししし師子身中の虫の

獅子ししを食等云云、大果報かほうの人をば他の敵やぶりがたし親しみより破やぶるべし、

薬師經やくしに云くいわ「自界叛逆難」と是これなり、仁王經にんのうきように云くいわ「聖人しょうにん去る時七難ひちなん

必ず起おこらん」云云、金光明經こんこうみょうきように云くいわ「三十三天各瞋恨うらみを生ずるは其その国王こくおう

悪を縦ほしいままにし治せざるに由よる」等云云、日蓮にちれんは聖人しょうにんにあらざれども法華經ほけきよう

を説ことの如く受持じゅじすれば聖人しょうにんの如し又世間の作法兼かねて知るしることによて注し置くこ

とは違べかう可べからず現世げんせに云いいをく言の違はざらんをもて後生の疑うたがいをなすべか

らず、日蓮にちれんは此関東かんとくの御一門いちもんの棟梁とうりようなり・日月にちがつなり・亀鏡きつきようなり・眼目がんもくな

り・日蓮にちれん捨て去る時・七難ひちなん必ず起おこるべしと去年九月十二日御勘氣ごかんきを蒙こむりし

時大音声おんじょうを放てよばはりし事ことこれなるべし☆わすかに六十日ななじつ乃至百五十日ひゃくごじゅうじつに

此事このこと起るかは華報かほうなるべし実果じょうの成なせん時ときいかなげかはしからんずら

ん、世間の愚者ぐしゃの思おもに云く日蓮智者にちれんちしやならば何ぞ王難なんに値哉あなんと申す日蓮にちれん

来ての存知ふなり父母ふぼを打子うつこあり阿闍世王あじゃせなり仏・阿羅漢あらかんを殺し血いを出す者だ

あり提婆達多だいばだつたこれ是なり六臣ろくしんこれをほめく伽利等かりとうせこれを悦ぶ、日蓮当世にちれんとうせには此

御一門いちもんの父位あらかんなり仏阿羅漢ごの如ごとし然るを流罪るざいし主従共に悦よろこびぬるあはれに

無慙むざんなる者ものなり誘法ほつしの法師等みずかが自ら禍すでの既すでに頼たのむるを欺あきしがかくなるを

一旦いったんは悦よろこぶなるべし後のちには彼等かれらが欺あき目迎いちもんが一門いちもんに劣おとるべからず、例たとせば

泰衡たいけいがせうとを討九郎判官いっくを討うて悦よろこしが如ごとし既すでに一門いちもんを亡もうす大鬼おおいの此国このくにに

入いなるべし法華經ほけきょうに云く「惡鬼入其身あくき」と是これなり。

日蓮にちれんも又かくせめらるるも先業せんごうなきにあらず不輕品ふぎように云く「其罪畢已つみひつち」

等云云、不輕菩薩ふぎようぼさつの無量むりようの謗法ほうぼうの者に罵詈めり打うちちやくせられしも先業せんごうの所感しよくかん

なるべし何に況や日蓮今生には貧窮下賤の者と生れ施陀羅が家より出たり
心こそすこし法華經を信じたる様なれども身は人身に似て畜身なり魚鳥を
混丸して赤白二滯とせり其中に識神をやどす濁水に月のうつれるが如し
糞囊に金をつつめるなるべし、心は法華經を信ずる故に梵天・帝釈をも猶
恐しと思はず身は畜生の身なり色心不相応の故に愚者のあなづる道理なり
心も又身に対すればこそ月金にもたとふれ、又過去の謗法を案ずるに誰か
しる勝意比丘が魂にもや大天が神にもや不輕輕毀の流類なるか失心の余殘
なるか五千上慢の眷属なるか大通第三の余流にもやあるらん宿業はかりが
たし鉄は炎打てば劍となる賢聖は罵詈して試みるなるべし、我今度の
ごかんきせけんとかがいちぶんひとえせんこうじゅうを今生に消して後生の三惡
を脱れんずるなるべし、般泥洹經に云く「当來の世仮りに袈裟を被て我が
法の中に於て出家學道し懶惰懈怠にして此等の方等契經を誹謗すること有

らん当^{まさ}に知るべし此等^{これら}は皆是^{みな}今日^{こんにち}の諸^{もろ}の異道^{いどう}の輩^{やから}なり」等云云、此經文^{きやうもん}を見ん者自身^{じしん}をはづべし今・我等^{われら}が出家^{しゅっけ}して袈裟^{けさ}をかけ懶惰^{らんだ}懈怠^{けたい}なるは是^{こゝ}に在^{ざい}世^{せい}の六師^{りくし}外道^{がうどう}が弟子^{でし}なりと仏記^{ぶつぎ}し給^{たま}へり、法然^{ほうねん}が一類^{いちるい}大日^{だい}が一類^{いちるい}念仏宗^{ねんぶつしゅう}・禪宗^{ぜんしゅう}と号^{ごう}して法華經^{ほけきやう}に捨閑閣^{しゃくわんかく}抛^{ほう}の四字^{しじ}を副^そへて制止^{せいし}を加^{くわ}て權教^{こんきやう}の弥陀^{みだ}称名^{しょうめい}計^{けい}りを取立^{きりだて}教外^{きやうがい}別伝^{べつでん}して法華經^{ほけきやう}を月^{つき}をさす指^{さし}只^{ただ}文字^{もんじ}をかぞふるなんと笑^{わら}ふ者は六師^{りくし}が末流^{まつりゅう}の仏教^{ぶつぎやう}の中に出来^{しゅつたい}せるなるべし、うれへなかなや涅槃經^{ねはんぎやう}に仏光明^{ぶつこうみやう}を放^{はな}て地の下一百三十六地獄^{じちく}を照^{てら}し給^{たま}うに罪人^{ざいにん}・一人もなかるべし法華經^{ほけきやう}の寿量品^{じゆりやうぽん}にして皆成^{みなじやうぶつ}仏^{ぶつ}せる故^{ゆゑ}なり但^{ただ}し一闍提人^{いつせんたい}と申^{まを}て謗法^{ぼうぼう}の者^{もの}計^{けい}り地獄^{じちく}守^{しゅ}に留^{とど}られたりき彼等^{かれら}がうみげて今^{いま}の世^よの日本^{にほん}国^{こく}の一切衆生^{いっさいしゆじやう}となれるなり。

日蓮^{にちれん}も過去^{かこ}の種子^{しゆしすで}已^{もう}に謗法^{ぼうぼう}の者^{もの}なれば今生^{こんじやう}に念仏者^{ねんぶつ}にて数年^{ねんぶつ}が間^{かん}・法華經^{ほけきやう}の行者^{ぎやうじや}を見ては未^み有^う一人得者^{みういちにんとくしやせんちゆうむいつ}千中無^{せんちゆうむいつ}一等^{いちどう}と笑^{わら}しなり今^{いま}謗法^{ぼうぼう}の醉^{さい}さめ

て見れば酒に酔る者父位を打て悦しが酔さめて後歎しが如し欺けども甲斐
なし此罪消がたし、何に況や過去の謗法の心中にそみけんをや經文を見
候へば烏の黒きも鷺の白きも先業のつよくそみけるなるべし外道は知らず
して自然と云い今の人は謗法を躪し扶けんとすれば我身に謗法なき由をも
ながちに陳答して法華經の門を閉よと法然が書けるをとかくあらかひなん
どす念仏者はさてをきぬ天台・真言等の人人彼が方人をあながちにするな
り、今年正月十六日十七日に佐渡の国の念仏者等数百人印性房と申すは念仏
者の棟梁なり日蓮が許に來て云く法然上人は法華經を抛よとかかせ給に
は非ず一切衆生に念仏を申させ給いて候此の大功德に御往生疑なしと
書付て侯を山僧等の流されたる並に寺法師等・善哉善哉とほめ候をいかが
これを破し給と申しき鎌倉の念仏者よりもはるかにはかなく侯ぞ無慙とも
申す計りなし。

いよいよ日蓮にちれんが先せん生しょう今こん生じょう先せん日にちの謗ほう法ぼうおそろしかかりける者の弟子でしと成

けんかかる国に生れけんいかなるべしとも覚おほえず、般泥垣はんねいこん經きやうに云いく

「善男子ぜんなんし過去かこに無量むりやうの諸罪しよざい・種種しゆじゆの惡業あくごうを作らんに是この諸しよの罪報ざいほう・或あるは

輕易きやういせられ・或あるは形状ぎやうじやう醜陋しゆうる衣服えふく足らず飲食おんじき☆疎そ・財を求めて利あらず

貧賤ひんせんの家及び邪見およ じゃけんの家に生れ・或あるは王難なんに遇う」等云云、又云く「及び余

の種種しゆじゆ にんげんの人間の苦報現世げんせに軽く受くるは斯これ護法ごほうの功德力くんとくに由る故なり」

等云云、此經文きやうもんは日蓮にちれんが身なくば殆ほとんど仏の妄語もうごとなりぬべし、一には・或ある

被輕易きやうい二には・或ある形状ぎやうじやう醜陋しゆうる三には衣服不足えふくふそく四には飲食おんじき☆疎五そには

求財不利ぐざいふり・六には生貧賤家しやうひんせんけ・七には及邪見家じゃけん・八には・或ある遭王難等云云、

此八句は只日蓮ただにちれんが身に感ぜり、高山こうざんに登る者は必ず下り我人われを輕かるしめば

還かえりて我身人わがみに輕易きやういせられん形状ぎやうじやう端嚴たんごんをそしれば醜陋しゆうるの報ういを得人の衣服えふく

飲食おんじきをうばへば必ず餓鬼がきとなる持戒尊貴じかいそんきを笑へば貧賤ひんせんの家に生しょうず正法しょうほうの家

をそしれば邪見じやくけんの家に生ず善戒を笑へば国土こくどの民となり王難なんに遇ふ是は常
の因果いんがの定れる法なり、日蓮にちれんは此因果いんがにはあらず法華經ほけきようの行者ぎようじやを過去かこに
輕易きよういせし故ゆえに法華經ほけきようは月と月とを並べ星と星とをつらね華山に華山をかさ
ね玉と玉とをつらねたるが如ごとくなる御經を・或あるは上げ・或あるは下くだして嘲弄ちやうりやうせし
故ゆえに此八種だいはんの大難あえに値るなり、此八種みらいは尽未来際が間・一づつこそ現げんずべ
かりしを日蓮にちれんつよく法華經ほけきようの敵を責るによて一時いちじに聚あつまり起せるなり 譬たとえば民
の郷郡きやうぐんなどにあるにはいかなる利錢りせんを地頭等じとうにおほせたれどもいたくせ
めず年年ねねにのべゆく其所きよ所を出る時に競起きやうきが如ごとし斯これ護法の功德くどく力ちからに由る故
なり等は是これなり、法華經ほけきようには「諸もろの無智むちの人ひと有あり惡口罵詈あつくめり等とうじようがしやくし刀杖瓦石とうじやうがしやくを
加うる乃ないしこ至國王だいじん・大臣ばらもん・婆羅門こじ・居士こじに向つて乃ないし至數數ししばしば摸出もしゅせられん」等
云云ごくそつ、獄卒ざいにんが罪人を責せずば地獄じごくを出る者かたかりなん当世とうせの王臣おうしんなくば日蓮にちれん
が過去かこ謗法ほうほうの重罪じゆうざい消し難がたし日蓮にちれんは過去かこの不輕ふきようの如ごとく当世とうせの人人ひとびとは彼の輕毀きようき

の四衆ししゅうの如ごとし人は替れども因いんは是こゝは一なり、父母ふぼを殺せる人ひと異なれども同じ
むげんじこく
無間地獄におついかなれば不輕ふぎょうの因いんを行じて日蓮にちれん一人釈迦しゃか仏ぶつとならざるべ
き又彼諸人しよにんは跋陀婆羅門ばつだばらもん等と云はれざらんや但千劫阿鼻地獄せんごうあびじこくにて責られん
事こそ不快にはおぼゆれ是これをいかんとすべき、彼輕毀きやうきの衆は始は謗ぼうぜしか
ども後には信伏しんぷく隨從ずいじゆうせりき罪多つみた分ぶんは滅して少分有しが父母千人殺したる程
の大苦たうをうく当世とうせの諸人しよにんは翻ひるがえりす心なし譬喩品ひゆほんの如く無数劫むしゆこをや経つんずら
ん三五の塵点じんてんをやおくらんずらん。

これはさてをきぬ日蓮にちれんを信ずるやうなりし者どもが日蓮にちれんがかくなれば
疑うたがひを・をこして法華經ほけきやうをすつるのみならずかへりて日蓮にちれんを教訓きやうくんして我賢きやうけん
しと思はん僻人びやくにん等が念仏ねんぶつ者よりも久く阿鼻地獄あびじこくにあらん事不便ふびんとも申す
計ばかりなし、修羅しゆらが仏ぶつは十八界我は十九界と云ひ外道げどうが云く仏ぶつは一究竟道くきやうどう我
は九十五究竟道くきやうどうと云いしが如く日蓮御房にちれんごぼうは師匠ししやうにておはせども余にこはし

われら我等はやはらかに法華經を弘むべしと云んは螢火が日月をわらひ蟻塚が華山を下し井江が河海をあなづり烏鵲が鸞鳳をわらふなるべしわらふなるべし。

なむみょうほうれんげきよう
南無妙法蓮華經

ぶんえい
文永九年太歳 壬申 三月二十日

日蓮 花押

にちれんでし だんな おんちゅう
日蓮弟子・檀那等御中

さど
佐渡の国は紙侯はぬ上面面に申せば煩あり一人ももるれば恨ありぬ

このもん
べし此文を心ざしあらん人人は寄合て「御覧じ料簡侯て心なぐさませ

たま
給へ、世間にまさる欺きだにも出来すれば劣る欺きは物ならず当時の

ひとびと
軍に死する人人実不実は置く幾か悲しかるらん、いざはの入道さかべ

にまうい
の入道いかになりぬらんかはのべ山城得行寺殿等の事いかにと書付て

げてん
給べし、外典書の貞観政要すべて外典の物語八宗の相伝等此等がな

くしては消息もかれ候はぬにかまへてかまへて給侯べし。

◆一二六

富木殿御返事

文永6年4月51歳御作

於佐渡一の谷

962P

御返事

日蓮が臨終一分も疑無く頭を刎ねらるる時は殊に喜悅有るべし、

大賊に値うて大毒を宝珠に易ゆと思う可きか。

鷲目員数の如く給ひ候い畢んぬ御志申し送り難く候、法門の事先度四

条三郎左衛門尉殿に書持せしむ其の書能く能く御覧有る可し、粗経文を

勘え見るに日蓮・法華經の行者為る事疑無きか但し今に天の加護を蒙ら

ざるは一には諸天神此の悪国を去る故か、二には善神法味を味わざる

故に威光勢力無きか、三には大悪鬼三類の心中に入り梵天・帝釈も力

及ばざるか等、二の証文道理追て進せしむ可く候、但生涯本より思い切

て侯今に翻返ること無く共の上又遺恨無し諸の悪人は又善知識なり、
・折伏の二義仏説に依る、敢て私曲に非ず万事靈山浄土を期す、
・恐
謹言。
きんげん
きんげん

卯月十日

日蓮 花押

土木 殿

◆一二七 土木殿御返事

文永十年七月 五十二歳御作

963P

驚目二貫給侯い畢んぬ、太田殿と其れと二人の御心喜び侯、伊与房は機
量物にて侯ぞ今年留め候い畢んぬ、御勘気ゆりぬ事・御欺き侯べからず侯、
当世・日本国子細之れ有る可き由之を存ず定めて勘文の如く侯べきか、
設い日蓮死生不定為りと雖も妙法蓮華經の五字の流布は疑い無き者か
伝教大師は御本意の円宗を日本に弘めんとす、但し定慧は存生に之を弘

め円・或は死後に之を顕す事法為る故に一重大難之れ有るか、仏滅後・二
千二百二十余年今に寿量品の仏と肝要の五字とは流布せず、当時果報を論
ずれば恐らくは伝教・天台にも超え竜樹・天親にも勝れたるか、文理無く
んば大慢豈之に過んや、章安大師・天台を褒めて云く「天竺の大論尚其の
類に非ず震旦の人師何ぞ劣しく語るに及ばん此れ誇耀に非ず法相の然らし
むるのみ」等云云、日蓮又復是くの如し竜樹・天親等尚其の類に非ず等
云云、此れ誇耀に非ず法相の然らしむるのみ、故に天台大師日蓮を指して
云く「後の五百歳遠く妙道に結わん」等云云、伝教大師当世を恋いて云く
「末法太はだ近きに有り」等云云、幸いなるかな我が身「数数見擯出」の
文に当ること悦ばしいかな悦ばしいかな、諸人の御返事に之を申す故に
委細、恐恐

七月六日

日蓮花押

土木殿御返事ごへんじ

◆一二八

富木殿御書ときどのごしよ

文永十一年五十三歳御作ぶんえい

964P

けかち申もうすばかりなし米一合もうらずがししぬべし、此の御房ごぼうたちも
・みなかへして但一人侯べし、このよしを御房ごぼうたちにもかたりさせ
給たまへ。

十二日さかわ十三日たけのした十四日いわくるまがへし十五日を・をみや十
六日なんぶ、十七日このところ・いまださだまらずといえども、たいしは
この山中・心中しんちゅうに叶かないて侯そうらへば・しばらくは侯そうらはんずらむ、結句けっくは一人に
なりて日本国にほんこくに流浪るろうすべきみにて侯、又たちとどまるみならば・けさんに
入り侯べし、きようきようきんげん 恐恐謹言。

十七日

日蓮にちれん 在御判

ときどの

◆一二九 土木殿御返事 ごへんじ

964P

仕候なり。

ほうび

褒美に非ず、実に器量者なり。

きりよう

来年正月大進阿闍梨と越中に之を遣し去

つか

るべく候、白小袖一つ給ひ候ひ畢んぬ、今年日本国一同に飢渴の上、佐渡

にほんこく

さど

の国には七月七日已下天より忽ちに石灰虫と申す虫と雨等にて一時に稻穀

いかそら

もう

いちじ

損し。其の上疫病处处に遍満し、方方死難脱れ難きか、事事紙上に尽し難

えきびようしよしよ

へんまん

かたがた

なん

なん

なん

く候、恐恐謹言。

きようきようきんげん

十一月三日 日蓮在御判

にちれん

◆一三〇 法華行者逢難事

ほっけぎようじや

なん

文永十一年正月 五十三歳御作与富木常忍

ぶんえい

ときじょうにん

965P

河野辺殿等中

やまとあじやりごほうおんちゆう

大和阿闍梨御房御中

一切我弟子等中 いっさいでし

三郎左衛門尉殿 さえもののじょう

謹上 きんじょう

日蓮 にちれん

富木殿 ときどの

追て申す、竜樹・天親は共に千部の論師なり、但権大乘を申べて法華經 もうりゅうじゅてんじんろんしごんだいじょうのほけきょう

をば心に存して口に吐きたまわず 此に口、伝有り、天台・伝教は之を宣べて本門の ほんもん

本尊と四菩薩と戒壇と南無妙法蓮華經の五字と之を残したもう、所詮一に ほんぞんぼさつかいだんなむみょうほうれんげきょうごじこれしよせん

は仏・授与したまわざるが故に、二には時機未熟の故なり、今既に時来れ じゅよゆえんじきすで

り四菩薩出現したまわんか日蓮此の事先ず ぼさつしゅつげんにちれん

之を知りぬ、西王母の先相には青鳥・客人の来相には☆鵲是なり、各各 これせいおうぼせんそうせいちょううかんじやくこれ

・我が弟子たらん者は深く此の由を存ぜよ設い身命に及ぶとも退転するこ でしよしたといしんみょうたいてん

と莫れ。 なか

富木・三郎左衛門の尉・河野辺・大和阿闍梨等・殿原・御房達各各互に
読聞けまいらせさせ給え、かかる濁世には互につねに・いゐあわせてひま
もなく後世ねがわせ給い候へ。

法華經の第四に云く「如来の現在すら猶怨嫉多し況や滅度の後をや」等

云云、同第五に云く「一切世間怨多くして信じ難し」等云云、涅槃經の三

十八に云く「爾の時に外道に無量の人有り○心瞋恚を生ず」等云云、又云く

「爾の時に多く無量の外道有り和合して共に摩伽陀の王・阿闍世の前に往き

ぬ○今は唯一大悪人有り瞿曇沙門なり王未だ検校せず我等甚だ畏る、

一切世間の悪人利養の為の故に其の所に往集して眷属と為る乃至迦葉・

舍利弗・目☆連」等云如来現在猶多怨嫉の心是なり、得一大德天台智者大師

を罵りして曰く「智公汝は是れ誰が弟子ぞ三寸に足らざる舌根を以て

覆面舌の所説の教時を謗ず」、又云く「豈是れ☆狂の人に不ずや」等云云、

南都・七大寺の高徳等・護命僧都・景信律師等三百余人・伝教大師を罵り

して曰く「西夏に鬼弁婆羅門有り東土に巧言を吐く禿頭沙門あり此れ乃ち

物類冥 召して世間を誑惑す」等云云、秀句に云く「浅きは易く深きは難し

とは釈迦の所判なり浅きを去つて深きに就くは丈夫の心なり、天台大師は

釈迦に信順し法華宗を助けて震旦に敷揚し、叡山の一家は天台に相承し

法華宗を助けて日本に弘通す」云云。

夫れ在世と滅後と正像二千年の間に法華經の行者・唯三人有り所謂仏

と天台・伝教となり、真言宗の善無畏・不空等・華嚴宗の杜順・智儼等

・三論・法相等の人師等は実經の文を会して権の義に順ぜしむる人人な

り、竜樹・天親等の論師は内に鑒みて外に発せざる論師なり、經の如く

宣伝すること正法の四依も天台・伝教には如かず、而るに仏記の如くん

ば末法に入つて法華經の行者有る可し其の時の大難・在世に超過せんと云

云、仏に九横の大難有り所謂孫陀利の謗と金鏑と馬麦と琉璃の釈を殺すと
こつじきくうはつ せんしやによ ちようだつ
乞食空鉢と旃遮女の誘と調達が山を謗すと寒風に衣を索むるとなり、其の
いっさいげどう ざんそう
上一切外道の讒奏上に引くが如し記文の如くんば天台・伝教も仏記に及ば
ず。

これを以て之を案ずるに末法の始に仏説の如く行者世に出現せんか、而
ぶんえい
に文永十年十二月七日・武蔵の前司殿より佐土の国へ下す状に云く自判之
在り。

佐渡の国の流人の僧日蓮弟子等を引率し悪行を巧むの由其の間え有り
しよぎよう くわだ はなはだ
所行の企て甚だ以て奇怪なり今より以後・彼僧に相い随わん輩に於て
は炳誠を加えしむ可し、猶以て違犯せしめば交名を注進せらる可きの由の
所に候なり、何て執達件の如し。
しったつくだん ごと

文永十年十二月七日

沙門観惠上る

依智六郎左衛門尉等云云。

此の状に云く悪行を巧む等云云、外道が云く瞿曇は悪人なり等云云、又

くおうなん

九横の難一一に之在り、所謂琉璃殺釈と乞食空鉢と寒風索衣とは仏世に

ちようか

超過せる大難なり、恐くは天台・伝教も未だ此の難に値いたまわず当に知

るべし三人に日蓮を入れ四人と為して法華經の行者・末法に有るか、

よろこばしいかなきようめつと

喜い哉況滅度後の記文に当れり悲い哉国中の諸人阿鼻獄に入らんこと茂

きを厭うて之を子細に記さず心を以て之を推せよ。

いとこれしさい

ふんえいきえいぬ

文永十一年甲戌正月十四日日蓮花押

いっさいしよにんこれけんもん

一切の諸人之を見聞し志有らん人人は互に之を語れ。

ときどのごへんじ

富木殿御返事

文永十二年五十四歳御作

968P

富木殿御返事

富木殿御返事

かたばら

惟一領給ひ候い畢んぬ、夫れ仏弟子の中・比丘一人はんべり、飢饉の

日蓮

世に仏の御時事かけて候いければ比丘袈裟をうて其のあたいを仏に奉る、
仏其の由来を問い給いければ・しかじかとありのままに申しけり、仏云く
「袈裟はこれ三世の諸仏・解脱の法衣なり、このあたひをば我報じがたし」
と辞退しましたしかば此の比丘申すは「この袈裟あたひをば・いかなが
せん」と申しければ、仏の云く「汝悲母有りや不や」答えて云く「有り」
仏云く「此の袈裟をば汝母に供養すべし」此の比丘・仏に云く「仏は此れ
三界の中第一の特尊なり一切衆生の眼目にてをはす、設い十方世界を覆う
衣なりとも大地にしく袈裟なりとも能く報じ給うべし、我が位は無智なる
事牛のごとし羊よりもはかなしいかでか袈裟の信施をほうぜん」と云云、
仏返して告げて云く「汝が身をば誰か生みしぞや汝が母これを生む此の
袈裟の恩報じぬべし」等云云、此れは又齡九旬にいたれる悲母の愛子に・
これをまいらせさせ給える我と両眼を誕り身命を尽くせり、我が子の身と

して此のか帷かたびらの恩かたしと・をぼして・つかわせるか日蓮にちれん又はうじがたし、しかれども又返すべきにあらず此の帷かたびらをきて日天にってんの御前おんまえにして此のしさい子細もうを申し上げば定めて釈梵諸天しよてんしろしめすべし、帷かたびらは一なれども十方じゅうっぽうの諸天しよてん此れをしり給たまうべし、露つゆを大海たいかいによせ土を大地だいちに加るがごとし生生に失せじ世世にくちざらむかし、
恐恐謹言きょうきょうきんげん。

二月五日

日蓮

花押かおう

◆一三二 富木殿御書ときどのごしよ

建治元年五十四歳御作がねん

969P

与富木常忍ときじょうにん

妙法蓮華經の第二に云くみようほうれんげきよう「若し人信ぜずして此の經を毀謗きぼうし經を誦誦どくじゆし書持しよじすること有らん者を見て輕賤きやうせん憎嫉そうしつして結恨けつこんを懷いだかん其人命終ごにんみようじゆうして阿鼻獄あびごくに入らん乃至是の如く展轉てんでんして無數劫むしゆこうに至らん」第七に云くいわ「千劫せんこう阿鼻獄あびごくに於てす」第三に云くいわ「三千塵点さんぜんじんてん」第六に云くいわ「五百塵点劫ごひやくじんてんこう」等云

云、涅槃經に云く「惡象の為に殺されては三惡に至らず惡友の為に殺され
ては必ず三惡に至る」等云云、賢慧菩薩の法性論に云く「愚にして正法
を信ぜず邪見及び☆慢なるは過去の謗法の障りなり不了義に勒着して供養
きようけい じゃけんおよ きようまん 慢なるは過去の謗法の障りなり不了義に勒着して供養
恭敬に著し唯邪法を見て善知識に遠離して謗法者の小乗の法に樂著す
かくのこと しゅじよう しんこん だいじよう ぜんちしき おんり ほうほう ほうほう しょうじよう
是の如き等の衆生に親近して大乘を信ぜず故に諸仏の法を謗ず、智者
は怨家・蛇・火毒因陀羅・霹靂・刀杖諸の惡獸・虎狼・師子等を畏るべか
おんけ じゃ いんだら へきれき とうじようもろもろ こうろう しし おそ
らず、彼は但能く命を断じて人をして畏るべき阿鼻獄に入らしむること能わ
ず、畏るべきは深法を謗ずると及び謗法の知識となり決定して人をして
おそ じんぼう ぼう ほうほう ちしき けつじよう
畏るべき阿鼻獄に入らしむ、惡知識に近づきて惡心にして仏の血を出だし
おそ あびごく あくしん
及び父母を殺害し諸の聖人の命を断じ和合僧を破壊し及び諸の善根を断ず
およ ふぼ さつがい もろもろしょうにん わごうそう はえ およ もろもろぜんこん
ると雖も念を正法に繋ぐるを以て能く彼の処を解脱せん、若し復余人有
いえど しょうほう つな よ ところ げだつ げだつ また
つて甚深の法を誹謗せば彼の無量劫にも解脱を得べからず、若し人衆生
じんじん ひほう むりようこう げだつ う また しゅじよう

をして是かくのごとの如かくしんきの法ほふを覚め信しんせしめば彼これわがは是ふ我またこが父ぜんち母しき亦是きれ善ぜん知ち識しなり、彼

の人は是ちしや智ち者しやなり如にやらい来めつこの滅めつこ後じやけんてんどうに邪じやけんてんどう見けん顛てん倒どうを廻せいでうして正せい道どうに入いらしむるを以もつて

の故ゆえに三さん宝ほう清しやう淨じやうの信しん・菩ぼ提だい功く徳とくの業ごふなり」等と云い云い、竜りゆう樹じゆ菩ぼ薩さつの菩ぼ提だい資さい糧りやう

論いに云いく「五む無げん間げんの業とを説ときたもう乃ない至し許ゆるし未み解げの深じん法ほうに於おいて執しやく着ちやくを起おこせ

るは○彼むげんの前むげんの五つみ無つみ間つみ等これの罪つみ緊きんに之これを比ひするに百ひやく分ぶんにしても及およばず」云い云い。

未けんれ賢じん人は安あんきに居ゐて危けいきを欺おそき佞ねい人じんは危けいきに居ゐて安あんきを欺あざむく大だい火かは小

水いを畏ふ怖ふし大たい樹じゆは小あ鳥ちうに値あいて枝えだを折ちぢんらる智ち人じんは恐く怖ふすべし大だい乘じやうを謗ぼうずる

故ゆえに、天てん親じん菩ぼ薩さつは舌しやうを切きらんと云いい馬め鳴み菩ぼ薩さつは頭かうを刎はねんと願ねがひ吉きち藏そう大師だいし

は身にくを肉きよく橋きうと為なし玄さん奥そう三さん蔵そうは此これを靈れい地ちに占ふい不ふ空くう三さん蔵そうは疑うたがいを天てん竺じくに

決でんし伝ぎ教きやう大だい師しは此これを異い域ぎに求みなむ皆あ上あに挙あぐる所きやうは経きやう論ろんを守護しゆごする故ゆゑか。

今にほん・日こく本こく国こくの八はつ宗しゆ並なびに浄じやう土ど・禪ぜん宗しん等しんの四し衆しゆ上かう主しゆ上かう・上しん皇かうより下しも臣しん下か

万ばん民みんに至いたるまで皆みな一い人ひとも無なくく弘かう法ほう・慈じ覺かく・智ち証しやうの三だい大だい師しの末ぼつ孫そん・檀だん越のつなり、

円仁・慈覚大師云く「故に彼と異り」円珍・智証大師云く「華嚴・法華を
大日經に望むれば戲論と為す」空海弘法大師云く「後に望むれば戲論と
為す」等と云云、此の三大師の意は法華經は已・今・当の譜經の中の第一
なり然りと雖も大日經に相對すれば戲論の法なり等云云、此の義心有らん
人信を取る可きや不や。

今・日本國の諸人・惡象・惡馬・惡牛・惡狗・毒蛇・惡刺・懸岸・陰崖
・暴水・惡人・惡國・惡城・惡舍・惡妻・惡子・惡所從等よりも此に超過
し以て恐怖すべきこと百千万億倍なれば持戒・邪見の高僧等なり、問うて
云く上に挙ぐる所の三大師を謗法と疑うか叡山第二の円澄寂光大師・
別当光定大師・安慧大樂大師・慧亮和尚・安然和尚・淨觀僧都・檀那僧・
正・慧心先德・此等の數百人、弘法の御弟子実慧・真濟・真雅等の數百人
並びに八宗・十宗等の大師先德・日と日と・月と月と・星と星と・並びに

出でたるが如し、既に四百余年を経歴するに此等の人人・一人として此の義を疑わず汝何なる智を以て之を難ずるや云云。

此等の意を以て之を案ずるに我が門家は夜は眠りを断ち昼は暇を止めて之を案ぜよ一生空しく過して万歳悔ゆること勿れ、
恐恐謹言。

八月二十三日

日蓮花押

富木殿

鷲目一結給ひ候畢んぬ、志有らん諸人は一処に踏集して御聴聞有るべきか。

◆一三三 御衣並単衣御書

建治元年

五十四歳御作

971P

御衣の布並びに御単衣給ひ候い畢んぬ鮮白比丘尼と申せし人は生れさせ給いて御衣をたてまつりたりけり、生長するほどに次第にこの衣大になりけり、後に尼とならせ給いければ法衣となりけり、ついに法華經の座に

して記☆をさづかる一切衆生喜見如来これなり、又法華經を説く人は柔和

忍辱衣と申して必ず衣あるべし、物たねと申すもの一なれども植えぬれば

多くとなり竜は小水を多雨となし人は小火を大火となす、衣かたびらは一

なれども法華經にまいらせ給いぬれば法華經の文字は六万九千三百八十四

字・一字は一仏なり、此の仏は再生敗種を心符とし顕本遠寿を其の寿と

し常住 仏性を咽喉とし一乗妙行を眼目とせる仏なり、応化非真仏と申し

て三十二相

・八十種好の仏よりも法華經の文字こそ真の仏にては・わたらせ給いて仏

在世に仏を信ぜし人は仏にならざる人もあり、仏の滅後に法華經を信ずる

人は無一不成仏如来の金言なり、この衣をつくりてかたびらをきそえて

法華經を

よみて候わば日蓮は無戒の比丘なり法華經は正直の金言なり、毒蛇の珠を

はき伊蘭いらんの梅檀せんだをいだすがごとし、
恐恐きようきよう謹言きんげん。

九月二十八日御返事日蓮ごへんじにちれん 花押かおう

かんじんほんぞんとくいしよう

がんねん

◆一三四 観心本尊得意抄 建治元年十一月 五十四歳御作 972P

鷲目がもく一貫文厚綿ごんの白小袖一つ筆十管墨五丁給おわび畢おわんぬ。

身延山は知食ちじく如く冬は嵐はげしくふり積む雪は消えず極寒の処ところにて候間

昼夜の行法もはだうすにては堪たえ難かたく辛苦にて候に此の小袖を著ては思い

有ある可べからず候なり、商那和修しょうなわしゅうは付法蔵ふぼうぞうの第三の聖人しょうにんなり、此の因位いんいを仏

説いわいて云く「乃むかし往過去かこに病びくの比丘びくに衣を与ゆえる故ゆえに生生世世しょうじよよよに不思議ふしぎ自在じざい

の衣を得たり、今の御小袖は彼かしこに似たり此の功德くどくは日蓮にちれんは之これを知る可べか

らず併しやながら釈迦しゃか仏ぶつに任せ奉まかり畢たてまつおわんぬ。

そもそも

抑おさも今の御状ごほうに云く教信かんじんのほんぞんの御房しょう 観心本尊抄かんじんほんぞんしょうの未得等もんじの文字もんじに付て

しゃくもん

迹門しやくもんをよまじと疑うたがい心の候なる事不相伝そうでんの僻見びやくけんにて候か、去いぬる文永年中ぶんえい

に此の書の相伝は整足して貴辺に奉り候しが其の通りを以て御教訓有る可
候、所詮在在處處に迹門を捨てよと書いて候事は今・我等が読む所の
迹門にては候はず、叡山天台宗の過時の迹を破し候なり、設いて天台・伝教
の如く法のままありとも今末法に至ては去年の暦の如し何に況や慈覚自
己来大小・権実に迷いて大謗法に同じきをや、然る間像法の時の利益も
之無し増して末法に於けるをや。

一 北方の能化難じて云く爾前の経をば末顕真実と捨て乍ら安国論には
爾前の経を引き文証とする事自語相違と不審の事前前申せし如し、総じて
一代聖教を大に分つて二と為す一には大綱二には綱目なり、初の大綱と
は成仏得道の教なり、成仏の教とは法華経なり、次に綱目とは法華已前
の諸経なり、彼の諸経等是不成仏の教なり、成仏得道の文言之を説く
と雖も但名字のみ有て其の実義は法華に之有り、伝教大師の決権実論に

云く「権智の所作は唯名のみ有て実義有ること無し」云云、但し権教に於ても成仏得道の外は説相空しかる可からず法華の爲の綱目なるが故に、所詮成仏の大綱を法華に之を説き其の余の綱目は衆典に之を明す、法華の爲の綱目なるが故に法華の証文に之を引き用ゆ可きなり、其の上法華經にて實義有る可きを爾前の經にして名字計りののしる事全く法華の爲なり、然る間尤も法華の証文となるべし。

問う法華を大綱とする証如何、答う天台は当に知るべし此の經は唯如来説教の大綱を論じて綱目を委細にせざるなりと、問う爾前を綱目とする証如何、答う妙楽の云く「皮膚毛綵衆典に存在せり」云云、問う成仏は法華に限ると云う証如何、答う經に云く「唯一乗の法のみ有て二も無く亦三も無し」文問う爾前は法華の爲との証如何答う經に云く「種種の道を示すと雖も仏乗の爲なり」委細申し度く候と雖も心地違例して候程に省略せしめ

候、きょうきようきんげん
恐恐 謹言。

十一月二十三日

日蓮にちれん

花押かおう

ときどのごへんじ
富木殿御返事

そつどのものがたり 帥殿の物語りしは下総に目連樹と云う木の候よし申し候し、其の木の根をほりて十両ばかり両方の切目には焼金やきがねを宛てて紙にあつくつつみて風ひかめ様にこしらへて大夫次郎が便宜びんぎに給ひ候べきよし御伝えあるべく候。

◆一三五 聖人知三世事しょうにんちさんぜじ

建治元年がんねん 五十四歳御作 与富木常忍ときじょうにん

974P

しょうにんもう 聖人と申すは委細いさいに三世さんぜを知るを聖人と云う、儒家の三皇・五帝並びに三聖は仏説在を知つて過・末を知らず外道げどうは過去かこ八万・未来みらい八万を知るいちぶんしょうにん 一分の聖人なり、小乗しょうじょうの二乗は過去かこ・未来の因果いんがを知る外道げどうに勝れたる

しょうにん 聖人なり、しょうじょう 小乗の菩薩は過去三僧祇菩薩、つうきょう 通教の菩薩は過去に動踰塵劫
きょうりやく を経歴せり、べつきょう 別教の菩薩は一一の位の中に多俱低劫の過去を知る、ほけきょう 法華經
しゃくもん の迹門は過去の三千塵点劫を演説す一代超過是なり、ほんもん 本門は五百塵点劫
かこおんのんこう 過去遠遠劫をも之を演説し又未來無數劫の事をも宣伝し、之に依つて之を
くわし 案ずるに委く過未を知るは聖人の本なり、きょうしゅしやくそんすで 教主釈尊既に近くは去つて
ごさん 後三月の涅槃之を知り遠くは後・五百歳・広宣流布疑い無き者か、もし
しか 爾れば近きを以て遠きを推し現を以て当を知る如是相乃至本末究竟等是なり。

だれびと 後五百歳には誰人を以て法華經の行者と之を知る可きや予は未だ我が
ちえ 智慧を信ぜず然りと雖も自他の返逆・伝道之を以て我が智を信ず敢て他人
ため あら の為に非ず又我が弟子等之を存知せよ日蓮は是れ法華經の行者なり不輕の
あと 跡を紹繼するの故に輕毀する人は頭七分に破・信ずる者は福を安明に積

まん、問うて云く何ぞ汝を毀る人頭破七分無きや、答えて云く古昔の聖人は
は仏を除いて已外之を毀る人・頭破但一人・二人なり今日蓮を毀皆する事
は非一人・二人に限る可らず日本一國・一同に同じく破るるなり、所謂正嘉
の大地震・文永の長星は誰か故ぞ日蓮は一閻浮提第一の聖人なり、上一人
より下万民に至るまで之を輕毀して刀杖を加え流罪に処するが故に梵と釈
と日月・四天と隣國に仰せ付けて之を逼責するなり、大集經に云く・
仁王經に云く・涅槃經に云く・法華經に云く・設い万祈を作すとも日蓮を
用いずんば必ず此の國今の壱岐・對馬の如くならん、我が弟子仰いで之を
見よ此れ偏に日蓮が貴尊なるに非ず法華經の御力の殊勝なるに依るなり、
身を挙げれば慢ずと想い身を下せば經を頗る松高ければ藤長く源深ければ
流れ遠し、幸なるかな楽しいかな穢土に於て喜樂を受くるは但日蓮一人な
る而已。

◆ 一三六

富木尼御前御返事

あまごぜんこへんじ

建治二年

五十五歳御作

975p

驚目がもく

なら

一貫並びにつつひとつ給たまひい候おわ了んぬ・やはしる事は弓のちから

・くものゆくことはりうのちから、をとこのしわざはめのちからなり、い

まときどののこれへ御わたりある事尼おんちからごぜんの御力なり、けぶりをみれば

火をみるあめをみればりうをみる、をとこをみればめをみる、今ときどの

にけさんつかまつれば尼おんちからごぜんをみたてまつると・をぼう、ときどのの御

物がたり候はこのは・わのなげきのなかにりんずうのよくをはせしと尼が

よくあたりかんびやうせし事のうれしさ・いつのよにわするべしともをば

えずと・よろこばれ候なり、なによりも・をぼうかなき事は御所むじょう勞なり、かまえてさもと三年はじめのごとくに・きうじせさせ給たまへ、病なき人も無常まぬかれがたしただ但しとしのはてにはあらず、法華經ほけきようの行者ぎやうじやなり非業ほけきようの死にはあるべからずよも業病にては候はじ、設たといい業病なりとも法華經ほけきようの御力おんちからた

のもし、あじやせ阿闍世王はほけきよう法華經をたも持ちて四十年の命をのべちんしん陳臣は十五年の命を
のべたり、ほけきよう尼ごぜん又ぎようじゃ法華經の行者なりしんじん御信心月のまさるがごとく・しを
のみつがごとし、いかでか病も失せ寿ものびざるべきと強盛にをぼしめし
身を持し心に物をなげかざれ、なげき出来いできる時はゆきつしまの事・だざひ
ふの事・かまひとびとくらの人人の天の樂・のごとにありしが、とうじ当時つくしへむか
へばとどまる・めこゆくをとこ、はなるときはかわをはぐがごとくかを
と・かをとをとりあわせ目と目とをあわせてなげきしが、しだい次第にはなれて
ゆいのはま・いなぶらこしこえさかわはこねさか一日・二日すぐるほどに、
あゆみあゆみ・とをさかる・あゆみをかわも山もへだて雲もへだつれば・
うちそうものはなみだなり・ともなうものはなげきなり、いかにかなしか
るらむ・かくなげかんほどに・もうこのつわものせめきたらば山か海もい
けとりか・ふねの内か・かうらいかにて・うきめにあはん、これ・ひとへ

に^{とが}失もなく^{にほんこく}て日本国の一切衆生の父母となる法華經の行者日蓮をゆへも
なく・或^{ある}はのり・或^{ある}は打ち・或^{ある}はこうじをわたし、ものにくるいしが十羅刹
のせめをかほりてなれる事なり、又又これより百千万億倍たへがたき事と
もいで来るべし、不思議^{ふしぎ}を目の前に御らんあるぞかし、我れ等は仏に疑^{うたがい}
いなしと・をぼせば・なにのなげきか有^あるべき、きさきになりてもなにか
せん天に生れても・ようしなし、竜女^{りゅうにょ}があとをつぎ摩訶波舍波提比丘尼^{まか はだいびく に}の
れちにつらなるべし、あらうれし・あらうれし、南無妙法蓮華經・南無
妙法蓮華經と唱^{とな}えさせ給^{たま}へ、恐^{きょう}恐^{きょう}謹言^{きんげん}。

三月二十七日日蓮^{にちれん} 花押尼^{かおう}ごぜんへ

◆一三七 忘持經事^{じきようじ} 建治二年 五十五歳御作 与富木常忍^{ときじょうにん} 976p

忘れ給^{たま}う所の御持經追^{じきよう}て修行者^{しゅうぎようじゃ}に持たせ之^{これ}を遣^{つか}わす。

魯^ろの哀公云く人好く忘る者有り移宅に乃ち其の妻を忘れたり云云、孔子^{こうし}

云く又好く忘るること此れより甚しき者有り桀紂の君は乃ち其の身を忘

れたり等云云、夫れ槃特尊者は名を忘る此れ閻浮第一の好く忘るる者なり

今常忍上人は持経を忘る日本第一の好く忘るるの仁か、大通結縁の輩は

衣珠を忘れ三千塵劫を経て貧路に踟☆し久遠下種の人は良薬を忘れ五百

塵点を送りて三途の嶮地に顛倒せり、今真言宗・念仏宗・禪宗・律宗

等の学者等は仏陀の本意を忘失し未来無數劫を経歴して阿鼻の火坑に

沈淪せん、此れより第一の好く忘るる者あり所謂今の世の天台宗の学者等

と持経者等との日蓮を誹謗し念仏者等を扶助する是れなり、親に背いて敵

に付き刀を持ちて自を破る此等は且く之を置く。

夫れ常啼菩薩は東に向つて般若を求め善財童子は南に向いて華嚴を得る

雪山の小児は半偈に身を投げ樂法梵志は一偈に皮を剥ぐ、此等は皆上聖

大人なり其の迹を☆うるに地・住に居し其の本を尋ぬれば等妙なるのみ

・身は八熱に入つて火坑三昧を得・心は八寒に入つて清涼三昧を証し身心しんしん

共に苦無し、譬たとえば矢を放つて虚空を射・石を握つて水に投ずるが如し。

今常忍貴辺は末代の愚者にして見思未断の凡夫なり、身は俗に非ず道にあら

非ず秃居士心は善に非ず惡に非ず羝羊のみ、然りと雖も一人の悲母・堂にあら

有り朝に出で主君に詣で夕に入て私宅に返り営む所は悲母の為め存する所あした い しゅくん もう ひも

は孝心のみ、而るに去月下旬の比・生死の理を示さんが為に黄泉の道にしか しゅうじ こころわり ため こうせん

趣く此に貴辺と歎いて言く齡既に九旬に及び子を留めて親の去ること次第おもむ ここ きへん なげ いわ よわいすで およ とど しだい

たりと雖も倩事の心を案ずるに去つて後来る可からず何れの月日をか期せいえど いずれ

ん二母国に無し今より後誰をか拝す可き、離別忍び難きの間・舍利を頸にべ しの がた

懸け足に任せて大道に出で下州より甲州に至る其の中間往復千里に及ぶ国か まか い そ ちゅうげん せんり

・皆飢饉し山野に盜賊充滿し宿宿糧米乏少なり我身羸弱・所從亡きみな ききん そくじゅうまん ろうまいぼうしょう わがみえいじやく しよじゅう

が若く牛馬合期せず峨峨たる大山重重として漫漫たる大河多多なり高山にもし ぎゅうばあいこ がが ころも とうざん

登れば頭を天に☆ち幽谷へ下れば足雲を踏む鳥に非れば渡り難く鹿に非れば越え難し眼眩き足冷ゆ、羅什三蔵の葱嶺・役の優婆塞の大峰も只今なりと云云、然る後深洞に尋ね入りて一菴室を見る法華読誦の音・青天に響きいちじよう

一乗談義の言山中に聞ゆ、案内を触れて室に入り教主釈尊の御宝前に母の骨を安置し五躰を地に投げ合掌して両眼を開き尊容を拝し歡喜身に余り心の苦み忽ち息む、我が頭は父母の頭・我が足は父母の足・我が十指は父母の十指・我が口は父母の口なり、譬えば種子と菓子と身と影との如し教主釈尊の成道は浄飯・摩耶の得道・吉占師子・青提女・目☆尊者は同時の成仏なり、是の如く觀する時無始の業障忽ちに消え心性の妙蓮忽ちに開き給うか然して後に随分仏事を為し事故無く還り給う云云、きようきようきんげん。 富木入道殿

恐恐謹言。

富木入道殿

◆一三八 富木殿御返事 建治二年十萬五十五歳御作

驚目一結天台大師の御宝前を莊嚴し候い了んぬ、經に云く「法華最第一

なり」と、又云く「能く是の經典を受持すること有らん者も亦復是の如し

いっさいしゅじょう

一切衆生の中に於て亦これ第一なり」と、又云く「其の福復彼れに過ぐ」

みょうらくいわ

妙樂云く「若し悩乱する者は頭七分に破れ供養すること有らん者は

ふくじゅうこう

福十号に過ぐ」伝教大師も「讀者は福を安明に積み謗者は罪を無間に開

く」等云云、記の十に云く「方便の極位に居る菩薩猶尚第五十人に及ばず」

いかに

等云云、華嚴經の法慧功德林大日經の金剛薩捶等尚法華經の博地に及ばず

いかに

何に況や其の宗の元祖等法蔵善無畏等に於てをや、是れは且く之を置く、

いかに

尼ごぜんの御所勞の御事我身一身の上とをもひ候へば昼夜に天に申し候な

いかに

り、此の尼ごぜんは法華經の行者をやしなう事灯に油をそへ木の根に土を

いかに

かさぬるがごとし、願くは日月天共の命にかわり給へと申し候なり、又を

もいわする事もやと・いよ房に申しつけて供そ、たのもしと・をぼしめ
せ、きようきよう恐恐。

十一月二十九日

日蓮 花押

ときどのごへんじ
富木殿御返事

◆一三九 道場 神守護事

建治二年十二月 五十五歳御作 979p

がもく 鷺目五貫文たしかに送り給ひ候おわんい了ぬ、且つ知食しろしめすが如く此の所は里中を離

れたる深山みやまなり衣食いしょく乏少の間いしよくぼうしょう読経どつきやうの声こゑ続き難く談義かたの勤つとめ廃べしつ可し、

此の託宣たくせんは十羅刹じゅうらせつの御計ごけいにて檀那だんなの功こうを致いたさしむるか、止観しかんの第八いはに云く

「帝たいしやく釈堂しやくどうの小鬼敬けいい避くるが如し道場の神大みだなれば妄りに侵しんによう☆すること

無し、又城の主た剛ければ守る者も強し城の主・剛ければ守る者忙る、心は

是れ身この主なり同名同生の天こ是れ能く人を守護しゆごす心固ければ則ち強し身すなわの

神尚爾なおしかなり況や道場の神をや弘決くけつの第八いはに云く「常に人を護まもると雖も必いえど

ず心の固きに仮りて神の守り則ち強し」又云く「身の両肩の神尚常に人を
護る況や道場の神をや」云云、人所生の時より二神守護す所謂同生天同
名天是を俱生神と云う華嚴經の文なり、文句の四に云く「賊南無仏と称し
て尚天頭を得たり況や賢者称せば十方の尊神敢て当らざらんや但精進せ
よ懈怠すること勿れ」等云云、釈の意は月氏天を崇めて仏を用いざる国あ
り而るに寺を造り第六天の魔王を主とす頭は金を以てす大賊年来之を盗ま
んとして得ず有時・仏前に詣で物を盗んで法を聴く、仏説いて云く南無と
は驚覺の義也盗人之を聞いて南無仏と称して天頭を得たり、之を糾明す
る処盗人上の如く之を申す一國・皆天を捨てて仏に歸せり云云、彼を以て
之を推するに設け科有る者も三宝を信ぜば大難を脱れんか、而るに今示し
給える託宣の状は兼て之を知る之を案ずるに難を卻て福の来る先兆ならん
のみ、妙法蓮華經の妙の一字は竜樹菩薩の大論に釈して云く「能く毒を

變じて藥と為す」と云云、天台大師の云く「今經に記を得る即ち毒を變じて藥と為すなり」と云云、災來るとも變じて幸と為らん何に況や十羅刹之を兼るをや、薪火を熾にし風・求羅を益すとは是なり、言は紙上に尽し難し心を以て之を量れ、恐恐謹言。

十二月十三日

日蓮 花押

御返事

◆一四〇 常忍抄

建治三年十月 五十六歳御作 980p

御文粗拝見仕り候い了んぬ。

御状に云く常忍の云く記の九に云く「権を稟けて界を出づるを名れて虚出と為す」云云、了性房云く全く以て其の釈無し云云、記の九に云く「無有虚出より昔虚為実故に至るまでは去声権を稟けて界を出づるを名けて虚出と為す三乗は皆三界を出でずと云うこと無し人天は三途を出でんが為なら

ずと云うこと無し並に名けて虚と為す」云云、文句の九に云く「虚より出でしかて而も実に入らざる者有ること無し、故に知んぬ昔の虚は去声実の為の故なり」と云云、寿量品に云く「諸の善男子・如来諸の衆生小法を楽ねがうとくはつくじゅう徳薄垢重の者を見て乃至以諸衆生乃至未會暫廢」云云、此の經の文を承うけて、天台・妙楽は釈せしなり、此の經文は初成道の華嚴の別円より乃至ほけきよう法華經の迹門十四品を・或は小法と云い・・或は徳薄垢重・・或は虚出等と説ける經文なり、若し然らば華嚴經の華嚴宗・深密經の法相宗・般若經の三論宗・大日經の眞言宗・觀經の淨土宗・楞伽經の禪宗等しよきようの諸經の諸宗は依經の如く其の經を讀誦すとも三界を出でず三途を出でざる者なり何に況や・或は彼を實と稱し・或は勝ぐる等云云、此の人天に向つて唾を吐き地を☆んで忿を為す者か。

此の法門に於て如来滅後・月氏・一千五百余年・付法藏の二十四人・

りゆうじゅ てんじん 竜樹・天親等知つて未だ此れを顕さず、漢土一千余年の余人も未だ之を知
らず但天台・妙楽等粗之を演ぶ、然りと雖も未だ其の実義を顕さざるか、
でんぎようだいし ほんこれ の 伝教大師以て是くの如し、今日蓮粗之を勘うるに法華經の此の文を重ねて
ねはんぎよう の 涅槃經に演べて云く「若し三法に於て異の想を修する者は当に知るべし
この輩は清淨の三歸則ち依処無く所有の禁戒皆具足せず終に声聞・
縁覺・菩薩の果を証することを得ず」等云云、此の經文は正しく法華經の
じゅうりようほん けんせつ 壽量品を顕説せるなり 壽量品は木に譬え爾前・迹門をば影に譬うる文な
り、經文に又之有り、五時・八教・当分・跨節・大小の益は影の如し本門
の法門は木の如し云云、又壽量品已前の在世の益は闇中の木の影なり過去
に壽量品を聞きし者の事なり等云云、又不信は謗法に非ずと申す事、又
云く不信の者地獄に墮ちずとの事、五の卷に云く「疑を生じて信ぜざら
ん者は則ち當に惡道に墮つべし」云云。

総じて御心へ候へ法華經ほけきょうと爾前にぜんと引き向えて勝劣しょうれつ・淺深せんじんを伴ともなするに当分とうぶん
跨節かせつの事に三つの様有り日蓮にちれんが法門ほうもんは第三の法門ほうもんなり、世間せけんに粗夢ほぼの如くごと
一二をば申せども第三をば申さず候、第三の法門ほうもんは天台てんだい・妙樂みょうらく・伝教でんぎょうも
粗之ほぼこれを示せども未だ事いま了えず所詮しよせん末法まつぽうの今に譲ゆずり与えしなり、五五百歳は
是なり、但しただ此の法門ほうもんの御論談ろんだんは余は承うけたまわらず候彼は広学多聞こうがくたもんの者なりはば
かりはばかりみたみた候いしかば此の方のまけなんども申しつけられな
ばいかんがし候べき、但しただ彼の法師等ほっしが彼の釈しやくを知り候はぬはさてをき候
いぬ、六十卷になしなんと申もうすは天のせめなり謗法ぼうぼうの科とがの法華經ほけきょうの御使おんつかいに
値あうて顕あらわれ候なり、又此の沙汰さたの事を定めてゆへありて出来しゅつたいせり・かしま
の大田次郎兵衛大進房おほつ又本院主もいかにとや申もうすぞよくよくきかせ給たまい候
へ、此これ等は經文きやうもんに子細しさいある事なり、法華經ほけきょうの行者ぎやうじやをば第六天だいろくてんの魔王まおう
必ず障ささうべきにて候、十境の中の魔境此れなり魔の習ならいは善を障ささえて悪を

造らしむるをば悦ぶ事に候、強いて惡を造らざる者をば力及ばずして善を造らしむ又二乗の行をなす物をば・あながちに怨をなして善をすすむるなり、又菩薩の行をなす物をば遮つて二乗の行をすすむ是後に純円の行を一向になす者をば兼別等に墮すなり止觀の八等を御らむあるべし。

又彼が云く止觀の行者は持戒等云云、文句の九には初二三の行者の持戒をば此れをせいす經文又分明なり、止觀に相違の事は妙樂の問答之有り記の九を見る可し、初隨記に二有り利根の行者は持戒を兼ねたり鈍根は持戒之を制止す、又正像末の不同もあり摂受折伏の異あり伝教大師の市の虎の事思い合わすべし。

此れより後は下總にては御法門候べからず了性思念をつめつる上は他人と御論候わばかへりてあさくなりなん、彼の了性と思念とは年来・日蓮をそしるとうけ給わる、彼等程の蚊虻の者が日蓮程の師子王を聞かず見ずし

てうはのそらにそしる程のをこじんなり、天台法華宗の者ならば我は南無
妙法蓮華經と唱えて念仏なんと申す者をばあはさる事なんと申すだにも
きくわいなるべきに其の義なき上・偶申す人をそしる・でう・あらふし
ぎふしぎ、大進房が事さきざきかわして候やうにつよづよとかき上
申させ給い候へ、大進房には十羅刹のつかせ給いて引きかへしせさせ給う
と・をぼへ候ぞ、又魔王の使者ななどがつきて候いけるが・はなれて候と
・をぼへ候ぞ、悪鬼入其身はよも・そら事にては候はじ、事事重く候へど
も、此の使いそぎ候へばよるかきて候ぞ、恐恐謹言。

十月一日

にちれんかおう
日蓮花押

◆一四一 始聞 仏乗義

建治四年二月 五十七歳御作

ときじょうにん
与富木常忍

982p

せいふ
青鳧七結下州より甲州に送らる其の御志悲母の第三年に相当る御孝養な

り、問う止観明静前代未聞の心如何、答う円頓止観なり、問う円頓止観の
意何ん、答う法華三昧の異名なり、問う法華三昧の心如何、答う夫れ末代
の凡夫法華經を修行する意に二有一には就類種の開会二には相對種の
開会なり、問う此の名は何より出るや、答う法華經第三藥草喻品に云く「種
相體性の四字なり其の四字の中に第一の種の一字に二あり、一には就類種
二には相對種なり」其の就類種とは釈に云く「凡そ心有る者は是れ正因の
種なり随つて一句を聞くは是れ了因の種なり低頭挙手は是れ緣因の種な
り」等云云、其の相對種とは煩惱と業と苦との三道其の當体を押えて法身
と般若と解脱と稱する是なり、其の中に就類種の一法は宗は法華經に有り
と雖も少分又爾前の經經にも通ず、妙樂云く「別經は唯就類の種有つて
而も相對無し」と云云、此の釈の別教と云うは本の別教には非ず爾前の
円・或は他師の円なり、又法華經の迹門の中・供養舍利已下二十余行の

ほうもん だいたいじゆるいしゅ かいえ
法門も大体就種類の開会なり、問う其の相對種の心如何、答う止觀に云く
「云何なるか聞円法なる生死即法身・煩惱即般若・結業即解脱なりと聞く
なり三の名有りと雖も而も三の体無し是れ一体なりと雖も而も三の名を立
つ是の三即ち一相にして其れ實に異有ること無し、法身究竟すれば般若も
解脱も亦究竟な般若清淨なれば余亦清淨なり解脱自在なれば余亦自在
なり一切の法を聞くこと亦是の如し皆仏法を具して減少する所無し是を
もんえん なす
聞円と名く」等云云、此の釈は即ち相對種の手法なり其の意如何、答う生死
とは我等が苦果の依身なり所謂五陰・十二入・十八界なり煩惱とは見思・
塵沙・無明の三惑なり結業とは五逆・十惡・四重等なり、法身とは法身
如来・般若とは報身如来・解脱とは応身如来なり我等衆生無始曠劫より
このかた
已来此の三道を具足し今法華經に値つて三道即三徳となるなり。

なん いわ
難じて云く火より水出でず石より草生ぜず惡因・惡果を感じ善因善報を

生ずるは仏教ぶつぎょうの定れる習なり而るに我等其の根本を尋ね究むれば父母の精
血・赤白しゃくぱびやくにたいわごう二☆和合して一身と為る悪の根本不浄こんぽんふじょうの源みなもとなり、設たとい大海を
傾これけて之を洗うとも清浄しょうじょうなる可らず又此れ苦果の依身は其の根本こんぽんを探り
見れば貧・瞋・癡の三毒より出ずるなり、此の煩惱苦果の二道に依つて業
を構う此の業道即ち是れ結縛すなわこの法なり、譬たとえば籠かこに入れる鳥の如し如何ぞ
此の三道を以て三仏因ぶつじんと称するや、譬たとえば糞を集めて栴檀せんだを造れども終に
香しからざるが如し、答こたう汝が難大いに道理なり我此の事を弁えず但し
付法蔵ふほうぞうの第十三天台大師の高祖・竜樹菩薩・妙法の妙の一字を釈しゃくして
譬たとえば大薬師やくしの能く毒を以て薬と為すが如し等云云、毒と云うは何物ぞ我等
が煩惱ぼんのう・業・苦の三道なり薬とは何物ぞ法身・般若・解脱げだつなり、能く毒を
以て薬と為すとは何物ぞ三道を變じて三徳と為すのみ、天台云く妙は
ふかしぎ
不可思議と名づく等云云、又云く一心乃至不可思議境意此に在り等云云、

そくしんじょうぶつ
即身成仏と申すは此れ是なり、近代の華嚴・真言等・此の義を盗み取りて
我が物と為す大偷盗天下の盗人はなり。

問うて云く凡夫の位も此の秘法の心を知るべきや、答う私の答は詮無し
りゅうじゅぼさつ だいろん いわ
竜樹菩薩の大論に云く九十三なり「今漏尽の阿羅漢還つて作仏すと云うは唯
仏のみ能く知ろしめす、論議とは正しく其の事を論ず可し測り知ること能わ
ず是の故に戲論すべからず若し仏を求め得る時乃ち能く了知す余人は信ず
べく而も未だ知るべからず」等云云、此の釈は爾前の別教の十一品の断・
むみょうえんきょう
無明円教の四十一品の断・無明の大菩薩普賢・文殊等も未だ法華經の意を
知らず何に況や藏通二教の三乗をや何に況や末代の凡夫をやと云う論文な
り、之を以て案ずるに法華經の唯仏与仏・乃能究尽とは爾前の灰身滅智の
にじょう ほんのう
二乗の煩惱・業・苦の三道を押えて法身・般若・解脱と説くに二乗還つて
さぶつ ぼさつ ほんぶ またかくのごと しゃく
作仏す菩薩・凡夫も亦是くの如しと釈するなり、故に天台の云く二乗根敗

す之を名けて毒と為す今經に記を得る即ち是れ毒を変じて藥と為す、論に
云く余經は秘密に非ず法華は是れ秘密なり等云云、妙樂云く論に云くとは
大論なりと云云、問う是くの如し之を聞いて何の益有るや、答えて云く始
めて法華經を聞くなり、妙樂云く若し三道即是れ三徳と信ぜば尚能く二死
の河を渡る況や三界をやと云云、末代の凡夫此の法門を聞かば唯我一人の
み成仏するに非ず父母も又即身成仏せん此れ第一の孝養なり病身為るの
故に委細ならず又又申す可し。

建治四年太歲 戊寅 二月二十八日

日蓮花押

富木殿

◆ 一四二

可延定業書

弘安二年五十八歲御作与富木常忍妻

985p

夫れ病に二あり一には輕病二には重病・重病すら善医に値う急に
對治すれば命猶存す何に況や輕病をや、業にこあり一には定業二には不定
業、定業すら能く能く懺悔すれば必ず消滅す何に況や不定業をや、法華經
第七に云く「此の經は則為閻浮提の人の病の良藥なり」等云云、此の經文
は法華經の文なり、一代の聖教は皆如来の金言・無量劫より已来不妄語
の言なり、就中此の法華經は仏の正直捨方便と申して眞実が中の眞実な
り、多宝・証明を加え諸仏・舌相を添え給ういかでか・むなしかるべき、
其の上最第一の秘事はんべり此の經文は後・五百歳・二千五百余年の時
女人の病あらんと・とかれて侯文なり、阿闍世王は御年五十の二月十五日
に大惡瘡・身に出来せり、大医耆婆が力も及ばず三月七日必ず死して無間
・大城に墮つべかりき、五十余年が間の大樂一時に滅して一生の大苦・三
七日にあつまれり、定業限りありしかども仏・法華經をかさねて演説して

ねはんぎよう
涅槃經となづけて大王にあたひ給いしかば身の病・忽に平癒し心の重罪も
いちじ つゆ
一時に露と消えにき、仏滅後・一千五百余年・陳臣と申す人ありき命知命
もう
にありと申して五十年に定まりて侯いしが天台大師に伴いて十五年の命を
のべ
宣べて六十五までをはしき、其の上不輕菩薩は更増壽命ととかれて法華經
を行じて定業をのべ給いき、彼等は皆男子なり女人にはあらざれども法華經
を行じて壽をのぶ、又陳臣は後・五百歳にもあたらず冬の稻米・夏の菊花
のごとし、当時の女人の法華經を行じて定業を転ずることは秋の稻米冬の
菊花誰か・をどろくべき。

にちれん ひも
されば日蓮悲母をいのりて侯しかば現身に病をいやすのみならず四箇年
じゆみよう
の壽命をのべたり、今女人の御身として病を身にうけさせ給う・心みに
ほけきよう しんじん
法華經の信心を立てて御らむあるべし、しかも善医あり中務三郎左衛門尉
ほけきよう ぎようじや
殿は法華經の行者なり、命と申す物は一身第一の珍宝なり一日なりとも・

これを延るならば千万両の金にもすぎたり、法華經の一代の聖教に超過せんまんしていみじきと申すは寿量品のゆへそかし、閻浮第一の太子なれども短命じゅうりょうほんなれば草よりもかろし、日輪のごとくなる智者なれども天死にあれば生犬にちりんに劣る、早く心ざしの財をかさねていそぎいそぎ御対治あるべし、此れよりも申すべけれども人は申すによて吉事もあり又我が志もうのうすきかと・をもう者もあり人の心しりがたき上先先に少少かかる事候、此の人は人の申せばすこそ心へずげに思う人なり、なかなか申すはあしかりぬべし、但もうなかうどもなく・ひらなさけに又心もなくうちたのませ給え、去年の十月これに來りて候いしが御所勞の事をよくよくなげき申せしなり、當事大事だいいじのなければ・をどろかせ給わぬにや、明年正月二月のころをひは必ずをこるべしと申せしかば・これにも・なげきは入つて候。

ときどきの
富木殿も此の尼ごぜんをこそ杖柱とも恃たるになんと申して候いしなり

随分ずいぶんにわび候そうらいしぞ・きわめて・まけじたましの人にて我がかたの事をば
大事だいじと申もうす人なり、かへすがへす身の財をだに・をしませ給たまわば此の病治
がたかるべし、一日の命は三千界さんぜんかいの財にもすぎて候なり先ず御志ごしをみみ
へさせ給たまうべし、法華經ほけきょうの第七の巻に三千大千世界さんぜんせかいの財を供養くようするよりも
手の一指を焼きて仏・法華經ほけきょうに供養くようせよと・とかれて候そうらはこれなり、命は
三千さんぜんにもすぎて候・而しかも齡よわいもいまだ・たけさせ給たまはず、而して法華經ほけきょうにあ
わせ給たまいぬ一日もいきてをせば功德くどくつもるべし、あらをしの命や・をし
の命や、御姓名なら並びに御年を我とかかせ給たまいて・わざと・つかわせ大日月にちがつ
天に申もうしあぐべし、いよどのもあながちになげき候そうらへば日月天にちがつに自我じが偈を
あて候そうらはんずるなり、恐きょう恐きょう。
○

日蓮花押にちれんかおう

尼ごへんじござん御返事ごへんじ

◆一四三 富城殿御返事ごへんじ

あまこぜん じゅみょうちようおん
尼御前御壽命 長遠の由・天に申し候ぞ其の故御物語り候へ。
ふだんほけきよう
不断法華經来年三月の料の分錢三貫文米二斗送り給ひ畢んぬ。 おわ

十一月二十五日

にちれん
日蓮

在御判

富城殿御返事
ごへんじ

◆一四四 四菩薩造立抄
ぼさつ

弘安二年五月
こうあん

五十八歳御作

987p

白小袖一薄墨染衣一・同色の袈裟一帖・鷲目一貫文給ひ候、今に始め
ける御志言を以て宣べがたし何れの日を期してか対面を遂げ心中の朦朧を
もう ひらかん
申し披や。

一御状に云く本門久成の教主釈尊を造り奉り脇士には久成地涌の四
いわ ほんもんくじよう きようしゅしやくそん つく たてまつ きようじ ゆ
ぼさつ ぼさつ たてまつ
菩薩を造立し奉るべしと兼て聴聞仕り候いき、然れば聴聞の如くんば何の
かね ちようもん しが ちようもん こと いずれ

時かと云云、夫れ仏世を去らせ給いて二千余年に成りぬ、其の間・月氏・
漢土・日本国一閻浮提の内に仏法の流布する事・僧は稲麻のごとく法は
竹葦の如し、然るにいまだ本門の教主釈尊・並に本化の菩薩を造り奉り
たる寺は一処も無し三朝の間に未だ聞かず、日本国に数万の寺を建立せ
し人人も本門の教主脇士を造るべき事を知らず上宮太子仏法最初の寺と
号して四天王寺を造立せしかども阿弥陀仏を本尊として脇士には観音等・
四天王を造り副えたり、伝教大師・延暦寺を立て給うに中堂には東方の
鷲王の相貌を造りて本尊として久成の教主・脇士をば建立し給はず、
南京七大寺の中にも此の事を未だ聞かず田舎の寺寺以て爾なり、かたがた
不審なりし間・法華經の文を拝見し奉りしかば其の旨顕然なり、末法・
鬪諍堅固の時にいたらずんば造るべからざる旨分明なり、正像に出世せ
し論師・人師の造らざりしは仏の禁を重んずる故なり、若し正法・像法

の中に久成くじょうの教主きょうしゅ釈尊しやくそん並びに脇士きょうじを造るならば夜中に日輪出で日中に月輪の出でたるが如くなるべし、末法まつぽうに入つて始めの五百年に上行菩薩じょうぎょうぼさつの出でさせ給たまいて造り給うべき故に正法しょうぽう・像法ぞうぽうの四依しえの論師ろんし・人師にんしは言にも出でさせ給たまいて造り給うべき故に正法しょうぽう・像法ぞうぽうの四依しえの論師ろんし・人師にんしは言にも出させ給たまはず、竜樹りゅうじゆ・天親てんじんこそ知らせ給たまいたりしかども口より外へ出させ給たまはず、天台智者大師も知らせ給たまいたりしかども迹化しゃくけの菩薩ぼさつの一分なれば一端は仰おおせ出させ給たまいたりしかども其その実義じつぎをば宣のべべ出させ給たまはず、但ねずめの枕ほこに時鳥ときどりの一音を聞きしが如くにして夢のさめて止ぬるやうに弘ひろめ給たまい候もとぬ、夫それより已外いげの人師にんしはまして一言ひとことをも仰おおせ出し給たまう事なし、此等これらの論師ろんし・人師にんしは靈山りようぜんにして迹化しゃくけの衆しゅうは末法まつぽうに入らざらんに正像二千年しょうざうにせんねんの論師ろんし・人師にんしは本門久成ほんもんくじょうの教主きょうしゅ釈尊しやくそん並びに久成くじょうの脇士きょうじ地涌きようじゆ上行じょうぎょう等の四菩薩しほさつを影いども申出いすべからずと御禁いましめありし故ぞかし。

今末法まつぽうに入れば尤も仏もつとの金言きんげんの如くんば造るべき時なれば本仏本脇士ほんぶつ きょうじ

つくり奉るべき時なり、たてまつ 当時は其の時に相当れば地涌の菩薩やがて出でさせ
給はんずらん、たま 先ず其れ程に四菩薩を建立し奉るべし尤も今は然るべき時
なりと云云、されば天台大師は後の五百歳遠く妙道に沾わんとしたひ、
伝教大師は正像稍過ぎ已て末法太だ近きに有り法華一乗の機今正に是れ
其のときなりと恋いさせ給う、たま 日蓮は世間には日本第一の貧しき者なれども
仏法を以て論ずれば一閻浮提第一の富る者なり、是れ時の然らしむる故な
りと思へば喜び身にあまり感涙押へ難く教主釈尊の御恩報じ奉り難し、
恐らくは付法蔵の人人も日蓮には果報は劣らせ給いたり天台智者大師・
伝教大師等も及び給うべからず最も四菩薩を建立すべき時なり云云、問
うて云く四菩薩を造立すべき証文之れ有りや、い 答えて云く涌出品に云く「四
導師有り一をば上行と名け二をば無辺行と名け三をば淨行と名け四
をば安立行と名く」等云云、問うて云く後・五百歳に限るといへる經文
あ 安立行と名く」等云云、問うて云く後・五百歳に限るといへる經文

これ有りや、答えて云く薬王品に云く「我が滅度の後・後の五百歳の中に
閻浮提に広宣流布して断絶せしむること無けん」等云云。

一御状に云く大田方の人人・一向に迹門に得道あるべからずと申され候

由・其の聞え候とは以ての外の謬なり、御得意候へ本・迹二門の浅深

・勝劣・与奪・傍正は時と機とに依るべし、一代聖教を弘むべき時に三

あり機もつて爾なり、仏滅後・正法の始の五百年は一向・小乗後の五百

年は権大乘像法一千年は法華經の迹門等なり、末法の始には一向に本門

なり一向に本門の時なればとて迹門を捨つべきにあらず、法華經一部に

於て前の十四品を捨つべき經文之れ無し本・迹の所判は一代聖教を三重

に配当する時・爾前・迹門は正法・像法・或は末法は本門の弘まらせ

給うべき時なり、今の時は正には本門傍には迹門なり、迹門無得道と云

つて迹門を捨てて一向本門に心を入れさせ給う人人はいまだ日蓮が本意の

ほうもん 法門を習はせ給はざるにこそ以ての外の僻見なり、私ならざる法門を僻案

ひんま せん人は偏に天魔波旬の其の身に入り替りて人をして自身ともに無間・

だいじよう

お

大城に墮つべきにて候つたなしつたなし、此の法門は年来貴辺に申し含め

ひとびと たる様に人人にも披露あるべき者なり総じて日蓮が弟子と云つて法華経を

しゅぎよう

ひとびと

にちれん

ごと

さだにも

候はば

釈迦・

多宝・

十方

ぶんじん

じゅうらせつ

候べし、

其れさへ

尚人人の

御心中は

量りがたし。

ふんじん 分身・十羅刹も御守り候べし、其れさへ尚人人の御心中は量りがたし。

ぼうしきよ

ふびん

是にて

法華経の

文読み進

らせて

南無

妙法蓮華

みようほうれんげきよう

まい

願くは

日行を

釈迦・

多宝・

十方の

諸仏靈山へ

迎

たまた

もう

へ取らせ

給へと

申し上げ

候いぬ、

身の所

労いまだ

きらきらしからず

略せしめ候、又又申す可く候、恐恐謹言。

きようきようきんげん

きようきようきんげん

恐恐

謹言。

恐恐

謹言。

恐恐

謹言。

恐恐

こうあん

弘安二年五月十七日

にちれんかおう

日蓮花押

◆一四五 富木殿女房尼御前御書

ときどのにようほうあまごせんごしよ

こうあん

弘安二年十一月 五十八歳御作

990p

いよ房ぼうは学生になりて候ぞつねに法門ほうもんきかせ給たまへ。

はるかに見まいらせ候はねばをぼつかなく候、たうじとてもたのしき事は候はねどもむかしはことにわびしく候いし時よりやしなはれまいらせて候へばことにをんをもくをもいまいらせ候、それについては・いのちはつるかめのごとくさいはいは月のまさりしをのみつがごとくとこそ法華經ほけきょうにはいのりまいらせ候へ、さてはえち後房ぼうしもつけ房ぼうと申もうす僧をいよどのにつけて候ぞ、しばらくふびんにあたらせ給たまへとき殿たみには申もうさせ給たまへ。

十一月二十五日

にちれんかおう
日蓮花押

富城殿

にようぼうあまこせん
女房尼御前

しよきよう ほけきよう なんい
◆一四六 諸經と法華經と難易の事

問うて云くいわ法華經ほけきようの第四法師品ほうしほんに云くいわ難信難解なんしんなんげと云云いいかなる事ぞや、

答えて云くいわ此の經はと仏説たまひき給いて後二千余年にまかりなり候、月氏がっしに一千

二百余年かんど漢土に二百余年を経て後に日本国にほんこくに渡りて・すでに七百余年なり、

仏滅後ぶつめつに此の法華經ほけきようの此の句を読みたる人但三人なり、所謂月氏いわゆるがっしには竜樹りゅうじゅ

菩薩ぼさつの大論だいろんに云くいわ「譬たとえば大薬師やくしの能く毒を以て薬と為すが如し」等云云、

此これは竜樹菩薩りゅうじゅぼさつの難信難解なんしんなんげの四字を読み給いしなり、漢土かんどには天台智者てんだいちしや

大師だいしと申せし人読んで云くいわ「已今当説いこんとう最も為れ難信難解」と云云、日本国にほんこく

には伝でんぎようだいし教大師読んで云くいわ「已説いせつの四時の經今説こんせつの無量義經当説むりようぎきやうとうせつの涅槃經ねはんぎきやう

易信易解いしんいげなり随他意ずいたいの故に此ゆえの法華經ほけきようは最も為れ難信難解なんしんなんげなり随自意ずいじいの

故に」等云云、問うて云くいわ其その意如何いかに、答て云くいわ易信易解いしんいげは随他意ずいたいの故にゆえ

難信難解なんしんなんげは随自意ずいじいの故なり云云、弘法大師並びに日本国東寺こうぼうだいしならの門人もんじんをもわ

く法華經は顯教の内の難信難解にて密教に相對すれば易信易解なり云云、
慈覺・智証並びに門家思うよう法華經と大日經は俱に難信難解なり但し
大日經と法華經と相對せば法華經は難信難解大日經は最も為れ難信難解
なり云云、此の二義は日本一同なり、日蓮讀んで云く外道の經は易信易解
・小乗經は難信難解小乗經は易信易解大日經等は難信難解大日經
等は易信易解般若經は難信難解なり・般若と・華嚴と・華嚴と涅槃と・
涅槃と法華と・迹門と本門と・重重的の難易あり。

問うて云く此の義を知つて何の詮か有る答えて云く生死の長夜を照す
大燈・元品の無明を切る利剣は此の法門に過ぎざるか隨他意とは真言宗・
華嚴宗等は隨他意の易信易解なり仏九界の衆生の意樂に随つて説く所の
經經を隨他意という譬えば賢父が愚子に隨うが如し、仏・仏界に隨つて
説く所の經を隨自意という、譬へば聖父が愚子を隨えたるが如きなり、

にちれん

日蓮此の義に付て大日經・華嚴經・涅槃經等を勘え見候に皆隨他意の

きようぎよう

經經なり、問うて云く其の隨他意の証拠如何、答えて云く勝鬘經に云く

ひほう

「非法を聞くこと無き衆生には人天の善根を以て之を成熟す声聞を求

むる者には声聞乗を授け緣覺を求むる者には、緣覺乗を授け大乘を求む

る者には授くるに大乘を以てす」と云云、易信易解の心是なり、華嚴・大日

・般若・涅槃等又是くの如し「爾の時に世尊・藥王菩薩に因せて八万の大

士に告げたまわく藥王汝是の大衆の中の無量の諸天・竜王・夜叉・

乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩羅伽・人と非人と及び比丘・比丘尼

・優婆塞・優婆夷の声聞を求むる者・辟支仏を求むる者・仏道を求むる者

を見るや、是くの如き等類咸く仏前に於て妙法華經の一偈・一句を聞いて

一念も隨喜する者には我皆記を与え授く当に阿○菩提を得べし」文、諸經

の如くんば人は五戒・天は十善・梵は慈悲喜捨・魔王には一無遮・比丘の

二百五十・比丘尼の五百戒・声聞の四諦・縁覚の十二因縁・菩薩の六度・
譬へば水の器の方円に随い象の敵に随つて力を出すがごとし、法華經は爾ら
ず八部・四衆皆一同に法華經を演説す、譬へば定木の曲りを削り師子王の
剛弱を嫌わずして大力を出すがごとし。

此の明鏡を以て一切經を見聞するに大日の三部・淨土の三部等隠れ無
し、而るを・いかにやしけん弘法・慈覺・智証の御義を本としける程に此
の義すでに隠没して日本国四百余年なり、珠をもつて石にかへ梅檀を凡木
にうれり、仏法やうやく顛倒しければ世間も又濁乱せり、仏法は体のごと
し世間はかげのごとし体曲れば影ななめなり、幸なるは我が一門仏意に随つ
て自然に薩般若海に流入す、世間の学者の若きは随他意を信じて苦海に沈
まんことなり、委細に旨又又申す可く候、恐恐。

五月廿六日

日蓮花押

◆一四七 富城入道殿御返事

弘安四年十月 六十歳御作

993p

与富木胤繼 於身延

今月十四日の御札同じき十七日到来、又去ぬる後の七月十五日の御消息
同じて二十比到来せり、其の外度度の貴札を賜うと雖も老病為るの上又不
食氣に候間未だ返報を奉らず候条其の恐れ少からず候、何よりも去ぬる後
の七月御状の内に云く鎮西には大風吹き候て浦浦・島島に破損の船充滿の
間乃至京都には思円上人・又云く理豈然らんや等云云、此の事別して此の
一門の大事なり総じて日本国の凶事なり仍つて病を忍んで一端是れを申し
候はん、是偏に日蓮を失わんと為て無かるう事を造り出さん事兼て知る、
其の故は日本国の真言宗等の七宗・八宗の人人の大科今に始めざる事な
り然りと雖も且く一を挙げて万を知らしめ奉らん、去ぬる承久年中に隱岐
の法皇義時を失わしめんが為に調伏を山の座主・東寺・御室・七寺・

おんじょう

園城に仰せ付けられ、仍つて同じき三年の五月十五日鎌倉殿の御代官・伊

かまくら

賀太郎判官光末を六波羅に於て失わしめ畢んぬ、然る間同じき十九日二十

かまくら

日鎌倉中に騒ぎて同じき二十一日・山道・海道・北陸道の三道より十九万

つわもの

騎の兵者を指し登す、同じき六月十三日其の夜の戌亥の時より青天俄に陰り

しんどうらいでん

て震動雷電して武士共首の上に鳴り懸り鳴り懸りし上・車軸の如き雨は篠

ぶし

を立つるが如し、爰に十九万騎の兵者等・遠き道は登りたり兵乱に米は

ひょうらん

尽きぬ馬は疲れたり在家の人は皆隠れ失せぬ胃は雨に打たれて縣の如し、

つ

かぶと

わた

こと

武士共・宇治勢多に打ち寄せて見ければ常には三丁四丁の河なれども既に

ぶし

すで

六丁・七丁・十丁に及ぶ、然る間・一丈・二丈の大石は枯葉の如く浮び五

か

から

こと

丈・六丈の大木流れ塞がること間無し、昔利綱・高綱等が渡せし時には似る

ふさ

あみ

あみ

わた

に

可くも無し武士之を見て皆臆してこそ見えたりしが、然りと雖も今日を過

ぶし

これ

みな

しか

いえど

さば皆・心を翻し堕ちぬ可し去る故に馬筏を作りて之を渡す処・或は百

みな

ひるがえお

べ

いぬ

ゆえ

うまいかた

これ

わた

ところ

ある

騎・・或はある千万騎・此かくの如ごとく皆我も我もと度ると雖も・・或は一丁・或

は二丁三丁渡る様なりと雖も彼の岸に付く者は一人も無し、然る間・緋綴

あかおとし

・赤綴等の甲其の外弓・箭・兵・杖・白星の胄等の河中に流れ浮ぶ事は猶

あかなずき

もみじ

長月神無月の紅葉の吉野・立田の河に浮ぶが如くなり、爰に叡山・東寺・

おんじょうじ

こうそう

これ

七寺・園城寺等の高僧等之を聞くことを得て真言の秘法・大法の験とこそ

よろこ

たま

だいり

ししんでん

ざす

とうじ

おむろ

五壇・十五壇の

悦び給いける、内裏の紫宸殿には山の座主・東寺・御室・五壇・十五壇の

いよいよさか

ほうこう

えいかんきわま

なく

かざり

を地に付け大

法を弥盛んに行われければ法皇の御叡感極り無く玉の巖を地に付け大

ほつし

みて

たま

だいじん

くぎよう

を庭の上へ走り落ち五

法師等の御足を御手にて摩給いしかば大臣・公卿等は庭の上へ走り落ち五

体を地に付け高僧等を敬い奉る。

こうそう

たてまつ

又宇治勢田にむかへたる公卿・殿上人は胄を震い挙げて大音声を放つ

て云く義時・所従の毛人等慥に承われ昔より今に至るまで王法に敵を作し

い

よしとき

しよじゅう

えびす

たしかうけたま

いた

を放つ

な

を放つ

を放つ

奉る者は何者か安穩なるや、狗犬が師子を吼えて其の腹破れざること無く

たてまつ

なにもの

あんのん

くけん

しし

ほ

そ

わ

なく

を放つ

を放つ

を放つ

を放つ

を放つ

を放つ

を放つ

を放つ

を放つ

を放つ

を放つ

を放つ

を放つ

を放つ

を放つ

を放つ

修羅しゅらが日月にちがつを射るに其その箭やえ還そつて其まなこの眼あたに中あたらざること無し遠ためしき例れいは
且しばらこれこ之これを置おく、近ちかくは我われが朝あさに代か始はまつて人王みこ八十余代の間・大山の皇子みこ
大石の丸まるを始はと為なて二十余人王法たてまに敵なを為なし奉たてまれども一人として素懷そかい
を遂とげたる者みななし皆頸くくを獄門かに懸かけられ骸かばねを山野さらに曝かんとうす関東の武士等ぶし・
・或あるは源平ある・・或あるは高家等先祖相伝そうでんの君きみを捨すてまつ奉たてまつ伊豆の国の民な為なる義時よしとき
が下知げちに随したがう故ゆえにかかる災難さいなんは出来しゅつするなり、王法そむに背そむき奉たてまつ民たてまの下知げちに
随したがう者ししは師子王やこが野狐やこに乗のせられて東西南北とうざいなんぼくに馳走ちそうするが如ごとし今生こんじようの恥はじ
之これを何如かぶと、急きふとぎ急きふとぎ胃いを脱だつぎ弓弦ゆづるをはづして参参さんさんと招まねきける程ほどに、何いかに
有あるりけん申酉さるとりの時ときにも成なりしかば関東かんとうの武士等ぶし・河かを馳はせ渡わたり勝ちかか
り責せめし間京方かみがたの武者共とも一人も無なく山林さんりんに逃にげげ隠かくるの間、四つの王おうをば
四つの島しまへ放はなちまいらせ又高僧こうそう・御師おんし・御房達ごぼうは・或あるは住房あを追おわれ・或
は恥辱ちじよくに値あひ給たまひて今いまに六十年の間むじゅうねんいまだ・そのはぢをすすがずとこそ見

え候に、今亦彼の僧侶の御弟子達御祈☆承はられて候げに候あひだいとも
の事なれば秋風に纔の水に敵船・賊船などの破損仕りて候を大將軍生
取たりなんと申し祈り成就の由を申し候げに候なり、又蒙古の大王の頸の
参りて候かと問い給うべし、其の外はいかに申し候とも御返事あるべから
ず御存知のためにあらあら申し候なり。

乃至此の一門の人人にも相触れ給ふべし又必ずしいぢの四郎が事は承り
候い畢んぬ、予既に六十に及び候へば天台大師の御恩報じ奉らんと仕り候
あひだみぐるしげに候房をひきつくろい候ときに・さくれうにおろして候
なり、錢四貫をもちて一閭浮提第一の法華堂造りたりと靈山浄土に御参り
候はん時は申しあげさせ給うべし、恐恐。

十月二十二日

日蓮花押

◆一四八 治病大小権実違目

富木入道殿御返事

日蓮

995p

さへもん殿の便宜びんぎの御かたびら給たまひ了おぬ。

今度の人人このたびひとびとのかたがたの御さいども佐衛門尉殿の御日記にっきのごとく給たまひ

了おぬと申もうさせ給たまひ候へ。

太田入道殿のかたがたのもの・ときどのの日記にっきのごとく給たまひ候お了わぬ

此の法門ほうもんのかたづらは佐衛門尉殿にかきて候、こわせ給たまひいて御らむ有ある

べく候。

御消息しょうそくに云く凡そ疫病えきびょう 弥興盛等と云云、夫れ人そに二の病あり一には

身の病・所謂地いわゆる大百一・水大百一・火大百一・風大百一・已上四百四病な

り、此の病は設たといい仏に有らざれども・之これを治す所謂いわゆる・治水・流水るすい・耆婆ぎば・

扁鵲等へんじやくが方藥此これを治するにゆいて愈いえずという事なし、二には心の病

所謂三毒乃至八万四千の病なり、此の病は二天・三仙六師等も治し難がたし何いかに

況や神農・黄帝等の方藥及ぶべしや、又心の病重重に淺深勝劣分れたり、
六道の凡夫の三毒八万四千の心病は小仏・小乗・阿含經・俱舍・成実・
律宗の論師・人師此れを治するにゆいて愈えぬべし、但し此の小乗の者
等・小乗を本として・或は大乗を背き・或は心には背かざれども大乗
の国に肩を並べなんどする其の国其の人に諸病起る、小乗等をもつて此れ
を治すれば諸病は増すとも治せらるる事なし、諸大乘經の行者をもつて
此れを治すれば則ち平愈す、又華嚴經・深密經・般若經・大日經等の
權大乘の人人・各各劣謂勝見を起して我が宗は・或は法華經と齊等・
或は勝れたりなんど申す人多く出来し・或は国主等此れを用いぬれば
此れによつて三毒八万四千の病起る、返つて自の依經をもつて治すれども
いよいよ倍增す、設い法華經をもつて行うとも驗なし經は勝れたれども
行者・僻見の者なる故なり。

法華經に又二經あり所謂迹門と本門となり本迹の相違は水火天地の
違目なり、例せば爾前と法華經との違目よりも猶相違あり爾前と迹門とは
相違ありといへども相似の辺も有りぬべし、所説に八教あり爾前の円と
迹門の円は相似せり爾前の仏と迹門の仏は劣応・勝応・報身・法身異れ
ども始成の辺は同じきぞかし、今本門と迹門とは教主已に久始のかわり
め百歳のをきなと一歳の幼子のごとし、弟子又水火なり土の先後いうばか
りなし、而るを本迹を混合すれば水火を弁えざる者なり、而るを仏は分明
に説き分け給いたれども仏の御入滅より今に二千余年が間三国並びに一
閻浮提の内に分明に分けたる人なし、但漢土の天台日本の伝教此の二人
計りこそ粗分け給いて候へども本門と迹門との大事に円戒いまだ分明な
らず、詮ずる処は天台と伝教とは内には鑒み給うといへども一には時来
らず二には機なし三には譲られ給はざる故なり、今末法に入りぬ地涌出現

して弘通有るべき事なり、今末法に入つて本門のひろまらせ給うべきには
小乗・権大・乗迹門の人人・設い科なくとも彼れ彼れの法にては驗
有るべからず、譬へば春の薬は秋の薬とならず設いなれども春夏のごとく
ならず何に況や彼の小乗・権大乘・法華經の迹門の人人・或は大小・
権実に迷える上・上代の国主彼れ彼れの經經に付きて寺を立て田畠を寄
進せる故に彼の法を下せば申し延べがたき上・依怙すでに失るかの故に大
瞋恚を起して・或は実經を謗じ・或は行者をあだむ国主も又一には多人
につき・或は上代の国主の崇重の法をあらため難き故・或は自身の愚癡の
故・或は実教の行者を賤しむゆへ等の故彼の訴人等の語を・をさめて
実教の行者をあだめば実教の守護神の梵釈・日月・四天等其の国を罰
する故に先代未聞の三災・七難起るべし、所謂去年去ぬる正嘉等の疫病
等なり。

うたがい 疑つて云く汝が申すがごとくならば此の国法華經の行者をあだむ

ゆえ ぜんじん 故に善神此の国を治罰する等ならば諸人の疫病なるべし何ぞ汝が弟子等

又やみ死ぬるや、答えて云く汝が不審最も其の謂有るか但し一方を知りて
いっぽう

一方を知らざるか、善と悪とは無始よりの左右の法なり權教並びに諸宗

の心は善悪は等覺に限る若し爾ば等覺までは互に失有るべし、法華宗の心

は一念三千・性悪性善・妙覺の位に猶備われり元品の法性は梵天・

帝釈等と顕われ元品の無明は第六天の魔王と顕われたり、善神は悪人をあ

だむ悪鬼は善人をあだむ、末法に入りぬれば自然に悪鬼は国中に充滿せり

瓦石草木の並び滋がごとし善鬼は天下に少し聖賢まれなる故なり、此の

疫病は念仏者・真言師・禪宗律僧等よりも日蓮が方にこそ多くやみ死ぬ

べきにて候か、いかにとして候やらん彼等よりもすくなくやみすくなく死

に候は不思議に・をばへ候、人のすくなく故か又御信心の強盛なるか。

問うて云く日本国に此の疫病先代に有りや、答えて云く日本国は神武天皇よりは十代にあたらせ給いし崇神天皇の御代に疫病起りて日本国やみ死ぬる事半にすぐ、王始めて天照太神等の神を国に崇しかば疫病やみぬ故に崇神天皇と申す、此れは仏法のいまだわたらざりし時の事なり、人王第三十代並びに一二の三代の国主並びに臣下等疱瘡と疫病に御崩去等なりき、其の時は神にいのれども叶わざりき、去ぬる人王三十代・欽明天皇の御宇に百済国より經・論・僧等をわたすのみならず金銅の教主釈尊を渡し奉る、蘇我の宿禰等崇むべしと申す物部の大連等の諸臣並びに万民等一同に此の仏は崇むべからず若し崇むるならば必ず我が国の神・瞋りをなして国やぶれなんと申す、王は両方弁まえがたくをはせしに三災・七難先代に超えて起り万民皆疫死す、大連等便りを得て奏問せしかば僧尼等をはじめに及ぼすのみならず金銅の釈迦仏をすみを・をこして焼き奉る寺又同

じ、爾その時に大連おおむらじやみ死ぬ王も隠れさせ給たまい仏をあがめし蘇そ我がの宿禰すくねもや

みぬ、大連おおむらじが子・守屋もりやの大臣だいいん云く此の仏をあがむる故ゆえに三代の国主こくしゅすでに

・やみかくれさせ給たまう我が父もやみ死ぬ、まさに知るべし仏をあがむる
しようとかいし

聖徳太子・馬子等はをやのかたき公の御かたきなりと申せしかば穴部の

王子・宅部みこの王子等・並びに諸臣しよ已下数千人・一同によりきして仏と堂等

をやきはらうのみならず、合戦すでに起りぬ結句けつくは守屋討たれ了おわぬ、

仏法渡りて三十五年が間・年年に三災さんさい・七難疫病起りしが守屋馬子に討た

るのみならず神もすでに仏にまけしかば災難忽さいなんたちまちに止おわ了わぬ、其その後の

代代の三災さんさい・七難等は大体は仏法の内の乱れより起るなり、而れども・或ある

は一・人・二人・或あるは一国・二国・或あるは一類・二類・或あるは一処・二処の事

なれば神のたたりも有り謗法ほうぼうの故もあり民のなげきよりも起る。おこ

而しかるに此の三十余年の三災さんさい・七難等ひちなんは一向いっこうに他事たじを雑まじえず日本にほん・一同に

にちれん

日蓮をあだみて国・郡・郷・村・人ごとに上一人より下万民にい

たるまで前代未聞の大瞋恚を起せり、見思未断の凡夫の元品の無明を起す

事此れ始めなり、神と仏と法華經にいのり奉らばいよいよ増長すべし、

但し法華經の本門をば法華經の行者につけて除き奉る結句は勝負を決せざ

らん外は此の災難止み難かるべし、止観の十境・十乗の観法は天台大師

説き給いて後・行ずる人無し、妙楽・伝教の御時少し行ずといへども敵人

ゆわきゆへにさてすぎぬ、止観に三障四魔と申すは権經

を行ずる行人の障りにはあらず今日蓮が時具さに起れり、又天台・伝教等

の時の三障四魔よりもいまひとしをまさりたり。一念三千の観法に二つあ

り一には理・二には事なり天台・伝教等の御時には理なり今は事なり観念

すでに勝る故に大難又色まさる、彼は迹門の一念三千・此れは本門の

一念三千なり天地はるかに殊なりことなりと御臨終の御時は御心へ有るべ

い

い

い

い

い

い

い

く候、きょうきようきんげん
恐恐謹言。

六月二十六日

にちれんかおう
日蓮花押

◆一四九 金吾殿御返事ごへんじ

ぶんえい 文永七年十一月 四十九歳御作 与大田金吾 999p

しかん 止観の五正月一日よりよみ候いて現世安穩げんせあんのん・後生善処ごしょうぜんしょと祈請仕り候、
びんぎ 便宜に給わり候本末は失うせて候いしかどもこれにすりさせて候多く本入
るべきに申し候。もう

だいし 大師講に鵜目五連給候がもくい了んぬ、此の大師講だいし・三四年に始めて候が今年
は第一だいいちにて候いつるに候。

そもそも 抑此ほうもんの法門ほうもんの事・勘文かんもんの有無うむに依よつて弘ひろまるべきか弘ひろまらざるか・
こそ 去年方方に申もうして候いしかども・いなせの返事候はず候、今年十一月の比
かたがた 方方へ申もうして候へば少少返事あるかたも候、をほかた人の心もやわらぎて

・さもやと・をぼしたりげに候、又上のけさんにも入りて候やらむ、これ
ほどの僻事^{ひがごと}申して候へば流・死の二罪^{つみ}の内は一定と存ぜしがいままでな
と申す事も候はぬは不思議^{ふしぎ}と・をぼへ候、いたれる道理^{どうり}にて候やらむ、又
自界叛逆難^{じかいほんぎやくなん}の経文^{きやうもん}も値べきにて候やらむ、山門^{さんもん}なんども・いにしへにも百
千万億倍^{せんまん}すぎて動揺^{どうご}とうけ給わり候、それならず子細^{しさい}ども候やらん震旦^{しんたん}・
高麗^{こま}すでに禪門^{ぜんもん}・念仏^{ねんぶつ}になりて守護^{しゆご}の善神^{ぜんじん}の去るかの間彼の蒙古^{もうこ}に聳^もい候
いぬ、我が朝も又此の邪法弘まりて天台法華宗^{てんだいほつけしやう}を忽諸^{ゆるがせ}のゆへに山門安穩^{さんもんあんのん}な
らず師檀^{したん}違叛^{ゐはん}の国と成り候いぬれば十が八・九はいかんがと・みへ候、人身^{じんしん}
すでにうけぬ邪師^{じゃし}又まぬがれぬ、法華經^{ほけきやう}のゆへに流罪^{るざい}に及びぬ、今死罪^{しざい}に
行われぬこそ本意^{ほんい}ならず候へ、あわれ・さる事の出来^{しゅつたい}し候へかしと・こそ
はげみ候いて方方^{かたがた}に強言^{かうげん}をかきて挙げ^あげをき候なり、すでに年五十に及びぬ
余命いくばくならず、いたづらに曠野^{かうや}にすてん身を同じくは一乘法華^{いちじやうほつけ}のか

たになげて雪山童子薬王菩薩の跡をおひ仙予・有徳の名を後代に留めて
ほつけ ねはんぎょう と
法華・涅槃經に説き入れられまいらせんと願うところなり、南無
みょうほうれんげきょう
妙法蓮華經。

十一月二十八日 日蓮花押 にちれんかおう

御返事 ごへんじ

◆一五〇 転重輕受法門 ほうもん 文永八年十月 ぶんえい

五十歳御作 与大田左衛門曾谷入道金原法橋 1000P さえもんそやにゅうだう

修利槃特と申すは兄弟二人なり、一人もありしかばすりはんどくと申す
しゅりはんどく もう きょうだい

なり、各各三人は又かくのごとし一人も来らせ給へば三人と存じ候なり。
ねはんぎょう もう ほうもん

涅槃經に転重輕受と申す法門あり、先業の重き今生につきずして未来に
ねはんぎょう もう ほうもん せんごう こんじょう みらい

地獄の苦を受くべきが今生にかかる重苦に値い候へば地獄の苦みぱつとき
じごく こんじょう あ

へて死に候へば人天・三乘・一乗の益をうる事の候、不輕菩薩の惡口罵詈
にんてん さんじょう いちじょう ふぎょう ぼさつ あつく めり

じょうもくがりやく

かこ ひほうしうほう

せられ杖 木瓦礫をかほるもゆへなきにはあらず過去の誹謗正法のゆへかと・みへて其罪畢已と説れて候は不輕菩薩の難に値うゆへに過去の罪の滅

つみひつち

ふぎようぼさつ

なん

あ

かこ つみ

するかとみへはんべりは一、又付法蔵の二十五人は仏をのぞきたてまつりて

ふほうぞう

は皆仏のかねて記しをき給える権者なり、其の中に第十四の提婆菩薩は外道

みな

しる

たま

ごんしゃ

そ

だいはぼさつ

げどう

にころされ第二十五師子尊者は檀 弥 栗王に頸を刎られ其の外仏陀密多・

ししそんじゃ

いよいよ

はねそ

ぶつだ

りゆうじゅぼさつ

竜樹菩薩なんとも多くの難にあへり、又難なくして王法に御帰依いみじく

なん

なん

ごきえ

て法をひろめたる人も候、これは世に悪国善国有り法に摂受 折伏あるゆ

しやうじゆしやくぶく

へかとみへはんべる、正像猶かくのごとし中国又しかなり、これは辺土

しやうぞうなお

ちゆうごく

なり末法の始なり、かかる事あるべしとは先にをもひさだめぬ期をこそま

まつほう

ち候いつれ是二、この上の法門はいにしえ申しをき候いきめづらしからず

ほうもん

もう

えんきよう

かんぎようそく

もう

しぎよう

しぎよう

円教の六即の位に観行即と申すは所行如所言・所言如所行と云云、

そく

えんじん

もう

しぎよう

しぎよう

理即名字の人は円人なれども言のみありて真なる事かたし、例せば外典の

えんじん

もう

しぎよう

しぎよう

げてん

さんぶん

三墳・五典には読む人かずをしらず、かれがごとくに世を・をさめふれま

う事千万が一つもかたしされば世のをさまる事も又かたし、法華経は紙付

に音をあげてよめども彼の経文のごとくふれまう事かたく候か、譬喩品に

云く「経を誦読し書持すること有らん者を見て輕賤憎嫉して結恨を懷かん」

法師品に云く「如来現在すら猶怨嫉多し況や滅度の後をや」勸持品に云く

「刀杖を加え乃至数数擯出せられん」安樂行品に云く「一切世間怨多く

して信じ難し」と、此等は経文には候へども何世にかかるべしともしられ

ず、過去の不輕菩薩・覺徳比丘などこそ身にあたりてよみまいらせて候

いけるとみへはんべれ、現在には正像二千年はさてをきぬ、末法に入つて

は此の日本国には當時は日蓮一人みへ候か、昔の悪王の御時多くの聖僧の難

に値い候いけるには又所従・眷属等・弟子檀那等いくぞばくか・なげき候

いけんと今をもちてをしはかり候、今日蓮・法華経一部よみて候一句一偈

に猶受記をかほれり何に況や一部をやと、いよいよたのもし、但おほけなく国土までところをもひて候へども我と用いられぬ世なれば力及ばず、しげきゆへにとどめ候い了んぬ。

ぶんえい かのとひつじ
文永八年辛 未十月五日

にちれんかおう
日蓮花押

さえもののじょう
大田左衛門尉殿

にゅうどう
蘇谷入道殿

ごほう
金原法橋御房

◆ 一五一 大田殿許御書 文永十二年正月 五十四歳御作 1002p

し たこうじんこうじん
新春の御慶賀自他幸甚幸甚。

そもそもぞくたい しんたい
抑俗諦・真諦の中には勝負を以て詮と為し世間出世とも甲乙を以て先

な し か しきよう しよしゅう しやうれつ
と為すか、而るに諸経・諸宗の勝劣は三国の聖人共に之を存し兩朝の

これ ほけきよう だいにちきよう てんだいしゅう しんこんしゅう しやうれつ
群賢同じく之を知るか、法華経と大日経と天台宗と真言宗との勝劣は

がつしにほんいま これ
月支日本未だ之を弁ぜず 西天東土にも明らめざる物か、 所詮天台・伝教の
如き聖人・公場に於て是非を決せず 明帝桓武の如き国主之を聞かざる故
か、 所謂善無畏三蔵等は法華經と大日經とは理同事勝等と慈覚・智証等も
此の義を存するか、 弘法大師は法華經を華嚴經より下す等此等の二義共に
經文に非ず同じく自義を存するか將た又慈覚・智証等表を作つて之を奏す
申すに随つて勅宣有り、 聞くが如くんば真言・止観兩教の宗をば同じく
醍醐と号し俱に深秘と称す乃至譬えば猶人の兩目・鳥の雙翼の如き者なり
等云云、 又重誠の勅宣有り・聞くが如くんば山上の僧等専ら先師の義に
違して偏執の心を成ず殆んど以つて余風を扇揚し旧業を興隆することを
顧みず等云云、 余生れて末の初に居し学諸賢の終りを慕く慈覚・智証の正義
の上に勅宣方方之れ有り 疑い有るべからず一言をも出すべからず然りと
いえど えんにん えんちん だいにし せんし でんぎようだいし せいぎ こうりやく ちよくせん もう
雖も円仁・円珍の兩大師・先師・伝教大師の正義を劫略して勅宣を申し

下すの疑い之れ有る上・仏誠遁れ難し、随つて又亡国の因縁・謗法の源
初之れに始まるか、故に世の謗を憚からず用不用を知らず身命を捨てて
之を申すなり。

疑つて云く善無畏・金剛智・不空の三三蔵・弘法・慈覚・智証の三
大師・二經に相對して勝劣を判ずるの時・或は理同事勝・或は華嚴經より
下る等云云、随つて又聖賢の鳳文之れ有り、諸徳之を用いて年久し此の外
に汝一義を存して諸人を迷惑し剩さえ天下の耳目を驚かす豈増上慢の者
に非ずや如何、答えて曰く汝等が不審尤最もなり如意論師の世親菩薩を
炳誠せる言は是なり、彼の状に云く「党援の衆と大義を競うこと無く群迷
の中に正論を弁ずること無かれと言ひ畢つて死す」云云、御不審之れに当
るか、然りと雖も仏・世尊は法華經を演説するに一經の内に二度の流通
之れ有り重ねて一經を説いて法華經を流通す、涅槃經に云く「若し善比丘

あつて法を壊る者を見て置いて呵責し駈遣し拳処せずんば当に知るべし
是の人は仏法の中の怨なり」等云云、善無畏・金剛智の両三蔵・慈覺・智証
の二大師・大日の權經を以つて法華の実經を破壊せり。

而るに日蓮世を恐て之を言わずんば仏敵と為らんか、随つて章安大師末代
の學者を諫曉して云く「仏法を懷乱するは仏法の中の怨なり慈無くして
詐わり親しむは是れ彼の人の怨なり能く糾治する者は即ち是れ彼が親なり」
等云云、余は此の釈を見て肝に染むるが故に身命を捨てて之を糾明する
なり、提婆菩薩は付法藏の第十四・師子尊者は二十五に當る・或は命を
失い・或は頭を刎らる等是なり、疑つて云く經經の自讃は諸經常の
習いなり、所謂金光明經に云く「諸經の王」密嚴經の「一切經中の勝」
蘇悉地經に云く「三部の中に於て此の經を王と為す」法華經に云く「是れ
諸經の王」等云云、随つて四依の菩薩・両国の三蔵も是くの如し如何、

答えて曰く^{いわ} 大國・小國・大王・小王・大家・小家・尊主・高貴・各各分齊^{ぶんざい}
有り然りと雖も^{しか} 國の萬民・皆大王と号し同じく^{いえど} 天子と称す^{みなだいおう} 詮を以つて
これを論ぜば^{これ} 梵王を大王と爲し^{ぼんのう} 法華經を以て^{だいおう} 天子と称するなり、求めて云く^な
其の証如何、答えて曰く^そ 金光明經の是諸經之王の文は^い 梵釈の諸經に相對^い
し密嚴經の一切經中勝の文は^{みつこんきょう} 次上に十地經・華嚴經・勝鬘經等を^{いっさいきょう} 挙げ^{つぎのかみ}
て彼彼の經經に相對して一切經の中に勝ると云云、蘇悉地經の文は^{かがれ} 現文^{きようぎよう}
之れを見るに三部の中に於て王と爲す等云云、蘇悉地經は大日經・金剛^こ
頂經に相對して王と云云、而るに善無畏等・或は理同事勝・或は華嚴經^{ちようぎよう}
より下ると等云云、此れ等の僻文は螢火を日月に同じ大海を江河に入る^{そつたい}
か。

疑つて云く^{うたがい} 經經の勝劣之れを論じて何か爲ん、答えて曰く^い 法華經の^い
第七に云く^い 「能く是の經典を受持する者有れば亦復是くの如し一切衆生^い

の中に於て亦為第一なり」等云云、此の經の藥王品に十喩を挙げて已今當
の一切經に超過すと云云、第八の譬兼ねて上の文に有り所詮仏の意の如く
ならば經の勝劣を詮するのみに非ず法華經の行者は一切の諸人に勝れた
るの由之れを説く、大日經等の行者は諸山・衆星・江河・諸民なり、
法華經の行者は須弥山・日月・大海等なり、而るに今の世は法華經を輕蔑
すること土の如し民の如し眞言の僻人等を重崇して國師と爲ること金の
如し王の如し之に依つて増上慢の者・國中に充滿す青天瞋を爲し
黄地天☆を致す涓聚りて☆塹を破るが如く民の愁い積りて國を亡す等
是なり、問うて曰く内外の諸釈の中には是くの如きの例之れ有りや、答え
て曰く史臣吳兢が太宗に上つる表に云く「竊かに惟れば太宗・文武皇帝の
政化・曠古より之れ求むるに未だ是くの如くの盛なる者有らず唐堯・虞舜
・夏禹・殷湯・周の文武・漢の文景と雖も皆未だ逮ばざる処なり」云云、

今・此の表を見れば太宗を慢ぜる王と云う可きか政道の至妙先聖に超えて
讚ずる所なり、章安大師・天台を讚めて云く「天竺の大論尚其の類に非ず
真丹の人師何ぞ劣く語るに及ばん此れ誇耀に非ず法相の然らしむるのみ」
等云云、從義法師重ねて讚めて云く「竜樹・天親未だ天台には若かず」
伝教大師自讚して云く「天台法華宗の諸宗に勝ることは所依の經に拠る
が故に自讚毀他ならず庶くば有智の君子・經を尋ねて宗を定めよ」云云、
又云く「能く法華を持つ者は亦衆生の中の第一なり已に仏説に拠る豈自讚
ならんや」云云、今愚見を以つて之を勘うるに善無畏・弘法・慈覺・智証
等は皆仏意に違うのみに非ず・或は法の盜人・或は伝教大師に逆える
僻人なり、故に・或は閻魔王の責を蒙り・或は墓墳無く・或は事を入定
に寄せ・或は度度・大火・大兵に値えり権者は辱を死骸に与えざる處の本
文に違するか、疑つて云く六宗の如く真言の一宗も天台に落たる状之れ

有りや、答う記の十の末に之を載せたり、随つて伝教大師依憑集を造つて
これまなこ之を集む眼有らん者は開いて之を見よ、
ねがわしきかなまつだい かくしやみうらく だんぎよう

の聖言に随つて善無畏・慈覚の凡言を用ゆること勿れ、予が門家等深く此
よししたがの由を存ぜよ、今生に人を恐れて後生に惡果を招くこと勿れ、恐恐謹言。
こんじよう まね なか きようきようきんげん

正月廿四日

日蓮花押

大田金吾入道殿

◆一五二 太田殿女房御返事

建治元年 五十四歳御作於身延

やつきぶん 八月分の八木一石給候い了んぬ、即身成仏と申す法門は諸大乘經並び

に大日經等の經文に分明に候ぞ、爾ればとて彼の經經の人人の

即身成仏と申すは二の増上慢に墮ちて必ず無間地獄へ入り候なり、記の

九に云く「然して二の上慢深淺無きにあらず如と謂うは乃ち大無慙のひと

成る」等云云、諸大乘經の煩惱即菩提・生死即涅槃の即身成仏の法門は

いみじくをそたかきやうなれども此れはあえて即身成仏の法門にはあら
ず、其の心は二乗と申す者は鹿苑にして見思を断じて・いまだ塵沙・無明
をば断ぜざる者が我は已に煩惱を尽したり無余に入りて灰身滅智の者とな
れり、灰身なれば即身にあらず滅智なれば成仏の義なし、されば凡夫は
煩惱業もあり苦果の依身も失う事なければ煩惱業を種として報身・応身と
もなりなん、苦果あれば生死即涅槃とて法身如来ともなりなんと二乗をこ
そ弾呵せさせ給いしか、さればとて煩惱・業・苦が三身の種とはなり候は
ず、今法華經にして有余・無余の二乗が無き煩惱・業・苦をとり出して
即身成仏と説き給う時二乗の即身成仏するのみならず凡夫も即身成仏す
るなり此の法門をだにもくはしく案じほどこせ給わば華嚴・真言等の人人
の即身成仏と申し候は依經に文は候へども其の義はあえてなき事なり僻事
の起り此れなり。

弘法・慈覚・智証等は此の法門に迷惑せる人なりとみ候、何に況や其の
已下の古徳・先徳等は言うに足らず、但天台の第四十六の座主東陽の忠尋
と申す人こそ此の法門はすこしあやぶまれて候事は候へ、然れども天台の
座主慈覚の末をうくる人なれば、いつわりをろかにて・さてはてぬるか、
其の上・日本国に生を受くる人はいかでか心にはをもうとも言に出し候べ
き、しかれども釈迦・多宝・十方の諸仏・地涌・竜樹菩薩・天台・妙樂
・伝教大師は即身成仏は法華經に限ると・をばしめされて候ぞ、我が弟子
等は此の事を・をもひ出にせさせ給え。

妙法蓮華經の五字の中に諸論師・諸人師の釈まちまちに候へども皆
諸經の見を出でず、但竜樹菩薩の大論と申す論に「譬えば大薬師の能く
毒を以て薬と為すが如し」と申す釈こそ此の一字を心へさせ給いたりける
かと見へて候へ、毒と申すは苦集の二諦・生死の因果は毒の中の毒にて候

ぞかし、此の毒を生^{しょうじそく}死^{ねはん}即^{ぼだい}涅槃・煩惱即菩提となし候を妙の極とは申しけるなり、良^{りょうやく}藥と申^{もう}すは毒の^{りゅうじゆ}變じて藥となりけるを良^{りょうやく}藥とは申し候いけり、此の竜樹菩薩は大論と申^{もう}す文の一百の卷に華嚴・般若等は妙にあらず^{ほけきよう}法華經こそ妙にて候へと申^{もう}す釈なり、此の大論は竜樹菩薩の論羅什三蔵と申^{もう}す人の漢土へわたして候なり、天台大師は此の法門を御らむあつて南北をばせめさせ給^{たまひ}いて候ぞ、而^{しか}るを漢土唐の中・日本弘仁已後の人人の☆の出来し候いける事は唐の第九代・宗皇帝の御宇・不空三蔵と申^{もう}す人の天竺より渡^{わた}して候論あり菩提心論と申^{もう}す、此の論は竜樹の論となづけて候、此の論に云^{いわ}く「唯真言法の中にのみ即身成仏する故に是れ三摩地の法を説く諸教の中に於て闕て書せず」と申^{もう}す文あり、此の釈にばかされて弘法・慈覺・智証等の法門はさんざんの事にては候なり、但し大論は竜樹の論たる事は自他あらそう事なし、菩提心論は竜樹の論・不空の論と申^{もう}すあらそ

い有り、此れはいかにも候へさてをき候ぬ、但不審なる事は大論の心ならば即身成仏は法華經に限るべし文と申し道理きわまり、菩提心論が竜樹の論とは申すとも大論にそむいて真言の即身成仏を立つる上唯の一字は強と見へて候、何の經文に依りて唯の一字をば置いて法華經をば破し候いけるぞ証文尋ぬべし、竜樹菩薩の十住毘婆娑論に云く「經に依らざる法門をば黒論」と云云自語相違あるべからず、大論の一百に云く「而も法華等の阿羅漢の授決作仏・乃至譬えば大藥師の能く毒を以て藥と為すが如し」等云云、此の釈こそ即身成仏の道理はかかれて候へ、但菩提心論と大論とは同じ竜樹大聖の論にて候が水火の異をばいかんせんと見候に此れは竜樹の異説にはあらず訳者の所為なり、羅什は舌やけず不空は舌やけぬ、妄語は・やけ実語は・やけぬ事顕然なり、月支より漢土へ經論わたす人・一百七十六人なり其の中に羅什一人計りこそ教主釈尊の經文に私の言入

れぬ人にては候へ、一百七十五人の中・羅什らじゅうより先後・一百六十四人は羅什らじゅうの智をもつて知り候べし、羅什来らせ給たまいて前後・一百六十四人が☆もあやまり頭あらわれ新訳の十一人が☆も頭あらわれ又こざかしくなりて候も羅什の故なり、此れこ私の義にはあらず感通伝に云く「絶後光前」と云云、前を光らすと申すはもう後漢より後秦までの訳者、後を絶すと申すは羅什已後・善無畏・金剛智・ふくう不空等も羅什の智をうけてすこしこざかしく候なり、感通伝に云く「已下の諸人並びに皆俟つ事」されば此の菩提心論の唯の文字は設たい竜樹りゅうじゆの論なりとも不空ふくうの私みの言なり、何に況や次下に「諸教の中に於て闕おいて書せず」とかかれて候・存外ぞんがいのあやまりなり。

即身成仏そくしんじやうぶつの手本てほんたる法華經をば指をいて・あとかたもなき真言しんこんにそくしんじやうぶつ即身成仏を立て剩あまつさたえ唯の一字を・をかるる条・天下第一の僻見びやくけんなり此れこひとえししゅらこんじやう修羅根性の法門なり、天台智者大師の文句の九に寿量品の心を釈しゃくし偏に修羅根性の法門なり、天台智者大師の文句の九に寿量品の心を釈しゃくし

て云く「い仏・三世に於て等しく三身有り諸教の中に於て之を秘して伝えず」
とかかれて候、此れこそ即身成仏の明文にては候へ、不空三蔵此の釈を消
さんが為に事を竜樹に依せて「唯真言の法の中にのみ即身成仏するが
故に是の三摩地の法を説く諸教の中に於て闕いて書せず」とかれて候な
り、されば此の論の次下に即身成仏をかかれて候が・あへて即身成仏に
はあらず生身得忍に似て候、此の人は即身成仏は・めづらしき法門とは
きかれて候へども即身成仏の義はあへてうかがわぬ人人なり、いかにも候
へば二乗成仏・久遠実成を説き給う経にあるべき事なり、天台大師の「於
諸教中秘之不伝」の釈は千且千且恐恐。

外典三千余卷は政当の相違せるに依つて代は濁ると明す、内典五千・七
千余卷は仏法の僻見に依つて代濁るべしとあかされて候、今の代は外典に
も相違し内典にも違背せるかのゆへにこの大科一國に起りて已に亡國とな

らむとし候か、不便ふびんふびん。

七月二日

にちれんかおう
日蓮花押

にようぼうごへんじ
太田殿女房御返事

にようどうごへんじ
◆一五三 太田入道殿御返事

がんねん
建治元年十一月 五十四歳御作

1009p

きさつこれ
貴札之を開いて拝見す、御痛みの事一たびは歎なげき二たびは悦よろこびぬ、

ちようじやゆいまきつみずか
維摩詰經に云く「爾その時に長者維摩詰自ら念ねんずらく寝いねて牀ゆかに疾やむ云云、

もんじゆしり
爾その時に仏・文殊師利に告つげたまわく、汝維摩詰なんじゆいまきつに行詣ぎやうけいして疾やまいを問え」

だいねはんきよう
云云、大涅槃經に云く「爾その時に如来にょらい乃至なんじ身に疾やまい有あるを現げんじ、右脇うきようにして

ふ
臥ふしたもう彼の病人びやうじんの如ごとくす」云云、法華經ほけきように云く「少病少惱しやうびやうしやうのう」云云、止観しかん

いわ
の第八に云く「若もし毘耶びやに偃臥えんがし疾やまいに託たくいて教を興おこす、乃至なんじ如来滅しやうらいに寄よせ

よ
て常を談じ病に因よつて力を説く」云云、又云く「病おこの起おこる因縁いんねんを明あきすに六

有り、一には四大順ならざる故に病む・二には飲食節ならざる故に病む・
三には坐禪調わざる故に病む・四には鬼便りを得る・五には魔の所為・六
には業の起るが故に病む」云云、大涅槃經に云く「世に三人の其の病治し
難き有り・一には大乘を誇ず・二には五逆罪・三には一闍提是くの如き三
病は・世の中の極重なり」云云、又云く「今世に惡業成就し乃至必ず地獄
なるべし乃至三宝を供養するが故に地獄に墮せずして現世に報を受く所謂
頭と目と背との痛み」等云云、止觀に云く「若し重罪有つて乃至人中に
軽く償うと此れは是れ業が謝せんと欲する故に病むなり」云云、竜樹菩薩
の大論に云く「問うて云く若し爾れば華嚴經・乃至・般若波羅蜜は秘密の
法に非ず而も法華は秘密なり等、乃至譬えば大藥師の能く毒を変じて藥と
為すが如し」云云、天台此の論を承けて云く「譬えば良医の能く毒を変じ
て藥と為すが如く乃至今經の得記は即ち是れ毒を変じて藥と為すなり」云

云、故に論に云く「余経は秘密に非ず法華を秘密と為すなり」云云、止観
に云く「法華能く治す復稱して妙と為す」云云、妙楽云く「治し難きを能く
治す所以に妙と稱す」云云、大経に云く「爾の時に王舎大城の阿闍世王
其の性弊惡にして乃至父を害し已って心に悔熱を生ず乃至心悔熱するが
故に偏体瘡を生ず其の瘡臭穢にして附近すべからず、爾の時に其の母韋提希
と字く種種の藥を以て而も為に之を傳く其の瘡遂に増して降損有ること無
し、王即ち母に白す是くの如きの瘡は心よりして生ず四大より起るに非ず
若し衆生能く治する者有りと云わば是の処有ること無けん云云、爾の時
に世尊・大悲導師・阿闍世王のために月愛三昧に入りたもう三昧に入り
已って大光明を放つ其の光り清涼にして往いて王の身を照すに身の瘡
即ち愈えぬ」云云、平等大慧・妙法蓮華經の第七に云く「此の経は則ち
為れ閻浮提の人の病の良藥なり若し人病有らんには是の経を聞くことを得ば

病即ち消滅して不老不死ならん」云云。

已上・上の諸文を引いて惟に御病を勘うるに六病を出でず其の中の五病は且らく之を置く第六の業病最も治し難し、将た又業病に軽き有り重き有りて多少定まらず就中・法華誹誘の業病最第一なり、神農・黄帝・華佗・扁鵲も手を拱き持水・流水・耆婆・維摩も口を閉ず、但し釈尊一仏の妙経の良薬に限つて之を治す、法華経に云く上の如し、大涅槃経に法華経を指して云く「若し是の正法を毀誘するも能く自ら改悔し還りて正法に帰すること有れば乃至此の正法を除いて更に救護すること無し是の故に正法に還歸すべし」云云、荊溪大師の云く「大経に自ら法華を指して極と為す」云云、又云く「人の地に倒れて還つて地に従りて起つが如し故に正の謗を以て邪の墮を接す」云云、世親菩薩は本小乗の論師なり五竺の大乗を止めんが為に五百部の小乗論を造る後に無著菩薩に値い

たてまつ たちまちじゃけん ひるが いちじ 此の罪を滅せんが為に著に向つて舌を切ら
奉りて忽に邪見を翻えし一時・
んと欲す、著止めて云く汝其の舌を以て大乘を讃歎せよと、親忽に五百
部の大乘論を造つて小乗を破失す、又一の願を制立せり我一生の間
小乗を舌の上に置かじと、然して後罪滅して弥勒の天に生ず、馬鳴菩薩
は東印度の人、付法蔵の第十三に列れり本外道の長たりし時勒比丘と内外
の邪正を論ずるに其の心言下に解けて重科を遮せんが為に自ら頭を刎ねん
と探す所謂我・我に敵して墮獄せしむ、勒比丘・諫め止めて云く汝頭を
切ること勿れ其の頭と口とを以て大乘を讃歎せよと、鳴急に起信論を造
つて外小を破失せり月氏の大乗の初なり、嘉祥寺の吉蔵大師は漢土第一の
名匠・三論宗の元祖なり呉会に独歩し慢幢最も高し天台大師に対して
已今当の文を諍い立処に邪執を翻破し謗人・謗法の重罪を滅せんが為に
百余人の高徳を相語らい智者大師を屈請して身を肉橋と為し頭に兩足を

承く、七年の間・薪を採り水を汲み講を廢し衆を散じ慢幢を倒さんが為

法華經を誦せず、大師の滅後隨帝に往詣し☆足を☆撰し涙を流して別れ

を告げ古鏡を觀見して自影を慎辱す業病を滅せんと欲して上の如く懺悔

す、夫れ以みれば一乘の妙經は三聖の金言・已今当の明珠諸經の項に

居す、經に云く「諸經の中に於て最も其の上に在り」又云く「法華最第一

なり」伝教大師の云く「仏立宗」ニ云云。

予隨分・大・金・地等の詣の眞言の經を勘えたるに敢えて此の文の會通

の明文無し但畏・智・空・法・覺・証等の曲會に見えたり是に知んぬ釈尊

・大日の本意は限つて法華の最上に在るなり、而るに本朝眞言の元祖た

る法・覺・証等の三大師入唐の時・畏・智・空等の三三藏の誑惑を果・全

等に相承して歸朝し了んぬ、法華・眞言弘通の時三説超過の一乘の明月

を隠して眞言兩界の螢火を顯し剩さえ法華經を罵詈して曰く戲論なり無明

の辺域なり、自害の謬☆に曰く大日経は戲論なり無明の辺域なり本師既に
曲れり末葉豈直ならんや源濁れば流清からず等是れ之を謂うか、之に依つ
て日本久しく闇夜と為り扶桑終に他国の霜に枯れんと欲す。

抑貴辺は嫡嫡の末流の一分に非ずと雖も將た又檀那の所従なり身

は邪家に処して年久しく心は邪師に染みて月重なる設い大山は頽れ設い

大海は乾くとも此の罪は消え難きか、然りと雖も宿縁の催す所又今生に

慈悲の薰ずる所存の外に貧道に値遇して改悔を發起する故に未来の苦を

償うも現在に輕瘡出現せるか、彼の闍王の身瘡は五逆誹法の二罪の招く所

なり、仏・月愛三妹に入つて其の身を照したまえば惡瘡忽に消え三七日の

短寿を延べて四十年の宝算を保ち發ては又千人の羅漢を屈請して一代の

金言を書き顯し、正像未に流布せり、此の禪門の惡瘡は但謗法の一科なり、

所持の妙法は月愛に超過す、宝輕瘡を愈して長寿を招かざらんや、此の

ことばしるしく
語徴無くんば声を發して一切世間眼は大妄語の人・一乗妙経は綺語の
典なり・名を惜しみ給わば世尊驗を顕し・誓を恐れ給わば諸の賢聖来り護
り給えと叫喚したまえと爾か云う書は言を尽さず言は心を尽さず事事見参
の時を期せん、恐恐。

十一月三日

にちれんかおう
日蓮花押

太田入道殿御返事

一五四 乗明聖人御返事

建治三年四月五十六歳御作

与大田乗明

1012p

そうしゅう かまくら
相州の鎌倉より青鳧二結甲州身延の嶺に送り遣わされ候い了んぬ、昔
こんじゅによ
金珠女は金錢一文を木像の薄と為し九十一劫金色の身と為りき其の夫の金
師は今の迦葉・未来の光明如来是なり、今の乗明法師・妙日並びに妻女は
銅錢二千枚を法華經に供養す彼は仏なり此れは経なり経は師なり仏は弟子

なり、涅槃經に云く「諸仏の師とする所は所謂法なり乃至是の故に諸仏
きようけい くよう 恭敬供養す」と、法華經の第七に云く「若し復人有つて七宝を以て
さんぜんだいせんせかい 三千大千世界に満てて仏及び大菩薩・辟支仏・阿羅漢を供養せし、是の人
の得る所の功德は此の法華經の乃至一四句偈を受持する其の福の最も多き
しに如かず」夫れ劣る仏を供養する尚九十一劫に金色の身と爲りぬ勝れたる
くよう 經を供養する施主・一生に仏位に入らざらんや、但眞言・禪宗・念佛者等
ほうぼう 謗法の供養を除き去るべし、譬えば修羅を崇重しながら帝釈を歸敬す
るが如きのみ、
きょう 恐恐 謹言。

卯月十二日

にちれんかおう
日蓮花押

乗明聖人御返事
しょうにんごへんじ

一五五 大田殿女房
にようぼう 建治三年十一月

五十六歳御作 与大田入道女房
にやうぼう 於身延 1013p

柿のあをうらの小袖わた十両に及んで候か、此の大地の下は二の地獄あり一には熱地獄すみを・をこし野に火をつけせうまうの火鉄のゆのごとし、罪人のやくる事は大火に紙をなげ大火になくづをなぐるがごとし、この地獄へはやきとりと火をかけてかたきをせめ物をねたみて胸をこがす女人の墮つる地獄なり、二には寒地獄此の地獄に八あり、涅槃經に云く「八種の寒氷地獄あり所謂阿波波地獄・阿☆地獄・阿羅羅地獄・阿婆婆地獄・優鉢羅地獄・波頭摩地獄・拘物頭地獄・芬陀利地獄」云云、此の八大かんど獄は・或はかに・せめられたるこえ・或は身のいろ等にて候、此の国のすわの御いけ・或は越中のたて山のかへし加賀の白山のれいのとりのはねをとぢられ、やもめをうなのすそのひゆる、ほろろの雪に・せめられたるをもてしろしめすべし、かに・せめられて・をとがいのわなめく等を阿波波・阿☆・阿羅羅等と申すかに・せめられて身のくれないに

たるを紅蓮・大紅蓮等と申すなり、いかなる人の此の地獄にをつるぞと申

せば此の世にて人の衣服をぬすみとり父母・師匠等のさむげなるを・みま

いらせて我はあつくあたたかにして昼夜をすごす人人の墮つる地獄なり。

六道の中に天道と申すは其の所に生ずるより衣服ととのをりて生ると

ころなり、人道の中にも商那和修鮮白比丘尼等は悲母の胎内より衣服とと

のをりて生れ給へり、是れはたうとき人人に衣服をあたへたるのみならず

父母・主君・三宝にきよくあつき衣をまいらせたる人なり、商那和修と申

せし人は裸形なりし辟支仏に衣をまいらせて世世・生生に衣服身に随ふ、

☆曇弥と申せし女人は仏にきんばら衣をまいらせて一切衆生喜見仏となり

給う、今法華經に衣をまいらせ給う女人あり後生に・はちかん地獄の苦を

まぬかれさせ給うのみならず、今生には大難をはらひ其の功德のあまりを

男女のきんだち・きぬにきぬをかさね・いろにいろをかさね給うべし、

あなかしこあなかしこ
六賢六賢。

建治三年丁丑十一月十八日 ひのとうし 日蓮在御判 にちれん

一五六 大田左衛門尉御返事 さえもののじょうごへんじ 弘安元年四月 こうあんがんねん 五十七歳御作 1014p

当月十八日の御状、同じき二十三日の午の刻計りに到来、うまのこく 聴_{やがてはいけん}拝見仕り候

ひ畢_{おわん}ぬ、御状の如く御布施・鳥目十貫文・太刀・五明一本・焼香二十両給ひ

候、抑_{そもそももつぱ}専ら御状に云く某今年は五十七に罷_{まか}り成り候へば大厄の年かと

覚え候、なにやらんして正月の下旬の比より卯月の此の比に至り候まで身_{しんしん}心

に苦勞多く出来候、本より人身_{じんしん}を受くる者は必ず身_{しんしん}心に諸病相續して五体

に苦勞あるべしと申しながら更_{さら}に云云。

此の事最_{さい}第一_{だいいち}の歎_{なげ}きの事なり、十二因縁と申_{もう}す法門_{ほうもん}あり、意_{われら}は我等が身

は諸苦_{しよく}を以て体と為す、されば先世_{せんぜ}に業を造る故に諸苦_{しよく}を受け、先世_{せんぜ}の集

・煩惱ぼんのうが諸苦しよくを招き集め候、過去かこの二因・現在げんざいの五果・現在げんざいの三因・未来みらいの二果とて三世次第さんぜしだいして一切いっさいの苦果くかを感じさずるなり、在世ざいせの二乗にじようが此等しよくの諸苦しよくを失しはんとて、空理くうりに沈けみ灰身滅智けしんめっちして、菩薩ぼさつの勤行精進しやうじんの志を忘れ、空理くうりを証得しやうとくせん事を真極しんごくと思ふなり、仏・方等ほうとうの時・此等しよくの心地を彈呵だんかし給ひしなり、然るに生を此の三界さんがいに受けたる者苦を離るる者あらんや、羅漢らかんの応供おうぐすら猶此しよくくの如し、況や底下ていげの凡夫ほんぶをや、さてこそいそぎ生死しやうじを・離るべしと勧めすす申し候へ。

此等これらてい体の法門ほうもんはさて置きぬ、御辺ごへんは今年は大厄と云云、昔伏羲ふぎの御宇に、黄河もつうと申す河より龜もつうと申す魚・八卦はっけと申す文を甲かいに負おひて浮出たり、時の人・此の文を取り挙げて見れば、人の生年より老年の終りまで厄あかの様を明あかしたり、厄年あやうの人の危あやうき事は、少水に住む魚を鵠とび鵠からすなどが伺うかひ、灯の辺に住める夏の虫の火中に入らんとするが如ごとくあやうし、鬼神きじんややもすれば

此の人の神たましいを伺うかがひなやまさんとす、神内もうと申す時は諸しよの神たましい・身みに在り
万事ばんじ心に叶たましいふ、神外もうと申す時は諸しよの神たましい・識しの家を出だでて万事ばんじを見聞みきこす
るなり、当年は御辺は神外もうと申して諸神しよ他国たこくへ遊行つしすれば慎つつしんで除災得樂
を祈り給ふべし、又木性の人にて渡わたらせ給へば、今年は大厄なりとも春夏しゅんか
の程は何事なにことか渡わたらせ給ふべき、至門しもん性經しやうに云く「木は金に遇て抑揚し、火
は水を得て光滅し、土は木に値て時に瘦せ、金は火に入て消え失せ、水は
土に遇て行かず」等云云。

指さして引き申もつすべき經文きやうもんにはあらざれども、予が法門ほうもんは四悉檀ししつだんを心に懸
けて申もつすならば、強ながちに成仏じやうぶつの理に違はざれば、且しばらく世間普通せけんの義を
用もちゆべきか、然るに法華經ほけきやうと申もつす御經は身心しんしんの諸病しよの良藥りやうやくなり、されば經
に云く「此の經は則ち為閻浮提こゑんぶの人の病の良藥なり、若し人病やまい有らんに
是の經を聞くことを得ば、病即消滅そくしやうめつして不老不死ふろうふしならん」等云云、又云く

「現世は安穩にして、後生には善処ならん」等云云、又云く「諸余の怨敵、
みなことごとくさいめつ
皆悉く摧滅せん」等云云、取分奉る御守り方便品・寿量品、同じくは一部
書て進らせ度候へども、まい 当時は去り難き隙どもも入る事候へば略して二品奉
り候、相構へ相構へて御身を離さず重ねつつみて御所持有るべき者なり、
此の方便品と申すは迹門の肝心なり、ほうべん 此の品には仏・十如実相の法門を説
て十界の衆生の成仏を明し給へば、じゅつかい 舍利弗等は此れを聞て無明の惑を
断じ真因の位に叶ふのみならず、じょうぶつ 未来華光如来と成て、成仏の覚月を離垢
世界の暁の空に詠ぜり、せかい 十界の衆生の成仏の始めは是なり、じゅつかい 当時の念仏
者・真言師の人人・しんごんし 成仏は我が依経に限れりと深く執するは、じょうぶつ 此等の法門
を習学せずして、しゅうがく 未顕真実の経に説く所の名字計りなる授記を執する故な
り。

貴辺は日来は此等の法門に迷ひ給ひしかども、きへん ひごろ 日蓮が法門を聞て、にちれん 賢者けんじゃ

なれば本執を忽に翻し給て、法華經を持ち給ふのみならず、結句は身命

よりも此の經を大事と思食す事・不思議が中の不思議なり、是れは偏に今

の事に非ず、過去の宿縁開發せるにこそ、かくは思食すらめ、有り難し有

り難し、次に壽量品と申すは本門の肝心なり、又此の品は一部の肝心、

一代聖教の肝心のみならず、三世の諸仏の説法の儀式の大要なり、教主

釈尊、壽量品の一念三千の法門を証得し給ふ事は、三世の諸仏と内証

等しきが故なり、但し此の法門は釈尊一仏の己証のみに非ず諸仏も亦然な

り、我等衆生の無始已來六道生死の浪に沈没せしが、今教主釈尊の所説

の法華經に値ひ奉る事は、乃往過去に此の壽量品の久遠実成の一念三千

を聴聞せし故なり、有り難き法門なり。

華嚴・真言の元祖、法蔵・澄観・善無畏・金剛智・不空等が、釈尊・一代

聖教の肝心なる壽量品の一念三千の法門を盗み取て、本より自の依經に

説かざる華嚴經・大日經に一念三千有りと云て取り入る程の盗人にばか

されて、末学深く此の見を執す、墓無し墓無し、結句は真言の法師の云く

「争て醍醐を盗て、各自宗に名く」云云、又云く「法華經の二乗作仏・久遠

じつじよう

だいにちきよう

ほうもん

ほうもん

実成は無明の辺域、大日經に説く所の法門を明の分位」等云云、華嚴の

人師云く「法華經に説く所の一念三千の法門は枝葉、華嚴經の法門は根本

の一念三千なり」云云、是跡形も無き僻見なり、真言・華嚴經に一念三千を

いちねんさんぜん

これあとかた

しんこん

説きたらばこそ、一念三千と云ふ名目をばつかはめ、おかしおかし、

きもうとかく

ほうもん

龜毛兎角の法門なり。

まさ くおんじつじよう いちねんさんぜん ほうもん ぜんしみ ほうもん

正しく久遠実成の一念三千の法門は前四味並に法華經の迹門十四品ま

で秘させ給て有りしが、本門正宗に至て寿量品に説き顕し給へり、此の

いちねんさんぜん ほうしゆ みようほうごじ こんこう ふえ まつだい われら

一念三千の宝珠をば妙法五字の金剛不壊の袋に入れて、末代貧窮の我等

しゅじよう

ほうしゆ

みようほうごじ

こんこう

ふえ

まつだい

われら

しゅじよう

ほうしゆ

しようほう

そうほう

衆生の為に残し置かせ給ひしなり、正法・像法に出でさせ給ひし論師・

人師の中に此の大事を知らず、唯竜樹・天親こそ心の底に知らせ給ひしかども色にも出ださせ給はず、天台大師は玄・文・止観に秘せんと思召ししかども、末代の為にや止観十章第七正観の章に至て粗書かせ給ひたりしかども、薄葉に釈を設けてさて止み給ひぬ、但理観の一分を示して事の三千をば斟酌し給ふ。

彼の天台大師は迹化の衆なり、此の日蓮は本化の一分なれば盛に本門の事の分を弘むべし、然に是くの如き大事の義理の籠らせ給ふ御經を書て進らせ候へば弥信を取らせ給ふべし、勧発品に云く「当に起て遠く迎へて、当に仏を敬ふが如くすべし」等云云、安樂行品に云く「諸天昼夜に、常に法の為の故に、而も之を衛護す、乃至天の諸の童子、以て給使を為さん」等云云、譬喩品に云く「其の中の衆生は、悉く是れ吾が子なり」等云云、法華經の持者は教主釈尊の御子なれば、争か梵天・帝釈・日月・衆星も

昼夜朝暮に守らせ給はざるべきや、厄の年災難を払はん秘法には法華經に過ぎず、たのもしきかな、たのもしきかな。

さては鎌倉に候ひし時は細細申し承はり候ひしかども、今は遠国に居住

よつて めんえつ

候に依て面謁を期する事更になし、されば心中に含みたる事も使者玉章に

もう

あらざれば申すに及ばず、歎かし歎かし、当年の大厄をば日蓮に任せ給へ、

釈迦・多宝・十方分身の諸仏の法華經の御約束の実不実は是れにて量るべき

やくそく ふじつ

なり、又又申すべく候、

もう

弘安元年 戊寅 四月二十三日

こうあんがねんつちのえとら

にちれんかおう

日蓮花押

さえものじょう

太田左衛門尉殿御返事

にようほうごへんじ

◆一五七

大田殿女房御返事

1018p

ていれはば かんばつ

八木一石付十合者大旱魃の代に、かはける物に水をほどこしては、大

りゅうおう

竜王と生れて雨をふらして人天をやしなう、うえたる代に、食をほどこせ

こくおう

る人は国王と生れて其の国ゆたかなり、過去の世に金色と申す大王ましま

はらな

もう

かこ

もう

だいおう

しき其の国をば波羅奈国と申す、十二年が間、早魃ゆきて人民うえ死ぬ事

かんばつ

じんみん

おびただし。宅中には死人充滿し、道路には骸骨

がいこつ

じゅうまん

そのとき

だいおう

いっさいしゅじょう

くら

充滿せり、其の時、大王・一切衆生をあはれみて、おおくの蔵をひらき

て施をほどこし給ひき、蔵の中の財つきて唯一日の御供のみのこりて候ひ

しゅうそう

し、衆僧をあつめて供養をなし、王と后と衆僧と万民と皆うえ死なんと

しゅうそう

ばんみん

みな

せし程に、天より・雨のごとくふりて大国一時に富貴せりと、金色王経に

たいこくいちじ

とかれて候、此れも又かくのごとし此の供養によりて現世には福人となり、

こしょう

じきょく

きようきようきんげん

後生には靈山浄土へまいらせ給ふべし。恐恐謹言。

おそおそ

九月二十四日

にちれん

かおう

日蓮 花押

大田入道殿女房御返事

にゅうどう

にようぼうこへんじ

◆一五八 慈覚大師事 じかくだいし

弘安三年正月 こうあん 五十九歳御作与大田入道 にぎひりてう 於身延 1014p

驚眼三貫・絹の袈裟一帖給い候い了んぬ、法門の事は秋元太郎 兵衛尉 ぜに けさ たまい おわ ほうもん ひょうえのじょう

殿の御返事に少少注して候・御覧有るべく候、なによりも受け難き人身・ ごへんじ あ

値い難き仏法に値いて候に五尺の身に一尺の面あり其の面の中三寸の眼二 あた ぶつぼう あ

つあり、一歳より六十に及んで多くの物を見る中に悦ばしき事は法華最第一 よろこ

の経文なり、あさましき事は慈覚大師の金剛頂經の頂の字を釈して きょうもん じかくだいし こんごうちょうきょう いただき しゃく

云く「言う所の頂とは諸の大乗の法の中に於て最勝にして無過上なる いわ いただき もろもろだいじょう おい さいしやう かじよう

故に頂を以て之れに名づく乃至人の身の頂最も為勝るるが如し、乃至法華 ゆえ いただき こ ないし もっともこれまさ ないしほっけ

に云く是法住法位と今正しく此の秘密の理を顕説す、故に金剛頂と云うな いわ ぜほうじゅうほうい まさ ひみつ けんせつ ゆえ こんごうちよう

り」云云、又云く「金剛は宝の中の宝なるが如く此の経も亦爾なり諸の経法 いわ こんごう ごとく またしか もろもろきようほう

の中に最為第一にして三世の如来の髻の中の宝なる故に」等云云、此の さいい だいいち さんぜ によらい もとより ゆえ

しゃく

釈の心は法華最第一の經文を奪い取りて金剛頂經に付くるのみならず、

如人之身頂最為勝の釈の心は法華經の頭を切りて真言經の頂とせり、

こすなわ

此れ即ち鶴の頸を切つて蝦の頸に付けけるか真言の蟻も死にぬ法華經の

鶴の御頸も切れぬと見え候、此れこそ人身うけたる眼の不思議にては候へ、

さんぜん

三千年に一度花開くなる優曇花は転輪聖王此れを見る。

くきようえんまん

究竟円満の仏にならざらんより外は法華經の御敵は見しらさんなり、

いちじよう

一乗のかたき夢のごとく勘へ出して候、慈覺大師の御はかはいづれのとこ

ろに有りと申す事きこへず候、世間に云う御頭は出羽の国・立石寺に有り

云云、いかにも此の事は頭と身とは別の所に有るか、明雲座主は義仲に頸

を切られたり、天台座主を見候へば伝教大師はさてをきまいらせ候いぬ、

だいいちぎしん

第一義真・第二円澄・此の兩人は法華經を正とし真言を傍とせり、第三の

ざす

座主・慈覺大師は真言を正とし法華經を傍とせり、其の已後代代の座主は

相論そうろんにて思い定むる事こと無し、第五十五並びに五十七の二代は明雲大僧正そうじょう座主ざすなり、此の座主ざすは安元三年五月日院勘いんかんを蒙りて伊豆の国へ配流はいりゅう、山僧さんそう・大津にて奪い取りて後治承三年十一月に座主ざすとなりて源みなもとの右將軍賴朝うしろうぐんよりともを調伏じょうぶくせし程に寿永二年十一月十九日義仲に打たれさせ給うたま、此の人・生けると死ぬと二度大難だいにんに値あえり、生の難なんは仏法の定例ぶつぽう・聖賢せいけんの御繁盛はんじょうの花なり死の後の恥辱ちじよくは悪人あくにん・愚人ぐにん・誹謗正法ひぼうしやうほうの人招まねくわざわいなり、所謂いわずゆる大慢だいまんばら門・須利等なり。

粗ほろこ此れを勘かんえたるに明雲いみぐもより一向しんごんに真言ざすの座主ざすとなりて後・今三十余代ほけきやう一百余年が間いっごう・一向しんごん・真言ざすの座主ざすにて法華經しやうぼうの所領しやうりやうを奪えるなり、しかれば此等これらの人人ひとびとは釈迦しやか・多宝たほう・十方じゆつぱうの諸仏しよぶつの大怨敵おんてき・梵釈ほんしやく・日月にちがつ・四天してん・天照太神てんしやうだいじん・正八幡大菩薩はちまんたいぼさつの御讎敵かたきなりと見えて候ぞ、我が弟子等でし・此の旨むねを存ほうもんじて法門ほうもんを案たまじ給うべし、恐恐きようきよう。

正月二十七日 にちれんかおう 日蓮花押

太田入道殿御返事 ごほうじ

◆一五九 三大秘法稟承事 ひほう

こうあん 弘安四年四月 六十歳御作

与大田金吾

1021p

そ ほけきょう 夫れ法華經の第七神力品に云く「要を以て之を言はば如来の一切の所有の

法・如来の一切の自在の神力・如来の一切の秘要の蔵・如来の一切の甚深

の事・皆此經に於て宣示顯説す」等云云、釈に云く「經中の要説の要・四

事に在り」等云云、問う所説の要言の法とは何物ぞや、答て云く夫れ釈尊

初成道より四味三教乃至法華經の広開三顯一の席を立ちて略開近顯遠を

説かせ給いし涌出品まで秘せさせ給いし実相証得の当初修行し給いし処

の寿命品の本尊と戒壇と題目の五字なり、教主釈尊此の秘法をば三世に

隠れ無き普賢・文殊等にも譲り給はず況や其の以下をや、されば此の秘法

を説かせ給^{たま}いし儀式は四味三教並に法華經の迹門十四品に異なりき、所居^{しやうこ}の土は寂光本有の国土なり能居^{のうこ}の教主は本有無作の三身なり所化^{しよけ}以て同体なり、かかる砌なれば久遠称揚の本眷属上行等の四菩薩を寂光の大地の底よりはるばると召し出して付属し給^{たま}う、道暹律師云く「法是れ久成の法なるに由る故に久成の人に付す」等云云、問て云く其の所属の法門仏の滅後に於ては何れの時に弘通し給^{たま}う可きか、答て云く經の第七藥王品に云く「後の五百歳の中に閻浮提に広宣流布して断絶せしむること無けん」等云云、謹んで經文を拜見し奉るに仏の滅後正像二千年過ぎて第五の五百歳・閻諍堅固・白法隱没の時云云、問て云く夫れ諸仏の慈悲は天月の如し機縁の水澄めば利生の影を普く万機の水に移し給べき処に正像末の三時の中に末法に限ると説き給^{たま}わば教主釈尊の慈悲に於て偏頗あるに似たり如何、答^{いかん}う諸仏の和光・利物の月影は九法界の闇を照すと雖も謗法

いっせんたい

一闡提の濁水には影を移さず正法一千年の機の前には唯小乗・権大乘

相叶へり、像法一千年には法華經の迹門・機感相応せり、末法の始の五百

ほけきよう

ほんもんぜんご

ほけきよう

しやくもん

きかんそうおう

またぼう

くつう

年には法華經の本門前後十三品を置きて只壽量品の一品を弘通すべき時な

きほつそう

り機法相応せり。

ほんもんじゆりよう

そうほう

このごひやくさい

きなおた

今・此の本門壽量の一品は像法の後の五百歳・機尚堪えず況や始めの五

いか

しうほう

き

しやくもんなお

ほんもん

またぼう

百年をや、何に況や正法の機は迹門尚日浅し増して本門をや、末法に入

にぜん

しやくもん

しゆつりしうじ

もつば ほんもんじゆりよう

て爾前・迹門は全く出離生死の法にあらず、但専ら本門壽量の一品に限

しゆつりしうじ

ようほう

これ

しよぶつ

けどう

おい

へんげ

りて出離生死の要法なり、是を以て思うに諸仏の化導に於て全く偏頗無し

しゆつりしうじ

ようほう

これ

しよぶつ

けどう

おい

へんげ

等云云、問う仏の滅後正像末の三時に於て本化迹化の各各の付属分明な

じゆりよう

めつごししうそうまつ

おい

ほんげしやつけ

ふそくふんみよう

り但壽量の一品に限りて末法濁惡の衆生の為なりといへる經文未だ

ふんみよう

たしか

げんぶん

ほ

いかん

なんじあなが

これ

分明ならず慥に經の現文を聞かんと欲す如何、答う汝強ちに之を問う聞

ふんみよう

たしか

げんぶん

ほ

いかん

なんじあなが

これ

て後堅く信を取る可きなり、所謂壽量品に云く「是の好き良薬を今留め

べ

い

わゆるじゆりようほん

いわ

こ

は

りようやく

とど

て此に在く汝取て服す可し差じと憂うる勿れ」等云云。

問て云くいわ 寿量品専ら末法惡世に限るきようもんけんねん 經文顯然なる上は私に難勢を加う

べかしか 可らず然りと雖も三大秘法其の体如何、答て云く予が己心の大事之に如か

ず汝が志なんじ 無二なれば少し之を云わんこれ 寿量品に建立する所の本尊は五

百塵点の当初より以来此土有縁深厚本有無作三身の教主釈尊是れなり、

寿量品に云く「如來秘密神通之力」等云云、疏の九に云く「一身即三身な

るを名けて秘と為し三身即一身なるを名けて密と為す又昔より説かざる所

を名けて秘と為し唯仏のみ自ら知るを名けて密と為す仏・三世に於て等し

く三身有り諸經の中に於て之を秘して伝えず」等云云、題目とは二の意有

り所謂正像と末法となり、正法には天親菩薩・竜樹菩薩・題目を唱えさ

せ給いしかども自行ばかりにしてさて止め、像法には南岳・天台等亦南無

妙法蓮華經と唱え給いて自行の爲にして広く他の爲に説かず是れ理行の

題目なり、末法まつぽうに入いて今日連けふつらが唱なる所の題目だいもくは前代ぜんだいに異ちがり自行化他じぎょうけたに亘わたり

て南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうなり名体宗用教ごじゆうげんの五重玄ごじの五字ごじなり、戒壇かいだんとは王法ぶつぽう佛法ぶつぽう

に冥むすぶじ仏法王法ぶつぽうに合あして王臣おうしん一同いどうに本門ほんもんの三秘密ひみつの法たもを持もちて有徳王うとく・

覚徳比丘かくとくびくの其その乃往むかしを末法濁惡まつぽうじよくあくの未来みらいに移うつさん時勅ちよくせん宣並みきようしよに御教書もうを申し

下くだして靈山淨土りやうぜんじやうどに似さいしたらん最勝さいしやうの地たずを尋かいだんねて戒壇こんりゆうを建立べす可べき者ざんげめつざいか時ざんげめつざいを

待べつ可べきのみ事かいほうの戒法もうと申こすは是これなり、三国並えんぶだいに一閻浮提えんぶだいの人ざんげめつざい・懺悔滅罪ざんげめつざい

の戒法かいほうのみならず大梵天王だいぼんてんのう・帝釈等たいしやくも来下らいげして☆給ふみたまうべき戒壇かいだんなり、此この

戒法かいほう立ちて後えんりやくじ・延暦寺えんりやくじの戒壇かいだんは迹門しやくもんの理戒ちなれば益ちやくあるまじき処ところに、叡山えいざん

に座主ざす始ちまつて第三じかく・第四ちしやうの慈覚じかく・智証存ちしやうの外ほんしに本師でんぎやう・伝教ぎしん・義真そむに背そむき

て理同事勝りどうじしやうの狂言けうごんを本ほんとして我が山の戒法かいほうをあなづり戲論けろんとわらいし故ゆえに、

存えんりやくじの外しやうじやうに延暦寺ちゆうぎやうの戒みやうかい・清淨しやうじやう・無染ちゆうぎやうの中道みやうかいの妙戒いたすらなりしが徒いたすらに土泥どどとなり

ぬる事なげ云なげうても余なげりあり歎なげきても何なげかはせん、彼の摩黎山まりの瓦礫がりやくの土なげとな

り梅檀林の荊棘となるにも過ぎたるなるべし、夫れ一代聖教の邪正偏円
を弁えたらん学者の人をして今の延暦寺の戒壇を☆ましむべきや、此の法門
は義理を案じて義をつまびらかにせよ、此の三大秘法は二千余年の当初・
地涌千界の上首として日蓮慥かに教主大覚世尊より口決相承せしなり、
今日蓮が所行は靈鷲山の稟承に芥爾計りの相違なき色も替らぬ寿量品
の事の三大事なり。

問う一念三千の正しき証文如何、答う次に出し申す可し此に於て二種有
り、方便品に云く「諸法実相・所謂諸法・如是相・乃至・欲令衆生
開仏知見」等云云、底下の凡夫・理性所具の一念三千か、寿量品に云く「然
がじつじょうぶついらい・無量無辺」等云云、大覚世尊・久遠実成の当初証得の
一念三千なり、今日蓮が時に感じて此の法門広宣流布するなり予年来己心
に秘すと雖も此の法門を書き付て留め置ずんば門家の遺弟等定めて無慈悲

の讒言ざんげんを加くう可べし、其その後は何と悔くゆとも叶かなうまじきと存ぞんずる間・貴き辺へんに
対たいし書しよき送しゆり候けい、一見いちだいいの後・秘ひして他見あ有べる可べからず口外くわいも詮無せんむし、法華經ほけきやう
を諸しよ仏出ぶつしゆつせ世せの一大事いちだいじと説たまいかせ給たまいて候けいは此この三大秘法ひほうを含ふめたる經きやうにて渡わた
らせ給たまえばなり、秘べす可べし秘べす可べし。

弘安四年卯月八日
日蓮花押

◆一六〇 曾谷入道殿御書

文永十一年 五十三歳御作 於身延 1024p

自界叛逆難・他方侵逼の難既なんすでに合あい候けいい畢おわんぬ、之これを以もて思おもうに「多く
他方たほうの怨賊おんぞく有あつて国内こくないを侵掠しんりやくし人民諸じんみんの苦惱くなんを受け土地とちに所楽しやらくの処ところ有ある
こと無なけん」と申もうす經文合きやうもんい候けいいぬと覺おほえ候けい、当時とうじ嵯岐さいぎ・対馬つしまの土民どみんの
如ごとくになり候けいはんずるなり、是これ偏ひとえに仏法ぶつぽうの邪見じゃけんなるによる仏法ぶつぽうの邪見じゃけんと
申もうすは真言宗しんこんしゆうと法華宗ほつけしゆうとの違目いもくなり、禪宗ぜんしゆうと念仏宗ねんぶつしゆうとを責め候けいしは此この

事を申し顕さん料なり漢土には善無畏・金剛智・不空三蔵の誑惑の心・
てんだいほつけしゅう しんこん だいにちきよう
天台法華宗を真言の大日經に盗み入れて還つて法華經の肝心と天台大師の
徳とを隠せし故に漢土滅するなり、日本国は慈覺大師が大日經・金剛
ちようきよう そしちきよう ちんごこつか
頂經・蘇悉地經を鎮護国家の三部と取つて伝教大師の鎮護国家を破せし
えいざん あくぎ しゅつたい つい
より叡山に惡義・出来して終に王法尽きにき、此の惡義・鎌倉に下つて又
にほんこく もう こうぼうだいし じゃぎ なかなかけんねん
日本国を亡すべし弘法大師の邪義は中顯然なれば人もたばらかされぬ者
もあり、慈覺大師の法華經・大日經の理同事勝の釈は智人既に許しぬ愚者
いか じゃくだいし ほけきよう だいにちきよう りどうじしやう ちじんすで ゆる ぐしゃ
争でか信ぜざるべき慈覺大師は法華經と大日經との勝劣を祈請せしに
や じゃくだいし ほけきよう だいにちきよう こ じゃくだいし しんちゅう じゅうら
箭を以て日を射ると見しは此の事なるべし、是れは慈覺大師の心中に修羅
の入つて法華經の大日輪を射るにあらずや、此の法門は当世叡山其の外
ほけきよう だいにちりん ほうもん とうせえいざんそ
にほんこく もち も じつじ にちれんあにしゅみせん
日本国の人用ゆべきや、若し此の事・実事ならば日蓮豈須弥山を投る者に
あらずや、我が弟子は用ゆべきや如何最後なれば申すなり恨み給べからず、
でし もち いかん さいご もう

きようきようきんげん。
恐恐 謹言。

十一月二十日

にちれんかおう
日蓮花押

そやにゆうどう
曾谷入道殿

◆一六一 曾谷入道殿御返事

1025p

ほうべん

方便品の長行書進せ候先に進せ候し自我偈に相副て読みたまうべし、此

の經の文字は皆悉く生身妙覺の御仏なり然れども我等は肉眼なれば文字

と見るなり、例せば餓鬼は恒河を火と見る人は水と見る天人は甘露と見る

水は一なれども果報に随つて別別なり、此の經の文字は盲眼の者は之を見

ず、肉眼の者は文字と見る二乗は虚空と見る菩薩は無量の法門と見る、仏

は一一の文字を金色の釈尊と御覧あるべきなり即持仏身とは是なり、され

ども僻見の行者は加様に目出度く渡らせ給うを破し奉るなり、唯相構え

て相構えて異念無く一心に靈山浄土を期せらるべし、心の師とはなるとも

心を師とせざれとは六波羅蜜經の文ぞかし、委細は見參の時を期し候、
恐恐謹言。

きようきようきんげん

文永十二年三月 日 蓮花押

ぶんえい にちれんかおう

曾谷入道殿

そやにゆうどう

◆一六二

曾谷入道殿許御書

そやにゆうどう ごしよ

文永十二年三月

ぶんえい

五十四歳御作与曾谷入道

そやにゆうどう

太田金吾 1026p

夫れ以れば

おもんみればじゆうびよう

重病を療治する

りようじ

には良薬を構築し逆謗を救助する

りようやく こうさく

には要法

ようほう

には如かず、

いわゆる

所謂時を論ずれば正像末教を論ずれば

しょうぞうまつ

小大・偏円・権実・

へんえん こんじつ

顯密・国を論ずれば中辺の兩國・機を論ずれば已逆と未逆と已謗と未謗と

けんみつ

りゆうにく

いきやく

師を論ずれば凡師と聖師と二乗と菩薩と他方と此土と迹化と本化となり、

ほんし

にじよう

ぼさつ

たほう

しど

しゃっけ

ほんげ

故に四依の菩薩等滅後に出現し仏の付属に随つて妄りに經法を演説した

ゆえ

しえ

ぼさつ

めつご

しゅつげん

ふそく

したが

みだ

きようほう

えんぜつ

まわす、所詮無智の者未だ大法を謗ぜざるには忽ちに大法を与えず悪人爲る

しよせんむち

いま

だいほう

ぼう

たちま

だいほう

あくにん

上已に実大を謗ずる者には強て之を説く可し、法華經第二の卷に仏・舍利弗
に対して云く「無智の人の中にして此の經を説くこと莫れ」又第四の卷に
薬王菩薩等の八万の居士に告げたまわく「此の經は是れ諸仏秘要の藏なり
分布して妄りに人に授与す可からず」云云、文の心は無智の者の而も未だ
正法を謗ぜざるには左右無く此の經を説くこと莫れ、法華經第七の卷不輕
品に云く「乃至遠く四衆を見ても亦復故に往いて」等云云、又云く「四衆
の中に瞋恚を生じ心不淨なる者有り惡口罵詈して言く是の無智の比丘何れ
の所従り來りてか」等云云、又云く「・或は杖木瓦石を以て之を打擲す」
等云云、第二第四の卷の經文と第七の卷の經文と天地水火せり。
問うて曰く一經二説何れの義に就いて此の經を弘通すべき、答えて云く
私に会通すべからず靈山の聴衆為る天台大師並びに妙樂大師等処に
多くの釈有り先ず一兩の文を出さん、文句の十に云く「問うて曰く釈迦は

しゅつせ ちちゅう

出世して踰☆して説かず今は此れ何の意ぞ造次にして説くは何ぞや答えて

日く本已に善有るには釈迦小を以て之を將護し本未だ善有らざるには不輕

・大を以て之を強毒す」等云云、釈の心は寂滅・鹿野・大宝・白鷺等の

前四味の小大・権実の諸經四教八教の所被の機縁・彼等が過去を尋ね見

れば久遠大通の時に於て純円の種を下せしかども諸衆一乘經を謗ぜしか

ば三五の塵点を経歴す然りと雖も下せし所の下種・純熟の故に時至つ

て自ら繫珠を顕す但四十余年の間過去に已に結縁の者も猶謗の義有る可き

の故に且らく権小の諸經を演説して根機を練らしむ。

問うて日く華嚴の時・別円の大菩薩乃至觀經等の諸の凡夫の得道は

如何、答えて日く彼等の衆は時を以て之を論ずれば其の經の得道に似たれ

ども実を以て之を勘うるに三五下種の輩なり、問うて日く其の証拠如何、

答えて日く法華經第五の卷涌出品に云く「是の諸の衆生は世世より已來常

に我が化を受く乃至此の諸の衆生は始め我が身を見・我が所説を聞いて
すなわ みなしんじゅ によらい
即ち皆信受して如来の慧に入りనికి」等云云、天台釈して云く「衆生久遠」
等云云、妙樂大師の云く「脱は現に在りと雖も具に本種を騰ぐ」又云く
「故に知んぬ今日の逗会は昔成熟するの機に赴く」等云云、經釈 顯然
の上は私の料簡を待たず例せば王女と下女と天子の種子を下さざれば国主
と為らざるが如し。

問うて曰く大日經等の得道の者は如何、答えて曰く種種の異義有りと
いんどしげ ゆえ これの ただ しよせん きようぎよう しゅじゅくだつ
雖も繁きが故に之を載せず但し所詮彼れ彼れの經經に種熟脱を説かざれ
ば還つて灰断に同じ化に始終無きの經なり、而るに真言師等の所談の
そくしんじようぶつ たと ぐうにん みだ ていおう みずか ちゅうめつ こと おうもう
即身成仏は譬えば窮人の妄りに帝王と号して自ら誅滅を取るが如し王莽
・趙高の輩外に求む可からず今の真言家なり、此等に因つて論ぜば仏の
めつこ おい しようそう しょうねん には 猶下種の者有り例せば在世
滅後に於て三時有り、正像二千余年には猶下種の者有り例せば在世

よんじゅうねん 四十余年の如し根機を知らずんば左右無く実經を与う可からず、今は既に
まっぽう 末法に入つて在世の結縁の者は漸漸に衰微して権実の二機皆悉く尽きぬ彼
ふぎようほさつ の不輕菩薩末世に出現して毒鼓を撃たしむるの時なり、而るに今時の学者
じき 時機に迷惑して・或は小乗を弘通し・或は権大乘を授与し・或は一乗
えんぜつ を演説すれども題目の五字を以て下種と為す可きの由来を知らざるか、
こと しんごんしゅう 殊に真言宗の学者迷惑を懷いて三部經に依憑し単に会二破二の義を宣ぶ猶
そうたい 三一相對を説かず即身頓悟の遺跡を削り草木成仏は名をも聞かざるのみ、
しか 而るに善無畏・金剛智・不空等の僧侶・月氏より漢土に來臨せし時本国に
おい 於て未だ存せざる天台の大法盛に此の国に流布せしむるの間・自愛所持の
ひろ 經弘め難きに依り一行阿闍梨を語い得て天台の智慧を盗み取り大日經等に
しょうにゆう 摂入して天竺より有るの由之を偽る、然るに震旦一国の王臣等並びに
にほんこく 日本国の弘法・慈覺の兩大師之を弁えずして信を加う已下の諸学は言うに

足らず、但漢土・日本の中に伝教大師一人之を推したまえり、然れども
未だ分明ならず所詮善無畏三蔵・閻魔王の責を蒙りて此の過罪を悔い不空
三蔵の還つて天竺に渡つて真言を捨てて漢土に來臨し天台の戒壇を建立し
て兩界の中央の本尊に法華經を置きし是なり。

問うて曰く今時の真言宗の學者等何ぞ此の義を存せざるや、答えて曰く
眉は近けれども見えず自の禍を知らずとは是の謂か、嘉祥大師は三論宗を
捨てて天台の弟子と為る今の末學等之を知らず、法蔵・澄觀華嚴宗を置
て智者に歸す彼の宗の學者之を存せず、玄奘三蔵・慈恩大師は五性の邪義
を廢して一乗の法に移る法相の學者堅く之を諍う。

問うて曰く其の証如何、答えて曰く・或は心を移して身を移さず・或は
身を移して心を移さず・或は身心共に移し・或は身心共に移さず其の証文
は別紙に之を出す可し此の消息の詮に非ざれば之を出さず、仏滅後に三時

有り、所謂正法一千年・前の五百年には迦葉・阿難・商那和修・末田地・

脇比丘等一向に小乗の薬を以て衆生の輕病を対治す四阿含經・十誦・八

十誦等の諸律と相續解脱經等の三藏を弘通して後には律宗・俱舍宗・

成実宗と号する是なり、後の五百年には馬鳴菩薩・竜樹菩薩・提婆菩薩

・無著菩薩・天親菩薩等の諸の大論師初には諸の小聖の弘めし所の

小乗經之を通達し後には一一に彼の義を破失し了つて諸の大乗經を

弘通す是れ又中薬を以て衆生の中病を対治す所謂華嚴經・般若經・

大日經・深密經等・三輪宗・法相宗・真言陀羅尼・禪法等なり。

問うて曰く迦葉・阿難等の諸の小聖何ぞ大乘經を弘めざるや、答えて

曰く一には自身堪えざるが故に二には所被の機無きが故に三には仏より

譲り与えられざるが故に四には時来らざるが故なり、問うて曰く竜樹・

天親等何ぞ一乗經を弘めざるや、答えて曰く四つの義有り先の如し、問う

て曰く諸の真言師の云く「仏の滅後八百年に相当つて 竜猛菩薩・月氏に
出現して釈尊の顕經たる華嚴・法華等を馬鳴菩薩等に相伝し大日の
密經をば自ら南天の鉄塔を開拓し面り大日如来と金剛薩☆とに對して之を
口決す、竜猛菩薩に二人の弟子有り提婆菩薩には釈迦の顯教を伝え竜智
菩薩には大日の密教を授く竜智菩薩は阿羅苑に隱居して人に伝えず其の間
に提婆菩薩の伝うる所の顯教は先づ漢土に渡る其の後數年を経歴して竜
智菩薩の伝うる所の秘密の教を善無畏・金剛智・不空漢土に渡す」等云云
此の義如何、答えて曰く一切の真言師是くの如し又天台・華嚴等の諸家も
一同に之を信ず、抑 竜猛已前には月氏国の中には大日の三部經無しと云
うか釈迦よりの外に大日如来世に出現して三部の經を説くと云うか、顯
を提婆に伝え密を竜智に授くる証文何れの經論に出でたるぞ、此の大妄語
は提婆の欺誑罪にも過ぎ瞿伽利の誑言にも超ゆ漢土・日本の王位の尽き兩

朝の僧侶の謗法と為るの由來専ら斯れに在らずや、然れば則ち彼の震旦既に
北蕃の為に破られ此の日域も亦西戎の為に侵されんと欲す此等は且らく
之を置く。

像法に入つて一千年・月氏の仏法・漢土に渡來するの間・前四百年には
南北の諸師・異義蘭菊にして東西の仏法未だ定まらず、四百年の後・五
百年の前其の中間一百年の間に南岳・天台等漢土に出現して粗法華の実義
を弘宣したまう然而円慧・円定に於ては国師たりと雖も円頓の戒場未だ
之を建立せず故に国を挙つて戒師と仰がず、六百年の已後法相宗西天よ
り來れり太宗皇帝之を用ゆる故に天台法華宗に歸依するの人漸く薄し、
茲に就いて隙を得て則天皇皇后の御宇に先に破られし華嚴亦起つて天台宗に
勝れたるの由之を称す、太宗より第八代・玄宗皇帝の御宇に真言始めて月氏
より來れり所謂開元四年には善無畏三藏の大日經・蘇悉地經・開元八年に

は金剛智・不空の両三蔵の金剛頂經 此くの如く三經を天竺より漢土に
持ち來り、天台の釈を見聞して智發して釈を作つて大日經と法華經とを
一經と爲し其の上印・真言を加えて密教と号し之に勝るの由、結句權教
を以て実教を下す漢土の學者・此の事を知らず。

像法の末・八百年に相當つて伝教大師・和国に託生して華嚴宗等の
六宗の邪義を糾明するのみに非ずしかのみならず南岳・天台も未だ弘め
たまわざる円頓戒壇を叡山に建立す、日本一州の學者一人も残らず大師の
門弟と爲る、但天台と真言との勝劣に於ては誑惑と知つて而も分明なら
ず、所詮末法に贈りたもうか此等は傍論爲るの故に且らく之を置く、吾が
師・伝教大師三国に未だ弘まらざるの円頓の大戒壇を叡山に建立したも
う此れ偏に上藥を持ち用いて衆生の重病を治せんと爲る是なり。

今末法に入つて二百二十余年五濁強盛にして三災頻りに起り衆見の二濁

國中に充満し逆謗の二輩四海に散在す、専ら一闡提の輩を仰いで棟梁と
侍怙謗法の者を尊重して国師と為す、孔丘の孝經之を提げて父母の頭を
打ち釈尊の法華經を口に誦しながら教主に違背す。不孝国は此の国なり
勝母の閭他境に求めじ、故に青天・眼を瞋らして此の国を睨み黄地は憤
りを含んで大地を震う、去る正嘉元年の大地動・文永元年の大彗星・此等
の天災は仏滅後二千二百二十余年の間・月氏・漢土・日本の内に未だ出現
せざる所の大難なり、彼の弗舎密多羅王の五天の寺塔を焼失し漢土の会昌
天子の九国の僧尼を還俗せしめしに超過すること百千倍なり大謗法の輩国
中に充満し一天に弥るに依つて起る所の天災なり、大般涅槃經に云く
「末法に入つて不孝謗法の者大地微塵の如し」意、法滅尽經に「法滅尽の
時は狗犬の僧尼・恒河沙の如し」等云云意、今親り此の国を見聞するに人毎
に此の二の惡有り此等の大惡の輩は何なる秘術を以て之を扶救せん、大覺

世尊せそん仏眼ぶつげんを以もつつて末法まつぽうを鑒知かんちし此この逆さか・謗つみの二罪ふたつみを対治たいじせしめんが為ために一

大秘法ひほうを留め置きたもう、所謂い法華經ほけきよう本門久成ほんもんくじようの釈尊しゃくそん・宝淨世界ほうじようせかいの多宝仏たほうぶつ

・高さ五百由旬ひやくゆじゆん広さ二百五十由旬ゆじゆんの大宝塔ほうとうの中に於おいて二仏座ふつざを並べしこと

宛も日月あたかの如ごとく十方分身じゅつぽうふんじんの諸仏しよぶつは高さ五百由旬ひやくゆじゆんの宝樹ひやくゆじゆんの下に五由旬ゆじゆんの

師子ししの座ざを並べ敷しき衆星しゅうせいの如ごとく列座れつざしたもう、四百萬億那由他なゆたの大地だいちに三

仏二會じゅうまんに充滿じゅうまんしたもうの儀式けごんは華嚴寂やくじよう場けそうの華藏世界けそうせかいにも勝すぐれ真言しんごん兩界りやうかいの

千二百余尊よそんにも超こえたり一切世間いっさいせけんの眼まなこなり、此この大会たいえに於おいて六難なん九易くよくいを

挙あげて法華經ほけきようを流通りつちうせんと諸もろの大菩薩ほさつに諫曉かんぎようせしむ、金色世界せかいの文殊師利もんじゆしり

・兜史多宮としたの弥勒菩薩みろくほさつ・宝淨世界ほうじようせかいの智積菩薩ちしやくほさつ・補陀落山ふだらくさんの觀世音菩薩かんぜおんほさつ等・

頭陀第一ずだだいの大迦葉かしよう・智慧第一ちえだいの舍利弗等しやりほつ・三千世界さんぜんせかいを統領とうりようする無量むりようの梵天ぼんてん

・須弥しゆみの頂いたに居住むへんする無辺たいしやくの帝釈たいしやく・一四天下してんげを照耀しやうようせる阿僧祇あしんぎの日月にちがつ

・十方じゅつぽうの仏法ぶつぽうを護持ごじする恒沙かうしゃの四天王してんのう・大地微塵だいちみじんの諸もろの竜王りゆうおう等我われにも我

にも此の経を付嘱せられよと競い望みしかども世尊都て之を許したまわず、
爾その時に下方の大地より未見今見の四大菩薩を召し出したもう、所謂
上行菩薩・無辺行菩薩・淨行菩薩・安立行菩薩なり、此の六菩薩各各
六万恒河沙の眷属を具足す形 貌威儀言を以て宣べ難く心を以て量るべか
らず、初成道の法慧・功德林・金剛幢・金剛藏等の四菩薩各各十恒河沙の
眷属を具足し仏会を莊嚴せしも大集經の欲・色二界の中間大宝坊に於て
來臨せし十方の諸大菩薩乃至大日經の八葉の中の四大菩薩も金剛頂經
の三十七尊の中の十六大菩薩等も此の四大菩薩に比☆すれば猶帝釈と猿猴
と華山と妙高との如し、弥勒菩薩・衆の疑を挙げて云く「乃一人をも
識らず」等云云、天台大師云く「寂場より已降今座より已往十方の大士
來会絶えず限る可からずと雖も我れ補処の智力を以て悉く見・悉く知る
而も此の衆に於ては一人をも識らず」等云云、妙樂云く「今見るに皆識ら

ざる所以は乃至智人は起を知り蛇は自ら蛇を識る」等云云、天台又云く「雨
の猛きを見て竜の大なるを知り華の盛なるを見て池の深きを知る」云云、
例せば漢王の四将の張良・樊☆・陳平・周勃の四人を商山の四皓・
綺里枳・角里先生・東園公・夏黄公等の四賢に比するが如し天地雲泥な
り、四皓が為体頭には白雪を頂き額には四海の波を畳み眉には半月を
移し腰には多羅枝を張り恵帝の左右に侍して世を治められたる事・堯舜
の古を移し一天安穩なりし事・神農の昔にも異ならず、此の四大菩薩も亦
またかくのごとほつけ復是くの如し法華の会に出現し三仏を莊嚴し謗人の慢幢を倒すこと大風の
小樹の枝を吹くが如く衆会の敬心を致すこと諸天の帝釈に従うが如く
提婆が仏を打ちしも舌を出して掌を合せ瞿伽梨が無実を構えしも地に
臥して失を悔ゆ、文殊等の大聖は身を慙ぢて言を出さず舍利弗等の小聖は
智を失して頭を低る、爾の時に大覺世尊・寿量品を演説し然して後に十

神力じんりきを示現じげんして四大菩薩ぼさつに付属ふぞくしたもう、其その所属しよそくの法は何物なにものぞや、法華經ほけきよう

の中にも広を捨て略を取り略を捨てて要を取る所謂いわゆる妙法蓮華經みょうほうれんげきようの五字ごじ・名

・体・宗・用・教の五重ごじゅうげん玄えんなり、例せば九苞淵ほうえんが相馬そうばの法には玄黄げんこうを略し

て駿逸しゅんいつを取り史陶林しとうりんが講經こうきやうの法には細科ここを捨て元意げんいを取るが如ごとし等、此の

四大菩薩ぼさつは釈尊しやくそん成道じやうどうの始はじめ、寂滅じやくめつ道場どうじやうの砌みぎりにも来らず如来にょらい入滅にゅうめつの終り

に拔提河ばつだいの辺べにも至いたらずしかのみならず靈山りやうぜん八年の間に進んでは迹門しやくもん序

正の儀式もんじゆに文殊もんじゆ・弥勒みろく等の發起ようぎ影向えいけうの諸聖衆しよしやうしやうにも列つらならず、退しりぞいては

本門流通ほんもんりつづの座席ざせきに觀音かんのん・妙音みやうおん等の發誓くきやう弘經しやだいの諸大士しよだいにも交まじわらず、但此の

一大秘法ひほうを持もつて本処ほんしよに隱居いんきよするの後・仏の滅後めつご正像しやうざう二千年の間に於おいて

未だ一度も出現しゅつげんせず、所詮しよせん・仏専もつぱら末法まつぽうの時に限こつて此等これらの大士ふぞくに付属ふぞくせ

し故なり、法華經ほけきようの分別功德品ぶんべつくどくに云く「惡世末法の時よくこ能く是の經こを持つ者」

云云、涅槃經ねはんきように云く「譬たとえば七子の父母ふ平等びやうどうならざるに非あらず然も病者しかに

おい すなわ ひとえ
於て心則ち偏に重きが如し」云云、法華經の藥王品に云く「此の經は則ち
こ えんぶだい
為れ閻浮提の人の病の良藥なり」云云、七子の中に上の六子は且らく之を
置く第七の病子は一闡提の人・五逆謗法の者・末代惡世の日本国の一切
しゅじよう
衆生なり、正法 一千年の前五百年には一切の聲聞涅槃し了んぬ、後の五
百年には他方來の菩薩・大体本土に還り向い了んぬ、像法に入つての一千
年には文殊・觀音・藥王・弥勒等・南岳・天台と誕生し傳大士・行基・
でんぎよう
傳教等と示現して衆生を利益す。

まつぼう
今末法に入つて此等の諸大士も皆本処に隱居しぬ、其の外・閻浮守護の
天神・地祇も・或は他方に去り・或は此の土に住すれども惡國を守護せず
ある ほうみ な
・或は法味を嘗めざれば守護の力無し、例せば法身の大士に非ざれば三惡道
に入られざるが如し大苦忍び難きが故なり、而るに地涌千界の大菩薩・一
しやばせかい
には娑婆世界に住すること多塵劫なり二には釈尊に随つて久遠より已來
たじんこう
このかた

初しよほつしん発でし心の弟子なり三には娑婆しゃは世界の衆生しゆじやうの最初さいしよげしゆ下種ほさつの菩薩ぼさつなり、是かくの如ことき等の宿縁しゆくえんの方便ほうべん・諸大菩薩しよだいほさつに超過ちやうかせり。

問いわうて曰そく其の証拠しやうこ如何いかん、法華ほつけ第五涌出品ゆじゆつぽんに云いわく「爾その時たほうに他方こくどの国土こくど

より諸もろもろの来れる菩薩摩訶薩ぼさつまかさつの八恒河沙ごうがしやの数すに過ぎたる乃ないし至爾その時もろもろに仏諸もろもろの

菩薩摩訶薩衆ぼさつまかさつに告こげたまわく・止ぜんみね善男子ぜんなんし汝等なんじが此この經じを護持ごじせんこと

を須もいじ」等云云、天台てんだい云いわく「他方たほうは此ちの土結縁けちえんの事せんじゆ浅し宣授せんじゆせんと欲ほす

と雖いえども必ず巨益こやく無し」云云、妙樂みやうらく云いわく「尚偏なほひとえに他方たほうの菩薩ぼさつに付あにひとせず豈あにひと独り

身子しんしのみならんや」云云、又云いわく「告はちまん八万大士ないしとは乃至ないし今いまの下たの文ふみに下方きやうしやく

を召めすが如ごとく尚本眷属なほけんそくを待しるしつ驗しるしし余いまは未ただ堪たえざることを」云云、經釈きやうしやく

の心こころは迦葉かしやう舍利弗しやりふつ等の一切いっさいの声聞しやうもん・文殊もんじゆ・藥王やくおう・觀音かんのん・弥勒みろく等の迹化しやくけ・

他方たほうの諸大士しよだいは末世くきやうの弘經くきやうに堪たえずと云いわなり、經きやうに云いわく「我が娑婆世界しゃはせかい

に自みづから六万恒河沙ごうがしや等の菩薩摩訶薩ぼさつまかさつ有ほさつり一一ほさつの菩薩ぼさつに各六万恒河沙ごうがしやの眷属けんそく有けんそく

り是この諸人等能く我が滅後めつごに於て護持し誦誦とくじゆし広く此の經を説かん、仏
是これを説きたもう時・娑婆世界しゃばせかいの三千大千さんぜんの国土こくど・地皆震裂みなして其その中より
無量千万億の菩薩摩訶薩ぼさつまかせつ有り同時に涌出ゆうじゆつせり、乃至是の菩薩衆ぼさつしゆうの中に四た
り導師どうし有り一をば上行じやうぎやうと名け二をば無辺行むへんぎやうと名け三をば淨行じやうぎやうと名け四
をば安立行あんりゆうぎやうと名く其の衆の中に於て最も為上首唱導もつともこれじやうしゆしやうどうの師なり」等云云、
天台云く「是れ我が弟子でしに我が法を弘ひろむべし」云云、妙樂云く「子父の
法を弘ひろむ」云云道暹どうせん云く「付属ふぞくとは此の經は唯下方涌出ただゆじゆつの菩薩ぼさつに付す何が
故に爾る法是れ久成くじやうの法なるに由るが故に久成くじやうの人に付す」等云云、此等
の大菩薩末法の衆生ほさつまつぽうしゆじやうを利益りやくしたもうこと猶魚の水に練れ鳥の天に自在じざいなる
が如ごとし、濁惡じよくあくの衆生しゆじやう此の居士ぶつしゆに遇つて仏種を殖ふつしゆうることを例せば水精すいしやうの月
に向つて水を生じ孔雀くじやくの雷いかずちの声を聞いて懷妊かいにんするが如ごとし、天台云く「猶
百川の海に潮すべきが如ごとし縁に牽ひかれて応生おうえいするも亦復是くの如し」云云。

慧日大聖尊仏眼を以て兼ねて之を鑒みたもう故に諸の大聖を捨棄し此の

四聖を召し出して要法を伝え末法の弘通を定むるなり、問うて曰く要法の

経文如何、答えて曰く口伝を以て之を伝えん釈尊然後正像二千年の衆生

の為に宝塔より出でて虚空に住立し右の手を以て文殊・観音・梵帝・

日月・四天等の頂を摩でて是くの如く三反して法華經の要よりの外の

広略二門並びに前後の一代の一切經を此等の大士に付属す正像二千年の

機の為なり、其の後涅槃經の会に至つて重ねて法華經並びに前四味の諸經

を説いて文殊等の諸大菩薩に授与したもう、此等は☆拾の遺属なり。

爰を以て滅後の弘經に於ても仏の所屬に随つて弘法の限り有り然れば

則ち迦葉・阿難等は一向に小乘經を弘通して大乘經を申べず、竜樹

・無著等は権大乘經を申べて一乘經を弘通せず、設い之を申べしかども

纔かに以て之を指示し、或は迹門の一分のみ之を宣べて全く化道の始終

をわすれ

わすれ

わすれ

わすれ

わすれ

わすれ

わすれ

わすれ

わすれ

わすれ

わすれ

を談ぜず、南岳・天台等は観音・藥王等の化身と為て小大権実・迹本二門

・化道の始終・師弟の遠近等悉く之を宣べ其の上に已今当の三説を立てて

一代超過の由を判ぜること天竺の諸論にも勝れ真丹の衆釈にも過ぎたり

旧訳・新訳の三蔵も宛かも此の師には及ばず、顕密二道の元祖も敵対に

非ず、然りと雖も広略を以て本と為して未だ肝要に能わず・自身之を存す

と雖も敢て他伝に及ばず・此れ偏に付属を重んぜしが故なり、伝教大師は

仏の滅後・一千八百年・像法の末に相当つて日本国に生れて小乗・大乘

・一乗の諸戒一一に之を分別し梵網・瓔珞の別受戒を以て小乗の二

百五十戒を破失し又法華・普賢の円頓の大王の戒を以て諸大乘經の臣民

の戒を責め下す、此の大戒は靈山八年を除いて一閻浮提の内に未だ有らざ

る所の大戒場を叡山に建立す、然る間八宗共に偏執を倒し一国を挙げて

弟子と為る、觀勒の流の三論・成実道昭の渡せる法相・俱舍良弁の伝う

る所の華嚴宗・鑒真和尚の渡す所の律宗・弘法大師の門弟等誰か円頓の
大戒を持たざらん此の義に違背するは逆路の人なり、此の戒を信仰するは
伝教大師の門徒なり日本一州・円機純一・朝野遠近・同帰一乘とは是の
謂か、此の外は漢土の三論宗の吉蔵大師並びに一百余人・法相宗の慈恩
大師・華嚴宗の法蔵・澄観・真言宗の善無畏・金剛智・不空・慧果日本
の弘法・慈覚等の三蔵の諸師は四依の大師に非ざる暗師なり愚人なり、經
に於ては大小・権実の旨を弁えず顯・密兩道の趣を知らず論に於ては通申
と別申とを糾さず申と不申とを曉めず、然りと雖も彼の宗宗の末学等・此
の諸師を崇敬して之を聖人と号し之を国師と尊ぶ今先ず一を挙げんに万を
察せよ。

弘法大師の十住心論・秘蔵宝鑰・二教論等に云く「此くの如き乗乘
自乗に名を得れども後に望めば戲論と作る」又云く「無明の辺域」又云く

「震旦しんたんの人師等にんし諍あらそつて醍醐だいごを盗み各自宗じしゅうに名なく」等云云、釈しゃくの心は法華ほつけの
大法だいほうを華嚴けこんと大日經だいにちきようとに對して・戲論けろんの法あなずと蔑むみようり無明へんいきの辺域くたと下あまつさし・剩ええ
震旦しんたん一國しよしの諸師ぬすびとを盗人ののしると罵ののしるる、此れ等の謗法ほうほう・謗人ほうじんは慈恩得じおん一の三乘さんじようしんじつ真實
・一乘方便いちじようほうべんの誑言おうげんにも超過ちようかし善導ぜんどう・法然ほうねんが千中無一せんちゆうむいつ・捨閉閣拋しゃへいかくほうの過言しやへいかくほうにも
雲泥うんでいせるなり、六波羅蜜經ろくはらみつきようをば唐とうの末ふくうさんそうに不空三藏ぶくうさんそう・月氏がっしより之これを渡わたす後漢ごかん
より唐とうの始めいたに至いまるまで未だ此の經有せきとくいまらず南三北七なみさんぺきしちの碩德せきとく未だ此の經を見
ず三論さんろん・天台てんだい・法相ほつそう・華嚴けこんの人師誰人にんしだれびとか彼の經の醍醐だいごを盗だまんや、又彼の
經の中に法華經ほけきようは醍醐だいごに非あらずというの文これあ之有いなりや不しや、而しかに日本國にほんこくの東寺とうじ
の門人等もんじん堅これく之しゅじゅを信びやつけんじて種種しゅじゅに僻見びやくけんを起おこし非ひより非ひを増まし・暗くらより暗くらに入
る不便ふびんの次第しだいなり。

彼の門家もんかの伝法院でんぼういんの本願ほんがんたる正覺しょうかくの舍利講式しゃりかうしきに云いく「尊高そんかうなる者は不二
摩訶衍まかえんの仏ぶつ・驢牛ろごの三身さんじんは車くるまを扶たすくること能あたず秘奧ひおくなる者は兩部曼陀羅まんだらの

教・顯乗の四法の人は履をも取るに能えず」云云、三論・天台・法相・華嚴等の元祖等を真言の師に相對するに牛飼にも及ばず力者にも足らずと書ける筆なり、乞い願わくは彼の門徒等心在らん人は之を案ぜよ大惡口に非ずや大謗法に非ずや、所詮此等の誑言は弘法大師の望後作戲論の惡口より起るか、教主釈尊・多宝・十方の諸仏は法華經を以て已今當の諸説に相對しかいぜんしんじつて皆是眞實と定め然る後世尊は靈山に隱居し多宝諸仏は各本土に還りたまいぬ、三仏を除くの外誰か之を破失せん。

就中弘法所覽の眞言經の中に三説を悔い還すの文之有りや不や、弘法既に之を出さず末学の智如何せん而るに弘法大師一人のみ法華經を華嚴・大日の二經に相對して戲論盜人と為す所詮釈尊・多宝・十方の諸仏を以て盜人と稱するか末学等眼を閉じて之を案ぜよ。

問うて曰く昔より已來未だ曾て此くの如きの謗言を聞かず何ぞ上古清代

の貴僧に違背して寧ろ当今濁世の愚侶を帰仰せんや、答えて曰く汝が言う所の如くば愚人は定んで理運なりと思わんか然れども此等は皆人の偽言に因つて如來の金言を知らざるなり、大覺世尊・涅槃經に滅後を警めて言く「善男子我が所説に於て若し疑を生ずる者は尚受くべからず」云云、然るに仏尚我が所説なりと雖も不審有らば之を叙用せざれとなり、今予を諸師に比べて謗難を加う、然りと雖も敢て私曲を構えず専ら釈尊の遺誠に順つて諸人の謬釈を糾すものなり。

夫れ齊の始めより梁の末に至るまで二百余年の間・南北の碩徳・光宅・智誕等の二百余人涅槃經の「我等悉名邪見之人」の文を引いて法華經を以て邪見之經と定め一國の僧尼並びに王臣等を迷惑せしむ、陳隋の比智者大師之を糾明せし時始めて南北の僻見を破り了んぬ、唐の始めに太宗の御宇に基法師・勝鬘經の「若如來隨彼所欲而方便説・即是大乘無有二乘」

の文を引いて一乗方便・三乗真実の義を立つ此の邪義・震旦に流布する
のみに非ず、日本の得一が称徳天皇の御時盛んに非義を談ず、爰に伝教
大師悉く彼の邪見を破し了んぬ、後鳥羽院の御代に源空・法然・観無量寿經
の読誦大乘の一句を以て法華經を摂入し「還つて称名念仏に対すれば
ぞうぎようほうべん しゃへいかくほう 雑行方便なれば捨閑閑抛せよ」等云云。

然りと雖も五十余年の間・南都・北京・五畿・七道の諸寺・諸山の衆僧
等・此の悪義を破ること能はざりき予が難破分明為るの間・一国の諸人
たちま せんちやくしゅう 忽ち彼の選集を捨て了んぬ根露るれば枝枯れ源乾けば流竭くとは蓋
し此の謂なるか、加之ならず唐の半玄宗皇帝の御代に善無畏・不空等
大日經の住心品の如実一道心の一句に於て法華經を摂入し返つて權經
と下す、日本の弘法大師は六波羅蜜經の五藏の中に第四の熟蘇味の般若
波羅蜜藏に於て法華經・涅槃經等を摂入し第五の陀羅尼藏に相對して争

つて醍醐を盗む等云云、此等の禍咎は日本一州の内・四百余年・今に未だ
これ きゆうめい
之を糾明せし人あらず予が所存の難勢☆く一國に満つ必ず彼の邪義を破ら
れんか此等は且らく之を止む。

かしよう あなん りゆうじゅ てんじん てんたい でんぎよう しやだいしようにん
迦葉・阿難等・竜樹・天親等・天台・伝教等の諸大聖人知つて而も

未だ弘宣せざる所の肝要の秘法は法華經の文赫赫たり論釈等に載せざるこ
いま ぐせん かんよう ひほう ほけきよう かくかく ろんしゃく の

と明明なり生知は自ら知るべし賢人は明師に値遇して之を信ぜよ罪根深重
みずか けんじん ちくう これ ざいこんしんちよう

の輩は邪推を以て人を輕しめ之を信ぜず且く耳に停め本意に付かば之を
やかから かる これ しばら とど ほんい これ

喩さん、大集經の五十一に大覺世尊・月藏菩薩に語つて云く「我が滅後に
さいと だいしつきよう だいかくせそん ぼさつ かた いわ めつこ

於て五百年の中は解脱堅固・次の五百年は禪定堅固、一千年次の五百年は
おい げだつけんこ ぜんじようけんこ 已上

読誦多聞堅固・次の五百年は多造塔寺堅固二千年次の五百年は我が法の中に
よくじゆたぶんけんこ たそうとうじけんこ 已上

於て闢諍言訟して白法隱没せん」等云云、今末法に入つて二百二十余年
おい とうじようこんしろう びやくほうおんもつ まつぽう

・我法中闢諍言訟・白法隱没の時に相当れり、法華經の第七葉王品に
がほうちゅうとうじようこんしろう びやくほうおんもつ あいあた ほけきよう やくおうほん

きようしゅしゃくそん 教主 釈尊・多宝仏と共に宿王華菩薩に語つて云く「我が滅度の後・

このごひやくさい 後の五百歳の中に広宣流布して閻浮提に於て断絶して悪魔・魔民諸の天竜

やしや 夜叉・鳩槃荼等に其の便を得せしむこと無けん」大集経の文を以て之を

案ずるに前四箇度の五百年は仏の記文の如く既に符合せしめ了んぬ、第五

の五百歳の一事豈唐捐ならん、随つて当世の体為る大日本国と大蒙古国と

とうじよう 闘諍合戦す第五の五百に相当れるか、彼の大集経の文を以て此の法華経

の文を惟うに後・五百歳中広宣流布・於閻浮提の鳳詔・豈扶桑国に非ず

や、弥勒菩薩の瑜伽論に云く「東方に小国有り其の中に唯大乘の種姓の

み有り」云云、慈氏菩薩・仏の滅後九百年に相当つて無著菩薩の請に赴い

て中印度に來下して瑜伽論を演説す、是れ・或は権機に随い・或は付属に

順い・或は時に依つて権経を弘通す、然りと雖も法華経の涌出品の時・

地涌の菩薩を見て近成を疑うの間・仏・請に赴いて寿量品を演説し

分別功德品に至つて地涌の菩薩を勸奨して云く「惡世末法の時能く是の經
を持たん者」と、弥勒菩薩自身の付属に非ざれば之を弘めずと雖も親り
靈山会上に於て惡世末法時の金言を聴聞せし故に瑜伽論を説くの時末法
に日本国に於て地涌の菩薩・法華經の肝心を流布せしむ可きの由・兼ねて
之を示すなり、肇公の翻經の記に云く「大師須梨耶蘇摩左の手に法華經
を持し右の手に鳩摩羅什の頂を摩で授与して云く仏・日西に入つて遺耀
將に東に及ばんとす此の經典東北に縁有り汝慎んで伝弘せよ」云云、予
此の記の文を拝見して両眼滝の如く一身悦びを☆くす、「此の經典東北
に縁有り」云云西天の月支国は未申の方・東方の日本国は丑寅の方なり、
天竺に於て東北に縁有りとは豈日本国に非ずや、遵式の筆に云く「始め西
より伝う猶月の生ずるが如し今復東より返る猶日の昇るが如し」云云、
正像二千年には西より東に流る暮月の西空より始まるが如し末法五百年に

は東より西に入る朝日の東天より出ずるに似たり、根本大師の記に云く「代
を語れば則ち像の終り末の初・地を尋ぬれば唐の東・羯の西・人を原ぬれ
ば則ち五濁の生・鬭諍の時なり、經に云く猶多怨嫉・況滅度後と此の言
良に以有るが故に」云云、又云く「正像稍過ぎ已つて末法太だ近きに有り
法華一乗の機・今正しく是れ其の時なり何を以て知る事を得ん安樂行品
に云く末世法滅の時なり」云云此の釈は語美しく心隠れたり、読まん人
之を解し難きか、伝教大師の語は我が時に似て心は末法を樂いたもうな
り、大師出現の時は仏の滅後・一千八百余年なり、大集經の文を以て
之を勘うるに大師存生の時は第四の多造塔寺堅固の時に相当る全く第五
鬭諍堅固の時に非ず、而るに余処の釈に末法太有近の言は有り定めて知ん
ぬ鬭諍堅固の筆は我が時を指すに非ざるなり。

予情事の情を案ずるに大師藥王菩薩として靈山會上に侍して仏・

上行菩薩 出現の時を兼ねて之を記したもう故に粗之を喩すか、而るに予
地涌の一分に非ざれども兼ねて此の事を知る故に地涌の大地に前立ちて粗
五字を示す例せば西王母の先相には青鳥・客人の来るには☆鵲の如し、
此の大法を弘通せしむるの法には必ず一代の聖教を安置し八宗の章疏
を習学すべし然れば則ち予所持の聖教多多之有り、然りと雖も両度の
御勘氣・衆度の難の時は、或は一卷・二巻散失し、或は一字・二字脱落
し、或は魚魯の謬☆・或は一部二部損朽す、若し黙止して一期を過ぐるの
後には弟子等定んで謬乱出来の基なり、爰を以つて愚身老耄已前に之を
糾調せんと欲す、而るに風聞の如くんば貴辺並びに大田金吾殿・越中の
御所領の内並びに近辺の寺寺に数多の聖教あり等云云、兩人共に大檀那
為り所願を成ぜしめたまえ、涅槃經に云く「内には智慧の弟子有つて甚深
の義を解り外には清浄の檀越有つて仏法久住せん」云云、天台大師は毛喜

等を相語らい伝かた教大師は国道弘世等でんぎようだいしを恃怙くにみちひろよむ云云。

仁王經に云くにんのうきよう「千里の内をして七難起らざらしむ」云云、法華經に云くひやくちゆじゆん

「百由旬の内に諸の衰患無からしむ」云云、国主正法を弘通すれば必ずひやくちゆじゆん

此の徳を備う臣民等・此の法を守護せんに豈家内の大難を払わざらんや、そな しんみん

又法華經の第八に云くほけきよう「所願虚しからず亦現世に於て其の福報を得ん」又い わ

云く「当に今世に於て現の果報を得べし」云云、又云く「此の人は現世にいま

白癩の病いを得ん」又云く「頭破れて七分と作らん」又第二卷に云く「經びやくらい

を讀誦し書持すること有らん者を見て輕賤憎嫉して結恨を懷かん乃至其のどくじゆ

人命終して阿鼻獄に入らん」云云、第五の卷に云く「若し人惡み罵らばみようじゆう

口則ち閉塞せん」云云、伝教大師の云く「讚する者は福を安明に積み謗すすなわ へいそく

る者は罪を無間に開く」等云云、安明とは須弥山の名なり、無間とは阿鼻つみ むげん

の別名なり、国主持者を誹謗せば位を失い臣民行者を毀害すれば身を喪すこくしゆじしや ひぼう うしな しんみんぎようじや きし ほろぼ

一國を挙りて用いざれば定めて自反他逼出来せしむべきなり、又上品の
行者は大の七難中品の行者は二十九難の内・下品の行者は無量の難の
随一なり、又大の七難に於て七人有り第一は日月の難なり第一の内に又五
の大難有り所謂日月度を失し時節反逆し・或は赤日出で・或は黒日出で二
三四五の日出ず・或は日蝕して光無く・或は日輪一重二三四五重輪現ぜ
ん、又経に云く「二の月並び出でん」と、今・此の国土に有らざるは二の
日・二の月等の大難なり余の難は大体之有り、今・此の龜鏡を以て日本國
を浮べ見るに必ず法華經の大行者有るか、既に之を謗る者に大罰有り之を
信ずる者何ぞ大福無からん。

今兩人微力を励まし予が願に力を副え仏の金言を試みよ經文の如く之を
行ぜんに徴無くんば釈尊正直の經文多宝証 明の誠言・十方分身の
諸仏の舌相・有言無実と為らんか、提婆の大妄語に過ぎ瞿伽利の大誑言に

こ 超えたらん日月地に落ち大地反覆し天を仰いで声を発し地に臥して胸を
おさ 押う殷の湯王の玉体を薪に積み戒日大王の竜顔を火に入れしも今・此の
とき 時に当るか、若し此の書を見聞して宿習有らば其の心を發得すべし、使
者に此の書を持たしめ早早北国に差し遣し金吾殿の返報を取りて速速是非
を聞かしめよ、此の願若し成せば崑崙山の玉鮮かに求めずして蔵に収まり
たいかい 大海の宝珠招かざるに掌に在らん、恐惶謹言。

下春十日

にちれんかおう
日蓮花押

そやにゆつどう
曾谷入道殿

大田金吾殿

一六三 法蓮抄

がんねん
建治元年

五十四歳御作 与曾谷法蓮日礼

1040p

そ おもんみればほけきよう
夫れ以れば法華經第四の法師品に云く「若し悪人有つて不善の心を以て

一劫の中に於て現に仏前に於て常に仏を毀罵せん其の罪尚輕し若し人・一
つの惡言を以て在家・出家の法華經を讀誦する者を毀☆せん其の罪甚だ
重し」等云云、妙樂大師云く「然も此の經の功高く理絶えたるに約して此
の説を作すことを得る余經は然らず」等云云、此の經文の心は一劫とは
人壽八萬歲ありしより百年に一歲をすて千年に十歲をすつ此くの如く次第
に減ずる程に人壽十歲になりぬ、此の十歳の時は當時の八十の翁のごとし、
又人壽十歲より百年ありて十一歲となり又百年ありて十二歲となり乃至一
千年あらば二十歲となるべし乃至八萬歲となる、此の一減一増を一劫とは
申すなり、又種種の劫ありといへども且く此の劫を以て申すべし、此の一劫
が間・身口意の三業より事おこりて仏をにくみたてまつる者あるべし例せ
ば提婆達多のごとし、仏は淨飯王の太子・提婆達多は斛飯王の子なり、
兄弟の子息なる間・仏の御いとこにてをはせしかども今も昔も聖人も

凡夫も人の中をたがへること女人よりして起りたる第一のあだにてはんべ
るなり、釈迦如来は悉達太子として・をはしし時提婆達多も同じ太子なり、
耶輸大臣に女あり耶輸多羅女となづく五天竺第一の美女・四海名譽の天女
なり、悉達と提婆と共に後にせん事をあらそひ給ひし故に中あしくならせ
給ひぬ、後に悉達は出家して仏とならせ給ひ提婆達多・又須陀比丘を師と
して出家し給ひぬ、仏は二百五十戒を持ち三千の威儀をととのへ給ひしか
ば諸の天人これを渴仰し四衆これを恭敬す、提婆達多を人たとまざりしか
ば・いかにしてか世間の名譽・仏にすぎんと・はげみしほどにとかう案じ
いだして仏にすぎて世間にたとまれぬべき事五つあり、四分律に云く一に
は糞掃衣・二には常乞食・三には一座食・四には常露座・五には塩及び五
味を受けず等云云、仏は人の施す衣をうけさせ給う提婆達多は糞掃衣、仏
は人の施す食をうけ給う提婆は只常乞食、仏は一日に一二三反も食せさせ

給^{たま}い提^{だい}婆^ばは只^{ただ}一座^{いちざ}食^{じき}、仏^{ぶつ}は塚^{ちよかん}間^{かん}・樹^{じゆ}下^げにも処^{しょ}し給^{たま}い提^{だい}婆^ばは日^じ中^{ちゆう}常^{じやう}露^{ろう}座^ざなり、
仏^{ぶつ}は便^{びん}宜^ぎにはしを復^{また}は五^ご味^みを服^{ふく}し給^{たま}い提^{だい}婆^ばはしを等^{とう}を服^{ふく}せず、かうありし
かば世^せ間^{けん}・提^{だい}婆^ばの仏^{ぶつ}にすぐれたる事^{こと}・雲^{うん}泥^{でい}なり、かくのごとくして仏^{ぶつ}を失^{うしな}い
たてまつらんとうかがひし程^{ほど}に頻^{ひん}婆^ば舍^{しゃ}羅^ら王^{わう}は仏^{ぶつ}の檀^{だん}那^ななり日^{にち}日^{にち}に五^ご百^{ひやく}輛^{りやう}の
車^{くるま}を数^{かず}年^{ねん}が間^{かん}・一^{ひと}度^{たび}もかかさずおくりて仏^{ぶつ}・並^{なら}びに御^{おん}弟^{でい}子^し等^{とう}を供^く養^{やう}し奉^{たてまつ}る、
これ^{これ}をそねみ・とらんがた^ために未^み生^{しやう}怨^{おん}太^{たい}子^しをかた^たらいて父^ふ・頻^{ひん}婆^ば舍^{しゃ}羅^ら王^{わう}を
殺^{ころ}させ我^{われ}は仏^{ぶつ}を殺^{ころ}さんとして・或^{ある}は石^{いし}をもつて仏^{ぶつ}を打^{うち}ちたてまつるは身^{しん}業^{ごう}
なり、仏^{ぶつ}は誑^{おおわく}惑^くの者^{もの}と罵^{のの}詈^りせしは口^く業^{ごう}なり、内^{ない}心^{しん}より宿^{すく}世^せの怨^{あだ}とをもひし
は意^い業^{ごう}なり三^{さん}業^{ごう}相^{そう}応^{おう}の大^{だい}惡^{あく}此^これにはすぐべからず、此^この提^{だい}婆^ば達^{だつ}多^たほどの大^{だい}
惡^{あく}人^{にん}・三^{さん}業^{ごう}相^{そう}応^{おう}して一^{いつ}中^{ちゆう}劫^{じやく}が間^{かん}・釈^{しゃ}迦^か仏^{ぶつ}を罵^{のの}詈^り・打^{ちやう}杖^{じやう}し嫉^{しつ}妬^とし候^{こう}はん
大^{だい}罪^{ざい}はいくらほどか重^{しげ}く候^{こう}べきや、此^この大^{だい}地^ちは厚^{あつ}さは十^{じゅう}六^{ろく}万^{まん}八^{はち}千^{せん}由^{ゆう}旬^{じゆん}なり
されば四^{たい}大^{かい}海^{かい}の水^{みづ}をも九^{さん}山^{ぜん}の土^ど石^{しやく}をも三^{さん}千^{せん}の草^{そう}木^{もく}をも一^{いっ}切^{さい}衆^{しゆ}生^{じやう}をも頂^{ちやう}戴^{だい}

して候へども落ちもせず・かたぶかず破れずして候ぞかし、しかれども
提婆達多だいばだつたが身みは既に五尺すでの人身じんしんなりわづかに三逆罪さんぎやくざいに及びしかば大地だいち破れ
て地獄じごくに入りぬ、此の穴・天竺てんじくにいまだ候・玄奘げんじよう三蔵さんそう・漢土かんどより月支がっしに
修行しゆぎようして此れをみる西域さいいきと申す文もうに載せられたり、而しかるに法華經ほけきようの末代まつだいの
行者ぎようじやを心にも・をものはず色にもそねまず只ただたわふれてのりて候が上かみの
提婆達多だいばだつたがごとく三業相応そうおうして一中劫めり仏たてまつを罵詈めりし奉るにすぎて候ととかれ
て候、何いかに況や当世とうせの人の提婆達多だいばだつたがごとく三業相応そうおうしての大惡心あくしんをもつ
て多年が間・法華經ほけきようの行者ぎようじやを罵詈めり・毀辱きにく・嫉妬しつと・打擲ちようちやく・讒死ざんし・歿死にに
当てんをや。
あたり

問うて云く末代の法華經ほけきようの行者ぎようじやを怨める者は何なる地獄じごくに墮おつるや、答
えて云く法華經ほけきようの第二いに云く「經きやうを讀誦どくじゆし書持しよじすること有らん者を見て
輕賤きやうせん憎嫉そうしつして結恨けつこんを懷いだかん乃至其の人命終みやうじゆうして阿鼻獄あびごくに入らん一劫いつくわうを

具足して劫尽きなば復死し展転して無數劫に至らん」等云云、此の大地の
下・五百由旬を過ぎて炎魔王宮あり、その炎魔王宮より下・一千五百由旬
が間に八大地獄並びに一百三十六の地獄あり、其の中に一百二十八の地獄
は軽罪の者の住处・八大地獄は重罪の者の住处なり、八大地獄の中に七
大地獄は十惡の者の住处なり、第八の無間地獄は五逆と不孝と誹謗との
三人の住处なり、今法華經の末代の行者を戲論にも罵詈・誹謗せん人人
はおつべしと説き給へる文なり、法華經の第四法師品に云く「人有つて仏道
を求めて一劫の中に於て乃至持經者を歎美せんは其の福復彼に過ぎん」等
云云、妙樂大師云く「若し悩亂する者は頭七分に破れ供養する有らん者
は福十号に過ぐ」等云云、夫れ人中には転輪聖王・第一なり此の輪王
出現し給うべき前相として大海の中に優曇華と申す大木生いて華さき実
なる、金輪王出現して四天の山海を平になす大地は縣の如くやはらかに

たいかい かんろ 大海は甘露の如くあまく大山は金山・草木は七宝なり、此の輪王須臾の間に四天下をめぐる、されば天も守護し鬼神も来つてつかへ竜王も時に随つて雨をふらす、劣夫なんども・これに従ひ奉れば須臾に四天下をめぐる、是れ偏に転輪王の十善の感得せる大果報なり、毘沙門等の四大天王は又これには似るべくもなき四天下の自在の大王なり、帝釈は☆利天の主・第六天の魔王は欲界の頂に居して三界を領す、此れは上品の十善戒・無遮の大善の所感なり、大梵天王は三界の天尊・色界の頂に居して魔王・帝釈をしたがへ三千大千界を手になぎる、有漏の禪定を修行せる上に慈・悲・喜・捨の四無量心を修行せる人なり、声聞と申して舍利弗・迦葉等は二百五十戒・無漏の禪定の上に苦・空・無常・無我の観をこらし三界の見思を断尽し水火に自在なり故に梵王と帝釈とを眷属とせり、縁覚は声聞に似るべくもなき人なり仏と出世をあらそふ人なり、昔獵師ありき飢

えたる世に利^りと申^{もう}す辟支仏^{ひやくしぶつ}にひえの飯を一盃供養^{くよう}し奉^{たてまつ}りて彼の獵師^{りようし}九十
一劫^{いつこう}が間^{にんちゆうてんじよう}人中^{ちようじや}天上^{てんじよう}の長者^{ちようじや}と生^{おん}ず、今生^{こんじよう}には阿那律^{あなりつ}と申^{もう}す天眼第一^{てんげんだいいち}の
御弟子^{おんでし}なり、此^これを妙樂大師^{みようらくだいし}釈^{しやく}して云^{いわ}く「稗飯^{ひえはん}輕^{かる}しと雖^{いえど}も所有^{しよう}を尽^おし及び
田勝^{まさ}るるを以^{もつ}ての故^{ゆえ}に勝^{まさ}るる報^{ほう}を得^える」等云云、釈^{しやく}の心^{しん}はひえの飯^{はん}は輕^{かる}し
といへども貴^{とうと}き辟支^{ひやくし}仏^{ぶつ}を供養^{くよう}する故^{ゆえ}にかかる大果報^{かほう}に度度^{たびたび}生^なるとこそ書^か
れて候^ほへ、又菩薩^{ぼさつ}と申^{もう}すは文殊^{もんじゆ}・弥勒^{みろく}等^らなり、此^この大菩薩^{ぼさつ}等^らは彼の辟支^{ひやくし}仏^{ぶつ}
に似^にるべからざる大人^{だいじん}なり、仏^{ぶつ}は四十二品^{むみよう}の無明^{もうみ}と申^{もう}す闇^{やみ}を破^{やぶ}る妙覺^{みようかく}の仏^{ぶつ}
なり、八月十五夜^{まんげつ}の満月^{まんげつ}のごとし、此^この菩薩^{ぼさつ}等^らは四十一品^{むみよう}の無明^{もうみ}をつくし
て等覺^{とうかく}の山^{さん}の頂^{いただき}にのぼり十四夜^{しじゆ}の月^{げつ}のごとし、仏^{ぶつ}と申^{もう}すは上^{かみ}の諸人^{しよじん}には
百千万億倍^{せんまん}すぐれさせ給^{たま}へる大人^{だいじん}なり、仏^{ぶつ}には必ず三十二相^そあり其^その相^{さう}と
申^{もう}すは梵音^{ぼんおん}聲^{しやう}・無見頂相^{むけんちやうさう}☆相^{さう}・白毫^{びやくこう}相^{さう}・乃至^{ないし}・千輻輪相^{ふくりん}等^らなり、此^この
三十二相^{さんじにさう}の中^{ちゆう}の一相^{いつさう}をば百福^{ひやくふく}を以^{もつ}て成^{たま}じ給^{たま}へり、百福^{ひやくふく}と申^{もう}すは仮令^{かとい}大医^{だいい}あ

りて日本国・漢土・五天竺十六の^{たいこく}大国・五百の^{ちゆうこく}中国・十千の^{しやうこく}小国・乃至
一閻浮提・四天下・六欲天・乃至・三千大千世界の一切衆生の^{まなこ}眼の盲
たるを本の如く一時に開けたらんほどの大功徳を一つの福として此の福・
百をかさねて候はんを以て三十二相の中の一相を成ぜり、されば此の一相
の功徳は三千大千世界の草木の数よりも多く四天下の雨の足よりもすぎた
り、設い壞劫の時・僧☆陀と申す大風ありて須弥山を吹き抜いて色究竟天
にあげて・かへつて微塵となす大風なり、然れども仏の御身の一毛をば動
かさず仏の御胸に大火あり平等大慧・大智光明・火坑三昧と云う、涅槃の
時は此の大火を胸より出して一身を焼き給いしかば六欲・四海の天神・竜
衆等・仏を惜み奉る故にあつまりて大雨を下し三千の大地を水となし須弥
は流るといへども此の大火はきへず、仏にはかかる大徳ましますゆへに
阿闍世王は十六大国の悪人を集め一四天下の外道をかたらひ提婆を師とし

て無量の悪人を放ちて仏弟子をのりうち殺害せしのみならず、賢王にてと
がもなかりし父の大王を一尺の釘をもつて七処までうちつけ、はつけにし
生母をば王のかんざしをきり刀を頭に於てし重罪のつもりに悪瘡七処に
出で、三七日を経て三月の七日に大地破れて無間地獄に墮ちて一劫を経べ
かりしかども仏の所に詣で悪瘡いゆるのみならず無間地獄の大苦をまぬか
れ四十年の寿命延びたりき、又耆婆大臣も御つかひなりしかば炎の中に入
つて瞻婆長者が子を取り出したりき、之を以て之を思うに一度も仏を供養
し奉る人はいかなる悪人・女人なりとも成仏得道疑無し、提婆には三十
相あり二相かけたり所謂白毫と千輻輪となり、仏に二相劣りたりしかば
弟子等軽く思いぬべしとて螢火をあつめて眉間につけて白毫と云ひ千輻輪
には鍛冶に菊形をつくらせて足に付けて行くほどに足焼て大事になり結句
死せんとせしかば仏に申す、仏御手を以てなで給いしかば苦痛さりき、こ

こにて改悔あるべきかと思ひしにさはなくして瞿曇が習ふ医師はこざかし
かりけり又術にて有るなど云ひしなり、かかる敵にも仏は怨をなし給はず
何に況や仏を一度も信じ奉る者をば争でか捨て給うべきや。

かかる仏なれば木像・画像にうつし奉るに優填大王の木像は歩をなし
摩騰の画像は一切経を説き給ふ、是れ程に貴き教主釈尊を一時・二時な
らず一日・二日ならず一劫が間掌を合せ兩眼を仏の御顔にあて頭を
低て他事を捨て頭の火を消さんと欲するが如く渴して水を・をもひ飢えて
食を思うがごとく間無く供養し奉る功德よりも戯論に一言繼母の繼子をほ
むるが如く心ざしなくとも末代の法華經の行者を讃め供養せん功德は彼の
三業相応の信心にて一劫が間・生身の仏を供養し奉るには百千万億倍すぐ
べしと説き給いて候、これを妙樂大師は福過十号とは書れて候なり、十号
と申すは仏の十の御名なり十号を供養せんよりも末代の法華經の行者を

供養くようせん功德くどくは勝まさるとかかれたり、妙樂大師みょうらくだいしは法華經ほけきようの一切經いっさいきように勝すぐれたる事を二十あつむる其その一なり、已上・上の二つの法門ほうもんは仏説ぶつせつにては候へども心えられぬ事なり争いかでか仏を供養くようし奉たてまつるよりも凡夫ぼんぶを供養くようするがまさるべきや、而しかれども是これを妄語もうごと云はんとすれば釈迦如来しゃかにょらいの金言きんげんを疑うたがいい多宝仏たほうぶつの証しょう明みょうを輕かろしめ十方諸仏じゅうっぽうしよぶつの舌相ぜっそうをやぶるになりぬべし、若もし爾しからば現身げんしんに阿鼻地獄あびじごくに墮おつべし、巖石いがんにのぼりて・あら馬を走らするが如ごとし心肝しんかんしづかならず、又信みよぜば妙覺みょうかくの仏にもなりぬべし如何いかにしてか今度このたび・法華經ほけきように信心しんじんをとるべき信なくして此の經を行ぜんは手なくして宝山に入り足なくして千里せんりの道を企くわつるが如ごとし、但ただし近げんき現証しやうを引いて遠おんき信を取るべし仏の御歳八十の正月一日・法華經ほけきようを説きおはらせ給て御物語おんものがたりあり、「阿難あなん・彌勒みろく・迦葉かしやう・我世いに出いでし事は法華經ほけきようを説かんがためなり我既すでに本懷ほんかいをとげぬ今は世にありて詮なし今三月ありて二月十五日に涅槃ねはんすべし」云云、

いっさいないげ ひとびとうたがい
一切内外の人人疑をなせしかども仏語むなしからざればついに二月十五日に御涅槃ありき、されば仏の金言は実なりけるかと少し信心はとられて候、又仏記し給ふ「我滅度の後・一百年と申さんに阿育大王と申す王出現して一閻浮提三分の一が主となりて八万四千の塔を立て我が舍利を供養すべし」云云、人疑い申さんほどに案の如くに出現して候いき是よりしてこそ信心をばとりて候いつれ、又云く「我滅後に四百年と申さんに迦忒色迦王と申す大王あるべし五百の阿羅漢を集めて婆沙論を造るべし」と是又仏記のごとくなりき、是等をもつてこそ仏の記文は信ぜられて候へ、若し上に挙ぐる所の二の法門・妄語ならば此の一経は皆妄語なるべし、寿命品に我は過去五百塵点劫のそのかみの仏なりと説き給う我等は凡夫なり過ぎにし方は生れてより已来すらなをおぼへず況や一生二生をや況や五百塵点劫の事をば争か信ずべきや、又舍利弗等に記して云く「汝未来世に於て無量

無^む辺^{へん}不可^ふ思議^か劫^しを過^すぎ及^ま至^さ当^{たう}に作^さ仏^{ぶつ}するこ^こを^を得^うべし号^{ごう}を華^げ光^{こう}如^に来^{らい}と
曰^いわん」云^{うん}云、又^{また}摩^ま訶^か迦^か葉^{しやう}に記^しして云^いく「未^み来^{らい}世^せに於^おて乃^{ない}至^し最^{さい}後^ごの身^こに
於^おて仏^{ぶつ}と成^{なる}爲^{なる}こ^こを^を得^うん名^なけ^て光^{くわう}明^{めい}如^に来^{らい}と曰^いわん」云^{うん}云、此^{これ}等^らの經^{きやう}文^{もん}は
又^{また}未^み来^{らい}の事^じなれば我^{われ}等^ら凡^{ぼん}夫^ぶは信^{しん}ずべしと^ともおぼえず、されば過^か去^こ未^み来^{らい}を^を知^し
らざらん凡^{ぼん}夫^ぶは此^{これ}の經^{きやう}は信^{しん}じがたし又^{また}修^{しゆ}行^{ぎやう}して^{して}も何^{なん}の詮^{せん}かあるべき是^{これ}を以^{もつ}
て之^{これ}を思^しうに現^{げん}在^{ざい}に眼^{がん}前^{ぜん}の証^{しやう}拠^こあらんずる人^{ひと}・此^{これ}の經^{きやう}を説^{せつ}かん時^{とき}は信^{しん}ずる
人^{ひと}もありやせん。

今^{いま}法^{ほふ}蓮^{れん}上^{しやう}人^{にん}の送^たり給^{たま}へる諷^ふ誦^{じゆ}の状^{じやう}に云^いく「慈^じ父^ふ幽^い靈^{りやう}第^{だい}十^{じふ}三^{さん}年^{ねん}の忌^き辰^{しん}に
相^{あい}當^{あた}り一^{いち}乗^{じやう}・妙^{みやう}法^{ほふ}蓮^{れん}華^け經^{きやう}五^ご部^ぶを転^{てん}読^{どく}し奉^{たてまつ}る」等^{そう}云^{うん}云、夫^それ教^{きやう}主^{しゆ}釈^{しやく}尊^{そん}を
ば大^{だい}覺^{かく}世^せ尊^{そん}と号^{ごう}したてまつる、世^せ尊^{そん}と申^{もう}す尊^{そん}の一字^{いち}を高^{かう}と申^{もう}す高^{かう}と申^{もう}す一^{いち}
字^じは又^{また}孝^{かう}と訓^{くん}ずるなり、一切^{いっさい}の孝^{かう}養^{やう}の人^{ひと}の中^{ちゆう}に第^{だい}一^{いつ}の孝^{かう}養^{やう}の人^{ひと}なれば世^せ尊^{そん}
と号^{ごう}し奉^{たてまつ}る、釈^{しやく}迦^か如^に来^{らい}の御^{おん}身^みは金^{きん}色^{しき}にして三^{さん}十^{じふ}二^に相^{しやう}を備^たへ給^{たま}ふ、彼^かの三^{さん}十^{じふ}

二相の中に無見頂相と申すは仏は丈六の御身なれども竹杖外道も其の
みだけ 御長をはからず梵天も其の頂を見ず故に無見頂相と申す是れ孝養第一の
大人なればかかる相を備へまします、孝経と申すに二あり一には外典の
孔子と申せし聖人の書に孝経あり、二には内典今の法華経是なり、内外
異なれども其意は是れ同じ、釈尊塵点劫の間修行して仏にならんとはげ
みしは何事ぞ孝養の事なり、然るに六道・四生は一切衆生は皆父母なり
孝養おへざりしかば仏にならせ給はず、今法華経と申すは一切衆生を仏に
なす秘術まします御経なり、所謂地獄の一人・餓鬼の一人・乃至・九界の
一人を仏になせば一切衆生・皆仏になるべきことほり顕る、譬えば竹の節
を一つ破ぬれば余の節亦破るるが如し、困碁と申すあそびにしちようと云
う事あり一の石死しぬれば多の石死ぬ、法華経も又此くの如し金と申すも
のは木草を失う用を備へ水は一切の火をけす徳あり、法華経も又一切衆生

を仏になす用おはします、六道・四生の衆生に男女あり此の男女は皆我等
が先生の父母なり、一人ももれば仏になるべからず故に二乗をば不知恩の
者と定めて永不成仏と説かせ給う孝養の心あまねからざる故なり、仏は
法華經をさとらせ給いて六道・四生の父母孝養の功德を身に備へ給へり、
此の仏の御功德をば法華經を信ずる人にゆづり給う、例せば悲母の食う物
の乳となりて赤子を養うが如し、今・此の三界は・皆是れ我が有なり・
其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり」等云云、教主釈尊は此の功德を
法華經の文字となして一切衆生の口になめさせ給う、赤子の水火をわきま
へず毒藥を知らざれども乳を含めば身命をつぐが如し、阿含經を習う事は
舍利弗等の如くならざれども華嚴經をさとする事解脱月等の如くならざれど
も乃至一代聖教を胸に浮べたる事文殊の如くならざれども一字・一句を
も之を聞きし人・仏にならざるはなし、彼の五千の上慢は聞きてさとらず

不信ふしんの人なり、然しかれども謗ほうぜざりしかば三月さんげつを経て仏ほとけになりనికి「若もしは信もじ若もしは信もぜざれば即すなわち不動国ふどうこくに生ねぜん」と涅槃經ねはんぎょうに説とかるるは此この人
の事なり、法華經ほけきょうは不信ふしんの者ものすら謗ほうぜざれば聞きつるが不思議ふしぎにて仏ほとけにな
るなり、所謂いわゆる七步蛇ふじやに食かれたる人ひと一步ひと乃至あし七步しをすぎず毒どくの用もちの不思議ふしぎに
て八步はつぽをすごさぬなり、又胎内たいないの子この七日しちにちの如ごとし必ず七日しちにちの内に転まじて余
の形かたちとなる八日はつにちをすごさず、今の法蓮上人しやうにんも又此かくの如ごとし教主きやうしゆしやくそん釈尊しやくそんの御
功德くどく・御身おんみに入りかはらせ給たまいぬ、法蓮上人しやうにんの御身おんみは過去かこ聖靈しやうりやうの御容貌おんがうぶつ
を残のこしおかれたるなり、たとへば種たねの苗めいとなり華はなの菓ことなるが如ごとし其華そのはなは
落おちて菓このみはあり種たねはかくれて苗げんは現げんに見みゆ、法蓮上人しやうにんの御功德くどくは過去かこ
聖靈しやうりやうの御財たからなり、松まつさかふれば柏かしわよろこぶ芝しかるれば蘭らんなく情じやうなき
草木そうもくすら此かくの如ごとし何いかに況いはや情じやうあらんをや又父子ふしの契ちぎりをや。

彼の諷誦ふじゆに云いく「慈父閉眼じふへいがんの朝あしたより第十三年じしんの忌辰いたに至いたるまで釈迦如来しやかにらい

の御前おんまえに於おいて自ら自我みづか偈じがけ一卷ひとくまを讀誦とくじゆし奉りて聖靈たてまつに回向しやうりやうす」等云云、當時とうじ

・日本国にほんこくの人、仏法ぶつぽうを信ぶつぽうじたるやうには見へて候へども古いにしえいまだ仏法ぶつぽうの

わたらざりし時は仏もうと申す事も法もうと申す事も知らず候しを守屋もりやと上宮じやうぐう太子たいし

と合戦くわせんの後・信ずる人もあり又信ぜざるもあり、漢土かんとも此かくの如ごとし摩騰まとう・

漢土かんとに入いつて後・道士どうしと諍じやうろん論ろんあり道士どうしまけしかば始はて信ずる人もありしか

ども不信ふしんの人多し、されば烏龜おりゆうと申せし能書あたは手跡あの上手うなりしかば人

之これを用もちゆ、然しかれども仏經ぶきやうに於おいてはいかなる依怙たのみありしかども書かず最後さいご

臨終りんじゆうの時・子息遺しそくいりゆう竜りゆうを召いして云いわく汝なんじ我が家に生なれて芸能ぎのうをつぐ我が孝養こうやう

には仏經ぶきやうを書かくべからず殊ことに法華經ほけきやうを書かく事なかれ、我が本師ほんしの老子らうしは天

尊たうなり天てんに二つの日ひなし而しかるにに彼の經けいに唯我ゆいがいちにん一人ひとりと説だくきくわい第一だいいちなり、

若もし遺言ゆいごんを違たがへて書かく程ほどならば忽たちまちに惡靈あくりやうとなりて命いのちを断ことつべしと云いつて舌

八はつにさけて頭こゝ七分しちぶんに破やれ五根ごこんより血ちを吐はいて死しし畢おんぬ、されども其その

子善惡を弁ぜんあくへざれば我が父の謗法わきまのゆへに惡相現ほうぼうじて阿鼻地獄げんに墮あちたり
ともしらず遺言ゆいごんにまかせて仏經ぶきようを書く事なし況や口に誦ずする事あらんをや、
かく過すぎ行く程に時の王を司馬氏しばしと号し奉たてまつる御仏事ぶつじのありしに書写しよしゃの經あ
るべしとて漢土第一かんとだいいちの能書たすを尋ねらるるに遺竜いりゆうに定まりぬ、召して仰せ付
けらるるに再三辞退申せしかば力及およばずして他筆にて一部の經を書かせら
れけるが、帝王心ていおうよからず尚遺竜いりゆうを召して仰せに云く汝親おおの遺言いとて朕が
經を書かざる事其その謂いわれ無しと雖も且いく之を免いず但題目計だいまくばかりは書くべしと三
度勅定あり、遺竜猶辞退申す大王竜顔心よからずして云く天地尚王てんちの進退しんたい
なり、然しからば汝なんじが親は即ち我が家人にあらずや、私をもつて公事くじを輕んず
る事あるべからず、題目計だいまくばかりは書くべし若もし然しからずんば、仏事ぶつじの庭なりと
いへども速すみに汝なんじが頭こづへを刎はぬべしとありければ題目計だいまくばかり書けり、所謂いわゆる
妙法蓮華經卷第一・乃至卷第八等云云、其その暮たそがれに私宅に歸りて歎なげいて

いわ 云く我親の遺言を背き王勅術なき故に仏經を書きて不孝の者となりぬ天神
ゆいこん そむ すべ ゆえ ぶきよう ふこう てんじん
も地祇も定んで瞋り不孝の者とおぼすらんとて寝る、夜の夢の中に大光明
ちぎ いか ふこう いね たいみょう
しゅつげん
出現せり朝日の照すかと思へば天人・一人庭上に立ち給へり又無量の眷属
てんにん ちようじよう こくう てんにん ひとりよう けんぞく
あり、此の天人の頂上の虚空に仏・六十四仏まします、遺竜・合掌して
問うて云く如何なる天人ぞや、答えて云く我は是れ汝が父の烏竜なり仏法
いわ いかん てんにん いわ こ なんじ おりゆう ぶつぽう
を謗ぜし故に舌八つにさけ五根より血を出し頭七分に破れて無間地獄に
ぼう ゆえ りんじゅう かにん ことへ むげんじこく
墮ちぬ、彼の臨終の大苦をこそ堪忍すべしともおぼへざりしに無間の苦は
お りんじゅう むげん
尚百千億倍なり、人間にして鈍刀をもて爪をはなち鋸をもて頸をきら
なお じんげん にぶきかたな のこぎり
れ炭火の上を歩ばせ棘にこめられなんどせし人の苦を此の苦にたとへばか
あゆ いばら
ずならず、如何してか我が子に告げんと思ひしかどもかなはず、臨終の時
いかん りんじゅう
・汝を誠て仏經を書くことなかれと遺言せし事のくやしさを申すばかりな
なんじ いましめぶきよう ゆいこん もう
し、後悔先にたたず我が身を恨み舌をせめしかども・かひなかりしに昨日
ごうかい

の朝より法華經の始の妙の一字・無間地獄のかなへの上に飛び来つて變じ
て金色の釈迦仏となる、此の仏三十二相を具し面貌満月の如し、大音声
を出して説て云く「仮令法界に遍く善を断ちたる諸の衆生も一たび法華經
を聞かば決定して菩提を成ぜん」云云、此の文字の中より大雨降りて無間
地獄の炎をけす閻魔王は冠をかたぶけて敬ひ獄卒は杖をすてて立てり、
一切の罪人はいかなる事ぞとあはてたり、又法の一字来れり前の如し又蓮
・又華・又經・此くの如し六十四字来つて六十四仏となりぬ、無間地獄に
仏・六十四体ましませば日月の六十四が天に出たるごとし、天より甘露を
くだして罪人に与ふ、抑此等の大善は何なる事ぞと罪人等・仏に問い奉り
しかば六十四の仏の答に云く我等が金色の身は梅檀・宝山よりも出現せず
是は無間地獄にある烏竜が子の遺竜が書ける法華經八巻の題目の八八・六
十四の文字なり、彼の遺竜が手は烏竜が生める処の身分なり、書ける文字

は烏竜おりゅうが書くにてあるなりと説き給たまいしかば無間地獄むげんじごくの罪人等ざいにんは我等われらも娑婆しゃばにありし時は子もあり婦つまもあり眷属けんぞくもありき、いかに・と

ぶらはぬやらん又訪へども善根ぜんこんの用の弱くして来らぬやらんと歎なげけども

歎なげけども甲斐かいなし、或あるは一日・二日・一年・二年・半劫・一劫いつくうになりぬ

るにかかる善知識ぜんちしきにあひ奉たてまつて助けられぬるとて我等われらも眷属けんぞくとなりて

とうりてん

☆利天りてんにのぼるか、先ず汝なんじをおがまんとて来るなりとかたりしかば、夢の

中にうれしさ身にあまりぬ、別れて後又いつの世にか見んと思ひし親のす

がたをも見奉たてまつり仏をも拝はいし奉たてまつりぬ、六十四仏の物語ものがたりに云く我等われらは別の主べちな

し汝なんじは我等われらが檀那だんななり、今日よりは汝なんじを親と守護しゅごすべし汝なんじ・をこたる事

なかれ、一期いちきの後には必ず来とそつつて都率とそつの内院へ導くべしと御約束ありしかば

遺竜いりゅうことに畏かしこみて誓いいて云く今日以後外典の文字いごげてんを書く可べからず等云云、

彼の世親菩薩せじんぼさつが小乗經しょうじょうきょうを誦じゆせじと誓いひ日蓮にちれんが弥陀念仏みだねんぶつを申もうさじと願もうせし

がごとし、さて夢さめて此の由を王に申す、大王の勅宣に云く此の仏事
すでに已に成じぬ此の由を願文に書き奉れとありしかば勅宣の如くにし、さてこ
そ漢土・日本国は法華經にはならせ給いけれ、此の状は漢土の法華伝記に
候。

是は書写の功德なり、五種法師の中には書写は最下の功德なり、何に況
や読誦など申すは無量無辺の功德なり、今の施主十三年の間・毎朝読誦
せらるる自我偈の功德は唯仏与仏・乃能究尽なるべし、夫れ法華經は一代
聖教の骨髓なり自我偈は二十八品のたましひなり、三世の諸仏は寿量品
を命とし十方の菩薩も自我偈を眼目とす、自我偈の功德をば私に申すべか
らず次下に分別功德品に載せられたり、此の自我偈を聴聞して仏になりた
る人人の数をあげて候には小千・大千・三千世界の微塵の数をこそあげて
候へ、其の上薬王品已下の六品得道のもの自我偈の余残なり、涅槃經四十

卷の中に集りて候いし五十二類にるいにも自我偈じがげの功德くどくをこそ仏は重ねて説かせ
給たまひいしか、されば初め寂滅じやくめつ道場どうじやうに十方世界微塵数じゅつぽうせかいじんじゆの大菩薩ほさつてんにん・天人等てんにん・雲
の如ごとくに集りて候いし大集だいしつ・大品の諸聖だいほんしよも大日經だいにちきやう・金剛頂經こんこうちやうきやう等の千二百
余尊よそんも過去かこに法華經ほけきやうの自我偈じがげを聴聞ちやうもんしてありし人人ひとびと、信力しんりきよはくして三五
の塵点じんてんを経へしかども今度釈迦仏このたびしやかぶつあに値たてまつい奉りて法華經ほけきやうの功德くどくすすむ故に靈山
をまたずして爾前にぜんの經經きやうきやうを縁きとして得道とくどうなると見えたり。

されば十方世界じゅつぽうせかいの諸仏しよぶつは自我偈じがげを師として仏にならせ給たまう世界せかいの人の
父母ふぼの如ごとし、今法華經ほけきやう・寿量品じゆりやうぼんを持つ人は諸仏しよぶつの命いのちを續つづぐ人なり、我が
得道とくどうなりし經を持つ人を捨て給たまう仏あるべしや、若もし此これを捨て給たまはば仏
還かえつて我が身を捨て給たまうなるべし、これを以て思うに田村利仁としひとなんどの様
なる兵つわものを三千人さんぜん生うみたらん女人にょにんあるべし、此の女人にょにんを敵とせん人は此の
三千人さんぜんの將軍しやうぐんをかたきに・うくるにあらずや、法華經ほけきやうの自我偈じがげを持つ人を

敵とせんは三世の諸仏を敵とするになるべし、今の法華經の文字は皆生身の仏なり我等は肉眼なれば文字と見るなり、たとへば餓鬼は恒河を火と見る・人は水と見・天人は甘露と見る、水は一なれども果報にしたがつて見るところ各別なり、此の法華經の文字は盲目の者は之を見ず肉眼は黒色と見る二乗は虚空と見・菩薩は種種の色と見・仏種・純熟せる人は仏と見奉る、されば經文に云く「若し能く持つこと有るは即ち仏身を持つなり」等云云、天台の云く「稽首妙法蓮華經一帙・八軸・四七品・六万九千三八四・一一文・是真仏・真仏說法利衆生」等と書かれて候。

之を以て之を案ずるに法蓮法師は毎朝口より金色の文字を出現す此の文字の数は五百十字なり、一一の文字変じて日輪となり日輪變じて釈迦如来となり大光明を放って大地をつきとをし三惡道・無間・大城を照し乃至東西南北・上方に向つては非想・非非想へものぼりいかなる處にも過去

しょうりよう

聖靈のおはすらん処まで尋ね行き給いて彼の聖靈に語り給うらん、我

をば誰とか思食す我は是れ汝が子息・法蓮が毎朝誦する所の法華經の

じがげ

もんじ

もんじ

なんじ

まなこ

自我偈の文字なり、此の文字は汝が眼とならん耳とならん足とならん手

とならんとこそねんごろに語らせ給うらめ、其の時・過去聖靈は我が子息

ぜんちしき

たま

しゃばせかい

かこしょうりよう

たま

・法蓮は子にはあらず善知識なりとて娑婆世界に向つておがませ給うらん、

是こそ実の孝養にては候なれ。

こうよう

そもそもほけきよう

抑法華經を持つと申すは經は一なれども持つ事は時に随つて色色なる

ある

べし、或は身肉をさひて師に供養して仏になる時もあり、又身を牀とし

くよう

たきぎ

じようもく

しやうじん

て師に供養し又身を薪となし、又此の經のために杖木をかほり又精進し

じかい

かみ

こと

よ

ふじよう

又持戒し上の如くすれども仏にならぬ時もあり時に依つて不定なるべし、

てんだいだいし

ちやくじにい

だいし

しゆしゃとくぎふかいつこう

されば天台大師は適時而已と書かれ、章安大師は「取捨得宜不可一向」等

云云。

問うて云く何なる時か身肉を供養し何なる時か持戒なるべき、答えて
云く智者と申すは此くの如き時を知りて法華經を弘通するが第一の秘事な
り、たとへば渴者は水こそ用うる事なれ弓 箭兵 杖はよしなし、裸なる者
は衣を求む水は用なし一をもつて万を察すべし、大鬼神ありて法華經を弘通
せば身を布施すべし余の衣食は詮なし、悪王あつて法華經を失わば身命を
ほろぼすとも随うべからず、持戒精進の大僧等・法華經を弘通するやうに
て而も失うならば是を知つて責むべし、法華經に云く「我身命を愛せず
但だ無上道を惜しむ」云云、涅槃經に云く「寧ろ身命を喪うとも終に王の
所説の言教を匿さざれ」等云云、章安大師の云く「寧喪身命不匿教とは
身は軽く法は重し身を死して法を弘む」等云云。

然るに今日蓮は外見の如くは日本第一の僻人なり我が朝六十六箇国・二
の島の百千万億の四衆・上下万人に怨まる、仏法・日本国に渡つて七百余

年いまだ是程に法華經の故に諸人に悪まれたる者なし、月氏・漢土にもありともきこえず又あるべしとおぼへず、されば一閻浮提第一の僻人ぞかし、かかるものなれば上には一朝の威を恐れ下には万民の嘲を顧みて親類もとぶらず外人は申すに及ばず出世の恩のみならず世間の恩を蒙りし人も諸人の眼を恐れて口をふさがんためにや心に思はねども・そしるよしをなす、数度事にあひ兩度御勘氣を蒙りしかば我が身の失に当るのみならず、行通人人の中にも・或は御勘氣・或は所領をめされ・或は御内を出され・或は父母・兄弟に捨てらる、されば付きし人も捨てはてぬ今又付く人もなし、殊に今度の御勘氣には死罪に及ぶべきがいが思はれけん佐渡の国につかはされしかば彼の国へ趣く者は死は多く生は稀なり、からくしで行きつきたりしかば殺害謀叛の者よりも猶重く思はれたり、鎌倉を出でしより日に強敵かさなるが如し、ありとある人は念仏の持者なり、野を

行き山に行くにもそばひらの草木そうもくの風に随したがつてそよめく声も、かたきの我を責せむるかとおぼゆ、やうやく国にも付きぬ北国の習なれば冬は殊ことに風はげしく雪ふかし衣薄く食ともし、根を移されし橘じねんの自然じねんにからたちとなりけるも身の上につみしられたり、栖すみかには・おばな・かるかや・おひしげれる野中の三昧さんまいばらにおちやぶれたる草堂の上は雨もり壁は風もたまらぬ傍あたりに昼夜・耳に聞く者はまくらにさゆる風の音、朝あしたに眼まなこに遮さえぎる者は遠近おちこちの路を埋む雪なり、現身げんしんに餓鬼道がきを経・寒地獄じごくに堕おちぬ、彼の蘇武そぶが十九年の間・胡国ここくに留とどめられて雪を食し李陵りりようが巖窟いんくつに入つて六年養みのをきてすごしけるも我が身の上なりき。

今適御勘ごかんき気ゆりたれども鎌倉中かまくらにも且しばくも身をやどし迹しやくを・とどむべき処ところなければ・かかる山中の石のはざま松の下に身を隠かくし心を静しずむれども大地だいちを食とし草木そうもくを著そざらんより外は食もなく衣も絶えぬる処ところにいかなる

御心ねにて・かく・かきわけて御訪のあるやらん、知らず過去の我が父母
みたましい おんみ
の御神の御身に入りかはらせ給うか、又知らず大覺世尊の御めぐみにやあ
るらん涙こそ・おさへがたく候へ。

問うて云く抑正嘉の大地震・文永の大彗星を見て自他の叛逆・我が朝
いわ そもしょうか だいじしん ぶんえい すいせい じた
ほけきょう うしな たま いかん いわ
に法華經を失う故としらせ給うゆへ如何、答えて云く此の二の天災・地天

は外典三千余巻にも載せられず三墳・五典・史記等に記する処の大長星・
げてんさんぜん の さんぶん しき しる ところ

大地震は・或は一尺二尺・一丈二丈・五丈六丈なりいまだ一天には見へず
だいじしん ある 一 じゆうろく いってん

地震も又是くの如し、内典を以て之を勘うるに仏御入滅已後はかかる大瑞
かくのこと ないてん これ かんが にゆうめつ いこ だいずい
しゅつたい がっし みつたらおう ぶつぽう たいこく じとう

出来せず、月支には弗沙密多羅王の五天の仏法を亡し十六大国の寺塔を焼
そうに 二つへ かんど えしやうてんし
き払い僧尼の頭をはなし時も・かかる瑞はなし、漢土には会昌天子の寺院

・四千六百余所をとどめ僧尼・二十六万五百人を還俗せさせし時も出現せ
そうに げんそく しゅつげん

ず、我が朝には欽明の御宇に仏法渡りて守屋・仏法に敵せしにも清盛法師
あした きんめい ぎよう ぶつぽうわた もりや ぶつぽう きよもりほっし

・七^な大^な寺^{だいじ}を^う焼^しき^な失^うい^し山^{さん}僧^{そう}等^ら・園^{おん}城^{じやう}寺^じを^う焼^し亡^{じやう}せ^しし^にも^し出^し現^{げん}せ^じざる^す大^{だい}慧^い星^{せい}な^り。

ま^まさ^さ当^{たう}に^だ知^ちる^じべ^いし^し是^ぜより^りも^も大^{だい}事^じなる^る事^{こと}の一^{いっ}閻^{えん}浮^ふ提^{だい}の^の内^{ない}に^に出^し現^{げん}す^すべ^べき^きなり^{なり}と^と
か^かん^んが^が り^りっ^りし^しょう^{しょう}あ^あん^んこ^ころ^ろん^ん つ^つく^く さ^さい^いみ^みよう^{よう}じ^じに^にゆう^{ゆう}どう^{どう} ^たて^てま^まつ^つ
勘^{かん}えて^て立^た正^{せい}安^{あん}国^{こく}論^{ろん}を^を造^{つく}り^りて^て最^{さい}明^{めい}寺^じ入^{にゅう}道^{どう}殿^{でん}に^に奉^{ほう}る^る、^たて^てま^まつ^つ 彼^かの^の状^{じやう}に^に云^いく^く ^いわ^わ ^{だい}ぜ^ぜ此^この^の大^{だい}瑞^{ずい}
は^は他^た国^{こく}より^り此^この^の国^{こく}を^をほ^ほろ^ろぼ^ぼす^すべ^べき^き先^{せん}兆^{しやう}なり^{なり}、^{ぜん}し^しゆう^{ゆう} ^{ねん}ぶ^ぶつ^つし^しゆう^{ゆう} ^ほけ^けき^きよう^{よう}
う^うし^しな^な 失^しう^う故^こなり^{なり}、^ほつ^つし^し 彼^かの^の法^{ほう}師^し原^{げん}が^が頸^{けい}を^をき^きり^りて^て鎌^{かま}倉^{くら}ゆ^ゆる^るの^の浜^{はま}に^にす^すて^てず^ずば^ば国^{こく}正^{せい}に^に亡^まぶ^ぶ
べ^べし^し等^ら云^い云^う、^そ ^ぶん^んえ^えい^い ^すい^いせ^せい^い 其^その^の後^ご文^{ぶん}永^{えい}の^の大^{だい}慧^い星^{せい}の^の時^{とき}は^は又^{また}手^てに^にに^にぎ^ぎり^りて^て之^{これ}を^を知^しる^る、^いぬ^ぬる^るぶ^ぶん^んえ^えい^い
八^{はち}年^{ねん}九^く月^{げつ}十^{じゅう}二^に日^{にち}の^の御^ご勘^{かん}氣^きの^の時^{とき}重^{かさ}ね^ねて^て申^{もう}し^して^て云^いく^く予^よは^は日^{にっ}本^{ぽん}国^{こく}の^の棟^{どう}梁^{りやう}なり^{なり}我^{われ}を^を
う^うし^しな^な 失^しう^うは^は ^こか^かん^んき^き ^かさ^さ ^もう^う ^いわ^わ ^にほ^ほん^んこ^こく^く ^とう^うり^りよう^{よう}
国^{こく}を^を失^うし^しな^なる^るべ^べし^しと^と今^{いま}は^は用^{もち}い^いま^まじ^じけ^けれ^れど^ども^も後^ごの^のた^ため^めに^にと^とて^て申^{もう}し^しに^にき^き、^こそ
の^の四^し月^{げつ}八^{はち}日^{にち}に^に平^{へい}左^さ衛^ゑ門^{もん}尉^ゐに^に対^{たい}面^{めん}の^の時^{とき}蒙^{もう}古^こ国^{こく}は^は何^いつ^つこ^ころ^ろか^かよ^よせ^せ候^{こう}べ^べき^きと^と問^{もん}う^うに^に、
答^{こた}えて^て云^いく^く ^いわ^わ ^きよう^{よう}も^もん^ん ^ただ^だ ^{てん}げん^{げん} ^しき^き 経^{きやう}文^{ぶん}は^は月^{げつ}日^{にち}を^をさ^ささ^さず^ず但^{ただ}し^し天^{てん}眼^{げん}の^のい^いか^かり^り頻^{しき}り^りなり^{なり}今^{いま}年^{ねん}を^をば^ばす^すぐ^ぐべ^べ

からずと申もうしたりき、是等これらは如何いかんにして知るべしと人疑うたがいうべし予不肖ふしょうの身なれども法華經ほけきょうを弘通くつうする行者ぎょうじやを王臣おうしん人民じん之これを怨あだむ間・法華經ほけきょうの座ざにて守護しゆごせんと誓ちかをなせる地神ぢしんいかりをなして身をふるひ天神てんじん身より光を出して此の国をおどす、いかに諫いせむれども用もちいざれば結局は人の身に入つて自界叛逆じかいほんぎやくせしめ他国たこくより責せむべし。

問いうて云いく此の事何たる証拠しやうこあるや、答う經いに云く「惡人あくにんを愛敬あいぎやうし善人ぜんにんを治罰ちばつするに由よるが故ゆゑに星宿せいしゆく及び風雨ふうう皆時みなを以て行いわず」等云云、夫れそ天地てんちは国の明鏡めいきやうなり今・此の国に天災地天あり知るべし国主こくしゆに失とがありと云う事を鏡きやうにうかべたれば之これを諍あらそうべからず国主こくしゆ・小禍せうこのある時は天鏡てんきやうに小災見こさいゆ今の災さいは当まさに知るべし大禍ありと云う事を、仁王經にんのうきやうには小難せうなんは無量むりやうなり中難ちゅうなんは二十九・大難だいにんは七とあり此の經をば一には仁王にんのうと名づけ二には天地鏡てんじきやうと名づく、此の国主こくしゆを天地鏡てんじきやうに移して見るに明白めいはくなり、又此の

経文きやうもん いわに云く「聖人しやうにん去らん時は七難ひちなん必ず起るおこ」等云云、当まさに知るべし此の国こくにんに大聖人しやうにん有りと、又知るべし彼の聖人しやうにんを国主こくしゅ信ぜずと云う事を。

問うて云く先代せんだいに仏寺うしなを失ひし時何ぞ此の瑞なんなきや、答えて云く瑞とがは失けいちよう

の輕重けいちようによりて大小だいしやうあり此の度の瑞むあやしは怪ひとたびむべし、一度二度にあらず一

返二返ねんげつにあらず年月いよいよをふるまに弥盛これなり、之を以て之これを察すべし先代せんだい

の失とがよりも過ぎたる国主こくしゅに失あり、国主こくしゅの身にて万民ばんみんを殺し又万臣ばんしんを殺し

又父母ふぼを殺す失とがよりも聖人しやうにんを怨む事あだ・彼に過ぐる事を、今・日本国にほんこくの王臣おうしん

並びに万民ばんみんには月氏がし・漢土かんど総じて一閭浮提えんぶだいに仏滅後ぶつめつ・二千二百二十余年いっしよの

間だいかいまだなき大科たいか・人ひとごとにあるなり、譬たとえば十方世界じゆつぽうせかいの五逆ごぎやくの者を一処いっしよ

に集めたるが如ごとし、此の国の一切いっさいの僧みは皆みな・提婆だいば・瞿伽利くぎやりが魂たまを移し国主こくしゅ

は阿闍世王あじゃせ・波瑠璃王はるりの化身けしんなり、一切いっさいの臣民しんみんは雨行大臣うぎやうだいじん・月称大臣がししやうだいじん・

刹陀耆利等せつだきりの悪人あくにんをあつめて日本国にほんこくの民となせり、古は二人・三人・逆罪

不孝ふこうの者ありしかばこそ其その人の在所ざいしょは大地だいちも破われて入りぬれ、今は

此この国くにに充満じゅうまんせる故ゆえに日本国にほんこくの大地だいち・一時いちじにわれ無間むげんに墮おち入おらざらん外

は一人・二人の住所おの墮おつべきやうなし、例せば老人ろうじんの一二しらがの白毛しらをば拔

けども老耄ろうもうの時ときは皆白毛みなしらなれば何を分けて抜き捨すてつべき只一度ただひとたびに剃捨そりすつる

如ごとくなり、問いうて云いく汝なんじが義ぎの如ごときは我が法華經ほけきようの行者ぎようじやなるを用もちいざる

が故ゆえに天變地天等てんぺんちようありと、法華經第八ほけきように云いく「頭破こうべれて七分と作わらん」と、

第五いに云いく「若もし人惡にくみ罵のれば口則すなわち閉塞へいそくす」等云云、如何なんぞ数年が間の・罵

とも怨あたむとも其その義ぎなきや、答こたう反詰はんきつして云いく不輕菩薩ふぎようぼさつを毀き☆し罵詈めりし

打擲ちようちやくせし人は口閉頭破こうへいありけるか如何いか、問いう然しかれば經文きようもんに相違そういする事

如何いか、答こたう法華經ほけきようを怨あたむ人に二人あり、一人は先生せんしに善根ぜんこんありて今生こんじように

縁いを求めて菩提心ぼだいしんを發おこして仏になるべき者は・或あるは口閉あち・或あるは頭破やぶる、

一人は先生せんしに謗人ぼうじんなり今生こんじようにも謗ぼうじ生生むげんに無間地獄じよくの業じようじゆを成就じようじゆせる者あ

り是はのれども口則ち閉塞せず、譬えは獄に入つて死罪に定まる者は獄の中にて何なる僻事あれども死罪を行ふまでにて別の失なし、ゆりぬべき者は獄中にて僻事あれば・これをいましむるが如し、問うて云く此の事第一の大事なり委細に承わるべし、答えて云く涅槃經に云く法華經に云く云云。

日蓮 花押

◆一六四 曾谷殿御返事

建治二年五十五歳御作 1055p

夫れ法華經第一方便品に云く「諸仏の智慧は甚深無量なり」云云、釈に云く「境淵無辺なる故に甚深と云い智水測り難き故に無量と云う」と、抑此の經釈の心は仏になる道は豈境智の二法にあらずや、されば境と云うは万法の体を云い智と云うは自体顕照の姿を云うなり、而るに境の淵ほとりなく・ふかき時は智慧の水ながる事つつがなし、此の境智合しぬれば即身成仏するなり、法華以前の經は境智・各別にして而も權教方便なる

が故に成仏せず、今法華經にして境智一如なる間・開示悟入の四仏知見を
さとりて成仏するなり、此の内証に聲聞・辟支仏更に及ばざるところを
次下に一切聲聞・辟支仏所不能知と説かるるなり、此の境智の二法は何物
ぞ但南無妙法蓮華經の五字なり、此の五字を地涌の居士を召し出して
結要付屬せしめ給う是を本化付屬の法門とは云うなり。

然るに上行菩薩等・末法の始の五百年に出生して此の境智の二法たる
五字を弘めさせ給うべしと見えたり經文赫赫たり明明たり誰か是を論ぜ
ん、日蓮は其の人にも非ず又御使にもあらざれども先序分にあらあら弘め
候なり、既に上行菩薩・釈迦如来より妙法の智水を受けて末代惡世の枯槁
の衆生に流れかよはし給う是れ智慧の義なり、釈尊より上行菩薩へ譲り
与へ給う然るに日蓮又日本国にして此の法門を弘む、又是には總別の二義
あり總別の二義少しも相そむけば成仏思もよらず輪廻生死のもといたら

ん、例せば大通仏の第十六の釈迦如来に下種せし今日の声聞は全く弥陀・
薬師に遇て成仏せず譬えば大海の水を家内へくみ来らんには家内の者皆縁
をふるべきなり、然れども汲み来るところの大海の一滴を闇きて又他方の
大海の水を求めん事は大僻案なり大愚癡なり、法華經の大海の智慧の水を
受けたる根源の師を忘れて余へ心をうつさば必ず輪廻生死のわざはいなる
べし、但し師なりとも誤ある者をば捨つべし又捨てざる義も有るべし世間
・仏法の道理によるべきなり、末世の僧等は仏法の道理をば・しらずして
我慢に著して師をいやしみ檀那をへつらふなり、但正直にして少欲知足た
らん僧こそ真実の僧なるべけれ、文句の一に云く「既に未だ真を發さざれ
ば第一義天に慙じ諸の聖人に愧ず即是れ有羞の僧なり觀慧若し發するは即
真実の僧なり」云云、涅槃經に云く「若し善比丘あつて法を壞る者を見て
置いて呵責し駢遣し挙処せずんば当に知るべし是の人は仏法の中の怨なり、

も若し能く駈遺し呵責し拳処せんは是れ我が弟子其の声聞なり」云云、此の
文の中に見壞法者の見と置不呵責の置とを能く能く心腑に染む可きなり、
ほけきよう法華經の敵を見ながら置いてせめずんば師檀ともに無間地獄は疑いなか
るべし、南岳大師の云く「諸の悪人と俱に地獄に堕ちん」云云、謗法
を責めずして成仏を願はば火の中に水を求め水の中に火を尋ぬるが如くな
るべしはかなし・はかなし、何に法華經を信じ給うとも謗法あらば必ず地獄
にをつべし、うるし千ばいに蟹の足一つ入れたらんが如し、毒氣深入・矢
本心故は是なり、經に云く「在在諸の仏土に常に師と俱に生ぜん」又云く
「若し法師に親近せば速かに菩薩の道を得ん是の師に隨順して学せば恒沙
の仏を見たてまつることを得ん」釈に云く「本此の仏に従つて初めて道心
を發し亦此の仏に従つて不退地に住す」又云く「初め此の仏・菩薩に従つ
て結縁し還此の仏菩薩に於て成就す」云云、返す返すも本従たがへずして

じょうぶつ

成仏せしめ給うべし、たま釈尊は一切衆生の本従の師にて而も主親の徳を備

たま

へ給う、此法門を日蓮申す故に忠言耳に逆う道理なるが故に流罪せられ命

およ

にも及びしなり、然ともいまだこりず侯・法華経は種の如く仏はうへての

こと しゅじょう

如く衆生は田の如くなり、若し此等の義をたがへさせ給はば日蓮も後生は

もう

助け申すまじく侯、恐恐謹言。

きょうきょうきんげん

ひのえね

建治二年丙子八月三日

そや

曾谷殿

にちれんかおう
日蓮花押

◆一六五

そやにゆうどう 曾谷入道殿御返事

1057p

みょうほうれんげきよう

妙法蓮華経一部一卷小字経、御供養のために御布施に小袖・二重・鷲目

もんく

十貫・並に扇百本、文句の一に云く「如是とは所聞の法体を挙ぐ」と、記の

いずくん

一に云く「若し超八の如是に非ずんば安ぞ此の経の所聞と為さん」云云、

けこんきよう

華嚴経の題に云く「大方広仏・華嚴経、如是我聞」云云、「摩訶般若波羅蜜

けこんきよう

によぜがもん

まかはんにやはらみつ

經・如是我聞によぜがもん」云云、大日經の題に云く「大毘盧遮那・神變加持經・

如是我聞によぜがもん」云云、一切經の如是何なる如によぜ是いかぞやと尋ぬれば、上の題目を

指して如是とは申もうすなり、仏、何の經にても・とかせ給ひし其の所詮の理

をさして題目とはせさせ給ひしを、阿難・文殊・金剛手等・滅後に結集し給

ひし時、題目をうちをいて、如是我聞と申せしなり、一經の内の肝心かんじんは題目だいもく

におさまれり、例せば天竺と申す国あり、九万里・七十箇国なり、然れど

も其中の人畜・草木・山河・大地・皆月氏と申す二字の内にれきれきたり、

譬へば一四天下の内に四洲あり、其の中の一切の万物は月に移て、すこし

もかくるる事なし、經も又是くかくのことの如く、其の經の中の法門ほうもんは其の經の題目だいもく

の中にあり、阿含經の題目は一經の所詮・無常の理をおさめたり、外道の

經の題目のあう阿の二字にすぐれたる事百千万倍なり、九十五種の外道・

阿含經の題目を聞てみな邪執を倒し、無常の正路におもむきぬ、般若經

の題目だいもくを聞ては体空・但中・不但中の法門ほうもんをさとり、華嚴經の題目だいもくを聞く人たんちゅうは但中・不但中のさとりあり、大日經・方等・般若經の題目だいもくを聞く人たんちゅうは・或あるは析空しゃくくう、・或あるは体空、・或あるは但空、・或あるは不但空、・或あるは但中、・不但中の理をばさとれども、いまだ十界互具・百界千如・三千世間の妙覺みょうかくの功德をばきかず、その詮を説かざれば、法華經より外は理即の凡夫なり、彼の經經の仏・菩薩はいまだ法華經の名字即ななうじそくに及ばず、何いかに況や題目だいもくをも唱へざれば觀行即くわんぎようそくにいたるべしや、故に妙樂大師の記に云く「若し超八にやぜの如是に非ずんば、安いずくんんぞ此の經の所聞しよもんと為さん」云云、彼彼の諸經しよぎようの題目だいもくは八教の内なり、網目の如し、此の經の題目だいもくは八教の網目に超えこて大綱たいこうと申す物なり、今妙法蓮華經と申す人人はその心をしらざれども、法華經の心をうるのみならず、一代の大綱たいこうを覺り給へり、例せば一、二、三歳の太子位たいしにつき給ひぬれば、国は我が所領しよりようなり、摂政せつしやう関白かんぱく已下いは我

が所従なりとは、しらせ給はねども、なにも此の太子の物なり、譬へば小児
は分別の心なけれども、悲母の乳を口にのみぬれば自然に生長するを、趙
高が様に心おこれる臣下ありて、太子をあなづれば身をほろばす、諸経・
諸宗の学者等、法華經の題目ばかりを唱ふる太子をあなづりて、趙高が
如くして無間地獄に墮つるなり、又法華經の行者の、心もしらず題目計り
を唱ふるが、諸宗の智者におどされて退心をおこすは、こがいと申せし
太子が趙高におどされ・ころされしが如し。

南無妙法蓮華經と申すは一代の肝心たるのみならず、法華經の心なり、
体なり、所詮なり、かかるいみじき法門なれども仏滅後・二千二百二十余
年の間・月氏に付法蔵の二十四人弘通し給はず、漢土の天台・妙楽も流布
し給はず、日本国には聖徳太子・伝教大師も宣説し給はず、されば和法師
が申すは僻事にてこそ有るらめと諸人疑て信ぜず、是れ又第一の道理な

り、たと譬へば昭君しょうくんなどを、あやしの兵つわものなどがおかしたてまつるを・み

な人よも・さはあらじと思へり、大臣公卿だいじんくきやうなどの様なる天台・伝教てんだい でんきやうの弘通くつう

なからん法華經ほけきやうの肝心かんじん・南無妙法蓮華經なむみよほうれんげきやうを、和法師程ほっしのものがいかで唱ふ

べしと云云、汝等是を知るや・鳥からすと申す鳥は無下のげす鳥なれども、

わしくまたか

驚☆の知らざる年中の吉凶きつぎやうを知れり、蛇と申す虫は竜象りゆうそうに及ばずとも、

七日の間の洪水を知るぞかし、設い竜樹天台たとりゅうじゅてんだいの知り給はざる法門ほうもんなりとも

経文きやうもん顯然けんねんならばなにをか疑うたがいはせ給ふべき、日蓮にちれんをいやしみて南無なむ

妙法蓮華經と唱へさせ給はぬは、小児しょうじが乳をうたがふて・なめず病人が

医師くすしを疑うたがいて薬を服せざるが如し、竜樹・天親りゅうじゅ てんじん等は是を知り給へども、時

なく機きなければ弘通くつうし給はざるか、余人は又しらずして宣伝せんでんせざるか、仏法ぶつぽう

は時により機きによりて弘ひろまる事なれば、云ふにかひなき日蓮にちれんが時にこそあ

たりて候らめ。

所詮妙法蓮華經の五字をば當時の人人は名と計りと思へり、さにては候

はず・体なり・体とは心にて候、章安云く「蓋し序王は經の玄意を叙し、

玄意は文の心を述す」云云、此の釈の心は妙法蓮華經と申すは文にあら

ず、義にあらず、一經の心なりと釈せられて候、されば題目をはなれて

法華經の心を尋ぬる者は、☆をはなれて肝をたづねし・はかなき龜なり、

山林をすてて菓を大海の辺にもとめし☆猴なり、はかなし・はかなし。

建治三年丁丑霜月二十八日

日蓮花押

曾谷次郎入道殿

◆一六六 曾谷殿御返事 弘安二年八月 五十八歳御作 1059p

焼米二俵給畢ぬ、米は少と思食し候へども人の壽命を継ぐ者にて候、命

をば三千大千世界にても買はぬ物にて候と仏は説かせ給へり、米は命を継

ぐ物なり譬えば米は油の如く命は燈の如し、法華經は燈の如く行者は

油ことの如だんなし檀那ことは油ことの如ぎようじゃく行者ともしびは燈ことの如いっさいし、一切にゅうみの百味にゅうみの中には乳味にゅうみと
申もうして牛ちちだいいちの乳ねはんぎよう第一なほんぎようなり、涅槃いわ經なほんぎようの七なほんぎように云くく「猶なほしよみ諸味なほしよみの中に乳もつともこれ最だいも為だいれ第一だい
なるが如ことし」云云、乳味にゅうみをせんずれば酪味らくみとなる酪味らくみをせんずれば乃至ないし
醍醐だいごみ味だいごみとなる醍醐だいごみ味だいごみは五味だいごみの中の第一だいごみなり、法門ほうもんを以ほうもんて五味だいごみにたとへば儒家じゆけ
の三千さんぜん・外道げどうの十八じゅうはちだいきよう大經だいごみは衆味じゆもんの如ことし、阿含あこんきよう經だいごみは醍醐だいごみ味だいごみなり、阿含あこんきよう經だいごみは
乳味にゅうみの如ことく觀かんきよう經いっさい等ほうとうぶの一切ほうとうぶの方等部ほうとうぶの經ほうとうぶは酪味らくみの如ことし、一切いっさいの般若はんんにゃきよう經いっさいは
生蘇しやうそみ味けこんきよう・華嚴じゆくそみ經むりようぎきようは熟蘇ほけきよう味ねはんぎよう・無量むりようぎきよう義經ほけきようと法華ほけきよう經ねはんぎようと涅槃ねはんぎよう經ほけきようとは醍醐だいごみのことし又
涅槃ねはんぎよう經だいごは醍醐だいごのことし法華ほけきよう經ほけきようは五味ことの主ことの如ことし、妙樂みようらくだいし大師だいし云くく「若もし教旨ぎようし
を論ほっけずれば法華ただかいこんは唯開權顯遠しやうしゆを以なつて教ひとの正主しやうしゆと為なす独ひとり妙ひとの名ひとを得ひとる意ひと
此こに在こり」云云、又云いく「故ゆえに知ほっけんぬ法華ほっけは為これ醍醐だいごの正主しやうしゆ」等云云、此
の釈まさしは正ほけきようく法華ほけきよう經ほけきようは五味じゆくそみの中まにはあらず此しやくの釈しやくの心しやくは五味じゆくそみは壽命じゆくそみをやしな
ふ壽命じゆくそみは五味じゆくそみの主じゆくそみなり、天台宗てんだいしゆうには二てんだいしゆうの意てんだいしゆうあり一てんだいしゆうには華嚴けこん・方等ほうとう・般若はんんにゃ

・涅槃・法華は同じく醍醐味なり、此の釈の心は爾前と法華とを相似せるにいたり世間の学者等・此の筋のみを知りて法華経は五味の主と申す法門に迷惑せるゆへに諸宗にたばらかさるるなり、開未開・異なれども同じく円なりと云云是は迹門の心なり、諸経は五味法華経は五味の主と申す法門は本門の法門なり、此の法門は天台・妙楽粗書かせ給い候へども分明ならざる間・学者の存知すくなし、此の釈に若論教旨とかかれて候は法華経の題目を教旨とはかかれて候、開権と申すは五字の中の華の一字なり顕遠とかかれて候は五字の中の蓮の一字なり 独得妙名 とかかれて候は妙の一字なり、意在於此とかかれて候は法華経を一代の意と申すは題目なりとかかれて候ぞ、此れを以て知んぬべし法華経の題目は一切経の神・一切経の眼目なり、大日経等の一切経をば法華経にてこそ開眼供養すべき処に大日経等を以て一切の木画の仏を開眼し候へば日本国の一切の寺塔の佛像

等形は仏に似れども心は仏にあらず九界の衆生の心なり、愚癡の者を智者とするはより始まれり、国のついへのみ入て祈とならず還て仏變じて魔となり鬼となり国主乃至万民をわづらはす是なり、今法華經の行者と檀那との出来する故に百獸の師子王をいとひ草木の寒風をおそるるが如し、是は且くをく法華經は何故ぞ諸經に勝れて一切衆生の為に用いる事なるぞと申すに譬えば草木は大地を母とし虚空を父とし甘雨を食とし風を魂とし日月をめのととして生長し華さき菓なるが如く、一切衆生は実相を大地とし無相を虚空とし一乗を甘雨とし已今当第一の言を大風とし定慧力莊嚴を日月として妙覺の功德を生長し大慈大悲の華さかせ安樂仏果の菓なつて一切衆生を養ひ給ふ、一切衆生又食するによりて壽命を持つ、食に多数あり土を食し水を食し火を食し風を食する衆生もあり、求羅と申す虫は風を食す・うぐろもちと申す虫は土を食す、人の皮肉・骨髓等

を食する鬼神きじんもあり、尿糞等を食する鬼神きじんもあり、寿命じゅみょうを食する鬼神きじんもあり、
り、声を食する鬼神きじんもあり、石を食するいをくろがねを食するべくもあり、
地神・天神・竜神・日月・帝釈・大梵王・二乗・菩薩・仏は仏法をなめ
て身とし魂とし給ふたま、例せば乃往過去に輪陀王と申す大王ましましき一
閻浮提の主なり賢王なり、此の王はなに物をか供御ともとし給うと申せば白馬はくば
の鳴声いなくこえをきこしめして身も生長し身心しんしんも安穩あんのんにしてよをたまち給うたま、れ
いせば蝦蟇かえると申す虫の母のなく声を聞いて生長するがごとし、秋のはぎの
しかの鳴くに華のさくがごとし、象牙草のいかづちの声にはらみ柘榴じやくろの石
にあふてさかうるがごとし、されば此の王・白馬はくばを・をほくあつめて・か
はせ給ふたま、又此の白馬は白鳥をみてなく馬なれば、をほくの白鳥をあつめ
給たまいしかば我が身の安穩あんのんなるのみならず百官・万乗もさかへ天下てんかも風雨ふうう・
時にしたがひ他国たこくもかうべをかたづけて・すねんすごし給うたまにまつり事の

さをいにやはむべりけん又宿業によつて果報や尽きけん・千万の白鳥一時
にうせしかば又無量の白馬もなく事やみぬ、大王は白馬の声をきかざりし
ゆへに華のしほめるがごとく月のしよくするがごとく、御身の色かはり力
よはく六根もうもうとしてぼれたるがごとくありしかば、きさきももうも
うしくならせ給ひ百官万乗もいかんがせんとなげき、天もくもり地もふる
ひ大風かんぱちしけかちやくびように人の死する事肉はつか骨はかはらと
みへしかば他国よりも・をそひ来れり、此の時大王いかんがせんと・なげ
き給ひしほどに・せんする所は仏神にいのるには・しくべからず、此の国
に・もとより外道をほく国をふさげり、又仏法という物を・をほくあが
めをきて国の大事とす、いづれにてもあれ白鳥をいだして白馬をなかせん
法をあがむべし、まづ外道の法にをほせつけて数日をこなはせけれども白
鳥一足もいでこず白馬もなく事なし、此の時外道のいのりを・とどめて

ぶつきよう

仏教にをほせつけられけり、其の時馬鳴菩薩と申す小僧一人あり・めしい

だされければ此の僧の給はく國中に外道の邪法をとどめて仏法を弘通し

たま

給うべくば馬をなかせん事やすしといふ、勅宣に云くをほせのごとくなる

そのとき めみようほさつ さんぜじゅつぼう

べしと、其の時に馬鳴菩薩・三世十方の仏にきしやうし申せしかば・たち

しゅつたい

まちに白鳥出来せり、白鳥は白鳥を見て一こへなきけり、大王・馬の声を

まなこ

一こへ・きこしめして眼を開き給い白鳥二ひき乃至百千いできたりければ

はくばいちじ

百千の白馬一時に悦びなきけり、大王の御いろ・なをること日しよくの・

せんまん

ほんにふくするがごとし、身の力・心のはかり事・先先には百千万ばいこ

だいじん

へたり、きさきも・よろこび大臣・公卿いさみて万民もたな心をあはせ他国

たこく

も・かうべをかたぶけたりとみへて候。

てんじん

天神七代・地神五代・已上十二代は

じょうじう

成劫のごとし・先世のかいりきと福力とによつて今生のはげみなけれど

せんぜ

こんじよう

じゅみよう

も国もおさまり人の寿命も長し、人王のよとなりて二十九代があひだは

せんぜ

先世のかいりきも・すこしよはく今生のまつり事もはかなかりしかば国に

さんさい

ひちなん

やうやく三災・七難をこりはじめたり、なを・かんどより三皇・五帝の世

さんさい

ひちなん

を・をさむべきふみわたりしかば其をもつて神をあがめて国の災難をしづ

さんめい

む、人王第三十代欽明天王の世となりて国には先世のかいふくうすく悪心

しゅったい

ぜんしん

がうじやうの物をほく出来て善心をろかに悪心は・かしこし、外典のをし

げてん

ないてん

へはあさしつみをもきゆへに外典すてられ内典になりしなり、れいせば

にほん

てんじん

もりやは日本の天神七代・地神五代が間の百八十神をあがめたてまつりて

ぶつきよう

仏教をひろめずして・もとの外典となさんといのりき、聖徳太子は教主

しやくそん

ごほんそん

釈尊を御本尊として法華経・一切経をもんしよとして両方のせうぶあり

ほけきよう

いっさいきよう

しに・ついには神はまけ仏はかたせ給いて神国はじめて仏国となりぬ、

たまい

しんこく

天竺漢土の例のごとし、今此三界・皆是我有の経文あらはれさせ給うべき

こんしさんがい

かいぜがう

きようもん

たまた

きようもん

たまた

きようもん

たまた

きようもん

たまた

きようもん

たまた

きようもん

たまた

序なり、欽明より桓武にいたるまで二十よ代・二百六十余年が間・仏を大王とし神を臣として世を・をさめ給いしに仏教はすぐれ神はをとりたりしかども未だよをさまる事なし。

いかなる事にやとうたがはりし程に桓武の御宇に伝教大師と申す聖人出来して勤えて云く神はまけ仏はかたせ給いぬ、仏は大王・神は臣かなれば上下あひついで・れいぎただしければ國中をさまるべしと・をもふに国のしづかならざる事ふしんなるゆへに一切経をかんがへて候へば道理にて候けるぞ、仏教に・をほきなるとがありけり、一切経の中に法華經と申す大王をはします、ついで華嚴經・大品經・深密經・阿含經等はあるいは臣の位あるいはさふらいのくらい・あるいはたみの位なりけるを・或は般若經は法華經にはすぐれたり三論宗・或は深密經は法華經にすぐれたり法相宗・或は華嚴經は法華經にすぐれたり華嚴宗・或は律宗は諸宗の

母なりなんと申して一人として法華經の行者なし、世間に法華經を讀誦するは還つてをこつきうしなうなり、「之に依つて天もいかり守護の善神も力よはし」云云、所謂「法華經を・ほむといえども返つて法華の心をこそす」等云云、南都・七大寺十五大寺・日本国中の諸寺・諸山の諸僧等・此のことばを・ききて・をほきにいかり天竺の大神・漢土の道士・我が国に出来せり所謂最澄と申す小法師是なり、せんする所は行きあはむずる処にてかしらをわれ・かたをきれ・をとせうてのれと申せしかども桓武天皇と申す賢王たづね・あきらめて六宗はひが事なりけりとて初めてひへい山をこんりうして天台法華宗とさだめをかせ円頓の戒を建立し給うのみならず、七大寺・十五大寺の六宗の上に法華宗をそへをかる、せんする所六宗を法華經の方便となされしなり、れいせば神の仏にまけて門まほりとなりしがごとし、日本国も又かくのごとし法華最第一の經文初めて此の国に

あらわ^{たまひ}のうせつ
頭れ給い能竊為一人・説法華經の如來の使初めて此の国に入り給いぬ、桓武^{かんむ}

・平城・嵯峨の三代二十余年が間は日本一州・皆法華經の行者なり、しか^{へいせい}

れば梅檀には伊蘭釈尊には提婆のごとく伝教大師と同時に弘法大師と^{せんだ}
もう しょうにんしゅつげん

申す聖人出現せり、漢土にわたりて大日經・真言宗をならい日本国に^{かんど}

わたりてありしかども伝教大師の御存生の御時はいたう法華經に大日經^{でんぎようだいし}

すぐれたりといふ事はいはざりけるが、伝教大師去ぬる弘仁十三年六月四^{でんぎようだいし}

日にかくれさせ給いてのちひまをえたりとや・をもひけん、弘法大師^{たまい}

去ぬる弘仁十四年正月十九日に真言第一・華嚴第二・法華第三・法華經は^{こうにん}

戲論の法・無明の辺域・天台宗等は盗人なりなんと申す書どもをつくり^{けろん}

て、嵯峨の皇帝を申しかすめたてまつりて七宗に真言宗を申しくはえて七^{さが}

宗を方便とし真言宗は真実なりと申し立て畢んぬ。^{ほうべん}

其の後・日本一州の人ごとに真言宗になりし上其の後又伝教大師の^そ

御弟子慈覚と申す人漢土にわたりて天台・真言の二宗の奥義をきはめて
帰朝す、此の人金剛頂經・蘇悉地經の二部の疏をつくりて前唐院と申す
寺を叡山に申し立て畢んぬ、此れには大日經第一法華經第二其の中に弘法
のごとくなる過言かずうべからず、せむぜむにせうせう申し畢んぬ、智証
大師又此の大師のあとをついでをんじやう寺に弘通せり、たうじ寺とて国
のわざはいとみゆる寺是なり、叡山の三千人は慈覚・智証をはずば真言
すぐれたりと申すをばもちいぬ人もありなん、円仁大師に一切の諸人くち
をふさがれ心をたばらかされてことばをいだす人なし、王臣の御きえも又
傳教・弘法にも超過してみへ候へばえい山七寺日本一州一同に法華經は
大日經にをとりと云云、法華經の弘通の寺寺ごとに真言ひろまりて法華經
のかしらとなれり、かくのごとくして・すでに四百余年になり候いぬ、や
うやく此の邪見ぞうじやうして八十一乃至五の五王すでにうせぬ仏法うせ

しかば王法すでにつき畢おわんぬ。

あまつさへぜんしゅう禪宗と申す大邪法念もう仏宗と申す小邪法真言じゃほうしんこんと申す大惡法此もう

の惡宗はなをならべて一國にさかんなり、天照太神はたましいをうしなつてんしょうだいじん

てうぢごをまほらず八幡大菩薩は威力よはくして國を守護しゅごせずけつくははちまんだいぼさつ

他國の物とならむとす、日蓮此のよしを見るゆへににちれん仏法中怨・俱墮地獄等ぶつぽうちゅうおん

のせめをおそれてほぼこくしゅ粗國主にしめせども、かれらが邪義にたばらかされて信じやぎ

じ給たまう事なし還かえつて大怨敵となり給たまいぬ法華經をうしなふ人國中じゅうまんに充滿せ

りと申せども人しる事なければただぐちのとがばかりにてある事今は又ほけきよう

法華經の行者出来ぎようじゃしゅつたいせり日本國の人人癡にほんこくの上にいかりを・をこす邪法じやほうをあ

いし正法しょうほうをにくむ、三毒さんどくがうじやうなる一國いかでか安穩あんのんなるべき、壞劫えこう

の時は大の三災さんさいをこる、いはゆる火災水災風災なり、又滅劫の時は小の三災さんさい

をこる、ゆはゆる飢渴けかち疫病合戦なり、飢渴けかちは大貪えきびようよりをこりやくびやうは

ぐちよりをこり合戦は瞋^{しん}恚^によりをこる、今・日本^{にほんこく}の人人^{ひとびと}四十九億九万四

千八百二十八人の男女^{にょにん}人人^{ひとびと}ことなれども同じく一の三毒^{さんどく}なり、所謂^{いわゆる}南無

妙法蓮華^{みょうほうれんげきょう}經

を境としてをこれる三毒^{さんどく}なれば人ごとに釈迦^{しゃか}・多宝^{たほう}・十方^{じゅうっぽう}の

諸^{しよぶつ}仏^{いちじ}

を一時^{いちじ}にのりせめ流しうしなうなり、是^これ即^{すなわ}ち小^{さんさい}の三災^{ついで}の序^{ついで}なり。

しかるに日蓮^{にちれん}が一^{いち}るいいかなる過去^{かこ}の宿^{しゆく}しうにや法華^{ほけきやう}經^{だいまく}の題目^{だいまく}のだんな

となり給^{たま}うらん、是^{これ}をもつてをぼしめせ今^{こん}梵天^{ぼんてん}・帝釈^{たいしやく}・日月^{にちがつ}・四天^{してん}・

天照^{てんしょう}太神^{だいじん}

・八幡^{はちまん}大菩薩^{だいぼさつ}日本^{にほん}国の三千^{さんぜん}一百^{ひゃく}三十二^{さんじふに}社の大小^{だうしやう}のじんぎは過去^{かこ}

の輪陀^{りんだ}王^{おう}のごとし、

白馬^{はくば}は日蓮^{にちれん}なり白鳥^{いちもん}は我^{われ}らが一門^{いちもん}なり白馬^{はくば}のなくは我^{われ}等^ら

が南無^{なむ}妙法蓮華^{みょうほうれんげきやう}經^{きやう}のこえなり、此^この声をきかせ給^{たま}う梵天^{ぼんてん}・帝釈^{たいしやく}・日月^{にちがつ}・

四天^{してん}等^らいかでか色をましひかりをさかんになし給^{たま}はざるべき、いかでか我^{われ}等^ら

を守護^{しゆご}し給^{たま}はざるべきとつよづよと・をぼしめすべし。

抑^{おさ}貴^き辺^{へん}の去^いぬる三月^{ぶつじ}の御^が仏^{もくそ}事^そに驚^{おどろ}目^め其^{その}の数^{かず}有^ありしかば今年^{ことし}一百^{ひゃく}よ人の

抑^{おさ}貴^き辺^{へん}の去^いぬる三月^{ぶつじ}の御^が仏^{もくそ}事^そに驚^{おどろ}目^め其^{その}の数^{かず}有^ありしかば今年^{ことし}一百^{ひゃく}よ人の

人を山中にやしなひて十二時の法華經をよましめ談義して候ぞ、此れらは
まつだいあくせ
末代悪世には一えんぶだい第一の仏事にてこそ候へ、いくそばくか過去の
しよりよう
聖靈 もうれしくをぼすらん、釈尊は孝養の人を世尊となづけ給へり貴辺
せそん
あに世尊にあらずや、故大進阿闍梨の事なげかしく候へども此れ又法華經
るふ しゅったい
の流布の出来すべきいんえんにてや候らんと・をぼしめすべし、事事命な
がらへば其の時申すべし。
そのときもう

弘安二年己卯八月十七日 日蓮花押
こうあん つちのとう にちれんかおう

曾谷道宗御返事
そや ごへんじ

◆一六七 曾谷二郎入道殿御返事
いぬ ぶつぼう しょうそく みそかとうらい そや にゅうどう ごへんじ

1065p

去る七月十九日の消息、同三十日到来す、世間の事は且らく之を置く、
専ら仏法に逆ふこと法華經の第二に云く「其人命終入阿鼻獄」等云云、問
て云く、其の人とは、何等の人を指すや、答て云く、次上に云く「唯我一
なんら

人・能為救護・雖復教詔・而不信受」と、又云く「若人不信」と、又云

く「・或復顰蹙」と、又云く「見有読誦書持經者・輕賤憎嫉・而懷結恨」

と、又第五に云く「生疑不信者・即当墮惡道」と、第八に云く「若有人輕

毀之言・汝狂人耳・空作是行終無所獲」等云云、「其人」とは、此れ等の人人

を指すなり、彼の震旦国の天台大師は、南北十師等を指すなり、此の日本國

の伝教大師は、六宗の人人と定めたるなり、今日蓮は弘法・慈覺・智証等

の三大師、並に三階・道綽・善導等を指して其の人と云ふなり、入阿鼻獄と

は、涅槃經第十九に云く「仮使ひとり人独り是の獄に墮ち、其の身長大にし

て八万由延なり、其の中間に☆満して空しき処無し、其の身周匝して種種

の苦を受く設ひ多人有て、身亦☆満すとも相い妨碍せず」、同三十六に云

く「沈没して阿鼻地獄に在て、受くる所の身形・縦広八万四千由旬ならん」

等云云、普賢經に云く「方等經を謗ずる是の大惡報惡道に墮すべきこと暴雨

にも過ぎ必定して当に阿鼻地獄に墮つべし」等とは、阿鼻獄に入る文なり。

日蓮云く、夫れ日本国は、道は七、国は六十八箇国、郡は六百四、郷は

一万余、長さは三千五百八十七里、人数は四十五億八万九千六百五十九人、

或は云く四十九億九万四千八百二十八人なり、寺は一万一千三十七所、

社は三千一百三十二社なり、今法華經の「入阿鼻獄」とは、此れ等の人人

を指すなり、問て云く、衆生に於て悪人善人の二類有り、生処も又善惡の

二道有るべし、何ぞ日本国の一切衆生、一同に入阿鼻獄の者と定むるや、

答て云く、人数多しと雖も業を造ることは是れ一なり、故に同じく阿鼻獄と

定むるなり。

疑て云く日本国の一切衆生の中に、或は善人・或は悪人あり善人とは

五戒・十戒、乃至二百五十戒等なり、悪人とは、殺生・偷盜、乃至五逆・十惡

等是なり、何ぞ一業と云ふや、答て云く、夫れ小善・小惡は異なりと雖も、

ほけきよう

法華經の誹謗に於ては、善人悪人・智者愚者、俱に妨げ之れ無し、是の故に

同じく入阿鼻獄と云ふなり、問て云く、何を以てか日本国の一切衆生を、

一同に法華誹謗の者と言ふや、答て云く、日本国の一切衆生衆多なりと雖

も四十五億八万九千六百五十九人に過ぎず、此等の人人貴賤上下の勝劣有

りと雖も是くの如きの人人の憑む所は唯三大師に在り師とする所三大師を

離る事無し余殘の者有りと雖も信行・善導等の家を出ずべからざるなり、問

て云く三大師とは誰人ぞや、答て曰く、弘法・慈覚・智証の三大師なり、疑

て云く此の三大師は何なる重科有るに依て、日本国の一切衆生於經文の

其の人の内に入るや、答て云く、此の三大師は大小乘持戒の人、面には

八万の威儀を備へ、或は三千等之を具す、顯密兼学の智者なり、然れば

則ち、日本国四百余年の間、上一人より下万民に至るまで、之を仰ぐこと

日月の如く、之を尊むこと世尊の如し、猶徳の高きこと須弥にも超え、智

惠の深きことは蒼海にも過ぎたるが如し但恨むらくは法華經を大日真言經に相對して勝劣を判ずる時は・或は戲論の法と云ひ・或は第二第三と云ひ、或は教主を無明の辺域と名け・或は行者をば盜人と名く彼の大莊嚴仙の末の六百四萬億那由佗の四衆の如き、各各の業因異りと雖も、師の苦岸等の四人と俱に同じく無間地獄に入りぬ、又師子音王仙の末法の無量無辺の弟子等の中にも貴賤の異有りと雖も同じく勝意が弟子と為るが故に一同に阿鼻大城に墮ちぬ今日本國亦復是くの如し。

去る延曆弘仁年中、伝教大師六宗の弟子檀那等を呵責する語に云く「其の師の墮つる所弟子亦墮つ、弟子の墮つる所檀越亦墮つ、金口の明説慎まざるべけんや、慎まざるべけんや」等云云、疑て云く、汝が分齊何を以て三大師を破するや、答て云く、予は敢て彼の三大師を破せざるなり、問て云く、汝が上の義は如何、答て云く、月氏より漢土本朝に渡る所の

きようろん

経論は五千七十余卷なり、予粗之を見るに、弘法・慈覚・智証に於ては、世間

の科は且く之を置く、仏法に入ては、謗法第一の人人と申すなり、大乘を

誹謗する者は、箭を射るより早く地獄に墮すとは如来の金言なり、将又

謗法罪の深重は弘法・慈覚等一同定め給ひ畢ぬ、人の語は且く之を置く、

釈迦・多宝の二仏の金言虚妄ならずんば、弘法・慈覚・智証に於ては定めて

無間・大城に入らん、十方分身の諸仏の舌墮落せずんば、日本国中の四

十五億八万九千六百五十九人の一切衆生は、彼の苦岸等の弟子檀那等の

如く阿鼻地獄に墮て熱鉄の上に於て仰ぎ臥して九百万億歳伏臥して九百万

億歳・左脇に臥して九百万億歳・右脇に臥して九百万億歳、是くの如く熱

鉄の上に在て三千六百万億歳なり、然して後、此の阿鼻より転じて他方に

生れて大地獄に在て、無数百千万億那由佗歳大苦惱を受けん、彼は小乗經

を以て権大乘を破せしも、罪を受くることは是くの如し、況や今三大師は

未顕真実の經を以て、三世の仏陀の本懷の説を破するのみに非ず、剩さえ
一切衆生成仏の道を失ふ、深重の罪は、過・現・未來の諸仏も、争か之
を窮むべけんや、争か之を救ふべけんや。

法華經の第四に云く「已說今說當說 而於其中此法華經 最為難信難解」、

又云く「最在其上」、並に「藥王十喻」等云云、他經に於ては、華嚴・方等

・般若・深密・大雲・密嚴・金光明經等の諸教の中に、經經の勝劣之を説

くと雖も、或は小乘經に對して此の經を第一と曰ひ、或は真俗二諦に

對して中道を第一と曰ひ、或は印真言等を説くを以て第一と為す、此等

の説有りと雖も、全く已今當の第一に非ざるなり、然而るに末の論師人師

等、謬執の年積り、門徒又繁多なり。

爰に日蓮彼の依經に無きの由を責むる間、弥よ瞋恚を懷て是非を

糾明せず唯大妄語を構へて國主・國人等を誑惑し、日蓮を損ぜんと欲す、

衆千の難を蒙らしむるのみに非ず兩度の流罪剝へ頸の座に及ぶ是なり、

此等の大難忍び難き事不輕の杖木にも過ぎ、將又勸持の刀杖にも越えたり、

又法師品の如きは「末代に法華經を弘通せん者は、如来の使なり此の人を

輕賤するの輩の罪は、教主釈尊を一中劫蔑如するに過ぎたり」等云云、

今日日本国には提婆達多・大慢婆羅門等が如く無間地獄に墮つべき罪人、國中

三千五百八十七里の間に、満つる所の四十五億八万九千六百五十九人の

衆生之れ有り彼の提婆・大慢等の無極の重罪を、此の日本国四十五億八万

九千六百五十九人に対せば、輕罪中の輕罪なり問ふ其の理如何答ふ彼等は、

惡人爲りと雖も全く法華を誹謗する者には非ざるなり又提婆達多是恒河第

二の人にして第二に一闡提なり今日日本国四十五億八万九千六百五十九人は

皆恒河第一の罪人なり、然れば則ち提婆が三逆罪は輕毛の如し日本国の上

に拳ぐる所の人人の重罪は猶大石の如し定めて梵釈も日本国を捨て同生

同名も國中の人を離れ、てんしやうだいじん はちまんだいぼさつ天照太神・八幡大菩薩も争か此の国を守護せん。

去る治承等の八十一・二・三・四・五代の五人の大王と頼朝・義時と此の国を御

諍あらそひ有て天子てんしと民との合戦なり猶鷹駿やうしゆんと金鳥こんちやうとの勝負しやうぶの如くなれば、

てんしよりとも

天子頼朝等に勝たんこと必定なり、決定けつじやうなり、然りと雖も五人の大王は負

け畢ぬ、兎しし、師子王に勝ちしなり、負くるのみに非ず、剩へ・或あるは蒼海に

沈み、・或あるは島島に放たれ、誹謗法華未だ年歳を積まざる時、猶以て

是かくのごとくの如し、今度は彼このたびに似るべからず、彼は但國中の災わざわい許りなり、其そのゆえの故

は粗之を見るに、蒙古もうこの牒状已前に、去る正嘉・文永等の大地震・大彗星の

告よつてげに依て、再三之を奏すと雖も、国主敢て信用無し、然るに日蓮にちれんが勸文

粗ぶつ仏意に叶ふかの故に、此の合戦既に興盛なり、此の国の人人ひとびと今生には一

同に修羅道しゆらどうに墮だし、後生ごしやうには皆阿鼻大城みなあびだいじやうに入らん事、疑うたがいひ無き者なり。

爰きへんに貴辺にちれんと日蓮とは師檀しだんの一分なり、然りと雖も、有漏うろの依身こくしゆは国主に

随ふが故に、此の難に値はんと欲するか、感涙押へ難し、何れの代にか対面
を遂げんや、唯一心に靈山淨土を期せらるべきか、設ひ身は此の難に値ふ
とも、心は仏心に同じ、今生は修羅道に交はるとも、後生は必ず仏国に居
せん、恐恐謹言。

弘安四年閏七月一日

日蓮 花押

曾谷二郎入道殿御返事

◆一六八 秋元殿御返事

文永八年正月 五十歳御作 1070p

於安房保田

御文委く承り候い畢んぬ、御文に云く末法の始・五百年には・いかなる

法を弘むべしと思ひまいらせ候しに聖人の仰を承り候に法華經の題目に限

つて弘むべき山・聴聞申して御弟子の一分に定まり候、殊に五節供はいか

なる由来・何なる所表・何を以て正意として・まつり候べく候や云云、夫れ

此の事は日蓮委しく知る事なし、然りと雖も粗意得て侯、根本大師の御
相承ありげに侯、総じて真言・天台兩宗の習なり、委くは曾谷殿へ申侯
次での御時は御談合あるべきか、先ず五節供の次第を案ずるに妙法蓮華經
の五字の次第の祭なり、正月は妙の一字のまつり天照太神を歳の神とす、
三月三日は法の一字のまつりなり辰を以て神とす、五月五日は蓮の一字の
まつりなり午を以て神とす、七月七日は華の一字の祭なり申を以て神とす、
九月九日は經の一字のまつり戌を以て神とす、此くの如く心得て南無
妙法蓮華經と唱へさせ給へ現世安穩・後生善処疑なかるべし、法華經の
行者をば一切の諸天・不退に守護すべき經文分明なり、經の第五に云く
「諸天昼夜に常に法の為の故に而も之を衛護す」云云、又云く「天の諸の童子
以て給使を為し刀杖も加えず毒も害する能わず」云云、諸天とは梵天・
帝釈・日月・四大天王等なり、法とは法華經なり、童子とは七曜・二十八

宿・摩利支天等なり、「臨兵闘者皆陳列在前」是又「刀杖不加」の四字なり、此等は随分の相伝なり能く能く案じ給うべし、第六に云く「一切世間の治生産業は皆実相と相違背せず」云云、五節供の時も唯南無妙法蓮華經と唱へて悉地成就せしめ給へ、委細は又又申す可く候。

次に法華經は末法の始め五百年に弘まり給ふべきと聴聞仕り御弟子とな

ると仰せ候事、師檀となる事は三世の契り種熟脱の三益別に人を求めんや、

「在在諸の仏土常に師と俱に生れん若し法師に親近せば速かに菩提の道を

得ん、是の師に随順して学ばば恒沙の仏を見奉る事を得ん」との金言違ふ

べきや、提婆品に云ふ「所生の処常に此の經を聞くしの人はあに貴辺に

あらずや、其の故は次上に「未来世中・若有善男子・善女人」と見えたり、

善男子とは法華經を持つ俗の事なり 信心をいたし給うべし、信心をい

たし給うべし、 恐恐 謹言。

正月十一日

日蓮花押
にちれんかおう

秋元殿御返事
ごへんじ

保国 安房のほたへ保田より出す
あわ いだ

◆一六九 秋元御書
ごしよ

弘安三年一月 五十九歳御作 於身延 1071p
こうあん

筒御器一具付三十並に蓋付六十送り給ひ候い畢んぬ、御器と申すはうつ
つづき
はものと読み候、大地くぼければ水たまる青天淨ければ月澄めり、月出で
だいち
ぬれば水淨し雨降れば草木昌へたり、器は大地のくぼきが如し水たまるは
そうもくさか
池に水の入るが如し、月の影を浮ぶるは法華經の我等が身に入らせ給うが
ごと
如し、器に四の失あり一には覆と申してうつぶけるなり又はくつがへす又
おほ
は蓋をおほふなり、二には漏と申して水もるなり、三には☆と申してけが
けだ
れたるなり水淨けれども糞の入りたる器の水をば用ゆる事なし、四には糞
もち
なり・飯に・或は糞・或は石・或は沙・或は土などを糺へぬれば人食ふ
ある
ある
ある
ある
まし

事なし、器は我等が身心を表す、我等が心は器の如し口も器・耳も器なり、
法華經と申すは仏の智慧の法水を我等が心に入れぬれば・或は打ち返し
・或は耳に聞かじと左右の手を二つの耳に覆ひ・或は口に唱へじと吐き出
しぬ、譬えば器を覆するが如し、・或は少し信ずる様なれども又惡縁に値う
て信心うすくなり・或は打ち捨て・或は信ずる日はあれども捨つる月もあ
り是は水の漏が如し、・或は法華經を行ずる人の一口は南無妙法蓮華經一
口は南無阿彌陀仏なんど申すは飯に糞を雜へ沙石を入れたるが如し、法華經
の文に「但大乘經典を受持することを樂うて乃至余經の一偈をも受けざ
れ」等と説くは是なり、世間の学匠は法華經に余行を雜えても苦しからず
と思へり、日蓮もさこそ思ひ候へども經文は爾らず、譬えば后の大王の
種子を妊めるが又民とつげば王種と民種と雜りて天の加護と氏神の守護
とに捨てられ其の國破るる縁となる、父二人出来れば王にもあらず民にも

あらず人非人なり、法華經の大事と申すは是なり、種熟脱の法門法華經の

かんじん さんぜじゅつぽう

肝心なり、三世十方の仏は必ず妙法蓮華經の五字を種として仏になり給へ

り、南無阿弥陀仏は仏種にはあらず真言五戒等も種ならず、能く能く此の

事を習い給べし是は雜なり、此の覆・漏・☆・雜の四の失を離れて候器を

なら かんき もう

ば完器と申して・またき器なり、墮つつみ漏らざれば水失る事なし、信心

のこころ全ければ平等大慧の智水乾く事なし、今・此の筒の御器は固く

厚く候上・漆淨く候へば法華經の御信力の堅固なる事を顕し給うか、

うるし びしゃもんでん

毘沙門天は仏に四つの鉢を進らせて四天下第一の福天と云はれ給ふ、

淨徳夫人は雲雷音王仏に八万四千の鉢を供養し進らせて妙音菩薩と成り

たま ほうきよう つつこき

給ふ、今法華經に筒御器三十蓋六十進らせて争か仏に成らせ給はざるべき。

そもそものにほんこく もう

抑日本国と申すは十の名あり扶桑・野馬台・水穂・秋津洲等なり、別

しては六十六箇国島二つ長さ三千余里広さは不定なり、・或は百里・或は

五百里等、五畿・七道・郡は五百八十六・郷は三千七百二十九・田の代は
上田一万一千一百二十町・乃至八十八万五千五百六十七町・人数は四十九
億八万九千六百五十八人なり、神社は三千一百三十二・社寺は一万一千三
十七所・男は十九億九万四千八百二十八人・女は二十九億九万四千八百三
十人なり、其の男の中に只日蓮第一の者なり、何事の第一とならば男女に
悪まれたる第一の者なり、其の故は日本国に国多く人多しと云へども其の
心一同に南無阿弥陀仏を口ずさみとす、阿弥陀仏を本尊とし九方を嫌いて
西方を願う、設い法華經を行ずる人も真言を行ふ人も、戒を持つ者も智者
も愚人も余行を傍として念仏を正とし罪を消さん 謀は名号なり、故に
・或は六万・八万・四十八万返・或は十返・百返・千返なり、而るを日蓮
一人・阿弥陀仏は無間の業・禅宗は天魔の所為・真言は亡国の惡法・
律宗・持斎等は国賊なりと申す故に上一人より下万民に至るまで父母の敵

宿世すくせの敵謀叛むほん夜討強盜あるよりも・或畏れ・或は瞋いかり・或は詈のり・或は打つ、
是これを☆る者には所領しりょうを与へ是これを讃ほむる者をば其その内を出だし・或は過料あるを
引かせ殺害さつがいしたる者をば褒美ほうびなんどせらるる上兩度まで御勘氣ごかんきを蒙こうむれり、
とうせだいいち 當世第一ふしぎの不思議ふしぎの者たるのみならず人王九十代仏法渡りては七百余年な
れども・かかる不思議ふしぎの者なし、日蓮にちれんは文永ぶんえいの大彗星すいせいの如ごとし日本国にほんこくに昔よ
り無き天変てんぺんなり、日蓮にちれんは正嘉しょうかの大地震だいじしんの如ごとし秋津洲ちように始めての地天ちようなり、
日本国にほんこくに代始まりてより已すでに謀叛むほんの者二十六人・第一だいいちは大山みこの王子・第二
は大石なの山丸ないし・乃至第二十五人よりともは頼朝よりとも第二十六人よしときは義時よしときなり、二十四人は
朝あしたは責められ奉り獄門たてまつこくに首かを懸けられ山野かばねに骸さを曝す、二人は王位さを傾
むけ奉り国中たてまつを手に拳にぎる王法すで既に尽きぬ、此等これらの人人ひとびとも日蓮にちれんが万人ばんにんに悪にくま
るるに過ぎず、其その由よしを尋たずぬれば法華經ほけきようには最第一さいだいいちの文あり、然しかるを弘法こうぼう
大師だいしは法華最第三ほっけ・慈覺大師じかくだいしは法華最第二ほっけ・智証大師ちしょうだいしは慈覺じかくの如ごとし、今叡山えいざん

・東寺・園城寺の諸僧・法華經に向いては法華最第一と読めども其の義を
ば第二・第三と読むなり、公家と武家とは子細は知るしめさねども御歸依
の高僧等皆此の義なれば師檀一同の義なり、其の外禪宗は教外別伝と云云
・法華經を蔑如する言なり、念仏宗は千中無一・未有一人得者と申す心は
法華經を念仏に對して挙げて失ふ義なり、律宗は小乘なり正法の時す
ら仏免し給う事なし況や末法に是を行じて国主を誑惑し奉るをや、妲己・
妹喜・褒似の三女が三王を誑らかして代を失いが如し、かかる惡法國に
流布して法華經を失う故に安德・尊成等の大王・天照太神・正八幡に捨
てられ給いて・或は海に沈み・或は島に放たれ給い相伝の所従等に傾けら
れ給いしは天に捨てられさせ給う故ぞかし、法華經の御敵を御歸依有りし
かども是を知る人なければ其の失を知る事もなし、「知人は起を知り蛇は
自ら蛇を識る」とは是なり。

にちれん ちじん あら
日蓮は智人に非ざれども蛇は竜の心を知り烏の世の吉凶を計るが如し、
此の事計りを勘へ得て候なり、此の事を申すならば須臾に失に当るべし申さ
ずば又大阿鼻地獄に墮つべし。

ほけきよう なら
法華經を習うには三の義あり一には謗人、勝意比丘・苦岸比丘・無垢論師
・大慢婆羅門等が如し、彼等は三衣を身に纏い一鉢を眼に当てて二百五十
戒を堅く持ちて而も大乘の讎敵と成りて無間・大城に墮ちにき、今・
にほんこく こうぼう じかく ちしよう じかい かけら ごと ちえ びく
日本国の弘法・慈覚・智証等は持戒は彼等が如く智慧は又彼比丘に異なら
ず、但大日經・真言第一・法華經第二・第三と申す事百千に一つも日蓮が
申す様ならば無間・大城にやおはすらん、此の事は申すも恐れあり増して
書き付くるまでは如何と思ひ候へども法華經最第一と説かれて候に是を二
三等と読まん人を聞いて人を恐れ国を恐れて申さずば即是彼怨と申して
一切衆生の大怨敵なるべき由・經と釈とにのせられて候へば申し候なり、

人を恐れず世を憚はばからず云う事我不愛身命がふあいしんみょう但惜無上道たんしやくむじょうどうと申すは是なり、
不輕菩薩ふぎようぼさつの悪口杖石あくくそうせきも他事たじに非ず世間あらしを恐れざるに非ず唯法華經ただほけきょうの責めの
ねんころ
苦なればなり、例せば祐成すけなり・時宗が大将殿の陣の内を簡えらばざりしは敵の
恋しく恥はじの悲しかりし故ぞかし、此れは謗人ほうじんなり。

謗家もうと申すは都すて一期の間いちよ・法華經を謗せず昼夜十二時に行ずれども謗
家に生れぬれば必ず無間地獄むげんじごくに墮おつ、例せば勝意比丘しょういびく・苦岸比丘くがんびくの家に生
まれて・或あるは弟子でしとなり・或あるは檀那だんなと成りし者共が心ならず無間地獄むげんじごくに
墮おちたる是これなり、譬たとえば義盛が方の者・軍をせし者はさて置きぬ腹の内に
有りし子も産を待たれず母の腹を裂かれしが如ごとし、今日蓮いまにちれんが申す弘法こうぼう・慈覺じかく
・智証ちしょうの三大師だいしの法華經ほけきょうを正まさしく無明むみょうの辺域へんいき・虚妄こもうの法と書かれて候は
も
若もし法華經ほけきょうの文実えいざんならば叡山えいざん・東寺とうじ・園城寺おんじょう七大寺おんなだいにほん日本一万一千三十七所
の寺寺の僧いかんは如何そうらが候はんずらん、先例せんれいの如くならば無間むげん・大城だいじょう疑無うたがいし、

こ
是れは謗家なり。

謗国と申すは謗法の者・其の国に住すれば其の一国・皆無間・大城になるなり、大海へは一切の水集り其の国は一切の禍集まる、譬えば山に草木の滋きが如し、三災月月に重なり七難日日に来る、飢渴発れば其の国餓鬼道と変じ疫病重なれば其の国地獄道となる軍起れば其の国修羅道と変ず、ふぼ・きようだい父母・兄弟姉妹をば簡ず妻とし夫と憑めば其の国畜生道となる、死して三悪道に墮つるにはあらず現身に其の国四悪道と変ずるなり、此れを謗国と申す。

例せば大莊嚴仏の末法師子音王仏の濁世の人人の如し、又報恩經に説かれて候が如くんば過去せる父母・兄弟姉妹一切の人死せるを食し又生たるを食す、今・日本国亦復是くの如し真言師・禪宗持齋等人を食する者・国中に充滿せり、是偏に真言の邪法より事起れり、竜象房が人を食いしは

万が一あらわ顛れたるなり、彼に習かしこいて人の肉を・或は猪鹿ちよろくに交へ・或は魚鳥あるに切り雑まじへ・或はたたき加へ・或はすしとして売る、食する者数を知らず皆天に捨てられ守護しゅごの善神ぜんじんに放されたるが故なり、結句けっくは此の国・他国たこくより責められ自国とし打ちして此の国變じて無間地獄むげんじごくと成るべし、日蓮にちれん此の大なる失を兼て見し故に与同罪の失を脱とがれんが為め仏の呵責かしやくを思う故に知恩ちおん報恩ほうおんの為め国の恩を報ぜんと思こくしゆいて国主並に一切衆生に告げ知らしめしなり。

不殺生戒ふざつしようかいと申すは一切の諸戒しよの中の第一だいいちなり、五戒ごかいの初めにも不殺生戒ふざつしようかい八戒・十戒・二百五十戒・五百戒・梵網ぼんもうきようの十重禁戒じゅうじん・華嚴けこんの十無尽戒むじん・瓔珞經ようらくの十戒等の初めには皆不殺生戒なり、儒家の三千の禁の中にも大辟たいへきこそ第一だいいちにて候へ、其の故は「☆満三千界・無有直身命しんみょう」と申して三千世界さんぜんせかいに満ちんぽうつる珍ちんぽう宝なれども命に替かわる事はなし、蟻あり子を殺す者尚地獄なおいごくに墮おつ況や

魚鳥等をや青草を切る者猶地獄に墮つ況や死骸を切る者をや、是くの如き
重戒なれども法華經の敵に成れば此れを害するは第一の功德と説き給うな
り、況や供養を展ぶ可けんや、故に仙予國王は五百人の法師を殺し覺徳比丘
は無量の謗法の者を殺し阿育大王は十万八千の外道を殺し給いき、此等の
國王比丘等は閻浮第一の賢王持戒第一の智者なり、仙予國王は釈迦仏覺徳
比丘は迦葉仏阿育大王は得道の仁なり、今・日本国も又是くの如し持戒・
破戒・無戒王臣万民を論ぜず一同に法華經誹謗の国なり、設い身の皮をは
ぎて法華經を書き奉り肉を積んで供養し給うとも必ず国も滅び身も地獄に
墮ち給うべき大なる科あり、唯真言宗・念仏宗・禅宗持斎等を禁めて身
を法華經によせよ、天台の六十卷を空に浮べて国主等には智人と思われた
る人人の・或は智の及ばざるか、或は知れども世を恐るるかの故に・或
は真言宗をほめ、或は念仏・禅・律等に同ずれば彼等が大科には百千超え

て候、例せば成良義村等が如し、慈恩大師は玄賛十巻を造りて法華經を讀め
て地獄に墮つ、此の人は太宗皇帝の御師玄奘三蔵の上足十一面觀音の後身
と申すぞかし、音は法華經に似たれども心は爾前の經に同ずる故なり、
嘉祥大師は法華玄十巻を造りて既に無間地獄に墮つべかりしが法華經を讀
む事を打ち捨てて天台大師に仕えしかば地獄の苦を脱れ給いき、今法華宗
の人人も又是くの如し、比叡山は法華經の御住所日本国は一乗の御所領
なり、而るを慈覺大師は法華經の座主を奪い取りて真言の座主となし三千
の大衆も又其の所従と成りぬ、弘法大師は法華宗の檀那にて御坐ます嵯峨
の天皇を奪い取りて内裏を真言宗の寺と成せり、安徳天皇は明雲座主を師
として頼朝の朝臣を調伏せさせ給いし程に、右大將殿に罰せらるるのみな
らず安徳は西海に沈み明雲は義仲に殺され給いき、尊成王は天台座主・
慈円僧正東寺御室並に四十一人の高僧等を請下し奉り内裏に大壇を立て

て義時右京の権の大夫殿を調伏せし程に、七日と申せし六月十四日に洛陽らくよう破れて王は隱岐の国・或は佐渡の島に遷され座主御室は・或は責められ
・或は思い死に死に給いき、世間の人人・此の根源を知る事なし此れ偏に
法華經・大日經の勝劣に迷える故なり、今も又日本国大蒙古国の責を得
て彼の不吉の法を以て御調伏を行わると承わる又日記分明なり、此の事
を知らん人争か歎かざるべき。

悲いかな我等誹謗正法の国に生れて大苦に値はん事よ、設い謗身は脱る
と云うとも謗家謗国の失如何せん、謗家の失を脱れんと思はば父母・兄弟
等に此の事を語り申せ、・或は悪まるるか・或は信ぜさせまいらするか、
謗国の失を脱れんと思はば国主を諫曉し奉りて死罪か流罪かに行わるべき
なり、我不愛身命但惜無上道と説かれ身軽法重・死身弘法と釈せられし
是なり、過去遠遠劫より今に仏に成らざりける事は加様の事に恐れて云い

事此にも過ぎて候と思食せ、常に仏禁しめて言く何なる持戒智慧高く御坐し
て一切經並に法華經を進退せる人なりとも法華經の敵を見て責め罵り国主
にも申さず人を恐れて黙止するならば必ず無間・大城に墮つべし、譬え
ば我は謀叛を發さねども謀叛の者を知りて国主にも申さねば与同罪は彼の
謀叛の者の如し、南岳大師の云く「法華經の讎を見て呵責せざる者は謗法
の者なり無間地獄の上に墮ちん」と、見て申さぬ大智者は無間の底に墮ち
て彼の地獄の有らん限りは出ずべからず、日蓮此の禁めを恐るる故に國中
を責めて候程に一度ならず流罪・死罪に及びぬ、今は罪も消え過も脱れな
んと思ひて鎌倉を去りて此の山に入つて七年なり。

此の山の為 体日本国の中には七道あり七道の内に東海道十五箇国、其の
内に甲州・飯野・御牧・波木井の三箇郷の内波木井と申す、此の郷の内戊亥
の方に入りて二十余里の深山あり、北は身延山・南は鷹取山・西は七面山

・東は天子山なり、板を四枚つい立てたるが如し、此の外を回りて四つの河あり北より南へ富士河・西より東へ早河此れは後なり、前に西より東へ波木井河の内に一つの滝あり身延河と名けたり、中天竺の鷲峰山を此の処へ移せるか将又漢土の天台山の来れるかと覚ゆ、此の四山四河の中に手の広さ程の平かなる処あり、爰に庵室を結んで天雨を脱れ木の皮をはぎて四壁とし、自死の鹿の皮を衣とし、春は蕨を折りて身を養ひ秋は果を拾いて命を支へ候つる程に、去年十一月より雪降り積て改年の正月今に絶る事なし、庵室は七尺・雪は一丈・四壁は氷を壁とし軒のつらは道場莊嚴の瓔珞の玉に似たり、内には雪を米と積む、本より人も来らぬ上雪深くして道塞がり問う人もなき処なれば現在に八寒地獄の業を身につくのへり、生きながら仏には成らずして又寒苦鳥と申す鳥にも相似たり、頭は剃る事なければうつらの如し、衣は氷にとぢられて鶯鶯の羽を氷の結べるが如し、

かかる処へは古へ昵びし人も問わず弟子等にも捨てられて候いつるに此の御器を給いて雪を盛りて飯と観じ水を飲んでこんずと思う、志のゆく所
・思い遣らせ給へ又又申すべく候、恐恐謹言。

弘安三年正月二十七日

日蓮花押

秋元太郎兵衛殿御返事

◆一七〇 兄弟抄 文永十二年四月 五十四歳御作 1079p

与池上兄弟 於身延

夫れ法華經と申すは八万法蔵の肝心十二部經の骨髓なり、三世の諸仏は此の經を師として正覺を成じ十方の仏陀は一乗を眼目として衆生を引導し給ふ、今現に經蔵に入つて此を見るに後漢の永平より唐の末に至るまで渡れる所の一切經論に二本あり、所謂旧訳の經は五千四十八卷なり、新訳の經は七千三百九十九卷なり、彼の一切經は皆各各分分に随つて我

だいいち

第一なりとなのれり、しかるにほけきよう然而法華經と彼の經經きようぎようとを引き合せて之を見るに

しょうれつてんち

勝劣天地なり高下雲泥なり、彼の經經きようぎようは衆星しゅうせいの如く法華經は月の如しごと

きようぎよう

彼の經經は燈炬・星月の如く法華經は大日輪の如し此れは總なり。

きようもん

別して經文に入つて此れを見奉れば二十の大事あり、第一第二の大事は

さんぜんじんてんこうこひやくじんでんこう

三千塵点劫五百塵点劫と申す二つの法門なり、其三千塵点と申すは第三の

けじようゆほん

卷化城喩品と申す処に出でて候、此の三千大千世界を抹して塵となし東方

きようもん

に向つて千の三千大千世界を過ぎて一塵を下し又千の三千大千世界を過ぎ

いちじん

て一塵を下し此くの如く三千大千世界の塵を下はてぬ、さてかえつて下せ

さんぜんだいいせんせかい

る三千大千世界と下さざる三千大千世界をともおしふさねて又塵となし、

もろもろちり

此の諸の塵をもてならべをきて一塵を一劫として經尽しては、又始め又始

しよちり

めかくのごとく上の諸塵の尽し經たるを三千塵点とは申すなり、今三周の

しよもん

声聞と申して舍利弗・迦葉・阿難・羅云など申す人人は過去遠遠劫・

さんぜんじんてんこう

だいつうちしょうぶつ

みこ

三千塵点劫のそのかみ大通智勝仏と申せし仏の第十六の王子にてををせし

菩薩ましましき、かの菩薩より法華經を習いけるが悪縁にすかされて法華經

を捨つる心つきにけり、かくして・或は華嚴經へをち・或は般若經へをち

・或は大集經へをち・或は涅槃經へをち・或は大日經・或は深密經・或

は觀經等へをち・或は阿含・小乘經へをちなんどしけるほどに次第に

墮ちゆきて後には人天の善根・後に惡にをちぬ、かくのごとく墮ちゆく程

に三千塵点劫が間、多分は無間地獄少分は七大地獄たまたまには一百余の

地獄まれには餓鬼・畜生・修羅なんどに生れ大塵点劫なんどを経て人天に

は生れ候けり。

されば法華經の第二の卷に云く「常に地獄に処すること園觀に遊ぶが如く

余の惡道に在ること己が舍宅の如し」等云云、十惡をつくる人は等活黑繩

なんど申す地獄に墮ちて五百生・或は一千歳を経、五逆をつくれる人は

無間地獄に墮ちて一中劫を経て後は又かへりて生ず、いかなる事にや候ら
ん法華經をすつる人はすつる時はさしも父母を殺すなどのやうにをびた
だしくはみへ候はねども無間地獄に墮ちては多劫を経候、設父母を一人・
二人

十人・百人・千人・万人・十万人・百万人・億万人など殺して候ともい

かんが三千塵点劫をば經候べき、一仏・二仏・十仏・百仏・千仏・万仏・

乃至・億万仏を殺したりともいかんが五百塵点劫をば經候べき、しかるに

法華經をすて候いけるつみによりて三周の声聞が三千塵点劫を経諸大菩薩

の五百塵点劫を経候けることをびただしくをばへ候、せんするところは・

をもつて虚空を打てばくぶしいたからず石を打てばくぶしいたし、悪人を

殺すは罪あさし善人を殺すは罪ふかし・或は他人を殺すは☆をもつて泥を

打つがごとし父母を殺すは☆をもつて石を打つがごとし、鹿をほうる犬は

頭くうへわれず師子ししを吠る犬は腸はらわたくさる日月にちがつをのむ修羅しゆらは頭くうへ七分にわれ仏を
打ちだいばし提婆だいちは大地ほけきようわれて入りにき、所対しよたいによりて罪つみの輕重けいちようはありけるなり。
さればこの法華經ほけきようは一切いっさいの諸仏しよぶつの眼目がんもく教主きよくしやくそん釈尊ほんしの本師ほんしなり、一字一点
もすつる人あれば千万ふほの父母ふぼを殺せる罪つみにもすぎ十方じゆつぽうの仏の身より血を
出いだす罪つみにもこへて候けるゆへに三五じんでんの塵点へそうらいをば經候けるなり此の法華經ほけきようは
さてをきたてまつりぬ又此の經を經のごとくにとく人に値あうことは難かたきにて
候たとい、設たとい一眼うきぎの龜の浮木あには値うとも・はちすのいとをもつて須弥山しゆみせんをば
虚空こくうにかくとも法華經を經のごとく説く人にあひがたし。

されば慈恩大師じおんだいしと申せし人は玄奘三蔵げんじようさんぞうの御弟子おんでしたいそうこうてい太宗皇帝おんしの御師おんしなり、梵
漢を空にうかべ一切經を胸にたたへ仏舍利しやりを筆のさきより雨ふらし牙より光
を放ち給たまひいし聖人しやうにんなり、時の人も日月にちがつのごとく恭敬きやうけいし後の人も眼目がんもくとこ
そ渴仰かつうせしかども伝教大師でんきやうだいしこれをせめ給たまうには雖讀法華經すいさんほけきよう・還死法華心等げんしほつけ

云云、言は彼の人の心には法華經をほむとをもへども理のさすところは

法華經をころす人になりぬ、善無畏三蔵は月支国うちやうな国の国王なり、

位をすて出家して天竺五十余の国を修行して顕密二道をきわめ、後には

漢土にわたりて玄宗皇帝の御師となる、尸那日本の真言師誰か此人のなが

れにあらざる、かかる・たうとき人なれども一時に頓死して閻魔のせめに

あはせ給う、いかなりける・ゆへとも人しらず。

日蓮此れをかんがへたるに本は法華經の行者なりしが大日經を見て

法華經にまされりといふしゆへなり、されば舍利弗・目連等が三五の塵点

を経しことは十悪・五逆の罪にもあらず謀反・八虐の失にてもあらず、但

悪知識に値うて法華經の信心をやぶりて権經にうつりしゆへなり、

天台大師釈して云く「若し悪友に値えば則ち本心を失う」云云、本心と申す

は法華經を信ずる心なり、失うと申すは法華經の信心を引きかへて余經へ

うつる心なり、されば経文に云く「然与良薬而不肯服」等云云、天台の云く「其の心を失う者は良薬を与うと雖も而かも肯て服せず生死に流浪し他国に逃逝す」云云。

されば法華經を信ずる人のをそるべきものは賊人・強盜・夜打ち虎狼師子等よりも当時の蒙古のせめよりも法華經の行者をなやます人人なり、此の世界は第六天の魔王の所領なり一切衆生は無始已来彼の魔王の眷属なり、六道の中に二十五有と申するうをかまへて一切衆生を入るのみならず妻子と申すほだしをうち父母・主君と申すあみをそらにはり貪・瞋・癡の酒をのませて仏性の本心をたばらかす、但あくのさかなのみをすすめて三悪道の大地に伏臥せしむ、たまたま善の心あれば障碍をなす、法華經を信ずる人をば・いかにもして悪へ墮さんとをもうに叶わざればやうやく・すかさんがために相似せる華嚴經へをとしつ杜順・智儼・法蔵・

ちようかん これ はんによきよう

澄観等はなり、又般若経へすかしをとす悪友は嘉祥僧詮等はなり、又深密

経へすかしをとす悪友は玄奘・慈恩是なり、又大日経へ・すかしをとす

悪友は善無畏・金剛智・不空・弘法・慈覚・智証是なり、又禪宗へすかし

をとす悪友は達磨・慧可等はなり、又観経へすかしをとす悪友は善導・

ほうねんこれ だいりくてん まおう ちしや 法然是なり、此は第六天の魔王が智者の身に入つて善人をたばらかすなり、

ほけきよう あつきそ 法華経第五の巻に「悪鬼其の身に入る」と説かれて候は是なり。

たと とうかく ぼさつ がんぼん むみよう もう あつき 設ひ等覚の菩薩なれども元品の無明と申す大悪鬼身に入つて法華経と

申す妙覚の功德を障へ候なり、何に況んや其の已下の人人にをいてをや、

又第六天の魔王・或は妻子の身に入つて親や夫をたばらかし・或は国王の

身に入つて法華経の行者を・をどし・或は父母の身に入つて孝養の子をせ

むる事あり、悉達太子は位を捨てんとし給いしかば羅☆羅はらまれてをは

しませしを浄飯王此の子生れて後出家し給えといさめられしかば魔が子を

・をさへて六年なり、舍利弗は昔禪多羅仏と申せし仏の末世に菩薩の行を立てて六十劫を経たりき、既に四十劫ちかづきしかば百劫にてあるべかりしを第六天の魔王・菩薩の行の成ぜん事をあぶなしと思ひけん、婆羅門となりて眼を乞ひしかば相違なくとらせたりしかども其より退する心しゅつたい しゃりほつ むりようこう 出来て舍利弗は無量劫が間・無間地獄に堕ちたりしぞかし、大莊嚴仏の末の六百八十億の檀那等は苦岸等の四比丘にたばらかされて普事比丘を怨みてこそ大地微塵劫が間・無間地獄を経しぞかし、師子音王仏の末の男女等は勝意比丘と申せし持戒の僧をたのみて喜根比丘を笑うてこそ無量劫が間地獄に堕ちつれ。

今日蓮が弟子・檀那等は此にあたり、法華経には「如来の現在にすら猶怨嫉多し況や滅度の後をや」又云く「一切世間怨多くして信じ難し」ねはんぎよう いわ よこしま わざわいかか かしゃく めにく べんじよう へいけい きが 涅槃経に云く「横に死殃に羅り呵嘖・罵辱・鞭杖・閉繫・飢餓・困苦・

かくのこと
是くの如き等の現世の輕報を受けて地獄に墮ちず」等云云、般泥・經に云く

「衣服不足にして飲食・疎なり財を求めるに利あらず貧賤の家及び邪見の

家に生れ・或いは王難及び余の種種の人間の苦報に遭う現世に軽く受くる

は斯れ護法の功德力に由る故なり」等云云、文の心は我等過去に正法を行

じける者にあだをなしてありけるが今かへりて信受すれば過去に人を障る

罪にて未来に大地獄に墮つべきが、今生に正法を行ずる功德強盛なれば

未来の大苦をまねぎこして少苦に値うなり、この經文に過去の誹謗により

てやうやうの果報をうくるなかに・或は貧家に生れ・或は邪見の家に生れ

・或は王難に値う等云云、この中に邪見の家と申すは誹謗正法の家なり王

難等と申すは惡王に生れあうなり、此二つの大難は各各の身に當つてをば

へつべし、過去の謗法の罪を滅せんとして邪見の父母に・せめられさせ給う、

又法華經の行者をあだむ國主にあへり經文明明たり經文赫赫たり、我身

は過去かこに謗法ほうぼうの者なりける事疑うたがいい給たまうことなかれ、此これを疑うたがいつて現世げんせの輕苦しの忍びがたくて慈父じふのせめに随したがいて存外ぞんがいに法華經ほけきょうをすつるよしあるならば我身わがみ地獄じごくに墮おつるのみならず悲母ひもも慈父じふも大阿鼻地獄あびじごくに墮おちてともにかなしまん事疑うたがいいなるべし、大道心どうしんと申もうすはこれなり。

各各ずいぶん随分ほけきょうに法華經ほけきょうを信まことぜられつるゆへに過去かこの重罪じゅうざいをせめいだし給たまいて

候、たとへばくろがねをよくよくきたへばきずのあらわるるがごとし、石

はやけばはいとなる金は・やけば真金ごしんとなる、此の度こそ・まことの御信用ごしんよう

は・あらわれて法華經ほけきょうの十羅刹じゅうらせつも守護しゆごせさせ給たまうべきにて候らめ、雪山童子せつせんどうじ

の前に現げんぜし羅刹らせつは帝釈たいしゃくなり尸毘王しびおうのはとは毘沙門天びしゃもんてんぞかし、十羅刹じゅうらせつ・心

み給たまわんがために父母ふぼの身に入らせ給たまいてせめ給たまうこともや・あるらん、

それにつけても、心あさからん事は後悔こうかいあるべし、又前車まいしんのくつがへすは

後車ごしんのいましめぞかし、今の世には・なにとなくとも道心どうしんをこりぬべし、

此の世のありさま厭うともよも厭われじ日本の人人定んで大苦に値いぬと
見へて候眼前の事ぞかし、文永九年二月の十一日にさかなりし華の大風
にをるるが・ごとく清絹の大火に・やかるるがごとくなりしに・世をいと
う人のいかでかなかるらん文永十一年の十月ゆきつしまのものども一時に
死人となりし事は・いかに人の上とを・をぼすか當時も・かのうてに向か
いたる人人のなげき老たるをやをさなき子わかき妻めづらしかりし・すみ
かうちすて・よしなき海をまほり雲の・みうればはたかと疑い・つり
ぶねの・みゆれば兵船かと肝心をけす、日に一二度山えのぼり夜に三四度
馬にくらを・をく、現身に修羅道をかんぜり、各各のせめられさせ給う事
も詮するところは国主の法華経のかたきとなれるゆへなり、国主のかたき
となる事は持斎等・念仏・真言師等が謗法よりをこれり、今度ねうしくら
して法華経の御利生心みさせ給へ、日蓮も又強盛に天に申し上げ候なり、

いよいよ・をつる心ねすがた・をはすべからず、定んで女人にょにんは心よはくをはすれば・ござたちは心ひるがへりてやをはすらん、がうじやうに・はがみをして・たゆむ心なかれ、例せば日蓮にちれんが平左衛門さえもんの尉がもとにて・うちふるまいゐしがごとく・すこしもをつる心なかれ、わだが子となりしもの・わかさのかみが子となりし・将門貞当ろうじゅうが郎従等となりし者、仏になる道には・あらねども・はぢを・をもへば命をしまぬ習ならいなり、なにと・なくとも一度ひとたびの死は一定なり、いろばしあしくて人に・わらはれさせ給たまうなよ。

あまりにをぼつかなく候へば大事だいじのものがたり一つ申もうす、白伯夷叔叔齊せいと申せし者は胡竹国の王の二人の太子たいしなり、父の王弟の叔せいたまたに位をゆづり給たまいき、父して後叔せい位につかざりき、白いひが云いく位につき給たまえ叔せいいが云いく兄位いを継たぎ給たまえ白いひが云いくいかに親の遺言ゆいごんをばたがへ給たまうぞと申

せしかば親の遺言はさる事なれどもいかんが兄を・をきては位には即くベ
きと辞退せしかば、二人共に父母の国をすてて他国へわたりぬ、周の文王
につかへしほどに文王殷の紂王に打たれしかば武王百箇日が内にいくさを
・をこしき、白ひ叔せいは武王の馬の口にとりつけていさめて云く・をや
のしして後三箇年が内にいくさを・をこすはあに不孝にあらずや、武王い
かりて白ひ叔せいを打たんとせしかば大公望せいして打たせざりき、二人
は此の王をうとみてすやうと申す山にかくれゐてわらびを・をりて命をつ
ぎしかば、麻子と申す者ゆきあひて云くいかに・これには・をはするぞ二
人上件の事をかたりしかば麻子が云くさるにては・わらびは王の物にあら
ずや、二人せめられて爾の時よりわらびをくわず、天は賢人をすて給わぬ
ならひなれば天白鹿と現じて乳をもつて二人をやしなひき、白鹿去つて後
に叔せいが云く此の白鹿の乳をのむだにもうましまして肉をくわんといふ

しかば白ひせいししかども天これをききて来らず、二人うへて死ににき、
一生が間賢なりし人も一言に身をほろぼすにや、各各も御心の内はしらず
候へば・をぼつかなしをぼつかなし。

釈迦如来は太子にてをはせし時父の浄飯王太子を・をしみたてまつりて

しゅつけ

出家をゆるし給はず、四門に二千人のつわものをすへてまほらせ給ひしか

ども、終にをやの御心をたがへて家をいでさせ給いき、一切は・をやに随う

べきにてこそ候へども仏になる道は随わぬが孝養の本にて候か、されば

しんじかんきよう

心地観経には孝養の本をとかせ給うには棄恩入無為真実報恩者等云云、言

はまことの道に入るには父母の心に随わずして家を出て仏になるがまこと

の恩をほうずるにてはあるなり、世間の法にも父母の謀反などを・をこ

すには随わぬが孝養とみへて候ぞかし、孝経と申す経に見へて候、

てんだいだいし

ほけきよう

さんまい

たまい

ふぼさう

ふぼさう

天台大師も法華経の三昧に入らせ給いてをはせし時は父母左右のひぎに住

して仏道ぶつどうをさえんとし給たまいしなり、此これは天魔てんまの父母ふぼのかたちをげんじてさうるなり。

白はくひすくせいが因縁いんねんはさきにかき候もちぬ、又また第一だいいちの因縁いんねんあり、日本国にほんこくの人王わう第十六代に王わうをはしき応神天王おうじんてんわうと申もうす今の八幡大菩薩はちまんだいぼさつこれなりこの王わうの御子みこ二人まします嫡子ちやくしをば仁徳にんとく・次男つぎは宇治王子みこ天王てんわう・次男つぎの宇治みこの王子みこに位みこをゆづり給たまいき、王わうほうぎよならせ給たまいて後あと・宇治みこの王子みこの云いく兄位いろえにつき給たまうべし、兄いの云いく、いかに・をやの御みゆづりをばもちゐさせ給たまわぬぞ、かくのごとくたがいにろむじて、三箇年さんかんねんが間位まゐに王わうをはせざりき、万民ばんみんのなげきいうばかりなし天下てんかのさいにてありしほどに、宇治みこの王子みこ云いく我われいきてあるゆへにあに位みこに即すなはち給たまわらずといつて死しさせ給たまいにき、仁徳にんとくこれをなげかせ給たまいて又またふししづませ給たまいしかば、宇治みこの王子みこいきかへりて・やうやうに・をほせをかせ給たまいて・又またひきいらせ給たまいぬ、さて仁

徳・位につかせ給たまいたりしかば国をだやかなる上しんら・はくさひ・かう
らいも日本国にほんこくにしたがひて・ねんぐを八十そうそなへけると・こそみへて
候

へ。

けんおう

賢王けんおうのなかにも兄弟きょうだいをだやかならぬれいも・あるぞかし・いかなるちぎ

きょうだい

りにて兄弟きょうだいかくはをはするぞ浄蔵・浄眼の二人の太子たいしの生れかはりてをは

やくおう

するか薬王薬上の二人か、大夫志殿たゆうのさかんどの御をやの御勘気ごかんきはうけ給たまわりしか

さかんど

どもひやうへの志殿しだんの事は今度このたびはよもあにには・つかせ給たまはじさるにては

たゆうのさかんど

いよいよ大夫志殿たゆうのさかんどのをやの御不審ふしんはをぼろげにてはゆりじなんどをもつて

もう

候へばこのわらわの申し候はまことにてや候らん、御同心ごどうしんと申し候へば・

べち

あまりの・ふしぎさに別の御文おんふみをまいらせ候、未来みらいまでのものがたり・な

に事かこれにすぎ候べき。

西^{さい}域^{いき}と申^{もう}す文^{ぶん}にかきて候^{がっし}は月^{げつ}氏^しに婆^は羅^ら☆斯^す国^{こく}・施^せ鹿^ろ林^{りん}と申^{もう}すところの一^{いち}
の隠^{いん}士^しあり仙^{せん}の法^{ほう}を成^{じょう}ぜんとをもう、すでに瓦^が礫^{りやく}を变^かじて宝^{たから}となし人^{じん}畜^{ちく}の
形^{かたち}をかえけれどもいまだ風^{ふう}雲^{うん}にのつて仙^{せん}宮^{みや}にはあそばざりけり、此^{この}の事^{こと}を
成^{じょう}ぜんがために一^{いち}の烈^{りつ}士^しをかたらひ長^{なが}刀^{とう}をもたせて壇^{だん}の隅^{すみ}に立てて息^{いき}をか
くし言^{こと}をたつ、よひよりあしたにいたるまで・ものいはずば仙^{せん}の法^{ほう}・成^{じょう}ず
べし、仙^{せん}を求^{もと}める隠^{いん}士^しは壇^{だん}の中に坐^まして手^てに長^{なが}刀^{とう}をとつて口^{くち}に神^{じん}呪^{しゅ}をずうす
約^{やく}束^{そく}して云^{いわ}く設^{たと}ひ死^しなんとする事^{こと}ありとも物^{もの}言^{こと}う事^{こと}なかれ烈^{りつ}士^し云^{いわ}く死^しする
とも物^{もの}いはず、此^{この}の如^{ごと}くして既^{すで}に夜^よ中^{ちゆう}を過^すぎて夜^よまさにあけんとする時^{とき}、
如何^{いかん}が思^{おも}いけん烈^{りつ}士^し大^{おおい}に声^{こゑ}をあけて呼^よはる、既^{すで}に仙^{せん}の法^{ほう}成^{せい}ぜず、隠^{いん}士^し烈^{りつ}士^し
に言^{こと}つて云^{いわ}く何^{いか}に約^{やく}束^{そく}をばたがふるぞ口^{くち}惜^{おし}しき事^{こと}なりと云^いう、烈^{りつ}士^し歎^{なげ}いて
云^{いわ}く少^{せう}し眠^いつてありつれば昔^{むかし}し仕^しへし主^{しゅ}人^{じん}自^{みづか}ら来^きりて責^せめつれども師^しの恩^{おん}
厚^{あつ}ければ忍^{しの}で物^{もの}いはず、彼^{かれ}の主^{しゅ}人^{じん}怒^{いかでか}つて頸^{けい}をはねんと云^いう、然^{しかるに}而^に又^{また}ものい

はず、遂に頸を切りつ中陰に趣く我が屍を見れば惜く歎かし然而物いはず、遂に南印度の婆羅門の家に生れぬ入胎出胎するに大苦忍びがたし然而息を出さず、又物いはず已に冠者となりて妻をとつぎぬ、又親死ぬ又子をまうけたり、かなしくもありよろこばしくもあれども物いはず此くの如くして年六十有五になりぬ、我が妻かたりて云く汝若し物いはずば汝がいとをしみの子を殺さんと云う、時に我思はく我已に年衰へぬ此の子を若し殺されなば又子をまうけがたしと思いつる程に声をおこすと・をもへばをどろきぬと云いければ、師が云く力及ばず我も汝も魔にたばらかされぬ終に此の事成ぜずと云いければ、烈士大に歎きけり我心よはくして師の仙法を成ぜずと云いければ、隱士が云く我が失なり兼て誠めざりける事と悔ゆ、然れども烈士師の恩を報ぜざりける事を歎きて遂に思ひ死にししぬとかかれて候、仙の法と申すは漢土には儒家より出で月氏には外道の法の一分

なり、云うにかひ無き仏教の小乗・阿含經にも及ばず況や通別円をや況

や法華經に及ぶべしや、かかる浅き事だにも成ぜんとすれば四魔競て成じ

かたし、何に況や法華經の極理南無妙法蓮華經の七字を始めて持たん

日本国の弘通の始ならん人の弟子・檀那とならん人人の大難の来らん事を

ば言をもつて尽し難し心をもつてをしはかるべしや。

されば天台大師の摩訶止観と申す文は天台一期の大事一代聖教の肝心

ぞかし、仏法漢土に渡つて五百余年・南北の十師・智は日月に齊く徳は四海

に響きしかどもいまだ一代聖教の浅深・勝劣・前後・次第には迷惑し

てこそ候いしが、智者大師再び仏教をあきらめさせ給うのみならず、

妙法蓮華經の五字の蔵の中より一念三千の如意宝珠を取り出して三国の

一切衆生に普く与へ給へり、此の法門は漢土に始るのみならず月氏の論師

までも明し給はぬ事なり、然れば章安大師の釈に云く「止観の明静なる前代

に未だ聞かず」云云、又云く「天竺の大論尚其の類に非ず」等云云、其の上摩訶止観の第五の巻の一念三千は今一重立ち入たる法門ぞかし、此の法門を申すには必ず魔出来すべし魔競はずは正法と知るべからず、第五の巻に云く「行解既に勤めぬれば三障四魔紛然として競い起る乃至随う可らず畏る可らず之に随えば将に人をして悪道に向わしむ之を畏れば正法を修することを妨ぐ」等云云、此の釈は日蓮が身に当るのみならず門家の明鏡なり謹んで習い伝えて未来の資糧とせよ。此の釈に三障と申すは煩惱障・業障・報障なり、煩惱障と申すは貪・瞋・癡等によりて障礙出来すべし、業障と申すは妻子等によりて障礙出来すべし、報障と申すは国主父母等によりて障礙出来すべし、又四魔の中に天子魔と申すも是くの如し今・日本国に我も止観を得たり我も止観を得たりと云う人人誰か三障四魔競へる人あるや、之に随えば将に人をして悪道に向わしむと申すは只三悪道の

みならず人にんてん天九界を皆惡道とかけり、されば法華經を除きて華嚴・阿含・
ほうとう 般若・涅槃・大日經等なり、天台宗を除きて余の七宗の人人は人
あくとく を惡道に向わしむる獄卒なり、天台宗の人人の中にも法華經を信ずるやう
にて人を爾前にぜんへやるは惡道に人をつかはす獄卒なり。

今二人の人人は隱士ひとびとと烈士りようけんのごとし一もかけなば成じようずべからず、譬たとえ

ば鳥の二つの羽人の兩眼りようげんの如し、又二人の御前達おんまえは此の人人の檀那だんなぞかし

女人にょにんとなる事は物に随したがつて物を随つかえる身なり夫たのしくば妻もさかふべし

夫盜人ぬすびとならば妻も盜人ぬすびとなるべし、是れ偏ひとえに今生計こんじようばかりの事にはあらず世生

生に影と身と華と果と根と葉との如ごとくにておはするぞかし、木にすむ虫は

木をはむ水にある魚は水をくらふ芝かるれば蘭なく松さかうれば柏よろこ

ぶ、草木そうもくすら是かくのくの如し、比翼ひよくと申もうす鳥は身は一つにて頭かう二つあり二つの

口より入る物一身を養ふ、ひほくと申もうす魚は一目づつある故ゆえに一生が間は

なるる事なし、夫と妻とは是かくの如し此の法門ほうもんのゆへには設たひ夫に害せら
るるとも悔くゆる事なかれ、一同して夫の心をいさめば竜女りゅうにょが跡あとをつぎ末代まつだい
悪世あくせの女人にょにんの成仏じょうぶつの hands と成り給たまうべし、此かの如ごとくおはさば設たひいかな
る事ありとも日蓮にちれんが二聖・二天・十羅刹じゅうらせつしや釈迦たほう・多宝もうに申じゆんして順次生じしやうに仏に
なしたてまつるべし、心の師とはなるとも心を師とせざれとは六波羅蜜經ろくはらみつぎやう
の文なり。

設たとひ・いかなる・わづらはしき事ありとも夢になして只法華經ただほけきやうの事のみ
さはぐらせ給たまうべし、中にも日蓮にちれんが法門ほうもんは古へこそ信じかたかりしが今は
前さき前さきいひをきし事すで既にあひぬればよしなく謗ほうぜし人人ひとびとも悔くる心あるべし、
設たとひこれより後に信なんずる男女なんよありとも各各にはかへ思ふべからず、始は信
じてありしかども世間せけんのをそろしさにすつる人人ひとびとかずをしらず、其その中に
返へつて本より謗ほうずる人人ひとびとよりも強盛かうじやうにそしる人人ひとびと又あまたあり、在ざい世せいにも

ぜんしょうびく

善星比丘等は始は信じてありしかども後にすつるのみならず返つて仏をは

たてまつ

うじ奉りしゆへに仏も叶い給はず無間地獄にをちにき、此の御文は別して

さかんだの

ひやうへの志殿へまいらせ候、又太夫志殿の女房兵衛志殿の女房によ

さかんだの

によぼう

さかんだの によぼう

もう

くよく申しきかせさせ給うべしきかせさせ給うべし南無妙法蓮華経・南無

みょうほうれんげきよう

妙法蓮華経

ぶんえい

文永十二年四月十六日

にちれん

日蓮

かおう

花押

◆一七一

兵衛志殿御返事

さかんだのこへんじ

がんねん

建治元年八月五十四歳御作

於身延

1089p

がもく

鷺目二貫文・武蔵房円日を使にて給ひ俣い畢んぬ、人王三十六代・皇極

てんのう

天皇と申せし王は女人にてをはしき、其の時入鹿の臣と申す者あり、あま

によにん

そのときいるか

おみ

もう

り・おごりの・ものぐるわしさに王位を・うばはんと・ふるまいしを、

てんのう

みこ

ふしぎ

およ

天皇王子等不思議とはをぼせしかども・いかにも力及ばざりしほどに、大兄

おおえ

の王子・輕の王子等なげかせ給いて中臣の鎌子と申せし臣に申しあわせさせ給いしかば、臣申さく・いかにも人力はかなうべしとは・みへ候はず、馬子が例をひきて教主釈尊の御力ならずば叶がたしと申せしかば・さらばとて釈尊を造り奉りて・いのりしかば入鹿ほどなく打れにき、此の中臣の鎌子と申す人は後には姓をかへて藤原の鎌足と申し内大臣になり大職冠と申す人・今の一の人の御先祖なり、此の釈迦仏は今の興福寺の本尊なり、されば王の王たるも釈迦仏・臣の臣たるも釈迦仏・神国の仏国となりし事もえもんのたいう殿の御文と引き合せて心へさせ給へ、今代の他国にうばわれんとする事・釈尊を・いるがせにする故なり神の力も及ぶべからずと申すはこれなり、各各は二人は・すでにとこそ人はみしかども・かくいみじくみへさせ給うは・ひとえに釈迦仏・法華經の御力なりと・をぼすらむ、又此れにもをもひ候、後生のたのもしさ申すばかりなし、此れより後

も・いかなる事ありとも・すこしもたゆむ事なかれ、いよいよ・はりあげ
てせむべし、たと設ひ命に及ぶとも・すこしも・ひるむ事なかれ、あなかしこ
・あなかしこ、きょうきょうきんげん恐恐謹言。

八月二十一日

にちれんかおう
日蓮花押

さかんどのごへんじ
兵衛志殿御返事

◆一七二 さかんどのごへんじ 兵衛志殿御返事

がんねん 建治元年十一月 五十四歳御作

於身延

1090P

かたがたのものふ二人を・もつて・をくりたびて候、その心ざし弁殿の
御ふみに申もうすげに候、さてはなによりも御ために第一だいいちの大事を申もうし候なり、
しょうほう正法・そうほう像法の時は世もいまだをとろへず聖人・賢人けんじんも・つづき生れ候き
天も人をまほり給たまいき、末法まつぽうになり候へば人のとんよくとんよく〈貪欲〉やうやく
すぎ候て主と臣おみと親と子と兄と弟と諍じようろん論ひまなし、まして他人たにんは申もうすに

および、これに・よりて天も・その国をすつれば三災・七難乃至一二三四

五六七の日いでて草木かれうせ小大河もつき大地はすみのごとく・をこり

たいかい

大海はあぶらのごとくになり・けつくは無間地獄より炎いでて上梵天まで

じゅうまん

火炎・充滿すべし、これていの事いでんとて・やうやく世間はをとへ候な

みな

り、皆人のをもひて候は父には子したがひ臣は君にかなひ弟子は師にゐす

でし

べからずと云云、かしこき人もいやしき者もしれる事なり、しかれども貪欲

とんよく

・瞋恚・愚癡と申すさけにえいて主に敵し親をかるしめ師をあなづるつね

しんに

ぐち

もう

にみへて候、但師と主と親とに払いてあしき事をば諫ば孝養となる事はさ

こうよう

きの御ふみにかきつけて候いしかばつねに御らむあるべし。

その

ただこのたびゑもんの志、どのかさねて親のかんだうあり・との御前

おんまえ

にこれにて申せしがごとく一定かんだうあるべし・ひやうへの志殿をぼつ

さかんの

かなしごせんかまへて御心へあるべしと申して供しなり今度はとのは一定

もう

きやう

このたび

をち給いぬと・をぼうるなりをち給はんをいかにと申す事はゆめゆめ候は
たま たま もう
ず但地獄にて日蓮をうらみ給う事なかれしり候まじきなり千年のかるかや
じごく にちれん たま
も一時にはひとなる百年の功も一言にやぶれ候は法のことわりなり、さえ
いちじ
もんの大夫殿は今度・法華經のかたきに・なりさだまり給うとみへて候、
たゆうどの このたび ほけきよう たま
えもんのたいうの志殿は今度・法華經の行者になり候はんずらん、との
さかんの このたび ほけきよう ぎようじゃ そうら
は現前の計なれば親につき給はんずらむ、ものぐるわしき人人はこれをほ
げんぜん たま ひとびと
め候べし、宗盛が親父入道の悪事に随いてしのわらにて頸を切られし重盛
むねもり にゅうどう したが
が随わずして先に死せしいづれか親の孝人なる、法華經のかたきになる親
したがわ こつよう
に随いて一乗の行者なる兄をすてば親の孝養となりなんや、せんすると
したが いちじよう ぎようじゃ こつよう
ころひとすぢにをもひ切つて兄と同じく仏道をなり給へ、親父は妙莊嚴王
きようだい たまた みようそうこん
のごとし兄弟は浄蔵・浄眼なるべし、昔と今はかわるとも法華經のことわ
きようだい ほけきよう
りは・たがうべからず・當時も武蔵の入道そこばくの所領所従等をすて
とうじ むさし にゅうどう しりようしじゅう

て遁世あり、ましてわどのばらがわづかの事をへつらひて心うすくて悪道あくどうに墮おちて日蓮にちれんをうらみさせ給たまうな、かへすがへす今度このたびとのおつは墮おつべしと・をぼうるなり。

此の程心ざしありつるが・ひきかへて悪道あくどうに墮おち給たまはん事がふびんなれば申もうすなり、百に一つ千に一つも日蓮にちれんが義につかんと・をぼさば親に向つていい切り給たまへ親なれば・いかにも順いまいらせ候べきが法華經ほけきようの御かたきになり給たまへば・つきまいらせては不孝ふこうの身となりぬべく候そうらへば・すてまいらせて兄につき候なり、兄をすてられ候わば兄と一同と・をぼすべしと申もうし切り給たまへ、すこしも・をそるる心なかれ・過去遠遠劫より法華經ほけきようを信ぜしかども仏にならぬ事これなり、しをのひると・みつと月の出づると・いると・夏と秋と冬と春とのさかひには必ず相違そういする事あり凡夫ぼんぷの仏になる又かくのごとし、必ず三障四魔と申す障さわりいできたれば賢者けんじゃはよろこび

愚者ぐしゃは退くこれなり、此の事は・わざとも申し又びんぎにと・をもひつる
に御使おんつかいありがたし、墮おち給たまうならば・よもこの御使おんつかいは・あらじと・をも
ひ候そうらへば・もしやと申もうすなり。

仏になり候事は此の須弥山しゅみせんにはりをたてて彼の須弥山しゅみせんより熊をはなちて、

そのいと・すぐにわたりて・はりのあなに入るよりもかたし、いわうや

・さかさまに大風たいふうのふきむかへたらんは・いよいよかたき事ぞかし、経に

云く「億億万劫いふより不可議ふかぎに至る時に乃すなわち是この法華経ほけきょうを聞くことを得・億

億万劫ふより不可議ふかぎに至る諸仏しよぶつ・世尊時せそんに是この経を説ときたもう・是かくのゆえの故に

行者ぎやうじや・仏滅後ぶつめつに於おいて是かくのこの如ごときの経を開きいて疑惑ぎわくを生ずること勿なれ」等云

云、此の経文きやうもんは法華経ほけきやう二十八品の中に・ことにめづらし、序きじ仰ほうより

法師品ほうしほんにいたるまで等覺とうかく已下いかの人天にんてん・四衆ししゆう・八部はちぶ・其そのかずありしかども

仏は但釈迦如来しやくかによらいちぶつ一仏しなり重しくてかるきへんもあり、宝塔品ほうとうぼんより囑累品そくるいにい

たるまでの十二品は殊に重きが中の重きなり、其の故は釈迦仏の御前に多宝の宝郡部現せり月の前に日の出でたるがごとし、又十方の諸仏は樹下に御はします十方世界の草木の上に火をともしせるがごとし、此の御前にてせんせられたる文なり。

ねはんぎよう

涅槃經に云く「昔無數無量劫より來た常に苦惱を受く、一一の衆生一劫

おうしゃじよう

びふら

くろう

にゆうじゆう

しゅじよういっこう

の中に積む所の骨は王舎城の毘富羅山の如く飲む所の乳汁は四海の水の

ごとく
如く身より出す所の血は四海の水より多く父母・兄弟・妻子・眷属の

いだい
しがい

ふぼ・きようだい

さいし

けんぞく

つ

そつもく

つ

つ

みようじゆう

こくきゆう

いだい

たいかい

そつもく

つ

そつもく

つ

そつもく

つ

そつもく

つ

そつもく

つ

命終に哭泣して出す所の目涙は四大海より多く、地の草木を尽くして四

かづとり

な

ふぼ

またつく

あた

そつもく

そつもく

そつもく

そつもく

そつもく

そつもく

そつもく

そつもく

そつもく

そつもく

寸の籌と為し以て父母を数うも亦尽くすこと能わじ」云云、此の經文は

さいご

そつもん

ふし

たまい

みことば

だいち

そつもく

そつもく

そつもく

そつもく

そつもく

そつもく

そつもく

そつもく

そつもく

仏最後に雙林の本に臥てかたり給ひし御言なりもつとも心をとどむべし、

むりようこう

このかた

ふぼ

じゅつぼうせかい

だいち

そつもく

そつもく

そつもく

そつもく

そつもく

そつもく

そつもく

そつもく

そつもく

そつもく

無量劫より已來生ところの父母は十方世界の大地の草木を四寸に切りてあ

てかそうとも・たるべからずと申す經文なり、此等の父母にはあひしかど

もう

きようもん

これら

ふぼ

そつもく

そつもく

そつもく

そつもく

そつもく

も法華經ほけきょうにはいまだ・あわず、されば父母ふぼはまうけやすし法華經ほけきょうはあひが
たし、今度このたびあひやすき父母ふぼのことばを・そむきて・あひがたき法華經ほけきょうのと
もに・はなれずば我が身・仏になるのみならず・そむきしをやをもみちび
きなん、例せば悉達太子しったたいしは浄飯王じょうばんの嫡子なり国をもゆづり位にもつけんと
・をぼして・すでに御位につけまいらせたりしを御心をやぶりて夜中城を
にげ出いでさせ給たまいしかば不孝ふこうの者なりと・うらみさせ給たまいしかども仏にな
らせ給たまうては・まづ浄飯王じょうばん・麻耶夫人まやふじんをこそ・みちびかせ給たまいしか。をや親
という・をやの世をすてて仏になれと申もうす・やは一人もなきなり、これ
は・とによせ・かくによせて・わど和殿のばらを持齋じさい・念佛者等ねんぶつが・つくり・
をとさんために・をやを・すすめをとすなり、両火房は百万反の念佛ねんぶつをす
すめて人人ひとびとの内をせきて法華經ほけきょうのたねを・たたんと・はかるときくなり、
極楽寺殿ごくらくはいみじかりし人ぞかし、念佛者等ねんぶつにたばらかされて日蓮にちれんを怨あだま

せ給たまいしかば我が身みといい其その一門いちもん皆みなほろびさせ給たまう・ただいまは・へち
この守殿しうどの一人計ばかりなり、両火房りうくわふを御信用ごしんようある人はいみじきと御らむあるか、
なごへの一門いちもんの善光寺・長楽寺・大仏殿だいぶつでん立てさせ給たまいて其その一門いちもんのならせ
給たまう事をみよ、又守殿しうどのは日本国にほんこくの主にてをはするが、一閻浮提えんぶだいのごとくな
る・かたきをへさせ給たまへり。

わどを見をすてて・あにがあとを・ゆづられたりとも千万年せんまんのさかへ・
かたかるべし、しらず又わづかの程ほどにや・いかんが・このよならんずらん、
よくよくをもひ切つて一向いっかうに後世ごしよをたのまるべし、かう申もうすとも・いたづ
らのふみなるべしと・をもへば、かくも・ものうけれども・のちのをもひ
でに・しるし申もうすなり、
恐恐きょうきょう謹言きんげん

十一月二十日

にちれんかおう
日蓮花押

兵衛志殿御返事
さかんのこへんじ

◆一七三 兵衛志殿 女房御返事

1094P

先度仏器まいらせさせ給ひ候しが、此度此の尼御前大事の御馬にのせさ

せ給て候由承はり候、法にすぎて候・御志かな・これは殿はさる事にて、
女房のはからひか、昔儒童菩薩と申せし菩薩は、五茎の蓮華を五百の金銭

を以て・かいとり、定光菩薩を七日七夜供養し給ひき、女人あり、瞿夷と

なづく、二茎の蓮華を以て自ら供養して云く、凡夫にてあらん時は世世・

生生・夫婦とならん、仏にならん時は同時に仏になるべし・此のちかひく

ちずして、九十一劫の間・夫婦となる、結句、儒童菩薩は今の釈迦仏・昔

の瞿夷は今の耶輸多羅女・今法華経の勧持品にして具足千万光相如来是な

り、悉達太子檀特山に入り給しには、金泥駒・帝釈の化身、摩騰迦・竺法蘭

の経を漢土に渡せしには十羅刹・化して白馬となり給ふ、此馬も法華経の

道なれば百二十年御さかへの後・靈山浄土へ乗り給ふべき御馬なり、

きようきようきんげん。
恐恐 謹言。

建治三年丁丑三月二日

にちれんかおう
日蓮花押

ひのとうし
さかんののうぼう
兵衛志殿 女房

さかんののこしよ
兵衛志殿御書

1095p

久しくうけ給わり候はねばよくおぼつかなく候、何よりもあはれにふし
ぎなる事は大夫志殿と殿との御事不思議に候、常さまには世末になり候へ
ば聖人・賢人も皆かくれただざんじむねいじんわざんきよくりの者のみこ
しようにん けんじん みな
そ国には充滿すべきと見へて候へば、喩えば水すくなくなれば池さはが
じゅうまん たとえ
しく風ふけば大海しづかならず、代の末になり候へばかんばち・えきれい
たいかい
大雨大風ふきかさなり候へば広き心もせばくなり道心ある人も邪見になる
だいいうたいふう どうしん じゃけん
とこそ見へて候へ、されば他人はさてをきぬ父母と夫妻と兄弟と諍う事れ
たにん ふぼ きょうだい あらそ
つしと・しかと・ねこと・ねずみと・たかと・きじとの如しと見へて候、
いごと

りようかん

てんま

ほっし

さえもん

たゆうどの

良観等の天魔の法師らが親父左衛門の大夫殿をすかし、わどのばら二人を

失はんとせしに、殿の御心賢くして日蓮がいさめを御もちゐ有りしゆへに

にちれん

二のわの車をたすけ二の足の人になへるが如く二の羽のとぶが如く日月

にちがつ

いっさいしゅじょう

の一切衆生を助くるが如く、兄弟の御力にて親父を法華經に入れまいら

きやうだい

おんちから

ほけきやう

たまひ

せさせ給いぬる御計らい偏に貴辺の御身にあり、又真実の經の御ことはり

ひとえ

きへん

おんみ

しんじつ

ぶつぼう

を代末になりて仏法あながちにみだれば大聖人・世に出ずべしと見へて

たとえ

候、喩へば松のしもの後に木の王と見へ菊は草の後に仙草と見へて候、代

けんじん

みだ

しやうにんぐにん

あらわ

のおさまれるには賢人見えず代の乱れたるにこそ聖人愚人は顕れ候へ、あ

さえもん

にちれん

もち

はれ平の左衛門殿さがみ殿の日蓮をだに用いられて候いしかば、すぎにし

もうこ

蒙古国の朝使のくびはよも切せまいらせ候はじ、くやしくおはすらなん。

いちだい

てんのう

もう

だいおう

てんだい

ざす

しんごんし

人王八十一代安徳天皇と申す大王は天台の座主明雲等の真言師等数百人

みなもと

うしやうぐんよりとも

じやうぶく

げんちやくおほんにん

かたらひて源の右將軍頼朝を調伏せしかば還著於本人とて明雲は義仲に

切られぬ安徳天皇は西海に沈み給う、人王八十二三四隱岐の法皇・阿波の
院・佐渡の院・当今・已上四人・座主・慈円僧正・御室・三井等の四十余
人の高僧等をもて平の將軍義時を調伏し給う程に又還著於本人とて上の
四王島島に放たれ給いき、此の大悪法は弘法・慈覚・智証の三大師・
法華經最第一の釈尊の金言を破りて法華最第二・最第三・大日經最第一
と読み給いし僻見を御信用有りて今生には国と身とをほろぼし後生には
無間地獄に墮ち給いぬ、今度は又此の調伏三度なり、今・我が弟子等死し
たらん人人は仏眼をもて是を見給うらん、命つれなくて生たらん眼に見よ、
国主等は他国へ責めわたされ調伏の人人は・或は狂死・或は他国・或は
山林にかくるべし、教主釈尊の御使を二度までこうちをわたし弟子等を
ろうに入れ・或は殺し・或は害し・或は所国をおひし故に其の科必ず其の
国国民の身に一一にかかるべし、或は又白癩・黒癩・諸悪重病の

ひとびと
人人おほかるべし、我が弟子等・此の由を存ぜさせ給へ、
恐恐謹言。

九月九日

にちれんかおう
日蓮花押

此の文は別しては兵衛の志殿へ、総じては我が一門の人人御覧有るべし、
他人に聞かせ給うな。

◆一七五 兵衛志殿 女房御返事

1097P

銅の御器二給ひ畢んぬ、釈迦仏三十の御年・仏になり始てをはし候時・
牧牛女と申せし女人・乳のかいをにて仏にまいらせんとし候し程にいれて
・まいらすべき器なし、毘沙門天王等の四天王・四鉢を仏にまいらせたり
し、其の鉢をうちかさねて・かいをまいらせしに仏にはならせ給う、其の
鉢後には人も・もらざりしかども常に飯のみちしなり後に馬鳴菩薩と申せ
し菩薩・伝へて金銭三貫にほうじたりしなり、今御器二を千里にをくり
釈迦仏にまいらせ給へば、かの福のごとくなるべし、委しくは申さず候。

建治三年丁丑十一月七日

にちれんかおう
日蓮花押

兵衛志殿 女房御返事

ひのとうし
さかんだのにようぼうこへんじ

◆一七六

兵衛志殿御返事

さかんだのこへんじ
こうあんがんねん

1097p

みそをけ一給ひ畢ぬ。はらのけ(下痢)は左衛門どのの御薬になをりて候。

又このみそ(味噌)をなめて、いよいよこちなをり候ぬ。あわれあわれ今

年御つつがなき事をこそ、法華経に申し上げまいらせ候へ。恐恐謹言。

きようきようきんげん

弘安元年六月二十六日

こうあんがんねん

にちれん
日蓮

花押

兵衛志殿御返事

さかんだのこへんじ

◆一七七

兵衛志殿御返事

さかんだのこへんじ

弘安元年十一月五十七歳御作

こうあんがんねん

於身延

1098p

錢六貫文の内一貫次郎の分白厚綿小袖一領四季にわたりて財を三宝さんぼうに供養くようし

給^{たま}ういづれも・いづれも・功德^{くどく}にならざるはなし、但^{ただ}し時に随^{したが}いて勝劣^{しょうれつ}・

浅深^{せんじん}わかれて候、うへたる人には衣をあたへたるよりも食をあたへて候は

・いますこし功德^{くどく}まさるこごへたる人には食をあたへて候よりも衣は又ま

さる春夏^{しゅんか}に小袖をあたへて候よりも秋冬^{しゅうとう}にあたへぬれば又功德^{くどく}一倍なり、

これをもつて一切^{いっさい}はしりぬべし、ただし此の事にいては四季を論ぜず日月^{にちがつ}

をたださずせに・こめ・かたびら・きぬこそで・日日月月にひまなし、例

せばびんばし^{頻婆沙羅王}やらわうの教主釈尊^{きょうしゅしゃくそん}に日々に五百輛の車を・をくり阿育^{あそか}

大王^{だいおう}の十億の沙金を鶏頭魔寺にせせしがごとし、大小^{だいしょう}ことなれども志^{こころざし}

は彼^{かしこ}にも・すぐれたり。

其^その上今年^{しんねん}は子細^{しさい}候、ふゆと申^{もう}すふゆいづれのふゆかさむからざる、な

つと申^{もう}すなついづれのなつかあつからざる、ただし今年^{しんねん}は余国はいかんが

候らんこのはきゐは法にすぎてかんじ候、ふるき・をきなどにも・とひ候

へば八十九十一百になる者の物ものがたり語り候はすべて・いにしへ・これほどさむ
き事候はず、此のあんじちより四方しほうの山の外十町二十町人かよう事候はね
ばしり候はず、きんぺん一町のほどはゆき一丈二丈五尺等なり、このうる
う十月卅日ゆきすこしふりて候しがやがてきへ候ぬ、この月の十一日たつ
の時より十四日まで大雪ふりて候しに兩三日へだててすこし雨ふりてゆき
かたくなる事金剛こんがうのごとし・いまにきゆる事なし、ひるも・よるも・さむ
くつめたく候事法にすぎて候、さけはこをりて石のごとく、あぶらは金に
にたり、なべかまは少し水あればこおりてわれかんいよいよかさなり候へ
ば、きものうすく・食ともしくして・さしいづるものもなし。

坊ははんさくにてかぜゆきたまらず・しきものはなし、木はさしいづる
ものもなければ・火もたかず、ふるきあかづきなんどして候こそで・なん
どきたるものは其身のいろ紅蓮ぐれんだいぐれん大紅蓮のごとし、こへははは大ばば地獄じごくに

ことならず、手足かんじてきれさけ人死ぬことかぎりなし、俗のひげをみれば・やうらくをかけたなり、僧のはなをみればすずをつらぬきかけて候、かかるふしぎ候はず候に去年こその十二月の卅日より・はらのけの候しが春夏やむことなし、あきすぎて十月のころ大事だいじになりて候しがすこして平愈へいゆつかまつりて候へども・ややもすればをこり候に、兄弟二人きょうだいのふたつの小袖わた四十兩をきて候が、なつのかたびらのやうにかろく候ぞ・ましてわたうすく・ただぬのものばかりのもの・をもひやらせ給たまへ、此の二のこそでなくば・今年はここへしに候なん。

其上兄弟きょうだいと申し右近の尉むつの事と申し食もあいついて候、人はなき時は四十人ある時は六十人、いかにせき候へどもこれにある人人ひとびとのあにとて出来しゅつたいし舎弟しやていとてさしいでしきゐ候ぬれば・かかはやさにかにとも申しへず・心にはしずかに、あじちむすびて小法師ほっしと我が身計ばかり御経よみまいらせん

とこそ存じて候に、かかるわづらはしき事候はず、又としあけ候わばいくへもにげんと存じ候ぞ、かかるわづらわしき事候はず又又申すべく候。なによりも・えもんの大夫志と・とのとの御事ちちの御中と申し上のをばへと申し面にあらずば申しつくしがたし、
恐恐謹言。

十一月廿九日

日蓮 花押

兵衛志殿

さかんの

◆一七八

孝子御書

1100p

御親父御逝去の由・風聞真にてや候らん、貴辺と大夫志の御事は代末法に入つて生を辺土にうけ法華の大法を御信用候へば悪鬼定めて国主と父母等の御身に入りかわり怨をなさん事疑なかるべきところに、案にたがふ事なく親父より度度の御かんだうをかうほらせ給ひしかども兄弟ともに浄蔵・浄眼の後身か將た又薬王薬上の御計らいかのゆへに事に事ゆへなく

親父に御かんきをゆりさせ給いて前にたてまいらせし御孝養心に任せさせ
給いぬるはあに孝子にあらずや、定めて天よりも悦びをあたへ法華經十羅刹
も御納受あるべし。

其の上貴辺の御事は心の内に感じをもう事候、此の法門經のごとくひろ
まり候わば御悦び申すべし、
べからず不和にわたらせ給ふべからず、
候きこしめすべし、
恐恐謹言。

弘安二年二月二十一日

日蓮 花押

◆一七九 兩人御中御書

弘安二年 五十八歳御作 於身延 1101p

大國阿闍梨えもんのたいう 志殿等に申す、故大進阿闍梨の坊は各各の御
計らいに有るべきかと存じ候に今に人も住せずなど候なるはいかなる事

ぞ、ゆづり状のなくばこそ人人も計らい候はめ、くはしくうけ給わり候へ

ばべんの阿闍梨にゆづられて候よしうけ給わり候き、又いぎあるべしとも

・をぼへず候、それに御用いなきは別の子細の候か其の子細なくば大國

あじやりたゆうどの

阿闍梨大夫殿の御計らいとして并の阿闍梨の坊へこぼちわたさせ給い候へ

心けんなる人に候へばいかながとこそ・をもい候らめ、并の阿闍梨の坊を

すりしてひろくもらずば諸人の御ために御たからにてこそ候はんずらむめ、

ふゆはせうまうしげし、もしやけなばそむと申し人もわらいなん、このふ

みついて兩三日が内に事切て各各御返事給ひ候はん、

きようきようきんげん
恐恐謹言。

十月廿日

兩人御中
おんちゆう

日蓮 花押
にちれん かおう

ゆづり状をたがうべからず

◆一八〇 右衛門太夫殿御返事
ごへんじ

1102P

そもそも

抑久しく申し承うけたまわらず候ところの処おんふみとうらいに御文到来候おわい畢ことんぬ、殊ことにあをきうら

の小袖一とうこん まつぽうばうし一がもくをび一さぶすぢ鷺目一貫文くり一籠たしかにうけとりまいら

せ候、当今は末法の始の五百年に当りて候、かかる時刻じこくに上行菩薩御出現じようぎようぼさつ しゅつげん

あつて南無妙法蓮華經の五字を日本国の一切衆生にさづけ給たまうべきよし

きようもんふんみよう

經文分明るざい しぜいなり、又流罪・死罪に行あきらわるべきよし明かなり、日蓮は上行菩薩にちれん じようぎようぼさつ

おんつかい

の御使にも似たり此の法門を弘ひろむる故に、神力品に云く「日月の光明にちがつ こうみようの

よ もろもろ ゆうみよう

能く諸の幽冥こと こが除くが如く斯の人・世間せけんに行じて能く衆生の闇を滅す」

きようもん

等云云、此の經文に斯人行世間の五の文字の中の人の文字をば誰とか思し

じようぎようぼさつ

食す、上行菩薩の再誕さいたんの人なるべしと覚えたり、經に云く「我が滅度の後めつど

おい まさ こ

に於て応に斯の經を受持すべし是の人・仏道ぶつどうに於て決定けつじようして疑有うたがいあること

きへん じようぎようぼさつ

無けん」云云、貴辺も上行菩薩の化儀けぎをたすくる人なるべし。

弘安二年己卯十二月三日

日蓮花押

右衛門太夫殿御返事

◆一八一 大夫志殿御返事

弘安三年 五十九歳御作

1103p

小袖一つ直垂三具同じく腰三具等云云、小袖は七貫直垂並びに腰は十貫

已上十七貫文に当れり、夫れ以れば天台大師の御位を章安大師顕して云く

「止観の第一に序文を引いて云く安禅として化す、位五品に居したまえ

り、故に経に云く四百万億那由他の国の人に施すに一一に皆七宝を与え又

化して六通を得しむるすら初随喜の人に如ざること百千万倍せり況や五品

をや、文に云く即如来の使なり如来の所遣として如来の事を行ず」等云云、

伝教大師・天台大師を釈して云く「今吾が天台大師は法華経を説き法華経

を釈し群に特秀し唐に独歩す」云云、又云く「明かに知んぬ如来の使なり

讃むる者は福を安明に積み謗る者は罪を無間に開く」と云云、是の如きは

且らく之を置く、滅後・一日より正像二千余年の間・仏の御使二十四人なり、所謂第一は大迦葉・第二は阿難・第三は未田地・第四は商那和修・第五は☆多・第六は提多迦・第七は弥遮迦・第八は仏駄難提・第九は仏駄密多・第十は脇比丘・第十一は富那奢・第十二は馬鳴・第十三は毘羅・第十四は竜樹・第十五は提婆・第十六は羅☆・第十七は僧☆難提・第十八は僧☆耶奢・第十九は鳩摩羅駄・第二十は闍夜那・第二十一は盤駄・第二十二は摩奴羅・第二十三は鶴勒夜奢・第二十四は師子尊者、此の二十四人は金口の記する所の付法藏經に載す、但し小乗・権大乘經の御使なりいまだ法華經の御使にはあらず、三論宗の云く「道朗吉藏は仏の使なり」法相宗の云く「玄奘慈恩は仏の使なり」華嚴宗の云く「法藏・澄觀は仏の使なり」真言宗の云く「善無畏・金剛智・不空慧果弘法等は仏の使なり」にちれんこれにあらざるを勘えて云く全く仏の使に非ず全く大小乗の使にも非ず、之を

供養くようせば災わざを招まねき之これを謗ほうぜば福ふくを至いたさん、問なんじう汝なんじの自義じぎか答こたえて云いわく設たい
自義じぎ為なりと雖いえども有文有義ゆうもんうぎならば何とがの科しあらん、然しかりと雖いえども釈し有うり伝でん教ぎやう大師だいし
云いわく「誰たれか福ふくを捨すて罪つみを慕もう者ものあらんや」云云、福ふくを捨すてるとは天台大師てんだいだいし
を捨すてる人ひとなり、罪つみを慕もうとは上あに挙あぐる所ところの法相ほうそう・三論さんろん・華嚴けごん・真言しんごん
元祖がんそ等らなり、彼かれの諸師しよしを捨すて一向いっかうに天台大師てんだいだいしを供養くようする人ひとの其その福ふくを今いま申もうす
べし、三千大千世界さんぜんだいせんせかいと申もうすは東西南北とうざいなんぼく一須弥山しゆみせん六欲梵天ぼんてんを一四天下してんげとなづ
く、百億しゆみせんの須弥山しゆみせん四州等しよしを小千せうせんと云いう、小千せうせんの千せんを中千ちゆうせんと云いう、中千ちゆうせんの千せん
を大千ちゆうせんと申もうす、此この三千大千世界さんぜんだいせんせかいを一いつにして四百萬億那由佗なゆた国こくの六道ろくどうの
衆生しゆじやうを八十年はちじゅうねんやしなひ法華經ほけきやうより外ほかの已今当いこんとうの一切經いっさいきやうを一いつの衆生しゆじやうに
読誦どくじゆせさせて三明六通さんみよろくつうの阿羅漢あらかん・辟支仏ひやくしぶつ等ら覺かくの菩薩ぼさつとなせる一人ひとりの檀那だんな
と、世間出世せけんしゆつせの財たからを一分いちぶんも施ほどこさぬ人ひとの法華經計ほけきやうばかりを一字いっく・一句いっく一偈いちげ持もつ人ひと
と相對そつたいして功德くんどくを論ろんずるに、法華經ほけきやうの行者ぎやうじやの功德勝くんどくすぐれたる事こと百千萬億倍せんまんな

り、天台大師此れに勝れたる事五倍なり、かかる人を供養すれば福を須弥山

につみ給うなりと伝教大師ことはらせ給ひて候、此の由を女房には申さ

せ給へ、恐恐謹言。

大夫志殿御返事 花押

◆一八二 兵衛志殿御返事 1104p

青島五貫文送り給び了んぬ、唱え奉る南無妙法蓮華經一返の事、恐恐。

六月十八日

日蓮 花押

兵衛志殿御返事

◆一八三 大夫志殿御返事 弘安四年十二月六十歳御作 1105p

聖人一つ味文字一をけ生和布一こ聖人と味文字はさてをき候いぬ生

和布は始めてにて候、将又病の由聞かせ給いて不日に此の物して御使をも

つて脚力につかわされて候事心ざし大海よりふかく善根は大地よりも厚し、

かうじんかうじん、きようきよう恐恐。

十二月十一日日蓮花押にちれんかおう

たゆうのさかんどのごへんじ

大夫志殿御返事

◆一八四 八幡宮造営事はちまん

弘安四年五月六十歳御作こうあん

1105p

ほうもんもう

此の法門申し候事すでに廿九年なり、日日の論義ろんぎ月月の難兩度の流罪るざいに

身つかれ心いたみ候いし故ゆえにや此の七八年おとろえ間が間年な年に衰病をこり候い

つれどもなのめにて候いつるが、今年そは正月より其の氣分けぶん出来しゅつして既すでに

いちしゅう

一期いしゅうをわりになりぬべし、其その上齡よわい既に六十にみちぬ、たとひ十に一今年

はすぎ候とも一二をば・いかでかすぎ候べき、忠言は耳に逆りい良薬りょうやくは口くに

苦しとは先賢せんけんの言なりやせ病の者は命をきらう倭人わいじんは諫いさめを用いずと申もうすな

り、此の程は上下じょうげの人人ひとびとの御返事申す事なし心もものうく手もたゆき故な

り、しかりと申せども此の事大事だいじなれば苦を忍んで申すものうしとおぼす

らん一篇きこしめすべし、村上天皇てんのうの前中書王の書を投げ給たまいしがごとく
なることなかれ。

さては八幡宮はちまんの御造営につきて一定さむそうや有らんずらむと疑うたがいいま
いらせ候なり、をやと云ひ我が身もうと申し二代が間きみにめしつかはれ奉たてまつり
てあくまで御恩ごおんのみなり、設そう一事相違すともなむのあらみかあるべき、わ
がみ賢人けんじんならば設上よりつかまつるべきよし仰おおせ下さるるとも一往いちおうはなに
事につけても辞退すべき事ぞかし、幸に讒臣等がことを左右さうによせば悦よろこんで
こそあるべきに望まるる事一の失とがなり、此これはさてをきぬ五戒ごかいを先せん生しょうに
持たもちて今生こんじょうに人身じんしんを得たり、されば云うに甲斐かいなき者なれども国主等謂いな
く失とがにあつれば守護しゆごの天いかりをなし給たまう況や命をうばわるる事は天の放
ち給たまうなり、いわうや日本国にほんこく四十五億八万九千六百五十九人の男女なんよをば四
十五億八万九千六百五十九の天まほり給たまうらん、然しかるに他国たこくよりせめ来る

大難は脱るべしとも見え候はぬは、四十五億八万九千六百五十九人の人人だいなんのがの天にも捨てられ給う上六欲四禅梵釈・日月・四天等にも放たれまいらせ給うにこそ候いぬれ、然るに日本国の国主等八幡大菩薩をあがめ奉りなばたまななに事のあるべきと思はるるが、八幡は又自力叶いがたければ宝殿を焼きてかくれさせ給うか、然るに自の大科をばかへりみず宝殿を造りてまほらせまいらせむとおもへり。

日本国の四十五億八万九千六百五十九人の一切衆生が釈迦・多宝・十方分身の諸仏・地涌と娑婆と他方との諸大士十方世界の梵釈・日月・四天に捨てられまひらせん分齊の事ならばはづかなる日本国の小神にほんこく天照太神・八幡大菩薩の力及び給うべしや、其の時八幡宮はつくりたりとてんしょうだいじんも此の国・他国にやぶらればくぼきところにちりたまりひききところに水あつまると、日本国の上一人より下万民にいたるまでさたせむ事は兼て又にほんこくかみいちにんばんみんか

知れり、八幡大菩薩は本地は阿弥陀ほとけにまします、衛門の大夫は念仏

・無間地獄と申す阿弥陀仏をば火に入れ水に入れ其の堂をやきはらひ念仏

者のくびを切れと申す者なり、かかる者の弟子・檀那と成りて候が八幡宮

を造りて候へども八幡大菩薩用いさせ給はぬゆへに此の国はせめらるるな

りと申さむ時はいかがすべき、然るに天かねて此の事をしろしめすゆへに

御造宮の大ばんしやうをはづされたるにやあるらむ 神宮寺の事のはづる

るも天の御計いか。

其の故は去ぬる文永十一年四月十二日に大風ふきて其の年の他国よりお

そひ来るべき前相なり風は是れ天地の使なりまつり事あらければ風あらし

と申すは是なり、又今年四月廿八日を迎えて此の風ふき来る、而るに四月

廿六日は八幡のむね上と承はる、三日の内の大風は疑なかるべし、蒙古

の使者の貴辺が八幡宮を造りて此の風ふきたらむに人わらひさたせざるべ

しや。

返す返す穩便おんびんにして・あだみうらむる氣色なくて身をやつし下人をもぐ

せずよき馬にももらず、のこぎりかなづち手にもちこしにつけてつねにえ

めるすがたにておわすべし、此の事一事もたがへさせ給たまうならば今生こんじょうに

は身をほろぼし後生ごしょうには惡道あくどうに墮おち給たまうべし、返す返す法華經ほけきょううらみさせ

給たまう事なかれ、恐恐きょうきょう。

五月廿六日

在御判

たゆうのさかんの
大夫志殿

さかんの
兵衛志殿

◆一八五 兵衛志殿 女房御返事

1108p

さかんののようほう

たまい

兵衛志殿 女房絹片裏給たまい候、此の御心ごこころは法華經ほけきょうの御宝前ごほうぜんに申し上げて

ごほう

もう

候、まこととはをばへ候はねども此の御房ごぼうたちの申し候は御子どもはなし

よにせけんふつふつとをはすると申され候こそなげかしく候へどもさりと
もと・をぼしめし候へ、きようきよう恐恐。

十一月廿五日

にちれん日蓮 在御判

兵衛志殿 女房御返事
さかんののようほうごへんじ

◆一八六 兵衛志殿御返事
さかんののごへんじ

1108p

我が法華經ほけきようも本・迹わこう和合して利益りやくを無量むりようにあらはす、各各二人又かくの
ごとし二人同心して大御所・守殿・法華堂ほっけ・八幡等はちまんつくりまいらせ給うな
らばこ此れは法華經ほけきようの御利生りしようとをもわせ給たまわざるべき、二人・一同の儀は車
の二つのわの如ごとし鳥の二つの羽のごとし、設たといさいしい妻子等の中のたがわせ給たまう
とも二人の御中おんちゆう不和ふわなるべからず、恐れ候へども

にちれん日蓮をたいとしとをもひあわせ給たまへ、もし中不和ふわにならせ給たまうならば二人
みようがの冥加いかながあるべかるらめと思しめせ、あなかしこ・あなかしこ、各

各みわきかたきもたせ給いたる人人なり、内より論出来れば鷸蚌の相扼も漁夫のをそれ有るべし、南無妙法蓮華經と御唱えつつしむべし、
べし、
きようきよう
○ 恐恐

十一月十二日

ひやうえの志殿御返事

◆ 一八七

1109p

懐胎のよし承り候い畢んぬ、それについては符の事仰せ候、日蓮相承の

中より撰み出して侯・能く能く信心あるべく侯、たとへば秘薬なりとも毒

を入れぬれば薬の用すくなし、つるぎなれども・わるびれ〔臆病〕おくびょうたる人

のためには何かせん、
就中夫婦共に法華の持者なり法華經流布あるべきた
なかんずく ほつけ じしゃ ほけきようるふ

ねをつぐ所の玉の子出で生れん目出度覚え候ぞ、色心二法をつぐ人なり争か

・をそなはり候べき、とくとくこそ・うまれ候はむずれ、此の薬をのませ

給はば疑たまいなるべきなり、闇なれども灯入りぬれば明あきらかなり濁水にも
月入りぬればすめり、明あきらかなる事・日月にちがつにすぎんや淨き事蓮華れんげにまざるベ
きや、法華經は日月ほけきようと蓮華にちがつとなり故に妙法蓮華經と名く、日蓮又日月なすと蓮華にちれん
との如ごとくなり、信心しんじんの水すまば利生の月・必ず応を垂れ守護しゆごし給たまうべし、
とくとくうまれ候ほけきようべし法華經に云く「如是妙法」又云く「安樂産福子」云
云、口伝相承くでんそうじようの事は此の弁公にくはしく申しもつふくめて候・則・如来にやらいの使な
るべし返す返すも信心しんじん候べし。

天照大神は玉を・そさのをのみことにさづけて玉の如ごとくの子をまふけた
り、然しかる間・日の神・我が子となづけたり、さてこそ正哉吾勝とは名けた
れ、日蓮にちれんうまるべき種をさづけて候そうらへば争か我が子にをとるべき、「有一
宝珠ほうしゆけ価直三千」等、「無上宝聚不求自得・釈迦如来皆是吾子」等云云、日蓮にちれん
あに此の義にかはるべきや、幸なり幸なりめでたしめでたし・又又申もうすべ

く候、あなかしこ・あなかしこ。

ぶんえい
文永八年五月七日

にちれんかおう
日蓮花押

しじょうきんこ にようほうこへんじ
四条金吾殿 女房御返事

◆一八八 月満御前御書 ぶんえい 文永八年五月 五十歳御作 1110p

わかわらべ

若童生れさせ給いし由承り候目出たく覚へ候、殊に今日は八日にて候、

彼れと云い此れと云い所願しをの指すが如く春の野に華の開けるが如し、

然ればいそぎいそぎ名をつけ奉る月満御前と申すべし、其の上此の国の主

はちまんだいぼさつ

八幡大菩薩は卯月八日に生まれさせ給ふ娑婆世界の教主釈尊も又卯月八

日に御誕生なりき、今の童女又月は替れども八日に生まれ給ふ釈尊八幡の

生まれ替りとや申さん、日蓮は凡夫なれば能くは知らず是れ併しながら日蓮

が符を進らせし故なり、さこそ父母も悦び給うらん、殊に御祝として餅酒

がもく

鳥目一貫文送り給ひ候い畢んぬ是また御本尊十羅刹に申し上げて候、今日

の仏生れさせまします時に三十二の不思議あり此の事周書の異記と云う
文にしるし置けり。

釈迦仏は誕生し給いて七歩し口を自ら開いて「天上・天下唯我独尊・
さんがいみな

三界皆苦我当度之」の十六字を唱へ給ふ、今の月満御前はうまれ給いてう

ぶごろに南無妙法蓮華經と唱へ給ふか、法華經に云く「諸法実相」天台の

云く「声為仏事」等云云、日蓮又かくの如く推し奉る、譬えば雷の音耳

しいの為に聞く事なく日月の光り目くらの為に見る事なし、定めて十羅刹女

は寄り合うてうぶ水をなで養ひ給うらんあらめでたやあらめでたや御悦び

推量申し候、念頃に十羅刹女天照太神等にも申して候、あまりの事に候間

委くは申さず、是より重ねて申すべく候、穴賢穴賢。

日蓮花押

ぶんえい
文永八年七月 五十歳御作

1111p

雪のごとくいわ白く候白米一斗古酒のごとく候油一筒御布施一貫文、態使わざわざ

者を以て盆料送り給たまい候、殊ことに御文の趣有難かたくあはれに覚おほえ候。

そもそもうらぼん

もともくれんそんじや

しょうだいによ

もう

けんどん

抑 孟蘭盆と申もうすは源目連尊者の母青提女と申もうす人慳貪の業によりて五

ひやくしやう

がき

たま

候を

目連救ひ

しより

事起りて

候、

然りと雖も

いえど

百生・餓鬼道にをち給たまいて候をもくれん目連救ひしより事起りて候、然りと雖も

そのゆえ

ほけきやう

ぎやうじや

ゆえ

ゆえ

ゆえ

ゆえ

ゆえ

仏にはなさず其の故は我が身いまだ法華經の行者ならざる故に母をも仏に

りやうぜんはちかねん

ざせき

ほけきやう

たま

なむみやうほうれんげきやう

とな

とな

とな

なす事なし、靈山八箇年の座席にして法華經を持ち南無妙法蓮華經と唱え

たまらばせんだんこうぶつ

たま

給い

此の時母も

仏になり

給う、

又施餓鬼の事仰せ

おほ

て多摩羅跋栴檀香仏となり給たまい此の時母も仏になり給う、又施餓鬼の事仰せ

ほけきやう

い

けこく

こつぐ

だいおう

こんきやう

云云、

此の文は

中根の四

候、法華經第三に云く「如從飢国来忽遇大王膳」云云、此の文は中根の四

しょうもん

だいご

い

けこく

こつぐ

だいおう

こんきやう

云云、

此の文は

中根の四

大声聞・醍醐の珍膳をおとにもきかざりしが今經に來つて始めて醍醐の

しょうもん

だいご

い

けこく

こつぐ

だいおう

こんきやう

云云、

此の文は

中根の四

味をあくまでになめて昔しうへたる心を忽にやめし事を説き給う文なり、

も

しか

がき

くやう

じゆ

な

む

みやうほうれんげきやう

とな

とな

若し爾らば餓鬼供養の時は此の文を誦して南無妙法蓮華經と唱えてとぶら

ひ給^{たま}うべく候。

総じて餓鬼^{がき}にをいて三十六種類^{しゅるい}相わかれて候、其^その中に☆身餓鬼^{かくしんがき}と申^{もう}すは目と口となき餓鬼^{がき}にて候、是^{いか}は何なる修因^{しゅういん}ぞと申^{もう}すに此の世にて夜討強盗などをなして候によりて候、食吐^{じきど}餓鬼と申^{もう}すは人の口よりはき出す物^{いた}を食し候是も修因^{しゅういん}上の如^{ごと}し、又人の食をうばふに依^より候、食水餓鬼^{がき}と云うは父母孝養のため^{ふぼこうよう}に手向る水などを吞む餓鬼^{がき}なり、有財餓鬼^{がき}と申^{もう}すは馬のひずめの水をのむがきなり是は今生^{こんじょう}にて財^{たから}を・をしみ食をかくす故なり、無財^{むざい}がきと申^{もう}すは生れてより以来飲食^{いらいおんじき}の名をもきかざるがきなり、食法^{しきはう}がきと申^{もう}すは出家^{しゅつげ}となりて仏法^{ぶつぽう}を弘^{ひろ}むる人・我は法を説けば人尊敬するなご思^{おも}ひて名聞名利^{みょうもんめいり}の心を以て人にすぐれんと思^{おも}うて今生^{こんじょう}をわたり衆生^{しゅじょう}をたすけず父母^{ふぼ}をすくふべき心もなき人を食法^{しきはう}がきとて法をくらふがきと申^{もう}すなり、当世^{とうせ}の僧を見るに人に・かくして我、一人ばかり供養^{くよう}をうくる

人もあり是は狗犬くけんの僧ねはんぎようと涅槃經に見えたり、是は未来みらいには牛頭ごずと云う鬼となるべし、又人にしらせて供養くようをうくるとも欲心よくしんに住して人に施ほどこす事なき人もあり是は未来みらいには馬頭めずと云う鬼となり候、又在家ざいけの人人ひとびとも我が父母地獄ふぼじごく・餓鬼がき・畜生ちくしやうにおちて苦患くかんをうくるをばとぶらはずして我は衣服飲食えぶくおんじきにあきみち牛馬眷属ぎゆうばけんぞくじゆうまん充滿みみして我が心に任せてたのしむ人をば・いかに父母ふぼのうらやましく恨み給たまうらん、僧の中にも父母師匠ししやうの命日をとぶらふ人はまれなり、定めて天の日月地の地神ちがたいかりいきどをり給たまいて不孝ふこうの者とおもはせ給たまうらん形は人にして畜生ちくしやうのごとし人頭鹿にんずろくとも申もうすべきなり、日蓮にちれん此の業障ごうしやうをけしはてて未来みらいは靈山淨土りやうぜんじやうどにまいるべしとおもへば種種しゆじゆの大難雨だいなんのごとくふり雲のごとくにわき候へども法華經ほけきやうの御故なれば苦をも苦ともおもはず、かかる日蓮にちれんが弟子でし・檀那だんなとなり給たまう人人殊ひとびとことに今月十二日の妙法みやうほうしやうりやう 聖靈しやうりやうは法華經ほけきやうの行者ぎやうじやなり日蓮にちれんが檀那だんななりいかでか餓鬼道がきにおち給たまうべき

や、定めて釈迦・多宝仏・十方の諸仏の御宝前にまします、是こそ
四条金吾殿の母よ母よと同心に頭をなで悦びほめ給うらめ、あはれいみじ
き子を我はもちたりと釈迦仏とかたらせ給うらん、法華經に云く「若し
善男子・善女人有つて妙法華經の提婆達多品を聞いて淨心に信敬して疑惑
を生ぜざらん者は地獄・餓鬼・畜生に墮ちずして十方の仏前に生ぜん、
所生の処には常に此の經を聞かん、若し人天の中に生れば勝妙の樂を
受け、若し仏前に在らば蓮華より化生せん」と云云、此の經文に善女人と
見へたり妙法聖靈の事にあらずんば誰が事にやあらん、又云く「此の經
は持つこと難し若し暫も持つ者は我即ち歡喜す諸仏も亦然なり是の如きの
人は諸仏の歎めたもう所」と云云、日蓮讚歎したてまつる事はもののかず
ならず、諸仏所歎と見えたり、あらたのもしやあらたのもしやと信心をふ
かくとり給うべし信心をふかくとり給うべし、南無妙法蓮華經・南無

みょうほうれんげきよう
妙法蓮華經、 恐恐 謹言。

七月十二日

にちれん
日蓮 花押 かおう

しじょうきんご
四条金吾殿御返事 ごへんじ

◆一九〇

しじょうきんご
四条金吾殿御消息 しょうそく

1113p

たびたび

おとずれもう

度度の御音信申しつくしがたく候、さてもさても去る十二日の難のとき

きへん

貴辺たつのくちまでつれさせ給い、しかのみならず腹を切らんと仰せられ

し事こそ不思議とも申すばかりなけれ、

ふしぎ

もう

にちれんかこ

さいししりようけんぞく

ゆえ

日蓮過去に妻子所領眷属等の故に

しんみよう

身命を捨てし所いくそばくありけむ、或は山にすて海にすて、或は河

ある

或はいそ等路のほとりか、然れども法華經のゆへ題目の難にあらざれば

捨てし身も蒙る難等も成仏のためならず、

こおむ

なん

じょうぶつ

成仏のためならざれば捨てし

海河も仏土にもあらざるか。

このたび

ほけきよう

ぎようじゃ

るざい

しざい

今度・法華經の行者として流罪・死罪に及ぶ、

流罪は伊東死罪はたつの

くち相州のたつのくちこそ

にちれん

日蓮が命を捨てたる処なれ

仏土におとるべし

くち相州のたつのくちこそ

にちれん

日蓮が命を捨てたる処なれ

仏土におとるべし

や、其の故は・すでに法華經の故なるがゆへなり、經に云く「十方仏土中

ゆいいうちじよう

唯一乘法」と此の意なるべきか、此の經文に一乘法と説き給うは法華經

じゅつぽう

の事なり、十方仏土の中には法華經より外は全くなきなり除仏方便説と見

も

えたり、若し然らば日蓮が難にあう所ごとに仏土なるべきか、娑婆世界の

にほんこくにほんこく

中には日本国日本国の中には相模の国相模の国の中には片瀬片瀬の中には

たつのくち

竜口に日蓮が命をとどめをく事は法華經の御故なれば寂光土ともいうべき

じんりきほん

か、神力品に云く「若於林中若於園中若山谷曠野是中乃至而般涅槃」とは

是か。

はか。

にちれん

かかる日蓮にともなひて法華經の行者として腹を切らんと給う事かの

こうえん

弘演が腹をさいて主の懿公がきもを入れたるよりも百万倍すぐれたる事

にちれんりようぜん

なり、日蓮靈山にまいりてまづ四条金吾こそ法華經の御故に日蓮とをなじ

もう

く腹切らんと申し候なりと申し上げ候べきぞ、又かまくらの仰せとて

もう

内内佐渡さどの国へつかはすべき由承り候たまわ、三光天子てんしの中に月天子がつてんしは光物とあ

らはれ竜口たつのくちの頸をたすけ、明星天子てんしは四五日いぜん已前に下りて日蓮にちれんに見参し

給ふたま、いま日天子にってんしばかりのこり給ふ定めて守護しゅごあるべきかと・たのました

のもし、法師品ほうしほんに云くいわ「則遣变化人へんか為之作衛護まも」疑うたがひあるべからず、

安樂行品あんらくぎょうほんに云くいわ「刀杖不加とうじょう」普門品ふもんほんに云くいわ「刀尋段段壞これら」此等の経文よ

も虚事そらごとにては候はじ、強盛じょうじょうの信力しんりきこそありがたく候へ、恐恐きょうきょう謹言きんげん。

ぶんえい
文永八年九月二十一日

にちれん
日蓮 花押 かおう

しじょうきんご
四条金吾殿

◆一九一 同生同名御書ごしよ

ぶんえい
文永九年四月 五十一歳御作

此の御文おんふみは藤四郎殿にようぼうの女房と常によりあひて御覧あるべく候。

大閻おおよみをば日輪にちりんやぶる女人にょにんの心は大閻のごとし法華経は日輪のごとし、幼子

は母をしらず母は幼子をわすれず、釈迦仏しゃかぶつは母のごとし女人は幼子のごと

し、二人たがひに思へば・すべてはなれず一人は思へども一人思はざれば
あるときはあひ・あるときはあわず、仏は・をもふものの・ごとし女人は
・をもはざるものの・ごとし、我等・仏を・をもはば・いかでか釈迦仏見
え給はざるべき、石を珠といへども珠とならず珠を石といへども石となら
ず、権経の当世の念仏等は石のごとし、念仏は法華経ぞと申すとも法華経
等にあらず、又法華経をそしるとも珠の石とならざるがごとし。

昔唐国に徽宗皇帝と申せし悪王あり、道士と申すものにすかされて仏像
・経巻をうしなひ僧尼を皆還俗せしめしに一人として還俗せざるものなか
りき、其の中に法道三蔵と申せし人こそ勅宣をおそれずして面になをや
かれて江南と申せし処へ流されて候いしが、今の世の禪宗と申す道士の
法門のやうなる悪法を御信用ある世に生れて、日蓮が大難に値うことは法道
に似たり、おのおの・わずかの御身と生れて鎌倉にゐながら人目をも・は

ばからず命をも・おしまず法華經ほけきようを御信用ごしんようある事ただ事とも・おぼえず、
但おしはかるに濁水に玉を入れぬれば水のすむがごとし、しらざる事を・
よき人に・おしえられて其そのままに信用しんようせば道理どうりに・きこゆるがごとし、
釈迦しゃか・普賢菩薩ふげんぼさつ・藥王菩薩やくおうぼさつ（やくおうぼさつ）・宿王華菩薩等ぼさつの各各の御
心中しんちゆうに入り給たまへるか、法華經ほけきようの文に閻浮提えんぶだいに此の經を信ぜん人は普賢菩薩ふげんぼさつ
の御力おんちからなりと申もうす是これなるべし、女人にょにんは・たとへば藤のごとし・をとこは松
のごとし須臾しゆゆも・はなれぬれば立ちあがる事なし。

はかばかしき下人もなきに・かかる乱みだれたる世に此のとのを・つかはさ
れたる心ざし大地だいちよりも・あつし地神定めてしりぬらん・虚空こくうよりも・た
かし梵天ぼんてん・帝釈たいしゃくもしらせ給たまいぬらん、人の身には同生同名と申もうす二のつか
ひを天生るる時よりつけさせ給たまいて影の身にしたがふがごとく須臾しゆゆもはな
れず、大罪たいざい・小罪しょうざい・大功徳くどく・小功徳くどくすこしも・おとさずかはる・かはる天

にのぼて申し候と仏説き給う、此の事ははや天も・しろしめしぬらん、た
のもしし・たのもしし。

四月 日

にちれんかおう
日蓮花押

しじょうきんご にようぼうごへんじ
四条金吾殿 女房御返事

◆一九二

しじょうきんご ごへんじ
四条金吾殿御返事

ぶんえい
文永九年五月五十一歳 御作

1116p

にちれん しよなん
日蓮が諸難について御とぶらひ今に・はじめざる 志 ありがたく候、

ほけきよう ぎよつじや
法華經の行者として・かかる大難にあひ候は・くやくおもひ候はず、い

かほど生をうけ死にあひ候とも是ほどの果報の生死は候はじ、又三悪・四

趣にこそ候いつらめ、今は生死切断し仏果をうべき身となれば・よろこば

しく候。

てんだい だんぎよう
天台・伝教等は迹門の理の一念三千の法門を弘め給うすら・なを怨嫉

の難にあひ給いぬ、日本にしては伝教より義真・円澄・慈覚等・相伝して弘め給ふ、第十八代の座主・慈慧大師なり御弟子あまたあり、其の中に檀那・慧心僧賀・禅喻等と申して四人まします、法門又二つに分れたり、檀那僧正は教を伝ふ、慧心僧都は觀をまなぶ、されば教と觀とは日月のごとし教はあさく觀はふかし、されば檀那の法門は・ひろくして・あさし、悪心の法門は・せばくして・ふかし。

今日蓮が弘通する法門は・せばきやうなれども・はなはだふかし、其の故は彼の天台・伝教等の所弘の法よりは一重立入りたる故なり、本門寿量品の三大事とは是なり、南無妙法蓮華經の七字ばかりを修行すればせばきが如し、されども三世の諸仏の師範・十方薩埵の導師・一切衆生・皆成仏道の指南にてましますなれば・ふかきなり、經に云く「諸仏智慧・甚深無量」云云、此の經文に諸仏とは十方三世の一切の諸仏・真言宗の

だいにちによらい じょうどしゅう 大日如来・浄土宗の阿弥陀・乃至諸宗・諸經の仏・菩薩・過去・未来・
げんざい しょうぶつ げんざい しょうぶつ 現在の總諸仏・現在の釈迦如来等を諸仏と説き挙げて次に智憲といへ
り、此の智慧とは・なにもので諸法実相・十果成の法体なり、其の法体
とは又なにもので南無妙法蓮華經是なり、釈に云く「実相の深理・本有の
妙法蓮華經」といへり、其の諸法実相と云うも釈迦・多宝の二仏とならう
なり、諸法をば多宝に約し実相をば釈迦に約す、是れ又境智の二法なり多宝
は境なり釈迦は智なり、境智而二にして・しかも境智不二の内証なり、
此等はゆゆしき大事の法門なり煩惱即菩提・生死即涅槃と云うもこれなり、
まさしく男女交會のとき南無妙法蓮華經と・となふるところを煩惱即菩提
・生死即涅槃と云うなり、生死の当体不生不滅とさるより外に生死即涅
槃はなきなり、普賢經に云く「煩惱を断ぜず五欲を離れず諸根を淨むるこ
とを得て諸罪を滅除す」止觀に云く「無明度勞は即是菩滿生死は即涅槃な

り」じゅうりょうぼん 寿量品に云く「毎に自ら是の念を作す、何を以てか衆生をして無上道むじょうどう

に入り、速にすみや 仏身ぶつしんを成就じょうじゆすることを得せしめん」と方便品に云く「世間の

じょうじゆう

相常住じょうじゆうなり」等は此の意なるべし、此くかの如く法体ほつたいと云うも全く余には

あら

なむ みようほう

非ずただ南無妙法頸華經の事なり、かかる・いみじくたうとき法華經を

かこ

過去にて勃ごのしたに・をきたてまつり・或はあなづりくちひそみ、或

は信じ奉らず、・或は法華經の法門をならうて一人をも教化し法命をつぐ

人を悪心あくしんをもつて・とによせ・かくによせ・おこつきわらひ、・或は後生

のつとめなれども即今生こんじようかなひがたければ・しばらく・さしをけなんどと

無量むりようにいひうとめ謗ぼうぜしによつて今生こんじように日蓮種にちれんしゆじゆの大難だいなんにあうなり。

しよきよう

諸經の項上たる御經を鵬たてまつきくをき奉る故によりて現社げんほくに又人に紆ふげられ

用もちいられざるなり、譬喩品ひゆほんに「人にしたしみつくとも人山ふびんがいれて不便と

おもふべからず」と説ときたり、然るに血月ほけきよう辺法華經ぎようじやの行者けつくだいなんとなり結句大難

- 2352 -

にもあひ日蓮にちれんをもたすけ給たまう事、法師品ほうしほんの文に「造化四衆ししゅう・比丘比丘びくびく優婆塞優婆襲うばそくうば」と説き給たまふ此の中の優婆塞うばそくとは貴辺きへんの事にあらずんば・たれをかささむ、すでに法を聞いて信受しんじゆして逆はざればなり不思議ふしぎや不思議ふしぎや、若もし然しからば日蓮にちれん・法華經ほけきようの法師ほつしなる事疑うたがいなきか、則すなわち如来にょらいにもたるらん行如来事にょらいをも行ずるになりなん。

多宝塔中たほうたうちゅうにして二仏・並坐の時・上行菩薩じようぎようぼさつに譲ゆずり給たまいし題目だいもくの五字ごじをにちれんほぼ日蓮粗もつひろめ申もうすなり、此これ即すなわち上行菩薩じようぎようぼさつの御使おんつかいいか、貴辺きへん又日蓮にちれんにしがひて法華經ほけきようの行者ぎようじやとして諸人しよにんにかたり給たまふ是これ豈流通あにるつうにあらずや、法華經ほけきようの信心しんじんを・とをし給たまへ・火をきるに・やすみぬれば火をえず、強盛こつじようの大信力しんりきをいだして法華宗ほつけしゆうの四条金吾しじようきんご・四条金吾しじようきんごと鎌倉中かまくらの上下万人じようげばんにん・乃至日本国いっさいしゆじようの一切衆生いっさいしゆじようの口にうたはれ給たまへ、あしき名さへ流す況やよき名をいかや何いかに況や法華經ほけきようゆへの名をや、女房にようほうにも此この由よしを云ひふくめて日月にちがつ・

りようげん

両眼・さうのつばさと調ひ給へ、日月あらば冥途あるべきや 両眼あらば

三仏の顔貌拝見疑なし、さうのつばさあらば寂光の宝刹へ飛ばん事・

しゅゆせつな

須臾刹那なるべし、委しくは又又申べく候、恐惶謹言。

きようこうきんげん

五月二日

しじょうきんご ごへんじ

四条金吾殿御返事

にちれんかおう
日蓮花押

◆一九三 四条金吾殿御返事 文永九年九月 五十一歳御作 1118p

そ せい かんこう

夫れ斉の桓公と申せし王・紫をこのみて服給いき、楚の莊王と言いし王

たまい

は女の腰のふとき事を・にくみしかば一切の遊女腰をほそからせんがため

に餓死しけるものおほし、しかれば一人の好む事をば我が心にあはざれど

ばんみんしたが

も万民随いしなり、たとへば大風の草木をなびかし大海の衆流をひくが

たいふう

そうもく

たいかい

しゅうる

ごと

如し、風にしたがはざる草木は・をれうせざるべしや、小河大海におさま

そうもく

たいかい

らずばいづれのところにおさまるべきや、国王と申す事は先生に万人にす

こくおう もう

せんしやう ばんにん

来て大戒だいかいを持ち天地及び諸神しよゆるし給たまいぬ、其の大戒だいかいの功德くどくをもちて其の
 住むべき国土こくどを定む、二人・三人等を王とせず地王・天王海王山王等悉く
 来臨らいりんしてこの人をまほる、いかにいはんや其の國中しよの諸民しよ其の大王だいおうを背く
 べしや、此の王はたとひ惡逆あくぎやくを犯すとも一二三度等には左右さうなく此の大王
 を罰せず、但諸天等しよてんの御心かなに叶あわざるは一往いちおうは天変地天等てんぺんちようをもちてこれを
 いさむ、事過分ごきたすれば諸天善神等しよてんぜんじん其の国土こくどを捨離しゃりし給う、若しは此の大王だいおう
 の戒力けいりきつき期来ききたつて国土こくどのほろぶる事もあり、又逆罪ぎやくつみ多くにかさまれば隣国
 に破らるる事もあり、善惡ぜんあくに付て国は必ず王に随したがうものなるべし。

世間せけん此ことくの如ごとし仏法ぶつぽうも又然しかなり、仏陀ぶつだすでに仏法ぶつぽうを王法たに付し給うしか
 ればたとひ聖人しょうにん・賢人けんじんなる智者ちしやなれども王にしたがはざれば仏法ぶつぽう流布るふせ
 ず、或あるは後には流布るふすれども始めには必ず大難だいにん来る、迦貳志加王は仏の

滅後めつご四百余年の王なり健陀羅國けんたらこくを掌たなこころのうちににぎれり、五百の阿羅漢あらかんを
歸依きえして婆沙論ばしゃろん二百卷をつくらしむ、國中総しゅうじょうて小乘しょうじょうなり其の國に大乘弘だいじょうひろ
めがたかりき、發舍密多羅王はつしゃみつたらおうは五天竺てんじくを随ぶつぼうへて仏法ぶつぽうを失うしないしゅうそうひ衆僧しゅうそうの頸けいをきる、
誰たれの智者ちしやも叶かなわず。

太宗たいそうは賢王けんおうなり玄奘三藏げんじょうさんざうを師しとして法相宗ほうそうしゅうを持たもち給たまいき誰の臣下しんかかそ
むきし、此この法相宗ほうそうしゅうは大乗だいじょうなれども五性各別かくべつと申もうして仏教中ぶつきやうのおほきな
るわざはひと見えたり、なを外道げどうの邪法じゃほうにもすぎ惡法あくほうなり、月支がっし・震旦しんたん・
日本にほん三国共にゆるさず、終ついに日本國にほんこくにして伝でんぎようだいし教大師みでの御手みでにかかりて此の
邪法止め畢おわんぬ、大なるわざはひなれども太宗たいそうこれを信仰しんこうし給たまいしかば誰
の人かこれをそむきし。

真言宗しんこんしゅうと申もうすは大日經だいにちきよう・金剛頂教こんこうちやう・蘇悉地經そしつちきようによるこれを大日の三部
と号ごうす、玄宗皇帝げんそうこうていの御時おんとき・善無畏三藏ぜんむいさんざう・金剛智三藏こんこうちさんざうより將まさち來きれり、

げんそう
玄宗これを尊重し給う事天台・華嚴宗等にもこへたり、法相・三論にも
すぐ おほめ ゆえ かんど だいにちきよう ほけきよう まさ
勝れて思し食すが故に漢土は総て大日経は法華経に勝ると・おもひ日本
とうせ てんだいしゅう しんこんしゅう
当世にいたるまで天台宗は真言宗に劣るなりとおもふ、彼の宗を学する
とうじ てんだい こうそう まんかまん ただ だいにちきよう ほけきよう
東寺・天台の高僧等慢過慢をおこす、但し大日経と法華経とこれをならべ
へんと う これ だいにちきよう ほたるび こと ほけきよう
て偏党を捨て是を見れば大日経は螢火の如く法華経は明月の如く真言宗
しゅうせい こと てんだいしゅう にちりん こと へんしゅう
は衆星の如く天台宗は日輪の如し、偏執の者の云く汝未だ真言宗の
じんぎ なら むじん とが もう ただ しんこんしゅう かんど わた
深義を習いきはめずして彼の無尽の科を申す、但し真言宗漢土に渡つて六
にほん ひろ
百余年日本に弘まりて四百余年此の間の人師の難答あらあらこれをしれり、
でんぎよう だいし ほうもん こんげん たま
伝教大師一人・此の法門の根源をわきまへ給う、しかるに当世・日本
だいいち とがこれ ほうもん こんげん とうせ にほんこく
第一の科是なり、勝を以て劣と思ひ劣を以て勝と思ふの故に大蒙古国を
じょうぶく かえ
調伏する時・還つて襲われんと欲す是なり。
けこんしゅう もう ほうそう ほっし しよりゅう

華嚴宗と申すは法蔵法師が所立の宗なり、
そくてん とうじう こきえ
則天皇后の御帰依ありしによ

りて諸宗肩をならべがたかりき、しかれば王の威勢によりて宗の勝劣はありけり法に依つて勝劣なきやうなり。

たとひ深義を得たる論師・人師なりといふとも王法には勝がたきゆへにたまたま勝んとせし仁は大難にあへり、所謂師子尊者は檀弥羅王のために頸を刎ねらる、提婆菩薩は外道のために殺害せらる、竺の道生は蘇山に流され法道三蔵は面に火印をされて江南に放たれたり、而るに日蓮は法華經の行者にもあらず又僧侶の数にもいらず。

然り而して世の人に随て阿弥陀仏の名号を持ちしほどに阿弥陀仏の化身とひびかせ給う善道和尚の云く「十即十生・百即百生乃至千中無一」と、勢至菩薩の化身とあをがれ給う法然上人・此の釈を料簡して云く「末代に念仏の外の法華經等を雜ふる念仏においては千中無一一向に念仏せば十即十生」と云云、日本国の有智・無智仰いで此の義を信じて今に

五十余年一人も疑うたがいを加へず、唯日蓮ただにちれんの諸人しよにんにかはる所は阿弥陀仏あみだぶつの本願ほんがんには「唯五逆ただごぎやくと誹謗ひぼう正法しやうほうとを除く」とちかひ、法華經ほけきやうには「若もし人信ぜずして此の經を毀謗きぼうせば則ち一切世間の仏種を斷ず、乃至其の人命終みやうじゆうして阿鼻獄あびごくに入らん」と説かれたり、此れ善導ぜんどう・法然ほうねん謗法の者なればたのむところの阿弥陀仏あみだぶつにすてられをはんぬ、余仏余經よぶつよきやうにおいては我と抛なげうちぬる上は救い給たまうべきに及ばず、法華經ほけきやうの文の如ごときは無間地獄むげんじごく・疑うたがいなしと云云、而しかにほんこくを日本国はをしなべて彼等が弟子たるあひだ此の大難だいなんまぬかれがたし。無尽むじんの秘計ひけいをめぐらして日蓮にちれんをあだむ是これなり先先の諸難しよなんはさておき候いぬ、去年こぞ九月十二日御勘氣ごかんきをかほりて其の夜のうちに頭こづへをはねらるべきにてありしがいかなる事にやよりけん彼の夜は延びて此の国に來りていままで候に世間せけんにもすてられ仏法ぶつぽうにもすてられ天もとぶらはれず二途ふたみちにかけたるすてものなり、而しかを何いかなる御志ごしにてこれまで御使おんつかいをつかはし御身おんみ

には一期の大事たる悲母の御追善第三年の御供養を送りつかはされたる兩
三日はうつつともおぼへず、彼の法勝寺の修行がいをはが嶋にて・としご
ろつかひける童にあひたりし心地なり、胡国の夷陽公といひしもの漢土に
いけどられて北より南へ出けるに飛びまひける雁を見てなげきけんもこれ
にはしかじとおぼへたり。

但し法華經に云く「若し善男子・善女人・我が滅度の後に能く竊かに一
人の為にも法華經の乃至一句を説かん、当に知るべし是の人は則ち如来の
使如来の所遣として如来の事を行ずるなり」等云云、法華經を一字・一句
も唱え又人にも語り申さんものは教主釈尊の御使なり、然れば日蓮賤身
なれども教主釈尊の勅宣を頂戴して此の国に来れり、此れを一言もそ
しらん人人は罪を無間に開き一字・一句も供養せん人は無数の仏を供養す
るにも・すぎたりと見えたり。

きようしゅしくそん いちだい きようしゅいつさいしゅじよう
教主釈尊は一代の教主一切衆生の導師なり、
はちまんほうそう みなきんげん
八万法蔵は皆金言十二
部経は皆眞実なり、
むりよう
無量億劫より以来持ち給いし不妄語戒の所詮は一切経
これ
是なり、
うたがい
疑うべきにあらず、
但是は總相なり別してたづぬれば
によらい きんく しゅつたい しようじよう だいじよう けんみつこんきよう じつきよう
如来の金口より出来して小乗・大乘・顕密権経・実経是あり、
ほけきよう
今この法華経は「
しょうじきしやほうべん ないしせそんほうくご しようとうせつしんじつ
正直捨方便等乃至世尊法久後・要当說眞実」と説き給う事な
れば誰の人か疑うべきなれども多宝如来証明を加へ諸仏舌を梵天に付
うたがい
給う、
たま
されば此の御経は一部なれども三部なり一句なれども三句なり一
字なれども三字なり、
ほけきよう
此の法華経の一字の功德は釈迦・多宝・十方の諸仏
くどく
の御功德を一字におさめ給う、
たま
たとへば如意宝珠の如し一珠も百珠も同じ
き事なり一珠も無量の宝を雨す百珠も又無尽の宝あり、
むりよう ふら むじん
たとへば百草を抹
りて一丸乃至百丸となせり一丸も百丸も共に病を治する事これをなじ、
ないし
譬へ
ば大海の一・も衆流を備へ一海も万流の味をもてるが如し。
たいかい しゅうる ごと

みようほうれんげきよう
妙法蓮華經と申すは総名なり二十八品と申すは別名なり、月支と申すは

てんじく

天竺の総名なり別しては五天竺是なり、日本と申すは総名なり別しては六

てんじく

十六州これあり、如意宝珠と申すは釈迦仏の御舍利なり竜王に・これを

たま

給いて頂上に頂戴して帝釈是を持ちて宝をふらす、仏の身骨の如意宝珠

たま

となれるは無量劫来持つ所の大戒身に薰じて骨にそみ一切衆生をたすける

たま

珠となるなり、たとへば犬の牙の虎の骨にとく魚の骨の・の氣に消ゆるが

たま

如し、乃至師子の筋を琴の絃にかけてこれを弾けば余の一切の獣の筋の絃皆

き

きらざるにやぶる、仏の説法をば師子吼と申す乃至法華經は師子吼の第一

なり。

なり。

仏

には三十二相そなはり給う一一の相皆百福莊嚴なり、肉髻白毫など

もう

申すは菓の如し因位の華の功德等と成つて三十二相を備え給う、乃至

むけんちようそう

無見頂相と申すは釈迦仏の御身は丈六なり竹杖外道は釈尊の御長をはか

らず御頂を見奉らんとせしに御頂を見たてまつらず、
たてまつらず、大梵天王も御頂をば見たてまつらず、
これは・いかなるゆへぞとたづねれば父母・師匠主君を頂を地につけて
恭敬し奉りしゆへに此の相を感得せり。

ないしほんおんじよう

もう

だいいち

だいおうてんりんおう

乃至梵音声と申すは仏の第一の相なり、小王大王転輪王等・此の相を

いちぶん

一分備へたるゆへに此の王の一言に国も破れ国も治まるなり、宣旨と申す

ほんおんじよう

いちぶん

ばんみん

およ

すなわさんぶん

は梵音声の一分なり、万民の万言一王の一言に及ばず、則ち三墳・五典な

もう

みことば

しょうこく

ないしだいほんてんのうさんがい

しゅじよう

んど申すは小王の御言なり、此の小国を治め乃至大梵天王三界の衆生を

だいほんてんのう

たいしゃく

たま

ほんおんじよう

これら

随ふる事仏の大梵天王・帝釈等をしたがへ給う事もこの梵音声なり、此等

ほんおんじよういつさいきよう

いつさいしゅじよう

りやく

そ

ほけきよう

しゃかによらい

の梵音声一切経と成つて一切衆生を利益す、其の中に法華経は釈迦如来

あらわ

こえ

もんじ

たま

もんじ

の書き顕して此の御音を文字と成し給う仏の御心はこの文字に備れり、た

しゅし

とへば種子と苗と草と稻とはかはれども心はたがはず。

釈迦しゃか仏ぶつと法華ほけ經きょうの文字もんじとはかはれども心こころは一つなり、然しかれば法華ほけ經きょうの文字もんじを拜はい見けんせさせ給たまうは生身しょうしんの釈迦しゃか如來にょらいにあひ進まいらせたりとおぼしめすべし、此この志こころざし佐渡さどの国くにまでおくりつかはされたる事ことすでに釈迦しゃか仏ぶつ知しし食くし畢おわぬ、実じつに孝養こうようの詮しゆんなり、恐恐きょうきょう謹言きんげん。

文永九年 月 日

にちれん
日蓮在御判

四條三郎殿御返事

◆一九四

経王御前御書

文永九年五十一歳御作

1123p

種種しゆじゆ御送り物給ひ候い畢おわぬ、法華ほけ經きょう第八はち・妙莊嚴みょうそうごん王品おうひんと申もうすには妙莊嚴みょうそうごん王おう・淨徳じやうとく夫人ふじんと申もうす後は淨蔵じやうざう・淨眼じやうがんと申もうす太子たいしに導みちびかれ給たまうと説たかれて候きやう、経王御前きやうおうごぜんを儲もさせ給たまいて候へば現世げんせには跡あとをつぐべき孝子こうしなり後生ごしやうには又導またみちびかれて仏ぶつにならせ給たまうべし、今の代よは濁世じやくせと申もうして乱みだれて候なり、其その上うへ・眼前がんぜんに世の中よのちう乱れて見え候へば皆人みな今生こんじやうには弓箭きやうせんの難なんに値あいて

しゅらどう 修羅道におち後生には悪道 疑いなし。

し かに 法華經を信ずる人人こそ仏には成るべしと見え候へ、御覧ある様に
しか ほけきよう
ひとびと
かかる事出来すべしと見へて候、故に昼夜に人に申し聞かせ候いしを用い
しゅったい
もう
らるる事こそなくとも科に行はるる事は謂れなき事なれども、古も今も人
とが
の損ぜんとは善言を用いぬ習いなれば終には用いられず世の中亡びんと
ぜんげん もち
なら
するなり、是れ偏に法華經・釈迦仏の御使いを責むる故に梵天・帝釈・
こ ひとえ ほけきよう
しゃかぶつ おんつかい
せ
日月・四天等の責めを蒙つて候なり、又世は亡び候とも日本国は南無
にちがつ してん
こつむ
なほんこく
なむ
みようほうれんげきよう
とな
そうら
如何に申さじと思うと
妙法蓮華經とは人ごとに唱え候はんずるにて候ぞ、
そし
いよい もつ
も毀らん人には弥よ申し聞かすべし、命生きて御坐ば御覧有るべし、又い
とな
にちれん
あだ
ひとびと
むげんじこく
かに唱うとも日蓮に怨をなせし人人は必ず無間地獄に堕ちて無量劫の後に
にちれん
でし
じようぶつ
べ
きようきようきんげん
日蓮の弟子と成つて成仏す可し、
きようきようきんげん
恐恐謹言。

しじようきんこ ごへんじ
四条金吾殿御返事

にちれん かおう
日蓮 花押

◆一九五

経王殿御返事

文永十年八月 五十二歳御作

1124p

其の後御おとづれきかまほしく候いつるところに・わざと人を・をくり
給候、又なによりも重宝たるあし山海を尋ねるとも日蓮が身には時に当た
りて大切に候。

夫について経王御前のこと・二六時中に日月天に祈り申し候、先日せんじつのまほ

暫時さんじも身を・はなさずたまち給へ、其の本尊ほんぞんは正法しょうぼう・像法ぞうぼう・二時には習

へる人だにもなし・ましてかき頭あらわし奉る事たえたり、獅子王ししおうは前三後ぜんさん・一

と申もうしてありの子を取らんとするにも又たけきものを取らんとする時も・

いきをひを出す事いだは・ただをなじき事なり、日蓮守護にちれんしゅごたる処ところの御本尊ごほんぞんを・

したため参らせ候事も獅子王ししおうに・をとるべからず、経に云く「獅子奮迅ししふんじんしりき之力」

とは是これなり、此の曼荼羅まんだら能く能く信ぜさせ給ふべし、南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようは獅子

吼この如し、いかなる病さわりをなすべきや、鬼子母神きしもじん・十羅刹如じゅううらせつ・法華經ほけきよう

の題目だいもくを持つものを守護しゅごすべしと見えたり、幸さいいは愛染あいぜんの如ごとく福ふくは毘沙門びしゃもん

の如ごとくなるべし、いかなる処ところにて遊びたはふるとも・つつがあるべからず

遊行おそして畏おそれ無きこと獅子王ししおうの如ごとくなるべし、十羅刹じゅうらせつ如の中うちにも皇諦女こうだいによの

守護しゅごふかかるべきなり、但ただし御信心しんじんによるべし、つるぎなんども・すすま

ざる人のためには用る事なし、法華經ほけきょうの劍けんは信心しんじんのけなげなる人こそ用る

事なれ鬼に・かなぼうたるべし、日蓮にちれんがたましひをすみにそめながして・

かきて候ぞ信じさせ給たまへ、仏みこころの御意ほけきょうは法華經にちれんなり日蓮なむがたましひは南無

妙法蓮華經みょうほうれんげきょうに・すぎたるはなし、妙樂みょうらく云く「頭本遠寿けんぽんおんじゅを以て其その命なと為す」

と釈しゃくし給たまう。

經王御前きやうおうごぜんには、わぎはひも転じて幸いとなるべし、あひかまへて御信心しんじん出

し此この御本尊ごほんぞんに祈念きねんせしめ給たまへ、何事なにことか成就じやうじゆせざるべき、「充滿じゅうまん其願ごん・

如清涼池によしよりようち・現世安穩げんせあんのん・後生善處ごしょうぜんしよ」疑うたがいなからん、又もう申し候当国だいなんの大難だいなんより

候はばいそぎ・いそぎ鎌倉へ上り見参いたすべし、法華經の功力を思ひや
り候へば不老不死・目前にあり、ただ歎く所は露命計りな天たすけ給へと
強盛に申し候、淨徳夫人・竜女の跡をつがせ給へ、南無妙法蓮華經・
南無妙法蓮華經、あなかしこ、あなかしこ

八月十五日

日蓮花押

経王殿御返事

◆一九六 呵責謗法滅罪抄

文永十年 五十二歳御作

1125p

御文委く承り候、法華經の御ゆへに已前に伊豆の国に流され候いしもか

う申せば謙ぬ口と人はおぼすべけれども心ばかりは悦ば入つて候いき、無始

より已来法華經の御ゆへに実にも虚事にても科に当るならば争か・かか

るつたなき凡夫とは生れ候べき、一端は・わびしき様なれども法華經の御

為なればうれしと思ひ候いしに少し先生の罪は消えぬらんと申しかども

無始より已來の十惡・四重六重八重十重五無間誹謗正法一闡提の種種の重罪大山より高く大海より深くこそ候らめ、五逆罪と申すは一逆を造る猶一劫無間の果を感じず。

一劫と申すは人壽八万歳より百年に一を減し是くの如く乃至十歳に成りぬ、又十歳より百年に一を加うれば次第に増して八万歳になるを一劫と申す、親を殺す者・此程の無間地獄に堕ちて隙もなく大苦を受くるなり、法華經誹謗の者は心には思はざれども色にも嫉み戯れにも・る程ならば經にて無けれども法華經に名を寄たる人を輕しめぬれば上の一劫を重ねて無數劫無間地獄に堕ち候と見えて候、不輕菩薩を罵打し人は始こそさありしかども後には信伏隨從して不輕菩薩を仰ぎ尊ぶ事諸天の帝釈を敬ひ我等が日月を畏るるが如くせしかども始め☆りし大重罪消えかねて千劫大阿鼻地獄に入つて二百億劫三宝に捨てられ奉りたりき。

五逆と謗法とを病に對すれば五逆は霍乱の如くして急に事を切る、謗法は白癩病の如し始は緩に後漸漸に大事なり、謗法の者は多くは無間地獄に生じ少しは六道に生を受く、人間に生ずる時は貧窮・下賤等・白癩病等と見えたり、日蓮は法華經の明鏡をもつて自身に引き向かへたるに都てくもりなし、過去の謗法の我が身にある事疑いなし此の罪を今生に消さずば未來争か地獄の苦をば免るべき、過去遠遠の重罪をば何にしてか皆集めて今生に消滅して未來の大苦を免れんと勘えしに当世・時に當つて謗法の人人國に充滿せり、其の上國主既に第一の誹謗の人たり、此の時・此の重罪を消さずば何の時をか期すべき、日蓮が小身を日本國に打ち覆うてののしらは無量無辺の邪法の四衆等無量無辺の口を以て一時に・るべし、爾の時に國主は謗法の僧等が方人として日蓮を怨み・或は頸を刎ね・或は流罪に行ふべし、度度かかる事、出来せば無量劫の重罪一生の内に消なんと

謀てたる大術・少も違ふ事なくかかる身となれば所願も満足なるべし。

然れども凡夫なれば動すれば悔ゆる心有りぬべし、日蓮だにも是くの如

く侍るに前後も弁へざる女人なんどの各仏法を見ほどかせ給わぬが何程か

日蓮に付いてくやしとおぼすらんと心苦しかりしに、案に相違して日蓮よ

りも強盛の御志・どもありと聞へ候は偏に只事にあらず、教主釈尊の

各の御心に入り替らせ給うかと思へば感涙押え難し、妙楽大師の釈に云く

記七「故に知んぬ末代一時も聞くことを得聞き已つて信を生ずる事宿種なる

べし」等云云、又云く弘二「運像末に在つて此の真文を囑る宿に妙因を殖う

るに非ざれば実に値い難しと為す」等云云。

妙法蓮華經の五字をば四十余年此れを秘し給ふのみにあらず迹門十四

品に猶是を抑へさせ給ひ寿命品にして本果本因の蓮華の二字を説き顕し

給ふ、此の五字をば仏・文殊・普賢・弥勒・薬王等にも付属せさせ給はず、

地涌じゆうの上行菩薩じょうぎようぼさつ・無辺行菩薩むへんぎようぼさつ・淨行菩薩じようぎようぼさつ・安立行菩薩あんりゆうぎようぼさつ等を寂光じやくこうの

大地だいちより召し出して此これを付屬ふぞくし給ふ、儀式ぎしただ事ならず宝淨世界ほうじようせかいの多宝たほう

如来にょらいだいち大地しつほうより七宝しつほうの塔に乘じて涌現ゆげんせさせ給ふ、三千大千世界さんぜんだいせんせかいの外に四百

万億なゆた那由佗こくどの国土こくどを淨め高さ五百由旬ひやくゆじゆんの宝樹ひやくゆじゆんを尽一箭道けんどうに殖え並べて宝樹

一本もとの下に五由旬ゆじゆんの師子ししの座を敷き並べ十方分身じゆつぼうふんじんの仏ほとけ尽く来り坐し給ふ、

又釈迦如来しゃかにょらいは垢衣くえを脱ぬいで宝塔ほうとうを開き多宝如来たほうにょらいに並び給ふ、譬たとえば青天ちやうてんに日月にちがつ

の並べるが如ごとし帝釈たいしゃくと頂生王ていせいおうとの善法堂ぜんぽうどうに在すが如ごとし、此この界かいの文殊もんじゆ等

他方たほうの觀音かんのん等十方じゆつぼうの虚空こくうに雲集うんしゆせる事星じゆつぼうせかいの虚空こくうに充滿じゆうまんするが如ごとし、此この

時とき・此この土どには華嚴經けこんきやうの七处しちこ・八会十方世界はくかいじゆつぼうせかいの台上たいじやうの盧舎那佛ろしゃなほとけの弟子でし法慧ほうえ

・功德林くどくりん・金剛幢こんこんじやう・金剛藏こんこんざう等の十方刹土塵点じゆつぼうじんてん数の大菩薩雲集だいぼさつうんしゆせり、方等ほうとう

の大宝坊雲集だいほうふくうんしゆの仏ほとけ・菩薩般若經ぼさつぱんにやきやうの千仏せんほとけ・須菩提しゆぼだい・帝釈たいしゃく等・大日經だいにちきやうの

八葉九尊はちようの四仏四菩薩金剛頂經ぼさつしんこうちようきやうの三十七尊等涅槃經さんじちしゆんとうねはんぎやうの俱尸那城くしなじやうへ集会すえせ

させ給^{たま}いし十方^{じゅつぽう}法界^{ほっかい}の仏^{ぶつ}・菩薩^{ぼさつ}をば文殊^{もんじゅ}・弥勒^{みろく}等互^{たがい}に見知^みりて御物^{おんもの}語^{がたり}り
是^{これら}ありしかば此等^{ぼさつ}の大菩薩^{だいぼさつ}は出仕^なに物狎^なれたりと見え候^{さう}、今^{いま}・此^この四菩薩^{しぼさつ}
出^いでさせ給^{たま}うて後釈迦^{しゃかに}如来^{らいらい}には九代^{くうだい}の本師^{ほんし}三世^{さんぜ}の仏^{ぶつ}の御母^{おんぼ}にておはする
文殊^{もんじゅ}師利菩薩^{しりぼさつ}も一生^{いっしよ}補处^{ふしよ}と・ののしらせ給^{たま}うふ弥勒^{みろく}等も此^この菩薩^{ぼさつ}に値^あいぬ
れば物^{もの}とも見えさせ給^{たま}はず、譬^{たと}えば山^{さん}かつが月卿^{げつけい}に交^かり☆猴^{えんこう}が師子^{しし}の座^ざに
列^りるが如^{ごと}し、此^この人人^{ひとびと}を召^よして妙法蓮華^{みょうほうれんげきやう}經^{きやう}の五字^{ごじ}を付属^{ふそく}せさせ給^{たま}いき、付属^{ふそく}
も只^{ただ}ならず十神^{じんに}力を現^{げん}じ給^{たま}ふ、釈迦^{しゃか}は広長^{こうちやうぜつ}舌^{ぜつ}を色界^{しっかい}の頂^{いただき}に付^{たま}け給^{たま}へば
諸^{しよ}仏^{ぶつ}も亦復^{また}是^{かくの}くの如^{ごと}く四百萬億那由他^{なゆた}の国土^{こくど}の虚空^{こくう}に諸^{しよ}仏^{ぶつ}の御舌^{おんぜつ}赤虹^{しやくこう}を百
千萬億^{せんまん}並^なべたるが如^{ごと}く充満^{じゅうまん}せしかばおびただしかりし事^{こと}なり、是^{かくの}くの如^{ごと}く
不思議^{ふしぎ}の十神^{じんに}力を現^{げん}じて結要^{けつちやう}付属^{ふそく}と申^{もう}して法華^{ほけきやう}經^{きやう}の肝心^{かんじん}を抜き出して四
菩薩^{ぼさつ}に譲^{ゆず}り、我^{めづ}が滅後^{めつご}に十方^{じゅつぽう}の衆生^{しゆじやう}に与^{おんこん}へよと慇懃^{ふそく}に付属^{ふそく}して其^その後^ご又
一^{いっ}つの神力^{じんりき}を現^{げん}じて文殊^{もんじゅ}等の自界^{たほう}他方^{ほさつ}の菩薩^{にじやう}・二乘^{てんにん}・天人^{りゆうじん}・竜神^{りゆうじん}等^らには

いつきようないしいちだいしようきよう
一經乃至一代聖教をば付属せられしなり、本より影の身に随つて候様に
つかせ給ひたりし迦葉舍利弗等にも此の五字を譲り給はず此れはさてをき
ぬ、文殊・弥勒等には争か惜み給うべき器量なくとも嫌い給うべからず、
かたがたふしん
方方不審なるを・或は他方の菩薩は此の土に縁少しと嫌ひ、或は此の土
の菩薩なれども娑婆世界に結縁の日浅し、或は我が弟子なれども初発心
の弟子にあらずと嫌はれさせ給う程に、四十余年並びに迹門十四品の間は
一人も初発心の御弟子なし、此の四菩薩こそ五百塵点劫より已来教主釈尊
の御弟子として初発心より又他仏につかずして二門をもふまざる人人なり
と見えて候、天台の云く「但下方の發誓を見る」等云云、又云く「是れ我
が弟子なり応に我が法を弘むべし」等云云、妙樂の云く「子父の法を弘む」
等云云、道暹云く「法是れ久成の法なるに由るが故に久成の人に付す」等
云云、此の妙法蓮華經の五字をば此の四人に譲られ候。

しか
而るに仏の滅後・正法一千年・像法一千年・末法に入つて二百二十余年
が間・月氏・漢土・日本一閻浮提の内に未だ一度も出でさせ給はざるは
何なる事にて有るらん、正くも譲らせ給はざりし文殊師利菩薩は仏の滅後
四百五十年まで此の土におはして大乘經を弘めさせ給ひ、其の後も香山
・清涼山より度度來つて大僧等と成つて法を弘め、藥王菩薩は天台大師と
なり觀世音は南岳大師と成り、弥勒菩薩は傳大士となれり、迦葉・阿難等
は仏の滅後二十年四十年法を弘め給ふ、嫡子として譲られさせ給へる人の
未だ見えさせ給はず、二千二百余年が間・教主釈尊の繪像・木像を賢王
・聖主は本尊とす、然れども但小乗・大乘・華嚴・涅槃・觀經・法華經
の迹門普賢經等の仏・真言・大日經等の仏宝塔品の釈迦・多宝等をば書
けどもいまだ壽量品の釈尊は山寺精舎にましまさず何なる事とも量りが
たし、釈迦如來は後・五百歳と記し給ひ正像二千年をば法華經流布の時と

は仰おほせられず、天台大師は「後の五百歳遠く妙道みょうどうに沾うるわん」と未来みらいに譲ゆずり、

伝でん教大師は「正像しょうそう稍過ややすぎ已おわつて末法まつぽう太なだ近ちかきに有あり」等と書たまき給たまいて、

そうほう

像法いまの末はは未いまだ法華經流布ほけきようふの時ふならずと我われと時ときを嫌きらひ給たまふ、さればをしは

かるに地涌じゆせんがい千界せんがいの大菩薩ぼさつは釈迦しゃか・多宝たほう・十方じゆつぽうの諸仏しよぶつの御譲ゆずり御約束やくそくを空むなしく

もくし

黙止もくしてはてさせ給たまうべきか。

外典げてんの賢人けんじんすら時ときを待つ郭公もうと申もうす畜鳥しよくそうは卯月もう五月ごに限かぎる、此この大菩薩ぼさつ

も末法まつぽうに出でずべしと見みえて候こう、いかなと候こうべきぞ瑞相ずいそうと申もうす事ことは内典ないてん・外典げてん

に付ついて必かならずず有あるべき事ことの先さきに現げんずるを云いうなり、蜘蛛ちちゆうかかつて喜事きじ来きり

☆鵲鳴かささぎいて客人まろうと来きると申もうして小事しょうじすら驗しるし先に現げんず何いかに況だいじや大事だいじをや、され

ば法華經序品ほけきようじよほんの六瑞いちだいちようかは一代超過だいずいの大瑞だいずいなり、涌出品ゆじゆつぽんは又また此これには似にるべく

もなき大瑞だいずいなり、故ゆえに天台てんだいの云いく「雨たけの猛たけきを見ては竜りゆうの大きおほなる事ことを知し

り華はの盛さかなるを見ては池いけの深ふかき事ことを知しる」と書かかれて候こう、妙樂みょうらく云いく「智人ちじん

みょうらくい

智人ちじん

智人ちじん

は起を知り蛇は自ら蛇を知る」と云云、今日蓮も之を推して智人の一分とならん、去る正嘉元年「太歳丁巳」八月二十三日戌亥の刻の大地震と、ぶんえいがんねんきのえね 文永元年甲子七月四日の大彗星、此等は仏滅後・二千二百余年の間未だしゅつげん 出現せざる大瑞なり、此の大菩薩の此の大法を持ちて出現し給うべき先瑞なるか、尺の池には丈の浪たたず驢吟ずるに風鳴らず、日本国の政事乱れ万民歎くに依つては此の大瑞現じがたし、誰か知らん法華經の滅不滅の大瑞なりと。

二千余年の間・悪王の万人に・らるる謀叛の者の誰人にあだまるる等にちれん とが 日蓮が失もなきに高きにも下きにも罵詈毀辱刀杖瓦礫等ひまなき事二十余年なり、唯事にはあらず過去の不輕菩薩の威音王仏の末に多年の間・罵詈せられしに相似たり、而も仏彼の例を引いて云く我が滅後の末法にも然るべし等と記せられて候に近くは日本遠くは漢土等にも法華經の故にかかる

事有りとは未だ聞かず人は悪んで是を云はず、我と是を云はば自讃に似たり、云わずば仏語を空くす過あり、身を軽んじて法を重んずるは賢人にて候なれば申す、日蓮は彼の不輕菩薩に似たり、国王の父母を殺すも民が考妣を害するも上下異なれども一因なれば無間におつ、日蓮と不輕菩薩とは位の上下はあれども同業なれば彼の不輕菩薩成仏し給はば日蓮が仏果うたがい疑うべきや、彼は二百五十戒の上慢の比丘に罵られたり、日蓮は持戒第一の良觀に讒訴せられたり、彼は帰依せしかども千劫阿鼻獄におつ、此れは未だ渴仰せず知らず無數劫をや経んずらん不便なり不便なり。

疑つて云く正嘉の大地震等の事は去る文応元年庚申七月十六日宿屋の入道に付けて故最明寺入道殿へ奉る所の勘文立正安國論には法然が選択に付いて日本国の仏法を失ふ故に天地暝をなし自界叛逆難と他国侵遍難起こるべしと勘へたり、此には法華經の流布すべき瑞なりと申す先後

の相違そうい之有あるか如何いかん、答えて云く汝能なんじよく之これを問えり、法華經ほけきようの第四よに云く

「而しかも此この經きようは如來にょらい現在げんざいすら猶なほ怨嫉おんしつ多し況めつどや滅度めつどの後ごをや」等云云、同第

七しちに況滅度きやうめつど後ごを重ねて説かいて云く「我が滅度めつどの後ご・後ごの五百歳このごひやくさいの中に閻浮提えんぶだい

に広宣流布こうせんるふせん」等云云、仏滅後ぶつめつの多怨たおんは後ご・五百歳みようほうれんげきやうに妙法蓮華經めいほうれんげきやうの流布るふ

せん時ときと見えて候、次つぎぎ下しもに又また云く「惡魔あくま・魔民まみん・諸天しよてん・夜叉やしや・鳩槃荼くぼんだ」

等云云、行滿座主ぎやうまんざす傳でん教大師ぎやうまんざすを見て云く「聖語ことば朽ちず今いま・此この人に遇あえり

我われれ披閱ひげんする所の法門ほうもん・日本國にほんこくの阿闍梨あじやりに授与じゆよす」等云云、今いまも又是またくかくの如ごと

し末法まつぽうの始はじめに妙法蓮華經めいほうれんげきやうの五字ごじを流布るふして日本國にほんこくの一切衆生いっさいしゆじやうが仏ぶつの下種げしゆ

を懷妊かいにんすべき時ときなり、例たとせば下女おうしゆが王種かうしゆを懷妊かいにんすれば諸女しよ瞋いかりをなすが

如ごとし、下賤げせんの者に王頂たまの珠じゆよを授与だいなんせんに大難たいなん來きらざるべしや、一切世間いっさいせけん

・多怨難信たおんなんしんの經文きやうもん是これなり、涅槃經ねはんぎやうに云く「聖人しやうにんに難なんを致いたせば他國たこくより其その

國おそを襲おそう」と云云、仁王經にんのうきやうも亦復また是かくの如ごとし取意にちれん、日蓮にちれんをせめて弥いよ天地四方てんちしほう

より大災雨の如くふり泉の如くわき浪の如く寄せ来るべし、国の大蝗虫

たる諸僧等近臣等が日蓮を讒訴する弥よ盛ならば大難倍来るべし、帝釈

を射る修羅は箭還つて己が眼にたち阿那婆達多竜を犯さんとする金翅鳥は

自ら火を出して自身をやく、法華経を持つ行者は帝釈・阿那婆達多竜に

劣るべきや、章安大師の云く「仏法を壊乱するは仏法の中の怨なり慈無く

して詐わり親むは則ち是れ彼が怨なり」等云云、又云く「彼が為に悪を除

くは則ち是れ彼が親なり」等云云。

日本国の一切衆生は法然が捨閉閣抛と禪宗が教外別伝との誑言に誑か

されて一人もなく無間・大城に墮つべしと勘へて国主・万民を憚からず大

音声を出して二十余年が間よばはりつるは竜逢と比干との直臣にも劣る

べきや、大悲千手観音の一時に無間地獄の衆生を取り出すに似たるか、火

の中の数子を父母が一時に取り出さんと思ふに手少なければ慈悲前後有る

に似たり、故に千手万手億手ある父母にて在すなり、爾前の経経は一手

・二手等に似たり法華経は「一切衆生を化して皆仏道に入らしむ」と無数

手の菩提是なり、日蓮は法華経並びに章安の釈の如くならば日本国の一切

衆生の慈悲の父母なり、天高けれども耳とければ聞かせ給うらん地厚けれ

ども眼早ければ御覧あるらん天地既に知し食しぬ、又一切衆生の父母を

罵詈するなり父母を流罪するなり、此の国此の両三年が間の乱政は先代に

もきかず法に過ぎてこそ候へ。

抑悲母の孝養の事仰せ遣され候感涙押へ難し、昔元重等の五童は五郡

の異性の他人なり兄弟の契りをなして互に相背かざりしかば財三千を

重ねたり、我等親と云う者なしと歎きて途中に老女を儲けて母と崇めて一分

も心に違はずして二十四年なり、母忽に病に沈んで物いはず、五子天に仰い

で云く我等孝養の感無くして母もの云わざる病あり、願くは天孝の心を受

け給はば此の母に物いはせ給へと申す、其の時に母五子に語つて云く我は
本是れ大原の陽猛と云うものの女なり、同郡の張文堅に嫁す文堅死にき、
我に一人の児あり名をば烏遺と云いき彼が七歳の時乱に値うて行く処をし
らず、汝等五子に養はれて二十四年此の事を語らず、我が子は胸に七星の
文あり右の足の下に黒子ありと語り畢つて死す、五子葬をなす途中にして
国令の行くにあひぬ、彼の人物記する囊を落せり此の五童が取れるになし
て禁め置かれたり、令来つて問うて云く汝等は何くの者ぞ、五童答えて
云く上に言えるが如し、爾の時に令上よりまろび下て天に仰ぎ地に泣く、
五人の縄をゆるして我が座に引き上せて物語りして云く我は是れ烏遺な
り、汝等は我が親を養いけるなり此の二十四年の間多くの楽みに値へども
非母の事をのみ思い出でて楽しみならず、乃至大王の見参に入れて
五県の主と成せりき、他人集つて他の親を養ふに是くのごとし、何に況や同

父同母の舎弟妹女等がいういうたるを顧みば天も争か御納受なからんや。

浄蔵・浄眼は法華經をもつて邪見の慈父を導びき、提婆達多は仏の御敵

よんじゅうよねん きようぎよう

四十余年の経經にて捨てられ臨終悪くして大地破れて無間地獄に行きし

ほけきよう

かども法華經にて召し還して天王如来と記せらる、阿闍世王は父を殺せど

ねはん

も仏・涅槃の時・法華經を聞いて阿鼻の大苦を免れき。

ほけきよう

例せば此の佐渡の国は畜生の如くなり又法然が弟子充滿せり、鎌倉に

にちれん にく

日蓮を惡みしより百千万億倍にて候、一日も寿あるべしとも見えねども各

いころぞし

御志ある故に今まで寿を支へたり、是を以て計るに法華經をば釈迦・

たほう じゅつぼう

多宝・十方の諸仏大菩薩供養恭敬せさせ給へば此の仏・菩薩は各各の

じふ

慈父慈母に日日夜夜十二時にこそ告げさせ給はめ、当時主の御おぼえのい

みじくおはするも慈父悲母の加護にや有るらん、兄弟も兄弟とおぼすべ

ちちはは

からず只子とおぼせ、子なりとも梟鳥と申す鳥は母を食ふ破鏡と申す獸

ただ

の父を食わんとうかがふ、わが子四郎は父母を養ふ子なれども悪くばなにかせん、他人なれどもかたらひぬれば命にも替るぞかし、舎弟等を子とせられたらば今生の方人・人目申す計りなし、妹等を女と念はばなどか孝養せられざるべき、是へ流されしには一人も訪う人もあらじとこそおぼせしかども同行七八人よりは少からず、上下のくわても各の御計ひなくばいかせん、是れ偏に法華經の文字の各の御身に入り替らせ給いて御助けあるとこそ覚ゆれ。

何なる世の乱れにも各各をば法華經十羅刹助け給へと湿れる木より火を出し乾ける土より水を儲けんが如く強盛に申すなり、事繁ければとどめ候。

四条金吾殿御返事

日蓮花押

◆一九七 主君耳入此法門免与同罪事

文永十一年九月 五十三歳御作 与四条金吾

1132p

錢二貫文給び畢んぬ。

有情うじようの第一だいいちの財たからは命にすぎず此これを奪うう者は必ず三途さんずに墮おつ、然しかれば
輪王りんおうは十善じゅうぜんの始はつには不殺生ふせつしようぶつ仏ぶつの 小乘經しょうじようきようの始はつには五戒ごかい其その始はつには不殺生ふせつしよう、
大乗だいじよう梵網經ぼんもうきようの十重じゅうきん禁きんの始はつには不殺生ふせつしよう、法華經ほけきようの寿量品じゆりようほんは釈迦しゃかに如来にらいの
不殺生戒ふさつしようかいの功德くどくに當あつて候品くどくぞかし、されば殺生せつしようをなす者は三世さんぜの諸仏しよぶつに
すてられ六欲天りくよくてんも是これを守る事ことなし、此この由よしは世間せけんの学者がくしやも知しれり日蓮にちれんもあ
らあら意得いこころづて候た、但ただし殺生せつしように子細しさいあり彼の殺ころさるる者の失とがに輕重けいちようあり、
我が父母ふぼ・主君しゅくん我が師匠ししやうを殺ころせる者をかへりて害がいせば同じおなじつみなれども
重罪じゅうざいかへりて輕罪けいざいとなるべし、此これ世間せけんの学者がくしや知しれる処ところなり、但ただし法華經ほけきよう
の御ごかたきをば大慈大悲だいじだいひの菩薩ぼさつも供養くようすれば必ず無間地獄むげんじこくに墮おつ、五逆ごぎやくの
罪人ざいにんも彼あを怨あだとすれば必ず人天にんてんに生なを受うく、仙予國王せんよこくおう有徳國王うとくこくおうは五百無量むびりやう
の法華經ほけきようのかたきを打ちて今は釈迦しゃかに仏ぶつとなり給たまう、其その御弟子おんでし迦葉かしやう・阿難あなん

しやりほつ　もくれん　むりよう　けんぞく
舍利弗・目連等の無量の眷属は彼の時に先を懸け陣をやぶり・或は殺し
ある　ある　ずいき　ひとびと　かくとく　びく　かしようぶつ
・或は害し・或は随喜せし人人なり、覺徳比丘は迦葉仏なり、彼の時に此
すす　ほけきよう　ふ　ほ　すく　せ　こと　だいじ　だいひ
の王王を勧めて法華經のかたきをば父母宿世叛逆の者の如くせし大慈大悲
ほけきよう　ぎようじや
の法華經の行者なり。

こくしゅにちれん　もう
今の世は彼の世に当れり、国主日蓮が申す事を用ゆるならば彼がごとく
もち　うえ
なるべきに用いざる上かへりて彼がかたうどとなり一國こぞりて日蓮をか
かみいちにん　ばんみん　みなごぎやく　す　ほうぼう
へりてせむ、上一人より下万民にいたるまで皆五逆に過ぎたる謗法の人と
にちれん　どうい
なりぬ、されば各各も彼が方ぞかし、心は日蓮に同意なれども身は別なれ
おんこと　しゅくん　ほうもん
ば与同罪のがれがたきの御事に候に主君に此の法門を耳にふれさせ進せけ
もち　とが　まめか　こ
るこそありがたく候へ、今は御用いなくもあれ殿の御失は脱れ給ひぬ、此れ
より後には口をつつみておはすべし、又天も一定殿をば守らせ給うらん、
こ　もう
此れよりも申すなり。

かまへてかまへて御用心候べし、いよいよにくむ人人ねらひ候らん、御
さかもり夜は一向に止め給へ、只女房と酒うち飲んでなにの御不足あるべ
き、他人のひるの御さかもりおこたるべからず、酒を離れて・ねらうひま
有るべからず、返す返す、恐恐謹言。

九月二十六日

日蓮 花押

左衛門尉殿御返事

◆一九八

四条金吾殿女房御返事

文永十二年正月

五十四歳御作

1134p

所詮日本国の一切衆生の目をぬき神をまどはかす邪法真言師にはすぎず
是は且らく之を置く、十喩は一切経と法華経との勝劣を説かせ給うと見
えたれども仏の御心はさには候はず、一切経の行者と法華経の行者とを
・ならべて法華経の行者は日月等のごとし諸経の行者は衆星燈炬のご

としと申す事を詮と思し食され候、なにを・もつてこれをするとならば第八の譬の下に最大事の文あり、所謂此の經文に云く「有能受持是經典者またによぜ いっさいしゅじょう またこれだい亦復如是於一切衆生中亦為第一」等云云、此の二十二字は一經第一の肝心いっさいしゅじょうなり一切衆生の眼目なり、文の心は法華經の行者は日月大梵王仏のごとし、大日經の行者は衆星・江河凡夫のごとしとかれて候經文なり、されば此の世の中の男女僧尼は嫌うべからず法華經を持たせ給う人は一切衆生のしうとこそ仏は御らん候らめ、梵王・帝釈は・あをがせ給うらめと・うれしき申すばかりなし、又この經文を昼夜に案じ朝夕によみ候へば常の法華經の行者にては候はぬにはんべり、是經典者とて者の文字はひととよみ候へば此の世の中の比丘・比丘尼うば塞うばいの中に法華經を信じまいらせ候人人かと思えまいらせ候へばさにては候はず、次下の經文に此の者の文字を仏かさねてとかせ給うて候には若有女人ととかれて候、

にちれん 日蓮・法華經より外の一切經をみ候には女人とはなりたくも候はず、・或
ほけきよう 經には女人をば地獄の使と定められ、・或經には大蛇ととかれ、・或經にはま
によにん じこく だいじや ある ぶつぼう
がれ木のごとし、・或經には仏種をいれる者とこそとかれて候へ、仏法なら
ある ぶつしゆ
げてん ず外典にも榮啓期と申せし者の三樂をうたひし中に無女樂と申して天地の
によにん むじょらく もう てんち
中女人と生れざる事を一の樂とこそたてられて候へ、わざわひは三女より
によにん
をこれりと定められて候に、此の法華經計りに此の經を持つ女人は一切の
ほけきようばか によにん いっさい
女人にすぎたるのみならず一切の男子にこえたりとみえて候、所詮一切の
によにん しよせん いっさい
人にそしられて候よりも女人の御ためにはいとをしと、をもはしき男にふ
によにん
びんと、をもはれたらんにはすぎじ、一切の人はにくまばにくめ、釈迦仏
いっさい しゃかぶつ
たほうぶつ 多宝仏・十方の諸仏・乃至梵王・帝釈・日月等にだにもふびんと、を
じゆつほう ないしほんのう たいしやく にちがつ
もはれまいらせなばなにかくるしかるべき、法華經にだにもほめられたて
ほけきよう
まつりなばなにかくるしかるべき。

今三十三の御やくとて御布施送りたびて候へば釈迦仏・法華經日天の御
まへに申し上て候、又人の身には左右のかたあり、このかたに二つの神を
はします一をば同名二をば同生と申す、此の二つの神は梵天・帝釈・日月
の人をまほらせんがために母の腹の内に入りしより・このかた一生をわる
まで影のごとく眼のごとくつき随いて候が、人の悪をつくり善をなしなむ
どし候をばつゆちりばかりものこさず天にうたへまいらせ候なるぞ。

華嚴經の文にて候を止觀の第八に天台大師よませ給へり、但し信心のよ

はきものをば法華經を持つ女人なれどもすするとみえて候、例せば大將軍

よはければしたがうものもかひなし、弓よはければ絃ゆるし・風ゆるけ

れば波ちゐるさは自然の道理なり、而るにさえもん殿は俗の中日本にはか

たをならぶべき者もなき法華經の信者なり、是にあひつれさせ給いぬるは

日本第一の女人なり、法華經の御ためには竜女とこそ仏はをぼしめされ

候らめ、女と申す文字をばかかるとよみ候、藤の松にかかり女の男にかか
るも今は左衛門殿を師とせさせ給いて法華經へみちびかれさせ給い候へ。
又三十三のやくは転じて三十三のさいはひとならせ給うべし、七難即滅
七福即生とは是なり、年は・わかうなり福はかさなり候べし、あなかし
こ・あなかしこ。

五月二十七日

にちれんかおう
日蓮花押

しじょうきんご にようぼうごへんじ
四条金吾殿 女房御返事

◆一九九 四條金吾殿御返事
しじょうきんご ごへんじ

ぶんえい 文永十二年三月 五十四歳御作 一一三六頁

しきょうなんじ 此経難持の事、抑 弁阿闍梨が申し候は、貴辺のかたらせ給ふ様に持つ

げんせあんのん らん者は現世安穩・後生善処と承つて・すでに去年より今日まで・かたの

ごとく 如く信心をいたし申し候処に、さにては無くして大難雨の如く来り候と云

云、真にてや候らん、又弁公がいつはりにて候やらん、いかさま・よきつ
いでに不審をはらし奉らん、法華經の文に難信難解と説き給ふは是なり、
此の經をききうくる人は多し、まことに聞き受くる如くに大難来れども憶持
不忘の人は希なるなり、受くるは・やすく持つはかたし・さる間・成仏は
持つにあり、此の經を持たん人は難に値うべしと心得て持つなり、「即為
疾得・無上仏道」は疑なし、三世の諸仏の大事たる南無妙法蓮華經を念
ずるを持とは云うなり、經に云く「護持仏所屬」といへり、天台大師の云く
「信力の故に受け念力の故に持つ」云云、又云く「此の經は持ち難し若し暫く
も持つ者は我即ち歡喜す諸仏も亦然なり」云云、火にたきぎを加える時は
さかなり、大風吹けば求羅は倍增するなり、松は万年のよはひを持つ故に
枝を・まげらる、法華經の行者は火と求羅との如し薪と風とは大難の
如し、法華經の行者は久遠長寿の如来なり、修行の枝をきられ・まげら

れん事疑うたがいなかるべし、此これより後は此經難持しきょうなんじの四字を暫時ざんじもわすれず案
じ給たまうべし、○恐恐きようきよう。

ぶんえい
文永十二年乙亥三月六日
きのとい

にちれんかおう
日蓮花押

四条金吾殿
しじょうきんご

◆二〇〇 王舎城事
おうしゃじょう

建治元年四月 五十四歳御作 与四条金吾
がんねん しじょうきんご

1137p

銭一貫五百文給おわび候い畢おわんぬ、焼亡の事委くわしく承うけたまわつて候事悦よろこび入いつて候、
大火だいの事は仁王經にんのうきやうの七難ひちなんの中の第三の火難なん・法華經ほけきやうの七難ひちなんの中には第一の
一の火難なんなり、夫それ虚空こくうをば剣にてきることなし水をば火焼くことなし、
聖人しょうにん・賢人けんじん・福人ちしや・智者ちしやをば火やくことなし、例せば月氏がつしに王舎城おうしゃじょうと
申もうす大城だいじやうは在家ざいけ・九億万家きゅういっまんかなり、七度まで大火だいをこりてやけほろびき、万
比ひなげきて逃亡たいおうせんとせしに大王だいおうなげかせ給たまう事ことかぎりなし、其そのの時賢人ときけんじん

ありて云く七難の大火と申す事は聖人のさり王の福の付くる時をこり候なり、然るに此の大火・万民をば・やくといえとも内裏には火ちかづくことなし、知んぬ王のとが・にはあらず万民の失なりされば万民の家を王舎と号せば火神・名にをそれてやくべからずと申せしかば、さるへんもとて王舎城とそなづけられしかば・それより火災とどまりぬ、されば大果報の人をげ大火はやかざるなり。

これは国王已にやけぬ知んぬ日本国の果報のつくるしるしなり、然りに此の国は大謗法の僧等が強盛にいのりをなして日蓮を降伏せんとする故に弥弥わざはひ来るにや、其の上名と申す事は体を顕し候に両火房と申す謗法の聖人・鎌倉中の上下の師なり、一火は身に留まりて極楽寺焼て地獄寺となりぬ、又一火は鎌倉にじやなちて御所やけ候ぬ、又一火は現世の国をやきぬる上に日本国の師弟ともに無間地獄にはちて阿鼻の炎にもえ候べき

せんびょう
先表なり、愚癡ぐちの法師等ほっしが智慧ちえある者の申もうす事ことを用もちい候こうはぬは是これ体ていに候こうなり、不便ふびん不便ふびん、先おん御文ふみまいらせ候こうしなり。

御馬ごうまのがいて候こうへば又またともびきしてくり毛けなる馬うまをこそまうけて候こうへ、あはれ・あはれ見みせまいらせ候こうはばや、名越なごえの事は是こそ多おほくの子細しさいどもをば甲こうえて候こうへ、ある人ひとの・ゆきあひて理具りぐの法門ほうもん自讃じさんしけるを・さむざむにせめて候こうけると承たまり候こう。

又また女房にようぼうの御いごのりの事こと・法華經ほけきょうをば疑うたがひまいらせ候こうはねども御信心しんじんやよはくわたらせ給たまはんずらん、如法にょぼうに信しんじたる様ようなる人々ひとびとも実じつにはさもなき事こととも是こゝにて見て候こう、それにも知ししめされて候こう、まして女人にょにんの御心ごしん・風をば・つなぐとも・とりがたし、御いごのりの叶かない候こうはざらんは弓ゆみのつよくしてつるよはく・太刀たちつるぎにて・つかう人ひとの臆病おくびょうなるやうにて候こうべし、あへて法華經ほけきょうの御ごとがにては候こうべからず、よくよく念仏ねんぶつと持齋じさいとを我われもす

て人をも力のあらん程はせかせ給へ、譬へば左衛門殿の人ににくまるが
ごとしとこまごまと御物語り候へ、いかに法華經を御信用ありとも法華經
のかたきを・とわりほどには・よもおぼさじとなり、一切の事は父母にそ
むき國王にしたがはざれば不孝の者にして天のせめをかうふる、ただし
法華經のかたきに・なりぬれば父母・國主の事をも用ひざるが孝養ともな
り國の恩を報ずるにて候。

されば日蓮は此の經文を見候しかば父母手をすりてせいせしかども師に
て候し人かんだうせしかども・鎌倉殿の御勘氣を二度まで・かほり・すで
に頸となりしかども・ついにをそれずして候へば、今は日本國の人人も道理
かと申すへんも・あるやらん、日本國に國主・父母・師匠の申す事を用い
ずしてついに天のたすけをかほる人は日蓮より外は出しがたくや候はんず
らん、是より後も御覽あれ日蓮をそしる法師原が日本國を祈らば弥彌國亡

ぶべし、結句^{けつく}せめの重^{おも}からん時^{とき}・上一人^{かみいちにん}より下万民^{ばんみん}まで・もとどりをわか
つやつことなりはぞをくうためしあるべし、後生^{ごしょう}はさてをきぬ今生^{こんじょう}に
ほけきよう
法華經^{ほけきよう}の敵^{てき}となりし人をば梵天^{ぼんてん}・帝釈^{たいしやく}・日月^{にちがつ}・四天^{してん}・罰^{たまい}し給^{みな}いて皆人^{みな}に・
みこりさせ給^{たま}へと申しつけて侯^{もう}、日蓮^{にちれん}・法華經^{ほけきよう}の行者^{ぎやうじや}にてあるなしは是れ
にて御覽^{ごらん}あるべし、かう申せば国主^{こくしゅ}等は此^{こゝ}の法師^{ほふし}のをどすと思^{おも}へるか、あ
へてにくみては申^{もう}さず大慈大悲^{だいじだいひ}の力^{ちから}・無間地獄^{むげんじごく}の大苦^{おほくるしみ}を今生^{こんじょう}にけさしめん
となり、章安大師^{ぢやうあんだいし}云く「彼^{かれ}が為^{ため}に惡^{あく}を除^{のぞ}くは即^{すなわ}ち是^{こゝ}れ彼^{かれ}が親^{おや}なり」等云云、
かう申^{もう}すは国主^{こくしゅ}の父母^{ふぼ}・一切衆生^{いっさいしゅじやう}の師匠^{ししやう}なり、事事^{じじ}多く侯^{もう}へども留^{とど}候^{こう}ぬ、
又麦^{あふ}の白米^{はくまい}一^{ひと}だはしかみ送り給^{そうら}ひ侯^{おほ}い畢^{おひ}んぬ。

建治元年乙亥卯月十二日
がんねんきのとい

四条金吾殿御返事
しじょうきんご ごとへんじ

◆二〇一 四条金吾殿御返事
しじょうきんご ごとへんじ

わざと おんつかい
態と御使喜び入つて候、又柑子五十・鷺目五貫文給ひ候い畢んぬ、各各
くよう
御供養と云云、又御文の中に云く去る十六日に有る僧と寄合うて候時・
しょうじゅうそう ほうもん もう
諸法実相の法門を申し合いたりと云云、今経は出世の本懐・一切衆生・
かいじょうぶつどう
皆成仏道の根元と申すも只此の諸法実相の四字より外は全くなきなり、さ
でんぎようだいし ばんり はとう
れば伝教大師は万里の波濤をしのぎ給いて相伝しますます此の文なり、
いっく
一句万了の一言とは是なり、当世・天台宗の開会の法門を申すも此の経文
を悪く意得て邪義を云い出し候ぞ、只此の経を持ちて南無妙法蓮華經と
こころう じゃぎ い
とな しょうじきしやほうべん たんせつむじょうどう
唱えて正直捨方便・但説無上道と信ずるを諸法実相の開会の法門とは申す
なり、其の故は釈迦仏・多宝如来・十方三世の諸仏を証人とし奉り候なり、
かま しょうじきしやほうべん たほうによらい じゅうぶつさんぜ しょうぶつ
相構えてかくの如く心得させ給いて諸法実相の四の文字を時時あぢわへ
たま しょうじきしやほうべん たまい しょうほうじっそう もんじ じじ
給うべし・良薬に毒をまじうる事有るべきや・うしほの中より河の水を取
り出す事ありや、月は夜に出・日は昼出で給う此の事諍ふべきや、此れよ
いだ

り後には加様に意得給いて御問答あるべし、但し細細は論難し給うべからず、猶も申さばそれがしの師にて侯日蓮房に御法門侯へとうち咲うて打ち返し打ち返し仰せ給うべく侯。

法門を書きつる間・御供養の志は申さず供、有り難し有り難し委くは是よりねんごろに申すべく侯。

建治元年乙亥七月二十二日 日蓮花押

四条中務三郎左衛門尉殿御返事

◆二〇二 瑞相御書 建治元年 五十四歳御作 1140p

与四条金吾

夫れ天変は衆人をおどろかし地天は諸人をうごかす、仏・法華經をとかんとし給う時五瑞六瑞をげんじ給う、其の中に地動瑞と申すは大地六種に震動す六種と申すは天台大師文句の三に釈して云く「東涌西没とは東方は

青・肝を主とする肝は眼まなこを主とする西方さいほうは白肺を主とする肺は鼻を主とする此れ
眼根がんこんの功德くどく生じて鼻根ほんのうたがいの煩惱ぼんのうたがい互に滅するを表するなり鼻根の功德くどく生じて眼
の中の煩惱ぼんのうたがい互に滅す余方の涌没しょうめつして余根の生滅しょうめつを表するも亦復また」云云、
妙楽大師みょうらくだいし之を承うけて云いく「表根ひょうこんと言いうは眼鼻だん已すでに東西すいを表す耳舌理じとして
南北なんぼくに對たいす中央ちゅうおうは心なり四方しほうは身なり身四根しこんを具ぐす心あまね☆く四しを縁ゆえす故ゆえに心
を以もつて身みに對たいして涌没ゆうめつを為なす」云云、夫十方じゅうぽうは依報えほうなり衆生しゅじやうは正報しやうほうなり
譬たとへば依報えほうは影えいのごとし正報しやうほうは体たいのごとし身みなくば影えいなし正報しやうほうなくば
依報えほうなし又正報しやうほうをば依報えほうをもつて此これをつくる、眼根がんこんをば東方とうほうをもつてこ
れをつくる、舌ぜつは南方なんぽう鼻びは西方さいほう耳みみは北方ほくほう身みは四方しほう心こころは中央ちゅうおう等らこれをもつ
て・しんぬべし、かるがゆへに衆生しゅじやうの五根ごこんやぶれんとせば四方しほう中央ちゅうおうをどろ
うべし・されば国土こくどやぶれんとするしには・まづ山さんくづれ草木そうもくかれ
江河かうかつくるしるしあり人の眼耳等げんにきよう驚きやうそうすれば天変てんぺんあり人の心こころをうごかせ

ば地動す・抑何の経経にか六種動いっさいきようこれなき一切経を仏とかせ給たまいしみな

これあり、しかれども仏・法華経をとかせ給たまはんとて六種震動しんどうありしかば

衆も・ことにおどろき弥勒菩薩も疑うたがいい文殊師利菩薩もこたへしは諸経しよきようよ

りも瑞も大に久しくありしかば疑うたがいも大に決しがたかりしなり、故に妙樂みょうらく

の云く「何れの大乗経にか集衆放光雨花動地あらざらん但大疑だいぎを生ずる

こと無し」等云云、此の釈の心はいかなる経経きやうぎようにも序は候へども此れほ

ど大なるはなしとなり・されば天台大師の云く「世人以蜘蛛掛れば喜び来

り・鵲鳴けば行人至ると小すら尚徴なほ有り大焉ぞ瑞無からん近きを以て遠き

を表す」等云云。

夫一代四十余年が間なかりし大瑞を現じて法華経の迹門をとかせ給たまい

ぬ、其の上本門と申すは又爾前の経経きやうぎようの瑞に迹門を対するよりも大なる

大瑞なり、大宝塔の地よりをどりいでし地涌千界大地よりならび出でし大

震動はしんどう大風たいふうの大海たいかいを吹けば大山のごとくなる大波のあしのはのごとくなる
小船せうせんのをひほにつくがごとくなりしなり、されば序品じよほんの瑞みろくをば弥勒もんじゅは文殊もんじゅ
に問い涌出品ゆじゅつぽんの大瑞だいずいをば慈氏じしは仏に問いたてまつるこれを妙楽みょうらく釈しゃくして云く
「迹事もんじゆは浅近文殊せんじんもんじゅに寄すべし久本は裁り難がたし故に唯仏ただに託す」云云迹門しやくもんの
ことは仏説とき給たまはざりしかども文殊もんじゅほほこれをしれり、本門ほんもんの事は妙徳みょうとくす
こしもはからず、此の大瑞だいずいは在世ざいせいの事にて候、仏神力品じんりきぽんにいたつて十神力じんりき
を現げんず此れは又さきの二瑞ごにはにるべくもなき神力じんりきなり、序品じよほんの放光ほうこうは東方とうほう
万八千土まんぱっせんど、神力品じんりきぽんの大放光ほうこうは十方世界じゅつぽうせかい、序品じよほんの地動ちどうは但三千界さんぜんかい神力品じんりきぽんの
大地動だいちは諸仏しよぶつの世界地せかい皆六種みなに震動しんどうす、此の瑞も又かくのごとし、此の
神力品じんりきぽんの大瑞だいずいは仏の滅後正像めつごしやうそう二千年にせんねんすぎて末法まつぽうに入つて法華經ほけきやうの肝要かんようのひ
ろまらせ給たまうべき大瑞だいずいなり、經文きやうもんに云く「仏の滅度めつどの後に能く是の經こを持
つを以ての故に諸仏しよぶつ皆歡喜むりやうして無量じんりきの神力げんを現げんず」等云云、又云く「惡世あくせ

末法の時」等云云。

疑うたがいつて云いわく夫それ瑞きつぎようは吉凶きつぎようにつけて・或あるは一時いちじ・二時ある・或あるは一日いちにち・二日ある

・或あるは一年ある・二年ある・或あるは七年十二年か・如何いかんぞ二千余年いご已後の瑞あるべき

や、答いえて云いわく周しゅうの昭王しょうおうの瑞は一千十五年に始めてあえり、訖利季王の夢

は二万二千年に始めてあいぬ、豈あに二千余年の事の前にあらはるるを疑うたがいう

べきや、問いうて云いわく在世ざいせよりも滅後めつごの瑞大ずだいなる如何いかん、答いえて云いわく大地だいちの動

ずる事は人の六根ろくこんの動くによる、人の六根ろくこんの動きの大小だいしょうによつて大地だいちの六

種こうげも高下こうげあり、爾前きやうぎようの経経きやうぎようには一切衆生煩惱いっさいしゆじやうぼんのうをやぶるやうなれども実に

はやぶらず、今法華経ほけきやうは元品がんぽんの無明むみやうをやぶるゆへに大動あり、末代まつだいは又在世ざいせ

よりも悪人あくにん多あ多くなり、かるがゆへに在世ざいせの瑞にも・すぐれてあるべきよし

を示現じげんし給たまう。

うたがい
疑つて云く証文如何、答えて云く而かも此の経は如来の現在すら猶

おんしつ
怨嫉多し況や滅度の後をや等云云、去る正嘉文永の大地震大天変は天神七

ちじんごだい
代・地神五代はさてをきぬ、人王九十代二千余年が間・日本国にいまだな

てんべん ちよう
き天変地天なり、人の悦び多くなれば天に吉瑞をあらはし地に帝釈の動あ

あくしん
り、人の悪心盛なれば天に凶変地に凶天出来す、瞋恚の大小に随いて天変

だいしよう ちよう
の大小あり地天も又かくのごとし、今・日本国上一人より下万民にいたる

あくしん しゅじようじゅうまん
まで大悪心の衆生充滿せり、此の悪心の根本は日蓮によりて起れるとこ

しゅご ちう
ろなり、守護国界経と申す経あり法華経以後の経なり阿闍世王仏にまいり

いわ
て云く我国に大早魃・大風・大水飢饉疫病年年に起る上他国より我が国を

しか しゅつげん たま
せむ、而るに仏の出現し給える国なりいかんと問いまいらせ候しかば仏答

いわ よきかなよきかなだいおうよ
えて云く善き哉善き哉大王能く此の問をなせり、汝には多くの逆罪あり

そ だいば
其の中に父を殺し提婆を師として我を害せしむ、この二罪大なる故かかる

大難来ることかくのごとく無量なり、其の中に我が滅後に末法に入つて提婆
がやうなる僧国中に充滿せば正法の僧一人あるべし、彼の悪僧等正法の
人を流罪・死罪に行いて王の後乃至万民の女を犯して謗法者の種子の国に
充滿せば国中に種種の大難をこり後には他国に・せめらるべしととかれて
候、今の世の念仏者かくのごとく候上・真言師等が大慢提婆達多に百千万
億倍すぎて候、真言宗の不思議あらあら申すべし、胎藏界の八葉の九尊を
画にかきて其の上にのぼりて諸仏の御面をふみて灌頂と申す事を行うな
り、父母の面をふみ天子の頂をふむがごとくなる者・国中に充滿して
上下の師となれり、いかでか国ほろびざるべき。

此の事余が一大事の法門なり又又申すべし、さきにすこしかきて候、い
たう人におほせあるべからず、びんごとの心ざし一度二度ならねば・いか
にとも。

いっさいしゅじよう

一切衆生・南無妙法蓮華經と唱うるより外の遊樂なきなり經に云く

「しゅじよう

衆生所遊樂」云云、この文あに自受法樂にあらずや、衆生のうちに貴

たま

殿もれ給うべきや、所とは一閻浮提なり日本国は閻浮提の内なり、遊樂と

われら

しきしんえしよう

いちねんさんぜん

じじゅうしん

にほんこく

えんぶだい

ほけきよう

は我等が色心依正ともに一念三千・自受用身の仏にあらずや、法華經を

たも たてまつ

持ち奉るより外に遊樂はなし現世安穩・後生善処とは是なり、ただ世間の

るなん

留難来るとも・とりあへ給うべからず、賢人・聖人も此の事はもがれず、

にようぼう

ただ女房と酒うちのみて南無妙法蓮華經と・となへ給へ、苦をば苦とさ

とり樂をば樂とひらき苦樂ともに思い合わせて南無妙法蓮華經とうちとな

へゐさせ給へ、これあに自受法樂にあらずや、いよいよ強盛の信力をいた

たま

へゐさせ給へ、これあに自受法樂にあらずや、いよいよ強盛の信力をいた

たま

きようきようきんげん

し給へ、恐恐謹言

ひのえね

建治二年丙子 六月二十七日

日蓮

にちれん

花押 かおう

四条金吾殿御返事 しじょうきんご ごへんじ

◆二〇四 四条金吾釈迦仏供養事 しじょうきんご しゃかぶつ ぐやう

建治二年七月 五十五歳御作

1144p

御日記の中に釈迦仏の木像一体等云云、開眼の事普賢經に云く「此の

だいじょうきようてん

大乘經典は諸仏の宝蔵なり十方三世の諸仏の眼目なり」等云云、又云く

ほうとう

「此の方等經は是れ諸仏の眼なり諸仏是に因つて五眼を具することを得た

こ

しよぶつ

まなこ

しよぶつ

よ

ぐ

もう」云云、此の經の中に得具五眼とは一には肉眼二には天眼三には慧眼

ほうげん

ぶつげん

ほうけきよう

ほうけきよう

ほうけきよう

ほうけきよう

ほうけきよう

ほうけきよう

四には法眼五には仏眼なり、此の五眼をば法華經を持つ者は自然に相具し

たふ

じねん

じねん

じねん

じねん

じねん

じねん

じねん

候、譬へば王位につく人は自然に國のしたがつがごとし、大海の主となる

じねん

けこん

あこん

ほうとう

はんによ

だいにちきよう

だいにちきよう

だいにちきよう

者の自然に魚を得るに似たり、華嚴・阿含・方等・般若・大日經等には五

そ

そ

そ

そ

そ

そ

そ

そ

眼の名はありといへども其の義なし、今の法華經には名もあり義も備わり

て候、設たとひ名はなけれども必ず其その義あり。

三身さんじんの事、普賢ふげん經に云く「仏三種ほうとうの身は方等ほうとうより生ず是この大法印ほういんは涅槃ねはん

海を印かす此ことの如ごとき海中かいちゆうより能よく三種しいうじゆうの仏しいうじゆうの清淨しいうじゆうの身を生ず此この三種さんじんの

身は人天にんてんの福田ふくでんにして応供おうぐの中の最さいなり」云云、三身さんじんとは一いつには法身ほっしん如来にらい

・二ふたには報身ほうしん如来にらい・三さんには応身おうじん如来にらいなり、此この三身さんじん如来にらいをば一切いっさいの諸しよ仏ぶつ必

ずあひぐす譬たとへば月の体たいは法身ほっしん月の光こうは報身ほうしん・月の影えいは応身おうじんにたとう、一

の月に三さんのことわりあり一いち仏ぶつに三身さんじんの徳とくまします、この五眼ごがん三身さんじんの法門ほうもんは

法華ほけ經きやうより外ぐわいには全ぜんく候こうはず、故ゆゑに天台大師てんだいだいしの云いく「仏ぶつ・三世さんぜに於おいて等とうし

く三身さんじん有しより諸教しよきやうの中に於おいて之これを秘ひして伝でんえず」云云、此この釈しやくの中に於しよきやう諸教しよきやう

中ちゆうとかかれて候こうは華嚴けごん・方等ほうとう・般若はんになのみならず法華ほけ經きやうより外ほかの一切いっさい經きやうな

り、秘ひ之ふでん不傳ふでんとかかれて候こうは法華ほけ經きやうの寿量品じゆりやうぼんより外ほかの一切いっさい經きやうには教主きやうしゆ

釈尊しやくそん秘ひめて説とき給たまはずとなり。

されば画像・木像の仏の開眼供養は法華經・天台宗にかぎるべし、其の
いちねんさんぜん ほうもん もう
上一念三千の法門と申すは三種の世間よりをこれり、三種の世間と申すは
しゅじょうせけん ごおんせけん こくどせけん
一には衆生世間二には五陰世間三には国土世間なり、前の二は且らく之を
置く、第三の国土世間と申すは草木世間なり、草木世間と申すは五色の
そふもく おこ
のぐは草木なり画像これより起る、木と申すは木像是より出来す、此の画
こんばく もう
木に魂魄と申す神を入るる事は法華經の力なり天台大師のさとりなり、此
ほうもん しゅじょう
の法門は衆生にて申せば即身成仏といはれ画木にて申せば草木成仏と
そくしんじょうぶつ
申すなり、止観の明静なる前代いまだきかずとかかれて候と無情仏性・
しかん ぜんだい
惑耳驚心等とのべられて候は是なり、此の法門は前代になき上・後代にも
わくにきょうしん くれ
又あるべからず、設ひ出来せば此の法門を偷盜せるなるべし、然るに
たと しゅつたい ほうもん ちゅうとう
天台以後二百余年の後・善無畏・金剛智・不空等・大日經に眞言宗と
てんだい いご ぜんむい こんこうち ふくう だいにちきょう しんごんしゅう
申す宗をかまへて仏説の大日經等にはなかりしを法華經・天台の釈を盗み
もう ぶつせつ だいにちきょう ほうきょう てんだい

入れて真言宗の肝心とし、しかも事を天竺によせて漢土・日本の末学を
誑惑せしかば皆人・此の事を知らず一同に信伏して今に五百余年なり、然る
間・真言宗已前の木画の像は靈驗・殊勝なり真言已後の寺塔は利生うす
し、事多き故に委く注さず。

此の仏こそ生身の仏にて・おはしまし候へ、優填大王の木像と影顯王の
木像と一分もたがうべからず、梵・帝・日月・四天等必定して影の身に随う
が如く貴辺をばまほらせ給うべし是一。

御日記に云く毎年四月八日より七月十五日まで九旬が間・大日天子に仕
えさせ給ふ事、大日天子と申すは宮殿七宝なり其の大さは八百十六里五十
一由旬なり、其の中に大日天子居し給ふ、勝無勝と申して二人の後あり左右
には七曜九曜つらなり前には摩利支天女まします七宝の車を八匹の駿馬に
かけて四天下を一日一夜にめぐり四州の衆生の眼目と成り給う、他の仏・

菩薩天子等は利生のいみじくまします事・耳に・これをきくとも愚眼に
未だ見えず、是は疑うべきにあらず眼前の利生なり教主釈尊にましま
さずば争か是くの如くあらたなる事候べき、一乗の妙経の力にあらずん
ば争か眼前の奇異をば現す可き不思議に思ひ候、争か此の天の御恩をば報
ずべきと・もとめ候に仏法以前の人人も心ある人は皆・或は礼拝をまいら
せ・或は供養を申し皆しるしあり、又逆をなす人は皆ばつあり、今内典を
以てかんがへて候に 金光明経 に云く「日天子及以月天子是の経を聞くが
故に精氣充実す」等云云、最勝王経に云く「此の経王の力に由つて流暉
四天下を遶る」等云云、当に知るべし日月天の四天下をめぐり給うは仏法
の力なり彼の 金光明経 ・最勝王経は法華経の方便なり 勝劣を論ずれば
乳と醍醐と金と宝珠との如し、劣なる経を食しまして尚四天下をめぐ
り給う、何に況や法華経の醍醐の甘味を嘗させ給はんをや、故に法華経の

序品には普香天子とつらなります、法師品には阿耨多羅三藐三菩提と

記せられさせ給う火持如来是なり、其の上慈父よりあひつたはりて二代我

が身となりてとしひさし争かすてさせたまひ候べき、其の上日蓮も又此

の天を待みてたてまつり日本国にたてあひて数年なり、既に日蓮かちぬべ

き心地す利生のあらたなる事・外にもとむべきにあらず、是より外に御日記

たうとさ申す計りなけれども紙上に尽し難し。

なによりも日蓮が心にたつとき時候、父母御孝養の事度度の御文に候上

に今日の御文なんだ更にとどまらず、我が父母地獄にやおはすらんとなげ

かせ給う事のあわれさよ、仏の弟子の御中に目☆尊者と申しけるは父をば

きつせん師子と申し母をば青提女と申しけるが餓鬼道におちさせ給いける

を凡夫にてをはしける時は、しらせ給わざりければなげきもなかりける程

に、仏の御弟子とならせ給いて後阿羅漢となりて天眼をもつて御らんあり

ければ餓鬼道におはしけり、是を御らんありて飲食をまいらせしかば炎となりていよいよ苦をましさせまいらせ給いしかば、いそぎはしりかへり仏に此の由を申させ給いしぞかし、爾の時の御心をおもひやらせ給へ、今貴辺は凡夫なり肉眼なれば御らんなければももしもさもあらばとなげかせ給うこは孝養の一分なり梵天・帝釈・日月・四天も定めてあはれとおぼさんか、華嚴經に云く「恩を知らざる者は多く横死に遭う」等云云、觀仏相海經に云く「是れ阿鼻の因なり」等云云、今既に孝養の志あつし定めて天も納受あらんか是二。

御消息の中に申しあはさせ給う事くはしく事の心を案ずるにあるべからぬ事なり、日蓮をば日本国の人あだむ是はひとへにさがみどののあだませ給うにて候ゆへなき御政りごとなれどもいまだ此の事にあはざりし時よりかかる事あるべしと知りしかば今更いかなる事ありとも人をあだむ心ある

べからずとをもち候へば、此の心のいのりとなりて候やらんそこばくのな
んを・のがれて候、いまは事なきやうになりて候、日蓮にちれんがさどの国にても
かつえしなず又これまで山中にして法華經ほけきようをよみまいらせ候はたれかたす
けんひとへにとの御たすけなり又殿の御たすけはなにゆへぞとたづぬれ
ば入道殿にゅうどうの御故ぞかし、あらわにはしろしめさねども定めて御いのりとも
なるらんかうあるならばかへりて又との御いのりとなるべし父母ふぼの孝養こうよう
も又彼の人の御恩ごおんぞかし、かかる人の御内を如何いかんなる事有あればとてすてさ
せ給たまうべきやかれより度度たびたびすてられんずらんはいかがすべき又いかなる命
になる事なりともすてまいらせ給たまうべからず、上にひきぬる經文きやうもんに不知恩ふちおん
の者は横死おうし有と見えぬ孝養こうようの者は又横死おうし有ある可べからず、鵜うと申もうす鳥の食す
鉄くろがねはとくれども腹の中の子はとけず、石を食する魚あり又腹の中の子
はしなず、梅檀せんだの木は火に焼けず浄居の火は水に消へず仏おんみの御身をば三十

二人の力士・火をつけしかどもやけず、仏の御身おんみよりいでし火は三界さんがいの
竜神雨りゅうじんをふらして消しかどもきえず、殿は日蓮にちれんが功德くどくをたすけたる人なり

あくにん

悪人にやぶらるる事かたし、もしやの事あらば先生せんしやうに法華經ほけきやうの行者ぎやうじやをあ

だみたりけるが今生こんじやうにむくふなるべし、此の事は如何いかんなる山の中海の上に

てものがれがたし、不輕菩薩ふぎやうぼさつの杖木じやうもくの責も目☆尊者そんじやの竹杖ちくじやうに殺されしも

是これなり、なにしにか歎なげかせ給たまうべき。

但し横難ただなんをば忍にはしかじと見へて候此の文御覽ありて後はけつして百

日が間をぼろげならでは・どうれい並に他人たにんと我が宅ならで夜中の御さか

もりあるべからず主の召さん時は昼ならばいそぎ参らせ給たまうべし、夜なら

ば三度までは頓病とんびやうの由よしを申させ給たまいて三度にすぎば下人又他人たにんをかたらひ

てつじを見せなんとして御出仕あるべし、かうつつしませ給たまはんほどにむ

この人もよせなんどし候はば人の心又さきにひきかへ候べし、かたきをう

つ心とどまるべしと申もうさせ給たまう事は御あやまちありとも左右なく御内を
出いでさせ給たまうべからず、まして・なからんにはなにと人申せくるしかる
べからず、おもひのままに入道にゅうどうにもなりておはせばさきさきならばくるし
からず、又身にも心にもあはぬ事あまた出来しゅったいせばなかなか悪縁度度来あくえんたびたびるべ
し、このごろは女は尼になりて人をはかり男は入道にゅうどうになりて大悪をつくる
なり、ゆめゆめあるべからぬ事なり、身に病なくともやいとを一二箇所や
いて病の由あるべし、さわぐ事ありともしばらく人をもつて見せをほせさ
せ給たまへ。

事事くはしくはかきつくしがたし、此の故ゆえに法門ほうもんもかき候はず、御經の
事はすずしくなり候いてかいてまいらせ候そうらはん、
恐恐謹言きょうきょうきんげん。

建治二年丙子七月十五日
ひのえね

日蓮 にちれん
花押 かおう

四条金吾殿御返事
しじょうきんご ごへんじ

◆二〇五

四条金吾殿御返事

1148p

しょうほう

正法をひろむる事は必ず智人ちじんによるべし、故に釈尊しやくそんは一切経をとかせ

たまい しょうじょうきよう

給いて 小乗経しょうじょうきようをば阿難大乗あなんだいじょうきよう経をば文殊師利法華経もんじゆしりほけきようの肝要かんようをば一切いっさいの

しょうもん

もんじゆ

いっさい

ぼさつ

じょうぎようぼさつ

声聞・文殊等の一切の菩薩をきらひて上行菩薩をめして授けさせ給いき、

たといしょうほう

たも

ちしゃ

だんな

いかで ひろ

しか しゃかぶつ

設い正法を持てる智者ありとも檀那なくんば争か弘まるべき然れば釈迦仏

だんな ぼんのう しゃく

の檀那は梵王帝釈の二人なりこれは二人ながら天の檀那なり、仏は六道の

にんてんにんてん

い

たま

さんぜんせかい

てんじく

中には人天人の中には人に出でさせ給う人には三千世界の中央・五天竺

てんじく

・五天竺の中には摩竭堤国に出でさせ給いて候しに、彼の国の王を檀那と

とこ

さだむべき処に彼の国の阿闍世王は悪人なり、聖人は悪王に生れあふ事

だいいち

あた

あじやせ

けんおう

けんおう

しょうにん

あくおう

第一の怨にて候しぞかし、阿闍世王は賢王なりし父をころす、又うちそふ

わざはひと堤婆達多を師とせり、

だった

だった

さんぎやくざ

おんみ

達多は三逆罪をつくる上仏の御身より血

を出だしたりし者ぞかし、不孝の悪王と謗法の師とよりあひて候しかば人間

ふこう

あくおう

ほうほう

にんげん

に二のわざはひにて候しなり、一年・二年ならず数十年が間・仏にあだを
・ なしまいらせ仏の御弟子を殺せし事数をしらず、かかりしかば天いかり
をなして天変てんべんしきりなり、地神いかりを・なして地天申すに及ばず、月月
に悪風あくふう年年に飢饉ききん疫癘えきれい来りて万民ばんみんほとんどつきなんとせし上、四方しほうの国よ
り阿闍世王あじゃせを責む、既に危く成りて候し程に阿闍世王・或は夢のつげによ
り・或は耆婆ある ぎばがすすめにより・或は心にあやしむ事ありて提婆達多だいいたたをばう
ち捨て仏の御前にまいりてやうやうにたいほう申せしかば身の病忽たちまちにいゑ
るばかりしが命をのべて四十年なり、千人の阿羅漢あらかんをあつめて一切経いっさいきやうこと
には法華経ほけきやうをかきをかせ給いき、今・我等われらがたのむところの法華経は阿闍世
王のあたへさせ給う御恩ごおんなり。

是はさてをきぬ仏の阿闍世王あじゃせにかたらせ給いし事を日蓮申すならば

にほんこく

日本国の人は今つくれる事どもと申さんずらんなれども我が弟子・檀那
ればかたりたてまつる、仏言のたまわく我が滅後末法に入つて又調達ちやうだつがやうなる
・たうとく五法を行ずる者・国土こくどに充滿じゅうまんして悪王あくおうをかたらせて但一人あら
ん智者ちしやを・或あるはのり・或あるはうち・或あるは流罪るざい・或あるは死に及ぼさん時昔にも・
すぐれてあらん天変地天てんぺんちよう・大風たいふう・飢饉ききん・疫癘えきれい・年年ねんねんにありて他国たこくより責べ
しと説かれて候、守護経しゆごと申す経の第十の巻の心なり。

とうじ

当時の世にすこしもたがはず、然しかるに日蓮にちれんは此この一分いちぶんにあたれり日蓮にちれんを

こころがし

ひとびと

たすけんと志こころがしす人人ひとびと少少せうせうありといへども・或あるは心ざしうすし・或あるは心ざ

しは・あつけれども身がうごせずやうやうにをはするに御辺ごへんは其その一分いちぶんな

り・心ざし人にすぐれてをはする上わづかの身命しんみょうをささうるも又御故な

り、天もさだめてしろしめし地もしらせ給たまいぬらん殿いかなる事にもあは

せ給たまうならばひとへに日蓮にちれんがいのちを天のたたせ給たまうなるべし、人の命は

せ給たまうならばひとへに日蓮にちれんがいのちを天のたたせ給たまうなるべし、人の命は

せ給たまうならばひとへに日蓮にちれんがいのちを天のたたせ給たまうなるべし、人の命は

せ給たまうならばひとへに日蓮にちれんがいのちを天のたたせ給たまうなるべし、人の命は

せ給たまうならばひとへに日蓮にちれんがいのちを天のたたせ給たまうなるべし、人の命は

せ給たまうならばひとへに日蓮にちれんがいのちを天のたたせ給たまうなるべし、人の命は

山海・空市まぬかれがたき事と定めて候へども又定業亦能転またの経文きやうもんもあり
又天台てんだいの御釈にも定業をのぶる釈もあり、前に申せしやうに蒙古国もうこのよす
るまでつつしませ給たまうなるべし、主の御返事をば申もうさせ給たまうべし身に病あ
りては叶かないがたき上世間せけんすでにかうと見え候それがしが身は時によりて憶
病はいかんが候そうらはんずらん、只今ただの心は・いかなる事も出来候はば入道しゅつたい
殿おんまえの御前にして命をすてんと存じ候、若もしやの事候ならば越後よりはせ上
らんははるかなる上不定ふじようなるべし、たとひ所領しよりようをめさるるなりとも今年は
きみをはなれまいらせ候べからず。

是より外はいかに仰おおせ蒙こむるともをそれまいらせ候べからず、是よりも大事だいじ
なる事は日蓮にちれんの御房ごぼうの御事おんことと過去かこに候父母ふぼの事なりとののしらせ給たまへ、す
てられまいらせ候とも命はまいらせ候べし後世ごしやうは日蓮にちれんの御房ごぼうにまかせまい
らせ候と高声にうちなのり居たまさせ給たまへ。

建治二年丙子九月六日 ひのえね

日蓮花押 にちれんかおう

四条金吾殿 しじょうきんご

◆二〇六 四条金吾殿御返事 しじょうきんご ごへんじ

1150p

はるかに申し承り候はざりつればいぶせく候いつるにかたがたの物と

申し御つかいと申しよろこび入つて候又まほりまいらせ候、所領の間の

御事は上よりの御文ならびに御消息引き合せて見候い畢んぬ、此の事は

御文なきさきにすいして候、上には最大事とおぼしめされて候へども御き

んずの人人のざんそうにてあまりに所領をきらい上をかるしめたてまつり

候、ちうあうの人こそを・をく候にかくまで候へば且らく御恩をば・おさ

へさせ給うべくや候らんと申しぬらんとすいして候なりそれにつけては御

心えあるべし御用意あるべし、我が身と申しをやるいしんと申しかたがた

御内に不便といはれまいらせて候大恩の主なる上すぎにし日蓮が御かんき

の時・日本一同にくむ事なれば弟子等も・或は所領を・ををかたよりめ
されしかば又方方の人人も・或は御内内をいだし・或は所領をおいなんと
せしに其の御内になに事もなかりしは御身にはゆゆしき大恩と見へ候。

このうへはたとひ一分の御恩なくともうらみまいらせ給うべき主にはあ
らず、それにかさねたる御恩を申し所領をきらはせ給う事御とがにあらず
や、賢人は八風と申して八のかぜにをかされぬを賢人と申すなり、利衰

・毀・誉・称・譏・苦楽なり、をを心は利あるによるこばずをとるうるに

なげかず等の事なり、此の八風にをかされぬ人を必ず天はまほらせ給う
なりしかるをひりに主をうらみなんどし候へば・いかに申せども天まほり

給う事なし、訴訟を申せど叶いぬべき事もあり、申さぬに叶うべきを申せ

ば叶わぬ事も候、夜めぐりの殿原の訴訟は申すは叶いぬべきよしをかんが

へて候しにあながちになげかれし上日蓮がゆへに・めされて候へば・いか

でか不便ふびんに候はざるべき、ただし訴訟もうだにも申し給たまはずばいのりてみ候そうらはんと申せしかば、さうけ給たまわり候いぬと約束やくそくありて又をりかみをしきりにかひとひとき人人訴訟ひとひとろんなんどありと申せし時に此の訴訟もうよも叶かなわじとをもひ候いしがいままでのびて候。

だいがくどのゑもんのたいうどのの事どもは申もうすままにて候あいだいのり叶かないたるやうにみえて候、はきりどのの事は法門ほうもんの御信用ごしんようあるやうに候へども此の訴訟もうは申すままには御用もちいなかりしかばいかながと存じて候いしほどにさりとはと申もうして候いしゆへにや候けんすこししるし候か、これにをもうほどなかりしゆへに又をもうほどなし、だんなど師とをもひあわぬいのりは水の上に火をたくがごとし、又だんなど師とをもひあひて候へども大法だいほうを小法せうほうをもつてをかしてとしひさしき人人ひとひとの御いのりは叶かない候はぬ上、我が身もだんなもほろび候なり。

てんだい
天台の座主明雲と申せし人は第五十代の座主なり、去ぬる安元二年五月
に院勘をかほりて伊豆国へ配流・山僧大津よりうばいかへす、しかれども
又かへりて座主となりぬ又すぎにし壽永二年十一月に義仲に・からめとら
れし上願うちきられぬ是はながされ願きらるるをとがとは申さず賢人・
しょうにん
聖人も・かかる事候、但し源氏の頼朝と平家の清盛との合戦の起りし時
きよもり いちるい
清盛が一類二十余人起請をかき連判をして願を立てて平家の氏寺と叡山を
たのむべし三千人は父母のごとし山のなげきは我等がなげき山の悦びは
われら
我等がよろこびと申して、近江の国・二十四郡を一向によせて候しかば、
たいしゅう
大衆と座主と一同に内には真言の大法をつくし外には悪僧どもをもつて
げんじ
源氏をいさせしかども義仲が郎等ひぐちと申せしをのこ義仲とただ五六人
ばかり えいざんちゅうどう
計り叡山中堂にはせのぼり調伏の壇の上にありしを引き出してなわをつ
け西ざかを大石をまろばすやうに引き下して頸をうち切りたりき、かかる

事あれども日本の人人真言をうとむ事なし又たづぬる事もなし去ぬる

じようきゆう

かのとみ

承久三年辛巳五六七の三箇月が間・京・夷の合戦ありき、時に日本国第一

にほんこくだいいち

の秘法どもをつくして叡山・東寺・七大寺・園城寺等・天照太神・

ひほう

えいざん

とうじ

ななだいじ

おんじようじ

てんしようだいじん

しょうはちまん

さんのう

にほんだいいち

正八幡・山王等に一一に御いのりありき、其の中に日本第一の僧四十一人

いわゆるさき

ざす

じえん

そうじよう

とうじ

おむろ

みいでら

じようじゅう

そうじよう

なり所謂前の座主・慈円大僧正・東寺・御室・三井寺の常住院の僧正

たびたび

よしとき

じようぶく

おむろ

ししんでん

しんこん

じようぶく

等は度々・義時を調伏ありし上、御室は紫宸殿にして六月八日より御調伏

ありしに、七日と申せしに同じく十四日に・いくさにまけ勢多迦が頸きら

おむろ

れ御室をもひ死に死しぬ、かかる事候へども真言はいかなるとがとも・あ

しんこん

だいほう

しんこん

ひとたび

じえん

やしむる人候はず、をよそ真言の大法をつくす事明雲第一度慈円第二度

にほんこく

おわ

このたび

とうじ

もうこじようぶく

日本国の王法ほろび候い畢んぬ、今度第三度になり候、当時の蒙古調伏

此れなり、かかる事も候ぞ此れは秘事なり人にいはずして心に存知せさせ

給へ。

たま

給へ。

されば此の事御訴訟なくて又うらむる事なく御内をばいず我かまくらにうちいてさきざきよりも出仕とをきやうにてときどきさいでておはするならば^{かな}叶う事も候なん、あながちにわるびれてみへさせ^{たま}給うべからず、よくと名聞^{みょうもん}願との。

◆二〇七 ^{よリモト}頼基陳状 建治三年六月 五十六歳御御作 1153p

^い去ぬる六月二十三日の御下文・^{くだしがみ}島田の左衛門入道殿・^{やましろう}山城の民部入道殿・^{たまわ}兩人の御承りとして同二十五日^{つつし}謹んで^{はいけん}拝見仕り候い畢^{おわ}んぬ、^{おお}右仰せ下しの状に云く^{いわ}竜象御房の御説法の所に参られ候いける次第^{しだい}をほかた^{おんびん}穩便ならざる由、^{けんもん}見聞の人遍く一方ならず同口に申し合^{あは}い候事^{おどろ}驚き入つて候、徒党の仁^そ其の数兵 杖^{ひょうじょう}を帯^{たい}して出入すと云云。

^{あとかた}此の条跡形も無き虚言なり、^{しよせんたれびと}所詮誰人の申し入れ候けるやらん御哀憐^{いれん}を蒙^{こゝむ}りて召し合せられ実否を糾明^{きゅうめい}され候はば然^{しか}るべき事にて候、凡^{およ}そ此の事

の根源は去る六月九日日蓮聖人の御弟子三位公頼基が宿所に来り申して
云く近日竜象房と申す僧京都より下りて大仏の門の西桑か谷に止住して日
夜に説法仕るが申して云く現当の爲仏法に御不審存ぜむ人は来りて問答
申す可き旨説法せしむる間、鎌倉中の上下釈尊の如く貴び奉るしかれども
問答に及ぶ人なしと風聞し候、彼へ行き向いて問答を遂げ一切衆生の後生
の不審をはらし候はむと思ひ候、聞き給はぬかと申されしかども折節官仕
に隙無く候いし程に思い立たず候いしかども、法門の事と承りてたびたび
罷り向いて候えども頼基は俗家の分にて候い一言も出さず候し上は悪口に
及ばざる事厳察足る可く候。
ここに竜象房説法の中に申して云く此の見聞満座の御中に御不審の
法門あらば仰せらる可くと申されし処に、日蓮房の弟子三位公問うて云く
生を受けしより死をまぬかるまじきことはり始めてをどろくべきに候はね

ども、ことさら當時・日本国の災☆に死亡する者数を知らず眼前の無常人毎
に思いしらずと云ふ事なし、然る所に京都より上人・御下りあつて人人の
不審をはらし給うよし承りて参りて候つれども御説法の最中骨無くも候な
ばと存じ候し処に問うべき事有らむ人は各各憚らず問い給へと候し間悦び
入り候、先づ不審に候事は末法に生を受けて辺土のいやしき身に候へども
中国の仏法幸に此の国にわたれり是非信受す可き処に経は五千・七千
数多なり、然而一仏の説なれば所詮は一經にてこそ候らむに華嚴・真言
乃至八宗浄土・禪とて十宗まで分れてをはします、此れ等の宗宗も門はこ
となりとも所詮は一かと推する処に、弘法大師は我が朝の真言の元祖・
法華経は華嚴経・大日経に相對すれば門の異なるのみならず其の理は戲論
の法無明の辺域なり、又法華宗の天台大師等は諍盜醍醐等云云、法相宗の
元祖慈恩大師云く「法華経は方便深密経は真実無性有情永不成仏」云云、

華嚴宗の澄観云く「華嚴經は本教法華經は末教・或は華嚴は頓頓法華は

ぜんとん

漸頓」等云云、三論宗の嘉祥大師の云く「諸大乘經の中には般若教第一」

云云、浄土宗の善導和尚云く「念仏は十即十生・百即百生・法華經

等は千中無一」云云、法然上人云く「法華經を念仏に對して捨閉閣拋・或

は行者は群賊」等云云、禪宗の云く「教外別伝・不立文字」云云、教主

釈尊は法華經をば世尊の法は久しくして後に要當に眞實を説きたもうべ

し、多宝仏は妙法華經は皆是眞實なり十方分身の諸仏は舌相梵天に至ると

こそ見えて候に弘法大師は法華經をば戲論の法と書かれたり、釈尊・多宝

・十方の諸仏は皆是眞實と説かれて候、いづれをか信じ候べき、善導和尚

・法然上人は法華經をば千中無一・捨閉閣拋・釈尊・多宝・十方分身の

諸仏は一として成仏せずと云う事無し皆仏道を成ずと云云、三仏と導和尚

然上人とは水火なり雲泥なり何れをか信じ候べき何れをか捨て候べき

なかんずく

就中彼の導然兩人の仰ぐ所の雙觀經の法藏比丘の四十八願の中に第十八

願に云く「設い我れ仏を得るとも唯五逆と誹謗正法とを除く」と云云、た

とひ弥陀の本願実にして往生すべくとも、正法を誹謗せむ人人は弥陀仏

の往生には除かれ奉るべきか又法華經の二の卷には「若し人信ぜざれば

其の人命終して阿鼻獄に入らん」と云云、念仏宗に詮とする導然の兩人

は經文実ならば阿鼻大城をまぬかれ給ふべしや、彼の上人の地獄に墮ち

給わせば末学弟子・檀那等自然に惡道に墮ちん事疑いなるべし、此等

こそ不審に候へ上人は如何と問ひ給はれしかば。

竜上人答て云く上古の賢哲達をば・いかでか疑い奉るべき、竜象等

が如くなる凡僧等は仰いで信じ奉り候と答え給しを、をし返して此の仰せ

こそ智者の仰せとも覺えず候へ、誰人か時の代にあをがる人師等をば疑

い候べき、但し涅槃經に仏最後の御遺言として「法に依つて人に依らざれ」

と見えて候、人師にんしにあやまりあらば經に依れと仏は説かれて候、御辺はよ
もあやまりましまさじと申もうされ候、御房の私の語ことばと仏の金言きんげんと比くらべんには三
位によらいは如來の金言きんげんに付きまいらせむと思ひ候なりと申もうされしを。

象上人しょうにんは人師にんしにあやまり多しと候は・いづれの人師にんしに候ぞと問はれしか

ば、上に申もうしつる所の弘法大師・法然上人等の義に候はずやと答え給たまい候

しかば象上人しょうにんは嗚呼叶ああかない候まじ我が朝あしたの人師にんしの事は忝かたじけなくも問答仕るまじ

候、満座まんざの聴衆ちようしゅう皆其の流にて御座す鬱憤うっぷんも出来せば定めてみだりが

はしき事候なむ恐れあり恐れありと申もうされし処ところに、三位房の云いわく人師にんしのあ

やまり誰ぞと候へば經論きやうろんに背そむく人師達をいだし候し憚はばかりあり・かなふまじ

と仰おほせ候にこそ進退しんたいきはまりて覚え候へ、法門ほうもんと申もうすは人を憚はばかりり世を恐れ

て仏の説とき給たまうが如ごとく經文きやうもんの実義じつぎを申もうさざらんは愚者ぐしやの至極しごくなり、智者ちしや

上人しょうにんとは覚え給たまはず惡法世あくほうに弘ひろまりて人惡道あくどうに墮おち国土滅こくとすべしと見へ候

はむに法師ほつしの身として争いかでかいさめず候べき、然しかれば則すなわち法華經ほけきようには「我
身命しんみょうを愛あまず」涅槃經ねはんきようには「寧むしろ身命しんみょうを喪うしなうとも」等云云、実じつの聖人しようにんに
てをせば何が身命しんみょうを惜おしみて世にも人にも恐れ給たまうべき、外典げてんの中にも
竜蓬りゅうほうと云いいし者、比干ひかんと申まをせし賢人けんじんは頸けいをはねられ胸むねをさかれしかども
夏の桀・殷いんの紂ちゆうをばいさめてこそ賢人けんじんの名なをば流ながし候しか、内典ないてんには不輕ふぎよう
菩薩ぼさつは杖じようもく木きをかほり師子尊者しそんじゃは頭こうべをはねられ竺じくの道生どうしやうは蘇山そざんにながされ
法道三蔵ほうどうさんそうは面かおに火印かなやきを・さされて江南しやうにんにはなたれしかども正法しやうほうを弘ひろめてこ
そ聖人しようにんの名なをば得候しかと難なんぜられ候しかば。

竜上人しようにんの云いくさる人まっだいは末代まつだいにはありがたし我我わがは世よをはばかり人を恐おそる
る者ものにて候、さやうに仰おおせらる人ひととてもことばの如ごとくにはよもをはしま
し候はじと候しかば。

此この御房ごぼうは争いかでか人ひとの心こころをば知たまり給たまうべき某それがしこそ当時とうじ・日本国にほんこくに聞きこえ

たまにちれんしょうにん
給う日蓮聖人の弟子として候へ、
それがしししょうしょうにんまつだい
某が師匠の聖人は末代の僧にて御坐
候へども当世の大名僧の如く望んで請用もせず人をも☆はす聊か異なる
あくみょう
悪名もたたず只此の国に真言・禪宗・浄土宗等の悪法並に謗法の諸僧満
かみいちにん
ち満ちて上一人をはじめ奉りて下万民に至るまで御帰依ある故に法華經
きようしゆしやくそん
教主釈尊の大怨敵と成りて現世には天神地祇にすてられ他国のせめにあ
こしやう
ひ、後生には阿鼻大城に墮ち給うべき由・經文にまかせて立て給いし程
あびだいじやう
に此の事申さば大なるあだあるべし申さずんば仏のせめのがれがたし、い
もつ
はゆる涅槃經に「若し善比丘あつて法を壞る者を見て置いて呵責し驅遣し
ねはんぎやう
拳処せずんば当に知るべし是の人は仏法の中の怨なり」等と云云、世に恐
こしよ
れて申さずんば我が身惡道に墮つべきと御覽じて身命をすてて去る建長
もつ
年中より今年建治三年に至るまで二十余年が間あえてをこたる事なし、然れ
いた
ば私の難は数を知らず国王の勘氣は兩度に及びき、三位も文永八年九月十
こくおう
かんき
およ
ぶんえい

二日の勘氣かんきの時は供奉くわんぷの一人にて有りしかば同罪どうつみに行はれて頸けいをはねらるべきにてありしは身命しんみょうを惜おしむものにて候かと申もうされしかば。

りゅうそう

竜象房口を閉て色を変え候しかば此の御房申されしは是程これほどの御智慧ちえにて

ふしん

は人の不審ふしんをはらすべき由おほの仰せ無用に候けり苦岸比丘勝意比丘等は我れ

しょうほう

正法を知りて人をたすくべき由存ぜられて候しかども我が身も弟子でし・檀那だんな

むげんじこく

等も無間地獄に堕ち候き、御法門ほうもんの分齊ぶんざいにてそこばくの人を救はむと説き

たま

給うが如くならば師檀共しだんに無間地獄にや堕ち給はんずらむ今日より後は

か

此くの如き御説法せつぽうは御はからひあるべし、加様かようには申すまじく候へども悪法あくほう

じこく

を以て人を地獄じこくにをとさん邪師じゃしをみながら責め顯けんはさずば返つて仏法ぶつぽうの中

あだ

の怨あだなるべしと仏の御いましめ・のがれがたき上ちようもん聴聞じようげみなあくとうの上下皆惡道じようげみなあくとうにをち

たま

給はん事不便ふびんに覚え候へば此くの如く申し候なり、智者ちしやと申すは国のあや

じゃけん

うきをいさめ人の邪見じゃけんを申しとどむるこそ智者ちしやにては候なれ、是はいかな

るひが事ありとも世の恐しければ・いさめじと申されむ上は力及ばず、某
もんじゆ ちえ ふる な べんぜつ
は文殊の智慧も富楼那の弁説も詮候はずとて立たれ候しかば、諸人歡喜を
たなこころ
なし 掌を合せ今暫く御法門候へかしと留め申されしかどもやがて歸り
たまい おわ
給い了んぬ、此の外は別の子細候はず且つは御推察あるべし法華經を信じ
ぶつどう
参らせて仏道を願ひ候はむ者の争か法門の時惡行を企て惡口を宗とし候べ
き、しかしながら御ぎやうさく有る可く候其上日蓮聖人の弟子となのりぬ
まか おんまえ
る上罷り歸りても御前に参りて法門問答の様かたり申し候き、又た其の辺
よりもと
に頼基しらぬもの候はず只頼基をそねみ候人のつくり事にて候にや早早召
そ
し合せられん時其の隠れ有る可らず候。

又仰せ下さるる状に云く極樂寺の長老は世尊の出世と仰ぎ奉ると此の条
おお
難かむの次第に覚え候、其の故は日蓮聖人は御經にとかれてましますが
なん しだい おほ そのゆえ にちれんしょうにん
如くば久成如来の御使 上行菩薩の垂迹法華本門の行者五五百歳の大
こと くじょうによらい おんつかいじょうぎようほさつ すいじやくほつけほんもん ぎようじゃ

導師にて御座候聖人を頸をはねらるべき由の申し状を書きて殺罪に申し行はれ候しが、いかが候けむ死罪を止て佐渡の島まで遠流せられ候しは良觀上人の所行に候はずや其の訴状は別紙に之れ有り、抑生草をだに伐るべからずと六齋日夜説法に給われながら法華正法を弘むる僧を斷罪に行わる可き旨申し立てらるるは自語相違に候はずや如何此僧豈天魔の入れる僧に候はずや、但し此の事の起は良觀房常の説法に云く日本国の一切衆生を皆持齋になして八齋戒を持たせて国中の殺生天下の酒を止めむとする処に日蓮房が謗法に障えられて此の願叶い難き由歎き給い候間・日蓮聖人・此の由を聞き給いていかがして彼が誑惑の大慢心をたをして無間地獄の大苦をたすけむと仰せありしかば、頼基等は此の仰せ法華經の御方人大慈悲の仰せにては候へども当時・日本国別して武家領食の世きらざる人にてをはしますをたやすく仰せある事いかがと弟子共同口に恐れ申し候し

程に、去る文永八年太歳辛いの ぶんえい 未六月十八日大旱魃かのとひつじの時・彼の御房祈雨ごぼうきうの法を

行いて万民ばんみんをたすけんと申し付け候由日蓮聖人にちれんしようにん聞き給たまひいて此体は小事しょうじなれ

ども此ついでの次でに日蓮にちれんが法験ばんにんを万人に知らせばやと仰おおせありて、良観房りようかんの所

へつかはすに云いわく七日の内にふらし給たまはば日蓮にちれんが念仏ねんぶつ・無間むげんと申もうす法門ほうもんす

てて良観りようかん上人しょうにんの弟子でしと成りて二百五十戒持でしつべし、雨ふらぬほどならば

彼の御房ごぼうの持戒じかいげなるが大誑惑おおくわくなるは顯然けんねんなるべし、上代あまごいも祈雨きうに付て勝負しょうぶ

を決したる例これ多し、所謂護命いわゆるごみょうと伝でん教大師きやうだいしと・守敏しゅびんと弘法こうぼうなり、仍よつて

良観房りようかんの所もとへ周防房しうぼう・入沢いるさわの入道にゅうどうと申もうす念仏ねんぶつ者を遣つかわす御房ごぼうと入道にゅうどうは

良観りようかんが弟子でし又念仏ねんぶつ者なりいまに日蓮にちれんが法門ほうもんを用もちうる事なし是これを以て勝負しょうぶと

せむ、七日の内に雨降るならば本もとのの八斎戒ねんぶつ・念仏ねんぶつを以て往生おうじやうすべしと思

ふべし、又雨ふらずば一向いっしやうに法華經ほけきやうになるべしといはれしかば是等これらよろこ悦こころびて極楽ごくらく

寺りようかんの良観房りようかんに此よしの由もつを申し候もちけり、良観房りようかん悦よろこびないて七日の内に雨ふら

すべき由にて弟子百二十余人頭より煙を出し声を天にひびかし・或は念仏
・或は請雨經・或は法華經・或は八齋戒を説きて種種に祈請す、四五日ま
で雨の氣無ければたましみを失いて多宝寺の弟子等數百人呼び集めて力を
尽し祈りたるに七日の内に露ばかりも雨降らず其の時・日蓮聖人使を遣す
事三度に及ぶ、いかに泉式部と云いし姪女・能因法師と申せし破戒の僧・
狂言綺語の三十一字を以て忽にふらせし雨を持戒持律の良觀房は法華・
真言の義理を極め慈悲第一と聞へ給う上人の數百人の衆徒を率いて七日の
間にいかにふらし給はぬやらむ、是を以て思ひ給へ一丈の堀を越えざる者
二丈三丈の堀を越えてんややすき雨をだにふらし給はず況やかたき往生
成仏をや、然れば今よりは日蓮怨み給う邪見をば是を以て翻えし給へ
後生をそろしくをぼし給はば約束のままにいそぎ来り給へ、雨ふらす法と
仏になる道をしへ奉らむ七日の内に雨こそふらし給はざらめ、旱魃弥

こうじょう

興盛に八風ますます吹き重りて民のなげき弥弥深し、すみやかに其のいの

りやめ給へと第七日の申の時使者ありのままに申す処に良観房は涙を流

す弟子・檀那同じく声をおしまず口惜しがる日蓮御勘気を蒙る時・此の事

御尋ね有りしかば有りのままに申し給いき、然れば良観房・身の上の恥を

思はば跡をくらまして山林にもまじはり約束のままに日蓮が弟子ともなり

たらば道心の少にても・あるべきにさはなくして無尽の讒言を構えて殺罪

に申し行はむとせしは貴き僧かと日蓮聖人かたり給いき又頼基も見聞き候

き、他事に於てはかけはくも主君の御事畏れ入り候へども此の事はいかに

思ひ候とも・いかでかと思はれ候べき。

仰せ下しの状に云く竜象房・極楽寺の長老見参の後は釈迦・弥陀とあ

をぎ奉ると云云、此の条又恐れ入り候、彼の竜象房は洛中にして人の骨肉

を朝夕の食物とする由露顕せしむるの間、山門の衆徒蜂起して世末代に

およびおよ あつき悪鬼国中しゅつげんに出現しゅつげんせり、山王さんのおの御力おんちからを以て対治たいじを加えむとて住所を
焼失しょうしつし其その身を誅罰しゅふせむとする処ところに自然じねんに逃失にげし行方を知らざる処ところにた
またま鎌倉かまくらの中に又人の肉を食の間情くふある人恐怖くふせしめて候に仏・菩薩ぼさつと
仰せ給おほ たまう事所従しよじゆうの身として争いかでか主君しゅくんの御あやまりをいさめ申もうさず候べき、
御内のをとなしき人ひと人いかにこそ存じ候へ。

同じき下くだし状じやうに云いく是非ぜひにつけて主親しよせんの所存しよせんには相隨したがわんこそ仏神ぶつしんの冥
にも世間せけんの礼にも手本てほんと云云、此の事最第一さいだいいちの大事だいじにて候へば私の申もうし状
恐れ入り候間本文を引くべく候、孝経こけいに云く「子以て父に争わずんばある
べからず臣おみ以て君に争わずんばあるべからず」、鄭玄ていげん曰く「君父不義有ら
んに臣子いさ諫めざるは則ち亡国破家の道なり」新序しんしゆに曰く「主の暴を諫めざ
れば忠臣あに非ざるなり、死を畏おそれて言わざるは勇士あに非ざるなり」、伝教でんきやう
大師云く「凡そ不誼ふぎに當つては則ち子以て父に争わずんばあるべからず臣おみ

以て君に争わずんばあるべからず^{まさ}に知るべし^{くんしんふししてい}君臣父子師弟以て師に争わ
ずんばあるべからず」文、^{ほけきよう}法華經に云く「我れ身命^{しんみよう}を愛まず但無上道を惜^{むじようどう}
む」文、^{ねはんぎよう}涅槃經に云く「譬^{たと}えば王の使の善能談論し方便に巧にして命を他國^{たこく}
に奉ずるに寧ろ^{むし}身命^{しんみよう}を喪うとも終に王の所説の言教^{げんきよう}を匿さざるが如し^{ごと}
ちしや^{またしかり}」文、章安大師云く「寧ろ^{むし}身命^{しんみよう}を喪うとも教を匿さざれとは^{かく}
身は軽く法は重し身を死して法を弘む」文、又云く「仏法を壊乱するは^{ぶつぽう}仏法^{ぶつぽう}
の中の怨^{あた}なり慈^{なく}無くして詐^{いつわ}り親むは則ち^{すなわこ}是れ彼が怨^{あた}なり能く^よ糾治する者は
彼の爲めに惡を除く則ち^{すなわこ}是れ彼が親なり」文、賴基をば^{ほうはい}傍輩こそ無礼なり
と思はれ候らめども世の事にをき候ては是非父母・主君の仰せ^{おほ}に随^{したが}い参ら
せ候べし。

其にとて^{じゅうおん}重恩の主の惡法^{あくほう}の者にたばらかされましまして惡道^{あくどう}に墮^おち給^{たま}は
むをなげくばかりなり、^{あじゃせ}阿闍世王は提婆六師を師として^{だいば}教主^{きようしゅ}釈尊を敵と

せしかば摩竭提国・皆仏教の敵となりて閻王の眷属・五十八万人・仏弟子
を敵とする中に耆婆大臣計り仏の弟子なり、大王は上の頼基を思し食すが
如く仏弟子たる事を御心よからず思し食ししかども最後には六大臣の邪義
をすて耆婆が正法にこそつかせ給い候しが其の如く御最後をば頼基や救
い参らせ候はんずらむ此の如く申さしめ候へば阿闍世は五逆罪の者なり
彼に対するかと思し食しぬべし、恐れにては候へども彼には百千万倍の
重罪にて御座すべしと御経の文には顯然に見えさせ給いて候、所謂「今・
此の三界は皆是れ我有なり其中の衆生は悉く是れ吾子なり」文の如くば
教主釈尊は日本国の一切衆生の父母なり師匠なり主君なり阿弥陀仏は此
の三の義まします、而るに三徳の仏を闇いて他仏を昼夜朝夕に称名し
六万八万の名号を唱えましますあに不孝の御所作にわたらせ給はずや、
弥陀の願も釈迦如来の説かせ給いしかども終にくひ返し給いて唯我一人と

定め給いぬ、其の後は全く二人・三人と見え候はず、随つて人にも父母二人なし何の經に弥陀は此の国の父何れの論に母たる旨・見へて候觀經等の念仏の法門は法華經を説かせ給はむ為の・しばらくの・しつらひなり、塔くまむ為の足代の如し、而るを仏法なれば始終あるべしと思う人・大僻案なり、塔立てて後・足代を貴ぶほどのはかなき者なり、又日よりも星は明と申す者なるべし、此の人を經に説いて云く「復教詔すと雖も而も信受せず其の人命終して阿鼻獄に入らん」、当世・日本国の一切衆生の釈迦仏を抛つて阿弥陀仏を念じ法華經を抛つて觀經等を信ずる人・或は此の如き謗法の者を供養せむ俗男・俗女等・存外に五逆七逆・八虐の罪を・をかせる者を智者と竭仰する諸の大名僧並びに国主等なり、如是展転至無數劫とは是なり、此の如き僻事をなまじゐに承りて候間次を以て申せしめ候、宮仕をつかまつる者上下ありと申せども分分に随つて主君を重んぜざるは

候はず、上の御ため現世後生あしくわたらせ給うべき事を秘かにも承りて
候はむに傍輩・世に憚りて申し上ざらむは与同罪にこそ候まじきか。

随つて頼基は父子二代・命を君に・まいらせたる事顕然なり・故親父某

故君の御勘気かふらせ給いける時・数百人の御内の臣等心かはりし候ける

に中務一人・最後の御供奉して伊豆の国まで参りて候き、頼基は去る文永

十一年二月十二日の鎌倉の合戦の時、折節伊豆の国に候しかば十日の申の時

に承りて唯一人・宮根山を一時に馳せ越えて御前に自害すべき八人の内に

候き、自然に世しづまり候しかば今に君も安穩にこそわたらせ給い候へ、爾

来大事小事に付けて御心やすき者にこそ思い含まれて候頼基が今更何につ

けて疎縁に思いまいらせ候べき、後生までも随従しまいらせて頼基成仏

し候はば君をもすくひまいらせ君成仏しましまさば頼基も・たすけられ・

まいらせむとこそ存じ候へ。

其れに付ひて諸僧しよそうの説法せつぽうを聴聞ちようもん仕りて何れか成仏じようぶつの法とうかがひ候処ところ

に日蓮にちれん聖人の御房ごぼうは三界さんがいの主一切衆生の父母釈迦如来いっさいしじゆようの御使おんつかい上行菩薩じようぎようほさつ

にて御坐候ける事の法華經ほけきように説かれてましましけるを信じまいらせたるに

候、今こそ真言宗しんこんしゅうと申す悪法あくほう・日本国にほんこくに渡りて四百余年去る延暦えんりやく二十四

年に伝教大師でんぎようだいし・日本国にほんこくにわたし給いたりしかども此の国にあしかりなむと

思し食し候間宗の字をゆるさず天台法華宗てんだいほつけしゅうの方便ほうべんとなし給い畢たまひんぬ、其の

後・伝教でんぎよう

大師御入滅だいしにゆうめつの次をうかがひて弘法大師こうぼうだいし・伝教でんぎように偏執へんしゅうして宗の字を加えし

かども叡山えいざんは用うる事なかりしほどに慈覚じかく・智証短才ちしよくにして二人の身は当

山に居ながら心は東寺とうじの弘法こうぼうに同意どういするかの故に我が大師だいしには背そむいて始め

て叡山えいざんに真言宗しんこんしゅうを立てぬ日本亡国にほんぼうこくの起り是なり、爾来三百余年ある・或は真言しんこん

勝れ法華勝れ一同なむと諍論じようろん・事き

れざりしかば王法も左右なく尽きざりき、人王七十七代後白河法皇の御宇
に天台の座主明雲一向に真言の座主になりしかば明雲は義仲にころされぬ
頭破作七分是なり、第八十二代隱岐の法皇の御時禪宗・念仏宗出来つて
真言の大惡法に加えて国土に流布せしかば、天照太神・正八幡の百王百
代の御誓やぶれて王法すでに尽きぬ、関東の権の大夫義時に天照太神・
正八幡の御計いとして國務をつけ給い畢んぬ、爰に彼の三の惡法・関東に
落ち下りて

存外ぞんがいに御帰依ごきえあり、故ゆえに梵釈ぼんしゃく・二天にちがつ・日月にちがつ・四天してんいかりを成せんし先代せんだい未有むぎの

てんべん ちよう

天変地天を以ていさむれども用い給はざれば鄰国りんこくに仰せ付けて法華經誹謗ほけきようひぼう

ちばつ

の人を治罰ちばつし給う間、天照太神てんしょうだいじん・正八幡しょうはちまんも力及び給はず、日蓮聖人にちれんしょうにん・一

たまた

人・此の事を知し食せり、此かくの如ごとき嚴重ほけきようの法華經にてをはして候間、主君しゅくん

しるしめ

をも導きまいらせむと存じ候故に・無量むりようの

小事しょうじをわすれて今に仕われまいらせ候、頼基よりもとを讒言申す仁は君の御為不忠ふちゆう

の者に候はずや、御内まかを罷り出でて候はば君たちまちに無間地獄むげんじごくに墮おちさせ

給たまうべし、さては頼基よりもと・仏に成り候ても甲斐かいなしとなげき存じ候。

抑おさ彼のしょうじよう小乗しょうじよう戒かいは富楼那ふうるなと申せし大阿羅漢あらかん諸天しよてんの為ために二百五十戒を

説とき候しを・浄名じようみよう居士こじたんじて云いわく「穢食えじきを以て宝器ほうきに置くこと無れ」

等云云おうつつまら、鷲崛摩羅もんじゆは文殊かしやくを呵責あし・嗚呼蚊蚋あもんぜいの行だいじようは大乗だいじよう空くうの理りを知らずと、

又小乗しょうじよう戒かいをば文殊もんじゆは十七とがの失しつを出いだし如来にやらいは八種ひやくの譬喻ひやくを以て是これをそし

又小乗しょうじよう戒かいをば文殊もんじゆは十七とがの失しつを出いだし如来にやらいは八種ひやくの譬喻ひやくを以て是これをそし

り給うに驢乳と説き蝦蟆に譬えられたり、此れ

等をば鑒真の末弟子は伝教大師をば悪口の人とこそ嵯峨天皇には奏し申し

候しかども経文なれば力及び候はず、南都の奏状やぶれて叡山の大戒壇

立ち候し上は、すでに捨てられ候し小乗に候はずや、頼基が良観房を

蚊蚋蝦蟆の法師なりと申すとも経文分明に候はば御とがめあるべからず。

剩へ起請に及ぶべき由仰せを蒙むるの条存外に歎き入て候、頼基不法時

病にて起請を書き候程ならば君忽に法華經の御罰を蒙らせ給うべし、良観

房が讒訴に依りて釈迦如来の御使日蓮聖人を流罪し奉りしかば聖人の

申し給いしが如く百日が内に合戦出来して若干の武者滅亡せし中に、名越

の公達横死にあはせ給いぬ、是れ偏に良観

房が失ひ奉りたるに候はずや、今又竜象良観が心に用意せさせ給いて頼基

に起請を書かしめ御座さば君又其の罪に当らせ給はざるべしや、此くの

如き道理ことを知らざる故か、又君をあだし奉らむと思ふ故か、頼基よりもとに事を寄
せて大事だいじを出さむとたばかり候人等御尋たずねあつて召し合わせらるべく候、
きようこうきんげん
恐惶謹言。

建治三年丁丑ひのとうし六月二十五日

四条中務尉

頼基・請文よりもと

◆二〇八

四條金吾殿御返事

1163p

去月二十五日の御文・同月の二十七日の酉とりの時に来りて候、仰おおせ下さる
 状と又起請きしょうかくまじきよしの御せいじやうとを見候へば優曇華うどんげのさきた
 るをみるか赤梅せんだ檀だのふたばになるをえたるか、めづらしかうばし、三明六通さんみようろくつう
 を得給たまう上法華經ほけきようにて初地しよじ・初住しよじゆうにのぼらせ給たまへる証果しょうかの大阿羅漢得あらかん
 無生忍むしようにんの菩薩ぼさつなりし舍利弗しゃりほつ・目連もくれん・迦葉かしよう
 等だにも娑婆世界しゃばせかいの末法まつぽうに法華經ほけきようを弘通ぐつうせん事の大難だいなんこらへかねければか
 なふまじき由辞退候しよじたいこういき、まして三惑未断さんかくみだんの末代まつだいの凡夫ほんぶが争いかでか此經きようの行者ぎようじや
 となるべき、設たといいにちれん一人は杖じようもくがしやくあつく木瓦石惡口王難なんをも忍しのぶとも妻子さいしを帶さいしせる
 無智むちの俗いなかんでどは争いかでか叶かなうべき、中中信ぜざらんはよかりなんすへとをら
 ずしばしならば人に・わらはれ

なんと不便ふびんにをもひ候たひいしに、度度たびたびの難なん二箇度の御勘氣ごかんきに心ざしをあらは

し給たまうだにも不思議ふしぎなるに、かく・おどさるるに二所の所領しりょうをすてて

ほけきよう

法華經を信じとをすべしと御起請候事きしやういかにとも申もうす計りなし、普賢ふげん・文殊もんじゆ

等を末代まつだいはいかんがと仏思し食して妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの五字ごじをば地涌千界じゆせんがいの

じようしゆじようきやう

上首ただ 上行 等の四人にこそ仰おおせつけられて

候へ只事ただの心を案ずるに日蓮にちれんが道をたすけんと上行菩薩貴辺じやうぎやうぼざつきへんの御身おんみに入り

かはらせ給たまへるか又教主きやうしゆしやくそん釈尊おんはからの御計ごけいいか、彼の御内ひとびとの人人うちにはびこつ

りようかんりゆうぞう

て良觀りやうくわん竜象が計けいひにてやぢやうあるらん、起請きしやうをかせ給たまいなば・いよ

いよかつばらをごりてかたがたにふれ申もうさは鎌倉かまくらの内に日蓮にちれんが弟子等でし一人

もなくせめうしなひなん、凡夫ほんぶのならひ

身の上みのかみははからひがたし、これをよくよくしるを賢人けんじん・聖人しやうにんとは申もうすなり、

遠きをばしばらくをかせ給たまへ、近きは武蔵むさしのかう殿両所にやうじやうをすてて入道にやうだうにな

り結局は多くの所領しよりよう男女なんよのきうだち御ぜん等をすてて御遁世とんせいと承うけたまわる、
のは子なしたのもしき兄弟きょうだいなしわづかの二所の所領しよりようなり、一生はゆめの
上明日をごせずいかなる乞食こつじきにはなるとも法華經ほけきようにきずをつけ給たまうべから
ず、されば同くはなげきたるけしきなくて此の状に・かきたるが・

ごとくすこしもへつらはず振舞仰せあるべし、中中へつらふならば・あし
かりなん、たと設しよりようひ所領をめされ追ひ出し給うとも十羅刹女の御計いにてぞあ
るらむとふかくたのませ給うべし。たま

にちれん

日蓮はながされずしてかまくらにだにも・ありしかば・有りし・いくさ

に一定打ち殺されなん、こ此れも又御内にてはあしかりぬべければ釈迦しゃかぶつ仏の

おんはから

御計いにてやあるらむ、陳状は申もうして候へども又それに僧は候へども・あ

まりのおぼつかなさに三位房をつかはすべく候にいまだ所労きらきらしく

候はず候へば同事に此の御房ごぼうをまい

らせ候、だいがくの三郎殿かたきの太郎殿かとき殿かにいとまに随したがいてか

かせてあげさせ給たまうべし、これはあげなば事きれなむいたういそがずとも

内内うちをしたため・又ほかの・かつばらにも・あまなく・さはがせて・

さしいだしたらば・若や此の文かまくら内にもひろうし上へもまいる事も

やあるらん、わざはひの幸はこれなり。

法華經ほけきょうの御事おんことは已前いぜんに申しふりぬ、しかれども小事しょうじこそ善ぜんよりはをこて

候へ、大事だいじになりぬれば必ず大なる・さはぎが大なる幸となるなり、此の

陳狀人ちんじやうじんごとにみるならば彼等かれらがはぢあらわるべし、只一口ただに申し給へ我と

は御内みうちを出て所領しよりようをあぐべからず、上よりめされいださむは法華經ほけきょうの御

布施幸ふせと思うべしとののしらせ給へ、たま

かへすがへす奉行人ぶぎやうじんにへつらうけしきなかれ、此の所領しよりようは上より給たるに

はあらず、大事だいじの御所勞ごしやうらうを法華經ほけきょうの薬をもつてたすけまいらせて給て候

所領しよりようなれば召すめならば御所勞ごしやうらうこそ又かへり候はむずれ、爾時そのときは頼基よりもとに御た

いじやう候とも用ひまいらせ候まじく候とうちあてにくさうげにてかへる

べし。

あなかしこ・あなかしこ御よりあひあるべからず、よるは用心ようじんきびしく

夜廻の殿原かたらいて用ひ常にはよりあはるべし今度御内をだにもい
ださ
れずば十に九は内のもものねらひなむかまへてきたなきしにすべからず。

ひのとうし

にちれんかおう

しじょうきんこごへんじ

建治三年丁丑七月 日蓮花押

四条金吾殿御返事

◆二〇九

四条金吾殿御返事 しじょうきんごごへんじ

建治三年 五十六歳御作

1165p

御文おんふみあらあらうけ給たまわりて長き夜のあけとをき道をかへりたるがごとし、
夫それ仏法ぶつぽうと申もうすは勝負しょうぶをさきとし、王法おうほうと申もうすは賞罰しょうばつを本とせり、故ゆえに仏
をば世雄よゆうと号し王をば自在じざいとなづけたり、中にも天竺てんじくをば月氏がつしという我国
をば日本にほんと申もうす一閻浮提えんぶだい八万の国の中に大なる国は天竺てんじく小なる国は日本にほんな
り、名のめでたきは印度いんど第二・扶桑ふそう
第一だいいちなり、仏法ぶつぽうは月の国より始めて日の国にとどまるべし、月は西より出いで
東に向ひ日は東より西へ行く事天然のことはり、磁石じしやくと鉄くろがねと雷いかずちと象華
のごとし、誰か此のことはりをやぶらん。

此の国に仏ぶつ法ぽうわたりし由ゆ来らいをたづぬれば天神七代・地神五代すぎて人王ちじんごだい

の代となりて第一神武天皇乃至第三十代欽明天皇と申せし王をはしき、位だいいち

につかせ給たまいて三十二年治世し給たまいに第十三年壬申十月十三日辛酉ちんめいてんのう

此の国より西に百済国と申す州あり日本国みづのえさるの大王の御知行の国なり、其その

国の大王・聖明王と申せし国王あり、年貢だいう

を日本国にまいらせしついでに金銅の釈迦仏・並に一切経・法師・尼等をせいめいおう

わたしたりしかば天皇大に喜びて群臣に仰せて西蕃の仏をあがめ奉るべしにほんこく

やいなや、蘇我の大臣いなめの宿禰と申せし人の云く西蕃の諸国みな此れそが

を礼すとよあきやまとあに独り背やと申す、物部の大むらじをこし中臣ひと

のかまこ等奏して曰く我が国家・天下そむかん

に君たる人はつねに天地しやそく百八十神を春夏秋冬に・さいはいするをそう

事とす、しかるを今更あらためて西蕃の神を拜せばおそくは我が国の神いわ

いかりをなさんと云云、爾その時に天皇てんのうわかちがたくして勅宣ちよくせんす、此の事を
只ただ心みに蘇我そがの大臣だいじんにつけて一人にあがめさすべし、他人たにんもち用いる事なかれ、
蘇我そがの大臣おとどうけ取りて大に悦おおび給たまいて此の釈迦しゃかぶつ仏を我が居住のおはたと
申もうすところに入まいらせて安置あんちせり、物部の大連おおむらじ・不思議ふしぎなりとて・いき
どを

りし程に日本国に大疫病おこりて死せる者大半に及ぶすでに国民尽きぬべ

かりしかば、物部の大連・隙を得て此の仏を失うべきよし申せしかば勅宣

なる、早く他国の仏法を棄つべし云云、物部の大連御使として仏をば取

りて炭をもつてをこしつちをもつて打ちくだき仏殿をば火をかけてやきは

らひ僧尼をばむちをくわう、其の時

天に雲なくして大風ふき雨ふり、内裏天火にやけあがつて大王並に物部の

大連蘇我の臣三人共に疫病あり・きるがごとくやくがごとし、大連は

終に寿絶えぬ蘇我と王とはからくして蘇生す、而れども仏法を用ゆること

なくして十九年すぎぬ。

第三十一代の敏達天皇は欽明第二の太子治十四年なり左右の両臣は一は

物部の大連が子にて弓削の守屋父のあとをついで大連に任ず蘇我の宿禰

の子は蘇我の馬子と云云、此の王の御代に聖徳太子生給へり用明の御子・

びんたつ
敏達のをいなり御年二歳の二月東に向つて無名の指を開いて南無仏と唱へ
たま しゃりたなこころ
給へば御舍利掌 にあり、是れ日本国の

しゃかねんぶつ
釈迦念仏の始めなり、太子八歳なりしに八歳の太子云く「西国の聖人
たいし しょうにん

しゃかむにぶつ
釈迦牟尼仏の遺像末世に之を尊めば則ち禍を銷し福を蒙る之を蔑れば則ち
すなわ

災を招き寿を縮む」等云云、大連物部の弓削宿禰の守屋等いかりて云く
すくね もりや

「蘇我は勅宣を背きて他国の神を礼す」等云云、又疫病未だ息まず人民
そが ちよくせん そむ たこく えきびよういま や じんみん

すでにたえぬべし、弓削守屋又此れを間奏す云云、勅宣に云く「蘇我の馬
ぶつぽう こつぎよう よろし ぶつぽう ちよくせん いわ そが

子仏法を興行す宜く仏法を卻ぞくべし」等云云、此に守屋中臣の臣勝海
おむらじ ここ もりやなかとみ おみかつみ

大連等両臣

と、寺に向つて堂塔を切たうし仏像をやきやぶり、寺には火をはなち僧尼
ぶつどう ぶつぞう

の袈裟をはぎ笞をもつてせむ・又天皇並に守屋馬子等疫病す、其の言に
けさ むち てんのう もりや えきびよう そ

云く「焼くがごとしきるがごとし」又瘡をこるはうそうといふ、馬子歎い
いわ きず

て云く「尚三宝を仰がん」と勅宣に云く「汝独り行え但し余人を断てよ」
等云云、馬子欣悦し精舎を造りて
三宝を崇めぬ。

天皇は終八月十五日崩御云云、此の年は太子は十四なり第三十二代用明
天皇の治二年欽明の太子・聖徳

たいし
太子の父なり、治二年 丁未 ひのとつじ 四月に天皇疫病あり、てんのうえきびよう 皇勅して云く、みかど「三宝
に帰せんと欲す」云云、ほ蘇我の大臣詔に随う可しとて遂に法師を引いて内裏
に入る豊国の法師是なり、ほつしこれ物部の守屋大連等大に瞋り横に睨んで云く天皇
を厭魅すと終に皇隠れさせ給う五月に物部の守屋が一族洩河の家にひきこ
もり多勢をあつめぬ、ついかど太子と馬子と押

し寄せてたたかう、五月・六月・七月の間に四箇度・合戦す、三度は太子
まけ給う第四度めに太子願を立てて云く、たま「釈迦如来の御舍利の塔を立て
してんのうこんりゆう四天王寺を建立せん」と・馬子願て云く、い「百済より渡す所の釈迦仏を寺を
立てて崇重すべし」と云云、弓削なのつて云く、すうちよう「此れは我が放つ矢にはあ
らず我が先祖崇重の府都の大明神の放ち給ふ矢な

り」と、此の矢はるかに飛んで太子の鎧に中る、ふと太子なる「此は我が放
つ矢にはあらず四天王の放ち給う矢なり」とて迹見の赤棹と申す舍人にい

させ給へば矢はるかに飛んで守屋が胸に中りぬ、はだのかはかつをちあひ

て頸をとる、此の合戦は用明崩御崇峻未だ位に即き給わざる其の中間なり。

第三十三・崇峻天皇位につき給う、太子は四天王寺を建立す此れ釈迦

如来の御舍利なり、馬子は元興寺と申す寺を建立して百済国よりわたりて

候いし教主釈尊を崇重す、今の代に世間第一の不思議は善光寺の阿弥陀

如来という誑惑これなり、又釈迦仏にあだをなせしゆへに三代の天皇並に

物部の一族むなしくなりしなり又太子・教主釈尊の像一体つくらせ給い

て元興寺に居せしむ今の橘寺の御本尊これなり、此れこそ日本国に釈迦仏

つく

りしはじめなれ。

漢土には後漢の第二の明帝永平七年に金神の夢に見て博士蔡☆王遵等

の十八人を月氏につかはして仏法を尋ねさせ給いしかば中天竺の聖人

摩騰迦・竺法蘭まとうか じくほうらんと申せし二人の聖人しょうにんを同永平十年丁卯ひのとうの歳迎へ取りて

崇重すうちゅうありしかば、

漢土かんどにて本より皇の御いのりせし儒家道家の人人じんずう数千

・此の事をそねみて・うつたへしかば、同永平十四年正月十五日に召し合

せられしかば漢土かんどの道士悦どうしよろこびをなして唐土もろこしの神百靈ほんぞんを本尊としてありき、

二人の聖人しょうにん

は仏の御舍利しやりと釈迦仏しゃかぶつの画像と五部の經を本尊ほんぞんと恃怙たのみ給う、道士は本より王の前ならにして習ならいたりし仙經・三墳さんぶん・五典・二聖・三王の書を薪たきぎにつみこめてやししかば古はやけざりしがはいとなりぬ、先には水にうかびしが水に沈みぬ、鬼神きじんを呼しも来らず、あまりのはづかしさに☆善信ちよぜんしん・費叔才ひしゆくさいなど申せし道士等はおもい死にししぬ、

二人の聖人しょうにんの説法ありしかば舍利しやりは天に登りて光を放ちて日輪にちりんみゆる事なし、画像の釈迦仏しゃかぶつは眉間より光を放ち給う、呂慧通等の六百余人の道士どうしは歸伏きふくして出家しゅつけす、三十日が間に十寺立ちぬ、されば釈迦仏しゃかぶつは賞罰ただしき仏なり、上に挙かみぐる三代の帝みかど・並に二人の臣下しんか・釈迦如来の敵とならせ給たまいて今生こんじょうは空く後生は惡道あくどうに墮おちぬ。

今の代も又これに・かはるべからず、漢土かんとの道士信費等日本にほんの守屋等もりやは漢土・日本の大小の神祇を信用して教主釈尊の御敵となりしかば神は仏

にしたが随たてまつい奉ぎようじり行者みなは皆ほろびぬ、今の代も此かくの如ごとく上にあ挙あぐる所の百済国くだら
の仏きようしゆしやくそんは教主たぶつ釈尊しやくそんなり、名あみだぶつを阿弥陀仏と云にほんこくつて日本国をたばらかしてしやくそん釈尊
を他たぶつ仏にかへたり、神と仏と仏と仏との差別さべつ
こそあれどもしやくそん釈尊しやくそんをすつる心はただ一なり、されば今の代の滅せん事又
うたがい疑いいなるべし、是いまは未だ申もうさざる法門ほうもんなり秘べす可べし秘べす可べし、又吾いちもん一門
ひとびとの人人しんじんの中にも信心しんじんもにちれんうすく日蓮もうが申もつす事をそむ背たまき給そがはば蘇我ごとが如ごとくなるべ
し、其そのゆえの故ぶつぼうは仏法にほん・日本しゆつせに立ちし事は蘇我そがの宿禰すくねと馬子ふしとの父子二人の故
ぞかし、釈迦如来しやくかによらいの出世しゆつせの時の梵王ぼんのう・帝釈たいしやくの
如ごとくにてこそあらまじなれども、物部もりやと守屋もりやとを失うしないし故ゆえに只ただ一門いちもんになり
て位ちぎようもあがり国いちもんをも知行はんじようし一門ゆえも繁昌はんじようせし故ゆえに高挙たかいをなして崇峻天皇すしゆんてんのうを
うしな失うしないたてまつり王子みこを多く殺けつくし結句たいしは太子たいしの御子みこ二十三人を馬子うしながまご
入鹿いるかの臣下しんかうしな失うしなひまいらせし故ゆえに、皇極天皇てんのうは中臣なかとみの鎌子かまこが計きいとして教主きようしゆ

釈尊しゃくそんを造りつく奉りたてまつてあながちに申せしかば入鹿いるかの臣並おみに父等いちじの一族一時に滅めつびぬ。

此これをもつて御推察あるべし、又我が此この一門いちもんの中にも申もうしとをらせ給たまはざらん人人ひとびとは・かへりて失とがあるべし、日蓮にちれんをうらみさせ給たまうな少輔房能登房しょうぼうの とぼう等を御覽あるべし、かまへてかまへて此の間はよの事なりとも御起請きしょうか

かせ給^{たま}うべからず火はをびただしき様なれども暫^{しばら}くあればしめる水はのろ
き様なれども左右^{さう}なく失^{うしな}いがたし、御辺は腹あしき人なれば火の燃るがこ
とし一定人にすかされなん、又主のうらうらと言^{やわら}和かにすかせ給^{たま}うなら
ば火に水をかけたる様に御わたりありぬと覚^{おほ}ゆ、きたはぬかねはさかな
る火に入るればとくとけ候、冰^{こおり}を

ゆに入るがごとし、剣などは大^{だい}火に入るれども暫^{しばり}くはとけず是きたへる
故なり、まへにかう申^{もう}すはきたうなるべし仏^{ぶつ}法と申^{もう}すは道理なり道理と申^{もう}
は主に勝つ物なりいかにいとをしはなれじと思^{おも}うめなれども死しぬればか
ひなしに所^{しよ}領^{りやう}を・をししと・をぼすとも死しては他人^{たにん}の物、すでにさ
かへて年久しすこしも惜^{おし}む事なかれ、又さきざき申^{もう}すがごとくさきざきよ
りも百千万億倍御用心あるべし。
せんまん　ようじん

日蓮は少^{にちれん}より今^{こん}生^{じやう}のいのりなし只^{ただ}仏にならんとをもふ計^{ばか}りなり、されど

も殿の御事をばひまなく法華經・釈迦仏・日天に申すなり其の故は法華經の命を継ぐ人なればと思うなり。
あなかしこあなかしこ
六賢六賢 あらかるべからず吾が家に・

あらずんば人に寄合事なかれ、又夜廻の殿原はひとりもたのもしき事はなけれども法華經の故に屋敷を取られた

人なり、常はむつばせ給うべし、又夜の用心の為と申しかたがた殿の

守りとなるべし、吾方の人人をば少少の事をばみずきかずあるべしさて又

法門などを聞ばやと仰せ候はんに悦んで見え給うべからず、いかんが

候はんずらん、御弟子共に申してこそ見候はめとやわやわとあるべしいか

にもうれしさにいろに顕われなんと

覚え聞かんと思う心だにも付かせ給うならば火をつけてもすがごとく天よ

り雨の下るがごとく万事をすてられんずるなり。

又今度いかなる便も出来せばしたため候し陳状を上げらるべし、大事の

文なればひとさはぎはかならずあるべし、
穴賢あなかしこあなかしこ穴賢。

しじょうきんご

四条金吾殿

にちれんかおう

日蓮花押

◆二一〇

四条金吾殿御返事

1170p

ほけきょう

法華經本・

そつたい

迹相對して

しゃくもん

迹門は

なおいじょうしやうかく

尚始成正覺の

むね

旨を明す故にいま

ゆえ

るなん

だ留難か

ほんもん

本門は

るなん

留難を

しか

去りたり

いえどだいもく

然りと雖も

ごじ

題目の

そつたい

五字に相對

まつぼう

する時は

き

末法の

しんじつ

機に

かなは

ざる法

しんじつ

なり、

しんじつ

真実

いっさい

一切

しんじつ

衆生

いっさい

色心の

るなん

留難を

ただなむみょうほうれんげきやう

秘術は

ただな

唯南無妙法蓮華經なり。

しじょうきんご

四条金吾殿御返事

にちれん

日蓮

◆二一一

崇峻天皇御書

建治三年九月

五十六歳御作

与

しじょうきんご

四条金吾

1170p

白小袖一領錢一ゆひ又富木殿の御文のみなによりもかきなしまひじき

ひるひじきやうやうの物うけ取りしなじな御使おんつかいにたび候いぬ、さてはなに

よりも上の御いたはりなげき入つて候、たとひ上は御信用ごしんようなき様に

候へどもとの其その内に・をはして其その御恩ごおんのかげにて法華經ほけきようをやしなひま

いらせ給たまひい候へば偏ひとえに上の御祈とぞな

り候らん、大木の下もとの小木大河の辺の草は正ただしく其その雨にあたらず其その水

をえずといへども露つゆをつたへ・いきを

えて・さかうる事に候。

此これもかくのごとし、阿闍世王あじゃせは仏の御かたきなれども其その内にありし

耆婆大臣ぎばだいじんに志こころありて常に供養くやうありしかば其その功大王だいおうに帰すところ見へ

て候へ、仏法ぶつぽうの中に内薰外護ないくんげごと申す大なる大事だいじありて宗論しゅうろんにて候、法華經ほけきよう

には「我なんじ深く汝等うやもを敬うやまう」涅槃經ねはんぎようには「一切衆生いっさいしゆじよう悉く仏性ぶつじよう有あり」馬鳴菩薩めみようぼさつ

の起信論きしんろんには「真如しんによの法常くんじゅうに薰習くんじゅうするを

以ての故に妄心即滅して法身顕現す」ゆゑ もうしんそくめつ ほっしんけんげん 弥勒菩薩の瑜伽論には見えたり、か
くれたる事のあらはれたる徳となり候なり、されば御内の人人には天魔つ
いて前より此の事を知りて殿の此の法門を供養するをささえんがために
このたび 今度の大妄語をば造り出だしたりしを御信心深ければ十羅刹たすけ奉らん
もうこ がために此の病はをこれるか、上は我がか
たきとはをぼさねども一たんかれらが申す事を用い給いぬるによりて御し
よらうの大事になりて・ながしらせ給うか、だいじ 彼等が柱とたのむ竜象すでに
たうれぬ、わざん 和讃せし人も又其の病にをかされぬ、そ 良観は又一重の大科の者
なれば大事に値うて大事をひきをこして・いかにもなり候はんずらん、よ
だいじ もただは候はじ。

こ 此れにつけても殿の御身もあぶなく思いまいらせ候ぞ、一定かたきにね
らはれさせ給いなんすぐろくの石は二つ並びぬればかけられず車の輪は二
たま

あれば道にかたぶかず、敵も二人ある者をばいぶせがり候ぞ、いかにとが
ありとも弟どもしばらも且くも身をはなち給うな、殿は一定腹あしき相かをに顕れあらわ
たり、いかに大事だいじと思へども腹あ

しき者をば天は守らせ給はぬと知らせ給へ殿の人にあだまれてをはさば
たといたい仏にはなり給うとも彼等が悦びと云う、此れよりの歎きと申し口惜し
かるべし、彼等かれらがいかにもせんとはげみつるに、古よりも上に引き付けら
れまいらせてをはすれば外ほかのすがたはしづまりたる様にあれども内の胸は
もふる計りばかにや有らん、常には

彼等に見へぬ様にて古よりも家のことを敬うやまひきうだちまいらせ給いてをはさ
んには上かみの召しありとも且く・つつしむべし、入道殿にようどういかにもならせ給は
ば彼の人人ひとびとはまどひ者になるべきをばかへりみず、物をぼへぬ心に・との
のいよいよ来るを見ては一定ほのを・を胸にたきいきをさかさまにつくら

ん、若^もしきうだちきり者の女房^{にようぼう}たち・い

かに上の御そろうはと問^もい申^うされば、いかなる人^{ひと}にても候へ・膝^{ひざ}をかがめて手を合せ某^{それがし}が力の及ぶべき御所^{おお}労には候はず候をいかに辞退^し申せどもただと仰^{おお}せ候へば御内^おの者にて候間かくて候とてびむをもかかずひたたれこはからず、さはやかなる小袖色ある物なんどもきずして且^しくねうじて御覧^らあれ。

返す返す御心への上なれども末代まつだいのありさまを仏の説かせ給たまいて候には
濁世じよくせには聖人しょうにんも居しがたし大火だいかの中の石いしの如ごとし、且しばくはこらふるやうなれ
ども終ついにはやけくだけで灰となる、賢人けんじんも五常ごじやうは口に説ときて身には振舞ふるまいい
がたしと見へて候ぞ、かうの座をば去れと申もうすぞかし、そこばくの人の殿
を造つくり落さんとしつるにをとされず
してはやかちぬる身が穩便おんびんならずして造つくり落されなば世間せけんに申もうすこぎこひ
での船こぼれ又食の後に湯の無きが如ごとし、上よりへやを給たまいて居こしてをは
せば其処ことなにては何事無くとも日ぐれ曉なんど入り返りなんどに定めて・ね
らうらん、又我が家の妻戸の脇・持仏堂・家の内の板敷いたじきの下か・天井なん
どをば、あながちに心えて振舞ふるまいい給たまへ、今度このたびはさきよりも彼等かれらはたばかり
賢かるらん、いかに申もうすとも鎌倉かまくらのえがら夜廻りの殿原にはすぎじ、いか
に

心にあはぬ事有りともし・かたらひ給へ。^{たま}

義経はいかにも平家をばせめおとしがたかりしかども・成良をかたらひ

て平家をほろぼし、大将殿は・おさだを親のかたきと・をぼせしかども平家

を落さざりしには頸を切り給はず、況や此の四人は遠くは法華経のゆへ近

くは日蓮がゆへに命を懸けたるやしきを上へ召されたり、日蓮と法華経と

を信ずる人人をば前前彼の人人いかなる事ありともかへりみ給うべし、其の

上殿の家へ此の人人常にかようならばかたきはよる行きあはじと・をぢ

るべし、させる親のかたきならねば顕われてとはよも思はじ、かくれん者

は是れ程の兵士はなきなり、常にむつばせ給へ、殿は腹悪き人にてよも用

ひさせ給はじ、若しさるならば日蓮が祈りの力及びがたし、竜象と殿の兄

とは殿の御ためにはあしかりつる人ぞかし天の御計いに殿の御心の如くな

るぞかしいかに天の御心に背かんとは

・をぼするぞたとい設よろずい千万の財をみちたりとも上にすてられまいらせ給たまいいては
何の詮すでかあるべき已すでに上にはをやの様に思はれまいらせ水の器したがに随したがうが
如ことくこうしの母を思ひ老者の杖をたのむが如ことく主のおほしめのを思食おほしめされたるは
法華經ほけきょうの御たすけにあらずや、あらうらやましやとこそ御内のひとびと人人は思は
るるらめとくとく此の四人かたらひて

にちれん 日蓮にきかせ給へさるならば強盛（いつじょう）に天に申すべし、又殿の故御父御母の
おんこと さえもん 御事も左衛門の尉があまりに歎なげき候ぞと天にも申し入れて候なり、定めて
しゃかぶつ おんまえ 釈迦仏の御前に子細候らん。

返す返す今に忘れぬ事は頸切れんとせし時殿はともして馬の口に付きて
なきかなしみ給たまいしをばいかなる世にか忘れなん、設たい殿の罪つみふかくして
じごく 地獄に入り給たまはば日蓮をいかに仏になれと釈迦しゃかぶつ仏こしらへさせ給たまうとも用
ひまいらせ候べからず同じく地獄じごくなるべし、日蓮にちれんと殿と共に地獄じごくに入るな
らば釈迦しゃかぶつ仏・法華經ほけきょうも地獄じごくにこそ・を
はしまさずらめ、暗に月の入るがごとく湯に水を入れるがごとく冰こおりに火を
たくがごとく日輪にちりんにやみをなぐるが如ごとくこそ候そうらはんずれ、若もしすこしも此
の事をたがへさせ給たまうならば日蓮にちれんうらみさせ給たまうな。

此の世間せけんの疫病えきびょうはとののまうすがごとく年帰りなば上へあがりぬと・を

ばえ候ぞ、十羅刹じゅうらせつの御計おんはからいか今し且ばらく世に・をはして物を御覧あれかし、又世間せけんのすぎえぬやうばし歎なげいて人に聞かせ給たまうな、若もしさるならば賢人けんじんにははづれたる事なり、若もしさるならば妻子さいしがあとにとどまりてはぢを云うとは思はねども、男のわかれのおしさに他人たにんに向いて我が夫のはぢをみなかたるなり、此これ偏ひとえにかれが失とがにはあらず我がふるまひのあしかりつる故なり。

人身じんしんは受けがたし爪の上の土人身じんしんは持たもちがたし草の上の露つゆ、百二十まで持たもちて名を・くたして死せんよりは生きて一日なりとも名をあげん事こそ大切なれ、中務三郎左衛門尉さへものじょうは主の御ためにも仏法ぶつぽうの御ためにも世間せけんの心こころなもよかりけりよかりけりと鎌倉かまくらの人人ひとびとの口くちにうたはれ給たまへ、穴あな賢かしこ穴あな賢かしこ、蔵くらの財たからよりも身の財たからすぐれたり身の財たからより心の財たから第一だいいちなり、此の御文おんふみを御覧あらんよりは心の財たからつませ給たまうべし。

だいいちひそう
ものがたり

第一秘蔵の物語あり書きてまいらせん、日本始りて国王二人人に殺され

たま

そ

すしゅんてんのう

きんめいてんのう

たいししょうとくたいし

給う、其の一人は崇峻天皇なり、此の王は欽明天皇の御太子聖徳太子の伯

しょうとくたいし

ちよくせん

父なり、人王第三十三代の皇にてをはせしが聖徳太子を召して勅宣下さ

る、汝なんじは聖智の者と聞く朕ちんを相してまいらせよと云云、太子たいし三度まで辞退もう申たまさせ給たまいしかども頻ちよくせんの勅宣ちよくせんなれば止みがたくして敬たまいいて相しまいらせ給たまう、君は人に殺され給たまうべき相ましますと、王みけしきの御気色かはらせ給たまいて・なにと云しょうこう証拠を以て此の事を信しんずべき、太子たいし申しさせ給たまはく御眼ごがんに赤き筋とをりて候人にあだまるる相なり、皇帝みかど勅宣ちよくせんを重ねて下くだしいかにしてか此なんの難まぬかを脱たれん、太子たいしの云いわく免脱のがれがたし但ただし五常ごじようと申もうすつはものあり此これを身に離たまし給たまわずば害まぬかを脱たれ給たまはん、此このつはものをば内典ないてんには忍波羅蜜はらみつと申もうして六波羅蜜ろくはらみつの其その一なりと云云、且しばらくは此これを持たもち給たまいてをはせしがややもすれば腹あしき王これにて是を破やぶらせ給たまいき、・或時人ある・猪いの子をまいらせたり

しかばこうがいをぬきて猪の子の眼まなこをづぶづぶとささせ給たまいていつかにくしと思おもうやつをかくせんと仰おほせありしかば、太子たいし其の座にをはせしが、あ

らあさましや・あさましや・君は一定人にあだまれ給いなん、此の御言は
身を害する剣なりとて太子多くの財を取り寄せて御前に此の言を聞きし者
に御ひきで物ありしかども、有人蘇我

おとど
の大臣・馬子と申せし人に語りしかば馬子我が事なりとて東漢直駒・

直磐井と申す者の子をかたらひて王を害しまいらせつ、されば王位の身な

れども思ふ事をばたやすく申さぬぞ、孔子と申せし賢人は九思一言とてこ

このたびおもひて一度申す、周公旦と申せし人は沐する時は三度握り食

する時は三度はき給いき、たしかにきこしめせ我ばし恨みさせ給うな仏法

と申すは是にて候ぞ。

一代の肝心いちだい かんじんは法華經ほけきよう法華經ほけきようの修行しゆぎようの肝心かんじんは不輕品ふぎようにて候なり、不輕菩薩ふぎようぼさつ

の人を敬いしは・いかなる事ぞ教主きようしゆしやくそん釈尊しゆつせの出世ほんかいの本懐ふるまいは人の振舞ふるまいにて候

けるぞ、
六賢あなかしこあなかしこ六賢あなかしこ、賢あなかしこきを人と云いいはかなきを畜いふといふ。

建治三年丁丑九月十一日

ひのとうし

さえもんのじょう

ごへんじ

四條左衛門尉殿御返事

日蓮

にちれん

花押

かおう

1175p

鷹取たかとり

のたけ身延のたけなないたがれのたけいいだにと申しもう、木のもとか

やのねいわの上土の上いかにたづね候へどもをひて候ところなし、されば

海にあらざればわかめなし山にあらざればくさびらなし、法華經ほけきょうにあらざ

れば仏になる道なかりけるかこれはさてをき候いぬ、なによりも承りたまわてす

ずしく候事は・いくばくの

御にくまれの人の御出仕に人かずにめしぐせられさせ給たまいて、一日・二日

ならず御ひまもなきよし・うれしさ申もうすばかりなし、えもんのたいうのを

やに立ちあひて上の御一言にてかへりてゆりたると殿のすねんが間のにく

まこそれ去年のふゆはかうとききしにかへりて日日の御出仕の御ともいかなる事ぞ、ひとへに天の御計おんはからい法華經ほけきようの

おんちから

御力ごりきにあらずや、其その上えんきよう円教房えんきようの来りて候いしが申し候は、えまの四郎

殿の御出仕に御ともものさふらい二十四・五其その中にしうはさてをきたてまつりぬ、ぬしのせいといひかをたましひむま下人までも中務のさえものじやう第一だいいちなり、あはれをとこやをとこやとかまくらわらはべはつじちにて申しあひて候しとかたり候。

もう

これにつけてもあまりにあやしく候、孔子こうしは九思一言周公旦しゅうこうたんは浴あゆみする時は三度にぎり食する時は三度はかせ給たまう、古いにしえの賢人けんじんなり今の人のかがみなり、されば今度このたびはことに身をつつしませ給たまうべし、よるはいかなる事ありとも一人そとへ出いでさせ給たまうべからず、たとひ上の御めし有りとまづ下人をこそへつかわして、なひなひ一定

をききさだめてはらまきをきてはちまきし、せんごさう先後左右に人をたてて出仕し
御所のかたわらに・心よせの・やかたか又我がやかたかにぬぎをきてまい
らせ給^{たま}うべし、家へかへらんにはさきに人を入れてとのわきはしのしたむ
まやのしりたかどの一切^{いっさい}くらきところをみせて入るべし。せうまうには我
が家よりも人の家よりもあれ・た

からを・をしみてあわてて火をけすところへづつとよるべからず、まして走り出る事なかれ、出仕より主の御ともして御かへりの時はみかどより馬よりをりて、いとまのさしあうよしはうくわんに申して・いそぎかへるべし、上のを・をせなりともよに入りて御ともして御所にひさしかるべからず、かへらむには第一心だいいちにふかきえうじんあるべし、ここをばかならずかたきのうかがうところなり。

人のさけたばんと申すもつともあやしみてあるひは言をいだしあるひは用いもちることなかれ、又御をととにもは常はふびんのよしあるべし、つねにゆせにぎうりのあたいなんと心あるべし、もしやの事のあらむには・かたきはゆるさじ、我がためにいのちをうしなはんずる者ぞかしと・をぼして、とがありともせうせうの失とがをば・しら

ぬやうにてあるべし、又女るひはいかなる失とがありとも一向いっせいに御けうくんま

でも・あるべからず、ましていさかうことなかれ、涅槃經に云く「罪極て重しと雖も女人に及ぼさず」等云云、文の心はいかなる失ありとも女のがを・をこなはざれ、此れ賢人なり此れ仏弟子なりと申す文なり、此の文は阿闍世王父を殺すのみならず母をあやま

たむとせし時耆婆月光の両臣がいさめたる經文なり、我が母心ぐるしくをもひて臨終までも心につかけし・いもうとともなければ失をめんじて不便といふならば母の心やすみて孝養となるべしとふかくおぼすべし、他人をも不便といふぞかしいわうやをととともをや、もしやの事の有るには一所にていかにもなるべし、此等こそ

とどまりゐてなげかんずればをもひでにとふかくをぼすべし、かやう申すは他事はさてをきぬ、雙六は二ある石はかけらず、鳥の一の羽にてとぶことなし、将門さだたふがやうなりしいふしやうも一人は叶わず、されば舎弟

等を子とも郎等ともうちたのみてをはせば、もしや法華經ほけきょうもひろまらせ給たまい
て世にもあらせ給たまわば

いっぽう一方のかたうどたるべし。

すでにきやうのだいり院のごそかまくらの御所並に御うしろみの御所一
年が内に二度正月と十二月とに

やけ候いぬ、これ只事にはあらず謗法の真言師等を御師とたのませ給う上
かれら法華經をあだみ候ゆへに天のせめ法華經十羅刹の御いさめあるなり、
かへりて大ざんげあるならばたすかるへんもあらんずらん、いたう天
の此の国を・をしませ給うゆへに大なる御いさめあるか、すでに他国が此
の国をうちまきて国主国民を失はん上仏神の寺社百千万がほろびんずるを
天眼をもつて見下して・なげかせ給うなり、又法華經の御名をいういた
るものどもの唱うるを誹謗正法の者どもがをどし候を天のにくませ給う故
なり。

あなかしこ・あなかしこ、今年かしこくして物を御らんぜよ、山海・空
市まぬかるところあらばゆきて今年はずぎぬべし、阿私陀仙人が仏の生れ
給いしを見て、いのちを・をしみがごとしをしみがごとし、恐恐謹言。

正月二十五日

にちれんかおう
日蓮花押

中務左衛門尉殿
さえもんのじょう

いよいよかない候べし、いかにわなくともきかぬやうにてをはすべし、
此の事をみ候に申すやうにだにふれまわせ給うならばなをも所領もかさな
り人のをぼへもいできたり候べしと・をぼへ候、さきざき申し候いし
やうに陰徳あれば陽報ありと申して、皆人は主にうたへ主もいかんぞをぼ
せしかどもわどのの正直の心に主の後生をたすけたてまつらむとをもう心
がうじやうにしてすれんをすすればかかるりしやうにもあづからせ給うぞ
かし此は物のはしなり大果報は又来るべしとおぼしめせ、又此の法門の一
行いかなる本意なき事ありとも・みずきかずいわずしてむつばせ給へ、大人
にはいのりなしまいらせ候べし、上に申す事私の事にはあらず外典三千・
内典五千の肝心の心をぬきて・かきて候、あなかしこ・あなかしこ 恐恐

きんげん
謹言。

卯月二十三日

にちれん
日蓮在御判

ごへんじ
御返事

◆二一四 中務左衛門尉殿御返事さえもんのじょうごへんじ

こうあんがんねん
弘安元年六月

五十七歳御作 1178p

夫れ人そに二病あり、一には身の病所謂地いわゆる大百一水・大百一火・大百一風
・大百一已上四百四病・此の病は治水・流水・耆婆へんじやく・偏鵲等の方薬をも
つて此れこを治す、二には心の病所謂三毒いわゆるさんどく・乃至八万四千ないしはちまんの病なり、仏に有
らざれば二天三仙も治しがたし何いかに況や神農・黄帝こうていの力及ぶべしや、又心

の病に重重の浅深せんじん分れたり

六道ろくどうの凡夫ほんぶの三毒さんどく・八万はちまん

四千の心の病をば小乗の三蔵俱舎・成実・律宗の仏此れを治す大乘の
華嚴・般若・大日經等の經經をそしりて起る三毒八万の病をば小乗
をもつて此れを治すればかへりては増長すれども平愈全くなし、大乘を
もつて此れを治すべし、又諸大乘經の行者の法華經を背きて起る三毒
八万の病をば華嚴・般若・大日經・真言三論等をもつて此れを
治すればいよいよ増長す、譬へば木石等より出でたる火は水をもつて消し
やすし水より起る火は水をかくればいよいよ熾盛に炎上りて高くあがる、
今の日本国去今年の疫病は四百四病にあらざれば華陀偏鵠が治も及ばず
小乗・權大乘の八万四千の病にもあらざれば諸宗の人人のいのりも叶
はずかへりて増長するか、設い今年は・とどま
るとも年年に止がたからむか、いかにも最後に大事出来して後定まる事も
候はんずらむ、法華經に云く「若し医道を修して方に順つて病を治せば

更に他の疾を増し・或は復死を至さん而も復増劇せん」涅槃經に云く「爾
の時に王舎大城の阿闍世王○偏体に瘡を生じ乃至是くの如き創は心に從て
生ず、四大より起るに非ず、若し衆生能く

治する者有りと云はば是の処有ること無けん」云云、妙樂の云く「智人

は起を知り蛇は自ら蛇を識る」云云、此の疫病は阿闍世王の瘡の如し彼

の仏に非ずんば治し難し此の法華に非ずんば除き難し、将又日蓮下痢去年

十一月卅日事起り今年六月三日四日日に度をまし月月に倍增す定業かと

存ずる処に貴辺の良藥を服してより已来

日日月月に減じて今百分の一となれり、しらず教主釈尊の入りかわりま

いらせて日蓮をたすけ給うか、地涌の菩薩の妙法蓮華經の良藥をさづけ

給えるかと疑い候なり、くはしくは筑後房申すべく候。又追つて申す

きくせんは今月二十五日戌の時来りて候・種種の物かずへつくしがたし、

ときどのか もう たびらの もう 申し給たまわるべし、
又女房にようぼうの御を・をちの御事おんことなげ
き入もうつて候よし申し給たまふべし、
恐恐きようきよう。

六月廿六日

にちれんかおう
日蓮花押

中務佐衛門尉殿御返事
ごへんじ

◆二一五

四条金吾殿御返事

弘安元年九月 五十七歳 御

作 1180p

錢一貫文給いて頼基がまいらせ候とて法華經の御宝前に申し上げて候、
定めて遠くは教主釈尊・並に多宝・十方の諸仏・近くは日月の宮殿にわ
たらせ給うも御照覧候ぬらん、さては人のよに・すぐれんとするをば賢人
・聖人と・をばしき人人も皆そねみ・ねたむ事に候、いわうや常の人をや、
漢皇の王昭君をば三千のきさき是をそねみ帝釈
の九十九億那由佗のきさきは☆戸迦をねたむ、前の中書王をば・をの宮
の大臣是をねたむ、北野の天神をば時平の大臣是をざんそうして流し奉る、
此等をもて・をぼしめせ、入道殿の御内は広かりし内なれども・せばく

ならせ給たまいきうだちは多くわたらせ給たまう、内のとしごろの人人ひとびと・あまたわたらせ給たまへば池の水すくなくなれば魚さわがしく秋風立てば鳥こずえをあらそう様に候事そうらに候へば、いくそばくそ御内の人人ひとびとそねみ候らんに度度たびたびの仰せをかへし・よりよりの御心にたがはせ給たまへばいくそばくのざんげんこおほそ候らんに、度度たびたびの御所領しりょうをかへして今又所領給はらせ給たまうと云云、此れ程ふしぎの不思議は候はず此れ偏ひとえに陰徳あれば陽報ありとは此れなり。

我が主ほけきように法華經を信じさせまいらせんと・をぼしめす御心のふかき故か、阿闍世王あじやせは仏の御怨あだなりしが耆婆大臣ぎばだいじんの御すすめによつて法華經を御信じありて代たもを持ち給たまう、妙莊嚴王みょうそうこんは二子の御すすめによつて邪見じゃけんを・ひるがへし給たまう、此れ又しかるべし貴辺きへんの御すすめによつて今は御心も・やわらがせ給たまいてや候らん・此れ偏ひとえに貴辺きへんの法華ほつけ

經の御信心しんじんのふかき故なり、根ふかければ枝さかへ源遠ければ流長しと申し

て一切いっさいの経は根あさく流ちかく法華ほけきょう経は根ふかく頂いただきとをし、末代まつだい・悪世あくせ
までも・つきず・さかうべしと天台大師てんだいだいしあそばし給たまへり、此この法門ほうもんにつき
し人あまた候いしかども・をほやけかたくしの大難だいにん・度度たびたび重なり候いしか
ば一年・二年こそつき候いしが後後みなには皆

・或はをち・或はかへり矢をいる、・或は身はをちねども心をち・或は心は・をちねども身はをちぬ。

釈迦しゃかぶつ仏は淨飯王じようばんの嫡子・一閻浮提えんぶだいを知行ちぎようする事・八万四千二百一十の

大王なり・一閻浮提えんぶだいの諸王しよ・頭こうべをかたぶけん上・御内に召しつかいし人

十萬億人なりしかども十九の御年・淨飯王宮じようばんおうぐうを出でさせ給たまいて檀特山だんどくせんに

入りて十二年、此の間御ともの人五人なり、所謂拘鄰いわゆるくりんと☆☆と跌提ばつだいと十力

迦葉かしようと拘利太子くりたいしとなり、此の五人も六年と申せしに二人は去りぬ残りの三

人も後の六年にすて奉りて去んぬ、但一人残り給たまうてこそ仏にはならせ給たまい

しか、法華經ほけきようは

又此れにもすぎて人はじがたかるべし難信難解なんしんなんげこ此れなり、又仏の在位より

も末法まつぽうは大難だいなんかさなるべし、此れをこらへん行者ぎようじやは我が功德くどくには・すぐれ

たる事・一劫いつこくとこそ説かれて候へ、仏滅度後ぶつめつとこ・二千二百三十余年になり候

に月氏・一千余年が間・仏法を弘通せる人・伝記にのせて・かくれなし、
漢土一千年・日本七百年・又目錄にのせて侯いし

かども仏のごとく大難に値える人人少し、我も聖人・我も門人とは申せど

も況滅度後の記文に値える人・一人も候はず、竜樹菩薩・天台・伝教こ

そ仏法の大難に値える人人にては候へども此等も仏説には及ぶ事なし、

此れ即代のあがり法華經の時に生れ候はせ給はざる故なり。

今は時すでに後・五百歳・末法の始なり、日には五月十五日・月には八

月十五夜に似たり、天台・伝教は先に生れ給へり今より後は又のちぐへな

り、大陣すでに破れぬ余党は物のかずならず、今こそ仏の記しをき給いし

後・五百歳・末法の初・況滅度後の時に当りて候へば仏語むなしからずば

一閻浮提の内に定めて聖人出現して候らん、聖人の出ずるしには一

閻浮提第一の合戦をこるべしと説かれて候にすでに合戦も起りて候にす

に聖人しょうにんや一閻浮提えんぶだいの内にい出でさせ給たまいて候まちらん、きりん出いでしかば孔子こうしを
聖人しょうにんとする鯉社しょうにんなつて聖人しょうにん出いで給たまう事うたがい疑うたがいなし、仏には
梅檀せんだの木をひて聖人しょうにんとする、老子ろうしは二五の文を結んで聖人しょうにんとする、末代まつだい
の法華經ほけきようの聖人しょうにんをいば何を用つてかいしるべき、經に云いく「能說此經・
能持此經のうじしきようの人・則すなはち・如來にょらいの使しなり」八卷・一卷・一品・一偈いちげの人・乃至な題目ないしだい
を唱となうる人・如來にょらいの

使なり、始中終すてずして大難を・とをす人・如来の使なり。

日蓮が心は全く如来の使にはあらず凡夫なる故なり、但し三類の大怨敵

にあだまれて二度の流難に値へば如来の御使に似たり、心は三毒ふかく一

身凡夫にて候へども口に南無妙法蓮華經と申せば如来の使に似たり、過去

を

尋ぬれば不輕菩薩に似たり、現在を・とぶらうに加刀杖瓦にたがう事なし、

未来は当詣道場疑いなからんか、

これをやしなはせ給う人人は豈浄土に同居するの人にあらずや、事多しと

申せどもとめ候心をもて計らせ給うべし。

ちこのそらうよくなりたり悦び候ぞ、又大進阿闍梨の死去の事・末代の

ぎば・いかでか此れにすぐべきと皆人・舌をふり候なり、さにて候いける

やらん、三位房が事さう四郎が事・此の事は宛も符契符契と申しあひて候、

にちれん
日蓮が死生をば・まかせまいらせて候、全く他のくすしをば用いまじく候
なり。

こうあんがんねん

弘安元年戌寅九月十五日

しじょうきんご

四条金吾殿

にちれんかおう

日蓮花押

◆二一六

四條金吾殿御返事

1183p

鷲目一貫文給い候い畢んぬ、御所領上より給わらせ給いて候なる事まこ
とも覚へず候夢かとあまりに不思議に覚へ候、御返事なんどもいかやう
に申すべしとも覚へず候、其の故はとのの御身は日蓮が法門の御ゆへに
日本国並にかまくら中御内の人人きうだちまでうけずふしぎにをもはれて
候へば其の御内にをはせむだにも不思

議に候に御恩をかうほらせ給へばうちかへし又うちかへしせさせ給へばい
かばかり同れいどももふしぎとをもひ上もあまりなりと・をぼすらむ、さ
ればこのたびはいかんが有るべかるらんとうたがひ思い候つる上・御内の
数十人の人人うつたへて候へばさればこそいかにもかなひがたかるべし、

あまりなる事なりと疑候うたがいいつる上・

兄弟きょうだいにもすてられてをはするにかかる御をん面目申めんもくもうすばかりなし、かの処ところ

はとのをかの三倍とあそばして候上さどの国のもののこれに候がよくよく

其の処そこをしりて候が申し候は三箇郷の内にかだと申もうすは第一だいいちの処ところなり、

でんばた

田畠はすくなく候へどもとくははかりなしと申し候もうぞ、二所はみねんぐ千

貫一所は三百貫と云云、かかる

ところ

処なりと承はる、なにとなくともどうれいといひしたしき人人ひとびとと申しすて

はてられてわらひよろこびつるにとのをかにをとりて候処ところなりとも御下くだし

文は給たく候つるぞかしまして三倍の処ところなりと候、いかにわろくともわろ

きよし人にも又上へも申もうさせ給たまうべからず候、よきところ・よきところと

もう

申し給たまはば又かさねて給たまはらせ給たまう

べし、わろき処ところ・徳分なしなむど候はば天にも人にも・すてられ給たまい候は

むずるに候ぞ、御心へあるべし。

あじやせ

けんじん

阿闍世王は賢人なりしが父をころせしかば即時そくじに天にもすてられ大地だいちも

やぶれて入りぬべかりしかども・殺されし父の王一日に五百りやう五百り

やう数年が間・仏を供養くようしまいらせたりし功德くどくと後に法華經ほけきょうの檀那だんなとなる

御いちもん一門ごほうの御房たち又俗人等にも・かかるうれしき事候はず、かう申せば

今生こんじょうのよくと・をぼすか、それも凡夫ほんぶにて候へばさも候べき上慾うえをも・は

なれずして仏になり候ける道の候けるぞ、普賢ふげん經ほけきょうに法華經かんじんの肝心とを説きて

候「煩惱ぼんのうを断ぜず五欲だんを離れず」等云云、天台てんだい

大師だいしの摩訶止觀まかしかんに云く「煩惱即菩提ぼんのうそくぼだい・生死即涅槃しいうじそくねはん」等云云、竜樹りゅうじゆ菩薩ぼさつの大論だいろん

に法華經ほけきょうの一代いちだいにすぐれて・いみじきやうを釈しゃくして云く「譬たとえば大藥師やくしの

能く毒どくを変じて藥なと為すが如ごとし」等云云、「小藥師やくしは藥を以て病を治す大

医は大毒をもつて大重病じゅうびょうを治す」等云云。

弘安元こうあん 戊寅つちのえとら 年十月 日

四條金吾殿御返事しじょうきんごごへんじ

日蓮花押にちれんかおう

◆二一七

四条金吾殿御返事 しじょうきんごごへんじ

弘安元年十月 こうあんがねん

五十七歳御作

1185p

今月二十二日信濃より贈られ候いし物の日記 にっき ☆ 銭三貫文・白米能米俵一

・餅五十枚・酒大筒一・小筒一・串柿五把・柘榴十、 じゃくろ 夫れ王は民を食とし そ

民は王を食とす衣は寒温をふせぎ食は身命 しんみょう をたすく、 たとえ 譬ば油の火を継ぎ

水の魚を助くるが如し、 ごと 鳥は人の害せん事を恐れて木末に巢くふ、然れど しか

も食のために地にをりてわなにかかる、魚は淵 ふち の

底に住みて浅き事を悲しみて穴を水の底に掘りてすめども餌にばかされて

鉤をのむ、 おんじき 飲食と衣薬とに過ぎたる人の宝や候べき。

而るに日蓮 しにか は他人 にちれん にことなる上山林 さんりん の栖就 なかんずく 中 な 今年 えきれい は疫癘飢渴 けかち に春夏 しゅんか

過越し秋冬は又前にも過ぎたり、又身に當りて所勞大事になりて候つるを
かたがの御藥と申し小袖彼のしなじなの御治法にやうやう驗し候て今所勞
平愈し本よりもいさぎよくなりて候、弥勒菩薩の瑜伽論竜樹菩薩の大論を
見候へば定業の者は藥變じて毒と

なる法華經は毒變じて藥となると見えて候、日蓮不肖の身に法華經を弘め
んとし候へば天魔競ひて食をうばはんとするかと思ひて歎かず候いつるに
今度の命たすかり候は偏に釈迦仏の貴辺の身に入り替らせ給いて御たすけ
候か。

是はさてをきぬ、今度の御返りは神を失いて歎き候いつるに事故なく鎌倉
に御歸り候事悦びいくそばくぞ、余りの覺束なさに鎌倉より来る者ごとに
問ひ候いければ、或人は湯本にて行き合せ給うと云い、或人はこうづにと
或

人は鎌倉かまくらにと申し候もういしにこそ心落居おちいて候へ、是より後はおぼろげならず
ば御渡りわたあるべからず大事だいじの御事候おんことはば御使おんつかいにて承うけたまわり候べし、返す返す
このたび
今度の道は・あまりに・おぼつかなく候いつるなり、敵と申もうす者は・わす
れさせ

てねらふものなり、是より後に若やの御旅には御馬をおしましませ給ふべからず、よき馬にのらせ給へ、又供の者どもせんにあひぬべからんものやどうまるもちあげぬべからん御馬にのり給うべし、摩訶止観第八に云く弘決第八に云く「必ず心の固きに仮つて神の守り則ち強し」云云、神の護ると申すも人の心つよきによるとみえて候、法華経はよきつるぎなれどもつかう人によりて物をきり候か。

されば末法に此の経をひろめん人人舍利弗と迦葉と観音と妙音と文殊と薬王と此等程の人やは候べき、二乗は見思を断じて六道を出でて候菩薩は四十一品の無明を断じて十四夜の月の如し、然れども此等の人人には・ゆづり給はずして地涌の菩薩に譲り給へり、されば能く能く心をきたはせ給うにや、李広將軍と申せし・つはもの

は虎に母を食れて虎に似たる石を射しかば其の矢羽ぶくらまでせめぬ、後

に石と見ては立つ事なし、後には石虎將軍と申しき、貴辺も又かくのごとく敵はねらふらめども法華經の御信心強盛なれば大難も・かねて消え候か、是につけても能く能く御信心あるべし、委く紙には尽しがたし、
きようきようきんげん。
恐恐 謹言。

弘安元年 戊寅 後十月二十二日
こうあんがんねんつちのえとら

日蓮花押
にちれんかおう

四条左衛門殿御返事
さえもん ごへんじ

◆二一八 日眼女造立釈迦仏供養事 弘安二年二月 五十八

歳御作

1187p

御守書てまいらせ候三界の主教主釈尊一体三寸の木像造立の檀那日眼

女・御供養の御布施前に二貫今一貫云云。

法華經の寿命品に云く「或は己身を説き・或は他身を説く」等云云、

東方の善徳仏・中央の大日如来・十方の諸仏・過去の七仏・三世の諸仏・

上行菩薩等・文殊師利・舍利弗等・大梵天王・第六天の魔王・釈提桓因

王・日天・月天・

明星天・北斗七星・二十八宿・五星七星・八万四千の無量の諸星・阿修羅

王・天神・地神・山神・海神・宅神・里神・一切世間の国国の主とある人

何れか教主釈尊ならざる天照太神・八幡大菩薩も其の本地は教主釈尊

なり、例せば釈尊しゃくそんは天の一月諸仏しよぶつ・菩薩等ぼさつは万水ばんすいに浮べる影なり、釈尊しゃくそん一体を造立する人は十方世界の諸仏しよぶつを作り奉る人なり、譬たとえば頭こうべをふればかみゆるぐ心はたらけば身うごく、大風吹けば草木そうもくしづかならず大地だいちうごけば大海たいかいさはがし、教主きようしゅ釈尊しゃくそんをうごかし奉たてまればゆるがぬ草木そうもくやあるべきさわがぬ水やあるべき。

今日けふの日眼女は三十七のやくと云云、やくと申もうすは譬たとえばさいにはかどますにはすみ人にはつきふし方まさには四維よすみの如ごとし、風は方よりふけばよはく角より吹けばつよし病は肉より起れば治しやすし節より起れば治しがたし、家にはかきなければ盗人ぬすびといる人にはとがあれば敵便をうく、やくと申もうすはふしぶしの如ごとし、家にかきなく人に

科とがあるがごとし、よきひやうしを以てまほらすれば盗人ぬすびとをからめとる、ふしの病をかめて治すれば命ながし、今いま教主きようしゅ釈尊しゃくそんを造立し奉たてまれば下女たいしが太子たいし

をうめるが如し（こと）國王尚此（こくおうな）の女を敬（うや）ひ給（たま）ふ何（いか）に況や大臣（だいじん）已下（い）をや、大梵天王（だいぼんてんのう）
・釈提桓因王（しゃくだいかにん）・日月等（にちがつ）・此（こ）の女人（にょにん）を守り給（たま）ふ況や大小（だいしょう）の神祇（じんぎ）をや、昔
うでんだいおう
・優填大王（うでんだいおう）・釈迦仏（しゃかぶつ）を造立（たてまつ）し奉りしかば大梵天王（だいぼんてんのう）・日月等（にちがつ）・木像（うでんだいおう）を礼（くよう）しに参
給（たま）いしかば木像（うでんだいおう）説（いわ）いて云く「我（くよう）を供養（くよう）せんよりは優填大王（うでんだいおう）を供養（くよう）すべし」
等云云（ようげん）、影堅王（えうけん）の画像（しやくそん）の釈尊（しゃくそん）を書き奉りしも又是（たてまつ）く（かくの）の如し、法華經（ほけきよう）に
云く「若し人・仏（ゆゑ）の為（もろもろぎようぞう）の故（こんりゆう）に諸（かく）の形像（か）を建立（たてまつ）す是（かく）くの

こと しよにん みなすで ぶつどう
如き諸人等皆已に仏道を成じき」云云、文の心は一切の女人釈迦仏を造り
たてま げんざい
奉れば現在には日日・月月の大小の難を払ひ後生には必ず仏になるべしと
もう
申す文なり。

そもそもよにん いちだい 抑 女人は一代五千・七千余巻の 経経 きようぎよう に仏にならずときらはれまし

す、但法華経ばかりに女人・仏になると説かれて候、天台智者大師の釈に

ほけきよう

云く「女に記せず」等云云、釈の心は一切経には女人・仏にならずと云云、

次下に云く「今経は皆記す」と云云、今の法華経にこそ竜女・仏になれり

と云云、天台智者大師と申せし人は仏滅度の後・一千五百年に漢土と申す

国に出でさせ給いて一切経を十五返まで御覧あそばして候いしが法華経よ

り外の経には

女人・仏にならずと云云、妙楽大師と申せし人の釈に云く「一代に絶えた

る所なり」等云云、釈の心は一切経にたえたる法門なり、法華経と申すは

- 2520 -

星の中の月ぞかし人の中の王ぞかし山の中の須弥山水の中の大海の如し、
是れ程いみじき御経に女人・仏になると説かれぬれば一切経に嫌はれたる
になにかくるしかるべき、譬えば盗人・

夜打・強盗・乞食・渴体にきらはれたらんと国の大王に讃られたらんと

何れかうれしかるべき、日本国と申すは女人の国と申す国なり、天照太神

と申せし女神のつきいだし給える島なり、此の日本には男十九億九万四千

八百二十八人女は二十九億九万四千八百三十人なり、此の男女は皆・念仏

者にて候ぞ皆・念仏なるが故に阿弥陀仏を本尊

とす現世の祈りも又是くの如し、設い釈迦仏をつくりかけども阿弥陀仏の

浄土へゆかんと置いて本意の様には思い候はぬぞ、中中つくりかかぬには

をとり候なり。

今日眼女は今生の祈りのやうなれども教主釈尊をつくりまいらせ給い

候へば後生も疑なし、二十九億九万四千八百三十人の女人の中の第一なりとおぼしめすべし、委くは又又申すべく候、恐恐謹言。

こころあん

つちのとう

弘安二年己卯二月二日

にちれん
日蓮

かおう

花押

ごへんじ

日眼女御返事

◆二一九

聖人御難事 しょうにん なん

弘安二年十月五十八歳御作 こうあん

与門人 もんじん

等

1189p

い 去ぬる 建長五年 けんちよう 癸丑四月二十八日に安房の国・長狭郡の内東条の郷今は ながさこおり とうじよう

郡なり、天照太神の御くりや右大將家の立て始め給いし日本第二のみくり てんしょうだいじん うだいしようけ たまい にほん

や今は日本第一なり、此の郡の内清澄寺と申す寺の諸仏坊の持仏堂の南面 にほんだいいち きよすみでら もう しよぶつ

にして午の時に此の法門申しはじめて今に二十七年弘安二年「太歳己卯」 ほうちもんもう こうあん つちのとう

なり、仏は四十余年天台大師は三十余年・ よんじゅうよねんでんだいだいし

伝教大師は二十余年に出世の本懐を遂げ給う、其中の大難申す計りなし先 でんぎようだいし しゅっせ ほんかい と たま ごちゆう だいなんもう ばか

先に申すがごとし、余は二十七年なり其の間の大難は各各かつしろしめせ もう そ だいなん

り。

法華経に云く「しか ほけきよう いわ しか 而も此の経は如来の現在にすら猶怨嫉多し、況や滅度の にょらい げんざい なのおんしつ めつど

後をや」云云、釈迦しやか如来にょらいの大難だいにんはかずをしらず、其その中に馬の麦をもつて

九十日・小指の出仏身血・大石の頂いただきにかかりし、善生比丘等びくの八人が身

は仏の御弟子・心は外道にともないて昼夜十二時に仏の短ひまをねらいし、無量むりよう

の釈子の波瑠璃王に殺されし・無量の弟子等

あくそう

あじやせ

だいにん

でし

これら

にょらいげんざい

なん

が悪象にふまれし阿闍世王の大難をなせし等、此等は如来現在の小難なり、

きようめつご

だいにん

りゆうじゆ

てんじん

てんだい

でんきよう

あ

たま

ほけきよう

況滅度後の大難は竜樹・天親・天台・伝教いまだ値い給はず法華経の

ぎようじや

ぎようじや

ぎようじや

行者ならずといわば・いかでか行者にてを合せざるべき、又行者といは

んとすれば仏のごとく身より血をあやされず、何に況や仏に過ぎたる大難

きようもん

ぶつせつ

なし経文むなしきがごとし、仏説すでに大

こもう

虚妄となりぬ。

しか

にちれん

いつちようがんねん

かのとり

西五月十二日には伊豆の国へ流罪、

而るに日蓮二十七年が間弘長元年辛酉五月十二日には伊豆の国へ流罪、

ぶんえいがんねん

甲

いつへ

ぶんえい

文永元年十一月十一日頭にきずをかほり左の手を打ちをらる、同文永八

年^{かのとひつじ} 未^み九月十二日佐渡^{さど}の国へ配流^{はいりゅう}又頭^{またうへ}の座に望^{もち}む其^その外に弟子^{でし}を殺され
切^きられ追出^{おしだ}くわれう等^らかずをしらず仏^{ぶつ}の大難^{だいなん}には及^{およ}ぶか勝^{すぐ}れたるか其は知
らず、竜樹^{りゅうじゆ}・天親^{てんじん}・天台^{てんだい}・伝教^{でんぎよう}は余に肩を

並べがたし、日蓮末法に出でずば仏は大妄語の人多宝・十方の諸仏は大
虚妄の証明なり、仏滅後・二千二百三十余年が間・一閻浮提の内に仏の
御言を助けたる人但日蓮一人なり、過去・現在の末法の法華經の行者を
輕賤する王臣万民始めは事なきやうにて終にほろびざるは候はず、日蓮又
かくのごとし、始めはしるしなきやうなれども今二十七年が間、法華經守護
の梵釈・日月・四天等さのみ守護せずば仏前の御誓むなしくて無間・
大城に墮つべしと・お

そろしく想う間今は各各はげむらむ、大田の親昌・長崎次郎兵衛の尉時綱
・大進房が落馬等は法華經の罰のあらわるるか、罰は総罰・別罰・顯罰・
冥罰・四候、日本国の大疫病と大けかちとどううちと他国よりせめらる
るは総ばちなり、やくびやうは冥罰なり、大田等は現罰なり別ばちなり、
各各師子王の心を取り出していかに人をどすと

もをづる事なかれ、師子王は百獸にをぢず師子の子又かくのごとし、彼等は野干のほうるなり日蓮がいちもん一門は師子のほう吼るなり、故最明寺殿の日蓮をゆるししと此の殿の許ししは禍なかりけるを人のざんげんと知りて許ししなり、今はいかに人申すとも聞きほどこかずしては人のざんげんは用い給うべからず、設い大鬼神のつける人なりと

も日蓮をば梵釈・日月・四天等・天照太神・八幡の守護し給うゆへにばつしがたかるべしと存じ給うべし、月月・日日につより給へすこしもたゆむ心あらば魔たよりをうべし。

我等凡夫のつたなさは経論に有る事と遠き事はおそる心なし、一定として平等も城等もいかりて此の一門をさんざんとなす事も出来せば眼をひさいで観念せよ、当時の人人のつくしへかさされんずらむ、又ゆく人・

又か

しこに向える人人を我が身にひきあてよ、当時までは此の一門に此のなげ
きなし、彼等^{かれら}はげんはかくのごとし殺されば又地獄^{じごく}へゆくべし、我等現に
は此の大難^{だいなん}に値うとも後生^{ごしょう}は仏になりなん、設^{たと}えば灸治^{やいと}のごとし当時^{とうじ}はい
たけれども後の薬なればいたくしていたからず。

彼のあつわらの愚癡^{ぐち}の者どもいるはげましてをどす事なかれ、彼等^{かれら}には
ただ一えんにおもい切れ・よからん

は不思議ふしぎわるからんは一定と・をもへ、ひだるしとをもわば餓鬼道がきを・をしへよ、さむしといわば八じかん地獄じごくを・をしへよ、をそろししといわばたかにあへるきじねこにあえるねずみを他人たにんとをもう事なかれ、此これはこまごまと

かき候事はかくとしどし月月・日日に申もうして候へどもなごへの尼せう房のと房三位房なんどのやうに候、をくびやう物をぼへずよくふかくうたがい多き者どもはぬれるうるしに水をかけそらをきりたるやうに候ぞ。

三位房が事は大不思議ふしぎの事ども候いしかどもとのぼらのをいには智慧ちえある者をそねませ給たまうかと・ぐちの人をもいなんとをもいて物も申もうさで候いしが、はらぐろとなりて大難だいにんにもあたりて候ぞ、なかなかさんざんと・だにも申せしかばたすかるへんもや候いなん、あまりにふしぎさに申もうさざりしなり、又かく申せばおこ人どもは死もうの事を仰おおせ候と申もうすべし、鏡

のために申す又此の事は彼等かれらの人人ひとひとも内内はおぢおそれ候らむと・おぼへ候ぞ。

人のさわげばとてひやうじなんと此の一門いちもんにせられこば此れへかきつけて
たび候へ、恐恐きょうきょう謹言。

十月一日

にちれんかおう
日蓮花押

ひとびとおんちゅう
人人御中

さぶらうづへもん殿のもとにとごめらるべし。

◆二二〇

四条金吾殿御返事 しじょうきんごごへんじ

弘安二年十月 五十八歳 こうあん

御作

1192p

先度強敵こつてきととりあひについて御文給いき委くわしく見まいらせ候、さても・さ
ても・敵人てきじんにねらはれさ給たまひいしか、前前の用心さきざきようじんといひ又けなげといひ又
法華經の信心ほけきようしんじんつよき故に難なんなく存命せさせ給たまひい目出たし目出たし、夫れ運そ
きはまりぬれば兵法もいらす・果報かほうつきぬれば所従しよじゆうもしたがはず、所詮運しよせん
ものこり果報もひかゆる故なり、ことに法華經の行者ぎようじやをば諸天しよてん・善神ぜんじん・
守護しゆごすべきよし属累品そくるいほんにして誓状せいじようをたて給たまひい・一切の守護神しゆごしん・諸天しよてんの中に
も我等われらが眼まなこに

見へて守護しゆごし給たまひうはうは日月天にちがつなり争いかでか言をとらざるべき、ことに・こと

に日天にってんの前に摩利支天まのしちてんまします。日天にってん・法華經ほけきようの行者ぎようじやを守護しゆごし給たまはんに

所従しよじゆう

の摩利支天尊たまたすで給たまうべしや、序品じよほんの時とき・名月天子ながつてんし・普光天子ふくわうてんし・宝光

天子てんし

・四大天王しよだいてんわう与其眷属けんそく・万天子まんてんし俱くと列座れつざし給たまふ、まりし天てんは三万天子さんまんとんしの

内うちなるべし、もし内うちになくば地獄じごくにこそおはしまさんずれ、今度このたびの大事だいじは

此この天てんのまほりに非あらずや、彼の天てんは劍形けんぎやうを貴辺きへんにあたへ此こへ下りぬ、此この

にちれん

日蓮にちれんは首題ごていの五字

なんじ

を汝なんじこそさづく、法華經受持ほけきようじゆじのものを守護しゆごせん事うたがい疑ぎあるべからず、まりし

ほけきよう

天てんも法華經ほけきようを持ちて一切衆生いっさいしゆじようをたすけ給たまう、「臨兵闘者皆陣列在前ざいぜん」の文

ほけきよう

も法華經ほけきようより出いでたり、「若説俗間經書治世語言資生業等皆順正法しやうぼう」と

これ

は是これなり、これに・つけても・いよいよ強盛かうじやうに大信力だいしんりきをいだし給たまへ、我が

運命しよてんしゆめいつきて諸天守護しよてんしゆごなしとつらむる事あるべ

からず。

将門は・つわものの名どとり兵法の大事だいじをきはめたり、されども王命に
はまけぬ、はんくわひ・ちやうりやうもよしなし・ただ心こそ大切なれ、
いかに日蓮にちれんいのり申もうすとも不信ふしんならばぬれたる・ほくちに・火をうちかく
るが・ごとくなるべし、はげみをなして強盛じやうじやうに信力をいだし給たまうべし、す
ぎし存命ふしぎ不思議とおもわせ給たまへなにの兵法よ

りも法事経の兵法をもちひ給うべし、「諸余怨敵・皆悉摧滅」の金言むな
しかるべからず、兵法剣形の大事も此の妙法より出でたり、ふかく信心を
とり給へ、あへて臆病にては叶うべからず候、
恐恐謹言。

十月二十三日 日蓮花押

四条金吾殿御返事

◆二二二 四条金吾殿御返事

弘安三年十月五十九歳御作

1193p

殿岡より米送り給ひ候、今年七月・孟蘭盆供の僧膳にして候、自恣の僧
・靈山の聴衆・仏陀・神明も納受随喜し給うらん、尽きせぬ志・連
連の御訪い言を以て尽くしがたし。

何となくとも殿の事は後生菩提ごしょうぼだい疑うたがなし、何事なにことよりも文永八年ぶんえいの御勘氣ごかんき

の時すで既に相模さがみの国竜の口にて頸切られんとせし時にも殿は馬の口に付いて

かちはだし

足歩赤足にて泣き悲み給たまいし事実にならば腹きらんとさどの氣色なりしをば・

いつの世にか思い忘るべき、そのみならず佐渡さどの島に放たれ北海の雪の下もと

に埋もれ北山の嶺の山下風に命助かる

べしとも・をぼへず、年来ともの同朋にも捨てられ故郷へ帰らん事は大海たいかいの底

のちびきの石の思ひしてさすがに凡夫ほんぶなれば古郷の人人ひとびとも恋しきに在俗ざいそくの

みやすかえひま

官仕隙なき身に此の経を信ずる事こそ稀有なるに山河さんがを凌ぎ蒼海しのかを経てへ

はるかたず

遙たまいに尋ね来り給たまいし志いし香城こうじょうに骨を砕くだき雪嶺せつりやうに身を投げし人人ひとびとにも争いかでか

劣り給たまうべき、又我が身はこれ程に浮なんび難か

りしがいかなりける事にてや同十一年の春の比赦免しやめんせられて鎌倉かまくらに帰り上

りけむ、倩事の情を案ずるに今は我身わがみに過あやまちあらじ、・或あるは命いのちに及およばんと

し弘長こうちようには伊豆いずの国文永ぶんえいには佐渡さどの島諫かんぎ暁再三きょうさいさんに及べば留難重るなんちようじよう 置せり、
仏法中怨ぶつぽうちゅうおんの誠責かいしやくをも身にははや免れぬらん。
まぬか

然るに今山林に世を遁れ道を進まんと思ひしに人人の語様なりしかども
も旁存する旨ありしに依りて当国・当山に入りて已に七年の春秋を送
る、又身の智分をば且らく置きぬ法華經の方人として難を忍び疵を蒙る事
は漢土の天台大師にも越え日域の伝教大師にも勝れたり、是は時の然らし
むる故なり、我が身法華經の行者ならば靈山の教主釈迦宝浄世界の多宝
如来・十方分身の諸仏本化の大士迹化の大菩薩梵釈竜神十羅刹女も定め
て

此の砌におはしますらん、水あれば魚すむ林あれば鳥来る蓬萊山には玉多
く摩黎山には栴檀生ず麗水の山には金あり、今・此の所も此くの如し仏・
菩薩の住み給う功德聚の砌なり、多くの月日を送り読誦し奉る所の法華經
の功德は虚空にも余りぬべし、然るを毎年度の御参詣には無始の罪障も
定めて今生一生に消滅すべきか、弥はげむべしはげむべし。

十月八日

四條中務三郎左衛門殿御返事

さえもん

ごへんじ

日蓮 にちれん

花押 かおう

◆二二二

しじょうきんご おんふみ
四條金吾許御文こうあん
弘安三年十二月 五十九歳御作 与四條金吾女房
しじょうきんごにようぼう

1195p

白小袖一つ・縣わた十兩たしかたびそうら慥に給候い畢おわぬ、歳もかたぶき候又ところ処は山の中風
はげしく庵室あんしつはかこの目の如ごとし、うちしく物は草の葉きたる物はかみぎぬ
身のひゆる事は石の如ごとし、食物は冰こおりの如ごとくに候へば此の御小袖給候て頓やが
身をあたたまらんと・をもへども明年の一日とかかれて候へば迦葉尊者かしようそんじやの
・足山にこもりて慈尊じそんの出世しゅつせ・五十六億七千万歳せんまんをまたるるもかくやひさ
しかるらん。

これはさてをき候ぬ、しゐぢの四郎がかたり申し候・御前ごぜんの御法門ほうもんの事
うけ給たまわり候こそ・よに・すずしく覚おぼえ候へ、此の御引出物に大事だいじの法門ほうもん

一つかき付けてまいらせ候、八幡大菩薩をば世間の智者愚者大体は阿弥陀仏あみだぶつの化身けしんと申し候ぞ、其れもゆへなきにあらず中古の義に・或は八幡の御託宣たくせんとて阿弥陀仏あみだぶつと申しける事少少候、
此れはをの心の念仏者ねんぶつにて候故にあかき石を金と思いくひせをうさぎと見るが如し、其れ実には釈迦仏しゃかぶつにて・おはしまし候ぞ、其の故は大隅の国に石体の銘と申す事あり、一つの石われて二つになる、一つの石には八幡はちまんと申す二字あり、一つの石の銘には「昔靈鷲山りょうじゅうせんに於て妙法蓮華經を説きと今正宮の中に在りて大菩薩と示現す」云云、
是れ釈迦仏しゃかぶつと申す第一の証文なり、此れよりもことにまさしき事候、此の八幡大菩薩は日本国人王第十四代・仲哀天皇は父なり、第十五代神功皇后しんこうこうごうは母なり、第十六代応神天皇おうじんてんのうは今の八幡大菩薩是なり、父の仲哀天皇てんのうは天照太神の仰せにて新羅国を責めんが為に渡り給いしが新羅の大王に

調伏せられ給いて仲哀天皇ははかたにて

崩御ありしかば、きさきの神功皇后は此の太子を御懷妊ありながらわたら

せ給いしが、王の敵をうたんとて数万騎のせいをあい具して新羅国へ渡り

給いしに、浪の上船の内にて王子御誕生の氣いでき見え給う、其の時

神功皇后ははらの内の王子にかたり給ふ、汝は王子か女子か王子ならばた
しかに聞き給へ、我は君の父仲哀天皇の敵を打たんが為に新羅国へ渡るな
り、我が身は女の身なれば汝を大将とたのむべし、君日本国の主となり
給うべきならば今度生れ給はずして軍の間腹の内にて数万騎の大将となり
て父の敵を打たせ給へ、是を用ひ給はずして只今生れ給うほどならば海へ
入れ奉らんずるなり、我を恨みに思い給うなと有りければ、王子・本の如く
胎内にをさまり給いけり、其の時石のをびを以て胎をひやし新羅国へ渡り
給いて新羅国を打ちしたがへて還つて豊前の国うさの宮につき給いここに
て王子誕生あり、懐胎の後三年六月三日と申す甲寅の年四月八日に生れさ
せ給う是を応神天皇と号し奉る、御年八十と申す壬申の年二月十五日に
かくれさせ給ふ、男山の主・我が朝の守護神正体めづらしからずして靈驗
新たにおはします今の八幡大菩薩是なり。

又釈迦如来は住劫第九の減・人壽百歳の時淨飯王を父とし摩耶夫人を

母として中天竺伽毘羅衛国らんに園と申す処にて甲寅の年四月八日に

生れさせ給いぬ、八十年を経て東天竺俱尸那城跋提河の辺にて二月十五日

みずのえさる

壬申にかくれさせ給いぬ、今の八幡大菩薩も又是くの如し、月氏と日本

ふほ

と父母はかわれども四月八日と甲寅と

みずのえさる

二月十五日と壬申とはかわる事なし、仏滅度の後・二千二百二十余年が

がっし

間・月氏・漢土・日本・一閻浮提の内に聖人・賢人と生るる人をば皆釈迦

によらい

如来の化身とこそ申せども・かかる不思議は未だ見聞せず。

はちまんだいぼさつ

かかる不思議の候上八幡大菩薩の御誓いは月氏にては法華經を説いて

しょうじきしゃほうべん

正直捨方便となのらせ給い、日本国にしては正直の頂にやどらんと誓

たま

い給ふ、而るに去ぬる十一月十四日の子の時に御宝殿をやいて天にのぼら

たま

せ給いぬる故をかがへ候に此の神は正直の人の頂にやどらんと誓へる

に正直しょうじきの人の頂いただきの候きようはねば居き処しよなき故ゆえに

栖たまりなくして天てんにのぼり給たまいけるなり、日本にほん国の第一だいいちの不思議ふしぎには釈迦しやか如来にょらい

の国くにに生なれて此この仏ぶつをすてて一切衆生いっさいしゆじよう・皆みな一同いどうに阿弥陀仏あみだぶつにつけり、有縁うえん

の釈迦しやかをばすて奉たてまつむ縁えんの阿弥陀仏あみだぶつをあをぎたてまつりぬ、其その上親父うしやうふち

しゃかぶつ　にゆうめつ
釈迦仏の入滅の日をば阿弥陀仏につけ又誕生の日をば薬師になしぬ、

はちまんだいぼさつ　あがむ　ほんち　あみだぶつ
八幡大菩薩をば崇るやうなれども又本地を阿弥陀仏になしぬ、本地垂迹

を捨つる上に此の事を申す人をばかたきとする故に力及ばせ給はずして此

の神は天にのぼり給いぬるか、但し月は影を水にうかぶる濁れる水には栖

ことなし、木の上草の葉なれども澄める露には移る事なれば・かならず国主

ならずとも正直の人のかうべにはやどり給うなるべし。

然れば百王の頂に・やどらんと誓い給いしかども人王八十一代・安徳

天皇・二代隠岐の法皇・三代阿波・四代佐渡・五代東一条等の五人の国王

の頂にはすみ給はず、諂曲の人の頂なる故なり、頼朝と義時とは臣下

なれども其の頂にはやどり給ふ正直なる故か、此れを以て思うに法華経

の人人は正直の法につき給ふ故に釈迦仏・猶是をまほり給ふ、況や垂迹

の八幡大菩薩争か是をまほり給はざるべき、淨き水なれども濁りぬれば月

はちまんだいぼさつ　いかで　これ　たま　なほこれ　たま　すいじやく

やどる事なし、糞水なれどもすめば影を惜み給はず、濁水は清けれども月やどらず糞水はきたなければすめば影を・をします、

濁水は智者学匠の持戒なるが法華經に背くが如し、糞水は愚人の無戒なる

が貪欲ふかく瞋恚強盛なれども法華經計りを無二無三に信じまいらせて

有るが如し、涅槃經と申す經には法華經の得道の者を列ねて候に☆☆蝮蠍

と申して糞虫を挙げさせ給ふ、竜樹菩薩は法華經の不思議を書き給うに

☆虫と申して糞虫を仏になす等云云、又

涅槃經に法華經にして仏になるまじき人をあげられて候には「一闍提の人

の阿羅漢の如く、大菩薩の如き」等云云、此等は濁水は淨けれども月の影

を移す事なしと見えて候、されば八幡大菩薩は不正直をにくみて天にのぼ

り給うとも、法華經の行者を見ては争か其の影をばをしみ給うべき、我が

一門は深く此の心を信ぜさせ給うべし、八幡大菩薩は此にわたらせ給うな

り、
疑^{うたがい}い給^{たま}う事なかれ
疑^{うたがい}い給^{たま}う事なかれ、
恐^{きょう}恐^{きょう}謹^{きん}言^{げん}。

十二月十六日

花押^{かおう}

四^し条^{じょう}金^{きん}吾^ご殿^{でん}女^{によう}房^{ぼう}御^ご返^{へん}事^じ

日蓮^{にちれん}

満月まんげつのごとくなるもちゐ二十かんろのごとくなる・せいす一つ・給候たびそうらい
おわ 畢おわんぬ、春のはじめの御悦よろこびは月のみつるがごとく・しをのさすがごとく
・草のかこむが如ごとく・雨のふるが如ごとしと思し食すべし。

抑そも 抑そも 八日は各各の御父・釈迦しゃかぶつ仏の生れさせ給たまい候し日なり、彼の日に三
十二のふしぎあり・一には一切いっさいの草木そうもくに花さき・みなる・二には大地だいちより
一切いっさいの宝わきいづ・三には一切いっさいのでんばたに雨ふらずして水わきいづ・四
には夜変

じてひるの如ごとし・五には三千世界さんぜんせかいに欺きのこゑなし、是かくくの如ごとく吉瑞の相

のみにて候し、是より已来今にいたるまで二千二百三十余年が間・吉事に
このかた
は八日をつかひ給たまい候なり。

しか然るに日本にほんこく・皆釈迦みなしやか仏ぶつを捨てさせ給たまいて候に・いかなる過去かこの善根ぜんこんに

てや・法華ほけきよう経しやかぶつと釈迦しやかぶつ仏ぶつとを御信心しんじんありて・各各あつまらせ給たまいて八日はちをく

やう申もうさせ給たまうのみならず・山中にちれんの日蓮にちれんに華かうを・をくらせ候やらん、

たうとし・たうとし、
きようきよう
恐恐。

正月七日

にちれんかおう
日蓮花押

ひとびとごへんじ
人人御返事

◆二二四

月水御書ごしよ

ぶんえいがんねん
文永元年四月四十三歳御作

1199p

伝え承はる御消息しやうそくの状に云く法華經を日ごとに一品づつ二十八日が間に

一部をよみまいらせ候しが当時は薬王品の一品を毎日まいにちの所作しよさにし候、ただ

もとの様に一品づつを・よみまいらせ候べきやらんと云云、法華經は一

日の所作しよさに一部八卷・二十八品・ある或は一卷・ある或は一品・一偈・一句二

字・ある或は題目ばかりを南無妙法蓮華經と只一遍となへ・ある或は又一期の

間に只一度となへ・ある或は又一期の間にただ一遍唱うるを聞いて随喜ずいきし・

・ある或は又随喜ずいきする声を聞い

て随喜ずいきし・是体これていに五十展転して末になりなば志こころざしもうすくなり随喜ずいきの心の

弱き事・二三歳の幼稚の者のはかなきが如く・牛馬などの前後を并へざるが如くなりとも、他經を学する人の利根にして智恵かしこく・舍利弗・目連・文殊・弥勒の如くなる人の諸經を胸の内にうかべて御坐まさん人人の御功德よりも勝れたる事・百千万億倍なるべきよし・經文並に天台・妙楽の六十巻の中に見え侍り、されば經文には「仏の智慧を以て多少を籌量すとも其の辺を得ず」と説かれて仏の御智慧すら此の人の功德をば・しろしめさず、仏の智慧のありがたさは此の三千大千世界に七日・若しは二七日など・ふる雨の数をだにも・しろしめして御坐候なるが只法華經の一字を唱えたる人の功德をのみ知しめさずと見えたり、何に況や我等逆罪の凡夫の此の功德をしり候いなんや、然りと云えども如来滅後二千二百余年に及んで五濁さかりになりて年久し事にふれて善なる事ありがたし、設ひ善を作人も一の善に十

の悪を造り重ねて結句は小善につけて大悪を造り心には大善を修したり
と云ふ慢心を起す世となれり、然るに如来

の世に出でさせ給いて侯し国よりしては二十万里の山海をへだてて東によ
れる日域辺土の小嶋に生まれ・五障の雲厚うして三従の・きづなに・つな
がれ給へる女人などの御身として法華経を御信用侯は・ありがたしなん

ど・

とも申すに限りなく候、凡そ一代聖教を扱き見て顕密二道を究め給へる
様な・る智者学匠だにも・近來は法華經を捨て念仏を申し候に何なる御
宿善ありてか此の法華經を一偈・一句もあそばす御身と生れさせ給いけ
ん。

されば此の御消息を拝し候へば優曇華を見たる眼よりもめづらしく一眼
の龜の浮木の穴に値へるよりも乏き事かなと・心ばかりは有がたき御事に
思いまいらせ候間、一言・一点も随喜の言を加えて善根の余慶にもやと・
はげみ候へども只恐らくは雲の月をかくし塵の鏡をくもらすが如く短く
拙き言にて殊勝にめでたき御功德を申し隠しくもらす事にや候らんといた
み思ひ候ばかりなり、然りと云えども貴命もだすへ黙止へべきにあらず一
滴を江海に加へ

☆火を日月にそへて水をまし光を添ふると思し食すべし、先法華經と申す

は八卷・一卷・一品・一偈・一句・乃至・題目を唱ふるも功德は同じ事と
思し食すべし、譬^{たと}えば大海の水は一滴なれども無量の江河の水を納めたり、
如意宝妹は一珠なれども万宝をふらす、百千万億の滴珠も又これ同じ法華經^{ほけきよう}
は一字も一の滴珠の如し、乃至万億の字も
又万億の滴珠の如し、諸經・諸仏の一字一名号は江河の一滴の永山海の
一石の如し、一滴に無量の水を備えず一石に無数の石の徳をそなへもたず、
若し然らば此の法華經は何れの品にても御坐しませ只御信用の御坐さん品^も
こそ・めづらしくは候へ。

総じて如来の聖教は何れも妄語の御坐すとは承り候はねども・再び
仏教を勧^{かん}えたるに如来の金言の中にも大小・権実・顕蜜など申す事・
經文より事起りて候、随つて論師・人師の釈義にあらあら見えたり、詮を
放つて申さば釈尊の五十余年の諸教の中に先四十余年の説教は猶うたが

はしく侯ぞかし、みずか 仏、むりようぎきよう 自ら無量義經に「よんじゆうよなんいま 四十余年未だ真実しんじつ
あらわを顕さず」と申すもう 經文きようもん まのあたり説かせ給たまへる故なり、ほけきよう 法華經に於ては仏、
みずか 自ら一句の文字を「しょうじき 正直に方便を捨てて但た無上道を説く」と定めさせ
たま給いぬ、そ 其の上・多宝仏・大地より涌出でさせ給たまいて「みようほけきよう 妙法華經・皆是真実」
しょうみよう と証 明を加へ十方の諸仏・皆法華經の座にあつまりて舌を出して法華經
もんじ の文字は一字なりとも妄語もうご なるまじきよし

助成をそへ給へり、譬えば大王と后と長者等の一味同心に約束をなせるが

如し、若し法華經の一字をも唱えん男女等・十惡・五逆・四重等の無量の

重業に引かれて惡道におつるならば日月は東より出でさせ給はぬ事はあり

とも・大地は反覆する事はありとも・大海の潮はみちひぬ事はありとも、

破たる石は合うとも江河の水は大海に入らず

とも・法華經を信じたる女人の世間の罪に引かれて惡道に墮つる事はある

べからず、若し法華經を信じたる女人・物をねたむ故・腹のあしきゆへ・

食欲の深きゆへななどに引れて惡道に墮つるならば・釈迦如来・多宝仏・

十方の

諸仏・無量曠劫より・このかた持ち來り給へる不妄語戒忽に破れて調達が

虚誑罪にも勝れ瞿伽利が大妄語にも超えたらん争か・しかるべきや。

法華經を持つ人・惡しく有りがたし、但し一生が間二惡をも犯さず・五戒

・八戒・十戒・十善戒・二百五十戒・五百戒・無量の戒を持ち・一切經をそらに浮べ・一切の諸仏・菩薩を供養し無量の善根をつませ給うとも、法華經計りを御信用なく又御信用はありとも諸經・諸仏にも並べて思し食し・又並べて思し食さずとも他の善根をば隙なく行じ

て時時・法華經を行じ・法華經を用ひざる謗法の念仏者なんどにも語らひをなし、法華經を末代の機に叶はずと申す者を科とも思し食さずば・一期の間・行じさせ給う処の無量の善根も忽にうせ・並に法華經の御功德も且く隠れ

させ給いて、阿鼻大城に墮ちさせ給はん事・雨の空にとどまらざるが如く・峰の石の谷へころぶが如しと思し食すべし、十惡・五逆を造れる者なれども法華經に背く事なければ往生成仏は疑なき事に侍り、一切經をたもち諸仏・菩薩を信じたる持戒の人なれども法華經を用る事無ければ惡道

に墮おつる事疑うたがいなしと見えたり。

予が愚見ぐけんをもつて近來きんらいの世間せけんを見るに多くは在家ざいけ・出家しゅつけ・誹謗ひぼうの者のみ
あり、但しただ御不審ふしんの事・法華經ほけきやうは何れの品も先に申しつる様に愚おろかならね
ども殊ことに二十八品の中に勝すぐれて・めでたきは方便品ほうべんと寿量品じゆりやうぼんにて侍り、余
品は皆枝葉みなしやうにて候なり、されば常の御所作しよさには方便品ほうべんの長行と寿量品じゆりやうぼんの長
行とを習ならひ読たまひ給そう候へ、又別に書き出

しても・あそばし候べく候、余の二十六品は身に影の随ひ玉に財の備わる
が如し、じゅうりょうほん 寿量品・ほうべん 方便品をよみ候へば自然に余品はよみ候はねども備はり
候なり、やくおうほん 薬王品・だいば 提婆品は女人の成仏往生を説かれて候品にては候へど
も提婆品は方便品の枝葉・ほうべん 薬王品は方便品と寿量品の枝葉にて候、されば
常には此の方便品・じゅうりょうほん 寿量品の二品をあそばし候て余の品をば時時・御いと
まの・ひまに・あそばすべく候。

又御消息の状に云く日ごとに三度づつ七つの文字を拝しまいらせ候事
と、なむいちじょう 南無一乗妙具と一万遍申し候事とをば日ごとにし候が、例の事に成つ
て候程は御経をばよみまいらせ候はず、はい 拝しまいらせ候事も一乗妙典と
申し候事も・そらにし候は苦しかるまじくや候らん、それも例の事の日数
の程は叶うまじくや候らん、いく日ばかりに

て・よみまいらせ候はんずる等と云云、此の段は一切の女人ごとの御不審

に常に間たまいせ給おんことい侯御事にて侍り、又古いにしえへも女人によにんの御不審ふしんに付いて申もうしたる人も多く候へども一代いちだいしきょう聖教せいぎょうにさして説かれたる処ところのなきかの故に証文しやうもん分明ふんみように出したる人もおはせず、日蓮粗にちれんぼしきよう聖教せいぎょうを見候にも酒肉しゆにく・五辛ごしん・姪事いんじなんどの様に不浄ふじようを分明ふんみように月日をさして禁めたる

様に月水をいみたる経論きやうろんを未だ勘いまへず候なり、在世ざいせの時多く盛んの女人によにん・尼ぶつぼうになり仏法ぶつぽうを行ぜしかども月水の時と申もうして嫌きらはれたる事なし、是これをもつて推おし量り侍るに月水と申もうす物は外より来れる不浄ふじようにもあらず、只女人ただによにんのくせへ癖くせかたわ生死しやうじの種を継ぐべき理にや、又長病ながわづらいの様なる物なり例せば屎尿しにやうなどは人の身より出れども能く浄くなしぬれば別にいみもなし是体これていに侍る事か。

されば印度いんと・戸那しななんども・いたくいむよしも聞えず、但し日本国ただにほんこくは神国しんこくなり此の国の習として仏・菩薩ぼさつの垂迹すいじやく不思議ふしぎに経論きやうろんにあひにぬ事も

多く侍るに・是をそむけば現に当罰あり、委細に経論を勘へ見るに仏法の
中に随方毘尼と申す戒の法門は是に当れり、此の戒の心はいたう事かけざ
る事をば少少仏教にたがふとも其の国の風俗に違うべからざるよし仏一つ
の戒を説き給へり、此の由を知ざる智者共神は鬼神なれば敬ふべからずな
んど申す

強義（い）を申もうして多くの檀那（だんな）を損ずる事ありと見えて候なり、若し然（しか）らば此の
国の明神（みょうじん）・多分（たぶん）は此の月水をいませ給たまへり、生を此の国にうけん人人（ひとびと）は
大に忌み給おおいうべきか、但し女人（にょにん）の日の所作（しよさ）は苦しかるべからずと覚え候おほか、
元より法華經（ほけきよう）を信ぜざる様なる人人（ひとびと）が經をいかにしても云いいうとめんと思
うが・さすがに・ただちに經を捨てよとは
云いいえずして、身の不浄（ふじよう）なんどにつけて法華經を遠ざからしめんと思う程
に、又不浄（ふじよう）の時・此（こ）れを行ずれば經を愚（おろ）かにしまいらする・なんど・おど
して罪（つみ）を得させ候なり、此の事をば一切御心得（いっさいごころえ）候て月水の御時（おんとき）は七日まで
も其（そ）の氣（いき）の有らん程は御經をば・よませ給たまはずして暗に南無妙法蓮華經と
唱（とな）えさせ給たまい候へ、礼拝（らいはい）をも經にむかはせ
給たまはずして拜せさせ給たまうべし、又不慮（りんじゆう）に臨終（りんじゆう）なんどの近づき候（そつら）はんには魚
鳥（う）なんどを服せさせ給たまうても候（そうら）へ、よみぬべくば經をもよみ及び南無

妙法蓮華經みょうほうれんげきょうとも唱となえさせ給たまい候こべし、又月水なんどは申もうすに及び候およはず又

南無一乘妙具なむいちじょうと唱となえさせ給たまう事こと 是これ同じ事はべには侍はべれども天親菩薩てんじんぼさつ・

天台大師等てんだいだいしの唱となえさせ給たまい候こしが如ごとく・只南無妙法蓮華經ただなむみょうほうれんげきょうと唱となえさせ給たまう

べきか、是これ子細しさいありてかくの如ごとくは申もうし候こなり、
六賢あなかしこあなかしこ六賢はべ。

文永元年甲子四月十七日

日蓮にちれん 花押かおう

大学三郎殿御内御報

◆二二五 大学三郎殿御書ごしよ

建治元年七月がんねん 五十四歳御作

1203p

外道げどうには天・人・畜さんぜんどうの三善道あかを明あかし鬼道うむの有無む之これを論じこくじて地獄道そは其その

沙汰さた無し、小乗經しょうじょうきょうには六道ろくどうの因果いんがを明あかして四聖ししやうの因果いんが以ふんみて分明ふんみならず、

俱舎・成実・律の三宗はしょうじょうきょう小乗經えびように依憑して但六道を明これす是なり、
三論宗は天台宗已前にてんじく天竺より之を渡わたす八界を立ててじゅつかい十界を明あかさず、
法相宗は又天竺の宗なりてんじく天台已後にとう唐の太宗の世に之を渡わた

す、又八界を立つだいじょうな大乘為りと雖もいえど五性各別を立て無性有情は永くかくべつ成仏せ
ずと之を立つこれ殆んど外道の法に似たりげどう自他宗の歎きなり、華嚴宗・真言宗
の両宗は天台已後に之有り、華嚴宗は唐の則天皇后の御宇に之を立つ、
真言宗しんこんしゅう

は玄宗の時善無畏三藏之を渡すげんそう但し天竺に真言宗の名之無しぜんむいさんそうこれ無畏三藏・
大日經を以て宗と為すの故に猥りに天竺の宗と称するか、此の二宗共に
十界を立つただ但し天台宗已後なりてんだいしゅういこ智者大師の巧智を偷盜して自身の才能と
号するか。

仏説の如く之を勘うればぶつせつ法華經の外華嚴經・大集經・般若經・大日經・
深密經等の諸經は但じんみつ小衍相對なりしよきよう但法華經計りに限つて已今当を以て
眷属の修多羅と為す、然りと雖もけんぞく天台已前の諸師法華經等の一切の大乗經
を小衍相對を以て之を釈す、王臣の差別無く上下之を混すしよえんそうたい仏法未だ顕れず

愚癡ぐちの失とが之これ有あり、天台てんだい已い後ごに諸宗しよしゅう小衍しょうえん相對そうたいの經經きょうきょうを以もつて權實相對こんじつそうたい之これを定さだむ、天台てんだいの智これ之を盜ぬすめり、日月にちがつに背そむいて灯とう・に向むかい丘塚つねを華恒けに比ひするこれ是これなり、仏ぶつは十八界しゆら修羅しゆらは十九界てんだい天台てんだいは四智しんこん真言しんこんは五智てんだい天台てんだいは九識しんこん十識しんこん真言しんこんは十識しんこん十一識しんこん而しかるを天台てんだいの学者がくしや之をに誑惑おおわく

せられ悉ことごとく実義じつぎなりと思おもひ、「法華經ほけきやうは釈尊しゃくそんの所說しよせつにて民の万言ばんげんの如ごとく

大日經だいにちきやうは天子てんしの鳳文ほうぶんにて王の一言ひとことの如ごとし」等云云とんじく、善無畏ぜんむい三藏事さんざうじを天竺てんじくに

寄よせ法華經ほけきやうと大日經だいにちきやうと理同事勝りどうじしやうと立つ是れ一の謬言こなり、日蓮にちれんは論師ろんし・

人師にんしの添言もつばを捨てて専ら經文きやうもんを勘かんうるに大日經だいにちきやう一部六卷いちぶろく並びに供養法くやうほふの

卷・一卷・三十一品これ之を見聞けんもんするに声聞乘しやうもんと緣覺乘えんかくと大乘だいじやうの菩薩ぼさつと仏乘ぶつじやう

の四乘これ之を説そく、其その中の大乘だいじやうの菩薩乘ぼさつとは三藏教さんざうの三祇さんぎの菩薩乘ぼさつなり

仏乘ぶつじやうは実大乘じつだいじやうな

り法華經ほけきやうに及およばざるの上華嚴けこん・般若はんにやにも劣たり但あ阿含あこんと方等ほうとうとの二經ふたきやうなり、

大日經だいにちきようの極理ごくりは未だいま天台てんだいの別教べつきよう・通教つうきようの極理ごくりにも及およばざるなり。

弘法大師こうぼうだいし延暦えんりやく二十三年にゅうとうに入きちよう唐たうし大同二年きちように帰朝きちようす、三箇年けいかわじようの間けいかわじよう慧果けいかわじよう和尚けいかわじよう

に値あいて真言しんこんの秘教しんこんを学習しんこんし歸朝きちようの後じゅうじゅう十住じゅうじゅう心しん二教論にせつ之これを注しよけんして世間せけんに

流布るふす、

釈迦牟尼しゃかむに・並びならに大日經だいにちきよう二仏しよせつの所説しよれつの勝劣しやうれつ之これを定だいいちむ、第一だいいち

大日經だいにちきよう・

大日經だいにちきよう・

第二・華嚴經・第三法華經・浅きより深きに至る義なり華嚴經・法華經に

まさ

勝るとは南北の二義を取るなり又華嚴宗の義なり、南北並びに弘法大師は

むりようぎきよう

ほけきよう

ねはんぎきよう

くにな

すで

ふんみよう

けこんきよう

けこんきよう

けこんきよう

けこんきよう

無量義經・法華經・涅槃經の三經を見ざる愚人なり、仏既に分明に華嚴經

むりようぎきよう

しょうれつこれ

なん

なに

なに

なに

なに

なに

なに

なに

と無量義經との勝劣之を説く、何ぞ聖言を捨てて南北の凡謬に付かんや、

近きを以て遠きを察するに將た又大日經と法華經との勝劣之を知らず、

は

だいにちきよう

ほけきよう

しょうれつこれ

しょうれつこれ

しょうれつこれ

しょうれつこれ

大日經には四十余年の文之無く又已今当の言之を削る二乗作仏・久遠

だいにちきよう

よんじゅうよねん

これなく

いこんとう

これ

にじようさぶつ

くおん

くおん

くおん

くおん

実成之無し、法華經と大日經との勝劣之を論ぜば民と王と石と珠との

じつじようこれな

ほけきよう

だいにちきよう

しょうれつこれ

しょうれつこれ

しょうれつこれ

しょうれつこれ

しょうれつこれ

しょうれつこれ

しょうれつこれ

しょうれつこれ

勝劣高下是なり、而るに安然和尚粗之を顕す然りと雖も但だ華嚴經と

しょうれつこうげこれ

しか

あんなんわじよう

ほほこれ

あらわ

しか

いえど

た

けこんきよう

けこんきよう

けこんきよう

法華經との勝劣は之を明むるに似たれども法華・大日經の勝劣之に闇う

ほけきよう

しょうれつ

これ

あきら

ほつけ

だいにちきよう

しょうれつ

しょうれつ

しょうれつ

しょうれつ

しょうれつ

して闇と漆との如くなり、

うみし

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

慈覚大師は本伝教大師に稟くと雖も本を捨て末に付き入唐の間・真言家

じかくだいし

でんぎようだいし

う

いえど

いえど

いえど

いえど

いえど

いえど

いえど

いえど

の人人に誑惑せらるるの間又大日經と法華と理同事勝と云云、賢きに似た

ひとひと

おおく

おおく

おおく

おおく

おおく

おおく

おおく

おおく

おおく

おおく

の人人に誑惑せらるるの間又大日經と法華と理同事勝と云云、賢きに似た

の人人に誑惑せらるるの間又大日經と法華と理同事勝と云云、賢きに似た

の人人に誑惑せらるるの間又大日經と法華と理同事勝と云云、賢きに似た

の人人に誑惑せらるるの間又大日經と法華と理同事勝と云云、賢きに似た

の人人に誑惑せらるるの間又大日經と法華と理同事勝と云云、賢きに似た

の人人に誑惑せらるるの間又大日經と法華と理同事勝と云云、賢きに似た

の人人に誑惑せらるるの間又大日經と法華と理同事勝と云云、賢きに似た

の人人に誑惑せらるるの間又大日經と法華と理同事勝と云云、賢きに似た

の人人に誑惑せらるるの間又大日經と法華と理同事勝と云云、賢きに似た

の人人に誑惑せらるるの間又大日經と法華と理同事勝と云云、賢きに似た

の人人に誑惑せらるるの間又大日經と法華と理同事勝と云云、賢きに似た

の人人に誑惑せらるるの間又大日經と法華と理同事勝と云云、賢きに似た

れども但ただ善ぜん無む畏いの僻び見けんを出いでざるのみ。

而しかるに日蓮にちれん末まつ代だいに居こし粗ほ此この義ぎを疑うたがう遠ときを尊うみ近ききを賤いやみ死しせるを

上あげ生なけるを下くだす、故ゆえに当とう世せの学がく者しゃ等ら之これを用もちいず、設たい堅いく三さん帰かい五ご戒かい・
じゅうぜんかい

十じゅう善ぜん戒かい・二百五十戒・五百戒十無尽戒等の諸戒しよを持たもてる比丘・比丘尼等も

愚癡ぐちの失とがに依よつて小乘經しょうじょうきようを大乘經だいじょうきようと謂おもい権大乘經こんだいじょうきようを実大乘經じつだいじょうきようなり

と執しゅうする等の謬義みょうぎしゅつたい出来もうこす、大妄語大殺生大偷盜等の大逆罪つみの者なり、愚人ぐにん

は之これを知らずして智者ちしやと尊うむ、設たい世間せけんの諸戒しよ之これを破やぶる者なりとも堅かく

大小・権実等の經きやうを弁わえきまば世間せけんの破戒はかいは佛法ぶつぽうの持戒じかいなり、涅槃經ねはんぎやうに云いく「戒

に於おて緩かんなる者なを名なけて緩かんと為なさず乘おに於おて緩かんなる者すなわを乃すなわち名なけて緩かんと

為なす」等云云、法華經ほけきやうに云いく「是これを持戒じかいと名なく」等云云、重おもき故ゆえに之これを留とど

む、事事りやうぜん靈山りやうぜんを期こすす、恐恐きやうきやうきんげん謹言きんげん。

七月二日

日蓮にちれん 花押かおう

◆二二六

星名五郎太郎殿御返事ごへんじ

文永四年十二月

四十六歳御作

1206p

漢の明夜夢みしより迦竺しやうにん二人の聖人初めて長安のとぼそに臨みしより
いらいとう じうてい いた てんじく ぶつぼうしんたん るふ
以来唐の神武皇帝に至るまで天竺の仏法震旦に流布し、梁の代に百済国の
せいめいおう
聖明王より我が朝の人王三十代欽明の御宇に仏法初めて伝ふ、其れより
このかたいっさい きやうろんしよしゆうみなにちいき
已来一切の経論 諸宗皆日域にみてり、幸なるかな生を末法に受くるとい
へども 靈山りやうぜんのきき耳に入り身は辺土に居せりといへども大河の流れ 掌
に汲めり、但し委く尋ね見れば仏法に於て大小・権実前後のおもむきあり、
若しも

此の義に迷いぬれば邪見に住して仏法を習ふといへども還つて十悪を
まよい じゃけん ぶつぼう かえ じゆうあく

おか　ごきやく　つく　つみ　はなはだ　ここを
犯し五逆を作る罪よりも甚しきなり、爰を以て世を厭ひ道を願はん人先

ず此の義を存ずべし、例せば彼の苦岸比丘等の如し、故に大經に云く

「もし邪見なる事有らんに命終の時正に阿鼻獄に墮つべし」と云へり。

問う何を以てか邪見の失を知らん予不肖の身たりといへども随分後世を

畏れ仏法を求めんと思ふ、願くは此の義を知らん、若し邪見に住せばひる

がへして正見におもむかん、答う凡眼を以て定むべきにあらず浅智を以て

明むべきにあらず、經文を以て眼とし仏智を以て先とせん、但恐くは若し

此の義を明さば定めていかりをなし

憤りを含まん事を、さもあらばあれ仏勅を重んぜんにはしかず、其れ

世人は皆遠きを貴み近きをいやしむ但愚者の行ひなり、其れ若し非ならば

遠とも破すべし其れ若し理ならば近とも捨つべからず、人貴むとも非なら

ば何ぞ今用いん、伝え聞く彼の南三・北七の十流の学者威徳ことに勝れて

てんか そんなちよう
天下に尊重せられし事既に五百余年まで有り

しかども陳隋二代の比天台大師是を見て邪義なりと破す、天下に此の事を

聞いて大きに是をにくむ、然りといへども陳王隋帝の賢王たるに依て彼の

諸宗に天台を召し決せられ、邪正をあきらめて前五百年の邪義を改め

みなことごとだいし
皆悉く大師に帰す。

又我が朝の叡山の根本大師は南都北京の碩学と論じて仏法の邪正をただ

す事・皆経文をさきとせり、今当世の道俗貴賤皆人をあがめて法を用いず

心を師として経によらず、之に依て・或は念仏権教を以て大乘妙典をな

げすて・或は真言の邪義を以て一実の正法を謗す、是等の類豈大乘誹謗

のやからに非ずや、若し経文の如くならば争か那落の苦みを受けざらんや、

之に依て其の流をくむ人もかくの如くなるべし、疑つて云く念仏・真言

は是れ

・或は権・或は邪義又行者・或は邪見・或は謗法なりと此の事甚だ以て

不審なり、其の故は弘法大師は是れ金剛薩・の化現第三地の菩薩なり、真言

は是れ最極甚深の秘密なり、又善導和尚は西土の教主弥陀如来の化身なり、

法然上人は大勢至菩薩の化身なりかくの如きの上人を豈に邪見の人と云

うべきや、答えて云く此の事本より私の語を以

て是を難ずべからず經文を先として是をただすべきなり、真言の教は最極

の秘密なりと云うは三部經の中に於て蘇悉地經を以て王とすと見えたり、

全く諸の如來の法の中に於て第一なりと云う事を見ず、凡そ佛法と云うは

善惡の人をゑらばず皆仏になすを以て最第一に定むべし、是れ程の理をば

何なる人なりとも知るべきことなり、若し

此の義に依らば經と經とを合せて是を×すべし、今法華經には二乗成仏あ

り真言經には之無しあまつさへ・あながちに是をきらへり、法華經には

女人成仏之有り真言經にはすべて是なし、法華經には惡人の成仏之有り

真言經には全くなし、何を以てか法華經に勝れたりと云うべき、又若し

其の瑞相を論ぜば法華には六瑞あり、所謂

雨華地動し白毫相の光り上は有頂を極め下は阿鼻獄を照せる是なり、又

多^た宝^{ほう}の塔^{だい}大^{だい}地^ちより出^でて分^{ぶん}身^{しん}の諸^{しよ}仏^{ぶつ}・十^{じゆ}方^{つぽう}より来^くる、しかのみならず上^{じやう}行^{ぎやう}
等^ぼの菩^さ薩^つの六^{ろく}万^{まん}恒^{こう}沙^{しゃ}五^ご万^{まん}四^し万^{まん}三^{さん}万^{まん}乃^{ない}至^し一^{いつ}恒^{こう}沙^{しゃ}半^{はん}恒^{こう}沙^{しゃ}等^だ大^{だい}地^ちよりわきいでし
事^い此^ぎの威^い儀^ぎ不^ふ思^し議^ぎを論^{ろん}ぜば何^{なん}を以^{もつ}て真^{しん}言^{ごん}・法^ほ華^けにまされりと云^いわん、此^{これ}等^ら
の事^{くわ}委^しく^くのぶるにいとまあらず・はづかに大^{たい}海^{かい}の一^{いつ}滴^{だつ}を出^{いだ}す。

爰こゝに菩提心論と云う一卷の文あり竜猛菩薩りゅうもうぼさつの造と号す、此の書に云く

「唯真言法ただしんごんの中に即身成仏そくしんじようぶつす故に是れ三摩地の法を説く諸教しよきようの中に於て

闕かいて書るさず」と云えり、此の語ことばは大に不審なるに依て經文きやうもんに就てこ

れを見るに即身成仏そくしんじようぶつの語ことばは有れども即身成仏そくしんじようぶつの人全くなし、たとひあり

とも法華經の中に即身成仏そくしんじようぶつあらば諸教しよきようの中にをい

てかいて而もかかずと云うべからず此の事甚だ以て不可ふかなり、但し此の

書は全く竜猛りゅうもうの作にあらず委むねき旨は別に有るべし、設たとひ竜猛菩薩の造な

りともあやまりなり、故に大論に一代いちだいをのぶる肝要かんようとして「般若はん若にやは秘密ひみつに

あらず二乗作仏にじようさぶつなし法華ほっけは是秘密ひみつなり二乗作仏にじようさぶつあり」と云えり、又云く

「二乗作仏にじようさぶつあるは是秘密ひみつ二乗作仏にじようさぶつなきは是顯教けんきやう」と云えり、若し菩提心論ぼだいしんろん

の語ことばの如くならば別しては竜樹りゅうじゆの大論だいろんにそむき総じては諸仏出世しよぶつしゆつせの本意ほんい

・ 一大事いちだいじの

因縁いんねんをやぶるにあらずや、今竜樹りゆうじゆ・天親てんじん等は皆釈尊みなしゃくそんの説教せつぎやうを弘ひろめんがため
為ために世に出ず、付法蔵ふほうぞう二十四人の其その一なり何ぞ此なんくの如ごとき妄説もうせつをなさん
や、彼の真言しんごんは是これ般若經はんになぎやうにも劣おとれり何いかに況ほつや法華ほつに並なべんや、爾しかるに
弘法こうぼうの秘蔵宝鑰ひそうほうやくに真言しんごんに一代いちだいを摂せつするとして法華ほつを第三番くだに下くだし、あまつ
さへ戲論けろんなりと云えり、謹つしんで法華經ほけきやうを披ひらきたるに諸もろの如來しよれつの所説しよせつの中に
第一だいいちなりと云えり、又已今当いこんとうの三説さんに勝すぐれたりと見えたり、又藥王やくおうの十喻じゅうゆ
の中に法華ほつ

を大海たいかいにたとへ日輪にちりんにたとへ須弥山しゆみせんにたとへたり、若もし此この義ぎに依よらば深
き事なん何ぞ海なんにすぎん・明あきらかなる事なん何ぞ日輪にちりんに勝すぐれん高き事なん何ぞ須弥山しゆみせんに越
ゆる事た有えらん、喩たとを以もつて知しんぬべし何を以もつてか法華ほつに勝すぐれたりと云はんや、
大日經等だいにちぎやうに全く此この義ぎなし但己おのが見まに任ませて永ふつく仏意ぶつゐに背そむく、妙樂大師みょうらくだいし
曰いわく「請まなこう眼有いしつらん者は委悉これに之これを

尋ねよ」と云へり、法華經を指て華嚴に劣れりと云うは豈眼ぬけたるもの
にあらずや、又大經に云く「若し仏の正法を誹謗する者あらん正に其の
舌を断べし」と、嗚呼誹謗の舌は世世に於て物云うことなく邪見の眼は生
生にぬけて見ることに無らん加之らず「若し人信ぜずして此の經を毀謗せ
ば乃至其の人命終えて阿鼻獄に入らん」の文の如くならば定めて無間・
大城に堕ちて無量億劫のくるしみを受けん、善導・法然も是に例して知ん
ぬべし、

誰か智慧有らん人・此の謗法の流を汲んで共に阿鼻の焰にやかれん、
行者能く畏るべし此れは是れ大邪見の輩なり、所以に如来誠諦の金言を
按ずるに云く「我が正法をやぶらん事は譬えば獵師の身に袈裟をかけたる
が如し、或は須陀・斯那含阿那含阿羅漢・辟支仏及び仏の色身を現じて
我が正法を壊らん」といへり。

今・此の善導・法然等は種種の威を現じて愚癡の道俗をたぶらかし如来
の正法を滅す、就中彼の真言等の流れ偏に現在を以て旨とす、所謂畜類
を本尊として男女の愛法を祈り莊園等の望をいのる、是くの如き少分のし
るしを以て奇特とす、若し是を以て勝れたりといはば彼の月氏の外道等に
はすぎじ、彼の阿竭多仙人は十二年の間・恒河の水を耳にただへたりき、
又耆菟仙人の四大海を一日の中にすひほし、☆留外道は八百年の間石とな
る豈是

にすぎたらんや、又瞿曇仙人が十二年の程釈身と成り説法せし、弘法が刹那

の程にびるさな毘盧那の身と成りし、其の威徳を論ぜば如何、若し彼の變化のし

るしを信ぜば即ち外道を信ずべし当に知るべし彼れ威徳ありといへども猶

阿鼻あびの炎をまぬがれず、況やはづかの變化にをいてをや況や大乘誹謗にを

いてをや、是一切衆生の惡知識

なり近付くべからず畏る可し畏る可し、仏の曰く「惡象等に於ては畏る

心なかれ惡知識に於ては畏る心をなせ、何を以ての故に惡象は但身をや

ぶり意をやぶらず惡知識は二共にやぶる故に、此の惡象等は但一身をやぶ

る惡知識は無量の身無量の意をやぶる、惡象等は但不淨の臭き身をやぶる

惡知識は淨身及び淨心をやぶる、惡象は但肉身をやぶる惡知識は法身を

やぶる、惡象の為にころされては三惡に至らず惡知識の為に殺されたるは

必ず三惡に至る、此の惡象は但身の為のあだなり、惡知識は善法の為にあ

だなり」と、故に畏る可きはやくじや大毒蛇きじん惡鬼神こうほうぜんどうよりも弘法善導・法然等の流のあくちしき惡知識おそを畏るべし、略してじゃけん邪見のとが失を明すことおわ畢んぬ。

此の使あまりに急ぎ候ほどにとりあへぬさまにかたはしばかりを申し候、
此の後又便宜に委くびんぎ経釈くわしを見調べてかくべく候、あなかしこあなかしこ穴賢穴賢、もつ外見ある
べからず候若命つれなく候はば仰せの如く明年の秋下り候て且つ申すべ

く候、きょうきよう
恐恐。おそおそ

十二月五日

にちれんかおう
日蓮花押

星名五郎太郎殿御返事
ごへんじ

◆二二七

大豆御書
ごしよ

ぶんえい
文永七年十月 四十九歳御作

12

10p

大豆一石かしこまつて拝領し畢んぬ法華經ほけきようの御宝前ほうぜんに申し上候もう、一・の
水たいかいを大海たいかいになげぬれば三災さんさいにも失せず一華いつけを五淨ごじやうによせぬれば劫火ごうかにもし
ばまず、一豆ひとまめを法華經ほけきようになげぬれば法界ほっかいみな蓮れんなり、
恐惶きようかう謹言きんげん。

十月二十三日

にちれん
日蓮

かおう
花押

御所御返事ごへんじ

◆二二八

寿量品得意抄じゅうりょうほん とくいしやう

文永八年四月 五十歳御作ぶんえい

1210p

きようしゅしゃくそんじゅうりょうほん
教主釈尊 寿量品を説き給うに爾前・迹門のききをあげて云く「一切いっさい

せけん てんにんおよ あしゅら みな
世間の天人及び阿修羅は皆今の釈迦牟尼仏は釈氏の宮を出でて伽耶城を去
ること遠からず道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提を得たりと謂えり」云云、
あのくたらさんみやくさんぼだい おも

けこんきやう
此の文の意は初め華嚴經より終り法華經安樂行品に至るまで一切の仏の
おんでし ぼさつ ところ
御弟子大菩薩等の知る処の思いの心中をあげ

にぜん
たり、爾前の經に二つの失あり、一には「行布を存する故に仍未だ権を開

せず」と申^{もう}して迹門方便品の十如是^{しやくもんほうべん}の一念三千開權顯実二乗作仏の法門^こを
説かざる過なり、二には「始成^{しじよう}を言う故^{ゆえ}に尚未^{なおいま}だ迹を發わず」と申^{もう}して

くおんじつしょう

じゅうりょうほん

久遠実成の寿量品を説かざる過なり、此の二つの大法は一代聖教の

こうじついつさいきょう

綱骨一切経の心髓なり、迹門には二乗作仏を説いて四十余年の二つの失

しやくもん

にじょうさぶつ

よんじゅうよねん

とが

一つを脱したり、然りと雖も未だ寿量品を説かざれば実の一念三千もあら

しか

いえどいま

じゅうりょうほん

いちねんさんぜん

にじょうさぶつ

はれず二乗作仏も定まらず、水にやどる月の如く根無し草の浪の上に浮べ

ごと

るに異ならず、又云く「然るに善男子・我実に成仏してより已来無量無辺

いわ

しか

ぜんなんし

じょうぶつ

このかたむりようむへん

せんまん

なゆた

百千万億那由佗劫」等云云、此の文の心は華嚴経の始成正覚と申して始て

せんまん

なゆた

せんなんし

じょうぶつ

このかたむりようむへん

仏になると説き

と

たま あこんきよう

しよじょうどうじょうみようきよう

しざぶつじゆだいしつきよう

だいにちきよう

給ふ阿含経の初成道 浄名経 の始坐仏樹大集経の始十六年大日経の

がしやくびどうじょうにんのうきよう

我昔坐道場 仁王経の二十九年、無量義経の我先道場法華経方便品の

どうじょうほけきようほうべん

がしざどうじょう

我始坐道場等を一言に大虚妄なりと打破る文なり、本門寿量品に至って

ほんもんじゅうりょうほん

しじょうしょうかく

始成正覚やぶるれば四教の果やぶれぬれば四教の因やぶれ

しきよう

しきよう

しきよう

ぬ、因とは修行弟子の位なり、爾前・迹門の因果を

しゆぎようでし

にぜん

しやくもん

いんが

打破ほんもんつて本門ほんもんの十界じゅうかい因果いんがをときあらはす是これ則すなわち本因ほんいん・本果ほんがの法門ほうもんなり、

九界むしも無始ぶっかいの仏界ぶつがいに具むしし仏界ぶつがいも無始むしの九界むしにそなへて実じゅうかいの十界互具じゅうかいぐ・

ひやっかいせんによ

いちねんさんぜん

百界千如いちねんさんぜん・一念三千なるべし、かうしてかへてみるときは華嚴經けこんきょうの台上

るしやな

あこんきょう

じようろく

しやかほうとう

はんにやこんこうみようきよう

あみだ

盧舎那・阿含經の丈六の小釈迦方等・般若・金光明經・阿弥陀經・

だいにちきよう

こんぶつ

大日經等の權仏等は此の壽量品の仏の天月のしばらくかげを

だいしよう

大小のうつはものに浮べ給うを、諸宗の智者学匠等は近くは自宗にまど

ほけきよう

じゅうようほん

ひ遠くは法華經の壽量品を知らず水中の月に実月のおもひをなして・或は

ほけきよう

じゅうようほん

入つて取らんと・おもひ・或は繩をつけてつなぎとどめんとす、此れを

てんだいだいししやく

いわ

天台大師釈して云く「天月を識らずして但池月を觀ず」と、心は、爾前・

しやくもん

迹門に執着する者はそらの月をしらずして但池の

月をのぞみ見るが如くなりと釈せられたり、又僧祇律の文に五百の×山よ

り出でて水にやどれる月をみて入つてとらんとしけるが実には無き水月な

い

れば月とられずして水に落ち入つて×は死にけり、×とは今の提婆達多・
六群比丘等なりとあかし給へり。たま

いっさいきよう

一切経の中に此の寿量品ましまさずは天に日月無く国に大王なく山海

じゅうりようぼん

にちがつなく

だいおう

に玉なく人にたましゐ無からんがごとし、されば寿量品なくしては一切経

じゅうりようぼん

いっさいきよう

いたづらごとなるべし、根無き草はひさしからず・みなもとなき河は遠か
ら

ず親無き子は人にいやしまる、所詮しよせん寿量品じゆりようぽんの肝心かんじん南無妙法蓮華經こそ
じゅつぽうさんぜ　しよぶつ
十方三世の諸仏の母にて御坐し候へ、恐恐謹言。
きようきようきんげん

四月十七日

日蓮にちれん

花押かおう

◆二二九

五人土籠御書ごしよ

文永八年十月　五十歳御作　於

相模依智作さがみえち

与日朗・日心・坂部入道・伊沢
にゅういづ
入道・得業寺

五人御中参おんちゆう

日蓮にちれん

せんあくてご房をばつけさせ給へ、又四郎奴しらうめが一人あらんするがふ
たま

びんに候へば申す。^{もう}

今月七日さどの国へまかるなり、各各は法華經一部づつあそばして候へば我が身並びに父母・兄弟・存亡等に回向しまし申し候らん、今夜のかんずるにつけていよいよ我が身より心くるしさ申すばかりなし、ろうをいさせ給いなば明年のはるかならずきたり給えみみへまいらすべし、せうどのの但一人あるやつをつけよかしとをもう心心なしとをもう人・一人もなければしぬまで各各御はぢなり。

又大進阿闍梨はこれにさたすべき事かたがたあり、又をのの御身上をもみはてせんが・れうにとどめをくなり、くはしくは申し候わんずらん、^{きようきようきんげん}恐恐謹言。

十月三日

にちれんかおう
日蓮花押

五人御中
おんちゅう

◆二三〇

土籠御書ごしよ

文永八年十月

与日郎

12

13p

日蓮にちれんは明日・佐渡さどの国へまかるなり、今夜のさむきに付けても・ろうの
うちのありさま思いやられて・いたはしくこそ候へそうら、あはれ殿は法華經一
部を色心二法共にあそばしたる御身なれば・父母・六親・一切衆生をも
たすけ

給うべき御身おんみなり、法華經を余人のよみ候は口はかり・ことばはかりは・
よめども心はよまず・心はよめども身によまず、色心二法共にあそばされ
たるこそ貴く候へそうら、天諸童子しよどうじ・以為給使きゅうじ・刀杖不加毒不能害と説かれて
候へば別べちの事はあるべからず、籠かこをばし出でさせ給たまい候はば・とくとく・

きたり給へ、見たてまつり見えたてまつらん、
恐恐謹言。

ぶんえい
文永八年辛未十月九日
にちれんかおう
日蓮花押

筑後殿

◆二三一

しようにんごしよ
日妙聖人御書

ぶんえい
文永九年五月
五十一歳

1213p

にょらい
御作過去に樂法梵志と申す者ありき、十二年の間・多くの国をめぐりて
きようぼう
如来の教法を求む、時に総て仏法僧の三宝一つもなし、此の梵志の意は渴
ぶつぼう
して水をもとめ飢えて食をもとむるがごとく仏法を尋ね給いき、時に婆羅門
たず
あり求めて云く我れ聖教を一偈持てり若し実に仏法を願はば当にあたふ
しいうきよう
いわけ
しょうきよう
いちげ
たも
も
ぶつぼう
ぶつぼう
まさ

べし、梵志答えて云くいわしかなり、婆羅門ばらもんの云くいわ実に志しつみだし あらば皮をはいで
紙とし・骨をくだいて筆とし・髓をくだいて墨とし・血をいだして水とし
て書かんと云

はば仏の偈げを説かん、時に此の・梵志よんし悦びをなして彼が申もうすごとくして皮
をはいで乾ほして紙とし乃至ないし一言をもたがへず、時に婆羅門ばらもん・忽然こつねんとして失
ぬ、此の梵志・天にあふぎ・地にふす、仏陀ぶつだこ此れを感じて下「万より涌出ゆじゅつ
て・説て云くいわ「如法は応に修行まざしゆぎようすべし非法ひほうは行ずべからず今世も若しは後世ごしやう
・法を行ずる者は安穩あんのんなり」等云云、此の梵志・須臾しゆゆに仏になる・此れは
二十字なり、昔釈迦菩薩しやかばさつ・轉輪王てんりんおうたりし時き「夫生輒死此滅為樂ちやうしいうらく」の八字
を尊たまたび給ゆえう故に身

をかへて千燈にともすして此の八字を供養くようし給たまい人をすすめて石壁・要路
に・かきつけて見る人をして菩提心ぼだいしんをおこさしむ、此の光明こうみやう・とう利天に
至いたる天の帝釈たいしやくなら並びに諸天の燈しよてんとなり給たまいき。

昔釈迦菩薩しやかばさつ・仏法を求め給たまいき、癩人らいにんあり此の人にむかつて我れ正法しやうほうを
持たもてり其その字・二十なり我が癩病をさすりいだきねぶり日に兩三斤の肉を

あたへば説くべしと云う、彼が申すごとくして二十字を得て仏になり給う、
所謂「如来は涅槃を・を証し永く生死を断じ給う、若し至心に・聴くこと
有らば当にに無量の樂を得べし」等云云。

昔雪山童子と申す人ありき、雪山と申す山にして外道の法を通達せしか

ども・いまだ仏法をきかず、時に大鬼神ありき説いて云く「諸行無常是

生滅法」等云云、只八字計りを説いて後をとかず時に雪山童子・此の八字

を得て悦きはまなければども半なる如意珠を得たるがごとく華さき菓ならざ

るに・にたり、残の八字を。きかんと申す、

時に大鬼神の云、我れ数日が間・飢えて正念乱るゆへに後の八字をときが

たし食をあたへよと云う、童子問うて云く何をか食与る、鬼答えて云く我

は人のあたたかなる血肉なり、我れ飛行自在にして須臾の間に四天下を回

つて尋ぬれどもあたたかなる血肉得がし、人をば天守り給う故に失なけれ

ば殺害する事かたし等云云、童子

の云く我が身を布施として彼の八字を習い伝えんと云云、鬼神の云く智慧

はなはだ

甚だ賢し我をや・すかさずらん、童子答えて云く瓦礫に金銀をかへん

に是をかえぎるべしや我れ徒に此の山にして・死しなば鴟梟虎狼に食はれ

いちぶん

て一分の功德なかるべし、後の八字にかえなば糞を飯にかふるがごとし、

鬼の云く我いまだ信ぜず、童子の云く証人

あり過去の仏も・たて給いし大梵天王・釈提桓因・日月・四天も証人にたち給うべし、此の鬼神後の偈をとかと申す、童子身にきたる鹿の皮を・ぬいで座にしき踞跪合掌して此の座につき給へと請す、大鬼神・此の座について説て云く「生滅滅已・寂滅為樂」等云云、此の偈を習ひ学して若しは木・若しは石等に書き付けて身を大鬼神の□になげいれ給う、彼の童子は今の釈尊☆☆彼の鬼神は今の帝釈なり。

薬王菩薩は・法華經の御前に臂を七万二千歳が間ともし給い、不輕菩薩は多年が間・二十四字の故に無量無辺の四衆に罵詈・毀辱・杖木・瓦石・而打擲之せられ給いき、所謂二十四字と申すは「我深く汝等を敬う敢て輕慢せず所以は好ん汝等皆菩薩の道を行じて当に作仏することを得べし」等云云、かの不輕菩薩は今の教主釈尊なり、昔の須頭檀王は妙法蓮華經の五字の為に千歳が間・阿私仙人にせめつかはれ身を床となさせて給いて

今の釈尊と

なり給う。たま

然るに妙法蓮華經は八卷なり・八巻を読めば十六巻を読むなるべし、

釈迦・多宝の二仏の經なる故へ、十六巻は無量無辺の巻軸なり、十方の

諸仏の証明ある故に一字は二字なり釈迦・多宝の二仏の字なる故へ・一

字は無量の字なり十方の諸仏の証明の御經なる故に、譬えば如意宝珠の

玉は一珠なれども二珠乃至無量珠の財をふらすこと・

これをなじ・法華經の文字は一字は一の宝・無量の字は無量の宝珠なり、

妙の一字は二つの舌まします釈迦・多宝の御舌なり、この二仏の御舌は八葉

の蓮華なり、この重なる蓮華の上に宝珠あり妙の一字なり。

此妙の珠は昔釈迦如来の檀波羅密と申して身をうえたる虎にかひし功德

・鳩にかひし功德・戸羅波羅密と申して須陀摩王として・そらごとせざり

し功德等、忍辱仙人として・歌梨王に身をまかせし功德・能施太子・
尚闍梨仙人等の六度の功德を妙の一字にをさめ給いて末代悪世の我等衆生
に一善も修せざれども六度万行を満足する功德をあたえ給う、今此三界・
皆是我有・其中衆生・悉是吾子これなり、我等具縛の凡夫忽に教主釈尊
と功德ひとし彼

の功德くどくを全体ぜんたい受け取る故なり、經に云く「如我等無為」等云々、法華經を心得こころうるものは釈尊しゃくそんと齊等さいとうなりと申す文なり、譬たとえば父母和合して子をうむ子の身は全体ぜんたい父母ふぼの身なり誰か是これを争あらそうべき、牛王の子は牛王なりいま獅子王ししおうとならず、獅子王の子は獅子王となる・いまだ天王・天王よならず、今法華經の行者は其中衆生悉是吾子と申して教主釈尊きやうしやくそんの御子なり教主きやうしやくそん釈尊しゃくそんのごとく法王ほうおうとならん事・難なんかるべからず、但し不孝ふこうの者は父母ふぼの跡あとをつがず

堯王ぎやうおうには丹朱たんしゆと云う太子たいしあり舜王しゆんおうには商均しょうきんと申す王子みこあり、二人共に不孝ふこうの者なれば父の王にすてられて現身げんしんに民となる、重華ちやうかと禹うとは共に民の子なり・孝養かうようの心ふかかりしかば堯ぎやうしゆん舜の二王・召して位をゆづり給たまひき、民の身たちま・忽たちまち玉体たまにならせ給たまひき、民の現身げんしんに王となると凡夫ほんぷの忽たちまち仙せんとなると同じ事なるべし、一念三千の肝心かんじんと申すはこれなり、なをいか

にとしてか此功徳くどくをばうべきぞ、樂法梵志ぎやうぼうほんじ・雪山童子等せっせんどうじのごとく皮をはぐべきか・身をなぐ

べきか臂ひじをやくべきか等云云、章安大師云く「取捨宜しきを得て一向いつうにす

べからず」等これなり、正法しょうぼうを修しゅうして仏になる行は時によるべし、日本国にほんこく

に紙なくば皮をはぐべし、日本国にほんこくに法華經ほけきやうなくて知れる鬼神きじん一人出来しゅつたいせば

身をなぐべし、日本国にほんこくに油なくば臂ひじをも・ともすべし、あつき紙・国に

充滿じゅうまんせり皮を・はいで・なにかせん、然しかるに玄奘げんじやうは西天さいてんに法を求めて十

七年じゅうまん・十万里じゅうまんにいたれり、伝教御人唐但二年でんぎやうなり波濤はとう三千里さんぜんをへだてた

り。

此等これらは男子なんしなり・上古じやうこなり・賢人けんじんなり・聖人しょうにんなり・いまだきかず女人にょにんの

佛法ぶつぽうをもとめて千里せんりの路をわけし事を竜女りゅうにょが即身成仏そくしんじやうぶつも摩訶波闍波提まかはじやはだい

比丘尼びくにの記べつにあづかりしも、しらず権化こんげにやありけん、又在世ざいせの事な

り、男子・女人^{によにんそ}其の性本より別れたり・火はあたたかに・水はつめたし海人^{あま}
は魚をとるに・たくみなり・山人^{やまかつ}は鹿をとるに・かしこし、女人^{によにん}は物をそ
ねむに・かしこしとこそ経文^{きようもん}には・あかされて候へ^{そうら}、いまだきかず仏法^{ぶつぽう}に
・かしこしとは、女人^{によにん}

の心を清風に譬え^{たと}たり風はつなぐとも・とりがたきは女人^{によにん}の心なり、女人^{によにん}
の心をば水にゑがくに譬え^{たと}たり、水面には文字^{もんじ}とどまらざるゆへなり、女人^{によにん}
をばおう人にたとへたり、・或時^{ある}は実なり・或時^{ある}は虚なり、女人^{によにん}をば河に
譬え^{たと}

たり・一切いっさいまがられる・ゆへなり、而しかるに法華經は・正直捨方便等・

かいぜしんじつ

皆是眞実等・質直意柔軟等・柔和質直者等と申もうして正直しやうじきなる事・弓の弦

のはれるがごとく・墨のなはを・うつがごとくなる者の信じまいらする御

経なり、糞を梅檀せんたと申もうすとも梅檀の香なし、妄語もうごの者を不妄語もうごと申もうすとも

不妄語もうごにはあらず、一切經は皆仏の金口の說・不妄語もうご

の御言みことばなり、然しかれども法華經に對し・まいらすれば妄語もうごのことば・椅語こごの

ごとし・惡口あくくのごとし・兩舌のごとし、此の御經こそ実語じつごの中の実語じつごにて

候へ、実語じつごの御經をば・正直しやうじきの者心得こころえ・候なり、今実語じつごの女人にょにん・にて・お

はすか当まさに知るべし須弥山しゆみせんを戴いたきて大海たいかいをわたる人を見みるとも此の女人にょにん

をば見るべからず、砂をむして飯となす人を

ば見みるとも此の女人にょにんをば見るべからず、当まさに知るべし釈迦しゃか仏・多宝たほう仏・

じゆつほうふんじん

十方分身の諸仏・上行じやうぎやう・無辺行等の大菩薩・大梵天王・帝釈たいしやく・四王等しおう

・此女人によにんをば影の身に・そうがごとく・まほり給たまうらん、日本第一にほんだいいちの法華經ほけきよう
の行者ぎようじゃの女人によにんなり、故ゆえに名を一つつけたてまつりて不輕菩薩ふぎようぼさつの義になぞら
へん・日妙聖人等しやうにん云云。

相州鎌倉より北国佐渡さどの国・其その中間ちゆうげん二千余里に及べり、山海はるか
に・へだて山は蛾蛾がが・海は濤濤とうとう・風雨ふうう・時にしたがふ事なし、山賊さんぞく・海賊かいぞく
克満せり、宿宿とまり・とまり・民の心・虎のごとし・犬のごとし、現身げんしん
に三惡道の苦をふるか、其その上当世とうせは世乱みだれ去年より謀叛むほんの者・国に充満じゅうまん
し今年二月十一日合戦、其それより今五月のすゑ・いまだ世間せけん安穩あんのんならず、
而しかれども一の幼子あり・あづくべき父も・たのもしからず・離別すでに久
し。

かた・がた筆も及ぼす心弁わきまへがたければとどめ畢おわんぬ。

ぶんえい
文永九年太歳壬 申五月二十五日
みずのえさる

にちれん
日蓮

花押 かおう

日妙聖人 しやうにん

◆二三二

乙御前御消息 おとこぜん しょうそく

建治元年八月 がんねん 五十四歳御作

1218p

漢土かんどにいまだ仏法ぶつぽうのわたり候そうらはざりし時は三皇さんこう・五帝ごてい・三王さんわう・乃至ないし
 大公望たいこうぼう・周公旦しゅうこうたん・老子ろうし・孔子こうしつくらせ給たまいて候そうらいし文ぶんを・或あるは経となづけ
 ・或あるは典等となづく、此の文を披ひらいて人に礼儀をおしへ・父母ふぼをしらしめ
 ・王臣おうしんを定めて世をおさめしかば人もしたがひ天も納受のうじゅをたれ給たまふ、此れ
 に・たがいし子をば不孝ふこうの者と申し臣おみをば逆臣とがの者として失とがにあてられし程
 に、月氏がっしより仏経ぶきようわたりし時・・或ある一類いちるいは用ふべからずと申し・或ある一類いちるいは
 用うべしと申せし程に・あら
 そひ出来しゅったいて召し合せたりしかば外典げてんの者・負けて仏弟子ぶつでし勝ちにき、其その後

は外典げてんの者と仏弟子ぶつでしを合せしかば・氷こおりの日に・とくるが如くごと・火の水に滅めつするが如くごと・まくるのみならず・なにともしなき者となりしなり、又仏經ぶつぎょう漸ようくわたり来りし程に仏經ぶきょうの中に又勝劣しょうれつ・浅深せんじん候そうらいけり、所謂いわゆる小乗經しょうじょうぎょう・大乗經だいじょうぎょう・顯經けんぎょう・密經みつぎょう・權經ごんぎょう・実經じつぎょうなり、譬たとえば一切いっさいの石は金に對すれば一切いっさいの金に劣おとれども・又金の中にも重重じゅうじゅうあり、一切いっさいの人間にんげんの金は閻浮檀金えんぶには及び候そうらはず、閻浮檀金えんぶは梵天ぼんてんの金には及びざるがごとく、一切經いっさいぎょうは金の如ごとくなれども又勝劣しょうれつ・浅深せんじんあるなり、小乗經しょうじょうぎょうと申もうす經は世間せけんの小船のごとく・わづかに人の二人・三人等は来すれども百千人は乗せず、設たとひ二人・三人等は来すれども此岸しがんにつけて彼岸ひがんへは行きがたし、又すこしの物をば入るれども大なる物をば入れがたし、大乘だいじょうと申もうすは大船なり人も十・二十人も来る上・大なる物をも・つみ・鎌倉かまくらより・つくしみちの国へもいたる。

じつきよう

もう

だいじようきよう

ちんぼう

実經と申すは又彼の大船の大乗經には・にるべくもなし、大なる珍宝

をも・つみ百千人のりて・かうらいなんどへも・わたりぬべし、一乗

いちじよう

ほけきよう

もう

かくのごと

だいばだった

もう

えんぶだいいち

あくにん

法華經と申す經も又是くの如し、提婆達多と申すは閻浮第一の大惡人なれ

ほけきよう

てんのうによらい

あじやせ

ども法華經にして天王如来となりぬ、又阿闍世王と申せしは父をころせし

あくおう

ほけきよう

つらな

いちげ

いっく

けちえん

惡王なれども法華經の座に列りて一偈・一句の結縁

衆となりぬ、竜女と申せし蛇体の女人は法華經を文殊師利菩薩説き給ひしかば仏になりぬ、其の上仏説には惡世末法と時をささせ給いて末代の男女に・をくらせ給いぬ、此れこそ唐船の如くにて侯・一乗經にてはおはしませ、されば一切經は外典に対すれば石と金との如し、又一切の大乗經・所謂華嚴經・大日經・觀經・阿弥陀經・般若經等の諸の經經を法華經に対すれば螢火と日月と華山と蟻塚との如し、經に勝劣あるのみならずだいになきよう いっさい しんこん
大日經の一切の眞言

師と法華經の行者とを合すれば水に火をあはせ露と風とを合するが如し、犬は師子をほうれば腸くさる・修羅は日輪を射奉れば頭七分に破る、一切の眞言師は犬と修羅との如く・法華經の行者は日輪と師子との如し、泳は日輪の出でざる時は堅き事金の如し、火は水のなき時はあつき事・鉄をやけるが如し、然れども夏の日にあひぬれ

ば堅泳のとけやすさ・あつき火の水にあひて・きへやすさ、一切いっさいの真言師しんごんしは気色のたうとげさ・智慧ちえのかしこげさ・日輪にちりんをみざる者の堅き泳をたのみ・水をみざる者の火をたのめるが如しごと。

とうせ　ひとびと　もうこ
当世の人人の蒙古国をみざりし時のおごりは御覧ありしやうに・かぎりもなかりしぞかし、去年こぞの十月よりは・一人も・おごる者なし、きこしめしし・やうに日蓮にちれん一人計りばかこそ申せしが・よせてだに・きたる程ならば面をあはする人も・あるべからず、但さるの犬を・をそれ・かゑるの蛇じゃを・をそるるが如ごとくなるべし、是れ偏ひとえに釈伽仏の御使おんつかいいたる法華經ほけきようの行者ぎようじやを・一切いっさいの真言師しんごんし・念仏者ねんぶつ・律僧等りつそうに・にくませて我と損じ、ことさらに天のにくまれを・かほれる国なる故ゆえに皆人みな・臆病おくびようになれるなり、譬たとえば火が水をおそれ・木が金をおぢ・雉きじが鷹たかをみて魂うしないを失ひ・ねずみが猫に・せめらるるが如ごとし、一人も・たすかる者あるべからず、

其の時は・いかがせさせ給うべき、軍には大將軍を魂とす大將軍をくし
ぬれば歩兵臆病なり。
そのとき
つわものおくびょう

女人は夫を魂とす・夫なければ女人魂なし、此の世に夫ある女人すら世
の中渡りがたふみえて侯に、魂もなくして世を渡らせ給うが・魂ある女人
にも・すぐれて心中かひがひしくおはする上・神にも心を入れ仏をもあが
めさせ
によにん
わた
しんちゆう
によにん
によにん
によにん

給へば人に勝れておはする女人なり、鎌倉に候いし時は念仏者等はさてを
き候いぬ、法華經を信ずる人人は志あるも・なきも知られ候はざりしか
ども・御勘氣を・かほりて佐渡の鳥まで流されしかば問い訪う人もなかり
しに・女人の御身として・かたがた御志ありし上・我と来り給いし事う
つつならざる不思議なり、其の上いまの事つで又申すばかりなし、定めて
神も・まほらせ給ひ十羅刹も御あはれみましますらん、法華經は女人の御
ためには暗きに・と

もしび・海に船・おそろしき所には・まほりと・なるべきよし・ちかはせ
給へり、羅什三蔵は法華經を渡し給いしかば毘沙門天王は無量の兵士をし
て葱嶺を送りしなり、道昭法師・野中にして法華經をよみしかば無量の虎
来りて守護しき、此れも又彼には・かはるべからず、地には三十六祇・天
には二十八宿まほらせ給う上・人には必ず二つの天・影の如くにそひて候、

所謂一をば同生天と云い二をば同名天と申す左右の肩にそひて人を守護す
れば、失なとが

き者をば天もあやまつ事なし・況や善人ぜんにんにおひてをや、されば妙楽大師の
たまはく「必ず心の固きに仮りて神の守り則ち強し」等云云、人の心かた
ければ神のまほり必ずつよしとこそ候へ、是は御ために申すぞ古への
御心おんこころざし申す計りなし・其よりも今一重強盛に御志あるべし、其の時
は弥弥十羅刹女の御まほりも・つよかるべしと・おぼ
いよいよじゅうしつに

すべし、例には他を引くべからず、日蓮をば日本国の上一人より下万民に
至るまで一人もなくあやまたんと・せしかども・今までかうのて候事は一
人なれども心のつよき故なるべしと・おぼすべし、一つ船に乗りぬれば船
頭のはかり事拙わるければ一同に船中の諸人損じ・又身つよき人も心かひな
ければ多くの能も無用なり、日本国には・か
むよう にほんこく

しこき人人ひとびとはあるらめども大将のはかり事つたなければ・かひなし、壱岐いぎ
・対馬つしま・九ヶ国のつはもの並に男女なんよ多く・或あるはころされ・或あるはとらはれ
・或あるは海に入り・或あるはがけよりおちしもの・いくせんまんと云う事なし、
又今度このたびよせなば先には・にるべくも・あるべからず、京と鎌倉かまくらとは但い壱岐
・対馬つしまの如くなるべし、前にしたくして・いづくへも・にげさせ給たまへ、
其の時そのときは苦し日蓮にちれんを見じ聞かじと申せし人人ひとびとも掌たなごころをあはせ法華經ほけきょうを信ず
べし、念仏者ねんぶつ・禪宗ぜんしゅうまでも

南無妙法蓮華經と申すべし、抑法華經をよくよく信したらん男女をば肩
に・になひ背に・おうべきよし經文に見えて候上・くまらゑん三蔵と申せ
し人をば木像の釈迦をわせ給いて候いしぞかし、日蓮が頭には大覺世尊か
はらせ給いぬ昔と今と一同なり、各各は日蓮が檀那なり争か仏にならせ給は
ざるべき。

いかなる男をせさせ給うとも法華經のかたきならば随ひ給うべからず、い
よいよ強盛の御志あるべし、冰は水より出でたれども水よりもすすさま
じ、青き事は藍より出でたれども・かさぬれば藍よりも色まさる、同じ
法華經にては・をはすれども志をかさぬれば・他人よりも色まさり利生
も・あるべきなり、木は火にやかるれども梅檀の木

は、やけず、火は水にけさるれども仏の涅槃の火はきえず、華は風にちれ
ども淨居の華は・しばまず・水は大旱魃に失れども黄河に入りぬれば失せ

ず、檀弥羅王と申せし悪王は月氏の僧の類を切りしに・とがなかりしかど

も・師子尊者の頸を切りし時・刀と手と共に一時に落ちにき、弗沙密多羅王

は鷄頭摩寺を焼し時・十二神の棒にかふべわ

られにき、今・日本国の人人は法華經の・かたきと・なりて身を亡ぼし国

を亡ぼしぬるなり、かう申せば日蓮が自訟なりと心えぬ人は申すなり、さ

には・あらず是を云わずば法華經の行者にはあらず、又云う事の後にあへ

ばこそ人も信ずれ、かうただ・かきをきなばこそ未来の人は智ありけりと

は・しり候はんずれ、又身輕法重・死身弘法と

のべて候ば身は輕ければ人は打ちはり悪むとも法は重ければ必ず弘まるべ

し、法華經弘まるならば死かばね還つて重くなるべし、かばね重くなるな

らば此のかばねは利生あるべし、利生あるならば今の八幡大菩薩と・いは

はるるやうに・いはうべし、其の時は日蓮を供養せる男女は武内・若宮な

んどのやうにあがめらるべしと・おぼしめ

せ、抑そもそも一人の盲目をあけて候もうもくはん功德そうらすら申もうすばかりなし、況や日本にほんこく国

の一切衆生の眼をあけて候いっさいしゅじょうはん功德そうらをや、何いかに況や一閻浮提えんぶだい・四天下してんげの

人の眼まなこのしゐたるを・あけて候そうらはんをや、法華經ほけきょうの第四いに云く「仏滅度ほとけめつどの

後に能よそく其の義を解げせんは是諸もろもろの天人てんにん・世間せけん之眼なり」等云云、法華經ほけきょうを

持つ人は一切世間の天人の眼いっさいせけんなりと説かれて

侯、日本国にほんこくの人の日蓮にちれんをあだみ侯そうらは一切世間いっさいせけんの天人てんにんの眼まなこをくじる人なり、

されば天たいもいかり日日にちに天変てんべんあり地ちもいかり月月げつに地天ちてんかさなる、天てんの

たいしやく

やかん

なら

きようしゆくそん

たまい

せっせんどうじ

帝釈たいしやくは野干やかんを敬やういて法ほふを習しゆくいしかば今の教主きようしゆく釈尊しやくそんとなり給たまひい・雪山童子せつせんどうじ

は鬼きを師しとせしかば今の三界さんがいの主しゆとなる、大聖だいせい・上人しやうにんは形かたちを摘とみて法ほふを捨すて

てざりけり、今日蓮けふにちれんおろかなりとも野干やかんと鬼き

とに劣おとるべからず、当世とうせいの人ひといみじくとも帝釈たいしやく・雪山童子せつせんどうじに勝まさるべからず、

にちれん

日蓮にちれんが身の賤せんきについて巧言ぎやうげんを捨てて侯故ゆえに国既すでに亡なびんとする・かなし

さよ、又日蓮にちれんを不便ふびんと申しぬる弟子でしどもをも・たすけがたからん事ことこそ・

なげかしくは覚え侯おぼへ。

いかなる事ことも出来侯しゆくたひはば是こゝへ御わたりあるべし見奉たてまつらん・山中さんちゆうにて共に

うえ死しにし侯そうらはん、又乙御前おとこぜんこそおとなしくなりて侯そうららめ、いかにさかし

く侯そうららん、又又申もうすべし。

八月四日

日蓮 にちれん

花押 かおう

乙御前へ おとこぜん

◆二二三三

乙御前母御書 おとこぜん ごとしよ

1222p

をとこぜんののはは

いまは法華經ほけきょうをしらせ給たまいて仏にならせ給たまうべき女人にょにんなり、かへすがへすふみものぐさき者なれども・たびたび申もうす、又御房ごぼうたちをも・ふびんにあたらせ給たまうとうけ給たまわる・申もうすばかりなし。

なによりも女房にようぼうのみとしてこれまで来りて候いし事・これまで・ながされ候いける事は・さる事にて御心おんこころざしの・あらわるべきにや・ありけんと

・ありがたくのみをばへ候、
釈迦しゃか如来にょらいの御弟子おんでしあまた・をわしし・なかに
十大弟子でし

とて十人ましまししがなかに目・連尊者そんじやと申せし人は神通第一じんつうだいいちにてをはし

き、四天下してんげと申して日月のめぐり給うところをかみすぢ一すぢきらざるに

めぐり給いきたまひ、これは・いかなるゆへぞと・たづぬれば・せんしやうに千里せんり

ありしところをかよいて仏法ぶつぽうを聴聞ちようもんせしゆへなり、又天台大師の御弟子に

章安と申せし人は万里ばんりをわけて法華經ほけきよう

をきかせ給へりたま、伝教大師は二千里せんりをすぎて止觀しかんをならい玄奘三蔵は二

十万里ばんりをゆきて般若經はんにやきようを得給へりたま、道のとをきに心ざしのあらわるるにや

かれは皆男子みななり権化こんげの人のしわざなり、今御身おんみは女人にょにんなりごんじちはし

りがたし・いかなる宿善しゆくぜんにてやはすらん、昔女人にょにんすいをとをしをのびてこ

そ・或あるは千里せんりをもたづね・石となり・木となり・鳥じやとなれる事

もあり。

十一月三日

日蓮にちれん在御判

をとごぜんののはは

をとごぜんが・いかに尼となり候いつらん、法華經ほけきょうにみやづかわせ候ほうこうをば・をとごぜんの尼は・のちさいわいなり候に○○○。

◆二三四

辨殿御消息べんどのしやうそく

文永九年七月 五十一歳御作ぶんえい

1223p

不審有らばふしん詮論じやうろん無く書き付けて一日進まいらしむべし。

此の書は随分ずいぶんの秘書なり、已前いぜんの学文の時もいまだ存ぜられざる事粗ほぼ之これを載のす、他人たにんの御聴聞ちやうもんなからん已前いぜん

に御存知有るべし、総じてはこれよりぐしていたらん人にはよりて法門御ごもん
聴聞有るべし互に師弟と為らんか、恐恐謹言。ちようもんあ たがい してい な きようきようきんげん

七月二十六日

日蓮花押にちれんかおう

辨殿・大進阿闍梨御房・三位殿べんどの あじやりごぼう

◆二三五

辨殿尼御前御書べんどの あまごぜんごしよ 文永十年九月 五十二歳御作与ぶんえい

日昭母妙一 1224p

しげければとどむ、辨殿に申す大師講を・をこなうべし・大師とてまいべんどの もう だいし
らせて候、三郎左衛門尉殿に候、御文のなかに涅槃經の後分二卷・文句おんふみ ねはんぎよう もんく
五の本末・授決集の抄の上巻等・御隨身あるべし。ほんまつ じゆけつしゅう ずいしん

貞当は十二年にやぶれぬ・将門は八年にかたふきぬ、第六天の魔王・十

軍のいくさを・をこして法華經の行者と生死海の海中にして同居穢土を

・とられじ・うばはんと・あらそう、日蓮其の身にあひあたりて大兵を・

をこして二十余年なり、日蓮一度もしりぞく心なし、しかりと・いえども

弟子等・檀那等の中に臆病のもの大体・或はをち・或は

退転の心あり、尼ごぜんの一文不通の小心に・いままで・しりぞかせ給わ

ぬ事申すばかりなし、其の上自身のつかうべきところに下人を一人つけら

れて候事定めて釈迦・多宝・十方分身の諸仏も御知見あるか、恐恐謹言

九月十九日

日蓮 花押

辨殿尼御前に申させ給へ

◆二三六

べんどの
しゅうそく
辨殿御消息

建治二年七月

五十五歳御作 与

日昭

1225p

たきわうをばいゑふくべきよし候けるとてまかるべきよし申し候へばつ
かわし候、ゑもんのたいうどののかへせにの事は大進の阿闍梨あじやりのふみに候
らん。

一 十郎入道殿じゅうろうにゅうだうの御けさ悦よろこび入つて候よしかたらせ給たまえ。

一 さぶらうざゑもんのの・このほど人をつかわして候しが、をほせ
給たまいし事あまりに・かへすがへすをぼつかなく候よし、わざと御わたりあ
りて・きこしめして・かきつかはし候べし、又さゑもんのにもかくと候
へ、かわのべどの等の四人の事はるかにうけ給たまはり候はずおぼつかなし、

かの辺になに事か候らん――に・かきつか

はせ、たびたび度度この人人ひとびとの事はことに一大事いちだいじと天をせめまいらせ候なり、さだ

めて後生ごしょうはさてをきぬ今生こんじょうにしるしあるべく候と存すべきよししたたかに

かたらせ給へ、伊東の八郎たまざるもん今はしなののかみはげんに、しに

たりしをいのりいけて念仏者等ねんぶつになるまじきよし明性房にをくりたりしが

かへりて念仏者ねんぶつ・真言師しんごんしになりて無間地獄むげんじごくに墮ぬ、のと房はげんに身かた

で候しが世間せけんのをそろしさと申しよくと申し日蓮もうをすつるのみならず・

かたきとなり候ぬ、せう房もかくの如し。

おのおのは随分ずいぶんの日蓮にちれんがかたうとなり、しかるをなづきをくだきていの

るにいままでしるしのなきは・こ

の中に心のひるがへる人の有ると・をばへ候ぞ、をもちあわぬ人をいのる

は水の上に火をたき空にいゑを・つく

るなり、此の由よしを四人にかたらせ給たまうべし、むこり国の事のあうをもつて
おぼしめせ、日蓮にちれんが失とがにはあらず、ちくご房三位そつ等をじゆうじゆうばいとまあらば
いそぎ来るべし大事だいじの法門申ほうもんもうすべしとかたらせ給たまえ、十住じゆうじゆう毘婆沙等びばしやの

ようぶん だいじょう

要文を大帖にて候と真言の表のせうそくの裏にさど房のかきて候と・そうじて・せせと・かきつけて候ものの・かるき・とりてたび候へ、紙なくして一紙に多く要事を申すなり。

七月二十一日

にちれんかおう
日蓮花押

べんどの
辨殿

◆二三七

やげん たごへん じ
弥源太殿御返事

1226p

そもそにちれん

にほんだいいち

抑日蓮は日本第一の僻人なり、其の故は皆人の父母よりもたかく主君

だいじ

よりも大事におもはれ候ところの阿弥陀仏 大日如来薬師等を御信用ある

ゆえ

さんさい

ひちなんせんたい

てんべん ちよう

故に、三災・七難先代にこえ天変地天等昔にもすぎたりと申す故に・結句

こんじよう

は今生には身をほろぼし国をそこない後生には大阿鼻地獄に墮ち給うべし

と、一日かたとき片時もたゆむ事なく・よ

ばわりし故ゆえにかかる大難だいにんにあへり、譬たとえば夏の虫の火にとびくばりねずみ

がねこのまへに出いでたるが如ごとし、是こゝに我が身を知つて用心ようじんせざる畜生ちくしょうの

如ごとくにあらずや、身命しんみょうを事失うしなふ・併しかしながら心より出ずれば僻人びやくにんなり、但ただし石

は玉をふくむ故ゆえにくだかれ鹿は皮肉の故ゆえに殺され魚はあぢはひある故ゆえにと

らるすいは羽ある故ゆえにやぶらる・女人にょにんはみめかたちよければ必ずねたまる

此の意なるべきか、日蓮にちれんは法華經ほけきょうの行者ぎやうじやなる故ゆえに三種さんしゆの強敵じやうてきあつて種種しゆじゆの

大難だいにんにあへり然しかるにかかる者の弟子でし・檀那だんなとならせ給たまう事不思議ふしぎなり定め

て子細しさい候らん相構かまえて能能よくよく御信しんじん心候

て靈山りやうぜんじやうど浄土へまいり給たまへ。

又御祈きとう☆のために御太刀同く刀あはせて二つ送り給たまはて候、此の太刀は

しかるべきかぢ作り候かと覚おぼへ候、あまくに・或あるは鬼きり・或あるはやつるぎ

異朝いちようにはかむしやうばくやが剣に争いかでかことなるべきや此これを法華經ほけきようにま

いらせ給う、殿の御もちの時は悪の刀今・仏前へまいりぬれば善の刀なるべし、譬えば鬼の道心をおこしたらんが如し、あらず不思議や、後生には此の刀をつえとたのみ給うべし、法華経は三世の諸仏発心のつえにて候ぞかし、但し日蓮をつえはしらともたのみ給うべし、けはしき山あしき道つえを・つきぬれば・たをれず、殊に手をひかれぬればまろぶ事なし、南無妙法蓮華経は死出の山にてはつえはしらとなり給へ、釈迦仏・多宝仏・上行等の四菩薩は手を取り給うべし日蓮さきに立ち候はば御迎にまいり候事もやあらんずらん、又さきに行かせ給はば日蓮必ず閻魔法王にも委く申すべく候、此の事少しもそら事あるべからず、日蓮・法華経の文の如くならば通塞の案内者なり、只一心に信心おはして靈山を期し給へ、ぜにと云うものは用にしたがつて変ずるなり、法華経も亦復是くの如し、やみには

燈となり渡りには舟となり・或は水ともなり・或は火ともなり給うなり、
若し然らば法華經は現世安穩・後生善処の御經なり。

其上日蓮は日本国の中には安州のものなり総じて彼国は天照太神のすみ

そめ給いし国なりといへりかしこにして日本国をさぐり出し給ふあはの国

御くりやなりしかも此国の一切衆生の慈父悲母なりかかるいみじき国な

れば定んで故ぞ候らんいかなる宿習にてや候らん日蓮又彼国に生れたり

第一の果報なるなり此消息の詮にあらざれば委しくはかかず但おしはかり

給うべし。

能く能く諸天にいのり申べし、信心にあかなくして所願を成就し給へ

女房にも・よく・よく・かたらせ給へ、
恐恐謹言。

二月二十一日

日蓮

花押

弥源太殿御返事^{やげんたごへんじ}

◆二三八

弥源太入道殿御返事

1228p

別の事候まじ憑み奉り候上は最後はかうと思し食し候へ、河野辺の入道殿のこひしく候に漸く後れ進らせて其のかたみと見まいらせ候はん、さるにても候へば如何が空しかるべきやさこそ覚え候へ。

但し当世は我も法華經をしりたりと人毎に申し候、時に法華經の行者はあまた候、但し法華經と申す經は転子病と申す病の様に候、転子と申すは親の様な子は少く候へども此の病は必ず伝わり候なり、例せば犬の子は母の吠を伝へ、の子は母の用を伝えて鼠を取る、日本国は六十六箇国・嶋

二つ、其の中に仏の御寺は一万一千三十

七所其の内に僧尼・或は三千・或は一万・或は一千一百・或は十人・或は

一人候へども其の源は弘法大師・慈覚大師・智証大師・此の三大師の
御弟子にて候、山の座主・東寺・御室・七大寺の検校、園城寺の長吏・伊
豆・箱根・日光・慈光等の寺寺の別当等も皆此の三大師の嫡嫡なり、此
の人人は三大師の如く読むべし、其れ此の三大師・法華經と

一切經との勝劣を読み候しには弘法大師は法華經最第三と慈覚・智証は
法華經最第二・或は戲論などこそ読み候いしか今又是くの如し。

但し日蓮が眼には僻目にてや候らん、法華經最第一皆是眞実と釈迦仏・

多宝仏・十方の諸仏は説いて証明せさせ給へり此の三大師には水火の

相違にて候、其の末を受くる人人彼の跡を繼で彼の所領の田畠を我が物と

せさせ給いぬれば何に諍はせ給うとも三大師の僻事ならば此の科遁れがた

くやおはすらんと見え候へども・日蓮は怯弱

の者にて候へばかく申す事をも人・御用いなし、されば今・日本国の人人

の我も我も経を読むといへども申^{もう}す事^{もち}用^{もち}ゆべしとも覚^{おぼ}えず候。

是はさて置き候ぬ御音信も候はねば何にと思いて候つるに御使うれしく
候、御所勞の御平愈へいゆの由うれしく候うれしく候、尚仰せを蒙こもる可く候
きようきようきんげん。
恐恐謹言。

九月十七日

日蓮にちれん

花押かおう

弥源太入道殿御返事やげんたにゅうべつごへんじ

◆二三九

弥源太入道殿御消息やげんたにゅうべつごしよく

1229p

一日の御帰路をばつかなく候つる処ところに御使悦び入つて候、御用事の御事おんこと
共は伯耆殿の御文おんふみに書かせて候、然しかるに道隆の死して身の舍利しゃりとなる由の

事、是は何とも人知らず用いまじく候へば兎角申して詮は候はず、但し仏

の以前に九十五種の外道ありき各各是を信じて仏に成ると申す、又皆人も

一同に思いて候し程に仏世に出でさせ給い

て九十五種は皆地獄に堕ちたりと説かせ給いしかば五天竺の国王・大臣等

は仏は所詮なき人なりと申す、又外道の弟子どもも我が師の上を云れて悪心

をかき候、竹杖外道と申す外道の目連尊者を殺せし事是なり、苦得外道と

申せし者を仏記して云く七日の内に死して食吐鬼と成るべしと説かせ給い

しかば外道瞋りをなす、七日の内に

食吐鬼と成りたりしかば其を押し隠して得道の人の御舍利買うべしと云い

き、其より外に不思議なる事数を知らず。

但し道隆が事は見ぬ事にて候へば如何様に候やらん、但し弘通するとこ

ろの説法は共に本権教より起りて候しを今は教外別伝と申して物にくるひ

て我と外道げどうの法と云うか、其の上建長寺けんちやうじは現げんに眼前がんぜんに見へて候、日本国にほんこくの
山寺の敵とも謂いいすべき様なれども事を御威ぎゐによせぬれば皆人みな恐れて云わ
ず、是は今生こんじやうを重しげくして後生ごじやうは輕くす

る故なりされば現身げんしんに彼の寺の故に亡国ゆえ ぼうこくすべき事当りぬ、日蓮にちれんは度度たびたび知つ

て日本にほんの道俗どうぞくの科とがを申せば是は今生こんじょうの禍後生ごしやうの福なり、但しただ道隆どうりゅうの振舞ふるまい

は日本にほんの道俗どうぞく知りて候へども上おそを畏れてこそ尊み申せ又内心ないしんは皆みなうとみ

て候らん、仏法ぶつぽうの邪正じゃせいこそ愚人ぐにんなれば知らずとも世間せけんの事は眼前がんぜんなれば知

りぬらん、又一もちは用いずとも人の骨

の舍利しゃりと成る事は易やすく知れ候事にて候、仏の舍利しゃりは火にやけず水にぬれず

金剛こんじうのかなづちにて・うてども摧くだけず、一くだきして見よかしあらやすし

あらやすし、建長寺けんちやうじは所領しよりやうを取られてまどひたる男どもの入道にゆうどうに成りて

四十五六十などの時走り入りて候が用は之これ無く道隆どうりゅうがかげにしてす

ぎぬるなり、云うに甲斐かいなく死ぬ

れば不思議ふしぎにて候をかくして暫しばらくもすぎき。

又は日蓮房にちれんが存知ほうもんの法門を人に疎ませんとこそたばかりて候らめ、あま

りの事どもなれば誑惑^{おおわく}顕われなんとす、但^{ただ}しばらくねうじて御覧ぜよ、根
露^{あらわ}れぬれば枝かれ源^{みなもと}渴^{のど}けば流^{なが}尽^{つく}くると申^{もう}す事あり、恐^{きょう}恐^{きょう}謹^{きん}言^{げん}。

こうあんがなんつちのえとら

弘安元年 戊寅 八月十一日

にちれん かおう

日蓮 花押

やげんたにゆうごう

弥源太入道殿

◆二四〇

さじき女房御返事にようぼうごへんじ

建治元年がんねん

五十四歳御作

1231p

女人にょにんは水のごとし・うつは物にしたがう・女人にょにんは矢のごとし・弓につがはさる・衆人しゅうじんはふねのごとし・かぢのまかするによるべし、しかるに女人にょにんはをとこ・ぬす人なれば女人にょにんぬす人となる・をとこ王なれば女人にょにんきさきとなる・をとこ善人ぜんにんなれば女人にょにん・仏になる、今生こんじょうのみならず後生ごしやうも・をとこによるなり、しかるに兵衛のさゑもんどのほけきやうは法華經の行者ぎやうじやなり、たとひ・いかなる事ありとも・をとこのめなれば法華經ほけきやうの女人にょにんとこそ仏は・しろしめされて供らんに・又我とこころを・をこしてほけきやう法華經の御ために御かたびらをくりたびて侯。

ほけきょう　ぎょうじや

しょうにん

もんじ

ほんぶ

法華經の行者に二人あり・聖人は皮をはいで文字をうつす・凡夫は・
ただ・ひとつきで焼かたびら・などを法華經の行者に供養すれば皮をはぐ
うちに仏をさめさせ給うなり、此の人のかたびらは法華經の六万九千三百
八十四の文字の仏にまいらせさせ給いぬれば・六万九千三百人十四のかた
びらなり、又六万九千三百八十四の仏・一一・六
万九千三百八十四の文字なれば・此のかたびらも又かくのごとし、たとへ
ばはるの野の千里ばかりに・くさのみちて候はんに・すこしの豆ばかりの
火を・くさ・ひとつにはなちたれば一時に無量無辺の火となる、此のかた
びらも又かくのごとし、ひとつのかたびら・なれども法華經の一切の文字
の仏にたてまつるべし。

くどく

ふほ

そふ

ないしむへん

しゅじょう

をよぼしてん、まして

・わが・いとをしと・をもふ・をとこは申すに及ばずと、おぼしめすべし、

おぼしめすべし。

五月二十五日

花押かおう

さじきにようぼうごへんじ女房御返事

日蓮にちれん

◆二四一

棧敷女房御返事

建治四年二月五

十七歳御作

1232p

白かたびら布一給い畢たまいおわぬ、法華經ほけきようを供養くよう申しまいらせ候に十種くやう
と申すもう十のやう候、其そのなかに衣服えぶくと申し候はなににても候へ、僧のき候
物をくやうし候、其その因縁いんねんをとかれて候には過去かこに十萬億の仏をくやうせ
る人・法華經ほけきように近づきまいらせ候とこそとかれて候へ、あらあら申すもうべく
候へども、身にいたはる事候間こまやかならず候、恐恐きようきよう謹言きんげん。

二月十七日

日蓮にちれん

花押かおう

さじきの女房御返事

◆二四二

善無畏抄 ぜんむい

建治元年五十四歳御作 がんねん

1232p

善無畏三歳は月氏烏菟奈国の仏種王の太子なり、七歳にして位に即き給う ぜんむい がっし ぶっしゅ たいし たま

十三にして国を兄に譲り出家遁世し五天竺を修行して五乗の道を極め三 このかみ ゆず しゅつけとんせい てんじく しゅぎよう きわ

学を兼ね給いき、達磨掬多と申す聖人に値い奉りて真言の諸印契一時に頓 か たまい だるまきくた もう しょうにん あ たてまつ しんごん しょいんけいいちじ とん

受し即日御灌頂なし人天の師と定まり給いき、☆足山に入りては迦葉 かんちよう にんてん けいそく かしよう

尊者の髪を剃り王城に於て雨を祈り給い そんじゃ そ おい たまい

しかば観音日輪の中より出て水瓶を以て水を灌ぎ、北天竺の金粟王の塔の かんのんにちりん すいびよう そそ てんじく こんぞく

下にして仏法を祈請せしかば文殊師利菩薩大日經の胎藏の曼荼羅を現して ぶっぼう きしょう もんじゆしりほさつだいにちきよう たいそう まんだら

授^{たま}け給^そう、其^{かいげん}の後開元四年丙辰に漢土に渡^{わた}る玄宗皇帝之^{げんそうこうていこれ}を尊^{にちがつ}むこと日月の
如^{ごと}し、又大旱魃^{かんばつ}あり皇帝勅^{こうていちよくせん}宣^{せん}を下^{くだ}す、三蔵一鉢^{さんぞういちばつ}に水^{みづ}を入^{いれ}れ暫^{しばら}く加^か持^じし給^{たま}い
しに水の中に指^{ばか}許^かりの物有^あり変^かじて竜

と成る其の色赤色なり、白氣立ち昇り鉢より竜出でて虚空に昇り忽に雨を
降す、此の如くいみじき人なれども一時に頓死して有りき、蘇生りて語つ
て云く我死する時獄卒来りて鉄の繩七筋付け鉄の杖を以て散散にさい
なみ閻魔宮に到りにき、八万聖教一字・一句も覚えず唯法華經の題名許り
忘れざりき題名を思いしに鉄の繩少し許ぬ息続いて高声に唱えて云く
今此三界・皆是我有其中衆生悉是吾子而今此処・多諸患難唯我一人能為
救護等云云、七つの鉄の繩切れ碎け十方に散す閻魔冠を傾けて南庭に下
り向い給いき、今度は命尽きずとて歸されたるなりと語り給いき、今日蓮
不審して云く善無畏三蔵は先生に十善の戒力あり五百の仏陀に仕えたり、
今生には捨て難き王位をつばきを捨てるが如く之を捨て幼少十三にして
出家し給い、月支国を廻りて諸宗を習い極め天の感を蒙り化道
の心深くして震旦国に渡りて真言の大法を弘めたり、一印一真言を結び誦す

れば過去・現在の無量の罪滅しぬらん何の科に依りて閻魔の責をば蒙り
給いけるやらん不審極り無し、善無畏三蔵真言の力を以て閻魔の責を脱れ
ずば天竺震旦日本等の諸国の真言師地獄の苦を脱る可きや、委細に此の事
を勘えたるに此の三蔵は世間の軽罪

は身に御せず諸宗並びに真言の力にて滅しぬらん、此の責は別の故無し

法華經誹謗の罪なり、大日經の義釈を見るに此の經は是れ法王の秘宝妄り

に卑賤の人に示さず、釈迦出世の四十余年に舍利弗慇懃の三請に因つて

方に為に略して妙法蓮華の義を説くが如し、今・此の本地の身又是れ

妙法蓮華最深秘処なり、故に寿量品に云く「常に靈鷲

山及び余の諸の住処に在り、乃至我が浄土は毀れざるに而も衆は焼き尽く

と見る」と、即ち此の宗瑜伽の意なるのみ、又「補処の菩薩の慇懃三請に

因つて方に為に之を説く」等云云、此の釈の心は大日經に本迹二門・開

顯一・開近顯遠かいこんけんのんの法門ほうもん有り、法華經ほけきようの本・迹二門ことの如し、此この法門ほうもんは法華經ほけきよう
 に同じけれども此この大日經だいにちきように印しんと真言しんごんと相加わりて三密相応そうおうせり、法華經ほけきよう
 は但意密許いみつばかりにて身口しんくの二密か闕けつけたれば法華經ほけきようをば略説りやくと云い大日經だいにちきようをば
 広説もうと申べす可べきなりと書かれたり、此この法門ほうもん第一だいいちの☆謗法あやまほうの根本こんぽんなり、此
 の文に二つの☆りあやま有り、又義釈ぎしゃくに云いく

「此の経横に一切の仏教を統ぶ」等云云、大日経は当分随他意の経なる

を☆りて随意跨節の経と思えり、かたがた・りたるを實義と思し食す

故に閻魔の責をば蒙りたりしか智者にて御座せし故に此の謗法を悔い還え

して法華経に翻りし故に此の責を免がるか、天台大師釈して云く「法華

は衆経を総括す乃至輕慢止まざれば舌口中

に爛る」等云云、妙樂大師云く「已今当の妙此に於て固く迷えり舌爛止

まざるは猶華報と爲す、謗法の罪苦長劫に流る」等云云、天台・妙樂の心

は法華経に勝れたる経有りと云はむ人は無間地獄に墮つ可しと書かれたり

善無畏三蔵は法華経と大日経とは理は同じけれども事の印・真言は勝れた

りと書かれたり、然るに二人の中に一人は必

悪道に墮つ可しと・をぼふる処に天台の釈は経文に分明なり、善無畏の

釈は経文に其証拠見え、其の上閻魔王の責の時・我が内証の肝心と

おほしめ だいにちきよう さんぶきよう

思食す大日経等の三部経の内の文を誦せず、法華経の文を誦して此の責を

まぬか 免れぬ、疑無く法華経に真言勝ると思う

☆を翻したるなり其の上善無畏

さんぞう おんでしふくうさんぞう ほけきよう ぎき だいにちきよう

三蔵の御弟子不空三蔵の法華経の儀軌には大日経

こんごうちきよう

・金剛頂経の両部の大日をば左右に立て法華経多宝仏をば不二の大日と

だいにち さう こん

定めて両部の大日をば左右の巨下の如くせり。

でんぎようだいし えんりやく

伝教大師は延暦二十三年の御入唐靈感寺の順 暁和尚に真言三部の

ひほう 秘法を伝う、仏滝寺の行満座主に天台止観宝珠を請け取り顕密二道の奥旨

を極め給いたる人、華嚴・三論・法相律宗の人人の自宗我慢の辺執を倒

して天台大師に帰入せる由を書かせ給いて候、依憑・集守護章・秀句なむ

ど申す書の中に善無畏・金剛智・不空等は天台宗に帰入して智者大師を

本師と仰ぐ由のせられたり、各各思えらく宗を立つる法は自宗をほめて他宗

を嫌うは常の習

を嫌うは常の習

を嫌うは常の習

を嫌うは常の習

を嫌うは常の習

を嫌うは常の習

を嫌うは常の習

を嫌うは常の習

なりと思えり、法然ほうねんなむどは又此例を引きて曇鸞どんらんの難易道なんいどう・綽しやくの聖道しょうどう・
浄土善導じやうとぜんどうが正雜しょうぞう二行の名目みょうもくを引きて天台てんだい・真言等しんごんの大法だいほうを念仏ねんぶつの方便ほうべんと
成せり、此等これらは牛跡あとに大海たいかいを入れ県の額を州に打つ者なり、世間せけんの法には
下剋上げこくじやう・背上向下そむは国土亡乱こくとぼうらんの因縁いんねんなり、仏法ぶつぽうには権小ごんしょうの經經きやうぎやうを本とし
て実經じつぎやうをあなづる、大謗法ほうぼうの因縁いんねんなり恐る可し恐る

べ
可し。

かじょう

きちそうだいし

さんろんしゅう

がんそ

ある

いちだいししゅうきよう

を五時に分け・或

嘉祥寺の吉蔵大師は三論宗の元祖・

或時は

一代聖教

を五時に分け・或

時は二蔵と判ぜり、

然りと雖も

竜樹菩薩の造の百論・中論十二門論大論を

尊んで般若經を依憑と定め給い、天台大師を

はんにやきよう

えびよう

たまひ

てんだいだいし

へんしゅう

す

たまひ

に

ちしやだいし

ぼんもつきよう

じよ

等

の疏を見て少し心とけやうやう近づきて

法門を

聴聞

智者大師の

梵網

等の疏を見て少し心とけやうやう近づきて法門を聴聞

せし程に

けつく

はんにやきようなら

ほけきよう

講ぜず

七年

に至つて天台大師に

たまい

高僧伝には

衆を散じ身を

肉橋と成

す」と書かれたり、天台大師高坐に登り給えば

き給えば

おいたてまつたま

給うて堀を越え給いき、

吉蔵大師程の人だにも

謗法を恐れ

てかくこそ仕え給いしか、

然るを真言三論・

法相等の宗宗の

人人今末末に

成りて

辺執せさせ給うは

自業自得果なるべし。

今

の世に浄土宗・

禪宗

今

の世に

浄土宗

・

禪宗

なんと申す

宗宗は

天台宗に

をとされし

真言・

今

の世に

浄土宗

・

禪宗

なんと申す

宗宗は

天台宗に

をとされし

真言・

今

の世に

浄土宗

・

禪宗

なんと申す

宗宗は

天台宗に

をとされし

真言・

今

の世に

浄土宗

・

禪宗

なんと申す

宗宗は

天台宗に

をとされし

真言・

今

の世に

浄土宗

・

禪宗

なんと申す

宗宗は

天台宗に

をとされし

真言・

今

の世に

浄土宗

・

禪宗

なんと申す

宗宗は

天台宗に

をとされし

真言・

今

の世に

浄土宗

・

禪宗

なんと申す

宗宗は

天台宗に

をとされし

真言・

今

の世に

浄土宗

・

禪宗

なんと申す

宗宗は

天台宗に

をとされし

真言・

今

の世に

浄土宗

・

禪宗

なんと申す

宗宗は

天台宗に

をとされし

真言・

今

の世に

浄土宗

・

禪宗

なんと申す

宗宗は

天台宗に

をとされし

真言・

今

の世に

浄土宗

・

禪宗

なんと申す

宗宗は

天台宗に

をとされし

真言・

今

の世に

浄土宗

・

禪宗

なんと申す

宗宗は

天台宗に

をとされし

真言・

今

の世に

浄土宗

・

禪宗

なんと申す

宗宗は

天台宗に

をとされし

真言・

今

の世に

浄土宗

・

禪宗

なんと申す

宗宗は

天台宗に

をとされし

真言・

今

の世に

浄土宗

・

禪宗

なんと申す

宗宗は

天台宗に

をとされし

真言・

今

の世に

浄土宗

・

禪宗

なんと申す

宗宗は

天台宗に

をとされし

真言・

今

の世に

浄土宗

・

禪宗

なんと申す

宗宗は

天台宗に

をとされし

真言・

今

の世に

浄土宗

・

禪宗

なんと申す

宗宗は

天台宗に

をとされし

真言・

今

の世に

浄土宗

・

禪宗

なんと申す

宗宗は

天台宗に

をとされし

真言・

今

の世に

浄土宗

・

禪宗

なんと申す

宗宗は

天台宗に

をとされし

真言・

今

の世に

浄土宗

・

禪宗

なんと申す

宗宗は

天台宗に

をとされし

真言・

今

の世に

浄土宗

・

禪宗

なんと申す

宗宗は

天台宗に

をとされし

真言・

今

の世に

浄土宗

・

禪宗

なんと申す

宗宗は

天台宗に

をとされし

真言・

今

の世に

浄土宗

・

禪宗

なんと申す

宗宗は

天台宗に

をとされし

真言・

今

の世に

浄土宗

・

禪宗

なんと申す

宗宗は

天台宗に

をとされし

真言・

今

の世に

浄土宗

・

禪宗

なんと申す

宗宗は

天台宗に

をとされし

真言・

今

の世に

浄土宗

・

禪宗

なんと申す

宗宗は

天台宗に

をとされし

真言・

今

の世に

浄土宗

・

禪宗

なんと申す

宗宗は

天台宗に

をとされし

真言・

今

の世に

浄土宗

・

けこん 華嚴等に及ぶ可からず、依経既に楞伽經・觀経等なり此等の経経は仏
しゅつせ 出世の本意にも非ず一時一会の小経なり一代聖教を判ずるに及ばず、
しか 而も彼の経経を依経として一代の聖教を聖道・浄土・難行・易行・
そうぎよう 雑行・正行に分ち教外別伝なむどののしる、譬えば民が王をしえたげ小
たいかい 河の大海を納むるが如し、かかる謗法の人師どもを信じて後生を願う人人
むげんじごくまぬがべ は無間地獄脱る可きや、然れば当世の愚者は仏には釈迦牟尼仏を本尊と定
めぬれば自然に不孝の罪脱がれ法華経を信じぬれば不慮に謗法の科を脱れ
たり。

そ 其の上女人は五障三従と申して世間出世に嫌われ一代の聖教に捨てら
おわ れ畢んぬ、唯法華経計りにこそ竜女が仏に成り諸の尼の記☆は・さづけら
れて候ぬれば一切の女人は此の経を捨てさせ給いては何の経をか持たせ
たま 給うべき、天台大師は震旦国の人・仏滅後・一千五百余年に仏の御使とし

て世に出でさせ給いき、法華經に三十卷の文を注し給い文句と申す文の第七の卷には「他經には但男に記して女に記せず」等云云、男子も余經にては仏に成らざれども且らく与えて其をば許してむ、女人に於ては一向諸經に於ては叶う可からずと書かれて候、縦令千万の經經に女人成る可しと許され為りと雖も法華經に嫌われなば何の憑か有る可きや。

きようしゅやくそん

しきようよんじゅうよねん

きようぎよう

みけんしんじつ

く

ねはんぎよう

教主釈尊我が諸經四十余年の經經を未顕真実と悔い返し涅槃經等を

とうせつ

きら

たまい

むりようぎきよう

こんせつ

ひい

ほけきよう

ば当説と嫌い給い無量義經をば今説と定め置き、三説に秀でたる法華經に

しょうじき

ほうべん

むじょうどう

せそん

のちかならずまさ

しょうじき

「正直に方便を捨て但無上道を説く世尊の法は久しくして後要当に真実

を説くべし」と

しゃくそんのべ

たまい

ほうじょうせかい

たいち

を説くべし」と釈尊宣べ給いしかば、宝浄世界の多宝仏は大地より出でさ

せ給いて

しんじつ

しょうみよう

明を加え、

じゅうほうふんじん

十方分身

の諸仏広長舌を梵天に付け給う、

しよぶつこうちようぜつ

ほんてん

たま

じゅうほうせかい

じんじゆ

しよぶつ

ぜつそう

もうち

戒の力に酬いて八葉の赤蓮華に生出させ給いき、一仏・二仏三仏・乃至十

はちよう

れんげ

いだ

たまい

いちぶつ

い

い

い

い

い

い

仏・百仏・千万億仏の四百万億那由他の世界に充滿せる仏の御舌を以て定

め置き給える女人成仏の義なり、謗法無くして此の經を持つ女人は十方

虛空に充滿せる慳貪・嫉妬・瞋恚・十惡・五逆なりとも草木の露の大風

にあえるなる可し三冬の氷の夏の日に滅するが如し、但滅し難き者は

法華經謗法の罪なり、譬えば三千大千世界の草木を薪と為すとも須弥山は

一分も損じ難し、縱令七つの日出でて百千日照すとも大海の中をばかわか

しがたし、設い八万聖教を読み大地微塵の塔婆を立て大小乗の戒行を

尽し十方世界の衆生を一子の如くに為すとも法華經謗法の罪はきゆべか

らず、我等過去・現在・未来の三世の間に仏に成らずして六道の苦を受く

るは偏に法華經謗法の罪なるべし、女人と生れて百惡身に備ふるも根本此

の經誹謗の罪より起れり。

然者此の經に値い奉らむ女人は皮をはいで紙と為し血を切りて墨と為し

骨を折りて筆と為し^な血の涙を硯の水と為して^な書き奉^{たてまつ}ると雖^{いえど}も飽^あく期あるべ
からず、何^{いか}に況^{えぶく}や衣服・金銀^{きんぎん}・牛馬^{ぎゅうば}・田畠^{でんはた}等の布施^{ふせ}を以て供養^{くよう}せむは・も
のの

かずにてかずならず。

◆二四三

妙密上人御消息しやうにん しやうそく

建治二年三月 五十五歳御作

与くわがやつ☆谷妙密

1237p

青鼻せいふ五貫文給たまひい候おわい畢おわんぬ、夫それ五戒ごかいの始はは不殺生戒ふさつしやうかい六波羅蜜ろくはらみつの始はは檀波羅蜜だんはらみつなり、十善戒じゅうぜんかい・二百五十戒にふしうかい・十重禁戒等じゅうじんの一切いっさいの諸戒しよの始めは皆不殺生戒みなふさつしやうかいなり、上大聖おんもつより下蚊虻いたに至るまで命いのちを財たからとせざるはなし、これを奪だいちへば又第一じゅういちの重罪じゅうざいなり、如来世にょらいに出いで給たまひいては生なまをあわれむを本とす、生なまをあわれむしるしには命いのちを奪だいちはず施食せじきを修しゅうするが第一だいいちの戒かいにて候しゅうなり、人に食ほどこを施ほどこすに三の功德くどくあり・一には命いのちをつぎ・二には色いろをまし・三には力さずを授さずく、命いのちをつぐは人中にんちゆう天上てんじやうに生なまれては長命かほうの果報くわほうを得え仏ほとけに成なりては法身如来ほつしんにょらいと顕あらわれ其その身虚空こくうと等ひとしし、力ちからを

授く
さす

る故に人中天上に生れては威徳の人と成りて眷属多し、仏に成りては

報身如来と顕れて蓮華の台に居し八月十五夜の月の晴天に出でたるが

如し、色をます故に人中天上に生れては三十二相を具足して端正なる事

華の如く、仏に成りては応身如来と顕れて釈迦仏の如くなるべし、夫れ

須弥山の始を尋ぬれば一塵なり大海の初は一露な

り一を重ぬれば二となり二を重ぬれば三乃至十百千万億阿僧祇の母は唯一

なるべし。

されば日本国には仏法の始まりし事は天神七代・地神五代の後人王百代

其の初めの王をば神武天皇と申す、神武より第三十代に当りて欽明天皇の

御宇に百濟国より経並びに教主釈尊の御影僧尼等を渡す、用明天皇の太子

の上宮と申せし人、仏法を読み初め法華経を漢土よりとりよせさせ給いて

疏じよを作りて弘ひろめさせ給たまいき、それより後人王三十七代孝徳天皇てんのうの御宇ぎように
観勒僧正かんろくそうじようと申もうす人新羅国しらぎより三論宗さんろんしゆう・成実宗じやうじつを渡わたす、同じき御代に道昭
と申もうす

僧漢土かんどより法相宗ほうそうしゆう・俱舍宗ぐしゃしゆうを渡わたす、同じき御代に審祥大徳しんじやうだいとく・華嚴宗けこんしゆうを渡わた
す、第四十四代・元正天皇てんのうの御宇ぎように天竺てんじくの上人しやうにん・大日経だいにちきやうを渡わたす、第四十
五代・聖武天皇しやうむてんのうの御宇ぎように鑑真和尚わじやうと申せし人漢土かんどより日本国にほんこくに律宗りつしゆうを渡わたせ
し・

ついでに天台宗の玄義・文句・円頓止観・浄名疏等を渡す、然れども
真言宗と法華宗との二宗を・ばいまだ弘め給はず、人王第五十代桓武天皇
の御代に最澄と申す小僧あり後には伝教大師と号す、此の人入唐已前に
真言宗と天台宗の二宗の章疏を十五年が間・但一人見置き給いき、後に
延暦二十三年七月に漢土に渡り・かへる年の六月に
本朝に著かせ給いて、天台・真言の二宗を七大寺の碩学数十人に授けさせ
給いき、其の後于今四百年なり、総じて日本国に仏法渡りて于今七百余年
なり、・或は弥陀の名号・或は大日の名号・或は釈迦の名号等をば一切
衆生に勧め給へる人人はおはすれども、いまだ法華經の題目・南無
妙法蓮華經と唱へよと勧めたる人なし、日本国に限ら
ず月氏等にも仏滅後・一千年の間・迦葉・阿難・馬鳴・竜樹・無著・天親
等の大論師・仏法を五天竺に弘通せしかども・漢土に仏法渡りて数百年の

間・摩騰・迦竺・法蘭・羅什三藏・南岳・天台・妙楽等・或は疏を作り

・或は經を釈せしかどもいまだ法華經の題目をば弥陀の名号の如く勧めら

れず、唯自身一人計り唱へ・或は經を講ずる時・講師計り唱る事あり、然る

に八宗・九宗等其の義まちまちなれども多分は弥陀の名号次には觀音の

名号次には釈迦仏の名号・次

には大日・薬師等の名号をば唱へ給へる高祖先徳等はおはすれども何なる

故有りてか一代諸教の肝心たる法華經の題目をば唱へざりけん、其の故を

能く能く尋ね習い給ふべし、譬えば大医の一切の病の根源薬の浅深は弁へ

たれども故なく大事の薬をつかふ事なく病に随ふが如し。

されば仏の滅後正像二千年の間は煩惱の病・輕かりければ一代第一の

良薬の妙法蓮華經の五字をば勧めざりけるか、今末法に入りぬ人毎に

重病有り阿弥陀・大日・釈迦等の輕薬にては治し難し、又月はいみじけ

れども秋にあらざれば光を惜む・花は目出けれども春にあらざれば・さか
ず、一切・時による事なり、されば正像二千年の間は題目

の流布の時に当らざるか、又仏教を弘るは仏の御使なり随つて仏の弟子

の譲りを得る事各別なり、正法千年に出でし論師像法千年に出づる人師等

は多くは小乗・権大乘・法華經の・或は迹門・或は枝葉を譲られし

人人なり、

いまだ本門の肝心たる題目を譲られし上行菩薩世に出現し給はず、此の人末法に出現して妙法蓮華經の五字を一閻浮提の中・国ごと人ごとに弘むべし、例せば当時・日本国に弥陀の名号の流布しつるが如くなるべきか。然るに日蓮は何の宗の元祖にもあらず又末葉にもあらず持戒・破戒にも闕て無戒の僧有智・無智にもはづれたる牛羊の如くなる者なり、何にしてか申し初めけん上行菩薩の出現して弘めさせ給うべき妙法蓮華經の五字を先立てねごとの様に心にもあらず南無妙法蓮華經と申し初て候し程に唱うる者なり、所詮よき事にや候らん・

又悪き事にや侍るらん我もしらず人もわきまへがたきか、但し法華經を開いて拝し奉るに此の經をば等覺の菩薩文殊・弥勒觀音普賢までも輒く一句一偈をも持つ人なし、「唯仏与仏」と説き給へり、されば華嚴經は最初の頓説円満の經なれども法慧等の四菩薩に説かせ給ふ、般若經は又華嚴經程

こそなければとうぶんも当分は最上の経ぞ

かし、然れども須菩提しゅぼだいこれを説く、但法華経計りこそ三身円満さんじんえんまんの釈迦しゃかの金口きんく

の妙説にては候なれ、されば普賢ふげん・文殊もんじゅなりとも輒たやすく一句一偈いっくいちげをも説かせ

給うべからず、何に況や末代の凡夫我等衆生は一字・二字なりとも自身じしん

は持ちがたし、諸宗しよしゅうの元祖等・法華経を読み奉れば各各其の弟子等そでしは我が

師は法華経の心を得給へりと思へり、然れ

ども詮を論ずれば慈恩大師は深密経唯識論を師として法華経をよみ、嘉祥かじょう

大師は般若経中論を師として法華経をよむ、杜順法蔵等は華嚴経十住とじゆんほうぞう

毘婆沙論を師として法華経をよみ、善無畏ぜんむい・金剛智こんこうち・不空等ふくうは大日経を師

として法華経をよむ、此等の人人は各法華経をよめりと思へども未だ一句いまだいっく

一偈もよめる人にはあらず、詮を論ずれ

ば伝教大師ことはりて云く「法華経を讀すと雖も還いえどつて法華の心を死す」

云云、例せば外道げどうは仏經ぶきようをよめども外道げどうと同じ・蝙蝠へんぷくが昼を夜と見るが如しごと、又赤き面おもての者は白き鏡も赤しと思ひ太刀に顔をうつせるもの円かなる面をほそながしと思ふに似たり。

今日蓮いまにちれんは然しからず已今当いこんとうの經文きようもんを深くまほり一經いつきようの肝心かんじんたる題目だいもくを我も唱すずへ人にも勧む、麻の中の蓬よもぎ・墨うてる

木の自体は正直しょうじきならざれども自然じねんに直ぐなるが如ごとし、経のままだに唱となうれば

まがれる心なし、当まさに知るべし仏の御心の我等が身に入らせ給たまはずば唱へ

がたきか、又それ他人たにんの弘ひろめさせ給ふたま仏法は皆師みなより習ならひ伝たまへ給へり、例

せば鎌倉かまくらの御家人等の御知行所領の地頭・或あるは一町二町なれども皆故大将

家の御恩ごおんなり、何いかに況や百町・千町・

一國・二國を知行ちぎようする人人ひとびとをや、賢人けんじんと申もうすはよき師より伝へたる人聖人しょうにん

と申もうすは師無なくくして我さと覚さとれる人なり、仏滅後・月氏がっし・漢土かんど・日本國に二

人の聖人しょうにんあり所謂天台いわゆるてんだい・伝教でんぎようの二人なり、此の二人をば聖人しょうにんとも云うべ

し又賢人けんじんとも云うべし、天台大師てんだいだいしは南岳なんがくに伝えたり是は賢人けんじんなり、道場どうじように

して自解じげ仏乗ぶつじようし給たまいぬ又聖人しょうにんなり、伝教でんぎよう

大師だいしは道邃どうずい・行滿しかんに止觀えんどんと円頓だいかいの大戒を伝へたりこれは賢人けんじんなり、入唐にゆうとう

已前いぜんに日本國にほんこくにして真言しんごん・止觀しかんの二宗を師しなくしてさとり極きわめ、天台宗てんだいしゆうの

智慧を以て六宗・七宗に勝れたりと心得給いしは是れ聖人なり、然れば外典に云く「生れながらにして之を知る者は上なりの名なり学んで之を知る者は次なりの名なり」内典に云く

「我が行師の保無し」等云云、夫れ教主釈尊は娑婆世界第一の聖人なり、天台・伝教の二人は聖賢に通ずべし、馬鳴・竜樹・無著・天親等・老子・孔子等は・或は小乗・或は権大乘・或は外典の聖賢なり、法華經の聖賢には非ず。

今日蓮は聖にも賢にも非ず持戒にも無戒にも有智にも無智も当らず、然れども法華經の題目の流布すべき後・五百歳二千二百二十余年の時に生れて近くは日本国遠くは月氏・漢土の諸宗の人人唱へ始めざる先に・南無妙法蓮華經と高声によばはりて二十余年をふる間・或は罵られ打たれ・或は疵をかうほり・或は流罪に二度死罪に一度

定められぬ、其その外ほかの大難だいな数をしらず・譬たとへば大湯に大豆を漬ひたし小水に大魚あの有あるが如ごとし、経いに云いく「而しかも此この経きやうは如來にょらいの現在げんざいにすら猶な怨おん嫉しつ多おほし況けいや滅めつ度どの後ごをや」又い云いく「一切いっさい世間せけん怨あだ多おほくして信しんじ難がたし」又い云いく「諸もろの無智むちの人ひと有ありて惡口罵詈あつくめりす」・或あるは云いく「刀杖瓦石とうじやうがしやくを加くえ・或あるは数数しばしば擯ひん出すせらる」等云云、此等これらの経文きやうもんは日蓮にちれん・日本国にほんこくに生なぜずんば但み仏ことばの御言みことばのみ有ありて其その義空ぎくうしかるべし、譬たとへば花さき菓このみみならず雷いかずちなりて雨ふらざらんが如ごとし

、きんげんむなし 仏の金言空くして正直しょうじきの御経に大妄語もうごを雑まじへたるなるべし、此等これらを以て

思ふに恐くは天台・伝教てんだい だんぎょうの聖人しょうにんにも及ぶべし又老子・孔子らうし こうしをも下くだしぬべ

し、日本国にほんこくの中に但一人南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと唱となえたり、これは須弥山しゅみせんの始の

いちじんたいかい

一塵大海の始の一露なり、二人・三人・十人・百人・一国・二国・六十六

箇国すで・已に島二にも及びぬらん、今は謗ぼうぜし人人ひとびと

も唱たまへ給たまうらん、又上一人かみいちにんより下万民ばんみんに至るまで法華經ほけきょうの神力品じんりきほんの如く一

同なむみょうほうれんげきょうに南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと唱たまへ給ふ事もやあらんずらん、木はしづかならんと

思へども風やまず春ととを留とどんと思へども夏となる、日本国にほんこくの人人ひとびとは法華經ほけきょうは

尊たまたとけれども日蓮房にちれんが悪ければ南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうとは唱となえまじとことはり

給たまふとも今一度ひとたびも二度だいいちこも大蒙古国だいもうこくより

押し寄せて壹岐対馬いきつしまの様に男をば打ち死し女をば押し取り京鎌倉かまくらに打ち入

りて国主並びに大臣百官等こくしゅなら だいじん からを搦め取り牛馬ぎゅうばの前に・けたて・つよく責めん

時は争いかな南無妙法蓮華經と唱へざるべき、法華經の第五の卷をもつて日蓮にちれんが面おもてを数箇度打ちたりしは日蓮にちれんは何とも思はずうれしくぞ侍りし、不輕品ふぎようの如ごとく身を責め勸持品の如ごとく身に當つて貴し貴し。とおと おと

但し法華經の行者を悪人に打たせじと仏前にして起請をかきたりし梵王ぼんのう・帝釈・日月・四天等いかに口惜くちおしかるらん、現身げんしんにも天罰をあたらざる事しは小事しょうじならざれば始中終をくくりて其その身を亡もうすのみならず議せらるるか、あへて日蓮が失うにあらうず謗法の法師等をたすけんが為ために彼等が大禍をじしん自身に招きよせさせ給たまうか。

此等これらを以て思ふに便宜びんぎごとの青鳧五連の御志ごしは日本国の法華經の題目だいもくを弘ひろめさせ給たまふ人に当れり、国中の諸人しよにん・一人・二人・乃至千万億の人・題目だいもくを唱となうるならば存外ぞんがいに功德身にあつまらせ給たまうべし、其その功德は大海たいかいの露つゆをあつめ須弥山の微塵をつむが如ごとし、殊ことに十羅刹女は法華經の題目だいもくを

守護しゅごせんと誓ちかわせ給たまう、此こを推すいするに妙密

しょうにんなら

にようほう

上人並びびに女房にようぼうをば母の一子を思ふが如ごとく☆牛みようこの尾を愛するが如ごとく昼夜

にまほらせ給たまうらん、たのもしたのもし、事多しといへども委くわしく申もうすにい

とまあらず、女房にようぼうにも委くわしく申もうし給たまへ此は諂へつらへる言にはあらず、金はやけば

いよいよ

弥

色まさり剣はとげば弥利いよいよくなる法華經の功德はほむれば弥いよいよ功德まさる、
二十八品は正まさしき事は・わずかなり讃ほむる言こそ多く候へと思食おほしめすべし。

閏三月五日

日蓮にちれん 花押かおう

☆谷妙密上人御返事くわがやつ しょうにんごへんじ

◆二四四

道妙禪門御書ぜんもんごしよ「四種祈きとう☆御書ごしよ」

1 2 4 2

p

御親父祈きとう☆の事承り候間、仏前ぶつぜんにて祈念申すべく候、祈きとう☆に於ては、顯

祈顯応・顯祈冥応・冥祈冥応・冥祈顯応の祈きとう☆有りと雖も、只肝要かんようは、此の經
の信心しんじんを致いたし給ひ候はば、現当げんとうの所願満足有るべく候、法華第三に云く「魔

及び魔民有りと雖、皆仏法を護る、第七に云く「病即消滅して不老不死
ならん」との金言之を疑ふべからず、妙一尼御前当山参詣有難く候、卷
物一卷之を進らせ候、披見有るべく候、南無妙法蓮華經。

建治二年丙子八月十日

日蓮 花押

道妙禪門

◆二四五

にちによこぜんごへんじ
日女御前御返事

建治三年八月 五十六歳御作

1243p

御本尊供養の御為に驚目五貫・白米一駄・菓子其の数送り給ひ候い

おわ 畢んぬ、抑此の御本尊は在位五十年の中には八年・八年の間にも涌出品

より属累品までに八品に顕れ給うなり、さて滅後には正法・像法・末法の

中には正像二千年には・いまだ本門の本尊と申す名だにもなし、何に況や

顕れ給はんをや又顕すべき人なし、天台・妙楽・伝教等は内にはかんが

み給へども故こそあるらめ言には出だし給はず、彼の顔淵が聞きし事・意

にはさとるといへども、言に出していはざるが如し、然るに仏滅後・二千

年過ぎて末法の始の五百年に出現せさせ給ふべき山経文赫赫たり明明た

り・天台・妙楽等の解釈分明なり。

ここに日蓮いかなる不思議にてや候らん竜樹・天親等・天台・妙楽等だ

にも顕し給はざる大曼荼羅を・末法二百余年の比はじめて法華弘通のはた

じるしとして顕し奉るなり、是全く日蓮が自作にあらず多宝塔中の大牟尼

世尊分身の諸仏すりかたぎたる本尊なり、されば首題の五字は中央にかか

り・四天王は宝塔の四方に坐し・釈迦・多宝・

本化の四菩薩肩を並べ普賢・文殊等・舍利弗・日蓮等坐を屈し・日天・

月天・第六天の魔王・竜王・阿修羅・其の外不動・愛染は南北の二方に陣

を取り・悪逆の達多・愚癡の竜女一座をはり・三千世界の人の寿命を

奪ふ悪鬼たる鬼子母神・十羅刹女等・加之・日本の守護神たる

天照太神・八幡大菩薩・天神七代・地神五代の神神・総じて大小の神祇

等・体の神つらなる・其の余の用の神豈もるべきや、宝塔品に云く「諸の

たいしゅう

大衆を接して皆虚空に在り」云云、此等の仏・菩薩・大聖等・総じて序品

列坐の二界八番の雜衆等一人ももれず、此の御本尊の中に住し給い妙法

ごじ あきらか

五字の光明にてらされて本有の尊形となる是をを本尊とは申すなり。

經に云く「諸法実相」是なり、妙樂云く「実相は必ず諸法・諸法は必ず十

如乃至十界は必ず身土」云云、又云く「実相の深理本有の妙法蓮華經」

等と云云、伝教大師云く「一念三千即自受用身・自受用身とは出尊形の

仏」文、此の故に未曾有の大曼荼羅とは名付け奉るなり、仏滅後・二千二

百二十余年には此の御本尊いまだ出現し給はずと云う事なり。

かかる御本尊を供養し奉り給ふ女人・現在には幸をまねぎ後生には此

の御本尊左右前後に立ちそひて闇に燈の如く險難の処に強力を得たるが

如く・彼こへまはり此へより・日女御前をかこみ・まほり給うべきなり、

相構え相構えてとわりを我が家へよせたくもなき様に誘法の者をせかせ

給うべし、悪知識を捨てて善友に親近せよとは是なり。

此の御本尊全く余所に求る事なかれ・只我れ等衆生の法華經を打ちて

南無妙法蓮華經と唱うる胸中の肉団におはしますなり、是を九識心王責

如の都とは申すなり、もう 十界具足とは十界じゅつかい一界もかけず一界にあるなり、
之に依もつつて曼荼羅とは申すなり、まんだら 曼荼羅と云うは天竺てんじくの名なり此には輪こころ円こころ
具足とも功德聚とも名くるなり、くどくじゆ 此の御本尊も只信心の二字にをさまれり
以信得入とは是なり。いしんとくにゆう これ

日蓮が弟子・檀那等・正直捨方便・不受余經一偈と無二に信ずる故によ
つて・此の御本尊の宝塔の中へ入るべきなり・たのもし・たのもし、如何
にも後生をたしなみ給ふべし・たしなみ給ふべし、ごしよう 六賢・南無妙法蓮華經
とげかり叫へて仏になるべき事尤も大切なり、たま 信心の厚薄によるべきなり
仏法の根本は信を以て源とす、ぶつぽう こんぽん もと しかん いわ 仏法は海の如し唯
信のみ能く入る」と、よ くけつ 弘決の四に云く「い 仏法は海の如し唯
とは孔丘の言こうしゅう

尚信を首と為す況や仏法の深理をや信無くして寧ろ入らんや、な はじめ な ぶつぽう じんり なく むし ゆえ けこん
故に華嚴に

信を道の元・功德くどくの母と為なす」等、又止の一に云いく「何が円えんの法を開き日の信を起し円えんの行を立て円えんの位に住せん」弘ぐの一に云いく「円信と二にうは理

に放つて信を起す信を行の本と為す^な」云云、外典^{げてん}に云く「漢王位の説を信
ぜしかば河上の波忽^{たちま}ちに冰^{こおり}り李広父

の☆^{あだ}を思いしかば草中の石羽を飲む」と云えり、所詮^{しよせん}・天台^{てんだい}・妙楽^{みょうらく}の釈

ふんみよう

分明に信を以て本とせり、彼の漢王も疑^{うたが}はずして大臣^{だいじん}のことばを信ぜしか

たつなみ

ば立波^{たつなみ}こほり行くぞかし、石に矢のたつ^こ是れ又父のかたきと思ひし至信の

故なり、

いかに況^{ぶつぼう}や仏法においてをや、法華經を受け持ちて南無妙法蓮華經と唱^{とな}うる

そくごしゆ

しゆぎよう

ぐそく

ほけきよう

たも

なむみようほうれんげきよう

とな

どうずいわじよう

あ

即五種の修行を具足するなり、比の事伝^{でんぎようだいし}教大師入朽して道邃和尚に値^あい

たてまつ

ごしゆとんしゅう

そうでん

たま

にちれん

でし

だんな

奉りて五種頓修の妙行と云う事を相伝し給ふなり、日蓮が弟子・檀那の

かんよう

肝要はより外に求る事なかれ、神力品に云く、委くは又又申す可く狭、

あなかしこあなかしこ

六賢六賢。

建治三年八月二十三日

日蓮^{にちれん} 花押^{かおう}

にちによごぜんごへんじ
日女御前御返事

◆二四六

にちによごぜんごへんじ
日女御前御返事

こうあんがんねん
弘安元年六月

五十七歳御作

1245p

御布施七貫文送り給ひ畢んぬ、
ふせ 属累品の御心は仏・虚空に立ち給いて四
おわ そくるいほん こくう たま

百万億那由他の世界にむさしののすすきのごとく富士山の木のごとくぞく
なゆた せかい

ぞくとひざをつめよせて頭を地につけ身をまげ掌をあはせあせを流し、
こゝろ うづ たな

つゆしげくおはせし上行菩薩等・文殊等・大梵天王・帝釈・日月・
じょうぎようぼさつ もんじゆ だいほんてんのう たいしやく にちがつ

四天王・竜王・十羅刹女等に法華経をゆづらん
してんのう りゆうおう じゅうらせつによ ほけきよう

がために、三度まで頂をなでさせ給ふ、
いただき たま たと ひも いただき のかみ

をなづるがごとし、爾の時に上行乃至・日月等忝き仰せを蒙りて法華経
そ じょうぎようないし にちがつ かたじけ おお こおむ ほけきよう

を末代まつだいに弘通くつうせんとちかひ給たまいしなり、薬王品やくおうぼんと申もうすは昔喜見菩薩きけんぼさつと申せし菩薩ぼさつ・日月にちがつ浄明徳じょうみょうとく仏ぶつに法華經ほけきょうを習ならわせ給たまいて其その師しの恩おんと申もうし法華經ほけきょうのたうとさと申もうしかんにたへかねて万よろずの重宝じゅうぼうを尽つくくさせ給たまいしかどもなを心ゆかずして身に油をぬりて千二百歳せんにひゃくじの間・当時とうじの油にとうしみをに入れてたく

がごとく身をたいて仏を供養くようし後に七万二千歳せんさいが間ひぢをともしびとして
たきつくし法華經ほけきようを御供養候くようき。

されば今法華經ほけきようを後・五百歳の女人供養にょにんくようせば其その功德くどくを一分いちぶんものこさず
ゆづるべし、譬たとえば長者ちやうじやの一子いっさいに一切いたくの財宝たからをゆづるがごとし、妙音品みようおん

と申もうすは東方とうほうの淨華宿王智仏じやうけしゆくおうちぶつの国みようおんぼさつに妙音菩薩みようおんぼさつと申もうせし菩薩ぼさつあり、昔むかしの

雲雷音王仏うんらいおんのうぶつの御代みよだいに妙莊嚴王みやうそうごんの後淨徳夫人きさきじやうとくふじんなり、昔むかし法華經ほけきようを供養くようして今

妙音菩薩みようおんぼさつとなれり、釈迦如来しやくかにらいの娑婆世界しやばせかいにして法華經ほけきようを説たまき給たまふにまいり

て約束やくそく申もうして末代まつだいの女人にょにんの法華經ほけきようを持ち給たまうをまもるべしと云云うんぐん。觀音品くわんおん

と申もうすは又普門品ふもんぼんと名なく、始かんぜは觀世音菩薩くわんぜおんぼさつを持ち奉たてまつる人の功德くどくを説たまきて候と、

此かんのんを觀音品くわんおんと名なづく後たもには觀音くわんおんの持たまち給たまへる法華經ほけきようを持くどくつ人の功德くどくをとけ

り此ふもんぼんを普門品なすと名なく、陀羅尼品だらにぼんと申もうすは二聖・二天・十羅刹女じゅうらせつによの法華經ほけきようの

行者ぎやうじやを守護しゆごす

べき様を説きけり、二聖と申すは薬王と勇施となり・二天と申すは毘沙門
と持国天となり十羅刹女と申すは十人の大鬼神女四天下の一切の鬼神の母
なり又十羅刹女の母あり鬼子母神是なり、鬼のならひとして人を食す、
人に三十六物あり所謂糞と尿と唾と肉と血と皮と骨と五蔵と六腑と髪と
毛と氣と命等なり、而るに下品の鬼神は糞等を食し中品の鬼神は骨等を食
す上品の鬼神は精氣を食す、此の十羅刹女は上品の鬼神として精氣を食
す疫病の大鬼神なり、鬼神に二あり一には善鬼二には悪鬼なり、善鬼は
法華經の怨を食す悪鬼は法華經の行者を
食す、今・日本国の去年今年の大疫病は何とか心うべき此を答ふべき様は
一には善鬼なり梵王・帝釈・日月・四天の許されありて法華經の怨を食
す、二には悪鬼が第六天の魔王のすすめによりて法華經を修行する人を食
す、善鬼が法華經の怨を食ふことは官兵の朝敵を罰するがごとし、悪鬼が

ほけきよう　ぎようじや
法華經の行者を食ふは強盜夜討等が官兵を殺

すがごとし、例せば日本国にほんこくに仏法ぶつぽうの渡りてありし時・仏法ぶつぽうの敵たりし物部

おおむらじもりや

えきびよう

の大連守屋等も疫病をやみき蘇我・宿禰の馬子等もやみき、欽明・敏達

ようめい

こくおう

ぶつぽうしやかによらい

たまい

用明の三代の国王は心には仏法釈迦如来を信じまいらせ給いてありしかど

てんしやうだいじんくまのさん

あお

も外には国の礼にまかせて天照太神熊野山等を仰ぎまいらせさせ給ひしか

ども仏と法との信はうすく神の信はあ

つかりしかば強きにひかれて三代の国王・疫病疱瘡にして崩御ならせ給いき、此をもて上の二鬼をも今の代の世間の人人の疫病をも日蓮が方のやみしぬをも心うべし、されば身をすてて信ぜん人人は・やまぬへんも・あるべし・

又やむともたすかるへんも・あるべし、又大悪鬼に値いなば命を奪はる人も・あるべし、例せば畠山重忠は日本第一の大力の大將なりしかども多勢には終にほろびぬ。

又日本国の一切の真言師の悪霊となれると並に禪宗・念仏者等が日蓮をあだまんがために国中に入り乱れたり、又梵釈・日月十羅刹の眷属にほんこくみだにほんこくに乱入せり、両方互に責めとらんとはげむなり、而るに十羅刹女は総じて法華經の行者を守護すべしと誓はせ給いて候へば一切の法華經を持つ人人をば守護せさせ給うらんと思ひ候

に法華經ほけきょうを持つ人ひと人も・或あるは大日經だいにちきょうはまされりなど申もうして真言師しんごんしが法華經ほけきょう

を讀誦どくじゆし候は・かへりてそしるにて候はなり、又余またの宗宗しゅうしゅうも此こを以て押し計はかり

るべし、又法華經ほけきょうをば經のごとく持つ人ひと人も法華經ほけきょうの行者ぎやうじやを・或ある

貪とん・瞋じん・癡ちにより・或あるは世間せけんの事により・或あるはしなじなのふるまひによつ

て憎む人あり、此こは法華經ほけきょうを信まことずれども信まことずる功德くどくな

しかへりて罰ばつをかほるなり、例せば父母ふぼなどには謀反等ぼうはんとうより外しそくは子息等しそく

の身として此こに背そむけば不孝ふこうなり、父が我がいとをしきめをとり母が我がい

とをしきおとこを奪うばふとも子の身として一分いちぶんも違ちがはば現世げんせには天に捨てら

れ

後生ごしょうには必ず阿鼻地獄あびじごくに墮おつる業ごうなり、何いかに況ふや父母ふぼにまされる賢王けんおうに背そむ

かんをや、何いかに況ふや父母國王ふぼこくおうに百千万億倍せんまんまされる世間せけんの師しをや、何いかに況ふ

や出世間せけんの師しをや、何いかに況ふや法華經ほけきょうの御師おんしをや。

黄河は千年に一度すむといへり 聖人は千年に一度出ずるなり、仏は
むりようこう ひとたびしゅつせ たま
無量劫に一度出世し給ふ、彼には値うといへども法華經には値いがたし、
たと ほけきよう あ たてまつ まつだい ほんぶ ほけきよう ぎようじゃ
設ひ法華經に値い奉るとも末代の凡夫法華經の行者には値いがたし、何ぞ
なれば末代の法華經の行者は法華經を説ざる華嚴・阿含・方等・般若・
だいにちきよう まつだい ほけきよう ぎようじゃ ほけきよう けこん あこん ほうとう はんによ
大日經等の千二百余尊よりも末代に法華經を説く行者は勝れて候なるを、
みようらくだいししやく いわ
妙樂大師釈して云く「供養すること有る者は福十号に過ぎ若し悩乱する
者は頭七分に破れ

ん」云云、今・日本国の者にほんこく去年今年の疫病えきびようと去正嘉の疫病しやうか えきびようとは人王始まりて九十余代に並なき疫病えきびようなり、聖人の国にあるをあたむゆへと見えたり、師子ししを吼ほうる犬は腸切れ日月にちがつをのむ修羅は頭しゅらの破こつれ候なるはこれなり、日本国の一切衆生いっさいしゆじやうすでに三分が二はやみぬ又半分は死しぬ今一分は身はやまざれども心はやみぬ、又頭いづべも頭みようにも冥みようにも破わりぬらん、罰そうばちに四あり総罰べつばち・別罰みようばち・冥罰けんばち・顯罰しやうにんなり、聖人をあだめは総罰そうばち一國にわたる又・四天下してんげ・又六欲・四禪にわたる、賢人けんじんをあだめば但敵人等てきじんなり、今・日本国の疫病えきびようは総罰そうばちなり定めて聖人しやうにんの國にあるをあだむか、山は玉をいだけば草木そうもくかれず國に聖人しやうにんあれば其その國やぶれず、山の草木そうもくのかれぬは玉のある故とも愚者ぐしやはしらず、國のやぶるるは聖人しやうにんをあだむ故とも愚人ぐにんは并わきまへざるか。

たと 設たひ日月の光ありとも盲目もつもくのために用ゆる事なし、設たひ声ありとも耳し

ひのためににの用があるべき、日本^{にほんこく}の一切^{いっさい}衆生^{しゅじやう}は盲目^{もうもく}と耳^{みみ}しひのごとし、此^この一切^{いっさい}の眼^{まなこ}と耳^{みみ}とをくじりて一切^{いっさい}の眼^{まなこ}をあけ一切^{いっさい}の耳^{みみ}に物をきかせんはいか程^{くどく}の功德^{くどく}があるべき、誰^{たれ}の人^{ひと}か此^この功德^{くどく}をば計^{はか}るべき、設^{たと}ひ父母^{ふぼ}子をうみて眼^{げん}耳^に有^ありとも物を教^しゆる師^し

なくば畜生の眼耳にてこそあらましか、日本国の一切衆生は十方の中に
ちくしょうげんに
さいほう いっぽういっさい
は西方の一方一切の仏の中には阿弥陀仏・一切の行の中には弥陀の名号此
あみだぶつ いっさい
の三を本として余行をば兼ねたる人もあり一向なる人もありしに、
よぎょう
か
いっこう
それがし
去ぬる

けんちよう
 建長五年より今に至るまで二十余年の間・遠くは一代聖教の勝劣先後
 せんじん
 浅深を立て近くは弥陀念仏と法華經の題目との高下を立て申す程に上一人
 ばんみん
 より下万民に至るまで此の事を用ひず、
 いた
 或は師師に問い、
 ある
 或は主主に訴
 ある
 へ、
 ある
 或は傍輩にかたり、
 ある
 或は我が身の妻子・眷属に申す程に、
 さいし
 国・郡郡

・郷郷・村村・寺寺・社社に沙汰ある程に、人ごとに日蓮が名を知り法華經
ねんぶつを念仏に對して念仏のいみじき樣法華經の叶ひがたき事諸人のいみじき樣
にちれん・日蓮わろき樣を

申す程に上もあだみ下も悪む日本一同に法華經と行者との大怨敵となり
もうぬ、かう申せば日本にほんこくの人人並に日蓮が方の中にも物におばえぬ者は人
ひとびとにちれん信ぜられんとあらぬ事を云うと思へり、此は仏法の道理を信じたる男女
ぶつぽうどうりなんよ

に知らせんれうに申す、各各の心にまかせ給うべし。

妙莊嚴王品と申すは殊に女人の御ために用る事なり、妻が夫をすすめた

る品なり、末代に及びても女房の男をすすめんは名こそかわりたりとも

功德は但淨徳夫人のごとし、いはうや此は女房も男も共に御信用あり・鳥

の二の羽そなはり車の二つの輪かかれり何事か成ぜざるべき、天あり地あ

り日あり月あり日てり雨ふる功德の草木花さき菓なるべし。

次に勧發品と申すは釈迦仏の御弟子の中に僧はあまたありしかども迦葉

・阿難左右におはしき王の左右の臣の如し、此は小乗經の仏なり、又

普賢・文殊と申すは一切の菩薩多しといへども教主釈尊の左右の臣なり、

而るに一代超過の法華經八箇年が間十方の諸仏・菩薩等大地微塵よりも多

く集まり候しに左右の臣たる普賢菩薩のお

はせざりしは不思議なりし事なり、而れども妙莊嚴王品をとかれてさてお

はりぬべかりしに東方宝威徳浄王仏の国より万億の伎楽を奏し無数の
八部衆を引率して・おくればせして参らせ給いしかば、仏の御きそくや・
あし

からんずらんと思ひし故にや色かへて末代に法華經の行者を守護すべきや
うを・ねんごろに申し上られしかば、仏も法華經を閻浮に流布せんことこ
とにねんごろなるべきと申すにやめでさせ給いけん、返つて上の上位より
もことにねんごろに仏ほめさせ給へり。

かかる法華經を末代の女人・二十八品を品ごとに供養せばやとおぼし
めす但事にはあらず、宝塔品の御時は多宝如来釈迦如来・十方の諸仏・
一切の菩薩あつまらせ給いぬ、此の宝塔品はいづれのところにか只今まし
ますらんとかがへ候へば、日女御前の御胸の間・八葉の心蓮華の内にお
はしますと日蓮は見まいらせて候、例せば

蓮のみに蓮華の有るがごとく、後の御腹に太子を懷妊せるがごとし、十善
を持てる人太子と生んとして、後の御腹にましませば、諸天此を守護す故に
太子をば天子と号す、法華經・二十八品の文字・六万九千三百八十四字・
一一の

もんじ
文字は字ごとに太子のごとし字毎に仏の御種子なり、闇の中に影あり人・
此をみず虚空に鳥の飛跡あり人・此をみず・大海に魚の道あり人これをみ
ず月の中に四天下の人物一もかけず人・此をみず、而りといへども天眼は
此をみる。

にちによごぜん おんみ ないしん ほうとうほん
日女御前の御身の内心に宝塔品まします凡夫は見ずといへども釈迦・

たほう じゅつぼう しよぶつ
多宝・十方の諸仏は御らんあり、日蓮又此をすいすあらたうとしたうとし、

周の文王は老たる者をやしなひていくさに勝ち、其の末・三十七代・八百
年の

間するゑずゑはひが事ありしかども根本の功によりてさかへさせ給ふ、阿闍世

王は大悪人たりしかども父びんばさら王の仏を数年やしなひまいらせし

ゆえ
故に九十年の間位を持ち給いき、当世も又かくの如く法華經の御かたきに

成りて候代なれば須臾も持つべしとはみえねども・故権の大夫殿武蔵の前

司入道殿の御まつりごと・いみじくて暫く安穩なるか、其も始終は法華經の敵と成りなば叶うまじきにや。

此の人人の御僻案には念仏者等は法華經にちいんなり日蓮は念仏の敵なり、我等は何れをも信じたりと云云、日蓮つめて云く代に大禍なくば古にすぎたる疫病・飢饉・大兵乱はいかに、召も決せずして法華經の行者を二度まで大科に行ひしはいかに・不便・不便、而るに女人の御身として法華經の御命をつがせ給うは釈迦・多宝・十方の諸仏の御父母の御命をつがせ給うなり此の功德をもてる人・一閻浮提に有るべしや、恐恐謹言。

六月二十五日日蓮花押

日女御前御返事

◆二四七

出家功德御書

弘安二年五月

五十八歳御作

1251p

近日誰やらん承りて申し候は内内還俗の心中 出来候由・風聞候ひける
は実事にてや候らん虚事にてや候らん心元なく候間・一筆啓せしめ候、凡
父母の家を出でて僧となる事は必ず父母を助くる道にて候なり、出家功德
経に云く「高さ三十三天に百千の塔婆を立つるよりも一日出家の功德は勝れ
たり」と、されば其の身は無智無行にも

あれかみをそり袈裟をかくる形には天魔も恐をなすと見えたり、大集経に
云く「頭を剃り袈裟を着くれば持戒及び毀戒も天人供養す可し則ち仏を
供養するに為りぬ」云云、又一経の文に有人海辺をとをる一人の餓鬼あつ

て喜び踊り、其の謂れを尋ねれば我が七世の孫今日出家になれり其の功德にひかれて出離生死せん事喜ばしきなり

と答へたり、されば出家と成る事は我が身助かるのみならず親をも助け上無量の父母まで助かる功德あり、されば人身をうくること難く人身をうけても出家と成ること尤も難し、然るに悪縁にあふて還俗の念起る事浅ましき

次第なり金を捨てて石をとり薬を捨てて毒をとるが如し、我が身惡道に墮つるのみならず六親眷属をも惡道に引かん事不便の至極なり。

其の上在家の世を渡る辛勞一方ならずやがて必ず後悔あるべし、只親のなされたる如く道をちがへず出家にてあるべし、道を違へずば十羅刹女の御守り堅かるべし、道をちがへたる者をば神も捨てさせ給へる理りにて候なり、大勢至經に云く「衆生五の失有り必ず惡道に墮ちん一には出家還俗

の失なり、又云く「出家の還俗は其の失

とが
ごぎやく

す

五逆に過ぎたり、

五逆罪と申すは父を殺し母を殺し仏を打ち奉りなんと

もつ

たてまつ

する大なる失を五聚めて五逆罪と云うなり、されば此の五逆罪の人は一中

とが

いつつあつ

ごぎやくざい

ごぎやくざい

むげんじこく

お

劫の間無間地獄に堕ちて浮ぶ事なしと見えたり。

然るに今宿善薰發して出家せる人の還俗の心付きて落つるならば彼の
五逆罪の人よりも罪深くして大地獄に墮つべしと申す經文なり、能く能く
此の文を御覽じて思案あるべし、我が身は天よりもふらず地よりも出でず
父母の肉身を分たる身なり、我が身を損ずるは父母の身を損ずるなり、此
の道理を弁へて親の命に隨ふを孝行と云う

親の命に背くを不孝と申すなり、所詮心は兎も角も起れ身をば教の如く
一期出家にてあらば自ら冥加も有るべし、此の理に背きて還俗せば仏天の
御罰を蒙り現世には浅ましくなりはて後生には三惡道に墮ちぬべし、能く
能く思案あるべし、身は無智無行にもあれ形出家にてあらば里にも喜び某
も祝著たるべし、況や能き僧にて候はんをや、委細の趣・後音を期し候。

弘安二年五月日

日蓮 花押

◆二四八

妙一尼御前御消息

1252p

妙一尼御前
あまごぜん

夫^それ天に月なく日なくば草木^{そうもく}いかでか生ずべき、人に父母^{ふぼ}あり一人もかけ

ば子息^{こども}等そだちがたし、其^その上過去^{かこ}

の聖霊^{しょうりよう}は・或^{ある}は病子あり・或^{ある}は女子あり、とどめをく母もかいがいしか

らず、たれにいまあつてか冥途^{めいど}にをもむき給^{たま}いけん。

大覚世尊^{だいかくせそん}・御捏盤^{あじやせ}の時なげいてのたまはく・我涅槃^{ねはん}すべし但心にかかる

事は阿闍世王^{あじやせ}のみ、迦葉童子^{かしようどうじ}菩薩^{ぼさつ}・仏に申^{もう}さく仏は平等^{びようどう}の慈悲^{じひ}なり一切^{いっさい}

衆生^{しゆじよう}のためにいのちを惜^{おし}み給^{たま}うべし、いかにかきわけて阿笹^{あさ}吾人^{われ}と・をほ

せあるやらんと問^といまいらせしかば、其^その御返事^{ごへんじ}に云^{いわ}く「譬^{たと}えば一人にし

て七子有り是この七子の中に一子病こに遇え

り、父母ふぼの心平等びやうどうならざるには非あらず、然しかれども病子びやうしに於おいては心則すなわち偏ひとえに重おもきが如ごとし」等云云、天台摩訶止觀てんだいまかしかんに此この經文きやうもんを釈しゃくして云いく「譬たとえば七子の父母ふぼ平等びやうどうならざるには非あらず然しかれども病者びやうしやに於おいては心則すなわち偏ひとえに重おもきが如ごとし」等云云・とこそ仏は答たまえさせ給たまいしか、文の心は人にはあまたの子あれども父母ふぼの心は病する子にありとなり、仏の御ごためには一切衆生いっさいしゆじやうは皆子みななり其その中罪つみふかくして世間せけんの父母ふぼをころし仏經ぶきやうのかたきとなる者は病子びやうしのごとし、しかるに阿闍世王あじゃせは摩竭提國まかたこくの主なり・我が大檀那だんなたりし頻婆舍羅王びんばしやらをころし我がてきとなりしかば天もすてて日月にちがつに變かいで地も頂いただきかじとふるひ・万民ばんみんみな佛法ぶつぽうにそむき・他國たこくより摩竭國まかつをせむ、此等これらは偏ひとえに惡人あくにん・提婆達多だいばだつたを師しとせるゆへなり、結句けつくは今日けふより惡瘡身あくそうに出て三月の七日・無間地獄むげんじこくに墮おつべし、これがかなしければ我涅槃ねはんせんこと心にかかるというなり、

我阿闍世王あじゃせをすくひなば一切いっさいの罪人ざいにん・阿闍世王あじゃせのごとしと・なげかせ給たまい
き。

しかるに聖靈しょうりようは・或あるは病子あるあり・或あるは女子あるあり・われすて冥途めいどにゆ
きなばかれたる朽木のやうなるとしより尼が一人とどまり此の子どもをい
かに心ぐるしかるらんと・なげかれぬらんとおぼゆ、かの心の・かたがた
には又は日蓮にちれんが事・心にかからせ給たまいけん、仏語ぶつごむなしからぜれば法華經ほけきよう
ひろまらせ給たまうべし、それについては此この御房ごぼうは
いかなる事もありて・いみじくならせ給たまうべしとおぼしつらんに、いうか
いなく・ながし失うしないしかば・いかにや・いかにや法華經ほけきよう十羅刹じゅうしやくはとこそ・を
もはれけんに、いままでだにも・ながらえ給たまいたりしかば日蓮にちれんがゆりて俟そうらい
し時ときいかに悦よろこばせ給たまはん。

又いゝし事むなしからずして・大蒙古国だいもうこくもよせて国土こくどもあやをしげにな

りて候へば・いかに悦び給はん、これは凡夫の心なり、法華經を信ずる人は冬のごとし冬は必ず春となる、いまだ昔よりきかず・みず冬の秋とかへれる事を、いまだきかず法華經を信ずる人の凡夫となる事を、經文には「若有開法者無二小成仏」ととかれて候。

故 聖靈は法華經に命をすてて・をはしき、わづかの身命をささえしと

ころを法華經のゆへにめされしは命をす

つるにあらずや、彼の雪山童子せつせんどうじの半偈はんげのために身をすて薬王菩薩やくおうぼさつの臂ひじをや
き給たまいしは彼しょうにんは聖人しょうにんなり火に水を入るがごとし、此これは凡夫ほんぶなり紙を火
に入るがごとし・此これをもつて案ずるに聖靈しょうりょうは此の功德くどくあり、大月輪
の中

か大日輪だいにちりんの中か天鏡をもつて妻子さいしの身を浮べて十二時に御らんあるらん、
設たい妻さい子は凡夫ほんぶなれば此これをみずきかず、譬たとへば耳みみしゐたる者の雷いかずちの聲
をきかず目つぶれたる者の日輪にちりんを見ざるがごとし、御疑おんうたがいあるべからず定
めて御まほりとならせ給たまうらん・其その上さこそ御わたりあるらめ。

力あらばとひまひらせんと・をもうところに衣を一つ給おんぶでう存外ぞんがいの
次第しだいなり、法華經ほけきょうはいみじき御經にてをはすれば・もし今生こんじょうにいきある身
ともなり候そうらいなば尼にごぜんの生きてをわしませ、んあれ、をさなききんだ
ち等をばかへり見たてまつるべし。

さどの国と申しこれと申し下人・一人つけられて候は・いつの世にかわ
すれ候べき、たてまつり候べし、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經・
恐恐謹言。
きようきようきんげん。

五月 日

日蓮 にちれん
花押 かおう

妙一尼御前
あまごぜん

◆二四九

妙一尼御前御返事

弘安三年五月

五十九歳御作

1255p

夫^{しんじん}信心と申^{もう}すは別にこれなく候、妻のをとこをおしむが如^{ごと}くをとこの妻

に命をすつるが如^{ごと}く、親の子をすてざるが如^{ごと}く子の母にはなれざるが如^{ごと}く

に、法華經・釈迦・多宝・十方の諸仏・菩薩・諸天善神等に信を入れ奉^{たてまつ}り

て南無妙法蓮華經と唱へたてまつるを信心とは申し候なり、しかのみなら

ず正直捨方便・不受余經一偈の經文を女のかがみをすてざるが如^{ごと}く男の

刀をさすが如^{ごと}く、すこしもすつる心なく案じ給^{たま}うべく候、あなかしこ・あ

なかしこ。

五月十八日 日蓮花押 妙一尼御前御返事

にちれんかおう

あまごぜんごへんじ

◆二五〇

妙一女御返事

弘安三年七月

五十九歳御作

1255p

問うて云く、日本国に六宗・七宗八宗有り何れの宗に即身成仏を立つ
 るや、答えて云く伝教大師の意は唯法華經に限り弘法大師の意は唯真言に
 限り、問うて云く其の証拠如何、答えて云く伝教大師の秀句に云く「当に
 知るべし他宗所依の經には都て即身入無し一分即入すと雖も八地已上に
 推して凡夫身を許さず天台法華宗のみ具に
 即入の義有り」云云、又云く「能化所化俱に歴劫無し妙法經力即身成仏
 す」等云云、又云く「当に知るべし此の文に成仏する所の人を問うて此の

經の威勢いせいを顯あらわすなり」と等云云、此の釈しゃくの心は即身成仏そくしんじょうぶつは唯法華經ただほけきやうに限るなり。

問いわうて云いく弘法大師こうぼうだいしの証しょうこ拠いかん如何、答いえて云いく弘法大師こうぼうだいしの二教論にけうろんに云いく「菩提心論ぼだいしんろんに云いく唯真言法ただしんごんの中に即身成仏そくしんじょうぶつする故こは是さんれ三摩地さんまじの法はを説しくしよきやうなり諸教しよきやうの中に於おいて闕かいて書しるさず、諭いして曰いく此このの論ろんは竜樹大聖りゅうじゆだいせいの所造しよぞう

千部の

論の中に秘藏肝心の論なり此の中に諸教と謂うは他受用身及び變化身等の
所説の法諸の顕教なり、是れ三摩地の法を説くとは自性法身の所説秘密
真言の三摩地の行是なり金剛頂十万頌の經等と謂う是なり」

問うて云く此の兩大師所立の義水火なり何れを信ぜんや、答えて云く此

の二大師は俱に大聖なり同年に入唐して兩人同じく真言の密教を伝受す、

傳教大師の兩界の師は順、曉和尚・弘法大師の兩界の師は慧果和尚・

順、曉・慧果の二人俱に不空の御弟子なり、不空三蔵の大日如来六代の

御弟子なり、相伝と申し本身といひ世間の重んずる

事日月のごとし、左右の臣にことならず末学の膚にうけて是非しがたし、

定めて悪名天下に充滿し大難を其の身に招くか然りと雖も試に難じて兩

義の是非を糾明せん、問うて云く弘法大師の即身成仏は真言に限ること

何れの經文何れの論文ぞや、答えて云く弘法大師は竜樹菩薩の菩提心論

に依るなり、問うて云く其の証拠如何、答えて

云く弘法大師の二教論に菩提心論を引いて云く「唯真言法の中のみ乃至

諸教の中に於て闕いて書さず」云云、問うて云く經文有りや、答えて

云く弘法大師の即身成仏義に云く「六大無礙にして常に瑜伽なり四種の曼

荼各離れず三密加持すれば速疾に顕る重重にして帝網の如くなるを即身と

名く、法然として薩般若を具足す心王心数剎塵

に過たり各五智無際智を具す円鏡力の故に実の覺智なり」等云云、疑つ

て云く此の釈は何れの經文に依るや、答えて云く金剛頂經大日經等に

依る、求めて云く其の經文如何、答えて云く弘法大師其の証文を出して

云く「此の三昧を修する者は現に仏菩提を証す」文、又云く「此の身を捨

てずして神境通を速得し大空位に遊歩して身秘密を成す」文、又云く「我

本より不生なるを覺る」文、又云く「諸法は本より不生なり」云云。

難じて云く此等の經文は大日經・金剛頂經の文なり、然りと雖も

經文は・或は大日如來の成正覺の文・或は眞言の行者の現身に五通を得

るの文・或は十回向の菩薩の現身に歡喜地を証得する文にして猶生身

得忍に非ず何に況や即身成仏をや、但し菩提心論は一には經に非ず論を本

とせば背上向下の科・依法不依人の仏説に相違す。

東寺の眞言師日蓮を惡口して云く汝は凡夫なり弘法大師は三地の菩薩な

り、汝未だ生身得忍に非ず弘法大師は帝の眼前に即身成仏を現ず、汝

未だ勅宣を承けざれば大師にあらず日本國の師にあらず等云云は一、慈覺

大師は傳教・義眞の御弟子智証大師は義眞・慈覺の御弟子安然和尚は安慧

和尚の御弟子なり、此の三人の云く法華天台宗は理秘密の即身成仏

眞言宗は事理俱密の即身成仏と云云、傳教・弘法の兩大師何れもをるか

ならねども聖人は偏頗なきゆへに慈覺・智証安然の三師は傳教の山に

栖すむむといへども其その義ぎは弘法東寺こうぼうとうじの心なり、随したがつて日本国にほんこく・

四百余年いぎは異義なんじふしょうなし汝なんじ不肖ふしょうの身としていかんが此この惡義あくぎを存たもずるや是二、

答こたえて云いく惡口あくくをはき惡心あくしんを・をこさば汝なんじにをいては此この義ぎ申もうすまじ、

正義せいぎを聞きかんと申もうさば申もうすべし、但ただし汝等なんじがやうなる者は物をいはずば・

つまりぬとをもうべし、いふべし惡心あくしんを・をこさんよりも惡口あくくをなさんよ

りもきらきらとして候きようもん經文きやうもんを出でして・汝なんじが

信しんじまいらせたる弘法大師こうぼうだいしの義ぎをたすけよ、惡口あくく惡心あくしんをもてをもうに經文きやうもん

には即身成仏そくしんじやうぶつ無なきか、但ただし慈覺じかく・智証ちしよう安然あんねん等の事ことは此これ又また覺証かくしようの兩大師だいいし

・日本にほんにして教大師だいいしを信しんずといへども、漢土かんどにわたりて有ありし時とき・元政げんじよう・

法全等ほふぜんとうの義ぎを信しんじて心こころには教大師だいいしの義ぎをすて、身みは其その山やまに住すれどもい

つわりてありしなり。

問とうて云いく汝なんじが此この義ぎはいかにしてをもひいだしけるぞや、答こたえて云いく

でんぎようだいし

傳教大師の釈に云く「当に知るべし此の文は成仏する所の人を問うて此

の經の威勢を顯すなり」とかかれて候は、上の提婆品の我於海中の經文

をかきのせてあそばして候、釈の心はいかに人申すとも即身成仏の人なく

ば用ゆべからずと・かかせ給へり、いかにも純円一実の經にあらずば

即身成仏はあるまじき道理あり、大日經・金剛頂經等の真言經には其の

人なし又・經文

を見るに兼・但・對・帶の旨分明なり、二乗成仏なし久遠実成あとをけ

づる、慈覺・智証は善無畏・金剛智・不空三藏の釈にたばらかされて・を

はするか、此の人人は賢人・聖人とは・をもへども遠きを貴んで近きをあ

なづる人なり、彼の三部經に印と真言とあるにばかされて大事の即身成仏

の道をわすれたる人人なり、然るを當時・叡山の

ひとびと ほかきょう すぐしんじょうぶつ
人人・法華經の 即身成仏のやうを申すやうなれども慈覺大師安然等の

すぐしんじょうぶつ

即身成仏の義なり、彼の人人の 即身成仏は有名無実の 即身成仏なり其の

もつぱ だんぎようだいし

義専ら伝 教大師の義に相違せり、教大師は分段の身を捨てても捨てずして

ほかきょう

も法華經の心にては 即身成仏なり、覺大師の義は分段の身をすつれば

すぐしんじょうぶつ

即身成仏にあらずと・をもはれたるがあへて 即身成仏の義をしらざる

ひとびと

人人なり。

求めて云く慈覺大師は伝 教大師に値い奉りて習い相伝せり 汝は四百余

ねんき

年の年紀をへだてたり如何、答えて云く師の口より伝うる人必ずあやまり

なく

後にたづねあきらめたる人をろそかならば經文をすてて四依の菩薩に

つくべきか、

父母の譲り状をすてて口伝を用ゆべきか、伝 教大師の御釈

むよう

無用なり慈覺大師の口伝眞実なるべき

だんぎようだいし

か、伝 教大師の秀句と申す御文に一切經になき事を十いだされて候に第

八に即身成仏そくしんじょうぶつ化導勝つぎしもとかかれて次下に「当まさに知るべし此の文成仏じょうぶつする所
の人を問うて此の經の威勢いせいを顯あらわすなり、乃至ないしまさ當に知るべし他宗所依たしゅうしよえの經に
は都すて即身入無そくしんじょうぶつし」等云云、此の釈を背きて覺大師の事理俱密だいにちきようの大日經の
即身成仏そくしんじょうぶつを用もちゆべきか。

求めて云いわく教大師だいいしの釈しゃくの中に菩提心論ぼだいしんろんの唯ただの字もちを用もちいざる釈有りや不いなや、

答いえて云いわく秀句しゅうくに云いわく「能化所化のうけしよけとも俱りやうに歴劫りやく無なくく妙法みょうほう經力そくしんじょうぶつ即身成仏そくしんじょうぶつす」等

云云、此の釈は菩提心論ぼだいしんろんの唯もちの字いを用いいずと見へて候、問いうて云いわく菩提心論ぼだいしんろん

を用もちいざるは竜樹りゅうじゆを用もちいざるか答いえて云いく但恐やくしやくは訳者の曲会私情の心な

り、疑うたがつて云いく訳者やくしやを用もちいざれば法華ほつけ

經の羅什らじゆうをも用もちゆ可べからざるか、答いえて云いく羅什らじゆうには現証げんしやうあり不空ふくうには

現証げんしやうなし、問いうて云いく其その証い如何いかん、答いえて云いく舌の焼いけざる証いなり具つには

聞いくべし、求めて云いく覺証かくしやう等は此の事を知らざるか、答いえて云いく此の兩人

は無畏等の三蔵を信ずる故に伝教大師の正義を用いざるか、此れ則ち人を信じて法をすてたる人人なり。

問うて云く日本国に^いまだ^わ覚証然等を破したる人をきかず如何、^い答えて云く弘法大師の門家は^い覚証を用ゆべしや^わ覚証の門家は弘法大師を用ゆべしや。

問うて云く両方の義相違すといへども汝が義のごとく水火ならず誹謗

しようほう

正法とはいわず如何、答えて云く誹謗正法とは其の相貌如何外道が仏教

しようじよう

をそしり小乗が大乗をそしり・権大乘が実大乘を下し実大乘が

ごんだいじよう

権大乘に力をあわせ詮ずるところは勝を劣という法にそむくがゆへに謗法

もう

とは申すか、弘法大師の大日経を法華経・華嚴経に勝れたりと申す証文

ほけきよう

ありや、法華経には華嚴経・大日経等を下す文分明なり、所謂已今当等

こうほう

なり、弘法尊しと雖も

しゃか

釈迦・多宝・十方分身の諸仏に背く大科免れ難し事を権門に寄せて日蓮を

じゅうほうふんじん

・をどさんより但正しき文を出だせ、汝等は人をかたうどとせり日蓮は

にちがつ

日月・帝釈・梵王をかたうどとせん、日月・天眼を開いて御覧あるべし、

はたまたにちがつ

将又日月の宮殿には法華経と大日経と華嚴経とをはすとけうしあわせて御

こうほう

覧候へ、弘法・慈覚・智証安然の義と日蓮が義と

は何れがすぐれて候、日蓮が義もし百千に一つも道理に叶いて候はば・いかにたすけさせ給はぬぞ彼の人人の御義もし邪義ならば・いかに日本国の一切衆生の無眼の報をへ候はんをば不便とはをぼせ候はぬぞ。

日蓮が二度の流罪結句は頸に及びしは釈迦・多宝・十方の諸仏の御頸を切らんとする人ぞかし日月は一人にてをかせども四天下の一切衆生の眼なり命なり、日月は仏法をなめて威光勢力を増し給うと見へて候、仏法のあぢわいをたがうる人は日月の御力をうばう人・一切衆生の敵なり、いかに日月は光を放ちて彼等が頂をてらし寿命と衣食とをあたへてやしなひ給うぞ、彼の三大師の御弟子等が法華經を誹謗するは偏に日月の御心を入れさせ給いて謗せさせ給うか、其の義なくして日蓮がひが事ならば日天もしめし彼等にもめしあはせ其の理にまけてありとも其の心ひるがへらずば天寿をもめしとれかし。

其^その義はなくしてただ理^り不^ふ尽^{じん}に彼等^{かれら}にさるの子を犬にあづけねづみの子
を・にたぶやうにうちあづけて・さんざんにせめさせ給^{たま}いて彼等^{かれら}を罰し
給^{たま}はぬ事心へられず、日蓮^{にちれん}は日月^{にちがつ}の御^{おん}ためにはをそらくは大事^{だいじ}の御^{おん}かたき
なり、教主^{きようしゅ}釈尊^{しゃくそん}の御前^{おんまえ}にてかならずうたへ申^{もう}すべし、其^{その}の時^{とき}うらみさせ
給^{たま}うなよ、日月^{にちがつ}にあらずとも地神^{ぢじん}も海神^{かいじん}

もきかれよ日本にほんの守護神しゅごしんもきかるべし、あへて日蓮にちれんが曲意こくいはなきなり、いそぎいそぎ御計ごけいらいあるべし、ちちせさせ給たまいて日蓮にちれんをうらみさせ給たまうなよ、南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやう・南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやう、恐恐きようきよう。

七月十四日

日蓮にちれん 花押かおう

妙一ごへんじ女御返事

◆二五一 妙一ごへんじ女御返事 弘安三年十月 五十九歳御作

1260p

去る七月いぬふずき中旬の比ひ、真言しんこん・法華ほっけの即身成仏そくしんじょうぶつの法門ほうもん・大体だいたい註し進まいらせ候、其その後ごは一定法華經ほっけきやうの即身成仏そくしんじょうぶつを御用もちい候らん、さなく候ては当世とうせの人人ひとびとの得意候無得道の即身成仏とくどうそくしんじょうぶつなるべし不審ふしんなり、先日書せんじつきて進まいらせ候いし

ほうもんよ
法門能く心を留めて御覧あるべし、其の上即身成仏と申す法門は世流布の
がくしゃ
学者は皆一大事とたしなみ申す事にて候ぞ、就中予が門弟は万事をさしを
きて此の一事に心を留む可きなり。

けんちよう

建長五年より今弘安三年に至るまで二十七年の間在在処処にして申し

のべ
宣べたる法門繁多なりといへども所詮は只此の一途なり、世間の学者の中

ほうもんはんだ

しよせん
に真言家に立てたる即身成仏は釈尊所説の四味三教に接入したる大日經

ただ

せけん
等の三部經に別教の菩薩の授職灌頂を至極の即身成仏等と思う、是は

がくしゃ

さんぶきよう
七位の中の十回向の菩薩の歡喜地を証得せる

しんこん

えこう
体為なり、全く円教の即身成仏の法門にあらず、仮令經文にあるよしを

べつきよう
のし

ほさつ
☆るとも歡喜行証得の上に得たるところの功德を沙汰する分齊にてある

そくしんじようぶつ
なり、是れ十地の菩薩の因分の所行にして十地等覺は果分を知らず、円教

しやくそんしよせつ

くどく

さた

ぶんざい

えんきよう
の心

えんきよう

そくしんじようぶつ

ほうもん

たといきようもん

あるよしを

しよしよ

もう

ほうもん

るふ

しんこん
等

さんぶきよう

べつきよう

ほさつ

じゆしよくかんちよう

しごく

そくしんじようぶつ

えんきよう

そくしんじようぶつ

えんきよう

えんきよう

えんきよう
七位の中の十回向の菩薩の歡喜地を証得せる

えんきよう

そくしんじようぶつ

ほうもん

たといきようもん

あるよしを

しよしよ

もう

ほうもん

るふ

えんきよう

えんきよう
体為なり、全く円教の即身成仏の法門にあらず、仮令經文にあるよしを

えんきよう

そくしんじようぶつ

ほうもん

たといきようもん

あるよしを

しよしよ

もう

ほうもん

るふ

えんきよう

えんきよう
☆るとも歡喜行証得の上に得たるところの功德を沙汰する分齊にてある

えんきよう

そくしんじようぶつ

ほうもん

たといきようもん

あるよしを

しよしよ

もう

ほうもん

るふ

えんきよう

えんきよう
なり、是れ十地の菩薩の因分の所行にして十地等覺は果分を知らず、円教

えんきよう

そくしんじようぶつ

ほうもん

たといきようもん

あるよしを

しよしよ

もう

ほうもん

るふ

えんきよう

の心

を以て奪つていへば六即そくの中の名字みょうじ観行かんぎようの一念いちねんに同じ、与えて云う時は
観行即かんぎようそくの事理じり和融わいうにして理慧相応そうおうの観行かんぎように及ばず、
により・或あるは大日経だいにちきようの三部の文によれども即身成仏そくしんじょうぶつにこそあらざらめ
生身得忍しょうしんとくにんに

だにも云いよせざる法門なり。

されば世間の人人は菩提心論の唯真言法中の文に落されて即身成仏は

しんこんしゅう

真言宗に限ると思へり、之に依つて正しく即身成仏を説き給いたる法華經

をば戲論等云云、止観五に云く「設し世を厭う者も下劣の乗を翫んで枝葉

はんぷ

くさむなびこ

びこ

たいしやく

な

がりがめ

こ

みようじゅ

に攀附す狗作務に狎れ☆猴を敬いて帝釈と為し瓦礫を崇めて是れ明珠と

す此の黒闇の人豈道を論ず可けんや」等云云、此の意なるべし、歎かわし

きかな華嚴・真言法相の学者・徒に・いとまをついやし即身成仏の法門を

たつる事よ、

夫れ先ず法華經の即身成仏の法門は竜女を証拠とすべし、提婆品に云く

「須臾の頃に於て便ち正覺を成ず」等云云乃至「變じて男子と成る」と、

又云く「即ち南方無垢世界に往く」云云、伝教大師云く「能化の竜女も

歴劫の

行なく無く所しよけ化しゅじようの衆生またりやつこうも亦歴劫りやつこう無し能化のうけ所化しよけ俱ともに歴劫りやつこう無し妙法みようほう經力
即身成仏そくしんじようぶつす」等云云、又法華經ほけきようの即身成仏そくしんじようぶつに二種しやくもんあり迹門しやくもんは理具りぎの
即身成仏そくしんじようぶつ本門ほんもんは事の即身成仏そくしんじようぶつなり、今本門ほんもんの即身成仏そくしんじようぶつは当位とうい即妙本有そくみようほんぬ
不改ふかいと断ふずるなれば肉身そを其そのまま本有無作ほんぬむさの三身さんじん如来にらいと云える是これなり、
此ほうもんの法門いちだいしよきようは一代諸教これなもんくの中に之い無し文句いわに云く「諸教しよきようの中に於おいて之これを秘ひし
て伝でんえず」等云云。

又法華經ほけきようの弘ひろまらせ給たまうべき時に二度有いり所謂いわゆる在世ざいせと末法まつぼうとなり、修行しゆぎよう
に又二意有にり仏世じゆんえんいちじつは純円めつこまつぼう一実いつじつ・滅後末法いつこうほんもんの今の時は一向いっこう本門ほんもんの弘ひろまらせ
給たまうべき時すなり、迹門しやくもんの弘ひろまらせ給たまうべき時は已すに過すぎて二百余年になり、
天台てんだい・伝教でんぎようこそ其その能弘のうくの人ににてましまし候いしかどもそれもはや入滅にゆうめつ
し給たまいぬ、日蓮にちれんは今時はるかを得かくべつたり豈あに此ほんもんの所囑しよの本門ほんもんを弘ひろめざらんや、本・迹
二門きは機きも法はも時ときも遥はるかに各別かくべつなり。

問うて云く日蓮計り此の事を知るや、答えて云く「天親・竜樹内鑑冷然」
等云云、天台大師云く「後の五百歳遠く妙道に沾わん」伝教大師云く
「正像稍過ぎ已つて末法太だ近きに有り法華一乗の機今正しく是れ其の時
なり、何を以て知ることを得んや、安樂行品に云く末世法滅の時」云云、
此等の論師・人師末法鬪諍堅固の時・地涌出現

し給いて本門の肝心たる南無妙法蓮華經の弘まらせ給うべき時を知りて恋
させ給いて是くの如き釈を設けさせ給いぬ、尚尚即身成仏とは迹門は能
入の門本門は即身成仏の所詮の実義なり、迹門にして得道せる人人・
種類種・相對種の成仏・何れも其の実義は本門寿量品に限れば常にかく
観念し給へ正観なるべし。

然るにさばかりの上代の人人だにも即身成仏には取り煩はせ給いしに、
女人の身として度度此くの如く法門を尋ねさせ給う事は偏に只事にあらず、
教主釈尊御身に入り替らせ給うにや竜女が跡を継ぎ給うか・又☆曇弥女
の二度来れるか、知らず御身は忽に五障の雲晴れて寂光の覚月を詠め給う
べし、委細は又又申す可く候。

弘安三年十月五日

日蓮 花押

妙一女御返事

◆二五二

日嚴尼御前御返事

弘安三年十一月 五十九歳

御作

1262p

こうあん

弘安三年十一月八日、尼日嚴の立て申す立願の願書並びに御布施の錢一

ほけきよう

ほうぜんなら

にちがつ

もう

ふせ

貫文又たふかたびら一つ法華經の御宝前並びに日月天に申し上げ候い畢ん

ひそかばか

もう

およ

しんじん

ぬ、其の上は私に計り申すに及ばず候叶ひ叶はぬは御信心により候べし全

にちれん

く日蓮がとがにあらず、水すめば月うつる風ふけば木ゆるぐごとくみな

御心は水のごとし信のよは

しんじん

きはにごるがごとし、信心のいさぎよきはすめるがごとし、木は道理の

きようもん

ごとし風のゆるがすは經文をよむがごとしと・をぼしめせ、

きようきよう
恐恐。

十一月二十九日

日蓮 にちれん

花押 かおう

日
巖
尼
御
前
御
返
事

あまごぜんごへんじ

◆二五三

おうにちにょ
王日女殿御返事

こうあん
弘安三年

五十九歳御作

1263p

弁房べんのぼうの便宜びんぎに三百文このたび今度二百文給び畢おわんぬ、仏は真に尊くして物によら

ず、昔どうじの得勝童子いさいは沙もちいの餅くようを仏に供養し奉りて阿育大王たてまつと生れて一閻浮提えんぶだい

の主たりき、貧女ひんによの我がかしらをおろして油と成せしが須弥山しゅみせんを吹きぬき

し風も此の火をけさず、されば此の二三がもくの鷲目にほんこくは日本国を知る人の国を寄

せ七宝しちぽうの塔を☆利天とうりてんにくみあげたらん

にもすぐるべし、法華經ほけきようの一字は大地だいちの如ごとし万物しゅつしやうを出生す、一字は大海たいかい

の如ごとし衆流しゅうりゅうを納おさむ一字は日月にちがつの如ごとし四天下してんげを照す、此の一字変じて仏とな

る、稲変じて苗なえとなる・苗変じて草となる草変じて米となる・米変じて人

となる・人変じて仏となる女人変じて妙の一字となる妙の一字変じて台上

の釈迦しゃか仏となるべし、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經、恐恐謹言。きょうきょうきんげん。

おおにちどの

王日殿

にちれん かおう

日蓮 花押

◆二五四

御輿振御書ごしよ

文永元年三月

四十三歳御作

与三位公日行

1264p

御文おんふみなら並びに御輿振の日記にっき給ひ候いぬ悦よろこび入つて候、中堂ちゆうどう炎上えんじやうの事そ其の義

に候か山門破滅さんもんはめつの期そ其の節そに候か、此等これらも其の故そのゆえ無なきに非あらず天竺てんじくには祇園ぎおん

精舎しょうじや・頭摩寺ずもうじ・漢土かんどには天台山てんだい・正像しょうざう二千年の内に以て滅尽めつじんせり、今末法まっぽう

に当にほんこくつて日本国計にほんこくけいりに叡山えいざん有さんぜんり三千界さんぜんかいの中の但此とこの処あのみ有あるか、定めて

悪魔あくま一跡あとに嫉とどを留しやうじやうむるか、小乗しょうじやう権教こんきやうの輩やからも之これを妬しやうじやうむか、随したがつて禅僧ぜんそう・

律僧りつそう・念仏者ねんぶつ・王臣おうしんに之これを訴さんぜんへ三千人さんぜんの大衆たいしやうは我が山はめつ・破滅こんげんの根源こんげんとも知

らずしだん師檀しだん共に

破国はこく・破仏はぶつの因縁いんねんに迷まよえり、但恃みやうほうむ所れんげきは妙法蓮華經第七の卷の後・五百

歳・於閻浮提・広宣流布の文か、又伝教大師の「正像稍過ぎ已つて末法
えんぶだい こうせんるふ はなは
太だ近きに有り法華一乗の機今正しく是れ其の時なり」の釈なり、滅する
ほつけいちじょう き まさ こ そのとき
は生ぜんが為下るは登らんが為なり、山門繁昌の為に是くの如き留難を起
みの がた
すか、事事紙面に尽し難し早早見参を期す、謹言。
こす きんげん

三月一日

日蓮 にちれん

花押 かおう

御返事 ごへんじ

◆二五五 法門申さるべき様の事 文永六年 四十八歳御

作 与三位公日行 1265p

ほうもんもう

法門申さるべきやう、選択をばうちをきて先ず法華經の第二の巻の

せんちゃく

ほけきよう

こんしさんがい

今此三界の文を開いて釈尊は我等が親父なり等定め了るべし、何の仏か

しゃくそん

われら

いづれ

われら ふぼ

我等が父母にてはをはします、外典三千余巻にも忠孝の二字こそせんにて

げてんさんせん

候なれ忠は又孝の家より出ずとこそ申し候なれ、されば外典は内典の初門

もつ

げてん

ないてん

じよもん

此の心は内典にたがわず候か、人に尊卑・上

ないてん

下はありといえども親を孝するにはすぎずと定められたるか、釈尊は我等

ないてん

しゃくそん

われら

が父母なり一代の聖教は父母の子を教えたる教経なるべし、其の中に

ふぼ

いちだい

しやうきよう

ふぼ

そ

天上 竜宮天竺なんどには無量無辺の御経ましますなれども、漢土・日本

てんじようりゆうぐうてんじく

むりようむへん

かんど

にほん

天上 竜宮天竺なんどには無量無辺の御経ましますなれども、漢土・日本

かんど

にほん

には・わづかに五千・七千余卷なり、此等の経經の次第勝劣等は私には
わきま
弁えがたう候、而るに論師大師先徳には末代の人
まつだい

の智慧こへがたければ彼の人人の料簡を用ゆべきかのところに、華嚴宗の
ちえ
けこんしゅう

五教四教法相・三論の三時二蔵・或は三転法輪世尊法久後・要当說眞実の
しきようほつそう
さんろん
ある
てんほうりんせそんほうくこ
ようとうせつしんじつ

文は又法華經より出て候金口の明說なり、仏說すでに大に分れて二途なり、
ほけきよう
きんく
めいせつ
ぶつせつ
おおい

たとえ
譬

へば世間の父母の讓の前判後判のごとし、はた又世間の前判後判は如来の
せけん
ふぼ
ゆずり
にょらい

金言をまなびたるか、孝不孝の根本は前判後判の用不用より事をこれり、
きんげん
ふこう
こんぽん

かう立て申すならば人人さもやと・をぼしめしたらん時申すべし。
もう
ひとびと
もう

抑浄土の三部經等の諸宗の依經は当分四十余年の内なり、世尊は我等
そもそもじょうと
さんぶきよう
しよしゅう
えきよう
とうぶんよんじゅうよねん
せそん
われら

が慈父として未顕眞実ぞと定めさせ給ふ御心はかの四十余年の経經に付
じふ
みけんしんじつ
たま
よんじゅうよねん
きようぎよう

けと・をぼしめし候か、又說眞実の言にうつれと・をぼしめし候か、心あ
しんじつ

らん人^{ひと}人^{びと}・御賢察候べきかとしばらくあぢわひてよも仏程の親父の一切^{いっさい}
衆生^{しゅじょう}を一子と・をぼしめすが真実^{しんじつ}なる事をすてて

未顕^{みけん}真実^{しんじつ}の不実^{ふじつ}なる事に付けとはをぼしめさじ、さて法華^{ほけきょう}經^{きょう}にうつり候^{そうら}はん

は四十余年^{よんじゅうよねん}の經^{きょう}經^{きょう}をすてて遷^{うつ}り候べきか、はた又かの經^{きょう}經^{きょう}並びに南無^{なむ}

阿弥陀^{あみだ}仏^{ぶつ}等をばすてずして遷^{うつ}り候べきかとおぼしきところに凡^{ほん}夫^ぶの私^しの・

はからいぜひにつけてをそれあるべし、仏と申す親父の仰を仰ぐべしとま
つところに仏定めて云く「正直捨方便」等云云、方便と申すは無量義經に
みけんしんじつ 申す ほうべん ほうべん ほうべん ほうべん ほうべん
未顕真実と申す上に以方便力と申す方便なり、以方便力の方便の内に浄土
さんぶきよう よんじゅうよねん いっさいきよう
三部經等の四十余年の一切經は一字一点も漏るべからざるか、されば
よんじゅうよねん きようぎよう ほかきよう
四十余年の經經をすてて法華經に入らざら
ひとびと せけん ふこう ぶつぼう だいいち ふこう
ん人人は世間の孝不孝はしらず仏法の中には第一の不孝の者なるべし、故に
ひゆぼん いわ こんしさんがいないし またきようちよく しんじゆ
第二譬喩品に云く「今此三界乃至雖復教詔而不信受」等云云、四十余年
きようぎよう ほかきよう ひとびと しゅしん
の經經をすてずして法華經に並べて行ぜん人人は主師親の三人のをほせ
もち ひとびと
を用いざる人人なり。

教と申すは師親のをしへ詔と申すは主上の詔勅なるべし、仏は閻浮第一
けんおう けんぶ けんふ けんふ よんじゅうよねん きようぎよう ほかきよう
の賢王・聖師・賢父なり、されば四十余年の經經につきて法華經へうつ
らず、又うつれる人人も彼の經經をすてて・うつらざるは三徳備えたる
ひとびと きようぎよう さんとく

親父の仰もちを用いざる人天地にんてんの中に住むべき者にはあらず、この不孝ふこうの人の
住処じゅうしょを経つぎしの次下に定めて云く「若人にやくにん不信ふしん乃至其人命終入阿鼻獄いしこにんみょうじゅうにゅうあびごく」等云云、
たといほけきよう
設ふこうい法華經をそしらずともうつり付ざらん人人・不孝ふこうの失疑とがうたがいなかるべし、
不孝ふこうの者

は又惡道あくどう疑うたがいなし故に仏は入阿鼻獄と定め給いぬ、何に況や爾前にぜんの經經きようぎよう
に執心しゅうしんを固ほけきようなして法華經へ遷うつららざるのみならず、善導ぜんどうが千中無一せんちゅうむいつ・法然ほうねんが
捨閑閣しゃくわく抛ほうとかけるは・あに阿鼻地獄あびじごくを脱のがるべしや、其その所化しよけ並びに檀那だんなは
又申もうすに及およばず、雖復教詔すいふきようしやうにふしんじゆ而不信受もつと申すは孝に二つあり世間の孝せけんの孝不孝ふこう
は外典げてんの人人ひとびとこれをしりぬべし、内典ないてんの孝
不孝ふこうは設たといい論師等ろんしなりとも実教じつぎようを弁わきまえざる權教ごんきようの論師ろんしの流を受けたる末
の論師ろんしなどは後生ごしやうしりがたき事なるべし、何に況や末末の人人ひとびとをや。

涅槃經ねはんぎようの三十四に云く「人身じんしんを受けん事は爪上の土・三惡道さんあくどうに墮おちん事

は十方世界の土・四重・五逆・乃至涅槃經を謗ずる事は十方世界の土
しじゅうごぎやくないしねはんぎよう
四重五逆乃至涅槃經を信ずる事は爪の上の土」なにととかれて候、末代
しぎやく
には五逆の者と謗法の者は十方世界の土のごとしとみへぬ、されども当時
じゅうごうせかい
五逆罪つくる者は爪の上の土・つくらざる者は

じゅつほうせかい きょうもん

十方世界の土と説かれ候へば経文そらごととなるやうにみへ候をくはしく

かんがへみ候へば不孝ふこうの者を五逆罪ごぎやくざいの者とは申し候か、又相似そうじの五逆ごぎやくと申す

事も候、さるならば前王ぜんおうの正法しょうほう・実法じつほうを弘めさせ給えと候を今の王ごんほうの権法ごんほう

・相似そうじの法を尊んで天子本命てんしほんめいの道場どうじょうたる正法しょうほうの御寺ごきえの御帰依ごきえうすくして、

権法ごんほう・邪法じゃほうの寺の国に多くいできたれ

るは、愚者ぐしゃの眼まなこには仏法ぶつぽう繁盛はんじょうとみへて仏天智者ぶつてんちしゃの御眼まなこには古き正法しょうほうの

寺ふほ寺ふほやうやくうせ候へば一ふこうには不孝ふこうなるべし賢かしこげなる父母ふぼの氏寺ふほをすつるゆ

へ二ふたには謗法ぼうほうなるべし、若しもしからば日本国にほんこく当世とうせは国一同ふこうに不孝謗法ふこうぼうほうの国

な

るべし、此の国は釈迦如来しやくかにょらいの御所領しよりょう仏ぶつの左右臣下さうおみたる大梵天王だいぼんてんのう・第六天だいろくてんの

魔王まおうにたはせ給たまひいて大海たいかいの死骸たいがいをとどめざるがごとく宝山ほうざんの曲林まがきをいとう

がごとく此の国の謗法ぼうほうをかへんとおぼすかと勘かんえ申もうすなりと申せ。

この上捨てられて候四十余年の経経きやうぎやうの今に候はいかになんなんと俗なつの難なんせば返詰へんきつして申もうすべし、塔たをくむあししろは塔たくみあげては切りすつるなり
なんもうと申もうすべし、此たとえの譬げんぎは玄義げんぎの第二の文に「今の太教も若もし起ほうれば方便ほうべんの教絶もうす」と申もうす釈しゃくの心なり、妙もうと申もうすは絶もうという事絶もうと申もうす事は此の経起いぜんれば已前きやうぎやうの経経きやうぎやうを断たちとどむ止もうると申もうす事なる
べし、正直捨方便しやうじきしやほうべんの捨もんじの文字かじやうの心・又嘉祥かじやうの日出しやうぬるに星せいかくるの心なる
べし、但ただし爾前にぜんの経経きやうぎやうは塔さんぜのあししろなれば切りすつるとも・又塔しよぶつをす
りせん時は用もちゆべし又切りすつべし、三世さんぜの諸仏しよぶつの説法せつぽうの儀式ぎしきかくのご
し。

又俗なんの難いわに云じかくく慈覚大師じかくだいしの常行堂等じやうぎやうの難なんこれをば答ないてんうべし、内典ないてんの人な
外典げてんをよむ得道とくどうのためにはあらず才学さいがくのためか、山寺しやうじの小児せうじの俱舎くしやの頌しよ
をよむ得道とくどうのためか、伝教慈覚でんぎやうじかくは八宗はつしゆうを極きわめ給たまへり一切経いっさいきやうをよみ給たまう、

これみな法華經ほけきょうを詮たと心へ給たまはん梯磴かけはしなるべし。

又俗なんの難いわに云く何いかにさらば御房ごぼうは念仏ねんぶつをば申し給たまはぬ、答えて云く伝教でんきょう

だいし

大師だいしは二百五十戒をすて給たまいぬ時にあたりて法華円頓ほっけえんどんの戒にまぎれしゆへ

とうせ　しよしゅう

なり、当世とうせは諸宗しよしゅうの行多けれども時にあたりて念仏ねんぶつをもてなして法華經ほけきょうを

ほう

謗ほうずるゆえに金石迷まよいやすければ唱となえ候はず、例せば仏・十二年が間・

じゅうらくがじょう

常樂我淨じょうらくがじょうの名をいみ給たまいき、外典げてんにも寒食

のまつりに火をいみあかき物をいむ、不孝ふこうの国と申もうす国をば孝養こうようの人とはとをらず、此等これらの義なるべし、いくたびも選択せんちやくをばいろへずして先ずかうたつべし。

又御持仏堂にて法門ほうもん申したりしが面目めんもくななどかかれて候事かへすがへす

不思議ふしぎに・をぼへ候、そのゆへは僧となりぬ其その上一閻浮提えんぶだいにありがたき

法門ほうもんなるべし、設たいとうかくきの菩薩なりともなにとかをもうべき、まして梵天ぼんてん

・帝釈等たいしやくは我等われらが親父釈迦しやかに如来よらいの御所領しよりようをあづかりて正法しょうぼうの僧をやしな

うべき者につけられて候、毘沙門等びしゃもんは四天してん

下の主此等これらが門まほり又四州の王等は毘沙門天びしゃもんてんが所従しよじゆうなるべし、其その上・

日本秋津嶋は四州りんのうの輪王しよじゆうの所従およにも及ばず・但嶋の長おさなるべし、長おさなんと

につかへん者どもに召されたり上ななどかく上・面目めんもくななど申もうすは・旁かたがた

せんずるところ日蓮にちれんをいやしみてかけるか、総じて日蓮にちれんが弟子でしは京にのぼ

りぬれば始は・わすれぬやうにて後には天魔てんまつきて物にくるうせう房がごとし、わ御房ごぼうもそれていになりて天のにくまれかほるな。

のぼりていくばくもなきに実名をかうるでう物くるわし、定めてことばつき音なんども京なめりになりたるらん、ねずみがかわほりになりたるやうに鳥にもあらずねずみにもあらず・田舎法師いなかほしにもあらず京法師みやこほしにもにず・せう房がやうになりぬと・をぼゆ、言をば但いなかことばにてあるべしなかなか・あしきやうにて有あるなり、尊成たかなりとかけるは隱岐おきの法皇ほうこうの御実名かかたがた不思議ふしぎなるべし。

かつ・しられて候やうに当世とうせの高僧真言こうそうしんこん・天台等てんだいの人人ひとびとの御いのりは叶かなうまじきよし、前前ぜんぜんに申し候上もう・今年鎌倉かまくらの真言師等しんごんしは去年こぞより變成男子かなの法をこなはる、隆弁じたんなどとは自歎じたんする事かぎりなし、七八百余人しんごんしの真言師・東寺とうじ・天台てんだいの大法秘法だいほうひほう尽して行ぜしがついにむなしくなりぬ、

ぜんしゅう りっそう
禪宗・律僧等又一同に行いしかどもかなはず、日蓮^{にちれん}

が^{かな}叶うまじと申^{もう}すとして不思議^{ふしぎ}なりなんどをどし候いしかども^{みな}皆むなしくな

りぬ、小事^{しょうじ}たる今生^{こんじょう}の御いのりの叶はぬを用つてしるべし^{だいじ}大事^{だいじ}たる後生^{ごしょう}

^{かな}叶うべしや。

真言宗しんこんしゅうの漢土かんとに弘ひろまる始はじは天台てんだいの一いち念ねん三さん千せんを盗ぬすみ取とつて真言しんこんの教相きょうそうと

定さだめて理りの本ほんとし枝葉しやうたる印いん・真言しんこんを宗しゆと立たて宗しゆとして天台宗てんだいしゅうを立たて下くだす

条ほう謗ぼう法ぽうの根こん源げんたるか、又また華嚴けこん・法相ほつそう・三論さんろんも天台宗てんだいしゅう日本にほんになかりし時ときは

謗ほう法ぽうともしられざりしが伝でん教大師ぎやうだいし円宗えんしゅうを勘かんえいだし給たまいて後ほう謗ぼう法ぽうの宗しゆと

もしられたりしなり、当世とうせい真言しんこん等の七宗しちしゆの

者しやしかしながら謗ほう法ぽうなれば大事だいじのいいのり叶かなうべしとも・ををぼへず、天台宗てんだいしゅう

の人人ひとびとは我が宗しゆは正ただなれども邪よこしまなる他宗たししゅうと同おなずれば我が宗しゆの正ただをもしらぬ

者しやなるべし、譬たとへば東あづまに迷まよう者しやは対当たいとうの西にしに迷まよい東西とうしに迷まようゆへに十方じふぱう

に

迷まようなるべし。

外道げどうの法ぽうと申もうすは本内道もとないどうより出いでて候しか、而しかれども外道げどうの法ぽうをもつて内道ないどう

の敵てきとなるなり、諸宗しよしゅうは法華經ほけきやうよりいで天台宗てんだいしゅうを才学しかとして而しかも天台宗てんだいしゅう

を失うなるべし、天台宗の人人は我が宗は実義とも知らざるゆへに我が宗

のほろび我が身のかろくなるをばしらずして他宗を助けて我が宗を失うな

るべし、法華宗の人が法華經の題目南無妙法蓮華經とはとなえずして南無

阿弥陀仏と常に唱えば法華經を失う者なるべし、例せば外道は三宝を立つ

其の

中に仏宝と申すは南無摩醯修羅天と唱えしかば仏弟子は翻邪の三歸と申し

て南無釈迦牟尼仏と申せしなり、此れをもつて内外のしるしとす、南無

阿弥陀仏とは浄土宗の依經の題目なり、心には法華經の行者と存すとも

南無阿弥陀仏と申さば傍輩は念仏者としりぬ、法華經をすてたる人とをも

うべし、叡山の三千人は此の旨を弁えずして王法にもすてられ叡山をもほ

ろぼさんとするゆへに自然に三宝に申す事叶わず等と申し給うべし。

人不審して云く天台・妙楽・伝教等の御釈に我がやうに法華經並びに

一切経を心えざらん者は悪道に墮つべしと申す釈やあると申さば、玄の三
籤の三及び已今当等をいだし給うべし、伝教大師六宗の学者・日本国の
十四人を呵して云く「顕戒論の下に云く昔斉朝の光統を聞き今は本朝の
六統を見る、実なるかな法華の何況や」等云云、華嚴・真言・法相・三論
の四宗を呵して云く「依憑集に云く新来の真言家は即ち筆受の相承を泯
ぼし、旧到の華嚴家

は則ち影響の軌模を隠す。沈空の三論宗は彈訶の屈恥を忘れ称心の醉を

覆う、著有の法相宗は僕陽の帰依を非し青竜の判経を撥う」等云云、天台

・妙楽・伝教等は真言等の七宗の人人は設け戒定はまつたくとも謗法の

ゆへに悪道脱るべからずと定められたり、何に況や禪宗・浄土宗等は勿論

なるべし、されば止観は偏に達磨をこそはして

候めれ、而るに当世の天台宗の人人は諸宗に得道をゆるすのみならず

諸宗の行をうばい取つて我が行とする事いかん、当世の人人ことに真言宗

を不審せんか立て申すべきやう、日本国は八宗あり真言宗大に分れて二

流あり所謂東寺・天台なるべし、法相・三論・華嚴・東寺の真言等は大乘

宗設け定慧は大乘なれども東大寺の小乗戒を持つ

ゆへに戒は小乗なるべし、退大取小の者小乗宗なるべし、叡山の

真言宗は天台円頓の戒をうく全真言宗の戒なし、されば天台宗の円頓

戒にをちたる真言宗なり等申すべし、而るに座主等の高僧名を天台宗にかりて一向・真言宗によって法華經をさぐるゆへに・叡山皆謗法になりて御いのりにしるしなきか。

問うて云く天台法華宗にたいして真言宗の名をけづらるる証文如何、

答えて云く学生式に云く傳教大師「天台法華宗年分学生式一首年分度者の人

柏原先帝天台法華宗
伝法者に加えらる凡そ法華宗天台の年分は弘仁九年より叡山に住せしめて一十二

年山門を出さず兩業を修しゅうがく学せしめん、凡そ止觀業の者○凡そ遮那業の者」

等云云、顯戒論縁起の上に云く「新法華宗を加えんことを請う表一首、

沙門最澄○華嚴宗に二人天台法華宗に二人」等云云、又云く「天台の業に

二人一人摩訶止觀を讀ましむ」此等は天台宗の内に真言宗をば入れて候こそ候め

れ、嘉祥元年六月十五日の格に云く「右入唐廻て請益す伝灯法師位円仁

の表に☆伏して天台宗の本朝に伝わることを尋ねれば○延暦廿四

年○廿五年特天台の年分度者二人を賜う一人は真言の業を習わし一人は
止観しかんの業を学す○然しかれば則すなわち天台宗の止観しかんと真言しんごんとの両業は是これ桓武天皇
の崇建する所えいざん等云云、叡山えいざんにをいては天台宗てんだいしゅうにたいしては真言宗しんごんしゅうの名
をけづり天台宗を骨とし真言しんごんをば肉となせるか。

而るに末代に及びて天台・真言・両宗中あしうなりて骨と肉と分け座主
は一向に真言となる骨なき者のごとし・大衆は多分天台宗なり肉なきも
のごとし、仏法に諍いあるゆへに世間の相論も出来して叡山静ならず朝
下にわづらい多し、此等の大事を内内は存すべし、此の法門はいまだをし
えざりきよくよく存知すべし。

又念仏宗は法華経を背いて浄土の三部経につくゆへに阿弥陀仏を正とし
て釈迦仏をあなづる、真言師・大日をせんとをもうゆへに釈迦如来をあな
づる、戒にをいては大小殊なれども釈尊を本とす余仏は証明なるべし、
諸宗殊なりとも釈迦を仰ぐべきか、師子の中の虫師子をくらう、仏教を
ば外道はやぶりがたし内道の内に事いできた

りて仏道を失うべし仏の遺言なり、仏道の内には小乗をもつて大乘を
失い権大乘をもつて実大乘を失うべし、此等は又外道のごとし、又小乗

・権大乘よりごんだいじょうは実大乘じつだいじょう法華經ほけきょうの人人ひとびとがかへりて法華經ほけきょうをば失だいじはんが大事だいじにて候べべ

し、仏法ぶつぽうの滅不滅めつふめつは叡山えいざんにあるべし、叡山えいざんの仏法滅ぶつぽうせるかのゆえに異国いこく我が朝あさをほろぼさんとす、叡山えいざんの正法しょうぽうの失うしなするゆえに大天魔てんま日本にほん国こくに出来しゅつたして法然ほうねん・大日等だいにちが身みに入り、此等これらが身を橋はしとして王臣等おうしんの御身おんみにうつり住すみ

、かへりて叡山えいざん三千人さんぜんに入るゆえに師檀中不和しだんふわにして御祈ぎとら☆しるしなし、御祈請きしやうしるしなければ三千さんぜんの大衆等檀那たいしゅうだんなにすてはてられぬ。

又王臣等おうしん・天台てんだい・真言しんごんの学者がくしゃに問とうて云いく念仏ねんぶつ・禅宗等ぜんしゅうの極理ごくりは天台てんだい・真言しんごんとは一つかとはせ給たまへば、名なは天台真言てんだいしんごんにかりて其その心こころも弁わえぬ高僧こうそう天魔てんまにぬかれて答こたえて云いく、禅宗ぜんしゅうの極理ごくりは天台てんだい・真言しんごんの極理ごくりなり・弥陀念仏みだねんぶつは法華經ほけきょうの肝心かんじんなりなんと答こたえ申もうすなり、而しかを念仏者ねんぶつ・禅宗等ぜんしゅう

のやつばらには天魔てんま乗りうつりて当世とうせの天台真言てんだいしんごんの

僧そうよりも智慧ちえかしこきゆえに全くしからず、禅ぜんははるかに天台・真言てんだいしんごんに超こえ

たる極理ごくりなり、或あるは云いわく「諸教しよきようは理深我等衆生りじんわれらしゆじようは解微きなり、機教相違きそうい

せり得道とくどうあるべからず」なんと申もうすゆへに、天台・真言等てんだいしんごんの学者がくしや・王臣等おうしん

・檀那だんな皆奪ないとられて御歸依ごきえなければ現身げんしんに餓鬼道がきに墮おちて友の肉をはみ

・仏神ぶっしんにいかりをなし檀那だんなをすそし年年に災

を起し・或は我が生身の本尊たる大講堂の教主釈尊をやきはらい・或は
生身の弥勒菩薩をほろぼす、進んでは教主釈尊の怨敵となり退いては
当来弥勒の出世を過たんとくる候か、この大罪は経論にいまだとかれず、
又此の大罪は叡山三千人の失にあらず公家・武家の失となるべし。

日本一州上下万人・一人もなく謗法なれば大梵天王帝桓並びに天照大神

等隣国の聖人に仰せつけられて謗法をためさんとせらるるか、例せば国民

たりし清盛入道王法をかたぶけたてまつり結句は山王・大仏殿をやきはら

いしかば天照大神正八幡山王等よりきせさせ給いて源の頼義が末の

頼朝に仰せ下して平家をほろぼされて

国土安穩なりき、今一国挙りて仏神の敵となれり、我が国に此の国を領す

べき人なきかのゆへに大蒙古国は起るとみへたり、例せば震旦高麗等は天竺

について仏国なるべし、彼の国国禪宗・念仏宗になりて蒙古にほろぼ

されぬ、日本国は彼の二国の弟子なり二国のほろぼされんにあに此の国安穩あんのんなるべしや、国をたすけ家を・をもは

人ひと人ひとはいそぎ禅念がともがらを經文きょうもんのごとくいましめらるべきか、經文

のごとくならば仏神ぶっしん・日本国にまします、かれを請しょうしまいらせんと術は

おぼろげならでは叶かないがたし、先ず世間の上下万人云く八幡大菩薩は正直しやうじき

の頂いただきにやどり給たまい別べちのすみかなし等云云、世間に正直しやうじきの人なければ大

菩薩ぼさつのすみかまします、又仏法の中に法華經計りこそ正直しやうじきの御經にては

おはしませ、法華經ほけきやうの行者ぎやうじやなければ大菩薩ぼさつの御すみか・おはせざるか。

但し日本国ただにほんこくには日蓮にちれん一人計りこそ世間出世正直せけんしゆつせしやうじきの者にては候へ、其の故

は故最明寺入道さいみやうじにゆうどうに向つて禅宗ぜんしゆうは天魔てんまのそいなるべしのちに勘文かんもんもつてこ

れをつけしらしむ、日本国にほんこくの皆人無間地獄みなむげんじごくに墮おつべし、これほど有ある事を

正直しやうじきに申すものは先代せんだいにもありがたくこそ、これをもつて推察あるべしそ

れより外ほかの小事曲しょうじぐべしや、又聖人しょうにんは言

をかざらずと申もうす、又いまだ顕あらわれざる後をしるを聖人しょうにんと申もうすか、日蓮にちれんは

しょうにん いちぶん

聖人の一分にあたり、此の法門ほうもんのゆへに二十余所をわれ結句けっく流罪りゅうざいに及び

身に多くのきずをかをほり弟子でしをあまた殺させたり、比干ひかんにもこえ伍しそ

にもをとらず、提婆菩薩だいばぼさつの外道げどうに殺され師子尊者ししそんじゃの檀弥利王だんみりおうに頸をはなれしにもをとるべきか、もししからば八幡大菩薩はちまんたいぼさつは日蓮にちれんが頂いただきをはなれさせ給たまいてはいづれの人の頂いただきにかすみ給たまはん、日蓮にちれんを此の国こちに用いずばいかんがすべきとなげかれ候なりと申せ、又日蓮房にちれんの申し候もち・仏菩薩並びに諸大善神しゅだいぜんじんをかへしまいらせん事は別の術べちすべなし、禪宗ぜんしゅう・念仏宗ねんぶつしゅうの寺寺を一つもなく失うしない其その僧らをいましめ叡山えいざんの講堂こうどうをつくり靈山りょうぜんの釈迦牟尼仏しやかむににぶつの御魂みたまを請しょうし入れたてまつらざらん外は諸しよ神もかへり給たまうべからず、諸仏しよぶつも此の国こちを扶たすけ給たまはん事はかたしと申せ。

◆二五六 十章抄

文永八年五月 五十歳御作 与三位公ぶんえい

日行 1273p

華嚴宗と申す宗は華嚴經の円と法華經の円とは一なり而れども法華經の

円は華嚴の円の枝末と云云、法相・三論も又又かくのごとし、天台宗彼の

義に同ぜば別宗と立てなにかせん、例せば法華・涅槃は一つ円なり先後に

依つて涅槃尚をとるとさだむ、爾前の円・法華の円を一とならば先後によ

りて法華豈劣らざらんや、詮ずるところ・

この邪義のをこり此妙彼妙・円実不異・円頓義齊・前三為☆等の釈にばか

されて起る義なり、止観と申すも円頓止観の証文には華嚴經の文をひきて

候ぞ、又二の巻の四修三昧は多分は念仏と見へて候なり、源濁れば流清

からずと申して爾前の円と法華經の円と一つと申す者が止観を人によませ

候えば但念仏者のごとくにて候なり、但止観

は迹門より出たり本門より出たり本・迹に亘ると申す三つの義いにしえよ

りこれあり、これは且くこれを・をく、故に知る一部の文共に円乗開権の

妙観みょうかんを成すと申もうして止観しかん一部は法華經ほけきょうの開會かいえの上に建立こんりゅうせる文なり、爾前にぜんの經經きょうきょうをひき乃ないし至外典げてんを用いて候も爾前にぜん・外典げてんの心にはあらず、文をばかれども義をばけづりすてたるなり、「境は昔に寄ると雖いえども智は必ず円に依よる」と申もうして文殊問方等請觀音等もんじゆ ほうとう かのん しきようの諸經しよきようを引いて四種を立つれども心は必ず

法華經なり「諸文を散引して一代の文体を該れども正意は唯二經に歸す」と申す・これなり。

止觀に十章あり大意・釈名・体相・摂法・偏円・方便・正觀・果報・

起教・旨歸なり、前六重は修多羅に依ると申して大意より方便までの六重

は先四巻に限る、これは妙解迹門の心をのべたり、今妙解に依つて以て

しようぎよう

正行を立つと申すは第七の正觀・十境・十乗の觀法本門の心なり、

いちねんさんぜんこ

一念三千此れよりはじまる、一念三千と申す事は迹門にすらな

ゆる

を許されず何に況や爾前に分たへたる事なり、一念三千の出処は略開三の

じっそう

十如実相なれども義分は本門に限る・爾前は迹門の依義判文迹門は本門

しんじつ

の依義判文なり、但真実の依文判義は本門に限るべし、されば円の行まち

たいかい

まちなり沙をかずへ大海をみるなを円の行なり、何に況や爾前の經をよみ

みだ

弥陀等の諸仏の名号を唱うるをや。

但ただこれらは時じ時の行ぎやうなるべし、真しん實じつに円えんの行ぎやうに順じゆんじて常じやうに口くちずさみにす

べき事は南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうなり、心しんに存ぞんすべき事はいちねんさんぜん一念三千かんぼうの觀法くわんぽうなり、こ

れは智ち者の行解ぎやうげなり日本にほん國こくの在ざい家けの者ものには但ただ一向いっごうに南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうとな

へさすべし、名なは必ず体たいにいたる徳とくあり、法華經ほけきやうに十七種しちしゆの名なありこれ通

名ななり別名さんぜは三世しよぶつみななの諸しよ佛ぶつ皆みな南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうとつけさせ給たまひしなり、阿あ彌み陀だ

・釈迦しゃか等の諸しよ佛ぶつも因位いんゐの時ときは必ず止觀しかんなりき口くちずさみは必ず南無なむ

妙法蓮華經みょうほうれんげきやうなり、此等これらをしらざる天台てんだい・真言等しんごんの念ねん佛ぶつ者もの口くちずさみには一向いっごう

に南無阿彌陀佛なむあみだぶつと申もうすあひだ在家ざいけの者ものは一向いっごうに

念おもうやう天台てんだい・真言等しんごんは念ねん佛ぶつにてありけり、又また善導ぜんどう・法然ほうねんが一門いちもんはすなわ

ち天台てんだい・真言しんごんの人人ひとびとも実じしゆに自宗かなが叶かないがたければ念ねん佛ぶつを申もうすなり、わづら

わしくかれを学まなせんよりは法華經ほけきやうをよまんよりは一向いっごうに念ねん佛ぶつを申もうして淨土じやうど

にし

て法華經ほけきょうをもさとりべしと申もうす、此このの義ぎ日本にほん国こくに充満じゅうまんせし故ゆえに天台てんだい・真言しんごん
の学者がくしや在家ざいけの人人ひとびとにすてられて六十余州ろくじゅうしゅうの山寺さんじはうせはてぬるなり。

九十六種くじゅうろくしゅの外道げどうは仏慧比丘ぶつてびくの威儀いぎよりをこり、日本にほん国こくの謗法ほうぼうは爾前にぜんの円えん

と法華ほっけの円えんと一つという義ぎの盛さかなりしよりこれはじまれり、あわれなるか

なや、外道げどうは常楽我淨じょうらくがじょうと立てしかば仏世ぶつせいにいでまさせ給たまいては苦・空・

無常むじょう・

むが 無我と・とかせ給いき、二乗は空觀に著して大乘にすすまざりしかば仏
いまし 誠めて云く五逆は仏のたね塵勞の 疇は如来の種二乗の善法は永不成と
きら 嫌わせ給いき、常樂我淨の義こそ外道はあしかりしかども名はよかりしぞ
かし、

しか 而れども仏名をいみ給いき、悪だに仏の種となるましてぜんはとこそをば
うれども仏二乗に向いては悪をば許して善をばいましめ給いき。

とうせ 当世の念仏は法華經を国に失う念仏なり、設いぜんたりとも義分あたれ

りというとも先ず名をいむべし、其の故は仏法は国に随うべし、天竺には

一向小乗 一向大乘 大小兼学の国ありわかれたり、震旦亦復是くの如し、

日本国は一向大乘の国大乘の中の一乗の国なり、華嚴・法相・三論等の

諸大乘すら猶相応せず何に況や小乗の三宗をや、而るに当世にはやる

念仏宗と禪宗とは源方等部より事をこれり法相・三論・華嚴の見を出す

べからず、南無阿弥陀仏は爾前にかぎる、法華經にをいては往生の行にあ

らず開会の後・仏因となるべし、南無妙法蓮華經

は四十余年にわたらず但法華八箇年にかぎる、南無阿弥陀仏に開会せられ

ず法華經は能開・念仏は所開なり、法華經の行者は一期南無阿弥陀仏と

申さずとも南無阿弥陀仏・並びに十方の諸仏の功德を備えたり、譬え

如意宝珠の如し金銀等の財を備えたり、念仏は一期申すとも法華經の功德

をぐすべからず、譬へば金銀等の如意宝珠をかねざるがごとし、譬へば三千

大世界に積みたる金銀等の財も一つの如意宝珠をばかうべからず、設い

開会をさ

とれる念仏なりとも猶体内の権なり体内の実に及ばず、何に況や当世に開会

を心得たる智者も少なくこそをはすらめ、設いさる人ありとも弟子・眷属

・所従などはいかんがあるべかるらん、愚者は智者の念仏を申し給うを

みては念仏ねんぶつ者とぞ見候らん、法華經ほけきょうの行者ぎやうじやとはよも候はじ、又南無なむ
妙法蓮華經みょうほうれんげきょうと申もうす人をばいかなる愚者ぐしやも法華經ほけきょうの行者ぎやうじやとぞ申もうし候そうらはんず
らん、当世とうせに父母ふぼを殺す人よりも謀反を・をこす人よりも天台てんだい・真言しんごんの学者がくしや
と云はれ

て善公れいさんが礼讃らいさんをうたひ然公ねんぶつが念仏ねんぶつをさえづる人人ひとびとは・をそろしく候なり。

この文を止観しかんよみあげさせ給たまいて後ふみのざの人ひとにひろめてわたらせ給たまうべし、止観しかんよみあげさせ給たまはばすみやかに御わたり候へ。

沙汰さたの事は本より日蓮にちれんが道理どうりだにもつよくば事切れん事かたしと存じて候いしが人ごとに問注ほうもんは法門ほうもんにはにずいみじうしたりと申し候なるときに事切るべしとも・をぼへ候はず、少弼殿しょうひつより平三郎左衛門さえもんのもとに・わたりて

候とぞうけ給たまわり候、この事のび候わば問注はよきと御心得ごこころえ候へ、又いつにてもよも切れぬ事は候はじ、又切れずば日蓮にちれんが道理どうりとこそ人人ひとびとはをもち候はんずらめ、くるしく候はず候、当時とうじはことに天台てんだい・真言しんごん等の人人ひとびとの多く来て候なり、事多き故ゆえに留め候とどい了おわぬ。

◆二五七

教行証御書

文永十二年三月五十四歳御作

与三位房日進於身延

1276p

そ しょうそう

夫れ正像二千年に小乗・権大乘を持依して其の功を入れて修行せし

だいたいそ

かば大体其の益有り、然りと雖も彼れ彼れの経経を修行せし人人は自依

きようぎよう

の経経にして益を得ると思へども法華経を以て其の意を探れば一分の益

ゆえん いか

なし、所以は何ん仏の在世にして法華経に結縁せしが其の機の熟否に依り

えんきじゆんじゆく

円機純熟の者は在世にして仏に成れり、根機微劣の

しょうほう

者は正法に退転して権大乘経の浄名・思益・觀經・仁王般若経等に

そ しょうか

して其の証果を取れること在世の如し、されば正法には教行証の三つ

とも けんび

俱に兼備せり、像法には教行のみ有って証無し、今末法に入りては教の

きようしょうなく

み有つて行証無く

ざいせけちえん
在世結縁の者一人も無しこんじつ権実の二機きこと悉く失せり、此の時は濁惡じよくあくたる当世とうせの
逆謗ほんもんの二人に初めて本門の肝心かんじん寿量品じゅりょうほんの南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうを以て下種げしゅと
為すな「是この好き良藥りょうやくを今留とどめて此こゝに在おくなんじ汝取べつて服べす可べし差えじと憂うれる
勿なかれ」とは是これなり、乃むかし往過去いおんの威音王おんおう仏ぶつの像法そうほうに三寶さんほうを知る者一人も無なか
りしに・不輕菩薩ふぎようぼさつ出現しゅつげんして教主きやうしゅ説たまき置まいき給たまい

し二十四字を一切衆生に向つて唱えしめしがごとし、彼の二十四字を聞きし者は一人も無く亦不輕大士に値つて益を得たり、是れ則ち前の聞法を下種とせし故なり、今も亦是くの如し、彼は像法此れは濁惡の末法・彼は初隨喜の行者此れは名字の凡夫彼は二十四字の下種此れは唯五字なり、得道の時節異なりと雖も成仏の所詮は全体是れ同じかるべし。

問うて云く上に挙ぐる所の正像末法の教行証各別なり何ぞ妙樂大師は「末法の初冥利無きにあらず且く大教の流行すべき時に抛る」と釈し給うや如何、答えて云く得意に云く正像に益を得し人人は顯益なるべし在世結縁の熟せる故に、今末法には初めて下種す冥益なるべし已に小乘・權大乘爾前・迹門の教行証に似るべくもなし現に証果の者之無し、妙樂の釈の如くんば、冥益なれば人は是を知らず見ざるなり。

問うて云く末法に限りて冥益と知る經文之有りや、答えて云く法華經

第七葉王品に云く「此の経は則ち為閻浮提の人の病の良薬なり若し人病有らんには是の経を聞くことを得ば病即ち消滅して不老不死ならん」等云云、妙楽大師云く「然も後の五百は且く一往に従う末法の初冥利無きにあらざりばら且く大教の流行す可き時に抛るが故に五百と云う」等云云。

問うて云く汝が引く所の経文釈は末法の初五百に限ると聞きたり

権大乘経等の修行の時節は尚末法万年と云へり如何、答えて曰く前釈

すでにしよじゅういちおう

已に且従一往と云へり再往は末法万年の流行なるべし、天台大師上の

きようもん

経文を釈して云く「但当時大利益を獲るのみに非ず後の五百歳遠く妙道

うお

に沾わん」等云云、是れ末法万年を指せる経釈に非ずや、

ほけきよう

法華経第六分別功德品に云く「悪世末法の時能く是の経を持てる者」と

あんらくきようほん

安楽行品に云く末法の中に於て是の経を説かんと欲す等云云此等は皆末法

まんねん

万年と云う経文なり、彼れ彼れの経経の説は四十余年未顕真実なり・或

は結集者の意に拠るか依用し難し、拙いかな諸宗の学者・法華經の下種
を忘れ三五塵点の昔を知らず純円の妙經を捨てて亦生死の苦海に沈まん
事よ、円機純熟の国に生を受けて徒に無間・大城に還らんこと不便とも
申す許り無し、崑崙山に入りし者の一の玉をも取らずして貧国に帰り梅檀
林に入つて瞻蔔を踏まずして瓦礫の本国に帰る者に異なら
ず、第三の巻に云く「飢国より来りて忽ち大王の膳に遇うが如し」第六に
云く「我が此の土は安穩○我が浄土は
こわ
毀れず」等云云。

狀に云く難問に云く爾前当分の得道等云云、涅槃經第三に「善男子
おうとうしゅうじゅう
応当修習」の文を立つ可し之を受けて弘決第三に「所謂久遠必無大者」
と會して「爾前の諸經にして得道せし者は久遠の初業に依るなるべし」と
云つて一分の益之無き事を治定して、其の後滅後の弘經に於ても亦復
いちぶん
これむき
そ
めつこ
ぐきよう
おい
また

かくのこと しょうそつ 是くの如く正像の得益証果の人は在世の結縁に依るなる ざいせい けちえん よ

べし等云云、又彼が何度も爾前の得道を云はば無量義經に四十余年の經經 にぜん とくどう むりょうぎぎょう よんじゅうよねん きょうぎょう

を仏・我れと未顕真実と説き給へば・我等が如き名字の凡夫は仏説に依り みけんしんじつ と たま われら こと みょうじ ほんぶ ぶつせつ よ

てこそ成仏を期すべく候へ人師の言語は無用なり、涅槃經には依法不依人 じょうぶつ けす にんし こんご むよう ねはんぎぎょう えほう ふえ

と説かれて大に制せられて候へばなんと立てて未顕真実と打ち捨て打ち捨 おおい しょうじきしやほうべん せそんほうくご きょうしやく さうなく いだ

て正直捨方便・世尊法久後なんどの經釈をば秘して左右無く出すべから しやうじきしやほうべん せそんほうくご きょうしやく せうしやく

ず。

又難問に云く得道の所詮は爾前も法華經もこれ同じ、其の故は觀經の なん いわ とくどう しよせん にぜん ほけきぎょう そのゆえ かんきぎょう

往生・或は其の外・例の如し等云云と立つ可し、又未顕真実其の外但似仮 おうじやう ある そ こと べ みけんしんじつそ たんに

名字等云云と、又同時の經ありと云はば法師品の已今当の説をもつて会す みょうじ どうじ ほうしほん いこんとう え

可きなり、玄義の三籤の三の文を出す可し、經釈能く能く料簡して秘す げんぎ せん くだ いだ べ きょうしやくよ りょうけん

可し。

一状に云く真言宗云云等、答う彼が立つる所の如き弘法大師の戲論無明
の辺域何れの經文に依るやと云つて・彼の依經を引かば云うべし大日如来
は三世の諸仏の中には何れぞやと云つて・善無畏三藏・金剛智等の偽りを
ば

汝は知れるやと云つて其の後・一行筆受の相承を立つ可し、大日經には
一念三千跡を削れり漢土にして偽りしなり、就中僻見有り毘廬の頂上
を蹈む証文は三世の諸仏の所説に之有りや、其の後・彼云く等云云、立つ
可し

だいまんばらもん 大慢婆羅門が高座の足等云云、彼れ此れ是くの如き次第何なる経文論文にこれ いた 之を出すやと等云云、其の外常に教へし如く問答対論あるべし、設ひ何なる宗なりとも真言宗の法門を云はば真言の僻見を責む可く候。
次に念仏の曇鸞法師の難行・易行道綽が聖道・浄土善導が雑行・しょうぎようほうねん しゃへいかくほう 正行 法然が捨閑閣抛の文、此等の本経・本論を尋ぬべし、経に於て権実の二経有ること例の如し、論に於ても又通別の二論有り、黑白の二論有ること深く習うべし、彼の依経の浄土三部経の中には是くの如き等の所説ありや、又人毎に念仏・阿弥陀等之を讃す又前の如し、
所詮和漢両国の念仏宗法華経を雑行なんと捨閑閣抛する本経・本論を尋ぬべし、若し慥なる経文なくんば是くのこと如く権経より実経を謗するの過罪、法華経の譬喩品の如くば阿鼻大城に墮落して展転無數劫を経歴し給はんずらん、彼の宗の僻謬を本として此の三世諸仏の皆是真實の

しょうもん
証文を捨つる其の罪実と諸人に評判せさすべし、心有こころあ

らん人誰か実否を決せざらんや、而して後に彼の宗の人師を強に破すべし、

いききょう

くいぜ

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

一經の株を見て万經の勝劣を知らざる事未練なる者かな、其の上・我と

あき

見明らめずとも釈尊並びに多宝分身の諸仏の定判し給へる經文法華經

ばか

かいぜしんじつ

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

許り皆是真實なるを不真實・未顕真實を已顕真實と僻める眼は牛羊の

しよけん

おと

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

所見にも劣れる者なるべし、法師品の已今当・無量義經の歴劫修行未顕

しんじついか

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

真實何なる事ぞや五十余年の諸經の勝劣ぞかし、諸經の勝劣は成仏の

うむ

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

有無なり、慈覺・智証

りどうじしやう

まなこ

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

の理同事勝の眼・善導・法然の余行非機の目・禪宗が教外別伝の所見は

えんもく

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

東西動転の眼目・南北不弁の妄見なり、牛羊よりも劣り蝙蝠鳥にも異なら

えほうふえ

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

ず、依法不依人の經文毀謗此經の文をば如何に恐れさせ給はざるや、悪鬼

えほうふえ

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

入其身して無明の悪酒に酔ひ沈み給うらん。

むみよう

い

い

い

い

い

い

い

一切は現証げんしょうには如しかず善無畏ぜんむい・一行が横難横死なんおうしこうぼう弘法こうぼう・慈覺じかくが死去しきよの有様
・實げに正法しょうぼうの行者ぎやうじゃ是この如ごとくに有あるべく候や、觀かん仏相ぶつそう海經かいきやう等の諸經しよきやう並ならび
に竜樹菩薩りゆうじゆぼさつの論文ろんぶん如何いかんが候や、一行ぎやう禪師ぜんしの筆受ひつじゆの妄語もうご・善無畏ぜんむいのたばかり
・弘法こうぼうの戲論けろん慈覺じかくの理同事勝りどうじしやう・曇鸞どんらん道綽どうしゆくが余行よきやう非機ひき・是かくの如ごとき人人ひとびとの
所見しよけんは權經こんきやう權宗こんしゆの虚妄こもうの仏法ぶつぼうの習ならひにてや候らん、

それほどに浦山敷もなき死去にて候ぞやと和らかに又強く両眼を細めに見

・顔貌に色を調へて閑に言上すべし。

状に云く彼此の経経得益の数を挙ぐ等云云、是れ不足に候と先ず陳ぶ

べし、其の後汝等が宗宗の依経に三仏の証誠之有りや未だ聞かず、よも

多宝分身は御来り候はじ、此の仏は法華経に來り給ひし間・一仏二言はや

はか御坐候べきと次に六難九易何なる経の文に之有りや、若し仏滅後の人人

の偽経は知らず、釈尊の実説五十年の説法の内には一字・一句も有るべか

らず候なんと立つ可し、五百塵点の顕本之有りや三千塵点の結縁説法あり

や・一念

信解・五十展転の功德何なる経文に説き給へるや、彼の余経には一二三

乃至十功德すら之無し五十展転まではよも説き給ひ候はじ、余経には一二

の塵数を挙げず何に況や五百三千をや、二乗の成・不成竜畜下賤の

そくしんじょうぶつ
即身成仏今

の経に限れり、華嚴・般若等の諸大乘経に之有りや、二乗作仏は始めて

こんきよう

今経に在り、よも天台大師程の明哲の弘法・慈覚の如き無文無義の偽りは

おはし給はじと我等は覚え候、又悪人の提婆天道国の成道法華経に並びて

いか

何なる経にか之有りや、然りと雖も万の難を闇いて何なる経にか十法界の

かいえ そつもくじょうぶつこれあ

開会等草木成仏之有りや、天台・妙楽の無非

ちゅうどうわくにきようしん

中道惑耳驚心の釈は慈覚・智証の理同事勝の異見に之を類す可く候や、

すで てんだい

已に天台等は三国伝灯の大師・普賢開発の聖師・天真・発明の権者なり、

あにきようろん

豈経論になき事を偽り釈し給はんや、彼れ彼れの経経に何なる一大事か

あ

之有るや、此の経には二十の大事あり就中五百塵点顕本の寿量に何なる

と たま

事を説き給へるとか人人は思召し候、我等が如き凡夫無始已来生死の苦底

ちんりん

に沈輪して仏道の彼岸を夢にも知らざりし衆生界を・無作本覚の三身と成

し実に一念三千 いちねんさんぜん

の極理を説くなんと浅深を立つべし、但し公場ならば然るべし私に問註す ごくり せんじん ただ こうじょう し か ひそか しる

べからず、慥に此の法門は汝等が如き者は人毎に座毎に日毎に談ずべくん たしか ほうもん なんじ こと ひごとく だん

ば三世諸仏の御罰を蒙るべきなり、日蓮已証なりと常に申せし是なり、大日 さんぜしよぶつ こおむ にちれんこしやう これ だいにち

経に之有りや、浄土三部経の成仏已来凡歴十劫之に類す可きや、なんと これあ みだ じやうどさんぶきやう じやうぶつこのかたほんりやく るい べ

前後の文乱れず一に会す可し、其の後又云うべし、諸人は推量も候へ ぜんご ぜんご え べ そ たほう しよにん

是くの如くいみじき御経にて候へばこそ多宝遠来して証 誠を加え分身 かくのごと しょうじやう ふんじん

来集し らいじゅう

て三仏の御舌を梵天に付け不虛妄とは☆しらせ給いしか、地涌千界出現し
て濁惡末代の当世に別付属の妙法蓮華經を一閻浮提の一切衆生に取り次
ぎ給うべき仏の勅使なれば・八十萬億の諸大菩薩をば止善男子と嫌はせ給
しか等云云、又彼の邪宗の者どもの習いとして強に証文を尋ぬる事之有
り、涌出品並びに文句の九・記の九の前三後三の釈を出すべし、但日蓮が
門家の大事之に如かず。

又諸宗の人・大論の自法愛染の文を問難とせば、大論の立所を尋ねて後
執權謗実の過罪をば竜樹は存知無く候いけるか、「余經は秘密に非ず法華
是れ秘密」と仰せられ・譬如大藥師と此の經計り成仏の種子と定めて又
悔い返して「自法愛染・不免墮惡道」と仰せられ候べきか、さで有らば仏語
には「正直捨方便・不受余經一偈」なんと法華經の実語には大に違背せり、
よもさにては候はじ、若し末法の当世時剋相應せる法華經を謗じたる弘法

曇鸞どんらんなどを付法蔵ふほうぞうの論師ろんし釈尊しゃくそんの御記文きもんにわたらせ給う菩薩ぼさつなれば鑒知かんちしてや記せられたる論文ろんぶんなるらん、覺束おほつか無しなどあざむくべし、御辺みへや不べ免墮惡道の末学あくどう まつがくなるらん 痛敷候いたわしくそうろう、未来無數劫みらいむしゅこう にんずうの人数にんずうにてや有あるらんと立つ可べし。

又律宗りつしゅうの良觀りょうかんが云く法光寺殿そじょうへ訴状たてまつそを奉る其の状いわに云く、忍性にんじやう年来なげ歎いいて云く当世とうせ・日蓮法師にちれんほつしと云える者世だごくに在り齋戒しやせんは墮獄だごくす云云、所詮しよせん何なる経論きやうろんに之有これありや一、又云く当世とうせ・日本国上下誰にほんこくじやうげ なんぶつか念仏ねんぶつせざらん念仏ねんぶつは無間むげんの業と云云、是れ何なる経文きやうもんぞや慥たしかなる証文しやうもんを日蓮房にちれんに対して之これを聞かこん是二、総じて是体この爾前得道にぜんとくどうの有無うむの法門六箇条云云、然しかるに推知すいちするに極楽寺良觀きよくらく りやうかん いぜんが已前いぜんの如く日蓮にちれんに相値あうて宗論しゅうろんあ有る可べきの由のし☆る事有らば目安めやすを上げて極楽寺きよくらくに対して申すべし、某それがしの師しにて候者いぬは去る文永八年ぶんえいに御勘氣ごかんきを蒙り佐州へ遷され給うて後・同じき文永ぶんえい

十一年正月の比御免許めんきよを蒙こり鎌倉かまくらに歸る、其その後平金吾へいきんごに對して様様の
次第しだい申し含こませ給たまいて甲斐かいの国の深山みやまに閉籠こもらせ給たまいて後は、何いかなる主上
女院みこころの御意ごいたりと云いえども山の内うちを出いで諸宗しよしゆうの学者がくしやに法門ほうもんあるべからざる
由おほ仰おほせ候けう、随したがつて其その弟子でしに若輩わくはいのものにて候けうへども師にちれんの日蓮にちれんの法門ほうもん九牛
が一毛およをも学まなび及およばず候けうといへども

ほけきよう

法華經に付いて不審有りと仰せらるる人わたらせ給はば存じ候なんと云つ

て、其の後は随問而答の法門申す可し、又前六箇条一一の難門・兼兼申せ

ごと

にちれん

でし

おくびよう

かな

きようぎよう

かながね

きようぎよう

しが如く日蓮が弟子等は臆病にては叶うべからず、彼れ彼れの經經と

ほけきよう

法華經と

しようにつ

せんじんじようぶつ

じようぶつ

にぜん

しゃくもん

しゃくそん

しゃくそん

しゃくそん

しゃくそん

勝劣・浅深成仏不成仏を判ぜん時・爾前・迹門の釈尊なりとも物の数

いか

そ

とうかく

ぼさつ

まして

ごんしゅう

ごんしゅう

ごんしゅう

ごんしゅう

ならず何に況や其の以下の等覺の菩薩をや、まして權宗の者どもをや、

ほけきよう

もう

ほんのう

くた

くた

くた

くた

くた

くた

くた

法華經と申す大梵王の位にて民とも下し鬼畜なると下しても其の過有ら

んやと意を得て宗論すべし。

しゅうん

しゅうん

しゅうん

しゅうん

しゅうん

しゅうん

しゅうん

しゅうん

しゅうん

又彼の律宗の者どもが破戒なる事山川の類るるよりも尚無戒なり、成仏

りっしゅう

はかい

はんせん

くず

くず

くず

くず

くず

くず

までは思もよらず人天の生を受くべしや、妙樂大師云く「若し一戒を持て

にんちゅう

にんてん

にんてん

にんてん

にんてん

にんてん

にんてん

にんてん

にんてん

にんてん

ば人中に生ずることを得若し一戒を破れば還て三途に墮す」と、其の外齋

にんちゅう

にんてん

にんてん

にんてん

にんてん

にんてん

にんてん

にんてん

にんてん

にんてん

しょうほうねんきよう

あごんきよう

だいししょうじよう

だいししょうじよう

だいししょうじよう

だいししょうじよう

だいししょうじよう

だいししょうじよう

だいししょうじよう

法經正法念經等の制法阿含經等の大小乘經の齋法齋戒今程の律宗忍性

が一党誰か一戒いっかい たもを持てる還墮三途だは疑無うたがいし、若しは無間地獄むげんじこくにや落ちん
ずらん不便ふびんなんど立てて宝塔品の持戒行者ぎょうじやと是これを☆しるべし、其その後良有やや
つて此の法華經の本門の肝心妙法蓮華經は三世の諸仏しよぶつの万行万善の功德くどく
を集めて五字ごじと為せり、此の五字ごじの内に豈万戒あにの功德くどくを納めざらんや、但し
此の具足ぐそくの妙戒みょうかいは一度持ひとたびつて後行者破ぎやうじやらんとすれど破われず是これを金剛宝器こんこう
戒もつとや申しけんなんど立つ可べし、三世さんぜの諸仏しよぶつは此の戒この戒を持ほつしんつて法身ほうしん・報身
・応身おうじんなんど何いずれれも無始無終の仏に成ら

せ給たまう、此これを「諸教しよきやうの中に於おいて之これを秘てんして伝だへず」とは天台大師は書き
給たまへり、今末法当世まつぽうとうせの有智うち・無智むち・在家ざいけ・出家しゆつけ上下万人じやうげばんにん・此の妙法蓮華經みやうほうれんげきやう
を持持つつて説しやくの如ごとく修行しゆぎやうせんに豈あに仏果ぶつがを得えざらんや、さてこそ決定けつじやう無有むう疑
とは

滅後濁惡めつごじよくあくの法華經ほけきやうの行者ぎやうじやを定判たまたせさせ給たまへり、三仏の定判もに漏もれたる

権宗の人人は決定して無間なるべし、是くの如くいみじき戒なれば爾前

・迹門の諸戒は今一分の功德なし、功德無からんに一日の斎戒も無用なり。

但此の本門の戒を弘まらせ給はんには必ず前代未聞の大瑞あるべし、

所謂正嘉の地動文永の長星是なるべし、抑当世の人人何の宗宗にか本門

の本尊戒壇等を弘通せる、仏滅後・二千二百二十余年に一人も候はず、日本

人王・三十代欽明天皇の御宇に仏法渡つて今に七百余年前代未聞の大法此

の国に流布して月氏・漢土・一閭浮提の内の一切衆生・仏に成るべき事こ

そ有り難けれ有り難けれ、又已前の重末法には教行証の三つ俱に備われ

り例せば正法

の如し等云云、に地涌の大菩薩上行出でさせ給いぬ結要の大法亦弘ま

らせ給うべし、日本・漢土・万国の一切衆生は金輪聖王の出現の先兆の

優曇華に値えるなるべし、在世四十二年並びに法華經の迹門十四品に之を

秘して説かせ給はざりし大法本門 正宗 に至つて説き顕し給うのみ。

良観房が義に云く彼の良観が日蓮遠国へ下向と聞く時は諸人に向つて

急ぎ急ぎ鎌倉へ上れかし為に宗論を遂げて諸人の不審を晴さんなど自讃

毀他する由其の聞え候、此等も戒法にてや有らん強ち尋ぬ可し、又日蓮鎌倉

に罷上る時は門戸を閉じて内へ入るべからずと之を制法し・或は風氣なん

ど虚病して罷り過ぎぬ、某は日蓮に非ず

其の弟子にて候まますし言のなまり法門の才覚は乱れがはしくとも・律宗

国賊替るべからずと云うべし、公場にして理運の法門申し候へばとて雑言

・強言・自讃気なる体・人目に見すべからず浅・しき事なるべし、弥

身口意を調え謹んで主人に向うべし主人に向うべし。

三月二十一日

日蓮 花押

三位阿闍梨御房へ之を遣はす

◆二五八

諸人御返事

1284p

三月十九日の和風並びに飛鳥同じく二十一日戌の時到来す、日蓮一生の
間の祈請並びに所願忽ちに成就せしむるか、将又五五百歳の仏記宛かも
符契の如し、所詮真言・禅宗等の謗法の諸人等を召し合せ是非を決せしめ
ば日本国一同に日蓮が弟子・檀那と為り、我が弟子等の出家は主上・上皇
の師と為らん在家は左右の臣下に列ならん、将又一閭浮提皆此の法門を仰
がん、幸甚幸甚。

弘安元年三月二十一日

日蓮

花押

諸人御返事

◆二五九

小蒙古御書もうこごしよ

1284 p

小蒙古の人・大日本国に寄せ来るの事、我が門弟並びに檀那等の中に
もうこ たにん にほんこく もんていなら だんな
若し他人に向い將又自ら言語に及ぶ可からず、若し此の旨に違背せば門弟
も たにん はたまたみずか ごんご も むね いはい もんてい
を離すべき等の由存知せる所なり、此の旨を以て人人に示す可く候なり。
をりあん ひとびと

弘安四年太歳 辛巳 六月十六日
こうあん かのとみ

花押かおう

人人御中
ひとびとおんちゆう

◆二六〇

さだしげ殿御返事ごへんじ

1285p

さきざきに申しもうつるがごとし、世間の学者・仏法を学問して智恵を明めて我も我もと・おもひぬ、一生のうちにむなしくなりて・ゆめのごとくに申しもうつれども唯一大事を知らずよくよく心得こころえさせ給たまうべし、あなかしこ・あなかしこ。

十二月二十日

日蓮にちれん

在御

判

さだしげ殿御返事ごへんじ

◆二六一

霖雨御書ごしよ

1285p

山中のながきあめつれづれ申^{もう}すばかり候はず、えんどうかしこまりて給^{たま}い
候いし、ことに・よろこぶよし玄性房申^{もう}しあげさせ給^{たま}い候へ、
恐^{きよう}恐^{きよう}。

五月廿二日

日蓮^{にちれん} 在御

判

御返事^{ごへんじ}

◆二六二

玄性房御返事ごへんじ

1286p

いやげんだ入道にゅうどうのなげき候いしかばむかはきと玄性御房ごほうこのよしをかみ

もう
へ申させ給たまい候へ、
恐恐きようきよう。

七月十八日

日蓮にちれん
花押かおう

玄性御房ごほう

◆二六三

智妙房御返事ちみょうぼうごへんじ

弘安三年十二月こうあん

五十九歳御

作 1286p

鷺目がもく一貫送り給たまいて法華經ほけきようの御宝前ほうぜんに申もうし上げ了おわぬ。

なによりも故右大將家の御廟と故権太夫殿の御墓とのやけて候由承わり
てなげき候へば又八幡大菩薩並びに若宮のやけさせ給う事いかんが人のな
げき候らむ。

世間の人人は八幡大菩薩をば阿弥陀仏の化身と申ぞ、それも中古の人人
の御言なればさもや、但し大隅の正八幡の石の銘には一方には八幡と申す
二字一方には昔靈鷲山に在つて妙法蓮華經を説き今正宮の中に在つて大
菩薩と示現す等云云、月氏にては釈尊と顕れて法華經を説き給い日本国に
しては八幡大菩薩と示現して正直の二

字を誓いに立て給う、教主釈尊は住劫第九の滅・人壽百歳の時四月八日

甲寅の日中天竺に生れ給い・八十年を経て二月十五日壬申の日御入滅

なり給う、八幡大菩薩は日本国第十六代応神天皇四月八日甲寅の日生れさ

せ給いて御年八十の二月の十五日壬申に隠れさせ給う、釈迦仏の化身と

申^{もう}す事はたれの人かあらそいをなすべき、

しかるに今・日本国にほんこくの四十五億八万九千六百五十九人はちまんの一切衆生いっさいしゅじょう・善導ぜんどう・

慧心えしん・永観ようかん・法然等ほうねんの大天魔てんまにたばらかされて・釈尊しゃくそんをなげすてて

あみだぶつあみだぶつを本尊ほんそんとす、あまりの物のくるわしさに十五日を奪い取つて

あみだぶつあみだぶつ阿弥陀仏あみだぶつの日となす八日をまぎらかして薬師やくし・仏の日と云云、あまりにを

やをにくまんとて八幡大菩薩はちまんたいぼさつをば阿弥陀仏あみだぶつの化身けしんと云

云、大菩薩ぼさつをもてなすやうなれども八幡はちまんの御かたきなり、知らずわざでも

・あるべきに日蓮にちれん此の二十八年が間ま・今此三界こんしさんがいの文を引いて此の迷まよひをしめ

せば信ぜずはさでこそ有あるべきに・いつき・つころし・つながしつ・おう

ゆへに八幡大菩薩ぼさつ・宅たくをやいてこそ天へはのぼり給たまひいぬらめ日蓮にちれんがかんが

へて候し立正安国論りっしょうあんこくろんこ此れなり、あわれ他国たこくよりせめ来りてたかのきじをと

るやうに・ねこのねずみをかむやうに・せめられん時、あまや女房にようぼうどもの

・あわて

候はんずらむ、日蓮にちれんが一あるるいを二十八ある年が間せめ候いしむくいに・或あるはいころし・切りころし・或あるはいけどり・或あるは他方たほうへわたされ・宗盛むねもりがなわつきてさらされしやうに・すせんまんの人人ひとびとのなわつきてせめられんふびんさよ、しかれども日本にほんこく国こくの一切衆生いっさいしゅじょうは皆五逆罪みなごぎやくざいの者なれば・かくせめられんをば天よろこも悦び仏ぶつもゆるし給たまはじ、あわれあわれはぢみぬさきに阿闍世王あじゃせの提婆だいばを・いましめしやうに・真言師しんごんし・念仏者ねんぶつ・禪宗ぜんしゅうの者どもをいましめて・すこし・つみをゆるくせさせ給たまえかし、あらをかし・あらふびん・ふびん・わわくのやつばらの智者ちしやげなれば・まこととて・もてなして事にあはんふびんさよ、
恐恐きようきよう謹言きんげん。

十二月十八日

日蓮にちれん

花押かおう

ちめう房御返事ごへんじ

◆二六四

十住毘婆娑論尋出御書

1288p

昨日武蔵前司殿の使として念仏者等召相せられて候いしなり、又十郎の使にて候はんずるか、十住毘婆娑論を内内見る可き事候、万事を抛ちて尋ね出だし給い候え。

十月十四日

にちれん
日蓮在御判

むさし ごぼう
武蔵公御房

十住毘婆娑論十四卷拜上せしむ、今一卷は求め失せ候なり、御要以後は早早返し給わる可く候、愚身も必ず必ず参り候いて承わる可く候、昨日の論談五十展転の随喜誠に以て有難く候、又袴品賜わる可し、あなかしこあなかしこ、きようきよう。

穴賢穴賢、恐恐

十月十一日

判

にちれんあじやりごほう
日蓮阿闍梨御房

◆二六五

むさし
武蔵殿御消息
しょうそく

1288p

じょうろん
撰論三卷は給候へども 釈論等の各疏候はざるあひだ事ゆかず候、をな
たまい
じくは給い候いてみあわすべく候、見参の事いつにてか候べき、仰をかほ
そつら
り候はん。

八講はいつにて候やらん。

七月十七日

日蓮 にちれん

在御判

武蔵殿御房 むさし ごぼう

◆二六六

破良観等御書 りようかん ごしよ

1289p

りようかん

どうりゅう

ひがんしょうにん

ごくらく

けんちようじ

ふもん

良観・道隆・悲願聖人等が極楽寺・建長寺・寿福寺・普門寺等を立て

えいざん

えんどんだいかい

べつじよ

ごと

こ

だいいち

はそうざい

て叡山の円頓大戒を蔑如するが如し、此れは第一には破僧罪なり二には仏

おんみ

ねんぶつ

きようしゆしやくそん

にゆうめつ

の御身より血を出だす、今の念佛者等が教主釈尊の御入滅の二月十五日

を・

をさへとり・

あみだぶつ

阿弥陀仏の日とさだめ仏生日の八日をば薬師・仏の日と

を・をさへとり・阿弥陀仏の日とさだめ仏生日の八日をば薬師・仏の日と

いっさい

しんごんし

だいにちによらい

きようしゆしやくそん

いゝ、一切の真言師が大日如来をたのみて教主釈尊

は無明に迷える仏・我等が履とりにも及ばず結句は灌頂して釈迦仏の頭
をふむ、ぜんしゅう 禪宗の法師等は教外別伝とののしりて一切経をば・ほんぐには
・をとり我等は仏に超過せりと云云、此は南印度の大慢ばら門がながれ
出仏身血の
すいぶつしんけつ

いちぶん

一分なり、第三に蓮花比丘尼を打ちころす・これ仏の養母にして阿羅漢な

り、此れは阿闍世王の提婆達多をすてて仏につき給いし時いかりをなして

大火・むね ☆をやきしかば・はらをすへかねて此の尼のゆきあひ候たりしを打

ち殺

せしなり、今の念仏者等が念仏と禪と律と真言とをせめられて・のぶるか

たわなし、けっく 結句は檀那等をあひかたらひて日蓮が弟子を殺させ・予が頭等

にきずをつけ・ざんそうをなして二度まで流罪・あわせて頸をきらせんと

・くわだて・弟子等数十人をろうに申し入るのみならず、かまくら内に

火をつけて日蓮が弟子の所為なりとふれまわして一人もなく失わんとせしが如し。

而るに提婆達多が三逆罪は仏の御身より血をいだせども爾禪の仏・久遠

実成の釈迦にはあらず、殺羅漢も爾前の羅漢法華經の行者にはあらず、

破和合僧も爾前小乗の戒なり法華円頓の大戒の僧にもあらず、大地われ

て無間地獄に入りしかども法華經の三逆ならざればいたうも深くあらざり

けるかのゆへに・提婆は法華經にして天王如来とならせ給う、今の真言師

・念仏者・禪・律等の人人・並に此れを御歸依ある天子並びに將軍家・

日本国の上

下万人は法華經の強敵となる上一乗の行者の大怨敵となりぬ、されば

設い一切經を覺り十方の仏に歸依し一國の堂塔を建立し一切衆生に

慈悲を・をこすとも・衆流大海に入りかんみとなり衆鳥・須弥山に近ず

きて同色となるがごとく、一切の大善変じて大悪となり七福かへりて七難をこり現在眼前には他国のせめきびしく・自身は兵にやぶられ妻子は敵にとられて後生には無間・大城に墮つべし。

此れをもんてをもうに故弥四郎殿は設い大罪なりとも提婆が逆にはすぐべからず、何に況や小罪なり法華經を信ぜし人なれば無一不成仏疑なきものなり。

疑て云く今の真言師等を無間地獄と候は心へられぬ事なり、今の真言は源弘法大師・伝教大師・慈覺大師・智証大師・此の四大師のながれなり、此の人人地獄に墮ち給はずば今の真言師いかで墮ち候べき、答えて云く地獄は一百三十六あり一百三十五の地獄へは墮つる人雨のごとし其の因やすきゆへなり、一の無間・大城へは墮つる人

かたし五逆罪を造る人まれなるゆへなり、又仏前には五逆なし但殺父殺母

の二逆計りあり、又二逆の中にも仏前の殺父殺母は決定として無間地獄へは墮ちがたし畜生の二逆のごとし、而るに今・日本国の人人は又一百三十五の地獄へはゆきがたし、日本国の人人形はことなれども同じく法華經誹謗の輩なり、日本国異なれども同じく法華誹謗の者となる事は源伝教より外の三大師の義より事をこれり。

問うて云く三大師の義如何、答えて云く弘法等の三大師は其の義ことなれども同じく法華經誹謗は一同なり、所謂善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵の法華經誹謗の邪義なり。

問うて云く三大師の地獄へ墮つる証拠如何、答えて云く善無畏三蔵は漢土

・日本国の真言宗の元祖なり彼の人すでに頓死して閻魔のせめにあへり、

其のせめに値う事は他の失ならず法華經は大日經に劣ると立てしゆへな

り、而るを此の失を知らずして其の義をひろめたる慈覺・智証地獄を脱る

べしや、但し善無畏三蔵の閻魔のせめにあ

づかりし故をだにもたづねあきらめば此の事自然に顯れぬべし・善無畏

三蔵の鉄の縄七すぢつきたる事は大日經の疏に我とかかれて候上・日本

醍醐の閻魔堂・相州鎌倉の閻魔堂にあらわせり、此れをもつて慈覺・智証

等の失をば知るべし。

問うて云く法華經と大日の三部經の勝劣は經文如何、答えて曰く法華經

には諸經の中に於て最も其の上に在りと説かれて此の法華經は一切經の

頂上の法なりと云云、大日經七卷・金剛頂經三卷・蘇悉地經三卷・已

上十三卷の内法華經に勝ると申す經文は一句一偈もこれなし、但蘇悉地經そしつちきよう計りにぞ三部の中に於て此の經を王と為すと申な

す文候、此れは大日の三部經の中の王なり全く一代の諸經しよきようの中の大王には

あらず、例せば本朝の王を大王といふ・此れは日本国の内の大王なり・全

く漢土・月支の諸王に勝れたる大王にはあらず、法華經は一代の一切經の

中の王たるのみならず三世十方の一切の諸仏の所説の中の大王なり、例せ

ば大梵天王のごときんば諸の小王・轉輪王・

四天王釈王魔王等の一切の王に勝れたる大王なり、金剛頂經と申すは

眞言教の頂王・最勝王經と申すは外道・天仙等の經の中の大王・全く

一切經の中の頂王にはあらず、法華經は一切經の頂上の宝珠なり、論師

・人師をすてて専ら經文をくらべば・かくのごとし、而るを天台宗・

出来の後・月氏よりわたれる經論並に天竺漢土にして立て

たる宗宗の元祖等・修羅心をさしはさめるかのゆへに・或は經論にわたく
しの言をまじへて事を仏説によせ・或は事を月氏の經によせなどして私
の筆をそへ仏説のよしを称す、善無畏三蔵等は法華經と大日經との勝劣
を定むるに理同事勝と云云、此れは仏意にはあらず、仏説のごとくならば
大日經等は四十余年の内・四十余年の内

にも華嚴・般若等には及ぶべくもなし、但阿含・小乘經にすこしいさて

たる經なり、而るを慈覺大師等は此の義を弁えずして善無畏三蔵を重くを

もうゆへに理同事勝の義を實義とをもらひ、弘法大師は又此等には・にる

べくもなき僻人なり、所謂法華經は大日經に劣るのみならず華嚴經等に

もととり等云云、而を此の邪義を人に信

ぜさせんために・或は大日如来より写瓶せりといふ・或は我まのあたり

靈山にしてきけりといふ・或は師の慧果和尚の我をほめし・或は三鈷をな

げたりなんと申し種種の誑言をかまへたり、愚な者は今信をとる、又天台

の眞言師は

慈覺大師を本とせり、叡山の三千人もこれを信ずる上墮つて代代の賢王の

御世に勅宣を下す、其の勅宣のせんは法華經と大日經とは同醍醐・譬へ

ば鳥の兩翼・人の左右の眼等云云、今の世の一切の眞言師は此の義をすぎ

ず、此等これらは螢火ほたるびを日月にちがつに越ゆとをもひ、蚯蚓きゅういんを花山より高しという義なり、
其その上一切いっさいの真言師しんごんしは灌頂かんちようとなづけて釈迦しゃか

仏を直ちにかきてしまんだらとなづけて弟子でしの足にふませ、・或あるは法華經ほけきよう
の仏は無明むみように迷まよえる仏・人の中のいぞのごとし真言師しんごんしが履くつとりにも及およばず
なんどふみにつくれり、今の真言師しんごんしは此の文を本疏じよとなづけて日日・夜夜
に

談義くげして公家ぶけ・武家のいのりと・がうしてを・をくの所領しよりようを知行ちぎようし檀那だんなを
たばらかす、事の心を案ずるに彼の大慢だいまんばら門がごとく無垢論師むくろんしにことな
らず、此等これらは現身げんしんに阿鼻あびの大火だいかを招まねくべき人人ひとびとなれども強敵かうてきのなければ・
さてすぐるか、而しかりといへども其そのしるし眼前がんぜんにみへたり、慈覺じかくと智証ちしようと
の門家等もんか・鬪諍とうじようひまなく・弘法こうぼうと聖覺しょうかくが末孫ばつそん

が本寺と伝法院でんぼういん・叡山えいざんと園城おんじようとの相論そうろんは修羅しゆらと修羅しゆらと猿と犬のごとし、

此等これらは慈覺じかくの夢想に日をいとみ・弘法こうぼうの現身げんしん妄語もうごのすへか、仏末代まつだいを記しるして云いわく謗法ほうぼうの者は大地微塵だいちみじんよりも多く正法しょうぼうの者は爪上そうじょうの土よりすくなかるべし、仏語ぶつごまことなるかなや今・日本国にほんこくかの記にあたり。

予はかつしろしめされて候がごとく幼少ようしょうの時より学文に心をかけし上・大虚空蔵菩薩こくうざうぼさつの御宝前ごぼうぜんに願を立て日本第一にほんだいいちの智者ちしやとなし給たまへ、十二のとしより此の願を立つ其その所願しょがんに子細しさいあり今くはしく・のせがたし、其その後先ごせんず

浄土宗・禪宗をきく・其の後叡山・蘭城・高野・京中・田舎等処処に

修行して自他宗の法門をならひしかども我が身の不審はれがたき上・本よ

りの願に諸宗何れの宗なりとも偏党執心あるべからず・いづれも仏説に

証拠分明に道理現前ならんを用ゆべし・論師・訳者・人師等にはよるべか

らず専ら經文を詮とせん、又法門によりては設い王のせめ

なりともはばかりるべからず何に況や其の已下の人をや、父母・師兄等の

教訓なりとも用ゆべからず、人の信不信はしらずありのままに申すべしと

誓状を立てしゆへに三論宗の嘉祥華嚴宗の澄觀法相宗の慈恩等をば

天台

・妙楽・伝教等は無間地獄とせめたれども真言宗の善無畏三蔵弘法大師

慈覚・智証等の僻見は・いまだ・せむる人なし、善無畏不空等の真言宗

をすてて天台による事は妙楽大師の記の十の後序並に伝教大師の依憑集

にのせられたれどもいまだくはしからざればにや慈覺・智証の謬☆は出来
せるかと強盛にせむるなり。

かく申す程に年卅二・建長五年の春の比より念仏宗と禪宗と等をせめ

はじめて後に真言宗等をせむるほどに・念仏者等始にはあなづる、日蓮い

かに・かしこくとも明円房・公胤僧上・顕真座主等には・すぐべからず、

彼の人人だにもはじめは法然上人をなんぜしが後にみな堕ちて・或は

上人の弟子となり・或は門家となる、日蓮は・かれがこ

とし我つめん我つめんとはやりし程に・いにしへの人人は但法然をなんじ

て善導・綽等をせめず、又経の権実をいわざりしかばこそ念仏者はをこり

けれ、今日蓮は善導・法然等をば無間地獄につきをとして専ら浄土の三部

経を法華経に・をしあはせて・せむるゆへに、螢火に日月・江河に大海の

やうなる上念仏は仏のしばらくの戲論の法実に・これをもつて生死を・は

なれんとをわねば大石を船に造り大海をわたり・大山をになて嶮難を越ゆるがごとしと難ぜしかば面をむかうる念仏者なし。

後には天台宗の人人を・かたらひて・どうちにせんとせしかども・そ

れもかなはず、天台宗の人人も・せめられしかば在家・出家の心ある人人

・少少念仏と禪宗とをすつ、念仏者・禪宗・律僧等我が智力叶わざるゆ

へに諸宗に

入りあるきて種種しゅじゆの讒奏ざんそうをなす、在家ざいけの人人ひとびとは不審ふしんあるゆへに各各それぞれの持僧ちそう
等・或あるは真言師しんこんし・或あるは念仏者ねんぶつ・或あるはふるき天台宗てんだいしゆう・或あるは禅宗ぜんしゆう・或あるは律僧りつそう
等をわきにはさみて・或あるは日蓮にちれんが住処じゅうしょに向い・或あるはかしこへよぶ、而れど
も一言二言にはすぎず迦旃延かせんねんが外道げどうをせめしがごとく徳慧菩薩とくえぼさつが摩沓婆まこうを
つめしがごとくせめしゆへに其その力およ及およばず、人は智ちか
しき者ものすくなきかのゆへに結句けっくは念仏者等ねんぶつをばつめさせてかなはぬとこ
ろには大名だいめいしてものをぼへぬ侍さむらいどものたのしくて先後せんごも弁わえぬ在家ざいけの徳人とくじん
等あ挙げて日蓮にちれんをあだするほどに・或あるは私ひそかに狼藉ろうぜきをいたして日蓮にちれんが・かたの者
を打ち・或あるは所ところを・をひ・或あるは地ちをたて・或あるはかんだうをなす事ことかずをし
らず、上に奏そうすれども人の主しゅとなる人は・さす
が戒力かいりきといふ福田ふくでんと申し子細しさいあるべきかともひて左右さうなく失とがもなされざ
りしかば・きりものども・よりあひてまちうど等らをかたらひて数万ばんにん人の者

をもつて夜中にをしよせ失わんとせしほどに・十羅刹じゅうらせつの御計らいにてやありけん日蓮にちれん其その難なんを脱だぬれしかば・兩國りょうこくの吏・心をあわせたる事なれば殺されぬを・とがにして伊豆の国へながされぬ、最明寺さいみょうじ殿計りこそ子細しさいあるかとをもわれていそぎゆるされぬ。

さりし程に最明寺さいみょうじ入道殿にゅうだうだん隠れさせ給たまいしかば・いかにも此の事あしくなりなんず、いそぎかくるべき世なりとは・をもひしかどもこれにつけても法華經ほけきょうのかたうど・つよくせば一定事いで来るならば身命しんみょうを・すつるにてこそあらめと思ひ切りしかば讒奏ざんそうの人人いよいよ・かずをしらず、上下万人じょうげばんにん・皆父母みなふぼのかたきとわりをみるがごとし、不輕菩薩ふぎょうぼさつの威音王いおんおう仏のすへにすこしもたがう事なし。

◆二六七

檀越某御返事 だんのつそれがしこへんじ

弘安元年四月五十七歳御作 こうあんがんねん

1294p

御文^{おんふみ}うけ給^{たま}わ良い了^おんぬ、日蓮^{にちれん}流罪^{るざい}して先先にわざわいども重^{かさなり}て侯に

又^{もう}なにと申^{もう}す事が候べきとは・をも

へども人のそんぜんとし侯には不可思議ふかしぎの事の侯へば・さが侯はんずらむ、
もしその義侯わば用いて侯はんには百千万億倍せんまんのさいわいなり、今度このたびぞ三
度になり侯、法華經ほけきようも・よも日蓮にちれんをば・ゆるき行者ぎやうじやとはをぼせじ、釈迦しゃか・
多宝たほう・十方じゆつぱうの諸仏しよぶつ・地涌千界じゆせんがいの御利生りしやう・今度このたびみはて侯はん、あわれ・あわ
れ・さる事の侯へかし、雪山童子せつせんどうじの跡あとを・をひ
不輕菩薩ふぎようぼさつの身になり侯はん、いたづらに・やくびやうにや・をかされ侯は
んずらむ、をいじにや死に侯はんずらむあらあさましあさまし、願くは
法華經ほけきようのゆへに国主こくしゆにあだまれて今度このたび・生死しやうじをはなれ侯わばや、天照太神てんしやうたいじん
・正八幡しょうはちまん・日月にちがつ・帝釈たいしやく・梵天等ほんてんの仏前ぶつぜんの御ちかい今度このたび心み侯わばや、事
事さてをき侯いぬ、各各おんみの御身の事は此れより申し
はからうべし、さで・をはするこそ法華經ほけきようを十二時に行ぜさせ給うにては
侯らめ、あなかしこ・あなかしこ、御みやづかいを法華經ほけきようと・をぼしめせ、

「いっさいせけん一切世間の治生ちせいさんぎよう産業は皆実相みなじつそうと相違そういそむ背せず」とは此これなり、かへす・が
へす御文おんふみの心こそ・をもうやられ候へ、そうら恐恐きようきよう謹嚴。

四月十一日

にちれんかおう日蓮花押

◆二六八

法衣書 ほうえ

1296p

御衣布並に單衣布給候たびそうらい了おわんぬ、抑食は命をつぎ衣は身をかくす、食

を有情うじように施すものは長寿ちようじゆの報をまねぎ人の食を奪うものは短命の報をう

く、衣を人にほどこさぬ者は世世せんしやう存生に裸形の報をかんず、六道ろくどうの中に人

道いか已下は皆形裸にして生る天は随生衣ずいしやうえなり、其その中の鹿等は無衣にして生

るのみならず、人の衣を・ぬすみしゆ

へに身の皮を人に・はがれて盗し衣をつぐのうほうをえたり、人の中にも

鮮白比丘せんびやくびくには生ぜし時・衣を被て生れぬ、仏法ぶつぽうの中にも裸形らぎやうにして法を行

ずる道なし、故ゆえに釈尊しゃくそんは摩訶大母比丘尼まかびくにの衣を得て正覚しょうかくをなり給たまいき、

諸もろもろの比丘びくには三衣さんねをゆるされき、鈍根どんこんの比丘びくは衣食いしよくととのわざれば阿羅漢あらかん

果を証せずと・みへて候、殊に法華經には

にんにく

柔和忍辱衣と申して衣をこそ本として候へ、又法華經の行者をば衣をもつ

おおわ たま

て覆せ給うと申すもねんごろなるぎ

なり。

にちれん

日蓮は無戒の比丘・邪見の者なり故に天これをにくませ給いて食衣とも

むかい

びく

じゃけん

ゆえ

たまい

しき身にて候、しかりといえども法華經を口に誦し・とき・とき・これを

ほけきよう

じゆ

とく、譬へば大☆の珠を含みいらんよりせんだんを生ずるがごとし、いら

たと

おろち

たま

んをすてて・せんだん・まいらせ候・☆形をかくして珠を授けたてまつる、

ちぎよう

たま

天台大師云く「他經は但男に記して女に記せず」等云云、法華經にあらざ

てんだいだしいいわ

たきよう

しる

ほけきよう

れば女人成仏は許されざるか、具足千万光相如来と申すは摩訶大比丘尼の

よにんにじようぶつ

ゆる

ぐそくせんまんこうそうによらい

もう

まか

びくに

ことなり、此れ等もつてをしはかり候に女人の成仏は法華經により候べき

こ

よにん

じようぶつ

ほけきよう

か、要当說眞實は教主 釈尊の金言・皆是眞實は多宝仏の証明・舌相至

ようとうせつしんじつ

きようしゆしやくそん

きんげん

かいぜしんじつ

たほうぶつ

しやうみよう

ぜつそう

梵天^{ほんてん}は諸^{しよ}仏^{ぶつ}の誓^{せい}状^{じやう}なり、日月^{にちがつ}は地^ちに落^おつべしや須弥^{しゆみ}山^{せん}はくづるべしや・
大海^{たいかい}の潮^{しう}は増減^{そうげん}せざるべしや大地^{だいち}は翻覆^{ほんぷく}すべしや、此^この御衣^{ごい}の功徳^{くどく}は法華^{ほけ}經^{きやう}
にとかれて候、但心をもつて・をもひやらせ給^{たま}い候へ、言にはのべがたし。

◆二六九

慧日えにち天照御書てんしょうごしよ

1297p

もつて一閻浮提えんぶだいの者の眼まなこを抉えぐるべきか、釈迦しゃか仏ぶつの御名みなをば幼稚ようちにては日種にちしうという、長大てんしやうの後の異名いみやうをば慧日えにちという、此の国くにを日本にほんという主もをば天照てんしやうと申もうす。

◆二七〇

釈迦しゃか御所領御書しよりようごしよ

1297p

「是これ我が有うなり其その中の衆生しゆじやうは悉ことごとく是れ吾子わがこなり」等云云、この文のごとくならばこの三界さんがいは皆釈迦しゃか如来にょらいの御所領しよりようなり、寿量品じゆりやうぼんに云いく「我常わじやうに此の娑婆世界しゃばせかいに在あり」等云云、この文のごとくならば乃至過去五百塵点劫ないしかこひやくじんてんこう

より・このかた此の娑婆世界は釈迦菩薩の御進退の国土なり、其の上仏の
滅後・一百年に阿育大王と申す王をはしき此の南閻浮提を三度まで僧に
付属し給いき、又此の南閻浮提の内の大日本国をば戸那国の南岳大師・此
の国の上宮太子と生れてこの国の王となり給いき、しかれば聖徳太子已後
の諸王は皆南岳大師の末葉なり、桓武天王已下の諸王は又山王。

者どもをば少少はをひいだし・或^{ある}はきしやうかかせて・はうにすぎて候
いつるが・七月末八月の始に所領^{しよりよう}かわり一万余束の作毛をさへ・かられて
山やにまとひ候ゆへに・日蓮^{にちれん}なを・ばうじつるゆへかと・ののしり候上・
御かへり

の後七月十五日より上下^{じょうげ}いしはいと申^{もつ}す虫ふりて国大体^{だいたい}三分のうへそんじ
候いぬ、をほかた人のいくべしともみへず候、これまで候をもいたたせ給^{たま}う
上なに事もとをもひ候へども・かさねての御心^{おんこころ}ざしはうにもすぎ候か。

なによりもおぼつかなく候いつる事はとののかみの御気色^{みけしき}いかながと・
をぼつかなく候いつるに・なに事もなき事^{もう}申すばかりなし。

かうらいむこの事うけ給わり候ぬ、なにとなくとも釈迦如来法華經を失い候いつる上は大果報ならば三年はよもとをもひ候いつるにいくさけかちつづき候いぬ、国はいかにも候へ法華經のひろまらん事疑なかるべし。

御母への御事經をよみ候事に申し候なり、此の御使いそぎ候へば・くはしく申さず候、
恐恐。

◆二七二

除病御書

1298p

其の上日蓮の身並びに弟子又過去謗法の重罪未だ尽きざるの上現在多年の間謗法の者と為り亦謗法の国に生る、当時信心深からざらんか豈之を脱れんや、但し貴辺此の病を受くるの理・或人之を告ぐ予日夜朝暮に法華經に申し上げ朝暮に青天に訴う除病の由今日之を聞く喜悅何事か之に過ぎん、

事事見参を期せん、
恐恐。

さんろんしゅう ぶんべつ

三論宗も分別ならざる証文をもつて立てたりしかば・盲目の衆生に

あ おおわく

値うて誑惑せしかども・明眼の智者に値うて邪義顕れぬ、此れ即根露るれ

から みなもと

ば枝枯れ源 乾けば流竭く自然の道理なり、念仏宗・禅宗と真言とは

そ こんぼんびょうこ

其の根本謬☆を

おおわく

本とし誑惑を源とせり、其の根源顕れなば設い日蓮はいやしくとも天のは

だいほうるふ

からひ大法流布の時来るならば・彼の悪法やぶれて此の真実の法立つ事

うたがい

疑なかるべし。

あくほう

すでに此の悪法消えんとするは汝知るやいなや、日蓮をいやしみて・さ

なんじ

にちれん

んざんとするほどにするほどに。

◆二七四

南無御書

1299p

堂塔どうとうつくらず布施ふせまいらせずらん、をしき物は命ばかりなり、これを
法華經ほけきようにまいらせんとをもし、三世さんぜの仏は皆凡夫みなほんぶにてをはせし時命ほけきようを法華經
にまいらせて仏になり給うたま、此の故ゆえに一切いっさいの仏の始はじには南無なむと申もうす南無なむと
申もうすは月氏がっしの語ことば・此の土こゝにては歸命きみょうと申もうすなり、歸命きみょうと申もうすは天台てんだいの釈しやくに
云いわく「命いのちを以て自ら歸みづかす」等云云、命いのちを法華經ほけきようにまいらせて仏にはならせ
給うたま、日蓮にちれん今度命このたびを法華經ほけきようにまいらせて。

◆二七五

題目功德御書

1300p

功德くどくは先の功德くどくにたくらぶれば・前の功德くどくは爪上そうじょうの土のごとし、法華經ほけきょう
 の題目だいもくの功德くどく十方じゅうほうの土のごとし、先の功德くどくは一の水のごとし・題目だいもくの功德くどく
 は大海たいかいのごとし、先の功德くどくは瓦礫がりやくのごとし・過日くどくの功德くどくは金銀きんぎんのごとし、
 先の功德くどくは螢火ほたるびのごとし・題目だいもくの功德くどくは日月にちがつのごとしと申もうす經文きょうもんなり。

◆二七六

大惡大善御書

1300p

大事だいじには小瑞しょうずいなし、大惡だいあくをきれば大善だいぜんきたる、すでに大謗法ほうぼう・国くににあり
 大正法しょうぼう必ずひろまるべし、各各たまたまなにをかなげかせ給たまうべき、迦葉尊かしようそんじゃ者しやにあ

らずとも・まいをも・まいぬべし、舍利しやりほつ弗にあらねども・立つてをどりぬべし、上行菩薩じょうぎょうぼさつの大地だいちよりいで給たまいしには・をどりてこそいで給たまいしか、普賢菩薩ふげんぼさつの来るには大地だいちを六種にうごかせり、事多しといへども・しげきゆへにとどむ、又文申もうすすべし。

◆二七七

来臨曇華御書らいりんどんげごしよ

1300p

追もうつて申もうす、御器の事は越後□□房もう申し候べし、御心おんこころざしふかき由・内房うつぶせへ申もうさせ給たまい候へ。

春の始の御悦びよろこ自他申しじたもう籠め候いこ畢んぬ、抑お去年の来臨はおも曇華の如し、
将又夢か幻かはたまた疑うたがいいまだ晴れず候処に。

◆二七八

常樂我淨御書

1301p

出でさせ給たまいて諸大乘しやだいじようきやう經をかんがへ出し十方じゆつぽうの淨土じやうどを立て一切いっさいの諸法しよほう
は常樂我淨と云云、其の時そのとき・五天竺てんじくの十六の大国たいこく・五百の中国ちゆうごく・十千の
小国しょうこく・無量の粟散国むりようの諸のそくさん小乗經むりようむへんの無量無辺むりようむへんの寺寺しゅうその衆僧しゅうそう一同に蜂の
ごとく蜂起ほうき

し・蟻のごとく緊集し・雷いかずちのごとくなりわたり、一時いちじに緊集して頭こうへをあ
わせて・なげいて云くいわ仏在世ざいせにこそ五大の外道げどうは我等われらが本師ほんし・教主きやうし釈尊しやくそん

とわ・あらそいしが・仏は一人なり・外道げどうは多勢なりしかども・外道げどうはありのごとし・

仏は竜のごとく・師し子し王のごとくましませしかばこそせめかたせ給たまいぬ、
此これはそれには・にるべくもなし、馬鳴めみは一人なれども・我等われらは多人なれども・代末すへになれば・悪はつよく善はゆわし、仏の在ざい世せの外道げどうと仏法ぶつぽうとは水火すいかなり。

◆二七九

帰伏きふく正法しょうぼう御書ごしよ

1301p

上かみ一人下万民げばんみん一同いどうに帰伏きふくする正法しょうぼうなり始めて勝劣しょうれつを立てて慈覚じかく・智証ちしょう
・弘法こうぼうそむかんとをほせある○べかりしと・をぼすか強敵かうてきを仏法ぶつぽうの中にあ

らそい出来^{しゅったい}すべきたね国のみだるべきせんてうなりいかなる聖人^{しょうにん}の御こ
とばなりとも^{もち}用ゆべからず各各日遮をいやしみて○真言宗^{しんごんしゅう}と法華經宗^{ほけきょう}と
叡山末寺^{えいざんまつじ}園城^{おんじょう}なら。^{奈良。}

・或あるはくびをきり・或あるはながさればととかれて此の法門ほうもんを涅槃ねはんぎようしやくこ經守護經
等の法華經ほけきようの流通りつうの御經ぎぎよにときをかせ給たまいて候まちは此の国くにをば梵王ぼんのう・帝釈たいしやくに
仏ほとけをほせつけてよりせめさせ給たまうべしととかれて候まちされば此の国くには法華經ほけきよう
の大怨敵おんてきなれば現世げんせに無間地獄むげんじやくの大苦たますこし心こころみさせ給たまうか教主きようしやくそん釈尊しやくそんの
日蓮にちれんがかたうどをしてつみしらせ給たまうにやよもさるならば天照太神てんしやうだいじん・
正八幡等しょうはちまんは此の国くにのかたうどにはなり給たまはじ日蓮房にちれんのかたきなりすずにて
なをわかし候そうらはんとぞはやり候まちらむいのらばいよいよあしかりなんあしか
りなん、恐恐きようきよう謹言きんげん。

二月十三日

日蓮にちれん在御

判

ごへんじ
御返事

◆二八一

いしよくごしよ
衣食御書

1302p

あまごぜん
尼御前へ参る

がもく
驚目一貫給い畢んぬ、それじきはいろをまし・ちからをつけ・いのちを

のぶ、ころもは・さむさをふせぎあつさ

をさえ・はぢをかくす、人にものをせする人は人のいろをまし・ちからを
そえいのちをつぐなり。

◆二八二

釈迦如来御書

1303p

釈迦如来は正しく法華經に「惡世末法の時能く是の經を持つ者」等云云、
善導云く千中無一等云云、いづれを信ずべしや、又云く日蓮がみる程の
經論を善導・法然上人は御覽なかりけるかと申すか、若しこの難のごと
くならば・昔の人の謬をば後の人のいかにあらわすべからざるか。

◆二八三

破信墮惡御書

1303p

かたきはを・をく・かたきはつよく、かたうどは・こわくして・しまけ
候へば惡心を・をこして・かへつて法華經の信心をも・やぶり惡道にをち

候なり、あしきところをば・ついしさりてあるべし、釈迦しゃかぶつ仏は三十二相そ
なわつて身は金色面は満月まんげつのごとし、しかれども・或あるは悪人あくにんはすみとみる
・或あるは悪人あくにんははいとみる・或あるは悪人あくにんはかたきとみる。

◆二八四

阿仏房御書

・或文永九年三月十三日

五

十一歳御作

与阿仏房

1304p

おんふみくわし ひけん
御文委く披見いたし候い了んぬ、抑 宝塔の御供養の物銭一貫文白米し
なじなをくり物たしかにうけとり候い了んぬ、此の趣 御本尊法華経にも
ねんごろに申し上げ候・御心やすくおぼしめし候へ。

おんふみ いわ たほうによらい ゆげん ほうとう なにごと たま
一御文に云く多宝如来・涌現の宝塔・何事を表し給うやと云云、此の法門
ゆゆしき大事なり宝塔をことわるに天台大師文句の八に釈し給いし時
しょうぜんきこ ほうとう
証前起後の二重の宝塔あり、証前は迹門・起後は本門なり・或は又閉塔
しやくもん
は迹門・

かいとう ほんもんこ すなわ きょうち
開塔は本門是れ即ち境智の二法なりしげきゆへに・これををく、所詮・三

周しゅうもんの声聞ほけきょう・法華經こしんに来て己心の宝塔ほうとうを見ると云う事なり、今日蓮いまにちれんが弟子でし・

檀那だんな又又かくのごとし、末法まっぽうに入つて法華經ほけきょうを持つ男女なんよの・すがたより外

には宝塔ほうとう

なきなり、若もし然しかれば貴賤きせん上下じやうげをえらばず南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと・となうるも

のは我が身宝塔ほうとうにして我が身又多宝たほう如来にらいなり、妙法蓮華經みょうほうれんげきやうより外ほうとうに宝塔な

きなり、法華經ほけきやうの題目宝塔だいもくほうとうなり宝塔ほうとう又南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうなり。

今阿仏上人しやうにんの一身すいかは地水火風空の五大なり、此の五大は題目だいもくの五字ごじなり、

然しかれば阿仏房あぶつぼうさながら宝塔ほうとう・宝塔ほうとうさながら阿仏房あぶつぼう此これより外ほかの才覚さいかく無益むやくな

り、聞・信・戒・定・進・捨・慚しんぼうの七宝しちぼうを以てかざりたる宝塔ほうとうなり、多宝たほう

如来にらいの宝塔ほうとうを供養くやうし給たまうかとおもへばさにては候はず我が身を供養くやうし給たまう

我が身又三身さんじん即一の本覚ほんがくの如来にらいなり、かく

信たまいじ給なむいて南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱となえ給たまへ、こゝさながら宝塔ほうとうの住処じゅうしょなり、

經に云く「法華經を説くこと有らん処は我が此の宝塔其の前に涌現す」と
はこれなり、あまりにありがたく候へば宝塔をかきあらはし・まいらせ候
ぞ、子にあらずんばゆづる事なかれ信心強盛の者に非ずんば見する事なか
れ、出世の本懐とはこれなり。

あふつぼう
阿仏房しかしながら北国の導師とも申しつべし、
浄行菩薩うまれかわ

たまい
り給いてや日蓮を御とふらい給うか

不思議ふしぎなり不思議ふしぎなり、此の御志ごしをば日蓮にちれんはしらず上行菩薩じょうぎようぼさつの御出現しゅつげん
の力にまかせたてまつり候ぞ、別の故べちはあるべからずあるべからず、宝塔ほうとう
をば夫婦ひそかにをがませ給たまへ、委くわしくは又又申もうすべく候、恐恐きようきよう謹言きんげん。

ぶんえい
文永九年壬申 三月十三日

にちれん かおう
日蓮 花押

あぶつほうしょうにん
阿仏房上人所へ

◆二八五

みようほう まんだら くよう
妙法曼陀羅供養事

ぶんえい
文永十年 五十二歳御作

与千日尼 1305p

みようほうれんげきよう ごほんぞん くよう
妙法蓮華經の御本尊供養候いぬ、此の曼陀羅は文字もんじは五字七字ごじしちじにて候へ
さんぜ しよぶつ おんしいうさい によにん じようぶつ
ども三世の諸仏の御師一切の女人の成仏の印文なり、冥途めいどにはともしびと

なり死出の山にては良馬となり・天には日月の如し地には須弥山の如し・
生死海の船なり成仏得道の導師なり。

此の大曼陀羅は仏滅後・二千二百二十余年の間・一閻浮提の内には未だ

ひろまらせ給はず、病によりて薬あり軽病には凡薬をほどこし重病には

仙薬をあたうべし、仏滅後より今までは二千二百二十余年の間は人の煩惱

と罪業の病軽かりしかば智者と申す医師たちつづき出でさせ給いて病に

随つて薬をあたえ給いき、所謂俱舍宗・成実

宗・律宗・法相宗・三論宗・真言宗・華嚴宗・天台宗・浄土宗・

禅宗等なり、彼の宗宗に一一に薬あり、所謂華嚴の六相十玄・三論の八不

中道・法相の唯識觀・律宗の二百五十戒・浄土宗の弥陀の名号・禅宗

の見性成仏・真言宗の五輪觀・天台宗の一念三千等なり。

今の世は既に末法にのぞみて諸宗の機にあらざる上、日本国一同に

いっせんだい ほうぼう

一闡提大謗法の者となる、又物に譬うれば父母を殺す罪謀叛ををこせる科

すいぶつしんけつ

・出仏身血等の重罪等にも過ぎたり、三千大千世界の一切衆生の人の眼

をつみ

をぬける罪よりも深く十方世界の堂塔を焼きはらへるよりも超えたる大罪

な

を一人して作れる程の衆生日本国に充滿せり、されば天は日目に眼をい

にほんこく

からして日本国をにらめ、地神は忿りを作して時時に身をふるうなり、然

いっさいしゅじょう

に我が朝の一切衆生は皆我が身に科なしと思ひ必ず往生すべし成仏をと

かくかく

げんと思へり、赫赫たる日輪をも目無き者は

たと

見ず知らず、譬えばたいこの如くなる地震をもねぶれる者の心にはおぼえ

にほんこく

ず、日本国の一切衆生も是くの如し女人よりも男子の科はを・をく男子よ

いっさいしゅじょう

りも尼のとはが重し尼よりも僧の科はを・をく破戒の僧よりも持戒の法師

じかい

のとはが重し、持戒の僧よりも智者の科はをもかるべし、此等は癩病の中

びやくらい

の白癩病白癩病の中の大白癩病なり。

末代まつだいの一切衆生いっさいしゅじょうはいかなる大医りやうやくいかなる良薬りやうやくを以てか治す可べきとかん

がへ候だいにちにへば大日如来ちけんの智拳ならの印並だいにちびに大日しんこんの真言あみだに・阿弥陀如来あみだにの四十八願しゅうびようしつじよ

・薬師如来やくしにの十二大願しゅうびようしつじよ・衆病しゅうびようしつじよ悉除しゅうびようしつじよの誓しも此しの薬しには及しぶべからず、つや

つや病消滅しやうめつせざる上しやうめついよいよ倍增ばいそうすべし、此等これらの末法まつぼうの時まっぼうのために教主きやうしゅ

釈尊しやくそん・多宝如来たほうに・十方分身じゆつぽうふんじんの諸仏しよぶつを集めさせ

給たまうて一の仙薬ほうえをとどめ給たまへり所謂妙法蓮華經いわゆるみようほうれんげきやうの五の文字もんじなり、此の文字もんじ

をば法慧ほうえ・功德林くどく・金剛薩こんごうさつ・普賢ふげん・文殊もんじゆ・薬王やくおう・観音かんのん等にもあつらへさせ

給たまはず、何いかに況かしや迦葉舍利弗等かしょうしやりほつをや、上行菩薩等じやうぎやうぼさつと申もうして四人の大菩薩ぼさつま

します、此の菩薩ぼさつは釈迦如来しやくかに・五百塵点劫ごひやくじんでんこうより・このかた御弟子おんでしとならせ

給たまいて一念いちねんも仏ぼさつを・わすれず・まします大菩薩ぼさつ

を召し出して授けさせ給たまへり、されば此の良薬りやうやくを持たん女人等にょにんをば此の四

人の大菩薩ぼさつ・前後左右ぜんごさうに立にそひて・此の女人にょにんたたせ給たまへば此の大菩薩ぼさつも立

たせ給ふ乃至此の女人・道を行く時は此の菩薩も道を行き給ふ、譬へば・
かげ

と身と水と魚と声とひびきと月と光との如し、此の四大菩薩南無
妙法蓮華經と唱えたてまつる女人をはなるるならば釈迦・多宝・十方
分身の諸仏の御勘氣を此の菩薩の身に蒙らせ給うべし、提婆よりも罪深く
瞿迦利よりも大妄語のものたるべしと・をぼしめすべし、あら悦ばしやあ
ら悦ばしや、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經。

にちれんかおう
日蓮花押

◆二八六

あぶつぼうあまごぜんこへんじ
阿仏房尼御前御返事

がんねん
建治元年九月三日 五十

四歳御作 与千日尼 1307p

おんふみ いわ ほうほう せんじんけいちよう おい
御文に云く 謗法の浅深軽重に於ては 罪報如何なりや云云、 夫れ法華經の
いっさいしゅじよう かいじようぶつどう
意は一切衆生・皆成仏道の御經なり、 然りといへども信ずる者は成仏を
ほう ぼう
とぐ 謗ずる者は無間・大城に墮つ、「若し人信ぜずして 斯の經を毀謗せば
むげん だいじよう お も
すなわ いっさいせけん ぶつしゅ だん ないしそ みようじゅう あびこく
即ち一切世間の仏種を断ぜん、乃至其の人命終して 阿鼻獄に入らん」と
これ ほうほう
は是なり、 謗法の者にも浅深軽重の異あり、 法華經を持ち信ずれども誠に
しきしんそうおう のうじしきよう ぎようじや
色心相応の信者能持此經の行者はまれなり、 此等の人は介爾ばかりの謗法
はあれど

じんじゅう つみ
も深重の罪を受くる事はなし、 信心はつよく 謗法はよはき故なり、 大水を
しんじん ほうほう たいすい

以て小火をけすが如し、涅槃經に云く「若し善比丘法を壞る者を見て置いて呵責し驅遣し挙処せずんば当に知るべし、是の人は仏法中の怨なり、若し能く驅遣し呵責し挙処せば是れ我が弟子眞の聲聞なり」云云、此の經文に・せめられ奉りて日蓮は種種の大難に値うといへども仏法中怨のいましめを免れんために申すなり。

但し謗法に至って淺深あるべし、偽り愚かにしてせめざる時も・あるべし、眞言・天台宗等は法華誹謗の者いたう呵責すべし、然れども大智慧の者ならではの日蓮が弘通の法門分別しがたし、然る間まづまづ・さしをく事あるなり立正安國論の如し、いふと・いはざるとの重罪免れ難し、云つて罪のまぬがるべきを見ながら聞きながら置いていましめざる事眼耳の二徳忽に破れて大無慈悲なり、章安の云く「慈無くして詐り親むは即ち是れ彼が怨なり」等云々、重罪消滅しがたし弥利益

の心尤も然る可きなり、輕罪の者をばせむる時も・あるべし・又せめずしてをくも候べし、自然になをる辺あるべしせめて自他の罪を脱れてさてゆるすべし、其の故は一向謗法になればまされる大重罪を受くるなり、彼がために惡を除けば即ち是れ彼が親なりとは是なり。

にちれん
日蓮が弟子・檀那の中にも多く此くの如き事共候、さだめて尼御前もき

こしめして候らん、一谷の入道の事日蓮が檀那と内には候へども外は念仏

者にて候ぞ後生はいかんとすべき、然れども法華經十卷渡して候いしなり。

いよいよしんじん
弥信心をはげみ給うべし、仏法の道理を人に語らむ者をば男女僧尼必

ずにくむべし、よしくまばにくめ法華經・釈迦仏天台・妙楽・伝教章

安等の金言に身をまかすべし、如説修行の人とは是れなり、法華經に云く

「く恐れ

の世に於て能く須臾も説く」云云、惡世末法の時三毒強盛の惡人等集りて

候時正法を暫時も信じ持ちたらん者をば天人供養あるべしと云う經文な

り。

此の度大願を立て後生を願はせ給へ少しも謗法不信のところが候はば無間・

大城疑いなかるべし、譬ば海上を船にのるに船おろそかにあらざれど

もあか入りぬれば必ず船中の人人・一時に死するなり、なはて堅固なれども蟻の穴あれば必ず終に湛へたる水のたまらざるが如し、謗法不信のあかをとり信心のなはてをかたむべきなり、浅き

罪ならば我よりゆるして功德を得さすべし、重きあやまちならば信心をはげまして消滅さすべし、尼御前の御身として謗法の罪の浅深軽重の義をとはせ給う事まことにありがたき女人にておはすなり、竜女にあにをとるべ

きや、「我大乘の教を聞いて苦の衆生を度脱せん」とは是なり、「其の義趣を問うは是れ則ち難しと為す」と云つて法華經の義理を問う人は・かたしと説かれて候、相構えて相構えて力あらん程は謗法をばせめさせ給うべし、日蓮が義を助け給う事・不思議に覚え候ぞ不思議に覚え候ぞ、穴賢穴賢。

九月三日

日蓮 にちれん

花押 かおう

阿仏房尼御前御返事 あぶつぼうあまごぜんごへんじ

◆二八七

千日尼御前御返事 あまごせんごへんじ

弘安元年七月二十八日 五

十七歳御作 与阿仏房尼 あぶつぼう 1309p

こうあんがんねん

弘安元年太歳

つちのえとら

戊寅

七月六日佐渡の国より

千日尼と申す人、同じく日本国

もつ

甲州・波木井郷の身延山と申す深山へ同じき夫の阿仏房を使として送り

はきり

たま おんふみ いわ にょにん 給う御文に云く、

女人の罪障はいかがと存じ候へども御法門に法華経は

にょにん 女人の成仏をさきとするぞと候いしを万事はたのみまいらせ候いて等云

云。

そ 夫れ法華経と申し候・御経は誰れ仏の説き給いて候ぞとをもひ候へば此

にほんこく

の日本国より西漢土より又西・流沙・葱嶺と申すよりは又はるか西・月氏

もう と申す国に浄飯王と申しける大王の太子・十九の年・位をすてさせ給いて

たまい

たまい

たまい

たまい

たまい

たまい

たまい

檀もつどく山と申す山に入り御出家しゅつけ三十にして仏とならせ給たまい身は金色と變じ
神さんぜは三世をかがみさせ給たまう、すぎにし

事来るべき事がみにかけさせ給たまいておはせし仏の五十余年が間・一代・
いっさいきようぎやうと

一切の経經を説きおかせ給たまう、此の一切の経經いっさいきようぎやう 仏の滅後・一千年が間
ががし

月氏国にやうやくひろまり候いしかどもいまだ漢土・日本国等へは来り候

は、ぶつめつとこ 仏滅度後・一千十五年と申せしに漢土へぶつぽうわた 仏法渡りはじめて候いしか

ども又いまだ法華經は・わたり給たまはず。

ぶつぽうかんど 仏法漢土にわたりて二百余年に及んで月氏と漢土との中間ちゅうげんに龜茲国と

申もうす国あり、彼の国の内に鳩摩羅くまえん三藏さんぞうと申せし人の御弟子に鳩摩羅什

と申せし人彼の国より月氏がしに入り・須利耶蘇磨三藏しゆりやそまさんぞうと申せし人に此の

ほけきやう 法華經

をさづかり給たまい、其の經を授けし時の御語おんことばに云く此の法華經は東北の国
いわ

に縁ふかしと云云、此の御語おんことばを持ちて月氏がっしより東方漢土とうほうかんとへは・わたし給たまい
しなり。

漢土かんとには仏法ぶつぽうわたりて二百余年しんのう後秦王ぎょうの御宇わたに渡りて候いき、日本国にほんこくに
は人王第三十代欽明天皇きんめいてんのうの御宇治みよしろしめす十三年・壬申みずのえさる十月十三日辛酉とりの日・
此れより西・百済国くだらと申す国より聖明皇もう・日本国にほんこくに仏法ぶつぽうをわたす、此れは
漢土かんとに仏法ぶつぽうわたりて四百年・仏滅後ぶつめつ・一千四百余年そなり、其の中にも法華經ほけきょう
はましまししかども人王第三十二代・用明天皇ようめいてんのうの太子聖徳太子たいししょうとくたいしと申せし人
・漢土かんとへ使を・つかわして法華經ほけきょうを・とりよせまいらせて日本国にほんこくに弘通くつうし
給たまいき、それより・このかた七百年なり、仏滅度後ぶつめつとしすでに二千二百三十
余年がっしになり候上・月氏かんと・漢土にほん・日本の山山・河河・海海・里
里・遠くへだたり人々ひとびと・心心・国国・各各・別別べつべつにして語ことばかわりしなこと
なれば、いかでか仏法ぶつぽうの御心をば我等凡夫われらぼんぷは弁え候べき、ただ經經きょうきょうの文字もんじ

を引き合せてこそ知るべきに一切経はやうやうに候へども法華經と申す御
經は八卷まします流通に普賢經序文の無量義經各一卷已上此の御經を開き
見まいらせ候へば明かなる鏡をもつて

我が面を見るがごとし、日出でて草木の色を弁えるにいたり、序品の

無量義經を見まいらせ候へば「四十余年未だ真実を顕わさず」と申す

經文あり、法華經の第一の卷方便品の始めに「世尊の法は久しき後に要ら

ず当に真実を説きたもうべし」と申す經文あり、第四の卷の宝塔品には

「妙法華經・皆是真実」と申す明文あり、第七

の卷には「舌相梵天に至る」と申す經文赫赫たり、其の外は此の經より外の

さきのちならべる經經をば星に譬へ江河に譬へ・小王に譬へ・小山に

譬へたり、法華經をば月に譬へ・日に譬へ・大海・大山・大王等に譬へ給へ

り、

此の語は私の言には有らず皆如来の金言なり十方の諸仏の御評定の御言
なり、一切の菩薩・二乗梵天・帝釈今の天に懸りて明鏡のごとくにまし
ます、日月も見給いき聞き給いき其の日月の御語も此の経にのせられて候、
月氏・漢土・日本国のふるき神たちも皆其の座につらなり給いし神神なり、
天照太神・八幡大菩薩・熊野・すずか等の

日本国の神神もあらそひ給うべからず、此の経文は一切経に勝れたり地
走る者の王たり師子王のごとし・空飛ぶ者の王たり鷲のごとし、南無
阿弥陀仏経等はきじのごとし兎のごとし鷲につかまれては涙をながし・
師子に・せめられては腸わたをたつ、念仏者・律僧・禅僧・真言師等又か
くのごとし、法華経の行者に値いぬれば・いろを失い魂をけすなり。

かかるいみじき法華經ほけきょうと申もうす御經はいかなる法門ほうもんぞと申せば、一の卷方便ほうべん品よりうちはじめて菩薩ぼさつ・二乗凡夫皆にじようほんぶみな仏になり給たまうやうをとかれて候へどもいまだ其そのしるしなし、設たとえば始めたる客人きやくじんが相貌そうみょううるわしくして心もいさぎよくよく口もきいて候へばいう事うたがい疑うたがいなけれどもさきも見ぬ人なればいまだあらわれたる事なけ

れは語ことばのみにては信じがたきぞかし、其そのの時語ときことばにまかせて大なる事度度たびたびあひ候へばさては後の事もたのもしなんど申もうすぞかし、一切いっさい信じて信ぜられざりしを第五の卷に即身成仏そくしんじょうぶつと申もうす一經第一の肝心かんじんあり、譬たとへばくろき物を白いくなす事漆うるしを雪となし不浄ふじようを清浄しょうじようになす事・濁水に如意珠にょいじゆを入れたるがごとし、竜女りゆうにょと申せし小蛇くちなわを現身げんしん

に仏になしてましましき、此の時こそ一切いっさいの男子の仏になる事をば疑うたがいう者は候はざりしか、されば此の經は女人成仏にょにんじょうぶつを手本てほんとしてとかれたりと

もう
申す、されば日本国に法華經の正義を弘通し始めましませし叡山の根本
でんぎようだいし
傳教大師の此の事を釈し給うには「能化所化俱に歴劫無し妙法經力
そくしんじようぶつ
即身成仏す」等、漢土の天台智者大師・法華經の正義

をよみはじめ給いしには「他經は但男に記して女に記せず乃至今經は皆
たまひ
記す」等云云、此れは一代聖教の中には法華經第一法華經の中には女人
こ いちだいししいうきよう
じようぶつだい
成仏第一なりとことわらせ給うにや、されば日本の一切の女人は法華經よ
ほか いっさいきよう
り外の一切經には女人成仏せずと嫌うとも法華經にだにも女人成仏ゆる
にょにんじようぶつ
されなばなにかくるしかるべき。

しかるに日蓮はうけがたくして人身をうけ値いがたくして仏法に値い
にちれん
奉る、一切の仏法の中に法華經に値いまいらせて候、其の恩徳を・をもへ
たてまつ いっさい ぶつぼう
ば父母の恩国主の恩一切衆生の恩なり、父母の恩の中に慈父をば天に譬へ
ふほ ふほ こくしゅ いっさいしゅじよう
ひも だいち たと
悲母をば大地に譬へたりいづれもわけがたし、其の中にも悲母の大恩こと
ひも だいち たと

にほうじがたし、此れを報ぜんと・をもう

に外典の三墳・五典孝経等げてんさんぶんこうきやうとうによって報ぜんと・をもへば現在げんざいをやしないで

後世をたすけがたし、身をやしない魂をたすけず内典の仏法ないてんぶつぽうに入りて五千

・七千余巻の小乗しょうじやう・大乘は女人成仏だいじやうかたければ悲母ひもの恩報おんほうじがたし・

小乗は女人成仏一向しょうじやうに許されず、大乘経は・或は成仏あるじやうぶつ・或は往生あるおうじやうを

許ゆるしたるやうなれども仏の仮言かりごとにて実事じつじなし、但法華経ほけきやう

計りこそ女人成仏悲母の恩を報ずる実の報恩経にて候へと見候いしかば

ひも 悲母の恩を報ぜんために此の経の題目を一切の女人に唱えさせんと願す、

其れに日本国の一切の女人は漢土の善導日本の慧心永観・法然等にすかさ

れて詮とすべきに南無妙法蓮華経をば一国の一切の女人・一人も唱うるこ

となし、但南無阿弥陀仏と一日に一返

・十返・百千万億反・乃至三万・十万反・一生が間・昼夜十二時に又他事

なし、道心堅固なる女人も又悪人なる女人も弥陀念仏を本とせり、わづか

に法華経をこととするやうなる女人も月まつまでのてずさびをもわしき男

のひまに心ならず心ざしなき男にあうがごとし。

されば日本国の一切の女人・法華経の御心に叶うは一人もなし、我が悲母

に詮とすべき法華経をば唱えずして弥陀に心をかけば法華経は本ならねば

たすけ給うべからず、弥陀念仏は女人たすくるの法にあらず必ず地獄に

たすけ給うべからず、

お
たま
墮ち給うべし、いかんがせんとなげきし程に我が悲母をたすけんがために
みだねんぶつ　むげんじこく
弥陀念仏は無間地獄の業なり・五逆　（ごぎやく）

にはあらざれども五逆にすぎたり、父母を殺す人は其の肉身をばやぶれど

ふほ　ごしやう　むげんじこく　にほんこく　によん
も父母を後生に無間地獄には入れず、今・日本国の女人は必ず法華經にて

仏になるべきを・たばらかして一向に南無阿弥陀仏になしぬ、悪ならざれ

ばすかされぬ、仏になる種ならざれば仏にはならず弥陀念仏の小善をもつ

ほけきやう　だいぜん　うしな　しやうぜん　ねんぶつ　（ごぎやく）
て法華經の大善を失う小善の念仏は大惡の五逆にすぎたり、譬へば承平の

かんとう
將門は関東八箇国をうたへ天喜の貞任は奥州をうちとめし民を王へ通せ

ちやうてき
ざりしかば朝敵となりてついにほろぼされぬ、此等は五逆にすぎたる謀反

なり。

にほんこく　ぶつぽう
今・日本国の仏法も又かくのごとし色かわれる謀反なり、法華經は大王

だいにちきやうかんむりやうじゆきやうしんこんしやうじやうとしやう　ぜんしやう　りっそう
大日經觀無量壽經真言宗淨土宗・禪宗・律僧等は彼れ彼れの小經によ

て法華經ほけきょうの大怨敵おんてきとなりぬるを日本にほんの一切いっさいの女人等にょにんは我が心のをろかなる
をば知らずして我をたすくる日蓮にちれんをかたきとをもひて大怨敵おんてきたる念仏者ねんぶつ・
禪・律・真言師等しんごんしを善知識ぜんちしきとあやまてり、たすけんとする日蓮にちれんかへりて大
怨敵おんてきとをもわるるゆへに女人にょにんこそりて国主こくしゅに讒言ざんげんして伊豆の国へながせし

上・

又佐渡の国へながされぬ。

ここに日蓮願つて云く日蓮は全く☆なし設い僻事なりとも日本国の一切

の女人を扶けんと願せる志はすてがたかるべし、何に況や法華經のまま

に申す、而るを一切の女人等・信ぜずばさでこそ有るべきに・かへりて日蓮

をうたする、日蓮が僻事が釈迦・多宝・十方の諸仏・菩薩・二乗梵釈・

四天等いかに計らい給うぞ、日蓮僻事な

らば其の義を示し給へ、ことには日月天は眼前の境界なり、又仏前にして

きかせ給える上法華經の行者をあだまんものをば「頭破れて七分と作ら

ん」等と誓わせ給いて候へばいかんが候べきと日蓮強盛にせめまいらせ候

ゆへに天此の国を罰すゆへに此の疫病出現せり、他国より此の国を天を

ほせつけて責めらるべきに・両方の人あ

また死ぬべきに天の御計らいとしてまづ民を滅ぼして人の手足を切るがこ

とくして大事だいじの合戦なくして・此の国の王臣等おうしんをせめかたづけて法華經ほけきょうの御敵ぎてきを滅ぼして正法しょうほうを弘通くつうせんとなり。

しかしかにちれんにちれん・佐渡さどの国へ流されたりしかば彼の国の守護等しゅごは国主こくしゅの御計

ららいに随したがいて日蓮にちれんをあだむ・万民ばんみんは其その命に随したがう、念仏者ねんぶつ・禪ぜん・律りつ・真言師しんごんし

等は鎌倉かまくらよりも・いかにもして此これへわたらぬやう計もうると申しつかわし・

極楽寺ごくらくの良観房等りょうかんは武蔵むさしの前司殿みきようしよの私の御教書もうを申して弟子でしに持たせて

日蓮にちれんをあだみなんとせしかば・いかにも命めいた

すかるべきやうはなかりしに天の御計ごけいらいはさてをきぬ、地頭じとう・地頭じとう・念仏者ねんぶつ

者ねんぶつ・念仏者等にちれん・日蓮あふつぼうが庵室あんしつに昼夜に立ちそいてかよう人も・あるをまどわ

さんとせめしに阿仏房あふつぼうに・ひつを・しおわせ夜中に度度たびたび・御わたりありし

事ただひもいつの世にか・わすらむ、只悲母さどの佐渡の国に生れかわりて有あるか。

漢土かんどに沛公はいこうと申せし人王の相有りとて秦の始皇ちよくせんの勅宣くだを下して云いわく沛公はいこう

打ちて・まいらせん者には不次の賞を行うべし、沛公^{はいこう}は里の中には隠れが
たくして山に入りて七日・二七日^{ふたしちじつ}など有^あるなり、其^{その}の時命^{とき}すでに・をわ
りぬべかりしに沛公^{はいこう}の妻女呂公^{りょこう}と申せし人こそ山中を尋^{たず}ねて時時^{よりより}命をたす
けしが彼は妻なればなさけすてがたし、此^これ

は後世^{ごしやう}を・をぼせずばなにしかかくはおはすべき、又其^{その}の故^{ゆえ}に・或^{ある}は所
を・をい・或^{ある}はくわれうをひき・或^{ある}は宅をとられなんとせしについにとを
らせ給^{たま}いぬ、法華經^{ほけきやう}には過去^{かこ}に十萬億の仏を供養^{くやう}せる人こそ今生^{こんじやう}には退せ
ぬとわみへて候へ、されば十萬億供養^{くやう}の女人^{にょにん}なり、其^その上・人は見る眼^{まなこ}の
前には心ざし有りと・もさしはなれぬれば・心

はわすれずともさでこそ候^いに去^ふぬる文永十一年より今年弘安元年までは・
すでに五箇年が間・此の山中に候に佐渡^{さど}の国より三度まで夫をつかはす、
いくらほどの御心^{おんこころざし}ざしぞ大地^{だいち}よりもあつく大海^{たいかい}よりもふかき御心^{おんこころざし}ざしぞか
し、

釈迦如来^{しゃかによらい}は我が薩^{さつ}☆王子^{たみこ}たりし時^{とき}うへたる虎に身をかいし功德^{くどく}尸毘王^{しひおう}とあ
りし時^{とき}鳩^{はと}のために身をかへし功德^{くどく}をば我が末の代かくのごとく法華經^{ほけきやう}を信
ぜん人にゆづらむとこそ多宝^{たぼう}・十方^{じゆつぱう}の仏の御前^{おんまえ}にては申^{もう}させ給^{たま}いしか。

其の上・御消息しょうそくに云いわく尼が父の十三年は来る八月十一日又云いわくぜに一貫

もん等云云、あまりの御心おんこころざしの切に候へばありえて御はしますに随したがいて

ほけきよう

法華經十巻をくりまいらせ候、日蓮にちれんがこいしくをはせん時は学乗房によま

せて御ちやうもんあるべし、此の御經をしるしとして後生ごしょうには御たづねあ

るべし、抑そもそも去年今年のありさまは・いか

にかならせ給たまいぬらむと・をぼつかなさに法華經ほけきようにねんごろに申し候もういっ

れどもいまだいぶかしく候いづるに七月二十七日の申さるのときの時に阿仏房あぶつぼうを見つ

けて尼にごぜんはいかにここう入道殿にようだんはいかにとまづといて候いづればいまだ

やまず、ここう入道殿にようだんは同道にて候いづるがわせは・すでにちかづきぬこわ

なしいかんがせんとして・かへ

られ候いづるとかたり候いし時こそ盲目もうもくの者の眼まなこのあきたる死たまし給える

父母ふぼの閻魔宮えんまより御をとづれの・夢の内にあ有るをゆめにて悦ぶがごとし、

あわれあわれふしきなる事かな、此れもかまくらも此の方の者は此の病にて死ぬる人はすくなく候、同じ船にて候へばいづれもたすかるべしとも・をぼへず候いつるに・ふねやぶれて・

たすけぶねに値えるか、又竜神のたすけにて事なく岸へつけるかとこそふしぎ不思議がり候へ。

さわの入道の事なげくよし尼ごぜんへ申しつたへさえ給え、ただし入道の事は申し切り候いしかば・をもち合

せ給^{たま}うらむ、いかに念仏^{ねんぶつ}堂ありとも阿弥陀仏^{あみだぶつ}は法華經^{ほけきょう}のかたきをばたすけ給^{たま}うべからず、かえりて阿弥陀仏^{あみだぶつ}の御かたきなり後生惡道^{ごしょうあくどう}に墮^おちてくいられ候らむ事あさまし。

ただし入道^{にゅうどう}の堂のらうにていのちをたびたびたすけられたりし事こそい

かにすべしとも・をぼへ候はね、学乗房をもつてはかにつねづね法華經^{ほけきょう}をよませ給^{たま}えとかたらせ給^{たま}え、それも叶^{かな}うべしとはをぼえず、さても尼のいかにたよりなかるらむとなげくと申しつたへさせ給^{たま}い候へ、又又申^{もう}すべし。

七月二十八日

にちれん
日蓮 花押 かおう

さど
佐渡国府阿仏房尼御前 あぶつぼうあまごぜん

◆二八八

千日尼御前御返事 あまごせんごへんじ

弘安元年十月十九日 五十

七歳御作

与阿仏房尼 あぶつぼう

1315

せいふ

青鳧一貫文・干飯一斗・種種の物給い候い了んぬ、仏に土の餅を供養せ

とくしようどうじ

あそかだいおう

し徳勝童子は阿育大王と生れたり、仏に漿を・まひらせし老女は辟支仏と

ほけきよう

じゅつぽうさんぜ

じゅつぽう

もう

とうほう

生れたり、法華経は十方三世の諸仏の御帥なり、十方の仏と申すは東方

なんぼうむうとく

なんぼうせんた

なんぼう

さいほうむりよう

善徳仏・東南方無憂徳仏・南方栴檀徳仏・西南方宝施仏・西方無量明仏・

とうほうく

さんじよう

じようほうこうしゅうとく

めいとく

西北方華徳仏・北方相徳仏・東北方三乗行仏・上方広衆徳仏・下方明徳

さんぜ

もう

かこ

そうこんこう

げんざい

けんざい

みらい

仏なり、三世の仏と申すは過去・莊嚴劫の千仏・現在・賢劫の千仏・未来

せいしゆく

ないしけこんきよう

ほけきよう

ねはんきよう

だいしろう

こんじつ

けんみつ

・星宿劫の千仏・乃至華嚴経・法華経・涅槃経等の大小・権実・顕密の

しよきよう

つらな

いっさい

しよぶつ

じゅつぽう

せかい

じんじゆ

ぼさつ

みなことと

諸経に列り給へる一切の諸仏・尽十方世界の微塵数の菩薩等も・皆悉く

ほけきよう

しゆつしろう

たま

しゆつしろう

たま

ゆえ

ほけきよう

けつきよう

ふげん

法華経の妙の一字より 出生し給へり、故に法華経の結経たる普賢経に

い
わ
云く「**仏三種の身は方等より生ず**」等云、**方等**とは**月氏の語・漢土**には
だいじょう
大乘と翻ず・**大乘**と申すは**法華經**の名なり、**阿含經**は**外道の經**に對すれ
だいじょうきよう
ば**大乘經**、**華嚴**・**般若**・**大日經**等は**阿含經**に對すれば**大乘經**、**法華經**
けごん
はん
だい
にちきよう
あこんきよう
だいじょうきよう
ほけきよう
すく
ゆえ
ひとり
に對すれば**小乘經**なり、**法華經**に勝れたる經なき故に一

大乘經なり、例せば南閻浮提・八万四千の国国の王王は其の国国にては

だいじょうきよう

大王と云う・転輪聖王に対すれば小王と申す、乃至六欲・四神の王王は

だいしろう

大小に破る、色界の頂の大梵天王独り大王にして小の文字をつくる事な

きが如し、

仏は子なり法華經は父性なり、譬えば一人の父母に千子有りて

一人の父母を讃歎すれば千子悦びをなす、

一人の父母を供養すれば千子を

供養するになりぬ。

又法華經を供養する人は十方の仏・菩薩を供養する功德と同じきなり、

十方の諸仏は妙の一字より生じ給へる故なり、譬えば一の師子に百子あり

・彼の百子諸の禽獸に犯さるるに・一の師子王吼れば百子力を得て諸の

禽獸皆頭七分にわる、法華經は師子王の如し一切の獸の頂きとす、

法華經の師子王を持つ女人は一切の地獄・餓鬼・畜生

等の百獸に恐るる事なし、譬えば女人の一生の間の御罪は諸の乾草の如し

等の百獸に恐るる事なし、

譬えば女人の一生の間の御罪は諸の乾草の如し

等の百獸に恐るる事なし、

譬えば女人の一生の間の御罪は諸の乾草の如し

等の百獸に恐るる事なし、

譬えば女人の一生の間の御罪は諸の乾草の如し

ほけきよう

法華經の妙の一字は小火の如し、小火を衆草につきぬれば衆草焼け亡ぶ

しゅうそう

るのみならず大木大石照焼け失せぬ、妙の一字の智火以て此くの如し諸罪

てりや

か

しよざい

消ゆ

るのみならず衆罪かへりて功德となる毒藥變じて甘露となる是なり、譬え

しゅうざい

くどく

かんろ

これ

たと

ば黒漆に白物を入れぬれば白色となる、女人の御罪は漆の如し南無

うるし

おしろい

によん

つみ

うるし

ごと

なむ

みようほうれんげきよう

もんじ

おしろい

ごと

りんじゅう

お

妙法蓮華經の文字は白物の如し人は臨終の時地獄に墮つる者は黒色とな

そ

ちびき

ごと

ぜんん

たと

によん

る上其の身重き事・千引の石の如し善人は設ひ七尺八尺の女人なれども色

りんじゅう

ごと

ぜんん

たと

によん

ごと

黒き者なれども臨終に色變じて白色となる又輕き事・鷲毛の如し軟なる事

りんじゅう

ごと

ごと

ごと

ごと

ごと

ごと

ごと

ごと

ごと

・兜羅縣の如し。

わた

ごと

さと

佐渡の国より此の国までは山海を隔てて千里に及び侯に女人の御身とし

さと

へだ

せんり

およ

によん

おんみ

おんみ

おんみ

おんみ

おんみ

おんみ

て法華經を志しましますによりて年年に夫を御使として御訪いあり定

ほけきよう

しんぎ

しんぎ

しんぎ

しんぎ

しんぎ

しんぎ

しんぎ

しんぎ

しんぎ

めて法華經・釈迦・多宝・十方の諸仏・其の御心をしろしめすらん、譬え

ほけきよう

しやか

たほう

じゅつぽう

しよぶつ

そ

そ

そ

そ

そ

そ

ばてんげつ天月は四万由旬よじゆんなれども大地だいちの池には須臾しゆゆに影浮び雷門の鼓は千万里ばんり遠
けれども打ちては須臾しゆゆに聞ゆ、御身おんみは佐渡さどの国にをはせども心は此の国に
来れり、仏に成る道も此かくの如ごとし、我等われらは穢土えどに候へども心は靈山りやうぜんに住べ
し、御面を見てはなにかせん心こそ大切に候へそうら、いつかいつか釈迦しゃか仏ぶつのを
はします靈山りやうぜん会上にまひりあひ候はん、南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやう

・南無妙法蓮華經、なむほうれんげきょう 恐恐謹言。きょうきょうきんげん

弘安元年後十月十九日
こうあんがねん

にちれん かおう
日蓮 花押

あまごぜんごへんじ
千日尼御前御返事

◆二八九 阿仏房御返事
あぶつぼうごへんじ

1317p

御状の旨・委細承り候むね いさい たまわ そうらい了んぬ、大覚世尊説いて曰く「生老病死・
生住異滅」等云云、既すでに生を受けて齡六旬よわいに及ぶ老又疑うたがいい無し只残ただる
所は病死の二句なるのみ、然しかるに正月より今月六月一日に至り連連此の病
息やむこと無し死ぬる事疑うたがいい無き者か、経いわに云く「生滅滅已・寂滅為楽」

云云、今は毒身を棄^すてて後に金身を受ければ豈^{あに}欺^{あざむ}くべけんや。

建治三年丁^{ひのと}丑六月三日

阿^あ仏^{ぶつ}房^{ぼう}

日蓮^{にちれん} 花押^{かおう}

◆二九〇

千日尼御返事ごへんじ

弘安三年七月二日こうあん

五十九歳御作

与阿仏房尼あぶつぼう

1318p

追伸、絹の染袈裟けさ一つまいらせ候、豊後房に申し候べし既に法門・日本国
にひろまりて候、北陸道をば豊後房なびくべきに学生ならでは叶かなうべ
からず・九月十五日いぜん已前に・いそぎいそぎまいるべし、こつ入道にゅうだう殿の
尼にごぜんの事なげき入つて候、又こいしこいしと申しつたへさせ給たまへ、
かずの聖教しやうきやうをば日記にっぎのごとくたんば房にいそぎいそぎつかわすべし、
山伏房をばこれより申もうすにしたがいてこれへは・わたすべし、山伏の現げん
にあだまれ候事悦よろこび入つて候。

鷺目がもく一貫五百文のりわかめほしいしなじなの物給おひ候わい了はんぬ、法華經ほけきやう

の御宝前に申し上げて候、法華經に云く「若し法を聞く者有らば一として

じようぶつ

成仏せざることを無し」云云、文字は十字にて候へども法華經を一句よみま

しやかによらい いちだいしきよう

いらせ候へば釈迦如来の一代聖教をのこりなく読むにて候なるぞ、故に

みようらくだいし

妙樂大師の云く「若し法華を弘むるは凡そ

ほつけ ひろ およ

一義を消するも皆一代を混じて其の始末を窮めよ」等云云、始と申すは

みないちだい

そ

しまつ きわ

等云云、始と申すは

けこんきよう

もう

ねはんきよう

けこんきよう

もう

しよじようどう

ほうえ

くどく

華嚴經・末と申すは涅槃經・華嚴經と申すは仏最初成道の時法慧・功德林

等の大菩薩・解脱月菩薩と申す菩薩の請に趣いて仏前にてとかれて候、

ぼさつ

げだつがつぼさつ

もう

ぼさつ

しきう

ぶつぜん

其の經

そ

は天竺・竜宮城・兜率天等は知らず日本国にわたりて候は六十卷・八十

てんじく りゆうぐうじよう

とそつてん

にほんこく

卷・四十卷候、末と申すは大涅槃經・此れも月氏・竜宮等は知らず我が朝

もう

だいねはんきよう

こ

がっし

りゆうぐう

には四十卷・三十六卷・六卷・二卷等なり、此れより外の阿含經・方等經

こ

ほか

あこんきよう

ほうとう

・般若經等は五千・七千余卷なり、此れ等の經經は見ず・きかず候へど

はんによきよう

こ

ききよう

も但法華經の一字・一句ほけきよう いっくよみ候へば彼れ彼れの經經きようぎようを一字

もをとさずよむにて候なるぞ、譬たとへば月氏がっしにほん日本と申もうすは二字・二字に五天竺てんじく

十六の大国・五百の中国・十千の小国・無量むりようの粟散国そくさんの大地だいち大山草木そうもく

人畜等じんちくをさまれるがごとし、譬たとへば鏡は・わづかに一寸・二寸・三寸・四

寸・五寸と候へども一尺・五尺の人をもうかべ一丈・二丈・十丈・百丈の

大山をもうつつすがごとし。

されば此の經文きやうもんをよみて見候へば此の經をきく人は一人もかけず仏にな

ると申す文なり、九界・六道の一切衆生各各心心かわれり、譬へば二人・

三人・乃至百千人候へども一尺の面の内しちににたる人・一人もなし、心

のにざるゆへに面にもにず、まして二人十人六道九界の衆生の心いかながか

わりて候らむ、されば花をあいし・月

をあいしすきをこのみにがきをこのみちいさきをあいし大なるをあいしい

ろいろなり、善をこのみ悪をこのみしなじななり、かくのごとく・いろい

ろに候へども法華經に入りぬれば唯一人の身一人の心なり、譬へば衆河の

大海に入りて同一の鹹味なるがごとく衆鳥の須弥山に近ずきて一色なる

がごとし、提婆が三逆も羅☆羅が

二百五十戒も同じく仏になりぬ、妙莊嚴王の邪見も舍利弗が正見も同じく

授記をかをほれり、此れ即ち無一不成仏のゆへぞかし、四十余年の内の

あみだ

しやりほつ

ぜんこん

みけんしんじつ

阿弥陀経等には舍利弗が七日の百万反大善根をとかれしかども未顕真実と
きらわれしかば七日ゆをわかつて大海になげたるがごとし、
み提希が観經

むしようにん

しようじきしやほうべん

をよみて無生忍を得しかども正直捨方便

ほけきよう

によにん

だいぜん

とすてられしかば法華經を信ぜずば返つて本の女人なり、大善を用うる事

ほけきよう

あ

なげ

ことな

いちじよう

しゆぎよう

なし法華經に値わざればなにかせん、大悪をも歎く事無かれ一乗を修行

だいば

あと

これら

みなむいつふじようぶつ

きようもん

せば提婆が跡をもつぎなん、此等は皆無一不成仏の經文のむなしからざ

るゆへぞかし。

あぶつぼう

しよつりよう

うたがい

されば故阿仏房の聖靈は今いづくにかをはすらんと人は疑うとも

ほけきよう

めいぎよう

そ

りようじゅうせん

たほうぶつ

法華經の明鏡をもつて其の影をうかべて候へば靈鷲山の山の中に多宝仏

ほうとう

にちれん

も

の宝塔の内に東むきにをはすと日蓮は見まいらせて候、若し此の事そらご

にちれん

しやかによらい

せそんほうくご

とにて候わば日蓮がひがめにては候はず、釈迦如来の世尊法久後・

ようとうせつしんじつ

たほうぶつ

みようほけきよう

かいぜしんじつ

ぜつそう

要当説眞実の御舌も多宝仏の妙法華經・皆是眞実の舌相

も四百万億那由佗なゆたの国土こくどにあさのごとくいねのごとく星のごとく竹のごとくぞくぞくとすきまもなく列つらなつてをはしましし諸仏しよぶつ如来にょらいの一仏いちぶつもかけ給たまはず、広長舌こうちようぜつを大梵王宮おうぐうに指し付けてをはせし御舌ごぜつどものくぢらの死に
てくされたるがごとく・いわしのよりあつまりて・くされたるがごとく・
皆みな一時いちじにくちくされて十方世界じゅうぽうせかいの

諸しよぶつ仏にょらい如来もうこ大妄語つみの罪をとされて寂光じやくこうの浄土じやうどの金をるり大地だいちはたとわれて
提婆だいばがごとく無間むげん・大城だいじやうにかつぱと入り法蓮香比丘尼びくにがごとく身より大
妄語もうこの猛火みやうかぱといでて実報華王じつぽうけおうの花をのその一時いちじに灰燼かいじんの地をなるべし、い
かでかさる事は候べき、故阿仏房あぶつぽう一人を寂光じやくこうの浄土じやうどに入れ給たまはず諸しよぶつ仏は
大苦おに墮たまち給たまうべし、ただ・をいて

物を見よただをいて物を見よ、仏のまことそら事は此これにて見奉たてまつるべし、
さてはをとこははしらのごとし女にょにんはなかわのごとし、をとこは足のごとし
女人にょにんは身をのごとし、をとこは羽をのごとし女をはみのごとし、羽とみと・べち
べちになりなばなにをもつてかとぶべき、はしらたうれなばなかは地をに墮おち
なん、いへにをとこなければ

人のたましゐなきがごとし、くうじをたれにかいゐあわせん、よき物をば
たれにかやしなうべき、一月二日たがいしをだにもをぼつかなくをもちし

に、こぞの三月の二十一日にわかれにしがこぞもまちくらせどまみゆる事なし、今年もすでに七つきになりぬ、たといわれこそ来らずともいかにをとづれはなかるらん、ちり

し花も又さきぬおちし菓このみも又なりぬ、春の風もかわらず秋のけしきもこぞのごとし、いかにこの一事のみ・かわりゆきて本のごとくなかるらむ、月に入りて又いでぬ雲はきへて又来る、この人人ひとびとの出いでてかへらぬ事こ

そ天ほけきようもうらめしく地もなげかしく候へ、さこそをぼすらめいそぎいそぎ法華經をらうれうとたのみまいらせ給たまいて、りやうぜん浄土じようどへまいらせ給たまいてみまいらせさせ給たまうべし。

そもそ

抑そも子はかたきと申もうす經文きようもんもあり「世人ため子の為に衆の罪つみを造る」の文なり、

☆ くまたか

・驚もうと申もうすとりはをやは慈悲じひをもつて養へば子は・かへりて食と

きようちよう

す梟きようちよう鳥と申もうすとりは生まれては必ず母をくらう、畜生ちくしやうかくのごとし、人

の中に

もはるり王は心もゆかぬ父の位を奪い取る、阿闍世王^{あじやせ}は父を殺せり、安祿

山は養母をころし安慶緒^{あんけいしよ}と申す人は父の安祿山を殺す安慶緒^{あんけいしよ}は又史師明^{ししめい}に

殺されぬ史師明^{ししめい}は史朝義^{しちやうぎ}と申す子に又ころされぬ、此^これは敵と申すもこと

わりなり、善星比丘^{ぜんしやうびく}と申すは教主釈尊^{きやうしゆしやくそん}の御子なり、苦得外道^{くとくげどう}をかたらい

て度度父^{たびたび}の仏を殺し奉^{たてまつ}らんとす、又

子は財と申すたから　もう　きようもん経文もはんべり所以にゆえん　きようもん　いわ経文に云く「其の男女追つて福をしゅう　こうみよう　じこく　てら　そ　ふ　ほ　しんじん　あらわ修すれば大光明有つて地獄を照し其の父母に信心をたといぶつせつ　まなこ顕さしむ」等と申す、
設いてんじく仏説ならずとも眼の前に見えて候。

天竺に安足国王と申せし大王は・あまりに馬をこのみて・かいしほどにこくおう　だいおう

・後には・かいなれて鈍馬を竜馬となすのみならず・牛を馬ともなす・
結句は人を馬と・なしてのり給いき、其の国の人あまりになげきしかば知けっく　たまひ　そ
らぬ国の人を馬となす、他国の商人のゆきたりしかば薬をかいて・馬とな
して御まやうに・つなぎつけぬ、なにと・なけれども

我が国はこいしき上妻子さいしことにこいしくしのびがたかりしかどもゆるす事
なかりしかばかへる事なし、又かへりたりともこのすがたにては由なかる
べし、ただ朝夕ちようせきにはなげきのみにしてありし程に・一人ありし

子父のまちどきすぎしかば人にや殺されたるらむ又病にや沈しずむらむ子の身

としていかでか父をたづねざるべきといでたちければ母なげくらく男も
他国たこくよりかへらず一人の子もすててゆきなば我いかんがせんと・な

げきしかども子ちちのあまりにこいしかりしかば安足国たすへ尋ねゆきぬ、あ
る小屋にやどりて候しかば家の主申もうすやうあらふびんやわどのはをさなき
物なり而しかもみめかたち人にすぐれたり、我に一人の子ありしが他国たこくに

ゆきてしにやしけん又いかにてやあるらむ、我が子の事を・をもへばわど
のをみてめもあてられず、いかにと申せば此の国は大なるなげき有り、此
の国の大王だいおうあまり馬をこのませ給たまいて不思議ふしぎの草を用もちい給たまへり、一葉せば
き草をくわすれば人馬となる、葉の広き草をくわすれば馬人となる、近く
も他国たこくの商人の有たりしを・この草をくわせて馬となして第一だいいちの御まやに
秘蔵ひそうしてつながれたりと申もうす、此の男これをきいてさては我が父は馬と成
りてけりとをもいて返つて問そう其の馬は毛はいかにとといければ家の主答

えて云く栗毛なる馬の肩白く・

ぶちたりと申す、此の物此の事をききてとかうはからいて王宮に近づき葉の広き草をぬすみとりて・我が父の馬になりたりしに食せしかば本のごとく人となりぬ、其の国の大王不思議なるおもひをなして孝養の者なりと

て父を子にあづけ給へり、其れよりついに人を馬となす事はとどめられぬ。

子ならずば・いかでか尋ねゆくべき、目連尊者は母の餓鬼の苦をすくひ

浄蔵・浄眼は父の邪見を・ひるがいます、此れよき子の親の財となるゆへぞ

かし、而るに故阿仏聖靈は日本国・北海の島のいびすのみなりしかども

後生を・をそれて出家して後生を願ひしが此の人・日蓮に値いて法華経を

持ち去年の春仏になりぬ、尸陀山の野干は仏法に

値いて生をいとひ死を願いて帝釈と生れたり、阿仏・上人は濁世の身を

厭いて仏になり給ひぬ、其の子藤九郎守綱は此の跡をつぎて一向法華経の

行者となりて去年は七月二日・父の舍利を頸に懸け、千里の山海を経て

甲州・波木井身延山に登りて法華経の道場に此れをおさめ、今年は又七月

一日身延山に登りて慈父のはかを拝見す、子にすぎたる財なし子にすぎた

る財なし南無妙法蓮華経・南無妙法蓮華経。

七月二日

あぶつぼう
故阿仏房尼御返事
ごへんじ

にちれんかおう
日蓮花押

◆二九一

国府入道殿御返事こへんじ

文永十二年ぶんえい

五十四歳御

作

1323p

あまのりのかみぶくろ二つわかめ十でうこものかみぶくろ一つたこひと
かしら。

人の御心は定めなきものなればうつる心さだめなし、さどの国に候いし
こしんよう

時御信用ありしだにもふしぎに・をばへ候いしに、これまで入道殿をつか
にゅうどう

わされし御心おんこころざし又国もへだたり年月ねんげつもかさなり候へばたゆむ御心もやと

うたがい候にいよいよいろをあらわしこうをつませ給たまう事但一生二生の事

にはあらざるか、此の法華経ほけきょうは

信じがたければ仙人の子となり父母ふぼとなり女となりなんどしてこそ信ぜさ

せ給^{たま}うなれ、しかるに御子もをはず但^{ただ}をやばかりなり、其中衆生^{うちゅうしゅじょう}

悉^{しつ}是^ぜ吾^ご子の經文^{きやうもん}のごとくならば教主^{きやうしゅ}釈尊^{しやくそん}は入道^{にゅうどう}殿尼^{あまごぜん}御前^{じふ}の慈父^{じふ}ぞかし、

にちれん

日蓮^{にちれん}は又御子にてあるべかりけるが、しばらく日本^{にほん}国^{こく}の人をたすけんと

ちゅうごく

中国^{しゅうごく}に候か、宿善^{しゆくぜん}たうとく候、又蒙古^{もうこ}国^{こく}の日本^{にほん}にみ

だれ入る時はこれへ御わたりあるべし、又子息^{しそく}なき人なれば御としのすへ

にはこれへと・をぼしめすべし、いづくも定めなし、仏になる事こそつゐ

のすみかにては候いしとをもひ切らせ給^{たま}うべし、恐^{きょう}恐^{きょう}。

卯月十二日

日蓮^{にちれん}

花押^{かおう}

ここう入道^{にゅうどう}殿御返事^{ごへんじ}

◆二九二

国府尼御前御書

建治元年

五十四歳御作

1324p

阿仏御房ごぼうの尼ごぜんよりぜに三百文、同心なれば此の文を二人して人によませてきこしめせ。

単衣一領さど佐渡さどの国より甲斐かいの国波木井はきりの郷の内の深山みやままで送り給候たびそうらい
了んぬ、法華經ほけきょう第四法師品ほうしほんに云く「人有いつて仏道ぶつどうを求めて一劫いつくわうの中に於おいて
合掌がっしょうして我が前に在あつて無数の偈げを以て讃ほめん、是この讃ほ仏ぶつに由よるが故ゆえに
無量むりょうの功德くどくを得ん、持經者じきやうを歎美たんびせんは其その福復ふくた彼かに過かぎん」等云云、
文の心は釈尊しゃくそんほどの仏を三業相応そうおうして

一中劫ちゅうくわうが間ねんごろに供養くようし奉たてまつるよりも末代まつだい惡世あくせの世に法華經ほけきょうの行者ぎやうじやを
供養くようせん功德くどくはすぐれたりと・とかれて候、まことしからぬ事にては候へ

とも仏の金言きんげんにて候へば疑うたがいうべきにあらず、其の上妙樂大師みょうらくだいしと申す人・此の

経文きょうもんを重ねてやわらげて云く「若し毀謗きぼうせん者は頭いづべ七分に破れ若し供養くようせん者は福十号ふくじゅうごうに過ぎん」等云云、釈しゃくの心は末代の法華經ほけきようの行者ぎやうじやを供養くようするは十号を具足ぐそくします如來にょらいを供養くようしたてまつるにも其の功德くどくすぎたり、又濁世じよくせに法華經ほけきようの行者ぎやうじやあらんを留難るなんをなさん人は頭いづべ七分にわるべしと云云。

夫れ日蓮にちれんは日本第一にほんだいいちのゑせものなり、其の故は天神七代てんじんはさておきぬ、地神五代ちじんごだいも又はかりがたし、人王始まりて神武より今に至るまで九十代欽明きんめい天王より七百余年が間世間せけんにつけ仏法ぶつぽうによりても日蓮にちれんほど・あまなく人にあだまれたるものは候はじ、守屋もりやが寺塔じとうをやき清盛入道きよもりにようどうが東大寺興福寺とうだいじこうふくを失せし彼等かれらが一類いちるいは彼がにくま

ず、將門貞たうが朝敵と成りし伝教大師の七寺にあだまれし彼等もいまだ日本一州の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の四衆にはにくまれず、日蓮は父母・兄弟師匠同法上一人下万民一人ももれず父母のかたきのごこと

く謀反強盜にも・すぐれて人ごとにあだをなすなり、されば・或時は数百人にのられ・或時は数千人に取りこめられて刀杖の大難にあう、所を・をはれ国を出さる・結句は国主より御勘氣二度一度は伊豆の国今度は佐渡の

嶋

なり、されば身命しんみょうをつぐべきかつてもなし形体を隠すべき藤の衣ももたず、
北海の嶋にはなたれしかば彼の国の道俗どうぞくは相州そうしゅうの男女なんによよりもあだをなし
き、野中に捨てられて雪にはだへをまじえくさをつみて命をささえたりき、
彼の蘇夫が胡国ここくに十九年雪を食うて世をわたりし、李呂が北海に六ヶ年が
んくつに・せめられし・我は身にてしられぬ、これはひとえに我が身には失とが
なし日本国にほんこくをたすけんとをもひしゆへなり。

しかるに尼なりごぜん並びに入道殿にゅうどうでんは彼の国あに有る時は人めを・をそれで夜
中に食を・をくり、・或る時は国のせめをもはばからず身にもかわらんと
せし人人ひとびとなり、さればつらかりし国なれどもそりたるかみをうしろへひか
れ・すすむあしもかへりしぞかし、いかなる過去かこのえんにてやありけんと
おぼつかなかりしに・又いつしか・これま

でさしも大事だいじなるわが夫を御つかいにてつかはされて候、ゆめかまぼろし

か尼ごぜんの御すがたをば・みまいらせ候はねども心をばこれにとどめを
ぼへ候へ、日蓮をにちれんこいしくをはしせば常に出いずる日ゆうべに・いづる月を
・をがませ給たまえ、いつとなく日月ににちがつかけをうかぶる身なり、又後生ごしようには
りようぜんじようど靈山浄土にまいりあひまひらせん、南無妙法蓮華經。

六月十六日

日蓮にちれん

花押かおう

さどの国のこのの尼御前あまごぜん

◆二九三

一谷入道御書

建治元年五月八日 五十四歳御作

与一谷入道にやうぼう日学にやうがく女房にようぼう

1326p

去る弘長元年いぬ こうちようがなんねん太歳辛酉五月十二日に御勘氣を蒙ごかんき こうむつて伊豆の国伊東の郷と

云う処ところに流罪るざいせられたりき、兵衛の介頼朝よりとものながされてありし処ところなり、

さありしかども程なく無く同三年太歳癸亥二月二十二日に召し返されぬ、又文永ぶんえい

八年太歳辛未九月十二日重かさねて御勘氣を蒙ごかんき こおむりしが忽たちまちに頸ねを刎はらるべきにてあ

りけるが子細しさいありけるかの故ゆえに・しばらく

のびて北国佐渡はくとの嶋ちぎようを知行むさしする武蔵の前司預りて其その内うちの者ものどもの沙汰さたと

して彼の嶋しまに行き付いてありしが・彼の島の者ものども因果いんがの理ことわりをも并なへぬあ

らゑびすなればあらくあたりし事は申もうす計はかりなし、然しかれども一分いちぶんも恨うらむる

心こころなし、其そのの故ゆえは日本国にほんこくの主ぬしとして少しも道理どうりを知りぬべき相模殿さがみだにも

国をたすけんと云う者を子細しさいも聞ほどかず理不尽りふじんに死罪しざいにあてがう事なれば・況ましてや其の末の者どもの事はよきもたのまれずあしきもにくからず。

此の法門ほうもんを申し始めしより命をば法華經ほけきょうに奉り名をば十方世界じゅつぱうせかいの諸仏しよぶつの浄土じょうとにながすべしと思ひ儲けしなり、弘演こうえんと云いし者は主衛きみえいの懿公いこうの肝を取りて我が腹を割さいて納めて死にき、予讓よじやうと云いし者は主の知伯ちはくが恥はじをすすがんがために劒を呑んで死せしぞかし、是は但わづかの世間せけんの恩を報ぜんがためぞかし。

況や無量劫むりやうこくより已来六道このかたろくどうに流轉るてんして仏にならざりし事は法華經ほけきょうの御ために身を惜おしみ命を捨てざる故ぞかし、されば喜見菩薩きけんぼさつと申せし菩薩ぼさつは千二百歳にちがつじようみようとくふつの間・身を焼いて日月にちがつ・淨明徳仏じやうめいとくぶつを供養くようし、七万二千歳せんさいの間臂ひじを焼いて法華經ほけきょうを供養くようし奉る其の人は藥王菩薩やくおうぼさつぞかし、不輕菩薩ふきやうぼさつは法華經ほけきょうの御ために多劫めりきにくの間・罵詈毀辱じやうもくがしやく・杖木瓦石じやうもくがしやくに・せめられき、今の釈迦仏しゃかぶつにあらずや、

されば仏になる道は時により品品に替つて行ずべきにや、今の世には法華經ほけきよう
は・さる事にておはすれども時によりて事ことなるなれば山林さんりんに交わりて
読誦どくじゆすとも將又里はたまに住して演説えんぜつすとも・持戒じかいにして行ずとも臂ひじを焼いて
供養くようすとも仏にはなるべからず、日本国にほんこくは仏法盛なるやうなれども仏法ぶつぽうに
ついて

不思議あり人^{これ}是^{これ}を知らず、譬^{たと}えば虫の火に入り鳥の蛇^{じや}の口に入るが如^{ごと}し
しんこんしけこんしゅうほうそう　さんろんぜんしゅう　じようとしゅう　りっしゅう
真言師華嚴宗法相・三論禪宗・浄土宗・律宗等の人人は我も法を得たり
しょうじ
我も生死を離れたる人とは思へども立始めし本師等依經の心をも弁えず、
ほんし　えきよう　わきま
但我が心の思い付いて有りしままに其^その經を取り立てんと思へる墓無き心
はかな
計りにて法華經に背けば又仏意にも
ぶつゐ
叶^{かな}わざる事をば知らずして弘め行く程に国主・万民是を信じぬ又他国へ渡^{わた}
ひろ　こくしゅ　ばんみんこれ
り又年久しく成りぬ、末学^{まつがく}の者共本師の誤^ごをば知らずして弘め習ひし人人^{ひとびと}
ほんし　あやまり　ひろ　なら
をも智者^{ちしや}とは思へり、源濁りぬれば流浄からず身曲りぬれば影直^{なほ}から
みなもと
ず、真言^{しんこん}の元祖善無畏等^{がんそぜんむゐ}は既に地獄^{じごく}に堕ちぬべかりしが、或^{ある}は改悔^{かいげ}して地獄^{じごく}
すで　お　ある　ただえきよう　ひろ　ほけきよう　さんたん
を免^{まぬか}れたる者もあり、或^{ある}は唯依經^{ただえきよう}を弘めて法華經^{ほけきよう}の讚歎^{さんたん}をもせざれば生死^{しょうじ}
まぬか　ある　ただえきよう　ひろ　ほけきよう　さんたん
は離れねども惡道^{あくどう}に堕^おちざる人もあり、而^{しか}るを末末の者・此の事を知らず
お　しか
して諸人^{しよにん}・一同に信をなしぬ、譬^{たと}えば破たる船に乗つて大海^{たいかい}に浮び酒に酔^よ
しよにん　たと　たいかい

る者の火の中に臥せるが如し。

日蓮是を見し故に忽に菩提心を發して此の事を申し始めしなり、世間の

人人何に申すとも信ずる事はあるべからず、還つて流罪・死罪せらるべし

とは兼て知つてありしかども今の日本国は法華經に背き釈迦仏を捨つる

故に後生は必ず無間・大城に墮ちん事はさておきぬ今生にも必ず大難に

値うべし、所謂他国より責め來つて上一人より

下万民に至るまで一同の歎きあるべし、譬えば千人の兄弟が一人の親を殺

したらんに此の罪を千に分ては受くべからず、一一に皆無間・大城に墮ち

て同じく一劫を経べし、此の国も又又是くの如し、娑婆世界は五百塵点劫

より已來教主釈尊の御所領なり、大地虚空山海草木一分も他仏の有なら

ず、又一切衆生は釈尊の御子なり、

譬えば成劫の始め一人の梵王下つて六道の衆生をば生て候ぞかし、梵王

の一切衆生の親たるが如く・釈迦仏も又一切衆生の親なり、又此の国の一切衆生のためには教主釈尊は明師にておはするぞかし、父母を知るも師の恩なり黒白を弁うも釈尊の恩なり、而るを天魔の身に入つて候善導・法然などが申すに付いて・国土に阿弥陀堂を造り・或は一郡・一郷・一村等に阿弥陀堂を造り・或は百姓万民の宅のごとに阿弥陀堂を造り・或は宅宅・人人ご

に阿弥陀仏あみだぶつを書造りつく・或は人ごとに口口に・或は高声に唱へ・或は一万遍ある
・或は六万遍あるなど唱うるに・少しも智慧ちえある者はいよいよこれをすすむ、
譬たとへば火にかれたる草をくわへ水に風を合せたるに似たり、此の国の人人ひとびと
は一人もなく教主きょうしゅ釈尊しやくそんの御弟子御民ぞかし、而るに阿弥陀等の他仏たぶつを一仏いちぶつ
もつくらずかかず念仏ねんぶつも申さず・ある
者は悪人あくにんなれども釈迦仏しやくかぶつを捨て奉る色いろは未だ顕あらわれず、一向に阿弥陀仏あみだぶつを念
ずる人人ひとびとは既に釈尊しやくそん仏ぶつを捨て奉る色いろ顕然けんねんなり、彼の人人ひとびとの墓はかな無き念仏ねんぶつを
申す者は悪人あくにんにてあるぞかし、父母ふぼにもあらず主君しゅくん・師匠ししやうにてもおはせぬ
仏ぶつをばいとをしき妻つまの様にもてなし、現に国主こくしゅ父母ふぼ明師めいしたる釈迦仏しやくかぶつを捨て
乳母にちぼの如ごとくなる法華經ほけきやうをば口にも誦じゆし奉らず是れ豈不孝あにふこうの者にあらずや、
此ふこうの不孝ひとびとの人人ひとびと・一人・二人・百人・千人ならず一国・二国ならず上一人かみいちにん
より

下万民ばんみんに至るいたまで日本国にほんこく・皆みなこぞりて一人もなく三逆罪さんぎやくざの者なり、されば
日月にちがつは色いろを變じて此これをにらめ・大地だいちも瞋いかりてをどりあがり大慧星天すいせいには
びこり大火国だいかに充滿じゅうまんすれども僻事ひがことありともおもはず、我等われらは念仏ねんぶつにひまな
し其その上念仏堂ねんぶつを造り阿弥陀仏あみだぶつを持ち奉たてまつるなんと自讃じざんするなり、是は賢けんき
様はかなにて墓無はかなし、譬たとえば若わかき夫妻等が夫は女を愛し女は夫をいとおしむ程に
父母ふぼのゆくへをしらず、父母は衣薄ふぼけれども我はねや熱し、父母は食せ
ざれども我は腹に飽あきぬ、是は第一だいいちの不孝ふこうなれども彼等かれらは失とがともしらず、
況や母に背そむく妻父にさかへる夫・逆重罪じぎゆうざいにあらずや、阿弥陀仏あみだぶつは十萬億の
あなたに有つて此の娑婆世界しゃばせかいには一分いちぶんも縁なし、なにと云うとも故もなき
なり、馬に牛を合せ犬に☆ほしをかたらひたるが如ごとし。

但日蓮にちれん一人計ばかり此の事を知りぬ、命おしを惜みて云はずば国恩を報おしぜぬ上・
教主きょうしゅ釈尊しやくそんの御敵ごてきとなるべし、是これを恐れずして有のままに申もうすならば死罪しざい

となるべし、たと設しひ死罪しざいは免まぬるとも流罪るざいは疑うたがなかるべしとは兼かねて知つて・
ありし

かども仏の恩重ゆえきが故ゆえに人をはばからず申もうしぬ、案にたがはず兩度まで流
されて候いし中に・文永九年ぶんえいの夏の比佐渡さどの国石田の郷一谷いと云いし処ところに
有ありしに・預りたる名主等は公と云ひ私と云ひ父母ふぼの敵よりも宿世すくせ

の敵よりも悪げにありしに宿むかしの入道にゅうどうと云ひ妻と云ひつかう者と云ひ始はお
ぢをそれしかども先世せんぜの事にやありけん、内内ふびん・不便と思ふ心付きぬ、預
りよりあづかる食は少し付ける弟子でしは多くありしに僅の飯の二口三口
ありしを・或あるはおしきに分け・或あるは手に入て食しに宅主内心ないしんあつて外に
はをそる様なれども内には不便ふびんげにありし事何いすれの世にかわすれん、我を
生みておはせし父母ふぼよりも当時は大事とうじとこそ思いしか、何なる恩おも・は
げむべしまして約束やくそくせし事たがうべしや。

然しかれども入道にゅうどうの心は後世ごせうを深く思いてある者なれば久しく念仏ねんぶつを申しつ
もりぬ、其その上阿弥陀堂あみだを造り田畠でんばたも其その仏の物なり、地頭じとうも又をそろし
なんと思ひて直ちに法華經ほけきようにはならず、是は彼の身には第一だいいちの道理どうりぞかし、
然しかれども又無間むげん・大城だいじようは疑無うたがいし、設たとひ是より法華經ほけきようを遣つかわしたりとも世間せけん
もをそろしければ念仏ねんぶつすつべからずな

んと思はば、火に水を合せたるが如し、こと 謗法ほうぼうの大水たいすい・法華經ほけきょうを信ずる小火
をけさん事うたがい 疑うたがいなかるべし、入道にゅうどう・地獄じごくに墮おつるならば還かえつて日蓮にちれんが失とがに
なるべし、如何いかんんがせん如何いかんんがせんと思ひわづらひて今まで法華經ほけきょうを渡わた
し奉らず、渡わたし進ためせんが為ためにまうけまいらせて有りつる法華經ほけきょうをば鎌倉かまくらの
焼亡うしないに取り失うしないひ参もうせて候由申す、旁かたがたに 入道にゅうどう
の法華經ほけきょうの縁よきようはなかりけり、約束やくそく申しける我が心ふしぎも不思議なり、又我とは
・すすまざりしを鎌倉かまくらの尼かえの還りの用途なげに歎ゆえきし故に口入くわい有りし事なげか
し、本錢もとせんに利分りぶんを添そへえて返さんとすれば又弟子でしが云いわく御約束やくそく違たがひなんと
申す、旁かたがたに進退極しんたいきくりて候へども人の思わん様は狂惑きやうかくの様なるべし、力およ及およば
ずして法華經ほけきょうを一部十卷いちぶじゅうかん・渡わたし奉たてまつる、入道にゅうどうよりもうばにてありし者は内
心ないしんよせなりしかば是これを持たもち給たまへ。
内ないしん心しんよせなりしかば是これを持たもち給たまへ。

日蓮にちれんが申もうす事は愚おろかなる者の申もうす事なれば用もちひず、されども去いぬる文永十一ぶんえい

年^{太歲}甲戌十月に蒙古国より筑紫によせて有りしに對馬^{つしま}の者かためて有りしに・
宗総馬尉^{そうそうまのじょう}逃ければ百姓等は男をば・或^{ある}は殺し・或^{ある}は生取にし・女をば
・或^{ある}は取り集めて手をとをして船に結い付け・或^{ある}は生け取にす・一人も助
かる者なし、壹岐^{いぎ}によせても又是^{かくの}くの如し、船おしよ

せて有りけるには奉行入道・豊前前司は逃げて落ちぬ、松浦党は数百人打

たれ・或は生け取にせられしかば寄せたりける浦浦の百姓ども壹岐対馬の

如し、又今度は如何が有るらん彼の国の百千万億の兵・日本国を引回ら

して寄せて有るならば如何に成るべきぞ、北の手は先ず佐渡の島に付いて

地頭守護をば須臾に打ち殺し百姓等は北山

へにげん程に・或は殺され・或は生け取られ・或は山にして死ぬべし、

抑是れ程の事は如何として起るべきぞと推すべし、前に申しつるが如く

此の国の者は一人もなく三逆罪の者なり、是は梵王・帝釈・日月・四天の

彼の蒙古国の大王の身に入らせ給いて責め給うなり。

日蓮は愚なれども釈迦仏の御使法華經の行者なりとなりの候を用いざ

らんだにも不思議なるべし、其の失に依つて国破れなんとす、況や・或は

国を追ひ・或は引はり・或は打擲し・或は流罪し・或は弟子を殺し

・或は所領しよりうを取る、現げんの父母ふぼの使つかをかくせん人人ひとびとよかるべしや、日蓮にちれんは
にほんこく ひとびと ふぼ
日本国にほんこくの人人ひとびとの父母ふぼぞかし・主君しゅくんぞかし・明師めいしぞかし・是これを背そむん事ことよ、念仏ねんぶつ
もう ひとびと むげんじこく お けつじよう
を申もうさん人人ひとびとは無間地獄むげんじこくに墮おちん事決定けつじようなるべし、たのもしたのもし。

そもそももうこ

抑おさ蒙古国もんこくより責せめん時は如何いかんがせさせ給たまうべき、此この法華經ほけきようをいただ

き頸けいにかけさせ給たまいて北山きたさんへ登のぼらせ給たまうとも年比ねんぶつ念仏ねんぶつ者を養やしなひ念仏ねんぶつを申もうし

て、釈迦しゃかぶつ・法華經ほけきようの御敵ごてきとならせ給たまいて有ありし事は久くしし、又また若もし命いのちと

もなるならば法華經ほけきようばし恨にくみさせ給たまうなよ、又閻魔王宮えんまおうきゆうにしては何なんとか仰おほせ

あるべき、おこがましき事とはおぼすと

も其そのときの時は日蓮にちれんが檀那だんななりとこそ仰おほせあらんずらめ、又是またはさてをきぬ、

此この法華經ほけきようをば学乗房がくじやうぼうに常に開ひらかせ給たまうべし、人如何いかんに云いうとも念仏ねんぶつ者もの

・真言師持斎しんこんしじさいなどにばし開ひらかせ給たまうべからず、又日蓮にちれんが弟子でしとなのる

とも日蓮にちれんが判はんを持もちざらん者をば御用ごもちいあるべからず、恐恐きようきよう謹言きんげん。

五月八日にちれん蓮花押かおう

一谷入道にゅうどう女房にようぼう

◆二九四

中興入道消息

弘安二年十一月三十日

五十八歳

御作 与中興入道 女房

1331p

驚目一貫文送り給い候い了んぬ妙法蓮華經の御宝前に申し上げ候い了ん

ぬ、抑日本国と申す国は須弥山よりは南一閻浮提の内縦広七千由旬なり、

其の内に八万四千の国あり、所謂五天竺十六の大国五百の中国・十千の

小国無量の粟散国微塵の島あり、此等の国は皆大海の中にありたとへ

ば池にこのはのちれるが如し、

此の日本国は大海の中の小島なりしほみては見へずひればすこしみゆるか

の程にて候いしを神のつき出させ給いて後人王のはじめ神武天皇と申せし

大王をはしましき、それより・このかた三十余代は仏と経と僧とは・まし

まさずただ人と神とばかりなり、仏法をはしまさねば地獄もしらず、浄土

もねがはず、父母・兄弟のわかれありしかどもいかなるらん、ただ露
のきゆるやうに日月のかくれさせ給うやうにうちをもいてありけるが・
然る

に人王第三十代欽明天皇と申す大王の御宇に此の国より戊亥の角に当りて
百済国と申す国あり、彼の国よりせいめい王と申せし王金銅の釈迦仏と此
の仏の説かせ給へる一切経と申すふみと此をよむ僧をわたしてありし
かば仏と申す物もいきたる物にもあらず、経と申す物も外典の文にもにず、
僧と申す物も物はいへども道理もきこへず形も男女にもにぎりしかばかた
がたあやしみをどろきて左右の大臣大王の御前にしてとかう僉議
ありしかども多分はもちうまじきにてありしかば、仏はすてられ僧はいま
しめられて候いしほどに・用明天皇の御子聖徳太子と申せし人びだつの二
年二月十五日東に向いて南無釈迦牟尼仏と唱えて御舍利を御手より出し

給たまいて同六年に法華經ほけきようを讀誦どくじゆし給たまふ、それより・このかた七百余年王は六十余代に及ぶまでやうやく仏法ぶつぽうひろま

り候にほんいて日本六十六箇国・二つの島にいたらぬ国もなし、国・郡・郷

郷・里・村に堂塔どうとうと申し寺もつと申し仏法ぶつぽうの住所すでに十七万一千三十

七所なり、日月にちがつの如くあきらかなる智者ちしや代代ぶつぽうに仏法ぶつぽうをひろめ衆星しゅうせいのごとく

・かが

やくけんじん国に充満せり、かの人人は自行には・或は真言を行じ・或は般若・或は仁王・或は阿弥陀仏の名号・或は観音・或は地藏・或は三千仏・或は法華経読誦しをるとは申せども無智の道俗をすすむるにはただ南無阿弥陀仏と申すべし、譬えば女人の幼子をまうけたるに・或はほり・或はかわ・或はひとりなるには母よ母よと申せば・

ききつけぬればかならず他事をすてたすくる習なり、阿弥陀仏も又是くの如し我等は幼子なり阿弥陀仏は母なり地獄のあな餓鬼のほりなんどにをち入りぬれば南無阿弥陀仏と申せば音と響きとの如く必ず来りてすくひ給うなりと一切の智人ども教へ給いしかば我が日本国かく申しならはして年ひさしくなり候。

然るに日蓮は中国都の者にもあらず辺国の將軍等の子息にもあらず遠国の者民が子にて候いしかば・日本国七百余年に一人もいまだ唱へまい

らせ候はぬ南無妙法蓮華經と唱え候のみならず、皆人の父母のごとく日月の如く主君の如くわたりに船の如く渴して水のごとくうえて飯の如く思いて候南無阿弥陀仏を無間地獄の業なりと申し候ゆへに食に石をたひたる様にがんせきに馬のはねたるやうに渡りに大風の吹き来たるやうに・じゅう

らくに大火のつきたるやうに俄にかたきのよせたるやうにとわりのきさき

になるやうに・をどろき・そねみ・ねたみ・候ゆへに去ぬる建長五年四月

二十八日より今弘安二年十一月まで二十七年が間退転なく申しつより候事

月のみつるがごとく・しほのさすがごとく・はじめは日蓮只一人・唱へ候

いしほどに、見る人値う人間く人・耳を

ふさぎ眼をいからかし・口をひそめ・手をにぎり・はをかみ・父母・兄弟

・師匠ぜんうも・かたきとなる、後には所の地頭・領家かたきとなる後に

は一国さはぎ後には万民をどろくほどに、・或は人の口まねをして南無

妙法蓮華經みょうほうれんげきょうとなへ・或あるは悪口あくぐちのためになへ・或あるは信しんずるに似て唱へ

・或あるはそしるに似て唱へなんとする程に、すでに日本にほんこく国

十分いちぶんが一分いっこうは一向南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうのこりの九分は・或あるは両方ある・或はうたが

ひ・或あるは一向念仏いっこうねんぶつ者なる者は父母ふぼのかたき主君しゅくんのかたき宿世すくせのかたきのや

うにののしる、村主郷主国主等こくしゅは謀叛むほんの者のごとくあだまれたり、かく

の如く申す程に大海の浮木の風に随いて定めなきが如く輕毛の虚空にのぼりて上下するが如く日本国を・をはれあるく程に、・或時はうたれ・或時はいましめられ・或時は疵をかほふり・或時は遠流・或時は弟子をころされ・或時はうちをはなれなんどする程に、去ぬる文永八年九月十二日には御かんきをかほりて北国佐渡の島にうつされて候いしなり、世間には一分のともなかりし身なれども故最明寺入道殿極樂寺入道殿を地獄に堕ちたりと申す法師なれば謀叛の者にもすぎたりとて相州・鎌倉・竜口と申す処にて頸を切らんとし候いしが科は大科なれども法華經の行者なれば左右なくうしなひなばいかんがとやをもはれけん、又遠国の島にすてをきたるならば・

いかにもなれかし。

上ににくまれたる上萬民も父母のかたきのやうにおもひたれば道にても

又国にても若しはころすか若しはかつえしぬるかにならんずらんとあてがはれて有りしに、法華經・十羅刹の御めぐみにやありけん、・或は天とがなきよしを御らんずらんにやありけん、島にてあだむ者は多かりしかども中興の次郎入道と申せし老人あり

き、彼の人^には年ふりたる上心かしこく身もたのしくて国の人にも人と・をもはれたりし人の此の御房はゆへある人にやと申しけるかのゆへに子息等もいたうもにくまず、其の已下の者どもたいし彼等の人人の下人にてありしかば内内あやまつ事もなく唯上の御計いのままにてありし程に、水は濁れども又すみ月は雲かくせども・

又はることはりなれば、科なき事すでにあらわれていゐし事もむなしからざりけるかのゆへに、御一門・諸大名はゆるすべからざるよし申されけれども相模守殿の御計らひばかりにてついにゆりて候いてのぼりぬ、ただ

さがみのかみ

し日蓮にちれんは日本国にほんこくには第一だいいちの忠の者なり肩をならぶる人は先代せんだいにも・あるべからず後代にも・あるべしとも覚えおぼえず。

其そのの故ゆえは去ぬる正嘉年中しょうかの大地震だいじしん文永元年ぶんえいがんねんの大長星の時内外ないげの智人ちじん

其そのの故ゆえをうらなひしかども・なにのゆ

へ・いかなる事の出来しゅつたいすべしと申もうす事をしらざりしに、日蓮一切経蔵にちれんいつさいきやうに入りて勘かんへたるに真言しんごん・禪宗ぜんしゆう・念仏律等の権小ごんしょうの人人ひとびとをもつて法華経ほけきやうを
かろしめたてまつる故ゆえに梵天ぼんてん・帝釈たいしゃくの御とがめにて西なる国に仰おおせ付けて
日本国にほんこくをせむべしとかがへて、故最明寺入道殿さいみやうじにゆうどうにまいらせ候いき、此の
事しよを諸道しよの者、をこつきわらひし程に・九箇
年いすぎて去ぬる文永五年ぶんえいに大蒙古国だいもうこくより日本国にほんこくを・をそうべきよし牒状ちやうじやう
わたりぬ、此の事ゆえのあふ故ねんぶつに念仏者しんごんし・真言師等みかどあだみて失はんとせしなり、
例せば漢土かんとに玄宗皇帝げんそうこうていと申せし御門みかどの御后きさきに上陽人と申せし美人あり、
天下第一の美人てんかだいいちにてありしかば楊貴妃と申もうすきさきの御らんじて此の人王
へまいるならば我がをばへをとりなんとて
宣旨せんじなりと申もうしかすめて、父母ふぼ・兄弟きやうだいをば・或あるはながし・或あるは殺し上・陽
人をばろうに入れて四十年までせめたりしなり、此これもそれにて候、日蓮にちれん

が勘文あらわれて大蒙古国を調伏し日本国かつならば此の法師は日本第一の僧となりなん、我等が威徳をとろうべしと思うかのゆへに讒言をなすをばしろしめさずして、彼等がことばを用い

て国を亡さんとせらるるなり、例せば二世王は趙高が讒言によりて李斯を失ひかへりて趙高が為に身をほろぼされ、延喜の御門はしへいのをとどの讒言によりて菅丞相を失いて地獄におち給いぬ、此れも又かくの如し、法華經のかたきたる真言師・禅宗・律僧・持斎・念佛者等が申す事を御用いありて日蓮をあだみ給うゆへに、日蓮

はいやしけれども所持の法華經を釈迦・多宝・十方の諸仏・梵天・帝釈・日月・四天・竜神・天照太神・八幡大菩薩・人の眼をおしむがごとく諸天の帝釈をうやまうがごとく母の子を愛するがごとくまほりおもんじ給うゆへに、法華經の行者をあだむ人を罰し給う事父母のかたきよりも

ちようてき
朝敵よりも重く大科に行ひ給うなり。

しか
然るに貴辺は故次郎入道殿の御子にて・をはするなり御前は又よめなり
こくしゅ
・いみじく心かしこかりし人の子とよめとにをはすればや、故入道殿のあ
もち
とをつぎ国主も御用いなき法華経を御用いあるのみならず法華経の行者を
ほけきよう
やしなはせ給いてとしどしに千里の道をおくりむかへ去ぬる幼子のむすめ
たまい
せんり

こぜん
御前の十三年に丈六のそとばを
じようろく

たてて其の面に南無妙法蓮華經の七字を顕してをはしませば、北風吹けば
南海のいろくづ其の風にあたりて大海の苦をはなれ東風きたれば西山の鳥
鹿・其の風を身にふれて畜生道をまぬかれて都率の内院に生れん、況や・
かのそとばに隨喜をなし手をふれ眼に見まいらせ候人類をや、過去の父母
も彼のそとばの功德によりて天の日月
の如く浄土をてらし孝養の人並びに妻子は現世には寿を百二十年持ちて
後生には父母とともに靈山浄土にまいり給はん事水すめば月うつりつづみ
をうてばひびきのあるがごとしと・をぼしめし候へ等云云、此れより後後
の御そとばにも法華經の題目を顕し給へ。

弘安二年己卯十一月卅日

身延山

日蓮

花押

中興入道殿女房

◆二九五

是日尼御書こしよ

1335p

さどの国より此の甲州まで入道にゅうどうの来りたりしかば・あらふしぎとをもひ
しに又今年来りなつみ水くみたきぎこりだん王の阿志仙人せんじんにつかへしがご
とくして一月に及びぬる不思議ふしぎさよ、ふでをもちてつくしがたし、これひ
とへに又尼ぎみの御功德くどくなるべし、又御本尊ごほんそん一ふくかきてまいらせ候、
靈山浄土りょうぜんじょうどにては・かならずゆきあひ・たてまつるべし、
恐恐きょうきょう謹言きんげん。

卯月十二日

日蓮にちれん

尼是日

にちれん

しやめん

かまくら

によがしやくしよがんこんじやいまんぞく

日蓮此の度赦免を被むり鎌倉へ登るにて候、如我昔所願今者已満足此の

年に当るか、

遠藤殿御育み

無く

んば

命永らう可し

や

亦赦免にも預かる可し

ベ

年

や、日蓮一代の行功は偏に左衛門殿等遊し候処なり、御経に「天諸童子以

にちれんいちだい

ぎようく

ひとえ

さえもん

とこ

なり、

御経に

「天諸童子以

しどうじ

以

て給使を為し刀

杖も加えず

毒も害すること能はず」と候得ば有難き御経な

きゆうじ

な

とつじよう

あた

と能はず」と候得ば有難き御経な

あた

と

候得ば有難き御経な

がた

有難き御経な

がた

有難き御経な

るかな、然ば左衛門殿は梵天釈天の御使にてましますか、

さえもん

ぼんてん

おんつかい

おんつかい

にてましますか、

おんつかい

おんつかい

おんつかい

おんつかい

おんつかい

おんつかい

おんつかい

に此の判を参せ候、一流は未来え持せ給え

そのとき

むか

まか

まか

まか

まか

まか

まか

まか

まか

まか

まか

まか

まか

まか

其の時御迎えに罷り出ず可く候、猶又鎌倉より申し進す可く候なり。

そのとき

むか

まか

まか

まか

まか

まか

まか

まか

まか

まか

まか

まか

まか

まか

文永十一年甲

ぶんえい

きんえいぬ

きんえいぬ

きんえいぬ

きんえいぬ

きんえいぬ

きんえいぬ

きんえいぬ

きんえいぬ

きんえいぬ

きんえいぬ

きんえいぬ

きんえいぬ

きんえいぬ

きんえいぬ

きんえいぬ

きんえいぬ

きんえいぬ

きんえいぬ

遠藤左衛門尉殿

さえもののじよう

さえもののじよう

さえもののじよう

さえもののじよう

さえもののじよう

さえもののじよう

さえもののじよう

さえもののじよう

さえもののじよう

さえもののじよう

さえもののじよう

さえもののじよう

さえもののじよう

さえもののじよう

さえもののじよう

日蓮

にちれん

◆二九七

生死一大事血脈抄

ぶんえい
文永九年二月十一日五十一

さいれんぼう
歳御作 与最蓮房日淨 1336p

にちれん 日蓮記之

いさい ひけん
御状委細披見せしめ候い畢んぬ、
そ 夫れ生死一大事血脈とは所謂

みょうほうれんげきょうこれ
妙法蓮華經是なり、
そのゆえ 其の故は釈迦・多宝の二仏宝塔の中にして上行菩薩

ゆず たまい
に譲り給いて此の妙法蓮華經の五字過去遠遠劫より已来寸時も離れざる

けちみやく
血脈なり、
妙は死法は生なり此の生死の二法が十界の当体なり又此れを

とうたいれんげ
当体蓮華とも云うなり、
てんだいいわ 天台云く「
まさ 当に知るべし依正の因果は悉く是れ蓮華

えしやう
の法なり」と云云此の釈に依正と云うは生死なり生死之有れば因果又蓮華

でんぎやうだいしいわ
の法なる事明けし、
伝教大師云く「
しやうじ 生死の二法は一心の妙用・有無の二道

は**本覚**^{ほんがく}の**真徳**と文、**天地**^{てんち}・**陰陽**^{いんよう}・**日月**^{にちがつ}・**五星**・**地獄**^{じごく}・**乃至**^{ないし}**仏果**^{ぶつか}・

しょうじ

生死の二法に非ずと云うことなし、是くの如く生死も唯妙法蓮華經の生死

なり、天台の止観に云く「起は是れ法性の起・滅は是れ法性の滅」云云、

しゃか たほう

釈迦・多宝の二仏も生死の二法なり、然れば久遠実成の釈尊と皆成仏道

ほけきよう われらしめじよう

の法華經と我等衆生との三つ全く差別無しと解りて妙法蓮華經と唱え

たてまつところ しょうじいちだいじ

奉る処を生死一大事の血脉とは云うなり、此の事

にちれん でし

但日蓮が弟子・檀那等の肝要なり法華經を持つとは是なり、所詮臨終只今

にありと解りて信心を致して南無妙法蓮華經と唱うる人を「是人命終為

千仏授手令不恐怖不墮惡趣」と説かれて候、悦ばしい哉一仏・二仏に非ず

百仏二百仏に非ず千仏まで来迎し手を取り給はん事歡喜の感涙押え難し、

法華不信の者は「其人命終入阿鼻獄」と説かれたれば定めて獄卒迎えに来

つて手を取り候はんずらん浅☆浅☆、十王は裁断し俱生神は呵責せんか。

いまにちれん でし だんな なむ みようほうれんげきよう とな

今日蓮が弟子・檀那等・南無妙法蓮華經と唱えん程の者は千仏の手を授

け給はん事譬えたまば☆夕顔の手を出すたとが如くうりゆうがおと思し食せ、過去かこに法華經ほけきようの結縁強盛なる故けちえんこうじように現在げんざいに此の經を受持じゆじす、未来みらいに仏果ぶつかを成就じようじゆせん事疑うたがい有るあべか

らず、過去かこの生死しやうじげんざい現在の生死しやうじみらい未来しやうじさんぜの生死しやうじに法華經ほけきようを離れ切れざるを法華の血脈相承ほつけ けちみやくそうじようとは云うなり、謗法不信ほうほうふしんの者は「即断一切世間・仏種いつさいせけん ぶつしゆ」として仏に成るべき種子しゆし だんぜつを断絶するが故に生死ゆえ しょうじいちだいじ一大事の血脈けちみやく之無きなり。

総じて日蓮が弟子・檀那等にちれん でし だんな じたひし自他彼此の心なく水魚の思おもひを成して異体同心いたいどうしんにして南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようと唱え奉るとな たてまつところ処けちみやくを生死しょうじいちだいじ一大事の血脈けちみやくとは云うなり、然しかも今日蓮いまにちれんが弘通くつうする処ところの所詮しよせん是なり、若し然しからば広宣流布こうせんるふの大願かなも叶う

べき者か、剩あまつさにちれんえ日蓮でしが弟子の中に異体異心の者これあ之有れば例せば城者として城やぶを破こるが如し、日本国にほんこくの一切衆生いっさいしゆじように法華經ほけきようを信ぜしめて仏に成る血脈けちみやくを継つがしめんとするに還かえつて日蓮にちれんを種種しゆじゆの難なんに合せ結句けっく此の島まで流罪るざいす、

而しかるに貴き辺へん日蓮にちれんに随ずい順じゆんし又難なんに値あい給たまう事しんちゆう心中しんちゆう思おもひ遣やられて痛いたしく候まぞ、
金だいは大だい火かにも焼やけず大水たいすいにも漂くろがねわす朽すいちず鉄くろがねは水火すいか共に堪たえず賢けん人は金じん
の如ごとく愚ぐ人は鉄くろがねの如ごとし貴き辺へん豈あに真金あらに非ほけきずや法華經ほけきの金きんを持もつ故ゆゑか、經きんに
云いわく「衆山しゅうざんの中に須弥山しゆみせん為これ第一だい此こゝの法華經ほけきも亦復また是かくの如ごとし」又云いわく「火
も焼やくこと能あたわす水も漂あたわすこと能あたわ

ず」云云、過去の宿縁追ひ来つて今度日蓮が弟子と成り給うか釈迦・多宝こそ御存知候らめ、「在在諸仏土常与師俱生」よも虚事候はじ。

殊に生死一大事の血脈相承の御尋ね先代未聞の事なり貴貴、此の文に委悉なり能く能く心得させ給へ、只南無妙法蓮華經・釈迦・多宝

上行菩薩 血脈相承と修行し給へ、火は焼照を以て行と為し水は垢穢を

浄るを以て行と為し風は塵埃を払ふを以て行と為し又人畜・草木の為に魂

となるを以て行と為し大地は草木を生ずるを以て行と

為し天は潤すを以て行と為す妙法蓮華經の五字も又是くの如し本化地涌の

利益是なり、上行菩薩末法今の時・此の法門を弘めんが為に御出現之れ

有るべき由・經文には見え候へども如何が候やらん、上行菩薩出現すと

やせん出現せずとやせん、日蓮先ず粗弘め候なり、相構え相構えて強盛

の大信力を致して南無妙法蓮華經臨終正念と祈念し給へ、生死一大事の

けちみやくこ

血脈此れより外に全く求むることなかれ、煩惱即菩提・生死即涅槃とは

是なり、信心の血脈無くんば法華經を持つとも無益なり、委細の旨又又

もう

申す可く候、恐恐謹言。

ぶんえい

みずのえさる

文永九年壬申二月十一日桑門

にちれん
日蓮

かおう

花押

さいれんぼうしょうにんごへんじ

最蓮房上人御返事

◆二九八

そうもくじょうぶつぐけつ
草木成仏口決

ぶんえい
文永九年二月二十日 五十一歳

御作

さいれんぼう
与最蓮房日浄

2338p

問うて云く草木成仏とは有情非情の中何れぞや、答えて云く草木成仏

とは非情の成仏なり、問うて云く情非情共に今經に於て成仏するや、答

えて云くいわ爾しかなり、問うて云くいわ証文しょうもん如何いかん、答えて云くいわ妙法みょうほう蓮華れんげ經きやう是これなり・
妙法みょうほうとは有情うじやうの成仏じやうぶつなり蓮華れんげとは非情ひじやうの成仏じやうぶつなり、有情うじやうは生うの成仏じやうぶつ非情ひじやう
は死じの成仏じやうぶつ生死しじやうの成仏じやうぶつと云うが有情うじやう非情ひじやうの成仏じやうぶつ

の事なり、其の故は我等衆生死する時塔婆を立て開眼供養するは死の成仏

にして草木成仏なり、止観の一に云く「一色一香中道に非ざることを無し」

妙樂云く「然かも亦共に色香中道を許す無情仏性・惑耳驚心す」此の一

色とは五色の中には何れの色ぞや、青黄赤白黒の五色を一色と釈せり一と

は法性なり、爰を以て妙樂は色香中道

と釈せり、天台大師も無非中道といへり、一色一香の一は二三相對の一に

は非ざるなり、中道法性をさして一と云うなり、所詮・十界・三千・依正

等をそなへずと云う事なし、此の色香は草木成仏なり是れ即ち蓮華の成仏

なり、色香と蓮華とは言はかはれども草木成仏の事なり、口決に云く「草

にも木にも成る仏なり」云云、此の意

は草木にも成り給へる寿命品の釈尊なり、経に云く「如来秘密神通之力」

云云、法界は釈迦如来の御身に非ずと云う事なし、理の頭本は死を表す

妙法と顕る・事の顕本は生を表す蓮華と顕る、理の顕本は死にて有情をつ

かさどる事の顕本は生にして非情をつかさどる、我等衆生のために依怙・

依託なるは非情の蓮華がなりたるなり・我等

衆生の言語・音声・生の位には妙法が有情となりぬるなり、我等一身の

上には有情非情具足せり、爪と髪とは非情なりきるにもいたまらず其の外は

有情なれば切るにもいたみくるしむなり、一身所具の有情非情なり此の

有情非情十如是の因果の二法を具足せり、衆生世間・五陰世間・国土世間

・此の三世間・有情非情なり。

一念三千の法門をふりすすぎたてたるは大曼荼羅なり、当世の習いそこ

ないの学者ゆめにもしらざる法門なり、天台・妙楽・伝教内にはかがみ

させ給へどもひろめ給はず、一色一香とののしり惑耳驚心とささやき給い

て・

みょうほうれんげ
妙法蓮華と云うべきを円頓止観とかへさせ給いき、されば草木成仏は死人
じょうぶつ
の成仏なり、此等の法門は知る人すくなきなり、所詮妙法蓮華をしらざる
ゆえ まよい
故に迷うところの法門なり、敢て忘失する事なかれ、恐恐謹言。

二月二十日

にちれん かおう
日蓮 花押

さいれんぼうごへんじ
最蓮房御返事

◆二九九

さいれんぼうごへんじ 最蓮房御返事

1340p

あいかまえそうかまえ
夕ざりは相構え相構えて御入り候へ、
とくじゆしよくにんくどくほうもん
得受職人功德法門委細申し
候はん。
そうら

むねいさいたまわ
御礼の旨委細承り候い畢んぬ、都よりの種種の物慥かに給ひ候い畢んぬ、
かまくら
鎌倉に候いし時こそ常にかかる物は

るぜい
見候いつれ此の島に流罪せられし後は未だ見ず候、
いま
是れ体の物は辺土の小
島にてはよによに目出度き事に

思い候。

いわいぬ
御状に云く去る二月の始より御弟子となり帰伏仕り候上は自今以後は
おんでし
人数ならず候とも御弟子の一分と思し食され候はば恐悦に相存ず可く候云
ひとかず
いちぶん

云、經の文には「在在諸仏しよぶつの土に常に師ともと俱ともに生れん」とも・或は「若し法師ほっしに親近しんこんせば速すみやかに菩薩ぼさつの道を得ん是この師ずいじゆんに随順ずいじゆんして学せば恒沙こうしゃの仏を見たてまつることを得ん」とも云へり、釈

には「本此の仏に従つて初めて道心どうしんを發おこし亦此の仏に従つて不退地ふたいに住せん」とも・或は云く「初此の仏・菩薩ぼさつに従つて結縁けちえんし還つて此の仏・菩薩ぼさつに於て成就おひす」とも云えり、此の經釈きやうしやくを案ずるに過去無量劫かこむりようこうより已來このかたして師弟の契約けいやく

有りしか、我等末法濁世われらまつぽうじよくせに於て生を南閻浮提大日本國えんぶだい にほんこくにうけ忝かたじけなくも諸仏しよぶつ出世しゅつせの本懷ほんかいたる南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうを口に唱へ心に信じ身に持ち手に翫もてあそぶ事こと・是れ偏ひとえに過去かこの宿習しゆくじゆうなるか。

予日本にほんの体を見るに第六天だいろくてんの魔王智者まおうちしやの身に入りて正師しやうしを邪師じやしとなし善師ぜんしを悪師あくしとなす、經に「惡鬼入其身あつき」とは是これなり、日蓮智者にちれんちしやに非あらずと

雖も第六天の魔王我が身に入らんとするに兼ての用心深ければ身によせつ
けず、故に天魔力及ばずして・王臣を始として良觀等の愚癡の法師原に取
り付いて日蓮をあだむなり、然るに今時は師に於て正師・邪師・善師・惡師
の不同ある事を知つて邪惡の師を遠離し正善の師に親近すべきなり、設い

徳

は四海しかいに齊ひとしく智慧ちえは日月にちがつに同くとも法華經ほけきようを誹謗ひぼうするの師あくしをば惡師じやし邪師しと

知つて是しんこんに親近しんこんすべからざる者あるなり、・或る經いわに云く「若もし誹謗ひぼうの者はには

共住すなわすべからず若もし親近しんこんし共住あびこくせば即おもむち阿鼻獄おもむに趣いましかん」と禁め給たまう是これな

り、いかに我が身しょうじきは正直せけんしゅつせにして世間出世けんじんの賢人けんじんの名をとらんと存ぞんずれども

惡人あくにんに親近しんこんすれば自然じねんに十度じゅうどに二度・三度

其その教しやうに隨したがひ以て行くほどに終ついに惡人あくにんになるなり、釈いに云く「若もし人本惡

無あきも惡人あくにんに親近しんこんすれば後必あくくず惡人あくにんと成あくくみようてんかあまね天下あまねに遍あまねからん」云云、

所詮しよせん其その邪惡じやくあくの師しとは今の世ほつけひほうの法華誹謗ほつしの法師ほつしなり、涅槃經ねはんぎように云く「菩薩ぼさつ

惡象あくぞう等に於おいては心くふに恐怖くふすること無あくくちしき惡智識あくちしきに於おいては怖畏ふいの心ふいを生ふいぜよ、

惡象あくぞうの爲ために殺さんしゆされては三趣さんしゆに至いたら

ず、惡友あくゆうの爲ために殺さんしゆさるれば必いくくず三趣さんしゆに至いたらん、法華經ほけきように云く「惡世あくせの中

の比丘びくは邪智じやくちにして心諂曲てんこく」等云云、先先申もうし候こと如ぜんむいく善無畏こんごうちだるま・金剛智達磨

・慧可善導・法然東寺の弘法園城寺の智証山門の慈覺關東の良觀等の諸師
え か ぜん どう ほう ねん とう じ こう ほう おん じょう じ ちしやう さん もん じか かん とう りやう かん しよし
は今の正直捨方便の金言を読み候には正直捨実教但説方便教と読み・或
しやう じき しや ほう べん きん げん しやう じき じつ きやう たん せつ ほう べん ある
は於諸經中最在其上の經文をば於諸經中最在其下と・或は
ほつ けさい だい いち きやう もん しやきやう きやう もん しやきやう ある
法華最第一の經文をば法華最第二・第三等と読む、故に此等の法師原を
じや あく もつ ほつ け
邪惡の師と申し候なり。

さて正善の師と申すは釈尊の金言の如く・諸經は方便法華は眞実と
しやう じき もつ しやく ぞん きん げん ごと しやきやう ほう べん ほつ け しん じつ
正直に読むを申す可く候なり、華嚴の七十七の入法界品之を見る可し云云、
ほけ きやう いわ ぜん ち しき こ いん ねん いわゆる け どう べ
法華經に云く「善知識は是れ大因縁なり所謂化導して仏を見たてまつり
あのく ぼ だい おこ ぜん ち しき こ いん ねん いわゆる け どう ぶつ せつ こと しやう じき しみ さん きやう
阿耨菩提を發することを得せしむ」等云云、仏説の如きは正直に四味三教
しやう じやう こん だい じやう ほう べん しやきやう ねん ぶつ しん こん しよしゆう なら
・小乘・權大乘の方便の諸經・念仏・眞言・禪・律等の諸宗並びに
しよえ 所依の經を捨て但唯以一大事因縁の妙法蓮華經を説く師を正師善師とは
しやう べ し か 申す可きなり、然るに

にちれん まっほうのはじめ
日蓮末法の初の五百年に生を日域に受け如来の記文の如く三類の強敵を
こおむ しゅじゅ さいなん あ しんみょう おし
蒙り種種の災難に相値つて身命を惜まずして南無妙法蓮華經と唱え候は
しょうし じゃし よくよく しゅい あ
正師か邪師か能能御思惟之有る可く候。

あ しょゆう ひとびと ほけきょう
上に挙ぐる所の諸宗の人人は我こそ法華經の意を得て法華經を修行す
る者よと名乗り候へども・予が如く弘長
ごと じうちょう

には伊豆の国に流され・文永には佐渡嶋に流され・或は竜口の頸の座等・此の外種種の難数を知らず、經文の如くならば予は正師なり善師なり・諸宗の学者は悉く邪師なり悪師なりと覺し食し候へ、此の外善惡二師を分別する

經論の文等是れ広く候へども兼て御存知の上は申すに及ばず候。

只今の御文に自今以後は日比の邪師を捨て偏に正師と憑むとの仰せは不審に覺へ候、我等が本師・釈迦如来法華經を説かんが為に出世ましますしには他方の仏・菩薩等來臨影響して釈尊の行化を助け給う、されば釈迦・多宝・十方の諸仏等の御使として來つて化を日域に示し給うにもやあるらん、經に云く「我於余國遣化人・為其集聽法衆亦遣化隨順不逆」此の經文に比丘と申すは貴辺の事なり、其の故は聞法信受隨順不逆眼前なり

争か之を

うたがい たてまつ
疑い奉るべきや、設い又在在諸仏土常与師俱生の人なりとも三周の声聞

ごと げしゅ
の如く下種の後に退大取小して五道・六道に沈輪し給いしが成仏の期

らいし とくだつ
来至して順次に得脱せしむべきゆへにや、念仏・真言等の邪法・邪師を捨

てて日蓮が弟子となり給うらん有り難き事なり。

いすれ
何れの辺に付いても予が如く諸宗の謗法を責め彼等をして捨邪帰正せし

たまひ
め給いて順次に三仏座を並べたもう常寂光土に詣りて釈迦・多宝の御宝前

おい われらむし このかたしてい けいやく
に於て我等無始より已来師弟の契約有りけるか無かりけるか又釈尊の

おんつかい
御使として来つて化し給へるかさぞと仰せを蒙つてこそ我が心にも知ら

そつら
れ候はんずれ、何様にも・はげませ給へ・はげませ給へ。

きへん いぬ
何となくとも貴辺に去る二月の比より大事の法門を教へ奉りぬ、結句は

みようほう
卯月八日・夜半・寅の時に妙法の本円戒を以て受職灌頂せしめ奉る者な

いかで げんざい みようかく
り、此の受職を得るの人争か現在なりとも妙覺の仏を成ぜざらん、若し

こんじょうみようかく
今生 妙覺ならば後生豈等覺等の因分ならんや、実に無始曠劫の契約常与
にちれんこのたびじょうぶつ
師俱生の理ならば日蓮今度成仏せんに貴辺豈相離れて惡趣に墮在したもう
べ
可きや、如来の記文仏意の辺に於ては世・出世に就いて更に妄語無し、然る
によらい きもんぶつ い おい しゅっせ つつ もうこ しか
に

ほけきょう
法華經には「我が滅度の後に於て応に斯の經を受持すべし、是の人・仏道
に於て決定して疑有ること無けん」。或は「速為疾得・無上仏道」等云
云、此の記文虚くして我等が成仏今度虚言ならば・諸仏の御舌もきれ・
多宝の塔も破れ落ち二仏・並座は無間地獄の熱鉄の牀となり方実寂の三土
は地餓畜の三道と変じ候べし、争か・さる事候べきやあらたのもしやたの
もしや是くの如く思いつづけ候へば我等は流人なれども身心共にうれしく
候なり。

だいじ
大事の法門をば昼夜に沙汰し成仏の理をば時時刻刻にあぢはう、
是くの如く過ぎ行き候へば年月を送れども久からず過ぐる時刻も程あらず、
例せば釈迦・多宝の二仏塔中に並座して法華の妙理をうなづき合ひ給ひし
時・五十小劫仏の神力の故に諸の大衆をして半日の如しと謂わしむと云い
しが如くなり、劫初より以来父母・主君等

の御勘氣を蒙り遠国の島に流罪せらるるの人・我等が如く悦び身に余りたる者よもあらじ、されば我等が居住して一乗を修行せんの処は何れの処にても候へ常寂光の都為るべし、我等が弟子・檀那とならん人は一步を行かずして天竺の靈山を見本有の寂光土へ昼夜に往復し給ふ事うれしとも申す計り無し申す計り無し。

余りにうれしく候へば契約一つ申し候はん、貴辺の御勘氣疾疾許させ給いて都へ御上り候はば・日蓮も鎌倉殿はゆるさじとの給ひ候とも諸天等に申して鎌倉に帰り京都へ音信申す可く候、又日蓮先立つてゆり候いて鎌倉へ帰り候はば貴辺をも天に申して古京へ歸し奉る可く候、恐恐謹言。

四月十三日

日蓮

花押

最蓮房御返事

◆三〇〇

祈☆抄

文永九年 五十一歳御作

本朝沙門

にちれん
日蓮撰

1344p

問うて云く華嚴宗・法相宗・三論宗小乗の三宗真言宗・天台宗の

祈をなさんにいづれかするしあるべきや、答て云く仏説なればいづれも一往

は祈となるべし、但法華經をもつていのらむ祈は必ず祈となるべし、問う

て云く其の所以は如何、答えて云く二乗は大地微塵劫を経て先四味の經を

行ずとも成仏すべからず、法華經は須臾の間

此れを聞いて仏になれり、若爾らば舍利弗迦葉等の千二百萬二千総じて一切

の二乗界の仏は必ず法華經の行者の祈をかなふべし、又行者の苦にもか

わるべし、故に信解品に云く「世尊は大恩まします希有の事を以て憐愍教化

して我等を利益し給う無量億劫にも誰れか能く報ずる者あらん、手足をも
て供給し頭頂をもつて礼敬し一切をもつて供養すとも皆報ずること能わず、
若しは以て頂戴し両肩に荷負して恒沙劫に於て心を尽して恭敬し、又美
膳無量の宝衣及び諸の臥具種種の湯藥を以てし牛頭栴檀及び諸の珍宝以つ
て塔廟を起て宝衣を地に布き斯くの如
き等の事もつて供養すること恒沙劫に於てすとも亦報ずること能わじ」等
云云、此の經文は四大声聞が譬喩品を聴聞して仏になるべき由を心得て、
仏と法華經の恩の報じがたき事を説けり、されば二乗の御為には此の經を
行ずる者をば父母よりも愛子よりも両眼よりも身命よりも大事にこそお
ぼしめすらめ、舍利弗・目連等の諸大声聞
は一代聖教いづれも讚歎せん行者をすておぼす事は有るべからずとは思
へども爾前の諸經は・すこし・うらみおぼす事も有らん「於仏法中已如

敗種はいしゆ「なんどしたたかにいましめられ給たまいし故なり、今の華光如来・名相みようそう如来・
如來・

普明如来ふみようなんとならせ給たまいたる事は・おもはざる外ほかの幸なり、例せば崑崙こんろん山のくづれて宝の山に入りたる心地しんじしてこそおはしぬらめ、されば領解りようげの文いに云く「無上宝珠不求自得等」云云。

されば一切いっさいの二乗界法華經にじょうほけきょうの行者ぎやうじやをまほり給たまはん事は疑うたがいあるべからず、あやしの畜生ちくしょうなんども恩をば報ずる事に候ぞかし、かりと申もうす鳥あり必ず母の死なんとする時孝をなす、狐は塚あとを跡にせず畜生ちくしょう猶此なつかくの如ごとし況や人類をや、されば王寿おうじゅと云ひし者・道を行きしにうえつかれたりしに、路の辺に梅の樹あり其その実多し寿とりて食し

てうへやみぬ、我れ此の梅の実を食して氣力をます其その恩を報ぜずんば・あるべからずと申もうして衣をぬぎて梅に懸かけてさりぬ、王尹おういんと云いいし者は道を行くに水に渴しぬ、河をすぐるに水を飲んで錢を河に入れて是これを水の直あたえと

す、竜は必ず袈裟けさを懸かけたる僧を守る、仏より袈裟けさを給りゅうくうじょうて竜宮城りゅうくうじょうの愛子あいしに懸かけさせて金翅鳥こんじちようの難なんをまぬがる故なり、金翅鳥こんじちようは必ず父母孝養ふぼこうようの者を守る、竜は須弥山しゅみせんを動かして金翅鳥こんじちようの愛子あいしを食す、金翅鳥こんじちようは仏の教によ

つて

父母ふほの孝養こうようをなす者僧そうのとるさんばを須弥しゆみの頂いただきにきて竜なんの難なんをまぬか

る故ゆゑなり、天てんは必ず戒たもを持ち善しんを修しゆする者ものを守る、人間界にんげんに戒かいを持たず

善しんを修しゆする者ものなければ人間界にんげんの人死にんしして多く修羅道しゆらどうに生なず、修羅多勢しゆらなれ

ば

ををごりをなして必ず天てんを・ををかす、人間界にんげんに戒たもを持ちて善しんを修しゆするの者多

ければ人死にんしして必ず天てんに生なず、天多てんければ修羅しゆらをそれそれをなして天てんを・ををか

さず、故ゆゑに戒たもを持ち善しんを修しゆする者ものをば天てん必ず之これを守る、何いかに況にや二乗にじようは六

凡ふより戒徳かいとくも勝すぐれ智慧ちえ賢ひとびとき人人ひとなり、いかでか我わがが成仏じようぶつを遂とげたらん

法華經ほけきようを行おこなぜん人ひとをば捨すつべきや。

又また一切いっさいの菩薩ぼさつ並ならに凡夫ぼんぷは仏ぶつにならんがために、四十余年よんじゆうよねんの經經きようぎようを無量劫むりようこつ

が間行かんぎやうぜしかども仏ぶつに成なる事ことなかりき、而しかるを法華經ほけきようを行おこなじて仏ぶつと成なつて

今十方世界におはします仏・仏の三十二相・八十種好をそなへさせ給いて

九界の衆生にあをがれて、月を星の回れるがごとく須弥山を八山の回るが

ごとく、日輪を四州の衆生の仰ぐが如く輪王

を万民の仰ぐが如く、仰がれさせ給うは法華經の恩徳にあらずや、されば

仏は法華經に誡めて云く「須らく復た舍利を安ずることをもちいざれ」

涅槃經に云く「諸仏の師とする所謂法なり是の故に如来恭敬供養す」等

云云、法華經には我舍利を法華經に並ぶべからず、涅槃經には諸仏は法華經

を恭敬供養すべしと説せ給へり、仏此

の法華經をさとりて仏に成りしかも人に説き聞かせ給はずば仏種をたたせ

給ふ失あり、此の故に釈迦如来は此の娑婆世界に出でて説かんとせさせ給い

しを、元品の無明と申す第六天の魔王が一切衆生の身に入つて、仏をあだ

みて説かせまいらせじとせしなり、所謂波瑠璃王の五百人の釈子を殺し、

鳶嶮摩羅が仏を追、提婆が大石を放・

旃遮婆羅門女が鉢を腹にふせて仏の御子と云いし、婆羅門城には仏を入れ

奉る者は五百兩の金をひきき、されば道にはうばらをたて井には糞を入れ

門にはさかむきをひけり食には毒を入れし、皆是れ仏をにくむ故に、華色

比丘尼を殺し、目連は竹杖外道に殺され、迦留陀夷は馬糞に埋れし皆仏を

あだみし故なり、而れども仏さまさまの難をまぬかれて御年七十二歳、仏法

を説き始められて四十二年と申せしに中天竺王舍城の丑寅・耆闍崛山

と申す山にして、法華經を説き始められて八年まで説かせ給いて、東天竺

俱く尸し那な城じやう跋ばつ提だい河がの辺へにして御年八十と申せし、二月十五日の夜半に御涅槃ねはん

に入らせ給たまいき、而しかりといへども御悟りをば法華經ほけきやうと説ときをかせ給たまへば・

此の經の文字は即釈迦そくしや如來かにの御魂みたまなり、一一の文字は仏の御魂みたまなれば此の

經を行ぜん人をば釈迦しやか如來に・我が御眼ごこの如くまほり給たまうべし、人の身に影

のそへるがごとくそはせ給たまうらん、いかでか祈とならせ給たまはざるべき。

一切いっさいの菩薩ぼさつは又始め華嚴經けこんきやうより四十余年の間・仏にならんと願たまい給たまいし

かどもかなはずして、法華經ほけきやうの方便品ほうべんの略開三顯りやくかいさんけん一の時「仏を求むる諸もろの

菩薩ぼさつ大数八万有はちまんり、又諸もろの万億国の轉輪聖王てんりんじやうおうの至いたれる合掌がつしやうして敬心を

以て具足の道を聞かんと欲ほす」と願たまいしが、広開三顯こうかいさんけん一を聞きいて「菩薩是の

法を聞きいて疑網ぎもう皆已みなすに断ちぬ」と説たまかせ給たまい

ぬ、其その後ご自界他方たほうの菩薩雲ぼさつの如く集り星の如く列つらなり給たまいき、宝塔品ほうとうほんの時

十方じゆつぱうの諸しよ仏ぶつ各各無辺むへんの菩薩ぼさつを具足して集り給たまいき、文殊もんじゆは海より無量の

菩薩を具足し、又八十万億那由佗の諸菩薩又過八恒河沙の菩薩・地涌千界の菩薩・分別功德品の六百八十万億那由佗恒河沙の菩薩・又千倍の菩薩・復一世界の微塵数の菩薩・復三千大千世界の微塵数の菩薩・復二千中国土の微塵数の菩薩・復小千国土の微塵数の菩薩・復四天下の微塵数の菩薩・三四天下二四天下・一四天下の微塵数の菩薩・復八世界微塵数の衆生・薬王品の八万四千の菩薩・妙音品の八万四千の菩薩・又四万二千の天子・普門品の八万四千・陀羅尼品の六万八千人・妙莊嚴王品の八万四千人・勧発品の恒河沙等の菩薩三千大千世界微塵数等の菩薩此れ等の菩薩を委く数へば十方世界の微塵の如し、十方世界の草木の如し、十方世界の星の如し、十方世界の雨の如し、此等は皆法華經にして仏にならせ給いて、此の三千大千世界の地上・

地下虚空の中にまします、迦葉尊者は☆足山にあり、文殊師利は清凉山に

あり、じそうぼさつ地藏菩薩は伽羅陀山からだせんにあり、かんのん觀音は補陀落山ふたらくさんにあり、みろくぼさつ弥勒菩薩は

とそつてん兜率天に、なんだ難陀等の無量の竜王むりよう阿修羅王りゅうおうあしゅらは海底湖畔にあり、たいしやく帝釈は☆利天

ほんのう梵王まけいしゅら是有頂天に、魔醯修羅まけいしゅらは第六の佗化天に、してんのう四天王は須弥しゅみの腰に、

にちがつ日月・しゅうせい衆星われらは我等が眼まなこに見へて頂上ちようじやうを照し給ふ、てら

江神・河神・山神等も皆法華經の会上しよそんの諸尊なり。

仏・法華經をとかせ給たまひいて年数二千二百余年なり、人間にんげんこそ寿も短き故ゆえに

仏をも見奉り候人も待らぬ、天上てんじやうは日数は永く寿も長ければ併ながら仏を

おがみ法華經を聴聞ほけきやうせる天人ちやうもんかぎり多くおはするなり人間にんげんの五十年は四王しおう

・天の一日一夜なり、此これ一日一夜をはじめとして三十日は一月十二月は

一年にして五百歳なり、されば人間にんげんの二

千二百余年は四王しおう・天の四十四日なり、されば日月並にちがつならびに毘沙門天王びしゃもんてんのうは仏

におくれたてまつりて、四十四日いいまだ二月にたらず、帝釈たいしやく・梵天ぼんでんなどと

は仏におくれ奉りて一月一時にもすぎず、わづかの間に・いかでか仏前の

なら

御誓並びに自身成仏の御經の恩をばわすれて、法華經の行者をば捨てさ

たま

せ給うべきななど思いつらぬれば・たのもし

き事なり、されば法華經の行者の祈る祈は響の音に応ずるがごとし影の

ほけきよう

ぎようじや

ひびき

体にそえるがごとし、すめる水に月のうつるがごとし方諸の水をまねくが

もろもろ

ごとし磁石の鉄をすうがごとし琥珀の塵をとるがごとし、あきらかなる

じしやく

くろがね

こはく

ちり

鏡の物の色をうかぶるがごとし世間の法には我がおもはざる事も父母・

せけん

ふぼ

主君・師匠妻子をろかならぬ友なんどの申す事は恥ある者は意にはあはざ

しゅくん

ししようにいし

もう

はじ

れども名利をもうしなひ、寿ともなる事も侍るぞかし、何に況や我が心か

みようり

はべ

いか

ら

をこりぬる事は、父母・主君・師匠などの制止を加うれどもなす事あり。

さればはんよきと云いし賢人は我頸を切つてだにこそけいかと申せし人

には与へき、季札と申せし人は約束の剣を徐の君が塚の上に懸けたりき、

而るに靈山会上にして即身成仏せし竜女は小乗経には五障の雲厚く

三従のきづな強しと嫌はれ、四十余年の諸大乘経には・或は歴劫修行

にたへずと捨てられ、・或は初発心時・便成正覚の言

も有名無実なりしかば女人成仏もゆるさざりしに設い人間天上の女人な

りとも成仏の道には望なかりしに・竜畜下賤の身たるに女人とだに生れ年

さへ・いまだ・たけずわづかに八歳なりき、かたがた思ひもよらざりしに

文殊の教化によりて海中にして法師提婆の中間わづかに宝塔品を説かれ

し時刻に仏になりたりし事は・ありがたき

事なり、一代超過の法華経の御力にあらずば・いかでかかくは候べき、さ

れば妙楽は「行浅功深以顯經力」とこそ書かせ給へ、たまたま 竜女は我が仏になれる経なれば仏の御諫なくともいかでか法華經の行者を捨てさせ給うべき、されば自讃歎仏の偈には「我大乘の教を聞いて苦の衆生を度脱せん」等とこそ・すすませさせ給いしか、たまたま 竜女の

誓は其の所従の「非口所宣非心所測」の一切の竜畜の誓なり娑竭羅竜王は竜畜の身なれども子を念う志深かりしかば大海第一の宝如意宝珠をもむすめにとらせて即身成仏の御布施にせさせつれ此の珠は直たまたま 三千大千世界にかふる珠なり。

提婆達多は師子頬王には孫釈迦如来には伯父たりし斛飯王の御子阿難尊者の舎兄なり、善聞長者のむすめの腹なり、てんりんじょうおう いちもん えんぶだい 転輪聖王の御一門南閻浮提には賤しからざる人なり、ざいけ 在家にましましし時は夫妻となるべきやすたら女を悉達太子に押し取られ宿世の敵と思ひしに、しゅつけ 出家の後に人天大会の集

まりたりし時・仏に汝なんじは癡人ちじん・唾つばきを食へる者とのられし上名聞利養深みょうもんりようか
りし人なれば仏の人にもてなされしをそねみて我が身には五法を行じて仏
よりも尊くろがねげになし鉄くろがねをのして千輻輪ふくりんにつけ螢火ほたるびを集めて白毫びやくこうとなし・六
万宝蔵ほうぞう・八万宝蔵はちまんほうぞうを胸に浮べ、象頭山に戒場

を立て多くの仏弟子をさそひとり、爪に毒を塗り仏の御足にぬらむと企て
蓮華比丘尼を打殺し・大石を放て仏の御指をあやまちぬ、具に三逆を犯し
結句は五天竺の悪人を集め仏・並びに御弟子檀那等にあだをなす程に、
頻婆娑羅王は仏の第一の御檀那なり、一日に五百輛の車を送り日に仏・
並びに御弟子を供養し奉りき、提婆そねむ心
深くして阿闍世太子を語いて父を終に一尺の釘七つをもつてはりつけにな
し奉りき、終に王舎城の北門の大地破れて阿鼻大城に墜ちにき、
三千大千世界の人・一人も是を見ざる事なかりき、されば大地微塵劫は過ぐ
とも無間大城をば出づべからずとこそ思ひ候に法華經にして天王如来とな
らせ給いけるにこそ不思議に尊けれ、提婆達多・

仏になり給はば語らはれし所の無量の悪人、一業所感なれば皆無間地獄の
苦ははなれぬらん、是れ偏に法華經の恩徳なり、されば提婆達多並びに

しよじゅう むりよう けんぞく ほけきよう ぎようじゃ
所従の無量の眷属は法華經の行者の室宅にこそ住せ給うらめと・たのも
し。

もろもろだいぢみじん

ごと

しよぼさつ

とうかく

がんぼん

むみようばか

諸の大地微塵の如くなる諸菩薩は等覺の位までせめて元品の無明計りも

はべ

しゃかによらい

あ

たてまつがんぼん

きようしゆしやくそん

ちて侍るが釈迦如来に値い奉る元品の大石をわらんと思ふに、教主釈尊

よんじゅうよねん

いんぶんかせつかぶんふかせつ

もう

みようかく

くどく

と

あらわ

四十余年が間は「因分可説果分不可説」と申して妙覺の功徳を説き顯し

たま

みようかく

ほんい

あらわ

給はず、されば妙覺の位に登る人・一人もなかりき本意なかりし事なり、

しか りようぜん

ただいちぶつじよう

と

たま

もろもろ

而るに靈山八年が間に「唯一仏乘名爲果分」と説き顯し給いしかば諸の

ぼさつみなみようかく

しゃかによらい

しゆみせん

いただき

しほう

菩薩皆妙覺の位に上りて釈迦如来と悟り等しく須弥山の頂に登つて四方

を見る

を

が如く長夜に日輪の出でたらんが如くあかなくならせ給いたりしかば仏の

仰せ無くとも法華經を弘めじ・又行者に替らじとはおぼしめすべからず、

おほ

ほけきよう

ひろ

ぎようじゃ

かわ

されば「我不愛身命但惜無上道・不惜身命当広説此經」等とこそ誓ひ給い

がふあいしんみようたんしやくむじようどう

おしんみよう

たま

を

しか。

其^その上慈父^{じふ}の釈迦^{しゃ}仏^{ぶつ}悲母^{ひも}の多宝^{たほう}仏^{ぶつ}慈悲^{じひ}の父母^{ふぼ}等^ら同じく助証^{じゆつぽう}の十方^{じふぱう}の諸^{しよ}仏^{ぶつ}
一座^{いざ}に列^{れつ}らせ給^{たま}いて、月^{つき}と月^{つき}とを集^{あつ}めたるが如^{ごと}く日^ひと日^ひとを並^{なら}べたるが如^{ごと}く
ましましし時^{とき}、「諸^{もろもろ}の大衆^{たいしゆ}に告^つぐ我が滅^{めつ}度の後^ご誰^{たれ}か能^よく此^この経^{きやう}を護^ご持^ぢし
読^{どく}誦^{じゆ}せんものなる、今^{いま}・仏^{ぶつ}前^{ぜん}に於^{おい}て自^{みづか}ら誓^{せい}言^{ごん}を説^{せつ}け」と三度^{さんど}まで諫^{かん}させ給^{たま}い
しに、八方^{はつぱう}・四百万億^{しよばんいふ}那由他^{ないうた}の国^{こく}土^ど

に充満せさせ給いし諸大菩薩身を曲低頭合掌し俱に同時に声をあげて
「世尊の勅の如く当に具さに奉行したてまつるべし」と三度まで・声を惜
まず・よばわりしかば、いかでか法華經の行者には・かわらせ給はざるべ
き、はんよきと云いしものけいかに頭を取せきさつと云いしもの徐の君が
塚に刀をかけし、約束を違へじがためな

り、此れ等は震旦辺土のえびすの如くなるものどもだにも友の約束に命を
も亡ぼし身に代へて思ふ刀をも塚に懸くるぞかし、まして諸大菩薩は本よ
り大悲代受苦の誓ひ深し仏の御諫なしともいかでか法華經の行者を捨て
給うべき、其の上・我が成仏の経たる上仏慇懃に諫め給いしかば仏前の御
誓丁寧なり行者を助け給う事疑う

べからず。

仏は人天の主・一切衆生の父母なり而も開導の師なり、父母なれども

賤き父母は主君の義をかねず、主君なれども父母ならざればおそろしき辺
もあり、父母・主君なれども師匠なる事はなし諸仏は又世尊にてましませ
ば主君にてはましませども娑婆世界に出でさせ給はざれば師匠にあらず。
又「其中衆生悉是吾子」とも名乗らせ給は

ず釈迦仏独主師親の三義をかね給へり、しかれども四十余年の間は提婆達多
を罵給ひ諸の声聞をそしり菩薩の果分の法門を惜み給しかば、仏なれども
よりよりは天魔・破旬ばしの我等をなやますかの疑ひ・人には・いはざ
れども心の中には思いしなり、此の心は四十余年より法華經の始まで失せ
ず、而るを靈山八年の間に宝塔虚空に現じ二仏・日月の如く並び・諸仏
大地に列り大山をあつめたるがごとく、地涌千界の菩薩虚空に星の如く
列り給いて、諸仏の果分の功德を吐き給いしかば宝蔵をかたぶけて貧人に
あたうるがごとく崑崙山のくづれたる

ににたりき、諸人・此の玉をのみ拾うが如く此の八箇年が間珍しく貴き事
心髄にもと・をとりしかば・諸菩薩・身命も惜まず言をはぐくまず誓をな
せし程に・属累品にして釈迦如来宝塔を出でさせ給いてとびらを押したて
給いしかば諸仏は国国へ返り給ひき、諸の菩薩等も諸仏に随ひ奉りて返ら
せ給ひぬ。

やうやう心ぼそくなりし程に「きやくこ卻後三月当般涅槃」と唱えさせ給たまいし事

こそ心ぼそく耳をどろかしかりしかば諸菩薩・二乘人天等ことごとく

ほけきよう ちようもん

法華經を聴聞して仏の恩徳心肝にそみて、身命をも法華經の御ために投

おんとく

しんみよう

ほけきよう

て仏に見せまいらせんと思ひしに仏の仰ごの如ごとく若もし涅槃せさせ給たまはば・い

かに・あさましからんと胸さはぎして・ありし程

に仏の御年満八十と申せし二月十五日の寅卯の時・東天竺・舍衛国・

てんじく

しゃえいこく

俱尸那城・跌提河の辺にして仏御入滅にゅうめつなるべき由の御音上は有頂横よこしまには

ぼつだい

にゅうめつ

よこしま

さんぜんだいせんかい

三千大千界までひびきたりしこそ目もくれ心もきえはてぬれ、五天竺・十

てんじく

六の大

ちゅうごく

しやうごくむりよう

そくせん

しゅじよう

いしよく

とどの

じようげ

国五百の中国十千のしやうごくむりよう小国無量の粟散国等の衆生一人も衣食を調へず上下

をきらはず、牛馬・狼狗・☆鷺・☆等にるいの五十二類いちるいの一類の数大地微塵を

ぎゅうば

いぬ

ちようじゆ

みんもう

にるい

いちるい

だいちみじん

もつくしぬべし況や五十二類をや、此の類皆華香衣食をそなへて最後の

にるい

みな

いしよく

さいご

供養とあてがひき、一切衆生の宝の橋おれなんとす一切衆生の眼ぬけな
んとす一切衆生の父母・主君・師匠死なんとすなんと申すこえひびきしか
ば身の毛のいよ立のみならず涙を流す、なんだをながすのみならず頭をた
たき胸を・をさへ音も惜まず叫びしかば血の涙血のあせ俱尸那城に大雨よ
りもしげくふり大河よりも多く流れたりき、是れ偏えに法華經にして仏に
なりしかば仏の恩の報ずる事かたかりしなり。

かかるなげきの庭にても法華經の敵をば舌をきるべきよし座につらなる
まじきよしののしり侍りき、迦葉童子菩薩は法華經の敵の国には霜雹とな
るべしと誓い給いき、爾の時・仏は臥よりをきてよろこばせ給いて善哉善哉
と讃め給いき、諸菩薩は仏の御心を推して法華經の敵をうたんと申さば、
しばらくもいき給いなんと置いて一一の誓はなせしなり、されば諸菩薩・
諸天人等は法華經の敵の出来せよかし仏前の御誓はたして釈迦尊並びに

たほうぶつしよぶつによらい
多宝仏諸仏如来にもげに仏前ぶつぜんにして誓いしが如ごとく、法華經ほけきようの御ためには名
をも身命しんみようをも惜おしまざりけりと思はれまいらせんとこそおぼすらめ。

いかに申もうす事はをそきやらん、大地だいちはささばはづるるとも虚空こくうをつなぐ
者はありとも潮のみちひぬ事はある

とも日は西より出づるとも法華經ほけきようの行者ぎようじやの祈りのかなはぬ事はあるべから

ず、法華經ほけきようの行者ぎようじやを諸もろの菩薩ぼさつ・人天八部等二聖にんてんはちふ・二天じゅうらせつ・十羅刹等じゆらせつ・千に一

も来つてまほり給たまはぬ事侍らば、上はべは釈迦諸仏しゃかしよぶつをあなづり奉り下たてまつは九界を

たばらかす失とがあり、行者ぎようじやは必ず不実ふじつなりとも智慧ちえはをろかなりとも身は

不浄ふじようなりとも戒徳かいとくは備へずとも・南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようと申もうさば必ず守護しゆごし給たまう

べし、袋きたなしとて金を捨る事なかれ伊蘭いらんをにくまば栴檀せんたあるべからず、

谷ふじようの池を不浄ふじようなりと嫌きらはば蓮を取らざるべし、行者ぎようじやを嫌きらい給たまはば誓を破り

給たまいなん、正像しょうざう既に過ぎぬれば持戒じかいは市の中の虎ことの如ちしやし智者りんかくは鱗角りんかくよりも

希まれならん、月を待つまでは灯たのむを憑ほうしゆべし宝珠たうじうのなき処ところには金銀きんぎんも宝なり、

白鳥の恩をば黒鳥に報ずべし聖僧せいそうの恩をば凡僧に報ずべし、とくとく利生りしやう

をさづけ給たまへと強盛かうじやうに申すならば・いかでか祈りのかなはざるべき。

問いわうて云く上にかかせ給たまふ道理どうり・文証もんしやうを拝見はいけんするにまことに日月にちがつの天に

・おはしますならば大地だいちに草木そうもくのおふるならば、昼夜こくとの国土こくとにあるならば
大地だいちだにも反覆はんぷくせずば大海たいかいのしほだにもみちひるならば、法華經ほけきようを信ぜん
人現世げんせのいのり後生ごしょうの善処ぜんしょは疑うたがいいなるべし、然しかりと雖いえども此この二十余年
が間の天台てんだい・真言等しんこんの名匠だいじ・多く大事だいじのいのり

をなすにはかばかしくいみじきのりありともみえず、尚なお外典がてんの者どもよ
りもつたなきやうにうちをぼへて見ゆるなり、恐おそらくは經文きやうもんのそらごとな
るか行者ぎやうじやのをこなひのをろかなるか・時機じきのかなはざるかと、うたがはれ
て後生ごしょうもいかんと・をぼう。

それは・さてをきぬ御房ごぼうは山僧おんでしの御弟子おんでしとうけ給たまはる父ちちの罪つみは子こにかか
り師つみの罪でしは弟子でしにかかるとうけ給たまはる、叡山えいざんの僧徒おんじやうさんもんの園城山門どうとうぶつぞうの堂塔どうとう仏像ぶつぞう
經卷きやうかん数千万せんまんをやきはらせ給たまうが、ことにおそろしく世間せけんの人人ひとびともさわぎ
うとみあへるはいかに前まへにも少少たまたうけ給たまはり候まちぬれども今度このたびくわしくきき

ひらき候^{そうら}はん、但し不審^{ただふしん}なることはかかる悪僧^{あくそう}どもなれば三宝^{さんぼう}の御意^{みごころ}にも
かなはず天地^{てんち}にもうけられ給^{たま}はずして、祈りも叶はざるやらん

と・をばへ候はいかに、答て云くせんぜんも少少申しぬれども今度又あら
あら申すべし、もう日本国にをいては此の事大切なり、これをしらざる故に多
くの人口に罪業をつくる、先づ山門はじまりし事は此の国に仏法渡つて二
百余年、桓武天皇の御宇に伝教大師立て始め給いしなり、かんむてんのう ぎよう でんぎようだいし
当時たまいの京都は昔
聖徳太子王氣ありと相し給いしかども・
しょうとくたいし

天台宗の渡らん時を待ち給いし間都をたて給はず、又上宮太子の記に云く
てんだいしゅう わた たまい

「我が滅後二百余年に仏法・日本に弘まる可し」云云、めつご ぶつぽう にほん ひろ
伝教大師延暦年
でんぎようだいし えんりやく

中に叡山を立て給ふ桓武天皇は平の京都をたて給いき、太子の記文たがは
えいざん たま かんむてんのう きやうと たまい たいし きもん

ざる

故なり、されば山門と王家とは松と栢とのごとし、蘭と芝とにいたり、松
さんもん

かるれば必ず栢かれらんしほめば又しばしばむ、王法の榮へは山の悦び王
よろこ

位の衰へは山の歎きと見えしに既に世・関東に移りし事なにか思食し
おとろえ なげ すで かんとう おほしめ

けん。

ひほう 秘法四十一人の行者・承久三年辛巳四月十九日・京夷乱れし時関東

じょうぶく

おき

ほうこう

せんじ

よ

かのとみ

みだ

かんとう

ひほう

ひほう

ひほう

ひほう

ひほう

ひほう

調伏の爲め隠岐の法皇の宣旨に依つて始めて行はれ御修法十五檀の秘法、

一字金輪法天台座主慈円僧正伴僧十二四天王法成興寺の宮僧正伴僧八口広瀬殿不動明王法成宝僧正伴僧八口花

いとく

威徳法七条院の御沙汰

転輪聖王法

口同院の御沙汰

十壇大威徳法

いとく

いとく

いとく

いとく

いとく

いとく

いとく

いとく

いとく

伴僧六口覺朝僧正俊性法印永信法印豪円法印厭円僧都慈賢僧正賢兼僧都仙尊僧都行遍僧都実覚法眼已上十人・大旨本坊に於て之を修す如意輪法妙高院僧正伴僧八口毘沙門法

いとく

常住院僧正三井伴

僧六口資質の御沙汰

御本尊一日之を造らせらる調伏の行儀は如法愛染王法

いとく

いとく

いとく

いとく

いとく

いとく

いとく

いとく

いとく

いとく

仁和寺御室の行法五月三日之れを始めて紫宸殿に於て二七日之を修せらる仏眼七日之を修す六字法僧都愛染王法観嚴僧正七日不動法僧八口皆僧綱

いとく

大威徳法僧正金剛童子法人已上十五壇の法了れり、五月十五日伊賀太郎判官

光季京にして討たれ、同十九日鎌倉に聞え、同二十一日大勢軍兵上ると聞

えしかば残る所の法六月八日之れを行ひ始めらる、尊星王法覚朝太元法蔵有

五壇法僧都猷円僧都行遍僧都守護經法

我朝二度之を行う五月二十一日武蔵の守殿が海道

いとく

いとく

いとく

いとく

いとく

いとく

いとく

いとく

大政僧正永信法印全尊御室之を行はせらる五月二十一日武蔵の守殿が海道

いとく

大政僧正永信法印全尊御室之を行はせらる五月二十一日武蔵の守殿が海道

いとく

大政僧正永信法印全尊御室之を行はせらる五月二十一日武蔵の守殿が海道

いとく

いとく

いとく

いとく

いとく

いとく

いとく

いとく

いとく

いとく

大政僧正永信法印全尊御室之を行はせらる五月二十一日武蔵の守殿が海道

いとく

大政僧正永信法印全尊御室之を行はせらる五月二十一日武蔵の守殿が海道

いとく

大政僧正永信法印全尊御室之を行はせらる五月二十一日武蔵の守殿が海道

いとく

いとく

いとく

いとく

いとく

いとく

いとく

いとく

いとく

いとく

大政僧正永信法印全尊御室之を行はせらる五月二十一日武蔵の守殿が海道

いとく

大政僧正永信法印全尊御室之を行はせらる五月二十一日武蔵の守殿が海道

いとく

大政僧正永信法印全尊御室之を行はせらる五月二十一日武蔵の守殿が海道

いとく

いとく

いとく

いとく

いとく

いとく

いとく

いとく

いとく

いとく

大政僧正永信法印全尊御室之を行はせらる五月二十一日武蔵の守殿が海道

いとく

大政僧正永信法印全尊御室之を行はせらる五月二十一日武蔵の守殿が海道

いとく

大政僧正永信法印全尊御室之を行はせらる五月二十一日武蔵の守殿が海道

いとく

いとく

いとく

いとく

いとく

いとく

いとく

いとく

いとく

いとく

大政僧正永信法印全尊御室之を行はせらる五月二十一日武蔵の守殿が海道

いとく

大政僧正永信法印全尊御室之を行はせらる五月二十一日武蔵の守殿が海道

いとく

大政僧正永信法印全尊御室之を行はせらる五月二十一日武蔵の守殿が海道

いとく

いとく

いとく

いとく

いとく

いとく

いとく

いとく

いとく

いとく

大政僧正永信法印全尊御室之を行はせらる五月二十一日武蔵の守殿が海道

いとく

大政僧正永信法印全尊御室之を行はせらる五月二十一日武蔵の守殿が海道

いとく

大政僧正永信法印全尊御室之を行はせらる五月二十一日武蔵の守殿が海道

いとく

いとく

いとく

いとく

いとく

いとく

いとく

いとく

いとく

いとく

より上洛し甲斐源氏

は山道^{たてまつ}を上る式部殿は北陸道を上り給う^{たま}、六月五日大津をかたむる手甲斐^か源氏^{げんじ}に破られ畢んぬ^{おわ}、同六月十三日十四日宇治橋の合戦・同十四日に京方^{かみがた}破られ畢んぬ^{おわ}、同十五日に武蔵守殿六条へ入り給ふ^{たま}諸人^{しよにん}入り畢んぬ^{おわ}、七月十一日に本院は隱岐の国へ流され給ひ中院は阿波の国へ流され給ひ第三院^{おき}は佐渡^{さど}の国へ流され給ふ^{たま}、殿上人^{しやうにん}七人誅殺せられ畢んぬ^{おわ}、かかる大惡法年^{だいくほう}を経て漸漸^{ぜんぜん}に關東に落ち下りて諸堂^{しよ}の別当^{べつとう}・供僧となり連連^{れんれん}と之^{これ}を行^{おこな}う、本より教法^{きやうほう}の邪正勝劣^{じやせいしやうれつ}をば知食^{しろしめ}さず、只三宝^{たださんぼう}をば・あがむべき事と・ばかり・おぼしめす故に自然^{ゆえ}として是^{これ}を用ひきたれり、關東^{かんとう}の国^{くに}のみならず叡山^{えいざん}・東寺^{とうじ}・蘭城寺^{おんじやうじ}の座主^{ざす}・別当^{べつとう}・皆關東^{みなかんとう}の御計^{みけい}と成りぬる故に彼の法^{ゆえ}の檀那^{だんな}と成り給いぬるなり。

問て云く真言^{いわ しんこん}の教^{あながちじやきやう}を強に邪教^{じやきやう}と云う心如何^{いかに}、答えて云く弘法大師云く

第一^{だい}大日經第二^{だい}・華嚴經第三^{けこんきやう}法華經^{ほけきやう}と能^{よくよく}能此^{しだい}の次第^{しだい}を案^あずべし、仏は何^{いかに}な

る經にか此の三部の經の勝劣を説き判じ給へるや、若し第一大日經第二

・華嚴經第三法華經と説き給へる經あるならば尤も然るべし、其の義なく

んば甚だ以て依用し難し、法華經に云く「藥王今汝に告ぐ我所説の

諸經而かも此の經の中に於て法華最も第一なり」云云、仏正く諸教を挙げ

て其の中に

於いて法華第一と説き給ふ、仏の説法と弘法大師の筆とは水火の相違なり

尋ね究むべき事なり、此筆を數百年が間凡僧高僧是を學し貴賤上下是を信

じて大日經は一切經の中に第一とあがめける事仏意に叶はず、心あらん

人は能く能く思い定むべきなり、若し仏意に相叶はぬ筆ならば信ずとも豈

成仏すべきや、又是を以て国土を祈ら

んに当に不祥を起さざるべきや、又云く「震旦の人師等諍て醍醐を盗む」

云云、文の意は天台大師等眞言教の醍醐を盗んで法華經の醍醐と名け給へ

る事は、此の筆最第一さいだいいちの勝事ほけきようなり、法華經ほけきようを醍醐だいごと名け給たまへる事は、
天台大師てんだいだいし・涅槃經ねはんぎようの文かんがを勘いっさいきようへて一切經いっさいきようの中には法華經ほけきようを醍醐だいごと名なくと判じ
給たまへり、真言教しんこんきようの天竺てんじくより唐土もうこしへ渡わたる事は天台出世てんだいしゅっせの以後いご二百余年なり、
されば二百余年しんこんの後に渡わたるべき真言しんこんの醍醐だいごを盗ほけきようみて法華經ほけきようの醍醐だいごと名け給
ひけ

るか此の事不審なり不審なり、真言未だ渡らざる以前の二百余年の人人を
ぬすびと 盗人とかき給へる事証拠何れぞや、弘法大師の筆をや信ずべき、涅槃經に
ほけきよう 法華經を醍醐と説けるをや信ずべき、若し天台大師盗人ならば涅槃經の文
いかに をば云何がこころうべき、さては涅槃經の文真実にして弘法の筆邪義なら
じやぎ ば邪義の教を信ぜん人人は云何、只弘法大師の筆と仏の説法と勘へ合せて
せいぎ 正義を信じ侍るべしと申す計りなり。

うたがい 疑て云く大日經は大日如来の説法なり若し爾らば釈尊の説法を以て
だいにちによらい 大日如来の教法を打ちたる事都て道理に相叶はず如何、答えて云く大日
によらい 如来は何なる人を父母として何なる国に出で大日經を説き給けるやらん、
ふぼ もし父母なくして出世し給うならば釈尊入滅以後、慈尊出世以前、五十
せんまん 六億七千万歳が中間に仏出でて説法すべしと云う事何なる經文ぞや、
ちゆうげん 若し証拠なくんば誰人か信ずべきや、かかる僻事をのみ構へ申す間邪教と
しょうこ せうしやうこ

は申すなり、

其の迷謬^{めいびょう}尽しがたし纔^{わずか}か一二を出すなり、加之^{しかのみならずなら}並びに禪宗^{ぜんしゅう}・念仏等^{ねんぶつ}

を是^{これ}を用る、此れ等の法は皆未^{みな}顕^{けん}真^{しん}実^{じつ}の權教^{こんきょう}不成^{じようぶつ}仏の法無^む間^{げん}地^じ獄^{ごく}の業^{ごう}な

り、彼の行人又謗^{ほう}法の者なり争^{いか}でか御^き祈^{とう}☆叶^えふべきや、然るに国主^{こくしゅ}と成^{なり}り

給^{たま}ふ事は過去^{かこ}に正法^{しょうぼう}を持^もち仏に仕^たふるに依^よつて大小^{だいしやう}の王^{みま}皆^{ぼん}梵^{のう}王^{たいしやく}・帝^{たい}釈^{しやく}・

日月^{にちがつ}・四天^{してん}等の御計^{おき}ひとして郡郷^{ぐんごう}を領^ため給^{たま}へり、所謂^{いわゆる}經^{きやう}に云^いく「我^{われ}今^{いま}五^ご眼^{がん}

をもて明^{あきら}かに三世^{さんぜ}を見るに一切^{いっさい}の国王^{こくおう}皆^{みな}過^か去^こ世^ぜに五百^{いほふ}の仏に侍^{さむらい}するに由^よつて

帝王^{ていおう}主^{しゅ}と為^なるこ

とを得^えたり」等^な云^いふ、然^{しか}るに法華^{ほけ}經^{きやう}を背^{そむ}きて真言^{しんごん}・禪^{ぜん}・念^{ねん}仏^{ぶつ}等の邪師^{じゃし}に付^つ

いて諸^{もろ}の善根^{ぜんこん}を修^{しゆ}せらるるとも、敢^{あえて}て仏意^{ぶつゐ}に叶^あはず神慮^{しんりょ}にも違^いする者^{もの}なり

能^よく能^よく案^{あん}あるべきなり、人間^{にんげん}に生^{なま}を得^える事^{こと}都^すて希^{まれ}なり適^{たまたま}生^{なま}を受けて法^{ほふ}

の邪正^{じゃせい}を極^{きわ}めて未^み來^{らい}の成^{じやう}仏^{ぶつ}を期^こせざらん事^{こと}返^{へん}本^{ほん}意^いに非^{あら}ざる者^{もの}なり、又

慈覚大師・御入唐以後・本師・伝教大師に背か

せ給たまいて叡山えいざんに真言しんごんを弘ひろめんが為ために御祈請きしやうありしに・日を射るに日輪にちりん動転

すと云う夢想を御覧じて、四百余年の間諸人しよにん是を吉夢と思へり、日本国にほんこくは

殊ことに忌むべき夢なり、殷いんのちゆうの紂王にちりん・日輪にちりんを的にして射るに依よつて身亡びたり、

此の御夢想は権化ごんげの事なりとも能よく能よく思惟しゆいあるべきか、仍よつて九牛の一

毛註しるする所件くだんの如ごとし。

◆三〇一

祈☆經送状

文永十年正月 五十二歳御作 与

さいれんぼう
最蓮房日浄

1356p

御礼の旨委細承はり候畢んぬ、兼ては又末法に入つて法華經を持ち候者

さんるい 三類の強敵を蒙り候はん事は面拝の時大概申し候畢んぬ、仏の金言にて

ふしん 候上は不審を致すべからず候か、然らば則日蓮も此の法華經を信じ奉り候

ある 後は・或は頭に疵を蒙り・或は打たれ・或は追はれ・或は頸の座に臨み

ある 或は流罪せられ候し程に結句は此の嶋まで遠流せられ候ぬ。

いか 何なる重罪の者も現在計りこそ罪科せられ候へ、日蓮は三世の大難に

あ 値い候ぬと存し候、其の故は現在の大難は今の如し、過去の難は当世の諸人

もう 等が申す如くば、如来在世の善星俱伽利等の大悪人が重罪の余習を失せ

によらい ずして如来の滅後に生れて是くの如く仏法に敵をなすと申し候是なり、次

に未来みらいの難なんを申し候もつはば当世とうせの諸人しよにんの部類ぶるい等ほうじ謗そうらじ候もつはん様やうは此この日蓮にちれん房ぼうは存在しゆじゆの時は種種だいにんの大難だいにんにあひ死門しもんに趣きしんむくの時は自身みずかを自ら食くして死しる上うへは

定あめて大阿鼻あびじごく地獄じごくに墜いまし在むへんして無辺むへんの苦くるを受うくるらんと申し候もつはんずるなり、

古こより已来このかた世間せけん出世しゅつせの罪科つみの人ひと・貴賤きせん上下じやうげ持戒ちかい毀戒かい凡聖ほんせいに付つけて多おほく候もつへ

ども但其げんざいは現在げんざい計ばかりにてこそ候もつに日蓮にちれんは現在げんざいは申もつすに及およばす過去かこ・未来みらいに

至いたるまで三世さんぜの大難だいにんを蒙こむり候もつはん事は只偏ただひとえに法華經ほけきやうの故ゆえにて候もつなり、日蓮にちれん

が三世さんぜの大難だいにんを以もつて法華經ほけきやうの三世さんぜの御利益りやくを覚さまし食くされ候もつへ、過去かこ久遠くおん劫くわつ

より已来このかた未来みらい永劫えいごうまで妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの三世さんぜの御利益りやく尽つくくすべからず候もつなり

り、日蓮にちれんが法華經ほけきやうの方人かとうどを少分せうぶん仕り候もつだにも加様だいなんの大難だいにんに遭あひ候もつ、まして

釈尊しゃくそんの世世番番せせばんばんの法華經ほけきやうの御方人かとうどを思おもひ遣はなりまいらせ候もつに道理どうり申もつす計ばかりな

くこそ候もつへ、されば勸持品かんじほんの説相せつそうは暫時ざんじも廃はいせず殊更じゆぐわう殊更じゆぐわう貴おほく覚おほえ候もつ。

一御山籠ごさんろうの御志ごしの事、凡およそ末法折伏まつぽうしやくぶくの行に背そむくと雖いえども病者びやうしやにて御座候上天下てんかの災国土こくどの難強盛なんじやうじやうに候はん時・我が身につみ知り候はざらんよ
り外もつはいかに申し候とも国主信こくしゆぜられまじく候へば日蓮尚にちれんなお籠居ごうきの志ごし候、

まして御分の御事はさこそ候はんずらめ、仮使山谷に籠居候とも御病も平癒おんこと　そうら　たといせんこく　へいゆ
して便宜も吉候はば身命を捨て弘通せしめ給ふべし。びんぎ　しんみょう　ぐつう　たま

一仰せを蒙りて候末法の行者・息災延命の祈☆の事、別紙に一卷註しおお　こおも　まっぼう　ぎやうじや　きとう

進らせ候、毎日一返闕如無く読誦せらるべく候、日蓮も信じ始め候し日よまい　まいにち　けつじよなく　どくじゆ　にちれん

り毎日此れ等の勘文を誦し候て仏天に祈誓し候によりて、種種の大難に遇まいにちこ　かんもん　じゆ　ぶつてん　きせい　しゆじゆ　だいなん

うと雖も法華經の功力釈尊の金言深重なる故に今まで相違無くて候なり、いえど　ほけきやう　しゃくそん　きんげんじんじゆう　ゆえ　そういなく

其れに付いても法華經の行者は信心に退転無く身に詐親無く・一切法華經そ　ほけきやう　ぎやうじや　しんじん　たいてんなく　いっさいほけきやう

に其の身を任せて金言の如く修行せば慥に後生は申すに及ばず今生も息そ　まか　きんげん　ごと　しゆぎやう　たしかこしやう　もう　およ　こんじやう

災延命にして勝妙の大果報を得広宣流布大願をも成就す可きなり。しょうみやう　かほう　こうせんるふ　じやうじゆ　べ

一御狀に十七出家の後には妻子を帶せず肉を食せず等云云、権教を信ぜししゅうつけ　さいし　しんきやう

大謗法の時の事は何なる持戒の行人と申し候とも、法華經に背く謗法罪のほうほう　いか　じかい　もう　ほけきやう　そむ　ほうほうつみ

故に正法の破戒の大俗よりも百千万倍劣り候なり、彼の謗法の比丘は持戒ゆえ　しょうほう　はかい　ひやくせんまんばい　ほうほう　びく　じかい

なりと雖も無間に墜す、正法の大俗は破戒なりと雖も成仏疑い無き故
なり、但今の御身は念仏等の権教を捨てて正法に帰し給う故に誠に持戒
の中の清浄の聖人なり、尤も比丘と成つては権宗の人すら尚然る可し
況や正法の行人をや、仮使権宗の時の妻子なりとも・かかる大難は遇は
ん時は振捨て正法を弘通すべきの処に地体よりの聖人尤も吉し尤も
吉し、相構え相構え向後も夫妻等の寄来とも遠離して一身に障礙無く國中
の謗法をせめて釈尊の化儀を資む奉る可き者なり、猶猶向後は此の一卷の
書を誦して仏天に祈誓し御弘通有る可く候但此の書は弘通の志有らん人
に取つての事なり、此の経の行者なればとて器用に能はざる者には左右
無く之を授与すべからず候か、
六賢六賢、
恐恐謹言。

文永十年癸酉正月二十八日

日蓮 花押

最蓮房御返事

◆三〇二

諸法実相抄

文永十年五月

五十二歳御作

与

さいれんぼう

にちれんこれ

最蓮房日浄

日蓮之を記す

1358p

問うて云く法華經の第一方便品に云く「諸法実相乃至本末究竟等」云云、

此の經文の意如何、答えて云く下地獄より上仏界までの十界の依正の

当体悉く一法ものこさず妙法蓮華經のすがたなりと云ふ經文なり依報あ

るならば必ず正報住すべし、釈に云く「依報・正報常に妙經を宣ぶ」

等云云、又云く「実相は必ず諸法・諸法は必ず十如・十如は必ず十界・

十界は必ず身土」、又云く「阿鼻の依正は全く極聖の自心に処し、毘盧

の身土は凡下の一念を

逾えず」云云、此等の釈義分明なり誰か疑網を生ぜんや、されば法界のす

がた妙法蓮華經の五字にかはる事なし、釈迦・多宝の二仏と云うも妙法
等の五字より用の利益を施し給ふ時事相に二仏と顕れて宝塔の中にしてう
なづき合い給ふ、かくの如き等の法門日蓮を除きては申し出す人・一人も
・あるべからず、天台・妙楽・伝教等は心に
は知り給へども言に出し給ふまではなし胸の中にしてくらし給へり、其れ
も道理なり、付嘱なきが故に・時のいまだいたらざる故に・仏の久遠の弟子
にあらざる故に、地涌の菩薩の中の上首唱導・上行・無辺行等の菩薩
より外は、末法の始の五百年に出現して法体の妙法蓮華經の五字を弘め
給うのみならず、宝塔の中の二仏・並座の儀式を
作り顕すべき人なし、是れ即本門寿命品の事の一念三千の法門なるが故な
り、されば釈迦・多宝の二仏と云うも用の仏なり、妙法蓮華經こそ本仏に
ては御座候へ、經に云く「如来秘密神通之力」是なり、如来秘密は体の三身

にして本ほん仏ぶつなり、神通じんつう之力は用の三身さんじんにして迹しやく仏ぶつぞかし、凡ほん夫ぶは体たいの三身さんじんにして本ほん仏ぶつぞかし、仏ぶつは用の三身さんじんにし

て迹しやく仏ぶつなり、然しかれば釈迦しやくか仏ぶつは我われ等衆生しゆじやうのためには主師親しゆししんの三徳さんとくを備へ

給たまうと思おもひしに、さにては候さうはず返かへつて仏ぶつに三徳さんとくをかかふらせ奉たてまつるは凡ほん夫ぶな

り、其そのの故ゆゑは如來にょらいと云いうは天台てんだいの釈しやくに「如來にょらいとは十方じゆつぱう三世さんぜの諸しよ仏ぶつ・二仏ふつ・

三仏ふつ・

ほんぶつしゃくぶつ

本仏迹仏の通号なり」と判じ給へり、此の釈に本仏と云うは凡夫なり迹仏

と云ふは仏なり、然れども迷悟の不同にして生仏異なるに依つて俱体俱用

さんじん

さんじん

の三身と云ふ事をば衆生しらざるなり、さてこそ諸法と十界を挙げて実相

とは説かれて候へ、実相と云うは妙法蓮華經の異名なり諸法は妙法蓮華經

と云う事なり、地獄は地獄のすが

たを見せたるが実の相なり、餓鬼と変ぜば地獄の実のすがたには非ず、仏

は仏のすがた凡夫は凡夫のすがた、万法の当体のすがたが妙法蓮華經の

当体なりと云ふ事を諸法実相とは申すなり、天台云く「実相の深理本有の

妙法蓮華經」と云云、此の釈の意は実相の名言は迹門に主づけ本有の

妙法蓮華經と云うは本門の上の法門なり、此の釈能く能く心中に案じさ

せ給へ候へ。

にちれんまっぽう

日蓮末法に生れて上行菩薩の弘め給うべき所の妙法を先立て粗ひろめ、

つくりあらはし給うべき本門寿命品の古仏たる釈迦仏迹門宝塔品の時
涌出し給う多宝仏涌出品の時出現し給ふ地涌の菩薩等を先作り顕はし奉る
事、予が分齊にはいみじき事なり、日蓮をこそにくむとも内証にはいかが
及ばん、さればかかる日蓮を此の嶋

まで遠流しける罪無量劫にもきへぬべしとも覚へず、譬喩品に云く「若し

其の罪を説かば劫を窮むるも尽きず」とは是なり、又日蓮を供養し又日蓮

が弟子・檀那となり給う事、其の功德をば仏の智慧にてもはかり尽し給う

べからず、経に云く「仏の智慧を以て籌量するも多少其の辺を得ず」と

云へり、地涌の菩薩のさきがけ日蓮一人な

り、地涌の菩薩の数にもや入りなまし、若し日蓮地涌の菩薩の数に入らば豈

に日蓮が弟子・檀那地涌の流類に非ずや、経に云く「能く竊かに一人の為

めに法華経の乃至一句を説かば当に知るべし是の人は則ち如来の使・如来

の所遣^{しよけん}として如来^{にょらい}の事を行ずるなり」と、豈^{あに}に別人^との事を説^{たま}き給^{たま}うならんや、されば余りに人の我をほむる時は

如何^{いかよう}様にもなりたき意^{しゅつたい}の出来^{しゅつたい}し候なり、是ほむる処^{ところ}の言^{こと}よりをこり候ぞ

かし、末法^{まっぽう}に生れて法華經^{ほけきよう}を弘^{ひろ}めん行者^{ぎようじゃ}は、三類^{さんるい}の敵人^{てきじん}有^あつて流罪^{るざい}・死罪^{しざい}

に及^{およ}ばん、然れどもたえて弘^{ひろ}めん者をば衣^{もつ}を以て釈迦^{しやか}仏^{ぶつ}をほひ給^{たま}うべきぞ、

諸天^{しよてん}

は供養くようをいたすべきぞ・かたにかけせなかにをふべきぞ・大善根ぜんこんの者にて

あるぞ・一切衆生いっさいしゅじょうのためには大導師どうしにてあるべしと・釈迦しゃか仏ぶつ・多宝たほう仏ぶつ・

十方じゅうほうの諸仏しよぶつ・菩薩ぼさつ・天神てんじん七代ちじんごだい・地神ちじん五代の神かみ・鬼子母神きしもじん・十羅刹女じゅうらせつによ・四

大天王ぼんてん・梵天ぼんてん・

帝釈たいしゃく・閻魔法王えんまほうおう・水神みづかみ・風神ふうかみ・山神さんかみ・海神かいじん・大日如来だいにちにやらい・普賢ふげん・文殊もんじゆ・日月にちがつ

等の諸尊しよそんたちにほめられ奉るたてまつ間、無量むりやうの大難だいにんをも堪忍かんにんして候なり、ほめら

れぬれば我が身の損ずるをもかへりみず、そしられぬる時は又我が身のやぶるるをもしらず、ふるまふ事は凡夫ぼんぷのことはざなり。

いかにも今度信心このたびしんじんをいたして法華經ほけきやうの行者ぎやうじやにてとをり、日蓮にちれんが一門いちもんとな

りとし給たまうべし、日蓮にちれんと同意どういならば地涌じゆの菩薩ぼさつたらんか、地涌じゆの菩薩ぼさつに

さだまりなば釈尊しゃくそん久遠くおんの弟子でしたる事うたがに疑はんや、經いわに云く「我久遠くおんより

来このかた是等これらの衆きやうけを教化これす」とは是なり、末法まつぽうにして妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの五字ごじを弘ひろ

めん者は男女はきらふべからず、皆地涌みなじゆ

の菩薩ぼさつの出現しゆつげんに非ずんば唱へがたき題目だいもくなり、日蓮一人ははじめは南無なむ

妙法蓮華經と唱へしが、二人・三人百人と次第に唱へつたふるなり、未来みらい

も又しかるべし、是あに地涌じゆの義に非ずや、剩へ広宣流布の時にほんは日本一同

に南無妙法蓮華經と唱へん事は大地を的とするなるべし、ともかくも

ほけきよう

法華經に名をたて身をまかせ給うべし、釈迦しやかぶつ仏

たほうぶつ

・多宝仏・十方の諸仏・菩薩・虚空にして二仏うなづき合い、定めさせ

給いしは別の事には非ず、唯ひとへに末法の令法久住の故なり、既に

多宝仏は半座を分けて釈迦如来に奉り給いし時、妙法蓮華經の幡をさし

あらわ

顯し、釈迦・多宝の二仏大将としてさだめ給いし事あにいつはりなるべき

や、併ら我等衆生を仏になさんとの御談合なり。

日蓮は其の座には住し候はねども經文を見候にすこしもくもりなし、又

にちれん

そ

きようもん

だんごう

にちれん

そ

其の座にもやありけん凡夫なれば過去をしらず、現在は見へて法華經の
行者なり又未來は決定として當詣道場なるべし、過去をも是を以て
推する

に虚空会にもやありつらん、三世各別あるべからず、此くの如く思ひつづ
けて候へば流人なれども喜悅はかりなしうれしきにもなみだつらきにもな
みだなり涙は善惡に通ずるものなり彼の千人の阿羅漢の事を思ひい

でて涙をながし、ながしながら文殊師利菩薩は妙法蓮華經と唱へさせ給へもんじゆしりほさつ みようほうれんげきよう たま

ば、千人の阿羅漢の中の阿難尊者は・なきながら如是我聞と答え給う、余あらかん あなんそんじや によぜがもん たま

の九百九十人はなくなみだを硯の水として、又如是我聞の上に妙法蓮華經すずり によぜがもん みようほうれんげきよう

とかきつけしなり、今日蓮もかくの如し、かかる身となるも妙法蓮華經いまにちれん ごとく みようほうれんげきよう

こじ 五字七字を弘むる故なり、釈迦仏・多宝仏ひろく しゃかぶつ たほうぶつ

・未来・日本国の一切衆生のためにとどめをき給ふ処の妙法蓮華經なりみらい にほんこく いっさいしゆじよう たま ところ みようほうれんげきよう

と、かくの如く我も聞きし故ぞかし、現在の大難を思いつづくるにもなみごとく げんざい だいなん

だ、未来の成仏を思つて喜ぶにもなみだせきあへず、鳥と虫とはなけどもみらい じようぶつ ちれん

なみだをちず、日蓮は・なかねども・なみだひまなし、此のなみだ世間のにちれん ちれん

事には非ず但偏に法華經の故なり、若しかあら ひとえ ほけきよう も

らば甘露のなみだとも云つべし、涅槃經には父母・兄弟・妻子・眷属にはかんろ ねはんきよう ふぼ・きようだい さいし けんそく

かれて流すところの涙は四大海の水よりもを・をしといへども、仏法のたたいかい ぶつほう

めには一滴をもこぼさずと見えたり、法華經の行者となる事は過去の
しゆくじゅう
宿習なり、同じ草木なれども仏とつくらるるは宿縁なるべし、仏なりと
ごんぶつ
も権仏となるは又宿業なるべし。

此文には日蓮が大事の法門どもかきて候ぞ、よくよく見ほどこせ給へ意得
このもん
させ給うべし、一閻浮提第一の御本尊を信じさせ給へ、あひかまへてあひ
たま
かまへて信心つよく候て三仏の守護をかうむらせ給うべし、行学の二道を
しんじん
はげみ候べし、行学たへなば仏法はあるべからず、我もいたし人をも教化
ぶつぽう
候へ、行学は信心よりをこるべく候、力あらば一文一句なりともかたらせ
しんじん
給うべし、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經、恐恐謹言。
たま

五月十七日

にちれん かおう
日蓮 花押

追申候、日蓮が相承の法門等前前かき進らせ候き、ことに此の文には
にちれん そうじょう ほうもん さきざき まい

だいじ
大事の事どもしるしてまいらせ候ぞ不思議なる契約なるか、六万恒沙の
じようしゆじようぎよう
上首 上行等の四菩薩の变化か、さだめてゆへあらん、総じて日蓮が身
あたり
に当てる法門わたしまいらせ候ぞ、日蓮もしや六万恒沙の地涌の菩薩の
けんぞく
眷属にもやあるらん、南無妙法蓮華經と唱へて日本国の男女をみちびか
いわ
んとおもへばなり、經に云く一名 上行 乃至唱導之師とは説かれ候はぬ
じようぎようないししうどうしし

か、まことに宿縁しゆくえんのをふところ予が弟子でしとなり給たまう、此の文あひかまへて秘たまし給へ、日蓮にちれんが己証こしようの法門ほうもん等かきつけて候おわぞ、とどめ畢おわんぬ。
さいれんほうごへんじ
最蓮房御返事

◆三〇三

十八円満抄えんまん

日蓮にちれん之これを記しるす

1362p

問いわうて云えんまんく十八円満ほうもんの法門いかんの出処い如何、答いえて云えんまんく源蓮の一字より起れるなり、問いわうて云いく此の事しよしゃく所釈これに之を見たりや、答いえて云いく伝でんぎ教大師ようだいしの修しゆ禅ぜん寺相伝じそうでんの日記にっきに之在り此法門ほうもんは当世天台宗の奥義なり秘すべし秘すべし。

問いわうて云えんまんく十八円満みようもくの名目い如何、答いえて云えんまんく一に理性りしやう円満えんまん・二に修行しゆぎやう円満えんまん・三に化用えんまん円満えんまん・四に果海えんまん円満えんまん・五に相即そうそく円満えんまん・六に諸教しよきやう円満えんまん・七に

いちねんえんまん

一念円満・八に事理円満・九に功德円満・十に諸位円満・十一に種子円満

・十二に権実円満・十三に諸相円満・十四に俗諦円満・十五に内外円満・

かんじんえんまん

十六に観心円満・十七に寂照円満・十八に不思議円満上

じゃくしやうえんまん

ふしぎえんまん

いわ

問うて云く意如何、答えて云く此の事伝教大師の釈に云く次に蓮の

でんぎやうだいし

いわ

ごじゆうげん

五重玄とは蓮をば華因成果の義に名く、蓮の名は十八円満の故に蓮と名く、

なす

えんまん

ゆえ

なす

りしやうえんまんいわ

一に理性円満謂く万法悉く真如法性の実理に帰す実性の理に万法円満す

ことごとしんによほつしやう

えんまん

ゆえ

故に理性を指して蓮と為す、二に修行円満謂く有相無相の二行を修して

りしやう

な

しゆぎやうえんまんいわ

しゆう

まんぎやうえんまん

万行円満す故に修行を蓮と為す、三に化用円満謂く心性の本理に諸法の

ゆえ

しゆぎやう

な

えんまんいわ

しんしよ

しよほう

因分有り此の因分に由つて化他の用を具す故に蓮と名く、四に果海円満と

よ

けた

ぐ

ゆえ

なす

えんまん

は諸法の自性を尋ねて悉く本性を捨て無作の三身を成す法として無作の

しよほう

じしやう

たす

ことごと

むさ

さんじん

むさ

三身に非ること無し故に蓮と名く、五に相即円満謂く煩惱の自性全く菩提

さんじん

あらざ

ゆえ

なす

そうそくえんまんいわ

ぼんのう

じしやう

ぼだい

にして一体不二の故に蓮と為す、六に諸教円満とは諸仏の内証の本蓮に

ゆえ

な

しよきやうえんまん

しよぶつ

ないしやう

しよきよう　ぐそく
諸教を具足して更に闕減なきが故に、
けつげん　ゆえ
七に一念円満謂く根塵相對して一念
いちねんえんまんいわ　ちりそうたい　いちねん
おこ　さんぜんせけん　ぐ　ゆえ
の心起るに三千世間を具するが故に、
八に事理円満とは

一法の当体而二不二にして闕減無く具足するが故に、九に功德円満謂く
妙法蓮華經に万行の功德を具して三力の勝能有るが故に、十に諸位円満
とは但だ一心を点ずるに六即円満なるが故に、十一に種子円満とは一切
衆生の心性に本より成仏の種子を具す權教は種子円満無きが故に皆成
仏道の旨を説かず故に蓮の義無し、十二に權実円満謂く法華実証の時は実
に即して而かも權權に即して而かも実權実相即して闕減無き故に円満の法
にして既に
三身を具するが故に諸仏常に法を演説す、十三に諸相円満謂く一一の相の
中に皆八相を具して一切の諸法常に八相を唱う、十四に俗諦円満謂く十界
・百界乃至三千の本性常住不減なり本位を動せず当体即理の故に、十五
に内外円満謂く非情の外器に内の六情を具す有情数の中に亦非情を具す、
余教は内外円満を説かざるが故に草木成仏

すること能あたわず草木そうもく非ひ成じやうぶつ仏ぶつの故ゆえに亦また蓮れんと名なけず十六じゅうろくに觀心くわんじん円満えんまんとは六塵ちり六
作常さくじやうに心相しんさうを觀くわんず更さらに余義あらずに非ひるが故ゆえに、十七じゅうしちに寂じやく照しやう円満えんまんとは文ぶんに云いく
ほつしよう しか やめん なず
法性ほつしやう寂然じやくぜんなるを止とどめと名なく寂じやくにして而しかかも常に照てらすを觀くわんと名なくと、十八じゅうはちに
ふしぎ えんまん いわ
不思議ふしぎ円満えんまん謂いく細ししく諸法しよほうの自性じしやうを尋たずねるに非有もろもろ非無ふしぎにして諸しよの情量じやうりやうを絶た
して亦また三千さんぜん三觀さんくわん並ならびに寂じやく 照等しやうとうの相無なくく大分だいぶんの深義じんぎ本来ふしぎ不思議ふしぎなるが故ゆえに
名なけて蓮れんと為なるなり、此この十八じゅうはち円満えんまんの義ぎを以もつて委くわく經意きやういを案あんずるに今經こんきやうの
勝能並かんとんに觀心くわんじんの本義良もことに蓮れんの義ぎに由よる、二乘惡人にじやうあくにん草木等そうもくの成仏じやうぶつ・並ならびに
久遠塵点等くおんじんてんは蓮れんの徳とくを離はなれては余義あ有あること無し、座主ざすの伝でんに云いく玄師げんしの
正決たすを尋たずねるに十九じゅうく円満えんまんを以もつて蓮れんと名なく所謂いわゆる当体とうたい円満えんまんを加くわう、当体とうたい円満えんまんと
は当体とうたいの

蓮華れんげなり謂いく諸法しよほう自性じしやう清淨じやうじやうにして染濁せんじやくを離はなるるを本ほんより蓮れんと名なく、一經いつきやう
の說よくに依いるに一切衆生いっさいしゆじやうの心こころの間に八葉はちようの蓮華れんげ有あり男子なんにんは上うへに向むかひ女人にょにんは下した

に向う、成仏じょうぶつの期いたに至ればたといによにん設いい女人いゑどなりと雖も心の間の蓮華速れんげすみやかに還かえりて上に向う、然しかるに今の蓮仏意ぶつゐに在るの時は本性清淨しょうじやうとうたい 当体の蓮と成る若もし機情きじやうに就ついては此の蓮華譬喩れんげひゆの蓮と成る。

次に蓮の体とは体おひに於て多種有おひり、一には徳体の蓮い謂く本性の三諦さんたいを蓮の体と為なす、二には本性の蓮体三千さんぜんの諸法しよほう本このかたとうたいより已来当体不動なるを蓮の体と為なす、三には果海真善の体一切いっさいしよほう諸法しよほうは本是れ三身さんじんにして寂光土じやくかうどに住すたとい設いい一法なりと雖も三身を離いれざる故に三身の果を以て蓮の体と為なす、四には大分真如しんによの体い謂く不変随縁ふへんずいゑんの二種の真如しんによを並びに証分しんによの真如なすと名く本・迹寂じやくしよ 照等じやうとうの相わを分わたず諸法しよほうの自性じしやう不可思議ふかしぎなるを蓮の体と為なす。

次に蓮の宗とは果海の上の因果いんがなり、和尚わじやうの云いく六即ろくそくの次位そくは妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの五字ごじの中には正まさしく蓮の字なすに在り蓮門れんもんの五重玄ごじゅうげんの中には正まさしく蓮の字おこより起おこる、所以何ん理ゆえんいか即りそくは本性なすと名く本性の真如理性しんによりしようえんまん円満えんまんの

ゆえ りそく
故に理即を蓮と名け果海本性の解行証の位に住するを果海の次位と名く、
ちしやだいしじげぶつじよう ないしろう もつ あきらかきようし たま
智者大師自解仏乗の内証を以て明に経旨を見給うに

蓮の義に於て六即の次位を建立し給えり故に文に云く此の六即の義は一家
おい そく こんりゆう たま ゆえ いわ

より起れりと、然るに始覚の理に依て在纏真如を指して理即と為し妙覚の
しか しかく よって しんによ りそく な みようかく

証理を出纏真如と名く、正く出纏の爲めに諸の万行を修するが故に法性
しより しゅってんしんによ なず まさし しゅってん もろもろまんぎよう しゅう ゆえ ほっしやう

の理の上の因果なり故に亦蓮の宗と名く蓮に六の勝能有り一には自性
いんが ゆえ また なず じしやう

清浄にして泥濁に染まず理即、二には華・台・実の
しやうじやう りそく

三種具足して減すること無し三諦と解了するが故に、三には初め種子より実を成ず
ぐそく 名字即諸法即是れ じよう

るに至るまで華・台・実の三種相續して断ぜず修し磨するなき故に、四には華葉
いた だん 観行即念念相續して ぶんしんそく

の中に在つて未熟の実眞の実に似たり相似即、五には花開き蓮現ず分眞即、
あ みじゆく そうじそく れんげん ぶんしんそく

六には花落ちて蓮成ず究竟即、此の義を以ての故に六即の深義は源蓮の字
れんじやう くきようそく もつ ゆえ そく じんぎ

より出でたり。

次に蓮の用とは六即円満の徳に由つて常に化用を施すが故に。

次に蓮の教とは本有の三身果海の蓮性に住して常に浄法を説き八相成道

し四句成利す、和尚云く証道の八相は無作三身の故に四句の成道は蓮教の

ところ

ただむ さんじん

ほんがく

な

処に在り只無作三身を指して本覚の蓮と為す、此の本蓮に住して常に八相

じやうどう

な

しゅぜんじそうでん

につきこれ

を唱へ常に四句の成道を作す故なり已上、修禪寺相伝の日記之をみるに

みようほうれんげきよう

ごじ

おい

ごじゅうげん

蓮の字の五重玄義此く
の如し余は之を略す

にちれん

いわ

妙法蓮華經の五字に於て各各五重玄なりの如し余は之を略す、日蓮案じて云く此

そうでん

ごこと

こんげん

いっしんさんかん

いちねんさんぜんさんたい

そく

きやうち

の相伝の義の如くんば万法の根源、一心三觀・一念三千諦・六即・境智

えんゆう

ほんしやく

しよせん

おこ

の円融・本迹の所詮源蓮の一字より起る者なり云云。

いわ

ごじゅうげん

いかん

いわ

ごじゅうげん

問うて云く総説の五重玄とは如何、答えて云く総説の五重玄とは

みようほうれんげきよう

ごじそくごじゅうげん

妙法蓮華經の五字即五重玄なり、妙は名・

法は体蓮は宗華は用經は教なり、又總説の五重玄に二種有り一には仏意の五重玄二には機情の五重玄なり。

仏意の五重玄とは諸仏の内証に五眼の体を具する即ち妙法蓮華經の

五字なり、仏眼は妙・法眼は法・慧眼は蓮・天眼は華・肉眼は經なり、妙

は不思議に名く故に真空冥寂は仏眼なり、法は分別に名く法眼は仮なり

分別の形なり、慧眼は空なり果の体は蓮なり、華は用なる故に天眼と名く

神通化用なり、經は破迷の義に在り迷を以て所対

と為す故に肉眼と名く、仏智の内証に五眼を具する即ち五字なり五字又

五重玄なり故に仏智の五重玄と名く、亦五眼即五智なり、法界体性智は

仏眼大円鏡智は法眼平等性智は慧眼妙觀察智は天眼成所作智は肉眼なり、

問う一家には五智を立つるや、答う既に九識を立つ故に五智を立つべし、

前の五識は成所作智第六識は妙觀察智第七識は平等性智第八識は大円鏡智

第九識は法界体性智なり。

次に機情ききの五重ごじゅうげん玄げんとは機きの爲ために説く所の妙法蓮華經みょうほうれんげきようは即すなわち是これ機情ききの五重ごじゅうげん玄げんなり首題ごじの五字ごじに付いて五重ごじゅうの一心三觀いっしんさんかん有り、伝いわに云く、

妙 不思議ふしぎの一心三觀いっしんさんかん 天真独朗てんしんどくろうの故ゆえに不思議ふしぎなり。

法 円融えんゆうの一心三觀いっしんさんかん 理性円融りしやうえんゆうなり総じて九箇くを成す。

蓮 得意いっしんさんかんの一心三觀いっしんさんかん 果位ほんがくなり。

華 複疎いっしんさんかんの一心三觀いっしんさんかん 本覺しゅぎやうの修行ほんがくなり。

經 易解いげの一心三觀いっしんさんかん 教談いっしんさんかんなり。

玄文げんもんの第二ごじに此この五重ごじゅうを挙あぐ文ぶんに随したがつて解くすべし、不思議ふしぎの一心三觀いっしんさんかんと

は智者ちしや己証ごしやうの法体理非造作ほつたいりひぞうさくの本有ほんぬの分ぶんなり三諦さんたいの名相みやうそう無なき中に於おいて強しいて

名相みやうそうを以もつて説ふくを不思議ふしぎと名なく、円融えんゆうとは理性法界りしやうほつかいの処ところに本もとより已来このかた

三諦さんたいの理り有り互たがいに円融えんゆうして九箇くと成なりる、得意ふしぎとは不思議ふしぎと円融えんゆうとの三觀さんかんは

凡心の及ぶ所に非^{あら}ず但^ただ聖智の自^じ受^じ用^{ゆう}

の徳を以て量知すべき故に得意と名く、複疎とは無作の三諦は一切法に遍して本性常住なり理性の円融に同じからず故に複疎と名く、易解とは三諦円融等の義知り難き故に且らく次第に附して其の義を分別す故に易解と名く、此れを附文の五重と名く、次に本意に依て亦五重の三観有り、一に三観一心の機、二に一心三観の機、三に住果還の一心三観上の機有りて知識の一切の法は皆是れ仏法なりと説くを聞いて真理を開す入真已後観を極めんが為に一心三観を修す、四に為果行因の一心三観謂く果位究竟の妙果を聞いて此の果を得んが為に種種の三観を修す、五に付法の一心三観五時八教等の種種の教門を聞いて此の教義を以て心に入れて観を修す故に付法と名く、山家の云く塔中の言なり亦立行相を授く三千三観の妙行を修し解行の精微に由つて深く自証門に入る我汝

が

証相を領するに法性寂然なるを止と名け寂にして常に照すを觀と名くと。

問うて云く天真独朗の止觀の時一念三千・一心三觀の義を立つるや、答

えて云く兩師の伝不同なり、座主の云く天真独朗とは一念三千の觀是なり、

山家師の云く一念三千而も指南と為す一念三千とは一心より三千を生ずる

にも非ず一心に三千を具するにも非ず並立にも非ず次第にも非ず故に理非

造作と名く、和尚の云く天真独朗に於ても亦多種有り乃至迹中に明す所の

不變真如も亦天真なり、但し大師本意の天真独朗とは三千三觀の相を亡し

一心一念の義を絶す此の時は解無く行無し 教行証の三箇の次第を経るの

時行門に於て一念三千の觀を建立す、

故に十章の第七の処に於て始めて觀法を明す是れ因果階級の意なり、大師

内証の伝の中に第三の止觀には伝轉の義無しと云云、故に知んぬ証分の

止觀には別法を伝えざることを、今止觀の始終に録する所の諸事は皆是れ

きようぎよう
教行の所撰にして実証の分に非ず、開元符州の玄師相伝に云く言を以て
これ
之を伝うる時は行証共に教と成り心を以て之を觀ずる時は教証は行の体
もつ
と成る証を以て之を伝うる時は教行亦不可思議なりと、後学此の語に意
もつ
を留めて更に忘失すること勿れ宛かも此の宗の本意立教の元旨なり和尚の
とこ
貞元の本義源此れより出でたるなり。
じようげん
みなもとこ

問うて云くいわ天真独朗てんしんどくろうの法滅後ほうめつごに於て何れの時いずれか流布るふせしむべきや、答えて云くいわ像法そうほうに於て弘通くつうすべきなり、問うて云くいわ末法まっぽうに於て流布るふの法みょうもくの名目なむ如何いかん、答えて云くいわ日蓮にちれんの己心相承こしんそうじょうの秘法ひほう此の答に顯すべきなり所謂南無なむ妙法蓮華經みょうほうれんげきやう是なり、問うて云くいわ証文しょうもん如何いかん、答えて云くいわ神力品じんりきほんに云く「爾その時・仏・上行等の菩薩に告げたまわく要を以て之を言わば乃至宣示顯説じやうぎやうす」云云、天台大師云く「爾時・仏告上行てんだいだいしの下は第三結要付属なり」又云く「經中のい

要説要は四事に在り総じて一經を結するに唯四ならくのみ其の枢柄すうへいを撮つて之を授与す」問うて云く今の文は上行菩薩等に授与するの文なり汝何んが故ぞ己心相承こしんそうじょうの秘法ひほうと云うや、答えて云くいわ上行菩薩の弘通くつうし給うべき秘法を日蓮先き立つて之を弘む身に当るの意に非ずや上行菩薩じやうぎやうほさつの代官いちぶんの一分なり、所詮末法に入つて天真独朗てんしんどくろうの法しよせんまっぽう

門むやく無益なり助行には用もちゆべきなり 正行しょうぎようには唯ただ南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようなり、
傳でん教大師ぎょうだいし云く「天台大師てんだいだいしは釈迦しゃかに信順しんじゆんして法華宗ほつけしゆうを助けて震旦しんたんに敷揚ふようし

叡山えいざんの一家てんだいは天台そうじように相承ほつけしゆうして法華宗にほんを助けて日本ぐつうに弘通ぐつうす」今日蓮いまにちれんは

塔中相承たつちゆうそうじようの南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようの七字まっぼうを末法まっぼうの時にほんこく・日本国ぐつうに弘通こす是れ豈あに時

国相応そうおうの仏法ぶつぽうに非あらずや、末法まっぼうに入てんしんつて天真独朗どくろうの法を

弘ひろめて正行しょうぎようと為なさん者は必むげんず無間だいいじよう・大城おに墜おちんこと疑うたが無きし、貴辺きへん年

来こんしゆうの權宗ごんしゆうを捨てて日蓮にちれんが弟子でしと成たまり給しんじつう真実そうおう・時国相応ちじんの智人ちじんなり総じゆうじて

予でしが弟子等でしは我が如ごとく正理しゆぎようを修行たま給たまえ智者学ちしやがくしゆう匠なの身なと為なりても地獄じごくに

墜おちて何あの詮しよせんか有ねんねんるべき所詮なむみょうほうれんげきよう時と念念となに南無妙法蓮華經とと唱となうべし。

上あに拳こぞんぐる所の法門ほうもんは御存知いゑと為まいりと雖も書き進えんまんらせ候えんまんなり、十八円満等

の法門ほうもん能よく能よく案たまじ給ならうべし並びに当体蓮華とうたいれんげの相承そうじよう等日蓮にちれんが己証こしじゆうの法門ほうもん等

前前さきさきに書き進まいらせしが如ごとく委くわしくは修禪寺相伝日記しゆぜんじそうでんにつきの如ごとし天台宗てんだいしゆうの奥義おくぎ之に

過ぐべからざるか、一心三觀・一念三千の極理は妙法蓮華經の一言を出でず敢て忘失すること勿れ敢て忘失するこ

と勿れ、伝教大師云く「和尚慈悲有つて一心三觀を一言に伝う」玄旨伝に

云く「一言の妙旨なり一教の玄義なり」と云云、寿量品に云く「毎に自ら

是の念を作す何を以てか衆生をして無上道に入り速に仏身を成就するこ

とを得せしめん」と云云、毎自作是念の念とは一念三千生仏本有の一念な

り、秘す可し秘す可し、恐恐謹言。

弘安三年十一月三日

日蓮

花押

最蓮房に之を送る

◆三〇四

六郎恒長御消息しょうそく

ぶんえいがんねん
文永元年九月

四十三歳御作

与南部六郎恒長

於安房あわ

1368p

しよせんねんぶつ　むげんじこく
所詮念仏を無間地獄と云う義に二つ有り、一には念仏者を無間地獄とは

にほんこく

いっさいねんぶつ

がんそほうねんしょうにん　せんちやくしゅう　じょうど

ねんぶつ

むげんじこく

日本国・一切念仏衆の元祖法然上人の選択集に浄土三部を除いてより以

いちだいししょうきよういわゆる

ほけきよう

だいにちきよう

はんにやきよう

いっさいだいししょう

外一代聖教所謂・法華経・大日経・大般若経等・一切大小の経を書き

しゃへいかくほう

しょうにんきつきよう

ところ

じょうどさんぶきよう

上げて捨閉閣抛等云云、之に付いて上人亀鏡と挙げられし処の浄土三部経

そ

そつかんきよう

あみだぶつ

いんい

ほうぞうびく

いわ

ただごきやく

の其の中に、雙観経・阿弥陀仏の因位・法蔵比丘の四十八願に云く唯五逆

ひぼうしょうほう

と誹謗正法とを除くと云云、法然上人も乃至十念の中には入れ給ふとい

ほけきよう

ほうねんしょうにん

ないし

あみだぶつ

も

えども、法華経の門を閉じよと書かれ候へば阿弥陀仏の本願に漏れたる人

あら

でしそ

だんな

またもつ

か

ごと

ほけきよう

も

に非ずや、其の弟子其の檀那等も亦以て此くの如し、法華経の文には若し

ないしそ

みようじゅう

あびこく

あみだぶつ

あみだぶつ

あみだぶつ

人信ぜずして、乃至其の人命終して阿鼻獄に入らんと云云、阿弥陀仏の

ほんがん ほけきよう
本願と法華經の文と眞実

ならば法然上人は無間地獄に墮ちたる人に非ずや、一切の經の性相に定めて云く師墮つれば弟子墮つ弟子墮つれば檀那墮つと云云、譬えば謀叛の者の郎從等の如し、御不審有らば選択を披見あるべし是^一。

二には念仏を無間地獄とは法華經の序分・無量義經に云く「方便の力を以て四十年には未だ眞実を顕さず」云云、次下の文に云く「無量無辺を過ぐるとも乃至終に無上菩提を成ずることを得じ」云云、仏初成道の時より白鷺池の辺に至るまで年紀をあげ四十余年と指して其の中の一切經を挙ぐる中に大部の經四部・其の四部の中に次に方等十二部經を説くと云云、是れ念仏者の御信用候三部經なり、此れを挙げて眞実に非ずと云云、次に

ほけきよう
法華經

に云く「世尊せそんの法は久しくして後要のちかならずまさ当に真実しんじつを説くべし」とは念仏等ねんぶつの

不真実しんじつに対し南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうを真実しんじつと申す文なり、次下つぎしもに云く「仏は自ら

大乘だいじやうに住したまへり乃至若し小乗しょうじやうを以て化すること乃至一人に於てせば

我即ち慳貪けんどんに墮す此の事は為て不可なり」云云、此の文の意は法華經ほけきやうを仏

・胸むねに秘しをさめて觀經かんきやう・念仏等の四十余年ねんぶつ よんじゅうよねん

の經計りを人人に授けて法華經ほけきやうを説かずして默止もくしするならば我は慳貪けんどんの者

なり三惡道さんあくどうに墮だすべしと云う文なり、仏すら尚唯念仏なおただねんぶつを行じて一生をすこ

し法華經ほけきやうに移らざる時は地獄じごくに墮だすべしと云云、況や末代まつだいの凡夫ぼんぷ一向いっかうに

南無阿弥陀仏なむあみだぶつと申して一生をすこし法華經ほけきやうに移つて南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱え

ざる者三惡道さんあくどうを免るべきや、第二の卷まぬらに云く今此三界等いわ こんしさんがいと云云、此の文は

日本国にほんこく六十六箇国嶋二つの大地だいちは教主きやうしゅしやくそん釈尊しやくそんの本領しやばもつなり娑婆さば以て此かくの

如く全く阿弥陀あみだの領あらに非ず、其中衆生ちちゆうしじゆうしつぜこし悉是吾子にほんこくと云云、日本国にほんこくの四十九億

九万四千八百二十八人の男女各父母有りといへども其の詮を尋ぬれば教主きようしゅ
釈尊しやくそんの御子なり、三千余社の大小の神祇じんぎも釈尊しやくそんの御子息しそくなり全く
あみだぶつあみだぶつに非あらざるなり。 Ⅱ 文永元年甲子九月 日
ふんえいがんねんきのえね

日蓮 花押
にちれん かおう

南部六郎恒長殿

◆三〇五 波木井三郎殿御返事はきり ごへんじ

文永十年八月 五十二歳
ぶんえい

御作 与南部六郎三郎 1369p

鎌倉かまくらに筑後房弁阿闍梨あじやり大進阿闍梨あじやりと申す小僧等もう こそう之有これあり之を召これして御尊ごそんび
有ある可べし御談義あ有べる可だいじし大事ほうもんの法門等粗ほぼぼ申もうす、
彼等かれらは日本にほんに未いまだ流布るふせ

ざる大法少少之だいほう くれ いまを有す随したがつて御學問注るし申す可きなり。

鳥跡飛び来れり不審ふしんの晴ること疾風の重雲やえくもを巻いて明月に向うが如し、

但し此ただの法門当世ほうもんとうせの人上下じょうげを論ぜず信心しんじんを取り難し其の故は佛法がたを修行そのゆえ ぶつぼう しゆぎようす

るは現世安穩げんせあんのん・後生善処等ごしようぜんしよと云云、而るに日蓮法師法華經しか にちれんほっしほけきよう ぎようじやの行者しやうじやと称すと

雖も留難多し当に知るべし仏意いえど るなん まさに叶わざるか等云云、但し此ただの邪難先業じやなんせんごうの

由御勘氣ごかんきを蒙るの後始めて驚く可おどろきに非ず、其の故は法華經そのゆえ ほけきようの文を見聞けんもんす

るに末法まっぽうに入つて教ごの如く法華經ほけきようを修行しゆぎようする者は留難多かる可るなんきの由・

経文きようもん

赫赫かくかくたり眼有まなこらん者は之これを見るか、所謂法華經いわゆるほけきようの第四いに云く「如来にょらいの現在げんざい

にすら猶怨嫉多し況や滅度めつどの後をや」又五の卷に云く「一切世間怨多いっさいせけんあだおくし

て信じ難がたし」等云云又云く「諸もろの無智むちの人の悪口罵詈あくくめり等し刀杖瓦礫とうじょうがりやくを加う

る有らん」等云云、又云く「惡世あくせの中の比丘びく」等云云、又云く「・或は阿蘭若ある あれんにや

に納衣のうえにして空閑くうげんに在る有らん乃至白衣ないしびやくえ

の与ために法を説いて世に恭敬きやうけいせらるること六通ろくつうの羅漢らかんの如ごとくならん」等云云、

又云く「常いたわに大衆たいしゅうの中に在つて我等われらを毀そしらんと欲ほする故に國王ゆうえ・大臣こくおう波羅だいじん

門居士こじおよ及び余びくの比丘衆ひほうに向つて誹謗ひぼうして我が惡を説かん」等云云、又云く

「惡鬼あつきそ其の身に入つて我を罵罵毀辱めりきにくせん」等云云、又云く「数数しばしば擯出ひんずいせら

る」等云云、大涅槃經だいねはんきやうに云く「一闡提いつせんたい

羅漢らかんの像かたちを作し空閑くうげんの処ところに住し方等ほうとう大乘經典だいじやうきやうてんを誹謗ひぼうすること有るを

諸もろもろの凡夫人ぼんぶ見已おわつて皆真みなの阿羅漢あらかんなり

是れ大菩薩ぼさつなりと謂おもわん」等云云、又云く「正法滅しやうほうして後・像法ぞうほうの中に

於おいて当まさに比丘びく有るべし持律じりつに似像じさうして少しく經きやうを誦誦どくじゆし飲食おんじきを貪嗜とんしし其の

身ちやうようを長養ないしけさし乃至袈裟いえどを服すと雖も猶獵師なかりやうしの細みめに視して徐しずかに行くが如ごとく猫の

鼠ねずみを

うかが
伺ふが如し」等云云、又般泥・經に云く「阿羅漢に似たる一闍提有り、乃至」
等云云、予此の明鏡を捧げ持つて日本国に引き向けて之を浮べたるに一分
も陰れ無し惑有阿蘭若・納衣在空閑とは何人ぞや為世所恭敬如六通羅漢と
は又何人ぞや、諸凡夫見已・皆謂真阿羅漢・是大菩薩とは此れ又誰ぞや、
持律少誦誦經とは又如何、是の經文
の如く仏・仏眼を以て末法の始を照見したまい当世に當つて此等の人人
無くんば世尊の謬乱なり、此の本・迹二門と雙林の常住と誰人か之を
信用せん今日蓮仏語の眞實を顕さんが為日本に配当して此の經を誦する
に・或有阿蘭若住於空処等と云うは、建長寺・寿福寺・極樂寺建仁寺東福
寺等の日本国の禪・律念仏等の寺寺なり、是等の

魔寺は比叡山等の法華天台等の仏寺を破せん爲に出来するなり、納衣持律
等とは当世の五・七・九の袈裟を着たる持斎等なり、爲世所恭敬是大菩薩
とは道隆・良觀・聖一等なり、世と云うは当世の国主等なり、有諸無智
人諸凡夫人等とは日本国中の上下万人なり、日蓮凡夫たる故に仏教を信ぜ
ず但し此の事に於ては水火の如く手に當てて之を知れり、但し法華經の
行者有らば惡口・罵詈・刀杖・擯出等せらる可し云云、此の經文を以て
世間に配當するに

一人も之れ無し誰を以てか法華經の行者と爲さん敵人は有りと雖も法華經
の持者は無し、譬えば東有つて西無く天有つて地無きが如し仏語妄説と成
るを如何、予自讃に似たりと雖も之を勘え出して仏語を扶持す所謂日蓮
法師是なり、其の上仏・不輕品に自身の過去の現証を引いて云く爾の時に
一りの菩薩有り常不輕と名く等云云、又云く惡口罵詈等せらる、又云く・或

は杖 木瓦石を以て之を 打擲 す等云云、 釈尊我が因位の 所行を引き載せ
て末法の始を勸励したもう 不輕菩薩既に法華經の爲に杖 木を蒙りて忽に
妙覺の極位に登らせたまいぬ、 日蓮此の經の故に現身に刀 杖を被むり二
度遠流に當る 當來の妙果之を 疑う可しや、 如來の滅後に四依の大士正像
に出世して此の經を弘通したもうの時にすら 猶留難多し、 所謂付法藏第二
十の提婆菩薩第二十五の師子尊者等・或は命を断たれ頸を刎らる、 第八の
仏駄密多第十三の 竜樹菩薩等は赤き旛を捧げ持ちて七年十二年王の門前に
立てり、 竺の道生は蘇山

に流され法祖は害を加えられ法道三藏は面に火印を捺され、慧遠法師は呵責
せられ天台大師は南北の十師に對当し、 伝教大師は六宗の邪見を破す、
此等は皆王の賢愚に當るに依つて用取有るのみ敢て仏意に叶わざるに非ず
正像猶以て是くの如し何に況や末法に及ぶにおいてをや、 既に法華經の

ため ごとかんき こうむ
為に御勘氣を蒙れば幸の中の幸なり瓦礫を以て金銀に易ゆるとは是なり、
ただ なげ
但し歎くらくは仁王經に云く「聖人去る時七難必ず起る」等云云、七難
いわゆる かんばつ ひょうらん これ
とは所謂大旱魃・大兵乱等是なり、最勝王經に云く「悪人を愛敬し善人
ちばつ よ ゆえ せいしゆくおよ ふううみな もつ
を治罰するに由るが故に星宿及び風雨皆時を以て行われず」等云云、愛
あくにん だれびと
悪人とは誰人ぞや上に挙ぐる所の諸人なり治罰善人とは誰人ぞや上に挙ぐ
さくさくけんひんずい
る所の数数見擯出

の者なり、せいしゆく 星宿とは此の二十余年の天変地天等てんべんちよう是なり、これ 經文の如くなら

ば日蓮を流罪するは国土滅亡の先兆なり、にちれん るざい こくど 其の上・御勘氣已前に其の由

之を勘え出す所謂立正安國論是なり誰か之を疑わん之を以て歎と為す、これ かんが いた いわゆるりっしょうあんこくろんこれ これ うたが これ もつ な

ただ ぶつめつ

但し仏滅後・今に二千二百二十二年なり、ただ 正法一千年には竜樹・天親等

・仏の御使と為て法を弘む然りと雖も但小・權おんつかい もつ ひろ しか いえど

の二教を弘通して実大乘をば未だ之を弘通せず像法に入つて五百年に

天台大師・漢土に出現して南北の邪義を破失して正義を立てたもう、てんだいだいし かんど しゅつげん じゃぎ はしつ せいぎ いわゆる 所謂

教門の五時觀門の一念三千是なり、きようもん かんもん いちねんさんぜんこれ 國を挙げて小釈迦と号す、然りと雖も

円定・円慧に於ては之を弘宣して円戒は未だ之を弘めず、えんね おい これ ぐせん いま これ ひろ ぶつめつ 仏滅後・一千八

百年に入りて日本の伝教大師世に出現して欽明えんね おい これ ぐせん いま これ ひろ ぶつめつ

より已来二百余年の間六宗の邪義之を破失す、このかた えんどん これ ぐせん いわゆるえいざんえんどん だいかいこれ 其の上天台の未だ弘めたま

わざる円頓戒之を弘宣したもう所謂叡山円頓の大戒是なり、えんどん これ ぐせん いわゆるえいざんえんどん だいかいこれ 但し仏滅後・

二千余年三朝の間数万の寺々之有り、然りと雖も本門の教主の寺塔
地涌千界の菩薩の別に授与したもう所の妙法蓮華經の五字未だ之を弘通せ
ず弘むべしと云う經文は有つて国土には無し時
機の未だ至らざる故か、仏記して云く「我が滅度の後・後の五百歳の中に
広宣流布し閻浮提に於いて断絶せしむること無けん」等云云、天台記して
云く「後の五百歳遠く妙道に沾わん」等云云、伝教大師記して云く
「正像稍過ぎ已つて末法太だ近きに有り法華一乗の機今正しく是れ其の時
なり」等云云、此れ等の經釈は末法の始を指し示すなり、外道記して云く
「我が滅後・一百年に當つて仏世に出でたもう」と云云、儒家に記して云く

「一千年

の後・仏法漢土に渡る」等云云、是くの如き凡人の記文すら尚以て符契の
如し況や伝教天台をや何に況や釈迦・多宝の金口の明記をや、当に知るべ

し残る所の本門ほんもんの教主きょうしゅ妙法めうほうの五字ごじ一閻浮提えんぶだいに流布るふせんこと疑うたがい無き者か、
但しただ日蓮法師にちれんほっしに度度たびたび之を聞きける人人ひとびと猶此なほこのの大難だいにんに値あつての後之このを捨すつる
か、貴辺きへんは之これを聞きたもうこと一兩度いちりょうど・一時いちじ
・二時しかか然りと雖もいえど未だ捨いまてたまわず御信心しんじんの由之これを聞く偏ひとえに今生こんじょうの事
に非じ、妙樂大師みょうらくだいしの云くいわ「故に知んぬ末代まつだい一時いちじ聞くことを得聞おわき已おつて信
を生ずること宿種しゆくしゅなるべし」等云云、又云く「運像末うんぞうまつに居し此の真文しんもんを矚みる

みょういん

妙因を植えたるに非ざるよりは実に遇い難しと為す」等云云、法華經に

いわ

云く「過去に十萬億の仏を供養せん人人間に生れて此の法華を信ぜん」又

ねはんぎよう

涅槃經に云く「熙連一恒供養の人・此の惡世に生れて此の經を信ぜん」等

云云取意、

あじゃせ

阿闍世王は父を殺害し母を禁固せし惡人なり、然りと雖も涅槃經

の座に來つて法華經を聴聞せしかば現世の

げんせ

惡瘡を治するのみに非ず四十年の壽命を延引したまい結局は無根初住の

仏記を得たり、提婆達多是閻浮第一の一闍提の人・一代聖教に捨て置か

れしかども此の經に値い奉りて天王如來の記☆を授与せらる彼を以て之を

推するに末代の惡人等の成仏不成仏は罪の輕重に依らず但此經の信不信

に任す可きのみ、而るに貴辺は武士の家の

仁昼夜殺生の惡人なり、家を捨てずして此所に至つて何なる術を以てか

三惡道を脱る可きか、能く能く思案有る可きか、法華經の心は当位即妙・

さんあくどう

のが

べ

よく

よく

あ

べ

か

ほけきよう

の心は

とういそくみよう

ふかいほんい　もう　ざいごう
不改本位と申して罪業を捨てずして仏道を成ずるなり、天台の云く「他経
は但善に記して悪に記せず今経は皆記す」等云云、妙楽の云く「唯円教
の意は逆即是順なり自余の三教は逆順定まる

ゆえ　にぜん　とくどう　む　これ　しる　べ　いえど　みようもく
が故に」等云云、爾前分分の得道有無の事之を記す可しと雖も名目を知る
これ　もう　しか　いえど　だいたいこれ　でしこ　やから
人に之を申すなり、然りと雖も大体之を教る弟子之れ有り此の輩等を召し
ほほこれ　そのときこれ　しる　もう　べ　きようきようきんげん
て粗之を聞くべし、其の時之を記し申す可し、恐恐謹言。

ぶんえい
文永十年太歳癸酉八月三日

にちれん　かおう
日蓮　花押

かいのくに　ごへんじ
甲斐国南部六郎三郎殿御返事

眠れる師子ししに手を付けざれば瞋いからず流にさを・を立てざれば浪立たず
謗法ほうほうを呵か嘖やくせざれば留難るなんなし、若善比丘けねん見壞ね法者置不か呵か嘖やくの置の字を・を
それずんば今は吉よし後を御らんぜよ無間地獄むげんじごく疑たが無し、故ゆえに南岳大師なんがくだいしの四
安樂行あんらくぎょうに云いく「若もし菩薩ぼさつ有りて惡人あくにんを將護しょうごして治罰ちばつすること能あたわず、其それ
をして惡を長ぜしめ善人ぜんにんを悩乱のうらんし正法しょうほうを敗壞せば此の人は實に菩薩ぼさつに
非あらず、外には詐侮げんを現げんじ常じょうに是の言ことを作なさん、我は忍辱にんにくを行なずと、其その人
命終みょうじゅうして諸の惡人と俱ともに地獄じごくに墮おちなん」云云、十輪經じしんに云いく「若もし誹謗ひぼう
の者ならば共住すべからず亦親近またしんこんせざれ、若もし親近しんこんし共住せば即すなわち阿鼻地獄あびじごく
に趣おもむかん」云云、梅檀せんだの林に入りぬればたをらざるに其身くんに薰ひず誹謗ひぼうの者

に親近しんこんすれば所修しよしゆう

の善根ぜんこん悉く滅して俱ともに地獄じごくに墮落だらくせん、故ゆえに弘決くけつの四いに云く「若もし人本惡もと

無なけれども惡人あくにんに親近しんこんすれば後に必ず惡人あくにんと成りて惡名あくみょう天下てんかに遍へんし」凡およそ

謗法ほうぼうに内外ないげあり國家こっかの二是これなり、外にほんとは日本六十六ヶ國ほの謗法ほうぼう是なり、内

とは王城九重ここのえの謗是これなり、此ないげの内外ないげを禁制きんせいせずんば宗廟社そうびようしやよく禪しんの神かみに捨すてて

られて必ず國家こっか亡なぶべし、如何いかんと云いうに宗廟そうびよう

とは國王こくおうの神かみを崇あがむ社やしろとは地ちの神かみなり禪しんとは五穀ごこくの總名そうめい五穀ごこくの神かみなり、此こ

の兩りやうの神法味ほうみに飢うえて國くにを捨すてて給たまう故ゆえに國土こくど既に日日すいげん衰減すいげんせり、故ゆえに弘決くけつ

に云く「地ち広ひろくして尽ことごとく敬べす可べからず封なじて社やしろと為なす禪しんとは謂いく五穀ごこく

の總名そうめいにして即五穀そくごこくの神かみなり」故ゆえに天子てんしの居こする所ところには宗廟そうびようを左ひだりにし社やしろ禪しん

を右みぎにし四時しじ・五行ごうぎやうを布つき列れつぬ故ゆえに國くにの亡なぶるを以もつて社やしろ禪しんを失うふと為なす、

故ゆえに山家大師さんけだいしは「國くにに謗法ほうぼうの聲こゑ有あるによつて万民數ばんみんを減へじ家いへに讚教つとの勤つとめ

あれば七難ひちなん必ず退散ひせん」と、故ゆえに分分ないげあの内外有るべし。

五月十六日

在御判

南部六郎殿

日蓮にちれん

◆三〇七

地引御書ごしよ

弘安四年十一月こうあん

六十歳御作

与南

部六郎

1375p

坊は十間四面しめんにまたひさしさしてつくりあげ二十四日に大師講だいし並びに延なら

年心のごとくつかまつりて二十四日の戌亥いぬいの時御所にすゑして三十余人を

もつて一日経いちにちきやうかきまいらせ並びに申酉なひの刻に御供養くようすこしも事ゆへなし、

坊は地ひき山づくりし候いしに山に二十四日一日もかた時も雨ふる事なし、

十一月ついたちの日せうばう

つくり馬やつくる八日は大坊のはしらだて九日十日ふき候あいわ了んぬ、しか

るに七日は大雨だいう八日九日十日はくもりてしかもあたたかなる事春の終りの

ごとし、十一日より十四日までは大雨だいうふり大雪下りて今に里にきへ

ず、山は一丈二丈雪こほりてかたき事かねのごとし、二十三日四日は又そ

らはれてさむからず人のまいる事洛中かまくらのまちの申酉さるとりの時のごとし、
さだめて子細しさいあるべきか。

次郎殿等の御きうだちをやのをほせと申し我が心にいれてをはします事
なればわれと地をひきはしらたて、とうひやうえむまの入道にゅうどう三郎兵衛尉ひょうえのじょう
等い已下の人人ひとびと・一人もそらくのぎなし、坊はかまくらにては一千貫にても
大事だいじとこそ申し候へ。

ただし一日経いちにちぎょうは供養くようしさして候、其そのの故は御所念ゆえの叶かなわせ給たまいて候なら
ば供養くようしはて候はん、なにと申し候とも御きねんかなはずば言のみ有り
て実なく華さいてこのみなからんか、いまも御らんぜよ此の事叶このたびはずば今度
・法華経ほけきょうにては仏になるまじきかと存ぞうじ候はん、叶かないて候はば二人よりあ
ひまいらせて供養くようしはてまいらせ候はん、神たましいならはすはねぎからと申す、
此の事叶ほけきょうはずば法華経信ほけきょうじてなにかせん、事事又又申すべく候恐恐きょうきょう。

十一月廿五日

南部六郎殿

にちれんかおう
日蓮花押

◆三〇八

波木井殿御報 はきり

弘安五年九月 こうあん 六十一歳御作

1376p

畏^{かしこ}み申^{もう}し候、みちのほどべち事候はでいけがみまでつきて候、みちの間

山と申^{もう}しかわと申^{もう}しそこばく大事^{だいじ}にて候いけるをきうだちにす護^{まも}せられま

いらせ候いて難^{なん}もなくこれまででつきて候事をそれ入り候ながら悦^{よろこ}び存し候、

さてはやがてかへりまいり候^{そうじ}はんずる道にて候へども所らうのみにて候へ

ば不ぢやうなる事も候^{そうら}はんずらん。

さりながらも日本^{にほんこく}国にそこばくもてあつかうて候みを九年まで御きえ候

いぬる御心^{おんこころざし}ざし申すばかりなく候へばいづくにて死に候ともはかをばみの

ぶさわにせさせ候べく候。

又くりかげの御馬はあまりをもしろくをぼへ候程にいつまでもうしなふ
まじく候、ひたちのゆへひかせ候はんと思ひ候がもし人にもぞとられ
候はん、又そのほかいたはしくをぼへばゆよりかへり候はんほど・かづさ
の

もばら殿のもとにあづけをきたてまつるべく候にしらぬとねりをつけて候
ては・をぼつかなくをぼへ候、まかりかへり候はんまで此のとねりをつけ
をき候はんぞんじ候、そのやうを御ぞんぢのために申し候、恐恐謹言。

九月十九日 日蓮

しんじょう

進上 波木井殿 御報

はきり

所らうのあひだはんぎやうをくはへず候事恐れ入り候。

◆三〇九

大井莊司入道御書

建治二年

五十五歳御作

1377p

柿三本酢一桶・くぐたち・土筆給い候い畢んぬ、唐土に天台山と云う山
に竜門と申して百丈の滝あり、此の滝の麓に春の初より登らんとして多く
の魚集れり、千万に一も登ることを得れば竜となる、魚・竜と成らんと願
うこと民の昇殿を望むが如く貧なるものの財を求むるが如し、仏に成るこ
とも亦此くの如し彼の滝は百丈早き事合張
の天より箭を射徹すより早し、此の滝へ魚登らんとすれば人集りて羅網を
かけ釣をたれ弓を以て射る左右の辺に間なし、空には・鷺鷥烏夜は虎・狼
・狐・狸・何にとなく集りて食い噬む、仏になるをも是を以て知りぬべし、

有情輪廻生死六道と申して我等が天竺に於て師子と生れ漢土・日本に於て
虎狼野干と生れ天には☆・鷲・地に

は鹿蛇と生れしこと数をしらず、・或は鷹の前の雉・☆の前の鼠と生れ、
生ながら頭をつつき・ししむらをかまれしこと数をしらず、一劫が間の身
の骨は須弥山より高く大地よりも厚かるべし、惜き身なれども云うに甲斐
なく奪われてこそ候いけれ、然れば今度・法華經の為に身を捨て命をも奪
われ奉れば無量無数劫の間の思ひ出なるべしと思ひ切り給うべし、
穴賢穴賢、又又申すべし、恐恐謹言。

大井莊司入道殿

建治二年丙子 日蓮花押

柑子こうじ一籠かこ・種種しゅじゅの物送り給候、法華經第七卷藥王品に云く衆星の中に
 がつてんしもっともこれだいいち
 月天子最も為第一なり此の法華經も亦復是くの如し、千万億種の諸の經法
 おい もっともこれしょうめい
 の中に於て最も為照明なり云云、文の意は虚空の星は・或は半里・或は一
 ある
 里・或は八里・或は十六里なり、天の満月輪は八百里にてをはします、
 ある
 華嚴經六十卷・或は八十卷・般若經六百卷・方等經六十卷・涅槃經四十
 けこんぎよう ある
 卷・三十六卷・大日經・金剛頂經・蘇悉地經觀經・阿弥陀經等の無量
 だいにちきよう こんごうちようきよう そしちちきようかんきよう あみだ むりよう
 むへん しよきよう ほけきよう こと
 無辺の諸經は星の如し、法華經は月の如しと説かれて候經文なり、此れ
 りゆうじゅぼさつむちやくぼさつ てんだいだいしぜんむいさんぞう ろんし にんし
 は竜樹菩薩無著菩薩・天台大師善無畏三蔵等の論師・人師の言にもあら
 きようしゅしやくそん きんげん たと てんし
 ず、教主釈尊の金言なり譬へば天子の一言の如し、又法華經の藥王品に
 ほけきよう やくおうほん

いわよく能く是の經典を受持すること有らん者も亦復是くの如し一切衆生の中に於て亦為第一等云云、文の意は法華經を持つ人は男ならば何なる田夫にても候へ、三界の主たる大梵天王・釈提桓因・四大天王・転輪聖王乃至・漢土・日本の国主等にも勝れたり、何に況や日本国の大臣・公卿源平の侍・百姓等に勝れたる事申すに及ばず、女人ならば女☆戸迦・吉祥天女・漢の李夫人・楊貴妃等の無量無辺の一切の女人に勝れたりと説かれて候、案ずるに經文の如く申さんとすればをびただしき様なり人もちゐん事もかたし、此れを信ぜじと思へば如来の金言を疑ふ失は經文明かに阿鼻地獄の業と見へぬ、進退わづらひ有り何がせん、此の法門を教主釈尊はよんじゅうよなんの内にかくさせ給う、さりとてはとて御年七十二と申せ四十余年が間は☆の内にかくさせ給う、さりとてはとて御年七十二と申せしに南閻浮提の中天竺王舎城の丑寅耆闍崛山にして説かせ給いき、今・日本国には仏御入滅一千四百余年と申せしに来りぬ、夫より今七百余年な

り、先き一千四百余年が間は日本^{にほんこく}の^{こく}人^{おう}国^{だいじん}王^{ないし}・大臣^{ばん}乃至^{みん}万民一人も此の事を知らず。

今・此の法華經ほけきょうわたらせ給たまへども・或は念仏ねんぶつを申し・或は眞言しんこんにいとま
を入れぜんしゅうじさい禪宗持齋もつなんと申し・或は法華經あるほけきょうを読む人は有あるりしかども南無なむ
妙法蓮華經みょうほうれんげきょうと唱となうる人は日本国にほんこくに一人も無し、日蓮にちれん始めて建長五年けんちやうの夏
の始より二十余年が間ただ唯一人當時の人の念仏ねんぶつを申すやうに唱となうれば人ごと
に是れを笑こひ結句けっこはのりうち切り流し頸をはねんと

せらるること一日・二日・一月・二月・一年・二年ならざればこらふべし
ともをばえ候はねども、此の經の文を見候へば檀王だんおうと申せし王は千歳せんさいが間
阿私仙人あしせんじんに責めつかはれ身を牀ゆかとなし給ふ、不輕菩薩ふぎやうぼさつと申せし僧は多年が
間・

悪口罵詈あつくめりせられ刀杖瓦礫とうじやうがりやくを蒙り、藥王菩薩やくおうぼさつと申せし菩薩ぼさつは千二百年が間・
身をやき七万二千歳せんさいひぢを焼たき給ふ、此れを見はんべるに何いかなる責め有あるり
ともいかでかさてせき留とどむべきと思ふ心に今まで退轉たいてん候はず。

然るに在家の御身として皆人にくみ候に、而もいまだ見参に入り候はぬ
に何と思し食して御信用あるやらん、是れ偏に過去の宿植なるべし、来生
に必ず仏に成らせ給うべき期の来りてもよをすこころなるべし、其の上
経文には鬼神の身に入る者は此の経を信ぜず釈迦仏の御魂の入りかはれる
人は此の経を信ずと見へて候へば・水に

月の影の入りぬれば水の清むがごとく御心の水に教主釈尊の月の影の入
り給ふかと・たのもしく覚へ候、法華経の第四法師品に云く「人有て仏道
を求めて一劫の中に於て合掌して我が前に在つて無数の偈を以て讃めん、
是の

讃仏に由るが故に無量の功德を得ん、持経者を歎美せんは其の福復た彼れ
に過ぎん」等云云、文の意は一劫が間教主釈尊を供養し奉るよりも末代
の浅智なる法華経の行者の上下万人にあだまれて餓死すべき比丘等を供養

せん功德くどくは勝まさるべしとの經文きようもんなり。

一劫いつじうと申もうすは八万里はちまんなんど候そうらはん青めの石をやすりを以もつて無量劫むりやうじうが間ます
るともつきまじきを、梵天ぼんてん三銖さんしゆの衣えと申もうしてきはめてほそくうつくしきあ
まの羽衣むりようを以もつて三年さんねんに一度下ひとたびくだしてなづるになでつくしたるを一劫いつじうと申もうす、此
の間無量むりようの財たからを以もつて供養くようしまいらせんよりも濁世じよくせの法華經ほけきようの行者ぎやうじやを供養くよう
したらん功德くどくはまさるべきと申もうす文なり

、此の事信じがたき事なれども法華經はこれにをびただしく、ことごとしき事どもあまた侍べり、又信ぜじと思へば多宝仏は証明を加へ教主釈尊は正直の金言とならせ給ふ、諸仏は広長舌を梵天につけ給いぬ、父のゆづりに母の状をそゑて賢王の宣旨を下し給うが如し、三つは一同なり誰か是れを疑はん、されば是れを疑いし無垢論師は舌五つに破れ高法師は舌ただれ三階禪師は現身に大蛇となる徳一は舌八つにさけにき、其れのみならず此の法華經並に行者を用ひずして身をそんじ家をうしない国をほろぼす人人・月支・震旦に其の数をしらず、第一には日天朝に東に出で給うに大光明を放ち天眼を開きて南閻浮提を見給うに法華經の行者あれば心に歡喜し行者をにくむ国あれば天眼をいからして其の国をにらみ給い、始終用いずして国の人にくめば其の故と無くいくさをこり他国より其の国を破るべし

と見えて候。

昔し徳勝童子とくしょうどうじと申せしをさなき者は土の餅しやかぶつを釈迦くよう仏に供養たてまつし奉りて阿育あそか

だいおう

えんぶだい

大王と生れて閻浮提えんぶだいの主と成りて結句けっくは仏になる、今の施主せしゅの菓子等を以

ほけきよう

くよう

じゅうらせつによ

よろこ

ことごと

つて法華經を供養します、何かに十羅刹女等も悦び給らん、悉く尽し

がたく候、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經。

なむみょうほうれんげきよう

なむみょうほうれんげきよう

二月十七日

日蓮花押にちれんかおう

松野殿御返事ごへんじ

鷺目がもくひとゆい一結白米一駄白小袖一送り給畢ぬ、抑おまんも此の山と申すは南は野山もつ

漫漫として百余里に及べり、北は身延山高く峙そばだちて白根が嶽しらねにつづき西に

は七面と申す山峨峨おもてもうとして白雪絶えず、人の住家一字もなし、適すみかま問いく

る物とては梢こずえを伝ふ☆猴みこうなれば少しばひくも留まる事なく還かえるさ急ぐ恨みなる

哉、東は富士河漲みぎりて流沙りゅうしゃの浪に異ならず、かかる所なれば訪う人も希まれな

るに加様に度度音信たびたびおとずれせさせ給ふ事不思議ふしぎの中の不思議ふしぎなり。

実相寺じっそうじの学徒日源にちれんは日蓮きふくに帰伏して所領しよりようを捨て弟子でし・檀那だんなに放され御座

て我身わがみだにも置き処ところなき由承たまわり候に日蓮にちれんを訪とむらい衆僧しゅうそうを哀みさせ給う事誠

の道心どうしんなり聖人しょうにんなり、已すでに彼の人は無雙むそうの学生ぞかし然しかるに名聞みょうもん名利みょうりを

捨てて某それがしが弟子でしと成りて我が身には我不愛がふあいしん身命みみょうの修行しゅぎょうを致いたし仏ごおんの御恩ごおんを報はたらぜんと面おもて面めんまでも教化きょう化申し此こくの如ごとく供養くきやう

等らまで捧ささげしめ給たまう事こと不思議ふしぎなり、末世まうしには狗犬くけんの僧尼そうには恒沙こうしゃの如ごとしと仏

は説たまかせ給たまいて候こうなり、文ぶんの意いは末世まうしの僧比丘尼びくには名聞みょうもん名利みんりに著じゃくし上じやうには

袈裟衣けさぎを著きたれば形かたちは僧比丘尼びくにに似にたれども内心ないしんには邪見じゃけんの剣けんを提ひっさげて我

が出入でんなんする檀那だんなの所もとへ余ほかの僧尼そうにをよせじと無量むりやうの讒言ざんげんを致いたす、余そうにの僧尼そうにを

寄たせずして檀那だんなを惜おしまん事こと譬たとえば犬いぬが前まへに人ひとの家に至いたて物ものを得えて食くふが、

後に犬いぬの来きるを見ていいがみほへ食合くいあうが如ごとくなるべしと云いう心こころなり、是かくの如ごと

きの僧尼そうには皆みな皆みな惡道あくどうに墮だすべきなり、此こ学徒がくせい日源にっげんは学生がくせいなれば此この文ぶんをや

見みさせ給たまいけん、殊ことの外ほかに僧衆そうしゆを訪かえりひ顧たみ給たまう事こと誠まことに有あり難かたく覺おぼえ候こう。

御文おんぶんに云いく此この経きやうを持たち申もうして後退たいてん転てんなく十如じゆのぜ是自じが我げ偈ぎを讀よみ奉たてまつり題目だいもく

を唱もうへ申もうし候こうなり、但ただし聖人しょうにんの唱となえさせ給たまう題目だいもくの功徳くどくと我われ等らが唱もうへ

申す題目の功德と何程の多少候べきやと云云、更に勝劣あるべからず候、
其の

故は愚者ぐしゃの持ちたる金も智者ちしやの持ちたる金も愚者ぐしゃの然せる火も智者ちしやの然せる火も其その差別さべつなきなり、但し此ただの經の心に背そむいて唱なへば其その差別さべつ有るべきなり、此の經の修行しゆぎやうに重重のしなあり其大概たいがいを申せば記の五に云く「惡の数を明あきらかすことをば今の文には説不説ふせつと云ふのみ」、有ある人此これを分わかつて云いわく「先きに惡因を列ね次ぎに惡果を列ぬ惡の因に十四あり・一に慢・二に懈怠けたい・三に計我・四に淺識せんしき・五に著欲・六に不解・七に不信ふしん・八に顰蹙ひんじゆく・

九に疑惑ぎわく・十に誹謗ひぼう・十一に輕善・十二に憎善・十三に嫉善・十四に恨善なり」此の十四誹謗ひぼうは在家ざいけ・出家しゆつけに亘わたるべし恐る可べし恐る可べし、過去かこの不ふぎきようほさついっさいししゆじようふつしよう不ふききようは一切衆生に仏性あり法華經ほけきやうを持たば必ず成仏じやうぶつすべし、彼れを輕んじては仏を輕んずるになるべしとて礼拝らいはいの行をば立てさせ給たまいしなり、法華經ほけきやうを持たざる者をさへ若もし持たもちやせんずらん

ぶつしょう

仏性ありとてかくの如く礼拝し給う何に況や持てる在家・出家の者をや、

此の經の四の卷には「若しは在家にてもあれ出家にてもあれ、法華經を持ち

説く者を一言にても毀る事あらば其の罪多き事、釈迦仏を一劫の間直ちに

そし たてまつみ

毀り奉る罪には勝れたり」と見へたり、或は「若実若不実」とも説かれ

そし たてまつみ

たり、之れを以つて之れを思ふに忘れても法華經を持つ者をば互に毀るべ

そし たてまつみ

からざるか、其故は法華經を持つ者は必ず皆仏なり仏を毀りては罪を得る

なり。

いこころえ とな

加様に心得て唱うる題目の功德は釈尊の御功德と等しかるべし、釈に

い わ あ び え しょう

云く阿鼻の依正は全く極聖の自身に処し毘盧の身土は凡下の一念を逾え

ず 云云、 十四誹謗の心は文に任せて推量あるべし、

加様に法門を御尋ね候

こと しょう

事誠に後世を願はせ給う人能く是の法を聴く者は斯の人亦復難しとて此

おんつかい

經は正き仏の御使世に出でずんば仏の御本意の如く説く事難き上、此の經

のいはれを問たずい尋たずねて不審ふしんを明あきらめ能よく信なんずる者難なんかるべしと見えて候、
何いかに賤いやしき

者なりとも少し我れより勝すぐれて智慧ちえある人には此の経のいはれを問たずい尋たずね
給たまうべし、然しかるに惡世あくせの衆生しゅじょうは我慢がまん・偏執へんしゅ名聞めいもん名利めいりに著じゃくして彼れが弟子でし
と成るべきか彼れに物を習はば人にや賤あくだうく思はれんずらんと、不断ふだん惡念あくねんに
住あくだうして惡道だに墮だすべしと見えて候、法師品ほうしほんには「人有むりようりて八十億劫の間無量
の宝つくを尽して仏を供養くようし奉たてまつらん功德くどく

よりも法華經ほけきょうを説くかん僧そうを供養くようして後に須臾しゆゆの間も此の經の法門ほうもんを聴聞ちやうもんする事あらば我れ大なる利益功德りやくくどくを得うべしと悦むぶべし」と見えたり、無智むちの者は此の經を説く者に使くれて功德くどくをうべし、何いかなる鬼畜きこくなりとも法華經ほけきょうの一偈いちげ・一句いっくをも説かん者をば「当まさに起ちて遠く迎むかえて当まさに仏うやもを敬うやもうが如くすべし」の道理どうりなれば仏くの如く互たがいに敬うやもうべし、例せば宝塔品ほうとうほんの時の釈迦しゃか・多宝たほうの如ごとくなるべし。

此の三位房げれつは下劣げれつの者なれども少分ほけきょうも法華經ほうもんの法門ほうもんを申もうす者なれば仏くの如く敬ほうもんいて法門ほうもんを御尋たずねあるべし、依法えほう不依人ふえこ此れを思ふべし、されば昔むかし独りひとりの人有りて雪山せっせんと申す山に住み給そき其の名を雪山童子せっせんどうじと云う、蕨わらびをおり菓このみを拾ひろいて命をつぎ鹿の皮きを著物きものとこしらへ肌をかくし閑に道を行じ給たまいき、此の雪山童子せっせんどうじおもはれけるは倩つらつら

世間せけんを觀みずるに生死無常しやうじむじやうの理なれば生ずる者は必ず死す、されば憂世うきよの中

のあだはかなき事たとえ譬たとば電光の如くごと朝露の日に向ひて消るに似たり、風の前

の灯ともの消へやすく芭蕉ばしやうの葉の破やすきに異ならず、人みな皆此このの無常むじやうを遁のがれ

ず終ついに一度ひとたびは黄泉こゝせんの旅に趣おもむくべし、然しかれば冥途めいどの旅を思うに闇闇としてく

らければ日月にちがつ・星宿せいしゆくの光もなく、せ

めて灯燭ともしびとてともす火だにもなし、かかる闇くらき道に又ともなふ人もなし、

娑婆しゃばにある時は親類しんるいきやうだい兄弟さいし・妻子けんぞく・眷属こんぞく集りて父は慈あわれみの志こころざし高く母は悲

しみの情深く、夫婦かいろうどうけつは海老同穴ちぎの契りとして大海たいかいにあるえびは同じちくしやう畜生ちくしやうなが

ら夫妻ふすまちぎり細かに、一生いっしよ一処いっしょにともなひて離いぬれ去る事なきが如くごと・鴛鴦えんおう

の衾ふすまの下に枕を並べて遊び戯たわむれる中なれども・彼

の冥途めいどの旅には伴なふ事なし、冥冥ひととして独り行く誰か来りて是非ぜひを訪はは

んや、・或あるは老少ふじやう不定の境なれば老いたるは先立わか若きは留とどまる是これは順次

の道理どうりなり歎なげきの中にもせめて思いなぐさむ方も有りぬべし、老いたるは

留まりとど若わかきは先立つされば恨いたの至いたつて恨めしきは幼くして親に先立つ子、

嘆なげきの至いたつて歎なげかしきは老いて子を先立

つる親なり、是かくの如ごとく生死しやうじむじやう無常老少ふじやう不定の境あだにはかなき世の中に但

昼夜こんじやうに今生たくわえの貯ちをのみ思せきひ朝夕ちやうせきに現在げんざいの業をのみなして、仏をも敬は

ず法をも信ぜず無行むぎやう無智むちにして徒いたずらに明あかし暮まして、閻魔えんまの庁庭に引き迎へ

られん時は何を以つてか資糧として三界の長途を行き、何を以て船筏として生死の曠海を渡りて実報・寂光の仏土に至らんやと思ひ、迷へば夢覺れば寤しかじ夢の憂世を捨てて寤の覺りを求めんにはと思惟し、彼の山に籠りて觀念の牀の上に妄想顛倒の塵を払ひ偏に仏法を求め給う所に。

帝 釈遙に天より見下し給いて思し食さるる様は、魚の子は多けれども魚

となるは少なく菴羅樹の花は多くさけども菓になるは少なし、人も又此く

の如し菩提心を発す人は多けれども退せずして実の道に入る者は少し、

すべて凡夫の菩提心は多く惡縁にたばらかされ事にふれて移りやすき物なり、

鎧を著たる兵者は多けれども戦に恐れ

をなさざるは少なきが如し、此の人の意を行て試みばやと思いて帝 釈鬼神

の形を現じ童子の側に立ち給う、其の時・仏世にましまさざれば雪山童子

普く大乘經を求むるに聞くことあたはず、時に諸行無常是生滅法と云

う音ほのかに聞ゆ、童子驚き四方を見給うに人もなし但鬼神近付て立ちたり、其の形けはしくをそろしくて頭のか

みは炎の如く口の齒は剣の如く目を瞋らして雪山童子をまほり奉る、此れを見るにも恐れず偏に仏法を聞かん事を喜び怪しむ事なし、譬えば母を

離れたるこうしほのかに母の音を聞きつるが如し、此事誰か誦しつるぞ・

いまだ残の語あらんとて普ねく尋ね求るに更に人もなければ、若しも此の語は鬼神の説きつるかと思へどもよも・さ

もあらじと思ひ彼の身は罪報の鬼神の形なり此の偈は仏の説き給へる語なり、かかる賤き鬼神の口より出づべからずとは思へども、亦殊に人もなければ若し此の語汝が説きつるかと思へば、鬼神答て云う我れに物な云いそ食せずして日数を経ぬれば飢え疲れて正念を覚え、既にあだごと云いつるならん我うつける意にて云へば知る事

もあらしと答ふ、童子の云く我れは此の半偈を聞きつる事半なる月を見る
が如く半なる玉を得るに似たり、慥に汝が語なり願くは残れる偈を説き
給へとのたまふ、鬼神の云く汝は本より悟あれば聞かずとも恨は有るべか
らず吾は今飢に責められたれば物を云うべき力なし都て我に向いて物な
いそと云う、童子猶物を食ては説かんやと

問う、鬼神きじん答て食ては説ときてんと云う、童子悦どうじよろこびてさて何物なにものをか食とする
ぞと問へば、鬼神きじんの云く汝なんじ更に問うべからず此これを聞きては必ず恐を成さ
ん、亦汝またなんじが求むべき物にもあらずと云へば童子猶責めて問たまい給はく其その物
をとだにも云はば心みにも求めんとの給たまえば鬼神きじんの云く我れ但人の和やわらか
なる肉を食し人のあたたかなる血を飲
む、空そらを飛び普あまねく求れども人をば各守り給たまう仏神ぶっしんましませば心まかに任せて
殺しがたし、仏神ぶっしんの捨て給たまう衆生しゅじょうを殺して食するなりと云う、其時そのとき・雪山せっせん
童子どうじの思たまい給はく我れ法の為ために身を捨て此の偈げを聞き畢おわらんと思おもいて、汝
が食物ここに有り外に求むべきにあらず、我が身いまだ死そせず其の肉あ
たかなり我が身いまだ寒ひえず其の血あたたか
ならん、願ねがひくは残のこの偈げを説たまき給へ此の身を汝なんじに与えんと云う、時に鬼神きじん
大に瞋おおいて云く誰か汝なんじが語ことばを實たのとは憑たのむべき、聞いて後には誰をか証人と

して糾たださんと云う、雪山童子せつせんとうじの云いわく此の身は終ついに死すべし徒いたすらに死せん命を
法の為ために投げばきたなくけがらはしき身を捨てて後生ごしょうは必ず覺さとりを開き仏
となり清妙なる身を受くべし、土器を捨て

て宝器かわに替かるが如ごとくなるべし、梵天ぼんてん・帝釈たいしゃく・四大天王じゅつぽう十方じふぱうの諸仏しよぶつ・菩薩ぼさつ

を皆証人みなとせん我れ更に偽いつわるべからずとの給たまえり、其の時鬼神そのとききじん少し和で

若もし汝なんじが云いう処実ところならば偈げを説かんと云う其の時雪山童子大に悦よろこんで身

に著きたる鹿の皮を脱いで法座ほうざに敷頭しきかうを地に付け掌たなごころを合せ跪ひざまずき、但願ただく

は我が為ために残のこの偈げを説とき給たまへと云うて至心に深く敬

い給たまふ、さて法座ほうざに登り鬼神きじん偈げを説いて云いわく生滅滅已しょうめつめつち・寂滅じゃくめつ為楽ためらと此の

時雪山童子是を聞き悦よろこび貴とうとみ給たまう事限なく後生ごしょうまでも忘れじと度度たびたび誦じゆして

深く其その心にそめ、悦よろこばしき処ところはこれ仏の説とき給たまへるにも異ならず歎なげかわ

敷ところき処ところは我れ一人のみ聞きて人の為ために伝へざらん事をと深く思おもいて石の上

・壁おもての面・路ほとりの辺しよの諸木しよごとに此この偈げを書き

付け願いのくは後おわに來そらん人そ必ず此この文ぎを見其その義理ぎをさとり実じの道みちに入れと

云いい畢おわつて、即そく高たかき木きに登のぼりて鬼神きじんの前まへに落おち給たまへり、いまだ地ちに至いたらざ

るに鬼神きじん俄たに帝たい釈しやくの形かたちと成なりりて雪山せっせん童子どうじの其身そのみを受う取りて平ひらかなる所ところに

すえ奉たてまつりて恭敬きやうけい礼らい拝はいして云いく我われ暫しばく如來にやらいの聖教しやうきやうを惜おしみて試ほに菩薩ぼさつの心こころ

を悩なやし奉たてまつるなり、願いのくは此この罪つみを許ゆるして後世ごしやう

には必ず救ひ給へと云ふ、一切の天人又来りて善哉善哉実には是れ菩薩なり
と讃め給ふ、半偈の爲めに身を投げて十二劫生死の罪を滅し給へり此の事
ねはんぎよう 然れば雪山童子の古を思へば半偈の爲に猶命を捨て給ふ
涅槃經に見えたり、
何に況や此の經の一品・一卷を聴聞せん恩徳をや何を以てか此れを報ぜ
ん、尤も後生を願はんには彼の雪山童子の如くこそあらまほしくは候へ、
誠に我が身貧にして布施すべき宝なくば我が身命を捨て仏法を得べき便
あらば身命を捨てて仏法を学すべし。

とても此の身は徒に山野の土と成るべし惜みても何かせん惜むとも惜み
とぐべからず・人久しといえども百年には過ず其の間の事は但一睡の夢ぞ
かし、受けがたき人身を得て適ま出家せる者も・仏法を学し謗法の者を責
めずして徒らに遊戲雑談のみして明し暮さん者は法師の皮を著たる畜生な
り、法師の名を借りて世を渡り身を養う

といへども法師ほっしとなる義は一もなし法師ほっしと云う名字なづけをぬすめる盗人ぬすびとなり、恥はづべし恐るべし、迹門しやくもんには「我身命しんみょうを愛せず但た無上道むじやうどうを惜おししむ」ととき本門ほんもんには「自ら身命しんみょうを惜おしまず」ととき涅槃經ねはんぎやうには「身は軽く法は重し身を死して法を弘ひろむ」と見えたり、本・迹両門涅槃經共に身命しんみょうを捨てて法ひふを弘ひろむべしと見えたり、此等の禁を背く重罪じゅうざいは目には見えざれども積りて地獄じごくに墮おつる事譬たとえば寒熱かんねつの姿形すがたかたちもなく眼まなこには見えざれども、冬は寒来りて草木人畜そうもくじんちくをせめ夏は熱来りて人畜じんちくを熱惱ねつなうせしむるが如ごとくなるべし。
然しかるに在家ざいけの御身おんみは但余念よねんなく南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと御唱とえありて僧そうをも供養くようし給たまうが肝心かんじんにて候なり、それも經文きやうもんの如ごとくならば隨力演說えんぜつも有あるベきか、世の中ものうからん時も今生こんじやうの苦さへかなしし、況らいせや来世らいせの苦をやと思し食しても南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱やうこへ、悦よろこばしからん時も今生こんじやうの悦よろこびは夢の中の夢・靈山淨土りやうぜんじやうどの悦よろこびこそ実の悦よろこびなれ

と思し食し合せて又南無妙法蓮華經と唱へ、退転なく修行して最後臨終
の時を待つて御覽ぜよ、妙覺の山に走り登つて四方をきつと見るならばあ
ら面白や法界寂光土にして瑠璃を以つて地とし金の繩を以つて八の道を界
ら面白や法界寂光土にして瑠璃を以つて地とし金の繩を以つて八の道を界

へり、天より四種の花ふり虚空に音楽聞えて、諸仏・菩薩は常樂我淨の風にそよめき娛樂・快樂し給うぞや、我れ等も其の数に列なりて遊戲し樂むべき事はや近づけり、信心弱くしてはかかる目出たき所に行くべからず行くべからず、不審の事をば尚尚承はるべく候、穴賢穴賢。

建治二年丙子十二月九日

にちれん かおう

日蓮 花押

松野殿御返事

◆三二二

松野殿御消息

1387p

昔乃往過去の古へ珊瑚提嵐国と申す国あり彼の国に大王あり無諍念王と申しき、彼の王に千の王子あり又彼の王の第一の大臣を宝海梵志と申す。

彼の梵志に子あり法蔵と申す、彼の無諍念王の千の太子は穢土を捨てて浄土
を取り給ふ、其の故は此の娑婆世界は何なる所と申せば十方の国土に父母
を殺し正法を誹謗し聖人を殺せる者彼の

国国より此の娑婆世界へ追い入れられて候、例せば此の日本国の人大科有る
者の獄に入れらるるが如し、我が力に叶はざれば哀愍せずして捨て給ふ、

宝海梵志一人請け取りて娑婆世界の人の師と成り給ふ、宝海梵志の願に云く
我未来世の穢惡土の中に当に作仏することを得べし、即ち十方浄土より

擯出せる衆生を集めて我れ当に之れを

度すべしと誓ひ給ひき、無諍念王と申すは阿弥陀仏なり、其の千の太子は

今の観音・勢至普賢・文殊等なり、其の宝海梵志と申すは今の釈迦如来な

り、此の娑婆世界の一切衆生は十方の諸仏に抜き捨てられしを釈迦一人

計りして扶けさせ給うを唯我一人と申すなり。

松野殿

日蓮^{にちれん}

花押^{かおう}

鷺目がもく一貫文・油一升・衣一・筆十管給たまい候、今に始めぬ御志申し尽しが
たく候へば法華經ほけきょう・釈迦しゃか仏に任せ奉り候。

先立もつより申し候、但在家の御身は余念よねんもなく日夜朝夕ちようせき・南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょう
と唱となえ候て最後臨終さいごりんじゅうの時を見させ給へ、妙覺みょうかくの山に走り登り四方しほうを御覽

ぜよ、法界ほっかいは寂光土じやくこうどにして瑠璃るりを以て地とし・金繩こがねなわを以て八の道をさかひ、

天よ

り四種こくうの花ふり虚空こくうに音楽聞え、諸仏しよぶつ・菩薩ぼさつは皆常樂我淨みなじょうらくがじょうの風にそよめき
給たまへば・我れ等も必ず其その数に列つらならん、法華經ほけきょうはかかる・いみじき御經
にて・をはしまいらせ候、委細いさいはいそぎ候間申さず候、恐恐きようきよう謹言きんげん。

建治三年丁丑つとむし九月九日

にちれんかおう
日蓮花押

ごへんじ
松野殿御返事

もう もくれん
追て申し候目連樹十両計り給はり候べく候

◆三二四 松野殿御返事ごへんじ

1388p

しゅじゅ
種種の物送り給い候畢ぬ山中のすまゐ思遣せ給うて雪の中ふみ分けて御
とむら
訪い候事御志 定めて法華經十羅刹も知し食し候らんさては涅槃經に云く
とこま
「人命の停らざることは山水にも過ぎたり今日存すと雖も明日保ち難し」
まや
摩耶經に云く「譬えば施陀羅の羊を駈て屠家に至るが如く人命も亦是くの如
いわ
く歩歩死地に近く」法華經に云く「三界は安きこと無し猶火宅の如し衆苦
ほけきよう
い
わ
さんがい
いた
ごと
な
お
ごと

じゅうまん
充滿して甚だ怖畏すべし」等云、
こ
此れ等の經文は我等が慈父・大覺
せそん まっだい
世尊・末代

の凡夫ほんぶをいさめ給たまい、いとけなき子どもをさし驚おどろかし給たまへる経文きやうもんなり、
然しかりと雖いえども須臾しゅゆも驚おどろく心なく刹那せつなも道心どうしんを發おこさず、野辺に捨てられなば一
夜の中にはだかになるべき身をかざらんがために、いとまを入れ衣を重かさね
んとはげむ、命終みようじゆうりなば三日の内に水と成りて流れ塵ちりと成りて地にまじ
はり煙と成りて天にのぼりあともみえずなる
べき身を養はんとて多くの財たからをたくはふ、此のことはりは事ふり候ぬ但ただし
当世とうせの体こそ哀れに候へ、日本国数年の間打ち続きけかちゆきて衣食いしょくたへ
畜るひをば食いつくし結句けっく人をくらう者出来しゅったいして・或あるは死人しにん・或あるは小兒しょうに
・或あるは病人等の肉を裂取さきとりて魚鹿等に加へて売りしかば人是これを買いいくへり此
の国存の外に大惡鬼あつきとなれり、又去年の春より
今年の二月中旬まで疫病国に充満じゅうまんす、十家に五家・百家に五十家皆みなやみ
死あるし・或あるは身はやまねども心は大苦に値あへりやむ者よりも怖し、たまたま

生残たれども・或は影の如くそいし子もなく眼の如く面をならべし夫婦も
なく・天地の如く憑し父母もをはせず生きても何にかせん・心あらん人
争か世を厭はざらん、三界無安とは仏説き給て候へども法に過ぎて見え候。
然るに予は凡夫にて候へども・かかるべき事を仏兼て説きをかせ給いて
候を国王に申しきかせ進らせ候ぬ、其れにつけて御用は無くして 弥 怨を
なせしかば力及ばず此の国既に謗法と成りぬ、法華經の敵に成り候へば
三世十方の仏神の敵と成れり、御心にも推せさせ給い候へ日蓮何なる大科
有りともし法華經の行者なるべし、南無阿弥陀仏
と申さば何なる大科有りともし念仏者にて無しとは申しがたし、南無
妙法蓮華經と我が口にも唱へ候故に罵られ打ちはられ流され命に及びしか
ども、勧め申せば法華經の行者ならずや、法華經には行者を怨む者は
阿鼻地獄の人と定む、四の巻には仏を一中劫罵るよりも末代の法華經の

ぎようじゃ　にくむつみ
行者を惡む罪深しと説かれたり、七の卷には行者を　ぎようじゃ

かる　ひとびとせんこう　あ　び　じこく
輕しめし人人千劫阿鼻地獄に入ると説き給へり、五の卷には我が末世末法　まっぼう

ほけきよう　ぎようじゃあ　そのときそ　じかい　はかい　むりようむへん
に入つて法華經の行者有るべし、其の時其の国に持戒・破戒等の無量無辺

こくしゆ　ざんげん　うしな　しか
の僧等集りて国主に讒言して流し失ふべしと説かれたり、然るにかかる經

文かたがた符合し候畢おわんぬ未来みらいに仏に成り候そうらはん事疑うたがいいなく覚おぼえ候、委細いさい
は見参の時申すべし。もう

建治四年 戊寅 二月十三日 つちのえとら

日蓮 にちれん 花押 かおう

松野殿御返事 ごへんじ

◆三一五 松野殿御返事 ごへんじ

1390p

日月にちがつは地におち須弥山しゅみせんはくづるとも、彼の女人にょにん・仏に成らせ給たまわん事疑うたがい
いなし、あらたのもしや・たのもしや。

干飯一斗・古酒一筒・ちまき・あうざし・たかなかたがたな方かたがたの物送り給たまいて

候草にさける花・木の皮を香として仏に奉る人 靈鷲山へ参らざるはなし、

況や民のほねをくだける白米・人の血をしぼれるが如くなるふるさを仏

・法華經にまいらせ給へる女人の成仏得道疑うべしや。

五月一日

日蓮 花押

妙法尼御返事

◆三二六

松野殿後家尼御前御返事

1390p

法華經第五の卷安樂行品に云く文殊師利此法華經は無量の国の中に於て

乃至名字をも聞くことを得べからず云云、此の文の心は我等衆生の三界

六道に輪回せし事は・或は天に生れ・或は人に生れ・或は地獄に生れ・或

は餓鬼^{がき}に生れ畜生^{ちくしょう}に生れ無量^{むりょう}の国に生をうけて無辺^{むへん}の苦しみをうけて・た
のしみにあひしかども一度^{ひとたび}も法華經^{ほけきょう}の国には生ぜず、

たまたま生れたりといへども南無妙法蓮華經と唱へず、となふる事はゆめ
にもなし人の申すをも聞かず、仏のたとへを説かせ給うに一眼の亀の浮木
の穴に値いがたきにたとへ給うなり、心は大海の中に八万由旬の底に亀と
申す大魚あり、手足もなくひれもなし腹のあつき事はくろがねのやけるが
ごとし、せなかのこうのさむき事は雪山にいたり、此の魚の昼夜朝暮のね
がひ時時剋剋の口ずさみには腹をひやしこうをあたためんと思ふ、赤梅檀
と申す木をば聖木と名つく人の中の聖人なり、余の一切の木をば凡木と
申す愚人の如し、此の梅檀の木は此の魚の腹をひやす木なり、あはれ此の
木にのぼりて腹をば穴に入れてひやしこうをば天の日にあてあたためばや
と申すなり、自然のことはりとして千年に一度出る亀なり、しかれども此
の木に値事かたし、大海は広し亀はちい

さし浮木はまれなり、たとひよのうききにはあへども梅檀にはあはず、あ

へども龜の腹をえりはめたる様に・がい分に相応したる浮木の穴にあひが
たし我が身をち入りなばこうをもあたためがたし誰か又とりあぐべき、又
穴せばくして腹を穴に入れえずんば波にあらひをとされて大海にしづみな
む、たとひ不思議として梅檀の浮木

の穴にたまたま行きあへども我一眼のひがめる故に浮木西にながるれば東
と見る故にいそいでのだらんと思ひておよげば弥弥とをさかる、東に流るを
西と見る南北も又此くの如し云云、浮木には・とをさかれども近づく事は
なし、是の如く無量無辺劫にも一眼の龜の浮木の穴にあひがたき事を仏
説き給へり、此の喩をとりて法華經にあ

ひがたきに譬ふ、設ひあへどもとなへがたき題目の妙法の穴にあひがたき
事を心うべきなり、大海をば生死の苦海なり龜をば我等衆生にたとへたり、
手足のなきをば善根の我等が身にそなはらざるにたとへ、腹のあつきをば

われら^{しんに}我等が瞋^{しん}恚^にの八熱地獄^{じごく}にたとへ背^{そむ}のこのさむきをば貧欲^{ひんよく}の八寒地獄^{はちかんじごく}にたとへ千年^{せんねん}大海^{たいかい}の底にあるをば我等^{われら}が三惡道^{さんあくどう}

に墮^おちて浮^うびがたきにたとへ、千年に一度^{ひとたび}浮^うぶをば三惡道^{さんあくどう}より無量劫^{むりょうじやく}に

一度人間^{ひとたにんげん}に生れて釈迦^{しゃか}仏^{ぶつ}の出世^{しゅっせ}にあひがたきにたとへ、余の松木^{しょうぼく}ひの木^{きの}の

浮木^{うきぎ}にはあひやすく梅檀^{めんだん}にはあひがたし、一切^{いっさい}經^{きやう}には値^あいやしく法華經^{ほふけきやう}

にはあひがたきに譬^{たと}へたり、たとひ栴檀^{せんた}には値^あうとも相応^{そうおう}したる穴^{あな}にあひ
がたきに喩^{たと}うるなり、設^{たと}ひ法華經^{ほけきよう}には値^あうとも肝心^{かんじん}たる南無妙法蓮華經^{なむみょうほうれんげきよう}の
五^ご字^じをとなへがたきにあひたてまつる事^{こと}のかたきにたとう、東^{とう}を西^{せい}と見^み・
北^{きた}を南^{なん}と見る事^{こと}をば我^{われ}等^ら衆生^{しゆじやう}かしこがほに智慧^{ちえ}有^ある由^{よし}をして勝^{しょう}を劣^{りやく}と思^{おも}
ひ劣^{りやく}を勝^{しょう}と思^{おも}ふ、得^{とく}益^{やく}なき法^{ほふ}をば得^{とく}益^{やく}あると見る機^きにかなはざる法^{ほふ}をば機^き
にかなう法^{ほふ}と云^いう、真言^{しんごん}は勝^{すぐ}れ法華經^{ほけきよう}は劣^{すく}り真言^{しんごん}は機^きにかなひ法華經^{ほけきよう}は機^き
に叶^{かな}はずと見る是^{これ}なり。

されば思^{おも}いよらせ給^{たま}へ仏^{ぶつ}・月氏^{がつし}国^{こく}に出^いでさせ給^{たま}いて一代^{いちだい}聖教^{しょうきやう}を説^{せつ}かせ
給^{たま}いしに四十三年^{しじゅうさんねん}と申^{まを}せしに始めて法華經^{ほけきよう}を説^{せつ}かせ給^{たま}ふ、八箇^{はちか}年^{ねん}が程^{ほど}・一切^{いっさい}
の御弟子^{おんでし}皆^{みな}如意宝珠^{にようぼうじゆ}のごとくなる法華經^{ほけきよう}を持^もち候^{もち}き、然^{しか}れども日本^{にほん}国^{こく}と天竺^{てんじく}
とは二十万里^{ばんり}の山海^{さんかい}をへだてて候^{もち}しかば法華經^{ほけきよう}の名字^{みょうじ}をだに聞^{きこ}くことな
かりき、釈尊^{しゃくそん}御入滅^{にゆうめつ}ならせ給^{たま}いて一千二百余年^{いっせんにひゃくにじゅうふくねん}と申^{まを}せしに漢土^{かんと}へ渡^{わた}し給^{たま}ふ、

いまだ日本国へは渡らず、仏滅後・一千五百余年と申すに日本国の第三十代・

きんめいてんのう

欽明天皇と申せし御門の御時百済国より始めて仏法渡る、又上宮太子と申

ぶつぼうわた

じょうぐうたいし

もろこし

せし人唐土より始めて仏法渡させ給いて其れより以来今に七百余年の間・

たま

いらい

いっさいきよう

ほけきよう

たま

かみいちにん

ばんにん

いた

一切経並に法華経はひろまらせ給いて、上一人より下万人に至るまで心あ

ほけきよう

ある

ある

たも

ある

ふほ

こうよう

らむ人は法華経を一部・或は一卷・或は一品持ちて・或は父母の孝養とす、

われら ほけきよう

されば我等も法華経を持つと思う、しかれ

いま

なむみょうほうれんげきよう

に

ども未だ口に南無妙法蓮華経とは唱へず信じたるに似て信ぜざるが如し、

たと

譬えば一眼の亀のあひがたき梅檀の聖木にはあいたれどもいまだ亀の腹を

せんだ

こと

穴に入れざるが如し、入れざればよしなし須臾に大海にしづみなん、我が

しゅゆ

たいかい

ほけきようひろ

たま

ある

ある

朝七百余年の間・此の法華経弘まらせ給いて・或は読む人・或は説く人

ある かつよう

ある

とうま ちく

・或は供養せる人・或は持つ人稻麻竹葦よりも多

し、然れどもいまだ阿弥陀の^{あみだ}名号^{みょうごう}を唱^{とな}うるが如^{ごと}く南無妙法蓮華經とす
むる人もなく唱^{とな}うる人もなし、一切^{いっさい}の經・一切^{いっさい}の仏の名号^{みょうごう}を唱^{とな}うるは凡木
にあうがごとし、未だ^{いま}梅檀^{せんだ}ならざれば腹をひやさず日天^{にってん}ならざれば甲をも
あたためず、但目をこやし心を悦^{よろこ}ばしめて実なし華さいて菓^{このみ}なく言のみ有
りてしわざなし。

但にちれん日蓮一人ばかり日本国にほんこくに始めて是これを唱へまいらする事、去いぬる建長五

年の夏のころより今に二十余年の間・昼夜朝暮ちようぼに南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようと是これを

唱となうる事は一人なり、念仏申ねんぶつもうす人は千万せんまんなり、予は無縁むえんの者なり念仏ねんぶつの方人かとうど

は有縁うえんなり高貴こうきなり、然しかれども師子ししの声には一切いっさいの獸けもの・声うしなを失ふ虎の影に

は犬恐いってんる、日天東にってんに出でぬれば万星の光

は跡形あとかたもなし、法華經ほけきようのなき所にこそ弥陀念仏みだねんぶつはいみじかりしかども南無なむ

妙法蓮華經みょうほうれんげきようの声・出来しゅったいしては師子ししと犬にちりんと星との光くらべのごとし、

譬たとえば鷹たかと雉きじとの・ひとしからざるがごとし、故ゆえに四衆ししゆうとりどりにそねみ

上下じやうげ同くにくむ讒人国ざんにんに充滿じゆうまんして奸人土けんんどに多し故ゆえに劣を取りて勝をにく

む、譬たとえば犬は勝すぐれたり師子ししをば劣おとれり星

をば勝すぐれ日輪にちりんをば劣おとるとそしるが如ごとし然しかる間邪見じゃけんの悪名あくみよう世上せじように流布るふし・や

やもすれば讒訴ざんそし・或あるは罵詈めりせられ・或あるは刀杖とうじようの難なんをかふる・或あるは度度たびたび

るぜい
流罪にあたる、五の巻の経文にすこしもたがはず、さればなむだ左右の眼
まなこ
にうかび悦びよろこ一身にあまれり。

ここに衣は身をかくしがたく食は命をささへがたし、例せば蘇武が胡国
そぶ こごく
にありしに雪を食として命をたもつ、伯夷は首陽山にすみし蕨をわらびをりて
身をたすく父母にあらざれば誰か問うべき三宝の御助にあらずんば・いか
ふぼ
でか一日片時も持つべき未だ見参にも入らず候人のかやうに度度・御をと
かたとき
づれの・はんべるは・いかなる事にや・あやしくこそ候へ、法華經の第四
ほけきよう
の巻には釈迦仏しゃかぶつ・凡夫の身にいりかはらせ給いて法華經の行者ぎやうじやをば供養す
くよう
べきよしを

説かれて候、釈迦仏しゃかぶつの御身おんみに入らせ給い候か又過去かこの善根ぜんこんのもよをしを、
りゆうによ もう によにん ほけきよう
竜女と申す女人は法華經にて仏に成りて候へば末代まつだいに此の經を持ちまいら
によにん
せん女人をまほらせ給うべきよし誓わせ給いし、其その御ゆかりにて候か、

とおととおと
貴し貴し。

こうあん

弘安二年己卯三月二十六日

つちのとう

にちれん

かおう

日蓮花押

ごけあまごぜんごへんじ

松野殿後家尼御前御返事

◆三二七

松野殿女房御返事

1394p

麦一箱いゑのいも一籠うり一籠かたがた 旁の物六月三日に給候しを今まで
ごへんじもう 御返事申し候はざりし事恐れ入つて候、此の身延の沢と申すもう 処は甲斐の国
 の飯井野御牧波木井の三箇郷の内波木井の郷の戌亥の隅にあたりて候、北
 には身延の嶽天をたけ いただき南には鷹取が嶽雲につづき東には天子の嶽日と
 たけをなじ西には又峨峨がが として大山
 つづきてしらねの嶽たけ にわたれり、☆のなく音天こえ に響ひびき き蟬のさゑづり地に
 みてり、天竺てんじく の靈山りようぜん 此の処ところ に来れり唐土もうこし の天台てんだい 山親まのあた りここに見る、我が
 身しや は釈迦しか 仏ぶつ にあらず天台大師てんだいだいし にてはなけれども、まかるまかる昼夜ほけき に法華經
 をよみ朝暮ちようぼ に摩訶止観まかしかん を談だん ずれば靈山りようぜん 浄土じようど にも相似そうじ たり・天台山てんだい にも異な

らず。

但有待の依身なれば著ざれば風身にしみ食ざれば命持ちがたし、灯に油をつがず火に薪を加へざるが如し命いかでかつぐべきやらん、命続がたく・つぐべき力絶えては、・或は一日乃至・五日既に法華經読誦の音も絶えぬべし止觀のまどの前には草しげりなん、かくの如く候にいかにして思い寄せ給いぬらん、兎は経行の者を供養せしかば天帝哀みをなして月の中にをかせ給いぬ・今天を仰ぎ見るに月の中に兎あり。

されば女人の御身として・かかる濁世末代に法華經を供養しましませば、

梵王も天眼を以て御覽じ帝釈は掌を合わせてをがませ給ひ地神は御足

をいただきて喜び釈迦仏は靈山より御手をのべて御頂をなでさせ給うら

ん、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經、恐恐謹言。

弘安二年己卯六月二十日

弘安二年己卯六月二十日

日蓮 にちれん

花押 かおう

松野殿 女房御返事 にようぼうごへんじ

白米一斗・芋一駄・梨子一籠・名荷・はじかみ・枝大豆・ゑびね 旁の
物給び候ぬ、濁れる水には月住まず枯たる木には鳥なし、心なき女人の身
には仏住み給はず、法華經を持つ女人は澄める水の如し釈迦仏の月宿らせ
給う、譬へば女人の懷み始めたるには吾身には覚えねども、月漸く重なり
日も屢過ぐれば初にはさかと疑ひ後には一定と思
ふ、心ある女人はをのこごをんなをも知るなり法華經の法門も亦かくの
如し、南無妙法蓮華經と心に信じぬれば心を宿として釈迦仏懷まれ給う、
始はしらねども漸く月重なれば心の仏夢に見え悦こばしき心漸く出来し候
べ

し、法門^{ほうもん}多しといへども止め候^{とど}、法華經^{ほけきょう}は初は信ずる様なれども後^{とぐ}遂る事
かたし、譬^{たと}へば水の風にうごき花の色の露^{つゆ}に移るが如^{ごと}し、何として今まで
は持たせ給^{たま}うぞ是・偏へに前生の功力の上・釈迦^{しゃか}仏^{ぶつ}の護^{まも}り給^{たま}うか、たのも
ししたのもしし、委^{くわ}くは甲斐^{かい}殿^{もん}申すべし。

九月一日

日蓮^{にちれん} 花押^{かおう}

松野殿女房御返事^{しょうのどのにようぼうごへんじ}

◆三一九

松野尼御前御返事 あまこぜんごへんじ

1396p

にほんこく

日本国の人にはにくまれ候ぬ、みちふみわくる人も候はぬにをもら

たま

おんこころざし

せ給いての御心ざし、

石の中の火のごとし火の中の蓮のごとし、ありがた

しありがたし、
きやうきやう
恐恐。

正月二十一日

にちれん

日蓮在御判%

松の尼御前御返事 あまこぜんごへんじ

◆三二〇

浄蔵浄眼御消息 しやうざうしやうそく

1396p

きごめの俵一・瓜籠一・根芋品品の物給い候畢んぬ、
うりこひとつ
楽徳と名付けける

ちようじや

長者に身を入れて我が身も妻も子も夜も昼も責め遣はれける者が、余りに責められ堪えがたさに隠れて他国に行きて其の国の大王に官仕へける程に・きりものに成りて閔白と成りぬ、後に其の国を力として我が本の主の国を打ち取りぬ、其の時本の主・此の閔白を

おおい

見て大に怖れ前に悪く当りぬるを悔ひかへして官仕へ様様の財を引きけ

みやすかえ

たから

る、前に負けぬる物の事は思ひもよらず今は只命のいきん事をはげむ、

ほけきよう

こ

こと

ほけきよう

とうほう

やくし

仏の主・

なんぼう

さいほう

法華経も又斯の如く法華経は東方の薬師・仏の主・南方・西方・北方・

じようげ いっさい

上下の一切の仏の主なり、釈迦仏等の仏の法華経の文字を敬ひ給ふことは

ほけきよう

もんじ

うやま たま

民の王を恐れ星の月を敬ふが如し、然るに我等衆生は

こと

し

われらしめじよう

だいろうくてん

まおう

そうでん

じごく

がき

ちくしろう

第六天の魔王の相伝の者地獄・餓鬼・畜生等に押し籠められて気もつかず

ちようせきごくそつ

朝夕獄卒を付けて責むる程に、兎角して法華経に懸り付きぬれば釈迦仏等

せ

とかく

ほけきよう

かか

しゃかぶつ

じゅつぼう

の十方の仏の御子とせさせ給へば、梵王・帝釈だにも恐れて寄り付かず

たま

ほんのう

たいしゃく

況や第六天の魔王をや、魔王は前には主なりしかども今は敬ひ畏れて、あ
しうせば法華經十方の諸仏の御見参にあしうや入らんずらんと恐れ畏て
供養をなすなり、何にしても六道の一切衆生をば法華經へ・つけじと・は
げむ

なり、然るに何なる事にや・をはすらん皆人の憎み候日蓮を不便とおぼし
て、かく遙遙と山中へ種種の物送りたび候事一度二度ならず、ただことに
あらず偏へに釈迦仏の入り替らせ給へるか、又をくれさせ給ひける御君達
の御仏にならせ給いて父母を導かんために御心に入り替らせ給へるか。

妙莊嚴王と申せし王は悪王なりしかども御太子淨蔵・淨眼の導かせ給い
しかば父母二人共に法華經を御信用有りて仏にならせ給いしぞかし、是も
さにてや候らんあやしく覚え候、甲斐公が語りしは常の人よりもみめ形も
勝れて候し上・心も直くて智慧賢く、何事に付けてもゆゆしかりし人の疾

はかなく成りし事の哀れさよと思ひ候

しが、又倩思へば此の子なき故に母も道心者となり父も後世者に成りて

候は只とも覚え候はぬに、又皆人の惡み候法華經に付かせ給へば偏へに是な

き人の二人の御身に添うて勧め進らせられ候にやと申せしが・さもやと

覚え

候、前前は只荒増の事かと思ひて候へば是程御志の深く候ひける事は始

めて知りて候、又若しやの事候はばくらき闇に月の出づるが如く

妙法蓮華經の五字・月と露れさせ給うべし、其の月の中には釈迦仏・十方

の諸仏・乃至前に立たせ給ひし御子息の露れさせ給ふべしと思ひ召せ、委く

は又又申すべし、恐恐謹言。

七月七日

日蓮

花押

◆三二一

刑部左衛門尉女房御返事

1397p

今月飛來の雁書がんしょに云く此の十月三日母にて候もの十三年に相当あひあたれり錢二

十貫文等云云、夫外典三千余卷には忠孝の二字を骨とし内典五千余卷には

孝養を眼とせり、

不孝の者をば日月も光を・をしみ地神も瞋をなすと見へ

て候、・或経あるに云く六道いわの一切衆生・仏前ぶつぜんに参り集りたりしに仏彼れ等が

身の上の事を一一に問い給たまいし中に仏地神なんじだいしに汝大地より重きものありやと

問い給たまいしかば地神敬んで申もうさく大地より重き物候と申す、仏の曰いわくいか

に地神

へんげ

偏頗へんぽんをば申もうすぞ此の三千大千世界の建立は皆大地の上にそなわれり、所謂

しゅみせん

須弥山の高さは十六万八千由旬横は三百三十六万里なり大海は縦横八万四

百八千由旬横は三百三十六万里なり大海は縦横八万四

百八千由旬横は三百三十六万里なり大海は縦横八万四

百八千由旬横は三百三十六万里なり大海は縦横八万四

百八千由旬横は三百三十六万里なり大海は縦横八万四

百八千由旬横は三百三十六万里なり大海は縦横八万四

百八千由旬横は三百三十六万里なり大海は縦横八万四

百八千由旬横は三百三十六万里なり大海は縦横八万四

百八千由旬横は三百三十六万里なり大海は縦横八万四

千由旬ゆじゆんなり、其その外ほかの一切衆生いっさいしゆじやう・草木等そうもくは皆大地みなだいちの上にそなわれり、此れこを持もてるが大地だいちより重き物有らんやと問い給たまいしかば、地神答いて云く仏はは知食しりしめしながら人に知らせんとて問い給たまう

か、我地神となること二十九劫なり其の間そ・大地だいちを頂戴ちやうだいして候に頸も腰も痛むことなし、虚空こくうを東西南北とうざいなんぼくへ馳走するにも重きこと候はず、但不孝ふこの者のすみ候所そうろうところが身にあまりて重く候なり、頸もいたく腰もおれぬべく膝もたゆく足もひかれず眼まなこもくれ魂もぬけべく候、あわれ此の人の住所の大地だいちをば・なげすてばやと思う心たびたび出来しゅつたい

し候へば不孝ふこの者の住所は常に大地だいちより候なり、されば教主きやうしゆしやくそん釈尊の御いとこ提婆達多だいばだつたと申せし人は閻浮提第一えんぶだいだいいちの上じやうろう・陂王種姓すじやうなり、然れども不孝ふこの人なれば我等彼の下われらの大地だいちを持つことなくして大地破だいちれて無間地獄むげんじごくに入り給たまいき、我れ等が力及およばざる故ゆえにて候と、かくの如ごとく地神こまごまと仏に

申し上げ候しかば仏はげにもげにもと合点せさせ給いき、又仏歎いて云く
我が滅後の衆生の不孝ならん事・提婆にも過ぎ瞿伽利にも超えたるべし等
云云取意、涅槃經に末代惡世に不孝の者は大地微塵よりも多く孝養の者は
爪上の土よりもすくなからんと云云。

今日蓮案じて云く此の經文は殊にさもやと・をぼへ候、父母の御恩は今
初めて事あらたに申すべきには候はねども母の御恩の事殊に心肝に染みて
貴くをぼへ候、飛鳥の子をやしなひ地を走る獸の子に・せめられ候事・目
もあてられず魂もきえぬべくをぼへ候、其につきても母の御恩忘れがたし、
胎内に九月の間の苦み腹は鼓をはれるが如く頸は針をさげたるが如し、氣
は出づるより外に入る事なく色は枯れたる草の如し、臥ば腹もさけぬべし
坐すれ

ば五体やすからず、かくの如くして産も既に近づきて腰はやぶれてきれぬ
べく眼まなこはぬけて天に昇るか・をぼゆ、かかる敵をうみ落しなば大地にも
ふみつけ腹をもさきて捨つべきぞかし、さはなくして我が苦を忍びて急ぎ
いだきあげて血をねぶり不浄ふじようをすすぎて胸にかきつけ懐きかかへて三箇年
が間おんこん慇懃に養ふ、母の乳をのむ事・一百

八十斛三升五合なり、此乳のあたひは一合なりとも三千大千世界にかへぬ
べし、されば乳一升のあたひを・へて候へば米に当れば一万一千八百五十
斛五升稻には二万一千七百束に余り布には三千三百七十段なり、何に況や
一百八十斛三升五合のあたひをや、他人の物は銭の一文米一合なりとも盗
みぬればろうのすもりとなり候ぞか

し、而しかるを親は十人の子をば養へども子は一人の母を養ふことなし、あた
たかなる夫をば懐いだきて臥ふせどもここへたる母の足をあたたむる女房にようぼうはな

し、給孤獨園ぎつこどくえんの金鳥こんちようは子の為ために火に入り・☆戸迦夫人きようしかふじんは夫の為ために父を殺す、
仏

の云いわく父母ふぼは常に子を念おもへども子は父母ふぼを念おもはず等云云、影現王ようげんの云いわく父
は子を念おもふといえども子は父を念おもはず等是これなり、設たとひ又今生こんじようには父母ふぼに
孝養こうようをいたす様なれども後生ごしようのゆくへまで問う人はなし母の生おいてをはせし
には心には思はねども一月ひとたひに一度一年ひとたひに一度は問いしかども死たまい給いてよ
り後は初七日より二七日ないし乃至・第三年ま

では人目の事なれば形ことの如く問ひ訪ひ候へども、十三年四千余日が間の程
はかきたえ問う人はなし、生てをはせし時は一日片時かたときのわかれをば千万日せんまん
とこそ思はれしかども十三年四千余日の程はつやつやをとづれなし如何いかんに
きかまほしくましますらん夫外典げてんの孝經こうきやうには唯今生ただこんじようの孝のみを・をしへ
て後生ごしようのゆくへをしらず身の病をいやして心の歎なげきをやめざるが如ごとし内典ないてん

五千余卷には人天・二乗の道に入れていまだ仏道へ引導する事なし。

夫目連尊者の父をば吉占師子・母をば青提女と申せしなり、母死して後

餓鬼道に堕ちたり、しかれども凡夫の間は知る事なし、証果の二乗となり

て天眼を開きて見しかば母餓鬼道に堕ちたりき、あらあさましやといふ計り

もなし、餓鬼道に行きて飯をまいらせしかば纔に口に入るかと見えしが飯

変じて炎となり・口はかなへの如く飯

は炭をおこせるが如し、身は灯炬の如くもえあがりしかば神通を現じて水を出だして消す処に・水変じて炎となり 弥火炎のごとくもゑあがる、もくれんじりき
目連自力には叶はざる間・仏の御前に走り参り申してありしかば、十方のせいそう くいよう そ さば わずか がき たま ばか
聖僧を供養し其の生飯を取りて纔に母の餓鬼道の苦をば救い給へる計りなしゃかぶつ
り釈迦仏は御誕生の後・七日と申せしに母の
摩耶夫人にをくれまいらせましき、凡夫にてわたらせ給へば母の生処まやふじん
を知しめすことなし、三十の御年に仏にならせ給いて父浄飯王を現身にしょうけ しょうか らかん たま じょうばん げんしん
教化して証果の羅漢となし給ふ、母の御ためには☆利天に昇り給いて摩耶きようけ しょうか らかん たま とうりてん まや
経を説き給いて父母を阿羅漢となしまいらせ給いぬ、此れ等をば爾前のきようげよう ひとびと にじきようけいこうの仏とこそ思
い候へども、立ち還つて見候へば不孝の声聞不孝の仏なり、目連尊者程のしょうにん じようぶつ たま ふこう しょうもんふこう もくれんそんじや
聖人が母を成仏の道に入れ給はず、釈迦仏程の大聖の父母を二乗の道に

入れ奉りて永不成仏の歎きを深くなさせまいらせ給いしをば・孝養とや
申す、べき不孝とや云うべき、而るに浄名居士目連を毀て云く六師外道
が弟子なり等云云、仏自身を責めて云く我則ち
慳貪に堕ちなん此の事は為めて不可なり等云云、然らば目連は知らざれば科
浅くもやあるらん、仏は法華經を知ろしめしながら生てをはする父に惜み
・死してまします母に再び値い奉りて説かせ給はざりしかば大慳貪の人を
ばこれより外に尋ぬべからず。

つらつら事の心を案ずるに仏は二百五十戒をも破り十重禁戒をも犯し
給う者なり、仏・法華經を説かせ給はずば十方の一切衆生を不孝に墮し
給ふ大科まぬかれがたし、故に天台大師・此の事を宣べて云く「過則ち仏
に属す」云云、有人云く是れ十方三世の御本誓に違背し衆生を欺誑する
こと有るなり等云云、夫四十余年の大小・顕密の

いっさいきよう

一切経並に眞言・華嚴・三論・法相・俱舍・成実・律浄土・禅宗等の仏

・菩薩・二乗・梵釈・日月及び元祖等は法華經に随ふ事なくば何なる孝養

をなすとも我則墮慳貪の科脱るべからず、故に仏本願に趣いて法華經を

説き給いき、而るに法華經の御座には父母ましまさざりしかば親の生れて

まします方便土と申す国へ贈り給て候なり、其の御言

に云くいわ「而かも彼の土に於いて仏の智慧ちえを求めて是の経を聞くことを得ん」
等云云、此の経文は智者ちしやならん人人は心をとどむべし、教主釈尊きようしやくそんの父母ふぼ
の御ために説かせ給いて候経文きようもんなり、此の法門ほうもんは唯天台大師と申せし人
計りばかこそ知りてをはし候ひけれ、其の外の諸宗ほかにしよしゅうの人人知らざる事なり、
日蓮が心中にちれん しんちゅうに第一と思ふ法門ほうもんなり。

父母ふぼに御孝養ごこうようの意あらん人人は法華経を贈り給べし、教主釈尊きようしやくそんの父母ふぼ
の御孝養ごこうようには法華経を贈り給いて候、日蓮が母存生にちれん ぞんしゅうしておはせしに仰せ候
し事をもあまりにそむきまいらせて候しかば、今をくれまいらせて候が・
あながちにくやくしく覚おぼへて候へば一代聖教いちだいしやうきやうを☆へて母の孝養ごうようを仕らんと
存じ候間、母の御訪い申させ給う人人ひとひとをば

我が身の様に思ひまいらせ候へば、あまりにうれしく思ひまいらせ候間あ
らあらかきつけて申し候なり、定めて過去聖霊かこしやうりようも忽に六道たちまちろくどうの垢穢くえを離れ

て靈山淨土へ御参り候らん、此の法門ほうもんを知識ちしきに値あわせ給たまいて度度たびたびきかせ給たまうべし、日本国にほんこくに知る人すくなき法門ほうもんにて候ぞ、くはしくは又又もう申すべく候、恐恐きょうきょう謹言きんげん。

十月二十一日

日蓮にちれん

花押かおう

尾張刑部左衛門尉殿女房御返事
おわりぎょうぶさえものじょう　にようぼうごへんじ

◆三三三

春麦御書こしよ

1401p

女房御参詣にようぼう　さんけいこそゆめとも・うつつとも・ありがたく候しか、心ざしいちのはせ申もうす、当時とうじの御いもふゆのたかうなのごとしあになつのゆきにこと

ならむ。春麦一俵・芋一籠^{かこ}・笥^{たかな}二丸給^{たまい}い畢^{おわ}んぬ。
五月廿八日

ほけきよう

先法華經につけて御不審をたてて其趣を御尋ね候事ありがたき大善根に

ふしん

たず

ぜんこん

て候、須弥山を他方の世界へつづてになぐる人よりも・三千大千世界をま

しゅみせん

たほう

せかい

さんぜんだいせんせかい

りの如くにけあぐる人よりも無量の余の經典を受け持ちて人に説ききかせ

ごと

むりよう

きようてん

たも

と

ちようもん

聴聞の道俗に六神通をえせしめんよりも、末法のけふこのごろ法華經の

べつぞく

じんつう

まつほう

ほけきよう

いっくいちげ

一句一偈のいはれをも尋ね問う人はありが

たず

たし、此の趣を釈し給いて人の御不審をはらさすべき僧もありがたかるべ

しゃく たまい

ふしん

しと、法華經の四の卷宝塔品と申す処に六難九易と申して大事の法門候、

ほけきよう

ほうとうほん

もう

ところ

なんくい

もう

だいじ

ほうもん

今・此の御不審は六の難き事の内なり、爰に知んぬ若し御持ちあらば

ふしん

がた

ここ

も

たも

そくしんじようぶつ

即身成仏の人なるべし、此の法華經には我等が身をば法身如来・我等が心

ほけきよう

われら

ほっしんにらい

われら

をば報身如来・我等がふるまひをば応身如来と

説かれて候へば、此の経の一句一偈いっくいちげを持ち信ずる人は皆此の功德くどくをそなへ

候、南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと申すは是れ一句一偈いっくいちげにて候、然れども同じ一句の中

にも肝心かんじんにて候、南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱うる計りにて仏になるべしやと、此

の御不審所詮ふしんしよせんに候一部いっぶの肝要かんよう八軸はちしよくの骨髓こつずいにて候。

人の身の五尺六尺のたましひも一尺の面かおにあらはれ・一尺のかほのたま

しひも一寸の眼まなこの内におさまり候、又日本と申す二の文字もんじに六十六箇国の

人畜じんちく・田畠でんぱた・上下じやうげ・貴賤きせん・七珍万宝しちしんばんぼう・一もかくる事候はず収めて候、其その

ごとく南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうの題目だいもくの内には一部八卷・二十八品・六万九千三百

八十四の文字もんじ・一字ももれず・かけずおさめて

候、されば経には題目だいもくたり仏には眼まなこたりと楽天ものべられて候、記の八に

略して経題きやうだいを挙あぐるに玄はるかに一部を収むと妙楽みょうらくも釈しゃくしおはしまし候、心は

略して經の名計りを挙ぐるに一部を収むと申す文なり、一切の事につけて
所詮・肝要と申す事あり、法華經一部の肝心は南無妙法蓮華經の題目にて
候、朝夕御唱え候はば正しく法華經一部を真読

にあそばずにて候、二返とな唱うるは二部ないし乃至・百返は百部・千返は千部・加

様に不退ふたいに御唱え候はば不退ふたいに法華經を讀む人にて候べく候、天台てんだいの六十

卷もうと申す文には此のやうを釈しゃくせられて候、かかる持ちたもやすく行じやすき法

にて候を末代惡世の一切衆生のために説ときをかせ給たまいて候、經文きやうもんに云く

「於末法中於後末世法欲滅時受持讀誦・惡世まつぼう

末法時・能持是經者後・五百歲中広宣流布」と、此れ等の文の心は当時末法まつぼう

の代には法華經を持ち信たもずべきよしを説かれて候、かかる明文めいぶんを学がくしあや

まりて日本にほん・漢土かんど・天竺てんじくの謗法の学匠達ほうぼう・皆みな・念佛者ねんぶつ・真言しんこん・禪・律の

小乗しょうじょう・權教こんきやうには

随したがに行じて法華經を捨てはて候ぬ、仏法ぶつぽうにまどへるをばしろしめされず、

形しなまことしげなれば云う事も疑うたがいひあらじと計ばかり御信用候間、をもはざる

に法華經の敵・釈迦しゃか仏の怨あだとならせ給たまいて今生こんじやうには祈しやる所願しょがんも虚むなしく命も

みじかく後生ごしょうには無間むげん・大城だいじょうをすみかとすべしと正ただしく経文きょうもんに見えて候。

さて此の経の題目だいもくは習ならい読よむ事なくして大なる善根ぜんこんにて候、悪人あくにんも女人にょにん

ちくしょう

じごく

しゅじょう

じゅつかい

そくしんじょうぶつ

も畜生ちくじょうも地獄じごくの衆生しゅじょうも十界じゅうかいともに即身成仏そくしんじょうぶつと説かれて候は、水の底な

る石いしに火のあるが如ごとく百千万年せんまんくらき所にも燈とうを入れぬればあかくなる、

せけん

世間のあだなるものすら尚加様に不思議ふしぎあり、何いかに況ぶつぽうや仏法の妙なる御法

おんちから

われらしゅじょう

あくごう

ぼんのう

しやうじ

かばく

の御力をや、我等衆生わがら・悪業あくごう・煩惱ぼんのう・生死しやうじ・果縛かばくの

身が、正・了・縁の三仏性ぶつしょうじょうの因そくによりて即そく・法・報・応の三身さんじんと顕あらわれん

うたがい

事疑うたがいひなかるべし、妙法経力みょうほうりき即身成仏そくしんじょうぶつと伝でんぎ教大師しやうくも釈しゃくせられて候、心

ほけき

は法華経の力にてはくちなはの竜女りゅうにょも即身成仏そくしんじょうぶつしたりと申もうす事なり

おんうたがい

御疑候ごぎこうべからず委くわしくは見参みさんに入り候もうて申もうすべく候もうと申もうさせ給たまへ。

こうあんがねんつちのえとら

弘安元年 戊寅 七月三日

にちれん かおう
日蓮 花押

みようほうあまごぜんごへんじ
妙法 尼御前御返事

◆三二四

妙法尼御前御返事

1404p

御消息しょうそくに云くいわ・めうほうれんくゑきやうを・よるひるとなへまいらせ、

すでにちかくなりて二声かうしやうとなへ、乃至ないしいきて候し時よりもな
を・いろもしろく・かたちもそむせずと云云。

法華經ほけきやうに云くいわ「如是相乃至本末究竟等」云云、大論だいろんに云くいわ「臨終の時・

色黒き者は地獄じごくに墮おつ」等云云、守護經しゆごに云くいわ「地獄に墮つるに十五の相

・餓鬼がきに八種の相・畜生ちくしやうに五種の相」等云云、天台大師てんだいだいしの摩訶止觀まかしかんに云くいわ

「身の黒色は地獄じごくの陰えんに譬たとう」等云云、夫それ以おもんれば日蓮にちれん幼少ようしやうの時より佛法ぶつぽう

を学び候しが念願ねんがんすらく人の寿命じゆみやうは無常むじやうなり、出る氣いきは入る氣いきを待つ事な

し風の前の露つゆ尚たと譬たとえにあらず、かしこきもはかなきも老いたるも若わかきも定

め無なき習ならいなり、

ますりんじゅう
されば先臨終の事を習うて後に他事を習うべしと思ひて、一代聖教の
ろんしにんししよしゃく
論師・人師の書釈あらあらかんがへあつめて此を明鏡として、一切の諸人
りんじゅう
の死する時と並に臨終の後とに引き向えてみ候へばすこしもくもりなし、
じごくおたまないしにんてん
此の人は地獄に墮ち給う乃至人天とはみへて候を、世間の人人・或師匠父母
りんじゅう
等の臨終の相をかくして西方浄土往生と
もう
のみ申し候、悲いかな師匠は悪道に墮ちて多くの苦み・しのびがたければ、

でし
弟子はとどまりゐて師の臨終をさんだんし地獄の苦を増長せしむる、譬へ
りんじゅう
ば・つみふかき者を口をふさいで・きうもんし・はれ物の口をあけずして
やま

するがごとし。

しかるに今の御消息に云く・いきて候し時よりも・なを・いろしろく・
しやうそく
かたちもそむせずと云云、天台の云く白白は天に譬ふ、大論に云く「赤白
てんだい
い
だいろん
い
せきびやく

端正なる者は天上てんじょうを得る」云云、天台大師・御臨終りんじゅうの記に云く色白いろしろし、
げんじょうさんそう りんじゅう しる
玄奘三蔵御臨終ろくどうを記して云く色白いろしろし、一代聖教いちだいしやうきやうを定むる名目みょうもくに云く「黒
業は六道にとどまり白業は四聖ししやうとなる」此等の文証もんしやうと現証げんしやうをもんてかん
がへて候に、此の人は天に生ぜるか、はた又法華經ほけきやうの名号みやうごうを臨終りんじゅうに二反
となうと云云、法華經ほけきやう

の第七の巻に云く「我滅度の後に於て応に此の経を受持すべし、是の人・
仏道に於て決定して疑有ること無けん」云云、一代の聖教 いづれもい
づれもをろかなる事は候はず、皆我等が親父大聖教主釈尊の金言なり皆
真実なり皆実語なり、其の中にをいて又小乗・大乘・顕教・密教・
權大乘・実大乘あいわかれて候、仏説と申すは二天・三仙・
外道・道士の経經にたいし候へば此等は妄語仏説は実語にて候、此の実語
の中に妄語あり実語あり綺語もあり悪口もあり、其の中に法華経は実語の
中の実語なり真実の中の真実なり、真言宗と華嚴宗と三論と法相と俱舎・
成実と律宗と念仏宗と禪宗等は実語の中の妄語より立て出だせる宗宗
なり、法華宗は此れ等の宗宗には・にるべ

くもなき実語なり、法華経の実語なるのみならず一代妄語の経經すら
法華経の大海に入りぬれば法華経の御力に・せめられて実語となり候、い

わうや法華經の題目をや、白粉の力は漆を變じて雪のごとく白くなす。
須弥山に近づく衆色は皆金色なり、法華經の名号を持つ人は一生・乃至・
過去遠遠劫の黒業の漆變じて白業の大善となる、いわうや無始の善根皆變
じて金色となり候なり。

しかれば故聖靈最後臨終に南無妙法蓮華經と・となへさせ給いしか
ば、一生乃至無始の悪業變じて仏の種となり給う、煩惱即菩提・生死即
涅槃即身成仏と申す法門なり、かかる人のえんの夫婦にならせ給へば又
女人成仏も疑なかるべし、若し此の事虚事ならば釈迦・多宝・十方分身
の諸仏は妄語の人・大妄語の人・悪人なり、一切衆生

をたばらかして地獄におとす人なるべし、提婆達多是寂光浄土の主となり
教主釈尊は阿鼻大城のほのをにむせび給うべし、日月は地に落ち大地は
くつがへり河は逆に流れ須弥山はくだけをつべし、日蓮が妄語にはあら

じゅっぼうさんぜ
ず十方三世の諸仏しよぶつの妄語もうごなりいかでか其その義候べきとこそをばへ候へ、
くわし
委くは見参の時申すべく候。

七月十四日

にちれんかおう
日蓮花押

みようほうあまごぜんもう
妙法尼御前申させ給へ
たま

◆三二五

妙法比丘尼御返事

1406P

おんふみ
御文に云くたふかたびら一つあによめにて候女房のつたうと云云、又お

はりの次郎兵衛殿六月二十二日に死なせ給うと云云。

ふほうぞうきよう
付法蔵經と申す經は仏・我が滅後に我が法を弘むべきやうを説かせ給い

て候、其の中に我が滅後・正法一千年が間次第に使をつかはすべし、第一

は迦葉尊者二十年第二は阿難尊者二十年第三は商那和修二十年乃至第二十

三は師子尊者なりと云云、其の第三の商那和修と申す人の御事を仏の説か

せ給いて候やうは、商那和修と申すは衣

の名なり、此の人生れし時衣をきて生れて候いき不思議なりし事なり、六道

の中に地獄道より人道に至るまでは何なる人も始はあかはだかにて候に天

道こそ衣をきて生れ候へ、たとひ何なる賢人・聖人も人に生るるならひは

皆^{みな}あかはだかなり、一生^{ふしよ}補^ほ処^{さつ}の菩^な薩^おすら尚^なはだかにて生^{たま}れ給^{たま}へり何かに況^な
や其^その外^そをや、然^{しか}るに此^この人は商^{しょう}那^な衣^えと

申^{もう}すいみじき衣^えにまとはれて生^{たま}れさせ給^{たま}いしが、此^この衣^えは血^ちもつかずけが
る事^{こと}もなし、譬^{たと}えば池^{いけ}に蓮^{れん}のをひをしの羽^うの水^{みづ}にぬれざるが如^{ごと}し、此^こ
人^{しだい}次第^{だい}に生^{せい}長^{ちやう}ありしかば又^{また}此^この衣^え次第^{だい}に広^{ひろ}く長^{なが}くなる、冬^{ふゆ}はあつく夏^{なつ}はう
すく春^{はる}は青^{あお}く秋^{あき}は白^{しろ}くなり候^{こう}し程^{ほど}に長^{ちやう}者^{じや}にてを^をはせしかば何^{なに}事^{こと}もともしか
らず、後^{のち}には仏^{ぶつ}の記^ししを^をき給^{たま}いし事^{こと}た

がふ事^{こと}なし、故^{ゆえ}に阿^あ難^{なん}尊^{そん}者^{じや}の御^{おん}弟^{でい}子^しとならせ給^{たま}いて御^{しゅ}出^つ家^けありしかば此^こ
衣^え変^へじて五^ご条^{じやう}七^{しち}条^{じやう}九^{きゆう}条^{じやう}等の御^け袈^さ裟^さとなり候^{こう}き、か^かる不^ふ思^し議^ぎの候^{こう}し故^ゆを仏^{ぶつ}
の説^たかせ給^{たま}いしやうは、乃^{ない}往^{おう}過^か去^こ・阿^あ僧^{そう}祇^ぎ劫^{こつ}の当^{たう}初^{しう}・此^この人は商^{しょう}人^{にん}にて有^{あり}
り

しが、五^あ百^き人^{ひと}の商^あ人^きと共^{とも}に大^{たい}海^{かい}に船^{ふね}を浮^うべてあきなひをせし程^{ほど}に海^{うみ}辺^べに

重病じゅうびょうの者あり、しかれども辟支仏ひやくしぶつと申もうして貴人なり、先業せんごうにてや有りけん、病にかかりて身やつれ心をぼれ不浄ふじょうにまとはれてをはせしを、此の商人あきひと
あは

れみ奉りてねんごろに看病して生しまいらせ、不浄をすすぎすてて☆布の

しょうなえ

商那衣をきせまいらせてありしかば、此聖人悦びて願して云く汝我を助

はじ

けて身の恥を隠せり此の衣を今生後生の衣とせんとてやがて涅槃に入り

たまひ

給いき、此の功德によりて過去・無量劫の間・人中天上に生れ生るる度

ごとに、此の衣・身に随いて離るる事なし、乃至

こんじよう

しゃかによらい

めつこ

ふぞく

しょうなわしゅう

もう

しょうにん

今生に釈迦如来の滅後第三の付嘱をうけて商那和修と申す聖人となり、

まところく

うるとげん

もう

がらん

むりよう

しゅじよう

きようけ

ぶつぽう

摩突羅国の優留茶山と申す山に大伽藍を立てて無量の衆生を教化して仏法

ぐつう

たまひ

を弘通し給いし事二十年なり、所詮商那和修比丘の一切のたのしみ不思議

みな

は皆彼の衣より出生せりとこそ説かれて候へ。

しか

にちれん

えんぶだい

にほんこく

もう

而るに日蓮は南閻浮提日本国と申す国の者なり、此の国は仏の世に出で

たまひ

させ給いし国よりは東に当りて二十万余里の外遥なる海中の小島なり、

しか

にゆうめつ

すで

がっし

かんど

而るに仏御入滅ありては既に二千二百二十七年なり、月氏・漢土の人の此

の国の人人を見候へば此の国の人の伊豆の大島奥州の東のえぞなどを見るやうにこそ候らめ、而るに日蓮は日本国安房の国と申す国に生れて候しが、民の家より出でて頭をそり袈裟をきたり、此の度いかにもして仏種をもうへ

生死を離るる身とならんと置いて候し程に、皆人の願わせ給う事なれば

阿弥陀仏をたのみ奉り幼少より名号を唱え候し程に、いささかの事あり

て、此の事を疑いし故に一の願をおこす、日本国に渡れる処の仏経並に

菩薩の論と人師の釈を習い見候はばや、又俱舍宗・成実宗・律宗・

法相宗・三論宗・華嚴宗・真言宗法華天台宗と申す宗と

もあまた有りときく上に、禪宗・浄土宗と申す宗も候なり、此等の宗宗

枝葉をばこまかに習はずとも所詮肝要を知る身とならばやと思ひし故に、

随分に・はしりまはり十二・十六の年より三十二に至るまで二十余年が間、

鎌倉・京・叡山・園城寺・高野・天王寺等の国・寺寺あらあら習い回り

候し程に・一の不思議あり、我れ等が・はかなき

心に推するに仏法は唯一味なるべし、いづれもいづれも・心に入れて習ひ

願はば生死を離るべしとこそ思いて候に、仏法の中に入りて悪しく習い候

ぬれば謗法と申す大なる穴に堕ち入つて、十悪・五逆と申して日日・夜夜

に

せつしょうちゅうどうじやいんもうこ

殺生偷盜邪婬妄語等をおかす人よりも五逆罪と申して父母等を殺す悪人

よりも、比丘・比丘尼となりて身には二百五十戒をかたく持ち心には八万

ほうそつ

法蔵をうかべて候やうなる、智者聖人の一生が間に一悪をもつくらず人に

は仏のやうにをもはれ、我が身も又さながらに悪道にはよも堕ちじと思ふ

程に、十悪・五逆の罪人よりも・つよく

じごく

地獄に堕ちて阿鼻大城を栖として永く地獄をいでぬ事の候けるぞ、譬えば

人ありて世にあらんがために国主につかへ奉る程に、させるあやまちはな

けれども我心のたらぬ上・身にあやしきふるまひかさなるを、猶我身にも

失あ

りともしらず又傍輩も不思議ともをもはざるに后等の御事によりてあやま

つ事はなけれども自然にふるまひあしく王などに不思議に見へまいらせ

ぬれば、謀反の者よりも其の失重し、此の身とがにかかりぬれば父母・兄弟

・所従^{しよじゆう}なんども又かるからざる失^{とが}にをこなはる事あり。

謗法^{ほうぼう}と申^{もう}す罪^{つみ}をば我れもしらず人も失^{とが}とも思はず但^{ぶつ}仏法^{ぶつぽう}をならへば貴^{ととお}し

とのみ思いて候程に此の人も又此の人にしたがふ弟子^{でし}・檀那^{だんな}等も無間地獄^{むげんじごく}

に墮^おつる事あり、所謂勝意比丘^{いわるしやういびく}・苦岸比丘^{くがんびく}など申せし僧は二百五十戒を

かたく持^{たも}ち三千の威儀^{いぎ}を一もかけずありし人なれども、無間^{むげん}・大城^{だいじやう}に墮^おち

て出づる期見へず、又彼の比丘^{びく}に近づきて弟子^{でし}となり檀那^{だんな}となる人人存^{ひとびと}の

外に大地微塵^{だいちみじん}の数よりも多く地獄^{じごく}に墮^おちて師と・ともに苦を受けしぞかし、

此の人後世^{ごしやう}のために衆善^{しゆぜん}を修^{しゆ}せしより外は又心なかりしかども・かかる

不祥^{ふしやう}にあひて候しぞかし。

かかる事を見候しゆへにあらあら経論^{きやうろん}を勘^{かん}へ候へば、日本^{にほん}の当世^{とうせ}こそ

其に似^にて候へ、代末になり候へば世間^{せけん}のまつり事のあらきにつけても世の

中あやうかるべき上、此の日本^{にほん}は他国^{たこく}にもにず仏法^{ぶつぽう}弘まりて国をさまる

べきかと思ひて候へば、中中・仏法弘まりて世もいたく衰へ人も多く悪道

に墮つべしと見へて候、其の故は日本国は

がっし・漢土よりも堂塔等の多き中に大体は阿弥陀堂なり、其の上家ごとに

阿弥陀仏を木像に造り画像に書き人毎に六万八万等の念仏を申す、又他方

を抛うちて西方を願う愚者の眼にも貴しと見え候上、一切の智人も皆い

さいほう

ぐしや

まなこ

とおと

いっさい

ちじん

みな

みじき事なりとほめさせ給う。たま

又人王五十代桓武天皇の御宇に弘法大師と申す聖人・此の国に生れて、

漢土より真言宗と申すめずらしき法を習い伝へ平城嵯峨淳和等の王の御師

となりて東寺・高野と申す寺を建立し、又慈覚大師・智証大師と申す聖人

同じく此宗を習い伝えて叡山・園城寺に弘通せしかば日本国の山寺一同に

此の法を伝へ今に真言を行ひ鈴をふりて公家・武家の御祈をし候、所謂二

階堂・大御堂・若宮等の別当等是れなり、是れは古も御たのみある上当世

の国主等家には柱天には日月河には橋海には船の如く御たのみあり。

禪宗と申すは又当世の持斎等を建長寺等にあがめさせ給うて父母よりも

重んじ神よりも御たのみあり、されば一切の諸人頭をかたづけ手をあさふ、

かかる世にいかなればにや候らん、天変と申して彗星長く東西に渡り地天

と申して大地をくつがへすこと大海の船を大風の時・大波のくつがへすに

似たり、大風吹いて草木をからし飢饉も年年にゆき疫病月月におこり大旱魃ゆきて河池・田畠・皆かはきぬ、此くの如く三災・七難・数十年起りて民半分

に減じ残りは・或は父母・或は兄弟・或は妻子にわかれて歎く声・秋の虫にことならず、家家のちりうする事冬の草木の雪に・せめられたるに似たり、是は・いかなる事ぞと経論を引き見候へば仏の言く法華經と申す經を謗じ我れを用いざる国あらばかかる事あるべしと、仏の記しをかせ給いて候・御言にすこしもたがひ候はず。

日蓮疑て云く日本には誰か法華經と釈迦仏をば謗すべきと疑ふ、又たまさか謗する者は少少ありとも信ずる者こそ多くあるらめと存じ候、爰に此の日本国に人ごとに阿弥陀堂をつくり念仏を申す、其の根本を尋ぬれば道綽禪師・善導和尚・法然上人と申す三人の言より出でて候、是れは

浄土宗じょうとしゅうの根本こんぽん今の諸人しよにんの御師おんしなり、此の三人さんの念仏ねんぶつ

を弘ひろめさせ給たまいし時にのたまはく未み有う一人得者ひととくしゃ・千中無一せんちゅうむいつ・捨しや閉へい閣かく抛ほう等云

云、いふころは阿弥陀仏あみだぶつをたのみ奉たてまつらん人は一切いっさいの經きやう・一切いっさいの仏ぶつ・一切いっさい

の神をすてて但阿弥陀仏あみだぶつ・南無阿弥陀仏なむあみだぶつと申もうすべし、其その上うへことに法華經ほけきやう

と

釈迦仏しゃかぶつを捨てまいらせよとすすめしかばやすきままに案もなくばらばらと

付き候ぬ、一人付き始めしかば万人ばんにん・皆付き候いぬ、万人付きしかば上は

国主こくしゅ・中は大いじん臣だいいじん・下は万民ばんみん一人も残る事なし、さる程に此の国存の外に

釈迦しゃか・法華ほけ経の御敵てきじん人となりぬ。

其故は「今此三界は皆是れ我が有なり其その中の衆生は悉く是れ吾が子な

り而も今此処は諸の患難多し唯我れ一人のみ能く救護きうごを為す」と説いて、

此の日本国の一切衆生のためには釈迦しゃか・天竺てんじく・天竺七代てんじくしちだい

・地神五代ちじんごだい・人王九十代の神と王とすら猶釈迦なかしやかぶつ・天竺てんじく・天竺七代しよじゅう

其の神と王との眷属等をや、今・日本国の

大地山河大海草木等は皆釈尊の御財ぞかし、全く一分も薬師やくし・阿弥陀あみだ・阿弥陀ぶつ

等の他た・他ぶつの物にはあらず、又日本国の天神てんじん・地神ちじん・九十余代の国主並に

万民牛馬ばんみんぎゅうば・生いき・生いけ・生しょうある者は皆教主釈尊しやくそんの一子なり、又日本国の天神てんじん

万民牛馬ばんみんぎゅうば・生いき・生いけ・生しょうある者は皆教主釈尊しやくそんの一子なり、又日本国の天神てんじん

・地神・諸王・万民等の天地・水火・父母・主君・男女・妻子・黑白等を
わきまたま
みなきようしゅしやくそん
弁え給うは皆教主 釈尊・御教の師なり、全く薬師・阿弥陀

等の御教にはあらず、されば此の仏は我等がためには大地よりも厚く虚空
よりも広く天よりも高き御恩まします仏ぞかし、かかる仏なれば王臣万民
俱に人ごとに父母よりも重んじ神よりもあがめ奉るべし、かくだにも候は
ば何なる大科有りととも天も守護して・よもすて給はじ・地もいかり給うべ
からず。

然るに上一人より下万人に至るまで阿弥陀堂を立て阿弥陀仏を本尊とも
てなす故に天地の御いかりあるかと見え候、譬えば此の国の者が漢土・高麗
等の諸国の王に心よせなりとも、此の国の王に背き候なば其の身はたもち
がたかるべし、今・日本国の一切衆生も是くの如し、西方の国主阿弥陀仏
には心よせなれども我国主釈迦仏に背き

奉^{たてまつ}る故^{ゆえ}に此^この国^{こく}の守護神^{しゅごしん}いかり給^{たま}うかと愚案^{ぐあん}に勘^{かん}へ候^{がう}、而^{しか}るを此^この国^{こく}の
人^{ひと}人^{ひと}阿弥陀^{あみた}仏^{ぶつ}を・或^{ある}は金^{きん}・或^{ある}は銀^{ぎん}・或^{ある}は銅^{どう}・或^{ある}は木画^{もくえ}等^らに志^しを尽^{つく}くし
仏^{ぶつ}事^じをなし、法華^{ほけきよう}經^{きやう}と釈迦^{しゃか}仏^{ぶつ}をば・或^{ある}は墨画^{もくえ}・或^{ある}は木像^{もくざう}にはくをひかず・或^{ある}
は草堂^{そうどう}に造^{つく}りなんどす、例^{れい}せば他人^{たにん}をば志^しを重^{かさ}ね妻^{さい}子^しをばもてなして
父^ふ母^ぼにおろかなるが如^{ごと}し。

又真言宗と申す宗は上一人より下万民に至るまで此れを仰ぐ事日月の如し、此れを重んずる事珍宝の如し、此の宗の義に云く大日経には法華経は二重三重の劣なり、釈迦仏は大日如来の眷属なりなどと申す此の事は弘法慈覚・智証の仰せられし故に今四百余年に叡山・東寺・園城・日本国の智人・一同の義なり。

又禪宗と申す宗は真実の正法は教外別伝なり法華経等の経経は教内なり、譬えば月をさす指・渡りの後の船・彼岸に到りて・なにかせん月を見ては指は用事ならず等云云、彼の人人謗法ともをもはず習い伝えたるまに存の外に申すなり、然れども此の言は釈迦仏をあなづり法華経を失ひ奉る因縁となりて、此の国の人人・皆一同に五逆罪にすぎたる大罪を犯しながら而も罪ともしらず。

此大科・次第につもりて人王八十二代・隱岐の法皇と申せし王並びに

佐渡さどの院等は我が相伝そうでんの家人にも及およばざりし、相州鎌倉そうしゅうかまくらの義時よしときと申せし人に代を取られさせ給たまいしのみならず・島島にはなたれて歎なげかせ給たまいしが・終ついには彼の島島にして隠れさせ給たまいぬ、神あぐりひは悪靈あくりょうとなりて地獄じごくに墮おち候いぬ、其その召仕はれし大臣だいじん已下いかは・或あるは頭こうべをはねられ・或あるは水火すいかに入り・其その妻子等さいしは・或あるは思い死に死に・或あるは民の妻となりて今五十余年・其外ほかの子孫は民のごとし、是これ偏ひとえに真言しんごんと念佛ねんぶつ等をもてなして法華經ほけきょう・釈迦しゃか仏の大怨敵おんてきとなりし故ゆえに天照太神てんしょうだいじん・正八幡等しょうはちまんの天神てんじん・地祇ちぎ・十方じゅうぽうの三宝さんぼうにすてられ奉たてまつりて、現身げんしんには我が所従等しよじゅうに・せめられ後生ごしょうには地獄じごくに墮おち候ぬ。

而しかるに又代東よあずまにうつりて年をふるままに彼の国主こくしゅを失うしないし、真言宗等しんごんしゅうの人人ひとびと・鎌倉かまくらに下り相州そうしゅうの足下そくかにくぐり入りてやうやうにたばかり故ゆえに・本もとは上臈じょうろうなればとてすかされて鎌倉かまくらの諸堂しよどうの別当べつどうとなせり、又念佛者ねんぶつをば

善知識ぜんちしきとたのみて大仏だいぶつ・長樂寺ちやうらくじ・極樂寺等ごくらくとあがめ、禪宗ぜんしゆうをば寿福寺・

けんちやうじ

建長寺等とあがめをく、隱岐おきの法皇ほうこうの果報かほうの尽き

たまい

とが

せんまん

だいかかまくら

しゅつたい

だいか

給いし失とがより百千万億倍せんまんすぎたる大科鎌倉だいかかまくらに出来しゅつたいせり、かかる大科だいかある

ゆえ

てんしやうだいじん

しやうはちまん

てんじん

ちぎ

しやか

たほう

じゅつほう

しよぶつ

故に天照太神てんしやうだいじん・正八幡等しやうはちまんの天神てんじん・地祇ちぎ・釈迦しやか・多宝たほう・十方じゅつほうの諸仏しよぶつ・一同

おおい

に大にとがめさせ給たまう故に、隣国りんこくに聖人しやうにん有りて万国の兵のあつめたる大王だいおう

おお

に仰せ付け

て、日本^{にほんこく}の王臣^{おうしん}万民^{ばんみん}を一同^{いどう}に罰^{ばつ}せんとたくませ給^{たま}うを、日蓮^{にちれん}かねて経論^{きやうろん}

を以^{もつ}て勘^{かん}へ候^{こう}いし程^{ほど}に、此^これを有^ありのま^もに申^{もう}さば国主^{こくしゅ}もいかり、万民^{ばんみん}も

用^{もち}ひざる上^{うへ}、念仏^{ねんぶつ}者^{もの}・禅宗^{ぜんしゅう}・律僧^{りつそう}・真言師^{しんごんし}等^ら定^{さだ}めて忿^{いか}りをなして・あだを

存^{ぞん}じ王臣^{おうしん}等^らに讒奏^{ざんそう}して我^{われ}が身^みに大難^{だいにん}おこりて、弟^で子^し乃^{すなは}至^{いた}檀那^{だんな}までも少^{すく}しも

日蓮^{にちれん}に心^{こころ}よせなる人^{ひと}あらば科^{とが}になし、我^{われ}が身^みもあやうく命^{いのち}にも及^{およ}ばんずら

ん、い^いかが案^{あん}もなく申^{もう}し出^いすべきとやすらひし程^{ほど}に、外典^{げてん}の賢人^{けんじん}の中^{なか}にも

世^よの

ほろぶべき事^{こと}を知^しりながら申^{もう}さぬは諛臣^{ゆしん}とて・へつらへる者^{もの}不知恩^{ふちおん}の人^{ひと}な

り、されば賢^{けん}なりし竜逢^{りゅうほう}比干^{ひかん}なんと申^{もう}せし賢人^{けんじん}は、頸^{けい}をきられ胸^{むね}をさかれ

しかども国^{くに}の大事^{だいじ}なる事^{こと}をばはばかり申^{もう}し候^{こう}いき、仏法^{ぶつぽう}の中^{なか}には仏^{ぶつ}いま

しめて云^いく法華^{ほけ}経^{きやう}のかたきを見て世^よをばはかり恐^{おそ}れて申^{もう}さずば、釈迦^{しゃか}仏^{ぶつ}の

御敵^{ごてき}いかなる智人^{ちじん}・善人^{ぜんにん}なりとも必^{かならず}ず無間地獄^{むげんじごく}に墮^おつべし、譬^{たと}へば父母^{ふぼ}を

人の殺さんとせんを・子の身として父母にしらせず、王をあやまち奉らんとする人のあらむを、しんか臣下の身として知りながら代をおそれて申さざらんが・ごとしなんと禁られて候。

されば仏の御使たりし提婆菩薩は外道に殺され、師子尊者は檀弥羅王に

頭をはねられ、竺の道生は蘇山へ流され、法道は面になやきをあてられ

き、此等は皆仏法を重んじ王法を恐れざりし故ぞかし、されば賢王の時は

仏法をつよく立つれば王両方を聞あきらめて勝れ給う智者を師とせしかば

国も安穩なり、所謂陳・隋の大王・桓武・

嵯峨等は天台智者大師を南北の学者に召し合せ、最澄和尚を南都の十四人

に對論せさせて論じかち給いしかば寺をたてて正法を弘通しき、大族王・

優陀延王・武宗・欽宗・欽明・用明・或は鬼神・外道を崇重し・或は道士

を帰依し・或は

神を崇めし故に、釈迦仏の大怨敵となりて身を亡ぼし世も安穩ならず、
其の時は聖人たりし僧侶大難にあへり、今・日本国すでに大謗法の国とな
りて他国にやぶらるべしと見えたり。

此れを知らながら申さずば縦ひ現在に安穩なりとも後生には無間・大城
に墮つべし、後生を恐れて申すならば流罪・死罪は一定なりと思ひ定めて
去ぬる文忠の比故最明寺入道殿に申し上げぬ、されども用い給う事なかり
しか

ば、念仏者等・此の由を聞きて上下の諸人をかたらひ打ち殺さんとせし程
にかなはざりしかば、長時武蔵の守殿は極楽寺殿の御子なりし故に親の御
心を知りて理不尽に伊豆の国へ流し給いぬ、されば極楽寺殿と長時と彼の
一門は皆ほろぶるを各御覧あるべし、其の後何程もなくして召し返されて
後又経文の如く弥よ申しつよる、又去ぬる
文永八年九月十二日に佐渡の国へ流さる、日蓮御勘氣の時申せしが如くど
しうちはじまりぬ、それを恐るるかの故に又召し返されて候、しかれども
用ゆる事なければ万民も弥弥悪心盛んなり。

縦ひ命を期として申したりとも国主用いずば国やぶれん事疑なし、つ
みしらせて後用いずば我が失にはあらずと思いて、去ぬる文永十一年五月
十二日相州鎌倉を出でて六月十七日より此の深山に居住して門一町を出で
ず既に五箇年をへたり。

本は房州の者にて候いしが地頭東条左衛門尉景信と申せしもの極楽寺殿じとうとうじょうさえもののじょうかげのふ

・藤次左衛門入道さえもん にゅうどう・一切の念佛者にかたらはれて度度の問註ありて・結句いっさい ねんぶつ たびたび けっく

は合戦起りて候上・極楽寺殿の御方人理をまげられしかば東条の郡ふせがいっけん かつうと

れて入る事なし、父母の墓を見ずして数年なり、又国主より御勘気二度なふぼ ぐくしゅ ごかんき

り、第二度は外には遠流と聞こへしかども内おんる

には頸を切るべしとて、鎌倉竜の口と申す処に九月十二日の丑の時に頸のかまくら もつ ところ

座に引きすへられて候いき、いかがして候いけん月の如くにをはせし物江ご

の島より飛び出でて使の頭へかかり候いしかば、使おそれきらず、とい

かうせし程に子細どもあまたありて其の夜の頸はのがれぬ、又佐渡の国にしさい そ

てきらんとせし程に日蓮が申せしが如く鎌倉にどうち始まりぬ、使はしにちれん かまくら ごと

り下りて頸をきらず結句はゆるされぬ、今は此の山に独りすみ候。けっく ひと

佐渡の国にありし時は里より遙にへだたれる野と山との中間につかはらさど はるか ちゅうげん

と申す御三昧所あり、彼処に一間四面の堂あり、そらはいたまあわず四壁
はやぶれたり・雨はそとの如し雪は内に積もる、仏はおはせず筵畳は一
枚もなし、然れども我が根本より持ちまいらせて候・教主釈尊を立てま
いらせ法華経を手ににぎり蓑をき笠をさ

して居たりしかども、人もみへず食もあたへずして四箇年なり、彼の蘇武そぶが胡国ここくにとめられて十九年が間養みのをき雪を食としてありしが如し。

今又此山に五箇年あり、北は身延山と申して天にはしだて・南は・たかとりと申して鷄足山けいそくの如し、西はなないたがれと申して鉄門てつもんに似たり・東は天子てんしがたけと申して富士の御山にたいしたり、四の山は屏風の如し、北に大河あり早河と名づく早き事・箭やをいるが如し、南に河あり波木井河はきりと名づく大石を木の葉の如く流す、東には富士

河北かほくより南へ流れたりせんのはこをつくが如し内に滝あり身延の滝と申す白布そらを天より引くが如し此の内に狭小の地あり日蓮にちれんが庵室あんしつなり深山みやまなれば昼も日を見奉らず夜も月を詠むる事なし峯にははかうの☆はるかまびすしく谷には波の下る音鼓を打つがごとし地にはしかざれども大石多く山には瓦礫がりやくより外には物もなし国主こくしゅはにくみ給ふたま

ばんみん
万民はとぶらはず冬は雪道を塞ぎ夏は草をひしげり鹿の遠音うらめしく蟬
の鳴く声かまびすし訪う人なければ命もつぎがたしはだへをかくす衣も候
はざりつるにかかる衣を・をくらせ給えるこそいかにとも申すばかりなく
候へ。

見し人聞きし人だにもあはれとも申さず、年比なれし弟子つかへし下人
だにも皆にげ失とぶらはざるに聞きもせず見もせぬ人の御志哀なり、
偏に是れ別れし我が父母の生れかはらせ給いけるか、十羅刹の人の見に入
りかはりて思いよらせ給うか、唐の代宗皇帝の代に蓬子將軍と申せし人の
御子・李如暹將軍と申せし人勅定を蒙りて

北の胡地を責めし程に、我が勢数十万騎は打ち取られ胡国に生け取られて
四十年漸くへし程に、妻をかたらひ子をまうけたり、胡地の習い生取をば
皮の衣を服せ毛帯をかけさせて候が、只正月一日計り唐の衣冠をゆるす、

年ごとに漢土^{かんど}を恋いて肝をきり涙をながす、而^さる程に唐^{とう}の軍おこりて唐^{とう}の兵胡地をせめし時ひまをえて胡地^{さいし}の妻子^{さいし}をふりすてて・にげしかば、唐^{とう}の兵は胡地の・えびすとして捕へて頸をきらんとせし程に、とかうして徳宗皇帝^{とくそうこうてい}

にまいらせてありしかば、いかに申せども聞も・ほどこせ給はずして・南
の国・呉越と申す方へ流されぬ、李如暹りじよせん歎なげいて云く進ては涼原の本郷を見
ることを得ず退ては胡地の妻子に逢ふことを得ず云云、此の心は胡地の妻子
をもすて又唐もうこしの古き栖すみかをも見ず・あらぬ国に流されたりと歎なげくなり、我
が身には大忠ありしかども・かかる歎なげきあり。

にちれん

か

ごと

にほんこく

よ

もう

いだ

程に、

日蓮も又此

の

如し

日本国を助け

ば

や

と思

う

心

に

我が生れし国をもせかれ又流されし国をも離れぬ、すでに此の深山にこも

りて

候が彼の李如暹

に

似て

候

なり、

但し

本郷

にも

流

され

し

処

にも

妻

子な

ければ

歎く事

は

よも

あら

じ、

唯

父

母

のは

か

とな

れ

し

人

人の

い

かが

・

な

る

ら

ん

と

・

を

ぼ

つ

か

な

し

とも

申

す

計

り

な

し、

但

う

れ

し

き

事

は

武

士

の

習

ひ

君

の

御

為

に

・

宇

治

勢

多

を

渡

し

前

を

・

か

け

な

ん

ど

し

て

・

あ

り

し

人

は、

た

と

ひ

身

は

死

す

れ

ど

も

名

を

後

代

に

挙

げ

候

ぞ

か

し、

日

蓮

は

法

華

經

の

ゆ

へ

に

度

度

所

を

お

は

れ

戦

を

し

身に手をおひ弟子等を殺され兩度まで遠流せられ既に頸に及べり、是れ
ひとえ ほけきよう
偏に法華經の御為なり、法華經の中に仏説かせ給はく我が滅度の後・
このごひやくさい
後の五百歳・

二千二百余年すぎて此の經閻浮提に流布せん時、天魔の人の身に入りかは
りて此の經を弘めさせじとて、たまたま信ずる者をば・或はのり打ち所を
うつし・或はころしなんどすべし、其の時先さきをしてあらん者は三世
じゅつほう
十方の仏を供養する功德を得べし、我れ又因位の難行・苦行の功德を譲
るべしと説かせ給う取意。

されば過去の不輕菩薩は法華經を弘通し給いしに、比丘・比丘尼等の智慧
かしこく二百五十戒を持てる大僧ども集まりて優婆塞・優婆夷をかたらひ
ふぎようほさつ
て不輕菩薩をのり打ちせしかども、退轉の心なく弘めさせ給いしかば終に
ふぎようほさつ
は仏となり給う、昔の不輕菩薩は今の釈迦仏なり、それをそねみ打ちなん

どせし大僧どもは千劫阿鼻地獄に墮ち

ぬ、彼の人人は觀經・阿弥陀經等の数千の經・一切の仏名・阿弥陀念仏を

もうほけきよう

申し法華經を昼夜に読みしかども、実の法華經の行者をあだみしかば

ほけきよう

ねんぶつ

法華經・念仏・戒等も助け給はず千劫阿鼻地獄に墮ちぬ、彼の比丘等は始

ふぎようほさつ

には不輕菩薩をあだみしかども後には心を・ひるがへして、身を不輕菩薩

に仕うる事やつこの主に随うがごとく有りしかども

むげんじこく 無間地獄をまぬかれず、今又日蓮に^{にちれん}あだをせさせ給う^{たま}日本国の^{にほんこく}人人も^{ひとびと}此く^かの^{こと}如し、^{かしこ}此は^に彼には^に似るべくもなし^{のし}彼は^{のし}罵り^{のし}打ちしかども^{こくしゅ}国主の^{るい}流罪は^いなし^{じょうもく}杖木瓦石はありしかども^{きず}疵をかほり^{およ}頸までには^{あつくじょうもく}及ばず、^{あつくじょうもく}是は^{あつくじょうもく}悪口杖木は二十余年が間・ひまなし^{きず}疵をかほり^{るい}流罪・頸に及ぶ、^{でし}弟子等は・或は^{ある}所領を^{しりょう}召され・或は^{ある}ろううに入れ・或は^{ある}遠流し・或は^{ある}其の内を出だし・或は^{ある}田畠を^{でんぱた}奪ひ^{ある}なんどする事・夜打・強盗・海賊・山賊・謀叛等の^{むほん}者よりもは^{ある}げしく行はる、^こ此れ又^{ひとえ}偏に^{ひとえ}真言・念仏者・^{ぜんしゅう}禅宗等の^{しんごん}大僧等の^{ねんぶつ}訴なり、^{ざんしゅう}されば^{しんごん}彼の^{ねんぶつ}人人の^{ざんしゅう}御失は^{しんごん}大地よ^{ねんぶつ}りも^{ざんしゅう}厚ければ^{しんごん}此の^{ねんぶつ}大地は^{しんごん}大風に^{ねんぶつ}大海に^{しんごん}船を^{ねんぶつ}浮べるが^{しんごん}如く^{しんごん}動転す、^{しんごん}天は^{しんごん}八万^{しんごん}四千の^{しんごん}星暉を^{しんごん}なし^{しんごん}昼夜に^{しんごん}天変ひまなし、^{しんごん}其の上^{しんごん}日月大に^{しんごん}変多し^{しんごん}仏滅後^{しんごん}既に^{しんごん}二千二百二十七年になり^{しんごん}候に^{しんごん}大族王が^{しんごん}五天の^{しんごん}寺をやき^{しんごん}十六の^{しんごん}大国の^{しんごん}僧の^{しんごん}頸を^{しんごん}切り^{しんごん}武宗皇帝の^{しんごん}漢土の^{しんごん}寺を^{しんごん}失ひ^{しんごん}仏像

をくだき、日本国にほんこくの守屋もりやが釈迦しや仏かぶつの金銅こんどうの像ぞうを炭火もつを以てやき僧尼そうにを打ち

せめては還俗げんぞくせさせし時も是これ程ほどの彗星すいせい大地震だいいじしんはいまだなし、彼かしこには

ひやくせんまんばいす

百千万倍ひやくせんまんばいす過ぎて候大悪あくにてこそ候いぬれ、彼は王一人あくしんだいじんの悪心あくしん大臣だいじん以下以下は心

より起おこる事なし、又また権仏こんぶつと権経こんきやうとの敵てきなり僧そうも法華経ほけきやうの行者ぎやうじやにはあらず、

是いっしやうは一向ほけきやうに法華経ほけきやうの敵・王・一人のみなら

ず一國ちじんならの智人ばんみん並びに万民等ばんみんの心より起れる大悪心あくしんなり、譬たとえば女人物にょにんをね

ためば胸たいかの内に大火たいかもゆる故ゆえに、身變みんじて赤く身の毛さかさまにたち五体

ふるかおひ面に炎あがりかほは朱をさしたるが如ごとし眼まなこまろになりてねこの眼まなこ

のねづみを見るが如ごとし、手わななきてかしわの葉を風の吹くに似たりかた

はらの人これ是を見れば大鬼神きじんに異ならず。

日本国にほんこくの国主こくしゅ諸僧しよそう比丘びく比丘尼びくに等も又是かくのくの如ごとし、たのむところの弥陀念仏みだねんぶつ

をば日蓮にちれんが無間地獄むげんじこくの業と云うを聞き真言しんこんは亡国ぼうこくの法と云うを聞き持斎じさいは

てんま 天魔の所為と云うを聞いて念珠をくりながら齒をくひちがへ鈴をふるにく
びをどりたり戒を持ちながら悪心をいだく極樂寺の生仏の良觀 聖人折紙
をささげて上へ訴へ建長寺の道隆 聖人は輿に乗りて奉行人にひざまづく
諸の五百戒の尼御前等ははくをつかひてでんそうをなす、是れ偏に法華經
を読みてよまず聞いてきかず善導・法然が千中無一と弘法・慈覺達磨等の
皆是戲論教外別伝のあまきふる酒にえはせ給い

てさかぐるひにておはするなり、法華最第一の經文を見ながら大日經は
ほけきよう ほつけさいだいいち 法華經に勝れたり きようもん 禪宗は最上の法なり だいにちきよう 律宗こそ貴けれ ほけきよう 念仏こそ我等が分 ぜんしゅう にはかなひたれと申す さいじよう は酒に酔える人にあらずや星を見て月 りっしゅう にすぐれたり もう 石を見て金にまされり東を見て西と云い天を地と申す物ぐるひを本として い 月と金は星と石とには勝れたり すぐ 東は東天は天なんど有りのままに申す者を もう ばあだませ給はば勢の多きに付くべきか たま 只物ぐるひの多く集まれるなり、 ただ されば此等 これら

を本とせし云うにかひなき男女の皆地獄に堕ちん事こそあはれに候へ なんよ 涅槃經には仏説き給はく ねはんぎよう 末法に入つて法華經を謗じて地獄に堕つる者は お ほけきよう 大地微塵よりも多く信じて仏になる者は爪の上の土よりも少しと説かれた だいぢみじん ほけきよう じごく お にほんこく しよにん にちれん じゅつぽう こ たま にほんこく しよにん にちれん じゅつぽう じ みじん しか い しゅくじゅう に て を は す れ ば 御 衣 を ば 送 ら せ の 微 塵 に て 候 べ き か、然 る に 何 な る 宿 習 に て を は す れ ば 御 衣 を ば 送 ら せ

給うぞ爪の上の土の数に入らんとおぼすか又涅槃經に云く「大地の上に針を立てて

たいふう

大風の吹かん時大梵天より糸を下さんに糸のはしすぐに下りて針の穴に入

ほんてん

る事はあるとも、末代に法華經の行者にはあひがたし」法華經に云く「大海

まつだい

ほけきよう

ぎようじゃ

ほけきよう

いわ

たいかい

の底に龜あり三千年に一度海上にあがる梅檀の浮木の穴にゆきあひてやす

さんぜん

ひとたび

せんた

うきぎ

むべし而るに此の龜一目なるが而も僻目にて西の物を東と見東の物を西と

しか

しか

ひがめ

見るなり」末代惡世に生れて法華經並

まつだいあくせ

ほけきよう

びに南無妙法蓮華經の穴に身を入るる男女にたとへ給へり何なる過去の縁

なむみようほうれんげきよう

なんよ

たま

いか

かこ

にてをはすれば此の人をとふらんと思食す御心はつかせ給いけるやらん、

おほしめ

たま

法華經を見まいらせ候へば釈迦仏の其の人の御身に入らせ給いて・かかる

ほけきよう

しゃかぶつ

そ

おんみ

たま

心はつくべしと説かれて候譬へばなにも思はぬ人の酒をのみてえいぬれ

たと

ばあらぬ心出来り人に物をとらせばや・なんと思ふ心出来る、此れは一

しゅったい

しゅったい

こ

生慳貪^{けんどん}にして餓鬼^{がき}に墮^おつべきを其^その人の酒の縁に菩薩^{ぼさつ}の入りかはらせ給^{たま}う
なり、濁水

に珠^{たま}を入れぬれば水すみ月に向いまいらせぬれば人の心あこがる、画にか
ける鬼には心なけれどもおそろし、とわりを画にかけば我が夫をばとらね
ども・そねまし、錦のしとねに蛇^{じゃ}をおれるは服せんとも思はず、身のあつ
きにあたたかなる風いとはし、人の心も此^かくの如^{ごと}し、法華經^{ほけきょう}の方へ御心を
よせさせ給^{たま}うは女人^{にょにん}の御身^{おんみ}なれども竜女^{りゅうにょ}

が御身おんみに入らせ給たまうか。

さては又尾張おわりの次郎兵衛尉ひょうえのじょう殿おんことの御事見参に入りて候いし人なり、日蓮にちれん

は此この法門ほうもんを申し候へば他人たにんにはにず多くの人に見て候へどもいとをしと

申もうす人は千人に一人もありがたし、彼の人はよも心よせには思はれたらじ

なれども、自体人がらくげなるふりなく・よろづの人に・なさけあらん

と思ひし人なれば、心の中は・うけずこそ・

をぼしつらめども、見参の時はいつはりをろかにて有りし人なり、又女房にようぼう

の信じたるよしありしかば実とは思ひ候はざりしかども、又いたう法華經ほけきよう

に背そむく事はよもをはせじなればたのもしきへんも候、されども法華經ほけきようを

失うしなふ念仏ねんぶつ・並びに念仏者ねんぶつを信じ我が身も多分たぶんは念仏者ねんぶつにてをはせしかば

後生ごしょうはいかがと・をぼつかなし、譬たとえば国主こくしゅは

みやづかへのねんごろなるには恩のあるもあり又なきもあり、少しをろ

かなる事候へばとがになる事うたがい疑なし、法華經ほけきようも又此かくの如ごとし、いかに信ずるやうなれども法華經ほけきようの御かたきにも知れ知らざれ、まじはりぬればむげんじこく無間地獄うたがいは疑なし。

是はさてをき候ぬ、彼の女房によぼうの御歎なげいかかと・をしはかるに・あはれなり、たとへば・ふじのはなのさかななるが松にかかりて思ふ事もなきに松のにはかにたふれ、つたのかきにかかれるが・かきの破われたるが如ごとくに・をぼすらん、内へ入れば主なし・やぶれたる家の柱なきが如ごとし、客人来れども外いに出でて・あひしらうべき人もなし、夜のくらきには・ねやすさまじく・はかをみれば・しるしはあれども声もきこへず、又思ひやる死出の山・三途の河をば誰とか越え給たまうらん只ただひと独り歎なげき給たまうらん、とどめをきし御前ごぜんたち・いかに我をば・ひとりやるらん、さはちぎらざりとや歎なげかせ給たまうらん、かたがた秋の夜の・ふけゆくままに

冬の嵐の・をとづる声につけても弥^い弥^い御^な歎^げき重^なり候^むらん、南^な無^む
妙^み法^よ蓮^う華^{れん}経^{げき}・南^な無^む妙^み法^よ蓮^う華^{れん}経^{げき}。

こゝあんがねんつちのえとら

弘安元年 戊寅 九月六日

にちれん かおう

日蓮 花押

ゆかたびら

明衣一つ給び生んぬ、女人の御身・男にもをくれ親類をも・はなれ一二

人ある・むすめもはかばかしからず便りなき上・法門の故に人にも・あだ

まれさせ給ふ女人、さながら不輕菩薩の如し、仏の御姨母・摩訶波闍波提

びくに

たま

によん

に

よん

に

よん

に

よん

に

よん

に

よん

に

よん

比丘尼は女人ぞかし、而るに阿羅漢とならせ給いて声聞の御名を得させ給

ようふじようぶつ

たま

によん

に

よん

に

よん

に

よん

に

よん

に

よん

に

よん

ひ永不成仏の道に入らせ給いしかば、女人の姿をかへ・きさきの位を捨て

ようふじようぶつ

たま

によん

に

よん

に

よん

に

よん

に

よん

に

よん

に

よん

て仏の御すすめを敬ひ、四十余年が程・五百戒を持ちて昼は道路にたたず

み・夜は

み・夜は

み・夜は

樹下に坐して後生をねがひしに、成仏の道を許されずして永不成仏のうき

なを流させ給いし、

たま

によん

に

よん

に

よん

に

よん

に

よん

に

よん

に

よん

なを流させ給いし、くちをしかりし事ぞかし、女人なれば過去遠遠劫の間

有るに付けても無きに付けても・あだなを立てし、はづかしく口惜かりしぞかし、其の身をいとひて形をやつし尼と成りて狭へば・かかる・なげきは離れぬとこそ思ひしに、相違して二乗と

なり永不成仏と聞きしは・いかばかり・あさましくをわせしに、法華經に

して三世の諸仏の御勘氣を許され、一切衆生喜見仏と成らせ給いしは・い

くら程か・うれしく悦ばしくをはしけん、さるにては法華經の御為と申す

には何なる事有りとも背かせ給うまじきぞかし、其に仏の言わく大音声

を以て普く四衆に告げたまわく誰れか能く此の

袈婆国土に於て広く妙法華經を説かん等云云、我も我も思うに諸仏の恩

を報ぜんと思はん尼御前女人達、何事をも忍びて我が滅後に此の袈婆世界

にして法華經を弘むべしと三箇度まで・いさめさせ給いしに、御用ひなく

して他方の国土に於て広く此の經を宣べんと申させ給いしは能く能く不

得^{こころえ}心の尼ぞかし、幾^{いくば}くか仏悪しと・をぼしけん、されば仏はそばむきて八
十^{じゅう}万^{まん}億^{いっ}邪^{じゃ}由^{ゆう}佗^たの諸^{しよ}菩^ぼ薩^{さつ}をこそ・つくづくと御覽ぜしか。

されば女人にょにんは由なき道には名を折り命を捨つれども成仏じょうぶつの道はよはかりけるやと・をばへ侯に、今末代悪世まくだいあくせの女人にょにんと生れさせ給たまいて・かかるものをばえぬ島のえびすにのられ打たれ責られねび法華經ほけきょうを弘めさせ給たまう彼の比丘尼びくにには雲泥勝うんでいすくれてありと仏は靈山りょうぜんにて御覽あるらん、彼の比丘尼びくにの御名みなを一切衆生喜見仏いっさいしゅじょうきけんぶつと申もうすは別の事べちにあ

らず、今の妙法尼御前みょうほうにあまごぜんの名にて侯べし、王となる人は過去かこにても現在げんざいにても十善じゅうぜんを持つ人の名なり名は・かはれども師子ししの座は一也なり、此の名も・かはるべからず、彼の仏の御言みことばをさがへす尼だにも一切衆生喜見仏いっさいしゅじょうきけんぶつとなづけらる、是は仏の言をたがへず此の娑婆世界しゃばせかいまで名を失うしなひ命をすつる尼なり、彼は養母として捨て給たまはず是は他人たにん

として捨てさせ給たまはば偏頗へんげの仏なり、争いかでかさる事は侯べき、況や其中うちゅうしゅじょうしつぜこしきょうもんの經文きょうもんの如くならば今の尼は女子なり彼の尼は養母なり、衆生悉是吾子の經文きょうもんの如くならば今の尼は女子なり彼の尼は養母なり、

養母を捨てずして女子を捨つる仏の御意やあるべき、此の道理を深く御存知あるべし、しげければ・とどめ候い畢んぬ。

みょうほうあまごぜん

妙法尼御前

にちれんかおう
日蓮花押

◆三二七

内房女房御返事

にょうぼうごへんじ

1420p

内房よりの御消息しょうそくに云く八月九日父にてさふらひし人の百箇日に相当りあいあた

てさふらふ、御布施料ふせに十貫まいらせ候乃至あなかしこ・あなかしこ、御

願文がんもんの状いわに云く「読誦どくじゆし奉る妙法蓮華經一部読誦どくじゆし奉る方便寿量品三十

巻読誦どくじゆし奉る自我偈じがげ三百巻唱え奉る妙法蓮華經の題名五万返」云云同状に

云く「伏いわして惟おもんみれば先考の幽靈生存の時弟子遙でしはるかに千里の山河さんかを凌しのぎ親まのあたり

妙法みょうほうの題名だいめいを受け然しかる後三十日を経へずして永く一生の終りを告ぐ」等云云、

又云く「嗚呼閻浮の露庭に白骨仮りに塵土と成るとも靈山の界上に亡魂・

定んで覺蕊を開かん」又云く「弘安三年女弟子大中臣氏敬白す」等云云。

夫れ以れば一乗・妙法蓮華經は月氏国にては一由旬の城に積み日本国

にては唯八卷なり、然るに現世後生を祈る人・或は八卷・或は一巻・或は

方便寿量・或は自我偈等を読誦し讚歎して所願を遂げ給ふ先例之多し此は

且らく之を置く、唱へ奉る妙法蓮華經の題名五万返と云云、此の一段を宣べ

んと思ひて先例を尋ぬるに其の例少なし、或は一返二返唱へて利生を

蒙る人粗これ有るか、いまだ五万返の類を聞かず、但し一切の諸法に亘り

て名字あり其の

名字皆其の体徳を顕はせし事なり、例せば石虎將軍と申すは石の虎を射徹

したりしかば石虎將軍と申す、的立の大臣と申すは鉄的を射とをしたりし

かば的立の大臣と名く、是皆名に徳を顕はせば今妙法蓮華經と申し候は一

部八卷・二十八品の功德を五字の内に収め候、譬へば如意宝珠の玉に万の
宝を収めたるが如し、一塵に三千を尽す法門是なり、南無と申す字は敬う
心なり随う心なり、故に阿難尊者は一切經の如是の二字の上に南無等云云、
南岳大師云く南無妙法蓮華經云云、天台大師云く稽首南無妙法蓮華經云
云、阿難尊者は斛飯王の太子・教主・釈尊の御弟子なり、釈尊御入滅の
後六十日を過ぎて迦葉等の一千人・文殊等の八万人・大閣講堂にして集会
し給いて仏の別を悲しみ給ふ上、我等は多年の間・随逐するすら六十日の
間の御別を悲しむ、百年千年乃至末法の一切衆生
は何をか仏の御形見とせん、六師外道と申すは八百年以前に二天・三仙等
の説き置きたる四韋陀・十八大經を以てこそ師の名残とは伝へて候へ、
いざさらば我等五十年が間・一切の聲聞・大菩薩の聞き持ちたる經經を
書き置き

て未来みらいの衆生しゅじょうの眼目がんもくとせんと僉議せんぎして、阿難尊者あなんそんじやを高座こうざに登のぼせて仏ぶつを仰あおぐ
ごとく如ごとく、下座げざにして文殊師利菩薩もんじゆしりほさつ・南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱となへたりしかば、阿難あなん
そんじやこ尊者う此これを承うけ取りて如是我聞によぜがもんと答こたふ、九百九十九人あらかんの大阿羅漢等おさは筆ふでを
染ぞめめて書かき留とどめ給たまいぬ、一部八卷いちぶはつけん・二十八品にじゅうはちひんの功德くどくは此この五字ごじに収おさめて候う
へばこそ文殊師利菩薩もんじゆしりほさつかくは唱となへさせ給たまう

らめ、阿難尊者あなんそんじや又さぞかしとは答え給うらめ、又万二千のしょうもんはちまん声聞八万の大

菩薩ぼさつ二界八番のざつしゅう雜衆も有りし事なれば合点せらるらめ、天台智者大師と

申すもう聖人・妙法蓮華經のしょうにん五字をみようほうれんげきよう玄義ごじ十卷・一千丁に書き給いて候、其の

心は華嚴經は八十卷・六十卷・四十卷・阿含經あこんきよう數百卷・大集方等數十卷・

大品般若四十卷・六百卷・涅槃經四十卷・三十六卷、乃至月氏・竜宮・

天上・十方世界の大地微塵の一切經は妙法蓮華經の經の一字の所しよじゆう從な

り、妙樂大師重ねて十卷造る

を釈籤しゃくせんと名けたり、天台以後に渡りたる漢土の一切經新訳の諸經は皆

法華經の眷属なり云云、日本の伝教大師重ねて新訳の經經の中の大日經

等の真言しんごんの經を皆法華經の眷属と定められ候い畢おわんぬ、但し弘法・慈覺・

智証等は此の義に水火すいかなり此の義後に粗書きたり、譬たとへば五畿・七道・六

十六箇国・二つの島・其の中の郡と莊と村と田と

島^{ぎゆうば}と人^{きんぎん}と牛馬^{みなにほんこく}と金銀等^{そなわ}は皆日本国の三字の内に備りて一つも闕^かくる事なし、

又王^{もう}と申すは三の字を横^{よこしま}に書きて一の字を豎^{たて}さまに立てたり、横の三の字

は天・地・人なり、豎の一字は王なり、須弥山^{しゆみせん}と申す山^{もう}の大地^{だいち}をつきと

をして傾^{かたむ}かざるが如^{ごと}し、天・地・人を貫^くきて少しも傾^{かたむ}かざるを王とは名け

たり、王に二つあり一には小王なり人王

天王^{これ}是なり二には大王^{だいおう}なり大梵天王^{だいぼんてんのう}是なり、日本国^{にほんこく}は大王^{だいおう}の如^{ごと}し国国の受

領等^{けいこんきよう}は小王^{あこんきよう}なり、華嚴經^{ほうとう}・阿含經^{はん}・方等經^{にやきよう}・般若經^{だいにちきよう}・大日經^{ねはんきよう}・涅槃經^{ねはんきよう}等

の已^い今^{こん}当^{とう}の一切^{いつさいきよう}經は小王^たなり、譬^{たと}へば日本国^{にほんこく}中の国王^{こくおう}受領等^{じうりやうとう}の如^{ごと}し、

法華經^{ほけきよう}は大王^{だいおう}なり天子^{てんし}の如^{ごと}し、然^{しか}れば華嚴宗^{けこんしゅう}・真言宗^{しんこんしゅう}等の諸宗^{しよしゅう}の人人^{ひとびと}は

国主^{こくしゅ}の内の所^{しよじやう}従^{じゆ}等^{とう}なり、国^{こく}の民^{みん}の身^みとして天子^{てんし}の徳^{とく}を奪^{うば}ひ取る^{とる}は下剋上^{げこくじやう}

背^{はい}上^{じやう}向^{かう}下^げ破^は上下^{じやうげ}乱^{らん}等^{とう}これなり、設^{たと}い^いかに世間^{せけん}を治^ちめんと思^{おも}ふ志^しありと

も国^{みだ}も乱^{らん}れ人も亡^む

びぬべし、譬へば木の根を動さんに枝葉静なるべからず大海の波あらから
んに船おだやかなるべきや、華嚴宗・真言宗・念仏宗律僧・禅僧等我が
身持戒正直に智慧いみじく尊しといへども、其の身既に下剋上の家に生れ
て法華經の大怨敵となりぬ、阿鼻大城を脱るべきや、例せば九十五種の
外道の内には正直有智の人多しといへども、二天三仙の邪法を承けしかば
終には惡道を脱るる事なし。

然るに今の世の南無阿弥陀仏と申す人人、南無妙法蓮華經と申す人を

・或は笑ひ・或はあざむく、此れは世間の譬に稗の稻をいとひ家主の田苗

を憎む是なり、是国将なき時の盗人なり日の出でざる時の☆なり、夜打

強盜の科めなきが如く地中の自在なるが如し、南無妙法蓮華經と申す国将

と日輪とにあはば大火の水に消へ☆猴が犬に値うなるべし、当時南無

阿弥陀仏の人人南無妙法蓮華經の御声の聞えぬれば、・或は色を失ひ・或

は眼を瞋らし・或は魂

を滅し・或は五体をふるふ、伝教大師云く日出れば星隠れ巧を見て拙きを

知る、竜樹菩薩云く謬辞失い易く邪義扶け難し、徳慧菩薩云く面に死喪の

色有り言に哀怨の声を含む、法歳云く昔の義虎今は伏鹿なり等云云、此等

の意を以て知ぬべし、妙法蓮華經の徳あらあら申し開くべし、毒藥變じて

藥となる妙法蓮華經の五字は惡變じて善と

なる、玉泉と申す泉は石を玉となす此の五字は凡夫を仏となす、されば過去
の慈父尊靈は存生に南無妙法蓮華經と唱へしかば即身成仏の人なり、石
變じて玉と成るが如し孝養の至極と申し候なり、故に法華經に云く「此の
我が二りの子已に仏事を作しぬ」又云く「此の二りの子は是我が善知識な
り」等云云。

乃往過去の世に一の大王あり名を輪陀と申す、此の王は白馬の鳴くを聞
きて色もいつくしく力も強く供御を進らせざれども食にあき給ふ他国の敵
も胃を脱き掌を合す、又此の白馬鳴く事は白鳥を見て鳴きけり、然る
に大王の政や悪しかりけん又過去の悪業や感じけん、白鳥皆失せて一羽
もなかりしかば白馬鳴く事なし、白馬鳴か

ざりければ大王の色も變じ力も衰へ身もかじけ謀も薄くなりし故に国
既に乱れぬ、他国よりも兵者せめ来らんに何とかせんに歎きし程に、大王

の勅宣ちよくせんに云いく国こくには外道げどう多みなし皆我みなが帰依きえし奉たてまつる仏法ぶつぽうも亦またかくの如ごとし、然しかるに外道げどうと仏法ぶつぽうと中惡なかあくし何いかにしても白馬はくばを鳴なかせん方を信いっぽうじて一方いっぽうを我が国こくに失うしなふべしと云云うんうん、爾その時ときに一切いっさいの外道げどう集ありて

白鳥はくばうを現げんじて白馬はくばを鳴なかせんとせしかども白鳥はくばう現げんずる事ことなし、昔むかしは雲うみを出でだし霧きりをふらし風かぜを吹ふかせ波なみをたて身みの上に火ひを出でだし水みづを現げんじ人ひとを馬うまとなし馬うまを人ひととなし一切いっさい自在じざいなりしかども、如何いかんがしけん白鳥はくばうを現げんずる事ことなし

かりき、爾その時に馬鳴菩薩めみょうぼさつと申もうす仏子ぶつしあり十方じゅつぽうの諸仏しよぶつに祈願しよかんせしかば白鳥
則い出はくで来りて白馬則鳴はくばけり、大王だいおう此を聞食きこしめし色も少し出いで来り力も付きは
だへもあざやかなり、又白鳥又白鳥と千の白鳥出現しゅつげんして千の白馬一時はくばいちじに
にわとり
鶏けいの時をつくる様に鳴きしかば、大王だいおう此の声を聞食きこしめし色は日輪にちりんの如ごとし膚
は月の如ごとし力は那羅延ならえんの如ごとし謀は梵王ぼんのうの如ごとし、爾その時に綸言汗りんげんの如ごとく出いで
て返らざれば一切いっさいの外道等其の寺を仏寺となしぬ。

今・日本国亦かくの如ごとし、此の国は始めは神代なり漸く代の末になる程
に人の意曲り貪瞋癡とんじんち・強盛じやうじやうなれば神の智浅く威も力も少し、氏子共をも
守護しゆごしがたかりしかば漸く仏法ぶつぽうと申もうす大法だいほうを取り渡して人の意も直ただちに神も
威勢強かりし程に、仏法ぶつぽうに付き謬あやまり多く出来しゅったいせし故に国あやうかりしかば、
威勢強かりし程に、仏法ぶつぽうに付き謬あやまり多く出来しゅったいせし故に国あやうかりしかば、
伝教大師・漢土に渡りて日本と漢土と月氏がっし

この聖教しやうきやうを勘かんへ合せて、おろかなるをば捨て賢けんきをば取り偏頗へんげもなく

勘へ給いて、法華經の三部を鎮護國家の三部と定め置き候しを、弘法大師
・慈覺大師・智証大師と申せし聖人等、或は漢土に事を寄せ、或は月氏
に事を寄せて法華經を、或は第三・第二・或は戲論・或は無明の辺域
等と押し下し給いて、法華經を真言の三部と成さしめて候

いし程に、代漸く下剋上し此の邪義既に一国に弘まる、人多く惡道に落ち

て神の威も漸く滅し氏子をも守護しがたき故に八十一乃至八十五の五主は

・或は西海に沈み、或は四海に捨てられ今生には大鬼となり後生は無間

地獄に落ち給いぬ、然りといえども此の事知れる人なければ改る事なし、

今日蓮此の事をあらあら知る故に國の恩を報ぜんとするに日蓮を怨み給ふ。

此等はさて置きぬ氏女の慈父は輪陀王の如し氏女は馬鳴菩薩の如し、白鳥

は法華經の如し白馬は日蓮が如し、南無妙法蓮華經は白馬の鳴くが如し、

大王の聞食して色も盛んに力も強きは、過去の慈父が氏女の南無

妙法蓮華經の御音を聞食して仏に成せ給ふが如し。
みょうほうれんげきよう きこしめ たま ごと

弘安三年八月十四日
こうあん

日蓮花押
にちれんかおう

白米一斗・☆荷みょうがの子・はじかみ一つと送り給おわひ候い畢おわんぬ。

仏には春の花秋の紅葉・夏の清水・冬の雪を進まいらせて候人人皆ひとびとみな仏に成ら

せ給たまふ、況や上一人は寿命かみいちにん じゅみょうを持たせ給ひ下万民は珠ばんみん たまよりも重しげくし候稻米よねを

法華經にまいらせ給たまう人争いかでか仏に成らざるべき、其その上世間せけんに人の大事だいじと

する事は主君しゅくんと父母ふぼとの仰おおせなり、父母の仰おおせを背そむけば不孝ふこうの罪つみに墮おちて

天に捨てられ、国主こくしゅの仰おおせを用もちいざれば違勅いちよくの者と成りて命をめさる、さ

れば我等われらは過去遠遠劫かこ おんのんこうより菩提ぼだいをねがひしに、・或あるは国をすて・或あるは妻さい子し

をすて・或あるは

身をすてなんどして、後生菩提ごしょうぼだいをねがひし程にすでに仏になり近づきし時

は、一乗・妙法蓮華經と申す御經に値いまいらせ候いし時は、第六天の魔王と申す三界の主をはします、すでに此のもの仏にならんとするに二の失あり、一には此のもの三界を出ずるならば我が所従の義をはなれなん、二には此のもの仏になるならば此のもの

が父母・兄弟等も又娑婆世界を引き越しなん、いかがせんとて身を種種に分けて・或は父母につき・或は国主につき・或は貴き僧となり、或は悪

を勧め・或はおどし・或はすかし・或は高僧・或は大僧・或は智者・或は持斎等に成りて・或は華嚴・或は阿含・或は念仏・或は真言等を以て

法華經にすすめかへて・仏になさじとたばかり候なり、法華經第五

の巻には末法に入りては大鬼神第一には国王・大臣・万民の身に入りて法華經の行者を・或は罵り・或は打ち切りて、それに叶はずんば無量無辺

の僧と現じて一切經を引いてすかすべし、それに叶はずんば二百五十戒・

三千さんぜんの威儀いぎを備へたる大僧と成りて国主こくしゅをすかし国母をたばらかして、
・或あるはながし・或あるはころしなどすべしと説かれて候。

又七の卷の不^{ふぎ}輕^{よう}品^ふ・又四の卷の法師品^{ほうしほん}・或^{ある}は又二の卷の譬^ひ喩^ゆ品^{ほん}・或^{ある}は
涅槃^{ねはん}經^{ぎょう}四十卷^{しじゅうし}・或^{ある}は守護^{しゆご}經^{ぎょう}等に委^{いた}細^{さい}に見^みへて候^{こう}が、当時^{とうじ}の世^せ間^{けん}に少^{せう}しもた
がひ候^{こう}はぬ上^{じやう}、駿河^{するが}の国^{こく}賀島^{がしま}の莊^{しょう}は殊^{こと}に目の前に身^みにあたらせ給^{たま}いて覺^{おほ}へ
させ給^{たま}い候^{こう}らん、他^た事^じには似^に候^{こう}はず、父^ふ母^ぼ国^{こく}主^{しゅ}等の法^ほ華^け經^{ぎょう}を御^ぎ制^{せい}止^し候^{こう}を用^{もち}い
候^{こう}はねば還^{かえ}つて父^ふ母^ぼの孝^{こう}養^{よう}となり国^{こく}主^{しゅ}の祈^{いの}りとなり候^{こう}ぞ、其^その上^{じやう}・日本^{にほん}国^{こく}
はいみじき国^{こく}にて候^{こう}神^{しん}を敬^{うや}み仏^{ぶつ}を崇^{あが}むる国^{こく}なり、而^{しか}れども日^{にち}蓮^{れん}が法^ほ華^け經^{ぎょう}を
弘^{くわう}通^{つう}

し候^{こう}を上^{かみ}一人^{いちにん}より下^げ万^{ばん}民^{みん}に至^{いた}るまで御^ぎあだみ候^{こう}故^こに、一^{いっ}切^{さい}の神^{しん}を敬^{うや}み一^{いっ}切^{さい}
の仏^{ぶつ}を御^ぎ供^く養^{よう}候^{こう}へども其^その功^く徳^{とく}還^{かえ}つて大^{だい}惡^{あく}となり、やいと還^{かえ}つて惡^{あく}瘡^{そう}と
なるが如^{ごと}く藥^{かえ}の還^{かえ}つて毒^{どく}となるが如^{ごと}し、一^{いっ}切^{さい}の仏^{ぶつ}神^{しん}等に祈^{いの}り給^{たま}ふ御^ぎ祈^{いの}りは
還^{かえ}つて科^{とが}と成^{なり}りて此^この国^{こく}既^{すで}に他^た国^{こく}の財^{たから}と成^{なり}り候^{こう}、又大^{ひと}なる人^{ひと}人^{ひと}皆^{みな}平^{へい}家^けの亡^な
びしが様^{せん}に百^{ひゃく}千^{せん}万^{まん}億^{いふ}すぎて御^ぎ歎^{なげ}きたるべきよし、兼^{かね}てより人^{ひと}人^{ひと}に申^{もう}し聞^{きこ}せ

候畢おわんぬ、又また法華經ほけきょうをあだむ人の科とがにあたる分齊ぶんざいをもつて還かえつて功德くどくとな
る

分齊ぶんざいをも知らせ給たまうべし、例たとせば父母ふぼを殺ころす人は何いかなる大善根ぜんこんをなせども
天これ是これを受け給たまう事なし、又また法華經ほけきょうのかたきとなる人ひとをば父母ふぼなれども殺ころし
ぬれば大罪たいざい還かえつて大善根ぜんこんとなり候、設たとい十方三世じゅうぽうさんぜの諸仏しよぶつの怨敵おんてきなれども
ほけきほけきょうの一句いっくを信じぬれば諸仏しよぶつ捨すて給たまう事なし、是これを以もつて推すいせさせ給たまへ、
おんつかい
御使ごしいそぎ候へば委くわしくは申もうさず候、又又申もうすべく候、恐恐きょうきょう謹言きんげん。

八月二十二日

日蓮にちれん 花押かおう

◆三二九

うらほんごしよ
孟蘭盆御書

1427p

☆^{こめ}牙一俵やいごめうりなすび等・^{ぶつぜん}仏前にささげ^{もう}申し上候畢んぬ。^{おわ}

うらほん

孟蘭盆と申し候事は^{おんでし}仏の御弟子の中に^{もくれんそんじゃ}目連尊者と^{もう}申して、^{しゃりほつ}舍利弗になら

びて^{ちえ}智慧第一・^{じんつうだいいち}神通第一と^{もう}申して^{しゅみせん}須弥山に^{にちがつ}日月のならび^{だいおう}大王に^{さう}左右の^{おみ}臣の

ごとくに^{もう}をはせし人なり、此の人の父をば^{きつせんしし}吉懺師子と^{もう}申し母をば^{しやうだいに}青提女と

申す、^そ其の母の^{けんどん}慳貪の科によつて^{がき}餓鬼道に^お堕ちて候しを^{もくれんそんじゃ}目連尊者のすくい

^{たま}給うより事をこりて候、^そ其の^{いんねん}因縁は母は^{がき}餓鬼道に^お堕ちてなげき候けれども

^{もくれん}目連は^{ほんぶ}凡夫なれば知る^{ようしやう}ことなし、^{げどう}幼少にして^し外道の家に^い入り^だ四^だる陀・

^{じゅう}じゅうはちだいきよう

十八大経

^{もう}と申す^{げどう}外道の一切経を^{いっさいきよう}ならいつくせども・^そいまだ^そ其の母の生所をしらず、

其その後十三のとし舎利弗しゃりぼつとともに釈迦しゃか仏にまいりて御弟子おんでしとなり、見惑けんわくを
だんじて初果しょかの聖人しょうにんとなり修惑しゅうを断じて阿羅漢あらかんとなりて三明をそなへ
ろくつうろくつう六通をへ給たまへり、天眼てんげんをひらいて、三千大千世界さんぜんだいせんせかいを明鏡めいきようのかげのごとく御
らむありしかば、大地だいちをみとおし三惡道さんあくどうを見る

事冰こおりの下に候魚を朝日にむかいて我等われらがとをしみるがごとし、其その中に
餓鬼道がきもうと申すところに我が母あり、のむ事なし食くらうことなし、皮はきんて
うをむしれるがごとく骨はまるき石をならべたるがごとし、頭いづへはまりのご
とく頸けいはいのごとし腹は大海たいかいのごとし、口をはり手を合せて物をこへる
形は・うへたるひるの人のかを・かげるが
ごとし、先生せんしょうの子をみて、なかとするすがた・うへたるかたちたとへを
・とるに及およばず、いかながかなしかりけん。

法勝寺ほうしょうじの修行舜觀しゆんくわんが・いわうの嶋にながされてはだかにてかみくびつき

にうちをい・やせをとろへて海へんにやすらいてもくづをとりてこしにま
き魚を・一みつけて右の手にとり口にかみける時、本つかいしわらわの

たづねゆきて見し時と、目連尊者もくれんそんじゃが母を見しといづれかをろかなるべきかれはいますこしかなしさわまさりけん。

もくれんそんじゃ

目連尊者はあまりのかなしさに大神通じんつうをげんじ給ひ・はん飯をまいらせたりしかば、母よろこびて右の手にははんをにぎり左の手にては・はん飯をかくして口にをし入れ給たまいしかば、いかんがしたりけんはん飯変じて火となり

・

やがてもへあがり、とうしびをあつめて火をつけたるがごとくぱともへあがり、母の身のごごことやけ候しを目連見もくれん給たまいて、あまりあわてさわぎ大神通じんつうを現げんじて大なる水をかけ候しかば、其その水たきぎとなりていよいよ母の身のやけ候し事こそあはれには候しが、其そのの時目連もくれんみずからの神通じんつうかなわざりしかばはしりかへり須臾しゅゆに仏

にまいりてなげき申せしやうは、我が身は外道げどうの家に生れて候しが仏の

御弟子になりて阿羅漢あらかんの身をへて、三界さんがいの生をはなれ三明六通さんみよろくつうの羅漢らかんとはなりて候へども、乳母の大苦をすくはんとし候にかへりて大苦にあわせて候は、心うしとなげき候しかば、仏いけ説いわいて云く汝なんじが母はつみふかし汝なんじ一人が力及ぶべからず、又何いすれの人なりと

も天神てんじん・地神邪魔外道道士四天王げどうどうししてんのう・帝釈梵王たいしゃくぼんのうの力も及ぶべからず、七月十五日じゅうごうに十方せいそうの聖僧をあつめて百味をんじきをととのへて母のくをはすくべしと云云、目連もくれん仏おの仰せのごとく行いしかば其その母は餓鬼道がき いっごう一劫いつこくの苦を脱まぬかれ給たまいきと、孟蘭盆經うらぼん もうと申す經にとかれて候、其によつて滅後末代めつごまつだいの人人ひとびとは七月十五日に此の法を行ひ候なり、此は常のごとし。

日蓮案にちれんじて云く目連尊者いと申せし人は十界じゅうかいの中に声聞道しょうもんの人・二百五十戒をかたく持つ事石のごとし、三千さんぜんの威儀いぎを備えてかけざる事は十五夜の月のごとし、智慧ちえは日ににたり神通じんつうは須弥山しゆみせんを十四さうまき大山をうご

かせし人ぞかし、かかる聖人しょうにんだにも重報の乳母の恩ほうじがたし、あまさへほうぜんとせしかば大苦をまし給たまい

き、いまの僧等の二百五十戒は名計なけいりにて事をかいによせて人をたばらかしいちぶんの神通じんつうもなし、大石の天にのぼらんとせんがごとし、智慧ちえは牛にるいし羊にことならず、設たとい千万人ばんにんをあつめたりとも父母ふぼの一苦すくうべし

や、せんするところは目連尊者もくれんそんじやが乳母の苦をすくわざりし事は、小乗しょうじょうの

法を信じて二百五十戒もつ じさいと申す持斎じさいにてありしゆへぞかし、されば浄名經じやうみやうきやう

と申す經もつには浄名居士じやうみやうこじと申す男目連房もくれんをせめて云く汝いわを供養くやうする者は

三惡道さんあくどうに墮おつ云云、文の心は二百五十戒のたうとき目連尊者もくれんそんじやをくやうせん

人は三惡道さんあくどうに墮おつべしと云云、此又ただ目連一人もくれん

がきくみみにはあらず、一切いっさいの声聞しょうもん乃至末代しまつだいの持斎等じさいがきくみみなり、此

の浄名經じやうみやうきやうと申すは法華經ほけきやうの御もつためには数十番ろつじゅうの末への郎從ろうじゅうにて候、詮せんす

るところは目連尊者もくれんそんじやが自身じしんのいまだ仏ぶつにならざるゆへぞかし、自身じしん仏ぶつにな

らずしては父母ふぼをだにもすくいがたし・いわうや他人たにんをや。

しかるに目連尊者もくれんそんじやと申す人は法華經ほけきやうと申す經もつにて正直捨方便しょうじきしやほうべんとて、

小乗しょうじょうの二百五十戒しやうじやう立ちどころになげすて南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと申せしか

ば、やがて仏ぶつになりて名号みやうごうをば多摩羅跋耨檀香たまらばせんだんこうぶつ仏ぶつと申す、此の時こそ父母ふぼ

も仏になり給へ、故に法華經に云く我が願既に満ち衆の望も亦足る云云、
目連が色身は・父母の遺体なり目連が色身仏になりしかば父母の身も又仏
になりぬ。

例せば日本国八十一代の安徳天皇と申せし王の御宇に平氏の大將安芸の

きよもり

守清盛と申せし人をはしき、度度の合戦に国敵をほろぼして上太政大臣ま

で官位をきわめ当今はまごとなり、一門は雲客月卿につらなり、日本六十

六国島二を掌の内にかいにぎりて候いしが、人を順うこと大風の草木を

なびかしたる・やうにて候しほどに、心を

ごり身あがり結句は神仏をあなづりて神人と諸僧を手に・にぎらむとせし

ほどに、山僧と七寺との諸僧のかたきとなりて、結句は去る治承四年十二

月二十二日に七寺の内の東大寺・興福寺の兩寺を焼きはらいてありしかば

其の大重罪・入道の身にかかりて・かへるとし養和元年潤二月四日身は

すみのごとく面は火のごとくすみのをこれる

がやうにて結句は炎身より出でてあつちじにに死ににき、其の大重罪をば

むねもり

二男宗盛にゆづりしかば西海に沈むとみへしかども東天に浮び出でて、右

よりとも

おんまえ

大将頼朝の御前に縄をつけて・ひきすへて候き、三男知盛は海に入りて魚

の

糞となりぬ、四男重衡しげひらは其その身に繩をつけて京かまくらを引かれて結句けっくな

ら七大寺にわたされて、十万人の大衆等我等われらが仏のかたきなりとて一刀づ

つ・きざみぬ、悪の中の大悪は我が身に其その苦をうくるのみならず子と孫

と末へ七代までもかかり候けるなり、善の中の大善だいぜんも又又かくのごとし、

目蓮尊者が法華經を信じまいらせし大善だいぜん

は我が身仏になるのみならず父母仏になり給う、上七代下七代上無量生下

無量生の父母等存外に仏となり給う、乃至・子息・夫妻・所従・檀那・

無量の衆生・三惡道をはなるのみならず皆初住・妙覺の仏となりぬ、

故に法華經の第三に云く「願くは此の功德を以て普く一切に及ぼし我等と

衆生と皆共に仏道を成ぜん」云云。

されば此等をもつて思うに貴女は治部殿と申す孫を僧にてもち給へり、

此僧は無戒なり無智なり二百五十戒一戒も持つことなし三千の威義一も持

たず、智慧は牛馬ちえ ぎゅうばにるいし威儀は猿猴いぎ ましらにて候へども、あをぐところは釈迦しゃかぶつ・仏信ほとけきようする法は法華經なり、例せば・の珠たまをにぎり竜の舍利しゃりを戴くがごとし、藤は松にかかりて千尋せんじんをよぢ鶴は

羽たのを待みて万里ばんりをかける此は自身じしんの力にはあらず、治部房も又かくのごとし、我が身は藤のごとくなれども法華經の松にかかりて妙覺みょうかくの山にものぼりなん、一乗いちじようの羽をたのみて寂光じやくかうの空にもかけりぬべし、此の羽をもつて

父母・祖父・祖母ふぼ そふ そぼ乃至七代の末までもとぶらうべき僧なり、あわれ・いみじき御たからは・もたせ給たまひいてをはします女人にょにんかな、彼の竜女りゆうにょは珠たまをささげて仏となり給たまふ、此女人は孫にょにんを法華經の行者ぎやうじゃとなして・みちびかれさせ給たまうべし、事事ききうききうそうそうにて候へば・くはしくは申もうさず、又又申もうすべく候、

恐恐。

七月十三日 日蓮花押にちれんかおう

治部殿うばごぜん御返事ごへんじ

◆三三〇

浄蓮房御書 ごしよ

建治元年六月 がんねん

五十四歳御

作 1431P

細美帷 かたびら 一つ送り給ひ候い畢んぬ、善導和尚と申す人は漢土に臨☆と申す

国の人なり、幼少の時・密州と申す国の明勝と申す人を師とせしが・彼

の僧は法華經と浄名經を尊重して我も読誦し人をもすすめしかば善導

に此れを教ゆ、善導此れを習いて師の如く行ぜし程に過去の宿習にや有

りけん、案じて云く仏法には無量の行あり機に随いて皆利益あり・教いみ

じと・いへども機にあたらざれば虚きがごとし、されば我れ法華經を行ず

るは我が機

に叶はずは・いかんが有るべかるらん、教には依るべからずと思いて

いっさいきよう

一切経蔵に入りりようげん、両眼を閉ぢて経をとるかんむりようじゆきよう、觀無量寿経を得たり、披見すれば

此の経に云くいわ「未来世の煩惱ぼんのうの賊ぞくに害せらるる者の為しょうじよう、清淨しやうじようの業を説く」

等云云、華嚴経は二乗けこんきようのためにじよう法華経・涅槃経等は五乗に・わたれども・た

いしは聖人しょうにんのためなり、末法まつぽうの我等われらが為なる経は

ただかんきようただかんきよう唯觀経にかぎり、釈尊最後の遺言しやくそんさいごには涅槃経ねはんきようにはすぐべからず、彼の

経には七種の衆生しゅじようを列ねたり、第一は入水則没だいいちの一闍提人いっせんたいなり生死しやうじの水に

入りしより已来このかたいまに出でずい譬へば大石たといを大海たいかいに投入たるがごとし、身重しげく

して浮ぶことを習はずこ常に海底こに有こり此れを常没じようぼつと名く、第二をば

出已復没しゅつちふもつと申すもう譬へば身たに力有たりとも浮ぶこ

とをならはざれば出で已いつて復入おわりぬ此れは第一またの一闍提この人には有らね

ども一闍提いっせんたいのごとし又常没じようぼつと名く、第三は出已不没しゅつちふもつと申す・生死しやうじの河を

出でてより・このかた没することなし、此れは舍利弗等しやりほつの声聞しょうもんなり、第四

は出已そく即住第五は觀方・第六は淺処・第七は到彼岸ひがん等なり、第四・第五・

第六・第七は緣覺・菩薩えんかく ぼさつなり、釈迦しゃか如来世に出でさ

せ給たまいて一代五時の經經いちだいを説き給たまいて第三・已上ひとびとの人人を救い給たまい畢おわん

ぬ、第一だいいちは捨てさせ給たまいぬ、法藏比丘阿弥陀仏ほうぞう びくこ此れをうけとつて・四十八

願おこを發して迎むかえとらせ給たまう、十方三世の仏と釈迦しゃか仏とは第三已上いっさいの一切

衆生しゅじょう

衆生

を救い給う、たまあみだ網仏は第一第二を迎えとらせ給う、たまた而るに今末代の凡夫

は第一第二に相当れり、だいいち あいあた而るを淨影大師・天台大師等の他宗の大師は此の

事を弁えずして九品の淨土に聖人も生ると思へりわきま じょうど しょうにん☆りが中の☆りなり、

一向末代の凡夫の中に上三品は遇大始めて大乘に値える凡夫、いっこうまつだい ほんぶ中の三品は

遇小始めて小乗に値へる凡夫、しょうじょう下の三品は遇悪一生造悪無間非法の荒

凡夫、ほんぶ りんじゅう臨終の時・始めて上の七種の衆生を弁えたる智人に行きあひて岸

の上の經經をきょうぎょう

うちすてて水に溺るるの機を救はせ給う、き たまた觀經の下品下生の大惡業に南無

阿弥陀仏を授けたり、あみだぶつされば我れ一切經を見るに法華經等は末代の機には

千中無一なり、せんちゅうむいつ だいいち第一第二の我等衆生は第三已上の機の為に説かれて候、

法華經等を末代に修行すれば身は苦しんで益なしと申して善導和尚は立所

に法華經を抛げすてて觀經を行ぜしかば三昧發得して阿弥陀仏に見参して

重ねて此の法門を渡し給う四帖の疏是なり、導の云く「然るに諸仏の大悲は

苦なる者に於て心偏に常没の衆生を愍念す是を以て勧めて浄土に帰せし

む亦水に溺るる人の如く急に須く偏に救うべし岸上の者何ぞ用いて済うこ

とを為さん」と云云、又云く「深心と言へるは即ち是れ深信の心なり、亦

二種有り、一には決定して自身は現に是れ罪惡生死の凡夫なり曠劫より

已来常に没し常に流転して出離の縁有ること

無しと深信す」又云く「二には決定して彼の阿弥陀仏の四十八願は衆生

を摂受したもうこと疑無く慮り無く彼の願力に乗ずれば定めて往生を

得ると深信す」云云、此の釈の心は上にかけ顕して候・浄土宗の肝心と

申すは此れなり、我等末代の凡夫は涅槃經の第一・第二なり、さる時に

釈迦仏の教には出離の縁有ること無し、法蔵比丘の本願にては「定得往生

と知るを三心の中の深心とは申すなり」等云云、此又導和尚の私儀には非ず、
綽禪師と

申せし人の涅槃經を二十四反かうぜしが曇鸞法師の碑の文を見て立所に

ねはんぎよう

ねはんぎよう

うつ

ほうもん

どんらんほっし

らんほっし

涅槃經を捨てて觀經に遷りて後此の法門を導には教えて候なり、鸞法師と

申せし人は齊の代の人なり漢土にては時に独歩の人なり、初には四論と

ねはんぎよう

ぼだいるし

もう

さんぞう

あ

ねはん

かんきよう

涅槃經とをかうぜしが菩提流支と申す三蔵に値いて四論と涅槃を捨て觀經

うつ

おうじよう

に遷りて往生をとげし人なり、三代が間

伝え候法門なり、漢土・日本には八宗を習う智人も正法すでに過ぎて像法に入りしかば・かしこき人人は皆自宗を捨てて浄土の念仏に遷りし事此なり、日本国のいろはは天台山の慧心の往生要集此なり、三論の永観が十因・往生講の式・此等は皆此の法門をうかがい得たる人人なり、法然上人も亦爾なり云云。

日蓮云く此の義を存ずる人人等も但恒河の第一第二は一向浄土の機と云、此れ此の法門の肝要か、日蓮・涅槃經の三十二と三十六を開き見るに第一は誹謗正法の一闡提常没の大魚と名けたり、第二は又常没其の第二の人を出ださば提婆達多・瞿伽梨・善星等なり、此れは誹謗五逆の人人なり、詮する所第一第二は謗法と五逆なり、法蔵比丘の「設い我仏を得んに十方衆生至心に信樂して我が国に生れんと欲し乃至十念して若し生ぜず

んば正覺

を取らじ唯五逆と誹謗正法とを除く」云云、此の願の如きんば法蔵比丘は

恒河の第一第二を捨てはててこそ候いぬれ、導和尚の如くならば末代の

凡夫阿弥陀仏の本願には千中無一なり、法華經の結經たる普賢經には五逆

と誹謗正法は一乗の機と定め給いたり、されば末代の凡夫の為には法華經

は十即十生・百即百生なり、善導和尚が

義に付いて申す詮は私案にはあらず阿弥陀仏は無上念王たりし時娑婆世界

は已にすて給いぬ、釈迦如来は宝海梵志として此の忍土を取り給い畢んぬ、

十方の浄土には誹謗正法と五逆と一闡提とをば迎うべからずと阿弥陀仏

・十方の仏誓ひ給いき、宝海梵志の願に云く「即ち十方浄土の擯出の衆生

を集めて我当に之を度すべし」云云、法華經に云く「唯我一人のみ能く救護

を為す」等云云。

唯我一人の經文は堅きやうに候へども釈迦如来の自義にはあらず、

あみだぶつ　しよぶつ　阿弥陀仏等の諸仏・我と娑婆世界を捨てしかば教主釈尊・唯我一人と誓
つて・すでに娑婆世界に出で給いぬる上はなにをか疑い候べき・鸞・綽
・導・心・観・然等の六人の人人は智者なり日蓮は愚者なり非学生なり、
但し上の六人は何れの国の人ぞ三界の外の人か六道の外の人か衆生か、
阿弥陀仏に値い奉りて出家受戒して沙門となりたる僧か、今の人人は將門
・純友・清盛・義朝等には種性

も及およばず威徳いとくも足らず、心のがうさは申もうすばかりなけれども朝敵ちようてきとなりぬ

れば其その人ならざる人人ひとびとも将門か純友かと舌にうちからみて申せども・彼

の子孫等しそんも・とがめず、義朝よしともなんと申もうすは故右大将家の慈父ちちぎみなり、子を敬

いまいらせば父をこそ敬いまいらせ候べきに・いかなる人人ひとびとも義朝よしとも為朝な

んど申もうすぞ、此これ則王法の重しげく逆臣つみの罪

のむくゐなり、上の六人も又かくのごとし、釈迦如来世に出でさせ給たまいて

一代いちだいの聖教しやうきやうを説ときをかせ給たまう、五十年の説法を我と集めて浅深勝劣虚妄せんじんしやうれつこもう

真実しんじつを定めて四十余年は未だ真実しんじつを顕あらわさず已今当第一等と説かせ給たまいしか

ば多宝たほう・十方じゆつぱうの仏真実しんじつなりと加判かはんせさせ給たまいて定めをかれて候を・彼の六

人は未顕真実みけんしんじつの觀經かんきやうに依りて皆是みなこれ真実しんじつ

の法華經を第一第二の悪人の為にはあらずと申もうさば・今の人人ひとびとは彼かしこにすか

されて数年を経たるゆへに・将門・純友等が所従等彼を用いざりし百姓ひやくせい

等を・或は切り・或は打ちなんどせしがごとし、彼をおそれて従いし男女
は官軍に・せめられて彼の人人と一時に水火のせめに値いしなり。

今・日本国の一切の諸仏・菩薩・一切の経を信ずるやうなれども・心は

彼の六人の心なり身は又彼の六人の家人なり、彼の将門等は官軍の向はざ
りし時は大将の所従知行の地且らく安穩なりしやうなりしかども違勅の責
め近づきしかば、所は修羅道となり男子は厨者の魚をほふるがごとし、炎
に入り水に入りしなり、今・日本国も又かく

のごとし、彼の六人が僻見に依って今生には守護の善神に放されて三災

・七難の国となり後生には一業所感の衆生なれば阿鼻大城の炎に入るべ

し、法華経の第五の巻に末代の法華経の強敵を仏記し置き給えるは如六通

羅漢と云云、上の六人は尊貴なること六通を現ずる羅漢の如し。

然るに浄蓮上人の親父は彼等の人人の御檀那なり、仏教実ならば無間

・大城だいじょう疑うたがいなし、又君の心を演のぶるは臣おみ・親の苦をやすむるは子なり、
目☆尊者そんじやは悲母ひもの餓鬼がきの苦を救い浄蔵・浄眼じやけんは慈父じふの邪見ひるがえりを翻たし給まいい
き、父母ふほの遺体いたいは子の色心しきしんなり、浄蓮じょうにん上人しょうにんの法華經ほけきやうを持ち給たまう御功德くどくは
慈父じふの御力おんちからなり、提婆達多だいばだつたは阿鼻地獄あびじごくに墮おちしかども

てんのうによらい
天王如来の記を送り給たまいき彼は仏と提婆だいばと同性一家なる故なり、此これは又
慈父じふなり子息しそくなり、浄蓮上人じょうにんの所持しよじの法華經ほけきやういかでか彼の故聖靈しやうりやうの功德くどく
とならざるべき、事多しと申せども止め畢おわんぬ三反人さんべんに・よませて・きこ
しめせ、恐恐きやうきやうきんげん謹言。

六月二十七日

にちれん かおう
日蓮 花押

返す返すするがの人人ひとびとみな同じ御心もうと申させ給たまい候へ。

◆三三三 新池殿御消息しやうそく

弘安二年五月 五十八こうあん

歳御作 1435p

八木三石送り給たまい候、今一乗いちじやう・妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの御宝前ほうぜんに備へ奉たてまつりて南無なむ

みようほうれんげきよう　ただいっぺんとな

妙法蓮華經と只一遍唱えまいらせ候い畢んぬ、いとをしみの御子を靈山りようぜん

じようど　けつじようむ　うぎ

浄土へ決定無有疑と送りまいらせんがためなり。

そもそもんが

抑因果のことはりは華と果との如し、千里の野の枯れたる草に螢火のほたるび

こと

如くなる火を一つ付けぬれば須臾に一草・二草・十・百・千万草につきわせんまん

たりてもゆれば十町・二十町の草木・一時にやけつきぬ、竜は一しずく

手に入れて天に昇りぬれば三千世界に雨をふらし候、小善しうぜんなれども法華經ほけきよう

に供養くようしまいらせ給いぬれば功德くどく此くの如し、

仏滅後・一百年と申せしに月氏国に阿育大王と申せし王ましましき・一ちきよう

えんぶだい

閻浮提・八万四千の国を四分が一御知行ありき、竜王りゆうおうをしたがへ鬼神きじんを召

し仕はせ給う、

六万の羅漢らかんを師として八万四千の石塔を立て十萬億じふいふの金を

くよう

仏に供養くようし奉らんと誓はせ給いき、かかる大王だいおうにてをはせし其の因位いんいの功德くどく

をたづぬればただ土の餅一・釈迦しゃか仏に供養くよう

をたづぬればただ土の餅一・釈迦しゃか仏に供養くよう

をたづぬればただ土の餅一・釈迦しゃか仏に供養くよう

をたづぬればただ土の餅一・釈迦しゃか仏に供養くよう

をたづぬればただ土の餅一・釈迦しゃか仏に供養くよう

をたづぬればただ土の餅一・釈迦しゃか仏に供養くよう

をたづぬればただ土の餅一・釈迦しゃか仏に供養くよう

し奉りし故ぞかし、釈迦仏の伯父に斛飯王と申す王をはします、彼の王に
太子あり阿那律となづく此の太子生れ給いしに御器一つ持ち出でたり、彼
の御器に飯あり食すれば又出でき又出でき終に飯つくる事なし、故にかの

たいし
太子のをさな名をば如意となづけたり、法華經にて仏に成り給ふ普明如来
これ
是なり、此の太子の因位を尋ぬればうへたる世にひえの飯を辟支仏と申す
くよう
僧に供養せし故ぞかし、辟支仏を供養する功德すら此くの如し、況や法華經
ぎようじゃ
の行者を供養せん功德は無量無辺の仏を供養し進らする功德にも勝れて候
なり。

そもそものにちれん にほんこく
抑日蓮は日本国の者なり、此の国は南閻浮提七千由旬の内に八万四千
の国あり・十六の大国・五百の中国・十千の小国・無量の粟散国あり、
ちゆうこく
その中に月氏国と申す国は大国なり、彼の国に五天竺あり、其れより東海
がっし
の中に小島あり日本国是なり、中天竺よりは十万余里の東なり、仏教は
にほんこくこれ
ぶつめつとこししょうほう
仏滅度後正法一千年が間は天竺にとどまりて余国
てんじく

にわたらず、正法一千年の末像法に入つて一十五年と申せしに漢土へ渡る、
しょうほう
かんど
漢土に三百年すぎて百済国に渡る、百済国に一百年已上一千四百十五年と
くだら
わた
くだら

申せしに・人王三十代・欽明天皇の御代に日本国に始めて釈迦仏の金銅の像

いっさいきよう

わた

と一切経は渡りて候いき、今七百余年に及び候、其の間・一切経は五千

およ

そ

いっさいきよう

余巻・或は七千余巻なり、宗は八宗・九宗・十宗なり、国は六十六箇国・

ある

はっしゅう

二つの島・神は三千余社・仏は一万余寺なり、男女よりも僧尼は半分に及

さんぜん

なんよ

そうに

べり、仏法の繁昌は漢土にも勝れ天竺にもまされり。

ぶつぼう

はんじょう

すぐ

てんじく

但し仏法に入つて諍論あり、浄土宗の人人は阿弥陀仏を本尊とし・真言

ただ

ぶつぼう

じょうろん

じょうとしゅう

ひとびと

あみだぶつ

ほんぞん

しんごん

の人人は大日如来を本尊とす・禪宗の人人は経と仏とをば闇いて達磨を

ひとびと

だいにちにようい

ほんぞん

ぜんしゅう

ひとびと

さしお

だるま

本尊とす、余宗の人人は念仏者・真言等に随へられ何れともなければども・

ほんぞん

よしゅう

ひとびと

ねんぶつ

しんごん

いすれ

つよきに随ひ多分に押されて阿弥陀仏を本尊とせり、現在の主師親たる

したがたぶん

あみだぶつ

ほんぞん

げんざい

しゅししん

釈迦仏を闇きて他人たる阿弥陀仏の十万億の他

しゃかぶつ

お

たにん

あみだぶつ

じゅういっぴやく

国へにげ行くべきよしをねがはせ給ひ候、阿弥陀仏は親ならず主ならず師

たまひ

あみだぶつ

ならず、されば一經いっぎやうの内・虚言そらごとの四十八願を立て給たまいたりしを愚おろなる人ひと人びと
実じつと思おもいて物狂ものぐるはしく金拍子かねばうしをたたきおどりはねて念仏ねんぶつを申し親おやの国くにをば
いとひ出いでぬ、来迎らいごうせんと約束やくそくせし阿弥陀あみだぶつ仏ぶつの約束やくそくの人ひとは来きらず中ちゆう有うのた
びの空まよひに迷まよいて謗法ほうぼうの業ごうにひかれて三惡道さんあくどうと申もうす獄屋ごくへおもむけば・獄卒ごくそつ
・阿防あぼう・羅刹らせつ悦よろこびをなし・とらへからめてさひなむ事こと限りなし、これをあ
らあ

ら經文に任せてかたり申せば日本国の男女四十九億九万四千八百二十八人
ましますが某一人を不思議なる者に思いて余の四十九億九万四千八百二
十七人は皆敵と成りて、主師親の釈尊をもちひぬだに不思議なるに、かへ
りて・或はのり・或はうち・或は処を追ひ・或は讒言して流罪し死罪に行
はるれば、貧なる者は富めるをへつらひ賤き者は貴きを仰ぎ無勢は多勢に
したがう事なれば、適法華經を信ずる様なる人人も世間をはばかり人を
恐れて多分
は地獄へ墮つる事不便なり、但し日蓮が愚眼にてやあるらん又宿習にて
や候らん法華經最第一已今当說難信難解唯我一人能為救護と説かれて候文
は如来の金言なり敢て私の言にはあらず、当世の人は人師の言を如来の金言
と打ち思ひ・或法華經に肩を並べて斉しと思ひ・或は勝れたり・或は劣る
なれども機にかなへりと思へり、し

かるに如來にょらいの聖教しょうきょうに隨他意ずいたい隨自意ずいじいと申もうす事あり、譬たとえば子の心に親の隨したがうをば隨他意ずいたいと申もうす親の心に子の隨したがうをば隨自意ずいじいと申もうす、諸經しよきようは隨他意ずいたいなり
仏・一切衆生の心に隨したがひ給ふ故に、法華經ほけきようは隨自意ずいじいなり一切衆生を仏の
心に隨したがへたり、諸經しよきようは仏說ぶつせつなれども是これを信しんずれば衆生の心にて永く仏に
ならず、法華經ほけきようは仏說ぶつせつなり仏智ぶつちなり一字一点
も是これを深く信しんずれば我が身即そく仏となる、譬たとえば白紙を墨に染むれば黒くな
り黒漆うるしに白き物を入れるれば白いくなるが如ごとし毒藥變じて藥となり衆生變じ
て仏となる故に妙法ゆえ みようほうと申もうす、然しかるに今の人人は高たかきも賤いやしきも現げん在ざいの父たる
釈迦しゃか・迦ぶつ・佛ふつをばかろしめて他人たにんの縁なき阿彌陀あみだ・大日だい等だいにちを重たてんじ奉まつるは是これ
不孝ふこうの失とがにあらざるや是これ謗法ほうほうの人にあらざる
や、と申まをせば日本國にほんこくの人・一同いどうに怨あだませ給たまうなり、其それもことほりなりま
がれる木はすなをなる繩なはをにくみいつはれる者はただしき政せいりごとをば心

にあはず思うなり。

我が朝人王九十一代いちだいの間に謀叛むほんの人人ひとびとは二十六人なり、所謂いわゆる大山の王子みこ

・大石の小丸さんりん・乃至ないし将門すみとも悪左府等なり、此等これらの人人ひとびとは吉野とつ河

の山林さんりんにこもり筑紫つくし・鎮西の海中かいちゅうに隠るれば・島島のえびす浦浦のものの

ふどもうたんとす、然れどもそれは貴き聖人とうとしょうにん・山山・寺寺・社社の法師ほっし・

尼女人にょにんはいたう敵と思ふ事なし、日蓮にちれんをば

上下じょうげの男女なんよ・尼に・法師ほっし貴とうとき聖人しょうにんなんと伝つたはるる人人ひとびとは殊ことに敵てきとなり候こう、
其そのの故ゆゑはいづれも後生ごしょうをば願ねがへども男女なんよよりは僧尼そうにこそ願ねがふ由よしはみえ候こうへ、
彼等かれらは往生おうじょうはさてをきぬ今生こんじょうの世よをわたるなかだちとなる故ゆゑなり、智者ちしや
しょうにん
聖人せいじん又また我好我勝もうたりと申し本師ほんしの跡あとと申し・所領しりやうと申し・名聞利養みやうもんりやうを
しげ
重おもくして・まめやかに道心どうしんは輕かろし、仏法ぶつぽうはひがさま
に心得こころえて愚癡ぐちの人ひとなり、謗法ほうぼうの人ひとなりと言いをも惜おしまず人ひとをも憚はばらず、当知まか
是人ぜそん、仏法中怨ぶつぽうちゅうおんの金言きんげんを恐おそれて我是世尊使せそん使し衆無所畏しゆむそふいと云いう文ぶんに任まかせてい
たくせむる間かん・未得謂為得がまん・我慢心じやうまん充満ひとびとの人人ひとびと争いかにくみ嫉にくみまざらんや。
されば日蓮程にちれん天神七代てんじん・地神五代ちじんごだい・人王九十余代じんおうじゅうよにいまだ此これ程法華經ほけきやう
ゆゑ
の故ゆゑに三類さんるいの敵人てきじんにあだまれたる者ものなきなり、かかる上下万人じやうげばんにん・一同いどうのに
くまれ者ものにて候こうに此これまで御渡り候わたいし事ことおぼろげの縁ゆかりにはあらず宿世すくせの
ふ
父母ふぼか昔きやうだいの兄弟きやうだいにて・おはしける故ゆゑに思おもひ付つかせ給たまうか、又過去かこに法華經ほけきやう

の縁深くして今度このたび仏にならせ給たまうべきたねの熟せるかの故ゆえに在俗ざいそくの身として世間せけんひまなき人の公事くじのひまに思い出ださせ給たまいけるやらん。

そ

其の上遠江の国より甲州波木井の郷身延山へは道三百余里に及べり、宿

宿のいぶせさ嶺に昇れば日月にちがつをいただき・谷へ下れば穴へ入るかおほと覚ゆ、

河の水は矢を射るが如ごとく早し大石ながれて人馬むかひ難がたし、船あやうくし

て紙を水にひたせるが如ごとくし、男は山かつ女は山母ことの如ごとくし、道は縄ことの如ごとくほ

そく・木は草ことの如ごとくしげし、かかる所へ

尋ね入らせ給たまいて候事・何なる宿習しゆくじゅうなるらん、釈迦しゃかぶつ仏は御手みてを引き帝釈たいしやく

は馬ばとなり梵王ぼんのうは身に随したがひ日月にちがつは眼まなことなりかはらせ給たまいて入らせ給たまいける

にや、ありがたしありがたし、事多しと申せども此の程風おこりて身苦し

く候間とこ留め候あわい畢おわんぬ。

いっあん

つちのこと

弘安二年己卯五月二日

にちれんかおう
日蓮花押

新池殿御返事
ごへんじ

うれしきかな末法流布まつぼうるふに生れあへる我等われらかなしきかな今度このたび此の経を信ぜ
ざる人人ひとびと、抑そも人界じんがいに生を受くるもの誰か無常むじょうを免れんまぬか、さあらんに取つ
ては何ぞ後世ごしやうのつとめをいたさざらんや、倩つら世間の体を観ずれば人皆口みな
には此の経を信じ手には経卷きやうかんをにぎるといへども経の心にそむく間惡道あくどうを
免れ難しまぬか、譬たとえば人に皆五臟みなあり一臟も損ずれば其その臟より病出て来て余
の臟を破り終に命を失うしなうが如しごと、爰ここを以て伝教大師でんぎやうだいしは「法華經ほけきやうを讃さんすと
雖もいえど

還かえつて法華ほっけの心を死す」等云云、文の心は法華經ほけきやうを持ち讀み奉たてまつり讀むれど

も法華ほっけの心に背そむきぬれば還かえつて釈尊しゃくそん・十方じゅうつぽうの諸仏しよぶつを殺すに成りぬと申もうす
意いなり、終ついに世間せけんの悪業衆罪あくごうしゅうざいは須弥しゆみの如ごとくなれども此の經きやうにあひ奉たてまつりぬれ
ば・諸罪しよざいは霜露そうろの如ごとくに法華經ほっけきやうの日輪にちりんに値あひ奉たてまつりて消ゆべし、然しかれども此
の經きやうの十四誹法ほうぼうの中に一も二もをかしぬれば

其その罪つみ消えがたし、所以ゆえんは何ん一大三千界さんぜんかいのあらゆる有情うじやうを殺したりとも
争いかでが一仏いちぶつを殺す罪つみに及およばんや、法華ほっけの心に背そむきぬれば十方じゅうつぽうの仏の命いのちを失うしなふ
罪つみなり、此このをきてに背そむくを誹法ほうぼうの者ものとは申もうすなり、地獄じごくおそるべし炎を
以もつて家とす、餓鬼がき悲かなむべし飢渴けかちにうへて子を食くふ、修羅しゆらは鬭諍とうじやうなり畜生ちくしやう
は残害たがいとて互たがいに殺しあふ、紅蓮地獄くれんじごくと申もうす

はくれなるのはちすとよむ、其そのの故は余りに寒につめられてここむ問もんせな
かわれて肉いの出いでたるが紅の蓮に似たるなり、況だいや大紅蓮だいくれんをや、かかる悪
所にゆけば王位將軍しやうぐんも物ならず獄卒ごくそつの呵責かしゃくにあへる姿は猿をまはすに異な

らず、此の時は争か名聞名利・我慢偏執有るべきや。

思食すべし法華經をしれる僧を不思議の志にて一度も供養しなば惡道

に行くべからず、何に況や十度・二十度乃至・五年・十年・一期生の間供養

せる功德をば仏の智慧にても知りがたし、此の經の行者を一度供養する

功德は釈迦仏を直ちに八十億劫が間無量の宝を尽して供養せる功德に百

千万億勝れたりと仏は説かせ給いて候、此の經にあひ奉りぬれば悦び身に

余り左右の眼に淚浮びて釈尊の御恩報じ尽しがたし、かやうに此の山ま

で度度の御供養は法華經並に釈迦尊の御恩を報じ給うに成るべく候、弥

はげませ給うべし懈ることなかれ、皆人の此の經を信じ始むる時は信心有る

様に見え候が中程は信心もよはく僧をも恭敬せず供養をもなさず自慢して

惡見をな

す、これ恐るべし恐るべし、始より終りまで信心をいたすべしさなく

して後悔こうかいやあらんずらん、譬たとえば鎌倉かまくらより京へは十二日の道なり、それを
十一日余り歩をはこびて今日に成りて歩をさしをきては何として都の月
をば詠ながめ候べき、何としても此の經の心をしれる僧に近づきいよいよ 弥いよいよ法の道理どうり
を聴聞ちやうもんして信心しんじんの歩を運ぶべし。

噫す過ぎし方の程なきを以て知んぬ我等われらが命今幾程もなき事を春の朝に花を
ながめし時ともなひ遊びし人は花と共に無常むじやうの嵐に散りはてて名のみ残り
て其その人はなし花は散りぬといへども又こん春も発ひらくべしされども消えに
し人は亦またいかならん世にか来るべき秋の暮に月を詠ながめし時戯れむつびし人
も月と共に有為うゐの雲に入りて後面影ばかり身にそひて物いふことなし月にしやまは
西山に入るといへども亦またこん秋も詠むべし然しかれどもかくれし人は今いづく
に

か住みぬらんおぼつかなし無常むじやうの虎のなく音は耳にちかづくといへども聞

いて驚くことなし屠所の羊の今幾日か無常の道を歩まん雪山の寒苦鳥は寒
苦に・せめられて夜明なば栖つくらんと鳴くといへども日出でぬれば朝日
のあたたかなるに眠り忘れて又栖をつくらずして一生虚く鳴くことをう
いつさいしゅじょう　またかくのごと　お　一切衆生も亦復是くの如し地獄に堕ちて炎に

むせぶ時は願くは今度人間に生れて諸事を闇ひて三宝を供養し後世菩提を
たすからんと願へどもたまたま人間に来る時は名聞名利の風はげしく仏道
修行の灯は消えやすし、無益の事には財宝をつくすにおしからず、仏法
僧にすこしの供養をなすには是をものうく思ふ事これただごとにあらず、
地獄の使のきをふものなり寸善尺魔と申すは是なり、其の上此の国は謗法
の土なれば守護の善神は法味にうへて社をすて天に上り給へば社には悪鬼

入り

かはりて多くの人を導く、仏陀化をやめて寂光土へ帰り給へば堂塔寺社は徒に魔縁の栖と成りぬ、国の費民の歎きにていらかを並べたる計りなり、是れ私の言にあらず経文にこれあり習ふべし。

諸仏も諸神も謗法の供養をば全く請け取り給はず況や人間としてこれをつくべきや、春日大明神の御託宣に云く飯に銅の炎をば食すとも心穢れたる人の物をうけじ、座に銅の焰には坐すとも心汚れたる人の家にはいたらじ、草の廊・萱の軒にはいたるべしと云へり、縦令千日のしめを引くとも不信の所には至らじ、重服深厚の家なりとも有信の所には至るべし云云、是くの如く善神は此の謗法の国をばなげきて天に上らせ給いて候、心けがれたると申すは法華經を持たざる人の事なり、此の經の五の巻に見えたり、謗法の供養をば銅焰とこそおほせられたれ、神だにも是くの如し況や我等凡夫としてほむらをば食すべしや、人の子として我が親を殺したらんもの

の我に物をえさせんに是これを取るべきや、いかなる智者ちしやしょうにん聖人も無間地獄むげんじごくを遁のがるべからず、又それにも近づくべからず

与よ同罪どうざい恐るべし恐るべし。

釈尊しゃくそんは一切の諸仏しよぶつ・一切の諸神しよ人天大会にんてんたいえい一切衆生の父なり主なり師なり

り、此の釈尊しゃくそんを殺したらんに争いかでか諸天善神等しよてんぜんじんうれしく思食おほしめすべき、今・此

の国の一切の諸人しよにんは皆釈尊みなしゃくそんの御敵なり、在家の俗男ざいけ・俗女等そくなんよりも邪智心そくじよ

の法師ほっしばらは殊ほかの外の御敵なり、智慧ちえに於ても正智あり邪智あり智慧ちえあり

とも其その邪義じやぎには随ふべからず、貴僧かうそう・高僧

には依よるべからず、賤いやしき者なりとも此の経の謂いれを知りたらんものをば

生身しやうしんの如來にやらいのごとくに礼拝供養らいはいくようすべし是れ経文きやうもんなり、されば伝教大師でんきやうだいしは

無智破戒むちはかいの男女等なんよも此の経を信ぜん者は小乘しやうじやう二百五十戒の僧の上に座席ざせき

に居すよ末座まつざすべからず況や大乘だいじやう此の経の僧をやとあそばされたり、今生こんじやう

身の如來にょらいの如ごとくにみえたる極樂寺ごくらくじの良觀房りょうかんより

も此この經きやうを信しんじたる男女なんによは座席ざせきを高く居することこそ候へ、彼の二百五十戒

の良觀房りょうかんも日蓮にちれんに会いぬれば腹はらをたて眼まなこをいからす是ただごとにはあら

ず、智者ちしやの身に魔まの入りかはればなり、譬たとえば本性ほんしやうよき人なれども酒に酔

い

ぬればあしき心出来し人の為にあしきが如し、仏は法華以前の迦葉・
舍利弗・目連等をば是を供養せん者は三惡道に墮つべし、彼が心は犬野干
の心には劣れりと説き給いて候なり、彼の四大声聞等は二百五十戒を持つ
ことは金剛の如し・三千の威儀具足する事は十五夜の月の如くなりしかど
も・法華經を持たざる時は是くの如く仰せられたり、何に況やそれに劣れ
る今時の者共をや。

建長寺・円覺寺の僧共の作法戒文を破る事は大山の頽れたるが如く・
威儀の放埒なることは猿に似たり、是を供養して後世を助からんと思ふは
・はかなし・はかなし、守護の善神此の国を捨つる事疑あることなし、
昔釈尊の御前にして諸天善神・菩薩・声聞・異口同音に誓をたてさせ
給いて若し法華經の御敵の国あらば・或は六月に霜霰と成りて国を飢饉せ
させんと申し、・或は小虫と成りて五穀をはみ失はんと申し、・或は旱魃を

なさん・或は大水と成り

て田園をながさんと申し、・或は大風と成りて人民を吹き殺さんと申し、

・或は悪鬼と成りてなやまさんと面面に申させ給ふ、今の八幡大菩薩も其の

座におはせしなり争か靈山の起請の破るるをおそれ給はざらん、起請を破

らせ給はば無間地獄は疑なき者なり恐れ給うべし恐れ給うべし、今まで

は正く仏の御使出世して此の経を弘めず国主もあながちに御敵にはならせ

給はず但いづれも貴しとのみ思ふ計りなり。

今某仏の御使として此の経を弘むるに依りて上一人より下万民に至る

まで皆謗法と成り畢んぬ、今までは此の国の者ども法華経の御敵にはなさ

じと一子のあひにくの如く捨てかねて・おはせども・靈山の起請のおそろ

しさに社を焼き払いて天に上らせ給いぬ、さはあれども身命をおしまぬ

法華経の行者あれば其の頭には住むべし、天照太神・八幡大菩薩・天に

上らせ給^{たま}はば其^その余^{しよ}の諸神争^{いかで}か社^{とと}に留^{とど}るべき、縦^{たと}ひ捨^すてじと思^{おほしめ}食^くすとも
靈山^{りようぜん}のやくそ

くのままに某^{それがし}呵責^{かしやく}し奉^{ほう}らば一日^{いちにち}もやはか・おはすべき、譬^{たと}えば盗人^{ぬすびと}の候^{こう}
に知^しれぬ時^{とき}は・かしこやここに住^すみ候^{こう}へども能^よく案内^{あんない}知^しりたる者^{もの}の是^ここそ
盗人^{ぬすびと}とののしりどめ^{ぬすびと}げば・おもはぬ外^{すみか}に栖^すを去^さるが如^{ごと}く、某^{それがし}にささへら
れて社^{やしろ}を

ば捨て給ふ、然るに此の国思いの外に悪鬼神の住家となれり哀なり哀なり。

又一代聖教を弘むる人多くおはせども是れ程の大事の法門をば伝教

てんだい

おほ

ひろ

こ

だいじ

ほうもん

でんぎょう

じょうぎ

ほうもん

じょうぎ

ほうもん

じょうぎ

ほうもん

じょうぎ

ほうもん

天台もいまだ仰せられず、其も道理なり末法の始の五百年に上行菩薩の

しゅつせ

ひろ

たま

ほうもん

どうり

まっぼう

じょうぎ

ほうもん

じょうぎ

ほうもん

じょうぎ

ほうもん

じょうぎ

ほうもん

じょうぎ

出世あつて弘め給ふべき法門なるが故なり、相構へていかにしても此の度

しゅつせ

ひろ

たま

ほうもん

どうり

まっぼう

じょうぎ

ほうもん

じょうぎ

ほうもん

じょうぎ

ほうもん

じょうぎ

ほうもん

じょうぎ

此の経を能く信じて 命終の時千仏の迎いに預り 靈山浄土に走りまいり

じじゅ

しんじん

しんじん

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

自受法樂すべし、信心弱くして成仏ののびん時・

それがし

しんじん

しんじん

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

某をうらみさせ給ふな、譬えば病者に良薬を与ふるに毒を好んでくひぬ

それがし

しんじん

しんじん

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

れば其の病愈えがたき時・我がとがとは思はず還つて医師を恨むるが如く

それがし

しんじん

しんじん

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

なるべし、此の経の信心と申すは少しも私なく経文の如くに人の言を用ひ

それがし

しんじん

しんじん

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

ず法華一部に背く事無ければ仏に成り候ぞ、仏に成り候事は別の様は候は

それがし

しんじん

しんじん

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

ず、南無妙法蓮華經と他事なく唱へ申して

それがし

しんじん

しんじん

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

候へば天然と三十二相・八十種好を備うるなり、如我等無異と申して 釈尊

それがし

しんじん

しんじん

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

じょうぶつ

程の仏にやすやすと成り候なり、たと譬えば鳥の卵は始は水なり其の水の中より誰か・なすとも・なけれども觜よ目よと蔽り出来て虚空にかけるが如し、我

等も無明の卵にして・あさましき身なれども南無妙法蓮華經の唱への母にあたためられ・まいらせて三十二相の觜出でて八十種好の鎧毛生そろひてむみようじつそうしんによなむみようほうれんげきよう実相真如の虚空にかけるべし、爰を以て經に云く「一切衆生は無明の卵にむみよう処して智慧の口ばしなし、しよちえ仏母の鳥は分段同居の古栖に返りて無明の卵をすみかたたき破りて・一切衆生の鳥をすだてて法性真如の大虚にとばしむ」と説けり取意。

有解無信とて法門をば解りて信心なき者は更に成仏すべからず、有信うしんむげげな無解とて解はなくとも信心あるものは成仏すべし、皆此の經の意なり私の言にはあらずされば二の卷には「信を以て入ることを得・己が智分に非ず」

とて智慧第一の舍利弗も但此の經を受け持ち信心強盛にして仏になれり

己が智慧にて仏にならずと説き給へり、

しやりほつ

舍利弗だにも智慧にては仏にならず、況や我等衆生少分の法門を心得たり

とも信心なくば仏にならんことおぼつかなし、末代の衆生は法門を少分こ

ころえ僧をあなづり法をいるかせにして惡道におつべしと説き給へり、法

を

こころえたる・しるしには僧を敬うやまひ法をあがめ仏を供養くようすべし、今は仏ま
しまさず解悟の智識を仏と敬ふべし争いかでか徳分なからんや、後世ごしやうを願はん者
は名利名聞みょうりみょうもんを捨てて何いかに賤しき者なりとも法華經を説かん僧を生身しょうしん
の如來にょらいの如ごとくに敬ふべし、是れ正まさしく經文なり。

今時の禪宗は大段に義礼智信の五常に背けり、有智の高徳をおそれ老い
たるを敬うやまひ幼きを愛するは内外典の法なり、然しかるを彼の僧家の者を見れば
昨日・今日まで田夫野人にして黒白こくびやくを知らざる者も・かちんの直綴をだに
も著つればうち慢まんじて天台・真言の有智高德の人をあなづり礼をもせず
其の上に居らんとするなり、是れ傍若無人にして畜生ちくしように劣れり、爰ここを以て
伝教大師の御釈に云く川獺祭魚のこころざし・林鳥父祖の食を通ず鳩鵲きゅうじやく
三枝の礼あり行雁連を乱みだらず・羔羊踞りて乳を飲む・賤いやしき畜生すら礼を知
ることはくのごと、何ぞ人倫なんじんりんに於て其の礼なからんやとあそばされたり取

意、彼等が法に迷ふ事道理なり、人倫にしてだにも知らず是れ天魔破句の
ふるまひにあらずや。

是等の法門を能く能く明らめて一部八巻・廿八品を頭にいただき懈らず行

ひ給へ、又某を恋しくおはせん時は日々に日を拝ませ給へ・某は日に

一度・天の日に影をうつす者にて候、此の僧によませまひらせて聴聞ある

べし、此の僧を解悟の智識と憑み給いてつねに法門御たづね候べし、聞か

ずんば争か迷闇の雲を払はん足なくして争か千里の道を行かんや、返す返

す此の書をつねによませて御聴聞あるべし、事事面の次を期し候間・委細

には申し述べず候、
穴賢穴賢、

弘安三年二月 日

日蓮 御判

新池殿

◆三三三三

船守弥三郎許御書

弘長元年六月四十歳御作

1445p

わざと使を以てちまきさけほしひさんせうかみしなじな給侯い畢んぬ、

又つかひ申され侯は御かくさせ給へと申し上げ侯へと日蓮心得申べく侯、

日蓮去る五月十二日流罪の時その津につきて供しに・いまだ名をもききを

よびまいらせず侯ところに・船よりあがりくるしみ侯いきところに・ねん

ごろにあたらせ給い侯し事は・いかなる宿習なるらん、過去に法華經の

行者にて・わたらせ給へるが今末法にふなもりの弥三郎と生れかわりて

日蓮をあ

われみ給うか、たとひ男は・さも・あるべきに女房の身として食をあたへ

洗足せんそくてうづ其その外そさも事ことねんごろなる事・日蓮にちれんはしらず不思議ふしぎとも申もうすばかりなし、ことに三十日あまりありて内心ないしんに法華經ほけきょうを信じ日蓮にちれんを供養くようし給たまう事いかなる事のよしなるや、かかる地頭じとう・万民ばんみん・日蓮にちれんをにくみねだむ事・鎌倉かまくらよりもすぎたり、みるものは目をひき・

きく人はあだむ、ことに五月さつきのころなれば米もとぼしかるらんにちれんに日蓮を内うちにて・はぐくみ給たまいしことは日蓮にちれんが父母ふぼの伊豆の伊東しにくようかわなと云うところところに生なれかわり給たまうか、法華經ほけきょう第四いに云く「及清信士女しにくよう供養ほつし於法師」と云ほけきょう、法華經ほけきょうを行しよてんぜんじんぜん者をば諸天善神等ある・或はをとことなり・或は女あるとなり形しによしをかへさまざまに供養くようしてたすくべしと云う經文きやうもんなり、弥三郎殿夫婦やさぶろうの士女しによしと生にちれんれて日蓮法師くようを供養くようする事疑うたがいなし。

さきにまいらせし文ぶんにつぶさにかきて供きようし間・今はくはしからず、ことことに当地頭じとうの病惱びやうなうについて祈いのせい申もうすべきよし仰おほせ供きようし間・案あんにあつかひて

侯、然れどもしか一分信仰いちぶんしんこうの心を日蓮にちれんに出し給たまへば法華經ほけきようへそせうところをも
ひ候へ、

此の時は十羅刹女じゅうらせつによもいかでか力をあわせ給たまはざるべきと思ひ候そうらいて・
法華經ほけきよう・釈迦しやか・多宝たほう・十方じゅうっぽうの諸仏しよぶつ・並てんに天照しょう・八幡はちまん・大小だいしやうの神紙等にちれんに
申もうして侯、定めて評議ありてぞ・しるしをばあらはし給たまはん、よも日蓮にちれんを
ば捨てさせ給たまは

じ、いたきとかゆきとの如くあてがわせ給はんと・をもひ候いしについに
病悩なをり・海中いろくづの中より出現の仏体を日蓮にたまわる事・
此れ病悩のゆへなり、さだめて十羅刹女のせめなり、此の功德も夫婦二人
の功德となるべし、我等衆生無始より・このかた生死海の中にありしが・
法華經の行者となりて無始色心・本是理性・

妙窮妙智・金剛不滅の仏身とならん事あにかの仏にかわるべきや、過去久遠
五百塵点のそのかみ唯我一人の教主釈尊とは我等衆生の事なり、法華經
の一念三千の法門・常住此說法のふるまいなり、かかるたうとき法華經
と釈尊にてをはせども凡夫はしる事なし。

寿量品に云く「顛倒の衆生をして近しと雖も和も見えざらしむ」とは
これなり、迷悟の不同は沙羅の四見の如し、一念三千の仏と申すは法界の
成仏と云う事にて候ぞ。

せつせんとうじ

雪山童子のまへにきたりし鬼神は帝釈の variation なり、戸毘王の所へにげ入

りし鳩は毘首羯摩天ぞかし、班足王城へ入りし普明王は教主釈尊にてま

します、肉眼はしらず仏眼は此れをみる、虚空と大海とには魚鳥の飛行す

るあとあり此等は経文にみえたり、木像即金色なり金色即木像なり、

あぬるだが金はうさぎとなり死人となる、釈摩男がたなごころにはいさこ

も金となる、此等は思議すべからず、凡夫即仏なり・仏即凡夫なり・

いちねんさんぜんがじつじょうぶつ
一念三千我実成仏これなり。

しからは夫婦二人は教主大覺世尊の生れかわり給いて日蓮をたすけ給う

か、伊東とかわなのみちのほどはちかく候へども心はとをし・後のために

ふみをまいらせ候ぞ、人にかたらずして心付させ給へ・すこしも人しるな

らば御ためあしかりぬべし、むねのうちにをきてかたり給う事なれ・あな

かしこ・あなかしこ、南無妙法蓮華經。

弘長元年六月二十七日

こうちょうがんねん

船守弥三郎殿許へ之を遣わす

やさぶろう

これつか

日蓮花押

にちれんかおう

夫れ味に六種あり・一には淡・二には鹹・三には辛・四には酸・五に

は甘六には苦なり、百味の飭膳を調ふといへども一つの鹹の味なければ
大王の膳とならず、山海の珍物も鹹なければ氣味なし、大海に八の不思議

あり、一には漸漸に転深し・二には深くして底を得難し三には同じ一鹹の

味なり・四には湖限りを過ぎず・五には種種の宝蔵有り・六には大身の

衆生中に在つて居住す・七には死屍を宿めず・八には万流大雨之を収めて

不増不減なり、漸漸

に転探しとは法華経は凡夫無解より聖人有解に至るまで皆仏道を成ずるに

譬うるなり、深くして底を得難しとは法華経は唯仏与仏の境界にして等覺

已下は極むることなきが故なり、同じ一鹹の味なりとは諸河に鹹なきは諸教に得道なきに譬ふ、諸河の水・大海に入つて鹹となるは諸教の機類

・法華經に入つて仏道を成ずるに譬ふ、潮限り

を過ぎずとは妙法を持つ入牢る身命を和するとも不退転を得るに譬ふ、

種種の宝蔵有りとは諸仏・菩薩の万行方善・諸波羅蜜の功德・妙法に納

まるに譬ふ、大身の衆生所居の住处とは仏・菩薩・大智慧あるが故に大

身衆生と名く大身・大心・大莊嚴・大調伏・大說法・大勢・大神通・

大慈・大悲・おのづから法華經より生ずるが故なり、死屍を

宿めずとは永く謗法一闡提を離るるが故なり、不増不減とは法華の意は

一切衆生の仏性同一性なるが故なり、蔓草漬たる桶 ☆の中の鹹は大海の

鹹に随つて満干ぬ、禁獄を被る法華の持者は桶びようの中の鹹の如く・火

宅を出で給へる釈迦如来は大海の鹹の如し、法華の持者を禁むるは釈迦如来

を禁いましむるなり、梵ほん釈しやく・四天してんも如何いかん頂いたき給たまわざらん、十羅刹じゅうらせつ女の頭破こう七
分の誓あじやせひ此の時に非あらずんば何いづれの時か果し給たまふべき、頻婆娑羅王びんばしやらおうを禁獄きんごくせし
阿あ☆世あくそう早く鋭身かんに大惡瘡とくを感得ほつけしき、法華じしやの持者きんごくを禁獄きんごくする人・何なんぞ現身げんしん
に惡瘡あくそうを感ぜざらんや。

日蓮花押
にちれんかおう

◆三三五

しいじしろ　ごしよ
椎地四郎殿御書

こうちようがんねん
弘長元年四月

四十歳御作

1448p

せんじつ　おんものがたり

先日御物語の事について彼の人の方へ相尋ね候いし処・仰せ候いしが

ごと

如く少しもちがはず候いき、これにつけても・いよいよ・はげまして法華經

くどく

の功德を得給うべし、師曠が耳・離婁が眼のやうに聞見させ給へ、末法に

ほけきよう

は法華經の行者必ず出来すべし、但し大難来りなば強盛の信心弥弥悦び

ほけきよう

をなすべし、火に薪をくわへんにさかんなる事なかるべしや、大海へ衆流

たきぎ

入る・されども大海は河の水を返す事ありや、法華大海の行者に諸河の水

たいなん

は大難の

ごと

如く入れども・かへす事とがむる事なし、諸河の水入る事なくば大海ある

たいかい

べからず、大難なくば法華經の行者にはあらじ、天台の云く「衆流海に入り薪火を熾んにす」と云云、法華經の法門を一文一句なりとも人に・かたらん

は過去の宿縁ふかしとおぼしめすべし、經に云く「亦不開正法如是人難

度」と云云、此の文の意は正法とは法華經なり、此の經をきかざる人は度

しがたしと云う文なり、法師品には若是善男子・善女人・乃至則・如来使

と説かせ給いて僧も俗も尼も女も一句をも人にかたらん人は如来の使と見

えたり、貴辺すでに俗なり善男子の人なるべし、

此の經を一文一句なりとも聴聞して神にそめん人は生死の大海を渡るべき

船なるべし、妙樂大師云く「一句も神に染ぬれば成く彼岸を資く、思惟・

修習永く舟航に用たり」と云云、生死の大海を渡らんことは妙法蓮華經

の船にあらずんば・かなふべからず。

そもそもほけきよう

によととくせん

もう

抑 法華經の如渡得船の船と申す事は・

教主大覺世尊・巧智無辺の

ばんしよう

はつきよう

番匠として四味八教の材木を取り集め・正直捨權とけづりなして

じゃしよういちによ

だいごいちじつ

しやうじ

たいかい

邪正一如ときり合せ・醍醐一実のくぎを丁と・うつて生死の大海へ・をし

ちゆうごういちじつ

かいによさんぜん

しよほうじつそう

うかべ・中道一実のほばしらに界如三千の帆をあげて・諸法実相のおひで

いしんとくにゆう

いつさいししゆう

しやかによらい

をえて・以信得入の一切衆生を取りのせて・釈迦如来はかぢを

取り・多宝如来はつなでを取り給へば・上行等の四菩薩は函蓋相応して

・きりきりとこぎ給う所の船を如渡得船の船とは申すなり、是にのるべき

者は日蓮が弟子・檀那等なり、能く能く信じさせ給へ、四条金吾殿に見参

候はば能く能く語り給い候へ、委くは又又申すべく候、恐恐謹言。

四月二十八日

日蓮花押

椎地四郎殿え

◆三三六

弥三郎殿御返事

建治三年 五十六歳御作

1449p

は無智の俗にて候へども承わり候いしに貴く思ひ進らせ候いしは法華
の第二の巻に今此三界とかや申す文にて候なり、此の文の意は今・此の

にほんこく

日本国は釈迦しゃか仏ぶつの御領ごりやうなり、天照太神てんしやうだいじん・八幡大菩薩はちまんたいぼさつ・神武天皇等てんのうの一切いっさいの

神かみ・国主こくしゆ並ならに万民ばんみんまでも釈迦しゃか仏ぶつの御所領ごしやうりやうの内うちなる上うへ此この仏ぶつは我等衆生われらしじやうじやうに

三さんの故御坐まします大恩おんの仏ぶつなり、一いちには国主こくしゆなり・二にには師匠ししやうなり・三さんには親

父ふなり、此この三徳さんとくを備たもへ給たまう事ことは十方じゆつぱうの仏ぶつの中に唯ただ釈迦しゃか仏ぶつ計けいりなり、され

ば今いまの日本にほん

いっさいしじやう

国くにの一切衆生いっさいしじやうは設たといしやかぶつ釈迦しゃか仏ぶつに・ねんごろに仕つかふる事こと当時とうじの阿弥陀仏あみだぶつの如ごとく

すとも又他仏たふつを並ならべて同おなじ様さまにもてなし進まいらせば大おほなる失とがなり、譬たとえば我

が主しやの而しかも智者ちしやにて御坐ましまさんを他国たこくの王わうに思おもひ替かえて・日本国にほんこくにすみなが

ら漢土高麗かんどこまの王わうを重おもんじて・日本国にほんこくの王わうにおろそかならんをば・此この国くにの

大だい王わういみじと申もうす者ものならんや、況いはや日本国にほんこく

の諸僧しよそうは一人ひとりもなく釈迦しゃか如来にやらいの御弟子おんでしとして頭かうべをそり衣きを著きたり、

阿弥陀仏あみだぶつの弟子でしにはあらぬぞかし、然しかるに釈迦堂しゃか法華堂ほつけ画像がう・木像そうぼう法華經

一部も持ち候はぬ僧共が・三徳全く備はり給へる釈迦仏をば闇きて・一徳もなき阿弥陀仏を国こぞりて郷・村・家ごとに人の数よりも多く立てなれば阿弥陀仏の名号を一向に申して一日に六万・

八万^{はちまん}なんどず、打ち見て^{うちみ}候所^{そうどうところ}はあら貴や貴やと見へ候へども・法華^{ほけきよう}經を
以て^{もつ}見進^{まい}らせ候へば中中日日に十^{じゅう}惡^{あく}を造る惡人^{あくにん}よりは過重^{かじゆう}きは善人^{ぜんにん}なり、
惡人^{あくにん}は何れの仏^{いすれ}にも・よりまいらせ候はねば思^{おも}ひ替^{かわ}る^も刃^{やいば}もなし、若^もし又善人^{ぜんにん}
とも成^ならば法華^{ほけきよう}經に付^つき進^{まい}らす事^{こと}もや有^ありなん、日本^{にほん}國の人人^{ひとびと}は何^{いか}にも
阿^あ彌^み陀^だ仏^{ぶつ}より釈迦^{しゃか}仏^{ぶつ}・念^{ねん}仏^{ぶつ}よりも法華^{ほけきよう}經を重^{しげ}くしたしく心^{こころ}よせに思^{おも}ひ進^{まい}ら
せぬ^せる事難^{なん}かるべし、されば此^この人人^{ひとびと}は善人^{ぜんにん}に似^にて惡人^{あくにん}なり、惡人^{あくにん}の中^{うち}に
は

一^{いん}閻^{ぶだい}浮^{だい}提^い第一^{だい}の大^{ほう}謗^{ぼう}法^{ぼう}の者^{せん}大^{だい}闡^だ提^いの人^{にん}なり、釈迦^{しゃか}仏^{ぶつ}・此^この人^{にん}をば法華^{ほけきよう}經の
二^にの卷^{くわん}に「其^その人^{にん}命^{めい}終^{しゆう}して阿^あ鼻^び獄^{ごく}に入^いらん」と定^{さだ}めさせ給^{たま}へり、されば
今^{こん}の日本^{にほん}國の諸^{しよ}僧^{そう}等^{どう}は提婆^{だい}達^{だつ}多^た・瞿伽^く梨^り尊^{そん}者^{じゃ}にも過^すぎたる大^{あく}惡人^{にん}なり、又
在^ざ家の人人^{ひとびと}は此^{これ}等^らを貴^{とう}み供^く養^{やう}し給^{たま}う故^{ゆゑ}に此^この國^{がん}眼^{ぜん}前^{ぜん}に無^む間^{げん}地^じ獄^{ごく}と變^かじて
諸^{しよ}人^{にん}現^{げん}身^{しん}に大^け飢^き渴^{かつ}大^{えき}疫^び病^{びやう}先^{せん}代^{だい}にな^なき大^{たい}苦^くを受^う

くる上他国たこくより責めらるべし、此これは偏ひとえに梵天・帝釈・日月等の御はから
ひなり、かかる事をば日本国にほんこくには但日蓮一人計り知ばかつて始は云うべきか云
うまじきかとうらおもひけれども・さりとは何いかにすべき、一切衆生の
父母ふぼたる上仏の仰おおせを背そむくべきか、我が身こそ何様いかようにも・ならめと思いて
云いい出せしかば二十余年・所をおはれ弟子でし

等を殺され・我が身も疵きずを蒙こおむり・二度まで流され結句けつくは頸切られんとす、
是れ偏ひとえに日本国にほんこくの一切衆生の大苦にあはんを兼かねて知りて歎なげき候なり、され
ば心あらん人人ひとびとは我等われらが為ためにと思食すべし、若し恩を知り心有る人人ひとびとは二
当らん杖には一は替かわるべき事ぞかし、さこそ無からめ還かえつて怨あだをなしな
んど・せらるる事は心得こころえず候、又在家の人

人の能よくも聞きほどこかずして・或あるは所を追ひ・或あるは弟子等でしを怨あだまるる心え
ぬさよ、設たといい知らずとも誤あやまりて現げんの親を敵ぞと思いひたがへて罵のり・或あるは打

ち殺したらんは何いかに科とがを免まぬらるべき、此の人人ひとびとは我があらぎをば知らずして
日蓮にちれんがあらぎの様に思おもへり、譬たとえば物ねたみする女の眼まなこを瞋いからかして・と
わりをにらむれば己おのが気色のうとましきをば知ら

ずして還かえつてとわりの眼まなこおそろしと云ことうが如ごとし、此等これらの事は偏ひとえに国主こくしゅの御
尋たずねなき故ゆゑなり、又何いかなれば御尋たずねなきぞと申もうすに此の国くにの人人ひとびと余あり科とが多
くして一定今生こんじょうには他国たこくに責こめられ後生ごしょうには無間地獄むげんじごくに墮おつべき悪業あくごう

の定まりたるが故なりと、きようもんれきれき 經文歴歴と候いしかば信じ進まいらせて候、此の事

は各各たといわれら設ごとい我等が如くなる云うにかひなき者共を責めおとし・或あるは所を追

わせ給たまい候ともよも終ついには只ただは候はじ、此の御房ごぼうの御心をば設たといてんしょうだいじんい天照太神

・正八幡しょうはちまんもよも随へさせ給ひ候はじ、まして凡夫ぼんぶをや、されば度度たびたびの大事だいじ

にもおくする心なく弥いよいよ強盛こうじように御坐すと承り候と加様のすぢに申し給たまうべ

し。

さて其その法師物申ほつしさば取り返してさて申しつる事は僻事ひがごとかと返して

釈迦しゃかぶつ仏は親なり・師なり・主なり・と申もうす文・法華經には候かと問うて有

りもうと申さばさて阿弥陀あみだぶつ仏は御房ごぼうの親・主・師と申もうす經文は候かと責めて・

無しと云わんずるか又有りと云はんずるか若しもさる經文きようもん有りと申もうさば御房ごぼう

の父は二人かと責め給たまへ、又無しといはば・さては御房ごぼうは親をば捨てて

何いかに他人たにんをもてなすぞと責め給たまへ、其の上法華經ほけきようは他經たきようには似させ給たまはね

ばこそとて四十

余年等の文を引かるべし、即往安樂の文にかからば・さて此れには先ずつ
まり給へる事は承伏かと責めてそれもとて又申すべし、構へて構へて所領
を惜み妻子を顧りみ又人を憑みて・あやぶむ事無かれ但偏に思い切るべし、
今年の世間を鏡とせよ若干の人の死ぬるに今まで生きて有りつるは此の事
にあはん為なりけり、此れこそ宇治川を渡せし所よ是こそ勢多を渡せし所
よ・名を揚るか名をくだすかなり、人身は受け難く法華經は信じ難しとは
是なり、釈迦・多宝・十方の仏・来集して我が身に入りかはり我を助け
給へと観念せさせ給うべし、地頭のもとに召さるる事あらば先は此の趣を
能く能く申さるべく候、
恐恐謹言。

建治三年丁丑八月四日

にちれんかおう
日蓮花押

弥三郎殿御返事
やさぶろう ごへんじ

◆三三七

新田殿御書

1452p

使ひ御志つかひおし 限り無き者か、経は法華経・顕密第一の大法なり、仏は

釈迦仏・諸仏第一の上仏なり、行者は法華経の行者に相似たり、三事

既に相應せり檀那の一願必ず成就せんか、恐恐謹言。

五月二十九日

日蓮在御判

新田殿御返事

並に女房の御方

◆三三八

実相寺御書

建治四年正月十六日

五十七歳御作

1452p

新春の御札の中に云くいわ駿河の国実相寺の住侶尾張阿闍梨と申す者・玄義げんぎ
四の巻に涅槃經を引いて、小乗を以て大乘を破し大乘を以て小乗をねはんぎょう
破するは、盲目の因なりと釈せる由申し候なるは實にて候やらん不審に候。もうもく
反詰して云く小乗を以て大乘を破し大乘を以て小乗を破する者はんきつ
盲目とならば弘法大師・慈覺大師・智証大師等はされば盲目となり給いたもうもく
りけるか、善無畏・金剛智・不空等は盲目と成り給うとの給うかとおつめよ、
玄義の四に云く「問う法華に・を開して・皆妙に入る涅槃何の意ぞ更に次第げんぎ
の五行を明すや、答う法華は仏世の人の為に權を破して實に入れ復・有るほっけ
こと無く教意整足せり、涅槃は末代の凡夫の見思の病重く一實を定執してなく
方便を誹謗ほうべん
ひほう

し甘露かんろを服すと雖いえども事に即そくして真なる能あたわず命を傷つけて早天するが為の
故に戒定慧けいじやうえを扶たすけて大涅槃ねはんを顕あらわす、法華ほっけの意を得れば涅槃ねはんに於おいて次第しだいの行
を用もちいざるなり」釈籤しゃくせんの四に云く「次の料簡りやうけんの中・扶戒定慧ふかいじやうえと言うは
事戒事定前三教じかいじじやうぜんさんきやうの慧並びに事法じふを扶たすくるが為の故なり具には止観しかんの対治助
開の中に説くが如し、今時の行者ぎやうじや・或は一向に理を尚ぶときは則ち己れ聖
に均ひとしと謂おもい及び実およを執しゆうして権けんを謗ぼうず、或は一向に事を尚ぶときは則ち
功こうを高位こうい

に推ゆずり及び実およを謗ぼうじじて権けんを許ゆるす、既に末代すでに処まつだいして聖旨しよを思むねわず其それ誰か
斯この二の失とがに墮だせざらん、法華ほっけの意を得れば則ち初後俱すなわに頓ともなり、請こうう心
を揣はかり臆おくを撫なで自みづから浮沈さつを曉さとれ」と等云云、此の釈しゃくに迷惑めいわくする者か、此の
釈しゃくの所詮しよせんは、或は一向尚理あるとは達磨宗いつこうなほに等しきなり、及び執実およ謗權しつじつぼうけんとは
華嚴宗けこんしゆう・真言宗しんこんしゆうなり、或は一向尚事あるとは浄土宗じやうどしゆう・律宗りつしゆうなり、及び謗実およ

許權とは法相宗なり。

夫れ法華經の妙の一字に二義有り一は相待妙・☆を破して妙を顯す二は

絶待妙・☆を開して妙を顯す、爾前の諸經並びに法華已後の諸經は破☆

顯妙の一分之を説くと雖も・開☆顯妙は全く之無し、爾るに諸經に依憑す

る人師・彼れ彼れの經經に於て破顯の二妙を存し・或は天台の智慧を盜

み・或は民の家に天下を行ふのみ、設い開☆を存すと雖も破の義免れ難き

か、何に況や上に挙ぐる所の一向執權・或は一向執實等の者をや、而る

に彼の阿闍梨等は自科を顧みざる者にして嫉妬するの間・自眼を回轉し

て大山を眩ると観るか、先ず實を以て權を破し權執を絶して實に入るは

釈迦・多宝・十方の諸仏の常儀なり、實を以て權を破する者を盲目と為せ

ば釈尊は盲目の人か乃至天台・伝教は盲目の人師なるか如何、笑う可し

返す返す。

四十九院等の事、彼の別当等は無智の者たる間・日蓮に向かつて之を恐
る小田一房等怨を為すか、弥彼等が邪法滅す可き先兆なり、根露るれば枝枯
れ源竭れば流れ尽くと云う本文虚しからざるか、弘法・慈覚・智証三大師
の法華経誹謗の大科四百余年の間隠せる根露れ枝枯る、今日蓮之を糾明せ
り拘留外道が石と為つて数百年、陳那菩薩に責められ石即ち水と為る、尼☆
が立てし塔は馬鳴之を頽す、臥せる師子に手を触れば瞋りを為す等はなり。

建治四年正月十六日

日蓮花押

駿河国実相寺豊前公御房御返事

◆三三九

石本日仲聖人御返事

1454p

同時に二仏に亘るか將た又一方は妄語なるか、近來念佛者天下を誑惑するか、早早御存知有る可きか。

抑駿馬一疋追ひ遣わさる事存外の次第か事事見参の時を期す、恐

謹言。

九月二十日

日蓮在御判

石本日仲聖人御返事

今月十五日酉時御文同じき十七日酉時到来す、彼等御勘氣を蒙るの時・

南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經と唱え奉ると云云、偏に只事に非ず定

めて平金吾の身に十羅刹入り易りて法華經の行者を試みたもうか、例せば

雪山童子・尸毘王等の如し將た又惡鬼其の身に入る者か、釈迦・多宝・

十方の諸仏・梵帝等・五五百歳の法華經の行者を守護す可きの御誓は

是なり、大論に云く能く毒を変じて藥と為す、天台云く毒を変じて藥と為す

云云、妙の字虚しからずんば定めて須臾に賞罰有らんか。

伯耆房等深く此の旨を存じて問注を遂ぐ可し、平金吾に申す可き様は文永

の御勘氣の時聖人の仰せ忘れ給うか、其の殃未だ畢らず重ねて十羅刹の罰

を招き取るか、最後に申し付けよ、さいごも 恐恐。きようきよう

十月十七日戌時

日蓮にちれん

在御判

しょうにん ごへんじ
聖人等御返事

この事のぶるならば此方このかたにはとがなしとみな人申すもうべし、又大進房が
落馬あらわるべし、あらわれば人人ひとびとことにおづべし、天の御計らいな
り、各にはおづる事なかれ、つよりもてゆかば定めて子細しさいいできぬと
おぼふるなり、今度の使にはあわぢ房を遣すつかわべし。

◆三四一

伯耆殿等御返事こへんじ弘安二年十月十二日こうあん

五十

八歳御作

1456p

だいたい 大体此の趣を以て書き上ぐ可きか、但し熱原の百姓等安堵せしめば日秀
等別に問注有る可からざるか、大進房・弥藤次入道等の狼藉の事に至つ
ては源は行智の勧めに依りて殺害刃傷する所なり、若し又起請文に及ぶ
可き云云の事之を申さば全く書く可からず、其の故は人に殺害刃傷せられ
たる上・重ねて起請文を書き失を守るは古今未會有の沙汰なり、其の上行
智の所行・書かしむる如くならば身を容るる処なく行う可きの罪・方無
きか、穴賢穴賢、此の旨を存じ問注の時・強強と之を申さば定めて上聞
に及ぶ可きか、又行智・証人立て申さば彼等の人人行智と同意して百姓等

が田畠でんばた數十か疇しゅうり取る由・之これを申せ、若し又証文しょうもんを出いださば謀書ぼうしよの由これ之これを申せ、
事事証人の起請文きしょうぶんを用もちゆべからず、但し現証げんしょうの殺害さつがい刃傷にんじょう而のみ已も、若し其その
義そむに背く者は日蓮にちれんの門家もんかに非あらず日蓮にちれんの門家もんかに非あらず候、恐恐きょうきょう。
こうあん

弘安二年十月十二日

日蓮にちれん 在御判

伯耆殿

日秀

日弁等 下

◆三四二

高橋殿御返事こへんじ

建治元年七月がねん

五十四歳御作

1457p

瓜か一籠かこささげひげこえだまめないもかうのうり給ひ候い畢おわんぬ、付法蔵經ふほうそうぎょうと申もつす經にはいさこのもちみを仏に供養くようしまいらせしわらは百年申もつすしに一閻浮提えんぶだいの四分が一の王となる所謂阿育大王これなり、法華經ほけきょうの法師品ほうしほんには而於一劫中いつくうちゅうと申もつして一劫が間・釈迦仏しゃかぶつを種種しゅじゅに供養くようせる人の功德くどくと・末代まつだいの法華經ほけきょうの行者ぎやうじやを須臾しゆゆも供養くようせる功德くどくと・たくらべ候に其福復彼に過ぐと申もつして法華經ほけきょうの行者ぎやうじやを供養くようする功德くどくすぐれたり、これを妙樂大師釈みょうらくだいししやくして云く「供養くようすること有らん者は福十号ふくじゅうごうに過ぐ」と云云、されば仏くようを供養くようする功德くどくよりも・すぐれて候なれ

ば仏にならせ給はん事疑いなし。

其の上女人の御身として尼とならせ給いて候なり・いよいよ申すに及ば

ず但しさだめて念仏者にてやをはすらん、たうじの念仏者・持斎は国をほ

ろぼし他国の難をまねくものにて候、日本国の人人は一人もなく日蓮がか

たきとなり候いぬ、梵王・帝釈・日月・四天のせめをかほりて・たうじの

ゆきつしまのやうになり候はんずるに・いか

がせさせ給うべきいかがせさせ給うべき、なによりも入道殿の御所勞なげ

き入つて候、しばらくいきさせ給いて法華經を謗ずる世の中御覧あれと候

へ、日本国の人人は大体はいけどりにせられ候はんずるなり、日蓮を二度

までながし法華經の五の巻をもてかうべを打ち候いしは・こり候はんずら

む。

七月二十六日

日蓮

花押 かおう

御返事 ごへんじ

◆三四三

高橋入道殿御返事

建治元年七月

五十四歳

御作

1458p

進上

高橋入道殿御返事

日蓮

われら 我等が慈父・大覚世尊は人壽百歳の時・中天竺に出現 しましまして
いっさいしゅじょう 一切衆生のために一代 聖教 をとき給う、 仏在世の一切衆生は過去の
しゅくじゅう 宿習 有つて仏に縁あつかりしかば・すでに得道成りぬ、我が滅後の衆生

をば・いかんがせんと・なげき給いしかば八万 聖教 を文字となして・

一代 聖教 の中に 小乗經 をば迦葉尊者にゆづり・大乘經並びに法華經

涅槃等をば文殊師利菩薩にゆづり給う、但八万 聖教 の肝心・法華經の眼目

たる妙法蓮華經の五字をば迦葉・阿難にもゆづり給はず、又文殊・普賢・

観音・弥勒・地藏・竜樹等の大菩薩にもさづけ給はず、此等の大菩薩等の
のぞみ申せしかども仏ゆるし給はず、大地の底より上行菩薩と申せし老人
を召しいだして・多宝仏・十方の諸仏の御前にして釈迦如来・七宝の
塔中にして妙法蓮華經の五字を上行菩薩にゆづり給う。

其の故は我が滅後の一切衆生は皆我が子なりいづれも平等に不便にをも

うなり、しかれども医師の習い病に随いて藥をさづくる事なれば・我が滅後

・五百年が間は迦葉・阿難等に小乗經の藥をもつて一切衆生にあたへ

よ、次の五百年が間は文殊師利菩薩・弥勒菩薩・竜樹菩薩・天親菩薩に

華嚴經・大日經・般若經等の藥を一切衆生にさづけ

よ、我が滅後・一千年すぎて像法時には藥王菩薩・觀世音菩薩等・法華經

の題目を除いて余の法門の藥を一切衆生にさづけよ、末法に入りなば迦葉

・阿難等・文殊・弥勒菩薩等・藥王・觀音等のゆづられしところの

しょうじょうきょう
小乗經・大乘

經・並びに法華經は文字もんじはありとも衆生しゅじょうの病の薬とはなるべからず、所謂いわゆる

病は重し薬はあさし、共の時じょうぎ上行菩薩ぼさつしゆつげん出現みようして妙法蓮華經ほうれんげきょうの五字ごじを一

閻浮提えんぶだいの一切衆生いっさいしゆじょうにさづべし、共の時じょうぎ一切衆生いっさいしゆじょう・此の菩薩ぼさつをかたきとせ

ん、

所謂しよゐさるのいぬをみたるがごとく・鬼神きじんの人をあだむがごとく・過去かこの不ふ輕ぎやう菩薩ぼさつの一切衆生いっさいしゆじやうにのりあだまれしのみならず杖じやうもくがりやく木瓦礫もくがらに・せめられしがごとく覺徳比丘かくとくびくが殺害さつがいに及およばれしがごとくなるべし。

其そのときの時は迦葉かしやう・阿難あなん等も・或あるは靈山りやうぜんにかくれ恒河こつがに没みろくし・彌勒もんじく・文殊もんじゆ等

も・或あるは都率とそつの内院ないえんに入り・或あるは香山かきやうに入らせ給たまい、觀世音菩薩くわんぜおんぼさつは西方さいほうに

かへり・普賢菩薩ふげんぼさつは東方とうほうにかへらせ給たまう、諸經しよきやうは行ずる人しゆていはありとも守護しゆご

の人なれば利生りしやうあるべからず、諸仏しよぶつの名号みやうごうは唱となうるものありとも天神てんじんこ

れをかごすべからず、但ただし小牛こぎうの母ははをはなれ金鳥きじのたかにあえるがごとく

なるべし、其そのときの時十方世界じふぱうせかいの大鬼神きじん・一閻浮提えんぷに充満じゆうまんして四衆ししゆうの身に入

つて・・或あるは父母ふぼ

をがいし・或あるは兄弟等きやうだいを失ことはん、殊ちとに國中ちくの智者ちしやげなる持戒じかいげなる僧尼そうにの

心に此きじんの鬼神こくしゆ入ならつて国主しんか並びに臣下しんかをたばらかさん、此の時じやうぎやうほさつ上行菩薩じやうぎやうほさつの御

かびをかほりて法華經の題目南無妙法蓮華經の五字計りを一切衆生にさ

づけば・彼の四衆等・並びに大僧等・此の人をあだむ事父母のかたき宿世

のかたき朝敵怨敵のごとくあだむべし、其のとき

大なる天変あるべし、所謂日月蝕し大なる彗星天にわたり大地震動して水

上の輪のごとくなるべし、其の後は自界叛逆難と申して国主・兄弟・並び

に国中の大人をうちころし・後には他国侵逼難と申して郷国より・せめら

れて・或はいけどりとなり・或は自殺をし国中の上下・万民・皆大苦に

値うべし、此れひとへに上行菩薩のかびをかをほり

て法華經の題目をひろむる者を・・或はのり・或はうちはり・或は流罪し

・或は命をたちなんとするゆへに・仏前にちかひをなせし梵天・帝釈・

日月・四天等の法華經の座にて誓状を立てて法華經の行者をあだまん人

をば父母のかたきよりもなをつよくいましむべしと・ちかうゆへなりとみ

へて候に、今日蓮いまにちれんにほんこく日本国に生れて一切経並びに法華経ほけきようの

めいきよう

明鏡めいきようをもて・日本国にほんこくの一切衆生の面に引向たるに寸分もたがはぬ上・仏

しる

の記し給たまいいし天変てんべんあり地天ちようあり、定んで此の国・亡国ぼうこくとなるべしとかねて

しる

しりしかば・これを国主こくしゅに申すならば国土安穩こくとあんのんなるべくも・たづねあきら

しる

むべし、亡国ぼうこくとなるべきならば・よも用いじ、用いぬ程もちならば日蓮にちれんは流罪るざい

しる

・死罪しじとなるべしとしりて候いしかども・仏いまし

めて云く此の事を知りながら身命を・をしみて一切衆生にかたらずば我が敵たるのみならず一切衆生の怨敵なり、必ず阿鼻大城に墮つべしと記し給へり。

此に日蓮進退わづらひて此の事を申すならば我が身いかにもなるべし我が身はさてをきぬ父母・兄弟並びに千万人の中にも一人も随うものは国主・万民にあだまるべし、彼等あだまるるならば仏法はいまだわきまへず人のせめはたへがたし、仏法を行ずるは安穩なるべしとこそをもうに・此の法を持つによつて大難出来するはしんぬ此の

法を邪法なりと誹誘して悪道に墮つべし、此れも不便なり又此れを申さずは仏誓に違する上・一切衆生の怨敵なり大阿鼻地獄疑いなし、いかながせんとをもひしかども・をもひ切つて申し出しぬ、申し始めし上は又ひきさす

べきにもあらざれば・いよいよつより申せしかば、仏の記文きもんのごとく国主こくしゅもあだみ万民ばんみんもせめき、あだをなせしかば天もいかりて日月いちがつに大変あり大せいせいも出現しゅつげんしぬ大地だいちもふりかえしぬくなりぬ、どううちもはじまり他国たこくよりもせめるなり、仏の記文きもんすこしもたがわず・日蓮にちれんが法華經ほけきょうの行者ぎょうじやなる事も疑うたがはず。

但ただし去年こぞかまくらより此のところにげ入り候いし時・道みちにて候へば各もつにも申もうすべく候いしかども申もうす事もなし、又先度の御返事ごへんじも申もうし候はぬ事はべちの子細しさいも候はず、なに事にか各各をば・へだてまいらせ候べき、あだをなす念仏者ねんぶつ・禅宗ぜんしゅう・真言師等ならをも並びに国主等こくしゅをもたすけんがためにこそ申せ、かれ等のあだをなすは・いよ

いよ不便ふびんにこそ候へ、まして一日も我がかたとて心よせなる人人ひとびとはいかでかをろかなるべき世間せけんのをそろしさに妻子さいしある人人ひとびとのとをざかるをば・こ

とに悦ぶ身なり、日蓮にちれんに付てたすけやりたるかたわなき上・わづかの所領しよりょうをも召さるるならば子細しさいもしらぬ妻子さいし・所従等しよじゅうがいかなげかんずらんと心ぐるし。

而も去年しかこそぞの二月に御勘氣ごかんきをゆりて三月の十三日に佐渡さどの国を立ち同月の二十六日にかまくらに入る、同四月の入日平左衛門尉さえもんのだいようにあひたりし時・やうやうの事ども・とひし中に蒙古国もうこは・いつよすべきと申せしかば、今年
よす

べし、それにとて日蓮にちれんはなして日本国にほんこくにたすくべき者一人もなし、たすか

らんとをもひしたうならば日本国にほんこくの念仏者ねんぶつと禅ぜんと律僧等りつそうが頸を切つてゆい

のはまにかくべし、それも今はすぎぬ・但しただ皆人みなのをもひて侯そうらは日蓮にちれんをば

ねんぶつ

念仏師ねんぶつしと禅ぜんと律りつをそしるをもひて侯、これは物のかずにてかずならず・

しんごんしゅう

もう

真言宗しんごんしゅうと申もうす宗そうがうるわしき日本国にほんこくの

あくほう

ごうほうだいし

じかくだいし

大なる呪咀じくの悪法あくほうなり、弘法大師こうぼうだいしと慈覚大師じかくだいし・此の事にまどひて此の国を

ほろぼ

亡さんとするなり、設たとい二年三年にやぶるべき国なりとも真言師しんごんしにいのら

する程ならば一年半年に此のくに・せめらるべしと申もうしきかせて侯そうらいき。

たすけんがために申もうすを此程あだまる事なれば・ゆりて候いし時さど

の国より・いかなる山中海辺にもまぎれ入るべかりしかども・此の事をい

ひとたび

さえもん

もう

にほんこく

ま一度平左衛門に申しきかせて日本国にほんこくにせめのこされん衆生しゅじょうをたすけんが

ためにのぼりて候いき、又申もうしきかせ侯そうらいし後は・かまくらに有あるべきな

らねば足にまかせていでしほどに便宜びんぎにて候いしかば設たい各各は・いとは
せ給たまうとも今一度ひとたびはみたてまつらんと千度をもひしかども・心に心をたた
かいて

すぎ候いき、そのゆへはするがの国は守殿こうどのの御領ことにふじなどは後家
尼ひとごぜんの内の人人多し、故最明寺殿・極楽寺殿のかたきといきどをらせ
給たまうなればききつけられれば各各の御なげきなるべしと・おもひし心計ばかりな
り、いまにいたるまでも不便ふびんにをもひまいらせ候そうらへば御返事までも申もうさず
候いき、この御房ごぼうたちのゆきすりにも・あなかしこ・あなかしこ・ふじか
じまのへんへ立ちよるべからずと申せども・いかが候らんと・をぼつかな
し。

ただし真言しんこんの事ぞ御不審ふしんにわたらせ給たまい候らん、いかにと法門ほうもんは申もうすと
も御心へあらん事かたし但眼前がんぜんの事をもつて知ししめせ、隠岐おきの法皇ほうこうは人王

入十二代・神武よりは二千余年・天照太押入りかわらせ給いて人王となら

せ給う、いかなる者かてきすべき上欽明より隱岐の法皇にいたるまで漢土

・百濟・新羅・高麗よりわたり来る大法秘法を

叡山・東寺・園城・七寺並びに日本国にあがめをかれて候、此れは皆国を

守護し国主をまほらしためなり、隱岐の法皇世をかまくらにとられたる事

を口をしと・をぼして叡山・東寺等の高僧等をかたらひて義時が命をめし

と

れと行ぜしなり、此の事一年・二年ならず数年調伏せしに・権の大夫殿は

ゆめゆめしろしめさざりしかば一法も行じ給はず・又行ずとも叶うべしと

もおぼへずありしに・天子いくさにまけさせ給いて隠岐の国へつかはされ

させ給う、日本国の王となる人は天照太神の御魂の入りかわらせ給う王な

り、先生の十善戒の力といひ・いかでか国中

の万民の中にはかたぶくべき、設いとがありともつみあるをやをとがなき

子のあだむにてこそ候いぬらめ、たとい親に重罪ありとも子の身としてと

がに行はんに天うけ給うべしや、しかるに隠岐の法皇のはじにあはせ給い

しはいかなる大禍ぞ・此れひとへに法華経の怨敵たる日本国の真言師をか

たらはせ給いしゆへなり。

一切の真言師は灌頂と申して釈迦仏等を八葉の蓮華にかきて此れを足に

ふみて秘事とするなり、かかる不思議の者ども諸山・諸寺の別当とおおぎ

とてもなすゆへに・たみの手にわたりて現身げんしんにはぢにあひぬ、此の大悪法だいあくほう
又かまくらに下つて御一門いちもんをすかし日本国にほんこくをほろぼさんとするなり、此の
事最大事だいじなりしかば弟子等でしにもかたらず・

只ただいっはり・をろかにて念仏ねんぶつと禅等計りぜんとうけりをそしりてきかせしなり、今は又
もち用いらぬ事なれば身命しんみょうもおしままず弟子どもにも申もうすなり、かう申せば・
いよいよ御不審ふしんあるべし、日蓮にちれんいかにいみじく尊くとも慈覚じかく・弘法こうぼうにすぐ
るべきか、この疑うたがいすべてはるべからず・いかにとかすべき。

但しただ皆人みなはにくみ侯にすこしも御信用ごしんようのありし上・此これまでも御たづね
の侯は只今生計りそつらの御事おんことにはよも侯はじ定めて過去かこのゆへか、御所労ごしやうの
だいじ大事だいじにならせ給たまひて侯なる事あさましく侯、但しただつつるぎはかたきのため
薬は病のため、阿闍世王あじやせは父をころし仏の敵となれり、悪瘡身あくそうに出いで後に
仏きふくに帰伏ほけきようし法華經たもを持ちしかば悪瘡あくそうも平癒へいゆし

寿をも四十年のべたりき、而も法華經は閻浮提人病之良藥とこそとかれて
そうら えんぶ 侯へ、閻浮の内の人病の身なり法華經の藥あり、三事すでに相応しぬ一
しか ほけきよう えんぶだいじんやまいのりようやく
身いかでかたすからざるべき、但し御疑のわたり侯はんをば力をよばず、
ただ おんうたがい そうら
南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經。
なむみょうほうれんげきよう なむみょうほうれんげきよう

かくじょうぼう
覚乗房は・わき房に^{たびたび}度度よませてきこしめせ・きこしめせ。

七月十二日

進上^{しんじょう} 高橋六郎兵衛入道殿^{にゅうどう} 御返事^{ごへんじ}

日蓮^{にちれん} 花押^{かおう}

◆三四四

異体同心事^{いたいどうしん}

1463p

白小袖一つあつわたの小袖は・わき房のびんぎに^{がもく}驚目一貫並びに^{なら}うけ
給^{たま}わる、は・わき房さど房等の事あつわらの者どもの御心ざし^{おんこころざしいたいどうしん}異体同心な
れば^{ばんじ}万事を成し同体異心なれば^{どうたいいしん}諸事叶う事なしと申^{もう}す事は^{げてんさんぜん}外典三千余巻に
定^{いんのちゆう}りて候、殷の紂王は七十万騎なれども同体異心なればいくさにまけぬ、
周の武王は八百人なれども^{いたいどうしん}異体同心なればかちぬ、一人の心なれども二つ

の心あれば其その心たがいて成じやうずる事なし、百人・千人なれども一つ心なれば必ず事

を成にほんこくず、日本国の人人は多人なれども体同異心なれば諸事成しよじじやうぜん事かたし、

にちれん いちるい いたいどうしん

日蓮が一類は異体同心なれば人人ひとびとすくなく候へども大事を成じて一定

ほけきやう

法華經ひろまりなんと覺おほへ候、悪は多けれども一善いちぜんにかつ事なし、譬たとへば

多くの火 あつまれども一水にはきゑぬ、此の一門いちもんも又かくのごとし。

其の上貴きへん辺は多年としつもりて奉公法華經にあつくをはする上今度このたびはいか

にも・すぐれて御心おんこころざし見えさせ給たまう よし人人ひとびとも申し候、又かれらも申し

候、一一に承りたまわて日天にってんにも大神にも申し上げて候ぞ。

御文おんふみはいそぎ御返事申すべく候ひつれどもたしかなるびんぎ候はでいま

まで申し候もうはず、べんあさがびんぎあまりそうそうにてかきあへず候い

き、さては各各としのころいかんがと・をぼしつる、もうこの事すでにち

かづきて候か、我が国のほろびん事はあさましけれども、これだにもそら
事になるならば日本^{にほんこく}の人人^{ひとびと}いよいよ

ほけきよう
法華經を謗して万人無間地獄に墮つべし、
お
かれたにもつよるならば国はほ
ろぶとも謗法はうすくなりなん、
ほうほう
譬へば灸治をしてやまいをいやし針治に
たと
て人をなをすがごとし、
とうじ
当時はなげくとも後は悦びなり、
よろこ
日蓮は法華經の
おんつかい
にほんこく
御使い日本国の人人は大族王の一閻浮提の仏法を失いしがごとし、
うしな
蒙古
せっせん
国は雪山の下王のごとし天の御使として法華經の行者をあだむ人人を罰
おんつかい
ほけきよう
ぎようじや
せらるるか、
げんしん
又現身に改悔を・をこしてあるならば阿闍世王の仏に歸して
あじやせ
びやくらい
白癩をやめ四十年の寿をのべ無根の信と申す位にのぼりて現身に無生忍
げんしん
むしようにん
をえたりしがごとし、
きようきようきんげん
恐恐謹言。

八月六日

にちれん
日蓮
かおう
花押

◆三四五

六郎次郎殿御返事こへんじ

建治三年三月

五十六歳御作

1464p

白米三斗油一筒給ひ畢おわぬいまにはじめぬ御心ざし申しつくしがたく候

にちれん よろこ

日蓮が悦び候のみならず釈迦仏定めて御悦よろこび候らん、我則歡喜諸仏亦然かんきしよぶつまたは

これ是なり、明日三位房をつかはすべく候、その時委細申いさいもうすべく候、恐恐きょうきょう。

建治三年丁丑ちのとつし三月十九日

日蓮 花押かおう

六郎次郎殿

次郎兵衛殿

◆三四六

減劫御書ごしよ

1465p

減劫と申すもうは人の心の内に候、貪・瞋・癡の三毒が次第に強盛になりも
てゆくほどに次第に人のいのちもつづまりせいもちいさくなりもつてまか
るなり、漢土・日本国は仏法已前には三皇・五帝三聖等の外經をもつて民
の心をととのへてよをば治めしほどに次第に人の心はよきことは・はかな
く・わるき事は・かしこくなりしかば・

外經の智あさきゆへに惡のふかき失をいましめがたし、外經をもつて世を
さまらざりしゆへに・やうやく仏經をわたして世間を・をさめしかば世を
だやかなりき、此れはひとへに仏教のかしこきによつて人民の心をつくはし
くあかせるなり、当時の外典と申すは本の外經の心にはあらず、仏法のわ

たりし時は外經とぶつぎょう仏經とあらそいしかど

もやうやく外經まけて王と民と用いざりしかば・外經のもの内經のしよじゆう所従となりて立ちあうことなくありしほどに外經のひとびと人人内經の心をぬきて智慧ちえをまし外經に入れて候を・をろかなる王は外典げてんのかしこきかともう。

又人の心やうやく善の智慧ちえは・はかなく惡の智慧ちえかしこくなりしかばぶきよう仏經の中にもしやうじやうきやう小乘經の智慧世間ちえを・をさむるに代をさまることなし、

其の時大乘經をひろめて代を・をさめしかば・すこし代をさまりぬ、其その後大乘經の智慧及ばざりしかばいちじやう一乘經の智慧をとりいだして代を・をさ

めしかば・すこししばらく代をさまりぬ、今の代は外經もしやうじやうきやう小乘經も

大乘經も一乘法華經等もかなわぬよとなれり、ゆえいかなとなれば衆生しゆじやう

の貪・瞋・癡の心のかしこきこ

と大覺世尊の大善にかしこきがごとし、た譬へば犬は鼻のかしこき事人にす

ぎたり、又鼻の禽獸きんじゅうをかぐことは大聖の鼻通にもをとらず、ふくろうがみ
みのかしこきとびの眼まなこのかしこき・すずめの舌のかるき・りうの身のかし
こき皆みなかしこき人にも・すぐれて候、そのやうに末代濁世まつだいじよくせの心の貪欲とんよく・瞋恚しんに
・愚癡ぐちのかしこきは・いかなる賢人けんじん・聖人しょうにん

も治めがたき事なり、其の故は貪欲とんよくをば仏不淨觀ふじようの藥をもて治し瞋恚しんにをば慈悲觀じひをもて治し愚癡ぐちをば十二因緣觀いんねんをもてこそ治し給たまうに・いまは此のほうもん法門ほうもんをとひて人を・をととして貪欲とんよく・瞋恚しんに・愚癡ぐちをますなり、譬たとへば火をば水をもつてけす・惡をば善をもつて打つ・しかるにかへりて水より出ぬる火をば水をかくればあぶらになりていよいよ大火だいかとなるなり。

今末代惡世まつだいあくせに世間の惡せけんより出世しゅつせの法門ほうもんにつきて大惡しゅつしやう出生しゅつしやうせり、これをば・しらずして今の人人ひとびと・善根ぜんこんをすすればいよいよ代のほろぶる事しゅつたい出来しゅつたいせり、今の代の天台てんだい・真言等しんごんの諸宗しよしゆうの僧等しゆをやしなうは・外ぜんこんは善根ぜんこんとこそ見ゆれども内じゆうあくは十惡じゆあく・五逆ごぎやくにもすぎたる大惡ごぎやくなり、しかれば代のをさまらん事はだいかくせそん大覺世尊ちえの智慧ちえのごとくなる智人ちじん・世に有り

て仙予國王せんよこくおうのごとくなる賢王けんおうとよりあひて・一向いひううに善根ぜんこんをとどめ大惡ぜんこんをもつて八宗はつしゆうの智人ちじんとをもうものを・或あるはせめ・或あるはながし・或あるはせをとどめ

・或は頭ある とうへをはねてこそ代はすこし・をさまるべきにて候へ。

法華經の第一の巻の「諸法実相乃至唯仏と仏と乃ち能く究尽し給う」とほけきょう だいいち しよほうじつそうないしただ すなわよ たま

とかれて候はこれなり、本末究竟と申すは本とは惡のね善の根・末と申すほんまつくきよう もう

は惡のをわり善の終りぞかし、善惡の根本枝葉をさとり極めたるを仏とはぜんあく こんほんしやう ぎわ

申すなり、天台云く「夫れ一心に十法界を具す」等云云、章安云く「仏尚此れもう てんだいいわ いっしん ほっかい ぐ いわ なおこ

を大事と為す易解を得べきなり」妙樂云くだいじ な いげ う みようらくいわ

「乃至終窮究竟の極説なり」等云云、法華經に云く「皆実相と相違背せず」ないししゅうぐくきよう ほけきよう いわ みなじつそふ そういそむ

等云云、天台之を承けて云く「一切世間の治生産業は皆実相と相違背せず」てんだいこれ う いわ いっさいせけん ちせいさんぎよう みなじつそふ そういそむ

等云云、智者とは世間の法より外に仏法を行ず、世間の治世の法を能く能くちしや せけん ぶつぽう せけん ちせい よよ

心へて候を智者とは申すなり、殷の代の濁りて民のわづらいしを大公望出世ちしや もう ちん のちゆう たいこうぼうしゅつせ

して殷の紂が頸を切りて民の

なげきをやめ、二世王が民の口ににがかりし張良出でて代を・をさめ民のい

口をあまくせし、此等^{これら}は仏法^{ぶつぽう}已^い前^{ぜん}なれども教主^{きようしゅ}釈尊^{しやくそん}の御使^{おんつかい}として民をたすけしなり、外經^{ひとびと}の人人^{ひとひと}は・しらざりしかども彼等^{かれら}の人人^{ひとひと}の智慧^{ちえ}は内心^{ないしん}には仏法^{ぶつぽう}の智慧^{ちえ}をさしはさみたりしなり。

今の代には正嘉しょうかの大地震文永の大せひせひの時智慧ちえかしこき国主こくしゅあらま
しかば日蓮にちれんをば用もちいつべかりしなり、それこそなからめ文永九年ぶんえいのどしう
ち・十一年の蒙古もうこのせめの時は周の文王の大公望たいこうぼうをむかへしがごとく・殷
の高丁王の傳悦ふえつを七里より請しやうせしがごとくすべかりしぞかし、日月にちがつは生盲いきめくら
の者には財たからにあらず賢人けんじんをば愚王ぐおうのにくむとはこれなり、しげきゆへにし
るさず、法華經ほけきやうの御心もこころと申すはこれてひの事にて候・外ほかのことと・をぼす
べからず、大悪だいあくは大善だいぜんの来るべき瑞相ずいさうなり、一閻浮提えんぶだいうちみだすならば
閻浮提えんぶだい内うち広令流布るふはよも疑うたがいい候はじ。

此の大進阿闍梨あじやりを故六郎入道殿にやうだいの御はかへつかわし候、むかし・この
法門ほうもんを聞いて候人人ひとびとには関東の内かんとうならば我とゆきて其そのはかに自我じがげ偈ぎよみ
候そうらはんと存じて候、しかれども当時とうじのありさまは日蓮にちれんかしこへゆくならば
其その日に一國にきこへ又かまくらまでもさわぎ候そうらはんか、心ざしある人な

りともゆきたらんところの人人めを・をそれ

ぬべし、いままでとぶらい候はねば 聖靈 しやうりやう いかにかひしくを・はすらんと

・をもへば・あるやうもありなん、そのほど・まづ弟子 でしをつかわして御は

かに自我 じがけ 偈をよませまいらせしなり、其 その由御心へ候へ、 恐恐 きようきよう。

◆三三七 高橋殿御返事

1467p

米穀も又かくの如 ごとし、同じ米穀なれども 謗法 ぼうぼうの者をやしなうは 仏種 ぶつしゆを

たつ命をついで 弥弥強盛 いよいよかうじやうの敵人 てきじんとなる、又命をたすけて 終 ついに 法華經 ほけきやうを引き

入るべき故か、又法華 ほっけの行者 ぎやうじやをやしなうは 慈悲 じひの中の大慈悲 じひの米穀なるべ

し、一切衆生 いっさいしゆじやうを利益 りやくするなればなり、故 ゆえに 仏舍利 ぶつしやり 變じて 米と成るとは 是 これな

るべし、かかる今時分人をこれまでつかはし 給 たまう事うれしさ 申 もうすばかりな

し、 釈迦 しゃか 仏 ぶつ・地涌 じゆの菩薩御身 ぼさつおんみに入りかはらせ 給 たまうか。

其^その国^{こく}の仏^{ぶつ}法^{ぽう}は貴^き辺^{へん}にまかせたてまつり候^{こう}ぞ、仏^{ぶつ}種^{しゆ}は縁^{ゆかり}に従^{したが}つて起^{おこ}る
是^{かく}の故^{のゆえ}に一^{いち}乗^{じよう}を説^{とく}くなるべし、又^{また}治^ち部^ぶ房^{ぼう}・下^{しも}野^の房^{ぼう}等^ら来^きり候^{こう}は・ばいそぎい
そぎつかはすべく候^{こう}、松^{まつ}野^の殿^{でん}にも見^み参^{さん}候^{こう}はば・くはしくかたらせ給^{たま}へ。

◆三三八

三三蔵祈雨事

建治元年六月五十四歳御作 与

にしやまにゆうどう
西山入道

1468p

そ 夫れ木をうえ候には大風吹き候へどもつよきすけをかひぬればたうれず、

お 本より生いて候木なれども根の弱きはたうれぬ、甲斐無き者なれどもたす

くる者強ければたうれず、すこし健の者も独なれば悪しきみちにはたうれ

ぬ、又三千大千世界のなかには舍利弗迦葉尊者をのぞいては仏よにいで給は

さんぜんだいせんせかい
ずば一人もなく三悪道に墮つ

さんあくどう
べかりしが、仏をたのみまいらせし強縁によりて一切衆生はをほく仏にな

あじやせ
りしなり、まして阿闍世王・あうくつまらなんと申せし悪人どもはいかに

あびじこく
もかなうまじくて必ず阿鼻地獄に墮つべかりしかども・教主釈尊と申す

だいにん
大人にゆきあはせ給いてこそ仏にはならせ給いしか、されば仏になるみち

は善知識ぜんちしきにはすぎず、わが智慧ちえなに

にかせん、ただあつきつめたきばかりの智慧ちえだにも候ならば善知識ぜんちしきたいせ
ちなり、而しかるに善知識ぜんちしきに値あう事が第一だいいちのかたき事なり、されば仏ぜんちしきは善知識
に値あう事をば一眼うきぎのかめの浮木うきぎに入り・梵天ぼんでんよりいとを下おろして大地だいちのはりの
めに入るにたとへ給たまへり、而しかるに末代悪世まつだいあくせには悪知識あくちしきは大地微塵だいちみじんよりもを
ほく善知識ぜんちしきは爪上そうじょうの土よりもすくなし、

ふだらくさん かんぜおんぼさつ ぜんざいどうじ ぜんちしきべつえん

補陀落山の觀世音菩薩は善財童子の善知識別円べつえん二教を・をしへて・いまだ

純円じゅんえんならず、常啼菩薩は身ぜんちしきをうて善知識をもとめしに曇無竭菩薩ぜんむかつぼさつにあへ

り、通別円つうべつえんの三教をならひて法華經ほけきょうを・をしへず、舍利弗しゃりほつは金師ぜんちしきが善知識

・九十日と申せしかば闍提せんだいの人となしたりき、ふるなは一夏いちげの説法せつぽうに大乘だいじょう

の機きを小人となす、大聖ほけきょうすら法華經ほけきょうをゆるされ

ず証果しょうかのらん機きをしらず、末代悪世まつだいあくせの学者等がくしやをば此をもつてすひしぬべ

し、天を地といふ東を西といふ。火を水をしへ星は月にすぐれたり、ありづかは須弥山しゆみせんにこへたり、なんと申す人人ひとびとを信じて候はん人人ひとびとは・ならばざらん悪人あくにんにはるかをとけてをしかりぬべし。

にちれんぶつぼう

日蓮仏法をこころみるに道理と証文とにはすぎず、又道理証文よりも

げんしやう

現証にはすぎず、而るに去る文永五年の比・東には俘囚えびすをこり西には蒙古もうこ

よりせめつかひつきぬ、日蓮案じて云く仏法を信ぜざればなり定めて調伏じやうぶく

をこなはれずらん、調伏じやうぶくは又真言宗しんこんしゅうにてぞあらんずらん、月支がっし・漢土かんど・

にほん

日本・三箇国の間に且く月支しづらがっしはをく、漢土かんど・日本の二国は真言宗しんこんしゅうにやぶら

るべし、善無畏三蔵ぜんむいさんぞう・漢土かんどに亘りてありし時は唐とうの玄宗げんそうの時なり、大旱魃かんばつ

ありしに祈雨きうの法

を・をほせつけられて候しに・大雨だいうふらせて上かみ一人より下した万民ばんみんにいたるま

おおいよろこ

で大に悦びし程に須臾しゆゆありて大風たいふう吹き来りて国土こくどをふきやぶりしかば・け

をさめてありしなり、又其の世に金剛智三蔵わたる、又雨の御いのりありしかば七日が内に大雨下り上のごとく悦んでありし程に、前代未聞の大風吹きしかば・真言宗は・をそろしき悪法なり

とて月支へをわれしが・とかうしてとどまりぬ、又同じ御世に不空三蔵・

雨をいのりし程三日が内に大雨下る悦さきのごとし、又大風吹きてさき二

度よりも・をびただし数十日とどまらず、不可思議の事にてありしなり、

此は日本国の智者愚者一人もしらぬ事なり、しらんと・をもはば日蓮が生

きてある時はしくたづねならへ、日本国に

は天長元年二月に大旱魃あり、弘法大師も神泉苑にして祈雨あるべきにて

ありし程に守敏と申せし人すすんで云く「弘法は下臈なり我は上臈なり・

まづをほせを・かほるべし」と申す、こうに随いて守敏をこなう、七日と

申すには大雨下りしかども京中計りにて田舎にふらず、弘法にをほせつけ

られてありしかば七日にふらず二七日に

ふらず三七日にふらざりしかば、天子我といのりて雨をふらせ給いき、而る

とうじ もんじん

を東寺の門人等我が師の雨とがうす、くわしくは日記をひきて習うべし、

てんかだいいち

天下第一のわうわくのあるなり、これより外に弘仁九年の春のえきれい又

こうにん

三古なげたる事に不可思議の誑惑あり口伝すべし。

てんだいだいし

ふかしぎ おおわく

くでん

天台大師は陳の世に大旱魃あり法華經をよみて・須臾に雨下り王臣かう

しゅゆ

おうしん

べをかたづけ万民たなごころをあはせたり、しかも大雨にもあらず風もふ

ばんみん

だいう

かず甘雨にてありしかば、陳王大師の御前に・をはしまして内裏へかへら

かんう

だいいし

おんまえ

だいいり

んことをわすれ給いき、此の時三度の礼拝はありしなり。

たまい

らいはい

去る弘仁九年の春・大旱魃ありき・嵯峨の天王真綱と申す臣下をもつて
冬嗣のとり申されしかば・法華經・金光明經・仁王經をもつて伝教
大師祈雨ありき、三日と申せし日ほそきくもほそきあめしづしづと下りし
かば天子あまりによろこばせ給いて、日本第一のかたことたりし大乘の
戒壇はゆるされしなり、伝教大師の御師・護命と申せし聖人は南都第一
の僧なり、四十人の御弟子あいぐして仁王經をもつて祈雨ありしが五日と
申せしに雨下りぬ、

五日はいみじき事なれども三日にはをとりにて而も雨あらかりしかばまけに
ならせ給いぬ、此れをもつて弘法の雨をばすひせさせ給うべし、かく法華經
はめでたく真言はをろかに候に日本のほろぶべきにや一向・真言にてある
なり、隱岐の法王の事をもつてをもうに真言をもつて蒙古とえぞとをでう
ぶくせば日本国やまけんずらんと・すひせしゆへに此の事いのちをすてて

・いゐて・みんなをもひしなり、いゐし時はでしらせいせしかども・いまは

あひぬれば心よかるべきにや、漢土・日本の智者・五百余年の間・一人もしらぬ事をかんがへて候なり、善無畏・金剛智・不空等の祈雨に雨は下りて而も大風のそひ候は・いかに心へさせ給うべき、外道の法なれども・いうにかひなき道士の法にも雨下る事あり、まして仏法は小乗なりとも法のごとく行うならば・いかでか雨下らざるべき、

いわうや大日経は華嚴・般若にこそをよばねども阿含にはすこしまさりて候ぞかし、いかでか・いのらんに雨下らざるべき・されば雨は下りて候へども大風のそいぬるは大なる僻事のかの法の中にまじわれるなるべし、弘法大師の三七日に雨下らずして候を天子の雨を我が雨と申すは又・善無畏等よりも大にまさる失のあるなり。

第一の^{だいいち}大^{もうこ}妄^{こうぼう}語^{だいし}には弘^{じひつ}法^{いわ}大師^{こうにん}の自^じ筆^{ひつ}に云^いく、「弘^{こう}仁^{にん}九^く年^{ねん}の春^{はる}疫^{えき}れい^{れい}をい^いの

りてありしかば夜^い中^{ちゆう}に日^にい^いでたり」と云^い云^い、か^かかるそ^そら^らご^ごをい^いう人^{ひと}なり、

此^この事^{こと}は日^に蓮^{れん}が門^{もん}家^か第^{だい}一^{いち}の秘^ひ事^じなり本^{ほん}文^{ぶん}をとりつめてい^いうべし、仏^{ぶつ}法^{ぽう}はさ

てをきぬ上^{じやう}にかきぬる事^{こと}天^{てん}下^か第^{だい}一^{いち}の大事^{だいじ}なり、つてに・をほせあるべから

ず御^{おん}心^{こころ}ざしのい^いたりて候^{こう}へばをどろかしまいらせ候^{こう}、日^に蓮^{れん}をばい^いかんがあ

るべ^べかるらんと・をぼ^ぼつか^かなしと・をぼ^ぼしめ^めすべ^べきゆ^ゆへに・か^かかる事^{こと}ども

候^{こう}、む^むこ^こり

国だにも・つよくせめ候わば今生こんじょうにもひろまる事も候いなん、あまりには
げしくあたりし人人ひとびとは・くゆるへんもや・あらんずらん。

外道げどうと申すは仏前ぶつぜん・八百年よりはじまりて、はじめは二天三仙にてあり
しが・やうやく・わかれて九十五種きゅうじゅうごしゆなり、其その中に多くの智者神通ちしやじんつうのもの
・ありしかども一人も生死しやうじをはなれず、又また帰依きえせし人人ひとびとも善につけ惡につ
けて皆三惡道みなさんあくどうに墮おち候いしを・仏出世しゅつせさせ給たまひいてありしかば、九十五種きゅうじゅうごしゆ
の外道げどう十六大国の王臣諸民おうしんしよをかたらひて

・或あるはのり・或あるはうち・或あるは弟子でし・或あるはだんな等無量無辺むりやうむへんころせしかども
仏たゆむ心なし、我此わうもんの法門ほうもんを諸人しよにんにをどされているやむほどならば一切いっさい
衆生地獄しゆじやうじくに墮おつべしとつよくなげかせ給たまひいしゆへに・退する心なし、この
外道げどうと申すは先仏きやうびやうの經經きやうぎやうを見て・よみそこないて候いしより事をこれり。

今も又かくのごとし、日本にほんの法門ほうもん多しといへども源もとは八宗はつしゅう・九宗きゅうしゅう・十宗じしゅう

よりをこれり、十宗のなかに華嚴等の宗宗はさてをきぬ、真言と天台との
勝劣に弘法・慈覚・智証のまどひしによりて日本国の人人・今生には
他国にもせ

められ後生にも惡道に墮つるなり、漢土のほろび又惡道に墮つる事も善無畏
・金剛智・不空のあやまりよりはじまれり、又天台宗の人人も慈覚・智証
より後は・かの人人の智慧にせかれて天台宗のごとくならず、されば・さ
のみやはあるべき。

いわうや日蓮はかれにすぐべきとわが弟子等をぼせども・仏の記文には
たがはず、末法に入つて仏法をばうじ無間地獄に墮つべきものは大地微塵
よりも多く、正法をへたらん人は爪上の土よりも・すくなしと涅槃經に
はとかれ、法華經には設い須弥山をなぐるものはありません・我が末法に
法華經を経のごとくにとく者ありがたしと

しる
記しをかせ給へり、たま大集經・金光明經・仁王經・守護經はちなひをん
經・最勝王經等さいしょうおうきように末法まつぽうに入つて正法しょうぽうを行ぜん人出来しゅつたいせば邪法じゃほうのもの
おうしん
王臣等おうしんにうたへて・あらんほどに彼の王臣等・他人たにんが・ことばにつひて一
しょうほう
人の正法のものを

・或^{ある}はのり・或^{ある}はせめ・或^{ある}はながし・或^{ある}はころさば梵王^{ぼんのう}・帝釈^{たいしやく}・無量^{むりよう}の
諸天^{しよてん}・天神^{てんじん}・地神等^{けんおう}りんごくの賢王^{けんおう}の身に入りかはりてその国をほろぼす
べしと記^{しる}し給^{たま}へり、今の世は似^にて候者^{ある}かな。

そもそも

抑^{おさ} 各各^{おの}はいかなる宿善^{しゆくぜん}にて日蓮^{にちれん}をば訪^たはせ給^{たま}へるぞ、能^よく能^よく過去^{かこ}を

たず

御尋^おね有^あらばなにと無^{なく}くとも此度^{このたび}生死^{しやうじ}は離^はれさせ給^{たま}うべし、すりはむどく

むげん

は三箇^{さん}年に十四^{しよ}字^じを暗^{くら}にせざりしかども仏^{ぶつ}に成^{なり}りぬ提婆^{だいば}は六万^{りくまん}蔵^{ざう}を暗^{くら}にし

むげん

て無間^{むげん}に墮^おちぬ是^これ偏^{ひとえ}に末代^{まつだい}の今^{いま}の世^よを表^{あらわ}するなり、敢^{あえて}て人^{ひと}の上^{うへ}と思^{おも}し食^く

むげん

すべからず事繁^{しげ}ければ止^{とど}め置き候^{あわ}い畢^{おわ}んぬ、抑^{おさ} 当時^{そのとき}の忽忽^{そのとき}に御志^{ごし} 申^{まう}す

ばか

計^{はか}り候^{あわ}はねば大事^{だいじ}の事^{こと}あらあらをどろかしまひらせ候^{あわ}、ささげ青大豆^{あまい}給^{たま}い

候いぬ。

六月二十二日

にちれん

日蓮 花押

かおう

にしやま
西山殿御返

◆三四九

もうこ
蒙古使御書

がんねん
建治元年五十四歳御作

与

にしやま
西山高橋入道

1472p

かまくら

鎌倉より事故なく御下りの由承り候いてうれしさ申す計りなし、又蒙古

の人の頸を刎られ候事承り候日本国の敵にて候念仏・真言・禅・律等の

法師は切られずして科なき蒙古の使の頸を刎られ候ける事こそ不便に候へ

子細を知らざる人は勘へあてて候をおごりて云うと思ふべし此の二十余年の

間私には昼夜に弟子等に歎き申し公には度度申せ

し事はなり一切の大事の中に国の亡びるが第一の大事にて候なり

最勝王経に云く「書の中の極めて重きは国位を失うに過ぎたること無し」

等云云、文の心は一切の悪の中に国王と成りて政悪くして我が国を他国

に破らるるが第一の悪にて候と説れて候又 金光明經 に云く「悪人を愛敬ぜんにん ちばつし善人を治罰するによるが故に乃至他方の怨賊来りて

国人喪乱に遇う」等云云、文の心は国王と成りて悪人を愛し善人を科にあ

つれば必ず其の国・他国に破らるると云う文なり、法華經第五に云く「世

に恭敬せらるるを為ること六通の羅漢の如くならん」等云云、文の心は

法華經

の敵の相貌そうみようを説きて候に・二百五十戒を堅く持ち迦葉舍利弗の如くなる人

を・国主こくしゅこれを尊みて法華經の行者ぎやうじやを失なはむとするなりと説れて候ぞ。

夫れ大事だいじの法門ほうもんと申すは別に候はず、時に當て我が為め国の為め大事だいじな

事を少しも勘かんへたがへざるが智者ちしやにては候なり、仏のいみじきと申すは

過去かこを勘かんへ未来みらいをしり、三世さんぜを知しめすに過ぎて候・御智慧ちえはなし、設たとい

仏にあらねども竜樹りゆうじゆ・天親てんじん・天台てんだい・伝教でんぎようなど申せし聖人しようにん・賢人けんじん等は仏

程ほどこそ・なかりしかども・三世さんぜの事を粗知ほほしろしめされて

候しかば名なをも未来みらいまで流されて候き、所詮しよせん・万法ばんぽうは己心こしんに収まりて一塵いちじん

もかけず九山くしやん・八海はかいも我が身に備そなわりて日月にちがつ・衆星しゅうせいも己心こしんにあり、然しかりと

いへども盲目もうもくの者の鏡に影を浮べるに見えず・嬰兒えいじの水すい火かを怖れざるが

如ごとし、

外典げてんの外道げどう内典ないてんの小乗しょうじよう・権大乘こんだいじよう等は皆己心みなこしんの法ぽうを片端かたはしかたはしと片端かたはしかたはしと説きて候な

り、然りしかといへども法華經ほけきようの如く説かず、然れば經經ききようきように勝劣しょうれつあり人人ひとびとに
も聖賢せいけん分れて候ぞ、法門ほうもん多々なれば止め候い畢おわんぬ。

かまくら

くだ

すき

もう

ほか

そ

しゅじゅ

鎌倉より御下りそうその御隙すきに使者申す計りなし、其の上種種しゅじゅの物送

よろこ

にほん

みな

なげ

にちれん

いちるい

なげ

り給候事悦び入つて候、日本は皆人の歎なげき候に日蓮がにちれん一類いちるいこそ歎なげきの中に

よろこ

もうこ

まぬか

悦び候へ、国に候へば蒙古の責はよも脱まぬかれ候はじなれども・国のために責

もうこ

こしょう

よろこ

られ候いし事は天も知しめして候へば後生は必ずたすかりなんと悦よろこび候に

こんじよう

もうこ

こうむ

たまい

・御辺こそ今生こんじように蒙古国の恩を蒙こうむらせ給い

さいみきようじ

たまい

しよりよう

て候へ、此の事起らずば最明寺殿の十三年に当らせ給いては御かりは所領しよりよう

もう

ほか

ほうじよう

つくし

おわし

にては申す計りなし、北条六郎殿のやうに筑紫にや御坐なん、是は各各の

たま

とが

ほけきよう

御心のさからせ給うて候なり、人の科をあてるにはあらず、又一には法華經ほけきよう

ゆえ

たまい

ひがごと

これほど

よろこ

の御故にたすからせ給いて候いぬるか・ゆゆしき御僻事ひがごとなり、是程これほどの御悦よろこび

よろこ

た

まいりても悦よろこびまいらせ度く候へども人聞つつましく候いてとどめ候い

おわ
畢んぬ。

乃時

にちれん
日蓮
かおう
花押

にしやま
西山殿御返事
ごへんじ

◆三五〇

西山殿御返事にしやまごへんじ

建治二年 五十五歳御作

1474p

青鼻せいふ五貫文たまい給おわい候い畢そんぬ、夫いたれ雪至こつて白ければそむるにそめられず

・漆うるし至いたつてくろければしろくなる事なし、此これよりうつりやすきは人の心

なり、善惡ぜんあくにそめられ候、真言しんごん・禪ねんぶつ・念仏じやあく宗等の邪惡の者にそめられぬれ

ば必ず

地獄じごくにをつ、法華經ほけきようにそめられ奉たてまれば必ず仏になる、經いわに云く「諸法実相しよほうじつそう」

云云、又云いわく「若人にやくにん不信ふしん乃ないし至ゆうあ入阿鼻獄あびごく」云云、いかにも御信心しんじんをば雪漆うるしの

ごとくに御もち有あるべく候、恐恐きようきよう。

建治二年丙子ひのえね

にちれん かおう
日蓮 花押

にしやま ごへんじ
西山殿御返事

◆三五一

宝軽法重事

こうあん
弘安二年五月

五十八歳御作 与

にしやまにゆうどう
西山入道

1474p

たかなな

筭 百本又二十本追給い畢んぬ、妙法蓮華經第七に云く「若し復人有つ

て七宝を以て三千大千世界に満てて仏及び大菩薩・辟支仏・阿羅漢に供養

せん、是の人の所得の功德も此の法華經の乃至一四句偈を受持する其の福

の最も多きには如かじ」云云、文句の十に「七宝を四聖に奉るは一偈を持

つに如かずと云うは法は是れ聖の師なり能生能養能成能榮法に過ぎたるは

莫し故に人は軽く法は重きなり」云云、記の十に云く「父母必ず四の護を

もつ
以て子を護る^{まも}

が如し^{ごと}、今^{いま}發心^{ほっしん}は法^よに由^よるを生^なと為^なし始終^{しじゅう}隨^ず逐^いするを養^なと為^なし極果^{ごくか}を滿^みぜ
しむるを成^なと為^なし能^よく法界^{ほっかい}に應^おずるを榮^なと為^なす、四^よつ同^{どう}じからずと雖^{いえど}も法^ほ
を以^{もつ}て本^{もと}と為^なす」云云、經並^{きやうへい}に天台^{てんだい}・妙樂^{みょうらく}の心^{こころ}は一切^{いっさい}衆生^{しゆじやう}を供養^{くやう}せんと

阿羅漢あらかんを供養くようせんと乃至ないし一切いっさいの仏ぶつを尽つくして七宝しつぽうの財たからを三千大千世界さんぜんだいせんせかいにもり
みてて供養くようせんよりは・法華經ほけきようを一偈いちげ・或あるは受持じゅじし・或あるは護持ごじせんはすぐ
れたりと云云經いんに云く「此ほけきようの法華經ほけきようの乃至ないし一四句偈くげを受持じゅじする其その福ふくの最
も多おほきには如しかず」天台てんだい云く「人ひとは輕かろく法ほふは重おもきなり」妙樂みょうらく云く「四よつ同
じからずと雖いへども法ほふを以もつて本もとと為なす」云云、九界いっさいしゅじよう
の一切衆生いっさいしゅじようを仏ぶつに相對そつたいして此これをはかるに一切衆生いっさいしゅじようのふくは一毛いちもうのかる
く仏ぶつの御ごふくは大山おほいさんのをもきがごとし、一切いっさいの仏ぶつの御ごふくは梵天ぼんてん三昧しんまいの衣い
のかるきがごとし、法華經ほけきようの一字いちじの御ごふくの重おもき事ことは大地だいちのをもきがごと
し、人輕かるしと申もうすは仏ぶつを人ひとと申もうす法重ほふちゆうしと申もうすは法華經ほけきようなり夫それ法華ほつけい已前いぜん
の諸經しよきよう並しよに諸論しよろんは仏ぶつの功德くんとくをほめて

候こう仏ぶつのごとし、此ほけきようの法華經ほけきようは經きんの功德くんとくをほめたり仏ぶつの父母ふぼのごとし、華嚴經けこんきよう
・大日經だいにくきよう等の法華經ほけきように劣おとる事ことは一毛いちもうと大山おほいさんと三昧しんまいと大地だいちのごとし、乃至ないし

ほけきよう　さいか　ぎようじゃ　けこん　しんこん　さいじよう
法華經の最下の行者と華嚴・真言の最上の僧とくらぶれば帝釈と☆猴と
しし　しょうれつ　しか
師子と兎との勝負なり、而るをたみが王とののしればかならず命となる、
しよきよう　ぎようじゃ　ほけきよう　ぎようじゃ　すぐ
諸經の行者が法華經の行者に勝れたりと申せば必ず国もほろび地獄へ入
り候なり。

但かたきのなき時はいつわりをろかにて候、譬へば將門・貞任も貞盛・
頼義がなかりし時は・国をしり妻子安穩なり云云、敵なき時はつゆも空へ
のぼり雨も地に下り逆風の時は雨も空へあがり日出の時はつゆも地にをち
ぬ、されば華嚴等の六宗は伝教なかりし時はつゆのごとし真言も又かく
のごとし、強敵出現して法華經をもつて・

つよくせむるならば叡山の座主・東寺の小室等も日輪に露のあへるがごと
しと・をぼしめすべし、法華經は仏滅後・二千二百余年にいまだ經のごと
く説ききわめてひろむる人なし、天台・伝教もしろしめさざるにはあらず

・時も来らず機きもなかりしかば・かききわめずして・をわらせ給たまへり、日蓮にちれんが弟子でしとならむ人人ひとびとは・やすくしりぬべし。

一閻浮提えんぶだいの内に法華經ほけきようの寿量品じゆりようぽんの釈迦仏しゃかぶつの形像ぎようそうを・かきつくれる堂塔どうとういまだ候こうはず、いかでか・あらわれさせ給たまわざるべき、しげければとどめ

候。

たけのこは百二十本法華經ほけきようは二千余年にあらわれ候ぬ、布施ふせはかるけれ

ども志こころ重おもき故なり、当時とうじはくわんのうと申し大宮づくりと申しかたがた

民のいとまなし、御心おんこころざしふかければ法もあらわれ候にや、恐恐きようきよう謹言きんげん。

五月十一日

日蓮にちれん

花押かおう

西山殿御返事にしやま ごへんじ

◆三五一

西山殿御返事にしやま ごへんじ

弘安四年こうあん 六十歳御作

1467p

あまざけ一をけ・やまのいも・ところせうせう給お了わんぬ、梵網經ぼんもうきようと申もうす

經には一紙・一草と申もうしてかみ一枚くさひとつ大論だいろんと申もうするんにはつちの

もちゐを仏にくやうせるもの閻浮提えんぶだいの王となるよしを・とかれて候。

これは・それには・にるべくもなし・そのうへをとこにもすぎわかれ・
たのむかたもなきあまのするがの国西山にしやまと申すところより甲斐国かいのくにのはきゐ
の山の中にをくられたり、人にすてられたるひじりの寒さに・せめられて
・いかに心ぐるしかるらんとをもひやらせ給たまいて・をくられたるか、父母ふぼ
にをくれしより・このかた・かかるねんごろの

事にあひて候事こそ候はね、せめての御心おんこころざしに給たまうかとおぼえてなみだ
もかきあへ候はぬぞ、日蓮にちれんは・わるき者にて候へども法華経ほけきようは・いかでか
・おろそかにおわすべき、ふくろはくさけれども・つつめる金はきよし・
池はきたなければどもはちすしやうじやうなり、日蓮にちれんは日本第一にほんだいいちのえせもの
なり、法華経ほけきようは一切経いっさいきようにすぐれ給たまへる経なり

り、心あらん人金をとらんとおぼさばふくろをすつる事なかれ、蓮をあひ
せば池をにくむ事なかれ、わるくて仏になりたらば法華経ほけきようの力あらはるべ

し、よつて臨終りんじゆうわるくば法華經ほけきようの名をりなん、さるにては日蓮にちれんは・わるく
てもわるかるべしわるかるべし、恐恐きようきよう謹言きんげん。

月 日 御 返 事

◆三五三

西山殿御返事にしやまごへんじ

1477p

としごろ後生ごしょうをぼしめして御心おんこころざしをはすれば名計なけいり申し候もう、同行どうぎょうども
にあらあきこしめすべし、やすき事なれば智慧ちえの入る事にあらず智慧ちえの
入る事にあらず、恐恐きょうきょう。

一月廿三日

日蓮にちれん 在御

判

西山殿御返事にしやまごへんじ

◆三五四

妙心みょうしん尼御前御返事あまごぜんごへんじ

建治元年八月がんねん 五十四

歳御作

1477p

すずの御志ごし 送り給ひ候おほい了わぬ、おさなき人の御ために御まほりさづけまいらせ候、この御まほりは法華經ほけきょうのうちのかんじん一切經いっさいきょうのげんもくにて候、たとへば天には日月にちがつ・地には大王だいおう・人には心・たからの中には如意宝珠にょいほうじゆの・たまいえにははしらしらのやうなる事にて候。

このまんだらを身にたちぬれば王ぶしを武士ぶしのまほるがごとく子を・をやのあいするがごとくいの水をたのむがごとく草木そうもくのあめをねがうごとく・とりの木をたのむがごとく・一切いっさいの仏神等ぶつしんのあつまり・まほり昼夜しやに・かげのごとく・まほらせ給たまう法たにて候、よくよく御信用ごしんようあるべし、あなかしこ・あなかしこ、きようきようきんげん 恐恐 謹言。

八月二十五日

日蓮にちれん 花押かおう

みようしんあまごぜんごへんじ
妙心尼御前御返事

◆三三五

窪尼御前御返事 あまごぜんごへんじ

弘安元年五月 こうあんがねん

五十七歳御

作

1478p

ちまき は たかな
粽 五把・ 第十本・ 千日ひとつつ 給い 畢んぬ、 たまい おわ いつもの事に候へども・

ながあめふりてなつの日ながし、山はふかく・みちしげければ・ふみわくる人も候はぬに・ほととぎすにつけての御ひとこへありがたし・ありがたし。

さてはあつわらの事こんどをもつて・をぼしめせ・さきもそら事なり、かうのとは人のいゐしに・つけて・くはしくも・たづねずして此の御房 ごぼう をながしける事あさましと・をぼしてゆるさせ給 たまい いてののちは・させるとがもなく

てはいかんが・又あだせらるべき、すへの人人ひとびとの法華經ほけきょうの心にはあだめども・うへにそしらば・いかんがと・をもひて・事にかづけて人をあだむほどに・かへりてさきざきのそら事のあらわれ候ぞ、これはそらみげうそと申もうす事はみぬさきよりすいして候、さどの国にてもそらみげうそを三度までつくりて候しぞ、これにつけても上と国と

の御ためあはれなり、木のしたなるむしの木をくらひたうし・師子ししの中のむしの師子ししを食らいうしなふやうに守殿うしどのの御をんにてすぐる人人ひとびとが守殿うしどのの御威ぎいをかりて一切いっさいの人人ひとびとを・をどし・なやまし・わづらはし候うへ、上の仰おおせとて法華經ほけきょうを失うしないて国もやぶれ主をも失うしなうて返つて各各が身をほろぼさんあさましさよ、日蓮にちれんはいやしけれども

經は梵天ほんてん・帝釈たいしやく・日月にちがつ・四天してん・天照太神てんしょうだいじん・八幡大菩薩はちまんだいぼさつのまほらせ給たまう御經なれば・法華經ほけきょうのかたをあだむ人人ひとびとは・剣をのみ火を手ににぎるなるべ

し、これにつけても・いよいよ御信用ごしんようのまさらせ給たまう事、たうとく候ぞた
うとく候ぞ。

五月三日

日蓮にちれん

花押かおう

窪尼御返事ごへんじ

◆三五六

窪尼御前御返事

弘安元年六月

五十七歳御作

1479p

すずの御供養送り給い了んぬ、大風の草をなびかしいかづちの人を・を
どろかすやうに候、よの中にいかにいままで御しんようの候いけるふしぎ
さよ、ねふかければはかれず・いづみに玉あれば水たえずと申すやうに・
御信心しんじんのねのふかく・いさぎよき玉の心のうちに・わたらせ給うか、たう
としたうとし、恐恐おそおそ。

六月二十七日

日蓮花押にちれん かおう

くぼの尼御前御返事あまこぜんごへんじ

◆三五七

妙心尼御前御返事

弘安元年八月

五十七歳御作

1479p

あわしかき二籠なすび一こ給い候い了んぬ、入道殿の御所勞の事、唐土
に黃帝・扁鵲と申せしくすしあり天竺に持水耆婆と申せしくすしあり、こ
れらはその世のたから末代のくすしの師なり、仏と申せし人はこれには
にるべくもなきいみじきくすしなり、この仏・不死の薬をとかせ給へり・
今の妙法蓮華經の五字是なり、しかも・この五字をば閻浮提人病之良薬
とこそとかれて候へ。

入道殿は閻浮提の内日本国の人なり、しかも身に病をうけられて候病之
良薬の經文顯然なり、其の上蓮華經は第一の薬なり、はるり王と申せし
悪王仏のしたしき女人五百余人を殺して候いしに・仏阿難を靈山につかは

して青蓮華せいれんげをとりよせて身にふれさせ給たまいしかば・よみかへりて七日あり
て☆利天とうりてんに生れにき、蓮華れんげと申もうす花はかか

るいみじき徳ある花にて候へば仏妙法みょうほうにたとへ給たまへり、又人の死ぬる事は
・やまひにはよらず・当時とうじのゆきつしまのものどもは病なけれども・みな
みなむこ人に一時いちじに・うちころされぬ・病あれば死ぬべしといふ事不定ふじょうな
り、又

このやまひは仏の御はからひか・そのゆへは 浄名経じやうみやうぎやう・涅槃経ねはんぎやうには病ある人・仏になるべきよしとかれて候、病によりて道心どうしんはをこり候なり、又一切いっさいの病の中には五逆罪ごぎやくざいと一闡提いつせんたいと謗法ぼうぼうをこそおもき病とは仏はいたませ給へたま
今の日本にほん

国の人は一人もなく極大重病じゆうびやうあり所謂大謗法いわゆる ぼうぼうの重病じゆうびやうなり今の禪宗ぜんしゆう・念仏宗ねんぶつしゆう・律宗真言師りつしゆうしんごんしなりこれらはあまりに病おもきゆへに我が身にもおぼへず人もしらぬ病なりこの病のこうずるゆへに四海しかいのつわものただいま来りなば王臣万民おうしんばんみんみなしづみなんこれをいきてみ候はんまなここそあたあたしく候へ。

入道殿にゅうどうでんは今生こんじやうにはいたく法華経ほけきやうを御信用ごしんようありとは見え候はねども・過去の宿習かこ しゆくじゆうのゆへの・もよをしによりて・このなが病にしづみ日日夜夜にちじつげに道心どうしんひまなし、今生こんじやうにつくりをかせ給ひし小罪しょうざいは・すでにきへ候いぬ

らん、ほうぼう謗法の大悪は又ほけきよう法華經に歸しぬるゆへに・きへさせ給たまうべしただいまにりようぜん靈山にまいらせ給たまいなば日いいでて十方じゅうぽうをみるが・

ごとくうれしく、とくしにぬるものかなとうちよろこび給たまい候そうらはんずらん、
ちゅうう中有の道にいかなる事もいできたり候はば日蓮にちれんがでしなりとなのらせ給たまへ、

わずかの日本にほんこく国なれどもさがみ殿のうちのものと申もうすをば・さうなく

おそるる事候、日蓮にちれんは日本にほん第一だいいちのふたうの法師ほっしただし法華經を信じ候事は

一閻浮提第一えんぶだいの聖人しょうにんなり、其その名は十方じゅうぽうの浄土じょうどにきこえぬ、定めて天地てんち

もしりぬらん・日蓮にちれんが弟子でしとなのらせ給たまはば・いかなる惡鬼あくきなりともよも

しらぬよしは申もうさじとおぼすべし、さては度度たびたびの御心おんこころざし申もうすばかりなし、

きようきようきんげん恐恐謹言。

さるは木をたのむ魚は水をたのむ・女人にょにんはおとこをたのむ・わかれの
をしきゆへにかみをそり・そでをすみにそめぬ、いかでか十方じゅうぽうの仏も

あはれませ給はざるべき、法華經もすてさせ給うべきとたのませ給え

・たのませ給え。

八月十六日

日蓮
花押

妙心尼御前御返事

◆三五八

窪尼御前御返事 あまごぜんごへんじ

弘安二年五月 五十八 こうあん

歳御作

1481p

御供養^{くよう}の物数のままに慥^{たしか}に給^{たま}い候^い、当時^{とうじ}は五月の比おひにて民のいとま
なし其^その上宮^{じょうぐう}の造宮にて候なり、かかる暇なき時・山中の有り様思ひやら
せ給^{たま}いて送りたびて候事御志殊^{ごし}にふかし。

あそかだいおう

阿育大王と申せし王はこの天の日のめぐらせ給^{たま}う一閻浮提^{えんぶだい}を大体^{だいたい}しろし
めされ候いし王なり、此の王は昔德勝^{とくしょう}とて五になる童にて候いしが釈迦^{しゃか}仏^{ぶつ}
にすなのもちゐをまいらせたりしゆへにかかる大王^{だいおう}と生れさせ給^{たま}う、此の
童はさしも心ざしなしたわふれなるやうにてこそ候いしかども仏のめでた
くをはすればわづかの事も・ものとなり

て・かかる・めでたき事候、まして法華經ほけきようは仏にまさらせ給たまう事星と月と
ともしびと日とのごとし、又御心おんこころざしざしも・すぐれて候。

されば故入道殿こゆうぐうも仏にならせ給たまうべし、又一人をはする・ひめ御前ごぜんも・
いのちもながく・さひわひもありて・さる人の・むすめなりと・きこえさ
せ給たまうべし、当時とうじもおさなければも母をかけてすごす女人にょにんなれば父の後世ごしやう
をもたすくべし。

から国にせいしと申せし女人にょにんは・わかなを山につみて・をひたるは・わ
をやしなひき、天あはれみて越王もうと申す大王だいおうのかりせさせ給たまいしが・みつ
けてきさきとなりనికి、これも又かくのごとし・をやを・やしなふ女人にょにんな
れば天もまほらせ給たまうらん仏もあはれみ候らん、一切いっさいの善根ぜんこんの中に孝養父母こうようふぼ
は第一だいいちにて候なれば・まして法華經ほけきようにてをはす、金のうつわものに・きよ
き水を入れたるがごとく・すこしももるべからず候、めでたし・めでたし、

きようきようきんげん
恐恐 謹言。

五月四日

にちれん かおう
日蓮 花押

くぼの尼御前御返事
あまこぜんごへんじ

このなかの御くやうのものは・ところところ略して法門ほうもんを書写しよしゃし畢おわぬ。

◆三五九 妙心尼御前御返事
みょうしん あまこぜんごへんじ

弘安二年十一月 五十八歳御
こうあん

作 1482p

御そうぜんれう送り給たまい了おわぬ、すでに故入道殿にゅうどうのかくるる日にて・おはしけるか、とかうまぎれ候いけるほどに・うちわすれて候いけるなり、よもそれには・わすれ給たまはじ。

蘇武と申せし男は漢王の御使に胡国と申す国に入りて十九年めもおとこをはなれ・おともわする事なし、あまりのこひしさに・おとこの衣を秋ごとにきぬたのうへにて・うちけるが・おもひやとをりて・ゆきにけん・おとこのみみにきこへたり、ちんしといいしものは・めおとこ・はなれけるに・かがみをわりて・ひとつづつ・とりにけり、わする時はとりとび去りけり、さうしといぬしものは・おとこをこひてはかにいたりて木となりぬ、相思樹

と申すはこの木なり、大唐へわたるにしがの明神と申す神をはす・おとこのもろこしへ・ゆきしをこひて神となれり・しまのすがたおうなになたり、まつらさよひめといふ是なり、いにしへより・いまにいたるまでをやこのわかれ主従のわかれ・いづれかつらからざる、されども・おとこをんなのわかれほど・たとげなかりけるはなし、過去遠遠より女の身となりしが・

このおとこ娑婆^{しゃば}最後のぜんちしきなりけり。

ちりしはな・をちしこのみも・さきむすぶ・いかにこ人の・返らざるらむ。

こぞもうくことしもつらき・月日かな・おもひはいつも・はれぬものゆへ。

ほけきよう だいもく
法華經の題目をとなへまいらせてまいらせ候。

十一月二日

にちれん かおう
日蓮 花押

みょうしんあまごぜんごへんじ
妙心尼御前御返事

◆三六〇

あまごぜんごへんじ
窪尼御前御返事

こうあん
弘安二年十二月

五十八歳御作

1483p

十字五十まい・くしがき一れん・あめをけ一・送り給たまい了おわぬ、御心おんこころざし
さきざきかきつくしてふでもつひゆびもたたため、三千大千世界さんぜんだいせんせかいに七日ふる
雨のかずは・かずへつくしてん、十方世界じゅうぽうせかいの大地だいちのちりは知る人もありな

ん、法華經の一字供養の功德は知りがたしとこそ仏は・とかせ給いて候へ、
此れをもつて御心へあるべし、
恐恐謹言。

十二月二十七日

日蓮 花押
にちれん かおう

くぼの尼御前御返事
あまごぜんごへんじ

◆三六一 妙心尼御前御返事
みょうしん あまごぜんごへんじ

弘安三年五月 五十九歳御作
こうあん

1483p

すずのものを給いて候、
たまい
たうじはのう時にて人のいとまなき時・かやうに
くさぐさのものども・をくり給いて候事いかにも申すばかりなく候、
たまい

これもひとへに故入道殿にきりぎりすの御わかれの・しのびがたきに後世ごしやうの御ためにて
こそ候らんめ、ねんごろにごせをとぶらはせ給たまい候へば・いくそばく・う
れしくおはしますらん、とふ人もなき草むら

に露あらわしげきやうにて・さばせかいにとどめをきしをさなきものなどのゆくへきかまほし。

あの蘇そ武ぶが胡こ国こくに十九年ふるさとの妻と子とのこひしさに雁の足につけしふみ、安部の中麻呂が漢土かんどにて日本にほんへかへされざりし時・東にいでし月をみてかのかすがの月よと・ながめしも身にあたりてこそ・おはすらめ。

しかるに法華經ほけきようの題目だいもくをつねは・となへさせ給たまへば此の妙の文じ御つかひにたまい変ぜさせ給たまい・或は文殊師利菩薩・或は普賢菩薩・或は上行菩薩・或あるは不輕菩薩等ふぎようぼさつとならせ給たまうなり、譬たとえばちんしがかがみのとりの・つねに
つげしがご

とく蘇そ武ぶがめのきぬたのこえのきこえしがごとくさばせかいの事を冥途めいどにつげさせ給たまうらん、又妙の文字もんじは花のこのみとなるがごとく半月の満月まんげつとなるがごとく変じて仏とならせ給たまう文字もんじなり。

されば経に云く「能く此の経を持つは則ち仏身を持つなり」と、天台大師の云く「一一文文是れ真仏なり」等云云、妙の文字は三十二相・八十種好円備せさせ給う釈迦如来にて・おはしますを我等が眼つたなくして文字とは・みまいらせ候なり、譬へばはちすの子の池の中に生いて候がやうに候はちすの候をとしよりて候人は眼くらくし

てみず、よるはかげの候をやみにみざるがごとし、されども此の妙の字は仏にて・おはし候なり、又此の妙の文字は月なり日なり星なりかがみなり衣なり食なり花なり大地なり大海なり、一切の功德を合せて妙の文字とならせ給う、又は如意宝珠のたまなり、かくのごとくしらせ給うべし、くはしくは又又申すべし。

五月四日

日連 花押

かおう

はわき殿^{もう}申させ給^{たま}へ

◆三六二

窪尼御前御返事

弘安三年六月

五十九歳御作

1485p

仏の御弟子おんでしの中にあなりちと申せし人はこくぼん王の御子いえにたから

をみて・おはしき、のちに仏の御でしとなりては天眼第一てんげんだいいちのあなりちと

さんぜんだいせんせかい

て三千大千世界を御覧ありし人、法華經の座にては普明如来ふみょうにょらいとならせ給う、

そのさきのよの事をたづぬればひえのはんを辟支仏ひやくしぶつと申す仏の弟子でしにくや

うせしゆへなり、いまの比丘尼びくにはあわのわさごめ山中にをくりて法華經に

くやうしまいらせ給う、いかでか仏にならせ給はざるべき、恐恐謹言きょうきょうきんげん。

六月二十七日

日蓮 花押

にちれん

かおう

くぼの尼御前御返事 あまごぜんごへんじ

◆三六三

窪尼御前御返事 あまごぜんごへんじ

弘安四年十二月 こうあん 六十歳御作

1485p

しなじなのものをくり給て候。

善根ぜんこんと申もうすは大なるによらず又ちいさきにもよらず・国により人により

時により・やうやうにかわりて候、譬たとへばくそをほしてつきくだきふるい

てせんだんの木につくり又女人にんてん天女・仏につくりまいらせて候へども火を

つけてやき候へばべちの香なくそくさし、そのやうに・ものをころし・

ぬすみをしてそのはつを・をとりて功德善根くどくぜんこんをして候へども・かへりて悪

となる。

すだつちようじゃ

須達長者と申せし人は月氏第一の長者がっしだいいち ちようじゃぎをん精舎しょうじゃをつくりて仏を入れ

まいらせたりしかども彼の寺焼けてあとなし、この長者ちようじゃもといをを・ころ

してあきなへて長者ちようじゃとなりしゆへに・この寺つゐにうせにき、今の人人ひとびとの

善根ぜんこんも又かくのごとく大なるやうなれども・あるひは・いくさをして所領しよりよう

を給ある・或はゆへなく民をわづらはして・たからをまうけて善根ぜんこんをなす、此等これら

は大なる仏事ぶつじとみゆれども仏にもならざる上其その人人ひとびとあともなくなる事なり。

又人をも・わづらはさず我が心もなをしく我とはげみて善根ぜんこんをして候も

仏にならぬ事もあり、いはくよきたねをあしき田にうえぬれば・たねだにもなき上かへりて損となる、まことの心なれども供養くようせらるる人だにも・

あしければ功德くどくとならず、かへりて悪道あくどうにおつる事候。

こ
此れは日蓮にちれんを御くやうは候はず法華經ほけきょうの御くやうなれば釈迦しやか仏ぶつ・多宝たほう仏ぶつ
・十方じゅうぽうの諸仏しよぶつに此の功德くどくはまかせまいらせ候、抑そもそも今年の事は申しふりて
候上とうじ當時はとしのさむき事生れて已来このかたいまだおぼへ候わず、ゆきなんどの
ふりつもりて候事おびただし、心ざしある人もとぶらひがたし、御をとづ
れをぼろげの御心おんこころざしにあらざるか、恐恐きようきよう謹言きんげん。

十二月二十七日

日蓮にちれん

花押かおう

くぼの尼御前御返事あまごぜんごへんじ

◆三六四

三沢御房御返事ごぼうごへんじ

文永十二年ぶんえい

五十四歳御作 与

三沢小次郎

1468p

佐渡さどの国の行者ぎようじゃ数多此あまたの所まで下向げこうゆへに今の法門ほうもん説き聞かせ候えは
未来みらいまでの仏種ぶつしゆになる事こと是れ皆みな釈尊しやくそんの法恩ありがたし、越後にて此の歌詠
じ候ゆへ書き送り候なり。

おのづから・よこしまに降雨はあらし風こそ夜の・をうつらめ。

二十一日

◆三六五

三沢抄

建治四年二月 五十七歳御作 与

三沢小次郎

1487p

かへすがへす・するがの人人ひとびとみな同じ御心と申もうさせ給たまひい候そうらへ。

柑子こうじ一百・こぶ・のり・をご等の生の物はるばると・わざわざ山中へ

をくり給たまひいて候、ならびに・うつぶさの尻しりごぜんの御こそで一給たまひい

候そうらいたんぬ。

さては・かたがたのをほせくはしくみほどき候。

抑そも仏法をかくする者は大地微塵だいちみじんよりをほけれども・まことに仏になる

人は爪の上の土よりも・すくなしと・大覚だいかく世尊せそん・涅槃經ねはんきやうにたしかに・とかせ

給たまひいて候そうらいしを、日蓮にちれんみまいらせ候て・いかなれば・かくわ・かたかるらむと

・かんがへ候いしほどに・げにも・さならむとをもう事候、仏法をばくすれども・或は我が心のをろかなるにより・或はたとひ智慧は・かしこき・やうなれども師によりて我が心のまがるをしらず、仏教をなをしくならひうる事かた

し、たとひ明師並に実経に値い奉りて正法をへたる人なれども生死をいで仏にならむとする時には・かならず影の身にそうがごとく・雨に雲のあるがごとく・三障四魔と申して七の大事出現す、設ひ・からくして六は・すぐれども第七にやぶられぬれば仏になる事かたし、其の六は且くをく第七の大難は天子魔と申す物なり、設い末代の凡夫・一代聖教の御心をさとり・摩訶止観と申す大事の御文の心を心えて仏になるべきになり候いぬれば・第六天の

魔王・此の事を見て驚きて云く、あらあさましや此の者・此の国に跡を止

ならば・かれが我が身の生死しやうじをいづるかは・さてをきぬ・又人を導くべし、
又此の国土こくどを・をさへとりて我が土を浄土じやうどとなす、いかんがせんとて欲・
色・無色の三界さんがいの一切いっさいの眷属けんぞくをもよをし仰せ下おおくだして云いわく、各各のうのう
に随したがつて・かの行者ぎやうじやをなやましてみよ・そ

れに・かなわずば・かれが弟子^{でし}だんな並に国土^{こくど}の人の心の内に入りかわり
て・あるひはいさめ・或^{ある}はをどしてみよ・それに叶はずば我みづから・う
ちくだりて国主^{こくしゅ}の身心^{しんしん}に入りかわりて・をどして見むに・いかでか・とど
めざるべきとせんぎし候なり。

にちれん
日蓮^{にちれん}さきより・かかるべしと・みほどき候いて末代^{まつだい}の凡夫^{ぼんぷ}の今生^{こんじょう}に仏に
なる事^{だいじ}は大事^{だいじ}にて候いけり釈迦^{しゃかぶつ}仏の仏にならせ給^{たまひ}いし事^{きやうぎやう}を経^{きやうぎやう}にあら
とかれて候に第六^{だいろくてん}天^{まおう}の魔王^{まおう}の・いたしける大難^{だいなん}いかにも忍^{しの}ぶべしとも・み
へ候^{そうら}はず候、提婆^{だいば}達多^{だつた}・阿闍^{あじゃ}世王^{せせ}の悪事^{あくじ}は・ひとへに第六^{だいろくてん}天^{まおう}の魔王^{まおう}のたば
かりとこそみて候へ、まして如来^{にょらい}現在^{げんざい}・猶多^{ゆた}怨嫉^{おんしつ}・況滅^{きやうめつ}度^ど後^ごと申^{もう}して大覚^{だいかく}
世尊^{せそん}の御時^{おんとき}の御難^{おんなん}だにも凡夫^{ぼんぷ}の身^み・日蓮^{にちれん}にかやうなる者は片時^{かたとき}一日^{いちにち}も忍^{しの}び
がたかるべし、

まして五十余年^{しゆじゆん}が間の種種^{だいなん}の大難^{だいなん}をや、まして末代^{まつだい}には此等^{これら}は百千万億倍^{せんまん}

すぐべく候なる大難をば・いかでか忍び候べきと心に存して候いしほどに

・聖人は未萌を知ると申して三世の中に未来の事を知るを・まことの

聖人とは申すなり、而るに日蓮は聖人にあらざれども日本国の今の代に

あたりて・此の国亡亡たるべき事をかねて知りて

候いしに・此れこそ仏のとかせ給いて候・況滅度後の経文にあたりて

候へ、此れを申しだすならば仏の指させ給いて候未来の法華經の行者な

り、知りて而かも申さずば世世・生生の間・をうしことどもり生ん上・

教主釈尊の大怨敵其の国の国主の大讎敵・他人にあらず、後生は又無間

・大城の人・此れなりとかんがへみて・或は衣食に・せめられ・或は

父母・兄弟・師匠・同行にもいさめられ・或は国主・万民にも・をどされ

しに・すこしもひるむ心あるならば一度に

申し出ださじと・としごろひごろ心をいましめ候いしが・抑過去遠遠劫

より定めて法華經ほけきようにも値あい奉り菩提心たてまつぼだいしんもをこしけん、なれども設たい一難二難なんなん
には忍しのびけれども大難次第だいにんしだいにつづき来りければ退たいしけるにや、今度このたびいかな
る大難だいにんにも退せぬ心ならば申もうし出いだすべしとて申もうし出して候そうらいしかば・經文きようもん
にたがわず此の度度たびたびの大難だいにんにはあいて候そうらいしぞかし。

今は一こうなり・いかなる大難だいにんにも・こらへてんと我が身に当てて心あたみて候へば・不審ふしんなきゆへに此の山林さんりんには栖すみ候なり、各各は又たとい・すてさせ給たまうとも一日かたときも我が身命しんみょうをたすけし人人ひとびとなれば・いかでか他人たにんにはにさせ給たまうべき、本より我、一人いかにもなるべし・我いかにしなるとも心に退転たいてんなくして仏になるならば・

とのばらをば導きたてまつらむとやくそく申もうして候いき、各各は日蓮にちれんほども仏法ぶつぽうをば知らせ給たまわざる上俗なり、所領しよりょうあり・妻子さいしあり・所従しよじゅうあり・いかにも叶かないがたかるべし、只ただいつわりをろかにて・をはせかしと申もうし候いき・こそ候そうらへけれ、なに事につけてか・すてまいらせ候べき・ゆめゆめをろかのぎ候べからず。

又法門ほうもんの事はさどの国へながされ候いし已前いぜんの法門ほうもんは・ただ仏にぜんの爾前にぜんの經と・をばしめせ、此の国の国主こくしゅ我が代をも・たもつべくば真言師しんごんし等にも

召し合せ給はんずらむ、爾の時まことの大事をば申すべし、弟子等にもな
ひなひ申すならばひろうしてかれらしりなんず、さらば・よもあわじと・
をもひて各各にも申さざりしなり。

而るに去る文永八年九月十二日の夜たつの口にて頸をはねられんとせし

時より・のちふびんなり、我につきたりし者どもにまことの事をいわざり
けるとをもうて・さどの国より弟子どもに内内申す法門あり、此れは仏よ
り後迦葉・阿難・竜樹・天親・天台・妙楽・伝教・義真等の大論師・大人師は
知りてしかも御心の中に秘せさせ給いし、口

より外には出し給はず、其の故は仏制して云く「我が滅後・末法に入らず
ば此の大法いふべからず」と・ありしゆへなり、日蓮は其の御使にはあ
らざれども其の時剋にあたる上・存外に此の法門をさとりぬれば・聖人の
出でさせ給うまでまづ序分にあらあら申すなり、而るに此の法門出現せば

しょうほう　　そうほう　　ろんし　　にんし　　ほうもん　　みな　　い
正法・像法に論師・人師の申せし法門は皆日出で

て後の星の光・巧匠たくみの後に拙を知るなるべし、此の時には正像しょうぞうの寺堂の
ぶつぞう　　れいけん　　みな
仏像・僧等の靈験は皆きへうせて但此の大法のみ一閻浮提えんぶだいに流布るふすべしと
みへて候、各各はかかる法門ほうもんにちぎり有ある人なれば・たのもしと・をぼす
べし。

又うつぶさの御事おんことは御としよらせ給たまいて御わたりありしいたわしくをも
ひまいらせ候そうらいしかども・うぢがみへ

まいりてあるついでと候しかば・けさんに入るならば・定めてつみふか
るべし、其そのの故は神は所しよじゆう従とうなり法華經は主君しゆくんなり・所しよじゆう従とうのついでに主君
への・けさんは世間せけんにも・をそれ候、其その上尼の御身おんみになり給たまいては・ま
づ仏をさきとすべし、かたがたの御とがありしかばけさんせず候、此の又
尼にごぜん一人にはかぎらず、其その外ほかの人ひと人びとも・しも
べのゆのついでと申もうす者をあまた・をひかへして候、尼にごぜんは・をやの
ごとくの御としなり、御なげきいたわしく候そうらいしかども此の義をしらせま
いらせんためなり。

又またとのは・をととしかのけさんの後のちそらごとにてや候そうらいけん御そらうと
申せしかば・人をつかわして・きかんと申せしに・此この御房ごぼうたちの申せし
はそれはさる事に候そうらへども・人をつかわしたらば・いぶせくやをもはれ
候そうらはんずらんと申せしかば・世間せけんのならひは・さもやあるらむ、げんに

おんこころざし
御心ざしまめなる上・御所勞ならば御使も有りなんと・をもひしかども・

おんつかい

御使もなかりしかば・いつわりをろかにて・をぼつかなく候そうらいづる上無常むじょう

は常のならひなれ

ども・こそことしは世間せけんはうにすぎて・みみへまいらすべしとも・をぼへ

ず、こひしくこそ候そうらいづるに御をとづれあるうれしとも申もうす計ばかりなし、尼

ごぜんにも・このよしをつぶつぶとかたり申もうさせ給たまい候そうらへ、法門ほうもんの事こま

ごまと・かきつへ申もうすべく候そうらへども事ひさしくなり候そうらへばとどめ候。

ただし禪宗ぜんしゅうと念仏宗ねんぶつしゅうと律宗りっしゅう等の事は少少前にも申もうして候、真言宗しんこんしゅうが

ことに此の国とたうどとをば・ほろぼして候ぞ、善無畏三蔵ぜんむいさんそう・金剛智三蔵こんごうちさんそう・

不空三蔵ふくうさんそう・弘法大師こうぼうだいし・慈覚大師じかくだいし・智証大師ちしょうだいし・此の六人が大日の三部經と

ほけきょう

法華經との優劣に迷惑めいわくせしのみならず、三三蔵さんそう・事をば天竺てんじくによせて兩界

をつくりいだし狂惑だいししけるを・三大師だいしうちぬかれて

日本にほんへならひわたし国主こくしゅ並に万民ばんみんにつたへ、漢土かんどの玄宗皇帝げんそうこうていも代をほろぼし・日本国にほんこくもやうやくをとろへて八幡大菩薩はちまんだいぼさつの百王ひやくおうのちかいもやぶれて・八十二代おき隱岐の法王ほうおう・代あすまを東にとられ給たまいしは・ひとへに三大師だいしの大僧等だいしがいのりしゆへに還著げんちやくおほんにん於本人かんとうして侯、関東かんとうは此あくほうあくにんの惡法惡人たいじを対治せしゆへに十八代ひやくおうをつぎて百王そつらにて侯べく侯いつる

を、又かの悪法の者どもを御帰依有るゆへに一国には主なければ・梵釈・

にちがつ してん おんはから

日月・四天の御計いとして他国にをほせつけて・をどして御らむあり、又

ほけきよう ぎようじや

法華經の行者をつかわして御いさめあるを・あやめずして・彼の法師等に

ほけきよう

心をあわせて世間出世の政道をやぶり、法にすぎて法華經の御かたきにな

たま

らせ給う、すでに時すぎぬれば此の国やぶれなんとす。

やくびやうは・すでにいくさにせんふせわまたしるしなり、あさまし・

あさまし。

二月二十三日

にちれん 日蓮

かおう 花押

みさわどの

◆三六六

十字御書 ごしよ

1491p

十字一百まい・かしひとこ給たまいお了わんぬ、正月の一日は日のはじめ月の始めとしのはじめ春の始め此これをもてなす人は月の西より東をさしてみつがごとく日の東より西へわたりてあきらかなるがごとく・とくもまさり人にもあいせられ候なり。

そもそもじく

抑地獄と仏とはいづれの所に候ぞとたづね候へば・或あるは地の下と申もうす

きょうもん

経文きやうもんもあり・或あるは西方等と申もうす経も候、しかれども委細いさいにたづね候へば

われら

我等が五尺の身の内に候とみへて候、さもやをばへ候事は我等われらが心の内に

父をあなづり母を・をろかにする人は地獄其じごくの人の心の内に候、譬たとへば蓮

のたねの中に花と菓いのみとのみゆるがごとし、仏と

もう

申もうす事も我等われらの心の内に・をはします・譬たとへば石の中に火あり珠たまの中に財たから

のあるがごとし、我等凡夫われら ほんぶはまつげのちかきと虚空こくうのとをきとは見候事な

し、我等^{われら}が心の内に仏はをしましけるを知り候はざりけるぞ、ただし疑^{うたがい}
ある

事は我等は父母の精血變じて人となりて候へば三毒の根本姪欲の源なり、
いかでか仏は・わたらせ給うべきと疑い候へども又うちかへしうちかへ
し案じ候へば其のゆわれもやと・をぼへ候、蓮はきよきもの泥よりいでた
り、

せんだんはかうばしき物大地よりをいたり、さくらはをもしろき物・木の
中よりさきいづ、やうきは見めよきもの下女のはらよりむまれたり、月
は山よりいでて山をてらす、わざわいは口より出でて身をやぶる・さいわ
いは心よりいでて我をかざる。

今正月の始に法華經をくやうしまいらせんと・をぼしめす御心は・木よ
り花のさき・池より蓮のつぼみ・雪山のせんだんのひらけ・月の始めて出
るなるべし、今・日本国の法華經をかたきとしてわざわいを千里の外より
まねき

よせぬ、此れをもつてをもうに今又法華經ほけきようを信ずる人は・さいわいを万里ばんりの外よりあつむべし、影は体より生ずるもの法華經ほけきようをかたきとする人の国は体に・かげのそうがごとく・わざわい来るべし、法華經ほけきようを信ずる人は・せんだんに・かをばしさのそなえたるがごとし、又又申もうし候べし。

正月五日

日蓮にちれん

在御判

をもんすどのの女房御返事にようぼうごへんじ

◆三六七 南条兵衛七郎殿御書ごしよ 文永元年十二月 四十三歳ぶんえいがんねん

御作 与南条兵衛七郎 1493p

御所ごしよ勞の由承たまわり候はまことにてや候らん、世間せけんの定なき事は病なき人も
留とどまりがたき事に候へば・まして病あらん人は申もうすにおよばず・但心あらん
人は後世ごしよをこそ思おもいさだむべきにて候へ、又後世ごしよを思おもい定めん事は私ひそかには
かなひがたく候、一切衆生の本師ほんしにてまします釈尊しゃくそんの教こそ本にはなり
候べけれ。

しかるに仏の教へ又まちまちなり人の心の不定ふじようなる故か。

しかれども釈尊しゃくそんの説教せつきよう五十年にはすぎず、さき四十余年よんじゅうよねんの間の法門ほうもんに
華嚴經けこんきようには心仏及衆生しんぶつぎやうしゆじよう・是三無差別これさんむさべつ・阿含經あこんきようには苦・空・無常むじよう・無我むが
だいしききよう せんじようゆうずう だいほん こんどう そうかんきよう かんきよう あみだ
大集經だいしききようには染淨融通せんじようゆうずう・大品經だいほんには混同無二こんどう・雙觀經そうかんきよう・觀經かんきよう・阿弥陀經あみだ

等には往生極樂、此等の説教は皆正法・像法・末法の一切衆生をすくはんがためにこそとかれはべりけんめ、しかれども仏いかながおぼしけんむりようぎきよう
無量義經に「方便の力を以て四十余年には未だ真実を顕さず」と説かれてよんじゅうよねん おうじょうごくらく いっさいきよう
先四十余年の往生極樂等の一切經は親の先判のごとく・くひかへされてむりようむへん ふかしぎ あそぎこう す
「無量無辺不可思議・阿僧祇劫を過ぐるとも終に無上菩提を成ずることを得ず」といゐきらせ給いて法華經の方便品に重ねて「正直に方便を捨て但無上の道を説く」と説かせ給へり、
ほうべん 方便をすてよとかれてはべるは四十余年の念仏等をすてよとかれて候、かうたしかにくひかへして実義を定むるには「世尊の法は久くして後要まさ しんじつ
當に真実を説くべし」といひ「久しく斯の要を黙して務いで速かに説かず」と定められしかば、多宝仏は大地よりわきいでさせ給いてこの事真実なりと証 誠をくわへ、十方の諸仏は八方に

あつまりてこうちようぜつそう広長舌相を大梵ほんてん天宮につけさせ給ふ、二処三会二界八番の衆生しゆじよう
一人もなくこれをみ候いき、此等これらの文をみ候にぶつきよう仏教を信ぜぬ悪人外道はさ
ておき候いぬ、ぶつきよう仏教の中に入り候てもにぜん爾前・ごんきよう權教・ねんぶつ念仏等を厚く信じて
十遍・百遍・千遍・一万乃至ないし・六万等を一日にはげみて十年・二十年のあ
ひだにも南無妙法蓮華經と一遍いっぺんだにも

もうひとびと
申さぬ人人は先判に付いて後判をもちぬ者にては候まじきか、此等は仏説
を信じたりげには我身も人も思いたりげに候へども仏説の如くならば不孝
の者なり。

ゆえほけきよう
故に法華經の第二に云く「今・此の三界は皆是れ我が有なり其の中の

しゅじよう
衆生は悉く是れ吾が子なり而も今・此の処は諸の患難多し唯我一人のみ

よくくこ
能く救護を為す復教詔すと雖も而も信受せず」等云、此の文の心は

しやかによらい
釈迦如来は我等衆生には親なり師なり主なり、我等衆生のためには

あみだぶつやくし
阿弥陀仏薬師・仏等は主にてはましませども親と師とには・ましまさず、

さんどく
ひとり三徳をかねて恩ふかき仏は釈迦一仏にかぎりたてまつる、親も親に

しやくそん
こそよれ釈尊ほどの親・師

しやくそん
も師にこそよれ主も主にこそよれ釈尊ほどの師主はありがたくこそはべ

おほ
れ、この親と師と主との仰せをそむかんもの天神・地祇にすてられたてま

つらざらんや、不孝ふこう第一だいいちの者なり故に雖復またき教詔ようちよく而不信受等しんじゆと説かれたり、

たとひ爾前にぜんの經につかせ給たまいて百千万億劫行ぜさせ給たまうとも法華經を一遍いっぺん

も南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようと申もうさせ給たまはずば、不孝ふこうの人たる故に三世十方さんぜじゆっぽうの

しようにしゅう

聖衆にもすてられ天神てんじん・地祇ちぎにもあだまれ給たまはんかは一。

たとひ五逆ごぎやく・十惡じゅうあく無量の惡をつくれる人も根だにも利なれば得道とくどうなる事

これあり、提婆達多だいばだつた・鴛崛摩羅等おうくつまらこれなり、たとひ根鈍なれども罪つみなけれ

ば得道とくどうなる事これあり須利槃特等しゆりはんとく是なり、我等衆生は根の鈍なる事すりは

んどくにもすぎ物のいろかたちをわきまへざる事羊目のごとし、貪とん・瞋じん・癡ち

きわめてあつく十惡じゅうあくは日日にちじつにかし五逆ごぎやく

をばおかさざれども五逆ごぎやくに似たる罪つみ又日日にちじつにおかす、又十惡じゅうあく・五逆ごぎやくにすぎ

たる謗法ほうほうは人毎ひとごとにこれあり、させる語ことばを以て法華經を謗ほうずる人はすくなけ

れども人ごとに法華經をばもちゐず、又もちゐたるやうなれども念仏ねんぶつ等の

やうには信心しんじんふかからず、信心しんじんふかきものも法華經ほけきょうのかたきをばせめず、
いかなる大善だいぜんをつくり法華經ほけきょうを千

万部しよしや読み書写いちねんさんぜんし一念三千の觀道を得たる人なりとも法華經ほけきょうの敵をだにもせ

めざれば得道とくどうありがたし、たとへば朝につかふる人の十年二十年の奉公あ

れども君の敵をしりながら奏もせず私ひそかにもあだまずば奉公みな皆みなうせて還かえつ

てとがに行はれんが如し、当世の人人は謗法の者としろしめすべし是二。

にゆうめつ

仏入滅の次の日より千年をば正法と申して持戒の人多く得道の人これ

しょうほう

あり。正法千年の後は像法千年なり破戒の者は多く得道すくなし、像法千

そうほう

はかい

とくどう

そうほう

まつほうまんねん

年の後は末法万年なり持戒もなし破戒もなし無戒の者のみ国に充滿せん、

じゅうまん

しか

じよくせ

もう

而も濁世と申してみだれたる世なり、清世と申してすめる世には直繩のま

しやうせ

もう

じぎじやう

がれる木をけづらするやうに非をすて是を用うるなり、正像より五濁やう

しやうざう

ごじよく

やういできたりて末法になり候へば五濁さかりにすぎて、大風の大波を起

まつほう

ごじよく

たいふう

し

て岸を打つのみならず又波と波とをうつなり、見濁と申すは正・像やうや

もう

じゃほう

うすぎぬれば、わづかの邪法の一つをつたへて無量の正法をやぶり世間の

むりやう

しやうほう

せけん

つみ

あくどう

罪にて悪道におつるものよりも仏法を以て悪道に墮つるもの多しとみへは

ぶつほう

もつ

あくどう

お

んべり。

しかるに当世とうせは正・像二千年すぎて末法まっぽうに入つて二百余年、見濁さかりにして悪よりも善根ぜんこんにて多く悪道あくどうに墮おつべき時刻じこくなり 悪は愚癡ぐちの人も悪とすればしたがはぬ辺もあり火を水を以てけすが如ごとし、善は但善と思ふほどに小善しょうぜんに付いて大悪おこの起る事をしらず、所以ゆえんに伝教でんぎょう・慈覚じかく等の聖跡あとあり・すたれあばるれども念仏堂ねんぶつにあらずと

いひてすてをきて・そのかたはらにあたらしく念仏堂ねんぶつをつくり彼の寄進きしんの田畠でんぱたをとりて念仏堂ねんぶつによす、此等これらは像法決疑經そうほうけつぎきょうの文ぶんの如ごとくならば功德くどくすくなしとみへはべり、これらをもつてしるべし善なれども大善だいぜんをやぶる小善しょうぜんは悪道あくどうに墮おつるなるべし、今の世は末法まっぽうのはじめなり、小乗經しょうじょうぎきょうの機き・權大乘經ごんだいじょうぎきょうの機き・皆みなうせはてて唯ただ実大乘經じつだいじょうぎきょうの

機きのみあり、小船せうせんには大石おおいしをのせず悪人愚者あくにんぐしやは大石のごとし、小乗經しょうじょうぎきょう並に權大乘經ごんだいじょうぎきょう・念仏等ねんぶつは小船せうせんなり、大惡瘡あくそうの湯治等たうぢは病・大なれば小治せうぢお

よばず、まつだいじょくせ末代濁世の我等われらには念仏等ねんぶつはたとへば冬田つくを作るが如ごとし時があは
ざるなり是三知。

国したをしるべし国に随がつて人の心不定ふじょうなり、たとへば江南の橘たちの淮北わいほくに
うつされてからたちとなる、心なき

そうもく

草木すらところによる、まして心あらんもの何ぞ所によらざらん、されば

げんじょうさんそう

玄奘三蔵の西域と申す文に天竺の国を多く記したるに国の習として不孝

げんじょうさんそう

なる国もあり孝の心ある国もあり瞋恚のさかんなる国もあり愚癡の多き国

もあり、一向に小乗を用る国もあり一向大乘を用る国もあり大小兼学

する国もありと見へ侍り、又一向に殺生の国一向に偷盗の国又穀の多き

国又粟等の多き国不定あり、抑日本国はいかなる教を習つてか生死

を離るべき国ぞと勘えたるに法華經に云く「如来の滅後に於て閻浮提の内

に広く流布せしめ断絶せざらしむ」等云云、此の文の心は法華經は南閻浮提

の人のための有縁の經なり、弥勒菩薩の云く「東方に小国有り唯だ大機の

み有り」等云云、此の論の文の如きは閻浮提の内にも東の小国に大乘經

の機あるか、肇公の記に云く「茲の典

は東北の小国に有縁なり」等云云、法華經は東北の国に縁ありとかかれた

り、安然和尚の云く「我が日本国・皆大乘を信ず」等云云、慧心の一乗要決
に云く「日本一州・円機純一」等云云、釈迦如来・弥勒菩薩・須梨耶蘇摩
三蔵・羅什三蔵・僧肇法師・安然和尚・慧心の先徳等の心ならば日本国は
純に法華經の機なり、一句一偈なりとも行ぜば必ず得道なるべし有縁の法
なるが故なり、たとへばくろかねを磁石のすうが如し方諸の水をまねくに
にたり、念仏
等の余善は無縁の国なり磁石のかねをすわす方諸の水をまねかざるが如し、
故に安然の釈に云く「如実乗に非ずんば恐らくは自他を欺かん」等云云、
此の釈の心は日本国の人に法華經にてなき法をさずくるもの我が身をもあ
ざむき人をもあざむく者と見えたり、されば法は必ず国をかんがみて弘む
べし、彼の国によかりし法なれば必ず此の国にもよかるべしと思ふべか
らず是四。

又ぶつぽう仏法流布の国においても前後ぜんごを勘かんうべし、ぶつぽう仏法を弘ひろむる習ならい必ずさきに弘ひろめける法の様を知るべきなり、例せば病人に薬をあたふるにはさきに服したる薬の様を知るべし、薬と薬とがゆき合いてあらそひをなし人をそんずる事あり、ぶつぽう仏法とぶつぽう仏法とがゆき合いてあらそひをなして人を損ずる事のあるなり、さきに外道げどうの法弘ひろまれる

国ならば仏法をもつて・これをやぶるべし、仏の印度にいでて外道をやぶ

り・まとうか・ぢくほうらんの震旦に來つて道士をせめ上宮太子・和国に

生れて守屋をきりしが如し、仏教においても小乗の弘まれる国をば

だいじようきよう

大乘經をもつてやぶるべし、無著菩薩の世親の小乗をやぶりしが如し、

こんだいじよう

權大乘の弘まれる国をば実大乘をもつて・これを

やぶるべし、天台智者大師の南三・北七をやぶりしが如し、而るに日本国

てんだい しんこん

は天台・真言の二宗のひろまりて今に四百余歳、比丘・比丘尼・うばそく

・うばひの四衆・皆法華經の機と定めぬ、善人・惡人・有智・無智・皆

ごじゆうてんでん

五十展轉の功德をそなふ、たとへば崑崙山に石なく蓬萊山に毒なきが如し、

しか

而るを此の五十余年に法然といふ大謗法の者いでき

たりて、一切衆生をすかして珠に似たる石をもつて珠を投させ石をとらせ

いっさいしゆじよう

たるなり、止觀の五に云く「瓦礫を貴んで明珠なりと申す」は是なり、

いっさいしゅじょう

一切衆生石をにぎりて珠とおもふ、念仏を申して法華經をすてたる是なり、

此の事をば申せば還つてはらをたち法華經の行者をのりて・ことに無間の

業をますなり是五。

但とのはこのぎをきこしめして念仏をすて法華經にならせ給いてはべり

しが、定めてかへりて念仏者にぞならせ給いてはべるらん、法華經をすて

て念仏者とならせ給はんは峯の石の谷へころび空の雨の地におつると・お

ぼせ大阿鼻地獄疑なし、大通結縁の者の三千塵点劫を久遠下種の者の五

百塵点を経し事、大悪知識にあいて法華

經をすてて念仏等の権教にうつりし故なり、一家の人人念仏者にてましま

しげに候いしかばさだめて念仏をぞすすめまいらせ給い候らん、我が信じ

たる事なればそれも道理にては候へども悪魔の法然が一類にたばらかさ

れたる人人なりとおぼして大信心を起し御用いあるべからず、大悪魔は貴き

僧となり父母・兄弟等につきて人の後世をば障るなり、いかに申すとも
法華經をすてよとたばかりげに候はんをば御用いあるべからず、まづ御き
やうさくあるべし。

念仏実に往生すべき証文つよくば此の十二年が間念仏者無間地獄と
申すをばいかなるところへ申しいだして

もつめずして候べきか、よくよくゆはき事なり、法然・善導等が・かきを

きて候ほどの法門は日蓮ほうもん にちれんらは十七八の時よりしりて候いき、このごろの人

の申すもこれにすぎず、結句は法門はかなわずしてよせてたたかひにし候

なり、念仏者は数千万ねんぶつ せんまんかたうど多く候なり、日蓮は唯一人にちれん ただかたうどは一人

もこれなし、今までもいきて候はふかしぎ

なり、今年も十一月十一日安房あわの国・東条とうじょうの松原と申す大路にして、申西

の時数百人の念仏等ねんぶつにまちかけられて候いて、日蓮は唯一人十人ばかりも

のの要にあふものは・わづかに三四人なり、いるやはふるあめのごとし・

うったちはいなづまのごとし、弟子一人は当座とうざにうちとられ二人は大事だいじの

てにて候、自身じしんもきられ打たれ結句けっく

にて候いし程に、いかが候いけんうちもらされていままでいきてはべり、

いよいよ法華經ほけきょうこそ信心しんじんまさり候へ、第四の巻に云くいわ「而も此の経は如来にょらい

の現在げんざいすら猶なお怨嫉おんしつ多し況めつどや滅度めつどの後のちをや」第五の巻いわに云いく「一切世間怨多いっさいせけんあだおほくく

して信がたじ難がたし」等云云、日本国にほんこくに法華經ほけきようよみ学まなぶ人ひとこれ多し、人の妻つまを

ねらひぬすみ等らにて打うはらる人ひとは多おほけれども法華經ほけきようの故ゆゑにあやまたるる

人ひとは一人もなし、されば日本国にほんこくの持經者じきやうはいまだ此こゝの經文きやうもんにはあわせ給たまは

ず唯ただにちれん日蓮一人こそよみはべれ我不愛身命がふあいしんみやう・但惜たんしやくむじようどうこれ無上道むじやうだう是これなりされば日蓮にちれんは

日本第一にほんだいいちの法華經ほけきようの行者ぎやうじやなり。

もしさきにたたせ給たまはば梵天ぼんでん・帝釈たいしやく・四大天王えんまだいおう・閻魔大王等もうにも申もうさせ

給たまうべし、日本第一にほんだいいちの法華經ほけきようの行者ぎやうじや日蓮房にちれんの弟子でしなりとなのらせ給たまへ、よ

もはうしんなき事は候ひとたびはじ、但ひとたび一度は念仏ねんぶつ一度は法華經ほけきようとなへつ・二心ふたこころま

しまし人の間まにはばかりなんと・だにも候ひとたびはばよも日蓮にちれんが弟子でしと申もうすとも

御用ごようゐ候ひとたびはじ後にうらみさせ給たまうな、

但ただし又法華經ほけきようは今生こんじやうのいのりともなり候ひとたびなれば・もしやとして・いきさせ

給^{たま}い候はば・あはれ・とくとく見参^{もつ}してみづから申しひらかばや、語^{ことば}はふ

みにつくさず・ふみは心をつくしがたく候へばとどめ候いぬ、恐^{きよう}恐^{きよう}謹^{きん}言^{げん}。

ぶんえいがんねん

文永元年十二月十三日

にちれん
日蓮

かおう

花押

なんでうの七郎殿

◆三六八

やくおうほんときいしよう
薬王品得意抄

ぶんえい
文永二年

四十四歳御作

与上

野時光妻

1499p

此の薬王品の大意たいいとは此の薬王品は第七の八巻・二十八品の中には第二

十三の品なり、此の第一巻に序品方便品の二品有り序品じよほんは二十八品の

序ついでなり、方便品より人記品にんきほんに至るまで八品は正には二乗作仏にじようさぶつを明し傍あかには

菩薩・凡夫ぼんぷの作仏さぶつを明あきらかす、法師宝塔提婆勸持安楽ほっしほうとうだいばかんじあんらくの五品は上の八品を末代まつだい

の凡夫ぼんぷの修行しゆぎようす可き様を説くなり、又涌出品ゆじゅっほん

は寿量品じゆりようほんの序ついでなり、分別功德品より十二品は正には寿量品じゆりようほんを末代まつだいの凡夫ぼんぷ

の行べず可き様を傍かたわらには方便品等の八品を修行しゆぎようす可き様を説くなり、然しかれば

此の薬王品は方便品等の八品並びに寿量品じゆりようほんを修行しゆぎようす可き様を説ときし品な

り。

此の品に十の譬有り、たとえ第一大海の譬、たといちたいかい先ず第一の譬を粗申す可し、此

の南閻浮提に二千五百の河あり、えんぶだい西俱耶尼に五千の河あり総じて此の四天下

に二万五千九百の河あり、ある或は四十里乃至百里・一里・一町・一尋等の

河之有り、これあ然りと雖も此の諸河は総じて深淺の事大海に及ばず、しよ法華已前

の華嚴經・阿含經・方等經・般若經・深密經・

阿彌陀經・涅槃經・大日經・金剛頂經・蘇悉地經・密嚴經等の釈迦

如来の所説の一切經・大日如来の所説の一切經・阿彌陀如来の所説の

一切經・薬師如来の所説の一切經過去・現在・未来三世の諸仏所説の

一切經の中に法華經第一なり、ほけきようだいいち譬えば諸經は大河・中河・小河等の如し

法華經は大海の如し等と説くなり、ほけきよう河に勝れたる大海に十の徳有り、

一に大海は漸次に深し河は爾からず、たいかい二に大海は死屍を留めず河は爾らず、

三に大海は本の名を失う河は爾らず、たいかい四に大海は一味なり河は爾らず、

五に大海は宝等有り河は爾らず、六に大海は極めて深し河は爾らず、七に
大海は廣大無量なり河は爾らず、八に大海は大身の衆生等有り河は爾らず、
九に大海は潮の増減有り河は爾らず、十に大海は大雨・大河を受けて盈溢
無し河は爾らず。

此の法華經には十の徳有り諸經には十の失有り、此の經は漸次深多にし
て五十展転なり諸經には猶一も無し

ないしこじゅうてんでん

たいかい

およ

しよきよう

況や二三四乃至五十展転をや河は深けれども大海の浅きに及ばず諸経は一字・一句・十念等を以て十悪・五逆等の悪機を摂すと雖も未だ一字・一句

いっく

もつ

じゅうあく

ごぎやく

き

せつ

いんどいま

いっく

ずいきこじゅうてんでん

およ

たいかい

しし

とど

ほけきよう

ほうぼう

の随喜五十展転には及ばざるなり、此の経の大海に死屍を留めずとは法華経

そむ ほうぼう

ごぎぜん

な

いんど

なおい

いか

あくにん

ほうぼう

に背く謗法の者は極善の人為りと雖も猶之を捨つ何に況や悪人なる上謗法

な ほうぼう

たといしよきよう

ほう

いんど

ほけきよう

そむ

ぶつどう

を為さん者をや、設い諸経を謗すと雖も法華経に背かざれば必ず仏道を

じよう たといいつさいきよう

いんど

ほけきよう

そむ

あびだいじよう

お

ないし

成ず、設い一切経を信ずと雖も法華経に背かば必ず阿鼻大城に墮つ、乃至

たいかい

しよきよう

たいかい

まかつだいぎよ

お

ないし

第八には大海は大身の衆生あり等と云うは大海には摩竭大魚等大身の

しよきようこれあ

むげんじこく

もつ

じゅうこうはちまんゆじゆん

たいかい

まかつだいぎよ

お

衆生之有り、無間地獄と申すは縦広八万由旬な

むげんじこく

もつ

じゅうこうはちまんゆじゆん

たいかい

まかつだいぎよ

お

り五逆の者無間地獄に墮ちては一人にて必ず充滿す、此の地獄の衆生は

むげんじこく

お

じゅうまん

じこく

しよきよう

な

五逆の者大身の衆生なり、諸経の小河・大河の中には摩竭大魚之無し

しよきよう

たいかい

これあ

ごぎやく

ぶつどう

こ

しよきよう

これ

な

法華経の大海には之有り、五逆の者・仏道を成す是れ実には諸経に之無し

しよきよう

これあ

いんど

みけんしんじつ

ゆえ

いちだいしよきよう

そらんぜ

諸経に之有りと云うと雖も実には未顕真實なり、故に一代聖教を諳し

てんだいちしゃだいし
天台智者大師の釈に云く他経は但菩薩に記して二乗に記せず乃至但善に
記して悪に記せず、今経は皆記す等云云、余は且く之を略す。

第二には山に譬う、十宝山等とは、山の中には須弥山第一なり、十宝山

とは一には雪山・二には香山・三には剎梨羅山・四には仙聖山・五には

由乾陀山・六には馬耳山・七には尼民陀羅山・八には斫伽羅山・九には

宿慧山・十には須弥山なり、先の九山とは諸経・諸山の如し、但し一一に

財あり須弥山は衆財を具して其の財に勝れたり、例せば世間の金の閻浮

檀金に及ばざるが如し、華嚴経の法界唯心般若の十八空・大日経の

五相成身・觀経の往生より法華経の即身成仏勝れたるなり、須弥山は金

色なり、一切の牛馬人天衆鳥等・此の山に依れば必ず本色を失つて金色

なり余山は爾らず一切の諸経は法華経に依れば本の色を失う例せば黒色の

物の日月の光に値えば色を失うが如し諸経の往生成仏等の色は法華経に

値えあば必ずそ其の義を失うしな。

第三には月に譬たとう衆星は・或あるは半里・或あるは一里・或あるは八里・或あるは十六里には過すぎず、月は八百余里なり衆星は光有りと雖も月に及およばず、設たい百千万億乃至一四天下・三千大千・十方世界の衆星之を集むとも一の月の光に及およばず、何に況や一の星月の光に及およぶ可べきや、華嚴經・阿含經・方等・般若・涅槃經・大日經・觀經等の一切の經之を集むとも法華經の一字に及およばじ、一切衆生の心中の見思・塵沙・無明の三惑並に十惡・五逆等の業は暗夜のごとし華嚴經等の一切經は闇夜の星のごとし法華經は闇夜の月のごとし法華經を信ずれども深く信ぜざる者は半月の闇夜を照すが如し深く信ずる者は満月の闇夜を照すが如し月無くして但星のみ有る夜には強力あの者かたましき者などとは行歩すと

いへども老骨の者女人によにんなむどは行歩に叶かなわず、満月の時は女人老骨によにんなむど

も、ある或は遊宴ゆうえんのため・或は人あるに値わんが如ごとき行歩自在じざいなり、諸經しよきようには
菩薩大根性ぼさつ こんじようの凡夫ほんぶは設たといとくどうい得道にじようなるとも二乘凡夫惡人にじようほんぶあくにん・女人にょにん・乃至末代ないしまつだいの老
骨けたいの懈怠むかい・無戒ひとびとの人人おつじようじようぶつふじようは往生ほけきよう成仏しんぶつ不定ふじようなり、法華經ほけきようは爾しからず、二乘惡人にじようあくにん
・女人等猶にょにん仏なおに成いる何いに況ほさつや菩薩こんじよう・大根性ほんぶの凡夫

をや、又月しゅんかはよいよりも暁しゅんかは光まさり春夏しゅんかよりも秋冬しゅうとうは光あり、法華經ほけきようは
ししょうぞうようぞう

正像二千年まつぼうよりも末法まつぼうには殊ことに利生りしやう有る可べきなり、問いうて云いく証文しやうもん如何いかん
答いえて云いく道理どうり顯然けんなんなり、其その上つぎ次しぎ下しもの文いに云いく「我が滅度めつどの後のち・

後のちの五百歲ごひやくさいの中に広宣こうせん流布りふして閻浮提えんぶだいに於おいて断絶だんぜつせしむること無し」等云

云、此きの經文きやうもんに二千年にせんの後南閻浮提えんぶだいに広宣こうせん

流布りふすべし・ととかれて候たは・第三たの月えの譬たとの意えなり、此この意いを根本こんぽん

傳でん教ぎやう大師釈だいしやくして云いく「正像しやうぞう稍過すぎ已おわつて末法まつぼう太なだ近おほきに有ほり法華ほつ一乘いの機き

今いま正ましく是これ其そのの時ときなり」等云云、正法しやうほう千年せんねんも像法ざうほう千年せんねんも法華經ほけきようの利益りやく

諸經しよきように之これ勝まさる可べし然しかりと雖いえども月の光しゆんかの春夏しやうげの正像しやうぞう二千年まつばう・末法しゆうとうの秋冬しゆうとうに至いたつて光まさの勝まさるが如ごとし。

第四に日の譬たとえは星の中に月の出いでたるは星の光には月の光は勝まさるとも

未いまだ星の光を消さず、日中には星の光消ゆるのみに非あらず又月の光も奪うばいて

光を失うしなう、爾前にぜんは星の如ごとく法華經の迹門しやくもんは月の如ごとく壽量品じゆりようほんは日の如ごとく、

壽量品じゆりようほんの時は迹門しやくもんの月未いまだ及およばず何いかに況にぜんや爾前にぜんの星をや、夜は星の時・

月の時も衆務しゆつむを作なさず、夜曉あけてて必なず衆務しゆつむを作なす、

爾前にぜん・迹門しやくもんにして猶なほ生死しやうじを離がたれ難ほんもんし本門ほんもん壽量品じやくもんに至いたつて必しやうじず生死しやうじを離はなる

可べし、余の六譬これ之を略りゃくす、此の外に又多くの譬此の品に有そり、其の中に渡わた

りに船を得たるが如ごとしと此の譬たとえの意は生死しやうじの大海たいかいには爾前にぜんの經は・或あるは筏

・或あるは小船

なり、生死しやうじの此岸しがんより生死しやうじの彼岸ひがんには付くと雖いえども生死しやうじの大海たいかいを渡り極楽ごくらくの彼岸ひがんにはとつきがたし、例せば世間せけんの小船等つくしが筑紫より坂東に至り鎌倉かまくらよりいの嶋しんたんなどへとつけども唐土もうこしへ至らず唐船とうせんは必ず日本国にほんこくより震旦国しんたんに至る

るに障さわり無きなり又云く「貧いきに宝を得たるが如ごとし」等云云、爾前にぜんの国は貧国ひんくなり爾前にぜんの人は餓鬼がきなり法華經ほけきやうは宝の山なり人は富人なり。

問うて云く爾前にぜんは貧国ひんくといふ經文きやうもん如何答えて云く授記品じゆきに云く「飢えたる国より来つて忽たちまちに大王だいおうの膳だんに遇へるが如ごとく」等云云、女人にょにんの往生おうじやうじよつぷつ成仏じやうぶつの段は經文きやうもんに云く「若もし如来にやらいの滅後めつご・後の五百歳このごひやくさいの中に若もし女人にょにん有つて是この

經典きやうてんを聞いて説ごの如ごとく修行しゆきやうせば此こに於おいて命終みやうじゆうして即すなわち安樂世界あんらくせかいあみだぶつあみだぶつの菩薩ぼさつ・大衆たいしゆうに困遶いにようせられて住する処ところに往ゆいて蓮華れんげの中宝座ちゆうぼうざの

上に生じ」等云云。

問うて曰く此の経・此の品に殊に女人の往生を説く何の故か有るや、答えて曰く仏意測り難し此の義決し難きか但し一の料簡を加えば女人は衆罪の根本破国の源なり、故に内典・外典に多く之を禁しむ其の中に外典を以て之を論ずれば三従あり三従と申すは三したがうと云ふなり、一には幼にしては父母に従う嫁して夫に従う老いて子に従う此の三障有りて世間・自在ならず、内典を以て之を論ずれば五障有り五障とは一には六道輪回の間男子の如く大梵天王と作らず二には帝釈と作らず三には魔王と作らず四には転輪聖王と作らず五には常に六道に留まりて三界を出でて仏に成らず超日月三昧、銀色女経に云く「三世の諸仏の眼は大地に墮落すとも法界の諸の女人は永く成仏の期無し」等云云、但し凡夫すら賢王聖人は妄語せずはんよきといふし者はけいかに頸をあたいきさつと申せし人は徐君が

塚に剣をかけたりきこれ約束やくそくを違えず妄語もうご無き故なり何いかに況や声聞しょうもん・菩薩ぼさつ
・仏をや、仏は昔凡夫ほんぶにてましましし時し 小乗經しょうじょうきょうを習ならい給たまいし時し五戒ごかいを受
け始め給たまいき五戒ごかいの中の第四の妄語もうごの戒を固く持たち給たまいき財たからを奪われ命
をほろぼされし時も此の戒をやぶらず大乘經だいじょうきょうを習ならい給たまいし時又十重禁戒じゅうきん
をたも持そち其の十重禁戒しんかいの中の

第四の^{もうご}不妄語戒^{たも}を持ち給^{たま}いき、此の戒を堅く持^{たも}ちて無量劫之を破りたまわ
ず終^{つい}に此の戒力に依^{よつて}て仏身^{ぶつしん}を成じ三十二相の中に^{こつちようぜつそう}広長舌相を得たまえり、
此の舌うすくひろくながくして・或^{ある}は面^{かお}にを・をい・或^{ある}は髮際にいたり
・或^{ある}は梵天^{ぼんてん}にいたる舌の上に五の画あり印文のごとし其^その舌の色は赤銅の
ごとし舌の下に二の珠あり甘露を涌出^{いだ}す此れ不妄語戒の徳の至^{いた}す所なり、
仏・此の舌を以^{もつ}て三世の諸仏の御眼は大地に落つとも法界の女人は仏にな
るべからずと説か

れしかば一切^{いっさい}の女人は何^{いか}なる世にも仏には成らせ給^{たま}うまじきところぞ覺^{おほ}えて
候へ、さるにては女人^{にょにん}の御身も受けさせ給^{たま}いては設^{たと}ひ后三公の位にそなは
りても何かはすべき善根^{ぜんこん}仏事^{ぶつじ}をなしてもよしなしとこそ覺^{おほ}え候へ、而^{しか}るを
此の法華經の藥王品に女人^{にょにん}の往生^{おうじよう}をゆるされ候ぬる事又不思議に候、彼の
經^{もうご}の妄語か此の經^{もうご}の妄語かいかにも一方^{いっぽう}

は妄語もうごたるべきか、若し又一方妄語もうごならば一仏いちぶつに二言あり信じ難がたし但ただし
むりようぎきよう よんじゅうよねん
無量義經の四十余年には未だ真実しんじつを顕あらわさず涅槃經ねはんぎようの如来にょらいには虚妄こもうの言無なし
いえど も しゅじょうこもう
と雖も若し衆生虚妄の說に因よると知しめすの文を以て之を思えば仏は女人にょにん
おうじょうじょうぶつ
は往生成仏すべからずと説かせ給たまいけるは妄語もうごと聞えたり、妙法華經みょうほけきようの
せそん
文に世尊の法は久くして後に要かならずに真実しんじつ
を説くべし妙法華經乃至皆是真実もうと申す文を以て之を思うに女人にょにんの往生おうじょう
じょうぶつけつじょう
成仏決定と説かるる法華經の文は実語不妄語戒と見えたり、世間の賢人けんじん
も但一人ある子が不思議ふしぎなる時・或は失ある時は永く子為なるべからざるの
きしょう
理・起請を書き・或は誓言せいごんを立ると雖も命終めいしゅうの時に臨めば之を許ゆるす、然しかり
いえど けんじん あら
と雖も賢人に非ずと云わず又妄語もうごせる者とも云わず仏も亦是くのごと
にぜんよんじゅうよねん ほさつ とくどうほんぶ とくどうぜんにん とくどう
爾前四十余年が間は菩薩の得道凡夫の得道善人男子等の得道をば許ゆるすやう
なれども、

にじょうあくにん　によにん
二乗悪人・女人などの得道此れをば許さず・或は又許すににたる事もあ

り、いまだ定めがたかりしを仏の説教・四十二年すでに過ぎて八年が間・

摩謁提国王舎城・耆闍崛山と申す山にして法華經を説かせ給うとおぼせし

時先づ無量義經と申す經を説かせ給ふ無量義經の文に云く四十余年云云。

月　　日

日蓮

花押

◆三六九 上野殿後家尼御返事うえのとのごへんじ

文永十一年七月 五十三

歳御作

1504p

御供養くようの物種種給畢しゅじゅ おわんぬ、抑そもそもも上野殿死去うえのとのしきよの後はをとづれ冥途めいどより候

やらんきかまほしくをぼへ候、ただしあるべしとも・をぼへず、もし夢に

あらずんばすがたをみる事そつちよもあらじ、まぼろしにあらずんばみみえ給たまう

事こといかことが候ことはん、さだめて靈山淨土りやうぜんじよつどにてさばの事をばちうやにきき御覧ごらんじ

候らむ、妻子等さいしは肉眼にくげんなればみさせ・

きかせ給たまう事なしついにたまは一所と・をぼしめせ、生生世世しやうじよよよの間ちぎりし夫

は大海たいかいのいさごのかずよりもを・をくこそをはしまし候いけん、今度このたびのち

ぎりこそまことのちぎりのをとこよ、そのゆへはをとこのすすめによりて

ほけきよう ぎようじや
法華經の行者とならせ給へば仏とをがませ給うべし、いきてをはしき時は
ほけきよう しようじ
生の仏今は死の仏生死ともに仏なり、即身成仏と申す大事の法門これなり、
ほけきよう
法華經の第四に云く、「もし能く持つこと有れば即ち仏身を持つなり」云
云。

そ じようど
夫れ浄土と云うも地獄と云うも外には候はずただ我等がむねの間にあり、
これをさとるを仏といふ・これにまよふを凡夫と云う、これをさとるは
ほけきよう
法華經なり、もししからば法華經をたもちたてまつるものは地獄即寂光と
さとり候ぞ、たとひ無量億歳のあひだ権教を修行すとも、法華經をはな
るるならばただいつも地獄なるべし、
にちれん もう
此の事日蓮が申すにはあらず釈迦仏・多宝仏・十方分身の諸仏の定めをき
給いしなり、されば権教を修行する人は火にやくるもの又火の中へいり、
ほけきよう
水にしづむものをふちのそこへ入るがごとし、法華經をたもたざる人は

火と水との中にいたるがごとし、法華經誹謗の悪知識たる法然・弘法等を
たのみ阿弥陀經・大日經等を信じ給うはなを火より火の中水より水のそこ
へ入るがごとし、いかでか苦患をまぬかるべきや、等活・黒繩・無間地獄
の火坑・

紅蓮・大紅蓮の氷の底に入りしづみ給はん事疑なかるべし、法華經の第二に云く「其の人命終して阿鼻獄に入り是くの如く展転して無數劫に至らん」云云。

故聖靈は此の苦をまぬかれ給い・すでに法華經の行者たる日蓮が檀那なり、經に云く「設い大火に入るも火も焼くこと能わず、若し大水に漂わされ為も其の名号を称れば即ち浅き処を得ん」又云く「火も焼くこと能わず水も漂すこと能わず」云云、あらたのもしや・たのもしや、詮するところ地獄を外にもとめ獄卒の鉄杖阿防羅刹のかしやくのこゑ別にこれなし、此の法門ゆゆしき大事なれども、尼にたいしまいらせておしへまいらせん、例せば竜女にたいして文殊菩薩は即身成仏の秘法をと給いしがごとし、これをきかせ給いて後はいよいよ信心をい

た

させ給へ、法華經の法門をきくにつけて・なをなを信心をはげむを・まことの道心者とは申すなり、天台云く「從藍而青」云云、此の釈の心はあい
は葉のときよりも・なをそむれば・いよいよあをし、法華經はあいのごとし修行のふかきは・いよいよあをきがごとし。

地獄と云う二字をばつちをほるとよめり、人の死する時つちをほらぬもの候べきか、これを地獄と云う、死人をやく火は無間の火炎なり、妻子・眷属の死人の前後にあらそひゆくは獄卒阿防羅刹なり、妻子等のかなしみなくは獄卒のこゑなり、二尺五寸の杖は鉄杖なり馬は馬頭・牛は牛頭なり、穴は無間・大城八万四千のかまは八万

四千の塵勞門家をきりいづるは死出の山・孝子の河のほとりにたたずむは三途の愛河なり、別に求むる事はかなしはかなし、此の法華經をたもちたてまつる人は此れをうちかへし・地獄は寂光土・火焰は報身如来の智火・

死人は法身如来火坑は大慈悲為室の応身如来、又つえは妙法実相のつえ、

三途の愛河は生死即涅槃の大海・死出の山

は煩惱即菩提の重山なり、かく御心得させ給へ・即身成仏とも開仏知見と

もこれをさととり・これをひらくを申すなり、提婆達多は阿鼻獄を寂光極楽

とひらき、竜女が即身成仏もこれより外は候はず、逆即是順の法華経な

れば

なりこれ妙の一字の功德なり。

竜樹菩薩の云く「譬えば大薬師の能く毒を変じて薬と為すが如し」云云、

みようらくだいしいわ

あにがや

じようじゃく

じやつこう

しやばあ

妙楽大師云く「豈伽耶を離れて別に常寂を求めん寂光の外別に娑婆有る

に非ず」云云、又云く「実相は必ず諸法・諸法は必ず十如・十如は必ず十界

・十界は必ず身土なり」云云、法華經に云く「諸法実相乃至本末究竟等」

じゅつかい

しんど

ほけきよう

いわ

しほほうじつそうないしほんまつくきよう

云云、寿命品に云く「我実に成仏してよ

じゅりようほん

いわ

じようぶつ

り已来無量無辺なり」等云云、此の經文に我と申すは十界なり十界本有

このかたむりようむへん

きようもん

もつ

じゅつかい

じゅつかいほんぬ

の仏なれば浄土に住するなり、方便品に云く「是の法は法位に住して世間

じようど

ほうべん

いわ

こ

ほうい

せけん

の相常住なり」云云、世間のならひとして三世常恒の相なればなげくべ

じようじゅう

せけん

さんぜじょうじょうじょう

じょうじょう

じょうじょう

きにあらずをどろくべきにあらず、相の一字は八相なり八相も生死の二字

きにあらず

どろく

べき

にあらず

さう

はちさう

はちさう

はちさう

はちさう

をいはず、かくさとるを法華經の行者の即身

いはず

かく

さとる

を

はけきよう

ぎようじゃ

そくしん

そくしん

じょうじょう

じょうじょう

成仏と申すなり、故聖靈は此の經の行者なれば即身成仏疑いなし、

じょうぶつ

もう

しやうりよう

は

この

きよう

ぎようじゃ

そくしん

じょうじょう

じょうじょう

成仏と申すなり、故聖靈は此の經の行者なれば即身成仏疑いなし、

じょうぶつ

もう

しやうりよう

は

この

きよう

ぎようじゃ

そくしん

じょうじょう

じょうじょう

成仏と申すなり、故聖靈は此の經の行者なれば即身成仏疑いなし、

じょうぶつ

もう

しやうりよう

は

この

きよう

ぎようじゃ

そくしん

じょうじょう

じょうじょう

さのみなげき給^{たま}うべからず、又なげき給^{たま}うべきが凡^{ほん}夫^ぶのことわりなり、た
だし聖^{しょう}人^{にん}の上にもこれあるなり、釈^{しゃ}迦^か仏^{ぶつ}御^に入^に滅^{めつ}のとき諸^{しよ}大^{だい}弟^で子^し等^{とう}のさと
りのなげき凡^{ほん}夫^ぶのふるまひを示^{たま}し給^{たま}うか。

いかにもいかにも追^{つい}善^{ぜん}供^く養^{よう}を心^{しん}のをよぶほどはげみ給^{たま}うべし、古^こ徳^{とく}のこ
とばにも心^{しん}地^じを九^{しゆ}識^ぎにもち修^{しゆ}行^{ぎやう}をば六^{ろく}識^しにせよとをしへ給^{たま}うことわりにも
や候^たらん、此^この文^{ぶん}には日^に蓮^{ちれん}が秘^ひ藏^{そう}の法^{ほう}門^{もん}かきて候^たぞ、秘^ひしさせ給^{たま}へ秘^ひしさ
せ給^{たま}へ、あなかしこ・あなかしこ。

七月十一日

日蓮 ^{にちれん} 花押 ^{かおう}

上野殿後家尼御前御返事
^{うえのとのごけあまごぜんごへんじ}

◆三七〇

うえのとのごへんじ
上野殿御返事

ぶんえい
文永十一年七月 五十三歳御作

1507p

驚目十連・かわのり二帖・しやうかう二十束・給候い畢んぬかまくらに
がもくとつる たびそうら おわ

てかりそめの御事とこそ・をもひまいらせ候いしに、をもひわすれさせ給わ
おんこと たま

ざりける事申すばかりなし、こうへのどのだにもをはせしかばつねに申し
もう 故上野殿 もう

うけ給わりなんとなげきをもひ候いつるに、をんかたみに御みをわかくし
たま 御遺愛

て・とどめをかれけるか・すがたのたがわせ給わぬに、御心さひにられけ
たま

る事いうばかりなし、法華經にて仏にならせ給いて候とうけ給わりて、御
ほけきよう たま

はか

にまいりて候いしなり、又この御心ざし申すばかりなし、今年のけかちに
おんこころざしもう

はじめたる山中に木のもとに・このはうちしきたるやうなる・すみか・を
もひやらせ給え、たまこのほどよみ候・御経の一分をいちぶんことのへ廻向えこうしまいらし
候、あわれ人はよき子はもつべかりけるものかなと、なみだかきあえずこ
そ候いし、みょうそうこん妙莊嚴王は二子ふたりこにみちびかる、かの王は悪人あくにんなり、こうへのど
のは善人ぜんにんなり、かれにはにるべくもなし、南無妙法蓮華經・南無
みょうほうれんげきょう妙法蓮華經。

七月二十六日

にちれん かおう
日蓮 花押

ごへんじ
御返事

人にあながちにかたらせ給たまうべからず、若わかき殿が候へば申もうすべし。

◆三七一

上野殿御返事うえのとのごへんじ

文永十一年十一月ぶんえい

五十三歳御

作 与南条七郎次郎

1508p

上人しょうにん二管・柑子こうじ一籠・☆☆十枚・薯蕷やまのうも一籠・牛房一束・種種しゅじゅの物送り
給たまひ候。

得勝・無勝の二童子どうじは仏に沙の餅を供養くようしたてまつりて閻浮提えんぶだい三分が一
の主となる所謂阿育大王いわゆるあそかだいおうこれなり、儒童菩薩じゅどうぼさつは錠光仏じつこうぶつに五茎いつくきの蓮華れんげを供養くよう
したてまつりて仏となる今の教主きょうしゅ釈尊しやくそんこれなり、法華經ほけきやうの第四よに云く「人
有あつて仏道ぶつどうを求めて一劫いつくわくの中に於おいて合掌がっしやうして我が前に在あつて無数の偈げを
以もつて讃ほめん、是この讃ほ仏ぶつに由よるが故ゆゑに無量の功德くどくを得ん、持經者じきやうを歎美たんびせん
は其その福復ふくまた彼れに過すぎん」等云云、文の心は仏を一中劫いちくわくが間供養くようしたてま

つる

より、まつだいあくせ末代悪世の中に人のあながちににくむほけきよう法華經の行者ぎようじゃを供養くようする功德くどく

はすぐれたりと・とかせたま給う、たれの人のかかるひが事をばおほせらるる

ぞと疑うたがいいおもひ候へばきようしゆしやくそん教主釈尊の我とおほせられて候なり、疑うたがはんと

も信ぜんとも御心にまかせまいらする、仏の御舌は・或あるは面かおに覆おおひ・或あるは

三千大千世界さんぜんだいいせんせかいに覆おおひ・或あるは色究竟天しきくきようてんまでに付け給たまう

過去遠遠劫かこおんのんごうより・このかた一言も妄語もうごのましまさざるゆへなり、されば

・或ある經いわに云く「須弥山しゆみせんはくづるるとも・大地だいちをばうちかへすとも仏には妄語もうご

なし」ととかれたり、日は西よりいづとも大海たいかいの潮はみちひずとも・仏の

御言みことばはあやまりなしとかや、其その上此ほけきようの法華經たきようは他經たにも・すぐれさせ給たまへ

ば・多宝仏たほうぶつも証しょうみよう明し諸仏しよぶつも舌を梵天ぼんてんにつけ給たまう、一字一点も妄語もうごは候ま

じきにや。

其^その上殿はをさなくをはしき、故親父は武士^{ぶし}なりしかどもあなかちに
ほけきよう
法華經を尊み給^{たま}いしかば・臨終^{りんじゅう}正念^{しょうねん}なりけるよしうけ給^{たま}わりき、其^その親
あと
の跡をつがせ給^{たま}いて又此の經を御信用^{ごしんよう}あれば・故聖靈^{しょうりよう}いかに草のかげに
ても喜びおぼすらん、あわれいきてをせば・いかにうれしかるべき、此
の經を持つ人^{ひと}は他人^{たにん}なれども同じ靈山^{りょうぜん}へまいり

あはせ給^{たま}うなり、いかにいはんや故^し聖靈^{より}も殿も同じく法華經^{ほけきよう}を信じさせ

給^{たま}へば同じところに生れさせ給^{たま}うべし、いかなれば他人^{たにん}は五六十までも親

と同じしらがなる人もあり、我がわかき身に親にはやくをくれて教訓^{きようくん}をも

うけ給^{たま}はらざるらんと御心のうちをしはかるこそなみだもとまり候はね。

そもそにちれん

にほんこく

抑^{おさ}日蓮は日本国をたすけんとふかくおもへども・日本国の上下万人・

一同に国のほろぶべきゆへにや用^{もち}いられざる上^{たびたび}度^{たびたび}あだをなさるれば力を

よばず山林^{さんりん}にまじはり候いぬ、大蒙古国^{だいまうこく}よりよせて候と申せば、申せし事

を御用^{もち}いあらば・いかになんど・あはれなり、皆人^{みな}の当時^{とうじ}のいきつしまの

やうにならせ給^{たま}はん事おもひやり候へば・なみだもとまらず。

ねんぶつしゅう

もう

ぼうこく

あくほう

念仏宗と申すは亡国の悪法なり、このいくさには大体人人^{だいたいひとびと}の自害^{じがい}をし

候はんずるなり、善導^{ぜんどう}と申す愚癡^{ぐち}の法師^{ほうし}がひろめはじめて自害^{じがい}をして候ゆ

ねんぶつ

へに念仏をよくよく申せば自害^{じがい}の心出来^{しゅつたい}し候ぞ。

ぜんしゅう　もう　とうじ　じさいほつし　てんま　しよい
禪宗と申し当時の持齋法師等は天魔の所為なり、
きようげべつでん　もう
教外別伝と申して神も

仏もなしなんと申すものくるはしき悪法なり。
あくほう

しんこんしゅう　もう　げれつ　おわく　ほけきよう　まさ
真言宗と申す宗は本は下劣の経にて候いしを誑惑して法華経にも勝るな

もう　ひとびと　だいしそужよう　にほんこく　だいたいじゅうまん
んど申して多くの人人・大師僧正などになりて日本国に大体充滿して

かみいちにん　こうべ　だいichi　じゃじ
上一人より頭をかたぶけたり、これが第一の邪事に候を昔より今にいたる

まで知る人なし、但伝　でんぎようだいし
教大師と申せし人こそしりて候いしかども・くはし

くもおほせられず、さては日蓮　にちれん
ほこの事

をしれり、後白河の法皇の太政の入道に・せめられ給いし、
たまい　おき　ほうおう
隠岐の法王の

かまくらにまけさせ給いし事みな真言悪法のゆへなり、
たまい　しんこんあくほう　かんど
漢土にこの法わた

りて玄宗皇帝ほろびさせ給う、この悪法かまくらに下つて当時かまくらに
げんそうこうてい　たま　あくほう　とうじ

はやる僧正法印等は是なり、これらの人人このいくさを調伏せば百日た
そうじようほういん　これ　ひとびと　じようぶく

たかふべきは十日につづまり・十日のいくさは一日に・せめらるべし。

今始めて申すにあらず二十余年が間音こえもをしまずよばはり候いぬるなり、
あなかしこ・あなかしこ、この御文おんふみは大事だいじの事どもかきて候、よくよく人
によませてきこしめせ、人もそしり候へものともおもはぬ法師ほっし等なり、
きようきようきんげん。
恐恐 謹言。

ぶんえい
文永十一年太歳甲戌十一月十一日

にちれん
日蓮 花押 かつら

ごへんじ
南条七郎次郎殿御返事

◆三七二 春の祝御書ごしよ

1510p

春のいわいわすでに事ふり候いぬ、さては故なんでうなどの殿はひさしき事

には候はざりしかども・よろず事にふれて・なつかしき心ありしかば・を
ろかならずをもひしに・よわひ盛さかなりしに・はかなかりし事わかれかな
しかりしかばわざとかまくらよりうちくだかり御はかをば見候いぬ、それ
よりのちはするがのびんにはと・をもひし

にこのたびくだしには人にしのびてこれへきたりしかばにしやまの入道にゅうどう殿
にもしられ候はざりし上は力をよばずとをりて候いしが心にかかりて候そ
の心をとげんがために此の御房ごぼうは正月の内につかわして御はかにて自我じがけ偈
一卷よまさんとをもひてまいらせ候、御とのの御かたみもなしなとなげ
きて候へば・とのをとどめをかれ

ける事よろこび入つて候、故殿は木のもと・くさむらのかげ・かよう人も
なし、仏法ぶつぼうをも聴聞ちやうもんせんず・いかにつれづれなるらん、をもひやり候へば
なんだもとどまらず、とのの法華經ほけきようの行者ぎやうじやうちぐして御はかにむかわせ

給^{たま}うには、
いかにうれしかるらん
いかにうれしかるらん。

◆三七三

うえのとのごへんじ
上野殿御返事

がねん
建治元年五月 五十四歳御作

与上野次郎時光

1511p

さつきの二日にいものかしらいしのやうにほされて候を一駄、ふじのう
へのよりみのぶの山へをくり給たまいて候。

仏の御弟子おんでしにあなりちと申せし人は天眼第一てんげんだいいちのあなりちとて十人の

御弟子おんでしのその一迦葉舍利弗かしようしやりほつ・目連阿難もくれんあなんにかたをならべし人なり、この人の

ゆらひをたづねみれば・師子頰王ししきようおうと申せし国王こくおうの第二の王子みこに・こくぼん

王と申せし人の御子釈迦如来しやかにらいのいとこにて・おはしましき、この人の御名みな

三つ候、一には無貧・二には如意にょい・三にはむれう

と申すもう一一にふしぎの事候、昔うえたるよにりだそんじやと申せしたうと

き辟支仏ありき、うえたるよに七日ときもならざりけるが山里にれうしの御器に入れて候いけるひえのはんをこひてならせ給う、このゆへにこのれうし現在には長者となりのち九十一劫が間人中天上にたのしみをうけて今最後にこくぼん王の太子と

むまれさせ給う、金のごきにはんとこしなへにたえせずあらかとならせ給う、御眼に三千大千世界を一時に御らんありていみじくをさせしが法華經

第四の巻にして普明如来と成るべきよし仏に仰せをかほらせ給いき、

妙楽大師・此の事を釈して云く「稗飯輕しと雖も所有を尽し、及び田勝るを以ての故に故に勝報を得る」と云云、釈の心かろきひえのはんなれども此れよりほかには・もたざりしを・たうとき人のうえておはせしに・まいらせてありしゆへに・かかるめでたき人となれりと云云。

此の身のぶのさわは石などはおほく候されども・かかるものなし、そ

の上夏のころなれば民のいとまも候はじ、又御造営と申しさこそ候らんに
山里の事を・をもひやらせ給たまいて・をくりたびて候、所詮しよせんは・わがをやの
わかれ

をしさに父の御ために釈迦^{しゃか}・法華^{ほけ}經へまいらせ給^{たま}うにや孝養^{こうよう}の御心か、
さる事なくば梵王^{ぼんのう}・帝釈^{たいしゃく}・日月^{にちがつ}・四天^{してん}その人の家をすみかとせんとちかは
せ給^{たま}いて候はいふにかひなきものなれども約束^{やくそく}と申^{もう}す事はたがへぬ事にて
候に、さりともこの人人^{ひとびと}はいかでか仏前^{ぶつぜん}の御約束^{やくそく}をばたがへさせ給^{たま}い候べ
き、もし此の事まことになり候はば・

わが大事^{だいじ}とおもはん人人^{ひとびと}のせいし候、又おほきなる難^{なん}来^きるべし、その時す
でに此の事かなうべきにやとおぼしめしていよいよ強盛^{かうじやう}なるべし、さるほ
どならば聖靈^{しょうりやう}・仏になり給^{たま}うべし、成^なり給^{たま}うならば来^きりてまほり給^{たま}うべ
し、其の時一切^{そのときいっさい}は心にまかせんずるなり、かへす・がへす人のせいしあら
ば心にうれしくおぼすべし、恐^{きやう}恐^{きやう}謹^{きん}言^{げん}。

五月三日

にちれん かおう
日蓮 花押

うえのとのごへんじ
上野殿御返事

◆三七四

うえのとのごへんじ
上野殿御返事

建治元年七月 がんねん 五十四歳御作

1512p

むぎひとひとつ・かわのり五条・はじめ六十給了^{おわ}んぬ、いつもの御事^{おんこと}に
候へばをどろかれずめづらしからぬやうにうちをぼへて候はぼむぶの心な
り、せけんそうそうなる上を・をみやつくられさせ給^{たま}へば百姓^{ひやくせい}と申し我^{もう}が
内の者と申しけかちと申しものつくりと申しいくそばくいとまなく御わた
りにて候らむに山のなかの・すまる

さこそと思ひやらせ給^{たま}いて鳥のかい子をやしなふが如^{ごと}く灯に油をそふるが
ごとく・かれたる草に雨のふるが如^{ごと}く・うへたる子に乳をあたふるが如^{ごと}く
ほけきよう法華經の御命をつがせ給^{たま}う事三世^{さんぜ}の諸仏^{しよぶつ}を供養^{くよう}し給^{たま}へるにてあるなり、

じゅっほう　しゅじょう　まなこ
十方の衆生の眼を開く功德にて候べし、尊しとも申す計りなし、あなか
しこ・あなかしこ　きょうきょうきんげん　きんげん
恐恐謹言。

しちがつにじふににち　にちれんかおう　しんじょう
七月十二日　日蓮花押　進上

うえのとのごへんじ
上野殿御返事

◆三七五

上野殿御書

建治元年八月

五十四歳御作 与

南条時光

1513p

態わざと御使おんつかいい有難かたく候、夫それについては屋形造の由目出度たくこそ候へ、何
か参り候いて移徙申し候はばや、一つ棟札むなふだの事承り候書き候いて此の伯耆
公に進せ候。

此の経文きやうもんは須達長者祇園精舎すだつちやうじゃぎおんしやうじゃを造りき、然しかるに何いかなる因縁いんねんにやよりけ
ん須達長者七度まで火災にあひ候時・長者ちやうじゃ・此よしの由を仏に問い奉たてまつる、仏答
えて曰のたまわん汝けんぞくが眷属貪欲深ゆえき故に此の火災の難起なんおこるなり、長者申ちやうじゃもうさくさて
いかんして此の火災の難なんをふせぎ申もうすべきや、仏の給たまはく辰巳の方より瑞相ずいそう
あるべし汝精進なんじしやうじんして彼まさの方に向へ、彼方あなた

より光ささは鬼神きじん三人来りて云わん、南海に鳥あり鳴忿めいふんと名なく此の鳥の
住処じゅうしょに火災なし、又此の鳥一つの文を唱となうべし、其の文に云く「聖主天中
天迦陵頻伽声哀愍衆生者我等今敬礼」云云、此の文を唱へんには必ず三
十万

里が内には火災をこらじと此の三人の鬼神きじんかくの如く告ぐべきなり云云、
須達すだつ・仏の仰せの如くせしかば少しもちがはず候いき、其の後火災なきと
見えて候、これに依りて滅後めつご・末代まつだいにいたるまで此の經文きやうもんを書きて火災を
やめ候、今以てかくの如くなるべく候、返す返す信じ給うべき經文きやうもんなり、
是は法華經の第三の卷化城喻品に説かれて候、委しくは此の御房に申し含
めて候、恐恐謹言。

八月十八日

日蓮にちれん

花押かおう

上野殿御返事うえのとのごへんじ

◆三七六

単衣抄

建治元年八月 がねん 五十四歳御作

1514p

単衣一領送り給い候い畢んぬ。たまひ おわ

棄老国には老者をすて日本国には今法華經の行者をすつ、抑此の国ほけきよう ぎようじゃ

かいびやく

てんじん

ちじんごだい

開闢より天神七代・地神五代人王百代あり、神武より已後九十代欽明よりいご きんめい

ぶつぽう

仏法始まりて六十代七百余年に及べり、其の中に父母を殺す者朝敵となるそ ふぼ ちやうてき

さんぞくかいぞく

者山賊海賊数を知らざれどもいまだきかず法華經の故に日蓮程人に惡まれほけきよう ゆえ にちれん にく

たる者はなし、・或は王に惡まれたれども民には惡まれず、・或は僧は惡めある にく ある にく

ば俗はもれ、男は惡めば女はもれ、・或は愚人は惡めば智人はもれたり、ある ぐにん ちじん

こ

なんよ

そうにぐにん

此れは王よりは民男女よりは僧尼愚人よりは智人惡む惡人よりは善人惡む、ちじん にくむあくにん ぜんにんにくむ

ぜんだいみもん

前代未聞の身なり後代にも有るべしともおぼえず、故に生年三十二より今あ ゆえ

年五十四に至るまで二十余年の間・或は寺を追ひ出され・或は処をおわれ

・或は親類を煩はされ・或は夜打ちにあひ・或は合戦にあひ・或は悪口数

をしらず・或は打たれ・或は手を負う・或は弟子

を殺され・或は頸を切られんとし・或は流罪兩度に及べり、二十余年が間

・一時片時も心安き事なし、頼朝の七年の合戦もひまやありけん、頼義が

十二年の鬭諍も争か是にはすぐべき。

法華經の第四に云く「如来の現在にすら猶怨嫉多し」等云云、第五に云く

「一切世間怨多くして信じ難し」等云云、天台大師も恐らくはいまだ此の

經文をばよみ給はず、一切世間皆信受せし故なり、伝教大師も及び給う

べからず況滅度後の經文に符合せざるが故に、日蓮日本国に出現せずば

如来の金言も虚くなり多宝の証明も・なに

かせん十方の諸仏の御語も妄語となりなん、仏滅後・二千二百二十余年

月氏・漢土・日本に一切世間・多怨難信の人なし、日蓮なくば仏語既に絶
えなん、かかる身なれば蘇武が如く雪を食として命を継ぎ・李陵が如く簞
をきて世をすごす、山林に交つて果なき時は空くして兩三日を過ぐ鹿の皮
破ぬれば裸にして三四月に及べり、かかる者

をば何としてか哀とおぼしけん、未だ見参にも入らぬ人の膚を隠す衣を送
り給候こそ何とも存じがたく候へ、此の帷をきて仏前に詣でて法華經を
読み奉り候いなば、御經の文字は六万九千三百八十四字・一一の文字は皆
金色の仏なり、衣は一つなれども六万九千三百八十四仏に一一にきせまい
らせ給へるなり、されば此の衣を給て候わば

夫妻二人ともに此の仏御尋ね坐して我が檀那なりと守らせ給うらん、今生
には祈りとなり・財となり・御臨終の時は月となり・日となり・道とな
り・橋となり・父となり・母となり・牛馬となり・輿となり・車となり・
蓮華となり・山となり二人を靈山浄土へ迎え取りまいらせ給うべし、南無
妙法蓮華經・南無妙法蓮華經。

建治元年乙亥八月 日

にちれん かおう
日蓮 花押

此の文は藤四郎殿にようほう女房と常により合いて御覧あるべく候。

◆三七七

上野殿うえのとの母尼御前あまござんごへんじ御返事

151

5p

母尼もにござんにはことに法華經ほけきようの御信心しんじんのふかくましまし候なる事よろこ悦び候と申もつさせ給候へ。

止観しかん第五の事正月一日辰の時こ此れをよみはじめ候、明年は世間せけん忽忽そつそつなるべきよし皆人みな申もうすあひだ一向後生こうじのために十五日まで止観しかんを談だんぜんとし候が、文あまた候はず候・御計ごけいらい候べきか、白米一斗御志じ申しんしつくしがたう候、鎌倉かまくらは世間せけんかつして候、僧はあまたをはします過去かこの餓鬼がき道の苦をばつくのわせ候ひぬるか。

法門ほうもんの事、日本国にほんこくに人ごとに信ぜさせんと願して候いしが願じようや成熟じゆうじゆくせ

んとし候らん、とうじ 当時は蒙古もうこの勘文かんもんによりて世間せけんやわらぎて候なり子細しさいあり
ぬと見へ候、本より信じたる人ひと人はことに悦ひとびとぶげに候か、きようきよう 恐恐。きようきよう

十二月二十二日

日蓮にちれん

花押かおう

うえのとの 上野殿母尼御前御返事あまごぜんごへんじ

◆三七八

神国王御書

1516p

そ おもんみればにほんこく
 夫れ以れば日本国を亦水穂の国と云い亦野馬台又秋津島又扶桑等云云、
 六十六ヶ国二つの島已上・六十八ヶ国・東西三千余里・南北は不定なり、
 此の国に五畿・七道あり・五畿と申すは山城・大和・河内・和泉・摂津等
 なり、七道と申すは東海道十五箇国・東山道八箇国・北陸道七箇国・山陰
 道八ヶ国・山陽道八ヶ国・南海道六ヶ国・西海道十一ヶ国・亦鎮西と云い
 ・又太宰府と云云、已上此れは国なり、国主をたづぬれば神世十二代は天神
 七代・地神五代なり、天神七代の第一は国常立尊乃至・第七は伊奘諾尊男
 なり、伊奘册尊妻なり、地神五代の第一は天照太神・伊勢太神宮日の神是な
 りいざなぎいざなみの御女なり、乃至第五は彦波瀲武☆☆草葺不合尊・此

の神は第四のひこほの

御子なり母は竜の女なり、已上地神五代・已上十二代は神世なり、人王は
だいたい
大体百代なるべきか其の第一の王は神武天皇此れはひこなきさの御子なり、
ないし
乃至第十四は仲哀天皇父なり第十五は神功皇后母なり・第十六は応神
天皇にして仲哀と神功の御子今の八幡大菩薩なり、乃至第二十九代は宣化
天皇なり、此の時までは月支漢土には仏法ありしかども日本国にはいまだ
わたらず。

第三十代は欽明天皇此の皇は第二十七代の継体の御敵子なり治三十二年、
此の皇の治十三年壬申十月十三日辛酉百濟国の聖明皇金銅の釈迦仏を渡し
奉る、今・日本国の上下万人・一同に阿弥陀仏と申す此れなり、其の表の
文に云く臣聞く万法の中には仏法最善し世間の道にも仏法最上なり天皇陛
下亦修行あるべし、故に敬つて仏像經教法師を捧げて使に附して貢獻す

よろし
宜く信行あるべき者なり已上、然りといへども欽明・敏達・用明の三代・三
十余年は崇め給う事なし、其の間の事さまざまなりといへども其の時の
てんぺん ちよう
天変地天は今の代にこそにて候へども・今は亦其の

代にはにるべくもなき変天なり、第三十三代崇峻天皇すしゅんてんのうの御宇ぎようより仏法我が

朝に崇められて、第三十四代推古天皇すいこてんのうの御宇ぎように盛さかんにひろまりき、此の時

さんろんしゅう

じようじつ

もう

わた

さんろんしゅう

がっし

三論宗と成実宗と申す宗始めて渡りて候いき、此の三論宗は月氏にても

かんど

にほん

だいいじよう

ゆえ

もう

漢土にても、日本にても大乘宗の始なり、故に宗の母とも宗の父とも申す、

人王三十六代・皇極天皇の御宇に禪宗わた

てんのう

ぎよう

ぜんしゅう

る、人王四十代・天武の御宇に法相宗わたる、人王四十四代元正天皇の

ぎよう

だいにちきよう

ぎよう

ほうそうしゅう

てんのう

御宇に大日経わたる、人王四十五代に聖武天皇の御宇に華嚴宗を弘通せさ

せ給う、

たまり

こうけんてんのう

ぎよう

りっしゅう

ほうけしゅう

しかりと

いへども唯律宗計りを弘めて天台法華宗は弘通なし。

たたり

ひろ

てんだいほうけしゅう

くつう

人王第五十代に最澄と申す聖人あり、法華宗を我と見出して俱舎宗・

さいちよう

もう

しょうにん

ほうけしゅう

ぐしやしゅう

成実宗・律宗・法相宗・三論宗・華嚴宗等の六宗をせめをとし給うの

じようじつ

りっしゅう

ほうそうしゅう

さんろんしゅう

けこんしゅう

ろくしゅう

たま

みならず、漢土に大日宗と申す宗有りとしろしめせり、同じき御宇に漢土

かんど

だいにち

もう

ぎよう

かんど

にわたりて四宗をならいわたし給う、たま所謂法華宗・真言宗・しんこんしゅう禪宗大乗の
律宗なり、りっしゅうしかりといへども法華宗と律宗とをば弘通あ

りて禪宗をば弘め給はず、ぜんしゅう真言宗をば宗の字をけづり七大寺等の諸僧に
灌頂を許し給う、かんちよう然れども世間の人人は・いかなるという事をしらず、ゆるたま
当時の人人の云く此の人は漢土にて法華宗をば委細にならいて真言宗をば
くはしくも知ろし食し給はざりけるかとすいし申すなり。ひとびと いわ

同じき御宇に空海と申す人漢土にわたりて真言宗をならう、ぎようしかりとい
へどもいまだ此の御代には帰朝なし、きよう人王第五十一代に平城天皇の御宇に
帰朝あり、きちよう五十二代嵯峨の天皇の御宇に弘仁十四年癸卯正月十九日に・
真言宗の住処東寺を給いて護国教王院とがうす、しんこんしゅう伝教大師御入滅の一
年の後なり。

人王五十四代・仁明天皇の御宇に円仁和尚・漢土にわたりて重ねて法華

・真言しんこんの二宗をならいわたす、人王五十五代・文徳天皇もんたくてんのうの御宇ぎように仁寿にんじゆと齊衡さいこうとに金剛頂經こんごうちようきようの疏じよ・蘇悉地經そしつちきようの疏じよ・已上十四卷つくを造りて大日經だいにちきようの義釈ぎしやくに並なべて真言宗しんこんしゆうの三部とがうし、比叡山ひえいざんの内に総持院そうじいんを建立こんりゆうし真言宗しんこんしゆうを弘通くつうする事此の時なり、叡山えいざんに真言宗しんこんしゆうを許ゆるされし

かば座主^{ざす}兩方を兼ねたり、しかれども法華宗をば月のごとく真言宗^{しんこんしゅう}をば日のごとしといひしかば、諸人^{しよにん}等は真言宗^{しんこんしゅう}はすこし勝れたりと・をもへけり、しかれども座主^{ざす}は兩方を兼ねて兼学^{けんがく}し給いけり大衆も又かくのごとし。

同じき御宇に円珍和尚と申す人・御入唐漢土にして法華・真言^{しんこん}の兩宗を

ならう、同じき御宇に天安二年に歸朝す、此の人は本朝にしては叡山第一

の座主・義真第二の座主円澄・別当光定第三の座主円仁等に法華・真言^{しんこん}

の兩宗をならいきわめ給うのみならず又東寺の真言をも習い給へり、其の

後に漢土にわたりて法華・真言^{しんこん}の兩宗をみがき給う今の三井寺の法華・

真言の元祖智証大師此れなり、已上四大師なり。

総じて日本国には真言宗に又八家あり、東寺に五家・弘法大師を本とす

・天台に三家・慈覺大師を本とす。

人王八十一代をば安德天皇と申す父は高倉院の長子・母は太政入道の女

けんれいもんいん
建礼門院なり、此の王は元暦元年乙巳三月二十四日八島にして海中に崩じ

たま
給いき、此の王は源ノ頼朝將軍に・せめられて海中のいろくづの食と

なり給う、人王八十二代は隱岐の法王と申す高倉の第三の王子・文治元年

ひのえうま
丙午御即位、八十三代には阿波の院隱岐の法皇の長子建仁二年に位を継ぎ

たま
給う、八十四代には佐渡の院・隱岐の法皇の第二の王子・承久三年辛巳

二月二十六日に王位につき給う、同じき七月に佐渡の島にうつされ給う、

此の二・三・四の三王は父子なり鎌倉の右大将の家人・義時に・せめられ

させ給へるなり。

ここににちれん
此に日蓮大いに疑つて云く仏と申すは三界の国主・大梵王・第六天の

まおう
魔王・帝釈・日月・四天・転輪聖王・諸王の師なり主なり親なり、三界

の諸王は皆は此の釈迦仏より分ち給いて諸国の総領・別領等の主となし

給へり、故に梵釈等は此の仏を・或は木像・或は画像等にあがめ給う、

須臾しゅゆも相背そむかば梵王ぼんのうの高台たかいもくづれ帝たい釈しやくの喜見きけんもやぶれ輪王りんも

かほり落ち給たまうべし、神かみと申もうすは又国こくの国主こくしゅ等の崩去いたし給たまえるを生身しょうしんの

ごとくあがめ給たまう、此これ又国王こくおう・国人こくにんのための父母ふぼなり・主君しゅくんなり・師匠ししやう

なり・片時かたときもそむかば国安隱こくあんなるべからず、此これを崇あがむれば国くには三災さんさいを消

し七難ひちなん

を払い人は病なく長寿ちようじゆを持ち後生ごしようには人天にんてんと三乗さんじようと仏となり給うべし。

しかるに我が日本にほんこくは一閻浮提えんぶだいの内・月氏がっし・漢土かんどにも・すぐれ八万はちまんの国

にも超こえたる国ぞかし、其そのの故は月氏のゆえの仏法がっしは西域ぶつぽう等さいいきに載せられて候た但

七十余国そなり其そのの余は皆外道みなげどうの国なり、漢土かんどの寺は十万八千四十所なり、

我が朝の山寺は十七万一千三十七所なり、此の国は月氏がっし・漢土かんどに対すれば

にほんこく

日本国に伊豆の大島を對せるがごとし、寺をかずうれば漢土かんど・月氏がっしのも雲泥うんでい

すぎたり、かれは又大乗だいじようの国小乗しょうじようの国大乘だいじようも権大乘こんだいじようの国なり、此これは

寺ごとに

はつしゅう

八宗・十宗をならい家家宅宅に大乘だいじようを讀誦どくじゆす、彼の月氏がっし・漢土かんど等は仏法ぶつぽう

を用もちゆる人は千人に一人なり、此の日本にほんこくは外道げどう一人もなし、其そのの上神は

だいいちてんしやうだいいじん

又第一天照太神第二八幡大菩薩第三は山王等さんおうの三千余社さんぜん、昼夜に我が国を

ちようせき こっか

まほり朝夕に国家を見そなわし給たまう、其そのの上天照太神は内侍所ないじどころと申もうす

めいきよう
明鏡にかげをうかべ内裏にあがめられ給い

はちまんだいぼさつ ほうでん
八幡大菩薩は宝殿をすてて主上の頂を栖とし給うと申す、仏の加護と

もう しゅこ もう
申し神の守護と申しいかなれば彼の安徳と隠岐と阿波佐渡等の王は相伝の
しよじゅう
所従等に・せめられて・或は殺され・或は島に放れ・或は鬼となり・或は

だいじこく お たまい
大地獄には堕ち給いしぞ、日本国の叡山七寺東寺・園城等の十七万一千三

十七所の山山寺寺に・いささかの御仏事を行うに

みなてんちようちきゅう あんのん
は皆天長地久玉体安穩とこそ・いのり給い候へ、其の上八幡大菩薩は殊に

しゅこ
天王守護の大願あり、人王第四十八代に高野天皇の玉体に入り給いて云く、

こっかかいびやく
我が国家開闢より以来臣を以て君と為すこと未だ有らざる事なり、

あまつひつぎ
天之日嗣必ず皇緒を立つ等云云、又太神行教に付して云く我に百王守護

の誓い有り等云云。

てんのう ひやくおう
されば神武天皇より已来百王にいたるまではいかなる事有りと云玉体は

つつがあるべからず・王位を傾くる者も有るべからず、一生補処の菩薩は
中天なし・聖人は横死せずと申す、いかにとして彼れ彼の四王は王位を
・をいをとされ国をうばはるのみならず・命を海にすて身を島島に入れ
給いけるやらむ、天照太神は玉体に入りかわり給はざりけるか・八幡大
菩薩の百王の誓はいかになりぬるぞ、其の上安徳天皇の御宇には明雲の
座主・御師とな

り太上入道並びに一門怠状を捧げて云く「彼の興福寺を以て藤氏の氏寺にゆうどうなら いちもんたいじょう ささと為し春日の社を以て藤氏の氏神と為すが如く、延暦寺を以て平氏の氏寺な かすが もつ な こと えんりやくじ もつと号し日吉の社を以て平氏の氏神と号す」云云、叡山には明雲座主を始めと

して三千人の大衆五檀の大法を行い、大臣以下は家家に尊勝陀羅尼さんぜん たいしゅう だいほう だいじん ぞんしょう だらにふどうみょうおう 不動明王を供養し・諸寺・諸山には奉幣し大法秘法を尽くさずという事なし。

又承久の合戦の御時は天台の座主・慈円仁和寺の御室三井等の高僧等じょうきゅう おんとき てんだい ざす じえんにんな おむろみい こうそうを相催して・日本国にわたれる所の大法秘法残りなく行われ給う、所謂あいもよお にほんこく だいほうひほう たま いわゆるじょうきゅう 承久三年辛巳四月十九日に十五檀の法を行わる、天台の座主は一字金輪

法等五月二日は仁和寺の御室如法愛染明王法を紫宸殿にて行い給う、又六にんな おむろ あいぜんみょうおう ししんでん たま月八日御室守護經法を行い給う、已上四おむろしゅごきょうほう たま

十一人の高僧こうそう十五壇だいぼうの大法此この法を行なう事は日本にほんに第二度なり、権たゆうどの大夫殿
は此この事を知り給たまう事なければ御調じようぶく伏ふも行ない給たまはず、又いかに行ない給たまうと
も彼の法ひとびと法彼の人人ひとびとにはすぐべからず、仏法ぶつぽうの御力おんちからと申もうし王法いりよくの威力と
申もうし彼は国主こくしゆなり三界さんがいの諸王しよ守護しゆごし給たまう、此これは日本国にほんこくの民なりわづかに
小鬼こゝろぞまほりけん代代しよじゆうの所従しよじゆう・重

重たの家人たなり、譬たとへば王威おういを用もちいて民をせめば鷹たかの雉きをとり・のねずみを
食じやい蛇じやのかへるをのみ師子王ししの兎うを殺ころすにてこそ有あるべけれ、なにしにか
かるがろしく天神地祇てんじんちぎには申もうすべき、仏ぼ・菩薩ぼさつをばをどろかし奉たてまつるべき、
師子王ししが兎うをとらむには精進しやうじんすべきか、たかがきじを食たんにはいのり有ある
べしや、いかにいのらずとも大王だいおうの身

として民を失なわんには大水たいたいの小火たいふうをけし大風たいふうの小雲たいふうを巻まくにてこそ有あるべ
けれ、其その上だい大火いかに枯木からを加くうるがごとく大河だいに大雨いうを下くだすがごとく・王

法の力に大法だいほうを行い合せて頼朝よりともと義時よしときとの本命ほんめいと元神えんしんとをば梵王ぼんのうと帝釈たいしやく等に抜き取らせ給たまう、譬たとへば古酒こしゅに酔えいる者のごとし・蛇じゃの蝦かえるの魂たまを奪うがごとし・頼朝よりともと義時よしときとの御魂みたま・御名みな・御姓うじをばかきつけて諸尊しよそん諸神等の御足みその下にふませまいせていのりしかば・いかにもこらうべしともみへざりしに・いかにとして一年・一月も延のびずして・わづか二日一日にはほろび給たまいけるやらむ、仏法ぶつぽうを流布るふの国主こくしゅとならむ

ひとびと
人人

は能くよ能くよ御案ありて後生をも定め御いのりも有るあべきか。

而るしかに日蓮此の事を疑うたがいいしゆへに幼少ようしょうの比より随分ずいぶんに顕密二道けんみつにとう・並び

に諸宗しよしゅうの一切の経を・或あるは人にならあい・或あるは我れと開見かいけんし勘かんへ見て候へば

故の候いけるぞ、我が面を見る事は明鏡めいきようによるべし国土こくどの盛衰せいすいを計ること

は仏鏡にはすぐべからず、仁王經にんのうきよう・金光明經こんこうみょうきよう・最勝王經さいしょうおうきよう・守護經しゆご・

涅槃經ねはんきよう・法華經等の諸大乘しよだいじようきよう經を開き見奉り候に・仏法に付ぶつぽう

きて国も盛へ人の寿も長く又ふつぽう仏法に付いて国もほろび人の寿も短かかるべ

しとみへて候、譬たとへば水は能くよ船をたすけ水は能くよ船をやぶる、五穀ごこくは人

をやしない人を損ず、小波小風は大船を損ずる事かたし大波・大風たいふうには小

船

をやぶれやすし、王法の曲るは小波小風のごとし大国たいこくと大人だいにんをば失うしないがた

し、仏法ぶつぽうの失とがあるは大風・大波の小船をやぶるがごとし国うたがいのやぶる事疑うたがい

いなし、ぶつき 仏記に云く我滅するの後末代には惡法・惡人の国をほろぼしぶつぼう 仏法
を失には失すべからずたと 譬へば三千大千世界の草木を薪として須弥山をやく
にやけず劫火の時須弥山の根より大豆計りの火出でて須弥山やくが如く・
我が法も又此くの如し惡人・外道・天魔・波旬・五通等にはやぶられず、
仏の

ごとく六通の羅漢のごとく三衣を皮のごとく身に紆い・一鉢を兩眼にあて
たらむ持戒の僧等と・大風の草木をなびかすがごとくなる高僧等我が正法
を失うべし、うしな 其の時梵釈・日月・四天いかりをなし其の国に大天變・大
地天等

をおこ 発していさめむにいさめられずば其の国の内に七難を・をこし
父母・兄弟王臣万民等互に大怨敵となり梟鳥が母を食い破鏡が父をがい
するがごとく自国をやぶらせて結句他国より其の国をせめさすべしとみへ

て候。

いまにちれん いちだいしょうきよう めいきよう
今日蓮・一代聖教の明鏡をもつて日本国を浮べ見候に・此の鏡に浮ん

ひとびと こくてき ぶつてき うたがい いちだいしょうきよう めいきよう
で候人人は国敵・仏敵たる事疑いなし、一代聖教の中に法華経は明鏡

どうきよう
の中の神鏡なり、銅鏡等は人の形をばうかぶれども・いまだ心をばうかべ

ほけきよう
ず、法華経は人

たまた
の形を浮ぶるのみならず・心をも浮べ給へり、心を浮ぶるのみならず・先業

みらい かんが たま ほけきよう にょらい
をも未来をも鑒み給う事くもりなし、法華経の第七の巻を見候へば「如来

めつこ しよせつ いんねんおよ しだい したが こと
の滅後において仏の所説の経の因縁及び次第を知り義に随つて実の如く説

か

ん、日月の光明にちがつ こうみょうの能く諸の幽冥よろもろゆうみょうを除くが如く斯ごとの人・世間せけんに行じて能く

しゅじょう

衆生の闇を滅す」等云云、文の心は此の法華經を一字も一句も説く人は必

いちだいしきょう

ず一代聖教せんじんの浅深と次第とを能く能く弁えたらむ人の説くべき事に候、

たと

譬へば暦の三百六十日をかながうるに一日も相違せば万日俱に反逆すべ

みそひともじ

し、三十一字を連ねたる一句・一字も相違せば

いっく

三十一字共に歌にて有るべからず、謂る一經を誦誦すとも始め寂滅道場

じゃくめつどうじょう

そうりんさいご

より終り雙林最後にいたるまで次第と浅深とに迷惑せば其の人は我が身に

ごぎやく

五逆を作らずして無間地獄に入り此れを帰依せん檀那も阿鼻大城に墮つべ

いか ちじん

し何に況や智人・一人・出現して一代聖教の浅深勝劣を弁えん時・

がんそ めいわく そうでん

元祖が迷惑を相伝せる諸僧等・或は国師となり・或は

しよ

諸家の師となりなんとせる人人・自のきずが顕るる上人にかろしめられん

ひとびと

事をなげきて、上に挙ぐる一人の智人を・或は国主に訴へ・或は万人にそ

しらせん、其の時・守護の天神等の国をやぶらん事は芭蕉の葉を大風のさ
き小舟を大波のやぶらむがごとしと見へて候。

むりようぎきよう

じやくめつどうじよう

はんにやきよう

いつさいきよう

無量義経は始め寂滅道場より終り般若経にいたるまでの一切経を

ある

あ

ある

みけんしんじつ

ねはんぎよう

もう

・或は名を挙げ・或は年紀を限りて未顕真実と定めぬ、涅槃経と申すは仏

さいこ

おんものがたり

しよじようどう

しよきよう

おんものがたりよんじゅうよねん

最後の御物語に初め初成道より五十年の諸教の御物語四十余年をば

むりようぎきよう

じやくん

ほけきよう

しゆくん

たま

無量義経のごとく邪見の経と定め法華経をば我が主君と号し給う、中に

ほけきよう

いこんとう

ちよくせん

たま

たほう

たま

法華経ましまして已今当の勅宣を下し給いしかば・多宝

じゅつぽう

しよぶつ

ほんど

たま

がっし

ふほうぞう

・十方の諸仏加判ありて各各本土にかへり給いしを・月氏の付法蔵の二十

しよじよう

こんだいじよう

ぐつう

ほけきよう

じつぎ

たま

たと

四人は但小乗・権大乘を弘通して法華経の実義を宣べ給う事なし、譬へ

にほんこく

ほさつ

がんじんわじよう

ほけきよう

たま

ぐつう

ば日本国の行基菩薩と鑒真和尚との法華経の義を知り給いて弘通なかりし

がごとし、

かんど

漢土の南北の十師は内にも仏法の勝劣を弁えず外にも浅深に

めいわく

迷惑せり、又三論宗の吉蔵・華嚴宗の澄観・

さんろんしゆう

きちぞう

けこんしゆう

ちようかん

ほうそうしゅう 法相宗の慈恩・此れ等の人人は内にも迷い外にも知らざりしかども。
どうしんけんこ どうしんけんこ 道心堅固の人人なれば名聞をすてて天台の義に付きにき、知らずされば此
ひとびと ひとびと の人人は懺悔の力に依りて生死やはなれけむ、将た又謗法の罪は重く懺悔
よ しょうじ ひとびと の力弱くして阿闍世王無垢論師等のごとく地獄にや堕ちにけん。
あじゃせ むくろんし じごく お

ぜんむいさんそう　こんこうちさんそう　ふくうさんそう　さんそう　いっさい　しんこんし　もう
善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵等の三三蔵は一切の真言師の申すは

だいにちにやら

大日如来より五代六代の人人即身成仏の根本なり等云云、日蓮勸えて云く

ほうぬすみ

がんそ

ぬすびと

こんほん

ひとびと

がっし

だい

にちれんかんが

い

わ

く

法像の元祖なり盗人の根本なり、此れ等の人人は月氏よりは法像の

こんこうちようきよう

そしつちきよう

もたら

きようぎよう

けこんきよう

はん

に

や

き

よう

もん

金剛頂経・蘇悉地経等を齎し来る、此の経経は華嚴経・般若経・

ねはんぎよう

およ

ほけきよう

げれつ

き

よう

もん

き

よう

もん

もん

もん

涅槃経等に及ばざる上・法華経に対すれば七重の下劣なり、経文に見へて

赫赫たり明明たり、而るを漢土に來りて天台大師の止観等の三十巻を見て

舌をふるい心をまよ

わして此れに及ばずば我が経弘通しがたし、勝れたりと・いはんとすれば

妄語眼前なり、いかんがせんと案ぜし程に一つの深き大妄語を案じ出だし

給う、所謂大日経の三十一品を法華経二十八品並に無量義経に腹合せに合

せて三密の中の意密をば法華経に同じ其の上に印と真言とを加えて法華経

は略なり大日経は広なり・已にも入れず・

は略なり大日経は広なり・已にも入れず・

は略なり大日経は広なり・已にも入れず・

は略なり大日経は広なり・已にも入れず・

は略なり大日経は広なり・已にも入れず・

は略なり大日経は広なり・已にも入れず・

は略なり大日経は広なり・已にも入れず・

は略なり大日経は広なり・已にも入れず・

は略なり大日経は広なり・已にも入れず・

今にも入れず当にもはづれぬ、法華經をかたうどとして三説の難を脱れ結句
は印と真言とを用いて法華經を打ち落して真言宗を立てて侯、譬へば三女
が后と成りて三王を喪せしがごとし、法華經の流通の涅槃經の第九に我れ
滅して後の惡比丘等我が正法を滅すべし、譬へば女人のごとしと記し給い
けるは是なり、されば善無畏三蔵は
閻魔王に・せめられて鉄の繩七脉つけられてからくして蘇りたれども又
死する時は黒皮隱隱として骨甚だ露焉と申して無間地獄の前相・其の
死骨に顕れ給いぬ、人死して後色の黒きは地獄に墮つとは一代聖教に定
むる所なり、金剛智・不空等も又此れをもつて知んぬべし、此の人人は改悔は有り
と見へて候へども強盛の懺悔のなかりけるか、今の真言師は又あへて知る
事なし、玄宗皇帝の御代の喪いし事も不審はれて候。

にほんこく　こうぼう　じかく　ちしやう　ほうぼう　なら
日本国は又弘法・慈覚・智証此の謗法を習い伝えて自身も知ろしめさず
人は又をもひもよらず、且くは法華宗の人人・相論有りしかども終には
てんだいしゅう　おとろ　えいざん　いちだい
天台宗やうやく衰えて・叡山五十五代の座主・明雲・人王八十一代の安徳
てんのう　このかた　えいざん　いっこう　しんこんしゅう　ざす　いちだい
天皇より已来は叡山一向に真言宗となりぬ、第六十一代の座主顕真権僧正
てんだい　ざす　しんこんしゅう　うつ　し　か　ほつけ　しんこん
は天台座主の名を得て真言宗に遷るのみならず、然る後・法華・真言をす
いっこう　ほうぼう　ほうねん　でし　じやうきゅう　じやうぶく　い　ち　だい
て一向謗法の法然が弟子となりぬ、承久調伏の上衆・慈円僧正は第
六十二代並びに

五・九・七十一代いちだいの四代の座主ざす隱岐おきの法皇ほうこうの御師おんしなり、此等これらの人人ひとびとは
善無畏三蔵ぜんむいさんそう・金剛智三蔵こんこうちさんそう・不空三蔵ふくうさんそう・慈覺じかく・智証等ちしょうの真言しんこんをば器しはかわれ
ども一の智水ちすいなり、其その上天台宗てんだいしゅうの座主ざすの名を盗ちみて法華經ほけきょうの御領ちぎょうを知行
して・三千さんぜんの頭こづべとなり一國いっくわくの法の師あおと仰おほがれて大日經だいにちきょうを本もととして七重しげ
だれる真言しんこんを用もちいて八重勝すくれりと・をもへるは・天を
地とをもい民を王とあやまち石たまを珠とあやまつのみならず珠たまを石という人
なり、教主きょうしゅ釈尊しやくそん・多宝仏たぼうぶつ・十方じふぱうの諸仏しよぶつの御怨敵おんてきたるのみならず一切衆生いっさいしゅじょう
がんもくの眼目を奪うばい取り三善道さんぜんどうの門かどを閉ふぢ三惡道さんあくどうの道みちを開ひらく、梵釈ぼんしやく・日月にちがつ・四天してん
等の

諸天善神しよてんぜんじんいかでか此の人を罰たせさせ給たまはざらむ、いかでか此の人の仰あおぐ檀那だんな
をば守護しゆごし給たまうべき、天照太神てんしやうだいじんの内侍所ないじどころも八幡大菩薩はちまんたいぼさつの百王守護ひやくおうしゆごの御ち
かいも・いかでか叶たまはせ給たまうべき。

余・此の由を且つ知りしより已来・一分の慈悲に催されて粗随分の弟子にあらあら申せし程に次第に増長して国主まで聞えぬ、国主は理を親とし非を敵とすべき人にてをはすべきかがしたりけん諸人の讒言を・をさめて一人の余をすて給う、彼の天台大師は南北の諸人あだみしかども陳隋二代の帝重んじ給いしかば諸人の怨も

うすかりき、此の伝教大師は南都・七大寺讒言せしかども桓武・平城・嵯峨の三皇用い給いしかば怨敵もおかしがたし、今日蓮は日本国十七万一千三十七所の諸僧等のあだするのみならず国主用い給わざれば万民あだをなす事父母の敵にも超え宿世のかたきにも・すぐれたり、結句は二度の遠流一度の頭に及ぶ、彼の大莊嚴仏の末法の

四比丘並に六百八十万億那由佗の諸人が普事比丘一人をあだみしにも超へ師子音王仏の末の勝意比丘・無量の弟子等が喜根比丘をせめしにも勝れり、

かくとくびく
覺徳比丘がせめられし不輕菩薩が杖木をかをほりしも・限りあれば此れに
はよもすぎじとぞをばへ候。

も
若し百千にも一つ日蓮・法華經の行者にて候ならば日本國の諸人後生の

むげんじごく
無間地獄はしばらくをく、現身には國を失い他國に取られん事彼の徽宗・

きんそう
欽宗のごとく優陀延王・訖利多王等に申せしがごとくならん、又其の外は

あるそ
・或は其の身は白癩黒癩・或は諸惡重病疑いなかるべきかもし其の義

なくば又日蓮・法華經の行者にあらじ此の身現身には白癩黒癩等の諸惡

じゅうびょう
重病を受け取り後生には提婆瞿伽利等がごとく無間・大城に墮つべし

にちがつ
日月を射奉る修羅は其の矢還つて我が眼に立ち師子王を吼る狗犬は我が腹

をやぶる釈子を殺せし波琉璃王は水中の大火に入り仏の御身より血を出だ

だいばだった
せし提婆達多是現身に阿鼻の炎を感じり金銅の釈尊をやきし守屋は四天王

とうだいじこうふく
の矢にあたり東大寺興福寺を焼きし清盛入道は現身に其身もうる病をうけ

にき彼等かれらは皆大事みなだいじなれども日蓮にちれんが事に合あすれば小事しょうじなり小事しょうじすら猶なほしるしあり大事だいじいかでか現罰げんばちなからむ。

悦よろこばしいかな經文きやうもんに任まかせて五五百歳ごうせん広宣流布ふをまつ悲かなしいかな鬭諍とうじやうけんこ堅固

の時に當あつて此の国修羅道しゆらどうとなるべし、清盛入道きよもりに入うどうと頼朝よりともとは源平の兩家本

より狗犬くけんと猿猴えんこうのごとし、少人・少福の頼朝よりともをあだせしゆへに宿敵ふびんたる

にゅうどう

いちもん

入道いりどうの一門いちもんほろびし上科じやうなき主上の西海さいかいに沈たみ給たまいし事は不便ふびんの事なり、

此これは教主きやうしゆ釈尊しやくそん・多宝たほう・十方じゆつぽうの諸仏しよぶつの

おんつかい

せけん

いちぶん

とが

しよにん

御使ごつかいとして世間せけんには一分いちぶんの失うなき者を一國しよにんの諸人しよにんにあだますのみならず

兩度の流罪るどいに當あたり

かまくら

ちやうてき

そ

菴しやくそんには釈尊ほんそんを本尊ほんそんとし一切いっさい經きやうを安置あんちしたりし其その室むろを刎はねこぼちて・

ぶつそうきやうかん

しよにん

いっさいきやう

あんち

そ

は

にちれん

仏像ぶつぞう經卷きやうかんを諸人しよにんにふまするのみならず糞泥ふんぬいにふみ入れ日蓮にちれんが懷かいいちゆう中に

ほけきやう

しよにん

いっさいきやう

あんち

そ

は

にちれん

かいいちゆう

にちれん

法華經ほけきやうを入れまいらせて候こういしを・とりいだして頭こづへをさんざんに打ちさい

法華經ほけきやうを入れまいらせて候こういしを・とりいだして頭こづへをさんざんに打ちさい

なむ、此の事如何なる宿意もなし当座の科もなし、ただ法華經を弘通する計りの大科なり。

にちれん

日蓮天に向つて声をあげて申さく法華經の序品を拝見し奉れば梵釈と

にちがつ

してん

りゅうおう

あしゅら

もう

ほけきよう

じよほん

はいけん

たてま

ほんしやく

日月と四天と竜王と阿修羅と二界八番の衆と無量の国土の諸神と集会し

たま

まさ

だいいち

むりよう

こくど

せっせんどうじ

しゅうえ

給いたりし時已今当に第一の説を聞きし時・我とも雪山童子の如く身を

くよう

やくおうぼさつ

ごと

ひじ

供養し薬王菩薩の如く臂をも・やかんとをいしに、

きようしゅしやくそん

たほう

十方の諸仏の御前にして今・仏前に於て自ら誓言を説けと諫曉し給いし

じゅつほう

しよぶつ

おんまえ

ぶつぜん

おい

みずか

せいこん

かんぎよう

たま

かば・幸に順風を得て世尊の勅の如く当に具さに奉行すべしと二処三会の

衆・一同に大音声

を

衆・一同に大音声

を

放ちて誓い給いしは・いかんが有るべき、唯仏前にては是くの如く申して
多宝・十方の諸仏は本土にかへり給う、釈尊は御入滅ならせ給いて・ほ
ど久くなりぬれば・末代辺国に法華經の行者有りとも梵釈・日月等・御
誓いをうちわすれて守護し給う事なくば日蓮がためには一旦のなげきなり、
無始已來・鷹の前のきじ・蛇の前のかへる・☆の前のねずみ・犬の前のさ
ると有りし時もありき、ゆめの代なれば仏・菩薩・諸天にすかされ・まい
らせたりける者にてこそ候はめ。

なによりも・なげかしき事は梵と帝と日月と四天等の南無妙法蓮華經の
法華經の行者の大難に値をすてさせ給いて現身に天の果報も尽きて花の
大風に散るがごとく雨の空より下るごとく其の人命終入阿鼻獄と無間・
大城に墮ち給はん事こそあはれにはをぼへ候へ、設い彼の人人は三世十方
の諸仏をかたうどとして知らぬよしのべ申し

たまにちれん
給うとも日蓮は其の人人には強きかたきなり、若し仏の返願へんげんをはずば
ほんしやくにちがつしてんむげんだいじょう
梵釈・日月・四天をば無間・大城には必ずつけたてまつるべし、日蓮が
まなこ
眼をそろしくば・いそぎいそぎ仏前の誓いをばはたし給へ、日蓮が口、〇。
又むぎひとひつ驚目両貫・わかめ・かちめ・みな一俵給い畢んぬ、干
い・やきごめ・各各一かうぶくろ給い畢んぬ、一一の御志ごしはかきつ
くすべしと申せども法門巨多ほうもんこたに候へば留め畢んぬ、他門にきかせ給うたま
なよ大事だいじの事どもかきて候なり。

◆三七九

うえのとの
上野殿御消息

建治元年

五十四歳御作 与

なんじょうときみつ
南条時光

1526p

三世さんぜの諸しよ仏ぶつの世よに出いでさせ給たまいても皆みな皆みな四恩しおんを報はぜよと説とき・
三皇さんこう・五帝ごてい・孔子こうし・老子ろうし・顔回がんかい等の古いにしえの賢人けんじんは四徳しとくを修しゆせよとなり、四徳
とは一には父母ふぼに孝あるべし・二には主に忠あるべし・三には友に合あうて
礼あるべし・四に

は劣おとれるに逢あうて慈悲じひあれとなり、一に父母ふぼに孝あれとはたとひ親はものに覺おほえずとも悪さまなる事を云うとも聊いささかかも腹も立てず誤あやまりる顔を見せず親の云う事に一分いちぶんも違たがへず親によりき物を与へんと思ひてせめてする事なくば一日に二三度えみて向へとなり、二に主に合あうて忠あるべしとは・いささかも主にうしろめたなき心ある

べからず、たとひ我が身は失うしなはるとも主にはかまへてよかれと思ふべし、かくれての信あればあらはれての徳あるなりと云云、三には友にあふて礼あれとは友達の一日に十度・二十度来れる人なりとも千里・二千里・来れる人の如ごとく思ふて礼儀いささか・をろかに思ふべからず、四に劣おとれる者に慈悲じひあれとは我より劣りたらん人を

ば我が子の如ごとく思ひて一切いっさいあはれみ慈悲あるべし、此これを四徳と云うなり、かくのごとくふるまい賢人けんじんとも聖人しょうにんとも云うべし、此の四の事あれば余の事

にはよからねどもよき者なり、かくのこと是くの如く四の得を振舞ふ人は外典三千巻をよまねども読みたる人となれり。

一に仏教ぶつぎょうの四恩とは一には父母ふぼの恩を報ぜよ・二には国主こくしゅの恩を報ぜよ・三には一切衆生いっさいしゅじょうの恩を報ぜよ・四には三宝さんぼうの恩を報ぜよ、一に父母ふぼの恩を報ぜよとは父母ふぼの赤白せきびやく二☆たい・和合わごうして我が身となる、母の胎内たいないに宿る事・二百七十日・九月の間・三十七度死るほどの苦みあり、生落うみおとす時たへがたしと思ひ念ずる息・頂うなじより出づる煙り梵天ぼんてんに至るいた、さて生落うみおとされて乳をのむ事一百八十余石・三年が間は父母ふぼの膝に遊び人となりて仏教ぶつぎょうを信ずれば先づ此の父と母との恩を報ずべし、父の恩の高き事須弥山しゅみせん・猶なおひきし・母の恩の深き事大海還たいかいがえつて浅し、相構かまえて父母ふぼの恩を報ずべし、二に国主こくしゅの恩を報ぜよとは・生れて已来このかた・衣食いしょくのたぐひより初めて・皆みな是れ国主こくしゅの恩を得てある者な

れば現世安穩・後生善処と祈り奉るべし、三に一切衆生の恩を報ぜよとは、
されば昔は一切の男は父なり・女は母なり・然る間・生生世世に皆恩ある
衆生なれば皆仏になれと思ふべきなり、四に三宝の恩を報ぜとは・最
初成道の華嚴經を尋ねれば経も大乘・仏も報身如来にて坐ます間・二乗
等は昼の梟・夜の鷹の如くして・かれを聞くと

へども耳しゐ・目しゐの如し、然る間・四恩を報すべきかと思ふに女人を
きらはれたる間・母の恩報じがたし、次に仏阿含・小乗經を説き給ひし
事・十二年・是こそ小乗なれば我等が機にしたがふべきかと思へば・男
は五戒・女は十戒・法師は二百五十戒・尼は五百戒を持ちて三千の威儀を
具すべしと説きたれば末代の我等かなふべしとも・

おぼえねば母の恩報じがたし、況や此の經にもきらはれたり、方等・般若
・四十余年の經經に皆女人をきらはれたり、但天女成仏經・觀經等に
すこし女人の得道の經文有りといへども・但名のみ有つて実なきなり、
其の上未顕真實の經なれば如何が有りけん、四十余年の經經に皆女人を
嫌われたり、又最後に説き給ひたる涅槃經にも女人を

嫌はれたり、何れか四恩を報ずる經有りと尋ぬれば法華經こそ女人成仏す
る經なれば、八歳の竜女・成仏し・仏の姨母・☆曇弥女・耶輸陀羅

比丘尼記 ☆ 記にあづかりぬ、されば我等が母は但女人の体にてこそ候へ・
畜生にもあらず蛇身にもあらず・八歳の童女だにも仏になる、如何ぞ此
の經の力にて我が母の仏にならざるべき、されば法華經を持つ人は父と母
との恩を報ずるなり、我が心には報ずると思はねども此の經の力にて報ず
るなり。

然る間・釈迦・多宝等の十方無量の仏・上行・地涌等の菩薩も普賢・
文殊等の迹化の大士も舍利弗等の諸大声聞も・大梵天王・日月等の明主
諸天も・八部王も・十羅刹女等も・日本国中の大小の諸神も・総じて此の
法華經を強く信じまいらせて余念なく一筋に信仰する者をば影の身にそふ
が如く守らせ給ひ候なり、相構て相構て心を翻へさず・一筋に信じ給ふ
ならば・現世安穩・後生善処なるべし、
恐恐 謹言。

日蓮花押

◆三八〇

南条殿御返事ごへんじ

建治二年正月

五十五歳御作

与南条七郎次郎

1529p

はるのはじめの御つかひじたもう自他申しこめまいらせ候、さては給たまはるところ
のすずの物の事、もちゐ・七十まい・さけひとつつ・いもいちだ・河のり
ひとかみぶくろ・だいこんふたつ・やまのいも七ほん等なり、なんごろの
おんころぎし御心ざしは・しなじなのものに・あらはれ候いぬ。

ほけきよう法華經の第八の巻に云くいわ「所願虚むなしからず亦現世またげんせに於て其の福報を得ん」
いわ又云く「当まさに現世げんせに於て現の果報かほうを得べし」等云云、天台大師云く「天子てんし
の一言虚むなしからず」又云くいわ「法王虚むなしからず」等云云、賢王けんおうとなりぬれば
・たとひ身をほろぼせどもそら事せず、いわうや釈迦しゃかにやらい如来は普明王ふみようとおは

せし時ははんぞく王のたてへ入らせ給い^{たまひ}

き不妄語戒^{もうご}を持たせ給い^{たまひ}しゆへなり、かり王とおはせし時は実語^{じつご}少人・大

妄語^{もうご}入地獄^{じごく}とこそおほせありしか、いわうや法華經^{ほけきよう}と申すは仏・我と

ようとうせつしんじつ

要当說真実^{たまひ}となのらせ給い^{たまひ}し上・多宝^{たほうぶつ}・十方^{じゅうぽう}の諸^{しよ}仏^{ぶつ}あつまらせ給い^{たまひ}て

にちがつ しゅうせい

日月・衆星の

ならばせ給^{たま}うがごとくに候いしぜせきなり、法華經^{ほけきよう}にそら事あるならばな

に事をか人信^{くよう}すべき、かかる御經^{ごきやう}に一華^{しやかに}一香^{いっかう}をも供養^{くよう}する人は過去^{かこ}に十

億^{おく}の仏^{ぶつ}を供養^{くよう}する人なり、又釈迦^{しやかに}如来^{にやらい}の末法^{まつぽう}に世^よのみだれたらん時^{とき}・王臣^{おうしん}

・万民^{ばんみん}・心を一^{いっ}にして一人^{ひとり}の法華經^{ほけきよう}の行者^{ぎやうじや}をあだまん時^{とき}・此^この行者^{ぎやうじや}かん

ぱちの小水^{せうすい}に魚^{うい}のすみ・万人^{ばんにん}にかこまれたる鹿^{しか}のごとくならん時^{とき}、一人あ

りて・とぶらはん人は生身^{しょうしん}の教主^{きやうしゅ}釈尊^{しやくそん}を一劫^{いつこく}が間^ま・三業^{さんごう}相応^{さうおう}して供養^{くよう}し

まいらせたら

んよりなを功徳くどくすぐるべきよし・如来にょらいの金言きんげん・分明ふんみょうなり、日は赫赫かくかくたり月
は明明めいめいたり・法華經ほけきょうの文字もんじはかくかく・めいめいたり・めいめい・かくか
くたり、あきらかなる鏡にかを・をうかべ、すめる水に月のうかべるがご
とし。

しかるに亦また於現世げんせ得其福報ちよくせんの勅宣ちよくせん・当於現世げんせ得現果報げんかほうの鳳詔ほうしやう・南条の
七郎次郎殿にかぎりて・むなしかるべしや、日は西よりいづる世月は地よ
りなる時なりとも・仏の言むなしからじとこそ定めさせ給たまいしか、これを
もつて・おもうに慈父じふ過去の聖靈しょうりやうは教主きようしゆ釈尊しやくそんの御前おんまえにわたらせ給たまい・
だんなは又現世げんせに大果報かほうをまねかん事疑うたがいあるべからず、かうじんかうじ
ん。

建治二年正月十九日

にちれん かおう
日蓮 花押

◆三八一

南条殿御返事ごへんじ

南条殿御返事ごへんじ

建治二年三月

五十

五歳御作

1530p

いものかしら・河のり又わさび・一一・人人ひとびとの御志ごころざしたまわ承り候いぬ、鳥の

かいこをやしなひ・牛の子を牛のねぶるが如ごとし、夫それ衣は身をつつみ・食

は命をつぐ、されば法華經ほけきようを山中にして読みまいらせ候人を・ねんごろに

・やしなはせ給たまふは、釈迦しゃかぶつ仏をやしなひまいらせ・法華經ほけきようの命をつぐにあ

らずや、妙莊嚴王みょうそうこんは三聖を山中にやしなひて・

沙羅樹王しゃらじゆ・仏となり、檀王だんおうは阿私仙人あしせんじんを供養くようして釈迦しゃかぶつ仏とならせ給たまふ、さ

れば必ずよみかかねども・よみかく人を供養くようすれば仏になる事うたがい疑ひなか

りけり、經に云く「是の人・仏道に於て決定して疑有ること無けん」
なむみょうほうれんげきよう
南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

建治二年三月十八日

にちれん かおう
日蓮 花押

きんじよう
謹上 南条殿御返事

橘三郎殿・太郎大夫殿・一紙に云云恐れ入り候、返す返すははき殿読み

たま
聞かせまいらせ給へ。

◆三八二

南条殿御返事ごへんじ

建治二年三月 五十五歳御

作 1531p

かたびら一つ・しをいちだ・あぶら五そう・給ひ候い了おわんぬ、ころもは
かんをふせぎ又ねつをふせぐ・みをかくし・みをかざる、法華經ほけきょうの第七や
くわうぼんに云くいわ「如裸者得衣」等云云、心ははだかなるものの・ころも
をへたるがごとし、もんの心はうれしき事をとかれて候。

ふほうぞうの人のなかに商那和衆もうと申す人あり衣をきてむまれさせ給うたま、
これは先生せんしやうに仏法ぶつぽうにころもを・くやうせし人なり、されば法華經ほけきやうに云くいわ「柔
和忍辱衣にんにく」等云云、こんろん山には石なしみのぶのたけにはしをなし、石
なきところには・たまよりも・いしすぐれたり、しをなきところには・し

を・こめにも・すぐれて候、こくおう国王のたから

は左右さうの大臣だいじんなり左右さうの大臣だいじんをば塩梅あんばいと申もうす、みそしを・なければよわた

りがたし左右さうの臣おみなければ国をさまらず、あぶらと申もうすは涅槃經ねはんぎょうに云いわく風

のなかに・あぶらなし・あぶらのなかに・かぜなし・風をぢする第一だいいちのく

すりなり、かたがたのものをくり給たまひいて候・御心おんこころざしのあらわれて候事申もうす

ばかりなし、せんするところは・こなんでうどのの法華經ほけきょうの御しんようの

ふかかりし事のあらわるるか、王の心ざしをば臣おみのべ・をやの心ざしをば

子の申もうしのぶるとはこれなり、あわれことのの・うれしと・をぼすらん。

つくしにを・をはしの太郎と申もうしける大名ありけり、大将どのの御かん

きを・かほりて・かまくらゆひのはまつちのろうにこめられて十二年めし

はじしめられしときつくしをうちいでしに・ごぜんにむかひて申せしは・

ゆみやとるみとなりてきみの御かんきを・かほらんことは・なげきならず、

又ござんに・をさなくよりなれしかいまはなれん事いうばかりなし、これ
はさてをきぬ、なんしにても・によしにても一人なき事なげきなり、ただ
しくわいにん

のよし・かたらせ給^{たま}う・をうなごにてやあらんずらん・をのこごにてや
候^{そうら}はんずらん、ゆくへをみざらん事くちおし、又かれが人となりて・ちち
というものも・なからんなげき・いかがせんと・をもへども・力^{およ}及ばずと
ていでにき。

かくて月ひすぐ・れことゆへなく生れにき・をのこごにてありけり、七
歳のとし・やまでらにのぼせてありければ・ともだちなりけるちごども・
をやなしとわらひけり、いへにかへりて・ははにちちをたづねけり、はは
のぶるかたなくしてなくより外^{ほか}のことなし、此のちご申^{もつ}す天なくしては雨
ふらず地なくしてはくさをいず、たとい母

ありとも・ちちなくばひととなるべからず、いかに父のありどころをば・
かくし給^{たま}うぞとせめしかば・母せめられて云うわちごをさなければ申^{もつ}さぬ
なり・ありやうはかうなり、此のちごなくなく申^{もつ}すやう・さてちちのかた

みはなきかと申せしかば、これありとて・ををはしのせんその日記☆なら
びにはらの内なる子に・ゆづれる自筆じひつの状なり、

いよいよをやこひしくてなくより外ほかの事なし、さて・いかがせんといゐし
かば・これより郎従ろうじゅうあまた・ともせしかども・御かんきをかほりければ・

みなちりうせぬ、そののちは・いきてや又しにてや・をとづる人なしと
・かたりければ・ふしころび・なきて・いさむるをも・もちゐざりけり。

はいわく・をのれをやまでらにのぼする事は・をやのけうやうのため
なり、仏に花をもまいらせよ・経をも一卷よみて孝養こうようとすべしと申せしか
ば・いそぎ寺にのぼりて・いえへかへる心なし、昼夜に法華経ほけきようをよみしか
ば・よみわたりけるのみならず・そらに・をぼへてありけり、さて十二の
とし出家しゅっけをせずして・かみをつつみ・とかくしてつくしをにげいでて・か
まくらと申すところへたづねいりぬ。

八幡はちまんの御前おんまえにまいりて・ふしをがみ申しけるは・

八幡大菩薩はちまんだいぼさつは日本にほん第十

六ろくの王おう・本地ほんちは靈山りょうぜん淨土じょうどに法華經ほけきょうをとかせ給たまいし教主きょうしゅ釈尊しやくそんなり、衆生しゅじょう

のねがいをみて給たまわんがために神とあらわれさせ給たまう、今わがねがいみて

させ給たまえ

、をやは生きて候か・しにて候かと申して・いぬの時より法華經をはじめて・とらの時まで・よみければ・なにとなき・をさなきこへはうでんに・ひびきわたり・こころすごかりければ・まいりてありける人人も・かへらん事をわすれにき、皆人いちのやうに・あつまりてみければ・をさなき人にて法師ともをぼえず・をうなにてもなかりけり。

をりしも・きやうのにゐどの御さんけいありけり、人めをしのばせ給いてまいり給いたりけれども御經のたうとき事つねにも・すぐれたりければはつるまで御聴聞ありけりさてかへらせ給いて・おはしけるがあまりなごりをしさに人をつけてきて大將殿へかかる事ありと申させ給いければめして持仏堂にして御經よませまいらせ給いけり。

さて次の日又御聴聞ありければ西のみかど人さわぎけり、いかなる事ぞとききしかば・今日はめしうどの・くびきらると・ののしりけり、あわ

れ・わがをやは・いままで有^あるべしとは・をもわねども・さすが人のくび
をきるると申せば我が身のなげきとをもひて・なみだぐみたりけり、大
将殿あやしと・ごらんじて・わちごはいかなるも

のぞ・ありのままに申せとありしかば・上くだんの事・一一に申しけり、
をさふらひにありける大名・小名・みすの内みな・そでをしぼりけり、大
将殿・かぢわらをめして・をほせありけるは・大はしの太郎という・めし
うど・まいらせよとありしかば・只^{ただ}今くびきらんとて・ゆいのはまへ・つ
かわし候いぬ、いまはきりてや候らんと申せしかば・こ

のちご御まへなりけれども・ふしころびなきけり、を・をせのありけるは
・かぢわらわれと・はしりて・いまだ切らずばぐしてまいれとありしかば
・いそぎいそぎゆいのはまへはせゆく、いまだいたらぬに・よばわりけれ
ばすでに頸切らんとて刀をぬきたりけるときなりけり。

さてかじわらを・をはしの太郎をなわつけながらぐしてまいりて・をを
にはにひきすへたりければ・大将殿こ

のちごに・とらせよとありしかば・ちごはしりをりて・なわをときけり、
大はしの太郎は・わが子ともしらず・いかなる事ゆへに・たすかるともし
らざりけり、さて大將殿又めして・このちごに・やうやうの御ふせたびて
・ををはしの太郎をたぶのみならず、本領をも安堵ありけり。

大將殿をほせありけるは法華經の御事は昔よりさる事とわききつたへた
れども・丸は身にあたりて二つのゆへあり、一には故親父の御くびを大上
入道に切られてあさましとも・いうばかりなかりしに、いかなる神・仏に
か申すべきと・おもいしに走湯山の妙法尼より法華經をよみつたへ千部と
申せし時、たかをのもんがく房をやのくび

をもて来りて・みせたりし上・かたきを打つのみならず・日本国の武士の
大將を給いてあり、これひとへに法華經の御利生なり、二つには・このち
ごが・をやをたすけぬる事不思議なり、大橋の太郎というやつは頼朝きく

わいなりとをもうたとい勅宣なりとも・かへし申して・くびをきりてん、

あまりのにくさにこそ十二年まで・土のろうに

は入れてありつるに・かかる不思議あり、されば法華經と申す事はありが
たき事なり、頼朝は武士の大將にて多くのつみを・つもりてあれども法華經
を信じまいらせて候へば・さりとともと・こそをもへと・なみだぐみ給いけ
り。

今の御心ざしおんこころざしみ候へば故なんでうどのは・ただ子なれば・いとをしとわ
・をぼしめしけるらめども・かく法華經をもて我がけうやうをすべしとは
・よもをぼしたらじ、たとひつみありて・いかなるところに・おはすとも
・この御けうやうの心ざしをば・えんまほうわう・ぼんでん・たひしやく
・までも・しろしめしぬらん、釈迦仏・法華經もいかでか・すてさせ給う
べき、かのちこのちちのなわを・ときしと・この御心ざしおんこころざし・かれにたがわ

ず、これはなみだをもちて・かきて候なり。

又むくりのおこれるよし・これにはいまだうけ給たまわらず、これを申せば

にちれん

日蓮房はむくり国のわたるといへば・よろこぶと申もうす・これゆわれなき事

なり、かかる事あるべしと申せしかば・あだがたきと人ごとにせめしが・

きようもん

経文かぎり

あれば来るなり・いかにいうとも・かなうまじき事なり、失^{とが}もなくして国
をたすけんと申せし者を用い^{もち}こそあらざらめ、又法華經の第五の巻をもつ
て日蓮^{にちれん}がおもてをうちしなり、梵天^{ぼんてん}・帝釈^{たいしやく}・是^{これ}を御覽ありき、鎌倉の
八幡大菩薩も見させ給^{たま}いき、いかにも今は叶^{かな}うまじき世にて候へば・かか
る山中にも入りぬるなり、各各も不便^{ふびん}とは思へ

ども助けがたくやあらんずらん、よるひる法華經に申し候なり、御信用^{ごしんよう}の
上にも力もをしま^{もつ}ず申させ給^{たま}え、あえてこれよりの心ざしのゆわきにはあ
らず、各各の御信心^{しんじん}のあつくうすきにて候べし、たいしは日本^{にほん}国^{こく}のよき人^{ひと}人^{びと}
は一定いけどりにぞなり候^{そつじ}はんずらん、あらあさましや・あさましや、

きようきようきんげん。
恐恐 謹言。

後三月二十四日

南条殿御返事
ごへんじ

にちれんかおう
日蓮花押

◆三八三

九郎太郎殿御返事こへんじ

建治二年九月 五十五歳

御作

1535p

いゑの芋一駄・送り給ひ候、こんろん山と申す山には玉のみ有りて石なし、石ともしければ玉をもつて石をかう、はうれいひんと申す浦には木草もくそうなし・いをもつて薪たぎをかう、鼻に病ある者はせんだん香・用にあらず、眼まなこなき者は明なる鏡なにかせん。

此の身延の沢と申す処ところは甲斐国かいのくに・波木井の郷はきりの内の深山みやまなり、西には七面もつのかれと申す・たけあり・東は天子てんしのたけ・南は鷹取たかとりのたけ・北は身延のたけ・四山の中に深き谷あり・はこのそこのごとし、峯さるにははこの☆の音こえかまびすし、谷にはたいかいの石多し。

然^{しか}れどもするがのいものやうに候石は一も候はず、いものめづらしき事
くらき夜のもしびにもすぎ・かはけ

る時の水にもすぎて候ひき、いかに・めづらしからずとは・あそばされて
候ぞ、されば其には多く候か・あらこひしあらこひし、法華經・釈迦仏に
ゆづりまいらせ候いぬ、定めて仏は御志いんぎふしをおさめ給うなれば御悦よろこび候ら
ん、靈山淨土へまひらせ給たまいたらん時・御尋たずねあるべし、恐恐謹言。
りようぜんじようど

建治二年丙子九月十五日

日蓮花押

九郎太郎殿御返事

◆三八四

本尊供養御書

建治二年十二月 五十五歳御作

与南条平七郎

1536p

法華經御本尊御供養の御僧膳料の米一駄・蹲鴟一駄・送り給ひ候い畢ん

ぬ、法華經の文字は六万九千三百八十四字・一一の文字は我等が目には黒
き文字と見え候へども仏の御眼には一一に皆御仏なり、譬えば金粟王と申

せし国王は沙を金となし・釈摩男と申せし人は石を珠と成し給ふ、玉泉に入りぬる木は瑠璃と成る・大海に入りぬる

水は皆鹹し、須弥山に近づく鳥は金色となるなり、阿伽陀薬は毒を薬とな

す、法華經の不思議も又是くの如し凡夫を仏に成し給ふ、蕪は鶉となり

・山の芋はうなぎとなる・世間の不思議以て是くの如し。

何に況や法華經の御力をや、犀の角を身に帶すれば大海に入るに水・身を

去る事五尺、梅檀と申す香を身にぬれば大火に入るに焼くこと無し、

法華經を持ちまいらせぬれば八寒地獄の水にもぬれず八熱地獄の大火にも

焼けず、法華經の第七に云く「火も焼くこと能わず水も漂すこと能わず」

等云云、事多しと申せども年せまり御使急ぎ候へば筆を留候い畢んぬ。

建治二年丙子十二月 日

日蓮花押

南条平七郎殿御返事

◆三八五

上野殿御返事うえのとのごへんじ

建治三年五月 五十六歳

御作

1537p

五月十四日にいものかしら一駄・わざとおくりたびて候、とうじ当時のいものは人のいとまと申し珠たまのごとしくすりのごとし、さてはおほせつかはされて候事たまうけ給わり候いぬ。

尹吉甫いんきつぽと申せし人は・ただ一人子あり・伯奇はくきと申すもう、をやも賢なり・子もかしこし・いかなる人かこの中をば申したもうがふべきと・おもひしかども・けいぼ継母よりより・よりうたへしに用いざりしほどに・けいぼ継母すねんが間・やうやうのたばかりを・なせし中に、蜂と申すもうむしを我がふところに入れて・いそぎいそぎ伯奇はくきにとらせて・しかも父にみせ・われをけそうすると

もう
申しなして・うしなはんとせしなり。

びんばさら王と申せし王は賢王けんおうなる上仏の御だんなの中に閻浮第一えんぶだいいちなり、

しかもこの王は摩竭提国まかたこくの王なり、仏は又此の国にして法華經ほけきょうを・とかん

とおぼししに・王と仏と一同なれば一定法華經ほけきょうとかれなんとみへて候しに、

提婆達多だいばだつたと申せし人・いかんがして此の事をやぶらんと・おもひしに・す

べて・たよりなかりしかば・とかうはかり

しほどに・頻婆沙羅王びんばしやらの太子阿闍世王たいしあじゃせをとしごろとかくかたらひて・やう

やく心をと・をやと子とのなかを申したがへて・阿闍世王あじゃせをすかし父の

頻婆沙羅王びんばしやらをころさせ・阿闍世王あじゃせと心を一にし提婆だいばと阿闍世王あじゃせと一味いちみとな

りしかば・五天竺てんじくの外道げどう・悪人あくにん・雲かすみのごとくあつまり・国をたび・

たからをほどこし・心をやわらげすかししかば・一

国の王すでに仏の大怨敵おんてきとなる、欲界よっかい・第六天だいろくてんの魔王まおう・無量の眷属むりょうけんそくを具足ぐそく

してうち下り、まかだこく 摩竭提国の提婆・だいは 阿闍世・あじゃせ 六大臣等の身に入りかはりしか
 ば・形は人なれども力は第六天の力なり、だいろくてん 大風の草木をなびかすよりも・たいふう 大風の大海の波をたつるよりも・たいかい 大地震の大地をうごかすよりも・だいじん 大火の
たいふう 連宅をやくよりも・さはがしくをぢわななきし事

ば・形は人なれども力は第六天の力なり、大風の草木をなびかすよりも・

大風たいふうの大海たいかいの波をたつるよりも・大地震だいじしんの大地だいちをうごかすよりも・大火だいかの

連宅をやくよりも・さはがしくをぢわななきし事

なり。

さればはるり王と申せし王は阿闍世王あじゃせにかたらはれ釈迦仏しゃかぶつの御身おんみしたし
き人数にんずう百人切りころす、阿闍世王あじゃせは醉象でしを放ちて弟子でしを無量無辺むりようむへんふみころ
させつ、或あるは道に兵士をすへ、或あるは井に糞ふつでしを入れ、或あるは女人あるをかたら
ひて、そら事いひつけて仏弟子ぶつでしをころす、舍利弗しゃりほつ・目連もくれんが事にあひ・かる
だいが馬のくそにうづまれし、仏はせめられて一夏いちげ

九十日・馬のむぎをまいりしこれなり、世間せけんの人のおもはく・悪人あくにんには仏
の御力おんちからもかなはざりけるにやと思ひて信じたりし人人ひとびとも音をのみて・もの
申さず眼まなこをとちてものを・みる事なし、ただ舌をふり手をかきし計りばかなり、
結句けっくは提婆達多だいばだつた・釈迦如来しゃかによらいの養母・蓮華比丘尼れんげびくにを打ちころし・仏の御身おんみよ
り血を出せし上・誰の人か・かたうどになるべき、かくやうやうになりて
の上・いかがしたりけん法華経ほけきようをとかせ給いぬ、此この法華経ほけきように云く「而もしか

此の経

は如来にょらいの現在げんざいにすら猶なほ怨嫉おんしつ多し況や滅度めつどの後をや」と云云、文の心は我が

いまし

現在いましして候だにも此の経の御かたきかくのごとし、いかにいわうや末代まつだいに

ほけきよう

法華経を一字一点もとき信ぜん人をやと説かれて候なり、此れをもつてお

ほけきよう

もひ候へば仏・法華経をとかせ給たまいて今にいたるまでは二千二百二十余年

ほけきよう

になり候へどもいまだ法華経を仏のごと

だいなん

くよみたる人は候はぬか、大難だいなんをもちてこそ・法華経しりたる人とは申もうす

てんだいだいし

でんぎようだいし

ほけきよう

ぎようじや

べきに、天台大師・伝教大師こそ法華経の行者とは・みへて候しかども

ざいせ

だいなん

なんざん

ほくひち

なんと

ななだいじ

なん

在世のごとくの大難なし、ただ南三・北七・南都・七大寺の小難なり、い

こくしゆ

まだ国主

ばんみん

かたきとならず・万民つるぎをにぎらず・一国悪口あつくをはかず、滅後めつこに法華経

ざいせ

だいなん

なん

を信ぜん人は在世の大難よりもすぐべく候なるに同じほどの難なんだにも来ら

ず・何に況いかやすぐれたる大難多難だいなんなんをや。

虎こうそぶけば大風たいふうふく・竜りゅうぎんずれば雲をこる・野兔うさぎのうそぶき驢馬ろばの
いはうるに・風ふかず雲をこる事なし、愚者ぐしゃが法華經ほけきょうをよみ賢者けんじやが義ぎを談だんず
る時は国もさわかず事もをこらず、聖人しょうにん出現しゅつげんして仏のごとく法華經ほけきょうを談
ぜん時・一国もさわぎ在世ざいせにすぎたる大難だいなんをこるべしとみえて候、今日蓮いまにちれん
は賢人けんじんにもあらず・まして聖人しょうにんは・おもひも

よらず天下第一てんかだいいちの僻人びやくにんにて候が・但經文計りにはあひて候やうなれば

大難来り候へば父母ふぼのいきかへらせ給たまいて候よりもにくきものことにあ

ふよりも・うれしく候なり、愚者ぐしやにて而も仏しかに聖人しょうにんとおもはれまいらせて

候はん事こそ・うれしき事にて候へ、智者ちしやたる上二百五十戒かたくたもち

て万民ばんみんには諸天しよてんの帝たい釈しやくをうやまふよりも・う

やまはれて・釈迦しゃか仏ぶつ・法華經ほけきやうに不思議ふしぎなり提婆だいばがごとしと・おもはれまい

らせなば・人目はよきやうなれども後生ごしやうはおそろし・おそろし。

さるにては殿ほけきやうは法華經ほけきやうの行者ぎやうじやににさせ給たまへりと・うけ給たまはれば・もつて

のほかに人のしたしきも・うときも日蓮房にちれんを信じては・よもまどいなん・

上の御氣色みけしきもあしかりなんと・かたうとなるやうにて御けうくむ候なれば

・賢人けんじんま

でも人のたばかりは・おそろしき事なれば・一定法華經ほけきやうすて給たまいなん、な

かなか色みへでありせば・よかりなん、大魔のつきたる者どもは一人をけうくんしをとしつればそれをひつかけにして多くの人をせめをとすなり。

にちれん

でし

もう

日蓮が弟子にせう房と申し・のと房といふ・なごえの尼なんと申せし物

どもは・よくふかく・心をくびやうに・愚癡ぐちにして・而も智者しちやとなのりし

・やつばらなりしかば・事のをこりし時・たよりをえて・おほくの人を・

おとせしなり、殿もせめをとされさせ給たまうならば・するがにせうせう信ず

るやうなる者も・又信ぜんと・おもふらん人人ひとびとも皆みな

ほけきよう

法華經をすつべし、さればこの甲斐かいの国にも少少信ぜんと申す人人ひとびと候へど

も・おぼろげならでは入れまいらせ候はぬにて候、なかなかしき人の信ず

るやうにて・なめりて候へば人の信心しんじんをも・やぶりて候なり。

ただをかせ給たまへ・梵天ぼんてん・帝釈たいしゃく等の御計として、

にほんこく

いちじ

日本国・一時に信ずる事

あるべし。爾時そのとき・我も本より信じたり信じたりと申す人こそおほくをはせ

ずらんとおぼえ候。御信用あつくをはするならば・人ためにあらず我が故
父の御ため・人は我がをやの後世には・かはるべからず・子なれば我こそ
故をやの後世をばとぶらふべけれ、郷一郷・知るならば半郷は父のため半
郷は妻子・眷属をやしなふべし、我が命は事出できたらば上に・まいらせ
候べしと・ひとへ

におもひきりて何事なにことにつけても・言をやわらげて法華經ほけきようの信を・うすく
さんずる・やうを・たばかり人出来しゅつたいせば我が信心しんじんを・こころむるかとお
ぼして各各これを御けうくんあるは・うれしき事なり、ただし御身おんみのけう
くんせ

させ給たまへ、上の御信用ごしんようなき事は・これにもしりて候を上をもつて・おどさ
せ給たまうこそかしく候へ、参りてけうくん申もうさんと・おもひ候つるに・うわ
てうたれまいらせて候、閻魔王えんまおうに我が身と・いとをしとおぼす御めと・子
とを・ひつぱられん時は・時光に手をやすらせ給たまい候そうらはんずらんと・にく
げに・うちいひて・おはすべし。

にいた殿の事まことにてや候らん、をきつの事きこへて候、殿もびんき
候はば其その義ぎにて候べし、かまへておほきならん人申もうしいだしたるらんは
あはれ法華經ほけきようのよきかたきよ、優曇華うどんげか盲龜うきぎの浮木うきぎかと・おぼしめして・

したたかに御返事あるべし。

千丁・万丁しる人もわづかの事にたちまちに命をすてしよりよう所領をめさるる人

もあり、このたび今度・ほげきよう法華經のために命をすつる事ならば・なにはをしかるべき、

やくおうぼさつ

薬王菩薩は身を千二百歳が間・やきつくして仏になり給い・檀王は千歳が

檀王は千歳が

間・身をゆかとなして今の釈迦しゃかぶつ仏といはれさせ給たまうぞかし、されば・ひが

給たま

されば・ひが

事をすべきにはあらず、今はすてなば・かへりて人わらはれになるべし、かたうどなるやうにて・つくりおとして、我もわらひ人にもわらはせんとするがきくわい

なるに・よくよくけんせさせて人のおほくきかんとおころにて・人をけ
うくんせんよりも我が身をけうくんあるべしとて・かつぱとたたせ給へ、
たま

一日・二日が内にこれへきこへ候べし、事おほければ申さず又又申すべし、

大申もう

きょうきょうきんげん
恐 謹言。

建治三年五月十五日

にちれんかおう
日蓮花押

うえのとのごへんじ
上野殿御返事

◆三八六

南条殿御返事ごへんじ

1541p

白麦一俵・小白麦一俵・河のり五でふ・送り給び了おわんぬ。

仏の御弟子おんでしに阿那律尊者あなりつそんじやと申せし人は・をさなくしての御名みなをば如意にょいと

申すもう、如意にょいと申すもうは心のおもひのたからをふらししゆへなり、このよしを

仏にとひまいらせ給たまいしかば・昔うえたるよに縁覚えんかくと申すもう聖人しょうにんをひゑのは

んをもつて供養くようしまいらせしゆへと答えさせ給たまう。

迦葉尊者かしようそんじやと申せし人は仏についても閻浮提第一えんぶだい だいいちの僧なり、俗にてをはせ

し時は長者ちやうじやにて・からを六十そのくらに金を百四十こくづつ入れさせ

給たまう、それより外ほかのたから申すもうばかりなし、この人のせんじやうの御事おんことを

仏にと

ひまいらせさせ給たまいしかば・むかしうえたるよにむぎのはんを一ぱひ供養くよう

したりしゆへに・とうりてん☆利天に千反生れて今釈迦しゃか仏ぶつに値あいまいらせ僧の中の

第一だいいちとならせ給たまい法華經ほけきようにて光明こうみよう如来にょらいと名をさづけられさせ給たまうと

てんだいだいしもんく天台大師・文句の第一だいいちにしるされて候。

かれをもつて此これをあんずるに迦葉尊者の麦のはんは・いみじくて光明こうみよう

如来にょらいとならせ給たまう、今のだんなの白麦はいやしくて仏にならず候べきか、

在世ざいせの月は今も月・在世ざいせの花は今も花・むかしの功德くどくは今の功德くどくなり、そ

の上上かみいちにん一人より下万民ばんみんまでに・にくまれて山中にうえしにゆべき法華經ほけきようの

行者ぎやうじやなり、これをふびんと・をぼして山河さんが

をこえわたり・をりくたびて候・御心おんこころざしは麦にはあらず金こがねなり・金こがねに

はあらず法華經ほけきようの文字もんじなり、我等われらが眼まなこにはむぎなり・十らせつには此のむ

ぎをば仏のたねとこそ御らん候らめ、阿那律あなりつがひゑのはんはへんじてうさ

ぎとなる、

うさぎ・へんじて死人^{しにん}となる・死人^{しにん}へんじて金^{こがね}となる・指をぬきてうりしかば又いできたりぬ、王のせめのありし時は死人^{しにん}となる、かくのごとく・つきずして九十一劫^{くじゅうじふいち}なり、釈まなんと申せし人の石をとりしかば金^{こがね}となりき、

金ぞく王は・いさごを金となし給いき。

今のむぎは法華經のもんじなり、又は女人の御ためには・かがみとなり

・身のかざりとなるべし、男のためには・よろひとなり・かぶとなるべ

し、守護神となりて弓箭の第一の名をとるべし、南無妙法蓮華經・南無

妙法蓮華經、恐恐謹言。

このよの中は・いみじかりし時は何事があるべきとみえしかども・

当時はことにあぶなげに・みえ候ぞ、いかなる事ありともなげかせ給う

べからず、ふつと・おもひきりてそりやうなんども・たがふ事あらば

・いよいよ悦びとこそおもひて・うちうそぶきて・これへわたらせ

給へ、所地しらぬ人もあまりにすぎ候ぞ、当時つくしへ・むかひて・

なげく人人は・いかばかりとか・おぼす、これは皆日蓮を・かみのあ

なづらせ給いしゆへなり。

七月二日

にちれんかおう

日蓮花押

南条殿御返事 ごへんじ

◆三八七

庵室修復書 あんしつ

建治三年 五十六歳御作

1542p

去文永^{ぶんえい}十一年六月十七日に・この山のなかに・きをうちきりて・かりそ

めにあじちをつくりて候いしが・やうやく四年がほど・はしらくちかきか
べをち候へども・なをす事なくて・よるひを・とぼさねども月のひかりに
て聖教^{しょうきょう}をよみまいらせ・われと御経をまきまいらせ候はねども・風をの
づから・ふきかへし・まいらせ候いしが、今年は十二

のはしら^{しほう}四方にかふべをなげ・四方^{しほう}のかべは・一そにたうれぬ、うだいた

もちがたければ・月はすめ雨はとどまれとはげみ候いつるほどに・人ぶな
くして・がくしやうどもをせめ・食なくして・ゆきをもちて命をたすけて
候ところに・さきに・うへのどのよりいも二駄これ一だは・たまにもすぎ。

◆三八八

だいびやくごしや
大白牛車書

建治三年十二月十七日 五十六歳御

作 与南条七郎次郎 1543p

そ ほけきよう
夫れ法華經第二の巻に云く「此の宝乘に乗り直ちに道場に至る」と云

にちれん けんちよう

云、日蓮は建長五年四月二十八日初めて此の大白牛車の一乘法華の相伝

を申し顯はせり、而るに諸宗の人師等・雲霞の如くよせ来り候、中にも

しんごん じようど ぜんしゅう

真言・浄土・禅宗等・蜂の如く起りせめたたかふ、日蓮大白牛車の牛の角

さいだいいいち

最第一なりと申してたたかふ、両の角は本・迹二門

の如く二乗作仏・久遠実成是なり、すでに弘法大師は法華最第一の角を最

第三となをし・一念三千・久遠実成・即身成仏は法華に限れり・是をも

真言の經にありとなをせり、かかる謗法の族を責めんとするに返って弥

しんごん
真言の經にありとなをせり、かかる謗法の族を責めんとするに返って弥

怨をなし候、あた 譬えば角を・なをさんとて牛をころしたるが如くなりぬべく
候ひしかども・いかでさは候べき。

そもそも

抑此の車と申すは本・迹二門の輪を妙法蓮華經の牛にかけ、三界の火

しょうじ

宅を生死・生死とぐるり・ぐるりとまはり候ところの車なり、ただ信心の

しんじん

くさびに志のあぶらをささせ給いて靈山淨土へまいり給うべし、又心王

しんおう

は牛の如し・生死は両の輪の如し、伝教大師云く「生死の二法は一心の

いっしん

妙用・有無の二道は本覺の真徳なり」云云、天台云く「十如は只是れ乃至

ただいこ

今境は是れ体」と云云、此の文釈能案じ給うべし、南無妙法蓮華經・

ないし

南無妙法蓮華經。

十二月十七日

日蓮

かおう

花押

◆三八九

上野殿御返事

建治四年二月二十五日

五十七歳

御作 与南条七郎次郎 1544p

蹲いへのいも鴟がっし・くしがき・焼米・栗・たかな・すつつ給おわび候い了んぬ。

月氏あそかだいおうに阿育大王もうと申す王をはしき、一閻浮提えんぶだい四分の一を・たなごころに

にぎり・竜王りゅうおうをしたがへて雨を心にまかせ・鬼神きじんをめしつかひ給たまいき、始

は悪王あくおうなりしかども後には仏法ぶつぽうに帰し・六万人ばんにんの僧を日く日に供養くようし・八万

四千の石の塔をたて給たまう、此の大王だいおうの過去かこをたづぬれば仏の在世ざいせに徳勝とくしょう

童子どうじ・無勝童子どうじとて二人のをさなき人あり、土

の餅を仏くように供養たまし給いいて一百年の内に大王だいおうと生れたり、仏はいみじしとい

へども法華經ほけきようにたいしまいらせ候ほたるびへば・螢火えんかと日月にちがつとの勝劣しょうれつ・天と地との

高下こうげなり、仏くようを供養くようして・かかる功德くどくあり・いわうや法華經ほけきようをや、土のも

ちゐ

を・まいらせて・かかる不思議ありいわうやすずのくだ物をや、かれはけ
かちならず・いまはうへたる国なり、此をもつて・をもふに釈迦仏・多宝仏
じゅうらせつによ
・十羅刹女いかでかまほらせ給はざるべき。
たま

ほけきよう
抑今の時・法華經を信ずる人あり・或は火のごとく信ずる人もあり
ある

・或は水のごとく信ずる人もあり、聴聞する時は・もへたつばかりをもへ
ある
ども・とをざかりぬれば・すつる心あり、水のごとくと申すは・いつも・
ちようもん
たいせず信ずるなり、此れはいかなる時も・つねは・たいせずとわせ給え
こ
ば水のごとく信ぜさせ給へるかたうとし・たうとし。
たま

まことやらむ・いえの内に・わづらひの候なるは・よも鬼神のそゐには
きじん
候はじ、十らせち女の信心のぶんざいを御心みぞ候らむ、まことの鬼神な
しんじん
らば法華經の行者をなやまして・かうべをわらんとをもふ鬼神の候べき
ほけきよう
ぎようじや
きじん

か、又釈迦しゃかぶつ・法華經ほけきょうの御そら事の候べきかと・ふかくをぼしめし候へ、
恐恐きょうきょう謹言きんげん。

二月廿五日

日蓮にちれん

花押かおう

御返事ごへんじ

◆三九〇

上野殿御返事 うえのとのごへんじ

弘安元年四月一日 こうあんがんねん

五十七歳御作

与南条七郎次郎

1545p

白米一斗・いも一駄・こんにやく五枚・わざと送り給ひ候い畢おわんぬ、な
によりも石河の兵衛入道にゅうどう殿のひめ御前ごぜんの度度御ふみをつかはしたりしが、
三月の十四五やげにて候しやらむ御ふみありき、この世の中をみ候に病な
き人

も・こねなんなどをすぐべしともみへ候はぬ上・もとより病ものにて候が
・すでにきうになりて候さいこの御ふみなりと・かかれて候いしが、され
ば・つゐに・はかなくならせ給たまいぬるか。

臨終りんじゆうに南無阿弥陀仏なむあみだぶつと申しあはせて候人は・仏きんげんの金言なれば一定の

おうじょう

往生とこそ人も我も存じ候へ、しかれども・いかなる事にてや候いけん、

仏のくひかへさせ給いて未顕真実・正直捨方便と・とかせ給いて候が・あ

さましく候ぞ、此れを日蓮が申し候へばそら事うわのそらなりと日本国に

はいかられ候、此れのみならず仏の小乗経には十方

に仏なし一切衆生に仏性なしと・とかれて候へども・大乘経には十方

に仏します一切衆生に仏性ありと・とかれて候へば・たれか小乗経

を用い候べき皆大乘経をこそ信じ候へ、此れのみならず・ふしぎのちが

ひめども候ぞ

かし、法華経は釈迦仏・已今当の経経を皆くひかえしうちやぶりて・此

の経のみ真実なりと・とかせ給いて候いしかば御弟子等用ゆる事なし、爾の

時・多宝仏・証明をくわへ十方の諸仏・舌を梵天につけ給いき、さて

多宝仏はとびらをたて十方の諸仏は本土に・かへらせ給いて後は・いかな

るきようぎよう經經 ありて法華經ほけきようを釈迦しゃか仏ぶつやぶらせ給たまうとも・他人たにん

わゑになりて・やぶりがたし、しかれば法華經ほけきよう已後いごの經經きようぎよう・普賢經ふげん・

ねはんぎよう

涅槃經等ねはんぎようには法華經ほけきようをば・ほむる事はあれどもそしる事なし、而しかるを

しんこんしゅう

真言宗しんこんしゅうの善無畏等ぜんむい・禪宗ぜんしゅうの祖師等そし・此これをやぶれり、日本國にほんこく・皆みな此の事

を信じぬ、例せば將門・貞任さだとうなどに・かたらはれし人人ひとびとのごとし、日本國にほんこく

すでに釈迦しゃか・多寶たほう・十方じゅつぽうの仏の大怨敵おんてきとなりて數年になり

すでに釈迦しゃか・多寶たほう・十方じゅつぽうの仏の大怨敵おんてきとなりて數年になり

候へば・やうやく・やぶれゆくほどに・又かう申す者を御あだみあり、わざはひにわざはひのならべるゆへに・此の国土すでに天のせめをかほり候はんずるぞ。

此の人は先世の宿業か・いかなる事ぞ、臨終に南無妙法蓮華經と唱え

させ給いける事は・一眼のかめの浮木の穴に入り・天より下いとの大地の

はりの穴に入るがごとし、あらふしぎふしぎ、又念仏は無間地獄に墮つる

と申す事をば經文に文明なるをば・しらずして皆人・日蓮が口より出でた

りとおもへり、天はまつげのごとしと申すはこれなり、虚空の遠きと・ま

つげの近きと人みなみる事なきなり、此の尼御前は日蓮が法門だにひが事

に候はば・

よも臨終には正念には住し候はじ。

又日蓮が弟子等の中に・なかなか法門しりたりげに候人人はあしく候げ

に候、南無妙法蓮華經と申すは法華經の中の肝心・人の中の神のごとし、

此れにものを・ならぶれば・きさきのならべて二王をおとことし、乃至き

さきのおみい大臣已下になひなひとつぐがごとし、わざはひのみなもとなり、

しょうほう しょうほう ほうもん よきよう
正法・像法には此の法門をひろめず余經を

失わじがためなり、今末法に入りぬれば余經も法華經もせんなし、但南無

みょうほうれんげきよう

妙法蓮華經なるべし、かう申し出だして候も・わたくしの計にはあらず、

しゃか たほう じゅつぼう しょうぶつ じゆせんがい
釈迦・多宝・十方の諸仏・地涌千界の御計なり、此の南無妙法蓮華經に

よじ
余事を

まじへば・ゆゆしきひが事なり、日出でぬれば・とほしびせんなし・雨の

ふるに露なにのせんかあるべき、嬰兒に乳より外のをやしなうべきか、

りょうやく

良薬に又薬を加えぬる事なし。

此の女人は・なにとなければども自然に義にあたりてし・ををせるなり、

たうとし・たうとし、
きようきようきんげん。
恐恐謹言。

こうあんがんねん

弘安元年四月一日

かおう

花押

うえのとのごへんじ

上野殿御返事

にちれん
日蓮

◆三九一 南条殿女房御返事 にようぼうごへんじ 弘安元年五月二十四日 五十七

歳御作 与南条七郎次郎女房 にようぼう 1547p

八木二俵送り給ひ候い畢おわんぬ、度度たびたびの御志ごし申し尽し難かたく候。

夫それ水は寒積つもれば氷と為る・雪は年累なつて水精すいしやうと為る・惡積つもれば地獄じごくと

なる・善積つもれば仏となる・女人にょにんは嫉妬しつとかさなれば毒蛇どくじやとなる。法華經供養ほけきやうくよう

の功德くどくかさならば・あに竜女りゆうにょがあとを・つがざらん、山といひ・河といひ

・馬といひ・下人しもにんといひ・かたがた・かんなんのとこころに・度度たびたびの御志ごし

申もうすばかりなし。

御所ごしよ勞らうの人の臨終りんじゆう正念しやうねん・靈山りやうぜん淨土じやうど疑うたがいなかるべし・疑うたがいなかるべし。

五月二十四日 日蓮にちれん

花押 かおう

◆三九二

種種物御消息 しゅじゅく しようそく

弘安元年七月七日 こうあんがんねん 五十七歳御作

与南条平七郎

しなしなのものをくり給びて法華經にまいらせて候。
ほけきょう

そもそにほんこく

抑日本国の人を皆やしな^{みな}いて候よりも父母一人やしな^{ふほ}いて候は功德ま^{くどく}

にほんこく

さり候、日本国^{みな}の皆人をころして候は七大地獄に墮ち候、父母をころせる

むげんじこく

人は第八の無間地獄と申す地獄に墮ち候、人ありて父母をころし釈迦仏の

おんみ

御身よりちをいだして候人は父母をころすつみにては無間地獄に墮ちず、

おんみ

仏の御身よりちをいだすつみにて無間地獄

に墮おち候なり、又じゅうあく十悪・五逆ごぎやくをつくり十方じゅうぽう・三世さんぜの仏の身より・ちをい
だせる人の法華經ほけきようの御かたきとなれるは・十悪じゅうあく・五逆ごぎやく・十方じゅうぽうの仏の御身おんみ
より・ちをいだせるつみにては阿鼻地獄あびじごくへは入る事なし・ただ法華經ほけきよう不信ふしん
の大罪たいざいにより

むげんじこく
て無間地獄へは墮ち候なり、又十悪・五逆を日日につくり・十方の諸仏
を月月にはうずる人と・十悪・五逆を日日につくらず十方の諸仏を月月
にはうぜず候人・此の二人は善悪はるかにかわりて候へども・法華經一字
一点もあひそむきぬれば・かならず・おなじやうに無間地獄へ入り候なり。
しかればいまの代の海人・山人・日日に魚鹿等をころし・源家平家等の
兵士等のとしどしに合戦をなす人人は・父母をころさねば・よも無間地獄
には入り候はじ、便宜候はば法華經を信じて・たまたま仏になる人も候ら
ん、今の天台の座主・東寺・御室・七大寺の検校・園城寺の長吏等の
真言師・並びに禅宗・念佛者・律宗等は眼前には法華經
を信じよむににたれども・其の根本をたづぬれば弘法大師・慈覺大師・
智証大師・善導・法然等が弟子なり、源にごりぬれば流きよからず・天
くもれば地くらし、父母謀反をおこせば妻子ほろぶ・山くづるれば草木た

ふるなら

ひなれば・日本にほん六十六ヶ国の比丘・比丘尼等の善人等・皆無間地獄に墮おつべきなり、されば今の代に地獄じごくに墮おつるものは悪人あくにんよりも善人ぜんにん・善人ぜんにんよりも僧尼そうに・僧尼そうによりも・持戒じかいにて智慧ちえかしこき人人の阿鼻地獄あびじごくへは墮おち候なり。

此の法門ほうもんは当世とうせ・日本国にほんこくに一人もしりて候人なし、ただ日蓮にちれん一人計りに候へば・此これを知しつて申もうさずば・日蓮にちれん・無間地獄むげんじごくに墮おちて・うかぶ期なかるべし、譬たとへば謀反たふのものを・しりながら国主こくしゅへ申もうさぬとがあり、申せばかたき雨のごとし風のごとし・むほんのもののごとし・海賊かいぞく・山賊さんぞくのもののごとし、かたがた・しのびがたき事なり、例せ

ば观音王仏いおんおうぶつの末ふぎの不輕菩薩ふぎようぼさつのごとし歡喜かんき仏ぶつのすえの覺徳比丘かくとくびくのごとし、天台てんだいのごとし・伝教でんぎょうのごとし、又かの人人ひとびとよりも・かたきすぎたり、かの人人ひとびと

は諸人しよにんにくまれたりしかども・いまだ国主こくしゅにはあだまれず、これは諸人しよにんよりは国主こくしゅにあだまるる事父母ふぼのかたきよりも・すぎたるをみよ。

かかるふしぎの者をふびんとて御くやう候は・日蓮にちれんが過去かこの父母ふぼか又先世せんぜの宿習しゆくじゆうか・おぼろげの事にはあらじ、某それがしの上雨ふりかぜふき人のせいするにこそ心させしはあらわれ候へ、此これも又かくのごとし、ただな

る時だに

も・するがとかいとのおさかひは山たかく河ふかく石おほくみちせばし、い
わうやたうじは・あめはしのをたてて三月におよびかわはまさりて九十日、
やまくづれ・みちふさがり人も・かよはずかつてもたえて・いのちかうに
て候いつるに・このすずのもの給いて法華經の御うえをもつぎ釈迦仏の御
いのちをも・たすけまいらせ給いぬ、御功德ただをしはからせ給うべし、
くはしくは又又申すべし、
恐恐。

七月七

にちれんかおう
日蓮花押

◆三九三

時光御返事

弘安元年七月八日 五十七歳御作

与南条時光

1549p

むぎのしろきこめ一駄はじかみ送り給ひ畢おわんぬ。

こく斛ぼん飯わう王の太子たいしあなり阿那ちと申もうす人は家にましましし時は俗性がっしは月氏

国の本主てんりん聖王のすえ師子ししけう王のまご浄じょう飯王ばんのおひ・こくぼん王

には太子たいしなり、天下てんかにいやしからざる上・家中には一日の間・一万・二千

人の人出入す、六千人はたからをかりき六千人は・かへりなす、かかる富

人にておはする上天眼てんげん第一の人・法華經ほけきょうにては普明如来ふみょうにょらいとなるべきよし仏

記しるし給たまう。

これは過去かこの行は・いかなる大善だいぜんぞとたづぬるに・むかしれうしあり山

のけだものをとりて・すぎけるが又ひえをつくり食とするほどに飢えたる

世なればものもなし、ただ・ひえのはん一ありけるを・くひければ・りだ

と申もうす辟支ひやくし仏ぶつの聖人しょうにん来たりて云いわく我七日の間食なし汝なんじが食者えさせよと

こわせ給たまいしかば・きたなき俗のごきに入れて・

けがしはじめて候と申しければ・ただえさせよ今食せずば死ぬべしと云う、
おそれながら・まいらせつ、此の聖人しょうにんまいり給たまいしがただひえ一つびを・
とりのこして・れうしにかへし給たまいき、ひえへんじていのことなる、いの
こ

變じて金こがねとなる金こがね變じて死人しにんとなる死人しにん變じて又金こがね人となる指をぬいて
売れば本のごとし、かくのごとく九十一劫くじゅういちじやく長者ちやうじやに生れ今はあなりちと申し
て仏おんの御弟子でしなり、わづかの・ひえなれども飢えたる国ちしやに智者の御いのち
をつぐゆへに・めでたきほうをう。

迦葉尊者かしようそんじやと申せし人は仏おんの御弟子でしの中には第一だいいちにたとき人なり、此の人
の家をたづねれば摩かだい国の尼くりだ長者ちやうじやの子なり、宅にたたみ千でう
あり一でうはあつさ七尺下品げぼんのたたみは金千兩なり、からすき九百九十九
・一のからすきは金千兩、金三百四十石入れたるくら六十・かかる大長者ちやうじや
なり、めは又身は金色にして十六里をて

らす、日本にほんの衣通姫こくにもすぎ漢土かんどのりふじんにもこえたり、此の夫婦道心どうしん
をおこ發して仏おんの御弟子でしとなれり、法華經ほけきやうにては光明くわうみやう如来にやらいといはれさせ給うたま、
此の二人の人人ひとびとの過去かこをたづねれば麦飯ひやくしふつを辟支仏くやうに供養せしゆへに迦葉かしよう

そんじや

尊者と生れ、金のぜに一枚を仏師にあつらへて毘婆尸仏の像の御はくにひ
きし貧人は此の人のめとなれり。

いまにちれん

しょうにん

ほけきよう

みな

こくしゅ

今日蓮は聖人にはあらざれども法華經に御名をたてり、国主ににくなり

て我が身をせく上弟子かよう人をも・或はのり・或はうち・或は所領をと

ある

こくしゅ

ひとびと

ある

しよりよう

り・或はところをおふ、かかる国主の内にある人人なれば・たとひ心ざし
あるらん人人もとふ事なし、此の事事ふりぬ、なかにも今年は疫病と申し

ひとびと

えきびよう

もう

飢渴と申しとひくる人人もすくなし、たとひ

もう

ひとびと

やまひなくとも飢えて死なん事うたがひなかるべきに麦の御とぶらい金に

こがね

もすぎ珠にもこえたり、彼のりだがひゑは変じて金人となる、此の時光が

たま

麦何ぞ変じて法華經の文字とならざらん、此の法華經の文字は釈迦仏とな

なん

ほけきよう

もんじ

ほけきよう

もんじ

しゃかぶつ

り給い時光が故親父の左右の御羽となりて靈山浄土へとび給へかけり

たまい

さう

りょうぜんじようど

たま

給へ、かへりて時光が身をおほひ・はぐくみ給へ、恐恐謹言。

たま

たま

きようきようきんげん

弘安元年七月八日

花押

上野殿御返事

日蓮

◆三九四

なんじょうときみつ

与南条時光

1551p

上野殿御返事 うえのとのごへんじ

弘安元年九月十九日 こうあんがんねん 五十七歳御作

塩一駄はじかみ送り給ひ候。

こがね

金多くして日本国にほんこくの沙のごとくならば誰か・たからとして・はこのそこ

におさむべき、餅多くして一閭えんぶだい浮提だいちの大地のごとくならば誰か米の恩を・

おもくせん。

今年は五月より日日に雨ふり・ことに七月より大雨だいうひまなし、このとこ

ろは山中なる上・南は波木井はきり・河北かほくは早河東は富士河・西は深山みやまなれば長

だいう

雨・大雨・時時・日日につづく間・山さけて谷をうづみ・石ながれて道を

ふせぐ・河たけくして船わたらず、富人あきひとなくして五穀ごこくともし商人なくして

人あつまる事なし、七月なんどは・しほ一升を・

ぜに百しほ五合を麦一斗にかへ候しが今はせんたい・しほなし、何を以て
か・かうべき、みそも・たえぬ、小児のちをしのぶがごとし。

かかるところに・このしほを一駄給びて候・御志・大地よりもあつく

虚空よりもひろし、予が言は力及ぶべからずただ法華経と釈迦仏とに・ゆ

づりまいらせ候、事多しと申せども紙上には・つくしがたし、
恐恐謹言。

弘安元年九月十九日

日蓮 花押

上野殿御返事

◆三九五

なんじょうときみつ

与南条時光

1552p

うえのとのごへんじ
上野殿御返事

こうあんがんねん
弘安元年十月十二日

五十七歳御作

おわ
畢んぬ。

いゑのいも一駄・かうじ一こ・ぜに六百のかわり御ざのむしろ十枚給び

去今年は大えき此の国にをこりて人の死ぬ事大風たいふうに木のたうれ大雪に草

のおるがごとし一人ものこるべしともみへず候いき、しかれども又今年

の寒温時にしたがひて五穀ごこくは田畠でんばたにみち草木そうもくはやさんにおひふさがりて

堯ぎょうしゆん舜の代のごとく成劫じやうけつのはじめかとみへて候いしほどに八月九月の大雨だいう

大風たいふうに日本にほん一同不熟ふじゆくゆきてのこれる

ばんみん
万民冬をすごしがたし、去ぬる寛喜・正嘉しょうかにもこえ来らん三災さんさいにも・おと

らざるか、じかいほんぎやく自界叛逆して盗賊国ぞくに充満じゅうまんし他界たがいきそいて合戦がくせんに心をつひやす、
民ふこうの心不孝にして父母ふぼを見る事他人たにんのごとく僧尼そうには邪見じゃけんにして狗犬くけんと☆猴えんこう
のあへるがごとし、慈悲じひなければ天も此の国をまほらず邪見じゃけんなれば三宝さんぼうに
もすてられたり、又疫病えきびようもしばらくはやみてみえしかども鬼神きじんかへり入る
かのゆへに北国きたくにも東国とうくにも西国せいくにも南国なんくにも一同いどうにやみなげくよしきこへ候、か
かるよにいかなる宿善しゆくぜんにか法華經ほけきようの行者ぎやうじやをやしなわせ給たまう事ことありがたく
候もちありがたく候、事事見参の時申すべし、恐恐きようきよう謹言きんげん。

こうあんがんねん弘安元年後十月十二日

にちれん日蓮

かおう花押

うえのとのごへんじ上野殿御返事

◆三九六

九郎太郎殿御返事こへんじ

弘安元年十一月一日 五十こうあんがんねん

七歳御作 与南条九郎太郎

1553p

これにつけてもこうえのどのの事こそをもひいでられ候へ。

いも一駄・くり・やきごめ・はじめ給ひ候いぬさてはふかき山にはいもつくる人もなし・くりもならず・はじめもをひず・ましてやきごめみへ候はず、たとえくりなりたりともさるのこずへからず、いえのいもはつくる人なし・たとえつくりたりとも・人にくみてたび候はず、いかにしてか・かかるたかき山へは・きたり候べき。

それ山をみ候へば・たかきよりしだいにしもえくだれり、うみをみ候へば・あそきより・しだいにふかし、代をみ候へば三十年・二十年・五年・

四三二一・次第しだいにをとろへたり、人の心もかくのごとし、これはよのすへになり候へば山には・まがれるきのみとどまり・のには・ひききくさのみをひたり、よには・かしこき人はすくなく・はかなきものはをほし、牛馬ぎゅうばのちちをしらず兎羊の母をわきまえざるがごとし。

仏御入滅にゅうめつありては二千二百二十余年なり代すへになりて智人ちじん次第しだいにかく

れて山のくだれるがごとく・くさのひききになり、念仏ねんぶつを申しかいをた

もちなんどする人は・ををけれども法華經ほけきょうをたのむ人すくなし、星は多け

れども大海たいかいをてらさず草は多けれども大内の柱とはならず、念仏ねんぶつは多けれ

ども仏と成る道にはあらず戒たもは持て

ども浄土じょうどへまひる種とは成らず、但南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうの七字のみこそ仏にな

る種には候へ、此これを申せば人はそねみて用ひざりしを故上野殿信うえのどのじ給たまい

しによりて仏に成らせ給たまいぬ、各各は其その末にて此の御志ごしをとげ給たまうか、

竜馬につきぬる・だには千里せんりをとぶ、松にかかれるつたは千尋せんじんをよづと申もうす
は是ほけきか、各各主の御心なり、つちのもちゐを仏くに供養くようせし人は王となりき、
法華經ほけきは仏にまさらせ給たまう法なれば供養くようせさせ給たまいて、いかでか今生こんじようにも

りしょう

利生にあづかり後生にも仏にならせ給はざるべき、その上みひんにして・

さんが

げにんなし、山河わづらひあり、たとひ心ざしありともあらはしがたきに

たま

・いまいろをあらわさせ給うにしりぬ、をぼろげならぬ事なり、さだめて

ほけきよう

じゅうらせつ

たま

法華經の十羅刹まほらせ給いぬらんと・たのもしくこそ候へ、事つくしが

たし、
きようきようきんげん
恐恐謹言。

こうあんがんねん

弘安元年十一月一日

にちれん

かおう

日蓮
花押

ごへんじ

九郎太郎殿御返事

◆三九七

うえのとのごへんじ

上野殿御返事

こうあん

弘安二年一月三日 五十八歳御作

1554p

餅九十枚・やまのいも五十本・わざと御便を以って正月三日羊の時に
するが駿河の国・富士郡上野郷より甲州は波木井の郷身延山のほらへ・おくりた
びて條。

そ夫れ海辺には木を財とし山中には塩を財とす、旱魃には水を財とし
あんちゅう闇中には灯を財とし・たから女人は夫を財とし夫は女人を命とし、王は民を親
としは民は食を天とす、此の兩三箇年は日本国の中に大疫起りて人半分減
じて候か、

こそ去年の七月より大なるけかちにて里市とをき無縁の者と山中の僧等は命存
じしがたし、そ其の上日蓮は法華經誹謗の国に生れて威音王仏の末法の不輕
ぼさつ菩薩の如し、かんきそうやく将又歡喜増益仏の末の覺悟比丘の如し、王もにくみ民もあだ
む

・衣もうすく食もとぼし・布衣はにしききの如し・草葉をば甘露と思ふ、
かんろ

其^その^こ上^そ去年の十一月より雪つもりて山里路たえぬ、年返れども鳥の声なら
では・をとづる人なし、友にあらざればたれか問うべきと心ばそくて過し
候に

元三の内に十字九十枚・満^{まん}月^{げつ}の如^{ごと}し、心^{しん}中^{ちゆう}もあきらかに生^{しょう}死^{うじ}のやみもはれ
ぬべし、あはれなり・あはれなり、こうへどのをこそ・いろあるをとこと
人は申せし・其^その御子なればくれないの、こきよしをつたへ給^{たま}えるか、あ
いよ

りもあをく・水よりもつめたき氷かなと・ありがたし・ありがたし、
きようきようきんげん。
恐恐 謹言。

正月三日

うえのとのごへんじ

上野殿御返事

◆三九八

上野殿御返事

うえのとのごへんじ

弘安二年四月二十日 五十八歳

御作

1555p

そもそにちれん

抑日蓮・種種の大難の中には竜口の頸の座と東条の難にはすぎず、

そのゆえ

しよなん

其の故は諸難の中には命をすつる程の大難はなきなり、或はのりせめ・或

ところ

は処をおわれ無実を云いつけられ・或は面をうたれしなどは物のかずなら

ず、されば色心の二法よりをこりてそしられたる者は日本国の中には日蓮

しきしん

にほんこく

にちれん

一人なり、ただしありとも法華經ほけきようの故ゆえに

はあらじ、さてもさても・わすれざる事はせうぼうが法華經ほけきようの第五の巻を取りて日蓮にちれんがつらをうちし事は三毒さんどくよりをこる処ところのちやうちやくなり。

天竺てんじくに嫉妬しつとの女人にょにんあり男をにくむ故ゆえに家内の物をことごとく打ちやぶり、

其その上にあまりの腹立にや・すがた・けしきかわり眼まなこは日月の光のごとく

かがやきくちは炎をはくがごとし・すがたは青鬼赤鬼のごとくにて年来男

のよみ奉たてまつる法華經ほけきようの第五の巻をとり両の足にてさむざむにふみける、其その

後命ごめいつきて地獄じじくにをつ両の足

ばかり地獄じじくにいらす獄卒鉄杖ごくそつをもつてうてどもいらす、是は法華經ほけきようをふみ

し逆縁ぎやくえんの功德くどくによる、いま日蓮にちれんをにくむ故ゆえにせうぼうが第五の巻を取りて

予がをもてを・うつ是も逆縁ぎやくえんとなるべきか、彼は天竺てんじく此れは日本にほん・かれは

女人にょにんこれはをとこ・かれは両のあし・これは両の手・彼は嫉妬しつとの故此これは

法華經ほけきょうの御故なり、されども法華經ほけきょう第五の卷は・をなじきなり、彼の女人にょにんのあし地獄じごくに入らざらん此の両の手・無間むげんに入るべきや、ただし彼は男をに

くみて法華經をば・にくまず、此れは法華經と日蓮とを・にくむれば一身
むげん 無間に入るべし、經に云く「其の人命終して阿鼻獄に入らん」と云々、
むげん 手ばかり無間に入るまじとは見へず不便なり不便なり、ついには日蓮にあ
ぶつか ひて仏果をうべきか不輕菩薩の上慢の四衆のごとし。

そ 夫れ第五の卷は一經第一の肝心なり竜女が即身成仏あきらかなり、

だいば 提婆はこころの成仏をあらはし竜女は身の成仏をあらはす、一代に分絶

ほうもん たる法門なり、さてこそ伝教大師は法華經の一切經に超過して勝れたる

たまい 事を十あつめ給いたる中に即身成仏化導勝とは此の事なり、此の法門は

てんだいしゅう 天台宗の最要にして即身成仏義と申して文句の

しんこん 義科なり真言・天台の両宗の相論なり、竜女が成仏も法華經の功力なり、

もんじゅしりぼさつ 文殊師利菩薩は唯常宣說妙法華經とこそかたらせ給へ、唯常の二字は八字

かんよう の中の肝要なり、菩提心論の唯真言法中の唯の字と・今の唯の字と・いづ

れ

を本とすべきや、彼の唯の字はをそらくはあやまりなり、無量義經に云く

「四十余年未だ眞實を顕さず」、法華經に云く「世尊の法は久しくして後

に要當に眞實を説きたもうべし」、多宝仏は皆是眞實とて法華經にかぎり

て即身成仏ありとさだめ給へり、爾前經にいかように成仏ありともとけ

権宗の人人・無量にいひくるふとも・ただほうろく千につち一つなるべ

し、法華折伏・破権門理とはこれなり、尤もいみじく秘奥なる法門なり。

又天台の学者・慈覺より・このかた玄・文・止の三大部の文をとか・く

れうけんし義理をかまうとも去年のこよみ昨日の食のごとし・けうの用に

ならず、末法の始の五百年に法華經の題目をはなれて成仏ありといふ人は

・仏説なりとも用ゆべからず、何に況や人師の義をや、爰に日蓮思ふやう

提婆品を案ずるに提婆は釈迦如来の昔の師な

り、昔の師は今の弟子なり今の弟子はむかしの師なり、古今能所不二にして法華經の深意をあらわす、されば惡逆の達多には慈悲の釈迦如来師となり愚癡の竜女には智慧の文殊師となり・文殊・釈迦如来にも日蓮をとり奉るべからざるか、日本国の男は提婆がごとく女は竜女にあひにたり、
逆順ともに成仏を期すべきなり是れ提婆品

の意なり。

次に勸持品に八十万億那由佗の菩薩の異口同音の二十行の偈は日蓮一人

よめり、誰か出でて日本国唐土天竺・三国にして仏の滅後によみたる人や

ある、又我よみたりと・なるべき人なし又あるべしとも覺へず、及加

刀杖の刀杖の二字の中に・もし杖の字にあう人はあるべし刀の字に・あ

ひたる人をきかず、不輕菩薩は杖木瓦石

と見たれば杖の字に・あひぬ刀の難はきかず、天台・妙楽・伝教等は

刀杖不加と見たれば是又かけたり、日蓮は刀杖の二字ともに・あひぬ、

剩へ刀の難は前に申すがごとく東条の松原と竜口となり、一度も・あう

人なきなり日蓮は二度あひぬ、杖の難には・すでにせうばうにつらをうた

れしかども第五の巻をもつてうつ、うつ杖も第五の巻

うたるべしと云う経文も五の巻・不思議なる未来記の経文なり、されば

・せうばうに日蓮にちれん數十人の中にしてうたれし時の心中しんちゆうには法華經ほけきようの故とは
・をもへども・いまだ凡夫ほんぶなればうたてかりける間・つえをも・うばひ・
ちからあるならば・ふみをりすつべきことぞかし、然れども・つえは法華經ほけきよう
の五の巻にてまします。

いまをもひ・いでたる事あり、子を思ふ故ゆえにや・をやつぎの木の弓をも
つて学文せざりし子にをしへたり、然る間しか・此の子うたてかりしは父にく
かりしは・つぎの木の弓、されども終ついには修学増進しゅうがくして自身得脱じしんとくだつをきわめ
・又人を利益りやくする身となり、立ち還かえつて見れば・つぎの木をもつて我をう
ちし故なり、此の子そとばに此の木をつく

り父の供養くようのためにたててむけりと見へたり、日蓮にちれんも又かくの如くあるべ
きか、日蓮仏果にちれんぶつをえむに争いかでかせうばうが恩をすつべきや、何いかに況や法華經ほけきよう
ごおんの御恩の杖をや、かくの如く思ひつづけ候へば感涙かんでいをさへがたし。

又涌出品は日蓮がためには・すこしよしみある品なり、其の故は

じょうぎようほさつ

まっほう

しゅつげん

なむみょうほうれんげきよう

ごじ

ひろ

上行菩薩等の末法に出現して南無妙法蓮華經の五字を弘むべしと見へた

にちれん

しゅつたい

こうしゃ

ほさつ

り、しかるに先日蓮一人出来す六万恒沙の菩薩より・さだめて忠賞をかほ

ほけきよう

るべしと思へば・たのもしき事なり、とにかくに法華經に身をまかせ信ぜ

たま

させ給へ、殿一人にかぎるべからず信心をすすめ

しんじん

給たまいて過去かこの父母等ふぼをすくわせ給たまへ。

にちれん

日蓮生れし時より・いまに一日片時も・こころやすき事はなし、此の

ほけきよう だいもく ひろ

法華經の題目を弘めんと思ふばかりなり、相かまへて相かまへて自他じたの生死しやうじ

はしらねども御臨終りんじゆうのきざみ生死しやうじの中間ちゆうげんに日蓮にちれんかならず・むかいにまい

り候べし、三世さんぜの諸仏しよぶつの成道じやうどうはなうしのをわり・とらのきざみの成道じやうどうな

り、仏法ぶつぽうの住処じゆうしよ・鬼門きもんの方に三國さんごくともにたつなり此等これらは相承そうじやうの法門ほうもんなる

べし委くわしくは又申もうすべく候、恐恐きようきよう謹言きんげん。

かつへて食をねがひ渴して水をしたうがごとく恋いて人を見たきがご

とく病にくすりをたのむがごとく、みめかたちよき人・べにしるいも

のをつくるがごとく法華經ほけきようには信心しんじんをいたさせ給たまへ、さなくしては後悔こうかい

あるべし、云云。

弘安二年己卯卯月二十日

いっしあん つちのとつ

- 3561 -

日蓮 にちれん

花押 かおう

上野殿御返事 うえのとのごへんじ

◆三九九 上野殿御返事

うえのとのこへんじ
弘安二年 五十八歳御作

559p

鷺目一貫・しほ一たわら蹲いへのいも 鴟一俵・はじかみ少々使者をもつて送り給び
おわ 畢んぬ、あつきには水を財とす・さむきには火を財とす・けかちには米
を財とす、いくさには兵ひょうじょう 杖を財とす・海には船を財とす・山には馬を
たから 小たからとす・武蔵下総に石を財とす、此の山中にはいえのいも・海のしほ
を財とし候ぞ、竹の子木の子等候へどもしほなければそのあぢわひつちの
ことし、又金と申すもの国王も財とし民も財とす、たとへば米のごとし
一切衆生のいのちなり。

ぜに又かくのごとし、漢土に銅山と申す山あり彼の山よりいでて候ぜに

なれば一文もみな三千里の海をわたりて来るものなり、万人・皆たまとおもへり、此れを法華經にまいらせさせ給う、釈まなんと申せし人のたな心には石變じて珠となる金ぞく王は沙を金となせり、法華經は草木を仏となし給ういわうや心あらん人をや、法華經は焼種の二乗を仏となし給ういわうや生種の人をや、法華經は一闡提を仏となし給ういわうや信ずるものをや、事事つくしがたく候、又又申すべし、恐恐謹言。

八月八日

にちれんかおう
日蓮花押

うえのとのごへんじ
上野殿御返事

◆四〇〇

上野殿御返事うえのとのごへんじ

弘安二年こうあん

五十八歳御作

1560p

唐土もうこしに竜門もうと申すたきありたかき事十丈・水の下ることがつひやうが・

やをいをとすよりもはやし、このたきにを・をくのふなあつまりて・のぼ
らむと申すもう、ふなと申すいをののぼりぬれば・りうとなり候、百に一・千
に一・万に一・十年二十年に一・ものぼる事なし、・或あるははやきせにかへ
り・或あるははしたか・とび・ふくろうにくらわれ、・或あるは十丁のたきの左右さう
に漁人ども・つらなりゐて・或あるはあみ網をかけ・或あるはくみとり・或あるはいてと
るものもあり、いをの・りう

となる事かくのごとし。

日本国にほんこくの武士ぶしの中に源平二家と申して門守もんまほりの犬二足候、二家ともに王を

守りたてまつる事やまかつが八月十五夜のみねより・いづるを・あいする
がごとし、でんじやうの・なんによの・あそぶをみては月と星との・ひか
りをあわせたるを木の上にて・さるのあいするがごとし、かかる身にては
あれども・いかんがして我等^{われら}でんじやう

の・まじわりをなさんと・ねがいし程に平氏の中に貞盛^{さだもり}と申せし者將門を
打ちてありしかども昇でんをゆるされず、其^その子正盛又かなわず其^その子忠
盛が時・始めて昇でんをゆるさる、其^その後清盛^{きよもり}・重盛等でんじやうにあそ
ぶ

のみならず、月をうみ日をいだくみとなりనికి、仏になるみち・これにを
とるべからず、いを・をの竜門をのぼり・地下の者の・でんじやうへ・ま
いるがごとし。

身子^{しんし}と申せし人は仏にならむとて六十劫が間・菩薩^{ぼさつ}の行をみてしかども

・こらへかねて二乗にじようの道に入りనికి、大通結縁だいつうけちえんの者は三千塵点劫さんぜんじんてんこう久遠くおん下種げしゆ
の人の五百塵点劫ごひやくじんてんこう生死しじうにしづみし此等これらは法華經ほけきようを行ぜし程ほどに第六天だいろくてんの魔王まおう
こくしち
・国主等の身に入りて・とかうわづらわせしかば・たいしてすてしゆへに
・そこばくの劫ろくどうに六道ろくどうには・めぐりしぞかし。

かれは人の上とこそ・みしかども今は我等われらがみにかかれり、願くは我が
弟子等でし・大願ををこせ、去年去去年こそのやくびやうに死にし人人ひとびとの・かずに
も入らず、又当時とうじ・蒙古もうこのせめに・まぬかるべしともみへず、とにかくに
死は一定なり、其の時そのときのなげきは・たうじのごとし、をなじくは・かりに
も法華經ほけきようのゆへに命をすてよ、つゆを大海たいかいにあつらへ・ちりを大地だいちにうづ
むと・をもへ、法華經ほけきようの第三に云く「願くは此の功德くどくを以て普く一切に及
ばし我等われらと衆生しゅじようと皆共に仏道ぶつどうを成ぜん」云云、恐恐きようきよう謹言きんげん。

十一月六日

日蓮にちれん 花押かおう

上野賢人殿御返事けんじん ごへんじ 此れはあつわらの事の・ありがたさに申す御返事もう ごへんじ

なり。

白米一だをくり給おび了わんぬ。

いっさい

一切の事は時ときによる事に候か、春は花・秋は月と申もうす事も時なり、仏も

世にいでさせ給たまいし事は法華經ほけきょうのためにて候いしかども・四十余年よんじゅうよねんはとか

せ給たまはず、其そのの故ゆえを經文きょうもんにとかれて候には説時せつじ未至みしこ故等と云云、なつあつ

わたのこそで冬かたびらをたびて候はうれしき事なれども・ふゆのこそで

・なつのかたびらには・すぎず・うへて候時のこがね・かつせる時のこれ

・うはうれしき事なれども・はんと水みづにはすぎず、仏に土をまいらせて

候人・仏となり玉をまいらせて地獄じごくへゆくと申もうすことこれか。

にちれん
にほんこく

日蓮は日本国に生れてわわくせず・ぬすみせず・かたがたのとなし、

末代まつだいの法師ほっしには・とがうすき身なれども・文をこのむ王に武のすてられ・
いろをこのむ人に正直物しょうじきのにくまるるがごとく・念仏ねんぶつと禪ぜんと真言しんこんと律りつとを
信あずる代に値ほけきよううて法華經ほけきようを・ひろむれば王臣おみ・万民ばんみんにくまれて・結句けっくは
山中に候へば天いかんが計らわせ給たまうらむ、五尺のゆきふりて本よりも・
かよわぬ山道ふさがり・といくる人もなし、衣もうすくて・かんふせぎが
たし・食たへて命

すでに・をはりなんとす、かかるきざみに・いのちさまたげの御とぶらひ
・かつはよろこびかつはなけかし、一度ひとたびにをもひ切つて・うへしなんと・
あんじ切つて候いつるに・わづかの・ともしびに・あぶらを入そへられた
るがごとし、あわれあわれたうとく・めでたき御心かな、釈迦しゃかぶつ仏ほけきよう・法華經
定めて御計らい給たまはんか、恐恐きようきよう謹言きんげん。

弘安二年十二月廿七日
いっしあん

日蓮にちれん

花押 かおう

上野殿御返事 うえのとのごへんじ

◆四〇二 上野殿御返事 うえのとのごへんじ

1562p

十字六十枚・清酒一筒・薯蕷五十本・柑子二十・串柿一連・送り給ひ候
おわい畢んぬ、ほけきよう法華經の御宝前にかざり進らせ候、春の始め三日種種しゆじゆの物・
ほけきよう法華經の御宝前に捧げ候い畢んぬ。ほうぜん

花は開いて果となり月は出でて必ずみち燈は油をさせば光を増し草木は
雨ふればさかう人は善根ぜんこんをなせば必ずさかう、其の上元三の御志し元一に
も超へ、十字の餅・満月の如し、事事又又申すべく候。もちいまんげつごともう

弘安三年庚辰正月十一日

花押

上野殿

日蓮

故上野殿・御忌日の僧・料米一たはら・たしかに給ひ候い畢んぬ、御仏に供しまいらせて自我偈一卷よみまいらせ候べし。

孝養と申すは・まづ不孝を知りて孝をしるべし、不孝と申すは酉夢と云

う者父を打ちしかば天雷身をさく班婦と申せし者・母をのりしかば毒蛇来りてのみき、阿闍世王・父をころせしかば白癩病の人となりきに、波瑠璃

王は親をころせしかば河上に火出でて現身に無間にをちにき、他人をころしたるには・いまだかくの如く例なし。

不孝をもつて思ふに孝養の功德のおほきなる事も・しられたり、外典三千余卷は他事なし・ただ父母の孝養ばかりなり、しかれども現世をやしなひ

て後生をたすけず、父母の恩のおもき事は大海のごとし現世をやしなひ後生をたすけざれば・一☆・のごとし、内典五千余卷又他事なし・ただ孝養の功德をとけるなり、しかれども如来四十

余年の説教は孝養ににたれども・その説いまだあらはれず孝が中の不孝な

るべし、目連尊者の母の餓鬼道の苦をすくひしは・わづかに人天の苦をす

くひて・いまだ成仏のみちにはいれず、釈迦如来は御年三十の時・父浄飯

王に法を説いて第四果をえせしめ給へり、母の摩耶夫人をば御年三十八の

時・阿羅漢果をえせしめ給へり、此等は孝養

ににたれども還つて仏に不孝のとがあり、わづかに六道をば・はなれしめ

たれども父母をば永不成仏の道に入れ給へり、譬へば太子を凡下の者とな

し王女を匹夫に・あはせたるが如し、されば仏説いて云く「我則ち慳貪に

墮せん此の事は為て不可なり」云云、仏は父母に甘露をおしみて麦飯を与

へたる人・清酒をおしみて濁酒をのま

せたる不孝^{ふこう}第一^{だいいち}の人なり、波瑠璃王^{はるり}のごとく現身^{げんしん}に無間^{むげん}・大城^{だいじょう}におち
あじやせ
阿闍世王^{あじやせ}の如く即身^{そくしん}に白癩病^{びやくらい}をも・つぎぬべかりしが、四十二年と申せし
ほけきよう
に法華經^{ほけきよう}を説き給いて「是^この人滅度^{めつど}の想を生じて涅槃^{ねはん}に入ると雖^{いえど}も而^{しか}も彼
の土^{おい}に於て仏^{ちえ}の智慧^{ちえ}を求めて是^この經を聞くことを得ん」と、父母^{ふぼ}の御孝養^{ごうよう}
のため法華經^{ほけきよう}を説き給いしかば、宝淨世界^{ほうじょうせかい}の
たほうぶつ
多宝仏^{たほうぶつ}も実^{じつ}の孝養^{こうよう}の仏なりと・ほめ給い・十方^{じゅうぼう}の諸仏^{しよぶつ}もあつまりて一切^{いっさい}
しよぶつ
諸仏^{しよぶつ}の中には孝養^{こうよう}第一^{だいいち}の仏なりと定め奉りき。
これをもつて案ずるに日本国^{にほんこく}の人は皆不孝^{みなふこう}の仁^{ひと}ぞかし、涅槃經^{ねはんぎよう}の文^{ぶん}に不孝^{ふこう}
の者は大地微塵^{だいちみじん}よりも多しと説き給へり、されば天^{てん}の日月^{にちがつ}八万四千^{はちまん}の星^{せい}・
各^{おの}いかりをなし眼^{まなこ}をいからかして日本国^{にほんこく}をにらめ給ふ、今^{いま}の陰陽師^{おんようし}の天変^{てんぺん}
・頻^{しき}りなりと奏^{そう}し申^{もう}す是^{これ}なり、地天^{ちよう}・日日^{にち}に起りて大海^{たいかい}の上の小船^{せうせん}をうか
べたるが如^{ごと}し、今^{いま}の日本国^{にほんこく}の小兒^{しょうに}は魄^{はく}をうしなひ・女人^{にょにん}は血^ちをはく是^{これ}なり。

貴^き辺^{へん}は日^に本^{ほん}国^{こく}・第^{だい}一^{いち}の孝^{こう}養^{よう}の人^{ひと}なり・梵^{ぼん}天^{てん}・帝^{たい}釈^{しゃく}をり下^さりて左^さ右^うの羽^うと
なり四^し方^{ほう}の地^ち神^{しん}は足^{あし}をいただいて父^ふ母^ぼとあをぎ給^{たま}うらん、事^{こと}多^{おほ}しと・いへ
どもとどめ候^{あわ}い畢^{おわ}んぬ、恐^{きょう}恐^{きょう}謹^{きん}言^{げん}。

弘^{こう}安^{あん}三年三月八日

日^に蓮^{れん}花^か 押

進^{しん}上^{じょう} 上^う野^え殿^{どの}御^ご返^{へん}事^じ

◆四〇四 上^う野^え殿^{どの}御^ご返^{へん}事^じ

弘^{こう}安^{あん}三年七月二日 五十九歳御

作 1565p

去^いぬる六^む月^{げつ}十五^{じふご}日^{にち}のけさん悦^{よろこ}び入^いつて候^{こう}、さては・かうぬし等^らが事^{こと}いま

までかかへをかせ給^{たま}いて候事ありがたくをばへ候、ただし・ないないは
法華經^{ほけきょう}をあだませ給^{たま}うにては候へども・うへには・たの事によせて事かづ
け・にく

まるるかのゆへに・あつわらのものに事をよせて・かしこ・ここをもせかれ候こそ候いめれ、さればとて上に事をよせて・せかれ候はんに御もちる候はずは物をぼへぬ人に・ならせ給うべしをかせ給いて・あしかりぬべきやうにて候わば・しばらく・かうぬし等をば・これへとをほせ候べしめこなんどはそれに候とも・よも御たづねは候

はじ、事のしづまるまで・それに・をかせ給いて候わば・よろしく候いなんと・をぼへ候。

よのなか上につけ下によ・せてなげきこそををく候へ、よにある人々をば・よになき人々は・きじの・たかをみ・がきの毘沙門をたのしむがごとく候へども・たかは・わしにつかまれ、びしやもんは・すらに・せめらる、そのやうに当時・日本国のたのしき人々は蒙古国の事をききては・ひつじの虎の声を聞くがごとし、また筑紫へおもむきて・

いとをしきめを・はなれ子をみぬは皮をはぎ肉をやぶるが・ごとくにこそ
候らめ、いわうや・かの国より・おしよせなば蛇じやの口のかえる・はうちや
うしがまないたに・をける・こゐふなのごとくこそおもはれ候らめ、
今生こんじよう
はさて

をきぬ命きえなば一百三十六の地獄じごくに墮おちて無量劫むりようこつふべし、我等われらは法華經ほけきよう
をたのみまいらせて候へば・あさきふちに魚のすむが天くもりて雨のふら
んとするを魚のよろこぶがごとし。

しばらくの苦こそ候とも・ついには・たのしかるべし、
国王こくおう一人の太子たいし
のごとし・いかでか位につかざらんと・おぼしめし候へ、
恐恐きようきよう謹言きんげん。

弘安三年七月二日こうあん

日蓮にちれん 花押かおう

上野殿御返事うえのとのごへんじ

人にしらせずして、ひそかにをほせ候べし。

◆四〇五

上野殿御返事うえのとのごへんじ

1566p

女子は門をひらく男子は家をつぐ日本国にほんこくを知つても子なくは誰にか・つ
がすべき、財たからを大千にみてても子なくば誰にかゆづるべき、されば外典げてん
三千余巻には子ある人を長者ちやうじゃといふ、内典ないてん五千余巻には子なき人を貧人ひんじんと
いふ、女子一人・男子一人・たとへば天には日月にちがつのごとく地には東西にか
たどれり、鳥の二つのはね車の二つのわなり、さればこの男子をば日若御前ごぜん
と申もうさせ給へ、くはしくは又又申もうすべし。

弘安三年八月二十六日こうあん

日蓮花押にちれんかおう

上野殿御返事うえのとのごへんじ

◆四〇六

南条殿御返事ごへんじ

1566p

はくまいひとふくろいも一だ給び了おわんぬ、抑そもそも故なんでうの七らううら
うどのの事、いままでは・ゆめかゆめか・まぼろしか・まぼろしかとうた
がいて・そらごととのみをもひて候へば・此の御ふみにも・あそばされて
候、さては、まことかまことかとはじめて・うたがいいできたりて候。

◆四〇七

上野殿御書

1567p

大海たいかいの一☆たいは五味のあぢわい江河こうかの一☆たいは一つの薬なり、大海たいかいの一☆たいは

万種の瓦のごとし、南無阿弥陀なむあみだぶつ仏は一河の一☆たい・南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうは大海たいかいの

一☆たい・阿弥陀經あみだは小河こうかの一てい・法華經ほけきやうの一乗いちじやうは大海たいかいの一てい、故五郎殿

の十六年が間の罪つみは江河こうかの一てい、須臾しゆゆの間の南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうは大海たいかいの一

ていのごとし、夫それ以おもんみれば華はつぼみさいて菓このみなる、をやは死にて子にに

なわる、これ次第しだいなり。

◆四〇八

上野殿御書

1567p

南条七郎五郎殿の御死去しきよの御事おんこと、人は生れて死するならいとは智者ちしやも愚者ぐしや

も上下一同じやうげに知りて候へば始めてなげくべしをどろくべしとわをぼへぬよ

し我も存じ人にもをしへ候へども時にあたりて・ゆめか・まぼろしか・い
まだわきまへがたく候、まして母のいかなげかれ候らむ、父母ふぼにも
きようだい
兄弟きやうだいにもをくれはてて・いとをしきをとこ

に・すぎわかれたりしかども・子ども・あまたをはしませば心なぐさみて
こそ・をはしつらむ、いとをしき・てここ・しかもをのここみめかたちも
人にすぐれ心も・かいがいしくみへしかば・よその人ひとびと人も・すずしくこそ
み候い

しに・あやなく・つぼめる花の風にしほみ・満つる月の・にわかとがに失たる
がごとくこそをぼすらめ、まこととも・をぼへ候はねば・かきつくるそら
も・をぼへ候はず、又又申もうすべし、恐恐きようきよう謹言きんげん。

ことうあん
弘安三年九月六日

にちれん
日蓮

かおう
花押

うえのとのごへんじ
上野殿御返事

追申、此の六月十五日に見奉り候いしに・あはれ肝ある者かな男や男
やと見候いしに・又見候はざらん事こそかなしくは候へ、さは候へども
しゃかぶつ ほけきよう
釈迦仏・法華經に身を入れて候いしかば臨終・目出たく候いけり、心は父
君と 一所に靈山浄土に参りて手を取り頭を合せてこそ悦ばれ候らめ、
あはれなり・あはれなり。

◆四〇九 上野殿母御前御返事

1568

p

南条故七郎五郎殿の四十九日御菩提のために送り給う物の日記の事、鷺目
両ゆひ・白米一駄・芋一駄・すりだうふ・こんにやく・柿一籠・ゆ五十等
ぼだい ほけきよう
云云御菩提の御ために法華經一部・自我偈数度・題目百千返唱へ奉り候い
じがげ だいもく たてまつ

おわん
畢ぬ。

そもそもほけきよう

もう

抑法華經と申す御經は一代聖教

いちだいしやうきやう

には似るべくもなき御經にて而かも

ゆいぶつよぶつ

唯仏と説かれて仏と仏とのみこそ・しろしめされて等覺已下乃至凡夫

とうかくいかないしほんぶ

は叶はぬ事に候へ。

りゆうじゅぼさつ

だいろん

されば竜樹菩薩の大論には仏已下はただ信じて仏になるべしと見えて

ほけきよう

ほうしほん

いわ

候、法華經の第四法師品に云く「薬王今汝に告ぐ我が所説の諸經あり而も

なんじ

しよせつ

しよきやう

しか

おい

ほつけ

だいいち

此の經の中に於て法華最も第一なり」等云云、第五の卷に云く「文殊師利

ほけきよう

しよぶつにやらい

ひみつ

此の法華經は諸仏如来の秘密の蔵なり諸經の中に於て最も其の上在り」

おい

そ

等云云、第七の卷に云く「此の法華經も亦

ほけきよう

またかくのごと

しよきよう

復是くの如し諸經の中に於て最も其の上なり」又云く「最も照明たり最

いわ

しやうめい

そ

も其の尊たり」等云云、此等の經文私の義にあらず仏の誠言にて候へば定

これら

きやうもん

せいげん

めてよもあやまりは候はじ、民が家に生れたる者我は侍に齊しなんと申せ

ひと

ば必ずとが来るまして我れ国王こくおうに齊ひとしまして勝すぐれたりなんと申せば我が身の
とがとなるのみならず父母ふほと申し妻子さいしと云ひ必ず損ことずる事大火だいかの宅を焼
き大木の倒るる時・小木等の損ことずるが如し。

仏教ぶつぎょうも又かくの如ごとく華嚴・阿含あこん・方等ほうとう・般若はんによ・大日經だいにちきよう・阿弥陀經あみだ等に
依よる人人ひとびとの我が信はじたるままに勝劣しょうれつも弁わきまえへずして我が阿弥陀經等は法華經ほけきよう
と齊等さいとうなり將はた又勝すぐれたりなんと申せば其その一類いちるいの人人ひとびとは我が經をほめら
れ・うれしと思へども還かえつてとがとなりて師でしも弟子だんなも檀那あくどうに墮おつる
こと箭やを射るが如ごとし、但ただし法華經ほけきようの一切經いっさいきよう

に勝れりと申して候は・くるしからず還つて大功德となり候、
経文の如くなるが故なり。

此の法華経の始に無量義経と申す経おはします、譬えば大王の行幸の御時
・將軍前陣して狼籍をしづむるが如し、其の無量義経に云く「四十余年に
は未だ真実を顕さず」等云云、此れは將軍が大王に敵する者を大弓を以て
射はらひ又太刀を以て切りするが如し、華嚴経を読む華嚴宗阿含経の律僧
等觀経の念仏者等・大日経の真言師等の者共が法華経にしたがはぬをせ
めなびかす利劍の勅宣なり、譬えば貞任を義家が責め清盛を頼朝の打ち失
せしが如し、無量義経の四十余年の文は不動明王の劍索愛染明王の弓箭
なり。

故南条五郎殿の死出の山三途の河を越し給わん時・煩惱の山賊・罪業の
海賊を静めて事故なく靈山浄土へ参らせ給うべき御供の兵者は無量義経の

よんじゅうねん みけんしんじつ
四十余年・未顕眞実の文ぞかし。

ほけきようだいいち
法華經第一の卷・方便品に云く「世尊せそんの法は久くして後要かならず当まさに眞実しんじつ

とを説きたもうべし」又云く「正直しやうじきに方便ほうべんを捨てて但無上道むじやうどうを説く」云云、

第五の卷に云く「唯髻ただけいちゅう中の明珠みやうじゆ」又云く「独り王の頂上ちやうじやうに此の一珠有

り」又云く「彼の強力いわの王の久しく護まもれる明珠みやうじゆを今乃ち之を与すなわけるが如ごとし」

等云云、文の心は日本国にほんこくに一切経いっさいきやうわたれり七千三

百九十九卷なり彼れ彼れの經經きやうきやうは皆法華經の眷属けんぞくなり、例せば日本国にほんこくの

男女なんなの数・四十九億九万四千八百二十八人候へども皆一人みなの国王こくおうの家人た

るが如ごとし、一切経いっさいきやうの心は愚癡ぐちの女人にょにんなどの唯一時ただいちじに心うべきやうは・た

とへ

だいとう
ば大塔だいとうをくみ候には先ず材木より外あししろに足代もうと申して多くの小木を集め一丈

二丈計ばかりゆひあげ候なり、かくゆひあげて材木を以もつて大塔だいとうをくみあげ候い

つれば返あししろつて足代を切り捨て大塔だいとうは候なり、足代あししろと申もうすは一切いっさいきよう経なり大塔だいとう
と申もうすは法華經ほけきようなり、仏いっさいきよう・一切と経を説たまき給たまいし事は法華經ほけきようを説たまかせ給たまはん
ための足代あししろなり、正直捨方便しょうじきしやほうべんと申もうして法華經ほけきようを信あずる人は阿弥陀經あみだ等の
南無阿弥陀仏大日經なむあみだぶつだいにくきよう等の真言宗阿含經しんこんしゅうあこんきよう等の律宗りつしゅうの二百五十戒等を切りす
て抛なげちてのち法華經ほけきようをば持たもち候なり、大塔だいとうをくまんがためには足代あししろ大切な
れども大塔だいとうをくみあげぬれば足代あししろを切り落

すなり、しょうじきしゃほうべん正直捨方便もうと申す文の心是なり、あししろ足代より塔は出来して候へど

も塔を捨てて足代を・をがむ人なし、今の世の道心者等どうしんしゃ一向に南無阿弥陀仏なむあみだぶつ

となあししろと唱えて一生をすごし南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと一返も唱へぬ人人は大塔をすてて

足代を・をがむ人なり、世間せけんにかしこくはかなき人と申すは是なり。

故七郎五郎殿は当世の日本国の人人には・にさせ給はず、をさなき心な

れども賢き父の跡をおひ御年いまだ・はたちにも及ばぬ人が、南無

妙法蓮華經みょうほうれんげきょうと唱えさせ給いて仏にならせ給いぬ無一成仏むいつふじょうぶつは是なり、乞

い願わくは悲母我が子を恋しく思食し給いなば南無妙法蓮華經と唱えさせ

給いて・故南条殿・故五郎殿と一所に生れんと願は

せ給へ、一つ種は一つ種・別の種は別の種・同じ妙法蓮華經の種を心に・

はらませ給いなば同じ妙法蓮華經の国へ生れさせ給うべし、三人面をなら

べさせ給はん時御悦びいかが・うれしくおぼしめすべきや。

そもそも

抑此の法華經を開いて拝見仕り候へば「如来則ち為に衣を以て之を覆

いたもう又他方現在の諸仏の護念する所と為らん」等云云、經文の心は

とうざいなんぼく

たほうげんざい

しよぶつ

ごねん

な

きようもん

もつ

これ

おほ

東西南北・八方・並びに三千大千世界の外・四百万億那由佗の国土に十方

しよぶつ

じゆうまん

たら

さんぜんだいせんせかい

な

な

な

な

な

な

な

な

な

の諸仏ぞくぞくと充滿せさせ給う、天には星の如く地には稻麻のやうに

なみい

ほけきよう

ぎようじや

しゆこ

たま

たま

たま

たま

たま

たま

たま

たま

たま

たま

たま

並居させ給ひ、法華經の行者を守護せさせ給ふ

なみい

ほけきよう

ぎようじや

しゆこ

たま

たま

たま

たま

たま

たま

たま

たま

たま

たま

たま

事、譬えば大王の太子を諸の臣下の守護するが如し、但四天王・一類のま

なみい

た

だいおう

たいし

もろもろおみ

しゆこ

ごと

してんのう

してんのう

いちるい

いちるい

いちるい

いちるい

いちるい

いちるい

ほり給はん事の・かたじけなく候に、一切の四天王・一切の星宿・一切の

にちがつ

たいしやく

ほんてん

しゆこ

たま

たま

たま

たま

たま

たま

たま

たま

たま

たま

たま

日月・帝釈・梵天等の守護せさせ給うに足るべき事なり、其の上・一切の

にじよう

いっさい

いっさい

いっさい

いっさい

いっさい

いっさい

いっさい

いっさい

いっさい

いっさい

いっさい

いっさい

いっさい

いっさい

二乗・一切

ほさつ

とそつ

みろくほさつ

みろくほさつ

みろくほさつ

みろくほさつ

みろくほさつ

みろくほさつ

みろくほさつ

みろくほさつ

みろくほさつ

みろくほさつ

みろくほさつ

みろくほさつ

みろくほさつ

の菩薩・兜率・内院の弥勒菩薩・迦羅陀山的地蔵・補陀落山の觀世音・

せいりようざん

もんじゆしりほさつ

もんじゆしりほさつ

もんじゆしりほさつ

もんじゆしりほさつ

もんじゆしりほさつ

もんじゆしりほさつ

もんじゆしりほさつ

もんじゆしりほさつ

もんじゆしりほさつ

もんじゆしりほさつ

もんじゆしりほさつ

もんじゆしりほさつ

もんじゆしりほさつ

もんじゆしりほさつ

清涼山の文殊師利菩薩等・各各眷属を具足して法華經の行者を守護せさ

せ給うに足るべき事に候に又かたじけなくも釈迦・多宝・十方の諸仏のて

せ給うに足るべき事に候に又かたじけなくも釈迦・多宝・十方の諸仏のて

づからみづから来り給たまいて昼夜十二時に守らせ給たまはん事のかたじけなさ
申もうす計ばかりなし。

かかるめでたき御経を故五郎殿は御信用ありて仏にならせ給たまいて今日は
四十九日にならせ給たまへば一切いっさいの諸仏しよぶつ霊山浄土に集まらせ給たまいて・或あるは手
すへ・或あるは頂いただきをなで・或あるはいだき・或あるは悦よろこび月の始めて出いでたるが如ごとく

・

花の始めてさけるが如ごとくいかに愛しまいらせ給たまうらん、抑そもいかなれば三世さんぜ

・十方じゅうぼうの諸仏しよぶつはあながちに此この法華經ほけきようをば守らせ給たまふと勘かんへて候こうへば道理どうり

にて候けるぞ法華經ほけきようと申もうすは三世十方さんぜじゅうぼうの諸仏しよぶつの父母ふぼなり・めのとなり・主

にてましましけるぞや、かえると申もうす虫は母の音こえを食とす母の声を聞かざ

れば生長する事なし、からぐらと申もうす

虫は風を食とす風吹かざれば生長せず、魚は水をたのみ鳥は木をすみかと

す仏またも亦またかくの如ごとく法華經ほけきようを命とし・食とし・すみかとし給たまうなり、魚は

水にすむ仏は此の經にすみ給たまう鳥は木にすむ仏は此の經にすみ給たまう月は水

にやどる仏は此の經にやどり給たまう、此の經なき国には仏まします事なしと

御心得ごころえあるべく候。

古昔輪陀王りんだおうと申せし王をはしき南閻浮提えんぶだいの主なり、此の王はなにを子供

御とし給たまいしと尋たずぬれば白鳥のいなくを聞いて食とし給たまう、此の王は白馬はくば

のいななけば年も若くなり色も盛んに魂もいさぎよく力もつよく又政事も
明らかなり、故に其の国には白馬を多くあつめ飼いしなり、譬えば魏王と

申せし王の鶴を多くあつめ・徳宗

皇帝のほたるを愛せしが如し、白馬のいななく事は又白鳥の鳴きし故なり、

されば又白鳥を多く集めしなり、・或時如何しけん白鳥皆うせて白馬いな

なかざりしかば、大王供御たえて盛んなる花の露にしほれしが如く満月の

雲におほはれたるが如し、此の王既にかくれさせ給はんとせしかば、后・

太子・大臣・一国・皆母に別れたる子の

如く皆色をうしなひて涙を袖におびたり如何せん如何せん、其の国に外道

多し当時の禪宗・念仏者・真言師・律僧等の如し、又仏の弟子も有り当時

の法華宗の人人の如し、中惡き事水火なり胡と越とに似たり、大王勅宣を

下して云く、一切の外道・此の馬をいななかせば仏教を失いて一向に外道

を信ぜん事・諸天しよてんの帝釈たいしやくを敬うやもうが如ごとく

ならん、仏弟子ぶつでし此の馬をいなかせば一切いっさいの外道げどうの頸けを切り其その所をうば

ひ取りて仏弟子ぶつでしにつくべしと云云、外道げどうも色をうしなひ仏弟子ぶつでしも歎なげきあへ

り、而しかれども・さてはつべき事ならねば外道げどうは先に七日を行ひき、白鳥も

来らず白馬はくばもいなかず、後七日を仏弟子ぶつでしに渡わたして祈をらせしに馬鳴めみようと申もうす

小僧こそう一人あり、諸仏しよぶつの御本尊ごほんぞんとし給たまう

ほけきよう　もつ
法華經を以て七日祈りしかば白鳥壇上に飛び来る、此の鳥一声鳴きしかば

・一馬・一声いなく、大王は馬の声を聞いて病の牀よりをき給う、后よ

り始めて諸人・馬鳴に向いて礼拝をなす、白鳥・一・二・三乃至・十・百

・千・出来して国中に充滿せり、白馬しきりに・いなき一馬・二馬・

乃至百・千の白馬いなきしかば大王此の音を聞こ

し食し面貌は三十計り心は日の如く明らかに　政　正直なりしかば、天よ

り甘露ふり下り、勅風・万民をなびかして無量・百歳代を治め給いき。

仏も又かくの如く多宝仏と申す仏は此の經にあひ給はざれば御入滅・此

の經をよむ代には出現し給う、釈迦仏・十方の諸仏も亦復かくの如し、

かかる不思議の徳まします經なれば・此の經を持つ人をば・いかでか

天照太神・八幡大菩薩富士千眼大菩薩すてさせ給うべきと・たのもしき事

なり、又此の經にあだをなす国をば・いかに正直

に祈り候へども必ず其の国に七難起りて他国に破られて亡国となり候事
たいかい
大海の中の大船の大風に値うが如く・大旱魃の草木を枯らすが如しと・を
ぼしめせ、当時・日本国のいかなる・いのり候とも日蓮が一門法華經の
ぎようじや
行者を

あなづらせ給へばさまさまの御いのり叶はずして大蒙古国に・せめられて
たま
・すでに・ほろびんとするが如し、今も御覽ぜよただかくては候まじきぞ
こと
是れ法華經をあだませ給う故と御信用あるべし。
たまた
こ　ほけきよう

抑故五郎殿かくれ給いて既に四十九日なり、無常はつねの習いなれど
たまい
も此の事うち聞く人すら猶忍びがたし、況や母となり妻となる人をや心の
なおいの
中をしはかられて候、人の子には幼きもあり長きもありみにくきもありか
たわなるも・ある物をすら思いに・なるべかりけるにや、をのこごたる上
うえのとの
よろづに・たらひなさけあり、故上野殿には壮なりし時をくれて歎き浅か
なげ

らざりしに此の子を懷妊かいにんせずば火にも入り水にも入らんといいしに此の子
すでに平安なりしかば誰にあつらへて身をも・なぐべきと思つて、此こゝに心
をなぐさめて此の十四五年はすぎぬ、いかにいかにとすべき、二人のをの
こごにこそ・になわれめと・たのもしく思ひ候いつるに・今年九月五日・
月を雲

にかくされ花を風にふかせて・ゆめか・ゆめならざるか・あわれひさしき
ゆめかなと・なげきをり候へば・うつつににて・すでに四十九日はせすぎ
ぬ、まことならばいかんがせん、さける花はちらずしてつぼめる花のかれ
たる、をいたる母はとどまりてわかきこは・さりぬ、なさけなかりける無常
むじょうかな。
かな無常かな。

かかるなさけなき国をば・いとい・すてさせ給いて故五郎殿の御信用あ
ほけきようりし法華經につかせ給いて常住不壞のりやう山浄土へとくまいらせ給う
たまいちちはりやうぜんにまします母は娑婆にとどまれり、二人の中間に・をは
じやうばします故五郎殿の心こそ・をもひやられて・あわれに・をばへ候へ、事多
しと申せどもとどめ候い畢んぬ、
おわ恐恐謹言。
きようきようきんげん

十月二十四日

日蓮 花押
にちれん かおう

うえのとの あまこぜんごへんじ
上野殿母尼御前御返事

◆四一〇

南条殿御返事

1573p

しらよね
☆牙二石並びに
いものかしら
☆鶏

一だ・故五郎殿百ヶ日等云云、法華經の第七に

云く、「川流江河諸水の中に海これ第一なり此の法華經も亦復是くの如し」

等云云、此の經は法華經をば大海に譬へられて候、大海と申すは・ふかき

事八万四千由旬広きこと又かくのごとし、此の大海の中にはなににのす

み有りと申し候へば阿修羅王・凡夫にてをは

せし時不妄語戒を持ちて・まなこをぬかれ・かわをはがれ・ししむらをや

ぶられ血をすはれ骨かれ子を殺され・めをうばわれなんどせしかども

無量劫が間・一度もそら事なくして其の功に依りて仏となり給いて候が

無一不成仏と申して南無妙法蓮華經を只一度申せる人・一人として仏に

ならざるはなしと・とかせ給いて候、釈迦一仏の仰せなりとも疑うべき

にあらざるに十方じゅうぽうの仏おんまへの御前ごぜんにて・なにのゆへにか・そら事をばせさせ
給たまうべき、其その上釈迦しやかぶつ仏ぶつと十方じゅうぽうの仏ぶつと同時どうじに舌を大梵ほんでん天てんに。

◆四一

上野殿御返事

1574p

驚目がもく一貫文送り給たまい了おんぬ、御心おんこころざしの候もうへば申し候もうぞ・よくふかき御房ごぼうとおぼしめす事なかれ。

仏にやすやすとなる事の候そうらぞ・をしへまいらせ候そうらはん、人のものを・をしふると申もうすは車のおもけれども油をぬりてまわり・ふねを水にうかべてゆきやすきやうにをしへ候なり、仏になりやすき事は別べちのやう候もうはず、旱魃かんばつにかわるるものに水をあたへ寒氷かんびょうにここへたるものに火をあたふるがごとし、又二つなき物を人にあたへ命のたゆるに人のせにあふがごとし。

金色王と申せし王は其その国に十二年の大旱魃かんばつあつて万民飢え死ぬる事か
ずをしらず、河には死人しにんをはしとし陸にはがいこつをつかとせり、其そのの時
・金色大王だいおう・大菩提心ほだいしんを・をこしておほきに施をほどこし給たまいき、せすべ

き物みなつきて蔵の内にただ米五升ばかりのこれり、大王の一日の御くご
なりと臣下申せしかば大王五升の米をとり出だして一切の飢えたるものに
・或は一りう・二りう・或は三りう・四りうなど・あまなくあたへさせ
給いてのち

天に向わせ給いて朕は一切衆生のけかちの苦に・かはりて・うえじに候ぞ
と・こえをあげて・よばはらせ給いしかば天きこしめして甘呂の雨を須臾
に下し給いき、この雨を身にふれ・かをにかりし人・皆食にあきみちて
一国の万民・せちなほに命よみかへりて候いきり。

月氏国にす達長者と申せし者は七度貧になり七度長者となりて候いし
が最後の貧の時は万民皆にげうせ死にをはりて・ただ・めおとこ二人にて
候いし時・五升の米あり五日のかつてとあて候いし時・迦葉・舍利弗・
阿難羅☆羅・釈迦仏の五人・次第に入らせ給いて五升の米をこひとらせ

給^{たま}い^いき、其^その日より五天竺^{てんじく}第一^{だいいち}の長者^{ちようじゃ}となりて祇園^{ぎおん}精舍^{しやうじゃ}をばつくりて候
ぞ、これをもつてよろづを心へさせ給^{たま}へ。

貴^き辺^{へん}は・すでに法華^{ほけきょう}經^{ぎょう}の行者^{ぎやうじや}に似^たさせ給^{たま}へる事さるの人に似^たもちゐの月
に似^たたるがごとし、あつはらのものどもの・かくをしませ給^{たま}へる事は承平
の将門・天喜^{ただその}の貞当^{さだその}のやうに此の国のものどもは・おもひて候ぞ、これひ
とへに法華^{ほけきょう}經^{ぎょう}に命をすつるがゆへなり、まつたく主君^{しゅくん}にそむく人とは天御
覽^そあらじ、其^その上わづかの小郷^{こくじ}に・をほくの公事^{くじ}せめあてられて・わが身
は・のるべき馬なし・妻子^{さいし}はひきかくべき衣なし。

かかる身なれども法華^{ほけきょう}經^{ぎょう}の行者^{ぎやうじや}の山中の雪に・せめられ食^たともしかるら
んと・おもひやらせ給^{たま}いて・ぜに一貫^{ひんによ}をくらせ給^{たま}へるは・貧女^{ひんによ}がめおとこ
二人して一つの衣をきたりしを乞食^{こつじき}にあたへ・りだが合子の中なりし・ひ
えを辟支^{ひやくしぶつ}仏^{ぶつ}に・あたへたりしがごとし、たうとし・たうとし、くはしくは
又^{もう}又^{もう}申^{もう}すべく候、恐^{きょう}恐^{きょう}謹言^{きんげん}。

弘安三年十二月二十七日

にちれん かおう
日蓮 花押

うえのとのごへんじ
上野殿御返事

◆四一二

あまごぜんごへんじ
上野尼御前御返事

157

3p

しょうにん

聖人ひとつつ・ひさげ十か・十字百・あめひとをけ二升か柑子ひとこ串

こうじ

柿十くし・ならびにおくり候い了んぬ春のはじめ御喜び花のごとくひらけ
月のごとくみたせ給うべきよしうけ給わり了んぬ。
たま おわ

そもそも

抑故五らうどのの御事こそ・をもいいでられて候へ、ちりし花もさか
おんこと

んとす・かれしくさもねぐみぬ、故五郎殿もいかでか・かへらせ給はざる
たま

むじょう

べき、あわれ無常の花と・くさとのやうならば人丸にはあらずとも花のも

とも・はなれじ、いはうるこまにあらずとも・草のもとをばよもさらじ。

きようもん

経文には子をばかたきととかれて候、それもゆわれ候か梟ふくろうと申すとり
は母をくらう破鏡はけいと申すけたものは父をがいす、あんろく山と申せし人は
師史明と申す子もうにころされぬ、義朝よしともと申せしつはものは為義ためよしと申すちちを

ころす、子はかたきと申すきようもん経文ゆわれて候、又子は財たからと申すきようもん経文あり、
妙みよう壯そう嚴ごん王おうは一期いちきの後ご無間むげん・大城だいじょうと申すもう地獄じごくへ墮おちさせ給たまうべかりしが浄
蔵じやうざうと申せし太子たいしにすくわれて大地獄だいじごくの苦をまぬがれさせ給たまうのみならず
さらじさゆらおうぶつ もう娑羅樹王しやらじゆおうと申すもう仏ぶつとならせ給たまう、生提女きうだいじよと申せし女人にょにんは慳貪けんどんのとがによ
つて餓鬼道がきだうに墮おちて候いしが目連もくれんと申すもう子にたすけられて餓鬼道がきだうを出いで候
いぬ、されば子こを財たからと申すもう経文きようもんたがう事なし。

故五郎殿ごごろうだんはとし十六歳じふろくさい・心こころね・みめかたち人にすぐれて候いし上男じやうなんのの
うそなわりて万人ばんにんにほめられ候いしのみならず、をやの心こころに随したがうこと水の
うつわものに・したがい・かげの身に・したがうがごとし、いへにては・
はしらとたのみ道みちにては・つへとをもちき、はこのたからも・この子のた
め・つかう所しよ従しやうもこれがため、我われしなば・に

なわれて・のぼへゆきなんのちの・あとをもちをく事なしとふかくをぼし

めしたりしに・いやなくさきにたちぬれば・いかにや・いかにや・ゆめか・まぼろしか・さめなん・さめなんと・をもへどもさめずして・しも又かへりぬ、いつとまつべしとも・をぼへず、ゆきあうべき・ところだにも申しをきたらば・はねなくとも天へものぼりなん、ふねなくとも・もろこしへも・わたりなん、大地のそこに・ありときかば・いかでか地をもほらざるべきと・をぼしめすらむ。

やすやすとあわせ給うべき事候、釈迦仏を御使として・りやうぜん浄土へまいりあわせ給へ、若有間法者無一不成仏と申して大地はささば・はづるとも日月は地に墮ち給うとも・しをはみちひぬ世はありとも花はなつにならずとも南無妙法蓮華經と申す女人の・をもう子にあわずという事はなしとこかれて候ぞ、いそぎいそぎつとめさせ給へつとめさせ給へ、
恐恐

きんげん
謹言。

正月十三日

にちれん

日蓮

かおう

花押

あまごぜんごへんじ

上野尼御前御返事

◆四一三

上野殿御返事うえのとのごへんじ

1577p

蹲いえのいも鴟一俵給び了おわんぬ。

又かうぬしのもとに候・御乳塩一疋なら並びに口付一人候、さては故五郎殿の事は・そのなげきふりずとおもへども御けさんははるかなるやうにこそおぼえ候へ、なをもなをも法華經ほけきようをあだむ事はたえつとも見え候はねば・これよりのちも・いかなる事そつらか候はんずらめども・いままでこらへさせ給たまへる事たままことしからず候、仏の説いての給たまはく火に入りて・やけぬ者はありとも大水たいたいに入りてぬれぬものはありとも大山そらは空へ・とぶとも大海たいかいは天へあがるとも末代まつだい悪世あくせに入れば須臾しゆゆの間も法華經ほけきようは信じがたき事にて候ぞ。

きそうこうてい
徽宗皇帝は漢土の主じ蒙古国に・からめとられさせ給いぬ、たまい 隠岐おきの法王ほうおう
にほんこく
は日本国のあるじ右京の権大夫殿に・せめられさせ給いて島にてはてさせ
たまい
給いぬ、ほけきよう 法華經のゆへにてだにも・あるならば即身そくしんに仏にもならせ給いぬ
ほけきよう
ん、わづかの事には身をやり命をすつれども、法華經の御ゆへに・あや
しのとがに・あたらんとおもふ人は候はぬぞ、身にて心みさせ給い候いぬ
きようきようきんげん
らん、たうとし・たうとし、きようきようきんげん 恐恐謹言。

こうあん
弘安四年三月十八日

にちれんかおう
日蓮花押

うえのとのごへんじ
上野殿御返事

◆四一四

南条殿御返事ごへんじ

1578p

御使おんつかいの申し候もうを承り候たまわ、是この所勞難儀なんぎのよし聞え候、いそぎ療治りょうじをいたされ候さんけいあいて御参詣有るべく候。

塩一駄大豆一俵とつさか一袋酒一筒給び候、上野の国より御帰宅候後は未だ見参に入らず候いま、牀敷存じ候ゆかしくいし処ところに品品の物ども取り副そえ候おとずれいて御音信に預り候事申し尽し難き御志うごめしにて候。

今申せば事新しきに相似にて候へども徳勝童子は仏に土の餅とくしょうどうじを奉りて阿育あそか大王だいおうと生れて南閭浮提えんぶだいを大体知行だいたいちぎようすと承り候たまわ、土の餅は物ならねども仏のいみじく渡わたらせ給たまへば・かくいみじき報しいを得たり、然しかるに釈迦しゃか仏は我わを無量の珍宝むりようを以て億劫ちんぼうの間・供養くようせんよりは末代の法華經まつだいの行者ほけきようを一日ぎようじやな

りとも供養くようせん功德くどくは百千万億倍せんまん・過すぐべしとこそ説たまいかせ給たまいて候たいに、
法華經ほけきようの行者ぎようじやを心こころに入れて數年くよう供養たまたし給たまう事こと有あり難がたき御ご志しころざしかな、金言きんげん
の如ごとくんば定さだめて後生ごしょうは靈山淨土りようぜんじようどに生なれ給たまうべしいみじき果報かほうなるかな。
其の上此そのの処ところは人倫じんりんを離はなれたる山中やうくつなり、東西南北とうざいなんぼくを去さりて里さともなし、
かかる・いと心細こころこまき幽窟ゆうくつなれども教主きようしゆしやくそん釈尊いちだいじの秘法ひほうを靈鷲山りようじゆうせんに
して相伝そうでんし、日蓮にちれんが肉團にくだんの胸中きようちゆうに秘かくして隱たもし持もてり、されば日蓮にちれんが胸きようの
間まは諸仏しよぶつ入定にゅうじようの処ところなり、舌の上てんほうりんは轉法輪のんどの所ところ・喉のどは誕生たうじやうの処ところ・口中くちゆう
しょうかく みぎり
正覺しやうかくの砌みぎりなるべし、かかる不思議ふしぎなる法華經ほけきようの行者ぎようじやの住処じゆうしよなれば・い
かでか靈山淨土りようぜんじようどに劣おとるべき、法妙ゆえなるが故とに人貴とおとし・人貴とつときが故ゆえに所尊しよせん
と申もうすは是これなり、神力品じんりきほん
に云いわく「若もしは林りんの中に於おいても若もしは樹しゆの下したに於おいても若もしは僧坊そうぼうに於おいても
ないし ねはん
乃至乃至而般涅槃ねはんしたもう」と云云みぎり、此この砌みぎりに望みまん輩やからは無始むしの罪障ざいしよう忽たちまちに

消滅^{しょうめつ}し三業^{さんごふ}の悪転^{あくてん}じて三徳^{さんとく}を成^{じやう}ぜん、彼^かの中^{ちゆう}天竺^{てんじく}の無熱池^{むねつち}に臨^{のぞ}みし惱者^{のうしや}が
心中^{しんちゆう}の熱氣^{ねつき}を除^{のぞ}愈^こして其^その願^{がん}を充満^{じゆうまん}する事^{こと}清涼池^{しやうりやうち}の如^{ごと}しとうそぶきしも
彼^かれ此^これ異^いなりといへども、其^その意^いは争^{いか}でか

替るべき。かわ

彼の月氏がっしの靈鷲山りょうじゅうせんは本朝ほんちょう此の身延の嶺なり、参詣さんけいはる遙かに中絶せり急急

らいりん くわだ

に來臨を企つべし、是にて待ち入つて候べし、哀哀もつ申しつくしがたき御

じうけん

志じうけんかな御志じうけんかな。

こうあん

弘安四年九月十一日

にちれん

日蓮

かおう
花押

ごへんじ

南条殿御返事

◆四一五

うえのとのごへんじ
上野殿御返事

1579p

いゑのいも一駄・ごばう一つと・大根六本、いもは石のごとし・ごばう
は大牛の角のごとし大根は大仙堂だいふつどうの大きくぎのごとしあぢわひは☆利天とうりてんの

甘露かんろのごとし、石を金にかうる国もあり土をこめにうるところもあり、千

金の金をもてる者もうえてしぬ、一飯をつとにつつめる者に・これをとれり、経いわに云く「うえたるよには・よねたつとし」と云云、一切いっさいの事は国により時による事なり、仏法ぶつぽうは此の道理どうりをわきまうべきにて候、又又申もうすべ

し、恐恐きょうきょう謹言。

こうあん

弘安四年九月廿日

にちれんかおう

日蓮花押

上野殿御返事
うえのどのごへんじ

◆四一六

上野尼御前御返事

1580p

しらよね

☆牙一駄四斗定あらひいも一俵・送り給びて南無妙法蓮華經と唱へまい

らせ候い了んぬ。
おわ

みようほうれんげきよう

妙法蓮華經と申すは蓮に譬えられて候、天上には摩訶曼陀羅華・人間

には桜の花・此等はめでたき花なれども此れ等の花をば法華經の譬には仏

たま

取り給う事なし、一切の花の中に取分けて此の花を法華經に譬へさせ給う

そのゆえ

事は其の故候なり、・或は前花後菓と申して花は前に菓は後なり・或は

このみ

前菓後花と申して菓は前に花は後なり、・或は一花

ある

多菓・或は多花一菓・或は無花有菓と品品に候へども蓮華と申す花は菓と

どうじ

花と同時に、一切經の功德は先に善根を作して後に仏とは成ると説くか

ゆえ ふじよう

かる故に不定なり、法華經と申すは手に取れば其の手やがて仏に成り口に

唱ふれば其の口即仏なり、譬えば天月の東の山の端に出ずれば其の時即水に影の浮かぶが如く音とひびきとの同時なるが如し、故に經に云く「若し法を聞くこと有らん者は一として成仏せざることを無し」云云、文の心は此の經を持つ人は百人は百人ながら千人は千人ながら一人もかけず仏に成ると申す文なり。

そもそも

しょうそく

あまごぜん

おんちち

さえもん に ゆうどう

きじつ

抑御消息を見候へば尼御前の慈父・故松野六郎左衛門入道殿の忌日

と云云、子息多ければ孝養まぢまぢなり、然れども必ず法華經に非ざれば

ほうぼう

しょうそく

しやくふつ

きんく

いかわ

せそん

かな

謗法等云云、釈迦仏の金口の説に云く「世尊の法は久しくして後要らず

まさ しんじつ

と

たほう

しょうみょう

いかわ

みょうほうれんげきよう

みな

当に眞実を説きたもうべし」と、多宝の証明に云く、妙法蓮華經は皆

こ しんじつ

じゅうほう

しょうぶつ

いかわ ぜつそうほんてん

いた

これよりひつ

是れ眞実なりと十方の諸仏の誓に云く舌相梵天に至る云云、これよりひつ

まさ

たいかい

かんど

なず

彼の国には

ある

或は仏を信

じてさるの方に大海をわたりて国あり漢土と名く、彼の国には

もち

ある

或は神を信じて

ある

或は神を信じて

ある

或は

じて神を用いぬ人もあり・或は神を信じて仏を用いぬ人もあり・或は

日本^{にほんこく}も始は・さこそ候いしか、然^{しか}るに彼の国に烏竜^{おりゅう}と申^{もう}す手書ありき
漢土^{かんど}第一の手なり、例せば日本^{にほんこく}の道風・行成等の如^{ごと}し、此の人、仏法^{ぶつぽう}を
いみて経をかかじと申^{もう}す願

を立てたり、此の人・死期来りて重病をうけ臨終にをよんで子に遺言して云く汝は我が子なり・その跡絶ずして又我よりも勝れたる手跡なり、たとひいかなる悪縁ありとも法華經をかくべからずと云云、然して後・五根より血の出ずる事・泉の涌くが如し・舌八つにさけ身くだけで十方にわかれぬ、然れども一類の人人も三惡道を知らざれば地獄に墮つる先相ともしらず。

其の子をば遺竜と申す又漢土第一の手跡なり、親の跡を追うて法華經を書かじと云う願を立てたり、其の時大王おはします司馬氏 仏法を信じ殊に法華經をあふぎ給いしが同じくは我が国の中に手跡第一の者に此の經を書かせて持經とせんとて遺竜を召す、竜申さく父の遺言あり是れ計りは免し給へと云云、大王父の遺言と申す故に他の手跡を召して一經をうつし畢んぬ、然りといへ共御心に叶い給はざりしかば又遺竜を召して言はく

汝親なんじの遺言ゆいごんと申せば朕われまげて経を写させず但八巻の題目計りを勅したに随うべ

しと云云、返す返す辞じし申すに王暝いかりて云く汝が父と云うも我が臣おみなり親

の不孝ふこうを恐れて題目を書かずば違勅いちよくの科ありと勅定度度重かりしかば・

不孝はさる事なれども当座の責を・のがれがたかりしかば法華經の外題を

書いて王へ上げ宅に歸りて父のはかに向いて血の涙を流して申す様は天子

の責重きによつて亡き父の遺言ゆいごんをたがへて既に法華經の外題を書きぬ。

不孝ふこうの責免まぬかれがたしと歎なげきて三日の間・墓を離れず食を断ち既に命に及

ぶ、三日と申す寅の時に已に絶死し畢つて夢の如し、虚空を見れば天人・

一人おはします帝釈たいしゃくを絵にかきたるが如し無量の眷属けんぞく・天地に充滿せり、

爰こゝに竜問うて云く何なる人ぞ答えて云く汝知らずや我は是れ父の烏竜おりゆうな

り、我人間にんげんにありし時・外典を執し仏法を

かたきとし、殊ことに法華經に敵をなしまいらせし故に無間に墮つ、日日に舌

をぬかるる事・数百度・或は死し・或は生き天に仰き地に伏してなげけど
も叶^{かな}う事なし、人間へ告げんと思へども便^{たよ}りなし、汝我が子として遺言^{ゆいごん}な
りと申せしかば其^その言炎と成つて身を責め・剣と成つて天より雨り下る、
汝^{なんじ}が不孝極^{ふこうきわま}り無かりしかども我が遺言^{ゆいごん}を違^{たが}へ

ざりし故に自業自得果うらみがたかりし所に金色の仏一むげんじこく体無間地獄に出現しゅつげん

して仮使たとい遍法界断善諸衆生ほとけだんぜんしよしゅじょう一聞法華經決定成菩提もんぼう けつじょう ぼだいと云云、此の仏・無間むげん

地獄じこくに入り給たまひいしかば大水を大火になげたるが如し、少し苦みやみぬる処ところ

に我合掌がっしょうして仏に問たてまつい奉りて何なる仏ぞと申せば・仏答えて我は是れ汝こ なんじ

が子息遺しそくいりゆう竜ただが只今書くところの法華經の題目六十四字の内の妙の一字なり

と言ふ、八卷の題目は八八六十四の仏・六十四の満月まんげつと成り給へば・無間むげん

地獄じこくの大閻そく即大明となりし上・無間地獄は当位即妙・不改本位ふかいほんいと申して

常寂光じょうじやっこうの都と成りぬ、我及び罪人およ ざいにんとは皆蓮みなはちすの上の仏と成りて只今都率ただ とそつの

内院へ上り参り候が先ず汝なんじに告ぐるなりと云云、遺竜いりゅうが云く、我が手にて

書きけり争いかでか君たすかり給うべき、而も我が心よりかくに非ず・いかに

・いかにと申せば、父答えて云く汝いわ なんじはか

なし汝なんじが手は我が手なり汝なんじが身は我が身なり汝なんじが書きし字は我が書きし

字なり、汝^{なんじ}心に信ぜざれども手に書く故^{ゆえ}に既に・たすかりぬ、譬^{たと}えば小児^{しょうに}の火を放つに心にあらざれども物を焼くが如^{ごと}し、法華經^{ほけきよう}も亦^{また}かくの如^{ごと}し存外^{ぞんがい}に信を成せば必ず仏になる、又^そ其の義を知りて謗^{ほう}ずる事無^{ことな}かれ、但^{ただ}し在家^{ざいけ}の事なれば・いひしこと故^{ことさらたいざい}大罪なれども懺悔^{ざんげ}しやすしと云云、此の事を
だいおう もう だいおう いわ すで
大王に申す、大王の言^{こと}く我が願^{ねが}既^{すで}にしるし有^{あり}りとて遺^{いり}竜^{ゆう}弥^い朝恩^{あそん}を蒙^{こむ}り国
又^{また}こぞつて此の御經^{おのきやう}を仰^{あお}ぎ奉^{たてまつ}る。

しか
然^{しか}るに故五郎殿^{ごごろうだん}と入道殿^{にゅうだうだん}とは尼御前^{あまごぜん}の父^{ちち}なり子^こなり、尼御前^{あまごぜん}は彼^かの入道^{にゅうだう}
殿^{だん}のむすめなり、今^{いま}こそ入道殿^{にゅうだうだん}は都率^{とそつ}の内院^{ないえん}へ参^{まゐ}り給^{たま}うらめ、此^この由^{よし}をは
・わきどのよみきかせまいらせ給^{たま}うべし、事^{こと}そうそうにてくはしく申^{もう}さず
候^{こう}。

きようきようきんげん
恐^{おそ}恐^{おそ}謹^{きん}言^{げん}

十一月十五日

にちれん
日蓮

かおう
花押

あまごぜんごへんじ
上野尼御前御返事

◆四一七

上野殿母御前御返事

1583

p

乃米一だ・聖人しょうにん一つつ・二十ひさげか・かつかう・ひとかうぶくろおくり給ひ候おわ了んぬ。

このところの・やう・せんぜんに申しもうふり候いぬ、さては去ぬるぶんえい文永十一年六月十七日この山に入り候いて今年十二月八日にいたるまで此の山・出いずる事一步も候はずただし八年が間やせやまいと申しもうとしと申しもうとしとしに身ゆわく・心をぼれ候いつるほどに、今年は春より此のやまい・をこりて秋すぎ・冬にいたるまで日日にをとろへ・

夜夜にまさり候いつるが・この十余日は・すでに食も・ほとをととどまり

て候上・ゆきはかさなり・かんはせめ候、

身のひゆる事石のごとし胸のつめたき事氷のごとし、しかるに・このさはたたかに・さしわかして、かつかうを・はたと・くい切りて一度のみて候へば火を胸に・たくがごとし、ゆに入るにいたり、あせに・あかあらひ・しづくに足をすすぐ、此の御志は・いかんがせんと・うれしくをもひ候ところにりようげん両眼よりひとつのなんだをうかべて候。

まことやまことや去年のこそ九月五日こ五郎殿のかくれにしはいかになりけると胸うちさわぎて・ゆびををりかずへ候へばすでに二ヶ年十六月四百余日にすぎ候が、それには母なれば御をとづれや候らむ、いかに・きかせ給はぬやらむ、ふりし雪も又ふれり・ちりし花も又さきて候いき、無常ばかり・またも・かへりきこへ候はざりけ

るか、あらうらめし・あらうらめし余所よそにても・よきくわんざかな・よき

くわんざかな玉のやうなる男かな男かないくせ・をやのうれしく・をぼす
らむと見候いしに、満月まんげつに雲のかかれるが・はれずして山へ入り・さかん
なる花のあやなく・かぜのちらせるがごとしと・あさましくこそをぼへ候
へ。

にちれん

日蓮は所らうのゆへに人人の御文の御返事も申さず候いつるがこの事は

あまりに・なげかしく候へば・ふでをとりて候ぞ、これも・よもひさしく

もこのよに候はじ、一定五郎殿にいきあいぬと・をぼへ候、母よりさきに

けさんし候わば母のなげき申しつたへ候はん、事事又又申すべし、恐

きんげん

謹言。

十二月八日

にちれん
日蓮

花押
かおう

上野殿母御前御返事
うえのとははごぜんごへんじ

◆四一八

大白牛車御消息
だいびやくこしゃ しようそく

1584p

そもそもほけきよう

抑法華經の太白牛車と申すは我も人も法華經の行者の乗るべき車にて

侯なり、彼の車をば法華經の譬喩品と申すに懇に説かせ給いて供、但し彼

の御経は羅什・存略の故に委しくは説き給はず、天竺の梵品には車の荘り物・其の外・聞信戒定進捨懺の七宝まで委しく説き給ひて候を日蓮あらあら披見に及び候、先ず此の車と申すは縦広五百由旬の車にして金の輪を入れ・銀の棟をあげ・金の繩を以て八方へつり繩をつけ・三十七重のきだし

をば銀を以てみがきたて八万四千の宝の鈴を車の四面に懸けられたり、三百六十ながれの・くれなひの錦の旗を玉のさほにかけながし、四万二千の欄干には四天王の番をつけ、又蜜の内には六万九千三百人十余体の仏・菩薩・宝蓮華に坐し給へり、帝釈は諸の眷属を引きつれ給ひて千二百の音楽を奏し、梵王は天蓋を指し懸け・地神は山

河・大地を平等に成し給ふ、故に法性の空に自在にとびゆく事をこそ・だいびやくこしや
大白牛車とは申すなれ、我より後に来り給はん人人は此の車にめされて

りようぜん
靈山へ御出で有るべく候、日蓮も同じ事に乗りて御迎いにまかり向ふべく
供、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經。

にちれん
日蓮
かおう
花押

◆四一九 春初御消息しゅんそくごせき

1585p

ははき殿かきて候事よろこびいりて候。

春の初の御悦よろこび木に花のさくがごとく山に草の生い出ずるがごとしと我も

人も悦よろこび入つて候、さては御送り物の日記にっき☆八木一俵・白塩一俵・十字三

十枚・いも一俵・給おわび候い畢おわんぬ。

深山みやまの中に白雪・三日の間に庭は一丈につもり谷はみねとなり・みねは

天にはしかけたり、鳥鹿あんしつは庵室に入り樵牧は山にさしいらず、衣はうすし

食はたえたり夜はかんく鳥にことならず、昼は里へいでおもふ心ひま

なし、すでに読経どつきようのこえもたえ観念かんねんの心もうすし、今生退転こんじょうたいてんして未来みらい三

五を経ん事をなげき候いつるところに此の御とぶらひに命いきて又もや見

参そうらに入り候はんずらんと・うれしく候。

過去の仏は凡夫にて・おはしまし候いし時五濁乱漫の世にかかる飢えた
法華經の行者をやしなひて仏にはならせ給うぞとみえて候へば法華經ま
ことならば此の功德によりて過去の慈父は成仏疑なし。

故五郎殿も今は靈山淨土にまいりあはせ給いて故殿に御かうべをなでら

れさせ給うべしと・おもひやり候へば涙かきあへられず、恐恐謹言。

正月二十日 日蓮花押

上野殿御返事

申す事恐れ入つて候、返返ははき殿一によみきかせまいらせ候へ。

◆四二〇 法華証明抄

法華經の行者

日蓮

花押

1586p

末代悪世に法華經を經のごとく信じまいらせ候者をば法華經の御鏡には
いかんがうかべさせ給うと拝見つかまつり候へば、過去に十萬億の仏を供養
せる人なりとたしかに釈迦仏の金口の御口より出でさせ給いて候を・一仏
なれば末代の凡夫はうたがいや・せんずらんとて、此より東方にはるか
國をすぎさせ給いて・おはします宝浄世界の多宝仏わざわざと行幸ならせ
給いて釈迦仏にをり向いまいらせて妙法華經・皆是眞実と証明せさせ
給い候いき、

此の上はなにの不審が残るべき・なれども・なをなを末代の凡夫は・をば

つかなしと・をぼしめしや有りけん、十方じゅうぼうの諸仏しよぶつを召しあつめさせ給たまいて
広長舌相こうぢやうぜうそうと申もうして無量劫むりやうじやくより・このかた永くそらごとなきひろくながく大
なる御舌しゆみせんを須弥山しゆみせんのごとく虚空こくうに立てならべ給たまいし事は・をびただしかり
し事なり、かう候へば末代まつだいの凡夫ぼんぶの身として法華經ほけきやうの一字・二字を信じま
いらせ候へば十方じゅうぼうの仏の御舌を持つ物ぞかし、いかなる過去かこの宿習しゆくじゆうにて
・かかる身とは

生よろこるらむと悦びまいらせ候・上の經文きやうもんは過去かこに十万億の仏にあいまいらせ
て供養くようをなしまいらせて候いける者が法華經計ほけきやうばかりをば用もちいまいらせず候い
けれども仏くやうの功德くどく莫大ばくだいなりければ謗法ぼうぼうの罪つみに依よりて貧賤ひんせんの身とは生
れて候へども又此の經を信ずる人となれりと見へて候、此これをば天台てんだいの御
釈いわに云く「人の地に倒れて還かえつて地より起つが如ごとし」等云云、地にたうれ
たる人は・かへりて地よりをく、法華經謗法ほけきやうぼうぼうの人は三惡さんあく並ならびに人天にんてんの地に

は・たうれ候へどもかへりて法華經ほけきようの御手みてにかかりて仏になるとことわられて候。

しかるにこの上野の七郎次郎は末代まつだいの凡夫武士ほんぶしの家に生れて悪人あくにんとは申すべけれども心は善人ぜんにんなり、其の故そのゆえ

は日蓮にちれんが法門ほうもんをば上かみ一人より下した万民ばんみんまで信じ給たまはざる上たまたま信ずる人

あれば・或あるは所領しりょう・或あるは田畠等でんばたにわづらひをなし結句けっくは命に及ひとびとぶ人人もあ

り信じがたき上・はは故上野は信じまいらせ候いぬ、又此の者敵子となり

て人もすすめぬに心中しんちゆうより信じまいらせて上下万人じやうげばんにんにあるいは・いさめ

・或あるはをどし候いつるに・ついに捨つる心なくて

候へばすでに仏になるべしと見へ候へば天魔てんま・外道げどうが病をつけてをどさん

と心み候か、命はかぎりある事なり・すこしも・をどろく事なかれ、又鬼神きじん

めらめ此の人をなやますは剣をさかさまにのむか又大火だいかをいだくか、三世さんぜ

十方じゅうぽうの仏の大怨敵おんてきとなるか、あなかしこ・あなかしこ、此の人のやまいを

忽たちまちになをして・かへりてまほりとなりて鬼道の大苦をぬくべきか、其その義

なくして現在げんざいには頭破七分ずはしちぶんの科とがに行われ後生ごしょうには大無間地獄むげんじごくに墮おつべきか、

永くとどめよ・とどめよ、日蓮にちれんが言をいやしみて後悔こうかいあるべし・後悔こうかいある

べし。

弘安五年二月廿八日

下伯耆房

◆四二

莛三枚御書ごしよ

1587p

莛三枚・生和布一籠かこ・給たまい了おわんぬ。

そもそも

抑三月一日より四日にいたるまでの御あそびに心なぐさみて・やせや
まいもなをり虎とるばかりをばへ候上此の御わかめ給びて師子ししにのりぬべ
くをばへ候。

さては財たからはところにより人によつてかわりて候、此の身延の山には石は
多けれども餅なし、こけは多けれどもうちしく物候はず、木の皮をはいで
しき物とす・むしろいかでか財たからとならざるべき。

億耳居士こじと申せし長者ちやうじゃは足のうらに・けのをいて候いし者なり、ありきのところ・いへの内は申すもうにをよばず・わたを四寸しきて・ふみし人なり、これは・いかなる事ぞと申せば先世せんぜに・たうとき僧に・くまのかわをしかせしゆへとみへて候。

いわうや日本国にほんこくは月氏がっしより十万よりをへだてて候辺国なる上・へびすの島・因果いんがのことはりも弁わきまえまじき上・末法まっぽうになり候いぬ、仏法ぶつぽうをば信ずるやうにてそしる国なり、しかるに法華經ほけきやうの御ゆへに名をたたせ給たまう上・御むしろを法華經ほけきやうにまいらせ給たまい候いぬれば。

◆四二二 芋一駄御書ごしよ

1588p

いも一駄はじかみ五十ぱをくりたびて候。

このみのぶのやまと申し候は・にしはしらねのたけ・つねにゆきをみる、
ひんがしにはてんしのたけ・つねにひをみる、きたはみのぶのたけ・みな
みはたかとり^{もう}のたけ四山のあひ・はこのそこのごとし、いぬゐのすみより
・かはながれて・たつみのすみ^{もう}にむかう・かかるいみじきところみねには
・せひのこへ・たには・さるのさけび木は・あしのごとし・くさは・あ
めににたり、しかれども・かかるいもはみへ候はず、はじかみはをひず、
いしににて少しまもりやわらかなり、くさににて・くさよりもあぢあり。
ほけきよう　もう
法華經に申しあげ候いぬれば御心ざしはさだめて釈迦^{おんこころざし}仏しろしめしぬら
ん、
きようきようさんげん
恐恐　謹言。

八月十四日

日蓮^{にちれん}在

御判

ごへんじ
御返事

◆四二三

閻浮提中御書

1589p

閻浮提中飢餓 えんぶだい きが ☐ ☐ ☐ 示現閻浮提中 じげん えんぶだい ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐、又云く又示現閻浮提中 ☐

☐ ☐ 劫起等云云、人王三十代 ☐ ☐ 国の聖明王 せいめいおう ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ 国にわたす王此れ こ

を用いずして三代仏罰にあたる ☐ ☐ ☐、釈迦仏を申し隠す もつ ☐ ☐ 念佛者 ねんぶつ

等善光寺の阿弥陀仏云云、上一人より下万民にいたるまで皆人 ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ 此れ こ

をあらわす、日蓮にあだをなす人は惣て日蓮を犯す、天は惣て此国を ☐ ☐ ☐

☐ ☐ ☐ 言く いわ「経を読誦し書持すること有らん者を見て輕賤憎嫉して結恨 けつこん

を懷かん」等云云、又云く「多病 ☆瘦」第八に云く「諸悪重病」又第二

に云く「若し医道を修し方に順て病を い

治せば更に他の疾を増し・或は復死を致す」又云く「若し自ら病有らんに も

人の救療すること無くなく設たい良薬を服すとも而も復増劇せん」等云云、弘法こうぼう
大師だいしは後に望んで戲論けろんと作す、東寺とうじの一門上御室いちもん おむろより下一切いっさいの東寺とうじの門家もんか
は法華經ほけきょうを戲論けろんと云云、叡山えいざんの座主並ざすならびに三千の大衆さんぜん たいしゅう□日本国にほんこく・山寺一同
の云く□□□□大日經等云云、智証大師ちしょうだいしの云く法華尚ほつけなお及およばず等云云、
園城おんじょうの長吏並ちようりならびに一国の末流等まつりゅうの云く法華經ほけきょうは真言經しんこんに及およばずと云云、
此さんしの三師もちを用こくしゅつゆる国主終ほうこうに法皇尽おわ了なぬ、明雲座主めいぐんざすの義仲ぎちゆうに殺されし、
承久じようきゅうに御室おむろ思おもひ死しにせし是これなり。

願でしくは我が弟子等ししは師子王ししおうの子となりて群狐ぐんこに笑わらはる事なかれ、過去かこ
遠遠劫おんのんこうより已来日蓮このかたにちれんがごとく身命しんみょうをすてて強敵かうてきの科とがを顕あらわせ・師子ししは値あいが
たかるべし、国主こくしゅの責め・なををそろし・いわうや閻魔えんまのせめをや、日本国にほんこく
のせめは水のごとし・ぬるるを・をそるる事なかれ、閻魔えんまのせめは火のご
とし・裸だいなはにして入ると・をもへ、大涅槃經だいねはんきょうの文の心は仏法ぶつぽうを信じて今度生死このたびしうじ

をはなる人のすこし心のゆるなるをすすめむがために疫病えきびょうを仏のあたへ
給たまうはげます心なり・すすむる心なり。

にちれん 日蓮は凡夫なり天眼なければ一紙をもみとをすことなし、宿命なければ
さんぜ 三世を知ることなし、而れども此の経文のごとく日蓮は肉眼なれども天眼
にほんこく 宿命□□日本国七百余歳の仏眼の流布せしやう、八宗・十宗の邪正漢土
がっし らんし にんし しやうれつはちまん ぶつげん るふ はっしゅう
・月氏の論師・人師の勝劣八万十二の仏經の旨趣をあらあらすいちし □□
ぼうこく ぼうこく ぼうこく ぼうこく
・我が朝の亡国となるべき事先に此れをかながへて宛も符契のごとし、
こ みなほけきやう おんちから し か こくしゅ
此れ皆法華經の御力なり、而るを国主は讒臣等が凶言を・をさめてあだを
なせしかば、凡夫なれば道理なりとをもつて退する心なかりしかども度度
あだをな。

◆四二四

衆生身心御書

1590p

しゅじやう 衆生の身心をとかせ給う其の衆生の心にのぞむとて・とかせ給へば人
しんしん
たまそ しゅじやう
たま

の説なれども衆生の心をいせず、かるがゆへに隨他意の經となづけたり、
譬へばさけもこのまぬをやのきわめてさけをこのむいとをしき子あり、か
つはいとをしみ・かつは心をとらんがために・かれにさけをすすめんがた
めに・父母も酒をこのむよしをするなり、しかるをはかなき子は父母も酒
をこのみ給うと・をもへり。

提謂經と申す經は人天の事をとけり、阿含經と申す經は二乗の事をとか
せ給う、華嚴經と申す經は菩薩のとなり、方等・般若經等は・或は
の凡夫これをよみ候へば仏の御心に叶うらんとは行者は・をもへども・く
はしく・これをろむずれば己が心をよむなり、己が心は

本よりつたなき心なれば・はかばかしき事なし、法華經と申すは隨自意と
申して仏の御心をとかせ給う、仏の御心はよき心なるゆへに・たとい・し

らざる人も此の経をよみたてまつれば利益はかりなし、麻の中のよもぎ・
つつの中のくちなは・よき人にむつぶもの・なにとなけれども心も・ふる
まひも言も・なをしくなるなり、ほけきよう法華経もかく

のごとし・なにとなければども・この経を信じぬる人をば仏のよき物と・を
ぼすなり、此の法華經ほけきょうにをひて又機きにより時により国によりひろむる人に
より・やうやうにかわりて候をば等覺とうかくの菩薩ぼさつまでも・このあわひをば・し
らせ給たまわずとみへて候、まして末代まつだいの凡夫ぼんぶは・いかでか・ちからひを・を
をせ候べき。

しかれども人のつかひに三人あり、一人はきわめてこざかしき、一人は
はかなくもなし又こざかしからず、一人はきわめて・はかなくたしかなる、
此の三人に第一だいいちはあやまちなし、第二は第一だいいちほどこそ・なければども・すこ
しこざかしきゆへに主の御ことばに私の言をそうるゆへに第一だいいちのわるきつ
かいとなる、第三はきわめて・はかなく

あるゆへに私の言をまじへず・きわめて正直しょうじきなるゆへに主の言ばを・たが
へず、第二よりもよき事にて候あやまつて第一だいいちにも・すぐれて候なり、第一だいいち

をば月支がつしの四依しえにたとう、第二をば漢土かんどの人師にんしにたとう、第三をば末代まつだいの凡夫ほんぷの中に愚癡ぐちにして正直しょうじきなる物にたとう。

仏在世ざいせはしばらく此これを・をく仏の御入滅にゆうめつの次の日より一千年をば

正法しょうほうと申す、この正法しょうほう一千年を二つにわかつ、前の五百年が間はしょうじゅうきやう小乗經

ひろまらせ給たまう、ひろめし人人ひとびとは迦葉かしょう・阿難あなん等なり、後の五百年は馬鳴めみやう・

竜樹りゆうじゆ・無著むぢやく・天親てんじん等 權大乘經こんだいじやうきやうを弘通くつうせさせ給たまう、法華經ほけきやうをば・かたはし

計ばかりかける論師ろんしもあり、又つやつや申しいださぬ人もあり、正法しょうほう一千年よ

り後の論師ろんしの中には少分ぶつせつを仏説ぶつせつににたれども多分たぶんをあやまりあり、あやま

りなくして而しかも

たらざるは迦葉馬鳴かしょうめみやう・阿難あなん・竜樹りゆうじゆ・無著むぢやく・天親てんじん等なり、像法そうほうに入り一千年

・漢土かんどに仏法ぶつぽうわたりしかば始めは儒家じゆけと相論そうろんせしゆへにいとまなきかのゆ

へに仏教ぶつぎやうの内の大小だいしやう・權実ごんじつの沙汰さたなし、やうやく仏法ぶつぽう流布るふせし上・月支がつし

- 3651 -

より・かさねがさねぶつぽう仏法わたり来るほどに・前のひとびと人人は・かしこきやうな
れども後にわたるきょうろん經論をもつて・みれば・はかなき事しゅつたいも出来す、又はか
なくをもひしひとびと人人もかしこくみゆる事もありき、結句けっくは十流になりて千万よろずの
義ありしかばぐしや愚者はいづれに・つくべしともみへず、智者ちしやとをぼしき人は
へんしゅう辺執かぎりなし、而れども最極しかは一同の義あり・

いわゆるいちだいいち
所謂一代第一は華嚴經・第二は涅槃經・第三は法華經此の義は上一人より
下万民にいたるまで異義なし、大聖とあうぎし法雲法師・智蔵法師等の十
師の義一同なりしゆへなり。

しか
而るを像法の中の陳隋の代に智☆と申す小僧あり後には智者大師とがう
す、法門多しといへども詮するところ法華・涅槃華嚴經の勝劣の一つ計り
なり、智・法師云く仏法さかさまなり云云、陳主此の事をたださんがため
に南北の十師の最頂たる恵☆僧上・恵光僧都・恵栄法歳法師等の百有余人
を召し合わせられし時・法華經の中には

「諸經の中に於て最も其の上に在り」等云云、又云く「已今当説最為
難信難解」等云云、已とは無量義經に云く「摩訶般若・華嚴海空」等云云、
当とは涅槃經に云く「般若はら蜜より大涅槃を出だす」等云云、此の經文
は華嚴經・涅槃經には法華經勝ると見ゆる事赫赫たり明明たり御会通ある

べしと・せめしかば、・或は口をとぢ・或は悪口をはき・或は色をへんじ
なんと・せしかども、陳主立つて三拝し百官掌をあわせしかば力及ばず
まけにき。

一代の中には第一法華經にてありしほどに像法の後の五百に新訳の經論
重ねてわたる大宗皇帝の貞觀三年に玄奘と申す人あり月支に入りて十七
年・五天の佛法を習いきわめて貞觀十九年に漢土へわたりしが・深密經・
瑜伽論・唯識論・法相宗をわたす、玄奘云く「月支に宗宗多しといへど
も此の宗・第一なり」大宗皇帝は又漢土第一の賢王なり玄奘を師とす、此
の宗の所詮に云く「・或は三乘方便・一乘真實」・或は一乘方便・三乘
真實・又云く「五性は各別なり決定性と無性の有情は永く仏に成らず」等
と云云、此の義は天台宗と水火なり而も天台大師と章安大師は御入滅な
りぬ其の已下の人人は人非人なり・すでに天台宗破れてみへしなり。

其その後そくてんこうごう則すなは天皇てんたい后だいしの御世に華嚴宗けこんしゅう立つ前てんだいだいしに天台大師に・せめられし六十卷
の華嚴經けこんきようをば・さしをきて後に日照三蔵さんそうのわたせる新訳しんやくの華嚴經けこんきよう八十卷を
もつて立てたり、此の宗のせんにいわく華嚴經けこんきようは根本こんぽん法輪ほうりん・法華經ほけきようは枝末しまつ
法輪等云云、則そくてんこうごう天皇てんたい后だいしは尼ににてをはせしが内外典ないげてんに・こざかしき人なり、
慢心まんしんたかくして天台宗てんだいしゅうをさげをぼしてあり

しなり、法相ほつそうといひる華嚴宗けこんしゅうといひる二重ふたへに法華經ほけきょうかくれさせ給たまう。

其その後玄宗皇帝げんそうこうていの御宇ぎように月支がっしより善無畏三藏ぜんむいさんそう・金剛智三藏こんこうちさんそう・不空三藏ふくうさんそう・

大日經だいにちきよう・金剛頂經こんこうちようきよう・蘇悉地經そしつちきようと申もうす三經をわたす、此の三人は人がらと

いひ法門ほうもんといひる前前の漢土さんどの法師にんしには対すべくもなき人人ひとびとなり、而も前に

なかりし印しんこんと真言しんこんとをわたすゆへに仏法ぶつぽうは已前いぜんには此の国になかりけりと

をぼせしなり、此の人人ひとびとの云いわく天台宗てんだいしゅうは華嚴けこん・法相ほつそう・三論さんろんには勝すぐれたり

・しかれども此の真言經しんこんには及およばずと云云そ、其の後妙樂大師みょうらくだいしは天台大師てんだいだいしの

せめ給たまはざる法相宗ほうそうしゅう・華嚴宗けこんしゅう・真言宗しんこんしゅうをせめ給たまひて候たまへども天台大師てんだいだいしの

ごとく公場こうじやうにてせめ給たまはざれば、ただ闇夜やみよのにしきのごとし、法華經ほけきょうにな

き印しんこんと真言げんぜんと現前げんぜんなるゆへに皆人みな・一同しんこんに真言しんこんまさりにて有りしなり。

像法そうほうの中に日本国にほんこくに仏法ぶつぽうわたり所謂いわゆる欽明天皇きんめいてんのうの六年きんめいなり、欽明きんめいより桓武かんむ

にいたるまで二百余年さんろんが間は三論じようじつ・成実じようじつ・法相ほつそう・俱舍ぐしゃ・華嚴律けこんの六宗ろくしゅう

- 3656 -

くつう
弘通せり、真言宗しんごんしゅうは人王じんおう四十四代・元正天皇げんしょうの御宇ぎようにわたる、天台宗てんだいしゅうは

人王第四十五代聖武天王しやうむの御宇ぎようにわたる、しかれどもひろまる事なし、桓武かんむ

の御代さいちようほつしに最澄法師さいちようほつし・後ごには伝教大師でんぎようだいしとがうす、

にゅうとう いぜん ろくしゅう なら
入唐にゅうとう已前いぜんに六宗ろくしゅうを習ならいきわむる上・十五年が間・天台てんだい・真言しんごんの二宗を山

にこもり給たまひいて御覧ごらんありき、入唐にゅうとう已前いぜんに天台宗てんだいしゅうをもつて六宗ろくしゅうをせめしか

ば七なな大寺皆みなせめられて最澄さいちようの弟子でしとなりぬ、六宗ろくしゅうの義ぎやぶれぬ、後延暦えんりやく

廿三年にゅうとうに御入唐ごにゅうとう・同じき廿四年御帰朝きちよう・天台てんだい・真言しんごんの宗を日本国にほんこくにひろめ

たり、但ただし勝劣しょうれつの事は内心ないしんに此これを存ぞんじて人に向つてとかざるか。

同代どうだいに空海くうかいという人あり後には弘法大師こうぼうだいしとがうす、延暦えんりやく廿三年にゅうとうに御入唐ごにゅうとう

・大同三年御帰朝きちよう但真言しんごんの一宗を習ならいわたす、此の人の義ぎに云いく法華経ほけきやうは

尚華嚴經なわけんきやうに及およばず何いかに況しんごんや真言しんごんにをひてをや。

伝でん教大師ぎやうだいしの御弟子おんでしに円仁えんにんという人あり後に慈覚大師じかくだいしとがうす、去いぬる

教大師ぎやうだいしの御弟子おんでしに円仁えんにんという人あり後に慈覚大師じかくだいしとがうす、去いぬる

教大師ぎやうだいしの御弟子おんでしに円仁えんにんという人あり後に慈覚大師じかくだいしとがうす、去いぬる

教大師ぎやうだいしの御弟子おんでしに円仁えんにんという人あり後に慈覚大師じかくだいしとがうす、去いぬる

教大師ぎやうだいしの御弟子おんでしに円仁えんにんという人あり後に慈覚大師じかくだいしとがうす、去いぬる

教大師ぎやうだいしの御弟子おんでしに円仁えんにんという人あり後に慈覚大師じかくだいしとがうす、去いぬる

教大師ぎやうだいしの御弟子おんでしに円仁えんにんという人あり後に慈覚大師じかくだいしとがうす、去いぬる

教大師ぎやうだいしの御弟子おんでしに円仁えんにんという人あり後に慈覚大師じかくだいしとがうす、去いぬる

承和五年の御入唐・同十四年に御帰朝・十年が間・真言・天台の二宗をが
くす、日本国にて伝教大師・義真・円澄に天台・真言の二宗を習いきわ
めたる

上・漢土にわたりて十年が間・八箇の大徳にあひて真言を習い宗叡・志遠等に値い給いて天台宗を習う、日本に帰朝して云く天台宗と真言宗とは同じく醍醐なり俱に深秘なり等云云、宣旨を申して・これにそふ。

其の後円珍と申す人あり後には智証大師とがうす、入唐已前には義真和尚の御弟子なり、日本国にして義真・円澄・円仁等の人人に天台・真言

の二宗習いきわめたり、其の上去ぬる仁嘉三年に御入唐同貞観元年に御

帰朝七年が間・天台・真言の二宗を法全良・等の人人に習いきわむ、天台

・真言の二宗の勝劣は鏡をかけたり、後代に一定

あらそひありなん定むべしと云つて天台・真言の二宗は譬へば人の両の目

・鳥の二の翼のごとし、此の外異義を存ぜん人人をば祖師・伝教大師にそ

むく人なり山に住むべからずと宣旨を申しそへて弘通せさせ給いき・され

ば漢土・日本に智者多しといへども此の義をやぶる人はあるべからず、此

の義まことならば習う人人は必ず仏にならせ給いぬらん、あがめさせ給う
國王等は必ず世安穩になりぬらんと・をぼゆ。

但し予が愚案は人に申せども、御もちあるべからざる上・身のあだと

なるべし、又きかせ給う弟子・檀那も安穩なるべからずとをもひし上其の

義又たがわず、但此の事は一定仏意には叶わでもや・あるらんと・をぼへ

候、法華經一部八卷・二十八品には此の經に勝れたる經をせば此の法華經

は十方の仏あつまりて大妄語をあつめさせ

給えるなるべし、随つて華嚴・涅槃・般若・大日經・深密等の經經を見

るに「諸經の中に於て最も其の上に在り」の明文をやぶりたる文なし、随つ

て善無畏等玄奘等弘法・慈覺・智証等種種のたくみあれども法華經を

大日經に対してやぶりたる經文はいだし給わず、但印・真言計りの有無

をゆへとせるなるべし、数百卷のふみをつくり

漢土・日本に往復して無尽のたばかりをなし宣旨を申しそへて人を・をど
されんよりは経文分明ならばたれか疑をなすべき、つゆつもりて河と
なる河つもりて大海となる塵つもりて山となる山かさなりて須弥山となれ
り小事つもりて大事となる何に況や此の事は最も大事なり、疏をつくられ
けるにも両方の道理・文証をつくさるべ

かりけるか、又せんじ宣旨も両方を尋ね極めて分明ふんみょうの証文しょうもんをかきのせていましめあるべかりけるか。

いこんとう

きようもん

已今当の経文は仏すらやぶりがたし何に況や論師・人師・国王の威徳を

もつて・

やぶるべしや、

已今当の

経文をば

梵王・

帝釈・

日月・

四天等

ちようもん

聴聞して各各の宮殿にかきとどめて・

をはするなり、まことに已今当の

経文を知らぬ人の有る時は

先の人人の邪義は・

ひろまりて失なきやうにて

きようもん

は・ありとも・此の

経文を・

つよく立て

退転せざる

こわ物出来しなば

大事出来すべし、

いやしみて・

しゅったい

はながし・

或は命をたたんほどに・

梵王・

帝釈・

日月・

四天をこりあひて

ぎようじや

此の行者のかたうとを・

せんほどに・

存外に天のせめ来りて

民もほろび国

もやぶれんか、

法華經の

行者はいやしけれども

ほけきよう

守護する天こわし、

例せば

修羅が

日月をのめば

頭七分に

わる犬は

師子を

ほゆれば・

しゅへ

はらわたくさる、

今予みるに日本国かくのごとし、又此れを供養せん人人は法華經供養の功德あるべし、伝教大師釈して云く「讚めん者は福を安明に積み謗せん者は罪を無間に開かん」等云云。

ひへのはんを辟支仏に供養せし人は宝明如来となり・つちのもちゐを仏に供養せしかば閻浮提の王となれり、設いこうをいたせども・まことならぬ事を供養すれば大悪とは・なれども善とならず、設い心をろかに・すこしきの物なれども・まことの人に供養すれば・こう大なり、何に況や心ざしありて・まことの法を供養せん人人をや。

其の上当世は世みだれて民の力よわし、いとまなき時なれども心ざしのゆくところ山中の法華經へ・まうそうか・たかなををくらせ給う福田によきたねを下させ給うか、なみだもとどまらず。

◆四二五

白米一俵御書ごしよ

1596p

白米一俵・けいもひとたわら・こふのりひとかご・御つかいを・もつてわざわざをくられて候。

人にも二つの財たからあり一には衣二には食なり経いわに云く「有情うじようは食よに依つて

住す」と云云文の心は生ある者は衣と食によつて世にすむと申もうす心なり、

魚は水にすむ水を宝とす木は地の上にをいて候・地たからを財とす、人は食によ

つて生あり食を財たからとす、いのちと申もうす物は一切いっさいの財たからの中に第一だいいちの財たからなり、

へんまんさんぜんかい
遍満三千界無有直身命しんみようととかれて

さんぜんだいせんせかい
三千大千世界にみて候財たからも・いのちには・かへぬ事に候なり、されば・

いのちは・ともしびのごとし食はあぶらのごとし、あぶらつくれば・とも

しびきへぬ食なければ・いのちたへぬ、一切のかみ・仏をうやまいたてまつる・始の句には南無と申す文字を・をき候なり、南無と申すは・いかなる事ぞと申すに・南無と申すは天竺のことばにて候、漢土・日本には帰命と申す帰命と申すは我が命を仏に奉ると申す事なり、我が身には分に随いて妻子・眷属・所領・金銀等をもてる人人もあり又財なき人人もあり、財あるも財なきも命と申す財にすぎて候財は候はず、さればいにしへの聖人・賢人と申すは命を仏にまいらせて仏にはなり候なり。

いわゆる雪山童子と申せし人は身を鬼にまかせて八字をならへり、薬王菩薩と申せし人は臂をやいて法華經に奉る、我が朝にも聖徳太子と申せし人は手のかわをはいで法華經をかき奉り、天智天皇と申せし国王は無名指と申すゆびをたいて釈迦仏に奉る、比れ等は賢人・聖人の事なれば我等は

叶かないがたき事にて候。

ただし仏になり候事は凡夫ほんぶは志こころざしざしと申もうす文字もんじを心へて仏になり候なり、志こころざしざしと申もうすはなに事ぞと委細いさいにかんがへて候へば観心かんじんの法門ほうもんなり、観心かんじんの法門ほうもんと申もうすはなに事ぞとたづね候へばただ一つきて候衣ほけきを法華經ように

まいらせ候が身のかわをわぐにて候ぞ、うへたるよに・これはなしては・
けうの命をつぐべき物もなきに・ただひとつ候これうを仏にまいらせ候が
身命しんみょうを仏にまいらせ候にて候ぞ、これは薬王やくおうのひぢをやき雪山童子せっせんどうじの身を

鬼にたびて候にも・あいをとらぬ功德くどくにて候へば聖人しょうにんの御ためには事供や

う凡夫ほんぶのためには理くやう止観しかんの第七の

観心かんじんの檀たんばら蜜みつと申もうす法門ほうもんなり、まことの・みちは世間せけんの事法にて候、

金光明経こんこうみょうきやう

には「若もし深く世法せほうを識しらば即すなわち是これ仏法ぶつぽうなり」ととかれ涅槃經ねはんぎやう

には「一切世間いっさいせけんの外道げどうの經書きやうしょは皆是みなこれ仏説ぶつせつにして外道げどうの説あらに非あらず」と仰おおせ

られて候を妙樂大師みやうらくだいしは法華經ほけきやうの第六の卷の「一切世間いっさいせけんの治生産業ちせいさんぎやうは皆実相みなじつそう

と相いはい違背いはいせず」との經文きやうもんに引き合せて

心をあらわされて候には彼れ彼れの二經きやうぎやうは深心しんの經きやうぎやうなれども彼の

經經きやうぎやうはいまだ心あさくして法華經ほけきやうに及およばざれば世間せけんの法ぶつぽうを仏法ぶつぽうに依せて

しらせて候、法華經はしからず・やがて世間の法が仏法の全体と釈せられて候。

爾前の經の心は、心より万法を生ず、譬へば心は大地のごとし草木は万法のごとしと申す、法華經はしからず心すなはち大地・大地即草木なり、爾前の經の心は心のすむは月のごとし心のきよきは花のごとし、法華經はしからず月こそ心よ花こそ心よと申す法門なり。

此れをもつてしろしめせ、白米は白米にはあらずすなはち命なり。

美食を・をさめぬ人なれば力をよばず山林にまじわり候いぬ、されども凡夫なればかにも忍びがたく熱をもふせぎがたし、食ともし表○目が万里の一食・忍びがたく・思子孔が十旬・九飯堪ゆべきにあらず、読經の音も絶えぬべし觀心の心をろそかなり。

しかるに・たまたまの御とぶらいただ事にはあらず、教主釈尊の御す

すめか將又過去宿習の御催か、
方方紙上に尽し難し、
恐恐謹言。

◆四二六

食物三徳御書

1598p

かゆへに大^{たい}國の王は民を・をやとし民は食を天とすとかかれたり、食には
三の徳あり、一には命をつぎ二にはいろをまし三には力をそう、人に物を
ほどこせば我が身のたすけとなる、譬^{たと}へば人のために火をともしれば我がま
へあきらかなるがごとし、悪をつくるものを・やしなへば命をますゆへに氣^{いき}
ながし、色をますゆへに眼^{まなこ}にひかりあり、力をますゆへに・あしはやく・
てきく、かるがゆへに食をあたへたる人かへりて・い^いろもなく氣^{いき}もゆわく
力もなきほうをうるなり。

一切^{いっさい}經と申^{もう}すは紙の上に文字^{もんじ}をのせたり、譬^{たと}へば虚空^{こくう}に星月のつらなり
大^{だい}地に草木^{そうもく}の生ぜるがごとし、この文字^{もんじ}は釈迦^{しゃか}如来^{にょらい}の氣^{いき}にも候なり、氣^{いき}と

申すは生氣なり・この生氣に二あり、一には九界。

◆四二七 一定証伏御書

1598p

一定と証伏せられ候いしかば其の後の智人かずをしらず候へども今に四百歳が間さで候なり、かるがゆへに今に日本国の寺寺・一万余三千余の社・四十九億九万四千八百二十八人の一切衆生・皆彼の三大師の御弟子となりて法華最第一の經文最第二最第三をとされて候なり、されども始は失なきやうにて候へども・つゆつもりて大海となり・ちりつもりて大山となる。

◆四二八

初穂御書ごしよ

1599p

石たま給いて御はつをたるよし、法華經ほけきょうの御宝前ほうぜんへ申し上げて候かしこまり
申もうすよし、けさんに入らせ給たまい候へ、恐恐きょうきょう謹言きんげん。

十月二十一日

日蓮にちれん

在御判

御所御返事ごへんじ

◆四二九

五大の許御書ごしよ

1599p

□□りげなくなに事もかくの事□不沙汰さたあるか○す御尋たずねあるべし、經
は・或あるは前後ぜんごし・或あるは落經にても候はず。□ものくるわしきとはこれなり
法門ほうもんもかしこきやうにて候へばわるかるべし。

追申

五大のもとへは三伊房も申もうして候・他所に於いて之これを聞かしめ將又事はたまたに
依より子細しさいあ有るべきか、伯耆阿闍梨事あじやりは但我祖なるやうなるべし、設たとひ件くだんの
人見参為いえどそと雖も其の義を存じて候へ。

◆四三〇

いちだいじごしよ
一 大事御書

1599p

あなかちに申もうさせ給たまへ、日蓮にちれんが身のうえの一大事いちだいじなり、あなかしこ・あ
なかしこ。

五月十三日

にちれん
日蓮在御判

◆四三一

身延相承書

〔総付嘱書〕

1600p

にちれんいちよう

こうほう

あじやりにっこう

これ ふぞく

ほんもんぐつう

どうし

日蓮一期の弘法、

白蓮阿闍梨日興に之を付嘱す、

本門弘通の大導師たる

こくしゅ

べきなり、国主此の法を立てらるれば富士山に本門寺の戒壇を建立せらる

ほんもん かいだん こんりゅう

べきなり、時を待つべきのみ、事の戒法と云うは是なり、就中我が門弟等

かいほう

これ

なかんずく

もんでい

べきなり、時を待つべきのみ、事の戒法と云うは是なり、就中我が門弟等

なかんずく 中我が門弟等

・此の状を守るべきなり。

こうあん

弘安五年壬午九月 日

日蓮在御判血脈

しだい

にちれんにっこう

の次第 日蓮日興

◆四三二

池上相承書

〔別付嘱書〕

1600p

そうじょう

ふぞく

しやくそん

釈尊・五十年の説法、

白蓮阿闍梨日興に相承す、

身延山久遠寺の別当

あじやりにっこう

そうじょう

くおん

べつどう

たるべきなり、そむ背く在家・ざいけ出家しゅっけどもの輩やからはひほう非法の衆たるべきなり。

にうあん弘安五年壬午十月十三日

武州池上

にちれん日蓮 在御判

先にちれんしようにんず日蓮聖人の本意は法華本門に於ては曾かつて異義有るべからざるの
 處ところ、其その整足の弟子等忽でしに異趣たちまちいしゆを起して法門改変ほうもんす況や末学等まつがくに於ては面
 面異轍てつを生ぜり、故に日興の門葉ゆえにっこうもんように於ては此の旨むねを守つて一同に興行こうぎやうせし
 むべきの状よ仍これつて之を録す。

一、聖人しやうにん・御在生の時弟子六人を定むる事、弘安五年十月 日 之これを定む

一 日昭 弁阿闍梨あじやり

二 日朗 大國阿闍梨たいこくあじやり

三 日興 白蓮阿闍梨あじやり

四 日向 佐渡阿闍梨 さどあじやり

五 日頂 伊予阿闍梨 あじやり

六 日持 蓮華阿闍梨 れんげあじやり

此の六人の内五人と日興一人と和合せざる由緒条条の事。

一、五人・一同に云く、日蓮聖人の法門は天台宗なり、仍つて公所に

捧ぐる状に云く天台沙門と云云、又云く先師日蓮聖人天台の余流を汲むと

云云、又云く桓武聖代の古風を扇いで伝教大師の余流を汲み法華宗を弘め

んと欲す云云。

日興が云く、彼の天台・伝教所弘の法華は迹門なり今日蓮聖人の弘宣

し給う法華は本門なり、此の旨具に状に載せ畢んぬ、此の相違に依つて五

人と日興と堅く以て義絶し畢んぬ。

一、五人・一同に云く、諸の神社は現当を祈らんが為なり仍つて

伊勢太神宮と二所と熊野と在在所所に参詣を企て精誠を致し二世の所望を願う。

日興一人云く、謗法の国をば天神・地祇並びに其の国を守護するの善神捨離して留らず、故に悪鬼神其の国土に乱入して災難を致す云云、此の相違に依つて義絶し畢んぬ。

一、五人・一同に云く、如法経を勤行し之を書写し供養す仍つて在在所所に法華三昧又は一日経を行ず。

日興が云く、此くの如き行儀は是れ末法の修行に非ず、又謗法の代には行ずべからず、之に依つて日興と五人と堅く以て不和なり。

一、五人・一同に云く、聖人の法門は天台宗なり仍つて比叡山に於て出家授戒し畢んぬ。

日興が云く、彼の比叡山の戒は是は迹門なり像法所持の戒なり、日蓮

しょうにん　じゅかい　ほつけほんもん
聖人の受戒は法華本門の戒なり今末法所持の正戒なり、之に依つて日興と
ぎぜつ　おわ
五人と義絶し畢んぬ。

いぜん　たいこうか
已前の条条大綱此くの如し此の外巨細具に注し難きなり。

かい　はきり
一、甲斐の国・波木井郷・身延山の麓に聖人の御廟あり而るに日興彼の
ごびよう
御廟に通ぜざる子細は彼の御廟の地頭南部六道入道法名日円は日興最初発心
でし
の弟子なり、此の因縁に依つて聖人・御在所九箇年の間歸依し奉る滅後
そ　ねんげつぎぜつ
其の年月義絶する条条の事。

しゃかによらい　くよう　ほんぞん　な　たてまつ
釈迦如来を造立供養して本尊と為し奉るべしは一。

しょうにん
次に聖人・御在生九箇年の間・停止せらるる神社参詣其の年に之を始む
さんけい
二所三島に参詣を致せり是二。

いちもん　かんじん　くよう　しかのみならず
次に一門の勧進と号して南部の郷内のフクシの塔を供養奉加之有り是

次に一門いちもん仏事ぶつじの助成と号して九品念仏ねんぶつの道場どうじょう一字これ之を造立し莊嚴そうごんせり、
甲斐国かいのくに其の処ところなり是四。

已上四箇条ほうほうの謗法きょうほうを教訓きょうくんするに日向これ之を許すと云云、此の義よに依つて
去いぬる其の年月ねんげつ・彼の波木井入道はきり にゅうどうの子孫しそんと永く以て師弟もっの義絶ぎぜつし畢おわんぬ、よ
つて御廟ごびように相通ぜざるなり。

一、聖人しょうにんの御例ごれいに順じ日興にっこう六人の弟子でしを定むる事。

一 日目

二 日華

三 日秀
聖人しょうにんに常隨給仕じょうずいきゆうじす

四 日禪

五 日仙

六 日乗 聖人に値い奉らず。

已上の五人は詮ずるに聖人給仕の輩なり、一味和合して異義有るべからざるの旨・議定する所なり。

一、聖人・御影像の事。

・或は五人と云い・或は在家と云い絵像・木像に図し奉る事在所所に其の数を知らず而るに面面不同なり。

爰に日興が云く、御影を図する所詮は後代に知らしめん為なり是に付け非に付け有りの儘に図し奉る可きなり、之に依つて日興門徒の在家・出家の輩聖人を見奉る仁等一同に評議して其の年月図し奉る所なり、全体異らずと雖も大概麁相に之を図す仍つて裏に書き付けを成すなり、但し彼の面の圖像一も相似ざる中に去る正和

二年日順図絵の本有り、相似の分なけれども自余の像よりも少し面影有り、
而る間後輩に彼此是非を弁ぜしめんが為裏書に不似と付け置く。

一、聖人御書のこと 付けたる十一ヶ条

彼の五人・一同の義に云く、聖人・御作の御書釈は之無き者なり、縦令
少少之有りと雖も・或は在家の人の為に仮字を以て仏法の因縁を粗之を示
し、若は俗男・俗女の一毫の供養を捧ぐる消息の返札に施主分を書いて
愚癡の者を引摺したまえり、而るに日興、聖人の御書と号して之を談じ
之を読む、是れ先師の恥辱を顕す云々、故に諸方に散在する処の御筆を
・或はスキカエシに成し・或は火に焼き畢んぬ。
此くの如く先師の跡を破滅する故に具に之を註して後代の亀鏡と為すな

り。

一、立正安国論一卷。

此れに兩本有り一本は文応元年の御作是れ最明寺殿宝光寺殿へ奏上の本なり、一本は弘安年中身延山に於て先本に文言を添えたもう、而して別の旨趣無し只建治の広本と云う。

一、開目抄一卷、今開して上下と為す。佐土国の御作四条金吾頼基に

賜う、日興所持の本は第二転なり、未だ正本を以て之を校えず。

一、報恩抄一卷、今開して上下と為す。身延山に於て本師道善房聖靈

の為に作り清澄寺に送る日向が許に在りと聞く、日興所持の本は第二転なり、未だ正本を以て之を校えず。

一、撰時抄一卷、今開して上中下と為す。

駿河国西山由井某に賜る、正本日興に上中二卷之れ在り此中に面目下卷に於いては日昭が許に之在り。

一、下山抄一卷。

甲斐の国・下山郷の兵庫五郎光基の氏寺・平泉寺の住僧因幡房日永追

出さるる時の述作なり、直に御自筆を以て遣さる、正本の在所を知らず。

一、観心本尊抄一卷。

一、取要抄一卷。

一、四信五品抄一卷。「法門不審の条条申すに付いての御返事なり仍つ

て彼の進状を奥に之を書く。」

已上の三卷は因幡国富城荘の本主今は常住下総国五郎入道日常に賜

わる、正本は彼の在所に在り。

一、本尊問答抄一卷。

一、唱題目抄一卷。だいもく

此の書最初さいしよの御書文応年中常途天台宗じやうとてんだいしゆうの義分ぎふんを以て且しく爾前にぜん・法華ほっけの相違そうゐを註たまし給う、仍よつて文言義理共ぎりに爾しかなり。

一、御筆抄ほっけほんもんに法華本門ほっけほんもんの四字しじを加う、故ゆえに御書ごしよに之これ無しと雖いえども日興にっこう今義ぎに従したがつて之これを置く、先例せんれい無あらきに非あらざるか。

一、本尊ほんぞんの事四箇条

一、五人一同いわに云く、本尊ほんぞんに於おいては釈迦如来しゃかによらいを崇あがめめ奉たてまつる可すしとて既に立すてたり、随したがつて弟子でし・檀那等だんなの中にも造立供養くようの御書ごしよ之れ在こりと云云、而しかか間ま・盛さかんに堂舎つくを造り、或あるは一鉢あんちを安置あんちし、或あるは普賢ふげん・文殊もんじゆを脇士きやうじとす、仍よつて

しょうにん
聖人御筆の本尊に於ては彼の仏像の後面に懸け奉り又は堂舎の廊に之を捨て置く。

にっこう
日興が云く、
しょうにん
聖人御立の法門に於ては全く絵像・木像の仏・菩薩を以て
ほんぞん
本尊と為さず、
ただごしよ
唯御書の意に任せて妙法蓮華經の五字を以て本尊と為す
すなわ
可しと即ち御自筆の本尊是なり

ごこと
一、上の如く一同に此の本尊を忽緒し奉るの間・或は曼荼羅なりと云つ
しにん
て死人を覆うて葬る輩も有り、
やから
或は又沾却する族も有り、
やから
此くの如く
きようせん
輕賤する間・
たぶん
多分は以て失せ畢んぬ。

にっこう
日興が云く、
いわ
此の御筆の御本尊は是れ一閻浮提に未だ流布せず正像末に
いま
未だ弘通せざる本尊なり、
ほんぞん
然れば則ち日興門徒の所持の輩に於ては左右
なく
無く子孫にも譲り弟子等にも付嘱すべからず、
ゆず
同一所に安置し奉り六人・

一同に守護し奉る可し、是れ偏に広宣流布の時本化国主御尋有らん期まで深く敬重し奉る可し。

一、日興弟子分の本尊に於ては一一皆書き付け奉る事・誠に凡筆を以て直に聖筆を贖す事最も其の恐れ有りと雖も・或は親には強盛の信心を以て之を賜うと雖も子孫等之を捨て、或は師には常随給仕の功に酬いて之を授与すと雖も弟子等之を捨て、之に依つて・或は以て交易し・或は以て他のため盗まる、此くの如きの類い其れ数多なり故に所賜の本主の交名を書き付くるは後代の高名の為なり。

一、御筆の本尊を以て形木に彫み不信の輩に授与して輕賤する由諸方に其の聞え有り所謂日向日頂日春等なり。

日興の弟子分に於ては在家・出家の中に・或は身命を捨て・或は疵を被り若は又在所を追放せられ一分信心の有る輩に忝くも書写し奉り之を

授与じゅよする者なり。

本尊ほんそん人数等又追放ついほう人等、頸切られ、死を致いたす人等。

一、本門寺を建つ可き在所の事。

五人一同に云く、彼の天台・伝教は存生に之を用いらるの間・直に
寺塔を立てたもう、所謂大唐の天台山本朝の比叡山是なり而るに彼の本門
寺に於ては先師何の国何の所とも之を定め置かれずと。

爰に日興云く、凡そ勝地を撰んで伽藍を建立するは仏法の通例なり、
然れば駿河国富士山は是れ日本第一の名山なり、最も此の砌に於て本門寺
を建立すべき由・奏聞し畢んぬ、仍つて広宣流布の時至り国主此の法門を
用いらるる時は必ず富士山に立てらるべきなり。

一、王城の事。

右、王城に於ては殊に勝地を撰ぶ可きなり、就中仏法は王法と本源一
なり居処随つて相離るべからざるか、仍つて南都・七大寺・北京比叡山・

せんしょう
先蹤之同じ後代改まらず、然れば駿河の国富士山は広博の地なり一には
ふそう
扶桑国なり二には四神相応の勝地なり、尤も本門寺と王城と一所なるべき
かつ
由且は往古の佳例なり且は日蓮大聖人の本願の所なり。

一、日興集むる所の証文の事。

ごしよ
御書の中に引用せらるる若は経論書釈の文若は内外典籍伝の文等、
たいこうずいぎてんよう
は大綱随義転用し、
ある
或は粗意を取つて述用し給えり、
たまたま
之に依つて日興散引
しよ
の諸文典籍等を集めて次第に証拠を勘校す、
しだい
其の功未だ終らず且らく集む
る所なり

一内外論の要文上下二巻開目抄の意に依つて之を撰ぶ。

一本・迹弘經要文上ぐきようようぶんじようちゆうげ 中せんじしやう 下三卷撰時抄の意に依つて之を撰ぶ。

一漢土の天台・妙樂邪法を対治して正法を弘通する証文一卷。
かんど てんだい みようらくじやほう たいじ しやうほう ぐつう しやうもん

一日本の伝教大師南都の邪宗を破失して法華の正法を弘通する証文
にほん でんぎようだいしなんと じゃしゆう はしつ ほっけ しやうほう ぐつう しやうもん

一卷。

已上七卷之を集めて未だ再治せず。
これ いま

一、奏聞状の事。
そうもん

一先師聖人文永五年申状一通。
せんししやうにんぶんえい にっごうそ 一同八年申状一通。

一日興其の年より申状一通。

一漢土の仏法先ず以て沙汰の次第之を図す一通。
かんど ぶつぽう もつ さた しだいこれ

一本朝仏法先ず以て沙汰の次第之を図す一通。
ほんちやうぶつぽう もつ さた しだいこれ

一三時弘經の次第並びに本門寺を建つ可き事。
ぐきよう しだいなら ほんもん べ

一先師せんしの書しよ釈しゃく要文一通ようぶん。

一、追加八箇条。

きんねんいらいにっこうしよりゆう

近年以来日興所立の義を盗み取り己が義と為す輩出来する由緒条条の

事。

一、寂仙房日澄にっちよう

始めて盗み取つて己が義と為す彼の日澄は民部阿闍梨

の弟子なり、仍つて甲斐国下山郷の地頭左衛門四郎光長は聖人の御弟子な

り御遷化の後民部阿闍梨を師と為す僧ななり、而るに去る永仁年中・新堂を

造立し一鉢仏を安置するの刻み、日興が許に來臨して所立の義を難ず、聞
き已つて自義と為し候処に正安二年民部阿闍梨彼の新堂並びに一鉢仏を
開眼供養す、爰に日澄本師民部阿闍梨と永く義絶せしめ日興に帰伏して
弟子と為る、此の仁盗み取つて自義と為すと雖も後改悔帰伏の者なり、
一、去る永仁年中越後国に摩訶一と云う者有り天台宗の学匠なり日興が
義を盗み取つて盛んに越後国に弘通するの由之を聞く。

一、去る正安年中以来浄法房天目と云う者有り聖人に値い奉る日興が義
を盗み取り鎌倉に於て之を弘通す、又祖師の添加を蔑如す。

一、并阿闍梨の弟子少輔房日高去る嘉元年中以来、日興が義を盗み取つ
て下総の国に於て盛んに弘通す。一、伊予阿闍梨の下総国真間の堂は一

鉢仏なり、而るに去る年月日興が義を盗み取つて四脇士を副う彼の菩薩の
像は宝冠形なり。

一、民部阿闍梨みんぶあじやりも同く四脇士きようじを造り副つくう、彼の菩薩像ぼさつは比丘形びくにして納衣のうえを著じゃくす、又近年きんねん以来諸神しよじんに詣とどずる事を留とどむるの由聞きこくなり。

一、甲斐国かいのくにに肥前房日伝いぜんぼうにっでんと云う者有あり寂日房向じやくにぼうかう背はいの弟子でしなり日興にっかうが義を盗ぬすみ取とつて甲斐国かいのくにに於おいて盛さかんに此この義を弘通くわつうす是れ又四脇士きようじを造り副つくう彼の菩薩ぼさつの像は身皆みな金色剃髮きんいろしはつの比丘形びくなり、又神詣ととを留とどむるの由之これを聞きこく。

一、諸方しよほうに聖人しやうにんの御書ごしよ之これを讀む由の事。此の書札の抄別状有あり之これを見みるべし。

◆四三四

五人所破抄しよは

1610p

そ おもんみればしよぶつけんえん
夫れ以れば諸仏懸遠の難きことは譬を曇華に仮り妙法値遇の縁は比を
うきぎ るい じんじゆ
浮木に類す、塵数三五の施化に猶漏れて正像二千の弘経も稍過ぎ已んぬ、
とうじようけんこ
闘諍堅固の今は乗戒俱に緩うして人には弊惡の機のみ多し何の依憑しき
こと有らんや、設い内外兼包の智は三祇に積み大小薰習の行は百劫を満
き
つとも時と機とを并ぜず本と迹とに迷倒せば其れも亦信じ難からん。
ここ
爰に先師聖人親り大聖の付を受けて末法の主為りと雖も、早く無常の相
えんじやく きにゆう
を表して円寂に帰入するの刻五字を紹繼するが為に六人の遺弟を定めた
もう。

日昭と日朗と日興と日向と日頂と日持と 已上六人なり。

五人武家ふけ ささに捧ささぐる状いに云いく未だ公家いまくげに奏そうせず。

天台てんだいの沙門しゃもん日昭にっしょう謹つしんで言い上ごんじやうす。

先師せんしにちれん日蓮にっぜんは忝かたじけなくも法華ほっけの行者ぎやうじやと為もつて専らもつぱ仏果ぶつかの直道じきどうを顕あらわし天台てんだいの余流いりりゆうを酌しやくみ地慮ぢりよの研精けんけいを尽つくすと云々。

又い云わく、日昭にっしょう不肖ふしやうの身な為なりと雖いえども兵火へい永息えいの為ため副将ふくしやう安全あんぜんの為ために法華ほっけの道場どうじやうを構かまえ、長日ちやうじつの勤行いんぎやうを致いたし奉たてまつる、已すでに冥冥めいめいの志し有あり豈昭昭あにしょうしょうの感かん無な

からんや詮せんを取る。

てんだいしやもん
天台沙門日昭謹つしんで言い上ごんじやうす。

先師せんしにちれん日蓮にっぜんは如來にょらいの本意ほんいに任まかせ先判せんきやうの権經ごんきやうを閣さしおいて後判ごきやうの実教じつきやうを弘通ぐつうせしむるに、最要さい未だ上聞じやうもんに達たつせず愁しゆうろう鬱おもを懷むないて空くうしく多年せうその星霜せいそうを送おくる玉たま

を含こみて寂じやくに入るが如ごとく逝去しきよせしめ畢おわんぬ、然しかして日昭にっしょう忝かたじけなくも彼いの一乘いちじやう妙典みやうてんを相伝さうでんして鎮とこしなえこに国家こくかを祈いたり奉まつる詮せんを取る。

てんだいほっけしゅう しゃもん 天台法華宗の沙門日向日頂謹んで言上す。

かんむせいだい 桓武聖代の古風を扇ぎ伝 あお 教大師の余流を汲み立正安国論に准じて法華 ほっけ

いちじょう あがめ 一乗を崇められんことを請うの状。 つし 右謹んで旧規を検えたるに祖師・

でんぎようだいし えんりやく 伝教大師は延暦年中に始めて叡山に登り法華宗を弘通したもう云云。

いわ ほっけ 又云く法華の道場に擬して天長地久を祈り今に断絶すること無し詮を取

る。

にっこうくげ そう 日興公家に奏し武家に訴えて云く。

にちれんしょうにん かたじけな 日蓮聖人は忝くも上行菩薩の再誕にして本門弘經の大権なり、所謂 いわゆる

だいかくせそんみらい じき 大覚世尊未来の時機を鑒みたまひ世を三時に分ち法を四依に付して以来、 いらい

しょうほう かしよう 正法千年の内には迦葉・阿難等の聖者先ず小を弘めて大を略す竜樹・ りゅうじゆ

てんじん ろんし 天親等の論師は次に小を破りて大を立つ、像法千年の間異域には則ち陳隋 ちんずい

ちしや じやぎ 両主の明時に智者は十師の邪義を破る、本朝には亦桓武天皇の聖代に伝教 でんぎよう

ろくしゅう びやくろん
は六宗の僻論を改む、今末法に入つては上行出世の境本門流布の時な

しょうぞうす
り正像已に過ぎぬ

なん にぜん しゃくもん もつ し
何ぞ爾前・迹門を以て強いて御帰依有る可けんや、就中天台・伝教は

ぞうほう えんぜつ にちれんしょうにん まつほう
像法の時に当つて演説し日蓮聖人は末法の代を迎えて恢弘す、彼は薬王の

こ じょうぎよう さいたん きようもん の
後身此れは上行の再誕なり経文に載する所・解釈炳焉たる者なり。

およ いちだい
凡そ一代教籍の濫觴は法華の中道を解かんが為三国伝持の流布は盍ぞ

しんじつ ほんもん も がりやく とうと
真実の本門を先とせざらんや、若し瓦礫を貴んで珠玉を棄て燭影を捧げて

ただ めいもう おも せそん けどう ぼう に
日光を睥せば只風俗の迷妄に趁いて世尊の化導を謗するに似るか、華の中

うとん せんた およ がた
に優曇有り木の中に栴檀有り凡慮覃び難し併ながら冥鑑に任す云云、本と

すで すいか へだ き またてんち ごと なん じゆ ぼさつ
迹と既に水火を隔て時と機と亦天地の如し、何ぞ地涌の菩薩を指して苟も

てんだい
天台の末弟と称せんや。

またもつ ふしん ゆえん いか ぶんえいめんきよ いにしえせんし
次に祈国の段亦以て不審なり、所以は何ん文永免許の古先師素意の分

既^{すで}に以^{もつ}て顕^{あらわ}れ畢^{おわ}んぬ、何^{なん}ぞ僭^{しやう}聖^{どう}道^{もん}門^{もん}の怨^{おん}敵^{てき}に交^あり坐^まして鎮^{とこ}に^{しな}てんち^{よう}ちき^{ゆう}の
御^ご願^{がん}を祈^{いの}らんや、況^{いは}や三^{さん}災^{さい}弥^い起^より一^{いち}分^{ぶん}も徴^{しる}し無^なし啻^{ただ}に祖^そ師^しの本^{ほん}懷^{かい}に違^いす
る

のみにあらず還かえつて己身こしんの面目めんもくを失うしなうの謂おもいか。

又五人一同いわに云およく凡わかんそ倭漢兩朝しやうじよの章疏ひらを披ひらいて本・迹二門ふたもんの元意げんいを探たづる

に判教げんもんは玄文げんもんに尽くつうし弘通くつうは残なんる所無てんだいし、何なんぞ天台一宗てんだいの外ぐおくに胸臆きこくの異義いぎを

構かまえんや、拙ちやくいかな尊高そんかうの台嶺たいりやうを編きみして辺鄙へんびの富山ふさんを崇あがみ、明静めいせいの止觀しがんを

闇さしおいて仮字かなじの消息しやうそくを執しゅうする、誠まことに是これ愚癡ぐちを一身いつしんに招ちやくき耻辱ちじよくを先師せんしに及およぶ

者ものか、僻案びやくあんの至いたりなり甚しだ以もつて然しかるべからず、若もし聖人しやうにんの製作しやうと号ごう

し後代こうだいに伝えはつんと欲ほつせば宜よろしく卑賤ひせんの倭言あたらを改あらため漢字かんじを用もちゆべし云云。

日興にっこうが云いわく、夫それ竜樹りゆうじゆ・天親てんじんは即すなわち四依しえの大士だいしにして円頓えんどん一実いちじつの中道ちゆうどう

を申いぶと雖いえども而しかも權けんを以もつて面おもてと為なし実かくを隱かくして裏うちに用もちゆ、天台てんだい・伝教でんぎやうは亦また

五品ごほんの行位ぎやうゐにして専もつら本ほん・迹二門ふたもんの不同ふどうを分わかち而しかも迹ひろを弘ひろめ衆しゆを救すくふ本ほんを

残のこして末すえに譲ゆづる、内鑒ないかんは然しかりと雖いえども外ぐわいは時宜ときかなに適あうかの故ゆゑに・或あるは知しらざ

るの相さうを示しめす・或あるは知しつて而しかも未いまだ闡揚せんやうせず、然しかるに今本こんぽん・迹りやうきやう兩經りやうきやう共ともに

てんだい ぐつう しやう
天台の弘通と称するの条は経文に違背し解釈は抛を失う、
ほうしょう おどろ かんじ
鳳詔に驚き勸持二万の勅答を挙げて此土の弘経を申ぶと雖も迹化の
ぼさつ ゆる
菩薩に許さず、過八恒沙の競望を止めて不須汝等護持此経と示し地涌千界
ぼさつ によらい いっさい しやう
の菩薩を召して如来・一切所有の法を授く、迹化他方の極位すら尚劫数の
じん でん ぜんなんし きんげん あに
塵点に暗し止善男子の金言に豈幽微の実本を許さんや、本門五字の肝要は
じやうぎやうぼさつ ふぞく
上行菩薩の付嘱なり誰か胸臆なりと称せんや委細文の如し経を
開いて見るべし。

てんだいだいしきやうもん
次に天台大師経文を消したもうに、「如来之を止むるに凡そ三義有り汝
みずか おの も
等各各自ら己が住有り若し此の土に住すれば彼の利益を廃せん、又他方は
しど けちえん
此土に結縁の事浅し宣授せんと欲すと雖も必ず巨益無からん、又若し之を
ゆる すなわ
許さば則ち下を召すことを得ず下若し来らずんば迹も破することを得ず遠
あらわ
も顕すことを得ず是を三義と為す、如来之を止めて下方を召して来らすに亦
こ
三義有り、是れ我が弟子心に我が法を弘むべし、縁深厚なるを以て能く此土

に遍へんして益やくし分身ふんじんの土へんに遍へんして益やくし他方たほうの土へんに遍へんして益やくし、又開近かいこん顯遠けんのんすることを得、是かくの故ゆえに彼とどを止めて下めを召めすなり」文、又云いわく「爾前にぜん仏告ぶつこう上行じょうぎょうの下こ是れ第三けっちように結要ふそく付嘱」と云々、伝教大師でんぎようだいしは本門ほんもんを慕もいて「正像しょうざう稍過ややすぎ已おわつ

て末法太だ近き^{まつぽうはなほ}に有り法華一乗^{ほつけいちじょう}の機^き今正しく是^{まさ}れ其^{その}の時^{とき}なり」文、又云く
「代^{ことば}を語^すれば則^{すなわ}ち像^{さう}の終^{はつ}り末^{まつ}の初^{はつ}め地^ちを原^{もと}ぬれば則^{すなわ}ち唐^{たう}の東^{とう}・羯^{かつ}の西^{せい}・人^{にん}
を尋^{たず}ぬれば則^{すなわ}ち五濁^{ごじよく}の生^{なま}・鬭^{とう}諍^{じやう}の時^{とき}・經^{きやう}に云^いく猶^{なほ}多^{おほ}怨^{おん}嫉^{しつ}・況^{きやう}滅^{めつ}度^ど後^ごと此^この
言^{まこと}良^{ゆえ}に以^{もつ}有^あるなり」云云。

加^{しか}之^{のみ}大^だ論^{ろん}の中^{ちゆう}に「法^{ほつ}華^けは是^これ秘^ひ密^{みつ}なれば諸^{もろ}の菩^ぼ薩^{さつ}に付^つす」と宣^のぶ、今
の下文^{くだしづみ}に下方^{くたしづみ}を召^めすが如^{ごと}く尚^{なほ}本^{ほん}眷^{けん}属^{そく}を待^{まち}つ驗^{あきら}けし余^いは未^{いま}だ堪^たえず、輔^ふ正^{しやう}記^き
に云^いく「付^ふ嘱^{そく}を明^{めい}せば此^この經^{きやう}をば唯^{ただ}下方^{くたしづみ}涌^ゆ出^{じゆつ}の菩^ぼ薩^{さつ}に付^つす、何^{もつ}を以^{もつ}ての
故^{ゆえ}に爾^{しか}る、法^こ是^これ久^く成^{じやう}の法^{ほふ}なるに由^よるが故^{ゆえ}に久^く成^{じやう}の人^{にん}に付^つす」論^{ろん}釈^{しやく}一^{いつ}に
非^{あら}ず繁^{はん}を恐^{おそ}れて之^{これ}を略^{りやく}す。

觀^{かん}音^{のん}・藥^{やく}王^{おう}は既^{すで}に迹^{しやく}化^けに居^こす南^{なん}岳^{がく}・天^{てん}台^{だい}誰^{だれ}人^{ひと}の後^ご身^{しん}ぞや、正^{しやう}像^{ざう}過^{かう}ぎて二
千^い年^ま未^{じやう}だ上^{じやう}行^{ぎやう}の出^{しゆ}現^{げん}を聞^まかず末^{まつ}法^{ぽう}も亦^{また}二^に百^{ひやく}余^よ廻^{かい}なれば本^{ほん}門^{もん}流^{りゅう}布^ふの時^じ節^{せつ}な
り何^{なん}ぞ一^{いつ}部^ぶの總^{そう}釈^{しやく}を以^{もつ}て猥^{みだり}に三^{さん}時^じの弘^{くわ}經^{きやう}を難^{なん}ぜんや、次^にに日^{にっ}本^{ぽん}と云^いうは惣

名なり亦本朝を扶桑国と云う富士は郡の号即ち大日蓮華山と称す、爰に知
んぬ先師自然の名号と妙法蓮華の経題と山州共に相応す弘通此の地に在
り、遠く異朝の天台山を訪えば台星の所居なり大師・彼の深洞を卜して
迹門を建立す、近く我が国の大日山を尋ぬれば日天の能住なり聖人・
此の高峰を撰んで本門を弘めんと欲す、閻浮第一の富山なればなり五人
争でか辺鄙と下さんや。

次に上行菩薩は本極法身微妙深遠にして寂光に居すと雖も未了の者の
ために事を以て理を顕し地より涌出したまいて以来付を本門に承け時を末法
に待ち生を我朝に降し訓を仮字に示す、祖師の鑒機失無くんば遺弟の改転
定めて恐れ有らんか、此等の所勘に依つて浅智の仰信を致すのみ、抑梵
漢の兩字と扶桑の一点とは時に依り機に随つて互に優劣無しと雖も情
上聖被下の善巧を思うに殆んど天竺震旦の方便に超えたり、何ぞ倭国の

風俗を蔑如^{ごと}して必ずしも漢家の水露^{つゆ}を崇重^{すうちよう}せん、但し^{ただ}西天^{せいてん}の仏法東漸^{ぶつぽうとうぜん}の時
・既^{すで}に梵音^{ぼんのん}を翻^わじて倭漢^{わかん}に伝^{つた}うるが如^{ごと}く本朝^{ほんちよう}の聖語^{ことば}も広宣^{こうせん}の日は亦^{また}仮字^{かなじ}
を訳^{ひあい}して梵震^{いだ}に通^{とほ}ず可^べし、遠沾^{えんせん}の翻訳^{へんやく}は諍論^{じようろん}に及^{およ}ばず雅意^がの改変^{かいへん}は独^{ひと}り
悲哀^{ひあい}を懷^{いだ}く者^{もの}な

り。

又五人一同に云く、いわ先師所持の釈尊は忝くも弘長配流の昔之を刻み、
こうあんきやく弘安帰寂の日も隨身せり何ぞ輒く言うに及ばんや云云。
にっこう

日興が云く、諸仏の莊嚴同じと雖も印契に依つて異を弁ず如来の本・迹
がたは測り難し眷属を以て之を知る、けんぞく所以に小乗三蔵の教主は迦葉・阿難を
きようじ脇士と為し伽耶始成の迹仏は普賢・文殊左右に在り、此の外の一跡の
ぎようぞうあにずだ形像豈頭陀の応身に非ずや、凡そ円頓の学者は広く大綱を存して綱目を事
つらつらしようにんしゆつせとせず倩聖人出世の本懷を尋ぬれば源と権実已過
けどう

の化導を改め上行所伝の乗戒を弘めんが為なり、図する所の本尊は亦
しようぞう正像二千の間・一閻浮提の内未曾有の大漫荼羅なり、今に当つては迹化の
きようしゆすて教主既に益無し況や☆☆婆和の拙仏をや、次に隨身所持の俗難は只是れ繼
なん

子

いったん
一旦の寵愛月を待つ片時の螢光か、執する者尚強いて帰依を致さんと欲せば須らく四菩薩を加うべし敢て一仏を用ゆること勿れ云云。

又五人一同に云く、富士の立義の体為らく雷に法門の異類に擬するのみに匪ず剩え神無の別途を構う、既に以て道を失う誰人か之を信ぜんや。

日興が云く、我が朝は是れ神明和光の塵仏陀利生の境なり、然りと雖も

今末法に入つて二百余年御帰依の法は爾前・迹門なり誹謗の国を棄捨するの条は経論の明文にして先師の勘うる所なり、何ぞ善神聖人の誓願に背き新に悪鬼乱入の社壇に詣でんや、但し本門流宣の代、垂迹還住の時は尤も上下を撰んで鎮守を定む可し云云。

又五人一同に云く、如法・一日の両経は共に以て法華の真文なり、書写・読誦に於ても相違有るべからず云云。日興が云く、如法・一日の両経

は法華の真文為りと雖も正像転時の往古・平等摂受の修行なり、今末法

の代むかを迎むかえて折伏しゃくぶくの相さうを論ろんずれば一部いぶ読誦とくじゆを専せんとせず但ご五字ごじの題目だいもくを唱となえ
三類さんるいの強敵かうてきを受うくと雖いえども諸師しよしの邪義じゃぎを責せむ可べき者ものか、此これ則すなわち勸持かんじ不輕ふぎようの
明文めいぶん上行じようぎよう弘通ぐんつうの現証げんしやうなり、何なんぞ必ずしも折伏しゃくぶくの時とき・摂受しやうじゆの行ぎやうを修しゆすべ
けんや、但ただし四悉はいりゆうの廢立はいりゆう・二門にもんの取捨しゆしやよろし宜じきく時機あえてを守へんしるべし敢ゆうて偏執へんしゆうする
こと勿なかれ云云。

又五人りつぎすでの立義たいぎ既すでに二途にに分われ戒門かいもんに於おいて持破じはを論ろんず云云。

日興にっこうが云いわく、夫それ波羅提木叉はらだいぼくしやの用否ようひぎやうじゆう行住ぎやうじゆう四威儀いぎの所作しよさ平嶮へいけんの時機じきに
隨したがい持破じはに凡聖ほんせい有あり、爾前にぜん・迹門しやくもんの尸羅しらを論ろんずれば一向いっかうに制禁せいぎんす可べし、
法華本門ほつげほんもんの大戒だいかいに於おいては何なんぞ又依用えようせざらんや。

但ただし本門ほんもんの戒躰かいたい委細いさいの經釈きやうしやく面もつを以もつて決べす可べし云云。

身延みだりの群徒うたが猥いに疑難ぎなんして云いわく、富士ふじの重科じゆうかは専もつぱら当所たうしよの離散りさんに有あり、
縦たとい地頭じとう非例ひれいを致いたすとも先師せんしの遺跡いせきを忍しのぶ可べし既すでに御墓さんけいに参詣さんけいせず争いかでか

向背の過罪を遁れんや云云。

日興が云く、此の段顛倒の至極なり言語に及ばずと雖も未聞の族に仰せ

て毒鼓の縁を結ばん、夫れ身延興隆の元由は聖人・御座の尊貴に依り

地頭発心の根源は日興教化の力用に非ずや、然るを今下種結縁の最初を忘

れて劣謂勝見の僻案を起し師弟有無の新義を構え理非顯然の諍論を致す、

誠に是れ葉を取つて其の根を乾かし流を酌んで未だ源を知らざる故か、何に

況や慈覚・智証は即伝教入室の付弟・叡山住持の祖匠なり、若宮八幡は亦

百王鎮護の大神日域朝廷の本主なり、然りと雖も明神は仏前に於て謗国

捨離の願を立て先聖は慈覚を指して本師違背の仁と称す、若し御廟を守る

を正と為さば円仁所破の段頗る高祖の誤謬なり、非例を致して過無くん

ば其の国・棄捨の誓い都べて垂迹の不覚か、料り知んぬ悪鬼外道の災を

作し宗廟社稷の処を辞す善神聖人の居は即ち正直正法の頂なり、

そもそも

抑身延一沢の余流未だ法水の清濁を分たず強いて御廟の参否を論ぜば汝

まさ

くだ

しやり

なん

ほつけ

じしや

まよい

もつとはなはだ

等將に碎身の舍利を信ぜんとす何ぞ法華の持者と号せんや、迷暗尤も甚

じゅん

し之に准じて知る可し伝え聞く天台大師に三千余の弟子有り章安朗然とし

ひと

これ

でんぎようだいし

さんぜん

しゅうと

でし

ぎしんいこ

そ

て独り之を達す、伝教大師は三千侶の衆徒を安く義真以後は其れ無きが

ごと

いまにちれんしょうにん

まんねんくご

ため

如し、今日蓮聖人は万年救護の為に

六人の上首じょうしゅを定む然りと雖もいへど法門ほうもん既に二途に分れ門徒亦一准ならず、
しゆくじゅう

宿習しゆくじゅうの至り正師しょうしに遇うと雖もいへど伝持でんじの人自他じた并がたじ難し、能く是この法を聴く

者・此の人亦復難しと此の言若し墮おちなば将来悲む可し、
またがた

宛かも符契ふけいの如し迹化しやつけの悲歎猶此くの如し本門ほんもんの墜だつ墜い寧ろ愁えざらんや、
また

案立若し先師せんしに違たがわば一身の短慮尤も恐れ有り言う所亦また仏意に叶かなわば五人

の謬義みようぎ甚だ憂う可し取捨正見しゅしやせいけんに任す思惟しゆいして宜しく解すべし云云。

此の外支流異義いぎを構かまえ詭曲てんこく稍数多なり、其の中に天目の云く、已前の六

人の談は皆みな以て嘲ちやうろう 哂すべきの義なり但し富山宜しと雖も亦過失とが有り迹門しやくもん

を破はし乍ら方便品ほうべんを読むこと既に自語相違すでせり信受しんじゆすべきに足らず、若し

所破しよはの為と云わば弥陀經みだをも誦すべけんや云云。

日興にっこうが云く、聖人の炳誠へいかいの如くんば沙汰さたの限りに非ずと雖も慢幢まんどうを倒さ

んが為ために粗一端ほぼを示さん、先ず本・迹の相違そういは汝慥なんじたしかに自發おこするや去る
いぬ

□□

☐ 正安二年の比天目当所に来て問答を遂ぐるの刻み日興が立義・一一証伏し

□
二正
年安

の比目当所に来て問答を遂ぐるの刻み日興が立義・一一証伏し

おわ
畢んぬ、
もし正見せいけんを存せば尤も帰敬もつときけいを成すべきの処ところに還かえつて方便読誦ほうべんどくじゆの難なん

若し正見を存せば尤も帰敬を成すべきの処に還つて方便読誦の難

を致す誠こゝろに是れ無慚むざん無愧むきの甚はなはだしきなり、夫れ狂言綺語きごの歌仙かせんを取つて自

そな けいしやう なお ちじよく な しゅうぐくきやう ほんもん おの
作に備うる 卿相すら尚短才の耻辱と為す、況や終窮究竟の本門を盗み己が

徳しょうと称する逆人争いかでむげんが無間の大苦まぬかを免れんや、
照覧しょうらん冥めいに在り慎つつしまずんばある

べからず。

次に方便品の疑難に至つては汝未だ法門の立破を弁ぜず恣に祖師の

てんかべつじょじゅうかあらごじうこともしほついぜんこと
添加を蔑如す重科一に非ず罪業上の如し、若し知らんと欲せば以前の如く

富山に詣で尤も習学の為宮仕を致す可きなり、抑彼等が為に教訓する

に非ず正見に任せて二義を立つ、一には所破の爲二には文証を借るなり、

初に所破しよはの為とは純一無雜じよぶんの序分じよぶんには且しばらく權乘あの得果はいしやくを挙げあげ廢はいしやく迹はいしやく顯はいしやく本の

じゆりよう 寿命 なおがや には猶伽耶の近情を明す、
こ 此れを以て之を思うに方便称読の元意は只
もつ これ ほうべん ただ

是れ牒破の一段なり、若し所破の為と云わば念仏をも申す可きか等の愚難
は誠に四重の興廢に迷い未だ三時の弘經を知らず重疊の狂難嗚呼の至極
なり、夫れ諸宗破失の基は天台・伝教の助言にして全く先聖の正意に
非ず何ぞ所破の為に読ま

ざるべけんや、きようしやく經釈めいきようすでの明鏡にちがつ既に日月ことの如し天目の暗者あんじゃやうん邪雲おほに覆おほわるる故
なり、次に迹もんしやうの文証じつそうを借りて本の実相を

あらわ顯これらすなり、此等の深義じんぎは聖人しやうにんの高意こういにして浅智せんちの覃あぶ所に非しやうきず正機しやうきには
まさこれ將に之を伝つたうべし云云。

嘉曆三戊辰年七月草案す

日順

◆四三五

日興遺誠置文

1617p

そ夫れ以おもんみれば末法弘通まつほうくつうの恵日けふは極惡ごくあく謗法ぼうほうの闇くらを照てらし久遠くおん寿量じゆりやうの妙風みやうふうは
がやしじやう伽耶始成ごんもんの権門ごんもんを吹ふき払はらう、あ於戲あぶつほう仏法あに値あうこと希まれにしてたとえ喩ごんげを曇華はなしべの萼はなしべ
かに仮うきぎり類なおもつを浮木うきぎの穴あなに比ひせん、尚なおもつ以こゝて足たらざる者ものか、爰こゝに我等われら宿縁しゆくえん深厚じんこうな

るに依よつて幸に此の經に遇たい奉まつることを得、随したがつて後学ための爲に条目じょうもくを筆端ひつたんに染しむる事、偏ひとえに広宣流布こうせんるふの金言きんげんを仰あおがんが爲なり。

一、富士の立義聊りつぎいささかも先師せんしの御弘通ぐつうに違ちがへざる事。

一、五人の立義りつぎ一先師せんしの御弘通ぐつうに違ちがへざる事。

一、御書ごしょ何れも偽書いつずれに擬こらし当門流きぼうを毀謗しせん者これあ之有べる可べし、若もし加様のあくりよしゆつたい惡侶出来しんこんせば親近べす可べからざる事。

一、偽書ごしょを造ごつて御書ごしょと号ごし本迹ほんしやく一致いつちの修行しゆぎようを致いたす者は師子身ししん中の虫むしと心得こころづ可べき事。

一、謗法ほうぼうを呵責かしやくせずして遊戯雜談ゆげそつだんの化儀けぎ並に外書歌道がうを好べむ可べからざる事。

一、檀那だんなの社参物詣あつきらんにゆうを禁べず可べし、何いかに況そや其の器きにして一見しやうと称しょうして謗法ほうぼうを致いたせる惡鬼乱入あくきらんの寺社あつきらんにゆうに詣べず可べけんや、返かへす返かへすも口惜くちおししき次第しだいなり、是これ全こく己義こぎに非あらず經文御抄等きやうもんに任まかす云云。

一、器用の弟子に於ては師匠の諸事を許し聞き御抄以下の諸聖教を教学す可き事。

一、学問未練にして名聞名利の大衆は予が末流に叶う可からざる事。

一、予が後代の徒衆等権実を弁えざる間は父母・師匠の恩を振り捨て出離

証道の為に本寺に詣で学文す可き事。

一、義道の落居無くして天台の学文す可からざる事。

一、当門流に於ては御書を心肝に染め極理を師伝して若し間有らば台家を

聞く可き事。

一、論議講説等を好み自余を交ゆ可からざる事。

一、未だ広宣流布せざる間は身命を捨て随力弘通を致す可き事。

一、身軽法重の行者に於ては下劣の法師為りと雖も当如敬仏の道理に任せ

て信敬を致す可き事。

一、弘通の法師に於ては下輩為りと雖も老僧の思を為す可き事。

一、下劣の者為りと雖も我より智勝れたる者をば仰いで師匠とす可き事。

一、時の貫首な為りと雖もいへど仏法ぶつぽうに相違そういして己義こぎを構かまえば之これを用うう可べからざる事。

一、衆議な為りと雖もいへど仏法ぶつぽうに相違そうい有らば貫首これ之を摧くだくく可べき事。

一、衣の墨黒くすべからざる事。

一、直綴じきとつを着きす可べからざる事。

一、謗法ほうぽうと同座どうざす可べからず与同罪よどうざいを恐おそる可べき事。

一、謗法ほうぽうの供養くようを請うく可べからざる事。

一、刀杖等とうじょうに於おては仏法守護ぶつぽうしゆごの為ために之これを許ゆるす。

但し出仕ただの時節じせつは帶おす可べからざるか、若もし其それ大衆等たいしゅうに於おては之これを許ゆるす可べきかの事。

一、若輩な為りと雖もいへど高位こういの檀那だんな自まつ座ざ

に居べる可べからざる事

一、先師せんしの如ごとく予がが化儀けぎも聖僧せいそう為なる可べし、但ただし時の貫首ある・或あるは習学しゅうがくの仁にに於おいては設たいいたん

一、巧ぎょう於難問答なんもんどうの行者ぎやうじやに於おいては先師せんしの如ごとく賞しょう翫がんす可べき事。

右の条目じょうもく大略か此ことの如ごとし、万年救護まんねんくこの為ために二十六箇条を置く後代の学侶

敢あえてて疑惑ぎわくを生なずる事勿なかれ、此の内一箇条に於おいても犯おす者は日興にっこうが末流まつりゅうに有ある可べからず、仍よつて定さだむる所の条条件くだんことの如ごとし。

元弘三年癸酉正月十三日

日興判

全文字数 〓 一二二万〇八三三文字